鷲尾順敬編纂

増訂
日本佛家人名辭書

東京　光融館藏版

日本佛家人名辭書序

維新以来。國運郅隆。如旭日之升。為宇内各國所驚視駭聽矣。是果因何而然乎。世人皆謂因引西洋文明而入之。其能引西洋文明而入之者。何也。無他。因先有佛教與儒教豫為之地焉耳。蓋佛教者。不嘗植立宗教思想。亦與儒教相待。以開發人智。化誘民俗。此所以我邦人能引西洋文明

而入之也歟。不然。假令接西洋文明。亦爲能解之。況引而入之乎。果然則儒佛二教之功。不亦大耶。若夫西洋文明與東洋文明。併取兩者。打爲一塊。則使我邦遂至拔一頭地于萬國之間。亦未可知也。然而東洋文明之粹。主在儒佛二教。是故西洋文明雖固不可不引而入之。而儒佛二教之研究。亦何可忽之乎。宜採東洋文明之粹。

與西洋文明融合調和。更開我邦文明之生面也。佛教之研究。近時稍有振起之徵。佛教哲學佛教歷史之類。著譯頗多。唯至僧傳。則無一足觀者。是爲遺憾矣。古來僧傳固不乏其書。師錬元亨釋書。師蠻本朝高僧傳。道契續日本高僧傳之外。天台則有天台座主記。眞言則有高野春秋。有豐山傳通記。有結網集。淨土則有淨土傳燈

錄。法華則有本化別頭佛祖統紀。眞宗則有本願寺通紀。曹洞則有日域洞上諸祖傳。有日本洞上聯燈錄。臨濟則有延寶傳燈錄。其他東國高僧傳三國高僧畧傳等。不遑枚擧。然而或偏于一宗。或限于一代。網羅古今各宗之僧侶者。未曾有之。本朝高僧傳雖曰最備。而不載眞宗與法華宗。續日本高僧傳雖併載二宗。而僅擧通蓮

與日政而已。其不備率如此。鷲尾順敬君蚤有慨于此。乃獨力拮据。苦辛慘澹。博搜事蹟。遍求史籍。斷簡零墨之微。亦無不撿。而徵之。凡更幾裘葛。而所蒐集古今名宗僧侶之傳。始大備矣。乃編次之。以為一大冊。目曰日本佛家人名辭書。其所收載。無慮六千餘人。僧傳之備者。古來莫之若。世之學者。一獲此書。而研究佛教。則可知其

便有倍蓰于往日者也。如此則東洋文明之粹。豈亦不容易歸其手中云乎哉。及印刷成。君徵序于余。余乃述其所見。以爲之序。

明治三十六年九月六日

巽軒井上哲撰

三島春洞書

序

歷史は過去の事實なり。過去幾千年に溯り、社會現象の跡を尋究して止まざるものは歷史家の任務なり。然るにその社會現象たるや、天の能くこれを爲すにあらず、地の能くこれを爲すにあらず、人ありて能くこれを爲すなり。假令天の能くこれを爲すとするも、天の人をしてこれを爲さしむるにあらずんば、決して實際の歷史とならざるなり。是によりて歷史の研究上暫時も缺くべからざるものは、その歷史を作爲しゝ人物の吟味なり。人物の吟味は慥に歷史研究の一方面を占有せるものと謂

ふべし。歐洲に於て人名辭書の早く成れる所以、蓋しこれがためならん。

然るに本邦未た完全なる人名辭書なかりしが、曩に經濟雜誌社の人名辭書を發行するあり、今また鷲尾順敬氏の日本佛家人名辭書の編纂の成れるを見る。本邦史學界に貢献することの多大なるや固より辯を竢たざるところなり。謂ふ勿れ佛教は歴史の少部分なりと、本邦奈良朝以後の國史は佛教史を除き去りて何の攷究すべきところかある。內治、外交、文學、美術、殖產興業等一として佛教に關係せざるものなきは、既に學者の是認して疑を容

れざるところなり。然れば日本佛家人名辭書は啻に佛教史研究に必須なるのみならず、苟も國史の研究に從事する者の暫時も座右に缺くべからざる要典なり。故に凡そ國史に志ある者は皆擧りて著者の勞を謝して可なり。

回顧するに今より數年前、余著者と共に席を同うして日本佛教史の研究に從事し、偶々人名辭書の必要を語りしに、著者亦其の志すところ此にありて、忽ちに余の言を納れ、爾來拮据勉勵すること茲に五週年一日の如し、亦力めたりと謂ふべし。眞に著者が本書のために寢食を忘れて苦辛經營せし

とは余の目撃して寒心したるところなり。今やその勞空しからずして此に本書の發刊を見るに至りたるは余の雙手を捧げて歡喜するも尚ほ足らざるの感ある所なり。世には本書の是非を批評する者も多からん、然れども草創は効を成し難しと云ふを以て之を觀れば、余はその是非を批評せんよりも、本書が史學界に貢献することの多きを以てこれを迎へ、著者の勞の大なるを謝せんとするものなり。こゝに一言蕪辭を陳べて序となすこと爾り。

明治三十六年八月

村上專精識す

日本佛家人名辭書の序

佛教傳來このかた既に一千四百年。其間諸宗迭る興り、諸派また盛を競へり。其冲天の勢あるに當りては、啻に罪障銷滅菩提證果の教たるのみならず、四時之が爲に序を成し、災厄之が爲めに除かれ、國土の安穩に、敵國の降伏に、上下之に慶賴せざるは無かりき。されば身に緇衣を纏ひし者も、古來蓋し幾千萬。延喜の昔三善淸行の封事には、天下の民三分の二は皆是禿首なりの句あり。鎌倉の末葉には、圓顱朝に滿ちたりと云はる。これ皆必ずしも聖經を誦し、戒律を持せし人には非ず、世を捨てし者、世

に棄てられし者、雜然相交れるなりとはいへ、亦以て、佛教の隆盛なりしを視るに足るべし。之に伴ひて、流弊餘毒の著しきものあるを免れずと雖も、鴻業偉績ある善智識の、德澤を千歳に垂れたるものも亦甚だ多し。されば、師蠻が本朝高僧傳を編纂するに當りては、收むるところ、實に一千六百餘人の多きに及べども、其漏れたるもの少しとせず。明治の初年に至り、伽藍を毀ち經像を燼くの厄ありしが、尚今日、寺堂の數は拾萬に餘り、住職の資格ある者のみの員數も、また六萬に垂んとす。佛教は實に、古往今來本邦の大勢力なり。若し之を等閑視せば、

國史の興味は其大なる一部分を減殺せらるべく、國家の經營は頗る其圓滑を缺くべし。

然るに、江戸時代文運の復興せしこのかた、學者大抵佛徒を目して、異端邪說、民を誣ひ世を惑はすものとし、之を輕んじ、之を憎み、從ひて口を極めて之を罵る。抑も水戸の義公、岡山の新太郎少將は、並びに淫祠を廢絕し、僧尼を淘汰したりと雖も、尙親から經を寫し、佛に禮し、又寺を建て、方外の人とも交れり。然るに、後の人、皆以て廢佛毀釋の代表者と爲し、大日本史にも、たゞ佛教害惡の一側面をのみ揭げて、最澄空海の如き偉大なる人物にただに、たゞ數

語を佛事志中に注するに止まる。聖德太子を始めとし、賢相良佐も、佛事に關係あるものは、多くは史家に貶黜せられたり、坊主といふ語、素と是れ一坊の主人公の義なるべし。然るに、また一種輕賤の意を含むに至りしは、豈嘆ずべきの至りならずや。輓近社會の秩序漸く整ひ、凡百の事物其所を得るに及び、佛教界また大に活動の狀あり。宣傳盛んにして慧日の德頗る輝き、研學行はれて眞如の光大に表はる。然れども、之を宗教としては、尙未だ遺教を宣揚して、識者を安慰するに足るべき信條を具へず。之を學問としては、未だ、佛徒の當然享有すべき

過去の榮譽をも發揮するに至らず。佛徒が事業を企て、驥足を伸ばすべき餘地の、向後孰れの方面にも、猶甚だ多かるべきを見る。

昔師錬は一代の學匠と呼ばれ、又識見も高かりき。當時滔々たる緇流の、噪然として支那に渡るを見て、思へらく是れ國辱なり、善し、我自ら西遊して、日本にもまた人あるを知らしめんと。其意氣の壯なること嘉すべし。しかも一たび寧一山に面して、本朝高僧の遺事を問はるゝに及びては、應對頗る澁り、深く慚恨發奮する所あり。是に於て、元亨釋書卅卷を編して奏進せしが、遂に勅命を以て、大藏中に

收めらるゝの榮を得たり古の支那は今の歐米なり。而して寧一山また出でなば、今の學者、師錬當年の慚恨を思ひ當らざるもの、果してよく幾人かあり得べき。大凡研究の本邦の事物に關するものは、材料夥くして組織未だ成らず。珍羞山の如くなるも器皿足らざるの觀あり。佛教史に關する研究の如きも其一なり。就中佛徒以外の者が、佛徒の事蹟を窺はんとするに當りて、最もこの道具立ての缺乏を感ずること深し。今若し一名僧の遺事を知らんと欲せば、浩瀚なる僧傳を繙かざるべからず。しかも繙くといへども、遂に求むるところのものを

得ざる事稀なりとせず。されば、道具立てを完くするこそ、此方面の研究を進め、高德智識を追慕せしむるに於て、最も急要のことなるべけれ。鷲尾順敬君のこの辭書の如きは、實にその要求に合へるものといふべし。

『封爾爲日本國王』と、回避するところなく明主の封册を讀み上げ、秀吉をして、怫然として朝鮮再征の師を發せしめしは、相國寺の承兌に非ずや『國家安康君臣豐樂』と、率直に大佛の鐘銘を作り、家康をして、莞爾として大坂剿討の辭柄を得しめしは、東福寺の淸韓なり。竝に史上に一異彩を放てる事柄な

れども、この二僧の傳は、從來甚だ詳かならず、近時我が大學の史料編纂掛は、漸く之を攷索するを得たり。この類の事は他にも極めて多し。されば、この辭書の如きは、其性質として、到底一時に完成を期すべきに非ず。再板また三板、絶えず漏れたるを補ひ、誤れるを訂し、以て其疵瑕なきに至るを望むべきのみ。師錬の元亨釋書は、僧史權輿の美名を擅にすと雖も、其實凝然固山等が、之が地を爲したりと云ふに非ずや。況んや、名山鉅寺材料を藏すること夥しく、向後幾多の發見の、今より豫期せらるゝに於てをや。是を以て、當初余の鷲尾君に待つところ

は、過大なるを得ざりき。然るに、今や其拮据經營の成績を見るに及び、喜び望外に出づるものあり。君の篤實勤勉なる結果として、世人をして、佛教史海にこの一大筏梁を得しめたること、感謝の至りに堪へざるなり。余は思ふ、佛徒にしてこの類の著述に苦辛するは、眞に佛恩を報じ、祖德を發揚するものなるべしと。而して余はこの巻首に一言するの榮を得て、また其善因緣を喜ぶものなり。

明治卅六年九月初三

三上參次識す

再版 日本佛家人名辭書

凡例

一本書は我國に佛教が傳來して以來、一千三百五十年間に亘り、諸宗の法師、尼法師、佛工、繪佛工、約六千人の傳を收載す。聖德太子、司馬達等の二人は、右等の孰れにも攝せられされとも、特別に佛教に關係あるを以て其傳を收載す。

一本書の編纂法即ち人名收載の順序は、五十韻の順序を追うて人名の首字たる漢字を類聚排列し。漢字の字音は明治三十三年八月發布の文部省新定の字音假名遣に依る。

一佛家人名の發音は古來大率吳音を慣用するも、漢音を以て呼ばるゝもの亦鮮からず。本書の排列見出しはなるべく吳音を以て擧げ、其漢音を以て呼ばるゝものは振假名を以て其發音を示す。然れとも佛家人名にして專ら漢音を以て著はるゝものに限り、排列見出しも漢音を以て擧ぐ。例せはコーボー(弘法)インゲン(隱元)レークー(靈空)等の如し。

一佛家人名中古以後一人にして數稱あり。即ち臨濟、曹洞、黃檗の如きは、必ず二

稱以上あり。淨土の如きは三稱四稱あり。（字、社號、譽號、阿號、謚號等なり。）本書排列見出しはなるべく法諱とせるものを用ゐたり。然れとも臨濟曹洞黃檗の如きは字又は號とせるものによりて聞ゆるを以て、是等三宗は必ず排列見出しを二所以上に擧げ、其他の佛家も字號等を以て著はるものは、亦皆排列見出しを二所以上に擧げたり。故に其指示する所に依りて法諱の下を見るべし。

一各人名の見出しの下に數字を註して日本紀元を擧ぐ。右は出生の年、左は示寂の年なり、出生示寂の年共に詳ならざるものは括弧の內に數字を註して同じく日本紀元を擧げ、在世の年代を示す。

一敕號敕謚幷に異稱畧名は、其數極めて多く、本書に一々擧ぐれば甚だ煩雜に涉るを以て、別に敕號敕謚索引、異稱畧名索引、禪僧別號室名索引を附す。然れとも其尤著名なるものは排列見出しを擧ぐ、例せはコーボーダイシ（弘法大師）シヨーイチコクシ（聖一國師）等の如し。

一本書に收載する傳はいづれも正確なる資料に依りたるものにして一部の書より採錄したるものあり、數部の書を參酌したるものあり、共に其傳の結

末に引用書目を註するも、煩雜に涉るものは重なる書目を註し餘を略す。異說あるものは併せ擧け、別に編纂者の考を附す。著作ある者は別行の書籍目錄の書を參照して一々結末に著作目錄を擧ぐ。

一卷首に附したる諸篇は孰れも本書を用ゐる際に、參考に資せんと期するものなり。其內日本佛家年表は示寂の年月日の順序に依り、示寂の年月日詳ならさるものは在世の年代に依る。然るに在世の年代詳ならさるものは、竟に闕如に附す。本書に傳を收載しなから在世の年代詳ならさるため該年表に擧げざるもの、實に三百餘人なり。諸宗門跡歷代、諸大寺歷代幷に諸職次第は、なるべく完全を期したるも、知了收載の便宜を得ざるものは闕如に附す。亦已むを得ざるなり。

一本書の編纂に就いて諸師友の指導援助を受けたると甚だ多し、殊に村上專精先生が本書編纂の初めに方りて費用若干を支給せられ、石川照勤氏が慰勞として金若干を寄贈せられ、今立裕氏が費用若干を貸附せられ、其他諸師友が圖書材料等を寄送贈與せられたること極めて夥し。以上謹て其厚意を感謝す。尙ほ林嘉太郎、市川宇八郎の二氏が、始終を通じ、編纂校正等の實務に

當り助力せられたるは此に併せ記し、永く忘るべからさるところなり。

一卷首に引用參考書目を列し、且つ寄贈書目を掲け、諸師友より寄贈を忝うしたる圖書材料を列記し、聊か其厚意に酬ゐんとしたるも、發行期日の切迫と頁數の增加との爲め其意を果す能はず、

明治三十六年十月　　編纂者識す

一本書の編纂は、殆ど十年以前にかゝり、余の佛教史に關する研究の進渉は、未だ自ら誇るべきものあらざるも、今日本書に對しては、大に意に充たざる所あり。然れども再版に方り、余の意に任せて全部改修するを許さず。故に姑く初版に依りて筆を加へ訂正增補したり。

一再版に方り訂正したる所極めて多く、且つ年表、系統圖、歷代、次第、索引等の各增補、及び本文增補を收め、初版に比すれば稍備はるを覺ゆ。

一本文增補の編纂は、本文の編纂法に依らず。今日普通に行はるゝ辭書の編纂法に依り、字音の假名に從ひたり。特別の編纂法は、普通の使用に便利ならざる所あるを感じたるに由るなり。

明治四十四年十一月　　編纂者識す

本書の編纂法に就いて

本書の編纂法、即ち人名收載の順序に就いては凡例に示したるところなるも、其法の普通に行はるゝ人名辭書に異るところあるを以て、尙ほ少しく說明し。且つ新に編纂法を設けたる理由を發表する必要あるべし。

一佛家の人名は、皆漢字の字音なるを以て、從來の字音假名遣に依れは、アウ、アフ、オウ、オフ、ヲウ、ヲフ。カウ、カフ、コウ、コフ。シヤウ、シヤフ、シヨウ、シヨフ。等、一々區別せざるべからず。此の如く一々區別して排列せは煩雜極りなく、實際に人名搜索檢出に適し難きものとなるべし。故に本書が一切文部省新定の字音假名遣に依り、アウ、アフ、オウ、オフ、ヲウ、ヲフは、皆オーとしたる所以なり。餘は例して知るへし。

二文部省新定の字音假名遣に依り五十韻の順序を追うて人名を排列するに、漢字の一字の音も、一字半の音も、二字の音も、何等の區別すること能はず、例せはショー(子容)とショー何(正―、性―、聖―、等)の如き。チユー(智幽)とチユー何(中―、忠―、仲―、等)の如き、ジキヨー(慈敎)とジキヨー(直鷹)の如き。等、皆同一例となりて排列せられさるべからす。此類の事極めて多し。此の如く漢字の混雜は、人名の搜索檢出に便利を缺くこと著大なり。乃ち本書が單に國音を本位とすることなく、同國音中に於いて漢字の一字を本位として一定の順序を追ひ、人名を排列したる所以なり。

三佛家の人名は同漢字極めて夥し。本書收載するところの傳約六千人にして、各一人に一づゝの別稱を擧げたるものと見て、畧々一萬貳千の人名あり。然るに其人名の首字たる漢字を檢するに僅に一千三十餘字なり。故に其首字たる漢字を以て人名を類聚すれば、一萬貳千の人名は其十分の一弱たる一千三十餘條に攝するを得るなり。是れ即ち本書が一定の規則により首字たる漢字を以て人名

字音の假名のみに依り、種々の漢字の内に就て搜索するの煩勞に比して數倍の便利あるは、已に數〻試驗したる所なり。

四佛家人名の首字たる漢字を以て其人名を類聚するに方りては、同漢字にして吳音漢音により二所に分ち擧くるよりも、一所即ち同一列中に擧け、振假名を以て其發音を示す方、搜索檢出に便利なるは論なし。是れ即ち本書が大率古來吳音と云ひ做せるものに依り、同漢字を同一列中に擧げ、異例なるものに限り振假名を附すことゝなしたる所以なり。但し弘白有等の三四字を二所に分ち擧げたるは、實に已むを得ざるに出でたるなり。

以上要するに、我國佛家の人名は、我國普通の人名の例に異るところあるを以て、本書が其人名を收載するに方り、殊に新に編纂法を設けて編纂し、專ら辭書として實用上の便利を期せんとしたるものにして、固より事を好み奇を衒はんとするものにあらす。本書を繙く者、幸に編纂者の微意のあるところを諒せられよ。

且つ別に宗派分類索引、人名首字字畫索引、人名首字字音索引を附したれば、亦以て人名搜索檢出の用を助くべし。

明治三十六年十月十日卽ち全部印刷を了りたる日

東京小石川の僑居に於いて

鷲尾順敬識す

目次

目次

附載

目次

緒言

日本佛教沿革畧

佛教一たび印度に興り、北上して中央亞細亞に流傳し、東折して北方支那に蔓延し、北方蕃族の南下に隨うて中央支那より南方支那に瀰漫し、其一部は北方支那より半島三國に流傳し、三國より一轉して我國に入り、漸次に一大勢力を積成し、所謂東方佛教の盛觀を呈するに至れり、已に印度等に於いて衰敗滅亡せる後、獨り我國に於いて興隆繁衍し、大小半滿顯密聖淨の諸宗一も備はらざるなく、燦然として金玉光を競ひ、續燄傳燈一千三百五十年に亘り、脈々として絶えざるもの、實に佛教が最後の光明なり。而して亦佛教が最後の開展なり。然れば印度等の佛教に對し我國の佛教が別に自ら一部の大歷史を成し、大に顯揚せらるべきものあるは言を待たざるなり。

且つ夫れ佛教が我國に入りて以來、一世の崇拜を受けて國民を感化誘導せる者每に佛教界に出でゝ、專ら佛教を皷吹したれば其教說深く國民の思想を鎔陶し、自ら社會の諸方面に浸染流動して一大勢力となれり。然のみならず、彼等僧侶が袈裟を肩にして社會の諸方面に活動したれば、佛教が關係するところのもの益多く、政治文學、藝術、風俗、習慣等、一として著大なる影響を蒙らざるはなく。既往の我國は全

第一節 司馬達等の西來
百濟の貢獻
物部尾輿中臣鎌子の抗議
司馬達等父子の苦心
蘇我馬子の威望
用明天皇の皈佛
宮中の祈禱
守屋勝海の陰謀
厩戸皇子の共伐
百濟の貢僧
推古天皇の崇佛
三寶興隆の詔

然佛教國なりと謂ふべし。然れば我國の佛教の沿革は、寧ろ我國の文明の沿革なりと謂ふも、亦必ずしも過言にあらざるなり。

〔一〕佛教の始めて我國に入りたるは、繼體天皇の朝梁の司馬達等の經像を齎持したるに由ると云ふも、當時未だ行はれず。欽明天皇の十三年十月、百濟の聖王明禮特に使を遣はして釋迦牟尼の金銅像並に經論幡蓋等を貢獻したれば、天皇一たび諸臣に諮問したまひ、大連物部尾輿、中臣鎌子の抗議により、宮中に安置することなく、大臣蘇我稻目に附與したまふ。敏達天皇の朝に入りて守屋勝海と馬子と各父の遺志を繼紹して確執し。佛教は數々災厄に罹りたるも、司馬達等父子專ら其興隆に力を盡し、苦心經營至らざるなし。用明天皇稻目の女堅鹽姫の出を以て立ちたまふに至り、馬子朝廷に威望あり。始めて勅あり宮中に法師を請し、天皇の病患平癒を祈禱せしめたまふ。守屋勝海の二人相謀り馬子を排除せんとして事成らず。馬子却て炊屋姫の令旨を奉じて二人を討伐す。厩戸皇子亦其軍に加はり、自ら四天王の像を刻して戰勝を祈禱す。馬子靈驗を感じ、益佛教に意を傾く。崇峻天皇の朝に百濟の威德王學僧十餘人並に寺工等を貢獻したれば、彼等我國に入りて佛教の興隆に力を致せり。推古天皇立ちたまふに至り、厩戸皇子を擧げて皇太子となし、萬機を委したまふ。大臣馬子故の如し。乃ち同二年二月始めて三寶興隆の詔を下したまふ。

厩戸并に馬子の經營
法隆寺四天王寺法興寺の建立
高麗百濟の貢僧
厩戸の講經
學藝の輸入
遣隋使
學問僧の發遣
高麗學僧慧灌の西來
三論宗の傳來
學問僧の皈着
政治上の革新
第二節
孝德天皇の興佛
僧旻

厩戸並に馬子これを拜して專ら興隆の經營をなし、厩戸は法隆寺四天王寺を興し、馬子は法興寺を興し、諸臣連亦相競うて寺塔を興し圖像を作れり。高麗百濟より學僧の入朝するもの陸續として至り。内外人相助けて其興隆に力を致したれば。未だ數年ならず佛敎の面目一新し、上下翕然として崇禮皈依し專ら佛敎によりて現世來世の幸福を願求したり。厩戸は寺塔圖像の造營製作に意を用ゐるにとゞまらず、百濟高麗の學僧を請して經論の義理を講究して大に得るところあり。後自ら諸臣連を會して講說流演するに至れり。百濟高麗の學僧は百科の學藝に該通し、佛敎と共に我國に傳持したれは、彼等が我國の人文の發達に資するところ極めて著しく。厩戸は佛敎の興隆と共に外國文明の扶植に力を盡し。天皇の十五年七月特に使を隋に遣はして經論を求め始めて支那大陸に交通し、翌十六年九月學問僧數名を送れり。二十九年二月厩戸薨し。後三年即ち天皇の三十三年一月高麗の學僧慧灌三論宗を傳持し、我國の佛敎に始めて宗名あり。舒明天皇の朝に入唐學問僧等相尋いて東皈し、着々として厩戸の遺志を成せり。皇極天皇の朝、入唐學問僧請安俗に還り、中大兄皇子を助け政治上の革新を謀りて功あり。

〔二〕孝德天皇立ちたまふに至り、勅を下して大に佛敎を興隆したまふ、且つ天皇が政治上の革新を行ひたまふに方り、僧旻等主として經營參畫し、支那の制度を倣

第一節
司馬達等の西來　百濟の貢獻　物部尾輿中臣鎌子の抗議　司馬達等父子の苦心　蘇我馬子の威望　用明天皇の皈佛　宮中の祈禱　守屋勝海の陰謀　厩戸皇子の出陣　百濟の貢僧　推古天皇の崇佛　三寶興隆の詔

然佛敎國なりと謂ふべし。然れば我國の佛敎の沿革は、寧ろ我國の文明の沿革なりと謂ふも、亦必ずしも過言にあらざるなり。

〔一〕佛敎の始めて我國に入りたるは、繼體天皇の朝梁の司馬達等の經像を齎持したるに由ると云ふも、當時未だ行はれず。欽明天皇の十三年十月、百濟の聖王明禮特に使を遣はして釋迦牟尼の金銅像並に經論幡蓋等を貢獻したれば、天皇一たび諸臣に諮問したまひ、大連物部尾輿、中臣鎌子の抗議により、宮中に安置することなく、大臣蘇我稻目に附與したまふ。敏達天皇の朝に入りて守屋勝海と馬子と各父の遺志を繼紹して確執し。佛敎は數々災厄に罹りたるも、司馬達等父子專ら其興隆に力を盡し、苦心經營至らざるなし。用明天皇稻目の女堅鹽姬の出を以て立ちたまふに至り、馬子朝廷に威望あり。始めて勅あり宮中に法師を請し、天皇の病患平癒を祈禱せしめたまふ。守屋勝海の二人相謀り馬子を排除せんとして事成らず。馬子却て炊屋姬の令旨を奉じて二人を討伐す。厩戸皇子亦其軍に加はり、自ら四天王の像を刻して戰勝を祈禱す。馬子靈驗を感じ、益佛敎に意を傾く。崇峻天皇の朝に百濟の威德王學僧十餘人並に寺工等を貢獻したれば、彼等我國に入りて佛敎の興隆に力を致せり。推古天皇立ちたまふに至り、厩戸皇子を擧げて皇太子となし、萬機を委したまふ。大臣馬子故の如し。乃ち同二年二月始めて三寶興隆の詔を下したまふ。

廐戸並に馬子これを拜して專ら興隆の經營をなし、廐戸は法隆寺四天王寺を興し、馬子は法興寺を興し、諸臣連亦相競うて寺塔を興し圖像を作れり。高麗百濟より學僧の入朝するもの陸續として至り。內外人相助けて其興隆に力を致したれば。未だ數年ならず佛教の面目一新し、上下翕然として崇禮皈依し專ら佛教によりて現世來世の幸福を願求したり。廐戸は寺塔圖像の造營製作に意を用ゐるにとゞまらず、百濟高麗の學僧を請して經論の義理を講究して大に得るところあり。後自ら諸臣連を會して講說流演するに至れり。百濟高麗の學僧は百科の學藝に該通し、佛教と共に我國に傳持したれは、彼等が我國の人文の發達に資するところ極めて著しく。廐戸は佛教の興隆と共に外國文明の扶植に力を盡し。天皇の十五年七月特に使を隋に遣はして經論を求め始めて支那大陸に交通し、翌十六年九月學問僧數名を送れり。二十九年二月廐戸薨し、後三年即ち天皇の三十三年一月高麗の學僧慧灌三論宗を傳持し、我國の佛教に始めて宗名あり。舒明天皇の朝に入唐學問僧等相尋いて東皈し、着々として廐戸の遺志を成せり。皇極天皇の朝、入唐學問僧請安俗に還り、中大兄皇子を助け政治上の革新を謀りて功あり。

〔二〕孝德天皇立ちたまふに至り、勅を下して大に佛教を興隆したまふ、且つ天皇が政治上の革新を行ひたまふに方り、僧旻等主として經營參畫し、支那の制度を摸し

廐戸幷に馬子の經營
法隆寺四天王寺法興寺の建立
高麗百濟の貢僧
廐戸の講經
學藝の輸入
遣隋使
學問僧の發遣
高麗學僧慧灌の西來
三論宗の傳來
學問僧の皈着
政治上の革新
第二節
孝德天皇の興佛
僧旻

政教相關の發端
國家的佛教の興隆
弘福寺崇福寺山階寺の建立
天武天皇の興佛
大官大寺の建立
金光明經仁王經の講說
諸國每家に經像安置
金光明經の頒與
國分寺創設の發端
僧尼令
興福寺新元興寺の建立
公驗
聖武天皇の興佛
國分寺國分尼寺の創設

て八省を設置し。政教相關の端を開き、國家的政治、國家的宗教相並びて國家の統一を期したれば、佛教の興隆は所謂國家事業として經營せらるゝこととなり、數々勅を下し盛に僧尼を請して國家安穩の祈禱をなさしめたまへり。齊明天皇の朝勅願あり弘福寺を興し、中臣鎌子山階寺を興し、天智天皇の朝勅願あり崇福寺を興し、並に國家安穩の祈禱道場となしたまふ。弘文天皇を經て天武天皇の朝に至り、孝德天皇の朝以來の施設は大に皇張せられ、大官大寺を興して祈禱道場となし、勅を下し諸國に金光明經仁王經の講演を開かしめ、後白鳳十四年勅を下し、諸國每家に經像を安置崇禮せしめたまふ。持統天皇の八年諸國に金光明經を頒與し、每年正月恒例とし讀誦せしめ、官物を以て布施としたまふ。是れ實に國分寺創設の端を開けるなり。文武天皇の大寶二年に律令を發布し、令第七僧尼令に佛敎に關する制度を規定して僧尼を優遇し、且つ同年諸國に國師を置き、諸國の僧尼を監せしめたまふ。元明天皇和銅三年都を奈良に遷したまひ、奈良に興福寺新元興寺を興し、國家安穩の祈禱道場となしたまふ。元正天皇の朝に至り、諸國の寺塔僧尼漸く弊習あり、乃ち始めて公驗を授與す。聖武天皇立ちたまひ、益國家的佛教を皇張したまひ。數々宮中に僧尼を請し、大般若波羅密經金光明最勝王經等を讀誦せしめたまひ。且つ諸國に頒與したまふ。天平十三年始めて勅を下し諸國に國分寺國分尼寺を剏設せしめた

物國分寺の創設 大佛の鑄造 大佛開眼供養會 行基、良辨 大僧正 道鏡 入唐學問僧の功勞

まひ、行基諸國に巡行して其經始をなせり。後奈良に惣國分寺を創設したまふ。惣國分寺は金光明四天王護國之寺と號し、毘盧沙那佛の巨像を安置鑄造して供養したまふ。所謂東大寺の大佛なり。像の面長一丈六尺、廣九尺五寸、四躰此に稱ふ。工事十餘年に亘り、國帑を傾倒したり。孝謙天皇の天平勝寶四年四月開眼供養會を行ひ、天皇行幸したまひ、文武の百官扈從し、盛儀天下の人目を駭かせり。此の如くにして中央政廳、地方の國司廳に對して、惣國分寺國分寺あり。一は律令を以て、一は經像を以て、共に國家の安穩を期せり。所謂顯冥一致なり。是れ實に孝德天皇以來の經營の皇張せられたるものなるも、聖武天皇の朝以來、主として其施設に奔勞したる者は行基良辨なり。二人は共に一代の大德と呼ばれ、行基始めて大僧正となれり。

當時政教相關は已に一方に偏重し、僧侶大に勢力あり。漸く政治に關與する者あるに至りて弊害あり。朝廷に僧俗權威を抗爭して相降らざるに至る。淳仁天皇を經て稱德天皇重祚したまひ、葛木山の祈禱師道鏡を召して法王の位を授けたまふに至り、國家の紀綱紛亂し、政教兩なから頽敗して收拾すべからず。政教相關の弊害此に至りて極まりたりと謂ふべし。光仁天皇立ちたまひ政教の形勢漸く一變の兆あるも、容易に新面目を見るべからざるなり。

初め孝德天皇の朝以來、入唐學問僧等の人文の發達國運の進步に貢献したると極

倶舍法相二宗の傳來
成實宗の傳來
華嚴宗の弘通
戒律宗の傳來

第三節
藤原時代

西東二寺の建立
講師讀師の設置

めて多く道德を說き學問を講じ。藝術を傳へ。產業を興し。山野を開墾し。道路を開通したる等。一々事實を擧ぐるに勝へず。然れば漸く僧侶の勢力を積成したるもの、寧ろ自然の數に出でたるものなるべし。

齊明天皇の朝に道昭始めて倶舍法相の二宗を傳持し。二宗に附帶して兜率上生の信仰漸く行はる。天武天皇の朝に百濟の道藏始めて成實論を講敷したるも竟に盛なるに至らず。聖武天皇の天平十二年新羅の審祥始めて華嚴經を講敷し。良辯尤其弘通に力を竭せり。孝謙天皇の天平勝寶六年鑒眞西來し、戒律宗を弘通す。後世以上の五宗に三論宗を加へて古京の六宗と稱す。

〔三〕桓武天皇の朝に入りて政教共に形勢一變す。玄昉道鏡を排擊したりし藤原氏代りて英邁なる天皇の朝廷に立ち聖意を奉し、大に經營せんとし、佛教の位置形勢の一變するは寧ろ當然なり。然るに天皇は政教共に深く意を用ゐたまひて其革新興隆を期したまひ、數々勅を下して奈良の諸大寺の衆僧を戒飭したまへり。葛野に都を遷し、宮城を築きたまふに方り、羅生門の兩側に西東二寺を興して鎭護の道場となしたまへるが如き、諸國に講師讀師を設けたまへるが如き、亦顯冥一致の餘意に出づるものなりと雖。固より往日の盛事を再見すべくもあらず。奈良の諸大寺は堂塔圖像の壯觀を留むるも實際の勢力なく、衆僧の氣焰自ら鎖沈し、唯空しく往日の

最澄、空海
一乘止觀院の建立
最澄の入唐
空海の入唐
最澄の歸着
天台宗の傳來
南北の爭
空海の歸着
眞言宗の傳來
最澄の性行態度
空海の性行態度

盛事を夢想したるもの丶如し。

然るに最澄空海の二人殆ど同時に出で、奈良の諸大寺の狀況を目擊して大に感憤し、各自ら錬心修行功を積み。漸く盛聞朝野に振ふ。殊に最澄は日枝山(即ち比叡山)に籠居したれば葛野に都の遷さる丶に至り、日枝山の一乘止觀院を以て宮城鎭護の道場とせられ、且つ一實大乘の敎義を宣揚せしめらる。延曆二十三年七月勅を拜して唐に航して天台宗の章疏を求むること丶なる。空海夙に大學明經科に遊び、道儒二敎に通達し、後、佛敎に皈して大安寺に投じ、學德を以て推重せらる。同月遣唐使の出發するに方り、二人共に一行に加はりて唐に航す。最澄は天台山に登りて道邃行滿等に歷謁して敎を受け、且つ經論章疏を謄寫し。翌二十四年八月命を了えて歸着し、益盛聞あり。乃ち比叡山の規摸を皇張し、僧綱の統攝を離れ、別に大乘の戒壇を設置せんとす。奈良の諸大寺の衆僧大に驚き、最澄の說を駁し、所謂南北の爭あり。平城天皇の大同元年空海眞言宗を傳持し、青龍寺惠果の密附を受けて皈着し山城の高雄山に留住して靜に弟子を敎養し、門學日に盛なり。最澄空海の二人共に新宗を傳持したるも、其の性行態度自ら相同じからず。最澄は極力奈良の諸宗を排擊し、彼等を敵視したるも。空海は然らず。一方には最澄に親善にして、他方には奈良の諸大寺の間に推重せられ、彼等の請により諄諄として眞言の敎義を說けり。嗟

金剛峰寺の建立
空海の東遊
最澄の示寂
大乘戒壇の設置
空海の盛譽
東寺を賜はる
後七日の御修法
第四節
空海の示寂
常曉、圓行、慧運、圓仁、圓珍の入唐
圓仁圓珍の對立
東密台密の並行
奈良の諸大寺の秘密教

峨天皇の朝に入りて、所謂南北の爭の益劇烈なるに方り、高野山を開いて隱棲せんとしたるも、工事歲月を涉る。乃ち去りて東國に歷遊したるもの、寧ろ京師の煩擾を避けたるものなるべし。弘仁十三年六月最澄寂し、翌年始めて勅許あり、大乘戒壇を設置し大乘比丘の供養せらるゝことゝなり、平安朝の一新宗たる天台宗の獨立を見る。當時空海の學德一世を葢ひ、殊に最澄寂して後、朝野の崇敬を一身に集む。天皇勅して東寺を賜はり、永く鎭護の道場としたまふ。淳和天皇仁明天皇益空海を信重皈依したまひ、承和二年正月勅あり始めて宮中に眞言の道場を開き、秘密法を薰修せしめられ、永く恒例としたまふ。所謂後七日の御修法なり。是より秘密教益宮中に盛行するに至れり。

〔四〕仁明天皇の承和二年空海寂し、眞雅實慧等後を繼げり。常曉、圓行、慧運、圓仁、圓珍等前後唐に入りて各、秘密教を傳持す。圓仁圓珍は天台宗の徒なるも、顯密二教を併せ傳へて秘密教に意を傾け、前者は比叡山に、後者は園城寺に、各一門を搆へ、盛に弘通せり。是に於いて最澄空海二人の末資は、共に秘密教の弘通に力を致したれば、所謂東台兩密相對して興隆繁衍し、且つ空海の末資は奈良の諸大寺に出入したれば、東密は東大寺等に流傳し、漸く秘密教は南北の諸宗を一統せんとする狀あり。

加持祈禱の盛行
眞言宗徒の講師讀師
安然の秘密教講究
天台眞言二宗の競爭
諸國講師讀師の紛擾
仁和寺の建立
寬平法皇
法皇號の始
益信、聖寶
修驗道
仁和醍醐の二寺

文德天皇淸和天皇の朝に至り、天台眞言の高僧輩出し、交〻勅請を拜して宮中に入り、秘密教を修行し、息災增益の加持祈禱日に月に盛なり。且つ始めて眞言宗の徒を擧げて諸國の講師讀師に任ぜられたれば、秘密教は諸國の地方に傳播し、自ら人心を感化したるべし。陽成天皇の朝に圓仁の末資に安然あり。圓仁遍照の風を受けて專ら眞言の敎義を講究し、一家の見を成す。其後天台宗內の秘密教益〻興隆し、比叡山は全然秘密教の大道場となるに至れり。然るに天台眞言の二宗は、漸く勢力を競ひ、東台兩密靈驗を爭ふに至り、其弊害は諸國の講師讀師に及び、數〻紛擾を見るに至りたり。

光孝天皇の朝勅して仁和寺を建立したまひ、宇多天皇の寬平二年に落慶し、眞言修行の道場としたまふ。醍醐天皇の昌泰二年、上皇落飾したまひ、法皇と稱したまふ。我國法皇の號此に始まる。後、東寺の益信を請して秘密灌頂を受けたまひ、仁和寺の御室に御し、眞言修行を事としたまふ。醍醐天皇の朝に入り、眞言宗の益信聖寶相並びて盛譽あり。聖寶顯密二致併せ通じ、且つ常に高山大川を經行して、鍊心修行し、大和の金峯山登攀の途を開き、後世修驗道の祖と稱せらる。益信寂したる後醍醐寺を興し、眞言修行を事とす。後、仁和醍醐の二寺益信聖寶の正脈を傳へ、門學大に興れり。

天慶の亂
賊徒降伏の祈禱
奈良の諸大寺の狀況
道詮明詮靜安
佛名會
佛生會
三大勅會
東南院の剏立
三論眞言二宗の關係
興福寺仲算
宮中の論議
定昭
一乘院の剏立
南北の爭
良源の經營
源信、覺運
尋禪
一身阿闍梨
圓仁圓珍の末資の爭
餘慶
山寺二門

朱雀天皇の朝、東國の亂るゝに方り、勅あり天台眞言の僧侶を請し、盛に加持祈禱をなし、賊徒の降伏を期したまひたり。

當時奈良の諸大寺は、東寺延曆寺（比叡山）の盛榮に壓せられたりと雖、尙ほ一面の勢力あり、道詮明詮靜安等學德を以て聞え、靜安佛名會佛生會等を奏請して宮中に請せられ、數〻法會を執行せり。且つ三大勅會（御齋會、維摩會、最勝會）の講師は、每に奈良の諸大寺の大德之に當り殊に推重せられたり。聖寶初め東大寺にあり、三論宗の碩學を以て知られ。後東南院を開いて三論宗の本所となし、爾來三論眞言の二宗密接の關係あり。村上天皇の朝興福寺に仲算あり、宮中の論議に出で、天台宗の良源に對敵し兩碩匠の名あり。後定昭興福寺に一乘院を開いて專ら法相宗を宣揚せり。是れより所謂南北の爭再び盛なるを見る。冷泉天皇圓融天皇の朝に比叡山に良源あり、大に一山の興隆を謀り、門學、林の如く、異材輩出す。源信覺運の二人學德を以て聞え、各一門を成す。尋禪大臣の子にして始めて一身阿闍梨となり、良源の寂後座主の職を襲ひ一山を統轄す。是に於いて比叡山の門風漸く變じ、大衆華榮を競ふ。華山天皇の朝を經て一條天皇の朝に入り、比叡山に圓仁圓珍二人の末資勢力を爭ひ、圓珍の末資餘慶等園城寺に遷つるに至り判然兩分し所謂山寺二門對立して相降らず。

寛朝
御室門跡

當時眞言宗に寛朝あり。世間門には宇多天皇の皇孫、出世間門には法皇の法孫にして仁和寺に住し所謂御室門跡の尊嚴華榮は、諸宗に首たる狀ありたり。

此の如くにして天台眞言の二宗は、共に秘密教を以て隆盛なるを致し、彼等僧侶は專ら現世の禍福吉凶を說き、且つ自ら諸大寺の間に位地勢威を競ふに至り、滔滔として俗醜を帶ぶるもの亦已むを得ざるなり。

延昌、光勝、源信
元杲、深覺
淨土往生の勸說

然るに此間にありて天台宗の延昌、光勝、源信、眞言宗の元杲、深覺が大に來世の苦樂昇沈を說き、淨土往生を勸めたるは、自ら一異彩を放てる觀あり、而して其實一部の反動たるなり。

第五節
皇慶、仁

〔五〕後朱雀天皇の朝に入りて天台宗の皇慶、眞言宗の仁海、共に大に秘密教を鼓吹し、二人の下より兩密對立し、益興隆繁衍す。朝廷數彼等を請し、國家安穩の加持祈禱をなさしむ。然るに當時國家の安穩を害する者、亦實に諸大寺の間にあり。曰

山寺の爭

はく山寺の爭、曰はく南北の爭、皆然らざるはなし。同天皇の朝園城寺の明尊の天

山門大衆の嗷訴

台宗座主となるに方りて圓仁の末資三千人一時に京師に入り攝政賴通の第に嗷訴し、亂暴狼藉に及べり。

寺門大衆の奏請

圓珍の末資は奏請して園城寺に大乘戒壇を設置せんとし比叡山の大衆極力反抗拒否せり。後冷泉天皇後三條天皇の朝に入りて、二門の大衆益

興福寺の富榮

相敵視し、交京師に入りて嗷訴す。奈良の諸大寺の內、興福寺は藤原氏の氏寺たる

惡僧
朝野の信仰
法成寺 平等院
定朝教禪
北京の三大勅會
興福寺大衆の暴行
山門大衆の暴行
園城寺の燒失
大乘院の剏立
奈良の兩門跡
諸大寺大衆の紛爭亂鬪

を以て富榮を極め大衆恣に勢威を張り、自ら延暦寺園城寺の大衆に對抗し、共に惡僧の稱あり。彼等諸大寺の大衆は動もすれば兵器を弄せんとし、近畿諸國の物情自ら騷然たり。

然れども朝野共に佛教の功德靈驗を崇禮信仰すること毫も衰へず、諸公卿相競うて寺塔を興し、圖像を作れり、道長の本願にかゝる法成寺、賴通の本願にかゝる平等院等は、結搆壯麗を極めたり。定朝教禪等圖像の妙工を以て聞え、僧綱に擬せらるゝに至れり。後三條天皇の末、勅を下し圓宗寺に法華會、最勝會を置き、白河天皇の朝法勝寺に大乘會を置きたまひ、後永式としたまふ。是れ所謂北京の三大勅會なり。

白河天皇の承保元年興福寺の大衆同寺の別當賴信を殺害し。永保元年大衆數千人比叡山の別院なる多武峯を攻めて火を放つ。同年比叡山の大衆園城寺に闖入し火を放ちて堂塔を燒燼し、僧侶を殺害す。實に佛教西來以後始めて此一大慘事を見るに至れり。堀河天皇の朝に法相宗の隆禪興福寺に大乘院を開き、後一乘大乘の兩院相並びて興り、奈良の兩門跡と稱せられ、大衆益富榮を誇り、勢威を張る、鳥羽天皇崇德天皇の朝以來諸大寺の大衆の紛爭亂鬪益劇烈なるを致し、南には興福寺、多武峯、金峯山、熊野、北には延暦寺、園城寺、白山等の大衆諸方に兵を搆へ、鋒を交ふる

日吉の神輿
春日の神木

諸公卿の慴怖
山科道理

秘密教の弊害慘毒

良忍、永觀

融通念佛宗の開立

覺鑁
大傳法院の開立

眞言宗新義派

金剛峯寺大傳法院
爭闘

に至り、黯澹たる殺氣都鄙に充つ。彼等は佛陀神明の威靈に口を藉りて恣に慾望を成さんとするものにして、比叡山の大衆は日吉の神輿を奉じ、興福寺の大衆は春日の神木を奉じ、交〻京師に闖入せり。朝廷彼等を如何ともする能はず、其嗷訴するに方ては諸公卿慴怖して、策の出づるところを知らず、遂に山科道理の語あるに至れり。

蓋し秘密教の興隆繁衍は、朝野を云はず、緇素を云はず、專ら加持祈禱に依りて現世の利益幸福を願求せんとしたるものにして、其弊害は先づ諸大寺の大衆の紛爭亂闘となり。遂に國家社會の秩序を紊亂するに至り。其弊害慘毒實に量るべからざるものありたり。

既に佛教の紛亂頽敗は極に達したれば、必然の形勢として、何等かの新局面の開展せられざるを得ず。崇德天皇の朝諸大寺の大衆の紛爭亂闘せる間にありて良忍永觀盛に淨土往生を勸說し、同天皇の天治元年良忍融通念佛宗を開立し、門下漸く盛なり。長承元年覺鑁高野山に大傳法院を興し、空海の事業の中興を以て自ら期するに至り、後世眞言宗新義派の祖と稱せらる。近衛天皇後白河天皇二條天皇の朝、諸大寺の大衆の紛爭亂闘益〻劇烈にして、警報四傳す、六條天皇の朝金剛峯寺の大衆大傳法院を攻め、大に爭闘するに至る、是れ寧ろ覺鑁の新勢力の積成したるを證すべ

源空
淨土宗の開立
淨土教の勃興
第六節　鎌倉幕府
幕府の政令
榮西　臨濟宗の傳來
二新宗の新勢力
諸大寺の大衆の暴横
二新宗の禁制
源空土佐に配流せらる
榮西鎌倉に下る　壽福寺の建立

し。高倉天皇の朝一世の大德を以て聞えたる源空極力淨土往生を勸說し、安元元年淨土宗を開立するに至りて門下雲集し、殊に源智、聖覺、隆寛、金光、辨長、證空等大に聞えたり。安德天皇の朝天下大に亂れ、朝野の人心洶洶として安ぜざるに方り、源空の勸說するところは沛然として流敷し、一世の人心を支配す。滔滔たる緇素老幼相競うて淨土往生を願求し、專修念佛の聲街衢に充つるに至れり。

〔六〕後鳥羽天皇の朝源賴朝の鎌倉に幕府を開くに方り、天下の形勢一變し、佛教亦革新の時期至れるを見る。外には賴朝數々令を下して諸大寺の大衆の暴横を牽制し、內には源空等の新宗益勢力あり。建久二年榮西宋より皈り臨濟宗を傳持し、我國佛教の再興を以て自ら任し興禪護國の主意を論張せり。是に於いて淨禪の二新宗相並びて新勢力を成さんとす。

抑佛教の紛亂頹敗は由來するところ尙しきを以て、固より一朝にして革新の功果を見るべからず。諸大寺の大衆の暴横尙ほ跡を收むるなく、數々京師に闖入して朝野を駭かせり。源空榮西の二新宗の興隆するに方りて、彼等は相結んで極力排擊妨害し、奏請して二新宗を禁制せんとす。土御門天皇の朝源空遂に罪名を負うて土佐に配流せられ、一門の諸弟子四方に流浪するに至れり。同天皇の朝榮西亦厄に罹り、京師を逃れ去りて鎌倉に下り、賴家の供養を受け、壽福寺を開いて圓密禪三宗の道

親鸞 眞宗の開立
眞佛、性信
道元 曹洞宗の傳來
興聖寶林寺 辨圓
道隆の西來 道元の北行
永平寺の建立
東福寺の建立
建長寺の建立
良忠
日蓮 日蓮宗の開立
親鸞の示寂
日蓮の上書 日蓮伊豆に配流せらる

場となす。然れば彼等の厄に罹りたるは、寧ろ新宗が諸國の地方に傳播流敷する好因縁となれり。順德天皇仲恭天皇の朝を經て後堀河天皇の朝に入り、元仁元年源空の弟子親鸞常陸の稻田に於いて眞宗を開立し、自ら世俗の風儀に順ひ、肉を噉し妻を帶し、專ら阿彌陀佛の大慈悲を宣傳すと稱し、門下に眞佛性信あり、教化殆ど東國に遍し。同天皇の安貞二年道元宋より皈り、曹洞宗を傳持す、四條天皇の朝に入り、山城深草に興聖寶林寺を興し、始めて叢林の淸規を行ふ。同天皇の朝辨圓宋より皈り、後嵯峨天皇の朝宋僧道隆來り、共に臨濟宗を傳持す。道元俗喧を厭うて越前の山中に入り、永平寺を開いて弟子を接得し、道化北國に振ふ、攝政道家辨圓の學德に服し、京師に東福寺を興し請して開山となし、且つ奏請して日本國惣講師となさんとす。後深草天皇の朝北條時賴道隆を請し、鎌倉に建長寺を興す。是に於いて京師鎌倉相對して臨濟宗の興隆人目に聳へ、始めて諸宗の間に一大位置を得るに至れり。同天皇の朝辨長の弟子良忠あり、京師鎌倉の間を往來して專修念佛を皷吹し、門學大に興る。安房淸澄山の衆徒日蓮諸宗の狀況を觀て大に發憤し、建長五年日蓮宗を開立し、鎌倉に入りて臨濟淨土等の諸宗の非を論し、專ら妙法蓮華經の功德を擧揚す、龜山天皇弘長二年親鸞京師に寂し、漸く血統法統兩分の狀あり。同天皇の朝日蓮幕府に書を上り諸宗の非を論して國家の時事に及び、遂に罪名を負うて初め伊豆に配

日蓮佐渡に流さる
身延山の開創
日昭、日朗、日興
一遍
時宗の開立
遊行上人
支那大陸との交通
普門、紹明、覺心、義尹の入宋
宋僧正念、祖元、一寧の西來
淨智寺の建立
圓覺寺の建立
普門の盛譽
南禪寺の建立
日像
日蓮宗京師に流傳す
紹明の盛譽
京師の臨濟宗の勢力
德儉、師錬、鏡圓、妙超
元亨の宗論
大德寺の建立
曹洞宗の隆盛
紹瑾、紹碩
惣持寺の建立

流せられ、後再び佐渡に配流せらる。文永十一年赦されて鎌倉に皈り、尋いで甲斐の身延山に隱棲して弟子を敎養す、門下に日昭日朗日興等あり。後宇多天皇の建治二年一遍時宗を開立し、諸國を遊行して念佛を勸說す故に遊行上人と云ふ。當時支那大陸の交通再び盛に開け、彼我の僧侶の徃來甚だ頻繁にして、彼等は皆臨濟曹洞の宗風を傳持擧揚したり。普門紹明覺心義尹等宋に入りて聞え、宋僧正念祖元一寧等來りて鎌倉に下る。北條師時淨智寺を興して正念を請じ、時宗圓覺寺を興して祖元を請す。伏見天皇の朝龜山法皇勅願あり京師に南禪寺を興し、普門を請じたまひ。深く崇重歸依したまふ。同天皇の朝日朗の弟子日像京師に上り、始めて日蓮の宗風を唱導し、號して法華宗と云ふ。後伏見天皇を經て後二條天皇の朝に入り、紹明勅召を拜して宮中に臨濟の宗風を擧揚す。辨圓の後普門紹明の二人出でゝ京師に臨濟宗大に興隆し、殆と天台眞言の二宗を壓倒せんとする狀あり。後醍醐天皇の朝普門紹明の後を受けて德儉鏡圓師錬妙超等の諸大禪德あり。交〻勅召を拜して宮中に參す。天台宗の徒彼等の盛譽を目擊して意平ならず。遂に宮中に於て天台禪二門の優劣を論議抗爭するに至れり。嘉祿二年赤松則村京師に大德寺を興し妙超を請じ開山となす。曹洞宗の紹瑾紹碩等北國に起りて門下雲集し、一大勢力を成す。紹瑾能登に惣持寺を開き北國の佛敎の中心たる觀をなせり。此の如くにして京師鎌倉に臨濟

日像、妙實、法明、寂惠、呑海、了源

鎌倉佛教の盛觀

黄金時代

聖然
明慧、宗性、凝然
俊芿、曇照、覺盛、叡尊
北京律
南京律
法性、道範
賴瑜
大傳法院の移轉

第七節

南北朝

天台眞言の徒の勤王

尊澄法親王
尊雲法親王

宗興り、北國に曹洞宗興り、自ら三方鼎立の狀あり、同時又日蓮宗の日像妙實、融通念佛宗の法明、淨土宗の寂惠、時宗の呑海、眞宗の了源、等諸方に競興して各其宗風を擧揚したれば、所謂鎌倉佛教は朝野都鄙に流敷瀰漫するに至れり。

鎌倉幕府時代の初期は、我國佛教の黄金時代と謂ふべく、所謂鎌倉佛教たる新宗を開立唱導したる諸高僧の輩出したるにとゞまらず、三論、法相、戒律、華嚴、眞言等の諸宗に諸大德輩出したり。即ち三論宗に聖然あり。法相宗に貞慶あり。華嚴宗に明慧宗性凝然あり。戒律宗に俊芿曇照覺盛叡尊あり。京師奈良に對立し、北京律南京律の稱あり。眞言宗に法性道範賴瑜あり。法性道範は古義を執り。賴瑜は新義を興し、兩門對立して相降らず。賴瑜は遂に高野山を下り、大傳法院を根來に遷すに至れり、

〔七〕後醍醐天皇の朝鎌倉幕府倒れ、中興の大業一たび成りたるも、僅に數年にして政治上の權力兩分し、南朝北朝は公家武家を代表して對立抗爭するに至り、天下大に亂れ、佛教亦著大なる影響を蒙れり。所謂公家佛家たる天台眞言の僧侶は、南朝のために盛に加持祈禱をなすのみならず、自ら武裝をなして軍に投し、數〻戰功ありたり。殊に天台宗は妙法院法親王尊澄、（後に宗良親王と云ふ）三千院法親王尊雲（後に護良親王と云ふ）の袈裟を脫して王事に盡瘁したまふに方り、比叡山の大衆大に憤興せり。

妙超、慧玄、義亨、疎石、

鎌倉の禪風京師に入る

武家佛教

妙心寺の建立

天龍寺の建立

疎石の盛譽

圓通懺摩の法
安國寺の設置

疎石の示寂
疎石の弟子

周信、中津、妙葩、周澤、志玄、德濟、

後醍醐天皇深く佛教に意を傾けたまひ、常に諸宗の高僧を召して法義を談論したまふ、當時臨濟宗に妙超(宗峯)、慧玄(關山)、義亨(徹翁)等あり、殊に妙超は數〻宮中に參して信重せられたり、

蓋し幕府倒れて鎌倉の五山衰微したるも、尊氏が京師に幕府を開き、隱然鎌倉幕府の經營を繼續したれば、鎌倉の禪風は亦漸く京師に流傳して一部の人心を感化したり。然れば當時臨濟宗の大德は尤北朝に禮遇せられ、所謂武家佛教たる實を示せり。花園法皇仁和寺御所跡を慧玄に賜ひ、妙心寺を造營せしめ給ひ、尋いで北朝光明天皇康永元年足利尊氏直義發願して、山城嵯峨に天龍寺の大禪苑を興し、疎石を請して開山となす。是れより鎌倉の支那禪風は圓覺寺開山祖元の法孫たる疎石に依りて京師に振興するに至れり。朝廷幕府共に疎石を禮遇し殊に尊氏は其學德に服して弟子の禮を執り、其幕府の經營に關しても、亦教を受けたり、疎石は教禪に兼通し、數〻圓通懺摩の法等を薰修して靈驗を示せり、尊氏直義等が諸國に安國寺を興し、政教相助けんとしたるもの、亦必ず彼等に教へたる者ありたるに由るべし。然れば臨濟宗は疎石出でゝ稍面目を異にし、專ら京師に興隆するに至れり。北朝崇光天皇觀應二年九月疎石三會院に寂す。受學の弟子一千餘人、受度の弟子四千餘人ありたりと云ふ。周信(義堂)、中津(絕海)、妙葩(春屋)周澤(龍湫)、志玄(無極)德濟、

周伸、周愉、京都の五山

五山文學

元光　永源寺の建立　元選　方廣寺の建立

宗昭、光玄　妙實、日靜　本願寺　妙顯寺　本國寺　日什　妙滿寺

山門大衆の暴擧

杲寶

僧錄司

相國寺

五山十刹の位次を定む

（鐵舟）周伸（無求）、周愉（默菴）等大に聞え、後義滿宋の例により五山を設くに方り、彼等各々請せられ相共に益勢力を成す。彼等は臨濟宗の宗風を擧揚するのみならず、支那の文藝學術に意を用ゐ、所謂五山文學の盛況大に見るべきものありたり。

同天皇の朝道隆の法孫元光（寂室）近江に抵り、永源寺を開き、後明の無友の法嗣元選遠江に抵り方廣寺を開き、各地方にありて一門の宗風を擧揚せり。

當時眞宗には宗昭（覺如）光玄（存覺）あり。日蓮宗には妙實日靜あり。彼等は各々其宗に聞え、本願寺、妙顯寺、本國寺の規摸を張り、漸く朝野の人目を引く。後日什出て妙滿寺を開くに至り日蓮宗の爲めに大に氣焔を吐けり。

此の如くにして京師に於いて所謂鎌倉佛教の興隆するに至りて、天台眞言の僧侶は意安からず、比叡山の大衆は數々山を下りて嗷訴し、暴擧して臨濟宗の諸大寺を破却せんとするに至り。眞言宗の杲寶亦殊に書を作り極力排擊せり。然るに臨濟宗は政治上の權力に附隨して益興隆し、五山十刹の繁榮比なく、北朝後圓融天皇康曆二年幕府始めて僧錄司を置き、妙葩を擧げて之に任す。同天皇の朝義滿京師に相國寺を興し、同じく妙葩を請して開山となし別に鹿苑院を搆へて僧錄司の所となす。北朝後小松天皇至德三年義滿五山十刹の位次を改め定め、五山の上に南禪寺を置き、同寺に周信を請す。是に於いて京師に於ける佛教の勢力は臨濟宗に皈し、臨濟

宗眞、寂靈、 慧明、眞梁 幕府の宗門 諸侯の宗門 宥快、聖憲 應永の大成 聖冏 聖聰 增上寺

宗の勢力は疎石の門下に皈したるなり。

曹洞宗に紹碩の門下に高僧輩出し宗眞(太源)寂靈(通幻)等四方に奔走して一門の宗風を擧揚せり。寂靈の門下に慧明(了菴)眞梁(石屋)の二人あり、前者は東國に下り、後者は西國に往き、各〻諸侯の皈依を受く。然れば共に所謂武家佛敎なるも、臨濟宗は幕府の宗門にして曹洞宗は諸侯の宗門たる狀ありたり。

當時眞言宗に宥快聖憲あり共に學德を以て聞ゆ、前者は古義の敎相を大成し、後者は新義の敎相を大成したりと謂はる。

稱光天皇の朝淨土宗に聖冏あり、東國に起り、殊に書を作りて禪に對抗し且つ常野武相の地を巡行して敎化盛なり。門下に聖聰あり、後武藏貝塚に增上寺を開き益一門の敎義を宣敷す。

第八節 室町幕府の衰傾 五山の諸禪德の凋落 入明使

〔八〕後花園天皇の朝に入りて室町幕府の勢力漸く衰傾の兆ありて、幕府の宗門たる臨濟宗尤其影響を蒙る。且つ五山の諸禪德漸次に寂を示して後を嗣く者乏しく、內外の事情交〻相迫り、臨濟宗の形勢漸く一變せんとす。

五山十刹の諸叢林に疎石の法孫群をなすと雖、彼等は大半一門の宗風擧揚に意を致さすして、專ら支那の學藝を玩び、詩文書畫の末技に名譽を競ひ、幕府の意を受けて文書記註の事を掌り、且つ入明使となり支那に航するに至り、殆と幕府の一官人

慧玄の法孫
義亨の法孫宗舜
妙心寺の再興
宗深
宗純
臨濟宗の衰頽
諸國大名の勃興
曹洞宗の勃興
明宗、正文、正猷、爲瑤
毛利氏大内氏島津氏の外護
兼壽、眞慧
兼壽の巡教
眞慧の巡教
本願專修二寺の軋轢

に類したり。然れは彼等の間に宗乘の見るへきものなしと雖、間〻學術技藝を以て名を傳ふへきもの內治外交を以て功を錄すへきものあるを見る。

京師に於ける臨濟宗中妙超の二高弟たる慧玄義亨の法孫は稍別風をなして妙心大德の二寺に據る。永亨文安の交慧玄の法孫宗舜(日峯)大に一門の興隆に苦心し、妙心寺の衰頽を挽回せり。後宗深(雪江)出つるに至りて門風大に張る。同時に義亨の法孫に宗純(一休)出て畸行を以て顯はれたり。

蓋し幕府の勢力漸く衰頽して幕府の宗門たる臨濟宗殊に五山十刹の衰頽するが如く、諸國の大名の漸く勃興して大名の宗門たる曹洞宗の勃興するは寧ろ當然なり。宗眞寂靈の法孫諸國に繁衍し、明宗(大綱)正文(月江)正猷(竹居)爲瑤(器之)等各大名の皈依を受け、各地方に一門の宗風を擧揚す。西國に於いて毛利氏大內氏島津氏等主として外護の力を盡したれは、其地方に大勢力を成すに至れり。

然るに政治上の權力漸く統一を缺き、天下騷亂の兆あるに方り、佛敎界亦大に動搖す。眞宗に兼壽(蓮如)眞慧の二人出て、前者は本願寺に據り後者は下野の專修寺に據り、對抗の狀あり、兼壽眞宗の中興を以て自ら任し、京畿幷に北國に巡敎し、到る所人心を風靡す。後土御門天皇の朝眞慧專修寺を伊勢の一身田に遷し、自ら北國を巡敎す。是より本願專修二寺の門徒各〻地方の大名に結びて軋轢紛爭す。日蓮宗に日隆日

日隆、日親、日眞、日朝
身延山の中興
本願寺門跡
眞宗日蓮二宗徒の軋轢
眞盛
天台宗眞盛派
比叡高野根來の大衆の暴擧亂行
比叡山大衆の大擧
天文の法亂
織田信長京師に上る
本願寺の大勢力
光佐

親日眞日朝等出で、日隆日親日眞共に本跡二門の勝劣を論張して一家の見を立て、極力諸宗を排せり。日朝は東國に起り身延山の中興と稱せらる。後柏原天皇の朝兼壽の後に光兼(實如)ありて本願寺益勢力あり、勅あり門跡に准せらる。而して眞宗日蓮の二宗の徒常に京畿に軋轢す。諸國の大名亦數〻彼等を教唆煽動し、交〻紛爭亂鬪せり。京畿幷に北國の人民、殊に其禍亂に罹る、而して又尤是等諸宗の感化に浴せり。

同天皇の朝天台宗に眞盛出て、大に淨土教を鼓吹し、自ら別立したる同宗に於ける一異彩なり。然れども天台眞言は滔滔として紛亂頽敗し、比叡高野根來の大衆數〻暴擧亂行せり。殊に比叡山の大衆は京師に於いて臨濟宗に次いて眞宗日蓮宗の勃興するに方り、大衆は數〻彼等宗徒を迫害したり後奈良天皇天文五年比叡山の大衆大擧して山を下り、日蓮宗徒を迫害し、京師の二十一ヶ寺を燒燼し、奏請して其徒を追却するに至れり。

正親町天皇の朝に入り、幕府の威信全く地に墜ち、諸國の大名競興し、天下騷亂を極む織田信長の大志を齎して京師に上るに方り、佛教亦大に其影響を蒙る。當時京師の北に比叡山の大衆の北國の淺井氏朝倉氏に通ずるあり。南に攝津石山本願寺の光佐(顯如)一大勢力を成し、西國の毛利氏等に通ずるあり。信長京師に入り比叡山の

信長本願寺を攻む
信長比叡山を攻む
比叡山の燒亡
信長本願寺に和を請ふ
豐臣秀吉根來を攻む
根來山の燒亡
木食應其
專譽、玄宥
天主教の傳來
第九節　堂塔圖像の修營
方廣寺の建立
比叡山の再興
豪盛、亮信、全宗、詮舜
應其、賴慶
興山寺の建立
青巖寺の建立

大衆を招き、本願寺の光佐を呼びたるも共に應ぜず。乃ち大兵を發して本願寺を攻め、元龜二年九月自ら大兵を率ゐて比叡山を攻め、火を放ちて堂塔を燒燼し、一千年の靈地赤土に化す。後本願寺を攻め數〻激戰したるも利あらず、却て大に苦しめられ遂に勅命を請うて和を講ずるに至れり。天正十三年豐臣秀吉根來の大傳法院を攻め、堂塔を燒燼し、大衆四散し專譽玄宥の二學匠南北に分離流浪す。秀吉軍を進めて高野山に向はんとするに方り、高野山の客僧木食應其大に周旋し、漸く一山事なきを得たるなり。

初め後奈良天皇の朝天主教始めて我國に傳來して西國に蔓延し、後京師に入り信長に迎へられて堂宇を興すに至る

〔九〕後陽成天皇の朝秀吉政治上の權力を一統するに方り、漸く佛教の再興に意あり且つ夙に天主教の弊害あるを洞見し、其堂宇を毀ち、宗徒を刑し、佛教の堂塔圖像を修營す、其本願にかゝる方廣寺毘盧遮那像の造立は大に人目を引きたり、天台宗の豪盛亮信全宗詮舜等一たび禍難を避けて地方に散じたるも、再び京師に入り、秀吉に請うて再興の事業に當り、比叡山の堂塔漸次に再興せらる。眞言宗の應其賴慶高野山の興隆を經營し、興山寺、青巖寺を開く。臨濟宗の宗陳(古溪)宗園(春屋)大德寺の荒廢を再興し、眞宗の光佐京師堀河に寺基を遷して一宗の柱礎を固う

宗陳、宗園　大德寺の再興　本願寺の移轉　日奥

す此の如くにして諸宗漸く平穩に皈す。獨り日蓮宗の日奥諸宗を排擊して不受不施を主張して罪せらる。

不受不施派　諸大寺の法度　學問の策勵

德川家康江戶に幕府を開くに方り、政治上の一經綸として諸宗の形勢に意を用ゐ、諸大寺に法度を下して、大衆の暴橫を牽制して學問の講究を策勵し、且つ寺領を寄附して其興隆を謀りたれば諸宗共に幕府が統監の下に益興隆するに至れり。

天海　義演　長谷寺の中興　智積院の建立　尊照　知恩院の中興　光壽　東本願寺の造營

當時天台宗に天海あり、比叡山再興の事業を完成し、舊規模を復す。眞言宗に義演あり、醍醐寺の衰敗を挽回す。專譽玄宥の二人は相分れ、前者は大和に入りて長谷寺を再興し、後者は山城に入りて智積院を興し、各〻新經營をなす。淨土宗に尊照あり、知恩院の衰敗を中興し。京師に門風を張る眞宗に光壽(敎如)あり、東本願寺を分立し。日蓮宗に日重あり、本國寺に一門の學風を開き門下漸く興る。此の如くにして諸宗の高僧は宛も戰後の經營に忙殺せらるゝ狀あり。

慈昌　天海、崇傳

然るに我國政治上の中心の京師を去り江戶に遷るに從ひ、佛敎の中心亦動搖し、幕府が慈昌天海崇傳等を重用するに方り、彼等は江戶に其宗風を擧揚せり。就中天海崇傳は幕府の政治に參與し、家康秀忠家光を助けて大に經營畫策するところあり、自ら佛敎の形勢に影響を與へたり。

天海の經營

蓋し天海は常に平安朝に於ける天台宗の盛況を慕ひ、幕府に依りて再現せんとし、

家康天海二人の結託
喜多院の中興
日光山の中興
東叡山の剏立
廓山、了的
崇六、宗彭
東海寺
日乾、日遠
天主教の嚴禁
宗門改め
寺院檀家の關係
東寔、文守
眞圓、覺海、超然

一種の政教相關を說けり。家康亦佛敎の勢力を恐れたれは、一面天海の說を容れ、其經營を助けたり。されは初め喜多院を以て關東天台宗の本山となし、天海を請す。家康薨する後天海益其經營に力を致し、日光山を開きて一宗の勢力を張り、寛永の初めに至り東叡山を開き、幕府の祈禱道塲となし、法親王の東下を請ふに至れり、然れは關東に於ける佛敎の勢力は天台宗に皈せんとしたるも、幕府は一宗に偏する弊を避け、諸宗の興隆を助けたれは、淨土臨濟等の諸宗漸く旺盛なり。淨土宗には廓山了的出て、臨濟宗には崇六（嶺南）宗彭（澤菴）出て、各〻門風を張る。明正天皇の朝宗彭家光の皈依を受け品川に東海寺を開く。日蓮宗の日重の弟子日乾日遠の二人東下して關東に談林を興し、後身延山の主となるに方り、日蓮宗亦大に關東に繁衍す。眞言曹洞眞宗等の僧侶各東下し、一宗の興隆を經營したり。

幕府は天主敎の弊害を見て嚴禁し、宗門改めの制を設け、佛敎の僧侶を利用したれは諸國の僧侶は幕府の權威を藉りて人民の間に推敬せられ、漸く寺院檀家の關係を見るに至れり。

後光明天皇の朝臨濟宗に東寔（愚堂）文守（一絲）あり文守殊に京師に在りて天皇の殊遇を拜し、窃に時勢の推移を嘆じたるも竟に如何ともすべからざりしなり。

當時長崎に支那の商賈の來皈居留して私に寺院を造營し、支那の僧侶を請ず、乃ち

三福寺　隆琦の西來　性潛　黃檗宗の開立　性瑫、如一　瑞聖寺　道光　大藏經の開刻　興儔の西來　第十節　儒佛二教の軋轢　慈山、光謙、堯恕、眞超、性慶、亮汰、運敞、淨嚴、雲堂、空心、交易、玄光、聞證、義山、貞準、性憲、知空、慧空、性激、道海、僧濬

眞聞(興福寺開山)、覺海(福濟寺開山)、超然(崇福寺開山)等相踵て西來し、所謂三福寺の禪漸く盛なり。承應三年福建の黃檗山主隆琦(隱元)興福寺性融等の强請によりて自ら一門を構へ、嘖嘖たる道聲京師に聞ゆ。臨濟宗の性潛(龍溪)等使を送りて東行を請ふに至り、隆琦京師に入り大に人目を引く。後西院天皇の寛文元年幕府の認許を得て山城宇治に黃檗山萬福寺を開き門下雲の如く、性瑫(木菴)如一(即非)の二人大に聞ゆ、隆琦の寂後性瑫開立の事業を完成し、靈元天皇の朝江戸に下り、紫雲山瑞聖寺を開く、是れより黃檗紫雲相對して興隆す、性瑫の門下人材輩出し、道光(鐵眼)大藏經の開刻を以て聞えたり。

同天皇の朝支那より興儔(心越)西來し、關東に歷遊して曹洞の宗風を擧揚せり。

(十)靈元天皇の末將軍綱吉の時に方りて幕府の諸制度整然として備はり、政教相併ひて盛興するに至り、始めて佛儒二教の軋轢を見る、儒家相競うて佛教を排難したるも議論常に肯綮に中らず、未だ著しく影響するところあらざりき。

當時佛教の諸宗に學問講究の風大に興り、學僧輩出し、各一方に聳へたり。即ち天台宗の慈山(妙立)、光謙(靈空)、堯恕、眞超、性慶(義瑞)。眞言宗の亮汰、運敞、淨嚴、雲堂、空心(契沖)。曹洞宗の交易、玄光、淨土宗の聞證、義山。同西山派の貞準、性憲。眞宗の知空、慧空。黃檗宗の性激(高泉)、道海(潮音)、華嚴宗の僧濬(鳳潭)、等。皆學問文章を以て一時に

亮賢、隆光
融觀
無能、祐天

聞え、間〻互に書を著はして意見を戰はしたり。

然るに此間にありて眞言宗の亮賢、隆光、融通念佛宗の融觀、淨土宗の無能、祐天等專ら教導誘引を以て聞え。殊に亮賢隆光の二人幕府の大奥に入りて加持祈禱を事としたり。

安樂院の開立
靈雲寺の開立

東山天皇の朝天台宗の光謙比叡山に安樂院を開いて四明の學風を興し、且つ四分律を唱へ、門風大に盛なり。眞言宗の淨嚴江戸に靈雲寺を開いて有部律を唱ふ。是れより天台眞言の二宗に戒律を唱ふる者漸く多し

宗胡　道白、竺信
宗統復古

曹洞宗の宗胡(月舟)一宗の法系の紛亂したるを憂ひて整正せんとし、道白(卍山)竺信(梅峯)出てゝ益力を致し、一宗の騷擾となり、遂に幕府に訴へて裁斷を請ふに至り、元祿十五年始めて古法を復するを得たり。

宗乘の講究
眞流、智幽
寂照、傳尊
大玄、貞極
僧樸、法霖
日達、
眞流智幽の抗爭
眞流安樂院に入る

同天皇の朝將軍吉宗の時諸宗に學僧林の如く、彼等は主として宗乘の講究に力を用ゐ、諸宗共に宗乘の議論大に盛なるを致せり。天台宗の眞流(圓耳)、智幽(玄門)曹洞宗の寂照(大光)、傳尊(天桂)。淨土宗の大玄、貞極、眞宗の僧樸、法霖、日蓮宗の日達、等。各一門戶を搆ふ。殊に天台宗に光謙の門風の盛興するに方りて、眞流極力其非を論し大師の眞意は圓密禪の一致にあるを說けり。光謙の弟子智幽安樂院に據りて門流を舉揚し相降らず。寶曆八年に至り、東叡山の公啓法親王の意により眞流安樂院に

眞流追放せらる

敬光

上野學寮
智豐兩山
吉祥寺栴檀林
飯高談林
中村談林
本願寺學林
高倉學寮

覺融、法住、快道、定惠、飲光、
慧鶴、圓慈
慧印、瑞芳、本光、藏海
關通、普寂
僧谿、功存、智洞、深勵
日諦、日導、日賢
正法律の開立
諸宗の排擠

入り、始めて四分律の制を改めて大乘圓頓戒を興し、古制を復せり。然るに後桃園天皇の朝將軍家治の時に至り、再び公遵法親王の意により光謙の遺意に依り、安樂院に四分律の制を行ひ、眞流等を追放するに至る。後園城寺に敬光（顯道）出て古制を復せんとしたるも事成らず。光謙の一門陸續高僧を出したり。

當時諸宗の學事上の施設益備はり、學問の講究益盛なり、天台宗の上野學寮、眞言宗の智豐兩山（智積院、長谷寺）、曹洞宗の吉祥寺栴檀林、淨土宗の增上寺檀林、日蓮宗の飯高談林、中村談林、本願寺の學林、東本願寺の高倉學寮、等尤盛にして、是等の一にして常に所化（學徒）二千餘人を收容したるものあり。而して諸宗の能化にして學德共に高き者亦鮮からざるなり。

後櫻町天皇、後桃園天皇、光格天皇の列朝、將軍家治家齊の時に方り、諸宗に學德敎化を以て聞えたるもの、眞言宗に覺融、法住、快道（林常）、定惠（戒定）、飲光（慈雲）、あり。臨濟宗に慧鶴（白隱）、圓慈（東嶺）あり、曹洞宗に慧印（指月）、瑞芳（面山）、本光（瞎道）、藏海（雜華）あり、淨土宗に關通、普寂あり。眞宗に僧谿、巧存、智洞、深勵あり。日蓮宗に日諦、日導、日賢あり、各其宗の重鎭を以て目せられたり。就中飲光正法律を主唱して一門を立て、高貴寺を本所となし、天台宗の安樂院と共に專ら戒律を主張せり。

然るに諸宗對立して勢力を競爭し、相排擠せんとする狀あり。稍降りて仁孝天皇孝

諸宗の沈滯
寺檀の關係の弊害
神儒二教の勃興
神國思想の鼓吹
佛教の逆遇
痴空、日輝
月照、月性
第十一節
神佛判然
神祇官
大教
宣教使
佛教の位置勢力の
失墜
教部省
三條の教則
教導職
神官僧侶
大教院

明天皇の朝、將軍家慶家定の時に入りて諸宗の高僧大半寂を示し、漸く落莫沈滯の狀あり、殊に寺檀の關係益固着して益弊害あり。且一方には神儒の二教益興り、古典の講究盛にして、神國思想の鼓吹せらるゝに方り、佛教は自ら逆遇せられ、嘉永安政の交、佛教排擊の議益喧く諸寺の梵鐘を破毀して砲銃を鑄造し、海防に備へんとする者あるに至れり。是時に方り痴空日輝の宗學に盡せる。月照月性の王事に勤めたると。僅に傳へらるへきのみ。

〔十一〕今上天皇立ちたまひ、明治元年神佛判然の令を下し、神祇官を設け、三年大教を興し、宣教使を命したまひ、所謂神國の實を擧けたまはんとし、佛教の位置勢力全然失墜するに至り。諸宗の僧侶如何ともする能はす。五年教部省を設け三條の教則を頒ちて國民の皈向する所を示し、教導職を置き國民教導の事に當らしめたまふ、然るに便宜上神官僧侶を擧げて教導職に任したれは、諸宗の僧侶始めて一分の位置を得るに至る。乃ち教部省に請うて大教院を開き、神官僧侶相共に內外の學問を講究せんとす。八年五月に至り大教院廢せられ、諸宗別に學林教校を設く。十年教部省廢せられ、十七年八月教導職廢せらる。是に於いて諸宗は全然獨立し、各其宗の經營をなし、相競うて教育傳導に力を致せり。

古寺法寶の保護

寺院生活と學校制度と衝突

信仰條目と科學思想との牴牾

前途の運命

爾來政府は著名なる古寺法寶を美術工藝上の意義を以て保護するにとゞまり、毫も佛教諸宗の經營に關係するとなし

然るに方今我國の文運は極めて急速に發達進歩するを以て、諸宗が一宗の獨力にかゝる教育傳導の施設を以て、其發達進步に伴はんとするは、大に困難なり。且つ教育は寺院生活と學校制度との衝突に妨けられ、傳導は信仰條目と科學思想との牴牾に惱まされ、共に未た實際の功果の見らるへきものあるなし。此の如き形勢を以て推測せは、今日の佛教諸宗が我國の宗教として保つへき前途の運命は、大なる問題なり。

日本佛教沿革略 終

○歷代天皇皇后皇子受戒表

御名	法號	戒師	受戒年、月、日
聖武天皇	勝滿	行基	天平勝寶元、正、十四
同皇后光明子	滿福	同	同
同皇太夫人宮子	德滿	同	同
孝謙天皇	法基	鑑眞	天平寶字六、六、一
○伊登內親皇（桓皇）			
平城天皇		空海	大同五、九、十六
同皇后			天長五、一、一
高岳親王	眞如	空海	弘仁元、九、十六
○嵯峨皇后嘉智子	檀林皇后		嘉祥三、三、一
正子內親王（嵯峨皇子）	良祚		
源鎮　同	白雲禪師		
源清　同	秋篠禪師		
源勝　同	由蓮		
源明　同	素然		
源啓			
繁子內親王　同			
○淳和皇后	空海		天長五、一、一
恒寂親王（淳和皇子）			嘉祥二、正、一
基貞親王　同			同
仁明天皇			嘉祥三、三、十九
同皇后			

御名	法號	戒師	受戒年、月、日
人康親王	法理		
常康親王			
貞登皇子	深寂		
國康親王			齊衡三、一、一
源效			
○惟喬親王（文德皇子）	淨忍		
源每有　同			
源時有　同			
清和天皇	素眞	圓仁 宗叡	貞觀元、一、一 元慶三、五、八
陽成天皇			天曆三、九、廿一
○空性皇子（光孝皇子）			
綏子內親王　同			延長三、三
宇多天皇	空理 金剛覺	益信	昌泰二、十一、廿四 延喜元、十二、十三
同中宮			延喜五、五、一
齊世親王	眞寂	寬平法皇	延喜八、五、一
敦實親王	覺眞		
成子內親王			天德元、一、一
醍醐天皇	金剛寶	尊意	延長八、九、廿一
盛明親王			寬和二、一、一
高明皇子			安和二、一、一
朱雀天皇	佛陀壽	寬空	天慶六、三、十四

名	法名	戒師	年月日
村上天皇	覺貞		康保四、五、廿五
致平親王	悟圓	慶祚	天元五、五、十一
承平親王			
爲平親王			寛弘七、十、|
昭平親王			永觀二、|、|
保子内親王			
資子内親王			寛和二、|、|
選子内親王			長元四、|、|
○第三皇子 冷泉皇子	深觀		
第四皇子 同	覺源	仁海	
圓融天皇	金剛法	寛朝	寛和元、八、廿九
同　皇后			永祚元、|、|
華山天皇	入覺		寛和二、六、廿二
一條天皇	精進覺		寛弘八、六、十八
同　皇后			長德二、五、|
敦康親王			寛仁二、十二、|
修子内親王			萬壽元、|、|
三條天皇	金剛淨		寛仁元、四、十九
同　中宮			萬壽四、九、
同　皇后			寛仁三、|、|
師明親王	性信	濟信	寛仁二、八、廿九
敦元親王	明行	永圓 明尊	長元二、|、|
敦明親王	妙覺		長久二、八、|
敦平親王			永承四、|、|
○後一條中宮			長元九、九、|
馨子内親王			
後朱雀天皇			寛德二、正、十八
同　皇后			
禎子内親王			
○後冷泉皇后			治暦四、十二、|
後冷泉中宮			延久元、三、|
後三條天皇	金剛行	性信	延久四、五、廿一
輔仁皇子			元永二、十一、|
聰子内親王			
白河天皇	融覺	勝覺	嘉保三、八、十
第三皇子	覺行	性信	應德二、二、十九
第四皇子	覺法	範俊	長治元、七、十一
第五皇子	聖慧	寛助	
第六皇子	行慶	行尊	
第七皇子	圓行		
第八皇子	靜證		
令子内親王			大治五、|、|
○堀川中宮			嘉承二、|、|
鳥羽天皇	空覺	信證	保延七、三、十
第二皇子	最雲	仁豪	
第三皇子	寛曉	聖慧	
同　中宮	眞如法		康治元、|、|
同　皇后	清淨理		永治元、|、|
君仁親王			
第五皇子	覺性	覺法	保延六、六、廿二

第六皇子	覺快	行尊	久安三、三、四
第七皇子	道慧	覺猷	保延四、六、｜
第八皇子	眞譽		康治元、｜、｜
第九皇子	最忠		
皇子	道果		
統子內親王	眞如理		永暦元、｜、｜
研子內親王			
暲子內親王	金剛觀		保元二、｜、｜
崇德天皇			
同中宮	淸淨慧		保元元、七、｜
重仁親王	空性		
元性親王	覺憲	信法	
○近衛中宮	淸淨觀		
後白河天皇	行眞	覺忠	嘉應元、六、十七
同皇后			安元二、七、｜
第三皇子	守覺	覺性	永暦元、二、十七
第四皇子	圓慧		
第五皇子	定慧	行尊	
第六皇子	靜慧	覺忠	元暦元、臘、十八
第七皇子	承仁	眞圓	
第八皇子	道法	明雲 守覺	治承三、四、十六
第九皇子	眞禎		
第十皇子	恒惠		
亮子內親王	眞如觀		建仁三、｜、｜
式子內親王	承如法		
覲子內親王	性圓智		元久二、｜、｜
○二條中宮妹子	實相覺		永暦元、｜、｜
同中宮育子			仁安三、十、九
第二皇子	尊慧		
○高倉中宮	眞如覺		承元五、｜、｜
惟明親王	聖圓		
○後高倉院	行助	俊芿	建暦二、三、廿六
同皇子	尊性	實全	建保四、臘、十六
同皇子	道深		
利子內親王	眞性智		延應元、｜、｜
邦子內親王	正覺如		文暦二、｜、｜
能子內親王			
本子內親王			
後鳥羽天皇	良然	俊芿	承久三、七、八
同中宮	淸淨智		建仁元、｜、｜
長仁親王	道助		建永元、十、十七
第五皇子	覺仁		
第六皇子	道覺	慈圓	建保四、六、廿
第七皇子	尊快	承圓	
第八皇子	尊圓	圓忠	建保五、｜、｜
第九皇子	道守	良遍	
第十皇子	覺譽		
第十一皇子	行超		
雅成親王			嘉祿二、｜、｜
道伊親王			

道緣親王			
禮子內親王	眞如理		承久二、|、|
煕子內親王			寬喜二、|、|
○土御門中宮			承久三、|、|
第二皇子	尊守	圓長	
第三皇子	道仁		
第四皇子	道圓	道助	
第五皇子	仁助	圓淨	
第六皇子	靜仁		
第七皇子	最仁	眞仙	
第八皇子	尊助	公圓	貞永元、十一、八
第九皇子	增仁		
第十皇子	懷尊		
覺子內親王	眞如覺		
○順德中宮	淸淨觀		嘉祿二、|、|
善統親王			
第五皇子	尊覺	尊快	
第六皇子	覺慧	靜忠	弘長三、三、十
忠房親王	禪慧		
穠子內親王	理智覺		建長五、|、|
○義子內親王 中恭皇女	眞如覺		弘安十、|、|
○後堀河皇后	眞淸淨		寬元四、|、|
同　中宮	蓮華性		同
暉子內親王	妙法覺		同
後嵯峨天皇	素覺	尊助 圓照	文永五、十、五 同　六、四、五
同　中宮	遍智覺		
第四皇子	圓助		寶治三、正、廿八
第五皇子	淨助		
第六皇子	性助		正嘉元、十、十三
第七皇子	覺助		
第八皇子	忠助	靜忠	弘長三、十、五
第十皇子	最初		
第十一皇子	慈助	尊助	文永二、十二、二
第十二皇子	仁惠		
第十三皇子	勝助		
悅子內親王	遍勝覺		弘安八、|、|
後深草天皇	素實		正應三、二、十一
同　中宮	圓鏡智		永仁元、六、|
第三皇子	聖惠		
第四皇子	堯仁		
第五皇子	性仁	性助	弘安元、七、十三
第六皇子	行覺		
第七皇子	深性	性仁	弘安十、八、廿四
第八皇子	恒助		
久子內親王	眞如智		嘉元二、|、|
媖子內親王	圓覺智		德治元、|、|
永子內親王	眞性寂		正和五、|、|
龜山天皇	金剛源	了遍	正應二、九、七
同　中宮	佛性覺		弘安六、|、|
第八皇子	良助	尊助	弘安二、十一、六

受戒者	法名	受戒年月日
第九皇子	聖雲	
第十皇子	覺雲	
第十一皇子	叡雲	
皇子	道性　法助	
第十二皇子	性惠	
第十三皇子	性覺	
第十四皇子	聖覺	
第十五皇子	性融　性仁	
第十六皇子	順助	
第十七皇子	慈道　道玄	永仁三、二、四
第十八皇子	行仁　良助	
第十九皇子	恒雲	
第二十皇子	益性　益助	
第廿一皇子	道澄	
第廿二皇子	尊珍	
第廿三皇子	寬融（一名寬尊）	元弘元、|、|
守良親王	覺靜	
恒明親王		
尊誓皇子		
喜子內親王	清淨源	德治元、|、|
後宇多天皇	金剛性　禪助 聖[illegible]	德治二、七、廿六 同二、十一、廿一
同　皇后		
第三皇子	承覺	
第四皇子	性圓	
良治親王	性勝	

受戒者	法名	受戒年月日
嫥子內親王	眞理覺	嘉曆元、|、|
禖子內親王		
伏見中宮	眞如源	正和五、六、|
惟永親王	寬性　性仁	永仁三十一廿九
第四皇子	惠助	
第五皇子	尊悟	正和二、三、廿八
尊彥親王	尊圓　慈深	應長元、六、廿六
第七皇子	道熈	
第八皇子	尊熈	
第十皇子	聖珍	
譽子內親王	解脫心	正和二、|、|
延子內親王	眞性慧	文保元、|、|
後伏見天皇	理覺　尊道	元弘三、六、廿六
第三皇子	法守　寬性	元亨元、三、十九
第四皇子	尊胤	
第五皇子	仁悟	
第六皇子	長助	
第七皇子	寬胤　教寬	文保|、|、|
第八皇子	承胤	
第九皇子	亮性	
第十皇子	慈眞	
第十一皇子	尊道　尊圓	曆應元、臘、十四
璜子內親皇		延元元、|、|
○後二條中宮	眞實覺	德治三、閏八、|
第二皇子	祐助　良助	元應元、五、|

名		法名		受戒年月日
第三皇子		永尊		
第四皇子		聖尊		
邦省親王				
媞子内親王				延元元、|、|
華園天皇		遍行	惠鎮	建武二、十一廿二
第二皇子		覺譽		
業永親王		源性		康永二、三、十八
第四皇子		眞仁		
○後醍醐中宮			後還俗	天弘二、|、|
第二皇子		尊澄		
第四皇子		尊雲		
第八皇子		中尊		
第九皇子		聖助		
第十皇子		法仁	法守	暦應元、臘、廿八
第十一皇子		玄圓	覺實	
皇子		恒性		
皇子		尊眞		
皇子		無文元選		元德三、|、|
祥子内親王				
妣子内親王				
惟子内親王				
瓊子内親王				
○惟成親王	後村上皇子			
皇子	同	義仁		
○皇子	長慶皇子	尊聖		應永卅三、|、|
後龜山天皇		金剛心		觀應三、八、八
第一皇子		行悟		
●光嚴天皇		勝光智	元政	延文二、|、|
同 後宮				
○皇子	光明皇子	尊朝	法守	文和四、八、廿一
●崇光天皇		勝圓心		延文二、二、十八
●後光嚴天皇		光融	竹巖聖皐	應安七、正、廿九
熈平親王		行助		
第六皇子		道寛	寛尊	
皇子		覺叡		應安六、十一廿四
皇子		明承		
皇子		寛守		
●後圓融天皇		光淨	竹巖聖皐	明德四、四、廿八
第二皇子		道朝		
●後小松天皇		素行智	竹巖聖皐	永享三、三、廿四
後花園天皇		圓滿智	增運	應仁元、九、廿
○尊敦親王	後土御門皇子	尊傳	尊應	
皇子	同	道圓		
○清彦親王	後柏原皇子	尊鎮	公助	
寛恒親王	同	彦胤		
第二皇子	同	覺道		永正七、臘、廿六
○皇子	後奈良皇子	覺恕		
○第一皇子	後陽成皇子	覺深		
皇子	同	慈胤		寛永七、|、|
皇子	同	道晃		

皇族	法名	戒師	年月日
第八皇子 同	良純		寬永廿、九、十七
第十皇子 同	尊覺		萬治二、四、六
第十二皇子同	道周		
後水尾天皇	圓淨	龍溪性潜	慶安四、五、六
嘉遐親王	道寬	道晃	明暦三、四、廿一
眞敎親王	性眞		慶安四、五、—
第四皇子	尊敬		
第六皇子	性承		正保四、九、廿七
第十二皇子	尊晃		
第廿六皇子	信敬改眞敎號正覺		
皇子	最昭		萬治三、八、廿七
○貴平親王後西院皇子	永悟	常尊	寬文九、十、十三
孝智親王同	守全		延寶元、十、七
第六皇子同	公辨	公海	延寶二、五、一
宗範親王同	道祐		延寶八十一廿七
勝明親王同	良應	公邊	貞享二十一十三
皇子同	公辨	行惠	貞享三、四、—
第九皇子同	道尊		元祿四、六、—
靈元天皇	素淨	道仁	正德三、八、十六
第十五皇子	尊胤		享保十二、三十九
光子內親王		龍溪性潜	寬文五、十、八
○有定親王東山皇子	學尊		寶永五、臘、十八
第三皇子同	公寬		正德三、臘、六
○忠篤親王中御門皇子	忠譽		享保八、三、廿六
保良親王同	公尊		享保十六、九十八

皇族	法名	年月日
第二皇子同	公遵	
第四皇子同	慈仁	享保十九正廿二
寬全親王同	遵仁	延享四、十、廿七

歷代天皇皇后皇子受戒表 畢

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一二一四	道深	百濟	—	—	—	—
一二一四	曇慧	百濟	—	—	—	—
一二四〇	善信尼	—	—	大和櫻井寺	—	—
一二四〇	惠善尼	—	—	—	—	—
一二四〇	禪藏尼	—	—	—	—	—
一二四〇	惠便	高麗	—	—	—	—
一二四〇	達等	南梁	—	—	—	—
一二四五	道場	尾張	—	—	—	—
一二四七	豐國	百濟	—	—	—	—
一二四七	德齊	—	—	—	—	—
一二四八	聆照	百濟	—	—	—	—
一二五五	慧聰	百濟	—	大和法興寺	—	—
一二六二	雲聰	高麗	—	—	—	—
一二六二	僧隆	—	—	—	—	—
一二六九	慧彌	—	—	大和法興寺	—	—
一二六九	道欣	百濟	—	—	—	—
一二七〇	曇徵	高麗	—	—	—	—
一二七〇	法定	高麗	—	—	—	—
一二八二	聖德太子	大和	—	大和磐余	推古天皇三十、二、廿二	四九
一二八三	惠慈	高麗	—	大和法興寺	推古天皇三一、二、五	—
一二八三	慧齊	—	—	—	—	—
一二八三	止利	—	佛工	—	—	—
一二八三	惠先	—	—	—	—	—
一二八四	德積	百濟	—	—	—	—
一二八四	觀勒	百濟	—	大和法興寺	—	—
一二八九	請安	—	—	—	—	—
一三〇一	惠資	—	三論	—	—	—
一三〇五	常安	—	—	大和元興寺	—	—
一三〇五	靈雲	—	—	—	—	—
一三〇五	惠至	—	三論	—	—	—
一三〇五	慧隣	—	—	大和元興寺	—	—
一三〇五	慧雲	—	—	—	—	—
一三一〇	道登	—	—	—	—	—
一三一一	法道	—	—	播磨法華山	—	—
一三一二	慧隱	—	—	—	—	—
一三一三	僧旻	—	—	—	白雉四、六、	—
一三一三	覺勝	—	—	—	—	—
一三一三	安達	—	—	—	—	—
一三一三	義向	—	—	—	—	—
一三一三	僧忍	—	—	—	—	—

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一三一三	知聴	—	—	—	—	—
一三一三	道福	—	—	—	—	—
一三一三	道観	—	—	—	—	—
一三一六	法明尼	百濟	—	—	—	—
一三一八	智踰	—	—	—	—	—
一三一八	智達	—	法相	—	—	—
一三一八	福亮	呉	三論	—	—	—
一三二二	道顯	高麗	—	大和大安寺	—	—
一三二八	道行	—	—	—	—	—
一三三二	義覺	百濟	—	攝津百濟寺	—	—
一三三二	慧灌	高麗	三論	河內井上寺	—	—
一三三三	慧輪	—	三論	大和法隆寺	—	—
一三三三	慧師	高麗	三論	—	—	—
一三三三	道明	—	—	—	—	—
一三三三	智藏	—	三論	—	—	—
一三三三	神泰	—	三論	大和元興寺	—	—
一三三三	智光	河內	三論	—	—	—
一三三四	智圓	—	—	—	—	—
一三三九	祚蓮	大和	—	—	—	—
一三四〇	稽文會	—	佛工	—	—	—
一三四〇	稽主勳	—	佛工	—	—	—
一三四一	慧妙	—	—	大和百濟寺	白鳳十、十二、	—
一三四一	道文	—	—	—	—	—
一三四一	常輝	百濟	—	—	—	—
一三四七	自得	陸奥	—	—	—	—
一三四七	多常	百濟	—	大和法器山寺	—	—
一三四七	智隆	新羅	—	—	—	—
一三四七	智藏	—	—	—	—	—
一三四七	行心	新羅	—	—	—	—
一三四八	道信	—	—	—	—	—
一三四九	智宗	—	—	—	—	—
一三五〇	法忍	—	—	—	—	—
一三五〇	法藏	百濟	—	—	—	—
一三五一	法員	—	—	—	—	—
一三五一	法鏡	—	—	—	—	—
一三五一	眞義	—	—	—	—	—
一三五二	道光	—	戒律	—	朱鳥 八、四、	—
一三六〇	道昭	河內丹比	法相	大和元興寺	文武天皇 四、三、	七二
一三六一	惠施	—	—	—	大寶元、	—
一三六一	博通	—	歌僧	—	—	—
一三六一	役小角	大和茅原	修驗道	大和葛木山	—	—
一三六二	義成	—	三論	—	大寶二、	—
一三六三	智淵	—	—	大和藥師寺	大寶三、十二、	—
一三六三	敎興	—	—	越中立山	—	—
一三六三	智雄	—	法相	—	—	—
一三六六	智鳳	—	法相	—	—	—
一三六九	淨達	—	法相	大和元興寺	—	—
一三七一	僧照	—	大和	—	和銅四、	—

年	名	出身	宗派	住寺	歿年	壽
一三七一	辨照				和銅四、	
一三七一	善住		法相	大和元興寺	和銅四、	
一三七二	辨○通					
一三七二	觀○成○		三論	大和元興寺		
一三七四	定´慧○		法相	大和多武峯	和銅七、六、	八〇餘
一三七五	觀智	新羅			靈龜二、	
一三七八	行善（河邊法師）					
一三八〇	勝曉					
一三八一	法蓮		醫僧			
一三八一	滿´誓○					
一三八一	道○藏◎	百濟	成實			九〇
一三八四	道瑜					
一三八四	都藍尼	大和				
一三八四	榮○常			山城高麗寺		
一三八七	德○道○	播磨揖寶		大和長谷寺		
一三八八	義´淵○	大和	法相	大和龍門寺	神龜五、十、	
一三八九	修榮		戒律	大和大安寺		
一三八九	鮹○翁					
一三八九	道榮○	唐				
一三八九	慧新		戒律	大和大安寺		
一三八九	忠慧		戒律			
一三八九	辨○正					
一三八九	道○融○		戒律	大和奈良		
一三八九	禮○光○		三論	大和元興寺		
一三九六	泰演		法相	大和西大寺	天平八、正、四、	
一三九六	辨正		三論		天平八、	
一三九六	佛哲	林邑國				
一三九六	伏○見翁○					
一三九七	神○叡○	唐	三論	大和元興寺	天平九、	
一三九七	妙觀尼		歌僧			
一三九九	良○敏○		法相	大和元興寺	天平十一、	
一四〇〇	審◎祥◎	新羅	華嚴		天平十二、	
一四〇四	道○慈○	大和添上	三論	大和大安寺	天平十六、十、	七〇餘
一四〇六	玄○昉○		法相	大和興福寺	天平十八、六、	
一四〇八	廣達	上總武射		大和金峰山		
一四〇八	嚴○智○		法相	大和元興寺		
一四〇九	行○基○	和泉大鳥	法相	大和藥師寺	天平勝寶元、二、二、	八〇
一四〇九	榮○睿○	美濃	法相	大和興福寺	天平勝寶元、	
一四〇九	信○嚴	和泉	法相			
一四一〇	行○信○		法相	大和法隆寺	天平勝寶二、	
一四一〇	榮辯		法相		天平勝寶二、	
一四一〇	舍利尼					
一四一三	慧常	唐	戒律			
一四一三	法載	唐	戒律	大和招提寺		
一四一三	良興		華嚴	大和東大寺		
一四一四	慧良	唐	戒律			
一四一四	懷謙	唐	戒律			
一四一四	聖一	唐	戒律	大和佛國寺		
一四一四	靈曜		戒律			
一四一四	慧達	唐	戒律			

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一四一六	法○榮○	—	戒律	大和戒壇院	—	—
一四一七	善○俊○	—	戒律	大和大安寺	—	—
一四一八	普○照○	—	法相	大和興福寺	—	—
一四一八	玄基	—	法相	山城山階寺	—	—
一四一九	寂○仙○	—	—	伊豫石槌山	天平寶字三、—	—
一四二〇	菩○提○僊○那○	天竺	—	大和東大寺	天平寶字四、二、廿五	五七
一四二〇	隆○尊○	—	法相	大和元興寺	天平寶字四、四、十八	五九
一四二〇	道○璿	唐許州	戒律	大和大安寺	天平寶字四、閏四、八	五九
一四二〇	眞法	—	戒律	大和興福寺	—	—
一四二三	鑑◎眞◎	唐揚州	戒律	大和招提寺	天平寶字七、五、六	七六
一四二三	慧○雲○	唐	戒律	大和戒壇院	—	—
一四二三	仁○韓○	唐	戒律	大和招提寺	—	—
一四二三	法○顆○	唐	戒律	大和招提寺	—	—
一四二三	義○靜○	唐	戒律	大和招提寺	—	—
一四二三	慧喜	唐	戒律	—	—	—
一四二三	雲靜	唐	戒律	—	—	—
一四二三	智威	唐	戒律	—	—	—
一四二三	忍基	唐	戒律	—	—	—
一四二三	法○成○	唐	戒律	—	—	—
一四二三	法○明○尼○(中將姬)	大和	—	大和當麻寺	—	—
一四二七	泰○澄○	越前麻布	—	加賀白山	神護景雲元、三、十八	八六
一四二八	善○仲○	—	—	攝津勝尾山	神護景雲二、二、十五	六一
一四三〇	永○興○	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一四三〇	慧勝	—	三論	大和大安寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一四三〇	法海	攝津豐島	法相	和泉卷尾寺	—	—
一四三〇	辨基	—	歌僧	—	—	—
一四三〇	通觀	—	歌僧	—	—	—
一四三〇	平榮	—	歌僧	—	—	—
一四三一	標瓊	—	—	—	—	—
一四三一	安○覺○	—	—	—	—	—
一四三二	道鏡	河内弓削	法相	大和葛木山	寶龜三、四、—	—
一四三二	永○嚴	—	法相	—	—	—
一四三二	長○義○	—	法相	大和藥師寺	—	—
一四三三	良○辨○	—	華嚴	大和東大寺	寶龜四、十一、十六	八五
一四三三	良○惠○	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一四三四	忠○惠○	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一四三七	慈○訓○	—	法相	大和興福寺	寶龜八、—	—
一四三七	妙○觀○	—	—	攝津勝尾山	—	—
一四三七	正○義○	—	法相	大和藥師寺	—	—
一四三七	長○朗○	—	華嚴	大和藥師寺	—	—
一四三八	法○進○	唐明州	戒律	大和佛國寺	寶龜九、九、廿九	七〇
一四三九	靈義	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一四三九	慧○忠○	—	法相	大和藥師寺	—	—
一四四一	開○成○	—	—	攝津勝尾山	天應元、十、四	五八
一四四一	緣達	—	歌僧	—	—	—
一四四一	惠行	—	歌僧	—	—	—
一四四一	清見	—	歌僧	—	—	—
一四四一	理願尼	—	歌僧	—	—	—

一四四二	觀規	紀伊名草	｜	紀伊能應寺	延曆元、二、十五	｜
一四四二	圓○元	｜	｜	｜	延曆元、二、廿六	六七
一四四二	慶○俊○	河內	三論	大和大安寺	延曆元、九、三	九〇
一四四二	戒○明○	讃岐	華嚴	大和大安寺	延曆元、｜｜	｜
一四四二	昌○海○	大和奈良	法相	大和興福寺	｜	｜
一四四二	兼算	｜	｜	近江梵釋寺	｜	｜
一四四二	最仙	｜	｜	常陸西蓮寺	｜	｜
一四四二	豐然	｜	｜	美濃谷汲寺	｜	｜
一四四四	鏡忍	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四四四	弘曜	｜	法相	大和藥師寺	｜	｜
一四四七	永覺	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四四八	永○忠○	京師	｜	近江梵釋寺	延曆七、｜｜	七五
一四四九	義○空○	唐	｜	山城檀林寺	｜	｜
一四五一	禪雲	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四五三	賢○憬○	尾張	法相	大和興福寺	延曆十二、十一、八	八九
一四五四	善○榮	｜	｜	｜	｜	｜
一四五五	報○恩○	備前津高	｜	大和子島寺	延曆十四、六、｜	｜
一四五五	堪久	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四五六	仁○耀	大和葛木	華嚴	大和東大寺	延曆十五、二、｜	七五
一四五七	善○珠○	大和	法相	大和秋篠寺	延曆十六、四、廿一	七五
一四五七	行○表○	大和葛上	三論	大和大安寺	延曆十六、｜｜	七六
一四五八	法○均○尼○	備前藤野	｜	｜	延曆十七、正、十九	七〇
一四五八	明○一	｜	華嚴	大和東大寺	延曆十七、｜｜	七一
一四五八	延○鎭○	｜	法相	山城淸水寺	｜	｜
一四五九	源海	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四六〇	等○定○	｜	華嚴	大和東大寺	延曆十九、七、｜	｜
一四六三	行○賀○	大和廣瀨	法相	大和興福寺	延曆廿二、二、十一	七五
一四六四	善○謝○	美濃不破	法相	大和興福寺	延曆廿三、五、｜	八〇
一四六五	定○興	｜	華嚴	大和東大寺	延曆廿四、十二、｜	｜
一四六五	思○託○	唐沂州	戒律	大和戒壇院	延曆廿四、｜｜	七〇餘
一四六六	海雲	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四六七	慈○雲	山城	華嚴	近江普光寺	大同二、｜｜	四九
一四六八	仁○秀	伊豫	法相	大和興福寺	大同三、三、｜	｜
一四七〇	定○春	｜	三論	大和東大寺	｜	｜
一四七〇	實○忠○	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四七〇	景○戒○	｜	法相	大和藥師寺	｜	｜
一四七〇	喜○選○	｜	歌僧	山城宇治	｜	｜
一四七一	勝○虞○	阿波板野	法相	大和元興寺	弘仁二、六、｜	八〇
一四七二	願演	｜	眞言	山城乙訓寺	｜	｜
一四七三	善議	河內錦織	三論	大和大安寺	弘仁三、八、｜	八四
一四七三	義慧	｜	｜	山城高雄寺	｜	｜
一四七三	義叡	｜	法相	大和藥師寺	｜	｜
一四七四	安澄	丹波磐井	三論	大和大安寺	弘仁五、三、一	五三
一四七四	光○意	河內石川	法相	河內弘川寺	弘仁五、三、四	七八
一四七四	如○寳○	唐	戒律	大和招提寺	弘仁五、五、｜	九〇餘
一四七四	常○樓○	山城	法相	大和秋篠寺	弘仁五、十、｜	七四
一四七四	義○海	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四七五	常○騰○	山城	法相	大和大安寺	弘仁六、｜｜	七六
一四七五	康守	｜	｜	｜	｜	｜
一四七六	道證	阿波	法相	筑前觀世音寺	弘仁七、十一、｜	六一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一四七六	廣○智○	｜	｜	下野小野寺	｜	｜
一四七七	澄睿	京師	戒律	大和大安寺	弘仁八、三、｜	｜
一四七八	玄○賓○	河内	法相	大和興福寺	弘仁九、六、十七	八〇餘
一四七八	品慧	山城京師	法相	大和興福寺	弘仁九、｜｜	七五
一四七九	慈寶	大和平郡	法相	大和元興寺	弘仁十、十一、｜	六三
一四八〇	奉賀	尾張	法相	大和大安寺	弘仁十一、｜｜	八四
一四八〇	道珍	下野	眞言	下野瀧尾寺	｜	｜
一四八一	靜雲	｜	華嚴	大和東大寺	弘仁十三、十一、｜	｜
一四八二	最◎澄◎	近江滋賀	天台	近江比叡山	弘仁十三、六、四	五六
一四八二	眞圓	｜	｜	｜	｜	｜
一四八二	永念	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四八三	勝○道○	下野芳賀	｜	下野神宮寺	弘仁十四、｜｜	七〇餘
一四八四	承俊	｜	法相	大和興福寺	｜	｜
一四八四	守敏	｜	眞言	山城西寺	｜	｜
一四八四	常魏	｜	戒律	大和大安寺	｜	｜
一四八四	忠延	｜	眞言	山城神護寺	｜	｜
一四八五	智○泉	讃岐	眞言	山城報恩院	天長二、二、十四	三九
一四八五	德○圓○	下總猿島	天台	近江比叡山	｜	｜
一四八六	興雲	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四八六	眞體	｜	眞言	山城神護寺	｜	｜
一四八七	慈恒	山城	法相	大和興福寺	天長四、三、｜	六五
一四八七	勤○操○	大和高市	三論	大和石淵寺	天長四、五、七	七〇
一四八七	玄睿	｜	三論	大和西大寺	｜	｜
一四八七	施平	｜	法相	大和元興寺	｜	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一四八八	願曉	｜	三論	大和元興寺	｜	｜
一四九三	義○眞○	相模	天台	近江延暦寺	天長十、七、｜	五三
一四九三	妙冲尼	京師	｜	｜	｜	｜
一四九四	護○命○	美濃各務	法相	大和元興寺	承和元、九、十一	八五
一四九四	心惠	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一四九四	安行	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	如○意○尼○	丹波與佐	眞言	攝津神咒寺	承和二、三、廿	三三
一四九五	空◎海◎	讃岐屛風浦	眞言	紀伊高野山	承和二、三、廿一	六二
一四九五	修○圓○	大和北谷	法相	大和興福寺	承和二、六、十五	六五
一四九五	眞朗	｜	眞言	山城高雄山	｜	｜
一四九五	眞等	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	眞泰	｜	眞言	大和牟漏寺	｜	｜
一四九五	智弘	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	眞鏡	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	長胤	｜	眞言	大和大安寺	｜	｜
一四九五	泰	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	康修	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	信叡	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	賢聰	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	眞曉	｜	眞言	｜	｜	｜
一四九五	德○一○	｜	法相	常陸筑波山	｜	｜
一四九六	定○秀○	近江蒲生	天台	近江楞嚴院	承和三、三、三	｜
一四九七	杲○隣○	｜	眞言	伊豆修善寺	承和四、四、五	七一
一四九七	泰範	｜	眞言	｜	｜	｜

一四九八	壽遠	武藏	三論	大和西大寺	承和五、十二、―	六八
一五〇〇	靜安	―	―	近江比良山	―	―
一五〇一	守寵	―	法相	大和元興寺	承和八、十二、―	―
一五〇二	壽廣	―	法相	大和傳法院	承和九、―、―	六三
一五〇三	守印	和泉	法相	大和元興寺	承和十、十二、廿八	六一
一五〇三	仲繼	―	法相	大和藥師寺	承和十、―、―	―
一五〇七	實慧	讃岐多度	眞言	山城東寺	承和十四、十一、十三	六二
一五〇八	明福	山城	法相	大和興福寺	嘉祥元、八、―	七一
一五〇九	轉乘	大和	―	大和金峯山	嘉祥二、―、―	―
一五一一	道雄	讃岐多度	眞言	山城海印寺	仁壽元、六、八	―
一五一一	圓明	紀伊	眞言	山城神護寺	仁壽元、―、―	―
一五一一	滿米	―	眞言	大和金剛山寺	―	―
一五一二	圓行	京師	眞言	山城靈巖寺	仁壽二、三、六	五四
一五一三	延祥	近江野洲	法相	大和興福寺	仁壽五、五、―	八八
一五一三	壽長	―	眞言	紀伊高野山	―	―
一五一五	長訓	近江滋賀	法相	大和興福寺	齊衡二、―、―	八二
一五一六	實敏	尾張愛知	三論	大和西大寺	齊衡三、九、五	六九
一五一八	賢安	甲斐八代	―	伊豆走湯山	天安二、二、四	―
一五一八	光定	伊豫風早	天台	近江延暦寺	天安二、八、十	八〇
一五一八	慧蕚	―	―	唐補陀洛山	―	―
一五一八	教待	―	天台	近江園城寺	―	―
一五一九	慧亮	信濃水内	天台	近江延暦寺	貞觀元、五、廿六	五九
一五一九	行教	備後	三論	大和大安寺	―	―
一五一九	乘念	―	眞言	常陸如來寺	―	―
一五一九	行巡	―	眞言	攝津勝尾寺	―	―
一五一九	白箸翁	―	―	―	―	―
一五二〇	眞濟	京師	眞言	山城神護國祚寺	貞觀二、二、廿五	六一
一五二〇	三澄	―	眞言	攝津忍頂寺	―	―
一五二〇	明哲	―	法相	大和藥師寺	―	―
一五二二	堅慧	―	眞言	大和佛隆寺	―	―
一五二二	長賢	―	三論	大和法隆寺	―	―
一五二三	賢永	―	天台	伯耆國分寺	―	―
一五二三	最教	―	戒律	大和東大寺	―	―
一五二四	圓仁	下野都賀	天台	近江延暦寺	貞觀六、正、十四	七一
一五二四	延庭	―	天台	山城興隆寺	―	―
一五二五	賢和	―	法相	大和元興寺	―	―
一五二五	興智	―	華嚴	大和東大寺	―	―
一五二六	教信	播磨加古	―	播磨加古	貞觀八、八、十五	―
一五二六	常曉	―	眞言	山城法琳寺	貞觀八、十一、三十	―
一五二六	眞如	京師	眞言	大和超昇寺	―	―
一五二六	平恩	―	―	大和西大寺	―	―
一五二七	壹演	山城	眞言	河内相應寺	貞觀九、七、十二	六五
一五二七	勝如	攝津	―	攝津彌勒寺	貞觀九、八、二	八七
一五二七	平智	―	法相	大和藥師寺	―	―
一五二七	平備	―	法相	大和元興寺	―	―
一五二七	勝均	―	法相	大和西大寺	―	―
一五二七	平珍	―	―	大和元興寺	―	―
一五二八	賢應	大和	法相	大和元興寺	貞觀十、三、六	―
一五二八	安慧	河内大縣	天台	近江延暦寺	貞觀十、四、三	七四
一五二八	明詮	大和奈良	法相	大和元興寺	貞觀十、五、十六	八〇

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一五二八	法勢	—	天台	近江延暦寺	—	—
一五二八	賢°護	—	法相	大和元興寺	—	—
一五二九	惠°運	京師	眞言	山城安祥寺	貞觀十一、九、廿三	七三
一五三〇	圓°宗	—	法相	大和元興寺	—	—
一五三〇	長°朗	—	法相	大和藥師寺	—	—
一五三一	豐榮	—	法相	大和興福寺	—	—
一五三二	長°源	—	法相	大和元興寺	—	—
一五三三	眞°紹	—	眞言	山城禪林寺	貞觀十五、七、七	七七
一五三三	隆如	—	法相	大和元興寺	—	—
一五三三	玄榮	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五三四	正進	—	華嚴	大和東大寺	貞觀十六、—	—
一五三四	長°歲	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五三四	藥仁	—	法相	大和藥師寺	—	—
一五三四	澄°海	攝津	三論	大和東大寺	—	—
一五三五	道°昌	讃岐香河	眞言	山城法輪寺	貞觀十七、二、九	七八
一五三六	道°詮	武藏	三論	大和法隆寺	貞觀十八、—	—
一五三六	常濟	—	天台	近江延暦寺	—	—
一五三六	春興	—	法相	大和大安寺	—	—
一五三七	興°昭	—	法相	大和興福寺	元慶元、正、廿八	—
一五三七	圓°載	大和	天台	近江比叡山	—	—
一五三七	安春	—	法相	—	—	—
一五三七	承均	大和	歌僧	—	—	—
一五三八	慧達	美濃	法相	大和藥師寺	元慶二、八、二	八三
一五三八	孝忠	—	法相	大和興福寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一五三八	龍°壽	—	眞言	山城法琳寺	—	—
一五三九	眞°雅	讃岐屛風浦	眞言	山城貞觀寺	元慶三、正、三	七九
一五三九	眞照	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五三九	寂圓	—	天台	山城元慶寺	—	—
一五四〇	基秀	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五四〇	安軌	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五四二	安海	—	三論	大和大安寺	—	—
一五四三	房°忠	—	法相	大和興福寺	—	—
一五四四	宗°睿	京師	眞言	山城圓覺寺	元慶八、三、廿六	七六
一五四四	安°然	—	天台	近江比叡山	—	—
一五四四	奉°基	—	法相	大和元興寺	—	—
一五四五	恒°寂	—	眞言	山城大覺寺	仁和元、九、十	六〇
一五四五	玄津	—	華嚴	大和東大寺	仁和元、—	—
一五四五	近保	—	法相	大和元興寺	—	—
一五四六	隆海	—	法相	大和元興寺	仁和二、七、十二	七三
一五四六	延最	—	天台	近江比叡山	—	—
一五四六	榮°仁	—	法相	大和興福寺	—	—
一五四七	源°仁	—	眞言	山城東寺	仁和三、十一、廿二	七〇
一五四七	平°仁	—	法相	大和東大寺	—	—
一五五〇	遍°昭	京師	天台	山城元慶寺	寬平二、正、十九	七四
一五五〇	神慧	—	天台	近江梵釋寺	—	—
一五五〇	朗善	—	天台	近江延暦寺	—	—
一五五〇	修入	—	天台	近江延暦寺	—	—
一五五〇	勝皎	—	華嚴	大和東大寺	—	—

一五五一	眞○然○	讃岐多度	眞言	紀伊金剛峯寺	寛平三、九、十一	八八
一五五一	圓◎珍◎(遠塵)	讃岐那珂	天台	近江園城寺	寛平三、十、廿九	七八
一五五一	峰禪	｜	眞言	紀伊金剛峯寺	｜	｜
一五五三	惟首(法興)	近江蒲生	天台	近江延暦寺	寛平五、二、廿八	六八
一五五三	空操	｜	法相	大和興福寺	｜	｜
一五五四	猷憲	下野鹽屋	天台	近江延暦寺	寛平六、八、廿二	六八
一五五五	祥勢	｜	華嚴	大和東大寺	寛平七、｜	｜
一五五八	覺如	｜	眞言	丹波玉泉寺	｜	｜
一五五八	昌住	｜	｜	｜	｜	｜
一五五八	康昌	｜	佛工	｜	｜	｜
一五五九	康濟	越前敦賀	天台	近江延暦寺	昌泰二、二、八	七二
一五五九	三○修	｜	法相	近江護國寺	昌泰二、五、十二	七〇餘
一五五九	幽○仙○	｜	天台	近江比叡山	昌泰二、十二、十四	七五
一五六〇	慧眕	｜	華嚴	大和東大寺	昌泰三、二、廿六	｜
一五六一	慈信	｜	｜	山城山崎寺	｜	｜
一五六一	基泉	山城乙訓	歌僧	｜	｜	｜
一五六一	陽勝	｜	天台	近江比叡山	｜	｜
一五六一	神退	｜	歌僧	｜	｜	｜
一五六二	道義	｜	華嚴	大和東大寺	延喜二、｜	六六
一五六二	印紹	｜	眞言	大和東大寺	｜	｜
一五六三	眞願	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一五六三	眞○寂○	｜	天台	近江園城寺	｜	｜
一五六五	濟棟○	｜	法相	大和東大寺	延喜五、六、｜	六七
一五六六	增○全○	河内河内郡	天台	近江極樂寺	延喜六、正、六	七〇
一五六六	益○信	備後	眞言	京師圓城寺	延喜六、三、七	八〇

一五六六	長○意○	和泉大鳥	天台	近江延暦寺	延喜六、七、三	七一
一五六六	圓倩	｜	眞言	山城法琳寺	｜	｜
一五六七	戒選	｜	法相	大和東大寺	延喜七、｜	六五
一五六七	貞壽	｜	眞言	大和東大寺	｜	｜
一五六八	道○憲	｜	三論	大和元興寺	｜	｜
一五六九	聖○寶	大和	眞言	山城醍醐山	延喜九、七、六	七八
一五六九	曆○海	｜	眞言	大和東大寺	｜	｜
一五六九	素○性○	京師	歌僧	｜	｜	｜
一五六九	延惟	｜	法相	大和東大寺	｜	｜
一五七四	由性	｜	天台	山城雲林院	延喜十四、二、廿	七四
一五七四	圓超	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一五七五	玄○照	｜	天台	近江延暦寺	延喜十五、二、三	七三
一五七八	無○空	｜	眞言	紀伊金剛峯寺	延喜十八、六、廿六	｜
一五七八	智鎧	京師	華嚴	大和東大寺	延喜十八、八、八	六八
一五七八	相○應○	近江淺井	天台	近江無動寺	延喜十八、十一、八	八八
一五八一	無空	京師	三論	大和東大寺	延喜廿一、六、｜	｜
一五八三	良勇	美濃	天台	近江延暦寺	延長元、三、六	六九
一五八三	峰○延	｜	天台	山城鞍馬寺	延長元、六、廿	八〇
一五八五	觀賢○	讃岐	眞言	山城東寺	延長三、六、十一	七三
一五八六	玄鑑○	｜	天台	近江延暦寺	延長四、三、十一	六六
一五八六	峰○宿	｜	眞言	紀伊金剛峯寺	｜	｜
一五八七	增○命○	京師	天台	近江延暦寺	延長五、十二、十	八五
一五八七	觀○宿○	｜	眞言	紀伊高野山	延長五、十二、十九	八五
一五八八	增利○	紀伊	法相	大和興福寺	延長六、七、十三	九三
一五八八	親宥	大和	華嚴	大和東大寺	延長六、｜	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一五八八	基遍	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一五八九	○延俶	京師	眞言	山城醍醐寺	延長七、三、十三	六八
一五八九	延性	—	眞言	山城醍醐寺	延長七、十、廿八	七一
一五八九	喜峰	—	眞言	山城醍醐寺	—	—
一五八九	神日	—	眞言	山城愛宕山	—	—
一五九一	基繼	越前	法相	大和興福寺	承平元、三、十六	八二
一五九三	○蓮舟	—	眞言	大和藥師寺	—	—
一五九五	○會理	—	眞言	山城東寺	承平五、十二、廿四	八四
一五九七	○能光（瓦屋）	—	—	唐碧雞坊	承平七、—	一六三
一五九八	如無	—	法相	大和元興寺	天慶元、八、十	七二
一五九八	平忍	—	天台	近江延暦寺	天慶元、—、—	八〇
一六〇〇	○平燈	—	天台	近江延暦寺	—	—
一六〇一	○濟○高	—	眞言	山城勸修寺	天慶四、十一、廿五	九一
一六〇三	○令○宸	京師	法相	大和大安寺	天慶五、八、廿一	八七
一六〇四	貞譽	美濃	眞言	山城東寺	天慶七、七、八	七三
一六〇四	○貞○崇	山城	眞言	山城醍醐山	天慶七、七、廿一	七九
一六〇四	○尊○敬	大和	天台	近江比叡山	—	—
一六〇四	春德	—	法相	大和興福寺	—	—
一六〇五	壹定	—	眞言	山城醍醐山	天慶八、十二、廿九	六六
一六〇五	寛救	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一六〇六	義海	豐前	天台	近江延暦寺	天慶九、五、十	七六
一六〇七	如藏尼	—	—	奥州慧日寺	—	八〇餘
一六〇九	平源	伊勢	法相	大和興福寺	天暦三、五、三	八七
一六〇九	泰舜	山城	眞言	山城法琳寺	天暦三、十二、二	七三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一六一〇	壹和	—	法相	大和興福寺	—	—
一六一三	淳和	山城	眞言	近江石山寺	天暦七、七、二	六四
一六一三	眞頼	—	眞言	近江石山寺	—	—
一六一四	明昣	和泉	三論	大和東大寺	天暦八、十二、十三	—
一六一四	遍覺	京師	眞言	山城勸修寺	天暦八、—、—	五六
一六一五	禪喜	京師	天台	近江延暦寺	天暦九、六、九	八二
一六一五	明達（眞仁）	攝津住吉	天台	近江延暦寺	天暦九、九、廿一	七九
一六一五	妙達	—	天台	出羽龍華寺	天暦九、—	—
一六一七	定助	—	眞言	山城醍醐山	天德元、四、十三	四九
一六一七	空晴	—	法相	大和興福寺	天德元、十二、九	八〇
一六一七	海達	越中	—	越中立山	天德元、—、—	—
一六一七	一蓮	—	眞言	山城東寺	—	—
一六一七	守朝	加賀山田	法相	大和興福寺	—	—
一六一七	平耀	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一六一九	仁皎	讃岐	眞言	山城成覺寺	天德三、十一、廿三	—
一六二〇	濟源	—	法相	大和藥師寺	天德四、四、五	—
一六二一	明祐	加賀	戒律	大和東大寺	應和元、二、十八	八四
一六二四	延昌	加賀江沼	天台	近江延暦寺	康保元、正、十五	八五
一六二四	鎭朝	京師	天台	近江延暦寺	康保元、十、五	—
一六二四	淨藏	京師	天台	近江延暦寺	康保元、十一、廿一	七四
一六二四	念照	—	天台	—	—	—
一六二六	○延鑒	山城	眞言	山城東寺	康保三、三、廿七	七五
一六二六	○喜慶	近江伊香	天台	近江延暦寺	康保三、七、十七	七六
一六二七	眞覺	—	天台	近江比叡山	—	—

一六二九	義照	京師	天台	大和元興寺	安和二、正、三	五〇
一六二九	法○藏○	山城	法相	大和東大寺	安和二、正、三	六五
一六二九	仲○算○	—	法相	大和興福寺	—	—
一六三〇	寛○空○	京師	眞言	山城東寺	天祿元、二、六	八九
一六三一	安秀	美濃	法相	大和興福寺	—	—
一六三二	光○勝○	京師	天台	山城六波羅密寺	天祿三、九、十五	七七
一六三三	救世 空也善集	京師左街	眞言	山城東寺	天延元、—	八四
一六三三	熙極	—	眞言	山城神應寺	—	—
一六三三	千○到○	—	法相	大和興福寺	—	—
一六三四	觀○理○	—	眞言	山城醍醐山	天延二、三、—	八一
一六三五	遍斅	—	天台	近江延曆寺	—	—
一六三五	增祐	播磨蜂目	天台	山城如意寺	—	—
一六三七	寛○忠○	—	眞言	山城東寺	貞元二、四、二	七三
一六三七	泰善	—	法相	大和國源寺	—	—
一六三八	義光	—	法相	大和傳法院	天元元、八、五	七二
一六三八	覺○超○	攝津	天台	近江延曆寺	—	—
一六三九	光智	山城	華嚴	大和東大寺	天元二、三、十	八六
一六三九	寛靜	京師	眞言	山城東寺	天元二、十、十一	七九
一六三九	敎眞	—	天台	山城平等院	天元二、十一、十八	—
一六四〇	千攀	—	眞言	山城東寺	天元三、正、四	七一
一六四〇	法縁	京師	三論	大和東大寺	天元三、十、—	七〇
一六四〇	覺縁	—	眞言	京師般若寺	—	—
一六四二	遍救	京師	天台	近江延曆寺	—	—
一六四三	定照	京師	法相	大和興福寺	永観元、三、廿一	七三
一六四三	千○観	相模	天台	攝津金龍寺	永観元、十二、—	六六
一六四四	良○源○ 慈惠	近江淺井	天台	近江延曆寺	永観三、正、三	七四
一六四五	日藏	京師	法相	大和龍門寺	寛和元、—	一〇〇說
一六四五	惠慶	—	歌僧	—	—	—
一六四五	聖救	—	天台	近江比叡山	—	—
一六四五	元方	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一六四七	湛昭	山城	法相	大和東大寺	永延元、—	—
一六四七	道○命○	—	天台	近江比叡山	—	—
一六四九	主恩	大和高市	法相	大和興福寺	永祚元、六、十一	五七
一六五〇	尋○禪○	—	天台	近江延曆寺	正曆元、二、十七	四八
一六五〇	陽生	伊豆北條	天台	近江延曆寺	正曆元、十、廿八	八七
一六五一	餘○慶○	筑紫早良	天台	近江延曆寺	正曆二、二、十八	七三
一六五一	法秀	近江志賀	天台	近江比叡山	—	—
一六五一	文慶	—	天台	山城大雲寺	—	—
一六五一	圓慶	—	天台	山城大雲寺	—	—
一六五二	圓賀	—	天台	近江延曆寺	正曆三、七、廿三	八七
一六五三	相助	—	天台	近江比叡山	正曆四、—	—
一六五三	覺縁	—	眞言	山城般若寺	—	—
一六五四	如覺	—	天台	大和多武峰	正曆五、三、十	—
一六五五	元○杲○	京師	眞言	近江石山寺	長德元、二、十七	八五
一六五五	慶助	—	眞言	山城醍醐寺	長德元、九、十	七四
一六五五	定觀	—	眞言	紀伊高野山	—	—
一六五五	賀仲	—	眞言	山城小栗栖	—	—
一六五七	寂心	—	天台	播磨八德山	長德三、—	—
一六五八	寛○朝○	—	眞言	山城仁和寺	長德四、六、十三	六三
一六五八	暹○賀	駿河	天台	近江延曆寺	長德四、八、一	八五

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一六五八	雅意（蓮成）	京師	眞言	山城仁和寺	―	―
一六五八	林懷	伊勢	法相	大和興福寺	―	―
一六五八	法壽	―	天台	近江比叡山	―	―
一六五九	實因	―	天台	近江延暦寺	―	―
一六五九	行眞	―	天台	大和多武峰	―	―
一六六〇	眞善	伊勢多氣	法相	大和興福寺	長保二、二、七	六九
一六六三	增賀○	京師	天台	大和多武峰	長保五、六、九	八七
一六六三	仁賀○	大和	天台	大和多武峰	―	―
一六六四	眞興○	―	法相	大和子島寺	寬弘元、十、廿三	七一
一六六四	清範	播磨	法相	山城清水寺	―	三八
一六六四	利朝	―	眞言	大和子島寺	―	―
一六六四	定覺	―	眞言	山城上乘院	―	―
一六六四	蓮入	―	眞言	大和石光寺	―	―
一六六四	願西尼	―	天台	近江比叡山	―	―
一六六五	行圓	鎭西	―	山城行願寺	―	―
一六六六	明普○	―	天台	近江延暦寺	寬弘三、四、七	―
一六六七	性空○	京師	天台	播磨圓敎寺	寬弘四、三、十	九八
一六六七	覺運○	京師	天台	近江檀那院	寬弘四、十、三十	―
一六六七	高明	―	天台	筑前本山寺	―	―
一六六七	平願	播磨	天台	播磨書寫山	―	―
一六六八	勸修○	京師	天台	近江園城寺	寬弘五、七、八	六四
一六七一	安樂尼○	―	天台	伊豫法樂寺	寬弘八、正、一	六八
一六七一	勝算○	京師	天台	山城修學院	寬弘八、八、廿二	七三
一六七一	穆算○	―	天台	近江園城寺	―	―

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一六七二	雅慶	―	眞言	山城東寺	長和元、十、廿五	八七
一六七三	廣壽	―	眞言	山城醍醐山	長和二、六、廿八	六六
一六七三	最源	―	天台	山城勝林院	―	―
一六七四	澄心	加賀	三論	大和東大寺	長和三、三、―	七六
一六七四	覺慶	京師	天台	近江延暦寺	長和三、十一、十二	八八
一六七四	惠清	宋	醫僧	―	―	―
一六七五	清壽	―	眞言	山城東大寺	長和四、四、廿七	―
一六七五	盛算（住清）	―	眞言	山城東寺	長和四、七、―	八四
一六七六	奝然○	京師	三論	大和東大寺	長和五、―、―	―
一六七七	源信○	大和葛木	天台	近江比叡山	寬仁元、六、十	七六
一六七七	慶祚○	―	天台	近江園城寺	寬仁元、十二、十二	―
一六七七	寬印	丹波與佐	天台	近江延暦寺	―	―
一六七七	恒久	―	天台	山城大靈寺	―	―
一六七七	助慶	―	天台	近江比叡山	―	―
一六七七	安海	京師	天台	近江延暦寺	―	―
一六七七	安養尼	―	天台	山城某菴	―	―
一六七九	慶圓	播磨	天台	近江延暦寺	寬仁三、七、廿一	七一
一六八〇	明救	―	天台	近江延暦寺	寬仁四、七、五	七五
一六八一	日觀	―	法相	大和傳法院	治安元、三、廿八	―
一六八一	朝晴	大和添下	三論	大和東大寺	治安元、四、―	―
一六八一	明觀	京師	眞言	山城醍醐山	治安元、十、八	六九
一六八一	明憲○	―	法相	大和興福寺	治安元、―、―	八一
一六八四	講仙	―	天台	山城六波羅密寺	萬壽元、―、―	―
一六八四	文惠	京師	書僧	―	―	―

年	名	出生	宗	住所	寂年月日	壽
一六八七	慶眞	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一六八八	院源	奥州	天台	近江延暦寺	長元元、五、廿六	七五
一六八八	扶公	京師	法相	大和興福寺	長元元、七、十	—
一六八八	長保	—	法相	大和興福寺	長元元、十二、十八	八二
一六八八	紹良	—	天台	近江比叡山	—	—
一六八九	觀眞	大和葛下	華嚴	大和東大寺	長元二、三、十九	七九
一六八九	觀圓	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一六九〇	○濟信	—	眞言	山城仁和寺	長元三、六、十一	七七
一六九六	○寂昭	—	天台	山城如意輪寺	長元九、—	七三
一六九六	慶盛	—	眞言	山城淸住寺	—	—
一六九六	成禪	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一六九七	行觀	京師	天台	河內錦織寺	—	—
一六九八	○慶命	京師	天台	近江延暦寺	長暦二、九、七	七四
一六九九	圓照	—	天台	近江楞嚴院	—	—
一七〇〇	命禪	—	眞言	大和圓成寺	長久元、—、—	七八
一七〇〇	長圓	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇三	○深覺	—	眞言	山城東寺	長久四、九、十四	八九
一七〇三	修仁	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七〇三	○賴舜（佛頂房）	—	眞言	山城東寺	—	—
一七〇三	朝源	京師	眞言	山城德大寺	—	—
一七〇四	經救	—	法相	大和興福寺	寬德元、五、四	—
一七〇四	○成典	—	眞言	山城仁和寺	寬德元、十、廿二	八七
一七〇四	○延尋	—	眞言	山城東寺	—	—
一七〇五	心譽	京師	天台	近江園城寺	寬德二、八、十二	八九
一七〇六	○仁海	和泉	眞言	山城曼荼羅寺	永承元、五、十六	九二
一七〇六	法圓	—	眞言	山城小栗栖	—	—
一七〇六	能因	京師	歌僧	攝津古曾部	—	—
一七〇六	觀杲	—	眞言	近江石山寺	—	—
一七〇六	護忍	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一七〇六	○聖昭（大慈房）	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	○契中（常寂房）	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	○忠快（大教房）	京師	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	○院尊（聖行房）	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	○行嚴（佛頂房）	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	覺念	—	天台	近江比叡山	—	—
一七〇六	○清海	常陸	法相	大和興福寺	—	—
一七〇七	○定譽（祈親）	—	眞言	紀伊高野山	永承二、二、—	九〇
一七〇七	教圓	—	天台	近江比叡山	永承二、六、十	六九
一七〇七	濟慶	京師	三論	大和東大寺	永承二、十、十四	六二
一七〇九	○皇慶	—	天台	山城延暦寺	永承四、七、廿六	七三
一七〇九	眞範	—	法相	大和興福寺	—	—
一七一〇	○延般	但馬	天台	近江延暦寺	永承五、三、廿六	—
一七一〇	深觀	—	眞言	山城東寺	永承五、六、十五	五〇
一七一一	清尋	—	眞言	大和東大寺	永承六、六、十八	—
一七一三	戒算	—	天台	山城眞如堂	天喜元、正、廿七	九一
一七一三	源心	奥州	天台	近江延暦寺	天喜元、十、十一	八三
一七一三	以圓	—	天台	近江比叡山	—	—
一五一五	源泉	播磨	天台	近江延暦寺	天喜三、二、—	七九
一七一五	賢尋	—	眞言	山城東寺	天喜三、九、十七	—
一七一五	學助	—	佛工	—	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一七一七	定○朝○	―	佛工	―	天喜五、八、一	―
一七一七	楨○舜○（月藏）	―	天台	近江延曆寺	天喜五、九、十	八〇
一七一七	長○算○	京師	天台	近江延曆寺	天喜五、―、―	六七
一七一九	慶暹	―	天台	近江園城寺	―	―
一七二〇	圓緣	―	法相	大和興福寺	康平三、―、―	―
一七二〇	理○然（如空）	―	法相	大和興福寺	―	―
一七二三	明○尊○	―	天台	近江園城寺	康平六、六、十六	九三
一七二三	覺○助○	京師	天台	近江園城寺	康平六、十一、十一	―
一七二三	珍○蓮○	奧州	天台	近江園城寺	―	―
一七二四	隆禪	―	法相	大和大乘院	康平七、七、十	六三
一七二五	覺源	―	眞言	大和東大寺	治曆元、八、十八	六六
一七二五	永快	―	眞言	大和千手院	治曆元、―、―	六〇餘
一七二五	覺善	―	眞言	紀伊高野山	―	―
一七二六	文豪	―	―	山城釋迦院	治曆二、五、五	―
一七二六	延幸	大和高市	華嚴	大和東大寺	治曆二、十二、廿一	―
一七二六	聖照	―	眞言	山城仁和寺	―	―
一七二六	慶意	京師	天台	近江延曆寺	―	―
一七二七	寂禪	京師	天台	近江石塔寺	治曆三、八、廿一	八三
一七二八	延救	―	眞言	武藏慈光寺	治曆―、正、十四	七〇
一七二九	賢源	―	法相	大和興福寺	延久元、―、―	―
一七二九	藥知	―	天台	近江延曆寺	延久元、―、―	―
一七二九	濟延	―	眞言	山城東寺	延久元、―、―	五九
一七三〇	有慶	―	三論	大和東大寺	延久二、二、十六	八八
一七三〇	明快	―	天台	近江延曆寺	延久二、三、十八	八四

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一七三〇	延慶	武藏	天台	近江比叡山	―	五五
一七三〇	入圓	―	天台	近江比叡山	―	―
一七三二	明懷	山城	法相	大和興福寺	延久四、八、二	八五
一七三二	長信	―	眞言	山城仁和寺	延久四、九、卅	五九
一七三二	賴增	―	天台	近江園城寺	―	―
一七三三	清○仁○	攝津榎並	法相	山城清水寺	延久五、九、廿二	―
一七三四	成○尊○	大和奈良	眞言	山城曼荼羅寺	承保元、正、七	六三
一七三四	常寂	京師	眞言	山城醍醐山	承保元、四、十三	八五
一七三四	勢緣	出雲	眞言	伯耆某寺	承保元、八、十八	―
一七三四	源導	―	眞言	山城大乘院	―	―
一七三五	教禪・	―	給佛師	―	承保二、三、―	―
一七三七	勝範	―	天台	近江延曆寺	承曆元、正、十八	八二
一七三七	良深	京師	眞言	山城東寺	承曆元、八、廿四	五九
一七三七	良源	―	眞言	山城東寺	承曆元、八、廿四	五三
一七三七	永興	京師	法相	大和興福寺	―	―
一七三八	寂因	京師	天台	近江比叡山	―	―
一七三八	暹斅	―	天台	近江延曆寺	―	―
一七三九	德○滿○	攝津水田	―	―	―	―
一七四一	長○宴○	京師	天台	近江比叡山	永保元、四、二	六六
一七四一	覺尋	―	天台	近江延曆寺	永保元、十一、―	七〇
一七四一	長○明	―	天台	信濃戶隱山	永保元、十二、十六	―
一七四一	成○尋○	―	天台	宋傳法院	永保元、―、―	七一
一七四二	行禪	京師	眞言	山城東寺	永保二、十一、十九	五九
一七四三	賴信	甲斐	法相	大和興福寺	永保三、六、廿一	―

一七四四	賴○豪○	伊賀	天台	近江園城寺	應德元、五、四	八三
一七四四	宗範	—	天台	近江三井寺	應德元、七、—	—
一七四四	信覺	—	眞言	山城仁和寺	應德元、九、十五	七四
一七四四	俊範	—	法相	—	應德元、—、—	四〇
一七四四	賴觀	—	眞言	山城東寺	—	—
一七四四	圓範	—	天台	近江園城寺	—	—
一七四四	永基	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七四四	安○慶○	—	天台	近江比叡山	應德二、三、廿九	—
一七四五	性信○	京師	眞言	山城仁和寺	應德二、九、廿九	八一
一七四五	宴眞（明普）	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七四五	寛眞	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七四五	寛智	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七四五	賴深	—	眞言	—	—	—
一七四五	賴宿	—	眞言	山城釋王寺	—	—
一七四五	賴尊	京師	眞言	山城淨光院	—	—
一七四六	公範	—	法相	大和興福寺	應德三、十、九	—
一七四六	安尊	—	天台	筑前内山寺	—	—
一七四七	賢昭	京師	天台	—	寛治元、—、—	六〇餘
一七四七	道寂	京師	天台	近江比叡山	—	—
一七四八	義範	肥後	眞言	山城醍醐山	寛治二、十、五	六六
一七四八	經頻	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一七四八	靜意	京師	眞言	山城德大寺	—	—
一七四九	禪意	—	天台	近江延暦寺	寛治三、—、—	—
一七五〇	湛增	—	眞言	紀伊新熊野	—	—
一七五一	長勢	—	佛工	—	寛治五、十一、九	八二
一七五三	經暹	—	眞言	山城小田原寺	寛治七、三、廿	八一
一七五三	教懷	—	法相	大和興福寺	寛治七、五、廿七	九三
一七五三	明實	—	天台	近江比叡山	寛治七、七、十三	—
一七五三	暹救（地藏房）	—	天台	近江比叡山	—	—
一七五五	慶○信○	京師	三論	大和東大寺	嘉保二、正、九	五五
一七五六	維○範○	紀伊相賀	眞言	紀伊高野山	永長元、二、三	八二
一七五六	仙命	丹波	天台	近江無動寺	永長元、八、十三	八三
一七五六	能眞	河內	眞言	紀伊高野山	永長元、—、—	七三
一七五七	利慶（宣陽房）	—	天台	近江園城寺	承德元、八、十二	—
一五七八	覺圓	京師	天台	近江延暦寺	承德二、四、十六	六八
一七五八	蓮待	土佐	眞言	紀伊高野山	承德二、五、—	八六
一七五九	林豪（青蓮房）	—	天台	近江延暦寺	康和元、七、一	六七
一七五九	賴嚴	—	法相	大和興福寺	康和元、—、—	五〇
一七五九	永實	—	天台	近江園城寺	—	—
一七五九	齊尊	—	天台	近江園城寺	—	—
一七六〇	定賢	—	眞言	山城東寺	康和二、十、六	七七
一七六〇	覺仁	京師	眞言	近江石山寺	—	—
一七六〇	林覺	京師	眞言	山城醍醐山	—	—
一七六〇	澄成	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一七六一	仁寛	京師	眞言	山城醍醐山	—	—
一七六一	慶耀	大和	天台	近江園城寺	—	—
一七六一	觀圓	—	天台	近江園城寺	—	—
一七六二	仁覺	京師	天台	近江延暦寺	康和四、三、八	五八
一七六二	賴助	—	佛工	—	—	—
一七六四	阿妙尼	京師	天台	山城某菴	長治元、三、十一	—

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一七六四	○經範○	─	眞言	山城東寺	長治元、三、十七	七四
一七六四	隆明	─	天台	近江園城寺	長治元、九、十五	八五
一七六四	○覺行○	─	眞言	山城仁和寺	長治元、十一、十八	三〇
一七六四	忠緣	─	眞言	山城仁和寺	─	─
一七六四	靜響	─	眞言	山城光明山	─	─
一七六六	○明算○	紀伊神崎	眞言	紀伊高野山	嘉承元、十一、十	八六
一七六六	靜槐（上東）	─	眞言	大和金峯山	─	─
一七六六	院助	─	佛工	─	─	─
一七六六	兼俊（圓林）	─	眞言	山城鳳閣寺	─	─
一七六六	行暹（龍泉）	─	眞言	山城東寺	─	─
一七六六	源算	因幡	─	山城三鈷寺	嘉承二、三、廿九	一〇八
一七六七	慶朝	─	天台	近江延暦寺	嘉承二、九、廿四	八一
一七六八	永暹	石見	天台	出雲鰐淵山	天仁元、十、八	─
一七六八	見佛	奥州	─	奥州松島寺	─	八三
一七六九	仁源	京師	天台	近江延暦寺	天仁二、三、九	五三
一七七〇	賢暹	─	天台	近江延暦寺	天永三、十二、廿三	八四
一七七三	明順	─	佛工	─	─	─
一七七四	經助（香聖）	─	眞言	大和鳴河寺	永久二、二、六	─
一七七五	俊豪	─	天台	近江比叡山	永久三、八、十五	─
一七七五	增有	─	眞言	山城醍醐山	永久三、十一、九	─
一七七五	○濟暹○	─	眞言	山城慈尊院	永久三、十一、十六	九一
一七七五	忠圓	─	佛工	─	─	─
一七七六	隆暹（總持房）	─	天台	近江延暦寺	永久四、正、廿六	七〇
一七七六	○增譽○	京師	天台	近江延暦寺	永久四、二、十九	八五
一七七六	增智	─	天台	近江園城寺	─	─
一七七七	敎覺（正智）	─	眞言	紀伊高野山	永久五、八、廿	─
一七七八	○嚴覺○	─	眞言	山城東寺	─	六六
一七七九	維寬（敎行）	京師	眞言	山城醐醍山	─	─
一七七九	頼眞	─	眞言	山城安祥寺	─	─
一七七九	公觀（成就）	京師	眞言	山城醍醐山	─	─
一七八〇	尊定（禪定）	京師	眞言	山城仁和寺	─	─
一七八〇	圓尊（金輪）	─	眞言	紀伊高野山	─	─
一七八一	覺信	京師	法相	大和興福寺	保安二、五、八	五五
一七八一	西因	肥前松浦	天台	加賀神宮寺	保安二、六、一	─
一七八一	仁豪	京師	天台	近江延暦寺	保安二、十、四	─
一七八一	寂俊	─	天台	近江比叡山	保安二、十一、十二	八七
一七八一	良勝（蓮光）	京師	眞言	山城勸修寺	─	─
一七八一	實任	─	眞言	山城勸修寺	─	─
一七八一	○實範○（本願）	京師	戒律	大和中川寺	─	─
一七八一	實嚴（筑前律師）	─	眞言	山城法琳寺	─	─
一七八一	良弘	─	眞言	山城勸修寺	─	─
一七八三	寬慶	京師	天台	近江延暦寺	保安四、十一、三	八〇
一七八四	明寂	─	眞言	紀伊高野山	─	─
一七八四	○瞻西○	─	天台	山城雲居寺	─	─
一七八五	○寬助○	─	眞言	山城東寺	天治二、正、─	六九
一七八五	永緣	遠江	法相	大和興福寺	天治二、四、五	七八
一七八五	賢圓（大智）	─	眞言	河内廣隆寺	─	─
一七八六	禪譽（賢聖房）	─	眞言	山城東寺	大治元、三、十七	六九

年	名	出生	宗派	寺	寂年月日	年齡
一七八六	覺俊	—	天台	近江三井寺	大治元、三、廿九	六〇
一七八六	西◯法	—	天台	近江延暦寺	大治元、九、廿三	七三
一七八六	聖◯賢◯	—	眞言	山城金剛土寺	—	—
一七八七	隆寛	—	眞言	山城仁和寺	大治二、二、十八	—
一七八七	淳寛	京師	眞言	山城醍醐川	—	—
一七八七	隆成	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七八七	寛雲	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一七八七	覺寛	—	眞言	河内廣隆寺	—	—
一七八八	源覺	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七八八	圓運	—	眞言	河内廣隆寺	—	—
一七八八	嚴覺（定法）	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一七八八	信慶	—	法相	大和興福寺	—	—
一七八九	永尋	出羽	天台	大和崇敎寺	大治四、正、卅	九一
一七八九	善意	備前	天台	近江延暦寺	大治四、二、十五	—
一七八九	勝覺	—	眞言	山城東寺	大治四、四、一	七三
一七八九	平明	京師	天台	上總國分寺	大治四、九、廿八	七七
一七八九	源覺	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一七九〇	佛光房	—	佛工	—	—	—
一七九一	仁實	京師	天台	近江延暦寺	天承元、六、八	四一
一七九一	禪◎仁	—	天台	近江園城寺	—	—
一七九二	良◎忍◎	尾張富田	融通念佛	山城來迎院	長承元、二、一	六一
一七九二	信敬	—	天台	近江延暦寺	長承元、六、—	—
一七九二	蓮意	大和	眞言	紀伊高野山	長承元、九、十	—
一七九二	院覺	—	佛工	—	—	—
一七九三	範◯俊◯	—	眞言	山城東寺	長承二、四、廿四	七五

年	名	出生	宗派	寺	寂年月日	年齡
一七九三	唯乘	—	天台	近江延暦寺	長承二、十一、—	—
一七九三	圓勢	—	佛工	—	長承二、十二、—	—
一七九三	良雅	—	眞言	山城大教院	—	—
一七九四	長◯俊	—	佛工	—	長承三、正、廿九	—
一七九四	公◯尹	—	天台	近江三井寺	長承三、十二、十九	八三
一七九四	仁増	—	佛工	—	—	—
一七九四	勢◯増	—	佛工	—	—	—
一七九五	行◯尊	—	天台	近江園城寺	保延元、二、五	七九
一七九五	快賢	下野	天台	近江延暦寺	保延元、十一、九	八四
一七九五	賢圓	—	佛工	—	—	—
一七九五	仲覺（觀明）	—	眞言	金峰山	—	—
一七九五	重譽	—	三論	大和光明山	—	—
一七九五	圓◯信	—	佛工	—	—	—
一七九六	證◯觀	—	天台	近江三井寺	保延二、二、十一	—
一七九六	珍西	—	天台	近江延暦寺	保延二、三、十五	—
一七九七	聖◯慧	—	眞言	山城仁和寺	保延三、二、十一	四四
一七九七	玄覺	—	法相	大和興福寺	—	—
一七九八	眞◯譽（持明房）	—	眞言	紀伊高野山	保延四、正、十五	—
一七九八	忠◯尋	—	天台	近江延暦寺	保延四、十、十四	七四
一七九八	皇◯覺	—	天台	近江比叡山	—	—
一七九八	順◯耀	—	天台	近江三井寺	—	—
一七九九	覺◯樹	—	三論	大和東南院	保延五、二、十四	五六
一七九九	良禪（解脱房）	紀伊神崎	眞言	紀伊高野山	保延五、二、廿一	九二
一七九九	聖仁	大和	眞言	紀伊高野山	保延五、六、十二	八二
一七九九	日禪（淨嚴）	—	眞言	紀伊高野山	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八〇〇	遲覺	豐後	天台	大和崇敬寺	保延六、正、｜	九五
一八〇〇	覺°猷	｜	天台	近江延暦寺	保延六、六、十六	八八
一八〇〇	定兼	｜	天台	近江延暦寺	保延六、八、廿四	四〇
一八〇〇	重怡	伯耆	天台	山城鞍馬寺	保延六、八、｜	六六
一八〇〇	源光（持法）	｜	天台	近江比叡山	｜	｜
一八〇〇	永實	｜	天台	近江園城寺	｜	｜
一八〇一	教尋（寶生房）	｜	眞言	紀伊大傳法院	永治元、三、廿三	｜
一八〇一	行意	｜	眞言	紀伊金剛峯寺	永治元、七、八	｜
一八〇一	能光	紀伊	佛工	｜	｜	｜
一八〇一	覺鏡	｜	眞言	山城慈心院	｜	｜
一八〇二	信證	京師	眞言	山城東寺	康治元、四、八	五五
一八〇二	康助	｜	佛工	｜	｜	｜
一八〇二	妙音	｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一八〇三	運覺	｜	眞言	山城醍醐山	康治三、三、｜	｜
一八〇三	覺°鑁°（正覺房）	肥前藤津	眞言	紀伊大傳法院	康治二、十二、十二	四九
一八〇三	青蓮	阿波	眞言	紀伊高野山	｜	｜
一八〇五	歸住（如法）	｜	眞言	紀伊高野山	久安元、四、十六	｜
一八〇五	圓春	｜	佛工	｜	｜	｜
一八〇五	元圓	｜	佛工	｜	｜	｜
一八〇五	勝圓	｜	佛工	｜	｜	｜
一八〇五	信慧（曜覺）	肥前	眞言	紀伊大傳法院	｜	｜
一八〇五	行慧	｜	眞言	紀伊大傳法院	｜	｜
一八〇五	隆海	｜	眞言	紀伊大傳法院	｜	｜
一八〇七	朝壽	京師	眞言	山城德大寺	久安三、六、五	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八〇七	道寂	｜	眞言	大和元興寺	久安三、十二、｜	八〇餘
一八〇八	覺任	京師	眞言	山城東寺	久安四、二、一	六七
一八〇九	定°海°	｜	眞言	山城東寺	久安五、四、十二	七五
一八〇九	宗海	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一八〇九	眞海（行善房）	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一八〇九	隆賀	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一八〇九	禪慧（心一）	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一八〇九	祐源（精進）	｜	眞言	山城深砂堂院	｜	｜
一八〇九	行朝	｜	眞言	山城遍智院	｜	｜
一八一〇	琳賀	紀伊那賀	眞言	紀伊高野山	久安六、八、十四	七七
一八一〇	長圓	｜	佛工	｜	久安六、｜、｜	｜
一八一一	圓能	大和添上	｜	大和信貴山	仁平元、正、廿四	｜
一八一一	永嚴	下野	眞言	山城東寺	仁平元、八、十四	七七
一八一一	賴西（智明房）	｜	眞言	紀伊高野山	仁平元、十一、五	｜
一八一一	珍ˆ海ˆ	｜	三論	大和禪那院	｜	｜
一八一二	藏滿	｜	｜	大和東大寺	｜	九〇餘
一八一三	寬°信°	京師	眞言	山城東寺	仁平三、三、七	七〇
一八一三	世豪	｜	眞言	山城仁和寺	仁平三、四、｜	｜
一八一三	行慧	紀伊澁田	眞言	紀伊高野山	仁平三、十一、十一	八八
一八一三	覺°法°	｜	眞言	山城仁和寺	仁平三、十二、六	六三
一八一三	仁°濟°（地藏）	京師	眞言	紀伊高野山	｜	｜
一八一四	康朝	｜	佛工	｜	｜	｜
一八一五	兼海（淨法）	紀伊	眞言	紀伊密嚴院	久壽二、五、卅	｜
一八一五	行玄	｜	天台	近江延暦寺	久壽二、十一、五	五九

一八一六	賢覺(理性)	—	眞言	山城醍醐山	保元元、三、十六	七七
一八一六	元海	京師	眞言	山城醍醐山	保元元、八、十	六四
一八一六	賢信(上來)	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八一六	隆覺	—	法相	大和興福寺	—	—
一八一六	西住	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八一七	覺英(圓法)	京師	法相	大和興福寺	保元二、二、十七	四一
一八一七	兼賢	—	眞言	紀伊高野山	保元二、六、十三	七〇
一八一七	基舜	—	眞言	紀伊高野山	—	—
一八一七	宗意	京師	眞言	山城安祥寺	—	—
一八一八	澄賢	紀伊	眞言	紀伊高野山	保元三、三、十一	—
一八一八	寛命	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八一九	寛曉	—	眞言	山城仁和寺	平治元、正、八	五七
一八二〇	實運	—	眞言	山城醍醐山	永曆元、二、廿	五四
一八二〇	院朝	—	佛工	—	—	—
一八二〇	懷俊	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八二一	最雲	—	天台	近江延曆寺	應保元、二、十六	五九
一八二一	慧信	—	眞言	大和興福寺	—	—
一八二二	恩覺(法明)	—	法相	大和興福寺	—	七〇餘
一八二四	重愉	—	天台	近江延曆寺	長寛二、正、五	六九
一八二四	空性(元性)	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一八二五	圓長	紀伊	眞言	紀伊高野山	永萬元、正、十八	—
一八二五	相實	—	天台	近江延曆寺	永萬元、七、七	—
一八二五	暹與	紀伊	眞言	紀伊高野山	永萬元、十二、十六	—
一八二五	靜然(戒光房)	京師	天台	近江比叡山	—	—
一八二六	寛遍	—	眞言	山城東寺	仁安元、六、卅	六七
一八二六	淨心	紀伊花園	眞言	紀伊高野山	仁安元、七、十三	六九
一八二六	俊圓	—	天台	近江延曆寺	仁安元、八、廿八	六〇
一八二六	勝遍	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一八二六	定毫	—	眞言	山城東寺	—	—
一八二七	聖譽	—	眞言	紀伊高野山	仁安二、二、廿九	—
一八二八	定嚴(調御)	紀伊相賀	眞言	紀伊高野山	仁安三、八、廿三	—
一八二九	明暹(妙蓮房)	紀伊	眞言	紀伊高野山	嘉應元、六、十五	九四
一八二九	慧珍	京師	三論	大和大安寺	嘉應元、十、十五	五三
一八二九	覺性	—	眞言	山城仁和寺	嘉應元、十二、十一	四一
一八二九	範助	—	佛工	—	—	—
一八二九	融源(五智)	肥前	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一八二九	實任	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一八三一	宗命	—	眞言	山城醍醐山	承安元、七、十	五三
一八三一	定任	—	眞言	紀伊高野山	承安元、—	—
一八三一	明陽	—	佛工	—	—	—
一八三一	樂西	—	天台	攝津妙法寺	—	—
一八三二	快修	—	天台	近江延曆寺	承安二、六、十二	七三
一八三二	慈信(尊慧)	—	天台	近江比叡山	—	—
一八三三	長幸	—	眞言	山城東寺	承安三、八、十三	七二
一八三四	寶心(淨蓮)	—	眞言	山城理性院	承安四、九、一	八三
一八三五	聖慶	—	三論	大和東大寺	安元元、三、六	三
一八三五	運助	—	佛工	—	—	—
一八三五	道慶	—	三論	大和東大寺	—	—
一八三五	康俊	—	佛工	—	—	—
一八三五	敏覺	—	三論	大和東大寺	—	—

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八三六	運慶	—	佛工	—	安元二、六、廿九	—
一八三七	佛嚴	—	醫僧	—	—	—
一八三七	覺明	—	眞	信濃康樂寺	—	—
一八三七	院慶	—	佛工	—	—	—
一八三七	俊惠	京師	歌僧	—	—	—
一八三八	乘海 圓月	—	眞言	山城醍醐山	治承二、五、四	六三
一八三八	西念	—	眞言	紀伊金剛峯寺	治承二、—、—	—
一八三八	藏○俊○	京師	法相	大和興福寺	—	—
一八三八	宗嚴	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八三九	濟俊	紀伊在田	眞言	紀伊高野山	治承三、三、—	八四
一八三九	叡空○ 慈眼	—	天台	近江比叡山	治承三、四、二	—
一八三九	房光	紀伊和佐	眞言	紀伊高野山	治承三、八、廿三	六五
一八三九	一海 尊勝	土佐	眞言	山城醍醐山	治承三、九、廿六	六四
一八三九	寛照 伯耆僧都	—	眞言	山城勸修寺	—	—
一八四〇	任覺	京師	眞言	山城東寺	治承四、二、十一	七三
一八四〇	源運	京師	眞言	山城金剛王院	治承四、八、十八	六九
一八四〇	行海	—	眞言	山城東寺	治承四、十二、十	七三
一八四一	心覺	—	眞言	紀伊高野山	養和元、六、廿四	—
一八四一	覺快	—	天台	近江延暦寺	養和元、十一、六	四八
一八四一	心蓮 理覺	—	眞言	紀伊高野山	養和元、—、—	—
一八四一	成朝	—	佛工	—	—	—
一八四一	良○鎭	山城嵯峨	融通念佛	攝津大念佛寺	—	—
一八四二	覺○阿○	—	天台	近江比叡山	—	—
一八四二	寛圓	—	佛工	—	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八四二	陳○佛○壽○	宋	佛工	—	—	—
一八四二	朝圓	—	佛工	—	—	—
一八四二	覺禪○ 金胎	—	眞言	山城清涼寺	—	—
一八四三	賴源	—	畫僧	—	壽永二、二、廿四	—
一八四三	禎喜	—	眞言	山城東寺	壽永二、十、一	八五
一八四三	明○雲○ 慈雲	京師	天台	近江延暦寺	壽永二、十一、十九	—
一八四三	覺○晏○ 佛地	—	天台	大和多武峰	—	—
一八四三	院實	—	佛工	—	—	—
一八四三	院尙	—	佛工	—	—	—
一八四四	定兼	和泉宇智	眞言	紀伊高野山	元暦元、八、廿五	七九
一八四四	密嚴	—	眞言	紀伊高野山	元暦元、九、九	八五
一八四四	宗賢	紀伊水谷	眞言	紀伊高野山	元暦元、九、十三	—
一八四五	定遍	京師	眞言	山城仁和寺	文治元、十、八	五三
一八四五	宗○遍	—	眞言	山城尊壽院	—	—
一八四五	文○覺○	京師	眞言	山城高雄山	—	—
一八四五	俊晴 顯揚房	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一八四五	寛昌 淨春	—	天台	播磨書寫山	—	—
一八四五	順信	常陸豐田	眞	常陸無量壽寺	—	—
一八四六	仁斅	—	法相	大和興福寺	文治二、六、廿二	七五
一八四六	了智	—	眞	信濃正行寺	—	—
一八四七	證○印 大乘	—	眞言	紀伊高野山	文治三、七、—	八〇
一八四八	心○海○	—	天台	近江園城寺	文治四、五、廿	七〇
一八四八	印藏	—	淨土	—	—	—
一八四九	任證	—	眞言	山城東寺	文治五、六、廿三	七七

年	名	出生	宗	寺	寂年	年齡
一八四九	有眞	—	眞言	山城仁和寺	文治五、九、廿七	八一
一八四九	辨○慶○ 武藏房	—	天台	出雲鰐淵山	文治五、—	—
一八五〇	西○行○ 圓位	京師	歌僧	—	建久元、二、十六	七三
一八五〇	雅寶	—	眞言	山城勸修寺	建久元、五、十三	六〇
一八五〇	勝賢	—	眞言	山城東寺	建久元、六、廿二	五九
一八五〇	圓靜 如寂	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八五〇	眞賢	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八五〇	會慶 覺顯	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一八五〇	智玄	—	醫僧	—	—	—
一八五一	良慶	—	天台	近江園城寺	建久二、二、廿九	八五
一八五一	公雅	—	天台	近江園城寺	—	—
一八五一	康慶	—	佛工	—	—	—
一八五二	俊證	京師	眞言	山城東寺	建久三、三、十七	八七
一八五二	理○賢○	大和	眞言	紀伊高野山	建久三、十、十一	七四
一八五二	顯○眞○	—	天台	近江延曆寺	建久三、十一、十四	六三
一八五二	全玄	京師	天台	近江延曆寺	建久三、十二、十三	八〇
一八五三	公顯	—	天台	近江延曆寺	建久四、九、十七	八四
一八五三	尋海	—	眞言	紀伊傳法院	—	—
一八五四	明善	山城鞍馬	眞言	紀伊高野山	建久五、七、十四	六三
一八五四	定○尊	尾張熱田	—	信濃善光寺	—	—
一八五五	重○源○ 俊乘	京師	淨土	大和東大寺	建久六、六、六	七〇餘
一八五五	定覺	—	佛工	—	—	—
一八五五	遠江別當	—	佛工	—	—	—
一八五五	運覺	—	佛工	—	—	—
一八五六	慈應 護念	—	天台	越後無動寺	—	—
一八五六	陳○和○卿○	宋	佛工	—	—	—
一八五七	承仁	—	天台	近江延曆寺	建久八、四、廿七	二九
一八五八	覺成	—	眞言	山城東寺	建久九、十、廿一	七三
一八五八	院•尊	—	佛工	—	建久九、十、廿一	七九
一八五九	鑁○阿○	—	眞言	下野鑁阿寺	正治元、三、八	四六
一八六〇	感西 眞觀	—	淨土	—	正治二、二、六	四八
一八六〇	行宴	—	眞言	山城仁和寺	正治二、七、七	一七
一八六〇	辨曉	—	華嚴	大和東大寺	正治二、七、—	六四
一八六一	雅西 知定	—	眞言	山城醍醐山	建仁元、正、四	—
一八六一	辨雅	京師	天台	近江延曆寺	建仁元、二、十七	六七
一八六二	兼澄	和泉	眞言	和泉藥師寺	建仁二、八、三	—
一八六二	守覺	—	眞言	山城仁和寺	建仁二、八、廿五	五三
一八六三	靜惠	京師	天台	山城三井寺	建仁三、三、十三	—
一八六三	照然 理明	—	眞言	山城勸修寺	建仁三、十一、廿	八四
一八六三	信圓	—	法相	大和興福寺	—	—
一八六四	實繼	—	眞言	山城醍醐山	元久元、正、廿一	五一
一八六四	倫圓	—	天台	近江園城寺	元久元、三、十一	八九
一八六四	珍玄	—	天台	近江園城寺	元久元、十二、十九	四七
一八六四	心寂 西仙	—	淨土	—	元久元、—	—
一八六四	證○眞○	—	天台	近江比叡山	—	—
一八六四	範賢 淨光	—	眞言	近江石山寺	—	—
一八六四	定圓	—	佛工	—	—	—
一八六五	仁隆	—	眞言	山城東寺	元久二、正、十	六二
一八六五	隆遍	—	眞言	山城東寺	元久二、十二、十七	六一
一八六五	度脫	—	淨土	—	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八六六	隆曉	—	眞言	山城東寺	建永元、二、一	七三
一八六六	延杲	—	眞言	山城東寺	建永元、三、十二	八四
一八六六	恒憲	—	天台	近江園城寺	建永元、四、廿九	四八
一八六七	○安樂	京師	淨土	—	承元元、二、九	—
一八六七	○住蓮	—	淨土	—	承元元、二、九	—
一八六七	印性	京師	眞言	山城東寺	承元元、七、三	七六
一八六七	○蓮生	武藏熊谷	淨土	—	承元元、九、一	—
一八六七	最珍	—	天台	近江延暦寺	承元元、十一、二	七七
一八六七	宏敎	—	眞言	相模無量壽院	—	—
一八六七	院賢	—	佛工	—	—	—
一八六七	覺忠	—	天台	近江延暦寺	—	六〇
一八六八	○延朗	但馬養父	天台	山城最福寺	承元二、正、十二	七九
一八六八	行舜	—	天台	近江園城寺	承元二、十一、五	六四
一八六九	勝成	—	天台	近江園城寺	承元三、六、廿四	七八
一八六九	最寛	—	眞言	山城仁和寺	承元三、十二、十	八〇
一八六九	光明	—	淨土	—	—	—
一八七〇	覺基（圓性）	和泉	眞言	紀伊高野山	—	—
一八七〇	○幸西（成覺）	—	天台	近江園城寺	—	—
一八七一	宣圓	—	佛工	—	—	—
一八七一	院範	—	佛工	—	—	—
一八七一	忠俊	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一八七一	觀心	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一八七一	行嚴	京師	眞言	山城醍醐山	—	—
一八七一	○蓮胤（長明）	京師	天台	山城大原山	—	—
一八七一	忠遍	—	眞言	山城理智院	—	—
一八七二	◎源空（法然房）	美作稻岡	淨土	山城黑谷	建暦二、正、廿五	八〇
一八七二	覺憲	京師	法相	大和寶積院	建暦二、十二、廿七	八二
一八七二	聽願	—	淨土	—	—	—
一八七二	行空（法本）	美作	淨土	—	—	—
一八七二	觀覺（智鏡）	美作	淨土	美作菩提寺	—	—
一八七二	覺心	—	淨土	讃岐西三谷	—	—
一八七二	隨蓮	—	淨土	—	—	—
一八七二	道辨	相模	淨土	—	—	—
一八七二	勝法	—	淨土	—	—	—
一八七二	作佛	遠江久野	淨土	—	—	—
一八七二	○長西（覺明）	讃岐	淨土	山城九品寺	—	—
一八七二	證空	—	淨土	山城大報恩寺	—	—
一八七二	道敎	—	淨土	—	—	—
一八七二	空寂	—	淨土	—	—	—
一八七二	○皇圓	—	天台	近江比叡山	—	—
一八七三	○貞慶（解脫）	京師	法相	山城笠置寺	建保元、二、三	五九
一八七三	常久	—	天台	近江園城寺	建保元、三、十四	七四
一八七三	親海	—	眞言	山城東寺	建保元、九、廿九	—
一八七三	覺心（慈心）	京師	戒律	大和海住山	—	—
一八七三	定範	—	三論	大和東大寺	—	—
一八七三	生西（乘蓮）	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八七三	康運	—	佛工	—	—	—
一八七三	承秀	—	佛工	—	—	—

一八七三	戒○如○（知足）	｜	戒律	大和西大寺	｜	｜
一八七三	越前女	｜	佛工	｜	｜	｜
一八七三	成實	｜	三論	山城東寺	｜	｜
一八七四	寛瑜	｜	眞言	山城東寺	建保二、二、八	八三
一八七四	禪覺	｜	天台	近江園城寺	建保二、二、十一	｜
一八七四	道法	｜	眞言	山城仁和寺	建保二、十一、｜	四九
一八七五	榮◎西○（明菴）	備中吉備津	臨濟	山城建仁寺	建保三、六、五	七五
一八七六	公○胤○	｜	天台	近江園城寺	建保四、六、廿	八〇餘
一八七六	圓經	｜	法相	大和知足院	｜	｜
一八七七	金○光○	鎭西	淨土	陸奥西光寺	建保五、三、廿五	六三
一八七七	覺朝	｜	天台	近江園城寺	｜	｜
一八七七	憲圓	美濃	法相	大和知足院	｜	｜
一八七七	道圓	近江日野	眞	常陸枕石寺	｜	｜
一八七七	隆覺	｜	眞言	山城仁和寺	｜	｜
一八七七	永慶	｜	天台	近江楞嚴院	｜	｜
一八七八	良海	｜	眞言	山城醍醐山	建保六、八、廿九	二三
一八七九	良俊	｜	天台	近江園城寺	承久元、二、十四	五七
一八八一	實全	｜	天台	近江延暦寺	承久三、五、十	八一
一八八一	慶範	｜	天台	近江園城寺	承久三、十一、一	六七
一八八一	隆○慶○（敬願）	｜	淨土	山城長樂寺	｜	｜
一八八一	俊承	｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一八八一	信承	｜	淨土	山城長樂寺	｜	｜
一八八一	能念	｜	淨土	山城長樂寺	｜	｜
一八八一	信敎	關東	淨土	｜	｜	｜
一八八一	澄海	｜	淨土	山城長樂寺	｜	｜
一八八一	智○慶○（南無）	｜	淨土	相模長樂寺	｜	｜
一八八一	敬○日○	｜	淨土	山城長樂寺	｜	｜
一八八一	了圓（胡達）	｜	淨土	備後尾ノ道	｜	｜
一八八一	覺照（眞忠）	｜	淨土	三河眞福寺	｜	｜
一八八一	俊範	｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一八八一	源延（淨蓮）	伊豆走湯	天台	相模西明寺	｜	｜
一八八二	高○辨○（明慧）	紀伊在田	華嚴	山城高山寺	貞應元、正、十九	六〇
一八八二	祐尊	｜	眞言	山城仁和寺	貞應元、五、廿七	七六
一八八二	雅海	｜	眞言	山城醍醐山	貞應元、八、十一	八五
一八八二	喜海	｜	華嚴	大和高山寺	｜	｜
一八八三	慶圓	筑紫	法相	大和龍門寺	貞應二、正、廿七	八四
一八八三	覺海（南證）	對馬	眞言	紀伊華王院	貞應二、八、十七	八二
一八八四	靜○遍○	｜	眞言	山城禪林寺	元仁元、四、廿	｜
一八八四	明○遍○	京師	眞言	紀伊高野山	元仁元、六、十六	八三
一八八四	唯信	｜	眞	常陸唯信寺	｜	｜
一八八四	聖海	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一八八五	明○全○（佛樹）	伊勢	臨濟	山城建仁寺	嘉祿元、五、五	四二
一八八五	運命	丹州	天台	近江無動寺	嘉祿元、八、十三	八三
一八八五	隆圓	京師	天台	近江園城寺	嘉祿元、十二、五	五六
一八八五	慈○圓○	京師	天台	近江延暦寺	嘉祿元、｜、｜	七九
一八八六	長舜	｜	天台	近江園城寺	嘉祿二、四、九	八三
一八八七	俊○芿○（我禪）	肥後飽田	戒律	山城泉涌寺	安貞元、三、八	六二
一八八七	明光	｜	眞	備後光照寺	安貞元、四、十六	六四
一八八七	成○賓○	｜	眞言	山城東寺	安貞元、十、七	六九
一八八七	隆○寛○（皆空）	京師	淨土	山城長樂寺	安貞元、十二、十三	八〇

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八八七	○思○宣	京師	戒律	山城泉涌寺	—	—
一八八七	照	—	天台	近江比叡山	—	—
一八八八	空○阿（法性）	—	淨土	—	安貞二、正、十五	—
一八八八	信○空（法蓮）	—	淨土	—	安貞二、九、九	八三
一八八八	専海（専信房）	遠江桑畑	—	三河願照寺	—	—
一八八八	覺信	—	眞	甲斐萬福寺	—	—
一八八八	信○瑞（敬西）	—	淨土	—	—	—
一八八九	明○住	紀伊神宮	眞言	紀伊高野山	寛喜元、十一、十	八二
一八八九	明範	和泉	眞言	紀伊高野山	—	—
一八八九	顯嚴	—	眞言	山城隨心院	—	—
一八八九	心海（空月）	—	—	攝津勝鬘院	—	—
一八九〇	眞性	—	天台	近江延暦寺	寛喜二、六、十四	六四
一八九〇	能禪	—	眞言	山城東寺	—	—
一八九〇	覺仁	—	眞言	相模無量壽院	—	—
一八九一	經○玄	—	天台	近江園城寺	寛喜三、正、十七	七三
一八九一	貞○曉	京師	眞言	山城仁和寺	寛喜三、二、廿二	四六
一八九一	成○賢	—	眞言	山城醍醐山	寛喜三、九、十九	七〇
一八九一	良○祐（安覺）	—	臨濟	筑前香正寺	寛喜三、—	七三
一八九一	賴○賢（意教）	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八九一	淨尊	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八九一	光寶	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八九一	定然（心月）	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一八九二	良遍	越中	眞言	山城東寺	貞永元、八、廿一	八三
一八九二	猷圓	—	天台	近江園城寺	貞永元、十、廿五	七三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一八九二	杲○海○	京師	眞言	山城金剛王院	—	—
一八九三	全賢	—	眞言	山城醍醐山	天福元、正、廿八	五〇
一八九三	行聖	—	天台	近江園城寺	天福元、七、廿二	六八
一八九三	白○蓮	—	淨土	山城某寺	—	七〇
一八九三	生○佛	關東	天台	近江比叡山	—	—
一八九三	宗○圓	—	淨土	—	—	—
一八九五	聖○覺	京師	淨土	山城安居院	嘉禎元、三、五	六九
一八九五	賴○慧（慈恩院）	—	三論	大和東大寺	嘉禎元、六、廿八	六八
一八九五	公○圓	—	天台	近江延暦寺	嘉禎元、九、廿	六八
一八九五	道禪（鳴瀧法印）	—	眞言	山城醍醐山	嘉禎元、十一、十六	三七
一八九五	院圓	—	佛工	—	—	—
一八九六	實尊	—	法相	大和興福寺	嘉禎二、二、十九	—
一八九六	承圓	—	天台	近江延暦寺	嘉禎二、十、六	五七
一八九六	觀嚴	—	眞言	大和東大寺	嘉禎二、十一、二	八六
一八九七	賢海（三位）	—	眞言	山城醍醐山	嘉禎三、十、廿三	七六
一八九七	道慶（東山）	—	天台	近江園城寺	—	—
一八九七	源俊（顯律）	—	戒律	常陸東榮寺	—	—
一八九七	勝心	京師	眞言	山城三寶院	—	—
一八九七	正○善	—	天台	攝津天王寺	—	—
一八九七	湛○慶	京師	佛工	—	—	—
一八九八	辨○長（聖光）	筑前香月	淨土	筑後善導寺	暦仁元、正、廿九	七七
一八九八	定豪	—	眞言	山城東寺	暦仁元、九、廿四	八七
一八九八	源○智（勢觀）	—	淨土	山城知恩寺	暦仁元、十二、十二	五六
一八九八	良尊	—	天台	近江園城寺	—	—

年	名	生國	宗	寺	寂年	年齡
一八九八	行仙	京師	淨土	—	—	—
一八九八	隨願	大隅	淨土	—	—	—
一八九八	聖護	筑後	淨土	—	—	—
一八九八	正念	—	淨土	山城某菴	—	—
一八九八	綽阿	豐後	淨土	—	—	—
一八九八	智鏡（明觀）	—	戒律	山城泉涌寺	—	—
一八九九	明元	—	天台	近江園城寺	延應元、正、十八	六二
一八九九	眞○慧○	—	眞言	山城東寺	延應元、正、廿一	七七
一八九九	尊性	—	眞言	大和海龍王寺	延應元、九、三	四六
一八九九	貞院（修蓮）	—	天台	近江延暦寺	—	—
一八九九	敎名	—	眞	越後西願寺	—	—
一九〇〇	道譽	—	天台	近江園城寺	仁治元、九、五	六二
一九〇〇	淨眞	京師	眞言	山城醍醐山	仁治元、十、廿八	—
一九〇〇	明賢	—	眞言	紀伊高野山	—	—
一九〇〇	寬○信○	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九〇〇	道智	—	天台	近江園城寺	—	—
一九〇一	西○佛○（信叡）	信濃	眞	信濃康樂寺	仁治二、正、廿八	八五
一九〇一	慈賢	—	天台	近江延暦寺	仁治二、三、三	六七
一九〇一	義空（求法）	出羽	—	山城大報恩寺	仁治二、四、卅	七〇
一九〇一	行○勇○（退耕）	相模酒匂	臨濟	相模淨妙寺	仁治二、七、五	七九
一九〇一	圓○晴○（尊性）	大和	戒律	大和不空院	仁治二、—、—	六二
一九〇一	良繼	—	法相	大和興福寺	—	—
一九〇一	了心（大歇）	—	臨濟	相模壽福寺	—	—
一九〇二	覺敎	—	眞言	山城東寺	仁治三、正、八	七六
一九〇二	明○禪○	—	天台	山城毘沙門堂	仁治三、五、三	七六
一九〇二	良快	山城	天台	近江延暦寺	仁治三、十二、十七	五八
一九〇二	禪慧○（本性）	—	戒律	大和大安寺	—	—
一九〇三	靜明	山城	天台	近江延暦寺	—	—
一九〇三	信尊	—	天台	武藏泉福寺	—	—
一九〇三	慈濟（賢明）	山城	戒律	相模極樂寺	—	—
一九〇三	道覺	—	淨土	山城蓮華壽院	—	—
一九〇四	信○寂○	—	淨土	播磨朝日山	寬元二、三、三	—
一九〇四	定舜（來緣）	—	戒律	山城泉涌寺	寬元二、三、五	—
一九〇四	信慧（靜慶）	—	戒律	大和招提寺	寬元二、三、十六	九一
一九〇四	定譽	—	天台	近江園城寺	寬元二、七、三	—
一九〇四	證○入○（觀鏡）	—	淨土	山城東山	寬元二、七、七	—
一九〇四	聖○入○	—	淨土	信濃善光寺	—	—
一九〇四	觀○日○（聖深）	—	淨土	山城東山	—	—
一九〇四	明隆	—	眞	山城金寶寺	—	—
一九〇四	觀○明○	—	淨土	山城安養寺	—	—
一九〇四	證○佛○	備中	淨土	山城東山	—	—
一九〇四	了觀（漸空）	—	淨土	山城三福寺	—	—
一九〇四	忍空（空智）	駿河	戒律	山城戒光寺	—	—
一九〇四	恩○允○（我圓）	—	戒律	山城泉涌寺	—	—
一九〇四	道玄（自性）	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
一九〇四	湛海（聞陽）	—	戒律	山城泉涌寺	—	—
一九〇四	覺○入○	—	淨土	山城東山	—	—
一九〇四	見○性○	長門	淨土	備後蓮臺院	—	—
一九〇四	成○信○	伊豫	淨土	山城東山	—	—
一九〇五	尙○祚○	—	眞言	紀伊高野山	寬元三、十一、廿五	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九〇五	嚴眞（戒慧）	—	眞言	大和海龍王寺	—	—
一九〇六	尊快	—	天台	近江延暦寺	寛元四、四、二	四三
一九〇六	證慶	—	天台	近江園城寺	寛元四、九、四	七七
一九〇六	紹仁（義翁）	宋涪江	臨濟	相模建長寺	—、六、二	—
一九〇六	有嚴（長忍）	—	戒律	大和西方院	—	—
一九〇七	仁慈	安藝	眞言	山城東寺	寶治元、七、十六	七三
一九〇七	○榮朝（釋圓）	—	臨濟	上野長樂寺	寶治元、九、廿六	—
一九〇七	◎證空（善慧）	京師	淨土	山城善峰寺	寶治元、十一、廿六	七一
一九〇七	玄忍（證覺）	—	眞言	大和海龍王寺	寶治元、十二、十	三六
一九〇七	修觀	—	淨土	—	—	—
一九〇七	薩生（全報）	—	淨土	—	—	—
一九〇七	○聖達	鎭西	淨土	肥前知恩寺	—	—
一九〇七	俊英	—	畫僧	—	—	—
一九〇八	道正菴主	—	曹洞	山城道正菴	寶治二、七、廿四	—
一九〇八	承覺	—	天台	近江園城寺	寶治二、十一、十三	六八
一九〇八	覺如	—	戒律	大和西大寺	—	—
一九〇八	專英	—	法相	大和某寺	—	—
一九〇九	○道助	—	眞言	山城仁和寺	建長元、正、十五	五五
一九〇九	入信	—	眞	常陸壽命寺	建長元、三、廿五	—
一九〇九	○覺盛（學律）	大和服部	戒律	大和招提寺	建長元、五、十九	五六
一九〇九	重圓	—	天台	近江園城寺	建長元、六、廿二	八八
一九〇九	道深	—	眞言	山城仁和寺	建長元、七、廿八	四四
一九〇九	實賢	—	眞言	山城東寺	建長元、九、四	七四
一九〇九	公縁	—	法相	大和興福寺	建長元、—、—	六九
一九〇九	叡効	京師	天台	山城正法寺	—	—
一九〇九	慶運（戒學）	—	戒律	大和橘寺	—	—
一九〇九	義能（明信）	越後	眞言	播磨無量壽院	—	—
一九〇九	禪觀（長聖）	—	戒律	大和東大寺	—	—
一九〇九	院繼	—	佛工	—	—	—
一九〇九	覺澄（性舜）	—	法相	大和知足院	—	—
一九〇九	○思順（天祐）	—	臨濟	山城勝林寺	—	—
一九〇九	院承	—	佛工	—	—	—
一九〇九	院忠	—	佛工	—	—	—
一九〇九	院瑜	—	佛工	—	—	—
一九〇九	院審	—	佛工	—	—	—
一六〇九	院尊	—	佛工	—	—	—
一九〇九	貞禪	—	三論	大和東南院	—	—
一九一〇	道覺	—	天台	近江延暦寺	建長二、正、十一	四七
一九一〇	光賢	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九一〇	濟寶	鎭西	—	筑前觀世音寺	—	—
一九一一	了源（信之）	相模	眞	相模善福寺	建長三、三、十二	六〇
一九一一	○宗源（乘願）	—	淨土	—	建長三、七、三	八四
一九一一	圓聰	—	天台	近江園城寺	建長三、七、四	七六
一九一一	宣嚴	—	眞言	山城東寺	建長三、八、七	—
一九一一	證信（明法）	常陸那珂	眞	常陸上宮寺	建長三、十、十三	六八
一九一一	念阿（念佛）	—	淨土	山城往生院	建長三、十一、三	九五
一九一一	勝尊	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九一一	實儼	—	眞言	山城金剛王院	—	—

一九一一	法明（了然）	高麗	曹洞	出羽玉泉寺	—	—
一九一一	道○仁	—	天台	近江園城寺	—	—
一九一二	道○範	和泉船尾	眞言	紀伊高野山	建長四、五、廿二	六九
一九一二	猷尊	—	天台	近江園城寺	建長四、七、十八	七五
一九一二	良○遍（信願）	京師	法相	大和興福寺	建長四、八、廿八	五八
一九一二	入○西	常陸	眞	常陸某寺	建長四、—	—
一九一二	密○嚴	—	戒律	下野藥師寺	—	—
一九一二	唯心（勸聖）	京師	戒律	大和戒壇院	—	—
一九一二	實算	—	法相	大和修行院	—	—
一九一三	快○慶	—	佛工	—	建長五、七、十五	八〇
一九一三	湛○空（正信）	京師	淨土	山城二尊院	建長五、七、廿七	七八
一九一三	道◎元（希玄）	京師	曹洞	越前永平寺	建長五、八、廿八	五四
一九一三	院○宗	—	佛工	—	—	—
一九一三	詮慧	近江	曹洞	越前永興寺	—	—
一九一三	靜仁	—	天台	近江園城寺	—	—
一九一四	行勝	攝津高木	眞言	紀伊高野山	建長六、四、廿八	八八
一九一四	俊嚴	京師	眞言	山城東寺	建長六、十一、廿九	—
一九一四	敎尹	—	法相	大和興福寺	—	—
一九一四	良覺	紀伊有田	眞言	紀伊高野山	—	—
一九一五	慈源	—	天台	近江延曆寺	建長七、七、十九	三七
一九一五	惟○儼（樵谷）	—	臨濟	信濃安樂寺	—	—
一九一六	道○祐	筑前博多	臨濟	山城妙見堂	康元元、二、五	五六
一九一六	圓淨	—	天台	近江園城寺	康元元、四、十九	六八
一九一六	圓順	—	天台	近江園城寺	康元元、七、六	七八
一九一六	道禪	—	天台	近江園城寺	康元元、八、八	八八

一九一六	濟助	—	天台	近江園城寺	—	—
一九一六	親尊	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九一七	本蓮	—	日蓮	尾張本蓮寺	正嘉元、六、十一	七三
一九一七	房圓	京師	眞言	山城東寺	—	—
一九一七	在阿	—	天台	—	—	—
一九一七	宗圓	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九一七	智舜	—	三論	大和東大寺	—	—
一九一七	弘○義	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九一七	了○然（月峰）	—	臨濟	山城淨明寺	—	—
一九一七	乘○範	—	法相	大和竹林院	—	—
一九一八	眞○佛	下野眞壁	眞	山城佛光寺	正嘉二、三、八	五〇
一九一八	禪○勝	—	淨土	遠江蓮華寺	正嘉二、十一、四	八九
一九一八	貞弘	—	法相	大和修行院	—	—
一九一九	淨業（法忍）	山城	戒律	山城戒光寺	正元元、二、廿一	七三
一九一九	蓮生（實信）	京師	淨土	山城西山	正元元、十一、十三	—
一九一九	如性（禪空）	大和奈良	法相	大和菩提山	—	—
一九一九	十乘	—	天台	河內某菴	—	—
一九二〇	道昭（入圓）	大和奈良	戒律	大和白毫寺	—	—
一九二〇	湛照（禪如）	京師	戒律	大和戒壇院	—	—
一九二〇	眞照	京師	—	山城增福寺	—	—
一九二〇	榮尊	三河	眞言	山城勸修寺	—	—
一九二〇	宗松	—	華嚴	大和東大寺	—	七〇餘
一九二〇	聖濟	—	眞言	山城慈尊院	—	—
一九二一	眞佛	常陸那珂	眞	常陸眞佛寺	弘長元、五、十五	六七
一九二一	賴兼	—	天台	近江園城寺	弘長元、七、十七	七六

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九二一	公縁	—	天台	近江園城寺	弘長元、十、廿九	八八
一九二一	眞辨	紀伊名手	眞言	紀伊高野山	—	—
一九二一	慶圓	—	眞	三河本證寺	—	—
一九二一	了海	—	眞	三河勝曼寺	—	—
一九二一	佛僊	近江	曹洞	越前某菴	—	—
一九二一	良敏（寂忍）	尾張熱田	眞言	尾張性海寺	—	—
一九二二	◎仁◎助	京師	天台	近江園城寺	弘長二、八、十一	—
一九二二	親鸞	京師	眞	山城東山	弘長二、十一、廿八	九〇
一九二二	專阿彌陀佛	京師	眞	山城安養寺	—	—
一九二二	覺信	—	眞	—	—	—
一九二二	念信	三河桑子	眞	三河妙源寺	—	—
一九二二	祐遍	紀伊紺野	眞言	紀伊高野山	—	—
一九二二	○源秀（戒印）	—	戒律	河內福泉寺	—	—
一九二二	○信○樂	—	眞	下總弘德寺	—	—
一九二三	○憲○深	—	眞言	山城醍醐山	弘長三、九、六	七三
一九二三	○穆○千	—	天台	近江園城寺	弘長三、九、十三	八三
一九二三	○慧信尼	京師	眞	常陸稻田	弘長三、九、十八	七九
一九二三	靜忠	—	天台	近江園城寺	弘長三、十、二	七四
一九二三	○圓顯	—	天台	近江園城寺	—	—
一九二四	○慧證（道觀）	京師	淨土	山城淨金剛院	文永元、五、六	七〇
一九二四	實瑜	—	眞言	山城東寺	文永元、七、六	六四
一九二四	元爲	奥州柳津	眞	陸前稱名寺	文永元、十、廿三	七九
一九二四	○尊○覺	—	天台	近江延曆寺	文永元、十、廿七	五〇
一九二四	日曉（鏡忍）	—	日蓮	安房鏡忍寺	文永元、十二、十一	—
一九二四	行遍	參河	眞言	山城東寺	文永元、十二、十五	八四
一九二四	唯心	山城幡	眞言	—	文永元、—、—	—
一九二四	○阿○日（阿月）	—	法相	大和釜ノ口別所	—	—
一九二四	○日○玉（妙隆院）	—	日蓮	安房日澄寺	—	—
一九二四	寂蓮	—	淨土	山城知恩寺	—	—
一九二四	日長	—	日蓮	伊賀妙臺寺	—	—
一九二四	寛海（空藏）	—	淨土	山城大光明寺	—	—
一九二四	信忍（知生）	京師	眞言	山城金山院	—	—
一九二四	聖禪	—	華嚴	大和東大寺	—	—
一九二四	○照阿（禪一）	—	戒律	大和戒壇院	—	—
一九二四	圓晴（道圓）	越後	戒律	大和戒檀院	—	—
一九二四	○性○瑜（本照）	—	戒律	大和護國院	—	—
一九二四	思順	—	戒律	攝津勝鬘院	—	—
一九二五	證性	—	眞	常陸青蓮寺	文永二、四、廿五	七七
一九二六	定親	—	眞言	山城東寺	文永三、九、九	六四
一九二六	○隆○澄	—	眞言	山城仁和寺	文永三、十一、十七	八六
一九二六	慶俊	—	天台	近江園城寺	文永三、十二、廿八	七七
一九二六	遠照（唯一）	—	戒律	大和戒壇院	—	—
一九二六	俊觀	—	天台	近江園城寺	—	—
一九二七	聖基	—	眞言	山城東寺	文永四、十二、九	六四
一九二七	琳海（信覺）	攝津	戒律	山城東北院	—	—
一九二七	幸尊（長禪）	—	戒律	大和海龍王寺	—	—
一九二八	信願	—	眞	下野慈願寺	文永五、三、十五	七六
一九二八	慶政	—	天台	近江園城寺	文永五、六、—	—

年	名	號	生地	宗	寺	寂年月日	壽
一九二八	眞○空○	廻心	—	三論	山城大通寺	文永五、七、八	六五
一九二八	善性		—	眞	越後淨光寺	文永五、八、廿	七〇
一九二八	良慧		—	眞言	山城仁和寺	文永五、十一、廿四	七七
一九二八	見空○	慈寂	—	—	大和海龍王寺	—	—
一九二八	慈○猛○	良賢	—	眞言	下野藥師寺	—	—
一九二九	長○空○	持願	—	淨土	—	文永六、四、十八	—
一九二九	觀勇		信濃	天台	近江園城寺	文永六、十一、十二	七二
一九二九	公聖	淨阿	京師	眞言	山城發心院	—	—
一九二九	快圓		—	三論	大和東大寺	—	—
一九二九	見塔		京師	三論	大和東大寺	—	—
一九三〇	勤尊		備前	天台	近江園城寺	文永七、二	八三
一九三〇	慧深		和泉大鳥	眞言	紀伊高野山	文永七、六、六	—
一九三〇	經○海		—	天台	近江延暦寺	—	—
一九三一	法○興○	淨音	京師	淨土	山城光明寺	文永八、五、廿二	—
一九三一	淨○因○	圓悟	京師	戒律	山城戒光寺	文永八、十二、十二	五五
一九三一	眞俶	妙性	—	眞言	山城醍醐山	文永八、十二、十四	—
一九三一	觀智	朝阿	安房	淨土	山城禪林寺	—	—
一九三一	本慧		—	淨土	鎭西某寺	—	—
一九三一	正慧	信戒	—	眞言	山城泉涌寺	—	—
一九三一	道譽	淵月	—	戒律	筑前觀音寺	—	—
一九三一	了音		—	淨土	山城本願寺	—	—
一九三一	爾○然○	無外	山城	臨濟	三河實相寺	—	—
一九三二	敬○念○	悟空	筑前太宰府	臨濟	筑紫首羅山	文永九、十、八	五六
一九三二	榮○尊○	神子	筑後三潴	臨濟	肥前萬壽寺	文永九、十二、廿八	八〇
一九三二	定祐	戒光	—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九三三	日○唱○	首題房	—	日蓮	下總唱行寺	文永十、五、一	八八
一九三三	賴賢	尊圓	京師	眞言	紀伊高野山	文永十、十二、七	七八
一九三三	道乘		—	眞言	山城東寺	文永十二、十一	五九
一九三三	純瑜		—	眞言	紀伊高野山	—	—
一九三四	道○朝		—	眞言	山城醍醐山	文永十一、八、廿六	—
一九三四	仙○覺○		—	天台	相模新釋迦堂	—	—
一九三四	圓珠		—	天台	攝津勝鬘院	—	—
一九三五	性○信○		常陸鹿島	眞	下總報恩寺	建治元、七、十七	八九
一九三五	定玄	僧然	—	淨土	山城淨華院	—	—
一九三五	觀覺		—	眞言	紀伊多聞院	—	—
一九三五	慶舜		—	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三六	道善		—	眞言	安房淸澄山	建治二、三、十六	—
一九三六	願○性○		—	臨濟	紀伊西方寺	建治二、四、廿三	—
一九三六	親○快○		—	眞言	山城遍智院	建治二、五、廿六	—
一九三六	慈○禪		—	天台	近江延暦寺	建治二、八、七	四六
一九三六	普○寧○	兀菴	宋西蜀	臨濟	相模建長寺	建治二、十一、廿四	—
一九三六	宏海	南洲	—	臨濟	相摸淨智寺	—	—
一九三六	總○覺		—	臨濟	越前淨福寺	—	—
一九三七	朗○譽○	藏叟	—	臨濟	相模壽福寺	建治三、六、四	八四
一九三七	實○深		—	眞言	山城東寺	建治三、九、六	七三
一九三七	圓○照○	實相	大和奈良	戒律	大和戒壇院	建治三、十、廿二	五八
一九三七	日元	久本房	—	日蓮	甲斐竹之房	建治三、十一、一	—
一九三七	慧安	東巖	播磨	臨濟	山城正傳寺	建治三、十一、三	五三
一九三七	重禪		—	戒律	大言戒壇院	—	—
一九三七	源章	蓮性	山城	戒律	大和戒壇院	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九三七	眞乘（爲全）	長門	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	行祐（觀照）	鎭西	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	適然（覺靜）	大和	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	通憲（顯日）	讃岐	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	圓喜（淨嚴）	鎭西	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	性融	上野	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	經爭（正眞）	攝津	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	慶圓（寂偏）	—	戒律	大和招提寺	—	—
一九三七	性憲	美濃	戒律	大和戒壇院	—	—
一七二七	元晴（隨道）	大和	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	玄空	京師	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	上俊（阿實）	越後	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	尊空（禪林）	伊勢	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	空月（禪性）	—	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	蓮眼	越前	眞言	紀伊高野山	—	—
一九三七	蓮淨（實阿）	大和	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三七	圓一	伊勢	戒律	大和戒壇院	—	—
一九三八	源海（光信）	京師	眞	山城佛光寺	弘安元、二、廿三	五八
一九三八	阿彌陀	—	淨土	山城某菴	弘安元、三、十五	—
一九三八	隆助	—	眞言	山城仁和寺	弘安元、七、九	六七
一九三八	蓮位	—	眞	常陸三月寺	弘安元、七、廿三	—
一九三八	道隆◎（蘭溪）	宋西蜀	臨濟	相模建長寺	弘安元、七、廿四	六六
一九三八	行仙	—	眞言	上野山上寺	弘安元、八、—	—
一九三八	深賢○	—	眞言	山城醍醐山	弘安元、九、十四	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九三八	仙朝	—	天台	近江園城寺	弘安元、十二、十四	七七
一九三八	顯證（良圓）	—	淨土	—	—	—
一九三八	行性	—	淨土	—	—	—
一九三八	範憲	—	法相	大和興福寺	—	—
一九三八	智鏡（明觀）	・	戒律	山城泉涌寺	—	—
一九三九	日得○（阿佛房）	京師	日蓮	佐渡妙宣寺	弘安二、三、廿一	九一
一九三九	專惠	筑前	眞	三河專光寺	弘安二、十二、十二	六四
一九三九	文岑（象先）	—	臨濟	相模壽福寺	—	—
一九三九	德悟（桃溪）	鎭西	臨濟	相模圓覺寺	—	—
一九四〇	眞慶	—	天台	近江園城寺	弘安三、三、十二	七七
一九四〇	行然（應準）	加賀	戒律	加賀無量壽寺	弘安三、五、廿八	—
一九四〇	懷奘○（孤雲）	京師	曹洞	越前永平寺	弘安三、八、廿四	八三
一九四〇	辨圓◎（圓爾）	駿河藁科	臨濟	山城東福寺	弘安三、十、十六	七九
一九四〇	賴譽	京師	眞言	山城東寺	弘安三、十二、七	—
一九四〇	圓心（鐵牛）	—	臨濟	筑前承天寺	—	—
一九四〇	圓然（奇山）	駿河久能	臨濟	山城普門寺	—	—
一九四〇	仙原（耕叟）	—	臨濟	筑前承天寺	—	—
一九四〇	智翁	—	臨濟	近江青蓮寺	—	—
一九四〇	慧璿（玉溪）	—	臨濟	攝津普門寺	—	—
一九四〇	滿慧（臨乘）	筑前	臨濟	筑前崇福寺	—	—
一九四〇	芝丘（高庵）	備後	臨濟	山城東福寺	—	—
一九四〇	義準	—	普洞	越前永德院	—	—
一六四〇	法心（性才）	—	臨濟	陸前圓福寺	—	—
一九四一	道忠（來圓）	—	淨土	—	弘安四、正、廿九	—

一九四一	寂入		出羽	戒律	大和戒壇院	弘安四、六、	—
一九四一	通融		山城	眞言	山城仁和寺	弘安四、七、十五	五八
一九四一	道寶		—	眞言	近江安祥寺	弘安四、八、四	六八
一九四一	院○豪○	一翁	—	臨濟	上野長樂寺	弘安四、八、廿一	七三
一九四一	實伊		—	天台	近江園城寺	弘安四、八、廿六	五九
一九四一	訓光	義芳	日向	曹洞	日向長持寺	—	—
一九四一	宗鑑	明窓	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
一九四一	良眞	夢嵩	奥州	臨濟	山城靈鷲寺	—	—
一九四一	圓淨	恵翁	—	臨濟	山城興聖寺	—	—
一九四二	圓助		—	天台	近江園城寺	弘安五、八、十二	四七
一九四二	定濟		—	眞言	山城東寺	弘安五、十、三	—
一九四二	日◎蓮◎		安房小湊	日蓮	甲斐身延山	弘安五、十、十三	六一
一九四二	承○澄○		京師	天台	近江比叡山	弘安五、十、廿二	七八
一九四二	性助		—	眞言	山城仁和寺	弘安五、十二、十九	三六
一九四二	德詮	無及	—	臨濟	相模禪興寺	—	—
一九四二	最源		—	天台	近江延暦寺	—	—
一九四二	日祐		—	日蓮	甲斐身延山	—	—
一九四二	日胤		—	天台	近江園城寺	—	—
一九四二	本立	千峯	—	臨濟	相模淨妙寺	—	—
一九四三	日○朝○	常在院	上野藻原	日蓮	下野妙光寺	弘安六、五、廿三	—
一九四三	尊信		—	法相	大和興福寺	弘安六、七、十三	—
一九四三	隆辨		—	天台	近江園城寺	弘安六、八、十五	七六
一九四三	阿○佛○尼○		京師	—	—	弘安六、九、	—
一九四三	定勝		京師	眞言	山城醍醐山	弘安六、十一、九	三九
一九四三	悟阿		—	華嚴	大和東大寺	弘安六、十一、十七	—

一九四三	道我		—	眞言	山城東寺	—	—
一九四三	慈信		京師	法相	大和興福寺	—	—
一九四四	隆○信○	圓空	—	淨土	山城眞宗院	弘安七、四、十八	七三
一九四四	法○助○		京師	眞言	山城仁和寺	弘安七、十一、廿一	五八
一九四五	入阿	入西	—	淨土	山城某寺	弘安八、十、二	—
一九四六	聖法		—	淨土	—	弘安九、二、十五	—
一九四六	善○鸞○	慈信房	—	眞	奥州大網	弘安九、三、六	七〇
一九四六	祖◎元◎	子元	宋明州	臨濟	相模圓覺寺	弘安九、九、三	六一
一九四六	房源		—	天台	山城長福寺	弘安九、九、五	七九
一九四六	寛乘		—	天台	近江三井寺	弘安九、九、廿九	八一
一九四六	日寂		—	日蓮	近江長昌寺	弘安九、十一、一	—
一九四六	最助		—	天台	近江延暦寺	—	—
一九四七	深覺		—	眞言	山城東寺	弘安十、正、十七	六三
一九四七	勝信		京師	眞言	山城東寺	弘安十、七、四	五三
一九四七	良○忠○	然阿	石見三隅	淨土	相模光明寺	弘安十、七、六	八九
一九四七	俊性		—	淨土	近江某寺	弘安十、十一、八	—
一九四七	覺○信○尼○		—	眞	山城東山	弘安十、十一、廿三	—
一九四七	祐信		紀伊河南	眞言	紀伊高野山	弘安十、—、	—
一九四七	專尋	求道	—	淨土	山城光明寺	—	—
一九四八	幸金		—	天台	近江園城寺	正應元、十二、廿六	—
一九四八	性眞	唱阿	武藏秩父	淨土	下總高聲寺	—	—
一九四八	明源	唯性	—	淨土	下總了覺寺	—	—
一九四八	唯圓		常陸茨木	眞	—	—	—
一九四八	阿一	如縁	—	戒律	河内教興寺	—	—
一九四八	慧海		—	戒律	河内法泉寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九四九	西念○	信濃	眞	信濃長命院	正應二、三、十五	一〇八
一九四九	理眞	｜	淨土	｜	正應二、五、廿八	｜
一九四九	道蓉	｜	曹洞	美濃西願寺	正應二、七	｜
一九四九	智眞◎（一遍）	伊豫	時	｜	正應二、八、廿三	五一
一九四九	尊助	｜	天台	近江延暦寺	正應二、十一、一	｜
一九四九	正念○（大休）	宋溫州	臨濟	相模淨智寺	正應二、十一、卅	七五
一九四九	聖戒○	｜	時	山城歡喜光寺	｜	｜
一九四九	解阿	｜	時	常陸善光寺	｜	｜
一九四九	一阿	｜	時	｜	｜	｜
一九四九	樹朗○	｜	三論	大和東大寺	｜	｜
一九四九	道泉（秋礀）	｜	臨濟	相模壽福寺	｜	｜
一九四九	守助	京師	眞言	山城東寺	｜	｜
一九四九	祐俊	｜	眞	山城西光寺	｜	｜
一九四九	照源（道明）	京師	三論	大和東大寺	｜	｜
一九五〇	道光○（了惠）	相模鎌倉	淨土	山城悟眞寺	正應三、三、廿九	｜
一九五〇	覺觀	｜	天台	近江園城寺	正應三、四、十七	｜
一九五〇	睿尊◎（思圓）	大和添上	戒律	大和西大寺	正應三、八、廿五	九〇
一九五〇	實圓	｜	天台	近江園城寺	正應三、十一、廿三	七四
一九五〇	育助	京師	眞言	山城仁和寺	正應三、十二、廿六	七四
一九五〇	幸圓	｜	戒律	大和西大寺	｜	｜
一九五〇	賴玄（蓮順）	｜	戒律	常陸清凉寺	｜	｜
一九五〇	貞院（修蓮）	｜	戒律	大和海龍王寺	｜	｜
一九五〇	玄基（興道）	｜	戒律	大和大安寺	｜	｜
一九五〇	總持（日淨）	大和	戒律	河内西林寺	｜	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九五〇	榮眞（圓眞）	｜	戒律	相模極樂寺	｜	｜
一九五〇	深助	｜	眞言	山城圓融寺	｜	｜
一九五〇	房海（觀烈）	｜	眞言	紀伊高野山	｜	｜
一九五一	實勝	京師	眞言	山城醍醐山	正應四、三、十三	五一
一九五一	日宗（宗明）	甲斐加賀美	甲斐	甲斐遠光寺	正應四、四、五	｜
一九五一	良胤（大圓）	｜	眞言	山城觀勝寺	正應四、五、廿六	八一
一九五一	堪照○（東山）	備中一萬郷	臨濟	山城東福寺	正應四、八、八	六一
一九五一	聖守○（中道）	大和奈良	眞言	大和眞言院	正應四、十一、廿七	七三
一九五一	普門◎（無關）	信濃保科	臨濟	山城南禪寺	正應四、十二、十二	八〇
一九五一	圓海（道本）	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一九五一	思季（想觀）	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一九五二	如圓○（信空）	京師	淨土	山城龍護院	正應五、三、三	｜
一九五二	證玄○（圓律）	｜	戒律	大和招提寺	正應五、八、十四	七三
一九五二	覺雅	｜	眞言	山城幸恩院	正應五、八、廿一	五〇
一九五二	信乘（律受）	｜	戒律	大和招提寺	｜	｜
一九五二	圓證（了寂）	｜	戒律	大和招提寺	｜	｜
一九五二	實寶	｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九五二	源惠	｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一九五二	覺濟	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一九五二	道忠	｜	戒律	大和慈光寺	｜	｜
一九五二	寬範	和泉宇多	眞言	紀伊高野山	｜	｜
一九五三	聖兼	｜	三論	大和東大寺	永仁元、九、十一	五三
一九五三	行覺	｜	天台	近江園城寺	永仁元、九、廿二	｜
一九五三	日合（筑前闍梨）	｜	日蓮	下總妙興寺	永仁元、十、十一	｜

一九五二	了海	顯明	京師	眞	山城佛光寺	永仁元、十一、六	九四
一九五三	若訥	宏辨	肥前	臨濟	丹波圓通寺	永仁元、十二、廿七	七七
一九五三	良範	了圓	奥州	眞言	山城淸水坂	｜	｜
一九五三	慈基		｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一九五三	師侃	愚直	｜	臨濟	山城三聖寺	｜	｜
一九五四	守助		京師	眞言	山城東寺	永仁二、五、五	五五
一九五四	覺晴		｜	天台	大和興福寺	｜	｜
一九五五	○憲靜	願行	｜	眞言	相模大山寺	永仁三、四、七	｜
一九五五	慈助		｜	天台	近江延暦寺	永仁三、七、十七	｜
一九五五	○覺○阿	覺一	｜	戒律	山城泉涌寺	｜、｜、八、十一	｜
一九五六	日門		｜	日蓮	常陸妙光寺	永仁四、七、廿	｜
一九五六	賴助		｜	眞言	山城東寺	永仁四、｜｜	｜
一九五六	智海	心慧	｜	戒律	相模覺園寺	｜	｜
一九五六	尊教		｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一九五七	明空		｜	眞	常陸光明寺	永仁五、二、十三	七三
一九五七	○然○空	禮阿	｜	淨土	山城淨華院	永仁五、六、十一	｜
一九五七	○良○空	慈心	｜	淨土	山城尊勝院	永仁五、七、八	｜
一九五七	○慧○曉	白雲	讃岐	臨濟	山城東福寺	永仁五、十二、廿五	七五
一九五七	忍性		｜	淨土	山城某寺	｜	｜
一九五七	慈雲		京師	淨土	｜	｜	｜
一九五七	守惠		京師	眞言	山城東寺	｜	｜
一九五八	增忠		｜	天台	近江園城寺	永仁六、正、廿四	｜
一九五八	日義尼		駿河村岡	日蓮	奥州妙法寺	永仁六、四、十二	｜
一九五八	○覺心	心地	信濃神林	臨濟	紀伊興國寺	永仁六、十、十三	九二
一九五八	玄慶		｜	眞言	山城醐醍山	永仁六、十二、六	｜
一九五八	深快		｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九五八	思賢	無住	｜	臨濟	紀伊興國寺	｜	｜
一九五八	道珍		｜	天台	近江園城寺	｜	｜
一九五九	覺乘		｜	天台	近江園城寺	正安元、正、七	七九
一九五九	靜嚴		京師	眞言	山城隨心院	正安元、正、七	五七
一九五九	勝惠		｜	眞言	山城東寺	正安元、二、八	五三
一九五九	日常	常忍	因幡富城	日蓮	法華經寺	正安元、三、四	八四
一九五九	重如	日蓮	大和	眞言	大和金剛王院	正安元、五、十八	七八
一九五九	深性		｜	眞言	山城六勝寺	正安元、六、七	二九
一九五九	日佛尼	妙了	甲斐中野	日蓮	甲斐身延山	正安元、八、廿二	｜
一九五九	寂圓		宋	曹洞	越前寶慶寺	正安元、九、十三	｜
一九五九	良助		｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一九五九	有信		｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九六〇	○如○信		｜	眞	山城本願寺	正安二、正、四	六二
一九六〇	慈實		京師	天台	近江延暦寺	正安二、五、九	六三
一九六〇	○義○尹	寒巖	｜	曹洞	肥後大慈寺	正安二、八、廿一	八四
一九六〇	守瑜		｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九六一	日妙尼	妙常	駿河富士郡	日蓮	駿河常林寺	正安三、二、廿九	｜
一九六一	○日○靜	學乘	佐渡雜田	日蓮	佐渡妙照寺	正安三、六、廿二	｜
一九六一	○慧○雲	山叟	武藏飯澤	臨濟	山城東福寺	正安三、七、九	七五
一九六一	空性	痴鈍	｜	臨濟	山城建仁寺	正安三、七、廿八	｜
一九六一	俊譽	竹内法印	｜	眞言	山城醍醐山	正安三、十一、廿六	｜
一九六一	○道然	葦航	信濃	臨濟	相模建長寺	正安三、十二、六	八三
一九六一	紹山	斯道	肥後	曹洞	肥後大慈寺	正安三、｜、｜	｜
一九六二	日傳	肥前阿闍梨	｜	日蓮	甲斐妙法寺	乾元元、三、十二	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九六二	長遍	—	眞言	山城東寺	乾元元、七、九	八〇
一九六二	道潤	—	天台	近江延曆寺	—	—
一九六三	行○昭	京師	天台	近江園城寺	嘉元元、正、五	七三
一九六三	忍○性（良觀）	大和磯城島	戒律	相模極樂寺	嘉元元、七、十二	八七
一九六三	幸尊	—	天台	近江園城寺	嘉元元、九、廿一	七九
一九六三	道耀	—	眞言	山城東寺	嘉元元、十二、—	—
一九六三	教辨（如蓮）	—	戒律	大和川原寺	嘉元元、—、—	八〇餘
一九六三	實助	—	眞言	山城東寺	—	—
一九六三	實苆	—	眞言	山城東寺	—	—
一九六三	瓊林	—	臨濟	山城勝林寺	—	—
一九六三	了遍	京師	眞言	山城[illegible]寺	—	—
一九六三	道昭	京師	天台	近江園城寺	—	—
一九六三	辨惠（良明）	京師	眞言	山城栂尾寺	—	—
一九六三	良○慶	—	天台	近江園城寺	—	—
一九六四	賴○瑜（俊音）	紀伊那賀	眞言	紀伊大傳法院	嘉元二、正、一	七九
一九六四	眞○性（勝順）	—	戒律	大和招提寺	嘉元二、二、一	六九
一九六四	道○教（顯意）	薩摩島津	淨土	山城眞宗院	嘉元二、五、十九	六七
一九六四	道玄	—	天台	近江延曆寺	嘉元二、七、十九	—
一九六四	性仁	—	眞言	山城法勝寺	嘉元二、八、十	三八
一九六四	順繼（圓勝）	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九六五	覺雲	—	天台	近江延曆寺	—	—
一九六六	尋算（勤性）	—	戒律	大和招提寺	德治元、三、十五	七九
一九六六	日○胤	下野	日蓮	下野妙光寺	德治元、四、六	—
一九六六	靜○照（無象）	相模鎌倉	臨濟	相模淨智寺	德治元、五、十五	七三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九六六	覺○圓（鏡堂）	宋蜀地	臨濟	山城建仁寺	德治元、九、廿六	六三
一九六六	子○曇（石礀）	宋台州	臨濟	相模建長寺	德治元、十、廿八	五八
一九六七	教助	—	眞言	山城東寺	德治二、二、二	—
一九六七	澄○禪（中觀）	山城小栗栖	戒律	山城桂宮院	德治二、二、二	八一
一九六七	信○圓	紀伊神宮	眞言	紀伊高野山	德治二、二、廿四	—
一九六七	覺○慧	—	眞	山城本願寺	德治二、四、十三	六九
一九六七	叡○澄（正覺）	京師	淨土	山城二尊院	德治二、六、十七	—
一九六七	圓○範（無隱）	紀伊	臨濟	相模建長寺	德治二、十一、十三	—
一九六七	智越（雲山）	—	臨濟	相模圓覺寺	—	—
一九六七	實宣	—	天台	近江園城寺	—	—
一九六八	尋慶（理覺）	—	淨土	山城二尊院	延慶元、正、二	—
一九六八	日○榮（基蓮）	京師	日蓮	山城本國寺	延慶元、四、十八	—
一九六八	順空（藏山）	—	臨濟	山城東福寺	延慶元、五、九	七六
一九六八	觀○兼	—	天台	近江園城寺	延慶元、五、廿九	七〇
一九六八	琛○海（月船）	播磨賀古	臨濟	山城東福寺	延慶元、六、廿六	七八
一九六八	憲○淳	近江粟田口	眞言	山城報恩院	延慶元、八、廿三	五一
一九六八	嚴家	—	眞言	山城醍醐山	延慶元、十一、三	—
一九六八	紹○明（南浦）	駿河安部	臨濟	相模建長寺	延慶元、十二、廿九	七四
一九六八	道空（谷翁）	尾張	臨濟	山城東福寺	—	—
一九六八	宗心（即庵）	—	臨濟	筑前崇福寺	—	—
一九六八	妙空（空室）	高麗	臨濟	高麗水精寺	—	—
一九六八	仁康	—	天台	山城祇陀林寺	—	—
一九六九	道海（參田）	播磨	臨濟	山城淨智寺	延慶二、正、八	—
一九六九	道俊	京師	眞言	山城東寺	延慶二、二、八	八一

一九六九	義价	徹通	越前足羽	曹洞	越前永平寺	延慶二、八、廿四	九一
一九六九	定任		京師	眞言	山城東寺	延慶二、八、廿七	—
一九六九	房曉		—	天台	近江園城寺	延慶二、十、二	六九
一九六九	英心	如空	—	戒律	大和西大寺	—	—
一九七〇	曉幸		—	天台	近江園城寺	延慶三、五、十七	三七
一九七〇	日乘	顯妙院	—	日蓮	甲斐立正寺	延慶三、十二、十九	—
一九七〇	惠助		—	天台	近江園城寺	—	—
一九七〇	良桂		—	日蓮	山城寶塔寺	—	—
一九七一	日忍		—	日蓮	相模長福寺	慶長元、四、十	—
一九七一	眞廣		—	日蓮	山城法華寺	應長元、五、二	—
一九七一	日辨	越後阿闍梨	駿河富士郡	日蓮	下總妙興寺	應長元、六、廿六	—
一九七一	玄海		—	淨土	肥前大音寺	應長元、八、八	—
一九七一	修廣	道御	大和服部	眞言	山城法金剛院	應長元、九、廿九	八九
一九七一	成然		—	眞	下總妙安寺	—	—
一九七一	了海		—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九七二	聖然	道明	—	三論	大和新禪院	正和元、八、十五	—
一九七二	一圓	道鏡	相模鎌倉	臨濟	尾張長母寺	正和元、十、十	八七
一九七二	大慧	痴兀	伊勢	臨濟	山城東福寺	正和元、十一、二	八四
一九七二	俊算		—	天台	近江園城寺	正和元、十二、九	八一
一九七二	慈觀	良嚴	—	淨土	下總正定寺	—	—
一九七二	道壬	虎溪	—	臨濟	山城大德寺	—	—
一九七二	如春	少林	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
一九七二	觀高		—	眞言	山城東寺	—	—
一九七二	定泉	堯戒	—	戒律	大和西大寺	—	—
一九七二	賴審		—	眞言	紀伊高野山	—	—
一九七三	祖圓	規菴	信濃水內	臨濟	山城南禪寺	正和二、四、二	五三
一九七三	日明	智道	京師	日蓮	山城本滿寺	正和二、五、廿七	—
一九七三	公什		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九七三	覺如		—	眞言	紀伊高野山	—	—
一九七四	日高	帥の阿闍梨	—	日蓮	下總法華經寺	正和三、四、廿六	五八
一九七四	聖雲		—	眞言	山城醍醐山	正和三、五、五	四一
一九七四	日向	佐渡阿闍梨	京師	日蓮	甲斐身延山	正和三、九、三	六二
一九七四	義演		—	曹洞	越前永平寺	正和三、十、廿六	—
一九七四	隆勝		—	眞言	山城醍醐山	正和三、十一、廿六	五一
一九七四	良圓		—	天台	近江園城寺	—	—
一九七四	日慶尼		—	日蓮	江戶日慶寺	—	—
一九七四	完聰		—	眞言	山城醍醐山	—	—
一九七五	日家	寂日房	上總夷隅	日蓮	安房誕生寺	正和四、七、十	五八
一九七五	日源	智海	—	日蓮	駿河實相寺	正和四、九、十三	—
一九七五	成慧		—	眞言	山城東寺	正和四、十二、廿三	七三
一九七五	光譽		—	眞言	山城東寺	—	—
一九七五	禪秀		—	眞言	山城東寺	—	—
一九七六	信空	慈道	大和	戒律	大和西大寺	正和五、正、廿六	八六
一九七六	尊觀	良辨	—	淨土	相模善導寺	正和五、三、十四	—
一九七六	誓海	願念	—	眞	山城佛光寺	正和五、五、廿六	五二
一九七六	上昭	寂菴	—	臨濟	相模壽福寺	正和五、六、十六	八八
一九七六	房海		攝津難波	天台	近江園城寺	正和五、八、三	—
一九七六	顯日	高峯	京師	臨濟	下野雲巖寺	正和五、十、廿	七六
一九七六	仁澄		京師	天台	近江延曆寺	—	—
一九七六	定範		和泉橫山	眞言	紀伊高野山	—	—

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九七六	聖慶（良寂）	｜	淨土	奥州成德寺	｜	｜
一九七六	妙喆（同大）	奥州	臨濟	相模淨妙寺	｜	｜
一九七七	唯善（弘雅）	｜	眞	下總常敬寺	文保元、二、二	六五
一九七七	日證（寂仙房）	｜	日蓮	駿河常林寺	文保元、三、八	｜
一九七七	○日頂（伊豫阿闍梨）	｜	日蓮	相模弘法寺	文保元、三、八	六六
一九七七	○一寧（一山）	宋台州	臨濟	山城南禪寺	文保元、九、廿四	七一
一九七七	友丘（東林）	｜	臨濟	相模建長寺	｜	｜
一九七七	公曉	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一九七七	良縁（無着）	｜	臨濟	山城西禪寺	｜	｜
一九七七	良睦（仲和）	｜	臨濟	相模建長寺	｜	｜
一九七八	日位	｜	日蓮	駿河本覺寺	文保二、四、廿五	｜
一九七八	○弘○會（東里）	宋明州	臨濟	相模建長寺	文保二、八、廿八	｜
一九七八	賢助	｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九七八	慈勝	｜	天台	近江延暦寺	｜	｜
一九七九	○眞○敎（心阿）	京師	時	｜	元應元、正、廿七	八三
一九七九	○淨雅	京師	天台	近江園城寺	元應元、四、七	六二
一九七九	○實○海	｜	眞言	山城東寺	元應元、五、七	｜
一九七九	○託○阿	上總	時	山城金光寺	元應元、八、十	七〇
一九七九	公紹	京師	眞言	山城東寺	元應元、八、十	｜
一九七九	慈遍	京師	天台	近江比叡山	｜	｜
一九七九	內阿	｜	時	相模無量壽寺	｜	｜
一七八〇	○日○朗	下總猿島	日蓮	武藏本門寺	元應二、正、廿一	七六
一七八〇	日範（大善阿闍梨）	｜	日蓮	丹波常照寺	元應二、三、十五	｜
一七八〇	○德儉（約翁）	相模鎌倉	臨濟	山城南禪寺	元應二、五、十九	七六

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一七八〇	○中○聖（智傳）	加賀堅田	時	相模當麻	元應二、七、｜	｜
一九八〇	順助	｜	天台	近江園城寺	元應二、十、十四	四四
一九八〇	○日妙尼（妙恩）	下總平賀	日蓮	遠江妙恩寺	｜	｜
一九八〇	○妙○準（太平）	｜	臨濟	相模淨智寺	｜	｜
一九八〇	敎寬	｜	華嚴	大和東大寺	｜	｜
一九八一	如空	京師	淨土	相模光明寺	元亨元、三、六	｜
一九八一	○慈輪（雲屋）	京師	臨濟	相模圓覺寺	元亨元、五、十	七四
一九八一	○凝○然（示觀）	伊豫高橋	華嚴	大和戒壇院	元亨元、九、五	八二
一九八一	○世○源（太古）	常陸	臨濟	相模建長寺	元亨元、九、廿五	八九
一九八一	道順	｜	眞言	山城醍醐山	元亨元、十二、廿八	｜
一九八一	祖忍尼（默譜）	能登	曹洞	能登圓通院	｜	八〇餘
一九八一	弘舜	｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九八一	景印（鐵牛）	｜	臨濟	伊豫觀念寺	｜	｜
一九八一	道祐	｜	眞言	山城醍醐山	｜	｜
一九八一	○英昌（桂巖）	｜	曹洞	加賀大乘寺	｜	｜
一九八二	○親○玄	京師	眞言	山城醍醐山	元亨二、二、十七	七四
一九八二	○智○侃（直翁）	上野	臨濟	豐後萬壽寺	元亨二、四、十二	七八
一九八二	○信忠	京師	眞言	山城東寺	元亨二、十、十九	｜
一九八二	○信○堅	｜	眞言	紀伊高野山	元亨二、十二、十六	｜
一九八二	道淳	紀伊神宮	眞言	紀伊高野山	｜	｜
一九八二	聖忠	｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九八二	實弘	｜	眞言	山城東寺	｜	｜
一九八二	○照○遠	｜	戒律	大和招提寺	｜	｜
一九八三	日昭（大成）	下總葛飾	日蓮	下總妙法華寺	元亨三、三、廿六	八八

一九八三	良○心○	持阿	武藏埼玉	淨土	下總正定寺	元亨三、六、五	—
一九八三	崇喜	見山	上野	臨濟	山城南禪寺	元亨三、六、八	—
一九八三	長乘		—	天台	近江園城寺	元亨三、十一、五	八一
一九八三	澄助		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九八三	親源		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九八三	旨明	石菴	—	臨濟	山城西禪寺	—	—
一九八三	聖尋		京師	眞言	山城東寺	—	—
一九八三	源照	珍山	加賀	曹洞	越中信光寺	—	—
一九八四	鏡圓○	通翁	—	臨濟	山城南禪寺	正中元、正、廿七	六八
一九八四	朗○慶○		越中	日蓮	越中法蓮寺	正中元、三、廿八	—
一九八四	能助		京師	眞言	山城東寺	正中元、五、二	四七
一九八四	慶運		—	歌僧	—	—	—
一九八五	禪爾	圓戒	京師	華嚴	和泉久米多寺	正中二、正、八	七三
一九八五	道隱	靈山	宋杭州	臨濟	相模建長寺	正中二、三、二	七一
一九八五	宣瑜	淨覺	—	戒律	大和西大寺	正中二、三、廿九	六六
一九八五	性守		—	天台	近江延曆寺	正中二、五、廿一	—
一九八五	紹○瑾	瑩山	越前多禰	曹洞	能登總持寺	正中二、八、十五	五八
一九八五	覺○融○	行觀	武藏	淨土	山城禪林寺	正中二、九、五	八五
一九八五	顯譽		—	眞言	山城東寺	正中二、九、七	五一
一九八五	良衍		—	天台	近江園城寺	正中二、九、廿七	—
一九八五	日德		上野	日蓮	武藏妙顯寺	正中二、十二、十二	—
一九八五	虛焞	日鑑	—	曹洞	圓興寺	—	—
一九八五	純證	德標	能登	曹洞	能登自得寺	—	—
一九八五	祖環	無端	能登	曹洞	越前祥園寺	—	—
一九八五	宣覺		—	眞言	山城東寺	—	—
一九八五	承覺		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九八六	日澄	大乘阿闍梨	相模小田原	日蓮	尾張本遠寺	嘉曆元、八、一	八八
一九八六	智義	松嶺	—	臨濟	豐後萬壽寺	嘉曆元、十、十一	—
一九八六	桓守		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九八六	承鎭		—	天台	近江延曆寺	—	—
一九八七	呑海		相模俣野	時	相摸清淨光寺	嘉曆二、二、十八	六三
一九八七	日暹		—	日蓮	越中蓮乘寺	嘉曆二、三、一	—
一九八七	定曉		—	眞言	山城醍醐山	嘉曆二、十、廿三	—
一九八八	良○曉○	寂慧	石見	淨土	相模光明寺	嘉曆三、三、一	七四
一九八八	曉○月○		京師	淨土	—	嘉曆三、十一、八	六四
一九八八	日◎印◎		越後	日蓮	越後本成寺	嘉曆三、十二、廿	六五
一九八九	本無	了心	—	戒律	大和竹林寺	元德元、十、三	—
一九九〇	日行	松林院	—	日蓮	佐渡本光寺	元德二、二、五	六二
一九九〇	禪○助○		京師	眞言	山城東寺	元德二、二、十二	八四
一九九〇	定顯		—	天台	近江園城寺	元德二、二、十四	七五
一九九〇	處○謙	潜溪	武藏	臨濟	山城南禪寺	元德二、五、二	—
一九九〇	顯助		—	眞言	山城東寺	元德二、七、廿一	三七
一九九〇	靜泉		—	天台	近江園城寺	元德二、十一、廿一	—
一九九〇	賴豪	行心	—	眞言	紀伊高野山	—	—
一九九〇	慈嚴		京師	天台	近江延曆寺	—	—
一九九一	道生	鐵菴	出羽	臨濟	山城建仁寺	元弘元、正、六	七〇
一九九一	祖輝	獨照	京師	臨濟	山城建長寺	元弘元、三、廿四	—
一九九一	巧○安○	嶮崖	肥前	臨濟	相模建長寺	元弘元、七、廿三	八〇
一九九一	妙誠	默翁	肥前	臨濟	阿波妙幢寺	—	—
一九九一	圓知	惡頑	但馬	淨土	山城光明寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九九一	空圓	—	淨土	山城知恩寺	—	七三
一九九一	本性	—	法相	大和般若寺	—	—
一九九一	益守	—	眞言	山城東寺	—	—
一九九一	慧◎光	相模	時	相模藤澤寺	—	—
一九九二	日◎興	甲斐巨摩	日蓮	駿河大石寺	正慶元、二、七	八八
一九九二	觀昭	—	天台	近江園城寺	元弘二、二、十	七四
一九九二	本元 元翁	—	臨濟	山城南禪寺	正慶元、七、四	五一
一九九二	日了 中道院	甲斐相股	日蓮	甲斐妙了寺	正慶元、八、七	五五
一九九二	宗昊 天桂	駿河久能	臨濟	山城東福寺	正慶元、八、廿七	—
一九九二	日善	—	日蓮	常陸大法寺	元弘二、九、廿二	七〇
一九九二	日運	—	日蓮	美濃常在寺	—	—
一九九二	日覺	山城	日蓮	美濃常在寺	—	—
一九九三	行○順	—	天台	近江園城寺	元弘三、十、十	六九
一九九三	義○雲	京師	曹洞	越前永平寺	正慶二、十、十二	八一
一九九三	澄順	—	天台	近江園城寺	—	—
一九九三	尊澄	—	天台	近江延曆寺	—	—
一九九四	日秀 丹波阿闍梨	上野栗田	日蓮	上野妙福寺	建武元、正、十	七〇
一九九四	宗○卓 絕崖	—	臨濟	山城南禪寺	建武元、六、廿七	—
一九九四	顯○智	—	眞	伊勢專修寺	建武元、七、四	八五
一九九四	日念 松本房	—	日蓮	越後妙國寺	建武元、八、廿七	—
一九九四	德○璇 玉山	信濃	臨濟	相模建長寺	建武元、十、十八	八〇
一九九四	日○隆 長榮	—	日蓮	山城鏡忍寺	建武元、十一、一	七〇
一九九四	日進 三位	—	日蓮	駿河正法寺	建武元、十二、八	七六
一九九四	仁○恭 石梁	元台州	臨濟	山城建仁寺	建武元、十二、十八	六九

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一九九四	了義 海岸	阿波	臨濟	攝津妙觀寺	—	—
一九九四	印玄 文妙	—	眞言	山城仁和寺	—	—
一九九四	幸俊	—	佛工	—	—	—
一九九四	院○信	—	佛工	—	—	—
一九九四	周○佐 德叟	常陸	臨濟	常陸天龍寺	—	—
一九九四	道欽 承先	—	臨濟	相模圓覺寺	—	七四
一九九五	舜○昌	近江志賀	淨土	山城知恩院	建武二、正、廿五	八〇餘
一九九五	慧○廣 天岸	武藏比企	臨濟	相模淨妙寺	建武二、三、八	六三
一九九五	士○雲 南山	遠江	臨濟	山城東福寺	建武二、十、七	八二
一九九五	日○禪 素頓	若狹	日蓮	若狹妙興寺	建武二、十、廿四	七〇
一九九五	宗○源 雙峰	筑前	臨濟	山城南禪寺	建武二、十一、廿二	七三
一九九五	元○義 虎溪	山城	臨濟	相模報國寺	—	—
一九九五	至遼 東洲	筑後	曹洞	肥後大慈寺	—	—
一九九五	湛睿 本如	—	華嚴	相模稱名寺	—	—
一九九五	道意	京師	眞言	山城東寺	—	—
一九九五	院乘	—	佛工	—	—	—
一九九六	空○性 了源	—	眞	山城佛光寺	延元元、正、八	四二
一九九六	士○安 鐵山	肥後	曹洞	肥後大慈寺	延元元、三、十三	九一
一九九六	是心	—	天台	近江園城寺	延元元、六、二	七一
一九九六	良○殿 定俊	—	眞言	紀伊大傳法院	延元元、九、五	七三
一九九六	楚○俊 明極	元明州	臨濟	山城南禪寺	延元元、九、廿七	七五
一九九六	妙◎超 宗峰	播磨揖西	臨濟	山城大德寺	延元元、十二、廿二	五六
一九九六	源○盛 信濃房	—	天台	伯耆大山寺	延元元、—、—	—
一九九六	奧志 不昧	—	臨濟	山城眞如寺	—	—

一九九六	得芳	卿堂	—	臨濟	相模淨妙寺	—	—
一九九六	永蘭	春谷	—	臨濟	相模淨智寺	—	—
一九九六	得折	愚溪	—	臨濟	相模建長寺	—	—
一九九六	印俊	鉢日	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九九六	玄雲	日成	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九九六	融秀	艮順	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九九六	政憲	信聖	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九九六	宗雲	白翁	出雲	臨濟	近江積翠寺	—	—
一九九六	融[illegible]	啉識	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
一九九七	○日成	出羽阿闍梨	—	日蓮	信濃妙法寺	延元三、四、十六	—
一九九七	天目		伊豆波多	日蓮	下野妙顯寺	延元三、四、廿六	—
一九九七	信助		京師	眞言	山城東寺	延元三、七、十九	四一
一九九八	日賢	淡路阿闍梨	駿河安東	日蓮	武藏海上寺	曆應元、三、十七	九六
一九九八	乘伊		—	天台	近江園城寺	曆應元、十一、十五	六五
一九九八	宗信		—	眞言	大和吉野山	—	—
一九九九	實融	證道	—	眞言	紀伊高野山	曆應二、正、十九	九〇
一九九九	道通	大川	—	臨濟	相摸圓覺寺	曆應二、六、一	—
一九九九	良眞	無相	—	臨濟	山城東山	曆應二、三、十	—
一九九九	○常賢	愚谷	—	曹洞	肥後鷲林寺	曆應二、十一、三	—
一九九九	○尊意		京師	天台	近江延曆寺	—	—
一九九九	○智訥	古劔	—	臨濟	和泉大雄寺	—	—
一九九九	○正澄	清拙	元福州	臨濟	山城南禪寺	曆應二、正、十七	六六
二〇〇〇	○日保		上總興津	日蓮	安房妙覺寺	曆應三、四、十二	八三
二〇〇〇	○慧日	東明	宋明州	臨濟	相模外長寺	曆應三、十、四	六九
二〇〇〇	正巖	獨峯	—	臨濟	豐後法界花	—	—
二〇〇〇	○永錤		元	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇〇〇	清瑜	溫中	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇〇〇	性忠	義空	—	臨濟	駿河清見寺	—	—
二〇〇〇	長盛	眞憲	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二〇〇〇	良耀		京師	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇〇	理有	大有	奧州	臨濟	山城大智寺	—	—
二〇〇〇	曙藏主		—	臨濟	相模建長寺	—	—
二〇〇〇	賢俊		—	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇〇	聖融	空識	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二〇〇〇	○成助		—	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇一	○日法	和泉阿闍梨	—	日蓮	甲斐立正寺	曆應四、正、五	九〇
二〇〇一	○尊衍		—	天台	近江園城寺	曆應四、正、十四	六七
二〇〇一	日傳	大圓阿闍梨	越後	日蓮	越後本土寺	曆應四、三、六	九五
二〇〇一	慈道		—	天台	近江延曆寺	曆應四、四、十一	—
二〇〇一	眞觀	淨阿彌陀佛	上總	淨土	山城金蓮寺	曆應四、六、二	七三
二〇〇一	○亮禪		—	眞言	山城東寺	曆應四、七、廿六	八四
二〇〇一	○運良	恭翁	出羽	臨濟	加賀傳燈寺	曆應四、八、十二	七五
二〇〇一	至簡	壺菴	加賀	曹洞	越中紹光寺	曆應四、九、十六	—
二〇〇一	○運奇	絕巖	—	曹洞	越中長慶寺	—	—
二〇〇二	日像		下總葛飾	日蓮	山城妙顯寺	康永元、十一、十三	七四
二〇〇二	實典		—	日蓮	山城靈光寺	—	—
二〇〇二	實眼		—	日蓮	山城妙泉寺	—、—、七、十六	—
二〇〇三	實慧		—	眞言	山城東寺	興國四、二、廿二	四二
二〇〇三	日滿		—	日蓮	能登妙宣寺	康永二、八、十五	八九
二〇〇三	日心	久成院	—	日蓮	加賀長遠寺	康永二、九、廿一	八八

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇〇三	圓○慧 可菴	尾張海東	臨濟	上總願成寺	康永二、十一、六	七五
二〇〇三	專○空	—	眞	伊勢專修寺	康永二、十二、十八	一三三
二〇〇三	慈照 高山	京都白川	臨濟	山城建仁寺	康永二、十二、廿五	七六
二〇〇三	經嚴	—	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇三	眞俊	—	天台	肥後飯田山	—	—
二〇〇四	覺圓	—	日蓮	越前妙顯寺	康永三、正、三	—
二〇〇四	祖雄 遠溪	丹波佐治	臨濟	丹波高源寺	康永三、六、廿七	五九
二〇〇四	妙珍	—	日蓮	加賀寶[illegible]寺	康永三、八、一	—
二〇〇四	竺源 東海	紀伊	臨濟	山城建仁寺	康永三、十、十六	七五
二〇〇四	玄鑑 洞巖	—	曹洞	近江龍泉寺	—	—
二〇〇四	妙○胤 別傳	元	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇〇五	宗○然 可翁	筑前	臨濟	山城南禪寺	貞和元、四、廿五	—
二〇〇五	隴暎 月菴	—	曹洞	能登永禪寺	貞和元、五、二	—
二〇〇五	證賢 向阿	甲斐甲府	淨土	山城清淨華院	貞和元、六、二	八三
二〇〇五	妙意 慈雲	信濃	臨濟	越後五智山	貞和元、六、三	七三
二〇〇五	祥啓 雪溪	下野宇都宮	臨濟	相模建長寺	貞和元、—	—
二〇〇五	榮海	—	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇六	玄素 大朴	—	臨濟	豐前崇祥寺	貞和二、正、廿八	五九
二〇〇六	居○中 嵩山	遠江吉最	臨濟	山城南禪寺	貞和二、二、六	六九
二〇〇六	師○錬 虎關	京師	臨濟	山城南禪寺	貞和二、七、廿四	六九
二〇〇六	寬○性	—	眞言	山城仁和寺	貞和二、九、卅	五八
二〇〇六	慧○崇 白雲	下野	臨濟	相模建長寺	貞和二、十、卅	八四
二〇〇六	友○梅 雪村	越後白鳥	臨濟	山城建仁寺	貞和二、十二、二	五七
二〇〇六	日善	—	日蓮	甲斐身延山	貞和二、十二、廿二	七六

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇〇六	日上	甲斐今諏訪	日蓮	甲斐身延山	—	—
二〇〇六	海翁	—	臨濟	山城東福寺	—	—
二〇〇六	堅梁 大材	—	臨濟	相模壽福寺	—	—
二〇〇六	志○一	—	—	相模鎌倉	—	—
二〇〇六	妙○快 古劍	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇〇六	中恕	筑紫	臨濟	山城天龍寺	—	—
二〇〇六	良○譽	山城	眞言	山城東寺	—	—
二〇〇七	玄○海	和泉	眞言	紀伊高野山	貞和三、三、十七	—
二〇〇七	慧湛 大川	山城	臨濟	相模壽福寺	貞和三、五、廿五	—
二〇〇七	齊○哲 明叟	—	臨濟	山城眞如寺	貞和三、七、三	—
二〇〇七	源○鸞 道猷	—	眞	山城佛光寺	貞和三、八、廿三	七九
二〇〇七	示導 康空	—	淨土	山城三鈷寺	貞和三、九、十一	—
二〇〇七	康俊	—	佛工	—	—	—
二〇〇七	快成	—	眞言	紀伊高野山	—	—
二〇〇八	宗暹	—	天台	近江園城寺	貞和四、四、十四	九五
二〇〇八	梵○僊 竺仙	元明州	臨濟	山城南禪寺	貞和四、七、十六	五七
二〇〇九	良○尊 法明房	京師	融通念佛	攝津大念佛寺	貞和五、六、十三	七一
二〇〇九	圓○有 在菴	—	臨濟	攝津福海寺	貞和五、十一、廿一	八四
二〇一〇	澄○豪	京師	天台	近江比叡山	觀應元、正、廿七	九三
二〇一〇	兼○好	京師	歌僧	山城雙岡	觀應元、二、十五	六九
二〇一〇	素○哲 明峯	加賀	曹洞	加賀大乘寺	觀應元、三、廿九	七四
二〇一〇	玄○慧 健叟	京師	天台	近江比叡山	正平五、六、二	—
二〇一〇	是法	—	淨土	山城某寺	—	—
二〇一〇	義南	出雲	臨濟	山城大德寺	—	—

二〇一〇	僧生	節閑		曹洞	能登靜泰寺		
二〇一〇	隆舜			眞言	山城東寺		
二〇一〇	禪暉	天菴	能登	曹洞	加賀開禪寺		
二〇一〇	素溪	龍松		曹洞	加賀放生寺		
二〇一〇	明照尼		越前	曹洞	加賀寶德寺		
二〇一〇	統玄	玄路		曹洞	加賀永安寺		
二〇一一	°宗昭	覺如	京師	眞	山城本願寺	觀應二、正、廿九	八二
二〇一一	道皎	月林	山城	臨濟	山城長福寺	觀應二、二、廿五	五九
二〇一一	什辨			天台	近江園城寺	觀應二、四、廿三	九二
二〇一一	智洪	無涯	加賀	曹洞	加賀淨住寺	觀應二、五、九	
二〇一一	°疎石	夢窓	伊勢	臨濟	山城天龍寺	觀應二、九、廿九	七七
二〇一一	房玄			眞言	山城醍醐山	觀應二、十、十五	
二〇一一	妙應	眞空		臨濟	下野興禪寺	觀應二、十、廿五	
二〇一一	°可什	物外		臨濟	相模建長寺	觀應二、十二、八	
二〇一一	了光	寂室		曹洞	能登洞谷寺		
二〇一一	宗可	仲庭		曹洞	能登洞谷寺		
二〇一一	紹清	月菴		臨濟	山城長福寺		
二〇一一	靈文	虎溪		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	智光	絶照		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	法順	適菴		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	梵淳	朴中		臨濟	相模建長寺		
二〇一一	志徹			臨濟	近江廣濟寺		
二〇一一	°志雄	奇峯		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	妙珠			臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	彌忠	大進		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	妙滇	東山		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	法珏	堅山		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	°中本	中嵓		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	妙讓	南峯		臨濟	相模壽福寺		
二〇一一	性珍	藏海	山城	臨濟	相模建長寺		
二〇一一	端照			臨臨	山城天龍寺		
二〇一一	寂見	徹叟		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	周恬	先覺		臨濟	山城大福寺		
二〇一一	周察	鑑溪		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	周佐	德叟	常陸	臨濟	山城南禪寺		
二〇一一	仁輿	香山		臨濟	山城南禪寺		
二〇一一	杲藏主			臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	省鐵			臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	紹榮	枯木		臨濟	山城安國寺		
二〇一一	伯奇	務菴		臨濟	山城天龍寺		
二〇一一	妙可	悅堂		臨濟	山城建仁寺		
二〇一三	°養冲	大陽	筑前	臨濟	山城南禪寺	文和元、正、十一	七一
二〇一三	了愚	鈍翁		臨濟	山城東福寺	文和元、四、四	
二〇一三	宥範		讚岐櫛梨	眞言	讚岐善通寺	文和元、七、一	八三
二〇一三	°增基		京師	天台	近江園城寺	文和元、七、廿一	七一
二〇一三	本淨	業海		臨濟	甲斐棲雲寺	文和元、七、廿七	
二〇一三	實算	賢順		眞言	紀伊大傳法院	文和元、八、廿三	
二〇一三	法仁			眞言	山城法勝寺	文和元、十、廿五	二八
二〇一三	賢仙	集山		臨濟	肥前高山寺	文和元、十二、十二	八六
二〇一三	深有	覺然	下總	眞言	近江尾山寺	｜、｜、十二、四	八五

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇一三	隆舜	—	眞言	山城東寺	文和二、正、十四	七四
二〇一三	正琴（嫋柱）	—	臨濟	美濃正法寺	文和二、正、廿一	八八
二〇一三	源性	京師	眞言	山城仁和寺	文和二、正、廿九	二七
二〇一三	○明光○（了圓）	—	眞	山城佛光寺	文和二、五、十六	六八
二〇一三	日荷（妙法）	相模鎌倉	日蓮	武藏上行寺	文和二、六、十三	—
二〇一三	俊才（十達）	—	華嚴	大和戒壇院	文和二、十、二	九五
二〇一四	妙環（樞翁）	—	臨濟	相模建長寺	文和三、二、十六	八二
二〇一四	妙霖（雷峯）	—	臨濟	相模淨智寺	—	—
二〇一四	歸整（人綱）	—	臨濟	相模建長寺	—	—
二〇一四	聖珍	—	眞言	山城東寺	—	—
二〇一五	禪鑑（象外）	肥前	臨濟	相模建長寺	文和四、十一、十六	—
二〇一五	隨心（國阿）	播磨	淨土	山城雙林院	—	—
二〇一六	實賢	—	日蓮	山城眞經寺	延文元、二、廿九	—
二〇一六	圓觀（慧鎮）	近江坂本	天台	山城法勝寺	正平十一、三、一	—
二〇一六	士顏（卍菴）	京師	臨濟	山城東福寺	延文元、七、七	七四
二〇一六	尊圓	—	天台	近江延暦寺	延文元、九、十三	五九
二〇一六	自敬	—	臨濟	美濃正法寺	—	六〇餘
二〇一六	通玄（一峯）	—	臨濟	山城普門寺	—	—
二〇一六	○單況○（無比）	—	臨濟	攝津報國寺	—	—
二〇一七	圓智	—	淨土	山城知恩院	正平十二、三、廿七	—
二〇一七	法位（道雲）	—	淨土	山城龍護院	延文二、三、卅	—
二〇一七	祖一（峯翁）	—	臨濟	美濃大覺寺	延文二、三、—	八四
二〇一七	如導（見蓮）	伯耆	戒律	山城永園寺	延文二、五、廿	七四
二〇一七	隆雅	—	眞言	山城東寺	延文二、八、廿八	—
二〇一七	○文觀○	—	眞言	山城醍醐山	正平十二、—、—	—
二〇一七	宗珍（寶珍）	—	曹洞	加賀永祥寺	延文二、—、—	—
二〇一八	○賢季○	—	眞言	山城東寺	延文三、正、卅	—
二〇一八	法菊（芳庭）	—	臨濟	相模淨妙寺	延文三、三、二	—
二〇一八	○妙文○	—	日蓮	越前妙泰寺	延文三、三、三	八〇
二〇一八	○照玄○（覺行）	—	華嚴	大和戒壇院	延文三、六、五	五八
二〇一八	○宗已○（復菴）	常陸	臨濟	常陸清音寺	延文三、九、廿六	七九
二〇一八	○元晦○（無隱）	豐前	臨濟	山城南禪寺	延文三、十七	—
二〇一八	德見（龍山）	下總香取	臨濟	山城南禪寺	延文三、十一、十三	七五
二〇一八	○道猷○	—	天台	近江園城寺	延文三、十二、十五	八〇
二〇一八	蓮勝（永慶）	常陸	淨土	常陸法然寺	延文三、—、—	—
二〇一八	聖瑞（一臺）	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇一八	○以倫○（無等）	—	臨濟	攝津廣嚴寺	—	八〇
二〇一八	桓豪	—	天台	近江延暦寺	—	—
二〇一九	○仁浩○（無涯）	出羽	臨濟	山城建仁寺	延文四、正、五	六六
二〇一九	○志玄○（無極）	京師	臨濟	山城天龍寺	延文四、二、十六	七八
二〇一九	日輪（大經阿闍梨）	下總平賀	日蓮	武藏本門寺	延文四、四、四	八八
二〇一九	尊悟	—	天台	近江園城寺	延文四、七、卅	五八
二〇一九	唱名	—	淨土	武藏壘德寺	延文四、九、十五	—
二〇一九	顯重	武藏	天台	但馬大林寺	延文四、十二、十五	八七
二〇一九	覺雄	—	眞言	山城東寺	—	—
二〇一九	衍舜	—	天台	近江園城寺	—	八三
二〇一九	理覺	—	淨土	總州龍福寺	—	—
二〇一九	定憲	京都	眞言	山城東寺	—	—

年	名	號	生國	宗	寺	寂年月日	壽
二〇二〇	一○鞏	圓山	肥前佐賀	臨濟	山城東福寺	延文五、二、十二	七七
二〇二〇	親○慧○	五智法印	—	眞言	山城王智院	延文五、五、十四	六四
二〇二〇	明千	古鏡	—	臨濟	信濃萬壽寺	延文五、五、廿二	—
二〇二〇	慈○俊○	從覺	—	眞	山城本願寺	延文五、六、廿	六六
二〇二〇	長慶		—	天台	山城施無畏寺	延文五、七、—	—
二〇二〇	道宗	雙救	—	淨土	山城龍護院	延文五、八、廿九	—
二〇二〇	素○安○	了堂	筑前博多	臨濟	相模建長寺	延文五、十、二	六九
二〇二〇	士昭	溫翁	—	臨濟	山城東福寺	延文五、十一、四	—
二〇二〇	慧◎玄	關山	信濃	臨濟	山城妙心寺	延文五、十二、十二	八四
二〇二〇	源重		近江	天台	近江百濟寺	延文五、—	—
二〇二〇	祥○登○	大年	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇二〇	宗峨	雲山	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二〇二一	長助		—	天台	近江園城寺	康安元、二、八	四二
二〇二一	懷義	天菴	日向	曹洞	肥後日輪寺	康安元、三、—	—
二〇二一	覺○明○	孤峯	岩代會津	臨濟	出雲雲樹寺	康安元、五、廿四	九一
二〇二一	良詔		能登酒井	曹洞	陸奥正法寺	康安元、六、十四	四九
二〇二一	宗○規○	月堂	筑前太宰府	臨濟	筑前聖福寺	康安元、九、廿七	七七
二〇二一	朝幸		—	天台	近江園城寺	康安元、十、十六	七六
二〇二一	泉惠		—	天台	近江園城寺	康安元、十二、十	七七
二〇二一	士○曇○	乾峯	筑前博多	臨濟	山城南禪寺	康安元、十二、十一	七七
二〇二一	法穆	靈岳	備中隼島	臨濟	備中信藏寺	康安元、十二、十三	七三
二〇二一	覺譽		—	天台	近江園城寺	—	—
二〇二一	明麟	聖徒	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇二二	日祐	智祐	—	日蓮	相模妙法華寺	貞治元、正、十四	—
二〇二二	盛譽	川智	—	華嚴	大和戒壇院	貞治元、正、廿一	—
二〇二二	長甫	獄翁	伊勢中原	臨濟	日向大光寺	貞治元、八、二	—
二〇二二	清算	彥證	—	—	大和白毫寺	貞治元、十二、十四	七五
二〇二二	杲○寶○		—	眞言	山城東寺	貞治元、—	五七
二〇二三	禪英	靈仲	—	臨濟	近江曹源寺	—	—
二〇二三	至孝	無德	越前平葺	臨濟	山城安國寺	貞治二、正、十一	八〇
二〇二三	旨淵	松岸	加賀	曹洞	能登光恩寺	貞治二、六、五	—
二〇二三	思淳	林艾	—	戒律	山城泉涌寺	貞治二、八、十六	八六
二〇二三	弘○智○		下總香取	眞言	越後養智院	貞治二、十、二	—
二〇二三	法延	大年	伊豫	臨濟	若狹高成寺	貞治二、十、二	—
二〇二三	智鑑	照菴	—	曹洞	能登長松寺	—	—
二〇二三	果杲		—	眞言	山城東寺	—	—
二〇二四	房仙		但馬	天台	近江園城寺	貞治三、正、廿四	七六
二〇二四	妙實	大覺	—	日蓮	山城妙顯寺	貞治三、四、三	六八
二〇二四	經深	兵部卿	—	眞言	山城醍醐山	貞治三、八、十四	七四
二〇二四	慈○均○	平田	相模鎌倉	臨濟	山城南禪寺	貞治三、九、十六	—
二〇二四	圓○旨○	別源	越前	臨濟	山城建仁寺	貞治三、十、十	七一
二〇二四	淨煕	仁叟	肥後	曹洞	肥後法泉寺	正平十九、十、十八	—
二〇二四	邵○元○	古源	越前	臨濟	山城南禪寺	貞治三、十一、十一	七〇
二〇二四	道○祐		—	眞	和泉眞宗寺	—	—
二〇二四	道本	同原	—	臨濟	信濃保福寺	—	—
二〇二四	德瓊	林叟	—	臨濟	相模壽福寺	—	—
二〇二四	德紹	無絃	—	臨濟	相模淨智寺	—	—
二〇二四	玄慧	能翁	—	曹洞	甲斐法泉寺	—	—
二〇二四	了運	泰菴	—	曹洞	武藏吉祥寺	—	—
二〇二五	得藏	教外	—	臨濟	上野長樂寺	貞治四、正、三	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇二五	紹碩○（峨山）	能登瓜田	曹洞	能登總持寺	貞治四、十、廿	九一
二〇二五	冷淬○（龍泉）	尾張海東	臨濟	山城萬壽寺	貞治四、十二、十一	｜
二〇二五	慧崇（無等）	｜	曹洞	能登洞谷寺	｜	｜
二〇二五	性秀（青山）	能登	曹洞	能登曹泉寺	｜	｜
二〇二五	如元（大山）	筑紫	曹洞	加賀聖興寺	｜	｜
二〇二五	超西（竺源）	｜	曹洞	越前梅香院	｜	｜
二〇二五	智至（愚溪）	｜	臨濟	山城萬壽寺	｜	｜
二〇二五	部動（大方）	｜	曹洞	｜	｜	｜
二〇二五	了源（竺堂）	山城	曹洞	能登總持寺	｜	｜
二〇二六	至遠（孤山）	紀伊	臨濟	山城建仁寺	貞治五、七、九	八九
二〇二六	智明（蒙山）	攝津玉造	臨濟	山城南禪寺	貞治五、八、廿	七五
二〇二六	日辜（鏡圓）	信濃	日蓮	甲斐身延山	貞治五、十二、七	四六
二〇二六	大智○（祖繼）	肥後宇土	曹洞	加賀祇陀寺	正平廿一、十二、十	七七
二〇二七	義天（無雲）	山城	臨濟	山城南禪寺	貞治六、五、廿七	七八
二〇二七	元光◎（寂室）	美作	臨濟	近江永源寺	貞治六、九、一	七六
二〇二七	清顯	｜	天台	近江園城寺	貞治六、十二、十三	八四
二〇二七	痴鈍	｜	臨濟	周防保壽寺	｜	｜
二〇二八	一清（無夢）	｜	臨濟	山城東福寺	應安元、五、廿四	｜
二〇二八	元恢（大力）	肥後	臨濟	筑前正觀寺	應安元、六、九	｜
二〇二八	慈妙	常陸神田	天台	尾張密藏院	應安元、八、八	七六
二〇二八	正𣏾（圓成）	｜	華嚴	相模極樂寺	應安元、八、廿一	｜
二〇二八	法忻○（大喜）	三河	臨濟	相模建長寺	應安元、九、廿	｜
二〇二八	良瑜	京師	天台	近江園城寺	｜	｜
二〇二八	良如（智水）	越前國府	淨土	越前西福寺	｜	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇二八	大闡（大法）	武藏	臨濟	相模淨智寺	｜	七九
二〇二八	元志（嶷中）	肥後合志	臨濟	肥後成道寺	｜	八三
二〇二八	快深（定俊）	｜	眞言	紀伊大傳法院	｜	｜
二〇二八	妙積（大岳）	｜	臨濟	相模圓覺寺	｜	｜
二〇二八	法方（中圓）	｜	臨濟	相模建長寺	｜	｜
二〇二八	道種（光圓）	｜	戒律	大和極樂院	｜	｜
二〇二九	正因（明巖）	相模	臨濟	相模建長寺	應安二、四、八	｜
二〇二九	義亨◎（徹翁）	出雲	臨濟	山城大德寺	應安二、五、十五	七五
二〇二九	日祐（淨行院）	下總佐倉	日蓮	下總法華經寺	應安二、五、十五	八〇
二〇二九	定專	｜	眞	伊勢專修寺	應安二、七、十一	五三
二〇二九	契聞○（不聞）	武藏河越	臨濟	相模圓覺寺	應安二、七、十二	六八
二〇二九	妙謙○（無礙）	武藏	臨濟	伊豆國清寺	應安二、七、十三	｜
二〇二九	日貞	下總	日蓮	下總法宣院	應安二、九、十三	｜
二〇二九	慈永（青山）	紀伊玉津	臨濟	相模建長寺	應安二、十、九	六八
二〇二九	泉尊	｜	天台	近江園城寺	應安二、十二、廿五	八二
二〇二九	處齊○（平心）	肥前小味莊	臨濟	三河定光寺	應安二、十二、廿九	七六
二〇二九	元圭○（方涯）	｜	臨濟	相模建長寺	｜	｜
二〇二九	日明（學優）	｜	日蓮	佐渡妙照寺	｜	｜
二〇二九	日經	｜	日蓮	下總淨光院	｜	｜
二〇二九	宗嘉○（大象）	｜	臨濟	山城大德寺	｜	｜
二〇二九	妙周○（岐岳）	｜	臨濟	山城大德寺	｜	｜
二〇二九	宗碩○（德翁）	美濃弓削	臨濟	山城大德寺	｜	｜
二〇二九	宗梵○（乾用）	｜	臨濟	山城大德寺	｜	｜
二〇三〇	一以（大道）	出雲島根	臨濟	山城南禪寺	應安三、二、廿六	七九

二〇三〇	思○	偲○	友山	山城	臨濟	山城東福寺	應安三、六、一	七〇
二〇三〇	聖	尊		｜	眞言	山城醍醐山	應安三、九、廿七	六七
二〇三〇	宗○	眞○	大源	加賀	曹洞	加賀佛陀寺	應安三、十一、廿	｜
二〇三〇	圓○	見○	月蓬	相模	臨濟	山城建仁寺	應安三、十二、二	七六
二〇三〇	定○	慧○	眞聲	相模小田原	淨土	相模光明寺	應安一、十二、廿六	七五
二〇三〇	文	珪	延用	｜	臨濟	山城轉法輪藏寺	｜	｜
二〇三〇	融	林	玉翁	薩摩	曹洞	肥前圓通寺	｜	｜
二〇三〇	融	中	的林	肥後	曹洞	肥前圓通寺	｜	｜
二〇三一	聽	秀	實翁	｜	臨濟	相模建長寺	應安四、三、廿七	｜
二〇三一	照	慧	淨心	｜	戒律	大和戒壇院	應安四、十一、二	｜
二〇三二	延	信		｜	天台	近江園城寺	應安五、四、三	八一
二〇三二	良	聽	聞溪	信濃	臨濟	山城建仁寺	應安五、七、五	｜
二〇三二	澄○	圓○		宋	淨土	和泉阿彌陀寺	應安五、七、十七	｜
二〇三二	智○	演○	遊學	和泉大島	淨土	相模光明寺	應安五、七、廿五	九〇
二〇三二	豪	鎮	寶菩提院	京都	天台	近江比叡山	應安五、九、廿	｜
二〇三二	善○	育○	大林	相模	臨濟	山城南禪寺	應安五、十二、三	｜
二〇三二	善	益		｜	臨濟	山城南禪寺	｜	｜
二〇三三	光○	玄○	存覺	京都	眞	山城常樂臺	應安六、二、廿八	八四
二〇三三	周	諭	默菴	武藏	臨濟	山城等持寺	應安六、六、十七	五六
二〇三三	日	院	實教	甲斐	日蓮	甲斐身延山	應安六、六、廿五	六二
二〇三三	光	林	放牛	｜	臨濟	山城南禪寺	應安六、八、九	｜
二〇三三	梵	奕	大觀	｜	臨濟	山城南禪寺	｜	｜
二〇三四	周	皎	碧潭	｜	臨濟	山城地藏院	應安七、正、五	八四
二〇三四	印○	元	古先	薩摩	臨濟	相模建長寺	應安七、正、廿四	八〇
二〇三四	士○	啓○	東傳	筑前	臨濟	山城東福寺	應安七、四、十一	｜
二〇三四	誓	阿		｜	淨土	山城知恩院	文中三、七、十九	｜
二〇三四	心	凉	檀溪	因幡	臨濟	伊勢正法寺	應安七、八、八	｜
二〇三四	祖○	應○	夢巖	出雲	臨濟	山城東福寺	應安七、十一、二	｜
二〇三四	祖	禪	定山	相模	臨濟	山城南禪寺	應安七、十一、廿六	七七
二〇二四	信	弘		｜	眞言	紀伊高野山	應安七、｜	｜
二〇三四	元	壽	太虛	｜	臨濟	攝津福嚴寺	｜	｜
二〇三四	自	休		｜	臨濟	備後廣德菴	｜	｜
二〇三四	等	海	東曙	｜	臨濟	相模建長寺	｜	｜
二〇三五	圓○	月○	中巖	相模鎌倉	曹洞	上總吉祥寺	永和元、正、八	七六
二〇三五	誠	蓮		｜	戒律	山城安樂院	永和元、五、廿五	｜
二〇三五	眞○	慶○		｜	眞言	攝津天王寺	｜	｜
二〇三五	眞	幸		｜	眞言	山城西方院	｜	｜
二〇三六	了○明○	尼○		山城	眞	山城佛光寺	永和二、正、三	八三
二〇三六	寬	胤		山城	眞言	山城勸修寺	永和二、四、三	六八
二〇三六	普	在	在菴	阿波倉本	臨濟	山城南禪寺	永和二、七、四	六九
二〇三六	曇	生	碩生	｜	臨濟	山城建仁寺	永和二、七、廿七	｜
二〇三六	德○	久○	約菴	和泉日根	臨濟	明圓通寺	永和二、九、廿四	六四
二〇三六	仁	禎	蔣山	｜	臨濟	山城大德寺	｜	｜
二〇三六	禪	守		｜	眞言	山城東寺	｜	｜
二〇三七	妙○	在○	此山	信濃	臨濟	山城南禪寺	永和三、正、十二	｜
二〇三七	承	胤		｜	天台	近江延曆寺	永和三、四、九	｜
二〇三七	玄	球	天琢	｜	臨濟	山城普門寺	永和三、六、廿六	六八
二〇三七	靈	波	性通	相模鎌倉	華嚴	大和戒壇院	永和三、八、十五	八八
二〇三七	祖○	能○	大拙	相模鎌倉	臨濟	常陸楞嚴寺	永和三、八、廿	七五
二〇三七	光	開	明滝	｜	臨濟	山城建仁寺	｜	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇三七	興○雅○	―	眞言	山城安祥寺	―	―
二〇三八	朗○源○	―	日蓮	山城妙顯寺	永和四、正、十六	五三
二〇三八	妙○奇○ 特峯	―	臨濟	丹波慧日寺	永和四、三、八	八〇
二〇三八	是英 傑翁	―	臨濟	相模圓覺寺	永和四、三、十二	―
二〇三八	尊朝	―	眞言	山城名和寺	永和四、七、十六	二五
二〇三八	日貞尼 妙林	下總佐倉	日蓮	下總禮林寺	永和四、七、廿	―
二〇三八	圓瞿 竺堂	―	臨濟	山城萬壽寺	永和四、十、十八	―
二〇三八	呑岌 底容	―	淨土	尾張高岳院	―	―
二〇三九	經深	―	天台	近江園城寺	康曆元、二、十四	五五
二〇三九	道愛 道叟	出羽秋田	曹洞	陸奧高澤寺	康曆元、九、十三	―
二〇三九	林○芳 草堂	―	臨濟	相模建長寺	―	―
二〇四〇	宗○弼○ 授翁	京師	臨濟	山城妙心寺	康曆二、三、廿八	八五
二〇四〇	空佛	―	眞	伊勢專修寺	康曆二、四、十四	六七
二〇四〇	尊顯	―	天台	近江園城寺	康曆二、六、廿九	八四
二〇四〇	日乘 大宮房	―	日蓮	能登妙成寺	康曆二、六、廿七	一一〇
二〇四〇	貞辨	―	天台	近江園城寺	康曆二、七、廿四	五二
二〇四〇	契愚 柳溪	―	臨濟	相模建長寺	康曆二、七、卅	六八
二〇四〇	尊信	京師	眞言	山城勸修寺	康曆二、―、―	五七
二〇四〇	定○寶○	―	眞言	山城勸修寺	―	―
二〇四〇	良○佐○ 汝霖	遠江高園	臨濟	山城寶幢寺	―	―
二〇四一	日山	下總小賀	日蓮	武藏本門寺	永德元、九、七	四四
二〇四一	法○顯○ 中山	相模	臨濟	相模建長寺	永德元、十一、七	―
二〇四一	靈○致○ 天境	甲斐	臨濟	山城南禪寺	永德元、十一、十八	九一
二〇四一	圓○照○ 無外	薩摩	曹洞	薩摩皇德寺	永德元、十二、六	七一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇四一	慶○芳○ 少室	―	臨濟	相模建長寺	永德元、十二、十	―
二〇四一	省○吾○ 無我	京師	臨濟	明牛頭山	永德元、―、―	七二
二〇四一	通○妙○ 高山	―	臨濟	相模圓覺寺	―	―
二〇四一	桂○萼○ 小林	―	臨濟	丹後安國寺	―	―
二〇四一	仝○用 大用	―	臨濟	山城南禪寺	―	―
二〇四一	舜惠	―	天台	近江園城寺	永德二、二、九	六九
二〇四二	永賢○	―	日蓮	越前妙顯寺	永德二、三、廿五	―
二〇四二	宗○興○ 滅宗	尾張中島	臨濟	尾張妙興寺	永德二、七、十一	七三
二〇四二	弘顯	―	眞言	山城照阿院	永德二、九、二	六四
二〇四三	浮○玉○ 寶山	越中	臨濟	丹後安國寺	永德三、三、廿五	八〇
二〇四三	本○空○ 寂性	―	臨濟	伊豫興禪寺	永德三、七、十	―
二〇四三	勇○健○ 大歇	信濃伊那	臨濟	信濃安養寺	永德三、九、四	五三
二〇四三	寶洲 南海	上野世田	臨濟	山城東福寺	永德三、十一、廿九	六三
二〇四三	良○日 靜見	―	淨土	大和來迎寺	永德三、十二、六	―
二〇四三	法○序○ 不遷	相模	臨濟	山城南禪寺	永德三、十二、十四	―
二〇四三	存○圓 天鑑	―	臨濟	相模建長寺	―	―
二〇四四	頓○阿○	―	時	山城金蓮寺	元中元、三、十三	八四
二〇四四	仝快 鈍夫	―	臨濟	相模建長寺	至德元、八、十四	七六
二〇四四	昭覺 同龕	―	臨濟	豐前羅漢寺	至德元、九、十一	―
二〇四四	良芳 闡洲	若狹	臨濟	山城南禪寺	至德元、十二、六	八〇
二〇四四	道淵	―	眞言	山城東寺	至德元、十二、	七八
二〇四四	信虔 九峯	―	臨濟	相模淨妙寺	至德元、―	―
二〇四四	良鎮	―	融通念佛	攝津大念佛寺	―	―
二〇四四	心王	―	臨濟	美濃大興寺	―	―

二〇四四	聖快		—	眞言	山城東寺	—	—
二〇四五	靜衍		—	天台	近江園城寺	至德二、二、八	六〇
二〇四五	識桂	香林	—	臨濟	相模圓覺寺	至德二、二、十八	七三
二〇四五	通徹	清溪	相模	臨濟	山城南禪寺	至德二、十一、四	八六
二〇四五	宗立	卓然	攝津	臨濟	山城大德寺	至德二、十二、二	—
二〇四五	慧澤	希雲	—	臨濟	山城東福寺	—	—
二〇四六	日源		—	日蓮	能登妙法輪寺	至德三、三、八	一三八
二〇四六	總融	通識	—	華嚴	大和戒壇院	至德三、四、廿一	—
二〇四六	乘運		—	日蓮	加賀本興寺	至德三、四、廿七	—
二〇四六	行助		—	天台	近江園城寺	至德三、九、十	二七
二〇四六	師°振°	起山	豐後	臨濟	山城東福寺	至德三、十、十八	六九
二〇四六	了實°	成阿	—	淨土	常陸常福寺	至德三、十一、三	—
二〇四六	良永	相山	—	臨濟	山城建仁寺	至德三、十二、二	五七
二〇四七	得°勝	拔隊	相模中村	臨濟	甲斐向獄寺	嘉慶元、二、廿	六一
二〇四七	道珍	珠巖	—	曹洞	加賀大乘寺	嘉慶元、三、廿三	—
二〇四七	旨廓	徹山	—	曹洞	筑前承天寺	—	—
二〇四八	周°信°	義堂	土佐長岡	臨濟	山城南禪寺	嘉慶二、四、四	六四
二〇四八	玄柔	剛中	豐後	臨濟	山城東福寺	嘉慶二、五、廿七	七一
二〇四八	妙°葩°	春屋	甲斐	臨濟	山城相國寺	嘉慶二、八、十三	七八
二〇四八	周°澤°	龍湫	甲斐	臨濟	山城南禪寺	嘉慶二、九、九	八一
二〇四八	妙°澤°	古劍	—	臨濟	下野國清寺	嘉慶二、九、—	八三
二〇四八	實傳	仁空	—	淨土	山城三鈷寺	嘉慶二、十一、十一	—
二〇四八	周°亨°	大椿	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇四八	中亮	菊隱	—	臨濟	相模建長寺	—	—
二〇四八	法一	無二	駿河	臨濟	伊豆淨因寺	—	—
二〇四八	正燈	無傳	出羽	臨濟	山城梅熟菴	—	—
二〇四八	周潭	懷州	—	曹洞	安房高照寺	—	—
二〇四九	光助		山城	眞言	山城醍醐山	康應元、正、十三	四〇
二〇四九	俊玄	善如	—	眞	山城本願寺	康應元、二、十九	五七
二〇四九	宗光	月菴	美濃	臨濟	但馬大明寺	康應元、三、廿二	六四
二〇四九	善°玖°	石室	筑前	臨濟	相模圓覺寺	康應元、九、廿五	九六
二〇四九	大義		甲斐	臨濟	豐前萬壽寺	—	—
二〇五〇	敎藏	慈翁（智）	—	淨土	武藏龍藏寺	明德元、正、二	—
二〇五〇	元◎選°	無文	京師	臨濟	遠江方廣寺	明德元、三、廿二	六八
二〇五〇	順證		—	眞	伊勢專修寺	明德元、六、十六	六〇
二〇五〇	實顯		—	天台	近江園城寺	明德元、六、廿一	五二
二〇五〇	清°曇°	獨芳	—	臨濟	山城天龍寺	明德元、八、八	—
二〇五〇	宗忠	言外	伊豫	臨濟	山城大德寺	明德元、十、九	七六
二〇五〇	覺增		—	天台	近江園城寺	明德元、十一、十九	—
二〇五〇	泉一		—	天台	近江園城寺	明德元、十二、廿二	六〇
二〇五一	一朝	天陽	—	曹洞	遠江可睡齋	—	—
二〇五一	道敎	感智	—	淨土	奧州新善光寺	明德二、三、十二	—
二〇五一	興信		—	眞言	山城勸修寺	明德二、四、五	三四
二〇五一	寂靈°	通玄	豐後 武藏野	曹洞	丹波永澤寺	明德二、五、一	七〇
二〇五一	宗渭	太清	相模鎌倉	臨濟	山城南禪寺	明德二、六、十九	七一
二〇五一	妙悟	省山	—	曹洞	越中滿源寺	明德二、八、一	—
二〇五一	法守	寧永	—	眞言	山城仁和寺	明德二、九、十九	八四
二〇五一	友山	雲溪	美濃	臨濟	播磨護聖寺	元中八、十一、十四	六三
二〇五一	聖壽	壺外	大隅蒲生	曹洞	大隅永興寺	—、正、六	—
二〇五一	祖忠	節堂	—	曹洞	大隅圓林寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇五一	眞玄 太白	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇五一	聖音 無聞	土佐	曹洞	周防洞泉寺	—	—
二〇五一	元明 了巖	山城	曹洞	大隅園林寺	—	—
二〇五二	日什	—	日蓮	山城妙滿寺	元中九、二、廿八	七九
二〇五二	聖憲 定休	和泉	眞言	紀伊根來山	明德三、五、二十	八六
二〇五二	淨晉	—	天台	近江園城寺	明德三、六、七	四五
二〇五二	綱嚴 慈觀	—	眞	近江錦織寺	—	—
二〇五二	日妙 大藏阿闍梨	—	日蓮	山城玄妙寺	—	—
二〇五二	日金 出羽阿闍梨	—	日蓮	岩代妙滿寺	—	—
二〇五三	時藝 絹如	—	眞	山城本願寺	明德四、四、廿四	四四
二〇五三	妙融 無著	大隅	曹洞	豐後泉福寺	明德四、八、十二	六一
二〇五三	融薰	—	曹洞	日向大平寺	—	—
二〇五三	融珪 峰山	信濃諏訪	曹洞	豐前護聖寺	—	—
二〇五三	鏡照 明巖	美作	曹洞	土佐大用寺	、九、十九	—
二〇五三	長應	—	曹洞	近江新豐寺	—	—
二〇五三	洞察 竺空	—	曹洞	美濃林廣寺	—	—
二〇五四	宗熈 春浦	播磨赤松	臨濟	山城大德寺	應永元、正、十四	八八
二〇五四	照元 無爲	山城	臨濟	山城東福寺	應永元、六、十六	—
二〇五四	祖裔 竺芳	遠江	臨濟	山城南禪寺	應永元、七、廿七	八三
二〇五四	玄晟 興國	—	曹洞	駿河桃源寺	應永元、八、九	—
二〇五四	性岱 崇芝	三河	曹洞	遠江石雲院	應永元、十、廿七	八三
二〇五四	宗韶 陽峯	京師	臨濟	山城大德寺	—	—
二〇五四	善均 平山	—	臨濟	山城臨川寺	—	—
二〇五四	定忠	—	眞言	山城醍醐山	—	—
二〇五四	周應 曇芳	—	臨濟	相模建長寺	、九、七	—
二〇五四	明覺	—	天台	加賀溫泉寺	—	—
二〇五四	啓諸 一元	—	臨濟	相模淨妙寺	—	—
二〇五四	康秀	—	佛工	—	—	—
二〇五四	正祠 在傑	丹波	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二〇五四	賢孝 心忠	—	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二〇五四	宗蘭 香林	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇五四	宗香 梅屋	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇五四	法朝 日峰	—	臨濟	山城天龍寺	—	—
二〇五四	利聞 鐘谷	—	臨濟	山城普門寺	—	—
二〇五四	宗楊 岐菴	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二〇五四	宗潘 華山	—	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二〇五四	周徹 靈光	—	臨濟	播磨瑞光寺	—	—
二〇五四	圓心 月堂	播磨	臨濟	美濃妙勝寺	—	七〇餘
二〇五四	心華	—	臨濟	山城定惠院	—	—
二〇五四	義梵 唄菴	大隅	曹洞	越前興禪寺	—	—
二〇五四	永傑 斗南	—	臨濟	山城妙光寺	—	—
二〇五四	如雪	明	臨濟	山城相國寺	—	—
二〇五四	琴叔	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇五四	以遠 韶陽	—	曹洞	相模最乘寺	—	—
二〇五四	以成 九峯	—	臨濟	山城天龍寺	—	—
二〇五四	中巽 權中	—	臨濟	—	—	—
二〇五四	異珍 奇叟	—	曹洞	薩摩佛陀寺	—	—
二〇五四	等蓮 竺雲	—	臨濟	山城南禪寺	—	—

二〇五四	了	訥 大辨	—	曹洞	伊賀安養院	—	—
二〇五四	○德	○濟 鐵舟	下野	臨濟	山城天龍寺	—	—
二〇五五	○藏	珍 玉岡	—	臨濟	相模圓覺寺	應永二、四、廿二	八一
二〇五五	日	靜 妙龍院	—	日蓮	山城本國寺	應永二、六、廿七	七三
二〇五五	善	偉 堯慧	—	淨土	山城圓福寺	應永二、七、廿九	—
二〇五五	善	忠	—	淨土	三河悟眞寺	應永二、八、廿八	—
二〇五五	一	○雅 大全	備前金河	臨濟	淡路圓鏡寺	應永二、九、廿六	五五
二〇五五	○心	昭 源翁	越後	曹洞	下野泉溪寺	應永三、正、七	七一
二〇五六	靈	光 性海	信濃橫山	臨濟	山城南禪寺	應永三、三、廿一	—
二〇五六	日	堯	—	日蓮	下總本行院	應永三、九、九	—
二〇五六	房	聖	但馬	天台	近江園城寺	應永三、十一、十四	七四
二〇五六	玄	晟 壺天	京師	曹洞	伯耆退休寺	—	—
二〇五七	俊	賀 乘圓房	—	眞言	山城醍醐山	應永四、五、五	—
二〇五七	良	覺	—	天台	近江園城寺	應永四、七、廿五	—
二〇五七	良	瑜	京師	天台	近江園城寺	應永四、八、廿一	—
二〇五七	日	叡 楞巖	京師	日蓮	相模妙法寺	應永四、十一、九	六四
二〇五七	有	恒 菊莊	—	臨濟	山城東福寺	應永四、十一、十一	—
二〇五七	日	義 伊像阿闍梨	—	日蓮	山城妙滿寺	應永四、—	—
二〇五七	道	意	京師	天台	近江園城寺	—	—
二〇五七	俊	豪	—	眞言	山城醍醐山	—	—
二〇五八	源	豪	—	天台	近江園城寺	應永五、正、廿九	—
二〇五八	清	祖 柏庭	—	臨濟	山城嘉隱菴	應永五、六、廿八	—
二〇五八	良	禪	—	天台	近江園城寺	應永五、九、廿九	—
二〇五九	元	聃 老仙	—	臨濟	相模建長寺	應永八、二、九	—
二〇五九	賢	朝	—	天台	近江園城寺	應永六、五、三	—
二〇五九	眞	覺 了堂	和泉結崎	曹洞	加賀佛陀寺	應永六、七、二	七〇
二〇五九	令	山 俊翁	武藏秩父	臨濟	武藏國濟寺	—	—
二〇六〇	良	印 月泉	能登	曹洞	能登正法寺	應永七、二、廿三	八二
二〇六〇	正	呈 德翁	—	曹洞	播磨永天寺	應永七、三、十七	—
二〇六〇	日	叡 上行院	—	日蓮	甲斐身延山	應永七、五、七	八三
二〇六〇	玄	晴 一天	越前	曹洞	能登雲門寺	應永七、五、十二	四七
二〇六〇	源	讃 唯了	—	眞	山城佛光寺	應永七、六、廿三	七八
二〇六〇	房	深	—	天台	近江園城寺	應永七、七、廿七	七三
二〇六〇	豪	尊	武藏金鑽	天台	上野龍增寺	應永七、十、五	—
二〇六〇	良	義 通海	—	曹洞	上野長覺寺	—	—
二〇六〇	○良	珍 巨泉	奥州	曹洞	奥州萬年寺	—	—
二〇六〇	○智	碩 大圓	周防	臨濟	周防正法寺	—	—
二〇六〇	良	桂 無等	出羽	曹洞	出羽正應寺	—	—
二〇六〇	宗	寅 建室	—	曹洞	下野大中寺	—	—
二〇六一	房	淳	—	天台	近江園城寺	應永八、二、廿一	六六
二〇六一	○海	○壽 椿庭	遠江	臨濟	山城南禪寺	應永八、四、十二	八四
二〇六一	日	○榮 大明房	相模三浦	日蓮	相模大明寺	應永八、十一、廿六	—
二〇六一	○仲	正 仲芳	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二〇六一	梵	初 心月	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二〇六二	俊	憲	—	眞言	山城醍醐山	應永九、五、—	—
二〇六二	聖	阜 竹巖	京師	戒律	山城雲龍寺	應永九、六、廿七	七九
二〇六二	大	殊 別峯	周防	臨濟	河內光通寺	應永九、八、二	八二
二〇六二	如	金 玉岡	越前	臨濟	山城南禪寺	應永九、八、廿六	七一
二〇六三	朝	圓	—	天台	近江園城寺	應永十、二、十	八一
二〇六三	希	讓 在先	越中	臨濟	山城東福寺	應永十、三、四	六九

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇六三	智通 光居	石見池田	淨土	美濃立政寺	應永十、五、一	九〇
二〇六三	周朗	相模	臨濟	山城南禪寺	應永十、五、二	八二
二〇六三	弘意	―	眞言	山城醍醐山	應永十、七、六	―
二〇六三	德俊 伯英	武藏	臨濟	山城南禪寺	應永十、八、十二	―
二〇六三	實濟	―	眞言	山城泉涌寺	應永十、八、廿四	七五
二〇六三	希徹 心源	―	臨濟	相模建長寺	應永十、十、十三	―
二〇六三	覺曇 希芳	―	臨濟	山城東福寺	―	―
二〇六五	等益 友峯	筑前	臨濟	相模建長寺	應永十二、正、廿二	七九
二〇六五	中津 絕海	土佐津野	臨濟	山城相國寺	應永十二、四、五	七〇
二〇六五	良秀 實峯	能登	曹洞	能登定光寺	應永十二、六、十二	―
二〇六五	祖濱 哲巖	播磨	臨濟	山城南禪寺	應永十二、八、十七	八二
二〇六五	日壽 通源	相模鎌倉	日蓮	山城妙顯寺	應永十二、十一、四	五七
二〇六五	韶奏 九峯	出雲	臨濟	山城南禪寺	應永十二、十一、十二	八一
二〇六五	惠圓	京師	佛工	―	―	―
二〇六五	侑籍 貝林	播磨	曹洞	能登龍護寺	―	―
二〇六五	玄淳 眞化	能登	曹洞	信濃靈松寺	―	―
二〇六五	淳享 人養	能登	曹洞	信濃靈松寺	―	―
二〇五六	如清 一崔	薩摩	曹洞	能登實相寺	―	―
二〇六五	侑松 雲巖	能登	曹洞	信濃靈松寺	―	―
二〇六五	梵仙 笠雲	―	曹洞	能登實相寺	―	―
二〇六六	善救 普濟	加賀河北	曹洞	越前願勝寺	應永十三、正、十二	―
二〇六六	中諦 觀中	阿波	臨濟	山城相國寺	應永十三、四、三	六五
二〇六六	永釋 彌天	―	臨濟	近江永安寺	應永十三、六、五	―
二〇六六	範伊	―	天台	近江園城寺	應永十三、六、廿	六三
二〇六六	宗興 溫老	能登	曹洞	加賀洞谷寺	應永十三、十一、八	七四
二〇六六	崇珍 寶山	越前	曹洞	越前洞源寺	―	―
二〇六六	如欣 怡去	越前	曹洞	越前洞源寺	―	―
二〇六六	賢孝 心忠	薩摩	曹洞	越前寶圓寺	―	―
二〇六七	常喜 悅堂	京師	曹洞	備中聖光寺	應永十四、正、一	―
二〇六七	啓源 大初	―	臨濟	明 三峰寺	應永十四、三、一	七五
二〇六七	妙英 鑑富	筑前太宰府	臨濟	山城天龍寺	應永十四、四、十六	六三
二〇六七	定紹 慶屋	能登	曹洞	周防禪昌寺	應永十四、六、廿	六九
二〇六七	一麟 大祥	京師	臨濟	山城南禪寺	應永十四、十二、三	七九
二〇六七	明應 空谷	近江淺井	臨濟	山城天龍寺	應永十四、十二、十六	八〇
二〇六七	承廣 無外	―	臨濟	山城南禪寺	―	六三
二〇六八	宗介 大徹	肥前	曹洞	越中立川寺	應永十五、正、廿五	七六
二〇六八	曇春 東富	―	臨濟	山城東福寺	應永十五、二、廿	―
二〇六八	圓方 [illegible]	―	臨濟	相模建長寺	應永十五、五、五	―
二〇六八	高湛 明印	總州	戒律	大和西大寺	應永十五、九、廿五	八六
二〇六八	宗越 大巖	越中	曹洞	攝津大廣寺	―	―
二〇六八	可眞 不寂	出羽	曹洞	越後耕文寺	―	―
二〇六八	宗觀 直菴	上野	曹洞	石見靈光院	―	―
二〇六八	玄了 覺巖	日向	曹洞	越中法城寺	―	―
二〇六八	宗林 大成	豐後	曹洞	越中正脉寺	―	―
二〇六八	元三 普門	出羽	曹洞	越中德成寺	―	―
二〇六八	契養 浩齋	肥前	曹洞	能登立川寺	―	―
二〇六八	應雲 月江	奥州	曹洞	越中大川寺	―	―
二〇六八	良旭 日山	信濃	曹洞	出羽向川寺	―	―

年	名	號	生國	宗	寺	寂年月日	壽
二〇六八	良闓	越覺	—	曹洞	越中立川寺	—	—
二〇六八	良闇	閣堂	—	曹洞	越中立川寺	—	—
二〇六八	龍乘	月桂	—	曹洞	越中立川寺	—	—
二〇六八	宗彭	人壽	大隅	曹洞	遠江大興寺	—	—
二〇六九	道芳	曇仲	—	臨濟	山城養壽院	應永十六、二、廿九	四三
二〇六九	日傳	大圓	相模鎌倉	日蓮	山城本國寺	應永十六、四、一	六八
二〇六九	良順	聖滿	—	淨土	相模光明寺	應永十六、五、廿六	—
二〇六九	周及	愚中	美濃岐阜	臨濟	安藝佛通寺	應永十六、八、廿五	八〇
二〇六九	日珍	正門啓朶阿	—	日蓮	越中本叡寺	—	—
二〇六九	慈錏		—	臨濟	—	—	—
二〇七〇	梵相	倜鑑	甲斐	臨濟	山城相國寺	應永十七、二、廿	六五
二〇七〇	明見	不見	出雲	曹洞	丹波永澤寺	應永十七、六、三	六四
二〇七〇	宗因	無因	尾張	臨濟	山城妙心寺	應永十七、六、四	八五
二〇七〇	重泉		播磨	天台	美濃長瀧寺	應永十七、八、十一	五六
二〇七〇	德	有隣	河内	臨濟	常陸東福寺	應永十七、九、五	—
二〇七〇	宗宿	春夫	山城	臨濟	筑前崇福寺	—	—
二〇七〇	宗純	溫中	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二〇七一	日經	一院童	—	日蓮	山城本國寺	應永十八、正、十二	一八
二〇七一	慧明	了菴	相模糟谷	曹洞	相模最乘寺	應永十八、三、廿七	七五
二〇七一	常訢	笑堂	攝津兵庫	臨濟	美濃大安寺	應永十八、七、九	五〇
二〇七一	慧春尼		相模糟谷	曹洞	相模最乘寺	—	—
二〇七二	明中	大陽	伊豆	曹洞	—	—	—
二〇七二	良勝	性音	奥州山崎	淨土	下野慈眼寺	應永十九、三、一	—
二〇七二	叡空	圓道	京師	戒律	大和西大寺	應永十九、三、廿三	八〇
二〇七二	題祐		—	眞言	山城醍醐山	應永十九、七、廿七	—
二〇七二	曇	華藏	—	臨濟	常陸福泉寺	應永十九、八、廿九	—
二〇七二	禪雄	人圓	加賀	曹洞	能登曹龍寺	—	—
二〇七三	祖祐	天鷹	加賀	曹洞	尾張雲興寺	應永廿、正、二	七八
二〇七三	自性	天眞	奥州	曹洞	奥州慈眼寺	應永廿、正、十三	—
二〇七三	得仙	竺山	近江清瀧	曹洞	下野桂林寺	應永廿、三、十九	七〇
二〇七三	祖旭	日東	—	臨濟	山城南禪寺	應永廿、四、五	—
二〇七三	秀格	越溪	—	臨濟	近江退藏寺	應永廿、四、十九	—
二〇七三	通知	心居	—	臨濟	山城東福寺	應永廿、五、十	—
二〇七三	圓伊	仲方	肥前長崎	臨濟	山城南禪寺	應永廿、八、十五	八〇
二〇七三	融適	天眞	肥後	曹洞	筑前瑞石寺	應永廿、八、廿	—
二〇七三	繼覺	大初	紀伊	曹洞	越前松隱寺	應永廿、九、四	六九
二〇七三	明祖	金山	安藝	臨濟	但馬宗鏡寺	應永廿、十一、十三	六五
二〇七三	良堯	聖欽	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二〇七三	子濟	居方	—	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二〇七四	方裔	偉仙	下野	臨濟	下野淨因寺	應永廿一、正、廿九	八一
二〇七四	良哲	善通	下野	淨土	下野延壽院	應永廿一、三、廿八	—
二〇七四	日嚴	本院高	—	日蓮	山城本國寺	應永廿一、四、五	—
二〇七四	寶生	白厓	河内	臨濟	上野泉龍寺	應永廿一、九、七	七二
二〇七四	祖東	春巖	伊豫大野	曹洞	大隅瑞光寺	應永廿一、十、廿八	六三
二〇七四	玄俊	快翁	—	曹洞	石見永谷寺	—	—
二〇七四	保廣	雪溪	—	曹洞	尾張常樂寺	—	—
二〇七四	棨玖	雲岡	豐後	曹洞	武藏龍澤寺	—	—
二〇七五	良空	古山	出羽莊内	曹洞	出羽龍門寺	應永廿二、三、一	五三
二〇七五	一祐	大峯	尾張	曹洞	能登總持寺	應永廿二、五、廿二	—
二〇七六	空廣	天海	京師	曹洞	奥州示現寺	應永廿三、二、十五	六九

紀元	法諱		出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇七六	法俊	英仲	京師	曹洞	丹波圓通寺	應永廿三、三、廿六	七七
二〇七六	○宥快	性嚴	京師	眞言	紀伊寶性院	應永廿三、七、十七	七三
二〇七六	超濟		｜	眞言	山城東寺	應永廿三、十、三	｜
二〇七六	○長覺		出羽	眞言	紀伊無量壽院	應永廿三、十一、十五	七一
二〇七六	日仁	宰相阿闍梨	｜	日蓮	山城妙滿寺	應永廿三、	｜
二〇七六	日全	藏人阿闍梨	｜	日蓮	山城玄妙寺	應永廿三、	｜
二〇七七	○道秀	松嶺	武藏川越	臨濟	伊豆臨濟寺	應永廿四、二、十四	八八
二〇七七	南要		美濃	時	｜	應永廿四、四、｜	六八
二〇七七	聞本	梅山	美濃	曹洞	越前龍澤寺	應永廿四、九、七	｜
二〇七七	希曇	天海	周防	曹洞	伯耆圓福寺	｜	｜
二〇七七	中啓	東輝	｜	臨濟	山城寶幢寺	｜	｜
二〇七八	法尊		｜	眞言	山城仁和寺	應永廿五、二、十五	三三
二〇七八	祖嚴	芳菴	攝津	曹洞	越前願成寺	應永廿五、四、廿三	｜
二〇七八	祐榮	嫩桂	近江	曹洞	越前少林寺	｜	｜
二〇七九	○日陣		越後蒲原	日蓮	相模本成寺	應永廿六、五、廿一	｜
二〇八〇	○聖冏	了譽	常陸巖瀨	淨土	武藏傳通院	應永廿七、九、廿七	八〇
二〇八〇	房譽		｜	天台	近江園城寺	應永廿七、十二、十五	七九
二〇八〇	○祖燦	大輝	｜	臨濟	山城東福寺	應永廿七、十二、廿一	｜
二〇八一	重舜		｜	天台	近江園城寺	應永廿八、六、十九	五四
二〇八一	原冲	謙巖	｜	臨濟	山城天龍寺	應永廿八、九、廿一	｜
二〇八二	貞舜		｜	天台	近江比叡山	應永廿九、正、｜	八九
二〇八二	玄賢	直傳	伊勢	曹洞	遠江榮林寺	應永廿九、九、廿四	九八
二〇八二	日億	行學院	甲斐波木井	日蓮	甲斐身延山	應永廿九、十一、八	｜
二〇八二	良乳	虎溪	奥州江刺	曹洞	奥州大祥寺	應永廿九、十一、十三	｜

紀元	法諱		出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇八二	俊承	天胤	筑後	臨濟	山城相國寺	應永廿九、｜	｜
二〇八二	梵清	人容	薩摩	曹洞	丹後玉雲寺	應永廿九、｜	｜
二〇八二	宗與	希雲	薩摩	曹洞	丹波德雲寺	｜六、一	｜
二〇八三	○健易	東漸	遠江	臨濟	山城南禪寺	應永卅、四、十七	八〇
二〇八三	義東	梅岸	｜	曹洞	遠江普濟寺	應永卅、四、｜	六四
二〇八三	○眞梁	石屋	薩摩伊集院	曹洞	薩摩妙圓寺	應永卅、五、十一	七九
二〇八三	良榮	理本	奥州磐前	淨土	下野圓通寺	應永卅、六、二	七三
二〇八三	超眞	實底	肥後求摩	曹洞	肥後永國寺	應永卅、七、二	｜
二〇八三	長譽		能登	眞言	紀伊高野山	應永卅、七、十四	｜
二〇八三	能勝	傑堂	河內	曹洞	越後耕雲寺	應永卅、八、九	｜
二〇八三	智嚴	竹窓	近江	曹洞	大和補巖寺	應永卅、八、九	｜
二〇八三	○周崇	大岳	阿波	臨濟	山城南禪寺	應永卅、九、十四	七九
二〇八三	永鑑	鑑窓	｜	曹洞	美作西來寺	｜	｜
二〇八三	行吉	松仙	｜	曹洞	周防龍文寺	｜	｜
二〇八三	靈用	人田	｜	曹洞	薩摩妙圓寺	｜	｜
二〇八三	良德	隆本	｜	淨土	下野圓通寺	｜	｜
二〇八三	良善		｜	淨土	常陸照光寺	｜	｜
二〇八三	○超虎	大蟲	肥後	曹洞	肥後永國寺	｜	｜
二〇八四	○方秀	岐陽	讚岐	臨濟	山城南禪寺	應永卅一、二、三	六三
二〇八四	日存	精進房	越中	日蓮	越中妙蓮寺	應永卅一、四、二	｜
二〇八四	尊興		｜	眞言	山城勸修寺	應永卅一、五、廿七	五〇
二〇八四	融純	無雜	越後	曹洞	筑前明光寺	應永卅一、十一、廿七	｜
二〇八四	豪猷		｜	天台	近江園城寺	應永卅一、十二、十三	九一
二〇八四	詔天	玉鱗	出羽	曹洞	能登慧眼寺	｜	｜

二〇八四	詔興	雲澤	能登	曹洞	能登慶德寺	—	—
二〇八四	詔珍	大琳	肥後	曹洞	能登總持寺	—	—
二〇八四	詔麟	瑞巖	能登	曹洞	能登宗園寺	—	—
二〇八四	詔春	日東	加賀	曹洞	能登靈泉寺	—	—
二〇八五	良信		越前	淨土	越前法福寺	應永卅二、正、廿五	—
二〇八五	○慧[illegible]	[illegible]隱	筑後	臨濟	山城天龍寺	應永卅二、二、十八	六〇
二〇八五	良聞	明庵	出羽	曹洞	下總永德寺	應永卅二、七、廿七	八一
二〇八五	周賀	慶中	—	臨濟	山城天龍寺	應永卅二、八、廿八	六三
二〇八五	賢諮		—	日蓮	越前妙顯寺	應永卅二、十、十	—
二〇八五	日[illegible]		—	日蓮	山城妙顯寺	應永卅二、—	—
二〇八五	元禮	麗中	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇八五	万宗	旅泊	—	臨濟	甲斐惠林寺	—	—
二〇八五	○得巖	惟肖	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇八六	隆源		—	眞言	山城東寺	應永卅三、三、廿九	八五
二〇八六	○弘鑁		—	眞言	山城醍醐山	應永卅三、五、二	六五
二〇八六	永宗	智翁	日向	曹洞	長門大寧寺	應永卅三、十、廿二	五五
二〇八六	隆增	戒光	—	眞言	山城醍醐山	—	—
二〇八六	不識		—	曹洞	長門不識菴	—	—
二〇八六	了空		—	曹洞	長門了空菴	—	—
二〇八七	良源	瑩照	越前波多野	曹洞	越前洞光寺	應永卅四、九、二十	七五
二〇八七	○十聲	頁祐	山城八幡	淨土	岩城傳稱寺	應永卅四、十一、廿四	—
二〇八七	永就	一經	—	曹洞	攝津景福寺	應永—、十、廿五	—
二〇八八	通覺		—	天台	近江園城寺	正長元、三、十三	五四
二〇八八	興胤		—	眞言	山城勸修寺	正長元、五、廿七	三五
二〇八八	○周噩	巖中	京師	臨濟	山城南禪寺	正長元、六、廿六	七〇

二〇八八	○宗曇	華叟	播磨揖保	臨濟	山城大德寺	正長元、六、廿七	七七
二〇八八	妙定尼		—	日蓮	山城法華院	正長元、七、一	—
二〇八八	日饒	慧海	—	日蓮	下總本土寺	正長元、九、六	—
二〇八八	○中淹	在中	能登	臨濟	山城南禪寺	正長元、十、七	八〇
二〇八八	良冠		—	淨土	奧州寶鏡寺	正長元、—	—
二〇八八	宗寂	性三	—	臨濟	山城大德寺	—、七、十二	—
二〇八八	宗溟	季東	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二〇八八	中曇	蔵存	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二〇八八	周賢	天英	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二〇八八	天章	呆菴	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二〇八八	純榮	柏堂	—	臨濟	相模淨智寺	—	—
二〇八八	清山	竺雲	—	臨濟	伊勢無量壽寺	—	—
二〇八八	正麟	德祥	—	臨濟	山城天龍寺	—	—
二〇八八	永果	東輝	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇八八	等梵	竺西	—	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二〇八八	○永因	三益	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇八九	隆寛		京師	眞言	山城醍醐山	永享元、三、十三	五三
二〇八九	○慧珙	元璞	山城	臨濟	山城相國寺	永享元、三、十五	五七
二〇八九	曇貞	大德	近江	曹洞	丹波永澤寺	永享元、[illegible]、六	九八
二〇八九	西性	頁意	—	淨土	武藏勝願寺	永享元、九、十一	—
二〇八九	康依		—	佛工	—	—	—
二〇八九	義稜	伯師	山城稻荷	臨濟	山城建仁寺	—	—
二〇九〇	慧徹	無極	肥前	曹洞	美濃補陀寺	永享二、十二、廿八	八一
二〇九一	慈達		—	眞	近江錦織寺	永享三、五、七	六七
二〇九一	○吉山	明兆	淡路	臨濟	山城東福寺	永享三、八、廿	八〇

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇九一	融參 寶菴	日向	曹洞	日向福聚寺	永亨三、十一、十	—
二〇九一	一之 江上藏	—	臨濟	山城東福寺	—	—
二〇九二	珠禪 土定菴	—	曹洞	長門大寧寺	永亨四、三、廿七	六〇
二〇九二	尊聖	—	眞言	山城勸修寺	永亨四、七、四	—
二〇九二	了運 籌山	—	曹洞	加賀大乘寺	永亨四、八、廿八	八三
二〇九二	良頓 有範	—	淨土	磐城東稱寺	永亨四、十、十九	—
二〇九二	周仲 寂芳	丹後天橋	臨濟	山城建仁寺	永亨四、—	七五
二〇九二	利蒙 占泉	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二〇九二	壽欣 州翁	—	曹洞	下總總寧寺	—	—
二〇九二	宗仙 笠芳	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二〇九二	正瑩 貝應	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二〇九三	慶字 顯窓	越後	曹洞	越後慈光寺	永亨五、正、廿二	—
二〇九三	日聰 大院周	—	日蓮	山城本國寺	永亨五、正、廿九	—
二〇九三	周勝 古幢	京師	臨濟	山城南禪寺	永亨五、二、十二	六四
二〇九三	性初 月因	—	曹洞	石見永明寺	永亨五、九、廿五	—
二〇九三	順波 晴譽	岩代會津	淨土	江戸淨閑寺	永亨五、十一、三	—
二〇九三	清心	—	法相	—	永亨五、—	—
二〇九三	長清 虛廓	—	曹洞	越後慈光寺	—	—
二〇九四	性宗 綱菴	美作	曹洞	美作瑞景寺	永亨六、八、一	八三
二〇九五	滿濟	京師	眞言	山城醍醐山	永亨七、六、十三	五八
二〇九五	良讚	京師	天台	近江園城寺	永亨七、六、廿九	五七
二〇九七	明宗 大綱	甲斐	曹洞	相模大慈寺	永亨九、正、十四	—
二〇九七	天闇 如仲	信濃上田	曹洞	遠江大洞院	永亨九、二、四	七五
二〇九七	覺卍 字堂	薩摩	曹洞	薩摩寶福寺	永亨九、九、七	八一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二〇九八	周宗 南英	武藏	臨濟	近江香積寺	永亨十、四、十九	七六
二〇九八	○良肇 嘆譽	下總猿島	淨土	下總弘經寺	永亨十、五、十二	—
二〇九九	大緣 竹菴	—	臨濟	山城天龍寺	永亨十一、四、廿三	—
二〇九九	性智 入息	山城	臨濟	山城南禪寺	永亨十一、六、卅	八〇餘
二〇九九	性曇	—	眞	山城佛光寺	永亨十一、十二、四	七一
二一〇〇	見方 中明	伊賀	曹洞	信濃臺松寺	永亨十二、正、八	七一
二一〇〇	○眞阿 貞仁	京師	淨土	山城十念寺	永亨十二、七、二	六六
二一〇〇	○聖聰 酉譽	下總千葉	淨土	武藏增上寺	永亨十二、七、十八	七五
二一〇〇	月明 貝覺	—	日蓮	山城妙顯寺	永亨十二、九、八	五五
二一〇〇	玄康 功如	—	眞	山城本願寺	永亨十二、十、十四	六五
二一〇〇	宗哲 明林	奧州	曹洞	出羽乘慶寺	—	—
二一〇〇	義易 東海	參河	曹洞	三河妙嚴寺	—	—
二一〇一	怏丰 昌菴	越前	曹洞	越前龍景寺	嘉吉元、八、廿三	—
二一〇一	宗播 叔英	播磨	臨濟	山城南禪寺	嘉吉元、九、十九	—
二一〇一	覺秀 榮岩	—	曹洞	奧州天澤寺	—	—
二一〇一	祖濃 宜菴	伊豫	曹洞	越前興禪寺	—	—
二一〇一	義見 明室	—	曹洞	能登總持寺	—	—
二一〇一	道青 俊鷹	—	曹洞	越前慈眼寺	—	—
二一〇二	性讚 喜山	信濃	曹洞	備中洞松寺	嘉吉二、七、四	六六
二一〇二	正光 玉翁	武藏	曹洞	越前金剛院	—	—
二一〇三	承朝 海門	—	臨濟	山城南禪寺	嘉吉三、五、九	七〇
二一〇三	守勤 惟忠	攝津	曹洞	長門大寧寺	—	—
二一〇四	令薰 琴江	—	臨濟	山城東福寺	文安元、八、十一	—
二一〇四	日延 大院聖	—	日蓮	紀伊妙臺寺	文安元、九、八	—

二〇四	純清	德標	—	臨濟	相模圓覺寺	文安元、十二、廿七	—
二〇四	教尊		—	眞言	山城勸修寺	文安元、十二、廿八	—
二〇四	清播	心田	—	臨濟	山城南禪寺	文安元、—	七三
二〇四	啓學	古田	—	臨濟	山城東福寺	—	—
二〇四	祖香	桂林	—	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二〇四	理柏	高巖	—	曹洞	越後長福寺	—	—
二〇五	良鑑	理中	—	淨土	盤城專稱寺	文安二、二、卅	—
二〇五	守邦	仲翁	日向飫肥	曹洞	大隅含粒寺	文安二、六、六	六七
二〇五	清良	希明	越前非白	曹洞	越前龍興寺	文安二、九、十六	—
二〇五	良懷	岌念	—	淨土	下野近龍寺	文安二、十、七	—
二〇五	能範	仙巖	—	曹洞	尾張常樂寺	—	—
二〇五	妙祐	清寧	薩摩	曹洞	伯耆定光寺	—	—
二〇六	○靈曜	人輝	尾張高柳	曹洞	遠江圓通院	文安三、四、十四	六四
二〇六	龍派	江西	—	臨濟	山城南禪寺	文安三、八、五	—
二〇六	宗廉	直翁	—	曹洞	尾張正福寺	文安三、十一、廿四	—
二〇六	繼主	盟堂	日向	曹洞	日向廣禪寺	—	—
二〇六	永梅	鶴叟	—	曹洞	越前雲興寺	—	—
二〇六	景椿	壽嶽	薩摩	曹洞	薩摩瑞川寺	—	—
二〇六	榮珠	玉川	出羽	曹洞	能登松隱寺	—	—
二〇六	智順	承顔	—	曹洞	能登總持寺	—	—
二〇八	宗俊	鷹嶽	美濃賀茂	曹洞	甲斐天澤寺	文安五、正、廿六	八一
二〇九	圓秀		近江	天台	近江園城寺	寶德元、五、廿八	—
二〇九	眞讀	鑑仲	—	臨濟	山城東福寺	寶德元、五、廿九	—
二〇九	道空	眞巖	河内	曹洞	近江洞壽院	寶德元、八、十五	七六
二〇九	玄珪	孑崇	越後保見	曹洞	遠江雲林寺	寶德元、八、十五	七〇
二〇九	隆堯		近江栗木	淨土	近江淨嚴院	寶德元、十二、十二	八一
二一〇	房能		京師	天台	近江園城寺	寶德二、一、廿	七七
二一〇	慧忻	笑巖	奥州江刺	曹洞	能登總持寺	寶德二、[illegible]	八四
二一〇	永衍		—	天台	近江園城寺	寶德二、二、廿四	七三
二一〇	日秀	觀隨	—	日蓮	山城本滿寺	寶德二、五、八	六八
二一〇	日福	叡順	—	日蓮	武藏永敎寺	寶德二、十二、廿	七三
二一〇	融照	月山	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二一〇	融眞	大芳	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二一一	成雄		—	眞言	紀伊高野山	寶德三、五、八	七一
二一一	○以篤	信中	淡路	臨濟	山城南禪寺	寶德三、十、一	—
二一一	隆快		—	眞言	山城安祥寺	—	—
二一一	隆算	靜定	—	眞言	山城仁和寺	—	—
二一二	了知	實賢	—	淨土	常陸常福寺	享德元、二、廿四	—
二一二	日壽		相模	日蓮	武藏木門寺	享德元、四、四	二三
二一二	月湖		—	醫僧	—	—	—
二一二	良慶	盛譽	—	淨土	常陸常福寺	—	—
二一二	了月	英譽	—	淨土	常陸常福寺	—	—
二一三	中爻	象初	—	臨濟	山城東福寺	享德二、三、十一	六九
二一三	融松	在山	奥州江刺	曹洞	奥州正法寺	享德二、五、十四	六九
二一三	承道		—	眞言	山城仁和寺	享德二、九、十	四六
二一三	永本	覺隱	大隅	曹洞	周防闢雲寺	享德二、十二、十八	七四
二一三	凡曒	明室	大隅	曹洞	大隅西福寺	—	—
二一三	眞昭	雪心	石見	曹洞	土佐豫岳寺	—	—
二一三	慶仙	竺心	豐前	曹洞	豐前寶陀寺	—	—
二一三	心建	德林	—	曹洞	因幡讓傳寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一一三	愼終 南壽	石見	曹洞	因幡讓傳寺	—	—
二一一三	玄徹 大應	—	曹洞	能登正法寺	—	—
二一一四	英文 景南	常陸	臨濟	山城南禪寺	亨德三、九、廿二	八三
二一一四	玄朔 桃隱	京師	臨濟	伊勢大樹寺	—	—
二一一四	宥信	常陸	眞言	紀伊高野山	—	—
二一一四	天功 無功	肥前	曹洞	越前龍澤寺	—	—
二一一四	允○澎○ 東洋	—	臨濟	山城天龍寺	—	—
二一一五	義曇 華藏	肥後	曹洞	遠江普濟寺	康正元、四、一	八一
二一一五	一純 雪叟	—	曹洞	信濃廣澤寺	康正元、四、十五	七九
二一一五	正琇 溫伯	—	臨濟	山城東福寺	康正元、五、八	—
二一一五	性欣 牡翁	京師	曹洞	丹波松山寺	康正元、十二、十九	七三
二一一五	祖寅 天叟	近江	曹洞	近江新豐寺	—	—
二一一五	一藺 全菴	薩摩	曹洞	阿波桂谷寺	—	—
二一一五	玄稜 木菴	阿波	曹洞	阿波桂谷寺	—	—
二一一五	元佐 巨濟	—	臨濟	山城東福寺	—	—
二一一六	宗能 春屋	陸奥	曹洞	相模報恩院	康正二、三、十九	七五
二一一六	玄祥 雲谷	—	臨濟	美濃汾陽寺	康正二、七、八	—
二一一六	俊增	—	眞言	山城慈心院	康正二、八、廿	六七
二一一六	禪龍 大見	奧州	曹洞	下野長雲寺	康正二、十一、十二	六六
二一一六	顯正 中叟	—	臨濟	相模建長寺	康正二、十一、廿六	—
二一一六	長柔 勝剛	—	臨濟	山城東福寺	康正二、十二、十三	—
二一一六	洞源 靈嶽	遠江	曹洞	越前龍澤寺	—	—
二一一六	宗宥 在中	—	曹洞	美濃天寧寺	—	—
二一一六	原佐 桂堂	—	曹洞	下總總寧寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一一六	宗訓 天叟	—	曹洞	下總總寧寺	—	—
二一一七	定順	—	眞	伊勢專修寺	長祿元、正、廿八	六九
二一一七	圓兼 作如	—	眞	山城本願寺	長祿元、六、十八	六三
二一一七	聞桂 石叟	越前	曹洞	遠江崇信寺	長祿元、七、八	七九
二一一七	慶順 聖學	—	淨土	相模光明寺	—	—
二一一七	清○啓○	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一一八	圓給 足室	日向	曹洞	日向大陽寺	長祿二、二、十七	七七
二一一八	性應 物先	信濃	曹洞	遠江海藏寺	長祿二、三、廿二	—
二一一八	仁泉 古淵	信濃	曹洞	備中法泉寺	長祿 二、 二	八〇
二一一八	日實 玄式	—	日蓮	山城立本寺	長祿二、四、廿二	六〇餘
二一一八	正○徹○ 清岩	備中	臨濟	山城東福寺	長祿二、五、九	七九
二一一八	禮浚 平川	—	臨濟	山城東福寺	長祿二、六、六	—
二一一八	心禮 用叟	—	臨濟	山城東福寺	長祿二、六、六	—
二一一八	宗○頤○ 養叟	京師	臨濟	山城大德寺	長祿二、六、廿七	八三
二一一八	祖命 天先	加賀	曹洞	尾張靈興寺	長祿二、八、四	九二
二一一八	梵機 關叟	—	曹洞	備中法泉寺	—	—
二一一八	玄文 錦江	—	曹洞	越前龍澤寺	—	—
二一一九	慶笠 大譽	江戸日比谷	淨土	山城知恩院	長祿三、正、廿四	—
二一一九	日○出○ 是生	—	日蓮	伊豆本覺寺	長祿三、四、九	—
二一一九	西○仰○ 聽譽	下總千葉	淨土	江戸增上寺	長祿三、五、十五	四二
二一一九	日學 成就院	—	日蓮	甲斐身延山	長祿三、十二、七	—
二一一九	讃譽	總州	淨土	三河城寶寺	—	—
二一二〇	謙○宗○ 南英	薩摩	曹洞	備前種月寺	寛正元、五、十九	七四
二一二〇	龍○惺○ 瑞巖	—	臨濟	山城南禪寺	寛正元、六、五	七七

二一一〇	宗種	月田	—	曹洞	越後種月寺	—	—
二一一〇	康永		—	佛工	—	—	—
二一一〇	院勝		—	佛工	—	—	—
二一一一	日延	觀行院	武藏	日蓮	甲斐身延山	寛正二、四、廿六	—
二一一一	正○猷	竹居	薩摩伊集院	曹洞	周防龍文寺	寛正二、十、廿五	八三
二一一二	宗○欽	徳嶽	—	曹洞	越後耕雲寺	—	—
二一一三	周○嚴	東沼	—	臨濟	山城相國寺	寛正三、正、二	—
二一一三	弘喜		—	眞言	山城光台院	寛正、三、六、九	—
二一一三	等○熙		京師	淨土	山城淨華院	寛正三、八、十三	—
二一一三	等仁	義山	大和奈良	曹洞	加賀大乘寺	寛正三、十、一	七七
二一一三	良秀	僧尋	—	淨土	山城淨華院	—	—
二一一三	正○文	月江	—	曹洞	上野雙林寺	寛正四、正、廿二	—
二一一三	一○慶	雲章	京師	臨濟	山城南禪寺	寛正四、正、廿三	七八
二一一三	慈○賢		—	眞	近江錦織寺	寛正四、六、廿	六九
二一一三	志○玉	總圓	—	華嚴	大和東大寺	寛正四、九、—	八一
二一一三	梵◎殷	天祐	—	臨濟	山城萬壽寺	—	—
二一一四	日◎隆	深圓	越中	日蓮	山城本能寺	寛正五、二、廿五	八一
二一一四	定顯		—	眞	伊勢專修寺	寛正五、五、廿四	四九
二一一五	玄詔	義天	土佐	臨濟	山城妙心寺	寛正六、三、十八	七〇
二一一五	周光	聖中	—	臨濟	山城南禪寺	寛正六、九、二	九五
二一一五	宗○俊	曇叟	—	曹洞	相模香雲寺	寛正六、十一、十九	—
二一一五	鑁○啓	寶巖	磐城	眞言	山城智積院	寛正六、十二、三	七七
二一一五	宗熙	釣船	美濃鵜沼	臨濟	山城妙心寺	—、—、二、十	八四
二一一六	慈孝	正海	伊勢	曹洞	伊勢千手寺	文正元、正、廿八	—
二一一六	德輔	推宗	—	臨濟	山城南禪寺	文正元、二、六	九七
二一一六	日、饒	妙勝院	—	日蓮	山城本國寺	文正元、二、六	—
二一一六	康溫		—	佛工	—	—	—
二一一六	仲仙	竺翁	薩摩	曹洞	伯耆瑞仙寺	—	—
二一一六	宗永	大年	伯耆	曹洞	伯耆瑞仙寺	—	—
二一一六	賢○春	陽谷	伯耆	曹洞	伯耆圓福寺	—	—
二一一六	建○撕		—	曹洞	越前永平寺	—	—
二一一七	祥參	實菴	駿河	曹洞	能登瑞龍寺	應仁元、正、十九	—
二一一七	祖默	存畔	—	臨濟	山城南禪寺	應仁元、三、十四	—
二一一七	崇永	古山	遠江周知	曹洞	遠江圓通寺	應仁元、七、十三	六七
二一一七	良賢		—	淨土	伊勢悟眞寺	應仁元、七、十六	—
二一一七	禪信		京師	眞言	山城東寺	應仁元、十二、八	六八
二一一七	慶圓	月心	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一一七	德鼎	慧龐	—	畫僧	—	—	—
二一一七	守拙		—	畫僧	—	—	—
二一一八	良○察	恕觀	—	淨土	磐城專稱寺	應仁二、四、廿六	—
二一一八	爲○璠	器之	大隅	曹洞	周防龍文寺	應仁二、五、廿四	六五
二一一八	良信	心巖	日向	曹洞	薩摩龍泉寺	應仁二、七、廿二	七一
二一一八	義貞		—	眞言	山城醍醐山	應仁二、十、二	七〇
二一一八	長○棟	高巖	—	曹洞	伊豆雲洞寺	應仁二、—、—	—
二一一九	仲○珊	湖海	備中	曹洞	下野雲明寺	文明元、正、廿四	六七
二一一九	快元		—	臨濟	—	文明元、四、廿一	—
二一一九	性善		—	眞	山城佛光寺	文明元、五、十一	四三
二一一九	爲學	大疑	—	臨濟	山城東福寺	文明元、五、十九	—
二一一九	蓮○雲	光聚房	—	天台	加賀某寺	—	—
二一一九	道○瑜	玄音	—	眞言	紀伊根來山	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一二九	○龍澤 天隱	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一二九	清鄴 子才	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一二九	賴譽 定嚴	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二一二九	宗繁 茂林	—	臨濟	和泉小林菴	—	—
二一三〇	等都 盧嶽	下野	曹洞	三河龍溪寺	文明二、二、一	—
二一三〇	永春 起龍	長門	臨濟	山城東福寺	文明二、五、廿九	—
二一三〇	隆濟	京師	眞言	山城東寺	文明二、九、五	六二
二一三〇	○性印 月泉	京師	曹洞	美濃開元院	文明二、十二、廿八	六三
二一三〇	蓮行	—	眞	三河上宮寺	—	—
二一三〇	倫藝	—	天台	近江園城寺	—	—
二一三〇	道見 閘菴	—	曹洞	三河泉龍院	—	—
二一三〇	良弘 天龔	—	淨土	奥州增福寺	文明三、三、十六	—
二一三一	○宗成 蹈菴	—	臨濟	山城大德寺	文明三、五、六	—
二一三一	光篤 竹馬	奥州白石	曹洞	丹波圓通寺	文明三、九、廿七	五三
二一三一	道順 慈伯	備後	曹洞	備後龍雲寺	—	—
二一三一	知恩 報翁	—	曹洞	備後龍雲寺	—	—
二一三二	珠鷹 青岑	武藏埼玉	曹洞	磐城龍門寺	文明四、九、十四	一〇一
二一三二	珍目 禪室	出雲	曹洞	美作青蓮寺	文明五、三、三	六七
二一三二	須益 大菴	薩摩	曹洞	長門大寧寺	文明五、三、廿二	六八
二一三二	圓忠 大功	大隅	曹洞	備中華光寺	文明五、三、廿七	—
二一三二	○日意 秀鏡	下總	日蓮	下總本土寺	文明五、四、九	五三
二一三二	周鳳 瑞溪	和泉堺	臨濟	山城相國寺	文明五、五、八	八三
二一三三	桂嶧 桐同	—	曹洞	阿波桂谷寺	—	—
二一三三	良心	信濃	醫僧	—	—	—
二一三三	道會 海雲	—	曹洞	—	—	—
二一三三	道圓	—	曹洞	—	—	—
二一三三	需糠 箕外	—	曹洞	—	—	—
二一三三	康 泰伯	—	曹洞	—	—	—
二一三三	仲心 高宗	—	曹洞	周防龍文寺	—	—
二一三三	崇脅 歡大	—	曹洞	長門大寧寺	—	—
二一三三	師透 合明	—	曹洞	周防龍豐寺	—	—
二一三三	壽陵 景甫	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二一三三	良鑁 隆順	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一三三	良順 養恭	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一三三	良卜 旭殘	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一三五	○覺證 明室	—	曹洞	信濃巖松院	文明七、五、六	—
二一三五	慧濟 川附	三河	曹洞	遠江一雲院	文明七、七、九	—
二一三五	永祥 麟翁	薩摩	曹洞	加賀瑞川寺	文明七、十、八	七三
二一三五	祖慶 雲窓	越後	曹洞	能登總持寺	—	—
二一三六	興德 海門	伊勢	曹洞	和泉慶田寺	文明八、正、廿六	—
二一三六	宗傳 心窓	加賀	曹洞	能登總持寺	—	—
二一三七	宗梅 鼎菴	大隅	曹洞	備後德雲寺	—	—
二一三七	瑞宗 幻宗	—	曹洞	能登興禪寺	—	—
二一三八	宗龍 雲岫	出雲	曹洞	甲斐廣嚴院	文明十、十二、九	八五
二一三九	聖觀 音菴	近江甲賀	淨土	武藏增上寺	文明十一、七、二	—
二一三九	宗愈 泰叟	—	臨濟	山城大德寺	文明十一、九、十	—
二一三九	宗睦 蒲菴	對馬	曹洞	對馬田口菴	文明十一、九、廿一	八三
二一四〇	融薰 梅溪	肥前	曹洞	肥前龍雲寺	—	—

二一四〇	融椿 玉室	—	曹洞	肥前地福寺	—	—
二一四一	隆阿 堯譽	近江野洲	淨土	近江淨嚴院	文明十三、九、七	—
二一四一	宗純 一休	京師	臨濟	山城大德寺	文明十三、十一、廿一	八八
二一四一	宗眞 巖譽	下野	淨土	近江淨嚴院	—	—
二一四一	宗範 模菴	伊豆	曹洞	伊豆普門院	—	—
二一四一	○正曇 華叟	越後	曹洞	美濃龍泰寺	文明十四、六、六	七一
二一四二	梵守 太安		曹洞	越後耕雲寺	文明十四、七、五	七六
二一四二	宗英 拈笑	武藏	曹洞	信濃定津院	文明十四、十、十七	—
二一四二	正察 審巖	—	曹洞	出羽勝傳寺	—	—
二一四二	元統 心巖	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二一四二	慶梵 清峯	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二一四二	宗巖 周剛	—	曹洞	越後耕雲寺	—	—
二一四三	了曉 慶善	大和	淨土	下野弘經寺	文明十五、五、廿七	—
二一四三	光助 順如	京師	眞	越前吉崎坊	文明十五、九、廿九	四三
二一四三	俊慶	—	眞言	山城醍醐山	文明十五、十、十六	六九
二一四三	守鑁	京師	眞言	山城東寺	文明十五、十二、一	六八
二一四四	正通 大林	美濃	曹洞	上野茂林寺	文明十六、四、十九	九一
二一四四	宗楞 安叟	駿河	曹洞	相模最乘寺	文明十六、九、廿二	九八
二一四四	宗覺 即菴	相模鎌倉	曹洞	下總東昌寺	文明十六、十二、十三	七八
二一四四	宗徹 智海	—	曹洞	相模總世寺	—	—
二一四四	眞雄 大拙	—	曹洞	伊豫洞光寺	—	—
二一四四	○正曹 南渓	—	曹洞	上野茂林寺	—	—
二一四五	禪洞 桃菴	越前	曹洞	越前心月寺	文明十七、三、十二	—
二一四五	妙康 奈叟	對馬	曹洞	武藏龍穩寺	文明十七、十一、四	八〇
二一四五	堅隆 紹嶽	出羽	曹洞	加賀大乘寺	文明十七、十一、廿九	—

二一四五	梵覺 海圖	長門	曹洞	越前心月寺	—	—
二一四五	○智樵 天巖	—	曹洞	越前慈眼寺	—	—
二一四六	宗深 雪江	攝津	臨濟	山城妙心寺	文明十八、六、二	七九
二一四六	日住 眞如	—	日蓮	紀伊正住寺	文明十八、九、十八	—
二一四六	弘典	—	眞言	山城醍醐山	文明十八、十一、廿九	八〇
二一四六	一東 日菴	—	臨濟	但馬圓通寺	文明十八、—、—	七四
二一四六	宗肅 凡浦	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二一四六	○集九 萬里	—	臨濟	山城相國寺	—	—
二一四七	永珊 石宙	—	曹洞	遠江長松寺	長享元、正、廿六	—
二一四七	芝繁 茂林	肥後高瀨	曹洞	備中洞松寺	長享元、二、八	九五
二一四七	鑑心 牛欄	奥州	曹洞	出羽洞雲寺	長享元、三、五	—
二一四七	良本	奥州小野	淨土	奥州安樂寺	長享元、六、四	—
二一四七	明秀 光雲	播磨	淨土	紀伊惣持寺	長享元、六、十	—
二一四七	大俶 季弘	—	臨濟	山城東福寺	長享元、八、七	—
二一四七	永秀 實山	相模	曹洞	伊豆藏春院	長享元、九、九	—
二一四七	日遵	—	日蓮	山城妙滿寺	長享元、十、廿	—
二一四七	妙智 愚丘	薩摩	曹洞	薩摩善勝寺	長享元、十、廿四	—
二一四七	○正伊 一川	周防	曹洞	上野雙林寺	長享元、十一、四	七三
二一四七	聖欽 超譽	—	淨土	常陸常福寺	長享元、十一、廿四	—
二一四七	慶琳 玉岡	薩摩甑島	曹洞	筑前永泉寺	長享元、—、—	六八
二一四七	良訓 雪光	—	曹洞	下野瑞光寺	—	—
二一四七	正謙 益之	—	曹洞	下野瑞光寺	—	—
二一四七	春庭	—	曹洞	山城淨德寺	—	—
二一四七	了秀 感譽	—	淨土	常陸常福寺	—	—
二一四七	音譽	—	淨土	常陸阿彌陀寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一四七	聖譽	—	淨土	山城知恩寺	—	—
二一四七	宗仙 笠菴	—	曹洞	伊豆昌溪院	—	—
二一四八	良椿 花庭	—	曹洞	筑前青蓮寺	長亨三、正、二	—
二一四八	○宗順 逆翁	尾張	曹洞	尾張乾坤院	長亨三、八、十五	五六
二一四八	日親 久遠成院	上總埴谷	日蓮	山城本法寺	長亨三、九、十七	八二
二一四八	日能 榮昌院	—	日蓮	越中大法寺	長亨三、十、廿五	七八
二一四八	日英 照英	—	日蓮	山城賓德寺	—	—
二一四八	宗川 芝岡	美濃	曹洞	尾張乾坤院	—	—
二一四九	大通	尾張	臨濟	相模淨智寺	延德元、正、十	九二
二一四九	正嚴 密山	武藏	曹洞	三河眞如寺	延德元、七、廿四	—
二一四九	日圓 成就院	—	日蓮	山城本國寺	延德元、七、廿九	—
二一四九	慈範	—	眞言	近江錦織寺	延德元、十一、二	四四
二一四九	○自圓 大虛	肥後臼杵	曹洞	甲斐觀盛寺	德延元、十一、十	—
二一四九	靈彥 希世	京師	臨濟	山城聽松院	延德元、—、—	八六
二一五〇	良處 諦阿	—	淨土	磐城專稱寺	延德二、二、二	—
二一五〇	圓舜	—	日蓮	越前妙顯寺	延德二、三、廿五	—
二一五〇	壽星 南極	相模	曹洞	常陸大雄院	延德二、七、九	—
二一五〇	永篤 信中	—	曹洞	常陸鳳林院	—	—
二一五〇	周思 斷江	—	曹洞	上總常泉寺	—	—
二一五一	蓮教	—	眞	山城興正寺	延德三、五、二	四二
二一五一	○量榮 春谷	—	臨濟	山城某寺	延德三、五、廿五	五四
二一五一	○周興 彥龍	山城深草	臨濟	山城相國寺	延德三、六、三	三四
二一五一	希雄 英巖	奧州	曹洞	周防闢雲寺	延德三、七、八	七五
二一五一	慧成 春岡	—	曹洞	三河長國寺	—	—
二一五二	品騰 傳翁	備後	曹洞	丹波圓通寺	明應元、正、六	六九
二一五二	光冏 隆譽	近江蒲生	淨土	武藏增上寺	明應元、五、十四	—
二一五二	○祖旭 旗雲	越前	曹洞	越前光嚴寺	明應元、十一、廿八	六九
二一五二	○尊通 拓菴	—	天台	近江園城寺	—	—
二一五二	尊舜	常陸友部	天台	常陸月山寺	—	—
二一五二	康珍	—	佛工	—	—	—
二一五二	紹彌 天釋	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二一五二	宗懌 悅堂	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二一五三	性隆 雷菴	越後	曹洞	越後轉輪寺	明應二、正、十三	七三
二一五三	日教 大覺院	—	日蓮	越中妙傳寺	明應二、四、十八	七五
二一五三	○景三 横川	京師	臨濟	山城南禪寺	明應二、十一、十七	六五
二一五三	妙慶 快菴	薩摩	曹洞	越後顯聖寺	明應二、十二、廿六	七三
二一五四	聽林 樂學	—	淨土	江戶善德寺	明應三、七、十六	—
二一五四	實定	—	眞言	山城仁和寺	—	—
二一五四	蘤芳 桂質	—	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二一五四	正瞰 直鷹	—	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二一五五	○盛能	越後	天台	伊勢西蓮寺	明應四、正、十三	—
二一五五	梵清 天宙	—	曹洞	上野吉祥寺	明應四、二、七	七四
二一五五	◎眞盛	伊勢	天台	近江西教寺	明應四、二、卅	五三
二一五五	東純 全巖	出羽	曹洞	周防瑠璃光寺	明應四、十二、十	—
二一五五	祐宗	—	淨土	相模光明寺	—	—
二一五五	明鑑	—	曹洞	—	—	—
二一五六	英麟 鳳菴	伊豆	曹洞	伊豆最乘寺	明應五、二、七	—
二一五六	宗昌 桂節	駿河安部	曹洞	遠江龍華院	明應五、五、二	九六

二一五六	紹等	沒倫	—	臨濟	山城大德寺	明應五、五、十六	—
二一五六	明譚	月窓	伊勢	曹洞	陸奥觀音寺	明應五、六、十九	—
二一五六	德源	古文	大和	曹洞	山城佛陀寺	明應五、十一、十五	七六
二一五六	明全	體花	丹波	曹洞	下野長安寺	—	—
二一五六	長玄	次答	—	曹洞	下野長安寺	—	—
二一五七	益通		—	眞言	山城仁和寺	明應六、九、六	四六
二一五七	存°俗	秀峰	—	曹洞	常陸龍谷院	—	—
二一五八	龍°統	正宗	山城	臨濟	山城南禪寺	明應七、正、廿二	—
二一五八	慶順	天巽	甲斐	曹洞	上野龍華院	明應七、三、四	八七
二一五八	良榮	大有	近江	曹洞	下野元性院	明應七、三、十	五一
二一五八	良°珍	玉叟	相模	曹洞	加賀龍谷寺	明應七、八、—	—
二一五八	忠°義	長房泉	—	眞言	紀伊高野山	明應七、十、廿三	七三
二一五八	德呂	桂林	—	臨濟	山城建仁寺	明應七、—、—	—
二一五八	宗恕	之了濟	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二一五八	龍°崇	常菴	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一五八	龍°深	九淵	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一五八	乘芳	心華	—	曹洞	上野高蔘院	—	—
二一五九	存°問	釋、	總州	淨土	三河光明寺	明應八、三、四	—
二一五九	兼°壽	蓮如	京師	眞	山城本願寺	明應八、三、廿五	八五
二一五九	紹偆	春江	關東	臨濟	美濃梅龍寺	明應八、三、廿六	八〇
二一五九	宗鵄	天關	—	臨濟	尾張瑞泉寺	—	—
二一六〇	宗°隆	景川	伊勢	臨濟	山城妙心寺	明應九、三、一	七六
二一六〇	日°詮	壽量院	—	日蓮	加賀寶乘寺	明應九、三、四	八一
二一六〇	日°朝	鏡澄	伊豆宇佐美	日蓮	甲斐身延山	明應九、六、廿五	七九
二一六〇	禪長	傑傳	奥州伊達	曹洞	下野慈眼寺	明應九、八、十	—
二一六〇	玄彭	大菴	越前	曹洞	相模最乘寺	明應九、八、十七	—
二一六〇	宗頓	悟溪	尾張丹羽	臨濟	山城大德寺	明應九、九、六	八五
二一六〇	周鏡	月翁	—	臨濟	山城南禪寺	明應九、九、廿六	—
二一六〇	宗繕	松岳	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一六〇	自超	堅室	上野	曹洞	上野永源寺	—	—
二一六一	豊°壽	龜阜	近江	曹洞	下總瑞泉寺	文龜元、正、五	六七
二一六一	日°具		安藝廣島	日蓮	山城妙顯寺	文龜元、二、十二	七九
二一六一	正挺	大倫	上野甘樂	曹洞	上野最興寺	文龜元、三、廿二	八五
二一六一	日調		下總向鑿	日蓮	武藏本門寺	文龜元、十、八	—
二一六一	守琮	泰雲	薩摩	曹洞	薩摩興國寺	文龜元、十、廿四	六九
二一六一	玄密	希菴	—	臨濟	山城妙心寺	文龜元、十一、廿七	—
二一六一	景°茝	蘭坡	—	臨濟	山城南禪寺	文龜元、—	—
二一六一	浩達	通菴	上野一宮	曹洞	武藏高乘寺	—	—
二一六一	宗遊	子賢	—	曹洞	相模最乘寺	—	—
二一六一	從賀	然想	—	曹洞	美濃龍泰寺	—	—
二一六一	禪亭		—	曹洞	美濃龍泰寺	—	—
二一六二	祖圭	大室	—	曹洞	美濃龍泰寺	文龜二、三、二	—
二一六二	良景	西湖	—	曹洞	周防龍華寺	文龜二、三、廿五	—
二一六二	祖晦	杲觀	—	臨濟	伊勢萬笑院	文龜二、三、廿七	八二
二一六二	祖益	大嶽	—	曹洞	奥州關錢寺	文龜二、四、十八	—
二一六二	長°祐	以翼	—	曹洞	近江洞壽寺	文龜二、四、廿七	八七
二一六二	珠°光		大和	臨濟	山城大德寺	文龜二、五、十五	八一
二一六二	宗梅	大巌	遠江	曹洞	駿河洞慶院	文龜二、六、四	—
二一六二	日°妙	法華院	甲斐羽切	日蓮	尾張法蓮寺	文龜二、七、十三	—
二一六二	宗°祇	自然齋	紀伊	天台	—	文龜二、七、卅	八二

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一六三	祖○奝 絶方	美濃福富	曹洞	信濃大澤寺	文龜二、九、五	一
二一六三	宗○球 天琢	尾張	臨濟	山城大德寺	文龜二、九、廿八	六六
二一六三	宗松 竹翁	一	曹洞	備中善江寺	一	一
二一六三	宗牧 養拙	一	曹洞	武藏香雲寺	一	一
二一六三	一風 玄譽	京師	淨土	山城報恩寺	一	一
二一六三	宗洵 西川	京師	臨濟	山城妙心寺	一	一
二一六三	宗范 春湖	一	臨濟	山城妙心寺	一	一
二一六三	光松 東販	一	臨濟	山城東福寺	文龜三、二、廿六	一
二一六三	堯仁 光教	一	眞	山城佛光寺	文龜三、三、十二	七四
二一六三	靜覺	一	眞言	山城仁和寺	文龜三、七、十五	六三
二一六四	賢深	一	眞言	山城東寺	永正元、正、廿九	七五
二一六四	宗榮 松花	奥州	曹洞	下總乘國寺	永正元、七、二	八二
二一六四	繁紹 隆溪	下總北條	曹洞	伊豆修善寺	永正元、八、七	五六
二一六四	慧應 雲英	京師	曹洞	上野長年寺	永正元、十、十四	八一
二一六四	榮主 中明	一	曹洞	下總乘國寺	一	一
二一六四	周孚 中雄	一	曹洞	下總乘國寺	一	一
二一六四	裔正 直應	一	曹洞	上野仁叟寺	一	一
二一六四	善長 天叟	一	曹洞	遠江可睡齋	一	一
二一六四	覡雯 章由	周防	曹洞	周防溪月寺	一	一
二一六四	文朝 甘峯	攝津	曹洞	攝津靈松寺	一	一
二一六四	慧堪 清龍	駿河	曹洞	遠江可睡齋	一	一
二一六四	宗演 儀中	一	臨濟	尾張瑞泉寺	一	一
二一六四	全芳 嫩如	一	曹洞	上野永源寺	一	一
二一六四	等觀 秋月	一	臨濟	山城東福寺	一	一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一六四	宗堯 朴菴	一	臨濟	尾張瑞泉寺	一	一
二一六五	行圓	一	天台	近江園城寺	永正二、正、八	一
二一六五	高盛 松堂		曹洞	遠江圓通寺	永正二、二、十一	七五
二一六五	永滿 足翁	筑前	曹洞	長門大寧寺	永正二、三、十六	七一
二一六五	良眞 圓融	京師	天台	近江延暦寺	永正二、五、十三	七一
二一六五	了聞 天譽	信濃伊那	淨土	武藏增上寺	永正二、七、八	一
二一六五	玄虎 大空	武藏	曹洞	伊勢淨眼寺	永正二、七、廿三	一
二一六五	呂○隆 虎淺	薩摩	曹洞	薩摩妙圓寺	永正二、八、九	一
二一六五	盛○全	一	天台	近江西教寺	永正二、八、十五	五七
二一六五	了忍 大寧	伊豆北條	曹洞	相模長泉寺	永正二、十、九	五四
二一六五	德○舜 門江	甲斐山梨	曹洞	甲斐天澤寺	永正二、十二、廿二	一
二一六六	等○揚 雪舟	備中赤濱	臨濟	石見大喜菴	永正三、三、十八	八七
二一六六	青牛 長松	肥後	曹洞	奥州頭陀寺	永正三、六、廿六	一
二一六六	日堯 大聖院	一	日蓮	山城本國寺	永正三、五、廿七	一
二一六六	豐隆 歲年	一	曹洞	加賀大乘寺	永正三、八、二	一
二一六六	禪○傑 特芳	尾張熱田	臨濟	山城妙心寺	永正三、九、十	八八
二一六六	等梅	筑後	眞言	紀伊高野山	一	一
二一六六	等禪 甫雪	肥前松浦	臨濟	山城東福寺	一	一
二一六六	周德 惟馨	一	臨濟	山城東福寺	一	一
二一六六	宗淵 如水	相模	畫僧	一	一	一
二一六六	息梅	越前	臨濟	山城某寺	一	一
二一六六	等本	一	臨濟	山城東福寺	一	一
二一六六	長樹 東木	一	曹洞	越前福聚寺	一	一
二一六六	鷲翔 超天	武藏	曹洞	武藏福聚寺	一	一

二一六六	慶順（嶋歩）	—	曹洞	越中最勝寺	—	—
二一六七	西閭（諸學）	肥前	淨土	下野弘經寺	永正四、正、十五	—
二一六七	碩山（一華）	筑前	臨濟	筑前聖福寺	永正四、三、四	六二
二一六七	明瀞（陳叟）	山城	曹洞	總州洞泉寺	永正四、四、四	—
二一六七	宗眞（質古）	美濃	臨濟	山城大德寺	永正四、四、八	七四
二一六七	慧徹（決淸）	—	臨濟	山城東福寺	永正四、五、廿七	—
二一六七	永範（授常）	伊豆	曹洞	常陸松岳寺	永正四、八、十六	六四
二一六七	常俊（賢慈）	—	曹洞	駿河眞珠院	永正四、十一、四	—
二一六七	慧昭（照應）	上總	曹洞	上總眞如寺	—	—
二一六七	宗悅（一翠）	—	淨土	下野弘經寺	—	—
二一六八	○玄樹（桂庵）	周防山口	臨濟	薩摩桂樹院	永正五、六、十五	八二
二一六八	繁俊（秀咋）	石見	曹洞	石見永明寺	永正五、十、三	—
二一六八	自德（積桂）	—	曹洞	甲斐長生寺	永正五、十一、十七	—
二一六八	祖文（字國）	—	曹洞	加賀泉龍寺	—	—
二一六八	○永瑾（雪嶺）	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一六九	文英（一華）	甲斐山梨	曹洞	甲斐永昌院	永正六、六、六	八五
二一六九	恒弘	—	眞言	山城勸修寺	永正六、八、八	七九
二一六九	高徒（無適）	伊豆	曹洞	甲斐萬壽寺	—	—
二一六九	智聰（決學）	—	淨土	相模宗圓寺	—	—
二一七〇	○日澄（啓運）	—	日蓮	伊豆本立寺	永正七、二、九	—
二一七〇	繁越（界巖）	出羽	曹洞	駿河梅林院	永正七、四、廿七	七六
二一七〇	訓公（空學）	—	淨土	山城知恩院	永正七、八、十五	—
二一七〇	日了（勸行院）	京師	日蓮	山城本國寺	永正七、八、廿八	—
二一七〇	玨言（無外）	對馬	曹洞	遠江洞月院	永正七、十、廿六	七三
二一七〇	宗棟（鄧林）	山城	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一七〇	融鑑（月春）	—	曹洞	肥前正藏寺	—	—
二一七〇	融鏡（古心）	肥前	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二一七一	珠琳（周學）	—	淨土	山城知恩院	永正八、正、廿六	—
二一七一	祥貞（天英）	播磨	曹洞	信濃龍雲院	永正八、三、廿四	—
二一七一	正授（牧中）	—	曹洞	越後雲明寺	永正八、六、十四	—
二一七一	日順	—	日蓮	攝津本澄寺	永正八、九、十九	—
二一七一	性寅（辰應）	尾張	曹洞	駿河增善寺	永正八、九、—	七二
二一七一	法譽	—	淨土	山城知恩寺	永正八、十、廿四	—
二一七二	宗授（天縱）	—	臨濟	山城妙心寺	永正九、正、十一	—
二一七二	英穆（悅常）	—	曹洞	信濃定津院	永正九、四、廿三	—
二一七二	繁哲（賢中）	備中	曹洞	駿河林叟院	永正九、六、廿四	七五
二一七二	堯守（經學）	—	眞	山城佛光寺	永正九、九、十四	五八
二一七二	○眞慧	下野	眞	伊勢專修寺	永正九、十、廿三	七九
二一七二	要藝（能山）	薩摩	曹洞	武藏禪林寺	永正九、十一、廿六	七一
二一七二	玄輔（助翁）	—	曹洞	上野東雲寺	—	—
二一七二	能日（覺翁）	—	曹洞	能登東昌寺	—	—
二一七三	○祥椿（大年）	遠江	曹洞	能登一雲寺	永正十、四、四	八
二一七三	○日祝（妙國院）	下總千葉	日蓮	和泉頂妙寺	永正十、四、十二	八六
二一七三	常弘	—	眞言	山城勸修寺	永正十、八、廿八	五三
二一七三	弘宣	—	眞言	山城醍醐山	永正十、九、十七	六一
二一七三	良從（能室）	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	永正十、十二、五	七七
二一七三	智運	上野新田	時	—	永正十、—	五五
二一七三	○桂悟（了菴）	伊勢	臨濟	山城南禪寺	—	—
二一七三	用兼（金岡）	讃岐	曹洞	周防長福院	—	—
二一七三	昌桂（月殿）	—	曹洞	阿波丈六寺	—	—

二一八〇	祚養	孝山	—	曹洞	能登龍華院	永正十七、三、十一	—
二一八一	佛蓮		—	眞言	越後國上寺	—	—
二一八一	日遵°	本性院	—	日蓮	山城本國寺	大永元、正、二	—
二一八一	玉翁		越後	淨土	山城本覺寺	大永元、正、十八	六二
二一八一	彭壽	普山	武藏川越	曹洞	武藏青松寺	大永元、六、一	—
二一八一	周道	東州	伊豫	曹洞	常陸管天寺	大永元、七、廿三	八三
二一八一	智濟	一川	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	大永元、七、廿六	—
二一八一	光融	眞如	京師	眞	山城本願寺	大永元、八、廿	三一
二一八一	日森	三智院	—	日蓮	越前妙顯寺	—	—
二一八一	圭陽	春翁	—	曹洞	上總龍源寺	—	—
二一八二	得吾	自山	甲斐巨摩	曹洞	甲斐廣巖寺	大永二、五、十六	八四
二一八二	宗松	興宗	—	臨濟	山城妙心寺	大永二、六、廿一	七八
二一八二	爲契	默巖	周防山口	曹洞	筑後千光寺	大永二、八、廿八	—
二一八二	宗翔	龍江	—	臨濟	山城大德寺	大永二、十一、三	七四
二一八二	宗楨	邦叔	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一八二	宗周	廓翁	—	曹洞	周防顯孝寺	—	—
二一八二	宗諗	趙菴	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一八二	宗播	玉林	—	臨濟	山城大德寺	—	—
二一八三	明鑑	能菴	上總海上	曹洞	武藏天王院	大永三、四、十六	七五
二一八三	融舜	一仲	—	淨土	山城禪林寺	大永三、十一、十八	—
二一八三	契凝	克補	—	曹洞	三河泉龍寺	—	—
二一八三	良迦	性海	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一八三	良閭	乘慈	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一八三	良岳	順訓	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二一八四	正悅	培芝	—	曹洞	下野大中寺	大永四、正、廿	八二
二一八四	慶文	回天	—	曹洞	駿河智滿寺	大永四、四、廿	—
二一八四	玄勳	勳甫	—	臨濟	美濃大仙寺	大永四、四、廿六	—
二一八四	禪長	天桂	加賀能美	曹洞	甲斐大泉寺	大永四、九、廿九	六三
二一八四	瑞潭	菊隱	但馬上杉	曹洞	甲斐廣巖寺	大永四、十二、八	七八
二一八四	宗殊	勝嵓	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一八四	摩聚	獨放	—	曹洞	上野龍源寺	—	—
二一八四	正忻	笑顏	—	曹洞	上野龍源寺	—	—
二一八四	尖智		—	曹洞	下野大中寺	—	—
二一八四	良°慶	快叟	—	曹洞	下野大中寺	—	—
二一八五	光°兼	實如	—	眞	山城本願寺	大永五、二、二	六八
二一八五	慈°淵	九江	周防吉田	曹洞	周防顯孝院	大永五、二、二	六三
二一八五	宗悟	悅溪	近江	臨濟	山城大德寺	大永五、五、廿六	六四
二一八五	慶隨	順翁	—	曹洞	若狹諦應寺	大永五、六、廿	—
二一八五	了運		京師	眞言	山城仁和寺	—	—
二一八五	玄弘	大宗	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一八五	宗策	規川	—	曹洞	周防眞如寺	—	—
二一八五	宗胤	春山	—	曹洞	周防法明寺	—	—
二一八六	永嶽	季雲	武藏	曹洞	長門石雲寺	大永六、二、十五	—
二一八六	宗萬	休翁	豐後	臨濟	山城大德寺	大永六、二、—	六四
二一八六	永康	泰安	能登	曹洞	武藏寶持寺	—	—
二一八六	覺珍尼		—	眞言	山城聖大寺	—	—
二一八七	文禎	大嶽	阿波	曹洞	讃岐寶光寺	大永七、二、廿五	六四
二一八七	示敦	儀雲	—	臨濟	山城榮福寺	大永七、四、五	—
二一八七	宗松	柏庭	—	臨濟	山城妙心寺	大永七、五、五	九〇
二一八七	舜政	天海	出羽米澤	曹洞	下野鷄足寺	大永七、六、廿七	六〇

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一八七	道興	京師	天台	山城聖護院	大永七、七、七	九八
二一八七	慧仁 芳譽	—	淨土	相模報土寺	大永七、八、廿七	—
二一八七	賢舜	—	日蓮	越前妙顯寺	大永七、九、二	—
二一八七	覺道	—	眞言	山城仁和寺	大永七、十、十三	六
二一八七	宗器 傳菴	京師	臨濟	山城大德寺	—	—
二一八七	宗冲 月湖	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一八八	宗珠 輝山	三河寶飯	曹洞	甲斐龍華寺	享祿元、正、十二	一二一
二一八八	日眞 慧光	但馬	日蓮	攝津久成寺	享祿元、三、廿九	八五
二一八八	宗賀 大朝	美濃	曹洞	下野本光寺	享祿元、五、十三	—
二一八八	日尋	京師	日蓮	陸奥法華寺	享祿元、五、十六	—
二一八八	尊俊 文筌	—	眞言	大和報恩院	—	—
二一八九	文呂 久峰	—	曹洞	駿河長興寺	享祿二、二、廿五	—
二一八九	永忍 安室	攝津多田	曹洞	丹波圓通寺	享祿二、十二、十八	—
二一九〇	宗悟 如幻	尾張	曹洞	土佐寶泉寺	享祿三、十一、廿	八一
二一九〇	亮膺 大雄	越前	曹洞	越前心月寺	—	—
二一九〇	梵策 大英	—	曹洞	越前慈眼寺	—	—
二一九一	行然 教譽	—	淨土	山城平等院	享祿四、四、十八	—
二一九一	海覺	京師	眞言	山城勸修寺	享祿四、十一、九	三四
二一九一	灑 溪笑	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一九二	宗津 天祐	薩摩	曹洞	薩摩隆盛寺	天文元、二、四	七二
二一九二	順孝 天叟	下總	曹洞	武藏雲松院	天文元、七、十七	—
二一九二	正睦 大蒲	—	曹洞	駿河永明寺	天文元、八、十	—
二一九二	英曇 華屋	備中	曹洞	伊豫安樂寺	天文元、十一、朔	—
二一九二	光然 德譽	—	淨土	山城知恩院	天文元、—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一九二	日護	—	日蓮	山城妙覺寺	天文元、—	—
二一九二	聖瑜 玄正	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二一九二	宗壽 仙岫	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一九二	玄譽 堯運	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二一九二	玄性 空深	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二一九二	思問	近江甲賀	淨土	—	—	八二
二一九二	道明	武藏	曹洞	武藏野雲菴	—	—
二一九二	阿本	—	眞言	紀伊高野山	—	—
二一九二	日遙 見龍院	—	日蓮	紀伊宣經寺	—	—
二一九二	宗峻 孤岫	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一九二	文勝 忍室	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	—	—
二一九二	瑞初 先照	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二一九二	無盡 藏海	—	曹洞	加賀妙雲寺	—	—
二一九二	聖譽 深音	—	眞言	紀伊大傳法院	—	—
二一九二	周鑑 石菴	—	曹洞	伯耆瑞泉寺	—	—
二一九二	玄智 定林	肥後託麻	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二一九二	春察 明山	—	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二一九三	宗孝 忠室	伊豆初島	曹洞	相模總世寺	天文二、正、九	—
二一九三	松颯 敬譽	—	淨土	伊勢樹敬寺	天文二、四、十七	—
二一九三	凝念 演譽	—	淨土	山城一心院	天文二、五、廿一	—
二一九三	順智 巧安	三河安城	曹洞	三河蓮華寺	天文二、六、一	七三
二一三九	壽桂 月舟	近江	臨濟	山城建仁寺	天文二、十二、八	—
二一九三	實海	武藏埼玉	天台	武藏喜多院	天文二、—	八六
二一九三	慧才 文室	—	曹洞	能登總持寺	—	—

二一九三	壽能	綱大	—	臨濟	山城建仁寺	—	—
二一九四	宗清	伊天	京師	臨濟	相模早雲寺	天文三、正、十九	—
二一九四	本興	永山	—	曹洞	尾張雲興寺	天文三、四、三	—
二一九四	○日芳		京師	日蓮	山城妙顯寺	天文三、十、一	六三
二一九四	祖香	[illegible]桂	—	曹洞	越前寶圓寺	—	—
二一九四	正巽	仲孚	—	曹洞	武藏慶德寺	—	—
二一九四	德忠	節香	信濃	曹洞	信濃溫泉寺	—	—
二一九四	伊鯨	日峰	—	曹洞	武藏法光寺	—	—
二一九四	利賢	竹堂	—	曹洞	伯耆定光寺	—	—
二一九四	秀麟	祥巖	—	曹洞	能登雲興寺	—	—
二一九四	康秀		—	佛工	—	—	—
二一九六	宗昕	寂照	三河	曹洞	駿河大祥寺	天文五、二、一	—
二一九六	智闇	提室	—	曹洞	加賀大乘寺	天文五、四、二	七六
二一九六	楚見	希雲	—	臨濟	山城妙心寺	天文五、四、六	七三
二一九六	光隣	芳綃	—	臨濟	山城東福寺	天文五、六、十四	—
二一九六	紹慧	小溪	美濃	臨濟	山城大德寺	天文五、七、廿八	六三
二一九六	○玄欣	喜州	飛彈	曹洞	武藏青松寺	天文五、九、廿	—
二一九七	應其	木食	近江	眞言	紀伊興山寺	天文六、五、廿九	四八
二一九七	宗俊	大鷹	—	曹洞	薩摩福昌寺	天文六、八、四	七五
二一九七	叟天		—	淨土	岩代高巖寺	天文六、九、廿八	—
二一九八	伊白	圭菴	—	曹洞	下野大中寺	天文七、正、九	—
二一九八	鳳積	雪窓	奧州	曹洞	遠江安興寺	天文七、八、十三	—
二一九八	慈音	觀人	若狹	曹洞	若狹芳春寺	天文七、十一、廿三	—
二一九八	日傳	寶聚院	—	日蓮	甲斐身延山	天文七、十二、十一	六七
二一九八	文海	龍洲	—	曹洞	下野大中寺	—	—
二一九八	日應		—	日蓮	尾張大光寺	—	—
二一九九	桂彥	俊屋	常陸眞壁	曹洞	甲斐廣嚴寺	天文八、正、廿五	九六
二一九九	學宗	乘譽	—	淨土	常陸常福寺	天文八、三、九	—
二一九九	秀馨		—	淨土	山城淨華院	天文八、七、九	—
二一九九	景春	雲龍	武藏	曹洞	武藏法性寺	天文八、十二、二	八二
二二〇〇	全衷	斤桂	備後	曹洞	丹波圓通寺	天文九、二、十四	—
二二〇〇	融悅	陽菴	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二二〇〇	融慶	陽室	肥前佐賀	曹洞	肥前大梅寺	—	—
二二〇一	○玄得	月渚	薩摩牛山	臨濟	薩摩龍源寺	天文十、二、九	—
二二〇一	宗誾	少傳	美濃	曹洞	常陸多寶院	天文十、十、三	—
二二〇一	良筠	節菴	武藏足立	曹洞	武藏青松寺	天文十、十一、廿三	八四
二二〇一	惟俊	模外	—	曹洞	三河龍梅院	天文十、十一、卅	—
二二〇一	善叢	茂彥	—	臨濟	山城東福寺	天文十、十二、十四	—
二二〇一	玄輔	明室	—	曹洞	常陸多寶寺	—	—
二二〇一	壽曹	鑑泉	—	曹洞	上總東雲寺	—	—
二二〇一	瑞禎	祥山	—	曹洞	常陸正法寺	—	—
二二〇一	玄顯	玉淵	—	臨濟	美濃東光寺	—	—
二二〇二	周陽	青巖	—	曹洞	武藏吉祥寺	天文十一、七、十八	—
二二〇二	玄訥	景堂	山城	臨濟	山城妙心寺	天文十一、十二、廿一	—
二二〇二	禪茂	南英	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二〇二	宗彭	州菴	—	曹洞	奧州峰全院	—	—
二二〇三	宗桂	千林	—	臨濟	山城大德寺	天文十二、三、十五	六八
二二〇三	尊海		—	眞言	山城仁和寺	天文十二、十一、四	七三
二二〇三	兼緣	蓮悟	—	眞	山城本泉寺	天文十二、—、—	七六
二二〇四	良懿	和南	—	淨土	磐城專稱寺	天文十三、七、十三	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二〇四	榮祐 受天	甲斐山梨	曹洞	安房長安寺	天文十三、十一、六	八一
二二〇四	呑達 眞然	奧州	淨土	奧州淨國寺	—	—
二二〇五	揚富 春岡	—	曹洞	肥前天祐寺	天文十四、九、八	六六
二二〇五	淳甫 大尖	加賀	曹洞	肥前天祐寺	—	—
二二〇六	慈芳 柱巖	—	曹洞	加賀玉龍寺	天文十五、八、廿五	—
二二〇七	瑞麗 奇伯	肥前	曹洞	長門大寧寺	天文十六、七、七	八五
二二〇七	文濟 以船	武藏豐島	曹洞	武藏寶光寺	天文十六、九、十	九一
二二〇七	傳譽	—	淨土	山城知恩寺	—	—
二二〇八	與林 梅叢	遠江飯田	曹洞	近江洞壽寺	天文十七、正、廿三	七〇
二二〇八	宗亘 古嶽	近江蒲生	臨濟	山城大德寺	天文十七、六、廿四	八四
二二〇八	永扶 助省	豐前	曹洞	長門興國寺	天文十七、十、廿六	—
二二〇八	文忠 恕居	—	曹洞	薩摩福昌寺	天文十七、十一、—	—
二二〇九	崇泉 亨仲	—	臨濟	山城妙心寺	天文十八、四、五	—
二二〇九	宗休 大休	—	臨濟	山城妙心寺	天文十八、七、廿四	八二
二二〇九	存牛 超譽	—	淨土	山城知恩院	天文十八、十二、廿	—
二二〇九	宗瑞 葉南	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二〇九	通川 東峯	出羽	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二二〇九	崇透 濟閣	—	臨濟	尾張瑞泉寺	—	—
二二一〇	日陽 中道院	—	日蓮	武藏本門寺	天文十九、三、十五	五五
二二一〇	日純 惠眼院	—	日蓮	武藏本門寺	天文十九、三、廿一	六九
二二一〇	省賀 慶香	尾張	曹洞	丹波圓通寺	天文十九、四、五	—
二二一〇	兼舍 蓮淳	—	眞	河內顯證寺	天文十九、八、十九	八一
二二一〇	日海尼 淨心院	相模小田原	日蓮	武藏淨心寺	天文十九、九、十四	—
二二一〇	日覺 智秀	尾張	日蓮	山城本成寺	天文十九、十一、—	六五
二二一一	周仰 親譽	武藏世田ヶ谷	淨土	武藏增上寺	天文廿、三、十九	—
二二一一	宗歎 天啓	越前	臨濟	山城大德寺	天文廿、四、廿八	六六
二二一一	永超	京師	法相	大和齊恩寺	天文廿、八、十	八一
二二一一	宗韓 泰秀	—	臨濟	山城妙心寺	天文廿、十一、十五	—
二二一一	祖巖 義雲	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一一	珠善 仁甫	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一二	貞安 忍譽	—	淨土	武藏相即寺	天文廿一、四、十九	—
二二一二	宗佺 松裔	相模糟谷	臨濟	山城大德寺	天文廿一、五、十四	六一
二二一二	慶照 蓮秀	—	眞	山城興正寺	天文廿一、七、十	七三
二二一二	日廣	遠江	日蓮	山城妙顯寺	天文廿一、八、廿五	四八
二二一二	慶浚 明叔	—	臨濟	山城妙心寺	天文廿一、八、廿七	—
二二一三	等惟 玉芝	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一三	祖鑑 天室	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一三	瑞奎 文益	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一三	瑞建 立叔	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一三	日助 蓮光院	—	日蓮	山城本國寺	天文廿二、七、十四	—
二二一四	稱念 吟應	江戶	淨土	山城一心院	天文廿三、七、十九	四二
二二一四	光教 證如	—	眞	山城本願寺	天文廿三、八、十三	三九
二二一四	一傳 念譽	—	淨土	武藏大德寺	—	—
二二一四	榮欣 亘室	—	曹洞	下總乘國寺	—	—
二二一五	正淳 虎溪	—	曹洞	加賀大乘寺	弘治元、二、二	—
二二一五	鏤海	山城	戒律	山城善能寺	弘治元、四、十二	—
二二一五	玄玻 玲巖	—	曹洞	肥前高傳寺	弘治元、五、廿三	—
二二一五	圭頓 悟宗	肥後	曹洞	肥前妙雲寺	弘治元、八、十四	八三

二二一五	總	菊 秋山	—	曹洞	伯耆觀音寺	弘治元、十、七	—
二二一五	崇	孚 太原	—	臨濟	山城妙心寺	弘治元、十、十	—
二二一五	德	陽 泰翁	美作	曹洞	能登總持寺	弘治元、十一、廿	七五
二二一五	周°	良° 策彦	丹波	臨濟	山城天龍寺	—	—
二二一五	治部卿		—	佛工	—	—	—
二二一五	玄	洪 景筠	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二一六	宗	忻 喜山	—	曹洞	伊豫安樂寺	弘治二、二、廿九	—
二二一七	祖	洞 師譽	丹波	淨土	下野弘經寺	弘治三、正、廿五	
二二一七	宗	九 毅誾	近江石山	臨濟	山城大德寺	弘治三、四、十三	七七
二二一七	宗°	友 貝山	下總結城	曹洞	下野洞雲寺	弘治三、五、九	—
二二一七	宏°	善 舜叔	—	淨土	山城光明寺	弘治三、七、廿三	八三
二二一七	祖	白 宣譽	—	淨土	下野弘經寺	—	—
二二一七	還	魯 堯譽	—	淨土	下野弘經寺	—	—
二二一七	善	悅 見譽	筑紫	淨土	下野弘經寺	—	—
二二一八	祖	貞 定譽	—	淨土	越後淨泉寺	永祿元、六、一	—
二二一八	芳	瞰 朝山	肥前島原	曹洞	能登總持寺	永祿元、四、一	八四
二二一八	永	徹 玄譽	—	淨土	和泉專修寺	永祿元、五、廿七	—
二二一八	梵	貞 吉州	—	曹洞	安房延命寺	永祿元、六、廿	—
二二一八	信°	譽°	—	淨土	三河光明寺	永祿元、十、廿九	—
二二一八	則°	傳°	—	眞言	豐後彌彦山	—	—
二二一九	日	成 大泉房	—	日蓮	佐渡根本寺	永祿二、二、一	—
二二一九	日	鏡 善學院	—	日蓮	甲斐身延山	永祿二、四、廿五	五三
二二一九	龍	溪 喜冠	—	曹洞	薩摩福昌寺	—	—
二二一九	登	譽	—	淨土	三河大樹寺	—	—
二二二〇	宗	碩 大室	但馬	臨濟	山城大德寺	永祿三、正、廿二	—
二二二〇	性	宙 虛空	播磨	曹洞	丹波圓通寺	永祿三、四、廿九	—
二二二一	宗	條 玉堂	美濃	臨濟	山城大德寺	永祿四、正、十七	八二
二二二一	宗	顯 江隱	越前	臨濟	山城大德寺	永祿四、二、六	五六
二二二一	日	現 佛壽院	—	日蓮	武藏本門寺	永祿四、七、廿一	六六
二二二一	舜	玉 老園	伊豆	曹洞	美濃安住寺	永祿四、八、十一	八五
二二二一	禪	愉 龜年	京師	臨濟	山城妙心寺	永祿四、十二、十三	—
二二二一	日	饒 觀照院	尾張	日蓮	山城妙覺寺	永祿四、——	—
二二二二	宗	謂 直指	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二二二	永	瑞 人雲	—	曹洞	尾張萬松寺	永祿五、四、廿二	八一
二二二二	宗	胄 清菴	攝津	臨濟	山城大德寺	永祿五、七、卅	—
二二二二	天	啓 泉譽	陸奥	淨土	武藏增上寺	永祿五、八、十八	—
二二二二	源	雅	—	眞言	山城東寺	永祿五、十、八	七二
二二二二	珠	榮 江南	—	臨濟	山城妙心寺	永祿五、[illegible]、廿九	—
二二二三	智	短 願故	—	淨土	駿河華陽院	永祿六、三、十五	—
二二二三	清	麟 園芝	近江	曹洞	丹波圓通寺	永祿六、四、十	—
二二二三	宗	鑑 龜洋	豐後	曹洞	長門大寧寺	永祿六、八、十九	七七
二二二三	寛	欽	京師	眞言	山城勸修寺	永祿六、十一、十一	五〇
二二二三	能	信 方譽	—	淨土	山城極樂寺	永祿六、十一、廿九	—
二二二三	文	慶 恒譽	—	淨土	駿河華陽院	—	—
二二二四	良	授	岩代	淨土	岩代稱名寺	永祿七、二、八	—
二二二四	禪	芳 然譽	—	淨土	武藏願行寺	永祿七、二、廿六	—
二二二四	文	賢 奈菴	—	曹洞	伊豫安樂寺	永祿七、五、十八	—
二二二四	光	晴 常如	—	眞	山城本願寺	永祿七、五、廿二	五四
二二二四	顯	貞	—	淨土	山城禪林寺	永祿七、七、十三	—
二二二四	慶	珠 巽雪	壹岐	曹洞	長門大寧寺	永祿七、十、十七	六三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二二四	宗俶（春林）	丹後	臨濟	山城大德寺	永祿七、十二、廿八	七七
二二二五	道進（傑山）	—	曹洞	能登總持寺	永祿八、五、八	八六
二二二五	宗的（大透）	淡路	曹洞	播磨興雲寺	永祿八、五、十八	—
二二二五	臨龍（白山）	—	曹洞	越前永平寺	永祿八、七、八	—
二二二五	宗菊（南岑）	京師	臨濟	山城大德寺	—、—、六、廿四	—
二二二六	宗慶（雲叔）	京師	臨濟	山城大德寺	永祿九、正、九	七三
二二二六	玄朔（光淑）	相模鎌倉	曹洞	安房長安寺	永祿九、八、八	—
二二二六	易學	—	淨土	伊勢欣淨寺	永祿九、十、八	—
二二二六	亮慧	—	眞言	山城東寺	永祿九、十一、十八	七七
二二二六	仝播（天藝）	—	曹洞	安房長安寺	—	—
二二二六	宗傳（總翁）	奥州	曹洞	安房龍江寺	—	—
二二二六	神龍（大雲）	—	曹洞	安房長安寺	—	—
二二二六	麟壽（衞山）	安房	曹洞	安房長安寺	—	—
二二二六	田悅（長巖）	—	曹洞	安房長安寺	—	—
二二二六	田承（嫡宗）	—	曹洞	安房長安寺	—	—
二二二七	良然（教隨）	上總	淨土	奥州來迎寺	永祿十、二、十	—
二二二七	堯賢（經光）	—	眞	山城佛光寺	永祿十、八、廿四	六四
二二二八	宗套（大休）	京師	臨濟	山城大德寺	永祿十一、正、廿七	八九
二二二八	智丘（隆室）	周防	曹洞	肥前龍泰寺	永祿十一、三、廿五	—
二二二八	慶堯（證秀）	—	眞	山城興正寺	永祿十一、三、十四	三四
二二二八	曉把（信學）	總州	淨土	山城淨國寺	永祿十一、十、五	—
二二二八	良潛（受徹）	—	淨土	磐城專稱寺	永祿十一、十一、廿六	—
二二二八	宗忻（笑嶺）	伊豫	臨濟	山城大德寺	永祿十一、十一、廿九	七九
二二二九	宗川（大歇）	美濃	臨濟	山城大德寺	永祿十二、四、廿一	七三
二二二九	崇春（天澤）	—	臨濟	日向延命寺	永祿十二、—、—	六一
二二三〇	秀繁（茂林）	—	曹洞	伊勢安樂寺	元龜元、正、八	—
二二三〇	宗謙	越後	曹洞	武藏永林寺	元龜元、二、十	—
二二三〇	三休（定譽）	石見	淨土	山城淨華院	元龜元、四、廿七	—
二二三〇	兼順（顯哲）	—	眞	加賀光教寺	元龜元、十、廿四	七三
二二三〇	融供（養叔）	肥前	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二二三〇	忍性	—	臨濟	土佐汲江寺	—	—
二二三〇	融察（案考）	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二二三一	貞鈍（隣學）	—	淨土	三河大樹寺	元龜二、七、八	—
二二三一	眞滴（釋院源）	—	日蓮	山城本誓寺	元龜二、九、廿八	五四
二二三二	宗鳳（在天）	尾張	曹洞	武藏大善寺	元龜三、正、廿三	八三
二二三三	慈澄	—	眞	近江錦織寺	天正元、二、十	八五
二二三三	日叙（寶藏院）	—	日蓮	甲斐身延山	天正元、四、十一	—
二二三三	深應	—	眞言	山城醍醐山	天正元、七、七	八五
二二三三	願西	—	法相	大和興福寺	天正元、七、十五	七〇
二二三三	眞哲（陝徹）	奥州磐前	淨土	奥州安養寺	天正元、七、—	—
二二三三	永恩（春澤）	—	臨濟	山城建仁寺	天正元、八、十六	—
二二三三	集堯（仁恕）	信濃	臨濟	山城相國寺	—	—
二二三三	玄譽	—	淨土	山城平等院	—	—
二二三三	良應（文翁）	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二二三三	良興（炎雪）	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二二三三	良玉（祖關）	—	淨土	下野圓通寺	—	—
二二三四	永歳（萬休）	三河羽多	曹洞	三河仝久寺	天正二、四、廿八	—
二二三四	存貞（感譽）	相模小田原	淨土	武藏蓮馨寺	天正二、五、十八	五三

二二三四	天室	登譽	相模小田原	淨土	山城一心院	天正二、六、十七	—
二二三四	○道譽		大和日根	淨土	下總大巖寺	天正二、九、七	—
二二三四	貞○把	道譽	和泉鳥取庄	淨土	武藏增上寺	天正二、十二、七	六〇
二二三四	感貞	純譽	—	淨土	武藏阿彌陀寺	天正二、—	—
二二三四	紹薰	督宗	山城	臨濟	山城大德寺	天正三、七、十一	六三
二二三五	日○諦	常光院	—	日蓮	和泉堺某寺	天正三、八、廿一	—
二二三六	殘夢	日白	—	臨濟	岩代實相寺	天正四、三、廿九	一三九
二二三六	祐補	雲窓	能登酒井	曹洞	加賀大乘寺	天正四、四、十四	—
二二三六	萬休	稱譽	相模鎌倉	淨土	近江花階寺	天正四、六、六	—
二二三六	宗順	和溪	但馬	臨濟	山城大德寺	天正四、十、廿一	八一
二二三七	存榮	繁興	對馬	曹洞	長門大寧寺	天正五、五、十五	六四
二二三七	良冏	長譽	—	淨土	甲斐阿彌陀寺	天正五、三、五	—
二二三七	宗松	萬仞	美濃	臨濟	山城大德寺	天正五、六、二	—
二二三七	日○秀	玄紹	—	眞言	紀伊大傳法院	天正五、十一、十二	八三
二二三七	宗昇	天眞	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二三八	日敎		京師	日蓮	山城妙顯寺	天正六、七、廿四	二三
二二三八	三譽		伊勢山田	淨土	伊勢善稱寺	天正六、八、八	—
二二三八	瑞○興	玉崗	—	臨濟	—	天正六、八、十	七九
二二三八	日○整	琳光	下總	日蓮	甲斐身延山	天正六、八、廿	六六
二二三九	宗慧	泰室	—	曹洞	越後林泉寺	天正七、正、四	—
二二三九	頁守	觀茂	奧州岩前	淨土	奧州九品寺	天正七、正、十二	—
二二三九	日○門	普傳房	—	日蓮	山城頂妙寺	天正七、五、廿七	—
二二三九	日○詮	山光院	—	日蓮	和泉堺某寺	天正七、七、廿五	—
二二三九	存守	大龍	—	曹洞	伊豫安樂寺	天正七、十二、五	—
二二四〇	總房	人宰	—	曹洞	越前心月寺	—	—
二二四〇	總藝	才翁	—	曹洞	越前心月寺	—	—
二二四一	球白	圭[illegible]	—	曹洞	越前西福寺	—	—
二二四二	紹喜	快川	美濃	臨濟	甲斐慧林寺	天正十、四、三	—
二二四二	開秀	三譽	—	淨土	武藏報土院	天正十、十、十五	—
二二二四	瑞昜	末宗	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二四二	玄廣	大雲	肥後	曹洞	肥後法泉寺	—	—
二二四二	廣端	龍伯	肥後八代	曹洞	肥後大慈寺	—	—
二二四二	廣椿		肥後宇土	曹洞	肥後大慈寺	—	—
二二四三	了感	日譽	—	淨土	常陸常福寺	天正十一、三、廿一	—
二二四三	日栖	中通院	—	日蓮	山城本國寺	天正十一、四、五	—
二二四三	鱗香	梅叟	—	曹洞	武藏金澤寺	天正十一、五、廿九	—
二二四三	良與	埋順	—	淨土	磐城專稱寺	天正十一、八、廿九	—
二二四三	妙尭尼		京師	日蓮	山城本蓮寺	天正十一、十一、十三	—
二二四三	乘○了	寶悟	—	眞	加賀願德寺	天正十一、十一、廿五	九二
二二四三	良攸	興順	—	淨土	奧州淨照寺	—	—
二二四四	守中	代賢	薩摩	曹洞	日向法華嶽	天正十二、三、十五	七〇
二二四四	禪睦	天室	上總長南	曹洞	武藏龍穩寺	天正十二、八、二	—
二二四四	賴玄	定識	—	眞言	紀伊大傳法院	天正十二、八、十二	七九
二二四四	圓○也	雲碧	筑後柳川	淨土	武藏增上寺	天正十二、九、五	—
二二四四	生西	秀譽	—	淨土	山城極樂寺	天正十二、九、廿九	—
二二四四	圓譽		相模	淨土	山城正法寺	天正十二、十一、六	八一
二二四四	日精	三光院	—	日蓮	相模宗延寺	天正十二、十一、六	—
二二四四	任助		京師	眞言	山城仁和寺	天正十二、十二、廿九	六二
二二四四	東播	布州	信濃	曹洞	武藏龍穩寺	—	八一
二二四四	良罷	善菴	武藏比企	曹洞	武藏大中院	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二四四	正曇 天海	肥後	曹洞	薩摩福昌寺	—	—
二二四四	桂逸 格翁	—	曹洞	越前能仁寺	—	—
二二四五	存雄 獨峯	駿河	曹洞	駿河多寶寺	天正十三、正、七	‥
二二四五	玄長 久室	相模愛甲	曹洞	武藏正覺寺	天正十三、六、廿三	—
二二四五	眞○智	‥	眞	伊勢專修寺	天正十三、七、四	八三
二二四六	玉念 靈譽	上野新田	淨土	近江正福寺	天正十四、正、十一	—
二二四六	洞庫 信譽	伊勢	淨土	和泉遍照寺	天正十四、二、十八	‥
二二四六	瑞仙 碧山	—	曹洞	武藏宗關寺	天正十四、二、廿一	—
二二四六	存○麟 玉田	信濃	曹洞	武藏皎月院	天正十四、四、廿六	
二二四六	甫○叔	山城醍醐	淨土	山城融雲寺	天正十四、六、二	五八
二二四六	玄津 月航	京師	臨濟	山城妙心寺	天正十四、七、十一	九〇餘
二二四六	存則 應譽	三河	淨土	近江西願寺	天正十四、八、廿	‥
二二四六	仝祝 北高	出羽	曹洞	信濃龍雲寺	天正十四、十二、二	八〇
二二四六	宗佐 材岳	—	臨濟	山城妙心寺	天正十四、—、—	—
二二四六	崇睦 天淳	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二四六	壽仝 澄空	—	淨土	山城禪林寺	—	—
二二四七	智察 以安	美濃細目	臨濟	美濃大仙寺	天正十五、二、廿六	七四
二二四七	宗恩 澤彥	‥	臨濟	山城妙心寺	天正十五、十、二	‥
二二四七	亮叡	—	淨土	山城淨華院	天正十五、十二、十四	‥
二二四八	玉泉 空譽	—	淨土	常陸常福寺	天正十六、二、十七	—
二二四八	泉犇 象耳	駿河	戒律	大和傳香寺	天正十六、五、十八	七一
二二四八	呑補 天顯	—	曹洞	上野龍文寺	天正十六、十、十六	八〇
二二四八	秀關 白菴	—	曹洞	下野大中寺	—	‥
二二四八	宗淳 朴堂	‥	曹洞	下野大中寺	—	‥

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二四九	良縁 含益	奥州鹿角	淨土	奥州圓樹寺	天平十七、二、廿八	—
二二四九	宗悅 怡雲	伯耆	臨濟	山城大德寺	天正十七、八、八	七三
二二四九	俊箇 一宇	相模	曹洞	相模總世寺	—	—
二二五〇	良穩 淵龍	武藏	淨土	出羽本覺寺	天正十八、三、廿五	‥
二二五〇	宗普 明叟	但馬	臨濟	山城大德寺	天正十八、四、十五	七五
二二五〇	等○膳 鳳山	伊勢篠島	曹洞	遠江可睡齋	天正十八、五、廿一	‥
二二五〇	如淵 眞西堂	土佐	臨濟	山城東福寺	天正十八、十、—	—
二二五一	宗罕 希叟	武藏	臨濟	山城大德寺	—	—
二二五一	瑞雄 威嚴	—	曹洞	常陸芳仝寺	天正十九、正、十三	七八
二二五一	宗瞰 東徭	—	臨濟	山城妙心寺	天正十九、十、五	五七
二二五一	倀因 指橋	甲斐小宮山	曹洞	甲斐景德院	天正十九、十、十五	‥
二二五二	經範	—	眞	山城佛光寺	天正十一、十一、九	三三
二二五一	如珊 九峯	—	曹洞	三河仝久寺	天正十九、十二、廿五	‥
二二五一	亮信	—	天台	近江比叡山	天正十九、—、—	五七
二二五一	紹立 雪叟	—	臨濟	山城妙心寺	—	‥
二二五二	聖信	—	眞言	山城勸修寺	文祿元、三、八	四九
二二五二	清嚴 總譽	相模小田原	淨土	上野大信寺	文祿元、六、廿七	‥
二二五二	日典	—	日蓮	山城妙覺寺	文祿元、七、廿	—
二二五二	日○新 寂慧	甲斐今諏訪	日蓮	甲斐身延山	文祿元、八、十一	五八
二二五二	堯雅	—	眞言	山城東寺	文祿元、十、八	八二
二二五二	仝○槎 淨翁	遠江	曹洞	三河仝久寺	文祿元、十、八	—
二二五二	光○佐 顯如	京師	眞	山城本願寺	文祿元、十一、廿四	五〇
二二五二	良雄 舜翁	岩城	淨土	羽前崇念寺	—	—
二二五三	雲潮 虎角	甲斐甲府	淨土	下野大巖寺	文祿二、二、四	五五

二二五三	源	立（道殘）	武藏	淨土	山城淨華院	文祿二、九、廿三	—
二二五三	俊	光（廓學）	—	淨土	越後三光寺	文祿二、—	—
二二五三	潮	心（西學）	下總結城	淨土	下總稱念寺	—	—
二二五三	禪	牛（園學）	—	淨土	攝津楞嚴院	—	—
二二五四	宗	杲（東谷）	—	臨濟	駿河清見寺	文祿三、正、十五	—
二二五四	良	廣	—	淨土	奥州德林寺	文祿三、二、四	—
二二五四	道	門（龍岳）	—	曹洞	出雲桐岳寺	文祿三、三、十九	八一
二二五四	輪	智（釋學）	—	淨土	常陸常福寺	文祿三、十一、八	—
二二五四	元	伯（岐秀）	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二二五五	雅	嚴	—	眞言	山城醍醐山	文祿四、三、廿	四八
二二五五	瀨	龍（三嶺）	近江	曹洞	遠江西來寺	文祿四、五、廿七	七九
二二五五	○日	○生（慧教）	播磨	日蓮	上總飯高談林	文祿四、七、廿四	四三
二二五五	宗	洞（仙岳）	和泉	臨濟	山城大德寺	文祿四、十、二	五一
二二五六	敬	宗	—	天台	近江園城寺	慶長元、三、十一	九三
二二五六	俊	鷲（瑞翁）	備中	曹洞	武藏青松寺	慶長元、九、廿九	—
二二五六	日	養（了覺院）	—	日蓮	越中法光寺	慶長元、九、十五	八一
二二五六	全	宗（德運院）	近江甲賀	天台	近江比叡山	慶長元、十二、十	六九
二二五六	禪	易（一桂）	三河	曹洞	遠江可睡齋	—	—
二二五六	禮	三（南宗）	—	曹洞	豐前安樂寺	—	—
二二五六	弘	譽	—	淨土	攝津最上寺	—	—
二二五六	懷	山	—	淨土	伊勢天然寺	—	—
二二五六	尊	海（圓頓）	—	天台	武藏喜多院	—	—
二二五六	日	孟（秀典）	—	日蓮	山城秀典寺	—	—
二二五六	日	淳	加賀	日蓮	加賀經王寺	—	—
二二五六	法	譽	—	淨土	山城東光院	—	—
二二五七	○宗	○陳（古渓）	越前	臨濟	山城大德寺	慶長二、正、十七	六六
二二五七	智	眼（讀學）	—	淨土	遠江心造寺	慶長二、三、廿七	—
二二五七	○英	○朝（東陽）	美濃加茂	臨濟	山城妙心寺	慶長二、五、廿一	七八
二二五七	明	言（宜安）	肥後高來	曹洞	日向江東寺	慶長二、七、三	—
二二五七	見	靈（信學）	—	淨土	常陸道林寺	慶長二、八、廿八	—
二二五八	○日	○陽（本覺院）	—	日蓮	尾張法華寺	慶長三、四、六	—
二二五八	日	悍（佛乘院）	備前福田	日蓮	武藏本門寺	慶長三、七、六	四九
二二五八	西	念（稱學）	—	淨土	土佐稱名寺	慶長三、七、廿三	—
二二五八	○秀	○存	山城	天台	近江比叡山	慶長三、八、十	—
二二五八	○日	○珖（佛心院）	和泉堺	日蓮	山城妙國寺	慶長三、八、廿七	六七
二二五八	○圭	○賢（見龍）	武藏多摩	眞言	大和長谷寺	慶長三、九、廿	七四
二二五八	良	本（利白）	—	淨土	陸前長龍寺	慶長三、九、—	—
二二五八	宗	甫（浩學）	—	淨土	山城知恩院	慶長三、十一、十七	—
二二五九	佐	超（顯尊）	—	眞	山城興正寺	慶長四、三、三	三〇
二二五九	○日	○賢（純性）	伯耆	日蓮	甲斐身延寺	慶長四、三、十三	四一
二二六〇	良	秀（慧玄）	—	淨土	磐城專稱寺	慶長五、五、五	—
二二六〇	伊	天（頭室）	遠江木原莊	曹洞	武藏大松寺	慶長五、七、一	七八
二二六七	○惠	○瓊（瑤甫）	安藝沼田	臨濟	安藝安國寺	慶長五、十、一	—
二二六〇	融	貞（久學）	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二二六〇	融	菊（東甫）	—	曹洞	肥前圓通寺	—	—
二二六一	來	譽（極阿）	—	淨土	山城永養寺	慶長六、二、五	—
二二六一	頁	拾（受得）	—	淨土	磐城專稱寺	慶長六、二、廿六	—
二二六一	宗	仲（薰甫）	播磨	臨濟	山城大德寺	慶長六、四、廿六	五三
二二六一	○日	○閑（仙壽院）	—	日蓮	甲斐積善房	慶長六、七、廿四	九八
二二六一	宗	賢（先甫）	京師	臨濟	山城大德寺	慶長六、八、廿五	七五

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二六一	日道（法雲院）	—	日蓮	甲斐身延山	慶長六、十二、十二	五〇
二二六二	○宗震（東漸）	美濃土田	臨濟	山城妙心寺	慶長七、三、廿七	七一
二二六二	誓般（教譽）	—	淨土	武藏月宗寺	慶長七、六、廿	—
二二六二	心阿（英譽）	山城伏見	淨土	武藏增上寺	慶長七、九、廿二	—
二二六二	亮淳	下總葛飾	眞言	山城仁和寺	慶長七、十、四	六六
二二六二	是瞰（朝谷）	—	曹洞	武藏龍穩寺	慶長七、十一、廿四	—
二二六三	珠門（關翁）	筑前穗波	曹洞	長門大寧寺	慶長八、二、十五	八三
二二六三	善慶（玄譽）	—	淨土	總州光岳寺	慶長八、三、八	—
二二六三	○日尊（文甫）	—	日蓮	武藏本門寺	慶長八、三、十六	—
二二六三	宗龍（眞翁）	加賀	曹洞	伊勢花林寺	慶長八、四、七	—
二二六三	誓岩（演譽）	三河	淨土	三河松應寺	慶長八、七、十四	—
二二六三	宗偉（雲英）	和泉	臨濟	山城大德寺	慶長八、十、四	四四
二二六三	舜利（古閘）	美濃土岐	曹洞	甲斐廣嚴寺	慶長八、十、廿一	八〇
二二六三	○日邵（壽政）	京師	日蓮	山城本禪寺	—	—
二二六三	日忠（唯心院）	—	日蓮	豐前勝立寺	—	—
二二六四	殘應（學譽）	丹波	淨土	武藏源壽院	慶長九、正、四	—
二二六四	良安（信譽）	—	淨土	山城淨華院	慶長九、三、九	—
二二六四	○專學（宮賢）	和泉大鳥	眞言	大和長谷寺	慶長九、五、五	七四
二二六四	○玄興（南化）	美濃	臨濟	山城妙心寺	慶長九、五、廿	六七
二二六四	快運（照譽）	—	淨土	下野專念寺	慶長九、七、四	—
二二六四	○日要（顯是院）	—	日蓮	甲斐身延山	慶長九、七、五	四八
二二六四	日堯（淳學）	尾張	日蓮	山城妙顯寺	慶長九、八、七	六三
二二六四	宗琇（玉仲）	日向櫛間	臨濟	山城大德寺	慶長九、十一、十六	八三
二二六四	珠養（安叟）	長門	曹洞	長門大寧寺	慶長九、十二、—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二六四	晋海（守理）	京師	眞言	山城法身院	—	—
二二六五	存世（光譽）	—	淨土	下總東國寺	慶長十、正、廿七	—
二二六五	永廓（大室）	—	曹洞	伊豫安樂寺	慶長十、二、十九	—
二二六五	稱往（白譽）	下野宇都宮	淨土	相模稱往院	慶長十、五、廿五	—
二二六五	日圓（慧雲）	下總飯高	日蓮	下野香取寺	慶長十、六、四	三九
二二六五	宗哲（明叔）	越前	臨濟	山城大德寺	慶長十、六、六	七七
二二六五	牛秀（贊譽）	甲斐	淨土	武藏大善寺	慶長十、六、十二	—
二二六五	日治（蓮藏院）	—	日蓮	加賀立像寺	慶長十、八、廿一	—
二二六五	○玄宥（堯性）	下野皆川	眞言	山城智積院	慶長十、十、四	七七
二二六六	貞盛（格外）	—	淨土	陸前大願寺	慶長十一、九、八	—
二二六六	○日祐（慧憧）	—	日蓮	下總小西談林	慶長十一、十、六	—
二二六七	良薫（白玄）	—	淨土	常陸常林寺	慶長十一、—	—
二二六七	○胤榮（覺禪房）	—	法相	大和寶藏寺	慶長十二、正、二	八七
二二六七	妙法尼（了秀院）	—	日蓮	—	慶長十二、八、十七	六三
二二六七	○承兌（西笑）	—	臨濟	山城南禪寺	慶長十二、十二、廿七	六〇
二二六八	明韶（舜甫）	—	戒律	山城來迎院	慶長十三、正、一	—
二二六八	洞壽（舜國）	三河設樂	曹洞	越前孝顯院	慶長十三、三、廿八	—
二二六八	然譽	—	淨土	因幡大善寺	慶長十三、八、四	—
二二六八	全素（大麟）	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	慶長十三、九、一	—
二二六八	良念（岌朔）	奧州盤前	淨土	奧州圓城寺	慶長十三、—	—
二二六九	堯慧	京師	眞	伊勢專修寺	慶長十四、正、廿一	八三
二二六九	岌往	—	淨土	甲斐飯命院	慶長十四、三、廿三	—
二二六九	○性盛（賴心）	尾張中島	眞言	大和長谷寺	慶長十四、七、十六	七三
二二六九	○日源	越前今立	日蓮	筑後福王寺	慶長十四、十、十四	—

二二六九	日淵		—	日蓮	山城妙滿寺	慶長十四、—、—	—
二二七〇	聖傳	奉譽	—	淨土	相模光明寺	慶長十五、正、十八	—
二二七〇	良憲	了圓	奧州楢葉	淨土	下野圓通寺	慶長十五、二、廿	—
二二七〇	慧等	覺翁	尾張	曹洞	加賀金剛寺	慶長十五、五、十八	—
二二七〇	明忍	俊正	京師	戒律	山城槇尾山	慶長十五、六、七	三五
二二七〇	豪盛		—	天台	近江比叡山	慶長十五、六、十九	八九
二二七〇	賴慶	有賢房	—	眞言	紀伊高野山	慶長十五、十、十三	四九
二二七〇	典宗	念譽	攝津	淨土	攝津九品寺	慶長十五、十一、廿五	—
二二七〇	宗唐	盛叔	明溫州	臨濟	山城大德寺	慶長十五、十一、廿七	六四
二二七〇	東胤	諦譽	武藏品川	淨土	武藏願行寺	慶長十五、十二、廿六	—
二二七一	宗闇	存屋	山城	臨濟	山城大德寺	慶長十六、二、九	八三
二二七一	利覺	本譽	武藏	淨土	武藏一行院	慶長十六、三、五	—
二二七一	宗乙	虎哉	美濃	臨濟	仙臺覺範寺	慶長十六、五、八	八二
二二七一	日長	圓覺院	甲斐巨摩	日蓮	伯耆感應寺	慶長十六、五、十三	九〇餘
二二七一	慧頓	勸譽	甲斐	淨土	信濃芳泉寺	慶長十六、五、廿四	—
二二七一	親譽		—	淨土	播磨心光寺	慶長十六、六、—	—
二二七一	理慶尼		—	眞言	甲斐大善寺	慶長十六、八、—	—
二二七一	日衍	春星	備前	日蓮	山城妙顯寺	慶長十六、十、十六	五三
二二七一	寥海	慧雲	和泉	戒律	山城槇尾山	慶長十六、—、—	—
二二七一	慧流	良譽	信濃佐久	淨土	信濃芳泉寺	—	—
二二七二	宗鐵	鍊寂	奧州	臨濟	山城大德寺	慶長十七、二、十五	八一
二二七二	勢譽	宗淳	和泉	眞言	紀伊高野山	慶長十七、三、廿三	—
二二七二	素覺	光譽	大和奈良	淨土	河內一乘寺	慶長十七、三、廿五	—
二二七二	紹滴	一凍	和泉	臨濟	山城大德寺	慶長十七、四、廿五	七四
二二七二	元信	二要	肥前小城	臨濟	山城圓光寺	慶長十七、五、廿	六五

二二七二	良杲	疊岡	—	淨土	磐城專稱寺	慶長十七、六、一	—
二二七二	日產	良應院	紀伊	日蓮	紀伊蓮心寺	慶長十七、九、九	四五
二二七二	重慶		伊賀	淨土	大和觀音寺	慶長十七、十、十五	六〇
二二七二	祐宜	長善	下野西方	眞言	山城知積院	慶長十七、十一、十一	七七
二二七三	彌誓		美濃	淨土	山城古知谷	慶長十八、五、廿五	四一
二二七三	紹珠	玉甫	京師	臨濟	山城大德寺	慶長十八、六、十八	六八
二二七三	宗玖	瑤林	和泉堺	臨濟	山城大德寺	慶長十八、七、四	五六
二二七三	建梁	棟室	伯耆	曹洞	伯耆總泉寺	慶長十八、九、十五	七九
二二七三	周公	叔譽	—	淨土	下總慶勝寺	—	—
二二七四	春譽		佐渡羽黑	淨土	佐渡極樂寺	慶長十九、正、十二	—
二二七四	良賀	大鏡	—	曹洞	武藏永源寺	慶長十九、正、廿八	—
二二七四	日性	圓智院	—	日蓮	山城要法寺	慶長十九、二、廿六	—
二二七四	林貞	善譽	—	淨土	武藏壽松院	慶長十九、六、五	—
二二七四	宗程	萬江	山城	臨濟	山城大德寺	慶長十九、七、八	七三
二二七四	良心	閑室	奧州行方	淨土	奧州天德寺	慶長十九、七、—	—
二二七四	存易	以八	岩代	淨土	安藝光明院	慶長十九、九、十四	七六
二二七四	光壽	教如	攝津大坂	眞	山城本願寺	慶長十九、十、五	五七
二二七四	源哲	宗譽	—	淨土	武藏眞福寺	慶長十九、十一、三	—
二二七四	宗章	龍室	信濃	臨濟	山城大德寺	慶長十九、十一、十四	七六
二二七五	慶舜	南嶺	—	曹洞	薩摩福昌寺	元和元、正、十四	—
二二七五	呂隆	紹屋	—	曹洞	能登安樂寺	元和元、四、一	—
二二七五	日祝	慧眼院	—	日蓮	甲斐身延山	元和元、五、七	四九
二二七五	學榮	顏譽	—	淨土	山城十榮寺	元和元、六、十一	—
二二七五	貞安	聖譽	相模	淨土	山城大雲院	元和元、七、十七	—
二二七五	存雄	盛譽	—	淨土	越前大法寺	元和元、九、十三	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二七五	良補（淨譽）	岩代	淨土	奧州專光寺	元和元、九、―	―
二二七五	豐嶽（旭譽）	相模三浦	淨土	但馬西林寺	元和元、十一、十九	―
二二七五	授譽	―	淨土	總州淨專寺	元和元、十二、三	―
二二七五	定○西○	石見	淨土	武藏靈巖寺	―	―
二二七五	乘專（清範）	―	眞	越前毫攝寺	―	―
二二七五	尙玄	―	日蓮	能登妙成寺	―	―
二二七五	天室	―	臨濟	土佐雪蹊寺	―	―
二二七五	茇觀（順譽）	―	淨土	尾張春正院	―	―
二二七五	松薫（天南）	遠江	曹洞	武藏大曉寺	―	―
二二七六	良壽（可眞）	奧州	淨土	岩代善性寺	元和二、正、―	―
二二七六	麟達（三了）	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	元和二、二、二	六三
二二七六	文賀（念譽）	―	淨土	武藏本誓寺	元和二、二、十	―
二二七六	雲龍（觀譽）	越後若松	淨土	上野光源寺	元和二、三、十三	―
二二七六	琳達（天永）	伊豆	曹洞	武藏勝光院	元和二、八、十一	八二
二二七六	行阿（嶽譽）	三河	淨土	山城稱念寺	元和二、十二、一	―
二二七六	全貞（深譽）	―	淨土	甲斐西凉寺	元和二、―、―	―
二二七六	大佐（國巖）	遠江川上	曹洞	磐城長源寺	元和二、―、―	―
二二七六	源可（然譽）	―	淨土	相模光明寺	―	―
二二七七	文龍（大雲）	武藏足立	曹洞	武藏妙昌寺	元和三、正、十八	―
二二七七	慶岩（源譽）	肥前鹽田	淨土	常陸大念寺	元和三、正、廿一	六四
二二七七	宗無（清巖）	―	淨土	筑後善導寺	元和三、二、三	―
二二七七	日詔（無問）	―	日蓮	武藏本門寺	元和三、四、十九	四九
二二七七	靈通（堪譽）	―	淨土	伊勢海藏寺	元和三、五、五	―
二二七七	存徹（泉譽）	京師	淨土	攝津金臺寺	元和三、六、九	―

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二七七	日友	上總湯坂	日蓮	武藏本門寺	元和三、六、十四	―
二二七七	日鳳（鷲山院）	越中富山	日蓮	能登妙成寺	元和三、七、廿	―
二二七七	祖的（乘譽）	―	淨土	三河大樹寺	元和三、八、六	―
二二七七	了感	―	淨土	信濃法然寺	元和三、九、三	―
二二七七	不殘（圓譽）	武藏	淨土	武藏勝願寺	元和三、九、三	―
二二七七	長益（大川）	―	曹洞	薩摩福昌寺	元和三、九、廿三	―
二二七七	宗鈍（鐵山）	甲斐上條	臨濟	山城妙心寺	元和三、十、八	八六
二二七七	盛林（琴譽）	伊勢	淨土	伊勢淨閑寺	元和三、十一、廿一	―
二二七七	道○和○（良說）	大坂生玉	融通念佛	攝津大念佛寺	―	―
二二七七	還愚（森譽）	―	淨土	下總淸光寺	―	―
二二七七	滿靈（光譽）	武藏岩付	淨土	武藏廓信寺	―	―
二二七八	梅翁（殘譽）	―	淨土	加賀極樂寺	元和四、二、一	―
二二七八	宥儀（玄音）	常陸水戶	眞言	大和長谷寺	元和四、七、十七	七三
二二七八	良光（牛越）	―	淨土	山城淨華院	元和四、七、廿	―
二二七八	存海	―	眞	山城佛光寺	元和四、八、四	四三
二二七八	人譽	岩代	淨土	總州淨土寺	元和四、八、六	―
二二七八	康○市○（大有）	陸前仙臺	臨濟	陸前東昌寺	元和四、九、十	八四
二二七八	智順（傳譽）	肥後	淨土	對馬海岸寺	元和四、十、二	―
二二七八	源榮（曉譽）	―	淨土	相模大長寺	元和四、十一、十	―
二二七八	一道（眼譽）	武藏	淨土	美作涅槃寺	元和四、十二、十五	―
二二七八	日持（蓮花）	駿河庵原	日蓮	紀伊蓮永寺	―	―
二二七九	聖吟（晃譽）	―	淨土	常陸大念寺	元和五、二、廿一	―
二二七九	日盛（現院）	―	日蓮	武藏瑞輪寺	元和五、三、廿七	五六
二二七九	圓○耳○（虛應）	京師	臨濟	山城興正寺	元和五、四、十九	―

二二七九	日傳 諄山	—	日蓮	武藏善立寺	元和五、四、—	—
二二七九	徐芸 象山	越前	曹洞	加賀桃雲寺	元和五、五、廿四	—
二二七九	存義 當譽	筑後柳川	淨土	武藏正信寺	元和五、七、十六	—
二二七九	嶺胤 貴雲	肥後	曹洞	長門大寧寺	元和五、七、廿五	—
二二七九	堯眞	—	眞	伊勢專修寺	元和五、九、廿	七一
二二七九	休岸 遵譽	大坂	淨土	武藏林泉寺	元和五、—	—
二二七九	空照	越前	眞言	越前波着寺	—	—
二二八〇	宗眼 天叔	丹後	臨濟	山城大德寺	元和六、二、廿一	八九
二二八〇	孤舟 專譽	和泉	淨土	大和西福寺	元和六、二、廿九	—
二二八〇	宗益 孔新	相模	臨濟	山城大德寺	元和六、五、十六	六四
二二八〇	尊照 嵩譽	京師	淨土	山城知恩院	元和六、六、廿五	五九
二二八〇	玄昌 文之	日向福島	臨濟	日向龍源寺	元和六、九、卅	六六
二二八〇	慈昌 源譽	武藏埼玉	淨土	武藏增上寺	元和六、十一、二	七五
二二八〇	日經 常樂院	—	日蓮	山城妙滿寺	元和六、—	—
二二八〇	存保 淨譽	武藏足立	淨土	武藏淨音寺	—	—
二二八〇	開譜 團譽	—	淨土	武藏法源寺	—	—
二二八〇	靈吟 龍譽	—	淨土	武藏呂清寺	—	—
二二八〇	眞聞	明浮梁縣	黃檗	肥前興福寺	—	—
二二八一	康正	—	佛工	—	元和七、正、十	八八
二二八一	蓮隨 空譽	伊勢山田	淨土	駿河淨光院	元和七、二、十四	—
二二八一	清韓 文英	—	臨濟	山城東福寺	元和七、三、廿五	—
二二八一	日秀 純志	甲斐巨摩	日蓮	山城墨染寺	元和七、七、十七	五六
二二八一	泉察 芳譽	—	淨土	武藏西光寺	文和七、八、十一	—
二二八一	良曜	奥州楢葉	淨土	陸前悟眞寺	元和七、九、廿	—
二二八一	宗良 賢谷	土佐	臨濟	山城大德寺	元和七、十、廿五	六五
二二八一	了道 本譽	三河	淨土	攝津養谷寺	元和七、十一、十七	—
二二八一	宗關 門菴	駿河	曹洞	武藏泉岳寺	元和七、十一、廿六	七六
二二八一	仲圓 桃屋	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	—	—
二二八二	伊堯 天室	三河豐河	曹洞	上野天增寺	元和八、正、廿一	—
二二八二	呑宿 寂譽	甲斐甲府	淨土	尾張高岳院	元和八、正、廿三	—
二二八二	昭玄 淮尊	京師	眞	山城興正寺	元和八、四、四	三八
二二八二	宗印 月峯	京師	臨濟	山城大德寺	元和八、四、五	六三
二二八二	良然 夢中	下野眞壁	淨土	岩代阿彌陀寺	元和八、四、十	—
二二八二	牛雄 日譽	—	淨土	近江西蓮寺	元和八、五、五	—
二二八二	日紹 星陽	備前金川	日蓮	山城妙顯寺	元和八、六、廿五	八一
二二八二	緣譽	—	淨土	山城勝念寺	元和八、九、十五	—
二二八二	行意 信譽	—	淨土	山城極樂寺	元和八、十一、十	—
二二八二	露牛 岌譽	武藏	淨土	伊勢天然寺	元和八、十一、—	—
二二八二	日純	—	日蓮	山城妙滿寺	元和八、—	—
二二八三	白道 幡隨	紀伊名草	淨土	武藏幡隨院	元和九、正、五	七〇
二二八三	怨陽 廣山	上野	曹洞	加賀瑞龍寺	元和九、正、十四	—
二二八三	源長 圓譽	下總行德	淨土	上總正源寺	元和九、二、八	—
二二八三	廓傳 見譽	周防山口	淨土	安藝滿岸寺	元和九、三、廿五	—
二二八三	日海 本因坊	京師	日蓮	山城寂光寺	元和九、五、—	—
二二八三	門瑞 教譽	—	淨土	山城瑞雲院	元和九、八、二	—
二二八三	日重 一如院	京師	日蓮	甲斐身延山	元和九、八、六	七五
二二八三	呑龍 然譽	武藏岩付	淨土	下野大光院	元和九、八、九	八〇餘
二二八三	周頓 竟譽	尾張	淨土	大和龍巖寺	元和九、十、廿八	—
二二八三	麟曹 一峰	江戶	曹洞	武藏青松寺	元和九、十一、八	五七
二二八三	貞譽	—	淨土	信濃來迎寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二八三	圓澄°	武藏	淨土	岩代阿彌陀寺	—	—
二二八四	宗璘 琢市	越前	臨濟	山城大德寺	寛永元、正、十六	六一
二二八四	日全 信命院	—	日蓮	加賀妙國寺	寛永元、正、廿一	—
二二八四	祖恩 男澤	—	臨濟	山城妙心寺	寛永元、四、十七	—
二二八四	良敎	—	淨土	奥州大善寺	寛永元、四、—	—
二二八四	清傳 澄譽	江戸	淨土	武藏清傳寺	寛永元、十、十七	—
二二八四	日慧 慈眼	—	日蓮	相模本覺寺	寛永元、十二、五	—
二二八四	康音	—	佛工	—	寛永元、—	—
二二八四	祐心	—	—	攝津源光寺	—	—
二二八四	周隨 景初	—	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二二八五	宗巖 身譽	常陸江戸崎	淨土	常陸長福寺	寛永二、三、十四	—
二二八五	日秀尼 妙慧	—	日蓮	山城瑞龍寺	寛永二、四、廿四	九二
二二八五	亮隅° 賀年	近江	眞	近江光明寺	寛永二、六、廿二	四五
二二八五	良隨 純應	石見磯竹	淨土	山城淨華院	寛永二、七、十九	—
二二八五	宗陽 東嶺	近江	臨濟	山城大德寺	寛永二、八、二	五七
二二八五	廓山° 正譽	甲斐市部	淨土	武藏增上寺	寛永二、八、廿六	五四
二二八五	日登 了雲院	甲斐	日蓮	武藏瑞輪寺	寛永二、九、十	六一
二二八五	祖的 達譽	甲斐	淨土	尾張西蓮寺	寛永二、九、廿七	—
二二八五	良隨	—	淨土	奥州欣靜寺	寛永二、十一、十五	—
二二八五	玄廓 念譽	駿河	淨土	駿河常林寺	寛永二、十二、一	—
二二八五	日長° 隆達	和泉堺	日蓮	山城顯本寺	寛永二、十二、二	—
二二八五	淳碩 香山	京師	曹洞	三河全久寺	寛永二、十二、三	—
二二八五	千山 英譽	上野	淨土	武藏光感寺	寛永二、十二、九	—
二二八六	隆光	—	法相	大和藥師寺	寛永三、正、五	—
二二八六	紹長 松[illegible]	和泉堺	臨濟	山城大德寺	寛永三、三、一	七三
二二八六	日貞° 慧性	—	日蓮	肥後本妙寺	寛永三、四、廿三	六二
二二八六	宗頓 南壽	相模	臨濟	山城大德寺	寛永三、四、廿三	五三
二二八六	利道 廓譽	—	淨土	日向專念寺	寛永三、五、十	—
二二八六	日豪 常在院	甲斐	日蓮	遠江妙恩寺	寛永三、七、八	八九
二二八六	雲岡 應譽	—	淨土	筑後良淸寺	寛永三、七、十二	—
二二八六	景庸° 庸山	美濃	臨濟	山城妙心寺	寛永三、七、十七	六八
二二八六	利導 夢	—	淨土	武藏專心寺	寛永三、九、十五	—
二二八六	舜悅 隨翁	山城〻麻	曹洞	遠江石雲寺	寛永三、十、廿六	一二〇
二二八六	宗珍 中華	對馬	曹洞	長門大寧寺	—	—
二二八七	日受 慧性院	—	日蓮	武藏瑞輪寺	寛永四、正、廿七	—
二二八七	良相 露傳	奥州菊田	淨土	奥州照岸寺	寛永四、二、—	—
二二八七	鑑通 光影	京師	戒律	河内子窟寺	寛永四、五、四	六五
二二八七	宗存 菊徑	駿河	臨濟	山城大德寺	寛永四、六、廿一	七〇
二二八七	了故 宗譽	相模三浦	淨土	山城西光寺	寛永四、十、十七	—
二二八七	守哲 代翁	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	寛永四、十一、十七	六二
二二八七	宗印 傳叟	京師	臨濟	山城大德寺	寛永四、十二、十一	五九
二二八七	日深 妙寂院	—	日蓮	甲斐身延山	寛永四、十二、廿八	五四
二二八七	道山 發譽	—	淨土	信濃願行寺	寛永四、—	—
二二八八	常觀 自息軒	京師	眞言	—	寛永五、正、六	—
二二八八	貞存	武藏江戸	淨土	總州大雲寺	寛永五、二、二	—
二二八八	了也° 貞譽	下總	淨土	武藏增上寺	寛永五、四、三	八〇
二二八八	善覺 心譽	—	淨土	武藏淸德寺	寛永五、九、十三	—
二二八八	願譽	攝津	淨土	攝津甘露寺	寛永五、十、十	—

二二八八	宗劉 龍溪	石見	臨濟	山城大德寺	寬永五、十、廿八	七三
二二八八	○昭珍 寶圓	河內	戒律	大和招提寺	寬永五、十二、六	七四
二二八八	及存 信學	越前	淨土	武藏宗源寺	寬永五、十二、十五	—
二二八八	覺海	明	黃檗	肥前福濟寺	—	—
二二八九	林作 正學	—	淨土	下總仲臺院	寬永六、三、七	—
二二八九	日秀尼	—	日蓮	山城瑞龍寺	寬永六、四、廿四	九三
二二八九	靈月 穩學	三河	淨土	岩代西岳寺	寬永六、六、一	—
二二八九	寂水 九學	—	淨土	三河大樹寺	寬永六、九、十八	—
二二九〇	流念 專學	—	淨土	攝津安養寺	寬永七、正、廿四	—
二二九〇	利的 圓學	伊勢津	淨土	武藏心行院	寬永七、二、五	—
二二九〇	◎日奧 安國院	京師	日蓮	山城妙覺寺	寬永七、三、十	六六
二二九〇	朗月 徽學	—	淨土	武藏大養寺	寬永七、四、廿一	—
二二九〇	○恭畏	京師西院	眞言	山城法輪寺	寬永七、六、十三	六六
二二九〇	順良 傳學	紀伊小倉	淨土	武藏法界寺	寬永七、七、十五	—
二二九〇	文宗 超學	—	淨土	武藏勝林寺	寬永七、七、—	—
二二九〇	○日陽 麟山	—	日蓮	紀伊宣經寺	寬永七、八、十三	七七
二二九〇	○了的 柔學	甲斐	淨土	武藏增上寺	寬永七、九、十五	六四
二二九〇	○含牛 秀學	相模鎌倉	淨土	武藏大善寺	寬永七、十二、八	—
二二九〇	潮龍 圓學	上總菊間	淨土	武藏增上寺	寬永七、十二、九	七〇
二二九〇	住意 傳學	筑後	淨土	筑後二尊寺	寬永七、—	—
二二九一	三甫 傳學	遠江水無	淨土	遠江天然寺	寬永八、三、二	—
二二九一	魯公 德學	—	淨土	山城知恩寺	寬永八、五、十一	—
二二九一	廓含 嚴學	武藏	淨土	武藏教運寺	寬永八、六、廿一	—
二二九一	牛廓 稱學	—	淨土	山城長德寺	寬永八、十一、十七	—
二二九一	潮呑 往學	—	淨土	山城光明寺	—	—
二二九一	壽益 日鑑	薩摩	曹洞	薩摩福昌寺	—	—
二二九二	傳察 深學	武藏品川	淨土	武藏增上寺	寬永九、正、元	七三
二二九二	運譽	肥前	淨土	肥前安祥寺	寬永九、二、五	—
二二九二	康猶	—	佛工	—	寬永九、六、十一	—
二二九二	宗呑 光學	三河	淨土	武藏無量院	寬永九、七、廿九	—
二二九二	文超 典學	—	淨土	總州大巖寺	寬永九、八、四	—
二二九二	心純 顯學	—	淨土	攝津大蓮寺	寬永九、八、十七	—
二二九二	覺夢 鏡學	豐後	淨土	遠江阿彌陀寺	寬永九、九、一	—
二二九二	○良澄 西岸	—	淨土	山城壬生寺	寬永九、九、十九	七三
二二九二	良乘 含隨	—	淨土	岩代本覺寺	寬永九、十、十五	—
二二九二	良安	—	淨土	下野法王寺	寬永九、十、廿四	—
二二九三	崇傳 以心	—	臨濟	武藏金地院	寬永十、一、—	六五
二二九三	礫道 九學	筑前	淨土	肥前長安寺	寬永十、三、十五	—
二二九三	林覺	—	淨土	岩代光源寺	寬永十、四、廿九	—
二二九三	理益 存學	—	淨土	三河松應寺	寬永十、六、廿五	—
二二九三	源朝	—	眞言	山城醍醐山	寬永十、七、四	五八
二二九三	周存 乘學	甲斐	淨土	安藝淨安寺	寬永十、九、廿	—
二二九三	尊譽		淨土	山城悟眞寺	寬永十、九、廿一	—
二二九三	林長 廣學	下總	淨土	信濃法藏寺	寬永十、十一、四	—
二二九三	覺惠	—	眞言	大和興福寺	—	—
二二九四	了學 照學	—	淨土	武藏增上寺	寬永十一、三、十三	八六
二二九四	廓圓 岩學	肥前三根	淨土	肥前報恩寺	寬永十一、二、十七	—
二二九四	日慧	—	日蓮	下總安世院	寬永十一、三、十三	—
二二九四	良諦 隨道	下野	淨土	下野妙安寺	寬永十一、四、二	—
二二九四	慶譽	山城小幡	淨土	山城大蓮寺	寬永十一、七、廿八	—

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二九四	日銀（文旨）	—	日蓮	山城寶塔寺	寛永十一、九、廿	—
二二九四	厭悶（圓譽）	—	淨土	信濃願行寺	寛永十一、—	—
二二九四	文利（大淵）	—	曹洞	下總總寧寺	—	—
二二九四	順教（貞融）	—	淨土	山城岩倉	—	—
二二九四	團了（榮譽）	武藏大宮	淨土	下總延命寺	—	—
二二九五	慧傳（禿翁）	三河松平	淨土	紀伊光恩寺	寛永十二、三、一	七六
二二九五	存榮（故道）	—	淨土	山城心光寺	寛永十二、四、十一	—
二二九五	宗温（光澤）	京師	臨濟	山城大德寺	寛永十二、六、九	四六
二二九五	專英（特雄）	—	曹洞	三河龍溪寺	寛永十二、六、廿五	—
二二九五	隨波（定譽）	筑前糟屋	淨土	武藏增上寺	寛永十二、九、十	七二
二二九五	宋山（士峯）	伊勢篠島	曹洞	遠江可睡齋	寛永十二、九、廿三	九二
二二九五	來應（昌譽）	—	淨土	相模淨源寺	寛永十二、十、四	—
二二九五	日乾（孝順）	若狹小濱	日蓮	甲斐身延山	寛永十二、十、廿七	七六
二二九五	但唱	攝津有馬	天台	武藏大日院	—	—
二二九五	日顔（見性院）	—	日蓮	山城法華寺	—	—
二二九五	日慶（常誦院）	—	日蓮	下總法界寺	—	—
二二九五	見道（登譽）	—	淨土	武藏定泉寺	—	—
二二九五	善海（明譽）	—	淨土	武藏法界寺	—	—
二二九六	專慶（傳譽）	安房	淨土	安房淨蓮寺	寛永十三、三、一	—
二二九六	禪珠（龍派）	相模田村	臨濟	相模長德寺	寛永十三、四、—	八四
二二九六	堯圓	—	眞言	山城東寺	寛永十三、七、廿五	六七
二二九六	隨流（源譽）	山城山科	淨土	相模光明寺	寛永十三、十、廿	—
二二九六	禪鷲（讃宅）	壹岐	曹洞	長門大寧寺	寛永十三、十一、九	五八
二二九六	隨嚴（阿譽）	—	淨土	武藏幡隨院	寛永十三、十二、十九	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二二九六	慶潭	近江日野	淨土	伊勢入門寺	—	—
二二九七	貞譽	筑後	淨土	肥後源空寺	寛永十四、三、廿九	—
二二九七	一山（存譽）	美作津山	淨土	美作本覺寺	寛永十四、六、一	—
二二九七	典牛（天譽）	阿波	淨土	山城智惠光院	寛永十四、六、一	—
二二九七	貞殘（念譽）	—	淨土	甲斐壽清院	寛永十四、八、八	—
二二九七	龍鐵（頓譽）	—	淨土	伊勢大蓮寺	寛永十四、九、一	—
二二九七	白祐（面譽）	—	淨土	肥後正法寺	寛永十四、十、五	—
二二九七	慈養	—	眞	近江錦織寺	寛永十四、十、廿七	八九
二二九八	存道（信譽）	筑前黑崎	淨土	筑前淨蓮寺	寛永十五、正、八	—
二二九八	慕秀（專譽）	—	淨土	佐渡廣源寺	寛永十五、三、五	—
二二九八	了把（受譽）	近江淺井	淨土	—	寛永十五、六、廿一	五五
二二九八	廓源（圓譽）	武藏河越	淨土	山城知恩院	寛永十五、七、四	七三
二二九八	源的（實譽）	武藏河越	淨土	山城知恩院	寛永十五、七、廿七	—
二二九八	林折（心譽）	—	淨土	武藏長傳寺	寛永十五、八、廿三	—
二二九八	玄篯（鐵村）	筑前	曹洞	豐前羅漢寺	寛永十五、十、十二	七三
二二九八	廓同（行譽）	出羽	淨土	安房量壽寺	寛永十五、十、十三	—
二二九八	達翁（谿州）	武藏	曹洞	武藏宗關寺	寛永十五、十、十五	—
二二九八	良阿（信譽）	相模小田原	淨土	武藏善長寺	寛永十五、十一、七	—
二二九九	三恕（大譽）	遠江懸川	淨土	伊豫大林寺	寛永十六、正、三	—
二二九九	智童（徑譽）	江戶淺草	淨土	武藏增上寺	寛永十六、正、九	六六
二二九九	良定（袋中）	岩城菊田	淨土	山城法林寺	寛永十六、正、廿一	九六
二二九九	良圓（一廓）	—	淨土	出羽一心院	寛永十六、二、廿二	—
二二九九	日玄（本覺院）	阿波	日蓮	紀伊本久寺	寛永十六、三、四	五二
二二九九	嶺翁（貝譽）	筑後	淨土	筑後眞福寺	寛永十六、四、十八	—

二二九九	良信	往關	常陸田木屋	淨土	下野圓通寺	寛永十六、五、十二	|
二二九九	一牛	鎭學	|	淨土	下總淨閑寺	寛永十六、七、一	|
二二九九	昭°乘	惺惺	大和奈良	眞言	山城瀧本坊	寛永十六、九、十八	五六
二二九九	還故	覺問	安房	淨土	武藏喜德寺	寛永十六、十、四	|
二二九九	究諦	愛學	大和	淨土	大和念佛寺	寛永十六、—	|
二二九九	智白		武藏	淨土	尾張建中寺	|	|
二二九九	岸石	貞意	下野眞野	淨土	下野法善寺	|	|
二二九九	茂典		|	淨土	下野法林寺	|	|
二二九九	長呑		|	淨土	常陸稱名寺	|	|
二二九九	良聖	貞龍	|	淨土	山城法霖寺	|	|
二二九九	良仙	圓維	|	淨土	下野圓通寺	|	|
二二九九	良照	明心	大和奈良	戒律	大和戒壇院	|	|
二二九九	良吟		|	淨土	下野安樂寺	|	|
二二九九	良然	廓道	|	淨土	下野淨念寺	|	|
二三〇〇	超運		武藏八王子	淨土	上野大善寺	寛永十七、正、四	|
二三〇〇	了開	白學	|	淨土	武藏幡隨院	寛永十七、四、八	|
二三〇〇	分龍		越中	淨土	佐渡法界寺	寛永十七、四、廿	|
二三〇〇	良然		奥州玉造	淨土	陸前慈恩寺	寛永十七、七、五	|
二三〇〇	無紋	往學	|	淨土	伊勢大光院	寛永十七、七、六	|
二三〇〇	宗周	文室	土佐	臨濟	山城大德寺	寛永十七、九、七	六九
二三〇〇	日淨	覺性院	|	日蓮	伊豆本覺寺	寛永十七、九、七	六七
二三〇〇	雪念	南學	|	淨土	武藏增上寺	寛永十七、九、十八	六七
二三〇〇	慧順	長學	下總香取	淨土	筑前少林寺	寛永十七、十、廿七	|
二三〇〇	童堯	吉學	|	淨土	信濃攝取院	寛永十七、十一、八	|
二三〇〇	日學	正純	武藏	眞言	山城智積院	寛永十七、十一、廿	八五

二三〇一	路廓	圓學	|	淨土	武藏龍原寺	寛永十八、三、五	|
二三〇一	宗°珀	玉室	京師	臨濟	山城大德寺	寛永十八、五、十四	七〇
二三〇一	松°風	靈岩	上總	淨土	武藏靈岩寺	寛永十八、九、一	八一
二三〇一	牛°澤	傳學	河內花田	淨土	攝津圓通寺	寛永十八、十、十二	|
二三〇一	秀°算	京識	上野高崎	眞言	大和長谷寺	寛永十八、十、十六	七〇
二三〇一	泉滴	巨山	武藏	曹洞	加賀天德寺	寛永十八、十、廿五	八一
二三〇一	淨往	稱學	京師	淨土	山城攝取院	寛永十八、十、廿八	七〇
二三〇一	廓°無	念學	|	淨土	大和靈巖院	|	|
二三〇一	珂°山		和泉堺	淨土	武藏靈岩寺	|	|
二三〇一	天意		肥前唐津	淨土	安房大泉寺	|	|
二三〇一	哲道	寂學	肥前長崎	淨土	安房眞勝寺	|	|
二三〇一	太益	貫學	江戸	淨土	近江兼平寺	|	|
二三〇一	暫°龍	透學	|	淨土	阿波長福寺	|	|
二三〇二	策°傳	日快	|	淨土	山城誓願寺	寛永十九、正、八	八九
二三〇二	日運	本藏完	|	日蓮	加賀寶乘寺	寛永十九、二、十九	|
二三〇二	日°遠	堯順	京師	日蓮	甲斐身延山	寛永十九、三、五	七一
二三〇二	靈門	聞學	羽前米澤	淨土	武藏源空寺	寛永十九、五、十八	|
二三〇二	隨應	本學	江戸	淨土	信濃法藏寺	寛永十九、六、八	|
二三〇二	日仙尼	抄壽	|	日蓮	相模高松寺	寛永十九、六、十二	|
二三〇二	全珠	集叟	薩摩	曹洞	薩摩妙圓寺	寛永十九、六、廿四	五五
二三〇二	了心	公學	三河	淨土	豐後淨安寺	寛永十九、八、八	|
二三〇二	祖玄	本學	尾張白山	淨土	尾張西林寺	寛永十九、八、十四	|
二三〇二	西岸	良登	京師	天台	伊勢西來寺	寛永十九、九、十九	七三
二三〇二	日惠	本瑞院	|	日蓮	肥前本蓮寺	寛永十九、十、卅	六三
二三〇二	路念	運學	|	淨土	出羽金淨寺	寛永十九、十二、十一	|

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三〇三	慈敎	｜	眞	近江錦織寺	寛永廿、二、九	五六
二三〇三	英松 信譽	三河	淨土	武藏西光寺	寛永廿、七、一	｜
二三〇三	○崇六 嶺南	日向沃肥	臨濟	武藏東禪寺	寛永廿、七、廿七	六一
二三〇三	牛存 見譽	｜	淨土	山城光照寺	寛永廿、八、廿一	｜
二三〇三	○宗玩 江月	和泉堺	臨濟	山城大德寺	寛永廿、十、一	七〇
二三〇三	○天海	奥州高田	天台	武藏東叡山	寛永廿、十、二	一〇八
二三〇三	能悅 念譽	｜	淨土	武藏大泉寺	寛永廿、十、十二	｜
二三〇三	日陽 正覺院	｜	日蓮	紀伊感應寺	寛永廿、十二、九	五八
二三〇三	慈忠	｜	眞	近江錦織寺	｜	｜
二三〇四	廓道 想譽	｜	淨土	信濃願行寺	正保元、正、廿九	｜
二三〇四	鎮岡 大譽	｜	淨土	武藏泉谷寺	正保元、五、廿五	｜
二三〇四	宗拙 清居	｜	臨濟	陸奥瑞鳳寺	正保元、八、十三	六六
二三〇四	惠仙尼	｜	臨濟	山城大聖寺	正保元、八、十九	五〇
二三〇四	孤峯 深譽	｜	淨土	常陸專稱寺	正保元、九、十三	｜
二三〇四	屋道 團譽	｜	淨土	武藏心行寺	正保元、九、十九	｜
二三〇四	日饒 英月	京師	日蓮	山城妙顯寺	正保元、九、廿二	七三
二三〇四	全堯 天菴	筑前	曹洞	越前龍泰寺	正保元、十一、廿八	六八
二三〇四	日感 一性院	｜	日蓮	肥前本蓮寺	｜	｜
二三〇四	定尊	伊賀	佛工	｜	｜	｜
二三〇五	靈松 貞譽	京師	淨土	山城常樂寺	正保二、正、廿二	｜
二三〇五	良白 利舟	奥州宮城	淨土	奥州無量寺	正保二、二、｜	｜
二三〇五	○文守 一絲	京師	臨濟	山城靈源院	正保二、三、十九	三九
二三〇五	日乘 乾龍	上總東金	日蓮	山城妙滿寺	正保二、四、廿三	｜
二三〇五	○應昌 應周	｜	眞言	紀伊文珠院	正保二、五、廿四	｜
二三〇五	意的	武藏猿崎	淨土	武藏安樂寺	正保二、八、二	｜
二三〇五	三譽	｜	淨土	播磨光明寺	正保二、十、廿二	｜
二三〇五	良讃 格傳	常陸笠間	淨土	岩代一乘寺	正保二、十一、廿	｜
二三〇五	○宗彭 澤菴	但馬	臨濟	武藏東海寺	正保二、十二、十一	七三
二三〇六	念光 法譽	相模	淨土	相模光念寺	正保三、正、五	｜
二三〇六	圓鏡 靈譽	｜	淨土	武藏寶智院	正保三、二、七	｜
二三〇六	良覺 皓譽	伊勢山田	淨土	山城淨華院	正保三、二、廿一	｜
二三〇六	閻助 正譽	｜	淨土	山城淨德院	正保三、二、廿五	｜
二三〇六	補道 十洲	近江	曹洞	武藏青松寺	正保三、三、十一	｜
二三〇六	文宿 明譽	下野宇都宮	淨土	武藏心光寺	正保三、四、廿四	｜
二三〇六	堯朝	｜	眞	伊勢專修寺	正保三、八、廿二	三三
二三〇六	離碧 辨譽	｜	淨土	山城法雲寺	正保三、八、廿四	｜
二三〇六	春貞 本譽	｜	淨土	武藏一行院	｜	｜
二三〇六	玄蘇 景徹	｜	臨濟	山城南禪寺	｜	｜
二三〇七	日英 本覺院	｜	日蓮	山城立本寺	正保四、一、廿五	｜
二三〇七	舊典 寶譽	近江	淨土	武藏生西寺	正保四、二、二	｜
二三〇七	○如周 正尊	山城八幡	戒律	山城泉涌寺	正保四、二、十八	五四
二三〇七	急西 最譽	山城醍醐	淨土	山城一心院	正保四、三、廿三	｜
二三〇七	土丸 大譽	大和奈良	淨土	越前圓成院	正保四、七、十七	｜
二三〇七	龍山 無住	｜	淨土	伊豫崇源寺	正保四、八、十	｜
二三〇七	隨的 忍譽	｜	淨土	伊勢一行寺	正保四、九、七	｜
二三〇七	萬說 賢譽	山城深草	淨土	山城公安院	正保四、十、廿一	｜
二三〇七	呑了 覺譽	石見津和野	淨土	武藏淸岸寺	正保四、十二、十五	｜
二三〇七	良永 賢俊	對島	眞言	紀伊高野山	正保四、｜	六二

二三〇七	聖助		｜	眞言	近江石山寺	｜	｜
二三〇八	○胤舜	禪榮房	山城加茂	法相	大和寶藏院	慶安元、正、十二	六〇
二三〇八	○元壽	長存	下野	眞言	山城智積院	慶安元、正、十三	七四
二三〇八	覺深		｜	眞言	山城仁和寺	慶安元、正、廿一	六一
二三〇八	雲堯	泰山	越前	曹洞	越前寶圓寺	慶安元、正、廿七	七五
二三〇八	宗淵	默之	肥前	臨濟	山城大德寺	慶安元、四、廿三	五九
二三〇八	○闡雅	准玄	｜	眞	阿內光善寺	慶安元、五、十六	六〇
二三〇八	日遲	隆怒	｜	日蓮	甲斐身延山	慶安元、五、廿九	六三
二三〇八	龍的	嚴譽	｜	淨土	尾張大應寺	慶安元、六、十九	｜
二三〇八	還無	業譽	江戸	淨土	武藏增上寺	慶安元、六、廿	七三
二三〇八	日啓		｜	日蓮	武藏本光寺	慶安元、七、四	｜
二三〇八	臺犀	緣譽	遠江濱松	淨土	安藝源光寺	慶安元、八、廿七	｜
二三〇八	臺山	專譽	江戸	淨土	下野大光院	慶安元、九、十七	｜
二三〇八	存榮	瑩譽	｜	淨土	武藏淨土寺	慶安元、十、八	｜
二三〇八	日東	常然	｜	日蓮	武藏本門寺	慶安元、十一、廿二	｜
二三〇八	○慧薰	風外	上野碓氷	曹洞	相模成願寺	｜	｜
二三〇八	道感		信濃	淨土	｜	｜十、十五	｜
二三〇八	日樹		相模及川	日蓮	下野弘法寺	｜	｜
二三〇八	林犀	英譽	｜	淨土	三河緣心寺	慶安二、正、卅	｜
二三〇九	○會言	論譽	武藏岩付	淨土	山城稱福寺	慶安二、二、廿五	｜
二三〇九	○日遼	貞山	｜	日蓮	武藏瑞輪寺	慶安二、三、廿九	六一
二三〇九	日講	順性	丹波與佐	日蓮	山城養珠寺	慶安二、四、十五	七〇
二三〇九	日性	堯印	｜	日蓮	甲斐本遠寺	慶安二、五、五	｜
二三〇九	存龍	還譽	相模	淨土	相模狐峯山	慶安二、五、七	｜
二三〇九	連意	萬譽	｜	淨土	三河大樹寺	慶安二、五、廿五	｜
二三〇九	魯念	心譽	相模鎌倉	淨土	攝津西福寺	慶安二、六、二	｜
二三〇九	泰宗	岩譽	甲斐	淨土	甲斐定得寺	慶安二、六、十一	｜
二三〇九	惠昌	長融	近江彥根	淨土	近江正會寺	慶安二、六、十三	六九
二三〇九	鶴曇	雲山	｜	曹洞	肥前皓臺寺	慶安二、九、十	｜
二三〇九	傳廓	澄譽	信濃	淨土	武藏專稱寺	慶安二、十、十七	｜
二三〇九	了性	明空	京師	戒律	大和法隆寺	慶安二、十、廿五	五八
二三〇九	存察		｜	淨土	三河悟眞寺	｜	｜
二三一〇	徐天	竭室	越前	曹洞	加賀護國寺	慶安三、正、一	七七
二三一〇	潮呑	往譽	武藏埼玉	淨土	武藏雲光院	慶安三、四、十二	七三
二三一〇	慈心	殘夢	相模	淨土	武藏善德寺	慶安三、四、廿	｜
二三一〇	日登		｜	日蓮	上總妙覺寺	慶安三、六、廿二	八二
二三一〇	日條	正覺院	加賀	日蓮	加賀妙正寺	慶安三、九、廿三	｜
二三一〇	日收	秋潤	能登	日蓮	山城常光寺	慶安三、十、十	七三
二三一〇	○日勇	天慧	京師	日蓮	山城護國寺	慶安三、十二、廿三	四七
二三一〇	日賢	一匯	｜	日蓮	山城妙勝寺	｜	｜
二三一一	岌廓	信譽	奧州津輕	淨土	武藏善雄寺	慶安四、二、十九	｜
二三一一	廓圓	直譽	相模	淨土	武藏傳通院	慶安四、四、廿五	｜
二三一二	窓月	西譽	山城	淨土	山城善法寺	慶安四、八、十五	｜
二三一一	日遠	忠桂	｜	日蓮	紀伊淨心寺	慶安四、十一、二	六四
二三一一	○觀徹	傳譽	筑後	淨土	肥前大音寺	慶安四、十一、十三	六四
二三一一	○高觀		武藏入間	天台	上野龍增寺	｜	｜
二三一二	以傳	住譽	｜	淨土	下野弘經寺	承應元、三、十七	｜
二三一二	笥靈	本譽	加賀小松	淨土	大和光明寺	承應元、三、廿九	四〇
二三一二	梵無	願譽	尾張犬山	淨土	加賀弘願院	承應元、六、八	｜
二三一二	潮也	法譽	｜	淨土	武藏靈山寺	承應元、六、十九	｜

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三一二	源底（日譽）	武藏	淨土	相模光明寺	承應元、七、十九	—
二三一二	亮典（文性）	伊勢度會	眞言	伊勢眞常院	承應元、八、十三	四六
二三一二	位産（曉譽）	—	淨土	武藏增上寺	承應元、八、廿	六八
二三一二	日選（文風）	—	日蓮	肥後本妙寺	承應元、九、十	—
二三一二	賴秀（然譽）	—	淨土	駿河光蓮寺	承應元、十二、十七	七〇
二三一二	尊慶（頼心）	—	眞言	大和長谷寺	承應元、十二、十九	七三
二三一二	祖岌（光譽）	武藏埼玉	淨土	武藏圓福寺	承應元、—	—
二三一二	良曉（捨荷）	奧州磐前	淨土	盤城天龍寺	承應元、—	—
二三一三	慶閏（道譽）	安房勝山	淨土	安房心光寺	承應二、四、十九	—
二三一三	傳譽	安房平群	淨土	安房遣永寺	承應二、六、廿六	—
二三一三	梵舜（天外）	相模鎌倉	曹洞	信濃全久寺	承應二、八、二	—
二三一三	碧山	武藏忍	淨土	武藏正覺寺	承應二、十一、八	—
二三一三	斷鐵	肥後	眞	長門光明坊	—	—
二三一三	了海	肥後	眞	山城東坊	—	—
二三一四	歷央（大譽）	下野	淨土	山城淨安寺	承應三、二、三	—
二三一四	一空（光譽）	上總	淨土	武藏智福寺	承應三、四、十	—
二三一四	良靜（龍頓）	奧州白川	淨土	下野專稱寺	承應三、五、三	—
二三一四	英師（萬安）	江戸	曹洞	山城興聖寺	承應三、八、廿一	六四
二三一四	良性（疊宣）	—	淨土	盤城專稱寺	承應三、九、十二	—
二三一四	廓存（成譽）	肥後	淨土	尾張建中寺	承應三、九、十八	—
二三一四	日遵（長遠院）	—	日蓮	安房誕生寺	承應三、十、三	—
二三一四	源歷（深譽）	武藏	淨土	豐後回向院	承應三、—	六九
二三一四	良圓（可頓）	奧州宮城	淨土	奧州飯命院	承應三、—	—
二三一四	唯一	明	黃檗	山城黃檗山	—	—
二三一四	良清（受覺）	岩代	淨土	奧州大念寺	—	—
二三一四	誓達（潮譽）	尾張愛知	淨土	尾張善住寺	—	—
二三一四	源逝（禿譽）	尾張愛知	淨土	尾張正行寺	—	—
二三一四	廓翁	尾張愛知	淨土	尾張光明寺	—	—
二三一四	賴照（中趣理房）	—	眞言	山城醍醐山	—	—
二三一五	廓翁（專譽）	紀伊和歌山	淨土	安藝心行寺	明曆元、二、廿二	—
二三一五	廓春（念譽）	—	淨土	尾張全順院	明曆元、三、十二	—
二三一五	了隨（隨譽）	大和平群	淨土	大和超龍寺	明曆元、三、十七	—
二三一五	日雄（實成）	若狹小濱	日蓮	攝津法華寺	明曆元、四、十九	七四
二三一五	日章（如竹）	薩摩	日蓮	山城本能寺	明曆元、五、十五	八六
二三一五	正三	三河	臨濟	三河了心院	明曆元、六、廿五	七七
二三一五	順應（專譽）	江戸小石川	淨土	武藏大雲寺	明曆元、九、七	—
二三一五	日耀（住心）	上總埴谷	日蓮	武藏本門寺	明曆元、十、十二	—
二三一五	牛道（心靈）	和泉郡山	曹洞	武藏青松寺	明曆元、十一、十三	—
二三一五	日珅（本是院）	—	日蓮	加賀本是寺	明曆元、十二、一	—
二三一五	臺山（往譽）	越後春日山	淨土	越後大嚴寺	明曆元、—	—
二三一五	良達（覺殘）	奧州小川	淨土	奧州滿藏寺	明曆元、—	—
二三一五	普定	明	黃檗	肥前崇福寺	—	—
二三一五	日豐（唯遠）	能登七尾	日蓮	武藏本門寺	—	—
二三一五	千江	—	臨濟	磐城某寺	—	—
二三一五	開悅（叙譽）	—	淨土	武藏傳通院	—	—
二三一六	萬的（禎譽）	出羽庄內	淨土	下野大乘寺	明曆二、三、四	—
二三一六	傳也（冠譽）	—	淨土	武藏廣德寺	明曆二、三、廿	—
二三一六	闇雪（英譽）	丹波	淨土	山城淨德院	明曆二、五、二	—

二三一六	海經		—	眞	山城佛光寺	明曆二、七、十八	五一
二三一六	宗英	普出	日向	臨濟	山城大德寺	明曆二、七、廿五	五三
二三一六	薰道	高嚴	相模愛甲	曹洞	武藏青松寺	明曆二、九、五	—
二三一六	隆長○	圓精	—	眞言	山城智積院	明曆二、十、十	七一
二三一六	是哲	願學	下總	淨土	武藏重願寺	明曆二、十二、七	—
二三一六	極圓		薩摩	臨濟	磐城長松寺	—	—
二三一七	源貞	寂學	三河奥平	淨土	武藏大養寺	明曆三、正、廿八	—
二三一七	元良	最居	—	臨濟	武藏金地院	明曆三、四、一四	七五
二三一七	壽徹	九學	但馬	淨土	因幡玄忠寺	明曆二、四、廿五	—
二三一七	俊把	堯鑑	山城愛宕	淨土	山城清榮寺	明曆三、六、一	六一
二三一七	國道	傳學	伊豆伊東	淨土	武藏長圓寺	明曆三、六、一	—
二三一七	求願	正學	—	淨土	駿河龍寶寺	明曆三、七、八	—
二三一七	良實	靈逢	—	淨土	磐城專稱寺	明曆三、七、廿七	—
二三一七	龍尾	正學	—	淨土	駿河善境寺	明曆三、八、八	—
二三一七	無外	謙學	下總大戸川	淨土	岩代稱名寺	明曆三、十、十三	—
二三一七	如定	默子	明	黃檗	肥前興福寺	明曆三、十一、卅	六一
二三一七	日眼	通遠	—	日蓮	武藏淨心寺	明曆三、十二、廿一	—
二三一八	西月	良眞	京師	淨土	—	萬治元、正、十五	—
二三一八	玄門	向學	甲斐	淨土	加賀玄門寺	萬治元、三、十五	—
二三一八	圓智	深學	下總	淨土	近江東光寺	萬治元、三、廿九	—
二三一八	光從	宣如	—	眞	山城本願寺	萬治元、四、廿五	五五
二三一八	南的	順學	—	淨土	周防海藏寺	萬治元、六、十五	—
二三一八	良譽	堯謚	下野都賀	眞言	大和長谷寺	萬治元、九、一	六八
二三一八	泰應	證學	相模小田原	淨土	武藏遍照寺	萬治元、十、十四	—
二三一八	西信		尾張	—	—	萬治元、十、十五	—

二三一八	宗璞	盡溪	近江	臨濟	山城大德寺	萬治元、十、廿	八九
二三一八	日演	顯院壽	—	日蓮	下野法華經寺	萬治元、十二、十七	六四
二三一八	長呑	欣學	—	淨土	武藏還到院	萬治元、—	—
二三一八	良經	貞吟	—	淨土	出羽壽光寺	萬治元、—	—
二三一八	慈仁		—	眞	近江錦織寺	—	—
二三一八	守慶		—	淨土	近江豐永寺	—	—
二三一八	超玄○	道者	明	黃檗	肥前崇福寺	—	—
二三一八	慈綱		—	眞	近江錦織寺	—	—
二三一九	日遙○	學淵	朝鮮	日蓮	肥後本妙寺	萬治二、二、廿六	七九
二三一九	典嶺	學嚴	駿河	淨土	武藏大善寺	萬治二、二、廿九	—
二三一九	說道	學寂	上總	淨土	武藏道林寺	萬治二、四、十一	—
二三一九	日了尼	妙法	—	日蓮	山城慈雲寺	萬治二、五、十七	—
二三一九	融頓	一庭	肥前佐嘉	曹洞	肥前皓臺寺	萬治二、七、十	七三
二三一九	希膺○	雲居	土佐畑郷	臨濟	山城妙心寺	萬治二、八、八	七八
二三一九	貞殘	高學	武藏	淨土	武藏嚴淨院	萬治二、九、廿八	—
二三一九	日鏡	叡長	—	日蓮	甲斐身延山	萬治二、十、廿八	五八
二三一九	眞超		京師	天台	近江西敎寺	萬治二、十一、二	—
二三一九	寬海		—	眞言	山城東寺	萬治二、十二、十三	六九
二三一九	兼慧		—	眞言	山城安祥寺	—	—
二三一九	寬伊		—	眞言	山城安祥寺	—	—
二三二〇	貴屋	遵學	—	淨土	武藏增上寺	萬治三、正、廿一	六三
二三二〇	良緣	傳學	—	淨土	武藏來迎院	萬治三、四、廿	—
二三二〇	寬濟		—	眞言	山城東寺	萬壽三、六、廿三	六八
二三二〇	日諦尼	妙弘	—	日蓮	山城燈光寺	萬治三、六、廿七	七六
二三二〇	日良	區通	—	日蓮	山城燈明寺	萬治三、七、十九	七一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三二〇	受頓（心譽）	奥州	浄土	武藏天嶽院	萬治三、八、十三	—
二三二〇	殘嶺（誓譽）	—	浄土	下總泉福寺	萬治三、九、四	—
二三二〇	宗堯（唐叔）	京師	臨濟	山城大德寺	萬治三、九、九	五八
二三二〇	故極（安譽）	相模瀬戸島	浄土	駿河大運寺	萬治三、九、十七	—
二三二〇	日○忠○（通心）	甲斐三子澤	日蓮	常陸久昌寺	萬治三、十、十六	—
二三二〇	昭超（准秀）	—	眞	山城興正寺	萬治三、十二、十二	五四
二三二〇	湛翁（重譽）	—	浄土	山城大善寺	萬治三、十二、廿	—
二三二〇	存的（寂譽）	紀伊和歌山	浄土	安藝禿翁寺	萬治三、—	六〇
二三二〇	稱譽	—	浄土	播磨廣教寺	—	—
二三二一	玄故（本譽）	信濃高遠	浄土	武藏操信寺	寛文元、三、十三	—
二三二一	往壽	—	眞	山城信樂寺	寛文元、三、十八	—
二三二一	聽保（聞譽）	—	浄土	武藏勝願寺	寛文元、四、廿四	—
二三二一	日○可○（資宣）	讃岐丸龜	日蓮	山城瑞光寺	寛文元、六、六	三八
二三二一	覺玄（法譽）	武藏持田	浄土	武藏智願寺	寛文元、六、十六	—
二三二一	觀靈（光譽）	紀伊臨瀬	浄土	和泉宗見寺	寛文元、七、十一	—
二三二一	存哲（經譽）	筑前遠賀	浄土	筑前隨蓮寺	萬文元、七、廿	—
二三二一	見壽（廓譽）	日向佐土原	浄土	日向浄念寺	寛文元、八、七	—
二三二一	堯○然○	京師	天台	山城妙法院	寛文元、八、廿二	六〇
二三二一	良燈（祖殘）	—	浄土	常陸雲充寺	寛文元、九、廿二	—
二三二一	三笛（誓譽）	—	浄土	武藏光台院	寛文元、九、廿五	—
二三二一	東○寔○（愚堂）	美濃伊自良	臨濟	美濃大仙寺	寛文元、十、一	八三
二三二一	宗○渭○（清巖）	近江大石	臨濟	山城大德寺	寛文元、十一、廿一	七四
二三二一	康知	—	佛工	—	寛文元、十一、廿三	—
二三二一	康湛	—	佛工	—	—	—
二三二一	大哲	—	浄土	武藏正命寺	—	—
二三二一	了全	—	佛工	—	—	—
二三二一	了無	—	佛工	—	—	—
二三二一	保山（聽譽）	—	浄土	美濃善教寺	—	—
二三二二	欣眞（往譽）	—	浄土	山城地福寺	寛文二、八、十五	—
二三二二	光圓（眞如）	—	眞	山城本願寺	寛文二、九、七	五一
二三二二	夢傳（圓譽）	筑前博多	浄土	對島夢傳庵	寛文二、十一、十三	—
二三二二	寅嘯（北巖）	甲斐	曹洞	能登雲光寺	寛文二、十二、廿五	—
二三二三	心譽	肥後	浄土	肥前立岩寺	—	—
二三二三	大譽	加賀上野	浄土	河内報土菴	—	—
二三二三	康乘	—	佛工	—	—	—
二三二三	康祐	—	佛工	—	—	—
二三二三	圓智（大譽）	—	浄土	尾張半田院	寛文三、二、十一	—
二三二三	祐察（不阿）	—	浄土	武藏大秀寺	寛文三、三、十九	六〇
二三二三	一的（寂譽）	—	浄土	武藏潮泉寺	寛文三、六、六	—
二三二三	天岡（心譽）	—	浄土	武藏上善寺	寛文三、七、十二	—
二三二三	良欣	奥州八塚	浄土	陸前生因寺	寛文三、八、二	—
二三二三	念無（法譽）	近江	浄土	武藏道住寺	寛文三、八、十五	—
二三二三	憶道（正譽）	遠江濱松	浄土	伊勢西光寺	寛文三、九、六	—
二三二三	廓傳（廣譽）	信濃更級	浄土	信濃專稱寺	寛文三、九、十四	—
二三二三	桂法（中華）	石見	曹洞	肥後東國寺	寛文三、九、廿一	—
二三二三	法○性○	—	眞言	紀伊寶性院	寛文三、十、廿一	—
二三二三	宗廓（輪譽）	安房	浄土	武藏誓願寺	寛文三、十、廿五	—
二三二三	龍鐵（白譽）	—	浄土	武藏廣大院	寛文三、十一、廿一	—

二三二三	的山	誠譽	—	浄土	伊勢大安寺	寛文三、十二、十九	—
二三二四	宗融	松雲	肥前	曹洞	肥前圓應寺	寛文四、正、四	五六
二三二四	○日怡	瑞圓院	京師	日蓮	山城瑞龍寺	寛文四、二、三	四〇
二三二四	日祐	玄首	攝津大坂	日蓮	下野弘法寺	寛文四、五、三	五五
二三二四	○宥貞	仙丁	上野勢田	眞言	山城智積院	寛文四、五、六	七三
二三二四	宗珉	[illegible]嚴	和泉	臨濟	山城大德寺	寛文四、七、廿三	五七
二三二四	○西吟	照默	豐前小倉	眞	豐前永照寺	寛文四、八、十五	五九
二三二四	○亮範	岳泉	越前新保浦	眞言	山城智積院	寛文四、九、廿七	七〇
二三二四	露白	本譽	相模小田原	浄土	武藏增上寺	寛文四、九、廿八	七七
二三二四	○如嘿	無爲菴	肥前	臨濟	岩代稽古堂	—	—
二三二五	浄因	頓譽	—	浄土	攝津滿福寺	寛文五、三、九	—
二三二五	道榮		—	日蓮	紀伊法紹寺	寛文五、三、十五	—
二三二五	傳廓		筑後島	浄土	肥後極樂寺	寛文五、四、九	—
二三二五	快山	光譽	—	浄土	下總大經寺	寛文五、六、三	—
二三二五	寂譽		肥前上佐賀	浄土	筑後報身寺	寛文五、十、八	—
二三二五	魯洞	玄怨	遠江橫須賀	浄土	和泉大經寺	寛文五、十二、十六	八七
二三二五	圓的	林譽	—	浄土	陸前寶林寺	寛文五、十二、—	—
二三二六	信遍		京師	眞言	山城東寺	寛文六、正、廿八	六一
二三二六	宗榮	啓宗	大和	臨濟	山城大德寺	寛文六、二、廿五	七〇
二三二六	澤山	存譽	安藝廣島	浄土	豐後長昌寺	寛文六、二、廿七	—
二三二六	○日審	文嘉	京師	日蓮	山城六條談林	寛文六、三、十五	六八
二三二六	光悅	周譽	—	浄土	武藏法安寺	寛文六、三、廿九	—
二三二六	快壽	春圓	薩摩	眞言	大和長谷寺	寛文六、五、十五	五三
二三二六	秀興		京師	浄土	山城眞駋寺	寛文六、六、六	—
二三二六	○宗立	江雪	和泉	臨濟	山城大德寺	寛文六、六、十九	七二
二三二六	龍也	傳譽	伊豫伊豫島	浄土	伊豫榮養寺	寛文六、七、十三	—
二三二六	三汲	欣譽	伊勢桑名	浄土	伊豫松源院	寛文六、七、廿一	—
二三二六	靈頓	信譽	武藏岩付	浄土	下總淸岸寺	寛文六、八、廿六	—
二三二六	良求	門的	奧州宮城	浄土	奧州春照寺	寛文六、八、—	—
二三二六	紹果	天祐	近江	臨濟	山城大德寺	寛文六、九、廿一	八一
二三二六	休道	高譽	武藏久良岐	浄土	武藏最上寺	寛文六、十、十一	—
二三二六	日存	觀妙院	—	日蓮	紀伊養珠寺	寛文六、十一、七	—
二三二六	歷山	木故	—	浄土	駿河華陽院	寛文六、十一、十五	—
二三二六	是傳	相譽	出雲	浄土	駿河照久寺	寛文六、十二、十八	—
二三二六	堯秀		—	眞	伊勢專修寺	寛文六、十二、—	八五
二三二六	源哲		下總結城	浄土	肥前正定寺	寛文六、—	—
二三二六	頼遍		—	眞言	近江石山寺	—	—
二三二六	日玄尼	智照院	—	日蓮	山城慧光寺	—	—
二三二六	靈順	歷譽	—	浄土	駿河華陽院	—	—
二三二七	露吟	助心	筑前博多	浄土	武藏大願寺	寛文七、正、二	—
二三二七	吟徹	大譽	江戸	浄土	武藏九品寺	寛文七、二、廿一	—
二三二七	大巖	本譽	上總富津	浄土	伊勢大巖寺	寛文七、四、六	—
二三二七	流傳	高譽	石見大森	浄土	出雲西方寺	寛文七、七、廿一	—
二三二七	○日寛	義道	—	日蓮	甲斐身延山	寛文七、七、廿三	六七
二三二七	宗竺	大室	尾張	臨濟	山城大德寺	寛文七、八、廿六	六三
二三二七	紹蘇	昭海	京師	臨濟	山城大德寺	寛文七、九、十九	五六
二三二七	雲恕	敦譽	日向佐土原	浄土	日向原濟寺	寛文七、九、廿四	—
二三二七	○道印	月坡	—	曹洞	近江比良山	—	—
二三二八	滿秋	神譽	近江野州	浄土	近江榮節寺	寛文八、正、廿七	—
二三二八	○日政	元政	京師	日蓮	山城瑞光寺	寛文八、二、十八	四六

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三二八	巍然 大學	信濃松本	淨土	信濃給念寺	寛文八、三、廿二	—
二三二八	呑屋 眼譽	甲斐	淨土	尾張高岳院	寶文八、四、二	八三
二三二八	○日樹 長遠院	—	日蓮	武藏長遠院	寛文八、五、十九	—
二三二八	○性融 逸然	明	黄檗	肥前興福寺	寛文八、七、十四	六七
二三二八	宗分 別傳	安房	臨濟	武藏慧然寺	寛文八、七、廿四	七一
二三二八	運亮 信譽	日向土佐原	淨土	日向法隆寺	寛文八、八、十一	—
二三二八	宗播 五舟	山城	臨濟	山城大德寺	寛文八、十一、十八	六九
二三二八	日完 學要	伯耆	日蓮	山城勝光寺	寛文八、十一、廿四	七八
二三二八	日感 本光院	—	日蓮	加賀寶乘寺	—	—
二三二九	日德 學林	—	日蓮	山城本法寺	寛文九、正、十六	—
二三二九	曉天 誓譽	信濃上田	淨土	信濃天用寺	寛文九、正、廿五	—
二三二九	宗雪 雪溪	京師	臨濟	山城大德寺	寛文九、三、廿三	五八
二三二九	宗○築 大愚	美濃武義	臨濟	筑前大安寺	寛文九、七、十六	八六
二三二九	智哲 頓譽	美濃	淨土	武藏增上寺	寛文九、八、十	六八
二三二九	了達 隨譽	—	淨土	伯耆光明寺	寛文九、九、八	—
二三二九	日龍 精進院	—	日蓮	山城頂妙寺	寛文九、九、廿三	七六
二三二九	到也 一譽	—	淨土	甲斐九品寺	寛文九、十、—	—
二三二九	嚴譽	肥前	淨土	肥前皪翁寺	寛文九、十一、五	—
二三二九	良信 靈殘	岩代	淨土	陸前遍照寺	寛文九、—、—	—
二三二九	鏡殘 良進	—	淨土	陸前報恩寺	—	—
二三三〇	胎通 意純	磐城	眞言	山城智積院	寛文十、二、廿四	七九
二三三〇	南龍 項譽	下野	淨土	武藏梅窓院	寛文十、四、六	—
二三三〇	日禪	—	日蓮	山城寶塔院	寛文十、六、廿七	六八
二三三〇	○日芳 養壽院	京師	日蓮	山城立本寺	寛文十、七、十五	五一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三三〇	玄滴 自峰	近江彦根	曹洞	美濃廣大寺	寛文十、八、十四	七七
二三三〇	○性潛 龍溪	京師	黄檗	近江正明寺	寛文十、八、廿三	六九
二三三一	○如○一 即非	支那福清	黄檗	豐前福聚寺	寛文十一、正、廿	五六
二三三一	無極 人譽	相模鎌倉	淨土	山城法成寺	寛文十一、二、—	—
二三三一	○大○江 南楚	—	淨土	紀伊總持寺	寛文十一、三、八	八〇
二三三一	光瑛 琢如	京師	眞	山城本願寺	寛文十一、四、十四	四七
二三三一	日養 覺隆院	—	日蓮	加賀寶乘寺	寛文十一、四、十六	—
二三三一	○文○巖 如雪	阿波杼西	臨濟	山城法雲院	寛文十一、四、十八	七一
二三三一	日祥 梅山	京師西津	日蓮	山城冠井談林	寛文十一、八、十	六六
二三三一	日廣 理性院	—	日蓮	紀伊本正寺	寛文十一、十、八	—
二三三一	忠殘 行譽	下總行德	淨土	下總清岸寺	寛文十一、—、—	九一
二三三二	宗喜 無隱	攝津	臨濟	山城大德寺	寛文十二、三、十一	五五
二三三二	○慧○猛 慈忍	河內秦村	眞言	河內野中寺	寛文十二、三、廿一	六三
二三三二	日利 智泉	—	日蓮	下總龍光寺	寛文十二、三、—	六〇
二三三二	日隆尼 妙雲院	—	日蓮	山城高松寺	寛文十二、四、二	三三
二三三二	○舜○融 懶禪	薩摩	曹洞	山城興聖寺	寛文十二、四、三	六
二三三二	成辨 轉譽	上野館林	淨土	武藏蓮華院	寛文十二、四、十三	—
二三三二	闡趣 超山	越中	曹洞	加賀大乘寺	寛文十二、五、三	九二
二三三二	洞雲 大譽	紀伊小倉	淨土	武藏珠寶院	寛文十二、六、廿二	—
二三三二	日通尼	—	日蓮	山城瑞龍寺	寛文十二、七、十七	二〇
二三三二	團譽	石見	淨土	山城吟松寺	寛文十二、七、廿七	—
二三三二	○唯○觀 稱意	能登藏見	淨土	大和今井谷	寛文十二、八、廿五	三三
二三三二	○性○易 獨立	明抗州	黄檗	豐前廣壽山	寛文十二、十一、六	七九
二三三二	舊門 本譽	信濃松本	淨土	武藏長谷寺	寛文十二、十一、九	—

二三三二	友心	全行	大和山邊	淨土	大和某菴	寛文十二、十二、三	七一
二三三二	宗單	乾英	攝津宮田	臨濟	山城大德寺	寛文十二、十二、廿五	六三
二三三二	康尊		—	佛工	—	—	—
二三三三	大龍	信譽	肥後松本	淨土	尾張大梅寺	延寶元、二、四	—
二三三三	日養◎	高月	—	日蓮	武藏本門寺	延寶元、二、八	四九
二三三三	隆琦◎	隱元	明福清	黃檗	山城萬福寺	延寶元、四、三	八二
二三三三	山信		—	日蓮	山城大虛菴	延寶元、四、廿五	—
二三三三	乘圓○	朗然	大坂	眞言	山城五智山	延寶元、五、廿一	四六
二三三三	戒琬○	蘊謙	明	黃檗	肥前福濟寺	延寶元、六、廿三	六三
二三三三	日桂	久應	相模高座	日蓮	武藏瑞輪寺	延寶元、七、廿三	八一
二三三三	正智	明堂	岩城會津	曹洞	伊勢長昌寺	延寶元、八、六	三九
二三三三	性善○	大居	明溫陵	黃檗	山城東林菴	延寶元、十、十八	五八
二三三三	的道	成譽	筑前糟屋	淨土	筑前報光寺	延寶元、十、廿七	—
二三三三	歷天	森譽	—	淨土	武藏增上寺	延寶元、十二、四	六七
二三三三	桂文	不鐵	肥前杵島	曹洞	肥前宗智寺	延寶元、十二、廿三	七四
二三三三	揚愼		明	黃檗	肥前崇福寺	—	—
二三三三	長典○		伊豫	眞言	大和長谷寺	—	—
二三三三	道香○	梅谷	肥前長崎	黃檗	大和玉龍寺	—	—
二三三三	總通	英譽	越前	淨土	越前欣淨院	—	—
二三三三	嵓山		—	淨土	常陸淨國寺	—	—
二三三四	日雄	天闕	近江坂田	眞言	山城愛染寺	延寶二、二、十五	七六
二三三四	雲英	傑外	能登輪島	曹洞	越前寶圓寺	延寶二、二、廿七	—
二三三四	覺雲	淨譽	岩代會津	淨土	下野不退寺	延寶二、六、二	—
二三三四	重貞	信譽	伊豆伊東	淨土	安房善生寺	延寶二、六、十四	—
二三三四	廓存	正譽	—	淨土	備前台宗寺	延寶二、六、廿	—
二三三四	舜空○	良惠	攝津花田	融通念佛	攝津大念佛寺	延寶二、七、四	七六
二三三四	誓譽		武藏西久保	淨土	駿河享德寺	延寶二、七、十	—
二三三四	入玄○	良乘	越後新潟	淨土	大和崎曲菴	延寶二、七、十二	五四
二三三四	聞海○	月感	肥後	眞	肥後延壽寺	延寶二、九、五	七五
二三三四	玉岡		明	黃檗	肥前崇福寺	—	—
二三三五	日體	叡逝	—	日蓮	武藏瑞輪寺	延寶三、三、廿一	五三
二三三五	宗佐	傳外	山城	臨濟	山城大德寺	延寶三、四、三	六八
二三三五	知闡	演譽	—	淨土	武藏幡隨院	延寶三、四、廿七	—
二三三五	單及	隨譽	—	淨土	信濃隆芳寺	延寶三、四、廿九	—
二三三五	長察	覺譽	相模小田原	淨土	武藏西岸寺	延寶三、五、九	—
二三三五	賴意○	任識	土佐須崎	眞言	大和長谷寺	延寶三、七、廿二	六三
二三三五	宗圭	雪菴	京師	臨濟	山城大德寺	延寶三、十、四	七九
二三三五	演海		京師	眞言	山城仁和寺	—	—
二三三六	無明○	梅天	豐後	臨濟	山城白河寺	延寶四、五、二	七〇
二三三六	珂天○	乘譽	相模筑井	淨土	武藏增上寺	延寶四、六、十三	七〇
二三三六	日梵	見妙	—	日蓮	山城華光寺	延寶四、六、卅	七四
二三三六	日英	受詮	上總東金	日蓮	山城妙滿寺	延寶四、八、四	六三
二三三六	無難○	至道	美濃關原	臨濟	武藏東北寺	延寶四、八、十九	七四
二三三六	宗傳	實堂	近江	臨濟	山城大德寺	延寶四、九、十八	六四
二三三六	萬量	貫譽	—	淨土	相模光明寺	延寶四、九、廿五	—
二三三六	是雲	典譽	出雲松井	淨土	周防實相院	延寶四、十、七	—
二三三六	順長	嚴譽	—	淨土	山城光明寺	延寶四、十、廿三	—
二三三六	恢龍○	玉譽	—	淨土	武藏長福寺	延寶四、十二、廿五	—
二三三六	湛海○	寶山	伊勢一色	眞言	大和寶山寺	延寶四、—、—	—
二三三七	眞空	稱入	京師	淨土	大和隨典菴	延寶五、二、六	五〇

紀元	法諱		出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三三七	宗智	愚溪	京師	臨濟	山城大德寺	延寶五、二、廿五	六一
二三三七	善貞	運譽	—	淨土	武藏淨林寺	延寶五、四、二	—
二三三七	門○哲	寬譽	土佐	淨土	土佐還到院	延寶五、四、七	—
二三三七	吉○道	案山	甲斐都留	曹洞	武藏某菴	延寶五、八、十五	七〇
二三三七	純譽		攝津	淨土	攝津法泉寺	延寶五、八、廿七	—
二三三七	英○性		山城瓺原	華嚴	大和東大寺	延寶五、九、十二	六〇
二三三七	秀的	不中	越前志比	曹洞	武藏青松寺	延寶五、九、十八	五七
二三三七	露天	誠譽	日向佐土原	淨土	日向松月院	延寶五、十一、六	—
二三三七	龍○天	降雨	—	淨土	三河松應寺	延寶五、十一、六	—
二三三七	圓○忍	眞政	加賀石川	戒律	和泉神鳳寺	延寶五、十二、廿五	六九
二三三七	慧○雲		明蘇州	黃檗	肥前興福寺	—	—
二三三七	純○周	鐵空	京師	戒律	三河法藏寺	—	—
二三三八	榮譽	文秀	土佐幡多	眞言	武藏根生院	延寶六、二、十	七六
二三三八	顯證	一音	攝津生玉	眞言	山城仁和寺	延寶六、二、十三	八三
二三三八	信海	宗俊	近江永原	眞言	大和長谷寺	延寶六、二、廿一	六六
二三三八	性永		—	眞言	山城仁和寺	延寶六、二、廿五	四二
二三三八	宗○朝	東海	淡路	臨濟	山城大德寺	延寶六、二、—	四〇
二三三八	智鑑	玄譽	遠江濱松	淨土	山城知恩院	延寶六、三、六	八〇餘
二三三八	萬空		—	淨土	武藏增上寺	延寶六、三、—	—
二三三八	日○演	良仕	京師	日蓮	紀伊養珠寺	延寶六、五、六	六七
二三三八	玄察	隨譽	—	淨土	武藏淨國寺	延寶六、五、十三	—
二三三八	行故	忍譽	筑後	淨土	筑後如意菴	延寶六、五、十四	—
二三三八	長傳	白譽	—	淨土	大和西方院	延寶六、九、十九	—
二三三八	寬海		常陸笠間	眞言	飛彈中臺寺	延寶六、十、一	六五
二三三八	傳○序	稱譽	信濃小縣	淨土	近江西方寺	延寶六、十、七	—
二三三八	輪○超	三譽	伊勢山田	淨土	三河大樹寺	延寶六、十、廿七	—
二三三九	日○通	玄海	—	日蓮	甲斐身延山	延寶七、二、十一	六六
二三三九	法運	相譽	遠江	淨土	武藏大圓寺	延寶七、二、十三	—
二三三九	春把	管譽	相模小田原	淨土	武藏涼源寺	延寶七、五、十九	—
二三三九	流安	長譽	越前大野	淨土	出雲月照寺	延寶七、五、廿	—
二三三九	闡龍	專譽	常陸吉生	淨土	武藏泰壽院	延寶七、五、卅	—
二三三九	宗龍	江雲	山城	臨濟	山城大德寺	延寶七、六、十七	八一
二三三九	廣譽		安房	淨土	安房念佛院	延寶七、十二、十七	—
二三四〇	南岸	貞譽	筑紫	淨土	丹後清運寺	延寶八、正、六	
二三四〇	萬○靈	光譽	近江大津	淨土	山城知恩寺	延寶八、正、廿三	九三
二三四〇	道○明	鐵心	伯耆河郁	曹洞	加賀箏覺寺	延寶八、正、廿八	八八
二三四〇	圓超	良尊	—	眞	山城興正寺	延寶八、三、九	九〇
二三四〇	梅○附	師巖	讚岐多當	曹洞	武藏青松寺	延寶八、三、卅	四五
二三四〇	俊○盛	存伯	常陸菊部	眞言	大和長谷寺	延寶八、三、廿六	六九
二三四〇	智○空	唯稱	京師	淨土	山城安養寺	延寶八、五、十八	六四
二三四〇	元寂	默玄	岩代會津	曹洞	美濃大禪寺	延寶八、六、二	五二
二三四〇	澄禪	悔焉	肥後求麻	眞言	肥後地藏院	延寶八、六、十二	—
二三四〇	萬無	玄譽	伊勢津	淨土	山城法然寺	延寶八、六、廿五	七五
二三四〇	林應	周譽	—	淨土	武藏長建寺	延寶八、八、五	—
二三四〇	義觀	傳隨	奧州	淨土	下野某寺	延寶八、八、六	—
二三四〇	理傳	鏡譽	大和高市	淨土	大和念佛寺	延寶八、八、廿五	—
二三四〇	松譽		出雲	淨土	美作念佛寺	延寶八、十、七	—
二三四〇	存樹	迹譽	—	淨土	三河大樹寺	延實八、十、廿八	—

二三四〇	亮○汰○ 後彦	薩摩布施田	眞言	大和長谷寺	延寶八、十一、十	五九
二三四〇	檀隨 本學	江戸	淨土	伊勢金剛寺	延寶八、十二、十四	—
二三四一	日莚 春山	—	日蓮	甲斐身延山	天和元、正、廿七	七三
二三四一	本譽	—	淨土	出羽潮蓮寺	天和元、正、廿九	—
二三四一	聖譽	江戸下谷	淨土	丹波正覺寺	天和元、三、十三	—
二三四一	呑潮 三學	甲斐	淨土	尾張西岸寺	天和元、四、十七	—
二三四一	希○勤 貫乘	河内丹北	眞	河内息心菴	天和元、五、十七	三
二三四一	關○空 善廓	尾張熱田	淨土	紀伊總持寺	天和元、六、十三	四九
二三四一	呑茂 念譽	—	淨土	尾張大泉寺	天和元、九、四	七六
二三四一	日方	—	日蓮	紀伊本久寺	天和元、九、廿	七四
二三四一	性○機○ 慧林	支那福州	黄檗	山城萬福寺	天和元、十一、十一	七三
二三四一	不禪 悅嚴	信濃松本	曹洞	山城眞成寺	天和元、十二、七	六六
二三四一	道○琛○ 慈岳	—	黄檗	肥前福濟寺	—	—
二三四一	了○意○ 昭儀房	—	眞	山城本性寺	—	—
二三四二	貞○聞○ 東暉	京師	淨土	山城法林寺	天和二、二、十八	六〇
二三四二	道○光○ 鐵眼	肥後益城	黄檗	攝津瑞龍寺	天和二、三、廿二	五三
二三四二	日入○ 元信	—	日蓮	山城平樂菴	天和二、六、十五	—
二三四二	存慶 專譽	尾張	淨土	三河昌福寺	天和二、七、廿五	—
二三四二	一念 淨譽	攝津高槻	淨土	山城常樂菴	天和二、九、十二	三〇
二三四二	松雲 龍幡	陸奥	曹洞	山城興聖寺	天和二、十一、一	七七
二三四二	宏源 貞翁	京師	眞言	山城觀音寺	天和二、十一、十四	五七
二三四二	則中 快玄	阿波	淨土	尾張相應寺	—	—
二三四三	相關 空寂	—	淨土	武藏傳通院	天和三、二、廿	—
二三四三	康音	—	佛工	—	天和三、三、二	—
二三四三	閑的 大學	駿河駿府	淨土	武藏法菴寺	天和三、五、七	—
二三四三	義天 高譽	山城伏見	淨土	山城淨華院	天和三、五、十三	—
二三四三	觀禪 天學	三河碧海	淨土	山城東山	天和三、五、十六	—
二三四三	宗心 祖道	越後	曹洞	美濃寶鏡山	天和三、八、廿五	四六
二三四三	日善 天素	加賀	日蓮	山城鷹峯談林	天和三、九、六	七九
二三四三	廓○玄○ 聖譽	—	淨土	伊勢知相寺	天和三、九、十五	—
二三四三	雲○溪○ 桃水	肥後柳川	曹洞	肥後法巖寺	天和三、九、十九	七〇
二三四三	剛中 快玄	阿波	淨土	尾張相應寺	—	—
二三四四	性○瑫○ 木菴	支那泉州	黄檗	山城萬福寺	貞享元、正、廿	七四
二三四四	宗玄 天岸	肥後	臨濟	山城大德寺	貞享元、二、一	五〇
二三四四	單譽	—	淨土	攝津安養寺	貞享元、二、三	—
二三四四	閑唱	信濃綿内	淨土	美濃靈合山	貞享元、二、三	五九
二三四四	玄周 三譽	甲斐	淨土	尾張正念寺	貞享元、二、廿四	—
二三四四	尊道	—	天台	近江延暦寺	貞享元、三、六	六三
二三四四	宗什 一溪	山城	臨濟	山城大德寺	貞享元、六、十六	六七
二三四四	智幻 成譽	—	淨土	上野專修寺	貞享元、九、九	—
二三四四	日廷 尊賀	京師	日蓮	山城妙覺寺	貞享元、九、九	七二
二三四四	宗春 仙溪	美濃	臨濟	山城大德寺	貞享元、十二、廿五	八〇
二三四四	春益	—	淨土	武藏增上寺	貞享元、—	六〇
二三四四	哲秀	常陸	淨土	山城正念寺	—	—
二三四四	普門 不文	豐前戸須	眞、	豐前妙正寺	—	—
二三四四	慧晃	—	—	山城双岡某菴	—	—
二三四五	梵○千○ 大顚	江戸	臨濟	相摸圓覺寺	貞享二、正、二	—
二三四五	貞○準○	京師	淨土	伊勢淨土寺	貞享二、三、廿二	五九
二三四五	宗璋 琢山	相摸	臨濟	山城大德寺	貞享二、四、十七	八九
二三四五	宗鈍 鐵舟	相模	臨濟	山城大德寺	貞享二、四、廿七	七三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三四五	蓮的（義譽）	武藏熊谷	淨土	武藏靈岸寺	貞享二、八、廿七	—
二三四五	西尊（叶譽）	加賀	淨土	山城金戒光寺	貞享二、八、廿九	—
二三四五	見雪（繁山）	—	曹洞	相模最乘寺	貞享二、九、十	六〇
二三四五	潮越（心譽）	武藏練間	淨土	武藏養伯寺	貞享二、十、廿九	—
二三四五	日悟（堯意）	陸前仙臺	日蓮	陸前法運寺	貞享三、正、四	七八
二三四六	雪堂	明	黃檗	肥前崇福寺	貞享三、二、十六	三三
二三四六	高譽	—	淨土	山城大雲院	貞享三、三、九	五八
二三四六	惠秀（信譽）	—	淨土	攝津見性寺	貞享三、四、五	七六
二三四六	誠入（聞益）	—	淨土	越前西福寺	貞享三、八、廿五	—
二三四六	春岳（專譽）	—	淨土	武藏傳通院	貞享三、九、十五	—
二三四六	一心	和泉堺	日蓮	和泉知足菴	貞享三、十、廿二	六三
二三四六	日玉尼（妙月）	—	日蓮	山城養壽菴	貞享三、十、廿五	六五
二三四六	日運（尊圓）	京師	日蓮	山城本國寺	貞享三、十一、廿五	—
二三四六	宗文（質休）	近江	臨濟	山城大德寺	貞享三、十一、廿八	五四
二三四六	靈圓（公譽）	安房	淨土	相模光明寺	貞享三、十二、二	—
二三四六	了山（喜譽）	信濃佐久	淨土	信濃芳泉寺	貞享三、十二、七	—
二三四六	春應（專譽）	甲斐	淨土	佐渡專光寺	貞享三、—	八七
二三四七	靈益（專譽）	—	淨土	大和清涼院	貞享四、正、十七	—
二三四七	亮賢	下野甘樂	眞言	武藏護國寺	貞享四、三、七	七七
二三四七	宗林（月舟）	—	曹洞	安藝洞雲寺	貞享四、六、三	—
二三四七	詮雄（廣譽）	江戶	淨土	武藏增上寺	貞享四、七、八	八一
二三四七	性源（獨本）	安房	黃檗	相模淨業寺	貞享四、八、十一	七三
二三四七	宗高（仰堂）	京師	臨濟	山城大德寺	貞享四、九、四	六〇
二三四七	庭岸（見譽）	近江膳所	淨土	美濃大運寺	貞享四、十、卅	—
二三四七	巖宿（信譽）	攝津	淨土	武藏增上寺	貞享四、十二、八	七六
二三四七	俊雄（勝譽）	—	淨土	武藏靈山寺	—	—
二三四八	輪超（一譽）	—	淨土	上總壽光院	元祿元、四、十五	—
二三四八	孝雄（信海）	—	眞言	山城豐藏坊	元祿元、五、廿七	六一
二三四八	聞證（貞光）	京師	淨土	武藏淨國寺	元祿元、五、廿七	五四
二三四八	性派（南源）	支那福唐	黃檗	河內正興寺	元祿元、六、廿五	六三
二三四八	流頓（乘譽）	越前府中	淨土	山城知恩寺	元祿元、九、十九	—
二三四八	紹佗（力充）	山城	臨濟	山城大德寺	元祿元、九、廿三	八四
二三四八	日寬（堯恩）	—	日蓮	甲斐本因寺	元祿元、九、卅	七三
二三四八	尊空（帝譽）	—	淨土	山城知恩院	元祿元、十一、七	—
二三四八	性獅（獨吼）	支那福州	黃檗	山城漢松院	元祿元、—	五七
二三四八	普門	—	眞	伊勢彰見寺	元祿元、—	五七
二三四八	求厭	攝津大坂	淨土	—	元祿元、—	八〇
二三四八	淨慶	—	佛工	—	—	—
二三四八	貫徹	—	曹洞	下野大雄寺	—	—
二三四八	海長（江外）	肥前長崎	黃檗	肥前清涼菴	—	—
二三四八	圓恕	山城	淨土	—	—	—
二三四八	圓智（中阿）	近江大津	淨土	近江正定寺	—	—
二三四八	廓龍	—	時	—	—	—
二三四八	賞山	—	時	駿河西光寺	—	—
二三四八	兆溪	—	黃檗	武藏弘福寺	—	—
二三四八	日曉（圓海）	—	日蓮	山城鷹峯	—	—
二三四八	道活（卓岩）	肥前長崎	臨濟	肥前某菴	—	—
二三四九	山常（寂琰）	—	眞	山城興正寺	元祿二、正、四	六六

二三四九	石○水○		—	臨濟	奧州圓同寺	元祿二、正、廿九	六〇
二三四九	隨庸		—	眞	山城佛光寺	元祿二、三、廿九	—
二三四九	香龍	大川	三河片濱	曹洞	遠江海藏寺	元祿二、四、六	七〇
二三四九	宗○恕	宥峯	山城	臨濟	山城大德寺	元祿二、五、十八	五六
二三四九	日○啓	輪匠	—	日蓮	山城妙傳寺	元祿二、六、十七	五八
二三四九	日○匠	温牧	攝津伊丹	日蓮	山城本法寺	元祿二、六、廿一	六三
二三四九	日堯	空雅	—	日蓮	山城淨妙菴	元祿二、七、十七	—
二三四九	周筆	覺闇	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二三四九	宗珊	球林	—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二三四九	日昇		—	臨濟	山城妙心寺	—	—
二三五〇	日閑	沾潙	—	日蓮	駿河蓮永寺	元祿三、二、十七	八一
二三五〇	慈○山○	妙立	美作	天台	近江比叡山	元祿三、七、三	五四
二三五〇	善榮	聞翠	三河小垣井	淨土	三河誓滿寺	元祿三、七、五	—
二三五〇	日明	本如	京師	日蓮	山城瑞光寺	元祿三、七、—	二七
二三四〇	日延	慧哲	—	日蓮	山城本國寺	元祿三、八、廿	七四
二三五〇	相山	諦譽	—	淨土	駿河寶台院	元祿三、十、三	—
二三五一	宗右	旋峰	京師	臨濟	山城大德寺	元祿四、三、七	六二
二三五一	香林	桂堂	肥前小城	曹洞	肥前天祐寺	元祿四、三、七	—
二三五一	澄○一○		明	黃檗	肥前興福寺	元祿四、四、八	八四
二三五一	日壽尼	瑞法院	—	日蓮	山城瑞龍寺	元祿四、四、廿九	四五
二三五一	慧雲	寶性院	—	眞	山城本誓寺	元祿四、五、十五	七九
二三五一	孤雲	專譽	—	淨土	山城知恩院	元祿四、十一、六	七六
二三五一	宗璜	桂山	京師	臨濟	山城大德寺	元祿四、十一、十二	八〇
二三五二	雲○堂○	乘音	和泉	眞言	紀伊文殊院	元祿五、四、九	—
二三五二	紹及	見岩	京師	臨濟	山城大德寺	元祿五、七、廿八	八五
二三五二	古巖	流譽	—	淨土	武藏增上寺	元祿五、九、廿六	七三
二三五二	空誓		江戶	眞	武藏妙延寺	元祿五、十一、三	九〇
二三五二	日堯		—	日蓮	山城頂妙寺	元祿五、十一、三	八三
二三五二	紹益	堅峰	京師	臨濟	山城大德寺	元祿五、十一、四	七六
二三五二	日允	玄通	—	日蓮	山城妙覺寺	元祿五、十二、十六	七四
二三五二	玄○秀	覺阿	遠江見付	時	甲斐吉積山	元祿五、—	四三
二三五三	信○盛	陽春	—	眞言	山城智積院	元祿六、正、八	—
二三五三	日六	貞順	京師	日蓮	山城妙顯寺	元祿六、正、廿六	六九
二三五三	晃○全○	販撓	讃岐	曹洞	越前永平寺	元祿六、二、廿四	六七
二三五三	日昌	善俊	京師	日蓮	山城本國寺	元祿六、二、廿四	五七
二三五三	弘賴	認譽	—	淨土	山城地藏院	元祿六、五、廿三	—
二三五三	宗○呑	月溪	京師	臨濟	山城大德寺	元祿六、七、廿六	五二
二三五三	運敞	元春	—	眞言	山城智積院	元祿六、八、十	八〇
二三六三	日守	淵盈	—	日蓮	山城淨心寺	元祿六、八、廿	—
二三六三	永○琢○	盤珪	播磨揖保	臨濟	播磨龍門寺	元祿六、九、三	七二
二三五三	良雄		大和十市	天台	近江比叡山	元祿六、九、十	五九
二三五三	圓長	起譽	—	淨土	武藏蓮馨寺	元祿六、十、四	—
二三五三	宗瑞	祥山	京師	臨濟	山城大德寺	元祿六、十二、十六	七五
二三五三	慈觀	照空房	—	眞言	武藏圓福寺	—	—
二三五三	曇寂	悲旭	—	眞言	山城五智山	—	—
二三五三	實養	長善房	—	眞言	陸前龍寶院	—	—
二三五三	如幻	道空	—	眞言	山城五智山	—	—
二三五三	慶○善○	積峯	山城久世	淨土	山城林禪寺	—	—
二三五四	宗鴻	大仲	京師	臨濟	山城大德寺	元祿七、二、廿八	七九
二三五四	呑益	深譽	江戶	淨土	武藏松音寺	元祿七、三、四	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三五四	性圓 獨照	近江	黃檗	攝津正樂寺	元祿七、七、十七	七八
二三五四	日淨 離着	播磨	日蓮	山城瑞光寺	元祿七、十、十五	五九
二三五四	交易 連山	常陸水戶	曹洞	下野大中寺	元祿七、十一、廿三	六〇
二三五四	隨譽	筑後幸袋	淨土	筑後榮長寺	元祿七、十一、廿九	—
二三五四	大衡	明福州	黃檗	肥前崇福寺	—	—
二三五五	遊安 廓榮	上野邑樂	淨土	武藏靈山寺	元祿八、正、十	五〇餘
二三五五	紘良 勁譽	—	淨土	三河大樹寺	元祿八、二、十九	—
二三五五	堯恕 林素	京師	天台	山城妙法院	元祿八、四、十六	五六
二三五五	宗安 閑徹	肥前平戶	臨濟	山城大德寺	元祿八、四、十六	六三
二三五五	京順 普峯	薩摩	曹洞	薩摩香積寺	元祿八、五、廿八	七六
二三五五	道海 潮音	肥前小城	黃檗	上野廣濟寺	元祿八、八、廿四	六八
二三五五	性潡 高泉	清福州	黃檗	山城萬福寺	元祿八、十、十六	六三
二三五五	公海 久遠壽院	京師	天台	武藏寬永寺	元祿八、—	八九
二三五五	珂碩	武藏	淨土	武藏淨眞寺	元祿八、—	八〇
二三五五	珂憶 勝譽	—	淨土	河內安福寺	—	—
二三五六	宗胡 月舟	肥前	曹洞	加賀大乘寺	元祿九、正、十	七九
二三五六	祖稜 高雲	大隅加治木	曹洞	山城興聖寺	元祿九、二、一	六一
二三五六	興儔 心越	明抗州	曹洞	常陸祇園寺	元祿九、九、卅	五五
二三五六	慈海 宗順	—	天台	武藏凌雲院	元祿九、十一、十六	—
二三五七	宗的 傳心	和泉	臨濟	山城大德寺	元祿十、正、三	七四
二三五七	日近 舜說	越前	日蓮	甲斐本遠寺	元祿十、二、八	八四
二三五七	補澤 舜山	武藏館鄉	曹洞	武藏宗關寺	元祿十、三、十五	六九
二三五七	賢廣	常陸筑波	眞言	武藏護國寺	元祿十、五、三	六一
二三五七	宗忽 天倫	丹州	臨濟	山城大德寺	元祿十、六、廿二	七二
二三五七	宗乙 虎巖	和泉	臨濟	山城大德寺	元祿十、十、廿九	五四
二三五七	日耀 勝光	—	日蓮	山城妙顯寺	元祿十、十一、廿	六三
二三五七	護洲 界遠	—	曹洞	近江深講菴	元祿十、十一、廿一	六一
二三五七	宗胖 碩翁	京師	臨濟	山城大德寺	元祿十、十二、廿九	六四
二三五七	法蓮	奧州	法相	大和興福寺	—	—
二三五八	日實 覺性	攝津大坂	日蓮	山城眞如寺	元祿十一、正、十四	七四
二三五八	玄光 獨菴	肥前佐賀	曹洞	肥前皓臺寺	元祿十一、二、十一	六九
二三五八	日隆 春山	—	日蓮	山城本國寺	元祿十一、三、五	五九
二三五八	日講 安國院	京師	日蓮	下總妙興寺	元祿十一、三、…	七三
二三五八	靈玄 生譽	出羽莊內	淨土	武藏增上寺	元祿十一、五、九	八〇
二三五八	日脫 空雅	加賀	日蓮	甲斐身延山	元祿十一、九、廿二	七三
二三五八	日性 春繼	—	日蓮	山城大虛菴	元祿十一、十一、十五	六八
二三五八	義道 清白	—	天台	近江比叡山	—	—
二三五八	道坦	—	曹洞	肥前泰智寺	—	—
二三五九	了山 晃譽	安藝廣島	淨土	下野大巖寺	元祿十二、正、廿五	—
二三五九	圓意 眞譽	—	淨土	下野弘經寺	元祿十二、三、八	—
二三五九	胤清 覺舜房	—	法相	大和寶藏院	元祿十二、四、四	六六
二三五九	濠印 皎印	山城淀	眞	豐後長福寺	元祿十二、五、十七	—
二三五九	虎白 月嘯	加賀	曹洞	加賀寶圓寺	元祿十二、八、廿	—
二三五九	日如 是心	—	日蓮	下總正峯山	元祿十二、十一、十二	七三
二三五九	秀翁 深慶房	伊勢安濃津	眞言	紀伊高野山	元祿十二、十二、十五	七四
二三六〇	日宗 叡桓	—	日蓮	山城妙顯寺	元祿十三、正、廿	八五
二三六〇	光海 一如	—	眞	山城本願寺	元祿十三、四、十二	五二
二三六〇	宗助 順叟	京師	臨濟	山城大德寺	元祿十三、六、廿八	六八

二三六〇	白玄	詮誉	江戸	淨土	武藏增上寺	元祿十三、七、二	七三
二三六〇	日利	春利	和泉堺	日蓮	山城妙顯寺	元祿十三、八、一	六〇
二三六〇	〇道機	鐵牛	石見	黄檗	武藏弘福寺	元祿十三、八、二	七三
二三六〇	日忍	無諍	京師	日蓮	山城瑞光寺	元祿十三、九、八	—
二三六〇	日順	堯辰	紀伊	日蓮	紀伊報恩寺	元祿十三、九、十	六四
二三六一	道稔	月畔	尾張名古屋	臨濟	陸前萬壽寺	元祿十四、正、一	七四
二三六一	日中	省巳	—	日蓮	和泉妙法寺	元祿十四、正、十九	七二
二三六一	〇空心	英冲	攝津尼崎	眞言	攝津圓珠院	元祿十四、正、廿五	六二
二三六一	妙一	乾角	京師	臨濟	山城大德寺	元祿十四、三、廿五	七一
二三六一	春應	慈譽	伊勢神戸	淨土	駿河寶臺院	元祿十四、三、廿八	—
二三六一	賀順		美濃岐阜	天台	和泉海岸寺	元祿十四、五、廿八	—
二三六一	日迨	遊慮	京師	日蓮	安房誕生寺	元祿十四、七、五	六三
二三六一	〇寂本	雲石堂	山城深草	眞言	紀伊寶光院	元祿十四、十、十五	七一
二三六一	濟深		—	眞言	山城勸修寺	元祿十四、十二、二	三二
二三六一	宗寛		—	眞言	伊勢敎王山	—	—
二三六二	意覺	聚譽	—	淨土	相模光明寺	元祿十五、正、廿五	—
二三六二	日春	是然	加賀金澤	日蓮	山城妙顯寺	元祿十五、正、廿五	八一
二三六二	愚白	雲山	肥後	曹洞	和泉成合寺	元祿十五、二、十八	八四
二三六二	〇淨嚴	覺彦	河内鬼住	眞言	武藏靈雲寺	元祿十五、六、廿七	六四
二三六二	〇義光	月潤	越中	曹洞	越中光禪寺	元祿十五、九、十六	五〇
二三六二	蓮躰		—	眞言	武藏靈雲寺	—	—
二三六三	浪化		越中	眞	越中瑞泉寺	元祿十六、十、十六	三二
二三六四	〇卓玄	淳亮	薩摩甑島	眞言	大和長谷寺	寶永元、正、廿五	七三
二三六四	〇慧堅	戒山	筑後久留米	天台	近江安養寺	寶永元、三、五	五六
二三六四	宗清	拙堂	京師	臨濟	山城大德寺	寶永元、六、廿二	七四

二三六四	日玄	義卓	—	日蓮	武藏本門寺	寶永元、七、三	—
二三六四	宗昕	陽岑	京師	臨濟	山城大德寺	寶永元、十一、十六	五一
二三六四	豪寛		—	天台	近江比叡山	—	—
二三六四	圓通		紀伊	黄檗	紀伊光明寺	—	—
二三六四	憶慶		能登	眞	能登往還寺	—	—
二三六四	日貞	學珠	京師	日蓮	山城本妙寺	—	—
二三六四	〇通元		豐後	眞	豐後長福寺	—	—
二三六四	日明	觀靜院	—	日蓮	武藏淨心寺	—	—
二三六五	〇性安	千獃	明福州	黄檗	山城萬福寺	寶永二、二、一	七〇
二三六五	〇智幽	玄門	伊勢安濃津	天台	近江安樂院	寶永二、五、十三	八七
二三六五	〇宗益	攝翁	出羽米澤	曹洞	奧州泰心院	寶永二、五、廿四	五七
二三六五	日言	長江	京師	日蓮	下總妙法華寺	寶永二、六、廿五	—
二三六五	〇公慶	敬阿	丹後宮津	華嚴	大和東大寺	寶永二、七、十二	五八
二三六五	宗古	德岑	武藏	臨濟	山城大德寺	寶永二、七、廿三	八一
二三六五	日相尼	妙是	加賀金澤	日蓮	武藏日慶寺	寶永二、十、三	八一
二三六五	〇日靜	慈觀	京師	日蓮	山城瑞光寺	寶永二、十、廿六	五六
二三六五	陽洲	正菴	尾張	淨土	尾張寶周寺	寶永二、十、—	—
二三六六	〇性瑩	獨湛	支那福建	黄檗	山城萬福寺	寶永三、正、廿六	七九
二三六六	秀算		播磨廣山	天台	近江比叡山	寶永三、四、十一	八二
二三六六	廓三		三河刈屋	淨土	—	寶永三、六、五	三二
二三六六	〇圓問	志譽	京師	淨土	山城知恩寺	寶永三、八、十五	七三
二三六六	〇心岩	縱譽	加賀小松	淨土	加賀大圓寺	寶永三、八、廿六	六〇
二三六六	法眼		京師	黄檗	攝津法福寺	—	—
二三六七	秀道	白譽	—	淨土	山城知恩院	寶永四、三、十一	—
二三六七	宗演	說叟	京師	臨濟	山城大德寺	寶永四、三、廿	八一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三六七	善作（行譽）	甲斐	淨土	武藏教善寺	寶永四、五、十四	—
二三六七	道覺（了翁）	羽後八幡	黃檗	山城天眞院	寶永四、五、廿二	七八
二三六七	澤秀（良[illegible]）	—	淨土	山城知恩寺	寶永四、六、一	—
二三六七	日念（孝存）	山城鳥羽	日蓮	近江淨心寺	寶永四、七、七	七四
二三六七	寬隆	—	眞言	山城仁和寺	寶永四、九、十六	三八
二三六七	義天（廓如）	攝津住吉	天台	近江比叡山	寶永四、十、一	五七
二三六七	慈泉（洞[illegible]）	京師	淨土	山城安養寺	寶永四、十一、十七	六三
二三六七	竺信（[illegible]）	攝津大坂	曹洞	山城興聖寺	寶永四、十一、十九	七五
二三六七	雷音（了[illegible]）	明	黃檗	肥前興福寺	—	—
二三六八	宣存（[illegible]）	上野西島	天台	武藏淺草寺	寶永五、三、十七	七〇
二三六八	圓性	—	眞	山城眞覺寺	寶永五、四、十七	八六
二三六八	宗點（梅岑）	美濃	臨濟	山城大德寺	寶永五、十、四	六六
二三六八	傳心（痴絕）	三河黑瀨	曹洞	長門大寧寺	寶永五、十、十二	六一
二三六八	日存（慈忍）	京都老松祠	日蓮	安房誕生寺	寶永五、十、十八	六七
二三六八	日從（通心）	加賀	日蓮	山城本國寺	寶永五、十二、十七	五九
二三六九	寂仙（[illegible]）	—	淨土	山城金戒光明寺	寶永六、正、十七	—
二三六九	良高（[illegible]）	武藏江戶	曹洞	備中定林寺	寶永六、二、七	六一
二三六九	日住（[illegible]）	甲斐	日蓮	武藏瑞輪寺	寶永六、三、卅	七三
二三六九	道悟（[illegible]）	美濃多藝	黃檗	攝津慈應寺	寶永六、四、廿四	七四
二三六九	白幽子	—	—	山城白河山	寶永六、七、廿五	—
二三六九	宗頤（別源）	京師	臨濟	山城大德寺	寶永六、九、十七	八二
二三七〇	了秀	—	淨土	山城淨華院	寶永七、正、廿五	—
二三七〇	師蠻（卍元）	相模	臨濟	美濃盛德寺	寶永七、二、十二	八五
二三七〇	日隆（道明院）	駿河澳津	日蓮	伊勢圓妙寺	寶永七、二、廿四	七九

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三七〇	安西	伊豫奧浦	淨土	伊豫本誓寺	寶永七、三、十五	七二
二三七〇	倖的	下野足利	淨土	下野大法寺	寶永七、五、廿九	—
二三七〇	宗光	但馬	臨濟	山城大德寺	寶永七、六、廿	六八
二三七〇	專戒	—	眞言	山城智積院	寶永七、六、廿四	七一
二三七〇	元慶	京師	黃檗	武藏羅漢寺	寶永七、七、十一	六三
二三七〇	祖衷	若狹佐田	曹洞	丹波慈德寺	寶永七、七、十六	八七
二三七〇	雲臥	江戶番町	淨土	武藏增上寺	寶永七、八、十六	六九
二三七〇	觀應（智）	下野	眞言	山城知積院	寶永七、八、廿八	五五
二三七〇	知辨	—	淨土	駿河寶相寺	寶永七、九、十五	—
二三七〇	月妙	京師	日蓮	山城妙顯寺	寶永七、十、十六	七三
二三七一	尊統	—	淨土	山城知恩院	正德元、五、十八	—
二三七一	元聰尼	—	黃檗	武藏泰雲寺	正德元、九、十八	六六
二三七一	日量	甲斐荊澤	日蓮	甲斐妙了寺	正德元、九、廿	五一
二三七一	忍徵	江戶	淨土	山城法然院	正德元、十一、十	六七
二三七二	篤智	信濃諏訪	曹洞	武藏高林寺	正德二、正、一	—
二三七一	湛澄	—	淨土	山城報恩寺	正德二、二、廿九	六三
二三七一	演智	—	淨土	伊勢曼荼羅寺	正德二、七、七	八〇
二三七一	祖京	—	天台	近江比叡山	正德二、十、廿九	四六
二三七二	英岳	丹波笹山	眞言	大和長谷寺	正德二、十一、一	七四
二三七二	只丸	伊賀上野	眞	攝津欣淨寺	正德二、十一、二	七〇餘
二三七二	日貞	—	日蓮	下總弘法寺	正德二、十一、五	—
二三七二	日忠	伊豆初島	日蓮	紀伊本廣寺	正德二、十二、十六	七一
二三七三	道胖	肥前	黃檗	肥前聖壽寺	正德三、—、—	八〇
二三七三	道定	美濃關	曹洞	尾張萬松寺	正德三、四、廿五	八〇

二三七三	榮專		武藏江戶	眞言	武藏根生院	正德三、十、十四	七〇餘
二三七三	紹肅	瑞堂	京師	臨濟	山城大德寺	正德三、十、廿六	八六
二三七三	日輝	尊明	京師	日蓮	山城本國寺	正德三、十一、八	—
二三七三	瑞光	曾瑞	—	眞言	下野金蓮院	—	—
二三七四	日宜	玄實	—	日蓮	山城本國寺	正德四、三、十六	七〇
二三七四	宗悅	怡溪	—	臨濟	武藏東海寺	正德四、五、二	七一
二三七四	懷音	眞譽	—	淨土	山城法然寺	正德四、五、五	—
二三七四	日了	長圓	駿河府中	日蓮	甲斐本覺寺	正德四、六、九	六七
二三七四	日祐	立慧	大坂	日蓮	山城眞如寺	正德四、六、十九	—
二三七四	日題	蓮華院	—	日蓮	越中正法寺	正德四、六、廿四	八二
二三七四	善慶	澄譽	—	淨土	常陸常福寺	正德四、七、廿五	—
二三七四	道白	古山	備後	曹洞	加賀大乘寺	正德四、八、十九	八〇
二三七四	日堯	孝辨	紀伊	日蓮	甲斐本遠寺	正德四、十、廿五	八一
二三七四	靈鏡	順譽	—	淨土	武藏東漸寺	正德四、十、廿七	—
二三七五	梅仙	笠巖	近江	曹洞	武藏青松寺	正德五、二、廿三	六七
二三七五	厭求		京師	淨土	山城專福寺	正德五、六、十一	八二
二三七六	湛海	寶山	伊勢二色	眞言	大和生駒山	享保元、正、十六	八八
二三七六	宗穩	穆岩	京師	臨濟	山城大德寺	享保元、二、十六	七一
二三七六	天空	月西	上野	淨土	佐渡念佛堂	享保元、三、廿八	七九
二三七六	融觀	忍光	攝津	融通念佛	攝津大念佛寺	享保元、閏二、十三	六八
二三七六	顯常	大典	近江	臨濟	山城相國寺	享保元、三、八	八三
二三七六	日慈尼	瑞應院	京師	日蓮	山城瑞龍寺	享保元、四、六	一八
二三七六	公辨	修禮	京師	天台	武藏輪王寺	享保元、四、十七	四八
二三七六	岸了	通譽	尾張	淨土	山城知恩院	享保元、七、十七	—
二三七六	堯圓		京師	眞	伊勢專修寺	享保元、七、廿七	七六
二三七六	義統	大心	京師	臨濟	山城大德寺	享保元、—、—	—
二三七六	日達		—	日蓮	山城寂光寺	—	—
二三七六	惠實	雪鼎	—	眞	山城圓德寺	—	—
二三七六	顯慧		—	淨土	尾張正覺寺	—	—
二三七六	日榮	忍辱鎧	—	日蓮	山城本瑞寺	—	—
二三七六	亮快	存心	—	眞言	山城清和院	—	—
二三七六	日諦	觀具院	—	日蓮	山城妙顯寺	—	—
二三七六	妙諦	聖僕	—	臨濟	和泉佛在菴	—	—
二三七六	護信		伊勢飯高	淨土	下總環菴	—	—
二三七七	日潤	慈雲	江戶	日蓮	武藏本門寺	享保二、正、廿七	—
二三七七	澄禪		—	淨土	山城大原山	享保二、二、四	七〇
二三七七	詮察	松譽	伊勢	淨土	武藏增上寺	享保二、三、十八	六七
二三七七	日透	惠照	京師	日蓮	甲斐西谷談林	享保二、三、廿六	六五
二三七七	滴水	曹源	石見津和野	曹洞	加賀大乘寺	享保二、四、十一	五七
二三七七	尊祐	教笠	下野鍋山	眞言	大和長谷寺	享保二、四、十八	七三
二三七七	海脈	靈源	清	黃檗	山城萬福寺	享保二、五、十八	六七
二三七七	明實	古溫	—	淨土	山城法恩寺	享保二、五、廿七	六五
二三七七	日燈	慧明	—	日蓮	山城瑞光寺	享保二、九、十二	七六
二三七七	秀本	如實	肥前佐賀	曹洞	武藏青松寺	享保二、十、廿六	七五
二三七七	義山	貞照	京師	淨土	山城華頂山	享保二、十一、十三	七〇
二三七七	日禪	宣海	紀伊	日蓮	紀伊養珠寺	享保二、十二、廿九	七九
二三七八	義觀		—	臨濟	—	享保三、三、—	—
二三七八	祐天	愚蒙	岩代新倉	淨土	武藏增上寺	享保三、七、十五	八二
二三七八	知空	性應	京師	眞	山城光隆寺	享保三、八、十三	八五
二三七八	道侃	直翁	近江野洲	黃檗	近江野洲某菴	享保三、十、十五	五七

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三七八	日相 是心	尾張桑栗	日蓮	美濃長照寺	享保三、十、十七	八四
二三七八	慧友 了諦	—	眞	攝津三光寺	—	—
二三七九	無能 守一	奥州石川	淨土	奥州北平田	享保四、正、二	三七
二三七九	蓮昉 旭如	—	黃檗	山城萬福寺	享保四、三、廿六	五六
二三七九	隆慶 專順	—	眞言	大和長谷寺	享保四、八、六	七一
二三七九	亮貞 自春	伊勢度會	眞言	大和長谷寺	享保四、九、十七	七三
二三七九	尊果尼	—	天台	山城光照院	享保四、十、—	四五
二三七九	性憲 慈空	京師	淨土	山城眞宗院	享保四、十一、廿一	七四
二三八〇	妙空尼 教智	攝津	日蓮	山城養壽菴	享保五、正、十五	七三
二三八〇	實貫 泰音	越前丸岡	眞言	武藏眞福寺	享保五、四、六	—
二三八〇	秀慶 應春	武藏矢那瀨	眞言	大和長谷寺	享保五、七、廿一	六八
二三八〇	周大 慧學	江戸麻布	淨土	武藏增上寺	享保五、九、十三	—
二三八〇	道龍 化寂	筑後	黃檗	肥前龍津寺	享保五、十一、九	八七
二三八一	馬蹄	—	曹洞	常陸祇園寺	—	—
二三八一	峻諦 寂清	越前福井	眞	越前勝授寺	享保六、正、五	五八
二三八一	日省 老辨	江戸	日蓮	甲斐身延山	享保六、正、十三	八五
二三八一	慧空 光遠房	近江金森	眞	山城西福寺	享保六、二、八	七八
二三八一	堯庸 隨如	—	眞	山城佛光寺	享保六、七、十七	八一
二三八一	日久尼 妙本	—	日蓮	山城養壽院	享保六、八、六	七三
二三八一	道明 慧𥟖	長門	黃檗	武藏瑞聖寺	享保六、八、廿四	—
二三八一	貞截 信智	磐城相馬	淨土	伊勢梅香寺	享保六、九、廿八	七三
二三八一	慧端 道說	信濃飯山	臨濟	信濃正受菴	享保六、十、六	八〇
二三八一	日亨 顓流	京師	日蓮	甲斐身延山	享保六、十二、廿六	七六
二三八一	樹心	京師	眞	山城長覺寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三八二	義山 音識	美濃大垣	眞言	山城智積院	享保七、四、四	—
二三八二	日禎 永順	上總大楠	日蓮	安房誕生寺	享保七、六、十三	—
二三八二	宗寬 江西	京師	臨濟	山城大德寺	享保七、十一、十	五六
二三八二	日近 幸長	—	日蓮	山城本法寺	享保八、正、廿五	八六
二三八三	妙順尼 孝淑	—	日蓮	山城養壽菴	享保八、二、七	七一
二三八三	吟達 然響	紀伊	淨土	武藏靈巖寺	享保八、三、二	—
二三八三	妙式	近江	眞	近江本福寺	享保八、四、十七	七一
二三八三	日詮 慧仲	—	日蓮	山城本國寺	享保八、五、十一	七九
二三八三	永義 虎溪	長門	臨濟	陸前東昌寺	享保八、九、十八	八〇
二三八三	日永 大通院	—	日蓮	紀伊報恩寺	享保八、十一、十二	七九
二三八三	信有 專榮	武藏谷原	眞言	大和長谷寺	享保八、十二、十五	六三
二三八四	日信 一正院	—	日蓮	紀伊感應寺	享保九、二、廿三	六二
二三八四	隆光 榮春	大和添下	眞言	常陸知足院	享保九、六、七	七六
二三八四	日忍 如節	京師	日蓮	山城立本寺	享保九、六、十二	七五
二三八四	快意 俊典	—	眞言	武藏護持院	享保九、七、九	—
二三八四	快存 是心	薩摩	眞言	山城智積院	享保九、八、廿九	七八
二三八五	光常 寂如	京師	眞	山城本願寺	享保十、七、八	七五
二三八五	日忍 智朗	上總久留利	日蓮	山城瑞光寺	享保十、八、一	三八
二三八五	圓理 應響	—	淨土	山城知恩院	享保十、九、五	—
二三八五	方炳 獨父	清	黃檗	山城萬福寺	享保十、十、十六	七〇
二三八五	覺眼 空覺	薩摩	眞言	山城智積院	享保十、十一、八	八三
二三八六	圓澄	武藏埼玉	天台	近江延曆寺	享保十一、三、十三	四二
二三八六	文清 單得	近江彥根	曹洞	美濃岑昌寺	享保十一、三、二	八八
二三八六	寂照 大光	肥前佐賀	曹洞	肥前高傳寺	享保十一、五、二	五五

二三八六	閔°鑑°	學譽	江戸	淨土	武藏增上寺	享保十一、十二、五	八〇
二三八七	日顯尼°	妙佑	京師	日蓮	山城淨妙菴	享保十二、正、五	八〇
二三八七	性°海°	無涯	京師	眞	近江圓照寺	享保十二、正、十	八四
二三八七	懷°英	春潮房	筑後久留米	眞言	紀伊高野山	享保十二、七、廿一	―
二三八七	慧曉		越中	眞	越中正安寺	―	―
二三八八	光°濟		―	眞言	山城東寺	享保十三、二、十二	六三
二三八八	日°啓	辨通	和泉堺	日蓮	山城妙顯寺	享保十三、四、廿	七三
二三八八	智°興	法音	―	眞言	山城智積院	享保十三、六、十八	―
二三八八	覺°翁	教音	伊勢度會	眞言	武藏圓福寺	享保十三、七、十八	六四
二三八八	辨龍	澄學	―	淨土	武藏天德寺	享保十三、八、十七	―
二三八八	澄°空		―	天台	近江園城寺	―	―
二三八九	宗°沆°	湘南	京師	臨濟	山城大德寺	享保十四、正、九	八一
二三八九	道°費°	無隱	―	曹洞	加賀實性院	享保十四、四、一	九二
二三八九	道°顯°	隱之	加賀金澤	曹洞	武藏瑞光寺	享保十四、七、一	六七
二三八九	日°命	不惜	甲斐山梨	日蓮	甲斐常在寺	享保十四、九、廿八	六三
二三八九	月°筌°	崇信	大坂天滿	眞	攝津定專坊	享保十四、十一、十五	五九
二三九〇	白隣	演學	伊勢	淨土	武藏增上寺	享保十五、六、廿一	七五
二三九〇	日慧	智後	和泉堺	日蓮	山城妙顯寺	享保十五、九、十五	八八
二三九〇	元善	仁峯	―	黃檗	山城佛國寺	享保十五、十一、廿	七三
二三九一	支°考°	師々菴	美濃	臨濟	美濃大智寺	享保十六、二、七	六七
二三九一	日°奏°	頭陀健	甲斐	日蓮	武藏報恩寺	享保十六、三、廿三	六八
二三九一	通°玄°		讃岐多度津	眞言	河內蓮光寺	享保十六、六、廿五	―
二三九一	日覺尼	離隆	京師	日蓮	山城淨妙菴	享保十六、九、十八	―
二三九一	祖°曉°	大嚴	甲斐賓村	曹洞	甲斐法泉寺	享保十六、十一、七	六五
二三九一	胤°風°	覺山房	―	法相	大和寶藏院	享保十六、十二、六	四六
二三九一	觀°徹°	義譽	京師	淨土	相模光明寺	享保十六、十二、十八	―
二三九二	眞°源°		播磨姬路	天台	近江比叡山	享保十七、四、十四	二八
二三九二	禪°峯°	侍定	出羽村山	淨土	出羽松高山	享保十七、七、十七	四七
二三九二	玄甫		―	眞	河內登願寺	享保十七、十二、五	―
二三九二	宗°瀨	桂州	京師	臨濟	山城大德寺	享保十七、十二、十九	―
二三九三	元°昶°	杲堂	清	黃檗	山城萬福寺	享保十八、六、十六	七一
二三九三	惠°湛°	象海	讃岐豐田	臨濟	備中寶福寺	享保十八、七、十二	五三
二三九三	日應	空心	京師	日蓮	佐渡妙照寺	享保十八、七、十八	八五
二三九三	融°天°	龍海	―	融通念佛	攝津貞松院	享保十八、七、廿五	―
二三九三	道恕		京師	眞言	山城東寺	享保十八、十一、十五	六六
二三九三	宗愠	眞堂	武藏	臨濟	山城大德寺	享保十八、十一、廿八	六七
二三九三	日等	靜慧	―	日蓮	武藏本門寺	享保十八、十二、三	八二
二三九三	良°空°	慧日院	伊勢三重	眞	伊勢常超院	享保十八、―、―	六五
二三九四	日°好°	唯妙	―	日蓮	妙法華寺	享保十九、七、廿一	八〇
二三九四	行°觀°	眞山	大坂	融通念佛	大和圓融寺	享保十九、十、六	―
二三九四	慧°光°	戒琛	―	眞言	武藏靈雲寺	享保十九、十一、四	六九
二三九五	泊如		―	眞	大和專立寺	享保廿、正、一	―
二三九五	丹舟	等譽	越前福井	淨土	伊勢天德寺	享保二十、正、六	五一
二三九五	利天	慈空	常陸下館	淨土	武藏增上寺	享保廿、二、九	七五
二三九五	主眞	昌春	―	眞言	武藏護持院	享保廿、三、十四	―
二三九五	如°岱°	若寂	武藏金澤	眞	近江正崇寺	享保廿、九、十七	六一
二三九五	日慈	慧天	越後	日蓮	山城妙顯寺	享保廿、十、廿二	七三
二三九五	傳°尊°	天桂	紀伊和歌山	曹洞	攝津陽松院	享保廿、十二、十	八八
二三九六	即心	圓瑞	甲斐	曹洞	甲斐文珠院	元文元、正、六	七〇
二三九六	尙存	嚴覺	石見波根	眞言	大和長谷寺	元文元、五、一	七一

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三九六	寂超（正行）	筑後	天台	筑後高良山	元文元、五、廿二	七七
二三九六	義典（諦龍）	播磨[illegible]鹽	眞言	和泉金輪寺	元文元、八、廿三	六四
二三九六	道顯（密山）	近江	曹洞	加賀大乘寺	元文元、十、十二	八五
二三九六	照什（南谷）	石見吉水	眞言	山城大通寺	元文元、十二、三	七四
二三九六	俊嶺	—	眞	肥前西法寺	—	—
二三九七	性慶（義瑞）	近江滋賀	天台	近江法明院	元文二、六、六	七一
二三九八	僧濬（鳳潭）	越中礪波	華嚴	山城華嚴寺	元文三、二、廿六	八五
二三九八	公寬	京師	天台	武藏輪王寺	元文三、三、十五	四二
二三九八	南鱗（桂州）	—	眞	紀伊安樂寺	元文三、三、廿六	—
二三九八	妙適（無染）	—	眞	山城槇尾山	元文三、—	—
二三九八	永覺	伊勢	天台	近江比叡山	—	—
二三九九	原資	江戸	臨濟	武藏東福寺	元文四、正、七	—
二三九九	光濬（住如）	京師	眞	山城本願寺	元文四、八、六	六七
二三九九	大顯（幻々）	筑前福岡	天台	近江安樂院	元文四、十、四	八八
二三九九	頓秀	上總望陀	淨土	武藏增上寺	元文四、十、十	七四
二三九九	昭玄	山城宇治	曹洞	信濃玉泉院	元文四、十一、廿八	七五
二三九九	獨麟	—	臨濟	攝津弘德寺	—	—
二四〇〇	慧岩	—	淨土	武藏蓮光寺	元文五、十、十八	—
二四〇〇	長茂	—	臨濟	武藏大住院	元文五、——	一六〇餘
二四〇〇	觀信	—	眞	攝津定專坊	—	—
二四〇一	宗仲	—	臨濟	山城大德寺	寬保元、正、二	—
二四〇一	準海	—	融通念佛	河內大聖寺	寬保元、正、九	八一
二四〇一	宗律	京師	臨濟	山城大德寺	寬保元、二、六	七八
二四〇一	光啓（諶如）	京師	眞	山城本願寺	寬保元、六、八	二八

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四〇一	法霖（日溪）	紀伊關戸	眞	近江正崇寺	寬保元、十、十八	四九
二四〇一	祐寶	—	眞言	肥前護國寺	—	—
二四〇一	盛典	—	眞言	下野大聖院	—	—
二四〇一	大溪（天山）	筑後柳川	黃檗	筑後某寺	—	—
二四〇二	亮徹（雲洞）	下野宇都宮	淨土	武藏淨國寺	寬保二、二、廿五	五〇
二四〇二	慧住	大坂	眞言	大和長谷寺	寬保二、五、廿二	七八
二四〇二	良悟（無得）	岩代會津	曹洞	長門大寧寺	寬保二、五、廿三	九二
二四〇二	高外	武藏中澤	曹洞	近江清凉寺	寬保二、九、十八	七三
二四〇二	元如尼	肥前蓮池	黃檗	肥前壽恩院	—	—
二四〇三	輔教	越後刈羽	曹洞	越後香積寺	寬保三、四、十二	八〇
二四〇三	智周	近江膳所	天台	薩摩佛日寺	寬保三、九、廿二	八五
二四〇三	了願	伊勢津	眞	伊勢光蓮寺	—	—
二四〇四	鑁淨	薩摩	眞言	山城智積院	延享元、四、廿二	—
二四〇四	光性	—	眞	山城本願寺	延享元、十、二	六三
二四〇四	道忠	但馬竹野	臨濟	山城龍華院	延享元、十二、廿三	九二
二四〇四	慧訓	—	臨濟	山城乙訓寺	—	—
二四〇四	了慶	—	佛工	—	—	—
二四〇五	慧海	三河吉田	眞言	大和長谷寺	延享二、四、廿九	七八
二四〇五	貞客	美濃	淨土	山城知恩院	延享二、四、—	七六
二四〇五	日潤	—	日蓮	甲斐身延山	延享二、九、卄	七五
二四〇五	珂然	大坂	淨土	攝津法泉寺	延享二、十、十一	七七
二四〇五	淨慧	伊勢	眞	伊勢金剛寺	—	—
二四〇六	廣本	京師	黃檗	近江福壽寺	延享三、五、十四	六一
二四〇六	慈海	—	眞	—	延享三、六、十八	六六

皇紀	名	號	生國	宗	寺	寂年月日	壽
二四〇六	素淵	默子	肥前佐賀	曹洞	遠江少林寺	延享三、六、廿	七四
二四〇六	○元棟	龍統	大坂	黄檗	山城萬福寺	延享三、九、十六	八四
二四〇七	○日達	連智	岩代福島	日蓮	山城本國寺	延享四、二、廿六	七四
二四〇七	明因	角上	—	眞	近江本福寺	延享四、五、—	七二
二四〇七	○了般	尊學	備後尾道	淨土	武藏增上寺	延享四、十、八	—
二四〇八	○信○培	堪慧	京師三條	淨土	山城長時院	寬延元、三、十九	七二
二四〇八	淨○曆	象先	—	黄檗	武藏羅漢寺	寬延元、六、五	七三
二四〇八	敬首	環珞菴	近江八幡	淨土	武藏正定院	寬延元、九、卅	六六
二四〇八	兼渉	良眞	—	眞言	山城蓮臺寺	寬延元、十二、十六	—
二四〇九	○元○養	百拙	京師	黄檗	山城法藏寺	寬延二、二、三	八三
二四〇九	○行○寧	靈空	肥前	曹洞	仙臺洞雲寺	寬延二、十、八	八四
二四〇九	○是○湛	靈空	尾張熱田	淨土	山城禪林寺	寬延二、—、—	八四
二四一〇	○亮○潤	家雲	—	天台	武藏寶園院	寬延三、八、二	八三
二四一〇	○鸞○宿	靈學	—	淨土	山城知恩院	寬延三、十、十五	—
二四一一	○禪○材	古月	日向	臨濟	薩摩大光寺	寶曆元、四、廿四	八五
二四一一	慧鐺		越前	眞	越前平乘寺	寶曆元、十一、十五	五八
二四一一	一道	靈順	—	淨土	伊勢觀正菴	寶曆元、十二、十四	—
二四一一	○佚○山	默隱	大坂	—	山城某菴	—	—
二四一一	行願	大進菴	—	眞言	山城寶持院	—	—
二四一一	○義寬		尾張	淨土	尾張觀音寺	—	—
二四一一	○實○順	覺道	武藏足立	眞	武藏某菴	—	—
二四一一	○良○哉		尾張	臨濟	三河華嶽寺	—	—
二四一一	○朗○湛		—	融通念佛	攝津觀音寺	—	—
二四一一	玄契		出雲	曹洞	—	—	—
二四一二	玄秀尼	松嶺	—	臨濟	山城林丘寺	寶曆二、六、—	五七

皇紀	名	號	生國	宗	寺	寂年月日	壽
二四一二	秀○恕○	嶺南	武藏荏原	曹洞	武藏青松寺	寶曆二、十一、廿三	七八
二四一三	○圓猷		京師	眞	伊勢專修寺	寶曆三、正、二	六〇
二四一三	○元○拙	百痴	陸奥仙臺	黄檗	山城萬福寺	寶曆三、六、六	七一
二四一三	似○雲	春雨亭	安藝廣島	眞	播磨源光寺	寶曆三、七、八	八一
二四一四	哲顏	淨阿	肥前	淨土	山城清蓮寺	寶曆四、正、四	六一
二四一四	常勤	寂永	—	眞	山城興正寺	寶曆四、七、十七	八四
二四一四	覺○瑩	昔乘	江戸番町	淨土	武藏增上寺	寶曆四、十一、六	—
二四一五	○義○海	空學	—	淨土	下野大光院	寶曆五、正、十	—
二四一五	○連○察	走學	江戸	淨土	武藏增上寺	寶曆五、四、廿五	八四
二四一五	○亮海	如實	—	眞言	山城智積院	寶曆五、十、十四	七〇
二四一六	○竹○端		山城	淨土	伊勢宇治來寺	寶曆六、正、十五	七〇
二四一六	○快○侃	是春	山城相樂	眞言	山城智積院	寶曆六、二、十三	七五
二四一六	○敬○己	佛行房	—	天台	近江比叡山	寶曆六、四、十四	—
二四一六	○覺○洲		和泉堺	華嚴	山城華嚴寺	寶曆六、五、廿六	—
二四一六	貞○極	立譽	山城室町	淨土	武藏四休菴	寶曆六、六、二	八〇
二四一六	淨○因	竺菴	清	黄檗	山城萬福寺	寶曆六、七、六	六一
二四一六	大○玄	成譽	下野	淨土	武藏增上寺	寶曆六、八、四	八〇
二四一六	慧巘	香陵	—	眞	山城法幢坊	—	—
二四一七	純成	興雲	尾張日置	淨土	尾張圓輪寺	寶曆七、正、三	三三
二四一七	元明	祖眼	三河八草	黄檗	山城萬福寺	寶曆七、正、廿七	八五
二四一七	靈○妙	神譽	—	淨土	下總弘經寺	寶曆七、六、十一	—
二四一七	○性○均	唯阿	—	眞	武藏安養寺	寶曆七、八、十四	七九
二四一七	○法○撰	大梅	信濃水内	曹洞	信濃正安寺	寶曆七、九、廿八	七六
二四一八	了○月	普照	京師	淨土	近江行安寺	寶曆八、十、十七	七四
二四一八	善的	除業障	—	淨土	備中智光寺	寶曆八、十一、十五	七五

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四一九	元東 [illegible]門	武藏塚原	臨濟	武藏長德寺	寶曆九、六、八	—
二四一九	圓說 銑性	近江下笠	淨土	山城法傳寺	寶曆九、八、三	四六
二四二〇	白龍 三洲	武藏忍	曹洞	山城妙立寺	寶曆十、四、八	九二
二四二〇	光超 從如	—	眞	山城東本願寺	寶曆十、七、十一	四一
二四二〇	喚丑 乙堂	上野境野	曹洞	上野鳳仙寺	寶曆十、十一、十一	—
二四二〇	日勇 存道	尾張名古屋	日蓮	山城妙滿寺	寶曆十、十二、廿二	—
二四二一	愚蒙 祐海	岩代	淨土	武藏祐天寺	寶曆十一、正、二	七九
二四二一	性雲 託龍	—	淨土	武藏增上寺	寶曆十一、六、二	三四
二四二一	忍海 壘譽	—	淨土	武藏寶松院	寶曆十一、六、十七	—
二四二二	眞證 公報	伊勢	眞	伊勢智慧光院	寶曆十二、九、十四	五六
二四二二	僧樸 抱質	越中射水	眞	山城宏山寺	寶曆十二、九、廿三	四四
二四二二	慧寂 大然	—	眞	武藏聞成寺	寶曆十二、—、—	—
二四二二	道粹 純叟	—	眞	出羽大信寺	—	—
二四二二	元昭 月海	肥前蓮池	黃檗	山城幻々菴	寶曆十二、七、十六	八九
二四二三	元嵩 仙岩	近江五ヶ莊	黃檗	山城萬福寺	寶曆十三、八、廿八	—
二四二三	憲榮 泰巖	—	眞	攝津常光寺	寶曆十三、九、十六	五三
二四二三	文雄 僧谿	丹波桑田	淨土	山城了蓮寺	寶曆十三、九、廿三	六四
二四二三	元轟 默子	出羽秋田	曹洞	武藏迦葉寺	寶曆十三、十一、五	八一
二四二三	信恕 諦圓	下總	眞言	大和長谷寺	寶曆十三、十二、十九	—
二四二三	曼碩	—	眞	日向眞純寺	—	—
二四二四	慧然 海東	和泉堺	眞	和泉專稱寺	明和元、正、十五	七三
二四二四	無等 本寂	武藏大里	眞言	武藏寶仙寺	明和元、三、十三	—
二四二四	性海 教任	下野鍋山	眞言	大和長谷寺	明和元、八、二	八一
二四二四	慧恩 法澤	—	戒律	大和法隆寺	明和元、八、十一	—
二四二四	玄趾 慈麟	越前燧城	曹洞	加賀大乘寺	明和元、十、九	七五
二四二四	理秀尼	京師	天台	—	明和元、十一、卅	四三
二四二四	慧印 指月	—	曹洞	武藏養光寺	明和元、十二、六	七〇餘
二四二四	越宗 蘭陵	—	曹洞	筑前某菴	—	—
二四二五	即道 雲門	肥前	曹洞	大和靈鷲山	明和二、正、—	七六
二四二五	舊應 勝譽	—	淨土	相模光明寺	明和二、三、一	—
二四二五	榮山 志道軒	山城東海津	—	江戸花川戸	明和二、三、七	八三
二四二五	淨清	江戸湯島	淨土	武藏麻布某菴	明和二、九、十三	六三
二四二六	圓秀 知新	大和奈良	眞言	大和長谷寺	明和三、十一、十	八一
二四二六	龍天 琳珊	—	眞言	山城智積院	明和三、—、—	九〇餘
二四二六	古貫 淡谷	—	眞	安藝某寺	—	—
二四二七	理寬	近江	眞	近江即得寺	明和四、八、十五	—
二四二七	善意 芳山	—	眞	越中西光寺	—、—、二、廿三	—
二四二八	智遲 游心齋	—	眞	播磨眞淨寺	明和五、五、十四	七九
二四二八	義教 泰通院	—	眞	越中圓滿寺	明和五、六、六	七五
二四二八	慧辯 離有無院	—	眞	伊勢龍泉寺	明和五、六、廿六	—
二四二八	元皓 大潮	肥前松浦	黃檗	肥前龍津寺	明和五、八、廿二	九二
二四二八	慧鶴 白隱	駿河駿東	臨濟	伊豆龍澤寺	明和五、十二、十一	八四
二四二八	慧昉 大休	山城北岩倉	臨濟	山城東福寺	—、—、六、三	六〇
二四二八	提洲	伯耆	臨濟	豐前自性寺	—	—
二四二八	惠潭	奥州白河	臨濟	大和吉野山	—	六八
二四二九	常照 臻道	—	眞	肥後法光寺	—	—
二四二九	日幹 要教	—	日蓮	武藏宗延寺	明和六、三、廿六	—
二四二九	本純 守篤	駿河府中	天台	近江安樂院	明和六、四、十七	六八

日本佛家年表

二四二九	瑞方	面山	肥後三島	曹洞	若狹空印寺	明和六、九、十六	八七
二四二九	普宗	亮宗	奥州小幡	曹洞	越後雲洞院	明和六、十、十九	六一
二四二九	興隆	寶嚴	越後	曹洞	武藏全久院	明和六、十、廿六	七九
二四二九	道一	曇秀	越後蒲原	曹洞	越後龍雲寺	明和六、十二、廿六	七三
二四三〇	關通	無礙	尾張海西	淨土	尾張圓成寺	明和七、三、二	七五
二四三〇	圓繼	ー	伊勢	眞	伊勢法受寺	明和七、六、六	ー
二四三〇	堯超	寛如	ー	眞	山城佛光寺	明和七、六、廿九	五八
二四三〇	文亨尼		京師	天台	山城圓照寺	明和七、七、四	二五
二四三〇	慧恭	可圓	ー	淨土	山城西光院	ー、ー、八、十五	七三
二四三一	覺遠	本圓	山城宇治	眞言	山城智積院	明和八、四、十四	八一
二四三一	寂嚴	諦乘	備中	眞言	備中寶島寺	明和八、八、三	七〇
二四三一	慧海	法饒	駿河府中	眞	駿河淨圓寺	明和八、八、十三	六五
二四三一	定月	妙譽	伊勢二見浦	淨土	武藏增上寺	明和八、十二、三	八四
二四三二	曇龍	騰譽	肥後熊本	淨土	武藏增上寺	安永元、四、十七	五三
二四三二	公啓		ー	天台	近江滋賀院	安永元、七、十六	四〇
二四三二	辨秀	歡譽	遠江濵松	淨土	武藏增上寺	安永元、七、廿九	ー
二四三二	眞流	圓耳	伊勢	天台	近江比叡山	ー	ー
二四三二	愚傳		ー	ー	安房日本寺	ー	ー
二四三三	智瑛	典譽	伊勢	淨土	武藏增上寺	安永二、二、廿五	ー
二四三三	雲說	貞阿	長門明木	淨土	長門妙慶寺	安永二、二、廿八	六八
二四三三	快尊	賢海	大和添上	眞言	大和長谷寺	安永二、四、十五	七一
二四三三	道尊		ー	眞言	山城仁和寺	安永二、八、五	五四
二四三三	睹道	本光	武藏	曹洞	武藏養光寺	安永二、十、五	ー
二四三三	靈應	豐譽	近江愛知	淨土	武藏增上寺	ー	ー
二四三四	慧亮	涌蓮	伊勢黑田	眞	武藏澄泉寺	安永三、七、廿八	ー
二四三四	正鯤	大鵬	清泉州	黄檗	山城萬福寺	安永三、十、十三	八四
二四三五	有慶	眞亘	大和牧野	眞言	大和長谷寺	安永四、九、八	六七
二四三五	淨空	慈澤	下野舟津川	眞言	山城智積院	安永四、十、廿八	八三
二四三六	公顯	清淨心院	京師	天台	下野輪王寺	安永五、七、十	ー
二四三六	惠旭	亘緣	三河	眞	三河某寺	ー	ー
二四三七	等空	周音	紀伊	眞言	山城護持院	安永六、六、一	ー
二四三七	明眞	得昇院	伊勢安濃	眞	伊勢光澤寺	安永六、十二、十二	五八
二四三八	敎遵	桂巖	ー	眞	攝津常光寺	ー	ー
二四三九	如達	智洞	能登菅原	眞	能登明傳寺	安永八、十、廿八	五三
二四三九	東晙	高峰	攝津池田	臨濟	山城建仁寺	安永八、ー、ー	六六
二四四〇	智了	明覺	但馬廣谷	淨土	山城法然院	安永九、八、廿三	七一
二四四一	元聽	通玄	豐後竹田	臨濟	相模建長寺	天明元、三、二	ー
二四四一	日諦	健立	常陸赤濵	日蓮	常陸三昧堂	天明元、六、五	ー
二四四一	禪慧	月船	奥州小野	臨濟	奥洲高乾院	天明元、六、十二	八〇
二四四一	普寂	德門	伊勢桑名	淨土	武藏長泉院	天明元、十、十四	七五
二四四一	凍滴	豹隱	近江	臨濟	近江某寺	ー	ー
二四四一	寶嚴		讃岐	眞	讃岐西法寺	ー	ー
二四四一	慧燈		ー	眞	安藝報專坊	ー	ー
二四四一	明洸	姬岳	ー	天台	陸奥峯壽寺	ー	ー
二四四二	敬雄	韶鳳	武藏	天台	武藏吉祥寺	天明二、正、八	七〇
二四四二	義龍	慧鏡	和泉	眞	和泉專稱寺	天明二、正、廿七	ー
二四四二	法位		ー	眞	播磨本德寺	天明二、七、ー	一七
二四四二	隨惠	香醉	播磨	眞	播磨福乘寺	天明二、七、ー	ー
二四四二	大我	孤立	江戸	淨土	山城正法寺	天明二、八、十五	七四
二四四二	慧雲	子潤	安藝廣島	眞	安藝報專坊	天明二、十二、廿二	五三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四四二	崇廓	—	眞	豐前教覺寺	—	—
二四四二	宗拙	京師	臨濟	武藏善昌院	—	—
二四四二	○淨眞	—	眞	安藝眞行寺	—	—
二四四三	○惠忍（皆乘院）	出羽	眞	羽後長命寺	天明三、九、十九	九一
二四四三	僧鎔（空華）	越中新川	眞	越中善巧寺	天明三、十、二	六六
二四四三	明增	—	眞	肥後清臺寺	—	—
二四四四	○智暉（大幻）	播磨三草	眞言	山城春日寺	天明四、三、十五	六八
二四四四	○慧晧（樹院法）	攝津大坂	眞	攝津正行寺	天明四、九、十七	—
二四四四	○藏海（雜華）	—	曹洞	常陸東光寺	—	—
二四四五	○義寶（素範）	備前	融通念佛	大和觀音寺	天明五、六、廿三	七〇
二四四五	○乘恩（湛然）	近江河原	眞言	山城淨教寺	天明五、十、廿九	六一
二四四五	性山	信濃	天台	信濃半光寺	天明五、十二、一	—
二四四六	○妙龍（諦忍）	—	眞言	尾張興正寺	天明六、六、十	八三
二四四六	墨隱（右山）	—	書僧	—	天明六、八、廿	—
二四四六	隆維（覺山）	下總	眞言	武藏眞福寺	天明六、十、廿六	—
二四四六	闡揚（法高）	—	眞	山城興正寺	—	—
二四四七	○快運（音識）	武藏大澤	眞言	大和長谷寺	天明七、三、十四	—
二四四七	○日選（後明）	越前	日蓮	山城妙覺寺	天明七、五、朔	—
二四四七	常順（寂聽）	—	眞	山城興正寺	天明七、六、廿九	八六
二四四七	○良慈	—	眞	近江錦織寺	天明七、八、十三	六八
二四四七	○觀山（即道）	上總匝瑳	融通念佛	大和法德寺	天明七、十一、廿一	六三
二四四八	盧明（自心）	武藏入間	眞言	大和長谷寺	天明八、正、廿一	八〇
二四四八	○公遵（隨意行院）	京師	天台	近江滋賀院	天明八、二、廿五	七七
二四四八	○猛火（明了）	伊勢飯高	眞	伊勢眞臺寺	天明八、五、廿九	七三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四四八	○覺融（宏道）	尾張	眞言	尾張大王坊	天明八、八、五	—
二四四八	○觀國	—	天台	武藏喜多院	—	—
二四四九	○惠岳（後道）	武藏江戸	眞言	常陸樂法寺	寛政元、正、十六	七一
二四四九	慧琳（懷玉）	伊勢河內	眞	伊勢西弘寺	寛政元、五、廿五	七五
二四四九	○教諦（和光院）	伊勢	眞	伊勢轉輪寺	寛政元、六、一	—
二四四九	○學信（敬阿）	伊豫鳥生	淨土	安藝光明院	寛政元、六、七	六六
二四四九	旭辯（昭堂）	伊勢	眞	伊勢彰見寺	寛政元、六、九	六〇
二四四九	○日導（一妙院）	肥後熊本	日蓮	下總正東談林	寛政元、七、十二	六六
二四四九	光闡（了武）	—	眞	山城本願寺	寛政元、十、廿四	八三
二四四九	○周海（深汸）	—	眞言	武藏根生院	寛政元、十一、五	—
二四四九	○元廬（遂翁）	下野	臨濟	駿河松蔭寺	寛政元、十二、[illegible]	七三
二四四九	感隨	奧州	淨土	武藏幡隨院	—	—
二四四九	忍鎧（惠南）	京師	—	山城某菴	—	八〇
二四四九	○空蓮（[illegible]）	近江信樂	淨土	近江信樂菴	—	—
二四四九	○明逸（[illegible]）	周防八代島	眞	伊豫圓光寺	—	—
二四四九	玄砂	—	淨土	山城光玄院	—	—
二四四九	○惠琮（頻翁）	越後	眞	攝津西光寺	—	—
二四四九	長鯤（呑舟）	紀伊廣縣	眞言	下總根本寺	—	—
二四四九	定慶	—	佛工	—	—	—
二四四九	圓空	美濃竹ケ鼻	臨濟	美濃彌勒寺	—	—
二四五〇	懷玄（高算）	近江	眞言	大和長谷寺	寛政二、十一、廿九	—
二四五一	宗衍（無學）	—	臨濟	山城大德寺	寛政三、正、十六	—
二四五一	順故	攝津	眞	攝津光得寺	寛政三、正、廿一	六〇
二四五一	圓通（功德院）	三河	眞	三河妙源寺	寛政三、正、廿三	—

二四五一	隆○善	便學	—	淨土	武藏增上寺	寛政三、三、廿四	八五
二四五一	鸞山○	察學	—	淨土	武藏誓願寺	寛政三、五、廿四	—
二四五一	淨○超	格宗	伊勢多氣	黃檗	山城萬福寺	寛政三、八、廿二	八〇
二四五一	基○辨	大同房	尾張	法相	大和藥師寺	寛政三、十二、廿七	七〇
二四五二	亮碩		山城	天台	近江園城寺	寛政四、正、三	三三
二四五二	圓慈	東嶺	近江神崎	臨濟	伊豆龍澤寺	寛政四、二、十九	七三
二四五二	光遍	乘如	京師	眞	山城本願寺	寛政四、二、廿二	四九
二四五二	正○隆○	蘭山	出羽山形	臨濟	豐前靜泰院	寛政四、四、廿九	八〇
二四五二	圓宣	統學	肥後伊万里	淨土	武藏增上寺	寛政四、五、一	七五
二四五二	佛猊	邇哮	京師	天台	近江園城寺	寛政四、十二、廿七	三一
二四五三	慧澈	香雲	京師二條	眞	山城西福寺	寛政五、二、廿五	—
二四五三	濤順	和苍	能登	曹洞	能登龍淵寺	—	—
二四五四	仰○誓○	欽頴	京師	眞	伊賀明覺寺	寛政六、四、二	七二
二四五四	耆○山○	懶翁	—	淨土	武藏梅窓院	寛政六、四、十七	八三
二四五四	玄○智○	景燿	—	眞	山城慶證寺	寛政六、十、四	六一
二四五四	圓門	法南	豐前日田	眞	豐前廣圓寺	寛政六、—、—	—
二四五五	敬○光	顯道	山城北岩倉	天台	近江園城寺	寛政七、八、廿二	五五
二四五五	融○道	勸善	—	眞言	佐渡蓮華寺	寛政七、八、廿八	—
二四五五	動○潮	通照	武藏忍	眞言	山城智積院	寛政七、十二、七	八七
二四五五	蝶○夢○	幻阿	京師	淨土	山城阿彌陀寺	寛政七、十二、廿四	六四
二四五六	宗詮	明道	武藏	臨濟	山城大德寺	寛政八、二、四	五九
二四五六	光雄	伊如	—	眞	播磨本德寺	寛政八、七、十六	—
二四五六	滿○空○	現學	播磨印南	淨土	武藏增上寺	寛政八、七、—	七九
二四五六	巧○存○	孑成	—	眞	越前平乘寺	寛政八、九、三	七七
二四五六	淨英	浦菴	大坂	黃檗	山城萬福寺	寛政八、十、一	七五
二四五七	慈○棹○	峨山	奥州	臨濟	武藏麟祥院	寛政九、正、十四	七一
二四五八	柔○遠○	子歸	越中新川	眞	越中明樂寺	寛政十、二、一	五七
二四五八	充○賢		越中	眞	越中某寺	—	—
二四五九	良○恭	孝完	安房長狹	眞言	安房寶珠院	寛政十一、正、十六	八〇
二四五九	澄○月	醉夢菴	備中	天台	山城本願寺	寛政十一、五、二	八五
二四五九	諦○住○	義主	近江膳所	眞	近江響忍寺	寛政十一、五、十	—
二四五九	光暉	文如	京師	眞	山城本願寺	寛政十一、六、十四	五六
二四五九	慶道	眞辨	—	眞	伊勢上宮寺	寛政十一、七、九	五七
二四五九	衍刧	石窓	信濃小縣	黃檗	山城萬福寺	寛政十一、九、廿八	七六
二四五九	遺智		肥前有田	眞	肥前正覺寺	—	—
二四五九	大任	墨菴	—	淨土	武藏端泉寺	—	—
二四六〇	大○運		安藝寺原	眞	安藝品秀寺	寛政十二、正、六	四四
二四六〇	法○住○	智幢	大和石上	眞言	大和長谷寺	寛政十二、五、十	七八
二四六〇	智○空	巖學	伊勢多氣	淨土	武藏增上寺	寛政十二、五、十六	七五
二四六〇	誓○眞		伊豫	淨土	安藝光明院	寛政十二、八、六	五九
二四六〇	信○應	白圓	—	眞言	武藏彌勒寺	寛政十二、十二、廿九	—
二四六〇	音○微	忍學	三河	淨土	山城金無院	寛政十二、—、—	七四
二四六一	慈○周○	六如	近江	天台	武藏明靜院	享和元、三、十	—
二四六一	榮○天○	太了	土佐中村	眞言	伊豫石牛寺	享和元、七、十七	六五
二四六一	隆○山○	慈光	—	眞言	近江總持寺	享和元、十二、廿七	—
二四六一	了○康○	安仲	肥後	曹洞	能登總持寺	—	—
二四六一	元○寔○	玉礀	京師	臨濟	阿波興源寺	—	—
二四六二	儀○貞	本昌	上野群馬	眞言	大和長谷寺	享和二、二、十一	七一
二四六二	寶○巖○	千丈	近江	曹洞	信濃長國寺	享和二、三、廿二	—
二四六二	了吟	風航	—	淨土	攝津大福寺	享和二、三、廿八	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四六二	元○榮 本住	武藏兒玉	眞言	大和長谷寺	享和二、五、十四	—
二四六二	寶○鼎○ 東海	—	曹洞	常陸祇園寺	享和二、十、三	七七
二四六三	大惠	—	眞言	武藏三念寺	享和三、二、卅	—
二四六三	曉惠 存詮	下總布瀨	眞言	大和長谷寺	享和三、三、一	七三
二四六三	公延	—	天台	近江滋賀院	享和三、五、廿七	四一
二四六三	大安	伊勢	眞	伊勢法泉寺	享和三、五、—	—
二四六三	月湛 洞水	越中新川	曹洞	越中高源寺	享和三、六、廿	七六
二四六三	淨光 信俊	安房	眞言	山城智積院	享和三、九、十五	七五
二四六四	闇○如	越前	眞	越前松樹院	文化元、二、廿五	七五
二四六四	大○瀛○ 子容	安藝志村	眞	安藝勝圓寺	文化元、五、四	四五
二四六四	圓禱	京師	眞	伊勢專修寺	文化元、五、八	四五
二四六四	盛尊 堪識	大和野原	眞言	大和長谷寺	文化元、五、九	—
二四六四	英○範 寶洲	近江	眞言	山城智積院	文化元、八、十五	七五
二四六四	飮○光○ 慈雲	播磨邑野	眞言	河內高貴寺	文化元、十二、廿三	八七
二四六四	周奎 維明	—	臨濟	山城相國寺	文化元、—	—
二四六四	妙船尼	江戶	眞	—	—	—
二四六四	大同	—	眞	筑前教法寺	—	—
二四六四	頓乘 常精	—	眞	長門三千坊	—	—
二四六四	道○振 嵩山	—	眞	安藝寂靜寺	—	—
二四六五	戒○定○ 金貌園	上野三倉野	眞言	武藏寶仙寺	文化二、正、廿三	—
二四六五	智○洞○ 桃花房	京師五辻	眞	山城淨教寺	文化二、十、廿二	—
二四六五	普明 寶月	豐前	眞	豐前長福寺	文化二、十、—	—
二四六五	老卯	出羽秋田	曹洞	周防洞泉寺	文化二、十二、十二	—
二四六五	芳樹 芳英	紀伊有田	眞	紀伊正念寺	—	—

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四六五	寶月	豐後竹田	眞	紀伊西覺寺	—	—
二四六五	環定 開得院	—	眞	肥後東光寺	—	—
二四六五	到徹	肥後甲佐	眞	肥後佛誓寺	—	—
二四六六	淨○觀○ 道甫	周防德山	天台	周防教覺院	文化三、正、—	五七
二四六六	文○丈○ 湛堂	肥前佐留志	臨濟	相模建長寺	文化三、五、廿	六七
二四六六	魯○龍○ 靈潭	但馬千原	曹洞	山城興正寺	文化三、七、三	六一
二四六六	慈延 大愚	—	天台	山城大愚菴	文化三、七、八	—
二四六六	常○音	越中	眞	紀伊眞教寺	—	—
二四六七	乘○躰○ 光嚴	阿波竹瀨	眞言	紀伊高野山	文化四、正、十	六八
二四六七	玄○透○ 即中	尾張名古屋	曹洞	越前永平寺	文化四、四、廿八	—
二四六七	眞○淳○ 普嚴	—	眞	伊勢常超院	文化四、五、廿九	七一
二四六八	高隆 實健	—	眞言	大和長谷寺	文化五、七、十一	七三
二四六八	胤憲 乘織房	—	法相	大和寶藏院	文化五、七、十七	六三
二四六八	願安	—	法相	大和興福寺	—	—
二四六九	玄○瑞○ 月僊	尾張名古屋	淨土	伊勢寂照寺	文化六、正、十二	六九
二四六九	典○海 教學	紀伊出島	淨土	武藏增上寺	文化六、十二、十	八〇
二四七〇	德定 佛慧	紀伊日高	淨土	山城清淨華院	文化七、正、六	六〇
二四七〇	雲○幢○ 幻華	伊豫	眞	安藝教順寺	文化七、正、—	六六
二四七〇	快○道○ 林常	上野山上	眞言	武藏根生院	文化七、二、廿一	—
二四七一	衆○鎧○ 月皎	—	眞	攝津淨明寺	文化八、正、十六	八三
二四七一	圓隆	播磨	眞	播磨常德寺	文化八、六、七	—
二四七一	集○鷹 天眞	—	臨濟	山城相國寺	文化八、—、—	七三
二四七二	淨○明○尼○ 壽保	攝津平野	融通念佛	大和高林寺	文化九、三、十五	六一
二四七二	道命	安藝警固屋	眞	安藝德正寺	文化九、九、六	四二

二四七二	○了胤	闡堂	江戸淺草	眞	武藏眞龍寺	文化九、九、十三	六三
二四七二	○念海	倫譽	信濃	淨土	武藏增上寺	文化九、九、十五	—
二四七二	○如日	照空	—	眞言	攝津遲月菴	文化九、九、十五	六二
二四七二	○謙順	豐春	武藏蒲生	眞言	山城智積院	文化九、九、十六	七三
二四七二	即周	速見	武藏俵瀬	眞言	大和長谷寺	文化九、九、廿四	—
二四七二	性俊	實祐	尾張名古屋	眞言	山城大通寺	文化九、十一、卅	五一
二四七三	諦忍	道隱	薩摩	眞	豐前長久寺	文化十、六、四	七三
二四七三	○觀豪	融光	紀伊岩手	眞言	山城智積院	文化十、六、廿四	六七
二四七三	奥龍	玄樓	志摩	曹洞	山城興聖寺	文化十、—、—	九四
二四七三	在禪	重響	紀伊	淨土	武藏增上寺	—	—
二四七三	○嚴城		美濃	眞	美濃淨明寺	—	—
二四七四	日明	智奐	尾張海東	日蓮	尾張妙法寺	文化十一、三、—	七二
二四七四	○良嚴	靈玉	上野群馬	天台	近江正教院	文化十一、七、廿九	七三
二四七四	○宗朗	若拙	筑前岡邑	眞	安藝香林坊	—	—
二四七五	典壽		—	淨土	山城法然院	文化十二、七、廿三	—
二四七五	○慈順	通助	武藏埼玉	眞言	山城智積院	文化十二、九、十九	八三
二四七五	○覺潭	東英	大和平群	融通念佛	河内大念寺	文化十二、十、—	六八
二四七五	法岸	性如	周防吉敷	淨土	長門西圓寺	文化十二、十二、五	七二
二四七五	良雄	浩然	薩摩隈	眞言	薩摩興全寺	文化十二、—、—	七〇
二四七五	○宗主	玄道	武藏	臨濟	山城大德寺	—	—
二四七六	日賢	智朗	江戸	日蓮	山城頂妙寺	文化十三、正、元	八二
二四七六	○泰禪	雲樞	越後新潟	曹洞	志摩常安寺	文化十三、二、十七	六五
二四七六	頓慧	鳳嶺	豐前	眞	豐前正行寺	文化十三、九、七	六七
二四七六	○慧見	誠實菴	播磨	眞	播磨福乘寺	文化十三、十、十九	—
二四七六	宗曄	曇榮	—	臨濟	豐前崇福寺	文化十三、—、—	六七
二四七七	○敬天	儒童	陸奥南部	天台	近江法明院	文化十四、四、十二	六〇
二四七七	○海旭	物先	奥州田村	臨濟	奥州長松寺	文化十四、五、十五	八二
二四七七	○深勵	子曷	越前	眞	越前永臨寺	文化十四、七、八	六九
二四七七	○海量	寶器	—	眞	近江覺勝寺	文化十四、十一、廿一	八五
二四七七	○惟琰	隱山	越前伊野原	臨濟	美濃梅龍寺	文化十四、十一、廿九	六四
二四七七	○玄綱	大寂菴	—	眞	近江覺勝寺	—	—
二四七七	孜元	大元	備中賀陽	臨濟	山城妙心寺	—	六九
二四七八	快尊		和泉	眞言	紀伊高野山	文政元、七、廿三	七六
二四七八	○爲戒	佛星	筑後久留米	曹洞	越前永平寺	文政元、九、四	七四
二四七八	○德本		紀伊日高	淨土	武藏一行院	文政元、十、六	六一
二四七八	仁慶	惠隆	武藏多摩	眞言	常陸樂法寺	文政元、十二、十六	五八
二四七八	明道		—	眞言	山城海印寺	—	—
二四七九	慧果	惟堂	周防小郡	臨濟	長門常樂寺	文政二、四、三	七九
二四七九	○常慈		—	眞	近江錦織寺	文政二、五、十三	七六
二四七九	履善	言隆	—	眞	石見淨泉寺	文政二、七、八	六六
二四七九	○圓遵		京師	眞	伊勢專修寺	文政二、十、廿二	七四
二四七九	慈等		武藏	天台	武藏凌雲院	文政二、十二、五	—
二四七九	○大嚴		—	眞	長門某寺	—	—
二四八〇	周樗	誠拙	伊豫宇和島	臨濟	相模圓覺寺	文政三、六、廿八	七五
二四八〇	○清蔭		周防	臨濟	相模圓覺寺	—	—
二四八一	○義陶	最親院	三河	眞	三河滿德寺	文政四、正、廿六	八二
二四八一	○宣明	巴陵	加賀	眞	越中開正寺	文政四、五、十七	七三
二四八一	公巖	海德院	出羽	眞	羽前淨福寺	文政四、八、十一	六四
二四八一	義諦		越前	眞	攝津慈明寺	—	—
二四八二	慈舟	佛海	常陸	曹洞	尾張泉德寺	文政五、三、廿八	七八

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四八二	大賢 鳳樹	仙臺	曹洞	仙臺輪王寺	文政五、七、廿七	六五
二四八二	觀道 昭義	—	眞	周防眞覺寺	文政五、八、七	七一
二四八二	日臨 本妙	江戸青山	日蓮	常陸三昧堂	文政五、九、十七	三六
二四八二	弘基 惠岳	越後濁澤	眞言	山城智積院	文政五、十一、六	七一
二四八二	靈曜 鏡山	尾張	眞	尾張養念寺	文政五、十一、七	—
二四八三	大乘 慧雲	—	眞	筑前長源寺	文政六、正、廿二	七一
二四八三	達亮 任阿	三河刈谷	淨土	三河隨念寺	文政六、正、卅	七三
二四八三	寬豐 人識	安房和宗	眞言	山城清和院	文政六、六、十四	六五
二四八三	祥蘂	阿波板野	眞言	阿波正興菴	文政六、十一、十九	—
二四八三	唯阿 傳燈	武藏	眞言	大和長谷寺	文政六、十二、十二	七三
二四八四	恢麟	—	淨土	攝津一心院	文政七、正、卅	—
二四八四	賢藏	越前	眞	越前淨願寺	文政七、七、廿七	—
二四八四	日應 勇猛院	—	日蓮	紀伊感應寺	文政七 —	—
二四八五	佛通	—	曹洞	攝津光明寺	文政八、三、十六	—
二四八五	僧叡 鷹城	安藝山縣	眞	安藝專教寺	文政八、三、四	七三
二四八五	知影 獨鶴	京都	眞	山城光隆寺	文政八、九、廿四	六四
二四八五	道一 漢三	但馬	曹洞	近江清涼寺	文政八、十、三	六九
二四八五	無相 無動	上野群馬	眞言	武藏根生院	文政八、十一、四	—
二四八五	泰嵒	安藝大屋	眞	安藝專念寺	—	—
二四八六	了眭 香流庵	加賀	眞	加賀林幽寺	文政九、正、五	七一
二四八六	淨踞 金猊	—	黃檗	山城萬福寺	文政九、十一、十六	六八
二四八六	光攝 不捨	京師	眞	山城本願寺	文政九、十二、十二	四九
二四八七	孤燈 轉譽	京師	淨土	八丈島多娛山	文政十、四、十二	四六
二四八七	了軌 公範	信濃飯山	淨土	武藏光明寺	文政十、五、九	七五

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二四八七	宜詳尼 眞宗	播磨御津濱	臨濟	播磨不詳菴	文政十、八、十九	六四
二四八七	會法 爲幢	佐渡戀ヶ浦	眞言	大和長谷寺	文政十、九、十七	—
二四八七	慧景 寶言院	近江	眞	近江淨滿寺	文政十、九、廿五	—
二四八八	文秀 華頂	近江石部	黃檗	山城萬福寺	文政十一、正、十五	八八
二四八八	榮山 智淨	武藏	眞言	大和長谷寺	文政十一、二、八	六三
二四八八	亮海 學岡	下總太田	眞言	山城智積院	文政十一、三、十四	七六
二四八八	公證	京師	天台	近江滋賀院	文政十一、八、七	五三
二四八八	順了 寶景	出羽酒田	眞	武藏光圓寺	文政十一、九、十七	八三
二四八八	洞水 功乘院	大坂	眞	播磨玉泉寺	文政十一、十二、一	—
二四八八	文詮 抱一	武藏江戸	眞	—	文政十一、十一、廿九	六八
二四八八	方巖 祖永	筑前福岡	臨濟	三河無量壽寺	文政十一、—	—
二四八八	融鑑 月春	—	曹洞	肥前正藏寺	—	—
二四八八	無著 黃泉	尾張愛知	曹洞	尾張萬松寺	—	—
二四八九	卓中 立禪	信濃諏訪	淨土	信濃教念寺	文政十二、正、廿二	六六
二四八九	玄實 妙峯	伊勢	臨濟	山城南禪寺	文政十二、四、九	六六
二四八九	日謙 道光	大坂	日蓮	出雲報恩寺	文政十二、五、八	八四
二四八九	法霖	伊勢須川	眞	伊勢本樂寺	文政十二、六、十九	六八
二四八九	亮恭 文泰	下野安蘇	眞言	大和長谷寺	文政十二、六、廿四	八五
二四八九	大鐵	越前	眞	越前蓮光寺	文政十二、八、五	—
二四八九	眞白 梅岳	美濃八神	黃檗	山城萬福寺	文政十二、九、十五	六五
二四九〇	慧潮	江戸駒込	眞	武藏還來寺	天保元、五、十六	七三
二四九〇	慧劍 如說院	近江	眞	近江本啓寺	天保元、五、廿五	—
二四九〇	堅光 寂室	豐前宇佐	曹洞	近江天寧寺	天保元、七、十	七八
二四九〇	日栢 尊忠	京師	日蓮	山城本國寺	天保元、十二、四	—

二四九〇	祖玄	活步	周防吉敷	曹洞	肥前皓臺寺	天保元、十一、九	八四
二四九〇	桂潭		―	眞	豐後福正寺	―	―
二四九〇	良慶	雲巣	―	眞言	武藏大護院	―	―
二四九〇	春登		―	時	甲斐西念寺	―	―
二四九一	良寛	大愚	越後柏崎	曹洞	越前國上山	天保二、正、六	七四
二四九一	亮空		越中	眞	越中光誓寺	天保二、二、十四	―
二四九一	正受	聞號	大和白淵	眞	大和順照寺	天保二、五、廿八	六一
二四九一	玄節	行應	伊豫矢野	臨濟	伊豫等覺寺	天保二、十一、廿	七六
二四九一	超首座		―	臨濟	備前淨心院	―	七〇餘
二四九三	胡僊	卓洲	尾張西津島	臨濟	山城妙心寺	天保四、八、廿八	七四
二四九三	智幢		―	眞	尾張萬福寺	天保四、十一、廿三	五四
二四九三	海應	智本	佐渡德和	眞言	山城智積院	天保四、十一、廿九	六三
二四九三	日英	英園院	―	日蓮	備後妙顯寺	―	―
二四九四	鳳山	靈督	河內花田	融通念佛	大和極樂寺	天保五、二、廿	五四
二四九四	智毅	法興	出雲松井	眞言	出雲朝日寺	天保五、三、九	六九
二四九四	法海	日南	肥後	眞	肥後光德寺	天保五、八、七	六七
二四九四	圓通	普門	因幡	天台	山城積善院	天保五、九、四	八一
二四九四	東暉		越後	眞	越後速念寺	天保五、十一、十九	―
二四九五	智現	長生院	越後	眞	越後淨玄寺	天保六、正、十四	―
二四九五	紹珠	雪關	美濃	臨濟	美濃大仙寺	天保六、二、三	七〇
二四九五	仁廓		肥前佐賀	眞	肥前長專寺	天保六、五、廿一	三七
二四九五	寬海	豪潮	肥後玉名	天台	近江楞嚴院	天保六、七、三	八七
二四九五	文雅	象匏	伊豆	臨濟	常陸常光寺	天保六、七、廿三	六二
二四九五	普嚴	圓護	―	眞	安藝西林寺	天保六、十、廿四	六一
二四九五	紹珠	春叢	豐後佐賀	臨濟	山城妙心寺	天保六、十、廿五	八〇餘
二四九五	實掌	深識	武藏葛西	眞言	大和長谷寺	天保六、十二、三	―
二四九六	慧海	潮音	武藏江戶	眞	武藏西教寺	天保七、正、朔	五四
二四九六	玄道	得譽	―	淨土	山城正定院	天保七、正、八	八二
二四九六	敬長	智遠	出雲循縫	天台	近江園城寺	天保七、二、七	五八
二四九六	亮太	淨輪院	伊勢四日市	眞	伊勢光源寺	天保七、三、九	九〇
二四九六	衍曜	璞岩	肥前長崎	黃檗	山城萬福寺	天保七、五、廿八	七〇
二四九七	義梵	仙崖	美濃谷口	臨濟	筑前聖福寺	天保八、十、七	八七
二四九七	榮性	諦純	信濃更級	眞言	武藏護持院	天保八、十、十三	七〇
二四九七	芳闇	大敬院	伊勢阿藝	眞	伊勢養光寺	天保八、十一、七	七一
二四九七	圓祥		京師	眞	伊勢專修寺	天保八、十二、廿一	五〇
二四九七	宗壽	棠林	―	臨濟	山城妙心寺	天保八、―、―	―
二四九七	攝門	常學	江戶	淨土	武藏增上寺	天保八、―、―	五七
二四九八	性海	道超	越中射水	眞	和泉萬福寺	天保九、正、―	七四
二四九八	歷甌		越後西蒲原	曹洞	山城興聖寺	天保九、四、六	―
二四九八	本覺	還譽	備後加茂	淨土	備後奈良津	天保九、四、八	六〇
二四九八	僧亮		―	眞	肥後專稱寺	―	―
二四九九	眞明	獨旨	長門下關	黃檗	山城萬福寺	天保十、四、廿四	六五
二四九九	法洲	還源	長門大津	淨土	長門西圓寺	天保十、七、十五	七五
二四九九	貝雄	德母	越前	眞	越前憶念寺	天保十、七、廿	六三
二四九九	岩岷	古梁	相模大安	臨濟	山城妙心寺	天保十、十一、八	八七
二四九九	辰亮	月峰	―	淨土	山城雙林寺	天保十、十一、九	―
二四九九	杏旭		―	眞	越中照顯寺	天保十、―、―	―
二五〇〇	鳳干		飛驒高山	眞	飛驒不遠寺	天保十一、四、廿一	―
二五〇〇	圓解	雲泉	豐後	眞	豐後光西寺	天保十一、六、廿三	七四
二五〇〇	圓環	了儒	大阪	眞	越前眞蓮寺	天保十一、六、廿三	七四

日本佛家年表

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二五〇〇	法定 梅憾	伊勢河藝	眞	伊勢專照寺	天保十一、六、卅	六八
二五〇〇	勝○乘	播磨護持	眞	播磨常德寺	天保十一、―、―	六二
二五〇一	○行○智 阿光房	江戸淺草	眞言	武藏覺吽院	天保十二、三、十三	六四
二五〇一	元○苗 眞淨	紀伊田邊	臨濟	相模建長寺	天保十二、七、廿五	七〇
二五〇一	曇○龍 龍華	安藝	眞	筑前万行寺	天保十二、八、十一	―
二五〇三	慧定	筑後荒木	眞	筑後淨光寺	天保十三、三、廿二	―
二五〇二	文珠 大觀	美濃乙坂	臨濟	山城南禪寺	天保十三、三、廿八	七七
二五〇二	了祥 龜水	三河	眞	三河萬德寺	天保十三、四、八	五五
二五〇二	惠音	越後中頸城	眞	越後正念寺	天保十三、七、三	八三
二五〇二	榮明 深玄	大和芝村	眞言	大和長谷寺	天保十三、九、十九	―
二五〇三	秀岸 雲華院	越後一日市	眞	越後安淨寺	天保十四、正、七	―
二五〇三	賢○幢 淨月菴	―	眞	加賀西方寺	天保十四、正、廿六	―
二五〇三	○古○范 顧鑑	美濃厚見	臨濟	武藏東輝菴	天保十四、八、二	―
二五〇三	靈○傑 義門	若狹	眞	若狹妙玄寺	天保十四、八、十五	五八
二五〇三	慧白 心畵院	能登	眞	能登西照寺	天保十四、七、六	―
二五〇三	了○阿 春山	江戸淺草	天台	武藏金地院	天保十四、十二、十四	七三
二五〇三	眞瑞	安藝燒山	眞	安藝善教寺	天保十四、十二、―	七二
二五〇四	普行	越中	眞	攝津淨光寺	弘化元、二、―	五三
二五〇四	大廉 眞教	飛驒吉城	眞	攝津得聞院	弘化元、九、廿九	七六
二五〇五	○圓○龍 即往院	筑後	眞	筑後覺了院	弘化二、六、十八	―
二〇五六	○道○順 隆教	―	天台	武藏東叡山	弘化三、正、二	七〇
二五〇六	自謙	石見川下	眞	石見瑞泉寺	弘化三、三、四	九六
二五〇六	正觀	―	眞	攝津正行寺	弘化三、五、―	―
二五〇六	不及 探情	―	眞	肥前某寺	弘化三、七、十七	六三

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二五〇六	信惠 悟心	武藏久保	眞言	大和長谷寺	弘化三、七、廿一	七一
二五〇六	公紹	京師	天台	江近滋賀院	弘化三、十、十九	五三
二五〇六	宗○格 海山	三河牟呂莊	臨濟	山城圓福寺	弘化三、―、―	七八
二五〇七	○本○高 風外	伊勢	曹洞	三河香積寺	弘化四、六、廿三	六九
二五〇七	寶雲 鳥水	筑前臼井	眞	筑前長源寺	弘化四、七、六	―
二五〇七	先晋 音頁	武藏	眞言	山城智積院	弘化四、十二、十七	七六
二五〇八	宗績 妙喜	駿河大岡	臨濟	駿河蓮光寺	嘉永元、七、一	七五
二五〇八	慶恩	肥後熊本	眞	肥後善正寺	嘉永元、十一、五	六七
二五〇八	誘苑	近江中小路	眞	近江眞行寺	―	―
二五〇九	覺意	―	眞言	山城東寺	嘉永二、三、廿一	五六
二五〇九	至信 諦洲	豐後濱脇	臨濟	長門常榮寺	嘉永二、七、廿三	七六
二五〇九	會玄	―	眞	越中照蓮寺	嘉永二、八、廿一	七五
二五〇九	義完	阿波德島	臨濟	阿波玄要寺	雑永二、十、―	六五
二五〇九	僧穎 日觀院	―	眞	筑後西福寺	嘉永二、―、―	―
二五〇九	純覺 慈雲	―	天台	下野大平山	―	―
二五一〇	範惠 快順	山城相樂	眞言	山城智積院	嘉永三、四、一	六二
二五一〇	隆瑜 唯明	―	眞言	山城智積院	嘉永三、四、三	七八
二五一〇	智訓 耕隱	美濃池田	臨濟	山城妙心寺	嘉永三、七、三	―
二五一〇	如○寶 楚州	江戸	黄檗	山城萬福寺	嘉永三、九、十七	六〇
二五一〇	大○含 雲華	豐前岡	眞	豐前正行寺	嘉永三、十、八	七八
二五一〇	圓琛	豐後	眞	豐後光西寺	嘉永三、―、―	―
二五一〇	昌俊 東海	備後	臨濟	相模圓覺寺	―	―
二五一一	印定 鮮溪	越中新川	眞	越中專立寺	嘉永四、正、十	七五
二五一一	禪宅 戒舟	武藏足立	眞言	山城智積院	嘉永四、二、十六	六七

年	名	號	出生	宗	寺	寂年	壽
二五一一	深賢	卓全	近江今西	眞言	大和長谷寺	嘉永四、七、十三	七六
二五一一	普天	諦之	近江	眞	近江唯泉寺	嘉永四、八、六	六三
二五一一	正慶	靈〃	越中稗田	眞	越中圓福寺	嘉永四、八、十五	七七
二五一一	○僧敏	密成	讃岐	天台	備中甘露庵	嘉永四、九、九	七六
二五一一	○僧朗		備後姬川	眞	越後正念寺	嘉永四、十、廿七	八三
二五一二	默耀		—	眞	越後領勝寺	—	—
二五一二	圓識	思恭	安藝廣島	眞	安藝弘願寺	嘉永五、六、一	六〇
二五一二	秀巓	蓮淨院	—	眞	越中淨玄寺	嘉永五、九、	—
二五一二	元劼	拙堂	丹後田邊	臨濟	山城南禪寺	嘉永五、十二、十六	六〇餘
二五一二	東流	巨海	—	曹洞	武藏豪德寺	嘉永五、—	—
二五一二	義龍	愚庵	丹波天田	臨濟	圓波龍雲寺	—、十一、三	八〇
二五一二	曇藏		—	眞	長門光明房	—	—
二五一三	普天		—	眞	攝津源光寺	嘉永六、七、十三	—
二五一三	回天		能登	曹洞	山城興聖寺	嘉永六、八、三	—
二五一三	愚春	夢南	出羽最上	淨土	岩代大圓寺	嘉永六、十一、十七	七三
二五一四	祖徹	通應	尾張清洲	臨濟	下野東光寺	安政元、三、廿八	五四
二五一四	○慧海		安藝吳	眞言	備後正滿寺	安政元、七、七	五七
二五一四	法梁	遊泉院	伊勢四日市	眞	伊勢攝取院	安政元、八、十七	六七
二四五一	○鳳健	光隆	—	眞	大和長谷寺	安政元、八、十九	—
二五一四	訶提		安藝高宮	眞	安藝光明寺	安政元、八、—	四三
二五一四	榮助	營禪	—	眞言	近江大萱堂	安政元、十一、六	六〇
二五一四	濟忍		—	眞	越前圓藏寺	安政元、—	—
二五一四	觀道	三光明	—	時	武藏敎念寺	—	—
二五一四	西笑		—	天台	近江比叡山	—	—
二五一五	古鏡	月珊	讃岐丸龜	臨濟	山城妙心寺	安政二、四、九	六七
二五一六	○信海	大鍾	三河額田	眞	山城智積院	安政三、正、廿六	七四
二五一六	崇言		—	眞	出羽廣濟寺	安政三、二、廿六	—
二五一六	○赫照	惠照	越後蒲原	眞	越後淸傳寺	安政三、七、十一	七七
二五一六	覺應	子感	周防	眞	攝津長光寺	安政三、九、廿三	六四
二五一六	永雅	徹範	武藏比企	眞言	大和長谷寺	安政三、十、十六	七八
二五一六	○承演	大人拙	若狹大島	臨濟	山城相國寺	安政三、十、廿一	五九
二五一六	覺了	不可得	豐前今津	眞	豐前淨光寺	安政三、十一、—	—
二五一六	服膺		越後蒲原	眞	越後皆應寺	—	—
二五一七	東英	陽關	常陸水戶	臨濟	山城妙心寺	安政四、八、七	八三
二五一七	純惠	榮興	尾張	—	美濃淨樂寺	安政四、八、—	七五
二五一七	寂明	覺嚴	京師	曹洞	攝津磐若林	安政四、十一、二	六五
二五一七	等貴	宗山	—	臨濟	山城南禪寺	—	—
二五一八	○德龍	召雲	越後	眞	越後無爲信寺	安政五、正、廿三	八七
二五一八	○了淳	義讓	尾張	眞	三河源德寺	安政五、二、四	六三
二五一八	○月性	淸狂	周防遠崎	眞	周防妙圓寺	安政五、五、十一	四二
二五一八	○信曉	佛心院	美濃靜里	眞	山城大行寺	安政五、六、十四	八五
二五一八	○泰誾	笑譽	阿波眉山	淨土	下野弘經寺	安政五、九、九	—
二五一八	忍阿	悅淨院	—	眞	伊勢金光寺	安政五、九、廿九	七三
二五一八	○忍向	月照	攝津大坂	法相	山城淸水寺	安政五、十一、十七	—
二五一八	義順	大通院	—	眞	美濃智通寺	安政五、十二、五	—
二五一九	○日輝	堯由	加賀金澤	日蓮	加賀立像寺	安政六、二、廿三	六〇
二五一九	○信海		大坂	法相	山城成就院	安政六、三、十八	三九
二五一九	迦陵		尾張春日井	臨濟	信濃龍門寺	安政六、三、—	六七
二五一九	觀月	皆乘院	—	眞	美濃善行寺	安政六、七、四	—
二五一九	德觀	香雲	越後水原	眞	越後無爲信寺	安政六、十二、十九	七九

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二五二〇	○秀○存（一蓮院）	美濃中尾	眞	播磨萬福寺	萬延元、三、廿八	七三
二五二〇	玄彙（萬宗）	尾張善師野	臨濟	山城妙心寺	萬延元、三、—	—
二五二〇	義辨	—	眞	三河蓮成寺	萬延元、四、四	—
二五二〇	敬彥（實幢）	近江大津	天台	近江法明院	萬延元、四、十三	五四
二五二〇	拙巖	豐前	眞	肥前光明寺	萬延元、六、廿三	—
二五二〇	○詮○海（播光）	大和筑紫	融通念佛	大和常樂寺	萬延元、十、一	六七
二五二一	宜成（皆遊院）	—	眞	河內光照寺	文久元、正、三	八五
二五二一	寒淵（鑑堂）	—	眞	肥前光嚴寺	文久元、正、廿二	六二
二五二一	淨嚴（莊學）	—	淨土	山城知恩院	文久元、四、十六	—
二五二一	慶喜（照如）	—	眞	伊勢上宮寺	文久元、五、九	—
二五二一	棲城	肥前諫早	眞	若狹妙延寺	文久元、七、十六	六九
二五二二	○得○住（獅々窟）	—	眞	能登常得寺	—	—
二五二二	癡空（慧澄）	近古滋賀	天台	武藏淨名院	文久二、三、二	八三
二五二二	賴如（人驗）	安房長狹	眞言	山城智積院	文久二、八、廿四	六一
二五二二	行照	越中新川	眞	美濃願誓寺	文久二、八、廿七	—
二五二二	幻成（過蓭蓭）	—	眞	豐前福圓寺	文久二、八、—	—
二五二三	○大○宣	能登羽咋	眞	能登專稱寺	文久三、五、廿六	—
二五二三	法道（圓如）	長門萩	淨土	長門西圓寺	文久三、六、廿三	六〇
二五二三	○慧○月（乘行院）	—	眞	越中長福寺	文久三、八、十三	—
二五二三	不遷（物外）	伊豫松山	曹洞	備後道濟寺	文久三、十一、—	七三
二五二四	○祖○安（伊山）	美濃高柳	臨濟	尾張大山寺	元治元、五、十六	七七
二五二四	南溪（淮水）	筑前	眞	豐後萬福寺	元治元、六、—	—
二五二四	智幢（松蓭）	—	眞	美濃覺明寺	元治元、七、十三	—
二五二五	德諠	—	眞	豐後長久寺	慶應元、三、一	—
二五二五	○全○龍（月潭）	肥後熊本	曹洞	相模寶珠寺	慶應元、六、廿四	—
二五二五	○智○隆	土佐仁井田	眞言	土佐發生寺	慶應元、七、廿六	五〇
二五二五	光朗（達如）	京師	眞	山城本願寺	慶應元、十一、四	八六
二五二五	撝謙	尾張	眞	尾張專養寺	慶應元、十二、十二	—
二五二五	賢明	—	眞	能登西勝寺	慶應元、—	—
二五二五	昌碩（義堂）	—	臨濟	山臨大龍寺	慶應元、—	五一
二五二六	制心（正定院）	—	眞	尾張成信房	慶應二、正、廿三	—
二五二六	頑海（筏舟）	越前福井	曹洞	越後觀音寺	慶應二、正、廿八	七七
二五二六	宥歡（周堂）	大和笠村	眞言	大和長谷寺	慶應二、四、廿一	—
二五二六	德霖	—	眞	近江即往寺	慶應二、六、廿一	—
二五二六	慈觀（無爲道人）	下野佐野	天台	下野修學院	慶應二、八、十一	七三
二五二七	元磨（羅山）	遠江	臨濟	山城妙心寺	慶應三、二、十六	五三
二五二七	法宣（廣設院）	大坂天滿	眞	攝津善覺寺	慶應三、三、三	—
二五二七	鳳冠	越後蒲原	眞	越後蓮德寺	慶應三、七、十一	—
二五二七	隆榮（龍謙）	安房長狹	眞言	山城智積院	慶應三、七、十七	五九
二五二七	見瑞	—	眞	美濃興雲寺	慶應三、七、廿三	—
二五二七	快識（大賢）	武藏埼玉	眞言	大和長谷寺	慶應三、十一、十[illegible]	—
二五二七	慈性	—	天台	近江滋賀院	慶應三、十二、七	—
二五二七	○中○觀	—	眞	越後淨嚴寺	—	—
二五二八	超然（虞淵）	近江	眞	近江覺成寺	明治元、二、廿九	七七
二五二八	○正○純（開發院）	京都堀川	眞	山城瑞蓮寺	明治元、九、十三	—
二五二八	如隆（貞忠）	近江愛知	黃檗	山城萬福寺	明治元、十、十	七六
二五二八	玄喬（蘇山）	肥後熊本	臨濟	山城妙心寺	明治元、十二、十四	六三
二五二八	唯念	伊勢桑名	眞	伊勢輪崇寺	—	—

二五二九	昇道	京都釜屋	眞	山城圓重寺	明治二、六、—	—
二五二九	悟芳 瑞雲	肥後佐賀	黄檗	山城萬福寺	明治二、四、十六	七三
二五二九	僧溫 慧麟	越後中頸城	眞	越中正念寺	明治二、九、廿七	八二
二五二九	至善 芳洲	—	眞	伊勢源正寺	明治二、九、廿七	七一
二五二九	日○鑑○ 通義	越前丹生	日蓮	山城寂光寺	明治二、十二、八	六四
二五二九	慈○本○ 泰初	伊勢	天台	近江比叡山	明治二、—、—	七五
二五二九	法雲	京都富小路	眞	山城唯明寺	—	—
二五三〇	慧旦 大震	阿波	臨濟	阿波見性寺	明治三、八、十七	七九
二五三一	宗恩 薩門	山城	臨濟	山城妙心寺	明治四、正、十一	六七
二五三一	弘濟	—	眞言	山城醍醐山	明治四、二、十	六七
二五三一	百叡	—	眞	加賀願成寺	明治四、三、十二	八五
二五三一	大玄 無休	伊勢水澤	眞	越前專念寺	明治四、五、三	—
二五三一	玫純 雪航	豐前小倉	臨濟	山城天龍寺	明治四、七、八	六六
二五三一	光澤 廣如	—	眞	山城本願寺	明治四、八、十九	七四
二五三一	忍州 至妙院	伊勢河藝	眞	伊勢金光寺	明治四、九、廿九	五九
二五三一	東瀛 關彰院	—	眞	山城西方寺	明治四、十、三	—
二五三一	祖○門○ 鐵翁	肥前長崎	臨濟	肥前春德寺	明治四、十二、七	八一
二五三一	法住 開華院	東京小石川	眞	武藏傳久寺	—	—
二五三二	甘雨 爲霖	出雲鰐淵山	曹洞	尾張龍泰院	明治五、二、八	八七
二五三二	元志 願翁	陸前松島	臨濟	相模建長寺	明治五、六、—	六二
二五三二	道○廓○ 晦巖	—	臨濟	山城妙心寺	明治五、八、廿三	七五
二五三二	通濟 最勝	江戸大塚	眞言	大和長谷寺	明治五、十、十八	八五
二五三二	隆盛	—	眞言	武藏護持院	明治五、十一、八	七三
二五三二	荷洲 雲馨院	—	眞	飛驒眞蓮寺	明治五、—、—	—
二五三二	慈○隆○ 部處靜莚	—	天台	下野日光山	明治五、十二、廿四	五四
二五三二	義導 威力院	—	眞	越後景清寺	—	—
二五三三	宗貲 龍水	遠江長上	臨濟	遠江藏龍院	明治六、八、廿一	六〇餘
二五三三	紹璞 雪潭	紀伊牟婁	臨濟	山城妙心寺	明治六、九、十八	七二
二五三三	見眞 猊峯	—	眞	安藝長德寺	明治六、九、廿五	七五
二五三三	德含 圓禪	伊豆下田	天台	武藏梅園院	明治六、十一、七	六五
二五三四	橘仙	周防	曹洞	越中瑞龍寺	明治七、三、廿八	七六
二五三四	靈潭	豐後	眞	阿波光善寺	明治七、十、十四	七七
二五三四	明○賓○ 慈海	肥後熊本	融通念佛	攝津大念佛寺	明治七、十一、四	七三
二五三四	祖心 傳翁	信濃更科	曹洞	越州永建寺	明治七、十二、三	—
二五三五	蓮○月○尼○	京師	淨土	山城神光院	明治八、二、八	八〇
二五三五	行阿	東京	眞言	武藏深川寺	明治八、四、十四	七三
二五三五	增護	—	眞言	山城東寺	明治八、十一、十二	—
二五三五	默慧 瑞應院	—	眞	加賀燈明寺	—	—
二五三六	大○雲○ 忍阿	京都四條	淨土	山城無量光院	明治九、二、朔	六八
二五三六	道○契○ 甌瓦	豐後神邊	眞言	美作圓通寺	明治九、七、廿三	六二
二五三六	自哲 愚谿	出雲	臨濟	筑前聖福寺	明治十、八、八	六六
二五三七	日○暉○ 白蓮華	下總葛飾	日蓮	伊豆妙法華寺	明治十、九、十一	五一
二五三八	善來 儀山	若狹	臨濟	山城大德寺	明治十一、三、廿八	七七
二五三八	楚棟 海州	美濃伊尾	臨濟	山城東福寺	明治十一、四、廿一	七一
二五三八	廣成 金獅	東京	黄檗	山城萬福寺	明治十一、六、十二	五六
二五三八	義○範○ 現覺	佐渡羽茂	眞言	山城智積院	明治十一、九、十	—
二五三八	弘規 義觀	佐渡大杉	眞言	山城智積院	明治十一、十二、一	六一
二五三九	泰玄 顯正院	—	眞	伊勢本淨寺	明治十二、正、九	六七
二五三九	力精	常陸湊	眞	近江聞信寺	明治十二、二、—	六三
二五三九	雷○雨○ 眞相	—	淨土	山城一心院	明治十二、四、七	—

紀元	法諱	號	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二五三九	旃崖	奕堂	尾張名古屋	曹洞	能登總持寺	明治十二、八、廿四	七五
二五三九	寛寧		肥後菊池	眞	肥後大光寺	明治十二、十二、十三	八三
二五四〇	淨觀		佐渡柿野	眞言	佐渡大聖院	明治十三、正、廿一	五三
二五四〇	辨玉	淨譽	江戸淺草	淨土	武藏三寶寺	明治十三、四、廿五	六三
二五四〇	宗興	玄風	尾張九淵	眞	近江即往寺	明治十三、九、二	六六
二五四〇	大圓	白堂	河內丹北	眞	近江晴明寺	明治十三、十二、十	七二
二五四〇	文彙	泰龍	尾張	臨濟	紀伊大泰寺	明治十三、十二、廿六	五四
二五四一	元志	星定	尾張中島	臨濟	伊豆龍澤寺	明治十四、六、十二	六六
二五四一	玄雄		—	眞	攝津專念寺	明治十四、七、五	七八
二五四一	祥明		—	眞	伊勢青巖寺	明治十四、十、十四	五八
二五四一	理準	密乘	美濃安八	眞	武藏正德寺	明治十四、十一、十	八六
二五四一	太痴	香雲	甲斐都留	曹洞	甲斐千福院	明治十四、—、—	五一餘
二五四二	亮阿	實戒	越中礪波	天台	尾張長榮寺	明治十五、三、十五	八三
二五四二	忍成	廓然	伊勢貝塚	眞	伊勢上品寺	明治十五、六、八	六一
二五四二	海音	專々	播磨室津	眞	播磨寂靜寺	明治十五、十、八	七〇
二五四二	介石	斷識	肥後八代	眞	肥後正泉寺	明治十五、十二、九	六九
二五四三	道晃		肥後葦北	眞	肥後善正寺	明治十六、二、七	七〇
二五四三	慶忍	性叡	豐前下毛	眞	豐前長久寺	明治十六、三、七	六六
二五四三	俊海	秀學	武藏上大越	眞言	武藏護持院	明治十六、六、七	八三
二五四三	研壽	僧鎧	越中城端	眞	越中慧林寺	明治十六、七、十六	三三
二五四三	哲僧	護法院	—	眞	加賀誓入寺	明治十六、七、廿	—
二五四三	如澤	霖龍	周防秋穗	黃檗	山城萬福寺	明治十六、十二、廿九	八二
二五四三	無涯		肥後	眞	伊勢淨蓮寺	明治十六、—、—	—
二五四四	大寶	守脫	伊勢佐倉	天台	近江園城寺	明治十七、二、十	八一
二五四四	沃洲	槐齋	肥後	眞	肥後淨專寺	明治十七、六、—	—
二五四四	守謙	越谿	若狹	臨濟	山城妙心寺	明治十七、十、十四	七五
二五四四	密雲	環谿	越後西頸城	曹洞	越前永平寺	明治十七、四、五	—
二五四五	恢嶺	痴堂	尾張名古屋	淨土	山城平等院	明治十八、二、十五	四七
二五四五	果	碩宗	紀伊栖原	眞	紀伊極樂寺	明治十八、六、六	—
二五四五	龍溫	雲解	京師	眞	山城圓光寺	明治十八、七、十二	八六
二五四五	雪鴻	鐵肝	越前武生	曹洞	越前永平寺	明治十八、八、十	五四
二五四五	雲溪	龍華院	豐前	眞	豐前光蓮寺	明治十八、八、—	—
二五四五	敬德	順道	尾張智多	天台	近江法明院	明治十八、十二、十四	五六
二五四六	日鑑	誠研	土佐	日蓮	甲斐身延山	明治十九、一、十三	六一
二五四六	體應	靈惺	越後後尾	眞言	越後曼荼羅寺	明治十九、二、廿五	六九
二五四六	韶舜	薫契	出雲島根	天台	武藏淺草寺	明治十九、三、卅	六二
二五四六	靈瑞	鳳譽	信濃更科	淨土	山城知恩院	明治十九、五、十六	七〇
二五四六	善讓	龍天	豐前蠣瀨	眞	豐前照雲寺	明治十九、七、六	八一
二五四六	秀善	惠運	越後花山	眞言	大和長谷寺	明治十九、十二、十四	七五
二五四七	神興	老南	越前金粕	眞	越前憶念寺	明治廿、六、廿八	七四
二五四七	頓成		能登羽喰	眞	能登長光寺	明治廿、十一、十九	九三
二五四八	行誠	晉阿	武藏豐島	淨土	武藏增上寺	明治廿一、四、廿五	八三
二五四八	日薩	文嘉	上野桐生	日蓮	甲斐身延山	明治廿一、八、廿九	五九
二五四九	眞機	獨唱	筑後柳川	黃檗	山城萬福寺	明治廿二、正、十七	七五
二五四九	了祐	博仁	越中新川	眞	美濃長慶寺	明治廿二、三、廿三	—
二五四九	義天	孤竹	越中蠣波	眞	越中眞敬寺	明治廿二、四、十七	六三
二五四九	實因	法泉	尾張名古屋	眞言	山城智積院	明治廿二、十一、廿	七〇
二五五〇	宣界		越後櫻町	眞	越後光西寺	明治廿三、二、廿八	八〇

二五五〇	行忠	香涼院	越後水原	眞	越後無爲信寺	明治廿三、五、廿九	七四
二五五〇	慈本	宏遠	近江高宮	眞	近江圓照寺	明治廿三、六、廿一	八三
二五五〇	秀曆	覺了	尾張名古屋	眞言	大和長谷寺	明治廿三、八、廿二	七五
二五五〇	湛空	普妙院	伊勢磯山	眞	伊勢隆崇寺	明治廿三、九、三	五三
二五五〇	實道	忍譽	伊勢桑名	淨土	山城高樹院	明治廿三、十二、十四	八五
二五五一	○旭雅		阿波勢力	眞言	山城泉涌寺	明治廿四、正、卅一	六四
二五五一	○徹定	順譽	筑後久留米	淨土	山城知恩院	明治廿四、三、十五	七八
二五五一	日修	圓政	備後福山	日蓮	甲斐身延山	明治廿四、五、十七	六九
二五五一	○日昇	泰山	越後	日蓮	武藏本門寺	明治廿四、十、廿九	六〇
二五五二	○宗慍	洪川	攝津	臨濟	相模圓覺寺	明治廿五、正、十六	七七
二五五二	龍關		―	臨濟	山城建仁寺	明治廿五、五、八	―
二五五二	德令	石門	筑後木屋	眞	筑後光善寺	明治廿五、七、二	九一
二五五二	○良作	坦山	磐城平	曹洞	山城心性寺	明治廿五、七、廿七	七四
二五五三	○聞惠	五岳	豐後日田	眞	豐前專念寺	明治廿六、三、三	八三
二五五三	針水	靜潭	肥後內田	眞	肥後光照寺	明治廿六、六、十二	八五
二五五三	日阜	秀泰	越中新川	日蓮	甲斐身延山	明治廿六、八、廿六	五八
二五五四	道教	包含	美濃	眞	美濃光慶寺	明治廿七、正、五	―
二五五四	光勝	嚴如	京師	眞	山城本願寺	明治廿七、正、十五	七八
二五五四	○徹周	是海	越前花堂	眞	越前專久寺	明治廿七、七、十一	七七
二五五五	宥性	智友	安房長狹	眞言	山城智積院	明治廿八、正、十三	七五
二五五五	知常	古知	相模	曹洞	伊豆修禪寺	明治廿八、七、廿五	五六
二五五五	承珠	獨園	備前兒島	臨濟	山城相國寺	明治廿八、八、三	七七
二五五五	○光映	壘覺	豐後中村	天台	近江延曆寺	明治廿八、八、十五	七七
二五五五	慧潭		和泉堺	臨濟	山城妙心寺	明治廿八、十、卅一	八八
二五五六	潛龍		三河	眞	美濃安養寺	明治廿九、三、廿六	六三
二五五六	道貫	得一	美濃	眞	美濃光慶寺	明治廿九、五、廿五	七五
二五五六	行乘	觀輪	仙臺	黃檗	山城萬福寺	明治廿九、九、一	七〇
二五五六	芳勝	純賢	越後三島	眞言	山城智積院	明治廿九、十一、五	五七
二五五七	○琢宗	魯山	越後	曹洞	越前永平寺	明治卅、正、卅一	六三
二五五七	謎厚	樂貝	信濃長野	天台	下野滿願寺	明治卅、七、五	六五
二五五七	隆基	芳仁	岩城菊多	眞言	山城智積院	明治卅、十、三	六九
二五五七	千巖	來々子	美濃安八	眞	筑後伯東寺	明治卅、十一、廿五	六七
二五五八	玄昌	澤海	美濃	臨濟	山城妙心寺	明治卅一、三、七	八八
二五五八	大了	章範	伊豫高岡	眞言	大和長谷寺	明治卅一、八、廿五	六五
二五五八	相憲	玄識	東京小石川	眞言	大和長谷寺	明治卅一、十二、廿	六七
二五五八	文奕	無學	美濃武儀	臨濟	山城妙心寺	明治卅一、十二、卅一	八〇
二五五八	光輪		越後	曹洞	伊豆修禪寺	明治卅一、―、―	六〇
二五五九	宜牧	滴水	丹波	臨濟	山城天龍寺	明治卅二、正、廿	七八
二五五九	實禪	新羅	美濃	臨濟	土佐陽貴山	明治卅二、二、十五	七四
二五五九	孝暢	石室	武藏	天台	近江延曆寺	明治卅二、五、卅一	六三
二五五九	雲集		筑後	眞	筑後榮久寺	明治卅二、八、十七	八四
二五六〇	○恒順		越後三島	眞	豐前萬行寺	明治卅三、正、廿九	六六
二五六〇	貫照		京都室町通	天台	武藏傳法院	明治卅三、九、廿二	五五
二五六〇	峨山	息畊	京都	臨濟	山城天龍寺	明治卅三、十、一	四九
二五六〇	海量	暖雲	上總木更津	眞言	大和長谷寺	明治卅三、十、九	六八
二五六一	普潤		筑後浮田	天台	山城安樂院	明治卅四、正、四	七三
二五六一	棵仙		信濃下高井	曹洞	能登總持寺	明治卅四、十一、廿七	七七
二五六二	悟光	萬丈	豐前下毛	黃檗	山城萬福寺	明治卅五、六、九	九七
二五六二	鐵然		周防	眞	周防妙遠寺	明治卅五、四、廿五	―
二五六二	睥嘯	虎林	肥前多久	黃檗	山城萬福寺	明治卅五、十、十五	六八

正誤

(一一頁)一六四〇　疊緣の一行削除ス
(三二頁)一九四九　守助の一行削除ス
(八九頁)二三三六　湛海賓山の一行削除ス

日本佛家年表　終

日本佛家年表增補

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
一五二六	教信	—	法相	大和興福寺	貞觀八、八、十五	—
一七七六	日覺	—	天台	近江延暦寺	—	—
一八六三	澄憲	京都	天台	京都安居院	建仁三、八、六	—
一八六六	重源	京都	眞言	山城醍醐寺	建永元、六、四	八六
一八七五	寛昌	筑紫	天台	播磨書寫山	—	—
一八八四	成忍	—	眞言	山城高山寺	—	—
一九二〇	證救	—	臨濟	京都建仁寺	文應元、八、十七	—
一九二八	慶政	—	天台	山城法華山寺	文永五、十、六	—
一九三七	眞海	—	眞言	—	建治三、九、六	七三
一九四六	無着尼	—	臨濟	京都景愛寺	—	—
一九七一	淨如	越前	眞	越前證誠寺	應長元、九、五	七六
一九八二	正虎	—	臨濟	山城海生寺	—	—
一九九一	實祐	—	—	大和藥師院	—	—
一九九三	乘明	—	眞言	播磨書寫山	—	—
一九九三	本性房	—	—	大和般若寺	—	—
一九九七	宏雲	相摸	臨濟	遠江平田寺	建武四、六、三	—
一九九八	範憲	—	法相	大和興福寺	暦應二、十二、十七	九三
二〇〇〇	如道	越前	眞	越前專照寺	暦應三、八、十一	八八
二〇〇〇	圓藝	—	眞	常陸願入寺	暦應三、八、十四	—
二〇〇三	專空	下野眞岡	眞	下野專修寺	康永二、十二、十八	一三
二〇〇六	印玄	—	眞言	山城仁和寺	貞和二、八、五	六九
二〇一〇	智玄	近江	臨濟	遠江平田寺	觀應元、九、十四	—
二〇一五	一鎭	—	時	相摸淸淨光寺	文和四、十二、廿二	七九
二〇一七	賢俊	京都	眞言	京都東寺	延文二、七、十六	五九
二〇二〇	妙讓	常陸筑波	臨濟	下野龍興寺	延文五、十二、廿三	六五
二〇二三	子越	京都	臨濟	長門安國寺	貞治二、九、十一	七九
二〇二五	永璵	元國	臨濟	京郭南禪寺	貞治四、五、六	—
二〇三五	源慶	三河	臨濟	相摸淨妙寺	永和元、四、廿六	—
二〇四八	聖通尼	京都	臨濟	山城通玄寺	嘉慶二、一、廿五	八〇
二〇五五	光宣	大和	法相	大和成身院	—	—
二〇五七	宥傳	安房平	眞言	安房寶珠院	文明二、四、九	七四
二〇五九	會統	肥後	臨濟	京都祇樹庵	應永六、四、廿五	七一
二〇七〇	中淵	—	臨濟	京都相國寺	應永七、正、六	七六
二〇七〇	瑞智	—	臨濟	京都相國寺	—	—
二〇七二	自空	—	時	相摸淸淨光寺	應永十九、三、十一	八四
二〇七三	周亨	筑紫	臨濟	京都南禪寺	應永廿、五、十	—
二〇七三	周仲	甲斐	臨濟	京都南禪寺	應永廿、十二、十八	—
二〇七八	建闇	三河大野	臨濟	遠江方廣寺	應永廿五、十、廿三	九九
二〇九二	有諸	—	臨濟	京都南禪寺	—	—
二〇九四	中珊	—	臨濟	京都相國寺	永享六、正、廿八	五八

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二一[illegible]	周沼	—	臨濟	京都相國寺	—	—
二一〇六	器重	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一〇九	元棣	美濃	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一一二	禮才	山城	臨濟	京都東福寺	寶德四、六、六	—
二一一七	清啓	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一二二	一慶	京都	臨濟	京都南禪寺	寬正三、正、廿三	七七
二一二五	惠鳳	美濃	臨濟	京都東福寺	—	—
二一二九	眞蘂	—	臨濟	京都相國寺	文明元、八、十一	六九
二一二九	周馥	—	臨濟	京都妙智院	—	—
二一三〇	等蓮	—	臨濟	京都南禪寺	文明二、正、七	八二
二一三二	周厥	—	臨濟	京都等持寺	文明四、二、廿三	六七
二一三四	了顯	越前	眞	越前本向寺	—	—
二一三五	志稽	—	臨濟	京都相國寺	文明七、五、十五	七四
二一三六	順永	大和	法相	大和興福寺	文明八、十、—	五四
二一四一	子建	—	臨濟	京都相國寺	文明十三、三、廿九	—
二一四一	碩鼎	—	臨濟	京都南禪寺	—	—
二一四二	景越	近江	臨濟	京都南禪寺	—	—
二一四四	順賢	大和	法相	大和興福寺	—	—
二一四六	西忍	京都	—	大和	文明十八、三、十四	一〇三
二一四七	大椒	備前	臨濟	京都東福寺	文明十九、八、七	六六
二一四七	集箴	—	臨濟	京都天龍寺	長享元、十一、十六	—
二一四九	瑞仙	近江愛知	臨濟	京都相國寺	延德元、十、廿八	六〇
二一四九	德濟	阿波	臨濟	京都眞如寺	—	—
二一五〇	梵桂	—	臨濟	京都南禪寺	延德二、十一、五	八七
二一五二	蘇泉	—	臨濟	京都相國寺	延德四、五、十三	—
二一五三	集證	—	臨濟	京都天龍寺	明應二、九、廿七	—
二一五三	周興	山城深草	臨濟	京都相國寺	—	—
二一五六	經覺	京都	法相	大和興福寺	明應五、八、—	一〇三
二一五七	等緣	—	臨濟	京都相國寺	明應六、六、十八	—
二一五八	龍琛	—	臨濟	京都南禪寺	明應七、—、廿三	—
二一六〇	圓俊	—	法相	大和藥師寺	—	—
二一六三	桂喆	—	臨濟	京都萬壽寺	—	—
二一六四	啓閭	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一六八	尋尊	京都	法相	大和大乘院	永正五、五、—	七九
二一六八	春莊	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一六九	壽顯	—	臨濟	京都南禪寺	永正六、十二、廿六	—
二一七一	弘稽	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一七七	順盛	大和	法相	大和成身院	—	—
二一七七	清三	伊勢	臨濟	相模建長寺	—	—
二一七八	周麟	—	臨濟	京都相國寺	永正十五、三、—	七九
二一八一	永因	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一八一	東悆	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二一八七	願知	越前荒井	眞	京都德正寺	大永七、正、廿八	八九
二一八七	肖栢	京都	—	攝津池田	大永七、四、—	八五
二一九四	信鏡	—	臨濟	京都東福寺	天文三、十二、十六	—
二一九五	順興	大和	法相	大和興福寺	天文四、七、—	—
二一九七	壽戩	—	臨濟	京都建仁寺	—	—
二二〇四	鷹灞	—	臨濟	京都建仁寺	—	—

二二〇七	惠教	｜	天台	山城二尊院	天文十六、三、廿四	八〇
二二一〇	順昭	大和	法相	大和興福寺	天正十九、｜、｜	｜
二二一五	守仙	信濃	臨濟	京都東福寺	弘治元、十、十二	六六
二二一八	瑞桂	｜	臨濟	京都眞如寺	永祿元、七、廿	｜
二二二七	妙安	近江	臨濟	京都相國寺	永祿十、十二、三	八八
二二三三	順貞	大和	｜	大和	天正元、十、廿一	｜
二二三四	集堯	｜	臨濟	京都相國寺	天正二、七、廿八	九二
二二三四	永恩	若狹	臨濟	京都建仁寺	天正二、八、十六	六四
二二三九	周良	京都	臨濟	京都天龍寺	天正七、六、一	七九
二二四〇	景秀	近江山上	臨濟	京都南禪寺	天正八、十一、十八	八五
二二四一	壽寅	｜	臨濟	京都眞如寺	天正九、正、四	九六
二二四一	宗二	奈良	｜	大和	天正九、｜、｜	八四
二二四三	有三	越前岩本	時	越前西方寺	天正十一、四、五	七三
二二四四	順慶	大和	法相	大和興福寺	天正十二、八、十一	三六
二二四四	瑞超	｜	臨濟	京都相國寺	天正十二、十二、九	｜
二二四五	清玉	｜	淨土	山城阿彌陀寺	天正十三、九、十五	四四
二二六〇	詮舜	近江滋賀	天台	近江觀音寺	慶長五、二、十九	六一
二二六二	紹巴	奈良	法相	大和興福寺	慶長七、四、十二	七九
二二六〇	永雄	若狹	臨濟	京都建仁寺	｜	｜
二二六五	元冲	山城	臨濟	京都南禪寺	慶長十、七、廿四	｜
二二六六	紹滴	和泉堺	臨濟	京都大德寺	慶長十一、四、廿三	七四
二二六六	玄韓	｜	臨濟	駿河寶泰寺	慶長十一、七、十六	六四
二二六七	承兌	｜	臨濟	京都相國寺	慶長十二、十二、廿七	六〇
二二六八	道澄	京都	天台	山城照高院	慶長十三、六、廿八	六五
二二六八	靈三	京都	臨濟	京都南禪寺	慶長十三、十、廿六	七四
二二六九	堯慧	｜	眞	伊勢專修寺	慶長十四、正、廿一	八三
二二七一	豪圓	伯耆宇田川	天台	伯耆大山寺	慶長十六、六、五	｜
二二七一	玄蘇	筑前西鄉	臨濟	對馬以酊庵	慶長十六、十、廿二	七五
二二七二	元佶	肥前晴氣	臨濟	山城圓光寺	慶長十七、五、廿	六五
二二七三	正悟	｜	臨濟	京都南禪寺	慶長十八、七、十三	五三
二二七四	政遍	越中	眞言	紀伊高野山	慶長十九、四、二	八一
二二七五	慶集	｜	臨濟	京都眞如寺	元和元、九、四	八六
二二七七	亮憲	｜	天台	常陸千妙寺	元和三、十一、八	七九
二二八一	清韓	伊勢	臨濟	京都東福寺	元和七、三、廿五	｜
二二八六	義演	京都	眞言	山城醍醐寺	寛永三閏四、廿一	六九
二二九三	瑞保	｜	臨濟	京都南禪寺	寛永十、十一、七	八六
二三〇〇	法爾	相模小田原	時	京都金光寺	寛永十七、十、廿九	七八
二三一八	顯啤	京都	臨濟	京都南禪寺	萬治元、正、廿	七九
二三一八	託資	｜	時	相模清淨光寺	萬治元、十二、三	六八
二三一八	日演	備前	日蓮	和泉妙國寺	萬治元、十二、十七	六四
二三二一	玄方	筑前宗像	臨濟	對馬以酊庵	寛文元、十、廿二	七四
二三二二	藤光	｜	時	相模清淨光寺	寛文二、十、十五	五三
二三二三	木端	｜	時	相模清淨光寺	寛文三、三、晦	六一
二三三〇	日泰	駿河	日蓮	和泉妙國寺	寛文十、七、一	七六
二三三三	日清	備前	日蓮	相模妙福寺	寛文十三、一、一	六三
二三四八	孝源	｜	眞言	紀伊高野山	｜	｜
二三五四	道澄	｜	黄檗	山城直指庵	｜	｜
二三五八	慶彦	｜	臨濟	京都鹿苑寺	元祿十一、十二、廿九	七八
二三六五	惠叢	｜	臨濟	京都相國寺	寶永二、五、十七	七四
二三六五	顯靈	｜	臨濟	京都相國寺	寶永二、五、廿	六九

紀元	法諱	出生地	宗門	住所	示寂年月日	享壽
二三六六	眞敬	京都	法相	大和興福寺	寶永三、七、六	五八
二三六七	道光	―	黃檗	肥前興福寺	寶永四、十、―	―
二三六九	道宗	明國	黃檗	山城萬福寺	寶永六、七、廿九	―
二三七四	祖緣	―	臨濟	京都相國寺	正德四、五、一	―
二三八四	惠南	―	眞	越前法林寺	享保九、十一、六	六六
二三八七	元瑤尼	京都	臨濟	山城林丘寺	享保十二、十、五	九四
二三九〇	志晃	―	天台	近江園城寺	享保十五、六、四	六九
二四〇〇	覺同	―	天台	武藏東叡山	元文五、十一、五	八三
二四一〇	德潤	播磨姬路	天台	武藏東叡山	寬延三、六、廿一	七六
二四一一	遲亮	越前大野	天台	越前善法院	寬延四、四、十一	六六
二四二一	仁海	―	曹洞	河內法藏寺	―	―
二四三五	禪海	越後高田	臨濟	豐前羅漢寺	安永三、八、廿四	―
二四三六	觀尊	京都	天台	近江園城寺	安永五、八、十六	六一
二四三六	澄覺	―	―	阿波興朝寺	―	―
二四三九	惠舶	越前丹生	眞	越前善行寺	安永八、十二、十一	五三
二四四四	照漢	淸國	黃檗	山城萬福寺	天明四、二、十	―
二四四五	淨光	―	臨濟	京都南禪寺	文明十四、三、廿六	―
二四五二	玄伏	―	眞	越前敬覺寺	寬政四、十一、十五	五五
二四六〇	誠誠	丹後熊野	淨土	但馬瑞泰寺	寬政十二、十一、廿三	六七
二四六三	月湛	―	曹洞	越中光嚴院	享和三、六、廿	七八
二四六六	覺千	江戶下谷	天台	武藏東叡山	文化三、五、廿六	五一
二四七七	圓基	―	黃檗	肥前福濟寺	文化十四、六、―	八八
二四八一	圓密	―	黃檗	肥前福濟寺	文政四、五、―	八四
二五〇七	順藝	越前	眞	越前淨勝寺	弘化四、―、―	七三
二五一二	亮範	尾張	淨土	山城光明寺	嘉永五、七、廿七	―
二五一三	圓琳	越前衙浦	眞	越前圓藏寺	嘉永六、四、十三	六七
二五一五	善超	京都	眞	越前證誠寺	安政二、七、十三	七一
二五一八	文器	東京	臨濟	京都妙心寺	安政五、秋	五〇
二五一九	宗淵	京都北野	天台	伊勢西來寺	安政六、八、廿八	七四
二五二二	文瑄	京都	臨濟	京都妙心寺	文久二、正、二	八六
二五二四	亮親	―	修驗	豐前英彥山	元治元、七、廿	四九
二五二四	成連	―	修驗	豐前英彥山	元治元、七、廿	三四
二五二五	有縣	―	修驗	豐前英彥山	慶應元、七、廿七	四六
二五二五	淨典	―	修驗	豐前英彥山	慶應元、七、―	四四
二五二五	順道	―	修驗	豐前英彥山	慶應元、七、―	四〇
二五二六	海雄	阿波高原	眞言	紀伊高野山	慶應三、六、九	―
二五二七	胤康	武藏四谷	臨濟	日向慈眼寺	慶應三、四、―	―
二五二七	琳瑞	羽前谷地	淨土	江戶處靜院	慶應三、十、―	三八
二五二八	範海	―	天台	武藏寬永寺	―	―
二五二九	義觀	武藏根岸	天台	武藏寬永寺	明治二、二、廿六	四七
二五三二	慈隆	下野日光	天台	下野淨土院	明治五、十二、廿四	五四
二五三三	義敬	下野	天台	越前平泉寺	明治六、一、廿三	五七
二五三三	紹璞	紀伊	臨濟	京都妙心寺	明治六、九、十九	七二
二五三六	慈英	京都	臨濟	京都建仁寺	明治九、―、―	五三
二五三七	良基	備後	眞言	紀伊金剛峯寺	明治十、十一、十六	七五
二五四〇	眞敎	三河棚尾	融通念佛	攝津大念佛寺	明治十三、十一、廿三	七七
二五四三	堯忍	江戶本鄕	天台	武藏東叡山	明治十六、九、十四	六九
二五五〇	壯裔	武藏秩父	臨濟	京都妙心寺	明治廿三、夏	八三

二五五二	佛磨	信濃	曹洞	東京圓通寺	明治廿五、一、廿四	六六
二五五三	增隆	攝津大坂	眞言	紀伊高野山	明治廿六、四、卅	七一
二五五三	法彥	越前南江	眞言	越前佛照寺	明治廿六、七、九	三五
二五五七	イハ	岩代耶麻	───	岩代熱鹽	明治卅、四、十九	六九
二五五七	石谷	薩摩石谷	天台	近江光淨院	明治卅、九、十五	六〇
二五五八	大圓	越後	眞	越後明通寺	明治卅一、七、五	六〇
二五六二	髀嘯	肥前多久	黃檗	山城萬福寺	明治卅五、十、十五	六八
二五六三	聞精	加賀山代	眞	加賀願成寺	明治卅六、六、二	六五
二五六三	宣正	越後三島	眞	越後光西寺	明治卅六、六、六	四五
二五六三	滿之	尾張名古屋	眞	三河西方寺	明治卅六、六、六	四一
二五六四	鐵眼	磐城平	臨濟	山城林丘寺	明治卅七、一、十七	五一
二五六四	全愚	美濃	臨濟	東京龍雲院	明治卅七、十一、廿四	七一
二五六五	香頂	豐後大分	眞	豐後妙正寺	明治卅八、三、十二	七五
二五六五	儼識	尾張	淨土	大和五劫院	明治卅八、五、三	八八
二五六五	日董	越後出雲崎	日蓮	京都妙顯寺	明治卅八、七、卅一	五八
二五六五	文幢	美濃山縣	臨濟	京都東福寺	明治卅八、九、四	八二
二五六五	呵成	京都	淨土	山城正法寺	明治卅八、十、十	四二
二五六五	寂順	出雲松江	天台	近江延曆寺	明治卅八、十、廿九	六八
二五六六	廣貫	武藏鄉地	天台	伊勢西來寺	明治卅九、八、十九	八九
二五六六	通晃	近江高島	臨濟	京都東福寺	明治卅九、九、廿一	五一
二五六七	イホ	肥前唐津	眞	肥前唐津	明治四十、二、七	六三
二五六七	慈薰	江戶下谷	天台	武藏喜多院	明治四十、二、廿七	七四
二五六七	宜田	───	臨濟	京都南禪寺	明治四十、三、十七	─
二五八七	蕃根	周防德山	───	東京	明治四十、九、二	九一
二五六七	宗澤	但馬養父	臨濟	山城大德寺	明治四十、八、十五	六八
二五六七	照遍	阿波北新居	眞言	河內延命寺	明治四十、九、廿四	八〇
二五六七	道龍	紀伊和歌山	眞	紀伊法福寺	明治四十、十一、十五	八八
二五六八	長安	越後新發田(救世教)		越後長岡	明治四十一、六、十五	六六
二五六九	雲照	出雲神門	眞言	山城仁和寺	明治四十二、四、十三	八三
二五六九	日與	江戶	日蓮	駿河海長寺	明治四十二、五、廿六	五六
二五六九	鍰海	大和	眞言	伊豫仙龍寺	明治四十二、六、十三	五四
二五六九	禪機	尾張松下	臨濟	近江永源寺	明治四十二、七、十四	八四
二五六九	承峻	京都	臨濟	京都相國寺	明治四十二、十、十七	六九
二五七〇	晃耀	三河一色	眞	三河安休寺	明治四十三、二、十四	八〇
二五七〇	智滿	攝津大阪	眞言	京都隨心院	明治四十三、三、廿一	六〇
二五七〇	義山	備後	眞	備後勝願寺	明治四十三、六、十六	八七
二五七〇	瑾英	陸奧湊	曹洞	能登總持寺	明治四十三、十二、四	九〇
二五七一	默雷	周防和田	眞	周防妙誓寺	明治四十四、二、三	七四
二五七一	通昌	伊勢	黃檗	山城萬福寺	明治四十四、二、六	七六
二五七一	道林	志摩御座	臨濟	京都南禪寺	明治四十四、二、廿六	八四
二五七一	日龜	駿河清水	日蓮	甲斐久遠寺	明治四十四、四、十三	七一
二五七一	義海	越前橫江	眞言	大和長谷寺	明治四十四、五、十一	七六
二五七一	範之	筑前久留米	曹洞	越後顯聖寺	明治四十四、六、廿三	四七
二五七一	得能	越前波寄	眞	東京宗恩寺	明治四十四、八、十八	五二

日本佛教各宗系統圖

○三論宗系統畧

- (吉藏)
  - (碩法師)—(元康)—智慈（大安寺流）—善議
    - 安澄
      - 玄叡
      - 實敏
      - 壽遠
    - 勤操—願曉—聖寶（東南院第一祖）—延敏—觀理
      - 育然
      - 法緣
      - 澄心
        - 濟慶
        - 有慶
          - 顯眞—永觀—(イ)
          - 慶信
            - 覺樹—(ロ)
            - 圓快—(ハ)
  - 慧灌—福亮—智藏
    - 智光（元興寺流）
    - 禮光（同）
    - 靈叡—藥寶
- 玄覺
  - 圓宗
  - 宣融
    - 玄耀—道詮
    - 明澄—道昌

- (イ)
  - 珍海—敏覺—明遍—貞敏
    - 貞乘
    - 貞禪
      - 聖基
      - 道寶—信忠
      - 快慧
    - 貞玄
  - 慧珍—聖慶

- (ロ)
  - 重譽
  - 寛信
  - 觀嚴

- (ハ)
  - 理眞
    - 賴慧
    - 重喜
      - 義海
      - 樹慶
        - 智舜
          - 眞空
          - 快圓
          - 聖然
          - 良秀
          - 見塔
        - 定春
        - 道快—聖實—聖兼—聖忠—聖尋
      - 乘信
    - 定範
    - 道慶
    - 秀慧
      - 覺澄
      - 信禪

○法相宗系統略

（玄奘）—（窺基）—（慧沼）—（智周）—（イ）

（玄奘）—智通
（玄奘）—智達
（玄奘）—道昭

智達・道昭—行基（南寺ノ傳）

行基—勝虞
行基—行信
行基—法海

勝虞—慈寶
勝虞—泰演
勝虞—護命
勝虞—守印
勝虞—源仁

護命—仲繼
護命—延祥
護命—守寵

仲繼—隆光
仲繼—明詮
仲繼—隆海

明詮—賢應
明詮—圓宗
明詮—三修
明詮—如無

圓宗—仁斆—定昭—定好—眞範—賴信

賴信—永縁
賴信—覺信

覺信—覺英
覺信—玄覺—惠信—信圓

信圓—良圓—實信
信圓—實尊—圓實

（イ）—智鳳
（イ）—智鸞
（イ）—智雄
（イ）—玄昉（北寺ノ傳）

智鳳—義淵

義淵—宣敎
義淵—行達
義淵—隆尊—鑑眞
義淵—良辨—實忠—等定
義淵—道慈
義淵—道鏡
義淵—良敏
義淵—玄昉

道慈—慶俊
道慈—勤操

玄昉—善珠

善珠—常樓
善珠—昌海—基繼—義光

良敏—慈訓

慈訓—明哲
慈訓—仁秀—願安
慈訓—正義—長朗

宣敎—賢璟
宣敎—玄賓—長訓

賢璟—明福—延賓
賢璟—修圓

修圓—德一
修圓—壽廣
修圓—眞如
修圓—春德

義光—延賓

延賓—空晴

空晴—仲算
空晴—眞喜—扶公—圓縁
空晴—守朝—淸範

仲算—眞興
仲算—林懷

圓縁・林懷—明憲
圓縁・林懷—經救
圓縁・林懷—主恩
圓縁・林懷—明懷

主恩—永超—湛秀—覺晴—藏俊

藏俊—覺憲—（ロ）
藏俊—遠湛

（ロ）—貞慶

貞慶—璋圓
貞慶—良算—專英—尊信
貞慶—覺遍—良遍
貞慶—圓玄
貞慶—圓經

良遍—貞隆
良遍—縁圓—隆禪—隆覺
良遍—貞弘—憲弘—範憲

○華嚴宗系統略

（法藏）—審祥—良辨—良興・實忠・良惠・忠惠・安寬・標瓊・鏡忍・永興

良辨—永興—永覺

良興—靈義

實忠—等定—正進・禪雲

正進—長歲・興智

長歲—道雄—基海・智鎧・道義

基海—良緒—圓超・光智

光智—松橋・觀眞

觀眞—（イ）

松橋—延幸—深幸—定暹—辨曉—尊玄・敎寬・道性

道性—（ロ）

良惠—堪久

（イ）—觀圓—延快—勝暹—良覺—如幻・景雅

景雅—高辨—喜海—靜海・辨清

靜海—照辨・順辨

（ロ）—良禎—宗性—凝然—湛睿・禪爾・道玄

禪爾—俊才—盛譽—照玄—正爲—照慧—靈波—總融—融存—志玉

○戒律宗系統略

（道宣）—（文綱）—（恒景）—鑑眞
- 仁韓
- 曇靜
- 法進
  - 聖一
  - 慧山
- 思託
- 法載（招提寺第一世）—眞璟—戒勝—壽高—增恩—安談—喜寬（以下斷絕）
- 義靜
- 法成
- 如寶（戒壇院第一世）—豐安—圓勝—道靜—仁階—眞空—豐惠—安康

（再興）實範—藏俊—覺憲—貞慶
- 戒如
  - 圓晴
  - 繼尊
  - 覺證
  - 有嚴
  - 覺盛（招提寺中興）
    - 良遍
    - 聖守
    - 定兼
    - 澄玄—眞性—導御—圓證—慶圓—照圓—照珍
    - 慈濟
    - 慶運
    - 圓照（戒壇院中興）—凝然—禪爾—本無—俊才—照玄—正爲—照慧—靈波—總融—總深—融存—靈賢—志玉
  - 禪惠
  - 源俊
  - 叡尊（西大寺中興）
    - 賴玄
    - 總持
    - 榮眞
    - 忍性
    - 信空—宣瑜—靜然—賢善—澄心—信照—元曜—覺眞—清算—覺乘—貞祐—信尊—堯基
    - 幸尊
    - 性瑜
- 覺眞
- 乘心

（了宏）
- 俊芿（泉涌寺中興）—定舜—智鏡—思允—憲靜—覺阿—智元—思淳
- （守一）—淨業—淨因—忍空

○天台宗學系統略第一

（道邃）—最澄—義眞—（イ）
最澄—圓澄
最澄—德圓
最澄—光定
最澄—圓仁（山門系統）
最澄—慈蘊
最澄—慈寛
最澄—守尊
最澄—廣智
最澄—延秀
最澄—道證
最澄—仁忠
最澄—無行
最澄—德善

圓仁—惠亮—理仙—良源
圓仁—安然—大慧
圓仁—長意—喜慶—慶圓
圓仁—相應—遍豪—慶命
圓仁—遍照
圓仁—安慧—增全—尊惠
增全—仁觀
圓仁—玄照

良源—覺運（檀那流）
良源—源信（慧心流）
良源—安海
良源—增賀
良源—明救
良源—實因
良源—長豪—潤慶—良祐—寛勝—範源—俊範

覺運—栢舜—永清
覺運—遍救—清朝—隆範—澄豪（慧光房流）
覺運—長圓—慶範—覺耀
覺運—長竿—廣竿—實陽
覺運—賴壽
覺運—源心
覺運—實哲

澄豪—智海（毘沙門堂流）—明禪—公豪
明禪—顯瑜—經海—專尋—惠顗—實譽
澄豪—永辨—圓輔—公性—尊惠—惠尋—惠顗—傳信
圓輔—辨長—禪雲—定仙—經祐—承教
澄豪—辨覺—證眞
澄豪—長耀（竹林房流）—靜嚴—聖融（猪熊流）
靜嚴—聖覺—聖憲—憲實
靜嚴—信覺—信承—禪仙—仙耀—光憲—眞聖
禪仙—康承—顯幸
靜嚴—禪覺—顯覺—俊覺
長耀—顯眞—仁快—雲快—憲雲—雲雅

源信—良暹
源信—覺超—定哲—惟命
覺超—勝範—長豪—良順—須耀—永心—覺什—朝明
長豪—圓禪—嚴算—珍仁—隆慧—證眞（寶地房流）
長豪—忠尋—皇覺（椙生流）—範源—俊範—靜明（行泉房流）
皇覺—眞俊—俊彷
源信—嚴久
源信—明豪—圓豪—賢豪—信朝—顯意
源信—寂心—寂照
源信—寬印—圓深—源然—辨覺—明雲—顯眞—仁快—雲快

證眞—永尊—雲雅
永尊—兼海
證眞—隆眞—隆澄
證眞—宗源—宗澄
證眞—嚴俊—宗嚴
證眞—圓舜

靜明—成運—榮運
靜明—心賀（土御門門跡流）—心聰
靜明—政海—一海

心聰—心榮—心源—慶存—賢慶—心能—心海—豪盛—天海

○天台宗學系統略第二

（イ）─圓珍（寺門系統）

- 良勇
  - 延昌
    - 覺慶
    - 蓮坊
  - 信賢─光勝
  - 平忍
    - 明達
    - 恒昭
- 猷憲
- 康濟
- 尊意
  - 餘慶
    - 勸修─行圓
    - 勝算
      - 濟祇
      - 濟覺
      - 慶暹─慶耀
    - 穆算
      - 禪仁
      - 澄禪
    - 慶祚
      - 賴高─公伊
      - 心譽─隆明
      - 增譽─增有
    - 辨圓
  - 勢祐
  - 房算
- 玄鑒
- 京意
- 悟忍
- 空惠
- 行譽
- 增命─運昭
  - 嚴圓─覺猷
    - 延猷─行智─慶範─猷尊
    - 覺鑁
  - 千觀─智圓
    - 證義（龍淵房流）─信增─常久─定兼─有禪─幸尊─靜泉─尊衍─衍舜─重泉─圓尊─尊漢─尊通─尊契─靜覺─亮憲─舜雄
      - 憲舜
      - 實雄
    - 範守（智寂房流）─良明─良慶─珍玄
  - 源心
- 增欽─明仙

○天台圓頓戒系統略

- (道邃)
  - 最澄
    - 圓澄
    - 光定
      - 增命
      - 長意
        - 鎭朝
        - 延昌
          - 慶圓
          - 尋禪—源信
            - 寬慶—行玄—覺快
            - 禪仁—良忍
              - 藥忍
                - 禪寂—禪威
                - 湛斅—賢忍—信尊
              - 相眞
              - 猷圓—惠尋
              - 睿空
                - 源空—信空
                - 證空
          - 明救
        - 喜慶
    - 德圓
    - 圓仁
      - 安然
      - 遍照
      - 安惠
        - 尊意—良源—慶命
        - 猷憲—長意—良勇—尊意—延昌—良源—覺慶—院源—敎圓—明快—最嚴—覺大—觀性—寬宴
    - 延秀
    - 無行
  - 義眞
    - 德圓
    - 圓珍
      - 尊意
      - 良勇
      - 玄鑒
      - 陽生
      - 遲賀
        - 敎圓
          - 增譽
          - 賢暹
          - 慶朝
        - 明快
          - 仁覺
          - 仁源
          - 仁豪
      - 餘慶
      - 良源
        - 院源
        - 慶命
          - 覺圓
          - 覺尋—忠尋—[illegible]
          - 良眞
        - 覺超—懷空—觀勢—良忍—延快—叡空
          - 信圓—惠尋
          - 惠淵
      - 覺慶
        - 勝範
        - 懷空

○台密系統畧第二

(イ)―皇慶（谷流）
- 長宴―陽宴
- 安慶―經暹―陽宴―相實（法曼流）
  - 相實―政春―覺審
  - 政春―圓長
  - 政春―玄隆
  - 相實―靜然―仙雲―仙尊
  - 仙雲―覺審
  - 仙雲―明禪
  - 仙雲―成源
- 安慶―範胤
- 明快（梨本流）
  - 明快―良祐（三昧流）―行玄―覺快
  - 良祐―忠尋―惠淵―成圓
  - 明快―範胤―最嚴
    - 最嚴―仁昭
    - 最嚴―全玄―慈鎮―慈賢
    - 慈鎮―道譽
    - 最嚴―覺快
- 賴昭
  - 賴昭―行嚴（佛頂流）―聖昭
  - 賴昭―覺範―院昭
  - 賴昭―禪仁―院昭
- 覺尋
- 院尊
  - 院尊―延範―院昭
  - 院尊―乘覺
- 院昭―豪覺―聖昭（穴太流）
- 院昭―豪源
- 聖昭―契中―忠快（小川流）―承澄
  - 承澄―澄豪（西山流）
  - 承澄―源惠
  - 承澄―忠源
  - 承澄―良含
  - 承澄―尊澄
  - 承澄―澄春
  - 豪鎮―豪顯
  - 豪鎮―敎雲―豪祝―豪宣―豪仁
  - 豪鎮―嚴豪―豪喜―豪宗―豪惠―豪憲
  - 行遍
  - 澄淳
  - 慧鎮
  - 光宗
  - 永慶―圓俊
  - 澄堯―祐成
  - 安忠―忠乘―義慶
- 聖昭―意嚴
- 聖昭―覺審
- 聖昭―覺蓮
- 聖昭―觀性
- 聖昭―其好―榮西（葉上流）
  - 榮西―榮朝―榮宋―琛海
  - 榮西―琳（岡流）―圓琳―聖禪―慈胤
  - 榮西―忠濟
- 契中―眞性
- 契中―聖胤―眞昭
- 契中―賴尋―安快―安忠―忠乘
- 契中―良信
  - 良信―春仁―阜鑒―玄契―義慶
  - 良信―良曉
- 契中―仁全
  - 仁全―房全―澄豪
  - 房全―尊猷
  - 仁全―寂守―道玄―慈道―祐助
- 勝範
  - 勝範―定慶―季仁―政春
  - 勝範―延快

日本佛教各宗系統圖

○東密系統畧第一

（惠果）—空海—

眞雅—眞然—源仁—

小野流 聖寶—

觀賢—淳祐—元杲—仁海—成尊—義範（醍醐流）—勝覺—定海（三寶院流）—一海（無量壽院流、松橋流）—雅海—全賢—淨眞—眞敒—俊學—公紹—俊賀

延惟—遍基

觀宿—一定

延性—平遍

濟高—寬救

峯禪—遍勝

印紹—明命

定助—法藏—仁賀—眞興（小島流（壺坂流））

寬惠

合良

眞賴

長斅

平耀

明觀

平救

成典

覺源

定賢

勝覺

範俊（小野流）—（イ）

明算（中院流）—（ロ）

林覺

快俊

宗尊

經尊

賢覺（理性院流）

聖賢（金剛王院流）

元海

覺鏡

信惠—嚴貞

潤照

證立

容尊（西大寺流）

俊豪—俊盛—俊憲

弘意—顯祐—俊增—俊慶—澄忠—俊聰—堯雅

堯圓—甚信—右雅—有圓—元雅—俊賢—光心

廣澤流 益信—

（第三圖を見よ）

實慧—宗叡

眞濟

道雄

圓明

眞如—恒寂

杲隣

智泉

堅慧

道昌

泰範

忠延

眞紹

源運—

家海（東南院方）—賢海—實賢—

雅西

杲西（安祥寺方）

勝尊（慈智方）—覺濟—

實智

道瑜（三輪流）

嚴胤（岩藏流）

覺濟（山本流）

宗淸（定仁方）

如實（加茂流）

實尊（實寺方）

覺濟—

實敒

眞嗣—親海—全海—親運

宣覺

嚴家

宗命（宗命方）—宗嚴—

行嚴—

觀俊—宗遍—仙覺—信耀—仲我—宗助—宗觀—宗濟—宗典

定兼

賴助

宗永—嚴助—亮助—勸助—禪恕—勸典

堯觀—宣雅—道雅—果觀—演隆—演護

定範

藏有

寶心（寶心方）—乘印—勝因—寬覺

賢信（賢心方）

成基—成淳—全融—隆海—空濟

隆全—全淳—陽春—堯運—宗秀

堯助—亮雄—堯辨—秀快—亮忠

覺源—元雅—亮運—果觀

實運—

勝賢—成賢—

親快（地藏院流）—實勝—聖雲—聖尊

親玄—房玄—親惠—弘顯—弘濟—弘鍐—弘喜—弘典—弘宣—俊雄—亮惠—亮淳—亮濟—恭畏—堯辰—融雄

道教（報恩院流）

憲深（幸心流）—實深—

覺雅（中性院流）—憲淳—隆舜—經深—隆源—隆覚—隆濟—賢深—澄惠—元雅—深應—雅嚴—源朝

賴瑜—賴淳—增辜—聖憲

寬濟—高賢—房演—賢繼—實雅—元雅—信隆—昭範

果觀—高實—定演—演護—龍曉

運敒

信海

亮兼—定祿—賢繼—演春—信隆—照範—杲觀—定隆—實隆

深賢（土流）

光寶

賴賢

道順（西院流）—聖忠—聖尋—聖珍

俊譽—義俊—

定任—賢助—賢俊

定濟—定勝（妙法院流）—

宗快—公性—俊性

通海

宗曉

聖守（眞言院流）

實繼—守覺

成寶

靜遍

道範

良海

義能（義範方）

慈猛（慈猛方）

實融（意教方）

寶部（願行方）—有祥（伊豆方）

○東密系統畧第二

(イ)—範俊(小野流)(?流)
- 嚴覺
- 勝覺
  - 念範
    - 觀祐
    - 興然
    - 尊海
    - 源基
  - 實範(中院流)
    - 重譽
    - 玄光
    - 心覺
  - 寛信(勸修寺流)
    - 仁濟(仁濟方)—玄證
      - 房海
      - 行守
    - 念範(念範方)
    - 行海(行海方)
      - 隆榮
      - 雅寶
        - 實繼
        - 成寶
          - 元實
          - 聖基
- 良雅
  - 宗意(安祥寺流)
    - 宥範(善通寺流)
    - 實嚴—賴眞—成嚴
      - 良瑜
        - 兼慧
        - 賴助
      - 寛海—兼慧—寛伊—成慧—光譽
        - 良伊
        - 隆雅—宥快
          - 興嚴
          - 成雄
    - 實證
    - 靜實
    - 光意—性印—快音—忠實—盛秀—尊慶—盛典—祐寶
    - 良雄—仟遍—快旻—朝意—道意—宥盛—良意—朝遍—淨嚴—祐寶
  - 增俊(隨心院流)
    - 顯嚴
    - 親嚴(親嚴方)
  - 良勝(良勝方)
  - 定海
  - 明寂
    - 覺心
    - 覺鑁
    - 覺雅
    - 定憲
    - 眞空
- 覺法
- 靜譽
  - 眞譽
  - 重譽
  - 增忍
  - 覺暹

- 良弘
  - 良智
  - 貞慶
- 行心
- 實任
  - 能覺
  - 興然
    - 高辨
      - 慧日
      - 喜海
    - 榮然
      - 道寶
        - 勝信—信忠
          - 教寛—寛胤
            - 尊信
              - 實信
              - 興信
              - 繼助
              - 公海
            - 俊然
          - 時寶
        - 道淳
      - 聖基
      - 榮尊
        - 建治上皇
        - 聖濟
          - 榮海
            - 俊然
            - 寛胤
          - 榮紹
            - 元應
    - 雄山
  - 尊實

- 尊興—興胤

(ロ)—明算(中院流)—良禪—兼賢
- 心蓮(南院流)
- 房光—覺善(引接院流)—良住—祐遍(正智嚴流)
- 定賢—明住—道範—賢定—仁然(正智院流)

○東密系統畧第三

廣澤流
益信—寛平法皇—寛空—寛朝—濟信—性信—寛助（イ）

寛空—寛朝・寛忠・定照・定靜・盛算

寛朝—濟信・深覺・雅慶・雅守・賴算・覺緣

深覺—深觀—永觀・修仁・信覺・朝源・覺源

修仁—齊朝・相實・嚴覺

濟信—性信・念緣・賢尋・永照・延尋・濟延

性信—寛助（イ）・快禪・寛意・賴觀・經範・行明・覺意・禪譽・濟暹

快禪—寛意—兼意・隆信・覺行

兼意—心覺（往生院流）—禪信・元性

隆信—隆勝—隆惠

濟暹—靜寛・定意

靜寛—寛瑜・堯眞・實宴

（イ）—寛助—信證（西院流）・聖惠（華藏院流）・永嚴（保壽院流）・寛遍（忍辱山流）・覺鑁（傳法院流）・覺法（仁和御流）（第四圖を見よ）・眞譽（持明院流）・範覺・覺任（覺任方）・仁嚴・眞助

信證—任覺・仁豪（仁豪方）・覺證（覺證方）・彬助（彬助方）

任覺—最寛—宏教—能禪—豪禪—賴我

任覺—印性—印顯

永嚴—琳助—實叡—高辨・行慈

永嚴—覺印—心覺—顯覺—宏教

覺印—能意—眞惠

寛遍—定遍（定遍方）・定豪（定豪方）・信遍（信遍方）・寛敏・寛季・兼豪

定遍—能遍・眞遍・宗遍

眞遍—圓遍・實遍・顯遍

實遍—玄瑜・宗瑜・良詮

兼豪—定豪—定證・隆豪

範覺—禎喜—延果—長毫

範覺—俊證—俊徧

聖惠—寛曉—宗覺—濟深—覺什—道勝・眞海・良祐

寛曉—隆曉—貞曉

道勝—道耀—道意—賴意・勝惠

覺鑁—兼海（兼海方）・證印（證印方）

兼海—隆海—覺尋・成覺

成覺—行住

覺尋—尋海・經尋・定尋

尋海—覺禪・房海

覺禪—經瑜—禪助・賴瑜

眞助—有眞・有幸・智源・覺耀

有眞—行延—快華

有眞—信賢—禪覺

有幸—祐尊

○東密系統畧第四

覺法—兼助
覺法—仁證
覺法—覺耀
覺法—覺教方 覺敎

兼助—覺成
兼助—覺性
兼助—慧任—正阿

覺成—尊修—勝心—興實—晴觀—賴鎮—智圓—雲海—定寶—榮眞
覺成—賢隆(慈尊院流)—最盛—源俊—知見—猷範—宗圓
覺成—隆遍

覺性—守覺
覺性—成德寺方 實任—隆範—全惠

守覺—道法
守覺—安井方 道尊—道瑜

道法—道助—道深—法助—性仁
法助—禪助—法守—永助—禪信—靜覺
法守—尊朝—寬守
尊朝—道朝
道法—道勝
道法—行遍—實容

尊海—覺道—任助—晋海—覺深—信遍—性承—孝源—寬隆

(元照)—常曉(大元帥法)—寵壽—賢石—舒隆—譽好
寵壽—命藤—元忠
寵壽—元如—泰舜
舒隆—泰幽
舒隆—圓照
舒隆—行觀

譽好—賀仲—元杲—仁海—成尊—義範—勝覺—賢覺
譽好—信源—進恩
信源—源慶—淨秀—定快—賢覺
信源—學源—定賢—勝覺—賢覺
信源—仁海—成尊—義範—勝覺
成尊—範俊—良雅—定海—元海—實運—勝覺—成興—光寶
成興—行嚴
定海—覺鏡
範俊—宗意

勝覺—琳覺—寶心—嚴有—藏秀
勝覺—賢覺—宗命—宗嚴—行嚴—觀俊
勝覺—宗遍—仙覺—信耀—仲我—賢獵
勝覺—宗助

實嚴—賴眞—成嚴—長海—親寬—寬智
成嚴—良瑜
成嚴—寬海—乘惠—寬伊—成惠—光譽—良伊—隆雄—弘雅
隆雄—良嚴

○淨土教系統畧第二

- 源空
  - 辨長 ─ 良忠
    - 白旗流 寂惠
      - 定慧
        - 智演
        - 了専 ─ 良吽 ─ 慶順 ─ 祐崇 ─ 智聰
          - 禪芳 ─ 範譽 ─ 幡隨
            - 還愚 ─ 貴屋
            - 幡涯 ─ 隨嚴 ─ 了聞 ─ 無涯
              - 詮雄 ─ 詮察
              - 祖山 ─ 岸了
              - 喩超
            - 位產 ─ 萬無 ─ 忍徵
            - 還無 ─ 珂天
          - 貞安 ─ 牛秀
      - 蓮勝 ─ 了實 ─ 聖冏
        - 了知
        - 聖聰
          - 良肇
          - 存冏
          - 慶竺
          - 了曉
            - 勢譽
            - 周譽
            - 酉冏 ─ 宗悅 ─ 祖洞 ─ 宗而
              - 貞把
                - 存把
                  - 潮流 ─ 尊空
                - 雲潮 ─ 雲巖 ─ 珂山 ─ 珂碩 ─ 珂憶
              - 尊照 ─ 良純法親王
          - 酉仰 ─ 聖觀 ─ 光冏 ─ 了聞 ─ 智雲 ─ 周仰 ─ 天啓 ─ 存貞
            - 圓也
            - 慈昌
            - 清嚴
              - 不殘 ─ 源底 ─ 恢龍 ─ 雲臥 ─ 順眞
              - 傳察
                - 雪念
                - 呑龍
                - 孤峯 ─ 是閑 ─ 實道 ─ 利天 ─ 眞海 ─ 聖道
                - 聞諦 ─ 智童 ─ 知鑑 ─ 春岳
                  - 廓瑩
                  - 寂仙
                - 信譽 ─ 龍山
                - 廓山 ─ 臺山
                  - 靈玄
                  - 鸞宿
                    - 靈應
                    - 鸞山
                - 了的 ─ 相閑 ─ 圓理 ─ 尊統
                - 了學 ─ 了也
                  - 了善 ─ 悅善 ─ 悅道 ─ 了道
                  - 了風
                - 知哲 ─ 嚴宿
                - 隨波
                  - 檀通 ─ 祐天 ─ 祐海
                  - 路白
                    - 白玄
                    - 酉尊
    - 名越流 尊觀 ─ (イ)
    - 藤田流 性眞 ─ 良心 ─ 持名 ─ 唱名
    - 小幡流 慈心
    - 三條流 道光
    - 一條流 然空 ─ 證賢 ─ 玄心 ─ 證法 ─ 敬法
      - 定玄 ─ 等熙
      - 良如 ─ 隆堯 ─ 隆阿
    - 如一 ─ 舜昌
    - 在阿
    - 空圓

- (イ) ─ 尊觀
  - 慈觀
  - 明心 ─ 妙觀
    - 十聲
    - 聖觀 ─ 良榮
      - 良德 ─ 良憲
      - 良堯
      - 良頓 ─ 良鑑 ─ 良察 ─ 良處
        - 良大 ─ 良潛
          - 良鄉 ─ 良定 ─ 東暉
            - 義山 ─ 梁道 ─ 定月
              - 洪慧
            - 聞證
            - 圓智
          - 良拾
  - 慧觀

○眞宗系統畧

- 親鸞
  - 眞佛
    - 顯智（專修寺派）—專空—定專—空佛—順證—定順—定顯—眞慧
    - 源海—了海—誓海—明光—了源（佛光寺派）—了明—源鸞—唯了—性曇—性善—光教
      - 經豪（興正寺派）
      - 經譽
    - 專海—圓善—如導—道性—如覺（專照寺派・證誠寺派・誠照寺派）
  - 性信（錦織寺派）—善性—顯明—愚咄—慈空—慈觀
  - 如信—宗昭（覺如）
    - 善入（毫攝寺派）—善智
    - 從覺—俊玄（善如）—時藝（綽如）—玄康（巧如）—圓兼（存如）—兼壽（蓮如）—光兼（實如）—光教（證如）—光佐（顯如）
      - 光壽（教如）　大谷派
      - 光昭（准如）　本願寺派
    - 存覺

○日蓮宗系統略

- 日蓮
  - 日昭
  - 日朗（本門宗（興門派））
    - 日像—妙實—朗源
      - 日霽—月明—日具—日芳
        - 日隆（本門法華宗（八品派））
        - 日眞（本妙法華宗（本隆寺派））
      - 日實—日成—日遵—日延—日善—日意—日寮—日住—日亨—日護—日賞—日兆
    - 日輪
    - 日印（法華宗（本成寺派））—日靜
      - 日傳
      - 日陳
  - 日興
  - 日持
  - 日頂
  - 日向
  - 日進—日善—日臺—日院
  - 日常
  - 日高—日祐
    - 日薩—日祝
      - 日言
      - 日沾—日珖—日重
        - 日乾
        - 日遠
        - 日詮
        - 日諦
    - 日親（顯本法華宗（妙滿寺派））
    - 日什

- 日顯—日鏡—日典—日乾
  - 日奥（不受不施派）
    - 日堯
    - 日講（不受不施講門派）

○禪三宗系統略第一

菩提達磨—慧滿—（入唐）道昭
　　　　—僧璨—道信—弘忍

曹谿慧能—青原行思—石頭希遷—藥山惟儼—雲巖曇晟—洞山良价—（入唐）瓦屋能光
　　　　　　　　　　　　　　—雲居道膺—同安道丕—同安觀志
　　　　　　　　　　　　　　—梁山緣觀—大陽警玄—投子義青—芙容道楷—丹霞子淳—眞歇清了—大休寶珏—足菴知鑑—長翁如淨—（入宋）希玄道元（本宗開祖）
　　—鹿門自覺（第二ヲ見ヨ）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—正覺宏智—自得慧暉—大虛契充—大仙竺□
　　—少林□春
　　—別源圓旨—玉岡如金
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—明極慧祚—東谷妙光—月□圓見
　　—□開契—無外圓方—□□清
　　—□林如春—□□□
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—直翁德擧—（歸化）東明慧日
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—雲外雲岫—（歸化）東陵永璵
　　　　—南嶽懷讓—馬祖道一—百丈懷海—黃蘗希運—臨濟義玄—興化存獎—寶應慧顒—風穴延沼—首山省念—汾陽善昭—石霜楚圓
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—鹽官齊安—（渡來）義空
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（渡來）道助
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—玉姥儵然

楊岐方會—白雲守端—五祖法演—開福道寧—月菴善果—大洪祖證—月林師觀—無門慧開—（入宋）心地覺心（臨第一圖ニヲ見ヨ）
黃龍慧南—晦堂祖心—靈源惟清—長靈守卓

玉泉神秀—嵩山普寂—終南惟政
　　　　　　　　　—（歸化）道璿—行表—（入唐）最澄
無示介諶—心聞曇賁—雪菴從瑾—虛菴懷敞—（入宋）明菴榮西（日本臨濟宗建仁寺派開祖）（臨第一圖イヲ見ヨ）

圜悟克勤—此菴景元—或菴師體—痴鈍智穎—（入宋）莿叟如珏—聖傳無傳
　　　　—大慧宗杲—拙菴德光—北磵居簡—天祐思順（入宋）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—物初大觀—晦機元熙—笑隱大訢—（入元）東傳正祖
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—東陽德輝—（入元）中巖圓月
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—空岩有—原翁信—止巖普成—傑峯世愚
　　　　—虎丘紹隆—應菴曇華—密菴咸傑
　　　　—（入宋）靈隱慧遠—覺阿
　　　　—大日能忍—佛地覺晏

曹元道生—癡絕道冲—頑極行彌—（歸化）山一寧（臨第一圖ハヲ見ヨ）
　　　　　　　　　—月潭智圓—（歸化）東里弘會
　　　　　　　　　—明極楚俊（歸化）
　　　　　—無碍覺通—虛舟普度—（入宋）瓊林
　　　　　　　　　　　　　　—虎巖淨伏—南楚師說—即休契了—（入宋）愚中周及
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—見心來復—（入元）以亨兼
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—得瓊—希融—艸堂得芳—愚溪得哲—不昧奥志—敎外得藏—春谷永蘭—竺堂□瞿
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—惟肯得巖—（入元）大初啓原
松源崇岳—無明慧性—（歸化）蘭溪道隆（臨第二圖ロヲ見ヨ）
　　　　—滅翁文禮—橫川如珙—古林清茂—（歸化）竺仙梵仙—椿庭梅壽
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—大年法延
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）石室善玖
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）月林皎—月菴紹清
　　　　—運菴普巖—虛堂智愚—（入元）巨山志源
　　　　　　　　　　　　　　—（入元）南浦紹明（臨第四圖リヲ見ヨ）
　　　　—掩菴普開—石帆惟衍—（入宋）無象靜照—（歸化）礀子曇—嵩山居中—寶山淨玉
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—□□止因—少林桂萼—大用全用
石溪心月—（歸化）大休正念（臨第一圖ヘヲ見ヨ）—大休善存—大中善益
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—延川文珪
破菴祖先
◎無準師範
石田法薰—愚極智慧—（歸化）清拙正澄（臨第一圖ホヲ見ヨ）

◎無準師範—環溪惟一—（歸化）鏡堂覺圓—無雲義天—月堂圓心
　　　　　　　　　—（入宋）樵谷惟仙—伯師祖稜
　　　　—別山祖智
　　　　—（歸化）子元祖元（臨第一圖トヲ見ヨ）
　　　　—（入宋）兀菴普寧（歸化）—南洲宏海—天外志高—密林志稠
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—岱宗祖岳
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—器之志芳
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—全提志令
　　　　—（入宋）圓爾辯圓（臨第三圖チヲ見ヨ）
　　　　—（入宋）了然法明
　　　　—（入宋）淅祐—悟空敬念—東巖慧安—法位問性—在菴圓有
　　　　—（入宋）性才法心
　　　　—雪巖祖欽—虛谷希陵—（入宋）別傳妙胤—玉崗藏珍
　　　　　　　　　—（入宋）靈山道隱
　　　　　　　　　—鐵牛持定—絕學世誠—古梅無友—（入元）無文元選
　　　　　　　　　—高峯原妙—中峰明本—（入元）古先印元—友峯等益—正中瑞—月舟壽桂—繼天壽戩
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—竺西竹梵
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—東曙等海
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）明叟齊哲—無塵省燈—寶藏普持—虛白惠昌—海舟普慈—寶峰明暄
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）無隱元晦—天奇本瑞—無聞自聰—月心德寶—幻有正傳
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）千巖元長—万峰時蔚—密雲圓悟—費隱通容—（歸化）隱元隆琦（日本黃檗宗開祖）
　　　—雪峯直信—道者超玄
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）大拙祖能—白崖寶生—南英周宗
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）遠溪祖雄
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）關西義南
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）業海本淨
　　　　　　　　　　　　　　　　　　—（入元）復菴宗己—一曇聖瑞

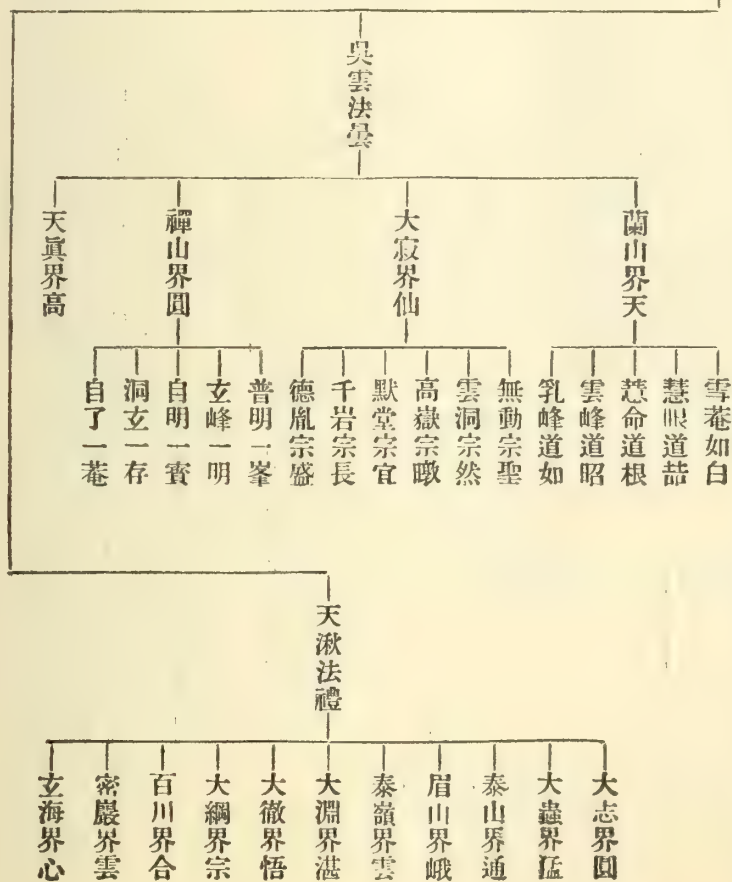
日本佛教各宗系統圖

○禪三宗系統略第二

長翁如淨—鹿門自覺—普照一辨—大明寶—王山體—雪巖滿—萬松行秀—雪庭福裕—少室文泰—還源福遇—淳拙文才—

松庭子嚴—凝然了改—俱空契斌—無方可從—月舟文載—小山宗書—蘊空常忠—無明慧經—慧臺元鏡—覺浪道盛—

濶堂大文—心越興儔—

- 吳雲法曇
  - 蘭山界天
    - 雪菴如白
    - 慧眼道喆
    - 慈命道根
    - 雲峰道昭
    - 乳峰道如
  - 大寂界仙
    - 無動宗聖
    - 雲洞宗然
    - 高嶽宗暾
    - 默堂宗宜
    - 千岩宗長
    - 德胤宗盛
  - 禪山界圓
    - 普明一峯
    - 玄峰一明
    - 自明一寶
    - 洞玄一存
    - 自了一菴
  - 天眞界高
- 天湫法禮
  - 大志界圓
  - 大蟲界猛
  - 泰山界通
  - 眉山界峨
  - 泰嶺界雲
  - 大淵界湛
  - 大徹界悟
  - 大綱界宗
  - 百川界合
  - 密巖界雲
  - 玄海界心

○臨濟宗系統略第一

(イ)明菴榮西（建仁寺派開祖）
- 退耕行勇—大歇了心
- 釋圓榮朝—藏叟朗譽—寂菴上昭—龍山德見
  - 無等以倫—文林以郁
  - 天祥一麟—中建龍惺—正宗龍統—常菴龍崇
    - 江四龍派—瑞岩龍惺
  - 艸堂林芳
- 了然齋明全

(ロ)蘭溪道隆（長寺派開祖）
- 約翁德儉—寂室元光—雲仲禪英
  - 傑岩偉—大章經—松壑貞
  - 和甫忍—桂林德昌
- 月峯了然
- 痴鈍空性
- 不退德溫
- 玉山德旋
- 無弦德韶
- 義翁紹仁
  - 靈叟太古
  - 大涯元圭
  - 太虛元壽
    - 松嶺道秀
    - 彌天永釋
    - 越溪秀格
  - 柏巖可禪—頑石曇生
  - 南嶺子越—履中元禮
  - 大山元矩—仲方中伊—雲莊德慶
  - 月翁□規—月心慶圓—一華心林
  - 秀山元中—大方元恢—寰中元志
- 明窓宗鑑—獨照祖輝
- 林叟德瓊—平心處齊
- 同原道本—了堂素安
  - 大業德基—藍田素瑛—靖叔德林—以心崇傳—最嶽元良
    - 剛宝崇寬—雲叟元云—乾巖元雄
      - 天寧元仙
      - 天柱元眞—濾叟元雍
      - 中岩元紹—章山元甫
      - 蒼溟元方—中谷元梗
    - 竺隱崇五
      - 晦堂元晃
      - 玉隱元札
      - 大休元寥
        - 香山元郁
        - 寬源元允
        - 日碉元澄
      - 大川崇達
  - 大素素一—霞堂資善
  - 大年祥登
  - 伯與德俊
  - 無印素文
  - 大雲素大
- 桃溪德悟—象先文岑
  - 泥牛正參
  - 桂峯文昌
  - 象外禪鑑
    - 東源文易
    - 大拙文巧—東岳文昱—以清嵩一
- 無及德詮
- 千峯本立
- 東陣僧海
- 桑田道海—靈巖道昭
  - 鈍夫全快—秀涯全俊
  - 足菴祖麟
- 無隱圓範
  - 雲山智越
  - 栞山賢仙—大圓智碩
  - 定巖圓一
- 葦航道然
  - 實翁聰秀—範堂圓模
  - 喝巖聰一—象先乾有
- 宏辨若訥
- 石菴旨明
- 宥山聞悟—香林識桂—柏巖繼趙

(ハ)一山一寧
- 雪村友梅—太清宗渭
  - 叔英宗播—大元眞倪
    - 叔之宗箴
    - 大圭宗价
  - 大白眞玄
  - 大有有諸
- 仲和良睦
  - 雪溪支山
  - 靈岳宗古
  - 蘭洲良芳—明叟齊洞
  - 魯山良周—延用宗器
  - 無格良標
- 聞溪良聰
- 無着良緣—相山良永
- 無惑良欽—宗傳良教
- 無相良眞—道林良涖
- 東林友丘—大本良中
- 石梁仁恭—竺芳祖裔

(ニ)心地覺心
- 孤峯覺明—拔隊得勝—峻翁令山
  - 古劍智訥
  - 慈雲妙意
  - 聖徒明麟
- 無住思賢
- 孤山至遠
- 東海竺源—在菴普在
  - 中立一鷄
  - 無傳普傳
- 高山慈照
  - 約菴德久
  - 大歇勇健
- 恭翁運良
- 絶巖運奇
- 嫩桂正榮—信中自敬—懶雲正融

(ホ)清拙正澄
- 大材堅梁
- 獨芳清曇
- 獨峯正巍
- 天境靈致
- 古鏡明千
- 溫中清愉
- 義空性忠
- 大翁清淳—伯元清禪—天與清啓
- 永鉷

(ヘ)大休正念
- 大川道通
  - 岳雲祖松
  - 大雲□蔭
  - 德翁靈麟
- 東方道川
- 鐵菴道生
  - 禮智
  - 無涯仁浩—惟忠通恕
  - 石麟仁球
- 秋礀道泉—之菴道貫—傑翁是英
- 嶮崖巧安
  - 天然興雲
  - 容山可允—大圓與伊
- 總覺
- 愚仁尼

日本佛敎各宗系統圖

○臨濟宗系統略第二

(ト)子元祖元（圓覺寺派開祖）

雲尾慧輪—天澤宏潤
太古世源—皦山光一
規菴祖圓—蒙山智明
一翁院豪—夢嵩良眞
白雲慧崇
見山崇喜
維峯奇英
無外如大
高峯顯日
大用慧堪

繼翁宏巨

大同妙喆
夢窓疎石（天龍寺派開祖・相國寺派開祖）
周交妙松
元翁本元
天菴妙受
特峯妙奇
可翁妙悅
默翁祖淵—承先道欽
太平妙準
秀巖玄挺
無際彌浩
天岸慧廣—虎溪元義
此山妙在—明溪光聞
樞翁妙環
眞空妙應
南峯妙讓
空室（少）空—少室慶芳
無礙妙謙

大喜法忻
中山法穎
無二法一
芳庭法菊

中圓法方
偉仙方裔
日峯法朝

雷峯妙霖
大岳妙積
大綱皈整
續芳以蓀

九峯以成
雪嶺永瑾
暉果
廷秀光賢
春澤永恩

天鑑存圓
東海總暉
久菴僧可

無極志玄—空谷明應
先覺宗恬
月山周樞
滴菴法順
春屋妙葩
碧潭周皎
平山善均
方外宏遠
鐵舟德濟
靈巖妙英
中巖牛本
絕海中津
元章周郁
通交宏感
青山慈永
德交周佐

朴中梵淳
慶仲周賀
嚴中周噩—月翁周鏡
圓鑑梵相
汝霖良佐
玉畹梵芳

西胤俊承
鄂隱慧奯
德祥正麟
叔方周仲
元璞慧珙
柏庭清祖
華山周潘

海門承朝
無外承廣
東岳澄昕
曇仲道芳—横川景三—彥龍周興

心田清播—子才清鄴—字峯梵伊
斯立幢
瑞雲中嘉
正玖書記

勝菴伯奇
絕照智光
大法大闡—周穆藏主
不遷法序—古幢周勝
瀧湫周澤—在中中淹
閑交中守—無傳正燈
觀中中諦—聖中周光
善堂周信—大椿周亨
心初祖肇—無昌謹
大亨妙亨—大基中建
古菴普紹—菊隱中亮
曇芳周應—一元啓諸
古劍妙快—如心仲恕
默翁妙誡—大岳周崇—竺雲等蓮—心翁周安—策彥周良
默菴周諭—大觀梵奕
香山仁與—悅堂妙可
無求周中—瑞溪周鳳—景市壽陵
俊茂中快
古天周誓
清溪通徹
月庭周朗
拈木紹榮
玉泉吉皓
晦谷祖曇
月舟周勳
靈光周敵

天英周賢
蔵春中曇
潤甫周玉
竺遠中曇
抱節中孫
竺華梵夢

大進彌忠
鑑公周察
古溪靈文
東山妙演
妙珠
泉
奇峰志雄
壁山法珏
義虎
廣濟志徹

○臨濟宗系統略第三

(チ)圓爾辯圓(東福寺派開祖)
- 東山湛照—虎關師錬
  - 性海靈見—明江聖悟
  - 霞峯心淳
  - 龍泉令淬
    - 愚溪智至—邵外令英—月建令諸
    - 在先希讓—春嶽喜—大通爲
  - 虎溪勝淡
  - 檜溪心涼—月泉祥洵—德中光倚
  - 南江宴洪—雪岡方林
  - 日田利涉—謙巖原冲
  - 無比單況
  - 回塘中淵
  - 斷崖義類
  - 濟翁
  - 淸叟仁
- 神子榮尊
- 耕叟仙原
  - 無才智翁
  - 夏雲智悅
  - 愚直智侃—起山師振—曇儀
  - 松嶺智義
- 月船琛海
  - 南道智薰
  - 鈍翁了愚
- 東州至道
- 天柱宗昊—一峯通玄
- 藏山順空
  - 字堂慶卍
  - 大道一以
    - 大全一雅
    - 金山明昶—心月宗悅
    - 嵩岳明中
    - 吉山明兆
  - 固山一鞏
    - 鏡谷利聞
    - 無塵至淸
- 無住一圓
- 直翁智侃
  - 東傳正祖
  - 深山正虎
- 南山士雲
  - 乾峯士曇
    - 靈岳法穆—別峯大珠
    - 嶽翁長甫
    - 韶陽長遠
    - 寰中長齡
    - 瑞峯長麟
    - 淨山長聳
  - 卍菴士顏
  - 友山士偲
  - 鑑翁士昭
  - 西源景師
  - 日峯士東
  - 正堂士顯
    - 南宗士綱
    - 朴菴士敦
  - 桂堂士聞
  - 東傳士啓—大廣巨幢
  - 無際士永
- 潛溪處謙
  - 龍谷廣雲—哲巖祖璿—華岳建胄
  - 夢巖祖應—少室通量—存耕祖默
- 白雲慧曉
  - 谷翁道空
  - 洒叟至休—華峯僧一—東漸健易
- 癡兀大慧—嶺翁寂雲—大海寂弘—大愚性智
- 無關普門(南禪寺派開祖)
  - 道山玄晟—平田慈均—一源會統
  - 玉山玄提—剛中玄柔
  - 釣叟玄江
    - 大朴玄素
    - 天琢玄珠
  - 竺　翁
  - 明　投
- 山叟慧雲
  - 靈鋒慧劍—九峯韶奏
  - 瑞巖曇現
- 雙峯宗源
  - 定山祖禪
  - 古源邵元
  - 天祥源慶
  - 南叟源康
  - 大方源用—景南英文
- 奇山圓然—雲章一慶
- 鐵牛圓心—義堂知信
- 無爲昭元
  - 無德至孝—大中禮省—愚極禮才
  - 大陽義冲
    - 瑞巖義麟
    - 振巖芝玉
  - 鐵牛景印
  - 無涯禪海
- 無外爾然
  - 一峯明一—太山一元
  - 可菴圓慧—直心是一
- 玉溪慧瑃—無夢一淸
- 湛慧
- 妙法尼

○臨濟宗系統略第四

(9)南浦紹明

先照瑞初—以安智奈—東漸宗震—嶠山景旛—愚堂東寔—至道無難—道鏡慧端

牧翁祖牛—盤珪永琢—節外祖貞—靈源周俊—梁巖智禮—石翠義貫

南景宗嶽—雲甫令祥—一絲文守

越水禪珊—仁谷會忠—大器祖章—物外禪起

絕崖宗卓—明室宗喆—石門本琛

物外可什—南菴啓瑞

峰翁祖一—的翁宗胃

玉林宗璨

大虫宗岑—月菴宗光—大陰宗蔭—鐵舟彥椎—日菴一東—堂彥瑞

大林宗甫—梅谷宗香

大有理有—笑堂常訢

全道彥勳

茂源松柏—松堂宗植

三峯紹宮—宗紹傳的

章一祖昶

心傳正鐵

即菴宗心—大興心王

滅宗宗興

宗峯妙超—白翁宗雲—金剛日山

授翁宗弼

關山慧玄（妙心寺派祖）

雲山宗峨—春夫宗宿—溫中宗純—明室宗許—三江紹益—東陽英朝

無因宗因—日峯宗舜—雲谷玄祥

華藏義曇—謙翁宗爲

香鄰德—

義天玄詔—雪江宗深—景川宗隆

桃隱玄朔—悟溪宗頓

特芳禪傑

海岸了義

虎溪道壬

徹翁義亨（大德寺派第一代）

大象宗嘉—岐岳妙周—春作宗興—岐菴宗揚—蘭菴宗戒

宗佐—大模宗範—一休宗純—東宗漢—天球宗球

言外宗忠—祥傳宗授—茂林宗繁—久尼—泰叟宗愈

華叟宗曇—宗秀—惟宗叔—陽峰宗韶

卓然山仁禎—宗潭—春浦宗熙—實傳宗眞

卓外宗立—養叟宗頤

藏海性珍

秀崖宗胤

通翁鏡圓—宗湛菴主

月堂宗規—無我省吾—嶽雲宗丘—無芳宗應

大川宗任

可翁宗然—挑源宗悟

古嶽宗亘—大林宗套—笑嶺宗訢—春屋宗園—萬江宗程

傳菴宗器　江隱宗顯

一凍紹滴—澤菴宗彭

清菴宗胃—大歇宗用

天啓宗歎—雲似宗慶

徹岫宗九—春林宗俶—雪舟等揚

督宗紹董

東溪宗牧—悅溪宗悉—休翁宗萬

一岫紹麟　小溪紹怤

龍江宗翔—千林宗桂—南岑宗菊—萬仞宗松—錬叔宗鐵

東海宗朝—以天宗淸—松裔宗佺—明叟宗普—希叟宗罕

大宰宗碩—梅隱宗香

渭川周瀏—荊巖玄理—日巖玄理—梅燈祖桃

一宅宗渴—極圓玄理—蘊山玄瑳—唯傳玄智—漸東玄遂—功林玄樹—觀堂玄諦—台山祖脈—月江宗鈍—物先海旭

笑峯宗訢—頂山宗鎭—北源祖阮—天宗祖擇—周道玄需—周峯周甫—虎瞳忍昌—北禪梵秀—東溪智門—月船禪慧

天蔭德樹—溪翁道勳

大雅耑匡—功甫玄勳

亨仲崇泉—濟宗崇透

希宗楚見—南宗崇瑞

天關宗鶚—玉淵玄顆

朴菴宗堯—高峰宗源

儀仲宗演

明叔慶浚—文益瑞堅

天宝禪鑑

立叔瑞建

希菴玄密—鹿苑宗譽—南英祖椿—菴原貞

三芝等惟—軒宗頤—山堂宗鎭—大龍全

玉淵祖大—淨眼祖透—翠義鐸—江西祖珉

丹嶺禪住—大堂性恩—竺印禪郁

林岳宗佐—芳澤祖恩—嶺南崇六

卍元師蠻

定洲宗陶—大仙龍樣—默水龍器

景堂玄訥—南英宗茂

春江紹蓓—果叟祖旿

柏庭宗松—月湖宗冲

興宗宗松—春宗韓

桃雲宗源—秀林玄俊—安叔紹泰—蜩蜿玄秀

革玄郁—廣山玄廈—頑山瑞盧—娩伽瑞如

琳山慧湫—的翁元瑜—滄洲元嶽—大宰元朝

玉潤元寔

仁濟宗恕—桂峯玄昌—

仁甫珠善—鴻宗哲

眩巖宗殊

叔榮宗茂—忠嶽瑞恕—梁南禪

奇雲祖巖

閩山永屹—北禪禪秀—桐峯智抱—白雲禪璁

太龍禪諭—霖翁禪霈—祥鳳瑞—境宗不蠢

卓州胡仙

玉浦宗珉—南溟紹化—說三宗璨

文叔玄郁—梅室智植—天心智覺—湛堂祥澂—物外紹播

雪嶺秀—奎紹琢

景範興勗—孤嶂宗俊—末宗瑞曷—嶺嶽宗拙—即入存理

劍峯宗智—水白樵

獨秀乾才—仁岫宗壽—快川紹喜—南化玄興

西川宗洵—春湖宗范—雲外玄曉—西川自鱗—海蒸門

大林宗成—登道自助

天縱宗受—大宗玄弘—岐秀元伯—虎哉宗乙—龍門自哉—仁英是完

江南殊榮—大虫宗岑

珍山秀寶—希光秀先

雪岑紹玄—泰嶽玄韓—林叔玄慧—千山玄松

江嶽士讓—古溪紹珉

天淳宗崇

竺印祖門—無着道忠

登林宗棟—東庵宗暾

大休宗休—月航玄津

九菴宗盧—龜年禪愉—南指宗謬

天釋紹彌—太原崇孚—東谷宗杲—大輝祥暹—說心宗宜—龍潭元恕

景筠玄洪—鐵山宗鈍—大宰祖丘—心嚴玄精

瑩峰道哲—節嚴道圓—賢嚴禪悅—柏林禪諗—讓天全良

月溪宗古—層峰禪味—獻堂文遂—廉方道林—晦巖道廓

大端宗育—大順祖順—單嶺祖傳—透鮮素承—日隱慧鶴

遂翁元盧

東嶺圓慈—關道靈樞—顧鑑古范

○臨濟宗系統略第五

- 賢巖悅—古月禪材
  - 月船禪慧
    - 誠拙周樗—淸蔭
      - 淡海—晦巖道廓—踏谷道晦
      - 巨海宗航
      - 東海昌晙—樵隱
    - 仙崖義梵
  - 蘭山正隆

- 白隱慧鶴
  - 東嶺圓慈—大觀文珠—大鑑—仙籟悟靈
  - 遂翁元盧—春叢紹珠—耕隱智訓—懶翁文常
  - 大休慧昉
    - 大雲—龍雲
    - 一山—象可
  - 天猊—性堂慧果—妙峯玄寶
  - 提洲—海門禪格
  - 良哉
  - 葦津
  - 靈源慧桃
  - 峨山慈棹
    - 隱山惟琰
      - 太元孜元
        - 大拙承演—獨園承珠
          - 東嶽承峻
          - 石蓮□全
          - 紫山宗溫
        - 儀山善來
          - 洪川宗溫—洪嶽宗演
            - 輟翁宗活
            - 大休宗悅
          - 越溪守謙
            - 鐵牛祖印
            - 虎關宗補—湘山惠澄
            - 眞淨宗詮
            - 禾山禪機
            - 拙叟義格
          - 滴水宜牧
            - 龍淵元碩—臺嶺周臺
            - 峨山昌禎—獨山玄義
          - 廣洲宗澤—要宗令提
      - 棠林宗壽—雪潭紹璞
        - 泰龍文彙—大義祖勤
          - 洞宗令聰
          - 昭隱會聰
    - 卓洲胡僊
      - 石應宗珉
        - 閭田祖苗—敬冲文幢
        - 翰英祖宜
      - 海州楚棟—臨應禪機
      - 海山宗格
        - 匡道慧潭—九峯定虔—天應惠倫
        - 南隱全愚
      - 蘇山玄喬
        - 羅山元磨—無學文奕
        - 鰲巓道契—實叢定眞—蘆山惠行
        - 伽山全楞—芳宗般
      - 月珊古鏡—航孜—白翁牀雪
      - 春應禪悅—遂巖—寬州玄政
        - 獻禪玄達—默雷宗淵—壽仙時保
        - 大徹道林
      - 妙喜宗績—迦陵瑞迦—潭海玄昌
        - 壽洪道三—霧海古亮
        - 海晏祖芳—無底七峯
      - 蓬洲禪苗
        - □禪達
        - □禪師舜
        - 巨梁□環
        - 月船慧海

○曹洞宗系統畧第三

大源宗眞

梅山聞本

大初繼覺

仙巖能範—雪溪?廣—雪洞永玖—心原祖鑑　昌山?玖—明室繼哲—總登九天—魯雲宗齊—桃翁等春—月泄宥松—喜叟周津—桂巖慧芳

壽嶽景梠—玉田榮玖—承顔智順—?玄宗悟

材長存良—大?慧展—覺翁慧等

明林宗哲

無功天功—大蒲正睦

青岑珠鷹—行之正順

錦江?文—回夫慶?—寂照宗明

榮峰覺秀—賢窓常俊—久峰文昌

翁山大尖—年天性孝—月峰長佐—命巖孝存—日山天慧—融山大祝—盛韻存翁—天桂昌連

?宗存陽　豁州道翁—北巖貢嘯—舜山祖澤—慧海存智—一山開宥—大川音龍

林英宗甫—大陽?鷗　天?一朝—潜龍慧湛　天叟善長—鳳山等膳—一桂禪易

十峯宋田

大素省淳—機外了禪—實田以耘—了山耘岱—皐國雲悅

一傳岱純—傳室文的—明堂正智

如仲天誾

月因性初

?琢?珪—明室覺證

行叟?佳—大巖宗梅

物外性應—川僧慧濟

眞巖道空

喜?性讃—靈嶽洞源

大輝靈曜

大年祥椿—大路一遵

實庵?參—栽松青牛

雲山長越—壽山?久

以翼?祐—無外珪言—?室興廓—雪窗鳳積—?叢?芬

?翁?順—芝岡?田

石雷?珊—大空玄虎—東木?梲—翔天?翔

界巖繁越—天叟順孝—傑山道逸—白山?龍—玉田存麟—隨翁舜悅—天永琳達

碧山瑞泉—谿州達翁

李雲永嶽—泰安永康—琴峯壽泉—鐵叟?鈍—舟谷長?—傑山?英—?恩宗恩—五峯開音

降慶繁紹—震?景?—汝?禪—?外?俊

賢仲繁哲—大樹?光—大桂傳?—象山?厚—玄樓奥龍—風外本高

良應性貞—明巖志宜—克補?疑—光國舜玉—巧安順智—萬休永歲—浮翁全槎—眞翁宗能

開庵?見—字?文—?峯如珊—?山淳碩　特雄?英—天外梵舜—鐵心道印—悅巖不禪

春岡慧威—震龍景春

?周剛宗?—天?叢源

盛禪洞奭

秀峯繁俊

?芝性岱

盧嶽東都

鼎山存?

牧中正?

德嶽宗欽—?安梵守—?巖

可山悅—損?宗?—?山瑞芳

?泉性?

茂林芝繁

古山崇永

松堂?盛

虚?長清

南?謙宗—月?宗種

?仲珊（中略十世）

駒窓慶字

雲窓祖慶—悅窓祖誾—雪心全立—天巖?性—康山田映—朴倫祖寶—大峯禪狀—不黠存可—北高全祝

了堂眞覺

傑堂能勝

希曇宗興

太容梵清

古制仁泉

關庵梵機

竹窓智嚴—字堂覺卍

奇叟異珍—麟?永祥

大辯了訥—?門興德

心窓宗傳

江?德源

大綱明宗

吾寶宗璨

拈笑宗英—悅堂英穆—雲鷹玄俊

鳳庵英麟—大洞存長

大嶽祖益

南?壽星—信中永?

?江周恩

模庵宗範—秀峯存岱—天海舜政

州庵宗彭—子賢宗遊

雲岫宗龍—一華文英—無敵高健—受天榮祐—龍湫玄朔—天翁全播—懐州周潭—續翁宗傳—亘天要播—大雲神龍—齡山馨壽—長巖田悅

能庵明鑑

自?得吾—俊屋桂彥—以船文濟—南學光眞—拈橋?因—三嶺?能—吉岫舜利

嫡宗田承—亘山泉滴

菊隱瑞潭

桂節宗昌

鷹嶽宗俊—積桂?德—眞翁宗見—天桂禪長

大虛自圓

輝山宗珠

明江德舜

?山永秀

大寧了忍

竺庵宗仙

春屋宗能

靈叟宗俊—養拙宗牧

月叟明潭—?仲了?

鵠庵明全—玖峰長玄

在中宗宥—松庵宗榮—中明榮主—中雄宗孚・信及前豚—良室榮欣—威?岬雄

少?宗誾—明室玄?—祥山瑞禎—?峯存?

桂堂?佐—天叟宗?—越翁周超—學仲原周—州翁?欣—?翁?訓—養?孝—巨海良達—高?良壽　鐵山林說—一峯?道

安叟宗楞—模?永範—東?周道

即庵宗?—智海宗?—一字俊?—忠室宗孝—能山?藝—覺翁能正—助翁玄輔　靈泉壽?—吉州梵良

骨山?徹　勝國良?—大淵文刹

天巽慶順—心華乘芳…（中略十世）…月峯快雲—指月慧印

○黄檗宗系統畧

（隱元隆琦）の後、(歸化)隱元隆琦─

（慧門如沛）─(歸化)高泉性潡─了翁道覺─仁峯元善─葛民淨養─知本衍妙─烏石如顧─克護眞恭─石華通芳─錬成弘堅──松洞仁翠─金獅廣威
　　└懷玉道溫

（也嬾性圭）

(歸化)木菴性瑫─
　鐵牛道機
　慧極道明─龍統元棟
　鐵眼道光
　潮音道海─碧潮元達─鐵面淨錬─梵仙衍國─天外如空─梅嶽眞白
　鐵文道智─悅堂元逸─泰陽淨圭─嵋山衍秀─富峯如顧─獨照眞機
　越傳道付─無關元光─玉鳳淨英─圓成衍通─格堂如宗─實山眞聽─道永通昌
　(歸化)悅山道宗─乙艇元達─孝先淨行─雄峯衍嶷　金成如鐵─獨旨眞妙
　　　　　　　└千峯元向─得雲淨龍─素明衍聰─霖龍如澤
　良寂道明─龍山元騰─大方淨用─石窓衍劫
　(歸化)慈岳道琛─東瀾元澤─(歸化)獨文淨炳─(歸化)全岩衍昌─(歸化)大鵬如鯤
　寶州道聰─象先元歷
　　　　　└大越元鵬─秀桂淨蘂─青山衍玄─石潤如玉─蓬山眞仙
　鐵心道胖─曉岩元明─黃河淨淸─璞巖衍曜
　雲巖道巍─祕眼元明

(歸化)即非如一─
　(歸化)千呆性按─寂潭海照─玉柱淨撑─石芝照瑞─恭源普淸─若存通用
　　　　　　　　└大休海燁─南陽淨和─貫之照詔─妙菴普最
　柱巖明幢─(歸化)靈源海脈─道本淨傳─(歸化)伯珣照浩
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└大成照漢(歸化)
　大智實統
　法雲明洞─空極海因─隻箭淨蒿─藏本照芳─鶴州通峯─萬丈悟光
　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　└大寂遠賢─卡方怡秀─月桂道中─柏樹曉森
　　　　　└愚禪實智─杜山際宗─心岩玄扱─見嵩如相─寶山眞了─若翔通才─來鳳弘梧─紫石聯珠

(歸化)慧林性機

龍溪性潛─後水尾法皇─晦翁元嵩─鳳林淨護─中岳衍執─華頂如秀

(歸化)獨湛性瑩─
　石窓道鏗─鼎山元提　祥麟淨瑞─普明衍光─楚州如寶
　(歸化)悅峯道章─(歸化)杲堂元昶─(歸化)竺菴淨印
　　　　　　　　└旭如元昉(歸化)
　化霖道龍─大潮元皓
　　　　　└月海元昭

(歸化)大眉性善─梅嶺道雪─衙天元統─格宗淨超
　　　　　　　　　　　　└仙岩元嵩

(歸化)獨照性圓

(歸化)南源性派─鐵梅道香─香林元椿─蒲菴淨印
　　　　　　　　　　　　└梅峯元玉─介猊淨踞

(歸化)獅吼性獅─鐵船道岸─賢嶺元珉─恢山淨淳─石泉衍澄─良忠如隆─觀輪行乘

獨本性源─大仙道覺─百癡元拙

○眞宗學系統略第一

本願寺派勸學學系

准玄
了尊 — 能化一代 西吟 — 性海 — 慈海 — 慈舟
西吟 — 大壽 — 宏遠

二代 知空 — 三代 若霖 — 四代 法霖 — 僧樸
若霖 — 智暹 — 常照 — 德潤
知空 — 靈潭 — 卞關 — 慧鐺 — 六代 功存

僧樸 — 空華派 僧鎔 ・ 大同 ・ 慧雲 ・ 崇廓 ・ 仰誓 ・ 七代 智洞
大同 — 大乘 — 南溪 — 星象
大乘 — 寶雲 — 侍聞 ・ 青象
仰誓 — 自謙
智洞 — 芳英 — 義天 — 月珠 — 贈 觀阿 ・ 慶忍 ・ 吐月 ・ 慧穩 ・ 圓月

慧雲 — 藝州轍 大瀛 — 龍華派 曇龍 — 針水 — 默雷
曇龍 — 贈 訶提 ・ 玄雄 ・ 棲城 ・ 力精

崇廓 — 圓珠 — 雲幢 ・ 興情 ・ 僧叡
雲幢 — 贈 道振 ・ 普巖
興情 — 聞號 — 靈潭
僧叡 — 慧海 ・ 泰嵓 ・ 僧鐙 ・ 淨眼 — 義山

僧鎔 — 堺空華派 道隱 ・ 慧航 ・ 杏旭 ・ 越中空華派 柔遠
杏旭 — 普行
道隱 — 性海 ・ 贈 拙巖 ・ 廓忍 ・ 玄肅
性海 — 贈 寒淵 ・ 實寧 ・ 善讓 ・ 得隣 ・ 贈 海音
柔遠 — 巧便 ・ 義諦 ・ 印定 ・ 印持 ・ 令玄 ・ 行照
巧便 — 義淨 ・ 芳流
印持 — 印順
行照 — 深寶 ・ 無涯 ・ 博仁 ・ 行善 ・ 行雲 ・ 了要

安定 — 五代 義教 — 北天 — 興隆 ・ 僧朗
僧朗 — 慧麟 ・ 百叙 ・ 宣海 ・ 中道 ・ 贈 持淨
宣海 — 聞精

肥後轍 環中 ・ 智洞 — 曇藏 ・ 都西 ・ 到徹 ・ 慶恩
慶恩 — 普天 ・ 淨眞 ・ 憲榮 ・ 贈 開生 ・ 環徹
開生 — 沃洲 — 贈 道晃 ・ 斷鎧 ・ 一專 ・ 峻嶺
斷鎧 — 隆英

○眞宗學系統略第二

大谷派講師學系

- 慧空（講師一代）
  - 慧曉（講師（不列世代））
  - 慧然（二代）
    - 慧琳（三代）
      - 宣明（六代）
        - 靈暀（十一代）
          - 得住（十四代）
          - 法住（十六代）
      - 寶景（七代）
      - 鳳嶺（贈）
        - 大含（九代）
          - 東瀛（贈）
        - 宜成（十二代）
        - 觀月（贈）
      - 義陶（贈）
    - 隨慧（贈講師）
      - 深勵（五代）
        - 靈曜（贈）
          - 義讓（十三代）
            - （晃耀）（二十代）
            - 義天（十八代）
            - 潜龍（二十二代）
        - 德龍（十代）
          - 龍溫（十五代）
          - 行忠（十九代）
        - 澄玄（贈）
          - 神興（十七代）
        - 秀存（贈）
          - 千巖（二十一代）
          - 雲溪（贈）
        - 智現（贈）
      - 法海（八代）
  - 慧倣（四代）

(附載一)

○悉曇學系統略

(船若多羅)—空海—宗叡—卜延—齊詮

(寶月)(宗叡)—圓仁—湛契
圓仁—安惠—長意・長法・元譽
長意—安然
安然—大惠—淨藏
安然—尊意—平燈—靜眞—皇慶・覺空
覺空—搞源・覺運・慶祐・覺超・藥智
皇慶—長宴・延般・搞源・藥智・安慶
長宴—(イ)

(イ)—長範—覺範—院昭—豪覺—惠淵—惠尋—快雅—道覺・公源・慈胤・淨空・重尊
(不明)—明覺—念昭—蓮雲—惠淵

（附載三）

○佛工系統畧

司馬達等—鞍作多須那—鞍作止利（鳥佛師）

康尚—定朝（▲七條佛所初代）
- 定朝—覺助（二代）—賴助（三代）—康助（四代）
- 定朝—長勢（▲三條一流）
  - 長勢—圓勢
  - 長勢—院助（▲七條大宮佛所）

圓勢
- 忠圓—明圓
  - 明圓—朝圓
  - 明圓—寛圓—定圓—宣圓
- 長圓
  - 長圓—長俊—勝圓
  - 長圓—圓信
- 賢圓
  - 賢圓—元圓
  - 賢圓—圓春
- 明順

康助
- 康朝
  - 康朝—成朝
  - 康朝—康俊
- 勢增
- 仁增
- 範助
- 康慶（五代）
  - 運慶（六代）
    - 湛慶（七代）—康運（八代）
      - 康勝（九代）
        - 康成（十代）—運賀（十一代）—運助（十二代）
          - 康俊（十三代）—康成（十四代）
          - 康祐
          - 康椿
          - 幸俊
        - 康譽（▲七條西佛所）—（イ）
      - 康圓
    - 越前女
  - 定覺
  - 快慶

康湛（十五代）—康吉（十六代）—康永（十七代）—康珍（十八代）—康琳（十九代）—康秀（二十代）—康正（廿一代）—康入（廿二代）—康永（廿三代）—康任（廿四代）—康信—康宣

康吉—法眼
- 法眼—康運—康祐
  - 康祐—大藏
  - 大藏—治部卿
- 法眼—承秀
  - 承秀—康繼

院助
- 院覺
  - 院慶—院承—院尋
  - 院尊
    - 院實
    - 院範—院繼—院審—院宗—院信—院乘—院勝
    - 院賢—院忠—院瑜
- 院朝—院尚—院圓

（イ）—康尊—康祐—康榮—康秀—康清—康壽—康慶—康英
- 康秀—康温—康音—音湛
- 康清—康住
  - 康住—康祐—康恵
  - 康住—大貳

○奈良平安朝時代佛家位階官職表

	僧位	僧官（三綱）	僧職	俗位相當	俗官相當	賻物相當
勅	法印大和尚位 清和天皇貞觀六年眞雅初叙	僧正 推古天皇三十二年觀勒初任	正法務 清和天皇貞觀十四年眞雅初補			從四位
		大僧正 聖武天皇天平七年行基初任		二位	大納言	
		正僧正 陽成天皇元慶三年遍昭初任		二位	中納言	
		權僧正 清和天皇貞觀七年壹演初任		三位	參議	
勅	法眼和尚位 淳和天皇天長三年歳榮初叙	僧都 推古天皇三十二年德積初任	權法務 清和天皇貞觀十四年延壽初補	四位	侍臣	正五位
		大僧都 文武天皇二年道昭初任				
		權大僧都 文德天皇仁壽三年眞濟初任				
		少僧都 天武天皇二年義成初任				
		權少僧都 仁明天皇嘉祥三年道雄初任				
授	法橋上人位 三條天皇長和二年覺空初叙	律師 文武天皇二年善往初任	大威儀師 清和天皇貞觀十二年延壽初補	五位		從五位
		大律師 稱德天皇天平神護二年基眞初任				
		中律師 稱德天皇天平神護一年圓興初任				
		權律師 淳和天皇天長三年歳榮初任				
勅授	傳燈大法師位		威儀師 光仁天皇寶龜六年六人初補	六位		
	傳燈法師位		從儀師 桓武天皇延曆十三年賢算初補	六位		
	傳燈滿位					
判授	傳燈住位					
	傳燈入位					

尙ほ國師講師讀師擬講已講內供護持僧大阿闍梨小阿闍梨一身阿闍梨傳法阿闍梨等の稱號ありて補任せられたり、此表には畧す

諸宗門跡歷代

歷代人名の右に傍點を附すは法親王なり

○眞言宗仁和寺門跡歷代

一に御室門跡と稱す

（創立年時）光孝天皇仁和四年
（現今位置）山城葛野郡花園村

門跡初代 寛平法皇（承平元、七、十九寂）―承平法皇（イ）（天曆六、八、十五寂）―寛空（イ無）（天祿三、二、六寂）―寛朝（イ無）（長德四、六、十二寂）―濟信（イ無）（長元三、六、十一寂）―性信、（應德二、九、廿七寂）

覺行、（覺念）（長治二、十一、十八寂）―覺法、（行眞）（仁平三、十二、六寂 イ十一月）―覺性、（信法）（嘉應元、十二、十一寂 イ十一月）―守覺、（守性）（建仁二、八、廿五寂）―道法、（尊性）（建保二、十一、廿一寂 イ十一日）―道助、（寶治三、正、十五寂）

道深、（建長元、七、廿八寂）―法助、（弘安七、十一、廿七寂 イ廿一日）―性助、（弘安五、十二、十九寂）―性仁、（嘉元二、八、十寂）―深性、（正安元、六、七寂）―寛性、（貞和二、九、卅寂）

法守、（明德二、九、十九寂）―法仁、（イ無）（文和元、十、廿五寂）―源性、（イ無）（文和二、正、廿九寂）―尊朝、（イ無）（惠任）（永和四、七、十六寂 イ八月）―永助、（空助）（永享九、二、十寂）―法尊、（イ無）（應永廿五、二、十五寂）

承道、（享德二、九、十寂）―靜覺、（法深）（文龜三、七、十五寂）―尊海、（イ無）（尋守）（天文十二、十一、四寂）―覺道、（大永七、十、廿三寂）―道永、（イ無）―任助、（寛法）（天正十二、十一、廿九寂）

守理、（イ無）―覺深、（正保五、閏正、廿一寂）―性承、（承法）（延寶六、二、廿九寂）―寛隆、（覺寛）（寶永四、九、十六寂）―守恕、（享保十四、四、九寂）―慈仁、（享保廿、八、七寂）

遵仁、（延享四、五、一寂）―覺仁、（寶曆四、九、廿一寂）―深仁、（文化四、七、廿一寂）―濟仁、―純仁―照道

榮嚴（明治三十三、十二、廿八寂）―雲照（明治四十二、四、十三寂）―智等―法龍

○眞言宗大覺寺門跡歷代

（創立年時）淸和天皇貞觀
（現今位置）山城國葛野郡嵯峨村

門跡初代 恒寂（仁和元、九、廿寂）―後宇多法皇（元亨四、六、廿五寂）―寛尊―性圓（貞和三、三、七寂）―性勝（イ恒性）―恒性（イ道イ性勝）（元弘三、二、十九寂）

―寛尊（イ）（永德二、十一、廿六寂）―道寛（イ）（應永十二、十二、十八寂 イ十一月）―深守（明德二、四、十五寂）―弘覺―道寛（イ恒性 イ無）―義昭（嘉吉元、三、十三寂）

―性深（イ性守）―性守（イ義俊）（享祿三、十一、廿六寂）―義俊（イ性深）（永祿十、正、十二寂）―尊信（イ無）（天正十六、六、二寂）―空性（慶安三、八、廿五寂）―尊性（慶安四、三、廿二寂 イ廿三日）

―性眞（元祿九、廿、五寂）―性應（正德二、八、十五寂）―寛守（享保十五、正、十四寂 イ享保十四、五、十四寂）―信性（イ無）―寛深―深眞（寛政十一、十一、九寂）

―亮深―慈性―神海―玉諦（明治二十任 明治三十二、九、十七寂）―龍暢

○眞言宗安祥寺門跡歷代

（創立年時）仁明天皇嘉祥
（現今位置）山城國宇治郡山科村

惠運（門跡切代）（貞觀十三、九、廿三寂）——朝壽——佛蓮イ——朝源——嚴覺イ（保安二、閏五、八寂）——宗意（〃、五、十九寂）——

實嚴（〃、五、十四寂）——賴眞イ——成嚴イ（〃、四、廿六寂）——寬海イ（〃、二、八寂）——兼惠イ（〃、十二、八寂）——良瑜イ——

賴助イ——成助イ——慈助イ——有助イ——寬伊イ（〃、四、廿五寂）——成惠（〃、十一、廿〃寂）——

光譽（〃、八、十二寂）——實舜——實靜——道俊——良伊——隆雅（〃、六、廿八寂）——

興雅——隆快（〃、三、十六寂）——光意（明應八、九、十寂）——（門跡廢絕）

○眞言宗禪林寺門跡歷代

（創立年時）清和天皇貞觀五年
（現今位置）京都市上京區[illegible]禪寺町

眞紹（貞觀十五、七、七寂）―宗叡（天慶八、三、廿六寂）―深覺（長久四、九、十六寂）―深觀（永承五、六、十五寂　イ長久四、九、十四寂）―良深（承曆元、八、廿四寂）―永觀（天永二、十一、二寂）―

尊譽―覺譽―道智―イ靜遍（貞應三、四、廿寂）―イ淨音―（門跡廢絶）（禪林寺は建久中淨土宗となり今淨土宗西山派の一本山なり）

○眞言宗勸修寺門跡歷代

（創立年時）醍醐天皇昌泰三年
（現今位置）山城國宇治郡山科村

承俊（イ無）延喜五、十二、七寂——濟高 天慶五、十一、廿五寂——貞譽 天慶七、七、八寂——遍覺（イ無）天曆八、一、一寂——雅慶（門跡初代）長和元、十、廿五寂——濟信 長元三、六、十一寂

深覺 長久四、九、十六寂——信覺 應德元、九、十五寂——嚴覺 保安二、閏五、八寂——寛信 仁平三、三、七日寂 イ仁平二、三、八寂——雅寶（一作雅實）建久元、五、十三寂——成寶 安貞元、十、七寂 イ十二月、十七日

聖基 文永四、十二、九寂——道寶 弘長四、八、四寂——勝信 弘安十、四、七寂 イ七月、四日——道淳——信忠 元亨二、十、十九寂——教寛

寛胤、天授二、四、三寂——尊信、康曆二、四、廿二寂——興信、康應元、八、廿一寂——尊興 應永卅一、五、廿七寂——興胤 正長元、五、廿七寂——尊聖 永亨四、七、四寂

教尊 文安一、十一、廿八寂——恒弘、永正六、閏八、八寂——常信（一作常弘）、——海覺、享祿四、十一、九寂——寛欽、永祿六、十一、十一寂 イ十月——聖信 文祿元、三、八寂

寛海 萬治二、十二、十三寂——寛俊 天和二、七、十八寂 イ十七日——濟深、元祿十四、十二、二寂 イ五日——尊孝、延享二、十、八寂 イ延享五、二、十七寂——寛寶 享和二、九、八寂——濟範（イ濟深）元治元、復飾

雲昭——榮嚴——覺阿——龍曉——海寂——宥匡

○眞言宗三寶院門跡歷代

（創立年時）鳥羽天皇永久―

（現今位置）山城國宇治郡醍醐村

門跡初代 勝覺 大治四、四、一寂 ― 定海 久安五、四、十二寂 ― 元海 久安五、四、十二寂 イ保元□、八、十八寂 ― 實運 永曆元、二、廿寂 イ廿四日 ― 勝賢 建久七、六、廿二寂 イ二月八日 ― 實繼 元久元、正、廿一寂

成賢 寬喜三、九、十九寂 ― 道教 イ 嘉禎二、五、廿八寂 イ廿六日 ― 良海 延保六、八、廿九寂 ― 聖海 ― 勝尊 イ無 ― 憲深 弘長三、九、六寂

定濟 弘安五、十、三寂 ― 定勝 弘安六、十一、九寂 ― 道性 ― 聖兼 永仁元、九、十一寂 ― 聖雲、 正和三、五、五寂 イ六月十五日 ― 定任 延慶二、八、廿七寂

賢助 ― 聖尊、 應安三、九、廿七寂 ― 聖尋 ― 聖珍 イ イ正和元、九、十一寂 ― 賢俊 延文二、閏七、十六寂 ― 光濟 永和五、閏四、廿二寂

聖、珍、 イ無 ― 光助 康應元、正、十三寂 ― 滿濟 永享七、六、十三寂 ― 義賢 應仁二、十、二寂 ― 政深 ― 義覺 文明十五、九、十七寂

政紹 延寶三、十二、廿七寂 ― 持嚴 永正七、十二、廿八寂 ― 義堯 永祿七、二、十五寂 ― 義演 ― 覺定 寬文元、五、十九寂 イ十三日 ― 高賢 寬永四、十一、五寂

房演 元文元、十二、九寂 ― 實演 享保十八、九、七寂 ― 良演 イ 寶曆十、八、八寂 ― 高演 弘化五、正、十六寂 ― 勝演 文化七、三、十寂 ― 定演 ―

演護 ― 眞應 ― 宥雄

○眞言宗隨心院門跡歷代

（創立年時）鳥羽天皇
（現今位置）山城國宇治郡山科村

空海（承和二、三、廿一寂）―眞雅（元慶三、正、三寂）―源仁（仁和三、十一、廿二寂）―聖寶（延喜九、七、六寂）―觀賢（延長三、六、十一寂）―淳祐（天暦七、七、二寂）―

元杲（長德元、二、廿七寂）―仁海（永承元、五、十六寂）―成尊（延久六、正、七寂）―範俊（天永三、四、廿四寂）―嚴覺（保安二、閏五、八寂）―増俊（門跡初代）―

顯嚴―親嚴（嘉祿二、十、二寂）―嚴海―宣嚴（建長三、八、七寂）―俊嚴（建長六、十一、廿九寂）―嚴惠―

靜嚴（永仁七、正、七寂）―嚴家（延慶元、十一、三寂）―經嚴―通嚴―照嚴―嚴叡―

祐嚴―嚴寶―持嚴―増孝（イ無）―忠嚴―仙朝―

長靜―増孝（正保元、七、廿一寂）―榮嚴―俊海（天和二、五、廿六寂）―堯嚴（天明九、寂）…増護（明治八、十一、十二寂）―

澄剛（明治九、二、十九寂）―旭雅（明治廿四、一、廿一寂）―隆燈（明治廿四、十、三十寂）―智滿（明治四十二、十二、十一寂）…法遵…

○眞言宗蓮華光院門跡歴代

安井門跡、小川門跡、岡崎門跡、下河原門跡の別稱あり

（創立年時）後鳥羽天皇建久
（古昔位置）山城國葛野郡安井
（現今位置）廢亡

道尊（門跡初代）安貞二、八、五寂 ― 道乘（イ無）文永十、十二、十一寂 ― 道圓 弘安四、七、十五寂 ― 道融（イ道性）弘安四、七、十五寂 ― 性融 ― 道性（イ）

寛融（イ）― 益助（イ尊守）― 竟圓（イ）― 益性（イ寛法）― 益守（イ竟圓）― 乘朝（イ無）

道永（イ無）― 寛守（イ無）文安三、二、廿二寂 ― 道朝（イ無）― 義昭（イ無）― 性演 延寶二、十一、廿七寂 ― 道恕 享保十八、十一、十五寂

尊深（イ）天保三、九、三十寂 ― 了尊 文政四、正、廿三寂 ―（廢亡）

○眞言宗上乘院門跡歷代

(創立年時)　龜山天皇(カ)
(古昔位置)　京都下河原
(現今位置)　廢亡

定惠イ——定覺イ——眞助イ——覺耀イ——實毫イ——公賢イ——

守、イ覺、——仁隆イ——良惠イ——道承イ——法助イ——勅助イ——

道乘(イ無)(文永十、十二、十一寂)——益助——益性、——有助イ——乘、朝、——道、永、(イ無)

寛、守、——道、朝、——靜、イ覺、(イ淨覺)——道、イ永、——道喜——覺智

良惠(文永五、十一、廿四寂)——良覺——道順(元亨二、十二、廿八寂)——公譽——實豪——實辨

實濟——尊實——公禪——道尋——增惠——明辨

乘伊(曆應元、十一、十五寂)——(廢亡)

○天台宗妙法院門跡歴代 一に新日吉門跡と云ふ

（創立年時）
（古昔位置）京都八坂
（現今位置）京都上京區大佛通

最澄（弘仁十三、六、四寂）―圓仁（貞觀六、五、十四寂）―惠亮（貞觀元、九、廿六寂 イ貞觀二年）―常濟―延昌（應和四、正、十五寂）―陽生（正曆四、七、廿三寂 イ正曆三、十、廿二寂）―

教圓（永承二、六、十寂）―勝範（承保四、正、廿八寂）―定慶―源暹（長承三、十、廿六寂）―相命―快實―

快修（承安二、六、十二寂 イ承安七年、又三年）―行眞法皇（建久三、三、十三崩）―昌雲（門跡初代）―實全（承久三、五、十寂）―尊、性、（延應元、九、三寂）―尊惠（イ無）―

俊圓（イ無）―尊、守、（文應元、十、寂）―性、惠、―尊教―性守（正中二、五、廿一寂）―性、惠、（イ）―

尊、澄、―亮、性、―亮、仁、（イ）（應安三、十、寂）―堯、仁、（永享二、四、廿一寂）―堯、性、（嘉應二、正、廿六寂）―明、仁、―

教覺―覺、胤、（天文十、正、廿六寂）―堯、尊、―常、胤、（元和七、六、十一寂）―堯、然、（寛文元、閏八、廿三寂）―堯、恕、（元祿八、四、十六寂）―

堯、延、（享保十、一、卅寂 イ享保三、十一、廿九寂）―堯、恭、（明和元、閏十二、五寂）―眞、仁、（文化二、八、八寂）―教、仁、―敦宮―天祐―

道盈―寂順（明治三八、十、廿九寂）―光轍

〇天台宗三千院門跡歷代

（梶井門跡、梨本坊、圓融坊等の別稱あり）

（創立年時）清和天皇貞觀二年
（古昔位置）近江國比叡山南谷
（現今位置）山城國愛宕郡大原村

最澄（弘仁十三、六、四寂）—圓仁（貞觀六、正、十四寂）—承雲（梨本門主の初）—延雄—尊意（天慶三、二、廿四寂）—安慧—

尋叡—明快（梶井門主の初）（延久二、三、十八寂）—良眞（嘉保三、五、十三寂）—仁覺（康和四、三、廿八寂）—仁豪（保安二、十、四寂）—仁實（天承元、六、八寂）—

最雲（應保二、二、十六寂）—最忠—公雲（イ）—明雲（壽永二、十一、十九寂）—顯眞（イ）（建久三、十一、十四寂）—承仁（建久八、四、廿七寂）—

承圓（嘉禎二、十、廿六寂 イ十六日）—尊快（寛元四、四、二寂）—尊覺（文永元、十、廿七寂）—最仁（永仁三、二、寂）—澄覺（正應二、四、廿八寂）—最助（永仁元、二、寂）—

覺雲（元亨三、十、十八寂）—叡雲—恒雲（イ桓雲）—尊忠—承覺—承鎭—

尊雲（建武元、七、十六寂）—尊胤（文和四、五寂）—承胤（永和三、四、八寂）—恒鎭（應安九、正、三寂）—覺叡（永和三、七、四寂）—明承（應永三、四、二寂）—

義承（應仁元、十一、寂）—義堯（イ無）—堯胤（永正七、六、八寂 イ享祿三、三、廿六寂）—彥胤（天文九、五、七寂）—應胤（慶長三、五、十七寂）—承快（イ最胤）（慶長十四、十二、廿寂）—

最胤（イ承快）（寛永十六、正、十三寂）—慈胤（元祿十二、十二、一寂）—最昭（イ常尹）（延寶八、六、廿六寂）—道仁（享保十八、五、十九寂）—叡仁（寶曆三、七、廿二寂）—常仁（明和九、四、廿二寂 イ廿三日）—

承眞（天保十二、正、十四寂）—昌仁—良海—寂順（明治三八、十、廿九日）—孝成

○天台宗圓滿院門跡歷代

一に平等院といふ　（創立年時）一條天皇（カ）　（現今位置）近江國大津町

圓珍 寛平四、十、廿九寂 ― 康濟 昌泰二、二、八寂 ― 增命 延長九、十一、十一寂 門跡初代 ― 京意 ― 敬一 ― 運昭 イ運照

行譽 ― 餘慶 正曆二、二、十八寂 イ閏二月 ― 悟圓 長久二、二、廿寂 ― 永圓 寛德元、五、廿二寂 イ廿日 ― 源泉 イ無 天喜三、｜、｜寂 ― 覺猷 イ無 保延六、六、十六寂

明尊 康平六、六、廿六寂 ― 明行 ― 覺圓 承德二、四、十六寂 ― 覺實 寛治六、十二、八寂 ― 行尊 長承四、二、五寂 ― 行慶

道惠 仁安三、四、一寂 ― 圓慶 イ圓惠 ― 尊惠 イ無 ― 道譽 イ無 仁治元、九、五寂 ― 道智 イ無 ― 定惠 建久七、四、一寂

法圓 文治三寂 ― 圓靜 ― 仁助 弘長二、八、十一寂 ― 圓助 弘安五、八、十二寂 ― 淨助 弘安三、十二、廿一寂 ― 性覺 イ無

眞覺 ― 行覺 永仁元、九、廿二寂 ― 恒助 延慶三、七、一寂 ― 尊齊 イ無 ― 尊悟 延文四、七、卅寂 イ延文二、四寂 ― 行悟 イ

長助 康安元、二、八寂 ― 尊兼 正和元、七、十二寂 ― 定尊 ― 性覺 イ往覺 ― 行悟 ― 行助 至德三、九、十寂

尊濟 ― 圓悟 ― 圓胤 ― 尊雅 ― 敎助 ― 仁悟

道悟 ― 養慶 ― 常尊 寛文十一、七、二寂 ― 永悟 延寶四、十、一寂 ― 行惠 ― 祐常 イ 安永二、十一、二寂

童イ形——童イ形——學、尊、——覺、淳、イ學諄——暹昇——祐玉明治卅四、一、四寂——

敬圓

○天台宗檀那院門跡歷代

（創立年時）
（古昔位置）山城國比叡山
（現今位置）廢亡

興良――覺運（寬弘四、十、晦寂 イ十一月朔日）――長算（天喜四、九、三寂 イ天喜五年）――仁暹（治暦三、九、十三寂）――長愉――公譽――

親源――雲助――公嚴――實嚴――相嚴――實承――

寬家――良證――澄嚴――（廢亡）

○天台宗淨土寺門跡歷代

（創立年時）一條天皇
（古昔位置）山城國白川
（現今位置）廢亡

門跡初代 明救（寛仁四、七、五寂）— 行覺イ（萬壽四、十二、四寂）— 覺尋イ — 尋仁イ — 相豪イ — 仁操イ —

行圓イ — 辨雅イ（正治三、二、十寂）— 圓基（曆仁元、八、廿三寂）— 慈禪イ（重出）— 慈靜イ — 慈基イ —

尋基 — 慈玄イ（不出）イ無 — 尊基イ — 慈勝 — 慈傳 — 慈忠 —

慈傳イ — 慈辨 — 持辨イ — 義尋イ（延德三、正、七寂）— 政玄イ — 政辨 —

政禪イ — 慈禪（建治三、八、七寂）イ無 — 慈基イ無 — 政玄イ無 — 尊基イ無 — 禪基イ無 —

覺尋（永保元、十一、寂）イ無 — 相豪イ無 — 仁操イ無 — 持辨イ無 — 辨雅（建仁元、二、十七寂）イ無 — 義尋（延德三、正、七寂）イ無 —

慈靜イ無 —（廢亡）

○天台宗妙香院門跡歷代

（創立年時）一條天皇（カ）
（古昔位置）山城國飯室
（現今位置）廢亡

尋禪（門跡初代　正曆元、二、十七寂）——嚴久——尋空（長元八、七、廿九寂）——尋光——良光——尋圓——

良性——賴賢——賴仁——尋算——仁覺（康和四、三、廿八寂）——俊覺（康和五、九、十三寂）——

清覺——相命——尊忠——良快（仁治三、十二、十七寂）——慈源——慈禪——

慈實（正安二、五、九寂）——慈玄——慈深——良性——慈慶（曆應三、五、廿九寂）——尊道、——

尊實、——慈濟——道圓、——相命——（廢亡）

○天台宗平等院門跡歷代

（創立年時）後冷泉天皇永承六年三月廿八日
（古昔位置）山城國宇治
（現台位置）山城國久世郡宇治町

永圓（長久元、五、廿寂）──明行──教眞（天仁二、十一、十八寂）──仁覺（承保元、十二、廿五補撿校　承德元、六、一免）──覺圓──行尊（元永元補別當）──

行慶──定惠──慈圓（文治二、八、十五補別當　建久七、十一、一免）──良俊──忠快──慈圓（建仁二、十一、廿七再補撿校）──

圓基（承久三、七、廿補）──尊任──慈禪（文永三、十二、十四補）──道玄（弘長元、八、廿一補）──圓助──道玄（正應元、八、廿八補）──

行覺──慈基（永仁六、七、補）──恒助──道玄（嘉元二、八、十三補）──尊悟──仁悟──

慈勝（正和二補　同四十、免）──行悟──道潤（正和五補）──行助──尊雅──教助──

道潤（嘉暦二、二再補）──慈勝（元德二再補）──養慶──良鎭（明應六、十、五補）──永悟──（門跡廢絶）（平等院後に天台淨土兼帶となる）

○天台宗曼殊院門跡歷代（一に竹内門跡と云ふ）

（創立年時）鳥羽天皇天仁
（古昔位置）山城國北山
（現今位置）山城國愛宕郡修學院村

最澄（イ無）—圓仁（イ無）—安惠（イ無）貞觀十、四、三寂—最圓（イ無）—玄昭（イ無）延喜十五、二、三寂—玄鑒（イ）延長四、二、十一寂

覺惠（イ無　イ覺慶）—是算（イ遍救）寬弘二、寂—遍救（イ是算）貞元元、六、廿九寂—暹圓—敎圓 永承二、寂—長算 天喜五、五寂

仁暹—賴圓—眞尊—忠尋（門跡初代）保延四、十、十四寂—顯尋—圓仙

仙範—承信—承兼—公澄—道救—慈順

慈嚴—慈快 康永三、三、十二寂—慈守（イ慈宗）—慈昭 永和二、三、七寂—道豪 應永十一、九、廿四寂—良順

覺什（イ無）—良什（イ無）長祿四、六、四寂—良鎭 永正十三、十、四寂—慈運 天文六、六、廿九寂—覺恕 天正二、正、三寂—良恕 寬永廿、七、十六寂（イ十五日）

良尙 元祿六、七、五寂—良應 寶永五、六、廿二寂—（イ）童形—良啓—童形—童形 享和二、八、七寂

護仁 天保十三、七、廿九寂—光檀—孝暢—觀澄

○天台宗十樂院門跡歷代

(創立年時) 鳥羽天皇永久三年
(古昔位置) 京都大谷
(現今位置) 廢亡

忠尋(保延四、十、十四寂)――顯尋――圓仙(長寬二、三、廿七寂)――忠雲(元曆元、十二、五寂)――仁慶――尊性、――
茂、仁、――最守――道玄――慈道、行圓、道淵、――
道澄、――尊圓、――尊道、――(廢亡)

○天台宗靑蓮院門跡歷代

（創立年時）近衞天皇天養元年
（現今位置）京都上京區粟田口町

最澄 弘仁十三、六、四寂 ― 圓仁 貞觀六、正、十四寂 ― 安惠 貞觀十、四、三寂 ― 相應 延喜十八、十二、二寂 ― 喜慶 イ 康保三、七、十七寂 ― 遍斆 貞元元、六、廿九寂 門跡初代

慶圓 イ 寛仁三、九、三寂 ― 慶命 長曆二、九、七寂 ― 慶範 承久三、十一、一寂 イ康平四、五、一寂 ― 廣算 承曆四、六、廿寂 ― 寛慶 保安四、十、三寂 イ十一月 ― 行玄 久壽二、十一、五寂

覺快 養和元、十二、六寂 イ十一月、イ二年 ― 眞譽 ― 慈圓 嘉祿元、九、廿五寂 ― 良尋 建永二、十、廿五寂 イ無 ― 眞性 寛喜二、六、十四寂 ― 良快 仁治三、十二、十七寂

慈賢 仁治二、三、三寂 イ無 ― 慈源 建長七、七、十九寂 ― 道覺 建長二、正、十一寂 ― 最守 建長八、九、廿五寂 ― 尊助 正應三、十二、一寂 ― 慈禪 建治二、八、七寂 イ無

道玄 嘉元二、七、十九寂 イ十一月十三日 ― 慈實 正安二、五、九寂 ― 慈助 永仁三、七、十七寂 イ廿七日 ― 慈玄 正安三、正、廿五寂 イ廿六日 ― 良助 文保二、八、十八寂 ― 祐助 イ

慈深 文和四、十二、二寂 イ貞和三、十二、三寂 イ慈道 ― 慈道 曆應四、四、十一寂 イ慈深 ― 行圓 イ ― 道淵 イ ― 尊圓 延文元、九、廿三寂 ― 尊實

祐助 イ尊道 イ無 ― 尊道 應永十、七、五寂 イ八日 イ祐助 ― 慈濟 イ無 ― 尊滿 イ ― 道圓 至德二、三、十四寂 ― 義圓 嘉吉元、六、廿四寂

義快 イ無 ― 尊應 永正十、正、八寂 イ永正十一、正、四寂 ― 尊傳 文龜四、正、廿六寂 ― 尊鎭 天文十九、十、三寂 イ九月十三日 ― 尊朝 慶長二、二、十三寂 ― 尊純 承應二、五、廿六寂

尊敬 ― 尊證 元祿七、十、十五寂 ― 日出宮 元祿十一、九、七寂 イ十月六日 イ英官 ― 尊祐 延享四、九、十六寂 ― 尊英 寶曆二、七、廿寂 ― 尊眞 文政七、三、十八寂

尊寶　天保三、九、十六寂
——洁宮　天保十四、六、十七寂
——尊融——覺昌——玄深

○天台宗法住寺門跡歷代

（創立年時）一條天皇
（古昔位置）山城國瓦坂
（現今位置）廢亡

尋覺（門跡初代）——覺仁（文永二、四、二十九寂）——道仁（弘長三、正、十四寂）——靜仁——仁惠——道瑜（延慶二、七、二寂）

增惠——增珍——（廢亡）

○天台宗聖護院門跡歷代

（創立年時）後深草天皇寛治四年
（古昔位置）山城國愛宕郡長谷
（現今位置）京都市上京區聖護院町

圓珍（寛平七、四、廿九寂）—增命（延長五、十一、十寂）—勢祐—勸修（寛弘五、七、八寂）（イ無）—最圓（永承二、八、廿八寂）—靜覺—

增譽（門跡初代）（永久四、二、十九寂　イ正月二十九日）—增知—覺忠（治承十、十六寂）—靜惠（建仁三、三、十二寂）—圓忠—靜忠（弘長三、十、二寂）—

尊圓（寛喜三、十、廿五寂）—深忠—覺惠—覺助（延元元、九、十七寂）—忠助（正應三、八、十七寂）—顯助（元應二、十、五寂）—

尊珍—惠助—覺譽（弘和元寂）—仁譽—聖助（イ靜尊）—靜尊（イ聖助）—

覺增（明德元、十一、十九寂）—道意—滿意—義觀（イ）—道興（大永七、七、七寂）—道應—

道增—道澄（慶長十三、六、廿八寂）—忠尊（イ義觀）—興意（元和六、十、七寂）—道晃（延寶七、六、十八寂）—道寛（延寶四、三、八寂）—

道祐（元祿三、十二、十八寂）—道尊（寶永二、九、廿八寂　イ十月二日）—道承（正德四、七、九寂　イ八日）—忠譽（天明八、四、十一寂）—增賞（明和七、閏六、廿五寂）—盈仁（文政十三、二、廿三寂）—

萬壽宮（天保二、二寂）—雄仁—敬心—密道—祐玉（明治卅四、一、四寂）—雄眞—

寛巽—敬明—寛良—顯定（明治卅九、二、廿五寂）

○天台宗本覺院門跡歷代

（創立年時）朱雀天皇（承平年中）
（古昔位置）山城國
（現今位置）廢亡

良快（門跡初代）（仁治二、十二、十七寂）―良禪―最源―尋源（イ無）―源惠―道潤―

聖惠（イ）―守慧（イ）―顯尊（イ無）―仲舜（イ無）―信顯（イ無）―聖助―

仁澄（イ無）―聖惠（イ無）―滿守（イ）―持玄（イ）

○天台宗實乘院門跡歷代

（創立年時）
（古昔位置）山城國粟田鄉岡崎
（現今位置）廢亡

成圓—圓長（嘉祿三、十、九寂）—成源—公澄（重出）—澄尋—圓源—
宗源—宸玄—圓守—桓守—成澄—桓豪—
桓覺—桓忠（康曆元、二、九寂）—桓慧—桓敎—桓昭—桓澄—
承玄—（廢亡）

○天台宗實相院門跡歴代

(創立年時) 龜山天皇(カ)
(現今位置) 山城國北岩倉

圓珍(寛弘四、十、廿九寂)—康濟—增命(延長五、十一、十一寂)—京意—敬一—運昭—

行譽—餘慶(正曆二、閏二、十八寂)—勸修(寛弘五、七、八寂)—心譽(寛仁二、八、十二寂)—行圓(永承二、正、八寂)—賴豪(應德元、五、四寂)—

行勝—勝運—公顯(建久四、九、十七寂)—賴兼イ(弘長元、七、十八寂)—覺朝—靜基—

增忠(永仁六、正、廿四寂)—靜譽(門跡初代)—增基(文治元、七、廿一寂)—增靜(イ無)—桓豪(イ無)—增覺—

增仁(應安元、六、十一寂 イ湖山)—靜深—良瑜—增珍(應永廿、正、晦寂)—增詮—義命—

增運—義桓—義運(イ慈運)—義尊(萬治四、正、十四寂)—義延(寛永三、十、十九寂)—岑宮(正德三、四、廿九寂)—

義周(元文五、六、三寂)—增賞—健宮(安永九、三、廿七寂 イ四月)—義海(天保三、三、十一寂)—棟宮—(此間二十餘年無住)—

密道—俊興—敬圓—俊良

○天台宗常住院門跡歷代

（創立年時）龜山天皇（カ）
（古昔位置）近江國愛宕郡
（現今位置）廢亡

證空（門跡初代）—良尊—道慶—行昭（嘉元二、正、五寂）—慈昭—道昭—

良慶（延文五、八、十二寂）—良瑜—道尊—快豪—道意（イ）—（廢亡）

○天台宗如意寺門跡歷代

（創立年時）
（古昔位置）山城國愛宕郡粟田
（現今位置）廢亡

公胤—公曉（建保七、五、廿九寂）—榮實（承久元、十、六寂）—賴仲—隆辨（門跡初代）（弘安六、八、十五寂）—道珍（イ無）—

道瑜（延慶二、七、二寂）—兼助（イ）—道珍（イ）—道基—滿意—兼助（イ無）—（廢亡）

○天台宗毘沙門堂門跡歷代

(創立年時)不詳
(古昔位置)左京出雲大路
(再興年時)後陽成天皇慶長十六年
(現今位置)山城國宇治郡山科村

明禪(仁治三、五、十三寂)—顯瑜(イ無)—經海(イ無)—公豪—實禪—實超—
實尊—實救—實圓(イ無)—實修(イ無)—公承(イ無)(文明十七、十一、廿八寂)—明圓—
經海(イ)—實圓(イ)—公承(イ)—忠承(イ實圓)—公意(イ實修)—覺眞(イ忠承)—
觀經(イ無)—行然(イ無)—仙雲(イ無)—成尊(イ無)—仙尊(イ無)—遍豪(イ無)—
公嚴—天海(再興一代)(寛永二十、十、十二寂)—公海(永祿八、十、十五寂 イ十六日)—公辨(享保元、四、十七寂)—童形(イ守澄)(正德三、四、六寂)—公尊(イ公辨)—
公寛(イ無)—公遵—公啓(イ無)—公顯(安永五、七、十寂)—公延—公澄—
舜仁—公詔—慈性—公現—行全—公映—
玄航—

○大念佛寺兼帶 天台宗日嚴院門跡歷代　一に尾坂門跡、小坂殿の稱あり

（創立年時）不詳
（古昔位置）京都綾小路
（現今位置）廢亡

快修（承安二、六、十二寂）——相顯——實覺——亮性、——亮繼、——亮秀——
明實——實昭——公意——覺胤、（天文十、正、廿七寂）——覺永——堯憲——
堯什——堯陳——堯明——堯海（寛政十一、三、廿六寂）——敎彌（明治五、寂）（廢亡）

○天台宗照高院門跡歷代

（創立年時）後陽成天皇元和——
（現今位置）山城國北白川

道澄——興意、（門跡初代）（元和六、十、七寂）——道周、（寛永十二、十一、廿八寂）——道晃、（延寶七、六、十八寂）——道尊、（寶永二、十、一寂）——忠譽、——（廢亡）

○天台宗輪王寺門跡歷代（一に日光門跡と云ふ）

（創立年時）後水尾天皇寛永元年
（現今位置）下野國日光山 東京市上野公園

門跡初代 尊、敬、（一名守澄）延寶八、五、十六寂 ─ 守、全、（一名天眞）元祿三、三、一寂 ─ 公、辨、正德六、四、十七寂 ─ 公、寛、享保二、三、廿四寂 イ元文三、三、十五寂 ─ 公、遵、天明八、、廿五寂 ─ 公、啓、明和九、七、十六寂 ─

公、顯、安永五、七、十寂 ─ イ（公遵再住）─ 公、延、享和三、四、廿七寂 イ五月 ─ 公、澄、文政十一、八寂 ─ 公、猷、天保十四、九、廿五寂 ─ 公、紹、弘化三、十、十九寂 ─ 慈、性、慶應三、十二、七寂 ─

公、現、─（慈亮 ─ 覺潤 ─ 山直 ─ 諶厚 ─ 亮榮）明治三十八、十一、十三寂

諶厚 ─ 諶照

○天台宗滋賀院門跡歷代

（創立年時）不詳
（古昔位置）山城北白川
（再興年時）後陽成天皇元和元年
（現今位置）近江國比叡山

同前

○三論宗東南院門跡歷代

（創立年時）醍醐天皇延喜五年
（古昔位置）大和國奈良東大寺
（現今位置）廢亡

聖寶（延喜九、七、六寂）—聖實（イ無）—延敞（イ）（延長七、二、十三寂）—觀理（天延二、三寂）—法緣（天元三、十寂）—澄心（長和三、二寂）—

濟慶（永承二、十、十四寂）—有慶（延久二、二、十八寂）—慶信（嘉保二、正、九寂）—覺樹（保延五、二、十四寂）—樹朗—聖兼（イ無）（永仁元、九、十一寂）—

仁澄—惠珎（嘉應元、十、十五寂）—顯惠—敏覺—聖慶（承安五、三、六寂）—道慶—

樹慶—勝賢—定範—道深—道快—聖實—

聖兼（永仁元、九、十一寂）—聖忠（文保三、七、十二寂）—聖尋—聖珍—聖助（イ）—觀海—

顯遍（イ）—觀覺—聖眞—珍覺—覺尋—忠嚴—

增孝（正保元、七、廿一寂）—榮嚴（寛文四、閏五、十寂）—俊海（天和三、八、六寂）—慶信（イ以下無）（嘉保二、正、九寂）—良覺—豪因—

慈快—齊慶—有慶—勝賛—聖慶（安元三、三、六寂）—覺樹（保延五、二、十四寂）—

聖忠—惠珍（嘉應元、十、十五寂）—（廢亡）

○法相宗一乘院門跡歷代

（創立年時）圓融天皇
（古昔位置）大和國奈良興福寺
（現今位置）廢亡

定昭（永觀元、三、廿一寂）―定好―眞範―賴信（イ永保三、六、廿一寂）―賴尊―覺信（保安二、五、八寂 イ二月）

玄覺―覺英（保元二、二、十七寂）―覺繼（永萬元寂）―信圓（貞應三、十一、十九寂）―良圓（承久三、正、十四寂）―實信

實靜―信昭―隆信―覺惠―覺昭―良信（文保三、七、十二寂）

良覺（正慶元、八、廿四寂）―信助（延元二、?、十九寂）―覺實（觀應二、五、十八寂）―玄圓―實玄―良玄

良昭（應永九、四、廿三寂）―玄昭―良兼（應永廿一、九、廿三寂）―昭圓―教玄（文明四、十二、十六寂）―信玄

良譽―宣譽（イ）―覺譽（永保五、四、十九寂）―覺慶（慶長一、八、廿八寂）―尊勢（元和二、五、三寂）―尊覺（寛文元、七、廿六寂）

信敬（寶永三、七、六寂 イ七日）―尊昭（延享三、九、十四寂 イ十月九日）（イ尊賞）―童形―尊快（寛政九、十二、九寂）―龜代宮―尊誠（文政五、八、廿四寂）

尊常（天保七、六、廿六寂）―尊應―忠起（明治元、四、廿九復飾）―（廢亡）

○法相宗大乘院門跡歷代

(創立年時)堀河天皇寬治元年
(古昔位置)大和國奈良興福寺
(現今位置)廢亡

隆禪(康和二、七、十四寂)──賴實(圓山)(康治元、十、十寂)──尋範(承安四、四、四、九寂)──信圓(貞應三、十一、十九寂)──實尊(嘉禎二、二、十九寂)──圓實(文永元、十一、廿六寂)──

實信──尊信(弘安六、七、十三寂)──慈信(正中元、十、二寂)──尋尊(文保二、八、廿七寂)──尋尊(曆應二、五、十一寂)──聖信──

孝覺(應安元、九、十九寂)──孝尊(イ教尊)──孝尋(イ孝信)──孝信(イ孝尋)(正長元、四、十八寂)──孝圓(應永十七、三、廿六寂)──經覺(イ無)(イ寬正五、八、廿七寂)──

尋實(イ無)──尋尊(イ無)(永正五、五、二寂)──政覺(イ無)(明應三、七、十六寂 イ三月)──慈尋(イ無)(明應七、四、廿六寂)──經尋(大永六、七、七寂 イ廿八日)──尋圓(天正九、正、十四寂)──

尋憲(天正十三、十一、廿寂)──義尋(慶長十、十、十七寂)──信尊(延寶四、四、三寂)──信雅(イ信賀)(元祿三、八、十九寂)──信覺(元祿十四、五、二寂)──隆尊──

隆遍(安永六、五、八寂)──隆範(文政十二、九、二十寂)──隆實(イ昭尋)(天保三、十二、廿一寂)──政尋──隆溫(明治八、三、十六寂)──尚嘉(明治元、四、廿九復飾)──(廢亡)

○淨土宗知恩院門跡歷代

（創立年時）後水尾天皇寬永
（古昔位置）京都大和大路
（現今位置）廢亡

良純——尊晃（イ尊光）——尊統——尊胤——尊峯——童形——
寬文九、八、一寂　延寶八、正、六寂　正德元、五、十八寂　天保九、十、十九寂　イ元文四、十二、廿一寂　天明八、七、廿一寂

尊超——（廢絕）

○眞宗本願寺門跡歴代

（創立年時）龜山天皇文永九年
（古昔位置）山城國吉水の北
（現今位置）京都市下京區堀河

親鸞 弘長二、十一、廿八寂 ― 如信 正安二、正、四寂 ― 宗昭（覺如） 觀應二、正、十九寂 ― 俊玄（善如） 康應元、二、廿九寂 ― 時藝（綽如） 明德四、四、廿四寂 ― 玄康（巧如） 永享十二、十、十四寂

圓兼（存如） 長祿元、六、十八寂 ― 兼壽（蓮如） 明應八、三、廿五寂 ― 光兼（實如） 門跡初代 大永五、二、二寂 ― 光教（證如） 天文廿三、八、十三寂 ― 光佐（顯如） 文祿元、十一、廿四寂 ― 光昭（准如） 寛永七、十一、卅寂

光圓（良如） 寛文二、九、七寂 ― 光常（寂如） 享保十、七、八寂 ― 光澄（住如） 元文四、八、六寂 ― 光啓（湛如） 寛保元、六、八寂 ― 光闡（法如） 寛政元、十、廿四寂 ― 光輝（文如） 寛政十一、六、十四寂

光攝（本如） 文政九、十二、十二寂 ― 光澤（廣如） 明治四、八、十九寂 ― 光尊（明如） 明治三十六、一、十六寂 ― 光瑞（鏡如）

○眞宗東本願寺門跡歴代

（造營年時）後陽成天皇慶長七年
（現今位置）京都市下京區烏丸七條

親鸞 弘長二、十一、廿八寂 ── 如信 正安二、正、四寂 ── 宗昭覺如 觀應二、正、十九寂 ── 俊玄善如 康應元、二、廿九寂 ── 時藝綽如 明德四、四、廿四寂 ── 玄康行如 永亨十二、十、十四寂

圓兼存如 長祿八、六、十八寂 ── 兼壽蓮如 明應八、三、廿五寂 ── 光兼實如 門跡初代 大永五、二、二寂 ── 光教證如 天文廿三、八、十三寂 ── 光佐顯如 文祿元、十一、廿四寂 ── 光壽教如 慶長十九、十、五寂

光從宣如 万治元、七、廿五寂 ── 光瑛琢如 承應十一、四、十四寂 ── 光晴常如 文祿七、五、廿二寂 ── 光海一如 文祿十三、四、十二 ── 光性眞如 延享元、十、二寂 ── 光超從如 寶曆十、七、十一寂

光遍乘如 寛政四、二、廿二寂 ── 光朗達如 慶應元、十一、四寂 ── 光勝嚴如 明治廿七、一、十五寂 ── 光瑩現如 ── 光演彰如

○眞宗專修寺門跡歷代

（創立年時）後堀河天皇嘉祿元年
（古昔位置）下野國芳賀郡大內庄高田
（現今位置）伊勢國奄藝郡一身田村

親鸞（弘長二、十一、廿八寂）――眞佛（正嘉二、三、八寂）――顯智（建武元、七、四寂）――專空（興國四、十二、十八寂）――定專（正平廿四、七、十一寂）――空佛（天授六、四、十四寂）――

順證（元中七、六、十六寂）――定順（長祿元、正、廿八寂）――定顯（寛正五、五、廿四寂）――眞慧（永正九、十、廿二寂）――眞智（天正十三、七、四寂）――應眞（天文六、五、廿五寂）――

堯慧（慶長十四、正、廿一寂）――堯眞（元和五、九、廿寂）――堯秀（寛文六、十二、十九寂）――堯朝（正保三、八、廿二寂）――堯圓（享保元、七、廿七寂）――圓猷（寶曆三、正、二寂）――

圓遵（文政二、十、廿二寂）――圓祥（天保八、十一、廿一寂）――圓禧（文久元、五、八寂）――堯熙

○眞宗佛光寺門跡歴代

（創立年時）順德天皇建曆元年
（古昔位置）山城國山科
（現今位置）京都市下京區高倉

親鸞 ─ 眞佛 正嘉二、三、八寂 ─ 源海（光信） 弘安元、二、廿三寂 ─ 了海（願明） 元應二、正、廿六寂 ─ 誓海（願念） 正和五、五、廿六寂 ─ 明光（了圓） 正平八、五、十六寂 ─

了源（空性） 延文元、正、八寂 ─ 源鸞（道猷） 貞和三、八 廿八寂 ─ 了明 天授二、正、廿三寂 ─ 唯了（源讃） 應永七、六、廿三寂 ─ 堯經（性曇） 永享十一、十二、四寂 ─ 經實（性善） 明文元、五、十一寂イ十七 ─

堯仁（光教） 文龜三、五、六寂 ─ 堯守（經譽） 永正九、九、十四寂 ─ 堯賢（經光） 永祿十二、八、廿四寂 ─ 經範 天正十九、十一、九寂 ─ 存海 元和四、八、五寂 ─ 經海 明曆二、七、廿八寂 ─

堯導 元祿二、三、廿九寂 ─ 堯庸（隨如） 享保六、七、十七寂 ─ 堯超（寬如） 明治七、六、廿九寂 ─ 堯祐 天明八、三、十七寂 ─ 眞乘 文政六、十、十八寂 ─ 眞導 弘化二、正、十二寂 ─

眞達 慶應二、十、四寂 ─ 家教 ─ 眞意

○眞宗興正寺門跡歷代

（創立年時）後土御門天皇文明十三年
（現今位置）京都市下京區花園町

親鸞—眞佛 正嘉二、三、八寂—源海 光信 弘安元、二、廿三寂—了海 願明 元應二、正、廿六寂—誓海 願念 正和五、五、廿六寂—明光 了圓 正平八、五、十六寂—

了源 空性 延元元、正、八寂—源鸞 道猷 貞和三、八、廿八寂—了明 天授二、正、廿三寂—唯了 源貫 應永七、六、廿二寂—堯經 性曇 永享十二、十二、四寂—經寶 性善 文明元、五、十七寂—

堯仁 光教 文龜三、五、六寂—經豪 蓮教 明應元、五、二寂—經照 唯空 天文廿一、七、十寂—經堯 永祿十一、三、十二寂—佐超 顯尊 慶長二、三、三寂—照玄 准尊 文和八、四、十四寂—

昭超 准秀 万治三、十、十二寂—圓超 良尊 延寶八、十二、九寂—由常 寂眠 文祿二、正、四寂—常勤 寂永 寶曆四、七、十七寂—常順 寂聽 天明七、六、廿九寂—闡揚 法高 寛政七、十、十寂—

堯揚 眞恕 文化九、五、六寂—攝生 本哲 天保三、十、十一寂—攝信 本寂 明治十、十一、十二寂—澤稱 本常

○眞宗錦織寺門跡歴代

（創立年時）四條天皇嘉禎元年
（現今位置）近江國野洲郡中野村

親鸞―如信―宗昭（覺如）―光玄（存覺）元中六、二、廿八寂―慈觀 應永廿六、三、二寂―慈達 永享三、五、七寂―

慈賢 寛正四、六、廿寂―慈光 康正元、六、十寂―慈範 延德元、十一、二寂―慈澄 天正元、二、十寂―慈養 寛永十四、十、廿七寂―慈敎 寛永廿、一、九寂―

慈統 萬治三、二、十寂―良慈 天明七、八、十三寂―常慈 文政二、[illegible]、十三寂―宅慈 弘化三、七、五寂―歡慈 天保十五、六、廿寂―賢慈 明治十八、正、六寂―

淳慈―惇行（孝慈）―

諸宗門跡歴代畢

諸大寺歷代并諸職次第

○華嚴宗東大寺別當次第

（創立年時）聖武天皇天平十七年
（現今位置）大和國奈良市

一 良辨　天平勝寶四、五、一任　寶龜四、閏十一、十六寂
二 良興　天平寶字五、任
三 良惠　天平神護元、任
四 永興　寶龜元、任
五 忠惠　寶龜五、任
六 靈義　寶龜九、任
七 等定　延暦二、任　延暦十九、七、寂
八 永覺　延暦六、任
九 禪雲　延暦十、任
一〇 堪久　延暦十四、任
一一 源海　延暦十八、任
一二 定興　延暦廿二、任　延暦廿四、十二寂
一三 海雲　大同元、任
一四 空海　弘仁元、任　承和二、三、廿一寂
一五 義海　弘安五、任
一六 靜雲　弘仁十、任　弘仁十二、十一寂
一七 永念　弘任十三、任
一八 興雲　天長三、任
一九 寛雲　天長七、任
二〇 心惠　承和元、任
二一 實敏　承和五、任
二二 正進　承和十、任
二三 眞雅　承和十四、任
二四 貞崇　仁壽元、任
二五 濟棟　齊衡二任　延喜五、六、十八寂
二六 眞昶　貞觀元、任
二七 祥勢　貞觀十三、閏八、十四任
二八 玄津　貞觀十七、四、廿八任　仁和元寂
二九 眞昶（再任）　元慶三、二、四、任
三〇 安軌　元慶四、四、九任
三一 祥勢（再任）　元慶五、八、十九任　寛平七、寂
三二 勝皎　寛平二、三、廿三任　寛平二、五、廿二寂
三三 惠畛　寛平二、九、十五任　昌泰三、二、廿六寂
三四 濟棟（再任）　寛平六、六、廿七任　延喜五、六、十八寂
三五 道義　昌泰元、八、八任　延喜五寂
三六 戒撰　延喜五、三、十七任
三七 延惟　延喜九、四、廿七任
三八 智鎧　延喜十二、正、廿一任　延喜八、八、八寂
三九 觀宥　延喜十九、十二、七任　延長六、八、廿八寂
四〇 延敒　延長二、二、三十任　延長七、十二、十三寂
四一 基遍　延長六、二、九任
四二 寛救　延長六、六、十七任
四三 明珍　承平六、十二、廿九任　天暦八、十二、十三寂
四四 寛救（再任）　天慶八任
四五 光智　天暦四、五、廿六任　天元二、三、十寂
四六 法藏　康保二、二、十四任　安和二、二、三寂
四七 觀理　安和二、任　天延二、寂
四八 法縁　天祿二、五、十七任　天元三、十寂

諸大寺歴代并諸職次第（華嚴宗東大寺）

- 四九 湛照　貞元三、九、十七任　寛和三寂
- 五〇 寛朝　永觀二、三、廿三任　長德四、六寂
- 五一 奝然　永延三、七、十任　長和五寂
- 五二 深覺　正暦三、七、八任
- 五三 [illegible]崇　正暦六、七、廿一任
- 五四 深覺（再任）　長德四、十二、十六任
- 五五 雅慶　長保元、八、九任　長和元、十、廿五寂
- 五六 濟信　寛弘二、十二、廿六任　長元三、六、十一寂
- 五七 澄心　寛弘四、四、七任　長和三、二、廿五寂
- 五八 清壽　長和三、二、廿六任　長和五、四、廿七寂
- 五九 深覺（三任）　長和五、五、十六任　長久四、九、十四寂
- 六〇 朝晴　寛仁四、十二、三十任　治安元、四、一寂
- 六一 觀眞　治安三、八、廿二任　長元二、三、十九寂
- 六二 仁海　長元二、六、廿三任　永承元、五、十六寂
- 六三 濟慶　長元六、十二、二十任　永承二、十二、一寂
- 六四 深觀　長暦元、十二、廿九任　永承五、六、十五寂
- 六五 尋清　永承四、十二、廿八任　永承六、六、十八寂
- 六六 有慶　永承六、五、廿三任
- 六七 覺深　天喜三、八、廿七任　治暦元、八、十六寂
- 六八 延幸　康平二、十二、廿四任　治暦二、十二、廿一寂
- 六九 有慶（再任）　治暦三、二、廿八任
- 七〇 信覺　延久三、二、廿二任　應德元、九、十五寂
- 七一 慶信　承保二、正、十四任
- 七二 經範　嘉保二、六、廿二任
- 七三 永觀　康和二、五、廿一任
- 七四 勝覺　長治元、五、廿九任
- 七五 寛助　元永元、四、廿八任　天治二、正、十五寂
- 七六 勝覺（再任）　大治二、七、二十任　大治四、四、一寂
- 七七 定海　大治四、五、廿一任　久安五、四、十二寂
- 七八 寛信　久安三、正、十四任　仁平三、三、七寂
- 七九 寛曉　仁平三、三、十一任　平治元、正、八寂
- 八〇 寛遍　平治元、三、廿八任　永万二、六、三十寂
- 八一 顯惠　永万二、七、五任　安元元、二、廿三寂
- 八二 敏覺　安元元、三、四任　養和元、十、二寂
- 八三 貞喜　治承元、任
- 八四 定遍　嘉永二、任　文治元、十二、十八寂
- 八五 雅寶　文治二、三、七任　文治五、五、十三寂
- 八六 俊證　文治九、五、廿八任
- 八七 勝賢　建久三、十、八任　建久七、六、廿二寂
- 八八 覺成　建久七、七、八任　建久九、十二、二十寂
- 八九 辨曉　建久十、正、十四任　建仁二、七、十一寂
- 九〇 延果　建仁二、七、十三任　元久三、三、十二寂
- 九一 道尊　元久三、三、十七任　安貞二、八、五寂
- 九二 成寶　承元四、四、十七任
- 九三 定範　建保元、十二、六任
- 九四 成寶（再任）　承久四、四、四任　安貞元、十、七寂
- 九五 道尊（再任）　嘉祿二、十二、一任　安永二、八、五寂
- 九六 定豪　安貞二、八、七任　暦仁元、九、廿四寂
- 九七 頼惠　天福、十二、二任　文暦、閏六、廿八寂
- 九八 觀嚴　文暦二、閏六、廿九任　嘉禎二、十一、二寂
- 九九 眞惠　嘉禎二、十一、四任
- 一〇〇 良惠　延應元、二、晦任
- 一〇一 定親　仁治二、正、八任　文永三、九、九寂
- 一〇二 宗性　文應元、七、十七任
- 一〇三 聖基　弘長三任
- 一〇四 定濟　文永四、四、廿二宣　弘安五、十、三寂
- 一〇五 道融　文永十、十二、廿五宣
- 一〇六 聖兼　建治二、十二、廿一宣
- 一〇七 道寶　弘安四、三、五宣　弘安四、八、七寂
- 一〇八 勝信　弘安四、八、四任　弘安十、七、四寂
- 一〇九 聖兼（再任）　弘安六、十二、任　永仁元、九、十一寂
- 一一〇 了遍　弘安十、二、廿三任
- 一一一 聖忠　正應元、九、十任
- 一一二 頼助　正應五、任
- 一一三 聖惠　永仁四、任
- 一一四 信忠　延慶三、三、三任

一一五實海 正和二、十、四任 —— 一一六聖忠 再任 正和五、五、十六任 —— 一一七公曉 文保元、任 —— 一一八教寛 正應二、任 —— 一一九聖尋 元亨二、任 —— 一二〇教寛 再任 元弘元、任 ——

一二一聖珍 建武元、任 —— 一二二良性 建武三、任 —— 一二三定曉 建武三、七、十六宣 —— 一二四實曉 延元元、七、廿二宣 —— 一二五實胤 曆應元、宣 —— 一二六聖珍 再任 康永二、八、十宣 ——

一二七寛胤 觀應元、宣 —— 一二八聖珍 三任 文和元、十、九宣 —— 一二九寛胤 再任 貞治六、六、宣 —— 一三〇尊信 應安六、九、十一宣 —— 一三一經辨 康曆元、十、九宣 —— 一三二觀海 至德二、宣 ——

一三三經辨 再任 應永三、四、十五宣 —— 一三四觀海 再任 應永六、四宣 —— 一三五經辨 三任 應永九、五、四宣 —— 一三六觀覺 應永十四、十二宣 —— 一三七光經 應永廿二、六、十二宣 —— 一三八尊胤 應永卅三、一宣 ——

一三九房宣 正長元、宣 —— 一四〇公顯 永享四、一、十六任 —— 一四一持寶 嘉吉二、三、十四任 —— 一四二珍覺 文安元、七、廿二任 —— 一四三隆寶 文安四、十二、十七任 —— 一四四恒弘 ——

一四五公惠 —— 一四六公深 —— 一四七覺尋 —— 一四八公惠 —— 一四九秀雅 —— 一五〇覺尋 ——

一五一光任 —— 一五二嚴寶 —— 一五三公惠 —— 一五四實譽 —— 一五五秀雅 —— 一五六實眞 ——

一五七公怡 —— 一五八忠嚴 —— 一五九光通 —— 一六〇公怡 —— 一六一實怡 —— 一六二公順 ——

一六三智經 —— 一六四殿息 童形失名 —— 增孝 —— 一六五榮嚴 —— 一六六俊海 —— 一六七濟深 ——

一六八道恕 —— 一六九尊孝 —— 一七〇寛寶 —— 一七一尊深 —— 一七二了尊 —— 一七三尊深 ——

一七四濟範 —— 一七五慈性 —— 一七六增護 —— 一七七存海 —— 一七八英樹 —— 一七九英懷 ——

一八〇晉 圖

諸大寺歷代幷諸職次第（華嚴宗東大寺）

○法相宗興福寺別當次第

（創立年時）齊明天皇三年
（古昔位置）山城國山科
（造營年時）元明天皇和銅三年
（現今位置）大和國奈良市

一　慈訓　天平寶字元、任　寶龜八、寂
二　永嚴　寶龜十、任
三　行賀　延暦十、任　延暦廿二、二、八寂
四　修圓　弘仁三、任　承和元寂
五　隆慧　承和元任
六　壽朗　承和十四、任　貞觀五寂
七　興昭　貞觀元、任　元慶七、正、廿八寂
八　孝忠　元慶元、任　元慶六、五、八寂
九　房忠　仁和四、任　寛平五、七、廿一寂
一〇　仙忠　寛平五任　延喜五、六、四寂
一一　道覺　延喜五任　延喜十五、十二、一寂
一二　基繼　延喜十五任　延長八、二、四寂
一三　平源　延長八任　天暦二、五、二寂
一四　空晴　天暦三、十二、廿六任　天德元、十二、九寂
一五　助精　天德元、十二、十七任　應和元、四、十七寂
一六　延空　應和元、任　康保四、七、七寂
一七　安秀　康保四、七、二十、任　天祿二、四、十六寂
一八　定昭　天祿二任　永觀元、三、廿三寂
一九　眞喜　永觀元任　長保二、二、七寂
二〇　定澄　長保二、八、廿九任　長和四、十一、一寂
二一　林懷　長和五、五、十五任　万壽二、四、四寂
二二　扶公　萬壽二、六、廿七任　長元八、七、七寂
二三　經救　長元八、八、廿七任　寛德元、五、二寂
二四　眞範　長久五、六、廿五任　天喜二、十二、五寂
二五　圓緣　天喜三、正、廿三任　康平三、五、一寂
二六　明懷　康平三、六、十六任　延久、八、二寂
二七　賴信　康平五、八、十四任　承保三、六、廿七寂
二八　公範　承保三、八、廿七任　應德三、十、十九寂
二九　賴尊　寛治三、三、六任　康和二、七、廿五寂
三〇　覺信　康和二、八、三十任　保安二、五、八寂
三一　永緣　保安二、十、廿七任　天治二、四、五寂
三二　玄覺　天治二、四、廿六任
三三　經尋　大治四、十二、十任　天承二、六、三寂
三四　玄覺　再任　天承二、七、八任　保延四、九、廿一寂
三五　隆覺　保延四、十、廿九任
三六　覺譽　保延五、十二、十五任　久安二、十二、十七寂
三七　覺晴　久安三、二、十三任　久安四、五、十七寂
三八　隆覺　再任　久安六、八、十六任　保元三、六、四寂
三九　惠信　保元二、十、六任　承安元、九、廿五寂
四〇　尋範　長寛二、五、十一任　承安四、四、九寂
四一　覺珍　承安三、八、廿四任　承安五、十、廿四寂
四二　教緣　承安五、十一、八任　治承三、四、十二寂
四三　玄緣　治承三、四、廿九寂
四四　信圓　養和元、正、廿九任　貞應三、十一、十九寂
四五　覺憲　文治五、五、廿八任
四六　範玄　建久六、十二、廿八任　正治元、六、六、一寂
四七　雅緣　建久九、十二、二十任
四八　良圓　建永二、正、廿二任
四九　雅緣　再任　承元二、二、十一任
五〇　信憲　建暦二、十二、四任　嘉祿元、九、十一寂
五一　雅緣　三任　建保　十、十二任　同　十二、十九免
五二　良圓　再任　建保六、十二、廿六任　承久二、正、十四寂
五三　雅緣　三任　承久二、正、十六任　貞應二、二、七免
五四　範圓　貞應二、二、九任　嘉祿二、六、廿七免

諸大寺歷代并諸職次第（法相宗興福寺）

五五 實尊 嘉祿二、七、二任 嘉禎二、二、十九寂
五六 實信 寛喜二、三、廿一任 同四、二、廿免
五七 圓玄 寛喜四、三、九任 貞永二、三、廿免
五八 實信 再任 貞永二、三、廿八任 文暦二、三、廿二免
五九 圓實 文暦二、三、四任
六〇 定玄 寛元三、正、二任 同三、十一、廿九免 寶治元、七、十一寂
六一 實信 三任 寛元三、十二、二任 寶治元、十一、廿四免
六二 覺遍 寶治元、十二、廿八任 正嘉二、七、廿九寂
六三 實信 四任 寶治二、閏十二、十八任 建長元、七、十免
六四 圓玄 再任 建長元、八、三十任 同二、正、十免 建長二、十一、廿八寂
六五 公緣 建長二、正、廿一任 同年十、廿八免
六六 實信 五任 建長三、十、廿八任 康元元、十一、十七寂
六七 親緣 建長五、十、十五任
六八 良盛 建長八、二、廿一任
六九 圓實 再任 正嘉二、十、十八任
七〇 尊信 正元元、十二、廿一任 文永三、四、四免
七一 賴圓 文永三、七、二任
七二 實性 文永五、十二、廿八任 同十、四、十六免
七三 信昭 文永十、四、廿一任 建治元、十二、廿九免
七四 性譽 建治二、八任 同三、十二、廿九免
七五 尊信 再任 建治四、正、十七任 弘安六、七、十三寂
七六 信昭 再任 弘安二、十二、十任 同四、三、十九免 弘安九、六、十四寂
七七 慈信 弘安四、四、十一任 同年、十、四免
七八 玄雅 弘安九、十二、十九任 弘安六、十二、八寂
七九 宗懷 弘安六、十、廿八任 同九、十二、十七免 正應二、三、廿五寂
八〇 慈信 再任 弘安九、閏十二、廿五任 正應元、五、廿三免
八一 尊清 正應元、五、廿七任 正應二、九、二寂
八二 實懷 正應二、八、十八任 同四、三、二免 正應四、四、廿四寂
八三 慈信 三任 正應四、三、廿八任
八四 性譽 再任 正應五、六、六任 德治元、十二、廿二寂
八五 慈信 四任 永仁元、八、八任
八六 顯覺 永仁三、六、十一任 永仁五、三、三寂
八七 尊憲 永仁五、三、十七任
八八 實昭 永仁六、六、三任 正安元、五、二免
八九 範憲 正安元、六、二任
九〇 慈信 五任 正安三、十一、四任
九一 經譽 正安三、九、十二任
九二 範憲 再任 乾元元、十一、十五任
九三 覺昭 嘉元元、十一、二任 延慶元、五、十六寂
九四 尋覺 嘉元二、十二、廿九任
九五 宗親 嘉元四、五、九任
九六 範憲 三任 德治二、正、八任
九七 良信 德治二、四、廿三任
九八 公壽 德治三、七、四任 正和四、十、十六寂
九九 尋覺 再任 德治三、十、六任
一〇〇 良信 再任 延慶三、三、十五任
一〇一 信顯 應長二、三、四任 應長三、正、十寂
一〇二 範憲 四任 正和二、七、一任 同三、正、廿八免
一〇三 尋覺 三任 正和四、二、十一任 文保二、八、十五寂
一〇四 實聽 正和四、十二、四任 嘉暦三、正、四寂
一〇五 良信 三任 正和五、十一、廿五任
一〇六 良覺 文保元、十一、十任
一〇七 隆遍 文保二、七、十六任 建武五、閏七、十七寂
一〇八 良覺 再任 文保二、十一、廿九任
一〇九 覺圓 元應元、十二、廿二任
一一〇 良覺 三任 元亨元、二、十六任
一一一 顯親 元亨元、九任
一一二 覺尊 元亨元、十一、六任
一一三 慈信 元亨三、五、九任 正中二、閏正、廿六寂
一一四 良信 四任 元亨三、八、十九任 嘉暦四、三、九寂
一一五 顯昭 嘉暦元、十二、廿七任 嘉暦四、八、十六寂
一一六 範憲 五任 嘉暦二、十一、十八任 暦應二、十二、十七寂
一一七 良覺 四任 嘉暦三、三、三任 同四、八、九免
一一八 覺尊 再任 嘉暦四、三、廿八任 元德元、十二、廿免 暦應二、五、十一寂
一一九 良覺 五任 元德二、三、三任 同三、五、十五免 正慶元、八、十四寂
一二〇 乘圓 正慶元、八、十八任

諸大寺歷代幷諸職次第（法相宗興福寺）

一二一 覺實 元弘三、八、十四任 康永三、二、廿七寂
一二二 覺圓再任 建武三、十二三任 曆應三、六、廿九寂
一二三 覺實再任 建武四、六、十一任
一二四 孝覺 康永二、八、九任 同年十一、廿一免
一二五 覺實三任 貞和二、二、十七任 同年十二、廿六免 觀應二、五、廿一寂
一二六 良曉 貞和三、二、六任
一二七 孝覺再任 貞和三、十、廿四任 貞治五、十、廿四免
一二八 懷雅 貞治五、十二、廿九任 應安八、三、十一免
一二九 孝覺三任 應安元、三、九任 應安元、九、十九寂
一三〇 賴乘 應安元、十、三任
一三一 盛深 應安三、二、十三任
一三二 顯遍 應安三、十二、廿九任
一三三 盛深再任 應安五、二、二任
一三四 實遍 應安六、十二、廿一任
一三五 印覺 永和元、八、十二任 同三、十二、廿四免 永和四、正、十七寂
一三六 隆圓 永和三、十二、廿七任
一三七 實遍再任 康曆元、六、五任
一三八 圓守 康曆二、八、廿七任
一三九 實遍三任 永德元、四任
一四〇 圓守再任 永德二、四、十五任
一四一 孝憲 至德元、十二、廿五任
一四二 覺成 至德三、五、三任
一四三 覺家 至德四、正、廿八任
一四四 圓兼 嘉慶二、二、廿一任
一四五 良昭 嘉慶二、十、十七任 康應二、二、廿八免
一四六 孝尋 康應二、三、十二任
一四七 長懷 明德三、十二、廿三任
一四八 孝尋再任 應永元、十二、廿三任 同二、十一、十八免
一四九 長雅 應永二、十一、十七任 同四、七、廿七免
一五〇 圓兼再任 應永四、七、廿八任
一五一 良昭再任 應永五、六、四任
一五二 實憲 應永七、三、十六任
一五三 孝圓 應永九、九、四任 同十二、十二、十八免
一五四 圓尋 應永十二、十二、十八任 同十四、二、十五免
一五五 隆俊 應永十四、八任 同十五、十、免
一五六 良兼 應永十五、九、卅任
一五七 實昭 應永十八、三、六任
一五八 兼覺 應永十九、十二、廿三任
一五九 光曉 應永廿二、四、廿五任
一六〇 孝俊 應永廿二、十二、廿三任
一六一 空昭 應永廿六、五、十九任
一六二 光雅 應永廿八、二、九任
一六三 隆雅 應永卅二、九、一任 文正元、一、二寂
一六四 乘雅 應永卅二、十二、廿二任 永享元、十、廿一寂
一六五 經覺 應永卅三、二、七任
一六六 昭圓 正長元、三、二十任 永享九、九、三寂
一六七 光曉再任 永享二、二任 永享五、七、四寂
一六八 經覺再任 永享八、二十四任 同七、十二、廿六免
一六九 兼昭 永享七、十二、廿七任 同八、四、五免 永享八、十、三寂
一七〇 覺雅 永享八、九、三任 同九、十二、十三免
一七一 隆秀 永享九、十二、十二任 寬正八、九、廿三寂
一七二 實意 嘉吉元、八、十五任 同二、三免 享德三、十二、八寂
一七三 俊圓 嘉吉二、十六任 同三、七、廿一免 文明十六、九、十二寂
一七四 兼曉 嘉吉七、廿九任 文安三、四免 寶德二、九寂
一七五 貞兼 文安二、四、廿一任 同九、四、廿三免 寶德四、四、寂
一七六 重覺 文安九、四、十一任 寶德二、七、十六寂
一七七 良雅 寶德二、四、廿六任 同三、廿七免 寬正七、二、廿三寂
一七八 空俊 寶德四、四、七任 享德三、三、廿七免 應仁三、正、廿四寂
一七九 敎玄 享德三、二、廿八任 康正二、四、十三免
一八〇 尋尊 康正二、十任 長祿三、三、廿三免
一八一 光憲 長祿三、四任 寬正二、正、十六免 文明十三、三、廿二寂
一八二 經覺三任 寬正二、二、廿二任 同四、六、九免
一八三 兼圓 寬正四、六、十三任 同六、五、三免
一八四 兼雅 寬正六、五、十二任 應仁元、九、四免 文明十三、五寂
一八五 孝祐 應仁元、五、廿二任 同二、二、廿九免
一八六 經覺四任 應仁二、三、三十任 文明五、八、廿七寂

一八七光淳 文明五、八、廿九任 同八、三、三免 ― 一八八任圓 文明八、三、廿四任 ― 一八九尊譽 文明十二、四、廿八任 ― 一九〇政覺 文明十五、二、二任 明應三、三、十六寂 ― 一九一隆憲 明應三、正、十六任 同五、十二、廿七寂 ― 一九二空覺 明應六、正、十八任 ―

一九三光慶 明應九、二、十八任 ― 一九四良譽 永正九、三、任 ― 一九五兼繼 永正十六、六、廿一任 ― 一九六經尋 大永二、三、十一任 大永六、八、十八寂 ― 一九七圓深 大永六、九任 ― 一九八孝緣 享祿二、九、八任 同四、十二、廿七免 ―

一九九實憲 享祿五、正、十七任 ― 二〇〇晃圓 天文四、二、廿三任 ― 二〇一兼繼再任 天文五、十一任 ― 二〇二覺譽 天文六、十一、十三任 ― 二〇三尋圓 天文十八、三、廿九任 ― 二〇四空實 永祿六、閏十二、廿一任 同十一、八、廿免 ―

二〇五光尊 永祿十一、八、廿五任 ― 二〇六實曉 文龜元、十、十一任 ― 二〇七光實 天正元、九、十七任 天正十三、四、十八寂 ― 二〇八兼深 天正十三、十一、廿九任 ― 二〇九尊勢 天正十七、八、十六任 元和三、五、三寂 ― 二一〇光助 元和二、任 元和四、寂 ―

二一一信尊 元和五、三、十任 延寶四、四、三寂 ― 二一二尊覺 元和八、十、廿六任 ― 二一三尊覺再任 承應二、正、二十任 寬文元、七、廿六寂 ― 二一四實雅 寬文四、正、十九任 延寶九、正、九寂 ― 二一五尊賞 正德四、九、廿二任 延享三、十、九寂 ― 二一六隆遍 元文四、三、十九任 安永六、五、八寂 ―

二一七尊快 明和六、十、十任 寬政五、十二、九寂 ― 二一九照尋 文化十一、九、廿六任 ― 二二〇尊應 天保十三、三、二十任 ― 二二一忠起 元治元、三、二十任

○法相宗長谷寺別當次第

（創立年時）元正天皇養老五年
（現今位置）大和國磯城郡初瀨村

一道明——二德道——三賢——四玄隣——五行賀——六安凝——

七永實——八最忠——九勝伐——一〇修圓——一一智照——一二眞日——

一三蓮舟——一四仁斅——一五延爾——一六一和——一七平傳——一八明久——

一九貞授——二〇實算——二一眞命——二二壽勢——二三觀照——二四綱理——

二五明憲——二六快公（治安元、十二任）——二七眞範（永承三、任）——二八明懷（天喜二、任）——二九賴信（延久元任）——三〇俊範（承曆三任）——

三一公範（承保三任）——三二濟尋（寛治元任）——三三隣禪（永長元任）——三四賴實（康和二任）——三五宗覺（康治元任）——三六尋範（久安元任）——

三六宗覺（保元元任）——三七定懷（仁安二任）——三八玄緣（安元二任）——三九尋忠（養和元任）——四〇信圓——四一實尊——

四二圓實——四三尊信——四四慈信——四五尋覺——四六覺尊——四七慈信——

四八聖信——四九覺尊——五〇聖信——五一覺尊——五二孝覺——五三教尊——

五四 教信——五五 孝尋——五六 教圓——五七 經覺——五八 尋尊——五九 政覺——

六〇 尋尊 再任（長谷寺は後眞言宗となる新義眞言宗豐山長谷寺能化歷代を見よ）

○法相宗法隆寺別當次第

（創立年時）推古天皇十五年
（現今位置）大和國生駒郡法隆寺村

一 延鳳（承和中任）
二 長賢（元慶二任）
三 慈願（寛平中任）
四 禎杲（昌泰元任）
五 長延（延喜四任）
六 寛延（延喜中任）
七 觀理（延長中任）
八 法縁（承平二任）
九 湛照（天慶二任）
一〇 法縁（康保元任）
一一 法蓮
一二 實算（天延元任）
一三 長隆（天元二任）
一四 忠教（寛和元任）
一五 仁階（正暦元任）
一六 長耀（長德元任）
一七 觀峯（寛弘二任）
一八 延轄（寛仁四、十二、廿七任）
一九 永照（萬壽二任　同四、六免　萬壽四、十二、一寂）
二〇 仁滿（長元元任）
二一 久圓（長元八、八、廿七任）
二二 親譽（長暦三、十二任）
二三 琳元（永承三、十二、廿二任）
二四 長照（天喜九、十、十五任）
二五 彥祚（治暦三、十二、廿六任）
二六 公範（延久二、二、廿任　承保元、二免）
二七 慶深（承保元、正、十四任）
二八 能算（承保二、九、卅任）
二九 永超（嘉保元、十二、[illegible]任　嘉保二、十二、晦寂）
三〇 延眞（嘉保三、二、十二任　康和二、七寂）
三三 定眞（康和三、正、十四任　天永元、十一、十二寂）
三四 經尋（天仁二、十一、晦任）
三五 覺譽（天承二、九、廿七任）
三六 覺晴（永治元、十一、廿四任　久安三、二、十三免　久安三、三、十七寂）
三七 信慶（久安四、九、廿九任）
三八 覺長（久壽二、五、廿四任）
三九 賀寶（安元二、三、廿一任）
四〇 慧範（治承四、正、十三任）
四一 範玄（建久二、八、晦任）
四二 覺辨（建久六、正、晦任）
四三 成寶（正治元、十二、四任）
四四 兼光（承元元任）
四五 範圓（承元四、三任　貞應二、三、十免）
四六 範信（貞應二、三、四任　嘉祿二、十二、廿四寂）
四七 範圓 再任（嘉祿三、二、廿二任　寛喜三、九、廿四寂）
四八 覺遍（寛喜三、十二、七任）
四九 尊海（建長七、十二、廿七任）
五〇 良盛（正元元、五、廿七任　弘長二、六、十四免）
五一 賴圓（弘長二、八、十六任）
五二 玄雅（文永三、七、廿八任　弘安六、十二、八寂）
五三 乘範（弘安六、十二、十八任）
五四 實懷（弘安七、十任）
五五 印寛（正應二、九任）
五六 性譽（永仁三任）

諸大寺歷代弁諸職次第（法相宗法隆寺）

五七公壽（永仁六任）——五八宗親（嘉元二、三、一任）——五九公壽（嘉元三、十二、十任）——六〇實聰（延慶元、四、三任）——六一隆遍（正和四任）——六二良寬（文保二任）——

六三能寬（元亨三任）——六四顯觀（嘉曆元、十二、三任）——六五實聰（嘉曆二、閏九、二任）——六六憲信（嘉曆三任）——六七能寬（建武二、九、十三任 康永三、二、廿七寂）——六八良曉（康永三、閏二、十五任）——

六九範守（貞和元、十一、四任）——七〇覺懷（貞和三、六、十一任）——七一懷雅（元和元、十、五任）——七二賴乘（應安三、二、廿一任）——七三顯遍（應安五、十二、五任）——七四實遍（永和二、三、晦任）——

七五孝憲（康曆元、六、廿三任）——七六圓守（至徳元、十二、五任）——七七長懷（應永元、十、八任）——七八兼覺（應永十六、四、三任）——七九孝俊（應永廿、九、廿四任）——八〇仁圓（文明十六、十二、十四拜堂）——

八一晃圓（永正十五、七、廿八拜堂）

○天台宗延曆寺座主次第

（創立年時）桓武天皇延曆七年
（現今位置）近江國滋賀郡坂本村

一　義眞　天長元、六、廿一任　天長十、七、四寂
二　圓澄　承和元、三、十六任　承和三、十、廿六寂
（光定）　天安二、八、十四寂
三　圓仁　仁壽四、四、任　貞觀六、正、十四寂
四　安惠　貞觀六、二、十六任　貞觀十、四、三寂
五　圓珍　貞觀十、六、三宣　寬平三、十、廿九寂
六　惟首　寬平四、五、廿二宣　寬平五、二、廿九寂
七　猷憲　寬平五、三、廿五宣　寬平六、八、廿二寂
八　康濟　寬平六、九、十二宣　昌泰二、二、八寂
九　長意　昌泰二、十、八宣　延喜六、七、三寂
一〇　增命　延喜六、十、十七宣　延長五、十一、十一寂
一一　良勇　延喜廿二、八、五宣　延長元、三、六寂
一二　玄鑒　延長元、七、廿二宣　延長四、二、十一寂
一三　尊意　延長四、五、十一宣　天慶三、二、廿四寂
一四　義海　天慶三、三、廿五宣　天慶九、五、十寂
一五　延昌　天慶九、十二、卅宣　應和四、正、十五寂
一六　鎭朝　康保元、三、九宣　康保元、十、五寂
一七　喜慶　康保二、二、十五宣　康保三、七、十七寂
一八　良源　康保三、八、廿七宣　永觀三、正、三寂
一九　尋禪　寬和元、二、廿七宣　永祚二、二、十七寂
二〇　餘慶　永祚元、九、廿九宣　正曆二、二、十八寂
二一　陽生　永祚元、十二、廿七宣　正曆元、十、廿二寂
二二　暹賀　正曆元、十二、二十宣　長德四、八、一寂
二三　覺慶　長德四、十、廿九宣　長和三、十一、廿三寂
二四　慶圓　長和三、十二、廿五宣　寬仁九、三寂
二五　明救　寬仁三、十、二十宣　寬仁四、七、五寂
二六　院源　寬仁四、七、十七宣　万壽五、五、廿四寂
二七　慶命　長元元、六、十九宣　長曆二、九、七寂
二八　教圓　長曆三、三、十二宣　永承二、六、十寂
二九　明尊　永承三、八、十一宣　康平六、六、廿六寂
三〇　源心　永承三、八、廿二宣　天喜元、十、十一寂
三一　源泉　天喜元、十、廿六宣　天喜三、三、十八寂
三二　明快　天喜元、十、廿九宣　延久二、三、十八寂
三三　勝範　延久二、五、九宣　承保四、正、廿八寂
三四　覺圓　承保四、五、五宣　承德二、四、十六寂
三五　覺尋　承保四、二、七宣　永保元、十、一寂
三六　良眞　永保元、十、廿五宣　嘉保三、五、十三寂
三七　仁覺　寬治七、九、十一宣　康和四、三、廿八寂
三八　慶朝　康和四、五、十三宣　嘉承二、九、廿四寂
三九　增譽　長治二、閏二、十四宣　永久四、正、廿九寂
四〇　仁源　長治二、潤二、十七宣　天仁二、三、九寂
四一　賢暹　天仁二、三、卅宣　天永三、十二、廿三寂
四二　仁豪　天仁元、五、十宣　保安二、十、四寂
四三　寬慶　保安二、十、十六宣　保安四、十一、三寂
四四　行尊　保安四、十二、十八宣　長承四、二、五寂
四五　仁實　保安四、十二、三十宣　天永元、六、八寂
四六　忠尋　大治五、十二、廿九宣　保延四、十、十四寂
四七　覺猷　保延四、十、廿七宣　保延六、九、十五寂
四八　行玄　保延四、十、廿九宣　久壽二、十一、五寂
四九　最雲　久壽二、三、三十宣　應保二、二、十六寂
五〇　覺忠　應保二、潤二、一宣　治承元、十、十六寂
五一　重愉　應保二、潤二、三宣　長寬二、正、三寂
五二　快修　應保二、五、三十宣
五三　俊圓　長寬二、潤十、十三宣　仁安元、八、廿八寂

諸大寺歷代幷諸職次第（天台宗延曆寺）

- 五四 快修 再任 仁安元、[illegible]、宣　承安二、六、十一寂
- 五五 明雲 仁安二、二、十五宣
- 五六 覺快 安元三、[illegible]、十一宣　養和元、十一、[illegible]寂
- 五七 明雲 再任 治承三、十一、十六宣　壽永二、十一、十九寂
- 五八 俊堯 壽永二、十二、十宣　文治二、三、廿九寂
- 五九 全玄 壽永三、二、三宣　建久三、十二、十三寂
- 六〇 公顯 文治[illegible]宣　建久四、九、十七寂
- 六一 顯眞 文治六、三、七宣　建久三、十一、十四寂
- 六二 慈圓 建久三、十一、廿九宣
- 六三 承仁 建久七、十一、三十宣　建久八、四、廿十寂
- 六四 辨雅 建久八、五、廿一宣　正治三、二、十七寂
- 六五 慈圓 再任 建仁元、二、十八宣
- 六六 實全 建仁二、七、十三宣　承久三、九、十寂
- 六七 眞性 建仁三、八、廿八宣　寬喜二、六、十四寂
- 六八 承圓 元久二、十二、十三宣
- 六九 慈圓 三任 建曆二、正、十六宣
- 七〇 公圓 建曆三、正、十一宣　嘉禎元、九、二十寂
- 七一 慈圓 四任 建保二、十二、十九宣　嘉祿元、九、廿五寂
- 七二 承圓 建保二、[illegible]、十二宣　嘉禎二、十、十六寂
- 七三 圓基 承久三、八、廿七宣　嘉禎四、八、廿三寂
- 七四 尊性 安貞元、十二、廿七宣
- 七五 良快 寬喜元、四、十三宣　仁治三、十二、十七寂
- 七六 尊性 再任 貞永元、八、廿五宣　延應元、九、三寂
- 七七 慈源 嘉禎四、三、一宣
- 七八 慈賢 仁治元、八、十一宣　仁治二、三、三寂
- 七九 慈源 再任 仁治二、正、十七宣　建長七、七、十八寂
- 八〇 道覺 寶治元、[illegible]、廿五宣　建長二、正、十一寂
- 八一 尊覺 建長元、九、九任　文永元、十、廿七寂
- 八二 尊助 再任 正元元、三、廿六任
- 八三 最仁 弘長三、八、十六任
- 八四 澄覺 文永二、三、十八任
- 八五 尊助 再任 文永四、七、十五任
- 八六 慈禪 文永五、十二、廿七任　建治二、八、七寂
- 八七 澄覺 再任 文永[illegible]、十一任　正應[illegible]、四、廿八寂
- 八八 道玄 建治二、十二、廿五任　弘安九、四、一免
- 八九 公豪 弘安元、四、二任　同九、免
- 九〇 最源 弘安九、三、二任　同年十二、廿二免
- 九一 尊助 三任 弘安七、九、廿七任　同九、十一、十四免
- 九二 最助 弘安八、十一、廿九任　同十一、三、廿一免　永仁元、二、四寂
- 九三 慈實 弘安十一、三、廿七任　正應二、二、九免　正安二、五、九寂
- 九四 慈助 正應二、四、十三任　同三、四、十五免
- 九五 尊助 四任 正應三、二、廿七任　同年十、廿八免　正應[illegible]、十[illegible]、寂
- 九六 慈助 再任 正應三、十二、廿七任　永仁三、七、廿七寂
- 九七 源惠 正應五、八、四任
- 九八 慈基 正應六、五、九任　永仁四、十二、免
- 九九 尊教 永仁四、十二、廿一任
- 一〇〇 良助 永仁七、四、廿三任　正安四、免
- 一〇一 道潤 正安四、[illegible]、十七任
- 一〇二 道玄 再任 乾元二、[illegible]、廿二任　嘉元二、十一、九免　嘉元三、十一、十三寂
- 一〇三 覺雲 嘉元三、四、四任　慶長元、[illegible]、三免
- 一〇四 公什 正和二、正、十二任
- 一〇五 慈道 正和三、[illegible]、一任　同九、六、十六免
- 一〇六 仁澄 正和[illegible]、廿九任　同六、九、免
- 一〇七 覺雲 再任 文保[illegible]、十二、十二任　[illegible]二免
- 一〇八 慈勝 文保二、十二、十四任
- 一〇九 親源 元亨二、三、廿三任
- 一一〇 澄助 元亨三、十一、一任　同四、免
- 一一一 慈道 元亨四、[illegible]、一任　正中二、五、七免
- 一一二 性守 正中二、[illegible]任　正中二、九、廿[illegible]寂
- 一一三 承覺 正中[illegible]、廿二任　同[illegible]、二免
- 一一四 承鎭 正中三、二、廿二任
- 一一五 慈道 再任 嘉曆[illegible]、四、廿[illegible]任　同三、十二、二免
- 一一六 尊雲 嘉曆三、[illegible]二、六任　同四、二免
- 一一七 桓守 嘉曆四、二、十一任　同年、十、八免
- 一一八 尊雲 再任 元德元、十二、十四任　同二、四、免
- 一一九 慈嚴 元德二、四、廿三任　同年、十一免

諸大寺歷代幷諸職次第（天台宗延曆寺）

一七九 尊敬　明曆元、十八任　同年十、十免　延寶八、五、廿六寂
一八〇 慈胤（三）　明曆元、十二、廿五任　萬治元、十、十免　元　十二、十二、二寂
一八一 堯恕　寬文三、十、十任　同九、九、十免
一八二 尊證　寬文九、九、十三任　同十三、四、十免
一八三 盛胤　寬文十三、四、十任　延寶四、二、二免
一八四 堯恕（再）　延寶四、二、四任　同年八、六免
一八五 尊證（再）　延寶四、八、十任　同五、五免　元祿七、十、十五寂
一八六 盛胤　延寶五、五、七任　延寶八、六、廿八寂
一八七 堯恕（三）　延寶七、十、二任　元祿六、八、免　元祿八、四、十六寂
一八八 公辨　元祿六、八、九任　同年、十、十四免
一八九 堯延　元祿六、十、十八任　寶永四、六免
一九〇 公辨（再）　寶永四、六、三任　同年十一、十六免
一九一 堯延（再）　寶永四、十一、十九任　同七、六、廿免
一九二 良應　寶永七、六、廿一任　同年、六、廿二免
一九三 堯延（三）　寶永七、六、廿三任　同八、三免　享保三、十一、廿九寂
一九四 道仁　寶永八、三、廿二任　正德四、十免
一九五 尊祐　正德四、十、八任　享保三、六、十二免
一九六 公寬　享保三、六、十三任　同年、十、廿二免
一九七 道仁（再）　享保三、十、廿六任　同七、十二免
一九八 尊祐（再）　享保七、十二、十九任　同十六、四、廿免
一九九 公寬（再）　享保十六、五、廿七任　同年十、九免　元文三、三、十九寂
二〇〇 道仁（三）　享保十六、十、九任　元文元、六、廿六免　享保十八、五、十九寂
二〇一 尊祐（三）　享保十八、六、十三任　元文元、六、廿六免
二〇二 堯恭　元文元、七、廿四任　延享二、四、八免
二〇三 公遵　延享二、九、廿六任　同年、九、十三免
二〇四 尊祐（四）　延享二、九、十六任　同四、十、五免　延享四、九、十六寂
二〇五 堯恭（再）　延享四、十、十三任　寬延二、十、朔免
二〇六 公遵（再）　寬延二、四、四任　同十二、七、廿六免　天明八、二、廿一寂
二〇七 堯恭（三）　寬延三、三、十任　同十二、閏四、廿一免
二〇八 公啓　寶曆十二、八、十八任　同年、十一免
二〇九 堯恭（四）　寶曆十二、十一、十五任　同十四、九、四免　寶曆十四、十二、五寂
二一〇 尊眞　明和元、閏十二、十六任　同八、四、廿二免
二一一 常仁　明和八、四、廿二任同日免　明和九、四、廿三寂
二一二 尊眞（再）　明和九、四、廿八任　天明六、五、二免
二一三 公延　天明六、五、八任　同年八、免　享和三、五、廿七寂
二一四 眞仁　天明六、八、二十任　寬政七、十一免　文化三、八、八寂
二一五 尊眞（三）　寬政七、十一、廿七任　同十二、五、十免
二一六 公澄　寬政十二、五、十任　同年、八、四免　文政十一、十一、十二寂
二一七 尊眞（四）　寬政十二、八、十四任　文化七、四、廿八免　文政七、三、十八寂
二一八 承眞　文化七、四、廿八任　同十、五、免
二一九 公猷　文化十、五、七任　同年、八、五免
二二〇 承眞（再）　文化十、八、廿六任　文政十一、十一、晦免
二二一 公猷（再）　文政十一、十二、三十任　同十二、正、十六免
二二二 承眞（三）　文政十二、正、十六任　同年十二、十三免
二二三 尊寶　文政十二、十二、十六任　天保三、九、六寂
二二四 承眞（三）　天保三、十、十五任　天保十二、正、十二寂
二二五 教仁　天保十二、四、十五任　同十三、九、廿九免
二二六 舜仁　天保十三、九、廿九任　同年、十一、十八免
二二七 教仁（再）　天保十三、十二、四任　嘉永五、十二免　嘉永五、十二、九寂
二二八 尊融　嘉永五、十二、十四任　安政六、八、廿免
二二九 昌仁　安政六、九、廿七任　文久二、九、二免
二三〇 慈性　文久二、九、廿七任　同年、閏八、四免
二三一 昌仁　文久二、八、廿四任
二三二 豪海
二三三 光映　明治八、四任　同十二、七、十九免　同廿八、八、十五寂
二三四 覺寶
二三五 寶源
二三六 寂順　明治廿九、任　同卅七、七、免　同卅八、十、廿九寂
二三七 孝暢
二三八 玄航
二三九 皎然
二四〇 孝成
二四一 玄深
二四二 源應
二四三 觀澄
二四四 智光

○天台宗園城寺長吏次第

（創立年時）天智天皇七年（カ）
（再興年時）清和天皇貞觀元年
（現今位置）近江國滋賀郡大津町

一 圓珍 貞觀元任 寛平三、十、廿九寂
二 惟首 寛平三、十任 寛平五、二、廿五寂
三 猷憲 寛平五、二任 寛平六、八、廿二寂
四 康濟 寛平六、八任 昌泰二、二、八寂
五 增命 昌泰二任、延喜廿二再任 延長五、十一、十一寂
六 良勇 延喜廿一任 延長元、三、六寂
七 明仙 延喜四任
八 勢祐 延長五、任
九 敬一 天曆三、十、二十二寂
一〇 運昭 イ無
一一 房算 應和元、三任 康保四寂
一二 行譽 安和元任 天祿元、四、七寂
一三 禪藝 天祿元任
一四 餘慶 天元二任 正曆二、閏二、九寂
一五 勝算 正曆二任、長德二免、寛弘五再任 寛弘八、八、二十二寂
一六 觀脩 長德二任、同四再任、寛弘五、七、八寂
一七 穆算 長德四、十任 長德四、十二、十六寂
一八 明肇 寛弘八任、長和二、七、二寂
一九 文慶 長和三任、寛仁三再任 永承元、七、[illegible]寂
二〇 教靜 寛仁元任 寛仁二、八、二十五寂
二一 心譽 長元元任 長元二、八、十二寂
二二 明尊 長元三、八任、長曆三、再任 康平六、六、十二寂
二三 永圓 長元四任 長久[illegible]、二十二寂
二四 覺圓 康平六任 承德二、[illegible]、六寂
二五 隆明 承德二、四任 長治元、九、十六寂
二六 增譽 康和二、[illegible]任 永久四、[illegible]、十九寂
二七 行尊 永久四、正任 長承四元、二、四寂
二八 覺猷 保延元、冬任 保延六、九、十五寂
二九 覺宗 保延六、任 仁平二、九、二十二寂
三〇 行慶 仁平二任 永萬元、七、十六寂
三一 道惠 永曆元任 仁安三、四、二十五寂
三二 覺忠 仁安三任 承元元、十、十六寂
三三 覺讃 治承元任 治承四、九、[illegible]寂
三四 房覺 治承四任、養和[illegible]、正免 壽永[illegible]、十二再任 元曆元、六、二十六寂
三五 公顯 康[illegible]元任 建久四、九、十七寂
三六 實慶 文治元任、元久元再任 建永[illegible]、[illegible]任 承元三、十一、廿八寂
三七 定憲 建久元任 建久七、四、十八寂
三八 靜憲 建久七任 建仁三、十、三寂
三九 眞圓 正治二任 元久元、五、一寂
四〇 公胤 元久二任、承元三、再任 建保四、六、廿寂
四一 行意 建保四任 建保五、十一、二十九寂
四二 覺仁 建保六任 文永三、四、十二寂
四三 覺實 承久三任 寛喜四、三、二十一寂
四四 圓忠 嘉祿二任 文曆元、十一、八寂
四五 覺朝 安貞元任 寛喜二、十、一寂
四六 良尊 寛喜三任 寛元四、三、十二寂
四七 圓淨 貞永元任 建長八、四、十九寂
四八 靜忠 嘉禎元任 弘長三、十、二寂
四九 道慶 嘉禎二任 弘安[illegible]、二十八寂
五〇 重圓 延應元任 建長元、[illegible]、二十二寂
五一 覺惠 仁治元任
五二 公緣 仁治二、十二任 建長元、十[illegible]、二十九寂
五三 道智 仁治三、[illegible]任 文永六、[illegible]寂
五四 仁助 仁治三任 弘長二、八、十一寂

五五道仁（建長三任　弘長三、正、十四寂）——五六靜仁（建長六任　永仁四、四、十寂）——五七圓助（正嘉元任　弘安九、八、十二寂）——五八隆辨（文永四任、建武初再任　弘安六、八、十五寂）——五九覺助（文永五任　建武三、九、十七寂）——六〇行昭（弘安中任　乾元二、正、五寂）——

六一增忠（弘安八、十二、七任　永仁六、正、二十四寂）——六二性覺（弘安十、十二、廿三任、正應四再任、同五、三任　永仁五、九、二十六寂）——六三忠助（正應二、六任）——六四行覺（正應二、　任　承仁六寂）——六五靜譽（正應四、九、八任　永仁四、七、五寂）——六六淨雅（文保三、四、七寂）——

六七道瑜（延慶二、七、二寂）——六八順助（元亨二、十、十四寂）——六九道珍（延慶二、八、十二寂）——七〇惠助（嘉曆三、九、九寂）——七一道昭（文和四、十二、二十二寂）——七二尊悟（元應中任、元亨四再任　建武三、三任　延文四、七、廿九寂）——

七三增基（元亨四、正、八任　同年六、五免　觀應三、七、二十一寂）——七四尊珍（嘉曆元任　元德初再任）——七五顯辨（嘉曆二、九、廿四任　元德三、四、十二寂）——七六房朝（元德二任）——七七增覺（元德中任　康永二、九、二寂）——七八良慶（元德二任）——

七九覺譽（曆應五、正任、文和四再任、貞治四、三任、永德二、五、廿八寂）——八〇長助（康永三、三、八任、寬應元再任、延文五、三任、延文六、二、八寂）——八一增仁（康永四任　貞和四再任　應安元、六、十一寂）——八二靜深（貞和二、九、廿三任）——八三仁譽（康安元任）——八四良瑜（貞治二、三、六任、應安三、十二、廿七再任、明德元、十、廿六、三任　應永四、八、二十一寂）——

八五覺信（貞治六、十二、七任）——八六定尊（應安二、正、廿六任）——八七道基（應安五、四、五任　明德四、再任）——八八定伊（永和元、任）——八九道尊（永和三、九、十任）——九〇行助（康曆元、三、廿七任）——

九一覺增（永德三、六任）——九二道淳（至德元、十二、廿一任）——九三定助（康應元、五、廿任）——九四尊綱（應永四任）——九五道意（應永六任）——九六增珍（應永十五、九任）——

九七滿慶（應永十五任）——九八增詮（應永廿、十二、廿七寂）——九九行雅——一〇〇尊雅——一〇一義命——一〇二教助——

一〇三道興——一〇四道應——一〇五道增——一〇六道澄——一〇七興意——一〇八道晃——

一〇九道周——一一〇常尊——一一一義尊——一一二道寬——一一三道祐——一一四義延——

一一五道承——一一六忠譽——一一七義周——一一八祐常——一一九盈仁——一二〇義海——

諸大寺歷代幷諸職次第（天台宗園城寺）

一三一雄仁──一三二祐玉──一三三顯定──一三四敬圓

○眞言宗東寺長者次第

（創立年時）桓武天皇延暦五年
（現今位置）京都市下京區九條

一 空海　弘仁十四、正、十九賜寺　承和二、三、廿一寂
二 實惠　承和三、五、十任　承和十四、十二、十二寂
三 眞濟　承和十四、十一任　貞觀二、二、廿六寂
四 眞雅　貞觀三、任　元慶三、正、三寂
五 宗叡　元慶三、正任　元慶八、三、廿六寂
六 眞然　元慶八、三任　寛平三、九、十一寂
七 益信　寛平[illegible]任　延喜六、三、七寂
八 聖寶　延喜[illegible]、九、六免　延[illegible]九[illegible]寂
九 觀賢　延喜九、[illegible]任　延[illegible]三、[illegible]、十一寂
一〇 延敒　延長三、六、十七任　延長六、十二、十三寂
一一 觀宿　延長三、八、十任　延長六、十二、十九寂
一二 濟高　延長六、十二、廿七任　天慶五、十一、廿五寂
一三 貞崇　天慶五、十一任　天慶七、七、廿二寂
一四 [illegible]舜　天慶七、七任　天暦三、十二、三寂
一五 寛空　天暦三、十二任　天祿二免　天祿三、二、六寂
一六 救世　天祿二任　天延元寂
一七 寛靜　天延元任　天元二、十、十一寂
一八 定照　天元二、十任　同四、八、十四免　永觀元、三、廿一寂
一九 寛朝　天元四、八、三十任　長德四、六、十二寂
二〇 雅慶　長德四、[illegible]任　長和元、十、廿五寂
二一 深覺　長和元、[illegible]任　同二、二免
二二 濟信　長和二、正、十四任　長元三、六、十一寂
二三 深覺　治安三、十二、廿九任　長元四、十二、廿六免
二四 仁海　長元四、十二、廿六任
二五 深覺　長元六、十二、廿二任　長久四、九、十四寂
二六 仁海　長久四、九任　永承元、五、十六寂
二七 深觀　永承元、六任　永承五、六、十五寂
二八 覺源　永承五、十、廿四任　治暦元、八、十八寂
二九 長信　治暦元、八任　延久四、九、三十寂
三〇 成尊　延久四、十任　承保元、正、七寂
三一 良深　承保元、十二、廿七任　承暦元、八、廿四寂
三二 信覺　承保二、正、十四任　應德元、九、十五寂
三三 定賢　應德元、九任　康和二、十、六寂
三四 賴觀　康和二、[illegible]、廿一任　同三、四、廿五免　康和四、四、六寂
三五 經範　康和三、四、廿五任　長治元、三、十七寂
三六 範俊　長治元、五、十九任　天永二、四、廿四寂
三七 寛助　永久三、四任　天治二、正、十五寂
三八 勝覺　天治元、正、十九任　大治四、四、一寂
三九 信證　大治四、四任　長承二、十、五免　康治元、四、八寂
四〇 定海　長承二、十、五任　久安元、十、廿九免　久安五、四寂
四一 寛信　久安元、十、十九任　同六、二、七免　仁平三、三、十七寂
四二 寛遍　久安六、二、七任　仁安元、六、三十寂
四三 禎喜　仁安元、七、三任　壽永二、十、一寂
四四 定遍　壽永二、十、二任　文治元、十二、十八寂
四五 俊證　文治元、十二、十九任　建久三、三、十七寂
四六 覺成　建久三、三、廿任　建久九、十、廿一寂
四七 延果　建久九、十、廿一任　建永元、三、十二寂
四八 印性　建永元、三、十[illegible]任　承元元、七、三寂
四九 道尊　承元元、七、五任　承久二、十二、廿九免
五〇 成寶　承久三、正、一任　同年、十一、七免　安貞元、十二、十七寂
五一 道尊（再任）　承久三、十一、七任　安貞二、八、五寂
五二 親嚴　安貞二、八任　嘉禎二、十一、二寂
五三 定豪　嘉禎二、十二、廿四任　暦仁元、八、廿四寂
五四 眞惠　暦仁元、九、十五任　延應元、正、廿一寂

諸大寺歷代幷諸職次第（眞言宗東寺）

- 五五 覺敎　延應元、十一、廿一任　仁治二、九免　仁治三、正、八寂
- 五六 良惠　仁治元、九、十六任　同三、二、廿三免
- 五七 嚴海　仁治三、二、二十任　寛元元、十二、十二免　建長三、四、廿五寂
- 五八 良惠 再任　寛元元、六、二十任　寶治二、三、三寂
- 五九 實賢　寶治二、十二、廿九任　建長元、九、四寂
- 六〇 良惠 三任　建長元、九、六任　建長三、五、廿八免　文永三、十一、廿四寂
- 六一 道乘　建長三、五、三十任　正嘉二、二、二免　文永十、十二、十一寂
- 六二 房圓　正嘉二、二、三任　文應元、五、五免
- 六三 實瑜　文應元、五、十八任　弘長元、七、廿二免　文永元、七、六寂
- 六四 定親　弘長元、十、廿二任　同二、十二、廿六免　文永三、九、九寂
- 六五 道勝　弘長二、十二、廿六任　文永三、五免　文永十、七、十三寂
- 六六 隆澄　文永三、五、廿八任　同年、十一免
- 六七 道融　文永三、十二、五任　弘安四、閏七、十五寂
- 六八 道寶　建治三、正、十一任　弘安元、七、四免　弘安四、八、七寂
- 六九 奝助　弘安元、七、六任　同三、八、十免　正應三、十二、廿六寂
- 七〇 定濟　弘安三、八、六任　弘安五、十、三寂
- 七一 勝信　弘安五、十、十四任　同七、四、廿免　弘安十、七、四寂
- 七二 道耀　弘安七、四、廿二任　同十一、十四免　嘉元二、十二、二寂
- 七三 了遍　弘安八、十二、十六任　同十、八、廿九免　嘉元三寂
- 七四 守助　弘安十、九、三任　正應二、十一、廿二免　永仁二、正、五寂
- 七五 靜嚴　正應二、十二、六任　同五、正、五免　永仁七、正、七寂
- 七六 實寶　正應五、十二、三任　永仁二、二免
- 七七 禪助　永仁二、二、七任　同年、七免
- 七八 勝惠　永仁二、十一、廿一任　同五、三、廿四免　永仁七、三、八寂
- 七九 守惠　永仁五、三、廿六任　同六、五、廿免
- 八〇 守譽　永仁六、五、廿五任　同年十、廿九免
- 八一 深快　永仁六、十一、三任　正安元、正、四免
- 八二 守瑜　正安元、任　同二、二、七免
- 八三 守譽　正安二、二、八任　同年閏七、廿七免　嘉元、五、十九寂
- 八四 長遍　正安二、四、廿二任　同年、八免
- 八五 信忠　正安二、八、廿八任　嘉元三、二、十七免　元亨二、十、十九寂
- 八六 嚴家　嘉元元、二、廿四任　德治元、八、十五免　延慶元、十一、三寂
- 八七 親玄　德治元、十二、十八任　同二、十二、三免　元亨二、二、十七寂
- 八八 禪助 再任　德治二、十二、三任　延慶元、三、十六免　元德二、二、十二寂
- 八九 聖忠　延慶元、三、廿一任　同三、七、三免
- 九〇 成惠　延慶三、七、四任　應長元、十二、十免　正和四、十二、廿三寂
- 九一 定助　應長元、十二、十任　正和二、正、二免　文德元、四、十三寂
- 九二 能助　正和二、正、六任　元亨四、五、二寂
- 九三 實海　正和四、十、十任　文保元、四、一免　文保二、五、七寂
- 九四 顯譽　文保元、四、三任　同二、十二、廿九免　正中二、九、七寂
- 九五 公紹　元德元任　同八、正、六免　元亨元、八、十寂
- 九六 禪助　元應元、八、十九任　同二、七免
- 九七 道順　元應二、正、廿二任　元亨元、十二、廿八寂
- 九八 實弘　元亨元、十二、廿五任　同二、十二、二十九免
- 九九 弘舜　元亨二、十二、廿九任　同三、十一、廿免
- 一〇〇 教寬　元亨三、十一、三十任　正中二、八、廿二免
- 一〇一 有助　正中二、十一、廿五任　嘉曆元、二、九免
- 一〇二 道意　嘉曆元、二、九任　同年、八、廿八任
- 一〇三 教寬 再任　嘉曆元、八、廿九任
- 一〇四 聖尋　嘉曆三任
- 一〇五 賢助　嘉曆二、十二、晦任
- 一〇六 聖尋　嘉曆四、三、八任
- 一〇七 道意　元德三任
- 一〇八 益守　元弘二、正、二任
- 一〇九 成助　元弘二、十二、廿三任　正慶二免
- 一一〇 道意　正慶二任
- 一一一 益守　元弘四、十二、卅任
- 一一二 弘眞　建武二、三、十九任
- 一一三 成助 再任　建武三、九、十六任
- 一一四 賢俊　曆應三、十一、廿六任

諸大寺歷代幷諸職次第（眞言宗東寺）

一一五　經嚴　再任　康永元、二、十二任
一一六　賢俊　再任　康永元、三、十九任
一一七　榮海　康永四、正、四任
一一八　賢俊　三任　康永四、十一、廿九任
一一九　隆舜　觀應元、十一、廿七任　文和二、正、十四寂
一二〇　弘眞　再任　觀應二、十一任

一二一　道意　四任　文和二任
一二二　聖珍　文和三、九、廿八任
一二三　定憲　延文元、六、廿八任　同四、四、十免
一二四　覺雅　延文四、四、十二任
一二五　光濟　延文五、十二、廿九任
一二六　定憲　再任　貞治六、五任

一二七　光濟　再任　應安〃任
一二八　定憲　再任　應安七、四任
一二九　光濟　三任　永和元、二、十任　康曆元、閏四、廿二寂
一三〇　宗助　康曆元、六任　至德元、十二免
〔四〕一三一　道快　至德元、十二、廿九任
一三二　宗助　再任　明德元任

一三三　俊尊　應永二、十二、三十任
一三四　滿濟　應永十六、八、三任
一三五　守融　應永十八、四、五任　同十九、正、十六免
一三六　隆源　應永十九、二、八任
一三七　守融　再任　應永二十、六、十二任
一三八　禪守　應永廿一、五、三任

一三九　祐嚴　應永廿二、二、十任
一四〇　超濟　應永廿三、九、廿二任　應永廿三、十、三寂
一四一　滿濟　應永廿三、十、九任
一四二　光超　應永廿八任
一四三　房教　應永廿八、四、十任
一四四　義昭　應永廿九、八任

一四五　寶順　應永廿九、十二、廿六任
一四六　房教　再任　應永卅一、六、二任
一四七　義賢　應永卅三、十二、五任
一四八　禪信　應永卅三、十二任
一四九　義昭　再任　應永卅四、三、二十任
一五〇　祐嚴　再任　正長卅五、五、六任

一五一　成基　永享二、十二、十七任
一五二　宗觀　永享三、十二、八任
一五三　持圓　永享四、十二、十八任
一五四　禪信　再任　永享五、十二、廿七任
一五五　賢快　永享六、六、廿三任
一五六　禪信　三任　永享六、七、十三任

一五七　弘繼　永享六、十二、十一任
一五八　成淳　永享十、十一、十二任
一五九　祐嚴　三任　永享十一、十二、十三任
一六〇　定意　嘉吉元、十、十一任
一六一　守遍　文安五、十二、十八任
一六二　了助　寶德二、十二、十七任

一六三　賢性　享德二、八、九任
一六四　禪信　四任　長祿元、十、十六任　同二、十二、九免
一六五　禪信　五任　長祿四、四、十九任
一六六　宗濟　寬正元、十、八任
一六七　義賢　寬正四、十、廿九任　應仁二、十、一寂
一六八　定昭　寬正六、八、廿八任

一六九　嚴寶　文正元、四、十一任
一七〇　隆濟　文明元、六、二任
一七一　守鑁　文明十五、六、二十任　同十五、十二、廿一寂
一七二　性深　長享二、十一、十任
一七三　賢深　文龜二、十二、十八任　永元、正、廿九免
一七四　持嚴　永正六、七、八任　同七、十二、廿八免

一七五　義堯　天文三、正、廿六任　同五、九、五免　永祿七、二、十五寂
一七六　源雅　天文十二、四、五任　永祿九、十二、八寂
一七七　堯雅　天正九、三、十六任　文祿元、十、八寂
一七八　義演　文祿三、七、十六任　寬永三、閏四、廿一寂
一七九　堯圓　寬永三、十二、廿八任
一八〇　增孝　寬永七、十二、廿四任

諸大寺歷代幷諸職次第（眞言宗東寺）

一八一尊性 寛永十二、四、廿一任——一八二寛海 慶安四、八、二任——一八三寛濟 万治元、五、二十任——一八四信遍 寛文三、八、七任——一八五高賢 寛文六、九、廿二任——一八六性演 寛文十、十一、三任——

一八七永愿 寛文十二、四、五任——一八八有雅 延寶六、八、廿八任——一八九孝源 貞享元、四、十二任——一九〇賴遍 元祿三、八、十任——一九一了海 元祿八、五、廿七任——一九二隆證 元祿十五、四、五任——

一九三房演 寶永三、六、八任——一九四寛順 正德元、十、三任——一九五道恕 享保三、三、廿八任——一九六堯觀 享保八、八、十任——一九七道恕 享保十四、八、廿八任 再任 享保十八、十一、五寂——一九八了恕 享保十八、十一、十二任——

一九九孝宥 元文元、五、十二任——二〇〇隆幸 元文二、五、十八任——二〇一榮遍 延[illegible]、五、二任——二〇二寳雅 寶曆元、[illegible]、十二任——二〇三元雅 寶曆六、八、十七任——二〇四寛深 寶曆十二、二、十四任——

二〇五道證 明和元、十、二任——二〇六宥證 明和三、三、廿八任——二〇七尊淳 明和三、九、十九任——二〇八果觀 安永三、七、廿九任——二〇九寛證 安永五、三、十六任——二一〇宥證 安永三、十、十任——

二一一尊淳 天明六、五、六任 再任——二一二禪證 天明六、七、十三任——二一三寛淳 寛政二、十一、四任——二一四禪證 寛政六、十二、十一任——二一五高演 享和二、十任——二一六禪家 文化四、十二、廿九任——

二一七果助 文化十、八、廿六任——二一八亮深 文化十三、八任——二一九禪忍 文政元、七、一任——二二〇深融 文政六、十二、一任——二二一良助 文政十、七、十七任——二二二淳心 文政十、十、廿四任——

二二三高演 天保二、三、廿八任 再任——二二四寛恕 天保六、十、廿九任——二二五增護——二二六元譽——二二七覺寶——二二八乘禪——

二二九榮嚴 明治三十、十二、廿八寂——二三〇實因——二三一玉諦 明治二十九任 明治三十二、九、十七寂——二三二心猛 明治三十九、五、六寂——二三三人了 明治卅一、八、廿五寂——二三四龍曉——

二三五快運——二三六宥匡——二三七龍暢——二三八法龍

○眞言宗金剛峯寺座主次第

(創立年時) 嵯峨天皇弘仁七年
(現今位置) 紀伊國伊都郡高野村

一 壽長 寛平元、三任
二 無空 寛平六、正任 延喜十八、六、廿六寂
三 峰禪 延喜十六任
四 觀賢 延喜十九、九任 延長三、六、十一寂
五 觀宿 延長三、六任 延長六、十二、十九寂
六 濟高 延長六、十二任 天慶四、十一、廿五寂
七 貞崇 天慶五、十任 天慶七、七、廿一寂
八 泰舜 天慶七、八任 天曆三、十二、二寂
九 寛空 天曆四、三任 天祿元、二、六寂
一〇 救世 天祿二、五任 天延元寂
一一 寛靜 天延三、三任 天元二、十、十一寂
一二 定昭 天元二、二任 永觀元、三、廿一寂
一三 寛朝 天元四、八任 長德四、六、十二寂
一四 雅慶 長德四、九任 長和元、十、廿五寂
一五 濟信 長元三、六、十一寂 (以下廢絕)

○眞言宗金剛峯寺撿校次第

（創立年時）嵯峨天皇弘仁七年
（現今位置）紀伊國伊都郡高野村

一 峯宿 延長七、三任
二 仲應 天慶五任 天曆四寂
三 定觀 天曆四任 同六免
四 雅眞 永觀元、三任 長保元、三、廿一寂
五 明朝 長保元、三、廿一任 長和二免
六 成得 長和二任 治安三、十二免
七 峯杲 治安三任 長久四免
八 眞念 寬德元、正任 天喜末免
九 行明 康平元、任 延久五寂
一〇 興胤 延久五任 承保元免
一一 維範 承保二任 寬治三、八免 嘉保二、三、三寂
一二 明算 寬治四任 嘉承元、十一、十一寂
一三 定深 嘉承元、十一任 天仁元、三、六寂
一四 良禪 天仁元、一任 永久三、四、一任 長承三、五八辭、同六、一任、久安元、十、免
一五 信惠 長承三、十二任
一六 眞譽 保延二、六任 保延三、正、十五寂
一七 良禪 再任 保延三、正、十八任 保延五、二、廿一寂
一八 聖仁 保延五、二、廿一任 保延五、六、十二寂
一九 琳賢 保延五、十一、八任 保延六、八、十四寂
二〇 行惠 久安五、五、十九任 仁平三、十一、十二寂
二一 兼賢 仁平三、十一、十二任 保元二、六、十三寂
二二 俊覺 保元二、六、十三任 永萬二、八、九寂
二三 宗賢 永萬二、七、廿八任 壽永二、九、三寂
二四 禪信 仁安三、五、七任 治承三、八、廿三寂
二五 房光 安元元、五、五任 治承二、冬免 治承三、八、廿三寂
二六 玄信 治承二、十二、廿六任 文治三、九、廿四寂
二七 濟俊 治承三、正任 治承三、三、朔寂
二八 定兼 治承三、三、二任 元曆元、八、廿五寂
二九 理賢 元曆元、八、廿五任 建久元、十、十一寂
三〇 明信 建久元、十、十二任 同四、冬免 建久五、七、廿四寂
三一 覺善 建久五春任 同六免 建久七、十寂
三二 灌實 建久六冬任 正治二、二、六寂
三三 智眞 正治二、二、七任 正治二、閏七、二寂
三四 玄叡 正治二、七、二任 元久二免
三五 勝成 建永元春任 承元元、十二免 承元二、正、二寂
三六 覺基 承元元、十二任 建保四免 建保五、七、廿五寂
三七 覺海 建保四任 承久二、十二免 貞應二、八、十七寂
三八 宗禪 承久二、十二任 嘉祿元冬免
三九 明任 嘉祿元任 安貞二、十二免 寬喜元、六、六寂
四〇 忍信 寬喜元、五、六任 同二、冬免 貞永元、五、廿一寂
四一 勝心 貞永元、五、廿一任 同二、十二免
四二 良任 嘉禎三、十二、廿五任 同四、二、十一免
四三 信寬 嘉禎四、二、任 同四、廿六免
四四 良任 再任 嘉禎四、四、廿六任 仁治元、十免
四五 明賢 仁治元、十、十四任 寬元元、七免
四六 慶源 寬元元、七、十一任 寬元四、十一、十三寂
四七 親性 寬元四、十一、十三任 寶治二、三、十五免
四八 定信 寶治二、三、十五任 建長元、正、廿免
四九 親性 再任 建長元、正、二十任 同元、三、廿六寂
五〇 良覺 建長元、四、十五任 同五、十、廿七免
五一 實眞 建長六、十、廿五任 正嘉元春免 正嘉元、三寂
五二 定運 正嘉元、三、十九任 同年四、十三寂
五三 理俊 正嘉元、三、廿六任 同年八、寂
五四 英賢 正嘉元、十、廿一任 同二、二、一免

諸大寺歷代并諸職次第（眞言宗金剛峯寺）

五五 良覺　正嘉二、二、六任　正元元、七、廿六寂
五六 眞辨　正元元、七、廿七任　弘長元、七、免
五七 成詔　弘長元、八、五任　同二、正、免
五八 直辨 再任　弘長二、正、三十任　同年六、十、免
五九 祐遍　弘長二、六、十五任　文永元、四、免
六〇 覺傳　文永元、四、十九任　同五、十、廿五免

六一 榮舜　文永五、十、廿九任　文永六、四、廿五寂
六二 惠深　文永六、五、十一任　文永七、二、朔寂
六三 覺胤　文永七、三、一任　同八、六、八免
六四 賴辨　文永八、六、七任　同十一、三、晦免
六五 覺傳 再任　文永十一、三、五任　建治二、十二免
六六 興實　建治二、十二任　同三、十一免

六七 弘傳　建治三、十一、十五任　建治三、十二、十二寂
六八 興實　建治三、十二、廿九任　同四、正、十四免
六九 賢定　建治四、正任　弘安三、十二免
七〇 靜辨　弘安三、十二任　同四、十二、十三免
七一 賢隆　弘安四、十二、十三任　同七、十一、十九免
七二 祐信　弘安七、十一、十五任　同九、八寂

七三 泰然　弘安九、八任　弘安十、十寂
七四 光信　弘安十、十、十九任　正應元、十二免
七五 隆辨　正應元、十二任　同三、十二免
七六 明玄　正應三、十二任　同四、十二免
七七 寛範　正應四、十二任　永仁元、十二免
七八 長任　永仁元、十二任　同二、三免

七九 隆昇　永仁二、三任　永仁四、八、十二寂
八〇 良善　永仁四、八、十三任　永仁六、八寂
八一 長任 再任　永仁六、九、一任　同年、十免
八二 良弘　永仁六、十、十五任　正安三、十一免
八三 乘阿　正安三、十一、十九任　嘉元元、十二免
八四 賴成　嘉元元、十二任　同四、十二免

八五 寛舜　德治元、十二任　延慶元、十二免
八六 尙寛　延慶元、十二任　延慶三、十寂
八七 慶胤　延慶三、十、十六任　正和元、十二免
八八 親圓　正和元、十二任　同二、十二免
八九 源意　正和二、十二、廿八任　正和三、五寂
九〇 定範　正和三、五任　同五、免

九一 賴玄　正和五、十二、廿八任　文和二、十二免
九二 隆傳　文保二、十二任　元應二、十二免
九三 圓雅　元應二、十一任　元亨元、六寂
九四 忍宗　元亨元、六任　同三、十二免
九五 道淳　元亨三、十二任　正中二、十二免
九六 能算　正中二、十二任　嘉暦二、冬免

九七 賴審　嘉暦二、三、廿八任　元德元、十免
九八 弘算　元德元、十二任　建武二、七、廿二寂
九九 澄喜　元弘元、三任　正慶二免
一〇〇 祐勝　正慶二、冬任　延元元、冬免
一〇一 隆覺　延元元、十二、二任　暦應三、十二免
一〇二 祐金　暦應三、十二任　康永元、十二免

一〇三 嚴祐　康永元、十二、十任　貞和元、十二免
一〇四 賴算　貞和元、十二、十任　同四、十二免
一〇五 泰助　貞和四、十二、十任　觀應二、十、十九寂
一〇六 繼滿　觀應二、十、十九任　正平九、十二免　延文元、十、四寂
一〇七 寶杲　文和三、十二任　延文元、十二免　貞治五、七、廿五寂
一〇八 定寶　延文元、十二任　同二、十二免

一〇九 永澄　延文三、正、十二任　同五、十二免　貞治四、八、十四寂
一一〇 賴暹　延文五、十二任　貞治三、十二免　應安四、十一、廿二寂
一一一 長藝　貞治三、十二任　同六、免
一一二 昌實　貞治六任　應安二、三免　明德三、三寂
一一三 弘惠　應安二、三、十五任　同四、十二免
一一四 了算　應安四、十二任　同七、十二、廿一免　應永四、十二寂

一一五 快祐　應安七、十二、十九任　永和元、[illegible]免　應永五、六寂
一一六 有遍　永和元、六任　同二、三免
一一七 聖算　永和二、四任　同四、春免　應永十五、二寂
一一八 隆喜　永和四、二任　康暦二、正免　應永十七、二寂
一一九 禪惠　康暦二、二任　永德二、十二免　至德元、九、八寂
一二〇 實印　永德二、十二任　至德二、十二、廿一免

諸大寺歷代并諸職次第（眞言宗金剛峯寺）

一二一 寛藝　至德三、十二任　嘉慶二、十二免
一二二 長深　嘉慶二、十二、十四任　康應元、十二免　應永廿七、正寂
一二三 靜喜　康應元、十二任　明德三、十二免
一二四 頼宗　明德三、十二任　應永二、十二免
一二五 行清　應永二、十二、六任　同三、十二免
一二六 覺榮　應永三、十二、十三任　同六、十二免

一二七 頼應　應永六、十二任　同八、六免
一二八 長慶　應永八、六、三任　同十、十二免
一二九 龍秀　應永十、十二、十三任　同十一、十一、十寂
一三〇 行算　應永十一、十二任　同十四、十二免
一三一 長惠　應永十四、十二、十三任　同十六、十二免
一三二 頼澤　應永十六、十二、十七任　同二八、四免　永享十二、四寂

一三三 覺實　應永十八、四任　同廿一、十一免
一三四 宜順　應永廿二、十二、十三任　同廿四、十二免
一三五 隆法　應永廿四、十二、十三任　同廿九、十二免
一三六 慶意　應永廿五、十二、十五任　同廿八、十二免
一三七 定秀　應永廿八、十二、十六任　同卅一、十一免
一三八 宥信　應永卅一、十二、三任　永享四、十、五寂

一三九 鏡忠　應永卅一、十二、二任　應永卅三、三、四寂
一四〇 明祐　應永卅三、三、五任　同卅四、六免　長祿二、六寂
一四一 信忠　應永卅四、六任　正長二、三免　長祿三、三寂
一四二 良尊　永享元、三、十任
一四三 定忠　永享元、四、六任　同年九免
一四四 道兼　永享元、九、二十任　同二、十一、晦免

一四五 勝算　永享二、十二、十五任　同九、十一免
一四六 長範　永享九、十二任　同八、十二免
一四七 善秀　永享八、十二、六任　永享十一、四、廿一寂
一四八 弘惠　永享十一、九任　嘉吉二、十二免
一四九 貞算　嘉吉二、十二、六任　文安二、十二免
一五〇 宥澄　文安二、十二、六任　同三、十一免

一五一 鏡範　文安三、十一、廿二任　寶德元、十二免
一五二 重印　寶德元、十二任　享德元、十二免
一五三 慶尊　享德元、十二、六任　享德四、四、廿八寂
一五四 仙義　享德四、閏四、十四任　長祿二、十二免　寬正三、三、二寂
一五五 宥任　長祿二十、二十、三任　寬正二、十二免
一五六 弘算　寬正二、十二、六任　同九、十二免

一五七 重仙　寬正五、十二、六任　同七、十二免　明德五、九寂
一五八 善勢　文正元、十二任　文明二、十二免　同三、三十寂
一五九 成隆　文明二、十二、六任　同九、九、晦寂
一六〇 眞叡　文明五、七、四任　同八、十一免
一六一 長任　文明十二、十二任　同十五、十、十六寂
一六二 快憲　文明十一、十二任　同十四、四、廿寂

一六三 快算　文明十四、四、廿六任　同十七、十二、六免　明應四寂
一六四 慶藝　文明十七、十二、六任　長享二、十一免
一六五 良重　長享二、十二任　延德三、二、十九寂
一六六 俊善　延德三、三、廿八任　明應三、十二免　同七、十二、十六寂
一六七 賢珍　明應三、十二任　同六、十二免　永正三、正、二寂
一六八 藏惠　明應六、十二任　同八、春寂

一六九 快舜　明應八任　文龜二、十二免　永正四、三、廿六寂
一七〇 宥增　文龜二、十二、六任　永正二、十二免　永正十四、二、廿四寂
一七一 淸宅　永正二、十二任　同三、十二免　永正四、正寂
一七二 亮遍　永正三、十二任　同六、冬免　永正九、秋寂
一七三 重任　永正六、冬任　同九、十二免　同十五、十、十六寂
一七四 快義　永正九、十二、六任　同十二免

一七五 秀存　永正十二、十二、六任　同十五、十一、廿六寂
一七六 雄吟　永正十五、十二、六任　大永元、二、十三寂
一七七 任譽　永正十八、二任　同十八、六、十七寂
一七八 朝盛　大永元、六任　同五、閏十一免
一七九 嚴範　大永五、閏十一任　享祿元、十二免　天文五、春免
一八〇 頼宣　享祿元、十二、六任　同三、八寂

諸大寺歷代幷諸職次第（眞言宗金剛峯寺）

一八一朝鑒——享祿三、八、三任　天文二、十二免
一八二宥雅——天文二、十二任　同五、十二免　同廿三、[illegible]寂
一八三宗範——天文五、十二任　同八、十二免　同廿一寂
一八四堯榮——天文八、十二任　同十一、十二免　同十九、十二、十寂
一八五忠海——天文十一、十二任　同十三、三、十寂
一八六澄惠——天文十三、二、十五任　同十三、八、六寂

一八七覺融——天文十三、九、十四任　同十六、十二免
一八八長舜——天文十六、十二任　同十九、十二免
一八九賴全——天文十九、十二、六任　同廿二、二、十七寂
一九〇良弘——天文廿二、二、廿六任　同廿三、正、廿四寂
一九一行祐——天文廿三、二、六任　弘治三寂
一九二榮任——弘治三、九、六任　永祿三、十二免　同三、十二、八寂

一九三快宗——永祿三、十二任　同六、十二免
一九四長秀——永祿六、十二、六任　同八、三、廿三寂
一九五行遍——永祿八、三、廿八任　同十一、十二免
一九六祐清——永祿十一、十二、六任　元龜二、十二免
一九七頼仁——元龜二、十二任　同三、七、廿三寂
一九八賴宗——元龜三、七、六任　天正四、十二免

一九九秀算——天正四、十二任　同六、十二免　同八、十、十三寂
二〇〇行算——天正七、十二、六任　同十、十二免　同十七、八寂
二〇一良運——天正十、十二、六任　同十三、十二免　慶長元寂
二〇二宥雅——天正十三、十二任　同十四、五、朔寂
二〇三來宗——天正十四、五、六任　同十七、八寂
二〇四快慶——天正十七、八、十三任　同十九、十二免

二〇五宥鏡——天正十九、十二、六任　文祿三、十二免　慶長六、十一、十七寂
二〇六良盛——文祿三、十二、六任　慶長二、十二免　慶長八、三、廿四寂
二〇七清胤——慶長三、十二、六任　同九、十二免　同五、十、十寂
二〇八賴旻——慶長五、十、一任　慶長十、三、九寂
二〇九龍海——慶長八、十二任　慶長十一、四寂
二一〇政遍——慶長十一、五、一任　同十四、十一免　同十九、四、三寂

二一一玄仙——慶長十四、十一任　慶長十七、六、三寂
二一二宥全——慶長十七、六任　同十九、十二免
二一三宥光——慶長十九、十二任　元和元、十二免
二一四辨雄——元和元、十二任　同三、五免　元和四、三、十九寂
二一五融義——元和三、五、五任　同四、二免
二一六快盛——元和四、十二任　同七、十二免

二一七俊圭——元和七、十二任　同九、十二免　寛永元、八、一寂
二一八祐範——元和九、十二任　寛永二、四、五寂
二一九全秀——寛永二、四任　同三、十二免
二二〇賢祐——寛永三、十二任　同四、十二免　同十七、二、廿六寂
二二一快舜——寛永四、十二任　同五、十二免　同十五、九、十寂
二二二良胤——寛永五、十二任　寛永五、十二、廿二寂

二二三宥盛——寛永五、十二、廿七任　同八、正、十免　同十六、十一、二寂
二二四覺雄——寛永八、正、十一任　同十一、十二免　同十二、六、三寂
二二五寶慶——寛永十一、十二任　同十二、十二免　同十四、九、廿八寂
二二六遍宥——寛永十二、十二任　寛永十三、正、三十寂
二二七弘惠——寛永十三、二任　同十四、十二免
二二八眞興——寛永十四、十二任　同十九、十二免　正保三、正、三寂

二二九定秀——寛永十九、十二任　寛永十六、七、一寂
二三〇弘翁——寛永十六、七、十五任　同十七、十二免　同十七、八、十七寂
二三一良遍——寛永十七、十二任　同十八、十二免　同廿、四、八寂
二三二覺運——寛永十八、十二任　同十九、十二免
二三三雲雪——寛永十九、十二任　同廿、十二免
二三四快盛——寛永二十、十二任　同廿一、十二免

二三五叟遍——正保元、十二任　同四、十二免　寛文元、七、廿九寂
二三六雄胤——正保四、十二任　慶安二、四、廿一免
二三七賢雄——慶安三、五任　承應二、十二免
二三八信榮——承應二、十二任　承應三、七、廿六寂
二三九義英——承應三、八任　明曆三、七、二十寂
二四〇尙政——明曆三、七、廿一任　萬治元、十二免　寛文元、八、廿九寂

二四一 賴仙　萬治元、十一任　萬治二、十二兗

二四二 榮範　萬治二、十一任　同三、十二兗　延寶四、九、廿一寂

二四三 隆朝　萬治三、十一任　寛文元、十二兗

二四四 榮覺　寛文元、十二任　同二、十二兗

二四五 仙譽　寛文二、十二任　同三、十二兗

二四六 懷宣　寛文三、十二任　同六、十一兗　同六、十一、廿一寂

二四七 朝遍　寛文六、十一、十三任　同九、十二兗　同十一、正、廿六寂

二四八 快存　寛文九、十二任　同十、十二兗　延寶三、三、十一寂

二四九 宥專　寛文十、十一任　延寶元、廿八寂

二五〇 遵胤　延寶元、四、六任　同二、十二兗　同六、九、五寂

二五一 靑範　延寶二、十二任　同三、十二兗　同七、五、四寂

二五二 榮義　延寶三、十二任　同四、十二兗　貞享四、十、廿七寂

二五三 勝英　延寶四、十二任　同五、十二兗　同六、三、廿一寂

二五四 日玉　延寶五、十二、任　同六、十二兗　同九、九、廿七寂

二五五 文啓　延寶六、十二任　天和元、十二兗　貞享二、十一、廿九寂

二五六 敎宥　天和元、十二任　同二、十二兗　貞享二、十二、十六寂

二五七 寶秀　天和二、十二任　天和四、正、三寂

二五八 堯雅　貞享元、三、廿一任　同二、十二兗　元祿元、十二、九寂

二五九 堅雄　貞享二、十二任　貞享三、八、九寂

二六〇 秀傳　貞享三、八任　元祿二、十二兗

二六一 信龍　元祿二、十二任　同五、十二兗　同九、九寂

二六二 快然　元祿五、十二任　同六、十二兗　同十一、二、廿一寂

二六三 尖惠　元祿六、十二任　同九、十二兗　同十三、十一、十五寂

二六四 長翁　元祿九、十二任　同十二、十二兗　同十二、[illegible]、四寂

二六五 秀翁　元祿十二、十、七任　元祿十三、拾二、十五寂

二六六 觀譽　元祿十三、十二、十六任　同十三、十二兗

二六七 榮鏡　元祿十三、十二任　同十四、十二兗　寶永五、八、十四寂

二六八 隆心　元祿十四、十二任　寶永元、十二兗　寶永九、七、廿五寂

二六九 宥乘　寶永元、十二任　同四、十二兗

二七〇 政俊　寶永四、十二任　同五、十二兗　正德五、九、廿一寂

二七一 長淸　寶永五、十二任　同六、十二兗

二七二 良遍　寶永六、十二任　同七、十二兗

二七三 全算　寶永七、十二任　正德元、十二兗　正德二、七、廿三寂

二七四 堯寶　正德元、十二任　正德二、八、十九寂

二七五 雄宣　正德二、八任　同三、十二兗

二七六 良宥　正德三、十二任　同四、十二兗　同六、五、七寂

二七七 隆恭　正德四、十二任　享保二、十二兗　享保七、八、十二寂

二七八 懷英　享保二、十二任　同三、十二兗　同十二、七、廿一寂

二七九 榮融　享保三、十二、六任　同四、十二兗　同十六、六、廿六寂

二八〇 乘阿　享保四、十二任　同七、八、廿寂

二八一 玄鏡　享保七、八任　同八、十二兗　同十九、九、二寂

二八二 心海　享保八、十二任　同九、十二兗　同十二、八、廿八寂

二八三 義雄　享保九、十二任　同十二、十二兗　同十五、十二、十寂

二八四 弁存　享保十二、十二任　同十三、十二兗

二八五 哲眞　享保十三、十二任　同十六、十二兗　同二十、十、廿三寂

二八六 宥快　享保十六、十二任　同十七、十二兗　同十八、七、廿六寂

二八七 覺津　享保十七、十二任　同十八、十一兗　元文三、九、十八寂

二八八 敎榮　享保十八、十二任　元文元、十二兗　元文四、八、十八寂

二八九 普什　元文元、十二任　同二、十二兗　寛保元、正、五寂

二九〇 宥榮　元文二、冬任　同三、十二兗

二九一 性海　元文三、十二任　同四、十二兗

二九二 存靑　元文四、冬任　元文五、八、八寂

二九三 有遍　元文五、八任　寛保元、十二兗　延享四、十七寂

二九四 英同　寛保元、十二任　同二、九兗　同二、十、六寂

二九五 祖遍　寛保二、十任　延享元、十二兗　寶曆元、十二、十二寂

二九六 傳譽　延享元、十二任　寶曆三、十二兗

二九七 存榮　延享三、十二任　延享四、九、廿三寂

二九八 恭翁　延享四、任　寛延三兗　同四、二、五寂

二九九 運應　寛延三、十二任　同四、十二兗

三〇〇 寛淳　寶曆元、十二任　同二、十二兗　同七、十、十九寂

三〇一 理峰 寶暦二、十二任 同三、十二免
三〇二 智翁 寶暦三任 寶暦六、八、十七寂
三〇三 如眼 寶暦六、八任 同七、十二免 同九、二、廿二寂
三〇四 弘範 寶暦七任 明和九、十一、廿九寂
三〇五 眞辨 寶暦十、十任 同十一、十二免 同十三、八、十八寂
三〇六 宥亮 寶暦十一任 同十二、十二免

三〇七 宥淳 寶暦十二任 寶暦十三、八、廿三寂
三〇八 實因 寶暦十三、八任 明和三、四、二寂
三〇九 臨恭 明和三、四、五任 明和九、二、廿五寂
三一〇 印定 明和六任 同七、十二免 安永三、正、廿五寂
三一一 立幢 明和七、十二任 同八、十二免 安永二、六、十六寂
三一二 快辨 明和八、十二任 安永三、十二免

三一三 鑁雄 安永二、十二任 同四、十二免 同五、正、六寂
三一四 雲津 安永四、十二任 同五、十二免
三一五 純淨 安永五、十任 同六、七、廿七寂
三一六 龍剛 明和六、八副任 同九、十二免 天明八、十一、十五寂
三一七 覺寶 安永九、十二任 天明元、九、廿四寂
三一八 智體 天明元、十任 同二、九免 同二、九、十三寂

三一九 秀慧 天明二、九任
三二〇 英寂 天明三、十二任 同六、十二免 寛政六、六、十六寂
三二一 靈信 天明六、冬任 寛政元、十二免
三二二 圭瑜 寛政元、十二任 同二、十二免
三二三 寛耕 寛政二、十二任 同三、九、廿一免 同九、廿一寂
三二四 明道 寛政三、九任 同四、十二免

三二五 任教 寛政四、十二任 同五免 文化元、正、四寂
三二六 寛雄 寛政五任 同六、十二免
三二七 龍溪 寛政六、冬任 同八、十二、廿一免
三二八 增興 寛政八、十二任 同八、十二免
三二九 義諦 寛政九、十二任 同十、十二免
三三〇 妙海 寛政十、十二任 享和元、十二免 文化三、八、廿二寂

三三一 湛海 享和元、十二任 享和二、十二、廿九寂
三三二 眞海 享和二、十二任 同三、十二免 文化九、十二、廿三寂
三三三 寛海 享和三、十二任 文化元、十二免
三三四 義辨 文化元、十二任 同二、十二免 文政四、七、十七寂
三三五 覺道 文化二、十二任 同三、十二免 文化七、七、朔寂
三三六 唯仁 文化五、十二任 同八、十二免 同十、七、廿三寂

三三七 曇海 文化八、十二任 同八、八、八寂
三三八 體妙 文化九、八任 同十二、正、十一免
三三九 仙巖 文化十二、三任 同十二、八、十八免 同十二、八、十八寂
三四〇 寛光 文化十三、八任 同十三、十二免 文政六、十六寂
三四一 弘榮 文化十、十二任 同十四、十二免 文政十三、八、廿寂
三四二 增啓 文化十四、十二任 文政元、十二免 文政七、七、寂

三四三 圭道 文政元、十二任 同二、十二寂
三四四 寶本 文政二、十任 同三、十一、廿一免
三四五 靈瑞 文政三、冬任 同四、十二免 同十五、廿八寂
三四六 陳實 文政四、十二任 同七、十二免 同十、七、廿寂
三四七 弘源 文政七、十二任 同八、十二免
三四八 淨應 文政八任 文政九、八、廿寂

三四九 英龍 文政九、九任 同十、十二免
三五〇 乘如 文政十、十二任 同十三、十二免
三五一 經尊 文政十任 天保四、十二免
三五二 增源 天保四、十二任 同五、冬免
三五三 寛雅 天保五、冬任 同六、冬免 同九、二、十八寂
三五四 瑞教 天保六、冬任

三五五 周存 天保七、冬任 同八、正免 天保八、正、十六寂
三五六 龍遍
三五七 研龍
三五八 專雄
三五九 靈明
三六〇 來應

三六一快般——三六二增琢——三六三實賢——三六四湛智——三六五德淵——三六六湛然——

三六七銳信——三六八增應——三六九隆快——三七〇龍雄——三七一周傳——三七二義空——

三七三宥明——三七四研暢——三七五宥永——三七六良基（明治十、十一、十六寂）——三七七澄辨——三七八實嚴——

三七九惠範——三八〇惠晃——三八一覺幽——三八二觀空——三八三道雅——三八四快猛——

三八五智賢——三八六海充——三八七慶明——三八八卓如——三八九快理——三九〇宥經——

三九一增隆（明治廿四、正、任 同廿六、四、卅寂）——三九二法祥——三九三覺道——三九四祐淨——三九五眞應——三九六宥中——

三九七心猛（明治卅九、五、六寂）——三九八高範——三九九高淳——四〇〇弘榮——四〇一秀宜——四〇二宥範——

四〇三密雄——四〇四觀應——四〇五賀道——四〇六本雅——四〇七眞淨——四〇八廣賢——

四〇九覺範

○熊野山別當次第

（創立年時）（古昔位置）紀伊國牟婁

一禪洞 ― 二千始 ― 三仲靈 ― 四僧雲 ― 五殊勝 ― 六泰救（長保元、二、三任）―

七快眞（寛仁二、十二任）― 八永尊（萬壽元、十一任）― 九覺眞（延久元、十任）― 一〇長快（承保二、五任）― 一一長範（保安四任）― 一二長憲（康治元、十任）―

一三湛快（久安二任）― 一四行範（承安二、十二任）― 一五範智（承安三、十一任）― 一六湛增（文治二、任）― 一七行快（建久九、七任）― 一八範命（建仁六、十二、九任）―

一九湛政（承元二、八、廿七任）― 二〇琳快（貞應元、六任）― 二一快命（安貞三、八、任）― 二二湛眞（嘉禎三、六任）― 二三尋快（仁治四、四任）― 二四定湛（正嘉元任）―

二五靜快（建治三任）― 二六正湛（弘安五、十二任）

○熊野山檢校次第

（創立年時）（古昔位置）紀伊國牟婁

一 增譽 寛治四任 ―― 二 行尊 永久四任 ―― 三 覺宗 保延元任 ―― 四 覺讃 仁平二任 ―― 五 實慶 養和元任 ―― 六 覺實 正治元任 ――

七 長嚴 元久元任 イ承元三任 ―― 八 定豪 承久三任 ―― 九 良尊 嘉禎四、九、五任、寛元四任 ―― イ（道慶）寛元四任 ―― 一〇 覺仁 寛元四、四、十九任 イ寶治二任 ―― 一一 靜仁 文永三、六任 ――

一二 行照 永仁四、四、廿任 イ行眼 ―― 一三 道照 乾元二、正、五任 イ無 ―― 一四 道瑜 嘉元三、四、十八任 ―― 一五 道照 徳治二、八任 再任 ―― 一六 覺助 元亨元、五、十四任 イ文和四、十二、廿二任 ―― 一七 道照 元亨三、七、二八任 三任 イ文和四、十二、廿二任 ――

一八 良慶 文和四、十二、十三任 イ文和四、十、二任 イ長慶 ―― 一九 良瑜 文和五、六、十一任 ―― 二〇 道意 康元七、十任 本名道基

○新熊野別當次第

（創立年時）（古昔位置）紀伊國弁要

一 辨宗 承安―任 ― 二 宗圓 文治二任 ― 三 圓快 承久三任 ― 四 澄豪 承久四、正、廿任 ― 五 道嚴 建曆三任 ― 六 澄豪 建保元任 ―

七 正範 建保六任 ― 八 澄豪 再任 寛喜二任 ― 九 正範 再任 寛喜四任 ― 一〇 貞繼 嘉禎元任 ― 一一 正範 嘉禎二任 ― 一二 禪實 曆仁元任 ―

一三 宗猷 寛文四任 ― 一四 正範 寶治二任 ― 一五 正實 建長四任 ― 一六 宗信 文永十一、十二、廿二任 ― 一七 道豪 弘安三、二任 ― 一八 教範 弘安六任 ―

一九 宗顯 弘安九、七、一任 ― 二〇 教範 弘安十任 ― 二一 靜進 正曆元任 ― 二二 增兼 正應三任 ― 二三 嚴助 永仁二任 ― 二四 教快 永仁四任 ―

二五 慶親 永仁六任 ― 二六 實讃 正安元任 ― 二七 嚴助 正安三任 ― 二八 信尊 嘉元三、六、三任 ― 二九 實讃 再任 延慶元任 ― 三〇 慶譽 正慶二任 ―

三一 實讃 三任 延慶二任 ― 三二 淨仙 正和五任 ― 三三 信尊 文保三任 ― 三四 忠讃 正中二任 ― 三五 良昭 嘉曆二任 ― 三六 宗助 元德二任 ―

三七 俊幸 正慶元任 ― 三八 宗助 元和三任 ― 三九 良宗 建武元任 ― 四〇 教賀 建武三任 ― 四一 良海 曆應二任 ― 四二 道猷 曆應四、七任 ―

四三 良海 曆應四、八任 ― 四四 盛兼 康永元任 ― 四五 道猷 再任 康永三、十一任 ― 四六 盛兼 再任 康永三、六任 ― 四七 道讃 康永三、十一任 ― 四八 淨讃 觀應三、六任 ―

四九 宗辨 文和二任 ― 五〇 賢秀 文和四、六任 ― 五一 兼俊 延文二、十任 ― 五二 賢秀 再任 延文二、十一任 ― 五三 兼俊 再任 延文三、二任 ― 五四 宗辨 再任 延文五任 ―

五五 宗昭（延文五任）―― 五六 朝守（貞治三、十一任）―― 五七 宗辨（三任）（貞治六任）―― 五八 宗縁（應安二、二、廿九任）―― 五九 定昭（應安五、十一任）―― 六〇 宗縁（再任）（永和四、九、十六任）――

六一 尊顯（康應元、五、八任）―― 六二 道賢（康暦元、五、十四任）―― 六三 賴昭（至德四、五、卅任）―― 六四 宗縁（三任）（康暦元、五、七任）―― 六五 豪猷（康暦元、七、廿八任）―― 六六 朝兼（明德三任）――

六七 豪猷（應永六、十任）―― 六八 辨學（應永十、五、九任）―― 六九 良縁（應永廿四任）

○新熊野檢校次第（創立年時）（古昔位置）紀伊國牟婁

一覺讃（正安三任）──二房覺（治承四任）──三道仁（元應元任）──四實慶（文治二任）──五覺實（建仁元任）──六長嚴（承元三、十二、十八任）──

七定豪（承久二、八、三任）──八良尊（嘉禎四、九、廿五任）──九道慶（寛元四、五、十任）──一〇覺仁（寶治二、五、廿四任）──一一靜仁（建長四、五、十任）──一二仁惠（弘安七、六、九任）──

一三仁昭（正應元、九、十任）──一四靜仁再任（正應三、十一、九任）──一五仁惠再任（永仁四任）──一六行照（永仁六、四、廿五任）──一七道瑜（正安二、八、三任）──一八道昭（延慶二、七、十八任）──

一九覺助（元亨元、五、十四任）──二〇惠助（正中二任）──二一覺助（嘉暦三、九任）──二二道昭（元徳二、二、五任）──二三良慶（暦應元、九、十四任）──二四良瑜（延文三、十二、十九任）──

二五道基改道意（永和二、二、卅任）──二六道尊（應永四、十任）──二七道遣（應永十二任）──二八滿意（應永十九、七、廿六任）

○金峰山檢校

（創立年時）（古昔位置）大和國吉野

一懷實 承暦寛治比 ― 二尋範 久安元、正、任 ― 三惠信 保元元、七、十九任 ― 四信圓 承安四、一、十九任 ― 五實尊 承元二、九、三任 ― 六圓實 ―

七實信 ― 八圓實 嘉元 ― 九信昭 ― 一〇尊信 ― 一一慈信 ― 一二覺昭 ―

一三良信 ― 一四良覺 ― 一五覺實 ― 一六實玄 ― 一七良昭 ― 一八良兼 ―

一九昭圓 ― 二〇雄玄

○融通念佛宗大念佛寺歷代

（創立年時）崇德天皇天治二年
（現今位置）攝津國住吉郡平野村

一 良忍 長承元、二、一寂
二 良惠 巖賢 久安四、四、三寂
三 良感 明應 永暦元、三、四寂
四 良信 觀西 承安元、七、朔寂
五 隆阿 尊永 治承三、七、二寂
六 護阿 良鎭 壽永元、十、五寂
七 良尊 法明 貞和五、六、十三寂
八 修觀 興善 延文元、十二、二寂
九 乘空 法阿 延文五、十、六寂
一〇 心觀 道善 應安元、八、廿五寂
一一 融阿 道圓 應安七、十一、七寂
一二 稱觀 幸阿 永和四、二、八寂
一三 法空 本阿 至德元、五、五寂
一四 良響 道音 明德二、九、十四寂
一五 惠觀 淨善 應永七、正、廿四寂
一六 圓忍 明教 應永十九、五、九寂
一七 教觀 法圓 應永廿六、九、十寂
一八 覺法 性阿 永享二、三、十一寂
一九 教觀 妙阿 文安元、七、十二寂
二〇 良眞 道從 寶德二、十一、十三寂
二一 觀阿 道永 長祿三、十、十九寂
二二 任空 濟法 文正元、六、十六寂
二三 良融 濟通 文明六、四、廿七寂
二四 法觀 淨蓮 長享元、八、十二寂
二五 道祐 幸觀 明應二、九、十九寂
二六 道觀 妙惠 文龜元、十、十九寂
二七 空觀 法清 永正九、十二、十三寂
二八 觀山 道融 大永元、九、廿寂
二九 加空 法融 享祿二、二、廿三寂
三〇 助空 道阿 天文十三、正、廿寂
三一 良阿 道觀 天文十九、十一、廿六寂
三二 良勝 道融 天正三、十二、廿六寂
三三 道融 良齊 慶長元、十一、廿一寂
三四 頓空 宗圓 慶長五、三、十一寂
三五 法禪 良古 慶長十八、三、十一寂
三六 良說 道和 元和四、廿五寂
三七 良宜 法順 元和七、二、九寂
三八 良圓 法覺 寛永六、八、廿八寂
三九 良巖 法善 正保元、八、五寂
四〇 良覺 道祐 慶安二、三、廿六寂
四一 良月 淸雲 承應二、十二、十七寂
四二 良實 崇嚴 万治三、八、廿四寂
四三 良惠 舜空 延寶二、七、四寂
四四 隆明 崇觀 延寶三、九、十三寂
四五 覺意 良觀 貞享三、二、十八寂
四六 融觀 大通 享保元、二、十二寂
四七 融海 忍通 享保六、八、五寂
本山執權 融天 龍海
四八 通存 信海 安永六、九、十二寂
四九 通弘 堯海 寛政十一、三、廿六寂
五〇 通天 洞海 文化四、十一、四寂
五一 通法 眞海 天保四、八、四寂
五二 通津 教瀾 明治九、七、十一寂
五三 通仁 教寛 明治二、六、十八寂

五四 眞教 學頭 明治十三、十一、廿三寂 ― 五五 義雲 教忍 ― 事務取扱 靈嚴 ― 五六 淸凉 得善 明治四十、十一、四寂 ― 五七 泰教

○戒律宗西大寺長老歷代

（創立年時）孝謙天皇天平神護元年
（再興年時）四條天皇嘉禎
（現今位置）大和國生駒郡伏見村

一 叡尊 思圓 正應三、八、廿五寂 ― 二 慈眞 正和五、正、廿六寂 ― 三 宣瑜 淨覺 正中二、二、九寂 ― 四 靜然 良澄 元弘元、十二、十三寂 ― 五 賢善 覺律 曆應三、十、二寂 ― 六 澄心 靜心 貞和三、九、五寂 ―

七 信昭 靜觀 文和元、三、三寂 ― 八 元耀 求覺 文和四、十、十七寂 ― 九 眞湛 悟妙 延文五、十、五寂 ― 一〇 清算 彥證 貞治元、十一、十四寂 ― 一一 覺乘 慈淵 貞治二、正、廿六寂 ― 一二 貞祐 慈證 貞治四、閏九、二寂 ―

一三 信尊 道昭 貞治五、九、廿寂 ― 一四 堯基 尊密 應安三、四、廿四寂 ― 一五 貞泉 信乘 康曆元、六、一寂 ― 一六 禪譽 圓宗 嘉慶二、五、五寂 ― 一七 慈朝 祐覺 明德二、四、九寂 ― 一八 深泉 本荊 應永二、九、廿五寂 ―

一九 良耀 淨順 應永十一、二、廿五寂 ― 二〇 高湛 明卯 應永十五、九、廿四寂 ― 二一 叡空 圓道 應永十九、二、廿三寂 ― 二二 英如 正圓 應永廿二、二、廿九寂 ― 二三 英源 圓善 應永廿六、十、五寂 ― 二四 元空 忍照 應永卅、七、廿五寂 ―

二五 榮秀 淨晉 永享二、八、二寂 ― 二六 高海 本圓 永享八、四、廿六寂 ― 二七 良誓 淨音 寶德二、正、二寂 ― 二八 元澄 良賢 長祿元、十一、八寂 ― 二九 高算 明圓 文明三、十一、十二寂 ― 三〇 仙惠 明珠 文明十、八、六寂 ―

三一 秀如 正眞 長亨二、五、廿七寂 ― 三二 良慶 圓珠 明應七、八、七寂 ― 三三 尊海 淨宗 文龜二、三、七 ― 三四 高仲 通圓 永正六、五、八寂 ― 三五 高森 圓宣 永正八、二、二寂 ― 三六 玄海 ―

三七 高實 ― 三八 光淳 ― 三九 高珠 ― 四〇 尊珠 ― 四一 高興 ― 四二 尊慶 ―

四三 凝海 ― 四四 高秀 ― 四五 高久 ― 四六 高仙 ― 四七 尊智 ― 四八 高喜 ―

四九 賢瑜 ― 五〇 高圓 ― 五一 尊信 ― 五二 高算 ― 五三 尊覺 ― 五四 尊榮 ―

五五寬慶——五六高瑜——五七尊靜——五八尊空——五九尊員——六〇慶般——

六一英堂——六二尊慧——六三高判——六四泓澄——六五眞應

○淨土宗華頂山知恩院歷代

（創立年時）高倉天皇安元元年（カ）
（現今位置）京都市下京區新橋大和大路

- 一 源空（法然房） 建暦二、正、廿五寂
- 二 源智（勢觀房） 暦仁元、十二、十二寂
- 三 道宗（本佛） 建長二、十、二寂
- 四 道舜 文永元、二、三寂
- 五 覺生 文永八、六、九寂
- 六 觀明 弘安八、九、廿一寂
- 七 了信 永仁六、二、十三寂
- 八 如一 元亨元、三、六寂
- 九 舜昌 建武二、正、廿五寂
- 一〇 西阿 正平十、八、十八寂
- 一一 圓智 正平十二、三、廿七寂
- 一二 誓阿 文中三、七、十九寂
- 一三 恭阿 天授三、九、二十寂
- 一四 助阿 弘和元、四、廿二寂
- 一五 佐阿 應永五、二、廿二寂
- 一六 信樂 應永七、十、廿二寂
- 一七 法阿 應永十四、四、廿三寂
- 一八 入阿 文安五、八、廿六寂
- 一九 隆阿（堯譽） 文明十三、九、七寂
- 二〇 空禪 寶德二、四、廿八寂
- 二一 慶竺（大譽） 長祿三、正、廿四寂
- 二二 珠琳（周譽） 永正八、正、廿六寂
- 二三 愚底（勢譽） 永正十三、四、十一寂
- 二四 訓公（肇譽） 永正十七、八、十五寂
- 二五 存牛 天文十八、十二、二十寂
- 二六 源派（保譽） 天文二十、三、晦寂
- 二七 光然（德譽） 弘治元、七、廿四寂
- 二八 聰甫（浩譽） 慶長三、十一、十七寂
- 二九 中興 尊照（滿譽） 元和六、六、廿五寂
- 三〇 法雲（城雲） 寛永四、十二、一寂
- 三一 源正（然譽） 寛永五、八、五寂
- 三二 靈巖（雄譽） 寛永十八、九、一寂
- 三三 廓源（圓譽） 慶安元、七、四寂
- 三四 文宗（心譽） 慶安二、十二、八寂
- 三五 舊應（勝譽） 明暦三、三、一寂
- 三六 尊空（帝譽） 元祿元、十一、七寂
- 三七 知鑑（玄譽） 延寶六、三、六寂
- 三八 萬無（玄譽） 天和元、六、廿五寂
- 三九 感榮（直譽） 貞享四、十二、一寂
- 四〇 孤雲（專譽） 元祿六、十一、六寂
- 四一 良我（宏譽） 元祿六、十二、廿九寂
- 四二 秀道（白譽） 寶永四、三、十一寂
- 四三 圓理（應譽） 享保十、九、五寂
- 四四 岩了（通譽） 享保元、七、十七寂
- 四五 澤春（然譽） 享保三、七、廿五寂
- 四六 了鑑（然譽） 享保十二、八、五寂
- 四七 見超（照譽） 享保十七、正、六寂
- 四八 往的（孚譽） 元文三、四、廿五寂
- 四九 眞察（稱譽） 延享二、四、四寂
- 五〇 鸞宿（靈譽） 寛延三、十、十五寂
- 五一 雲頂（喚譽） 寶暦三、二、五寂
- 五二 了風（風譽） 寶暦四、九、三寂
- 五三 順眞（龍譽） 明和六、四、十三寂
- 五四 澤眞（哲譽） 明和二、七、廿五寂

五五 正含（興譽）明和六、十、二寂　五六 教意（覺譽）明和八、十二、四寂　五七 貞現（檀譽）安永九、九、廿四寂　五八 祐月（佛譽）天明四、七、五寂　五九 興玄（貫譽）寛政八、三、十八寂　六〇 定說（誠譽）享和二、正、三寂

六一 聖道（仰譽）享和元、九、十六寂　六二 靈麟（聖譽）文化三、四、十三寂　六三 智儼（存譽）文化六、八、十六寂　六四 在心（泰譽）文政五、九、廿七寂　六五 貞嚴（照譽）文政十、六、廿九寂　六六 貞瑞（察譽）天保二、十二、廿二寂

六七 說行（聽譽）嘉永三、四、十九寂　六八 說玄（響譽）天保九、閏四、廿一寂　六九 順良（方譽）弘化二、十二、十六寂　七〇 歡幢（林譽）嘉永元、七、廿六寂　七一 顯道（萬譽）安政五、五、十二寂　七二 淨嚴（莊譽）文久元、四、十六寂

七三 學天（名譽）明治三、十二、廿六寂　七四 俊光（隨譽）明治七、五、廿一寂　七五 徹定（順譽）明治廿七、三、十五寂　七六 行誠（立譽）明治廿一、四、廿五寂　七七 靈瑞（鳳譽）明治廿九、五、十二寂　七八 運海（竟譽）明治卅七、十二、廿一寂

七九 現有（孝譽）

○淨土宗三緣山增上寺歴代

（創立年時）後小松天皇明德四年
（古昔位置）武藏國貝塚
（再興年時）後陽成天皇慶長十年
（現今位置）東京市芝區芝公園

一 聖聰 酉譽 永享十二、七、十八寂
二 酉仰 聰譽 長祿三、九、十五寂
三 聖觀 音譽 文明十一、七、二寂
四 光問 隆譽 明應元、五、十四寂
五 了聞 天譽 永正二、七、八寂
六 智雲 領譽 永正十三、八、十四寂

七 周仰 親譽 天文二十、三、十九寂
八 天曆 果譽 永祿五、八、十八寂
九 貞把 道譽 天正二、十二、七寂
一〇 存貞 感譽 天正二、五、十八寂
一一 聞也 雲譽 天正十二、九、五寂
一二 中興 慈昌 存應 元和二、十一、二寂

一三 廓山 一實 寛永二、八、廿六寂
一四 了的 導故 寛永七、九、十五寂
一五 潮龍 助給 寛永七、十二、九寂
一六 傳察 誠阿 寛永九、正、元寂
一七 了學 遊獄 寛永十一、二、十三寂
一八 隨波 向西 寛永十二、九、十寂

一九 智童 志白 寛永十六、正、九寂
二〇 雪念 慈眼 寛永十七、九、十八寂
二一 還無 空脱 慶安三、六、二十寂
二二 位産 遲阿 承應元、八、二十寂
二三 貴屋 直爾 万治三、正、廿一寂
二四 露月 本譽 寛文四、九、廿八寂

二五 智哲 正心 寛文九、八、十寂
二六 歷天 森譽 延寶元、十二、三寂
二七 珂天 京風 延寶四、六、十三寂
二八 詮雄 良海 貞享四、七、八寂
二九 巖宿 直在 貞享四、十二、八寂
三〇 靈玄 生譽 元祿十一、五、九寂

三一 古巖 願故 元祿五、九、十六寂
三二 了也 貞譽 寶永五、四、三寂
三三 白玄 清風 元祿十三、七、二寂
三四 雲臥 諸譽 寶永七、閏、十八寂
三五 門周 湛譽 享保五、九、十三寂
三六 祐天 愚心 享保三、七、十五寂

三七 詮察 松譽 享保二、三、十八寂
三八 白隨 演譽 享保十五、六、廿一寂
三九 問鑑 學譽 享保十七、十二、五寂
四〇 利天 衍譽 享保二十、二、九寂
四一 顧秀 通譽 元文四、十、十寂
四二 了般 尊譽 延享四、十、八寂

四三 連察 不如 寶曆五、四、廿五寂
四四 覺瑩 門譽 寶曆四、十一、六寂
四五 大玄 成譽 寶曆六、八、四寂
四六 定月 妙譽 明和八、十二、三寂
四七 辨秀 歡譽 明和九、七、廿五寂
四八 智瑛 典譽 安永二、二、廿五寂

四九 靈應 豊譽 安永六、二、十一寂
五〇 隆善 便譽 寛政三、三、廿四寂
五一 滿空 現譽 寛政八、七、九寂
五二 圓宣 統譽 寛政四、五、二寂
五三 智堂 嶺譽 寛政十二、五、十六寂
五四 念海 倫譽 文化九、九、十五寂

五五 在禪（重譽）文政三、三、廿一寂 ── 五六 典海（教譽）文化元、十二、十寂 ── 五七 實海（皓譽）文政三、正、九寂 ── 五八 舜從 ── 五九 顯了（寶譽）── 六〇 顯了（寶譽再住）天保二、三、十三寂 ──

六一 念成（功譽）天保九、七、廿九寂 ── 六二 德翁（明譽）天保十二、五、廿三寂 ── 六三 巨東（瑞譽）天保十三、八、九寂 ── 六四 密賢（梵譽）弘化元、六、三寂 ── 六五 智典 ── 六六 慧嚴（冠譽）萬延元、十二、十寂 ──

六七 教音（闡譽）慶應三、十、十七寂 ── 六八 明賢（等譽）明治五、八、廿四寂 ── 六九 大宣（温譽）明治十七、二、廿九寂 ── 七〇 行誡（立譽）明治廿一、四、廿五寂 ── 七一 靈瑞（鳳譽）── 七二 玄信 明治二十、五、十七寂 ──

七三 靈瑞（再住）明治廿九、五、十二寂 ── 七四 義應（交譽）明治廿三、五、十七寂 ── 七五 運海 明治三十七、十二、廿一寂 ── 七六 現有 ……… 七七 貫務

○淨土宗西山派光明寺歷代

一 源空 建暦二、正、廿五寂
二 蓮生 建久九住 元久二、九、十四寂
三 幸阿 元久二住 暦仁元、十二、二寂
四 證空 善惠 寶治元、十一、廿六寂
五 尊西 源光
六 淨音 法興 文永八、五、廿二寂
七 觀性 善空 弘安九、三、八寂
八 立信 廣空
九 玄觀 正空
一〇 祖閑 長空 元弘二、十、五住 康永二、五、十寂
一一 乘圓 月空
一二 聖法 弘空
一三 教神 傳空
一四 教順 一空
一五 空撮 乘運 永正五、二、十三寂
一六 秀旭 舜空 天文二十、十二、五寂
一七 正孝 融國
一八 宏善 舜叔 弘治三、七、廿三寂
一九 乘養 底空
二〇 正見 實道
二一 顯眞 實空
二二 圭遵 空運
二三 頓空 春易
二四 顯雄 桓空
二五 等順 顯空 永祿五、十一、廿五住 元龜四、正、六住
二六 教運 頓空 元龜四、正、廿七住
二七 甫叔 智空 天正十四、六、二寂
二八 默然 尊空 永祿二、十一、住 元和七、七、二寂
二九 李栖 萬空 慶長七、十二、住 寛永九、七、廿八寂
三〇 純長 道空 元和元、住 寶永十五、正、十四寂
三一 弘元 本空 寛永十六、九住 慶安二、十一、十九寂
三二 俊意 倍山 慶安四、十一、廿九住 延寶二、八、一寂
三三 休園 圓空 延寶二、十、十七住 元祿九、八、七寂
三四 太悅 快空 天和三、十二、九住 貞享三、十一、廿一寂
三五 惠雲 大空 貞享三、住、元祿十二、退、有故被削世譜
三六 絕道 達空 元祿十二、五、九住 正德五、十二、廿三寂
三七 作遵 靈空 寶永四、四、住 享保二、七、七寂
三八 澤了 明空 享保二、六、十九住 同十五、正、廿五寂
三九 賢秀 三空 享保十五、三、廿六住 同十八、十二、九寂
四〇 臥雲 龍空 享保十九、四、八住 寛保二、七、三寂
四一 看省 日空 寛保二、十、廿五住 同二、十、十三寂
四二 旭粲 然空 元文二住 同三、十、廿八寂
四三 旭瑛 泰空 延享三、十二住 同九、二、二十寂
四四 元克 峻空 延享五、五住 同四、二、廿二寂
四五 俊察 盡空 寛延四、四住 寶暦三、十二、四寂
四六 惠玉 眞空 寶暦四、正住 安永九、八、廿五寂
四七 實堂 眞空 明和六、十二住 天明元、十一、二寂
四八 律賢 見空 安永六、四、四住 同四、九、二十二寂
四九 壽山 眞空 天明四、十一住 同七、七、廿七寂
五〇 豐道 大空 天明七、十一住 寛政九、十二、五寂
五一 法麟 端空 寛政十、八住 享和三、十一、十八寂
五二 玄敬 禮空 享和三、九住 文化二、十一、一寂
五三 呑海 量空 文化二、九住 文政十、六、十五寂
五四 大臻 道空 文化十二、四住 文政二、十二、廿一寂

五五 俊英　仙空　文政三、三住　同四、七、廿五寂

五六 秀山　叡空　文政四、十一住　天保二、九、十六寂

五七 亮範　關空　天保二、十二住　嘉永五、七、廿九寂

五八 感瑞　眞空　天保十一、十二住　嘉永元、十、廿六寂

五九 俊鳳　鷲空　嘉永元、十二住　萬延元、六、廿六寂

六〇 仙意　誠空　安政六、五住　明治五、九、廿三寂

六一 寛績　成空　慶應元、十一住　明治十八、十二、六寂

六二 隆賢　哲空　明治四、六住　同十八、一、廿五寂

六三 俊洲　滄空　明治十七、四住　同十九、十一、退

六四 圓瑞　輪空　明治二十、二住　同二十六、五、十三寂

六五 賢玉　精空　明治二十六、九住　同三十五、三、十五寂

六六 俊洲　滄空　明治三十三、二、再住　同三十八、六、六寂

六七 相善　觀空

○時宗藤澤山淸淨光寺住持歴代

（創立年時）後醍醐天皇正中二年
（現今位置）相模國高座郡藤澤大富町

一呑海（正中二開基　嘉暦二、二、十八寂）――二安國（建武四、十二、三寂）――三一鎭（文和四、十二、廿二寂）――四渡船（康暦三、正、八寂）――五元愚（嘉慶元、正、十一寂）――六自空（應永十九、三、十一寂）――

七尊明（應永廿四、四、十寂）――八大空（永享十一、十一、十四寂）――九南要（文明二、六、十九寂）――一〇如象（明應三、正、廿六寂）――一一尊皓（明應五、七、十八寂）――一二一峯（永正九、八、廿五寂）――

一三普光（寛永三、五、廿二寂）――一四燈外（正保元、四、廿寂）――一五如短（正保三、八、八寂）――一六託資（萬治元、十二、三寂）――一七慈光（寛文三、十、十五寂）――一八木端（寛文三、三、晦寂）――

一九尊任（元祿四、九、十五寂）――二〇信碩（元祿四、九、廿四入　元祿九、九、廿七寂）――二一尊遵（寶永四、十、晦寂）――二二唯稱（寶永四、十二、十八入　寶永五、四、廿六寂）――二三賦國（正德元、十一、廿四寂）――二四轉眞（正德元、十一、廿四入　享保五、十一、十六寂）――

二五一法（享保十、六、廿九寂）――二六快存（享保二十、十、廿九入　寶暦三、十一、九寂）――二七如意（享保十一、三、十八入　享保二十、九、十二寂）――二八賦存（寶暦四、七、七入　寶暦六、二、廿八寂）――二九一海（寶暦十一、八、十三入　明和三、三、廿六寂）――三〇呑快（明和三、三、三入　明和六、三、廿九寂）――

三一任稱（明和六、七、七入　安永二、三、三寂）――三二尊如（安永五入　安永八、三、廿寂）――三三諦如（安永八、五、十一入）――三四尊祐――三五一空――三六弘海――

三七傾心――三八一道――三九一如――四〇一念――四一尊證――四二尊敎――

四三一眞――四四尊覺――四五尊龍――四六尊純（明治三十九、十、十二入　同四十四、七、三十寂）

○臨濟宗東山建仁寺住持歷代

（創立年時）土御門天皇建仁二年（カ）
（現今位置）京都市下京區建仁寺町

一 榮西（明菴）建保三、六、五寂
二 行勇（退耕）仁治二、七、十五寂
三 道聖（三諦房）仁治二、六、六寂
四 玄珍 十一、七寂
五 禪興 六、九寂
六 嚴琳（蓮寶房）四、廿七寂
七 圓琳（一乘房）七、廿七寂
八 證救（濟翁）文應元、八、十七寂
九 了心（大歇）
一〇 辨圓（圓爾）正嘉二、五、十四入 弘安三、十、十七寂
一一 道隆（蘭溪）正元元、入 弘安元、七、廿四寂
一二 紹仁（義翁）弘長元、入 弘安四、六、二寂
一三 祐圓（虛菴）弘安十、十、十二寂
一四 空性（痴鈍）正安三、六、廿九寂
一五 圓範（無隱）德治二、十一、十三寂
一六 覺圓（鏡堂）正安二、十二入 德治元、九、廿六寂
一七 德儉（約翁）德治元、十二入 元應二、五、十九寂
一八 宗鑑（明窓）文保二、七、廿寂
一九 巧安（嶮崖）元弘元、七、廿三寂
二〇 道生（鐵菴）元亨元入 元弘元、正、六寂
二一 祖輝（獨照）嘉曆元入 建武三、三、廿四寂
二二 仁恭（石梁）建武元、十二、十八寂
二三 正澄（清拙）正慶二、十、廿入 曆應元、十二、再入 曆應二、正、十七寂
二四 楚俊（明極）延元元、四、七入 延元元、九、廿七寂
二五 居中（嵩山）延元二入、曆應二、再入 貞和元、三、六寂
二六 慈照（高山）曆應三入 貞和二、十二、廿五寂
二七 竺源（東海）康永元入 康永三、十、十六寂
二八 宗然（可翁）貞和元、四、廿九寂
二九 智明（蒙山）康永三入 貞治九、八、二十寂
三〇 友梅（雪村）貞和元、二、十八入 貞和二、十二、二寂
三一 妙胤（別傳）十二、十五寂
三二 元晦（無隱）貞和四入 延文三、十、十七寂
三三 光林（放牛）應安六、八、九寂
三四 祖麟（足菴）文和三、十一、廿七寂
三五 德見（龍山）觀應元、八入 延文三、十一、十三寂
三六 善育（大林）文和三入 應安五、十二、三寂
三七 義天（無雲）文和四入 貞治六、五、廿七寂
三八 妙在（此山）延文元入 永和三、正、十二寂
三九 仁浩（無涯）延文三、四、五入 延文四、正、五寂
四〇 元曉（月窓）延文四入 貞治元、十、二寂
四一 靈致（天境）延文五、八、十八入 永和二、七、廿九再入 永德元、十一、十八寂
四二 圓月（中巖）貞治元、四、十九入 同年八、再入 永和元、正、八寂
四三 慈永（青山）貞治二、三、廿三入 應安三、十、九寂
四四 圓旨（別源）貞治三、六入 貞治三、十、十寂
四五 良聰（聞溪）貞治三入 應安五、七、五寂
四六 圓見（月蓬）貞治五入 應安三、十二、二寂
四七 周澤（龍湫）貞治六、三、九入 嘉慶二、九、九寂
四八 普在（在菴）應安元入 永和二、閏七、四寂
四九 清誾（中山）
五〇 仁球（石鱗）應安四、十二、十九寂
五一 良遁（道林）
五二 曇生（頑石）永和二、七、廿七寂
五三 運芳（桂巖）永和三、十二、十五寂
五四 良芳（蘭州）永和四入 至德元、十二、六寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗東山建仁寺）

五五 周信 義堂　康曆二、四、四入　嘉慶二、四、四寂
五六 慶圓 月心　｜、九、十六寂
五七 宗任 大用　永德二、正入
五八 妙快 古劍　永德二、八入
五九 良永 相山　至德元、入　至德三、八、五寂
六〇 祖裔 竺芳　應永元、七、廿九寂

六一 如金 玉岡　至德三、入　應永九、八、廿六寂
六二 周敦 大義　明德三、十二、二寂
六三 宗古 靈岳　｜、八、十八寂
六四 周格 物先　應永四、八、十九寂
六五 清瑜 溫中　｜、正、廿一寂
六六 周巳 心巖　明德四、秋入　應永五、三、四寂

六七 一麟 一菴　應永元、十、十九入　應永十四、十二、二寂
六八 祥登 大年　｜、五、十九寂
六九 中崧 中山　應永五、入　｜、五、十九寂
七〇 宗濬 龍潭　應永七、十、廿九寂
七一 善益 大中
七二 梵雲 祥菴　應永廿四、三、五寂

七三 德基 大業　應永廿一、十、十四寂
七四 梵亮 明室
七五 宗新 秀峯
七六 清牧 東溪　｜、三、十六寂
七七 明麟 聖徒　｜、八、七寂
七八 梵芳 玉畹　｜、三、十二寂

七九 妙夫 一關
八〇 周曇 竺雲　｜、四、三寂
八一 圓伊 仲方　應永十六、三、十四入　應永二十、八、十五寂
八二 一光 日巖
八三 周初 極先　應永廿四、三、二寂
八四 一大 遠芳

八五 梵超 象先　應永廿、十一、七寂
八六 中令 行中
八七 良楷 南堂
八八 通恕 惟忠　應永十七、八、廿三入　永享元、九、廿五寂
八九 曇尹 耕雲
九〇 眞玄 太白　應永十八、六入　應永廿二、八、廿二寂

九一 崇誾 巨闇
九二 祖運 大岡　｜、四、十四寂
九三 梵師 仲安
九四 光聞 明溪
九五 章珍 南洲
九六 建幢 南宗

九七 全檮 楠岩
九八 周印 古篆
九九 宗琢 玉峯
一〇〇 靈彥 竺卿
一〇一 梵宛 子春
一〇二 周仲 叔方　永享四、十一、晦寂

一〇三 元瑾 子瑜
一〇四 妙澤 雲溪
一〇五 周篆 文明
一〇六 良云 少雲
一〇七 清正 春澤
一〇八 宗播 叔英　嘉吉元、九、十九寂

一〇九 仁逵 東叟
一一〇 梵樟 惟秀
一一一 妙可 悅堂
一一二 性同 大徹　｜、八、廿四寂
一一三 妙曇 季芳
一一四 全曉 了中

一一五 能秀 台岩
一一六 承廣 無外
一一七 阿菊 古芳
一一八 禮忍 梅嶺　永享九、十二、三寂
一一九 妙孫 季英
一二〇 梵鷟 文成

一二一 性智 大愚 永享十一、六、晦寂
一二二 清勇 從中
一二三 本矩 方中
一二四 法誾 笑岩
一二五 宗茂 材用
一二六 中兌 虎溪

一二七 正綸 希文
一二八 有明 文翁
一二九 大緣 竹菴 永享十一、四、廿三寂
一三〇 梵梁 惟方
一三一 西肇 諾菴
一三二 梵芳 梅嵓

一三三 清渭 釣文
一三四 周藝 遊叟 文安二寂
一三五 弘榮 大寧 ｜、十二、二十寂
一三六 丶元 竺翁 永享元、五、廿五寂
一三七 壽郁 文林 正長元、秋入 ｜、五、廿六寂
一三八 妙河 東溟

一三九 聖最 勉之
一四〇 等懋 德中 文安三、十二、廿六寂
一四一 有諸 大有
一四二 宗桂 識遠
一四三 清禪 伯元
一四四 崇瑛 藍田 寶德三、八、十六寂

一四五 寶勛 堯天 永享元入
一四六 乾景 德仲 永享二、夏賜帖
一四七 周慶 喜泉
一四八 永喜 笑雲
一四九 如憲 用章 永享三入 ｜、十二、廿九寂
一五〇 彥洞 明叟 ｜、十二、二十寂

一五一 建崇 惟嵒 永享六入
一五二 祖稜 伯師 永享七、十二、廿三入
一五三 祖淳 朴堂 永享九、八入 應仁元、五、廿四寂
一五四 龍派 江西 永享九、十賜帖 文安三、八、五寂
一五五 妙守 元節 永享六、十二入
一五六 景繕 性天 永享十二、八入 享德二、十、十二寂

一五七 清播 心田 嘉吉元、八、廿二入
一五八 周巖 東沼 寬正三、正、二寂
一五九 法璵 文琰
一六〇 友南 陽谷
一六一 中嘉 瑞雲
一六二 丶藍 靑岩

一六三 聖才 文溪
一六四 丶尹 伯文
一六五 丶貞 松茂
一六六 良曇 元華 寬正三、十一、廿一寂
一六七 丶稟 性天
一六八 丶蕣 雪庭

一六九 永誾 泰和
一七〇 中怡 悅林
一七一 龍惺 瑞巖 文安三、十、廿一入 寬正元、閏九、五寂
一七二 至廣 春航 康正元、六、二寂
一七三 丶玄 太初
一七四 希闇 古道

一七五 德慶 雲莊
一七六 正英 邵中
一七七 契智 愚谷 ｜、四、三寂
一七八 珠回 呂翁
一七九 丶勤 業白
一八〇 丶璨 象田 寶德元、九入

一八一 丶楨 國庸 寶德三、九、入
一八二 曇種 菊畹
一八三 原松 祝菴
一八四 良存 默叟
一八五 丶柏 古心 享德三、三入 同二、三、廿七再入
一八六 宗价 大士 康正元、入 享德二、八、十七再入

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗東山建仁寺）

- 一八七 龍睬 九淵 康正二入 文明六、三、十一寂
- 一八八 宗愈 泰斗 長祿元入
- 一八九 ヽ貞 惟正
- 一九〇 永嵩 雪巖
- 一九一 清啓 天與
- 一九二 宗永 宗江 長祿四、八入 [illegible]三、一寂
- 一九三 ヽ訓 月庭
- 一九四 景菊 存中
- 一九五 周歡 笑嶂
- 一九六 良伊 正仲 寛正四、八入
- 一九七 ヽ瑞 希壽
- 一九八 宗殊 勝幢 寛正五、七入 文明九、再入
- 一九九 光韶 舜徒 文正元入
- 二〇〇 ヽ菊 莊隱
- 二〇一 眞要 文叔
- 二〇二 集連 魯菴
- 二〇三 等章 文苑 文明四賜帖
- 二〇四 ヽ眞 珠溪 文明四、十二、二入
- 二〇五 正茂 秋柏 文明五、八入
- 二〇六 秀瑛 自成 文明五賜帖
- 二〇七 ヽ燈 心泉
- 二〇八 宗象 寶洲 文明六、六賜帖 文明六、十二、六寂
- 二〇九 中隗 始彦 文明八、八賜帖
- 二一〇 以成 九峰 文明十五、七、九寂 文明九、十二賜帖
- 二一一 梵同 太虛 文明十賜帖
- 二一二 永豐 鐘阜 文明十、十一賜帖
- 二一三 雲郁 文紀 文明十二、二入
- 二一四 原韶 春江 文明十一賜帖
- 二一五 元暉 繼章 文明十二入
- 二一六 ヽ瞰 東嵩 文明十二賜帖
- 二一七 龍統 正宗 文明十三、九、廿七入 明應七、正、廿三寂
- 二一八 龍澤 天隱 文明十五、三入 明應九、九、廿三寂
- 二一九 清鄴 子才 文明十五、十二、三入
- 二二〇 清堅 密溪 文明十六、六、廿六入
- 二二一 源梁 大梅 文明十六、七賜帖
- 二二二 祖兆 延瑞 文明十七、十一、十九入
- 二二三 宗頴 考叔 文明十七、十一賜帖
- 二二四 ヽ唬 喜足 文明十八、四賜帖
- 二二五 永琮 合浦 文明十八、四賜帖 文明十八、四、十六寂
- 二二六 元鶴 登瀛 文明十九、四賜帖
- 二二七 龍楨 叔幹 文明十九、四賜帖
- 二二八 孝壽 松年 文明九、五賜帖
- 二二九 ヽ幢 斯立 文明十九賜帖
- 二三〇 聖壽 仁浦 長享二、五、十九入
- 二三一 德昌 杜林 延德元、九、廿七入
- 二三二 宗亨 乾仲 延德二、十一、十六入
- 二三三 知裔 竺源 延德三、十二賜帖 明應三、三、十六再住
- 二三四 龍緣 未了 延德三、三、十六賜帖
- 二三五 宗寧 清源 延德三、四、十四賜帖
- 二三六 衛敏 秀峯 延德三、八、十七賜帖 明應元、十二、十八再住
- 二三七 集雍 陽叔
- 二三八 ヽ椿 春育 明應四、十二、十三入
- 二三九 明闍 東牧 明應六、春賜帖
- 二四〇 祖廣 慈航 明應七、秋賜帖 同九、五、十三再住
- 二四一 集樹 茂叔 大永二、四、廿四寂 明應八、五、廿六入
- 二四二 宗純 溫仲 永正八、十二、八寂 明應八、六、廿四賜帖
- 二四三 弘稽 古桂 文龜元、八、廿七入
- 二四四 利珪 甄叔 文龜三、秋賜帖
- 二四五 永瑾 雪嶺 永正五、三、廿入 天文六、九、八寂
- 二四六 壽桂 月舟 永正七、三、五入 天文二、十二、八寂
- 二四七 ヽ受 宗林 永正七、六、四入
- 二四八 ヽ誕 慶甫 永正八、十二、七入
- 二四九 ヽ集 大成 永正九、八、十八入 永正十二、八、廿一寂
- 二五〇 宗幹 貞岳 永正九、十二、廿五賜帖
- 二五一 清光 月甫 永正十、五、十八入
- 二五二 ヽ祝 融峯 永正十、十二、十賜帖

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗東山建仁寺）

二五三 先岫 月谷 永正十一、二、二賜帖
二五四 永遂 東岫 永正十一、三、三賜帖 大永六、十二、十寂
二五五 梵伊 字峯 永正十一、三、四賜帖
二五六 如泉 康甫 永正十一、三、四賜帖
二五七 克檀 芳岩 永正十一、五賜帖
二五八 丶鑑 湖月 永正十一、五賜帖
二五九 圓柔 芳春 永正十一、五賜帖
二六〇 英倫 彜伯 永正十一賜帖
二六一 祖藝 文岫
二六二 龍崇 常菴 永正十四、六、三入 天文五、九、五寂
二六三 清祐 白天 永正、十四、七、廿九賜帖
二六四 慈光 月江 永正十五、三、廿三入
二六五 光恩 仁岳 永正十七、八、十二賜帖
二六六 東悆 悅岩 享祿二、十二、十一寂 永正十八、三賜帖
二六七 丶貞 松壑 永正十八、四、廿八入
二六八 眞慶 一麟 大永三、七、廿四賜帖
二六九 瑞迦 竺英 大永三、八賜帖
二七〇 瑞承 有自 大永五、五、十入 大永六、七、廿五寂
二七一 宗璨 希三 大永八、三、廿四入 永祿四、四、十四寂
二七二 良蔭 汝興 享祿二、五、八賜帖 同年七、十六再住
二七三 永果 東暉 享祿三、五、廿一入 天文十一、八寂
二七四 洞丹 功甫 天文元、十二、賜帖
二七五 祖瀏 河淸 天文二、八、十八入 天文十二、七、廿九寂
二七六 賢昌 文仲 天文二、七、廿六賜帖
二七七 端益 友雲 天文四、七、廿三賜帖 同六、六、十九再住
二七八 宗賢 明甫 天文五、秋賜帖
二七九 鷹灞 驢雪 天文五、秋賜帖 同十八、廿七再住
二八〇 惠寶 玉之 天文五、閏十、十九賜帖
二八一 乘彭 長松 天文六、秋入
二八二 周玉 潤甫 天文十二、八、廿七入 天文十八、八、廿三寂
二八三 洞仙 雲巢 天文十、三、八賜帖
二八四 壽識 纖天 天文十二、十一、廿七入 天文十八寂
二八五 永淳 古岳 天文十七、九賜帖 天文十七、十、廿三寂
二八六 光賢 延秀 天文十、夏賜帖
二八七 永恩 春澤 天文廿二、三、六入 天正二、八、十六寂
二八八 景秀 鐵叟 天文廿一、五、廿五入 天正八、十一、十八寂
二八九 永忠 文溪 永祿十二、十一、四入
二九〇 聖慶 三餘 元龜二、五、十賜帖
二九一 東逋 術仙 天正五、十一、十一入 慶長十三、十、廿七寂
二九二 永雄 英甫 天正十四、十一、廿八入 慶長、七、九、十六寂
二九三 宗昨 明室 天正十五、二、十九入 天正十六、十二、十五寂
二九四 慈稽 古澗 慶長十、十二、八入 寛永十、九、五寂
二九五 紹益 友竹 慶長十一、三、十三入 慶安三、八、廿二寂
二九六 正精 進月 慶長十一、十一、十三入 慶長十二、五、九寂
二九七 東銳 利峯 慶長十五、十、廿三開帖 寛永廿、七、廿四寂
二九八 玄轍 琇溪 慶長十五、三、廿七入
二九九 元乘 一宗
三〇〇 中達 九巖 寛永二、六、廿入 萬治四、三、二十寂
三〇一 元寅 建中 寛永二、八、廿三入 寛永、三、八、二寂
三〇二 永洪 鈞天 寛永十六、二、廿入 承應二、二、十寂
三〇三 紹柏 茂源 承應三、十一、廿二入 寛文七、十二、廿寂
三〇四 紹善 三峯 明曆四、三、十五開帖 寛文十三、六、二十三寂
三〇五 祖昶 章天 明曆四、三、十五開帖 寛文八、六、十再住 寛文十二、八、晦寂
三〇六 通憲 顯令 萬治三、十、廿五入 天和元、十二、廿二寂
三〇七 正鉄 心傳 寛文四、三、五開帖 寛文六、六、廿三寂
三〇八 玄瑞 義天 寛文七、十、十開帖 延寶五、九、八寂
三〇九 東規 以成 延寶元、十二、八開帖 貞享二、四、廿四寂
三一〇 東竺 雲外 天和三、三、六開帖 同年四、廿二再住 享保十五、四、十一寂
三一一 宗植 松堂 天和三、八、廿入 正德四、九、十寂
三一二 慈嶂 黃巖 元祿二、二、五開帖 同五、三、廿再住 元祿七、閏五、廿三寂
三一三 慈篤 實傳 元祿五、十、十五開帖 同六、二、廿五再住 享保六、五、廿九寂
三一四 紹的 傳宗 元祿九、四、十九開帖 寶永四、五、十二寂
三一五 永集 雲壑 寶永五、四、十三開帖 同六、三、廿二再住 享保二、五、八寂
三一六 紹譚 洪基 正德元、六、十四開帖 享保三、三、一寂
三一七 宗瀓 汀峯 正德元、六、十四開帖 享保三、三、廿四再住 享保十五、正、十二寂
三一八 碩祐 天柱 正德元、六、十八開帖 享保六、三、七寂

諸大寺歴代幷諸職次第（臨濟宗東山建仁寺）

三一九 彦勳（全室）享保七、四、廿三開帖 同年五、廿五再住 享保八、十、十四寂
三二〇 東養（拙菴）享保十一、四、廿四開帖 同年十一、十三再住 元文元、八、六寂
三二一 慈篆（大陪）享保十一、四、廿四開帖 同十七、九、廿五再住 元文四、六、十六寂
三二二 紹育（春山）享保十一、四、廿四開帖
三二三 正琯（玉泉）享保十一、四、廿四開帖 元文四、九、六寂
三二四 中篘（雪巖）享保十六、五、八開帖 同十九、十一、廿三再住、延享四、十、四寂

三二五 紹訊（振宗）享保二十、閏三、廿七開帖 寛延三、二、廿二再住 寶暦二、五、廿寂
三二六 覺沅（東明）享保二十、閏三、廿七開帖 元文四、十、廿九再住 寶暦八、九、十六寂
三二七 道爾（北礀）寛延三、十二、四開帖 寶暦三、九、十二再住 明和三、九、四寂
三二八 彦柱（鐵舟）寛延三、十二、四開帖 明和元、八、二寂
三二九 覺葩（天岸）寛延三、十二、四開帖 寶暦五、五、十寂
三三〇 碩孝（永明）寶暦四、六、廿二開帖 明和六、八、廿六寂

三三一 竺津（白堂）寶暦十二、三、十九開帖 明和四、六、廿二寂
三三二 慈穆（在溪）寶暦十二、三、十九開帖 明和四、八、十九再住 安永四、九、廿九寂
三三三 紹菖（梁山）明和元、十、廿一開帖 安永四、八、四寂
三三四 中管（鳳洲）安永六、三、廿九開帖
三三五 東晙（高峯）安永六、三、廿九開帖 同年九、五再住
三三六 覺暹（海山）安永六、二、七寂 安永六、三、一賜帖

三三七 玄覺（仙巖）天明五、三、廿五開帖 寛政四、九、廿二寂
三三八 慈侃（正巖）天明五、三、廿五開帖 寛政八、二、廿九寂
三三九 彦端（友堂）天明五、三、廿五開帖
三四〇 玄寔（大有）寛政六、十、廿五開帖
三四一 玄諦（環中）寛政十二、四、七開帖
三四二 中倫（幹溪）文化三、四、開帖 同七、正、廿七再住 文政元、八、二寂

三四三 紹辨（介菴）文化三、四、開帖
三四四 東緝（嗣堂）文化三、四、開帖 文政三、三、十三再住 天保七、十二、廿六寂
三四五 玄珠（述岸）文化九開帖
三四六 玄賦（文叟）文政七、三、開帖
三四七 通銓（則堂）文政七、三、賜帖 天保二、八、十九再住 天保七、十二、十九寂
三四八 慈保（全室）文政十二、十開帖 天保三、九、五再住 文久三、三、四寂

三四九 紹衍（月潭）文政十二、十開帖
三五〇 玄曉（雪窓）
三五一 中規（宏道）
三五二 東玫（荊叟）天保十、十、開帖 同十三、九、再住 明治十九、一、廿一寂
三五三 紹潁（萬拙）弘化四、十、六開帖
三五四 慈穩（了堂）嘉永四、四、十一開帖 明治十七、七、十五寂

三五五 宗玕（湾溪）
三五六 東璋（上洲）
三五七 慈英（天章）
三五八 東佺（峻厓）
三五九 紹球（石窓）
三六〇 紹材（鄧林）

三六一 慈韶（石門）
三六二 東循（朴宗）
三六三 宗拙（大猷）
三六四 慈運（文嶺）
三六五 古鑑（龍關）
三六六 眞乘（玉翁）

三六七 義禎（古關）
三六八 祖順（孝道）
三六九 宗淵（默雷）

○臨濟宗巨福山建長興國禪寺住持歷代

（創立年時）後深草天皇建長五年
（現今位置）相模國鎌倉郡小坂村

一 道隆 蘭溪 弘安元、七、廿四寂
二 普寧 兀菴 至元十三、十一、廿四寂
三 正念 大休 正應二、十一、晦寂
四 紹仁 義翁 —、六、二寂
五 祖元 無學 弘安九、九、三寂
六 道然 葦航 正安三、十二、六寂

七 覺圓 鏡堂 德治元、九、廿六寂
八 空性 痴鈍 德治元、六、廿八寂
九 道海 桑田 延慶二、正、八寂
一〇 一寧 一山 元保元、十、廿五寂
一一 子曇 西澗 德治元、十、廿八寂
一二 圓範 無隱 德治二、十一、十三寂

一三 紹明 南浦 延慶元、十二、廿九寂
一四 顯日 高峯 正和五、十、廿寂
一五 德儉 約翁 元應二、五、十九寂
一六 弘會 東里 元應二、八、廿八寂
一七 世源 太古 元亨元、九、廿五寂
一八 惠日 東明 暦應三、十、四寂

一九 道隱 靈山 元應元、三、二
二〇 士雲 南山 正中二、十、七寂
二一 德璇 玉山 建武元、十、十八寂
二二 正澄 清拙 暦應二、正、十七寂
二三 楚俊 明極 建武三、九、廿七寂
二四 巧安 嶮崖 建武三、七、廿三寂

二五 祖輝 獨照 建武三、三、廿四寂
二六 惠宗 白雲 貞和二、十、晦寂
二七 居中 嵩山 貞和二、二、六寂
二八 聞悟 肯山 貞和二、八、二寂
二九 梵仙 竺仙 貞和四、七、十六寂
三〇 妙環 楓翁 文和三、二、十八寂

三一 禪鑑 象外 文和四、十二、十八寂
三二 永璵 東陵 貞治四、五、六寂
三三 士曇 乾峯 貞治四、十二、十一寂
三四 正因 明岩 貞治四、四、八寂
三五 素安 了堂 貞和元、十、廿寂
三六 聰秀 實翁 —、二、廿七寂

三七 可什 物外 貞治二、十二、八寂
三八 印元 古先 應安七、正、廿四寂
三九 士永 青山 應安七、十、九寂
四〇 法忻 大喜 應安七、九、廿四寂
四一 宏潤 天澤
四二 圓月 中岩

四三 善玖 石室 至德元、八、廿五寂
四四 友丘 東林
四五 士啓 東傳 應安七、四、廿一寂
四六 光一 皈山 應安七、九、十八寂
四七 元圭 方崖 永德二、九、十六寂
四八 普在 乍菴

四九 祖能 大拙 永和三、九、十三寂
五〇 是英 傑翁
五一 林芳 草堂 永和三、十二、十七寂
五二 妙悅 可翁 永和三、八、廿二寂
五三 全快 鈍夫 至德元、八、十四寂
五四 妙葩 嘉慶二、八、十三寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗巨福山建長興國禪寺）

五五 慶芳 少室 康應元、十一、七寂
五六 法頴 中山 ―、十一、七寂
五七 周誓 天 ―、十一、六寂
五八 慶圓 心 ―、九、十六寂
五九 周應 曇芳 ―、九、七寂
六〇 德俊 伯英 應永九、八、十二寂

六一 妙快 古劍 ―、八、十三寂
六二 應世 宗遠 ―、三、十寂
六三 存圓 天鑑 ―、四、十一寂
六四 興伊 大圓 ―、七、十九寂
六五 元聃 老仙 ―、正、九寂
六六 僧海 東暉 ―、六、廿七寂

六七 性珍 藏海 ―、六、十一寂
六八 等益 友峰 ―、二、廿二寂
六九 法方 中圓
七〇 希徹 心源 ―、十、十三寂
七一 文昱 東岳 應永廿三、二、廿三寂
七二 得哲 愚溪

七三 曾可 久菴 ―、正、廿六寂
七四 保譽 德岩 ―、二、十三寂
七五 興忻 悅岩
七六 闓光 象初
七七 圓方 無外
七八 禪能 南宗

七九 素大 大雲 ―、八、廿四寂
八〇 中泰 春江 ―、八、廿四寂
八一 皈整 大綱
八二 應嘉 瑞翁
八三 如春 少林
八四 妙年 鷲峯

八五 令聞 心聞
八六 淨林 大茂
八七 法慶 大安
八八 方聞 一溪
八九 法朝 日峯 ―、四、三寂
九〇 等海 東曙

九一 元禮 履仲
九二 資善 慶宅 ―、正、廿五寂
九三 全角 大用
九四 諲謹 無言
九五 圓樣 範堂
九六 良忍 大道

九七 梵亘 萬古
九八 中亮 菊隱
九九 元陳 古岩
一〇〇 長會 建宗
一〇一 等曒 照中
一〇二 孝貞 松嶽

一〇三 中申 東郊
一〇四 有貞 松崖 ―、十一、九寂
一〇五 曾顯 道菴 ―、十一、九寂
一〇六 曾尹 耕隱
一〇七 壽彭 澤隱
一〇八 喬順 大順

一〇九 清睦 和菴
一一〇 中季 東英
一一一 應符 契翁
一一二 總暉 東海
一一三 妙龍 劍江
一一四 禪三 益仲

一一五 元統 一源 應永十八、二、十九寂
一一六 等睦 中和
一一七 等擇 木禪
一一八 貞察 審中
一一九 啓端 直菴
一二〇 周傳 別宗

一二一中訢 笑岩 —
一二二白嚴 竹隱 —
一二三巨幢 大建 —
一二四周壯 松堂 —
一二五心榮 華宗 —
一二六自欽 唱岩 —

一二七永旭 東生 —
一二八守哲 古仲 —
一二九曾妙 玄海 —
一三〇寶粱 桂材 —
一三一芳統 萬宗 —
一三二等梵 竺西 應永十八、八、十一寂

一三三闇爾 汝仲 —
一三四中曇 一瑞 —
一三五本雄 仲英 —
一三六法永 明湖 —
一三七梵淳 朴中 永享五、十二、晦寂
一三八阿由 義海 —

一三九皈才 覺海 永享十、十、十九寂
一四〇要賢 仁菴 —、五、十七寂
一四一士呈 龍岩 —、五、三寂
一四二充察 智海 —
一四三心正 仲明 —
一四四統王 清河 —

一四五心林 一華 文安三、[illegible]、十五寂
一四六得光 觀堂 —
一四七用尊 策谷 —
一四八德瑛 伯溫 寶德三、二、十一寂
一四九德永 字江 寛正六、七、廿寂
一五〇世澤 無滴 —

一五一中勵 節翁 —、五、四寂
一五二妙喜 大見 —
一五三宗嚴 毅仲 —
一五四統悟 星岩 —、四、二寂
一五五顯正 中叟 —、十、廿六寂
一五六嵩一 以清 文明二、八、廿四寂

一五七存松 大樹 延德三、十一、廿三寂
一五八妙繁 大蔭 —
一五九得公 子純 —、七、七寂
一六〇顯朝 天初 —、五、廿三寂
一六一景祐 天助 —、十、十六寂
一六二顯騰 竺雲 —

一六三德閒 香林 —
一六四英璵 玉隱 —、八、二寂
一六五梵壽 叔彭 —
一六六仝了 性雲 —
一六七元徹 心江 —
一六八惠棟 存材 —

一六九乾幢 暘谷 —、十二、十一寂
一七〇昌忠 貞芳 —
一七一玄澤 龍江 —
一七二祖祥 麟仲 —
一七三顯材 用林 —
一七四祖台 雲英 弘治三、十二、十四寂

一七五僧菊 九成 永祿十、九、四寂
一七六禪乂 俊叟 永正十四、十一、廿三寂
一七七宗祐 天叟 —
一七八單珠 龍派 寛永十二、四、廿寂
一七九慶順 瑞岩 明曆三、十一、廿五寂
一八〇元艮 最岳 明曆三、四、十五寂

一八一碩寬 大年 寛文十二、十、廿九寂
一八二祖德 明徹 寛文二、四、廿七寂
一八三碩珉 高嶽 延寶四、正、廿寂
一八四玄廉 溪堂 —
一八五惠祥 萬源 —
一八六碩東 天溪 —

諸大寺歴代并諸職次第（臨濟宗巨福山建長興國禪寺）

一八七崇寛 佛慈―一八八徳湛 龍室―一八九道杲 東陽―一九〇玄巖 龍山―一九一禪珪 長甌―一九二僧安 長山―

一九三玄琢 玉岡―一九四惠通 廊禪―一九五玄彭 松室―一九六碩信 義天―一九七元東 海門―一九八僧俊 秀岩―

一九九慧然 天瑞―二〇〇正徹 大蟲―二〇一碩誼 萬拙―二〇二禪無 大雲―二〇三惠超 龍門―二〇四徳祥 瑞應―

二〇五須跋 雪巣―二〇六惠亮 杲岑―二〇七子滴 曹源―二〇八一民 舜道―二〇九徳均 平源―二一〇元顯 頑石―

二一一顯周 鼎山―二一二徳聞 修山―二一三禪提 開宗―二一四碩才 良遂―二一五玄實 拙translate―二一六宗和 寶巖―

二一七碩英 雄邦―二一八元甾 圓淨―二一九法演 象河―二二〇存胤 龍淵―二二一元勃 拙堂―二二二惠樞 即門―

二二三子牧 箕山―二二四元志 願翁―二二五碩敬 石敬―二二六元云 等隣―二二七惠鎮 定溪―二二八惠眼 觀海―

二二九玄易 復菴―二三〇白聞 香山―二三一文宜 禮堂―二三二碩文 梅巖―二三三碩靜 壽應―二三四元柱 文國―

獨住一道周 一貞（兎宮 月鑑―雪庭―讓山）――一智良 細船―（舜洲―源鶴―

景猷―萬拙―宏山―璞洲―通翁―劍隨―藍田―壽山―城山―

、、―宗州―修道―玉圓―峨山―元志 碩應―彭澤―維明―龍淵―

藏專──文敎──仁宗──德山──弘道──容道──虎岳)──三壽山 時保

○臨濟宗慧日山東福禪寺住持歷代

（創立年時）後深草天皇建長七年
（現今位置）京都市下京區本町十五丁目

一 辨圓 圓爾 弘安三、十、十七寂
二 湛照 東山 正應四、八、八寂
三 普門 無關 正應四、十二、十二寂
四 惠曉 白雲 永仁五、十二、廿五寂
五 惠雲 山叟 正安三、七、九寂
六 順空 藏山 延慶元、五、九寂
七 昭元 無爲 應長元、五、十六寂
八 琛海 月船 應長元、六、廿六寂
九 大惠 痴兀 正和元、十、廿二寂
一〇 智侃 直翁 元亨二、四、十六寂
一一 士雲 南山 建武二、十、七寂
一二 宗源 雙峰 建武二、十一、廿二寂
一三 處謙 潜溪 元德二、五、二寂
一四 宗杲 天桂 正慶元、八、廿七寂
一五 師鍊 虎關 貞和二、七、廿四寂
一六 玄侃 直山 式武四、八、一寂
一七 士曇 乾峰 康安元、十二、十一寂
一八 明一 一峰 貞和五、九、廿三寂
一九 禪海 無涯 文和元、七、十八寂
二〇 義沖 太陽 文和元、正、十一寂
二一 了愚 鈍翁 觀應三、四、六寂
二二 一鞏 固山 延文五、二、十二寂
二三 至孝 無德 貞治二、正、十一寂
二四 慈均 平田 貞治三、九、十六寂
二五 邵元 古源 貞治三、十二、十一寂
二六 士顏 卍菴 貞治三、七、七寂
二七 祖禪 定山 應安七、十一、廿六寂
二八 一以 大道 應安三、二、廿六寂
二九 士昭 鑑翁 延文五、十一、四寂
三〇 一清 無夢 應安元、五、廿四寂
三一 嘉猷 雪舟 永和元、九、十五寂
三二 士偲 友山 應安三、六、一寂
三三 源深 洞天 貞治二、四、廿六寂
三四 曇現 瑞岩 ―、二、八寂
三五 士啓 東傳
三六 了紀 綱宗
三七 心涼 檀溪 應安七、八、八寂
三八 知信 義堂 ―、九、五寂
三九 玄薰 徹堂 應安六、十一、十一寂
四〇 祖應 夢岩 應安七、十一、二寂
四一 景仰 西源 應安三、五、廿八寂
四二 芝丘 高菴 ―、十、五寂
四三 靈見 性海 應永三、三、廿三寂
四四 寶洲 南海 永德二、十一、廿九寂
四五 利涉 日田 至德元、閏九、十三寂
四六 義麟 瑞岩 至德元、二、八寂
四七 士東 日峰 至德元、八、廿五寂
四八 師振 起山 至德元、十、十八寂
四九 素璘 在山 至德元、三、十二寂
五〇 源用 大方 明德元、七、十三寂
五一 祖愛 天章 ―、十二、七寂
五二 知忻 笑岩 至德二、九、十七寂
五三 芝玉 振岩 明德二、七、十五寂
五四 玄柔 剛中 嘉慶二、五、廿七寂

諸大寺歷代并諸職次第（臨濟宗慧日山東福禪寺）

五五 長遠 韶陽 明德四、十二、十七寂
五六 士綱 南宗 應永八、十、二寂
五七 長齡 實中 應永九、十、十三寂
五八 祖濬 哲岩 應永十二、八、十七寂
五九 肯恒 菊莊 應永四、十一、十一寂
六〇 韶奏 九峰 應永十二、十一、十二寂

六一 祖旭 日東 應永廿、四、五寂
六二 希讓 在先 應永十、三、四寂
六三 通量 少室 應永十六、九、廿九寂
六四 祥秀 松岳 應永十二、七、二寂
六五 曇春 東岩 應永十五、二、廿寂
六六 九頴 秀岩 應永十五、十一、六寂

六七 健易 東漸 應永卅、四、十七寂
六八 了喜 大寧
六九 靈瑞 雲叟 應永十四、十一、晦寂
七〇 明昶 金山 應永廿、十一、十三寂
七一 昌詵 南源 應永十六、五、二寂
七二 允禎 祥岩 應永十七、四、三寂

七三 見剛 眞宗 應永十七、四、廿八寂
七四 宏怡 悅雲 應永廿七、四、廿三寂
七五 通知 心岳 應永廿、五、十寂
七六 明中 嵩岳 應永廿七、八 廿七寂
七七 玄冲 太虛
七八 明東 日照 應永廿八、五、九寂

七九 原冲 謙岩 應永廿八、九、廿一寂
八〇 方秀 岐陽 應永卅一、二、三寂
八一 通衍 大川 應永十八、十二、廿寂
八二 祖蘊 眞牧 應永十二、六、十七寂
八三 祥學 益翁 應永廿八、十二、廿二寂
八四 聖悟 明江 應永廿七、正、廿一寂

八五 令在 月岩 應永廿二、正、十寂
八六 祖興 季宗 應永廿二、正、九寂
八七 濟高 陽岩
八八 豐璵 中瑩
八九 性智 大愚 永享十一、六、卅寂
九〇 宴洪 南江 應永廿七、五、廿六寂

九一 玄晴 明叔 應永廿七、十、廿二寂
九二 景存 奘室
九三 士遵 古心 應永廿一、十二、十寂
九四 靈知 足菴 應永廿六、二、十二寂
九五 大麟 一中
九六 良鑑 中叟 永享九、五、八寂

九七 祖恭 伯順
九八 光堅 密岩 永享九、正、七寂
九九 會譚 笑翁
一〇〇 祖璨 大 應永廿七、十二、廿一寂
一〇一 善洞 雲心 應永廿八、七、廿八寂
一〇二 誠心 東澗

一〇三 珠堅 東陽 應永卅一、十一、四寂
一〇四 明識 桂林 應永卅五、六、十九寂
一〇五 珠得 徹叟 應永廿六、六、九寂
一〇六 僧薗 伸伯 應永廿九、七、十六寂
一〇七 令雅 頌溪
一〇八 通廣 雲澤

一〇九 齊遠 虎溪
一一〇 永璠 魯岳 正長二、正、十四寂
一一一 明紹 業仲 永享六、十、十寂
一一二 啓洪 翠岩 永享二、九、廿四寂
一一三 德輔 惟宗 文正元、二、六寂
一一四 大緣 竹菴 永享十一、四、廿三寂

一一五 充善 春溪 享德二、十二、四
一一六 一棟 隆菴
一一七 壽范 金溪 永享八、八、十四寂
一一八 聖香 嚴陽 文安二、五、十九寂
一一九 法揚 高明 永享四、十、廿九寂
一二〇 永敎 別傳

諸大寺歷代幷諸山次第（臨濟宗慧日山東福禪寺）

一二一大方 古[illegible] 永享九、三、廿五寂
一二二心安 [illegible] 永享九、六、廿七寂
一二三心英 芳岩 永享四、六、五寂
一二四士鏡 湖心 嘉吉元、正、十四寂
一二五宗紀 南[illegible] 永享十一、三、十六寂
一二六維篆 玄室
一二七關岱 雲[illegible] 嘉吉三、七、五寂
一二八直遠 [illegible] 文安六、五、九寂
一二九令薫 琴江 文安元、八、十一寂
一三〇以篤 信仲 寶徳三、十、一寂
一三一祖芳 一株 文安二、十一、卅寂
一三二一慶 [illegible]章 寛正四、正、廿三寂
一三三永原 中川 嘉吉三、二、十四寂
一三四祖默 存拙 應仁元、二、廿二寂
一三五慈超 此宗 長祿二、十二、廿七寂
一三六祥洵 月泉 文明十四、三、廿六寂
一三七玄嚴 季亨 長祿元、十二、廿五寂
一三八珠嚴 肅翁
一三九正琇 溫伯 享徳四、五、八寂
一四〇濟準 [illegible]翁
一四一方林 雪岡 康正二、七、廿二寂
一四二建冑 華居 文明二、二、廿二寂
一四三光侑 徳中 文安六、四、七寂
一四四會玄 象先 文明六、一、一寂
一四五禮浚 平川 長祿二、六、六寂
一四六仲爻 象初 享徳二、三、十一寂
一四七長柔 勝剛 康正二、十二、十三寂
一四八心禮 用叟 長祿二、六、六寂
一四九禮才 愚極 寶徳四、六、六寂
一五〇宗育 大化 寛正五、十一、廿二寂
一五一宗悅 心月 寛正五、八、廿四寂
一五二惠龍 天用 文明八、三寂
一五三爲學 太痴 文明元、五、十九寂
一五四超榮 [illegible] 文明二、十一、廿寂
一五五永春 起龍 文明二、五、廿九寂
一五六元修 月崖 文明十六、四、廿八寂
一五七元佐 巨濟
一五八聖慶 稜堂
一五九士原 岷江 寛正四、七、十四寂
一六〇元作 文溪 應仁元、八、十寂
一六一宗綱 天[illegible] 文明二、四、廿五寂
一六二祖章 典[illegible] 文明十六、一、一寂
一六三祖騮 快菴 文明六、七、廿寂
一六四令諸 月[illegible] 長享元、十二、十六寂
一六五光瑞 秀芳 文明二、五、十七寂
一六六正豫 兌心 文明七、十二、十五寂
一六七惠桑 旭昇 文明元、九、廿一寂
一六八見進 惟精 文明九、八、一寂
一六九妙滐 竹院
一七〇正好 月谷 文明八、三、廿六寂
一七一桂悟 了菴
一七二元郁 文伯 明十三、一、一寂
一七三首慶 雲英
一七四大淑 季弘 文明十九、八、七寂
一七五信佐 高霖 文明十四、七、五寂
一七六珠珍 [illegible]浦 文明十六、四、卅寂
一七七宗霖 甘澤 長享二、十一、十四寂
一七八智音 純如 明應三、十、十三寂
一七九生音 琴溪 永正元、八、二寂
一八〇希果 東昇 文龜二、九、四寂
一八一光松 東皈 文龜三、二、廿六寂
一八二宗敦 叢雲 大永七、四、五寂
一八三惠徹 汝南 永正四、五、廿七寂
一八四守懌 白悅 永正十七、十二、一寂
一八五長璆 玉岫
一八六景悟 桃岩 永正五、八、廿一寂

一八七令偉　作成　永正四、正、十八寂
一八八利寅　東曜　永正三、九、二寂
一八九慈暘　耀伯
一九〇惠澤　希雲
一九一東梁　要津　永正十七、八、六寂
一九二惠心　竺峯　永正十五、三、五寂

一九三景允　中邑
一九四周龍　雲叔
一九五信玄　白圭　享祿三、十、十寂
一九六信鏡　湖月　天文三、十二、十六寂
一九七瓚光　圭甫　天文三、十二、十六寂
一九八智光　安叔　享祿三、十、十寂

一九九善叢　茂彦　天文十、十二、十四寂
二〇〇光隣　芳郷　天文五、六、十四寂
二〇一宗揚　綱宗　享祿四、五、廿三寂
二〇二光悦　槐叔　天文七、十、九寂
二〇三令従　瑞雲　天文三、六、十一寂
二〇四祥廓　太虚　天文四、四、廿八寂

二〇五令松　高岳　天文廿一、三、廿二寂
二〇六令惠　竹伯　天文十五、十、一寂
二〇七守仙　彭叔　弘治元、十、十二寂
二〇八見橘　香仲　天文廿三、九、九寂
二〇九東興　叔龍　天文廿一、三、十八寂
二一〇賢諄　大痴

二一一光秀　[illegible]　元龜三、十一、一寂
二一二光璞　献由　天正十九、三、四寂
二一三惠心　竹雲　天正七、八、三寂
二一四龍喜　熙春　文祿三、正、三寂
二一五光瀉　逍翁　天正五、六、六寂
二一六善樟　笑隠　天正十四、五、廿二寂

二一七令見　汝源　天正十七、十、廿九寂
二一八永哲　惟杏　慶長八、六、十二寂
二一九長玉　月岑　天正十三、正、十寂
二二〇圓侃　眞渓　天正十、三、十三寂
二二一令憩　文坡　慶長八、七、廿三寂
二二二聖澄　月渓　慶長廿、七、七寂

二二三守藤　集雲　元和七、七、六寂
二二四惠瓊　瑶甫　慶長五、十、一寂
二二五龍珊　友月　元和元、七、廿寂
二二六玄長　養之　元和四、十一、十五寂
二二七清韓　文英　元和七、三、廿五寂
二二八光澤　天倫　慶長十四、七、廿二寂

二二九永濟　惟舟　慶長十七、三、九寂
二三〇令柔　剛外　寛永四、八、七寂
二三一光欽　瑞雪　寛永元、八、十一寂
二三二龍玄　圭叔　寛永二、三、七寂
二三三義格　越渓　慶長十四、四、廿三寂
二三四明知　惟心　寛永十、九、十八寂

二三五玄召　棠陰　寛永廿、四、廿九寂
二三六永俊　雄峯　寛永十五、七、十三寂
二三七靈眞　虚白　寛永十九、十、廿九寂
二三八圓旦　周南　正保四、九、廿三寂
二三九圓育　天澤　寛文廿、十一、十一寂
二四〇大宜　虎伯　寛文十三、九、十七寂

二四一令瞻　太華
二四二祖辰　南宗
二四三光鶴　丹陽
二四四士賢　如林
二四五玄棟　松陰
二四六永義　虎渓

二四七慧忠　丹心
二四八大良　俊峯
二四九龍楚　雲岩
二五〇宗寔　香林
二五一智達　絃外
二五二士全　湘山

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗慧日山東福禪寺）

二五三師諄（千岩）—二五四龍菖（石□）—二五五守倫（天衣）—二五六守沼（碧天）—二五七光欣（木堂）—二五八光瑄（盧溪）—

二五九宗見（龍潭）—二六〇心桓（栢陰）—二六一師勝（義堂）—二六二守瑛（玉嶺）—二六三師孝（舜峯）—二六四龍芳（桂岩）—

二六五龍育（熙陽）—二六六大稀（古堂）—二六七玄禎（龍河）—二六八慧本（靈泉）—二六九守選（天瑞）—二七〇龍根（靈岩）—

二七一玄實（妙堂）—二七二龍璞（湛堂）—二七三守航（頤海）—二七四師潛（行山）—二七五至信（諦洲）—二七六惠喬（松堂）—

二七七道寛（大拙）—二七八健鎚（萃洋）—二七九光秀（蘭溪）—二八〇師定（宋洲）—二八一慧春（芳山）—二八二以清（斯山）—

二八三令先（物道）—二八四源果（實堂）—二八五玄芸（排邦）—二八六健貞（春嶺）—二八七守俊（玉淵）—二八八楚棟（海洲）明治二住 同十一、四、廿一—

二八九士匡（寶應）—二九〇惠潭（匡道）明治十住 同廿八、十、廿一寂—二九一文幢（敬沖）明治十五住 同廿八、九、四寂—二九二通晃（東昱）明治廿九、二住 同年九、廿一寂—二九三定慶（九峯）—

○臨濟宗瑞鹿山圓覺興聖禪寺住持歷代

(創立年時)　後宇多天皇弘安五年
(現今位置)　相模國鎌倉郡小坂村

一 祖元 無學 弘安九、九、三寂
二 正念 大休 正應元、十一、晦寂
三 覺圓 鏡堂 德治元、九、廿六寂
四 德悟 桃溪 嘉元四、十二、六寂
五 道然 葦航 正安三、十二、六寂
六 士曇 西澗 德治元、十、廿八寂

七 一寧 一山 文保元、十、廿五寂
八 圓範 無隱 德治二、十一、十二寂
九 昭元 無爲 應長元、五、十六寂
一〇 惠日 東明 曆應三、十、十四寂
一一 士雲 南山 建武三、十、七寂
一二 道隱 靈山 元亨四、三、二寂

一三 惠輪 雲屋 元德元、五、十寂
一四 巧安 險崖 元德三、七、廿三寂
一五 疎石 夢窓 觀應二、九、卅寂
一六 正澄 清拙 曆應三、正、十七寂
一七 道通 大川 曆應元、三、二寂
一八 惠宗 白雲 貞和元、十、晦寂

一九 志高 天外 康永二、八、一寂
二〇 居中 嵩山 康永二、二、六寂
二一 妙環 樞翁 文和三、二、十八寂
二二 通川 東峯 文和二、二、廿三寂
二三 禪鑑 象外 文和五、十一、十八寂
二四 正因 明岩 應安二、四、八寂

二五 士曇 乾峯 康安元、十二、十一寂
二六 永璵 東陵 貞治四、五、六寂
二七 智越 雲山 延文三、五、一寂
二八 可允 容山 延文五、四、十八寂
二九 印元 古先 應安七、正、廿四寂
三〇 法忻 大喜 應安元、九、廿四寂

三一 宏潤 天澤 貞治六、十、十四寂
三二 友丘 東林 應安二、八、廿寂
三三 契聞 不聞 應安元、七、十二寂
三四 士啓 東傳 應安七、四、廿一寂
三五 光一 皈山 應安七、九、十八寂
三六 妙謙 無碍 應安二、七、十三寂

三七 靈弁 梅林 應安七、三、三寂
三八 是英 傑翁 永和四、三、十三寂
三九 善玖 石室 康應元、九、廿五寂
四〇 祖能 大拙 永和三、九、十三寂
四一 大闡 大法
四二 妙在 此山 永和三、正、十二寂

四三 契充 大虛
四四 慶芳 少室 永德元、十二、十寂
四五 全快 鈍夫 至德二、八、十四寂
四六 妙積 太岳 永德二、十一、廿六寂
四七 海壽 椿庭
四八 識桂 香林 —、二、十八

四九 道欽 承先 —、十二、六寂
五〇 德俊 伯英 應永九、八、十二寂
五一 存圓 天鑑 應永三、四、十一寂
五二 道妙 高山 —、五、十七寂
五三 有承 大傳 —、十、三寂
五四 興伊 大圓

諸大寺歷代并諸職次第（臨濟宗瑞鹿山圓覺興聖禪寺）

五五 藏珍 玉崗 ｜、四、廿寂
五六 性珍 藏海 ｜、六、十一寂
五七 元聃 老仙
五八 周膺 曇芳 應永八、九、七寂
五九 周潘 華岳 應永六、七、六寂
六〇 圓方 無外 應永十五、正、五寂

六一 文昱 東岳 應永廿三、二、廿三寂
六二 知春 少林 應永十八、四、五寂
六三 得哲 愚溪 應永十三、三、十二寂
六四 興忻 悅岩
六五 祖松 岳雲 應永十四、三、五寂
六六 中圓 月潭 應永十四、九、七寂

六七 正隆 大翁 應永十五、五、十五寂
六八 妙佐 柚宗
六九 敬忠 恕堂
七〇 全用 大用
七一 梵與 無等
七二 僧可 久菴 應永廿四、正、廿六寂

七三 等曒 照中
七四 了喜 太寧
七五 中樹 心翁
七六 長會 建宗
七七 總暉 東漸
七八 妙冲 雲林

七九 永旭 東生
八〇 淨舜 大化
八一 中季 東英
八二 性中 天心
八三 中快 俊茂
八四 聖瑞 一曇

八五 見機 玉英
八六 友修 疊隆 應永廿二、正、二寂
八七 法都 金城
八八 宗晃 月浦
八九 珠珍 藏中
九〇 中哲 明仲

九一 德聰 明浦
九二 巨幢 大建
九三 天松 德操
九四 曾妙 玄海
九五 純乾 九單
九六 梵松 林宗

九七 心興 大龍
九八 梵淳 朴中 永享五、十二、晦寂
九九 心榮 華宗 應永廿三、四、十一寂
一〇〇 天哲 明達
一〇一 省音 大雅 應永廿六、六、八寂
一〇二 聞爾 汝中

一〇三 繼趙 栢岩
一〇四 丶丶 一峯
一〇五 存香 桂岩
一〇六 英冑 華翁
一〇七 祥玖 長川
一〇八 中曇 一瑞

一〇九 本雅 仲英 永享三、正、十九寂
一一〇 販才 學海 永享十、十、廿九寂
一一一 長旭 東白
一一二 昌猷 雲溪
一一三 昌薰 南谷
一一四 景芳 春溪 文五、九、五寂

一一五 正安 雲溪 永享九、三、七寂
一一六 妙薰 蘭堂
一一七 周南 浦雲
一一八 法勳 竺元
一一九 芳蓀 芳谷 寶德二、三、十五寂
一二〇 周有 子有

諸大寺歷代并諸職次第（臨濟宗瑞鹿山圓覺興聖禪寺）

一二一 梵樟 用林
一二二 用尊 謙谷 康正二、九、十二寂
一二三 心林 一華 文安三、四、十五寂
一二四 心正 中明 文安二、六、七寂
一二五 士倫 太叙 永享十二、八、廿六寂
一二六 純清 德標 文安元、十一、廿七寂

一二七 中和 禮岩 寶德三、八、一寂
一二八 德瑛 伯溫 寶德三、二、十二寂
一二九 妙訓 古教 寶德三、九、十九寂
一三〇 光溫 玉溪 寶德元、八、六寂
一三一 中蓮 西菴 寬正六、六、十五寂
一三二 守旭 東岩 享德元、八、四寂

一三三 正文 以天 享德三、正、廿六寂
一三四 德荷 恩江
一三五 法紹 續宗 寬正四、八、十四寂
一三六 有菊 芳隱 文正元、六、十四寂
一三七 長全 叔甫 文明九、二、廿八寂
一三八 摠竺 仙夫

一三九 周顒 虛中 文明三、五、廿八寂
一四〇 妙然 以浩 文明十四、九、二寂
一四一 妙續 芳鄉 文明十七、二、十三寂
一四二 興德 集翁 長享三、六、九寂
一四三 德隼 秋壑
一四四 中淳 誠中 永正五、七、十七寂

一四五 中恩 芳林 明應五、十二、十一寂
一四六 紹俊 子明 天文五、十、二寂
一四七 法璨 禹玉 永正五、六、三寂
一四八 正心 月舟
一四九 禪懌 叔悅 天文四、七、十六寂
一五〇 省輔 仁英 天文六、二、八寂

一五一 周隨 景初 弘治三、七、晦寂
一五二 梵梅 奕芳 天文八、十、八寂
一五三 禪才 奇文 文龜三、十二、十四寂
一五四 法堯 仁芳
一五五 昌伊 三伯 慶長十八、十二、一寂
一五六 昌圓 天甫 寬永七、四、晦寂

一五七 妙意 雲如 寬永五、四、廿寂
一五八 玄端 岫雲 万治四、八、三寂
一五九 是恩 蓮中 寬文十一、六、廿寂
一六〇 昌益 三英 延寶二、正、十一寂
一六一 妙籌 天運
一六二 碩林 雪山

一六三 梵千 大嶺
一六四 昌俊 英嶽
一六五 碩秀 一疇
一六六 昌永 徹傳
一六七 是倫 大機
一六八 周洪 大圓

一六九 昌徵 潭日
一七〇 昌益 雷啓
一七一 碩然 浮山
一七二 碩柳 東水
一七三 昌宜 義海
一七四 是岱 東岳

一七五 周法 燈外
一七六 周幹 鳳林
一七七 碩隆 峻道
一七八 周珊 月岑
一七九 周棟 岱洲
一八〇 昌朴 順叟

一八一 周維 靈峯
一八二 是鈞 千巖
一八三 周朝 東山
一八四 周忠 節山
一八五 法教 別峯
一八六 法如 實際

諸大寺歴代并諸職次第（臨濟宗瑞鹿山圓覺興聖禪寺）

一八七周朝寰海 ― 一八八周楞誠拙 ― 一八九周古睦洲 ― 一九〇吾竺清蔭 ― 一九一梵俊志山 ― 一九二昌璘湘山 ―

一九三是典徹叟 ― 一九四硯見龍爪 ― 一九五梵重鼎洲 ― 一九六昌晙東海 ― 一九七昌筠竹院 ― 一九八梵志貫宗 ―

一九九是坦融峯 ― 二〇〇惠通荊叢 ― 二〇一宗温洪川（明治八、十一、住 同廿五、一、十六寂） ― 二〇二宗演洪嶽 ― 二〇三宗海涵應 ―

○臨濟宗瑞龍山太平興國南禪禪寺住持歴代

（創立年時）伏見天皇正應三年
（現今位置）京都市上京區南禪寺町

一　普門（無關）正應四、十二、十二寂
二　祖圓（規菴）正和二、四、二寂
三　一寧（一山）文保元、十、廿五寂
四　宗卓（絕崖）建武元、六、廿七寂
五　德儉（約翁）元應二、五、十九寂
六　崇喜（見山）元亨三、六、八寂
七　宗源（双峯）建武二、十一、廿二寂
八　鏡圓（通翁）正中二、正、廿七寂
九　疎石（夢窓）觀應二、九、卅寂
一〇　處謙（潜溪）元德二、五、二寂
一一　本元（元翁）嘉慶元、七、四寂
一二　居中（嵩山）貞和元、二、六寂
一三　楚俊（明極）建武四、九、廿七寂
一四　正澄（清拙）曆應二、正、十七寂
一五　師鍊（虎關）貞和二、七、廿四寂
一六　梵仙（竺仙）貞和四、七、十六寂
一七　妙受（天菴）康永四、十、廿七寂
一八　宗然（可翁）
一九　智明（蒙山）貞治五、八、廿一寂
二〇　士曇（乾峯）康安元、十二、廿一寂
二一　元晦（無隱）貞治四、十、十七寂
二二　義冲（大陽）觀應三、正、十一寂
二三　永璵（東陵）貞治四、五、六寂
二四　德見（龍山）延文三、十一、十三寂
二五　慈均（平田）貞治三、九、十六寂
二六　光林（牧牛）應安六、八、九寂
二七　善育（大林）應安五、十二、三寂
二八　至孝（無德）貞治二、正、十一寂
二九　妙在（此山）永和三、正、十二寂
三〇　義天（無雲）貞治六、五、廿七寂
三一　一以（大道）應安三、二、廿六寂
三二　靈致（天境）永德元、十一、十八寂
三三　祖禪（定山）應安七、十一、廿六寂
三四　良欽（無感）應安七、二、廿寂
三五　周澤（龍湫）嘉慶二、九、九寂
三六　普在（在菴）永和二、閏七、四寂
三七　通徹（清溪）至德二、十一、廿四寂
三八　良遁（道林）至德二、閏九、六寂
三九　妙葩（春屋）嘉慶二、八、十三寂
四〇　靈見（性海）應永三、三、廿一寂
四一　良芳（蘭洲）至德元、十二、六寂
四二　法序（不遷）永德三、十二、四寂
四三　宗渭（太清）永德二、十二、九入
四四　周信（義堂）嘉慶二、四、四寂
四五　祖裔（竺芳）康曆二、—、—寂
四六　海壽（椿庭）應永八、閏正、十二寂
四七　清頴（中山）明德元、十一、七寂
四八　宗古（雲岳）—、八、十八寂
四九　周佐（德叟）應永七、三、十二寂
五〇　長遠（韶陽）明德四、十一、十七寂
五一　光信（卯空）
五二　慶圓（月心）—、十、六寂
五三　德俊（伯英）應永十、八、十二寂
五四　祖濬（喆岩）應永十二、八、十七寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗瑞龍山太平興國南禪禪寺）

五五 中津 絕海 應永十二、四、五寂
五六 韶奏 九峯 應永十二、十一、十二寂
五七 一麟 一菴 應永十四、十二、二寂
五八 祥登 大年
五九 祖旭 日東 應永廿、四、五寂
六〇 善益 大中

六一 以縱 大機
六二 守新 秀峯
六三 周亨 大椿
六四 良芝 玉海
六五 周朗 月庭 應永十、五、二寂
六六 周仲 無求 應永廿、十二、十八寂

六七 一鶚 中立
六八 德基 大業 應永廿一、十、十四寂
六九 昌旒 玉林
七〇 中淹 在中 正長元、十、七寂
七一 周崇 大岳 應永卅、九、十四寂
七二 嚴敬 信叟

七三 健易 東漸 應永卅、四、十七寂
七四 聖菘 岳林
七五 圭密 堅中
七六 中樹 心翁
七七 元禮 履中 應永廿、十、十寂
七八 圓伊 仲芳 應永廿、八、十五寂

七九 妙冲 雲林
八〇 全用 大用
八一 梵芳 玉畹
八二 是惠 雷門
八三 明麟 聖徒
八四 周千 大旋

八五 宏怡 悅雲 應永廿七、四、廿三寂
八六 宗器 延用 永享四、八、八寂
八七 周脩 大周 應永廿二、七、廿九寂
八八 景壽 仁中
八九 通恕 惟忠 永享二、一、一寂
九〇 明中 嵩岳 應永廿七、八、廿七寂

九一 中擧 獨鼎
九二 性智 大愚 永享十一、六、卅寂
九三 元壯 士峯
九四 令在 月岩 應永卅二、正、十寂
九五 梵苑 子春
九六 梵師 仲安

九七 方秀 岐陽 應永卅一、二、三寂
九八 得巖 惟肖
九九 周玄 一關
一〇〇 周湛 玉潭
一〇一 正曇 竺堂
一〇二 周噩 嚴中

一〇三 承廣 無外
一〇四 良倫 大舜
一〇五 僧蔄 仲伯
一〇六 聖瑞 一曇
一〇七 建幢 南宗
一〇八 如積 雪洌

一〇九 濟高 陽岩
一一〇 中綮 全牛
一一一 梵意 栢堂
一一二 中欽 誠中
一一三 靈彥 文溪
一一四 善齋 安中

一一五 周湛 巨海
一一六 周玖 珪田
一一七 宗播 嘉吉元、九、十九寂
一一八 大徹
一一九 周仲 叔芳
一二〇 宗眼 見外

一二一善從 心源
一二二等仲 正長二、十、廿一寂
一二三善廣 中叟
一二四良鑑 中叟 永亨九、五、八寂
一二五本矩 方中
一二六周勝 古幢 永亨五、二、廿二寂

一二七禮廣 大翁
一二八大緣 竹菴 永亨十一、四、廿三寂
一二九川方 汝舟
一三〇　奭 南谷
一三一正倫 季文
一三二英文 景南 享德三、九、廿二寂

一三三承朝 海門 嘉吉三、五、九寂
一三四梵三 友雲
一三五西肇 諸菴
一三六正茂 同溪
一三七梵梁 惟方
一三八祥學 無爲

一三九宗蔄 香林 享德二、十一、廿一寂
一四〇英種 玉岫
一四一周藝 遊叟
一四二如憲 用章 永亨十一、十一、廿九寂
一四三永賀 慶年
一四四龍派 江西

一四五禮才 愚極 寶德四、六、六寂
一四六周悦 雲菴
一四七殊楞 伯巖
一四八乾治 用剛
一四九梵奕 大觀
一五〇俊列 星岩

一五一允徹 東越
一五二崇瑛 藍田 寶德三、八、十六寂
一五三德潤 玉溫
一五四祖楞 伯師
一五五等運 竺雲
一五六以篤 信仲 寶德三、十一、一寂

一五七中浚 巨源
一五八玄釋 古仙
一五九惠鑑 希曹
一六〇有諸 大有
一六一清播 心田
一六二崇鎮 昴甫

一六三彥洞 明叟
一六四梵軌 大模
一六五惟才 樗菴
一六六尚祐 大叔
一六七德輔 惟宗 文正元、二、六寂
一六八慈超 北宗 長祿二、十二、廿七寂

一六九永先 聖仲
一七〇全壽 伯春
一七一永本 大初
一七二一慶 雲章 寬正四、正、廿三寂
一七三中建 大基
一七四周藤 春休

一七五令英 邵外
一七六永喜 笑雲
一七七中曇 竺遠
一七八中孫 抱節
一七九宗欒 疊伯
一八〇貞祥 元幹

一八一龍惺 瑞岩 長祿四、閏九、五寂
一八二祖淳 朴堂 應仁元、四、廿四寂
一八三周洋 東嶼
一八四梵龍 雲岩
一八五澄昕 東居
一八六祖默 存耕 應仁元、二、廿二寂

諸大寺歷代升諸職次第（臨濟宗瑞龍山太平興國南禪寺）

一八七 中嘉 瑞雲
一八八 梵蘂 笠華
一八九 德慶 雲莊
一九〇 受環 玉崖
一九一 建怤 一華
一九二 眞圭 龍岡

一九三 建冑 華岳 文明二、二、廿二寂
一九四 懷雄 笠峯
一九五 乾策 國用
一九六 宗忱 誠甫
一九七 宗玠 大圭
一九八 祥洵 月泉 文明十四、三、廿六寂

一九九 眞詢 東芳
二〇〇 正渭 東遠
二〇一 景菊 存中
二〇二 龍睬 九淵
二〇三 宗永 字江
二〇四 光幢 斯立

二〇五 梵桂 惟馨
二〇六 瑞訢 咲雲
二〇七 宗坡 雪堂
二〇八 眞要 文叔
二〇九 應曇 一方
二一〇 光韶 舜徒

二一一 見進 惟精 文明九、八、一寂
二一二 宗殊 勝幢
二一三 令諸 月建 長享元、十二、十六寂
二一四 宗湊 利涉
二一五 明掄 彥材 文明十九、三、十八寂
二一六 祖章 大典

二一七 集連 魯菴 文明十六、一、一寂
二一八 禪榮 茂元
二一九 昌源 桃隱
二二〇 宗致 高叔
二二一 長能 南英
二二二 中隗 始彥

二二三 德種 玉莊
二二四 善林 茂叔
二二五 周鏡 月翁
二二六 景茝 蘭坡 文龜元、二、廿八寂
二二七 景文 琴江
二二八 永猛 伯進

二二九 周喜 笑岩
二三〇 妙忠 牧菴
二三一 龍澤 天隱 明應九、九、廿三寂
二三二 全卯 文和
二三三 光珪 仲璋
二三四 宗霖 廿澤 長享二、十一、十四寂

二三五 智岳 松嶺
二三六 周量 子通
二三七 正茂 秋伯
二三八 宗樹 遠湖
二三九 景三 横川 明應二、十一、十七寂
二四〇 龍統 正宗 明應七、正、廿三寂

二四一 桂悟 了菴
二四二 英瑞 廷麟
二四三 殊原 太年
二四四 慶集 文林
二四五 善玉 藍英
二四六 梵鐸 金溪

二四七 瑞亨 儀仲
二四八 慈昜 學苑
二四九 瑞要 笠關
二五〇 周盛 文叔
二五一 景趣 琴叔
二五二 梵庠 學之 永正六、十、四寂

二五三芳宗 超華
二五四宗純 溫仲
二五五宗勢 太江
二五六宗恕 春庸 天文九、三五寂
二五八集樹 茂叔 大永二、四、廿四寂
二五八景村 梅圃

二五九宗香 梅屋 天文十四、五、廿三寂
二六〇（不明）
二六一智旺 東嶺
二六二德林 靖林 天正二、三、十六寂
二六三景秀 鐵叟 天正八、十二、十八寂
二六四元保 梅谷 文祿二、六、八寂

二六五宗純 錬甫 天正十九、八、十五寂
二六六靈三 玄圃 慶長十三、十、廿六寂
二六七正稷 華溪 慶長八、十、十三寂
二六八元沖 梅坪 慶長十、十、廿四寂
二六九宗最 悅叔 元和八、七、廿九寂
二七〇崇傳 以心 寬永十、正、廿寂

二七一正悟 梅心 慶長十八、七、十三寂
二七二景洪 英岳 寬永五、十一、七寂
二七三靈圭 雲嶽 寬永九、九、廿七寂
二七四元良 寂嶽 明曆三、四、十五寂
二七五榮宣 默室 寬永十八、九、十二寂
二七六圓遵 言如 寬永十四、九、八寂

二七七慶順 瑞巖 明曆三、十二、廿五寂
二七八崇五 笑隱 元祿十、六、廿三寂
二七九靈叟 玄承 貞享五、五、二寂
二八〇玄賢 英中 元祿八、八、廿三寂
二八一崇寬 剛寶 元祿十、三、十九寂
二八二光瑞 正巖

二八三正佐 佐天 享保十一、十、十八寂
二八四元寔 大休 寶永元、六、六寂
二八五元云 雲叟 正德元、九、十一元
二八六光晃 晦堂 正德二、七、廿九寂
二八七元札 玉嶺 享保十八、十二、六寂
二八八崇達 大川 享保元、十二、廿六寂

二八九元雄 乾巖 元文五、十二、廿三寂
二九〇宗珠 寶林 元文四、十二、三寂
二九一玄巔 青峯 元文九、閏七、八寂
二九二玄竺 西巖 元文三、十、廿七寂
二九三元郁 香山 延享四、九、二寂
二九四玄璠 晉山 寬延四、閏六、十五寂

二九五元充 寶源 元文四、十二、晦寂
二九六祖應 三峯 寶曆十三、四、廿八寂
二九七元眞 天柱 安永七、三、廿六寂
二九八明侃 大室 寶曆七、七、十八
二九九元紹 中巖 明和二、十二、十三寂
三〇〇正荀 龍堂

三〇一元方 蒼溟 天明三、十、三寂
三〇二元仙 天寧 安永五、八、十九寂
三〇三玄豪 文禮
三〇四周精 神洲
三〇五元雍 潕叟 天明七、十二、十六寂
三〇六祖薰 香岑

三〇七玄功 春江
三〇八元甫 章山
三〇九東巖
三一〇元梗 中谷
三一一元澄 月礀 文政七、七、十寂
三一二玄欒 仙山 文化十三、十一、廿寂

三一三元運 廣叔 文政十三、五、廿三寂
三一四元珠 天嶺 弘化三、九、六寂
三一五玄鎭 古林 天保七、八、十八寂
三一六玄昌 椿洲 弘化四、四、六寂
三一七阿稱 退耕 嘉永三、十二、十三寂
三一八元弘 惟叢 慶應二、八、七寂

諸大寺歷代幷諸派次第（臨濟宗瑞龍山太平興國南禪禪寺）

三一九至信 諦洲 嘉永二、七、廿三寂 — 三二〇祖韶 舜堂 明治元、十二、廿一寂 — 三二一慈航 巨[illegible] 明治七、八、廿六寂 — 三二二德亘 可庭 明治十、十一、廿八寂 — 三二三元堅 高峯 明治九、十、廿七寂 — 三二四道郁 梅嶺 明治卅二、三、三寂

三二五梵惠 巨梁 明治十九、十二、廿二寂 — 三二六周演 大江 明治廿八、三、十一寂 — 三二七道林 大徹 明治九、[illegible]寂 — 三二八晦翁 — 三二九知籐 文宗 明治廿二、三、廿二寂 — 三三〇宗俊 寛道 明治廿八、三、七寂

三三一宜田 舜應 明治四十、三、十七寂 — 三三二寛道 明治廿五、五、十二寂 — 三三三匝三 高[illegible] — 三三四古亮 霧海

○臨濟宗龍寶山大德禪寺住持歷代

（創立年時）後醍醐天皇嘉曆元年
（現今位置）山城國愛宕郡大宮村

開山妙超 宗峯 建武四、十二、廿二寂 ── 一 義亨 徹翁 應安二、五、十五寂 ── 二 宗雲 今翁 ── 三 宗碩 愚翁 ── 四 道千 虎溪 永和三寂 ── 五 道均 平泉

六 仁稹 蔚山 ── 七 宗忠 言外 明德元、十、九寂 ── 八 宗立 卓然 至德二、十二、二寂 ── 九 操堂 法雲 ── 一〇 明叟 ── 一一 宗碩 德翁

一二 宗棟 鄧林 ── 一三 宗嘉 大象 ── 一四 大器 ── 一五 南周 ── 一六 竺翁 ─、四、十四寂 ── 一七 宗範 大模

一八 東源 ── 一九 宗梵 乾用 ── 二〇 妙用 季獄 ── 二一 宗簡 香林 ── 二二 宗曇 華叟 正長元、六、廿七寂 ── 二三 巨岳

二四 宗壽 椿巖 ── 二五 楞菴 ── 二六 宗顋 養叟 長祿二、六、廿二寂 ── 二七 宗智 明遠 永享十一寂 ── 二八 無言 ── 二九 璉江

三〇 宗光 日照 ── 三一 宗興 滅崖 ── 三二 祖越 格堂 ── 三三 宗溟 季東 ── 三四 玄奎 燈菴 ── 三五 宗藝 一洲

三六 宗舜 日峯 文安五、正、廿六寂 ── 三七 宗鑑 足菴 ── 三八 宗寂 惟三 ─五、七、十二寂 ── 三九 玄承 義夫 寛正三、三、十八寂 ── 四〇 宗熈 春浦 明應五、五、十四寂 ── 四一 宗深 雪江 文明十八、六、二寂

四二 體調 ── 四三 顯室 ── 四四 宗隆 柔仲 ── 四五 宗揚 岐菴 ─、正、十寂 ── 四六 紹隆 景川 明應九、三、一寂 ── 四七 宗純 一休 文明十三、十一、廿一寂

四八 宗昭 晦翁 ── 四九 芳蔭 ── 五〇 宗僉 泰叟 ── 五一 禪傑 特芳 永正三、九、十寂 ── 五二 宗頓 悟溪 明應九、八、六寂 ── 五三 英朝 東陽 永正元、八、廿四寂

諸大寺歷代住持識次第（臨濟宗龍寶山大德禪寺）

五四 宗統 一渓 延德三、五寂
五五 宗盧 西浦
五六 宗眞 實傳 永正四、四、八
五七 紹彌 天釋
五八 宗仙 拙[illegible]
五九 宗壽 椿叟 永正元、八、十五寂

六〇 宗受 天縦
六一 宗球 天琢
六二 宗恕 仁濟
六三 宗澤 悦堂
六四 嫩 桂菴
六五 宗珉 玉浦

六六 乾才 獨秀
六七 竺 大機
六八 宗棟 鄰林
六九 宗松 興宗
七〇 宗昭 陽峯 永正九、七、廿六寂
七一 宗緒 端峯

七二 宗牧 東溪 永正十四、四、十九寂
七三 宗朝 東海 永正十五、十一、廿七寂
七四 桂 笑堂
七五 瑞秀 雪嶠
七六 宗亘 古嶽 天文十七、六、廿四寂
七七 中謙 廉叟 大永五、七、廿四寂

七八 紹鱗 一宗 永正十三、十一、廿七寂
七九 宗悆 悦溪 大永五、五、廿六寂
八〇 宙 古澗
八一 宗問 玉英 天文三、六、十三寂
八二 宗翔 龍江 大永二、十一、二寂
八三 宗清 以天 天文廿三、正、十九寂

八四 宗廉 貞叔
八五 宗桂 千林 天文十二、二、十五寂
八六 宗怤 小溪 天文五、三、廿八寂
八七 宗萬 休翁 天文三、十二、廿六寂
八八 宗器 傳菴 天文二、三、十一寂
八九 玄珠 月浦

九〇 宗套 大林 永祿十一、正、廿七寂
九一 宗九 徹岫 弘治二、四、十三寂
九二 宗條 玉堂 永祿四、正、十七寂
九三 宗冑 清菴 永祿五、七、卅寂
九四 宗歎 天啓 天文廿、四、廿八寂
九五 宗碩 大室 永祿二、正、廿二寂

九六 宗貞 謙甫
九七 宗登 龍谷
九八 宗儼 春林 永祿七、十二、廿八寂
九九 寂佺 松裔 天文廿二、五、十四寂
一〇〇 宗康 泰嶽
一〇一 宗慶 雲叔 永祿九、正、九寂

一〇二 宗顯 江隱 永祿四、二、六寂
一〇三 宗順 和溪 天正四、十一、廿一寂
一〇四 宗榮 華菴 永祿七、二、二寂
一〇五 宗悦 怡雲 天正十七、八、八寂
一〇六 宗用 大歇 永祿十二、四、廿一寂
一〇七 宗訢 笑嶺 天正十一、十一、廿九寂

一〇八 宗璋 玉叟 永祿三、十二、八寂
一〇九 紹董 督宗 天正三、七、十一寂
一一〇 宗菊 南岑 永祿十一、六、廿四寂
一一一 宗園 春屋 慶長十六、二、九寂
一一二 宗琇 玉仲 慶長九、十一、十六寂
一一三 宗普 明叟 天正十八、四、十五寂

一一四 宗初 太岫 天正二、十二、十六寂
一一五 宗頓 南英 天正十、十、十五寂
一一六 宗松 萬仭 天正五、六、二寂
一一七 宗陳 古溪 慶長二、正、十七寂
一一八 宗香 梅隱 天正十七、十一、廿六寂
一一九 宗根 眞叔 天正十五、七、五寂

一二〇宗听 笑嶺 天正十四、七、十六寂
一二一宗哲 明叔 慶長十、六、六寂
一二二宗洞 仙岳 文祿四、十、二寂
一二三宗紋 竹澗 慶長四、十二、五寂
一二四宗賢 先甫 慶長六、八、廿五寂
一二五宗謌 太素 文祿三、四、十五寂
一二六紹滴 一凍 慶長十一、四、廿三寂
一二七宗範 準叟 慶長三、十一、廿四寂
一二八宗葩 梅溪 文祿二、十一、卅寂
一二九宗眼 天叔 元和六、二、廿一寂
一三〇紹琮 玉甫 慶長十八、六、十八寂
一三一宗鐵 篠叔 慶長十七、二、十五寂
一三二宗罕 希叟 慶長十九、九、八寂
一三三宗安 太翁
一三四宗程 萬江 慶長十九、七、八寂
一三五宗珍 寶叔 元和三、六、六寂
一三六宗安 心淺 元和二、十一、廿九寂
一三七紹長 松嶽 寛永三、三、一寂
一三八宗仲 董甫 慶長六、四、廿六寂
一三九宗兆 京用 文祿五、二、廿三寂
一四〇宗秀 蘭叔 慶長五、八、十三寂
一四一宗偉 雲英 慶長八、十、四寂
一四二宗印 月岑 元和八、四、五寂
一四三宗承 自天 慶長十五、六、廿八
一四四宗唐 盛叔 慶長十五、十一、廿七寂
一四五宗鎭 州甫 慶長十三、八、十寂
一四六宗佐 賢叟 慶長十三、八、十寂
一四七宗珀 玉室 寛永十八、五、十四寂
一四八宗玖 瑤林 慶長十八、七、四寂
一四九宗璘 琢甫 元和十、正、十六寂
一五〇宗印 傳叟 一作紹印 寛永四、十二、十一寂
一五一宗陽 東嶺 寛永二、八、二寂
一五二宗瑛 藍溪 萬治元、十 廿寂
一五三宗彭 澤菴 正保二、十二、十一寂
一五四宗章 龍室 慶長十九、十一、十四寂
一五五宗頓 南隣 寛永三、閏四、廿三寂
一五六宗玩 江月 寛永廿、十、一寂
一五七宗韓 雄岑 慶長十七、十一、廿七寂
一五八紹璵 玉翁 寛永十七、十一、廿二寂
一五九宗良 賢谷 元和七、十、廿五寂
一六〇宗三 要寂 寛永五、正、四寂
一六一宗勝 春嶽 元和七、五、十三寂
一六二宗益 日新 元和六、正、十六寂
一六三宗瓚 玉田 寛永二、三、廿五寂
一六四宗劉 龍嶽 寛永五、十、廿八寂
一六五宗存 菊徑 寛永四、六、廿一寂
一六六宗周 文室 寛永十七、九、七寂
一六七宗懌 悅叔 寛永五、五、廿七寂
一六八宗温 光澤 寛永十二、六、九寂
一六九紹果 天祐 寛文六、九、廿一寂
一七〇宗渭 清巖 寛文元、十一、廿一寂
一七一宗寔 義峯 寛永四、九、廿八寂
一七二宗智 正隱 寛永六、八、廿六寂
一七三宗琨 澗甫 寛永十九、四、十四寂
一七四宗用 機菴 寛永十九、四、十四寂
一七五宗宜 隨倫 慶安三、六、四寂
一七六宗閑 安室 正保四、四 十寂
一七七宗容 翠嶽 正保二、二、十一寂
一七八宗淵 默翁 慶安元、四、廿三寂
一七九宗閒 笑堂 慶安五、四 朔寂
一八〇宗俊 禪海 寛文十二、正、十三寂
一八一宗立 江雪 寛文六、六、十九寂
一八二宗圭 雪菴 延寶三、十、四寂
一八三宗璽 鐵玄 貞享二、四 十七寂
一八四宗龍 江雪 延寶七、六、十七寂
一八五宗璠 玉舟 寛文八、十二、十八寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗龍寶山大德禪寺）

- 一八六 宗堯 東叔 萬治三、九、五寂
- 一八七 宗榮 啓室 寬文六、二、廿五寂
- 一八八 宗傳 燈外 延寶四、六、二十寂
- 一八九 宗春 仙溪 貞享元、十二、廿五寂
- 一九〇 宗竺 天室 寬文七、八、廿六寂
- 一九一 紹佗 方充 貞享五、九、廿三寂
- 一九二 宗鶴 祥巖 寬文十二、八、二寂
- 一九三 宗董 南叟 延寶九、十、七寂
- 一九四 宗英 茜山 明曆二、七、廿五寂
- 一九五 宗珉 翠巖 寬文四、七、廿三寂
- 一九六 宗左 傳外 延寶三、四、三寂
- 一九七 妙雄 大隱 寬文九、八、十八寂
- 一九八 宗單 乾英 寬文十二、十二、廿九寂
- 一九九 宗智 性翁 天和三、閏五、三寂
- 二〇〇 紹及 見岩 元祿五、七、廿八寂
- 二〇一 宗晃 春澤 元祿七、閏五、六寂
- 二〇二 惠傳 貫堂 延寶四、九、十八寂
- 二〇三 紹蘇 昭海 寬文七、九、十九寂
- 二〇四 宗恩 春嶺 寬文七、九、十七寂
- 二〇五 宗噉 陽甫 天和二、九、五寂
- 二〇六 宗瓚 桂山 元祿四、十二、十二寂
- 二〇七 宗鈍 鐵丹 貞享二、四、廿七寂
- 二〇八 宗潙 大仲 元祿七、二、廿八寂
- 二〇九 宗智 愚溪 延寶五、二、廿五寂
- 二一〇 宗喜 無隱 寬文十二、三、十一寂
- 二一一 宗什 一溪 貞享元、六、十六寂
- 二一二 紹谿 堅岑 元祿五、十二、四寂
- 二一三 宗雪 雪溪 寬文九、三、廿三寂
- 二一四 宗瑞 祥山 元祿六、十二、十六寂
- 二一五 宗的 傳心 元祿十、正、三寂
- 二一六 宗般 怡舟 延寶四、十二、廿六寂
- 二一七 宗古 德岑 寶永二、七、廿三寂
- 二一八 宗忽 天倫 元祿十、六、廿二寂
- 二一九 宗信 春外 貞享五、四、六寂
- 二二〇 宗忍 俊巖 元祿十六、十、九寂
- 二二一 宗演 說叟 寶永四、三、二十寂
- 二二二 宗高 仰堂 貞享四、九、五寂
- 二二三 宗右 旋岑 元祿四、三、七寂
- 二二四 宗甄 別源 寶永六、九、十七寂
- 二二五 宗考 先叔 貞享四、十二、十四寂
- 二二六 紹肅 端堂 正德三、十、廿六寂
- 二二七 宗泰 安叔 延寶九、九、十五寂
- 二二八 宗要 密玄 元祿十五、七、十三寂
- 二二九 宗諄 千巖 貞享三、十二、廿一寂
- 二三〇 宗清 拙堂 寶永元、六、廿二寂
- 二三一 宗助 順叟 元祿十三、六、廿八寂
- 二三二 義易 東岳
- 二三三 宗胖 碩翁 元祿十、十二、廿九寂
- 二三四 宗安 聞徹 元祿八、四、十六寂
- 二三五 宗玄 天岸 天和四、二、朔寂
- 二三六 宗實 眞岩 貞享二、三、十九寂
- 二三七 紹要 印充 元祿十三、五、十寂
- 二三八 義仙 列堂 永祿十五、七、廿四寂
- 二三九 宗文 質休 元祿三、十一、廿八寂
- 二四〇 宗恕 宥峯 元祿二、五、十八寂
- 二四一 宗五 天英 元祿十、正、四寂
- 二四二 義休 大雲 元祿十、四、廿六寂
- 二四三 義哲 啓外 元祿十二、九、廿一寂
- 二四四 宗柳 月庭 元祿十四、七、廿七寂
- 二四五 宗各 別山 元祿四、十、六寂
- 二四六 宗欽 必嶽 元祿十一、十、十四寂
- 二四七 宗呑 月溪 元祿六、七、廿七寂
- 二四八 妙一 乾舟 元祿十四、三、廿五寂
- 二四九 宗淳 素隱 享保七、十二、六寂
- 二五〇 宗點 梅岑 寶永五、十、四寂
- 二五一 宗桂 仙州 元祿七、四、十一寂

二五二 宗乙 虎巖 元祿十、十、廿九寂
二五三 宗悅 怡溪 正德四、五、二寂
二五四 宗松 月海 元祿十二、九、八寂
二五五 宗祥 端溪 元祿十二、三、廿八寂
二五六 宗穆 穆岩 正德六、閏二、十六寂
二五七 宗光 鏡岩 寶永七、六、廿寂

二五八 宗叔 伯堂 元祿十五、九、一寂
二五九 宗覺 悟溪 元祿十三、九、九寂
二六〇 宗沅 湘南 享保十四、正、九寂
二六一 宗勳 功海 享保元、十、十九寂
二六二 宗祐 孚山 享保四、六、十三寂
二六三 宗珉 江峰 寶永四、十一、廿九

二六四 宗昕 陽岑 寶永元、十一、十六寂
二六五 宗閭 天嶺 寶永五、十、一寂
二六六 宗看 悅堂 享保九、閏四、七寂
二六七 宗節 清居 享保三、正、廿三寂
二六八 宗章 龍睡 正德四、二、廿三寂
二六九 宗言 端崕 正德元、五、八寂

二七〇 宗柔 剛山 寶永五、十一、七寂
二七一 宗睦 陳叟 寶永四、六、十六寂
二七二 宗著 實翁 正德六、六、十七寂
二七三 義統 大心 享保十五、六、七寂
二七四 義淨 玉潭 享保十、六、七寂
二七五 紹珂 月山 正德二、十、四寂

二七六 宗瑚 琢宗
二七七 宗珠 海印 享保十三、四、廿七寂
二七八 義瑞 雲岩 享保十八、六、廿六寂
二七九 宗琳 南海 正德三、四、十九寂
二八〇 宗英 俊峰 保享十二、二、十寂
二八一 宗甫 周山 享保十八、八、二寂

二八二 宗陽 桃林 享保五、五、十一寂
二八三 義天 龍淵 享保十二、八、廿八寂
二八四 宗仙 桂隱 元文六、正、二寂
二八五 義雪 天柱 享保十二、五、十五寂
二八六 紹昌 久岩
二八七 宗棟 龍岩 元文六、二、六寂

二八八 義琇 梅堂 享保二、十、廿寂
二八九 紹云 亭山 享保二、十、廿寂
二九〇 宗白 雲秀 享保六、三、廿五寂
二九一 宗寬 江西 享保七、十一、十寂
二九二 宗黃 龍岫 元文四、六、十三寂
二九三 宗溫 艮堂 寬保十八、十一、廿八

二九四 宗璉 瑚隱 延享三、九、十八寂
二九五 宗斤 玉僊 享保九、十一、十七寂
二九六 宗恭 敬峯 延享三、五、廿八寂
二九七 宗貞 栢州 享保十八、五、廿九寂
二九八 宗庸 万拙 享保七、七、廿二寂
二九九 宗篤 天菴 享保七、四、十二寂

三〇〇 宗壽 鶴洲 享保十、十、一寂
三〇一 宗圓 大梅 享保十五、八、四寂
三〇二 宗玉 桂堂 享保十五、五、一寂
三〇三 宗湛 寂水 享保七、五、廿五寂
三〇四 妙處 端堂 享保十四、九、廿七寂
三〇五 宗嬾 桂洲 享保十七、十二、十九寂

三〇六 宗融 祝峯 享保廿一、四、廿七寂
三〇七 宗察 密雲
三〇八 宗里 孝岳 元文元十、十二、廿寂
三〇九 宗迪 啓叔 寬保三、三、六寂
三一〇 宗精 鍊了 元文四、正、十六寂
三一一 宗玖 瑞麟 享保十八、九、十七寂

三一二 宗量 寬嶺 寬保二、九、十四寂
三一三 宗堯 任叔 寶曆二、三、十九寂
三一四 宗伍 竺嶺 延享三、六、廿寂
三一五 宗師 月洲（イ義印） 享保廿、三、十寂
三一六 宗珊 大玄 享保十七、十二、廿九寂
三一七 宗林 少峯

諸大寺歴代幷諸職次第（臨濟宗龍寶山大德寺）

三一八義門 信叔 享保十五、十一、廿六寂
三一九義般 萬了 享保十六、三、一寂
三二〇宗活 江巖 延享元、十二、十二寂
三二一義諄 實峯 寛保三、七、十九寂
三二二宗律 法岩 享保廿、二、十寂
三二三宗諱 隆隱 元文五、十、九寂

三二四紹石 鐵叟 寶暦四、十二、十九寂
三二五宗信 謙谷 寛延四、十、卅寂
三二六宗植 茂林 寛延二、十一、廿一寂
三二七宗三 月船 寛保二、七、十五寂
三二八宗雄 虎峯 元文四、三、二寂
三二九宗親 大嶺 明和七、六、廿九寂

三三〇紹楊 岐堂 延享元、八、十一寂
三三一宗本 性嚴 延享二、正、廿八寂
三三二宗玖 玉閑 明和二、七、七寂
三三三宗盈 大虛 寛延二、六、廿七寂
三三四紹通 圓巖 寶暦元、十一、六寂
三三五宗徹 大溪 寶暦六、九、廿二寂

三三六宗兆 大蕃 寶暦七、正、八寂
三三七宗孝 文叟 寶暦五、十一、十二寂
三三八紹倫 梁堂 明和六、九、廿九寂
三三九妙常 眞叟 寶暦五、四、廿五寂
三四〇紹賢 安禪 明和六、十、十二寂
三四一宗文 大龍 寛延四、三、十六寂

三四二義田 藍谷 寶暦六、五、六寂
三四三義蕙 郁翁 延享五、四、十一寂
三四四紹典 文英 寛延四、九、廿七寂
三四五宗意 大菴 延享四、四、廿七寂
三四六宗善 見道 延享三、十一、十二寂
三四七義寧 泰州 寛延四、二、十六寂

三四八宗景 江堂 寶暦五、正、廿八寂
三四九宗如 巨海 延享三、七、六寂
三五〇紹本 大方 寶暦十一、六、六寂
三五一宗轍 別嚴 寶暦十一、八、六寂
三五二宗舜 日寛 明和元、十二、廿三寂
三五三宗就 成巖 明和五、十二、十九寂

三五四宗悦 心英 安永四、十一寂
三五五宗良 恭山
三五六義浚 大川 寶暦十二、四、十一寂
三五七宗般 大岫 明和七、七、廿寂
三五八義誾 閑田 明和二、八、四寂
三五九宗宏 寛溪 明和五、二、廿八寂

三六〇紹彦 謙叟 寶暦九、十一、卅寂
三六一宗賢 愚谷 明和二、四、十九寂
三六二宗哲 愚堂 安永八、三、七寂
三六三紹中 天洲 明和八、九、二寂
三六四宗誠 實門 寶暦七、十二、十五寂
三六五義參 英巖 寶暦十、五、廿五寂

三六六宗樞 斗山 明和六、二、廿二寂
三六七宗信 敬外
三六八宗常 梅峰 寶暦十二、九、廿三寂
三六九宗卓 特英 天明八、三、十六寂
三七〇宗旭 萬輝 天明三、十一、十九寂
三七一宗宜 皷山 明和二、四、五寂

三七二宗珥 陶嶺 天明元、十一、十五寂
三七三宗桂 石峯 明和四、十一、四寂
三七四義訓 庭洲 明和四、二、三寂
三七五宗音 海門 安永三、七、十九寂
三七六義覺 非心
三七七宗等 一道 寛政十一、正、廿八寂

三七八宗衍 無學 寛政三、正、十六寂
三七九宗寛 堯州 天明七、七、廿五寂
三八〇宗台 雪峯 天明八、九、四寂
三八一宗薩 德隱 寛政二、七、十九寂
三八二紹愼 獨翁 安永四、十一、十三寂
三八三義文 實峯 天明三、二、十五寂

諸大寺歴代并諸職次第（臨濟宗龍寶山大德禪寺）

三八四 宗敬 [illegible] 安永六、八、廿六寂
三八五 宗嶽 東天 天明八、七、十六寂
三八六 宗龍 靈巖 安永九、九、廿七寂
三八七 紹傳 別道 天明二、正、三寂
三八八 宗發 端岩 天明三、十二、四寂
三八九 宗輿 無價 天明元、十一、廿八寂

三九〇 宗乘 眞巖 亨和元、十一、廿一寂
三九一 宗貞 觀光 天明四、六、二寂
三九二 宗滿 普山 寛政元、九、廿寂
三九三 宗寅 建宗
三九四 宗活 大休 天明八、三、九寂
三九五 義全 功洲

三九六 宗頊 瑞岩 寛政七、七、廿一寂
三九七 宗廉 直翁 天明六、十、三寂
三九八 宗三 要道 寛政乙卯、九、廿四寂
三九九 宗璋 圭宗 文化六、十一、二寂
四〇〇 宗註 詮叟 寛政二、十二、廿四寂
四〇一 宗詮 明道 寛政八、二、四寂

四〇二 紹章 龍溪 亨和二、三、十二寂
四〇三 宗看 松巖 寛政八、十一、廿寂
四〇四 宗崑 鐵舟 寛政四、九、十九寂
四〇五 宗珍 玉堂 文化五、正、九寂
四〇六 宗軏 則道 寛政七、十、十一寂
四〇七 宗愼 大順 文政八、七、十一寂

四〇八 宗稷 古田 亨和二、三、四寂
四〇九 宗通 融谷 文化二、四、一寂
四一〇 宗研 心海 文化九、八、十一寂
四一一 紹隆 興巖 寛政十二、十一、十寂
四一二 宗良 眞逐 亨和二、十、廿寂
四一三 宗丁 一山 文化十三、二、六寂

四一四 宗堯 東陽 文化十五、三、十六寂
四一五 宗晙 寰海 文化十四、七、十七寂
四一六 宗驎 秀山 文化四、三、十一寂
四一七 紹瑛 大澤 文化二、十二、二寂
四一八 宗宇 宙寶 天保九、十二、八寂
四一九 宗勤 常光 文政三、六、十一寂

四二〇 宗行 護峯 天保九、三、五寂
四二一 宗珍 荊山 文化十二、二、四寂
四二二 義敎 別宗 文化六、正、八寂
四二三 宗薫 香林 文政十、十二寂
四二四 義剛 金嶺 文政五、十二、十二寂
四二五 宗淨 直道 文政二、八、十七寂

四二六 宗智 圓巖 文化八、十二、十九寂
四二七 宗健 剛道 天保六、九寂
四二八 宗圭 玄道 天保四、十二、六寂
四二九 宗宣 明堂 天保八、九、廿五寂
四三〇 宗斗 太徹 文政十一、七、廿寂
四三一 宗永 寛令 文政十二、十二、二寂

四三二 宗誾 笑雲 天保元、三、廿一寂
四三三 宗鎌 稽古 文政七、九、四寂
四三四 宗正 直峯 嘉永四、正、十一寂
四三五 宗彦 大綱
四三六 宗格 石窓
四三七 宗全 完山 天保五、十、九寂

四三八 宗中 月舟 弘化四、十、十三寂
四三九 宗允 大鼎 天保三、十一、七寂
四四〇 義董 正道
四四一 紹典 法巖 天保八、六、五寂
四四二 宗英 雄峯 天保十三、八、八寂
四四三 宗扶 斷橋 天保六寂

四四四 宗當 諦道 天保七、六寂
四四五 宗貞 正順 弘化二、十二、十一寂
四四六 宗戒 融山 天保十二、五、十一寂
四四七 宗瓮 拙叟
四四八 宗透 列翁 弘化二、十一、九寂
四四九 宗澤 恩光 天保九、十一、八寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗龍寶山大德禪寺）

四五〇宗兆（大雲）弘化三、十、一寂
四五一宗呂（頤道）
四五二宗丞（喬谷）天保十五、十二、十九寂
四五三宗篤（大道）弘化三、八、七寂
四五四宗銘（月海）弘化三、七、廿七寂
四五五義白（圭賓）

四五六宗瑾（淸閑）嘉永四、十二、廿四寂
四五七妙怡（悅叟）
四五八義演（說巖）
四五九宗妙（玄峯）
四六〇宗淸（月菴）
四六一義諦（觀宗）

四六二義格（石菴）
四六三義航（要津）
四六四義恬（浩道）
四六五宗郁（文溪）
四六六宗薰（靈巖）
四六七宗驪（玉淵）

四六八紹觀（眞叟）
四六九宗補（塤山）
四七〇宗眞（享山）
四七一宗壽（牧宗）
四七二宗亮（峻峯）
四七三義岫（海雲）

四七四宗滴（一翁）
四七五義貫（一道）
四七六宗篤（仁溪）
四七七宗詮（眞淨）
四七八宗俊（英叟）
四七九宗潤（圭窩）

四八〇宗安（大道）
四八一宗儀（容州）
四八二宗一（乾谷）
四八三宗澤（廣洲）明治四十、八、十五寂
四八四宗般（玄芳）

○臨濟宗靈龜山天龍資聖禪寺住持歷代

（創立年時）後村上天皇興國六年
（現今位置）山城國葛野村嵯峨村

一 疎石（夢窓）觀應二、九、卅寂
二 志玄（無極）延文四、二、十六寂
三 永璵（東陵）
四 一鞏（固山）
五 光林（放牛）
六 德見（龍山）
七 妙在（此山）
八 善玖（石室）
九 智明（蒙山）
一〇 妙葩（春屋）嘉慶二、八、十三寂
一一 通徹（清溪）
一二 普在（在菴）
一三 靈致（天境）
一四 良・遁（道林）
一五 周澤（龍湫）
一六 法序（不遷）
一七 靈見（性海）
一八 宗渭（太清）
一九 仁璵（香山）至德二、五、五溪
二〇 周佐（德叟）
二一 法頴（中山）
二二 周郁（元章）至德三、九、廿二寂
二三 海壽（椿庭）
二四 淸曇（獨芳）明德元、八、八寂
二五 周敦（大義）明德三、十二、一寂
二六 德俊（伯英）
二七 士綱（南宗）至德二八
二八 如金（玉崗）應永九、八、廿六寂
二九 周已（心岩）應永五、三、四寂
三〇 圓淵（大照）應永五、二、十七寂
三一 令簠（器之）應永五、十二、八寂
三二 一麟（一菴）
三三 福謙（益叟）
三四 周朗（月庭）
三五 祥秀（松嶽）
三六 圭密（堅中）
三七 中膺（無碍）應永十一、七、一寂
三八 中淹（在中）
三九 中琮（西泉）應永十一、十二、十七寂
四〇 明應（空谷）應永十四、五、十六寂
四一 梵相（圓鑑）
四二 梵雲（祥菴）應永廿四、三、五寂
四三 宗器（延用）
四四 中勝（大緣）應永廿二、六、十寂
四五 中選（即宗）應永廿、七、六寂
四六 周崇（大岳）
四七 中果（霜林）應永十八、十一、十七寂
四八 中穩（密傳）應永十九、九、廿二寂
四九 妙虎（笑溪）
五〇 元禮（履仲）應永廿、十、十寂
五一 原冲（謙岩）
五二 通恕（惟忠）
五三 周伸（無求）應永廿、十二、十八寂
五四 周印（古篆）

諸大寺歴代幷諸職次第（臨濟宗靈龜山天龍資聖禪寺）

五五 昌智 愚隱　五六 中學 獨鼎　五七 性智 大愚　五八 中令 行中　五九 梵湛 玉潭　六〇 梵椿 鈴仲

六一 惠奯 鄂隱　六二 梵苑 子春　六三 祥麟 德祥　六四 方秀 岐陽　六五 周噩 巖中　六六 元瑾 子瑜

六七 令在 月岩　六八 周玄 一關　六九 得岩 惟肖　七〇 僧䦨 仲伯　七一 周賀 慶仲　七二 光堅 寄岩

七三 大緣 竹菴　七四 周仲 叔芳　七五 聖東 雲林　七六 周勝 古幢　七七 梵梁 惟方　七八 惠勒 心傳

七九 周芳 訥室　八〇 周安 雪心　八一 景眼 方菴　八二 妙孫 秀英　八三 梵瑚 月林　八四 彥軾 敬叟

八五 俊玄 極先　八六 中勒 勉中　八七 中顒 無爲　八八 阿立 大安　八九 周初 心源　九〇 妙川 東溟

九一 道淵 龍室　九二 中興 吳溪　九三 英種 玉岫　九四 乾珍 寶山（永享七、十、八）　九五 周銘 息心　九六 妙濬 龍江

九七 乾治 用剛　九八 周颭 紹中　九九 清道 心關　一〇〇 周藤 春林　一〇一 周操 柏心　一〇二 德輔 惟宗

一〇三 中誓 恕中　一〇四 以篤 信中　一〇五 德瑛 玉霄　一〇六 頂勝 雲谷　一〇七 妙喬 東遠　一〇八 令英 部外

一〇九 中璉 大器　一一〇 周訓 無相　一一一 眞隆 重丘　一一二 法霈 雲篗　一一三 周方 寶參　一一四 禮久 桂室

一一五 壽樟 秀岳　一一六 中明 秀照　一一七 梵龜 沅浦　一一八 中瑚 月浦　一一九 全森 茂伯　一二〇 永先 聖仲

一二一中鄉 梅谷 ｜ 一二二芳鍵 天關 ｜ 一二三乾楞 剛叟 ｜ 一二四允澎 東洋 ｜ 一二五懷雄 笑峰 ｜ 一二六惠瞀 諸菴

一二七澄昕 東岳 ｜ 一二八周玉 仙英 ｜ 一二九等栢 雪心 ｜ 一三〇珍曄 光遠 ｜ 一三一俊到 星岩 ｜ 一三二梵訓 子庭

一三三祥詢 月泉 ｜ 一三四梵夢 竺華 ｜ 一三五瑞幢 立之 ｜ 一三六、、 春巠 ｜ 一三七慶瑜 玉英 ｜ 一三八自敦 以崇

一三九至廣 葦航 ｜ 一四〇眞榮 秀瓊 ｜ 一四一以成 九峯 ｜ 一四二成綸 天錫 ｜ 一四三景忠 牧菴 ｜ 一四四梵同 弋虛

一四五周薫 舜澤 ｜ 一四六宗箴 益之 長享元、十一、十六寂 ｜ 一四七梵密 竺心 ｜ 一四八康緒 元宗 ｜ 一四九全順 怡中 ｜ 一五〇川祥 吉州

一五一集證 龜泉 ｜ 一五二壽芳 春英 ｜ 一五三全功 無續 ｜ 一五四景照 高先 ｜ 一五五壽嚴 端元 ｜ 一五六周琅 玉坡

一五七中曇 竺遠 ｜ 一五八永香 梅溪 ｜ 一五九正安 逸中 ｜ 一六〇梵琇 玉崖 ｜ 一六一等階 英瑞 ｜ 一六二慈廣 月航

一六三宏陰 松屋 ｜ 一六四智岳 松嶺 ｜ 一六五慧通 泰甫 ｜ 一六六集康 大寧 ｜ 一六七寶欽 敬芳 ｜ 一六八周馥 旃室

一六九周模 規外 ｜ 一七〇周瑞 祥中 ｜ 一七一英珍 蘊秀 ｜ 一七二等誠 顯室 ｜ 一七三慶春 伯始 ｜ 一七四紹暾 練江

一七五等期 信元 ｜ 一七六中賢 竹隱 ｜ 一七七等安 心翁 ｜ 一七八周統 蕭菴 ｜ 一七九妙茂 竺芳 ｜ 一八〇天心 有文

一八一妙惠 光甫 ｜ 一八二馨恩 光夫 ｜ 一八三眞壽 天用 ｜ 一八四等靖 梅莊 ｜ 一八五周芳 祖林 ｜ 一八六承董 江心

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗靈龜山天龍資聖禪寺）

一八七 等孫 龍叔
一八八 等倍 樂甫
一八九 馨椿 文楚
一九〇 、、 明甫
一九一 等蕤 雪溪
一九二 玄宏 濟蔭

一九三 周憲 文盛
一九四 周泉 月臨　天正十七、八、晦入
一九五 令彰 三章
一九六 玄湜 梅眞
一九七 元彰 菊齡　慶長十五、八十六入
一九八 玄洪 玄英

一九九 壽仙 洞叔　寛永十八、仲春、廿七、入
二〇〇 等修 補仲　承應三、十、
二〇一 昌倫 賢溪
二〇二 中虔 虎林　寛文四、孟夏、廿六
二〇三 梵亨 泉叔
二〇四 玄森 蘭室　寛文十一、四、廿二入

二〇五 玄竹 虎岑　延寶二、三、九、入
二〇六 道充 古靈
二〇七 周郁 文禮　元祿五、十一、廿七入
二〇八 智悅 關仲　寶永元、五、廿八開堂
二〇九 玄中 中山　寶永元
二一〇 承光 月洲

二一一 性湛 月心
二一二 元庸 大倫
二一三 道岱 雲崖　享保十六、七、入、同十七、六退
二一四 性琴 古溪　享保十七、七入、同十八、六退
二一五 全統 大圭　元文四、四、廿七入　同五、十二退
二一六 等禎 瑞源　延享四、三、十入　寛延四、正、晦退

二一七 承堅 翠岩　寛延四、三、朔入　同、九、朔退
二一八 周寅 拙山　寶曆三、三、朔入　同六、十二、晦退
二一九 元穹 昊巖　明和五、七、十六入　安永六、四、十三退
二二〇 性范 十洲　安永六、四、十四入　同八、十五退
二二一 道倫 杜洲　安永六、八、十六入　同七、正、三十退
二二二 令椿 湛堂　天明八、八、廿七入　寛政元、十二、三十退

二二三 周眲 象田　寛政六、三、六入　同七、四、七退
二二四 周价 樵隱　文化三、十、十九入　同七、二、十七退
二二五 宗寔 天敬　文化十一、十二、廿一入　同十二、八、五退
二二六 周汪 別源　文化十二、八、六入　文政二、十、十一退
二二七 承宜 月江　文政三、十、十二入　同三、三、十九退
二二八 元俊 愚堂　天保二、正、十一入　同五、八、三十退

二二九 周侃 剛中　天保五、九、朔入　嘉永元、八、十退
二三〇 周續 龍巖　嘉永元、八、十一入　同三、七、廿九退
二三一 英歆 南海　嘉永三、八、朔入　同四、四、晦退
二三二 宗球 仙峯　安政三、四、五入　文久三、二、廿三退
二三三 周邑 清隱　慶應元、九、廿一入　同三、七、十六退
二三四 周寔 謙道　慶應三、九、十二入　同十二、廿七退

二三五 元瑜 鐘山　明治二、四、朔入　同三、四、晦退
二三六 宜牧 滴水　明治四、八、四入　同廿五、十二、十七退　同卅二、一、廿寂
二三七 元碩 龍淵　明治廿五、十二、十七入　同三十、十、十七退
二三八 昌禎 峨山　明治三十、四、十入　同三十三、十、二寂

○臨濟宗萬年山相國寺住持歷代

（創立年時）後小松天皇元中二年
（現今位置）京都市上京區烏丸上立賣

一 疎石（夢窓） 觀應二、九、卅寂
二 妙葩（春屋） 嘉慶二、八、十三寂
三 明應（空谷） 至德三、十二、廿六入 應永十四、正、十六寂
四 宗渭（大淸） 嘉慶二、七、廿二入 明德三、六、十九寂
五 支山（雲溪） 嘉慶二、十一、八入 明德二、十一、十四寂
六 中津（絕海） 明德三、十、三入 應永十二、四、五寂
七 周格（物先） 應永元、八、三入 應永四、八、十九寂
八 中淵（萬宗） 應永五、八、四入 應永十七、正、六寂
九 中諦（觀中） 應永七、三、八入 應永十三、四、三寂
一〇 周崇（大嶽） 應永九、三、八入 應永卅、九、十四寂
一一 中嵩（中山） 應永十、八、十九入 應永十七、五、十五寂
一二 周伸（無求） 應永十二、十、廿六入 應永廿、十二、十八寂
一三 中淹（在中） 應永十三、八、十七入 正長元、十、七寂
一四 周繁（少林） 應永十四、八、廿一入
一五 梵晃（東啓） 應永十四、十、三入 應永十五、六、廿七寂
一六 梵相（圓鑑） 應永十五、八、廿七入 應永十七、二、廿寂
一七 周奝（大周） 應永十五、十一、二入 應永廿六、七、廿四寂
一八 福謙（益宗） 應永十六、三、廿九入 應永十六、八、十四寂
一九 惠奯（鄂隱） 應永十七、三、廿三入 應永卅二、二、十八寂
二〇 志敬（簡翁） 應永十八、七、廿八入 應永廿七、閏正、廿寂
二一 梵超（象先） 應永十八、十二、十一入 應永廿十一、七寂
二二 周噩（嚴中） 應永廿、三、十三入 正長元、六、廿六寂
二三 俊承（西胤） 應永廿一、八、十入 應永廿九、十一、五寂
二四 梵意（柏堂） 應永廿二、八、廿五入 永享六、四、十五寂
二五 周賀（慶仲） 應永廿三、八、廿四入 應永卅二、八、廿八寂
二六 景演（無說） 應永廿五、八、十二入 應永廿六、九、二寂
二七 周勝（古幢） 永享五、二、廿二寂 應永廿六、八、十一入
二八 周頌（元容） 應永廿八、八、十三入 應永卅二、三、十七寂
二九 惠珙（元璞） 應永卅、八、十六入 正長二、三、十五寂
三〇 承朝（海門） 應永卅、九、廿七入 嘉吉三、五、九寂
三一 中欽（誠中） 應永三十一、四、廿八入 永享二、十、廿六寂
三二 周悅（雲菴） 應永卅四、八、三入 文安元、十二、十八寂
三三 乾治（用剛） 應永卅五、三、廿入 文安三、十、廿四寂
三四 俊列（星岩） 正長元、十二、二入 寶治四、三、一寂
三五 中珊（月溪） 正長二、六、十七入 永享六、正、廿八寂
三六 周藤（春林） 永享二、八、十入 寬正四、正、六寂
三七 中誓（恕中） 永享三、八、廿四入
三八 乾珍（瑤山） 永享四、三、廿九入 嘉吉元、十二、廿九寂
三九 等懋（德中） 永享五、七、廿八入 文安三、十二、廿六寂
四〇 等蓮（竺雲） 永享七、八、十一入
四一 周操（柏心） 永享九、八、十九入 寶德二、正、六寂
四二 周鳳（瑞溪） 永享十三、八、廿九入
四三 周澤（東岡） 嘉吉元、八、六入 寶德二、四、廿六寂
四四 周流（芷陽） 嘉吉二、三、廿二入 享德二、十、十二寂
四五 澄泰（東岳） 嘉吉三、十二、廿四入 寬正四、四、三寂
四六 全固（子聚） 文安元、二、廿六入 康正三、五、二寂
四七 景繕（性天） 文安元、十二、廿九入 享德三、十、十二寂
四八 承顗（溫中） 文安二、八、十二入 寶德四、五、十四寂
四九 等柏（雪心） 文安三、九、廿二入 長祿三、正、廿二寂
五〇 周嚴（東沼） 文安四、八、廿八入 寬正三、正、三寂
五一 慈辯（仲默） 文安四、十、十五入 享德四、五、十寂
五二 等輝（東旭） 文安五、八、十入 康正三、七、廿五寂
五三 慧淳（古邦） 文安六、三、十入 享德二、六、廿八寂
五四 周喆（靜甫） 寶德元、八、廿七入 寬正二、正、廿一寂

諸大寺歷代幷諸職次第（臨濟宗萬年山相國禪寺）

五五 洪曹 春溪 寶德元、十二、廿五入
五六 中佐 德翁 寶德二、十一、三入 長祿四、六、九寂
五七 洪省 察堂 寶德二、十二、廿九入
五八 等鋭 以鈍 寶德三、九、十一入
五九 中材 周堂 寶德四、三、廿三入 長祿二、十一、八寂
六〇 全悟 竹香 享德二、八、九入

六一 永舒 文溪 享德三、九、八入
六二 等助 順溪 康正元、九、廿六入 長祿三、六、三寂
六三 澄安 仙岩 康正三、八、十二入
六四 梵詳 徐岡 康正三、十一、廿一入
六五 周壽 柏岩 長祿二、九、十五入 寛正三、八、廿四寂
六六 俊譽 以仁 長祿三、三、五入

六七 光謹 修山 長祿三、十二、十四入
六八 周賢 天英 長祿四、二、十三入 寛正四、二、晦寂
六九 周茝 伯芳 長祿四、六、十七入
七〇 澄期 以遠 長祿四、七、十一入
七一 澄郢 雪菴 寛正元、十二、十九入
七二 梵桂 維馨 寛正三、三、十一入

七三 景忞 同文 寛正四、八、七入
七四 等奭 棠陰 寛正五、八、六入
七五 等璜 壁溪 寛正六、二、十三入
七六 守蔭 松堂 寛正六、八、六入
七七 本績 仲言 文正元、五、十五入
七八 梵琇 玉崖 應仁元、三、十二入

イ（七九 永喜 笑雲
八〇 、、 月關
八一 周鏡 月翁
八二 、、 魁叟
八三 景茝 蘭坡）
イ（八四）七九 景三 横川 文明十七、四、廿八入

イ（八五 、、 伯叔
八六 秀睦 、、
八七 以參、、）
イ（八八）八〇 瑞仙 桃源 文明十八、八、十六入
イ（八九）八一 梵鐸 全溪 文明十八、九、廿七入
イ（九〇 、、 春陽）

イ（九一）八二 乾道 森父 延德四、八、廿七入
イ（九二）八三 周麟 景徐 明應四、三、廿三入
イ（九三 持正 文摠）
イ（九四）八四 等紳 瀑岩 明應九、三、十六入
八五 、、、、
八六 等貴 宗山

イ（九五 、、 景甫
九六 瑞杲 旭岑
九七 、、 天祐）
イ（九八）八七 梵諺 少蕙
イ（九九）八八 全祥 雲屋
イ（一〇〇）八九 法霖 梅齋

イ（一〇一 、、 廉叔
一〇二 、、 東雲
イ（一〇三）九〇 妙安 惟高 天文九、九入
イ（一〇四 、、 春湖）
イ（一〇五）九一 集堯 仁安
イ（一〇六 、、 春寂

一〇七 瑞超 江春
一〇八 、、 雲岫）
イ（一〇九）九二 承兌 西笑 天正十二、二、十九入
イ（一一〇）九三 瑞保 有節 天正十五、五、十六入
九四 顯晫 昕齋 慶長十六、四、廿三入 萬治元、正、廿寂
イ（一一一 、、 本源）

イ（一一二）九五 承章 鳳林 寛永三、五、廿八入
イ（一一三 梵崟 雪岑）
イ（一一四）九六 顯吉 覺雲 承應三、十二、五入
イ（一一五）九七 梵寅 雪巖 萬治元、八、廿入 萬治三、十、十二寂
イ（一一六）九八 宗全 春葩 寛文四、十一、廿七入
イ（一一七 慶瑞 玉英）

イ（一一八）

九九等貴（愚溪）寛文十一、九、十九入 — 一〇〇周順（景臨）— 一〇一妙恕（汝舟）— 一〇二顯靈（太虚）— 一〇三集仗（天啓）— 一〇四紹珉（琢華）—

一〇五等玲（玉翁）— 一〇六祖桂（芳渚）— 一〇七祖縁（別宗）— 一〇八梵竺（乾岩）— 一〇九丶丶（觀溪）— 一一〇丶丶（正源）

一一一丶丶（蘭谷）— 一一二丶丶（獨峯）— 一一三丶丶（藍坡）— 一一四丶丶（維天）— 一一五丶丶（無聞）— 一一六丶丶（天叔）

一一七丶丶（岱宗）— 一一八丶丶（梅荘）— 一一九丶丶（松源）— 一二〇周奎（維明）— 一二一丶丶（古道）— 一二二丶丶（大中）

一二三丶丶（大有）— 一二四以中（、、）— 一二五丶丶（盈沖）— 一二六丶丶（北潤）— 一二七丶丶（橋洲）— 一二八丶丶（古桂）

一二九丶丶（養沖）— 一三〇丶丶（雲道）— 一三一承珠（獨園）明治廿八、八、三寂 — 一三二承峻（東嶽）

○鹿苑院僧錄歷代

（創立年時）後小松天皇永德三年
（現今位置）京都市上京區烏丸上立賣相國寺塔頭廢亡

一 妙葩 春屋 康曆元任 嘉慶二、八、十三寂、七八
二 中津 絕海 永德三、九、二十任 應永十二、四、五寂七〇
三 周伸 無求 至德元任 應永廿、十二、十八寂、八一
四 明應 空谷 至德二任
五 善幢 海印 至德三任
六 明應 空谷 嘉慶二再任

七 中津 絕海 應永五、再任 同十二、四、五寂、七〇
八 明應 空谷 應永十三、三任 同十四、正、十六寂八〇
九 周崇 大岳 應永十三任 同三十、九、十四寂、七九
一〇 周噩 嚴中 應永廿五、三、廿七任 正長元、六、廿六寂七〇
一一 古幢 周勝 正長元任 永享五、二、廿二寂、六四
一二 乾珍 寶山 永享七任 嘉吉元、十二、廿九寂、四八

一三 乾治 用剛 嘉吉元任 文安三、十、廿四寂、七三
一四 周鳳 瑞溪 永享十二、八、廿九任
一五 周藤 春林 文安五、七任
一六 周鳳 瑞溪 長祿元再任
一七 澄昕 東岳 寬正元任 同四、四、三寂、七六
一八 眞圭 龍岡 寶德二任

一九 周鳳 瑞溪 應仁二、三任 文明五、五、八寂、八二
二〇 澄安 僊巖 文明五任 同五、十一、廿六寂、七四
二一 梵桂 維馨 文明五任 延德二、十一、五寂、八七
二二 瑞智 維明 文明十六任
二三 周鏡 月翁 文明十八、九、廿七任
二四 景文 錦江 明德元任

二五 景三 横川 明德二任 同二、十一、十七寂、六五
二六 周麟 景徐 明應五、二任 永正十五、三、二寂、七九
二七 梵鐸 金溪 文龜元
二八 壽頭 文摠 永正四、五、六任
二九 梵鐸 金溪 承正六再任
三〇 光隣 芳卿 大永元

三一 等貴 宗山 大永二任 同六、二、十五寂
三二 景岱 東雲 大永六 同七、十二、廿九寂
三三 壽陵 景甫 享祿五任
三四 法霖 梅叔 天文五任
三五 壽顯 文捻 天文五、再任
三六 法霖 梅叔 天文九任

三七 法叔 汝雪 天文九、六任
三八 壽信 春湖 天文十二、七、廿六任
三九 妙安 惟高 天文十四任
四〇 洪臻 春叔 天文十九、五、廿五任
四一 瑞暉 陽山 永祿二任
四二 集堯 仁恕 永祿三任 天正三、七、廿八寂、九二

四三 瑞超 江春 天正三任 同十二、十二、九寂
四四 承兌 西笑 天正十三任 慶長十、十、八寂、六〇
四五 瑞保 有節 慶長十三任 寬永十、十二、七寂 八六
四六 顯晫 昕叔 慶長十七任
四七 承潮 海門 天和元任
四八 永隆 虎山

四九 等蓮 竺雲
五〇 妙貞 友竹
五一 周頌 元容
五二 中歀 誠中
五三 梵琇 玉崖
五四 梵結 少蕙

○曹洞宗吉祥山永平寺歷代

（創立年時）後嵯峨天皇寛元二年
（現今位置）越前國吉田郡志比村

一 道元 希玄 建長五、八、廿八寂 ― 二 懷奘 孤雲 弘安三、八、廿四寂 ― 三 義价 徹通 延慶二、八、廿四寂 ― 四 義演 正和三、十、廿六寂 ― 五 義雲 正慶二、十、十二寂 ― 六 曇希 ｜、｜五、十七寂 ―

七 以一 ｜、｜一、廿五寂 ― 八 喜純 ｜、｜三、五寂 ― 九 宋吾 ｜、｜二、廿三寂 ― 一〇 永智 ｜、｜三、二十寂 ― 一一 祖機 ｜、｜五、十二寂 ― 一二 了鑑 ｜、｜六、三寂 ―

一三 建綱 ｜、｜十一、廿六寂 ― 一四 建撕 ｜、｜七、三寂 ― 一五 光周 ｜、｜二、五寂 ― 一六 宗縁 ｜、｜十一、廿二寂 ― 一七 以貫 ｜、｜六、三寂 ― 一八 祚棟 ｜、｜十、五寂 ―

一九 祚玖 慶長十五、二、廿二寂 ― 二〇 門鶴 元和元、九、八寂 ― 二一 宗奕 元和七、三、廿三寂 ― 二二 祚天 寛永八、七、廿六寂 ― 二三 秀察 寛永十八、二、一寂 ― 二四 龍札 正保三、八、一寂 ―

二五 良頓 慶安元、六、十五寂 ― 二六 良義 慶安三、十、四寂 ― 二七 英峻 嶺巖 延寶二、四、十二寂 ― 二八 門渚 萬治三、三、十八寂 ― 二九 御洲 鐵心 寛文四、七、廿八寂 ― 三〇 智堂 光紹 寛文十、八、十五寂 ―

三一 僔海 月洲 天和二、十二、十五寂 ― 三二 愚門 大了 貞享四、十、一寂 ― 三三 徹翁 山陰 元祿十三、四、廿五寂 ― 三四 高郁 馥州 元祿元、十二、五寂 ― 三五 晃全 版橈 元祿六、二、廿四寂 ― 三六 本祝 融峰 元祿十三、五、十四寂 ―

三七 天梁 石牛 正德四、三、六寂 ― 三八 巖栁 緣岩 正德六、四、十三寂 ― 三九 則地 承天 貞享元、六、十四寂 ― 四〇 喝玄 大虛 享保廿一、二、五寂 ― 四一 雄禪 義晃 元文五、九、二寂 ― 四二 圓月 江寂 寛延三、十一、二十寂 ―

四三 密巖 央元 寶曆十一、六、十八寂 ― 四四 越宗 大晃 寶曆八、四、廿四寂 ― 四五 湛海 寶山 明和八、五、廿七寂 ― 四六 良須 彌山 明和八、十一、廿八寂 ― 四七 董元 天海 天明六、正、十七寂 ― 四八 台明 成山 寛政四、十二、六寂 ―

四九 國元 大耕 寛政九、十、廿九寂 ― 五〇 即中 玄透 文化四、四、廿八寂 ― 五一 惠源 靈岳 文化三、十二、十寂 ― 五二 宜峯 獨雄 天保六、七、四寂 ― 五三 爲戒 佛星 文政元、九、四寂 ― 五四 卍海 博容 文政四、七、八寂 ―

諸大寺歷代幷諸職次第（曹洞宗吉祥山永平寺）

五五 大因 緣産 文政九、四、廿八寂 —
五六 雲居 無庵 文政十、五、十八寂 —
五七 禹隣 栽庵 弘化二、二、三寂 —
五八 大信 道海 弘化元、八、五寂 —
五九 眺宗 觀禪 嘉永元、八、九寂 —
六〇 童龍 臥雲 明治四、十一、三寂 —
六一 密雲 環溪 明治十七、四、五寂 —
六二 雪鴻 鐵肝 明治十八、八、十寂 —
六三 琢宗 魯山 明治卅、一、卅一寂 —
六四 悟由 大休

○日蓮宗身延山久遠寺歷代

（創立年時）龜山天皇文永十一年
（現今位置）甲斐國南巨摩郡身延村

代	名	院號	寂
開山	日蓮	——	弘安五、十、十三寂
二	日向	佐渡阿闍梨	正和三、九、三寂
三	日進	三河阿闍梨	元德二、十二、八寂
四	日善	大法阿闍梨	正慶元、九、廿二寂
五	日臺	鏡圓阿闍梨	貞治五、三、七寂
六	日院	寬教阿闍梨	應安六、六、廿五寂
七	日叡	上行院	應永七、五、七寂
八	日億	行學院	應永廿九、十一、八寂
九	日學	成就院	長祿三、十二、七寂
一〇	日延	觀行院	寬正二、四、廿六寂
一一	日朝	行學院	明應九、六、廿五寂
一二	日意	圓教院	永正十六、二、三寂
一三	日傳	寶聚院	天文十七、十二、十一寂
一四	日鏡	善學院	永祿二、四、廿五寂
一五	日叙	寶藏院	天正五、五、廿三寂
一六	日整	琳珖院	天正六、八、廿寂
一七	日新	慈雲院	天正廿、八、十一寂
一八	日賢	妙雲院	慶長四、閏三、十三寂
一九	日道	法雲院	慶長六、十二、十二寂
二〇	日重	一如院	元和九、八、六寂
二一	日乾	寂照院	寬永十二、十、廿七寂
二二	日遠	心性院	寬永十九、三、五寂
二三	日視	慧眼院	慶長廿、五、七寂
二四	日要	題是院	元和九、七、五寂
二五	日深	妙寂院	寬永五、十二、廿八寂
二六	日暹	知見院	慶安元、九、廿九寂
二七	日境	通心院	万治二、十、廿八寂
二八	日奠	妙心院	寬文七、十、廿三寂
二九	日莚	隆源院	延寶九、正、廿七寂
三〇	日通	寂遠院	延寶七、二、十一寂
三一	日脫	一圓院	元祿十一、九、廿三寂
三二	日省	智寂院	享保六、正、十二寂
三三	日享	遠沾院	享保六、十二、廿六寂
三四	日祐	見龍院	元文二、正、八寂
三五	日竟	誠峯院	享保十九、正、廿一寂
三六	日潮	六牙院	寬延元、九、廿寂
三七	日寬	薩心院	寬延三、正、廿一寂
三八	日荅	廣演院	寬延三、八、十五寂
三九	日總	貞明院	寬延四、閏六、廿九寂
四〇	日輪	圓通院	寶曆四、四、廿寂
四一	日妙	能治院	寶曆七、八、三寂
四二	日辰	耐慈院	明和二、十、十八寂
四三	日見	理天院	明和六、二、五寂
四四	日寶	潮音院	明和六、八、六寂
四五	日應	寂隆院	安永二、十二、十九寂
除歷	日唱	守信	
四六	日遵	領峰院	安永七、十二、十八寂
四七	日豐	亮心院	天明六、九、三寂
四八	日源	光漸院	寬政六、三、十七寂
四九	日地	本義院	寬政十二、八、六寂
五〇	日沾	教山院	寬政十、十、十九寂
五一	日全	明靜院	文化五、四、六寂
五二	日盛	堅樹院	文化三、二、十九寂
五三	日奏	上妙院	文化十二、九、廿九寂

諸大寺歴代幷諸職次第（日蓮宗身延山久遠寺）

五四 日審 智透院　文化十四、七、二寂
五五 日逞 潮文院　文政十三、九、廿二寂
五六 日晴 太裕院　文政九、九、八寂
五七 日舜 究竟院　文政十、八、廿寂
五八 日環 晃運院　天保十二、八、廿八寂
五九 日詔 圓中院　天保五、六、廿寂
六〇 日潤 一雨院　天保九、閏四、七寂
六一 日心 智了院　天保十三、三、九寂
六二 日扇 雙樹院　天保十五、正、四寂
六三 日闡 一乘院　弘化二、二、十五寂
六四 日仲 不老院　弘化三、十二、廿三寂
六五 日桂 不恬院　弘化四、十、三寂
六六 日薪 示宣院　嘉永七、二、十一寂
六七 日樞 智鏡院　安政五、十二、廿九寂
六八 日實 慈祥院　萬延元、十、四寂
六九 日琢 事惑院　元治元、七、三寂
七〇 日祥 止明院　明治五、六、九寂
七一 日禱 智現院　明治四、四、十八寂
七二 日健 獅音院　明治七、五、廿二寂
七三 日薩 文明院　明治廿一、八、廿九寂
七四 日鑑 自厚院　明治十九、一、十三寂
七五 日修 心妙院　明治廿四、五、十七寂
七六 日皐 春應院　明治廿六、八、廿六寂
七七 日巖 境行院　明治卅一、三、二寂
七八 日良 智等院　明治四十二、四、四寂
七九 日龜 妙地院　明治四十四、四、十三寂
〇 日慈 木信院

○新義眞言宗豐山長谷寺能化歴代

（再興年時）後陽成天皇天正十五年
（現今位置）大和國磯城郡初瀬町

中興 專譽（宮賢）慶長九、五、五寂
二 性盛（賴心）慶長十四、七、十六寂
三 宥義（玄音）元和四、七、十七寂
四 秀算（京識）寛永十八、十、十六寂
五 尊慶（賴心）承應元、十二、十九寂
六 良譽（堯溫）明暦二、九、一寂
七 信海（宗俊）延寶六、二、廿一寂
八 快壽（春圓）寛文六、五、十五寂
九 賴意（任識）延寶三、七、廿二寂
一〇 俊盛（存仙）延寶八、三、廿六寂
一一 亮汰（俊彦）延寶八、十一、十寂
一二 尊如（俊良）貞享元、三、六寂
一三 卓玄（淳亮）寶永元、正、廿五寂
一四 英岳（宜春）正德二、十一、一寂
一五 亮貞（自春）享保四、九、十七寂
一六 尊祐（教算）享保二、四、十八寂
一七 隆慶（專順）享保四、八、六寂
一八 秀慶（應春）享保五、七、廿一寂
一九 信有（專榮）享保八、十二、十五寂
二〇 尚彦（嚴覺）享保廿一、九、一寂
二一 惠海（寛春）延享二、四、廿九寂
二二 慧任（亮辨）寛保二、五、廿二寂
二三 圭賢（見龍）寛延二、九、廿三寂
二四 信恕（諦圓）寶暦十三、十二、十九寂
二五 性海（教任）明和元、八、二寂
二六 圓秀（知新）明和三、十一、十寂
二七 快尊（賢海）安永二、四、十五寂
二八 有慶（眞良）安永四、九、八寂
二九 快運（音識）天明七、三、十四寂
三〇 [illegible]（[illegible]心）文政五、六、廿一寂
三一 懷玄（高算）寛政二、十一、廿九寂
三二 法住（智幢）寛政十二、五、十寂
三三 儀貞（本㠯）享和二、三、十一寂
三四 元榮（本住）享和二、六、十四寂
三五 曉惠（存詮）享和三、三、一寂　七寂
三六 盛尊（堪識）文化元、五、九寂
三七 高隆（實健）文化五、七、十一寂
三八 即同（逮見）文化九、九、廿寂
三九 唯阿（傳燈）文政六、十二、十二寂
四〇 亮恭（文恭）文政十二、六、廿四寂
四一 令法（爲覺）文政十、九、十十寂
四二 榮山（智城）文政十一、三、廿八寂
四三 實掌（深識）天保六、十一、三寂
四四 榮明（深玄）天保十三、九、十九寂
四五 鏡眞（琳貞）弘化五、二、十四寂
四六 信惠（悟心）弘化三、七、廿四寂
四七 深賢（卓全）嘉永四、七、十三寂
四八 永雅（徹範）安政三、十、十八寂
四九 通濟（最勝）明治五、十、十八寂
五〇 宥歡（周室）慶應二、四、廿一寂
五一 快識（太賢）慶應三、十一、五寂
五二 隆盛（精眞）明治五、十一、十八寂
五三 秀善（惠運）明治十九、十二、十四寂
五四 秀盛（覺了）明治廿三、八、廿二寂

諸大寺歷代幷諸職次第（新義眞言宗豐山長谷寺）

五五 大了 章範 — 明治廿一、八、廿五寂
五六 相憲 玄識 — 明治廿一、十二、廿寂
五七 海量 慶雲 — 明治廿三、十、九寂
五八 雷斧 —
五九 常識 —
六〇 全鏡 —
六一 義海 明治四十四、五、十一寂

○新義眞言宗五百佛山智積院能化歷代

（創立年時）後小松天皇應永
（再興年時）後陽成天皇慶長五年
（古昔位置）紀伊國那賀郡根來
（現今位置）京都市下京區東瓦町

中興 玄宥 號性 慶長十、十、四寂 ― 二 祐宜 長善 慶長十七、十一、十七寂 ― 三 日譽 正純 寛永十七、十一、廿寂 ― 四 元壽 長存 慶安元、閏正、十三寂 ― 五 隆長 圓精 明曆二、十、九寂 ― 六 宥貞 仙丁 寛文四、五、六寂 ―

七 運敞 元春 元祿六、九、十寂 ― 八 信盛 陽春 元祿六、正、八寂 ― 九 宥鑁 ケ織 元祿十五、七、十九寂 ― 一〇 專戒 芳春 寶永七、六、廿四寂 ― 一一 覺眼 空覺 享保十、十二、八寂 ― 一二 義山 音識 享保七、七、四寂 ―作

一三 快存 是心 享保九、八、廿九寂 ― 一四 智興 法音 享保十三、六、十八寂 ― 一五 亮範 居泉 元文四、九、廿二寂 ― 一六 鑁淨 眞快 延享元、四、廿四寂 ― 一七 龍天 琳珊 明和四、三、六寂 ― 一八 快侃 是春 寶曆六、二、十三寂 ―

一九 覺遠 本圓 明和八、四、十四寂 ― 二〇 淨空 慈潭 安永四、十、廿八寂 ― 二一 等空 周音 安永六、六、一寂 ― 二二 動潮 通照 寛政七、十二、七寂 ― 二三 鑁啓 寶嚴 寛政六、十二、三寂 ― 二四 胎通 意純 寛政十、三、廿四寂 ―

二五 慈順 通助 文化十二、九、十九寂 ― 二六 淨光 眞俊 享和三、九、十五寂 ― 二七 英範 寶洲 文化元、八、十九寂 ― 二八 謙順 文化九、九、十六寂 ― 二九 觀豪 融光 文化十、六、廿四寂 ― 三〇 弘基 惠居 文政五、十二、六寂

三一 亮海 學周 文政十一、三、十四寂 ― 三二 海應 智本 天保四、十二、廿九寂 ― 三三 隆瑜 唯明 嘉永三、四、三寂 ― 三四 禪宅 戒舟 嘉永四、二、十六寂 ― 三五 先晋 音長 弘化四、十二、十七寂 ― 三六 範惠 快順 嘉永三、四、一寂 ―

三七 信海 大幢 安政三、二、廿二寂 ― 三八 賴如 大龍 文久二、八、廿四寂 ― 三九 隆榮 龍謙 慶應三、七、十七寂 ― 四〇 弘現 義觀 明治十二、十二、一寂 ― 四一 義範 現覺 明治十二、九、十寂 ― 四二 寶因 法泉 明治廿二、十一、廿寂

四三 宥性 智友 明治廿八、正、十三寂 ― 四四 隆基 芳仁 明治卅、十、三寂 ― 四五 芳勝 純賢 明治廿九、十一、廿九寂 ― 四六 快運 九華 ― 四七 敎如

○黃檗宗黃檗山萬福寺住持歷代

（創立年時）後西院天皇寛文元年
（現今位置）山城國宇治郡宇治村

一 隆琦 隱元 延寶元、四、三寂
二 性瑫 木菴 貞享元、正、廿寂
三 性機 慧林 天和元、十一、十一寂
四 性瑩 獨湛 寶永三、正、廿六寂
五 性激 高泉 元祿八、十、十六寂
六 性侒 千呆 寶永二、二、朔寂

七 道宗 悅山 寶永六、七、廿九寂
八 道章 悅峯 享保九、五、十九寂
九 海脈 靈源 享保二、五、十八寂
一〇 蓮昉 旭如 享保四、三、廿六寂
一一 方炳 獨文 享保十、十、十八寂
一二 元昶 杲堂 享保十八、六、十八寂

一三 淨印 竺菴 寶曆六、七、六寂
一四 元棟 龍統 延享三、九、十六寂
一五 正鯤 大鵬
一六 元拙 百痴 寶曆三、六、六寂
一七 元明 祖眼 寶曆七、正、廿七寂
一八 再住 正鯤 安永三、十、廿五寂

一九 元嵩 仙岩 寶曆十三、八、廿七寂
二〇 照浩 伯珣 安永五、十、廿三寂
二一 照漢 大成 天明四、二、十寂
二二 淨超 格宗 寛政二、八、廿一寂
二三 淨英 蒲菴 寛政八、十、一寂
二四 衍劫 石窓 寛政十一、九、廿八寂

二五 文秀 華頂 文政十、正、十五寂
二六 普最 妙菴 文政四、十、十七寂
二七 淨踞 金猊 文政九、十二、十六寂
二八 眞白 梅嶺 文政十二、九、十五寂
二九 衍曜 璞岩 天保七、五、十八寂
三〇 眞明 獨旨 天保十、四、廿四寂

三一 通用 若存 嘉永三、十二、十八寂
三二 如寶 楚洲 嘉永三、九、十七寂
三三 如隆 良忠 明治元、十、十寂
三四 悟芳 瑞雲 明治二、四、十六寂
三五 眞機 獨唱 明治廿二、正、十七寂
三六 廣威 金獅 明治十一、六、十二寂

三七 悟光 萬丈 明治廿五、六、九寂
三八 通昌 道永
三九 如澤 霖龍 明治十六、十二、廿九寂
四〇 行乘 觀輪 明治廿九、九、一寂
四一 嘩嘯 虎林 明治廿五、十、十六寂
四二 眞山 逢山 明治三十七、十一寂

四三 聯珠 紫石
四四 曄森 柏樹

○勅號勅諡索引

ア行

カ行

サ行

マ行

ヤ行

ラ行

○勅號勅謚索引

勅號勅謚索引增補終

○異稱略名索引

ア行

カ行

異稱略名索引

異稱略名	名
甲斐權僧正	寛慧
鎌倉法印	貞曉
阿邊法師	行善
唐橋僧正	親嚴
[illegible]律師	眞圓
紀僧正	眞濟
祈親上人	定譽
北尾上人	常寂
信長老	元信
吉祥院僧都	湛昭
近代師	運敞
鳩（覺洲の反切音）	覺洲
清水寺上綱	清範
清住寺上人	廣堅
刑部卿法印	弘緣
慶阿闍梨	慶眞
敎王院僧都	快禪
敎示（敎宗二字の省略）敎王院	宗實
宮內卿	康音
宮內卿	康緣
宮內卿法印	永盛
宮內卿法印	宏、盛
九品寺上人	長西
過（グヮ）海大師	鑑眞
元（グヮン）三大師	良源
藏人阿闍梨	賴賢
勸見（勸寛二字の省略）勸修寺	寛信
勸言（勸信二字の省略）勸修寺	寛信
勸修寺法務	寛信
觀音院僧正	延壽
觀音院大僧都	寛意
花（ケ）光院大僧正	亮雅
華（ケ）嚴老僧	道玄
華（クハ）山僧正	遍照
華（ケ）藏院僧都	濟延
華（ケ）藏院律師	寛智
花水（華濟二字の省略）華藏院	濟延
華頂尊者	源空
袈裟法師	泉惠
啓書記	正啓
賢聖房僧都	禪譽
見立（觀音二字の省略）觀音院	寛意
見寺（觀寺二字の省略）觀音院僧都	延寺
古阿三喜	三喜
古曾部入道	能因
小島上綱	眞興
子島（コジマ）先德	眞興
木寺（コデラ）僧都	源覺
木寺法印	經範
小文殊	原資
後安祥寺宮	寛胤
後圓城寺僧正	良瑜
後小野僧正	範俊
後大御室	性承
後光臺院御室	靜覺
後高野御室	道法
後金剛院御室	寛隆
後釋迦院法務大僧正	賢深
後正覺僧正	雅嚴
後染王院	寛欽
後禪阿院御室	覺道
後僧正	眞然
後中院權僧正	經海
後中御室	性助
後菩提寺大僧正	光濟
後南御室	覺深
後入唐僧正	宗叡
五筆和尚	空海
五大院大德	安然
五智法師	親慧
御廟（ゴビャウ）大師	慈惠
高野御室	覺法
高野法印	貞曉
高御（高野御室の省略）高野御室	覺法
上野阿闍梨	寶心
光明院僧正	覺道
光明院上綱	覺遍
香隆寺僧正	寛空
興善院贈僧正	藏俊
國師僧正	憲淳
極樂房僧正	憲深
越（コシ）大德	泰澄
狛（コマ）親王	性覺
金剛王院僧正	實賢
金剛王院僧都	源運
根本大師	最澄

サ行

異稱略名	名
左衞門律師	仁性
左衞門督僧都	經雅
左京法眼	康祐
左大臣法印	眞儆
佐々目大僧正	賴助
佐渡阿闍梨	舉尊
嵯峨阿闍梨	覺禪
嵯峨の僧都	仁斅
嵯峨僧都	定照
宰相阿闍梨	淳寛
宰相僧正	弘舜
宰相僧都	眞慶

タ行

異稱畧名索引　終

○禪僧別號室名索引

水西　三章令彰
水拙　祖溪德浚
推枕　叔英宗播
隨緣道人　寰海宗晙
隨流子　唐叔宗堯
セ
是菴　子建寅
是鏡　天衣守倫
清溪　汝舟妙恕
清溪　熙春龍喜
清洲　補仲等修
清拙道人　小溪紹怤
青霞山人　玉舟宗璠
青丘遺老　伯英德俊
青松　桂林德昌
西河潛子　春屋妙葩
西礀　菊齡元彭
西華　藍溪光瑨
西山遺樵　東岳徵昕
西嵐殘衲　以遠澄期
生閒　有節周保
棲雲　景甫壽陵
星江　東明覺沅
栖碧山人　天章澄彧
夕巢菴　古嶽宗亘
雪礀　右靈道充

雪齋　汝雪法叔
雪蕉　天叔顯台
雪樵　蘭坡景茝
雪髯叟　雪岩中筠
雪巢　東岳徵昕
雪披　以遠澄期
啜松　天翁永幸
絕學　悅叟妙怡
泉南　中山玄中
泉南　瑞源等禎
蟬闇　瑞岩龍惺
全愚　大岳周崇
潛空　東漸健易
善哉　玉舟宗璠
千松　信仲明篤
闡提子　玉仲宗琇
ソ
蘇嚕子　傳心宗的
巢菴　春浦宗熙
巢雲　最岳元良
巢雲　遊叟周藝
草湖　惟杏永哲
率性　雪溪支山
村菴　希世靈彥
巽亭　茂源紹伯

タ行

タ
泰菴　春澤永恩
泰雲　維馨梵桂
大山　宗峯妙超
澤南　宗　勤
諾菴　靖叔德林
丹崟　春葩宗全
丹岳　琛甫周璘
丹田　蘭谷祖芳
湛圓　仰堂宗高
チ
知盈　瑞源等禎
知足　無極士玄
知足　宥峯宗恕
癡獃　說叟宗演
致爽翁　玄英壽珙
竹鄉　瑞溪周鳳
竹窠　鳳林承章
竹軒　瑞源等禎
竹谷　季弘大叔
竹所　斯立光幢
竹處　卍　菴
筑波　無傳普傳
枕流　一了宗登
中正子　中岩圓月

中孚　月舟壽桂
冲默　自南聖薰
長安　黎岩承堅
長岡　東峯通川
長水　雲外東竺
長峯　象外祖鑑
長蘆　江春瑞超
聽雨　心田清播
聽雲子　梅堂義琇
聽雪　大業德基
澄翠　東明覺沅
若波　古嶽宗亘
釣月　文仲賢昌
テ
鼎堂　乾舟妙一
滴翠　梅仙東逋
鐵牛子　東溪宗牧
鐵華叟　啓叔宗迪
天隱子　叔京妙初
天香　桂岩運芳
天津　春澤永恩
天津　賢溪昌倫
天府　無極志玄
天游　清溪通徹
點雲　顯令通憲
電久　拙山周寅

禪僧別號室名索引畢

○別號異稱索引增補

タ行の部

ナ行の部

ハ行の部

マ行の部

別號異稱索引增補

終

○名數索引

三祖　眞宗高田の三祖
親鸞　眞佛　顯智

三大祖師　華嚴宗の三大祖師
大檀主聖武天皇　初講祖師審祥　初與本願良辨

三律師　鑑眞門下の三律師
如寶　法載　義靜

三師　日蓮宗中興三師
一如院日重　寂照院日乾　心性院日遠

三筆　黄檗の三筆
隱元　木菴　即非

三傑　黄檗木菴會下の三傑
鐵牛道機　慧極道明　潮音道海

三傑　豐山天明の三傑
智淵法住　林常快道　戒定定惠

三寶　東寺の三寶
賴寶　杲寶　賢寶

三光　日蓮宗堺の三光
佛心院日珖　常光院日諦　由光院日詮

三元　深草の三元
元政　元贇　元信

●四傳の祖　法相宗四傳の祖
一傳道昭　二傳智鳳　三傳智通智達　四傳玄昉

四流の祖　西山四流の祖
西谷流淨音法興　深草流圓空隆信　東山流觀鏡證入
嵯峨流道觀證慧

四派の祖　妙心寺四派の祖
龍泉派景川宗隆　東海派悟溪宗頓　靈雲派特芳禪傑
聖澤派東陽英朝

四大師　平安朝の四大師
傳敎大師最澄　弘法大師空海　慈覺大師圓仁　智證大師圓珍

四聖　東大寺の四聖
本願聖武天皇　開基良辨　勸進行基　導師菩提僊那

四大佛師　東大寺の四大佛師
康慶　運慶　快慶　定覺

四侍者　顯道和尚の四侍者
敬天　良巖　亮碩　佛猊

四天王　華嚴宗の四天王
聖禪　秀慧　顯範　覺雄

四王　松橋の四王
尙房　叡尊　信西　雅房

四傑　法相宗の四傑
興昭　德一　壽廣　壽德

四傑　比叡山の四傑
桓舜　貞圓　圓序　遍救

四傑　三井寺の四傑
公尹　證觀　禪仁　覺俊

●五流の祖　法然門下五流の祖
一、鎭西流（一名筑紫義）祖聖光辨長　二、西山流祖善慧證空

三、長樂寺流祖皆空房隆寛　四、九品寺流祖覺明房長西　五、一念義の祖成覺房幸西

五山の開山　鎌倉五山の開山

一、巨福山建長寺開山大覺禪師蘭溪道隆　二、瑞鹿山圓覺寺開山佛光禪師子元祖元　三、龜谷山壽福寺開山千光祖師明菴榮西　四、金峯山淨智寺開山佛源禪師大休正念　五、稻荷山淨妙寺開山退耕行勇

五山の開山　京都五山の開山

一、靈龜山天龍寺開山正覺國師夢窓疎石　二、萬年山相國寺開山同　三、洛東山建仁寺開山千光祖師明菴榮西　四、惠日山東福寺開山聖一國師圓爾辨圓　五、京城山萬壽寺開山十地湛然和尚

五哲　峨山門下の五哲

大源宗眞　通幻寂靈　無端祖環　大徹宗令　實峯良秀

●**六流の祖**　東密小野六流の祖

一、三寶院流祖定海　二、理性院流祖賢覺　三、金剛王院流聖賢（以上三人勝覺門下）　四、勸修寺流祖寛信　五、隨心院流祖增俊　六、安祥寺流祖宗意（以上三人嚴覺門下）

六流の祖　東密廣澤六流の祖

一、仁和御流祖覺法　二、保壽院流祖永嚴　三、西院流祖信證　四、華藏院流祖聖慧　五、忍辱山流祖寛遍　六、傳法院流覺鑁

六流の祖　鎭西六流の祖

白旗流の祖寂慧良曉　名越流（一名大澤流）の祖良辨尊觀　藤田流の祖持阿性眞　小幡流の祖慈心良空　三條流の祖了慧道光　一條流の祖禮阿道忠

六祖　妙心寺の六祖

一、關山慧玄　二、授翁宗弼　三、無因宗因　四、日峯宗俊　五、義天玄詔　六、雪江宗深

六老僧　親鸞門下の六老僧

眞佛　源海　了海　專海　明空　源誓

（一傳　明光　了源　源海　源誓　專海　了海）

六老僧　日蓮門下の六老僧

大成辨阿闍梨日昭　大國阿闍梨日朗　白蓮阿闍梨日興　佐渡阿闍梨日向　伊豫阿闍梨日頂　蓮華阿闍梨日持

六老僧　日什門下の六老僧

日仁　日金　日妙　日穆　日金　日義

●**七上足**　義淵門下の七上足

玄昉　行基　宣敎　良敏　行達　隆尊　良辨

●**八家**　眞言入唐八家

一、傳敎大師最澄　二、弘法大師空海　三、慈覺大師圓仁　四、惠運　五、智證大師圓珍　六、常曉　七、圓行　八、宗叡

八祖　鎭西八祖

一、聖光辨長　二、記主禪師然阿良忠　三、寂慧良曉　四、良譽定慧　五、永慶蓮勝　六、成阿了實

●十五流の祖 法然門下十五流の祖
一、一念義幸西　二、多念義隆寛　三、說法義聖覺　四、三昧義薩西　五、道心義明遍　六、勸進義重源　七、選擇義公胤　八、一向義親鸞　九、九品義長西　十、諸行義信空　十一、本願義本願房　十二、一心義悟阿　十三、西方義覺阿　十四、他力義念佛房　十五、遊行義他阿

●十八中老僧 日蓮門下十八中老僧
和泉阿闍梨日法　寂日房日家　播磨阿闍梨日源　豐後阿闍梨日滿　丹波阿闍梨日秀　下野阿闍梨日忍　三位阿闍梨日進　淡路阿闍梨日賢　帥法眼日保　越後阿闍梨日辨　一來阿闍梨日門　帥阿闍梨日高　但馬阿闍梨日實　肥前阿闍梨日傳　大輔公日祐　治部卿日位　筑前阿闍梨日合　美濃阿闍梨天目

●二十四輩 親鸞弟子二十四輩
性信　眞佛　順信　乘念　信樂　成然　西念　證性　善性　是信　無爲信　善念　信願　定信　道圓　入信（穴澤の入信と稱す）　念信　入信（八田の入信と稱す）　明法　慈善　唯佛　唯信（外森の唯信と稱す）　唯信（畠谷の唯信と稱す）　唯圓

●二十四流の祖 禪宗二十四流の祖
明菴榮西　希玄道元　圓爾辨圓　兀菴普寧　心地覺心　蘭溪道隆　大休正念　無象靜照　鏡堂覺圓　南浦紹明　西磵子曇　一山一寧　東明惠日　東陵永璵　靈山道隱　清拙正澄　明極楚俊　別傳明胤　無隱元晦　古先印元　中巖圓月　無文元選　大拙祖能　愚中周及

●三十六流の祖 東密三十六流の祖
醍醐流の祖義範　小野流の祖範俊　中院流の祖明算　小島流の祖眞興　三寶院流の祖定海　理性院流の祖賢覺　金剛王院流の祖聖賢　隨心院流の祖增俊　安祥寺流の祖宗意　勸修寺流の祖寛信　松橋流の祖一海　南院流の祖心蓮　西大寺流の祖睿尊　善通寺流の祖宥範　地藏院流の祖道教　幸心流の祖憲深　土巨流の祖深賢　意教流の祖頼賢　三輪流の祖實範　岩嚴流の祖良胤　山本流の祖覺濟　加茂流の祖如實　正智嚴流の祖祐遍　岳西院流の祖玄慶　眞言院流の祖聖守　正智院流の祖仁然　中性院流の祖頼瑜　妙法院流の祖定曉（以上聖寶の末資）　仁和御流の祖覺法　西院流の祖信證　保壽院の祖永嚴　華藏院流の祖聖惠　忍辱山流の祖寛遍　傳法院流の祖覺鑁　持明院流の祖眞譽　常喜院流の祖心覺（以上益信の末資）

●四十六流の祖 禪宗四十六流の祖
虛菴懷敞の嗣明菴榮西　長翁如淨の嗣希玄道元　北磵居簡の嗣天祐思順　無準師範の嗣圓爾辨圓　無準師範の嗣性才法心　無準師範の嗣　道祐　無準師範の嗣兀菴普寧　無準師範の嗣了然法明

名數索引

畢

宗派分類索引

○三論宗○法相宗○華嚴宗

○戒律宗

○天台宗○同寺門派○同眞盛派

宗派分類索引

○眞言宗各派

○融通念佛宗

○淨土宗各派

宗派分類索引

宗派分類索引

○臨濟宗各派

宗派分類索引

○曹洞宗

宗派分類索引

智洪 七九四頁　智樵 七九七　知常 八〇六　仲仙 八一六　長樹 八二〇　長祐 八二二　偎因 八二八　傳心 八四七　東純 八五二　等都 八五五　道愛 八五八　道印 八五九　道空 八六六　道元 八六八　道定 八七九　道自 八八五　洞源 八九二　德源 八九六　得悟 九〇一　曇貞 九〇六　如欣 一〇〇六　能勝 一〇一四　梅腑 一〇一六　繁俊 一〇一八　普宗 一〇二八

無山大巖 竺翁東木以翼拈橋痴絕全巖盧嶽道叟月坡眞巖希庵惟慧卍山靈嶽江父自山天德怡雲傑堂師巖秀峰亮廓

智巖 七九五頁　智闡 七九八　珍月 八〇八　仲圓 八一七　長淸 八二〇　超虎 八二六　滴水 八二七　傳尊 八四七　東播 八五二　等仁 八五五　道一 八五八　道印 八五九　道顯 八六八　道順 八七六　道存 八八二　道費 八八七　洞寥 八九二　德舜 八九八　得仙 九〇二　呑補 九〇七　如珊 一〇〇七　能正 一〇一四　棵仙 一〇一六　繁紹 一〇[illegible]九　不識 [illegible]

竹窓提岳禪室桃屋虛廓[illegible]蟲曹源天桂布州義山漢三鐵心密山慈伯 無隱梅庭明江竺山永覆九峰覺翁 隆溪

智濟 七九五頁　智蟠 八〇〇　仲珊 八一六　長應 八一八　長棲 八二一　起西 八二六　天誾 八四三　田悅 八五〇　東流 八五[illegible]　統玄 八五六　道一 八五八　道會 八六〇　道顯 八六七　道靑 八七九　道坦 八八二　道明 八八八　洞爽 八九[illegible]　德忠 八九八　曇光 九〇五　仁泉 九九七　如淸 一〇〇八　能範 一〇一五　繁應 一〇一八　繁哲 [illegible]　不遷 [illegible]

一川詠通湖為機堂高[illegible]竺源如仲長巖巨海玄路曇秀海雲隱之俊靈萬仍 盛禪節香日菴古潤一庵仙巖量山賢仲物外

智頂 七九七頁　智恩 八〇四　仲心 八一六　長玄 八一八　長翁 八二三　超眞 八二六　天功 八四四　田承 八五〇　等膳 八五四　透龍 八五七　道逸 八五九　道圓 八六〇　道見 八六八　道正 八七九　道珍 八八三　道門 八八九　洞壽 八九三　德陽 九〇〇　曇璘 九〇六　如元 一〇〇六　能光 一〇一四　梅仙 一〇一六　繁越 一〇一八　白龍 一〇[illegible]　不禪 一〇[illegible]

[illegible]頌報扇為宗攻峰大川寶底無功嫡宗鳳山雲菴傑山 聞菴 珠巖龍岳舜國泰翁在山太山瓦屋竺巖界巖三洲悅巖

佛僧 一〇[illegible]五頁　保廣 一〇四四　法明 一〇五五　芳瞰 一〇六三　本興 一〇六八　梵策 一〇七〇　梵淸 一〇七一　煩海 一〇七[illegible]　密雲 一〇七六　明見 一〇七九　明照尼 一〇八二　妙悟 一〇九〇　妙祐 一〇九七　文英 一一〇五　文昌 一一一〇　文仲 一一一一　文龍 一一一二　融菊 一一一六　融薰 一一一六　融參 一一一九　融照 一一一九　融適 一一二〇　祐甫 一一二七　與廓 一一三三　用兼 一一三五

雪溪了然朝山永山大英大容筏舟環溪不見 省山清嶂一華久峰的翁大雲東甫梅溪寶菴月山天眞雪窓 金岡

佛通 一〇[illegible]五頁　幡敎 一〇四四　寶鼎 一〇六一　鳳積 一〇六四　品騰 一〇七[illegible]　梵守 一〇七〇　梵仙 一〇七一　摩壽 一〇七[illegible]　明鑑 一〇七八　明言 一〇八〇　明全 一〇八[illegible]　妙康 一〇九[illegible]　無盡 一一〇〇　文海 一一〇七　文淸 一一一〇　文忠 一一一一　聞本 一一一三　融慶 一一一六　融薰 一一一六　融眞 一一一九　融椿 一一二〇　融頓 一一二〇　侑籍 一一二八　與苏 一一[illegible]　嫩龍 一一四[illegible]

祖山東海雪惡傳翁古安竺雲齡山能菴宣安體菴杰叟嶽海龍洲單傳恕岳梅山陽室南陽人芳玉仝一庭貝林梅叢三嶺

補澤 一〇四三頁　法俊 一〇五一　豐壽 一〇六一　彭壽 一〇六五　梵覺 一〇七〇　梵舜 一〇七一　梵貞 一〇七二　摩聚 一〇七[illegible]　明鑑 一〇七八　明宗 一〇八[illegible]　明潭 一〇八四　妙智 一〇九[illegible]　無著 一一〇[illegible]　文賢 一一〇八　文勝 一一一〇　文朝 一一一一　融悅 一一一五　融鏡 一一一六　融琫 一一一八　融純 一一一九　融中 一一二〇　融林 一一二一　侑松 一一二八　要播 一一[illegible]四　理柏 一一四四

[illegible]山英仲龜阜普山海圖天外吉州獨放 大綱月窓愚丘黃果泰菴忍室目峰湯菴古心障山無雜的林玉翁雪巖目天高巖

補道 一〇四[illegible]頁　法撰 一〇五[illegible]　豐降 一〇六[illegible]　本高 一〇六八　梵機 一〇七〇　梵淸 一〇七一　梵巴 一〇七二　磨甎 一〇七[illegible]　明慶 一〇七八　明遵 一〇八[illegible]　明中 一〇八五　妙融 一〇九六　馬蹄 一一〇四　文濟 一一〇九　文刹 一一一〇　文禎 一一一二　融鑑 一一一六　融供 一一一六　融察 一一一九　融松 一一一九　融貞 一一二〇　祐榮 一一二五　惟俊 一一[illegible]　楊富 一一三四　利賢 一一四五

十州大梅幾年風外溺叟天雷江巾 快菴陳叟大陽無春 以船大淵大嶽月春養叔案考在山久學嫩桂按外春岡竹堂

○眞宗各派

○日蓮宗各派

宗派分類索引

○時宗

○黄檗宗

○未詳

○佛工繪佛師

宗派分類索引　終

○宗派分類索引增補

○曹洞宗

○眞宗

○日蓮宗

○時宗

○黄檗宗

○修驗道

○雜

宗派分類索引增補 終

○人名首字字畫索引

六畫

八畫

九畫

十畫

十一畫

十二畫

十三畫

十四畫

十五畫

十六畫

十七畫

十八畫

人名首字字畫索引畢

○人名首字字音索引

クの部

サの部

シの部

スの部

セの部

チの部

ツの部

テの部

トの部

ナの部

ニの部

ネの部

ノの部

ハの部

ロの部

ワの部

人名首字字音索引　畢

再版
日本佛家人名辭書
鷲尾順敬編纂

アの部

アイチ 阿一 一九八〇……… 〔戒律宗〕河内教興寺の律僧なり、阿一字は如縁と云ふ、興正菩薩睿尊の門に入り、戒律を講し、兼ねて密教を修す、具足戒を受くる後、河内教興寺に住す、元應二年十月寂す、和歌を善くし、玉葉集、風雅集に各一首を收めらる、弟子慧海、成眞、眞源、鏡慧の四人あり、（本朝高僧傳、倭歌作者部類）

〔考〕 教誡新學比丘行護律儀の奥書に、文和元年十月に阿一三十三年忌辰のこと見ゆ、今それに依り推算し、示寂年月を掲けたり、教興寺は、聖徳太子の遺蹟にして、睿尊再興し、後延寶七年眞言宗の淨嚴入りて住す、以來眞言律宗に屬したるも、今は廢頽せり、

アカクダイシ 阿覺大師 アンネン安然を見よ、

アギユーボー 阿吸房 ソクデン即傳を見よ、

アクワン 阿觀 一七九六 一八六七 〔眞言宗〕河内金剛寺の中興開山なり、阿觀、姓は大和氏、貞平の男、和泉大島郡の人なり、保延二年に生る、幼にして聰敏、高野山に登りて薙髮し、三密の奥旨を究む、永萬元年河内の天野に移り、廢寺を中興して天野山金剛寺と號す、承安二年高倉院にて御影供を行ひ、治承二年金堂を建立し、養和元年傳法會を行ふ、承元元年十一月十四日寂す、壽七十二、阿觀畫を能くし、永萬元年六觀音像を畫く、（金剛寺文書、天野山金剛寺古記、大日本史料、古畫備考）

アジツ 阿實 ジョーシュン上俊を見よ、

アショー 阿清（………）〔 ・ 〕備中窪屋郡の僧なり、阿清は備中窪屋郡の人、出家して靈區を歷遊し、會ゝ時疫に罹り六日にして寂す、二日にして蘇し、淨土に往きたりと語りたりといふ、（本朝高僧傳）

アショー 阿清 ソリユー祖瀏を見よ、

アニチ 阿日（一九二四）〔法相宗〕大和内山釜ノ口別所の僧なり、阿日字は阿月と云ふ、法相を學ひ蘊奥を究め後眞言宗に入りて意教上人の法脈を嗣き松橋流を汲む、醍醐山の源運を友として交はる、示寂の年月日詳ならす、（傳燈廣錄）

〔考〕 阿日は文永の頃の人なり、

アブツボー 阿佛房 ニチトク日得を見よ、

アホン 阿本（二一九二）〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、阿本郷貫詳ならす、高野山に苦行し、木食上人と呼はる、大永二年二月阿純と共に四國に勸化し、天文元年安藝に勸化し、高野山の大塔再興を經營して大に功あり、寂年月日幷に壽缺

（高野春秋）

アミダ　阿彌陀一九三八……〔淨土宗〕京師出雲路某菴の僧なり、阿彌陀俗姓生國詳ならず、源空上人の弟子なる九品寺覺明房長西に師事して諸行本願の義を主張し、玄義分の釋名門に依りて十六定善の義を立つ、出雲路に住して鈔記を作る、弘安元年三月十五日寂す、（淨土傳燈錄、淨土總系譜、）

アミヨーニ　阿妙尼一七〇六……〔天台宗〕山城某庵の尼なり、阿妙尼は京師の人俗姓源氏豐前權守有輔の女なり、出家して法華經を讀誦す、毎曉二十八品を缺くなし、長治元年三月十一日寂す、（後拾遺往生傳）

アヨ　阿譽　ズイガン隨巖を見よ、

アンアミダ　安阿彌陀　クワイキヨー快慶を見よ、

アンエ　安慧一四五五―一五一八〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、安慧俗姓は貊氏、河内大縣の人、父は江邊氏、母は下野丸子氏の出なり、延曆十三年に生る、幼にして州の小野寺廣智に事へて出離の法を學ぶ、廣智師を傳敎大師に付す、時に年十三歲なり、卽ち止觀幷に密敎を學ぶ、弘仁十三年大師寂す、因りて圓仁に隨ひ、毘盧舍那孔雀明王等の經を受け、天長四年大日經を試みられて及弟得度す、十年の間三部の念誦四種三昧等解修俱に進む、承和十一年出羽の講師となる、內民法相を學ひて天台を知らず、師開講するに及ひて歸依する者多し、仁明天皇定心院を剏めて十禪師を置き、師其選に列す、貞觀六年圓仁の寂するに及ひ、師其席を補して座主となる、八年畿內の旱魃を祈り僧正を賜らはんとすれども師受けず、仍て年分度者十二人、師衣並に砂金千兩を賜ふ、此年六月太政官令して止觀眞言兼學の者を座主となし、師其選に當る、十年四月三日安祥に寂す、壽七十四、著作、顯法華義鈔十卷・卽身成佛義一卷あり（元亨釋書、本朝高僧傳、天台座主記、諸宗章疏錄）

アンカイ　安海（一五一二）〔三論宗〕奈良大安寺の僧なり安海三論宗に精し、元慶六年に最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳、）

アンカイ　安海（一六七七）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり安海は京都の人なり。山徒屢々父の宅に至り、師に論題の語を敎ゆ。師一度び聞て更に忘れず、漸く數句を記す、後母の膝に踞し、衆僧の至る每に戲るに論議を以てし、其俊發なるとに驚かしむ、遂に比叡山に登り、興良法師に從つて剃髮受業し、天台敎を究め、常に橫川に居して益々家學を研く、源信嘗て二十七疑を設け宋の智禮法師に寄問す、師其問目を見、上中下の三答を作り、衆徒に謂て曰く、智禮の答釋我が三種を出てすと、已にして答釋來るに及び、果して師の中下の義の如くなりしと云ふ。寂年及壽缺く、（元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕安海は寬仁の頃世に在り、

アンカク　安覺（一四三一）〔……〕大和奈良の僧なり、安覺俗姓不詳、神護慶雲元年に大律師となり、寶龜二年其官を罷む、示寂の年時缺く、（七大寺年表）

アンカク　安覺　リヨユー良祐を見よ

アンキ　安軌（一五四〇）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、安軌は出家して華嚴の敎を學び、元慶四年四月九日東大寺別當に任ず、寂年及ひ壽缺く、（東大寺別當次第）

アンキヨー　安慶（一七〇六）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、安慶は谷阿闍梨と號す、一に井房安阿闍梨と號す、皇慶の甥なり、事相を以て聞え、池上の嫡傳と稱せらる、門下に頼昭範胤等あり、（三國名匠畧記）

〔考〕安慶は永承の頃の人なり、

アンギヨー　安行（一四九四）〔眞言宗〕祖空海上人の弟子なり、安行其詳傳なし、弘法大師の弟子にして、弘仁六年春夏の交大師道俗に緣を募りて祕藏の法門を謄寫する時、師康守と共に之に盡すと云ふ、（弘法大師弟子譜）

〔考〕安行は承和の頃の人なり

アンコクイン　安國院　ニチオー日奥を見よ、

アンサイ　安西　二三〇〇／二三七〇〔淨土宗〕伊豫本誓寺の僧なり、安西は伊豫奥浦の人なり、直正法師の下に落髪す、大洲の本誓寺に留りて淨業を勵む、寶永六年十一月八日阿彌陀佛の靈告を蒙り往生の期を知り、諸人に報す、期に至り別を同志に告け、資財を分施し、剃髪更衣して最後の別行を修す、觀る者蟻集す、大洲候之を聞きて其虛實を撿せしむ、然るに安西健康にして平生に異るなし、衆皆恠訝す、日午に至り師自ら起ちて阿彌陀佛像を禮拜すること五十遍なり、然る後端坐合掌し、勵聲に念佛す、忽ち燦爛たる金光師の頭上に起るありて像前の燈火消滅す、衆咸嘆し異口同音に念佛す、其聲未た終らすして寂然として氣息絕ゆ、實に寶永七年三月十五日正午なり、時に壽七十一、（安西法師傳、續日本高僧傳）

アンシツ　安室　エーニン永忍を見よ、

アンシユー　安修（……）〔天台宗〕筑前安樂寺の僧なり、安修は筑前太宰府安樂寺の學頭となり、顯密二教兼ね究む、三たび法華を講ず、年七旬を踰えて六時怠らず、偏に人生を厭ひて淨土を願求す、臨終特に西方に向ひ化す、壽七十五なり、（本朝高僧傳）

アンシユー　安秀（一六一八）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、安秀は美濃の人、興福寺平源僧都に唯識を學び、三藏を研究す、天德二年維摩會の講師となり、尋で新院に住す、應和二年選ばれて宮講に侍し、比叡山賀秀問者となり、問難數遍師能くこれを解く、天祿二年興福寺主務に補し、少僧都に任ず寂年及び壽缺く（本朝高僧傳

アンシユン　安春（一五三七）〔法相宗〕奈良の學僧なり、安春法相に精し、維摩會の講師となり、元慶の初豐樂殿に於て最勝會を修す、安春講師となる、去年正月大極殿燒けたるを以て豐樂殿に於て修せられたるなり、安春示寂の年時缺ぐ（本朝高僧傳）

アンジヨ　安助（……）〔天台宗〕河內往生院の僧なり、安助は河內の人、出家して後、州の往生院に住す、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

アンセツ　安說（二三五三）〔淨土宗〕安房長泉寺の開山なり、安說は維蓮社英譽と號す、下總の人、其俗姓詳かならず、虎角に就て剃髮受業し、安房眞念村長泉寺を剏む、後丹州淨眞寺に移り、同寺に於て寂す、其年時、並に壽缺く、（淨土[illegible]系譜）

アンソー　安叟　シユヨー珠養を見よ、

アンソー　安叟　シユーリヨー宗樗を見よ、

アンソン　安尊（一七四六）〔天台宗〕筑前内山寺の僧なり、安尊は其俗姓不詳、筑前の内山寺に住し、晝は博奕嬉戲し、夜は坐禪經行す、外は無慚無愧に似て、内は大悲心を全くす、時人安尊如來と稱す、暮年衆に謂ひて曰ふ、久しく行業を積みて偏に往生を願ふ、當山は魔窟なり、恐くは命終を妨げむ、俄に宮崎に假居し、臨終に沐浴淨衣念佛燒香阿彌陀讃を唱へて寂す、應德の末なり、（本朝高僧傳）

アンタツ　安達（一三一三）〔　　〕入唐學問僧なり、安達は中臣渠毎連の子なり、白雉四年五月に遣唐使に隨ひて唐に航す、事蹟傳はらず、（日本書紀）

アンチユー　安仲　リヨーコー了康を見よ、

アンチヨー　安澄（一四二三―一四七四）〔三論宗〕大和大安寺の學僧なり、安澄俗姓は身人氏、丹波船井郡の人なり、善議法師に從ひて三論を學びて、其蘊を究め、兼ねて密教に通す、大安寺に住して法柄を乘り、道譽一時に高くして諸僧師の右に出つるものなく、唯西大寺泰演法師と互に匹敵し、屢々宮中の講筵に召されて、空有を論し、輸贏を決する能はす、弘仁五年三月一日西大寺の別院に寂す、壽五十二、（元亨釋書、本朝高僧傳）

アンチン　安然（一五四四―）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、安然は天台宗の開祖最澄の俗系にして、幼にして比叡山に登り、圓仁の室に投して剃髮受戒し、顯密の教義を講究して蘊奧を極む、元慶寺遍照に就いて胎藏界の法を受く、密號を福集金剛と云ひ、亦眞如金剛と云ふ、後比叡山に五大院を搆へて屏居し、著作を事とす、因て五大院大德と呼はる、元慶八年に勅を拜して元慶寺座主となり、傳法阿闍梨位に任せらる、清和天皇の勅により、悉曇藏を作り上る、後終る所を知らす、謚して阿覺大師と云ふ、弟子大慧あり、大慧は淨藏に法を傳ふ、即ち遍照、安然、大慧、淨藏、嫡傳す、近江淺井寂寥山大吉寺は師の搆開なりと云ふ、著作悉曇藏八卷、悉曇藏、悉曇字根、悉曇十二例紀、大悉曇章、菩提悉曇章、隨文梵語集、各一卷（以上悉曇）菩提心義五卷、眞言教時義四卷、會異融通集三卷、教時諍論、被接義私記、安然疑問答數中末法、各二卷、三觀義私記、三周義私記、三身私記、即身義私記、菩薩義私記、二諦義私記、菩薩戒私記、斟定草木成佛私記、四明安全義、事定私記、天台宗要集問答、大日經疏、各一卷（以上教義）八家秘錄二卷、秘法要決目錄、眞言新宗三藏等所譯註法入藏錄、各一卷（以上目錄）金剛界對受記八卷、胎藏界對受記七卷、具支灌頂、嘉會壇灌頂次第、不動次第王本灌頂、不動儀軌中梵唐語灌頂次第、廣攝不動秘法要決、各六卷、兩界次第四卷、第七日夜行法、廣攝虚空藏菩薩行法要決、廣攝不動、各三卷、釋迦會不同、蘇悉地對受記、對治門鈔手草、各二卷、十八道梵本、大日經秘密處、大日經供養持誦不同、大日部持念法、大日經持明行者根本印并諸尊持明者根本印署記、胎藏諸尊種子三昧耶形、胎藏大曼荼羅諸位號、胎藏道場觀、大悲胎藏秘密壇金剛部持次第、大悲胎藏秘密曼荼羅經金剛部持誦次第、大悲胎藏秘密壇都會天神供養次第、大悲胎藏生大曼荼羅王嘉會壇中普通念誦次第、大悲胎藏及秘密壇護世天供養并神供法、大悲胎藏蓮華部持念法、十三大會許可秘印、金剛大道場經大明藏分修眞言淨除穢觸讀驗要記、金剛灌頂都

會天壇神供次第、兩界決記兩界諸尊種子、蘇悉地羯羅重玄門、瑜祇經行法次第、妙轉經次第、無量壽儀軌中梵唐對註眞言、阿彌陀經對註　無量壽義軌梵字、藥師眞言梵本不同、藥師眞言梵字決、藥師修行法要決、文殊一字咒義、不空羂索神變眞言持眞言者內行梵志要決、廣大寶樓閣陀羅尼印眞言、不動頂蓮義、大聖天敎行記、十二天集、十八秘鈔都會壇天法、請雨決、求子姙胎法、雞羅山提婆記、十二月表、八十決秘鈔、貞元新入目錄眞言敎幷眞言、貞元前譯陀羅尼法抽錄、各一卷(以上事相)あり(元亨釋書、名匠畧記、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

〔考〕安然の事蹟は甚た明瞭を缺けり、其出生地に關して、伊豆走湯山緣起(延喜四年九月十八日豪忠記とあり)には、相摸星谷の人とあり、三井の敬光の五大尊者贊には、出羽の人志田義次と云ふ者の男なりとあり、共に詳ならす、其元慶寺遍照より密法を傳へたるは事實なり、阿沙縛鈔第百に印信の書狀を錄せるを以て證すべし、敬光の台宗學則幷に慈本の祭五大安然尊者文に、貞觀年中唐に渡りたりとあり、然れとも事實にあらず、三代實錄に依れは、元慶元年四月齊詮玄昭觀溪と共に四人唐に渡らんとし、太宰府に赴きたるかことし、然れとも遂に出發するに至らすして京師に皈りたるなり、山密往來幷に遮那學則に辨するか如し、遮那學則に台宗學則の誤を訂せるところ信ずべし、其東國に經行したるは事實なるべし、伊豆走湯山緣起には齊衡二年四月走湯山に入り求聞持法を修し、且つ其地に聖敎數百卷を置きたりとあり、相摸大山緣起には、元慶八年の頃大山に登りたりとあり、其入寂に關して無住の雜談集には京師に於て餓死したりとあり、東叡山の亮潤の記には出羽置賜郡時澤山の岩窟に入定したりとあり、共に詳ならず、

アンヨ　安譽　コゴク故極を見よ、

アンヨ　安與　ウンチョー雲潮を見よ、

アンヨーイン　安養院　ソンコー尊興を見よ、

アンヨーニ　安養尼(一六七七)〔天台宗〕山城某菴の尼なり、

安養尼は源信僧都の妹なり、少時より佛道に志し、遂に婚嫁せす、淨土念佛を事とす、道心堅固を以て聞ゆ、嘗て強盜あり、尼の草菴を襲ひ、衣服器具等を奪ひ去る、尼は僅に紙衾一領を被る、尼に侍せる一小尼大に悲み、強盜の出て去りたる後に、其路上に落失したる一衣裝を拾ひ來り尼に進む、尼曰ふ、既に奪ひ去りたるからは、一衣裝も我有にあらす、汝強盜の跡を追うて、これを告けて返し與へよ、と、強盜等これを聞きて忽ち感悟し、交々慚愧し、悉く衣服器具等を留め置き去りたりと云ふ、尼は每月八日に地藏講を執行す、會々源信僧都來りて何故に八日に地藏講を執行することと問ひたまへば、即時に「每日にとふらふなれは日もさゝすこゝろのおこる時そ時にて」と云ふ歌を示されたりと云ふ、示寂年月日、幷に享壽詳ならす、(續本朝往生傳、古今著聞集)

アンラク　安樂(一八六六)〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、

安樂は京都の人、外記入道師秀の男にして、初め入道泰經の侍士なりしが、出家して源空上人に師事し、淨土敎を受く、學內外に通じたれは、源空上人選擇集選述に際し、師に命して筆受せしめらる、師大に喜び、同門に語りて我れ文

臣の家に生るゝにあらずんば、何ぞ此事あらんと云ひしを上人聞いて憍慢の意生して惡道に墮落せんを恐れ、乃ち即けて第三章以下は眞觀に命じて筆受せしめたりと云ふ。建永元年十二月同門住蓮等と共に鹿ヶ谷に別時念佛會を開き、晝夜六時に善導の往生禮讃を誦す、其聲調哀婉にして聽者皆涙を流し、自ら淨土往生を願ふ思あり、同月九日恰も後鳥羽上皇熊野山に行幸したまへば、宮女等私に宮を出で鹿ヶ谷に至り、六時念佛會に詣で、忽ち感仮して髮を剃る、後此事上皇の御聞に達し、敕して安樂住蓮等を罪し、遂に其故を以て六條河原にて首斬られたり、（皇帝紀抄、愚管抄、淨土總系譜、淨土傳燈錄、三長記）

〔考〕徒然草に安樂六時禮讃を作りたりとあれども然らず善導の六時禮讃を吟誦したるなり

アンラクニ　安樂尼　一五九四—一六七一　〔天台宗〕伊豫法樂寺の尼なり、　安樂出家して法樂寺に住し、二十五年間毎日の作業阿彌陀名號五万返、觀音眞言五千返、光明眞言一千返、普賢十願名三百返、更に怠らず、寬弘八年正月一日寂す、壽七十八（拾遺往生傳）

アンコー　案考　ユーサツ融察を見よ、

アンサン　案山　キチドー吉道を見よ、

イの部

イアン　以安　チサツ智察を見よ、

イエン　以圓（一七一三）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、以圓は文章博士大江以言（もちとき）の子なり、出家して比叡山楞嚴院に投し、顯密を兼ね究む、病中法華經を讀み、七日にして暗記す、興福寺圓緣僧都と相交る、天喜の頃以圓數月間病に臥す、圓緣曾て京の法成寺に在り。夢に以圓袈裟を被り、經囊を負ひて來る、圓緣問ふ、比來病に臥し、今何ぞ旅裝す、と、以圓曰ふ、將に極樂に往かむとす、舊好を忘れず、特に來りて辭を告ぐるなり、と、即ち西に飛び去る。圓緣覺めて後、使を遣はし問候すれば、此曉に寂したりといふ、（本朝高僧傳、拾遺往生傳）

イオン　以遠（二〇五〇）〔曹洞宗〕相模最乘寺第二代なり、以遠字は韶陽、其俗姓生國共に詳かにせず、出家して了菴和尚に參し、心地を發明し、出でゝ永澤寺に住し、後應永の頃相模最乘寺に住して第二代となる。其寂年欠く、（日本洞上聯燈錄）

イシン　以心　スーデン崇傳を見よ、

イシユー　以州　ジユンエー順榮を見よ、

イジヨー　以成（二一一七）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、　以成字は九峰、此山在ハ高弟なる續芳藻に師事して法を嗣ぎ、建仁寺に住し、後天龍寺に移る、晚年如是院に皈休し、某年寂す、壽欠く、（延寶傳燈錄）

〔考〕以成は長祿の頃の人なり

イセン　以船　モンサイ文濟を見よ、

イデン　以傳（二三一二）〔淨土宗〕下野弘經寺の僧なり、以傳は法蓮社住譽と號し、法を虎角に嗣ぐ、初め館林善導寺に住し、後飯沼弘經寺に遷る、承應元年二月十七日寂す、世

壽缺く、(淨土總系譜)

イトク 以篤 二二一……〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、以篤字は信中、俗姓は三善氏、淡路三原の人なり、出家して慧日寺大蔭樹に師事して其法を嗣ぐ、永享の初年州の棲賢寺に住し、六年にして京都安國寺に遷る、同八年藤原丞相の命により東福寺に遷り、五年を經て天龍寺を主どる、後南禪寺に出世す、時年已に六十八、寶德三年十月一日寂す、著作晦夫集あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

イハチ 以八 ソンイ存易を見よ、

イヨク 以翼 チョーユー長祐を見よ、

イリン 以倫(……)〔臨濟宗〕攝津廣嚴寺の禪僧なり、以倫字は無等、法を龍山見禪師に嗣ぎ、攝津の廣嚴寺に出世し、後建仁寺護國塔下に退居す、八十歲にして寂す、其年時欠く、(延寶傳燈錄)

イギヨー 伊堯 二二八二……〔曹洞宗〕上野天增寺の開山なり、伊堯字は天室、俗姓は藤原氏、參河豐河の人なり、幼にして妙嚴寺直心達に從ひて祝髮し、直心寂し、相屋舜永席を補す、師之れに從ひ衣偈を付せられ、尋で其席を補す、文祿初年稻垣長茂居士、上野大胡に長興寺を初め、師をして之れに居らしめ、又慶長六年植木邑に天增寺を建て、師を開山とす、元和八年正月二十一日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

イゲー 伊鯨(……)〔曹洞宗〕武藏法光寺の開山なり、伊鯨字は日峯、久しく格翁桂逸に參侍し、其寂後遺命に依り、武藏龍穩寺に住す、尋で最乘寺に遷る、我野の檀越法光寺を建て師其開山となる、寂年及壽欠く、法嗣梅叟隣香の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

イサン 伊山 ソアン祖安を見よ、

イテン 伊天 二二八三 二三六〇 〔曹洞宗〕武藏大松寺の開山なり、伊天字は頭室、遠江國木原莊の人なり、俗姓は穗積氏、鈴木の族なり、幼より葷を茹はず、堀越の海藏寺に入りて出家す、後關東に遊び青松寺の瑞翁に謁す、文祿年間總持寺に出世す、諸寺に歷遷して青松寺を領し、大に法門を弘通す、川口氏玉窓寺を創して聘して開山と爲す、又信徒有り大松寺を創して聘して開山と爲す、德川家康嘗て寺に入り師の說法を聽き大に悅ふ、是れより後每月城中に迎へて齋を設け、法話を聞く、閣老以下環坐之を聽て悅服せさることなし、朝廷紫衣幷普光禪師の號を賜ふ、慶長五年命して寺基を城南に遷さしむ、慶長五年七月朔日寂す、享年七十八歲、(日本洞上聯燈錄)

イテン 伊天 シューショー宗清を見よ、

イハク 伊白 二一九八……〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、伊白字は圭[illegible]、出家して培芝正悅に師事して其法を嗣ぎ、下野大中寺に主となり、天文七年正月九日寂す、壽缺く、法嗣龍州文海の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

イサン 位產 二二四七 二三一二 〔淨土宗〕武藏增上寺廿二代なり、位產は天蓮社膺譽還阿と號す、俗姓生國詳ならす、初め出家して幡隨上人に師事し、後還無上人に師事す、蓮馨寺光明寺傳通院に歷住し、慶安三年增上寺第廿二世の貫主となる、翌四年四月將軍家光薨去あり。師は增上寺に於て萬部の法會を修す、承應元年八月廿日寂す、壽六十六、(三緣山志)

イコーイン 威廣院 リョーヨー靈曜を見よ、

イゴン 威嚴（……）〔眞言宗〕山城安祥寺の僧なり、威嚴字は少納言法印といふ、賴眞の法を得、安祥寺の席を兼ねて大勝金剛院に住す、詔して小栗栖の別當となる、付法の弟子良瑜寛海の二人あり、（後傳燈廣錄）

イゴン 威嚴　ズイオー瑞雄を見よ、

イセン 威仙　シューゲー宗猊を見よ、

イセツ 異雪　キョーシュ慶珠を見よ、

イチン 異珍（二〇五四）〔曹洞宗〕薩摩佛陀寺の禪僧なり、異珍字は奇叟、南蠻國の人なり、薩摩國金鐘寺の了堂に依り薙髮取具し、海を越えて東し、龍泉寺通幻、普門寺天眞に參して佛陀寺に販り、復た了堂に師事し、玄奧に通す、後ち總持寺に出世して佛陀寺に住す、示寂年及世壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

〔考〕異珍は應永頃の人なり、

イカイ 爲戒 二四〇二 二四七八 〔曹洞宗〕越前永平寺の禪僧なり、爲戒字は佛星、俗姓は堀尾氏、筑後の久留米藩の人なり、壯年の頃伊豆最勝院隆峰に依りて薙染し、永平寺を董す朝廷特に照化理宗禪師の徽號を賜ふ、文政元年九月四日寂す壽七十七、

イカイ 爲契 二一八二……〔曹洞宗〕筑後千光寺の開山なり、爲契字は默巖、周防國山口の人、龍文寺爲宗仲心に依りて得度し、洞門の宗旨を學び、其典座と爲り、文龜二年龍護山の故跡を興し、千光寺を建て、其開山となる、地は明菴榮西開闢の道場にして、後小松帝賜額の所なり、住持二十一年、大永二年八月二十八日寂す、（日本洞上聯燈錄）

イガク 爲學 二一二九……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、爲學字は大[illegible]、其嗣承詳かならず、東福寺に住し、文明元年五月十九日寂す、壽欠く、（延寶傳燈錄）

イシュー 爲宗　チューシン仲心を見よ、

イゼン 爲全　シンジョー眞乘を見よ、

イドー 爲幢　リョーホー令法を見よ、

イハン 爲播 二〇六四 二一二八 〔曹洞宗〕周防龍文寺の禪僧なり、爲播字は器之、大隅國の人、俗姓は藤原氏なり、幼にして鄉寺に出家し、後京師に往き。南禪寺惟肖の下に投して內外の學を習ふ、精鋭拔群なり、巖深く之を器とし、乃ち器之と稱す、後竹居和尚大寧寺に在りと聞き、直に往て參し、居ること八年、周防の龍文寺席を虛す、周防長門豐前筑前の四國の大守大內弘忠師を請す、師辭すること能はずして之に應ず應仁二年五月二十四日寂す、享年六十五、坐夏五十四、詩偈集一卷あり、（日本洞上聯燈錄）

イリン 爲霖　カンウ甘雨を見よ、

イオー 意翁　エンジョー圓淨を見よ、

イカク 意覺 二三六二……〔淨土宗〕鎌倉光明寺の僧なり、意覺は念蓮社聚譽と號す、其鄉貫詳かならず、光譽宗呑に師事して法を嗣ぎ、瀧山の大善寺、瓜連の常福寺等に歷住して鎌倉光明寺に主となり、幾何ならずして寂す。實に元祿十五年正月二十五日なり、壽欠く、（淨土總系譜）

イキョー 意敎　ライケン賴賢を見よ、

イジュン 意純　タイツー胎通を見よ、

イテキ 意的 二三〇五……〔淨土宗〕江戸安樂寺の開山なり、

意的は正蓮社覺與と號し、武藏國猿崎の人、其俗姓詳かならず、法を雪念に嗣ぎ、江戸下谷金杉に安樂寺を創して開山となる、正保二年八月二日寂す。壽欠く、（淨土總系譜）

イテン 意天 二三〇〇…… 〔淨土宗〕江戸靈巖寺の第二代なり、意天は雄蓮社正譽、又は法術と號す、智譽上人に師事して法を嗣ぎ、初め江戸淺草西福寺に住し、後深川靈巖寺に主となる、寛永十七年十月二十六日寂す、壽欠く、嗣法六人あり、萬量、茂產、雲恕、吾順、鷹譽、慶閑これなり、（淨土總系譜）

イガン 維嵓 リョーグワン了願を見よ、

イクワン 維寛（一七七九）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、維寛字は敎行、京都の人、內匠頭基光の子、元永二年十月廿九日寛惠と共に三寶院にて賢覺より傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

イハン 維範 一六七五 一七五六 〔眞言宗〕紀伊高野山十四代の撿校なり、維範俗姓は紀氏、紀伊伊都郡桐賀の人なり、顯密兩學に通し、康平六年壺坂の太念に從ひて、灌頂を受け、法を繼ぎ、高野山に入りて南院に住す、承保二年檢校に補し、寛治三年八月職を辭す、山を領すること凡そ十六年、永長元年二月三日寂す、壽八十二、（續傳燈廣錄、高野春秋、高野往生傳）

イミヨー 維明 シューケー周奎を見よ、

イギヨーイン 易行院 ホーカイ法海を見よ、

イギヨーイン 易行院 セーショー栖城を見よ、

イヨ 易譽 二二一六…… 〔淨土宗〕伊勢欣淨寺の開山なり、易譽は指蓮社と號す、其鄕貫詳かならず、親譽上人に投じて剃髮受業し、法を鎭譽に嗣ぎ、伊勢山田に欣淨寺を剏む、永祿九年十月八日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

イアン 葦菴 ゲンヨー元養を見よ、

イコー 葦航 ドーネン道然を見よ、

イウン 怡雲 ニヨコン如欣を見よ、

イシン 頤神 ソエン祖緣を見よ、

イジヨーイン 已成院 ニチチヨー日長を見よ、

イシヨードーニン 倚松道人 ショーチ性智を見よ、

イセン 偉仙 ホーエー方裔を見よ、

イホー 蘐芳（……）〔曹洞宗〕越前寶圓寺の僧なり、蘐芳字は桂質、寶圓寺高巖理栢の法を嗣ぎ、其席を補す、寂年壽欠く、法嗣直應正暾の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

イチア 一阿（一九四八）〔時宗〕某寺の僧なり、一阿は其俗姓生國詳かならず、出家して聖達に師事し、專念の法を受け、一遍智眞と共に諸國を巡遊して、熾んに寶號を唱ふ、寂年及壽欠く、（本朝高僧傳）

〔考〕一阿は正應の頃の人なり、

イチア 一阿 レンサツ連察を見よ、

イチアン 一菴 ニヨショー如淸を見よ、

イチイ 一以 一九五二 二〇三〇 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、一以號は大道、俗姓は平氏、出雲國島根の人なり、生れて父母に捨てられ、叔父に掬養せらる、叔父沒して遂に父母に歸へる、十一歲郡の枕木山に投して剃髮し、十四歲比叡山に登り、登壇受戒す、別傳の宗旨を慕ひ、光明寺の藏山空和尙に

隨侍し後建長寺約翁南禪寺規菴に歷參す、規菴の寂後一山來り住し、師また隨侍すること久し、後東福寺の南山雙峰二師に謁す、雙峰瑞龍山に移つるに至りて高職に任せられ、虎關東福寺に出世する時、後版となり、再住に及ひて前堂に擢てらる、虎關南禪寺に住する時、師と共に往く、一日虎關の語を聞きて大悟し、之より參を罷めて永明塔下に退休す、康永元年夢窓國師の請に應して阿波の補陀寺に住す、數年の後事を謝して淡路に退隱す、太守源氏春所住の宅を改めて安國寺となし、師を開山に延く、三年ならすして殿堂廊閣煥然として興る、文和二年京都普門寺に住し、延文元年東福寺に移る。尋きて南禪寺に陞り、貞治の末印を釋きて淡路に歸へり、應安三年二月二十六日寂す、壽七十九、臘六十六、遺偈あり、曰く、無生一曲、調滿虛空、陽春白雪、碧雲淸風、と。（續群書類從二三四、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

イチイイン　一意院　ニチキヨー日經を見よ、

イチウ　一雨　ジヤクミヨー寂明を見よ、

イチウドー　一雨堂　リヨーニン亮潤を見よ、

イチエン　一圓　一八八六／一九七二　〔臨濟宗〕尾張長母寺の禪僧なり、一圓字は道曉、號は無住、俗姓梶原氏、相模鎌倉の人なり、幼にして父を喪ひ、常陸の親族に依る、十九歲にして州の山寺に投じ、祝髮し、幸圓僧都に就きて倶舍頌疏を習ひ、法身大德に就きて法華玄義を學ぶ、二十七歲長樂寺に投じて朗譽に師事し、禪暇に禪論圓覺經を聽く、二年を踰えて園城寺に到り、實[illegible]師に謁して止觀を聽き、奈良に遊びて戒律を傳へ、菩提山に留りて眞言を究むること五年なり、後聖一國師に謁して弟子の列に連なり、心印を傳ふ、文永の初尾張木賀崎に長母寺を開きて禪敎兼ね弘む、衆請により雨を祈り靈驗あり、藤相國東福寺を董せむことを請ふ、再三懇懃なれども固辭して受けず、正和元年十月十日桑名蓮華寺に化す、遺偈あり、一漚浮レ海、八十七年、風林波靜、依レ舊坦然、著作沙石集十卷、雜談集五卷、聖財集三卷、妻鏡一卷、念佛諸經要集一卷あり。後天文十五年勅諡大圓國師を賜ふ、（道跡考、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

イチエンイン　一圓院　ニチダツ日脫を見よ、

イチオー　一翁　インゴー院豪を見よ、

イチオー　一鷗　ニチシユー日收を見よ、

イチオン　一音　ケンシヨー顯識を見よ、

イチカ　一可　リヨーケン良憲を見よ、

イチガ　一雅　二〇〇一／二〇五五　〔臨濟宗〕淡路圓鏡寺の開山なり、一雅字は大全、世々近江に住せしか、父備州の金河莊に移りて師を生めり、師幼にして佛敎を慕ひ、加賀の安國寺に詣てゝ星山道に依りて下髮受具し、後京に上り東福寺に於て賓客を主とる、貞治の初年筑紫承天寺大湖に謁して其化を助く、師嘗て南遊の志あり、船を發し大洋に到りて風濤の爲に果さす、京都に飯へりて慧峰寺に挂搭し、大道和尙に參して其許可を受く、貞治四年大道詔により南禪寺に主となるに際し、師亦從侍す、翌年大道慧峰寺の智覺菴に退居し、檀越淡路島細川氏春大道を問ひて師に會し、豐財院に師を請す、應安二年應夢巖慧峰寺に主となり、師を招きて藏鑰を司とらしむ、明年二月大道宗鏡寺にて寂し、師智覺菴の塔を守る、日峰東

和尚東福寺に住し、師を畢けて第一座とす、承德二年春將軍義光の命を受けて淡路の安國寺に出世す、翌年檀越氏春圓鏡院を改めて禪剎となし、師を開山祖となす、嘉慶元年秋伯耆に往き、冬氏春の病を聞きて京に入り、末後の要路を示し、再び安國寺に住す、一住十年法化甚た盛にして氏春の子滿春大に師を優遇し、其嗣滿淩をして弟子の禮を取らしめ、且つ莊園を圓鏡寺に付す、應永元年滿春師の名を將軍に聞す、乃ち將軍師を幕府に招きて法を問ひ、之を厚遇す、二年夏病にかゝり、九月圓鏡寺に皈へり、書を大守に遺し、法具を門人に分ち、二十五日偈を書して曰く、來恁麼、去恁麼、著眼看、是什麼、と、翌二十六日安然として寂す、壽五十五、臘四十三、著作語錄あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

イチガ　一雅　ギョーエン堯圓を見よ、

イチカイ　一海　一七七六　一八三九　〔眞言宗〕山城醍醐山松橋無量壽院第二代なり、一海字は尊勝、少輔阿闍梨といふ、土佐刺史源朝俊の子にして、厚躬親王の裔、左大臣雅信の後、堀河左中辨師能の猶子、寶慶の同腹なり、華嚴宗の碩匠にして、三會の已講となり、久安三年五月二十日三寶院に登りて定海大僧正に職位灌頂を受く、時に年二十九なり、元海を受業の師とし、第二位島印璽を得たり、大僧正の寂後保元元年五月三十日元海に就きて再び法橋流の蘊奥を研め、元海の臨終の際、特に心印を授けらる、乃ち無量壽院の二世となり、治承三年九月二十六日寂す、壽六十四、(續傳燈廣錄)

イチギン　一吟　ジャクス、寂水を見よ、

イチキユー　一休　シユージユン宗純を見よ。

イチキヨー　一翟　一九四四　二〇三〇　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、一翟字は固山、號は無中と云ふ、俗姓は源氏、肥前佐嘉郡の人なり、十五歳筑前聖音寺に往て落髮受戒す、正安元年一山西磵支那に渡らんとして太宰府に留まる、師往てこれに謁し、無中の號を受け、且偈を贈らる、十七歳京都三聖寺に上り、無爲之に參し、又相模に往て西磵に侍す、藏山和尚東福寺に住するや、師また師事して要職を歷、貞和元年東福寺に出世し、文和初年天龍寺に移る、一住二年、正覺菴に退休し、延文五年正月疾に罹り、二月十二日偈を書して曰く、來時空手、去時赤脚、一去一來、單重交柝、と、筆を投じて寂す、壽七十七、門人遺命により國鑑禪師の塔左に葬り、塔を樹て正光と云ふ、(續群書類從二三四、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

イチキヨー　一慶　二〇四六　二一二三　〔臨濟宗〕京都南禪寺の僧なり、一慶字は雲章といひ寶淸老人と號す、京都の人左大臣藤原經嗣の子、至德三年夏を以て桃華坊の第に生る、六歳にして山崎成恩寺に投し、十六歳にして落髮受具し、東福寺の衆徒となる、應永九年明の天寧寺の倫猶、上竺寺一菴如、等、使を奉じて來朝す、師乃ちこれに謁し　城北聖壽寺に往き、岐陽秀禪師に師事して專ら内外の學を究め碧巖錄を傳ふ、奈良に遊學して賢首慈恩の教疏を聽く、岐陽東福寺を領するに及び、輪藏を典とり、分座說法す、永享三年普門寺に主となる、七年後小松上皇詔を賜ひ、宮中に於て元亨釋書を講せしむ、嘉吉元年東福寺に遷る、寶德元年夏太上天皇の詔により御照容に賛す、此年冬詔を奉じて南禪寺に主となる、住持三ヶ月にして慧日山東福寺の寶渚院に佚老し、疾に罹り偈を作り

て曰く、一十五年坐不臥、一百餘日臥不坐、放屁合著大不調、釋迦彌勒難作和病癒へ壽を延ぶること十五年、寛正四年正月二十三日吉祥にして寂す、壽七十八、敕諡弘宗禪師と賜ふ、師儒學に通し周易傳義を講したり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本名僧傳）

イチキヨー　一經　エーシユー永就を見よ、

イチグ　一具　グシユン愚春を見よ、

イチクー　一空　二三一四　〔淨土宗〕江戸智福寺の開山なり、一空は明蓮社光菴と號し、上總の人なり、出家して法を無絃に嗣ぎ、平常草衣木食、念佛精修怠りなし、後河越三福寺、横沼西福寺、江戸芝智福寺等を開き、永應三年四月十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

イチクワク　一廓　リヨーエン良圓を見よ、

イチゲ　一華　セキエ碩山を見よ、

イチケー　一溪　シユートー宗統を見よ、

イチゲン　一元　ケーシヨ啓諸を見よ、

イチゲンイン　一源院　ニチカン日閑を見よ、

イチコ　一故　シユンガク春岳を見よ、

イチコ　一故　リカク利覺を見よ、

イチゴ　一牛　二二九九　〔淨土宗〕下總淨開寺の開山なり、一牛は西蓮社鎭譽と號し、其鄕貫詳かならず、觀智國師に法を嗣ぎ、下總行德に淨開寺を剏めて開山となり、寛永十六年七月朔日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

イチサイ　一西　チヨーエツ長悅を見よ、

イチザン　一山　二二九七　〔淨土宗〕美作本覺寺の開山なり、

一山は嚴蓮社存譽と號し、美作津山の人なり、法を潮龍に嗣ぎ、寛永三年鄕里に皈り、本覺寺を剏めて開山となる、同十四年六月一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

イチザン　一山　イチネー一寧を見よ、

イチシ　一之　（二〇五四）〔臨濟宗〕京師東福寺の僧なり、一之は江藏主と稱す、書を明兆に學びて、能く師に似たり、佛像人物を畫く、殊に墨畫に長せり、（扶桑畫人傳）

イチシ　一絲　モンシユ文守を見よ、

イチシドー　一枝堂　リヨーア了阿を見よ、

イチジツ　一實　リユーゼン隆善を見よ、

イチシン　一心　二二八五　二三四六　〔日蓮宗〕和泉知足菴の僧なり、一心は和泉堺の人、夙に俗世を厭ひ鷹峯知足庵日龍に師事し天台日蓮の敎を受け、道譽高し、貞享三年十月二十二日寂す壽六十二、（本化別頭佛祖統紀）

イチシン　一心　二二七七　二三四七　〔淨土宗〕和泉某菴の僧なり、一心は和泉堺の人壯年出家し、一小菴に居る、口に任せて念佛す、貞享四年十月微恙にかゝり同年同月十五日正坐し、手つから鉦を打ち、高聲念佛して寂す、壽七十、（續日本高僧傳）〔考〕日蓮宗の一心と云へる僧と同一人なるか、未た詳ならす、

イチシン　一心　ジキヨー自敬を見よ、

イチシンイン　一心院　ニチテー日延を見よ、

イチシユー　一岫　シヨーリン紹麟を見よ、

イチシユー　一州　シヨーイ正伊を見よ、

イチシユー　一宗　シユンコ俊箇を見よ、

イチジユン　一遵　二〇五九 二一七八〔曹洞宗〕遠江可睡齋の開山なり、　一遵字は大路遠江の豪族の子なり、十歳にして大洞寺如仲に投して業を受く、如仲の寂後川僧慧濟道を一雲寺に說くと聞き、往て逢ひ見ゆ、席に大年祥椿あり、師疑を叩きて大に悟り、遂に其法を嗣ぐ、大年の寂後蓮華峯の下に菴居す、蓋し如仲が嘗て菴居の地なり、靈現に依り久野城主（佐渡守）某寺を刱む、今の可睡齋是れなり、師其開山となり、次に龍澤寺に遷り、退きて再び可睡齋に皈る、永正十五年四月六日寂す、壽百二十、法嗣林英宗甫の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

イチジユン　一純　二〇三七 二一二五〔曹洞宗〕信濃廣澤寺の開山なり、　一純字は雪叟、俗姓生國未詳、近江新豐寺機堂長應禪師に師事して後其席を繼ぎ、總持寺慈眼寺等に歷住す、信濃の小笠原持長、廣澤寺を建て師を請じて開山となす、康正元年四月十五日寂す、壽七十九、（日本洞上聯燈錄）

イチシヨー　一清　二〇二八……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、　一淸字は無夢、俗姓不詳、普門寺玉溪琦の法を嗣ぐ、奈良に遊びて敎門を講究す、嘉元年間元に航し、廬山の龍巖眞、雪峯の樵隱逸、百丈の東陽輝に歷謁す、東歸の後備中の寶福寺に住す、延文四年東福寺に住す、詩あり、世間誰管事紛紛、靜坐茅簷到夕曛、白髮重添今歲雪、靑山猶帶去年雲、後天得庵に退休し、應安元年五月二十四日寂す、遺偈あり、一顆寶珠、人祕我出、今日擊碎、池潤天寬、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

イチシヨー　一昭　リキシヨー力精を見よ、

イチシヨーイン　一性院　ニチカン日感を見よ、

イチシヨーイン　一正院　ニチイン日陰を見よ、

イチジヨー　一定　一五四〇 一六〇五〔眞言宗〕山城醍醐山第六代の座主なり、　一定は一に壹定に作る元慶八年に生る、聖寶の高足にして三論宗に通し、東大寺塔院の主なり、延長三年父淳祐と共に觀賢に灌頂を受けて印可を蒙むり、鐵塔相承の寶珠を付せらる、天慶五年七月醍醐山第六世の座主に補せられ、八年正月小栗栖法琳寺泰舜に代りて維摩會の講師を勤め、十二月廿九日寂す、壽六十六、（續傳燈廣錄）

イチジヨーイン　一乘院　ニチヨー日饗を見よ、

イチジヨーイン　一乘院　ニチシユツ日出を見よ、

イチスイ　一睡　ニチケン日賢を見よ、

イチセン　一川　チサイ智濟を見よ、

イチゼンイン　一善院　ニチシン日禛を見よ、

イチチユー　一中　テージユン貞準を見よ、

イチチユー　一仲　ユーシユン融舜を見よ、

イチチユー　一柱　センエキ禪易を見よ、

イチチヨー　一朝（二一六四）〔曹洞宗〕遠江可睡齋の禪僧なり、　一朝字は天陽、大陽一鶚に師事して其法を得、席を繼きて遠江可睡齋に主となる、寂年及び壽歆く、法嗣潛龍慧湛一人あり、（日本洞上聯燈錄）

イチテー　一庭　ユートン融頓を見よ、

イチテキ　一的　二三二三……〔淨土宗〕江戶潮泉寺の開山なり、一的は照蓮社寂譽と號す、其鄉貫詳かならず、靈巖に師事して法を稟け、江戶駒込潮泉寺を開く、寬文三年六月六日寂す、世壽歆く、（淨土總系譜）

イチテン　一天　ゲンシヨー玄淸を見よ、

イチデン　一傳　〔淨土宗〕江戸天德寺の僧なり、一傳は十蓮社念譽と號す、稱念に師事して業を受け、江戸天德寺に住す、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

イチトー　一東　二二四六……〔臨濟宗〕但馬圓通寺の禪僧なり、一東字は日菴、一色持勝の子なり、九歲にして棲眞寺の大陰に侍し、下髮して但馬の宗源寺に寓す、又比叡山に登りて天台敎を學ふ、眞乘寺の華屋禪師楞嚴經を講す、師、衆と共に聽講す、畢りて大心寺景川隆に參す、去りて南禪寺の記室を司とる、文明の末山名政豐延きて但馬の圓通寺に住せしむ、年七十四にして同地に寂す、師嘗て虎關和尙五家の辯に依り五派一滴の圖を作り學者の參考となす、嗣法春輝禪師あり、南禪寺に住す、（本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

イチトー　一到　リョーゲン靈玄を見よ、

イチトー　一凍　ショーテキ紹滴を見よ、

イチドー　一道　一二七八……〔淨土宗〕美作涅槃寺の開山なり、一道は前蓮社眼譽、又は空阿と號す、武藏の人なり、智譽上人に就て剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、初め石見大田の大願寺に住し、後美作津山の涅槃寺を剏めて開山となり、盛んに所承の敎を弘む、元和四年十二月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

イチドー　一道　二四一一……〔淨土宗〕伊勢觀正菴の僧なり、一道は阿譽靈順と稱す、俗姓生國詳ならす、幼にして出家し西迎院快譽に師事し後觀正菴に住し日課念佛六万遍を修す、兄瞻阿發願して八万四千鋪の曼荼羅を彩繪して三國に弘通せんと云ふ、師亦發願して兄の大業を助けんと云ひ、曼荼羅を講究し、捜玄八卷を作る、寶曆元年十二月十日發願して水穀を絕ちて六時に五色の絲を執り念佛す、同十四日寂す、著作曼荼羅捜玄五卷等十四部あり、（續日本高僧傳）

イチドー　一道　ニチオン日遠を見よ、

イチドー　一童　クワクソン廓存を見よ、

イチドン　一曇　ショウズイ聖瑞を見よ、

イチニョ　一如　コーカイ光海を見よ、

イチニョアン　一如菴　コーオー光映を見よ、

イチニョイン　一如院　ニチジュー日重を見よ、

イチニョボー　一如房　ニチチョー日澄を見よ、

イチ子ー　一寧　一九〇七 一九七七　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、一寧字は一山、俗姓胡氏宋台州の人なり、幼にして英敏なり、稍長じて佛門を慕ふ、郡の鴻福寺に無等融あり其下に投し童侍すること三年、後辭して四明山に登り、普光寺處謙に就きて法華經等を聞き、二年を經て得度進具し、應眞寺に律を學び、延慶寺に天台を究む、而も義學の支解を嫌ひ、遂に天童山に登り、簡翁敬禪師を問ふ、禪師曰ふ、一心三觀何を以て躰となすか、と、師卽ち一笑す、禪師參堂を許す、坐究二年、後育王山に登り、藏叟珍に謁す、珍退きて後東叟愷、寂牕照、頑極彌、相續きて同山に住持たり、師四師に奉事し、獨り頑極に服す、一日懇に宗要を問へば、頑極曰ふ、我れ一法の人に與ふるなし、と、師卽ち契悟す、尋て大藏の關鑰を典る、後雲遊して環溪一、橫川珙、巧菴祥、清溪沅の諸老宿に謁す、造詣益深し、至元二十一年（我弘安七年）の夏、四明の祖印寺に住して上堂す、十年を經て慶元府の補陀山に

遷る、住持すること六年なり、海岸の靈區師の法化遍く布く、大德三年（我正安元年）に東航し來着す、初め元の世祖日本を兼併せんと欲し、戰艦六萬軍卒二十萬を發して襲擊し、五龍山に屯す、一夜暴風大に吹きて、海軍悉く溺沒す、然るに成宗位に卽きて尙ほ兼併の意あり、有道の名衲を遣はして勸誘し、以て附庸となさむと欲す、大德二年（我正安元年）に吾國の商船明州に艤す、成宗命じて名衲を選ばしむるに衆議一寧を推す、成宗師に金襴の僧伽梨、並に妙慈弘濟の號を賜ひ、東航を勸む、師已むを得ず、寶陀山を下りて出發し、十三日にして太宰府に着し、直に相模に下る、北條貞時師を疑ひ、伊豆の修禪寺に送る、師寺中に屛居し、晝夜禪誦を事とし、悠然自適す、幾もなくして貞時其禁錮を解きて鎌倉に請す、同年十二月建長寺に主り、法化甚盛なり、乾元元年十月に圓覺寺に遷り住す、正和二年の秋京の南禪寺席を虛くす、後宇多天皇勅を貞時に降し、師を召したまふ、乃ち同寺に住す、日日道を問ふもの群をなし、縉紳の車馬門路に塡つ、師應侍の煩を厭ひ、老病を以て屢退休を乞ふも優詔あり聽されず、遂に潜に遁れて越州に往く、上皇宸書を賜ひ、慰諭したまふ、文保元年九月南禪寺の方丈に疾を示す、上皇行幸して親しく慰問したまふ、二十四日曉手書の遺表を奉り、其恩を謝し、尋て寂す、壽七十一、偈あり、横行一世、佛祖呑レ氣、箭已離レ絃、虛空墜レ地、上皇震悼したまひ、勅して國師號を賜ひ、源有房に宣し文を作りて祭らしめたまふ、龜山廟の側に塔を建て、法雨の額を賜へり、且つ親ら像贊を製したまひたり、一寧四會の著述若干卷あり且つ書畫に巧なり其筆跡まゝ現存せり、一山國師語錄二卷刊行す、（行記、元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

イチ子ン　一念（二三一三—二三四二）〔淨土宗〕山城粟田口常樂菴の僧なり、一念號は淨譽、攝津高槻の人なり、壯年にして出家し、常に淨土の行業を修す、二六時中廢卷あるなし、粟田口に常樂菴を營み、淸貧を樂む、食盡くれば松皮等を嚙みて僅に氣息を續く、天和二年九月疾にかゝる、豫め死期を知り、兩手に阿彌陀來迎の印を結び寂す、天和二年九月十二日なり、壽三十、（續日本高僧傳）

イチプー　一風（二一六二）〔淨土宗〕山城報恩寺の僧なり、一風字は玄譽、俗姓詳ならず、一に云ふ京師の人なり、と、後土御門帝の御宇に方て、洛北法園寺に住す、師號を改めて報恩寺と爲す、文龜元年後柏原天皇佛牙舍利及佛具等を賜ふ、二年勅して寺額を賜ふ、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳　淨土總系譜）

イチヘン　一遍　チシン智心を見よ、

イチホー　一峰　ツーゲン通玄を見よ、

イチホー　一峰　リンソー麟曹を見よ、

イチホー　一法　ズイリュー隨流を見よ、

イチミヨーイン　一妙院　ニチギョー日堯を見よ、

イチミヨーイン　一妙院　ニチドー日導を見よ、

イチム　一夢　リドー利導を見よ、

チチム　一無　タクサン澤山を見よ、

イチモクシ　一默子　シューオン宗園を見よ、

イチユー　一祐……二〇七五〔曹洞宗〕若狹某菴の僧なり、

一祐字は大等尾張の人なり、幼にして美濃の山寺に投して出家し、受戒の後諸名宿に歷參し、定光寺實峰良秀に參して入室し、其法を嗣きて總持寺に出世し、明德二年若狹に到り茅菴を結ひて幽棲し、應永二十二年五月二十四日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

イチヨ 一譽 シユーエツ宗悅を見よ、

イチヨ 一譽 トーヤ到也を見よ、

イチヨ 一譽 リンチヨー輪超を見よ、

イチリン 一繭(二二一五)〔曹洞宗〕阿波桂谷寺の開山なり、一繭字は傘菴、薩摩の人、覺隱永本禪師に師事して印可を受け、總持寺に出世し、永澤寺に遷り、康正元年闢雲寺に主となる、晩年阿波に桂谷寺を築きて之れに居り、某年寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

イチリン 一麟 一九八九－二〇六七〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、一麟字は天祥、號は一菴、京都の人、俗世は藤原氏、攝政九條家に生る、幼にして東山大中菴に東海源和尚に依りて侍童となり、十七歲得度進具し、南禪建仁兩寺の間を歷遊して諸名宿に參し、傍ら文筆を嗜む、大に才名あり、中立鶚和尚と共に並ひ稱せらる、師天龍寺の眞和院にありて職に任して秉拂す、後、龍山見に謁し、建仁南禪兩寺に隨從し、延文二年龍山天龍寺に遷る、時に綱維に任す、明年正月天龍寺焚け北山の歡喜寺に退く、同年夏龍山天龍寺に寂す、師後事を調整し東山の知足塔に歸斂し、南禪寺に歸へり、首座となる、永和三年薩摩の大願寺に出世し、居ること三年、筑の聖福寺に移つる、康應元年京都の萬壽寺に住し、繼きて建仁天龍を歷董す、晩年東山護國の塔を守り、應永十四年十二月二日寂す、壽七十九、臘六十七、遺偈に曰く有有有有、無無無無、裂₂破鐵絲綱₁、擊₂碎驪領珠₁と、著作佛祖歷年圖二卷、藏叟餘十卷語錄二卷、龍涎集一卷あり、(續群書類從二三九收行狀一卷、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

イチレー 一鴿(二二六四)〔曹洞宗〕遠江可睡齋の禪僧なり、一鴿字は大陽と云ひ、林英𡧃甫の法を嗣き、遠江可睡寺に主となり、寂年及ひ壽缺く、法嗣天陽一朝一人あり、(日本洞上聯燈錄)

イチレン 一蓮 一五八三〔眞言宗〕山城東寺凡僧別當なり、一蓮は東寺の凡僧別當となる、延儆を禮して醍醐山に登り、灌頂、心印を受く。後重ねて定助の法を受く、(續傳燈廣錄)

イチレンイン 一蓮院 シユーソン秀存を見よ、

イチロ 一路 オクドー屋道を見よ、

イチエー 壹叡 紀伊熊野山の苦行僧なり、壹叡熊野山中にて圓善の骸骨の苔に裹まれて口舌尙ほ敗壞せず、夜中に法華經を誦持する聲あるを聞きて感悟し、自ら誦持をなしたり。示寂の年時缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

イチエン 壹演 一四六三－一五二七〔眞言宗〕河內相應寺開山なり、壹演俗姓は大中臣氏、俗名は正棟、山城の人、淸麻呂の裔にして、父は備州刺史治知麻呂といふ、師幼にして父を喪ひ、弘仁の末嵯峨天皇に事へて內舍人となる、二兄相尋きて沒するに及ひ、深く塵世の無常を厭ひ、冠纓を脫離して藥師寺の戒明を師とし、承和二年具足戒を受け、常に金剛般若經を持す、東大寺の眞如、別に一房を構へ師を招きて之に居らしめ

授くるに密教を以てす、嘗て皇太后の病を禱りて靈應あり、帝眷を避けて棲所常なし、適々河内に居る、朝廷木工寮に命して其地に寺を建て、額を相應と賜ふ、師京都の東北鴨川の西岸に感應寺を刱め、觀世音の像を安置す、貞觀七年十月藤原有房の病を祈る、權僧正に補し、超昇寺の座主に任す、僧階を歷すして綱位に昇るは師を以て初とす、九年七月十二日小舟に乘り水に浮ひて淹然示寂す、壽六十五（或は七十五といふ）勅して慈濟と諡す、師性深山幽谷を愛す、鞍馬谷稲荷峰は其遊履の地にして、世呼ひて僧正ヶ谷、僧正ヶ峰といふ、（本朝高僧傳）

イチワ　壹和（一六一〇）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、壹和は出家して增利僧都より法相を學び、元興寺延祥等と共に一時に傑出す、天曆三年春、敕により延祥維摩會の講師となる、師大に意に滿たず、忽ち所業を捨てゝ尾張熱田に往き神祠の側に乞丐と雜居す、後奈良に皈り、同四年敕を受けて維摩會講師に補せらる、初め東院に住し、東北院に移り、盛んに化儀を敷く、寂年及壽欠く、門下の神足東北院平傳、藥師寺增祐の二人あり、（本朝高僧傳）

イチドー　逸堂　ギョージョ堯恕を見よ、

イチネン　逸然　ショーユー性融を見よ、

イツザン　佚山（二四一一）〔……〕京都某菴の僧なり、佚山字は默隱と云ひ、號は常足道人と稱す、大阪の人なり初めは森修來と云ひ、京師に住し、夏岳に書法を受け、後一家をなす、趙宧光の說文長箋によりて篆文を研究し、且つ書を善くす、寂年詳ならす、著作古篆論語十卷、小篆千字文、傳家寶孤白、各二卷、補闕千字文、三躰廣千字文、篆躰異同歌補闕、各一卷あり、（諸家人物志、近代名家著述目錄）

〔考〕佚山は寶曆頃の人なるべし、

インエン　院圓（一八九五）七條大宮佛處の佛工なり、院圓は院尙の子なり、六條法印と稱す、嘉禎の頃の人なり、（吾妻鏡）

インカク　院覺（一七九二）七條大宮佛處二代佛工なり、院覺は院助の子なり、長承元年二月廿八日法眼に叙せらる、作る所の佛像數多し、（中右記、長秋記、玉海）

インキョー　院慶（一八二六）七條大宮佛處第三代佛工なり、院慶は院覺の男なり、仁安嘉應承安年間には法橋にして安元治承に至りて法眼に叙せられしものゝ如し、（人車記、玉海）

インケー　院繼（一九〇九）七條大宮佛處七代佛工なり、院繼は院範の子なり、法印に叙せらる、建長年代の人なり、（吉黃記）

インケン　院賢（一八六七）七條大宮佛處の佛工なり、院賢は院範の子にして、法眼に叙し、後法印に轉す、承元年頃の人なり、（源平盛衰記）

インゲン　院源（一六一四 一六八八）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、院源俗姓は平氏、奥州刺史基平の子なり、幼にして比叡山に登り、員源僧正に師事し、覺慶に就て敎觀を學び、大旨を究む、寬仁四年延曆寺座主に任す、治安二年七月關白藤原道長法成寺を建て、南北の碩德を招きて、落慶供養を修し、師敕により導師となり、封五千戶を賜ふ、三年僧正に任し、法

務を兼以師唱導を善くし、源滿仲其演法を聽き、即座に祝髪し、僚屬數十人同時に剃髪す萬治二年敕を奉して仁王經を講し、輦車に乘して宮中に入るを聽さる、晩年諸職を辭し、西方院に閑居し、長元元年五月十六日寂す、壽七十五、門下の神足に實誓僧都あり、（天台座主記、元亨釋書、本朝高僧傳）

インゴー 院豪（一八七〇 一九四一）〔臨濟宗〕上野長樂寺の禪僧なり、院豪字は一翁、壯より禪宗に歸し、諸師に參訊す、寛元元年宋に渡り徑山に登りて佛鑑禪師に謁し、問答の次二偈を呈す、鑑禪師許さず、一日問ひて曰ふ、不假方便直示一句、鑑禪師曰ふ、燒却二經來與偈示一句、師曰ふ、燒却了也、鑑禪師曰ふ、作麼生受用、師、手を擧げ開合す、鑑呵呵大笑し乃ち筆を乘り書して曰ふ、豪上座有向道之姿、師辭し歸へりて上野長樂寺に住す、文應の初兀菴寧來る、師屢請益す、佛光禪師來る、師謁して偈を呈す、「師是大唐閒世人、我濃日域一夢身、奇哉今日重和會、稽首和南笑轉新、」弘安四年八月廿一日長樂寺に寂す、壽七十二、遺偈あり、「火裏汲清泉、已七十二年、蟭螟飜身去、觸破於大千」勅謚圓明佛演禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

インジツ 院實（一八四三）七條大宮佛處第五代の佛工なり、院實は院尊の子にして、壽永二年法橋に叙す、其法印に陞りし年時詳かならす、（明月記）

インシン 院審（一九〇九）七條大宮佛處の八代佛工なり、院審は院繼の子なり、法印に叙せらる、建長年代の人なり（吉黄記）

インシン 院信（一九九四）七條大宮佛處十代佛工なり、院信は院宗の子なり、法印に叙す建武年頃の人なり、（大佛師系圖）

インジン 院尋（一[illegible]〇九）七條大宮佛處の佛工なり、院尋は院慶の孫にして、法印に叙せらる、建長時代の人なり、（吉黄記）

インシユー 院宗（一九一三）七條大宮佛處の佛工なり、院宗は院審の子なり、建長五年十二月廿一日法眼に叙す、（吉黄記）

インジヨ 院助（一七六六）七條大宮佛處初代佛工なり、院助は七條佛所第二代法眼學助の二男にして、別に一派を起し、七條大宮佛處と號す、一説に院助は學助の弟子なりといふ、法眼に叙せらる、嘉承以後の人なり、（長秋記、中右記、大佛師系圖、佛工系圖）

インシヨー 院承（一九〇九）七條大宮佛處の佛工なり、院承は院慶の子にして法印に叙せらる、建長年代の人なり、（吉黄記）

インシヨー 院尙（一八四三）六條万里小路佛處の佛工なり、院尙は一に院性に作る、院朝の子なり、壽永二年法橋に叙す其刻するところ高雄山神護國祚寺金堂に安置せる十二神四天王あり、（僧綱補任、山槐記、吾妻鏡、大佛師系圖、佛工系圖）

インシヨー 院勝（二一二〇）七條大宮佛處の十二代佛工なり、院勝は院乘の子なり、寛正年頃の人なり、（大佛師系圖）

インシヨー 院性 インシヨー院尙を見よ、

インジヨー　院乘（一九九四）　七條大宮佛所十一代佛工なり、　院乘は院信の子なり、（大佛師系圖）

インソン　院尊（一七〇六）　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、　院尊本名は公因、字は聖行房と云ふ、鄕貫詳ならず、比叡山に登り、池上阿闍梨皇慶に師事して一流の事相を傳ふ、後に院尊流の開祖と稱せらる、寂年並に壽缺く、著作聖行決あり、（台密血脉譜、諸宗章疏錄）

〔考〕　院尊は永承の頃の人なり、

インソン　院尊　一七八〇 一八五八　七條大宮佛處四代佛工なり院尊は院覺の子にして、院慶の弟なり、仁平年間法橋位にあり、治承壽永には法印たりしもの丶如し、然れとも其法眼に任せしを見ず、蓋し脫漏ならんか、建久九年十月二十九日寂す、壽七十九、（人車記、山槐記、佛工系圖、大佛師系圖、自曆御記）

インチユー　院忠（一九〇九）　七條大宮佛處の佛工なり、　院忠は院賢の子なり、　法印に叙す、建長年頃の人なり、（吉黃記）

インチヨー　院朝（一八二〇）　六條万里小路佛處の初代佛工なり、　院朝は院助の二男にして、別に一派を開きて六條万里小路佛處といふ、法印に叙せらる、作る所の佛像多し、長承永曆年頃の人なり、（佛工系圖、大佛師系圖）

インハン　院範（一八七一）　七條大宮佛處六代の佛工なり、　院範は院實の子なり、　法印に叙す、　建曆年頃の人なり、（明月記）

インユ　院瑜（一九〇九）　七條大宮佛處の佛工なり、　院瑜は院忠の子なり、法眼に叙す、建長年間の人なり、（吉黃記）

インゲン　印元　一九五五 二〇三四　〔臨濟宗〕相模建長寺の僧なり、　印元號は古先、俗姓は藤原氏、薩摩の人なり、八歲にして父と共に鎌倉に往き、圓覺寺の桃溪悟に歸して侍童となり、十三歲剃髮して具足戒を受け、偏く諸師に參謁す、文保二年元に入り、二十四歲華頂峰の無見覩に謁す、其勸誘により天目山の中峰本に侍して大事を悟了し、虛谷陵、古林茂、月江印、東嶼海、了菴欲、靈石芝、笑隱訢、斷江恩、別源宗、無言宣等の諸老に謁し、又古心誠に大仰寺に依ること一年餘、泰定二年夏吳松の曹溪寺に歸寓す、時に眞淨寺の清拙澄禪師日本の請を受けて東渡するに際す、因りて師之と共に歸朝す嘉曆二年清拙澄建長寺に住するに方り、師經藏を司とる、曆應二年天龍寺の夢窓國師に請せられて甲斐の慧林寺を主とる、翌年將軍足利直義京都の等持敎寺を革めて禪刹となし、師を延きて此に住持せしめんとす、師辭して無隱晦に讓り、後相模鎌倉の淨智寺に遷る、秋印を釋きて奧州を遊化す、師の兄某普應寺を建て師を延きて開山となす、延文三年源運師鎌倉に長壽寺を剏して師を招き、翌年また圓覺寺を領し、後建長寺に移つる、長壽寺に歸老し、應安七年正月二十四日寂す壽八十、臘六十八、遺命により全身を曇芳菴に葬むる、勅して正宗廣智禪師と謚す、（續群書類從一二三六、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

インゲン　印玄（一九九四）　〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、　印玄は文妙上人と稱す、禪助國師の附法なり、著作傳法灌頂作法、傳受記、各一卷あり、

〔考〕印玄は建武の頃の人なり、

インシユン 印俊(一九九六) 〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、印俊字は躰日、修學院に住す、頁殿に繼きて學頭となる、(結綱集)

〔考〕印俊は延元の頃の人なり、

インシヨー 印紹(一五六一) 〔眞言宗〕奈良東大寺の僧なり、印紹は仁壽三年に生る、延喜二年二月八日濟高と共に傳法灌頂大法心印を受く、(傳燈廣錄)

インシヨー 印性 一七九二 一八六七 〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、印性は藤原長輔の子京都の人なり、東寺の任覺僧正に從侍まて兩部の祕法を受く、建久九年僧官を歷昇して權大僧都に任す、夏雨を禱り功によりて弟子覺敎を法眼に叙す、三年七月東寺の長者となり、尋きて法印に轉す、建永元年三月東寺の主務に補し、翌日護持僧となる、越えて三日法務を掌とり、冬十月權僧正となる、後仁和寺に眞乘院を開き、職を讓りて歸休す、承元元年七月三日寂す、壽七十六、(本朝高僧傳)

インジヨー 印定 二四三七 二五一一 〔眞宗〕越中新川郡新名村專立寺の住持なり、印定少字を元麿と呼び、鮮溪と號す、越中新川郡の人にして西本願寺末なる新名村專立寺第十六代なり父は彫淳、母は僧鎔の女なり、師は其長子なり、壯にして父を喪ひ、母に事へて至孝なり、夙に柔遠に就きて學習し、笈を負ひて京畿に遊ふ、特に論註に精通し、學徒大に集まる、文政四年秋學林の看護となる、母妙壽尼の疾篤きに遇ひ、因て馳せて歸へる、母曰く法主の命に應し、任限未た滿たすして何故に半途にして歸へる、吾與に見るを欲せさるなり、と、茲に於て永訣す、遂に擢てられて首職となる、數々學林に代講し、法主に侍講し、且つ數々命を奉して攝河紀泉に遊ひ江濃、及ひ飛彈加賀に赴く、嘉永四年正月十日寂す、壽七十五諡を賜ひて法爾院といふ、(碑文)

インゾー 印藏(一八四八)〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、印藏初め清水寺に住り、後源空上人に就きて淨土敎を受く、文治四年五月十五日瀧山寺に於て能信等と、もに念佛會を盛修す、示寂の年月日缺く、(淨土傳燈錄)

インユー 印融 二〇九五 二一七九 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、印融は武藏國久保の人なり、弱冠にして京都奈良に遊學し、高野山に駐まりて修錬し、無量光院に住す、晩年武藏鳥山の三會寺に居り、永正十六年八月中旬寂す、壽八十五、著作杣保隱遁鈔、釋論指南鈔、各十卷、大疏指南鈔九卷、釋論愚案鈔七卷、住心論廣目鈔、古筆拾遺鈔、各六卷、金胎句義鈔四卷、大疏愚案鈔、釋論安養鈔、文筆問答、光明眞言句義、二十四帖、三寶院流私鈔、(號後記)各三卷、大疏詮要鈔、金胎曼荼羅鈔、釋論名目、三寶院護摩鈔、各二卷、作法集口決、三西不同鈔、各一卷、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

インゲン 隱元 リユーキ隆琦を見よ、

インサン 隱山 ユイアン惟琰を見よ、

インシ 隱之 ドーケン道顯を見よ、

インエー 胤榮 二二八一 二三六七 〔法相宗〕大和寶藏寺の僧なり、胤榮は字覺禪房と云ふ、俗姓中御門氏なり、出家の後好みて刀槍の術を究む、柳生但馬守宗巖と共に上泉伊勢守(神陰流の祖)に刀術を學び、大膳太夫盛忠に鎗術を學び、精妙を究め

鎌鎗を用ゆ、これを寶藏院流と云ふ、門下禪榮房胤舜、奥藏院某等あり、俗弟子中村市右兵衛門其術を傳ふ、慶長十二年正月二日寂す、壽八十七なり、胤榮門下を誡めて曰く、我釋門にありて武事を業とするもの固より本意にあらず、後嗣たる者、必ず武事を學ぶべからず、武器を無くするに如かず、と、乃ち武器若干を中村市右兵衛門に與へ、一も寺中に遺さざりきと云ふ、(武藝小傳)

インケン　胤憲　二四〇六 二四六八　〔法相宗〕奈良寶藏院の僧なり、胤憲は乘織房法印と稱す、滿田權右衛門淸原胤勝の三男なり伯父胤風の法を繼て、寶藏院流鎗術の奥旨を究む、天明元年五月門弟長尾撫兵資正、長尾小兵衛資順と共に將軍の前に技を演ず、文化二年十二月二十日再び將軍家齊の覽に供す、五年七月十七日寂す、壽六十三、(事實文編)

インシュン　胤舜　二二四九 二三〇八　〔法相宗〕奈良寶藏院の僧なり、胤舜は禪榮房權律師と稱す、山城加茂の人、俗姓は滿田氏出雲守の後裔なり、幼より胤榮に師事して、鎌鎗の術を學び其嗣となり、權律師に任せらる、十九歳の時胤榮寂せしを以て、其高弟奥藏院の住持某を招き、日夜勉習して遂に其奥義に達す、後自ら發明するところ多く、裏十一條の形を作爲して、後世に傳ふ、寛永六年八月紀伊侯光貞の紹介により將軍家光の前に其技を演し、正保三年三月再び將軍の覽に供す、慶安元年正月十二日寂す、壽六十、(事實文編)

インショー　胤淸　二二九四 二三五九　〔法相宗〕奈良寶藏院の僧なり、胤淸は覺舜房法印と稱す、滿田氏の義子にして、胤舜の家を繼ぐ、幼にして後見中御門半入淸原胤張に隨ひて槍法を受け、流の奥旨を究む、延寶二年六月將軍の覽に供せんとする時、會々將軍病あり、只時服を賜うて其勞を慰す、元祿十二年(一に元祿十四年)四月四日寂す、壽六十六、(一に六十五)(事實文編)

インフー　胤風　二三四六 二三九一　〔法相宗〕奈良寶勝院の僧なり、胤風は覺山房律師と稱す、滿田權右衛門淸原胤成の男なり、幼より鎗術を好み、胤淸に從て鎗法を學び、遂に其奥旨を究め、第四世となる。享保十一年九月二十四日技を將軍吉宗の覽に供す、十六年十二月六日江戸の客居に寂す、壽四十六、深川靈巖寺中谷寛成寮に葬る、(事實文編)

インサイ　寅載　二三二〇 二三八一　〔淨土宗〕伊勢梅香寺の中興なり、寅載字は信智、法蓮社要譽と號す、磐城國相馬の人なり、妙齡にして出家の志禁じ難く、其地の興仁寺に於て得度し、專ら内外の典籍を研習し、後江戸增上寺に笈を負ふ、貫主其精勵を感じて、抽てゝ藏司となす、寶永中伊勢梅香寺に主となり、盛んに淨土敎を唱へ、神國決疑論を撰して、神佛一致の義を述べ、聲價高し、晩年棚橋蓮華寺に退隱し、享保六年三月病に罹り、九月二十七日門人を誡しめ、二十八日寂す、壽七十二、(淨土總系譜、續日本高僧傳)

インシュー　寅嘯　二三二三……　〔曹洞宗〕能登雲光寺の開山なり、寅嘯字は北巖、俗姓は原氏、甲斐の人なり、十七歳定慧に依り、薙髮得度し、出でゝ勝光寺天永、天應寺慧照に參し終りに宗關寺豁州達翁に依り、印可を蒙る、總持寺に出世し松門信松宗關の諸寺に歷遷す　晩年雲光寺を搬めて逸老す、寛文二年十二月二十五日寂す、壽欠く、法嗣舜山補澤の一人

あり、(日本洞上聯燈錄)

ウの部

ウキヨー 有慶 一六四三 一七三〇 〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、有慶は參議藤原有國の子、濟慶の弟なり、澄心に三論を受け、後濟慶に從ひて深く玄奥を硏む、長元八年南圓堂の維摩會に講座を主領し、永承六年東大寺に住す、康平六年請を受けて元興寺に移り、大僧都に任し、治暦三年再び東大寺を領す、四年の後上表して席を高弟慶信に讓り、東南院に退去し延久二年二月十八日寂す、壽八十八、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ウゴン 有嚴(一九〇三)〔戒律宗〕大和西方院の律僧なり、有嚴字は長忍別號は慈禪、西大寺の戒如に從ひて戒律を受持し、後吉野の覺如に就きて重受す、嘉禎二年覺盛睿尊等と共に羯磨法を以て大佛殿に自誓自受して比丘戒を修む、爾後東西を遊化して四衆の爲に講を開く、寛元四年秋覺如律師に從ひて宋に入り、諸師に謁して戒疏を索問し、歸朝して招提寺に居り、後西方院を建て、人事を絶して習禪危坐す、某年寂す、壽欽く、(本朝高僧傳)

ウシン 有信(一九六〇)〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、有信は其師承を詳かにせす、正安元年東寺の長者に任し、同十二月權僧正に任し、二年正に轉す、死沒の年時欽く、(東寺長者補任)

ウリン 有隣 トク德を見よ、

ウキヨー 右京 コーヱ康惠を見よ、

ウキヨー 右京 コーユー康佑を見よ、

ウキヨー 右京 ジョークワン淨觀を見よ、

ウサン 右山 ボクイン墨隱を見よ、

ウリユー 右龍 ダイケン大賢を見よ、

ウザン 羽山 シユーケー周奎を見よ、

ウスイ 烏水 ホーウン寶雲を見よ、

ウダナ 優陀那 ニチキ日輝を見よ、

ウツタン 欝潭 シンスイ針水を見よ、

ウマヤド 廐戸 ショートク聖德を見よ、

ウンアン 雲菴 トーリユー透龍を見よ、

ウンエー 雲英 二二三四 〔曹洞宗〕越前寶圓寺の禪僧なり、雲英字は傑外、俗姓は鈴木氏、能登輪島の人なり、鄕里蓮江寺に投じて剃髮し、芸を禮して師となし、具足戒を受け、歷遊十餘年、參する老宿凡そ十餘員、最後に長齡寺關室徐天に見え、衣偈を付せられ、總持寺に出世し、桃雲寺に遷る、慶安三年小松中納言菅原利常の請を受けて寶圓寺に住す、延寶二年二月二十七日寂す、世壽欠く、法嗣月嘯虎白の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

ウンエー 雲英 シユキヨー首慶を見よ、

ウンオク 雲屋 エリン慧輪を見よ、

ウンキヨー 雲慶(ケイ) ウンキヨー運慶(ケイ)に同し、

ウンギヨー 雲堯 二二三四 二三〇八 〔曹洞宗〕能登總持寺の彈僧なり、雲堯字は泰山と云ふ、越前守朝倉義景の第三子なり、八歳にして同國寶圓寺に投して象山和尚に師事し、童侍とな

る、受具の後遠江國の大洞寺光國に參見し、次に越前に瑞龍寺廣山加賀の寶圓寺量山に見ゆ、偈を述て量山に呈す、山擢んで第一座に居らしむ、初め能登の長齡寺に住し、總持寺に升り、芳春寺を兼攝す、後遷て挑雲寺に居る、太守歸崇し、法會を設る毎に師必ず座に升りて法要を擧す、元和元年德川家康兵を統へて伏見に駐る、諸宗の徒を徴して城中に入れ顧問とす、師も亦與る、家康將に永平寺を以て洞門の本寺と爲さんとす、師書を家康に上て、其先蹤に戻るを謂ふ、家康遂に師の言を入れ、永平總持を陞して兩本寺と爲す總持寺の本寺と爲る者は師の力なり、後太守の招を受けて寶圓寺に遷る未た幾ならずして永澤寺に轉し、總持寺を董す、寛永八年一閑院に退隱す、慶安元年正月廿七日寂す、享年七十五歲、（日本洞上聯燈錄）

ウングワ　雲臥　二三〇二　二三七〇　〔淨土宗〕增上寺第三十四代なり、雲臥は眞蓮社證譽と號し、獨淸と稱す、武藏江戸番町の人、俗姓長田氏なり、麴町栖岸院に投し、玉譽恢龍上人に師事し後增上寺の學寮に入り、學業を勵む、元祿元年東漸寺に住し、同十二年弘經寺に轉し十三年七月十日增上寺に上り、十五年九月六日大僧正に任せらる、將軍綱吉の皈依深く、常に城中に請して法要を問はる、寶永元年十一月職を辭して麻布に閑捿し、同七年閏八月十八日寂す、壽六十九、臘五十七、雲臥內外の學に通し、且つ詩文に長す、その學寮に在るころ、偶机に凴りて午睡せるに、江漢禪人來りて雲臥晝不起と孟浩然の句を擧く師聲に應し江漢故人稀と杜子美の句を以て答へたり此事一時傳へて佳話となしたりといふ、（三緣山志）

ウンゲ　雲華　ダイガン大含を見よ、

ウンゲ　雲解　リユーオン龍溫を見よ、

ウンゲ　雲外　シヨートン性激を見よ、

ウンゲイン　雲華院　ダイガン大含を見よ、

ウンゲイン　雲華院　シユーガン秀岸を見よ、

ウンケー　雲冏　……二二八六　〔淨土宗〕筑後良淸寺の開山なり、雲冏は圓蓮社應譽と號す、俗姓は蒲池氏其生國詳かならず、觀智國師に師事して法を稟け、筑後柳川に良淸寺を剏む、寛永三年七月十二日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ウンケー　雲溪　……二五四五　〔眞宗〕豐前田川郡川崎光蓮寺の住持なり、　雲溪は龍華院と號し、蓮井氏なり、嘉永六年より高倉學寮に華嚴綱目起信論義記孔目章を講し、慶應元年五月二十九日擬講となり、明治六年嗣講となり、翌年より最要鈔唯識三十頌三經往生文類を講し、尋きて二等學師となりて往生論註、入出二門偈、玄義分、安樂集を講し、十八年八月寂す、（高倉學寮講者列傳稿本）

ウンケー　雲溪　……二三四三　〔曹洞宗〕肥後法巖寺の禪僧なり、雲溪字は桃水、一に洞水に作る、肥後柳川の人なり、容貌愚の如くにして、內甚た聰敏なり、流長院圍巖鐵に師事し、賢巖愚白等に交る、初め島原向東寺に住し、後肥後河尻に草菴を營み幽居すると八年なり、法巖寺に住するに至りて四衆四來し、敎を請ふ、師其煩を厭ひ、一朝潛に遁れ去り、人皆往く所を知らす、弟子密禪伊勢の驛路を過き、一禿奴の茆店に草鞋を造る者を熟視して師なるを知り、大に驚く、師偈を與へ、世上の是非に關せさることを示す、一士人の怪みて問

ふに答へて曰ふ、今時の僧口には身を捨つべきことを說けとも、其實を知らす、我は其實を試むるのみと、後京師に至り、時に傭奴となりて薪を荷ひ、時に丐見となりて食を乞ふ、遂に大津の驛に留まり、草鞋を造るにあたりて、熊本の寺僧侯の召により江戸に下る儀衞極めて盛なり、大津に次し、馬丁の草鞋を買ふにあたり、草鞋を賣る老爺を熟視して桃水和尚なるを知り、僧大に驚く、師敎示するところあり、後京師の角倉氏供養せんとするも應せす、乃ち師に告けて曰ふ、我邸人多く日々殘餘の飯空しく腐爛するに實に惜むへし、師殘餘の飯を以て酢を釀して賣り給はゝ、老躰を勞して行乞したまふに勝らん、と、師其言を眞とし、酢を釀して賣る、鷹ヶ峯に住して酢屋道全とも、通念とも自稱せり、天和三年九月十九日寂す、遺偈に曰ふ、「七十餘年快哉、屎臭骨頭堪作二何用一、咦眞飯處作麼生、鷹峯月白風清」と、平生の詩歌あり、「如是生涯如是寛、弊衣破椀也閑々、飢餐渴飲只吾識、世上是非總不レ干」「行脚昔年闘二利名一、相依來レ盡老夫情、東山幸卜二閑居地一、來伴浴陽風月清」、「せまけれと宿をかすそや阿彌陀との後生たのむとおほしめすなよ」（桃水和尚傳贊、近世畸人傳、日本洞上聯燈錄）

ウンケー　雲溪　シサン支山を見よ、

ウンケーイン　雲馨院　カシユー荷洲を見よ、

ウンコ　雲居　キヨー希膺を見よ、

ウンコー　雲岡　エーク榮玖を見よ、

ウンコー　雲岡　シユントク舜德を見よ、

ウンコーケン　雲興軒　ゲンシヨー玄昌を見よ、

ウンコク　雲谷　ゲンシヨー玄祥を見よ、

ウンコクケン　雲谷軒　トーヨー等楊を見よ、

ウンサン　雲山　シユーガ宗峩を見よ、

ウンサン　雲山　グハク愚白を見よ、

ウンシツ　雲室　リヨーキ了軌を見よ、

ウンジユイン　雲樹院　シンコー神興を見よ、

ウンシユー　雲集　二四七六 二五五九　〔眞宗〕筑後三瀦榮久寺の住持なり、雲集は筑後の人、調氏なり、明治元年擬講となり、二十一年嗣講となりて易行品大乘起信論を講し、二十三年玄義分を講し、三十年七月講師となり、三十二年八月十七日寂す、壽八十四、（高倉學寮講者列傳稿本）

ウンシユー　雲岫　シユーリユー宗龍を見よ、

ウンシユク　雲叔　シユーキヨー宗慶を見よ、

ウンジヨ　雲恕　……二三二七　〔淨土宗〕日向原濟寺の開山なり、雲恕は敎譽と號し、日向佐土原の人なり、正譽意天上人に法を嗣ぎ、州の兒湯郡原濟寺開山となる、寛文七年九月二十四日寂す、（淨土總系譜）

ウンジヨー　雲靜　（一三一四）〔戒律宗〕祖鑑眞和上の弟子なり、雲靜は唐の人俗姓詳ならず、出家して鑑眞に師事し泉州の超功寺に居す、戒律を弘持して一方に師範たり、眞和尚に從ひて來朝す、雲靜彫刻に工にして自ら盧遮那の丈六像を彫刻して招提寺に安置す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ウンジヨー　雲靜　紀伊熊野山の苦行僧なり、雲靜常

に法華經を誦持す、志摩に至り、海岸の勝景を愛し、石窟に捿居す、一夜醒風來り毒霧身に逼り、巨蟒出で呑まんとす、師一意に誦持し、聲を斷たず、巨蟒聞きて感悟するものゝごとくにして去り、師は難を免るを得たりと云ふ、示寂の年時缺く（本朝高僧傳）

ウンセキドー　雲石堂　ジャクホン寂本を見よ、

ウンセツ　雲說 二三六六／二四三三 〔淨土宗〕長門玅慶寺十七代なり、雲說字は貞阿、常蓮社連譽と稱し、別に愚元と號す、俗姓は藤原氏、內藤安兵衞尹敎の子、長門阿武郡明木村の人なり、幼にして母沒し、世の無常を知りて道心萌し、同國萩の蓮池院常譽雲岡に就きて侍童となり、十一歲剃髮染衣し、學問に志す、十八歲江戶增上寺に往き、二十歲同寺白隨大僧正より五重相傳を授かり、翌年春上總小糸作島田村に往き眞言宗の海泉か師に參し、顯密の敎を習ふこと三ヶ月、阿字本不生の奧旨を究め、中島の阿彌陀堂に留まり、修行怠りなく、一字三禮して淨土玅典を一石に一字つゝ書寫し、十ヶ月にて成就し、石塔を建立し其供養として、坐像の地藏尊を彫造し、其堂に安置す、四年の後去りて享保十七年六月鎌倉に往き、光明寺善譽上人に謁し、受業ノ師と仰ぐ、同年冬增上寺學譽大僧正の下に宗脈祕璽を承け、廿七歲の春鄕里萩龍昌院に雲岡を省し、淨行をつとむ、享保廿年春厚狭郡無量山玅慶寺の請に應して之に住し、四衆歸依深し、七日不臥專修百万遍を修すること前後幾回なるを知らず、日課念佛二萬餘なり、常に紺紙金泥にて名號の右に善導大師の或得三萬六萬十萬者皆是上品上生人也と書き人々に與へ時に源空上人の一枚起請文をも書き與ふ、住二十一年、享保二十年十二月十二日席を上足の弟子に付し、隱退するも尙ほ衆請により法を說く、安永二年二月二十八日寂す、壽六十八、（雲說和尙別行念佛利益傳）

ウンセン　雲泉　エンゲ圓解を見よ、

ウンセンサイ　雲泉齋　シューギョー集堯を見よ、

ウンソー　雲聰（一二六二）（……）高麗の歸化僧なり、雲聰は高麗の人なり、推古天皇十年十月僧隆と共に來り歸化す、事蹟詳ならず、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ウンソー　雲窓　ソキョー祖慶を見よ、

ウンタク　雲澤　ショーコー紹興を見よ、

ウンチョー　雲潮 二一九九／二二五三 〔淨土宗〕下野大巖寺の二代なり、　雲潮字は虎角と云ひ、號は隱蓮社安譽と云ふ、天文元年甲斐府中に生る、俗姓飯田氏世々武田氏の家臣なり、父某亂を避けて武藏に赴き、品川に寓居し、後一族の緣により上總國中島村に遷る、雲潮は其三男なり、幼にして出家の志あり、天文の初道譽貞把上總の生實に來り講席を開く、父兄の許を得て貞把上人を問ひ、其下に師事す、時に十三歲なり、旣にして得度して學業を勵む、後貞把に從つて增上寺に留り、貞把の命により大巖寺建築の事に當て功あり、永祿六年正月廿五歲にして貞把上人より宗脈を受け、翌七年八月菩薩戒を受く、師淨土敎を傳ふる傍ら、禪に意を傾けて大に得るなり人皆稱して淨土敎に通して禪に達するは虎の角を戴ける如くなりと云ふ、これより字して虎角と云ふ、天正の初め、大巖寺に住し、大に宗風を揚ぐ、同八年四月二藏義の序を作り、且つ四綱領六祖勸文頌を作り學徒に與ふ、文祿二年二月四日念

佛して大嚴寺に寂す、壽五十五、臘四十三、著作淨土四義私記一卷あり、(別行傳、鎭流祖傳、淨土傳燈總系譜)

ウンドー 雲堂 二三五二……〔眞言宗〕紀伊高野山文殊院第五代なり、雲堂初めの名は立英、字は乘音、號は寶月、一號は天岳と云ふ、和泉の人なり、出家して高野山に登り、行人方となり、文殊院に住す、寛文六年學侶行人の紛爭に際し、九月二日奥州に流さる、貞享二年十月四日赦されて皈り、後京師に入り、東山鳳皇寺に閑居し、詩歌を樂しむ、元祿五年四月九日東山に寂す、壽欠く、著作雲堂集二十八卷あり、(高野春秋、南紀風雅集、雲堂集)

ウンドー 雲幢 二四一九―二四八四〔眞宗〕安藝原村敎順寺の住持なり、雲幢は幻華と號す、伊豫の人、父を慈靈といふ、善く唱導を巧にし、廣島專立の女を娶りて師を生む、九歳專立に依り、二十歳の比報專寺の慧雲に依りて眞宗の宗義を聞き、傍ら諸家の學に涉獵す。初め加茂郡原村敎順寺に住し後去りて遊方し、享和三年冬佐伯郡草津驛に住し、翌年夏廣島竹街に移つる、信徒吾作三兵衞其宅の東に林園を開き、師をして居らしむ、師乃ち菴を幻華と號す、文化五年十二月なり、同十年より文政四年に至る間本山なる西本願寺の學林に臨み、法主に侍し、聖教を講說すること各三度なり、六年七月明年の講を命せられ、八月廣島善正寺に觀經を講す、病あり事に堪へす、幻華菴に歸へり、七年正月適々廣島永照寺に寓して寂す、壽六十六、古江村海濱に茶毘す、秋七月法主諡して深信院といふ、著作大經講錄、六字釋講錄、往生要集科、眞宗唯信訣、五願六法大意各一卷、二門偈講錄三卷あり、(碑文、本願寺派學事史)

ウンドー 雲洞 リョーテツ亮徹を見よ、

ウンノー 雲農 ジョーゴン淨嚴を見よ、

ウンパ 雲把(……)〔淨土宗〕越前大原山の僧なり、雲把は妙蓮社善譽と稱す、越前守忠直卿の請によりて敦賀の大原山に住し、齋邑一百石を給せらる、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

ウンホ 雲甫 リョーイン良因を見よ、

ウンポー 雲峯(……)〔曹洞宗〕某寺の僧なり、雲峯字は大覺、良高禪師の法孫にして悟有の法嗣となる書を以て聞ゆ、(鑒定便覽)

ウンモン 雲門 ソクドー即道を見よ、

ウンヨ 雲譽 エンヤ圓也を見よ、

ウンリユー 雲龍 二二七六……〔淨土宗〕上野光源寺の開山なり、雲龍は念蓮社觀譽と號す、俗姓は五十嵐氏越後若松の人なり、呑龍に師事して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、州の甘樂郡二日村に光源寺を剏めて開山となり、元和二年三月十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ウンリユーイン 雲龍院 キョーカイ經海を見よ、

ウンレー 雲欞 タイゼン泰禪を見よ、

ウンガ 運賀(二八七八)七條佛所十一代佛工なり、運賀は運慶の五男なり、法眼に叙せらる、(大佛師系圖)

ウンカク 運覺 一八〇三……〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり、運覺は醍醐寺に留まりて聖賢に從ひ、灌頂法を禀け、諸の密藏を學ひ、三論を討習す、誓願を發して自ら一切經を寫し、

三十年間に二千卷を書す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ウンカク　運覺（……）　七條佛所佛工なり、　運覺は定覺の男なり、本名を圓慶といふ、高山寺の持國天は師の作なり、（佛工系圖、高山寺緣起）

ウンキ　運奇（……）　〔曹洞宗〕越中長慶寺の開山なり、運奇字は絕巖、生國俗姓詳かならす、初め諸老宿の門に遊ひて曹洞の宗趣を明にし、後加賀の傳燈寺に到りて恭翁良禪師に參して衣法を傳へらる、越中の檀越師の道化を慕ひて護國山長慶寺を搠め、師を開山とす、寂年缺く、（本朝高僧傳）

ウンキヨー　運慶（一八七八）　七條佛所六代佛工なり、運慶一に雲慶に作る、備中と號す、康慶の子なり、法橋法眼を經て法印となる、故に世に備中法印と云ふ、東大寺の大佛職となる、長寬二年父康慶と共に蓮華王院の佛像を造る、文治五年奧州の藤原基衡毛越寺を搠立するにあたり、其請により、一丈六尺の藥師佛、幷に十二神將の像を造る、始めて玉眼を箝入す、基衡舟三艘に金帛を滿載して、其勞に酬ゆ、鳥羽法皇其像の靈妙なるを一見したまひ、京師に留めんとしたまふ、基衡大に苦悶して閉籠祈禱し、且つ九條關白に依りて切情を陳し、遂に勅許あり、奧州に下す、建久八年父康慶と共に東大寺四天王像を造り、運慶其東方天像を彫刻す、同年東寺の大日如來を修理し、且つ子湛慶と共に南大門の二王を造る、東方金剛力士、運慶彫刻し、西方湛慶彫刻す、建仁三年七月東大寺南大門二王を造る、建保六年十二月鎌倉將軍の命により、大倉新堂の藥師佛を造る、其餘高山寺金堂の一丈六尺の盧舍那佛像、幷に羅漢堂の賓頭盧像、地藏十輪院の本尊等其數甚多し、沒年確傳なし、一說に安元二年六月廿九日と云ふも、未た詳ならす、（東大寺造立供養記、東大寺別當次第、東寶記、吾妻鏡、大佛師系圖）

ウンジヨ　運助（一八七八）　七條佛所二代佛工なり、　運助は運慶の六男にして、法印に叙せらる、（大佛師系圖）

ウンシヨー　運敞（二二七四／二三五三）　〔眞言宗〕山城智積院第七代なり、　運敞字は元春、號は泊如、俗姓藤原氏、幼にして母に隨ひ、京都に往き、東山大佛殿に詣し、出家の志あり、已にして父卒す、十三歲神泉園快我に師事し、尋て安樂壽院賴運に事ふ、十六歲得度し、四度瑜珈を受く、翌年智積院第三代日譽の講席に列し、顯密の學を究む、幾何もなく賴運寂するにのぞみ、佛性戒、及灌頂を授けらる、尋て智積院第四代元壽に師事し、一宗の祕奧を受け、醍醐山寬濟大僧正に事へて秘密義軌を傳ふ、慶安二年尾張長久寺宥雄

運敞僧正

の請に應し、同寺の法席を繼ぎ、尾張侯に優遇せらる、承應二年智積院第五代隆長の命により同院に皈り第一座となり、性靈集を講ず、聽者八千人に及ぶと云ふ。明曆元年奈良に遊び、實慶等を訪うて三論法相華嚴等を究め、且諸大寺大衆に請はれ、三敎指皈を講す。翌年比叡山に登り、等譽僧正を訪うて天台の敎觀を學ぶ、同年十月江戶圓福寺に住す、寬文元年智積院第六代宥貞退院するにあたり、幕府の命を拜し、同院第七代となる、五年將軍家綱に謁し、智積院食邑を增給せらる、六年八月敕を拜し上皐の宮中に三密具缺の敎義を講論して優感を蒙る、七年密嚴堂等を新築し延寶の頃智積院に大藏經を備へ、天和二年瑞應山に退隱し、元祿六年八月疾重く、九月五日必要一則を書して門人に與へ、同月十日寂す、壽八十、臘六十七、智積院の學風は師によりて大に興りたれば、其學德を崇びて近代師と稱せり、師自像の題詩あり、曰ふ、罪惡之物、今將ニ滅除一、何用醜狀、留ニ上畫圖一、著作大疏第三重啓蒙五十九卷、釋論第三重啓蒙四十一卷、大疏談義二卷、釋論談義二卷、大疏第二重一卷、釋論第二重一卷、付法傳纂解五卷、寶鑰纂解七卷、性靈集鈔十七卷、性靈集便蒙十卷、三敎指皈刪補七卷、結網集三卷、開奩篇二卷、全辨僞一卷、切心義章三卷、谷響集十卷、瑞林集十五卷、光嚴場記一卷、灌頂承應記一卷、本不生義一卷等あり、（泊如僧正傳、泊如僧正年譜、續日本高僧傳、名家略傳）

ウンシヨー　運淸　リヨーリン良林を見よ、

ウンテ　運智　ニチタツ日達を見よ、

ウンヨ　運譽　二二九二〔淨土宗〕肥前安祥寺の開山なり、

運譽は載蓮社と號し、肥前の人なり、潮龍に師事して法を禀け、州の高來郡柴田村に安祥寺を剏めて開山となる、寬永九年二月五日寂す壽缺く、（淨土總系譜）

ウンヨ　運譽　ゼンテー善貞を見よ、

ウンヨ　運譽　ロネン路念を見よ、

ウンリヨー　運亮　二三三八〔淨土宗〕日向法隆寺の開山なり、運亮は順蓮社信譽と號す、俗姓は井上氏日向佐土原の人なり、幼にして郡の高月院大譽廓道の室に入りて剃髮し、後遵譽貴屋上人に師事して遂に其法を嗣ぐ、州に法隆寺隆恩寺曼陀羅寺等を開き、寬文八年八月十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ウンリヨー　運良　一九二七　二〇〇一〔臨濟宗〕加賀傳燈寺の開山なり、

運良字は恭翁、俗姓生國未詳、一說に出羽の人と云ふ、同國の玉泉寺了然明禪師に師事し、十九歲登壇受戒、後洞谷に到り、瑩山紹瑾に謁し、曹洞一派の深旨を傳ふ、尋て鷲峰に到り心地覺心に謁す、國師趙州狗子の話を示す、師參究して契悟あり、南都東大寺に到り、戒壇院凝然の華嚴經の講席に列し、六相の義を問難す、凝然は師に就きて禪旨を受け、意氣相投ず、師萬壽寺南浦明を問ひて益參究し、紹明禪師に隨ひて鎌倉の壽福寺建長寺に歷住す、加賀の大乘寺席を缺く、瑩山紹瑾師を召す、寺門の禪風師によりて盛興す、後白山下の眞光寺に寓す、檀越某歸依して瑞應山傳燈寺を構ふ、師開山となる、隣民光山興禪寺を構ふ、師同じく開山となる、尋て越中に遊び、放生津に一菴を結びて居る、與化寺と號す、兜率寺を開き、同しく開山となる、曆應四年八月微恙を示す、

十二日剃髪更衣して遺偈を書し寂す、壽七十五、臘五十六、弟子大光塔を起てゝ、骨を収む、後光嚴天皇勅諡佛慧禪師と賜ひ、後小松天皇、佛林慧日禪師と加賜したまふ、著作正法眼藏語、正傳血脈相承訣、見性鈔、並に語錄あり、繪畫を善くし其大悲像の圖加賀大野尼寺に藏したりと云ふ、(塔錄、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ウンケン　蘊謙　カイエン戒琬を見よ、

エの部

エアン　慧安　一八八五／一九三七　〔臨濟宗〕京師正傳寺の禪僧なり、慧安號は東巖、俗姓不詳、一說常磐宮播摩に遷され師を生みたりと、師播摩の人なり、書寫山に登りて天台を學び、日夜勤勉橫臥せさるもの十餘年なり、三十八歲にして山城石清水八幡宮に到り、所藏の大智度論一百卷を閲し、正嘉元年入宋の志を持して太宰府に到り、悟空念禪師に遇ひ、宗乘を問難し、始めて義解の用なきを知り、天台宗を出でゝ禪宗に歸す、參究功あり、心印を傳ふ、尋て東歸して洛東に福田菴を營み居り、弘長二年建長寺に到り、兀菴寧に謁す、寧、趙州狗子話を擧す、安、機辨滯るなし、兀菴宋に歸るに際し、慧安送りて鳥羽に至り、法衣及び頂相を付せらる、三年悟空念禪師を福田菴に迎へ謹事す、文永五年靜成法師と云ふものあり、安を請じ、今出川に正傳寺を開く、雲衲四來す、天台の學徒屢妨害す、安乃ち衣を拂ひて東行し、壽福寺に投し、大休念禪師を訪問す、奥州大守平泰盛聖海寺を創して請す、建治三年夢病に罹り十一月三日に寂す、壽五十三、後應永二十年三月二十三日勅諡宏覺禪師を賜ふ、(續群書類從二二六、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕世傳に慧安を兀庵寧の法嗣となすものあれども取らず其法系次の如し、

徑山無準範―道祐―悟空念―東巖安、

エイン　慧印　二四二四／……　〔曹洞宗〕武藏養光寺の開山なり、慧印字は指月と云ふ、鄉貫詳ならず、幼にして出家し、加賀大乘寺智燈に師事す、智燈は卍山の法嗣なり、後成田龍淵寺春翁の法を嗣く、武藏押切の西光寺、小曾根の西光院、山川崎の養光寺を開く、故に人稱して三光老人と云ふ、平生著作を事とし、其書皆不能語と題す、明和元年十二月六日養光寺に寂す、壽七十餘なり、著作數十部あり、

エウン　慧雲　(一三〇五)〔……〕入唐學問僧なり、慧雲推古の末、唐に渡り、舒明の十一年九月惠隱と共に歸朝す、孝德天皇の朝に十師の一に列す、示寂の年時缺く、(日本書紀、本朝高僧傳)

〔考〕本朝高僧傳に、嘉祥寺吉藏に學ひたりとあれとも誤なり、

エウン　慧雲　(一三一四)〔戒律宗〕祖鑑眞和尚の弟子なり、慧雲號は空盛、俗姓缺く、唐に生る、出家して鑑眞に師事し、高才偉器聲譽海岱に聞ゆ、眞和尚に附隨して來朝し、東大寺に於て具足戒を受け、後戒壇院第五代となる、讃岐の屋島寺に遷り第一代となり、講席を張る、空海始め慧雲に就きて戒律を習ひたりといふ、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳、律苑僧

寶傳）

エウン　慧雲　一八八七／一九六一〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、慧雲字は山叟丹治氏なり、母は平氏、武藏飯澤の人、十七歲出家し、十九歲京に上り、聖一國師に師事して法嗣となる、正嘉二年宋に航し、抗州に到り、南屏山斷橋倫に謁し問ふ、如何是祖師西來意、倫禪師壁間の墨梅を指し示す、師偈を呈す一段工夫歷ニ雪霜ヲ、嶺南消息露ニ堂堂ヲ、花開月上雨明白、不ㇾ待ニ春風ニ滿院香、倫禪師笑ひて曰ふ和閣梨曾テ得ニ梅意ヲ、時に禪師の下に新參せるもの三百人あり、禪師は慧雲の參堂を許せり、方菴折、淸虛心に謁し、後天台山の石橋に登りて茶を羅漢に供す、甌中出山の二字を現す、文永五年（宋咸淳四年）東歸し、聖一國師に省覲す、筑前の承天寺に出世し、尋て太宰府の崇福寺に遷る、奧州の某に請せられて勝滿寺の開山となり、且つ東昌寺の開山となる、奧州に留ること十年、東北の緇素翕然風に靡く、永仁三年東福寺席を虛くす、承相忠敎の請により上堂す、龜山上皇幸駕して法を聽きたまふ、北條貞時亦歸仰し、三莊を割きて食邑に供す、六年の冬、筑前の崇福寺に轉し、幾くもなく東福寺に歸住す、正安三年七月九日丈室に寂す、壽七十五、法臘三十三、遺偈あり忘ニ去來機ヲ、無ㇾ依獨歸、照ㇾ天夜月、滿ㇾ地光輝、正和三年勅諡佛智禪師と賜ふ、（續群書類從二二八、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エウン　慧雲　二三三三〔黃檗宗〕肥前長崎興福寺の禪僧なり、慧雲は明の蘇州の人なり、延寶五年心越興儔禪師と共に西來し、長崎興福寺に留り、關を閉ちて禪を修す、後聘に應し、伊豫松山に遊化す、寂年詳ならす、

エウン　慧雲　二三二七三／二三五一〔眞宗〕京都本誓寺の住持なり、慧雲は寶性院と號す、慧隆の男なり、眞宗高田派なる京都の本誓寺に住し、學與高し、元祿四年五月十五日寂す、壽七十九、著作敎行信證鈔十五卷、正信偈稱揚鈔等あり、（眞海湛海氏返信）

エウン　慧雲　二三九〇／二四四二〔眞宗〕安藝廣島報專坊の住持なり、慧雲は初め名を寶雲といひ、字は子潤、號は甘露別に東岳と云ふ、廣島專照寺の次子なり、報專坊に入りて嗣となる、嘗て陳善院に師事し、且つ文辭を修す、業稍〻熟するに及ひ、講說著述を以て任とす、天明二年十二月廿二日寂す、壽五十三、同八年五月八日宗主諡して深諦院といふ、著作十一禮墨江錄、本典義例各一卷、止觀大意、甘露遺稿、敎觀綱宗翼、八敎大意、正信偈湖南錄拾遺、正信偈吳江錄、五會讃蓮花錄、讃阿彌陀偈傍贊、阿彌陀經普行記、各二卷、阿彌陀經甲午記、論註山縣錄、法事讃刊定記、二卷鈔光謙記、淨土和讃光壽訣、正像末讃靑藍記、各三卷、三論玄義記、高僧和讃興宗記、玄義分喚遺錄、五會讃眞宗記、各四卷、安樂集訪導篓、選擇集通律錄、各五卷、觀經微笑記、論註服宗記、各六卷、大經安永錄十卷あり、（本願寺通紀、淸流紀談、本願寺派學事史）

エウン　惠雲　ネンカイ念海を見よ、

エウン　慧雲　ダイジョー大乘を見よ、

エウン　慧雲　リョーカイ寥海を見よ、

エウン　慧雲　ニチエン日圓を見よ、

エウン　惠運　一四五八／一五二九〔眞言宗〕山城安祥寺の開山なり、慧運は京都の人、東大寺泰基中繼の二師に就て戒を受け、法

相を學ぶ、東寺の實慧に灌頂を受く、承和九年唐商李氏の船に乘して八月溫州樂城縣に着し、青龍寺義眞和尙を禮して灌頂壇に入り、兩部の密印を受け、留唐六年にして、承和十四年歸朝し、齎すところの密經軌樣等二百餘卷を上表進呈す、仁明天皇安祥寺を建て、師詔によりこれに主となり、入唐中會昌の淘汰に逢ひ得るところの青龍寺の鎭守の神體を安置す、貞觀六年少僧都に任ず、師諸寺の度者受戒の廢を憂へ、得度戒を上奏して大にこれを改む、十一年東大寺の寺務に補し、此年九月二十三日寂す、壽七十二、臘五十二、著作菩提心戒儀一卷、金剛界要記一卷、進官請求錄一卷、護摩鈔、資財帳若干卷あり、後世入唐八家の一人と稱せらる、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

エウン　惠運　シユーゼン秀善を見よ、

エエン　惠圓(二〇六五)京都の佛工なり、　惠圓は京都の人なり、應永の頃名工を以て知らる、同十二年成恩寺關白一條左大臣經嗣の命を受け公家の白檀木の本尊を修覆す、

エオー　慧應　二〇八四—二一六四〔曹洞宗〕越前永平寺の禪僧なり、慧應字は曇英、京都の人、藤原氏の族、轉法輪の裔、父周防に謫居し其處に師を生む、時に應永卅一年十二月二十三日なり、翌年父に從ひて遠江に遷り、六歲に金剛寺に投して童子となり、十三歲薙髮し、圓覺寺麟天瑞に侍し、尋きて京都の相國寺に往きて文墨を學ぶこと數年、去りて行脚し、慈眼寺天叟に參す、大寧寺竹居、龍文寺器之に造詣し、後に楞嚴寺月江に參し、執侍十餘年、一州正伊雙林寺に住するに方り、往きて衣法を受く、一州の最乘寺に移るに及ひ、師亦之に從ひ第一座となる、長亭元年一州の遺命を受け、雙林寺に主となり、最乘寺玉泉寺に歷遷す、會々永平寺荒敗す、諸山議して師を之に補す、勅旨により紫衣を賜ひ、號を寶光智證禪師と賜ふ、明應三年武藏の普門寺に住し、又其敗を中興す、同六年信濃の刺史平能景越後春日山に林泉寺を捌め師を請す、文龜元年伊豫の太守長野某上野室田に長年寺を創し師を開山とす、永正元年十月十四日寂す、壽八十一、塔を長年寺に建つ、法嗣直應裔旦、天室光育の二人あり、(洞上聯燈錄)

エオン　惠隱(一三一二)入唐學問僧なり、　惠隱推古天皇十六年九月、遣唐使小野妹子が再度の出發に隨ひ、新漢人日文南淵、漢人請安、漢人廣齊の諸僧、並に學生四人相共に同行す、惠隱は留學三十一年に亘り、舒明天皇十一年九月に歸朝す、同十二年五月大齊會の時、勅を拜して宮中に無量壽經を講說す、是れ所謂宮講の始めなり、後白雉三年五月再び宮中に召され同經を講說す、惠資論議者となり、聽衆の僧一千人なり、示寂の年時缺ぐ、(日本書紀)

エオン　慧恩　二四二四……〔戒律宗〕大和法隆寺の僧なり、慧恩字は法澤、其里族詳かならず、早年出家し、眞言宗に歸し、野澤の法流を續く、廿九歲具足戒を受け、堅持精修す、後三井の義瑞律師に就きて天台を學ひ、湛慧鳳潭の二師に就きて華嚴を學ふ、次に丹波法常寺大梅禪師に參謁し禪を傳ふ、法隆寺北室院に住して禪律双錬を以て聞ゆ、寬延三年四月尾張圓成寺に住し、行事鈔を講す、因て關通和尙に謁し淨土敎の法要を聞き、信解徹底す、聖道難行の時機に應せさるを領し、遂に餘業を拋ち念佛の一行を勵む、明和元年七月微恙に

羅り、廿二日弟子を誡め、八月十一日合掌念佛して寂す、偈あり、昨宵織月似挑燈、本無一物何所徵、玲瓏空色唯誘引、白髮重頭這病僧、と、（續日本高僧傳）

エオン 惠音 二四二〇—二五〇二 〔眞宗〕越後正念寺の住持なり、惠音は越後中頸城郡姫川原村正念寺覺音の第五子なり、初の字を響流といひ、後興隆と改む、初め惠音と諱せしか、後僧音と更む、寶曆九年二月に生る、安永二年二月剃度し、爾來北天龐滿に從ひて宗乘餘乘を研究し、又儒典を高田藩の村松氏及び水野玄哲に習へり、天明四年の安居に、智洞の五敎章講義の筵に陪して、華嚴の敎義、及び大乘義章等を研究し、翌年悉曇十八章を肥後の臻道に受け、其翌年根來山の法住に隨ひて住心品疏、及び唯識述記の講義を聞く、寬政四年十月藏經購讀の志願を發して募緣に着手し、翌年九月始めて其幾分を購求し、資金の集まるに從ひて、漸次完備せしむるの法を執れり、同八年安居に學林にて、八敎大意を副講す、九年四月大藏全備するを以て、其供養會を修す、十年講主の命により、眞宗金剛錍破文を製す、享和二年安居し、文類聚抄を代講す、文政四年十一月司敎に擢てられ、尋さて勸學職に陞る、天保六年安居し、學林に於て四十八願文を講し、五月七日より歸三寶偈の侍講を命せらる、同十三年六月病を發し、七月三日寂す、壽八十三、十二月に至り法主諡を下して等心院といふ、著作三經往生文類善光錄、唯信鈔文意錄、尊號眞像銘文錄、步船鈔錄、歸三寶偈崑崙記、御消息集錄、一多證文錄、淨土見聞集錄、四敎儀略錄、勸章一帖目善光錄、八敎大意錄、各一卷、口傳鈔錄二卷、栖心齋隨筆、略文類天保錄、各四卷、撰擇集壬辰記七卷、本典徵決（元名未辛錄）十九卷、高僧和讃己癸記（卷數未詳）あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

エカイ 慧海 （一九四八） 〔戒律宗〕河內法泉寺の律僧なり、慧海字は直明、阿一の上足にして、法泉寺を開く、寂年及壽欠く、（本朝高僧傳）

エカイ 慧海 二四四三—二四九六 〔眞宗〕江戶西敎寺の住持なり、慧海字は潮音、號は海印定院と云ふ、武藏江戶の人なり、天明三年に江戶四谷傳馬町三河屋に生る、三河屋は世々油商なり、兄長九郎業を繼き、師は幼より親族なる駒込西敎寺住持某の下に敎育せられ、內外の學業を勵めり、後ち西敎寺第八代の住持となりて大に寺門を張り、且つ益學業を勵み知洞に就いて宗乘を受け、天台宗の慧澄に就いて天台宗の敎義を學び、傍ら神儒の學を講究せり、文政の頃摑裂邪網編二卷を作りて、富永仲基の出定後語を駁し、金剛索一卷を作りて服部天遊の赤裸々を駁す、天保四年十一月八日寺格餘間となり、同九日內陣となり、學階助敎を授けらる、同六年五畿內の地方を歷遊して內外の學匠に交を結び、詩文の贈答をなす、同七年正月一日西敎寺に寂す、壽五十四なり、著作起信論義記筌諦六卷、金師子章放光記一卷、除疑蓋辨一卷、摑裂邪網編二卷、金剛索一卷、佛足石歌考一卷、無用閑談一卷あり、

エカイ 慧海 二四五八—二五一四 〔眞宗〕備後世羅郡甲山正滿寺の住持なり、慧海は安藝國安藝郡吳村の人なり、壯年筑前龜井氏の塾に遊び、後僧叡に事へて專ら宗乘を研究し、備後正滿寺に住す、平生講する書三經七釋に涉り、其幾百席なるを知らすと雖も、師記性に富むを以て、別に講語を錄せす、故に

著作略文類聚鈔略解、淨土論啓蒙各一卷、三經義燈二卷あり、餘は皆門弟の筆記なり、安政元年七月七日寂す、壽五十七、(學苑談叢、本願寺派學事史)

エカイ　慧海 二三二八/二四〇五 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十一代なり、慧海字は寛春(一に春貞)、參河吉田の人(一に遠江の人)なり、幼にして州の大聖院寛海の室に入り、豐山に學び、梅心院に住し、次に下總妙見寺に遷る、享保五年三月十四日幕府の命により、江戸根生院に昇り、兼ねて妙見寺を領し、客座僧寮を建つ、同九年二月十六日護國寺に轉し、次に護持院に移り、權僧正に任ず、享保十五年選まれて豐山能化職に補し、正僧正に進む、在職五年にして辭し、黑崎與元寺に退き、延享二年四月二十九日寂す、壽七十八、(新義眞言宗史料)

エカイ　慧海 二三六七/二四三一 〔眞宗〕駿河靜岡淨圓寺の住持なり、慧海字は法饒、號は芙蓉峯といひ、別に白雪廬と稱す、後龍音院と云ふ、駿河府中眞宗高田派淨圓寺に生る、十八歲京都に上り、松尾寺鳳潭に師事して器重せられ、特に獨麟と云ふ號を附せらる、尋て眞言の慧光等を問訊して敎を受け、後高田派の學頭職に上り、大僧都に任せらる、高田一派の學風を振興す、明和八年八月十三日寂す、壽六十五、著作文類聚鈔義贊、淨土下野流本尊義、淨土解行論、連環辨導畧、唯信鈔秘印訣、等四十餘部一百餘卷あり、(淨圓寺返信、碑文)

エカイ　慧海　ニチニヨー日饒を見よ、

エガク　慧萼 (一五一八) 〔臨濟宗〕唐補陀洛寺の開山なり、萼其俗姓生國詳かならず、承和の初め嵯峨天皇の皇后嘉智子の命を奉じ　、幣帛を齎して唐に入り、登萊の界に達し、鴈門より五臺山に登り靈跡を巡拜す、後南方杭州鹽官の靈池寺に至り、齊安國師に謁して皇后の旨を通し、上首義空禪師を請して東皈し、初めて禪法を唱へしむ、齊衡の初め再び唐に入りて五臺山に登り山上に於て觀音の聖像を得、唐大中十二年像を奉して東皈せんとし、寧波府故昌縣の海濱を過ぎ、船石上に著て動かす、舟子載物の重きを思ひて諸物を出せとも船尙故との如し、聖像を出すに及び漸く浮ぶ、師其聖像に離るゝに忍びず、遂に陸に上り、補陀洛迦山寺を建て開山となり、聖像を安置す、寂年及壽欠く、(元亨釋書、本朝高僧傳、普陀志、佛祖統記、佛祖通載)

エガク　惠岳 二三七九/二四四九 〔新義新言宗〕常陸樂法寺二十代なり、惠岳字は俊道、江戸妙義坂の人、俗姓鈴木氏なり、幼にして出家の志あり、江戸本所彌勒寺惠敎を禮して師となし、十四歲にして度を受く、初め常陸輕部長福寺に住し、寶暦四年八月雨引山樂法寺に遷り、第十九代吽海の附屬を得て第二十代となる、先年樂法寺火災に罹り、吽海再築を企畫し、先づ庫裡を興す、師其後を繼き、客殿書院等皆再築功を畢ふ、師の父菩提の資の爲め黃金七百兩を寄附してこれを助く、師道暇筆札を善くし、和歌を嗜む、謄寫の法華經等あり、安永四年寺務を惠應に讓りて退隱し、寛政元年正月十六日寂す、壽七十一、著作萬葉集撮要一卷、萬葉選要鈔九卷、萬葉集傍註二十卷、枕辭畧註一卷、(惠岳傳、樂法寺歷代、近世名家著述目錄)

エガク　惠岳　グキ弘基を見よ、

エ(惠、慧)カ

エガン　慧岩 二四〇〇 〔淨土宗〕江戸蓮光寺第八代なり、慧岩は淨蓮社立譽と云ひ別に字は堅卓、號は雪山と云ふ、其鄉貫師承詳かならす、江戸駒込蓮光寺に住し第八代となり詩文に長す、徂徠集中の卓上人と云ふは即ち師なり、元文五年十月十八日寂す壽缺く、(江戸名家墓所一覽)

エキ　慧喜 (一四一三)〔戒律宗〕祖鑑眞和上の弟子なり、慧喜は唐の人なり、鑑眞和上に從ふて西來し、戒律を弘む、示寂年月日缺く、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

エギ　惠顗　エンチ圓智を見よ、

エギヨー　慧曉 一八八三―一九五七 〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、慧曉字は白雲、俗姓不詳、讃岐國の出生なり、比叡山に登りて行泉法師に師事し、法華玄義を學ぶ、十七歲得度受具、二十五歲泉涌寺に投し、明觀律師に就きて戒律を學び、後聖一國師を禮し、禪宗を問ふ、國師一圓相を圖し示すも契せず、偈を與へて曰ふ、無内無外、孤圓一輪、忘㆑光忘㆑影、諸聖出身、師これより服勤すること八年に亘り、默契する所あり、文永三年宋に渡り、兩浙に歷遊し、瑞巖寺の希叟曇に謁す、曇禪師、百丈撥火公案を擧す、師聞得て大悟す、即ち杖拂を付せらる、歸來世緣を厭ひて隱遁す、無學元禪師西來して圓覺寺に住す、師偈を呈し大に優賞せらる、正應五年請せられて東福寺に主たり、自ら持すること極めて質撲なり、冬日帽なく、侍僧購はむことを請ふ、師曰ふ貲なし、侍僧即ち知事に報せむとすれば問うて曰ふ、一頂價幾何ぞ、曰ふ、五百文、と、五百文は吾香積四分の一を資くべし、と、終に購はず、晚年城北に菴居し觀世音を禮す、栗棘菴と云ふ、天皇聞きて聖壽の額を賜ふ、永仁五年十二月二十五日寂す、壽七十五、坐夏五十四、語錄二卷あり、遺偈に曰ふ、來也如是、去也如是、更問如何、如是如是、塔を常寂と云ひ、勅謚佛照禪師を賜ふ、(續群書類從二二八傳、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エギヨー　慧曉 (二三七六)〔眞宗〕越中鷹栖正安寺の住持なり、慧曉は越中の人、高倉學寮講師慧空に師事して學を承く、寶曆九年學寮に七十五法を内講す、享保十二年推されて講師となる、寂年、並に世壽欽く、(高倉學寮講者列傳稿本)

エギヨー　慧恭 (二四三二)〔淨土宗〕山城西光院の僧なり、慧恭字は可圓、俗姓不詳、早年出家して三學綜鍊す、關通和尚を訪ひて淨土の宗要を問ふ、和尚辭讓して曰く、我是れ緇林の朽木なり、法門を說くに堪へずと、師慇懃に三請す、和尚即ち勵聲して曰く、即今死なは如何と、師言下に省覺す、爾來宗要に意を傾け、念佛を事とす、後西光院に住し、某年八月十五日寂す、壽七十二、(續日本高僧傳)

〔考〕慧恭は安永の頃の人なるべし、

・**エギヨー**　慧珙 二〇三三―二〇八九 〔臨濟宗〕京師相國寺の僧なり、慧珙字は元璞、山城の人なり、幼にして出家し、絕海津の法を嗣ぐ、應永三十年相國寺に出世す、將軍足利義持深く皈依し、接遇常禮に過ぐ、是歲義持等持寺に祝髮す師頌幷に序を獻して之を賀す、昔釋迦文捨㆓金輪之位㆒、脫㆓却珍御之襲㆒、而踰㆑城入㆑山、出家修道矣、竊惟大檀越位高㆓于三台之上㆒、而不㆑居㆓其高㆒、德重㆓于四海之間㆒、而不㆑矜㆓其重㆒、紨軒冕爵祿之榮、視㆑之如㆑棄㆓敝蹝㆒、往往從㆓法中之士㆒、事㆓方外之遊㆒、問法參禪日以爲㆑務焉、於㆑是癸卯之夏落髮圓頂、像㆓迦文之律儀㆒、修㆓菩薩之

慈行、以ニ度生ニ爲レ急、一彼一此、易レ地皆然、故在ニ靈山會上ニ則四聖六凡圍繞如ニ籠レ月之雲、於ニ扶桑國中ニ則九夷三韓朝宗似ニ赴レ壑之水、吁其盛矣、欽奉ニ鈞命ニ製ニ伽陀ニ以祝贊曰、

結髮峨冠累劫因、一刀截斷便超レ塵、寸絲不レ掛毘盧頂、萬德莊嚴妙色身、永享元年三月十五日相國寺に寂す、壽五十七、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エキヨー 惠慶（一六四五）平安京の歌僧なり、　惠慶は其鄉貫詳かならず、後拾遺集目錄に依れば播摩講師と云ひ、寛和年中の人なり、和歌を善くし中古三十六歌仙の一人なり、寂年及壽缺く、（中古三十六歌仙傳）

エキヨー 慧鏡　ギリユー義龍を見よ、

エギヨー 惠行（一四四一）奈良の歌僧なり、　惠行は其鄉貫詳かならず、和歌を善くし、詠歌は載せて萬葉集にあり、寂年壽缺く、（萬葉集作者履歷）

エキヨク 惠旭（二四三六）〔眞宗〕三河某寺の住持なり、惠旭字は良緣、號は鷲丘と云ふ、三河の人なり、夙に內外の學に通し、深く眞宗の開祖親鸞上人の傳の備はらさるを憂ひ、寛保二年壬戌は親鸞上人か入寂したる弘長三年壬戌に同し干支に當りたれは、自ら幸運なりとして志を立て、上人の傳の研究を事とし、諸國に旅行して材料の蒐集をなすこと三十年に及ふ、然るに安永二年十月隣家火を失して師の書齋延燒し、材料大半を燒失す、後記臆により宗祖世錄五卷十冊を編し、安永五年に至りて大成す、師示寂の年月日詳ならす、（宗祖世錄序文）

エキヨク 惠旭　ドンジヤク曇寂を見よ、

エクー 慧空（二三〇四 二三八一）〔眞宗〕京都西福寺の住持なり、慧空は光遠房と號し、姓は川那邊氏、道西の苗裔にして、信空の子なり、正保元年五月十五日近江野洲金森村善龍寺に生る、未た十五歲ならすして兄を喪ひ、悲哀に堪へす、是に於て出塵の志愈切なり、信空竊かに其意あるを聞き、制止して許さす、然れとも願心已ます、甫めて十八歲遂に信空に謂うて曰く、我聞く比叡山は天台宗傳敎大師の開立にして五宗の章疏を函藏する靈鎭なり、橫川の流は淸く、黑谷の地は靜なり仰き願くは我れ彼山に登り天台宗を學はん、と、信空其英氣の羈束すへからさるを知り、復た制止せす、乃ち比叡山に登り、參究するもの三年を累ぬ、竊に思へらく、予の嚮に世務を辭して此山に來るもの、隱遁の志あるか爲に止むを得さりしなり、然れとも永く此山に留住せは、實義を翻失せん、且つ夫れ故國の善龍寺は眞宗の靈場にして、蓮如上人の遺跡なり、法燈熾盛にして葉々落ちす、往きて緖を繼かずは、恐らく恩を知る者にあらさらん、と、仍て山を下り、故里に歸へり、爾來深く祖訓を信し、專ら自宗を學ふ、時に湖東に一僧あり、龍溪と云ふ、互に舊識たり、師乃ち往きて共に學ひ、後京都に入り、誓源寺圓智に隨ひて宗門章疏を習ふ、或は近江大津に行脚し、或は京都高倉に寓止し、學功相積む、圓智は一宗の耆宿にして、當時の英匠なり、是を以て淳寧院琢如大僧正、圓智を遇すること最も厚し、一日圓智、大僧正に謂うて曰く、予の門下に慧空あり、慧悟聰敏、學ひて厭はす、巨擘といふへし、冀くは糧祿を賜ひ、彼をして恩に死せしめよ、と、大僧正之を可とす、寛文十年二月召されて本山に出て

エ（惠、慧）ク

給事す、時に二十七歳、十一年十月唱導を祖堂に勤む、又十七條の疑問を記し、釋解を諸方の學生に詢へとも、之に應する者なし、因て自ら釋解を作る、皆悶確是なり、後門徒の請により京都の西福寺に入る、時に延寶八年十二月十二日三十七歳なり、又請に因りて講筵を開き、聽衆甚た多し、天和四年より大藏經を周覽して怠らす、栂尾山大藏經は高辨以來集むる所の秘庫なり、就いて一覽せんとして大に苦心し、遂に道路を開くとを得たるも淨土部殆と皆缺くるを見て大に歎息す、後、嵯峨の二尊院古く淨土教を傳ふる名刹にして藏經の書籍に富めるを聞き、玄誓を誘ひて跣行徒歩して乞ふこと三年に及ひたるも其志す所を果たす、學問研究に熱心なること大に常人に超えたり、享保六年二月八日寂す、壽七十八、（慧空講師傳）

エクー　惠空 二三五一〔淨土宗〕紀伊淨福寺の僧なり、惠空生緣を詳にせず、（紀伊の人か）幼にして敏慧なり、十五歳の時實語教童子教の註釋を作り人を驚かす、寬文十一年に紀伊若山中島の淨福寺を中興し同寺に住し、權大僧都となる、後京都眞如堂に寓す、元祿四年寂す、壽缺く、一生著作する所多し即ち左の如し、首書闕通章、盂蘭盆經便蒙、觀音經靈驗記、講餘錄、自信錄、暇日操觚、無盡燈、淨土策進、病中法語、淨信錄、各一卷、年濟拾唾、梨窓隨筆、閑窓和筆、專修專念鈔、他力領解伊呂波字考錄、各二卷、實語童子教諺解、各三卷、徒然草參考八卷、首書心經科考四卷、謠法音鈔十卷、節用集大全十五卷、徒然草百年精粹十六卷、元亨釋書和解二十三卷、原人論發微錄二卷あり、（紀伊國人物志、紀伊國續風土記、近代名家著述目錄）

エクン　慧薰 二三〇八〔曹洞宗〕相模成願寺の禪僧なり、慧薰字は風外、上野國碓氷郡土鹽村の人なり、幼にして出家す、學諸宗を綜ふ、屢々名宿を叩き、遂に大事了畢し、叢林に道聲あり、時に相模成願寺席を虛す、衆の請により入りて住す、一住數年、辭し去て曾我山の巖窟に棲止す、慶安元年小田原の城主稻葉氏師の名を聞き、使を遣して城中に延請す、後去て伊豆の山中に隱る、北條の信徒竹溪院を興して師を迎ふ、居る三年、遁れて遠江國に經行す、晚年同國金指鄉石岡里に至り菴居す、一日靑銅三百文を與へ、一地に穴を開かしめ、自ら穴に投して人をして埋ましめ、植木の如くにして寂す、其年月日並に壽詳かならず、師畫を善くし殊に畫達磨に妙なり、（日本洞上聯燈錄、名家畧傳）

エクン　慧訓 二四〇四〔臨濟宗〕山城乙訓寺の學僧なり、慧訓俗姓生國詳かならす、延享の頃、京都にありて學僧の譽あり、神儒佛の三教と比較論斷せり、著作文林武林通俗談、迷雲雜記、三教論衡あり、寂年欠く、（續日本高僧傳）

エクワ　慧果 二四〇一／二四七九〔臨濟宗〕長門常榮寺の禪僧なり、慧果字は性堂といひ、別に藏六曇空等の號を用ゆ、周防小郡の人なり、業を東福寺鐘山に受け、大休月船の諸老に參見し、後天猊に侍してその法を嗣き、長門の常榮寺を董す、文政二年四月三日寂す、壽七十九、

エクワク　慧鶴 二三四五／二四二八〔臨濟宗〕伊豆龍澤寺の開山なり、慧鶴字は白隱、駿河駿東郡浮島ヶ原杉山氏の子にして、貞享二年十二月二十五日に生る、母は驛長長澤氏の出なり、元祿

十二年二月二十五日、師十五歲單嶺傳を禮して得度し慧鶴と云ふ、同年沼津大聖寺息道に師事す、翌年法華經を誦すれども、未だ安ずる能はず、寶永元年美濃檜木瑞雲寺に至り、馬翁に侍し、同二年春辭して洞戸保福寺に於て南禪に謁し、秋靈松寺萬久に見え、又去りて伊自良東光寺大巧に依り、翌年春若狹常高寺に至り、萬里和尚の虛堂會に列す夏法弟松藏同と共に行脚して美濃に至り、次に伊豫正宗寺に往き、逸禪和尚の佛祖三經を講ずるを聞き、大に悟るところあり、冬同寺にありて三經の講本を寫す、仝四年春海を航して備後福山正壽寺に往き、正宗讃會を終りて歸り途中兵庫より船に乘じ、颶風に逢へとも師獨り安然として眠れり、蓋し平素修養の然らしむるところならん、伊勢に至れば馬翁病に罹る、師看護すること三ヶ月、十月翁の全快するを以て、辭して國に皈る、慧徧下の長首座德源寺に留る均首座隆英之に從ふ師も亦た往きて之を問ひ。翌年春長及諸友

白隱禪師

と共に越後高田英巖寺に性徹の人天眼目を講ずるを聞く、其餘暇寺後にある先侯の廟に到り、坐禪考察二月の始より十六日の夜まで少しも倦ます、一夜恍然として曉に達し、乍ち遠寺の鐘聲を聞き、豁然として大悟し、性徹に見えて所見を呈す、次に佛徹及び長首座に謁するも皆機思契せす師大に所見を擔ひ諸方を幷呑し自負して三百年來己の如く痛快に了徹するものあらすとす、會々宗格なるもの來りて契悟洒脫し、其師授するところを聞き竊に宗格と共に寺を出て、信濃飯山に到り、先つ傳燈錄を閱して蓬蒿の修業二十年にして蘊奧を盡し得たるを見て慢心滅し、增進智を發す、四月宗格に從ひて其師的翁端に飯山上倉村正受菴にて謁見す、入室して所解一編を呈す、以後勤勉努め、寢も攪まず、屢々的翁の怒罵打擲に逢ひ、猶契せす、益々發憤して工夫し、遂に徹するを得、五月松本の慧光院に往きて具足戒を受けんと欲す、的翁無相心地戒を說きて之を授く、服勤八月餘にして其蘊奧を極む、十一月同友敬叢越後より尋ね來る、師翁を辭して共に歸へらんとす、翁師を送ること二里餘なり、此年の冬松蔭寺に坐臘す、寶永六年春遠江小山の能滿寺に圓海の金剛經講義を聞き、夏菩提樹院に頂門の正宗讃を聞く、時に宗格飯山より來り會す、師乃ち五位纓盡の訣を傳へられんことを乞ひ、宗格諾して別る、師箇中の理を了悟しなから、猶命根を斷絶し盡さヽるを省みて奮勵し出てヽは動中の工夫を試み、入りては靜處の禪定を凝る、冬法雲寺に往きて桂林の化を助く、翌年春法雲寺を辭し、松隱寺に還へり、大義、紹巖、六隱等と共に寶臺寺に抵り、澄水の碧巖會に列す、宗格約を踏みて會に在り、

師玆に於て五位變蓋の訣を受け、然るに師參學に勞して病に罹り、將に廢人とならんとす、醫を求めて美濃靈松寺に往き、山城白河山中に白幽眞人なる者ありて醫に通すと聞き、之を訪ひて內觀修養の訣を聞き松隱寺に歸へり。專ら療養して癒ゆ、夏宗格及ひ兩三友と共に同寺に坐究し、秋結城の節首座を請して臨濟錄を講す、正德元年遠江龍谷寺に沙石集を閱し、二月紹巖六隱等と下總佐倉の養源寺に提河和尚に謁し、那須の徹通危座と語を交へ、宗圓寺の鐵髓に參す、因に長舟道人に遇ひ、共に養源寺に留る、冬十一月息道病と聞き、辭して大雲寺に至り看護す、翌年夏松蔭寺に歸へり、少室六門集を講す、同三年伊勢建國寺に至り、豐後の寂而に謁し、且つ義海の虛堂會に列す、並に首座の覆講を聽く、日向の古月材の荷葉團々の頌に參せんと欲し、建國寺を辭して鈴鹿嶺に向はんとし、雨後溪水衍溢す、衣を褰けて往くこと數百步、廓然として荷葉團々の頌に入得することを得たり、尋て京都を過き、若狹圓照寺に鐵堂に侍す、夏河內法雲寺慧極に謁し、見道畧ぼ其要を得たり、慧極の教に從ひて槇尾山に住菴を求めんとすれとも山主許さす、志を得すして下る、和泉蔭涼寺に鐵心の遺風を壽鶴道人に聞き、一夜坐して曉に徹し雪を聽きて女子出定の大事に撞着し和歌を詠す「きかせばや信田の森の古寺のさ夜ふけかたの雪のひゞきを」四年春辭し、再ひ美濃保福寺に南禪に參し、大燈國師の語錄を閱して深く感し、秋去りて萬休寺靈松に依り、翌年三月辭して巖瀧山に登りて菴居し、宗涼道人と相語る、冬夜雪に因りて詠あり「忘れては寒しとそ思ふ床のゆきを掃ふ、まなき人もありしを」と、享保六年鹿野德元居士其子に命して師に信施せしむ、此年師の父病みて師を見んとし且つ松蔭寺を守らしめんと欲し、老僕夜計七兵衞をして探索せしむ、七兵衞師を覓めて其情を述ふ、乃ち十一月共に歸へり、松蔭寺の室を掃ひ、父の病を看護す、二年正月十日檀越の强請により單嶺先師の忌齋に入院の儀を整ふ、此時松蔭寺頹敗して寺產一も殘りなく、老僕覺左衞門薪を拾ひて朝夕の供に給す、一僧來りて每日食を乞ふ、乃ち僧の爲めに大慧の書を講し、巖流山中の事を追憶して詠して曰く「なさけあるもつらきも遠くなりはてぬ嬉しやよその山は尋ねじ」と、村の庄司氏なる者、米囊を負ひて寄宿參詳す、秋惡發[illegible]司來りて侍す、冬禪門寶訓を講す、十二月二十一日師の父逝く、翌年春紹巖と長光の齋に赴く、總州の鐵髓、師の道風を慕ひて來る、松永の不二菴に住せしめて益友となす、夏破相を講し、秋臨濟錄を提唱し、冬十一月花園妙心寺第一座となり、白隱と號し。透麟の法嗣となる、五年伊豆吉名の溫泉に浴し、馬蹄和尚に見ゆ。秋淸見寺陽春碧巖錄を講するを聞く、六年大慧の書を講し七年原人論を講し九年博山警語を講す、十年閑關室を方丈の後に建て、靜坐して世緣を忘る、十一年法華經を誦し、其深理を了得し、經王の經王たる所以を知る、十四年秋普門品を講し、十五年夏自撰の寒林貽寶を講し、十六年夏四部錄寒山詩を講し、十七年春臨濟錄を提唱し、次に碧巖集を擧揚す、十八年秋禪門寶訓を講し、神社考を讀む、十九年夏碧巖集を提唱し、翌年春虛堂錄を提唱す、夏禪門寶訓を講し、二十一年春惠通首座の爲に維摩經を講す、秋僧堂を建つ、冬植松季統妙智山觀音寺の古基を開きて小僧

堂小僧厨を建て、師を請して開山とす、翌二年伊豆臨濟寺の請に應し、碧巖集を提唱し、四年八月伊豆秋山古鑑居士の請に應し、其家に大慧書を講す、諸弟翌年の春を期して、虛堂會を勸發す、師固く之を拒む、弟子請ひて止ます、師諸子の懇請に感し、純航二子を携へて鹿島に遁れ、瀧川に轉し、比奈に入りて滯留す、諸弟師の不在を便として老屋を修繕す、五年春虛堂錄を提唱し、寬保元年春甲斐桂林寺に到りて碧巖集を擧揚す、二年夏遠江龍潭寺の請に應して禪門寶訓を講す、三年三月大慧武庫を提唱す、秋門下庫司の再營を謀り、十二月二十五日落成し、新庫に遷る、延享元年二月初めて息耕錄開筵普說を繙き、冬甲斐の自性寺に般若心經の活字版を開く、歸路林泉菴に至り、川老金剛經を講す、二年二月甲斐自得寺の維摩會に臨み、先に井上平馬の刊行せる十句觀音經を弘む、三年二月源立の請により一乘經を講す、秋甲斐の寶林寺に於て初めて闡提紀聞を讀み、自ら十六梵儀を書きて住持雪明禪師に送る、復た石林寺に於て法華を講し、次に能成寺を過ぎりて松蔭寺に歸る、二年春蓼原の文殊堂に臨濟錄を講し、夏碧巖集を提唱す、黃蘗の格宗來り參す、五位の訣を授く、三年春菴原大乘寺の請に應し、碧巖集を提唱し、秋遠江の貞永寺に於て初めて槐安國語を繙き、冬播磨龍谷寺の請により息耕錄を評唱す、寶曆元年春備前岡山少林寺に川老金剛經を講し、井山寶福寺に四部錄を講し、歸路京都に寄り、養涼寺に碧巖錄を講す、冬菴原大乘寺に到りて碧巖錄を講し、五位の祕訣を編す、冬香林寺に碧巖錄を評唱す、二年春松蔭寺に在りて碧巖錄を評唱す、四月八日新無量寺落成し、師其開山となる、秋伊豆の歸一庵に佛光錄を擧揚す、冬無量寺に遺敎經を講し、又次に松崎玉林寺にて洪鐘新鑄の佛事をなす、三年二月甲斐能成寺にて人天眼目を提唱す、後東光寺に赴き毒語心經を講演す、歸路福王南松慈眼寺の請に應し、十二月八日松蔭寺に歸へる、六年春松蔭寺に楞嚴經を講し、七年春甲斐南松寺に槐安國語を提唱し、信濃興禪寺に法華を繙く、開善龍翔の二寺に赴き、三河淵龍寺を歷て松蔭寺に皈へる、八年春美濃瑠璃光寺に大圓寶錫國師百年忌齋を修し、碧巖錄を提唱す、會終りて發林、瑞鷗清泰、梅龍の諸寺の請あり、次に蕺源、王龍宗猷諸寺の請あり、道中寶鑑貽照を著し、宗猷寺に到りて碧巖錄を提唱し、會終りて歸路龍門、林泉、妙樂三寺の請に應し、次に龍源寺に寶藏論を講すること月餘、天祥寺に開法すること累日、後諸珠、白林、二道場にて法施し、遠江の地藏寺に於て虛堂の頌古を評唱す、冬松蔭寺に歸る、三島に龍澤寺の廢を興し、九年七月江戸臨川寺に入り、二十四日碧巖集を評唱し、東淵寺に於て前會の殘講を講す、十年春二月龍澤の新道場に於て息耕錄會の普說を講し、開山の儀を成す、四月龍澤の席を圓慈に付し、後龍澤の地を易へ、工畢りて師又說法す、十三年二月祥光寺に碧巖錄を提唱し、次に龍雲、醫源、永正、淨因、泉龍の諸寺に開法日を經、航浦院に入て碧巖集を終ふ次に江尻の慈雲寺に松源錄を評唱し、明和元年二月十五日大應錄を擧し、七月松蔭寺に還り、事を謝して後事を遂翁に付す、二年正月龍澤寺にて設利會を設く、三年正月江戸に赴き、岩波氏に寓し、尋いて法壽院尼公、及ひ東北寺に移る、二月十一日萬年山に入り、庵の改造成るを見

エ（慧）ク

エ（慧）ク

て大に悅ひ、一住半年、六月東陽和尙の衡梅老師に請益せし碧巖集を繕寫し、長壽寺に赴きて之を評唱す、三島福聚寺の請あり、靑木大勝大村氏及ひ東北寺の請を受けて相摸に出て、栖雲寺を過きて福聚寺に入り、法華三周の會を開く、復た玉井の請に應して前會の殘講を終へ、冬松蔭寺に歸へる、四年十月龍澤寺に荊叢毒蘂を提唱す、五年春德樂寺の請により毒蘂を講し、三月松蔭寺に歸へる、七月靈元太上法皇師をして安牌麼讃を修せしむ、十六日松蔭寺に歸へる、後屢々出て遊ひて法施を行ひ、十一月松蔭寺にて病み、十二月十一日寂す、壽八十四、明和六年六月八日勅謚神機獨妙禪師を賜ふ、明治十七年五月廿六日勅謚正宗國師を賜ふ、著作語錄十卷、荊叢毒蘂五卷、槐安國語、闡提記聞、息耕錄、開莚普說、寒林貽寶、寶鑑貽照、及ひ假名法語等あり、(年譜、近世禪林僧寶傳)

エクワク　慧嶽　二〇二六―二〇八五　〔臨濟宗〕京師天龍寺の禪僧なり、慧嶽號は鄂隱筑後の人なり、幼にして出家し絕海津の法を嗣ぐ、至德の末明に航し、諸禪林を回歷す、東歸の時承天寺仲銘新、崇報寺行中仁等皆送行の偈あり、新禪師の偈に「蓄航轉レ舵浙江濱、歸到二扶桑一二月春、海若朝迎霞以レ綺、天吳夜舞浪如レ銀、心傳二列祖源流遠一、身被二中朝雨露新一、鄕國君臣應二共喜一、郭門幢蓋擁二朱輪一」東歸の後土佐吸江菴に逸居し、風雅を以て年月を送り、詩偈多し覺苑傳、「閑花野草草芬芳、即是如來妙覺場、寶綱交羅金碧耀、隨機也解レ學二時粧一」探玄號「擬下於二靜處一覓中玄微上、當面依然隔二鐵圍一、金闕朝隨二天仗一入、鳳池暮帶二御香一歸、」臨濟三頓棒頌「烏藤六十沒二人情一、大樹陰涼早已成、偃若高安灘下水、爲レ佗容易泄二虛名一」細川賴之の招請により阿波寶冠寺に住す、天栄相國に際遷し、後相國の長德院に退休す、應永三十二年二月十八日寂す、壽六十、南遊稿あり康正二年冬後花園天皇勅謚佛慧正續國師を賜ふ、(延寶傳燈錄　本朝高僧傳)

エクワン　慧觀(一九七二)〔淨土宗〕正定寺の第三代なり、慧觀字は良然と、俗姓生國詳ならず、名越の尊觀に師事して一門の宗義を受け、下總古河大野正定寺第三代となる、示寂の年月缺く、著作澆季無證論一卷あり、(淨土總系譜)

〔考〕　慧觀は正和の頃の人なり、

エクワン　慧灌(一二八五)三論宗の開祖なり、　慧灌一に慧觀に作る、高麗の人なり、嘗て隋に遊歷して三論を嘉祥大師吉藏より受けて盛譽あり、推古天皇三十三年一月一日高麗王の旨を帶びて來朝す、時に大に旱す、勅を拜して雨を祈る靈驗あり、天皇大に悅びたまひ、擢でゝ僧正に任じたまふ、是れ觀勒以後第二の僧正なり、元興寺に住して三論を講說す後河內志紀郡市邊に井上(カミ)寺を創立す、白鳳の頃大和禪林寺落慶の導師となる示寂の年時缺く、門下に福亮　慧輪、慧師、智藏等あり、(日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕　三國佛法傳通緣起に慧灌は大化二年に宮中にて三論を講說し僧正に任せらるとあれども信じがたし、其僧正に任せられたる年時は、今、日本書紀僧綱補任に依る、

エグワツ　慧月　二五二一……〔眞宗〕越中礪波郡今石動長福寺の住持なり、　慧月は乘行院と號す、寮司となりて天保十三年より高倉學寮に觀所緣々論𥝱伽心立義三類境選要を講し、

嘉永二年二月二十八日(一に廿三日)擬講に任せられ、六年より淨土論起信論義記成唯識論を講し、文久元年十二月二十日嗣講に進み、同三年選擇集を講し、同八月十三日江戶に寂す(高倉學寮講者列傳稿本)

エケイ　慧景　二四八七……〔眞宗〕近江野洲淨滿寺の住持なり。慧景號は實言院、近江の人、高倉學寮に學び、文政七年擬講となり、八年倶舍論を講ず、同十年九月二十五日寂す、壽缺く、同年十二月十四日嗣講を贈らる、(高倉學寮講者列傳稿本)

エケイ　惠瓊　二二六〇……〔臨濟宗〕安藝安國寺の開山なり、惠瓊字は瑤甫、安藝沼田郡の人なり、十一歲にして京都に往き、東福寺に入りて剃髮し、順藏主と稱す、博讀暗誦、衆に超ゆ、長老となり、南禪寺に遷り、祿司を主どる、後紫衣を聽され、安藝に安國寺を剏め、又退耕菴を修す、毛利輝元師の辨才を愛し、寵遇殊に渥く、食邑を與へて國政を預聞せしむ、豐臣秀吉毛利氏を伐つに當り師兩軍の間に往來して遂に和議をなさしむ、これより常に秀吉の信任を受け、遂に佛を棄てゝ武に飯す、慶長五年の亂起るに及び、三成に屬し、九月兵を帥て南宮山に陣し、戰破れて鞍馬の月性院に奔り、東寺に隱れたりしが、捕へられて十月一日京都六條に斬らる、壽缺く、(野史)

エケン　慧巘(三四一六)〔眞宗〕京都法幢坊の住持なり、慧巘號は香陵、寶曆六年東本願寺寮司となり、十門辨惑論を講ず、後擬講を歷て嗣講となる、寂年、及壽欠く、(高倉學寮講者列傳稿本)

エケン　慧見(……)〔眞宗〕越前黑目稱名寺の住僧なり、慧見は越前の人、眞宗高田派黑目の稱名寺の住持となり、宗乘に通し、二回本山の安居本講を勤む、寂年月日詳ならす、

エケン　慧見　二四七六……〔眞宗〕播磨佐土福乘寺の住持なり、慧見號は誠智庵、播磨の人、高倉學寮に學び、文化二年擬講となり、十三年秋學寮に讃阿彌陀佛經を講ず、同年十月十九日寂す、壽欠く、(高倉學寮講者列傳稿本)

エケン　慧劍(……)〔臨濟宗〕出雲華藏寺の禪僧なり、慧劍號は靈峰、早年東福寺に投じ、山叟雲に師事し、其法を嗣ぐ、後龜谷壽福寺に留り、尋いて南禪寺第一座となり、播摩の法雲寺に出世す、出雲に隱棲して道俗崇信し、華藏寺を開きて請す、同地に數寺を開く、示寂の年時缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エケン　慧劍　二四九〇……〔眞宗〕近江蛇溝本啓寺の住持なり、慧劍號は如說院、一に開扇坊と云ふ、近江の人、高倉學寮に學び、文化八年寮司となり、楞伽心玄義を講じ、十一年唯識述記を講ず、十三年三月擬講となり、起信論義記、往生文類、倶舍論を講す、文政四年八月五日嗣講となり、五年二十述記を講じ、後淨土和讃正像末和讃を講ず、天保元年五月二十五日寂す、壽缺く、(高倉學寮講者列傳稿本)

エケン　慧堅　二三〇九 二三六四〔天台宗〕近江安養寺の律僧なり、慧堅字は戒山、俗姓は江上氏、筑後久留米の人なり、十五歲郡の千榮寺に投し侍童となる、寬文五年黃檗の道光禪師(鐵眼)千光寺に起信論を講す、師日々其席に列し、出家の志切なり、而も父母許さす、十一月大雪に乘し、潛に家を遁れ出

エ(慧、惠)ケ

て千光寺に至り、光禪師に請ひて落髮す、時に十七歳なり、宗悅禪師に就きて金剛、圓覺、法華、楞嚴等の諸經を聽き、夜中は坐禪して不思善不思惡の話を參究す、一日喟然として曰く、僧伽の羽翼は戒律にあり、羽翼なくして飛はんとするは謬なり、と、乃ち京坂の地に至り、明師を求む、大坂法嚴寺に雲溪禪師（桃水）あり、師之に謁して志を告く、禪師曰く、方今の律師は慈忍猛和尚に若くはなし、子宜しく師事すべし、と、猛和尚は山城東陽山に住して道化盛なり、師一見器重せらる、寛文十年猛和尚河內青龍山に遷る、師隨侍せり、同年十二月二十二日具足戒を受く、延寶三年三月猛和尚寂す、師喪事の後去りて深草眞宗院に寓し、門を閉ち客を謝し 般舟三昧を練行す、花園五佛山等に隱捿し、去留緣に任せり、京都樋口某安養寺を復興し、師を請して中興第一世となす、元祿十一年同寺に灌頂壇を開き、法を慧淑に付す、翌年秋席を慧淑に讓り、自ら退耕道人と稱し、京都淨慈菴に退休す、十六年秋法兄慈門光靑龍寺の席を退く、衆師に請ひて其後を繼かしむ、寶永元年春淨慈寺に寓して微恙あり、三月四日佛像に向ひ、手に密印を結ひ、微笑して寂す、壽五十六、法臘三十三、安養寺に葬むり、妙光塔を建つ、所度の弟子一百餘人、三歸戒等を受けるもの勝けて計ふへからす、著作律苑僧寶傳梵網戒迪蒙、盂蘭盆羹蒙供儀、近住威儀錄要、西方懺願儀略、機要筆記等あり、（續日本高僧傳）

エゲン 慧玄 一九三七 二〇二〇 〔臨濟宗〕京都妙心寺の開山なり、慧玄は關山と號す、姓は源氏、信濃の人高梨氏の子なり、其先は淸和天皇より出づ、鎌倉の巨福山建長寺の廣嚴菴に到り、東傳啓和尚を禮して剃髮稟具す、適々開山大覺禪師の年忌に値ひ、西來菴に赴く、其時師同列の僧に問うて曰ふ、方今海內の叢林、誰か活手となすか、僧曰ふ、京都の大燈國師は人を殺すに眼を貶せす、と、因て其作用を語る、師聞きて欣然として曰ふ、是れ眞の智識なりと、卽日束包して菴下より直に大德寺の方丈に上りて謁見し問うて曰ふ如何なるが是れ宗門の向上事ぞ、と、大燈國師答へて曰ふ關、と、師拂袖して出づ、國師曰く作家の禪客天然に在るありと師從て掛搭を乞ふ、國師侍者をして告げしめて曰ふ、若し掛搭を要せは、須く紹介を持し來るべしと、師曰ふ、夫れ善智識は金剛の正眼を具し、門を跨れは學人の心肝を見徹す、什麼の紹介を說かんと、國師乃ち參堂を許す、師頓機俊發して一夕端なくも關字を衝破す、卽ち丈室に至りて告く國師可して關山の號を與へ且つ頌を以て證して曰ふ鎖斷路頭難透處、寒雲長帶翠巒峰、韶陽一字藏機去、正眼看來隔萬重、と爾來左右に親炙して咨詶機に契ふ、後醍醐天皇國師に命して參內せしむ、國師病の故を以て師をして代らしむ、師玉座に侍して禪を語る、元德二年國師より法語を付せられ去りて美濃の伊吹山に入り、草菴を結びて迹を沒す、延元二年國師病む、花園上皇使を遣はして曰ふ、和尚の後朕誰に隨ひてか法を問はん、國師奏して曰ふ、關山といふ者あり、吾か骨髓を得たり、我か沒後召して之に問ひたまへと、上皇再ひ藤原大納言を遣はして曰ふ、朕花園の離宮を改めて梵刹となし、關山を請して開山となさん、和尚宜しく寺號を與へよ、と、卽ち正法山妙心禪寺といふ、乃ち師勅召を拜して妙心寺に住 開堂す、延文五年十二月十二日寂す、壽

八十四、臘六十四、妙心寺に塔を建て微笑塔と稱す、法嗣授翁宗弼一人あり後奈良天皇勅して本有圓成國師の諡號を賜ひ後西院、桃園、光格、孝明の諸天皇佛心覺照、大定聖應、光德勝妙、自性天眞、放無量光の諡號を累賜したまふ（正法山六祖傳、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、佛敎各宗綱要）

エゲン 慧玄 ゲンドー玄道を見よ、

エゲン 慧玄 リヨーシユー良秀を見よ、

エゲンイン 惠眼院 ニチジユン日純を見よ、

エゲンイン 慧眼院 ニチシユク日淑を見よ、

エコー 慧光（一九九一）〔時宗〕相模藤澤寺の僧なり、慧光俗姓は大森氏、相模の人、定慧と同胞にして、共に寂慧良曉上人の室に入り、遂に其法を嗣ぎ、退いて藤澤寺を開きて住す、寂年、及壽欠く、（淨土總系譜）

〔考〕慧光は元弘の頃の人なり、

エコー 慧光（二三二六 二三九四）〔眞言律宗〕江戸靈雲寺の二代なり、慧光字は戒琛、鄉貫詳ならず、淨嚴律師に師事し、灌頂を受く、元祿十五年七月十一日三十六歲にして淨嚴律師の後を繼ぎて靈雲寺二代となる、寺務廿六年にして義璨慧曦律師に讓る、後奈良戒壇院に住す、享保十九年十一月四日同院に寂す、壽六十九歲なり、著作密軌問辨啓迪五卷、密軌問辨、秘密眞言觀行要覽、秘密瑜伽學習提圖、各一卷あり、

エコー 慧光 ニチシン日眞を見よ、

エコーボー 慧光房 チヨーゴー澄豪を見よ、

エコー 慧晃（二三四四）〔……〕山城双岡某菴の學僧なり、慧晃は鄉貫詳ならず、出家して南北の講席に列し、性相顯密の學に該通し、殊に悉曇に達し、因明に精し、貞享元年三十三過本作法纂解三卷を作り、南都興福寺知足坊淸慶に示す、淸慶激賞して序を作る、後枳橘易土集廿六卷同附卷四卷を作る、これ諸經論に散見せる梵語を類聚して解釋を附したるものにして博覽强記驚くべし、一生の行實未だ詳かならす、（纂解序、枳橘易土集凡例）

エコー 慧皓（……二四四四）〔眞宗〕大坂正行寺の住持なり、慧皓號は樹林菴、大坂の人、寶曆五年寮司となり、高倉學寮に易行品を講ず、同七年に擬講となる、阿彌陀經を講じ、後念佛三昧寶王論三帖和讃を講ず、明和三年嗣講となり、八年正信偈を講ず、天明四年九月十七日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

エコー 慧廣（一九三三 一九九五）〔臨濟宗〕相摸淨妙寺の禪僧なり、慧廣號は天岸、俗姓伴氏、武藏比企の人、十三歲佛光國師の下に投し得度す、後南都に往きて東大寺戒壇に登り、雲巖寺に入りて佛國禪師の下に參究し、印記を受け、後圓覺寺に歸りて第一座となる、元應二年天目中峰和尚の道風を聞きて同志物外什等數十人太宰府に往きて翌年出航す、時に四十九歲なり、師船中に於て忽ち中峰の遷化を感知し、愁然偈を作る萬斛堅舟何所載、都盧一個大疑團、中峰昨夜刹竿倒、打破疑團無應看、同船の上首物外什等唱和す、編して巨海一滴といふ、到着の後師天目山に登り、前の偈を呈す、寺主頗る奇異の感をなし、師に中峰和尚の眞蹟並に幻住菴記柱杖を附與す、師古林茂、清拙澄等に參見し、後徑山の正續塔を禮す、また翰林學士掲溪斯に謁し、佛光國師の塔銘を製せしめ、資

政大夫全岳柱をして篆額を書せしむ、正中元年に東歸し、物外菴に住す、元德二年の春鎌倉の淨妙寺に住す、建武元年伊豫守足利家時報國寺を建立して師を請し、第一世となす、北條高時伊豆に香山寺を建立して師を請す、淨智寺よりも請す、而も高臥して就かず、建武二年三月八日病に罹り寂す、壽六十三、臘五十、遺偈あり、末後一句、佛祖不ㇾ知、掲ニ翻大海一、躍ニ倒須彌一、報國寺に塔を建て骨を收む勅諡佛乘禪師と云ふ、著作東歸集あり偈讃を集めたるなり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エゴク　慧極　ドーミョー道明を見よ、

エコン　慧忻　二〇二七 二一〇　〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、慧忻字は笑巖、奧州江刺郡の人、俗姓は平氏なり、出家の後諸老に徧參し、月泉良印に謁して其印可を蒙る、角懸の檀越瑞德寺を建て師其開山となる、次に入首常安寺に遷る、應永年間月泉の寂するに及び、能登の總持寺に主となり、兼て奧羽二州の僧祿の事を總ぶ、後花園上皇鳳章を給ふ、寶德二年二月二十二日寂す、壽八十四、(日本洞上聯燈錄)

エサイ　慧齊　(一二八三)〔　〕入唐學問僧なり、惠齊入唐の年詳ならざるも、推古天皇三十一年七月新羅大使智洗爾に隨ひ、惠先并に醫惠日福因等と共に歸朝す、事蹟缺く(日本書紀、本朝高僧傳)

エサイ　慧才　(二一九三)〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、慧才字は文室、洞光寺、大拙眞雄に參し、天文二年二月十三日印可を蒙り、定光寺に出世し、總持慈眼兩寺に歷住す示寂の年時及世壽欠く、法嗣竹堂利賢の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エサイ　慧濟　二二三五……〔曹洞宗〕遠江一雲院の禪僧なり、慧濟字は川僧三河國の人俗姓不詳、花藏寺に投して出家し、學內外を綜ふ、後言外の旨を慕ひ、洞壽寺貞巖に謁す、貞巖大に之を異とし、命して侍司に居らしむ、師力を盡して參請し、遂に旨訣を得たり、巖乃ち命して其席を嗣がしむ、尋て一雲院に遷り、總持寺に昇る、山門に至り曰く、未だ一雲を離れす、已に諸嶽に登る、と是れより名聲顯れ、美濃の國守安仲、常陸の國守聖古、加賀の國守了巖居士、三河の國守劫山居士、皆師資の禮を以て禪要を問ふ、寛正元年越前の龍澤寺に赴き、明年事を謝して一雲院に歸る、尾張の乾坤院は嗣子逆翁菴を結ふの地にして、師を請て第一祖と爲す、文明七年七月九日寂す、後柏原帝大永四年に諡を法覺佛慧禪師と賜ふ、(日本洞上聯燈錄)

エシ　慧師　(一三三三)〔三論宗〕祖慧灌の弟子なり、慧師元は高麗の人なり、歸化して鞍部氏となる、慧灌に師事し三論を受け、天武天皇白鳳二年三月僧正に任せらる、示寂の年時缺く、(僧綱補任)

〔考〕三國佛法傳通緣起には大化二年に僧正に任せらるとあれども、今は僧綱補任に從ふ、

エシ　惠至　(一三〇五)〔三論宗〕祖慧灌の弟子なり、惠至孝德天皇の初め十師の一に選はる、示寂の年時缺く(日本書紀)

エシ　惠資　(一二八九)〔三論宗〕奈良の學問僧なり、惠資は舒明天皇の朝に、慧隱の講席に列す、(日本書紀)

エジ　惠慈　一二八二……〔……〕大和法興寺の僧なり、惠慈推古天皇三年五月高麗より來る、同四年に法興寺（後に元興寺と稱す）の成るに當り、慧聰と共に請せられて同寺に留り、佛敎を弘演す、二僧は三寶の棟梁と稱せられ、就中惠慈は廐戸皇子の師事し給ふところなり、同二十三年十一月高麗に歸り、廐戸皇子の製作に係る法華經疏を其國に流通せり、同廿九年皇子の薨去したまふを聞きて、大に悲痛し、齋會を設け、其翌年二月五日高麗に寂したりといふ、（日本書紀、法王帝說、元亨釋書）

エジツ　惠實（二三七六）〔眞宗〕山城圓德寺の僧なり、惠實は雪鼎と號し、一に玉幹と號す、詩を以て名あり、著作空華菴集あり、（日本詩史、日本詩選）

〔考〕　惠實は享保頃の人なるべし

エシン　慧信（一八二二）〔眞言宗〕大和興福寺の僧なり、慧信は藤原忠通の子、母は與務の大守藤原基信の女なり、少にして興福寺玄覺僧正に隨ひて落髮受業し、稍長して東大寺の戒壇に登り、息慈戒を受く、法相學を究め、瑜伽の法を持す、一乘院に住して大僧正に任し、兼ねて法務を司とる、康和二年再ひ興福寺を管す、尋きて法勝寺の寺務を領し、金峰山の檢校となる、應保元年夏秋の交勅を奉して雨を祈り驗ありて、優賞を賜ふ、（本朝高僧傳）

エシンニ　慧信尼　一八四五―一九二三〔眞宗〕開祖親鸞上人の配なり、慧信尼は始め玉日姬と云ふ、月輪關白九條兼實の第七女なり、文治二年京師に生る、建仁元年十八歲にして法然上人の弟子善信、即ち眞宗開祖親鸞の配となり、元久元年十月範意を生む、範意は後に印信僧都と稱す、元久元年親鸞越後國府に流さるゝに方り、玉日姬は京師に在り、幾もなく病死すと傳ふ、然るに實は假に兵部大輔三善爲敎の女となりて越後國に下り、親鸞に從ふ、建曆元年親鸞勅免を蒙り、信濃に入り、角間に滯留す、同二年十二月二日玉日姬角間に於て昌姬を生む、姬は後に小黑女房と稱す、建保元年常陸に赴き、親鸞に從ふ、三年十一月三日常陸稻田に於て明信を生む、後に信蓮房と稱し、父の化導を助成せり、同五年六月十一日善鸞を生む、承久元年八月十二日有房を生む、後に益方入道道性と稱す、同三年四月二十九日嵯峨姬を生む、姬は後に高野尼と稱す、貞應元年十二月十八日彌女を生む、女は後に覺信尼と稱す、貞永元年親鸞に就いて度を受け、法名慧信尼と云ふ、嘉禎元年親鸞京師に皈り、慧信尼は稻田坊に留り、一同の諸弟子を統率して法門の弘通を事とす、弘長二年十一月廿八日親鸞京師に寂せる後、尙ほ專ら親鸞上人の遺訓を遵守し、法門の弘通を事とし、同三年九月

慧信尼　七十八歲

エ（慧、惠）シ

一門の高弟敎養に遺言し、九月十八日稻田坊に寂す、壽七十九なり、大古山木崎臺に葬る、諡七日に至り、如信上人の意により遺骨を分ちて京師の彌女に送り、深草に葬る、（高田正統傳、眞宗興隆緣起）

〔考〕古來玉日慧信を別人となし、慧信尼を以て親鸞の後配なりとなす、然れとも今は眞宗興隆緣起に、光闡房反古裏等に依りて考證せるものに依り、玉日慧信尼を一人となす、尙ほ親鸞上人の傳を參照すべし、

エシン　慧新（一三九六）〔戒律宗〕の大和大安寺の高僧なり、慧新俗姓缺く、道璐の高弟なり、大安寺に在りて疏鈔を講敷す、（本朝高僧傳）

エシン　惠心　ゲンシン源信を見よ、

エジン　慧深　一九三〇……〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、慧深は和泉大鳥郡の人、仁和寺覺法親王に師事して、兩部の密灌を受け、櫻池院に住す、師密典を覽て苦學兩眼の明を失す、文永五年合山議して檢校に補す、時人盲檢校と稱す、同七年六月六日寂す壽缺く（本朝高僧傳、高野春秋）

エジン　慧深　一九三〇……ケンジョ兼助を見よ、

エジン　惠尋（一九三八）〔淨土宗〕山城光明寺第三代なり、惠尋字は求道、何の許の人たるや詳ならず、始め比叡山に住し、後黑谷の源智に師事し淨土の宗要を受け、黑谷なる、紫雲山光明寺に擢られ第三世となる、文永弘安の比、天台宗の律學悉く廢亡す故を以て神藏寺の傳信、法勝寺の惠鎭、元興寺の惟賢、西山の道空、理圓等皆師に依て圓戒を流傳す、德望最も高し、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

エジヤク　慧寂　二四二二……〔眞宗〕江戶蹈成寺の僧なり、慧寂字は大然、號は曇華、詩文を以て名あり寶曆十二年寂す、（江戶名家墓所一覽）

エシユー　惠秀　二三六九　二三四六　〔淨土宗〕攝津見性寺の僧なり、惠秀號は信譽、初め鎭西の善導寺に住し、後攝津桑津の見性寺に住す、博學にして智行兼備る、貞享三年三月疾あり、弟子に告けて曰く、我か疾甚革まる、這回滅を取らんこと必せり、仍て阿彌陀尊像を病牀に安置し、別時念佛を修す、命終の時奇瑞數ふへからす、即ち貞享三年四月五日なり、壽七十八、（續日本高僧傳）

エジユー　慧什　サイチヨー齊朝を見よ、

エジユー　慧什　シユークワン宗寬を見よ、

エシユン　慧瑃（一九三八）〔臨濟宗〕攝津普門寺の禪僧なり、慧瑃字は玉溪、聖一國師の下に記莂を拜す、普門寺に住す、示寂の年時缺く、門下無夢淸禪師慧瑃の頂相を携へて元に渡り、徑山の古鼎銘禪師に讃を請ふ、銘禪師讃を作り、其德を稱揚せり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エシユンニ　慧春尼（二〇七二）〔曹洞宗〕相模小田原最乘寺の尼なり、慧春尼俗姓は藤原氏、相模糟谷の人にして、了菴和尚の妹なり、容姿絕群なりしも俗に處するを厭ひ、年三十を過きて兄了菴に就きて度を求む、了菴曰く、夫れ出家は大丈夫の事なり、兒女輩は立ち難くして流れ易し、容易に女人を度して法門を汚辱するもの多し、と、尼默然として退き、火爐に就きて鐵箸を燒き、面上に烙すること縱橫、再ひ進みて度を求む、了菴已むを得すして剃度す、尼勇猛に參禪

し、果して法源に徹し、許可を蒙むる、一日了菴擧して曰く、僧巴陵に問ふに祖意と教意と同か別かを以てせしに、巴陵答へて鷄は寒くして樹に上り、鴨は寒くして水に下るといへり、尼一轉語せよ、乃ち尼曰く、賢臣は二君に事へす、貞女は二夫に見えず、と、了菴之を肯す、是よりして機辯無礙なり、當時鎌倉の瑞鹿山圓覺寺常に大衆一千人を滿たす、龍象雜群す諸方其門に登るを憚る、了菴瑞鹿山に使を發す、衆皆之を難す、尼曰く我命を奉して使すべし、と、乃ち瑞鹿山に登る、彼大衆既に尼の機鋒當り難きを知り、當に不意に出て、其鋒を挫折せんとす、尼の階を拾ひて進むに及ひ、一僧あり突出し、手を以て裳を掲け、陰莖を怒らし、逆立して曰く、老僧か物三尺と、尼亦裳を褰て、陰門を擘開し曰く、尼か物底無し、と、一僧恐れて罷む、遂に函丈に上る、坐定りて堂頭侍者を顧みて曰く、茶を點し來れ、侍者茶を澡盤に點し來りて尼に與ふ、尼轉して堂頭に奉して曰く、此はこれ和尚常用底の茶盞、請ふ和尚喫せよ、堂頭答ふること能はす、尼の名之より振ふ、尼形骸を土木にすと雖も、尚ほ容貌人を動かすものあり、一僧密に其情を啓きて懇に其欲を遂けんことを求む、尼之に告けて曰く、易事のみ、願ふに我と汝と共に僧なり、宜しく交會は尋常の處にあらさるへし、只期に臨み難險に阻まれて約を破り來りて我に就くこと能はざるを慮るのみと、僧曰く尼若し我か願を諾せは、湯火と雖も辭せす、況んや其餘をや、一日了菴の上堂に大衆雲集す、尼寸絲を着けす、赤々裸々傲然として衆中に出て、高聲に其僧を召して曰く、汝と約あり速に來りて我に就き、汝か欲を肆にすへし、と、其僧驚き走りて潜かに山を逃るといふ、後、菴を山下に營み往來を接待す、晩年薪を最乘寺の三門前なる盤石上に置きて柴棚を作り、自ら火を秉りて火焰裏に入定す、了菴來りて問うて曰く、尼よ熱きか、尼答ふ、冷熱は生道人の知る所にあらす、と、云ひ終りて寂す、骨を收めて攝取菴に搭す、最乘寺堂前火定石ありて今猶ほ存すといふ、（日本洞上聯燈錄）

エジユン　慧順　……二三〇〇　〔淨土宗〕筑前少林寺の開山なり、慧順は秀蓮社長譽と號す、下總香取郡の人其俗姓詳かならず、法を河越感譽に嗣き、筑前福岡少林寺を開く、寛永十七年十月二十日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

エジヨ　惠助（一九六八）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、惠助は持明院の子、正安二年八月四日出家し、延慶三年十一月廿六日受戒す、寂年及ひ壽欽く、（三井續灯記）

エシヨー　慧勝（一四三〇）〔三論宗〕大和大安寺の僧なり、慧勝は大和の大安寺に居り、衆と共に學習し、常に法華を誦す、寶龜年中遊方して近江の御上山に上り、法華を持誦す、後其終年を知らす、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エシヨー　慧勝（……）〔……〕大和延興寺の僧なり、慧勝は大和延興寺に在りて浴室を司とる其詳傳なし、（本朝高僧傳）

エシヨー　惠昌　二三四一　二三〇九　〔淨土宗〕近江正會寺の僧なり、惠昌字は圓融と云ふ、西蓮社東譽と稱す、俗姓は八木氏、近江國彥根の人なり、二十歲にして同所宗安寺に入り出家す、後江戶に至り、增上寺源譽存應傳通院了的に歷事して宗學を修め錦織正念寺に住し盛に法門を弘通す、慶安二年六月十三

エ（慧、惠）シ

日寂す、壽六十九歲、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

エシヨー 惠淸(一六七二) 鎭西の醫僧あり、惠淸は宋の僧なりしが、皈化して鎭西に居り、醫を善くす、長和三年藤原淸賢按察納言となり、師をして砂金千兩を齎し、宋に往きて治眼の方を求めしむ、寂年壽缺く、(皇國名醫傳)

エシヨー 慧照(……) 〔曹洞宗〕上總眞如寺の禪僧なり、慧照字は照應、上總の人、陳叟明遵に師事して眞訣を受け、洞泉寺にまとなり、眞如寺に移る、寂年及ひ壽缺く(日本洞上聯燈錄)

エシヨー 惠照　ニチトー日透を見よ、

エシヨー 惠照　カクシヨー赫照を見よ、

エシヨー 慧性　ニチシン日眞を見よ、

エジヨー 慧成(二一五一) 〔曹洞宗〕三河長岡寺第二代なり、慧成字は春岡、盧嶽等都に師事して其法を嗣き、辭して諸方に遊ひ、參河大窪に菴居す、菴は後に寺となり長岡寺と稱す、即ち盧嶽を奉して開山となし、自ら二世に居る、次に總持寺に出世し、延德三年遠江の大洞寺を主とる、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

エジヨー 慧常(一四一三) 〔戒律宗〕祖鑑眞和上の弟子なり、慧常は唐の人、鑑眞に師事し、天平勝寶五年に和上に從ひて來朝し和上の戒律弘通の敎化を助く示寂年時缺く、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

エジヨー 慧定(二五〇……) 〔眞宗〕筑後荒木村淨光寺の住持なり、慧定一に慧成に作る、案司となりて文政七年より高倉學寮に彌陀偈經、敎觀綱宗、安議還源觀五事、毘婆娑論を講し、天保九年十月二日(一に三日)擬講となり、十一年成唯識論を講し、十三年二月二十三日寂す、(高倉學寮講者列傳稿本)

エシヨーイン 慧性院　ニチユ日受を見よ、

エスー 慧崇(二〇二五) 〔曹洞宗〕能登洞谷寺の禪僧なり、慧崇字は無等、總持寺の峨山紹碩に參し旨を得たり、洞谷寺に出世し又光禪寺を開く、某年崇法嗣天菴禪謂の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エスー 慧崇(一九二三―二〇〇六) 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、慧崇字は白雲、下野の人法光禪師の法嗣となる、初め圓覺寺に住し、後建長寺に遷る、晚年観史菴に退休す、貞和二年十月晦日病なく寂す、壽八十四、遺偈あり、人間逆旅、來往如織、久客卽今歸去來、淸風明月與無極、勅諡佛頂禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エセ 惠施(一三六一……〔……〕)入唐學問僧なり、惠施は俗姓小豆氏、孝德天皇白雉四年五月道嚴道通道光等と共に唐に航し、後歸朝し、文武天皇二年三月十八日僧正に任せらる、大寶元年に寂す、(日本書紀、續日本紀、僧綱補任、七大寺年表)

エセン 惠先(一二八三)〔……〕入唐學問僧なり、惠先入唐年時詳ならざるも、推古天皇三十一年七月新羅大使智洗爾に隨ひ、惠齊、幷に醫惠日福因等と共に歸朝す、事蹟缺く、(日本書紀、本朝高僧傳)

エセンニ 惠仙尼(二二五五―二三〇四) 〔臨濟宗〕京師大聖寺の尼なり、惠仙尼は後陽成天皇第四の皇女、母は中和門院文祿四年に生る、慶長七年九月十九日大聖寺に入りて得度す、寛永元年職

を辭して還俗し、大聖寺東側に居る、因て東御所と稱す、正保元年八月十九日薨す、壽五十、大歡喜寺に葬り、天祥院宮と號す、（皇胤紹運錄）

エゼンニ　惠善尼（一二五〇）〔……〕大和櫻井寺の尼なり、惠善尼は錦織壺の子、敏達帝十三年善信禪藏と共に出家す、蘇我馬子寺を營み、三尼を迎へて供養す、崇峻天皇の元年馬子に請ひて求法の爲め百濟に赴き、三年春歸朝して櫻井寺に住す、寂年壽缺く、（日本書紀、元亨釋書）

エソー　慧聰（一二五五）〔……〕大和法興寺の僧なり、慧聰は百濟の人推古天皇三年に來り、高麗の歸化僧惠慈と共に法興寺に住し、三寶の棟梁と稱せらる、示寂の年時缺く、（日本書紀）

〔考〕元亨釋書本朝高僧傳には崇峻天皇元年三月に來朝すとあり、これは日本書紀の同年の條に百濟より惠摠令斤惠寔等の來朝を記す、惠摠慧聰を同人となせるものなり、されども書紀は前後別人となせるなり、今は姑く書紀の文面に從ふ、

エソー　惠琮（二四四九）〔眞宗〕大阪西光寺の住持なり、惠琮はもと越後の產にして本立院道粹の直弟たり、別號を頫翁と稱し、或は越翁といふ、博學多識にして三論に名あり、寛政年間山命を奉して代講の任に當たること兩度に及ふ、初め桃花坊の紹介にて西光寺に住し、後三業惑亂の頃、閱閣對話の和融を計ひ、又山命を奉し美濃大垣の緣覺寺に下りし時、勸諭兩端に跨かりしにや、一旦關東の糾察に就き下向せりと雖も、不日にして歸國を免されしとそ、著作、般舟讃講錄三卷、般舟讃科文一卷あり、（淸流紀談、本願寺派學事史）

エゾー　慧增（……）〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり、慧增は醍醐寺に住して法華を持す、二十八品皆よく誦徹す、只方便品偈中の二字記する能はず、自ら謂らく定めて是れ宿礙ならむ、と、乃ち大和長谷寺に詣し斷食祈禱す、七日の夜に至り、夢に龐眉の僧告げて曰ふ、汝前生は播磨賀茂郡の人、曾て法華を讀み、嚴冬爐に向て讀誦す、火迸散し、誤りて二字を燒く、汝補はずして死す、是に因りて方便品偈中の二字記する能はざるなり、今彼地に其經尙ほ存し、汝が前生中の父母も亦存す、汝當に速に往きて經を補ひ、且つ父母に遭ふべし、云云、慧增即ち賀茂に往て一家に宿す、家主其客を見、聲を聞きて問ひて曰ふ、汝何人ぞ、恍として我子に似たり、と、夫妻二人熟視して訝る、慧增事情を語る父母悲喜して經を出し驗するに果して二字を失す、慧增感嘆し、乃ち書し補ふ、これより前後二世父母四人に孝養を盡したりと云ふ、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

エゾン　慧存（……）〔淨土宗〕信濃靜松寺の僧なり、慧存は定蓮社等譽と號す、傳隨に師事して法を嗣ぎ、信濃靜松寺に主となる、寂年及世壽詳かならず、（淨土總系譜）

エタク　慧澤（……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、慧澤字は希雲と云ふ、金山旭の法孫なる通叟徹に參すること多年、遂に其法を嗣ぎ、京都東福寺に住す、寂年及壽欠く、（延寶傳燈錄）

エタク　慧澤　ニチユー日祐を見よ、

エタツ　慧達（一四一四）〔戒律宗〕祖鑑眞和尙の弟子なり、慧達俗姓缺く、唐に生れ出家して鑑眞に師事し、天平勝寶六

年に眞和上に隨ひて來朝す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

エタツ 慧達 一四五六 一五三八 〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、慧達俗姓は秦氏、美濃の人なり、藥師寺の仲繼和尙に從ひて法相を受け、初め藥師寺に住し、後、近江比良山に登りて修練するもの久し、文德天皇不豫の時勅を奉して病を禱る、淸和天皇貞觀五年神泉苑に御靈會を營むや、師其導師に擢抜せらる、尋きて僧綱に任せられ、元慶二年八月二日寂す、壽八十三、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エタン 慧湛 （二一六四）〔曹洞宗〕遠江可睡齋の禪僧なり、慧湛字は潛龍、駿河の人、俗姓は林氏、幼にして出家し、諸方に歷參して後、天陽一朝に師事して其印可を付せられ、天陽の寂後席を踵きて遠江可睡齋に主となり、一座十五年其敗頽を興す、晚年退きて菴居し、寂年及壽缺く、法嗣天叟善長の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エタン 慧湛 二〇〇七……〔臨濟宗〕鎌倉壽福寺の禪僧なり、慧湛字は大用京師の人、佛光禪師の法嗣となる、壽福寺に住す、晚年正隆菴を構へて屛居す、貞和三年五月廿五日寂す、遺偈あり、諸佛凡夫、不生不滅、今日天風、庭柏吹折、勅謚靈光禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エタン 惠湛 二三四二 二三九三 〔臨濟宗〕備中寶福寺の住持なり、惠湛字は象海、俗姓は米谷氏、讃岐豐田郡の人なり、早年寶福寺立巖久禪師の下に投し侍童となる、十七歲自ら發憤し誓ひていふ、此生に道業成らすは、他日何を以て群迷を度せんかと、出遊して諸宗匠に歷謁し、參究功を積めり、二十八歲寶福寺に歸へる、同寺の住持鐵堂石禪師危篤なり、師擢てられて住持となる、享保元年三十五歲にして江戶に遊ふ、攝津の路上脚指石に蹶し忽然省覺す、同十四年東福開山忌に衆請により後版となり、選佛道場に坐す、僧錄某師の請により南禪寺に寓すること半夏にして法化盛なり、十七年十月東福寺に結制す、滿堂一千七百餘人なり、十八年六月微恙あり、七月十二日泊然として寂す、壽五十二、臘三十九、寬保三年勅謚佛眼大觀禪師といふ、（續日本高僧傳）

エタン 慧旦 二四五二 二五三〇 〔臨濟宗〕阿波見性寺の禪僧なり、慧旦字は大震阿波の人、十歲德島興源寺大室に投ず、十八歲見性寺に留る、後出遊して隱山、卓洲、行應、太元に歷事し、遂に太元の法を嗣き、見性寺に住す、寺務五十餘年、大に宗風を張る、明治三年八月十七日寂す、壽七十九、

エタン 惠潭（……）〔臨濟宗〕大和吉野山の隱者なり、惠潭は奧州白河の人、坂上氏なり、初め並河義豪（ヨシカタ）と云ふ、世々武家なり、夙に文武の技に達して令名ありしも、世事を厭ふ意禁しかたく、妻を娶らす、男を養ひて家嗣となす、後、家を辭し歌書二卷を携へて行脚し、駿河に至り松蔭寺白隱禪師の弟子に謁して臨濟の宗風を傳へ、京師を經て大和に至り、吉野山中に隱捿し、時々和歌の師なる梅井一室に音信を通す、寂年月日詳ならす、壽六十八、（近世畸人傳）

エタン 慧潭 二四六八 二五五五 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、慧潭字は匡道、號は要津と云ふ、和泉堺の人、俗姓指吸氏、後蘆氏を稱す、文化五年に生る、文政三年十三歲にして大阪高津少林寺月叟の下に投し、月叟の寂する後讓を受けて少林寺に住す、弘化二年三十八歲兵庫祥福寺に住し、明治十年東福

寺に住し一住六年にて辭し、二十六年妙心寺に住す、明治二十八年十月卅一日寂す、壽八十八、

エタン　慧端 二三〇二—二三八一 〔臨濟宗〕信濃正受菴主なり、　慧端字は道鏡、信濃飯山侯松平某の庶子なり、十九歲江戸麻布の東北庵無難禪師に師事し、臨濟の宗風を參究す、後奥州に遊び、虎哉、一源等の諸老に參し、再び麻布に歸り、無難に謁す、無難師を擧げて法席を讓らむとするも、師辭して受けず、信濃飯山城上倉村に隱れ茅茨を結びて正受菴と云ひ自ら採薪汲水の勞に服し、正修正行を事とす、衆に示して曰ふ、夫正念工夫之端的未㆑悟入者、切須㆘見㆓眞正導師㆒決㆗定願心㆖、既得㆓決定㆒去、十二時中四威儀之間須㆘以㆔正念工夫不㆓打失㆒爲㆗第一㆖、云云、佛成道偈「六歲凝㆑神窮苦身、凡愚不㆑識解㆓心眞㆒、明星見了有㆓何事㆒、亘古流今累㆓幾人㆒」「盡㆑巧勞㆑心設㆓化城㆒、六年端坐不㆓輕輕㆒、後來莫㆑認總閑事、今古明星輝㆓五更㆒、」達磨忌「千古儼然相未㆑泯、威風凛凛、祖師神、誰言隻履歸㆑西去、霜染㆓楓林㆒面目新、」隻履西歸幾何年、諸方風色暗寥然、玄冥霜後楓林曉、處處爭㆑朱一撩天、享保六年十月六日平旦遺偈を書し寂す、壽八十、臘六十二、正受菴側に葬る、末後一句、至急離㆑道、言無㆓言言㆒、不㆑道不㆑道、寶曆九年二月白隱鶴禪師法位を追贈し妙心第一座となし、私謚的翁と云ふ、(正受老人崇行錄、續日本高僧傳、近世禪林僧寶傳)

エチン　慧珍 一七七八—一八二九 〔三論宗〕大和大安寺の學僧なり、　慧珍は京都の人、源顯國の子なり、覺樹に從ひて空宗を受け、東南院に住し三論を弘む、久安二年維摩會の講筵に座し、權律師に任す。長寬二年春大安寺に住し、仁安二年權少僧都に任す、師私財を以て東大寺の食堂を修補し、其功により主務に任し、兼ねて法務を司とる、師辭して寛信に讓り嘉應元年夏奏して大安寺を印を解き、上足聖慶に讓り、東南院に退き十月十五日に寂す、壽五十二、(本朝高僧傳)

エチン　慧鎭　エンクワン圓觀を見よ、

エチユー　惠忠 (一四三九)〔法相宗〕奈良藥師寺の學僧なり、　惠忠俗姓不詳、藥師寺に留りて法相を弘む、寶龜三年維摩會講師となる、同十年少僧都に任せらる、(七大寺年表)

エチユー　慧忠 (……)〔三論宗〕大和大安寺の學僧なり、　慧忠俗姓秦氏山背の人なり、大安寺に住し、講論微細に入る、時に智者と稱せらる、性遊化を好み、五畿七道杖鞋殆んど遍し、後七十餘にして寂す、其年時缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

エチユー　慧仲　ニチセン日詮を見よ、

エチヨー　慧潮 二四一九—二四九〇 〔眞宗〕武藏江戸駒込還來寺の住持なり、　慧潮は東本願寺の晉乘院惠忍に師事し、內外の學を受く、後江戸駒込西敎寺中還來寺に住し、西敎寺慧海に道交あり、天保元年五月十六日寂す、壽七十二、

エチヨー　慧澄　チクー癡空を見よ、

エテツ　慧徹 二〇一〇—二〇九〇 〔曹洞宗〕美濃補陀寺の開山なり、　慧徹字は無極、俗姓は藤原氏、武藏兒玉黨の後なり、父嘗て足利義隆に事へしが、國變に値て肥前に移り、遂に永住の地と定む、師觀應元年を以て生れ、十四歲にして日向皇德寺崇著禪師に投して剃髮し、受具の後諸方に遊歷して偏く名宿に參する十餘年、未だ悟ること能はず、越州に赴き、天明和尙

に謁す、時に三十六歳なり、爾來左右に侍すること八年、辭し去りて武藏小山田に菴居す、時に了菴和尚最乘寺に住して法席甚だ盛んなりと聞き、往て拜謁し、參究久しうして印可を受け、命せられて分座說法す、尋で總持寺に出世し、龍泉寺に移り、補陀寺を開く、時に丹波永澤寺主席を虛し師請せられて主となり、盛んに法幢を樹つ、永亨二年十二月二十八日寂す、壽八十一、臘六十八、武藏龍穩寺、上野補陀寺等は皆師の請せられて開山となりし地なり、（日本洞上聯燈錄）

エテツ　慧徹　二一六七……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、慧徹字は汝南、其俗姓生國詳かならず、琴江薰の法嗣なる文溪作に參して印可を受け、明應八年東福寺に住す、永正四年五月二十七日寂す、藕絲軒に塔す、（延寶傳燈錄）

エテツ　慧哲　ニチテー日延を見よ、

エテン　慧天　二二七七……〔淨土宗〕武藏勝願寺第八代なり、慧天は慈智蓮社定譽殼龍と號す、不殘に師事して法を嗣き、鴻巢勝願寺に住す、元和三年十月十六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

エテン　慧天　ニチオー日應を見よ、

エヂン　慧眕　一五六〇……（華嚴宗）大和東大寺の別當なり、惠眕は出家して華嚴を究め、寬平二年三月二十三日東大寺別當に任し、同四年律師となり、昌泰三年二月二十六日寂す、壽缺く、（東大寺別當次第）

エデン　慧傳　二二二〇 二二九五〔淨土宗〕紀伊光恩寺開山なり、慧傳字は禿翁、樂蓮社信譽と號す、俗姓源氏、永祿三年參河松平に生る、十一歲の時大樹寺成譽に謁して薙髮受戒し、其勸めにより武藏川越の蓮馨寺感譽に業を受く、久しからずして感譽寂せしかは、增上寺觀智國師に師事すること十數年、顯密大小畧其淵源を窺ひ、且つ本邦の神道を修む、乃ち所信を實行せんと、諸國に巡行し京師に入りて天皇に謁し、上人號を拜す、去りて伊勢渡會郡山田原に往き、善導寺に住し、源福寺九譽文華上人と道交を結ふ、天正十七年三月十四日文華に從ひ圓頓戒並に布薩戒を受く、明年宮鄉の藥德寺に移り、數ヶ月の後、那賀郡小倉に往き、土豪津田監物建つる所の草廬に居る、四衆靡然として道風を慕ひ雲集す、由來此鄉人多く眞言を信せしが、茲に至りて淨土宗に歸する者千餘戶に及ふ、檀請により菴を增築して寺となし、懷岳山光恩寺と號し、師開山となる、慶長二年去りて粉川の淸見寺の廢を興し、運行寺と改む、又大和宇知郡に龍崎寺を五條に稱念寺を剏め、後吉野西方寺當麻護念院に住す、更に安藝に廣島に禿翁寺を筥崎に信樂寺を石見濱田に禿翁寺を開き、銀山西福寺を再興し、出雲松江に信樂寺を建て、其徒の爲に大原法語を講す、慶長八年禪家論戰を挑み、幕命により信樂寺に會して論筵を開きて決を取り、師大に勝つ、之より道譽益揚る、又伯耆の印敷信樂寺、小路淨土寺、中野信光寺、因幡鳥取信樂寺を建つ、十三年紀伊小倉に歸へり居ること七月、熊野山に登る、請に應して廣瀨大立寺に住す、幡隨意和尚來りて師を訪ふ、師爲に吹上に草菴を結ひて居らしむ、十四年正月知恩院靈巖和尚の請によりて宗祖會の導師となる、元和七年四月十七日大泉寺なる正淸の廟を光恩寺に移し、廟地及ひ湯沐の殿を師に付して冥福を祈らしむ、幕府又鈴丸法蓮寺を建て丶信宿の

エ（慧、惠）テ

處とせしむ、師神道を修めしか故に、屢々郷人の請によりて神祠を建て祭典を司ることあり、藏王權現も亦師の創立するところなり、寛永十二年三月一日寂す、年七十六、臘六十六、塔を光恩寺の西に建つ、（南紀小倉信譽上人傳、鎭流祖傳）

エトン　慧頓　二二七一　〔淨土宗〕信濃芳泉寺第一代なり、慧頓は先蓮社勸譽稱阿と號す、甲斐の人、其俗姓詳ならす、清巖に師事して法を稟け、信濃上田芳泉寺に住し第一世となる、慶長十六年五月二十日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

エトー　慧等　二二七〇　〔曹洞宗〕加賀金剛寺第一代なり、慧等字は覺翁、尾張の人、父は前田大岳居士、即ち菅原道眞の後裔なり、十三歳常樂寺材長春良に從ひて下髮し、出遊して大圓慧展に謁し、梅山和尚所傳の法衣を付せられ、席を踵きて加賀玉龍寺に住す、天正中對馬の刺史前田長種聘して龍淵寺に主たらしむ、後檀越金剛寺を剏め、延きて第一世とす、慶長十五年五月十八日寂す、壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

エトー　慧等　カクオー覺翁を見よ、

エトー　慧鐺　二三五四 二四一一　〔眞宗〕越前太田平乘寺の住持なり、慧鐺は州の演仙寺の次子なり、嘗て金津卞關に就きて修學し、延享三年小經幣帚錄を著はし世に印行す、寛延某年學黌にて小經及ひ論注を講し、寶暦元年十一月十五日寂す、壽五十八、宗主諡して顯明院といふ、能化職にあらすして學講により院諡を賜ふもの此を始となす、著作以上の外四十二對勸辨一卷、雪窗隨筆五卷あり、（本願寺通紀、本願寺派學事史）

エトー　慧燈　二四四二　〔眞宗〕安藝廣島報專坊の學僧なり、慧燈は何許の人なるかを知らず、初め俗家の子にして、深諦院慧雲の寺に傭はれて僕となり、採薪汲水の餘暇に三部經を聞き覺ゆ、院は僧にせんとて其由を告くれは大に喜び、欣然として之に從ひ、剃髮して僧となり、院の伴僧として使はれ居たり、一日院師の不在を時として其室に入りて見られしに讃阿彌陀偈の講錄を認めたり、之を披き覽るに、解義周備、文字も簡潔にして能く其法に契ひ、老成人と雖も及ひ易からさる所あれは他日上京の時之を陳善院僧樸に示されたり、陳善院も一讀大に感服し誡めて曰く、此の如き學才あるものを伴僧に使ふとは足下は才を愛することを知らさる者なり、と、是に於て院大に悟り、歸寺するや否や早速之を檀徒に告け、學資を給し勉學せしむ、然るに其後或る所へ法談に招かれての歸途酒に醉ひて袈裟を遺失しけるが、院之を聞きて師に謂ひて曰く、汝は袈裟を忘れて歸へりたる由、能くこそ首は遺さゝりしぞと師大に感して以爲らく、僧として袈裟を遺失せしは其首を遺せしも同様なりと慚愧の心内に欝し、遂に病を發して沒せり。（學苑談叢）

エトーイン　慧燈院　リョーゲン令玄を見よ、

エトーダイシ　慧燈大師　ケンジュ兼壽を見よ、

エナン　惠南　ニンガイ忍鎧を見よ、

エニチ　慧日　一九三二 二〇〇〇　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、慧日號は東明、俗姓沈氏、宋の明州定海縣の人、九歳奉化の大同寺に投し、十三歳祝髮し、十七歳受具す、天寧寺直翁舉に師事し、參究功あり、印記を受く、天童靈隱萬壽蔣山に歷遊し、尋て姑蘇の承天寺に留り、藏鑰を掌る、また明堂の白

雲寺に開法す、延慶元年(元の至大元年)我書聘至る、即ち翌二年東航す、時に三十八歲なり、相模に下り、北條貞時に迎へられて禪興寺に住す、貞時弟子の禮を執り、崇信甚だ篤し、住持七年法化盛なり、寺の西に白雲菴を營みて退休の所とす、而も幕府の請切なるまゝに、建長、萬壽、東勝、壽福の諸寺に歷住すること三十年に垂むとす、建武二年後醍醐天皇の勅により京師に上る、歷應三年再び東下し、建長寺に住す、夏六月微恙あり、菴中に退休す、十月朔疾篤し、數通の遺書を作り、四日卯の刻に寂す、壽六十九、臘五十三、七處十一會の語錄あり、遺偈に曰ふ、六十九年、有レ生有レ死、古渡雲收、青山在レ水、門人本菴に全身を瘞め大明塔を起す、(塔銘、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄)

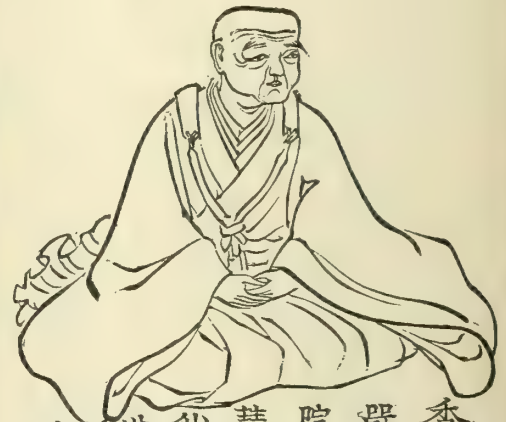
〔考〕慧日の時代臨濟曹洞對立の狀なければ、慧日は曹洞宗の法脈を傳持せるも、常に臨濟宗の寺に住すると其宗の諸僧に同じ、

エニン　慧仁　二一八七……〔淨土宗〕相模報土寺の開山なり、慧仁は觀蓮社芳譽と號す、其鄉貫詳かならす、觀譽上人に師事して淨土敎を學ひ、光明寺に住す、後相摸浦川鄉に報土寺を開く、大永七年八月二十七日寂す、(淨土總系譜)

エニン　惠忍　二三五三／二四四三〔眞宗〕羽後米澤長命寺の十代なり、惠忍號は皆乘院といふ、出羽の人なり、東本願寺末なる米澤長命寺の第十代の住持となり、內外の學に通し、就中國學に精し、寶曆二年退隱し、天明三年九月十九日寂す、壽九十一、弟子慧潮あり、著作二河白道長歌一卷刋行せり、

エニン　慧任　二三二五／二四〇二〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十二代なり、　慧任字は亮辯、父は小島氏、母は河内の田邊氏、寛文五年を以て攝津大阪に生る、延寶六年十四歲にして天滿の寶珠院にて剃髮し、七年四度の瑜珈行を修し、翌年三月灌頂を受く、秋八月西藏院賴雅に從ひて豐山に登り、天和元年覺如僧正に謁して講莚に交はる、元祿十五年三日傳法大阿闍梨となり、寶永七年五月隆慶僧正の命に依り喜多坊に住し、秋九月六日傳法會竪者に選はる、正德二年三月醍醐山に登り、報恩院寛順大僧正に依り、親しく兩部の秘奧及び諸尊の密軌を受く、仝五年七月武藏中野寶仙寺を主どり、享保二年三月護國寺快意大僧正に就きて傳法院流を受く、同七年十二月幕府の命を蒙りて彌勒寺の席に補し、仝十五年四月十一日亦護國寺に轉住を命せらる、十七年春鎌倉の智光を請して西院の奧秘を傳ふ、十九年九月特に豐山の席に補せられ、十二月幕府の執奏に依り權僧正に任ず、元文元年三月二十八日僧正に轉ず、仝五年秋與喜寺に退閑し、寛保二年五月二十二日寂す、壽七十八、臘六十五、(豐山傳通記追加、勸學院記)

エネン　慧然　二三五三／二四二四〔眞宗〕和泉堺專稱寺第八代なり、慧然一名は義融、號を海東又は華藏菴といふ、元祿六年和泉專稱寺に生る、幼にして聰穎なり、時の儒宗と交はり、弱冠にして京都に遊學し、慧空の門下に列し深く一宗の要義を究め、尙ほ華天の學に通し、三十七歲宗主光性上人の命を受け、東本願寺の講師職となり、香嚴院と稱す、從來枳殼邸の一隅なる學舍狹隘を告くるを以て本山に請ひ、高倉通魚棚上る處に學寮の再興を企て、寶曆五年に成る、同年の坐夏に顯深義記を講し、翌年の坐夏に選擇集を講す、以後累年文類聚鈔

大無量壽經、觀無量壽經、三帖和讃を講す、講師職にあること三十五年、明和元年正月十五日京都に於て寂す、壽七十二、著作顯眞義記四巻あり、（慧然傳、高倉學寮講者列傳稿本）

香嚴院慧然講師

エハク　慧白　二五〇三……〔眞宗〕能登宿村西照寺の住持なり、慧白は心書院と號す、寮司となりて文政十三年、高倉學寮に法華入疏を講し、天保九年十月二日（一に三日）擬講に任じ十二年夏秋の交講演法華儀稱讃淨土經を講し、十四年十月六日寂す、（高倉學寮講者列傳稿本）

エベン　惠便（一二四四）〔……〕播摩の僧なり、惠便は高麗の人なり、我國に皈化す、敏達天皇の朝、一たび佛敎排擊せられたれば俗に還り播摩に潜む、同十三年九月に、百濟より鹿深臣彌勒石像一軀、佐伯連佛像一軀を齎持し來る、蘇我馬子此二軀を請ひ得て祀らんとし、乃ち司馬達等、池邊氷田を四方に使して、修業者を索め、適播摩にて惠便を得、請し來りて導師となす、師は司馬達等の女島等を度し、二軀の靈像に奉仕せしむ、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書）

エベン　慧辯　二四二八……〔眞宗〕伊勢國富田龍泉寺の住持なり、慧辯號は離有無院と云ふ、眞宗高田派なる伊勢富田の龍泉寺に住し、學譽高し、明和五年六月廿六日寂す、壽缺く、著作淨土大名目集註等數部あり、

エホー　慧芳　二二〇六……〔曹洞宗〕加賀玉龍寺の開山なり、慧芳字は桂巖、常樂寺喜叟周津に參して旨を得たり、尾張大守源廣居士請して常樂寺に住せしむ、天文年中郡主前田氏玉龍寺を建て師其開山となる、天文十五年八月二十八日寂す、壽欠く、法嗣材長春良の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エボー　慧昉（二四二八）〔臨濟宗〕寶福寺の禪僧なり、慧昉字は大休、山城國愛宕郡北岩倉村の人なり、六歳郡の木野村正福菴竺傳應の下に沙彌となる、十六歳東福寺象海湛を問ひて掛搭し侍者となる、平素工夫を事として、茫然自失せることあり、夢中侍者と稱せらる、二十三歳日向に下り、古月材禪師を問ひ所見を呈す、二十七歳紀伊熊野に行脚し、偶駿河白隱鶴の宗風を聞きて東下し、一謁して深く心服し、掛搭を乞ふも許されず、乃ち隣里に假居し、漸次に近附して敎示を受く、遂に許されて侍者となり、參究功あり、法印を傳ふ井山に住して法化盛なり、六十歳疾あり大雲雪に祖系を付し、幾もなく示寂す、某年六月三日なり、壽六十、法臘五十五、嗣法者十一人なり、（續日本高僧傳、近世禪林僧寶傳）

エミ　慧彌（一二六九）〔……〕大和元興寺の僧なり、慧彌は推古天皇十七年四月道欣等と共に肥後葦北津に漂着す、勅して元興寺に留居せしむ、事蹟詳ならず、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

エミヨー　慧明　一九九七　二〇七一〔曹洞宗〕相模最乘寺の開山なり、慧明字は了菴俗姓は藤原氏相模國糟谷の人、建長寺不聞禪師に業を受け後偏く諸方を歴遊す、通幻禪師永澤寺に在て洞上の宗旨を盛唱すと聞き、遂に往て禮謁す、其下に侍すること多年、後師石屋和尙と東西に在て化を並ふ、學者福昌寺に遊ばされば必ず最乘寺に上る、晩年應接に倦て山を去ること三里餘の地に小院を結て住す、應永十八年三月二十七日寂す、壽七十五歲、（日本洞上聯燈錄）

エミヨー　慧明　ニチトー日燈を見よ、

エミヨー　慧妙　一三四〇〔……〕大和百濟寺の僧なり、慧妙は推古天皇の末年に唐に渡り、後歸朝す、孝德天皇の大化元年勅を拜して百濟寺寺主となる、天武天皇九年十一月病に臥す、勅して草壁皇子を遣はし慰問せしめ給ふ、同月寂す、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

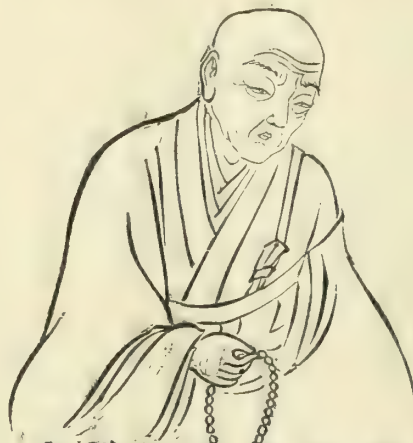
〔考〕本朝高僧傳に、入唐嘉祥寺吉藏に學びたりとあれど、詳ならず、

エミヨーイン　慧明院　ニチリヨー日了を見よ

エミヨー　慧猛　二二七四　二三三五〔眞言律宗〕河內野中寺の律僧なり、慧猛字は慈忍、河內秦村の人、秦河勝二十八代の孫なり、父の名は宗伯、母は濱氏の出なり、少にして家塾に就きて詩を學ひ、出家を思へども兩親許さす、常に講席に周遊し、諸經論を聽き、遂に素志を遂けて出離し、年二十六歲眞空阿に從ひて下髮染衣し、雲龍院如周律師に侍して經疏を硏き、久くして槇尾山の心王院に往き、戒律に意を傾け、寬永十八年春懺悔法を修して好相を得、遂に通受の法を以て自誓受具す、正保二年に十八契印を稟け、兩部の大法を修し、屢々靈異を感す、不動護摩の法を修し字輪觀に入る、三年槇尾の寺衆の請により嵓松院に住し、寺規を擴張して大に戒律を唱ふ、同年夏雨を祈る、承應二年求聞持の法を修し、相次きて此法を薰修すること九度、皆靈應あり、明曆三年西大寺に到りて高喜觀に從ひ、傳法灌頂を稟け、興正菩薩所傳の祕璽及び松橋流の密印を付せられ、弘法大師の書きし不動明王の像を受く、戒疏を問ひ大に請益す、寺を距る數十步の地に禪定古寺あり、平崇上人の創立に係る、村民淨財を喜捨して師の駐錫の所とす、師乃ち一廬を搆へ居る、寬文九年政賢英の言に從ひ、河內の野中寺の廢を與さんと計る、十年槇尾の寺衆に嵓松院結界の事を以てせしむ、衆議多し、故に去りて野中寺に居る、寺は只風雨を凌くに足るのみ、師中興の意あり、佛殿僧房構成して舊に復す、十三年秋圭盟の請に遵ひて洛西の桂宮院に結界し、四分衆法の布薩を行ふ、延寶三年正月病に遘ひ、三月十五日布薩を行ひ、翌日遺誡數條を書して上足慈門光に命して席を嗣かしめ、二十一日初更頭北面西にして滅を示す、壽六十二、臘三十三、全身を寺の西北隅に葬むり、塔を建て常寂といふ、著作三聚戒釋要、六物圖略釋、敎誡律儀鈔等若干卷あり、（律苑僧寶傳、本朝高僧傳）

エモク　慧牧　ゲンロ元廬を見よ、

エリン　慧琳　二三七五　二四四九〔眞宗〕伊勢阿波西弘寺の住持なり、慧琳字は懷玉、（一に抱玉）といひ、號は龜陵と云ひ別に佛乘坊と稱す、正德五年五月一日伊勢安濃郡河內村願了寺に生る、父は知節といひ、母は前田氏の出なり、甫めて九歲にして得

慶し、慧空といひ、後慧琳と改む、幼より京に遊ひ、未た弱冠ならすして諸方の學匠と交を結ひ、名聲を揚く時に和泉堺の慧然内外の兩典に達す、師之に就きて一宗の要義及ひ華嚴天台の蘊奥を究む、慧然講師となるに及ひ師代りて楞嚴經を京都に講し、尋きて副講となる、時に年二十九、翌年慧然と共に學寮の再興を企て、幾もなく功成る、明和二年五月二十五日慧然に代りて講師となり、理綱院と號し、(一に之を論とす)、特に堂班内陣に進む、此前後寶曆五年より天明七年に至るまて師の講するところは、三帖和讃、圓覺經集註、四教儀集註、十不二門指要抄、顯深義記、入出二門偈、起信論義記、文類聚鈔、四帖疏、愚禿鈔、三帖和讃、阿彌陀經、大經、選擇集、正信偈、安樂集、往生要集等なり、寛政元年五月廿五日同國飯野郡阿曾村西弘寺に寂す、著作記事珠六卷眞宗龜鑑一卷等壽七十五、(碑文、高倉學寮講者列傳稿本)

理綱院慧琳講師

エユー　慧友（二三七八）〔眞宗〕　大阪天滿三光寺の住持なり、　慧友字は了諦といひ、父は愚然と稱す、某年三光寺に居り、享保三年二月(一に正德四年九月)正信偈集解四卷を著す、九年秋寂す寂後門人刪集解を修して世に印布す、同胞了慶も亦學を以て聞こゆ、(本願寺通紀、本願寺派學事史)

エリン　慧隣（一三〇五）〔……〕大和元興寺の僧なり、慧隣は元興寺に住す、孝德天皇の朝十師の一に列す、示寂の年時缺く、(日本書紀、本朝高僧傳)

〔考〕　本朝高僧傳に入唐嘉祥寺吉藏に學び、歸朝の後白鳳二年に僧正となるとあれども疑はし、

エリン　慧輪（一三三三）〔三論宗〕祖慧灌の弟子なり、慧輪は俗姓大原氏、慧師と共に慧灌に師事して三論を受く、天武天皇白鳳二年三月僧正に任せらる、示寂の年時缺く、(僧綱補任)

〔考〕　三國佛法傳通緣起には大化二年に慧灌が三論講演の勸賞に師資共に僧正に任せらるとあれとも、今は僧綱補任に從ふ、

エリン　慧輪一九〇八／一九八一〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、慧輪字は雲屋、京の人なり、出家して諸方に遊歴し、後、祖元元に師事し法嗣となり、圓覺寺に出世し、參徒其下に集る、晩年長壽院を剏して退休し、元亨元年五月十日偈を書し寂す、壽七十四、勅諡佛地禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エリン　惠輪　チエン智淵を見よ、

エリン　惠琳　ホーリン法霖を見よ、

エリン　慧麟　ソーオン僧溫を見よ、

エリン　慧林　シヨーキ性機を見よ、

エリユー 慧流 （……）〔淨土宗〕信濃芳泉寺第二代なり、慧流は歡蓮社泉譽向榮と號す、信濃佐久郡の人、其俗姓詳かならず、慧頓に師事して法を嗣ぎ、芳泉寺に主となる、後上野高崎に退隱し、某年寂す、其年時並に壽欠く、（淨土總系譜）

エリユー 惠隆 ニンキヨー仁慶を見よ、

エリヨー 慧亮 一四四五 一五一九 〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、慧亮は信濃水內縣の人なり、少より比叡山に登りて出家得度し、天長六年夏止觀院に義眞座主に從ひて菩薩の大戒を受け、圓澄和尚に就きて顯密の法を學ふ、慈覺大師を拜して日に誘掖を受け益々深奧を究む、衆請に應して同山西塔院に住し、十禪師大法師位に任す、師常に延暦寺に年度者二人を置き法華維摩金光明大安樂經を試みて神賀春日の二神に供せんと欲す、依りて貞觀元年秋上表して之を請ひ、翌年三月下旬比叡山西塔の寶幢院に之を試度し、後弘仁十四年の官符に準して大戒を受けしめ先師の式に遵ひ、十年山を出てがらんと上奏して許可せらる、後洛東の妙法院に移り、貞觀元年五月二十六日病を得て寂す、壽五十九、（本朝高僧傳）

エリヨー 慧亮 二四三四 …… 〔眞宗〕江戸櫻田澄泉寺の住持なり、慧亮字は逹空、號は涌蓮、別に嵯峨居士といふ、伊勢國黑田の人、淨光寺誓海の弟なり、江戸櫻田の澄泉寺に住す、一日高僧傳を讀みて感發し、一封を留めて寺を逃れ出て、京師に上り、生嶋某の亭に潛み、後嵯峨の獅子巖の下に隱捿し、冷泉民部卿爲村を問うて和歌を學ひ、後爲村の入道してより、道交甚た深し、平生一物を蓄へす、念佛誦經の暇には、唯和歌を詠して樂めり、嘗て爲村嵯峨へ尋ねたるに、師菴にあらさりしかは、「住かたは都の西ときゝなから霞へたてゝ春もへにけり」の一首を留めて歸る、師後和歌五首を送れり、其一に、「春かすみへたてこし身のおこたりし今さらくやし君にとはれて」、安永三年七月廿八日寂す、歌集を獅子巖集といふ、秀作多し故鄕の母のもとへゆく人あるとき「忘れてもねさめするとはかたるな子は老ぬると親のおどろく」、美人の髑髏を見る繪の賛、「朝夕の鏡も今は手にとらしこれをまことのすかたみにして」、ぬす人いりてわつかにもてる物をとりていにけるとき、「すてし身はやふれ衣に麻衾たることとしれとのこしおきけん」、無題、「有明の月しつかなる庭の面にをり〳〵落る木のはをそきく」、皆其人品を窺ふべし、（近世畸人傳、眞岡湛海氏返信）

エリヨー 慧良（一四一四）〔戒律宗〕祖鑑眞和上の弟子なり、慧良は唐に生れ、出家して鑑眞に師事す、我朝天平勝寶六年に鑑眞に隨ひて來朝す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

エエー 懷英 二三八七 …… 〔眞言宗〕紀伊高野山の撿挍なり、懷英字は春潮房、筑後久留米の人なり、十四歳久留米の祇園寺快應法印に度を受け、寛文三年の春高野山に登り、發先院秀榮に師事し、尋て蓮華三昧院秀翁に師事し、法相を研究し、後南部に出遊し、益蘊奧を極む、內外の學成り、高野山に還り、一山の樞要に當る、元祿の間學侶行人の評論あるに際し、屢江戸に出て周旋奔走す、貞享元年正月門主宥算の勸めにより、高野山の歷史の編修を志し、諸事繁忙の間にも材料の拾收を力む、享保三年十二月隆恭の後を繼いて第二百七十八世撿

挍となる、同十高野山の歴史稿を畢り、高野春秋編年輯錄と號し、一部廿一卷あり、後修禪院に退隱す、享保十二年七月廿一日寂す、壽缺く、著作高野春秋、元祿聖斷記、難蘆勢萩傳、高野續往生傳、野山感通傳、信長高野攻記、等あり、(高野春秋、高野山某氏返信)

エオー　懷翁　シユータン周潭を見よ、

エオン　懷音　……二三七四〔淨土宗〕山城法然院中興二世なり、懷音號は眞譽玄阿と云ふ、俗姓生國詳ならず、出家して淨土敎に皈し、濟度を任とす、壯年大和今井西光寺に住して葛城寺稱念寺を再興し、且つ淨土考原錄を作り、痛く敎門の流弊を呵彈す、山城獅子谷法然院中興忍澂上人考原錄を讀みて深く感し、師を延請す、師因て同院に入り、忍澂上人の法化を助く、元祿六年八月廿五日進山し、同院中興二世となり、稱念寺葛城寺を法然院の支院となす、師住持すること二十二年なり、正德四年五月五日寂す、壽缺く、著作往生禮贊纂釋三卷、淨土考原錄、孟蘭盆會法式畧解、各一卷あり、(續日本高僧傳)

エカン　懷鑒　(……)〔曹洞宗〕越前波著寺の禪僧なり、懷鑒俗姓不詳、多武峯覺晏に師事し禪を傳ふ、晏の遺命により道元に從ふ、師の下に義价、義尹、義演、義準、義荐、義運等あり、法を義价に傳ふ、价は後懷奘の法嗣となる、(道元和尙廣錄、建撕記訂補)

エギ　懷義　二〇二一〔曹洞宗〕肥後日輪寺の開山なり、懷義字は天菴日向國の人、日向守盛長の季子なり、幼より穎異、十歲にして肥後の大慈寺鐵山安に投して出家し、其下に師事すること十五年なり、太守菊池正時州の日羅寺を再興し、師を請す、正和丙辰進院し、化風大に振ひ、大衆一千に餘る、後醍醐帝師の道譽を聞き、遠く鳳詔を降して慰問し、且つ扁額を賜て醫福山日輪興國禪寺と改む、時に延元二年なり、師寺院を創開すること前後十一、道化甚だ盛なり、康安元年三月某日寂す、世壽詳ならず、(日本洞上聯燈錄)

エギヨク　懷玉　エリン慧琳を見よ、

エケン　懷謙　(一四〇九)〔戒律宗〕祖鑒眞和上の弟子なり、懷謙俗姓不詳、唐の人なり、鑑眞の門に就きて戒律並に天台を傳へ、天平勝寶六年眞和尙に隨ひて來朝す、示寂の年時缺く、(律苑僧寶傳)

エゲン　懷玄　……二四五〇〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十一世なり、懷玄字は高算、近江の人なり、出家して豐山に登り、學成りて彌勒寺に住し、護持院に轉ず、虛明僧正彌勒寺より化主となり職を辭するに及び、師其後を繼ぎて天明五年第三十一世能化職に晉む、在職六年にして寬政二年十一月二十九日寂す、著作起信私記三卷あり、(新義眞言宗史)

エサン　懷山　(二二五六)〔淨土宗〕伊勢天然寺の僧なり、懷山は其氏姓を詳にせず、幼にして傳通院に投して出家し、伊勢國阿濃津天然寺に住す、示寂の年月日缺く、著作淨土源流章解蒙一卷あり(鎭流祖傳、蓮門經籍錄)

〔考〕　懷山は慶長の頃の人なり、

エシユン　懷俊　(一八二〇)〔眞言宗〕山城醍醐山西谷松本の已講なり、懷俊は永曆三年(元年か)遍智院にて義範の印可を受け、後小野の大乘院に住す、懷一に快に作る、松本は一に戒光院と云ふものあり、(續傳燈廣錄)

エシヨー　懐奘　一八五八—一九四〇　〔曹洞宗〕越前永平寺の二代なり、懐奘字は孤雲といひ、京都の人、俗姓は藤原氏、九條相國爲通の曾孫、中納言爲實の孫なり、幼にして横川の圓能に依りて侍童となり、二十一歳にして具足戒を受け、止觀、法相、倶舎、成實、三論を精究して旨趣に貫徹す、一日歎して曰く、大丈夫たるもの當に言を離れて自證すへし、安そ能く屑々として海に入り砂を數ふるの愚を學はんや、と、遂に錫を杖いて遊方す、初め多武峰覺晏和尚に參す、覺晏和尚師に首楞嚴頻伽瓶の譬を示す、師即ち空の去來無きを知り、識の生滅なきことを明む、時に道元禪師歸朝して京都の建仁寺に寓す、師之に見えて所證を呈すれとも道元肯せす、辭して諸方に遊ふ、文暦元年冬再ひ深草にて道元に參し、誠意歸向す、翌嘉禎元年菩薩戒を受く、一日道元一毫穿㆓衆穴㆒といふ因縁を擧す、師言下に大悟し、衆を出てゝ作禮す、道元曰く何を見る、師答へて曰く、一毫を問はずして如何か是れ衆穴なると、道元微笑して曰く、穿却し了ると、師再拜して退く、侍奉久しくして盡く法の源底に達す、首座となりて分座す、道元永平寺を開く時、師力を盡して業を助く、建長五年七月道元病を以て永平寺を退くや、師に命して席を補せしむ、八月道元京都に入り醫療を求む、師隨侍して看護す、道元の寂するに及ひ、師其靈骨を負ひて山に還る、文永四年東堂に退隱して席を義价に讓り、弘安三年病に罹り、八月二十四日寂す、壽八十三、臘六十三、法嗣義价、寂圓、義演、義準、佛僧、道荐六人あり、（傳光錄、洞上諸祖傳、日本洞上聯燈錄、三祖行業記）

エヨ　懐譽　タクシユー澤秀を見よ、

エキヨー　會慶（一八五〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、會慶字は覺顯、俗姓生國詳かならす、高野山に住して碩學の譽あり、蓮華院の俊晴に繼きて大傳法院學頭となり、華遊院を開き住す、學者蓮華院流に對して華遊院流といふ、寂年欱く、（結網集、本朝高僧傳）
〔考〕會慶は建久前後の人ならむ

エゴン　會言　……二三〇九〔淨土宗〕山城稱福寺の開山なり、會言は聽蓮社諦譽と號し、武藏岩槻の人なり、行阿に從ひて剃染し、法を安譽虎角より嗣ぐ、洛西西千本に稱福寺を開く、慶安二年二月十二日寂す、壽欱く、（淨土總系譜）

エリ　會理　一五一二—一五九五　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、會理は鄕貫詳ならず、承平元年東寺の長者に任し、同五年權少僧都に任ぜらる、承平五年十二月二十四日寂す、壽八十四、（東寺長者補任）

エシン　迴心　シンクー眞空を見よ、

エーイン　永因（……）〔臨濟宗〕京師建仁寺の僧なり、永因字は三益と云ふ、建仁寺十如院に住し、戀詩二百首を作り、詩名あり、著作三益集一卷あり、寫傳す、（日本名僧傳）

エーエン　永衍　二〇二九—二一〇〇　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、永衍は其鄕貫詳かならず、十四歳にして剃髮受戒し、衍舜朝圓に就て天台並に倶舍を學び、法勝寺に住し、三井題者職となる、寶德二年二月二十四日寂す、壽七十二、（三井續灯記）

エーエン　永緣　一七〇八—一七八五　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、永緣俗姓は藤原氏、永相の子、母は遠江刺史江公資の女なり、師甫めて九歳の時父を喪ひ、母に携へられて奈良に往き、一

乘院に投し、賴信に師事す、應德元年維摩會講詔を承く、師七大寺を領して道福賑ひ、帝寵を蒙りて車に乘り宮に入る、嘉承元年詔を奉して最勝會に赴き、第二日朝座の講師となる、元永元年最勝寺を慶して三百僧を供し、師命を受けて導師となる、保安二年大僧都に任し、權僧正に轉す、老ひて後印を解き花林院に居り、天治二年四月五日同院に寂す、壽七十八、上足勝超あり、三會の講師を歷て興福寺の主務を補す、（本朝高僧傳）

エーオン　永恩（二二三三……）〔臨濟宗〕京師建仁寺の僧なり、永恩字は春澤、其鄉貫詳かならず、雪嶺瑾に參して法を嗣ぎ、建仁寺に住す、天正元年八月十六日寂す、壽欠く、（延寶傳燈錄）

エーガ　永雅（二四三九―二五一六）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十八代なり、　永雅字は徹範、武藏比企郡紫竹村の人なり、出家して豐山に學ぶこと多年、彌勒寺に住し、嘉永四年擧げられて豐山能化となる、在職六年安政三年十月十八日寂す、壽七十八、著作、心經私記、眞如隨緣成佛義、各一卷あり、（新義眞言宗史）

エーカク　永覺（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、永覺は伊勢の人、少にして出家し、覺尊に就て台敎を學び、頗る義理を辨ず、十六歲他事を抛ち念佛を修す、後室谷に移り、專ら念佛を修す、寂年壽欠く、（三外往生傳）

エーカク　永覺（一四四二―）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、　永覺は出家して永興に華嚴の敎を學び、延曆六年東大寺別當に任す、寂年、及壽欠く、（東大寺別當次第）

エーガク　永嶽（二一八六……）〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、永嶽字は季雲、武藏の人、出家して遠江の石雲寺崇芝性岱に參し、服勤多年、其法を嗣き、總持寺に出世し、後石雲寺に主となる、三谷の檀越圓成寺を建て師請せられて第一世となる、大永六年二月十五日寂す、法嗣泰安永、康天叟、順孝震、龍景春の三人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーカン　永鑑（……）〔曹洞宗〕美作西來寺第三代なり、　永鑑字は鑑窻、俗姓生國不詳、初め敎乘を學び、後禪門を慕ひ、石屋和尚に參し、後ち美作西來寺に住じ、第三代となる、其示寂年壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

エーキ　永基（……）〔眞言宗〕山城仁和寺の學僧なり、永基は京都の人、美濃守兼貞の子右大臣賴宗の孫なり、賴觀の灌頂を受けて廣澤の學講となる、（傳燈廣錄）

エーキ　永錤（……）〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、永錤は元人なり、淸拙に隨つて來り南禪寺に居りて記室を掌る、年未だ弱くして病に罹り、臨終に偈を作りて淸拙に辭して曰く、十年侍中瓶、萬里渡重溟、扶桑日頭出、唐土打三更と寂年欠く、（延寶傳燈錄）

エーギ　永義（二三〇四―二三八三）〔臨濟宗〕仙臺東昌寺の禪僧なり、永義字は虎溪、谷姓毛利氏、長門の人なり、出家して普く諸老に參す、寬文中伊達綱村の聘により東昌寺に住す、其仙臺に往くや、儒士內藤以貫砲家井上可安を伴ひ藩士に薦む、元祿中東福寺を主となる、綱村金襴法衣幷に黃金を贈る、世之を千金法衣と稱す、朝宗の五百年忌に會し、東福寺に宋の佛鑑禪師より聖一國師に寄する書牘幷黃金を送り供養となす、

後再び東昌寺に歸へる、黄檗宗大年寺を剏め鐵牛禪師を請して開祖とす、永義書をよくし其欵印なきものは內藤以貫の眞蹟として世に傳ふるに至る、享保八年九月十八日、東昌寺の禪室に寂す、壽八十、（仙臺史傳）

エーキン 永瑾（二一六四）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、永瑾字は雪嶺、別に識廬と稱す、九峰成禪師の法を嗣き、永正五年春建仁寺に住す、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

エーキョー 永慶（……）〔天台宗〕近江楞嚴院の僧なり、永慶は俗貫詳かならず、出家して覺超に師事し、台敎を學び、楞嚴院に住し、法華經を讀誦す、寂年及壽缺く、（本朝法華驗記）

エーキョー 永慶　レンショー蓮勝を見よ、

エークワイ 永快（一七二五）〔眞言宗〕大和千手院の住僧なり、永快は其郷貫師承詳かならず、金峯山千手院に住し、平常念佛を以て行となす、治曆年中壽六十餘にして寂す、（拾遺往生傳）

エークワク 永廓（二二六五……）〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、永廓字は大室、大龍存守に參して法を得、席を踵きて伊豫安樂寺に住す、後總持寺閼雲寺に歷遷して、守樂寺に皈へる、晩年風早の大通寺に退隱し、慶長十年二月十九日寂す、法嗣南榮禮山の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エークワン 永觀（一七一三 一七九二）〔淨土宗西山派〕京都禪林寺の學僧なり、永觀は文章博士源國經の子なり、少にして山峰の國成寺に入り、十一歲禪林寺の深觀僧都に從ひ剃髮受業し、又密灌を受く、辭して東大寺に往き、登壇受戒し、有慶顯眞の二師に隨ひて三論の玄奧を傳へ尋いで華嚴法相を聽く、年三十光明山に入りて淨業を修し、幽栖すること凡そ十年なり、道友强ゐて禪林寺に住せしむ、仍て空宗を演へ、兼ねて安養を勸む、後同寺の境內に東南院を構へ、長坐淨修して餘年を送る、應德二年敕を奉して維摩會の講師となり、寬治八年七寶の塔を作りて舍利二粒を安し、丈六の阿彌陀像を刻み、靈驗により分倍したる舍利を其眉間に納めて藏王院に安す、承德三年東大寺に主となり、一住持二年、禪林寺に歸へり、天永二年十一月二日壽七十九にして寂す、師名聞を厭はす、僧綱を辭す、只位律師に止れり、著作往生十因十卷、往生講式一卷、彌陀要記若干卷あり、（百因緣集、東大寺別當次第、長西錄、本朝高僧傳、蓮門經籍錄）

エーケツ 永傑（……）〔臨濟宗〕京師妙光寺の僧なり、永傑字は斗南、明に航し、書を以て聞ゆ、虞世南の筆法を學び、一家をなす、世に斗南樣と云ふ、（半陶藁、書史會要補遺）

エーケン 永賢（二〇四二……）〔日蓮宗〕越前敦賀妙顯寺第三代なり、永賢俗性生國未詳敦賀妙顯寺覺圓に師事し、終に其後ちを嗣ぐ、永德二年三月二十五日寂す、壽欠く、（本化別頭佛統記）

エーコー 永興（一四三〇）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、永興は出家して良興に師事し、寶龜元年東大寺に任す、寂年及壽缺く、（東大寺別當次第）

エーコー 永興（一七三七）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、永興は俗姓葦屋氏、京の人、一說攝津手島の人、出家して興福寺に留り、性相を修し、兼ねて密法に通ず、後紀伊熊野に

至り草庵を結びて土民を敎化す、土民其智德を貴びて南菩薩と稱す、蓋し京より來りて南國に在るを以てなり、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕本朝高僧傳永興の年代を錄せず、蓋し承曆の前後の人ならん、

エーコー 永杲（………）〔臨濟宗〕京師建仁寺の僧なり、永杲字は東輝、建仁寺十如院に住し詩名あり、（日本名僧傳）

エーコー 永康（………）〔曹洞宗〕武藏寶持寺の開山なり、永康字は泰安、能登の人、幼にして出家し、遊方して諸老に謁し、次に季雲永嶽の室に投して其法を嗣き、總持寺に出世し、又武藏波寄に退き、寶持寺を剏め、某年寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

エーコー 永高　シユークワン宗觀を見よ、

エーゴン 永嚴（一四三〇）〔法相宗〕大和奈良の學僧なり、永嚴俗姓不詳、慈訓に師事す、傳燈大法師位に昇る、寶龜三年中律師となり、同年十一月四日大律師となる、門下に行賀、常騰あり、示寂の年時缺く、（七大寺年表、本朝高僧傳）

エーゴン 永嚴　一七三五―一八一一〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、永嚴俗姓は平氏、下野守常季の子なり、出家して寬助に就きて眞言を學び、久安元年權少僧都に任し、東寺三長者に加任す、仁平元年八月十四日寂す、壽七十七、（諸門跡譜、東寺長者補任）

エーサイ 永歲　……―二二三四〔曹洞宗〕越前永平寺の僧なり、永歲字は萬休、俗姓は藤原氏、三河羽多の人なり、幼にして鳳來寺に入りて出家し、密敎を學ぶ、後衣を更へて行脚し、琴客大通の門に遊び、次に光國に參し、去りて巧安順智に師事し、其法を嗣ぎ、永平寺に出世し、全久寺に還り、瑞光寺二世となる、泉龍龍溪二寺にも住し、天正二年四月二十八日寂す、壽缺く、法嗣浮翁全權の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーサン 永珊　……―二二四七〔曹洞宗〕遠江長松寺院の開山なり、永珊字は石宙、諸老に歷參し、川僧慧濟の法を嗣き、一雲寺に住し、大洞寺に還る、晚年奥野村に菴居す、後菴寺となり、深澤山長松院と稱す、長享元年正月二十六日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

エージツ 永實（………）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、永實は關白藤原師實の子、顯密の敎を覺圓に受け、覺猷と共に稱せらる、三井の圓滿院に住し、後宇治の蘭若に移る、法印權大僧都に敘し、一身阿闍梨に任す、人常に宇治の法印と稱す、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

エージン 永尋　一六九九―一七八九〔天台宗〕大和崇敎寺の僧なり、永尋は出羽の人、信命に從ひて天台敎を學び、比叡山及四天王寺に巡遊し、大和崇敎寺に住し、法華經を講すること六十萬坐、千座の講を修す、大治四年正月三十日寂す、壽九十一、（本朝高僧傳）

エージン 永尋　キヨージン敎尋を見よ、

エーシヤク 永釋　……―二〇六六〔臨濟宗〕近江永安寺の開山なり、永釋字は彌天、鄉貫不詳、永源寺寂室元光に師事して心印を受く、東晉の彌天道安を景仰し、自ら彌天と號す、甲斐に歷遊し、淨光寺に住す、後近江に歸へり、永安寺の開山となり、後甘泉天恩二寺の開山となる、貞治六年八月寂室の

將に寂せんするに方り、師命を受けて祭文を作る、應永十三年六月五日寂す、壽詳く、弟子英靈仲靈骨を永安寺に葬むり實相塔を建つ、勅謚見性悟心禪師と賜ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エージユ　永就（二〇五四）〔曹洞宗〕攝津景福寺の二代なり、永就字は一經、俗姓生國詳ならす、出家して諸名宿に歷參し、通幻寂靈に師事して印可を受け、總持寺に出世し、永澤龍泉の諸寺に歷住す、越前の大守平尾氏、攝津六瀨に景福寺を建て師を延く、師通幻を開山とし、自ら二世となる、應永某年十月二十五日寂す、壽缺く、法嗣實底超眞の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーシユー　永秀（二一四七……）〔曹洞宗〕伊豆藏春院の開山なり、永秀字は實山、相摸國松田氏の子なり、最乘寺に出家し、春屋和尙に師事して受戒す、數々名僧智識を叩き、春屋和尙を省して親しく印記を受け、總持寺に出世す、是より先春屋和尙菴を伊豆田方郡に創し、師に付す、永享十一年安房太守上杉憲實地を施し寺を建て、持氏に追薦す、今の藏春院是れなり、師此に住すること數年、遷て報恩寺に住し、最乘寺に主となる、長享元年九月九日寂す、（日本洞上聯燈錄）

エーシユー　永宗（二〇三二 二〇八六）〔曹洞宗〕長門大寧寺の開山なり、永宗字は智翁、日向の人、俗姓は平氏なり、十一歲にして州の華嶽寺に投じ、圓明法師に就て剃髮し、觀世音寺に入りて登壇受具し、深く敎乘を探る、一日首楞嚴を閱して省あり、未だ究意にあらさるを知り、薩摩妙圓寺に到り、石屋和尙に謁す、時に年十七なり、爾來其下にありて參印し、遂に契悟して印可を付せらる、出てゝ肥後天艸寺に住し、美作西來寺に移る、應永三十年秋行化して長門に到る、大守大內弘忠師の道譽を慕ひ、勝地を擇ひ師を請して康福寺を興す、これより先き石屋和尙一寺を剏創して未だ完たからさるに寂したり、師乃ち寺基を此に移し、康福寺を改めて大寧寺と云ふ、時に山神靈異を示し、峯巒慶雲を簇せしを以て山を名けて瑞雲と云ひ、西海の各藍となる、三十三年九月疾に罹り、大守山に入りて慰問す、十月中旬府に入りて太守に別を告げ、沐浴端坐して書を竹居和尙に遺して後事を囑し、衆を集めて懇ろに遺誡し、脫然として寂す、實に應永三十三年十月二十二日なり、壽五十五、臘四十一、遊仙窟に塔す、師生平深く許可を愼む故に群聚年を積めと　一人の其印可を受くるものなし、（日本洞上聯燈錄）

エーシユン　永春（二一三〇……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、永春字は起龍、俗姓は大中臣氏、長門の人なり、幼にして出家し、通心岳、派江西、才愚極の諸師に參して契悟し、文安四年長門長福寺に住す、寶德元年京都普門寺に移り、康正元年東福寺に主となる、後鄕里に皈り、語心寺の基址を開き、亂を避けて屛居し、禪餘瑜伽を修し、復法華を講ず、文明二年五月二十九日偈を書して寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

エージユン　永順　ニチシン日禎を見よ、

エージヨ　永助（……）〔眞言宗〕伊豆修善寺の僧なり、永助は甲斐の人、京都に上りて專ら顯密二敎を學び、伊豆修善寺に住す晚年念佛を修し、期終りて普く檀越に辭し、薪を積みて燒死す、寂年、壽缺く、（本朝高僧傳）

エーシヨー　永祥 二〇六四 二一三五 〔曹洞宗〕加賀瑞川寺の禪僧なり、永祥字は麟翁、薩摩伊集院堀內氏の子、應永十一年三月三日を以て生る、十一歳にして廣濟寺南仲に依りて得度し、偏く講肆に遊んで三藏を究め、遊方して大寧寺に於て、竹居禪師に參し、二年を越えて郷里に皈り、金光院を築きて日々法華を誦せしが、字堂覺卍禪師化を熊嶽山に開くと聞き、往て其所得を質し、遂に信衣を受く、時に永享九年八月念一日なり、同十二年總持寺に出世し、亨德二年加賀瑞川寺に移り、居ること六年にして熊嶽山に主となり、文正元年龍德院を築きて逸居し、文明七年十月八日寂す、壽七十二、法嗣貴山富實山貞大雲瑞の三人を出す、（日本洞上聯燈錄）

エーシヨー　永誠（……）〔臨濟宗〕京都眞如寺の禪僧なり、永誠字は明之、東明旭に參して法を嗣ぎ、眞如寺に住す、後退耕菴に退き、晩年出雲安國寺に皈り、某年寂す壽缺く、（延寶傳燈錄）

エーシヨーイン　永昌院　ニチカン日鑑を見よ、

エーズイ　永瑞 二一四二 二二一二 〔曹洞宗〕尾張萬松寺の開山なり、永瑞字は大雲、俗姓は平氏織田信秀の伯父なり、幼にして出家し、雲興寺の祥巖秀麟に依りて薙髮受具し、後其法を嗣き祥巖の寂後席を繼きて雲興寺に主となり、居ること十三年、春岡をして席を繼がしめ、辭して大森の正法寺に退去す、天文九年備後の大守織田信秀尾張に龜嶽山萬松寺を創め、師を開山とす、永祿五年四月二十二日寂す、壽八十一、（日本洞上聯燈錄）

エーセン　永暹 ……一七六八 〔天台宗〕出雲鰐淵山の僧なり、永暹俗姓は紀氏、石見の人なり少より出家し、出雲鰐淵山に住して法華經を書寫す、又天王寺幷に良峰山に經を書寫供養す、後河內に往き、聖德太子の廟前に供養法を修し、天仁元年十月八日同所に寂す、（本朝高僧傳）

エータク　永琢 二二八二 二三五三 〔臨濟宗〕播摩龍門寺の開山なり、永琢字は盤珪、俗姓は菅氏、播摩揖保郡網干濱田村の人なり、十歳父を失ひ、母に事へ、夙に出家を願ひ、隨應寺雲祥に就きて得度す、時に十七歳なり、去りて諸老に歷參し、三年の後皈りて與福寺に寓す、二十六歳の時、一朝出でゝ漫步する際、梅香鼻を衝いて忽ち大悟す、明年南遊して堂歇愚堂寔等の諸老に謁し、次で美濃日立村に到り、王龍菴を結び、居ること多年、慶安三年道者禪師長崎に來ると聞き、往きて崇福寺に於て謁し、遂に參堂し、朝夕請益す、一日晚參の後、衆と共に僧堂暗黑のところに座し、豁然大悟す、乃ち堂を出で長養を命せらる、師請ひて厨下に居り、身を忘れて勤勞す、明年七月辭して皈り、吉野山に入り、茅屋を結びて山を出でず、又美濃の舊菴に遷り、正應三年冬備前三友寺に寓す、時に熊澤蕃山陽明學を唱へ、時人多くこれを信じて佛を排す、師この者流と論戰し、遂に性命良知の說を摧き、釋氏の道を明む、儒士皆舌を結びて退く、明曆元年長崎に至り、再び道者に謁す、幾何ならずして辭し翌年春郷里に菴を結び、母に侍す、出羽守加藤泰興師を伊豫大洲に請して法要を問ひ、遍照菴を立てゝこれに居らしむ、萬治二年備中守京極高豐封邑濱田に龍門寺を搆め、師其開山となり、法雷大に振ふ、十二年春敕により妙心寺に住し、元祿二年備前三友寺に說法し、三年詔によ

り特に佛智弘濟禪師の號を賜ふ、六年春請に應して江戶に赴き、候伯宰官三問絶えず、一日遽かに播摩に皈り、六月上旬龍門寺に到り、九月三日寂す、壽七十二、臘五十五、塔を定光と云ふ、師生前得度の弟子四百餘人、廢寺を修する四十七なりと云ふ、（盤珪禪師行業記、續日本高僧傳）

エーチユー　永忠　一三七四—一四四八〔……〕近江梵釋寺の僧なり、永忠俗姓は秋篠氏、京都の人なり、幼にして出家し、奈良に徃きて經律を學び、又支那の佛法を慕ひ、寶龜の初め唐に入る、時に代宗の大曆年中なり、帝師の德業を聞き、敕して西明寺の院内に居らしむ、諸刹を巡歷して徧く名德に謁し、長安に在留すること三十年、延曆の末國使と共に皈朝す、延曆五年桓武天皇敕して近江に梵釋寺を建てしが、久しく住持なきを以て師勅旨を奉して主となり、帝の寵遇を受け、僧綱に任ず、七年某日將に寂せんとする時唐より齎したる律呂旃宮の圖二卷、日月の圖二卷、律管二枚塤一枚を上り、奄然として寂す、壽七十五、著作五佛頂法訣一卷あり、（本朝高僧傳）

エーチヨー　永超（一七五四）〔法相宗〕大和齊恩寺の學僧なり、　永超は京都の人、出雲太守橘俊孝の子なり、法相を興福寺主恩に受け、康平二年春敕に應して維摩會の講場に上る、後齊恩寺を開きて盛に有宗を唱ふ、師眞敎に逕するのみならす、亦よく俗書を讀む、嘉保元年東域傳燈目錄三卷を著し青蓮院主に寄す、時に年八十一、後其終を知らす、（本朝高僧傳）

エーチヨー　永超　二三一—二二一〔曹洞宗〕肥前圓應寺の中興祖なり、　永超字は了然、壹岐の人、少にして出家し、長門大寧寺天甫存佐に依ること二十餘年なり、其法を嗣ぎ、肥前慈恩寺に住す、永正十六年藤原純明圓應寺を再興し、長弘寺の虎巖を請せしに巖辭して師をして之れに應ぜしむ、後嗣子禪殊に席を繼かしめ、慈恩寺に退居す、天文二十年八月十日寂す、壽八十一、（日本洞上聯燈錄）

エーテツ　永徹　……—二二一八〔淨土宗〕和泉專修寺の開山なり、永徹は黃蓮社玄譽と號す、久我豐通の子にして、敎譽に師事して法を嗣ぎ、平等院に住す、後和泉堺に專修寺を剏めて開山となり、永祿元年五月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

エートク　永篤（……）〔曹洞宗〕常陸鳳林院の開山なり、　永篤字は信中、南極壽星の法を繼き、天童寺に住す、常陸竹原の擴信鳳林院を剏め、師其開山となる、寂年及ひ壽傳はらす、（日本洞上聯燈錄）

エーニン　永忍　……—二一八九〔曹洞宗〕丹波圓通寺の禪僧なり、永忍字は安室、俗姓は源氏、攝津多田郡の人なり、年初めて十四、丹波圓通寺の竹馬光篤に從ひて下髮受具し、三年の後初めて開悟す、時に二十四歲なり、辭し去りて攝津高平山に入りて菴居す、又熊嶽に晦ますこと凡そ三十年、衆の請に依り圓通寺に住持す、享祿二年十二月十八日寂す、世壽缺く、法嗣折桂伞衷の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーネン　永念（一四八二）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、　永念は其鄕貫詳かならず、弘仁十三年東大寺別當に任ず、寂年壽缺く、（東大寺別當次第）

エーバイ　永梅（……）〔曹洞宗〕越前雲興寺の僧なり、永梅字は魁叟、直翁宗廉禪師の法嗣にして、總持寺に主となり、後雲興寺正眼寺に歷住し、某年寂す、壽缺く、法嗣永山本興

の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーハン　永範 二一〇四 二一六七 〔曹洞宗〕常陸松岳寺の開山なり、永範字は摸堂、俗姓は問宮氏、伊豆の人、文安元年正月一日を以て生れ、十五歳の時、總持寺安叟宗楞に依りて剃髮し、二十一歳の時、具足戒を受け、辭して常陸小田の寶鏡山に菴居す、戶崎城主義則居士牧洞山に松岳寺を創し、師招られて開山となる、永正四年八月十六日寂す、壽六十四、臘四十三、法嗣東州周道の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーフ　永扶 二二〇八…… 〔曹洞宗〕長門興國寺の中興なり永扶字は助翁、俗姓は崎氏、豐前の人なり、十三歳豐後泉福寺に投し、道明に依りて得度し、東遊して大中寺無學に參せしが、長門大寧寺に於て奇伯瑞龐の法を開くを聞き、往て禮謁し、後其法を嗣ぐ、大永六年席を繼ぎて補し、天文六年豐前廣運寺に退居す、多多良義興州の天目山興國寺の廢を興して師を住せしむ、寺は無隱和尙開基、後醍醐天皇勅賜の道場なり、同十七年十月二十六日寂す、世壽欠く、法嗣龜洋宗鑑の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーホン　永本 二〇四〇 二一一三 〔曹洞宗〕周防闢雲寺の禪僧なり、永本は字を覺隱と云ひ、大隅の人、姓は藤原氏なり、十五歳の時福昌寺石屋に投じて出家受戒し、後ち典座となり、苦學十六年、石屋密かに信衣を付す、應永中遺命を受けて周防闢雲寺に住す、防長豐筑四州の大守多多良盛見、及び持盛等道化に皈す、永亨中寺基を鳴瀧に移立す、泰雲寺と號す多多良敎弘師と遊び道を論じ大に感じて多く寺產を附す、永亨五年永澤寺に主となり、九年總持寺に出世し、居ること一年、辭して闢雲寺に皈り、老を方臺院に養ふ、亨德二年十二月十八日寂す、壽七十四、臘六十なり、(日本洞上聯燈錄)

エーマン　永滿 二〇九五 二一六五 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、永滿字は足翁、筑前の人なり、幼にして州の千手院に投して得度し、專ら敎乘を習ふ、後潛に院を出て、長門に往き、大寧寺大菴に參し、次いで龍文寺に登り、器之に謁す、後京都に遊ひ、五山の諸師に謁し、又關東の諸老宿に歷參し、再ひ大寧寺に歸へる、時に全巖東純主席にあり、師之に親近して衣法を付せられ、明應元年正月席を繼きて大寧寺に主となる、晚年豐前の天寧寺に遷り、永正二年三月八日同寺に寂す、壽七十一、法嗣繁林瑞春、朝山芳瞰、天甫存佐の三人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーラン　永蘭 (一九九六)〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、　永蘭字は春谷、明極楚俊に參して法を嗣き、相模淨智寺に住す、後印を解て浴に皈り、龍山の少林寺に居す、寂年及世壽詳かならず、(延寶傳燈錄)

エーエー　榮睿 ……一四〇九 〔法相宗〕奈良興福寺の律僧なり、榮睿俗姓詳ならず、美濃の人、出家して興福寺に居り、諸經論を習ひ、瑜珈唯識を以て本業となす、常に戒律の完からさるを憂ふ、隆尊律師の推薦により、天平五年普照等と共に遣唐使丹治比廣成に附隨して唐に渡る、實に唐の開元廿一年なり、偏く明師を訪ひ、定賓律師に就いて具足戒を受け、後天寶二年揚州の大明寺に至り、鑑眞に謁して强請す、鑑眞の出發するに際し、俱に船に上り、海中屢困厄に遭ひ、同八年端州の龍興寺に泊し、疾患に罹り寂す、世壽缺く、(元亨釋書、本

朝高僧傳、律苑僧寶傳)

エーカイ　榮海　一九三八 二〇〇七　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、榮海は大舍人藤原俊業の子、母は大江氏なり、師幼にして父に學び、後醍醐山に入りて慈尊院聖濟僧正に灌頂法を受け、諸密部に達す、初め慈尊院に住して隨心院を領し、高雄の神護寺に移つる。僧正に任す、貞和元年正月東寺長者に補す、同三年八月十六日慈尊院に寂す、壽八十、著作儼避羅鈔十九卷類聚八祖傳十卷、眞言傳七卷、兩界記四帖あり、(神護寺交衆任日次第、東寺長者補任、後傳燈廣錄、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

エーク　榮久　二一七五……〔淨土宗〕山城平等院の中興なり、榮久は城譽と號し、西三條實隆の息智恩寺傳譽慶秀に投じ、後音譽聖觀の法を嗣ぐ、明應三年平等院中興となり、永正十二年十月二十五日寂す、法嗣、教譽行然あり、(淨土總系譜)

エーク　榮玖　(……)〔曹洞宗〕武藏龍澤寺の禪僧なり、榮玖字は雲岡、豐後の人、常樂寺雪溪保廣を禮して剃髮し、平田仙巖に依り後雪溪の法を嗣け、總持寺に出世す、法嗣心源祖鑑あり、(日本洞上聯燈錄)

エーグ　英弘　(……)〔法相宗〕大和知足院の學僧なり、英弘興福寺信憲に法相を學び、三會講師を經て堯思坊に住し、唯識を講す、(本朝高僧傳)

エーコー　榮興　ジュンエ純惠を見よ、

エーコン　榮欣　(……)〔曹洞宗〕下總乘國寺の僧なり、字は良室、信及前豚に師事して旨を得、席を嗣きて下總乘國寺に主となり、某年寂す、壽缺く、法嗣威嚴瑞雄の一人あり、

エーサイ　榮西　一八〇一 一八七五　〔臨濟宗〕京都建仁寺の開山なり、榮西字は明菴と云ひ、葉上房と稱し後に千光祖師と稱す、備中吉備津の人、俗姓は賀陽氏、薩摩刺史某の曾孫なり、母は田氏靈夢に感して孕むあり、永治元年四月を以て生る、稍長して出家の志あり、郡の安養寺靜心法師の下に投し、三寶に

榮西禪師

事ふ、久壽の初年比叡山に登りて得度受戒し、尋て法兄千命に就いて求聞持法を受け、精修錬行を積みて、屢靈應を感したりと云ふ、平治元年出でゝ諸方に回歷し、顯密の教義を究む、比叡山の有辨、顯意、伯耆大山の基好等は皆師が隨侍したる所なり、かくて、比叡山中に關を掩ひ、大藏經を閱讀すること前後八年、大に感憤する所あり、山門古德の徃跡を追うて遠遊せんと志し、飄然西下して筑前博多に到る、會〻通事李德昭なる者に遇うて、宋の國情を聞き、仁安三年四月商船に便乘し、明州に着す、廣慧寺を問うて禪宗を傳持せんとしたるも、未だ十分得ると

ころなく、去りて天台山に登り、祖塔を禮し、五百の阿羅漢に茶湯を供養し、且つ天台の章疏六十餘卷を索め、同年九月東皈し、再び比叡山に登る、爾來山中に留まり、益々經論を講究し、就中密教に意を傾けて一流を開き、葉上流と云ふ、當時山門には密教盛んに行はれ、また溪谷の間に苦修錬行するものあり、印度釋迦の八塔を摸せる山中の靈地の如き、常に巡禮するもの斷えず、而して師は專ら密教の明匠として聞えたり、然れとも師傳教慈覺智證安然等の書中禪宗の事あるを見、これか蘊奥を究めんとすること切にして、再び宋に渡り、禪宗の大德名宿を叩き、且つ陸路印度に達して、親しく釋迦の八塔を瞻禮せんとするの大圖を畵し、文治三年三月諸宗血脉譜、並に西域方志を携へて出發し、先づ明州に入り、臨安府に到り、これより徐ろに印度行の謀を立てむとす、然るに關塞通せざるを以て、府命許されず、乃ち去りて再ひ天台山に登り、萬年寺に投じ、虛菴懷敞に謁す、蓋し懷敞は黃龍慧南七世の法孫なり、師其下に宗乘を參究し、且つ衣資錢三百萬星を捨てゝ智者大師の塔、並に萬年寺の三門兩廡を修理す、懷敞の天童山に遷り住するに當り、師亦追隨し、遂に佛祖の心印を得たり、天童山にありて千佛閣の改造に與り、大に功あり、學士樓鑰これを記して石に勒す、時に宋地疫病流行し、君臣大に憂懼す、師これを見て諸高僧と共に祈禱して靈驗あり、嘉賞せらる、かくて天童山にあること數年、懷敞より菩薩戒を受け、且つ法信僧伽梨衣等を頂受し、建久二年七月揚三綱の船に便乘し、肥前平戶島葦浦に着す、西海の諸國に滯留して所傳の禪宗を弘演するに、道俗漸く來附す、因て筑前博多に聖福寺を開く、これ我國最初の禪寺なり、然るに事、上國に聞え、比叡の山僧等上奏して新宗を停止せんとす、建久五年七月宣下ありて禪宗を停止せらる、當時師は東西の間に流浪し、出家大綱一卷を作りて出家の本領を說き、暗に山僧の暴橫を呵彈し、尋て興禪護國論三卷を作りて禪宗の新宗にあらざるを示し、傳教慈覺智證等の言を引きて、極力これを顯揚す、然れども山僧等の妨難益甚しきを以て、京師を去り、東下鎌倉に入り、將軍賴家に謁し、禪宗興隆の謀を立てんとす、正治元年九月始めて幕府に於て不動尊供養の導師となる、翌二年閏二月政子の本願にて義朝の舊跡龜谷に壽福寺を興して師を請す、これより幕府の皈依深く、常に賴家等の請により法要を說く、建仁二年二月幕府義朝の沼濱の舊宅を壽福寺に寄附し、寺觀を添ふ、同年幕府京都五條鴨川畔の土地を寄附して建仁寺の寺基を開く、同四年佐々木定綱畠山重忠工事を督し、僧堂講堂總明等を造營し、輪奐の美を極めたりと云ふ、然れともこは圓密禪三宗の道場としたるなり、此年間師は京都鎌倉の間に往來し、法化益盛んなり、建永元年東大寺の修繕を幹し、承久二年法勝寺九層塔の修理を幹して功あり、建保元年五月幕府に出で、自ら大師號宣下の執奏を請ふ、然れども生前に大師號宣下の例なきを以て幕府の議之を否決し、同年六月執奏して權僧正に任ぜらる、同三年六月五日壽福寺の方丈に寂す、壽七十五、臘六十三、幕府遠江守親廣を遣はし弔す、後建仁寺護國院に塔を建つ、著作興禪護國論三卷、出家大綱一卷、一代經論總釋、三部經開題、喫茶養生記等あり、弟子榮朝、行勇、明全、良祐等其法を嗣ぐ、（塔銘、興禪護國

エー（榮）サ

論序文、帝王編年記、吾妻鏡、百錬鈔、元亨釋書、本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

〔考〕 榮西禪師の事蹟は古來宗門に傳ふるところ大に疑ふべし、禪師の事蹟は、吾妻鏡、百錬鈔等に散見せり、然るにこれを宗門に傳ふるところに對照すれは、全く一致せず、宗門に傳ふるところにして古きは興禪護國論の序文、並に元亨釋書なり、興禪護國論は眞僞の議論あり、聖僕の禪籍志に之を疑へり、されは其序文に言ふところ、未た遽に信用すべからす、況や此二書に見ゆるところを對照して亦一致せさるをや、明の上天竺寺如蘭の製せる塔銘の序は、尤詳密なれども、明の永樂二年甲申正月、即ち我應永十一年正月に成れるものにして、實に禪師示寂の後一百八十九年を隔つるなり、然れは所謂金石文字なれとも、歴史上の價値に乏しきものなるは論なし、其詳密なるもの、却て益信用しかたし、延寶傳燈錄、本朝高僧傳が塔銘の序を採用して、一も疑を存せさるは恠むへきなり、吾妻鏡に壽福寺建立の年時並に禪師示寂の年月日等明記せるもの信用せざるべからず、故に今は全く宗門の傳ふるところを措いて、吾妻鏡等を取りたり、無住禪師の沙石集に榮西禪師が故に京都に上りて示寂したるよし見ゆれは、塔銘の序に見ゆる傳説は、古くより行はれたるものたるを知るべし、然れとも今は取らず、

エーザン　榮山 二三四三 二四二五 〔……〕江戸花川戸の奇僧なり、榮山は初め義定と云ひ、志道軒と號す、一に一無堂と號す、俗姓は深井氏、京都東梅津の農太作の子なり、初めの名は政七、剃髮して義定と號す、內外の學を究め、大に名聲あり、二十歳にして具足戒を受け、堅く持したるも、後袈裟を脱し、戒律を破り、佛像經卷を賣りて酒色の資に供し、自ら酒色塲中の大快悟の人を以て任ず、後江戸に下り、淺草金龍山に到り、觀音堂の傍らに一高床を設けて其上に坐し、野史一卷を机上に備へ、巧みに古今の治亂興廢を講説し、陰莖の形を造りて如意に代へ、講説して興到れはこれを揮りて、或は漫罵し、或は睥睨し、或は哭泣し、大に都人士女の視聽を驚かせり、而して金錢を得れは酒色に耽る、時人呼ひて摩羅僧といふ、自己の像を圖し、其上に戲歌を書し、印刻して人々に與ふ、もとなし草一卷を作り、陰陽生育の理を述べ、戲謔の言を借りて三教の奥旨を說けり、卷末に題せる詩あり、曰ふ、讀レ史談レ軍數十卷、大悲閣下得レ名新、曾夫木扣ニ牀頭一日、白眼總看ニ世上人一、延享戊辰の年、一無堂志道亭と、明和二年三月七日歿す、壽八十三、浮世繪師奥村政信其肖像を圖して市に賣り、金龍道人敬雄其傳を作る、平賀源内深く景慕し、志道軒傳を作る、(事實文編、志道軒傳、名家畧傳、譚海)

エーザン　榮山 二四二七 二四八八 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十二代なり、 榮山字は智淨と云ひ、武藏の人、出家して豐山に登り、學成りて伊豫松山石寺に住す、文政元年十二月二十七日幕命により江戸根生院三十二代となり、翌十年十二月二十日豐山能化職に晋み、十一年二十八日寂す、壽六十二、(新義眞言宗史料)

エーシン　榮眞 (一九五〇)〔戒律宗〕相摸極樂寺の律僧なり、 榮眞字は圓眞、興正菩薩に師事して戒律を學ぶ、進具の後灌頂法を受け、初め大和願成寺に住し、後忍性の後を繼

ぎ、相模極樂寺に遷る、寂年缺く、弟子一人諱宣基字は圓源ありて丹後國分寺に住す、(本朝高僧傳)

エーシユ　榮珠 (……)〔曹洞宗〕能登松隱寺の僧なり、榮珠字は玉田、出羽の人、九歳にして出家し、大僧戒を受くるに及び越前壽嶽景椿に參し、其記室となり、幾何もなくして首座となり、分座説法す、總持寺に出世し、松隱寺に遷る、後再び總持寺を主どり、院宣に依り紫衣を賜ふ、二年の後退きて松隱寺に休す、寂年缺く、法嗣承顏智順の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーシユ　榮主 (……)〔曹洞宗〕下總乘國寺の僧なり、榮主字は中明、松菴宗榮の法を嗣ぎ、乘國寺に住す、寂年世壽缺く、法嗣中雄宗孚少傳榮誾の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーシユン　榮春 リユーコー隆光を見よ、

エージヨ　榮助 二〇〇三 二〇八四〔眞言宗〕近江大萱堂の僧なり、榮助字は營禪、鄕貫詳ならず、近江國栗本郡駒井に住し、密供精修すること多年なり、應永二十二年二月一日の夜靈夢を感じ、爾來唯一向に念佛を專修す、應永三十一年十月の初聊か違例あり、治療を加へんが爲に京師に上り、醫藥を盡すと雖も其功なし、同十一日京師より下り、命期の近きを知り、至心念佛し、聖像の近接を期す、和歌あり曰く、「ついにげにかぎりあるへきいのちぞとおもひしことのいまになりけり」、應永三十一年十月二十一日寂す、享年八十二歳、(緇白往生傳)

エーシヨー　榮祥 二四五五 二五一四〔新義眞言宗〕伊賀常福寺の學僧なり、榮祥字は淨純、近江彥根の人なり、豐山に學び、國上寺に晋み、伊賀常福寺に轉す、安政元年十一月六日寂す、壽六十、著作髻珠鈔三卷、諸流印信集二卷、論場旗皷引據、十卷章科文、傳流灌頂見聞記、兩部習合神道口訣、秘部口訣、臨終用心、北越美談、阿字百首、各一卷、鑁字人形義、一紙あり、(新義眞言宗史料)

エーシヨー　榮性 二四二八 二四九七〔新義眞言宗〕江戸護持院四十代なり、榮性字は諦純と云ふ、初の名は榮慶なり、信濃國更級郡八幡村の農浦澤勝右衞門の二男なり、明和五年四月十五日に生る、幼名を又治郎と云ふ、安永六年四月十二日十歳にして水内郡南小川村金剛寺に投して出家し、榮壽和上に師事し、天明二年加行、同五年二月豐山の衆に入る、七年十一月始めて大和に至り、豐山に登る、寬政元年一たび國に皈り、同二年十一月再び豐山に登り、雲井坊蓮阿に事へて性相を學び、四年二月能滿院に入りて求聞持法を修す、同六年九月蓮阿に從ひ、勸喜院に入る、其年俱舍論を聽く、七年國に皈り俗弟惣治郎を率ゐて重て豐山に登る、俗弟出家して觀光明阿と云ふ、九年八月蓮阿に從うて武藏弘光寺に入り、十年八月豐山に皈り、寮舍に入りて學問を事とす、十住心論俱舍論等を研究す、後榮壽蓮阿の喪を修し、二師の恩に報るため、著作開刻に力を致せり、文化十一年五月紀伊の領主の懇請により根來寺に入り住し、蓮花院、津乘院、大傳法院を兼帶す、同十二年正月勸修寺門主の奏聞により權僧正に昇る、文政四年より大傳法院の再建を企圖し、十年を經て功を畢ふ、天保四年十月四日幕府の命により江戸護持院に入り住し、護國寺を兼帶す、天保八年十月十三日護國寺に寂す、壽七十、臘六十一、著作滅緣滅行決斷、得名懸隔決斷、六合釋決斷、勃陀

エー(榮)シ

胃地決斷、即身義決斷、二教論決斷、各一卷あり、(新義眞言宗史料)

エーシヨーイン　榮昌院　ニチノー日能を見よ、

エージヨー　榮常(一三八四)〔……〕山城高麗寺の僧なり、榮常聖武天皇の朝山背國相樂郡の高麗寺に在り、常に法華經を讀誦す、一日一白衣あり榮常と共に碁を圍む、白衣碁の手に就て榮常を呰る、忽にして白衣の口傾斜し、次に死す、見聞するもの皆法華經の行者を呰りたる故に此禍にかゝると云へり、榮常示寂の年時缺く、(靈異記、本朝高僧傳)

エーセン　榮專　二三七三……〔新義眞言宗〕江戸根生院第二代なり、榮專は其字詳かならず、俗姓は太田氏、江戸の人なり、幼にして榮譽に投じて剃髮し、榮譽退院の後、席を繼ぎて根生院に住す、延寶元年醍醐山に登り、幸心院有雅より事相を受け、貞享四年權僧正となり、將軍に謁し優遇せらる、元祿三年將軍の命により、城中に觀音經を講ず、後屢幕府に出で、將軍に優遇せられ、寺祿を加賜せらる、十六年十一月二十九日根生院火災に罹り燒失す、寶永二年再建の工事を興し、幾何もなく落成す、其歳十月退院して院の西北隅に菴居し、正德三年十月十四日寂す、壽七十餘、西新井總持寺に葬る、(新義眞言宗史料)

エーソン　榮尊(一九二〇)〔眞言宗〕山城勸修寺慈尊院の四代なり、榮尊は三河僧正といふ、三河八名伊賀守藤原家房の子なり、左大臣近衞兼敎の猶子となる、榮然の室に入りて出家し、學業畢りて榮然の傳法灌頂を受け、慈尊院四世の席に居る、文應元年五月十七日權僧正となり、某年寂す、付法の弟子一人聖濟あり、(後傳燈廣錄)

エーソン　榮尊　一八五三／一九三二〔臨濟宗〕肥前萬壽寺の開山なり、榮尊號は神子、(一說に諱は口光、字は榮尊)、俗姓平氏判官康賴の子なり、康賴硫黃島に配流せられ、故あり筑後國三潴庄に滯留し、藤吉種繼の女を娶り一子を生む、即ち榮尊なり、建久六年六月廿六日鄉里に生る、時に父既に配流の地に赴けり、祖父某これを道路に棄つ、永勝寺元淋(一に嚴淋に作る)は榮西の弟子なり、奇端に感して收容し、母に授けて鞠育せしむ、七歲にして元淋の室に侍し、誦經を學ぶ、尋て落髮し、天台の敎觀を學ぶ、十六歲入壇して大僧となり、後諸方に歷遊し、肥前小城郡小松山に小菴を結び住し、淨土の行業を修す、建保五年宇佐宮に詣し、靈夢に感して東行師を求め、貞應二年二十九歲上野長樂寺に投じ、榮朝に師事し、同門に於て辨圓(聖一國師)と相知り、共に參究す、天福元年辨圓と共に長樂寺を辭し、渡宋傳法の志あり、西歸の途、伊勢大神宮に詣し、嘉禎元年四十一歲辨圓と共に平戶より商船に駕して西航し、明州に到る、辨圓と手を分ちて諸老宿を歷訪し、佛鑑禪師の下に投じ、法益を受く、三年を經て東歸す、仁治元年肥前水上山に禪林を開き、萬壽寺と號す、辨圓の東歸するや、請して禪席を張らしむ、榮尊諸方に法化を布き、朝日寺、報恩寺、妙樂寺等を開く、後京師に上り二條相國の歸依を受く、文永九年十二月二十日微恙あり、同二十八日に寂す、壽八十、法嗣亨菴宗光、樂山ーー、徹叟道映、一關祖邱、神光了因あり、(行實、年譜、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エーチヨー　榮朝　一九〇七……〔臨濟宗〕上野世良田長樂寺の

開山なり、榮朝字は釋圓、俗姓不詳、初め顯密二教を兼ね修め、後明菴榮西に師事して禪宗の心印を傳へて道譽高し、東福寺の圓爾（聖一國師）初め其教を受く、後上野世良田縣に長樂寺を開き、大に關東に禪風を揚ぐ、壽福寺の朗譽其下に參せり、嘗て一僧あり問ふ、佛法如何か用心せむ、と、朝曰ふ、忍辱精進して一塵を立せざれ、と、寶治元年九月廿六日に寂す、榮西の法系は榮朝の下朗譽、上昭、德見に至る、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エーテン　榮天 二三九七／二四六一 〔新義眞言宗〕伊豫石手寺の學僧なり、榮天字は太了、土佐中村の人なり、豐山に學び、石手寺に晋む、一住三年、享和元年七月十七日寂す、壽六十五、著作異部宗輪論日錄三卷、五教章講錄十卷、三論玄義大底記二卷、起信論講義五卷あり、（新義眞言宗史料）

エーニン　榮仁（一五四六）〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、榮仁法相に通じ、維摩會講師となり、傳灯大法師位に任せらる、仁和二年大極殿最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

エーフサイ　榮普齋　ショーケー祥啓を見よ、

エーベン　榮辯 一四一〇…… 〔法相宗〕大和奈良の僧なり、榮辨俗姓並に師承不詳神龜二年に律師に任せられ、天平十年七月三日少僧都に任せらる、天平勝寶二年に示寂す、（續日本紀、七大寺年表）

エーホー　榮峰　カクシユー覺秀を見よ、

エーミヨー　榮明 二五〇二…… 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十四代なり、　榮明字は深玄、大和芝村藩の人なり、豐山に登り、土佐の榮天に學びて、乙訓寺に住し、彌勒寺に晋む、天保五年豐山能化職に擧けられ、六年を經て退隱し、天保十三年九月十九日寂す、壽缺く、（新義眞言宗史料）

エーユー　榮祐 二一二五／二二〇四 〔曹洞宗〕安房長安寺開山なり、榮祐字は受天、俗姓は板垣氏、甲斐山梨郡の人なり、早歲廣濟寺に投して得度し、游方して三十餘人の宗師に徧參す、時に無敵高徒、士峯の麓に開法すと聞き、往きて之に見え、左右に侍すること廿年を經て玄奥に達し、西岫所傳の法衣を付せらる、安房の大守里見義弘新に長安寺を剏め、師請せられて開山となる、天文十三年十一月六日寂す、壽八十一、法嗣龍湫玄朔の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーヨ　榮譽 二二六三／二三三八 〔新義眞言宗〕江戸根生院の開山なり、　榮譽字は文秀、俗姓は齋藤氏、土佐幡多の人、慶長八年に生る、幼にして州の石見寺榮雅に從つて度を受け、後大和長谷寺に學ぶ、江戸知足院第三世榮增榮雅の法兄を以て將軍家光に寵遇せらる、數々城中に伺候し、春日局の皈依を受く、後春日局の意により師を召す、茲に於てか師長谷寺より江戸に入り、春日局に見ゆ、麻衣緇服蟣虱襟領に充つ、局乃ち新たに法衣を製して師に贈り命じて知足院に寓せしむ、幾何もなく局の推擧により、將軍の護持僧となる、寛永十三年榮增より報恩院流の事相を稟く、局白壁町の家を購買し、根生院と號し、師をしてこれに住せしめ、將軍及局の祈願を勤修せしむ、正保二年長者町徒行屋敷の地を將軍に請ひ、根生院を移し、建築す、且つ澁谷村に別院を築き、火災を避くる用に供す、寶文五年七月家綱より澁谷の別院へ寺祿百石を寄附せ

らる、延寶六年師疾に罹る、將軍特に使を遣して慰問せらる、同年二月十日寂す、壽七十六、西新井總持寺に葬る、(新義眞言宗史料)

エーヨ　榮譽　センリヨー泉良を見よ、

エーヨ　榮譽　ダンリヨー團了を見よ、

エーガク　英岳　二二九九／二三七二　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十四代なり、英岳字は宜春、俗姓は宇都宮氏、寛永十七年を以て伊賀上野に生れ、十四歳にして豐山に登り、良譽に依りて剃髮受戒し、十六歳四度軌を受け、瑜珈行を修む、十八歳にして肥前の覺因に隨ひ、具支灌頂の印璽を稟く、師常に亮汰に從ひ、密藏の經疏を聽き、深く五部の秘要に通ず、又奈良に往き華嚴唯識を學び、園城寺にて法華倶舍を聞き、醍醐寺に至りて大僧正有雅に謁し、親炙すると數年なり、兩部の大法、及び諸尊契印經軌等を傳へられ、寛文元年正月豐山に皈りて講莚を開く、延寶元年尾張の法花院に移る、中納言綱誠甚目寺に遊び、師と語りて寵遇厚し、同三年俊盛豐山に主となり、師に命じて西藏院に住せしむ、貞享元年尾張大納言光友の嚴請に依り、長久寺に移る、元祿四年將軍綱吉の命に依り、武藏彌勒寺に住す、時に將軍牧野成貞の宅に駕せられ、師其邸に於て法を講ずること前後二回なり、彌勒寺に封戸及朱印を給はる、全八年命を蒙りて豐山の席を嗣ぎて第十四代となり、僧正に任せらる、師一座九年に及ぶ、十六年病に依り、職を辭して江戸に來る、將軍綱吉進休菴を建て捿住せしむ、寶永四年冬敕して大僧正に任せらる、蓋し異例なり、師將軍に寵せらるゝこと最も厚く、寶永五年秋綱吉自ら進休菴を訪ふ、同六年春綱吉薨ずるを以て、師興喜山に至り、專ら著作を事とし、正德二年十一月一日寂す、壽七十四、臘六十一、著作理趣經純秘鈔講義六卷、同頭書三卷、舍利禮文首書一卷、雜章問答三卷、第三重私記六卷、光明眞言科註箋解三卷、阿字義註一卷、入重玄門義二卷、八囀聲事一卷、見聞隨筆一卷、塵塚一卷等あり、(豐山傳通記、新義眞言宗史)

エーガン　英巖　ケオー希雄を見よ、

エークン　英訓　(....)〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、英訓俗姓は山田氏、山城の人なり、三論を習究し、兼ねて密學に涉る、初め觀音院に住し、後東大寺に遷る、寂年及壽缺く、著作大乘玄論不審鈔若干卷あり、(本朝高僧傳)

エーグワツ　英月　ニチニヨー日饒を見よ、

エーケン　英憲　(....)〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、英憲字は密乘と云ふ、三論を討究し、兼て倶舍に精し、東大寺に住し、盛んに空宗を唱ふ、寂年及壽缺く、著作頌疏鈔三十卷あり、(本朝高僧傳)

エーシン　英心　一九四九／……　〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、英心號は如空と云ふ、幼にして慈眞和尚に投じ、延慶二年二十一歳を以て師兄定泉に滿分戒を受け、西大寺攝津の多田院に住して、盛んに律幢を樹つ、寂年及壽缺く、著作梵網古迹鈔十卷、行事鈔資賢訣、表不表章顯業鈔、菩薩戒洞義鈔、等あり(本朝高僧傳)

エーシユ　英種　二二五一／二三一四　〔曹洞宗〕山城宇治興聖寺の禪僧なり、英種字は萬安と云ふ、武藏江戸の人なり、俗姓源氏、遠山の族なり、九歳にして父を喪ひ、起雲寺源室和尚に從う

て行童となる、十一歲にして得度し、尋いて受具す、出遊して東林寺日州、吉祥寺洞谷、總寧寺鐵山に歷參し、五年を越えて起雲寺に還り、偶ゝ大慧の書を閱して參究し、狗子話を單提して省悟あり、大慈寺に至り大焉和尙に謁す、時に洪州察幕府の命を受けて吉祥寺に住し、元和四年結制し、大衆萬を以て數ふ、師を選びて第一座に居らしむ、源室の寂するに方りて、師席を嗣きて起雲寺に住す、同八年勅を拜して惣持寺に莅み、事畢りて歸る、師深く宗風の衰頽を嘆し、同志の禪侶と共に門を杜して打坐すること凡そ六年なり、寛永四年七月事を謝す、偈あり曰ふ、頂上鐵伽方脚却、瘦藤破笠出㆓禪關㆒、只隨㆓雲水㆒無㆓蹤跡㆒、不㆑識寄㆓生何處山㆒、と乃ち相摸の大山の下に隱捿す、後道俗の來參を厭うて、深く舟田山に入る、然るに鐵心、宗文、慶佐以下續々相集る者五十餘人に及ふ、五年の秋出羽の大守北條氏遠江の大德寺に請するも、師辭して出てず、美濃の水晶山に入り、草菴を營む、和泉守松平氏、師の道風を景仰して供養す、次に攝津の雲松寺に留り、寛永十三年の秋、丹波に遊び瑞巖寺の荒敗を興し、其閑寂を愛して住居すること數年なり、師常に大法の興隆を以て己の任となし、一時の尊宿たる愚堂、大愚、雲居、一絲、龍溪等皆道交を結び、相共に激勵して古風を回復せんとす、正保二年の春退隱して攝津住吉に臨南庵を營みて閑捿すること五年なり、慶安元年信濃の大守大江尙政（永井氏）山城淀城に在り、師の道風を景仰して迎へ請す、師宇治の興聖寺に入り、其荒敗を再興す、翌年に至りて再興の工事成り、元旦衆に示して曰ふ「朝日山頭呈㆓瑞氣㆒、宇治橋下抱㆓淸灣㆒、興隆興聖古禪刹、新歲重開㆓向上關㆒、と、當時江戶に宗風革新に關して議論喧し、大和守久世氏、和泉守松平氏、織部正菅沼氏等大に禮遇す、一旦師召されて江戶に出て、起雲寺に寓し、相共に謀議す、疾に罹り、興聖寺に歸り、承應三年八月廿一日偈を書して寂す、壽六十四、臘五十四、師菴院を開くこと三十餘所なり、（日本洞上聯燈錄）

エーシヨー　英性　二二七一―二三三七　〔華嚴宗〕奈良東大寺の學僧なり、

英性俗姓和田氏、山城張原の人、十二歲にして淸涼院實英に從うて得度し、華嚴學を學び、兼て三論宗を習ひ、後推されて華嚴三論兩宗の學頭となる、法華維摩の兩會に盛譽を擧ぐ、萬治の頃敕を拜し、宮中に法華八講第四日夕座の講師となる、太上法皇の敕命を拜し、法皇の宮に四法界の義を講ず、後大衆の爲めに五教章を講ず、智積院能化運敞も師に就て華嚴宗の宗義を受けたり、明曆三年より延寶五年に至る、二十年間二月堂の大導師職となること二十一度なり、延寶五年江戶に降り、旅館に於て疾に罹り、仝年九月十二日寂す、壽六十七、（續日本高僧傳）

エーシヨー　英昌（……）〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、英昌字は桂巖、俗姓生國不詳、幼にして佛陀寺大源和尙に投じて出家受戒し、志を立てゝ京都建仁寺に至り、年を逾えて佛陀寺に皈り、大源の寂後加賀の大乘寺徹山廓に教を受け、後ち承天寺に補し、次て吉祥寺に住し、晩年に至り、徹山廓の後を受けて大乘寺主となり、又永光寺に移る、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

エーシヨー　英松　……―二三〇三　〔淨土宗〕江戶西光寺の開山な

り、英松は源蓮社信譽重故と號す、俗姓は小林氏、三河の人なり、普光觀智國師に師事して法を嗣ぎ、江戸深川西光寺を刱めて開山となる、寛永二十年七月朔日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

エーチユー　英仲　ホーシユン法俊を見よ、

エーチヨー　英朝　二〇八八—二一六四　〔臨濟宗〕京都大德寺の僧なり、英朝字は東陽、俗姓は土岐氏、美濃加茂郡の人なり、甫めて五歳京都に上り天龍寺の玉岫稙禪師を禮して侍童となり、稍長して剃髮受具し、玉岫に南禪寺に參すること久しくして辭し、徧く叢席を廻り、雪江深禪師の道譽を聞き、龍安寺に掛錫して之に依る、遂に其印許を受け、出てゝ丹波の龍興寺に住す、文明十三年十一月詔を奉して京都大德寺に住し、一年にして玅心寺に轉住し、一住三年、尾張の瑞泉寺の席を補す、美濃の人源司農少林寺を刱し、師を請ひて第一世とす、尋いて州の大仙定慧の二寺に歷遷す、師道場に坐するもの八回四十餘年玅心寺にありし時多く祖錄を講し五山の衆僧來聽す永正元年八月美濃少林寺にて病み、二十四日偈を書して曰ふ、涅槃四柱一時拗折、看看珊瑚枝々撑ニ著月ー、憑ニ甚魔宮化ー、墨魔膽落、喝、と、筆を投して寂す、壽七十七、臘六十四、少林寺に塔す、著作正燈錄十四卷あり、百丈清規江湖集等を校正し前後箭を集む前箭は世に句双紙と云ひ盛に行はる、門人八會の法語を集めて十卷となし無孔笛といふ、法嗣七人あり天蔭、大雅、朴菴、泰邦、天關、希雲、亨仲と云ふ、承應二年一百五十年忌に勅諡大道眞源禪師を賜ふ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、宗統八祖傳）

エートン　英頓　二二五七……　〔曹洞宗〕肥前菩提寺の禪僧なり、英頓字は領山、俗姓は三島氏、肥前島原の人なり、十五歳耕田寺宣菴に依りて剃髮し、出遊して筑の祥寧寺に至り、朝山芳暾に見え、其法を嗣き、耕田寺に皈り、天文二十年菩提寺に住す、慶長二年五月二十一日寂す、壽缺く、遺偈あり、曰く、七十八年、水清月圓、轉身端的、蹈ニ飜昊天ー、と、（日本洞上聯燈錄）

エードン　英曇　二一九二……　〔曹洞宗〕伊豫安樂寺の禪僧なり、英曇字は華屋、備中の人、全國の華光寺玄室守腋に參して旨を得、總持寺に出世し、永正十二年玄室の命を受け、伊豫の安樂寺に居り、晚年紺原の安養寺に退休し、天文元年十一月一日寂す、世壽缺く、法嗣喜山宗忻の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

エーハン　英範　二三九〇—二四六四　〔新義眞言宗〕山城智積院第二十七代なり、英範字は寶洲、近江の人、同國石動寺に投じ得度す、後智積院に學び、寛政三年六月幕府の命により眞福寺第二十七代となり、本堂等を再建し、中興と稱せらる、享和三年十一月智積院に進み、僧正に任ぜらる、文化元年八月十五日寂す、壽七十五、著作具支灌頂手鏡一卷あり、（眞福寺世代新義眞言宗史）

エーモク　英穆　二一七二……　〔曹洞宗〕信濃定津寺の禪僧なり、英穆字は悅堂、信濃定津寺拈笑宗英に參し、謹侍すること多年なり、拈笑總持寺に遷るに及ひ、之に從ひて入室し、遂に衣法を受く、時に應仁元年七月二十七日なり、拈笑の沒するに際し、定津寺に主となり、延德二年最乘寺に遷る、永正九

年四月廿三日寂す、壽缺く、法嗣雲鷹玄俊の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーモン　英文　二〇三二 二一一四〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、英文號は景南と云ふ、常陸の人、佐竹義基の第六子なり、稍長じて京都に入り、東福寺大方用和尚を拜して師となし、深く玄旨に達して、其法を嗣ぎ、萬壽寺に出世し、東福寺南禪寺等に歷遷す、永享十二年春將軍足利義敎洛東八坂塔を修し、法觀寺に於て大法會をなし、師を導師となし、將軍親しく臨場す、師年七十六にして龍山の東禪院に退休し、亨德三年九月二十二日懇ろに諸弟を誡め正念にして寂す、壽八十三、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エーヨ　英譽　リョークワツ了月を見よ、

エーヨ　英譽　センザン千山を見よ、

エーヨ　英譽　ソーツー總通を見よ、

エーヨ　英譽　リンオク林屋を見よ、

エーヨ　英譽　ギンセツ誾雪を見よ、

エーヨ　英譽　アンセツ安說を見よ、

エーヨ　英譽　シンア心阿を見よ、

エーリン　英麟　二二五六〔曹洞宗〕伊豆最勝寺の禪僧なり、英麟字は鳳菴、伊豆の人、俗姓は平氏なり、拈笑宗英に投して祝髮し、出て、叢席に遊ひ、再ひ歸りて其印可を受け、伊豆最勝寺に主となる、明應二年最乘寺に遷り、仝五年閏二月七日寂す、壽缺く、法嗣大洞存長、大嶽祖益の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

エーコー　睿好　(……)〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、睿好は比叡山の三昧和尚の門人なり、橫川寺の勝行と肥前肥御崎に到り、留連して靈驗を感し、歸京して其後を知らす、(本朝高僧傳)

エージツ　睿實　(……)〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、睿實久しく比叡山に留まりて、博く台教を學ひ、常に法華を持す、嘗て愛宕山に居り、晚年九州に往き、世務俗掌を執る、寂年及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

エーソン　睿尊　一八六一 一九五〇〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、睿尊字は思圓、俗姓は源氏、母は藤原氏の出、建仁元年大和添上郡箕の田に生る、七歲にして母を喪ひ、出家の志禁しかたく、十一歲醍醐寺の睿賢に投し、後西谷に往き、慧操に謁し、菩提心論、悉曇字義、俱舍等を學ひ、十七歲にして同寺の圓明阿闍梨に就きて下髮受業し、十八契印兩部の大法、及ひ護摩秘記等を受け、元仁初年春、高野山に登り、信惠阿闍梨に逢ひて、醍醐寺、長岡寺等に隨從し、安貞元年具支灌頂を受く、後東大寺に往き、覺盛、覺證、圓晴に從ひて、南山の宗を學ひ、律鈔を質問す、嘉貞二年秋、師三十六歲にして覺盛、圓晴、有嚴等と共に、瑜伽大乘論によりて自誓受戒し、海龍王寺に住し、西大寺に移りて戒疏を講し、布薩を行ふ、寬元三年夏大和法華寺の尼文簇等に沙彌尼戒を授け、九月和泉の家原寺に白四羯磨別受の法に依りて具足戒を重受す、建長の初年法華寺に於て慈善等の十二人に大比丘尼戒を授け、行事鈔を講す、六年春西琳寺に說戒し、眞福寺に結界す、菩薩戒を受くるもの甚た多し、正化元年冬攝津四天王寺にて梵網經を講し、弘長元年春藤原中納言定嗣、師に從ひて落髮受戒し、

淨住寺を洛西に剏め、師を請して開山となす、二年春越後守實時の招きにより、鎌倉に到り、其叔父道崇居士を始め、府內の一族に菩薩の大戒を授く、四年般若寺を修營し、五年春無遮の大會を設け、餓者數萬人を救ふ、弘安二年後深草上皇に招かれて梵網經を講じ、宮中に留まること七日、上皇に十重禁戒を、龜山上皇に菩薩の大戒を授け、公卿以下五十九人に戒を授く、四年春國家のために最勝王經を寫し、上皇自ら護國品を書し、尋で西大寺に幸して、師に仁王曼陀羅を賜ふ、三月播磨嵓峰寺に梵網十重を講じ、布薩を行ふ、戒を受くるもの一千八百五人、郡主平時俊佛教に皈し、治內東西三里、南北二十五町の間殺生を禁す、四月平等院にて梵網經の古迹を講し、受戒するもの八百餘人、師又平等院の上下宇治橋の南北を永く殺生禁斷せんことを奏請し聽さる、六月蒙古來寇するとき敕を蒙り、京都奈良の僧五百六十餘人と共に山城男山八幡宮に就て仁王會を開き、愛染の法を修す、後宇多天皇師を召して菩薩戒を受け、弟子の禮を執る、六年春寶生護國院を建て、國祚を祝し、具支灌頂を行ふ、七年四月師歲八十を過くるを以て輿に乘りて宮禁に入るを許さる、招提寺大悲菩薩の後、結界道場多く頹廢せしを、師再び營興す、同年冬、旨ありて四天王寺の主務に任す、八年春住持の任を統べて敬田院を結界す、師晩年由良の法燈國師に逢ひて禪を探り、別傳あるを知る、伏見天皇即位するや、師を召して法を問ひ、戒を受く、正應三年八月の初め疾を示し、二十五日寂す、壽九十、臘五十四、遺骨を西大寺の東北に納め、塔を法身體性と號す、師戒經を講し、布薩を行ふこと一万七百十餘座、具足別受沙彌菩薩戒を授くるもの六萬六千一百三十餘人、密灌を授くる者七十餘人、漁獵を禁し、放生池を置く一千三百五十餘所、餓餒を救ふこと一万計、舍利を感する若干粒、門下良觀慈道等三十餘人、皆名刹に住す、著作梵網古迹文集十卷、表不表章文集三卷、感身學正記三卷、菩薩戒本釋文鈔、應理宗戒釋文鈔、別受八齋儀、授菩薩戒儀、等各一卷あり正安二年後伏見天皇敕して興正菩薩と諡す、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳、諸宗章疏錄）

エータツ　叡達　ニチタイ日躰を見よ、

エーチヨー　叡長　ニチキヨー日境を見よ、

エーチヨー　叡澄　一九六七……〔淨土宗〕山城二尊院の僧なり、叡澄字は正覺大納言三條公の子にして、正信湛空に師事して淨土敎を修め、後嵯峨御深草龜山後宇多伏見五帝の戒師なり、京都二尊院に住す、德治二年六月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

エークー　叡空　一八三九……〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、叡空字は慈眼といふ、比叡山西塔黑谷に住し、學解深し、大原の良忍上人に師事して淨土敎を受け、念佛誦經を務めたり、且つ好んで源信僧都の往生要集を講論したれは、源空上人其下に敎を受けたり、後叡空は源空の高風に服し、弟子の禮を執りたりと云ふ、治承三年四月（一に二月）二日寂す、（淨土傳灯錄、淨土宗年譜）

エークー　叡空　一九九三　二〇七二〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、叡空字は圓道、俗姓は高氏、京都の人なり、幼より慧海律師に從ひて剃髮受學し、具足戒を稟受す、後南北に周旋して顯

密の宗旨を探り、應永十四年の秋西大寺の衆請を受けて、住持すること五年なり、同十九年三月二十三日寂す、壽八十、（本朝高僧傳）

エークワン　叡桓　（…）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、叡桓は法華を誦し觀念を修す、自ら警策して曰く、初發若し僻まば萬行を施すも徒爾に歸せん、故に必す當に圓教の大心を發し、實相の妙行を修し、六道の衆生を誘引して、佛智見に悟入せしめん、我近世の行人を見るに、或は外相の苦行を營みて內心の觀念を爲さず、或は依報の資財を施して正報の信慧なし、徒に人天の果報を感して、三乘の位次に陷ゐることなし云々と、即ち戒律を堅持して日午を過くれは厨烟を上けす、纔に觀念散すれは誦するも之を捨つ、かくて精誦一萬餘部に至り、屢々奇瑞を感す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

エークワン　叡桓　ニチシユー日宗を見よ、

エーグワン　叡願　ニチフク日福を見よ、

エーコー　叡効（一九〇九）〔天台宗〕山城正法寺の學僧なり、叡効は京都の人、園城寺に入りて衆僧の業を勤め、大悲菩薩に法を問ふ、山城巖間山の觀音靈感ありと聞き、往きて他と言語を絕ち、法華經三千部を讀み、後園城寺に皈る、朝廷名を聞きて僧官を給ふて正法寺に住せしむ、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

エーヨ　叡譽　カイエツ開悦を見よ、

エーゲン　頴玄（…）〔眞宗〕近江上品寺の僧なり、頴玄は法界坊と號す、寺の近村の名主の子、八歲の時に父を喪ひ、其菩提を弔はんか爲めに出家して諸國を遍歷し、江戸に出で、法を學び、師の讓りを受けて近江坂田郡鳥居驛上品寺に住し、其廢頽を興さんと欲し、諸國に勸進す、江戸に上りて市內を托鉢す、遊女花扇なるものあり師に就て受戒し、師の望により梵鐘を鑄てこれを贈る、師大に悦び、車に載せ、挽きて近江に皈る、寂年、及壽歆く、（實事譚、名譽實錄）

エーショー　裔正（…）〔曹洞宗〕上野仁叟寺の僧なり、裔正字は直應、曇英慧應の法を嗣き、上野仁叟寺に主となり、寂年及ひ壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

エーゼン　營禪　エーヂヨ榮助を見よ、

エキドー　奕堂　センガイ旃崖を見よ、

エツガン　悦巖　チギン智誾を見よ、

エツガン　悦巖　フゼン不禪を見よ、

エツガン　悦岩　シユーゴ宗吾を見よ、

エツガン　悦嵒　トーネン東念を見よ、

エツサン　悦山　ドーシユー道宗を見よ、

エツゼン　悦禪　ゼンエキ禪懌を見よ、

エツドー　悦堂　ジヨーキ常喜を見よ、

エツドー　悦堂　シユーエキ宗懌を見よ、

エツドー　悦堂　ミヨーカ妙可を見よ、

エツドー　悦堂　エーモク英穆を見よ、

エツポー　悦峯　ドーシヨー道章を見よ、

エンア　圓阿　シンサツ眞察を見よ、

エンア　圓阿　シユードン宗呑を見よ、

エンイ　圓意（……二三五九）〔淨土宗〕下野弘經寺の僧なり、圓意は實蓮社眞譽路經と號す、其俗姓生國詳かならず、路白

に投じて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、初め舘林善導寺に住し、後飯沼弘經寺に遷る、元祿十二年三月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

エンイ 圓伊 二〇一四 二〇七三 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、圓伊字は仲方、長崎の人なり、八歲にして筑前聖福寺南嶺越を拜して得度し、稍長じて南都に遊び、西大寺高湛律師を問ひて戒律を學ぶ、尋て京師に入り、東福寺に掛搭す、應永九年播磨の法雲寺に開法す、後建仁寺に昇る、應永十六年四月八日京都第五橋の落慶供養の導師となる、(第五橋は前一年僧慈鐵の設計にかゝるもの長八十六丈、廣二丈四尺なり、)後南禪寺に昇り、法化益盛なり、晩年建仁寺長廣菴に退休す、應永二十年六月疾に罹り、八月十五日寂す、壽六十、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エンイ 圓位 サイギョー西行を見よ、

エンイチ 圓一 (一九三七) 〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、圓一は伊勢の人、出家して泉涌戒光二寺に歷遊し、後戒壇院圓照に師事して戒律華嚴を究む、晩年伊勢に還り、戒律を唱ふ、寂年缺く、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

エンウ 圓有 一九二六 二〇〇九 〔臨濟宗〕攝津福海寺の開山なり、圓有字は在菴と云ふ、俗姓生國詳ならす、法位性禪師の法を嗣ぎ、兀菴禪師四世の曾孫なり、京師正傳寺に居す、建武の頃、足利尊氏の皈依を受け、攝津矢田部に大光山福海寺を開く、貞和五年十一月廿一日寂す、壽八十四、遺偈に曰ふ八十四年、笑倒祖佛、一句臨行、寒嵐拂拂、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、攝陽群談、攝津名所圖繪)

エンウン 圓運 (一七八八) 〔眞言宗〕河內廣隆寺の僧なり、圓運は大治三年十二月三日覺寬と共に無量光院にて傳法灌頂く受く、(續傳燈廣錄)

エンエ 圓慧 一九二九 二〇〇三 〔臨濟宗〕上總願成寺の禪僧なり、圓慧號は可菴、俗姓藤原氏、尾張海東郡の人なり、母は源氏、嗣なきを以て同國甚目寺の觀自在菩薩に祈る、一夕夢に佛袈裟を懷き、覺めて孕むあり、文永六年に生る、天質凡ならず、八歲の時、父母其俗家に置くを憚りて郡の某寺に付す、圓慧初め天台を學び、幾くもなく三藏の名目を暗記す、十三歲、父の命により禪宗に投じ、實相寺應通禪師に就きて剃具す、後南都に到り、三論、法相、華嚴、等を學び、叡山に登りて八教の旨を質し、兼ねて密灌を受く、永仁四年元に渡航す、時に二十八歲なり、江浙の諸刹を歷遊すること前後十三年、延慶元年に東歸す、檀越總州の太守吉良滿氏に請せられ、實相寺の席を董す、住持四年、四衆四來す、寶珠菴を營みて退休の所となし、また寺南一里巨海と云ふ地に願成寺あり、初め吉良長氏夫人の創立にかゝる、滿氏改めて禪林となす、師請せられて開山となる、然るに自ら任せず、先師應通を推して開山始祖となす、これ應通が實相寺を開きて聖一國師を推して開山となせしに準ぜるなり、康永二年十一月六日寂す、壽七十五臘六十なり、遺偈あり、平生活路、七十五年、金剛眼目、只對吾禪、本山に覺塲塔を建てゝ遺骨を收む、應永丙申の秋勅諡圓光禪師を賜ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エンエン 圓緣 ……一七二〇 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、圓緣は朝臣の家に出で、扶公に師事して法を得、中宮院に住

し、後興福寺に移る、康平三年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

エンオー　圓雄　リヨーセン良仙を見よ、

エンオー　圓應　シヨーケー正瑩を見よ、

エンガ　圓賀　一五六六／一六五二　〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、圓賀其俗姓生國詳かならず、比叡山に掛錫し、密敎に通す、永延元年三年十日勅して律師より大僧都に任す、此例師に始まるなり、正暦二年七月二十三日寂す、壽八十七、(本朝高僧傳)

エンガ　圓雅　二二四九／二三〇八　〔眞宗〕河内光善寺の住持なり、圓雅字は准玄、俗姓は藤原氏、父は准勝なり、某年河内出口光善寺を住持す、寛永十六年十一月本山學黌を創建するや、法主に擢てられて講主となり、稱して能化といふ、此れ眞宗能化職の祖なり、明年夏學黌にて和讃を講す、時に年五十二なり、八年を歷て正保四年出口に歸り、慶安元年五月十六日寂す、壽六十、元錄六年師の孫寂玄異を立て衆を惑し、東派に轉す、遂に師の功を沒するに至る、著作三經大綱一卷あり、(本願寺通紀、本願寺派學事史)

エンカイ　圓海　(……)〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、圓海字は道本、東大寺に居り、圓照によりて受具し、海龍王寺戒壇院に巡遊し、常に華嚴を玩ふ、聖守圓珠の二師に就きて眞言を傳習す、寂年缺く、(本朝高僧傳)

エンカイ　圓海　二二六〇／二三三四　〔眞宗〕肥後延壽寺の學僧なり、圓海字は月感、初の名は明了と云ふ、肥後の人、俗姓藤原氏なり、慶長五年十二月廿日合志坂井庄碧海寺に生る、父は政重法名唯忍と云ふ、師は其二男、小字小次郎丸憲隆と云ふ、十六年十二歲にして得度し、内外の兩典を講究す、寛永八年、三十二歲京師に上り、諸高僧を訪問す、幾もなく國に歸りて敎化を事とし、寛永十八年九月、四十二歲にして再び京師に上り、翌十九年建仁寺に入り、大藏經を閲覽す、慶安二年五十歲長崎に遊び、明僧如禎禪師に謁し、且つ其藏にかゝる大藏經を閲覽す、同年國に皈り敎化を事とし、皈仰する者多し、承應元年五十三歲三ひ京師に上り、本願寺學寮に入りて論註安樂集の講釋を聽き、一流の安心を誤れるを慨嘆す、實は京師を經て東國に遊び、親鸞上人の遺跡を巡拜せんとの考なりしも、一流の安心の大事なるを思ひ、京師に留り、承應二年二月八日訴狀七ヶ條を本願寺に出し、能化西吟を彈劾す、同年三月八日西吟答書を出し、師二たひ破文を作り呈出す、三月廿二日西吟二たび答書を出し、六月師三たひ破文を作り呈出し、西吟の說を以て自性一心の安心なりとし、極力駁擊し、十一月十七日最後の訴狀を老中奉行中に出し、西本願寺下を退き、東福寺元西堂に依る、元西堂の周旋により、東本願寺宣如上人に謁し、遂に東本願寺下に轉し、淨林坊に寓す、西本願寺の僧俗共に大に動搖し、幕府に訴へて西吟圓海二師の安心を判ぜんことを請へり、時に西本願寺、興正寺、兩寺其見を異にし、興正寺は師の說を助けて西本願寺幷に西吟に當れり、承應三年幕府師を召して調査し、安心邪正の批評には西本願寺幷に西吟を非とし、本願寺學寮を破毀し、別に事に托し興正寺門跡、幷に師を流罪に附す、七月晦日興正寺門跡は江戶を出て、越後今町の配所に赴き師は出雲玉造の配所に下る、萬治元年十月廿四日五十九歲勅免を蒙り、玉造を發して

國に歸り、延壽寺に入る、二年六十歲六字談釋、四修畧解、五智註疏、十三失要解を著す、寬文元年、六十二歲、親鸞上人の四百年忌に當るを以て、報恩の爲め三國傳繪、二河圖、三經安心畧圖、無常十界を製し、檀越に施與す、寬文四年山分を著し、五年六十六歲四恩論を著す、同六年正月二日六十七歲東本願寺へ歸參す、寬文七年六十八歲、再び東國北國の親鸞上人の遺跡巡拜せんとしたるも奉行より制止せらる、九年八邪辨要を著す、同年以來國内の檀越の請を受け敎化を事とす、延寶元年七十四歲近世善惡華報錄を編す、延寶二年八月病あり、九月五日寂す、壽七十五、著作分畧四恩鈔、發願文十六箇條要解、六字講釋、四修畧解、五智註疏、大藏經末渡目錄、（三卷）決定鈔糅記、山分、和讚袖之裏、八邪辨要、勸化大綱、五重之短解、曼荼羅核定記、夢想紀、罪福等三對觀世音私考、近世善惡華報錄、（三卷）あり、（延壽寺圓海年譜）

エンカイ　圓海　ザンオー殘應を見よ、

エンカイ　圓戒　ゼンニ禪爾を見よ、

エンガク　圓覺　シユーコー修廣を見よ、

エンガクイン　圓覺院　ニチチヨー日長を見よ、

エンカン　圓鑑　ボンソー梵相を見よ、

エンガン　圓龕　シヨーカク昭覺を見よ、

エンキ　圓喜　（……）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、圓喜字は淨慶、鎭西の人、初め淨音に從ひて淨土敎を學び、後圓照に就て戒律を受け、鎭西に戒律を唱ふ、寂年缺く、（本朝高僧傳）

エンキ　圓禧　二四二〇／二四六四　〔眞宗〕伊勢專修寺の第二十代なり、圓禧は淸淨樂院宮と號す、韶仁親王の王子なり、天保三年六月入室、同九年三月廿一日住職、文化元年五月八日寂す、壽四十五なり、

エンキユー　圓給　二〇四二／二一一八　〔曹洞宗〕日向大陽寺の開山なり、圓給字は足室日向の人、其姓を詳かにせず、永德二年を以て生れ、幼にして石屋眞梁和尙に投じて出家得度し、徧く名宿に歷參し、後竹居正猷禪師に謁して之れに師事し、信衣を受け、了心寺今の津友寺に主となる、永享十一年の冬詔に應じて總持寺に住し、特に紫伽黎を賜はる、嘉吉二年日向の檀越大陽寺を築き、師を請して開山となす、長祿二年二月十七日寂す、壽七十七、（日本洞上聯燈錄）

エンキヨー　圓經　（一八七六）　〔法相宗〕大和知足院の學僧なり、圓經は解脫上人の上足にして、建保四年維摩會の講師となり、權少僧都に任ず、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

エンキヨー　圓鏡　二三〇六……　〔淨土宗〕武藏寶智院の開山なり、圓鏡は靈譽と號す、其鄕貫詳かならず、觀智國師に師事して法を嗣ぎ、武藏稻毛小田中寶智院（大吉寺）の開山となる、正保三年二月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

エンキヨー　圓鏡　カクリヨー覺了を見よ、

エンキヨー　圓慶　（………）〔天台宗〕京都大雲寺の僧なり、圓慶は法を文慶に承けて大雲寺に住す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

エンキヨーイン　圓敎院　ニチイ日意を見よ、

エンギヨー　圓行　一四五九／一五一二　〔眞言宗〕山城靈巖寺の開山なり、圓行俗姓詳ならず、京都の人なり、十一歲より元興寺

の蔵榮律師に從ひて業を受け、十六歳華嚴宗の年分に預りて得度す、弘仁十三年有部の具足戒を稟け、十四年空海に從ひ、兩部の大法を傳ふ、天長元年九月廿七日空海高雄寺に廿僧の定額を置くに及ひ、師も亦其一員に擢てらる、杲隣を拜して灌頂壇に入り、付法の首位となる、承和四年正月九日檜尾僧都の上表により、入唐を命せられ、四月六日常曉、圓仁、圓載等と遣唐使に從ひ海に泛ひ、風に阻れて止まり、五年六月再ひ發して唐に入り、長安に到り、禮賓院に館す、翌年正月十三日上座圓鏡等勅を拜して師を青龍寺に導き遠來の勞を慰す、師は惠果和上の塔を禮して別房に寓す、十五日左街の僧錄三敎講大德體虛、勅を奉して、保壽寺內供奉臨壇大德光辨、晉敬寺內供禪宗大德弘辨、招福寺內供齊亳興、唐寺內供光顯、雲華寺內供海岸、青龍寺講論大德圓鏡をして敎門を標し、師と其要義を詰難せしむ、師遂に內供奉講論大德に任せられ、諸物品を賜はる、閏正月二日義眞和尚に兩部灌頂の職位を付せらる、中天竺三藏難陁は梵夾一具、佛舍利二千七百粒を贈る、左街の僧錄本使驃騎の帖を奉し、經典論策若干を縹囊にして師の東歸に贐す、翌日禮賓館に移り、承和六年十二月六日歸朝す、廿九日表を撰して請來の經論六十九部百三十卷、佛舍利三千粒、佛菩薩曼荼羅圖樣三張、畫像十軀、密壇道具十品を獻す、此年正月廿二日師唐にありて我か實慧等八大德の書を青龍寺內供奉講論大德圓鏡に達し、弘法大師の訃を報す、又師彼地大德の贈りし淨具を齎して高野山の祖堂に献して永世安置の寶とす、後勅して山城北山靈巖寺に居らしめ、播摩の大山寺を開き、天王寺最初の別當に補せられ、仁壽二年三月六日寂す、壽五十四、臘三十八、著作金剛界記、五大虛空藏法、聖無動尊決秘要義、靈巖口傳、並に進官請來錄一卷あり、(弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

エンギヨーイン　圓行院　ニチタイ日諦を見よ、

エンク　圓瞿　二〇三八……〔臨濟宗〕京師萬壽寺の禪僧なり、圓瞿字は竺堂、俗姓不詳、明極俊の法を嗣ぐ建長寺に留り、後、攝津兵庫の廣嚴寺に出世して明極俊の後を繼ぎ、二代となる、棲賢寺を開き開山となる、應安の末京師の萬壽寺播摩の法雲寺に歷住す永和四年十月十八日棲賢寺に寂す、遺偈あり、不レ隨二前釋迦一、不レ待二後彌勒一、出二世於中間一、分身千百億、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エンク　圓久　(……)〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、圓久俗姓不詳、九歳にして比叡山に登り、西塔の聖久に師事して敎學は勉む、後楞嚴院に遷り、法華經を誦す、音調和雅にして聞く者感激す、晚年愛太子山に登り、南星峯に住し、無緣三昧を修し、六時懺を行ふ、示寂の後四十日、尙ほ墓中に誦經の聲聞こえたりといふ(本朝高僧傳)

エンクー　圓空　(……)〔淨土宗西山派〕山城光明寺の僧なり、圓空字は久圓、俗姓生國未詳、信山無壁に師事して淨土宗西山派の學を修め、尾張曼陀羅寺に住し、次に山城粟生光明寺に遷り、其敎を弘む、寂年並に世壽缺く、著作論註私記一卷あり、(淨土總系譜)

エンクー　圓空　(……)〔臨濟宗〕美濃池尻彌勒寺の中興なり、圓空は美濃國竹ヶ鼻の人なり一説佐渡人幼より出

家して某寺に在りしが、廿三歳にして寺を遁れ出て、富士山に登りて山籠し、次に加賀白山に山籠し、一夜白山權現の示現により美濃の池尻彌勒寺を再建し、幾もなく飛彈の袈裟山千光寺に遊び、俊乘を問うて交善し、師平生持つものは鉈一丁なり、常に此鉈を以て佛像を彫刻し、袈裟山にて立なからの枯木にて二王を彫刻し、妙工と稱せらる、豫め人の來るを知り、人を見家を見て、豫め吉凶を判するに當らさるなし、或時高山の金森侯の居城を指して此處に城氣なしといへるに、一兩年の間に侯出羽に國替し、外廓のみとなる、大丹生と云ふ池に妖怪ありと傳ふ、師一見して國中大に災にかゝる兆なりと云ひしかば、諸人驚きて其災を攘はんとを請ふ、師不日にして鉈を以て佛像千躰を彫刻して池に沈めたり、其後何の故もなく、諸人皆師の德風に皈したりと云ふ、晩年蝦夷に渡り、佛教を弘通し、土人より今釋迦と稱せらる、美濃の池尻に皈りて寂す、美濃飛彈の地方にて窟上人と稱し傳ふ　常に窟に住したりし故なるべし、師彫刻繪畫を善くし作品世に傳ふ、(近世畸人傳、續日本高僧傳、逸人畫史)

エンクー　圓空　リユーシン隆信を見よ、

エンクー　圓空　サイジン濟甚を見よ、

エングワツ　圓月(ゲツ)　一九六〇 二〇三五　〔曹洞宗〕上總吉祥寺の開山なり、圓月號は中巖、俗姓土屋氏、相模鎌倉の人なり、八歲壽福寺に投し、十二歲道慧に就きて孝經論語を讀み、十三歲梓山律師に就きて剃髮受戒す、醍醐三寶院に入りて顯密二敎を兼ね修め、毎日弘法大師の像を百拜せり、後、轉して禪宗に歸し、寬通圓に依り、諸家の語錄を閲し、約翁儉、嶮崖安、

雲尾輪、並に東明日に歷謁し、文保二年太宰府に下り、元に航せむとするもの國守許可せず、再び京師に回り、萬壽寺絕崖の下にあり、同年冬越前に下り、永平寺義雲に謁し、元應元年鎌倉に回り、東明日、玉山旋、雲山隱を歷訊し、元亨元年また京師に上り、闘提具、虎關錬の下に參究し、翌二年東下し、正中元年に再び西下し、遂に元に航す、天寧寺靈石芝、保寧寺古林茂、雲巖寺濟川檝に歷謁し、嘉曆二年吳門に往きて絕除中に謁し、尋て淨慈寺雲巖欽、百丈山、東陽輝に謁す、輝の下記定を司り、天下師表閣棟梁文を作りて稱賞せらる、遂に輝の法を嗣き、去りて諸寺に遊ぶ、盧阜に龍巖柏壑の二老を訪ひ、鄱湖を過ぎて永福寺竺田心を訪ふ、正慶元年東歸、筑前博多に着し、顯功寺に寓す、翌二年京師に上り、南禪寺明極俊の下に留る、曆應二年近江刺史大友貞宗、上總利根に吉祥寺を搆立し、師を請す、尋きて下總の龍澤寺、相模の萬壽寺、豐前の萬壽寺、京師の萬壽寺に歷住す、延文六年京師萬壽寺に一菴を營み、妙喜世界と云ふ、(妙喜世界後建仁寺に移建す、)康安二年勅を拜し建仁寺に住し、尋て京師の等持寺、鎌倉の建長寺、近江の龍興寺に歷住す、南禪天龍の命あるも老衰を以て辭す、應安七年微恙あり、永和元年正月八日寂す、壽七十六、妙喜世界の後に塔を立つ、同二月勅謚佛種慧濟禪師と賜ふ、著作日本紀(發行を停止せらる)、並に東海一漚集五卷あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エングワツ　圓月　ジヨーカイ乘海を見よ、

エンクワン　圓觀　……二〇一六　〔天台宗〕京都法勝寺の僧なり、圓觀字は慧鎭、別に慈威和尙と云ふ、近江坂本の人なり、出

家して圓頓戒中興祖傳信興國和尚に師事し、圓頓戒を受け、圓頓戒中興第二祖と稱せらる、後伏見天皇花園天皇に圓頓戒を授け奉る、正中二年奏請して坂本西教寺の廢頽を興して圓頓戒を傳へ、且つ淨土敎に意を傾け、念佛修行す、後醍醐天皇の勅召により、宮中に參候し、圓頓戒を授け奉る、勅により元應寺より法勝寺に轉住し、天皇の皈依益深く、僧正に任せらる、光嚴天皇光明天皇に圓頓戒を授け奉る乃ち五朝國師の號を賜ふ、天皇は鎌倉幕府を滅せんとし、僧兵に依り、軍勢を養けんとし、數延暦東大興福等の諸大寺に行幸して、僧徒の心を收めたまふ、師は文觀忠圓と並に天皇の諮問に參し計畫するところあり、元弘元年天皇中宮の安產祈禱に托して大に諸寺の僧徒を召したまひ、殊に師並に文觀を請し、宮中に於て北條氏を咒咀せんとしたまふ、然るに事漏れて師等捕はれて鎌倉に送られ、陸奧に禁錮せらる、後亂平くに及ひ、京師に歸り、法勝寺に住す、正平十一年（北朝延文元年）三月朔日寂す、師諸國に戒律道場を開く、相模の寳戒寺、加賀の藥師寺、伊豫の等妙寺、筑紫の鎭弘寺、皆師の力により戒律道場となる（大日本史、天台霞標、淨土總系譜、西敎寺緣起、壁驢嘶餘、）

エンクワン　圓環　一三五六 一三九四　〔眞宗〕越前敦賀眞蓮寺の住持なり、圓環字は了稱、號は超空といふ、攝津大坂の產なり、姓は佐野氏、其先は信濃佐野の門閥家なり、六七歲にして和歌を賦すことを知る、八歲乳母に離る、心潛かに悲みに堪へす、偶々櫻花を見て詠す「小櫻の色は白色名に負はゞ乳滴る乳母は姥櫻かな」と、蓋し小櫻を以て己に擬し、乳母を以て姥櫻に比したるなり、又躑躅花を詠して曰く「躑躅花今を盛りと思ひしにはや入相の鐘の惜くも哉」と、後師に就きて句讀を習ひ、書法を學ふ、寳永六年十四歲にして父を喪ひ、因て京都西福寺慧空に投し弟子となる、正德三年十八歲にして義疾を患ひ、講筵を退き、京都七條に僑居す、師以爲らく法門の優劣を判別するには、諸宗の學に通せずは比較するに由なし、故に普く四方の講席に趨き、諸經論を聽かんと欲し、疾の愈るを待ち、近江の性慶上人法華を和泉堺に講するを聽き、又人の華嚴五敎章を講するを聽く、是より華嚴法華の敎を究む、華嚴法華の二敎は諸敎の上に出て諸宗の及ふ所にあらすとなし益意を傾く、享保四年二十四歲にして請に應して越前角鹿（敦賀）眞蓮寺を主とり、一住十六年間講說唱導に力めて曠歲なし、餘暇ある時は、和歌、點茶、賞香、箏、散樂、曲藝の諸技を樂む、嘗て近世の講流淨土の敎義を解するの者佛祖の面目を得さるを疑ひ、今に至る十有餘年工夫努力し、三十四歲にして大に佛祖の玄旨を悟る、翌年門人に招かれて阿彌陀經を近江伊香郡妙覺寺に講す、本願圓頓の說、安養華藏同異の說、聖道觀心と淨土信心との同異說、聖淨權實の說、十劫久遠の說、西方十万億の說を辯解す、然れとも時に難者ありて師を譏り新奇を好むとなす、同年冬洛西松尾華嚴寺僧濬上人明導劄一編を著し、淨土の敎義を難詰し、其難易多く師の講述中の辯論と合す、此に於てか衆皆師の說に服す、或人他宗疑難の旨を擧けて師に問ふ、師其根本なるもの兩三件を擧けて之を辯し、錄して一卷となし、二尊二敎圓々喩と號す、門人之を刊刻して四方に傳ふ、十六年春門人に招かれて觀無

エン（圓）ク

量壽經を近江淺井郡勝圓寺に講す、十七年遂に本山に拔擢せられ命を受けて小經を本山の學校に講す、八月近江八幡に到り正信偈を蓮照寺に講す、十八年夏又命を受けて本山の學黌に觀無量壽經を講す、秋請せられて加賀に遊ひ、觀無量壽經を金澤道場に講す、因りて越中の井波、城ヶ端、高岡、本吉、宮腰の所々を遊化す、先師慧空の十三年忌に當るを以て十住論彌陀章を講して報恩に擬す、十一月請によりて小松に到り、正信偈を正行寺に講し、十二月下旬敦賀に歸る、十九年春病に罹る、力めて京師に赴き、途中の道俗を化し、四月十日京に入り、十五日大無量壽經を學校に講す、幾何もなくして痁疾を患ふ、門人講席の勞を恐れて保養を請ふ、師聽かすして一日も講を廢せす、廿一日講して第十八願文に至る、此日師志氣清爽にして詞義明晰なり、門人皆之を悦ふ、講散して僑居に歸り、未刻書札數通を書して故郷の親知故舊に送りて平安を報し、晩に至り門人數輩を近けて談笑し、酉の下刻に至り俄然として寂す、實に享保十九年甲寅五月二十一日なり、壽三十九、臘二十六、師數年來内院の傍に一小屋を構へて書齋となし、始めて學窓に入る時に和歌を賦して曰く「それながら市の中にも住める身は心にしのぶ山やしづけき」と世務を家人に委して日夕書を讀み、自ら道中と號し、又今日菴と稱す、平生の著述、大經弘願義十卷、觀經要門義八卷、小經眞門義三卷、正信偈定說二卷、二尊二敎圓々喩一卷、和歌集五卷、其他論註講錄、選擇集講錄、淨土根本敎義、大谷敎義指要、十往論彌陀章科解、等、未た刊刻せず、遺骨を二分し一は大谷惠空老人の墳に收め、一は角鹿に送る、(超空師行狀)、

エンゲ　圓解 二四二七　二五〇〇 〔眞宗〕豐後府内光西寺の住持なり、圓解號は雲泉、別に華光院と云ふ、豐後の人、高倉學寮に學び、文化三年寮司となり、末法燈明破邪論を講す、文政三年擬講となり、法華問答八宗綱要を講す、天保二年二月二十一嗣講となり、四年法事讃を講し、後、高僧和讃、正像末和讃を講ず、天保十一年六月二十三日寂す、壽七十四、(高倉學寮講者列傳稿本)

エンケー　圓繼 二四三〇 〔眞宗〕伊勢四定田法受寺の住持なり、圓繼一に圓劍に作る、伊勢の人、寶永八年東本願寺擬講となり、群疑論を講ず、後、因明纂解、註維摩經を講す、明和三年七月四日嗣講となり、四年般舟讃を講ず、五年安樂集を講ず、後觀念法門四敎儀集註を講ず、七年六月六日寂す、壽缺く、(高倉學寮講者列傳講本)

エンケー　圓冏 二二九四　二三六六 〔淨土宗〕京都知恩寺の僧なり、圓冏は法號信蓮社忠譽と云ひ、一に無爲と號す、京都の人なり、十三歲父を喪ひて慟哭す、母慰諭して曰く、聞く一子出家すれは其功德量りがたしと、汝盍そ深く思はさる、と、師佛門を慕ひ、江戸靈岸寺珂山に師事す、寬文七年定中阿彌陀佛を感得す、元祿元年知恩寺に住して靈異に感し、無爲と號す、十一年夏安居す、日に舍利一顆机上に落す、晝夜不臥日課念佛六万聲す寶永三年八月微恙にかゝり、(一說九月)十五日正念念佛して寂す、壽七十三、臘六十一、師誦持すること淨土三部經一万三千九百五部、阿彌陀經十五万八千十五部なり、また自ら百万遍念佛を修すること二十餘回なり、(續日本高僧傳、鎭流祖傳　淨土總系譜)

エンケン 圓顯 (一九二九)〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓顯は親賀僧都の子、圓順法師に業を受け、弘長七年(七年は誤)四月卅日園城寺別當に任す、寂年及び壽缺く、(三井續灯記)

エンケン 圓見 一九五五―二〇三〇〔臨濟宗〕京都建仁寺の僧なり、圓見號は月蓬、俗姓は藤原氏、相模の人、母は平氏の出なり、甫めて七歲、同國性相寺の道律師の勸によりて出家し、十三歲律師に從ひて祝髮し、沙彌の法を學ふ、後京に上り東福寺無爲元禪師を禮して參究し、大僧となりて左右に侍す、久しくして契せす、辭して圓覺寺の東明和尙に參して省あり、命を受けて侍司となる、東明建長寺に移つるに及ひ、師之に從ひて藏鑰となり、次ぎて分座說法す、康安中肥前の壽勝寺に出世し、聖福寺に移つる、後、旨を受けて京都建仁寺を領し、晚年東山の雲龍菴に逸老す、應安三年十二月二日寂す、壽七十六、臘五十九、全身を本菴に塔す、(續群書類從二三五、日本洞上聯燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕圓見は曹洞下の法を嗣くも、臨濟下の寺に住すること、慧日等に同し、當時一禪宗にして分つ所あらさるに由る、

エンケン 圓兼 二〇五六―二一一七〔眞宗〕山城本願寺第七代なり、圓兼號を存如と云ふ、本願寺第六代玄康上人の長子にして、應永三年七月十日に生る、大納言廣橋兼宣の猶子たり得度して權大僧都に任し、嘉吉元年宗務を繼きて第七代宗主となる長祿元年六月十八日寂す壽六十二、七子あり、一兼壽、二女子、三女子、四女子、五應玄、六蓮康、七女子なり、(門跡傳、大谷略譜、本山寺誌)

エンケン 圓劍 エンケー圓檵を見よ、

エンゲン 圓元 一三七六―一四四二〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓元は其鄉貫詳かならす、出家して心海に台敎を學び、又良慶兼秀に隨つて宗乘を究む、一日俱舍の義を撮り五卷を撰す、世にこれを禪談鈔と號す、延曆元年二月二十六日寂す、壽六十七、(三井續灯記)

エンゴ 圓悟 ジョーイン淨因を見よ、

エンゴ 圓護 フゴン普嚴を見よ、

エンサイ 圓載 (一五三七)〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、圓載は大和の人なり、出家して比叡山に登り、最澄和尙に師事し、佛儒の學に通す、承和の初唐に渡る、比叡山の諸師天台敎の疑問五十科を作り、師に附し天台山の碩德に寄す、師廣修維蠲の二師に謁して疑問を呈し、敎觀を受學す、承和十年即ち唐の會昌三年、(一說承和七年即ち唐の開成五年)解答を弟子仁好順昌に附し、比叡山に送る、同十一年七月仁好の再渡するに方り、勅して黃金二百兩を師に賜ふ、師は唐に留り、宣宗の命により、西明寺に入り、法全阿闍梨に受學す、十四年六月仁好并に慧蕚唐より至り、師の奏狀を上る、十五年六月勅して黃金一百廿兩を師に賜ひ、留學の勞を賞し給ふ、圓珍咸如等の長安に至るに方りて、師斡旋して便を供す、齊衡二年、唐の大中九年、淸凉寺法全阿闍梨を拜し、圓珍と共に胎藏界灌頂を受け、次に金剛界曼陀羅を受け、次に蘇悉地の法、幷に諸儀軌を受く、師唐に留學すると四十餘年、元慶元年、即ち唐の乾符四年十月、佛儒の諸典數千卷を齎持し李延孝の商船に乘して東皈の途に上る、當時の大家皮日休、陸龜

蒙、顏萓等皆詩を賦して送る、然るに船海上に暴風に遭ひて顚覆し、李延孝等と共に溺沒す、著作唐決一卷傳はる、（續日本紀、大宋僧史畧、宋高僧傳、本朝高僧傳、天台霞標、諸宗章疏錄）

〔考〕圓載渡唐の年時、本朝高僧傳に承和の初とあれとも、大宋僧史畧に開成三年とあり、開成三年は我承和五年に當れり、今姑く高僧傳に依る、

エンシ　圓旨　一九五四 二〇二四　〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、圓旨字は別源、自ら縱性と稱す、俗姓は平氏、越前の人なり、永仁二年十月を以て生れ、幼にして父に隨ひて郡の帆山寺に詣てゝ出家の志を發し、皈りて父母に乞ひ、遂に佛種寺竹菴圭和尙に依りて童子となり、十六歲剃髮受戒す、會東明日和尙元より來り、圓覺寺に住す、師竹菴の命によりこれに見え、師事する十二年、大に省あり、元應二年海に航して元に入り、右林茂、雲外岫、中峰本、無是覩、靈石芝、古智哲、竺田心、南楚悅、龍巖眞、般若誠等諸名衲に參し、元德二年皈朝し、圓覺寺の後版に任し、建長寺の前版に遷る、康永の初め鄕里越前に還る、朝倉金吾弘祥寺を剏め、師請せられて開山となる、又壽勝寺の請を受けて鎭西に往き、明年弘祥寺に皈る、檀越善應吉祥二寺を建て師を延て開山第一世となす、文和三年東陵嶼和尙南禪寺に住し、師を招きて分座說法せしむ、延文二年命を承けて京都眞如寺を主とり、翌年脚疾を患ひ、職を辭して越前に皈る、貞治三年將軍足利義詮建仁寺に請す師病を以て辭すれとも使頻りに至る乃ち已むを得ず疾を力めて請に應し、十一日晚參終りて疾革る、十月一日義詮使を遣して慰問し、弘祥寺位を陞せて諸山に列す、八日中巖月を招きて後事を托し、翌日衣を更へ偈を書して寂す、實に貞治三年十月十日なり、壽七十一、臘五十六、門人全身を壽塔に葬り、定光と云ふ、著作南遊東歸の二集あり、（續群書類從二三五延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕圓旨は曹洞下の法を嗣くも臨濟下の寺に住すると臨濟下の諸師に異らす、これ當時一禪宗にして分つところなきに由るなり、

エンジ　圓慈　二三八一 二四五二　〔臨濟宗〕伊豆龍澤寺の第二代なり、圓慈字は東嶺、近江國神崎の人、俗姓佐々貫氏なり、幼にして古月禪材禪師に謁し、出家の志あり、九歲父の意を受けて鄕里の高山和尙に就いて得度し、十七歲出遊して日向の古月禪材、幷に其法嗣翠岩に謁し、次に丹波の大道に謁す、後鄕里に皈り、草菴を營みて打坐精修す、寬保三年駿河に下り、白隱慧鶴に謁し、師資の禮を執り亢亢精修し、遂に重疾に罹り死に瀕す、乃ち自ら謂ふ宗門の蘊奧を究むるも、一旦溘死せは何そ宗門に益あらん、と、因て宗門無盡燈論一編を作りて、白隱慧鶴に呈して曰ふ、若し採るへきところあらは後に貽さん、採るへきところなくは速に火中に投せよ、と、慧鶴禪師一見して嘆して曰ふ、後世の點眼藥となさんと、後、禪師の下を辭して京師に上り、白河村に幽棲し、宿疾を養ふ、幾もなく東皈し、禪師より法衣を附せらる、爾來其下に留り、法化を助く、明和五年慧鶴禪師京師等持寺より請せらるゝも、老衰を以て辭し、師代りて赴き、人天眼目を提唱す、大衆四百餘人なり、講席未た終らずして慧鶴禪師の訃音至る、即ち松蔭

寺に皈り、遂翁元盧等と共に葬事を行ふ、其後伊豆の龍澤寺を開き、慧鶴禪師を請して開山となし、自ら第二代となり、一住二十年なり、寛政三年尾張瑞泉寺の請に應し、輝東菴を再興す、尋て郷里に皈る意あり、偈を作り門下に示す、人生七十古來稀、出輝東菴何國之、老僧今年七十一、出輝東菴何國之、と、郷里の諸人に迎へられて齢仙精舍に入り、日々自註三法孝經を講す、寛政四年閏二月十九日寂す、壽七十二、臘六十三門下相謀り輝東菴の側に塔を築き放光と云ふ、龍澤寺に同しく塔を築き三光と云ふ、師著作達磨多羅禪經疏七卷宗門無盡燈論、快馬鞭各一卷あり法嗣豊洲英、聯燈多、闕堂樞あり、後謚を佛護神照禪師と云ふ、（快馬鞭後序、續日本高僧傳、近世禪林僧寶傳、正法山宗派圖）

エンシキ　圓識　二四五三 二五一二　〔眞宗〕安藝蒲刈島弘願寺の第九代なり、圓識幼名は民藏といひ、初の名は寶乘、字は思恭と稱す、東郭散人、又は竈洲老樵は其號なり、寛政五年三月十五日に生る、父を覺圓といふ、安藝沼田郡廣島の人なり、文化元年より六年に至り、（十二歳より十七歳まて）廣島の儒坂井禎の門に在りて、坂井虎山、等と同しく經史詩文を切磋す、七年九州に遊ひ、烏水寶雲の門に入り、因明、倶舍、唯識を學ふこと五年許、此時長崎に遊ひて清人姑蘇顧英等と文字の交をなす、同十二年幻華雲幢に從ひ、宗乘餘乘を修むること凡そ四年なり、同十四年安藝佐伯郡廿日村蓮敎寺某の嗣となり、居ること一年餘にして故あり辭し歸へる、文政元年より僧叙に就き、宗學、及ひ華嚴、天台、眞言等の法義を研尋すること九年許、備後の慧海、安藝の泰嵓、見眞、惠滿、筑前の大印、土佐の大年、（後還俗して岡本退藏といふ土藩の儒なり）、等と同窓の友たり、同六年五月より伊勢風早郡熊田村克讓に就きて國學を受け、同十年六月得度し、十二年四月安藝郡蒲刈島三ノ瀬弘願寺住職崇乘の嗣となる、時に三十七歳なり、天保元年正月講學の便を謀り、一の學舍を設け、樹心齋と號す、爾來後進を敎育すること大凡二十三年なり其間四方來學するもの無慮二百七十四人、就中知泉、朗然、大集、俊誦、實往、誦念、文藝、圓海、白鱗、勇哲、唯信、慈雲、英峰、海潮等最も聞ゆ、同十年六月十日學徒惠空覺瑩會主となり講筵を設く、師敎行信證を講し、十三年五月初旬滿講せり、同十二年九月伊豫今治常向寺に於て本願成就文を講す、同十五年三月廿九日弘願寺九代の住職を嗣く、時に五十二歳なり、同年四月得業に昇り、同五月安藝高宮郡河戸村德行寺に於て淨土論を講す、弘化二年安居廣島寺町佛護寺に於て安樂集を講し、三年三月助敎に進む、同九月安藝賀茂郡兼澤村德正寺に於て現世利益和讃を講す、其他豊田郡梨和村淨德寺、山縣郡大朝村圓龍寺等に於て講筵を開く、同四年二月七日學林監守となる、此時に方り大和の亮惠浴仲の兩人異義を主張す、師糺正の命を受け、善讓岱觀と同しく本山に於て數十日間糺正の勞に服す、同年六月能稱立信謬解者敎誡掛を命せられ、嘉永元年五月安藝國法談取締役同年六月安藝國學業策進掛を命せらる、同五年正月十三日の夜中風症に罹り、五月一日寂す、壽六十、後司敎を贈らる、著書本願成就文誘蒙錄、全講錄、淨土論講錄、安樂集講錄、玄義分六字釋私考、行信管窺、諸經和讃私考、現世利益讃講錄、高僧和讃私考、光號

エン（圓）シ

因緣類文、往生要集講錄、私淑錄、唯識論記、應行抄、塵砂抄、各一卷、宗要私議二卷あり、(行實、本願寺派學事史)

エンシン 圓心 一九一四/一九八六 〔臨濟宗〕筑前承天寺の禪僧なり、圓心字は鐵牛、俗姓菅原氏、筑紫太宰府の人、聖一國師(辨圓)に師事し、殊に親近せらる、後承天寺に住す、國師の遺命により其年譜編成の任に當り功を畢ふ、嘉歷元年九月廿四日寂す、壽七十三、(菅神入宋授衣記、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エンシン 圓心(二〇五四) 〔臨濟宗〕美濃妙勝寺の禪僧なり圓心字は月堂、播磨の人、同國明禪寺曇溪芳の下に得度し、古法雲寺無雲天の法を嗣ぐ、間溪聰、特芳奇、愚中及、眞巖後等を歷訊して益究む、美濃妙勝寺越前龍溪寺に歷住す、七十餘にして近江智海寺に寂す、其年時詳ならず、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕 圓心は應永の頃の人なり

エンシン 圓心 カオク可憶を見よ、

エンシン 圓信(一七九五) 三條一流の佛工なり、圓信一に圓眞に作る、長圓の弟子なり、保延某年鳥羽造佛の賞として阿闍梨に補し、後法眼に叙せらる、佛工にして阿闍梨に補せらるゝもの圓信に始まると云ふ、(釋家初例鈔、外記日記)

エンシン 圓眞もエーシン榮眞を見よ、

エンシユ 圓珠(一九二一) 〔天台宗〕攝津勝鬘院の律僧なり、　圓珠は泉涌寺の智鏡道玄の二老師に師事し、南北の講肆に遊びて益々研究す、弘長文永の末年圓照律師鷲尾山に住す、師往て錫を駐め菩提心論及諸部、律疏を講ず、後攝津の四天王寺の請により勝鬘院に住す、寂年及壽欠く、(本朝高僧傳)

エンシユ 圓守(……)〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、圓守俗姓は藤原氏、中納言道經の子なり、兄弟五人皆出家し、師叡山の宗源法師に師事して顯密二教を究め、二會の講主に歩し、尋で最勝講會の證義者となる、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

エンシユー 圓秀 二〇九… 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓秀は近江の人、出家して敎圓道順成秀の諸師に就て台密二教を究め、應永年中探題職に座す、寶德元年五月二十八日寂す、壽缺く、(三井續灯記)

エンシユー 圓秀 二三四六/二四二六 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十六代なり、　圓秀字は知新、奈良の人、故ありて武藏某寺に出家し、豐山に學ぶ、初め管明月輪兩院を經て千葉妙見寺に轉し、寶曆十八年八月根生院に晋み、明和元年十月十日豐山能化となり權僧正に任せらる、主職にあること三年、明和三年十一月十日小池坊方丈に寂す、壽八十一、(新義眞言宗史料)

エンシユー 圓秀 リヨーカ良可を見よ、

エンシユー 圓宗(一五一九) 〔法相宗〕奈良元興寺の學僧なり、　圓宗三論宗に歸し、維摩會講師となり、傳灯大法師位に昇る、貞觀十二年最勝會講師となる、示寂の年時欠く(本朝高僧傳)

エンジユー 圓住 ニチジユー日住を見よ、

エンシユン 圓舜 二一五〇… 〔日蓮宗〕越前妙顯寺第五代な

エン(圓)シ

り、　圓舜俗姓生國未詳、越前敦賀妙顯寺寶證に師事し其後を嗣ぐ、延德二年三月二十五日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

エンシユン　圓春(一八〇五)三條一流の佛工なり、　圓春は六條右大臣顯房の孫、皇后宮亮信雅朝臣の子にして、賢圓の弟子たり、初め賢圓の兄長圓の養子たりしか、不和にして緣を斷ち賢圓の弟子となる、法橋に任す、久安年代の人なり、(台記別記)

エンシユン　圓脩(……)〔眞言宗〕山城小栗栖法琳寺の別當なり、　圓脩は智行兼備し、圓城寺僧正益信を禮して大毘盧遮那法身正宗心印を受け、傳燈位を嗣く、京都素光寺に住し、小栗栖の別當となり、付法の弟子遍勝あり、(傳燈廣錄)

エンジユン　圓順(一八三九／一九一六)〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓順俗姓は源氏、彈正少弼宗仲の子なり、長舜頁俊に從ひて台敎を學ひ、重圓に就て摩訶毘盧舍那法を受け、四宗證義一寺別當を經て本寺の趣者となり、六十八歲の時大阿闍梨位に登る、康元元年七月六日寂す、壽七十八、著作有文抄十卷あり、(三井續灯記)

エンジユン　圓遵(二四〇六／二四七九)〔眞宗〕伊勢專修寺の第十八代なり、　圓遵は無上々院宮と號す、織仁親王の第五子なり、寶曆三年九月七日入室、同八年住職、文政二年十月廿二日寂す、壽七十四、

エンジヨ　圓恕(二三四八)〔淨土宗〕某寺の僧なり、　圓恕は山城の人、少時同辈圓愚と專修念佛し悟覺して後獨湛和倘に謁す、寂年缺く(遠羅天釜)

〔考〕圓恕は元祿頃の人なり

エンジヨ　圓助(一八九四／一九四二)〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓助は後嵯峨院第六の皇子なり、寶治四年十四歲にして仁助に就て剃髮受戒し、密法を學び、建長四年圓淨に從つて密灌を受く、文永十一年二品親王に勅任せられ、建治二年大阿闍梨位に登る、弘安五年八月十二日寂す、壽四十七、(三井續燈記)

エンシヨー　圓照(一八八〇／一九三七)〔戒律宗〕大和戒壇院の中興なり、　圓照號は實相、俗姓は藤原氏、奈良の人、中道の弟なり、母は源氏の出、承久三年に生れ、幼名を金光と云ふ、十歲に剃髮し、十五歲東大寺良忠に投じ、智舜眞空に就きて三論を聽き、二十歲大悲菩薩の壇に昇りて具足戒を受くこれより遊方し、白毫寺の良遍に謁して法相を學び、禪慧に從ひ、行事鈔を聞く、寛治元年海龍王寺に居り、證覺睿尊寺にありて分說す、師從ひて講明す、四恩院淨法につき三密を稟け、三輪寺の乘心に胎金の密壇に入り、八幡の唯心に逢ひて五部の秘奧を傳へ、磯長寺の十乘に台敎を習ひ、八宗の綱要を徧く研究す、治承の火後、戒壇廢頽す、西迎力を盡してこれを再興し、研觀に復す、建長三年師請せられて主となり、三昧院の眞究、戒光寺の淨因等を招き、律規を行ひ、日に講席を張る、聖一國師の道化を開き、自ら門下を率ゐて普門寺に掛錫し、九旬間參禪し、遂に印可を蒙り、禪戒を受く、既にして舊院に皈り、晝は戒疏を講し、夜は禪坐す、康元元年秋放生會を修せんと欲し、難波の津住吉浦に至り、法財を棄てゝ魚族を救ふ、大和元興寺の恢復を計る、正嘉元年春法華を講

エン(圓)シ

し、道俗を化す、僧房を造り荘園を附し、碩學を選び唯識を講せしむ、同年夏郡の龍池に到り雨を禱りて驗あり、此秋石清水の檢校法印宮淸善法寺を立て師其開山となる、師別に竹林寺を構へ、行基菩薩の沙梨を奉ず、大和の法隆寺上宮王院、和泉の家原寺に歷住す、生馬の竹林寺主明觀滅師を請して席を讓る、合敕により東大寺幹事となり、職に居る十四年、意を營復に置き、法華堂二月堂三面房舍七楹の鐘樓皆舊觀に復す、正元元年藤原隆親師に洛東の金山院を施し、師又これを修營す、文永六年夏後嵯峨上皇戒壇院に幸し、師に就きて受戒し、金塔を賜はる、七年東大寺幹事を辭す、建治三年十月二十二日寂す、壽五十八、臘四十八なり、生前寺に主たる十餘ヶ所、其室に入るもの眞照、忍空、道照、倫海、凝然等一百餘人、菩薩戒を受くる者源皇后通子、藤原皇后長子、西園寺實氏、其子公相、德大寺實基、其子公孝、四條隆親、其子房名、其他妃嬪卿庶五戒を受け三聚を持する者若干人、七大寺の衆師を稱して戒壇院の中興となす、門人示觀然、師の行狀三卷を撰す、(本朝高僧傳)

エンショー 圓照 一九七一/二〇四一 〔曹洞宗〕薩摩皇德寺の開山なり、圓照は字は無外薩摩國の人なり、幼より出家し受具の後肥後蘇迷嶽に至て精舍を創し住す、而も大事明ならずして偏參し、能登總持寺峨山の下に往て謁す、服勤侍從するもの多年、遂に其法を嗣ぐ、山命して首衆に居らしむ、師辭して日向の山中に去り、一菴を創し永谷山皇德寺と號す、薩摩の島津大道其德を欽し、皇德寺を建て聘請して開山始祖と爲す、永德元年十二月六日寂す、壽七十一歲、坐五十九夏、(日本洞上聯燈錄)

エンショー 圓昭 (一六九九)〔天台宗〕近江比叡山楞伽院の僧なり、圓昭(一に圓照に作る)は俗姓名は源顯基と云ふ、大納言俊賢の子なり、後一條天皇に仕へて中納言となり、恩眷を受く、天皇崩御し、諒闇の間、宮中に在り、一夕梓宮の燭を進むると頗る遲きを怪み、之を問ふ、或者曰ふ、女侍輩皆新帝の宮に給事し、梓宮に供する者なし、と、顯基深く人情の變移を悲み、即日髮を削る、これ三十八歲の時より、比叡山の延般に從ひ、相共に楞迦院に隱捿して止觀の業を修す、後延般と相共に醍醐山に遁れ、東北坊に隱捿す、長曆三年正月廿日、小野の仁海を禮して小野流の灌頂を受け、心印法儀を傳ふ、晩年大原に隱捿し、經論を閱す、偶疽を患ふ、良醫治療せんとするも、師辭して曰ふ、我聞く萬病の中、亂れずして寂に入るは唯疽のみなり、と、我適疽を患ふるは何ぞ其幸なる、と、安祥として寂す、師の語、罪なくし配所の月を觀ん云々、世に喧傳せり、(元亨釋書、本朝高僧傳、續傳燈廣錄、大日本史、扶桑隱逸傳、大東世語)

エンショー 圓證 (・・・・)〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、圓證字は了寂と云ふ、出家して台密敎を究め、圓律玄に師事して具足戒を受け、招提寺に出世して大に律幢を樹つ、寂年、及壽缺く、(律苑僧寶傳、本朝高僧傳)

エンショー 圓性 二二八三/二三六八 〔眞宗〕京都粟田口眞覺寺の住持なり、圓性は知空の兄なり、慶安四年長兄圓海近江圓照寺に主たるを以て明性の嗣となり、眞覺寺に住す、元錄十四年四月楞伽經を侍講す、嘗て遠江及丹州に到り法難を平治す、

寶永五年四月十七日寂す、壽八十六、(本願寺通記)

エンシヨー 圓性 カクキ覺基を見よ、

エンシヨー 圓祥 二四四八 二四九七 〔眞宗〕伊勢專修寺の第十九代なり、圓祥は眞無量院宮と號す、織仁親王の第五子なり、寛政五年二月廿三日入室、文化八年三月住職、天保八年十一月廿一日寂す、壽五十、

エンシヨー 圓松 カクエー覺英を見よ、

エンシヨー 圓靜(…)〔眞言宗〕山城醍醐山の法師なり、圓靜字は如寂、俗名は尚書郎太宰帥藤原資實といひ、勝賢の兄なり、父信西の縡に堪へず、遁世入道して勝賢の法を受く、成賢師の爲に兩部の修儀を撰し、題して都督次第といふ、師之に就きて修錬し、名聲一時に轟く、(續傳燈廣錄)

エンジヨー 圓淨 一八四九 一九一六 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、圓淨俗姓は藤原氏、基通の子なり、建長九年正月十九日恒惠に就て落髮受具し、覺朝に從ひて密法を受け禪覺を拜して密灌を受け、又長舜に謁して天台倶舍等を學び、六勝寺別當、三井の長吏、宇治法成寺執印等の諸職を經て法務に任じ、大僧正に任ず、寛喜元年四十一歲にして大阿闍梨位に登り、康元元年四月十九日寂す、壽六十八、(三井續灯記)

エンジヨー 圓淨(…)〔臨濟宗〕興聖寺の開山なり、圓淨字は意翁、霊鷲寺良眞の法嗣となる、示寂の年時缺ぐ、後光嚴天皇勅號佛通禪師を賜ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

エンジヨー 圓成 シヨーイ正爲を見よ、

エンシヨーイン 圓照院 ニチミヨー日明を見よ、

エンジヨーイン 圓成院 ナンケー南溪を見よ、

エンジヨーイン 圓乘院 センミヨー宣明を見よ、

エンズイ 圓瑞 ソクシン卽心を見よ、

エンゼイン 圓是院 ニチヨー日耀を見よ、

エンセー 圓勢(…)〔……〕大和高宮寺の僧なり、圓勢は百濟の人なり、我國に來れる年時缺く、大和高宮寺に住し、解行兼ね備はり、門下願覺あり、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

エンセー 圓勢 一七九三…… 三條一流第二代の佛工なり、圓勢は長勢の子なり、其工作父に勝れし故か、早く抽でられて淸水寺の別當に補せらる、然るに其功を猜まれ、奈良法師に妨けらる、寛治に法橋にして天仁に法印たり、長承二年閏十二月沒す、(僧綱補任、中右記、外記日記等)

エンセー 圓晴 (一九二四)〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、圓晴字は道圓、越後に生れ、奈良にて成長す、十七歲にして廣受に密敎を學び、文永の初圓照を禮して三摩耶戒を稟け、瑜伽の秘を傳ふ、竹林寺に於て灌頂法を行ふ、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

エンセー 圓晴 一八四〇 一九〇一 〔戒律宗〕大和不空院の律僧なり、圓晴字は尊性、自ら照眞と號す、大和の人なり、知足院の戒如和尙に從ひて律を受け、常に覺盛、睿尊、有嚴と共に律部を討論し、處に隨ひて開講す、世に之を奈良の四律匠といふ、嘉禎の初年東大寺に在りて刪補鈔を講し、翌年秋覺盛等と懺悔法を修して各好相を得、遂に東大寺の遮那殿に就きて自誓自受して具足戒を納れ、師同寺の上首となる、後奈良の不空院に住し、盛に戒律を唱ふ、晩年洛北の雲林院内に一精舍を

構へ、廣く三歸五戒を授け、四衆雲集す、仁治二年嵯峨の某院に寂す、壽六十二、(本朝高僧傳)

エンセー　圓政　ニチシユー日修を見よ、

エンセツ　圓說　二三五四／二四一九〔淨土宗〕山城法傳寺の僧なり、圓說字は鈍性、別號不退といふ、近江栗本郡下笠村の人なり、八歲父を喪ひ、母に請ひて出家し、妙樂寺單譽の下にあり、十五歲增上寺に登り、性相を硏究し、十八歲自ら顧みて曰く、我れ出家するは先考の追福、幷に自身解脫の爲なり、今生空しく過ぎむか、再び生死海に流轉す、其れ之を如何せんと、宗戒相承の後諸國に遍歷す、享保二十年鄕里に歸り、妙樂寺に住す、道俗法澤を蒙むるもの甚た多し、後京都正覺寺に移つり、三時禮懺し、日課稱名六万遍なり、十餘年間一日の如し、寬延二年鳥羽の法傳寺に住す、日課を受くるもの一万五千餘人なり、寶曆九年七月微恙にかゝり、自ら死期を知る、八月一日後事を囑し、三日の夜頭北面西にして寂す、壽四十六、臘三十五、淨土宗にて念佛に木魚を用ゆるは師に始まると云ふ、(續日本高僧傳、續台宗學則)

エンセン　圓宣　二三七八／二四五二〔淨土宗〕增上寺の第五十二代なり、　圓宣は廣蓮社統譽道阿と號す、肥前國伊万里の人、片山氏の子なり、同村常光寺に於て出家し、傳譽圓山和尙に師事し、頗る英才の譽あり、初外典より入り、後、顯密の奧義を究む、十九歲にして增上寺に入り、法問講筵に列し、宗戒の二脉を得、後屢々東叡山の學寮に入り、天台の諸部を學ぶ、明和九年正月十九日袋谷に遷り、同年十月五日大善寺に住す、安永九年八月廿四日大光院に移り、天明四年九月二日傳通院に轉し、寬政二年四月十九日增上寺貫主となる、同四年五月二日寂す、壽七十五、著作打磨論、悉曇初學抄、傳書五重辨釋、起信義記講錄、天台戒疏講錄、觀經宗鈔講錄、異部宗輪論述記講本、廣統錄等なり(三緣山志)

エンゼン　圓善　(…)〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、圓善東塔院に住し、常に法華經を誦す、六萬部を持せんとし、半數にして熊野祠に參詣の途中に寂す、死後口舌敗壞せず、行人屢誦持の聲を聞きたりと云ふ、(本朝高僧傳)

エンゼン　圓禪　トクガン德岩を見よ、

エンソー　圓聰　一八三六／一九一一〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、圓聰は其鄕貫詳かならず、出家して顯圓に台敎を學び、灌頂を公胤に受く、晚年洛東靈山畔に移居して道心抄十卷を作り、顯密禪門大要を記す、建長三年七月四日寂す、壽七十六、(三井續灯記)

エンソン　圓尊　一七八〇／……〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、圓尊字は金輪といふ、保安元年十一月勝覺を禮して無量光院に於て傳保職位を受く、聖賢之か導師となり、定海敎授たり、(續傳燈廣錄)

エンチ　圓智　二〇一七／……〔淨土宗〕京都知恩院第十一代なり、圓智其氏族を詳にせず、西河上人に法を嗣き華頂山知恩院第十一世の住持となる、後退職して鳥羽法傳寺に幽捿す、始め法傳寺は眞言宗にして後鳥羽院の妃芹摘后所持の地像尊を安置す、正平十二年三月廿七日寂す、師示寂の後知恩院の末山と爲す、(鎭流祖傳、淨土總系譜、淨土宗年譜)

エンチ　圓智　(一九九一)〔淨土宗〕山城光明寺第四代なり、

圓智字は惠顗、俗姓は平氏、但馬の人なり、幼にして俗事を厭ひ、父母沒して後十四歲にして紫雲山光明寺に投じ、述道の室に入りて剃髮す、園城法隆建仁の諸寺に歷遊して博く諸宗を究め、相模鎌倉に到り、寂惠定惠の二師に謁して淨土の宗義を學ぶ、後京都に回り光明寺を領して第四世となる、道化最も盛んなり、寂年、並に壽缺く、(鎭流祖傳)

〔考〕圓智は元弘頃の人なり、

エンチ　圓智 二三一八……　〔淨土宗〕近江東光寺の開山なり、圓智は深譽と號し、下總の人なり、隨流の室に入りて剃髮し、法を靈巖に嗣ぐ、後近江愛知郡に東光寺を剏めて、これに住し、萬治元年二月二十九日寂す、壽缺く、法嗣五人あり、慶德、守慶、宗圓、知傳、慶融これなり、(淨土總系譜)

エンチ　圓智 二三二三……　〔淨土宗〕尾張平田院の開山なり、圓智は鏡蓮社大譽愚道と號し、其俗姓生國詳かならず、廓呑に師事して法を嗣ぎ、尾張名古屋平田院を開きて法化を布き、寬文三年一月十一日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

エンチ　圓智 (二三四八)　〔淨土宗〕近江草津正定寺の僧なり、圓智號は中阿と云ふ、近江大津の人なり、淨念寺圓立に投して度を受け、後聞證に師事し宗學を究め、近江草津正定寺に住す、寂年月日缺く、著作西方要決畧註、註圓光大師行狀あり、(淨土總系譜)

〔考〕圓智ハ元祿の頃の人なり、

エンチン　圓珍 一四七四／一五五一　〔天台宗〕近江園城寺の中興開山なり、圓珍字は遠塵といふ、讃岐那珂郡の人、俗姓は和氣氏、父は景行天皇十五代の孫にして、名を宅成と呼ひ、母は佐伯氏の女なり、師弘仁五年三月十五日(一說に二月十五日)を以て生る、童名を廣雄と稱し、空海の姪たり、八歲の時因果經を誦し、十歲にして毛詩、論語、漢書、文選等を習ふ、天長四年十四歲家を辭して京に入り、翌年僧仁德に從ひて比叡山に登り、座主義眞に師事す、仁德は師の叔父なり、同九年年十九、年分の試業を受け、落髮納戒して圓珍と稱す、翌年毘盧遮那經を試みて甲科に中り、四月十五日延曆寺戒壇院に於て修禪院の義眞を拜して菩薩戒を受け、大僧となる、淳和天皇特に藤原三守(ミツ)を遣して戒牒を賜ふ、師例に依りて一紀の住山此年より始む、承和元年仁明天皇親しく綸旨を降して慰問せらる、此年十二月十四日雜記を撰す、三年八月二十八日胎藏の圖位を作り、又最勝王經の疏を撰す、五年奇瑞に感し圖師卒光に命して不動尊の像を圖せしむ、黃不動尊是なり、七年夏不動尊より親しく立印の儀軌を受け、七月十六日辰時灌頂大法を受く、九年二十九歲の五月十五日德圓法師より三種悉地の法を受く、蓋し此法は善無畏三藏が義林に付したるものにして、順曉、最澄、廣智の間に傳へ來りて德圓に至りたるものなり、翌年十一月宿曜經等の疑問を述す、十一年紀滿ちて山を出づ、十三年七月延曆寺の大衆に推擧せられて眞言の學頭となる、十四年正月大極殿吉祥會に預る、又奈良の明詮と大義を論して名聲を博す、勅により定心院の十禪師となる、嘉祥二年勅を蒙りて內供奉持念禪師となり、夏六月六日五條丹墀の母の求に應して普賢十願釋を著す、文德天皇の仁壽元年表を上りて渡唐を請ひ許さる、四月十五日京を出つ、藤原良相沙金三十兩を師に施す、五月二十四日大宰府に著き、

エン(圓)チ

四王院に住す、此時大日經心目及ひ大日經指歸各一卷を著す、二年八月始めて唐の商賈欽良暉に遇ひ、翌三年八月九日其船に投して海に泛ふ、十三日北風暴に起り、十四日琉球に漂流す、不動尊の加護によりて順風を得、翌日午時唐の福州連江縣に着す、刺史林師準來りて慰問し、開元寺に寓居す、便ち其寺の傳敎大德存式に就きて嘉祥慈恩の法華疏、華嚴涅槃疏、及ひ律倶舍等の義を聽く、存式師に麈拂一柄、及ひ南海の桄榔木の拄杖一枚を付して法信を表す、中天竺大那蘭陀寺の三藏般若怛羅に遇ひて梵字悉曇章を學ひ、兼ねて曇蘇宰利の祕法等を受く、般若怛羅師に曼素悉怛羅の梵夾、貝多樹皮の梵夾、熟銅の五鈷、小金剛杵一口を與へて法信となす、十二月一日台州に往き、十三日天台山國淸寺に至り、智者大師の眞容を拜し、遂に淸觀元璋と共に一房に寓す、日本の僧圓載なる者、越州より來りて相見る、齊衡元年二月佛隴寺に至りて遍く祖跡を拜し、國淸寺に歸りて夏を度る、時に物外止觀を講す、師之を聽受し、

智證大師

且つ敎文三百餘卷を寫す、七月越州の開元寺に至りて法華論の記を勘へ、九月智者九世の孫良湑に隨ひて天台敎の講を聞く、十二月集要の上中二卷を勘ふ、二年正月六日開元寺に法華文句義科の本を良湑に求めて之を寫す、二月止觀科節を抄寫し、良湑に就きて滅緣行の義を諮詢す、此月蘇州に至り偶〻微疾に染み、徐公直の宅に寓して療養す、三月開元寺に集要の下卷を勘ふ、四月圓載と共に上都に赴き、本國の僧田口圓覺と接し、敎籍を繕寫し、曼荼羅を畫く、五月六日洛陽に到り、二十一日長安に達す、六月三日左街靑龍寺の傳敎和尙長生殿の持念大德法全を拜して瑜伽の密旨を受け、全法に請うて大毘盧遮那神變加持經蓮華胎藏廣大成就儀軌を抄寫す、七月一日龍興寺淨土院の雲居房に移住す、十五日圓載と共に大悲胎藏灌頂壇に入り、二十日藏經拜記一卷を撰す、二十三日法全に請ひて蘇悉地羯羅供養法上下を抄寫勘定す、十月三日金剛界灌頂壇に入り、並に諸尊の法、及ひ蘇悉地等の法を受く、遂に法全の奧旨を得たり、遂に三昧耶戒及ひ阿闍梨位灌頂の法を授かり、法全師に灌頂三摩耶の五鈷杵一口、五鈷金剛鈴一口を附して法信となす、冬大興善寺の三藏智慧輪に見へて兩部の祕旨を受け、兼ねて新譯の持念經法を授けらる、智慧輪は不空の三世なり、師三藏不空の塔を拜す、十一月二十七日長安に出てんとす、法全、師に大日經の義釋一本を施す、十二月十七日洛陽の廣化寺に赴き、無畏三藏の舍利塔を禮し、大聖善寺に詣りて無畏の眞容を拜す、三年正月龍門の西岡に至りて金剛智の墳塔を拜す、二月二日胎三卷記を抜き、四月八日法全に義釋十卷を求めて之を得たり、五月五日能觀

は是れ大日、所觀は是れ四佛等の義を述へ、三十日開元寺に至りて良諝座主に謁し、天台宗の秘要を受く、辭し去りて天台山に赴き、六月四日國淸寺に至る、始め貞元年中最澄法師禪林寺に一院を造りしが、後荒廢せり、師國淸寺に止觀堂を建て、最澄の志に酬ひ、僧淸觀に付す、扁して天台山國淸寺日本國大德僧院といふ、師國淸寺に法華論一卷を得たり、八月十三日寺の西院天璋座主の房に仁王疏一卷を見て智者大師の著にあらざることを知る、十一月九日玄義略要を勘ふ、天安元年正月一日洛陽にありて普賢金剛薩埵の同異を辨し、三月一日諸法空爲坐、第一義空、其佛常處虛空等の義を述へ、三月七日國淸寺に在りて淨名疏略記三卷を著す、二年正月九日天台山に在りて再ひ法華論の記を勘ふ、然れとも修治了らざりき、二月二十三日台州開元寺に法聰座主の觀無量壽經記を見る、五月十五日入唐求法の總目錄を撰して曰く、兩京、兩浙、嶺南、福建の諸道を巡遊して得たる經律論傳記、幷に大總持敎曼荼羅幀、天台圓頓敎文、及ひ諸家の章疏、抄記、雜碎經論、梵夾目錄等四百四十一本壹千卷、道具法物等十六品を獲六月八日商人李延孝の船に乘りて唐を出て、二十二日太宰府松浦縣に著く、二十三日上奏す、八月官使師を太宰府に聘す、十二月二十七日京に入り出雲寺に寓す、師唐に在ること六年、在唐巡禮記五卷を製す、師友唱酬の詩集十二卷あり、貞觀元年齎持したる經籍を尙書省に收め比叡山に歸り、山王院に居る、奇瑞に感して朝に奏し、三井に一宇を造り、唐房と名け(後唐院と稱す)、尙書省の經書を移して藏す、二年二月二十五日勅を奉して圓敏、增命、康濟等と新羅神(師の歸朝以來數〻出現して奇瑞を示したりと云ふ)の祠を創建す、四年正月二十日園城寺にて傳法阿闍梨位灌頂を宗叡等に授く、四月十七日珍皇寺に法華開題を述ふ、是れ藤原南雄の求に應するなり、九月三井に大日經の義釋を勘治す、六年淸和天皇師を仁壽殿に延きて灌頂法を受く、大臣以下壇に入る者三十餘人なり、命を受けて大日經を講す、七年三月染殿の北院に大日經百字生品を講し、八年三月添足法華科文三卷を著し、九月再勘を加ふ、此年五月十四日官府宣を降して三井の別當は悉く師の血脈を用ひて寺家より簡定せしめ、即ち之に國印を加へて別當に補任すへきことゝす、此時師に眞言止觀弘傳の公驗を賜ふ、十一月四日師の世姓を改めて和氣氏と賜ふ、師奏して冷泉院に持念壇を建つ、九年唐の務州の人詹景金なる者、信を表して法藏の圖二幀を寄附す、十年六月三日延曆寺の座主に任せらる、二十九日特に三井の四至を賜ひて傳法灌頂の道場となし、唐傳來の大小經卷を悉く唐院に收む、十二年俱舍の頌を略註す、十四年奏して四天王寺安居の講に最勝王經を加ふ、但し此時迄は唯法華仁王の兩經のみなりしなり、十五年四月二十三日延曆寺竪義式を定む、九月九日總持院に於て三種悉地の法を遍照に付す、十六年六月三日復た延曆寺の竪義式を定む、十一月七日常濟、延祚、康濟、猷憲等に大法を授く、十七年三月二十七日、圓敏、良勇等の爲に三井の緣起を語り、五月五日十八名神の爲に法華一萬部を講す、此に於て總略科文を著す、此年三部の秘法を增命に授く、奈良の維摩會に天台の徒の加はること只一人なりしが師奏して二人となす、十八年唐の國淸寺淸觀詩を作りて師に寄す、

曰く、叡山新月冷、台嶠古風淸、と、菅原道眞大に之を稱すといふ、元慶元年陽成天皇即位す、仁王講百座例によりて執行す、師命せられて御前の講師となる、實に三月なり師比叡山別當和尙の爲に親ら法華八軸を書し、其冥福に資し、之を四王院に納む、山王神新羅神及ひ曩祖先哲の爲に諸大乘經を親書して其德に酬ゆ、二年四月二十九日勅を奉して仁壽殿に新譯の仁王經を講し、五重玄釋を用ひ、以て雨を禱り驗著あり、五年正月三日より九日に至る一七日間、總持院に於て捨源良勇等の四人に胎藏の法を授く、五月十七日唐梵對由來を十手儀軌の末に記す、七月傳敎大師行業記を撰す、十月九日捨源等四人に灌頂の大法を授く、此年唐の務州の人李達なる者張家の船に付して大藏の闕本百二十卷を寄付す、六年師僧三惠を唐に遣して藏經の缺本三百餘卷を請ひ、又書を大興善寺三藏智惠輪に呈し、併に釋摩訶衍論の眞僞作者を問ひ、些々の疑問を撰して元慶六年七月集と題す、十月十三日、延祚 康濟、捨源等に金剛界を授く、十二月二十日天台大師書讃註を作る、七年三月二十六日法橋に任す、二十八日四種聲聞の義を講す、七月十六日眞皎玄超に金剛界を授く、十月七日法眼和尙位に任す、八年二月授決集二卷を撰す、一日大日經義釋を失ふ、四月十四日勅して舊本を求めて師に賜ふ、五月二十二日異本と比校して之を正す、六月大般若經を抄して六卷となす、七月十四日眞源玄超に胎藏界を授け、十九日惠稠、良基、良勇に金剛界を付す、仁和元年光孝天皇の即位四月二十六日例により仁王講百座を修し、二十七日山に歸り、三部灌頂を增命に授く、二年五月齋日月集を著す、九月大智度論を抄す、十月天皇の病を禱癒す、三年三月勅して延曆寺に年度二人を賜ふ、此秋支佛集上下卷を著す、仁和四年興福寺の維摩會に請せられて講師となる、四月二十九日復た延曆寺の竪義式を定む、六月普賢經記を撰し、十月眞言疑目及ひ維摩會記を著し、大空論を見る、寬平元年五月十二日仁王の疏中卷の文を抽きて六住退決に加へ、九月八日山王院にありて瑜伽供養次弟法傳來の義を記す、二年十一月觀心論を勘ふ、山徒の執奏により天皇勅して少僧都に任す、十二月二十七日なり、三年五月二十二日勅命を蒙り、山王院にありて傳法阿闍梨位灌頂を猷憲康濟の二人に授く、十月二十九日寂す、是より先き師涅槃經疏十五卷を寫し、寺衆をして流通せしめんと欲し、手つから其謬を正す、臨終の時に及ひ、此疏尙ほ手にありたりといふ、其大法を受け阿闍梨位に登る者及ひ一尊の儀軌を受くる者一百餘人、手度剃髮して大比丘となる者五百餘人、登壇受戒して僧となる者三千餘人といふ、比叡山の南峰に葬る、著作法華論記、最勝王經文句、入唐學師大相雜記、雜門雜記、各十卷、在唐記三十卷、最勝王經疏、敎王經疏、菩提場經略義釋、在唐巡禮記、雜鈔、各五卷、南洞次第四卷、普賢十願文、華嚴骨目添品、法華科文、各三卷、授決集、辟支佛集、胎燭胎生義、大悲胎藏瑜伽記、金錄、胎錄、各二卷、決疑法華提釋、法華開題、法華囑累問答、法華經骨目、壽量品妙義、文句略頌、法華玄贊註、法華論、四種聲聞記、四敎五時略頌、金剛般若開題、普賢經記、法華要集、法華總釋、法華經卷釋、法華玄義要略、止觀要決、大般若開題、仁王經開題、普賢經文句、普賢經私記、諸家敎相同異集、理智一門

集、掌中書、顯密一如本佛齋日記、維摩會日記、祖師行業記、般若心經記、天台決疑集、頓成菩提要、因陀羅義集、功德日記、戒體義、大日經指皈、大日經綱目、字輪品雜疑目、智者大師註書讚、大日經心目、大日經開題、義釋目錄、更問鈔、兩境灌頂式、義釋菩提心戒法幷授灌頂法、三部曼荼羅妙法記、護摩次第、護摩私記、在唐雜決疑、入唐願文、些些疑問　顯密相對集、宿曜經問答、秘密注記、[illegible]感夢記、密語宗叡問答決、三種悉地義、入眞言門講法華法門、入眞言門講演法華儀、阿字秘釋、阿若集、福州悉曇記各一卷、經藏疑義、三起請、圓鏡、類家二代額(額一に頌に作る)、大日經疏鈔、胎三卷略記、胎藏血脈圖、五大尊次第、理趣釋雜義、在京記、各若干卷等あり、延長五年十二月敕諡智證大師の號及び法印大和尚位を賜ふ、(智證大師年譜、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

エンチン 圓琛 ……〇九 〔眞宗〕豐後府内光西寺の住持なり、圓琛は豐後ノ東本願寺末なる光西寺に住持となる高倉學寮の擬寮司となる、文政九年法華弘傳序を講し、後寮司となる、天保十六年より三十頌三論玄義義林章を講し、嘉永二年十二月廿三日擬講となり、翌三年寂す、(高倉學寮講者列傳稿本)

エンチウ 圓忠 二一三三…… 〔曹洞宗〕備中華光寺第一代なり、圓忠字は大功大隅の人、幼にして園林寺に入り、了巖元明禪師に依り出家得度し、闢雲寺覺隱永本禪師に師事して印可を受け、總持寺に出世し、周防宮野莊に龍華院を創む、寶德元年闢雲寺に主となり、康正元年席を全菴に讓り、寛正三年再び出でゝ主となる、文明三年備中鬼妻城主上田氏華光寺を築き、師を迎へて第一代となす、同五年三月二十七日寂す、防州の鈔喜寺、豐州の安樂寺、豫州の高昌寺、等、皆師を以て開山となせり、(日本洞上聯燈錄)

エンチウ 圓柱 二〇五九 二一一七 〔曹洞宗〕遠江崇信寺の僧なり、圓柱字は石叟、越前石澤氏の子、康曆元年九月九日を以て生る、八歳にして龍澤寺に入り、梅山和尚の驅烏となり、十一歳の時如仲に依り祝髮具戒し、諸方に歷參すること數年にして皈り、如仲の命に依り遠江飯田の崇信寺に住し、總持寺に進み、大洞寺を領す、晩年に至り崇信寺に皈り、長祿元年七月八日寂す、壽六十九、臘五十九、(日本洞上聯燈錄)

エンチヨー 圓長 一八二五…… 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、圓長は紀伊の人なり、夙に高野山に登り、寛舜を禮して出家受戒し、理趣經、阿彌陀經、尊勝陀羅尼を誦す、永萬元年正月十八日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

エンチヨー 圓長 二三五三…… 〔淨土宗〕武藏蓮馨寺の僧なり、圓長は性蓮社起譽と號す、其俗姓生國詳かならず、光譽宗呑上人に師事して淨土教を學び、遂に其異義を究む、初め江戸小石川傳通院の學頭となり、後河越蓮馨寺に住す、元祿六年十月四日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

エンチヨー 圓澄 (………) 〔淨土宗〕阿彌陀寺の僧なり、圓澄武藏の人幡隨上人に從ひ、聲名甚だ高し、番頭位に轉せられ、多く幕府の論議會に預る、(鎭流祖傳)

エンチヨー 圓澄 二四四五 二四八六 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、圓澄俗姓は壬生氏、武藏埼玉の人、寶龜二年に生る、十八歳鄕里の道忠に就きて習學し、菩薩戒を受け、法鏡行者

エン(圓)チ

と稱せらる、道忠寂するに及ひ、最澄を比叡山に禮し、剃染して今の名に改む、延暦二十三年四月唐の僧泰信に就きて具足戒を受く、明年最澄紫宸殿に灌頂法を修する時、師も亦選に與りて入壇す、大同元年十一月二十三日最澄止觀院に始めて圓頓菩薩大戒を授くる時、師も列に加はりて之を受納す、二年二月一日法華長講を修し三年三月八日金光明長講を修す、弘仁八年最澄師を召して入室せしめ、法華深義、圓敎三身、寂光土義、蓮華因果の義及び止觀三德の義を授く、所謂止觀心要是なり、天長十年正月十四日比叡山の耆宿詔に應して紫宸殿に宗敎を議論するに方り、師詞辯奔流す、乃ち賞して御衣を賜ふ、此歲詔ありて延暦寺の座主に補す、山中に寂光院を刱志、西塔院を建て最終の處となし、承和四年十月二十六日寂す、壽六十六、臘三十四、（本朝高僧傳、天台座主記）

エンチヨウ　圓澄（二三四五―二三八六）〔眞宗〕美濃稱名寺の住持なり、圓澄一に演澄に作る、字は寶洲、貞享二年八月十五日美濃國葉栗郡中野村稱名寺に生れ、小字を辨彌と稱す、父は同寺七代の住僧にして祐山といひ、母は厚見郡切通村伊藤氏の女なり、師は其嫡男たり、元祿四年三月甫めて七歲にして剃髮染衣し、法名を玄祐といふ、七歲より書字を習ひ、十二歲より世典を讀み、十五歲にして初めて佛書を讀む、十四年名を緣生と改め、春二月京都に遊學し、本山の講堂に登りて南窓坊寂雅の大經兩卷義疏、觀經玄義分、西林寺是空の十疑論、無量壽經を聞き智積院法音の起信註疏、鳳潭の起信義記、五敎章、楞嚴義疏等を講するを聞き、秋郷に歸る十五年名を圓超と改め、春三月講堂に登りて是空の淨土論註、正信偈私記、往生要集、瑞蓮寺圓爾の西谷名目、安樂集を講するを聞き、秋に至りて國に歸り、八月同國山縣郡栗野村に詣り、大龍寺嶺秀の起信註疏を講するを聞く、十六年春三月京都に到り、圓爾の因明本作法纂解、憲明院如晴の論註を講するを聞き、四月自ら起信論義記を講す、寶永元年圓澄と改名し、三月武藝郡神淵村龍門寺に到り、大嶺の爲に因明義を說き、冬痴絕首座の請に應して圓覺略疏幻虎抄二卷を述ぶ、同三年三月京都に上り、衆請によりて因明纂解、西谷名目、正信偈私記、五敎章、觀經會疏を講し、餘暇東山智積院に往き、寂音の理趣經純秘抄、寂忍の即身成佛義、堯智の百法問答抄等を講するを聞き、八月尾張不破郡若林村淨寶寺に往き無量壽經及ひ三界義を講し、十一月寺に歸へる、寶永四年五月より起信註疏を講し、翌年五月二十五日より七月六日に至るまで自坊に大經上卷を講し、また三界義を講す、秋八月より九月に至るまて龍門寺に宿して禪語を聞く、七年九月淨寶寺に六物圖を講す、正德元年自坊に觀經會

圓澄講師

疏を講し、翌年四月大經を講す、四月二十七日飛檐に敍せられ、冬十二月坂井田氏の女を娶る、享保元年二月尾張國に觀經會疏四月選擇集六月淨土和讃九月大經を講す、八年正月寺に心經略疏を講し、九年觀念法門、般舟讃、序分義、往生禮讃を講し、又伊勢に大經上卷を講す、同年六月二十日本山より召され、七月四日講師に任せらる、八月四日眞如宗主紋別色安陀衣を賜ひ、八月五日命を奉して本山講堂に彌陀經を開講す、九月十六日より三河碧海郡高取村專修坊に玄義分を講す、十年二月近江四十九院村唯念寺に淨土文類聚鈔を三月醒井法善寺に高僧正像末和讃を講す、四月十五日命を奉して本山大講堂に無量壽經、六物圖を講す、翌十一年二月十三日病に罹りて寺に寂す、壽四十二、著作眞宗帶妻食肉義、神代畧說、鬪諍堅固記、正信偈義釋、各一卷。彌陀經刪裝解、心經略疏刪補解、因明本作法纂解研精考、安心決定抄畧釋、小經義疏略考、圓覺略疏幻虎抄、各二卷、起信註疏畧考、淨土文類聚鈔畧註、般若心經畧疏考、各三卷、大經補遺記四卷、五敎章鈔(精要錄と云ふ)六卷、起信義起鈔、(撰材疏と云ふ)選擇集略抄、各七卷、久遠實成義章、十劫義、彌陀眞信義、信心生因義、證果義序分演義、大經廣會抄、起信玄談科、各若干卷あり(年譜)

エンチヨー 圓超(一五七四)〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、圓超は海印寺良緒和尙に從ひて華嚴頓敎を受け、奈良に遊びて諸老宿に請益し、三論法相の玄致を究む、東大寺に居りて專ら雜華を弘め、僧都に任せらる、延喜十四年春敕して諸山の碩德に一家の章疏を錄記せしむ、天台の玄日、三論の安遠、法相の平祚、戒律の榮穩等各勅に隨て錄呈す、師乃ち華嚴宗の疏鈔、及び因明の目錄を記し、並に序を作りて上り、優稱を蒙る、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

エンチヨー 圓超(二三九一／二三四〇)〔眞宗〕山城興正寺の第七代なり、圓超字は良尊といひ、准秀の第二子、母は准如宗主の第五女なり、師始め鷹司戶輔の猶子となり、權僧正に任す、寬文元年三月十一日より十五日まで、宗祖の四百年忌を修す、延寶三年幕府寺領を讃岐に賜ふ、四月參府して恩を謝す、八年三月九日寂す、壽五十、受樂院と號す、五子あり、(本願寺通紀)

エンツー 圓通(二三六四)〔黃檗宗〕紀伊光明寺の開山なり、圓通は紀伊の人其俗姓詳かならず、黃檗山に登りて獨湛禪師に師事す、常に觀音を信ず、因て自ら圓通と稱す、法眼和尙と親しみ、善く草書に工みなり、嘗て人あり師の書を示して讀まんことを請ふ師熟視して我も亦讀む能はす、吾筆は弟子某能く讀めは其に請ふべしと云り、和歌山光明寺を開きて開山となる、寂年壽缺く、(近世叢語、長崎先民傳、近世畸人傳)〔考〕圓通は寶永頃の人なり

エンツー 圓通 二四五一……〔眞宗〕三河桑子妙源寺の住持なり、圓通は號を功德院と云ふ、三河の人なり、眞宗高田派なる妙源寺に住持となり、數々本山專修寺の安居本講を勤む、寬政三年正月廿三日寂す、著作溫古鈔等あり、(眞岡湛海氏返信)

エンツー 圓通 二四一四／二四九四〔天台宗〕山城積善院の僧なり、圓通字は珂月、號ば無外子、一に普門と云ふ、俗姓山田氏、

因幡の藩士某の子なり、七歲にして出家し、日蓮宗に屬す、稍長して識見あり、同志を糾合して宗弊を革めんとし、事露れて擯せられ、改めて天台宗に屬す、初め伯耆大山に居し、後比叡山に登り、安樂院に入りて慧澄隆敎等に交る、幾もなく智積院に學ふ、豪潮律師に謁して戒を受け隨侍す、神儒の學者の佛敎を排擊するを慨嘆し、且つ末世に佛敎を滅するものは天文地理の說より始まるとなし、印度の暦數を硏究す、三十餘年の間、經論章疏より百家の書に至り、遍く獵涉して日月の運行、經緯の數量等を明にし、佛國暦象編を作る、蓋し日藏經、月藏經、宿曜經、摩登伽經、立世阿毘曇、婆娑、倶舍等の諸經論に淵源するなり、初め山城積善院に住し、晩年輪王寺宮の命により江戶增上寺中の惠照律院に住す、天保五年九月四日寂す、壽八十一、著作佛國暦象編五卷、須彌山儀圖並に和解三卷、實驗須彌記、須彌略暦書、梵暦策進、各一卷あり、(碑文、續日本高僧傳)

〔考〕圓通は後に淨土宗增上寺中に住したるも天台宗より轉したるにあらさるか如し、故に今天台宗の下に掲く、

エンツー 圓通 ニチリヨー日良を見よ

エンテキ 圓的 二三二五……〔淨土宗〕仙臺寶林寺の開山なり、圓的は寶蓮社林譽と號す、出家して江戶傳通院に修學し、後法を良靜に嗣ぐ、仙臺北山に寶林寺を開き、寬文五年十二月寂す、壽詳かならず、(淨土總系譜)

エンドー 圓道 エークー叡空を見よ。

エントン 圓頓 ソンカイ尊海を見よ、

エントンイン 圓頓院 ニチギン日銀を見よ、

エンニ 圓耳 二二一九 二二七九 〔臨濟宗〕山城興正寺の開山なり、圓耳字は虛應、俗姓齋藤氏京都の人、十九歲にして日蓮宗意東法師に就て得度す、尋て妙覺寺日重に就て玄義文句の講莚に列す、後大應寺を開き、天台の敎觀を修す、偶感するところあり、建仁寺に投し、大藏經を閱し、大乘起信論を讀み、忽然として開悟し、遂に禪宗に皈し、靈驗を感ず、慶長八年大應寺を無關に附屬し、別に西隣に一寺を創立し、圓道山興正寺と云ふ。仝十年正月朝鮮の僧松雲渡來して京都本法寺に止まるに際し、師乃ち佛法綱要十則を作り贈呈す、松雲大に稱歎し、虛應の二字を大書し、答書に附して送る、仝二十年東國に歷遊し、上野長樂寺にとゞまる、住僧天海一見して優遇し、法語並に宗派圖を附し、且葉上流の秘密儀軌を授く、幾何ならずして再ひ京都に歸り、興正寺に住す、元和二年後陽成上皇の救語を拜し、宮中に法要を說く。仝五年二月疾に罹り、四月朔日懇ろに敎禪一味の說を以て門下を諭し、仝月十九日夜寂す、壽六十一、臘四十三、遺偈に曰く、殺レ佛殺レ祖、對二青山一眠、欲レ知二端的一、問二露柱一傳、と、門人遺骸を寺の西に葬る、大照塔を築く、著作心經註解、及び詩偈集あり、(續日本高僧傳)

エンニ 圓耳 シンリユー眞流を見よ、

エンニ 圓爾 ベンエン辨圓を見よ、

エンニン 圓忍 二三六九 二三三七 〔戒律宗〕和泉神鳳寺の律僧なり、圓忍字は眞政、俗姓は窪田氏、加賀石川郡の人、母は長谷氏の出なり、年甫めて十四歲本州伏見院に入りて快玄阿闍梨を師として出離の法を學ひ、翌年落髮して諸密咒を習ふ、十八

歳金剛峰寺に登り、寶光院の長靑に從ひて兩部の灌頂を禀け、去りて圓通寺賢俊に隨侍して沙彌戒を受け、阿字觀法を受く、正保二年三十七歲、通受の法によりて具足戒を納る、四年囑を受けて席を補し、慶安二年奈良の上宮皇院に移つる、後攝津の勝尾山に遊ひ、又嵯峨の法輪寺に赴き、有以阿闍梨に就きて道敎流の密軌を傳ふ、時に隱元琦黃檗山に結界し、衆を集めて戒法を授く、師一夏掛錫して法化を扶助す、寬文十二年快圓の請を以て神鳳寺に移り、岡本山法起寺に住す、延寶五年十二月二十五日寂す、壽六十九、臘三十三、極樂寺に葬むる、法弟慧忍、然純、空照、眞讓、性快、圓空等若干人、著作、修善要法、觀行要法集、各二卷あり、（本朝高僧傳）

エンニン　**圓仁**　一四八四／一五二四〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、圓仁俗姓は壬生氏下野都賀郡の人なり、崇神天皇の長子、豐城入彥の第二子の後裔なり、延曆十三年に生る、幼にして父を喪ひ、兄に從ひて經史を學ふ、心竊かに佛を慕ふ、母其志を見て、之を大慈寺廣智和尙に與ふ、年甫めて十五歲廣智に携へられて比叡山に登り、最澄に從ひて止觀を學ひ、止觀文義の骨髓、一代經論の關鍵を授かる。弘仁四年試業に及弟し。翌年正月剃髮得度し、沙彌戒を持す、遂に最澄より傳法灌頂を受け、七年東大寺にて具足戒を納る、十四年根本中堂に始めて大乘羯磨を行ひ、義眞は和上となり、師は敎授師となる、以後十年間山を出てずと誓ふ、山衆强ゐて群生を度せしむ、此より山を下り法隆天王等の諸寺に開講し、年四十を過きて身疲れ、眼昏み、比叡山の北磵に居りて死を待つ、然れとも命數未た盡きす、靈應によりて病平復す、此に於て石墨草筆を以て法華經を寫し、塔を作り經を藏し、名けて如法堂といひ、傍に一菴を構へて四種三昧を修す、後の首楞嚴院是なり、承和二年入唐の詔を拜し、五年六月二十二日大使藤原常嗣に從ひ、唐の楊州海陵縣に着く、乃ち文宗の開成三年七月十二日なり、大使は京に赴く、師は開元寺に留まる、上都の僧宗睿といふ者あり、悉曇に通す、師之に從ひて梵書を習ふ、又全雅なるもの密敎を善くするあり、師之に灌頂を受け、兩部の曼荼羅、諸尊の儀軌佛舍利等を付せらる、翌年大使藤原氏長安より來り、師を誘ひて海に浮ふ、逆風俄に吹きて登州の界に返る、同夜賊に逢ひしも賊財を奪ふこと能はす、却りて善心を發して師を府内に送る、府主之を憐みて、再ひ日本の船に附せしが、亦大風に遮さられ登州の界に返へる、乃ち船を下り赤山の法華院に寓す、翌年州縣を巡觀す、幾ならすして張詠なる者縣牒を持して來り、日本の僧宜しく意に任して巡禮せよと、且つ副使に命して每縣に牒を送る師靑州府に往きて節度使。及ひ副

慈覺大師

エン（圓）二

使判官に謁し、延かれて龍興寺に館す、翌日判官師を第に請して供養甚だ懇切なり、判官姓は蕭氏、名は慶、佛心宗に通す、師之に就きて請益し、遂に印可を蒙る、辭し去りて五臺山に登り、山中の碩德に謁し、華嚴寺に留まる、志遠法師に逢ひて摩訶止觀を受け、兼ねて天台宗の諸疏を寫す、夏中臺山に往き、文殊の石像を拜し、又西臺山に向ひ二十里を越えて北臺山に至り、秋更に南臺山を拜し、長安に到りて左街功德使儀同三司仇士良に謁す、勅して資聖寺に居らしむ、屢大興寺の翻經院に往き、元政阿闍梨に隨ひ、金剛界の大法を學ひ、五瓶の灌頂を受け、金剛界の大曼荼羅を圖書す、會昌五年夏青龍寺の義眞阿闍梨に從ひて胎藏灌頂壇に入り、毘盧遮那經の眞言印契を習ひ、並に秘密の儀軌及ひ蘇悉地の大法を稟け、胎藏の大曼荼羅を圖す、二年玄法寺の法全阿闍梨に値ひて胎藏の儀軌を習ひ南天竺の寶月三藏に逢ひて悉曇章を習ひて醴泉寺の宗穎法師に從ひて重ねて止觀を習ひ尋いで街東大安國寺良侃阿闍梨、街西淨影寺惟謹阿闍梨に見え、共に器許密付せらる、師長安に寓すること凡そ六年、經書五百五十餘卷、念珠法物若干を得たり、武宗の會昌の難に方り、歸朝の期なきを憂へしが、宣宗卽位するに及ひ、佛法再ひ興る、大中元年京を出て八月船を艤して海に浮び、承和十四年九月太宰府に著く、將來する經書法具を表進す、勅下して賞勞し、唐客四十餘輩に各衣粮を給ふ、嘉祥元年詔を奉して京に入る、卽比叡山に登りて、先師最澄の塔を拜し夏六月大法師位を授けらる、明年四月詔して灌頂法を修せしむ、壇に入る者一千餘人、官、僧供を賜ふ、三年春文德帝卽位の際、詔して新傳の法を修せしめんとす、師乃ち奏請して延曆寺に就き總持院を建て、二七僧を選ひて常に持念せしむ、仁壽元年五臺山念佛の法を授け、諸徒をして常行三昧を修せしむ、四年天台座主に任す、齊衡三年春帝師を冷泉院の南殿に召して兩部の灌頂を受け、公卿官僚壇に入る者多し、冬東宮の召により灌頂を授け、貞觀二年帝に菩薩戒を授く、二年初めて舍利會を修す、淳和太后師及ひ二十四員の僧を請して菩薩戒を受け官僚以下三摩耶戒を受け、密壇に入る者四百二十餘人なり、此年文殊樓を建つ、五年十月藤原忠仁六十の壽を祝し、師に請ひて三摩耶戒を受く、壇に入る者公卿女御二百餘人なり、六年正月十四日寂す、壽七十一、臘四十九、寺北の天梯尾に窆る、遺命により禪院神祠を比叡山の西麓に建つ、貞觀八年七月勅して諡を慈覺大師と賜ふ、著作法華釋題名、法華會頌、法華讃頌、法華觀心四種釋、法華實悟釋、法華觀心私記、迹門觀心絕待妙釋、本門觀心十妙釋、迹門義悟記、本門融通義記、方便品問答、四要品私記、般若心經疏集、顯戒論緣起、四土通達義記、寂光土記、四土不二義記、五重玄義最秘釋、十不二集、百界千如義記、一念三千覆註、三身問答、覺性論、俗諦不生不滅論、己心中義記、隨智記、七喩三平等十無上義、己心衆生界佛界記、通達菩提義記、實相直道義記、權實通達義記、照了分別義記、半與半奪義、細人麁人義記、作佛知衆生門、自他不二義、一心自行記、自利利他心平等義、事々不相卽義、佛性義鈔、隨意觀法集、內證佛位集、敎時集、讃義集、妙義集、一代要義、要纂、神通記、六十卷記、授三昧耶及第七日夜行事、曼荼羅問答、妙心大、眞言所立三身問答、

法身說法文、千手陀羅尼注、在唐所餘決、菩提心戒儀、敎時集、後傳法記、三戒記、一代要義、三種悉地祕決、悉曇記、九年圖記各一卷四悉檀義、十如是集、胎藏界虛心記、灌頂式、金剛界淨地記、護摩私記、熾盛光私記、唐決各二卷、法華開講、法華實相義記、安樂行品私記、涅槃開講、談義集、融通佛法義各三卷、三部密記、五臺順禮記各四卷、三寶輔行記、在唐記各五卷、涅槃音義七卷、速證菩提集、顯揚大戒論、法華疏記鈔集各八卷、止觀私記、十卷義綱集、文顯集、義便集、辨字釋妙就記、大日經鈔、各若干卷あり（元亨釋書、四大師傳、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

エンニヨ 圓如 コーユー光融を見よ、

エンニヨ 圓如 ホードー法道を見よ、

エンネン 圓然（一九四〇）〔臨濟宗〕京師普門寺の禪僧なり、圓然字は奇山、駿河久能の人、辨圓（聖一國師）の族姪なり、辨圓に侍して心印を傳へ、京の普門寺に住す、相國內經藤公（一條）入室參禪し、遂に戒法幷に祖衣を受けて弟子の禮を執る、因て城南山崎に成恩寺を開きて開山となす、圓然後普門寺に寂す、其年時缺く（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エンノー 圓能 一八一一……〔……〕大和信貴山の僧なり、圓能大和添上郡伏見の人年十八にして信貴山に登と。一僧に就きて修學す、性昏鈍なれども志操純一なり、常に阿彌陀佛を念誦す、伏見に一寺あり、弘文院と號す、丈六の藥師佛像を安置す、圓能一百日を期して日日三千禮し、誓ひて曰ふ、我れ願くは眞身を見むと、九十六日にして眞身を拜す、同時に阿彌陀佛、並に文珠菩薩の眞身を拜す、幾くもなくして頓に死す、胸次暖きを以て葬らず、三十餘日を經て蘇生して曰ふ、六地藏の救護によりて再び娑婆に還るも、爾來四衆を勸諭して念誦益勤め、金字五部の大乘經を書し、金寶山に登りて山上に慶讃安置す、仁平元年正月廿四月沐浴し、淨衣跏趺合掌して化す、壽缺く、（本朝高僧傳）

エンハン 圓範 一八九〔一九六七〕〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の禪僧なり、圓範字は無隱、俗姓不詳、紀伊の人なり、大覺禪師に師事す、後元に遊び益參究し、歸來大覺の法嗣となる、永仁の初、建仁寺に住し、尋て鎌倉の圓覺寺建長寺に歷住し、德治二年十一月十三日病なくして寂す、壽七十八、辭世の偈あり、來去無方行、去來更沒蹤、要知吾住處、明月與淸風、勅諡覺雄禪師と云ふ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エンハン 圓範（一七四四）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり。圓範は備後守藤原保家の子、長守僧正に就きて台密の法を學び、康平四年龍華院の阿闍梨に任す、承曆三年最勝講會の聽衆に加はり、永保應德の間、屢々二會の諸師となる、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

エンホー 圓方 二〇六八……〔臨濟宗〕相模建長寺の僧なり、圓方字は無外といふ、不聞契聞に師事して其法を嗣き、肥前水上寺に主となり、尋いて相摸の淨智寺圓覺寺建長寺の諸寺に歷住し、應永十五年五月五日寂す、壽缺く、塔を妙光と云ふ、（延寶傳燈錄）

〔考〕 圓方は東明慧日の法嗣不聞契聞の法を繼けるものなれは、曹洞の法派に屬す、然れとも當時は一禪宗として分つなし

エンマン 圓滿 クンジヨー憲靜を見よ、

エンミヨー　圓明……一五一一〔眞言宗〕山城神護寺の僧なり、圓明其俗姓生國詳ならす、或は良豐田丸太夫の子、紀伊の人と云ふ、初め奈良東大寺にて三論を學び、後空海に從ひて密敎を受け、天長元年九月擢せられて、高雄神護寺定額廿一僧の班に補せられ、遂に兩部の大法を許し且つ東寺の凡僧別當となる、此職師に始まる、承和三年五月三日官許して東大寺眞言院に廿一僧を置き修法せしめ、師及び實慧をして會を幹せしむ、五年東大寺廿一代の別當に補し、寺中の多聞天の古像を修理す、嘉祥三年七月廿七日權律師に任す十二月八日正律師となる、仁壽元年化す、壽缺く、（弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、本朝高僧傳）

エンミヨーイン　圓妙院　ニチチヨー日澄を見よ、

エンミヨーイン　圓妙院　ニチセン日詮を見よ、

エンミヨーイン　圓妙院　リヨーオー良應を見よ、

エンミヨーコクシ　圓明國師　シヨーキン紹瑾を見よ、

エンモン　圓門……二四五四〔眞宗〕豐前廣圓寺の住持なり、圓門字は法蘭、一に曇茂と云ふ、號は錢塘、別に泥華院と稱す、豐前日田の人、黃檗宗僧大潮に業を受け、佛儒の學に通し、詩賦に長す、東本願寺末寺廣圓寺に住す、寛政六年寂す、壽缺く、著作錢塘詩集三卷刊行す、（豐綸詩史、宜園百家詩）

エンヤ　圓也……二二四四〔淨土宗〕増上寺の第十一代なり、圓也號は秀蓮社雲譽、俗姓中西氏にして、筑後國柳川に生る、菊池武俊の後なりといふ、幼にして能く人を敎化す、學業漸く熟するや、諸國を囘歷して名僧を訪ひ、玄要を試問す、伊勢國白子に至り、悟眞寺に住し、其第六代たり又職を辭して遊化し、關東に移り、叢林に入て規則を明かにし、衆徒の選擧辭する能はすし永祿九年十月四日相摸國大長寺より増上寺の第十一代に昇る、天正十年十一月寺內火災に遇ひしより厭心愈深く、仝十二年八月山下に天光院を開きて隱栖し、本刹を源譽觀智國師に讓る、仝十二年九月五日寂す、（鎭流祖傳、三緣山志）

エンユー　圓猷　二三五四／二四一三〔眞宗〕伊勢專修寺の第十七代なり、圓猷は歡喜心院宮と號す、貞致親王の第五子なり、元祿十年五月廿九日入室、寛永七年十一月住職し、寶曆三年正月二日寂す、壽六十、（專修寺歷代）

エンユー　圓融　エシヨー惠昌を見よ、

エンユー　圓融　リヨーシン良眞を見よ、

エンユー　圓祐　リヨーエン良圓を見よ、

エンヨ　圓譽　二一六四／二二四四〔淨土宗〕山城正法寺の僧なり、圓譽は相撲の人、畫圖を善くす、始め和泉三輪山に住し後山城國栂尾に住す、嘗て一宇を創し、石雲菴と云ふ　天正十二年十一月六日洛下正法寺に寂す、八十一歲、石雲に葬る、（鎭流祖傳）

エンヨ　圓譽　エンケー厭冏を見よ、

エンヨ　圓譽　クワクゲン廓源を見よ、

エンヨ　圓譽　キヨーカン慶閑を見よ、

エンヨ　圓譽　キヨーユー慶融を見よ、

エンヨ　圓譽　ゲンコ還故を見よ、

エンヨ　圓譽　ゲンチヨー源長を見よ、

エンヨ　圓譽　チヨーリユー潮龍を見よ、

エンヨ 圓譽 ムデン夢傳を見よ、

エンヨ 圓譽 リテキ利的を見よ、

エンヨ 圓譽 リョーモン靈門を見よ、

エンヨ 圓譽 レーオー嶺翁を見よ、

エンヨ 圓譽 ロククワク路廓を見よ、

エンリ 圓理 ……二三八五 〔淨土宗〕京師知恩院四十三代なり、 圓理は相蓮社應譽實空と號す、其郷貫詳かならず、相閑に投じて出家受業し、館林瓜連鎌倉の三大刹に歷住し、寶永四年華頂山に上り正德五年五月辭し享保十年九月五日寂す、門下に高譽尊統あり、（淨土總系譜、淨土宗年譜）

エンリツ 圓律 ショーゲン證玄を見よ、

エンリン 圓林 ケンシユン兼俊を見よ、

エンリンボー 圓琳房 ニチフク日福を見よ、

エンリユー 圓隆 二四七一…… 〔眞宗〕播摩明石常德寺の住持なり、 圓隆は播摩の人、高倉學寮に學び、寛政七年擬講となり、十一年觀念法門を講ず、後文類聚鈔無差別論疏を講ず、文化八年六月十七日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

エンリユー 圓龍 二五〇五…… 〔眞宗〕筑後榎本津覺了寺の住持なり、 圓龍號は即往院、筑後の人、高倉學寮に學び、文化六年寮司となり、遊心法界記を講ず、後五敎章心經畧疏を講ず、文政十年六月二十七日擬講となり、十一年安心決定鈔を講じ、後起信論義記、歎異鈔、五敎章を講じ、天保九年七月十三日嗣講に進む、十二年玄義分を講じ、十五年阿彌陀經を講ず、弘化元年願に依り、嗣講職を退き、二年六月十八日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

エンイン 延殷 一七一〇…… 〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、 延殷俗姓は橘氏、但馬の人なり、十六歲叡山に登り、慈忍僧正を禮して剃髮受戒し、靜照に從ひ山家の法を學び、大義に通ず、長保二年寂照宋に入る、師も又從ひ太宰府に赴く、朝廷議ありて師を留む、依て景雲阿闍梨に謁して兩部の密法を受く、寛仁の季多武峯に入り隱逸する三年、明快僧正の勸めにより山に皈る、幾何ならずして又大原山に入る、長暦二年慈覺智證の兩門座主の位を爭ふに當り、醍醐山に遷り、小野仁海僧正を拜して重ねて兩部の灌頂を稟く、永承五年三月二十六日寂す、壽缺く、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エンカン 延鑒 一五五二 一六二六 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、 延鑒俗姓は秦氏、山城の人なり、眞言敎を慕ひ、蓮舟僧都に從つて傳法灌頂を受け、律師に任ず、天暦四年東寺の長者となり、此秋九月衆の爲めに灌頂法を修す、九年敕により大和元興寺を主とり、居ること三年、京都貞觀寺に移り、天德二年少僧都に任す、應和元年大僧都となり、康保三年三月二十七日寂す、壽七十五、（東寺長者補任、本朝高僧傳）

エンギ 延義（……）〔三論宗〕大和藥師寺の學僧なり、 延義は俗姓生國及其師承詳かならず、藥師寺に居りて盛んに三論を弘む寂年及壽缺く、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エンキヨー 延慶（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、 延慶は武藏刺史業貞の子なり、比叡山に登りて明快僧正を師とし、台密を硏學して、博く諸部に涉る、某年壽五十五にて寂す、（本朝高僧傳）

エンク 延救（一七二五）〔眞言宗〕武藏慈光寺の僧なり、

延救は武藏慈光寺の住僧にして、賴算阿闍梨に隨ひて眞言教を受く、嘗て千日の護摩を修して食を絕ち戶を閉ぢて禪坐し、遂に寂す、時に治曆某年正月十四日なり、壽七十、(元亨釋書、本朝高僧傳、高野往生傳)

エンコー　延杲 一七八三 一八六六 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、延杲は藤原能忠の子、夙に眞言に歸し、東寺の大僧正禎喜に從ひて下髮受戒す、禎喜は師の叔父なり、業成りて密灌を受け、文治元年春權少僧都に任し、幾なくして大僧都となる、建久二年春東寺の長者を司り、夏五月神泉苑に雨を禱り法印に叙す、八年六月權僧正となり、翌年正僧正に轉し、寺務を領す、正治元年大僧正に移り、八月雨を祈りて牛車を許さる、此年高雄の神護寺に住し、建仁元年護持僧となる、翌年秋東大寺を董し一住三年、大に寺規を修す、元久二年七月雨を祈り、賞として弟子延敎を權律師に任す、後諸職を辭して六條の別院に退居し、建永元年三月十二日所住に寂す、壽八十四、世に六條の僧正といふ、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

エンコー　延幸 一六四五 一七二六 〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、延幸は大和高市の人、松橋に師事して其法を嗣ぎ、永正四年維摩會の講師となり、尋で尊勝院に住し、一宗の貫首となる、康平二年東大寺に移り、一住七年、別院に退き、治曆二年十二月二十一日寂す、壽八十二、(本朝高僧傳)

エンサイ　延最 (一五四五) 〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、延最俗姓不詳、圓澄の下にありて顯密を兼修し讓を受けて山中西塔院に主たり、仁和二年七月五日上奏して西塔院に僧五人を置き、晝は大般若經を轉讀し、夜は釋迦佛號を念誦せしめ、五人の衣供は定心院に准して官府の補を被らむ云々と請ふ所あり、制可せらる、示寂の年時欽く、(本朝高僧傳)

エンシン　延信 一九五二 二〇三二 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、延信は加賀守延持の子信有和尙に師事し、正中二年傳法灌頂に入る、時に三十三歲なり、應安五年四月三日寂す、壽八十一、(三井續灯記)

エンシン　延信　エンシン宴眞を見よ、

エンジン　延尋 (一七〇四) 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、延尋俗姓は源氏、參議扶茂の子なり　出家して濟高僧都に師事し　兩界の密法を受け、尋で家典を究め、權律師に任す、萬壽四年敕ありて東寺の長者を司どる、時に三十六歲なり、年四十に滿たずして此職を預るもの、師を初例となす、長元四年權少僧都となり、七年十月圓護寺落成供養の導師となる、長曆二年大僧都に進み、寬德元年疾に罹り諸職を辭し、其終るところを知らず、(本朝高僧傳、東寺長者補任)

エンシヨー　延昌 一五四〇 一六二四 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、延昌俗姓は洒御氏、一に槻本氏なりともいふ、加賀江沼郡の人なり、幼にして州の敎寺に投し諸經論を讀む、十三歲始めて歸鄉す、父其非を詰りて之を打つ、師忸怩として越前荒知山に赴く、途中平泉寺の僧に逢ひ、相伴ひて比叡山に登り座主玄昭に師事す、師玄昭に侍して顯密を學ひ、年二十二座主長意に菩薩戒を受け、又仁觀慧亮の室に入りて灌頂法を傳へ、諸密部を究む、承平五年冬辨日阿闍梨の執奏により法性寺阿闍梨となる、天慶二年冬座主に任し明年內供奉十禪師に補す九年十二月延曆寺の座主に任し、天德二年僧正に昇る、

師每夜尊勝咒を誦すること一百遍、每月十五日同門衆を招きて阿彌陀讃を唱へ、法華の奥義を論す、朱雀村上二帝の師となり、宮中に入りて加持す、康保元年正月十五日寂す、壽八十五、寂後三日勅して謚を慈念と賜ふ、（元亨釋書、本朝高僧傳、天台座主記）

エンシヨー　延性　一五一九 一五八九　〔眞言宗〕山城醍醐寺の座主なり、　延性は延喜五年灌頂法を聖寶に受け、念覺寺を開きて眞言教を弘む、延長六年醍醐寺の座主に任し、七年十月二十八日寂す、壽七十一、（本朝高僧傳）

エンシヨー　延祥　一四二六 一五一三　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、　延祥俗姓は槻本氏、近江野洲の人、護命和尚の侍童となり、弱年にして東大寺戒壇に登りて具足戒を受く、延暦七年護命涅槃經を春日寺に講し、師左右に侍して眞理を聞く、天長七年大極殿に最勝王經を講し、永和三年勅を奉して諸山の僧統を集めて殿上に論議す、其論鋒鋭利能く敵する者なきを賞し、大僧都に任し、仁壽元年進みて僧正に任す、三年五月五日寂す、壽八十八、臘六十餘、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エンチン　延鎭（一四三〇）　〔法相宗〕京都清水寺の第一代なり、　延鎭は奈良報恩法師の上足なり、　寶龜九年四月京都乙輪山に登る、延暦十七年坂上田村麿此山に邸を移して寺となし、清水寺と號し、師此に住す、後其終る所を知らす、（本朝高僧傳）

エンチン　延敞　一五二二 一五八九　〔眞言宗〕山城醍醐寺の座主なり、延敞俗姓は長統氏、京都の人なり、聖寶僧正に師事して三論及三密を稟け、又宇多上皇に灌頂法を受く、一日聖寶に侍して宮に入る、上皇其才を奇として綱位を授けんとす、師固辭して受けず、延喜十年敕を奉して維摩會の講師となり、延長二年東大寺に住す、翌年六月東寺の長者となり、七月醍醐寺の座主となる、六年春權少僧都に任し、法務を兼ぬ、晩年印を解き東南院に歸休し、七年二月十三日寂す、壽六十八、或は七十三と云ふ、（本朝高僧傳）

エンテー　延庭（一五一九）　〔天台宗〕山城興隆寺の開山なり、　延庭は山城常住寺の十禪師なり、經論に該通し、傳燈大法師位に任す、貞觀六年奏して山城葛野郡に興隆寺を建て、梵釋の像四王の像を安置す、貞觀二年木工寮に令して堂舍を修營し、春は最勝王經を講し、秋は妙法蓮華經を講す安居の中は大般若經を轉讀す　御願寺となして戒律眞言の兩宗を修し、且つ僧綱幷に講師の攝を經さらんことを請ひて許さる、寂年、及び壽歆く、（本朝高僧傳）

エンユイ　延惟（一五六一）　〔法相宗〕大和東大寺の學僧なり、　延惟は興禪寺に居りて法相を學び、又聖寶僧正に密法を受く、延喜七年維摩會の講師に任し、每に主座となる、九年四月東大寺主務を領し、傳法法師より僧綱に昇任す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

エンロー　延朗　一七九〇 一八六八　〔天台宗〕山城最福寺の中興なり、延朗は但馬養父郡の人、源義信の子、源義家四世の孫なり、二親を喪ふに及びて郡の比曾寺に往きて釋典を讀み、年十四歲三井の永證に從ひて天台を學び、翌年剃髮受戒し、京に居ること五年、比曾寺に歸へり、專ら法華を誦す、二十九歲比叡山東塔の山王院觀嚴に依りて兩部の灌頂法を受け、養和阿

闍梨に就きて重ねて密印灌頂を受く、平治元年源義朝、藤原信頼等亂を起すや、師源家の族なるを以て平清盛來りて寺を圍む、師夜潛に遁れ去り諸靈區を歷て遂に奧州の松島に到り、一廢寺に宿し、後舊寺に歸へる、安元二年杵尾の最福寺に遷り、大池を穿ちて殿堂を其畔に建つ、源義經丹州篠村莊を以て寺産に充つ、承元二年正月十二日寂す。壽七十九、遺骸を山西に葬る、（元亨釋書、本朝高僧傳）

エンカイ　演海（二三三五）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、演海は千種中納言從二位源有能の子、萬治二年性承の室に入り十一月得度す、三年權律師に任し。寛文三年法眼に叙し、六年少僧都に任し、延寶三年法印に叙す、寂年缺く、（仁和寺諸院家記）

エンジイン　演慈院　チクー知空を見よ、

エンチ　演智 二二九三 二三七二 〔淨土宗〕伊勢曼荼羅寺の二代なり、演智號は隨譽、俗姓生國詳ならず、幼にして入門寺法譽に師事し、後東遊して江戸幡隨院に掛錫し、一宗の奧義を究め、殊に曼荼羅の講究に意を潛め、摑象十四卷を作る、且つ安養山曼荼羅寺を建立して法譽を開山となし、自ら二世となる、正德二年七月七日寂す、壽八十、（續日本高僧傳）

エンチヨー　演澄　エンチヨー圓澄に同じ、

エンヨ　演譽　ギヨーチン凝念を見よ、

エンヨ　演譽　セーガン誓岩を見よ、

エンヨ　演譽　チセン知闡を見よ、

エンヨ　演譽　ハクズイ白隨を見よ、

エング　厭求 二二九四 二三七五 〔淨土宗〕山城專稱寺の開山なり、

厭求俗姓源氏、京都の人なり、幼にして靈夢に感し、出家の志を父母に乞へとも許されず、自ら髮を薙る、幾何もなく父沒す、因て正保二年專念寺信譽に投じて得度す、時に十三歲なり。これより淨土三部經六時禮讃等を習ひ、月を逾て諳誦す、十七歲にして江戸に遊學し、靈巖寺珂山に謁して宗門の秘密宗戒兩脉を受く、師淨土教を研究し、兼て諸經論を學び其蘊奧を究む、大に議論に長じ、人をして懸河の辯に感せしむ、明曆二年正月江戸火災に罹り、諸侯邸館商家民屋一時に灰燼となり、靈巖寺もまた其厄に罹る、師千辛萬苦して逃避し火難の逼惱によりて三途の劇苦、無常の迅速を省悟し、自ら深く韜晦して美濃大運寺に寓せしに、人師なることを知り、强て說法を請ふ、翌三年美濃片山に艸菴を結びて幽棲し、日課念佛六万遍なり、爾來攝津の茨木、高槻、芥川、或は京都等に遊化し　一時攝津の鮎川に在りて維摩楞嚴を閱し、一日鴉聲を聞いて忽然開悟す、萬治二年老母に侍して攝津の有馬溫泉に浴し。道俗の請に應じて極樂寺にて說法し、聽衆雲の如く集まる、住僧榮譽檀越と議して師をして極樂寺の席を補さんことを乞へとも師嘗て一生雲水となり住處を定めずとの自誓あるを以て固辭して聽かず、然れども老母痼疾ありて長時の浴を願ひ、且榮譽頻りに住山を請ふあるを以て遂に席を嗣き、其廢頽を興し、化道彌盛んなり、師一住九年、寛文七年二月母逝するを以て退院し、四方に巡遊す、延寶中弟子了緣等北野に專稱寺を剏め、師に請ひて寓居せしむ、次に攝津の唐崎に菴居し、或は京都專念寺に說法す、又伊勢豐原山中に寓し、後出羽湯殿山月山に登る、師嘗て請に應し、安藝

嚴島光明院に住し、松江侯の請により出雲を遊化し、廣く淨土敎を布く、師一宗に偏するなく、黃檗宗の木菴、慧林、獨照、慧極等の諸禪師と道交最も深し、老後益念佛三昧に入り、一七日に百萬返に至る、正德五年岡崎の草菴に寓し疾に罹る、仝年六月十一日懇ろに弟子を戒め、正念にして寂す、壽八十二、臘七十、師一生寺務を領せず、諸國に流寓し、伊勢弘道寺、京都專念寺、遠江念佛寺、攝津萬福寺、西山導故院、並に中興するところなり、著作念佛安心諸門領解、徒然要草、若干卷あり、師製作の佛菩薩の圖像數を知らず、書寫の阿彌陀經一千卷、阿彌陀佛號十万に及ぶと云ふ、(厭求上人行狀記、續日本高僧傳)

エンケー 厭問 二二九四……〔淨土宗〕信濃願行寺の中興なり、厭問は頓蓮社圓譽と號す、其俗姓生國詳かならず、智譽上人に師事して法を嗣ぎ、信濃上田願行寺の廢頽を修して中興と稱せらる、寬永十一年寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

エンタツ 緣達(……) 奈良京の歌僧なり、緣達は奈良朝の時歌を以て聞ゆ、萬葉集に其歌を載す、(萬葉集作者履歷)

エンヨ 緣譽 二二八二……〔淨土宗〕京都勝念寺の開山なり、緣譽は其俗姓生國詳かならず、潮龍に師事して法を嗣ぎ、京都賀茂川端勝念寺の開山となる、元和八年九月十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

エンヨ 緣譽 ダイオク臺屋を見よ、

エンヨ 緣譽 ショーネン稱念を見よ、

エンシン 宴眞(……)〔眞言宗〕山城仁和寺の學講なり、宴眞一に延信に作くる、字は皆明と稱す、性信親王の法を亨け、廣澤の大匠となる、後其居を號して皆明寺と稱す、(傳燈廣錄)

エンコー 衍劫 二三八四 二四五九 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第二十四代なり、衍劫字は石窓と云ふ、俗姓淸水氏、信濃小縣の人、出家して大方淨用禪師の法を嗣き、寬政十一年九月十六日黃檗山に進み、山主となり、寬政十一年九月廿八日寂す、壽七十六、(黃檗山歷代表)

エンシユン 衍舜(二〇一六)〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、衍舜は尊衍に就きて剃髮受戒し、延文三年十二月勅により法義を述ぶ、四年二月無量壽堂立義者となる、平生著作を事とし、抄を作ること三百餘帖に及ふ、皆眼耳抄と名つく、寂年缺く、壽八十三、(三井續灯記)

エンヨ 衍譽 リテン利天を見よ、

エンヨー 衍曜 二四二七 二四九六 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第二十九代なり、衍曜字は璞岩といふ、肥前長崎の人、西村氏の子なり、出家して黃河淨淸和尙に師事し、其法を嗣き、天保二年六月廿三日黃檗山に進み、第二十九代の山主となる、一住六年、天保七年五月廿八日寂す、壽七十なり、(黃檗山歷代表)

エンゲツ 淵月 ドーヨ道譽を見よ、

エンリユー 淵龍 リヨーオン良穩を見よ、

エンノオツヌ 役小角(一三六一) 修驗道の開祖なり、役小角は大和國茅原の里の人なり、賀茂役公にして(一に賀茂江公に作る) 開化天皇の皇子彥坐命より出つ、舒明天皇の六年を以て鄉里に生る、(一說に三年といふも今は前說に依

る）、幼にして學問に博通し、且つ三寶を仰信す、世俗に傳ふる所によれは、弱年にして生駒山に上りて苦行を修し、尋いて紀伊の熊野山中に入りて荊棘を開拓したりといふ、三十二歳にして葛城山に上り、岩窟の中に金銅の孔雀明王の像を安置し、其神咒を諳誦して秘密の觀法を修行すること三十餘年なり、これより奇異の驗術を證得して鬼神を驅使したりといふ、是れたま〳〵經に孔雀明王の神咒の功德利益を說けるものを取りて直に之を讀誦したる小角の行狀に比擬したるものなるべし、然れは固より一々事實として信すへからさるも、三十餘年の間岩窟の中に棲居して草衣木食を以て苦行を積みしは當時尋常ならさることゝして仰視せられたるなるへし、大和の南部より紀伊に亘る高山大嶽を蹈開したるは實に役小角に始まるなり、吉野の金峰山大峯山等の嶮岨は皆小角か神咒を讀誦しながら攀躋したるところなり、高野山牛瀧山等後に空海の經營にかゝるものも、皆小角か先つ脚を着けたるところなりと云ふ、攝津の諸山も亦蹈開したり、神峯山、本山、箕面山、は皆小角の脚を着けたるところなりといへり、蓋し葛城山を出てゝ後神咒を讀誦して近畿の諸國を回歷したるなり、當時其弟子の附從する者もありしか如し、從五位下韓國連廣足は小角を師として驗術を學ひ、後其賢能を嫉みて讒奏したれば、文武天皇三年五月世俗を誑惑する者として伊豆の大島に配流せらる、古傳に小角か葛城山より金峰山に至る間に橋梁を架せんとして葛城山の一言主命の神意に契はず、遂に配流せられたるものなりといふ、事、頗る險恠なるも、小角か山谷の開鑿より禍にかゝりたるを謂ふものならん、捕吏小角を捕縛せんとして先つ其母を牢に下しゝかは、小角自ら來りて捕縛せられしといふ、伊豆にありても晝は出てすして母に奉侍し、夜は逃れて富士山に登り、苦行を修す屢々捕吏のために殺害せられんとして驗術を以て危難を免れたりと傳ふ、蓋し富士山を蹈開したるは小角を以て始とするなり、相摸常陸の諸地にも回歷したる跡あり、大寶元年に赦されて京に歸る、これより西國に赴き、豐前の彥山を蹈開す、古傳に母を鐵鉢に載せ海に泛ひて唐に去るといふは怪しむへし、其新羅に於て道昭に遇ひたりといふは年代相違へり、蓋し豐前の地方にて世を終りたらんも其年時未た詳かならす、後世小角を以て修驗道の開祖とす、寬政十一年正月に勅して謚號を賜はり、神變大菩薩といふ、（續日本紀、帝王編年紀、古今著聞集、扶桑略記、靈異記、水鏡、本朝神仙傳、高野春秋、牛瀧山舊記、元亨釋書、相摸風土記、常陸風土記、僧綱補任、大平年表、修驗行者記、役君形生記、役公傳）

エンノギヨージヤ　役行者　エンノオヅヌ役小角に同じ、

エンセツ　炎雪　リョーコー良興を見よ、

エンチ　焉智　二三七二　（曹洞宗）武藏高林寺の僧なり、焉智字は默室、俗姓は土橋氏、信濃國諏訪郡上原の人なり、十三歳にして郡の賴岳寺に投して剃髮得度す、出遊して鐵心月舟の二老に謁し、次に長崎に到り、明僧道者禪師を崇福寺に禮す、久しふして京都に皈り、黄檗山の木菴に依る、明年獨菴和尚を訪ひ、機語相合す、乃ち鄉里松本に皈りて菴居燕默す、當時人呼んで默宗和尚と云ふ、時に明の心越禪師東渡長崎に抵りて厄に遭ふと聞き、直に往て禮謁し、鰲山雪と相

識して水戶侯に啓して法の外護を約し、長崎に至りてこれを心越に告ぐ、かくするもの數四、遂に其厄難を救ふことを得たり、心越の天德寺に住するに方り、師招れて第一座となり、師滿ちて武藏に皈る、諸山主皆衆僧と共に驩迎して法を問ひ、期を留めて宗乘を擧揚せしむ、高林、吉祥、天龍等の諸寺は皆師の留まりて法を說きたるところなり、後伊豆に遊び、其地の幽寂を愛し、菴を結びて居り、相模鎌倉に徜徉す、江戶高林寺主某師を延て老を養はしむ、正德二年（一說三年）、正月十一日（一說十四日）寂す、壽欠く、全身を院の後山に埋む、師常に誓て弟子を養はず、學者謁して依附せんとすれは言を勵まして之を拒けたれは、一人の法を嗣ぐものなし、（日本洞上聯燈錄）

〔考〕山崎美成の名家畧傳に風外慧薰と默室焉智とを混し疑を存せり、同書に依れは焉智の別號風外と云ひしか如し、然れとも風外慧薰と別人なり、

エンホー 允澎（二一一四）〔臨濟宗〕京師天龍寺の禪僧なり、允澎字は東洋と云ふ、法を琛首座に嗣く、首座は伯始に嗣く、絕海中津の派なり、師寶德三年室町幕府より遣唐使の命を受け、同年十月廿六日京師を辭して西海に下り、享德二年三月十九日五島を發す、一行遣唐使允澎、綱司芳貞、從僧瑞訢、淸啓等なり、同四月六日、即ち明の景帝景泰四年四月六日、補陀羅山に至り、次に定海縣を經て浙江を泝り、寧海府に達し、六月五山天童山等の靈刹を歷訪し、十月北京に入り、幕府より貢進の物品を出し朝禮す、翌三年七月十三日東皈して長門國赤馬關に着す、師示寂年月日詳ならす、（五山歷代、允澎入唐記）

オの部

オーウン 應雲（二〇六八）〔曹洞宗〕越中大川寺の開山なり、應雲字は月江、奧州の人、大徹宗令の法を嗣ぐ、越中上瀧の郡主大川寺を立て師其開山となる、後總持寺立川寺に遷る、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

オーゴ 應其（二一九六 二二六八）〔眞言宗〕高野山興山寺の開山なり、應其初の名は日齋、字は順良、後木食上人と呼ひ、興山上人と呼ふ、近江の人藤原氏、初め佐々木氏に仕へ、佐々木氏沒落の後、大和の越智氏に仕ふ、越智氏亦沒落したれは、深く人事の變遷を感慨し、天正元年三月三十六歲にして高野山に登りて、亡君の靈を弔慰し、十一月五日自ら髮を剃りて山中の穀屋寺に籠居す、天正十三年四月、秀吉大軍を率ゐて雜賀に入り、高野山を攻めんとす、十日、師は宥全快言の二僧を伴ひて、雜賀の陣中に至り、秀吉に面し、祈禱の卷數を捧けて一山他意なきを告く、十六日良運空雄の二僧を伴ひて、再ひ秀吉に面し、請狀を呈し、和議數條を結ふ、秀吉大に師を推重し、一々其言を容る、遂に一山事なく、禍を免るを得、六月勅あり高野山に領地を賜ふ、師拜して學侶に達す、七月十六日秀吉政所の本願により、高野山金堂を興すにあたり、師命を受けて經營す、天正十四年七月廿一日大坂城に出て、秀吉に謁す、十二月命を受けて京都大佛殿造營の工事を監す、天正十五年九月金堂落成す、秀吉より木食興山上人の號を贈らる、十六年大和長谷寺の工事を監して功あり、十七年七月

十九日法令十七條を作り、學侶に示諭す、十八年興山寺を興し、九月廿八日落成し、勅額を賜はる、十九年二月六角經藏を修補して功あり、十一月廿二日秀吉より食邑千石を給せらる、文祿元年師青巖寺を興す、三年三月三日秀吉高野山に登り、青巖寺に入る、師秀吉に謁し食邑を給せらる、七月廿三日青巖寺落成し、大曼供を修す、蓋し秀吉故府青巖貞松禪尼の本願に因るなり、八月廿三日青巖寺の庭儀灌頂を修行す、文祿四年二月丹生明神宮並に別當寺の造營を監す、慶長三年九月秀吉の遺骸を京師阿彌陀峰に葬るに關し、始終の事務を監す、同四年秀吉の廟を興し、土木の事を監す、五年九月師伏見の陣中より近江飯道寺に遁れ、十三年十月一日飯道寺に寂す、壽七十三、辭世の歌に曰ふ、「あだし世を廻りはてよと行月のけふの入日の空にまかせん」門弟棺を荷うて高野山に登り、興山寺に葬る、著作興言鈔三卷あり、建立、興山寺、青巖寺、高野山金堂、造營修繕、東寺塔、金堂、講堂、醍醐金堂、嵯峨釋迦堂、宇治平等院、清水寺子安堂、安祥寺靑龍社、石山觀音堂、豐國大明神社殿等一々數ふへからす、(高野春秋、秀吉家譜、南紀風雅集)

オーシン 應眞 二二五一—二二九四 〔眞宗〕伊勢專修寺の第十一代なり、 應眞は眞慧の子にして、母は加賀守富樫氏の女なり、文龜二年八月勅を奉して專修寺を主とり、幾ならすして職を辭し、一條柳原に遁れ、眞慧再ひ寺を主とる、永正九年九月職に復す、然れとも尙は京にあり、明年春寺に歸る、此年二月後柏原院重ねて任職安堵の綸旨を賜ふ、大永元年六月淨土宗下野流の綸旨を賜ひ、天文六年五月廿五日一條柳原にて寂す、壽四十八、官位法印大僧都に居る、永祿三年二月權僧正を追贈す、(本願寺通紀)

オーシユー 應周 オーショー應昌を見よ、

オージユン 應準 ギョーヂン行然を見よ、

オーショー 應昌 二三〇五 〔眞言宗〕高野山文殊院の僧なり、 應昌一名は應周、字は深乘といふ、鄕貫詳ならす、高野山に登り行人方となり、興山寺勢譽に師事し、勢譽の後を繼きて第三世となる、正保二年五月廿四日寂す、壽缺く、(高野春秋、南紀風雅集)

オーショー 應照 (……) 〔眞言宗〕紀伊那智山の僧なり、 應照は紀伊那智山に居りて法華を誦し、遂に穀鹽を絕ち、只松葉を食ひ、久しく燒身の具を蓄へ、期に至りて新製の法衣を著し、手に香爐を持し、薪上に趺坐し、西方に向て諸佛を勸請して薪を燒き、定印を結び、妙經を誦し、遂に寂す、壽及其年時缺く、(本朝高僧傳)

オーヨ 應譽 ウンケー雲冏を見よ、

オーヨ 應譽 エンリ圓理を見よ、

オーヨ 應譽 ソンソク存則を見よ、

オーゲンイン 往還院 サチョー佐超を見よ、

オージユ 往壽 二三二一 〔眞宗〕京師信樂寺の僧なり、往壽は讃岐國信樂寺の住僧なり、後京師に至り、東本願寺の僧となる、京師の信樂寺に住す、高德世に顯る、寛文元年三月十八日寂す、壽詳ならず、(緇白往生傳)

オーヨ 往譽 ゴンシン欣眞を見よ、

オーヨ 往譽 チョードン潮呑を見よ、

オーヨ 往譽 ムゲン無絃を見よ、

オーシ 奥志（……）〔臨濟宗〕京都眞如寺の僧なり、雪竇山に在りて侍局に居り、明極に參して雙林寺第一座となる、明極の東渡に及んで、師もまた隨つて歸朝し、其諸刹に歴遷するや、師版首となりて化を助く、後京都眞如寺に主となる、寂年欠く、（延寶傳燈傳）

オーリユー 奥龍 二三八〇／二四七三 〔曹洞宗〕山城宇治興聖寺の禪僧なり、奥龍字は玄樓、號は蓮藏海といふ、志摩の人、父は村上氏、母は北條氏なり、享保五年を以て生る、九歳にして出家し、十三歳にして長壽寺齡峰和尚に師事す、此夏難風あり、海客破船の爲に死する者甚た多し、師私に謂らく、萬物の世界にあるは、猶人の船に上れるか如く、船に成壞あり、人に生滅あり、其萬物各代謝あれは、世界も亦始終なかるべからす、其始は果して何の時そ、偶老僧に遇ひ、これを問ふ、老僧答へて曰ふ、無始より始まると、師曰ふ無始の始は如何の時そ、老僧答へて曰ふ、汝後に自ら悟るへしと、齡峰和尚偈を示して曰ふ、頭上鐵石、脚下氷淵、我心沒レ地、他見懸レ天、師日用の鐵石となす、十九歳出遊して江戸吉祥寺の講席に列し、翌夏空印和尚の楞嚴經を聽き、大に疑あり、一月餘にして忽ち省あり、七月吉祥寺を去り、諸國に徧歴し、北地京畿の地に至り、宗匠と稱する者參訊せさるなし、後一夜石上に踞し勇猛急切に辨究し、天明に至り遠寺の鐘聲を聞いて忽然として大悟す、乃ち偈を作りて曰ふ、曉應ニ鐘聲ニ天地開、日輪果自ニ大東ニ來、是何道理吾無レ識、不レ覺呵呵笑滿腮、是れ寬保三年師二十四歳の時なり、たゝちに但馬に至り、龍滿寺開厚和尚に謁し益辨究し、三十六歳空印和尚の懇願に任せ、駿河靜居寺に首版となり、其前後越中最勝寺ィ見妙義寺に至り大藏經を閲す、四十餘歳石見西福寺に住し、次に保安寺華嚴寺に轉し、次に但馬龍滿寺山城興聖寺に轉す、文化十年大坂當陽軒に寂す、壽九十四、臘八十六、著作蓮藏海五分錄十卷、十六鐘鳴二卷、鐵笛倒吹、辨官客永、祖韻敬賡各一卷あり、（玄樓和尚傳、近世佛家著作目錄稿本、）

オーゲドーニン 漚華道人 シユーガ周賀を見よ、

オーセン 横川 ケーサン景三を見よ、

オーヨ 雄譽 シヨーフー松風を見よ、

オクキヨー 憶慶（二三六四）〔眞宗〕能登往還寺の住持なり、憶慶は能登の人なり、鵜飼妙嚴寺地中往還寺に住し、後京都に上り、資永中樹心慧空等と高倉學寮の開立に力を盡くせり、堺南溪寺に轉住し寂年幷に壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

オクドー 憶道 二三二三……〔淨土宗〕伊勢西光寺の開山なり、憶道は行蓮社正譽智念と號す、俗姓は渡瀨氏、遠江濱松の人なり、法を慈昌に嗣ぎ、伊勢壹志郡三田氣に西光寺を剏めて開山となる、後同國大口の西稱寺石名平の觀音寺に歴住し、寬文三年九月六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

オクドー 屋道 二三〇四……〔淨土宗〕江戸心行寺の開山なり、屋道は光蓮社團譽一路と號す、其俗姓生國詳かならず、觀智國師に師事して宗乘を究め、江戸深川心行寺の開山となる、正保元年九月十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

オツオー 越翁 エツソー悳琮を見よ、

オツオー 越翁　シユチヨー周超を見よ、

オツケー 越溪　キヨーチヨー敬長を見よ、

オツケー 越溪　シユーカク秀格を見よ、

オツケー 越溪　リツエキ麟易を見よ、

オツケー 越谿　シユケン守謙を見よ、

オツシユー 越宗 (二四二四) 〔曹洞宗〕筑前某菴の僧なり。越宗字は蘭陵と云ふ、號は夜雨と云ふ、何許の人なるか詳かならず、明和の頃、筑前の山中に草庵を搆へて住し、常に內外の文人墨客に交り、詩酒に放浪す、其奇言奇行數々人を驚かせり、夜雨禪師の名一時西國に振ふ、示寂の年月日缺く、草庵稿二卷世間に行はる、(草庵稿序文、名家略傳)

オツゼン 越前女 (一八七三) 七條佛所佛工なり、越前(エチ)は運慶の女なり、父に習ひて佛像を刻めりといふ奈良春日神社舞樂面五十九個の內替者採桑老の二個には裏に天下越前の四字銘ありて運慶の女と稱せり其作甚た卓逸なり(佛工系圖)

〔考〕 越前女は建保頃の人なるべし、

オツソー 越叟　リヨンミン良閔を見よ、

オツドー 乙堂　クワンチユー喚丑を見よ、

オンカク 恩覺 (一八二二) 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、　恩覺字は法明、隆覺僧正に就きて宗敎を研き、內外の典籍を見る、京都法勝寺に往き、學徒の首座たり、還りて興福寺に居り、傳燈大法師位に任す、法相を以て己が任となし、應保二年應和宗論記、南北戒律勝劣、遣僞興眞章を著して天台を駁す、某年壽七十餘にして寂す、(本朝高僧傳)

オンケー 恩冏 (二一九二) 〔淨土宗〕某寺の僧なり、　恩冏姓は佐々木氏、近江國甲賀の人なり、性頭陀を善くす、五畿七道に週遊して念佛を勸誘す、天文年中和泉國堺に遊び、阿彌陀經十萬卷を書寫す、世人呼て十萬上人と稱す、師常に貧者病人を養ふ、故に悲田院と云ふ、後關白秀吉公齊田五十石を與ふ、享壽八十二、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

オンユー 恩融 (……) 〔……〕 恩融常に十一回觀音呪を持す、給使の童子死す、恩融屍を撫し觀音呪を誦し、水を面に灑けは蘇生す、これより相共に精行して終ふ、(本朝高僧傳)

オンシキ 音識　クワイウン快運を見よ、

オンシキ 音識　ギザン義山を見よ、

オンチヨー 音徵 (二三八七 二四六〇) 〔淨土宗〕山城金毛院の學僧なり、　音徵梵蓮社忍譽淨阿と云ふ、三河に生れ、同國遍照院穩冏上人に師事し、寬政元年京師に上り、智恩院山內旣成院に留り、同年西光庵に留り、二年同菴にて大乘義章唯識述記を講ず、三年京極勝圓寺に移り、獅子谷金毛院に於て典壽と共に大藏對校錄を校正す、同年正圓寺に於て俱舍論を講ず、同年九月淨福寺の住持となり、五年同寺に於て別時念佛を修し、且つ維摩經を講ず、八年義林章を講す、其後講經授戒を事とす、十二年淨福寺內に松聲院を開き幽捿す、尋て淨福寺を弟子覺譽に附し、松聲院に寂す、壽七十四、音徵嘗て後奈良天皇の勅請を拜し、宮中に阿彌陀經を講じ、感賞せられて土佐光信筆十王の圖十幅を賜ふ、(淨土宗史料)

オンチヨー 音長　センシン先晉を見よ、

オンヨ 音譽 (……) 〔淨土宗〕常陸阿彌陀寺の僧なり、

音譽は其俗姓生國詳かならず、超譽上人に就て剃髮受業し、其法を繼きて後常陸茨城郡大山阿彌陀寺に主となる、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

オンヨ　音譽　ショークワン聖觀を見よ、

オンヨ　音譽　リョーズイ良隨を見よ、

オンリュー　音龍　二二八〇—二三四九（曹洞宗）遠江海藏寺の僧なり、音龍字は大川、俗姓不詳、參河渥美郡片濱の人なり、遠江の連城寺鐵巖牛に謁して薙髮し、海藏寺一山間宿に參して記室となる、總持寺に出世し、横城の龍眠寺、及び海藏寺に遷る、元祿二年四月六日寂す、壽七十、海藏寺に塔す、(日本洞上聯燈錄)

オンコ　溫故　ニチショー日匠を見よ、

オンチュー　溫中　ショーユ清瑜を見よ、

オンニョ　溫如　リョーテー亮貞を見よ、

オンハク　溫伯　ショーシュー正琇を見よ、

オンロー　溫老　シューコー宗興を見よ、

オンキョーイン　遠慶院　ジョーゴン常勤を見よ、

オンケー　遠溪　ソオー祖雄

オンジン　遠塵　エンチン圓珍を見よ、

オンショー　遠照（二二〇六）（戒律宗）大和戒壇院の律僧なり、　遠照字は唯一、播摩の人出家して戒壇院圓照に師事し、文永三年具足戒を受く、後日阿に從つて密軌を傳へ、竹林寺に寓す、寂年缺く、(本朝高僧傳)

オンショーイン　遠照院　リョーユー了祐を見よ、

オンジョーイン　遠成院　ニチコン日近を見よ、

オンテンイン　遠沾院　ニチコー日亨を見よ、

オンリョーイン　遠了院　ニチエ日慧を見よ、

オンヨ　穩譽　リョーグワツ靈月を見よ、

オンコー　飮光　二三七八—二四六四（眞言宗）正法律の開祖なり、飮光字は慈雲、自ら百不知童子と號す、俗姓上月氏、父安範は播摩田野村の人なり、其系赤松氏より出つ、弱冠にして攝津大阪に移り住す、人と爲り任俠の風あり、財を輕し、義を重す、母は桑原氏、阿波德島の產なり、其族川北又助養うて女となす、又助高松侯に仕へ、大坂米倉に職を奉し、深く安範の人と爲りを喜ひ、其女を配す、師外祖父の家に生る、實に享保三年七月廿八日なり、父七男一女あり、師は其第七男なり、母桑原氏三寶を崇信す、師幼にして亦三寶を崇信し、十二歲儒敎を學び、朱子の書を讀む、河内法樂寺貞紀上人の下に度を受く、上人は母か常に崇信するところなり、十五歲密敎を受け、加行を勤め、且つ悉曇を學ふ、後十八歲上人の命により京都に上り、伊藤長胤の門に入りて經史詩文を學ふ、十九歲奈良に遊ひ、顯密の二敎を究め、四分律の五百結集の文を見て、大に感發し、河内野中寺秀巖を仰いて沙彌戒を受け、具支灌頂を拜し、戒龍を仰いて秘密儀軌を傳ふ、二十一歲通受三聚具足戒を受け、爾來專ら戒律に意を傾け、四律五論幷に南山疏鈔を究む、二十二歲秀巖の命により其法席を嗣きて野中寺の住持に推さる、師學行兼修し且つ阿字觀を修し大輪律師に諮問す、幾もなく法弟照林に讓り、信濃に遊ひ、曹洞の大梅禪師を問ふたるも、見所相合はす、去りて美濃地方に遊はんとし、適祖母幷に母の大病の報に接して蒼皇大坂に還り、看護を事とす、祖母沒せる後、法乘寺に寓居す、延

享元年二十七歳長榮寺に住し、始めて大衆の請により戒律を講敷す、親澄、覺法、覺賢、等皆弟子の禮を執る、同三年二十九歳三周界を結し、寺を以て僧坊となす、翌年親證壇に登り、具足戒を受く。所謂別受なり。我國鑑眞大和上の後、興正大悲二菩薩以來、概ね通受自誓得なり、間、別受を唱ふる者ありと雖、其法一準ならす。師規則を制定し、後代の標式となす、乃ち親證の言に從ひ、始めて正法律と號す、大は衆法、界の結制、戒の受捨、懺の輕重、安居要期、恣説治擯、等、小は心念法、衣鉢、坐具、祇支覆肩、等及び日用鎖事に至り、悉く其弊を革正す、剎巖紹應二禪師師の説を贊し、大に正法律の興隆に力を盡す、同年攝津有馬に遊び、桂林寺に住し、益盛に正法律を唱ふ、唐宋以來袈裟の裁製の正式に違ひ、着法も亦搭肩の式を失ひ、濫に鉤紐を施すを憂ひ、經律紀傳に依り、反覆參驗し、方服圖儀二卷廣本十卷を撰し、其畧本を刻して志ある者に與ふ、高野山に登り、大衆の請によりて南海寄皈傳を講して解纜鈔

慈雲尊者

を撰し、和泉の堺に於て表無表章を講して隨文釋を撰す、長慶に於て無門關を講して鑰説を撰す、四十二歳根來寺常明僧正より地藏院流の秘奥を傳ふ、幾もなく攝津生駒山に入り、長尾瀑布の上に草菴を營み隱棲す、智鏡禪尼と云ふ者、師を請して草菴を修補興造し、雙龍菴と號す、蓋し師か奉する釋迦牟尼佛の像の下に双龍ありて蓮座を扶持するに因るなり、師日夕行願贊、般若心經、阿彌陀經等の梵文を熟讀し、蘇漫多、底彥多、皆師授を借らすして心通意解す、是に於て弟子護明、法護、諦濡等を召し、自ら口授す、護明筆記して七九鈔五卷を成す、刻して四方に流布す、後竟に梵學津梁一千卷を編成す、五十四歳京師の四衆の強請により、其地に至り、阿彌陀寺に住す、道風四傳し、縉紳妃嬪の皈向する者甚た多し、師殊に十善法を説く、弟子錄して十善法語十二卷となす、寛政九年八十歳河内の高貴寺の幽靜を愛し、其地に退き遷る、遂に壇を築き、界を結して、十方僧刹となす、幕府特に命じて正法律一派の本山となす、師意を神道の書に傾け、古來の諸書を獵渉し、自ら弟子の爲めに講説す、大和郡山城主數々師を請す、師其請に應して城中に法を説く、文化元年八十七歳の秋に微疾あり、諸弟子の意に任せ、京師に至りて醫に就く、然れとも法を説いて少しも懈らず、毎に誡めて曰ふ、大丈夫見出家入道す。須らく佛知見を具し、佛戒を持し、佛衣を服し、佛行を行し、佛位に躋るべし、切に末世人師の行ふ所に倣ふ莫れ、と、同年十二月二十三日中夜京師阿彌陀寺に寂す、壽八十七、臘六十七、遺命して俗士の葬瘞に從事するを許さず、諸弟子悲泣し相共に靈龕を舁き、遠く高貴寺に就き、二

オン（飲）コ

十五日中夜全身を奥院高祖大師祠堂の右に瘞む、著作方服圖儀廣本十卷、同略本二卷、七九鈔五卷、南海寄皈傳解纜鈔、表無表章隨文釋、無門關論、十善法語等あり、別に梵學津梁一千卷あり、總目錄七詮に分つ、第一本詮、弘法大師請來四十二卷、八家秘錄所載八十六本、和州法隆寺所藏貝葉二葉、海龍王寺一葉、洛西淸涼寺一葉、城州調子瑞泉寺一葉、當寺一葉、(當寺は高貴寺なり)、近江坂本來迎寺三葉、彌陀經三本、心經廣畧倶存、行願讃三本、最勝王經陀羅尼等、新舊譯經中陀羅尼等幷梵名、」第二末詮、七佛名譯互證一卷、緣起法身偈諸譯互證一卷、賢聖名諸譯互證十卷、佛十號諸譯互證一卷諸通號附、三十五佛名諸譯互證諸佛尊名附、十二因緣諸譯互證、十二部經諸譯互證、法華經陀羅尼諸譯互證、四十二字門諸譯互證、十六大菩薩讃諸譯互證、阿彌陀經諸譯互證、(巳刻津梁三百十九末詮二之十一)普賢行願讃諸譯互證、般若心經諸譯互證、(巳刻津梁三百二十末詮二之十一)廣本般若心經諸譯互證、(廣略二本合爲一卷)佛三身讃諸譯互證、三摩耶偈諸譯互證、明鏡金窕輪法螺偈諸譯互證、大佛頂陀羅尼諸譯互證、大隨求陀羅尼仝、尊勝陀羅尼仝、寶篋印陀羅尼仝、千手千眼陀羅尼仝、靑頸觀世音陀羅尼仝、國界名仝、諸天名仝、法衣名仝、諸伽藍名仝、諸艸木名仝、諸外道名仝、諸惡趣名仝、諸心々所名仝、定諸名仝、篇象諸名仝、三十二相仝、八十隨好仝、三十七品仝、五十二位仝、四果四向仝、阿彌陀經義釋四卷、(巳刻津梁三百四十二末詮二之三十八)心經義釋一卷、(巳刻津梁三百四十六末詮二之三十九)普賢行願讃釋五卷、注大佛頂陀羅尼一卷、(慧雲請來)如意輪陀羅尼義注一卷、(不空)尊勝陀羅尼釋一卷、(法崇)仁王陀羅尼釋、(良賁)金剛界陀羅尼釋五卷、胎藏法陀羅尼釋五卷、百字眞言王釋一卷、眞言釋一卷、三部四處輪釋一卷、(以上合爲一卷)百光遍照釋一卷、彌陀大咒釋一卷、釋迦眞言釋一卷、藥師眞言釋一卷、五智名釋一卷、七佛藥師名釋一卷、十二光佛名釋一卷、(以上合爲一卷)、大佛頂陀羅尼釋三卷、大隨求陀羅尼釋三卷、光明眞言釋一卷、施餓鬼陀羅尼釋一卷、(以上合爲一卷)、戒日王八大靈塔讃釋一卷、十六羅漢名釋一卷、五篇六聚名釋一卷、三衣名義一卷、瓶鉢諸具足名義一卷、(以上合爲一卷)、諸讃唄釋三卷、三摩耶秘釋二卷、明鏡偈釋一卷、法輪寶螺偈一卷、(以上合爲一卷)、大佛頂略句義(津梁三百五、末詮二之五)、」第三通詮、(自津梁三百九十八至四百八十三)、梵字悉曇章二卷、(中天)悉曇章一卷(南天)、悉曇字記(同智廣)、同林記(禪林寺宗叡)、石山集記(石山淳祐)、諸家悉曇十二卷、優婆墍茶三卷、對注聲譜十卷、七九鈔十卷、七九畧鈔五卷、(巳刻通詮三之二十三)、怛多羅鈔十卷、同畧鈔三卷、連聯鈔三卷、同畧鈔一卷、五十字文悅三卷、十四音鈔二卷、諸列(例か)二十卷、第四別詮、(自津梁三百九十八至四百六十三)、大悉曇章、千字文、同異本、梵語雜名一卷、翻梵語十卷、(飛鳥井信行撰集)、多羅葉鈔三卷、悉曇藏八卷(安然)、悉曇十二例一卷、悉曇形音義二卷、(明覺)、悉曇要決八卷(同)、註大佛頂一卷(同)、註大隨求一卷同末得、梵語雜集三卷(曇寂)、眞言雜集(心覺)、眞言集三卷(小埜)、眞言藏三卷(淨嚴)、大課誦三卷(蓮體)、兩部眞言藏句義仝句義(印融)、仝句義抄四卷、漫荼羅大鈔十二卷、漫荼羅鈔二卷(印融)、仝、仝、九會密記一卷(仁海)、天竺字源七卷、枳橘易土集」第五略詮(自津梁三百六十三至五百八十八、)(此數亦恐有誤且原本

オン(飲)コ

用梵字今代以羅馬字）a三卷、â一卷、i三卷、î一卷、u三卷、û一卷、e二卷、ai一卷、o au一卷、am一卷、ah一卷、ri rî li lî三卷、ka至kah十卷、cha至chah七卷、ja至jah五卷、jha至jhah一卷、ña至ñah一卷、ta至tah二卷、tha至thah一卷、da至dah一卷、dha至dhah一卷、na至nah一卷、ta至tah三卷、tha至thah一卷、da至dah三卷、dha至dhah三卷、na至nah三卷、pa至pah十卷、pha至phah一卷、ba至bah三卷、bha至bhah三卷、ma至mah三卷、ya至yah三卷、ra至rah三卷、la至lah三卷、va至vah三卷、sa至sah三卷、sha至shah三卷、sa至sah十卷、ha至hah二卷、ksha至kshah三卷、（案ずるに此は辭書なるべし）省要五卷、要省五卷」、第六廣詮目次（自津梁五百八十五至六百十五）（此數亦或有誤）佛總號、仝總號、法藏諸目、賢聖階位、法相差別五十卷、國界、天衆、天趣、人趣、阿修羅等八部、諸畜生、諸餓鬼、諸地獄、人事、時令、草木」、第七雜詮目次（自津梁六百十卷至六百六十餘）（此數亦未知其正不）創學鈔㫖實、三密鈔淨嚴、宥快鈔、韻鏡二卷、横直圖二卷、九弄方圓二卷、采覽異言（新井源君美）、蒙古字、和蘭字、韃字、伊呂波傳、求那波那萠記、悉曇稽古錄二卷、泰西圖說、行願聞書十卷、七九又略、恆多羅又略、佛國記（法顯）、西域記六（冊）、南海寄歸傳二（冊）、慈恩傳三（冊）、外國傳、（明和三年七月晦日布薩後敎誥、慈雲尊者略傳、續日本高僧傳、梵學津梁總目錄）

カの部

カオク　珂憶（二三五五）〔淨土宗〕河内安福寺の中興なり、珂憶は超蓮社勝譽圓心と號す、其俗姓生國詳からず、珂碩に師事して法を嗣ぎ、河内安宿郡玉手安福寺に住して其中興となる、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

カグワツ　珂月　エンツー圓通を見よ、

カサン　珂山（二三〇一）〔淨土宗〕武藏靈岩寺の二代なり、姓は駒氏、和泉界の人、幼年より世事を樂まず、州の智善寺に入り出家す、十五歲の後靈岩に師事して業を受く、天性穎敏なるも學資乏し、相摸國江の島に詣て學粮を辨才天に禱る、始め靈岩三般の問難を擧て大衆の才量を試る、師三答を立つ、靈岩其の穎敏の才を愛し、靈岩寺二代に推す、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

カセキ　珂碩（二二七六　二三五五）〔淨土宗〕武藏淨眞寺の開山なり、珂碩俗姓は野村氏、元和四年正月一日を以て武藏に生る、十八歲にして邑の大巖寺に入り、隨流上人の門下珂山の弟子となる、寬永十三年珂山和尙靈巖寺に入りて第二代となり師これに隨侍す、時に寺基を江東の海濱に移され、師命を受けて工事を掌り、日夜心力を勞し、期年にして工を終ふ、嘗て一日に錢三文づゝを貯へて造佛の費に充て、寬文四年丈六尺の佛像一軀を成就し、同七年九品の佛像九體全く成り、別に釋迦一丈六尺の像を造りて靈巖寺に置く、延寶六年武藏世田谷奥澤村の人民師の德を慕ひて招請す、師時六十一歲、其地の閑靜なるを愛し、終焉の地となさんとし、堂を造り、九品の像を移して安置す、今の九品山唯在念佛院淨眞寺と云ふは、即ち是なり、師道餘醫術を善くす、元祿八年寂す、壽八十、（江戶砂子、續日本高僧傳、鎭流祖傳）

カテン　珂天　二二六七 — 二三三六　〔淨土宗〕江戸增上寺第二十七代なり、珂天は豈蓮社、乘譽、凉風と號す、相摸筑井縣の人、俗姓は渡邊氏なり、十三歲にして瀧山大善寺に入りて剃髮し、後增上寺に登りて修學す、學行進みて弘經寺に住し、光明寺を經て延寶元年十二月增上寺に出世す、三年四月廿四日職を辭して麻布一本松に退隱し、四年六月十三日寂す、壽七十、（三緣山志）

カネン　珂然　二三二九 — 二四〇五　〔淨土宗〕攝津法泉寺の學僧なり、珂然字は眞阿、號は寒叟と云ふ、俗姓松井氏、攝津大坂の人なり、河內玉手山珂憶信に就いて得度し、後東國に遊ひ、增上寺に留る、廓瑩上人に謁して一宗の奧義を受け、解行共に秀つ、大坂生玉法泉寺に住し、日々性相の經疏を講し、傍ら孔孟老莊の書に及ぶ、院を大藏轉經院と號し、室を修史室と云ひ、佛敎の史傳編修に力を用ひ日本往生全傳を完成す、延享二年十月十一日寂す、壽七十七、著作吉水實錄十五卷、淨土傳燈錄十二卷、元亨釋書索隱六卷、語燈錄燈枝五卷、小閱藏知津、淨宗護國編、成語考、各四卷、扶桑往生傳、同拾遺、唯識論討要記、法相義語、筆成蠅、聖廟州傳、甘棠編、往生論纂要、各三卷、慈空和尙行實、忍徹和尙行業記、義山和尙行業記、各二卷、閑證和上行業記、珂碩上人傳、臨終要訣註、和語燈かき立木、各一卷、二部經、安樂集、四帖疏、唯識百法等の講義、頌義會韻字典躰製等數十卷あり、（珂然上人畧傳、續日本高僧傳）

カアン　可菴　エンエ　圓慧を見よ、

カエン　可圓　エキョー　慧恭を見よ、

カオー　可翁　シユーネン　宗然を見よ、

カジキ　可貞（……）〔曹洞宗〕越後耕文寺の開山なり、可貞字は不藏、出羽の人、業を曇菴に受け、後立川寺大徹宗令に依り、其田可を蒙り、總持寺に出世し、立川寺に遷る、越後の檀越耕文寺を開き師請せられて其開山となる、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

カシン　可眞　リョージュ　良壽を見よ

カジュー　可什　二〇二一……　〔臨濟宗〕相摸鎌倉建長寺の禪僧なり、可什號は物外、大應國師（紹明）に師事す、元應二年天岸廣等と太宰府に往き、翌年出航して元に渡り、諸禪師を問ふ、元德元年（元の天曆二年）明極俊東航の途に登る、可什慧廣梵仙同伴して發す、可什船中詩あり、次明極禱風韻「大舶駕空滄海東、扶桑猶隔片雲中、龍七有頭不忘囑　莫惜竿頭五兩風、」始見富士山喜作、「見山同立喚山山、便覺歎心　樣寬、他日莫談波浪嶮、使人特地毛骨寒、」既に博多に着し、即ち太宰府都督大友賴尙に請せられ崇福寺に入る、住持稍久し、鎌倉幕府遠く請す、因て東下して建長寺に入る、尋て美濃正法寺開山大圜禪師七周忌に方り、同寺に到り說法す、觀應二年十一月八日天源菴に寂す、壽未詳、回陽塔を建つ、勅諡眞照大定禪師と云ふ、題一覽亭「山重重又海漫漫、塵刹都來貶眼間、見得分明非見見、共誰高倚曲欄干、」（本朝高僧傳）

カソン　可存（……）京師の耆僧なり可存は常行に學びて其法を得たり吳舜明嘗て此人に學ぶ、（鑒定便覽）

カチュー　可中　セーヨ　勢譽を見よ、

カトン　可頓　リョーエン　良圓を見よ、

カザン　迦殘　リョージョー　良靜を見よ、

カリョー　迦陵　二四五三 — 二五一九　〔臨濟宗〕信濃龍門寺の禪僧な

り、迦陵は尾張春日井郡小牧村の人なり、美濃深谷凉樹院禮瑞に投して薙染し、卓洲に參し、文政三年美濃伊那龍門寺の請を受けて之に住すること二十六年、時に妙喜沼津の蓮光寺にあり、師數十里を遠しとせす往來參究し、後法幢を永田に移す、實に弘化四年の春なり、嘉永三年春勅を奉して京都妙心寺に住す、安政六年三月寂す、壽六十七、（禪宗史料）

カコクサンニン 霞谷山人　ニチカ日可を見よ

カシユー 荷洲 一五三三…… 〔眞宗〕飛彈大野郡高山眞蓮寺の住持なり、荷洲は雲馨院と號す、寮司となりて安政二年以降高倉學寮に摩訶止觀八宗綱要四教儀集註を講し、慶應元年閏五月二十九日（一に五月一日）擬講となりて後女人往生聞書三經往生文類執持鈔を講し、明治五年寂す、（眞宗史料）

カダイ 訶提 二四七二 二五一四 〔眞宗〕安藝光明寺の住持なり、訶提は藝高宮郡矢口村敎蓮寺助敎順故の第三子なり、後賀茂郡川尻村光明寺に住す、宗學を龍華に受け、學成るに及ひて寺中に寮を開き、徒を集めて講授す、嘉永五年司敎に進み、安政元年八月病を以て沒す、壽四十三、明治二十四年十二月本山師に勸學職を追贈す、（學苑叢談）

カヨ 河譽　イチドー一道を見よ、

ガカイ 雅海 一七九八 一八八二 〔眞言宗〕山城醍醐山松橋の二代なり、雅海初の字はを性海と云ひ、大納言阿闍梨と稱す、美作權守源雅長の子、京極尙書源顯雅の孫なり、幼にして出家し、登壇灌頂して、松橋の三代となる、貞應元年八月十一日寂す、壽八十五付法の弟子全賢あり、（續傳燈廣錄）

ガキヨー 雅慶 一五八六 一六七二 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、雅慶は敦實親王の子なり、仁和寺に入りて族兄寬朝僧正に就て落髮受業し、灌頂法を稟く、又石山の大僧部元杲に就て重ねて秘密灌頂を受け、小野廣澤兩派の奥旨を究む、天曆九年勸修寺に住して密敎を講授し、永延三年東寺の長者に敕任す、永祿元年冬少僧都となり、長德四年寺務を領し、法務を兼ね、長保元年東大寺に移り、僧正に昇る、寬弘六年東寺觀音院にて灌頂法を修し、始めて胎藏界を行ふ、八年大僧正に進み、長和元年十月二十五日寂す、壽八十七、（本朝高僧傳）

ガゴン 雅嚴 二二〇八 二二五五 〔眞言宗〕山城醍醐山報恩院の十五代なり、雅嚴は後正覺僧正といふ、飛鳥井品尙書雅綱の子なり、源雅大僧正の室に入りて得度し、深應の正嫡を受けて第三十七祖となる僧正に任せられ文祿四年三月廿日寂す、壽四十八、付法一人義演源朝と稱す、（續傳燈廣錄）

ガサイ 雅西 一八六一…… 〔眞言宗〕山城醍醐山照阿院の開山なり、雅西字は知定といひ、源運和尙の法燈を傳へて悉地を得たり、平淸盛一院を開きて師を祖となす、光明山照阿院といふ、建仁元年正月四日寂す、壽缺く（續傳燈廣錄）

ガホー 雅寶 一七九一 一八五〇 〔眞言宗〕山城勸修寺の第八代長吏なり、雅寶は寬信の高足にして、贈太政大臣高藤の十世中納言九條顯賴の子なり、天承元年に生る、保延中得度し、仁平三年三月勸修寺の長吏に補す、應保元年十一月十四日行海の傳法灌頂を得、時に年三十一なり、嘉永二年十月長吏を辭して成寶に讓り、文治二年三月四日東大寺の別當に補す、四年別當職を辭し、建久元年五月十三日寂す、壽六十、實報院といふ、付法の弟子成寶、實繼、實信、良弘の四人あり、（後傳燈廣錄、

東大寺別當次第）

ガシユン 賀順（二三六一……） 〔天台宗〕和泉海岸寺の僧なり、賀順初の名は舜雄と云ふ、俗姓伊藤氏、美濃岐阜の人なり、初め北谷の正教坊を主り、後無量院に遷る、天正二年葛川の日代に補せらる、貞享三年院を舜海に附し、和泉海岸寺に遷り住す、元祿十四年五月廿八日寂す、（天台霞標）

ガチユー 賀仲（……） 〔眞言宗〕山城小栗栖の大元別當なり、 賀仲は元杲の法を受け、太元十二代の別當となる、後「攀廣澤の脈を受く、（續傳燈廣錄）

ガザン 峨山（二五一三—二五六〇） 〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、峨山號は息畊、京都の人、俗姓橋本氏なり、嘉永六年を以て京都下京烏丸四條下る町に生る、家は酒舖を業とす、師幼にして岩倉村の城守氏に乳養せられ安政四年五歳にして鹿王院に入り義堂禪師に師事す、元治元年薩長の兵京阪を騷かし、本山天龍寺亦兵火に罹り、鹿王院義堂嫌疑を以て召引せられ、大衆逃散す、師時に十二歳にして、嚴然として院を守り、獨り留りて去らず、義堂大に危み、叱して去らしむるも聽かずして曰く、水火唯和尙に從はんのみ、と、明治元年義堂寂す、翌二年師鹿王院を辭し、美濃正眼寺に入り、泰龍禪師に師事し、刻苦十一年にして再び鹿王院に皈り、尋て天龍寺滴水禪師に參謁す、明治二十四年師三十九歳にして攝津南宗寺に住し、始めて大衆に接す、三年にして鹿王院に皈住し、門下漸く盛にして、學衲雲集す、滴水禪師寂して後、遂に天龍寺に住し、大に宗風を張る、師天龍寺再建に心力を盡し、經營功あり、輪奐の美舊に復す、數々東京に出て、宗風を擧揚し、一時の名士相競ふて教を仰ぐ、明治三十三年九月肝臟病に罹り、十月一日遂に寂す、壽四十九、俗弟子某等相謀り峨山遺話一卷を編纂刊行す、師の偶作に曰ふ、溪邊黃葉水去住、嶺上白雲風往來、爭似老僧常不動、長年無事坐巖臺、（峨山遺話）

峨山禪師

ガザン 峨山 ジトー慈棹を見よ、

ガザン 峨山 シヨーセキ紹碩を見よ、

ガジヨー 我靜 シジユン思淳を見よ、

ガゼン 我禪 シユンシヨー俊彷を見よ、

カイア 海阿 ハクズイ白隨を見よ、

カイアン 海菴 センチ尖智を見よ、

カイイン 海印 チコク智轂を見よ、

カイウン 海雲（一四六六） 〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、 海雲は出家して華嚴教を學び、大同元年東大寺別當に任す、寂年及壽缺く、（東大寺別當次第）

カイウン 海翁　コーエキ交易を見よ、

カイウン 海雲　ドーエ道會を見よ、

カイエン 海圓　ポンカク梵覺を見よ、

カイオー 海翁　(二〇〇六)〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、海翁は頽禪師と云ふ、東福寺の虎關師錬に師事して其法を嗣き、心涼溪と同門なり、師錬禪師示寂の後、面壁趺坐して寺席を治せず、數日にして寂す、其年月日傳はらず、(本朝高僧傳)

カイオー 海應　二四三一—二四九三〔新義眞言宗〕山城智積院卅二代なり、海應字は智木、俗姓は菊池氏、明和八年佐渡羽茂郡德和村に生る、安永八年七月父の死に方り、母の許を得て出家す、師時に九歳なり、乃ち同國正覺寺慶應に就きて薙髮受戒す、天明二年兩部の大法を受け、五年三月十六日蓮華峰寺融道に密灌を稟く、七年秋十七歳にして智積院に往き、英範に師事すること五年、英範の勸めにより、寛政三年南方に徧游し、大和奥ヶ原村に行き、安樂寺にて寶遍に會し、御流神道灌頂を授けられ、又周照に隨ひて御流神道の一流を受く、七年冬奈良に遊ひ、東大寺智蕊に菩薩戒を融道に唯識敎義を高嚴に俱舍論を經歴に一乘敎を弘基元瑜の二師に野澤諸流並に兩部の大經十住心論等を傳受す、享和三年師三十三歳の時能化職となり、講述せるもの俱舍論三回、宗輪基疏述記一回、起信法藏疏二回、大日口疏一十卷疏一回、基因明疏及び三十三過各二回なり、文化六年師三十九歳謙順に從ひて幸心一流の祕旨を究め、兼ねて中性院流の祕奧を盡す、同十二年集議席に進み文政二年二月灌頂を行ひ、八月傳法大會堅者の任に當る、七年一月第一座となり、兼ねて六波羅密寺に住す、台命を受けて六月眞福寺に住し、又十二年六月智積院貫主となる、九月權僧正に任し、天保三年學徒の請に應して大日經奥疏を講し、安流法軌を授く、四年十一月二十九日寂す、壽六十三、臘四十七なり、五百佛峰の山巓に葬る著作論議私記十卷、唯識私記五卷、俱舍得魚編三卷、薩波多部二卷、俱舍論私記二卷、婆娑諸蘊條目三卷　宗輪論述記講錄二卷、中性院口訣二卷あり、(海應大和上傳、新義眞言宗史)

カイオン 海音　二五四二　〔眞宗〕播磨寂靜寺の住持なり、海音、名は雷震といひ、寺々と號す、文化十年六月播磨室津寂靜寺に生る、父を海玄といふ、甫て十一歳にして、赤穗福學神吉東廓に從ひ漢籍を學ぶこと三年、後勝乘泰嚴兩師の講筵に侍して略文類書、及ひ俱舍唯識を研き、天保元年春學林に掛搭し、秋に及ひて和泉に赴き、業を乘誓院に受く、寛寧善讓等の諸師と同窓の友たり、幾くもなく乘誓院中風症を發し、學徒を誘掖すること能はされは、辭して九州に遊ぶ、實に天保二年二月なり、初め肥後菊地正林寺に寓し、後肥前佐賀の仁廓に從ふ、講學五年、會乘誓院の病癒ゆと聞き、西上して再たひ佐海に寓す、院の沒するに及ひ寺に歸へり、寮舍を寺側に設け、耕雲閣と號し、日に講筵を開き、後進に敎授す、時に年廿五なり、弘化十三年七月得業の科に登り、安政三年十月助敎に進み、明治六年司敎となる、七年九月學林の敎授に任す、八年三月敎導職中講義に補せられ、尋いて權大講義に進む、十二年九月再ひ大敎校後期敎授に任す、十五年八月病を現し、十月八日寂す、法主悼惜して勸學職を贈り、

謚を開通院といふ、師性酒を嗜み、茶事を好み、且つ詩歌を樂み、常に文人墨客と來往す、寮を開き徒を聚むること大凡そ四十年、入社の徒殆んと三百人、人著書を勸む、師謝して曰く、迂衲淺學一も得る所あらす、若し愁に書を著はすことあらは、啻に笑を後世に傳ふるのみならず、或は人を惑はすあらん、愼みて之を爲さじと、故に一編の著作なし(學苑談叢)

カイオン　海音　ニチチヨー日潮を見よ。

カイカク　海覺　(二一五八/二二一九一)〔眞言宗〕山城勸修寺第二十四代の長吏なり、海覺は伏見院二品式部卿邦高親王の子、後柏原上皇の猶子なり、母は今出川左大臣教季の女なり、明應八年に生る、永正年間宣して親王となり、常弘親王の室に入りて得度し、十年八月長吏に補す、大永三年三月二十八日慈尊院の實尊僧正に從ひて傳法灌頂を受け、第三十七祖となる、享祿四年十一月九日寂す、壽三十四、稱して觀長院といふ、(後傳燈廣錄)

カイガン　海岸　リヨギ了義を見よ。

カイキヨク　海旭　(二三九六/二四七七)〔臨濟宗〕奧州長松寺の僧なり、海旭字は物先、俗姓は小泉氏、奧州田村郡小野の人なり、八歲佛門に歸し、郡の高乾院唱巖連禪師に師事す、稍長して諸方に遊ひ、月船慧禪師に謁し、隨侍すること二十年なり、明和八年長松寺月江鈍の法嗣となる、天文七年江戸東輝菴に住す、こは月船慧の舊蹟なり、偈あり「溪水千枝山萬朶、禪關密把嚴鑰鎖、可中不許佛魔窺、只使道人容趺坐」と、晩年明を失ふも、棒雨喝雷後進を誘誨して倦ます、文化十四年五月十五日寂す、壽八十二、坐夏七十四、著作栗棘蓬二卷あり、遺偈に曰く、雷喝一聲轟白日、此行何墮悄然機、從來燹氣今將去、莫使閻王傳下知と(續日本高僧傳)

カイザン　海山　シユーカク宗恪を見よ、

カイジユ　海壽　(一九七八/二〇六一)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、海壽字は椿庭、木杯道人と稱す、俗姓は藤原氏、遠江の人なり、幼にして相摸の淨智寺に往き、竺仙和尙を拜して下髮得度す、曆應四年竺仙旨を奉して南禪寺に住し、師亦之に隨從して侍者となる、貞和六年同志と共に元に入り、天寧寺の空海念に依りて藏鑰を司とり、後、南堂欲、月江印、了堂照の三宿に謁し、優賞を受け、陳氏の宅に居りて大藏經を閱す、穆菴招きて淨慈寺の第二座に居らしむ、職滿ちて徧遊して浙東の名區を探り、應天府の天界寺に掛錫す、時に明の太祖住持白菴金に命して一時の名宿を選ひて大藏經を點せしむ、師亦之に與り、帝の優遇を蒙むる、洪武五年白菴旨を受け、師を擧けて福昌寺に主たらしむ、師元朝に留まること二十三年、應安六年歸朝し、明年將軍義滿の請を受けて京都眞如寺に住し、相摸淨智寺、圓覺寺、京都天龍寺、南禪寺等に歷住し、道譽最も高し、晩年語心院を搆へて退老し、應永八年閏四月十二日病に罹り、門下を集めて懇に誡め、泊然として寂す、壽八十四、臘六十九、(本朝高僧傳)

カイシユー　海州　ソトー楚棟を見よ、

カイジヨーイン　海定院　エカイ慧海を見よ、

カイセツ　海說　シヨーゲン尙彥を見よ、

カイチヨー　海長　(二三二四八)〔黃檗宗〕肥前長崎清涼菴の僧なり、海長字は江外、俗姓は木下氏、肥前長崎の人なり、

豐前聖壽山に登りて支那僧千呆禪師に仰きて得度納戒し、服侍年あり、遂に其法を嗣く、後千呆禪師に從ひて黃檗山に留ること二十餘年なり、旣にして鄕里に歸へり、淸涼菴に閑居す、長崎奉行日下部氏等問訊して弟子の禮を執る、示寂年月日詳ならす(續日本高僧傳)

〔考〕海長は元祿の頃の人なり

カイトー 海東　エテン慧然を見よ

カイトクイン 海德院　コーガン公巖を見よ

カイミヤク 海脈 二三二一 二三七七 〔黃檗宗〕宇治萬福寺の九代なり、海脈字は靈源、淸の人なり、俗姓許氏、出家して諸禪師を歷訊し、我元祿元年七月西來し、長崎に留る、後千杏按の法を嗣き、享保元年八月黃檗山に住す、二年にして退隱し、享保二年五月十八日寂す、年六十七、(黃檗譜畧)

カイモン 海門　ゲントー元東を見よ

カイモン 海門　コートク興德を見よ、

カイモン 海門　ショーチョー承朝を見よ、

カイリヨー 海量 二四九三 二五六〇 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十七代なり、海量字は慶雲、後字を以て姓となす、上野木更津町の人なり、中野照光寺智敎の下に薙髮し、豐山に學び、業成りて師席を繼ぐ、次に鎌足村德花寺に移り、後山城八幡報恩寺に轉じ、又室生山主となる、明治三十一年豐山能化職に擧けられ、三十三年一宗の獨立するや、豐山派管長に補し、事相に精しきを以て知らる、同年十月九日泊然として寂す、壽六十八(新義眞言宗史)

カイリヨー 海量 ……… 二四七七 〔眞宗〕近江覺勝寺の僧なり、海量字は寶器、一の字奉張と云ふ、父は覺勝寺玄明、母は彥根藩士高瀨某の女なり、海量二十歲、得度して眞宗の宗義を講究し、稍長じて和漢の典籍に通じ、詩歌を善くす、父の職を襲ひて同寺に住すること二十餘年にして後辭し去り、四方に歷遊す、麻衣糲食、禪僧に異ならず、加茂眞淵に就きて和歌を學び、專ら古躰を主とす、明和二年秋彥根城南里根村に草菴を營みて幽接す、然も每年二回、必ず出遊し、數百里の行程隣里に行くが如し、寬政年中藩主井伊直中の內命により、諸藩の學制等を視察す、初め直中大に藩學を興し人材を養はむとし海量の人となりを聞き、行脚に托してこれが視察せむことを命ず、師即ち諸藩學を歷覽し、其造構規模等を圖して上る、直中熊本藩時習館圖を觀て大に整備せりとなし、其圖に準據して設計建築し、亦慶敎育の方策を獻す、直中師の功德を嘉賞し、城東石ヶ崎に草菴を營み、安住せしむ、かくて學舍新に成るも典籍未だ備らず、師曰ふ學舍成りて典籍に乏しきは、城壘ありて兵器なきかことし、と、乃ち自ら肥前長崎に至り、舶來の奇書を購求して歸へる、文化十四年十一月廿一日出遊せむと欲し、途中に寂す、壽八十五なり、海量豪邁寡慾にして出遊の途中糧盡き、數日食はざるも、毫も饑色なく、其誦經禮佛するに瞋目疾視怒るが如し、人其故を問へば、此の如くならずは眞心に貫徹せすと答へたりと云ふ、衣服等を見ること糞土に異ならず、新衣を供するものあれは舊衣を僕に與へ一も畜ふることあらざりきといふ、著作ひとよはな一卷あり、(日本敎育史料、譚海)

カイレン 海蓮(………)〔……〕越中立山の苦行僧なり、

海蓮は越中の人、法華經を持す、二十五品諷誦迅利なるも後の三品を誦ずる能はず、乃ち立山に登り諸靈塲に到りて精修苦行し、通誦を祈求す、夢に一菩薩あり告げて曰ふ、汝の前生は蟋蟀なり、社房の壁にありて法華經を誦ずるを聞く、普門品了りて倚身を放ちて壁に倚る、蟋蟀壓せられて死す、聞法の力の故に人身に轉生するも、前生三品を聞かず、故に全誦すること能はずと師覺めて益勉め、漸く三品に通す、天德元年に寂す、（本朝高僧傳）

カイイン 戒印　ゲシシユー源秀を見よ

カイエ 戒慧　ゴンシン嚴眞を見よ、

カイエ 戒慧　サイセン最仙を見よ、

カイエン 戒琬　一六一七—一六七三　〔黄檗宗〕肥前長崎福濟寺重興第一代なり、戒琬字は𪊲謙と云ふ、明人なり、慶安三年西來し、長崎福濟寺に住し、大に寺門を張る、寛文十年退穩して桑蓮居に閑棲す、延寶元年六月二十三日寂す、壽六十三、（禪宗史料）

カイガク 戒學　キヨーウン慶運を見よ、

カイコー 戒光　ジヨーユー定祐を見よ、

カイコー 戒光　リユーゾー隆增を見よ、

カイコーボー 戒光房　ジヨーネン靜然を見よ、

カイサン 戒算　一六三三—一七一三　〔天台宗〕京都眞如堂の開山なり、戒算出家して久しく比叡山に登り、台教を學び、觀心に通ず、後專ら淨土教を修す、永觀二年東山神樂岡に地を相し、正曆三年宣旨を承けて鈴聲山眞如堂を建て、長保元年春丈六の涅槃佛を造刻して後門の階殿に安し、天喜元年正月二十七日寂す、壽九十一、（本朝高僧傳）

カイサン 戒山　エケン慧堅を見よ、

カイシン 戒深　（……）〔天台宗〕尾張賢林寺の僧なり、戒深は其俗姓生國詳かならず、尾張賢林寺に主となり、五十にして寺門を出でず、日夜法華を修す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

カイシユー 戒舟　ゼンタク禪宅を見よ、

カイジヨー 戒定　二四六五……　〔新義眞言宗〕武藏寶仙寺第四十代なり、戒定假の名は定惠、金猊園と號す、上野群馬郡三野倉の人、俗姓は永井氏、父の名は逾樹、母は土屋氏の出なり、十二歲にして高崎石上寺に入り、辨快和上を禮して剃髮し、二十歲豐山に登り、寛政三年大塚護國寺の代補となり、同五月輪院に住し十年秋九月再び豐山に登り、地藏院に住す、十一年に二十唯識、十二年に詩書春秋等、十三年に五教章等を講し、同年並に十四年集議となる、享和二年成唯識論等を講じ、十月慈心院に移る、同三年十卷章等を講し、八月十九日命を受けて武藏寶仙寺に住し、第四十代となる、文化二年正月二十三日寂す、壽缺く、著作、二十唯識張秘錄二卷、五教章張秘錄五卷、二教論張秘錄二卷、六合釋張秘錄、寶鑰張秘錄、易經述讃、各一卷あり、（寶仙寺返信、新義眞言宗史）

カイセン 戒撰　一五〇三—一五六七　〔法相宗〕大和東大寺の學僧なり、戒撰俗姓生國詳かならず、法相を研究し、傳法大法師となり、延喜五年東大寺を主とり、一住四年、仝七年六十五歲を以て寂す、（本朝高僧傳）

カイニヨ 戒如　（一八七三）　〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、戒如は知足と號す、笠置の解脫上人に隨ひて戒檢を承

け、法相を質す、出て丶大和西大寺に住し、大に律疏を講す、其門に遊ふ者招提寺の覺盛、西方院の有嚴、不空院の圓晴、西大寺の睿尊、東大寺の禪觀、禪慧、嚴俊、知足院の覺澄、實塔院の繼尊等の高德ありて一時に名を知らる、（本朝高僧傳）

カイミヨー 戒明（一四四二）〔華嚴宗〕奈良大安寺の僧なり、　戒明俗姓凡直氏、讃岐の人なり、出家して大安寺に投じ、慶俊に師事し、華嚴宗を傳ふ、寶龜の末唐に航し、明匠を歴訊す、金陵の龍華寺に往きて傳大師の像を禮し、城南の牛亭山に登りて瑯琊王の墓に謁し、誌公の宅に至りて觀音の畵像を請得て歸り、大安寺南唐院に安置す、賫持し來たれる經論章疏を朝廷に獻す、當寺南都の衆僧中、大佛頂經を以て僞經なりと云ふ議論あり、戒明之を駁し、其僞經にあらさることを證せり、延暦中示寂す（本朝高僧傳）

カイチン 戒琛　エコー慧光を見よ、

カイゲイン 開華院　ホージユー法住を見よ、

カイゴイン 開悟院　シヨーコー正廣を見よ、

カイシヨー 開成（一三八四 一四四一）〔……〕攝津勝尾山の僧なり、開成は光仁天皇の皇子にして桓武天皇の庶兄なり、幼より英敏なり夙に佛敎に歸依し、天平神護元年正月一日潜に宮を出て、勝尾山に登る、時に年四十二なり、石を疊みて塔となし、其側に禪坐し、藥師佛像を手刻して安置す、二月十五日善仲善算の二人山中に經行す、開成二人を見て素志を語り、即ち就きて戒を受け、共に菴居す、善仲善算發願して大般若經を書寫さんとし、先づ楮樹々植えて紙を製す、紙成るに及びて書寫のことを開成に託して去る、開成二人の志を繼ぎて其功を異ふ、後道場を建立して彌勒寺と號し、其經を安置す、光仁天皇開成の行業を聞きたまひ、寶照の初彌勒寺に田數百畝を納め給ふ、天應元年十月四日手に香爐を執り、西向して寂す、壽五十八、（元亨釋書、本朝高僧傳）

カイゼンイン 界善院　ジカイ慈海を見よ、

カイセンボー 開扇房　エケン慧劍を見よ、

カイトクイン 開得院　クワンジヨー環定を見よ、

カイホツイン 開發院　シヨージユン正純を見よ、

カイオーイン 皆徃院　トンエ頓慧を見よ、

カイクー 皆空　リユークワン隆寛を見よ、

カイジユンイン 皆遵院　ギジヨー宜成を見よ、

カイジヨー 皆乘　カクケー覺螢を見よ、

カイジヨーイン 皆乘院　クソングワツ觀月を見よ、

カイジヨーイン 皆成院　エニン惠忍を見よ、

カイミヨー 皆明　エンシン宴眞を見よ、

カイオー 界雄　ジンゴー神興を見よ、

カイオン 界遠　ゴシユー護洲を見よ、

カイガン 界巖　ハンオツ繁越を見よ、

カイセキ 介石（二四七八 二五四二）〔眞宗〕肥後小島正泉寺の住持なり、　介石字は斷識といひ、等象齋と號す、文政元年四月八日生る幼名は觀靈、肥後國八代郡種山村の人、族姓は廣志氏、後飽田郡小島町佐田氏の義子なり、因りて其姓を冐す、父の名は慈博、佐伯氏の女なり、甫めて七歲儒醫齋藤宗原に從ひて學ひ、慧解人に過ぐ、十八歲笈を負ひて京都に遊ひ、寶雲南溪兩師に就きて、倶舍、唯識、成實、因明等を學ひ、

後國に歸へり、米山中に入り自ら廬を結び、靜思頗る得るところあり、再出て、東福南禪二寺に留錫すること十餘年、森尙謙の護法資治論を讀み、佛法の大難地理より起るといふ條に至り、深く悟るところあり、時に西洋星緯說稍々世に行はれ、佛曆將に廢せんとす、師慨然として起ち、天龍寺の寰中禪師に幽謁して佛曆を問ひ、深く其學未た明かならさるを憂ひ、栖の地を卜し、白晝戶を閉ち、燈を點して冥心默座すること十餘年、隣里之を目して無晝菴といふ、遂に恍然實兩象を視る理を悟る、乃ち其器を製し、天動等象記を作る、其學資一に母氏より出つ、師また善く經濟の術に達し、國家の形勢に就て大に憂ふる所あり、數々朝廷及ひ幕府に獻言すと雖、皆報なし、乃ち社を結ひて民弊を救ふ、曰く保國、曰く觀光、曰く六益、曰く共憂、曰く護國、曰く博濟々急、曰く補國、曰く魁益、曰く曳尾、曰く報國、各資益する所あり、又四方に講導し、謗議者を詰難す、他の緇素と意相合

介石上人

せす、但た淨土の行誡、天台の詔舜、曹洞の奕堂の三師と師友の交あり、明治十五年十月北越を巡敎し、信濃の飯山に至り病を得、强ゐて越後の高田に往き十二月九日寂す壽六十五、西本願寺法主謚を與へ嘯月院と云ふ、弟子仁寛等あり、東京淺草公園に碑を建て儒醫淺田宗伯銘幷文を作る、行誡嘗て師の像に題する贊あり、石也曾無貪瞋、唯思世益、不思身、因緣適屬大悲閣、疑是普門示現人、著作須彌山一目鏡、視實等象儀詳說、敎諭凡、國中案、日本槌きりふかみ各一卷、栽培經濟論二卷、助字槩五卷、大日本大聖傳あり（碑文、本願寺派學事史）

〔考〕介石上人晚年眞宗を出て、天台宗に入りたり、然れとも眞宗本願寺宗主謚を與ふるより見れは、全く關係を絕ちたるものにあらさるを知るべし、今姑く眞宗の下に入る

ガイシユーシ　芥舟子　シユーセン宗詮を見よ、

カクア　覺阿（……）〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、覺阿字は覺一幼にして出家し進具の後奈良の智鏡淨因の二師に就て律部を學び又願行上人憲靜に從ひて密灌を受け忍性を拜して通受の法を傳ふ後西三谷に往き覺心に謁して淨土門を習ひ旁ら俱舍を受く願行律師泉涌寺を退くに當り師席を嗣ぎてこれに主となり某年八月十一日寂す壽缺く（本朝高僧傳、淨土總系譜）

カクア　覺阿　一八〇三……〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、覺阿俗姓藤原氏なり、十四歲にして比叡山に登り、講究を事とし、梵漢の書を善くす、商客に値ひて彼土に禪宗の盛なるよしを聞き、渡航の志あり、承安元年の夏法弟金慶と共に出發す、時に年二十九なり、初秋に杭州に達す、即ち孝宗の乾

道七年なり、靈隱寺に至りて佛海遠禪師に謁し、其志願を書し示し、且問ふ、且如心佛及衆生是三無差別、離レ相離レ言、假レ言顯レ之、和尚如何開示と、禪師示して曰ふ、衆生虛妄見レ佛見二世界一と、覺阿問を書して曰ふ、無明因レ何而有、と、禪師便ち打つ、覺阿仍て禪師を請し座に陞せ、疑を決す、翌年の秋金陵に遊び、長蘆の江岸に抵りて皷聲を聞きて、忽然として大悟し、始めて佛海禪師垂手の旨趣を知る、靈隱寺に回りて五偈を呈す、「航レ海來探教外傳、要三離二知見一脫二蹄筌一、諸方參遍草鞋破、水在二澄潭一月在レ天」「掃二盡葛藤與二知見一、信レ手拈來全躰現、腦後圓光徹二大虛一、千機萬機一時轉」「妙處如何說向レ人、倒地便起自分明、驀地踏著故田地、倒裏幞頭孤路行、」「求レ眞滅レ妄元非レ妙、卽レ妄明レ眞却是錯、堪レ笑靈山古老錐、當陽拋下破二木杓一」「豎拳下喝少賣弄、說レ是說レ非入二泥水一、截斷千差休二指注一、一聲歸笛囉囉哩、」佛海禪師其所悟を印可す、覺阿其下を辭して歸朝し、比叡山に住す、安元の初延曆寺座主と共に一僧を使はして音信を佛海禪師に通じ、水晶の降魔杵、幷に數珠二臂綵扇二十事を贈る、壽永元年の夏、再び音信を通ずれば禪師已に遷化せり、高倉天皇覺阿の禪行を聞きたまひ、宮中に召して禪要を問ひたまふ師笛（一說に尺八なりと）を出し一吹す、滿座其意を測らず、師直に草菴に歸り、再び世に出でず、示寂の年時欹く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、龍門夜話）
〔考〕普燈錄、五燈會元、佛祖世譜等の支那の禪宗史籍に覺阿の事蹟見ゆ、

カクアン 覺晏（‥‥‥）〔天台宗〕大和多武峯の禪僧なり、覺晏俗姓不詳、三寶能忍に師事して法印を傳へ、大和多武峯に住して大に禪風を揚ぐ、其門に懷鑒、懷弉、懷照、懷義尼あり、師命終に臨み、諸弟子に勸めて道元禪師に依らしむ、示寂の年時欹く、著作心要提示あり、懷弉に付す、懷弉は後に永平寺第二世となる、（道元和尚廣錄、建撕記訂補）

カクイ 覺意 一七一二—一七六七 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、覺意俗姓は源氏、參議基平の子なり、長信僧正によりて得度し、性信親王の灌頂を受け、仁和寺の大教院に住す、承保二年法眼に叙す、圓教寺に移りて權少僧都に任ず、應德二年正少僧都に轉ず、嘉保二年東寺の長者に加し、明年權大僧都に進む嘉承二年弘法大師の忌日に寂す、壽五十六、（本朝高僧傳）

カクイチ 覺一 カクア覺阿を見よ、

カクイン 覺隱 エーホン永本を見よ、

カクウン 覺雲 ‥‥‥二三三四 〔淨土宗〕下野不退寺の開山なり、覺雲は體蓮社淨譽と號す、岩代會津の人、俗姓は須藤氏なり法を業譽還無に嗣ぎ、下野那須郡奧澤村不退寺を開き、延寶二年六月二日寂す壽缺く、（淨土總系譜）

カクウン 覺雲（一九六五）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、覺雲は禪林寺殿の子、澄覺に從ひて習學し、嘉元三年天台座主に任す、寂年欹く、（天台座主記）

カクウン 覺雲 チクー智空を見よ

カクウン 覺運 一六六七‥‥‥ 〔天台宗〕近江比叡山檀那院の學僧なり、覺運は京都の人、藤原貞雅の子なり、慈慧僧正に師事して台教を研習す、檀那院に住し、源信僧都と法義角立す、又池上の皇慶に就て灌頂を受け、其玄奧に達す、長保五年十二月大極殿の仁王會に方り一條天皇の詔により、總導

師を管し、少僧都に任せらる、後數々召されて參內し、法を說き、僧正に昇る、寬弘四年十月三十日寂す、壽缺く、著作玄義鈔、艸木成佛論、念佛寶號觀心偈、一實菩提偈、圓頓止觀勸文、各一卷、四種三昧義私記、三觀義私記、十二因緣私記、二諦義私記、三周義私記、囑累義私記、各若干卷なり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

カクヱ 覺惠 ……二二九三 〔眞言宗〕大和興福寺の僧なり、覺惠は大納言僧正と稱す、寬海の舍弟なり宥嚴に習學し、初め大覺寺大勝院に居り、後興福寺東北院に居る、元和二年得度し、寬永七年入壇す、八年少僧都に任し、九年法印に敘し、十年權僧正に任す、(仁和寺諸院家記)

カクヱ 覺慧 一八九九/一九六七 〔眞宗〕山城本願寺の僧なり、覺慧童名光壽、俗姓は藤原氏、父は左衞門佐日野廣綱、母は覺信尼なり、如信宗主と同年に生る、七歲權中納言日野家光に養はれて子となる、其年大藏卿光國先導となり、靑蓮院尊助の門に入りて出家得度し、宗慧と稱す、大原の諱有僧都の入室弟子となりて密乘を習修し、熾盛光院有職に補し、中納言阿闍梨法印と稱す、後天台の門を辭して遁世し、覺慧と改め、文永五年々三十にして如信宗主を拜して師となし、眞宗の敎義を學ぶ、尋きて宗主に代りて大谷の寺務を監す、正應三年遠く關東に赴き、親鸞の舊跡を巡歷す、德治二年大谷の廟堂鬩墻の禍あらんとす、師乃ち人をして留守せしめ、法嗣宗昭と共に出てゝ大炊御門東の衣服寺に居りて難を避く、此年四月上旬病に臥し十二日寂す、壽六十九、蓮臺野芝築地父廣綱の墓側に葬る、三子あり、長は宗昭、次は聖祐、末は行覺なり、(本願寺通紀)

カクヱイ 覺英 一七七七/一八一七 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、覺英字は圓松、關白藤原師通の子なり、興福寺に入り叔父覺信僧正に師事して法相を學ぶ、東大寺の戒壇に具足戒を稟け法華唯識に精通し、又和歌を善くす、未た壯歲に及はすして權少僧都に昇る、出てゝ四方に遊ひ、奧州の忍郡に至り、一古寺の傍に跡を晦まして菴居す、保元二年二月十七日寂す、壽四十一、翌年西行法師東遊して菴に到り遺すところの布囊中に法華要文三十頌、及ひ燧香等を得、又自ら發心の事歷を述へし遺稿、及ひ柱に書したる辭世の句を見、京に歸へりて藤原皇后璋子に奏す、(本朝高僧傳)

カクヱン 覺圓 ……二〇〇四 〔日蓮宗〕越前敦賀妙顯寺第二代なり、覺圓生國俗姓詳かならず、初め眞言宗の僧なり、越前敦賀津氣比祉の傍らの某寺に住す、日像北陸を經て京都に上る途次、敎を受けて其弟子となり、寺を改めて日蓮宗となし、日像を開山となし、自ら第二代となる、爾後盛んに日蓮宗を其地方に弘む、康永三年正月三日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

カクヱン 覺圓 一九〇四/一九六六 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、覺圓號は鏡堂、宋の西蜀の人なり、詩人白玉蟾の後なり、經論に通ず、後吳に遊び、諸禪宿を歷訪す、太白に登りて環溪一に謁し、心印を受く、弘安二年春、三十六歲にして無學元に同伴し來る、北條時宗慇勞崇敬す、禪興寺に住して法化を揚ぐ、後淨智寺に遷り住し、奧州の興德寺の開山となり、再び禪興寺に住し、十年を經、圓覺建長に歷住し、正安二年京

に上り、建仁寺を董す、留住七年、法化甚だ盛なり、德治元年九月廿六日寂す、壽六十三、四會語錄三卷あり、遺偈あり曰ふ、甲子六十三、無ニ法與ㇾ人說ㇾ任ㇾ運自去來、天上只一月、諸弟子靈骨を分ち建長建仁兩所に塔を建つ、建長寺に在るを瑞光塔と云ひ、建仁に在るを靈光塔と云ふ、勅諡大圓禪師と云ふ(續群一二八、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

カクエン　覺圓　(一六九一—一七五八)　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、覺圓は關白藤原賴通の第六子なり、園城寺の明尊僧正に從ひて下髮受業し、顯密の蘊奥を硏む、朝廷勅して一身阿闍梨に任し、園城寺の長吏に補し、尋きて法務となる、承曆元年二月詔により延曆寺の座主を領す、山徒之を拒む、官吏宣命を堂の欄に揭く、因りて訴を止む、師任後三日にして辭す、爾來屢々宮中に召されて法を修し驗を得、大僧正に任し、嘉保二年正月除日の修法に應して牛車の宣を拜し、官士八十人、童子四人、扈從七人を賜ふ、承德二年法勝寺の寺務を掌とる、此任師を始とするなり、同年四月十六日寂す、壽六十八、師常に宇治の精舍に居る、世呼ひて宇治の僧正といふ、(本朝高僧傳)

カクエン　覺緣　(……)　〔眞言宗〕京都鳴瀧般若寺の律師なり、覺緣は千攀の弟子にして、東大寺に入り、華嚴三論を學ひ、寛朝を禮して傳法灌頂を受く、後鳴瀧般若寺に住し、殿舍樓閣を建立す、風景佳絕なり、其寂年缺く、(傳燈廣錄)

カクエン　覺緣　(一六五〇)　〔眞言宗〕京都鳴瀧般若寺の僧都なり、　覺緣正曆四年六月二十三日元杲の傳法廣澤灌頂を受く、(續傳燈廣錄)

カクオー　覺雄　(二〇一九)　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、覺雄は東寺の長者に任し、延文四年四月十二日寺務並に法務補す、(東寺長者補任)

カクオー　覺應　(二四五三—二五一六)　〔眞宗〕攝津大坂長光寺の第十代なり、　覺應字は子感、號を周山と云ひ、後改めて龍山と云ひ、別號を龍護山人と云ひ、觀月臥松樓主人と云ひ院號を覺樹院と云ふ周防の人なり、大坂島町二丁目長住寺に住し、第十代の住持となる、天保の頃清流紀談二卷を撰し、西本願寺の學匠の事蹟を傳ふ、安政三年九月廿三日寂す、壽六十四、(清流紀談序、長光寺返信)

カクオー　覺翁　(二三二五—二三八八)　〔新義眞言宗〕江戶圓福寺第十五代なり、　覺翁字は敎音と云ひ、伊勢度會郡二見の人、俗姓は北村氏、父を傳左衞門と稱す、鳥羽城主内藤和泉守の大夫となり、祿三百石を受けしか、侯江戶に在勤中、罪ありて其封邑を除かれしかは、諸臣離散す、傳左衞門は退きて二見村に居る、師甫めて十二歲、志摩堅神觀音寺の快運に就きて薙髮染衣し、後近江に至り勢多最勝院尊海に隨從し、四度の密軌を修す、洛東佛山に掛錫し、祕密灌頂を蒙むり、敎相の幽賾を探くる、快運の寂後觀音寺を兼領す、元祿三年尊海擢てられて矢橋石津寺の主となる、師寺堂を修營し、新に鐘樓を建つ、人以て中興主となす、以來同寺を兼領し、佛山に往復し、螢雪功を積み、上座に轉し、明星院を領す、元祿十四年遍照院に轉す、同年醍醐山に登り、寛順大僧正に從ひて幸心院流を傳受し、寶永三年請に應して上總釋藏院に移住す、醍醐山に登り、三寶院大僧正房演の印可を蒙むり、釋藏院に

住すること四年にして退き、寶永六年再び佛山に登りて請益し、尋いで遍正院主となる、正德三年傳忍師に從ひて幸心法流を受け、日秀の相承者と稱す、享保元年再び醍醐山に登り、寛順大僧正に從ひ、後三部經等を受けて印信を拜す享保二年勸學院道場に於て行傳法灌頂を修するとき、師其大阿闍梨となる、此時灌頂手鏡五帖を綴つる、其他口訣を記するもの多し、三年快存僧正の門を叩き、廣澤西院流を傳授せらる、快存時に智積院の主印を釋き、西方寺に居る、師の求法に鄭重なるを感し、西院聖敎餘部四匣をば師に付す、八年勸學院道場に於て再び傳法灌頂を開き、師もまた大阿闍梨となる、此事また傳法大會の精義者を兼ぬる命を受け、草稿既に成る、五月に至りて尾張侯の嚴諭ありて長久寺の席を董す、故に精義者を他に讓る、同寺の法流は元意敎上人の流にして、中葉斷絶せり、師之を惜み有雅大僧正に從ひて之を傳ふ、有雅は之を幸心に依りて傳へしものといふ、同九年有雅大僧正に從ひて近江神照寺の法流を傳へ、師殊に之を尊重す、佛山に掛錫するの日、神照寺を兼領す、此に至りて其素志を遂ふなり、同十年江戸圓福寺前住傳忍和上寂す、師幕命を蒙むりてヽを補す、十三年病に罹り、七月十八日寂す、壽六十四、三田寶生院に葬むる、著作灌頂手鏡五帖あり、(眞言宗史料)

カクオー　〔覚翁　コーゲン宏源を見よ、

カクオー　覺翁　ノーショー能正を見よ、

カクオン　覺遠　二三五一―二四三一　〔新義眞言宗〕山城智積院第十九代なり、覺遠字は本間といふ、山城宇治郡石田村の人、俗姓は堀氏なり、元祿十五年始めて近江石津寺に至り、覺翁に師事すること年あり、寶永二年覺翁佛山に留學する日、大僧正覺眼阿闍梨を請して戒師となし、剃髮染衣して四種の瑜伽法を修す、七年勸學院道場にて智興阿闍梨に從ひて入壇灌頂し、正德二年石津寺主となる、然れとも覺翁佛山にあるを以て、師座右に侍す、享保三年快存僧正に西院印可を受け正德五年亮範僧正に安流印可を受け九年覺翁に神照寺法流及び意敎上人印可を受け、十年同しく覺翁に幸心法流を受け十二年智興僧正に中性院流を受け享保十八年醍醐山行樹院眞圓僧正に幸心一家の口訣を受け、幸心一家の口說を記して眞決鈔といふ、其後五智山に遊ひ、如幻曇寂兩師の門を叩きて造詣すること多し、是より先享保十年覺翁幕命を蒙むり、圓福寺の主となる、此日松橋の法流をを傳ふ、其寂するに及ひ、去りて佛山に登り請益す、享保二十年賞道阿闍梨に傳法法流を受け翌年了恕僧正に傳法印可を受く、元文元年尾張侯の請を蒙むり、長久寺の席を董す、又佛山に登りて集議席に轉昇し、寺に歸へりて緇徒に應す、延享元年江戸圓福寺の前住幸雄和尙寂す、官師に命して席を嗣しむ、乃ち往きて營構修理せんと請ひ、官百金を賜ふ、寛延二年より寶曆四年に至る六年間、專ら斯業を督勵し、正殿、拜殿、山門、鐘樓、石籬、小社數所、及ひ神用什器等を修補若しくは新造し、一として手を下さゞるところなし又山下の寺宇を修補し、兩工金を費やすこと千金に及ぶ、是年淸石神井三寶寺の智存を請して意敎上人の法流を傳へ、又傳法院聖敎諸部を書寫せしめらる、寶曆六年智積院の快侃僧正寂す、師官命を蒙むりて其後を繼く、是秋佛山に入り權僧正に敕任せられ、寶曆八年正に轉し、九年印を

カク(覺)オ

解きて六波羅密寺に退隱す、師法柄を秉ること前後四年なり、以後或は石津寺に、或は金藏院に寓居し、明和八年養命坊に移住す、同八年四月十四日寂す、壽八十一、著作行法義記四卷あり、(新義眞言宗史料、新義眞言宗史)

カクガ　覺雅　一九〇三／一九五二　〔眞言宗〕山城醍醐山幸恩院の二代なり、覺雅は尙書雅忠の猶子、因幡前司大江賴重の子なり、實深僧正の室に入りて得度し、文永二年六月六日蓮藏院にて庭儀灌頂を受く、後親快僧都の秘密灌頂心印を承けて人天の道師となり、鎌倉二階堂院主となり、本山に還らす、正應五年八月廿一日寂す、壽五十、(續傳燈廣錄)

カクカイ　覺海　一八〇二／一八八三　〔眞言宗〕紀伊華王院の學僧なり、覺海字は南證、對島の人なり、上國に遊び、醍醐寺の座主定海に從ひて眞言宗を受け、後高野山の華王院に住し、大に密席を張る、建保五年三山の撿校となる、貞應二年八月十七日壽八十二にして寂す、(本朝高僧傳)

カクカイ　覺海　一八〇一／一八八三　〔眞言宗〕紀伊高野山の撿校なり、覺海は花王院と稱す、早年より道行あり、建保五年正月金剛峯寺第三十七世撿校となり、一山を監す、承久二年十二月辭退して花王院に老隱し、偏に下品悉地を願求し、魔界に入りて同生利益し、山中の魔屬を對治し、彌勒出世の時に至り、大法の聽衆とならんと欲す、願行已に成り、貞應二年八月十七日の曉に饗膳を設けて客殿に配次す、然れとも人のこれを窺見するを禁したれは、珍賓の至れるを知る者なし、而して客の已に至れる頃に及び、師出てゝ中門の二扉を劈破して兩翼となし、大空に飛び去りたりと云ふ時に八十三歲なり師平生前七生覺知の人と稱せられたり、(高野春秋、沙石集)

カクカイ　覺海　(二二八八)　〔黃檗宗〕肥前長崎福濟寺の開山なり、覺海は明の人、出家して臨濟下の禪を修す、寬永五年了然覺意等と相伴ひて西來し、長崎に福濟寺を開く、漳州人其資を投し師を請したるを以て時人漳州寺と云ふ、師寂年詳ならす、(長崎年表)

カクガン　覺巖　ゲンリョー玄了を見よ、

カクガン　覺巖　ジャクミョー寂明を見よ、

カクキ　覺基　(一八七〇)　〔眞言宗〕紀伊高野山の撿校なり、覺基字は圓性、和泉の人、高野山蓮上院に住し、承元二年高野山座主撿校に補す、醍醐山座主金剛王賢海の法を受け、また覺濟の燈を續く、四年十一月後鳥羽上皇に詔を受けて仙洞に孔雀經の法を修し、法橋上人に敍せらる、其寂年缺く、(續傳燈廣錄、本朝高僧傳)

カクキ　覺基　ミョーケン明賢を見よ、

カクキョー　覺鏡　(一八〇二)　〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の僧都なり、覺鏡大輔僧都といふ、豐前守藤原皇兼の子なり、永治元年十二月七日三寶院に登り、定海大僧正の灌頂を受け、詔して太元帥別當となる、後此派を遮那院流といふ、付法淋海、學隆、實覺、琳經の四人あり、(續傳燈廣錄)

カクキョー　覺敎　一八二七／一九〇二　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり覺敎俗姓は藤原氏、左大臣實房の子なり、幼より印性法印に從ひて落髮受業し、仁和寺覺法親王を拜して秘密灌頂を受け、仁和寺の眞乘院に住す、建久五年二十歲にして法眼に叙す、正治二年權少僧都に任し、元久の初め權大僧都に進み、承久二

年東寺の長者に任ず、嘉祿二年僧正に進む、歴仁元年諸職を辭し、應永元年正月東寺の寺務及護持僧の宣を賜ひ、法務を兼ね、二月大僧正に昇る、仁治三年正月八日寂す、壽七十六(本朝高僧傳)

カクキヨー　覺慶　一五八七 一六七四　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、覺慶俗姓は平氏、大和刺史理善の子、京都の人なり、慈慧僧正に師事して顯密二敎を學び、應和の宮講に夕座の問者となる時に年僅かに弱冠を過ぐ、東大寺法藏と對論す、長德四年延曆寺の座主に補し、長保二年僧正に任し、翌年大僧正に轉す、宋の至道元年奉先寺源淸法師自撰の台敎疏鈔五部を贈り、本朝の台疏と交換を乞ふ、師敕命を拜して慈覺智證等と宋に送る天台章疏瑕疵を論ず、後東陽房を刱めて退休し、長和三年十一月十二日寂す、壽八十八、(本朝高僧傳)

カクギヨー　覺行　一七三五 一七六四　〔眞言宗〕京都仁和寺の法親王なり、覺行は白河天皇の第三子、母は藤原氏の出なり、九歲にして性信の室に投じて密敎を習修し、十一歲にして祝髮受戒し、後仁和寺の寺務を補し、寬治六年春一身阿闍梨に任じ、觀音院に於て大僧都寬意につき灌頂壇に入る、承德二年春結緣灌頂を修し、圓宗法勝二寺の撿校たり、康和元年春親王に敍し、四年七月尊勝寺落慶供養の導師となり、堀河帝法會に奉して、詔して師を長吏に補す、長治元年尊勝寺裡に灌頂院を構へ、結緣會を修し、同年(一說二年)十一月十八日寂す、壽三十(一說三十一)中御室と云ふ(仁和寺門跡傳、諸門跡譜、本朝高僧傳)

カクギヨー　覺行　シヨーゲン照玄を見よ、

カククワイ　覺快　一七九四 一八四一　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、覺快は鳥羽天皇の第七子、夙に佛門に歸し久安二年比叡山に登る、年十三歲青蓮院に入り大僧正行玄に隨ひ下髮受戒し、六月一身阿闍梨に任す、諸老に諮問して顯密の學を研く、六年冬權僧都に任す、仁平元年冬十一月行玄に就きて傳法灌き頂を受け、尋て法印に敍す、永曆元年秋宮中に日蝕を祈りて驗あり、嘉應二年無品親王に敍す、安元三年延曆寺の座主となり、兼ねて法性寺の座主を領す、師性多病にして寺務に倦み、住職三年、奏上して印を解き、青蓮院に歸る、養和元年十一月六日壽四十八歲にして寂す、遺骸を雲林院に葬むる、(本朝高僧傳)

カククワイ　覺快　ジエン慈圓を見よ、

カククワン　覺寬　(一七八八)〔眞言宗〕河內廣隆寺の僧なり、覺寬は書寫阿闍梨と稱す、白河天皇の子、左大臣家忠に養はる、大治三年十一月三日無量光院道場にて傳法灌頂を受く、聖賢は其導師護摩賢覺は敎授嘆德たり、付法の弟子淸泉、靜暹、院照、隆空等十九人あり、(續傳燈廣錄)

カククワン　覺觀　クワンリユー寬隆を見よ、

カクケー　覺瑩　二四一四　〔淨土宗〕江戶增上寺四十四代なり、覺瑩は敎蓮社門譽弘願皆乘と號す、江戶番町の人、其姓氏詳かならず、或は云ふ中村氏、父は大坂の浪士なり、傳通院意哲上人の弟子となり、寬誓と云ふ、元祿十一年八月二十一日禮讃部、二十年にして增上寺に移りて學寮に居り後學頭となる、享保中大巖寺に住し、大光院光明寺を經、寬延三年二月十六日出府の命に接し、三月一日三緣山貫主となり、

大僧正に任ず、これより一宗の興廢に心をおき、學寮の制條を集錄して各寮に附す、寛延四年六月二十日有德院薨去に際し、命を受けて三百部の法命を勤む、寶暦三年疾に罹り退職を請へども許されず、疾重るに及び十二月六日再び辭任を請ひ、一本松の隱室に移り、同四年十一月六日寂す、（三縁山志、淨土總系譜）

カクケー 覺冏 ゲンコ還故を見よ、

カクケン 覺顯 一八七一／一九五〇 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、覺顯は内大臣定通の子、圓淨法師に習學し、建治二年別當に任し、同十月の會に講師となる、正應三年四月十七日寂す、壽八十、（三井續燈記）

カクケン 覺顯 エキョー會慶を見よ、

カクケン 覺憲 一七九一／一八七二 〔法相宗〕大和寶積院の學僧なり、覺憲は藤原給事通憲の子なり、幼にして藏俊僧正に從ひ、剃髮受業し、唯識並に毘尼を學ぶ、常に大和の壺坂に居りしか、後寶積院に住し、招提寺に移る、權僧正に任し、建久六年春東大寺の大佛殿落慶供養の導師となる、建暦二年十二月二十七日寂す、壽八十二、師八宗の大綱を略紬して三國通鈔を勒成して門弟子に授く、（本朝高僧傳）

カクゲン 覺玄 二三二一 〔淨土宗〕江戸智願寺の開山なり、覺玄は蓮社法譽露水と號す、武藏持田の人、其俗姓詳かならず、源底に師事して法を嗣ぎ、江戸小日向智願寺を剏む、寛文元年六月十六日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

カクゲン 覺源 一六六〇／一七二五 〔眞言宗〕大和東大寺の僧なり、覺源は華山大皐の第四皐子なり、幼にして佛を慕ひ、醍醐寺明觀僧正により祝髮受業し、後深覺仁海二師に就て灌頂法を稟け、長元三年傳法阿闍梨の位に補し、醍醐寺の座主に任ず、長久年中權大僧都に叙し、永久三年夏東寺の長者となり、尋て法務を兼ぬ、康平二年冬東大寺に住し、五年夏權僧正に昇る、治暦元年八月十八日寂す、壽六十六、（本朝高僧傳）

カクゲン 覺眼 二三〇三／二三八五 〔眞言宗〕山城智積院第十一代なり、覺眼字は空譽號は抱拙薩摩の人、寛永二十年に生る、出家して慧學に長じ薩摩大乘院江戸圓福寺に歷任す、寶永二年四月二十五日智積院第十一世能化となる、同年八月二十六日權僧正となり、三年四月十五日正僧正となり、六年八月七日大僧正に昇り、仝月江戸護持院第三世に轉じ、僧錄職となる、享保二年正月二十二日護持院火災に罹る、同二月自ら職を辭し、三月二十四日退隱す、仝十年十一月八日寂す、壽八十三、著作住心品冠注九卷、十卷章撮義鈔十二卷、釋論科注二十卷、大日經拾義鈔十卷、光明眞言除闇鈔冠注四卷、摩多躰文考要一卷、幸心傳授記十二卷あり、（護持院世代、護國寺日記、新義眞言宗史）

カクサイ 覺濟 一九五二 〔眞言宗〕山城醍醐寺の座主なり、覺濟俗姓は藤原氏、三位少將兼季の子なり、法勝寺勝尊僧正に師事して兩部の灌頂を受け、金剛王院に住し、弘安二年權僧正に任し、幾もなく東寺の長者を司どる、正應五年春寺務法務を領し大僧正に任じ、冬十月諸職を辭し翌年醍醐寺の座主となる、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

カクサイ 覺齊 ゼンキュー禪牛を見よ

カクサン 覺山 リューオー隆雄を見よ

カクザン　覺殘　リョーダツ良達を見よ

カクサンボー　覺山房　インフー胤風を見よ

カクシ　覺芝之　コーホン廣本を見よ

カクシン　覺心（……）〔淨土宗〕讃岐西三谷の學僧なり、覺心俗姓生國詳ならす、源空上人の弟子なる覺明房長西に師事して諸行本願の義を傳へ、讃岐西三谷に住して盛に其義を主張す、示寂の年月日缺く、（淨土傳灯錄、淨土總系譜）

カクシン　覺心（……）〔戒律宗〕大和海住山の律僧なり、覺心は慈心と號す、京都の人なり、初め戶部尙書諫議平章に昇任し、後致仕して興福寺貞慶に依りて剃髮受具す、周く諸方に游學し、諸家の敎を統ふ、師海住山中に五大院を構へ、顯密並ひ行ひ、化興共に盛なり、又興福寺の裏に常喜院を建て、莊田を寄せて十方に供給す、寂年及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

カクシン　覺心（一八六七―一九五八）〔臨濟宗〕紀伊由良の興國寺の開山なり、覺心號は心地、俗姓常澄氏　信濃國神林縣の人なり、母戶藏の觀音に祈りて子を求む、一夜夢に菩薩燈を持し母に授く、覺めて娠めるあり、承元元年を以て出生し、英氣人に逼る、承久三年十五歲神宮寺に投じ、經論を讀み、略其意を知る、嘉祿元年十九歲落髮す、大和東大寺に至りて忠覺律師を禮して登壇進具す、同年高野山に登り、傳法院覺佛、正智院道範より眞言を受け、金剛三昧院（後に禪定院と號す）行勇より禪を傳へて服侍す、三輪の蓮道を問ひて金剛乘を修め、深草の道元を仰ぎて菩薩戒を受く、延應元年行勇の相模に遷るに際し同行す、寶治元年の春上野の長樂寺に到りて釋圓榮朝を問ふ、榮朝の滅後壽福寺に歸住し、藏叟朗譽の下に參究す、同二年秋京に入りて勝林寺に投じ、天祐思順の下に參究す、思順入宋傳法の高僧なり、此より入宋の志あり、尋て東福寺辨圓（聖一國師）の下に到る、辨圓其志を喜びて曰ふ、公無準に參せば、必ず所悟あらむと、乃ちその爲に書を修めて通謁せしむ、建長元年の春商船に附して出航す、宋に着し直に徑山に登れば、無準已に遷化し、痴絕冲其後を繼ぐ、師冲禪師に謁し、翌年の秋荊叟玉に見ゆ、而も尙ほ未だ契せず、同年四明山に遊び、育王山に留る、建長五年（唐寶祐元年）の春我國の學僧源心といふ者に値ひ、其誘引により、共に護國の佛眼禪師の下に到る、佛眼問ふ汝名計麼、師曰ふ、覺心、眼禪師即ち偈を說きて曰ふ、心卽是佛、佛即是心、心佛如如、亘レ古亘レ今、因て徵詰數番、機機相投し、即ち印記を承く、建長六年（唐寶祐二年）に歸を告く、眼禪師月林和尙語對御錄無門關等を付し、且つ像贊を授けて曰ふ、用ニ迷子訣一、飛ニ紅爐雪一、一喝當レ鋒、崖崩石裂、化ニ死蛇一作ニ活龍一、點ニ黃金一爲ニ生鐵一、去レ縛解レ粘、抽レ釘拔レ楔、更將ニ佛祖不傳機一、此界他界俱漏洩、師辭して務州の資林寺に往き、虛堂和尙を禮し、法語を受く、建長六年太宰府に着し、直に高野に登り、退耕行勇を拜覲す、康元元年に水晶數珠、並に書簡を佛眼禪師に呈し、恩を謝す、禪師報書に偈あり、曰ふ、百八摩尼顆顆圓、遶天鼻孔一齊穿、恒河沙數佛菩薩、日日呼來跳ニ一圈一、建長の末葛木五郎と云ふ者、大將軍實朝の命を帶びて宋に渡らむとし、紀伊由良濱に來り經營する所あり、然るに實朝薨じたれば經營する所徒爾に屬す、これより出家し願性と號し、高野山に留る、師に歸

依し、由良に興國寺を開き請して開山となす、師同寺に留りて化益甚盛なり、文應元年佛眼禪師書、並びに法衣一領、七葉圖一鋪、月林和尚體道銘、賜對十段錦を寄贈す、同年龜山上皇の勅召により、山城勝林寺に住す、上皇引見し宗門を問ひたまひ、深く歸依したまひ、禪林寺を開きたまふ、永仁三年相國師繼亦深く崇信し、別業を捐てゝ妙光寺を開けり、幾くもなく由良に歸り、隱棲せり、再び召されて京に上る、後宇多上皇嵯峨離宮に召し禪道を問ひたまふ、後由良に歸住し、永仁六年十月十三日に寂す、壽九十二、法臘七十四、龜山上皇勅諡法燈禪師を賜ふ、後醍醐天皇重ねて勅諡法燈圓明國師を賜ふ、（法燈國師年譜、高野春秋、本朝高僧傳）

〔考〕世に普化宗の祖として覺心を推す、心常に普化禪師の風を慕ひ、尺八を吹く、弟子に靳詮古山禪師あり、其傳を得て眞虛靈、霧海箎鈴慕、虛空鈴慕の三曲を吹奏し、妙を極む云云、然れども其實疑はし、

カクシン　覺信　一七二七／一七八一（法相宗）大和興福寺の學僧なり、覺信は關白藤原師實の子なり、幼にして興福寺に入り、賴信僧正に從ひ剃髮受具し、法相を習ひ、早く大義に通す、寛治年中一乘院に住し、康和二年興福寺に移つる、保安元年大僧正に任す、法相の徒行基菩薩天平十七年此位に叙してより三百八十年を經て、而して今師之に預るなり、二年二月病に罹り、僧綱並に寺務を辭し、五月八日寂す、壽五十五、（本朝高僧傳）

カクシン　覺信　一九七二／二〇四一〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、覺信は忠讃の子なり、乘伊に師事し、元德三年入壇し、永和三年亦此法を覺基に授く、永德元年九月五日寂す、壽七十、（三井續燈記）

カクシン　覺信（……）〔眞宗〕祖親鸞上人の弟子なり、覺信俗名は但馬太郎といふ、祖師の常隨弟子となる、某年寂す、（本願寺通紀）

カクシン　覺信（一八八八）〔眞宗〕甲斐万福寺の廿三代なり、　覺信字は源誓といひ、俗名は左京朝辰、俗姓は源氏よ稱す、賴朝の外孫なり、四十二歲出家して內外の學を講し、天台を信じ、甲斐山梨郡等力山万福寺を主として二十三代となる、安貞二年八月中旬親鸞上人東化し、万福寺に宿す、師乃ち親鸞に就きて出離の要を問ひ、弟子となる、其終るところを知らず、（本願寺通紀）

カクシン　覺眞（……）〔眞言宗〕山城仁和寺大教院の內供奉なり、　覺眞は參議良基の子なり、大內記を譔す、時人呼ひて大內記供奉と稱す、（傳燈廣錄）

カクシン　覺深　二二四八／二三〇八〔眞言宗〕山城仁和寺の二十一代なり、　覺深は後陽成天皇長子、母は上相親綱の女なり、文祿三年四月廿九日宣して親王となり、甫めて七歲諱を良仁に賜ふ、慶長六年三月廿八日得度す、時に年十四なり、十五年九月廿五日眞光南何殿に登り、晋海僧正に傳法灌頂を受け十九年七月七日直に一品に叙す、寛永十一年七月廿四日仁和寺を今の地に移し、殿堂を新創し、正保三年十月十一日落慶供養す、慶安元年閏正月廿一日寂す、壽六十一、稱して後南御室といふ、法を受くる者一人あり、信遍といふ、（傳燈廣錄）

カクジン　覺尋　一六七二／一七四一〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、

覺尋は藤原忠經の子、出家の後、明快、延胤、皇慶、頼秀、寛仁の諸師に師事して、顯密二教を學び、後天台座主に任す、承保四年二月二十六日法勝寺供養の導師となる、永保元年十一月寂す、壽七十、(諸門跡譜、天台座主記、三國名匠略記)

カクシンニ　覺信尼　一八八二／一九四一　〔眞宗〕開祖親鸞上人の第七子なり、覺信尼俗名は彌女(イヤニヨ)と呼び、右衛門督局といふ、親鸞の第七子、母は三善氏なり、貞應元年(一説十二月十八日)に生る幼にして堀河右大臣忠親に事へ、又久我大政大臣通光に事ふ、妙齡にして日野廣綱に嫁し二子を生む、長は光壽といひ、次は光玉尼と稱す、寛元三年廿四歳にして夫を喪ひ、再ひ小野宮禪念に嫁し、男を生む、男は後唯善と名く、禪念の沒後薙髪して覺信尼と稱す、是より先き寛元元年十二月廿一日親鸞年七十一の時刻むところの自像を以て覺信に附し、副ゆるに讓狀一首を以てす、親鸞の沒後遺弟を募化し、大谷の廟基を舊地の東數十歩に移し、殿堂を創造し、文永九年冬成る、靈骨を分取し祖像と共に之を安す、龜山伏見二天皇勅旨を下して勅願所となし久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜ふ、弘安四年四月十六日寂す壽六十、(一説に弘安十年十一月廿三日寂す壽五十四)京都丸山の安養寺に葬る、咸言一章承久元年清原良業の撰せる和論語に收む、(本願寺通紀)

〔考〕光闡坊反古裏に覺信尼の母は、慧信尼、即ち月輪禪定殿下の娘玉日と稱せし貴女なるよしあり、されは三善氏といふも、實は關白九條兼實の女なり、慧信尼の傳を參照すへし、

カクジユ　覺樹　一七四四／一七九九　〔三論宗〕大和東南院の學僧なり、覺樹は右大臣源顯房の子、幼にして儒を學ひ、長して梵經を讀む、東大寺慶信僧都に從ひ、三論を承け、餘教を綜ふ、天永元年維摩會の講堂に登り、權少僧都に任す、大治年中東南院に住す、宋の賜紫崇梵大師書簡並に佛舍利八十粒を寄贈して法信を結ふ保延五年二月十四日寂す、壽五十六、法弟十一人、就中寛信、珍海、重譽、慧珍、等最も顯はる、(本朝高僧傳)

カクジユ　覺樹　シユートー周等を見よ、

カクジユイン　覺樹院　カクオー覺應を見よ、

カクシユー　覺洲　二四一六／……　〔華嚴宗〕山城華嚴寺の學僧なり、覺洲は和泉堺の人、初め中村宗玄と云ふ、出家して鳳潭に師事し、法相の學に達し、成唯識論の書入をなす、世に鳩の書入と云ふ、自ら鳩と號したるに由る、蓋し覺洲反切音なり、寶暦六年五月廿六日寂す、著作唯識東海傳十卷、白虎入轉聲二卷、釋迦佛像圖記 天文地理說各一卷あり、

カクシユー　覺秀（三一〇二）〔曹洞宗〕奥州天澤寺開山なり、覺秀は字は榮峰と稱し加賀の金剛寺に於て、明林宗哲に參し、開悟す、嘉吉二年六月二十四日入室し、衣法を付せられ、總持寺に出世し、佛陀寺に遷る、退いて奥州に遊び、田村莊伊勢澤に地を相し、天澤寺を開く、法嗣以心傳あり、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

カクジユー　覺什（……）〔眞言宗〕伊勢敎王山第三代なり、覺什は因幡律師といふ、法を濟甚に受け、敎山王第三世となる、詔して律師に任し、伊勢三ヶ庄內を敎王山に寄す、付法の弟子眞祐眞海道勝あり、(傳燈廣錄)

カクシユン　覺俊　一七二七／一七八六　〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、覺俊は中納言資綱の子、齊舜律師に從ひて顯密を承け、

天永三年二會の講師を經て、永久元年最勝會の講首に任す、元永二年律師となり、大治元年三月二十九日寂す、壽六十、著作婆婆論鈔數卷あり、(本朝高僧傳)

カクシユンボー 覺舜房 インショー胤淸を見よ

カクジヨ 覺助 一七二三…… 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、覺助は京都の人、藤原道雅の子なり、幼にして園城寺に入り行圓心譽二師に從ひて秘密敎を受く、天喜三年大納言藤原經長の妻疾あり師これを祈りて驗あり、康平六年十一月十一日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

カクジヨ 覺助 一九〇九 一九九六 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、覺助は後嵯峨院の子、弘長二年十月五日年十三歳にして剃髮し十三日二品に叙せられ、靜忠仙朝の二師に受學す、五年園城寺の長吏に補し、十年大阿闍梨となる、年四十一初めて傳法灌頂大阿闍梨となり、延元元年九月十七日寂す壽八十八、(三井續灯記)

カクジヨ 覺助 クワンリユー寬隆を見よ、

カクジヨ 覺恕 クワンリユー寬隆を見よ、

カクシヨー 覺照 (……) 〔淨土宗〕三河眞福寺の僧なり、覺照字は眞忠と云ふ、本天台宗に入り、後長樂智慶に從ひ、又記主禪師を師として淨土敎を學び、三河眞福寺に住す、寂年壽缺く、門下に如律、淨如、圓道、律等あり、(淨土總系譜、鎭流祖傳)

カクシヨー 覺證 二一三五…… 〔曹洞宗〕信濃巖松院の開山なり、覺證字は明室、不琢玄珪の法を嗣ぎ遠江雲林寺に住す、檀越の請に應して信州高井郡に巖松院を開く、文明七年五月六日寂す、壽缺く、(洞上聯燈錄)

カクシヨー 覺性 一七八九 一八二九 〔眞言宗〕京都仁和寺の總法務なり、覺性は鳥羽天皇の第五子、母は皇后藤原璋子、大治四年七月二十日に生る、七歳にして仁和寺に入り、覺法親王を師とし、十二歳下髮、東大寺の戒壇に登りて具足戒を受く、久安元年法金剛院に住し三年四月一身阿闍梨に任す、是月十日覺法親王に就きて灌頂法を受け、五年春仁和圓宗二寺の檢校に補す、明年夏法勝寺の檢校となり、仁平三年仁和寺を主とる、保元の初め尊勝、圓勝、成勝等諸寺の檢校に任す、三年二月二十日蝕を祈り三品に賞叙す、長寬元年國家鎭護を祈り、賞を任覺に讓り、法印に恩叙す、二年正月天王寺の檢校に補す、秋天變あり、詔を奉して之を祈り、賞を仁證に讓りて權律師に任す、仁安一年總法務に任す、此職師に始まるなり、後京都紫金臺寺に居る、時人紫金臺の御室といふ、嘉應元年十二月十一日寂す、壽四十一、著作野月新鈔あり、(諸門跡譜、仁和門跡傳、本朝高僧傳)

カクシヨー 覺性 ニチジツ日實を見よ、

カクシヨーイン 覺性院 ニチジツ日實を見よ、

カクシヨーイン 覺性院 ニチジヨー日淨を見よ、

カクシヨー 覺勝 (一三一三) 〔……〕入唐學問僧なり、覺勝は白雉四年五月に遣唐大使小山上吉士長丹副使小乙上吉士駒に隨ひて唐に航し、後同地に寂す、(日本書紀)

カクジヨー 覺乘 一八八一 一九五九 〔天台宗〕遠江園城寺の學僧なり、覺乘俗姓は中原氏、父は親元、承久三年七月六日生る、嘉禎二年出家して覺仁、明弁、圓順の諸師に學ひ、仁治三年

灌頂位に入り、弘安五年傳法大阿闍梨位に登り、永仁二年十二月勅して僧正となり、正安元年正月七日寂す壽七十九、著作二百卷抄あり、（三井續灯記）

カクジヨー 覺成 一七八六 一八五八 〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、覺成は藤原忠雅の子なり、仁和寺覺法親王を師として密敎を受け、寶壽院に住す、長寛二年閏十月法眼に叙し、承安二年法印に轉す、治承二年權大僧都となり、四年十月東寺の長者に加任す、承和元年六月詔を奉して神泉苑に雨を禱り驗あり、文治五年權僧正に任し、建久三年正に轉す、七年七月東大寺務に法し、住持三年、大に寺規を整ふ、九年三月大僧正に昇り、十月二十一日寂す、壽七十三、（本朝高僧傳）

カクジヨーイン 覺成院 ニチネン日念を見よ、

カクジヨー 覺盛 一八五四 一九〇九 〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、覺盛字は學律、後窺情と號し、大和服部の人なり、少にして興福寺の金善法師に從ひて剃髮受學し、凡百の經疏眼を過くれは能く暗し、唯識倶舍日ならすして記し、特に禪坐を好む、建暦二年京都高山寺の明慧上人に就きて華嚴を學ひ、重重法界の旨を究め、西大寺の戒如和尚に隨ひて表無表章梵網古迹を聽き、戒法を受け、律部を質す、後に常喜院に住し、專ら戒律を以て任とす、師當時の僧侶皆學を貴み、戒律を持せさるを嘆き、嘉禎二年秋、叡尊、圓晴、有嚴等と共に道場を嚴飾し、各自好相を得、九月一日大乘三聚通受の法に依りて各自誓して近事戒を受け、次の日沙彌戒を納る、三日に圓晴、有嚴登具し、四日師及ひ叡尊進具す、師時に年四十三なり、四方擧りて之を排難すれとも、確として初志を挫かす、興福寺の松院に住して戒律を唱へ大に通別を開く、道俗此に於てか靡然として化に嚮ひ、生馬寺の眞遍、木幡寺の眞空等、其道化を助く、曆仁元年十月叡尊西大寺に結界し、師を請して羯磨を秉らしめ、四分布薩を行はしむ、仁治年中四條天皇師の戒德を聞き、詔して宮中に召し、菩薩の大戒を受け給ふ、此時皇妃公卿等同しく受戒する者多し、寛元の初年二月旨を奉して招提寺に住す、三年九月白四羯磨を以て具足戒を行はんため、諸徒を率ゐて和泉の家原寺に到る、既にして招提寺に歸へり戒疏を布演し、三大部を講す、時人皆師の德を稱して鑑眞の再生といふ、建長元年五月十九日新淨衣を着し、僧伽梨を披き、左手に香爐を執り、右手を舒へて大乘文を唱へて寂す、壽五十六、門人塔を同寺に建つ、門下竹林寺の良遍、眞言院の聖守、戒壇院の圓照、三輪寺の大乘心木幡寺の眞空、橘寺の慶雲、大安寺の禪慧、白毫寺の思蓮、極樂寺の慈濟、大智院の禪忍、招提寺の證玄等、一時の名德なり、著作甚た多く梵網經古迹二十卷、表無表章文集七卷、菩薩戒通別二受鈔、菩薩戒遺疑鈔、各一卷、其他皆世に傳はらず後醍醐天皇勅して大悲菩薩と諡す（本朝高僧傳、律苑僧傳）

カクセー 覺晴 （一七七四）〔天台宗〕大和興福寺の學僧なり、覺晴は左大臣宗忠の子、法相を淵秀に受け、永久二年維摩會講師となり唐院に住して大僧都に任し、興福寺に移る、寂年缺く、（本朝高僧傳）

カクセン 覺仙 リヨーサ良作を見よ、

カクゼン 覺善（……）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、覺善は久しく明善法師に師事して中院流の祕訣を承け、引接

院を開きて大に事相を唱ふ世に引接院流といふ(本朝高僧傳)

カクゼン 覺禪 (……) 〔眞言宗〕山城嵯峨清凉寺の阿闍梨なり、覺禪字は金胎、嵯峨阿闍梨と稱す京都の人なり、後醍醐山座主、覺源僧正を禮して傳法灌頂阿闍梨位を受け、後房悔の脈を嗣きて密に通じ、畫を善くす、覺禪抄百卷を作る其寂年缺く蓋し廣澤の覺禪とは同名異人なり(續傳燈廣錄)

カクゼン 覺禪 (一八四二) 〔眞言宗〕紀伊高野山小野寺の僧なり、覺禪字は金胎、少將法印といふ、北院御室成海の弟子眞光院覺瑜の兄なり、初め覺尋の法を受け、後尋海に就きて傳法灌頂を受く、諸尊の儀軌經籍を涉獵し、彰圖像註異說一百二十卷を作り覺禪抄と稱す、一に百卷鈔と稱す八帙あり諸佛部十二卷佛頂部七卷諸經部十五卷菩薩部十五卷觀音部十五卷明王部十五卷天等部十九卷雜集十三なり寂年缺く、付法の弟子一人經瑜あり、(傳燈廣錄、諸宗章疏錄)

〔考〕覺禪は壽永の頃の人なり諸宗章疏錄に覺禪元は興然の資後勝賢の資となるとあり未た詳ならす、

カクゼンボー 覺禪房 インエー胤榮を見よ

カクゾー 覺增 (二〇五〇) 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、覺增は後光嚴院の子、覺譽和尙に從ひて天台倶舍を學習し、曾て眞言血脉抄一卷を作る明德元年十一月十九日寂す、壽缺く(三井續灯記)

カクソン 覺尊 (……) 〔眞言宗〕近江延曆寺の僧なり、覺尊は比叡山に居り、初め稱念を業とし、後止觀を修す、卿庶歸依するもの多く、佛事を修する每に心の欲す所に從ふ、鴨河の堤壞る、師之を築防し、洛民皆擧りて之を助く、又天王寺に舍利を供養し、隨喜布施するもの城邑を傾く、寂年及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

カクソン 覺尊 コークワン公寬を見よ

カクタン 覺潭 (二四〇八 二四七五) 〔融通念佛宗〕河內大ヶ塚大念寺の第十八代なり、覺潭、字は東英、號は無相と云ふ、大和平群郡の人なり、出家して眞言宗なる豐山に學ひ、後、歷遊して江戶に至り、淨土宗なる增上寺會下に遊ふ、學徒師を要して敎義を論議す、再三問答して師答ふる能はす、退いて大源山に歸らんとし、江戶を發し、船、大坂川口に着するに方り、答辯を得、直に再び江戶に至り、增上寺會下の學徒に面し、答辯をなし屈服したり、寬政享和の頃、大源山講主となり、眞光院と稱す、一生五回大藏經を通覽せり文化の頃、豐山の智道全國諸宗の學者番附を製し、其中に西二十三ヶ國大關無相東英と記したりと云ふ、文化十二年十月寂す、壽六十八(大源山記錄)

カクチン 覺珍尼 (……) 〔眞言宗〕京都聖大寺の尼なり覺珍尼は後柏原天皇の女にして豐樂門院の生む所なり尼となりて大聖寺に住す(野史)

カクチユー 覺忠 (……) 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、覺忠は藤原忠通の子增智の法弟なり、千光院に住し、聖護院を兼ね、相次きて三井の長史、天台座主に歷補し、衆の令範となる、承元十年(十年は誤)六月寂す壽六十(本朝高僧傳)

カクチヨー 覺朝 (二四九四) 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、覺朝は其師承鄉貫詳からず、建保二年二月十五日別當に任し、同年四月十五日拜堂す、同五年三月二十八日權僧

正に任し、後長吏となる、寂年壽缺く、（三井續灯記）

カクチヨー 覺澄（一九〇九）〔法相宗〕大和知足院の學僧なり、覺澄は號を性舜と云ふ、幼にして奈良の諸寺に遍遊して法相を習貫し、博く法華玄賛上生經等に通ず、延長中知足院に住し、一夏に請に應して玄賛を詳説す、圓照、證玄等一時の碩德皆席に列なる、これより數々所々に席を開き、某年寂す壽缺く、（本朝高僧傳）

カクチヨー 覺超（一六八八）〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、覺超は攝津住吉有武の子、一に和泉の人と云ふ、巨勢氏なりとも云ふ、十三歲父母を喪ひ、播摩の府主に養はる、繼母の惡むところとなり、妹を率ゐて室津に走る、時に伊豫の太守妹を携へて國に下り、京都の商人師を得て京都に上り、其夜鳥羽に宿す、師亡父母の爲めに通宵法華經を誦す、會々慧心僧都檀越の請を受けて鳥羽にあり、師の誦經を聞き、商人に乞ひ、伴ひて比叡山に皈る、天元中試業得度して天台敎を學び、慶圓に秘密灌頂を受く、性隱逸を欲し、兜率院に居り、後横川楞嚴院に移る、師嘗て三誓を立つ、一に曰く、不踰閾塵、二に曰く、不關世事、三に曰く、臨終正念と、後皇后の難産を祈り、僧都に任せらる、尋て京都因幡寺落慶供養の導師となり、席に於て妹に逢ふ、長元某年正月寂す、壽缺く、師生前著作を樂みとし、多くの著作なり、胎藏三密鈔、金剛界三密鈔、各五卷、東曼茶羅、胎金三密鈔料簡、各三卷、成身文集、西曼茶羅、北嶺灌頂見聞集、護摩述記、護摩見聞集、各二卷、四顚一心三諦觀法、實相觀門、實相義問答、圓融佛意集、忌心中記、往生極樂問答、一念頌決、私用心記、菩提集、彌陀各義讃、仁王護國鈔、東曼茶羅別卷、胎藏界生起、金剛界生起、胎金三密鈔別卷、成身略記、五相成身私記、寺家灌頂記、離作業灌頂、護摩調度、護摩略鈔、護摩次第、許可印眞言、護摩集、見聞畧記、月輪觀、各一卷、六即義私記、三親義私記、即心成佛義、觀法用心、若干卷等これなり、（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄、）

カクドー 覺道（二一六〇／二一八七）〔眞言宗〕京都仁和寺の第十九代なり、覺道は後柏原天皇第二子、母は左中將正三位藤原雅行の女なり、永正七年十二月二十六日得度し、甫めて十一歲、八年三月廿六日宣して親王となりて毗盧を學び、十三年十二月十七日法金剛院觀音殿に登り、尊海に傳法灌頂を受けて總法務に居る、十六年正月廿三日直に特進に敘し、大永七年十月十三日寂す、壽二十八、後禪阿院御室といふ、（傳燈廣錄）

カクドー 覺道　カクズイ覺瑞を見よ、

カクドン 覺曇（二〇六三）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、覺曇字は季芳、其鄉貫詳かならず、久しく岐陽秀に參して法を嗣ぎ、應永十年明に入る、初め岐陽起信論生滅の科圖を作る、師これを携へて僧錄司遽菴佑の跋語を乞ひ、明に留まりて皈らず、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

カクニン 覺仁（……）〔眞言宗〕近江石山寺の座主なり、覺仁は京都の人、內大臣能長の子、權律師に任し、座主定賢を禮して傳法灌頂を受けて心印を得、石山寺の座主となる、（續傳燈廣錄）

カクニン 覺仁（……）〔眞言宗〕鎌倉無量壽院の長老なり、覺仁は能禪僧都の法を嗣き、鎌倉正統となる、詳傳な

し、（傳燈廣錄）

カクニン　覺任　一七四二 一八〇八　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、覺任は京都の人、藤原家能の子、大教院に入りて覺意に受業す、後成就院寛助に從ひて兩部の密灌祕法を傳へ、保延の初め威德院に住し、天養元年冬權少僧に任す、久安四年夏東寺の三長者に加はる、在世間軌修すること七十二壇共に應効を得たり、同年二月一日寂す、壽六十七（本朝高僧傳）

カクニュー　覺入（……）〔淨土宗西山派〕山城東山の學僧なり、　覺入生國俗姓詳ならず、東山の證入に師事して淨土の宗義を受け、弘通を事とす、示寂の年時缺く、門下見性の新義を立て、盛に弘演す、（淨土傳燈錄）

カクニョ　覺如（一九七二）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、覺如は高野山八傑の一人にして、櫻池院慧深の室に入りて灌頂法を稟け、三藏院に住して執事職を掌る、正和二年後宇多法皇高野山に幸す、師弘法大師の影前に諷經をなし、優賞を賜はる、後成就寺に移り、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

カクニョ　覺如（一九〇七）〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、　覺如字は成願と云ふ、幼より興正に師事して業を學び、具足戒を受く、寛元年中忍性律師戒疏の不備を慨き、支那に往てこれを需めんとし、師を勸めて往かしむ、興正大に喜び、定舜をして師に伴はしむ、師元に滯留すること三年、多く律部經論を齎し、寶治二年西大寺に皈る、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

カクニョ　覺如（一五五八）〔眞言宗〕丹州玉泉寺開山なり、覺如其俗姓生國詳ならす、久しく奈良東大寺に居り、三藏に博通し、密教に詳し、昌泰元年丹の道山に登り、安居持律し日に法華經を課す、道俗多く集る、幾ならすして殿堂成り、玉泉寺と名く、寂年及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

カクニョ　覺如　シューショー宗昭を見よ、

カク子ン　覺念（一七〇六）〔天台宗〕比叡山の僧なり、覺念は右大臣藤原俊家の子にして、延暦寺座主明快の族兄なり、　幼より比叡山に登り、顯密を兼ね究む、初め東塔院に住し、後大原に庵居し、檀施を受けす、專ら西方極樂を願求す、薪二束を荷ひ、賃を得て齋に充つ、毎日法華經一部を暗誦し、阿彌陀供を勸修す、餘暇あるときは友人を招きて碁を圍む、明快僧綱に任せらるゝを聞きて大息して曰く、過去迦葉佛の會に、同時に發心するもの三人、生死に沈淪して未だ出離を得ず、其一人は明快なり、其一人は誤りて佛物を費す、法成寺の覺照なり、此二人如何にして度すべき、悲哉、其一人は戒俊なれども乘急たり、貧道即ち是なり、幸に今世に出づ、願くば共に菩提を證せむと、永承年中に至り寂す、（本朝高僧傳）

カク子ン　覺念　カクギョー覺行を見よ、

カク子ン　覺念　シンクー眞空を見よ、

カク子ン　覺然　シンウ深有を見よ、

カクバン　覺鑁　一七五五 一八〇三　〔眞言宗〕新義眞言宗の開祖なり覺鑁は正覺坊と稱す、肥前藤津の人なり俗姓は平氏にして桓武天皇五世の孫、平將門が裔なり、父の名は伊佐平次兼元、母は橘氏の女なり、師は嘉保二年に生る、八歲の時一日兄に問ひて曰く、我か父よりも貴きものありや、と、兄曰くあり、是れ領主なり、又問ふ領主に踰ゆるものありや、曰く、天子

なり、又問ふ、天子に勝るものありや、曰く神道あり、又問ふ神道に過くるものありや、曰く佛あり、佛は三界の慈父なり、又問ふ佛に過くるものありや、曰くこれなし、故に無上世尊と云ふなり、乃ち請ひて佛道を聞く、兄師に敎へて曰く、佛に法報恩の三身あり、其敎に顯密の二敎あり、而して三身の中法身を最となし、二敎の內密乘を奧とす、三身二敎は幼兒の知るところに非すと、此に於て再ひ問ひて曰く、世に佛位に昇るものありや、曰く方今剃染の士にして勤修精進する者は必す佛位に登らん、又問ふ其人何處にかある、曰く紀伊高野山の定尊阿闍梨は其人なりと、師是よりして入道の志あり、長治元年父を喪ふ、嘉承二年仁和寺成就院の寬助僧正其徒の慶照法師に命して法器たるに堪ゆべき兒童を求めしむ、法師藤津の山寺に寓し、師の奇骨あるを聽きて之を率ゐて仁和寺に皈る、寬助僧正大に器重す師其意を設けて圓林法師を世諦の師とし、定尊律師を出世諦の師とす、天仁元年、師齡十四の時、圓林に携へられて奈良に往き、興福寺の慧曉僧都に唯識俱舍を學ひ、又東大寺覺樹院の右大臣僧都に華嚴を學ひ、東南院の室に入りて三論の宗敎を受く、天永元年十六歲にて仁和寺に皈る、此冬十月成就院の寬助僧正に隨ひて剃染し、沙彌十戒を受く、此より漸次に十八契印、兩部の大法、護摩の祕軌、及ひ諸尊の三昧を受け、脩習精勤すること數年なり、永久元年再ひ奈良に遊ひて益々性相權實の奧義を探る、二年東大寺の戒壇にて具足戒を受く、此年十二月大和路を經て高野山に登り、大晦夜に初めて大塔の下に到り、阿波上人青蓮の迎接を受けて往生院の山房に入る、三年山中の最禪院に明寂阿闍梨に謁し、名を受く、明寂は師に祕印密言を授け、師は亦明寂に纖旨妙解を與ふ、互に相喜ひ、最禪院の別房に寓す、幾ならずして最禪院火災に遭ひしかば、西谷の大蓮房に移つる、同四年より元永元年八月まで、求聞持の法を脩すること八度に及ひ、明寂阿闍梨常に之を助成す、是年八大願を立つ、其第八に曰く、勵勤して堪ゆるに隨ひ、眞言宗の章疏を撰集し、密敎の壽命を續き、行者の心眼を開くへしと、此事終に大成するを得たり、又千日の護摩を修し、其中間に言談を絕す、世に所謂千日無言行なり、此時二偈を壁に題す、世に之を障子の文と稱す、保安二年二十七歲の九月廿一日、仁和寺成就院の道場に於て法務大僧正寬助より三摩耶戒を受け、兩部の灌頂に沐す、其敎授師は北院の兼覺、唱導は最嚴、護摩師は保壽院の永嚴僧都なり、十月醍醐山の理性坊に往き、賢覺僧都に謁し、五部の灌頂を受け、小野一流の祕訣を究む。師先に修せし求聞持法の驗なきを慨し、賢覺

覺鑁上人

カク（覺）ハ

に就きて勝覺に傳の法を受けて、遂に悉地を得たり、天治二年孝養集一卷を作りて母氏に遣くり、往生極樂の要を諭す、大治元年永尊阿闍梨の勸めによりて、志を起し、傳法院を建て傳法會を設けて密敎を弘通せんと欲す、根來山を相して寺を創めんと欲し、先つ石手莊に日本國の大小の神明一千餘社を請して一祠を建て鎭護となし、傍に僧房を搆へて神宮寺と謂ふ、是れ根來寺の初なり、五年鳥羽上皇勅して神宮寺を御願寺となす、不日にして傳法院成就し、丈六の尊勝佛頂の像を安置し、僧侶三十六人を置く、小傳法院と號するもの是なり、天承元年請して大傳法院を建立し、十月十七日落成す、即ち曼荼羅供養を設く、導師は西院大僧正信證なり、上皇臨幸し同日密嚴院を落慶し、夜に入りて始めて傳法大會を行ふ、密嚴院は師の居所なり、別に三部及ひ九社の祠廟佛閣僧堂を立て、輪奐精嚴なり、朝廷莊園若干を大傳法院に賜ひ、傳法大會の供に充つ、又勅して御輿丁六口を賜ふ、尋いて又遠江初倉の莊を賜ふ、長承二年自ら謂へらく、法の源は惟た一なれとも、支流分る、苟も集て大成せずは、安んぞ法源の深廣を見んや、然れとも密敎は口授を貴ふ、故に多く名師に隨ひて稟承したりしかど、猶ほ受けさるものありと、白河上皇に奏請し、其宣命を得て、三井の覺猷、醍醐寺の定海僧正、勸修寺の寛信僧都、及ひ華藏院の聖慧親王に就きて、皆悉く其蘊を受く、親王の旨により、小野の官庫内の密軌を縱覽す、尋いて上皇の命を蒙りて、鳥羽の寶藏を閲することを得、弘法大師自畫の等身影像善女龍王の畫像を賜ふ、歸山して之を鎭護の寺寶とす、三年上皇の命を蒙り、大傳法院座主にして金剛峯寺の座主を兼ぬ、保延元年二月金剛峯寺及ひ大傳法院の座主職を持明院の眞譽阿闍梨に付し、自ら三摩地に修して自證の悉地を得んと欲し、密嚴院を退居す、以後數年門を閉ちて人に接せす、只た淨業を事とす、此に於てか金剛峰寺の衆徒疑を起して曰く、是れ師示寂せるものにして、徒弟之を隱匿して利を恣にせんとするものなるへしと因て保延六年上皇に訴へて其非を攻め、密嚴院を襲ひしも師健在せるを以て暴徒退くといふ、永治元年根來山の圓持の道場に求聞持の法を修すること一百日大に靈驗あり、康治元年師常に圓明寺の西院にありて北向面壁して阿字觀に入り、堀内坊に坐して月輪觀に入る、池上月輪を現せしかば、是より堀坊内を月輪院と號す、康治二年七月廿八日に忽ち風疾に染み、十二月十二日圓明寺の西廂にありて結跏趺坐し、袖中に祕印を結ひ、恬然として寂す、壽四十九、越えて二十一日遺骸を闍維す、元祿三年十二月勅して興敎大師の謚を賜ふ、著作、密嚴諸祕釋十卷、內譯、阿彌陀祕釋、阿字祕釋、阿字觀、吒洛字成就相應義、法華經祕釋、（以上第一卷、）不動講祕式、不動講式、愛染講式、毘沙門天講式、地藏講式、舍利供養式、日率都婆式、（以上第二卷、）障子文、眞言密行問答、祕密莊嚴不二義章、十九執金剛祕釋、一期大要祕密集、（以上第三卷）、釋論指事、祕鍵略註、（以上第四卷）、五大願祕釋、大願文、求聞持表白、金剛弟子、釋論愚案鈔、（以上第五卷）、五輪九字明祕釋、（以上第六卷）、寶劍、虛空藏寶鍵、自受法樂讃、（以上第七卷）、虛心合掌義釋、發露懺悔文、三界唯心釋、五十万遍表白、以呂波釋、祕密莊嚴兩部一心頌、一心目覚頌、發菩提心論祕釋、（以上

八卷）、月輪觀頌、心月輪祕釋、密嚴淨土略觀、（以上第九卷）、無相觀頌、八祖忌日頌、入法界觀同入法界觀、血脈、摩多躰文、五言略頌、即身成佛義章、法身說法頌、顯密不同頌、月輪觀頌、十八道、末代眞言行者用心、（以上第十卷）、密嚴遺敎錄四卷　內譯釋菩提心義、大日眞言開題、初心行者要文、顯密不同章、吒洛字成就相應義、鑁字義、鑁字義鈔、鑁阿界祕事、大日略觀、阿字觀、（以上第一卷）、請授法書簡、助師戒佛頌、五大明王功能、眞言三密修行問答、五字略頌、祕密雜章、密嚴院十德、密嚴院瑞夢、眞言宗義、神策卦、齋食略觀、謝德成佛頌、阿字月輪觀、覺鑁名字釋、兩部曼荼羅功德略鈔、（以上第二卷）、大日遍照釋、大師十號、精發頌、阿字觀頌、祕密曼荼羅十住心略頌、鑁字密觀、入唐諸師祕經總錄、理趣經種字釋、八千枚祕釋、祕密莊嚴傳法灌頂一異義、自身觀鐵塔、孝養父母觀念、（以上第三卷）、愛染王講式、歡喜天講式、葬儀風誦文、（以上第四卷）、父母孝養集三卷、淨菩提心私記、日月輪祕觀、大日經儀軌集、讓行不動頌、阿彌陀九字釋、三品阿彌陀祕釋、不動祕印、不動集釋、深法口決集、結願作法、本不生義、阿字略注求聞持次第、極大陀羅尼祕密法、各一卷、兩界沙汰、兩界、初行表白結願作法各二帖、十八道沙汰、兩界義注祕釋、大傳法供養願文、小傳法院供養願文、各一帖、大裏進狀、雜賀莊四至弁官符申請狀、進座主御房消息、神宮寺供養日遺勅使消息灌頂道具請文、各一通、高野奏狀四本、其他橫尾浴室修理勸進帳、岩手莊建立奏狀、大傳法院建立奏狀、等あり、（結網集、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

カクベン　覺辨　……一八五八　〔天台宗〕加賀往生院の學僧なり、覺辨は夙に比叡山に登り、天台の敎を研き、加賀山田に往生院を開き第一世となる、師毎年春分に國內の名僧を招き、五部の大乘經の要文を擧けて輪次に講說せしめ、四衆に結緣す、華嚴より始めて涅槃に至り終ふ、之を五時講といふなり、建久九年二月講を修する時、師十五日涅槃を講し、畢りて永眠す、壽缺く、（本朝高僧傳）

カクホー　覺法　一七五一―一八一三　〔眞言宗〕京都仁和寺第四代なり、覺法初の名は行眞、勝蓮華寺師子王宮といふ、白河天皇の第四子、母は右大臣源影房の女、郁芳門院賢子皇后なり、寛治五年師生る、之を仁和寺覺行親王に賜ふ、覺行は師の兄なり、長治元年甫めて十四歲落髮し、二年覺行寂するに及ひ、詔を受けて成就院寛助に就き、金剛乘を習ふ、天仁二年四月二十九日寛助に詔して觀音院殿堂を啓き、師に秘密佛戒を授けしめ師傳法灌頂の職位を受く、時に十九歲なり、此年上皇曼荼羅堂を建て、師をして慶讃せしむ、天永元年命により鳥羽僧正範俊の法脉を繼く、範俊曼荼羅寺を以て師に付す、三年十二月二十七日宣して親王となる、後屢々諸會の導師に任せられ、四年上皇崩するや、師哀悼して高野山に光臺院に登りて禪居服喪す、これより師を高野御室といふ、後五年信賢門院法金剛院を建て、師をして落慶供養せしむ、長承四年三月十七日、鳥羽仙宮に仁王大法を修す、保延三年十月十五日鳥羽安樂壽院を落慶供養し、牛車の宣を賜ふ、五年五月藤原皇后得子の產を祈りて孔雀王法を修し効驗あり、詔して仁和寺觀音院を御願寺となし、東寺灌頂壇に準して每歲大會を營ましむ、小阿闍梨を僧綱に任し、其法德を彰はす、乃ち之より永く同院

より東寺灌頂壇の阿闍梨を勤むへき旨を命せらる、七年秋上皇の病を祈りて孔雀王法を修し効驗あり、永治二年三月鳥羽上皇師に就きて奈良の戒壇に受戒す、天養元年八月二十三日天皇不豫の際、孔雀王法を修し奏功によりて寛遍和尙を法眼に叙す、久安二年に再び上皇の病を癒し、三年正月十八日彗星を攘却す、仁平三年十二月病に臥し、六日寂す、壽六十三、付法弟子覺性、覺成、寛暫、良實、寛敏、覺耀、寛一、寛繼、寛宗、禪寛、兼助、鳥羽上皇、仁證あり、（仁和寺門跡傳、傳燈廣錄）

カクマン　覺卍　二〇一七 二〇九七　〔曹洞宗〕薩摩寶福寺の開山なり、覺卍號は字堂、俗姓藤原氏、薩摩の人なり、母孕む時胸に卍字相を現す、因て名とす、父母南禪寺椿庭壽に附す、二十餘年服侍し、參究を事とす、南都に回遊して性相を學び、後南禪寺に歸り、大衆の爲めに楞嚴經を講す、壽禪師示寂の後國に歸へり、秦鑽菴を營み、閑棲す、樋脇村に玄豐寺を開き遷り住す、北越に竹究嚴の法化盛なるを聞き訪問す、嚴禪師華嚴十玄談を講ず、覺卍偈を呈し感嘆せらる、幾くもなく嚴禪師の衣拂を付せられて辭し去り、薩摩熊嶽に登り苦修錬行三年に亘る、道俗歸依し山中に寶福寺を創立し、師の道場とす、國主島津久豐の嗣子忠國其德風を慕ひ、田園を寄附せむとするも師受けず、杜多を事とせり、山を出てさること十六年なり、永享九年九月七日寂す、壽八十一（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

カクミヨー　覺明　（一八三七）〔眞宗〕信濃康樂寺の開山なり、覺明は後改めて信賀と云ひ、大夫坊と稱す、木曾義仲の侍史なり、原と奈良興福寺の僧にして、治承年中園城寺以仁親王の令旨を奉して書を奈良に移して兵を徵す、時に師其選に膺つて返牒を裁す、其文中に清盛は平家の糟糠なりと云ふ句あり、後清盛之を聞きて大に怒り、捕へて殺さんとす、師懼れて亡げ去り、終に髮を束ねて義仲の臣となりしなり、義仲亡ひて後信濃に潛居す、時に親鸞上人北國を巡錫するに會し、其門に入りて弟子となり、白鳥康樂寺を開創して眞宗の道場となす、寂年壽缺く（本願寺通記）

カクミヨー　覺明　一九三一 二〇二一　〔臨濟宗〕出雲雲樹寺の開山なり、覺明號は孤峰と云ふ、俗姓は平氏奧州會津の人なり、七歲にして母を喪ひ、出家の志禁し難く、十七歲良範講師に就て剃髮し、比叡山に登り、具足戒を受け、天台敎を討習すること八年、性相の旨を究む、既にして宗門の事あるを知り、法燈國師に鷲峯に參すること三年玄旨に達し、出羽に了然明に參して禪を問ひ、雲巖寺高峰日、横嶽南浦明等に請益し、信濃に菴居す、應長元年海に航して元に入り、天目山中峯和尙に參し、尋で元翁信、古林茂、斷崖我、雲外岫等に見へ、天台山に抵りて無見覩に謁し、第一座に居す、護國寺に到り、佛眼の塔を拜し、歸朝して建長寺南浦に依り、版首に擧げられたれとも就かす、北に往て洞谷に瑩山瑾を訪ひ、菩薩の大戒を授けられ、命により出雲宇賀莊に往き雲樹寺を搆す、元弘の初後醍醐帝伯耆に幸し、師を行在所に召し、戒法衣盂を受け、特に國濟國師の號、及ひ御筆の天長雲樹興聖禪寺の額を賜ふ、貞和元年鷲峯の虛席を繼ぎ、其廢頽を興し、又衆請により妙光寺に移る、將軍足利尊氏伽藍を創めて師を延かんとし、三請すれとも肯んせず、夜竊かに逃れ去る、後村上帝先

朝の志を繼ぎ、深く佛乘を慕ひ、師を召して寵遇殊に渥く、皇后皇太后と共に衣盂戒法を受け、三光國師の號を加へ、金襴の伽梨を賜ひ、勅して和泉高石に大雄寺を建て、師を請して開山始祖となし、開堂の日帝親しく臨御せらる、師深く兩帝の恩遇を感し、大雄寺を以て終焉の地となし、康安元年五月疾に罹り、二十四日懇ろに門下を誡め、安祥にして寂す、壽九十一、臘七十五、帝訃を聞て哀悼に勝へず、香幣を賜ひ、百官に勅して葬に會せしむ、門人遺骨を分ちて寺の西隅妙光寺及出雲の雲樹寺に収めて塔を建つ、(續群二三五、本朝高僧傳)

カクミヨー 覺明　チョーサイ長西を見よ、

カクム 覺夢 ……二二九二 〔淨土宗〕遠江阿彌陀寺の開山なり、覺夢は號を鏡譽と云ふ、俗姓は戸次氏、豐後の人なり、傳察に師事して法を嗣ぎ、遠江成瀧阿彌陀寺を創む、寛永九年九月朔日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

カクユー 覺融 一九〇一 一九八五 〔淨土宗西山派〕京師禪林寺の第十九代なり、　覺融、字は行觀と云ふ、武藏の人なり、四條天皇仁治二年五月十八日に生る、西谷流の第二祖觀智の室に入り、二尊二教の玄旨を傳へ、廢傍助正三重の妙義を自得し、深く善導の釋義に通達す、仁和寺西谷光明寺第三代となる、中年東國に遊び、武藏鵜木郷の山中に入りて柴を結ひて廬と爲し、念佛誦經を事とす、一鉢數〻空し、樵夫等相競て供養し、道化四方に敷く、乃ち一寺を剏立して光明寺寳幢院と號す、後再ひ京師に上り、東山禪林寺第十九代となり、大に一派の宗義を顯揚す、正中二年五月五日寂す、壽八十五歲なり、著作觀經疏私記三十卷、同具疏私記十卷、選擇集私記五卷、觀經秘記十四卷、觀念法門秘要鈔三卷、無量壽經鈔、般舟讃鈔、往生禮讃鈔、法華讃鈔、大綱名目、童蒙指揮等あり、觀經疏私記は、善導の四帖の疏を注するものにして發明多し、後世鵜木御書と稱し、一派の宗義の指針となす、選擇集私記の後一半は弟子覺愍の補作するところなり、(十二祖畧賛、選擇集私記凡例)

カクユー 覺融 ……二四四八 〔新義眞言宗〕尾張天王坊の學僧なり、　覺融字は宏道尾張の人なり奈良の諸大寺に遊びて因明を學び後豐山に入りて盛に性相學を講す後世豐山性相學の鼻祖と稱せらる天明八年八月五日寂す壽缺く著作因明纂解講錄二卷あり(新義眞言宗史料)

カクユー 覺猷 一七一三 一八〇〇 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり覺猷は大納言源隆國の子なり、顯密の法を東北院覺圓大僧正に禀け、共に其蘊を盡くす、鳥羽上皇に召されて鳥羽の離宮に秘要を說き、寺を構へて之を賜ひ、優遇甚た至る、護持僧となり、尋きて僧正に任す、天治の末園城寺の長吏に補し、保延四年十月延暦寺の座主となる、三日の後之を辭す、蓋し山徒の瞋恚を得しか故なり後鳥羽に居る、故に鳥羽僧正と號す、天性繪畫を嗜み、人物鳥獸、鳥魚を寫すに形似を求めず、精神を寫す、筆々巧妙人を驚かす、殊に馬を寫すに巧妙なり、其屏風十二枚天閑十二匹の馬を見てこれを圖したるもの、後世に傳はり珍重せらる、世に僧正の畫風を鳥羽繪と云ふ、保延六年六月十六日鳥羽の精舍に寂す、壽八十八、一說同九月十五日寂すと云ふ、(本朝高僧傳、扶桑畫人傳)

カクヨ 覺與 二〇二二 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、覺與は萩原院の子、清顯に就きて密乘に長し、康安元年九月

宮中に尊星王法を修す、寂年歟く、(三井續灯記)

カクヨ　覺譽　イテキ意的を見よ、

カクヨ　覺譽　カクオー廓翁を見よ、

カクヨ　覺譽　コガク故岳を見よ、

カクヨ　覺譽　チヨーサツ長察を見よ、

カクヨ　覺譽　ドンリヨー呑了を見よ、

カクリユーイン　覺隆院　ニチヨー日養を見よ、

カクリヨー　覺了　二五一六　〔眞宗〕豐前今津淨光寺の住持なり覺了初の名は月珠號は不可得といふ豐前今津淨光寺閒然の嫡子なり初め宗乘を淨信院の門に學ぶ後院の沒するに及びて父閒然に就きて鑽仰し遂に堂奥に詣る文政十一年春京に入り本山に奉務し安心教諭役となり尋いて助教に進み是より毎年命を奉して都鄙に奔走し道俗を教誡すること殆んと虚日なし其功績頗る著しきを以て褒賞を蒙むること屢なり天保六年安居命を奉して勸學興隆を教誡す蓋し興隆安心稍々左するを以てなり幾もなくして職を辭して國に歸へる本山號を賜ひて勝縁房といふ嘉永二年安居司教となり四年安居因明入正理論を學林に副講す十月勸學職を命せられ本願成就文を黑書院に講す六年安居二門偈を學林に代講す八月本典を古書院に講す大法主及ひ嗣法王親しく臨聽す年に及ひて法主の不豫に會し講を止む更に敬信錄十卷を撰して獻す法主賞するに自製和歌を以てせり安政二年十一月病を現して寂す本山謚を賜ひて善通院といふ師學系空華に出るも晩年諸家を折衷して多く自解を出たす行信に至りては頗る石泉に朋へり是を以て善讓師と相諍ひて多年解けすと云ふ著作願成就文記一卷眞假三願大意小經松江錄易行品管見行信義玄義分集解定善義集解三心釋私考二門偈集義各一卷淨土論隨釋論註南越安樂集集解序分義集解愚禿鈔信順錄各二卷大經光讚三卷觀經叢義鈔四卷本典兼對問記六卷及畧文類明川記若干卷あり(學苑談叢、本願寺派學事史)

カクリヨー　覺了　シユーセイ秀盛を見よ

カクオー　格翁　ケーイツ桂逸を見よ

カクゲ　格外　リヨーセー良盛を見よ

カクデン　格傳　リヨーサン良讃を見よ

カクコドーニン　角虎道人　リユースー龍崇を見よ

カクシヨー　角上　ミヨーイン明因を見よ

カクシヨー　赫照　二四四〇 二五一六　〔眞宗〕越後淸傳寺の住持なり、赫照字は惠照、舊名は智敬、號は蒲原と云ふ、越後蒲原郡眞宗佛光寺派淸傳寺主某の弟なり、正德五年三月十日に生る、未た二十歳ならずして江戸に出遊し、佛光寺派なる下谷別院に寓すること凡そ十年なり、後京師に轉學して、斋宗乘を研究し、遂に澁谷の講師となる、後京黌の學頭となり、大に一派の學風を興す、前門主順如上人の奏請により、勅して法橋に叙せられ、尋て權僧都に任せらる、門主の命により、大坂別院輪番と爲り、後淸傳寺に皈る、安政三年七月十一日寂す、享壽七十七、門主謚號法光院を與ふ、著作數部あり、(眞宗史料)

カクソー　鶴巢　リヨーサク良作を見よ

ガクウン　學運　ムノー無能を見よ

ガクエー　學榮　二二七五　〔淨土宗〕山城十榮寺の開山なり、學榮は松蓮社顔譽と號し其鄕貫詳かならず淸巖に師事して法を嗣ぎ山城伏見十榮寺の開山となる元和元年六月十一日寂す

壽缺く（淨土總系譜）

ガクエン　學淵　ニチヨー日遙を見よ

ガクシン　學信　三三八四　二四四九　〔淨土宗〕安藝光明院の僧なり、學信字は敬阿、正蓮社行譽と稱す、中頃增上寺豐譽大僧正より華王道人の印章を受け、晩年自ら無爲と號す、俗姓を知らず、享保七年伊豫今治近邊の鳥生村に生る、幼にして今治寺町圓淨寺眞譽上人に就きて薙髮染衣し、讀誦を勤め、密寺禪院に遊ひて内外の典籍を學習す、年二十の時宗規に從ひ江戸增上寺に往き、專ら自他の聖教を學ぶ、後辭し去りて京都に赴き、長時院滿慧和上に菩薩戒、及ひ八齋戒を受得す、又出てゝ筑紫に往き、鎭西上人金光上人の遺蹤を弔ふ、日向の古月禪師に謁し、西來直指の活法を會得し古月の印可を受く、其勸めに從ひ歸路長門妙慶寺に雲說に謁して請益する所あり、師曾て高野山に登り、密門阿闍梨に從ひ、瑜伽三密の秘法を傳受す、年三十の頃備後尾道何某の

學信和尚

家に寄宿して一大藏經を閲了す、伊豫岩城島淨光寺の請を受けて其住持となり、島民の疫病に苦めるを救ふ、寶暦八年一月二十五日退きて京都知恩院に登り信冏上人に淨光寺の後を繼かしめ、自ら出遊して學業を勵み、修行を勉む、明和三年六月十七日知恩院前大僧正眞譽正順の推選により、京都獅ヶ谷法然院を主とりしも、同十一月二日忽ち退き去り、請を受けて宮島光明院に住す、一住數年上足俊峯に讓り加祐軒に退隱し、後伊豫松山長建寺に移り、兩三年を經て太守の請に應し、其墓寺大林寺に轉し、大に宗規を刷新す、安永十年正月京都岡崎俊鳳和尚の草菴に大乘圓頓菩薩僧戒授受の作法を聞く、或年大旱にして民困窮す、師大守の命により雨を祈る、天明元年師法藏殿を建立し一大藏經を請して藏す、或年周防今市の某寺に往き、諸人に圓頓菩薩戒を授く、七年二月筑紫善導寺に往き大衆と共に法筵を開く、翌年八月伊豫に歸へり、今治の來迎寺に於て神國決疑編を講演す、加祐軒に歸へり、寬政元年六月七日寂す、壽六十六、遺偈及ひ和歌あり、來也來也、我法王家、快樂即是、大白牛車「いかはかりたのしからまし迎へらる花のうてなの深き御法は」弟子遺體を潮音寺に葬る、著作幻雲稿、蓮門興學論、一枚起請文符合決、一念邪正決等あり、（學信和尚行狀記、近世畸人傳、近世叢語、近世偉人傳、續日本高僧傳）

ガクシユ　學珠　ニチテー日貞を見よ、

ガクシユー　學宗　二一九九……　〔淨土宗〕常陸常福寺第七代なり、學宗は感蓮社乘譽と號す、了秀に師事して法を嗣ぎ、常福寺に主となる、天文八年三月九日寂す、法嗣玉泉あり、

（淨土總系譜）

ガクシユー　學周　リヨーカイ亮海を見よ、

ガクジヨ　學助（……）（……）七條佛所二代佛工なり、學助一に覺助に作る、定朝の子なり、某年法眼に叙せらる、其技術父定朝に優る、其行動父の意に適はず、家を逐はる、然れとも屢々父の不在を機として家に入り、母に謁す、一日家に入り父の作を見、其悪しきを心憂く思ひて之を削る、父歸りて、之を知り大に恐れとも己か惡作を見破られしを耻ち、遂に師を赦して家に迎ふといふ、寂年缺く、一說に天喜三年四月十日寂すとあれども誤なり、（古事談）

ガクジヨー　學乘　ニチジヨー日靜を見よ、

ガクチユー　學中　ゲンシユー原周を見よ、

ガクユー　學優　ニチミヨー日明を見よ、

ガクヨ　學譽　クーカン冏鑑を見よ、

ガクヨ　學譽　ザンオー殘應を見よ、

ガクヨー　學要　ニチクワン日完を見よ、

ガクリン　學林　ニチトク日徳を見よ、

ガクオー　嶽翁　チヨーホ長甫を見よ、

ガクヨ　嶽譽　ギヨーア行阿を見よ、

ガクイン　鄂隱　エクワク慧奯を見よ、

ガクセン　岳泉　リヨーハン亮範を見よ、

カンサイ　感西　一八一三／一八六〇〔淨土宗〕祖源空上人の高弟なり、感西字は眞觀、俗姓生國詳ならず、十九歳出家して源空上人に師事す、上人選擇集を撰述するにあたり　感西に命して筆を執らしむるに再三辭退す、乃ち筆蹟の任に當る、正治二年閏二月六日寂す、壽四十八、（淨土傳灯錄　淨土總系譜）

カンズイ　感隨　（……／二四四九）〔淨土宗〕武藏播隨院の學僧なり、感隨は奧州の人、出家して淨土宗に歸し、内外の二典に通し、强記人を驚す、玉篇七卷を諳記したるため、時人呼ひて漢玉感隨と云ふ、増上寺知童の法を嗣きて大光院に住し、次に幡隨院に進む、寂年缺く、（續日本高僧傳）

〔考〕感隨は寛政年間の人なり

カンツーイン　感通院　ニチギヨー日遂を見よ

カンテー　感貞　……／二二三四〔淨土宗〕武藏阿彌陀寺の僧なり、感貞は純譽と號す、感譽に師事して淨土教を學び、武藏足立郡阿彌陀寺に主となる、天正二年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

カンヨ　感覺　ソンテー存貞を見よ

カンヨ　感譽　ドーキヨー道教を見よ

カンヨ　感譽　リヨーシユー了秀を見よ

カンウン　閑雲　シユーコー宗與を見よ

カンクー　閑空　リヨーシン亘心を見よ

カンシツ　閑室　ゲンキツ元佶を見よ

カンシヨー　閑唱　二二八六／二三四四〔淨土宗〕美濃靈台山の僧なり、閑唱は信濃綿内の人、幼にして出家の意あり、五歳にして同國飯命山但唱上人に師事し、上人に隨ひて江戸に入り、芝の如來寺に留る、上人寂せる後二十一歳にして諸國に浪遊し、一時美濃笠原の眞性寺に留り手から佛像一千躰を刻して安置し信野の八幡院にも同しく一千躰を刻し安置す、三十六歳妻木の間の山に草菴を結ひ、自ら靈台山と云ひ、念佛の道場と爲す、同地方の男女の敎化せらるるもの數知れず、延寶三年相

摸大山に登り靈跡を感す、貞享元年正月靈谷山に於て梵網經を講し、二月二日に至りて畢る、同三日に弟子欣蕎唱に十念を授けて後定印を結ひて寂す、壽五十九、（新著聞集）

カンテキ　閑的　二三四三〔淨土宗〕江戸龍土法花寺の開山なり、閑的は信蓮社大譽、又は助心と號す、俗姓は吉田氏、駿府の人なり、法を廓山に嗣ぎ、江戸麻布龍土法菴寺開山となる、天和三年五月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

カンオー　鑑翁　シショー士昭を見よ、

カンケー　鑑溪　シューサツ周察を見よ、

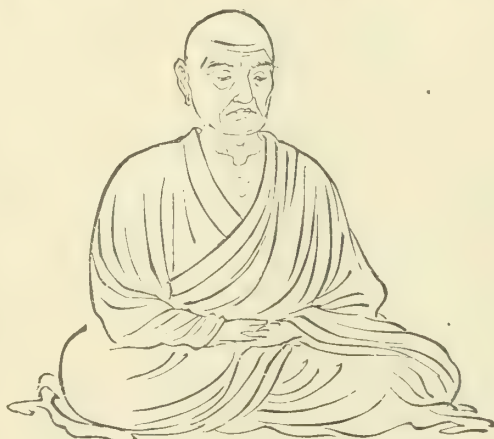
カンミン　鑑心　二一四七〔曹洞宗〕出羽洞雲寺の開山なり、鑑心字は牛欄、奥州の人、姓は藤原氏なり、初め徧く名宿に歷參して闢雲寺發隱和尚の門に入り、印可を受けて分座となり、後鄕里に皈り、闢山ノ深處に隱る、出羽最上の郡主某、師の德を慕ひ、白岩鄕に洞雲寺を築き、請して開祖となす、長享元年三月五日寂す壽缺く、偈あり曰く、生生滅滅、滅滅生生、蹈翻華藏海、浪平月亦清、（日本洞上聯燈錄）

カンシン　鑑眞　一二四八 一四二三　戒律宗の開祖なり、鑑眞は唐の廣陵楊州江陽縣の人、俗姓は淳于、齊の大夫髡の後なりといふ、中宗の嗣聖五年、（我持統天皇の二年）に生る、其父は同州大雲寺（後龍興寺と改む）の智滿に隨ひて受戒參禪したるものなり、師年十四、嘗て父と共に佛所に詣て佛像を拜して心大に感動する所あり、出家せんことを求む、父之を奇として師を智滿に付す、時に大周の則天武后天下に詔して大に僧を度す、師智滿によりて剃髮して沙彌となり、大雲寺に住す、これ實に武后の長安元年（中宗の嗣聖十八年）なり、智滿の事蹟は今傳ふるものなし、其後四年にして神龍元年十八歲にして道岸律師に謁し、菩薩戒を受く、道岸は始め文綱の徒にして、後道宣に隨へり、道宣は當時支那戒律宗の泰斗と仰かれたるなり、乾封二年、道宣寂を示す後、道岸斯宗の首たり、師の道岸に謁したりしはこれ即ち後年戒律宗を東流する端たりしものといふべし、道岸の下にあること二年許、景龍元年辭して東都に遊ひ、又長安に入る、翌年三月荊州南泉寺の沙門弘景律師（一に恒景に作る）の長安にあるに從ひ、實際寺に於て具足戒を受く、時に年二十一なり、弘景は文綱律師より戒律を傳へ、章安大師により天台を學ひたる者なり、師の天台の學は蓋し之より得たるものといふ、我國の天台は、後年最澄が師の徒より得たるところにして、其付法緣起にも師及ひ門人法進を其列に加ふ、後人師を以て天台宗の第四祖といへるものは此故なりといふ、之より師は二京の間に往來して、益々戒律宗の研鑽に力を盡し、融濟律師に就きて行事鈔、業疏、輕重儀等を學ひ、義威、遠智、全修、慧策、大亮等の諸師に從ひ法礪の四分律鈔を聽くと前後九回に及ふといふ、蓋し戒律は當時支那に於て最も全盛を極めたる一宗にして、縱令佛法を學ふといふも、持戒のものにあらすは殆僧中に齒せさりし狀態なりしかば、所謂戒律學も亦甚た旺盛を致し、中に於て四分律の三宗と號し、法礪の相部宗、道宣の南山宗、懷素の東塔宗は、三方に鼎立して彼此論難攻擊し互に相容れさる狀なりき、師はその初め道宣の南山宗より出てたるものにして、弘景も亦其派に屬し、師か融濟より學ひたりし行事鈔の如きも、皆道宣撰述の要書なり、然れとも其後相部宗の三祖滿意の徒

なる義威、遠智等の五師より法勵の疏を聞きしを見れは、其決して偏執の人にあらさりしを知るに足る、師既に學成りて戒律を江淮の間に講授す、時に年二十六、是年はしめて法勵の疏を講す、實に玄宗即位開元元年なり、三十一歳にして南山の道宣の疏、及ひ輕重儀を講し、四十歳に至り、羯磨疏を講す、其後六十六に及ふまて、四部の書、常に講說し、天台の敎觀研究愈精詳なり、開元二十一年、師年四十六、淮南江左にありて獨り戒名を擅にし、一方の化主として重きを法界に持し居たり、前後大律及ひ疏を講すること四十遍、律抄を講すること七十遍、輕重儀羯磨疏を講すること各十遍に至り、講授の間、寺院を建立すること八十餘ヶ所、衲袈裟一千領、布袈裟二千領を縫ひ、五臺山の衆僧に供し、一切經を寫すこと三部、一萬一千卷、其他佛像を作り、僧尼を供養し、悲田を開き、貧病を救濟す、事業廣大具に述へかたし、戒を授け人を度すること殆んと四萬に餘り、徒中抜群の者凡そ四十餘人に至り、各一方を化し、共に皆律藏の龍象にして、兼ねて法相、天台、倶舍、三論、攝論、維摩詰等の衆典該通せさるなしといふ、祥彥、道金、璿光、希瑜、法進、乾印、神邕、法藏、志恩、靈祐、明烈、明債、璿眞、惠琮、法雲、等、最も著はる、師か其生國に於ける事業感化は畧ほ之を以て想像するに難からさるへし、此時我國の僧榮叡普照戒律を得んかために入唐し、同學の僧玄朗、玄法（一に洪につくる）と共に玄宗の天寶元年、（我天平十四年）十月楊州に至る、時に師州の大明寺に在りて衆のために戒律を講す、榮叡普照と共に寺に至り師を禮して、本意を述へ、其東渡を請ふ、師乃ち法衆に告けて曰く、日本は佛

法興隆有緣の地なり、今衆中誰か此遠請に應すへき者そと、衆皆默然、敢て答ふる者なし、時に祥彥なる者進みて曰く、彼の國遙遠なり、生命期すへからす、滄海淼漫、能至る者百に一なし、今法衆進修備はらす、道果未た全きこと能はす、而して此難受の人身を捨て、難生の中國を離る、皆行くを欲せさる所以なりと、師、此に於て決然として告けて曰く、事固より大法のためなり、何そ身命を惜まん、諸人若し往くこと能はすは、我自ら行かんのみと此に於て衆皆驚いて曰く、和上若し去らは、我等豈また往くを辭せんやと、祥彥、道興、道航、神崇、忍靈、曜祭、明烈、道默、道因、法藏、法載、曇靜、道巽、幽巖、如海、澄觀、德清、思託、等以下二十一人、共に心を同くして東渡の要約を盟へり、此に於て船を造り粮を蓄へ、師は榮叡、普照等と共に既濟寺に在り、其徒開元大明の二寺に分處し、各旅裝を整へ、乾粮を辨し、之より共に與に天台山國清寺を訪ひ、大衆を供養して後海路に就かんと期す、偶海賊邊海に起り、台州、溫州、明州、等其害を蒙むること甚しく、海路梗塞して公私行を斷つ、時に道航、師に告けて曰く、今他國に向ひて戒法を傳へんと欲す、其人皆高德にして行業肅清なり、中に就きて如海等の如き、共に行を同くすへきにあらす、宜しく之を停むへしと、海これを聞きて大に怒り、州廳に訴へて曰く、道航なる者あり、海賊と通し乾糧を辨し、今既濟開元大明の諸寺に在り、と此に於て我國の僧榮叡、普照、玄朗、玄法、及ひ道航等皆捕へられて獄に投せらる、然れとも幸にして誣告の實明なることを得、如海は杖に處せられ、師等禍を免れたりといへとも、方今海

賊海路に縱横するかために、其渡海を止め、且つ造るところの船を沒收せらる、之を師東渡挫折の第一次とす、是れ實に天寶二年六月にして、師年五十六歳の時とす、此時我國の僧は隨意東歸を免され、獄中にあること四月にして放免せられたりしかは、玄朗玄法の二僧は直に東歸の途に就き、唯、榮叡、普照は密かに諸所を巡遊して、再ひ師の居に到る、師告けて曰く、予等愁ふることなかれ、豈終に本願を達せさらんや、と、再ひ軍船一隻を購得し、水手を雇ひ、糧食を整へ、佛像、經論、佛具、雜品を備へ、榮叡、普照、並に其徒十七人、及ひ玉作人、畫師、佛工、鏤鑄、寫繡、修文、鐫碑、等の工手船八十五人を二隻の船に乘し、天寶二年十二月帆を擧けて東下す、根溝浦（一に狼溝浦）に至るところ、惡風大に起り、怒浪船を撃ち、人皆岸に上る、潮水人腰に至り、冬時寒風急にして、衆皆甚た苦しむ、其困難の狀想見するに足る、之を東流挫折の第二次とす、然れとも師尚

鑑眞大和上

ほ志を屈せす、更に船を修理し、下りて大坂山に至る、船を泊むることを得す、即ち下嶼山に至り、滯住すること一月、好風を得て先つ桑名山に到らんとす、偶暴風再ひ此行を妨け、船は全く破れて用をなさす、水米倶に盡きて飢渴すること三日、殆んと策の爲すへきなし、時に人の來り救ふに會し、且つ明州の大守師を迎へて阿育王寺に安置するあり、乃ち纔かに蘇息するを得たり、之を東渡挫折の第三次とす、天寶三年、師、越州、杭州、湖州、宣州、等の請に應して巡遊し、開講授戒す、次に阿育王寺に至る、時に越州の僧等の東渡を留めんと欲し、官に告けて曰く、日本國の僧榮叡、大和上を請ひ日本に往かんと欲す、と　官榮叡を捕へ枷を加へて京に送る、杭州に至りて病に臥し、詐りて死すとなして出つることを得たり、師大に榮叡の志を嘆し、必す其願を遂けんと欲し、法進等を福州に遣はして、亦復船を買ひ、糧食を辨せしめ、諸門徒三十餘人と第四回の發途をなす、州の大守、及ひ僧尼、父老、送迎供養を設け、粮を送るもの多し、途次或は佛殿を修し、或は聖跡を巡禮し、其間の困苦艱難見聞の諸人、時に涕泣するものあるに至る、台州寧海縣より始豐縣に至り、臨海縣を經て、黃巖縣禪林寺に宿し、明朝溫州に向はんと欲す、忽ち官吏の來牒ありて其行を留めしむ、是れ師の徒靈祐なる者、諸寺の三綱と相議し、大和上願を發し、日本國に向はんと欲し、登山涉海艱苦數年牒なるを訴へしに由る、江東道の採訪使牒を諸州に下し、師の經るところの三綱を獄に留め、追蹤して禪林寺に至り、師を擁して押送し、採訪使の所に到る、舊によりて本寺に住せしめ、三綱等に約束し、防護して他國に

向ふことを得ざらしむ、師之を憂ひ、大に靈祐を呵責す、祐日々懺謝し、毎夜來り立つこと一更より五更に至り、六十日を終へ、諸寺の三綱大德悉く爲めに來り謝するによりて、始めて顏釋くるを得たりといふ、師か失望如何なりしぞ、之を東渡挫折の第四次とす、其後師揚州崇福寺に在り、天寶七年榮叡、普照、同安郡より來りて崇福寺に到る、重ねて二師と策を書し、船を造り、香藥を買ひ、諸物を辨し、榮叡、普照、祥彥、神倉、光演、頓悟、道祖、如高、德清、日悟、思託等道俗十四人、水手十八人、其他相隨ふを欲する者三十五人と共に六月二十七日崇福寺を發し、新河より船に乘し、常州界狼山に至り、越州三塔山に停住すること一月、好風を得て署風山に達し、留まることまた一月、既に發して暴風三たひ此船を障ふ、風急に波峻く、水黑きこと墨の如し、一上一下、人皆死を期す、然れとも幸にして沈沒の厄を免れ、漂蕩すること二月にして、船內食に物なく、徒に急風高浪の耳目に觸るゝあるのみ、衆僧惱臥して起つ者なし、唯普照毎日食時に生米少許を以て衆僧に與へて中食に充つ、然れとも船上水なく、喉乾きて嚼米咽を下らす、吐けとも出てす、鹹水を掬して之を飲み、腹之かために膨脹す、思託は自ら之を記して、一生辛苦何劇於此といへり、明日漸く風息み、陸を望むことを得たり、江州明州等の十五州を經て、海上にあること十四日にして岸に着く、後三日漸くにして攝州江口に至りて舟を泊す、其別駕馮崇債なるもの兵四百人を遣はして之を迎へ、州城に入らしむ、此に於て師か第五次の發途はまた全く挫折したり、其後師州の大守の宅に居り、會を設け、戒を授け、後、大雲寺に住す、留まること一年、甲兵八百餘人に護せられ、四十餘日を經て萬安州に至り、崖州に達す、引きて開元寺に入らしむ、留住すること一年、州縣を巡りて悟州に入り、次に端州龍興寺に着す、榮叡此地に於て寂す、師哀慟悲涙、最も切なり、蓋し師か東渡のことたる、一に榮叡普照の請による、而して此二人の熱誠ありて師をして感動せしめたるものありしならん、師か企劃數々敗れ、志未た遂せす、挫折五回に及ひ、逆旅にあること十有餘年、而して今忽ち東道の主人を失ふ、師か悲痛蓋し知るへきなり、後韶州に轉し、法泉寺に入り、開元寺に移つる、而して普照亦故ありて師と袂を分ち、師は去りて明州阿育王寺に向ふ、時に天寶九年なり、師乃ち普照の手を執て悲泣す、師か感慨洵に限なきものありしならん、此時師數々炎熱の地を經たるかため、眼疾を患ふ、會ま胡人あり、自ら能く明を治すといふ、依て治療を加へしむ、而して遂に全く明を失す、吉州に至りて祥彥また寂を示す、是より諸州を敎化し、到る所戒を授け、法を施し、空しく過ぐるところなし、漸く揚州に還りて、龍興、崇福、大明、近光等の諸寺に開講授戒、法益を施して、暫くも停斷なしといふ、師か榮叡普照の請により、東渡の念を決して、第一次の發途を企てたりしは天寶二年にして、師か五十六歲の時なり、爾後幾多の障害を蒙り、志常に成らすして、東西に往來すること殆んと十年餘、其業を共にする者の或は半にして去り、或は途にして死す、榮叡は滅を示し、普照は韶州に分る、而して師の志願は終に空しく成らざらんとす、天寶十二年十月十五日、我が遣唐大使藤原清河、副使大伴宿禰胡麿、及ひ吉備眞

備、安部仲麿、等、師の事を聞き延光寺に來りて師に告けて曰く、弟子等和上の日本に渡りて敎を布かんとしたる五回に及ふを知る、今親しく拜謁するを得たり、歡喜何そ加へん、弟子等先に既に和尙の尊號、幷に持律の弟子五僧を錄して主上に奏聞し、日本に向ひて戒を傳へんと請ふ、然るに主上道士の法を崇ひ、之を東國に流傳せんとす、我か君王及ひ弟子、未た道士の法を奏せす、此故に春桃原等四人を留めて之を學はしめ、其道士を本國に致すは之を辭したり、爲めに和上を請ふの奏もまた退けられて、其意を達することを得す、願くは和上自ら方便して弟子等の意を容れよ、弟子等國信を載す、る船四舶あり、行裝具足す、行難きにあらす、と、師許諾す事道俗に流布す、龍興寺の防護ために頗る固くして、進發すること能はす、時に仁幹禪師なる者あり、務州より來り、師の意を知り、船を江頭に備へて待つ、師十月十九日龍興寺を出てゝ船に乘す、二十四人の沙彌あり、悲泣して追ひ來り、師に告けて曰く、大和上今海東に向ひ給はゝ、弟子等再ひ尊容を見ることなけん、願くは最後の結緣に預らんと、師江邊に於て戒を授け、法進、曇靜、思託、義靜、法載、法成等十四人、智首尼等の比丘尼三人、潘及ひ仙童、安如法、軍法力、善聽等の優婆塞、總て二十四人と共に、下りて蘇州黃泗津に向ふ、(本朝高僧傳には、法進、思託、等高弟三十五人とあり、)此時携ふるところ、佛舍利三十粒、阿彌陀、觀世音、彌勒等の佛菩薩聖像、佛具、及ひ華嚴經、大佛名經、大品經、大集經、南本涅槃經、四分律、法勵、光統の二師の疏、鏡中記、智周靈溪菩薩戒の疏、天台の三大部、四教義、次第禪門行、法華懺法、小止觀、六妙門明了旃、定賓律師の飾宗義記補釋、飾宗記戒疏、觀音寺高律師義記、南山宣律師合註戒本、及ひ疏、行事抄羯磨疏、懷素律師の戒本疏、大覺律師批記音訓、比丘尼傳、西域記、終南山宣律師の關中創戒開戒壇圖法、銑律師尼戒本、及ひ疏、等、合して四十八部、其他羲之、獻之の眞跡、天竺朱和等の雜躰書五十帖なりといふ、二十三日大使淸河師以下を四船に分乘せしむ、事にして、人のために妨けられんことを恐れ、十一月十日副使大伴胡麿、夜半竊に師以下を己が船に入れ、人をして知らしめす、十三日普照越の餘姚郡より來りて眞備の船に投す、十五日四舟同しく發す、一雉あり第一舟の前に飛ふ仍て碇を下して明日更に發し、廿一日第一第二の兩舟阿兒奈波島に到り、第三舟多禰島に着す、十二月十九日風雨大に起り、三舟共に大に破損し、唯師か乘れる第二船平安にして、廿日午時薩摩阿多郡秋妻屋浦に着す、實に我朝孝謙天皇天平勝寶五年にして、師正に六十六歲、東渡を企つること六回、十一年にして始めて志を達することを得たり、廿六日師太宰府に入る、天平勝寶六年正月十一日大伴胡麿師太宰府に至ると奏す二月一日(或は二日)難波に到る、唐僧崇道等迎慰供養す、三日河内國に到る、道璿律師、弟子善談等と迎へて之を勞す、又志忠、賢璟、靈福、曉貴等三十餘人の僧迎へ來りて禮謁す、四日京都に入る、詔して正四位下安宿王を羅城門の外に遣はし、迎慰拜勞し、引きて東大寺に安置す、五日道璿、及ひ菩提仙那來りて慰問し、大臣以下官人百餘人皆來りて禮拜問尋す、後吉備眞備をして詔を宣せしむ、曰く、大德和上遠涉二滄波一、來投二此國一、誠副二朕意一、喜慰無レ喩、朕造二此

カン(鑑)シ

東大寺、經ニ十餘年ニ、欲レ立ニ戒壇ニ傳ニ受戒律ニ、自有ニ此心ニ、日夜不レ忘、今諸大德遠來傳レ戒、冥契ニ朕心ニ、自レ今以後授レ戒傳レ律一任ニ大和上ニと、良辨に勅して以下隨從の名を錄して禁內に進めしめ、次いて傳燈大法師位を授く、此年四月東大寺毘盧舍那佛の前に於て戒壇を造築す、其規一に道宣の戒壇圖經による、所立の戒場に三重の壇あり、第三重には多寶塔あり、塔中には釋迦多寶二佛の像を安して一乘深妙理智冥合の相を表す、これ即ち四分律に天台の理を合して築造したる大乘の戒壇なり、此に於て聖武天皇先つ始めて登壇し菩薩戒を受けたまひ、次きに皇后皇太子亦登壇受戒したまふ、これ實に四月五日のことゝいふ、尋いて沙彌澄修（一に證修）等四百四十四人、戒を受け、靈祐、賢璟、志忠、善頂、道緣、平德、忍基、善謝、行潛、行忍、等、八十餘人、皆舊戒を捨てゝ重ねて師の所授の戒を受けたり、後、五月一日大佛殿の西に於て別に戒壇院を築く宣旨あり、同七年舍那殿壇法を移して、戒壇を立てたまふ、天平勝寶八年五月二十四日大僧都に任す、天平寶字二年之を辭す、同年八月一日大僧正に任す、綱務繁雜なるを以て辭す更に大和上の號を授く、是より先き四方の僧侶來りて戒律を學はんとするもの甚た多し、然れとも供養乏しきか故に多く退還して志を遂くる者少し、天皇之を聞き、天平寶字元年十一月二十三日、勅して備前國水田一百町を施す、師これを以て伽藍を建立せんと欲す、勅して其工を資け、天平寶字三年八月三日唐律招提寺の號を賜ふ、之より此院內に住して戒律を講し且つ聖武天皇の冥福を薦せり、天皇は天平勝寶八年を以て崩し給ひたり、孝謙天皇勅して戒壇を築かしめ、自ら菩薩大戒を受けたまひ、群卿百僚をして同しく受けしむ、師の西來するや、東大寺にありて一切經を校正す、當時師既に明を失して眼能く見ることなしと雖も、暗誦して之を正すことを得たり、また天平年間自ら戒律の三大部の印版を開く、是れ我國印版あるの始めとす兼ねて亦醫を善くし、光明皇后不豫の際に方り、進むるところの醫藥効を奏す、（一說に備前の水田一百町を賜ひしは之に報ゆるものとせり）之より我か國の醫術大に面目を改めたり、後代の醫家師の像を摸して之を祀るといふ、天平寶字七年春、師諸弟子に語りて曰く、吾遷化せんこと今夏を過さす、汝等勉めて道を行し、懶惰を致すなかれ、と、五月六日に至り、結跏趺坐西に向ひて奄然として寂す、師平生弟子思託に語りて曰く、我若し終に臨まは、願くは坐死せん、汝我か爲に戒壇院に於て別に影堂を建てよと、此に至りて師豫しめ終日を記し、期に至りて端坐滅を取る、春秋實に七十六といふ、（或は七十七と云ひ、七十八と云ひ、又七十二と云ふも皆誤なり）寶龜元年我國使唐に到り師の寂を傳ふ、楊州の諸寺之を聞き皆喪服を着け哀を擧くること三日に及ふといふ、其徒思託傳を撰し名けて唐大和上東征傳といひ、具に師の行業を明にす、（東征傳、七大寺年表、傳通緣起、續日本紀、宋高僧傳、元亨釋書、本朝高僧傳、律苑僧寶傳、皇國名醫傳等）

カンソー　鑑窓　エーカン永鑑を見よ、

カンチコクシ　鑑智國師　ショークー證空を見よ、

カンチユー　鑑仲　シンオン眞遠を見よ、

カンエン　寒淵　二四六〇　二五二一　〔眞宗〕肥前藤津郡白馬光嚴寺の

住持なり、寒淵は鐘堂と稱す、文政元年和泉に遊ひ、乘誓院の門に入り宗乘を研究すること十年餘、得業科に登り、國に歸へる、爾後京都に往來すること頻年休まず、天保五年助敎に昇り、弘化五年司敎に進む、嘉永元年安居に二門偈を學林に副講し、安政三年再ひ副講の命を受く、爾後暫く畿內諸國に巡敎し、歸國の後學生を敎育すること多年、萬延元年冬病に罹り、翌文久元年正月廿二日寂す、壽六十二、明治十七年勸學を追贈す、(學苑談叢)

カンガン 寒巖 ギイン義尹を見よ、

カンソー 寒叟 カネン珂然を見よ、

カンウ 甘雨 二四四八 三五三二 〔曹洞宗〕尾張龍泰院の開山なり、甘雨字は爲霖、別號は不留山人、出雲鰐淵山の人なり、姓は荒木氏、父は寂照、母は清月と稱し、天明六年二月八日に生る、十三歲松江清光院大雄和尙に投して得度す、十七歲永平寺に登りて高祖道元禪師の五百五十回に逢ひて宗門の祖風に感す、此冬州の眞福寺に安居し、伊豫の童麟和尙助化たり、十八歲の夏伯耆總泉寺に到りて安居す、十九歲夏水寺に到りて靈潭和尙を訪はんと欲して果さす、鷹峰に掛錫す、擢られて書記となる、堂頭鄧洲和尙無孔笛集を講す、師晝夜精勤して文字を學ふ、二十歲の秋尾張に到りて大光寺に挂搭す、時に慈舟永安寺より來り住し、四衆輻湊す、乃ち方丈に參す、慈舟師に兜率三關を授く、此冬隨伴して三河廣濟寺に安居す、師慈舟を送りて後鷹峰に歸る、夏、事に因て紀州珊瑚寺に安居し、秋大光寺に歸錫す、一日十牛圖贊を見るに、前無ニ去者一後無ニ來者一不レ識依レ誰、繼ニ此宗一の語あり、忽然大疑團を打破し、自決疑なし、數日の後徐々として方丈に參す、慈舟痛く一頓を與ふ、師拂袖して去る、是より機鋒群を出つ、此冬州の乘圓寺に半夏して、近侍に充てらる、夏慈舟參河の大岩寺に助化す、師は內安居たり、慈舟師に示して曰く、大事を成就せんと欲せは、文字の學亦是れ助道の標準なり、と、師此に於て備後福山翰林寺を尋ね、日夜學校に就きて智證を益す、文化七年慈舟萬松寺に移り、師を擧けて首座となす、此冬分座し、會中龜岳に於て入室して、大事を了す、時に二十五なり、文化十二年永平寺に瑞世し、十三年冬備後因の島見性寺に助化す、風を開きて隨ふ者夥し、衆の强請により、福山城護國社內に住す、福山藩中の士參禪する者三十六人なり、君公の爲に法を說く、文政三年三月初めて近江の慈眼院に住す、文政十一年加賀の大守實性寺に請ふ十二年三月入院す、天保二年總持寺二代の遠忌に丁り、光嚴寺桂堂龍泉寺無底と共に單頭に坐す、十一年實性寺をも辭し、直に洛南の草廬に隱る、閑居中請により遠江の洞禪寺、出雲の了知寺、甲斐の桃岳寺等を行化す、五十六歲の夏甲斐の青松院に助化す、夏中正法眼藏袈裟功德の卷を講す、五十八歲越前の永建寺に請せられて此に住す、六十歲夏松前法幢寺を助化す、六十七歲衆と共に永平寺に拜搭す、秋高祖の大遠忌に際し、單頭に坐す、六十八歲永建寺に僧堂を建つ、七十一歲新僧堂に安居す、秋席を傳翁に付し、退院上堂す、七十二歲尾弟子全良、美濃南宮社內に淸月菴を建立し、師を請して開山となす、七十三歲法嗣慈觀尾張に龍泰院を建て師を請して法地開山とす、八十歲龍泰院開闢し、結制安居す、八十四歲法子未了をして攝津

の慈願寺を主とらしめ、此夏結制安居す、八十五歳春三月尾張泉德寺開祖の五十回忌に請せられて、尸羅場會を開く、結制終りて慈眼院に往き、幾もなく病にかゝり、翌年二月八日に寂す、實に明治五年にして、壽八十七なり、一化五十餘年、助化七十度、自會十度、戒師應請九十七回、戒弟万五千八百人、著作龍臺開山語錄六卷、對客茶話、三教辨惑、眞須保の薄、以呂波歌、百則法問、三歸假名法語各一卷あり、附法の弟子頗る多し、就中傳翁、慈觀、曇英、未了、忍海、玉仙等最も顯はる、（龍臺開山爲霖禪師行由）

カンロ　甘露　エウン慧雲を見よ、

カンロドーニン　甘露道人　ギョージョー行乘を見よ、

カンサン　漢三　ドーイチ道一を見よ、

カンテー　澗庭（……）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、澗庭（一に洞庭とあるは誤なり、）傳詳ならず、著作北斗護摩鈔二十卷あり、（諸宗章疏錄）

カンレー　韓嶺　リヨーオー良雄を見よ、

ガンセキ　岸石（……）〔淨土宗〕下野法善寺の開山なり、　岸石字は良意、下野眞岡の人、良信に師事して法を嗣ぎ、那須郡石神に法善寺を開らく、寂年缺く（淨土總系譜）

ガンリヨー　岸了（……二三七六）〔淨土宗〕京都知恩院の僧なり、岸了は入蓮社通譽到彼と號す、又自ら仰阿と稱す、尾張の人、祖山の室に入りて剃髮受業し、法を江戶小石川傳通院に於て嗣ぐ、初め東漸、大光、光明等に住し、正德五年京都知恩院に主となる、享保元年七月十七日寂す、壽缺く、著作、辨無得道三卷、大經要義十卷あり、（淨土總系譜、蓮門經籍錄）

ガンゴ　含牛（二二九〇……）〔淨土宗〕武藏大善寺第二代なり、含牛は源蓮社秀譽又は頑石と號す、俗姓は藤原氏相模鎌倉の人なり、道譽貞把に就て出家し、牛秀に法を嗣ぐ、瀧山大善寺に主となり、次に鎌倉光明寺の幹事となる、後近江に到り、攝津大坂に西往寺を開き、京都に上り、四條西念寺、大宮西往寺、五條常德寺等を開き、寬永七年十二月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ガンズイ　含隨　リヨージヨー良乘を見よ、

ガンヤク　含益　リヨーエン良緣を見よ、

ガンシク　巖宿（二二七〇二三四七）〔淨土宗〕江戶增上寺第二十九代なり、　巖宿は厭蓮社信譽直主稱阿と號す、俗姓は伊丹氏攝津の人、幼にして父母を喪ひ、伊勢山田信行院貞運和尙に養育せらる、後江戶に下り、隨波上人に師事し學德共に高く、大念寺、傳通院を經て、延寶八年八月八日三緣山主となる、天和二年七月退隱し、麻布に移り、念佛讀經をことゝす、貞享四年十二月八日寂す、壽七十八、（三緣山志）

ガンヨ　岩譽　チドー智堂を見よ、

ガンヨ　岩譽　クワクエン廓圓を見よ、

ガンヨ　岩譽　タイシユー泰宗を見よ、

ガンヨ　顏譽　ガクエー學榮を見よ、

キの部

キカイ　喜海（……）〔華嚴宗〕大和高山寺の學僧なり、喜海は久しく明慧に侍して華嚴教を傳へ、高山寺に住す寂年

及壽缺く(本朝高僧傳)

キキヨー　喜慶 一五四九 一六二六 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、喜慶俗姓は額田氏、近江伊香郡の人なり、横川寺の相應和尚に師事して下髮染衣し、密部を習ひ、鎭操理保の二師に就きて益慧解を増す、尊意僧正を拜して瑜伽法を傳へ、長意座主に從ひて菩薩戒を承く、天慶の初め比叡山の阿闍梨に任す、應和元年冬承香殿に安鎭國家不動の法を修す、此法は師初めて修する所なり、康保元年權少僧都に任し、請きて法性寺の座主延暦寺の座主に補す、二年帝不豫の際、孔雀經の法を仁壽殿に修し、傳敎大師自筆の法華經一部を賜ふ、師即ち之を比叡山の法華堂に納む、三年七月十七日寂す、壽七十八、臘六十二、(本朝高僧傳)

キクワン　喜冠　リユーキヨー龍慶を見よ、

キサン　喜山　シユーキン宗忻を見よ、

キサン　喜山　シヨーサン性讃を見よ、

キジユ　喜受　ベンシユー辨秀を見よ、

キシユー　喜州　ゲンゴン玄欣を見よ、

キシユン　喜俊　ニチシヨー日昌を見よ、

キセン　喜撰(………)(………)山城宇治山の僧なり、喜撰(一に窺仙に作り又窺詮に作る)俗姓未詳桓武天皇の裔なりと云ひ橘奈良麿の子なりと云ふも共に詳ならず、夙に俗塵を厭ひて醍醐山に隱れ、後宇治の御室戸に草庵を結び密呪を持す、和歌に巧にして「我庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり」の一首人口に膾炙す、終る所を知らず、喜撰式一部世に傳ふ、(古今集序、古今集目錄、本朝高僧傳)

キホー　喜峰(………)〔眞言宗〕山城醍醐山岳西院の開山なり、喜峰は曾て梵唄經讃の音曲を習ふ、推されて醍醐山の都維那となる、延性の傳法灌頂を受け、岳西院を建てゝ開山となる、寂年缺く、(續傳燈廣錄)

キヨ　喜譽　リヨーエツ了悅を見よ、

キケー　基繼 一五一〇 一五九二 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、基繼俗姓不詳、越前の人なり、廣岡の昌舜大德に從ひて法相を學ぶ、延喜九年維摩會講師となり、尋て興福寺に住す、承平元年二月十六日寂す、壽八十二、(本朝高僧傳)

キシユー　基秀(一五四〇)〔華嚴宗〕奈良東大寺の僧なり、基秀俗姓不詳、興智に就きて華嚴宗を傳ふ、維摩會講師となり、元慶四年大極殿の最勝會講師の任を拜し、座に登るに及びて俄に病を發す、藥師寺平智代り講師となる、病癒えて後て藥師寺最勝會講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

キシユン　基舜(………)〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、基舜は兼賢の上足にして、中院流の密灌を傳へ、經論を渉獵してよく原理に通す、時人呼ひて大智房といふ、大樂院を開きて第一世となり、某年寂す、法弟融源、覺義、兼海の諸士あり(本朝高僧傳)

キセン　基泉(………)(………)山城の歌僧なり、基泉山城國乙訓郡の人なり、和歌に巧なり、古今集雜部に一首を收む、(古今集目錄)

キトー　基燈(………)(………)周防某山の苦行僧なり、基燈周防大島郡の人、戒律を堅持し、日々法華經を誦すること三十餘部なり耳目通利にして數十里を隔てゝ見聞す、世に

稱して六根淨といふ、示寂の時、一百四十餘歲なるも顏色三十歲はかりの如し、某年時缺く、（本朝高僧傳）

キヘン　基遍（一五八八）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、基遍は出家して華嚴を討習し、延長六年二月九日官命により東大寺別當に任し、某年寂す、壽缺く、（東大寺別當次第）

キベン　基辨（二三四一／二四一〇）〔法相宗〕奈良藥師寺の學僧なり、基辨は大同房と號し後に三松院と稱す尾張の人、俗姓井上氏なり、父某醫を業とす、元文元年、師十五歲にして無染房妙適和上に依りて薙髮受業す、三年にして妙適和上寂す、師喪を修して後出遊し、五智山道空に依りて密敎を學び、後、顯密の諸學僧を歷訊し、講究を事とす、師自ら謂ふ　奈良諸大寺は佛法流傳の根本地なり、今日零落すと雖、嘉祥慈恩實學の餘風あるべく、縱令師範なきも、學得するとあるべし、と、乃ち誓うて奈良に向ふ、然るに當時奈良諸大寺衆徒を選ふと甚嚴重にして、他寺の薙髮する者の衆徒となるを許さす、師百方苦心して、遂に延享三年廿五歲にして藥師寺に入り、圓成院高範の資基範に師事し、法相宗の蘊奧を受く、數月にして基範寂す、師遺告により法光定院に住し　衆徒を訓誨す、十餘年一日の如し寶曆八年三十七歲京都に歸り、建仁寺に留り、二十唯識、三十唯識等を講す　五年にして再び奈良に入り、東大寺の衆徒となり、懷賢僧正に師事し、三論宗を學ふ、四年にして京都に歸り、講演著作を事とすると十餘年、門下雲の如し、安永元年五十一歲　因明大疏を講す、興福寺堯延法師聽衆の席に列し、講了るを待ち強て請ふに任せて、重ねて奈良に入り、興福寺に留り、講演著作を事とす、後京都に入りて講演著作を事とし、寬政三年病に罹り平生傳持するところの典籍數十函を藥師寺に納めて後學に資す、寬政三年十二月廿七日寂す、壽七十、著作義林章獅子吼鈔二十卷、因明智解融貫鈔二十卷、解深密經箋註五卷、五種玄論、十句義論疏、各二卷、三十論疏摩尼珠決、漢語八轉殺三摩婆娑釋未講決、隨喳八囀義、五姓玄論鵝珠光、受菩薩戒義、補闕法相義各一卷、（大同房基辨傳、三宅英慶氏返信、）

キサン　奇山　エンネン圓然を見よ、

キソー　奇叟　イチン異珍を見よ、

キハク　奇伯　ズイリユー瑞麗を見よ、

キホー　奇峰　シオー志雄を見よ、

キモン　奇文　ゼンサイ禪才を見よ、

キシユー　龜洲　シンレー深勵を見よ、

キネン　龜年　ゼンユ禪愉を見よ、

キフ　龜阜　ホージユ豐壽を見よ、

キモーシ　龜毛子　ドーネン道稔を見よ、

キヨー　龜洋　シユーカン宗鑑を見よ、

キリヨー　龜陵　エリン慧琳を見よ、

キウン　貴雲　レーイン嶺胤を見よ、

キオク　貴屋（二二五九／二三二〇）〔淨土宗〕增上寺第廿三代なり、貴屋は森蓮社遵譽と號し、直爾と稱す、俗姓生國詳ならす、一說に下總の人と云ふ、出家して淨土宗に皈し、幡隨院、大光院、傳通院を經て承應元年九月增上寺第三十三代の貫主となり上下の尊仰を受く、萬治二年十一月職を辭して青山梅窓院に閑居し、同三年正月廿一日寂す、壽六十二、（三緣山志、縚

白往生傳)

キヨ 貴磬　マンリヨー萬量を見よ、

キジユー 歸住 一八〇五……〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、歸住は如法と號す、高野山に入り、明王院に住し、草衣木食にして專ら觀行を修す、時人師を大如法と呼び、弟子を小如法と呼べり、久安元年四月十日六角堂前の松樹の上より天に昇りたりと云ふ、(高野春秋)

キセー 歸整 (……)〔臨濟宗〕相模建長寺の僧なり、歸整號は大綱、久しく樞翁環に師事して心地を究明し、圓覺寺に主となり、次に建長寺に移つる、後伊豆の國淸寺を領す、晩年巨福山建長寺の正濟菴に歸へりて寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

キゾーシツ 歸藏室　コーエキ交易を見よ、

キウン 季雲　エーガク永嶽を見よ、

キグ 季弘　ダイシユク大俶を見よ、

キトー 季東　シユーミヨー宗溟を見よ、

キガク 岐岳　ミヨーシユー玅周を見よ、

キシユー 岐秀　ゲンハク元伯を見よ、

キヨー 岐陽　ホーシユー方秀を見よ、

キザン 起山　シシン師振を見よ、

キヨ 起礜　エンチヨー圓長を見よ、

キリユー 起龍　エーシユン永春を見よ、

キアン 規菴　ソエン祖圓を見よ、

キセン 規川　シユーサク宗策を見よ、

キセン 窺仙　キセン喜撰に同じ、

キセン 窺詮　キセン喜撰に同じ、

キオー 葵翁　ニンチヨー忍徹を見よ、

キサイ 葵齋　リユーシン龍深を見よ、

キセツ 機雪　シユーシヨー宗淸を見よ、

キドー 機堂　チヨーオー長應を見よ、

キウン 旗雲　ソキヨク祖旭を見よ、

キガク 姫岳　ミヨーセン明洗を見よ、

キゲ 箕外　ジユコー需糠を見よ、

キゴク 熈極 (一六三三)〔眞言宗〕京都神應寺の內供奉なり、熈極は高野山座主救世の高弟なり、初め救世に依りて灌頂を受け、諸儀軌を學び、後寬朝に謁して其脈を繼ぎ許可を蒙むる、寂年缺く、(傳燈廣錄)

〔考〕熈極は天延頃の人なり

キサン 耆山 一三七二 一四五四〔淨土宗〕江戸青山梅窓院の學僧なり、耆山號は幗翁、傳通院の處靜院開山檀察に師事す、增上寺にありて詩文の名あり、寬政二年增上寺を出て青山に隱捿し同三年八十の高壽を迎へ內外の高僧碩學賀詞を呈す六年四月十七日寂す壽八十三、著作青山樵唱集十卷あり (三緣山志、江戸名家墓所一覽)

キサン 棊山　ケンセン賢仙を見よ、

キサン 輝山　シユーシユ宗珠を見よ、

キシン 輝眞　モンセン文詮を見よ、

キシ 器之　イハン爲播を見よ、

キネン 幾年　ホーリユー豐隆を見よ、

キハク 旣白　ジユサイ壽采を見よ、

ギイン　義尹　一八七七—一九六〇　〔曹洞宗〕肥後川尻大慈寺の開山なり、義尹字は寒巖といふ、後鳥羽天皇の皇子、（一說に順德天皇の第三皇子、）母は、左大臣藤原範季の女、脩明門院重子なり、建保五年に誕生す、幼にして出家し、比叡に登り、天台の宗義を學ふ、十六歲にして具足戒を受く、仁治二年廿五歲にして宇治の興聖寺に至り、道元禪師に皈す、寬元二年道元の北遊するに方り、師亦追從す、建長五年道元の寂に遭ひ、同年三十七歲にして宋に航し無外義遠、虛堂智愚、退畊源寧、等を歷訊し、自ら携ふる道元禪師語錄を示して校正を需む、三禪師並に序を作りて師に附す、文永四年商舶に便乘して東皈し、博多の聖福寺に寓す、後肥後に至り、小保里に幽居す、阿尻左衛門佐泰明の妹素明尼の請により宇土に三日山如來寺を開き、阿彌陀、釋迦牟尼、藥師の三像を手刻し、安置供養す、泰明は西宮左大臣源高明の後孫にして、實明といふ者肥後國河尻鄉を給せられ、河尻三郎と稱し、河尻の城に住居す、爾來世々河尻氏といふ、實明より十代の孫を泰明とす、深く義尹禪師の法德に皈服し、供養を怠らす、建治二年益城に極樂寺を開き、慈母の冥福を祈り、且つ郡の大渡に橋なきを憂ひ、自ら幹緣疏を製し、四方に助資を募り、日ならすして工事落成す、土人咸師の慈濟に感皈す、弘安元年泰明等相謀り、大梁山大慈寺を興し師を請す、師釋迦牟尼、文殊室利、普賢の三像を手刻して安置供養す、龜山法皇師の道風を聞きたまひ紫伽梨幷に勅額を賜ひ、大慈寺を官寺に列したまふ、師朝して恩を謝し、且つ御前に於て應製一磬聲中の作ありたりと云ふ、爾來師道風益揚り、世傳へて法皇長老と云ふ、幾もなく法席を弟子に讓り、正安二年八月廿一日寂す、壽八十四、偈あり、八十四年、動靜得禪、末期一句、威音以前、と、塔を靈根と云ふ、弟子五人あり、斯道、鐵山、愚谷、化叟、大智なり、後世此門派を法皇派と稱す、師自像の讚あり、曰ふ、「額皺眉霜頰本懷、百醜千拙具形骸、手中一脚傳來尙、脚下低高好草鞋、他來識知圖老躰、勝還添筆豈按排、」應製にいふ、「先皇輪旨定封疆、寺號大慈山大梁、從是兒孫相續在、盡乾坤內有誰爭、」（菊地軍記、寒巖禪師畧傳、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄）

〔考〕　寒巖義尹禪師の傳は、甚た明瞭を缺けり、禪師の世系に關して菊池軍記、菊池傳記、銀臺遺事、洞上聯燈錄には、後鳥羽天皇の第三皇子にして、順德天皇の皇弟とあり、畧傳、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、等には順德天皇の第三皇子とあり、今は姑く前說に依るも、第三皇子と云ふこと詳ならす、神皇正統記、神皇正統錄、皇帝紀抄、皇年代畧記、明月記、帝王編年記、等に依れは後鳥羽天皇の第三皇子は、即ち順德天皇なり、本朝皇胤紹運錄、皇代記、一代要記、百鍊鈔、等には、第二皇子立ちて順德天皇となりたまふとあれとも、仁和寺御傳に依れは、第二皇子は道助法親王なれは、神皇正統記等の說を捨て難し、禪師の母に關して、畧傳に順德天皇第三皇子にして、母は贈左大臣敎季の女とあるは誤なり、敎季の女脩明門院重子は後鳥羽天皇の后、順德天皇の御母なり、菊池軍記等に禪師の母修明門院重子とあるによれは順德天皇と禪師とは同母兄弟なり、禪師入宋皈朝の年時に關して、諸傳一致せず、畧傳に寶祐元年（我建長五年）入宋、凡そ四寒暑を經とあり、延寶傳燈錄、本朝高僧傳に同しく建長五年入宋留學十餘

年とあり、菊池軍記、洞上諸祖傳に禪師二十七歳にして入宋し、天童山長翁如淨禪師に參見したりとあるは誤なり、咸淳三年（我文永四年）皈朝とある諸書に同し、洞上聯燈錄に建長五年入宋し、翌六年皈朝し、孤雲徹通の二禪師に從ひ、文永元年再ひ入宋し、同四年に皈朝すとあり、前後二回入宋のこと他の諸傳に見えされは、今姑く疑を存す。道元禪師語錄に附する無外義遠の序末に景定甲子（我文永元年）とあり、退畊源寧、虛堂智愚の序末には、並に咸淳元年（我文永二年）とあり、故に我文永元年二年の頃、禪師の宋に留りたるは明なり、然れは今は建長五年入宋、文永四年皈朝と云ふに依る、法系に關して、延寶傳燈錄、本朝高僧傳には總持寺籍簿、寶山鐵公校纂の宗派圖、義堂の空華日工集の說に依り、道元禪師の法嗣となす、洞上聯燈錄には、禪師か仁叟淨熙に附したる嗣書に道元懷弉義价義尹とあり、禪師の孫無說宣が明菴須喆に附したる嗣書にも、同しと云ひ、此二證に依り、徹通の法嗣となせり、同傳に依れは、建長六年より文永元年再ひ出航するまで、弧雲徹通の二師に隨ひたりとあり、然るに禪師自ら道元禪師の法嗣を以て任したるかことし、道元禪師の語錄を携へて宋に入り、諸禪師に示したる事情、幷に無外、退畊、智愚の序の文意によりて略ほ明なり、且つ現今禪師の派下に傳ふる所によるも、道元禪師の法嗣となせり、故に今は洞上聯燈錄の說を採用せず、

ギウン　義雲　一九一三／一九九三〔曹洞宗〕越前永平寺の第五代なり、義雲は京都の人、紳縉家の裔なり、建長五年十二月に生る、幼にして俗に處するを甘せす、敎院に依りて出家し、華嚴法華の疏抄を學ふ、年二十四忽ち自ら歎して曰く、金鱗は龍と化すべし、曷そ教綱に拘泥せんや、と、奮然として衣を更へ、越の薦福寺に抵り、寂圓和尚に參す、和尚の門庭孤峻にして誨勵を事とせす、常に丈室に端坐して默淵日を竟ふ、纔に相看すれは呵せらる、學者其機に契ふものあること少し、師自ら發願文を製して和尚に呈す、和尚之を見て其精勤を愍み、允可して掛搭せしむ、師自ら樵爨の勞を憚らす、斯の如くするもの殆んと二十年、朝夕杳決して遂に堂奥に至る、正安元年和尚の遺囑を受けて席を繼く、家風峻絶、諸方之を憚る、正和三年越前永平寺席を虛す、出雲の太守藤原通貞、師を請して之を主とらしむ、一住十餘年、遠近風に靡く、推拂の餘暇に勤て構營す、夙夜心を注て敢て怠ることなし、堂宇總て廢を興し、金碧輝耀として林巒を照らす、時に中興と稱せらる、晩年上足曇希に命して席を補せしめ、榻を東堂に移して老を養ふ、正慶二年十月十二日疾な

義雲禪師

ギ（義）ウ

く、沐浴して衣を更へ、偈を書して曰く、毀教謗禪、八十一年、天崩地裂、沒火裏泉、と、筆を擲て寂す、壽八十一、臘六十五、全身を吉祥山に搭し、靈梅塔と號す、著作語錄あり、世に傳ふ、(日本洞上聯燈錄)

ギウン 義雲 (……)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、義雲は其鄉貫嗣承詳ならず、京都南禪寺に住す、文殊の讃に曰く、手中經卷本無文、著眼看來字義分、失卻金毛獅獅子、脚跟踏斷五臺雲、と、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

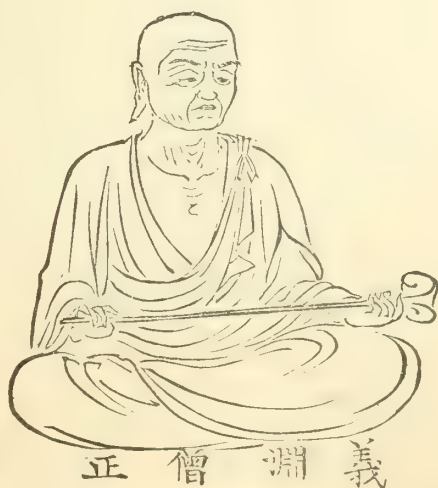
ギウン 義雲　ソゴン祖嚴を見よ、

ギエ 義慧 (一四七二)〔眞言宗〕山城高雄寺の僧なり、義慧は初め其師承する所を知らず、弘仁三年高尾山の直歲となる、寂年欠く、(弘法大師弟子譜)

ギエイ 義叡 (一五三九)〔法相宗〕奈良藥師寺の僧なり、義叡俗姓不詳、諸宗に通じ法相宗に精し、維摩會講師となり、少僧都に任せらる、元慶三年最勝會の講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ギエキ 義易 (二一〇一)〔曹洞宗〕三河妙嚴寺の開山なり、義易字は東海、參河の人、姓は源氏なり、十五歲にして出家し、諸老に參歷する十餘年、後、華藏禪師に師事して徹悟し、伽梨鉢盂を附せらる、時に永享十三年正月二十五日なり、華藏の寂後普濟寺に住し、法道大に振ふ、三河豐河の檀越某妙嚴寺を築きて主となす、某年此寺に寂す、壽欠く、(日本洞上聯燈錄)

ギエン 義演 一九七四……〔曹洞宗〕越前永平寺第四代なり、義演は其本貫詳ならず、波著寺懷鑑に業を受く、常に生死問題を以て自ら策勵す、懷鑑其精勤を見て甚た鍾愛す、仁治二年永平寺道元禪師に謁し、弟子の禮を執へ、元禪師滅後孤雲懷弉に參す、衆の請に依て進院開堂し、孤雲懷弉の嗣となる、晩年報恩寺に閑居して世と接せず、正和三年十月二十六日寂す、(日本洞上聯燈錄)

ギエン 義淵 一三八八……〔法相宗〕大和龍門寺の開山なり、義淵(ギエン)俗姓市往(イチキ)氏と云ふ、大和の人なり、其父子息なきを憂へて觀世音菩薩に祈禱し、一夜柴垣の上にて一兒を拾得するに、日ならずして成長す、事朝聞に達し天智天皇岡本の宮に召し養育せしめ給ふ、後勅を拜して出家す、是即ち義淵なり、師は元興寺に投じ智鳳に師事し法相宗を受學す、後吉野に龍門寺を開きて留住す、天皇岡本宮を賜ひ寺となす、龍善寺(俗に岡寺といふ)と云ふ尋きて龍福寺等を開く、傳に師は五個龍寺を開きたりと云ふ、大寶三年三月十四日に僧正に任せらる、同年十一月に勅して稻一万束を賜ひて其學業を

義淵僧正

賞揚す、神龜四年十二月に特に詔して其兄弟に岡連姓を賜ふ、即ち勅に曰ふ、僧正義淵法師、禪枝早茂、法梁惟隆、扇二玄風於四方一、照二惠炬於三界一、加以自二先帝御世一、迄二朕代一、供二奉内裏一無二一咎愆一、念斯若人年共隆宜下改二市往氏一賜二岡連姓一傳中其兄弟上、其翌五年十月に至り示寂す、聖武天皇勅して絁一百疋、絲二百絇、綿三百屯、布三百端を賻賜したまひ、治部の官人を遣はし喪事を監督せしむ、門下極めて多く玄昉、行基、宣敎、良敏、行達、隆尊、良辨は七上足と稱せらる、道場、道鏡も亦門下にあり、(續日本紀、扶桑略記、僧綱補任、三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕 義淵古來發音してギヰンといふ、元亨釋書に入唐して智周に受學したりあれども事實にあらず、諸傳一樣に其父、子息なく觀世音に祈請して得たるものとあれども、後に兄弟に姓を賜はれるより見れば、異腹の兄弟にてもありしこと明なり、

ギエン 義圓 テンカイ典海を見よ、

ギオー 義翁 ショーニン紹仁を見よ、

ギオー 義翁 セークン盛訓を見よ、

ギカイ 義海(一四七四) 〔華嚴宗〕大和東大寺別當なり、義海は出家して華嚴を學び、弘仁五年東大寺別當に任ず、寂年壽歆く、(東大寺別當次第)

ギカイ 義海(……) 〔三論宗〕大和東南院の學僧なり、義海は東南院の重器に就きて三論を學ひ、密敎を受け、倶舍を善くし、本院に住す、(本朝高僧傳)

キカイ 義海 一五三一―一六〇六 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、義海俗姓は宇佐氏、豐前の人なり、比叡山淸凉房の玄昭を禮して下髮得度し、顯密の二法を學ひ、座主尊意に兩部の密灌を受く、寬平八年座主康濟に菩薩戒を稟け、又奈良に奔りて性相學を究む、延長四年尊意の執奏により比叡山の阿闍梨となり、尋きて權律師に任す、承平六年春帝不豫なり、師勅を拜して祈禱す、功によりて正律師に轉し、砂金千兩を賜ふ、又天慶三年春延曆寺座主に補す、年已に七十、此年冬權大僧都に昇る、四年夏五月、勅を奉して大威德の法を修し、優賞を賜ふ、八年四月畿內大に旱す、師勅を奉して神泉苑に孔雀經法を修し、又法務に任せらる、五月上旬尊星王の法を行ひ、御願成就して年分度者十二人を賜ふ、十二月四日熾盛光の法を修す、此法を修する始めとす、九年五月十日寂す、壽七十六、(本朝高僧傳)

ギカイ 義海 ……二四一五 〔淨土宗〕新田大光院の學僧なり、義海號は空譽と云ふ、初め增上寺學寮に學び、常福寺に住し、後大光院に轉住し、著作を事とす、寶曆五年正月十日寂す、壽歆く、著作大經義疏選要記二卷、論註輔正記十二卷、遊心安樂道私記二卷、佛像標幟義箋註三卷、同圖說二卷、蕉窓漫筆三卷、蓮宗禦寇篇三卷、雪鵝箋斷非一卷、等あり、(近世佛家著作目錄稿本)

ギカイ 義价 一八七九―一九六九 〔曹洞宗〕越前永平寺第三代なり、義价號は徹通、越前足羽の人、俗姓藤原氏大將軍利仁の後裔なり、承久元年二月二日に生る、十三歲同國の波著寺懷鑑和尚の下に投して得度し、比叡山に登りて具足戒を受く、楞嚴の深旨を究め、兼ねて淨土業を修す、仁治二年興聖寺に登りて

道元禪師に謁す、元禪師上堂に曰ふ、是法住法位、世間相常位、春色百花紅、鷓鴣柳上鳴、と、師聞きて省あり、之より益參究し、後元禪師に隨逐して越前永平寺に遷り、典座となり、次に監寺となる、晝は衆事を辨し、夜は禪座して旦に達す、元禪師示寂後、懷奘に依附し、遂に此法嗣となる、奘謂ひて曰ふ、汝先師所得の處に於て其旨を會す、先師那伽定中必ず汝が爲に證を作らむと、又曰ふ、佛法の中人を得ること最難し、若し人を得ずは佛種を斷滅する罪を免れず、縱使人を得るも、而も其器にあらずばこの罪を免れず、此事先聖の難とする所、况やそれ今をや、今吾汝を得て、已に此罪を免る、今日死すとも復た遺恨なしと、即ち一門の宗旨建立を囑す、義价囑を受けて退き、後宋に渡らむとして如意輪虛空二大士像を刻し、誓ひて曰ふ、若し南遊して歸へり來らば嚴飾せむ、と、正元元年に出航し、直に天童山に登り、祖塔を禮し、後諸方に歷訊し、四年にして東歸し、永平寺に懷奘を省す、文永四年永平寺第三世となる、六年にして退休し、山下に養母堂を構へて老母に謹事す、美濃の擅越精舍を開きて請するも、遂に辭して出でず、加賀大乘寺澄海阿闍梨師に就きて禪要を聞きて師事す、擅越藤原家滿と俱に謀り、寺(眞言)を改めて禪宗となし、師を請して開山となす、延慶二年八月廿四日疾に罹り寂す、壽九十一、遺偈に曰く七顚八倒、九十一年、蘆花覆雪、午夜月圓、定光院を建てゝ靈骨を收む、嗣法四人あり、義尹、紹瑾 宗圓、壞暉なり、嘗て哲侍者と云ふ者あり、禪師の眞を寫して贊を求む、乃ち書して曰ふ、故業受生雖二各別一、即心是佛有二何疑一、從來俱住不レ識レ面、今日相看非レ我誰(日本洞上聯燈錄、本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

ギカク　義覺（一三二二）〔　〕難波百濟寺の僧なり、義覺は百濟の人、天智天皇の頃我國兵士に隨ひて來朝し、難波の百濟寺に留まる、一夕摩訶般若心經を誦す、同寺の慧義夜中に師の室內を見れば光明赫々たり、慧義怪みて窓隙より窺ふに師經を誦ずるに、口より光明を放つ、明朝慧義衆に告ぐ、衆皆驚嘆す、義覺語りて曰ふ、我目を閉ぢて經を誦す、百許遍にして目を開けば、四壁通洞として庭外皆見ゆ、起ちて之に觸るれば、室戸盡闔す、座に歸りて誦すれば通洞前の如し、是れ般若經の不思議力なり、と、示寂の年時缺く、(靈異記、元亨釋書、本朝高僧傳)

ギカク　義覺　ゼンヱ禪惠を見よ、

ギカク　義覺　ゼンヱ禪慧を見よ、

ギキヨー　義敎　二三五四　二四二八　〔眞宗〕越中射水郡氷見村圓滿寺の住持なり、義敎は大心海と號す、叢林六代の講主となり、學德共に高く大衆心服したりと云ふ大に日蓮宗を嫌ひ數書を著はして駁撃す日蓮宗の日緻日曉等亦書を著はして相當りたるため一時二宗を動搖したり明和五年六月六日寂す、壽七十五、著作願文講解、觀經敎演記、各四卷、阿彌陀經淨眼錄二卷、論註講義六卷、四帖疏講錄十三卷、二卷抄模象記六卷、二門偈講錄三卷、淨土眞宗諭客編一卷、輪駁行藏錄五卷、千五百條彈憚改十卷、並緣起一卷、本尊義破邪顯正一卷、閱寮壁聞一卷あり、(淸流紀談、本願寺通紀、本願寺派學事史)

ギクー　義空（一四四九）〔禪宗〕山城檀林寺の開山なり、義空は唐に生る、鹽官の齊安國師に師事し、南宗禪を傳ふ、

承和の初嵯峨天皇の皇后に請せられて來朝す、初め皇后空海より唐に禪宗あることを聞きたまひ、慧蕚を遣はして禪師を請したまふ、慧蕚は五臺山に上りて皇后發願の寶幡鏡匳等を納め、後鹽官縣の海昌院に抵り、齊安國師に謁す、國師は南宗慧能四世の法孫なり、慧蕚の請を納れて上首義空を使はせり、即ち師は法弟道昉等と共に慧蕚に從ひて來る、皇后大に悅びて東寺の西院に館せしめ、尋て宮中に召し禪を問ひ、奏對旨に稱ひ、檀林寺を興し、請じて開山となしたまふ、後辭して西歸し、示寂の年時を知らず、(元亨釋書、本朝高僧傳)
〔考〕弘法大師の傳には、空海の言に基きて義空の請せられたること所見なし、而も皇后の師を請したまひたることは事實なりとす、

ギクー　義空　一九〇一……〔……〕京都大報恩寺の開山なり、義空號は求法、出羽太守藤原秀衡の遠孫、父は忠明といふ、少にして鎌倉に月輪法師を拜して童子の役を執り、十九歲下髮納戒す、但し何れの宗に歸すへきかを知らす、鶴岡八幡宮に禱り比叡山に登りて澄憲に謁し、敎觀の旨を學ひ、諸師の室を敲きて秘密敎を得、倶舍論に通す、山に居ること十年、學業已に成る、師大誓を立て一精舍を建て、台密三論の三宗を弘めて、四恩に報ひんと欲し、建保初年洛北千本の地に初めて茅菴を結ひ、承久三年假に小堂を構へて釋迦幷に十大弟子を安す、貞應二年大堂を建てんと欲して良材を集め、殿宇成りて大報恩寺といふ、嘉禎元年特に綸旨を降して大小乘を弘布せしむ、師又多聞天の像を刻造す、仁治二年四月三十日寂す、壽七十に垂とす(本朝高僧傳)

ギクー　義空　ショーチユー性忠を見よ、

ギクワン　義觀　二三四〇……〔淨土宗〕下野某寺の僧なり、義觀字は傳隨、雄蓮社と稱す、奧州の人なり、出家して淨土宗に皈し、修學すること三十餘年、大小內外に通達す、常に倶舍、唯識、楞嚴、法華等を講ず、聽衆皆信服す、晩年下野國黑羽に住し法門を弘通す、延寶八年八月六日寂す、(鎭流祖傳)

ギクワン　義觀　二三七七……〔臨濟宗〕長崎某寺の僧なり、義觀は寶永中長崎にあり、才學なく某寺の浴室を守る、享保二年三月夜半火浴室より起る、義觀我過ちなりと云ひて火中に投じて死す、(野史、近世畸人傳、)

ギクワン　義觀　グゲン弘現を見よ、

ギクワン　義完　二四四五 二五〇九〔臨濟宗〕阿波玄要寺の禪僧なり、義完字は綾河、別稱再過と云ふ、阿波德島の人なり、俗姓芳村氏、始めて郡の慈光寺春叢禪師に師事す、出家せむとするも司吏許さす、乃ち潛に國を出て、讃岐に至り實峻禪師に師事し、後美濃に至り、正燈圓照禪師隱山に事ふること十一年、禪師の法を傳ふ、文化十年妙心寺第一座となり、十一年二月玄要寺に住し、文政元年伊豫の龍潭寺行應を請して槐安國語を評唱す、四年同寺の寶藏を造立し、尋て府庫殿堂等を造立す、天保六年開山月岑禪師の二百年忌に丁る、故あり、翌年三月に之を延修し、自ら五祖錄を評唱す、雲衲四集し、三百餘に上る、爾來盛に隱山の宗風を宣揚す、嘉永二年十月疾あり寂す、壽六十五、(近世禪林僧寶傳)

ギクワン　義寛　(二四一二)〔淨土宗〕尾張觀音寺の僧なり、

ギ(義)ク

義寛は尾張の人にして、知多郡觀音寺に住し、道心堅固なり、六十餘年間に唯數次門を出てたるなり、一僧あり師に問ひて曰く、老師何を以て關を消すか、と、師曰く、蝸牛角上石火光中唯迅速を覺ゆ、未た閑あるを知らす、と、某年大旱す、村民雨を禱らむことを請ふ、師辭すれとも聽かす、乃ち海上に壇を興し、端坐合掌すれは大に靈驗あり、村民歎呼し米穀を負ひて來謝す、師一握を受け、餘を返附す、村民益信仰敬服す、示寂の年時缺く、(續日本高僧傳)

〔考〕義寛は寶曆前後の人ならむ、

ギケー 義圭　タイジユー諦住を見よ、

ギケン 義見(………)〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、義見字は明室美作靑蓮寺江中梵巴の法を嗣き、總持寺に出世す、寂年欠く、(日本洞上聯灯錄)

ギケン 義賢 二〇五九―二一二八〔眞言宗〕山城醍醐山七十五代の座主なり、義賢は後遍智院准后といふ、將軍足利義持の猶子、小川權大納言源滿詮の子なり、應永六年に生る、滿濟准后の室に入りて得度し、三寶院十八世の席を董す、同師に庭儀職位灌頂を受け、永享五年詔して醍醐山七十五代の座主に補す、時に三十五なり、同年大僧正に叙せり、嘉吉年間東寺百四十七代の長者法務に補し、輦車牛車の宣を賜ふ、尋いて法務を辭す、又詔して百七十七代の長者に任す、應仁二年座主職を政深に付し、十月二日寂す、壽七十、(續傳燈廣錄)

ギコー 義光 二三一三―二三六二〔曹洞宗〕越中光禪寺の禪僧なり、義光字は月澗、俗姓は白子氏、越中の人なり、母は河合氏、靈夢に感して孕む、誕生して骨相淸奇なり、一日父三見を召し謂ひて曰く、阿誰か出家して父母を度すか、と、師聲に應して我出家すへし、と、父大に喜ひ、携へて寶光寺に附し侍童となす、十三歲光禪寺普門に師事し、尋いて蔭涼軒鉄心に見ゆ、天和元年月舟に、翌年卍山に見ゆ、卍山の下に趙州狗子話を參究し、紗契す、偈あり曰く、徹底有分徹底無、兩重關鎖一時開、南方五十有三處、笑殺普財空去來、と、後黃檗山に登り、獨湛に見ゆ、尋いて盤珪、心越等の諸大德に歷謁し、再ひ卍山の下に歸へり衣法を附せらる、貞享二年能登豐財院に住し、後、越中光禪寺に移轉す、佐渡の檀越師を直指菴に請す、師乃ち往き居ること幾ならすして病にかゝり、光禪寺に歸り、元祿十五年九月十六日寂す、壽五十、臘三十九、師平素行業嚴密なり、禪餘指頭の鮮血を灑して大般若經二百卷を書せり、(續日本高僧傳)

ギコー 義光 一五六八―一六二八〔法相宗〕大和傳法院の學僧なり、義光は興福寺基繼僧都に師事して唯識論を究め、安和中維摩會の講師となり、少僧都に任し、傳法院に住して法相宗を弘む、後西院を開きて第一世となり、天元元年八月五日寂す、壽七十一、門下に傳法院日觀、新院長保、傳法院安潤等あり、共に一時に傑出す、(本朝高僧傳)

ギコー 義向(一三一三)(………)入唐學問僧なり、義向白雉四年五月に遣唐大使に隨ひ、道福等と共に唐に航す、事蹟傳はらず、(日本書紀)

ギコー 義亨 一九五五―二〇二九〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、義亨號は徹翁、俗姓は頗氏、出雲の人なり、稍長して京都に入り、建仁寺鏡堂圓和尙を禮して師となし、鏡堂示寂の後十

九歳にして祝髮稟具す、大光和尙に南禪寺に謁し、大に器重せらる、大光亦寂するに方りて宗峰禪師に雲居寺に謁し印可を蒙むる、嘉曆の初め宗峰龍寶山大德寺に開法す、師朝夕奉侍して分座說法す、建武四年宗峰の遺命を受けて寺を領し、翌年春勅を奉して開堂す、師晚年別に寺前に一寺を建て德禪寺といふ、貞治六年秋將軍義詮の執奏により大德德禪の兩寺交代皆師の法孫住持すへき旨を命せらる、又天龍寺の命を受くれとも固辭して出てす、一日疾を示し偈を書して曰く、覿面當機、佛祖呑レ氣、一機轉處、虛空落レ地、と、筆を投して寂す、壽七十五、臘五十六、實に應安二年五月十五日、德禪寺に葬る、大永八年三月勅して大祖正眼禪師と諡す、著作語錄二卷あり、寬永十五年十一月澤庵宗彭奏し、勅して天應大現禪師の號を加賜す、(名僧行錄、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ギザン　義山　二三〇八―二三七七　〔淨土宗〕山城華頂山の學僧なり、義山字は良照、自ら信阿と號す、俗姓は三魔(ミマ)氏、京都の人なり、祖父宣治嘗て織田信長の武田勝頼を征するに從て戰功あり、其後讒せられて京都に潛居す、父宣次も亦武略あり、母は吉田氏なり、靈夢に感して師を生む、幼にして英悟なり、大和郡山に井司(イツカサ)榮休といふ者あり、家世々殷富なり、其母妙慧嘗て謂へらく、吾若し一兒を得は之を佛門に捨て、闔家冥福の資とせん、と、後一年京都に遊ひ、偶々師の聰慧にして世に比なきを聞き、約して義子となす、師遂に郡山の九條村なる光傳寺に投して剃染す、時に年十五なり、翌年江戶增上寺に遊學し、呑譽上人の室に入る、上人師の非凡なるを知り、命して下野圓通寺關證和尙の會下に赴かしむ、師精勤苦學して慧解日に進む、和尙武藏岩築の淨國寺に遷りて上首となる、師亦隨從し、衆と共に參究し、屹然として頭角を出たす、師殊に講說に秀て、語簡にして理明なり、玆に於て學徒雲集す、師乃ち宗門の諸書、及ひ俱舍、唯識、因明等の他宗諸部を敎講す、和尙師の偉器なるを喜ひ、其所學を以て悉く師に授く、後辭謝して京都に歸る、時に年卅六、是より緣に從ひて居處定まることなし、後洛東華頂山天王神祠の傍に菴居す、安養淨土の業を勵み、常時の日課五萬聲を修し、又日を剋して如法念佛百萬遍を行すること數十回なり、四方風を望みて淨徒門に迫る、師道暇恒に四來の爲に宗書及ひ他宗の章疏を講說す、大に宗風の頽廢を慨して破邪顯正につとむ、又宗書の誤謬あるを嘆き、普く善本を求めて校正し、印行して初學に便す、嘗て水戶の光圀師の德風を聞きて篤く請聘すれとも固辭して往かず、知恩院卅二世秀道大和尙、卅三世圓理大僧正、及び同院門主二品親王等の歸仰を受け、屢々盛典に侍す、太上天皇師の德を慕ひ正德五年四月宮中に召して法要を聞ひ給ひ、物を賜ひて勞を謝し給ふ、又上皇一夜嘉夢を感じ師に命して之を圖にせしむ、師原夢一篇を作りて呈す、皇情大に喜ふ、又承秋門院の命を受けて宮中に法を說く、其他縉紳の歸崇甚た多し、又關證和尙の囑を受けて元祖の傳を校正し、智恩院の藏本と比較して註を附し之を大成す、圓光大師行狀翼贊六十卷是なり、享保二年十一月十三日疾を以て寂す、壽七十、臘五十六、京都の東南華頂山に闍維す、著作三部經隨聞記七卷、圓光大師行狀翼贊六十卷、同隨聞記十卷、和語燈錄日講私記七卷、撰擇集講錄三卷、一枚起請隨聞記一卷、三卷書隨聞記

ギ(義)サ

一卷、曼荼羅述奬記四卷、授菩薩戒要解一卷あり、（義山和尚行業記、淨土宗經論章疏錄、）

ギザン 義山 二三八二…… 〔眞言宗〕山城智積院第十二代なり、義山字は音識、美濃大垣の人、出家して眞言宗の敎義を究め、播摩亦穗遠林寺に住す、後智積院に入り、六波羅普門院に住し、大石良雄等と往來す、尾張長久寺、江戸圓福寺を經て寶永六年智積院第十二代能化となる、享保七年四月四日寂す、壽欠く、（密嚴譜脉、純雅雜記）

ギサン 義山 トーニン等仁を見よ、

ギシン 義眞 一四四一 一四九三 〔天台宗〕近江延暦寺の第一座主なり、義眞は俗姓詳ならす、相模の人、弱年にして比叡山に登り、最澄に師事す、師最澄に大安寺に侍する時、鑒眞律師の徒に就きて戒範を受け、天台を探り、能く唐言に通す、延暦二十三年最澄入唐の際、奏請して師を伴ひて渡航し、貞元二十年十二月七日台州の國淸寺にて圓頓戒を受け、大僧に列し、最澄と同しく順曉の灌頂壇に入り、明年夏共に歸朝す、弘仁十四年四月十四日勅により始めて根本中堂に圓頓大菩薩戒の羯磨を行ふ、此年嵯峨天皇諸宗に詔し各一家の奧を述へしむ護命は研心章を作りて法相を述べ、空海は十住心論を著して眞言を述べ、師は天台宗義集を作りて斯宗を讃す、天長九年詔ありて延暦寺座主となる此職師に始まるなり、九年興福寺の維摩會講師となる天台宗徒の此任に預るもの亦師に始まるなり、晩年修禪院を構へて退休し修禪和尙と號す、十年七月寂す、壽五十三著作宗義集、雜疑問各一卷あり（元亨釋書、本朝高僧傳）

ギジユン 義順 二五一八…… 〔眞宗〕美濃安八郡大牧村智通寺の住持なり、議順は大通院と號す、寮司となりて天保十二年より高倉學寮に二十述記、八宗講要を講し、弘化四年四月二十日擬講となり、嘉永四年より略述法相義、歩船鈔を講す、略述法相義講錄は上梓せり、安政五年十二月五日寂す、（眞宗史料）

ギジユン 義準（……）〔曹洞宗〕越前永德院の開山なり。義準は義价、義演と同しく懷鑑和尙に師事し、尋て比叡山に登り三藏を探り後京師に入り、興聖寺道元禪師に謁し、師事すること多年、道元永平寺に遷るにおよひ、師は興聖寺に留て院事を統ふ、後に永平寺に至り、記室を掌り、道元の滅後孤雲和尙に咨參して心印を受く、某氏永德院を創して師を延て第一祖と爲す、暮年觀音院に退居す、終る所を知らず、

ギジユン 義準 ギノー義能を見よ、

ギスイ 義瑞 シヨーキヨー性慶を見よ、

キソン 義尊（……）〔天台宗〕山城良峰寺の僧なり、義尊初め比叡山の横川にありて顯密を學ひ、後西山の良峰寺に住す、師性禪を愛し端坐すること九年、常に法華を誦し地藏菩薩を信す、長さ二尺の像を作りて龕中に安す、又靈夢によりて三尺の像を作る、寂年、及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

ギシヨー 義照 二五八〇 一六二九 〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、義照俗姓は藤原氏、京都の人なり、幼にして出家し、笈を諸師に負て性相學を究め、殊に論義に長す、元興寺に住し、大に法相を張る、承平四年比叡山の良源勅を奉して興福寺維摩會の講席を主り、師と共に大に論義し、時人をして驚嘆せしむ、師時に年未だ弱冠ならず、天暦八年十二月五日良源の請

により比叡に法華八講を修し、山に留まる四日、大に義辯を振ふ、安和二年正月三日寂す、壽五十、(本朝高僧傳)

ギジヨー 義靜(一四一七)〔戒律宗〕開祖鑑眞和上の弟子なり、義靜俗姓詳ならず、唐に生れ出家して鑑眞に師事す、揚州の興雲寺に住す、眞和尙の東遊に從ひ來り、後招提寺を補す、道俗歸仰し、檀䞋を以て藏經を購ひ輪藏を招提寺に建つ、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

キジヨー 義成 ……一三六二 〔三論宗〕大和の僧なり、天武天皇二年十二月に少僧都に任ぜらる、我國の少僧都は義成に始るなり、大寶二年に寂す、(續日本紀、七代寺年表、僧綱補任)

ギジヨー 義定 エーザン榮山を見よ、

ギジヨー 義讓 リヨージユン了淳を見よ、

ギタイ 義諦 二四三二 二四八二 〔眞宗〕攝津上殿慈明寺の住持なり、義諦は越中の人、宗學を快樂院を受け、後本山の命に因り攝津慈明寺に住す、蓋し同地三業の餘黨あるを以て、師をして異安心を改悛せしめんが爲めなり、文化十二年文政四年の安居代講を勤む、文政五年閏正月京都に寂す、壽五十一、著書略文類記三卷、般舟讃記一卷、王本願成就文記一卷、八番問答錄二卷あり、寂するや謚を下して速成院といふ、(淸流紀談、學苑談叢、本願寺派學事史、越中史略)

ギタク 義卓 ニチゲン日玄を見よ、

ギチユー 義冲 一九四二 二〇一二 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、義冲號は大陽、俗姓藤原氏筑前の人なり、早年穎敏にして諸書を讀み、論語を暗誦するに至る、無爲和尙の下に出家し、後、鎌倉に下り、諸禪師を歷問す、再び西下し南禪寺に留り、曆應元年筑の承天寺に出世す、康永元年京師の普門寺に住し、同二年東福寺に迎へられて住す、觀應元年勅を拜して南禪寺に住す、天皇召して宮中に菩薩戒を受けたまふ、師毘盧遮那經を講じ、後勅問により卽心卽佛の話を奏對す、中條某三河高橋に長興寺を開き、迎へて開山とす、また檀越の請により、近江高島に淸凉寺を興し、開山となる、平生金剛經三十卷を課し、兼ねて密呪を持す、文和元年正月十一日病に因り遺戒を弟子に付し寂す、壽七十一、偈あり、直證二無生忍一、重轉二大法輪一、南辰後合レ掌、北斗裏藏レ身、(本朝高僧傳)

ギテン 義天 一九五〇 二〇二七 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、義天字は無雲、俗姓は加茂氏、山城の人なり、幼にして建仁寺の鏡堂圓和尙に師事す、十七歲鏡堂の寂するに及び、靈龜龍に就きて剃髮す、初め南禪寺に於て規庵圓禪師に侍し、次に蒙山明に依る、後相模に遊び、建長寺靈山隱和尙に參す、旣にして支那に入り、天童山に於て雲外岫に謁し、諸智識に見え、歸朝して京都の東山に寓す、時に石梁恭席を董して四來に接す、師を延きて版首となす、淸拙澄和尙代り住するに及ひ、亦師を同職に置く、貞和二年法を播磨法雲寺に開く、時に年五十七なり、京都安國寺の命あるも應せす、文和六年選はれて建仁寺に住し、光澤菴を構へて老を養ふ、晚年南禪寺を領し、貞治六年五月二十七日東山の本菴に寂す、壽七十八、臘六十三、遺偈あり、曰く、一靈皮袋、皮袋一靈、四大分散、作二甚麼形一、呵呵呵、休二定論一、木馬嘶二火裏一、泥牛吼二海門一と、(續群二三五、本朝高僧傳)

ギテン 義天 ……二三四三 〔淨土宗〕京都淨華院第四十四代な

り、義天は源蓮社高譽、隨風と號す、山城伏見の人、其俗姓詳かならず、廓山に師事して法を嗣き、江戶下谷西蓮寺を開く、後京都淨華院に住して四十四代となる、晩年に及び、近江西阪本法藏院に退き、天和三年五月十三日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ギテン　義天　二三二一／二三六七　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、義天字は廓如、俗姓津守氏攝津住吉の人なり、八歲にして津守寺成海に投し度を受く、後比叡山に登り、千光院大海に師事して顯密を兼學し、十八歲千光院に主となり、兼ねて攝津の神宮津守の二寺を領す、當時妙立和尙比叡山麓に住して戒律を唱ふ、師は四王院義道と共に從學す、靈空和尙安樂院を弘律場となすに方り、師大に與りて力なり、靈空戲に曰ふ、公は是れ安樂之護伽藍神なり、と、仙波の喜多院、東叡山の凌雲院に累遷し、大僧正となる、寶永四年十月朔日阿彌陀佛の像前に寂す、壽五十七、（天台霞標）

ギテン　義天　二四八七／二五四九　〔眞宗〕越中礪波郡竹內村眞敬寺の住持なり、義天號を孤竹といひ、香華院と稱す、越中礪波郡竹內四箇村の人、俗姓は宮地氏、世々眞敬寺を住持す、父は法順、母は高阪氏の女なり、幼にして書を好み、稍々長して每夏京都に入り貫練の堂に上り、其間に宗學を本法院義讓に、天文を天龍寺環中に、俱舍法相を智積院の龍謙義觀二師にいつれも親しく受け、明治四年三月擬講となる、是より先き寮司となりて、元治元年以降俱舍論、百法問答鈔を講し、擬講となりて唯識記述を講し、三等學師となりて三經往生文類を、二等學師となりて散善義を講し、十八年嗣講となりて往生要集、定善、義觀經を講し、二十二年四月十七日講師となり、同日寂す、壽六十三、臘四十、法主悼惜して少賛敎を贈る、三日を越えて鳥邊野阿彌陀峯に葬り、骨を故里に送り葬る師高野氏の女を娶りて五男一女を生む、長を自成といひ夭折し、次を大成といひ、其嗣たり、次は知法宣楊義芳といふ、（碑文、眞宗史料）

ギテン　義天　ゲンショー玄詔を見よ、

ギトー　義陶　二四〇〇／二四八一　〔眞宗〕三河岡崎滿德寺の住持なり、義陶は最親院と號す、三河の人、高倉學寮に學び、寬政七年八月九日擬講となり、文化三年八月八日嗣講となり、文政四年正月二十六日寂す、壽八十二、（高倉學寮講者列傳稿本）

ギトー　義統　……／二三九〇　〔臨濟宗〕京都大德寺の第二百七十三代なり、義統字は大心、別號は蓮華童子といふ、俗姓は下村氏、京都の人なり、十歲紫野淸涼院に投し、天倫忽禪師に師事す、明年二月剃髮し、二十一歲父母未生前本來面目話を參究し、稍省するあり、延寶八年正月黑江快聞師に菩薩戒を受く、四月宗門十勝論を講す、天和三年四月八日比丘戒を受く、貞享三年始めて高桐院輪番に補せらる、寶永三年二月龍山大德寺に住持となる、次に總見、大仙、羅賢、東海、等の諸寺に歷住す、念佛持咒の餘暇著作を事とせり、享保十五年六月七日寂す、具足戒弟子四十八人、菩薩戒弟子六百人、著作諸宗儀範、龍寶山大德寺誌各二卷、靈會日鑑、禮敬三寶說、墨江紀略、黑業油薪各一卷等三十餘部若干卷あり、諸人に惠賑したる書籍六千二萬三百五十一本なり、（續日本高僧傳、禪宗史料）

ギトー 義東 二〇二〇 二〇八三 〔曹洞宗〕遠江普濟寺の開山なり、義東字は梅岸、其俗姓詳ならず、始め東洲に參して狗子無佛の話を參究し、半年を逾えて省有り、東洲に師事すること多年、道化盛にして朝野歸向す朝旨特に德誠禪師の號を賜ふ應永三十年四月寂す、享年六十四普濟寺は師を以て開祖と稱せり、(日本洞上聯燈錄)

ギドー 義道 (二三五八) 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、義道字は淸白、號は夢槐といふ、萬治元年比叡山常智院を主り、寛文九年東叡山の眞乘院(後ち養壽院と改む)を兼ぬ、延寶元年覺林坊に轉す、盛胤親王四王院の號を賜ふ、元和二年比叡山の佛儀院を主り、解脫親王十願王院の號を賜ふ、貞享元年學頭正覺院を主る慈山妙立、顯道敬光等と道交深く、道暇詩文の贈答をなせり、元祿七年東叡山の學頭凌雲院を主り、十一年大僧正に昇る、東叡山の學頭にして大僧正に昇るは是を以て始とす、退隱して三諦院と號す、寂年月日詳ならす(天台霞標)

ギドー 義道 ニチテンロ眞を見よ、

ギドー 義堂 シユーシン周信を見よ、

ギドー 義堂 シヨーセキ昌碩を見よ、

ギドー 義導 (二五三五) 〔眞宗〕越後蒲原郡平澤村景清寺の住持なり、 道導姓は福田氏、威力院と號す、初め寮司となりて天保十五年より高倉學寮に比觀大意、法華經、俗諦不生不滅論、四教儀、法華玄義、法華文句を講し、安政三年正月十二日擬講となりて後美濃岐阜願正坊に轉住し、萬延元年正信偈大意金光明經執持鈔を講し、慶應二年正月四日嗣講に進みて美濃狐穴村に隱れ、四年淨土論を講し、明治二年近江唐川寺に轉住し、同五年正像末和讃を講し、二等學師となりて、八年文類聚鈔、玄義分を講す、(眞宗史料)

ギドー 義洞 コーソン巧存を見よ、

ギドン 義曇 二〇三五 二一一五 〔曹洞宗〕遠江普濟寺第二代なり、義曇字は華藏、肥後國の人、其俗姓は詳ならす、年始めて十歲、錢塘の海藏寺に入り、梅巖和尚に師事し出家す、左右に服侍すること二年、應永六年の歲梅巖世を謝す、師乃ち諸方を歷遊す、次で京師を出でゝ、遠州を經、會ま引間城主吉良氏新に精舍を建て居らしむ、精舍隨緣寺と號す其村天龍に沿ふを以々洪水あり流失す乃ち寺基を城地に移して再建し改めて普濟寺と號す、師梅巖を奉して始祖となす、康正元年四月朔日寂す、壽八十一歲(日本洞上聯燈錄)

ギナン 義南 (二〇一〇) 〔臨濟宗〕京師大德寺の禪僧なり、義南は出雲の人、俗姓は源氏、徹翁和尚の族弟なり、出家して戒律を修し、後臨濟宗に皈し、大燈國師に從ふ、後支那に入り中峯和尚に參して益々宗奧を究む、元の順宗其道譽を欽して菩薩の號を賜ふ、觀應元年無文選と共に皈朝し、化を關西に布く、寂年、壽歆く、(龍門夜話)

ギノー 義能 (一九〇九) 〔眞言宗〕播磨加古郡無量壽院の開山なり、義能は初め義準と稱す、字は明信、越後の人、本と禪宗にして、佛法禪師道元に從ひて出家す、長するに及び京都五山の門を叩き、次に高野山金剛三昧院に登り、行勇覺心の遺跡を禮し、意教に門學す、遂に其傳法職位を受け、法身の心印を付せらる、意教を勸奬して越洲の民を利濟せしむ、乃

ち鐵塔の相承、醍醐の的脈を嗣かんことを請ひて許さる、後播州加古に無量壽院を建て丶始祖となり、某年寂す、壽缺く、（續傳燈廣錄）

〔考〕義能は建長頃の人なり

ギハン　義範　一六八三 一七四八　〔眞言宗〕山城醍醐寺の住僧なり、義範俗姓は藤原氏、肥後の人、仁海に師事して密敎を習ひ、後成尊に從つて兩部の灌頂を受け、又性信法親王を拜して益々硏究す、永保二年夏秋の交畿内大に旱す、師敕により雨を祈りて驗あり、應德三年冬東寺の長者に補し、權少僧都に任す、寬治二年春疾に罹り、諸職を辭し、閏十月五日寂す、壽六十六（東寺長者補任、密宗血脉鈔、本朝高僧傳）

ギハン　義範　二四九〇 二五三八　〔新義眞言宗〕山城智積院第四十一代なり、義範字は現覺俗姓は佐々木氏、佐渡羽茂郡小比叡村の人なり、歲甫めて九歲州の養禪寺泰眼和尙に投じて剃髮し、天保十二年智山に掛錫して弘現の室に入る、明治三年佐渡蓮華寺に主となり、六年大講義に補す、七年進んで智積院能化職となり、宗敎の頹風を傷み、其挽回を以て任となす、明治十一年權大敎正に進み、此歲江戶增上寺に在りて衆の爲めに義林章を講ず、まだ半ならずして疾に罹り、九月十日寂す、壽四十九、東都桐谷に荼毘して遺骨を智積院に葬る、著作光明眞言和讃一卷、密宗安心章開蓮記三卷あり、（新義眞言宗史料）

ギベン　義辨　二五二〇……　〔眞宗〕參河碧海郡鷲塚村蓮成寺の住持なり、義辨は寮司となりて天保七年より高倉學寮に慧心枕双紙、四敎儀、華法玄義、十不二門指要鈔を講し、嘉永二年二月廿八日（一に廿三日）擬講となり、四年三月同郡靑野村慈光寺に轉住し、六年より學寮に觀經疏妙宗鈔最要鈔を講し、萬延元年四月四日寂す、（眞宗史料）

ギホー　義芳　クンコー訓光を見よ、

ギホー　義寶　二四四五……　〔融通念佛宗〕大和宮堂觀音寺の學僧なり、義寶は素範と號し、祥慶院と稱す、備前の人なり、出家して眞言宗なる長谷寺（豐山）に學び、後、融通念佛宗に入り隆天に師事し、觀山、玄嶺、圓應、東羸、太虔等の諸師に交はり、宗乘を硏究し、大に發明あり、大和平群郡宮堂常應山觀音寺に住し、宗風を擧ぐ、安永二年十一月大師號私記一卷を撰し、勅諡號聖應大師の原つく所、勅旨の存する所を明にす、天明五年六月廿三日觀音寺に寂す、壽七十餘なり、著作融通緣起綱要鈔八卷、圓門再集註（卷數不明）大師號私記、六字名號章、各一卷あり、（西本眞察氏返信）

ギボン　義梵　（二〇五四）　〔曹洞宗〕興禪寺の禪僧なり、義梵字は唄庵、大隅の人、幼にして象室和尙に依りて薙髮具戒し、往て興禪寺に不見禪師に師事すること多年、學行大に進み、總持寺に出世し、越前興禪寺主となる、後ち長禪寺を築いて第一世となり、應永中龍泉寺に住す、石見の檀越海藏寺を建て、請して住持せしむ、師不見を推して開山となす、寂年欠く、（日本洞上聯灯錄）

ギボン　義梵　二四一一 二四九七　〔臨濟宗〕筑前聖福寺の禪僧なり、義梵字は仙崖、美濃武儀郡谷口の人、郡の淸泰寺空印を拜して度を受け、後出遊して本覺淨妙禪師に參し省あり、偈を呈す、筑前聖福寺に至り、盤谷適和尙に師事し、機語相契ふ、

遂に其席を繼ぎ、妙心第一座となる、聖福寺に住する三十年一日の如く、道化盛なり、晩年虚白院に退隱し、孤燈隻影、淡然として安坐し、時々墨戲をなす、筆意奇警人を驚かす、本山の諸老屢勸めて紫衣を拜せしめんとするも固辭して受けす、天保八年九月病あり、十月七日偈を書して曰く、來時知二來處一、去時知二去處一、不レ撒レ手懸崖、雲深不レ知レ處、泊然として寂す、壽八十七、嘗て觀世音の黃金像を感得す、故に人呼ひて普門圓通禪師と云ふ、後人圓通禪師墨書書一卷刊行す、（圓通禪師墨蹟書、續日本高僧傳）

ギモン　義門　リョーデン靈傳を見よ、

ギユー　義融　二三三二―二三九六　〔眞言宗〕和泉金輪寺の僧なり、義融字は禪龍、俗姓は有賀氏、播磨飾西郡置壚村の人なり、十三歲郡の眞言宗眞樂寺深慧に投して得度す、後、高野山に登り、春雅阿闍梨より灌頂を受く、十九歲にして戒律に志し、姬路不動院順性により八齋戒を受く、寛永元年十月和泉大鳥山に登り、三年三月同山に於て具足戒を受く、五夏已に滿ちて攝津國分寺に住し、次に京都東山淸閑寺に遷る、行事鈔梵網古迹記等を講し、聽衆信服す、享保十年和泉路尾村了夢居士の請に應し、金輪寺に住す、十八年夏大に旱す、村民雨を祈らんことを請ふ、乃ち七日を期し、晴雨法を修す、靈驗あり、諺に曰く禪龍は眞の善龍なり、と、晚年淨土往生を願求し、日日陀羅尼數千遍を誦して行業となす、元文元年春微恙に罹る、氣力稍衰ふるも行業常の如し、秋八月十五日菩薩戒本を誦し、告けて曰く、今生の布薩今日のみ、と、翌日弟子を誡め、二十二日阿彌陀佛を念誦して寂す、六十四、（續日本高僧傳）

ギユー　義融　エネン慧然を見よ、

ギヨ　義譽　レンテキ蓮的を見よ、

ギリユー　義龍　……―二四四二　〔眞宗〕和泉專稱寺の住持なり、義龍一名は慧鏡、號は如實菴、和泉の人なり、明和七年高倉學寮擬講となり、顯深義記を講ず、安永五年嗣講隨慧、公事あり江戶に到る、故に隨慧に代り三帖和讚を講す、六年夏續講す、七年群疑論を講ず、後往生要集、俱舍論頌疏、選擇集を講ず、天明二年正月二十七日寂す、壽欠く、（高倉學寮講者列傳稿本）

ギリユー　義龍　（……―……）〔臨濟宗〕丹波龍雲寺の僧なり、義龍字は愚菴、初の名は祖竹と云ふ、丹波天田郡一尾村の人なり、八歲龍雲寺に投じ、十七歲法常寺大道禪師に謁し、十九歲日向の古月材ノ高風を慕ひ、西航して謁を求め、前後二十年に亘る、後、東歸して龍雲寺に住し法席を張る、幾もなく寺事を法弟に付與し、別に草庵を營みて幽棲す、虛空求聞持法一百座を修して靈驗あり、尋て白隱鶴に謁して嘆賞せらる、拙堂、東嶺、遂翁、葦津、靈源等の諸禪師と往來す、鶴禪師自畵自贊の杖を附與するも固辭して受けず、後梅林寺金剛寺に住し、法化盛なり、梅林寺の檀越某一枝軒を創立して迎ふ、某年十一月三日寂す、壽八十、遺偈に曰く、八十年間一日程、移レ居レ換處幾村城、春風不レ入二老僧戶一、白雲滿レ頭拂又生、

ギリヨー　儀稜　（二〇八九）　〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、義稜字は伯師、俗姓は秦氏、山城稻荷の人、九歲にして栖水寺に投して內外の書を習ふ、會々月堂心、慧日寺の龍吟菴に寓す師十一歲にして月堂心を拜して師となす、月堂東山

の瑞光塔を守るに際し、師左右に辭し、十五歳にして薙髮し、建仁寺に學ぶ、十七歳にて賓筵を司り、十九歳にて經藏を司る、二十九歳後班に轉し、職を釋きて光澤寺の祖塔を守り、大に敗頽を修す、五十一歳一座となり、應永三十四年春伯耆の安國寺に出世し、永享の初め豐後の萬壽寺に移つる、七年東山の左麓火あり、住持退く、將軍足利義教の命により師其席を補し、莊田を付せらる晩年瑞光菴に於て寂す、其年時缺く、著作東山二會話錄あり、(本朝高僧傳)

ギウン 儀雲 ジトン示敎を見よ、

ギサン 儀山 ゼンライ善來を見よ、

ギチユー 儀中 シユーエン宗演を見よ、

ギテー 儀貞 二三九二 二四六二 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十三代なり、 儀貞字は本昌、俗姓は初瀨川氏、上野群馬郡菊地村の人、享保十七年三月二十一日を以て生れ、郡の足門村德昌寺良照の室に入り、八歳にして薙髮受戒し、豐山に登り、傳法灌頂を僧正圭賢に受け、雲井梅心兩院に遷住す、天明三年七月二十五日四十箇年の許狀を帶び、大和室生寺に轉し、寬政三年六月十四日台命に依り江戶根生院に住し、第二十三代となる、在住六年、寬政八年四月十六日再び命を蒙りて護持院に移り、護國寺の主職を兼ね、權僧正に任ず、同年十月七日擢でられて、遂に豐山能化職に晉み、法權を執ること七年、享和二年三月十一日寂す、壽七十一、(新義眞言宗史料)

ギオー 宜翁 ニチカ日可を見よ、

ギシユン 宜春 エーガク英岳を見よ、

ギジヨー 宜成 二四三七 二五二一 〔眞宗〕河內金田光照寺の住持なり、 宜成は皆遵院と號す、擬寮司となりて高倉學寮に金牌論、南岳心要を講し、寮司となりて、執持鈔、四敎儀集註、法華經を講し、天保元年十一月二十一日擬講となり、三年より四敎儀集註、金牌論を講し、弘化元年七月二十五日嗣講に進み、三年より往生禮讃、大經上卷を講し、安政五年講師に任して觀經序分義、淨土和讃を講し、文久元年正月三日(一に四日に作る)寂す、壽八十五、在職四年なり、(眞宗史料)

ギシヨーニ 宜詳尼 二四二四 二四八七 〔臨濟宗〕播磨不詳菴の尼なり、宜詳は眞宗と號す、俗姓は中島氏播磨御津濱の人なり、甫めて十歳網干龍門寺默禪を禮して受具し、後遊方して井山寺大雲、永安寺愚溪堅相寺隱山に歷參し後播磨の不詳菴に住し常に尼衆に接し、文政十年八月十九日寂す、壽六十四、臘五十五、(禪宗史料)

ギチク 宜竹 ギシユーリン周麟を見よ、

ギネンボー 宜然房 ミヨードー明道を見、

ギモク 宜牧 二四八二 二五五九 〔臨濟宗〕京師天龍寺の禪僧なり、宜牧號は滴水、無異室と稱す、丹波國何鹿郡白道路村由里彥兵衞の男、文政五年四月八日に生る、父早く喪す、遺命により出家し、同國加佐郡行永村龍勝寺大法和尙に師事す、時に九歳なり、後備前の曹源寺に儀山善來禪師(特賜佛國興盛禪師)の道譽を慕ひ、其下に掛搭せむとして到るも、滿衆を以て謝絕せらる、懇請三日にして漸く許さる、入室參究數年に亘る廿八歳禪師の命により、嵯峨安藝佛通寺續翁和尙の法化を助け、尋て京師に上り、嵯峨要行院義堂和尙を訪問し、同院に留住す、文久二年四十一歲、天龍寺西堂に補せられ、義堂に

代りて叢林を領す、元治元年七月天龍寺兵火に罹る、宜牧祖堂に入り、開山夢窓國師の靈像を負ひて林樹の中に遁避す、明治四年天龍寺派管長となる、五年大敎正に補せられ、禪三派（臨濟、曹洞、黄檗）の管長に選任せらる、十二年二月法嗣龍淵を拉へて東京に上り、天龍寺伽藍再建の勸進のことを政府に請願して其許可を得、爾來再建を經營す、十七年林丘寺住職を兼ね、同寺の癈頽を中興す、二十四年天龍寺管長を龍淵に讓り、林丘寺に閑捿す、廿九年再び管長となり、再建工事を督す、三十二年林丘寺住職を辭し、專ら天龍寺の爲めに盡し、再建の工事略ぼ功を竣ふに至りて疾に罹り、一月廿日林丘寺雲母菴に寂す、壽七十八、遺偈あり、曹源一滴、七十餘年、受用不盡、蓋天蓋地、

ギカイ 顗海　ニチコー日亭を見よ、

ギケン 撝謙　……二五二五　〔眞宗〕尾張中嶋郡苅安賀村專養寺へ住持なり、撝謙は尾張の人、寮司となりて天保七年より高倉學寮に六物圖、菩提心論、顯密二敎論、即身成佛義、秘藏寶鑰、遺敎經、南海寄歸傳、講演法華儀、四分律戒本、無量義經、法華經、蓮華三昧經を講し、安政六年正月七日擬講となり、文久三年本理大綱集を講し、慶應元年十二月十二日（一に十四日）寂す、（眞宗史料）

ギヂン 巍然　……二三二八　〔淨土宗〕信濃給念寺の開山なり、巍然は信蓮社大譽と號し、信濃松本の人、君譽上人に師事して法を嗣ぎ、州の塔原給念寺の開山となる、寛文八年三月二十二日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

キクイン 菊隱　ズイタン瑞潭を見よ、

キクイン 菊隱　チューリヨー中亮を見よ、

キクイン 菊隱　ウクワン有桓を見よ、

キチザン 吉山　二〇一二 二〇九一　〔臨濟宗〕京都東福寺の僧なり、吉山字は明兆、淡路物部鄉の人なり、出家して東福寺に入り、大道禪師に事ふ資性畫を好み、朝參暮詣を廢するに至る、大道每にこれを戒め、將に師弟の契を絕たんとす、是に於て師自ら謂ふ、道路に遺棄するものは敝屣なり、我れ今大道に棄てらる何んぞ敝屣と異ならんやと、これより自ら破草鞋、赤脚子と號す、嘗て大道の不在に際し、筆を縱ちて不動尊を畫く、其畫絕妙にして眞に逼る、大道返りてこれを見、大に其至妙なるを感じ、これより敢て妨げざりきと云ふ、應永中東福寺殿司となりて、實兄業仲和尙の開きし南明院に住す、因て兆殿司と號す、而して畫法一に宋の李龍眠を學ぶ、將軍足利義持大に師を寵愛し、其欲するところを問ふ、師答へて曰く、財寶官爵は望むところにあらず、只頃者寺中多く櫻樹を栽ゆ、恐らくは後世に至り精舍變じて遊宴の場とならん、願くば命を下して悉く櫻樹を伐れ、と、義持其志を喜び、悉く櫻樹を伐採せしめたりと云ふ、師また東福寺に涅槃の像なきを憂ひ、縱三丈八尺、橫二丈六尺なるを圖して本堂に納む、永亨三年八月二十日寂す、壽八十、著名の作品は十六羅漢の圖、四十八祖の像、寒山拾得の圖、聖一國師（左鐵拐右蝦蟇）三幅對、正面達磨の圖、正面白衣觀音の像。佛殿後門觀音の像、法堂蟠龍の圖等なり、（野史、本朝畫史、扶桑畫人傳）

キチシユー 吉岫　シユンリ舜利を見よ、

キチシユー 吉州　ボンテー梵貞を見よ、

キチドー 吉道 二三三六八/二三三七 〔曹洞宗〕武藏深川某菴の禪僧なり、吉道字は案山、甲斐國都留郡藤崎郷の人なり、俗姓は藤木氏、八歲にして上野原の保福寺建州禪師に依て出家す、初め萬安和尚に武藏國舟田山に謁し、次に鐵心に信濃國全久寺に參見す、往來すること十餘年にして保福寺に歸る、時に建州の示寂に値ふ、大衆住持たらんを請ふ、師堅く辭して受けず、即ち郡の天目山に入り、柴を縛して菴となし、日々に果核を採て生食す、四邊より來集皈仰する者甚だ多し、師山中地を易ること數度、遂に去て木曾の山路を過ぐ、遽に草賊に會す、法衣を解て與へて行くこと數十步、更に囊中の金を出して之を與へて曰く、向きに之を遺せり、汝ち持ち去れと、賊熟ら視て大に感發し、遂に師を禮して髮を剃り侍從す、慶安の初め萬安興聖寺に住す、師再參し留て二夏を過ぐ、明僧即非豐前國廣壽寺に在るを聞き、乃ち往きて謁す、其後武藏國深川に菴居す、潜に遁れて富士山に登り、遂に巖窟に入定す、其徒久間と云ふ者は、曾て師に木曾に遇ふの賊なり、師を追うて巖窟に到れは、師既に瞑目す、時に延寶五年八月十五日なり、享年七十歲臘五十三、(日本洞上聯灯錄)

キツシユー 橘州 ホーカイ法海を見よ、

キツセン 橘仙 二四九九/二五三四 〔曹洞宗〕越中瑞龍寺の禪僧なり、橘仙俗姓松本氏、周防の人、十一歲伊豫松山法龍寺大梁に投して受度し、後攝津に遊ひ、陽松菴瞳眠に謁し、其法を嗣ぐ、周防の洞泉寺越中の瑞龍寺に歷住し、明治七年三月二十八日寂す、壽八十六、著作爛雲草あり、(近世禪林言行錄)

キンコー 琴江 シークン令薫を見よ、

キンシユク 琴叔 (……) 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、琴叔は書を善くし、又詩に妙なり、百喜鳥詩を作りて名あり、(日本名僧傳)

キンヨ 琴譽 セーリン盛林を見よ、

キンコー 錦江 ゲンモン玄文を見よ、

キンシユ 誾趣 二三四一/二三三二 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、誾趣字は超山、俗姓は中野氏、越中の人なり、州山春昌の法を得て加賀大乘寺に補す、晚年近江の蓮泉、攝津の大平二寺を掬め、寬文十二年五月三日寂す、壽九十二、法嗣福光智一人あり、(日本洞上聯灯錄)

ギンジヨ 誾助 二三〇六 〔淨土宗〕山城淨德院の開山なり、誾助は法蓮社正譽と號し、伊勢山田の人なり、幡隨に師事して法を嗣ぎ、洛西に淨德院を開き、又西蓮寺の中興となる、正保三年二月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギンセツ 誾雪 二三一六 〔淨土宗〕山城淨德院の中興なり、誾雪は英譽と號す、俗姓は淺井氏、丹波の人なり、法を雪念に嗣ぎ、洛西淨德院中興となる、明曆二年五月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギンニヨ 誾如 二三九〇/二四六四 〔眞宗〕越前嵩村松樹院の住持なり、誾如は越前の人なり、眞宗高田派なる嵩村松樹院に住し、宗乘に通す、明和二年本山の命により安居本講を勤め、後、進講師に任せらる、文化元年二月廿五日寂す、壽七十五、

ギンドー 誾堂 リヨーギン良誾を見よ、

キンオー 吟翁 二一七三/二二一四 〔淨土宗〕武藏淨國寺の僧なり、吟翁號は緣譽、別に稱會と云ふ、姓は藤田氏、武藏江戶の人

なり、父は左衞門尉道照、母は富永氏、八歳にして武藏增上寺の親譽和尙に隨て僧となる、性聰明なるを以て、早く五重宗脉、圓頓大戒を受く、親譽遷化の後は、總州飯沼の弘經寺鎭譽和尙に從て修學す、十八歳にして武藏岩築淨國寺に住す、久しからずして故鄕に歸り、天地菴を創立し、法門を弘通す、後、伊勢國松坂の樹敬寺に至りて住すること三年、道化する所甚だ多し、壯事の頃彼寺を去り、京師知恩院に詣づ、院主德譽和尙と法契甚だ厚し、時に京師野中の鄕に信者黑瀨氏と云ふ者あり、父子共に厚信なり、吉水に於て師に謁し、大に其高德に感し、師を野中の鄕に請て法を求む父子共に上人に隨て僧となり、法名を受く、父を道內と號す、後、野中の鄕に專稱菴を創し師に寄附す、師此地に住し、鄕人を道化すること久しく、後、知恩院の境內に於て一心院を開き、大時念佛を勤行し、衆徒を誡んが爲に十一個條の法條を製し、永世の軌則と爲す、永く上人を以て開山と爲し、自ら一派となし、一心院派と云ふ、上人嘗て野中村專稱菴に住する時、嵯峨大覺寺門主義俊、師に會せんことを求め給ふ、師其志に感じ、解脫の要道を談す、これより門主歸依甚だ厚く、嵯峨に稱念寺を創立す、師處々に堂宇を建立す、山城に七個寺を創立す、就中嵯峨正定院の極樂寺、田井の專念寺、淀の念佛寺等聞ゆ、天文二十三年七月十九日一心院に於て寂す、壽四十二歲、(緇白徒生傳)

ギンオー　吟應　ショーネン稱念を見よ、

ギンタツ　吟達　二三八三……　〔淨土宗〕江戶靈巖寺の僧なり、吟達は常蓮社然譽と號し、紀伊の人より、巖宿に師事して法を嗣ぎ、江戶深川靈巖寺に住し、後京都百万遍寺に移る、享保八年三月二日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ギンテツ　吟徹　二三二七……　〔淨土宗〕江戶淺草九品寺の開山なり、吟徹は辨蓮社天譽と號す、俗姓は武田氏江戶の人なり、幼にして本誓寺文賀の室に入りて剃髮し、了學に師事して法を嗣ぐ、初め本誓寺に住し、次に淺草山宿に九品寺を開く、後伊勢神領に白導寺を剏してこれに住し、寬文七年二月二十一日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ギャクオー　逆翁　シュージュン宗順を見よ、

キユーガン　休岸　二二七九……　〔淨土宗〕江戶林泉寺の開山なり、休岸は玉蓮社遵譽と號す、俗姓は板倉氏、攝津大坂の人、相模天照山光明寺に習學して隨流の法を嗣ぐ、後江戶三田林泉寺を開き、元和五年某月日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

キユーガン　休岸　(……)　〔淨土宗〕山城淨華院第二十三代なり、休岸字は潮譽、出家して頁休に淨土敎を學び、法兄源立の席を繼きて淨華院に主となる、後石見銀山に西向院を剏して開山となる、寂年壽欠く、嗣法一人頁安と云ふ、(淨土總系譜)

キユーゲツサイ　休月齋　ショーケー祥啓を見よ、

キユーテキ　休的　二三七〇……　〔淨土宗〕下野大法寺の開山なり、休的は品蓮社三譽と號し、下野足利五箇村の人なり、幼にして郡の法玄寺滿雪に就て剃髮し、後無絃に師事して法を嗣ぐ、鄕里に皈りて大法寺を開き、寶永七年五月二十九日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

キユードー 休道 二三二六……〔淨土宗〕江戸最上寺の開山なり、休道は超蓮社高譽と號す、武藏久良岐大角豆村の人なり、江戸牛込大信寺に入りて剃髮し、普光觀智國師に師事して法を嗣ぐ、後下谷坂本町に最上寺を開く、寛文六年十月十一日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

キユーオー 岌往 二二六九……〔淨土宗〕甲斐飯命院の開山なり、岌往は俗姓詳ならず、始め檀林を徧遊し學解殊に衆に長す、操行甚だ高く、道化盛なり、甲斐國に飯命院を開き住す、慶長十四年三月二十三日寂す、壽缺く、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

キユークワク 岌廓 二三二一……〔淨土宗〕江戸善雄寺の開山なり、岌廓は深蓮社信譽單仰と號す、奧州津輕の人、其俗姓詳かならず、了學に師事して法を嗣ぎ、江戸小石川に善雄寺を開く、慶安四年二月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

キユークワン 岌觀（……）〔淨土宗〕尾張春正院の開山なり、岌觀は眞蓮社順譽と號し、其郷貫詳かならず、呑岌に師事して法を嗣ぎ、尾張名古屋に春正院を創立して開山となる、寂年、並に壽欠く、（淨土總系譜）

キユーテン 岌天 二二九七……〔淨土宗〕岩代高巖寺の開山なり、岌天は大蓮社と號す、出家の後岌傳に師事して其法を繼ぎ、會津高巖寺を剏めて開山となる、天文六年九月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

キユーデン 岌傳（……）〔淨土宗〕常陸無量壽寺の僧なり、岌傳は法蓮社と號す、良岌の高弟にして、十塔無量壽寺に住し、後岩代會津黑河郷に退隱す、寂年壽缺く門下の高弟に岌天あり、（淨土總系譜）

キユーネン 岌念 リヨーエ良懷を見よ、

キユーベン 岌辨 リヨーネン良念を見よ、

キユーヨ 岌譽 ドーサン道山を見よ、

キユーヨ 岌譽 ロギユー露牛を見よ、

キユーサイ 急西 二三〇七〔淨土宗〕京都一心院の僧なり、急西號は最譽といひ、山城醍醐の人、出家して京都に住し、病人を訪問して看護す、一日病人の爲に魚肉を携へ、歸途道友に遇ふ、道友叱して曰く、こは非法、非律、非僧儀なり、と、答へて曰く、病人の食に充てむために買ひ來る、何の不可かあらむ、と、初め一心院に住し、晩年因幡堂の側に淸香菴を營み之に居る、正保四年二月二十二日、正念念佛して寂す、（續日本高僧傳）

キユースイ 急水 クワクエン廓圓を見よ、

キユーソン 及存 二二八八〔淨土宗〕江戸宗源寺の開山なり、及存は直蓮社信譽助久と號す、俗姓は石井氏、越前の人なり、觀智國師に師事して法を嗣ぎ、江戸牛込早稻田に宗源寺を築く、寛永五年十二月十五日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

キユーモクシ 朽木子 ドーケン道顯を見よ、

ギヨハク 漁白 シヨートー紹等を見よ、

キヨーエン 鏡圓 一九一七 一九八四〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、鏡圓號は通翁、一名淨光と云ふ、俗姓不詳、初め儒敎を修めたるも、究竟の法にあらずとなし遂に禪に歸す、雲巖寺高峰和尙に謁す、後、西行して筑前に至り、崇福寺南浦和

尙に謁して、參究す、一日僧あり屋上の松を指して曰ふ、一切草木山河天地を以て緣となす、彼れ獨り何を以て緣とす、一僧曰ふ、無緣を以て緣となす、と、師傍に在り之を聞きて忽然として大悟し、覺えず笑ふ、即ち南浦に告け、記別を受く、後、草菴を洛西に結び、正眼菴と云ふ、雪竇圓悟の風を慕ひ、碧岩百則の公案一々拈掇す、花園天皇勅して萬壽寺を董せしめたまふ、後醍醐天皇立ちたまひ勅して南禪寺を董せしめたまひ寵遇甚渥く、時に普照大光國師の號、並に御製の贊を賜ふ、時に八宗鏡興して禪宗を排し、屢讒訴す、正中元年正月廿一日、天皇延曆、園城、東寺、幷に南都の諸講師を召し、淸涼殿に於て鏡圓と宗要を辨論せしめたまふ、師會〻風疾に罹るも、勅令重くして辭すべからず、即ち升殿す、宗峰超侍者となりて隨ふ、百官列座して傾聽す、師奏して曰ふ、今聖上に對して宗旨を商量す、應に直問直答して繁辯を假らざるべし、若し負墮する者は即ち弟子とならむ、と、諸講師先づ弟子を出し詰問せしむるに、師乃ち侍者に命じて斥指せしむ、玄慧法印出でゝ問ふ、如何か是れ敎旨別傳と、師の侍者曰ふ、八角磨盤空裏に走る、玄慧曾せずして退く、園城寺の僧某、一個の函を携へて出で曰ふ、是れ乾坤の函なり、侍者鐃を以て擊碎して曰ふ、乾坤打破の時如何、と、僧懵然として惻るなし、東寺の虎聖奏して曰ふ、昔嵯峨の朝諸宗の對論一七夜に亘る、今何ぞ一問一答に限らむ、と是に於て諸講師憤激し、問難鋒起す、師一々破拆して洪鐘の敲擊に隨ひて大小共に應ずるが如し、二十七日に至り、虎聖出問す、如何か、是れ禪と、師曰ふ、箭已離レ弦、無ニ返回勢一、僧曰ふ、吾宗も亦是のごとし、圓扇子を擧げ曰ふ、儞試に射よ、看む、聖曰ふ中れり、師乃ち扇子を袖にして曰ふ、重ねて發て、看む、と、聖曰ふ箭既に盡ぬ、師曰ふ吾禪を知らむと欲せば白雲萬里、聖曰ふ禪侍て聞くへきか、師曰ふ近前せよ、子が爲めに道著せむ、聖近前す師便ち一蹈に蹈倒す、聖起ち來りて禮拜す、是に於て諸講師皆弟子の禮を執る、師七日堅坐して病益重く、殿を降り歸途偈を說きて曰ふ、淸風匝地杲日當レ空、十方俱遍塞、徧界沒ニ行蹤一泊然として化す、實に正中元年正月二十七日なり、壽六十八、門弟子扶け昇て寺に歸り葬る、塔を最勝輪と云ひ、菴を正眼と云ふ、（元亨釋書、延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

キヨーエン　鏡圓　ニチダイ日臺を見よ、

キヨーザン　鏡殘（……）〔淨土宗〕仙臺報恩寺の開山なり、鏡殘字は良進と云ふ、其鄕貫詳かならず、良信に法を嗣ぎ、仙臺報恩寺を開く、寂年壽欠く、（淨土總系譜）

キヨーシン　鏡眞（二五〇八……）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十五代なり、鏡眞字は琳貞、下總の人、其師承詳かならず、彌勒寺に住し、天保十二年豐山能化職に擧けらる、法柄を執る六年にして與喜寺に退き、嘉永元年二月十四日寂す、壽歆く、（新義眞言宗史）

キヨーシヨー　鏡照（……）〔曹洞宗〕土佐大用寺開山なり、鏡照字は明巖、美作の人、姓は平氏なり、幼にして生地の太平寺に入り、無著禪師に依り、薙髮受戒す、無著の泉福玉林寺に徙るに從つて院事を總ふ、後ち土佐の郡將大用寺を創立し、師を聘して始祖となす、次て總持寺に出世し、泉福寺に住す、某九年九月十九日寂す、世壽欠く、（日本洞上

聯燈錄)

キヨーチヨー 鏡朝　ニチチヨー日朝を見よ、

キヨードー 鏡堂　カクエン覺圓を見よ、

キヨーニン 鏡忍　……一四四四　〔華嚴宗〕奈良東大寺の高僧なり、鏡忍俗姓不詳、審詳に師事して華嚴經を究め、詳の滅後良辨に師事せり、天平十六年に勅を拜して慈訓圓證と共に金鍾道場に華嚴經を講ず、三年にして八十卷を畢はる、寶龜五年に東大寺を董し、律師より昇りて僧都となり、延曆三年示寂す、(續日本紀、本朝高僧傳)

キヨーニン 鏡忍　ニチキヨー日鏡を見よ、

キヨーヨ 鏡譽　カクム覺夢を見よ、

キヨーヨ 鏡譽　シユートン周頓を見よ、

キヨーヨ 鏡譽　リデン理傳を見よ、

キヨーイン 敎尹　(一九一四)　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、敎尹は東北院經圓に師事して五重唯識を受け、建長六年の冬維摩會の講師となる、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

キヨーエ 敎懷　一六六一 一七五三　〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、敎懷俗姓は藤原氏、左中將敎行の子なり、出家して興福寺林懷に就て唯識を究め、二十歲を過る頃寺を出て山城久世郡小田原に閑居す、故に時人小田原上人と云ふ、後高野山にある二十餘年、山を下らずして兩界を修練す、寬治七年五月二十七日手ら不動尊の像數百枚を摸し、衆を招きて供養し、同音念佛安然として寂す、壽九十三、(本朝高僧傳、拾遺往生傳、高野往生傳、高野春秋)

キヨーエン 敎圓　一六三九 一七〇七　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、敎圓俗姓は藤原氏、伊勢太守孝忠の子なり、華山天皇位を讓りて華山寺に住し、法諱を入覺と云ふ、師これに師事して灌頂を受け、後實誓を師として天台宗を承け、奈良に遊ひ性相を研究す、治安の初め法橋に任し、昇りて權大僧都となる、長元二年十二月法性寺八講會に選はれて座に登り、論說水の流るゝが如く、阿闍梨に賞任せられ、僧綱に進む、法成寺に住し、尋て法印に敍し、妙心院を主どる、長曆二年大僧都に任し、翌年延曆寺座主となる、長久四年疾に罹り、僧綱を辭し、永承二年六月十日寂す、壽六十九、(本朝高僧傳)

キヨーオーボー 敎王房　ゼンエ禪慧を見よ、

キヨーオン 敎音　カクオー覺翁を見よ、

キヨーオンイン 敎恩院　コーケン光兼を見よ、

キヨーカク 敎覺　……一七七七　〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、敎覺字は正智、北室の良禪阿闍梨に從ひて密灌頂を受け、屢々講筵を開く永久五年八月二十日寂す、壽缺く、師嘗て小廬を開き正智院と號す、(本朝高僧傳)

キヨーギヨー 敎行　キヨークワン經寬を見よ、

キヨークワン 敎寬　(一九八〇)　〔華嚴宗〕奈良東大寺の別當なり、敎寬は元應二年東大寺別當に任す、(東大寺別當次第)

キヨーゲ 敎外　トクーソーを見よ、

キヨーコー 敎興　(一三六一)　越中立山の僧なり、敎興は大寶三年に始めて越中立山に登り、祈禱を修行したり、(本朝通紀)

〔考〕立山緣起に大寶中五智寺慈朝の弟子慈興に登り、權現

を勸請すとあるもの同一事實なるべし、

キヨーコーイン　敎興院　コーエン光圓を見よ、

キヨーサン　敎算　ソンユー尊祐を見よ、

キヨーシン　敎眞　……一七六九　〔天台宗〕山城平等院の僧なり、敎眞初め比叡山首楞嚴院に住し、學顯密に通し、戒開遮を究む、毎日作業念佛六萬遍す、宇治關白藤原忠實請して平等院の住持とす、天仁元年某月某日の夢に、明年十一月十八日に入滅すべし、と、其期に至りて瓜生の別墅に遷る、十六日に二僧あり謁を通じて曰ふ、昨夜夢に禪僧來り告ぐ、敎眞阿闍梨十八日に往生す、平等院に至り拜すべし、と、故に來るなり、と、師即ち室に入り安坐す、弟子粥を進めむとして窺へば已に合掌して寂滅せり、（本朝高僧傳）

キヨージン　敎尋　……一八〇一　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、敎尋一名を永尋といふ、寶生房と號す、俗姓平氏、大和の人、初め三井寺に入り、高野山に遷りて學德幷に高し、覺鑁上人山に登りて明師を尋ね、二學僧に師事す、即ち敎尋、幷に明寂なり、大傳法院成るの後、請せられて同院の學頭となる、幾もなく退隱し、寶生院を開きて住し、文殊を持す、永治元年三月二十三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳、結網集）

キヨージユイン　敎授院　キヨーチヨー堯朝を見よ、

キヨージユン　敎遵　二三六三 二四三八　〔眞宗〕攝津小曾根常光寺の住持なり、敎遵字は桂巖、號は古香といふ、鳳潭、義瑞の諸匠に歷詢し、他敎を學ふ、月筌より宗乘を聽き、傍ら富日休に就きて文を學ふ、明和元年命を奉して眞宗法要を校刻し、四年鬻衆智暹等と本山に法義を角諍す、師傍觀するに忍ひす、短篇を著して之を辨す、安永元年夏本山白書院にて淨土和讚を講し、兼ねて輿殿に侍講す、七年正月廿八日寂す、壽七十六、著作阿彌陀經講錄四卷、二門偈講錄二卷、六字對釋一卷、往生成佛同異辨一卷、四敎儀增輝記補遺五卷、闢續記評一卷、起信論幻虎錄補遺二卷あり、（本願寺通記、本願寺派學事史）

キヨージヨ　敎助　……一九六七　〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、敎助は三條右大臣實親の子、出家して房助齋助性仁の三師に習業し、永仁二年東寺の長者に任す、四年權僧正になり、正安元年正に轉す、德治元年八月十八日法務に重任し、同二十四日法務大僧正となる、同二年二月二日寂す、壽缺く、（東寺長者補任）

キヨーズイ　敎隨　リヨーネン良然を見よ、

キヨーゼン　敎禪　……一七三五　京師の繪佛師なり、敎禪は佛師定禪の父なり、後冷泉院の御祈に法成寺に於て百二十一躰の御佛を繪圖せり、治曆四年三月繪佛師僧綱に任ぜらる、此職あるは師を以て始めとす、承保二年三月寂す、壽缺く、（續本朝畫史）

キヨーソン　敎尊（一〇四）　〔眞言宗〕山城勸修寺二十一代の長吏なり、　敎尊樋口聖承の子、將軍義敎の猶子たり、永享年間尊聖の室に入りて得度し、大僧都法印に任し長吏に補し、權僧正に敘す、慈尊院大僧正弘繼より、傳法灌頂職位を受け、第三十四祖となる、爺正長の謀により、天皇の叡意に戻り、遂に文安年中隱岐に配せられ、十一月二十八日寂す、壽缺く、（後傳燈廣錄）

キヨーゾー　敎藏　……二〇五〇　〔淨土宗〕武藏龍藏寺開山なり、

敎藏は慈智翁と號す、其鄕貫詳かならす、出家して唱名に法を繼ぎ、文和四年武藏埼玉郡三俣に龍藏寺を開き、明德元年正月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

キヨータイ　敎諦　二四四九　……〔眞宗〕伊勢國明星轉輪寺の住持なり、敎諦號は和光院伊勢の人、眞宗高田派なる明星村の轉輪寺に住し、數次本山の安居本講を勤む、寛政元年閏六月朔日寂す、(眞宗史料)

キヨータイ　敎待　(一五一八)　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、敎待は俗姓不詳、天安二年に圓珍伽藍地を相して園城寺に到る、敎待相見て舊の如し、時に檀越大友氏寺に在り、圓珍に謂ひて曰く、敎待上人寺主を請せずして常に曰ふ吾寺主已に出生す、後曰ふ吾寺主入唐す、と、今朝遽に曰ふ、吾寺主來れり、と、されば師を遲つこと久し、即ち寺劵を出して圓珍に附す、師時に年一百六十二なりといふ、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

キヨーチ　敎智　ミヨークーニ妙空尼を見よ、

キヨーニン　敎任　シヨーカイ性海を見よ、

キヨーニヨ　敎如　コージユ光壽を見よ、

キヨーベン　敎辨　(一九六三)　〔戒律宗〕大和川原寺の僧なり、敎辨號は如蓮、大和布施寺の住僧なり、文永の末戒壇院に入り聖守に親炙して具足戒を受け、行業純淸、兼ねて聲明を善くす、東大西大の兩寺に挂搭し、戒律を究め、後大和の川原寺に住して二諦を興隆す、新に食堂を造り僧房を營治す、衆を敎化し顯密を説き、嘉元年中壽八十餘にして同寺に寂す、(本朝高僧傳)

キヨーミヨー　敎名　(……)　〔眞宗〕越後西願寺の開山なり、敎名は出家して延曆寺に居り、敎眞と名く、建保六年齡三十にして親鸞の弟子となり、名を敎養と云ふ、延應元年親鸞師に敎名の名を與ふ、某年寂す、常陸笠間光照寺は其後裔たり、越後長岡の西願寺は師を以て祖となす、(本願寺通紀)

キヨーヨ　敎譽　ギヨーチン行然を見よ、

キヨーヨ　敎譽　セーハン誓般を見よ、

キヨーヨ　敎譽　テンカイ典海を見よ、

キヨーヨ　敎譽　モンズイ門隨を見よ、

キヨーカイ　經海　(……)　〔眞宗〕山城佛光寺の第十八代なり、經海は二條右大臣昭實の猶子となり、常胤二品親王を戒師となし、後中院權僧正と號す明曆二年七月十八日寂す、壽五十一、雲龍院と號す、(本願寺通紀)

キヨーカイ　經海　(一九〇三)　〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、經海俗姓は藤原氏、右大臣宣秀の子なり、幼より俊範に師事して天台敎を學ぶ、後嵯峨上皇に招かれて宮中に於て屢々止觀の要を説き、僧正に任す、横川鈔觀院に住し、或は毘沙門堂に寓して敎を講ず、寂年、及壽缺く、著作坐禪用心鈔、本裏鈔、若干卷あり、(本朝高僧傳)

キヨーク　經救　一七〇四　……〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、經救は林懷に師事して法相を習究し、寛仁維摩會の講師となり、東院に住し、專ら所業を唱ふ、長元中興福寺に移り、權僧都に任す、寺務を管する十年、寛德元年五月四日寂す、缺壽く、(本朝高僧傳)

キヨーゲン　經玄　一八二〇　一八九一　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、

經玄は玄秀の門に詣て出家得度し、永慶に從ひて宗義を學ぶ、寛喜元年六月の會に題者となり、法橋上人の位に叙す、寛喜三年閏正月十七日寂す、壽七十二、(三井續燈記)

キヨーゲン 經源(……)〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、經源は京都の人、興福寺に在りて久しく法相を學ぶ、後山城久世の小田原寺に住して密法を修練し、某年壽八十四にて寂す、(本朝高僧傳)

キヨーコー 經光 ギョーケン堯賢を見よ、

キヨーゴー 經豪 レンキョー蓮教を見よ、

キヨーゴン 經嚴(二〇〇三)〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、經嚴は嘉元年東寺の長者に任し、康永二年重ねて東寺の長者となる、某年歿く、(東寺長者補任)

キヨージン 經深 一八九五―二〇三九〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、經深は淸顯・泉惠・朝本・泉尊・良禪の諸師に從ひ、建武四年十二月大阿闍梨となり、最も天台の宗義に通す、篇目抄、經緯抄、躰達抄を著はし、康曆元年二月十四日寂す、壽五十五、(三井續燈記)

キヨージン 經深 一九五一―二〇一四〔眞言宗〕山城醍醐山釋迦院の法師なり、經深字は兵部卿、正覺法印と稱す、四條二品隆政の子、即ち隆舜の胞弟なり、隆舜の室に入りて得度し、行業訖りて傳法具支灌頂を受く、水本の九世となり、貞治三年八月十四日寂す、壽七十四、付法一人、隆源と云ふ(續傳燈廣錄)

キヨーシユン 經舜(……)〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、經舜字は正顯、攝津の人なり、淨因によりて律を學び、圓照に具足戒を受け、善法院に住す、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

キヨーシユン 經俊 キヨーヒン經頻を見よ、

キヨージヨ 經助 ……―一七七四〔眞言宗〕大和鳴河寺の僧なり、經助は香聖と稱す、幼にして出家し、專ら淨土に志す、永久二年二月六日病に罹りて寂す、(後拾遺往生傳、本朝高僧傳)

キヨーシヨー 經照 ユイクー唯空を見よ、

キヨーセン 經暹 一六九九―一七八三〔眞言宗〕山城小田原寺の僧なり、經暹は中納言定頼の子なり、壯にして佛を慕ひ、興福寺に入りて法相を學ひ、小田原寺に移りて眞言を弘む、保安四年十二月十日寂す、壽八十五(後拾遺往生傳、本朝高僧傳)

キヨーセン 經暹 一六七三―一七五三〔法相宗〕大和多武峰の僧なり、經暹多武峯安養房に住し學德並に高し、瑜珈法を究め阿彌陀佛を念持す、寛治七年三月二十日衆僧を勸修し阿彌陀經一部及び寶號百遍を誦し定印を結ひて西向示寂す、壽八十一、(拾遺往生傳、本朝高僧傳)

キヨートク 經得(……)〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、經得は少より高野山に登り、持明院の境内に別に小房を構へて專ら極樂を願ふ、人呼ひて小房聖といふ、某年寂す(本朝高僧傳、高野往生傳)

キヨーハン 經範 一六九一―一七六四〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、經範は參河の刺氏源經信の子なり、仁和寺に投し、性信親直に師事して兩部の漢灌頂を稟け、嘉保二年東大寺を主どる、寛治三年權僧都に任し、六年春東寺の長者となる、唐和二年山階寺に遷り、大僧都に進み、明年法印に叙す、此年七月勅に

より雨を祈りて驗あり、長治元年三月十七日寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

キヨーハン　經範（二二五一）〔眞宗〕山城佛光寺の第十六代なり、妙法院覺胤法親王を戒師となし權僧正に任し、天正十九年十一月（一に九月）九日寂す、壽三十三、（本願寺通紀）

キヨーヒン　經頻（……）〔眞言宗〕山城醍醐山阿彌陀院の學講なり、經頻は高野山の學人なり、遍智院義範に參し請して傳法印可を受け、燈光を繼く、阿彌陀院の主となる、經頻、一に經俊に作る、（續傳燈廣錄）

キヨーユ　經瑜（……）〔眞言宗〕京都仁和寺眞光院の開山なり、經瑜は二位法印、又は南勝院と稱す、覺禪和尚に從ひて傳法灌頂を受け、定瑜に謁して法流を汲む、其詳傳缺く、付法の弟子禪助賴瑜の二人あり、（傳燈廣錄）

キヨーヨ　經譽（……）〔淨土宗〕上總東漸寺の開山なり、經譽字は愚底、遠江の人、十五歲にして無量山に修學す、後諸家の講肆に歷遊す、楞嚴維摩に精し、後總州小金に止て東漸寺を創す、大に法門を弘通す、六月六日寂す、壽詳ならず、（鎭流祖傳）

キヨーヨ　經譽　ギヨーシユ堯守を見よ、

キヨーヨ　經譽　ソンテツ存哲を見よ、

キヨーイ　慶意（一七二六）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、慶意は京都の人、俗姓は藤原氏、章輔子となり、幼より佛乘を慕ひ、園城寺に入り座主慶圓に就きて剃髮受業し、長圓僧正に法を嗣く、治曆二年十二月敕を奉じ宮中に於て最勝王經を講し、僧官に賞叙せらる、後比叡山三昧院に住し、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

キヨーイ　慶怡（……）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、慶怡は經幸敎幸の二師に就き天台倶舍兩宗に深く、當時の四傑の一人たり、寂年、及び壽缺く、（三井續灯記）

キヨーウン　慶運（二〇〇六）京師の歌僧なり、慶運は僧淨辨の子にして歌を能くするを以て法印に叙せられ、父と名を等しうす、嘗て詠じて曰く、「菴を結ぶ山のすその丶夕雲雀揚るを落つる聲かとぞ聞く」人異名して裾野の慶運と云ふ、正平中後光嚴院藤原爲定をして新千載和歌集を撰ばしむ、慶運の歌四首を採る、慶運之を榮として大に悅ぶ、後頓阿の歌十餘首を採ると聞き、意平かならず、竊かに己れが歌を削り去れり、常に不遇を歎じ、死に臨み歌稿を收めて之を埋む、新後拾遺、風雅、新續古今等に其歌を載す、（大日本史）

キヨーウン　慶運（一九〇九）〔戒律宗〕大和橘寺の律僧なり、慶運號を戒學と云ひ大悲菩薩の開遮を受け、南北の講肆に周遊して性相の幽旨に精達し、大和の橘寺に住す、寂年及壽欠く、門下顯尊、道照、了運の三人あり、（本朝高僧傳）

〔考〕慶運は建長頃の人なり

キヨーウン　慶雲　カイウン海雲を見よ、

キヨーエン　慶圓（一六〇九 一六七九）〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、慶圓は播摩の人、同國の刺史藤原尹文の子なり、幼にして叡山に登り、三昧院喜慶に從つて剃髮受戒し、後圓賀に師事し台密の法を學びて、其奥蘊を究む、寛弘八年一條天皇不豫、院師を召して平愈を祈らしむ、此年權僧正に任ず、長和三年

春勅により僧正に任し、同年冬大僧正に轉ず、翌年延暦寺の座主に補し、寛仁三年七月二十一日寂す、壽七十一、(天台座主記、本朝高僧傳)

キヨーエン　慶圓 一八〇〇 一八八三 〔法相宗〕大和龍門寺の僧なり、慶圓は九州の人なり、吉野堯仁に隨ひて灌頂法を受け、又顯密の名宿に謁して研習し、初め大和安部の練若寺に止まり、後吉野の龍門寺に居して大般若、大集、大品、法華、涅槃、玄義、止觀、文句、密敎の諸軌等を書して觀修怠りなし、貞應二年正月二十七日寂す、壽八十四(元亨釋書、本朝高僧傳)

キヨーエン　慶圓 (一九二二) 〔眞宗〕三河本證寺の開山なり、慶圓俗名は新祐、姓は小山氏、父は判官行重なり、初め三河小島龍宮城に居り武を業とす、後、世を厭ひ宅を捨て、寺となし入道す、天台宗を奉せしが、後矢作柳堂に親鸞の敎誨を聞き、眞宗に歸す三河碧海寺野本證寺は其跡なり、(本願寺通紀)
〔考〕慶圓は弘長頃の人なり、

キヨーエン　慶圓 (……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、慶圓字は月心、月翁規に參して印可を受け、諸市を遊化し、海を航して唐に入り、徧く諸老宿に謁し、道譽彼地に高く、稱して大乘菩薩と云ふ、歸朝して美濃定林寺に主となり、建仁建長兩寺に歷任す、後鎌倉大雄菴に寂す、年時、及壽缺く、(本朝高僧傳)

キヨーエン　慶圓 (……) 〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、慶圓字は寂禪と云ふ、招提寺に入りて圓照に師事し、戒律を受け且松橋流の眞言事相を傳ふ、招提寺第七世となり、後大和興善寺に遷り住す、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

キヨーオク　慶屋 シユーシヨー宗紹を見よ、

キヨーオン　慶恩 二四四二 二五〇八 〔眞宗〕肥後熊本坪井鳥町善正寺の住持なり、慶恩は肥後熊本河原町順正寺の支房淨明寺に生れ、坪井鳥町善正寺住職某の養子となり、遂に其寺に住持す、天保十二年勸學となり、十三年安居學林に代講、十五年七月員外となり、嘉永元年十一月五日寂す、享年六十七諡を賜ひて繼興院と云ふ、斷鎧道晃は並に師の高足なり、(學苑談叢)

キヨーカン　慶閑 ……二三一三 〔淨土宗〕安房心光寺の開山なり、慶閑は聞蓮社圓與還悲と號す、安房勝山村の人、意天に師事して淨土宗を修め、州の深山村に心光寺を開く、承應二年四月十九日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

キヨーガン　慶岩 二二一四 二二七七 〔淨土宗〕常陸大念寺の僧なり、慶岩號は聲蓮社源譽と云ふ、肥前國鹽山の城主修理亮知光の三男なり、天文二十三年に生れ、童名は仙千代丸と云ふ、筑後の善導寺證譽に投して出家す、元龜三年二月師豐前黑浦に至り、船に乘して中國に赴き、京師を經て武藏に至り、圓治虎角二師と道交あり、天正六年那須の雲岩寺に至り、禪を究む、嘗て碧岩集を諺解す、時に名を慶岩と改む、十八年五月武藏に過遊す、常陸守盛重朝臣一謁して甚だ尊崇し慶長七年四月定山に於て大念寺を創立す、十五年七月師呑龍と共に登城を許さる、十九年冬將軍秀忠大坂を征し、師は伏見城に請す、元和二年四月家康の薨後增上寺に於て中陰の法務を管す、三年正月六日登城改年を賀す、幕命に依て城中に論議二會を修す、同月廿一日寂す、壽六十四、臘五十七、(鎭流祖傳)

キヨーキ　慶喜 ……二九二一 〔眞宗〕伊勢安濃津上宮寺の住持

なり慶喜字は照如と云ふ、眞宗高田派の上宮寺に住し、本山より准講師を命せられ、安居本講を勤む、文久元年五月九日寂す、（眞岡湛海氏返信）

キヨーギヨー 慶堯 二一九九 二二二八 〔眞宗〕山城興正寺の第三代なり、慶堯字は證秀といひ、蓮秀の子、母は光台寺實順の母なり、永祿八年始めて本山の内陣に坐す、十一年三月十四日寂す、壽三十四、（本願寺通紀）

キヨーグー 慶遇 二四一三 二四五九 〔眞宗〕伊勢安濃津上宮寺の住持なり、慶遇字は、眞辨號は本乘院と云ふ、智慧光院眞證の第三男なり、眞宗高田派の上宮寺に住し、少僧都法眼となり、講師を命ぜらる、寛政十一年七月九日寂す、壽五十七（眞岡湛海氏返信）

キヨーコー 慶香 シヨーガ省賀を見よ、

キヨージ 慶字 ……二〇九三 〔曹洞宗〕越後慈光寺の第二代なり、慶字字は顯窓、越後國の人なり、幼にして耕雲寺に傑堂を禮して出家す、尋て京師に遊び、義堂信に侍すること年あり、後郷里に歸りて菴居す、應永廿七年同國上田に赴く、其地の古刹、雲洞寺あり、藤原房前創する所なり、上杉憲實深く師の高德を慕ひ、雲洞寺を改めて禪寺と爲し師を請して第一祖と爲す、同三十四年秋傑堂寂す、師耕雲堂の席を繼く、正長元年春國郡騷動ありて豪民耕雲寺の莊園を侵す、憲實使を遣はし迎て雲洞寺に歸らしむ、師契劵を原主に付して退院す、時に法弟南英備前國牛頭山に在り、師の事に依て退院すと聞き、遠く來て耕雲寺の席を董す、既にして民皆改め悔て莊園を寺に歸す、是に於て南英自ら院事を謝し、再ひ師を請す師耕雲寺を主ること前後數年、復南英をして之を補せしめ、自ら檀越の請に依て瀧谷の慈光寺を開き、傑堂を以て開山となし、自ら第二代となる永享五年正月二十二日寂す、世壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

キヨージク 慶竺 ……二二一九 〔淨土宗〕京都知恩院第二十一代なり、慶竺は行蓮社大譽と號し、武藏江戸日比谷の人なり、初め蓮譽に師事し、後法を西譽に嗣ぐ、京都知恩寺に住して十九代となり、又知恩院に主となる、長祿三年正月二十四日寂す、世壽欠く、（淨土總系譜）

キヨーシン 慶信 一七〇一 一七五五 〔三論宗〕大和東大寺の僧なり、慶信は藤原公成の子、京都の人なり、少にして大和東南院の有慶に從ひて三論宗を研究し、永保二年敕して東大寺を管す、時に堂塔多く廢す、師官符を奉して修造し、二十年間其任を怠らす、朝廷頻に僧綱に補す、法眼位の如きは奈良の諸寺中師始めて之に叙せられたるものなり、嘉保元年十二月病に依りて印を解きて東南院に居り、翌年正月九日寂す、壽五十五、（本朝高僧傳）

キヨーシン 慶眞（一六八七） 〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、慶眞は万壽四年仁海の法を受け、宮中の眞言院にて修法す、世に慶闍梨と稱す、道聲高し、示寂の年月日幷に享壽傳らず、（續傳燈廣錄）

キヨーシユ 慶珠 二一六二 二二二四 〔曹洞宗〕長門大寧寺の僧なり、慶珠字は異雪、俗姓は佐氏壹岐の人なり、十三歲華光寺に於て祝髮し、出て丶了然に見え、次に龜州に謁し、大に悟るところあり、後大寧寺に往き、龜洋宗鑑を問ひ、其席を繼き、

同寺に主となる、寺兵焚に罹るに及び郷里に帰り、華光寺に居す、尋で龍藏寺を剏め、又對島に往く、毛利元就の請に依り、大寧寺に再住す、永祿四年周防龍福寺に退き、仝七年十月十七日寂す、壽六十三、臘五十、法嗣繁與存榮の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

キヨーシユン 慶浚 二二二二…… 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、慶浚字は明叔、幼にして景堂和尚に師事し、受戒の後、遊方して再び景堂を歸省し、印可を蒙むり、甲斐の慧林寺に遊び、廢を興して其中興祖となる、去りて美濃の愚溪寺に居り次に同國の大圓寺に住す、同年詔を承けて妙心寺に出世し、尾張の瑞泉寺に住し大心院に移居す、天文二十一年八月二十七日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

キヨーシユン 慶俊 一八五〇 一九二六 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、 慶俊は賢運に從ひ天台を學び、探題の職に登る、文永二年十二月二十八日寂す、壽七十七、(三井續灯記)

キヨーシユン 慶俊 (一四四二) 〔三論宗〕奈良大安寺の僧なり、 慶俊俗姓は藤井氏、河内の人なり、出家して大安寺に投し、道慈に師事して三論法相華嚴を受け、勤操より求聞持法を傳ふ、天平勝寶八年五月二十四日に律師となり、寶龜元年八月廿六日に少僧都となる、元應元年光仁天皇愛宕山を賜ふ、師即ち山中に道場を開けり、延曆某年九月三日壽九十に垂むとして寂す、(七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕 七大寺年表には寶龜九年に示寂すとあり、今は姑く本朝高僧傳に依る、

キヨーシユン 慶舜 (一九三五) 〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、 慶舜後に双圓と云ふ、初め菩提山に住し、後、戒壇院に入り日照律師に師事す、山城靈山院に住して戒律を唱ふ、寂年、及壽缺く、(本朝僧傳)

〔考〕 慶舜は建治頃の人なり

キヨーシユン 慶舜 二二七五…… 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺禪僧なり、 慶舜字は南嶺、俗姓は源氏大寺の族なり、大麟至榮に參して分座となり、慶長十二年薩摩福昌寺の虛席するにあたり、師州守の請によりて之に住す、元和元年正月十四日寂す、壽缺く、法嗣三了麟達の一人あり、(日本上聯燈錄)

キヨージユン 慶順 二〇七二 二一五八 〔曹洞宗〕上野龍華院の禪僧なり、慶順字は天巽、甲斐の人、藤金吾直行の子なり、法を春屋宗能禪師に受け、總持寺に出世し、永澤最乘諸寺に遷る、後遊化して上野沼田に至る、其地慈運律師なるものあり、師の道を慕ひ院を師に付す、因て敎を革めて禪林となし、伽藍山龍華院と云ふ、明應七年三月四日寂す、壽八十七、(洞上聯灯錄)

キヨージユン 慶順 (二一六六) 〔曹洞宗〕越中最勝寺第二代なり、 慶順字獨步、瑞泉寺龜阜豐壽に參して其法を嗣ぎ、最勝寺に主となり、第二世となる、永正三年八月慈眼寺に遷る、寂年並に壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

キヨージユン 慶順 (二一一七) 〔淨土宗〕相模光明寺第七代なり、 慶順は信蓮社堊譽と號す、常譽上人に就て剃髮受業し、長祿元年十月十日璽書を授けられ、後其席を嗣ぎて光明寺に主となる寂年壽缺く、著作諸記類聚一卷あり、(淨土總系譜)

キヨージヨ 慶助 一五八二 一六五五 〔眞言宗〕山城醍醐山第十一代

の座主なり、　慶助は村上天皇の皇弟なり備中太守兼遠に養はれて子となる、座主定助に依りて剃髪し、學業稍進みて法を定助に繼き、永觀元年醍醐山第十一代の座主となる、長德元年九月十日寂す、壽七十四。（續傳燈廣錄）

キョーショー　慶照　二二四一／二三二二　〔眞宗〕山城興正寺の第二代なり、　慶照字は蓮秀といひ、蓮教の嫡子にして母は蓮覺の女なり、師父の跡を繼きて興正寺を主とる、光善寺順如、蓮如宗主の孫なる神祇伯中將資氏の女を師に配す、天文年中日蓮黨諸兵家を誘ひて本山を攻め、數日にして克つこと能はす、師敎行寺實誓、及弟賢勝と共に和を講す、證如宗主功を賞して師を一家の列に加ふ、天文廿一年七月十日寂す、壽七十二、（本願寺通紀）

キョーズイ　慶隨　二一八五……　〔曹洞宗〕若狹諦應寺の開山なり、慶隨字は順翁、俗姓生國未詳、幼にして丹波周通寺に投し、牧翁欽を禮して得度し、長じて明に渡り、兩浙の間に周旋して一時の諸名宿に參方し、皈りて備後龍雲寺報扇智恩に謁し印可を受け、尋で若狹安賀に至り、城谷山諦應寺を創し、一住二十餘年、諸山の請聘あれども從はず、大永五年六月二十日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

キョーセー　慶政　一九二八……　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、慶政は能舜法師に師事し經論を學ふ、西山の法華山寺に居り、文永五年十月六日寂す、壽缺く、（三井續灯記）

キョーセー　慶盛　（一六九六）　〔眞言宗〕山城淸住寺の僧なり、　慶盛は道學に徹髓して好く禪觀をなす、世に淸住寺上人といふ、師長元九年十二月仁海僧正の室に入りて小野流の灌頂を受け、一方の法匠となる、後宋に入り其歸朝せしか、せざりしかを知らす、（續傳灯廣錄）

キョーセン　慶仙　（……）　〔曹洞宗〕豐前寶陀寺の開山なり、慶仙字は竺心、豐前の人、幼にして覺隱永本禪師に投じて祝髮具戒し、屢々名宿を叩き、遂に總持寺に出世し、後豐前寶陀寺を開き、晩年に至り闘雲寺に住し、某年寂す、壽缺く、法嗣如門眞、東海智二人を出す、（日本洞上聯燈錄）

キョーセン　慶暹　（一七一九）　〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　慶暹は源輔親の子なり、明尊僧正に隨ひて台密の法を學ひ、後明肇慶祚二師に就きて益々所業を琢く、康平二年後冷泉天皇仁王經を親書して三井山門の碩德を請し、慶讃供養す、師其散會の導師を命せらる、即座に詔して律師に任す、幾ならすして辭して退く、重ねて園城寺の長吏に補す、寂年、及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

キョーゼン　慶善　（……）　〔淨土宗西山派〕山城禪林寺の僧なり、　慶善字は積峯俗姓は能勢氏山城久世郡御牧の人なり、道空純長に投じて薙髮し、南楚大江に師事して淨土宗西山派の學を究め、伊勢淨土寺に住し後、東山禪林寺に主となり、盛んに門戶を張る、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

キョーゼン　慶善　リョーギョー了曉を見よ、

キョーソ　慶祚　一六一五／一六七九　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、慶祚俗姓は中野氏、師元の子なり、餘慶僧正に師事して顯密に敎を學び、大阿闍梨に任し園城寺に住し、化度を以て任となす正應三年兩門相閲くに際し、徒を率ひて巖藏大雲寺に移る、後又園城寺に主となる、長德三年宋の僧より新來五部を送る、師

等詔を奉して其義の淺薄なるを難破す、寛仁十二月十二日寂す、壽六十五(本朝高僧傳)

キヨータン 慶潭 (……) 〔淨土宗〕伊勢入門寺の僧なり、 慶潭は近江日野の人、隨龍上人に歸して出家す、當時博覽の名高し、後、伊勢譽田入門寺に住す示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

キヨーチユー 慶中 シユーガ周賀を見よ、

キヨーチヨー 慶朝 一六八七/一七六七 〔天台宗〕近江延暦寺座主なり、 慶朝は大宰大貳高階成章の三子なり、出家して賴賢仁覺、尋光の諸師に台教を學び、康和四年天台座主に任ず、嘉承二年九月廿四日寂す、壽八十一、(天台座主記)

キヨートク 慶德 (……) 〔淨土宗〕近江來迎寺の開山なり、 慶德は其郷貫詳かならず、圓知に師事して法を嗣ぎ、近江愛知郡小八木來迎寺の開山となる、寂年、並に壽缺く、(淨土總系譜)

キヨーニチ 慶日 (……) 〔天台宗〕攝津兎原山の僧なり、 慶日は京都の人、久しく比叡山にありて、最も義論に長ぜり、晩年攝津兎原山にありて法華を誦し、密法を修す、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

キヨーニン 慶忍 二四七八/二五四三 〔眞宗〕豐前福島長久寺の住持なり、 慶忍一名は性叡、豐前下毛郡落合村雲西寺住職乘願の三男なり、文化十三年九月二十七日に生る、弘化元年福島村長久寺住職芳慶の養子となり、嘉永六年六月住職を繼く、少壯にして筑前烏水寶雲の門に遊び、性相の學を研き、後月珠の門人となりて宗乘を修む、嘉永元年得業に及弟し、安政五年助敎に昇り、慶應三年司敎に轉し、明治三年安居往生要集を學林に副講し、七年勸學職を命せられ、十四年安居般舟讃を學林に代講し、十六年三月七日寂す、壽六十六、謚を下して乘願院といふ、著作、往生要集詮略、正信偈慶應錄、愚禿鈔慶應錄、般舟讃講錄、本願成就文講錄、金七十論己巳錄、因明入正理論己卯錄、成實論大見、六合釋略演、各一卷、五敎章略解、二十唯識論略解、四敎儀丙子錄、各二卷、眞宗二百題、選擇集甲酉錄、因明申戌錄、起信論略解、各四卷、敎行信證撿要五卷、因明大疏和詮六卷、倶舍義詮九卷、唯識論元治錄十卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

キヨーハン 慶範 一八一五/一八八一 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、 慶範は眞圓に師事して文治五年三月佛職位を受け、又圓榮に隨つて天台の敎義を學ぶ、三會已講となり、六十一歲の時大阿闍梨に登り、承久三年十一月朔日寂す、壽六十七、門下八人皆世に聞ゆ、著作寶秘記三十餘卷あり、(三井續灯記)

キヨーホー 慶芳 二〇四一 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、 慶芳字は少室、俗姓不詳、高麗國空室空の法を嗣ぐ、初め淨智圓覺兩寺に住し、尋ぎて建長寺に遷る、晩年圓覺寺に正源菴を構へ退休し、永德元年十二月十日寂す、壽缺く、遺偈あり、生也快活、死也快活、更問如何、快活快活、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

キヨーボン 慶梵 (……) 〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、 慶梵字は淸峰、初め心巖統禪師に參して藏主となり次いで衣法を付せられ、吉祥院に住し、又法泉寺に遷る、寂年月日並に壽詳ならず、法嗣定林玄智の一人あり、(日本洞上

聯燈錄）

キヨーミヨー 慶命 一六二五 一六五八 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慶命は京都の人、太宰府少貳藤原教友の子なり、靜慮院遍救に從つて受戒し、觀心を善くし、無動寺に住す、萬壽五年延曆寺座主に補す、長元三年秋藤原太皇后彰子東北院を建て師を請して落慶供養の導師とし、封七十戶を賜ふ、長曆二年九月七日寂す、壽七十四、著作招拾鈔あり、（天台座主記本朝高僧傳）

キヨーモン 慶文 二一八四…… 〔曹洞宗〕駿河智滿寺の開山なり、慶文字回天、洞慶寺大巖宗梅に參し藏鑰となり、服勤六年入室し首座となる、駿河川根鄉に菴居す、菴後に寺となり智滿寺と號す、大巖書を送りて招けども至らず、乃ち人をして法衣並に頂相の贊を送らしむ、大永四年四月二十日寂す、法嗣久峰文昌の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

キヨーユー 慶融 （……） 〔淨土宗〕近江善正寺の開山なり、慶融は圓譽と號し、其鄉貫詳かならず、圓知に師事して法を禀け、近江靑山に善正寺を開く、寂年、並に壽缺く、（淨土總系譜）

キヨーヨ 慶譽 二二九四…… 〔淨土宗〕山城大蓮寺の開山なり、慶譽は俗姓藤原氏、山城小幡の人なり、智譽上人に就て法を嗣ぎ、伏見に大蓮寺を剏む、寬永十一年七月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

キヨーヨ 慶譽 リヨーハ了把を見よ、

キヨーヨ 慶譽 クタイ究諦を見よ、

キヨーヨー 慶耀 （一七六一） 〔天台宗〕近江國園城寺の學僧なり、慶耀は大和の人、出家の後園城寺慶暹に師事して顯密に敎を學び、其奧義に達す、康和三年十一月上皇鳥羽離宮に於て講場を啓き、師年少なくして擢でられて其選に應ず、又筆翰を善くし、梵漢共に通す、能書の名遠く宋地に振ふと云ふ、寂年壽缺く、（元亨釋書）

キヨーリン 慶琳 二〇八〇 二一四七 〔曹洞宗〕筑前永泉寺の開山なり、慶琳字は玉岡、薩摩鹿兒島の人なり、應永十七年正月十八日に生る、幼より世相を厭ひ、嬉戲常に佛事を爲す、十歲にして福昌仲翁和尙に投して童子の役を執る、四年にして出家す、後執侍すること年久し、後去て京都に至り、石山寺觀世音に詣し、一夜靈夢を得て感する所なり、去て北地に入り東關に遊び、覺隱の風を聞きて、往てこれに依る、覺隱寶鏡三昧を以て反覆徵辨す、これより師資相契ふ、覺隱の滅後師將に鄉里に還らんとし、路筑前の原野を經たり、杖頭錚然として聲あり、熟視すれは鑰子なり、便ち先の夢と相合することあるを知り因て寺を創せんとすれども由る所なし、郡主高橋盛綱地を捨て寶殿を建て、大禪苑を開き、師を延て其席を主らしむ、即ち泰平山永泉寺と號す時に文安五年二月なり、寬正の初關雲寺に移り、文明に至りて三登たり、尋て總持寺、龍泉寺に主となり、長享元年足利義政鎌倉の第に延て弟子の禮を執り、菩薩戒を受く、越前の藩主播州の刺史、皆寺を建て聘請す、師病を以て辭し、筑前に歸り、同年秋寂す、永泉寺に葬る、享年六十八坐夏五十四あり、（日本洞上聯灯錄）

キヨーア 敬阿 ガクシン學信を見よ、

キヨーア 敬阿 コーキヨー公慶を見よ、

キヨーオー 敬雄（ケイユウ） 二三七三 二四四二 〔天台宗〕武藏足立吉祥寺の學僧なり、敬雄、字は韶鳳、號は金龍道人、別號痴道人、道樂菴主人と云ふ、又南無三寶と云ふ印を用ふ、武藏の人なり、幼にして出家し、比叡山に登りて天台の宗義を學び、後東國に遊び、江戸淺草金龍山に寓して學譽高く、時人呼びて金龍道人と云ふ、遂に自ら號となす、寛延の初の頃常野の地方に遊び、一時日光山に寓す、寶暦二年、三十歳にして下總正安寺の法席を董し、幾もなく輪王寺宮公啓法親王の懇命により、武藏足立の吉祥寺に轉し、學譽益高し、自ら書齋を道樂菴と號し、道樂菴夜話を作る、明和六年四十七歳にして寺務を辭し、四方に浪遊す、畿内より長崎に至り、古跡靈地を歴訪す、其後美濃安八の善學院に閑捿して學徒に接す、安永九年門下の學徒相謀りて善學院に師の壽碑を立つ、藤原公縄壽碑銘を撰して師に贈る、天明元年の冬微疾あり、翌二年正月の初め、豫め死期を知り、壁間に淨土の曼陀羅を掛けて趺坐合掌し、正月八日晏然として寂す、壽七十なり、師平素氣象磊落、胸襟濶達にして細行に拘束せず、眞言宗の行願、淨土宗の大我等に交深く、共に奇僧の名ありき、著作天台霞標三卷、註金剛經助覽、老子玄覽、雨新菴詩集、道樂菴夜話、各二卷、祇材詩材、祇林聯芳、各一卷あり、（壽碑銘、善學院返信、近世佛家著作目錄稿本）

キヨーキ 敬已 二四一六 〔天台宗〕近江比叡山無動寺善住院の第一世なり、敬已字佛行房と云ふ、比叡山に學び、善住院第一世となり、僧都に任せらる、中年にして院務を厭ひ、院を辭して坂本に隱捿し、道行高く、淨土の念佛を修す、道暇俳諧を嗜み、徘名を不邑と云ふ、「おどしたる報に朽つる案山子哉」「蚊ひとつに施しかぬる我身かな」等人口に膾炙せり、草花を愛し常に數百種を培養せり、寶暦六年四月十四日疾あり弟子の請により自影に題して曰ふ、「往かう／＼と思へは何も手に着かす往こやれ西の花のうてなへ」と、書し畢りて西に向ひ合掌して寂す、享壽詳ならず、（近世畸人傳）

キヨーグワン 敬願 リユーキヨー隆慶を見よ、

キヨーゲン 敬彦（ケイゲン） 二四六七 二五二〇 〔天台宗〕近江法明院第七代なり、敬彦字は實幢、號は恭堂、近江大津の人、俗姓奥村氏、出家して法明院越溪敬長に師事し、其後を繼ぐ、萬延元年四月十三日寂す、壽五十四、著作續台宗學則一卷あり、（法明院記錄）

キヨーコー 敬光（ケイコウ） 二四〇一 二四五五 〔天台宗〕近江園城寺法明院第五代なり、敬光字は顯道號は蘿溪、一に戀西子と稱す、山城北岩倉の人俗姓は伊佐氏、宇多天皇の後裔なりと云ふ、元文五年を以て生れ、寛延三年十一歳にして園城寺に登り、敬雅僧正に師事す、寶暦二年十三歳にして度を受け本行教院に住し、七年十八契印法及び胎藏界密軌を受け、明年護摩金剛界等の持明瑜伽を受く爾後内外の學を講究し外學を那波魯堂、龍草廬、大江資衡等に問ふ、寶暦の際同門相鬩ぐに方り、僧正師をして外侮を抗禦せしむ、師止むを得ず官事を以て武藏江戸に掛錫する數年なり、世間暇あれば教籍を究め、傍ら儒老百家を探り、文藻を練る、石欄集四卷を著す、明和元年官事終りたるを以て本山に皈り、菩薩戒經義記等を講す、二年春伊勢、攝津、播磨、讃岐の四國に遊び、西遊篇二卷を著す、四年唐房行履錄三卷を編し、翌年行事明鑑を補點し、並

に評語を著す、六年僧職を辭し、北岩倉に退隱し、翌年京都相國寺に寓し、慈雲律師に就て悉曇を學び、兼て密灌を傳ふ、八年六月播磨西岸寺の請に應し、觀經疏鈔を講じ、此冬洛東源宗院に移り、摩訶止觀を講ず、安永二年十八物圖一卷を作り、此冬梵唐千字文譯注、及曾祖儀一卷を撰す、三年法華文句を講じ、圓戒大筌十卷、圓戒膚談七卷を著し、其文浩繁にして初機者の解さゝらんことを恐れ、敎時要義一卷を撰し、以て初心の徒に附す、此冬十月彌陀經要解を講じ、播磨書寫山の請に應し、往て觀經疏鈔、十不二門鈔、佛心印記を講し、備中に赴きて觀音玄疏を講ず、同年冬佛法血脈譜、及傳法偈に據り、傍ら志磐の佛祖統記等を考し、祖次を表定して山家列祖議を作る、復畫工をして台密禪戒四十祖の肖像を模せしめ、祭祀に擬し偈を作りて曰く、我師遊漢稟三宗、奏國先開比叡峯、諦觀月高龍鬼伏、敎時風起主臣恭、持明遠影心求護、修定對眞身逐蹤、圓戒元爲佛乘本、併圖四十祖尊容、と、四年幼學顯密儀五卷を撰し、五年秋三聖二師禮懺文五卷を撰し、戒壇院記を校閲す、同年冬定玉僧正に從ひて五部の傳法を稟け、翌年圓戒依律羯磨目錄一卷を撰し、貞元錄鑒定する大乘律二十七部を編集す、七年春列祖の規により一乘比丘戒儀を用ひ、梵網具戒を誓受し、進んで比丘となる、同秋天台小部集を校訂し、冬戒光山に登り、戒灌の法を稟け、洛南長講堂に於て四敎儀集註を講ず、師固より僧坊を創立して律徒を撫育せんとし、洛東淳公の屬により、河南岩涌山に移り、學徒を聚む、茲に於て四方より學徒雲集し瑜伽を稟け、聲明業を學ぶ、安永九年普賢觀文句記を勘訂し、天明元年一乘比丘戒儀を校訂す、此歲一乘戒儀、三執戒儀、普通授戒儀を校訂し、三年五大力菩薩祕釋、普賢行願讃梵本悉曇正音義を校訂す、四年春梵網具戒を敬天に授け、聲明業を德元澄に傳ふ、五年和泉鳩原彌勒堂に遷り、これより先き出雲鰐山の諸徒、河南に來りて請益せしが、師の河南を辭せしを見て懇請して止まず、仍て六年冬を以て鰐山に移居す、八年春請に應して松府普門院に於て般若心經疏を講す、是秋九年備中井山寶福寺拙菴、出雲國富興國寺大雲の請により論場を開く、師講師となり、亮碩を難者と爲す、此冬出家大綱を校訂し、且つ宗義を硏究するの際、神代の文字を得、熟思して通曉し、和字考三卷を著す、寛政元年法親王師の道譽を慕ひ、遠く使して禮聘するも、師辭して起たず、三年春蓮光寺に適て留まること旬餘なり、四方の道俗風を慕ひて集まる、秋出雲大社に詣で、興隆圓戒の冥助を祈ること七晝夜に及ぶ詩を獻じて曰く、龜鶴雙峯碧、挾宮億歲榮、祇應神不測、寫影一川淸、と、四年春一百日を期して不動立師法を修する三百座、旣に滿ちて後再び一七日を期し、鹽穀を斷ち、八千枚護摩を修す、五年春京都に上り、法親王の請に應し、積善院に館し、法華儀、大日經指皈、祕密即身義を講ず、秋八月傳法後授記を定玉大僧正に受く、六年春播磨善樂寺の請に赴き、般若心經祕釋を講し、嘗て淸朝の內典に乏しきを聞き、天台部律部の書若干卷を購ひ、相國寺大典をしてこれを贈らしむ、此秋園城寺戒春比丘師を延て席を緇かしむ、師因て法明院に移りて院務を管す、尋で四敎儀直解を講ず、七年春より夏に至るまで菩薩戒義記、幼學顯密儀を講じ、四月一日より四日に亘りて列祖忌會を創

む、初秋疾に罹り門徒をして沙彌威儀經を輪講せしめ、親しく臨んで決正す、八月に至り疾愈々篤く、乃ち偈を書して曰く、西方即是唯心土、一句了竟無二死生一、無死生中說二生死一、無東西裏送二此行一、と、筆を投じ泊然として寂す、實に寛政七年八月二十二日なり、壽五十五、臘十八、師意氣精勵、佛祖の道に一身を委ね、特に圓戒を弘め、具つ遮那を學び、悉曇聲明の法に至りては大に發明する所あり、法親王師の像に讃して曰く、淵情洞識、天資神傳、顯二揚圓戒一、群疑斯殄。哲將旣逝、誰近後殿と、著作、圓戒膚談七卷、大乘比丘行要鈔六卷、幼學顯密儀、三聖二師禮讃文、妙宗鈔講案、各五卷、石欄集四卷、圓戒指掌、唐房行履錄、松堂月纂、和字考、各三卷、一式貫注、山家學則、行事綱宗行事訣、西遊篇、各二卷、圓戒律目錄、大乘比丘十八物圖、諸教戒體、大乘比丘新學律儀、策修要法、大乘十善戒義、出家供範、僧戒說、山家列祖議、山家宗門尊祖儀、教時要義、大日經心目講翼、遮那經指皈、講翼、法華梵釋講翼、法華儀講翼、即身義講翼、悉曇藏序講翼、列祖儀講翼、菩薩戒經戒開題、八詠樓詩抄、迎涼臺詩鈔、各一卷、圓戒行事綱宗七卷、顯戒論隨釋六卷、學生式隨釋、大乘比丘作事領會、通別二受指暇、大戒綱要抉膜、顯密儀上卷講案、各一卷等あり、(顯道和上行業記)

キヨーシユ 敬首 二三四三/二四〇八 〔淨土宗〕武藏正受律院の開山なり、敬首は瓔珞菴と號す、俗姓佐佐木氏、世々近江八幡に住して、鄕士なり、天和の初父官訴の事あり妻を携へて江戶に下り、神田に假居し、靈夢に感して孕み、天和三年三月十五日、假居に師を生む、師生れて三歲にして父を喪ひ、母に育せらる、六歲湯島の靈雲寺に詣し、淨侶の行儀を見て出家の志あり、元祿九年五月、十五歲にして母並に養父の許を得て增上寺の學侶岸了の下に投じ落髮して法名祖海と云ふ十二年岸了小金の東漸寺に遷り住す、師亦隨うて給仕す、後其下を辭して西上し、山城師子谷法然院の忍徵を訪うて師事し、顯密の學を究む、寶永二年廿四歲にして江戶に下り、岸了に歸省す、其年の夏慧堅の證明により自誓受して大乘菩薩比丘となり、敬首と名く、尋て岸了は增上寺大僧正祐天に謀り、武藏の正受院を淨土の律院となし、師を開山となす、淨土宗の律院の規則を製するはこれを以て始めとす、爾來正受院に住し、敎化盛なり、享保の頃同院を弟子本明に讓り、下谷に隱棲し、自ら草菴を瓔珞菴と云ふ、別に書庫を造り眞如院と云ひ、內外の典籍數萬卷を藏し、讀書講學を事とす、寬延元年の春より疾に罹り、八月廿五日に至り、弟子海雲元皓を召して遺誡を付し、九月二十日安然寂す、世壽六十六、法臘四十四、諸弟子相謀り遺骨を下谷壽永寺に葬る、增上寺大僧正連察幕府に請うて壽永寺を淨土宗の律院とし、師を中興開山となし、元皓後を繼く、師著作、天台戒疏講述五卷、當麻曼陀羅正義四卷、阿彌陀經隨聞記、梵網經精義、即心念佛摘欺說、各二卷、續即心念佛摘欺說、一枚起請文親聞錄、放生會儀軌、地藏菩薩念誦儀軌、梵網經玄談、典籍概見、各一卷、(淨土宗史料、近世佛家著作目錄稿本)

キヨーシユー 敬宗 一八七九/一九七一 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、敬宗は鄕貫師承共に詳ならす、弘安十一年四月一日三井の別當となり、七月權僧正となる、十月の會に講師を勤む

キヨー(敬)シ

應長元年三月十一日寂す、壽九十三、(三井續燈記)

キヨーチヨー　敬長(ケイチャウ)　二四三九—二四九六　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、敬長字は習遠、號は越溪と云ふ、出雲循縫の人、俗姓金山氏なり、安永八年を以て生る、幼にして出家の志あり、父母より和尚に托せらる、乃ち五戒を受け、不動尊を持念す、會三井の顯道敬光和尚の巡化して鶴淵山に至るにあたり、寛政三年始めて京師に上り、靈曉佛現大僧都を拜して剃髮し、中將と稱す、未た幾ならすして大僧都寂す、五年敬光和尚京師に還り、積善院に寓し講筵を開く、師追隨して教示を受く、寛政七和尚寂す、此に於て大衆の請により和尚の跡を補す、師益學業を勵み、寶珠寺義山を拜して瑜伽の秘法を傳へ、正教院靈玉を拜して法華の深義を受け、且つ悉曇を學び、圓頓戒を諮ふ、傍ら皆川淇園、巖垣龍溪等に就いて經史詩文を學ふ、十年の春前大僧正敬雄阿闍梨の勸誘により義山を請して沙彌戒を受けて一乘沙彌となる、十二年大僧正の勸誘により傳法灌頂を受け、且つ天台法華宗の秘決を受く、享和元年槇尾山に登り戒律の三大部を講究し、文化二年大僧正より傳法後の授記を受け、龍雲寺守玄を拜して比叡山の灌頂を受け、雞足院に入りて瑜祇灌頂第五三昧耶を傳ふ、文化三年唐院に寓し天台の諸疏を講究す、四年三聖二師禮文一卷を校刻し、八年三式貫註二卷を校刻し、十一年の秋西教寺眞雄を拜して金剛戒灌頂を傳ふ、是冬七晝夜を期し日々三千禮を行ふ、十一月廿三日靈玉を拜して一乘圓頓戒を受く、十三年慈慧大師禮文一卷を撰す、文政二年十八物圖一卷を校刻す、六年天台五小部法華畧疏を講す、七年妙宗鈔四教儀集位を講し、各懸譚一卷を撰す、妙宗鈔懸譚中、唯識實相の二觀別理隨緣等の義を敘して、內外二境に關する異論を判す、八年菩提心論、大日經、指歸法華儀を講し、菩提心論案一卷を撰す、九年の春大阿闍梨となる、同年京師大善院に於て指要鈔を講し、懸譚一卷を撰す、懸譚中本邦弘通の一科を設け、盛に傳教大師一流の說を主張す、冬金剛錍論、心經山家釋を講し、金錍講案一卷を撰す、十年十善戒義一卷を校刻す、十一年顯道和尚行業記一卷を撰す、冬普賢觀經文句記を講す、繼明鈔三卷を撰す、十二年法華玄義を講し、懸譚一卷を撰し、盛に止觀圓戒舍那を幷行すへきことを主張す、十二年菩提場經義釋五卷を校正分會す、天保三年十善戒義を講し、助宣鈔一卷を撰す、四年悉曇源鑑一卷を撰す、同年藏乘院に遷り、尋て法音院に遷り住す、五年疾あり、六年修驗畧要を校正す、七年疾漸く革る、自ら命終の期を知り、不動尊の呪を誦す、二月七日寂す、壽五十八、夏二十三、師畢生所謂日本天台の主張を以て任し、講說に、著作に、全を注けり、數道俗の請により、聖天供、不動立印供等を薰修して靈驗ありたりといふ、著作前に擧ぐるか如し、弟子敬彥等あり、(越溪道蹟)

キヨーテン　敬天(ケイテン)　二四一八—二四七七　(天台宗)近江法明院の學僧なり、敬天字は儒童と云ふ、陸奧南部の人なり、寶曆八年を以て生る稍長して出家し二十歲にして大法を求めて西上し、顯道敬光和尚に依り業を受く、安永九年十八印契法を受け、一日一食苦修練行す、天明元年胎藏界護摩法等を受く、四年和尚を仰いて圓頓戒を受け、且つ菩薩戒經の深意を傳へ、戒本大意を筆受す、後圓頓戒に關する經論疏章の目錄を編し、

宗海目錄と云ふ、六年敬光和尚出雲に出發するあにたり、師陸奥に仮り、大に一流の法門を弘通す、文化十四年四月十二日國に寂す、壽六十、師常に不淨觀を修し、語りて曰ふ、觸向對面蟲想現前す、と、(復古四侍者畧傳)

キヨートク 敬德 二四九〇 二五四五 〔天台宗〕近江法明院の住僧なり、

敬德字は順道、俗姓井上氏、後に櫻井氏と云ふ、尾張知多郡西阿野村の人、井上廣堅の子、母は同村久田六左衞門の女なり、天保五年九月十三日に生る、幼名廣孝、甫めて九歳にして高讃寺觀智に就いて句讀を受け、次に稱名寺汪淨に就いて書法を學ふ、弘化元年稱名寺に於て長山和尚を拜して通受法により圓頓戒を受け、翌二年九月十三日感發するところありて父母に强請し、二年三月十三日其許を得て松榮寺に至り觀智阿闍梨の弟子となり、旭順阿闍梨より戒を受け、法名順廣と云ふ、五月朔發願して惠心僧都の讀經用心に依り、法華經一百部を讀誦す、四年十一月阿闍梨に就いて葉上流四度加行を受け、嘉永二年十一月藪村安樂寺塔頭玉泉寺の住持となり、三年五月圓城寺の法明院に至り、始めて羅月院敬彥和尚に謁す、六年九月十三日發願して大法を求めんがため近江美濃信濃三河遠江伊豆武藏上野下野の諸州を巡歷して明師を尋ね、安政元年三月再ひ園城寺に至り、敬彥和尚に謁し、師資の禮を執る、和尚其志を賞して法號戒忍を授く、三年十一月十三日一心戒を受け、十二月十三日更に一乘圓頓沙彌戒を受け、法名を改めて敬德と云ひ、字を順道と云ふ、四年十月三日四度加行開白し、五年正月十八日に至り滿行し、三井流の秘密法を傳ふ、萬延元年四月和尚の喪を修め、文久元年遺囑により法明院の住持となる、聖護院宮雄仁法親王復飾したまふにあたり、顯密の書訣を擧けて師に附與す、元治元年十月二日尾張長榮寺實戒を拜して具足戒を受く、明治五年官命により敎導職を奉し、諸州を巡回す、十三年十一月大敎正祐玉を拜して傳法灌頂を受く、十六年五月町田久成の請により、奈良東大寺戒壇院に於て圓頓菩薩戒を授く、十八年九月東京小梅の町田氏の宅に寓す、亞米利加人普惠能勞佐、美藝郎等に戒を授け、普惠能勞佐法號諦信、美藝郎法號月心と云ふ、二人の請により菩薩戒經を講す、亞米利加人海軍士官法宇斯に戒を授く、法名天心と云ふ、美藝郎小石川久堅町に圓寂道場を興し師を請す、師其道場に寓し、十一月疾に罹る、三人醫を招き百方力を盡すも功なく、十二月十四日寂す、壽五十六、夏二十六、弟子相謀り近江法明院に葬る、(敬德大和上畧傳)

キヨーニチ 敬日(……)〔淨土宗〕京師長樂寺の僧なり、

敬日俗姓生國詳ならす、出家して天台宗に歸し後長樂寺隆寛に師事して淨土敎を受け、一義を別立す、その要に謂ふ、餘の諸行を修するも亦報土に生る、諸行は佛の本願の行にあらず、九品往生の中、上品上生は報の淨土なり、自下の八品は並に邊地なり、と、師曰ふ遁世に三の口傳あり、一には同宿、二には、同躰なる後世者の庵を並へたる所に不レ可レ住、三には、遁世すればとて日來の有樣を悉く不レ可レ改、云云敬日寂年缺く、門下慈心聞へたり、(淨土傳燈錄、淨土總系譜、一言芳談)

キヨーネン 敬念 一八七七 一九三二 〔臨濟宗〕筑紫首羅山の禪僧なり、

敬念號は悟空、俗姓不詳、筑前太宰府の人、承天寺に於て

辨圓(聖一國師)に師事し、寛元年中宋に航し、徑山の佛鑑禪師の下に參究す、時に道祐前より佛鑑の下に在りて印記を傳ふ、敬念相見て喜ひ、道祐に語りて曰ふ、某參方久しと雖未だ入頭の處有らず、公慈悲方便せよ、祐勵聲して曰ふ、即今傍に在り、と、師言下に契悟す、文永元年兀菴普寧宋に歸らむとし聖福寺に寓止す、師東歸して相見て喜ぶ、同三年東巖慧安洛東に福田寺を營みて師を請す、師上堂し衆の爲に圓覺經を講演す、後太宰府に歸り、首羅山に棲遲す、九年十月八日衆を集めて上堂し、柱杖を拈し卓一下して曰ふ、三世諸佛證得法、六代祖師傳授法、皆悉在二柱杖頭上一、又卓一下して曰ふ、看、看、即ち寂す、壽五十六、法臘三十三、(元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

キヨーホー　敬法(……)〔淨土宗〕山城淨華院の第八代なり、敬法其俗姓を知らず、淨華院第七世證法上人の法を嗣き、第八世となり大僧正となる、其德化する所大なり、嘗て塔下に一字を創す、松林院と名く、龜山法皇師の道操を崇敬し、勅召して圓頓の大戒を禀けたまふ、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

キヨーヨ　敬譽　シヨーサツ松颯を見よ、

キヨーエ　曉惠　二三九一／二四六三〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十五代なり、曉惠字は存詮、一に存珪に作る、下總布瀨村の人なり、州の寶壽院曉盛の室に入りて剃髮し、後跡を嗣き、臼井村松虫寺に轉し、江戸大塚日輪院に居り、次いで豐山に登りて學年を積み、第一臈より室生山に移る、次で根生院に主となり、享和二年七月豐山能化に補し、翌三年三月朔日寂す、壽七十三、(新義眞言宗史料)

キヨーグヮツ　曉月(ゲツ)　一九二五／一九八八〔淨土宗〕京師某寺の僧なり、曉月は京師の人、俗名藤原爲守、祖父は爲家、母は安嘉門院の四女、後に阿佛尼と云ふ、共に文名高し、曉月夙に和歌を善くす、殊に狂歌に巧みにして、酒百首、蟻虱百首等を作る、嘉曆三年十一月八日寂す、壽六十四、命終の作あり、「むとせあまりよとせの冬のながき夜に浮世の夢を見はてぬるかな」(碧山日錄、狂歌百人一首)

〔考〕　碧山日錄に曉月は爲家の子なりとあるも採らず、今は狂歌百人一首に載するところに據る、

キヨーコー　曉幸　一九三四／一九七〇〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、曉幸は甫めて十二歲の時、幸尊の室に入り、後寛敎、に學ひ、永仁二年住學生に補せられ、六年十月本寺大堂の立義者と爲る、應長元年十二月台三三會講師に任し、已講の號を得、凡そ所聞の法皆私記あり、延慶三年五月十七日關東に寂す、壽三十七、(三井續灯記)

キヨーサン　曉山　リヨーテツ亮徹を見よ、

キヨーテン　曉天　……二三二九〔淨土宗〕信濃天用寺の僧なり、曉天は願蓮社誓譽と號し、信濃上田の人なり、了山に師事して法を嗣ぎ、後檀說に就て益々宗異に達す、州の鹽崎天用寺に住し、寛文九年正月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

キヨーハ　曉把　……二二二八〔淨土宗〕京都淨國寺の開山なり、曉把は深蓮社信譽任誓と號す、俗姓は千葉氏、總州の人なり、十二歲にして道譽に投して剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ永祿三年京都京極に淨國寺を開きてこれに住し、永祿十一年十月

五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

キヨーヨ　曉譽　イサン位産を見よ、

キヨーヨ　曉譽　ゲンエー源榮を見よ、

キヨーヨ　曉譽　ロギン露吟を見よ、

キヨーミヨー　境妙（……）〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、境妙は近江の人、比叡山横川に居り、法華を讀誦し二万部に滿つ、又五種法師十種供養の法を修す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

キヨーシキ　京識　シユーサン秀算を見よ、

キヨージユン　京順　二二八〇 二三五五　〔曹洞宗〕薩摩香積寺の開山なり、京順字は普峯薩摩國の人、田布施に生る俗姓山内氏、十三歲にして出家し、妙圓寺奪叟珠を禮して得度す、後、好で群書を究む、武藏に至り、正三老人に見え、師事すること三年、適道者禪師長崎の崇福寺に至ると聞き、即ち往きて謁す、菴を山中に結んで修行すること六年、道者明に歸るに及んで師も亦薩摩に還り、南瀨に幽居す、其山川の明媚を愛して菴を營みて居す、刻苦參究二十一年、一日の如し、偶天和某年の春、香積寺を興造す、奪叟禪師を崇請して始祖と爲し、自ら次位に居る、禰寂無休居士深固院を興復して師を請て之に住せしむ、元祿八年五月廿八日寂す、享年七十六歲、臘五十九、（日本洞上聯灯錄）

キヨーイ　恭畏　二二二五 二二九〇　〔眞言宗〕山城法輪寺の中興なり、恭畏は京都西院の人なり、夙に出家し、廣隆寺乘全に師事し、また惠山の惟杏に詩書春秋を學ひ、外學の名あり、後醍醐山亮淳僧正より瑜伽の秘奥を傳へ、僧伽梨金剛杵を附與せらる、南都の諸大寺を回歷して三論、華嚴、法相、戒律等を修習す、天正十九年律師となり、尋きて大僧都法印となる、慶長元年法輪寺（道昌開く所）に住し、堂舍經藏の廢荒を修繕し、尋演大僧正を請し、落慶の供養を行ふ、慶長九年の夏大に旱す、衆請により水天供を修し、大に靈驗あり、翌年再ひ修す、元和の頃禪宥僧正より廣澤の法流を傳ふ、爾後諸國の山川を歷遊し、金峯、葛城、富士、白山等の高嶮經行せさるなし、西遊して安藝廣島に留まり、求聞持法を修行し、日向薩摩大隅三國を行脚すること五年、歡喜天供を修すること九十四回に及ふ、偶臨濟の文之禪師朱子性理の說を執り、眞言宗を蔑視す、師邪正義三卷を作り難詰す、遂に京都に歸へり、法輪寺に住す、寛永元年高雄山神護寺に遷り住す、七年六月十二日寂す、壽六十六、同年八月十二日仁和寺覺親法親王推奏して權僧正を贈らる、著作前記の外密宗血脈鈔三卷ありて世に行はる、（續日本高僧傳、）

キヨーオー　恭翁　ウンリヨー運良を見よ、

キヨードー　恭堂　キヨーゲン敬彥を見よ、

キヨーウン　狂雲　ゲンショー玄昌を見よ、

キヨーウンシ　狂雲子　シユージユン宗純を見よ、

キヨータツ　匡達　エタン慧潭を見よ、

キヨーミヨーイン　境妙院　ニチシユー日宗を見よ、

キヨンヨ　叶譽　ユーソン西尊を見よ

ギヨーア　行阿　二二七六 ……　〔淨土宗〕山城稱念寺開山なり、行阿は俊蓮社嶽譽と號す、三河の人、天室に投じて剃髮受業し、後安譽虎角に就て法を嗣ぎ、初め江戸天德寺に住し、次

に京都一心院に遷る、慶長十七年洛西千本に稱念寺を剏む、元和二年十二月一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギヨーア 行阿 二四六四―二五三五 〔眞言宗〕江戶深川寺の修驗者なり、行阿は俗姓菅原氏、江戶の人なり、砂村の深川寺に住す、安政二年醍醐の院家なる法成就院を兼務し僧正となる、法相悉曇に通し、傍ら連歌を善くし、柳營御連歌御連衆となる、明治八年四月十四日寂す、壽七十二、著作修驗之大意一卷等あり、(深川照阿氏返信)

ギヨーイ 行意 二二八二…… 〔淨土宗〕山城極樂寺第四代なり、行意は信譽と號す、生西に就て剃髮受業し、山城沓掛に宗林寺を立て、又川勝村に西方寺を開く、後桂極樂寺に住して第四世となり、元和八年十一月十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギヨーイ 行意 一八〇一…… 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、行意、伏見修理大夫俊綱の子なり、高野山に登りて出家精修し長和親王を拜して受戒し、灌頂壇に入りて諸密軌を傳ふ、專ら戒檢を持し、兼ねて淨業を修す、永治元年七月八日寂す、壽缺く、俗に大夫律師、又は澤の律師と稱す、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ギヨーエ 行慧 一七二六―一八一三 〔眞言宗〕紀伊高野山の檢校なり、行慧は紀伊濃田の人、良禪法師の高弟なり、密學に通し、久安五年高野山の檢校となり、仁平三年十一月十一日寂す、壽八十八、嘗て山中に精舍を造り總持院と名く、(高野春秋、本朝高僧傳)

ギヨーエ 行慧 (一八〇五) 〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の座主なり、行慧は俗姓生國詳かならす、高野山に住し、學德高し、大傳法院第二代座主眞譽の讓を受けて第三代座主となる、示寂の年時缺く、(結綱集)

〔考〕行慧は久安の頃の人なり、

ギヨーエン 行圓 (一六六五)(……) 京都行願寺の僧なり、行圓は鎭西の人、常に千手觀音陀羅尼を持す、寬弘二年京都に遊化し、頭に寶冠を戴き、身に革服を著く、世呼ひて革上人といふ、加茂神祠の槻を得て大悲の像八尺のものを刻み、行願寺を建て之を安す、師此寺に住し常に革を衣るを以て世呼ひて革堂となす、寂年、及ひ壽缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ギヨーエン 行圓 二一六九…… 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、行圓は通議大夫源國舉の子、俗名は國輔と云ひ、仕官して進士となる、後園城寺に投じて剃髮し、勸修寺心譽の門に遊び顯密の奧旨に達す、灌頂して後常に阿彌陀の法を行ふ、後詔を奉し小野仁海僧正と共に雨を祈りて驗あり、永正二年正月八日寂す、壽缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ギヨーエン 行宴 一八四四―一八六〇 〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、行宴は後改めて行延と云ふ、少輔法眼と號す、惣在廳行俊の子なり、出家して有眞北院御室に師事して密教を學ぶ、正治二年七月七日寂す、壽十七、(仁和寺諸院家記)

ギヨーエン 行延 キヨーエン行宴に同し、

ギヨーオー 行應 ゲンセツ玄節を見よ、

ギヨーガ 行賀 一三八九―一四六三 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、行賀俗姓上毛氏、大和廣瀨郡の人、出家して興福寺に投し、永嚴に師事し、二十歲にして嚴を仰ぎて具足戒を受く、

後元興寺平備に就きて法相を學ぶ、天平勝寶五年勅を承けて唐に航し法相天台を傳ふ、三十一年にして歸朝す、齎持せる經疏一百餘卷なり、勅あり學僧三十人を附して其業を受けしむ、東大寺明一即ち罵りて曰ふ、久しく歳華を經て學殖膚淺、何ぞ朝寄に乖くか、師大に愧ちて涙を垂る、これより益研究す、延暦十年興福寺別當となり、同十五年十二月廿四日大僧都に昇り、二十二年二月十一日同寺に寂す、壽七十五、著作甚だ多し、法華玄贊二十卷、唯識論僉記三十卷　淨名經略贊五卷、仁王般若略贊三卷、百法論註二卷、唯識義暉一卷、唯識樞要義一卷、唯識義精一卷、唯識比量一卷、法華論釋一卷、遣僞興眞章一卷、（續日本紀、七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）〔考〕本朝高僧傳に留學三十一年とし、註に一說七年とあり、七大寺年表に寶龜七年十月十六日に少僧都となるとあるより推せば七年といふ方事實ならむ、然れとも今は姑く高僧傳の本文に依る．

キヨーカイ　行誡　二四六六／二五四八　〔淨土宗〕武藏增上寺第七十一代なり、行誡は晋阿と號し、建蓮社立譽と號す、俗姓は福田氏武藏豐島の人なり、幼にして小石川傳通院に投じて剃髮受業し、長じて京都に遊び、嵯峨の立道に謁して敎を受け、後小石川に歸り、鸞洲に師事して宗學を受け、又東叡山慧澄に參して天台敎を學ぶ、一山の大衆の講授を請ふを厭ひ、小石川處靜院に隱れ、後淸淨心院に逃る、大衆追尋し講授概ね虛日なし、會兩國回向院主席を虛うす、檀越の懇請により、其主席に就く、明治維新の後、大敎院に出で、敎務に力を盡し、同十二年傳通院を經て、增上寺に進み、大敎正となる、十九年三月病に罹り、深川本誓寺に退隱す、二十年三月再び出でゝ總本山智恩院門主となる、此歲十二月再び疾に罹り、翌二十一年四月二十五日寂す、壽八十三、著作大日本佛法傳德本行者傳、いり日の光、落花遇談、雪窓答問、松濤龜鑑、釋敎正謬再破批、吉野川もとすへ、傳語、緣山法語挾經、寒林集（詩集）落葉集、（歌集）後落葉集、釋敎百首、各一卷、旃檀瑞像傳二卷あり、（行誡上人全集）

行誡上人

ギヨーカイ　行海　一七六九／一八四〇　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、行海は其鄉貫詳かならず、承安二年東寺長者に任じ、治承四年十二月十日寂す、壽七十二、（東寺長者補任）

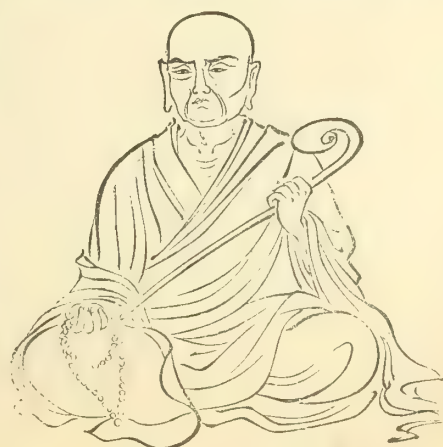
ギヨーカク　行覺　……／一九五三　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、行覺は當麻井法皇の子、正應元年十二月十五日出家し、眞覺法師を禮して宗義を學び、同二年受戒し、三年八月長吏

ギヨー（行）カ

に任し、四年灌頂す、永仁元年九月廿二日寂す、壽缺く、（三井續灯記）

ギヨーガクイン 行學院　ニチオク日億を見よ、

ギヨーガクイン 行學院　ニチチヨー日朝を見よ、

ギヨーキ 行基　一三三〇 一四〇九 〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、行基（一說に法諱法行と云ふ）は和泉國大鳥郡家原の人、俗姓高志氏、（一に越史に作る）母は蜂田連の女なり、百濟王の後胤に出つと云ふ、天智天皇九年に生る、幼より佛教に意を傾け、天武天皇白鳳十三年十五歲にして出家し、大和藥師寺に投し、新羅の慧基に就いて法相宗を受け、道昭・智鳳・義淵に從うて益蘊奧を傳へ、智通智達等にも從ひたりと云ふ、持統天皇朱鳥七年、二十四歲にして德光法師と云ふを仰いて具足戒を受けたりと云ふも、法師の事詳ならす、慶雲の初の頃、家原の宅を淨捨して佛堂となし、自ら大和の生駒山に隱棲し、老母に孝養を盡す　老母沒して後、生駒山を出て諸國に遊化す、師は法相宗を傳ふるも、道俗を誘導するには、淨土往生をも勸め、兜率上生をも說きたるかことし、都鄙到る所行基來ると聞けは、戶々居る者なく、皆出て丶禮拜し追從する者動もすれは千を以て數ふるに至りたり、されはこれより又度の弊も隨ひて生し、一門の徒時に國禁を犯すことありしかは、師の行狀は大に官の目を注くところとなり、養老元年四月に勅して、嚴に師幷に其徒を誡めらる、詔に云ふ、「方今小僧行基幷弟子等零疊ニ街衢ニ、妄說ニ罪福ヲ、合ニ構ヘ朋黨ヲ、焚ニ剝指臂ヲ、歷ニ門假說、强乞ニ餘物ヲ、詐ニ稱聖道ト、妖ニ惑百姓ヲ、道俗擾亂、四民棄ニ業、進違ニ釋敎ニ、退犯ニ法令ニ」云々とあり、これ自ら師が民間に於ける勢力を證すべし、養老神龜の頃、諸國に遊化するにあたり、寺院を剏開し、橋梁を架設する等、大に事功を成したり、即ち菅原寺久米田寺等は其の頃剏開にか丶れりと云ふ、神龜三年山崎橋を架設し且つ寶寺を剏開して大供養を行へり、天平三年八月に至り、詔に曰ふ「比年隨ニ逐行基法師ニ優婆塞優婆夷等、如法修行者男年六十一已上、女年五十五已上、咸聽ニ入道ヲ、自餘持ニ鉢行ヲ路者、仰ニ所由司ニ嚴加ニ提搦ヲ、其過ニ父母夫喪ヲ期年以内修行勿ヲ論ヲ」云々こ丶に至りて師の德光漸く顯はれ、朝野共に重するところとなれるを見るべし、同五年の頃、德道道明等の請により、長谷寺の十一面觀世音の開眼供養の導師となる其の頃攝津猪名野に至り昆陽の池を鑿ち、且つ昆陽寺を剏し、自刻の瑠璃光佛幷に十一面觀世音の像を安置し、有馬に入りて溫泉を開き、且つ寺を剏して自刻の藥師佛を安置し佐井に至りて佐井寺一名山田寺を剏し自刻の十一面觀世音を安置したりと云ふ、天平八年五月天竺の婆羅門菩提僊那、太宰府に到着し、八月攝津難波に入るにあたりて、師、諸大寺の僧侶を率ゐて引接し、一見故舊

行基大僧正

のごとく、國歌を贈答したりと傳ふ、十三年山城泉川橋梁を架設し、且つ橋寺を刱開して供養を行ふたり、十五年聖武天皇盧舍那佛造立の誓願を發起したまふに方り、師勅を拜して伊勢に赴き、太神宮の託宣を請ひたりといふ、天皇紫香樂宮に御して盧舍那佛の像を造立のため、始めて寺地を開きたまふに當り、師弟子を率ゐて衆を勸誘せり、◎天皇の朝二大事業と云はるゝ東大寺の建立、國分寺の刱設、共に師大に與りて力あり、國分寺の刱設には、諸國に巡行して土地を相して經營したりと云ふ、其著國府記は當時の撰にかゝるべし、十六年勅して行信僧都を遣はして師に封九百戸を給し、翌十六年正月廿一日(一說廿二日)に凡僧より一躍して大僧正に任せられ、度者四百人を賜ふ、大僧正の官實に此に始まるなり、同年に河内に淨土寺(一に往生院と云ふ)を開き、次に和泉高渚に高渚寺、攝津有馬に安樂院を開きたりと云ふ、師は初め彌勒上生兜率經に四十九重微妙寶宮の說あるに準じ、畿内五國に四十九院を開き、最後に安樂院を開きたるものなりといふ、四十九院の號、幷に其位地詳ならず、但し大和菅原寺、久米田寺、攝津の昆陽寺、佐井寺、河内の淨土寺等は、皆其内なりといふ、二十年正月八日に聖武天皇、及び皇后出家したまひ、翌年即ち天平勝寶元年正月十四日に、天皇、皇后、及び中宮子師を請して菩薩戒を受けたまふ、是れ我國に於ける天皇出家受戒の始なり、其翌月、即ち二月二日(一說に四日)に菅原寺の東南院に寂す、壽八十なり、命終の時、弟子光信に後事を付囑し、遺誡を與へ、且つ國歌二首を留めたりと云ふ、手度の弟子一百餘人あり、上足には光信、行信、行達、法海等あり、師一生の事功極めて多し、殊に開墾、疏通、築造等に力を用ひ、田制を畫し、海路を測り、墓地を開きたる等、一にして足らず、即ち攝津の堀口、𦆅生泊、韓泊、魚住泊、大輪田泊、河尻泊等の船津、山崎の橋、泉川、大津川等の橋、梅田の墓地等は、師の經營にして顯著なるものなりと云ふ、(續日本紀、日本後紀、三代實錄、扶桑畧記、帝王編年記、日本靈異記、日本往生極樂記、東大寺要錄、法華驗記、明匠畧傳、三國名匠畧記、元亨釋書、本朝高僧傳、行基菩薩行狀記、行基菩薩傳、御遺骨出現記、大僧正舍利記、僧綱補任、釋家官班記、神宮雜事記　朝野群載、本朝文粹、古今著聞集、昆陽寺鐘銘、拾芥抄、本朝書籍目錄、)

〔考〕　行基の事蹟は諸書に散見せり、今一々對照するに徃々にして一致せす、其出生の土地に關し、和泉家原とも云ひ、越後頸城とも云ふ、今は日本往生極樂記等に依り和泉家原と云ふを取る。出生の年時に關して、天智天皇元年とも云ひ、同七年とも云ふ、同九年とも云ふ、今は續日本紀に揭くる享壽を逆算し、九年なりと云ふを取る、大僧正に任せられたる年時に關して天平十六年とも云ひ十七年とも云ふ今は續日本紀に依り十八年と云ふを取る、其餘の鎖小の異說は擧けず、

◎ギヨーキヨー　行敎(一五一九)　〔三論宗〕大和大安寺の僧なり、行敎俗姓は紀氏、備後の人山城守兼弼の子、孝元天皇二十一世の裔、仁和寺益信の族兄なり、大和の大安寺に居りて三論及び眞言を學ぶ、傳燈大法師位に任す、貞觀元年豐前宇佐の八幡社に詣て、一夏九旬、歸へりて男山に靈祠を建つ、是れ此年の九月十九日なり、其後朝廷國家安寧の爲め、宇佐八幡に一切經を納め、師をして事を監せしむ、寂年及び壽缺

ギヨー(行)ギ

く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ギョークー 行空(一八七二)〔淨土宗〕某寺の學僧なり、源空上人に師事して、淨土敎を受け、後ち一念義を主張し、幸西等とともに門下を斥けられたりと云ふ、示寂の年月日幷に享壽缺けて傳はらず、(淨土傳灯錄)

〔考〕行空は建暦頃の人なり

ギョークー 行空(……)〔天台宗〕比叡山の僧なり、行空平生僧具三衣全からず、法華經八卷を負ひて晝夜讀誦すること十二部なり、五畿七道遊歷し、到る所に宿せず、時人稱して一宿上人といふ、示寂まで讀誦したる所三十餘萬部なり、九十歲に垂むとして沒す、年時缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ギョークワン 行觀(二三八五……)〔融通念佛宗〕大和郡山圓融寺の第十三代なり、行觀字は良山といひ、攝津大坂難波村の人なり、大通上人に就いて度を受け、一宗の奧義を傳へ、大和の奈良法德寺、郡山圓融寺に歷住し、專ら宗風の擧揚に力を盡す、享保十二三年の交圓門草錄一卷を製し享保十七年本山學頭職を拜し、眞光院と號す、大通上人の十七忌辰に方り、法恩に酬ひん爲め融通念佛圓門章私記三卷を製し、大通上人の說を敷演す、(寶曆九年河內譽田の金田寺玄嶺版に上ほし世に行ふ)此書は準海の集註と併稱して宗門の二要書と云ひ、俱舍の光寶二記に比すと云ふ享保十九年十月六日攝津難波、眞野氏の家に寂す、弟子泰超、泰山、琳溪等あり、(西本良察氏返信)

ギョークワン 行觀 カクユー覺[illegible]を見よ、

ギョークワン 行觀(……)〔天台宗〕河內錦織寺の僧なり、行觀は三條帝の皇孫、皇太子敦明の子なり、志、佛を慕ひ、三井の定基僧都により剃髮受戒し、顯密の二敎を究め、大僧正に任ず、河內錦織寺に幽棲す、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

ギョークワン 行願(二四一一)〔眞言宗〕山城寶持院の僧なり、行願號は大進菴、一號は如意菴と云ふ、鄕貫詳ならず、寶曆の頃常陸筑波山月輪院に住し、後武藏隅田川畔に大進菴を營み住す、歌あり云ふ「しばしたゝすみた川原にすみそめの衣寒けくむすふかり菴」天台の學僧なる武藏足立の吉祥寺敬雄等に交はり、學解を以て聞ゆ、後、小野の寶持院に住し、僧正となる、寂年、幷に壽缺く、著作文鏡秘府論冠註十五卷、註阿字義三卷、註梵字次第記、法華經異釋、各二卷、蘇曼多羅聲明釋、梵漢韻學須知、精進意義、各一卷、青表紙五卷、花間笑語、大進夜話、各二卷、堪忍袋一卷、あり(近世佛家著作目錄稿本)

ギョーゲン 行玄(一七五七一八一五)〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、行玄は藤原師實の子、比叡山に登りて落髮受學し、二十歲良祐阿闍梨に從ひて灌頂を受け、保安元年夏中宮の病を加持して賞せられ法務を掌とる、四年十月權僧正に任し、延曆寺座主に補す、永治元年上皇の病を禱りて手つから御衣を賜はる翌年春護持僧となる、康治元年夏上皇及ひ藤原忠實共に師に就きて受戒す、二年十月客星出て、地震ふ、師祈禱して靈驗あり後勅によりて日蝕を祈禱す、靈驗あり、牛車の宣を賜ふ、天養

二年月蝕及び彗星を祈禱して驗あり大僧正に轉す、六年九月美福門院金字銀字の一切經を裝し、最勝寺に於て慶讃供養をなすに方り豫め師をして晴天を祈禱せしむ亦靈驗あり、帝大に悅ひ、其房を營み、皇后の願寺となし、青蓮院と名け、阿闍梨五人を置き、師を第一世となす、仁平元年夏最勝會の證議者となる、三年春延曆法勝最勝の寺職を辭し、久壽二年十一月五日青蓮院にて寂す、壽五十九、(行玄年譜、本朝高僧傳)

ギヨーコ　行故　……二三三八　〔淨土宗〕筑後如意菴の僧なり、行故は法蓮社忍譽と號し、筑後の人なり、法を雪念に嗣ぎ、州の阿蘇郡に如意菴を構へて住し、延寶六年五月十四日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

ギヨーコ　行古(……)　〔曹洞宗〕周防龍文寺の禪僧なり、行古字は松仙、俗姓生國詳ならず、出家の後竹居眞梁禪師に敎を受け、遂に密印を授かり、某年寂す壽缺く、(日本洞上聯灯錄、)

ギヨーゴー　行豪　ゲンゴー源豪を見よ、

ギヨーゴン　行嚴(一八七一)　〔眞言宗〕山城醍醐山理性院の五代なり、行嚴は刑部卿法印といふ、京都の人、正三位能季の子宗嚴の法を受け、理性院五代の院務となる、建曆元年叉成賢僧正の法を嗣く付法十六人あり、宿蓮、義海、藏海、行緣、藏尊、深空、範譽、心海、幸眞、眞遍、公鏡、嚴眞、有嚴昌宴、定兼、了心といふ、(續傳燈廣錄)

ギヨーゴン　行嚴(一七〇六)　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、行嚴字は佛頂房と云ふ、郷貫詳ならす、比叡山に登り、双嚴房賴昭に師事して池上流の事相を究め、後に佛頂流を開く、祇園別當となる、寂年幷に壽缺く、著作口祕釋あり、(台密血脈譜、諸宗章疏錄)

〔考〕行嚴は永承頃の人なり

ギヨーシ　行之　ショーヂユン正順を見よ、

ギヨーシン　行心(……)(……)　新羅の歸化僧なり、行心持統天皇の朝皇子大津に從ひて兵を擧げ捕はる、詔に曰ふ新羅沙門行心與ニ皇子大津ー謀反朕不レ忍ニ加法ー徙ニ飛驒國伽藍ーと示寂の年時缺く、(日本書紀)

ギヨーシン　行心　ライゴー賴豪を見よ

ギヨーシン　行信　……一四一〇　〔法相宗〕奈良法隆寺の學僧なり、行信俗姓不詳、智鳳行基に師事し、法相宗を學び、道譽甚だ高く、聖武天皇に召され、宮中に法を說く、勅を拜して法隆寺に住す、天平十年七月律師となり、同十一年勅を拜して法隆寺を修營す、藤原不比等其監視をなし、寶殿、講堂等輪奐の美を極む、後大僧都に進み、天平勝寶二年示寂す、著作仁王護國經疏三卷、最勝經音義一卷ありしも、今傳はらず(元亨釋書、本朝高僧傳、七大寺年表)

〔考〕七大寺年表には唯律師拜任の事を錄し、一異說として天平二十年大僧都拜任のことを錄す、續日本紀天平勝寶六年の條に藥師寺僧行信を下野藥師寺に配流のことあり、別人とも覺えず、七大寺年表の示寂年時等疑なきにあらざるも、今姑く依用す、

ギヨーシン　行眞(……)　〔眞言宗〕伊豫神宮寺開山なり、行信出家して深山幽谷に禪坐安居し、尊勝陀羅尼を誦す、遊巡して伊豫に到り、神門山中にて苦修練行す、師遂に此地

に神宮寺を開く、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

ギヨーシン　行眞（一六五九）〔天台宗〕大和多武峯の學僧なり、行眞は藤原道長の第二子、俗名は顯長と云ふ、學內外に通し、左典廐に任す、十六歳潜かに家を出で、比叡山に登る、會々多武峯の增賀法師山にあり、師乃ち增賀に就て剃髮受戒し、台教を學ぶ、後比叡山に於て止觀を講す、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

ギヨーシン　行眞　カクホー覺法を見よ、

ギヨーシユ　行首　ニチゼン日禪を見よ、

ギヨーシユン　行舜（一八〇五／一八六八）〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、　行舜は其鄕貫師承詳かならず、文久三年別當に任じ、承元二年十一月五日寂す、壽六十四、(三井續灯記)

ギヨージユン　行順（一九二五／一九九三）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、　行順は美作守行康の子なり、出家して圓順圓顯二師に師事して天台教を學び、傳法大阿闍梨となり、後、法印に叙す、元弘三年十月十日寂す、壽六十九、著作行次抄若干卷あり、(三井續灯記)

ギヨージユン　行巡（一五一九）〔眞言宗〕攝津勝尾寺の僧なり、　行巡は其俗姓生國詳かならす、顯密の學に通し、勝尾寺第六の座主となる、貞觀年中淸和帝不豫の際、秘法を修して病を癒す、帝悅ひて田園を附し、寺產に充つ、寺は初め彌勒寺と云ふ後勅して勝尾寺と改む、師亦靑縣に菩提寺を開く、寂年、及ひ壽缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ギヨージヨ　行助（二〇二〇／二〇四六）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、行助は後光嚴院の子、房聖を禮して習學し、長助親王の後に居り、門主の號を得、至德三年九月十日寂す、壽二十七(三井續灯記)

ギヨーシヨー　行勝（一八二七／一九一四）〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、行勝ば攝津高木縣の人、其姓詳かならず、仁和寺華藏院の聖慧親王を拜して秘密敎を習ひ、淨喜院の心覺阿闍梨に從ひて傳法灌頂を受け、壯歳に及んで諸方を巡歷修練し、久しく大和の笙嵓窟に居して不動使者の法を修し、後高野山の寂靜院に住し、苦修益勤む、建長六年四月二十八日寂す、壽八十八、(本朝高僧傳)

ギヨーシヨー　行照（二五二三……）〔眞宗〕美濃岐阜願誓寺の住持なり、行照は越中新川郡新屋村明光寺に生る、幼にして快樂院の門人となり、專ら充實師に就きて宗乘を研究し、廿歳にして京師に遊ひ、雅龍に天台を承け、經歷に華嚴を學ひ、恢麟に性相を習へり、當時安藝石泉の學海內を風靡し、頗る稱名正因に傾くの虞あれとも、一人の之に抗する者なし、是に於て師獨り破斥の任に當り、終生力を此に費せり、天保十五年七月勸學職となり、弘化四年及ひ安政六年の安居に學林に代講し、文久二年八月廿七日寂す、宗主諡を與へて了達院といふ、著作四帖疏蛙井記三十卷、本典奉持記十五卷あり、(學苑談叢)

ギヨーシヨー　行昭（一八九一／一九六三）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、行昭俗姓は藤原氏、大政大臣道家の子なり、出家して園城寺良尊僧正に顯密の法を禀け、三井園城寺の長吏となり、法務を兼領す、數々法驗を顯して宮中の寵を承け、大僧正に任し牛車の宣を蒙むる、又三山の撿校たり、嘉元元年正月五日

寂す、壽七十三、(本朝高僧傳)

ギヨーシヨー　行性（一九三八）〔淨土宗〕某寺の僧なり、行性其氏族を詳にせず、始め禪宗の僧たりしが、後記主禪師良忠に從て淨土の宗義を學ぶ、道化高し、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

〔考〕行性は弘安頃の人なり

ギヨーシヨー　行聖（一八二八／一八九三）〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、行聖は其鄉貫師承詳かならず、貞永元年十月園城寺別當となり、天福元年七月二十二日寂す、壽六十六、(三井續灯記)

ギヨーシヨー　行乘（二四八七／二五五六）〔黃檗宗〕宇治萬福寺四十代なり、行乘字は觀輪、號は甘露道人、俗姓板垣氏、後自ら多々羅氏を稱す、家世〻伊達氏に仕ふ、文政九年正月仙臺に生る、幼にして出家し、萬壽寺周民に師事し、廿一歲諸國を歷遊し、眞忠の道風を聞いて師資の禮を執り、三十三歲良忠に隨待して攝津富田慶瑞寺に留り、後自敬菴に入り、近江正宗寺に住す、文久三年六月三十八歲良忠の法を嗣く、明治十七年十一月黃檗宗管長に任せられ、翌十八年大敎正に補せらる、在職十二年、明治二十九年九月一日寂す、壽七十

ギヨーセン　行仙（一八九八）〔淨土宗〕某寺の僧なり行仙は京師の人、大納言賴盛卿か孫なり、始め靜遍僧上に從うて學び諸宗に通達し、風儀淸高なり、後聖光上人に師事す、示寂の年月日缺く、(元亨釋書、鎭流祖傳、淨土惣系譜)

〔考〕行仙は曆仁頃の人なり

ギヨーセン　行仙（一九三八……）〔眞言宗〕上野山上寺の僧なり、行仙は其俗姓生國詳かならず、靜道法師に從ひて密敎を學び、觀理に通達す、上野山上寺に居りて念佛三昧を修す、弘安元年秋寂す、壽欠く、(本朝高傳僧)

ギヨーセン　行暹（一七六六）〔眞言宗〕京都東寺の學僧なり、行暹は龍象と號す、大敎院覺意僧都に從ひて兩部の灌頂を受け、東寺に寓す成龍院大僧正寬助東寺に灌頂を修す時、詔して二會に准し、師の年德高さを以て小灌頂を勤めしむ、當時の賞によりて權律師に任せらる師三日の後之を辭退す、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

〔考〕行暹は嘉承頃の人なり

ギヨーゼン　行禪（一六八四／一七四二）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、行禪は中納言兼隆の子、出家して密敎を學び、承元二年東寺の長者に任し、承曆三年權大僧都となる、永保二年十一月十九日寂す、壽五十九、(東寺長者補任)

ギヨーゼン　行善（一三八一）(……)入唐學問僧なり、行善は俗姓堅部氏、河邊法師といふ、初め高麗に航し、後唐に至り、養老二年歸朝し、道譽高し、同五年の詔に曰ふ、沙門行善負レ笈遊學既經二七代一備嘗二難行一解二三五術一方歸二本鄉一矜賞良深如有下修二行天下諸寺一恭敬供養上一同二僧綱之例一示寂の年時等缺く、(續日本記、靈異記、元亨釋書、本朝高僧傳)

ギヨーゼンボー　行善房　シンカイ眞海を見よ、

ギヨーソン　行尊（一七一七／一七九五）〔眞言宗〕近江園城寺の長吏なり、行尊は源基平の子なり、明尊僧正を拜して園城寺にて祝髮し、密敎を賴豪に學ひ、兩部の灌頂を覺圓に受く、十七歲に及ひて三井寺を出て名山靈區を跋涉し、大和の大峰に登

りて誦咒苦行す、和泉の眞木尾山に到り、名を匿して役事す、後、郁芳門院の病を禱る、遂に三井の平等院に住し、毎冬練行して大峰に掛錫す、永久元年天皇の病を癒やす、四年春三井長吏に補し、秋權僧正を授けらる、天永元年天王寺平等院の寺務を領し、保安四年天台座主に任す、長承三年勅して師を衆僧の上首となす、中納言藤原顯隆瘧を疾む、師之を禱りて平癒せしむ、顯隆近江の水田二十町を園城寺に寄す、師之を以て百座の仁王經を修し、永く恒式となす、天治二年大僧正に轉す、保安の初め寺火災に罹る、詔を得て之を再興す、保延元年二月五日寂す、壽七十九、一に八十九といふ、(本朝高僧傳)

ギヨーチ 行智 一四三八/二五〇一 〔眞言宗〕江戶淺草覺吽院の修驗者なり、行智は阿光房と稱す、江戶淺草の人、俗姓松沿氏なり、祖父行春、父行辯に就いて內外の學を受け、殊に悉曇學に達す、後、冷泉家の歌道の秘奥を傳へ持明院基時に就いて書道を傳ふ行辯の後を繼きて淺草福井町銀杏八幡別當覺吽院に住す、本山なる醍醐三寶院門跡より命せられて修驗宗當山派の惣學頭に補せられ、法印大僧都に任せらる、天保十二年三月十三日覺吽院に寂す、壽六十四、下谷北稻荷町黃雲山龍谷寺に葬り、墓表に梵學興隆沙門行智とあり、門下萩野梅塢等聞ゆ、著作蹈雲錄事二卷、木葉衣三卷、悉曇字記眞釋三卷、悉曇字記眞釋談議七卷、等あり、(深川照阿氏返信、近世佛家著作目錄稿本)

ギヨーチ 行地 シンア信阿を見よ、

ギヨーチユー 行忠 二四七七/二五五〇 〔眞宗〕越後水原無爲信寺の住持なり、 行忠は香凉院と號す、俗姓は武田氏なり、祖父は恒崇父は德榮、母は山際氏の女にして、師は其五男なり、文化十四年無爲信寺に生れ甫めて十一歲兄廣榮と共に百法問答鈔を講して科を分つ、聽者驚嘆す、天保六年香樹院德龍に從ひて京都高倉學寮に入る 時々京都の諸山に遊ひて內外の學を受け、最も性相の蘊を究む、嘉永元年高倉寮司となり、唯識三類境、般若心經、解深密經を講し、明治二年擬講となり、十年三等學師に進みて起信論義記を講し尋て二等學師に轉し、十六年嗣講となり易行品往生禮讚を講し、二十二年に至り講師に昇り、一等學師となり、少贊敎に任せらる、尋て病に罹り、法主使を遣して慰問す、翌二十三年五月二十九日京都に寂す、壽七十四、澁谷に荼毘し、後先塋の域に葬むる、本山師の肖影を同寺に賜ふ、蓋異典なり、師終身娶らす、詩歌を好み、書畫を玩ひ、最も書生を愛したり、門下に村上專精あり(碑文、高倉學寮講者列傳稿本)

ギヨーチヨー 行朝 (……) 〔眞言宗〕山城醍醐山遍智院の主なり、 行朝は林覺の入室弟子にして、右少辨定通の子、中納言保實の孫、通俊の猶子なり、定海大僧正の燈を續きて一方の匠となる、付法三人あり、覺定、行鑁、寬幸といふ、(續傳燈廣錄)

ギヨーテー 行貞 ……/二五四三 〔眞宗〕越前某寺の住持なり、行貞は一名雜雲といひ、越前の人なり、性相を臼井の寶雲の門に受け、造詣するところあり、嘗て西山校の敎授たり、明治十六年司敎となり、幾くもなくして寂す、著作六合釋私記二卷、入正論講讀一卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ギョーチー 行寧 二三二六—二四〇九 〔曹洞宗〕仙臺洞雲寺の中興なり、行寧字は牲莽號は老梅、俗姓は德久氏、肥前の人なり、伊達吉村の東山にあるや、一日雅會を八幡寺に開く、時に雲水僧あり、來り宿す、公其能を試むるに文を善くし書を善くす、公甚た之を嘉みす、留宿數月にして去る、即ち肥前の僧牲莽なり、後公佐賀侯を介して之を聘し、輪王寺に住せしむ、師吉村に請ひて七北田邑の洞雲寺を再興し、中興第一祖となる、師學博く書に巧なり、寛延二年十月八日洞雲寺に寂す、壽八十四(仙臺史傳)

ギョーネン 行然 ……一九四〇 〔戒律宗〕加賀無量壽福寺の開山なり、行然號は應準、加賀の人、少にして村黌に就きて儒書を學ひ、十七歳郡の覺然に從ひて下髮出家す、歳二十の時大病に罹り自ら誓願して之を癒し、奈良の不空院に往き、圓晴を禮して沙彌戒をうけ、進みて具足戒を納る、雲林院に圓晴に從ふの日八幡の善法院に往き、諸善友と共に戒律を持し木幡寺の道悟に謁し密教を傳へ聖一國師禪を普門寺に唱ふるとき、師往きて掛錫し、省所あり、文永の初年郷里に歸へり、天道山無量壽福寺を剏し、戒定並に行ひ、學徒雲集す、弘安三年五月二十八日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ギョーネン 行然 ……二一九一 〔淨土宗〕山城平等院の僧なり、行然は敎譽と號す、中院通秀の子にして、城譽榮久に就て剃髮受業し、平等院に住す、享祿四年四月十八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギョーハン 行範 (……—……) 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、行範は比叡山の學僧にして、久しく山徒と經法を講習し、俄かに無常を観し、天王寺に詣て、七日斷食して一心に念佛し、海に浮び、將に水死せんとす、隣里の貴賤舟を浮べ音樂を奏し以て葬に供す、師乃ち衣裏に砂を包み、合掌して沈む、其年時及壽欠く、(本朝高僧傳)

ギョーヒョー 行表 一三八二—一四五七 〔三論宗〕奈良大安寺の學僧なり、行表は大和葛上郡高宮郷戸主大初位上檜前調使案麿(ヒノクマ)の男なり、聖武天皇の天平十三年十二月十四日の勅により、宮中に於て七百七十三人の例に得度し沙彌となる、師主は大安寺道璿なり、十五年三月二十九日に興福寺北倉院に於て戒を受く、近江國滋賀の崇福寺寺主に任せられて同寺に住し、一丈餘の千手觀音像を造りて安置す、後近江の國師に任せらる、道璿より戒律幷に禪を傳ふ、晩年大和の比蘇寺に退休して禪を修す、延暦十六年大安寺西唐院に寂す、壽七十六(七大寺年表、天台霞標、本朝高僧傳)

〔考〕 本朝高僧傳に行表の壽一百四十歳とあるは誤なり、延暦十三年の房主帳に傳灯法師位行表年七十三臘五十二云云とありこれを以て推算すれば延暦十六年は年七十六なり、然るに高僧傳は房主帳の文を誤解して、天平十五年の時の年臘となし算出したるものと見ゆ、今之を正す、

ギョーヘン 行遍 一八四一—一九二四 〔眞言宗〕京師東寺の僧なり、行遍は俗姓藤原氏、參河の刺史任寮の子なり、仁和寺の道法親王を押して兩部の秘密灌頂を稟け、久しく左右に侍し、諸秘軌を受け、御室の菩提院に住し、練行苦修年あり、承久二年春少僧都に任し、嘉禎二年東寺第四の長者に加す、暦仁二年權僧正に轉し、仁治二年大僧正に昇り、東寺の長者に任し、

法務を管す、文永元年十二月十五日寂す、壽八十四、(著作參語集、五卷、本朝高僧傳、參語集奥書)

ギヨーユー 行勇 一八二三一九〇一 〔臨濟宗〕鎌倉淨妙寺の開山なり、行勇字は退耕、俗姓不詳、(一説に藤原氏、)鎌倉相摸酒勾の人出家して眞言宗に歸し、鎌倉八幡宮の供僧となり、永福大慈の二院を管す、二位尼政子(法號眞如)深く歸依し、戒を受く、明庵榮西の鎌倉に下りて壽福寺を開くに際し、轉じて禪宗となり、師資の禮を執る、問うて曰ふ、祖意と敎意と、同か、別か、明菴曰ふ、同別の知見を放下し來れ、汝が爲に道はむ、と、行勇益信入し、遂に印可を受く、二位尼平政子高野山に金剛三昧院を開き、明菴を請し落慶供養を執行す、明菴寂後寬喜三年に師高野山に登り、同院第二世となる、道範阿闍梨より眞言を受けて、蘊奥を究む、建仁寺に至りて留住し暫時にして再び金剛三昧院に歸へり、院に台密禪三宗を置く、これ建仁の寺制に倣ふなり、延應元年に壽福寺の席を空し、同三月請はれて山を下り、同寺に住持となる、北條泰時淨妙東勝の二寺を建立し、請して開山とす、仁治二年七月五日東勝寺に寂す、壽七十九、門下大歇了心あり、(元亨釋書本朝高僧傳、高野春秋、鶴岡供僧次第)

〔考〕本朝高僧傳に淨妙寺開山位牌に永仁二年十月二十日に寂す壽八十とあれども誤りなりとて、高野山名德傳に依りて訂せり、今其說に從ふ、

ギヨーユー 行祐 (……) 〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、行祐號を觀照と云ふ鎭西の人圓照に從ひて受具し、戒壇院及ひ善法院に住す、後高野金剛三昧院に往きて密敎を習學し、本𤗼寺に住して律密二敎を開說す、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

ギヨーヨ 行譽 ガクシン學信を見よ、

ギヨーヨ 行譽 クワクドー廓同を見よ、

ギヨーヨ 行譽 ゼンサク善作を見よ、

ギヨーヨ 行譽 チユーザン忠殘を見よ、

ギヨーヨー 行耀 (……) 〔眞言宗〕山城國醍醐山中院の僧なり、行耀は苦修練行して理趣に透徹し、小理趣坊と號す、理性院の法脉を嗣ぐ、付法隆源の一人あり、(續傳燈廣錄)

ギヨーイ 堯宸 ニチヲユン日順を見よ、

ギヨーイ 堯意 ニチゴ日悟を見よ、

ギヨーウン 堯運 ゲンヨ玄譽を見よ、

ギヨーエ 堯慧 ゼンイ善偉を見よ、

ギヨーエ 堯慧 二一八七二二六九 〔眞宗〕伊勢專修寺の第十二代なり、堯慧、俗姓は藤原氏、從一位飛鳥井雅綱の第三子にして、將軍足利義晴の養子となる、天文六年五月專修寺を主とる、正親町天皇女房の奉書を賜ひて御門跡となる、八年五月住職の綸旨を賜ひ、十年大僧正に任す、是年一身田の殿堂を營構し、十六年九月之を慶す、慶長十四年正月廿一日寂す、壽八十三、光德院と號す、(本願寺通紀)▲増補見よ

ギヨーエン 堯圓 二二〇一二三七六 〔眞宗〕伊勢專修寺の十六代なり、堯圓、俗姓は藤原氏、華山院左大臣定好の子、母は鷹司關白信尙の女なり、近衞關白尙嗣の猶子となり、德川家康の命に依りて專修寺に入る、明曆二年十月任職の綸旨を賜ひ、

寛文五年七月將軍嗣書を下さる、延寶五年大僧正に任す、某年堯秀建つるところの大殿及び樓門諸堂を慶讃す、寶永七年寺務を円猷に委ね、享保元年七月廿七日寂す、壽七十六、（本願寺通紀）

ギヨーエン　堯圓　二二三〇―二二九六　〔眞言宗〕山城東寺百八十九代の長者法務なり、堯圓初め一雅といひ、大納言大僧正阿野尙書實顯の兄、今出河右大臣晴季の猶子なり、幼にして堯雅法務僧正の室に入りて出家受學し、後傳法職位を同師に受けて松橋二十世の席に居る、寛永三年十二月宣して東寺の長者法務に補し、大僧正に任す、寛永十三年七月二十五日寂す、壽六十七、（續傳燈廣錄）

ギヨーオン　堯溫　リヨーヨ良譽を見よ、

ギヨーガ　堯雅　二一七一―二二九二　〔眞言宗〕山城東寺百八十七代の長者法務なり、堯雅は花光院大僧正と云ひ、世尊寺尙書行季の子なり、俊聰の法を嗣き、詔して東寺百八十七代の長者法務大僧正に補す、天正十一年三月二十日官符を賜ひ、東寺拜堂す、二十一日大祖七百年忌を擧行し、其導師たり、文祿元年十月八日寂す、壽八十二、（續傳燈廣錄）

ギヨーカイ　堯戒　ジヨーセン定泉を見よ、

ギヨーカン　堯鑑　シユンパ俊把を見よ、

ギヨーキヨー　堯經　シヨードン性曇を見よ、

ギヨーサン　堯山　ニチキ日輝を見よ、

ギヨージユン　堯順　ニチオン日遠を見よ、

ギヨーケン　堯賢　二二四一―二三二九　〔眞宗〕山城佛光寺の第十五代なり、堯賢字は經光といひ、關白二條公の猶子となり、妙法院教學親王を戒師となし、權僧正に進む、永祿十二年七月二十四日寂す、壽八十九、連成院といふ、一に曰く、師永祿十年八月廿四日寂す、壽六十四と、（本願寺通紀）

ギヨーシン　堯眞　二二〇九―二二七九　〔眞宗〕伊勢專修寺の第十三代なり、堯眞は堯慧の子、母は伊勢津乙部兵庫助源藤政の女なり、近衞關白時嗣の養子となり、天正十三年七月住職の綸旨を賜ふ、關白秀吉亦公書を下す、十七年八月越前に遊び、慶長十四年七月秀忠重ねて就職の公書を下す、元和五年九月二十日寂す、壽七十一、超光院と號し、官權僧正に至る、（本願寺通紀）

ギヨーシユ　堯守　二一二五―二一七二　〔眞宗〕山城佛光寺の第十四代なり、堯守字は經譽といふ、初め長兄經豪十四世の寺務たりしが、文明十三年父を喪ふ、喪未た終らすして從衆若干と共に本願寺派に歸屬す、是に於て餘衆師を立てゝ主となし遺跡を繼かしむ、權少僧都（或はいふ正僧正）に任し、永正九年九月十四日寂す、壽五十八、威德院と號す、（本願寺通紀）

ギヨーシユー　堯秀　二二四二―二三二六　〔眞宗〕伊勢專修寺の第十四代なり、堯秀は堯眞の子にして、母は美濃犬山城主遠江守信淸（織田信長の從子）の女なり、關白近衞信基の猶子となり、寛永十五年十二月嗣法の綸旨を賜ひ、官大僧正となる、寛文六年十二月寂す、壽八十五、菲雲院と號す、（本願寺通紀）

ギヨージヨ　堯恕　二三〇〇―二三五五　〔天台宗〕山城妙法院第卅四代なり、堯恕字は體素、號は逸堂別に獅子吼院と云ふ、後水尾天皇第八皇子、濕宮宗敏なり母は贈左大臣基音の女なり、寛永十七年十月十六日を以て生る年甫めて八歳にして妙法院に入り、堯然に師事し、十一歳落髮染衣し十三歳比叡山に登

り、根本中堂藥師佛を拜し、東塔竹林院に寓し、四度の密軌を修練す、爾來山に住すること二十餘年なり、諸宗匠に咨詢し、教觀を研究し、苦學怠りなし、萬治三年八月清涼殿の法華八講會に擢でられて第一座となる、寬文三年日光山に登り、尊敬に隨ひて五部の灌頂を受け、一身阿闍梨となる、此歲天台座主に任し、詔により護持僧となる、時に二十四歲なり、師平常顯密の行學を勵み夜を以て晝につぎ、十不二門指要鈔等を講じ、學徒を鍛練す、嘗て大藏經を置かんと欲し、地を佛殿の東北に相し、基を平げくるに方り瓦礫の中に慈氏の金像を感じ、思へらく予の置く大藏經は傳へて龍華會に到ると、仍て靈像を藏中に安置し、龍華藏と稱す、元祿四年別に一草庵を建て、名けて鐵龍庵と云ひ、閑栖禪誦し、花木異草を栽培し、逍遙自適す、八年四月十六日寂す、壽五十六、臘四十六、法住寺に葬る遺偈あり、曰く、蹈破一坤乾、呵々振袂皈、此路無二岐路、夏日白雪飛、と、著作五部大乘經捷徑錄、僧傳排韻、智者大師別傳註、逸堂集二卷等あり(續日本高僧傳、諸門跡譜、續門跡譜、本朝高僧傳、本朝皇運紹運錄書纜)

ギヨーシヨー　堯品　ゲンユー玄宥を見よ、

ギヨーシヨー　堯性　ゲンユー玄宥を見よ、

ギヨーチヨー　堯朝　二二七五 二三〇六　〔眞宗〕伊勢專修寺の十五代なり、　堯朝は堯秀の子、母は松坂城主古田兵部少輔の女なり、近衞關白信尋の猶子となり、權僧正に任す、寺務十年ならずして正保三年八月廿二日寂す、壽三十二、敎授院と號す、(本願寺通紀)

ギヨーチヨー　堯超　二三七〇 二四三〇　〔眞宗〕山城佛光寺二十一代なり、　堯超字は寬如、童名竹丸といふ、興正寺寂水の第四子なり、享保八年十一月十一日寺に入り三條關白の猶子となり名を竹君と更む十二年正月廿一日得度し法名を了澄と名く正僧正に任す明和七年六月廿九日寂す壽五十八(本願寺通紀佛光寺歷代表)

ギヨーニン　堯仁　二一〇九 二一六三　〔眞宗〕山城佛光寺の第十三代なり、　堯仁字光敎といひ、權僧正に任す、文龜三年三年十二日(或は五月六日に作る)寂す、壽七十四、敬興院と稱す、嘗て正信偈聞書二卷を著す、一說にこれ蓮如上人の講を聞きて書きしものなりと、(本願寺通紀、佛光寺歷代表)

ギヨーネン　堯然　二二六二 二三二一　〔天台宗〕山城妙法院門跡なり、堯然は俗名常嘉と云ひ、妙法院宮と稱す、後陽成天皇第六の皇子なり、母は勾當內侍藤原基子、持明院中納言基孝の女なり、慶長七年七月誕生す、同十年八月廿二日親王宣下あり、後出家し、常胤法親王の資となり、二品に叙せらる、寬永五年四月關東に參向し、東照宮十三回忌の導師となる、同九年四月再び十七回忌の導師となる、十年八月廿二日天台座主に補せられ、同年辭す、十三年四月關東に參向し、東照宮廿一回忌の導師となる、十七年七月十一日再び天台座主に補せらる、同年辭し、正保二年十二月廿四日三たび座主に補せらる、寬文元年閏八月廿二日(一說廿三日)寂す、壽六十法住寺に葬る慈恩院宮と稱す、師書法を狩野探幽に問ひ、善く人物花鳥を書き、且つ書道歌道に達し、石州流茶道に通したり、(續諸門跡譜、諸門跡譜、門跡傳、本朝皇胤紹運錄書纜、扶桑書人傳、皇朝名畫拾彙、茶人系統全書、)

〔考〕本文は主として續諸門跡譜に依る、門跡傳、近代御由緒等には、寛永十年に座主初補のとなく、寛永十七年、正保二年、並に承應二年六月十四日重補とあり、

ギョーベン 堯辨 ニチトー日透を見よ、

ギョーヨ 堯譽 ゲンロ還魯を見よ、

ギョーヨ 堯譽 リユーア隆阿を見よ、

ギョーヨー 堯要 ニチクワン日寛を見よ、

ギョーヨー 堯庸 二三〇一 二三八一 〔眞宗〕山城佛光寺の第二十代なり、堯庸字は隨如といふ、興正寺准秀の第六子にして、高松の城主松平讃岐守源英養ひて子となす、隨庸の席を繼きて正僧正に任す、彌陀堂を再興し、東山の祖墳を築き、嘗て勸章四十八章を作り、分ちて二帖となし、之を門下に授く、俗に十七日御書といふ、享保六年七月十七日寂す、壽八十一、（本願寺通紀）

ギョーシン 凝心 マンセツ萬說を見よ、

ギョーネン 凝念 二一九三 ……〔淨土宗〕京都一心院第三代なり、凝念は演譽と號す、稱念に師事して法を嗣ぎ、一心院に主となり、後伊勢桑名光德寺第二世となる、天文二年五月二十四日一心院に寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ギョーネン 凝然 一九〇〇 一九八一 〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、凝然は示觀と號す、伊豫高橋郡の人、仁治元年三月藤原氏に生る、十五歳にして戒壇院に投して圓照の下に、剃髮受業し、二十歳にして三聚戒を得たり、證玄淨因の講席に遊ひて律鈔を問ひ、密灌を聖守に受け、華嚴を宗性に學ふ、後丹州京都に歷遊し、佛心宗に參し、傍ら孔老百家の道に通す、後跡へりて圓照に侍すること凡そ十有餘年間なり、師諸宗を統ふれとも華嚴を宗となし、弘安の初め大佛殿に開講す、圓照の後を承けて戒壇院に住し、經を講し、戒を說く、正應四年大經を大和の金剛山寺に講し、四衆雲集す、正和二年招提寺に移り、五年の後戒壇院に回へる、師寺を管すること十八ヶ所、著述に力を用ゐて卷帙棟に充つ、後宇多天皇奈良に巡幸して師に菩薩戒を受く、其後宮に招きて五敎章を講せしめ、國師號を賜ふ、元亨元年九月五日寂す、鷲尾山に葬むる、壽八十二、臘六十二、著作（華嚴部）華嚴探玄記洞幽鈔百二十卷、五敎章通路記五十二卷、華嚴賢聖章六十卷、孔目章發悟記二十三卷、太子法華疏惠光記九十卷、太子維摩疏菴羅記四十卷、太子勝鬘疏詳玄記十八卷、十重唯識帝鑑記、新篇華嚴祖師傳、各七卷、三聖圓融觀義顯記四卷、普賢觀行雙翼記、七科章義瓊記、各三卷、十重唯識圓鑑記、華嚴法界義鏡、華嚴法界傳通錄、華嚴章疏目錄、各二卷、

凝然大德

五教要略、孔目章章源第一卷、遊心法界記科文、還源觀科文十重唯識瓊鑑章、心要義鈔、華嚴法界法門、華嚴法界義、華嚴宗要義、華嚴遊心頌、華嚴經品釋、華嚴經會釋、三生成佛義、會宗章、轉法輪章、起信論流雲章、各一卷、（法相部）法相宗祖師傳十八卷、二種生死義三十卷、唯識玄應章十四卷、大乘百法明門纂解十卷、大般若理趣分疏五卷、二十部要決、毘曇成實同異章、各三卷、法相五位修行圖一卷、（律宗部）梵網上卷古迹修法章十四卷、梵網香象疏日珠鈔八十卷、律宗瓊鑑章六十卷、南山敎義章三十卷、四分戒本定賓疏贊宗記二十卷、本部要決、南山佛性義各三卷、律宗綱要、南山法林章、南山三昧章、南山淨土義、各二卷、梵網經說儀章、菩薩戒二受章、菩薩戒宗要序記、五律宗、木叉義瓊章、通受比丘懺悔兩寺不同記、持犯要記略述、戒律要義、羯磨略策、敎誡義略策、南山卉木章、南山立義章、南山身上章、南山十二部敎章、南梵劫波章、南山四流章、南山二障章、南山三身章、南山敎觀論義勘文、資持一上二毫端章、濟緣記一上章、各一卷、梵網說戒章、南山法樹章、各若干卷、（淨敎部）淨土敎海章四十卷、淨土觀音記二十卷、淨土敎義章十六卷、淨土義山記十二卷、阿彌陀經疏拾要記、讃淨土觀義、各七卷、禮懺策行記四卷、般若讃進業記二卷、雙觀經宗要科文、淨土源流章、淨土得道章、安養淨業章、遊心安樂道科文、三觀要義、玄忠指歸、臨終要記、各一卷、（密敎部）任心論第四卷義批九卷、住心論第五卷義批七卷、住心論第六卷義批十三卷、住心論第九卷義批七卷、住心論第六卷新玄鈔二卷、（雜述部）佛法傳通章十八卷、世俗雜財論十卷、諸宗傳通錄六卷、春秋歷五卷、三國佛法傳通緣起、戒壇開山行狀、年代記、各三卷、音曲秘要鈔二卷、八宗綱要、內典塵露章、內典十宗秀句、善財童子講式、法華講式、長谷觀音管絃講式、弘誓殿講式、五部大乘經講式、手跡講式、六道講式、大賢法師行狀、興正菩薩略行狀、中行狀、行圓上人行狀、圓照上人行狀、大聖竹林寺記、雲雨鈔、帝王御系圖、遷都略記、各一卷、音律通致鈔若干卷、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

キョクガ　旭雅　二四八八—二五五一　〔眞言宗〕山城泉涌寺第五十二代なり、　旭雅は阿波三好郡勢力村の人、內田熊三郎の季子、姓は佐伯氏と稱す三歲父を喪ひ、十三歲母兄に辭し、郡の加茂野宮村瀧寺靈雅上人に就て剃髮し、加行受灌の後、京都に上り、諸宗の學匠を歷問して內外の兩學を受け、殊に倶舍、唯識、悉曇、義軌の奧に達し、兼ねて天台に通す、後諸大刹の請に應して講席を開くと數百所の多に及ぶ三十一歲成佛即身義を講するに方り、會五岳山主嚴猷病あり寺務を擧げて委附せらる、翌年大僧都に任せられ、尋で權

旭雅上人

正に昇る、會關東に櫻田の變ありて、國内大に騷擾す師國に皈り五重塔の再建に從事す、明治元年官佛教を廢せんとの議あり、師良基、增應、增隆、雲照、戒玉等と共に朝野の間に誘說し、遂に教部省の設置を見る、大講義に補せらる、九年教部省の命令により澄剛の後を嗣ぎて泉涌寺に主となる、此歲十一月に泉涌寺々務改正に囑托せられ後同寺轉任の命に接し、別院雲龍院へ保護料を下賜せらる、尋で仁和寺々務改正を囑託せられ、十三年以降宮内省より特別保護年金六百圓を泉涌寺に增額せられ、別に二千五百圓を下賜せらる、同年中教正に補せられ、翌年權大教正に進む、十三年十月十四日泉涌寺に火災ありて灰燼に皈す、師急ぎて東京に上り内務宮内兩省へ進退伺書を呈し、兼て再建を懇請し、命ありて褫職するを得、猶ほ御里、御殿を舊趾に移すを許さる、明治二十四年一月三十一日寂す、壽六十四、歷世の墳に葬る、著作冠導倶舍論三十卷、冠導光寶二記三十卷、冠導因明三十三過本作法纂解三卷、冠導八宗綱要一卷、冠導唯識論述記三十卷、冠導唯識三類境選要一卷　冠導三國佛法傳通緣起三卷、倶舍論雜記六卷、唯識論各所雜記三卷等あり、(行實)

キヨクザン　旭殘　リヨーボク良卜を見よ、

キヨクニヨ　旭如　レンボー蓮防を見よ、

キヨクベン　旭辯　二三九〇 二四四九　〔眞宗〕伊勢安濃津彰見寺の住持なり、旭辯字は昭堂號は慈韓院といふ眞宗高田派なる安濃津の彰見寺に住し宗乘に精通し、本山の講師に擧げらる、寬政元年閏六月九日寂す、壽六十、(眞岡湛海氏返信)

キヨクヨ　旭譽　ブガク豐嶽を見よ、

キヨクエン　棘園　シユーシヤク宗績を見よ、

ギヨクエー　玉英　シヨーチン照珍を見よ、

ギヨクエン　玉淵　ゲンギヨク玄顗を見よ

ギヨクオー　玉翁　二一二〇 二一八一　〔淨土宗〕京都本覺寺の開山なり、玉翁俗姓は上杉氏、越後の人、幼にして一禪寺に入り、曹洞の宗要を問ふ、二十歲を過ぎて去りて經教を習ひ、關東の談林に遊ひて般舟三昧の法を受く、文明の末京都に上りて市民を遊化す、應仁の兵燹に罹りて京都の寺多く灰燼に化す、師其災厄を嘆き、興營を謀る、瓦礫の間に寓して念佛門を談す、四衆歸向して素願大に成り、所謂洛東の眞如堂、六波羅密寺、嵯峨の釋迦堂、近江石山の觀音堂、皆師の功によりて再興す、後京都の五條に本覺寺を開く、後柏原天皇御筆の阿彌陀經、幷に圓譽の號を賜ふ、大永元年正月十八日寂す、壽六十二、弟子勢運、良印、守慶の三人あり、(本朝高僧傳)

ギヨクオー　玉翁　シヨーコー正光を見よ、

ギヨクオー　玉翁　ユーリン融林を見よ、

ギヨクカン　玉幹　エジツ惠實を見よ、

ギヨクカン　玉磵　クンシヨク元寔を見よ、

ギヨクケー　玉溪　エシユン慧諄を見よ。

ギヨクコ　玉虛　コーオー孝雄を見よ、

ギヨクコー　玉岡　(二三三三)　〔黃檗宗〕肥前長崎崇福寺の僧なり、玉岡は明の人なり、延寶二年西來して長崎崇福寺に留る、寂年詳ならず、(禪宗史料)

ギヨクコー　玉岡　キヨーリン慶琳を見よ、

ギヨクコー　玉岡　ゾーチン藏珍を見よ、

ギヨクコー 玉岡 ニヨコン如金を見よ、

ギヨクサン 玉山 トクセン德璇を見よ、

ギヨクシツ 玉室 シユーハク宗伯を見よ、

ギヨクシツ 玉室 ユーチン融椿を見よ、

ギヨクセン 玉泉……二二四八 〔淨土宗〕常陸常福寺第八代なり、玉泉は源蓮社容譽と稱し、其鄉貫詳ならず、學宗に師事して其法を繼ぎ、常福寺に主となる、後州に數寺を創立す天正十六年二月十七日寂す、法嗣に了感朱梅等あり、(淨土總系譜)

ギヨクソー 玉叟 リヨーチン良珍を見よ、

ギヨクデン 玉田 エーシユ榮珠を見よ、

ギヨクデン 玉田 ソンリン存麟を見よ、

ギヨクドーミヨーイン 玉洞妙院 ニチシユ日秀を見よ、

ギヨクネン 玉念……二二四六 〔淨土宗〕近江正福寺の開山なり、玉念は覺蓮社靈譽と號す、上野新田の人、其俗姓詳かならず、法を感譽に嗣ぎ、近江八幡正福寺、及び攝津住吉哀愍寺を建てゝ開山となる、天正十四年正月十一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ギヨクホ 玉浦 シユーミン宗珉を見よ、

ギヨクホー 玉峰 チタイ智琢を見よ、

ギヨクヨ 玉譽 クワイリユー恢龍を見よ、

ギヨクリン 玉麟 シヨーテン詔天を見よ、

ギヨリクン 玉林 シユーバン宗播を見よ、

クの部

グイ 弘意……二〇六三 〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、弘意は俊憲の灌頂を受けて松橋の三十二祖となる、應永十年七月六日寂す、付法一人顯祐と稱す、(續傳燈廣錄)

グヱ 弘會……一九七八 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、弘會一に德慧と云ひ、字は東里、宋の明州の人、西禪の月潭圓に師事して記莂を受く、延慶元年東航北條貞時に迎へられ禪興寺に住す、法化を布く、文保二年八月二十八日寂す、遺偈あり、無始無終、不生不滅、虛空消殞、大海枯竭、禪興寺中に塔あり、傳宗塔と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

グガ 弘雅 ユーゼン唯善を見よ、

ググワン 弘願……二三五三 〔淨土宗〕山城地藏院の中興なり、弘願は聽譽と號す、法を路白に嗣ぎ、洛西岡地藏院の中興となり、八瀨求願寺を開く、元祿六年五月二十三日寂す、世壽詳かならず、(淨土總系譜)

ググワン 弘願 カクケー覺瑩を見よ、

グキ 弘基 二四一二 二四八二 〔新義眞言宗〕山城智積院第三十代なり、弘基字は惠岳と云ふ、俗姓は菊人氏、越後古志郡濁澤の人なり、十一歲にして圓融寺寬阿闍梨の室に投じて剃髮し、十八歲智積院に登り、弘道和尙に師事す、後瓶原及海住山に抵りて勤學し、寬政十年集議席に進み、文化四年灌頂を行ふ、備前備中讚岐等に遊化し講席を張り、密壇を築く、十年觀豪寂し、師時に讚岐秋原にありしが、召されて十二年春東都に

下り、智積院主職に補し、秋權僧正に任じ、明年正に轉ず師主職にある八年、文政五年十一月六日寂す、壽七十一、師生前紫衣を賜うてより顯官受法三百餘人、印可を稟くるもの七百餘人、諸請益する者十餘名あり、(新義眞言宗史料)

グキ　弘喜　二一二三 ：　〔眞言宗〕山城醍醐山光臺院の大僧都法印なり、　弘喜は弘鑁に從ひ應永八年十一月二十七日光明心院にて職位灌頂を受け、光臺院に住し、三十年瀉瓶の記を得、寛正三年六月九日寂す、付法一人、弘典といふあり、(續傳燈廣錄)

グギ　弘義　(一九一七)　〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、弘義は鎌倉城介平義景の子なり、夙に出家し、正嘉元年五月七日三寶に入りて憲深僧正に傳法灌頂を受く、(續傳燈廣錄)

グケン　弘顯　一九七九／二〇四二　〔眞言宗〕山城醍醐山城照阿院の大僧都なり、　弘顯初め報恩院に入りて金剛乘宗を學び、後、房玄僧都に謁して具支灌頂を受け、親恵の堂奥に登りて瀉瓶を得、永德二年九月二日寂す、壽六十四、付法五人あり、弘濟、光助、弘後、顯祐、弘譽といふ、(續傳燈廣錄)

グゲン　弘現　二四七八／二五三八　〔新義眞言宗〕山城智積院第四十代なり、　弘現字は義觀、俗姓は藤原氏、佐渡羽茂郡大杉村の人なり、歲甫めて九歲、邑の清行寺皈現闍梨の室に入りて剃髮し、天保三年智積院に登り、多年研學業成りて安政四年佐渡蓮華峰寺に住し、明治二年六月選ばれて本山に主となる、翌三年閏十月大僧都に任じ、五年四月教部省の設置せらるゝや權少教正に補せらる、七年五月主職を法弟義範に讓り、養命房に退隱し、請に應して唯識論述記を講ず、後義範の寂するや、再び起て本山の教務を督す、明治十一年十二月一日寂す、壽六十一、臘四十八、師生前諸宗の囑により經疏を講する二千餘回、密灌傳受法會を修する數十回に及ぶと云ふ、著作悉曇字母表便覽一卷、十卷章私記若干書あり、(新義眞言宗史料)

グサイ　弘濟　一九八七／二〇五三　〔眞言宗〕山城醍醐山光臺院大僧都なり、　弘濟は大貳僧都といふ、延久四年四月十一日弘顯に從ひて傳法職位を受く、時に年三十四歲なり、應安四年六月十七日法を傳へ、至德年間丹波の與佐郡に禪定寺を建てゝ開山となる、元年九月九日禪勝所持の血脈抄三卷を寫し、添削して世に行ふ、明德四年二月十日寂す、壽六十七、付法五人、弘鑁、堅濟、快玄、弘豪、弘秀等なり、皆一時に聞ゆ(續傳燈廣錄)

グシン　弘眞　モンクワン文觀を見よ、

グシユン　弘舜　(一九八一)　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、弘舜俗姓生國詳かならず、南北二京の學僧を歷問して瑜珈唯識の教理に達し、元應元月冬敕により日食の御祈禱をなし靈驗を以て賞せらる、元亨初年東寺の長者に任ず、後寺務を領し、僧正に轉し、某年寂す、壽欠く、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

グセン　弘宣　二一一三／二一七三　〔眞言宗〕山城醍醐山光臺院の大僧都法印なり、　弘宣は文明六年二月二十八日傳法職位灌頂を受く、時に二十一歲なり、十五年十一月十九日瀉瓶印を稟け、牒記を得光臺寺に住す、永正十年九月十七日寂す、壽六十一、(續傳燈廣錄)

グソン　弘尊（……）〔眞言宗〕山城醍醐山遍智院の僧なり、弘尊字は宰相法印といふ、大峰山笙窟に入りて求聞持法を修すること四十二度に及ふ、（續傳燈廣錄）

グテン　弘典　二〇六七／二一四六　〔眞言宗〕山城醍醐山密敎院の大僧都法印なり、弘典は灌頂職位を受け、文明十八年十一月二十九日寂す、壽八十、付法一人あり弘宣といふ、（續傳燈廣錄）

グドー　弘道（……）〔新義眞言宗〕京師盤滿寺の學僧なり、弘道は鄕貫詳ならす、京師盤滿寺尾張八事山に歷住し、學解を以て聞ゆ、然るに其說稍異るを以て、智積院の學僧多くは用ゐす門下に弘基能化を出たす、寂年並に壽缺く、著作傳燈記二十卷、理趣經義述、曼荼羅宗敎主義各一卷あり、（新義眞言宗史料）

グバン　弘鑁　二〇二二／二〇八六　〔眞言宗〕山城醍醐山光明心院の僧なり、弘鑁は按察法印といふ、至德二年十一月十三日弘濟の室に入りて傳法職位を受く、時に年二十四なり、筆藝音調共に長け、內外の書典を涉獵し、明德三年十二月二十九日瀉瓶の記を受く、應永三十三年五月二日寂す、壽六十五、付法三人あり弘喜俊海照海と云ふ（續傳燈廣錄）

グヤ　弘也　コーショー光勝を見よ、

グヨ　弘譽（二二五六）〔淨土宗〕攝津最上寺の僧なり、弘譽は慶長の頃攝津國多田の最上寺に住し、法化盛なり、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

グヨー　弘曜（一四四四）〔法相宗〕奈良藥師寺の僧なり、弘曜俗姓不詳、藥師寺に住す、寶龜元年に律師となり、同五年二月廿四日に少僧都となり、十年十月十六日に大僧都となる、延曆三年四月上表して僧綱を辭し、勅あり許し机杖を賜ふ示寂の年時缺く、壽八十六、（七大寺表、元亨釋書、本朝高僧傳）

クエン　九淵　リユーシン龍深を見よ、

クオー　九翁　ホンゲン本元を見よ、

クグ　九華　ズイシヨ瑞璵を見よ、

クコー　九江　ジエン慈淵を見よ、

クホー　九峰　イジヨー以成を見よ、

クホー　九峰　シンケン信虔を見よ、

クホー　九峰　シヨーソー韶奏を見よ、

クホー　九峰　ニヨサン如珊を見よ、

クヨ　九譽　ジユテツ壽徹を見よ、

クヨ　九譽　ジヤクスイ寂水を見よ、

クヨ　九譽　リユーテン龍天を見よ、

クヨ　九譽　レキドー礫道を見よ、

クアン　久菴　ソーカ僧可を見よ、

クオー　久應　ニチケー日桂を見よ、

クオンジヨーイン　久遠成院　ニチシン日親を見よ、

クガク　久學　ユーテー融貞を見よ、

クシツ　久室　ゲンチヨー玄長を見よ、

クジヨーイン　久成院　ニチシン日心を見よ、

クジユーイン　久成院　ニチシヨー日相を見よ、

クホー　久峰　モンシヨー文昌を見よ、

クホンボー　久本房　ニチゲン日元を見よ、

クアン　舊菴　チヨーム蝶夢を見よ、

クオー　舊應（……）二四二五　〔淨土宗〕鎌倉光明寺の僧なり、

舊應號は超蓮社勝譽眞阿と云ふ、鄕貫詳ならず、出家して諸宗に通ず、鎌倉光明寺に住して學徒を敎訓し、後大谷寺に住す、慶安四年四月二十日將軍家の葬儀に列し、寛永寺に讀經す、明和二年三月一日寂す、壽缺く、(鎭流祖傳)

クテン　舊典　……二三〇七　〔淨土宗〕江戶生西寺の開山なり、舊典は相蓮社寶譽と號す、俗姓は藤原氏、近江の人なり、瀧山大善寺舊呑に就て剃髮し、法を幡隨に嗣ぐ、江戶小日向生西寺を創して開山となり、寶永十四年結城弘經寺に主となる、正保四年二月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

クモン　舊門　……二三二二　〔淨土宗〕江戶長安寺の開山なり、舊門は覺蓮社本譽と號し、信濃松本の人、其俗姓詳かならず、普光觀智國師に就て剃髮受業し、江戶麻布に長安寺を剏む、寛文十二年十一月九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

クジヨーイン　功乘院　ドースイ洞水を見よ、

グセー　救世　一五九〇 一六三三　〔眞言宗〕京師東寺長者なり、救世字は善集、京都左街の人、俗姓は源氏、比叡山の相應に從ひて出家し、神應寺に住す、又奈良興福寺に赴き、勝祐の弟子となりて性相台三宗の法門に學熟し、尋いて廣澤の開參法師を訪ひて弟子となり、天慶寛靜と共に傳法灌頂を受け、法身佛の心印を得、天皇其宏才を賞して大師眞蹟並に五股杵を賜ふ、後高野山に登る、時に金剛峰寺座主無空和尙逃走し學人荒凉に歸す、師諸方の學侶を集め聲明を習はしめ、遂に高野山引聲の中興となる、師山中に一院を建て恩賜の金剛杵大師眞蹟を奉安す、後勅して善集院の額を賜ふ、高野の第八世となり、後職を辭して京師に歸へり、石山寺に居る、應和三年七月國內旱し、詔を受けて神泉苑に請雨經の法を修し、十六日賞を賜ふ、康保三年少僧都に任し、五年正に轉ず、天祿二年東寺十四代の長者に補し、法務に任し天延元年寂す、壽八十四、弟子一人あり中圓といひ、眞如と號し、金剛神應寺に居る、(傳燈廣錄)

クタイ　究諦　……二二九九　〔淨土宗〕大和念佛院の中興なり、究諦は得蓮社慶譽と號す、俗姓は細井氏、大和の人なり、法を幡隨に嗣ぎ、大和當麻の念佛院に住し、其廢を修す、寛永七年江戶鳥越に念佛院を新築して開山となり、寛永十六年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

クホー　玖峰　チヨーゲン長玄を見よ、

グカイ　愚海　コーシヨー光性を見よ、

グギン　愚誾　ダイガン大巖を見よ、

グキユー　愚丘　ミヨーチ妙智を見よ、

グキユー　愚休　チベン知辨を見よ、

グキヨク　愚極　センキヨー專慶を見よ、

グケー　愚溪　コージユー光從を見よ、

グケー　愚溪　ジヨーエ淨慧を見よ、

グケー　愚溪　チシ智至を見よ、

グケー　愚溪　トクテツ得哲を見よ、

グケー　愚谿　ジテツ自哲を見よ、

グゲン　愚玄　コーエー光瑛を見よ、

グコー　愚光　レンテキ蓮的を見よ、

グコー　愚皐　コーシヨー光勝を見よ、

グコク　愚谷　ジヨーケン常賢を見よ、

グコク 愚谷 チクー凝空を見よ、

グサン 愚山 コーカイ光海を見よ、

グシン 愚心 ユーテン祐天を見よ、

グシユン 愚春 二四四二／二五一三 〔淨土宗〕岩城大圓寺の僧なり、愚春初の名は夢南、後に一具と云ふ、出羽最上の人なり、出家して福島大圓寺に住し、退隱の後江戸に出て中橋油座に居し、俳句并に畫を善くし、梅室、蒼虬、鳳朗に次くと稱せらる「忘れたき事は忘れす秋の風」「五月雨や油買ふにも川向ひ」「花なれは道なり雲の高根まで」など、人口に膾炙せり、嘉永六年十一月十七日寂す、壽七十二、深川靈岸寺に葬る、（徘諧名譽談）

グスイ 愚水 コーセー光晴を見よ、

グセン 愚川 コーチヨー光超を見よ、

グセン 愚船 コーヘン光遍を見よ、

グセン 愚泉 コーロー光朗を見よ、

グチユー 愚中 シユーキユー周及を見よ、

グチヨク 愚直 シカン師侃を見よ、

グテー 愚底 二一七六／…… 〔淨土宗〕京都智恩院第二十三代なり、愚底は眞蓮社勢譽と號し、京都の人なり、了曉の室に投じて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、性隱逸を好み、遊歷して三河守禰部の阿彌陀院、鴨田の西光寺等に寓す、文明七年源親忠の請に應し、州の伊田野に大樹寺を開き、永正元年知恩院に住し、二十三代の主となる、住持八年にして再び大樹寺に住し、永正十三年四月十一日三河福林寺に寂す、法嗣に敬譽、昇譽、辨譽の三人あり、（淨土總系譜、淨土宗史料）

グテー 愚底 キヨーヨ經譽を見よ、

グデン 愚傳 （二四三二）（……） 安房日木寺の僧なり、愚傳は安房平群郡保田村日木寺に住し、緣を四方に募りて石佛五百躰を彫刻し、山中に安置し、餘財を以て更に五百佛を作りたりといふ、安永年中の人なり、（佛敎史料）

グドー 愚道 エンチ圓智を見よ、

グドー 愚堂 トーシヨク東寔を見よ、

グドー 愚童 ウンリユー雲龍を見よ、

グトク 愚得 シユーエツ宗悅を見よ、

グハク 愚白 二二七九／二三六二 〔曹洞宗〕和泉成合寺の開山なり、愚白字は雲山、肥後國の人なり、其俗姓詳ならず、幼にして出家し、山崎の存性律師に詣てゝ受具す、初め愚堂國師を武藏の正統菴に禮し、次て大愚、雲居等の諸禪師に見ゆ、豐前國に至り賢巖を多福寺に問ひ、長崎に往き道者を聖壽寺に問ふ、後に月舟和尚に投して師事し、其法を繼ぐ、肥前の巖吼菴に隱捿す、已にして肥後國の大慈寺に出世す、安住すること數年、後和泉に隱捿す、黄檗山木菴禪師を訪ふて參究し、國司延て瑞龍寺に主たらしむ、居ること三年にして和泉に歸る、太守岡部氏篤く歸依す、師晩年成合寺を創して開山となる、元祿十五年二月十八日寂す、享年八十四なり、（日本洞上聯燈錄）

グモー 愚蒙 二三四三／二四二一 〔淨土宗〕江戸祐天寺の僧なり、愚蒙字は祐海、俗姓は新妻氏、奥州岩城の人なり、祐天僧正の俗姪なり、上總牛島に到り、祐天に童侍し、次に增上寺に遷る、僧正示寂の後、其遺志を繼紹して祐天寺に不斷念佛を

修し、鉦聲鏗々四十餘年一日の如し、走獸飛鳥までも法化を蒙れり、師大殿諸堂等の營搆をなし、壯觀を究む、寶曆九年十一月疾あり、先師僧正の法要法器を弟子祐全に附し、同十一年正月二日念佛の聲絶ゆると共に寂す、壽七十九、菩薩威儀略述、無量壽讃、西敎舍子篇等あり、（續日本高僧傳）

グエン　求厭　二二六九　二三四八　〔淨土宗〕伏見某寺の僧なり、求厭姓は豐臣氏、攝津大阪の人なり、秀頼の第二子なりと云ふ、始め增上寺に登り、業を受く、性秀發にして善く法門を弘通す、四邊其德風に化す、週遊して山城國伏見に捿止す、元祿元年寂す、壽八十歲、（鎭流祖傳、續日本高僧傳）

ググワン　求願　……二三二七　〔淨土宗〕駿河龍寶寺の開山なり、求願は覺蓮社正譽と號す、俗姓は長田氏、駿河駿東郡の人なり、知譽上人の室に入りて剃髮受業し、法を嗣ぎて後郡の御厨村に龍寶寺を搬して開山となる、明曆三年七月八日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

グドー　求道　エジン惠尋を見よ、

グホー　求法　ギクー義空を見よ、

グエー　虞淵　チヨーネン超然を見よ、

グカク　具覺　グヮツミヨー月明を見よ、

クーア　空阿　……一八八八　〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、空阿字は法性、俗姓生國詳かならず、初め延曆寺に在り、後源空上人に師事して淨土敎を受け、日夜念佛唱號の聲を絕たず、諸所を遊行して同志を誘ひ、念佛會を修す、鈴の音を喜び、常に一小鈴を携へ、宿に投ずれば檐頭に鈴を掛け。坐して其音を聞き、嘆して謂ふ、淨土の寶樹の風響、寶池の波聲自ら耳に入る想あり。と、攝津天王寺の西門に念佛會を盛修し、同地方の道俗を風動す、自ら號して無智の空阿念佛と云ふ、安貞二年正月十五日念佛し、疾なくして寂す、其容貌生るか如くなりきと云ふ、空阿學解なかりしも化導盛んなり、常修身房舍に住せず、諸地に遊行して民家等に寄宿したり、常に念佛の數を積みたれば、時人稱して多念義と云ひたりとぞ、師源空上人を尊重すること比なく、特に京師の畫師信實に囑して上人の像を作り、日夜奉侍したり、上人も亦深く師を愛し、其化導の盛んなるを稱したりと云ふ、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

クーア　空阿　イチドー一道を見よ、

クーア　空阿　ニヨニチ如日を見よ、

クーエン　空圓（一九九二）〔淨土宗〕京師知恩寺の僧なり、空圓號は善阿、俗姓は槻氏、山城賀茂の人、父は神宮兼實十三歲にして記主禪師の門下淨心に從て出家す、亦記主禪師に參して敎奧を開く、後長德山に住す、元弘元年七月時疫甚流行す、後醍醐天皇師に勅して癘災を禳はしむ、行年七十三歲にして寂す、其年月日詳ならず、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

クーオー　空雄（……）〔眞言宗〕山城醍醐山松橋の第十代なり、空雄は富小路大納言の孫季明の子なり、淸住寺を兼ねて閻魔堂別當となる、（續傳燈廣錄）

クーガ　空雅　ニチギヨー日堯を見よ、

クーガ　空雅　ニチダツ日脫を見よ、

クーカイ　空海　一四三四　一四九五　眞言宗の開祖なり、空海は讃岐國多度郡屛風浦の人、寶龜五年六月十五日に生る、俗姓は

佐伯直にして、幼名を眞魚といふ父を田公といひ同郡田方郷の長たり、(石山寺古文書には父の名を道長とせり)先祖大伴健日連は、景行天皇の朝に日本武尊の東征に從ひて大に功を樹て、讃岐國に土地を賜はりて此に移り住す、倭故連に至り允恭天皇の朝にはじめて讃岐國造となれり、後、國造は廢せられたるも、一族は其地に永住して官職に就けり、師の父田公のことは詳しく知るに由なきも、當時佛教界の人傑のこの一族より出てしもの極めて多し、即ち眞言の眞雅、眞然、實慧、道雄、天台の圓珍等皆師の俗縁なり、師幼にして聰明、夙に神童の名を博す、父母鍾愛し師を守して貴物と呼ふ、十五歳外戚阿刀大足に就きて論語孝經及ひ史傳等を受け、兼ねて文章を學び、尋て京に入りて大學に遊び、直講味酒淨成に就いて毛詩尚書を讀み、岡田博士に就いて左氏春秋を問ふ、殊に佛教に意を傾け、石淵寺の勤操に從ひて虛空藏求聞持法を受け、これを修行せんと欲し、京を去り、山川を跋渉す、大和より西に去りて南海に渉り、阿波の大瀧嶽の頂に登り、土佐の室戸崎に至り此法を修錬し、それより四國を廻歷し北に渡りて山陽道の地方にも到りたり、播磨にては行基菩薩の弟子の出家以前の妻某に供養せらる、更に東行して伊豆の地方を回りたりと云ふも詳ならず後自ら嚴冬の深雪には藤衣を着て精進道を顯はし、炎夏の極熱には穀漿を斷ちて朝暮懺悔せりといひしは此時の事なり、一たび還りて勤操を訪ひ、沙彌戒を受く、其空海と稱せしは鑑眞の弟子空鉢、眞海といふものに戒を受けたるによるといふも詳ならず佛前に誓ひて曰く、吾れ佛法に從ひ常に求めて要を尋ね、三乘十二部經は心神に疑ありて未た決せす、唯た願くは三世十方の諸佛我に不二を示せと、靈夢に感して大和の高市郡久米道場の塔柱の下に、大毘盧遮那經あることを知り、これを尋求して果して得たり、師か眞言教に因縁を結ひたるはこの時にあり、これより東大寺の西南隅に一小堂を構て膝を容れ、潜心覃思してこれを講究す、數年の間奈良に滯留して諸高德の間に出入し、專ら經論の攻究を事とす其師匠勤操は三論宗の碩德なれは、師は始めより三論の教理を講し、延暦十七年に三教指歸一卷を作る、尋て勤操を仰いて具足戒を受けたりと云ふ、然るに師が胸中の疑問を掃はんか爲に入唐を志すこと久し、會遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麿、副使從五位上石川朝臣道益、延暦廿二年四月十四日に難波を發せしが風浪の爲に果さす、翌廿三年四月廿五日に再ひ命を受け餞を賜ひ節刀を授けらる、師は勤操の執奏により五月十二日に入唐の敕許を拜す、當時比叡山の最澄も入唐の勅許を受く、一説には、師は勅命なくして私に遣唐使に依りて往きしともいひ、又最澄の藥生として渡りたりともいへれど、勤操の奏請により勅許せられたることものなるべし、最澄は請ひて義眞を伴ひ、師は堅慧智泉の二僧を從へたりと云ふ、古より高僧の唐に航するや、其出發に臨みて宇佐の八幡宮に海路平穩を祈禱するを例とす、師も亦此に祈禱し、自寫の般若心經一百卷を納め、自ら藥師佛を刻して船中に奉したりといふ、且つ自像を書きて母に贈れり、廿三年七月六日に遣唐使の一行四船前後相連りて肥前の松浦郡田浦を發す、第一船には葛野麿道益等ありて師之に同乘し、第二船には遣唐使判官正六位上菅原朝臣清公等ありて最澄之に同乘し、第

三船には同しく遣唐使判官六位上三棟朝臣今嗣等あり、第四船は之を詳にせず、七日西海の沖にて波浪に妨けられて、第三船第四船は第一第二に分離したれは航行を共にするを得ず、第一船は海路三十四日間にして八月十日に福州長溪縣赤岸鎭己南海口に到着し、第二船は九月一日に至りて明州の海岸に到着したり、第三船は第一船第二船に分離して後、翌廿四年七月四日更に松浦郡庇良島を發し、遠値嘉島に到り暴風雨に遭ひて船破壞し、今嗣等僅に身を以て免れたれは其航行を果すに由なかりしなり、第四船の事は分明ならず、八月十日第一船により師は福州に到着したるに、會々福州刺史柳冕といふ者病の故を以て任を去りしかば、十月三日に閻濟美と稱するもの新に來任するを待ちて、大使葛野麿は書を贈りて來意を告く、而して其書は師の草したるものなり、其文に依れは大使等の一行は初め上陸を拒まれしもの丶如し、師再三書を贈りて事情を陳したりと云ふ、遂に大使と共に上陸し、師は專ら佛法を學はんと欲して、西、長安に入らんことを請ひ、書を刺史に呈す、大使は十一月三日に福州を發したれは、師隨行し十二月廿三日に盛大なる歡迎を受けて長安に入りたり第二船は第一船に後れて明州に到着したるも、故障なかりし爲に直に上陸し、早く十一月十五日に長安に達したりしかは、却て淸公等の一行は、大使等の一行を長安に待ち居たるなり、既にして大行葛野麿國書を捧けて東皈せる後、師は長安に留り、二月十日より同學橘逸勢と丶もに西明寺なる永忠の故院に寓す、永忠は寳龜の初めに唐に入り代宗に優遇せられたる我國の高僧なり、師、西明寺の僧等と共に諸寺の大德名匠を歷訪したりしが、偶然にして靑龍寺惠果阿闍梨に遇ひて大に歡迎せられたるなり、阿闍梨は不空金剛附法の弟子にして、時に六十歲師は三十二歲なり、師其年の六月十三日に灌頂壇に登り、七月八月に兩部大曼荼羅祕法の相傳を了り、因て遍照金剛といふ號を得、靑龍寺門下の正統を繼紹すること丶なれり、此正統は不空金剛が金剛智より繼きて後、之を惠果唯一人に付し他に讓らす、而して惠果も亦師に付して他に付すことなし、故に印度以來の眞言宗は、全く師に付せられたり、惠果は師に付して後、十二月十五日に靑龍寺に入滅せり、惠果示寂の後、師は墓碑を長安に建設し、一大長文を作りて其行實を勒せり、後、長安の醴泉寺に於て罽賓國の僧般若三藏、及ひ牟尼室利三藏に遇ひ、南天竺の波羅門にも遇ひたり、是等の僧の事は詳ならさるも、般若三藏は曾て五天竺を歷遊し唐に留りて經典の翻譯等をなしたるものなり、師は是等の人より天竺の事を聞き梵語をも學ひたり、而して不空金剛の弟子なる曇貞和尙に就て悉曇の傳を受けたり、韓方明に就いて書を學ひて妙神に逼り、憲宗の勅を受けて宮中の壁間に王羲之の筆跡の破損せるものを修補し、大に賞讃を受けたりといふ、世に傳ふ、師は口並に兩手兩足に各筆を執り、五處に五行同時に書したれは、帝及ひ滿朝の臣下感歎極りなく、帝は勅して五筆和尙の號を賜ひ、且つ菩提實の念珠を施與して歸依の意を表したまひたりといふ、傳に筆を口にし兩手に援り兩足に挾みて五所に五行一時に書したりといひ、一に師勅を奉して宮中に入るとき日將に暮れんとし、事既に急迫したれは五筆同時に揮ひたるものにして、機に臨みて一計を案出した

クー(空)カ

るものなりと云ふ、これ盖し師は韓方明の執筆五法に通したるより、五筆和尚といふ號を得たるものなるを、後世事を好む者ありて附會したるものなるべし師は秘密敎を硏究し梵學等を講習し、且つ大に圖書の謄寫等に力を用ひたり、一身の衣鉢給せずして窮乏の中にこれを力めたるなり、初め師は滯留二十年を期して入唐したるものなれとも、惠果阿闍梨は既に寂を示し、且つ終に臨みて東國に大法弘通の付囑を受けたれは、幸にも高階眞人遠成の船便あるにあたりて、橘逸勢と倶に東歸することに決したるなり逸勢は學資の窮乏に苦しみ衣糧は辛うして命を續くに止まり、東修讀書の用に足らすと云へは、師の狀況をも推知すへし、元和元年八月憲宗の下を辭し眞俗の諸同輩に別るにあたり、詩文を贈りて之を餞する者甚た多し、而して師か留別の作として青龍寺義操闍梨に留めたる詩に曰く「同法同門喜遇深、隨空白霧忽歸岑、一生一別再難見、昨夢思中數々尋」、と、大同元年十月に海上數々波濤の險を淩きて筑前の岸に着し、遣唐使高階遠成の京都に復命するに依りて、請來せる經律論疏章等の目錄に上表文を附して奉獻す、其典籍の目錄によれは、新譯經等一百四十二部二百四十七卷、梵字眞言讃四十二部四十四卷、論疏章等三十二部一百七十卷あり、師は先つ筑前より上表文を奉り請來の目錄を獻して後暫く太宰府なる觀世音寺に錫を留めたり、是れ風雪に阻まれたるによるものなりと云ふ、大同二年二月十一日に田中某のために忌齋を設く、其願文によれはこの年間客旅にありて、千手千眼大悲菩薩並に四攝八供養摩訶薩埵の十三尊を圖繪し、且つ妙法蓮華經一部八軸、般若心經二軸を書寫し、田中某のために法事を修したることゝ見ゆ、博多に滯留し一寺を掇めて東長寺と號したりと云ふ、既にして東歸の途に上り、行々法益を施し、安藝の市杵姫の祠にも詣したるものゝ如し、盖東歸の途中此地に過きりたるものなるへけれは、必すや東長寺建立の後にて即ち二年四月より十一月頃までのことなるべし、幾もなくして和泉の國に到り槇尾山寺に着せり、十一月八日初めて久米寺に大日經疏を講したりと云ふ、當時實惠、堅惠等聽衆の中にありたりと傳ふれとも、如何にや疑はし、大同四年二月比叡山の最澄弟子を槇尾山に遣はして問候せり、同年七月太政官より和泉國司に下したる官符なりと云ひ傳ふるものあり曰く、僧空海、右被二右大臣宣一偁、請二件僧一令レ住二京都一者、國宜二承知一、依レ宣入レ京符到奉行大同四年七月十六日と、師の事は夙に朝聞に達したるへきも、近畿の諸地にして新に唐より傳へたる眞言の敎義を講說するなと、その行事の世の目を引くところとなりたれ

弘法大師

ば官符の下りたるにもあるべし、その翌弘仁元年十月二十七日に上表して、曾て最澄か毘盧遮那壇を建設したりし高雄山寺に於て、諸弟子を率ゐて仁王經の大法を修せんことを請へり、これ師か始めて金剛智以後脈々として傳はれる兩部大曼茶羅祕法の親しく靑龍寺にて受けたるところを修せんとしたるものにして眞言宗の端緒を發かんとしたるものなり即ち元年十一月十五日高雄山寺に於て最澄等四人に金剛界灌頂を授け、十二月十四日同しく高雄山寺に最澄以下一百九十餘人に胎藏界灌頂を授く、其大衆多くは東大寺、元興寺、大安寺、興福寺等奈良諸大寺の僧侶なり、而して最澄はこれらの奈良僧侶と共に師より灌頂を受けたりといふ、此年間に、最澄は時に師を高雄山寺并に乙訓寺に訪問して相與に敎義を語りたることあり、延暦寺興りて奈良の僧侶は常に意に滿たさるものありて事あらば直に相衝かんとしたるが、倶に同しく師の前に灌頂を授かりたりといふは誠に當時佛敎界の一大盛事といはさるへからず、嵯峨天皇即位の初、勅を奉して宮中に入り天位の安泰を祈禱し、藥子の亂には屢々勅を受けて高雄山寺に國家の平穩を祈禱したり、而して藤原仲成等誅に伏して亂平定するに至り、師は天皇の歸依を蒙むること愈々深し、弘仁元年十月二十七日に勅を拜して高雄山寺に於て仁王經の大法を修し國家の平穩を祈禱したるなり、これより天皇は師か說くところの兩大曼茶羅の祕法に意を寄せたまふことゝなり、師の德譽は益々揚らんとせり、同年奈良の諸大寺に迎へられて東大寺別當となる嵯峨天皇夙に學藝を好み給ふ故に、師が道業の餘研究せし書畵詩文等は大に天皇の欣敬し給ふところとなり、茲に興法の好機會を得たるなり、師が書法を唐の韓方明に學ひたるも、入唐以前に意を此に用ゆるにあらすは僅に三年の間佛敎を修業する餘暇に硏究したるものならは、その精妙なること此に至ることあらさるへし、執筆試筆の法、師より起り、鶴頭、偃波、垂露、懸針等の諸躰、及ひ眞書の四點即ち竪鉞、臥針、糸點、半月、皆師より出てたるものなりといふ、殊に大師流とて傳ふる飛白の一躰は、師か神筆を弄したるものなるへし、我國に書法あるは師に始まるにあらさるも師は天稟の材能を以てこれを擴張したれは、實際に於ては師は我か國の書の祖なり、而して嵯峨天皇は師と共に書の二聖と稱せられたれは、師か同天皇の聖鑑を得たるは一生の幸榮といはさるへからす、書は師にとりて一の末技に過きさるも、これを以て當時大に重せられしを見るへきなり、應天門の額、高野山座右銘、東寺の風信帖、補陀洛山の碑文、益田池碑文等その書に關して傳はるもの少からす、師は唐より筆工福某を伴ひ歸りて盛に筆を製造せしめたりといふ、師より筆の製造の一新したるものゝ如し、かくの如くして師は天皇の寵を蒙り、平安朝の學藝か欝勃として奮興せんとするの時期に際會して、その天稟の材能を擅にして自ら世を睥睨するに至りしもの誠は謂はれなきに非ずや、弘仁二年十一月に乙訓寺別當に補せられて高雄山寺より同寺に轉す、こは其京都に出つるに便利なるによる、然るに翌年同寺を辭して再ひ高雄山寺に入りしは、師か俗塵を避けて大法を修せんと欲する心の切なりしによらむ、當時尙ほ東大寺別當なりしかは、時には奈良にも出てたるべけれども高雄山寺は師の根本道場なりしなり、師は

此道場に在りて一方には比叡山なる最澄と往來して、他方に奈良諸大寺の僧侶の爲に大法を說けり、弘仁四年藤原冬嗣の懇請によりて奈良に出て興福寺なる南圓寺の建立の供養に與り、同寺に秘密の大法を修したり、其堂に安置せる丈六の三目八臂の不空羂索觀世音の像は、師か藤原氏のために繁榮を祈禱して造立したるところにして、その堂宇成りて冬嗣に懇請せられ自ら臨みて繁榮を祈禱したるなり、眞言宗興隆の初め即ち弘仁元年に師は勅によりて淸凉殿上に諸宗の學僧と論議するに方り、南方に當りて智拳印を結ひ、面門忽に開けて光明燦爛たる毘盧沙那佛を現し、諸宗の學僧の前に即身成佛義を證したれは、皆驚愕して大地に下り拜俯したり、これより天台の圓澄、華嚴の道雄、三論の道昌、法相の源仁等即ち其宗を去りて師の門に歸したりといふ、宮中法論の事は弘仁五年に最澄か勅によりて天台を說きて奈良諸大寺の學僧に對したるに同しきか如しと雖、其實師か當時に於ける位置は大に最澄に同しからず、師は初より奈良の僧侶に歸順せらるゝなり、而して師の學德は彼等の前に映發せり、その專ら眞言を說けるは恰も毘盧舍那佛の現したるか如き觀なきにあらず、天台は最澄初より師に親しみて其說を聞けり、圓澄、泰範、光定、賢榮は皆最澄の弟子にして比叡山を下りて高雄山に師を訪へり、これ弘仁四年にして最澄か灌頂を受けたる後一年なり、奈良の學僧の來りて兩部灌頂を受くるもの大安寺の實慧を以て始とす、即ち弘仁元年に來りてこれを受けたり、東大寺の道雄は天長元年に、道昌は天長五年に、幷に高雄山に於て灌頂壇に上り、源仁に至りては實に師の高弟なる眞雅より眞言宗を傳へたるなり、されは弘仁元年の淸凉殿上の法論に圓澄、道雄、道昌、源仁等か驚愕して師に歸したりと云ふものは事實として信ずべからず、當時師は高雄山中なる神護寺に留り、靜に實慧等の諸弟子と共に秘密教を修行し、餘暇には文墨を以て自ら樂めるもの動止極めて平穩なり、諸大寺の學僧と法論せんとするか如きは決して望まさるところのものなり、法論の事は師を誤り傳ふるものなること明なり、殊に圓澄、道雄、道昌等か空海の門に歸したる何れも後年のことにして、其事情明なるものあり、高雄山中なる神護寺（天長二年一月改めて神護國祚眞言寺と改む）は師か留住して一たひ佛敎の中心となれり、弘仁三年即ち最澄か奈良の僧侶と共に灌頂を受けたる頃、師は實慧以下五六の弟子を率るて此に留住せり、而して當時杲隣は獨り長年なれとも、實慧、智泉、眞紹、眞雅、眞然は皆少年の學僧なり、師は是等諸弟子に對して日々諄々として敎導す最澄か比叡山巔に廢權立實の事業に忙殺せられ居る間に、師は高雄山中の深樹鬱葱たる間に、別天地を作り諸弟子とともに留住せり弘仁三年十二月杲隣、實慧、智泉を以て高雄山の三綱となす、弘仁五年元興寺の僧中璟のために罪を赦さんことを請ひ、鑑眞の遺弟如寶のために招提寺封戸の恩賜を謝し、後年元興寺の永繼、藥師寺の良勝、西大寺の泰山、興福寺の康信等の赦宥等を請ふなど、奈良諸大寺のために盡すこと多し、且つ師が高雄山中に留住するに方り眞言を修行弘傳するの餘暇、文墨に意を傾けたるは亦師か淸高幽靜なる境遇を想像せらるゝなり、弘仁二年六月實慧を遣はして劉希夷、王昌齡等の詩集及び飛白書を献上したる

か、是れ師か高雄山中にありて餘暇に自寫したるものなり、其上表文によれは師は唐より攜へ來りたる詩文集及墨本等を讀み、意到れは自ら詩を作り書を作りて樂めるなり、然れとも師か文墨に於けるも亦自ら轉法輪の因緣ならさるはなし、嵯峨天皇か綿百屯に御製の詩を添へて賜はりたるより、更に詩を奉りたるも亦此年間の事にして、師か文墨の間に佛法を說くもの着々として見るへし 而して、その學德の四方に喧傳するに從ひて來り問ふもの益々加はり、動もすれは幽靜を妨けんとするものあるより、師は更に隱棲の地を求めんとして遂に高野山創開の事あり、是れ弘仁七年最澄か盛に比叡山に宗風を顯揚せる時なり、師か此時に至りて高野山を創開するは、恰も最澄の比叡に對立するか如く見ゆるも其實は然るにあらす、師は京を距ること南方二十餘里なる山中に俗塵を避けんとしたるなり、諸傳記によれは此年五月師は大和の南部なる山中を經行して偶然に此靈區に出て、即ち創開の事を企てたるものと云ふも、師は往年大和紀伊の深山幽谷を跋涉したることあれはほゞこれを知りしならん、而して紀伊に良豐田丸といふものありて、特に師に此地の形勝を報したれは師の意は益動き、即ち弟子信叡を發遣して之を探らしめ、又實慧、泰範の二高弟に命して地を相せしめ、而して後此に法基を建立せんとしたるものなりといふ、六月十九日上表して之を請ひ、七月八日に至りて勅あり官符を下し、伊都郡の地北は紀伊川を限り、東は丹生川上の峰、南は當川の南なる長峰、西は應神山の谷を限りて師に賜はりたり、此月師は神護寺にありて大安寺の勤操等のために兩部灌頂の事を行ひ、又十月には勅を奉して 天皇の聖躰 安穩の祈禱をなす、而して一方には實慧泰範等を督して高野山創開を經營せり、豐田丸の子にして師の弟子となれる圓明といふもの、師の命を受けて專ら土木のことに關したるものゝ如く、同八年四月より四面七間なる金堂を建築するに方りて、師は高野山に登りて結界を修せり、古傳に師はこの工事にあたりて伊呂波歌を作りて木匠をして謳はしめたりといふ、弘仁九年二月の頃諸國に大に疫病大に流行したれは、師は勅請を拜して高野山中より出てゝ東寺に入り般若心經を講して災厄攘除の祈禱をなしたり、十年の春に至りて金堂落成し尋いて鐘樓、經藏皆落成したるか、師は重ねて高野山に登りて此年五月三日に鎭守を勸請す、こゝに於て高野山建立の事は全く功を竣りたり、然れとも隱棲のことは尙ほ師の意の如くならさるものありて、京附近の地を去ること能はさりしなり、弘仁十一年に東國に旅行して、補陀洛山を創開したる勝道の遺跡を問はんとしたるものなるも、亦これ師か世間並に出世間の諠囂を避けんとしたるものならさるを得す、此年間殊に京附近の地を去らんとしたるは別に理由あり、弘仁十年二月最澄か上表して比叡山に戒壇を建立せんとせるより、奈良の諸大寺は沸騰せり、大安寺の護命、東大寺の景深等主として極力最澄に抗し、南北の法論紛糾せり、師か東國旅行は最澄か顯戒論三卷を著作して奏上したる年にして、師は此法論の紛糾を厭惡して避けんとしたるものならんか、即ち眞濟及ひ大安寺幹海を拉して東下し、伊豆の桂谷寺を經過し七月廿六日に下野に抵り、勝道の弟子なる道珍に迎へられて中禪寺に詣し、それより此二荒山の勝を

クー(空)カ

探りたり、此山は春秋二季に暴風あるより二荒の名あり、師は山中にありてこれか鎭定の祕法を修し、二荒を改めて日光といへり、その補陀洛山といふも亦二荒と云ふより出てたるなり、師が嘗て京師にて作りし勝道の碑文には補陀洛山とあるもの亦日光といふとゝもに、師の創意に出てたるものと思はる、乃ち往年道珍等の請によりて補陀洛山の碑を作りてより深く勝道の遺跡を景慕し遂に登攀したり、これ恰も勝道か寂を示してより三年の後なり、師は歸路東國を回歷し到るところに法益を施し、十二月四日に高雄山に着したるが、尙ほ比叡山の戒壇のこと落着せされは、師はこの抗爭を厭ひたるへし、而して師か一年間の旅行を終へて再ひ高雄山中に留住するや、道聲益々高し、殊に十二年に讃岐國司より萬農池の工事に就きて聘請せられたることは、明に師か當時の盛望を示せるものなり、師讃岐に到り土佐の地方をも回歷したり、幾くもなくして京に入り、弘仁十三年二月十一日に勅を拜して東大寺に於て灌頂道場を建立して國安を祈禱し、尋いて平城上皇に灌頂を奉したり、此年の六月四日に最澄は戒壇建立のこと未た允許せられずして比叡山に寂を示したれは、師はこれより海內の信仰を一身に集むることゝなれり、十住心論は實にこの年に著作せられたるなり、(一說に天長七年とせり)十四年正月十九日嵯峨天皇特に勅して東寺を師に賜はり且つ眞言僧五十人を置き、永く鎭護國家の祈禱所となす、天皇は特に東寺に行幸ありて師より灌頂を受け給ふに至り、師は殊に眞言宗を以て平城嵯峨の二皇の戒師となれり、即ち夙に高野山中に遁れんとせる師は、遂に京を去る能はざることゝ

なり、眞言宗はこれかために興隆することゝなれり、淳和天皇立ちたまひてより信仰歸依したまふこと益々深重にして、師は常に宮中に參候して眞言の秘法を修したるなり、天長元年に勅を拜して神泉苑に雨を祈禱し、實慧、眞濟、眞雅、眞紹等皆祈禱に參與したり、師か祈禱の靈驗ありしかは天皇は大にこれを嘉賞したまい、三月二十五日少僧都に任したまふ、その四月六日に上表して辭せとも許されず、六月十七日に勅ありて東寺を永く眞言弘傳の本所となし、號して敎王護國寺といふ、師諸弟子を從へて此に留住して、常に鎭護國家の祈禱をなし、且つ講堂及ひ五重塔造營のことに從へり、四年五月に宮中にて百僧を請して大法會あり、師主としてこれに與り、その冬大僧都に任せらる、宮中に於ける歸依信仰は益々師の一身に集り、天皇の妃等亦師の盛德に服す五年二月に師の敎を受けたる如意尼夜に乘して宮中を遁れ攝津の山中に入る、これより宮中の修法祈禱は年々に盛大になれり、この年間に師は東寺及ひ神護寺に留住して屢々宮中に參上したり、奈良并に比叡山に對する關係は益々親密なり、即ち天長六年には嘗て比叡山戒壇の事を以て極力最澄に對抗したる元興寺の護命のために、八十の賀壽の詩を作りて送れり、この年十一月を以て更に大安寺別當に補せられたり、比叡山に對しては西塔院の落慶會に、實慧、眞濟、眞雅、道雄、等を率ゐて臨めり、而して師か高野の山中に隱棲せんとおもふこと、益々切なるを致し八年に病を以て大僧都の職を辭し、九年十一月敎王護國寺を實慧に付し高野の山中に入り四恩の萬燈會を修す、承和二年正月京に上り宮中に眞言院を興し正月八日より秘密法

を修行す是を後七日の御修法と云ふ、後高野山に皈り三月廿一日諸弟子のために數條の訓戒を遺し、靜に眞言道場に結伽趺坐して寂に入る、時に壽六十二、後、文德天皇天安元年勅して大僧正を追贈し清和天皇貞觀六年法印和尚位を追贈し、醍醐天皇諡號弘法大師を賜ふ、諡號の勅宣に曰ふ、「琴絃已絶遺音更清、蘭叢雖凋餘香猶播、故贈大僧正法印大和尚空海消瘦煩惱、抛却驕貪、至三十七品之修行、斷九十六種之邪見、既而佛日西沒、受深海而仰餘輝、法水東流、通陵谷而導清波、受密語者多滿山林、習眞趣者自成淵藪、况太上法皇既味其道、追憶其人、誠雖浮天之波濤、何忘積石之源本、宜加崇飾之典、諡號弘法大師」、延喜二十一年十月二十七日、勅使少納言朝臣惟助」、と大師の門下甚多し、其聞ゆる者は、眞雅、實慧、眞濟、道雄、圓明、眞如、杲隣、泰範、智泉、忠延、眞紹、堅慧、道昌等なり、著作十住心論落脫文、十住心論問答、卽身成佛義、聲字實相義、吽字義、般若心經祕鍵、祕藏記尊位、略付法傳、付法傳問答、大日經略釋、大日經祕釋、金剛頂經略釋、金剛頂一字頂輪王儀軌音義、一字頂輪王祕音義、敎王經祕釋、眞實經文句、仁王經開題、仁王經法、法華經密號、法華經十不同、法華祕釋、梵網經開題、最勝王經略釋、最勝王經伽陀、金剛般若經開題、心經略釋、諸經開題、大佛頂經開題、孔雀經開題、阿彌陀經開題、無量義經釋、千手經開題、十一面經開題、浴像經開題、瑜祇經行法記開題、金剛王經祕密伽陀、文殊讃法身禮註釋、如意輪菩薩觀門義註祕訣、上新請來等經等目錄、眞言所學經律論目錄、授三摩耶戒文、三摩耶戒灌頂文、三摩耶戒表白、平城天皇灌頂文、嵯峨天皇灌頂文、眞言宗灌頂御願記、結緣灌頂表白表、遺告、金剛峰寺遺記、五部陀羅尼問答宗祕論、陀羅尼義釋、諸尊眞言梵字句義、阿字義釋、眞言二字義、萬字義略記、持念眞言理觀啓白、十二眞言王儀軌、眞言傳授作法、眞言雜問答書、四種曼荼羅義問答、四種曼荼羅義口決、五種供養義、梵字悉曇字母釋、大悉曇章、悉曇雜義鈔、兩部大法緣起、傳法問答、最極祕密文、祕書鈔、祕密鈔書、金匱祕錄要文、遍照金剛記、字塔一合法表白、願文集、雜觀行書、天正令正印義、惠日寺反徵、高野入定作法、高野雜筆集、消息狀、文章肝心鈔、玉造小町形衰記、不動尊詩、不能詩、[illegible]、[illegible]次第、胎藏次第、胎藏次第、胎藏念誦次第、胎藏界祕記、胎藏道場觀略本・胎藏界印眞言記、[illegible]、[illegible]、金剛界次第、金剛界第二略次第、金剛界私記、金剛界降三世五重結護、金剛界業義、金剛界肝要略記、金剛頂最勝眞實三昧次弟觀念、無盡莊嚴三昧念誦次弟私記、九會圖別記、建立曼荼羅次第、無量壽次第、求聞持次第、金輪次第、千手觀音行法次第、持寶金剛念誦法次第、大勝金剛次第、十八道念誦次第、十八契印、十八道儀軌、不動次第、不動納涼房式、不動尊功能、不動尊記、祕要書、愛染作法、雙天次第、吉祥天次第、護摩略次第、護摩私記、護摩祕記、護摩鈔、護摩法、護摩本、外護摩略記、息災護摩次第、四種護摩口訣、嵯峨文、內護摩法、內護摩鈔、內護摩略記、觀內護摩、壇爐記各一卷、辯顯密二敎論、秘藏記、秘密漫羅敎付法傳、大日經開題秘釋、金制頂經開題、最勝王經開題、守護經釋、釋摩訶衍論指事、大日經疏文次第、三摩耶戒序、道誡、無名秘書、高野往來集、胎藏界廣

記、金剛界次第、金則界口訣、金剛界大儀軌各二卷、秘藏寶鑰、三教指歸、大日經儀軌、敎王經義記、四種曼荼羅義、胎藏界次第、胎藏界私記、金剛界次第各三卷、理趣經釋、眞言答書各四卷、大日經開題、敎王經開題、理趣經開題、法華經開題各五卷、文鏡秘府論六卷、秘密曼荼羅十住心論、遍照發揮性靈集各十卷、篆隷字書三十卷、遺告眞然大德等文、大師牙牒各百十卷（以上著作には眞僞未決のもの數部あり）あり、（空海僧都傳、贈大僧正空海和上傳記、弘法大師廣傳、弘法大師行狀集記、弘傳畧頌鈔、弘法大師御傳、弘法大師行記、弘法大師年譜、弘法大師正傳、眞言傳、本朝神仙傳、元亨釋書、明匠畧記、東國高僧傳、本朝高僧傳、諸宗章疏錄以下略す）

〔考〕空海の事蹟に關して、古來異說ありて未た決せさるものなり、殊に其出家以前の經歷、幷に出家の年時、大に明瞭を缺けり、然るに眞濟の空海僧都傳等の文意に依れは夙に大學明經科に入りて儒學を專攻したるは事實なり、而して三教指皈の文意に依れは、其大學を出て儒學を棄てたる事情も略ほ判知せらるも、出家の年時に關して古來傳ふる所諸說一樣ならす、即ち大師二十歲、二十二歲、二十五歲、三十歲等の說あり、先つ遺告文と云へるものに延曆十二年二十歲にして和泉の槇尾山に登り戒を受くと云へり、後世の傳記大半此說を採れり、然るに七大寺年表には、延曆十四年廿二歲にして東大寺の戒壇に登り、勤和尚より具足戒を受くと云へり、經範の行狀集記には十四年四月九日と云へり、本朝高僧傳の東大寺堪久傳には同年に別當堪久より具足戒を受くと云へり、眞雅の空海和上傳記、（實は眞雅の撰にあらざるべし）幷に三教指皈の文意に依れは、延曆十七年四月九日廿五歲とあり、梅園奇賞幷に古文書類纂に收むる石山寺古文書には、延曆廿二年四月七日三十歲にて東大寺戒壇に登り具足戒を受くと云へり、以上の諸說皆其據る所あれは輕率に取捨を加ふへからすと雖、今姑く考ふるに、三教指皈、石山寺古文書は、最も意を留めさるべからす、石山寺古文書にして眞に當時の文書ならは、一言を費すまでもなく、此一文書によりて他の諸書に見ゆる所の誤りなるを證するに餘あり、然れとも其古文書は現存せさるを以て、實地に眞贋を辨別すべからす、眞濟の空海僧都傳に依れは、三教指歸三卷を作りて優婆塞と成るとあれは、延曆十七年廿五歲にしてこれを作りて儒教を棄てたるも、即時に出家したるにあらさるは明瞭なり、然れは延曆十七年廿五歲にして優婆塞となり、後、延曆廿二年三十歲にして始めて具足戒を受けたるものならんか、一說に延曆九年十七歲にして三教指歸を作り、後十七年廿五歲にして再治したるものなりと云へとも、事實にあらす、三教指皈の文意自らこれを證せり、要するに三教指皈等に依れは、大師か佛教に皈したるは廿五歲以後なると事實なるべし、古傳に讃岐屋島寺慧雲に就いて戒律を學ひたりと云ひ大安寺思託に就いて三聚戒を受けたりと云ひ、空鉢眞海と云ふ者に就いて具足戒を受けたりと云ひ、石淵寺勤操に就いて具足戒を受けたりと云ひ、東大寺堪久に就いて具足戒を受けたりと云ふ等、諸說紛然たれとも皆詳ならす、次に大師か入唐の事情に關しても稍明瞭を缺けり、且つ其年月に關しても遺告文、請來錄、玉印鈔等に五月六月の異說あり、玉印鈔に延曆二十三年五月十二日に勅許を

得たりと云ふは事實なり、日本後紀等に依れは、五月十二日勅許を得、六月一日に難波より船に乗り、七月六日に肥前を出發し、八月十日に福州に到着したるなり、其餘瑣細の異說は皆玆に畧して擧けす、

クーカク 空覺 カクゲン覺眼を見よ、

クークーアン 々菴 チキ智暉を見よ、

クーグワ 空畫 ブツゲー佛猊を見よ、

クーゲ 空華 ミョーリユー妙龍を見よ、

クーゲ 空外 ソーヨー僧鎔を見よ、

クーゲ 空外 シンジョー心昭を見よ、

クーゲドーニン 空華道人 シユーシン周信を見よ、

クーグワツ 空月 (一九三七) 〔戒律宗〕大和戒壇院の學僧なり、空月字は禪性、初め戒壇院に入りて圓照に受學し、滿分戒を受け、戒律の奥旨を通貫す、又東南院に在りて細に三論の玄致を究め、高野山に登り兩部の密灌を受く、戒壇院に回りて羯磨を持し、教外の旨を慕ひて宋の諸刹を問ひ、歸へりて禪教を說きて二京に接化す、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

クーグワツ 空月 シンカイ心海を見よ、

クーコー 空廣 二〇〇八―二〇七六 〔曹洞宗〕奥州示現寺の禪僧なり、空廣字は天海橘諸兄の後裔にして、京都の人なり、八歲にして佐賀の天龍寺に入りて出家し、十五歲受戒す、初め諸老を徧參し、遂に源翁心昭の法嗣となる、應永六年示現寺に出世す、同二十三年二月十五日寂す、壽六十九、臘五十四、遺偈あり曰く、四大皈本、如子得母、虛空說夢、聞得太奇、(日本洞上聯燈錄)

クーコク 空谷 ミョーオー明應を見よ、

クーシ 空子 ニチセー日政を見よ、

クーシキ 空識 ショーユー聖融を見よ、

クーシツ 空室 ミョークー妙空を見よ、

クーシン 空心 二三〇〇―二三六一 〔眞言宗〕攝津圓珠院の開山なり、空心字は契沖俗姓は下河氏、其先は近江蒲生郡馬淵村に住す祖父左衞門元宣は加藤肥後侯に仕へ、父現全は尼崎青山侯に仕ふ、師は寛永十七年尼崎に生る甫めて五歲母口づから百人一首を授くるに不日にして能く記誦す父實語教を授くるに亦同し、七歲疫を患ひ、竊に天滿天神の號を書して祈禱し、靈驗に感す、後常に出家の志禁じ難く、父母に强請して、十一歲の時今里妙法寺手定法師の弟子となる、初め般若心經を受けて讀むこと四五度にして能く諳し、且つ書す、十三歲にして剃髮し、高野山に登り、東寶院快賢に師事し、居ること數年、學行大に進む、快賢より五部灌頂を受け、兩部大阿闍梨に列す、寛文二年檀越の請に應じて攝津生玉の曼陀羅院に住す、然れとも城市に隣り、喧閙なるを厭ひ、壁上に歌を題して遁れ去り、諸國に周遊して大和長谷寺に至り、一七日を期し絕食念誦す、寶生山に登りて三七日を期し練行す吉野葛城等の山川靈異の地一として至らさるなく、後高野山に皈りて圓通寺快圓に菩薩戒を受け、和泉久井里に往き菴居すること數年、次に池田河の側に居ゐて徧く皇朝の國史實錄古記を讀み、國風を好みて廣く其書を探る、延寶五年河內鬼住山延命寺覺彥に安流灌頂を受け、儀軌二百餘卷を手寫し、生駒寶山寺に

納む　八年手定寂し、其遺命により妙法寺に住す、傍らに一室を搆へ、老母を迎へて孝養を盡す、會徳川光圀萬葉集の註釋を撰せんとして師を召す、師固辭して出でず、然れども其志に感し遂に萬葉代匠記二十卷惣釋二卷を作りて進呈す、光圀大に喜び、白金千兩、絹三十匹を贈りて之を勞ふ、師悉く散じて貧者に給し、且つ寺院の修營に充て一も私するところなし、母歿するに及び退隱して大坂東高津に圓珠院を搆し、俗客を謝し、清修自適す、述懷の作あり「我こそはあしの下折れ一ふしのありとも誰かありとみるへき」光圀時に物を賜ひ起居を問ふこと絶えず、元祿十四年正月二十五日寂す、壽六十二、院の後に葬る、明治二十三年十二月十七日敕して正四位を追贈せらる門人今井似閑、海北若冲、野田忠蕭等あり、著作萬葉集代匠記二十卷、古今集餘材鈔二十卷、源注拾遺十卷、類字名所外集九卷、百人一首改觀鈔、新敕撰集考、和字正濫鈔、河社、各五卷、勢語臆斷四卷、厚顔鈔三卷、日本書紀宴歌頭書、萬葉集總釋、古語拾遺鈔、二四代鈔、和字正濫鈔要畧、年中行事鈔、勝地吐懷編、頭書新撰管家萬葉集各二卷、眞蹟俳諧歌、三十六歌仙贊歌、富士百首、雜記、雜雜記、和歌拾遺錄帖拾遺考要、後撰考宮方人帖各一卷、類字名所補翼鈔七卷、漫吟鈔二十卷等なり、（碑文、行實、近世三十六家集、近世畸人傳、續日本高僧傳、近代各家著述目錄、）

契沖阿闍梨

クーシン　空心　ニーチオー日應を見よ、

クーシン　空深　ゲンショー玄性を見よ、

クージヤク　空寂（……）〔淨土宗〕甲斐某寺の學僧なり、　空寂俗姓生國詳かならず、源空上人の弟子なる九品寺覺明房長西に師事して諸行本願の義を主張し、著作多し、無量壽經疏五卷、善導觀無量壽經疏記八卷、元照阿彌陀經疏鈔三卷等あり、然れども皆傳はらず、師初め生馬大聖竹林寺に住し、後甲斐に入りて淨土敎を弘む、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

クージヤ　空寂　ソーカン相閑を見よ、

クーシユー　空宗　ジユロー樹朗を見よ、

クーシヨー　空性　一九六一……〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、　空性字は痴鈍、俗姓は二階堂氏なり、大覺禪師の法嗣となり建仁寺に住し、後建長寺に留る、奥州に巡化して靈山普門禪福の三寺を開く、正安三年閏七月廿八日寂す、臨終に徒に示して日ふ、雲翳都盡、萬里一天、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

クーシヨー　空性　一九五五　一九九六　〔眞宗〕京師佛光寺第七代なり、

空性字は了源、第四代了海の第三子にして、永仁三年五月朔日を以て生る、延慶元年六月得度し、南北の學筵に遊ふ、正和正年二月五日年二十二、佛光寺第六代明光の後を繼ぐ、此時に方り宗徒中惡人正機の名義を濫用し、放逐無慚を事とするの弊あり、了源自ら矯正の任に當り、四十餘人の高足を諸國に派し、專ら眞宗の正義を宣揚す、元應二年六月寺基を東山今の澁谷に移す、嘉曆二年少僧都に補せらる、此年後醍醐天皇本尊の由來、及び宗門の起原を勅問し給ふ、乃ち第三代源海著す所の宗祖傳記、及び祖書を叡覽に供し、且其敎義を奉答す、正慶元年遠參尾の三州に遊化し、建武二年伊賀に留錫す、延元元年正月八日伊賀を發するの途中に於て邪徒のために要擊せられて寂す、(一說に建武二年十二月八日とも云ふ)、時に年四十二なり、破邪顯生鈔等漢和の撰述數部なり、(本願寺通記、佛敎各宗綱要)

クーショー　空性 (……) 〔眞言宗〕京都仁和寺華嚴院の法親王なり、空性字は元性、崇德天皇の長子にして、諱は重仁、號を華嚴院宮といふ、崇德天皇讃岐に遷りて後磊々として庶人の如し、仁和寺に於て出家し、北院にあり、西行訪ひ來り、共に昔時を語る、翌朝西行去らんとして歌を詠して曰く、「かはる世に影もかはらすすむ月を見るわれさへにうらめしき哉」互に別れを惜みたりといふ、(傳燈廣錄)

クーショー　空照 (二二七九) 〔眞言宗〕越前波着寺の僧なり、空照俗姓は九里氏と云ひ、越前の人なり、二兄あり少藏、九郎兵と云ふ、少藏は國主に從ひて武藏八王寺の役に戰死し、九郎兵は能登侍從に從ひて加賀大聖寺役に戰死す、瑞龍公其絶家を憐みて空照を立て、二兄の後を繼かしめんとす、然るに其母肯せす、二兄の爲めに菩提心を勸め僧となし、且つ越前より金澤に至る、徵明公地を賜ひ波着寺を建つ、此地は横山忠次舊第地なり、元和五年再ひ命あり地を小龍野に轉し、同年六月空照旨を奉して石川郡白山祠鐘銘を作る、盖し加賀藩中僧にして文辭ある者、師を始めとす、寂年月日詳ならす、(燕臺風雅)

クーショーボー　空性房　リョーゲン了源を見よ、

クースイ　空水　ニチオー日應を見よ、

クーセー　空晴 (一五三八—一六一七) 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、空晴俗姓は藤原氏、隆光の子なり、初め延賓已講に就て法相を習究し、後基繼僧都に師事して、益玄旨に達す、承平二年維摩會の講席に座し、少僧都に任し、喜多院に住す、天曆三年興福寺を主とり、一住九年、天德元年十二月九日寂す、壽八十、門下松室の仲算、喜多院の眞喜、興福寺守朝、東大寺平忍の四神足あり、(本朝高僧傳)

クーセー　空誓 (二二六三—二三五二) 〔眞宗〕江戶築地鈔延寺第二代なり、空誓は江戶の人なり、內外の學に通す、本願寺宗學勃興の時に當り、著述を事とす、寬文九年黃檗の鐵眼禪師江戶に下り、淺草海雲寺に於て首楞嚴經を講し、眞宗の肉食妻帶を攻擊す、師築地にありて鐵眼に對抗して講筵を開き、且つ京都より能化知空を請し、大に眞宗の宗義顯揚に力を盡くす、元祿五年十一月三日寂す、壽九十、著作正信偈私見聞五卷、正信偈註解六卷、三帖和讃註解十九卷、御傳探證記十卷、淨土眞宗私問答四卷、因陀羅網十五卷あり、(本願寺通紀、本願寺派

學事史、三餘隨筆)

クーソー 空操 (一五五三) 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、空操は俗姓不詳、春德に師事して法相を受け、寛平五年に維摩會講師なる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

クーゾー 空藏 クワンカイ寛海を見よ、

クーソン 空存 ニチシユン日春を見よ、

クーダツ 空脫 ゲンム還無を見よ、

クーチ 空智 ニンクー忍空を見よ、

クードー 空堂 ニチコン日近を見よ、

クーブツ 空佛 一九七四 二一四〇 〔眞宗〕伊勢專修寺第六代なり、空佛は專空の長子なり、少年多病なるか故に弟定專をして父の跡を繼かしむ、應安二年正月定專に代りて專修寺を主とり、康曆二年四月十四日寂す、壽六十七、(本願寺通紀)

クーヤ 空也 コーシヨー光勝を見よ、

クーヨ 空譽 ギヨクセン玉泉を見よ、

クーヨ 空譽 レンズイ蓮隨を見よ、

クーレン 空蓮 (二四四九) 〔淨土宗〕近江信樂の某菴の僧なり、空蓮は號を廓譽と云ふ、近江信樂の人なり、出家して淨土の念佛を勤行す、現世の利益を示して衆生を導かんとし、岩窟に入りて七日七夜斷食祈願す、遂に靈驗により藕絲を感得す、師自ら南無阿彌陀佛の名號を書して人々に與ふ、之れを禮拜すれは、必す掌中より青黃赤白等の藕絲を生す、人々皆其奇瑞に感服したりと云ふ、示寂年月日詳ならす、(續近世畸人傳)

〔考〕空蓮は寛政頃の人なり、

クージヨー 窮情 カクジヨー覺盛を見よ、

グーホー 藕峯 キヨーコー敬光を見よ、

クンコー 訓公 二一七〇…… 〔淨土宗〕京都知恩院第二十四代なり、訓公は釋蓮社登譽と號す、了曉に師事して法を嗣ぎ、三河信光明寺に住して第二代となり、又州の大恩寺に主となり、其廢頽を興す、後京都知恩院を主とり、永正七年八月十五日遺命して信光寺存牛を推擧し、寂す、壽缺く、(淨土總系譜、祝禱篇)

クンコー 訓光 (……) 〔曹洞宗〕長持寺の開山なり、訓光字は義芳、日向の人なり、東川和尚に依りて出家得度し、遊方して明窻禪師に師事して印可を受け、能登諸嶽山に住し、繼で日向の長善寺に徙る、晚年に至り同國に長光寺を築き、第一祖となり、某年寂す、也壽欠く、(日本洞上聯燈錄)

クンケー 薰契 シヨーシユン韶舜を見よ、

クンドー 薰道 二三二六…… 〔曹洞宗〕江戶青松寺第十二代なり、薰道字は高巖、俗姓は平氏、相模愛甲郡のなり、曾て父の職を襲ひて縣令となり、後之を捨てゝ天王院に投して祝髮受具し、諸老に歷參し、青松寺十洲補道に謁して侍者となり久しくして永平寺に出世す、相模天王院、江戶全勝寺に歷遷す、晚年心靈牛道の後を踵きて青松寺を領す、明曆二年九月五日寂す、壽缺く、西山に塔す、法嗣不中秀的の一人あり、(萬年山志)

クンヨ 薰譽 ジヤクセン寂仙を見よ、

クンヨ 薰譽 ザイゼン在禪を見よ、

クンヨ 君譽 ドーギヨー童堯を見よ、

クラツクリノトリ　鞍作鳥　トリ止利を見よ、

クワ　果　二五四五　〔眞宗〕紀伊栖原村極樂寺の住持なり、果字は碩宗といひ、冷雲と號す、紀伊栖原村の人なり、學漢籍に邃く、兼ねて詩文書法を善くす、常に菊地溪琴と互に相唱酬し、其推すところとなる、寺中常に講筵を設け、後進を教育すること數十年、南紀の學者師の陶冶を受けざるものなし、明治十一年法主の召に應して京に入り、西山校に教授す、校廢せらるゝに及ひ、學林副講補に遷り、十八年六月六日卒然病を發し、京都の僑寓に寂す、輔教職を贈らる、著作冷雲詩鈔三卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

クワコー　果杲　二〇二三　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、果杲は前太政大臣公賢の子、出家して益守成助二師に從ひて、宗要を學ひ、貞治二年十月東寺の長者に任す、其寂年缺く、(東寺長者補任、仁和家記)

クワサアン　過杳菴　ゲンジョー幻成を見よ、

グワウンサンニン　臥雲山人　シユーホー周鳳を見よ、

グワウンソー　臥雲叟　チクー知空を見よ、

グワリユードーニン　臥龍道人　コーゲ高外を見よ、

グワオク　瓦屋　ノーコー能光を見よ、

クワイアン　快菴　ミヨーキヨー明慶を見よ、

クワイアン　快菴　ミヨーキヨー妙慶を見よ、

クワイイ　快意　二三八四　〔眞言宗〕武藏護持院第三代なり、快意字は俊典、父は岡村氏、母は篠田氏の出、大和三昧田村の人なり、十三歲金蓮院賴意の室に入り、快壽僧正に從ひて落髮受戒し、又四度の軌を傳へられ、瑜珈行を修す、十六歲大衆園に列し、常に淳亮周溫に教を開き、宗教の奧義を究む、同二年醍醐寺大僧正有雅に祕藏を授けられ、一流の淵源を究む、而して後豐山にありて講筵を開く、貞享三年卓玄の命により梅心院に住し、元祿八年春室生山を兼ぬ、秋七月將軍綱吉の命を蒙り、江戶彌勒寺に住し、同十一月護國寺に轉住を命せらる、十二月二十二日幕府の執奏に依り權僧正に任せらる、十年正月命ありて觀音堂を再興し、七月僧正に寶永三年十二月大僧正に累進し、四年護持院第二代となる、一住三年同六年職を辭して成滿院を拜領し、此に休隱す、正德三年大和の法喜寺に隱れ、享保九年七月九日寂す、(豐山傳通記、護持院世代記)

クワイウン　快運　二二六四　〔淨土宗〕下野專念寺の開山なり、快運は行蓮社照譽と號す、俗姓は佐藤氏、其生國詳かならず、虎角によりて剃髮受業し、遂に法を嗣ぐ、下野喜連川專念寺を開き、慶長九年七月四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

クワイウン　快運　二四四七　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十九代なり、快運字は音識と云ひ、武藏埼玉郡大澤の人、俗姓は大橋氏、母は今井氏の出なり、幼にして州の增林村福壽院快眞上人の室に入りて剃髮し、後快眞の越後弘誓寺に移るや、席を繼ぎて福壽院を司とり、次で豐山に登り、苦學年を積み、能滿院梅心院を經て明和元年武藏元保谷應德寺に移り、安永元年十二月二十九日幕命により根生院に住し、第十九代となる、同四年十一月十日遂に豐山能化職に進み、翌五

年正月權僧正に任ず、六年正月江戸に任官を謝せんとして發たる留守中に火あり、講堂丈室等悉く烏有に皈す、師直に皈山し、其年八月より起工し、前後五年を費し、遂に舊觀に復せしむ、在職七年にして與喜寺に移り、天明七年三月十四日寂す、壽缺く、著作卓義錄若干卷あり、（新義眞言宗史料）

クワイエン　快圓（……）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、快圓は東南院智舜に師事して三論を學び、且つ法相倶舍を究む、常に東大寺に在りて定春と倶に名あり、時の人空宗の龍蛇倶舍の麟鳳と稱す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

クワイエン　快圓（……）〔淨土宗〕武藏誓願寺の僧なり、快圓は信濃の人、幼にして出家し、諸檀林に遊學す、後木曾の深谷に坐禪し、禪宗の旨を得たりと云ふ、尋て三緣山に登り講席を開く、殊に碧巖集に通ず、後武藏淺草誓願寺に住す、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

クワイオー　快翁　ゲンシュン玄俊を見よ、

クワイガン　快侃　二三四二―二四一六　〔眞言宗〕山城智積院第十八代なり、快侃は是春、自ら邦淑と號す、山城相樂郡下狛の人、俗姓は仲氏、源家の末裔なり、年甫めて十三家、俗舅、明王院快繼の室に入りて得度受戒す、元祿七年九月に四度の瑜伽行を習ひ、九年洛東智積院に入り、化主宥證僧正を拜して請益し、晝夜精進す、更に三摩耶戒を受け、又灌頂を受く、是れ正德三年なり、同五年春醍醐山幸心の室に侍し、兩部の印契眞言を學ひ、諸尊秘軌口訣を受く、享保九年集議評席に入り、眞俗の事務を裁斷す、十九年秋傳法大會精義者に擢てられ、滿山の大衆を導く、元文四年八月化主僧正の命により京都六波羅密寺に住す、寛保二年春智積勸學道場に登り、傳法灌頂を勤む、仝年冬十二月智積院の大衆を統領す、三年夏請に依り蓮臺寺に轉し、同冬仁和寺法王の執奏に依り權僧正に任す、寶曆三年命を拜して智積院の第十八代となる、四年春江戸に往きて、將軍に謁し、下野日光山に詣てゝ東照宮を參拜す、六年二月十二日智積院に於て急病にかゝり翌十三日寂す、壽七十五、臘六十三なり、（新義眞言宗史料）

クワイキヨー　快慶　一八三四―一九一三　七條佛所佛工なり、快慶は法名を安阿彌陀といひ、世に略して安阿彌と稱す、又越後法橋と號し、丹波講師といふ、康慶の弟子なり、其技倆の勝れたるを以て康慶及ひ運慶等と並ひ立ちて東大寺大佛師職に補せらる、作るところの佛像頗る多く、一々記すへからす、一說に後深草天皇の建長五年七月十五日寂す、壽八十といふも詳ならす、（大佛師系圖下學集）

クワイケン　快賢　一七一二―一七九五　〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、快賢は下野の人、廿歲にして比叡山に登り、業を西塔の菩提房に受くること六年、大原に菴居す、寺主師を長講の職に補す、保延元年十一月九日寂す、壽八十四、（本朝高僧傳）

クワイゲン　快元　二一二九……　〔臨濟宗〕某寺の禪僧なり、快元は鄕貫未詳、下野足利學校を中興し、儒典を講究し、學生を敎育す、文明元年四月廿一日寂す、壽缺く、（足利學校書籍目錄）

クワイザン　快山　二三二五……　〔淨土宗〕下總大德寺の開山なり、快山は照蓮社光譽直至と號す、法を普光觀智國師に稟け、行德新宿大德寺の開山となる、寛文五年六月三日寂す、

世壽欠く、(淨土總系譜)

クワイシキ　快識　一五二七……　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十一代なり、快識字は大賢、武藏埼玉郡神明下村の人なり、幼にして郡の尾曾根村照蓮院快龍に隨つて剃髮し、增林村福壽院に住し、後豐山に登り第一座となる、弘化四年八月西新井總持寺宥圓の請によりて同寺に住し、安政六年十月三日江戶根生院に晋み、慶應二年十一月十五日幕命を蒙り、豐山能化職に補す、在職二年にして同三年十一月十二日寂す、壽欠く、(新義眞言宗史料)

クワイジン　快深(二〇二八)　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、快深字は宗俊、俗姓生國詳かならす、中性院聖憲に師事して、宗乘を究む、應安年中聖憲より釋論の微旨を受け、釋論定俊鈔十卷を作る、寂年缺く、(結網集、諸宗章疏錄)

クワイジユ　快壽　二二七四 二三二六　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第八代なり、快壽字は春圓、薩摩の人、俗姓は神戶氏なり、幼年大乘院快性に從ひて薙髮し、十六歲四度の瑜珈行を修し、十八歲三聚耶戒、及び兩部の灌頂を受く、寬永十年智積院に往き始めて講場に學び、密乘に通す、正保四年の春、宗俊元俊等と俱に園城寺に遊び、亳忠に天台の宗學を學び、實雄に法相の敎義を學ひ、更に醍醐寺に登り、法務大僧正寬濟に謁し、兩部の大法諸尊の契印等を傳ふ、慶安二年の夏、尾張蓮華寺の請によりて其寺に移り、一住五年、承應二年の春、再ひ智積院に往き、隆長僧正に謁す、同年十一月尾張中納言光友の命に依りて長久寺に遷り、一住七年、三年將軍家綱の命を受けて、豐山に登り、主位に補す、寬文元年正月僧正に任せらる、仝年六月日光山に詣て、江戶に至り、幕府に請うて豐山の院宇を南麓に遷さんことを以てす、將軍之れを許して疆界を增すこと數百步、且つ黃金七百五十兩を賜ふ、師喜んで山に歸り、專ら經營に務め、工成るを得たり、寬文六年五月十五日寂す、壽五十三(豐山傳通記)

クワイシユー　快修　一七六〇 一八三二　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、快修は中納言大宰師俊忠の子なり、最雲源暹二師に師事して台敎を學び、應保二年天台座主に任し、永万二年僧正に轉任し、仁安元年再び天台座主、に還補す、承安二年六月十二日寂す、壽七十三、(天台座主記)

クワイジユン　快順　ハンヱ工範惠を見よ、

クワイシヨー　快成(……)　〔眞言宗〕紀伊高野山寶性院の大學講なり、快成は高野山の富那密林論師なり、玄海に大法心印璽寶器を付せられ、二十八世祖となる、高野寶性院に住し、傳法僧都に任せらる、付法一人あり信弘といふ、(續傳燈廣錄)

クワイセン　快川　シヨーキ紹喜を見よ、

クワイゼン　快禪(……)　〔眞言宗〕京都尊勝寺の律師なり、快禪は敎王僧都といふ、詳傳なし、付法の弟子四人あり、(傳燈廣錄)

クワイゼン　快禪(……)　〔淨土宗〕加賀圓誓寺の僧なり、快禪は加賀小松の人、幼にして圓誓寺に入りて僧となり、佛事を習ふも、一も得るところなし、師僧圍碁に耽りて常に碁客を迎ふ、師每に傍らにありて之を觀、竊かに得る所あるが如し、一日客散じて後老僧師に試に圍碁を許し、師の

歳幼なるを侮り、井目を張らしめ、數日の後には已に相抗する能はさるに至る、後金澤に到り遍ねく碁名ある者と鬪ふに、復師の右に出づるものなし、遂に諸州に漫遊して東都に來り、傳通院に寓居し、本因坊の門に入る、當時增上寺門主棊を好み、碁客數輩を招き師と鬪はしめしに、師の右に出づるものなし、是より師の名大に顯れ、駿河猶無と共に其名最も高し、或は師を以て優れりとなし或は猶無を以て優れりとなし更に其甲乙を知る能はず、玆に於て日を卜し大に湯島の茶樓に會して、其優劣を定む、看官皆輸贏を以て賭す、師鬪ひて輸く、凡そ碁の法は前後二局を以て期となす、前局終りて再び後局を圍みしに、師の石勢又難澁し、將に潰へんとす、猶無誇りて曰く、優劣既に知るべしと、師潛思良久しうして石を下すに形勢一變して猶無の石勢支離分裂し、遂に相抗する能はず、石を投じて去る、玆に於て師の名益盛んにして、人皆段に登らんことを勸むれども肯んぜず、凡そ棋官の家登段の品料を設け、高手あれば金を以て品料を買ふなり、師自ら謂ふ金錢を出して品位を買ひ、自ら足れりとなすものは論ずるに足らず、余の如は但對秤し輸贏を以て品料を定むるのみと、終に段に登らず、江戸に在ること數十年、辭して鄕里に歸らんとし、路信濃を過ぎ、病みて寂す、其年時及壽缺く、(棋僧快禪小傳)

クワイソー　快叟　リョーキョー良慶を見よ、

クワイソン　快尊　二四〇三 二四七八〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、快尊は和泉の人なり、十一歳宥快の室に入りて侍童となり、十六歳得度して三密を學ひ、早く灌頂を受く、諸方を巡化し、講を張る、應永の末良雄の讓を受けて寶性院に住す、二月十五日天野宮に始めて兒童の論席を啓き、竪者は西方院の華壽、題者は五智院の朝算なり、仁和寺の法務奏して紀伊名手莊の租稅を納れて問答會に充つ、此問答會は在昔開かれしもの、中頃廢りしを、師再興したるなり、文政元年七月二十三日寂す、壽七十六、(本朝高僧傳)

クワイソン　快尊　二三六三 二四三三〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十七代なり、快尊字は賢海、大和添下郡菅條村の人なり、幼より州の龍福寺快傳に就て出家し、豐山に登り、留學三十四年、第三席より武藏浦和玉藏院に轉住し、後彌勒寺に移り、明和三年豐山能化に任ず、主職にあること七年、安永二年四月十五日寂す、壽七十一、(新義眞言宗史料)

クワイソン　快存　二三〇七 二三八四〔新義眞言宗〕山城智積院第十三代なり、快存字は是心といひ、薩摩の人なり正保四年三月廿一日頴娃郡開聞山下に生る、父は池田氏、母は安東氏の女なり、甫めて十歳邑の瑞應院快譽に事へ、內外の諸籍を習讀す、瑞應院は薩摩の總廟にして、開聞神社の別當なりとす、萬治三年の春瑞應院後住快義僧都に從ひて薙染受戒す、翌寛文元年の春瑜伽十八道、金剛界護摩軌、及ひ胎藏大法を受け、數百ヶ月慇懃に習修す、寛文四年快義僧都鹿兒島の護國山大樂寺安養院に移住す、師其道場にて重ねて十八道、金胎兩部大法、及ひ護摩軌を受く、修練一百餘日に及ふ、僧都同府經園山寶成就寺の灌頂道場に幢幡儀庭を建て、縵幕を四隅に張り、大阿闍梨となるの日、師に三摩耶戒場に登り、菩薩心戒を受け、兩部自姓內庫に入り、五部圓果灌頂を沐す、已に三

寶一流の印璽を中心に受く、寬文七年快義亦移轉して同宗坊津一乘院に住す、師猶は隨從す、翌年春快義法幢を同院に建て、傳法灌頂を授く、師金剛壇に登り、無漏尸羅心地を受く、遂に印璽を付せられ阿闍梨職位を受く、寬文十二年秋初めて笈を負うて洛東智積院に入り、議論の席に列す、運敞僧正師の器宇を知り、師の爲めに灌頂壇を開き中性院一流灌頂印信を許可す、金剛頂經を學ひ、法幢を都部に張り、兼ねて大和下駒寶光院に住し、唯識を興福寺に習ふ、寶光院にて辨才天法を修すること一百日、此に於て辨才天生身を現したりと云ふ、延寶四年夏總州西光寺義忍和尙薩州一院の請により、西光寺を師に付す、師乃ち東行す、運敞僧正詩を賦して餞りて曰く、千里問津嘗㆓苦辛㆒、敝衣空鉢每安㆑貧、喜師一日董名刹。適意從㆑今轉㆓秘輪㆒、と、旣にして師寺を補營し、盛に衆生を度し、延寶六年再ひ智積院寮舍に掛錫し、山中の諸知識に謁し、十一月九日慧空法師に見えて具足戒を受け、佛舍利七粒を授けらる、是れ鑑眞和尙請來する所のものなり、師一生之を敬信し、後智積院寶藏に納め、小塔を建つ、同年律師に任せられ翌春少僧都に昇任せらる悉曇の妙旨を究め、天和元年大僧都に任せらる、同二年春法印に敍せらる、また智積院信盛僧正に就きて請益し、同七月病に罹る、同月十三日大殿火を失す、師病床を蹴りて起ち、佛藏經卷を出したりといふ、一年空覺と共に高野山に登り、韻聲決擇を學ひ、翌年春總州に皈へり、梵網仁王等の經を講す、同國德滿寺隆平和尙の室に入り、印可灌頂を受く、和尙之を器許して地藏報恩二流の蘊奧を授け、重ねて傳法一流を許可せらる、元祿某年武藏護持院造營の時、師選はれて供養師となる、將軍の命により梵字にて不動尊種子を書して呈す、將軍喜ひて時服、及ひ狩野常信筆の繪を與へらる、十一年夏西光寺に法華經を講し、聽衆には諸宗の碩德三百餘に及ふ、寶永二年薩隅日三州の太守の請により皈省して坊津の一乘院に住し、院室の摩尼珠院を兼帶す、此に於て太守有司に命して一乘院の寺家悉皆を再營せしむ、同四年冬當山先師大乘現住騰雲上人の附法を得、十一月法幢を建てゝ衆を化す、翌年の夏に戒經を講し、寶永六年太守の命により麑島の大乘寺に轉住し、同國中等王院、及ひ院家の尊壽院を兼帶す、翌七年春先師騰雲和尙の許可附法を受け、金胎曼茶羅内庫を開き最上大乘密場に傳法灌頂を授く、頂受するもの二百餘人なり、正德元年智積院大衆の招によりて、京に上り、六波羅密寺に住し、中興十四世となる、兼ねて常盤精舍に掛錫し、翌年春醍醐山に攀ち、法務寬濟大僧正に謁し、又報恩院流の儀軌秘釋の源底を汲み、重ねて瓶瀉を受く、同七月幕府の命により武藏眞福寺に移り、新義派の寺院を檢柄す、秋金胎兩部内陣を開きて報恩印璽秘軌を授け、又傳法印秘釋を下總成田新勝寺院主に授く、享保元年秋將軍の命を拜して智積院の十三世となり、先師大阿闍梨正僧正義山大和尙の付法を受けて一山大衆の敎主となる、又中性院二十六世の法務に兼補し、同年勅旨を拜し參內して龍顏に咫尺し、玉盞を賜ひ、權僧正に任せらる、翌二年江戶に往き、將軍に謁し、白銀數百枚時服數重を賜ふ、三年春命あり、參內拜謁して正僧正に轉し、爾後宮中の御筵に侍し、榮遇せらる、越えて四年微疾を示し、伏見に退隱す、薩摩出水城主幸善寺を開き、喜

志久利神祠の別當寺となし、師を請して開山となす、此に於て中性流印璽を二世宥徹和尙に傳へ、以て當寺代々法印心法脉となす、享保九年八月廿九日寂す、壽七十八、臘六十六、（快存上人傳）

クワイデン　快傳　ライゲン賴玄を見よ、

クワイドー　快道　二四一〇／二四七〇　〔新義眞言宗〕江戶根生院の學僧なり、快道字は林常と云ふ、上野勢田郡山上の人、幼にして學問を好み、郡の相應寺の住僧某に句讀を受け、其寺の靜閑を愛して數日家に皈らさることあり、後遂に住僧某に就いて得度す、稍長して大和長谷寺に遊び、益學問を力む、相應寺地僻にして學資給せす、同窓に請うて傭書し、僅に學資を支へたり、六合釋に關する書を作りて化主法住僧正の說を駁し、其怒に遭うて退いて高野山に遊び、益得る所あり、後東皈し武藏浦和玉藏院に住し、數〻江戶に出て、傳通院等に聘せられて講席を開き、大に盛譽あり、江戶第一の碩學と稱せらる、遂に江戶湯島根生院に住し、講席を開き、門學市をなしたり、文化七年二月廿一日寂す壽六十、師性質豪放にして小節に拘らす、其根生院に住せんとして二度選に當らす、寺社奉行同院の役僧を召して其故を問へは、役僧曰ふ、快道は一世の碩學なれとも、常に佛を禮せす、經を誦せす、根生院は天下の祈願所なれは、かゝる僧をば迎へ難しと、奉行曰ふ、天下の祈願所を置く所以は、濟生益物にありて禮佛誦經にあるにあらす、何ぞ快道を迎ふるに妨くる所あらむ、こゝに於て三たひ選して住することゝなりたりと云ふ、著作、七十五法念流鈔、入阿毘達磨論玄談、阿毘達磨論標條、倶舍皥記、倶舍玄談、因明疏詳定記、同海鏡、同門念鈔、六合釋精義、同辨誤、同指門答釋、六合釋章疏標目、同叢林評註、十句義論叢林、金七十論私記、同操鏡、攝八囀義了間廓答、大疏懸談、同隨聞記科文、同口の疏私記、管絃相承義隨聞記、敎主十九人異說集、釋論疏愚記、同私記、同法敏疏一覽、唯識四ヶ疏辨量鈔、玄弉唯識量緣、新舊兩譯對話章、觀所緣了論義疏、同義述、衆師立敎目錄、瑜伽地論疏、同釋勘文、文句義決鈔、起信論私記、雜藏經略述、年忌月忌本說、日月行路集異鈔各一卷、金七十論疏、唯識述記顯義鈔、義林章玄談要述、四敎義補忌鈔各二卷、倶舍法義略記、因明攻鼓、各三卷、十句義論決擇、攝八囀義論述意、釋論疏、同鈔、二十唯識論權衡鈔各五卷、學要稠林、法華玄義文句見聞錄各八卷、論義私記十三卷、因明疏量義鈔二十卷、倶舍法義三十卷、外に手澤通計五十四部、百五十六卷あり、（碑文、新義眞言宗史）

クワイリユー　快龍（……）　〔淨土宗〕山城淨華院の僧なり、快龍姓は沼氏、泉州大島の人なり、九歲にして波手の寶圓寺に入り僧となる、後水戶中納言に請せられて同地に至り、後京師淨花院に住するにあたり水戶中納言崇敬して修粮五十石を寄す、壽八十歲にして寂す、（鎭流祖傳）

クワイテン　回天　二五一三……　〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、回天は能登の人なり、幼にして加賀金澤野田寺町の融山院に投して得度し、京燦等と共に磨甎に侍し、遂に其法を嗣き、興聖寺に出世す、嘉永六年八月三日寂す、門下瑑環坦山あり、

クワイテツ　恢徹　リョーセー良誓を見よ、

クワイリン 恢麟 ……二四八四 〔淨土宗〕攝津一心院の僧なり、恢麟は性相の學に通し、一心院に住し慧解を以て聞ゆ、文政七年正月三十日寂す、壽缺く、著作法相伊呂波名目四卷あり、(淨土宗史料)

クワイリユー 恢龍 ……二三三六 〔淨土宗〕江戸長福寺の僧なり、 恢龍は直蓮社玉譽順爾と號す、秀惠上人の俗弟にして、久しく貴屋に師事して、淨土教を學び、業成りて江戸長福寺に住す、長福寺は本眞宗の寺なりしを、後江戸麹町に移して淨土宗となせしなり、延寶四年十二月二十五日寂す、壽欠く、嗣法の高弟に雲臥一人あり、(淨土總系譜)

クワイレイ 恢嶺 二四九九 二五四五 〔淨土宗〕山城中等院の僧なり、恢嶺字は痴堂、曠蓮社廓譽と號す、俗姓は岸上氏、天保十年八月八日を以つて尾張名古屋に生る、年甫めて十三にして州の實瑞寺文嶺に投じて、薙髪し、安政元年武藏に遊び、三緣山增上寺に掛錫し、居ること二年、一宗の譜脉を承け、後四方に周遊し、偏く諸名宿に參し、尾張に皈り、木村春樹の家に寓して大藏經を閲讀す、明治元年增上寺學寮に主となり、六年中講義を拜し、十三年少教正に累遷す、師嘗宗學の久しく奮はざるを憂へ、明治三年首唱して東西兩都に淨土宗教黌を設け、推されて東部司教となり、轉じて西部司教となる、師教育の任にあること十餘年、其薫陶を受けたる者の甚た多く、教綱大に張る、十六年宇治平等院に主となり、十八年二月十五日寂す、壽四十七、臘三十五、明治二十九年師の功績を銓考して正僧正を贈らる、著作選擇集纂註五卷、說教惟中策九卷、科註原人論講義五卷、隨意說教、悉曇體文、科註原人論、同增補、釋門小字彙、各一卷、及因明入正理論講錄の遺稿等あり、(碑文、淨土宗經論章疏錄)

クワイウシ 煨芋子 ゲンセツ玄節を見よ、

クワイエン 悔焉 チヨーゼン澄禪を見よ、

クワイガン 晦巖 ドークワク道廓を見よ、

クワイサイ 槐齋 ヨクシユー沃州を見よ、

クワイソー 魁叟 エーバイ永梅を見よ、

クワクエー 廓榮 ユーアン遊安を見よ、

クワクエン 廓圓 ……二三一一 〔淨土宗〕江戸傳通院の僧なり、廓圓號は直譽、一に急水と云ふ、相模の人始め昌國師に師事し、後廓山に師事す、瓜連の常福寺に住し、慶安三年五月幕命に依て傳通院に擢てられ、大に法門を弘通す、四年四月二十日將軍家光薨し、寛永寺に葬る、師は增上寺位產に謀り、增上寺に葬らんとを請はんとするも位產故ありて諾せず、師憤恨し同廿五日舌を咬んで寂す、壽詳ならず(淨土總系譜、鎭流祖傳)

クワクエン 廓圓 ……二二九四 〔淨土宗〕肥前報恩寺の開山なり、 廓圓は源蓮社岩譽と號す、俗姓は大隈氏、肥前三根郡下津毛村の人なり、幼にして州の船名西蓮寺に入りて剃髪し、觀智國師に師事して法を嗣ぐ、後州佐嘉郡高木に報恩寺を築きて開山となり、寛永十一年二月十七日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクオー 廓翁 ……二三一五 〔淨土宗〕安藝心行寺の開山なり、 廓翁は念蓮社專譽と號し、紀伊和歌山の人なり、信譽の室に投じて宗乘を學び、遂に其眞訣を嗣ぐ、安藝廣島に心

行寺を剏めて開山となり、明暦元年二月二十二日寂す、（淨土總系譜）

クワクオー 廓翁（……）〔淨土宗〕尾張光照寺の開山なり、廓翁は正蓮社覺譽と號す、俗姓は山田氏尾張愛知郡の人なり、廓呑の室に入りて剃髮し、武藏岩付の玄譽に法を嗣ぐ、後郷里に皈り、南野村に光照寺を開きてこれに住し、盛んに法化を布く、寂年、及壽欠く、（淨土總系譜）

クワクオー 廓翁　シユーシユー宗周を見よ、

クワクガン 廓含 ……二二九一〔淨土宗〕江戸敎運寺の開山なり、廓含は法蓮社嚴譽と號し、武藏の人、了學に師事して淨土敎を學び、嗣法の後江戸麻布龍土敎運寺の開山となる、寛永八年六月二十一日寂す、世壽欠く、（淨土總系譜）

クワクゲン 廓源 二二三七 二二九八〔淨土宗〕京都知恩院第三十三代なり、廓源は本蓮社圓譽欣心と號す、武藏河越の人、其俗姓詳かならず、出家して蓮馨寺に修學し、法を感譽に稟く、初め蓮馨寺に主となり、次に光明寺に移る、幾何ならずして相模小田原に隱棲し、伊勢山田淸雲院に閑居す、後公命により京都知恩院に住して第三十三代となり、寛永十五年七月四日寂す、壽七十二、（淨土總系譜）

クワクサン 廓三 二二三五 二二六六〔淨七宗〕三河刈屋某菴の僧なり、廓三俗姓不詳、三河刈屋の人なり、早年得度し、梵行淸白、目を揚けて女子を見ず、十九歲關東の學林に遊ひ、淨土敎を究め、信解開發す、一時鳳來寺に詣し、一七日の間斷食稱號して菩提心を祈禱す、晩年苅屋の茅菴に住し、寶永三年六月五日寂す、壽三十二、（續日本高僧傳）

クワクサン 廓山 二二三二 二二八五〔淨土宗〕增上寺第十三代なり、號は定蓮社正譽、俗姓高坂氏にして、高坂昌信の二男なり、永祿二年五月三日甲斐國八代郡市部村に生る、幼より經書兵馬の事を學ぶ、當時大守信玄兵を諸國に出し、昌信每に之に從うて功あり、廓山屍を見て出塵の志を起す、父母之を許さず、元龜三年三月十四歲にして國府の尊躰寺に入りて剃度を求め後安譽上人圓也の門に入り、辯論を以て學徒に尊重せらる、源譽觀智國師に師事し、優才卓量を愛せられ、常に同門了的と共に對論して止ます、將軍德川家康常に座下に召して之を寵す、慶長十二年秋九月日蓮宗事あり、遂に仝十三年十一月十五日江戸城中に宗論を開く、廓山了的之に當り、日蓮宗の日經、來源、玄聰、玉雄、琳碩、可圓に對す、判者は高野院僧都賴慶なり、廓山遂に彼等を論破し了る、幕府日經等の法衣を脫せしめ、翌年二月其耳鼻を剕りて牛車に載せて市中を牽かしむ、仝年十二月將軍池上本門寺、中山法華寺、碑文谷法華寺等に命し、念佛墮獄の經證を出さしめ、又仝十四年本山久遠寺、京師廿一寺に同事を命せしも、皆之れ無きを言ふ、家康の駿河に移るや、命に依て法を說き、世事を談ず、此地に來迎院を開く、家康命じて南都に唯識瑜珈の深義を究めしむ、元和元年六月八日廓山出てゝ淨土宗の法度を駿府に受く、仝八年十月傳通院より入りて增上寺の第十三代となる之より先命に依りて傳通院を中興し、爾後同院に於て將軍の大母君の追福を祈るを例とす仝九年三門を改造す、寛永二年八月廿六日寂す、享年五十四增上寺に塔す（鎭流祖傳、三緣山志）

クワクシユン 廓春 ……二三一五〔淨土宗〕尾張全順院の開山

なり、廓春は行蓮社念譽と號す、廓呑に就て剃髮受業し、尾張名古屋に全順院を開く、明曆元年三月十二日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクゾン 廓存 二三三四……〔淨土宗〕備前台宗寺の開山なり、廓存は行蓮社信譽一童と號す、其鄕貫詳かならず、業譽還無上人に師事して法を嗣ぎ、備前岡山台宗寺を開く、延寶二年六月二十日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクデン 廓傳 二三二三……〔淨土宗〕信濃專稱寺開山なり、廓傳は大蓮社廣譽と號し、信濃更級郡の人、俗姓は瀧澤氏なり、法を源底に嗣ぎ、州の南方村專稱寺を開く、寬文三年九月十四日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクデン 廓傳 二二八三……〔淨土宗〕安藝淸岸寺の開山なり、廓傳は圓蓮社晃譽と號し、周防山口の人、俗姓は增田氏なり、法を雲譽に嗣ぎ、安藝廣島淸岸寺を開く、元和九年三月二十五日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクドー 廓道 二三〇四……〔淨土宗〕信濃願行寺の僧なり、廓道は源蓮社想譽と號す、其鄕貫詳かならず、岌譽道山上人に投じて剃髮し、後、智譽上人に師事して法を嗣ぐ、信濃願行寺に住し、正保元年正月二十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

クワクドー 廓道 リョーネン良然を見よ、

クワクドー 廓同 二二九八……〔淨土宗〕安房量壽寺の開山なり。廓同は信蓮社行譽是還と號す、出羽の人其俗姓詳かならず、潮龍に師事して法を嗣ぎ、安房岩井宮谷村に量壽寺を開きてこれに住し、寬永十五年十月十三日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

クワクドン 廓呑 二三一四……〔淨土宗〕尾張建中寺の開山なり、廓呑は業蓮社成譽と號す、俗姓は夏目氏肥後の人なり、幼にして出家し、聞悅に師事して宗乘を究め、傳通院增上寺の學頭となる、初め結城弘經寺に住し、盛んに法化を布く、慶安三年尾張侯德川光友の請に應じて建中寺の開山となり、敕賜紫衣を拜す、承應三年九月十八日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクニヨ 廓如 ギテン義天を見よ、

クワクホー 廓法 二三四三……〔淨土宗〕伊勢知相寺の開山なり、廓法は聖譽と號し、其鄕貫詳かならず、伊勢津の天然寺開山露牛の弟子にして、法を隨波に嗣ぐ、天然寺に住して其中興となり、又州久居の知相寺を開く、天和三年九月十五日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワクム 廓無(……)〔淨土宗〕大和靈巖院第二代なり、廓無は念譽と號し、其鄕貫詳かならず靈巖に投じて剃髮受業し、奈良靈巖寺に住して第二代となる、寂年、及壽欠く、(淨土總系譜)

クワクヨ 廓譽 クワイレー恢嶺を見よ、

クワクヨ 廓譽 ケンジユ見壽を見よ、

クワクヨ 廓譽 リドー利道を見よ、

クワクリユー 廓龍(……)〔時宗〕薩摩鹿兒島某寺の僧なり、廓龍は鄕貫詳ならす、出家して時宗に入り、薩摩鹿兒島に居して一宗の學業を勵み、元祿頃時宗第四十四祖尊通の撰したる播州問答領解抄の後六卷を記述して前後完成

す、師示寂年月日詳ならす、(清淨光寺記錄)

クワクリヨー 廓亮　ダイエー大瀛を見よ、

クワクドン 鶴曇 二三〇九……〔曹洞宗〕肥前皓臺寺の禪僧なり、鶴曇字は雪山俗姓生國詳ならす、國照寺一庭融頓に依りて徹證し、常陸長興寺に主となり、一庭の寂後席を踵きて皓臺寺に移る、慶安二年九月十日寂す。壽欲く、法嗣月舟宗材の一人あり(日本洞上聯燈錄)

クワツドー 瞎道 二四三三……〔曹洞宗〕武藏養光寺の僧なり、瞎道字は本光、俗姓は新井氏なり武藏の人、幼にして出家し、武藏の石神安盛寺にあり、指月に師事して其法を嗣き、川崎養光寺に住し、屢々江戸吉祥寺栴檀林に法席を張り。正法眼藏等を講す、安永二年十月五日寂す、著作正法眼藏參本二十卷、大智偈頌參註三卷、衆寮淸規求寂參二卷、曹山解釋一卷、五位顯訣參註一卷、心王銘參註一卷、永平廣錄點茶湯。宏智錄國字註、若干卷等あり。(禪宗史料)

クワツホ 活步　ソゲン祖玄を見よ、

グワツアン 月菴　コーエー恍瑛を見よ、

グワツアン 月菴　シユーコー宗光を見よ、

グワツアン 月菴　シヨーセー紹淸を見よ、

グワツイン 月因　シヨーシヨ性初を見よ。

グワツオー 月翁　シユーキヨー周鏡を見よ、

グワツオー 月翁　チキヨー智鏡を見よ、

グワツカイ 月海　ゲンシヨー元昭を見よ、

グワツカン 月感　エンカイ圓海を見よ、

グワツカン 月澗　ギコー義光を見よ、

グワツカン 月鑑　コジユン虛淳を見よ、

グワツクワイ 月快　サクデン策傳を見よ、

グワツケー 月溪　クワンシン觀信を見よ、

グワツケー 月溪　リユージヨー龍乘を見よ、

グワツコ 月湖 (二一一二)(……)　鎭西の醫僧なり、月湖は潤德齋、一に明監寺と云ふ、明に渡り錢塘に寓し、醫を以て鳴る、明の景泰二年全九集を著し、後又濟陰方を著す、(皇國名醫集)

グワツコ 月瀾　シユーチユー宗冲を見よ、

グワツコー 月江　オーウン應雲を見よ、

グワツコー 月江　ジヨーモン正文を見よ、

グワツコー 月航　ゲンシン玄津を見よ、

グワツコー 月皎　シユーガイ衆鎧を見よ、

グワツコー 月畊　ドーネン道稔を見よ、

グワツサイ 月西　テンクー天空を見よ、

グワツサン 月珊　コキヨー古鏡を見よ、

グワツサン 月山　ユーシヨー融照を見よ、

グワツシ 月枝　ゲンコー元皓を見よ、

グワツシン 月心　キヨーエン慶圓を見よ、

グワツシユ 月珠　カクリヨー覺了を見よ、

グワツシユー 月舟 (……)〔臨濟宗〕但馬圓通寺の僧なり、月舟は其鄉貫師承詳かならず、但馬美含郡圓通寺に住す、書畫を善くし、常に近江琵琶湖の水を取りて艸隸を作る、故に能く湖水の水を辨知するを得たり、(皇朝名畫拾彙)

グワツシユー 月舟 二三四五 二三九五〔淨土宗〕伊勢天德寺の僧な

り、月舟號は等譽、越前福井の人、早年出家し、攝津平野滿願寺に住す、次に伊勢洞津天然寺に移つる、專ら念佛し化導せらるゝもの甚多し、一信者市治なるものあり、深く月舟の教誨に服し、念佛怠らす、月舟謂ひて曰く、我れ往生の時汝扈從するかと、市治曰く、僕必す扈從せんと、享保二十年正月六日微疾あり、京都の客舍に寂す、壽五十一なり、幾もなく市治之を聞きて曰く、嗚呼和尚業に已に往生したまふ、予前約を違はしと即ち天然寺の佛殿に上り、高聲念佛し、俄頃にして命終す、衆皆奇遇と稱す(日本高僧傳)

グワツシユー 月舟 ジユケー壽桂を見よ、

グワツシユー 月舟 シユーコ宗胡を見よ、

グワツシユー 月舟 シユーリン宗林を見よ、

グワツシユー 月嘯 コハク虎白を見よ、

グワツシユン 月春 ユーカン融鑑を見よ、

グワツシヨー 月性 二四七七 二五一八 〔眞宗〕周防遠崎妙圓寺の住持なり、月性は清狂と號す、天下に周遊し、名儒傑士と交を結ふこと殆んと二十餘年、護國扶宗を以て任とし、內は僧門の怠弊を警醒し、外志氣の軟弱を振興し、切に海防諸策を講論す、吉田松陰、賴三樹、僧默霖の徒と最も同氣相投するものなり、藩老數延き見て喜ひて其說を容る、法主も亦徵し見て其論を可とし、頗る用ゆるところあり、安政五年年四十二病の爲に寂す、明治二十三年六月二十日三十三回忌辰に際し祭粢料として金五拾圓を下賜せらる、土屋楨撰するところの傳あり、清狂吟艸の首に付して世に刊行せり、著作佛法護國論、鴉片始末考異各一卷清狂遺稿あり(學苑談叢、本願寺派學事史、近世偉人傳)

グワツシヨー 月照 ニンコー忍向を見よ、

グワツゼー 月婿 シヨートー紹等を見よ、

グワツセン 月泉 シヨーイン姓印を見よ、

グワツセン 月僊 ゲンズイ玄瑞を見よ、

グワツセン 月船 ゼンヱ禪慧を見よ、

グワツセン 月船 チンカイ琛海を見よ、

グワツセン 月筌 二三三一 二三八九 〔眞宗〕大坂定專坊の住持なり、月筌字は崇信、別號を難思議弗知と稱す、大坂天滿に生る、九歲にして剃度す、其師父諸方に遊化せらる、故に幼齡より寺務を攝し、每歲夏秋の間門葉を巡化すること百餘村に及ふ、十六歲にて定專坊を住持し、佛閣を輪奐し、門徒を敎育す、その暇分陰を惜み、業益〱進む、三十歲にして起信論を講し、次いで倶舍論五教章を講す、各疏記を著せり、享保元年四十六歲にて隱退す、其後絕えて世事に管らす、終日机に倚りて書を讀み、足門庭を出てす、近隣と雖も其顏を見る人なし、他門の論疏を講せす、專ら宗乘を研究せらる、自ら居るところの閣を蓮華藏といふ、每月十五日華藏會を設けて門弟を試む、享保十四年十一月十五日夜急疾に罹りて寂す、壽五十九、遺命して薄葬せしむ、遺偈に曰く、脫二破艸鞋一登二蓮華臺一園林遊戲、快哉快哉、と、著作散善義會解、蓮閣偶筆、本典字義辨疑談、眞宗佛身問答、親見聞往生祥瑞事迹、兩谷合海、倶舍破我品科文、自照錄各一卷、蓮華藏世界圖一幅、四帖疏宗釋往生禮讃念報錄、正信偈剿說、各三卷、稱讃淨土經駕說、散善義如是解、各四卷、駕說義繇、剿說義憑、崑崙拾璜、

各七卷、序分義會解九卷、玄義分會解、高僧和讃啓解、各十二卷、往生論註過哉鈔、定善義如是解、各十三卷、淨土和讃啓解十八卷、選擇集正脈二十卷、本典私考三十卷、眞宗關節五部十五卷、（護法篇一卷、報謝辨一卷、源頭論三卷、不來迎問答四卷、不回向問答六卷）、及び結華藏會序並標式、倶舍頌疏闡幽鈔、起信論疏、啓曜鈔、各若干卷あり、（淸流紀談、本願寺通紀、本願寺派學事史）

グワツソー　月窓　ミヨータン明潭を見よ、

グワツゾー　月藏　クワンシユン桓舜を見よ、

グワツゾー　月藏　ホーカイ法海を見よ、

グワツタクドーニン　月澤道人　亮隅リヨークーを見よ、

グワツタン　月湛（二三八八―二四六三）〔曹洞宗〕越中高源寺の住持なり、月湛字は洞水といひ、全苗と號す、俗姓は黑川氏、越中新川郡新莊の人なり、甫めて十四歳、富山淸源寺膽全に投して薙染し、光嚴灯外の印記を受けて高源、光嚴、雲龍、全福の諸寺に住し、享和三年六月二十日寂す、世壽七十六法臘六十三▲增補見よ

グワツタン　月潭　ゼンリユー全龍を見よ、

グワツチヨ　月渚　ゲントク玄得を見よ、

グワツデン　月田　シユーシユ宗種を見よ、

グワツデン　月殿　シヨーケー昌桂を見よ、

グワツドー　月堂　エンシン圓心を見よ、

グワツドー　月堂　シユーキ宗規を見よ、

グワツハ　月坡　ドーイン道印を見よ、

グワツホー　月峰　シンリヨー辰亮を見よ、

グワツホー　月峰　リヨーネン了然を見よ、

グワツホー　月蓬　エンケン圓見を見よ、

グワツミヨー　月明（二〇四六―二一〇〇）〔日蓮宗〕妙顯寺第五代なり、月明字は具覺、俗姓は藤原氏、應永の間宗門本迹の論を起し宗祖の旨に違する者あり、師之に對して一致の義を立て辨鋒觸る可からさるなり、是に於て皆其過を悔ひて一致の義に從ふ、師護國利生論を述べ後小松帝に上る、應永十八年辛卯四月大僧都と爲る、永享中僧正に任せらる、十二年庚申九月八日寂す、享年五十五歳、坐夏詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

グワツリン　月林　ドーコー道皎を見よ、

クワンア　觀阿（二五二八）〔眞宗〕京都專修寺の住持なり、觀阿は月珠師の門弟にして、善く其衣鉢を傳ふ、京都專修寺に住持し、祖山の堂職に任す、事眞俗に亘り、頗る其功あり、明治の初頃寂す、諭して得法院といひ、勸學を贈らる、著作一卷あり、本願成就文一滂錄といふ、（學苑談叢）

クワンウン　觀雲　タオン慈音を見よ、

クワンエン　觀圓（……）〔華嚴宗〕大和尊勝院の學僧なり、觀圓は觀眞律師に師事して傳燈大法師に任ず、尊勝院に住し、華嚴經及五敎章を講ず、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

クワンエン　觀圓（一七六一）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、觀圓は久しく三井寺に居りて諸師の門を敲き、顯密の學を究め、大小乘に涉り、阿闍梨に任す、康和三年十一月鳥羽離宮に第一番の論席を開き、比叡山の嚴勝阿闍梨と宗義を論決す、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

クワンオー　觀應（二三七〇）〔新義眞言宗〕京都智積院の

學僧なり、　觀應は巧智房と號し、下野の人なり、出家して智積院に登り、業成りて智山に敎莚を張る、寶永七年八月二十八日寂す、壽五十五、著作五敎章冠註十卷、西谷名目頭書、光明眞言照闇鈔蒙引、各四卷、補忘記、初學暗誦文、各一卷、父母恩重經科註首書三卷あり、(新義眞言宗史)

クワンカク　觀覺(………)〔淨土宗〕美作菩提寺の僧なり　觀覺字は智鏡俗姓秦氏、美作の人なり、出家して延曆寺に登り、天台宗の敎義を學ひ、後南都に遊びて法相宗を學ぶ、美作菩提寺に住し、俗姪を養うて弟子となす、即ち源空上人なり、暮年上人の高風を慕ひ、却て弟子の禮を執りたりと云ふ、示寂の年月日缺く、(淨土傳灯錄)

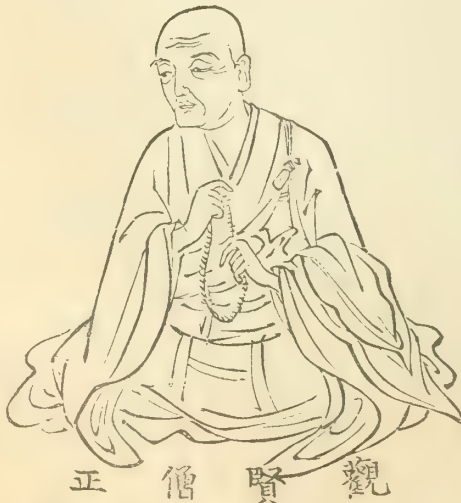
カワンカク　觀覺(………)〔眞言宗〕高野山多聞院の學僧なり、觀覺は其俗姓生國詳かならず、出家して高野山に登り、密敎を傳習して其奧義に達す、建治中多聞院を構へてこれに住す、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

クワンキ　觀規　一四四二………〔………〕紀伊能應寺の僧なり、觀規は俗姓三間名の干岐なり、紀伊國名草郡の人、天性彫刻に巧妙なり、寶永十年に發願して釋迦の丈六像並に脇士を造る、後十一面觀世音菩薩像高十尺許なるものを造る、半成りて老哀の爲め功を畢らず、延曆元年二月十一日州の能應寺に病み、十五日に至り寂す、弟子明規あり、(靈異記)

クカンキヨー　觀鏡　ショーニユー證入を見よ、

クワンキヨーイン　觀行院　ニチエン日延を見よ、

クワングワツ　觀月　二五一九………　(眞宗)美濃不破郡表佐村善行寺の住持なり、　觀月は皆乘院と號す、文政元年以來天台四敎義、歩船鈔、指要鈔、法華諸品大意、妙法蓮華經、法華玄義を講し、天保三年七月十日擬講となる、翌年より淨土論起信論記を講し、嘉永二年閏四月廿六日、(一に十六日)嗣講に進み、翌年より往生要集、入出二門偈を講し、安政六年七月四日寂す、(眞宗史料)

クワンケン　觀兼　一八九九／一九六八　〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、　觀兼は觀圓法師の子なり、實伊、實行、審基、幸尊、圓助の諸師に歷事して宗義を學ひ、僧正に任して三井の別當となる、六十四歳大阿闍梨位に登り、延慶元年五月廿九日寂す、壽七十(三井續灯記)

クワンケン　觀賢　一五一三／一五八五　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、　觀賢は讃岐の人、俗姓は秦氏なり、聖寶行化して讃岐を過ぎ、路傍の水を掬して手を洗ふ、時に一兒沙場に遊戲してこれを見て其水の不淨なることを告ぐ、聖寶の曰く、諸法豈淨不淨あらんや、と、兒曰ふ淨不淨なく

觀賢僧正

んば、何ぞ手を洗ふや、と、聖賓其機辨に屈してこれを奇とし父母に乞ひ、携へ歸りて鞠養す、即ち師なり、稍長して密敎を傳へ、兼て三論を究む、寛平七年冬傳法灌頂を受け、新に般若寺を捌して大に敎乘を演ぶ、昌泰三年仁和寺を主とり、延喜九年東寺の長者となる、十四年夏勅により神泉苑に於て雨を禱り、二十の作僧に各度者一人を賜ふ、此歲石山寺に住し、十九年醍醐寺座主に任ず、二十一年勅賜紫衣を奉して高野山に入り、十月空海に弘法大師の號を賜はらんことを奏請す、幾何ならずして座主となり、延長三年僧正に任し、六月十一日寂す、壽七十三(密宗血脈鈔、元亨釋書、本朝高僧傳)

クワンコー 觀杲(………)〔眞言宗〕近江石山の僧なり、觀杲は土佐入寺と稱す、雅眞座主の弟子、仁海僧正の法弟なり、其法を受け去りて三昧耶戒を學び、毘盧大觀を修し、遂に悉地を得たり、(續傳燈廣錄)

クワンコー 觀高(一九七二)〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、觀高は慶長元年東寺の長者に任し、正和元年正僧正となる、寂年缺く、(東寺長者補任)

クワンゴー 觀豪 二四〇七 二四七三 〔新義眞言宗〕山城智積院第二十九代なり、觀豪字は融光、紀伊岩手の人、越前三國性海寺大信に師事し、後智積院に登り、顯密の學を究む、六波羅密寺眞福寺を經て、文化七年五月幕府の命を蒙り、智積院第二十九世能化となる、智積院非常資金として四百兩を納め且永世不斷光明三昧の資として千兩を納む、能化職にあること四年、文化十年六月二十四日寂す、壽六十七、(眞福寺世代)

クワンコク 觀國(………)〔天台宗〕武藏川喜多院の學僧なり、觀國鄕貫詳ならす、川越喜多院に住し、大僧正に昇る、著作起信論裂網疏講錄六卷あり、

クワンゴン 觀嚴(………)〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、觀嚴は鎭西の人、久しく三林寺にありて諸老に詢ひ、大小乘に通す、寂年、壽缺く、(本朝高僧傳)

クワンゴン 觀嚴 一八一一 一八九六 〔眞言宗〕大和東大寺の別當なり、觀嚴は其鄕貫師承詳かならず、東寺一の長者となり、文曆二年閏六月二十九日東大寺別當に任じ、嘉禎二年十一月二日寂す、壽八十六、(東大寺別當次第)

クワンサン 觀山 二三八五 二四四七 〔融通念佛宗〕大和奈良法德寺の學僧なり、觀山字は即道といふ、上總匝礎の人なり、初め出家して長谷寺に投し、眞言宗を學び、法住快道等に交る、後轉して融通念佛宗に皈し、大和郡山の圓融寺、奈良の法德寺に住して著作事とす、明和八年融通本母集十卷を撰す、これ天台の二百題に傚ひ、圓門章の要目百題を揭け、問答躰を以て宗意を說けるなり。天明七年十一月廿一日寂す、壽六十三、著作、融通本母集十卷、圓門章明眼記、圓門章和解、勸進俗衆記、各五卷、圓門章論講、圓門章遊意、各四卷、融通圓極四重譚、融通宗義決擇辨、引接贊口義、各一卷、(以上宗乘)俱舍論講述十卷、略述法相義講述四卷、西谷名目開講要義、般若心經秘鍵講述各二卷、四明十義書講述、梵網經講述、廿唯識論疏私記、若干卷、(以上餘乘)あり、(大源山記錄、西本良察氏返信)

クワンシン 觀心(………)〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、觀心俗姓生國詳かならず、初め傳法院の學頭を司と

り、後華遊院に主となる、寂年、壽缺く、(本朝高僧傳)

クワンシン　觀心（一八七一）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、觀心號は實悟房俗姓生國詳かならす、高野山に住し碩學の譽あり、華遊院會廣の後を繼きて同院にあり、學頭に昇る、寂年缺く、(結綱集)

〔考〕觀心は建暦前後の人ならむ

クワンシン　觀信（……）〔眞宗〕大阪定專坊の住持なり、觀信字は月溪といふ、月筌の後を嗣きて大阪天滿の定專坊に住す、月筌の行狀を書して笛峯道人行狀といふ、著作笛峯道人月筌行狀一卷、法華讃題宗記六卷、寶章私鈔九卷、大經眼髓十一卷、二卷抄會解十四卷、本典高堅記十三卷、正像末讃執恩解十八卷、稱讃淨土經駕說關記十五卷、玄義分隨釋二十卷、往生論註眼髓二十五卷あり、(淸流紀談、本願寺派學事史)

クワンシン　觀眞（一六一一―一六八九）〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、觀眞は大和葛下郡の人、光智僧都に隨事して華嚴を學び、事理法界の旨を得たり、寬弘八年維摩會の講主となり、權律師に任す、治安三年東大寺に住し、六年にして同寺に寂す、時に長元二年三日十九日なり、壽七十九(本朝高僧傳)

クワンジユイン　觀樹院　ニチクー日空を見よ、

クワンシユク　觀宿（一五〇四―一五八八）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、觀宿俗姓生國詳ならす、幼にして出家し、二十三歲登壇受戒し、道義法師に從ひて華嚴を學ひ、眞雅僧正の室に入りて瑜珈を受く、聖寶僧正より灌頂を傳へ、學內外に渉る、延喜十年內供奉となり、十七年東大寺の寺務を管す、延長二年六月旱す、詔により七月一日神泉苑に請雨經法を修す、三年春律師に任し、八月東寺の長者となり、五年秋、少僧都に進み、翌年大僧都に轉す、十二月十九日寂す、壽八十五臘六十二、(密宗血脉鈔、本朝高僧傳)

クワンシヨー　觀性（……）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、觀性は事相に通し、法橋となる、著作三六鈔一卷あり、

クワンシヨー　觀昭（一九一九―一九九二）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、觀昭は圓觀實伊の二師に就きて顯密二教に通し、道譽一時に高し、乾元二年國師號を賜ひ、官大僧正に任す、元弘二年二月十日寂す、壽七十四、(三井續灯記)

クワンシヨー　觀照　ギヨーユー行祐を見よ、

クワンジヨー　觀成（一三七二）〔三論宗〕大和元興寺の僧なり、觀成は新羅の人、皈化して、元興寺に住し、三論宗を弘む、始めて鉛粉を製す、其賞として持統天皇六年五月、絁十五匹、綿三十屯、布五十端を賜はる、後、和銅五年九月十五日大僧都に任せらる、示寂の年時缺く、(日本書紀、七大寺年表)

クワンシヨーイン　觀照院　ニチギヨー日饒を見よ、

クワンジヨーイン　觀靜院　ニチミヨー日明を見よ、

クワンズイ　觀隨　ニチシユー日秀を見よ、

クワンゼン　觀禪（二三四三―……）〔淨土宗〕京都東山の僧なり、觀禪は初めの名を白鷗と云ひ、然蓮社天譽と號す、俗姓は河原氏、三河碧海郡の人なり、知鑑に依りて剃髮受業し、感隨に師事して益々宗乘の奥義を究む、性隱逸にして勤めて苦行

た修し、山城東山に幽棲し、天和三年五月十六日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

クワンチ　觀智　一三七六……〔……〕奈良の僧なり、觀智は新羅の人なり、持統天皇三年四月、新羅の國使に隨ひて明聰等と共に來り、遂に皈化す、慶雲四年に維摩會の講師となる、和銅五年九月十五日律師となる、靈龜二年の頃寂す、(日本書紀、七大寺年表)

〔考〕日本書紀には學問僧とありて、新羅國の人なりとも判しかたし、今は七大寺年表に明記せるものに依る、

クワンチ　觀智〔……〕〔淨土宗西山派〕山城禪林寺の僧なり、觀智字は朝阿、安房の人なり、淨音觀智に師事して淨土宗西山派の學を受け、洛東禪林寺に住し、後又武藏在原郡鵜木の光明寺に遷りて盛んに法化を弘む、寂年、及世壽欠く、(淨土總系譜)

クワンチコクシ　觀智國師　ゾンオー存應を見よ、

クワンチユー　觀中　チユータイ中諦を見よ、

クワンチヨーイン　觀長院　カイカク海覺を見よ、

クワンテツ　觀徹　二三四八 二三一一〔淨土宗〕肥前大音寺開山なり、觀徹は法蓮社傳譽と號す、筑後の人、俗姓は藤原氏、安武義久の第三子なり、九歲高敎寺に得度し、十四歲關東に遊び、常陸大念寺に留る、慶長十九年長崎に遊ぶ、當時西洋人其學藝宗敎を日本に敷かんとす、幕府これを禁制すれとも功なく、酷刑を以て罰し、漸く止む、然れども獨り長崎は、西洋人の雜居する所なるを以て、民風自ら變す、鎭臺これを患ひ、師を請して寺院を市內に構へ、中道院と號す、師專ら敎導に務む初め檀越と稱する者僅かに二十三人なりしが師の德に化し、來皈するもの日に益多し、是に於て耶蘇宗徒大に沮み、遂に師を害せんと謀る者あるに至る、特に鎭臺師に双劍を帶ぶるを許し、師をして自から護らしむ、元和二年鎭臺幕府に建言し舊博多街西洋館の地を師に賜ひ、寺となさしむ、翌三年落成し、正覺山大音寺と號す、これ長崎に寺あるの始めなり、寬永十五年將軍家光師を召見て物を賜ふ、慶安四年十一月十三日寂す、壽六十四、臘五十六、寬文中幕府師の功を思ひ、特に白金百錠を第三世法譽に賜ひ、修寺料と爲さしむ、(碑文)

クワンテツ　觀徹　二三九一……〔淨土宗〕相模鎌倉光明寺の第五十八代なり、觀徹は圓蓮社義譽淨覺眞阿と云ふ、京師の人なり、幼にして觀禪に師事し度を受く、十五歲にして東國に遊び、性相の學を究む、大僧正雲臥の命により、小金東漸寺に住し、學を講す、盛年の頃より念佛を勵み、日課一萬聲怠るなし、元祿十三年七月四日誓うて阿彌陀經十萬卷を誦せんとし、十二年にして功を畢ふ、即日日課念佛を增し、三萬聲とす、正德二年江戶崎大念寺に住し、享保四年日課念佛を增し、六萬聲とす、同五年水戶常福寺に住し、大に菩薩戒を弘通す、同十一年鎌倉光明寺に轉住す、十六年十二月十八日寂す、壽缺く、著作三部經合讃七卷、智光淸海兩曼陀羅合讃二卷、圓頓戒誘蒙一卷あり、(現證往生傳、蓮門經籍錄)

クワンドー　觀道　二四一二 二四八二〔眞宗〕周防平尾村眞覺寺の住持なり、觀道字は昭義といふ、安永の初め同國超倫圓淨謙讓等の諸子と同しく笈を負ひて東上し、攝津住吉靈松寺義端

に從ひて外典を學ぶ、其後京都に往き、本覺に掛錫す、勸善隆山等の諸師に隨ひて、專ら性相を研磨す、經歷に從ひて華嚴法華等を學ぶ、天明二年三十一歲にして慧雲に謁し、遂に師資の約をなす、享和三年夏長門萩清光寺の學校に安樂集を講し、文化元年夏興御殿の侍講となり同七年の安居に高僧和讃を附講す、文政五年八月二日萩より歸る途中三田尻光明寺に投宿し、暴疾に罹り同七日寂す、壽七十一、著作、眞宗義林章一卷、眞宗護法編、神佛辨妄編、各二卷、正信偈慶歎錄、文類聚鈔敬信錄、安樂集庚子錄補註各三卷、眞宗正訛篇八卷、三帖和讃採集記二十四卷あり、（淸流紀談、本願寺派學事史）

クワンドー　觀道（……）〔時宗〕武藏教念寺の學僧なり、觀道字は三光明といひ、また單に三光といふ、時宗西部學寮の寮主にして、學識該博の聞あり安政の頃寂す、著作選擇獅子絃、選擇貴舊抄、選擇皮肉抄、選擇骨目抄、選擇知津章、弟子武田義徹、卍山寶辨、河野覺阿、靈犬等あり、俱に世に聞ゆ、

クワンドー　觀導　シゼン至善を見よ、

クワンニチ　觀日（……）〔淨土宗西山派〕山城東山の學僧なり、觀日字は聖深其鄕貫詳かならず東山の證入に師事して淨土の宗義を受け、門下盛んなり、範承、了觀、盛信、聖入、等皆當時に聞ゆ、寂年及壽欠く、（淨土傳灯錄、淨土總系譜）

クワンニヨイン　觀如院　ニチトー日透を見よ、

クワンミヨー　觀明（……）〔淨土宗西山派〕山城安養寺の學僧なり、觀明俗姓未詳、東山證入の門に入りて淨土の宗義を受け、洛東安養寺に住して敎化盛なり、示寂の年月日欠く、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

クワンミヨー　觀明　チューカク仲覺を見よ、

クワンミヨーイン　觀妙院　ニチソン日存を見よ、

クワンモ　觀茂　リヨーシユ良守を見よ、

クワンユー　觀勇（一八五八―一九二九）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、觀勇は信濃の人、出家して觀敎法師に師事し、著作を以て事とす、其作る所の抄、天台三大部、俱舍論三十卷、及び大乘止觀授決集等あり、文永六年十一月十二日寂す、壽七十二、（三井續灯記）

クワンヨ　觀譽　ウンリユー雲龍を見よ、

クワンヨ　觀譽　ユーシユー祐宗を見よ、

クワンリ　觀理（一五五四―一六三四）〔眞言宗〕山城醍醐寺の學僧なり、觀理俗姓は平氏、奈良の人なり、幼にして父を喪ひ、家亦貧なり、師佛前に向うて母を養はんことを祈る、藤原忠平其敏穎なるを聞き、召して左右に侍せしめ寵愛す、後、興福寺に投し、剃髮受戒し、法相を學び、悉く玄旨に達す、後延敞に三論を受け、兼ねて密敎を傳ふ、天曆六年維摩會の講師となり、天德四年權律師に任し、醍醐寺第九代の座主となる、應和二年八月帝南北の法匠を淸涼殿に召し宗義を論決せしむ、師時に無量壽經を講し、延暦寺餘慶と對論す、康保二年少僧都に任じ、安和元年大僧都に進み、明年二月東大寺に主となる、居ること二年にして東南院に移り、天延二年三月寂す、壽八十一（一說に、八十四）、著作唯識章十五卷、四種相違制三卷、三論方言義、諸經論指事文集、若干卷等あり、（密宗血脉鈔、本朝高僧傳、）

クワンリン 觀輪 ギョージョー行乘を見よ、

クワンレー 觀靈 二三二……〔淨土宗〕和泉宗見寺の開山なり、 觀靈は行蓮社梵譽と號し、紀伊廣瀨の人なり、聞悅に師事して和泉堺宗見寺の開山となる、寬文元年七月十一日寂す、世壽詳かならず、(淨土總系譜)

クワンレツ 觀烈 ポーカイ房海を見よ、

クワンロク 觀勒 (一二八四)〔……〕 大和法興寺の僧なり、 觀勒は百濟の人なり推古天皇十五年十月に來朝し曆本、天文、地理、遁甲、方術の書を貢獻す、乃ち書生三四人を選びて師に就きて是等の書を學ばしむ陽胡史玉陳は曆法を學び、大友村主高聰は天文遁甲を學び、山背臣日並立は方術を學び、皆其業を成せり、同卅二年四月に一僧あり斧を以て祖父を毆つ、天皇之を聞きたまひ、詔して諸寺の僧尼を推問し、之を捕へしめたまふ、觀勒乃ち諸寺の僧尼の爲に上表し、赦されむことを請へり、表に曰ふ、「夫佛法自㆓西國㆒至㆓于漢㆒經㆓三百歲㆒乃傳㆑之至㆓於百濟國㆒而僅一百年矣、然我王聞㆓日本天皇之賢哲㆒而貢㆓上佛像及內典㆒未㆑滿㆓百歲㆒故當㆓今時㆒以僧尼未㆑習㆓法律㆒輙犯㆓惡逆㆒是以諸僧尼惶懼以不㆑知㆑所㆑如、仰願其除㆓惡逆者㆒以外僧悉赦而勿㆑罪、是大功德也、云々、天皇其請を聽許したまふ、同年に僧正僧都を置き、師を僧正となし、鞍部德積と云ふものを僧都となす、我國に僧正僧都の官あるは是を以て始とす、師これより諸寺の僧尼を檢校す、當時寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人あり、師の示寂の年時缺く、(日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳)

觀勒僧正

クワンイ 寬伊 (……) 〔眞言宗〕山城安祥寺の僧正なり、 寬伊は大納言僧正といふ、兼慧の傳燈を受け、安祥寺に在り、付法一人成慧といふ、(後傳燈廣錄)

クワンイン 寬胤 一九六九 二〇三六 〔眞言宗〕山城勸修寺第十五代の長吏なり、 寬胤は後伏見天皇の第七子なり、延慶二年に生る、幼にして勸修寺に入り、下髮して東大寺の戒壇に登る、詔を受けて顯密を兼學し、嘉曆三年十二月八日大僧正敎寬に從ひて傳法灌頂を受く、建武四年長吏に補し、宣して親王となり、東大寺の別當に任す、此間慈尊院の榮海に傳法を請ひ、金剛寶閣にて灌頂を受け、心印を相承して第二十八祖となる、道寶所附の安祥寺流を受け、安祥寺の敎宣に其祕密藏內道場儀式並に院席を附せらる、貞和四年東大寺の別當を辭す、觀應年間再ひ同職に補せられ、大井の左管領を命せらる、延文五年東寺の長者法務となり、十二月法務を辭す、長者にあること僅に七月、故に譜に載せさるなり、貞治年中東大寺の別

當を辭し、宣して特進に叙す、六年又東大寺の別當に復し、應安の年長吏を尊信に附して退閑し、永和二年四月三日寂す、壽六十八、號して後安祥寺といふ、付法の弟子、尊信、俊然の二子あり、（東大寺別當次第、後傳燈廣錄）

クワンイン 寛印（……）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、寛印俗姓は紀氏、丹後與佐郡の人なり、出家の後良源源信の二師に從ひ、經論を討究し、內供奉に勅任す、後丹後に皈り、古寺に閑居し、專ら法華を誦す、寂年及壽欠く、（元亨釋書、本朝高僧傳）

クワンウン 寛雲（一四九〇）〔華嚴宗〕大和東大寺別當なり、寛雲は鄉貫詳かならず、天長七年東大寺別當に任す、寂年、及壽缺く、（東大寺別當次第）

クワンウン 寛運（一七八七）〔眞言宗〕山城仁和寺の僧都なり、寛運は京都の人、藤原爲房の子、濟暹の弟子なり、大治二年三月三寶院にて職位灌頂を受く、賢覺其敎授たり、又無三昧耶戒を重受す、（續傳燈廣錄）

クワンエ 寛慧（一九六二 二〇〇三）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、寛慧は內大臣源通重の子なり、禪助和尙に師事して宗旨を學ひ、曆應三年東寺の長者に任し、同四年權僧正に任す、康永二年二月二十二日寂す、壽四十二、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

クワンエン 寛圓（一八四二）（……）三條一流六代佛工なり、寛圓は朝圓の二子なり、法橋に叙せらる、壽永年代の人なり、（僧綱補任）

クワンカイ 寛海（……）〔眞言宗〕山城法琳寺の別當なり、寛海は中納言法印といふ、成巖の職位を受け安祥寺を兼ねて金蓮院に居る、詔して小栗栖の別當となる、付法の弟子兼慧一人あり、（後傳燈廣錄）

クワンカイ 寛海（一九二四）〔淨土宗〕山城大光明寺の開基なり、寛海字は空藏、東關の人なり、長樂寺隆寛の法を受けたる長空上人に師事して一流の宗義を傳へ、山城伏見に大光明寺を建立す、文永の頃戒壇院圓照に就いて戒を受け法化益盛んなり、寂年及壽欠く、（淨土傳灯錄、淨土總系譜）

クワンカイ 寛海（二二五一 二三一九）〔眞言宗〕京都東寺百九十二代の長者なり、寛海は花山院左大臣定熙の子なり、一條關白左相內基の猶子なり、天正十九年に生る、二十年五月宣して准三后となり、慶長二年堯信の室に入る、六月二十八日得度して息慈戒を受く、同日長吏に補す、時に年七歲なり、九年法眼となり、十八年正月權大僧都に遷つる、九月十八日東寺觀智院僧正空盛に從ひて傳法灌頂位を受く、十九年德川家康安祥寺を以て高野山寶性院に寄す、時に師安祥寺の長吏たり、天和元年權僧正に叙し、寛永九年大に轉す、慶安四年八月詔を受けて東寺百九十二代の長者法務に補し、護持の大國師となる、万治二年十二月十三日寂す、壽六十九、後施無畏院と稱す、（後傳燈廣錄）

クワンカイ 寛海（二二七四 二三三八）〔新義眞言宗〕飛驒丸岡中臺寺の開山なり、寛海は字を定譽と云ふ、常陸笠間の人、海老名氏なり。十五歲にして勝福寺歡傳に就いて度を受け、廿八歲にして水戸寶鍾寺鍐杲僧都に就いて二摩耶戒を受け、兩部灌頂を受く、三十歲にして出遊し、智積院に投し、元壽僧正に就

いて一宗の教義を究む、慶安八年越前瀧谷寺の請に應し、承應二年再び智積院に登り、隨長僧正に就いて教義を究め、醍醐の寛濟大僧正に謁して秘密儀軌を傳ふ、尋いて越前に赴き、灌頂壇を建立す、寛文二年飛驒守本多重昭の請に應して丸岡中臺寺の開山となる、一住三年にして瀧谷に還る、同四年智積院に登り、運敞僧正の下にあり第一座となる、同六年八月仙洞御所に於ける論議の際、上首となり、義辯を以て顯はる、同八年勅命を拜し雨を祈りて靈驗あり、同年運敞僧正の命により山科妙智院の荒廢を中興す、延寶六年十月朔寂す、壽六十五、(瑞林集、智山通志)

クワンカイ　寛海　二四〇九 二四九五　[天台宗]近江比叡山楞嚴院阿闍梨なり、寛海密號は遍照金剛、字は快潮、後豪潮と改む、八萬四千煩惱主人、又は無所得道人と號す、肥後玉名郡山下村眞宗安養寺塔頭專光寺の二代貫道和尚の二男なり、母の名は松野といふ、寛延二年六月十八日に生る、兄を昇道と呼び專光寺の三代たり、寶曆五年九月三日父二子に告けて曰く、我嘗て天台の僧侶たらんと欲せしも志を遂くる能はさりき、今幸に汝等二子あり、故に兄は我か後を嗣き、弟は天台の僧となれ、と、師之を領し、父に伴はれて同郡天台宗繁根木(ハネギ)山壽福寺に赴き、豪旭阿闍梨を禮して剃髮し、十六歲春比叡山に登り、南溪吉祥院第一代慈門實榮籠山比丘に從ひて發心し、次て正覺院執行探題豪恕大僧正の會下に於て住山修學十餘年に及ぶ明和五年九月二十日比叡山の灌頂壇に入りて三密瑜珈の大法を傳受す、安永五年七月豪旭和尚病むを以て、師俄に國に歸る、幾もなく和尚寂す、檀信の請によりて壽福寺の席を繼く、時に年二十八歲なり、師持律嚴正、苦修練行し、時々六波羅密行相、佛母准胝懺、准胝尊獨部法等を修し、道譽大に揚かる、四衆歸服し、四國九州の諸侯大に渴仰す、往々諸侯の屈請を受けて諸所に法輪を轉す、師眼に宗派を置かず、徧く諸人を化す、其人に與ふる歌あり、其意を見るべし「往生はなむあみたふて事たれりこれより外を思ふへからす」「秋の野の草の葉毎に置露のそのほと〳〵に移る月影」「月花に迷うて少し樂まん悟りきつてはいらぬ春秋」聖護院宮盈仁一品親王の奏により內勅を奉して參內し、某の妃局の病を加持す、賞として准胝觀音の像、及ひ黃金十枚を賜ふ、後屢々召せとも辭して赴かず、光格天皇聖護院宮を介し詔して京都東の森積善院(今上京區聖護院町熊野神社の東邊にあり)を賜ひ、專ら諸人の病を加持す、親王の執奏により、勅して寛海大師の號を賜ふ、肥後の領主細川氏に請せられて熊本に歸り、次て豐前彥山の精舍に移る、道餘書畫を樂しむ、時の名僧尾張萬松寺の珍牛と道交厚し、文化十四年春尾張侯病む時、師請を受けて彼地に往きて加持す、其請命により萬松寺に留錫すること三年なり、知多郡岩窟寺に住す、是れ太守の命に依るなり、文政四年藩命を蒙りて江戶に赴き、市ヶ谷邸に入り、尾張中納言齊盛卿の病を禱る、茲に於て江戶の士民歸仰深く、相競ひて師の加持を受く、此秋九月中旬尾張に歸る、師岩屋寺に住すること凡そ八年專ら護國利民の祝禱を嚴修し、傍ら大堂伽藍を再建し、能く什寶を修繕す、間々阿彌陀の尊像を畫き、之を村落に配與して、大に念佛の法門を弘宣す、太守の請により愛知郡諸輪村長榮寺を再興す、次て復た御祈願所建

クワン(寛)カ

立の命を受け、維學心院の舊地柳原をトして堂宇を剏し文政六年四月工事成る、乃ち長榮寺を移し柳原御祈願所と公稱す、文政七年四月十日珍牛和尚の三回忌日に萬松寺に赴く、此頃紀伊に德本上人あり、師之と交る、是より先き長崎に遊ぶ、淸人程赤城と會見し、天台山圖を摸寫せんことを約す、後赤城送り來りたれば比叡山淨土院の寶庫に納めたりといふ、文政八年四月二十四日故豪恕大僧正の一周忌に當り比叡山に登る、天保六年七月三日寂す、壽八十七、（寛海大師行業略記）

クワンキン　寛欽 二一七四／二二二三 〔眞言宗〕山城勸修寺第二十五代の長吏なり、寛欽は伏見院二品中務卿貞敦親王の子なり、後奈良上皇の猶子となる、母は三條前關白實香の女なり、永正十一年に生る、天文元年七月宣して親王となり、海覺法親王の室に入りて得度す、時に年十九歳なり、便ち長吏に補し、安祥寺天王寺の檢校を兼ね、八年三月十五日慈尊院大僧正實尊に隨ひて傳法灌頂職位を受け、第三十八祖となる、永祿六年十一月十一日寂す、壽五十、稱して後染王院といふ、（後傳燈廣錄）

クワンキヨー　寛慶 一七〇四／一七八三 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、寛慶は右大臣俊家の子、母は相模守秀範の女なり、出家して慶範、廣算、經暹、賢暹の諸師に天台教を學び、保安二年天台座主に任ず、同四年十一月三日寂す、壽八十、（天台座主記）

クワンギヨー　寛曉 一七六三／一八一九 〔眞言宗〕京都仁和院の僧なり、寛曉は堀河天皇の皇子、華藏院の聖惠親王に從ひて兩部の密灌を受け、大治元年仁和寺の覺法、女院の產を祈る時師五壇の數に與る、仁平三年春東大寺の寺務に補し、秋天皇の病を禱りて權僧正に任し、相尋きて大僧正に轉す、平治元年正月八日寂す、壽五十七（本朝高僧傳）

クワンク　寛救 （一六〇五） 〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、寛救は出家して華嚴を習究し、延長六年六月十七日東大寺別當に任ず、後辭して承平三年九月二十八日再び別當となり、天慶八年還任す、寂年、及壽缺く、（東大寺別當次第）

クワンクー　寛空 一五四二／一六三〇 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、寛空俗姓は文室氏、京都の人なり、初め聞行、神日、觀賢の三師に從ひ灌頂法を受け、後宇多法皇に就きて重ねて灌頂を受く、法皇師に仁和寺の圓堂院を付し、天暦二年東寺の長者となる、權少僧都に任し、四年金剛峯寺の座主に補し、八年大僧都に轉す、香隆寺に任し、法務となる、天德四年雨を禱りて權僧正を與へられ、康保の初め亦雨を禱りて僧正に轉す、天祿元年諸職を辭し二月六日寂す、壽八十九、洛北の蓮臺寺に居りしか故に蓮臺僧正と呼ふ、（東寺長者補任、元亨釋書、本朝高僧傳）

クワンサイ　寛濟 二二五三／二三二〇 〔眞言宗〕東寺百九十三代の長者法務なり、寛濟は水本法務大僧正といふ、正覺僧正の室に入りて得度し、學業長して具支灌頂を源朝に受け、幸心院十六世の席に居る、同師の法を傳へて三十九祖となり、權僧正に任す、寛永十九年七月朔日大に轉し、十一月四日東寺二の長者に加補す、明暦二年二月護持僧となり、四年五月二十日東寺百九十二代の法務長者に補し、万治三年六月二十三日寂す、壽六十八、（續傳燈廣錄）

クワンシン　寛眞（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の學講なり、寛眞は加賀の阿闍梨と稱す、松橋の法院淨眞の入室入壇弟子なり、意敎を禮して燈光を嗣き、兩祖の堂奥に至たる、（續傳燈廣錄）

クワンシン　寛眞（……）〔眞言宗〕山城仁和寺の學講なり、寛眞は京都の人、右大臣俊家の子、性信親王の法を嗣く、（傳燈廣錄）

クワンシン　寛信（一七四四―一八一三）〔眞言宗〕山城東寺三十九代の法務なり、寛信は勸修寺贈太政大臣高藤の八世、參議右大辨大藏卿爲房の子なり、應德元年に至る、寛治七年に得度し、康和五年十月勸修寺權別當に補せらる、十二月三十一日東大寺准得業の宣を賜ひ、嘉承元年最勝講の聽衆となり、天仁元年灌頂壇に登り、大僧都嚴覺より灌頂を受く天永元年六月四日勸修寺別當に任し永久元年東寺に入り二年維摩會の講師となり、以後屢〻諸會の講師となる、保安二年故御所の門を扣きて小野流の極秘を受け、勸修寺七代の長吏となる、大治元年五月三十日元興寺別當に任し長承三年權少僧都となり、永治二年十二月二の長者に加へらる、二十六日大僧都に轉し、久安元年十月東寺三十九代の長者となり、二年正月法務を兼ね、三年正月十四日東大寺別當となり初めて御齋會講師となる、類顯鈔秘傳授集を錄して後進を策勵し、六年安祥寺の寺務を兼ね仁平三年正月東寺四十一代の法務に復す、三月七日に寂す、壽七十、付法の弟子、念範、行海、明海、淳寛、寛緣、寛照、仁濟等あり、（後傳燈廣錄、本朝高僧傳）

クワンシユン　寛春　エカイ慧海を見よ、

クワンジユン　寛順　センソー泉奘を見よ、

クワンジヨ　寛助（一七一七―一七八五）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、寛助は源師資の子なり、幼にして遍照寺の經範僧都に隨ひ瑜伽敎を學ふ、十九歲阿闍梨に任し、承曆四年春性信親王を拜して傳法灌頂、及ひ密軌を受く、成就院に居り、道譽高し、康和五年正月五日堀河天皇詔して五壇の法を修せしむるに方り、金剛夜叉の法を行ふ、長治元年權少僧都に任し、二年夏東寺の長者となる、秋八月遍照寺に住し、嘉承二年大僧都に轉す、仁和圓鏡の二寺を補し、此年護持僧となりて圓宗東大廣隆の諸寺歷領す、天永元年六月彗星東に出つ、詔を受けて宮中に孔雀經法を修す、其功によりて阿闍梨五人を成就院に置く、翌年春法務を兼ね、權僧正に任し、永久三年秋八月天皇の病を禱り、其功により南北三會の講師に準して僧綱に任すへき旨を命せられ、乃ら灌頂阿闍梨となる、四年夏正僧正に轉し、翌年春法勝寺を主とる、天永元年四月重ねて東大寺の寺務を補し、五月神泉苑に雨を禱り、冬最勝寺に移つる、保安二年秋白河上皇不豫の際、五壇の法を修し、其功によりて大僧正に轉す、天治元年三條の內裡に中宮の產を禱る、師孔雀經北斗の法を修すると凡そ二十度、皆靈應あり、王侯士大夫庶人皆歸恭す、稱して法關白と呼ふ、天治二年正月諸職を勇退して寂す、壽六十九、寶塔院に葬むる、（本朝高僧傳）

クワンシヨー　寛照（一八三九）〔眞言宗〕山城勸修寺の學講なり、寛照は伯僧都といふ、伯太夫源顯章の子、神祇伯顯重の孫なり、治承三年四月十二日三寶院にて傳法灌頂を受く、眞海阿闍梨其敎授たり、師初め寛信の法を受け再ひ眞海に受

く、(續傳燈廣錄)

クワンシヨー　寛昌（一八四五）〔天台宗〕播摩書寫山の學僧なり、寛昌字は淨眞と云ふ、文治の初め榮西禪師宋に入らんとして太宰府に寓す、時に老嫗一兒を携へ來りて曰く、此兒は平教盛の季子なり、平氏敗亡の時、我れ乳母となり兒を携へて逃れ去り今に至るまで養育す請ふ度せよと、榮西其容貌の凡ならさるを見て弟子となす、是れ即ち師なり、師後比叡山に登り、顯密の法を學び、菅原爲長に就て世書を學ぶ、宋國に遊び、天台山道教法師峨眉山文伯に逢ひて儒典を討論し、顯密の書百餘卷、外書七百餘卷を得て東皈し、書寫山の圓宗寺に住し、顯密の法を唱ふ、寂年、及壽歎く、師生前文才ありて書寫山の講式讃章を製作す、(本朝高僧傳)

クワンシヨー　寛性（一九四九―二〇〇六）〔眞言宗〕京都仁和寺法親王なり、寛性は一に惟永と云ひ常瑜院と號す、伏見天皇の第三子なり、正安二年親王の宣を蒙り、十三歲にして仁和寺に入り、禪助僧正に師事して落髮受戒し、乾元の初年仁和寺の主務に補す、嘉元二年春一身阿闍梨となり、兩部の灌頂を受く、五月總法務に任し、法勝寺を管す、正和元年上皇不豫師敕を拜して愛染の法を修して効あり、嘉曆元年辭して閑山に退居し、貞和二年九月三十日寂す、壽五十八、(仁和寺御傳、本朝高僧傳)

クワンジヨー　寛靜（一五六一―一六三九）〔眞言宗〕京都東寺の學僧なり、寛靜は京都の人、俗姓は文屋氏なり、或は嵯峨天皇七世の孫、肥後刺史源淳の子なりとも云ふ、幼にして寛平法皇に往つて密教を學び、寛空僧正に灌頂を受く、天祿二年東寺の二長者に加任し、安和元年權少僧都に任す、天延三年春高野の座主となり、尋て權大僧都に敘す、貞元二年大僧正に昇り、法務を兼ね、常に仁和の西寺に居す、天元二年十月十一日寂す、壽七十九、(本朝高僧傳)

クワンジヨー　寛乘（一八六六―一九四六）〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、寛乘俗姓は源氏、木工權頭兼時の子、建永元年に生る幼より經論を學び、祐曉法師就きて天台の宗義に長し、曆仁元年猷尊法師を拜して入壇す、文永五年三月始めて大阿闍梨位に登り、八月三昧耶戒和尚となる、一旦邪衆の訴により遠島に移されしか、弘安七年十一月免を蒙りて本房に歸へり、弘安九年九月廿八日寂す、壽八十一、(三井續灯記)

クワンチ　寛智（……）〔眞言宗〕山城仁和寺華嚴院の開山なり、寛智は京都の人、善く性信親王の指示を得て密學に徹す、要集記を撰す、付法一人俊譽なり、(傳燈廣錄)

クワンチユー　寛忠（一五六六―一六三七）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、寛忠は宇多上皇の孫兵部尙書敦固親王の子なり、幼にして上皇に就きて落髮し、石山寺の淳祐和尙を師として灌頂法を禀け、又東寺の寛空僧正に從ひて灌頂を重受す、初め奈良の大安寺に居り、後仁和寺の池上に居る、天德四年内供奉となり、康保五年律師に敘す、少僧都より昇進して安和年中僧正に任す、皇孫の出家して僧官に歷任するもの師を以て初めとす、尋きて東寺の長者となり、貞元二年四月二日寂す、壽七十二、(仁和寺御傳、本朝高僧傳)

クワンチヨー　寛朝（一五九六―一六九八）〔眞言宗〕山城仁和寺の三代なり、寛朝は敦實親王の第二子、宇多上皇の孫なり、年十

一歳上皇の室に投して下髮し、天暦二年蓮臺寺の寛空阿闍梨に隨ひて密灌を仁和寺の灌頂壇に受け、壹定法師に就きて重ねて祕法を質す廣澤の遍照寺に住して密講を開く、世に廣澤の密派といふ、康保四年仁和寺法務に補し、貞元二年權律師より少僧都に昇りて法務を兼ぬ、此年中東寺の三長者に加はり、詔を受けて西寺を領す、天元二年權大僧都に轉す、三年春師私財を捨てゝ東大寺の華嚴會を供養す、秋九月延暦寺の中堂供養の咒願師となり、四年僧正となり、東寺の寺務に補す、永觀二年圓融寺落慶の導師となり、一百戸を封せらる、二年東大寺の寺務を領す、寛和元年圓融上皇師に就きて出家す、二年大僧正となり眞言宗徒の此職は師に始まる、永延元年夏五月勅により雨を祈る、永祚五年上皇東寺にて師に兩部の灌頂を受く、長德四年六月十二日寂す、壽六十三、(仁和寺御傳、元亨釋書、本朝高僧傳)

クワンニヨ　寛如　ギョーチョー堯超を見よ、

クワンネー　寛寧　二四五七―二五三九　〔眞宗〕肥後山鹿大光寺の住持なり、寛寧は肥後菊池郡赤星村正林寺に生れ、山鹿郡新町の大光寺に住す、少壯の時訪導閣明增の講解を聞き、深く同師を景慕せり、後乘誓院の門に入り、研鑽數年、遂に門下第一の人となる、道遠曾て評して曰く善讓師は議論精覈なり、寛寧師も亦相敵するに足る、而して其善く先哲の義を咀嚼して諄々陳說するに至りては、殆んと比類を見すと、勸學職となり、明治十年安居選擇集を學林に代講し、十二年十二月十三日寂す、壽八十三、謚を得法院といふ、著作宗要開關前後編四卷、現益及帖外和讃啓蒙錄一卷あり、(學苑談叢)

クワンハン　寛範　(……)〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、寛範は和泉宇多の人、寶光院澄辨に師事して密敎を受け、青蓮院に住して盛に開講す、正應六年檢校に任し、權少僧都に昇る、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

クワンヘン　寛遍　一七六〇―一八二六　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、寛遍は源師忠の子なり、寛蓮僧都に就きて剃染受具し、密典を學ひ、寛助僧正に隨ひて灌頂法を受く、大和忍辱山に登りて專ら修練を事とす、一字金輪の法一座、尊勝咒一千遍を以て日課とす、保延五年詔して法眼に敍し、永治二年敕寶篋陀羅尼經一卷、理趣經一卷、法華經一品阿彌陀寶號一千遍を以て日課とす、保延五年詔して法眼に敍し、永治二年敕して城西の廣隆寺に補す、天養元年冬仁和寺の覺法親王孔雀經の法を修し、賞を師に讓りて權少僧都を歷すして直に權大僧都に任す、久安四年敕して東寺の長者となし、法印に敍し寺務を領す保元初年詔して法務を司らしむ、是年四月高野の大塔落慶し師を供養導師となす、秋七月敕により雨を祈り、牛車の宣を賜ひ、權僧正に任し、且つ阿闍梨五人を東寺の尊壽院に置く、二年七月再ひ雨を祈り優賞あり、平治元年春東大寺を管し、應保元年大僧正に轉す、長寬の初に仁和圓敎の二寺を領し、仁安元年六月三十日寂す、壽六十七、(本朝高僧傳)

クワンミヨー　寛命　(一八一八)　〔眞言宗〕山城醍醐山勝俱胝院の僧なり、寛命は大夫阿闍梨と稱す、本と三井菩提坊法印證觀の弟子、左大臣源俊房の孫、便ち實運座主の甥なり、保元三年十月八日三寶院に傳法職位を受けて金剛乘宗時乘海應護摩となる、後進みて後位心印を承け、祖々口訣諸軌祕奧三軸日々受學す、其寂年缺く、(續傳燈廣錄)

クワンユ 寛瑜 一七九一—一八七四 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、寛瑜は民部卿法印と號す、俗姓は源氏伊賀守憲明の子なり、出家して靜濃に眞言の宗旨を學び、建保元年六月東寺の長者となり、同七月これを辭す、同十月權大僧都に任せられ、建保二年二月八日寂す、壽八十三、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

クワンリユー 寛隆 二三二二—二三六七 〔眞言宗〕京都仁和寺の二十三世なり、寛隆初の名は覺觀といひ、後覺助、覺恕、寛蓮と改め、遂に今の名に定む、靈元天皇の第二子、母は愛宕尙書通福の女なり、天和三年八月十三日宣して親王となり、甫めて十二歳諱を師永と賜ひ、十七日眞乘院孝源大僧正に依りて得度す、元祿二年十二月廿六日時進に叙し、五年孝源大僧正に傳法灌頂を受く、屢々に仁和寺曼荼羅會に講師となり、寶永四年九月病に臥し、一品に叙せられ、十六日寂す、壽三十六、法金剛院山に葬むり、後金剛定院御室といふ、師生前僧統錄總法務の職に補せらる、（傳燈廣錄）

クワンレン 寛蓮 クワンリユー寛隆を見よ、

クワンシヨー 貫昭 二五〇六—二五六〇 〔天台宗〕淺草傳法院の僧なり、貫昭院は菩提心院、京都室町通花立町の人、奥田氏なり、弘化三年三月十六日に生る、幼名胤千代、又松彥と云ふ、世々醍醐家の家臣なり、師幼にして多病、十四歲比叡山松林院貫信僧都を拜して度を受け顯密の敎を傳ふ、萬延元年八月一日十八道前行として五落叉を修し、七日にして五十萬遍に至る、遮那止觀の兩業を修行して餘すなし、文久の頃伊勢の引攝寺法龍と相謀り、慧心僧都繪詞傳を版行す、慶應三年尾張名古屋に到り、長榮寺實海律師を訪うて秘密法を受け、明治二年京都に皈りて疾を養ひ、傍ら萬山の門に入りて書を習ふ、其技熟するに及び、これを鬻て父母に孝養の資となす、七年九月曼殊院門跡の命により荒神々護淨院湛海僧正の跡を繼ぐ、翌八年四月少講義に補せられ、北海道に赴きて敎導を事とす、九年八月京都に皈り、中講義に補せらる、十年京都府敎導正取締に任ぜられ、天台の敎觀の學を講ず、十二年八月信濃善光寺大勸進に派出し、紛議を調訂す、翌年十月山內の衆徒信徒等の請により大勸進副住職となり、大に寺務を擴張し、衆徒の爲めに天台の學を講じ、傍ら長野監獄に至り、囚徒を敎化す、十五年十二月長野に貧民養育院を新設し、貧民數十人を收容す、十六年東海道諸國を巡敎し、十八年二月京都に皈り、母の喪を修し、同年十月淺草寺に轉住す、二十年諸堂を修繕して功あり、二十八年疾を力めて廣島に抵り、軍隊に從つて淸國に渡らんとするに際し、激烈なる感冒肢炎に罹り、遂に京都護淨院に皈り養生を事とす、戰勝の後東亞協會、東亞同文會に加入し、大に東亞問題の講究に意を用ふ、明治三十三年九月二十日病重く、十二日寂す、壽五十五、（貫昭國師遺稿集）

クワンテツ 貫徹（二三四八） 〔曹洞宗〕下野那須大雄寺の僧なり、貫徹鄉貫詳ならす、下野那須黑羽の大雄寺に住し、詩文を以て聞え、萬山道白等に交る著作註石門文字禪五十卷なり、

〔考〕貫徹は元祿頃の人なり

クワンオー 關翁 シユモン珠門を見よ、

クワンクー 關空 二二九三 二三四一 〔淨土宗〕紀伊總持寺の僧なり、關空字は善廓、俗姓は岡崎氏、尾張熱田の人なり、七歲父母を喪ひ、郡の大寶禪寺に投して沙彌となり、內外の諸典を讀む、十八歲自ら歎して曰く內外の諸典を究むるも、未だ出離の要門を知らず、生死岸頭差路多し、即ち奈良に抵り、七日晝夜二月堂觀世音に禱祈す、其靈告により、京都東山に登り、禪林寺積峰和尙を問ひ、淨土の宗要を習練す、解行共に進む、越前安養寺に住し、次に紀伊總持寺に住す、延寶二年二月法席を退き、隣村の茅屋に幽棲し、麻衣蔬食し、淨土の三部經、法華四要品、往生禮懺を誦す、村民漁獵を業とし、因果を信ぜず、師深く之を哀憐し、化導最も力む、幾もなく村中の男女皆法澤を蒙むる、天和元年六月十三日終朝至れりとて弟子に告け、佛前に端坐し、佛名を稱すること一百餘遍なり、乃ち別室に入り、盧舍那佛像に對し、燒香禮拜し後、結跏趺坐して寂す、壽四十九なり、(續日本高僧傳)

クワンザン 關山 エゲン慧玄を見よ、

クワンシツ 關室 ジョテン徐天をを見よ、

クワンソー 關叟 ポンキ梵機を見よ、

クワンツー 關通 二三五六 二四二〇 〔淨土宗〕尾張圓成寺の開山なり、關通字は無礙、俗姓は横井氏、尾張海西郡大成村の人なり、六歲にして佛に皈する念を生し、好みて寺院に遊ひ、沙を集めて塔となし、禮佛講經等沙門の戲をなす、遂に郡の專德寺吳峰に從ひて童子となり、字を習ひ、經を受く、後西方寺の靈徹に依り、寶永五年十三歲にして度を受け、元敎と云ふ、爾來學業を鍊磨し、十六歲關東に遊ひ、增上寺に到り、孜々として學行をはげみ、正德二年祐天僧正より五重の宗要、及ひ宗戒兩脈を受く、又敬首に謁し、重ねて菩薩戒を受く、一日元亨釋書源空の傳を閱して專修念佛宗祖の要心を悟り、之より日々稱名三萬聲、選擇集、及語錄等を研究し、增上寺に留ること十三年、享保八年尾張に歸へり、享保十年伊勢長島の光岳寺に住し、後西方寺に主となる、元文中西方寺を改めて律院となし、圓成寺と號し、三河崇福寺義燈を請して開祖とす、延享五年江戶に遊化し、獅子吼菴を淺草に建て、衆に圓頓戒を授く、寬保元年京都に上りて四條金蓮寺に寓し、明和七年正月北郡轉輪寺に寓し病に罹り、二月二日寂す、壽七十五、臘六十三、師生前護法の心篤く、撰擇集を講すること二十回、歸命本願鈔を講すること三十六遍、諸國に遊化すること四十八年、得度の僧尼千五百人、圓頓戒を受くる者三千餘人、課號を誓受するもの千万餘人、寺を剏すること十六ヶ所なり、著作皈命本願鈔加俚語十卷、燧囊俚語七卷、一枚起請文梗概聞書、夢の知識、同續、隨聞往生記、曼陀羅口傳鈔、各三卷、燧囊二卷、本願念佛勸化本義、客問安心、後世のつと、宗要義、各一卷あり(續日本高僧傳、蓮門經籍錄)

クワンボク 關樸 ソーボク僧僕を見よ、

クワンゴー 桓豪 (二〇一八) 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、桓豪は洞院右大臣實泰の子、延文三年天台座主に任す、寂年缺く、(天台座主記)

クワンシユ 桓守 (一九八六) 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、桓守は洞院太政大臣公守の子なり、嘉暦元年天台座

主に任す、其寂年歎く、(天台座主記)

クワンシユン 桓舜 一六三八 一七一七 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、桓舜は月藏と號し、備後の刺史源致遠の子なし、延暦等に入り座主慶圓に從つて天台敎を學び、貞圓、日助、遍述等と共に山中の四傑と稱せらる、伊豆遊化して溫泉の神祠に詣で、七日説法す、幾何ならずして詔宣により最勝會の講師となり、大僧都に任し、法性寺の座主に補し、天王寺を領す、天喜五年九月十日壽八十にして寂す、(元亨釋書、本朝高僧傳)

クワンクー 環空 (……)〔天台宗〕加賀某寺の僧なり、環空は能登の人なり、金龍道人の從弟なりと云ふ、詩才あり、一時に聞ゆ、早年にして寂す、著作環空遺偈、環空詩鈔あり、世に行はる、(日本詩選、燕臺風雅)

クワンケー 環溪 ミツウン密雲を見よ、

クワンジヨー 環定 (二五二五)〔眞宗〕加賀石川郡金澤即願寺の住持なり、 環定は開得院と號す、安政三年春を初講として、高倉學寮に起信論義記、華嚴五敎章を講じ、文久二年二月二十五日(一に三月四日)擬講となり慶應元年より三聖閣融觀門、易行品、一多證文を講す、寂年歎く、(眞宗史料)

クワンチユー 環中 (……)〔眞宗〕肥後東光寺の住持なり、 環中は龍北と號す、少壯の時熊本順正寺の侍童となり、一日寺僧と爭ひ、師逃れて四國に航し、遂に安藝に至りて深諦院に謁し、其社中に入りて宗乘を精研すること三年、後京都に往き、桃花房の門人となれり、學業成るに及ひて鄕里に歸り、順正寺に來りて前年の罪を謝し、爾後常に同寺に出入して近傍子弟の爲め自地の書を講授せり、三業惑亂の時、初めは桃花房に與して建幢摧邪篇を著し、其義を翼贊せりと雖も、藥園の金剛錍世に出つるに及ひて心を回へして正意に歸せり、法主號を與へて忍成房といふ、肥前の民師の感化を受くること多く、其學徹に依る者年々相集り、講會を開き、議論最も盛なり、是を龍北會といふ、著作建幢邪摧編、散善義講錄、大經升量錄、二門偈溫古錄、各二卷、淨土論講錄、淨土論通申別申義、寶章正申記、四十八願玄談、十二禮講錄、六軸科説、信行兩座義、三帖和讃大綱、往生禮讃講錄、各一卷、並に文類聚鈔讃堅錄若干卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

クワンギコーイン 歡喜光院 コーベン光遍を見よ、

クワンギシンイン 歡喜心院 エンユー圓猷を見よ、

クワンフ 歡夫 ズーシユー崇啻を見よ、

クワンヨ 歡譽 ベンシユー辨秀を見よ、

クワンギヨーイン 勸行院 ニチリヨー日了を見よ、

クワンシユー 勸修 一六〇五 一六六八 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、 勸修俗姓は紀氏、京都の人なり、十一歳にして比叡山の靜祐法師により童子となり、後、剃髮受具し、餘慶僧正に就て灌頂法を承け、勢祐僧都に謁して從久所業を質す、長德三年宋より天台の書五部を送り、師賀因と共に朝命によりこれを毀破す、藤原道長淨妙寺を剏し、師其開山となる、長德三年園城寺の長吏に補す、長保三年大僧正に任す、寬弘五年七月八日寂す、壽六十四、後一條帝其德を追崇のて寬仁三年冬智靜と諡せらる、(本朝高僧傳)

クワンシヨー 勸聖 ユイシン唯心を見よ、

クワンゼン 勸善　ユードー融道を見よ、

クワンヨ 勸譽　エトン慧頓を見よ、

クワンチユー 冠中　ナンリユー南龍を見よ、

クワンヨ 冠譽　デンヤ傳也を見よ、

クワンカイ 館開　ソーショー僧生を見よ、

クワンチユー 喚丑　二四二〇……〔曹洞宗〕上野山田鳳仙寺第十六代なり、喚丑字は乙堂といふ、上野境野片山の人なり、出家修學の後武藏氷川の迦葉山盛德寺に註す、天桂傳尊の正法眼藏辨註を著作するにあたり、師其高祖の意と謬解せるものをなし、續絃講義を著作して面授嗣法授記の三辨註を駁す、享保二十年續絃講義を再治す、寶曆 年六月上野山田の鳳仙寺に轉住し、七年六月退隱し、同十年十一月十一日寂す　著作、正法眼藏續絃講義五卷、叢林公論二卷あり、(禪宗史料)

乙堂和尚

クワンチユー 寰中　ゲンシ元志を見よ、

グワンアン 願安(……)〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、願安は興福寺仁秀僧都の高弟なり、夙に性相の學に通し悲智の二嚴を兼ぬ後金勝寺を開きて經論を講す、(本朝高僧傳)

グワンエン 願演(一四七一)〔眞言宗〕山城乙訓寺の三綱なり、願演其生國俗姓詳かならず、本乙訓寺の三綱たり、弘仁二年十一月九日空海乙訓寺に住するや、師從ひて法化を助く、其後終る處を知らず、(弘法大師弟子譜)

グワンオー 願翁　ゲンシ元志を見よ、

グワンオーイン 願王院　チシユー智周を見よ、

グワンカク 願覺(……)〔天台宗〕大和高宮寺の僧なり、願覺は俗姓不詳、初め三井寺に投し、常照に師事し後奈良に遊び、高宮寺圓勢に事ふ師疎放にして戒を持せず、日日朝に邑里に出て晩に房に回る、一優婆塞あり師の言行を惡み、一夜窃に房に往き、壁を穿ちて窺ふに、房中光明赫々たり、驚きて感嘆す、幾もなくして寂す、(拾遺往生傳本朝高僧傳)

グワンギヨー 願曉(……)〔三論宗〕大和元興寺の學僧なり、願曉は藥寶勤操の二師に從ひて三論宗を研習し、兼ねて唯識宗及ひ密敎に通す、官僧都に昇り元興寺を主とし、講を開く、師平常撰述する所多し、後世に傳はるもの因明論の義骨三卷最勝玄樞十卷あり、(本朝高僧傳)

グワンギヨー 願行　ケンジヨ憲靜を見よ、

グワンコ 願故　ソンエー存榮を見よ、

グワンコ 願故　チタン智短を見よ、

グワンコ　願故　ソンテー存貞を見よ、

グワンコ　願古　コガン古巖を見よ、

グワサイ　願西　二一六四—二二三三〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、願西興福寺實尊僧都に從ひ、三十に及びて剃髮し、飛鳥寺の傍らに菴居す、天正元年七月十五日寂す、壽七十、（本朝高僧傳）

グワンサイニ　願西尼（一六六四）〔天台宗〕近江比叡山の尼なり、願西尼は楞嚴院源信僧都の姉なり、堅く戒律を持し、法華の深義に通す、常に衣食を儉にし孤獨に與ふ、法華を誦すること數万部、寛弘年中寂す、壽缺く、（法華驗記、元亨釋書、本朝往生傳）

グワンシン　願心　サンテキ三笛を見よ、

グワンシユー　願秀　二三一二……〔淨土宗〕駿河光蓮寺の開山なり、　願秀は榮蓮社然譽と號し、其鄕貫詳かならず法を感譽に嗣ぎ、駿河神原光蓮寺を開く、承應元年十二月十七日寂す、壽九十有餘、（淨土總系譜）

グワンシヨー　願性　一九三六……〔臨濟宗〕紀伊西方寺の開基なり、　願性は藤原景倫、葛山五郎と稱す、將軍實朝の近臣なり、建保六年十二月實朝の命を受けて密に宋に航し、万年寺を莊嚴して菩提を祈求せんとし、路次自分の領地なる紀伊由良莊に至り、由良湊に留り、天候を俟ちて出航せんとするに際し、承久元年正月廿七日、將軍鶴岡の難に遭ひて薨去したるよしを聞き、大に落胆し、即ち高野山に登り、禪定院退耕行勇に謁して度を受け、改めて願性と號し、專ら將軍の菩提を吊す、安貞元年由良に一寺を開きて西方寺と云ひ、後に興國寺と云ふ、明慧上人を請して落慶の供養を行ふ、後正嘉二年覺心禪師を請し、文永元年八月に至り、一寺を舉けて禪師に讓る、建治二年四月廿三日西方寺南大坊に寂す、享壽詳ならず、其命終に臨み明鏡一面を覺心禪師に遺附す、（高野春秋）

グワンジヨージユイン　願成就院　コージヨ光助を見よ、

グワンネン　願念　セーカイ誓海を見よ、

グワンミヨー　願明　リヨーカイ了海を見よ、

グワンヨ　願譽　二二八八……〔淨土宗〕攝津甘露寺の開山なり、願譽は攝津の人、俗姓は山川氏、州の山下甘露寺に入りて剃髮し、普光國師の法を嗣ぐ、後州の多田庄銀山に甘露寺を創して開山となる、寛永五年十月十日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

グワンヨ　願譽　ゼテツ是哲を見よ、

グワンヨ　願譽　ボンム梵無を見よ、

グワンセキ　頑碩　モンガ文賀を見よ、

グワンセキ　頑石　ドンシヨー曇生を見よ、

グワンセキ　頑石　ガンゴ含牛を見よ、

グワンリユー　頑立　シユンハ春把を見よ、

ケの部

ケアン　希菴　ゲンミツ玄密を見よ、

ケウン　希雲　エタク慧澤を見よ、

ケウン 希雲 ソケン楚見を見よ、

ケオー 希雄 二〇七七 二一五一 〔曹洞宗〕周防闢雲寺の禪僧なり、
希雄字は英巖、奥州の人、廉仲に依りて得度し、周防闢雲寺大功圓忠に參し、享德二年十二月二十七日入室し、信衣を付せらる、又覺隱和尚傳ふる所の竹篦を受く、已にして總持寺に出世し尋で周防龍華寺に住すること數年、席を西湖に讓り、華光寺に遷る、文明年間闢雲寺の主となり、同十二年多多良氏と同寺の僧堂を再興す、日峯書記なるものあり、師の像を寫して師に贊を乞ふ、後寺務を謝して華光寺に歸る、延德三年七月八日寂す、壽七十五、嗣法西湖良景、日峯文朝、玄室守腋あり(日本洞上聯燈錄)

ケゴン 希勤 二三一〇 二三四一 〔眞言宗〕河内息心菴の僧なり、
希勤字は實乘といひ、河内丹北郡一屋村の人なり、十八歲の時夢中人あり眞言を授く、覺めて後一僧に問ひて十一面觀音の眞言なるを知り、深く信して受持す、爾來出家の志あり、延寶四年廿七歲にして其志を遂するを得、二月淨嚴和尚を仰きて得度し、十一月菩薩戒を受く、同五年二月金剛界壇に入り、學法灌頂を受く、六年二月胎藏界壇に入り、四月淨嚴和尚に從ひて讃岐普通寺に到り、法華經の講席に列す、されとも師學問を嗜ます、禪誦を事とす、仍ち河内に歸り、小西見の草菴(息心菴)に閑居し、六殊菩薩の祕規を受持し、靈應あり、次に金田村觀音寺に寓し、一百日間大佛頂咒を誦す、七年四月不動明王儀軌を傳受し、火光定に入る、九月兩部大法を修行す、翌年二月傳法灌頂の職位を嗣く、淨嚴和尚の命により、多聞天王法を修す、これ教興寺の再興を祈禱するなり、九月世喧を避けて一ノ瀧に丈室を構へ住す、一榻一鑪僅に身命を支ふ、天和元年五月小西見息心菴に移り住す、同年同月十七日端坐して寂す、壽三十二、(續日本高僧傳)

ケジヨー 希讓 一九九五 二〇六三 〔臨濟宗〕山城東福寺の僧なり、
希讓字は在先、越中の人なり、幼にして龍泉淬禪師を拜して出家し、去りて無涯浩、頑石生、月心圓、柏山永の諸老に參し、皆證明を稟け、至德元年建仁寺第一座となり、後出てゝ三聖寺を司とる、明德元年普門寺に移り、應永五年八月東福寺に住す、同十年三月四日海藏院に於て寂す、壽六十九塔を靈源と稱す、著作三會の語錄あり、(本朝高僧傳)

ケセー 希世 リヨーゲン靈彥を見よ、

ケソー 希叟 シユーカン宗罕を見よ、

ケテツ 希徹 二〇六三…… 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、
希徹字は心源、其鄉貫詳かならず、大覺禪師の法孫なる月山一に參して法を嗣ぎ、相模鎌倉建長寺に主となる、應永十年十月十三日一溪菴に寂す、壽缺く、(延寶傳灯錄)

ケドン 希曇 二〇五四 〔曹洞宗〕伯耆圓福寺第二代なり、
希曇字は天海、周防の人、姓は藤原氏なり、二十歲にして明窻禪師の許に投じて僧となり、出でゝ寶峰寺禪洞に謁して教を聞く、應永十八年明窻命を受けて能登の諸嶽山に住す、師往て之れに從ひ、印可を受け、後伯耆に到り、圓福寺を築き、明窻を開山始祖となし、自ら第二代となる、應永二十四年諸嶽山に主となり、禪規大に振ふ、後再び圓福寺に歸り、大守山名氏の皈依を受く、寂年欠く、(日本洞上聯灯錄)

ケドン 希曇 シユーヨ宗璵を見よ、

ケミヨー　希明　ショーリヨー清良を見よ、

ケヨー　希膺　二二四二／二三一九　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、希膺字は雲居、號は把不住軒、俗姓は小濱氏、土佐畑鄕に生る、幼にして京都に上り、大德寺賢國良に就いて僧となり、妙心寺に入りて蟠桃院一宙に侍す、甞て塙團右衛門直之と舊交あり、元和の役團右衛門直之大坂城を守る、雲居潛に之を訪ひ、鐵藏主と稱し、軍機に與り、其死を同くせんことを約す、事東軍に聞こえ、一宙捕はれ師も亦縛に就き、一宙の寃を明にす、將軍家康其義を喜び共に之を赦るす、後、諸國に行脚し、若狹小濱に一寺を開き、法化盛なり、會々師を沮む者あり、師乃ち一偈を壁に書し、飄然として去る、偈に曰く、三毒生時双眼暗、萬緣脫處一身安、衲僧行李只如是、杖下杖頭天地寬、と、之より伊豫松山に遊ぶ、後攝津勝尾山にあり、後水尾天皇召して法を問ひ、これを嘉賞し再び召したまふも固辭して出てす、伊達政宗强いて聘すれとも亦出てす、伊達忠宗再三强て聘請して松島瑞巖寺に迎ふ、法德一時に高し、瑞巖寺中興第一世となる、初め仙臺に至るに方り路に草賊に逢ふ、師錢物を與て去らんとす、草賊尙ほ厭かす、其衣裓をも奪はんとす、師曰く、寒天裸體は貧道といへとも堪へさる所なり汝等之を奪はんとす何そ我生命を併せて之を奪はざるやと、辭氣凜然たり、草賊其凡僧ならさるを知り、羅拜して錢物を還へし、弟子とならんことを請ふ、師即ち引きて松島に至る、正保二年再ひ妙心寺に住し、次に松島に歸へり、洞雲大梅寺の佛刹を創し、萬治二年八月八日端然して寂す、年七十八、勅諡を賜ひ慈光不昧禪師と云ひ、又追號を賜ひ大悲圓滿國師と云ふ、（明良洪範、本朝高僧傳、仙臺史傳）

ケオーイン　華王院　カクカイ覺海を見よ、

ケオードーニン　華王道人　ガクシン學信を見よ、

ケオク　華屋　エードン英曇を見よ、

ケコーイン　華光院　エンゲ圓解を見よ、

ケザン　華山　シユーハン周藩を見よ、

ケケー　華圭　シユードン宗曇を見よ、

ケソー　華叟　シヨーガク正蕚を見よ、

ケゾー　華藏　ギドン義曇を見よ、

ケゾーアン　華藏菴　エテン慧然を見よ、

ケチヨー　華頂　モンシユー文秀を見よ、

ケテー　華庭　リヨーチン頁椿を見よ、

ケヒヨーニン　華表人　シコー支考を見よ、

ケレードーニン　華嶺道人　ソーシユン僧濬を見よ、

ケゲゼン　化々禪　シヨーユー正猷を見よ、

ゲリン　化霖　ドーリユー道龍を見よ、

ゲア　解阿　（一九四八）　〔時宗〕常陸善光寺の開山なり、解阿は鄕貫詳ならず、時宗二祖眞敎の弟子となり、常陸海老嶋に新善光寺を開き、盛に時宗を弘通す、世に其門派を解意派と云ふ、師示寂年日月く、（淨土總系譜）

〔考〕正應の頃の人なり

ゲダツ　解脫　ジヨーキヨー貞慶を見よ、

ゲダツボー　解脫房　リヨーゼン頁禪を見よ、

ケーアン　圭菴　イハク伊白を見よ、

ケーガク　圭嶽　シユハク珠白を見よ、

ケ（希）ミ―ヨ

ケ（華、化）　ゲ（解）　ケイ（圭）

ケーケン　圭賢（二三一九—二四〇九）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十三代なり、圭賢字は母龍、武藏多摩郡和田村の人、州の練馬愛染院に投して薙染し、西新井總持寺に住し、豐山に留錫して慈心院に住し、近江北野寺に轉す、享保十二年三月十八日幕命により江戸根生院第九代となり庫裏を修造す、十九年五月五日命を受けて護國寺に移り高祖九百年忌大曼荼羅を修し、次で護持院に昇り、權僧正に任ず、元文五年擢てられて豐山能化職に補し正僧正に進む、在職七年、辭して與喜寺に退き、寛延二年九月二十三日寂す、壽八十一、（新義眞言宗史料）

ケージヨ　圭徐（二一八五—二二五八）〔曹洞宗〕能登長齡寺開山なり、圭徐字は大透、俗姓は戸田氏、尾張の人、出家して越前寶圓寺に至り、直應正瞰に見え、印可を受け、其席を補し、總持寺に昇り、又龍泉寺に主となる、杉野利家能登を領し七尾に長齡寺を剏して師を迎ふ、天正十一年加越能三州を領し、遷りて金澤城に居るに方り、師を招き、新に護國山寶圓寺を創す文祿二年大守に告て總持寺の廢を興す、明年象山に護國寺の席を讓り、長齡寺に退き、慶長三年九月二十日寂す、世壽七十四、臘六十三、長齡寺に塔す、法嗣象山徐芸あり、（日本洞上聯燈錄）

ケートン　圭頓（二一三三—二二一五）〔曹洞宗〕肥前妙雲寺の開山なり、圭頓字は悟宗、俗姓原氏、菊池の族、肥後の人なり、十九歳敎院に投して祝髮し、專ら三藏の敎を究む、後捨てゝ禪に入り、周防寧山寺勁巖珠端に謁して發悟し、侍從數年、其席を補す、後檀越の請に應し、肥前筥河邑に妙雲寺を建て、其開山となる、弘治元年八月十四日寂す、壽八十三、法嗣玲巖玄珑、一光玄鱗の二人あり、天正年間大守日峯居士佐嘉城に金剛山宗龍寺を建て、師其開山となれりと云ふ、（日本洞上聯灯錄）

ケーヨー　圭陽（……）〔曹洞宗〕上總龍源寺禪僧なり、圭陽字は春翁、傳菓菩迦に師事して言外の旨を得、上總龍源寺に主となり、下總孝顯寺に遷る、寂年、及び壽缺く、法嗣的翁文仲の一人あり、（日本洞上聯灯錄）

ケーギ　契凝（二一八三）〔曹洞宗〕參河泉龍寺の禪僧なり、契凝字は克補、字岡祖文に依りて旨を得、嗣ぎて其席を主どり、三河泉龍寺に住す、大永三年五月二十八日姿を隱し、終るところを知らず、法嗣光國舜玉あり、（日本洞上聯灯錄）

ケーグ　契愚（……）〔臨濟宗〕京都臨川寺の禪僧なり、契愚字は柳溪、天龍寺夢窓國師の下にありて第一座となり、後臨川寺に主となる、寂年月日缺く、（延寶傳燈錄）

ケージユー　契充（一九七三—二〇四〇）〔臨濟宗〕圓覺寺の禪僧なり、契充字は大虛、東明に師事し印を受く、屢名刹に歷遷し鎌倉圓覺寺に補し後東堂に退休す、康曆二年七月三十日寂す、壽六十八（日本洞上聯灯錄）

〔考〕　契充は曹洞法派なれども、臨濟法派の寺に任せるなり、

ケーチユー　契中（……）〔天台宗〕比叡山の學僧なり、契中は字常寂房と云ふ、世に但馬阿闍梨と呼ふ、俗姓詳ならす、出家して比叡山に登り、大慈房聖昭に師事して台密の秘奧を傳ふ、寂年、並に壽缺く著作五輪鈔あり、（台密血脉譜、諸宗章疏錄）

ケーチユー　契沖　クーシン空心を見よ、

ケーモン　契聞　一九六二 二〇二九〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の禪僧なり、契聞字は不聞、萬休叟と號す、武藏河越の人、平氏某の子、乾元元年十二月八日を以て生る、幼にして郷校に入り書を讀む、出家して圓覺寺東明に師事す、尋て比叡山に登り、具足戒を受け、東明に就きて參禪し、印可を受く、後虎關錬、雙峰源等に歷事す、嘉曆元年二十五歳にして元に航し、台州に至り、華頂山見觀無に參す、淅州に入り靈隱寺東嶼海、淨慈寺靈石芝、鄂渚寺竺田心に見ゆ、遇々異方人なるにより、捕へられて獄に下されしが、幾もなくして高昌王子の爲に釋さる、王子之に金縷の僧伽黎を贈る、後金陵に至り古林、月江、竺源、斷行等に歷參し、復靈石の下に留ること三年、俄に東明の書に接して東歸し、圓覺寺白雲菴に留る、東明の建長寺に遷るに及びて、擢でられて第一座となる、武藏瑞應寺に出世し、駿河清見寺に入り、居住十年、名聲大に揚る、義詮將軍の請により金山に主となり、五年の後、遂に圓覺寺を主とる、自ら梵音菴を築きて養老の所とす、翌年義詮招きて建長寺に住せしめんとするも辭して應せす、應安二年七月十二日示寂す、壽六十八、臘五十三、圓覺寺に葬る、偈あり也太奇也太奇、末後一句無二人知一、大洋海底遣二火熱一、虛空蓬下木羊兒、(延寶傳燈錄。日本洞上聯灯錄)

〔考〕契聞は東明の法を嗣けるを以て曹洞法脈に屬するものなり、

ケーヨー　契養(……)〔曹洞宗〕能登立川寺の禪僧なり、契養字は浩齊、肥前の人、大徹宗令の法を嗣き、總持寺に出世し、立川寺に遷る、又川徳寺の開山たり、詳傳欠く、

ケーアン　桂菴　ゲンヂユ玄樹を見よ、

ケーイツ　桂逸(……)〔曹洞宗〕越前能仁寺の禪僧なり、桂逸字は格翁と云ふ善菴良罷に師事して法を得、永平寺に出世し、又能仁寺に法を開き、歷遷して武藏龍穏寺に主となる、寂年及び壽欠く、法嗣日峰伊鯨の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

ケーエキ　桂譯(……)〔曹洞宗〕阿波桂谷寺の禪僧なり、桂譯字は桐岡、木菴玄稜の法嗣、阿波桂谷寺に住し、寂年缺く、法嗣茂菴樹繁の一人あり、(日本洞上聯灯錄)

ケーガク　桂萼(二〇四二)〔臨濟宗〕安國寺の禪僧なり、桂萼字は少林　俗姓不詳、嵩山の室に法を附せらる、室町幕府の命により丹後安國寺に住す、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

〔考〕諸傳桂萼の年代を缺くも、嵩山の下にあり、寶山玉の後安國寺に住したるものなれば、永德の頃世にありしものなり、

ケーガン　桂巖　キヨージユン教遵を見よ、

ケーガン　桂巖　エーシヨー英昌を見よ、

ケーガン　桂巖　エホー慧芳を見よ、

ケーゲ　桂華　ナンリン南麟を見よ、

ケーゲン　桂彥　二一〇四 二一九九〔曹洞宗〕甲斐廣嚴寺の禪僧なり、桂彥字は俊屋、俗姓は藤原氏、常陸眞壁郡の人なり、十三歳椎能山に登りて出家し、専ら天台の教を習ふ、十八歳の時捨て去りて下野長安寺の玖峰に參し、次に甲斐の神嶽山に入りて靜住す、時に自山得吾廣巖寺にあり、師往きて說を叩き、

遂に其法を嗣ぐ、大永二年自山寂するに及び、其席を補す、天文八年正月二十五日寂す、壽九十六、法嗣以船文濟の一人あり、（日本洞上聯灯錄）

ケーゴ　桂悟　二〇八五……〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、桂悟字は了菴伊勢の人俗姓三浦氏應永三十二年正月廿五日岩內里に生る、稍長じ出家して眞如寺大疑信の法を嗣ぐ、文明年中伊勢安養寺に出世し、京都の東福寺に遷り南禪寺に昇住す、勅を拜して宮中に法を說き、了菴の二字を大書し賜はる、明の武宗正德八年即ち我永正十年東歸す時に八十九歲なり、王陽明師を送る序あり、後慧日寺の大慈院に回へりて某年寂す、敕して佛日禪師と謚す、著作語錄二卷あり、（三條實隆公記、東福寺伽藍緣起、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、籌海圖編、）

ケーシツ　桂質　イホー蘭芳を見よ、

ケージユ　桂儒　二一七九……〔曹洞宗〕越前龍淵寺の禪僧なり、桂儒字は惟通、久しく族雲祖旭に侍して其法を嗣ぎ、詔を請けて永平寺に出世す、文明十一年師命及檀請に依り龍淵寺に主となり、一住三十年にして常泉寺に退居し、永正十六年十月七日寂す、世壽缺く、法嗣以州順榮、大朝宗賀の二人あり、（日本洞上聯灯錄）

ケーシユー　桂州　コークワン公寬を見よ、

ケーセツ　桂節　シユーシヨー宗昌を見よ、

ケータン　桂潭　（二四九〇）〔眞宗〕豐後鶴崎福正寺の住持なり、桂潭は明增の上足にして性相を研磨し、倶舍桂潭といはる、行餘詩文に巧なり、東派の講師法海澁谷の講主聞隆等と友たり、著作、唯識二十述記要纂、十句義論玄談、五事毘婆娑論魚釋、金七十論錄各一卷、倶舍論講錄若干卷あり、（清流紀談、本願寺派學事史）

〔考〕桂潭は天保頃の人なり

ケードー　桂堂　ケンサ原佐を見よ、

ケードー　桂堂　コーリン香林を見よ、

ケーホー　桂法　二三二三……〔曹洞宗〕肥後東岡寺の開山なり、桂法字は中華、俗姓は藤原氏、石見の人、永明寺天樹に投じて祝髮受具し、周防瑠璃光寺に到り、年叟に參すれども契せす、年叟退席して的翁當全席を補するに及びて入室衣法を傳へられ、後其下を辭して東遊し、大中寺門菴吉祥寺洞空に參して皆許可せらる、慶長末年亂を避けて鄉里に歸へり、養德院に年叟を問ふ、時に的翁辭して主席を虛くせり、師請せられて之を掌とり、一住十一年、堂宇を一新す、寬永十四年能登大守龜井氏に請せられて、石見の永明寺を司とり、其廢を興す、六年の後、攝津難波に退去す、鈴木正三の勸により、正保四年肥後豐岡に往き、東向寺を剏して法を開く、寬文三年九月二十一日寂す、壽缺く（日本洞上聯燈錄）

ケーモン　桂文　二二六〇 二三三三〔曹洞宗〕肥前宗智寺の開山なり、桂文字は不鐵、俗姓は藤原氏、肥前杵島郡の人なり、十三歲郡の無外本に依りて童子となり、十五歲祝髮受具し、十八歲遊方し、長門大寧寺に到りて安叟珠養に謁し、尋さて關東に往き、常陸多寶院に留まり、勤究七年、足利學校に往きて經

史を聽講す、時に龜雲麗鑑大寧寺に開法す、師之に謁し首座となるも、大事未た了せさるを以て、慶長十二年辭して拘留孫山に登りて靜住し、後肥の慧日寺に龜雲を省して其法を嗣き、分座說法す、龜雲の退席するに方り、衆請によりて其席を補す加賀守鍋島直茂肥前に宗智寺を建て、師、請せられて始祖となる、延寶元年十一月二十三日寂す、壽七十四、臘六十、（日本洞上聯灯錄）

ケーリン　桂林　ソコー祖香を見よ、

ケーリン　桂林　トクショー德昌を見よ、

ケーイン　景印（一九八一）〔臨濟宗〕伊豫觀念寺の禪僧なり、景印號は鐵牛、無爲元禪師に師事す、元亨年中元に航す、靈石芝、獨孤明、月江印、龍巖眞、古林茂、明極俊等に歷謁す、各偈を作りて贈る、元に留ること十餘年にして皈り、伊豫の觀念寺を開く、示寂の年時缺く、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

ケーイン　景筠　ゲンコー玄洪を見よ、

ケーガ　景雅（……）〔華嚴宗〕京都仁和寺岡の學僧なり、景雅は華嚴を頁覺に受け、智德を以て南北に聞ゆ、醍醐山の側に棲み、或は仁和寺の岡に居り、處に隨ひて法を弘む、時人呼ひて岡の法橋といふ、寂年及ひ壽缺く、法弟高辯、聖詮、慶聖の三人あり、（本朝高僧傳）

ケーカイ　景戒（一四七〇）〔法相宗〕大和藥師寺の學僧なり、景戒は藥師寺に住し、延曆十四年十二月傳燈住位となる。日本國現報善惡靈異記三卷を著す、寂年及ひ壽缺く、（日本國現報善惡靈異記、本朝高僧傳）

ケーサン　景三（二〇八九／二一五三）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、景三號は橫川と云ふ、京都の人なり、四歲にして英叟に投して童役を執り十三歲に及びて安國寺龍淵禪師に依る、曇仲芳の三十三回忌に値りて齋筵に赴き、其肖像を拜して自らこれが嗣となる、長じて諸山の名宿に參し、皆推許を承く、應仁の亂に際し、諸刹皆焦土となりたるを以て、近江飯高山に僑居す、小倉松齋居士師に隨つて禪を學び、識廬菴を構へて請し居らしむ、六年を經て再び安國寺に皈り、斗室を築營して名けて小補と云ふ、文明三年將軍足利義政の請により、京都等持寺に住し、次に相國寺に移る、幾何ならずして辭して小補に休居す、十二年再び相國寺に主となり、長享元年南禪寺に遷る、將軍足利義尙贈るに金襴の伽梨を以てす、時に年五十九なり、明應二年十一月十七日小補に寂す、壽六十五、著作東遊集、閩門集幷に京華集十卷あり、（續群一四三、延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

ケーシン　景茝（二一六一……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、景茝字は蘭坡と云ひ、其鄕貫詳かならず、久しく大模軌に參して遂に其法を嗣ぐ、京都南禪寺に住し、晚年正因菴に退居す、後土御門上皇屢々師を宮中に召して法要を問ひ給ひ、崇信最も渥し、文龜元年寂す、著作仙館集あり、後其忌辰に當り、後柏原天皇特に諡して佛慈圓應禪師と賜ふ、（延寶傳燈錄）

ケーシユン　景春（二一一八／二一九九）〔曹洞宗〕武藏法性寺第二代なり、景春字は雲龍武藏の人幼にして出家し、諸老に徧參し、後圓成寺季雲永嶽の室に入り其法を嗣ぐ、明應七年の秋武藏鳩谷に遊び、地の檀請を受けて玉龍山法性寺に主となる、寺

は素天台宗なりしが、師更めて禪宗となし、規模を一新したるなり。乃ち季雲の文殊寺に居りしを迎へて開山となし、自ら次位に居す、時に永正十一年九月なり、翌年五月季雲の命に依り同寺の二代なり、後遠江の石雲寺に住し、次に法性寺に歸る、享祿三年藏六齋に退居し、天文八年十二月二日寂す、壽八十二、臘六十八、遺偈あり曰く陽焰空華八十年、心如牆壁眼如眉、如今忘却來時路、呵呵呵進退谷之、と(日本洞上聯灯錄)

ケーシヨ　景初　シユーズイ周隨を見よ、

ケージヨ　景徐　シユーリン周麟を見よ、

ケーセン　景川　シユーリユー宗隆を見よ、

ケーソー　景聰　コーギヨク興勗を見よ。

ケーチン　景椿（二二〇六）〔曹洞宗〕薩摩瑞川寺の僧なり、景椿字は壽嶽、薩摩の人なり、鄉里瑞川寺に於て剃髮し。松隱仙巖和尚に參し、其提唱を聞き悟るところあり、後に其席を嗣ぐ、總持寺に出世し文安三年龍澤寺に遷り、再び瑞川寺に歸る、寂年缺く、塔を朽隱寺に立つ。(日本洞上聯灯錄)

ケーチユー　景中　ケーヨー景庸を見よ、

ケーチヨー　景趙　シユーネン宗諗を見よ、

ケードー　景堂　ゲントツ玄訥を見よ、

ケーナン　景南　エーモン英文を見よ、

ケーホ　景甫　ジユリヨー壽陵を見よ、

ケーヨー　景庸　二二一九 二二八六〔臨濟宗〕京師妙心寺聖澤院の中興なり、景庸始め景中と稱す、號は庸山と云ふ、美濃の人、姓は遠藤氏(一說に十岐氏、)なり、少年の時以安和尙の室に投して薙髮受業す。以安妙心寺に再住するとき、師衣鉢に侍す、其滅後諸禪林に遊方し、古今の因緣を體究す、後來東漸の室に入りて益々玄微を咨詢す、東漸若狹の發心寺に在る時、師本山妙心寺に居る、適々惟天の徒なる太陽と呼ふ者、一年聖澤院を主とり、輪次に當りて妙心寺常住院の金穀を見る、算計脫することありて償ふこと能はす、太陽聖澤院を常住院に奉して遁れ去る、同門の諸老尾張にあり、飛价を本山に馳せ、師をして之に代らしむ、師職を畢へて鄉邑を省す、本院の傍に伯盥寺といふ者あり、若狹に往き、事を東漸に告く。東漸本院の常住院に歸するを患ひ金を償ひて常住院に納る、之によりて聖澤院は東漸の掌握に歸す、乃ち師をして同院を主とらしむ、師命を受けて栗柄の大泉寺より來りて住す、一日東漸に所得を呈して證を得、庸山の號を與へらる、衆に推されて妙心寺の前班に位す、豐後舟井の城主早川主馬頭長政金を寄せて聖澤院の廢を興し、伏見の館を移して庫堂を作る、慶長四年五月天皇紫衣を賜ひ、妙心寺を主とる、十二年再住一年なり、法兄南景に代りて三たび妙心寺を主とる、慶長十六年十月瑞泉寺の請に赴き、期滿ちて京に歸る、石見城主初耶蘇を信したりしが、師の法を聞きて翻心す、乃ち請はれて同國に赴き、耶蘇敎師と論辨し敎師を說伏す、後京に歸る、僧海津の長福寺開祖大幢國師の二百年忌に師を請せんとす、僧錄崇傳長老之を議し、官に訴へて事を構へんとす、故に師を駿府に召す然るに師の德容人を服せしかば其議なくして還る師醫道に巧なり、屢々病厄を救ふ、殊に小兒の病を癒すに妙を得たり、輕々しく付法せず、後愚堂を得て心印を授く、

聖澤院に住すること三十八年、病に罹り後事を愚堂に屬し、寛永三年七月十七日寂す、壽六十八、臘五十餘、(宗統八祖傳)

ケーヨー 景耀　ゲンチ玄智を見よ、

ケーテツ 景轍　ゲンソ玄蘇を見よ、

ケーウン 啓運　ニチチョー日澄を見よ、

ケーガク 啓學 (二一〇五)〔臨濟宗〕京都東福寺の僧なり、啓學字は古田、其嗣承詳ならず、文安年中慧日山永明寺の塔を守る、二年の春塔院に災あり、開祖の衣を失ひ、聖一國師の忌日に方り、復之れを塔傍に獲たり、師大に喜び、偈を作りて之を賀す、偈に曰く本是吾家舊物氈、何人持置₌四禪天₋、國師一縷千鈞重、再把₌鸞膠₋續₌斷弦₋と、寂年及壽欠く、(延寶傳灯錄)

ケーゲン 啓原 一九九三 二〇六七〔臨濟宗〕明國三峰寺の禪僧なり、啓原字は大初、九歳にして建長寺物外什を禮して剃髮得度し、十九歳宗猷等の十八人と共に明に遊び、天界寺の季潭泐、仰山寺の了堂、天童寺の無着等、四十五人の老宿に歷見し、終に徑山寺の傑峰英により、玄旨に徹し、頂相大衣拂子法語を受け、羅陽の三峯寺、及び山交の龍護院に住す、我應永十四年明の永樂五年三月一日衆を集め偈を書して曰く、生成₌鐵面皮₋死成₌鐵面皮₋一椎百雜碎、白日遶₌鐵圍₋と、筆を投して寂す壽七十五、行化四十餘年、著作三會語錄あり、(本朝高僧傳、延寶傳灯錄、釋氏稽古略)

ケーショ 啓諸 (……)〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、　啓諸字は一元と云ふ、曇芳周應に參して法を嗣ぎ、鎌倉淨妙寺に住す、寂年欠く、(延寶傳灯錄)

ケーカク 繼覺 二〇〇五 二〇七三〔曹洞宗〕越前松隱寺の開山なり、繼覺字は大初、俗姓は源氏、紀伊の人なり、幼にして和泉の高瀨寺は投じ、佛心國師を拜して沙彌となる、年滿ちて登壇受具し、錫を飛はして山川を涉り、龍澤山に梅山聞本に謁し、留まりて參請す、聞本の佛陀寺より總持寺に遷るに及び、師隨侍して遂に開悟し、擢んてられて第一座となる、未だ幾何ならずして龍澤山の席を繼ぎ、後佛陀寺に移り、復諸嶽山に主となる、越前波多野氏朝倉氏等師の道譽に皈依し、新に松隱寺を刱し、開山となす、應永三十年九月四日寂す、壽六十九、(洞上聯灯錄)

ケーコーイン 繼興院　キョーオン慶恩を見よ、

ケーシユ 繼主 (二一〇六)〔曹洞宗〕日向廣禪寺の僧なり、繼主字は盟堂、俗姓平氏、日向の人なり、慈眼寺快翁玄俊に師事し、其法を嗣ぎ、廣禪寺に住し、文安三年慈眼寺に遷り、次で總持寺に出世す、寂年欠く、(洞上聯灯錄)

ケーテン 繼天　ジユセン壽僊を見よ、

ケーフー 繼風　リョーエン靈圓を見よ、

ケーカン 冏鑑 二三〇七 二三八六〔淨土宗〕江戸增上寺第三十九代なり、　冏鑑は演蓮社學譽西阿と號し、一呼と云ふ、武藏國江戸の人なり、俗姓は松井氏初め小石川傳通院に留學し、顯密の敎義を究め、元祿十七年に華嚴原人論纘解三卷を著す、後靈岸寺に住し、檀徒の歸依信仰甚だ厚し、轉して光明寺に住し、享保十一年二月廿六日增上寺三十九代となる、同年八月廿二日職を辭し、廿五日廣布に移り、同十二月五日寂す、享年八十歳、(緇白往生傳、三緣山志)

ケーヨ 冏譽　ソーホ聰保を見よ、

ケーガン 勁巖　シユズイ珠瑞を見よ、

ケーヨ 勁譽　ゲンリヨー絃良を見よ、

ケーシユクン 稽主勳（一四三〇）奈良の佛工なり、稽文會と共に盛名あり、德道の大和長谷寺を建立するに方り、觀世音像を造立す、其事山怪誕にして信用すべからず、（長谷寺緣起）

ケーモンエ 稽文會（一四三〇）奈良の佛師なり、稽文會は形像の彫刻に妙を得、德道の長谷寺を建立するにあたり、觀世音菩薩の形像を彫刻す、其事山怪誕にして信用しかたし、（長谷寺緣起）

〔考〕三代實錄廿八に依れは、德道の長谷寺の建立は寶龜の頃なりと云ふ、稽文會は其頃の人なるべし、

ケーサン 瑩山　シヨーキン紹瑾を見よ、

ケーヨ 瑩譽　ソンエー存榮を見よ、

ケークワン 溪關　レン廉を見よ、

ケーゴン 珪言 二〇九九／二一七〇〔曹洞宗〕遠江洞月院の開山なり、珪言字は無外、俗姓は平氏、對島の人なり、長して同國の敎院に入り、出家し具足戒を受く、法華止觀貫練せざることなし、尋て去りて禪に入り、諸老に歷參す、洞壽寺以翼長佑に投じ、五年を歷て印可を受け、總持寺に出世し、延德元年以翼の席を繼きて洞壽寺に住し、明應六年一雲寺に遷り、洞壽寺に旋る。文龜元年再び一雲寺に住す、遠江の檀越師に請ひて洞月院を開かしむ、永正六年三たび一雲寺に住す、同三年越前の龍澤寺に住す、仝七年十月二十六日寂す、壽七十二、臘四十六、洞壽寺に塔す、法嗣梅叢與芬、然室與廓の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ケーシユー 谿州　タツオー達翁を見よ、

ケーリン 瓊林（一九六三）〔臨濟宗〕勝林寺の禪僧なり、瓊林俗姓不詳、文永年中宋に渡り、徑山の虛舟度に參す、度禪師法偈并に衣を付す、東歸して草河に菴居し、天祐順の風を慕ひ、草菴を營み隱遁す、嘉元年中虛舟和尙語錄商舶に附して至る、林其序を作り梓に上ぼす、示寂の年時缺く、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

ケツオー 傑翁　ゼエー是英を見よ、

ケツゲ 傑外　ウンエー雲英を見よ、

ケツサン 傑山　ドーイツ道逸を見よ、

ケツデン 傑傳　ゼンチヨー禪長を見よ、

ケツドー 傑堂　ノーシヨー能勝を見よ、

ケンイ 兼意（……）〔眞言宗〕京都仁和寺成就院第二代なり、兼意字は成蓮、亮阿闍梨といふ、粟田關白大和國の孫にして皇后宮之亮定兼の子なり、幼にして出家し、寛意の法を傳へ、一方の法匠となる、付法の弟子寛祐、覺命、成超、公延、兼深、寛成、琳俊、定慶、忠證、深尊、安覺、行仁、寛朝、覺證、覺圓、淨蓮、慈信、心覺等あり、（傳燈廣錄）

ケンエ 兼慧（……）〔眞言宗〕山城安祥寺の僧正なり、兼慧は中納言僧正といふ、先つ良瑜の法を受け、後、寛海の傳法を嗣き、安祥寺を兼ねて上野に住す、付法一人成慧といふ、（後傳燈廣錄）

ケンエン 兼緣 二一二八／二二〇三〔眞宗〕本泉寺の住持なり、兼緣字は蓮悟、童名は光壽丸といひ、蓮如上人の第十六子なり、

本泉寺泉祐に養はれて嗣となる、文明十三年薙度し、右兵衞督と稱す、十四歳本泉寺を主とる、永正十四年勅して淸澤上人といふ、騷亂以來籠居して慶光坊と稱す、天文十二年和泉堺に寂す、壽七十六、師二子あり、長は實悟、二は實教といふ、（本願寺通紀）

ケンエン　兼圓　ケンヱン賢圓を見よ、

ケンカイ　兼海　〔……一八一五〕〔新義眞言宗〕高野山密嚴院の第二代なり、兼海字は淨法、紀伊の人なり、覺鑁に從ふこと久し、深く眞言の宗旨を了す、遂に遺囑によりて密嚴院の席を董し信慧に繼きて學頭職に上る、尋きて圓明寺に居り、八角二級の堂を建て、一丈六尺の大日如來の像、兩界の曼荼羅、七幅三部の祕經を安置す、仁平二年十月奏して鳥羽上皇に請ひ、勅して御願寺となる、久壽二年五月卅日寂す、壽缺く、（結網集、本朝高僧傳）

ケンカク　兼覺（……）〔眞言宗〕京都仁和寺喜多院の僧なり、兼覺は北院學講といふ、備中守政長の子なり、不幸にして頓死す、（傳燈廣錄）

ケンゲイ　兼藝（……）〔……〕京師の歌法師なり、兼藝伊勢少掾古の二男、大和城上郡の人なり、和歌に巧みにして古今集別一首、戀二首、雜一首を收む、（古今集目錄）

ケンケン　兼賢　一七四八 一八一七〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、兼賢は紀伊海部の人なり、密敎を良禪阿闍梨に受け、良禪の寂後北室に移り、益々慧解を研く、仁平三年冬高野撿校に補し、保元二年六月十三日壽七十にて寂す（本朝高僧傳）

ケンコー　兼好　一九四二 二〇一〇〔……〕京師の歌僧なり、兼好は從四位右京大夫卜部宿禰兼名の長子兼顯の三男なり、常に吉田に居りしを以て吉田の兼好と云ふ、少にして好みて老莊の書を讀み、和歌を善くし、書に工みなり、後宇多天皇に仕へて左兵衞尉となり、天皇崩するの後剃髮して修學院に入る、後木曾に遊びて其山水を愛し、霧原山に廬を結びて居り、後京師に歸りて詠歌を以て娯みとす、嘗て葬地を京師雙岡にトして櫻花を樹へ和歌を作りて曰く、「契りおく花とならびの岡のへにあはれ幾世の春をすぐさむ」と、曆應三年伊賀守橘成忠の招きにより伊賀に赴き國見山の麓田井庄に菴居し、觀應元年二月十五日寂す、壽六十九、崇光天皇田井庄に墓を築かしめ、權大僧都を贈らる、著作徒然艸及び歌集あり、（大日本史）

兼好法師

ケンゴー　兼豪（……）〔眞言宗〕京都仁和寺相承院の開山なり、兼豪は參河法印といふ、木工頭爲忠の子、尙書國經九世の裔なり、寛遍の法を嗣き、付法の弟子三人を出た

す、定菴、寬經、靜觀、是なり、（傳燈廣錄）

ケンサン　兼算（一四四二）（……）近江梵釋寺の僧なり、

兼算は俗姓詳ならず、出家して梵釋寺十禪師に擧げらる、性布施を好み、常に阿彌陀佛を念誦し、且つ不動尊に歸依す、嘗て夢に人あり告けて曰ふ、汝是れ前生阿彌陀佛を念誦せる一乞食なり、と、兼算病惱に沈み七日の後忽然起き、心神明了なり、弟子に語りて曰ふ、我命將に終らむと、口、念佛の聲を絕す、手定印を結ひて寂す、（往生極樂記、本朝高僧傳）

〔考〕往生極樂記等兼算の年代を缺く、蓋し延曆の頃の人ならむ、

ケンシヤ　兼舍　二二一四／二二二〇　〔眞宗〕河内顯證寺の住持なり、

兼舍字は蓮淳、童名は光德丸、三位と假號す、蓮如上人の第十三子なり、母は平氏、寬正五年に生る、文明元年蓮如上人大津の近松に一寺を創し、顯證寺といふ、三年四月北地を行化す、乃ち師をして留守せしむ、時僅に八歲なり、九年十月蓮如上人法語消息を與ふ、蓮如實如兩上人並に命終の際後事を五子に囑す、師は其一人なり、享祿[illegible]年[illegible]月廿五日蓮如上人文章集錄の跋を作る、一旦故ありて本山の門下を離れ、天文某年興正寺蓮秀と共に來皈す、四年河内顯證寺に至る、初め明應年中蓮如上人河内久寶寺村に寺を剏し、西證寺といふ、後、第廿一子實順之を主とる、實順の沒後其子實眞嗣き、早世す、仍て師請に應して之に住し、顯證寺と改む、時に年七十一なり、近松の等身祖像を奉す、天文八年寺を其子實淳に讓りて近江に歸り、近松の顯證寺堅田の稱德寺に兼ね住し、改めて光應寺本法院と稱す、十一年六月廿八日實淳五十一にして寂す、嗣なし、乃ち重ねて顯證寺を主ること凡そ九年、十九年八月十九日寂す、壽八十七、伊勢長島顯證寺、河内招提敬應寺は師の開創に係る、師七子一女あり、（本願寺通紀）

ケンシンサイ　兼信齋　リゼン履善を見よ、

ケンジユ　兼壽　二〇七五／二一五九　〔眞宗〕山城本願寺第八代なり、

兼壽號は蓮如、一號信證院と云ふ本願寺第七代存如上人の長子、母は其生國姓氏を詳にせす、應永二十二年二月廿五日京都東山大谷に生れ、童名を布袋麿、一に幸亭麿と呼ぶ、同二十七年十二月二十八日母師に一宗の再興を諭して去る、永享元年十五歲にして深く母の言に感し、慨然として一宗興隆の志を立つ、同三年中納言廣橋兼卿に養はれ、同年青蓮院尊應和尙の室に入り、兼壽と稱し、次て後、奈良大乘院經覺僧正を師として法相宗を學ひ、後獨り大谷の草菴に閉ち籠りて經論釋の骨髓を自得す、文安四年初めて關東に行化し、寶德元年に東北に遊ひ、宗祖の遺跡を歷拜す、當時眞宗は萎靡して振はす、宗祖以來法緣深き東北の地方と雖も、猶昔日の隆盛跡を留めず、師は此際東北の地方を行化し、諸所に精舍を建立し、熱心なる弟子を得て、漸く眞宗の衰微を復す、長祿元年六月存如上人寂するに方り、師宗務を執りて第八代の宗主となるべきに繼母異義ありて相續問題起り、師と應玄との間に紛議生せんとせり、師謙退して爭はす、然るに伯父宣祐遠く北地にありて之を聞き、事の容易ならさるを知り、直に上京して大に之を爭ひ、終に師を推して第八代とす、時に長祿元年師四十三歲なり、寬正元年六月道西の請に應し、宗祖製作の正信念佛偈を和解し、正信偈大意といふ、之に前後し

て末代の劣機を鑑み、數十通の要文を作る、二年宗祖の二百年忌を營むに方り四衆遠近より雲集し、以來一たび萎靡したる大谷の一流漸く興隆し壯麗なる三門新觀を加へ、勅あり月華門の號を賜ふ、寛正六年一月十日比叡山の山法師其興隆を嫉み、大舉して夜襲し、殿堂を燒く、師佛祖の影像を奉して三井の出坊近松寺に難を避け、或は湖東金森の道場（弟子道西の道場）に、或は湖西堅田の道場（弟子法從の建つる所）に法を說き、信徒漸く多し、其間屢々山法師の攻擊に逢ふ、宗門漸く盛ならんとするに方り亦三井の嫉妬を受け、近松寺に永住すべからざるに至りしか故に、應仁元年堅田に移り、次に三河に往きて行化すること三年餘なり土呂に本宗寺を建立す是より先き應仁二年師法務を嗣子光助に讓る、其三河に往きたるは單に難を避くるか爲にあらずして、當時「善知識賴み」と稱する秘事同地に流行せるを以て、如光の請により其匡正をなさむか爲めなり、文明二年

蓮如上人

攝津和泉を行化し、暫時して一たび近江の舊栖に歸へり、三年四月北陸を行化す、師越前加賀諸處を廻歷し、宗門の弘通に盡瘁し一處に止まらず、遂に同七年越前阪井郡吉崎に地を相し一寺を建立して專ら二諦相資の宗義を弘通したれは、東北七國の宗徒群集し、同國守護朝倉景敏も亦深く歸向し、坊舍建立二年ならすして加賀、能登、越後、信濃、出羽、奧州七ケ國より道俗男女陸續として四來し法を聞き、化に浴す、師此間地方の各所に法筵を開き、緣に觸れ、時に應し、文章を製して諸人に與ふ、此の如くして宗門漸く面目を新にするに方り、亦宗派の紛擾興り、文明六年三月二十八日高田專修寺の信徒など國守富樫政親に攻められて坊舍燒失す、同七年七月潛に吉崎を出て、若狹小濱を過き、丹波の山路を越え、攝津萩谷を經て富田に到り、敎行寺を剏し、七年八月河內に入りて出口に光善寺を建立す、同八年堺津に信證院を營み、時々諸所に法筵を設け、南は大和貝塚にも至ると云ふ、十年山科野村に寺地を選び、十一年工を始め、十二年八月祖堂成り、大津近松寺より祖影を遷して之を安置し、十三年六月四日本堂成る、延德元年七十五歲にして職を光兼に讓り、南殿に退休す、信證院と稱す、退隱後と雖、諸所に行化す、明應の初め法專坊空善の志願により、播磨英賀に本德寺を剏建し又大和飯貝に本善寺を建立す、同五年九月大阪に敎恩院を建立して、此に移り住すること凡そ四年、同七年四月疾に罹り、八年二月山科に歸へり、三月十日自ら病中の容貌を寫し、獲一念信、今詣安養、穢身永絕、法相速證の偈を題し、同二十五日寂す、壽八十五。宗徒師を稱して中興上人となし、明治十五年三月

今上天皇勅して慧燈大師の諡號を賜ふ、師生前男子十三人、女子十四人を挙み、在職三十三年、寺を擁すること十五宇、法弟道徳、道西、道覺、法役、龍玄、空賢、教賢、如光、願生、覺然、法眼、願知、順誓、空專、善宗、道宗、了妙、法性、淨祐、明誓、了敬、蓮敎、等最も聞ゆ、著作正信偈大意一卷あり、後人一代聞書　御文章五帖を編成して刊行す（蓮如上人遺德記、本願寺通記、叢林集、大谷嫡譜、本山寺志）

ケンシユン　兼俊　一七……〔眞言宗〕金峰山鳳閣寺の僧なり、兼俊は字を圓林と云ふ、嘉承元年二月十七日金峰山鳳閣寺にて静觀と共に傳法灌頂を受く、時に年四十五なり、（續傳燈廣錄）

ケンジユン　兼順　二一九九／二二三〇〔眞宗〕加賀光教寺の住持なり、兼順字は顯誓、童名は光慶丸、後光玉丸と改む、假に侍從と稱し、光闡坊と號す、光教寺蓮誓の第九子、母は前權大納言侍委の女なり、長兄蓮能の法嗣となり、加賀山田光教寺に住す、嘗て證如上人の命を受けて北越講和を謀る、永祿九年八月證如上人の忌に當り、顯證寺佐玄と共に院家に進む、同月下仰教什、教清、純惠と共に法印に叙せらる、十年十月法流相違の由ありて證如上人の疑を蒙りて籠居す、十二月十五日今古獨語二卷を著し、翌年六月反故裡書一卷、紀祖門事實諸寺緣由等を著して世に傳ふ、元龜元年十月廿四日寂す、壽七十二、光教寺は今廢せり、（本願寺通紀）

ケンジヨ　兼助　一九三〇……〔眞言宗〕紀伊高野山の檢校なり、兼助字は慧深、後源空と改む、和泉の人なり、論場に臨みて盛名あり、一品親王に賞せられて櫻池院の乳香を賜ふ、文永五年十二月山衆に推されて檢校となり、七年六月六日寂す壽缺く、付法の弟子公賢、行慈、影實、印海、尊印、影耀、湛濟、玄心、靜曉、良賢、覺兼、寛驗、見蓮、成俊、慧任、覺成、覺性等あり（傳燈廣錄）

ケンチヨー　兼澄　二四〇八……〔新義眞言宗〕京師蓮臺寺の學僧なり、兼澄字は良眞、鄕貫詳ならず、京師蓮臺寺に住し、享保四年四月江戸護持院に住す、同九年十一月退休し、寛延元年十二月十六日寂す、壽缺く、著作大日經開題義釋一卷、同口筆一卷、十字義考要一卷なり、（新義眞言宗史料）

ケンチヨー　兼澄　一八六二……〔眞言宗〕和泉藥師寺の學僧なり、兼澄俗姓は物氏、和泉の人なり、早く正智院定兼の門に入りて祕印を傳付す、去りて鄕里の藥師寺に住して大に密教を布く、後鳥羽帝の詔により、和泉の僧統となり、後、寶光院に移りて常に淨業を修す、師世塵を嫌ひて院を道範に付し、建仁二年八月三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンリヨー　兼了　二一五二／二二四三〔眞宗〕加賀願德寺の住持なり、兼了字は實悟といひ、後名を兼俊と改む、童名は光童丸　中將と假號す、蓮如宗主の廿三子、母は源氏なり、生れて百日本泉寺蓮悟に養はれて嗣となる、文龜三年十一歲にして薙度し、二條院中納言雅康の猶子となる、前右大將忠輔の猶子となり、加賀清澤願得寺の住持となる、勅して權少僧都に任す、天文十年七月十五日本山本文系圖一卷を著す、天正四年三月二日本山の故實百七十二條を錄して之を顯如宗主に進む、時に年八十九なり、稱して實悟記と稱す、十一年十一月廿五日寂す、壽九十二、三子一女あり、（本願寺通紀）

ケンイ　顯意　一八九八／一九六五〔淨土宗西山派〕山城眞宗院の僧な

り、　顯意字は道教俗姓は平氏なり伊集院氏を稱す、薩摩島津の人なり、幼にして原山の聖達に師事し、後深草眞宗院隆信に事へて淨土の宗義を傳へ深詣あり、嵯峨釋迦院、竹林寺に住し、盛んに法化を揚ぐ、平素和歌を嗜み秀作あり、嘉元三年（一說二年）五月十九日寂す壽六十七、著作、楷定記（觀經疏）三十六卷、同疑端四卷、淨土宗要三卷、竹林鈔、一乘海義、二通血脉圖併裂章、五方便鈔、三心問答鈔若干卷あり、門下戒圓良間あり、龍御殿に止まりて師業を繼げり、（淨土系譜、淨土總系譜、淨土傳燈錄、僊歌作者部類、）

ケンイ　顯意　ドーキョー道教を見よ、

ケンエ　顯慧（……）〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、顯慧字は依納、藥師寺に住して戒解共に備はる、紀伊伊都郡の俠屋寺の尼衆十一面觀音の像を慶讚して師を請して導師となす、（本朝高僧傳）

ケンエ　顯慧（二三七六）〔淨土宗西山派〕尾張正覺寺の學僧なり、顯慧は性相の學に通す、松尾の大華嚴寺鳳潭に抗敵して書を作る、寂年月日詳ならす、著作起信論幻虎錄辨僞三卷、破邪決二卷あり、（近世佛家著作目錄稿本）

〔考〕顯慧は享保頃の人なり

ケンエ　顯慧（一五四六）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、顯慧は寬信に三論・密を稟け、東南院に住して二教を講す、仁和二年東大寺を董す、（本朝高僧傳）

ケンコー　顯杲（……）〔眞言宗〕大和奈良の已講なり、顯杲或は式部已講といふ、清源武者賴經の同胞なり、實運座主の法を傳ふ、付法の弟子二人乘徧、源幸と稱す、（續傳燈廣錄）

ケンゴン　顯嚴（一八八九）〔眞言宗〕山城隨心院の學僧なり、顯嚴は中原廣宗の子なり早歲より小野隨心院に入り、增俊阿闍梨を禮して落髮受業し、灌頂法を傳へて主席に據り、東寺の門者となり僧都に任ず、寬喜の初め、敕を奉して後七日御修法を行ひ、勅賞せられて隨心院を祈願場とす、師順德堀河四條の三帝の護持僧となり、牛車に乘し宮中に入るを許さる、寂年及壽缺く（本朝高僧傳）

ケンシン　顯眞（一七九〇—一八五二）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、顯眞は美作守藤原顯能の子なり、夙に比叡山に登りて顯教を座主明雲に學ひ、密灌を法印相實に稟く、年四十を過ぎて隱遁を欲し、僧都の官を辭し、洛北の大原に退隱す、壽永二年秋明雲の奏により僧官を賜はんとすれとも蓬門を閉ちて出てす、嘗て慧光房永辨の誘ふに依り、源空を吉水寺に訪ふ、文治二年秋源空を大原の勝林院に招き、丈六堂に會して專念の義を問ふ、師其義を深く信し、餘行を捨てゝ專ら念佛三昧にふける、三年正月に勝林院に同志十二人と不斷念佛を修し、十月大原山中に性智境智等の五房を建て蓮社の所となす、六年三月敕して延曆寺の座主に任するも避拒して往かす、勅使臨みて綸旨を宣ふ、遂に止むを得すして職に就く、五月二十四日最勝會の證義者を勤め權僧正を拜す、建久三年十一月十四日東塔の圓融房舍に在りて安祥にして寂す、壽六十三、遺命に依り全身を勝林院に葬むる、（本朝高僧傳）

ケンジュー　顯重（一九三三—二〇一九）〔天台宗〕但馬大林寺の開山なり、　顯重俗姓は平氏、武藏の人なり、顯重は定顯覺助二和

尙に師承し、嘉元三年入贈す、元亨二年但馬に大林寺を建てゝ開山となり、延文四年十二月十五日寂す、壽八十七、(三井續灯記)

ケンジヨ　顯助　一九五四／一九九〇　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、顯助は大夫僧正と號す、越後守平貞顯の子なり。禪助法師に從ひて宗旨を學ひ、延慶四年少僧都となり、正中二年長者に加任す、三年權僧正に轉し、同年十二月廿三日法務に補す、元德二年七月廿一日寂す、壽三十七、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

ケンシヨー　顯正　(二一一六)　〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり、　顯正字は中叟と云ひ、道菴建に師事して其法を嗣ぎ。諸山に住するの後建長寺に主となる、康正二年十一月二十六日寂す、壽缺く、(延寶傳燈錄)

ケンシヨー　顯證　(一九四七)　〔淨土宗〕相模某寺の僧なり、顯證字は良圓、其氏族は詳ならず、然圓上人に從て具足戒を受け、後記主禪師良忠に投して宗戒を受く、道化盛なり、示寂の年月日缺く(鎭流祖傳)

〔考〕　顯證は弘安頃の人なり

ケンシヨー　顯證　二二五六／二三三八　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、顯證字は一音俗姓は木村氏慶長二年十二月十一日攝津生玉に生る、(一說和泉に生る)甫めて十一歲の時父母の家を辭し、紀伊高野山に登り、釋迦文院の宥成阿闍梨に謁して落飾し、宥盛に隨ひて廣澤華嚴院に登り、十八道より胎藏法に至るまて之を修行し、暫く故里に歸り、和泉堺に假居す、時に十八歲となり益密の玄奥を慕ひ、仁和寺に來り心蓮院に寓す、又栂尾山寺に入り菊淵に進み、乃ち菊淵之に就きて廣澤流の四度業を重受して、初めて灌頂密壇に入り、南部の印可を受く、又小野の法流を希望し、洛西法輪寺恭畏法印の門を叩き、重ねて小野地藏院の四度業を修し、後槇尾平等心王院の比丘惠燈の法を續き、地藏院の灌頂を受く、然る後還りて心蓮院宥嚴正に從ひ、悉く廣澤の源底を盡くす、之より諸方に招かれて密法を修し、又經書の校補を力め、仁和寺高野山兩寺の文庫に入り經書を修繕するもの數千卷に至る、寬永年中將軍家光に請ひて仁和寺寺基を再興するに當り師專ら之を斡旋す、河内延命寺淨嚴其下に弟子の禮を執り、西院流の事相を受く、晩年法住菴を營構して幽棲す、延寶六年二月十三日寂す、壽八十三(續日本高僧傳、眞言宗史料)

〔考〕　木村重成の子なりと傳ふるも出生の年(慶長二年)を以て推すに事實にあらす、當時重成幼年にして父たるへからさるなり、

ゲンジヨー　顯常　二二九四／二三七六　〔臨濟宗〕京都相國寺の學僧なり、　顯常字は大典、蕉中一に梅莊と號す、近江の人、出家して佛乘に涉り、儒典を宇野明霞の門に受けて經史に通し、文章歌詩を善くす、安永八年相國寺に住す、天明元年幕府の命により日韓應酬の文書を掌り、文名大に揚り、白河樂翁侯の優遇を受く、寬政五年天台の六如慈周に謀り、相共に佛教の論章疏を支那に送致せんとし大に力を盡す　享保元年三月八日寂す、壽八十三、著作地藏本願經和解、諸宗傳畧、茶經詳說、煎茶譯、平安鬱收記、萍遇錄、柿本人麿事跡考、拜說續文編、唐詩擷英補、唐詩礎續編、峨嵋山月圖說、初學文談、

聯句式、九族稱呼圖、世說匡謬、各一卷、金玉詩韻、詩語解、學語編、初學文範、各二卷、尺牘式、詩律發揮、各三卷、四書越俎、皇朝事苑、文躰明辨粹鈔、同附錄、各四卷、文語解五卷、世說集成六卷、世說鈔撮、同補六卷、唐詩選解頤七卷、其他北禪詩艸六卷、同文章四卷、小雲栖稿十二卷、咏物詩二卷、小雲手簡四編八卷、昨非集二卷等あり、(一宵話、續諸家人物志、近世名家著述目錄)

ケンゼイン　顯是院　ニチヨー日要を見よ、

ケンセー　顯誓　ケンジユン兼順を見よ、

ケンソー　顯窓　キヨージ慶字を見よ、

ケンソン　顯尊　サチヨー佐超を見よ、

ケンチ　顯智　一九一〇―一九九四　〔眞宗〕伊勢專修寺第三代なり、顯智は何許の人なるかを知らす、餘五將軍の後胤井東平基知なる者の、嘗て富士山に上り、天池の邊にて之を得、携へ歸りて子と爲す、時に五六歲はかりなりしと傳ふ、學に就いて一を聞きて十を知る、比叡山に登り、東塔の覺賢に從ひて出家し、賢順と稱す、住山十年、一旦鄕に歸り高田の眞佛上人に就き淨教を承く、明年重ねて親鸞上人に謁し、弟子となる、名を更めて顯智といふ、時に安貞二年五月二日なり、是より上人に昵近し、常に德化に浴す、或は東北諸州に赴き、道化を布宣す、正嘉二年眞佛世を厭ふ、因て師に命して專修寺を主とらしむ、親鸞上人の滅後大谷に奉事し、屢々勤勞あり、華園天皇勅して大僧都に任じ、法印に叙し、天台靈光院門跡に補す、建武元年七月四日辰刻に高田の金堂に入りて禮拜し、西に向ひて去り、忽ち所在を失すといふ、一說に壽八十五といふ、(高田三祖傳、本願寺通紀)、

ケンテー　顯貞　二二二四　〔淨土宗西山派〕山城禪林寺の第三十五代なり、顯貞は鄕貫詳ならす、融舜上人の法を嗣く、大永四年に京師の善長寺より禪林寺に上る、享祿元年南禪寺塔頭皈雲院と地界を爭ふ、天皇綸旨を皈雲院に賜ひたるを以て、師遂に默止す、後、法眼琳賢に命して大曼陀羅一鋪を圖せしめ、西三條公(稱名院殿)をして銘文を書せしめ、永く禪林寺に安置せしめたり、永祿七年七月十三日寂す、寂壽缺く、法嗣、甫叔、俊式、奉全、純長、策傳、長感、等、皆一方の法匠となる、(禪林寺記錄、淨土系譜)

ケンドー　顯道　キヨーコー敬光を見よ、

ケンニチ　顯日　一九〇一―一九七六　〔臨濟宗〕下野雲巖寺の開山なり、顯日字は高峰、後嵯峨天皇の皇子、母は藤原氏、仁治二年に城南の離宮(後に龍翔寺となる)に生る、幼より腥を茹はず、十六歲聖一國師(辨圓)に投じ落髮す、嘗て一老宿に就きて鎌中の意を問ふ、老宿曰ふ、宗門の活頭は言詮の及ぶ所にあらず、師曰ふ、恁麼如何其意趣を知らむ、老宿曰ふ、是れ自悟して始めて得べし、師便ち端坐參究年あり、普請に値ふ途次人の草を刈て誤て蚯蚓を斷るを見即ち聖一國師に問うて曰ふ、蚯蚓斬りて兩段となる、兩頭共に搖ぐ、未審佛性那頭にか在る、國師曰ふ、須彌高からず、大海深からず、師旨を領す、時に二十歲なり、南都の某律師に師を訪ひ、師の英敏を稱し、請ひて携へ去る、師其下に留ること久しからず、遁れて東福寺に歸り、國師に侍すること數年なり、宋僧兀庵寧の建長寺に入るに際し、往て掛搭す、後、下野那須に茅菴を結

び隱接す、道聲四傳し、禪客群集するも、皆辭して接せず、檀越某師のために一寺を建立せむとす、師呵して止む、強て請ひ、富者金帛を施し、貧者力巧を施し、不日に殿堂門廊成る、即ち東山雲巖寺と號す、時に佛光禪師（祖元）圓覺寺に住す、一翁豪の介するありて鎌倉に入り、佛光禪師に見ゆ、禪師百丈捲席の公案を擧して、問ふ師曰ふ、一狀に領過す、佛光曰ふ、儞什麼に因りてか老僧が鉢盂裏に向ひて洗濯す師曰ふ、百雜碎、と、佛光呵呵大笑す、乃ち辭して雲巖寺に歸る、佛光書を致して平生の述作を求む、師偈を以て答ふ、一見明師意轉閑、痴憨終日坐烟巒、飽柴飽水無餘事、禪道文章何處安、再び佛光禪師に謁す、問答數回、明珠の玉盤に走るが如し、即ち信衣並に法語を授與せらる、弘安九年佛光寂し、遺書至る、即ち獻供上堂し、建長寺に走りて喪を治す、雲巖寺に歸へり住し、法化益盛なり、時に南浦紹明筑の崇福寺に住す、天下の學徒那須横嶽を指して二甘露門と云ふ、正安二年六十歲鎌倉淨妙寺を董す、嘉元元年京師に上り、乾明山萬壽寺に住す、夢窓疎石來叩す、同三年東下淨智寺に遷る、翌年同寺を退き、德治二年再び萬壽寺を董す、夢窓疎石重ねて謁す、遂に佛光相傳無準の法衣を疎石に附す、延慶元年東歸し、二年雲巖寺の禪窟に投す、正和元年再び鎌倉に入り、淨智寺に住す、三年建長寺に遷り、次第また雲巖寺に歸る、正和五年十月廿日同寺に寂す、壽七十六、臘六十一、遺偈に曰ふ、坐脫立亡、平地高堆、虛空翻筋、斗刹海動、風轟唱一唱、乃ち雲巖寺に葬り、淨智寺に正統塔を建つ、（後建元年間建長寺に移す）勅諡佛國應供廣濟國師といふ、五處七會の語錄あり、元の鳳臺の古林茂、雞足の淸拙澄、本覺の靈石芝、序跋をつくる、（行錄、延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

ケンニチ　顯日　ドーケン道憲を見よ、

ケンニヨ　顯如　コーサ光佐を見よ、

ケンミヨーイン　顯明院　エトー慧鐺を見よ、

ケンユー　顯祐　二〇七二……　〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、顯祐は弘意の法を嗣きて無量壽院の三十三祖となる、應永十九年七月二十七日寂す、付法の資俊增といふあり、（續傳燈廣錄）

ケンヨ　顯譽　一九三五—一九八五　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、顯譽は禪助法師に就きて宗要を學ひ、正和二年東寺の長者に任し、同三年權僧正に五年正僧正に累轉し、元應元年大僧正に昇る、正中二年九月七日寂す、壽五十一、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

ケンヨ　顯譽　シンジユン心純を見よ、

ケンヨ　顯譽　ユーテン祐天を見よ、

ケンヨーボー　顯揚房　シユンセー俊晴を見よ、

ケンリツ　顯律　ゲンシユン源俊を見よ、

ケンアン　賢安　一五一八……〔……〕伊豆走湯山の僧なり、賢安は甲斐八代郡の人、俗姓竹生氏なり、伊豆走湯山に登り菴を搆へて住す、承和三年四月靈夢を感し、觀世音の像を刻して安置す、齊衡二年四月安然和尙來り山中に求聞持法を修す、賢安和尙を仰いて度を受く、天安二年二月四日寂す、（走湯山緣起）

ケンエー　賢永　（一五二三）　〔天台宗〕伯耆國分寺の僧なり、

賢永は何の宗なるを考へず、伯耆の講師に補して傳燈大法師位に任す、貞觀五年奏して疫病饑饉を禱らんか爲に一萬三千佛觀世音菩薩像一切經を圖書し、穀百石を賜ひて國分寺に安置し、且つ國司に命して毎年其穀を出して斷つことなからしめんことを請ひて許さる、（本朝高僧傳）

ケンエン　賢圓　（一七九五）　三條一流の佛工なり、賢圓或は兼圓に作る、圓勢の三男なり、法印に叙せらる、大治長承保延年代の人なり、作るところの佛像夥多あり、（長秋記、古本僧綱補任、中右記）

ケンエン　賢圓　（一七八五）〔眞言宗〕河内廣隆寺の僧なり、賢圓字は大智といふ、河內廣隆寺の阿闍梨なり、淳寬と共に天治二年二月六日傳法職位を無量光院にて受く、林覺其唱導となり、聖賢は護摩教授、賢覺は嘆德たり、（續傳燈廣錄）

ケンオー　賢應　……五八……〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、賢應は大和の人、夙に明詮に就きて出家受學し、法相を究め、因明に精通す、貞觀五年維摩會の主座に昇り、元興寺に住す、此年山階寺の長講筵に東大寺の三修と因明比量相違前宗後因を論す、五年正月八日大極殿最勝會の講師に任し、十年三月六日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンカク　賢覺　一七四〇／一八一六〔眞言宗〕山城醍醐山理性院の開山なり、賢覺字は理性といひ、金剛王聖賢の家兄なり、承暦四年に生る、始め賴照に從ひて傳法職位を受け、又勝覺を禮し、嘉承三年六月五日大智院にて職位灌頂を受く、時に年廿九なり、父賢圓の家を改めて理性院と爲し、三寶院の一灯を分ちて法幢を建つ、保延元年三月十六日寂す、壽七十七、（續傳燈廣錄）

ケンキ　賢季　……二〇一八〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、賢季は其俗姓生國及び師承詳ならず、康永三年東寺の長者並に權僧正に任し、延文元年正に轉す、同三年正月卅日寂す、壽缺く、（東寺長者補任）

ケンケー　賢憬　一三六五／一四五三〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、賢憬俗姓は荒田氏尾張の人なり、出家して興福寺宣教に唯識を學び、學內外に涉りて戒法を堅守す、天平勝寶七年鑒眞和尙羯摩の法を東大寺に於て行ひ、師これが受者となる、是れ我國登壇受戒の始めなり、天平寶字二年秋師大藏經五千四十八卷を寫して招提寺に置く、師七帝の崇敬を受けて大僧都に歷任し、寶生山を捌して第一世となる、延曆十二年正月桓武天皇遷都を議し、師天文地理を善くするを以て勅を奉して鴻基を計畫す、今の平安城これなり、此歲十一月八日寂す、壽八十九、（本朝高僧傳）

ケンゲン　賢源　（一七二九）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、賢源は經救僧都に從ひて唯識の旨を受け、康平元年維摩の大會に衆の爲め大義を講す、延久中寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンゴ　賢護　（一五二八）〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、賢護は近江比良山の靜守に從ひて唯識の旨を稟け、元興寺に住す、貞觀十年奏して自ら作る所の佛像を禁中及び諸國に分置せんと請ひ、許可せらる、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンコー　賢孝　（……）〔曹洞宗〕越前寶圓寺の僧なり、

賢孝字は心忠薩摩の人、長ずるに及んで越前寶円寺直傳正祖禪師に投じて師事し、侍司に入り、尋で首衆分座す、直傳の寂後其席を嗣ぎ、再び總持寺を主とり、詔に依り紫衣を賜はる、某年寂す、壽欠く、法嗣桂林香、義山信、竹菴賢あり、（洞上聯灯錄）

ケンコー 賢廣 二二九七 二三五七 〔眞言宗〕武藏護國寺第二代なり、賢廣俗姓は早瀨氏、常陸筑波郡の人なり、十四歳知足院賢晴の室に入りて下髮受戒し、四度の別行、及び灌頂を受く、萬治元年三月笈を負ひて信海の會場に到り、後諸所に游方して亮賢に知られ、命に依りて清水寺に住し、又護國寺の席を讓らる、元祿元年桂昌院殿の請命により普門品を城内に講す、元祿三年春綱吉隣境一町餘を給す、同五月幕府の執奏により權僧正に任せらる、同九月將軍自書なる悉知院の額を賜ふ、八年秋僧正に轉任し、同十一月職を辭して閑隱寺に退休し、同十年五月二三日寂す、壽六十一、（豐山傳通記）

ケンゴー 賢豪（……） 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、賢豪は幼にして豪忠の門に入りて宗旨を研む、寂年欠く、（三井續灯記）

ケンカイ 賢海 一八二三 一八九七 〔眞言宗〕山城醍醐山第三十三代の座主なり、賢海字は三位給事といひ讃岐三位俊盛の子なり、先つ源運の法を傳へ、又杲海の法を嗣き、金剛法院四世となる、貞永元年六月宣を奉して醍醐山二十三代座主に補し、八月官符を賜ひ九月廿一月拜堂す、嘉禎元年十二月權僧正に任し、二年十二月職を實賢に讓り、三年僧正を辭し、十月廿三日寂す、壽七十六、（續傳燈廣錄）

ケンシツ 賢室 ジチヨー自超を見よ、

ケンシン 賢信 （……） 〔眞言宗〕山城醍醐山松橋の十二代なり、賢信は花山院尙書郎兼信の子なり、誰の資なるかを知らす、松橋に住し法眼に叙せらる、（續傳燈廣錄）

ケンシン 賢信（……） 〔眞言宗〕山城醍醐山勝正院の僧なり、賢信後改めて靜聖といひ、上來と字す、賢盛の高足、且つ俗甥にして、大藏卿宗時の子なり、珍海に就きて顯宗を學ひ、理性院の傳法灌頂を受け、又且つ寶心の心印を受く、後廣澤傳法院主隆海の門を叩きて天水を吞む、付法十五人あり、乘印、靜遍、琳曉、寶瑜、觀賢、玄心、敎意、壽海房海、蓮慶、光圓、覺瑜、聖海、長辨、隆性、是なり、（續傳燈廣錄）

ケンジン 賢深 二〇九〇 二一六四 〔眞言宗〕山城東寺百八十三代の長者なり賢深は後釋迦院法務大僧正と稱す、中山井尙書定親の子、隆濟僧正の室に入りて出家し、庭儀灌頂を同師に受け、水本十三世の跡を踐みて隆濟の法を繼き、東寺百八十三代の長者法務大僧正となる、永正元年正月二十九日寂す、壽七十五、（續傳燈廣錄）

ケンジン 賢尋（二〇……） 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、賢尋は左近權中將實方の子なり、濟信法師に從ひて宗要を學ひ、東寺の長者に任し、圓融寺別當となる、天喜三年九月十七日寂す、壽欠く、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

ケンシユイン 賢珠院 トクジユー得住を見よ、

ケンシユン 賢俊（二〇〇〇）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、賢俊は建武四年正月六日僧正に任し、同二十四日東寺の長者

となる、暦應二年權法務に補し、同三年寺務となる、其寂年缺く、(東寺長者補任) 増補を見よ

ケンシユン　賢俊　リヨーエー良永を見よ、

ケンシユン　賢春(……)　[曹洞宗]伯耆圓福寺の僧なり、賢春字は陽谷、伯耆の人、俗姓は源氏なり、笠翁仲仙に師事して印可を受け、總持寺に出世し、移りて伯耆圓福寺に主となる、寂年、並に壽缺く、(日本洞上聯灯錄)

ケンシユン　賢舜　二一八七……　[日蓮宗]越前妙顯寺第六代なり、賢舜俗姓生國未詳、越前敦賀妙顯寺圓舜に師事し、終に其後ちを嗣き、權大僧都となる、應永七年九月二日寂す、壽欠く、(本化別頭佛祖統紀)

ケンジユン　賢順　ジツサン實算を見よ、

ケンジヨ　賢助(一九七八)　[眞言宗]京都東寺の長者なり、賢助は正和四年に東寺の長者となり、文保二年七月十三日醍醐寺の座主に遷つる、其寂年缺く、(東寺長者補任)

ケンシヨー　賢證　二〇八五……　[日蓮宗]妙顯寺第四代なり、賢證俗姓生國未詳、敦賀妙顯寺第三代永賢に師事し、其後を嗣ぐ、應永三十二年十月十一日寂す、壽欠く、(本化別頭佛祖統紀)

ケンシヨー　賢紹(……)　[眞言宗]山城醍醐山松橋の十六代なり、賢紹一に通紹と稱す、武者小路大納言の子なり、閻魔堂の別當を兼ねて松橋の十六世に居る、(續傳燈廣錄)

ケンシヨー　賢性(……)　[眞言宗]山城醍醐山松橋の十七代なり、賢性は東寺百七十三代の長者法務大僧正となり詔して護持僧に任す、常に觀心院に居る、(續傳燈廣錄)

ケンシヨー　賢昭(一七四七)　[天台宗]某寺の僧なり、賢昭俗姓は中原氏内藏允菅原忠成の外舅、京都の人なり、其師承詳かならず、持戒清淨にして毎日法華を讀誦し、寛治年中壽六十餘にて寂す、(拾遺往生傳)

ケンシヨーボー　賢聖房　ゼンヨ禪譽を見よ、

ケンセン　賢暹　一六八九 一七七二　[天台宗]近江延暦寺座主なり、賢暹俗姓は源氏、下野權守信頼の子なり、出家の後頼源長實の二師に就て天台教を學び、天仁二年天台座主に任ず、天永三年十二月二十三日寂す、壽八十四、(天台座主記)

ケンセン　賢仙　一九二七 二〇一二　[臨濟宗]肥前高山寺の禪僧なり、賢仙字は棊山、俗姓藤原氏、比叡山に學ぶ、後教を捨て禪に投じ、無隱範に師事し法を嗣ぐ、建仁寺住持の命ありしも固辭す、將軍足利尊氏周防に安國寺を創し請す、周防の太守大内弘世師に歸依し數寺を創し、演說の地とす、文和元年十二月十二日寂す、壽八十六勅謚照覺普濟禪師と云ふ、題自肖、無ニ德可レ望、無ニ名可レ揚、德名共舍後、誰說ニ短兼ト長、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

ケンソー　賢聰(……)　[眞言宗]某寺の僧なり、賢聰其詳傳なし、只弘法大師の弟子たるを知るのみ、(弘法大師弟子譜)

ケンソー　賢窓　ジヨーシユン常俊を見よ、

ケンゾー　賢藏　二四八四……　[眞宗]越前三國淨願寺の住持なり、賢藏は越前の人、高倉學寮に學び、文化二年五月二十一日寮司を經て擬講となり、始終心要を講じ、後唯識二十論、

四教儀諦觀錄、成唯識論、十不二門指要鈔、三經往生文類、法華玄義等を講ず、文化十三年三月二十八日嗣講となり、十四年夏無量壽經を講ず、文政七年七月二十七日寂す、壽缺く、(高倉學寮講者列傳稿本)

ケンソン　賢尊（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、賢尊字は如意といひ、內供奉十禪師となり、聖賢と同日に傳法灌頂を受く、時に年六十七、(續傳燈廣錄)

ケンチュー　賢仲　ハンテツ繁哲を見よ、

ケンチョー　賢長（……）〔眞言宗〕山城妙法院の第五代なり、賢長は妙法院僧正と稱す、前法務光超の灯を續き、詔して東寺百六十五代の長者法務僧正に叙す、後滿濟の傳を承く、(續傳燈廣錄)

ケンチョー　賢朝　一九九六／二〇五九〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、賢朝俗姓は大中臣氏吉田社務の子なり、深く三學に通し、永和三年夏大堂立義の初問に侍す、應永六年五月三日寂す壽六十四、(三井續灯記)

ケンドー　賢幢　二五〇三〔眞宗〕加賀金澤西方寺の僧なり、賢幢は淨月菴と號す、寮司となりて文政元年以降高倉寮に彌勒上生經疏法華一乘義を講し、天保元年十一月二十一日擬講となり、翌年より尊號銘文五教章易行品を講し、同十四年正月二十六日寂す、(眞宗史料)

ケンニョ　賢如　ショーゲン尙彥を見よ、

ケンミョー　賢明　二五二五〔眞宗〕能登鹿島郡七尾村西勝寺の住持なり、賢明は寮司となりて天保十一年より學寮に入識大旨大乘起信論を講し、嘉永二年十二月二十三日擬講となり、文久三年五月二十六日歸役し、慶應元年寂す、(眞宗史料)

ケンミョー　賢明　ジサイ慈濟を見よ、

チンヨ　賢譽（……）〔眞言宗〕山城醍醐山橋第十八世なり、賢譽は日野大納言資明の四世隆光の子なり、閻魔堂の別當を兼ねて松橋の十八世に居り、常に觀心院にあり、權僧正に任す、其法系詳かならず、(續傳燈廣錄)

ケンワ　賢和　マンセツ萬說を見よ、

ケンワ　賢和（一五二五）〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、賢和俗姓不詳、性相に兼通す、貞觀七年四月二日上奏して近江野洲郡の奧島に堂宇を開き、神宮寺と號す、示寂の年時缺ぐ、(本朝高僧傳)

ケンア　見阿　リョーカン靈鑑を見よ、

ケンゲサイ　見外齋　シューギ宗祇を見よ、

ケンクー　見空（一九二八）（……）奈良海龍王寺の律僧なり、見空字は慈寂、仁治二年興正菩薩に從ひて納具し、文永五年灌頂法を受く、密教律部研盡せざるなく、海龍王寺に住して、大に道化を敷く、寂年缺く、(本朝高僧傳)

ケンサン　見山　スーキ崇喜を見よ、

ケンシン　見眞　二四五九／二五三三〔眞宗〕安藝長德寺第十三代なり、見眞號を狼峯といふ、少壯の時廣島の老儒山口某の門に入り、儒を學び、又々眞利に依りて他部及び宗乘を兼學す、後石泉の門を叩きて笈を留め、專ら宗乘を修すること多年、弘化四年得業の科に登り、嘉永三年助敎に進み、安政六年員外司敎となり、明治六年九月廿五日寂す壽七十五、(學苑談叢)

ケンシンダイシ　見眞大師　シンラン親鸞を見よ、

ケンジユ　見壽　……二三二一　〔淨土宗〕日向淨念寺の開山なり、見壽は然蓮社師譽と號す、俗姓は大川氏、日向佐土原の人なり、阿譽上人に師事して法を嗣ぎ、郷里に皈りて淨念寺を開く、寛文元年閏八月七日寂す壽缺く、（淨土總系譜）

ケンシヨー　見性（……　）〔淨土宗西山派〕備後蓮臺院の學僧なり、見性は長門の人なり、西山の善惠房證空の門下證入東山法を開き、證入の下に覺入あり、見性は覺入に師事して其宗義を傳へ、備後の蓮臺院に住し、法化を揚く、示寂年月は缺く、（淨土傳灯錄、淨土總系譜）

ケンシヨーイン　見性院　ニチガン日顏を見よ、

ケンズイ　見瑞　二五二七　〔眞宗〕美濃一之枝村興雲寺の住持なり、見瑞は擬寮司となりて文政十一年高倉の學寮に三十頌を講して寮司となり、天保七年以後五蘊論、三十三過本作法、義林章、二十論述記を講し、安政三年正月十二日擬講となりて文久元年以降一多證文、入阿毗達磨論を講し、尾張圓城寺に移住して元治元年秋易行品を講し、慶應三年七月廿三日寂す、（眞宗史料）

ケンセツ　見雪　二二八六／二三四五　〔曹洞宗〕相摸最乘寺の僧なり、見雪字は鰲山、薩摩國伊佐樺山氏の子なり、年十六歲笑岳寺玉峯に依て出家す、明年遊方して初め源清に江戸の吉祥寺に謁す、興聖寺の萬安、龍泰寺の長正、正覺寺格宗に參見す、皆な機緣契はず、再び泰龍寺に上て愚屋に謁し、師資の禮を執る、郡上に古寺あり、林黄と名く、師其閑寂を愛して獨處す、寛文四年衆請て龍泰寺に法を開かしむ、延寶二年最乘寺を董す、期年にして龍泰寺に歸る、七年秋明の心越禪師長崎に來る、師久しく宗門荒涼に皈し、其人に乏しきを嘆す、今其至るを喜んで欣然として專使を發して慰問す、翌年心越京師に入るを聞き、師親しく往て相訪ふ、贈るに偈を以てす、晚年に龍雲寺に退老す、貞享二年九月十日寂す、享年六十歲、（日本洞上聯灯錄）

ケントー　見塔（……）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、見塔は京都の人、初め比叡山に居りて天台の教觀を究め、後奈良戒壇院に住し、實相の室に投して具足戒を受け、白毫寺に遊びて眞珠思順の二師より金剛乘を傳ふ、又東大寺に寓して智舜に相破の說を聽き、菴を洛北に結び、衆を集めて法を演す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンドー　見道（……）〔淨土宗〕江戸定泉寺第二代なり、見道は登譽と號し、隨波上人の甥なり、出家して隨波に宗乘を學び、江戸駒込の定泉寺に主となる、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

ケンブツ　見佛（一七六八）〔臨濟宗〕奥州松島寺の僧なり、見佛俗姓不詳、奥州の人なり、出家し勝地を求めて住す、千松島の景を愛し、庵を結びて精修苦行すること十二年、法華經を誦持すること六萬部に滿つ、其後數を記せず、世に六根淨といふ、屢鬼神を役使して靈應を顯はし、諸衆其法化を被る、鳥羽天皇其德を嘉し、佛像寶器を賜ふ、これより士人千松島を呼びて御松島と云ふ、後能登の稻津に至り、其景を愛し菴居す、西行法師北地に遊び、日に問訊して和歌を酬唱したりと云ふ、年八十二にして所住にて寂す、（本朝高僧傳）

ケンホー 見方（二〇六三）〔曹洞宗〕信濃仁科靈松寺の開山なり、見方字は中明、伊賀の人出家して天照に師事し、久しくして實峰良秀に參し、親しく衣法を傳へらる、初め勅により總持寺に出世し、次に龍護寺に法兄貝林術籍を助け、其席を踵ぐ、信濃仁科郷に往きて靈松寺を剏め、實峰を一世とし自ら二世に居る、時に應永十年とす、能登に歸へりて後寂す、壽缺く、法嗣眞化玄淳の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

ケンホー 見芳（二〇三〇／二一〇〇）〔曹洞宗〕播摩慶德寺の開山なり、見芳字は春庭、俗姓は源氏、攝津多田の人なり、十二歳にして攝津の多田院に投して出家す、十七歳にして永澤寺通幻和尙を禮して受戒し、左右に侍す、明德元年の春通幻、越前龍泉寺に赴き、師亦侍從す、是より後不見和尙に隨侍し、洞上の奥義を究む、應永五年の秋見和尙を出雲に拜し、歸途播摩國を經る、遂に茅菴を結で留まること數月、郡主村民道化に歸嚮し、即ち山を開き、日ならずして一寺を剏す、慶德寺と云ふ、後、永澤、總持、龍泉、興禪の四大寺に歷住し、復慶德寺に還る、永享八年後花園帝勅召して禪要を問ふ、奏對旨に稱ひ、勅して寺に號を下し吉祥龜鶴山福壽慶德寺と云ふ、永享十二年正月八日寂す、世壽七十一歳、臘五十四、（日本洞上聯燈錄）

ケンミヨー 見妙　ニチボン日梵を見よ、

ケンヨ 見譽　ゼンエツ善悦を見よ、

ケンヨ 見譽　テーガン庭岸を見よ、

ケンリユー 見龍　ケーケン圭賢を見よ、

ケンリユーイン 見龍院　ニチヨー日要を見よ、

ケンリヨー 見靈（二二五七）〔淨土宗〕常陸道林寺の開山なり、見靈は單蓮社信譽と號す、其鄕貫詳かならず、慶岩に師事して法を嗣ぎ、常陸筑波郡谷田郡に道林寺を創して開山となる慶長二年八月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ケンレン 見蓮　ニヨドー如導を見よ、

ケンエー 憲榮（二三七一／二四二三）〔眞宗〕攝津小曾根常光寺の住持なり、憲榮字は泰嚴、號を慮雲といふ、敎遵の弟たり、十歳の時天滿三光寺了諦に就きて剃染し、兄と共に諸方に遊學し、完乘を月筌に學び、文を富日休に習ふ、平素道を樂み、富榮を蔑視す、專ら宗門の道を以て任となし、都鄙を遊化す、寶曆三年の秋以來、興殿に侍講し、恩遇甚だ渥し、四年より六年に至る間、大坂京都の異計を折伏し、九年六月華藏會徒と共に本山に乞ひて眞宗法要を校刻す、十一年四月學黌に登り、德望を以て恒式を離れ、十一日を以て十一年に當て、直に上座に進み、法華經を副講す、十三年五月錦華殿に侍講し、九月十六日興正寺別業に寂す、壽五十三、時に法要校刻未だ畢らず、本山乃ち敎導及ひ海輪をして業を繼かしめ、明和二年方に成る、安永二年宗主謚して直入院といふ、著作大經海蹄記二十二卷、觀經大意一卷、小經佩觿記四卷、選擇集私考、十五卷正信偈觀山辨一卷、文類聚鈔慶哉錄四卷、淨土和讃取意三卷、高僧和讃管解補缺三卷、高僧和讃贅說一卷、正像末讃連環解六卷、領解文略解一卷、蔟麥記一卷、雜行雜修考一卷、聖道權假辨一卷、三家安心說一卷、安心雙論決一卷、眞宗紫朱辨二卷、續紫朱辨二卷、殼攻篇二卷、法華略疏私考十一卷、唯識論述記慰愚一卷あり、（本願寺通記、本願寺派學事史）

ケンエン　憲圓（……）〔法相宗〕大和知足院の學僧なり、憲圓は美濃の人、英弘の法弟なり建保五年維摩會の講首となり、熾んに法相を説く、時の人美濃の僧都と稱す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ケンジン　憲深 一八五二 一九二三 〔眞言宗〕山城醍醐寺の學僧なり、憲深俗姓は藤原氏、侍從通成の子なり、醍醐寺成賢僧正に就て祝髮受戒し、年を積み灌頂壇に入る、尋で密印の口訣を受けて報恩院に住し、大に敎場を開き、聲華四方に馳す、賴瑜、敎舜、聖守、等の群英等皆壇下に集まり、弟子の禮を執り、灌頂法諸尊秘訣を受く、建長三年醍醐寺に主となり、敕して僧正に任す、弘長三年九月六日寂す、壽七十二、師生前秘密灌頂を授くるもの五十五人の多きに及びたりと云ふ、（本朝高僧傳）

ケンジュン　憲淳 一九一八 一九六八 〔眞言宗〕山城醍醐山報恩院の四代なり、憲淳は國師僧正といふ、粟田口一品良敎の子なり、疊雅の室に入りて出家し、正應五年八月十四日幸心院にて同師に具支灌頂を受け、其印璽を得て東寺三長者に加はる、乾元十年二月二十六日遍智院親王の請により印可を授く、延慶元年八月二十三日寂す、壽五十一、（續傳燈廣錄）

ケンジョー　憲靜 ……一九五五 〔眞言宗〕相摸大山寺の中興なり、憲靜字は願行、號は圓滿、俗姓生國詳かならず、京師泉涌寺俊芿に從ひて得度し、奈良の智鏡、醍醐の賴寶、意敎に就て顯密の二敎を究め、殊に三寶院流の事相に達し、願行方を開く、後長樂隆寬に就て淨土敎を傳へ、顯密淨律の諸宗に兼通す、初め大通寺、泉涌寺に住し、朝野の皈依を受け、數宮中に法を説く、後關東に下り、鎌倉大樂寺に住し、理智光寺安養院を剏め開山となる、尋で大山寺に遷り、同寺の廢頽を再興し、中興開山となる、常陸阿彌陀山に登り淨土敎を修す、永仁元年幕府に請て東寺の廢頽を興さんがために大勸進をなし、淀川の關錢を以て修繕の工を終ふ、且高野山の諸堂を修營す、永仁三年四月七日寂す、敕諡宗燈律師と賜ふ、（律苑僧寶傳、大山不動靈驗記、高野春秋、）

〔考〕淨土總系譜に憲靜は建治二年八月二十八日寂すとあり今取らず、

ケンエ　堅慧（一五二二）〔眞言宗〕大和佛隆寺の開山なり、堅慧は生國俗姓詳ならす、常に自ら法華を頂受し、專ら四安樂行を勤む、久しく奈良に遊ひ、三論法相を研覈し、大和室生山に掛錫す、會々弘法大師山に入り相見て甚た器重せらる、大師入唐するに方り、隨侍して名區を巡遊して、東歸の後東大寺に寓す、承和年中菩提鈔法の兩寺を營み、嘉祥三年又國祚を祝せんか爲めに檀越與繼と謀りて山麓に佛隆寺を剏す、仁壽二年五月鴻鐘を鑄て之か銘を譔す、齊衡元年内供奉傳燈大法師位に任し、貞觀二年律師に敘せらる、四年七月五日傳燈修行大法師位に擢てられ、某年佛隆寺に寂す、壽欠く、（弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜）

ケンコー　堅光 二四一三 二四九〇 〔曹洞宗〕近江彥根天寧寺の開山なり、堅光字は寂室と云ふ、俗姓藤原宮本氏と云ふ、豐前國宇佐郡天津村敷田の人なり、出家して豐後の國松屋の大堅全海禪師に師事し、後海外高天禪師に師事し、其法を嗣く、彥根天寧寺を開き住し、一代の宗師と稱せらる、天保元年七

月十日寂す、壽七十八、（天寧寺返信）

ケンサイ 堅濟（……）〔眞言宗〕山城醍醐山清淨光院の僧なり、顯濟は民部卿阿闍梨といふ、弘濟の法を受けて一方の匠となり、房玄所傳の秘軌聖敎及ひ印信を付せらる、（續傳燈廣錄）

ケンタク 堅卓 エガン慧岩を見よ、

ケンチユー 堅中 ミヨーミ妙彌を見よ、

ケンリユー 堅隆 二一四五…… 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、堅隆字は紹嶽、出羽の人、出家して諸老に歷參し、義山等仁の室に入り、初め大乘寺に住し、次に承天寺に遷る、文明十七年十一月二十九日寂す、偈あり剜ニ佛祖首一不レ用ニ吹毛一珍重、今日風清月高、法嗣幾年豐隆あり、（日本洞上聯灯錄）

ケンリヨー 堅梁（二〇〇六）〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、堅梁字は大材と云ふ、清拙正澄禪師に參侍する久し、禪師より心印を付せられ相模壽福寺に住す、寂年欠く、（延寶傳灯錄）

ケンガン 謙巖 ゲンチユー原冲を見よ、

ケンケー 謙溪 ナンリン南麟を見よ、

ケンサイ 謙齋 シユーリヨー周良を見よ、

ケンシユー 謙宗 二〇四七 二一二〇 〔曹洞宗〕備前種月寺の開山なり、謙宗字は南英、俗姓藤原氏、薩摩の人なり、早年京師に上り、相國寺大岸崇に師事し、十九歲出遊し、天巖越に事ふること五年なり次に比叡山に登りて敎乘を學び、次に越前の龍澤寺梅山本、黑川の笑堂訢に歷事し、應永十八年國に歸へり、石屋梁に事ふ、かくて未だ契悟せす、再び出遊し越前の畊雲寺に往き、傑堂勝に見へ、參究十二年、遂に其法をつぐ、偈あり、法身空解畵爲レ蛇、一拶當頭故若何、昨夜春櫓風雨惡、和レ根吹倒海棠花、尋て備前に往き、牛頭山に種月庵を營み、永享元年越前畊雲寺に遷り、明年東岡秘澤に退休す、後安房の天寧寺、美作の西來寺、備中の常照寺、出羽の玉泉寺等の請に應じ、東西に奔馳す、文安の末、再び耕雲寺に住し、法化を布く、同郡に洞福寺を開き、第一代となる、寛正元年五月十九日牛頭山に歸へり寂す、壽七十四、臘六十一、著作五位秘訣あり、遺偈一片祖翁閑田地、耕雲種月已三年、功成身退是今日、擲ニ拶犂鋤一不レ上レ肩、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ケンジユン 謙順 二四〇〇 二四七二 〔新義眞言宗〕山城智積院第二十八代なり、謙順字は豐春といふ、武藏埼玉郡蒲生村の人俗姓は中野氏なり、六歲にして父を喪ひ、十二歲にして母を失ふ、寶曆元年圓福寺覺遠に從ひて剃髮染衣し、四種密軌を修す、五年智積院に登り、衆に交はる、寶曆六年覺遠官命を蒙むりて智積院の主となるにあたり、師隨從し、二年の後覺遠の東行に從ひ、江戶に往く、七年乘雄和尙勸學院道場にて傳法灌頂を修行する時、師入壇灌頂す、此年覺遠に從ひて日秀及ひ神照相承の法流を受け、九年覺遠智積院の印を解きて六波羅密寺に退隱するに方り師後を繼く、十一年覺遠寺を去りて烏丸に居る、師亦隨從す、覺遠師に誨へて曰く、道を學ふは一にあらす、初め世典を學ひ、後內典を入れよ、と、即ち師をして世典の講肆に遊學せしむ、十三年淨空の學舍に入り、明和四年眞乘院宥證大僧正に傳法院流を傳へ、六年

淨空僧正尾崎寮にありて大日經疏を講す、師亦聽受す、其講說を記し大疏隨類と名く、八年春登遠病に臥す、師北野に往きて看護し、其寂するに及ひ、智積坊山に葬むる、師北野に在りて中隱勤行を修す、此夏淨空僧正養命坊に於て住心品疏を講す、師聽受す其講說を記し、大疏隨類と名け、前後幷せて十九卷となす、冬淨空の命を奉して諸流印信を傳受す、凡そ此印信は淨空僧正の明星院海淨より受けたるもの、及ひ餘師の傳總計二十八流なり、師之を傳受して後、一々書寫す、安永二年等空僧正師の功を歎賞し、供料を增加して賞賜す、四年山衆の請に應して十卷章を講し、冬三論玄義を講す、五年理性院法務僧正杲觀の請を受けて同院に二敎論等を講し、六年五敎章四敎儀を講す、七年動潮僧正に報恩流を受く、同年供料を增加して百金を賜ふ、八年南寮を賜ひ、百法門答を講し、同九年再ひ五敎章を講す、文明四年動潮僧正密嚴諸祕釋全部を校訂再梓する時、師及ひ猿島の東岳、忍岡の通明と共に助校せしむ、凡そ二年にして成り、天明六年印行す、八年法華義林章を講し、同年衆議席に轉す、寬政九年仁和寺一品親王の傳法院印可を蒙る、又諸宗章疏の全部三卷を校訂し、寬政二年新刊す、比年遍照院に移住し、翌年傳法大會の精義者となる、四年勸學院道場にて傳法灌頂を修行し、師大阿闍梨となる、五年眞光院禪證大僧正の開祖灌頂を受く、翌年山衆中六群徒あり、山衆二十人を誹謗し官に訴ふ、師また寃を蒙り、徒に歲月を送る。略策海滴二卷を著はし、又略策本書を校訂して上梓す、八年山徒の請により淨空所傳の密灌を授く、十一年六群の徒三名獄を脫し、二人死す、故に餘の山衆皆免かる、師翌年智積院の第一座となり、六波羅密寺を領す、享和三年智積院に移り、圓福寺席を虛す、乃ち師選に當りて之を董す、文化元年智積院の英範寂す、師命を受けて其後を繼く二年四月權僧正に任し、七年智積院の法柄を秉ること前後七年、退隱して栂尾の高山寺に居り、文化九年九月十六日寂す、壽七十三、著作、大疏隨類十九卷、畧策海滴二卷、五敎章玄談壹卷、眞決鈔壹卷、諸宗々脈記二卷、諸宗章疏錄三卷あり、(新義眞言宗史料、新義眞言宗史)

ケンエキ　健易　二〇〇四 二〇八三　〔臨濟宗〕京都南禪寺の僧なり、健易號は東漸、俗姓は藤原氏、遠江の人、母は源氏の出なり、幼名を龍石子と名く、甫めて七歲、華峰一和尚に投し、稍長して剃髮受具す、書內外を讀み。徧く諸刹に游ひ、建長の典賓となり、又相國寺の首坐となる、明德の間出てゝ遠江の華藏寺攝津の廣嚴寺を司とり、備中の瑞光寺に移り、京都の安國東福南禪の諸寺に歷遷す、應永三十年四月常在光寺にありて疾を得、十四日將軍義持來りて病を訪ふ、十六日請に依り法語を將軍に呈し、十七日端坐偈を書して曰く、威音一箭、虛空兩片、脚頭脚尾、日面月面、と、筆を投して寂す、壽八十、遺骸を茶毘して東福寺の回輝菴に塔す、著作諸會語錄、龍石藁等あり、(本朝高僧傳、續群二四〇收傳一卷)

ケンケン　健軒　ゲンエ玄慧を見よ、

ケンソー　健叟　ゲンエ玄慧を見よ、

ケンリユー　健立　ニチタイ日諦を見よ、

ケンソー　乾叟　ゼンコー禪亨を見よ、

ケンホー　乾峰　シドン士曇を見よ、

ケンリユー　乾隆　ニチジヨー日乘を見よ、

ケンガイ　嶮崖　コーアン巧安を見よ、

ケンジユ　研壽　二五一二／二五四三　〔眞宗〕越中國蠣波慧林寺の衆徒なり、研壽字は僧鑒、號は梵行院と云ふ、笠原氏なり、越中國蠣波郡城端町慧林寺住持笠原慧壽の長子なり、稍長して加賀金澤石川舜台の家塾愼憲社に學び、其社長に擧けらる、明治五年春日潛菴の門に遊ひて經史を究め、後京都に上り、本山なる大谷派本願寺々務所の役員となる、明治九年に至り宗主の命を帶びて南條文雄とゝもに英吉利に留學し、ロンドン、オクスフォルド等に歴遊し、明治十二年オクスフォルド大學教授博士エフ、マクス、ミユーラルの門に投して專ら梵語を學ひ、刻苦精勵常人に超えたり。十四年六月博士に從ひて文雄と共にモールヴェルン岡上の閑地に寓し梵文無量壽經金剛經の宣譯を筆受し、且つ梵文金七十論を譯す、同年九月亦博士に從ひ文雄と共に獨逸ベルリンに於ける萬國東洋學會に列し、後佛蘭西巴里に赴き、梵漢辭書、幷に梵文佛所行讚を謄寫し、梵文入楞伽經金光明經を鈔寫し、十月オクスフォルドに皈り、尋てケンブリッヂユに至り、十一月オクスフォルドに皈り、課業の餘に巴里の亞細亞學會の藏にかゝる梵文倶舍論註を謄寫す、其紙數五百三十五葉あり、師日々時間を限り透明紙を敷きて摸寫し、三ヶ月餘にして其功を畢ふ、時に肺病に罹り漸く重し、博士の勸めによりて醫士の診察を受け、始めて其大患なるを知りや、醫士の勸めにより本國に皈らんことを決す、十五年九月倫敦を發し、巴里馬耳塞等を經て海路錫蘭に至りて、佛陀行化の靈地を探り、十一月東京に着し、直に宗主の命により、伊豆熱海に浴す、十六年四月東京に皈りて淺草なる大谷教校に寓して學徒の請により梵語英語を教授し、七月の初より病勢を增したれは大學病院に入り治療したるも、其功なく、七月十六日を以て寂す、壽三十二なり、十八日千住火葬場に火葬し、遺骨を京都大谷に納む、師專ら梵英二語に通し、傍ら羅甸語佛語を學ふ、遺稿數部あり、エフ、マクス、ミユーラル師の傳を草して倫敦タイムスに寄せ、師の校訂にかゝる梵文法集名數經を刊行し、南條文雄文章書信等を編纂し、初め僧鑒遺稿と題し、後に笠原遺文集と改題し刊行す、（南條文雄氏返信、笠原遺文集）

笠原研壽師

ケンツー　竅通　二二三三／二二八七　〔戒律宗〕河内師子窟寺の律僧なり、竅通字は光影、俗姓は稻垣氏、京都の人なり、少にして出家し、金剛峯寺蓮華三昧院に光宥に謁して剃髮し、密教を稟く、光宥故ありて伊豆に謫せらる、師往きて之を省し、屢

々官に請ひて哀を訴ふ、官之を憐みて光宥を許す、師圓通寺の賢俊に謁して戒律を勵み、住吉神社に冥助を禱り、歸路慈雲に逢ひ、率ゐられて槇尾山に歸へり、僧籍に列す、寛永八年年三十二にして具足戒を受け、全璧燈に從ひて瑜伽法を稟く、背て河内普見山に登り、茅菴を結びて掛錫す、四衆雲集し、菴を增築して寺となし、師子窟寺と號す、寛永四年五月四日寂す、壽六十五、臘三十二、門人遺骸を荼毘して同寺に塔す、（本朝高僧傳）

ゲンア　玄阿　エオン懷音を見よ、

ゲンイ　玄彙　二五二〇……〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、玄彙は字を萬寧と稱す、尾張國善師野村の人なり、美濃龍福寺の大衍に投して薙染し、行應に伊豫龍潭寺に侍し、後棠林に參して大事を究明し、妙心寺を董し、瑞龍寺僧堂に入りて四來の雲衲を接す、萬延元年三月寂す、同年五月勅して神機妙感禪師の諡を賜ふ、

ゲンウン　玄雲（一九九六）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、玄雲字は日成、俗姓生國詳かならず、敎王院に住す、印俊に繼きて學頭となる、寂年缺く、（結綱集）

〔考〕玄雲は延元の頃の人なり

ゲンエ　玄慧（……）〔曹洞宗〕甲斐法泉寺の禪僧なり、玄慧字は能翁俗姓は源氏、幼にして法泉寺仁叟淨熙に依りて剃髮得度し、數年の間博く經史を究め、五年の後南遊し諸老宿に謁し、後皈りて仁叟に參す、仁叟託摩郡に吉祥院を建て師に命して管せしむ、仁叟沒するに及び、其住持に任す、後法泉寺に遷り、大慈寺を主どる、暮年退居して廣燈菴を構へ居り、某年寂す、世壽欠く、塔を廣塔菴に立つ、法嗣泰菴了雲の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲンエ　玄慧　二〇一〇……〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、玄慧字は健叟、號は健軒、一に獨淸軒と云ひ、別に洗心子と稱す、京師の人、俗姓藤原氏なり、俗兄出家し虎關師鍊と云ふ、師亦出家し、比叡山に登り、天台宗を學び、後、臨濟宗に意を傾く、京師北小路に寓居し、佛儒の書を讀む、殊に儒書は宋の新註を用ゐ、後醍醐天皇に召されて侍讀となり、宮中に宋の新註を講す、一寧一山、虎關師鍊等宋の新註を用ゐたるも、其宮中に講したるは師を以て始めとす、後、幕府に召されて文筆を以て重用せらる、建武式目、新加制式二十一條等は師が是圓等と幕府の命を受けて制定したるものなりと云ふ、正平五年三月二日寂す、著作庭訓往來、十七憲法註、各一卷ありと云ふ、師文藻あり、海邊眺望の詩に曰ふ、「碧波心上白鷗前、推出漁家一釣船、萬里蓬瀛休㆓遠覓㆒、風塵絕處是神仙」、「沙嶼松低潮滿處、海門山邊月升時、幽人相對更愁絕、難㆑寫㆓畫圖㆒難㆑入㆑詩」、（天台霞標、先哲叢談、漢學起源、大日本史）

ゲンエー　玄榮（一五三三）〔華嚴宗〕東大寺の僧なり、玄榮は俗姓詳ならす正進大德に就き華嚴を受學し、維摩會講師となり、貞觀十五年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ゲンエー　玄睿（一四八七）〔三論宗〕大和西大寺の學僧なり、玄睿は安澄に隨ひ大安寺に在りて空論に通達す、西大寺を補し、天長四年九月藥師佛像を慶讃し、四日入座敎義を

講演す、嵯峨天皇の朝に詔を奉じて三論の大義鈔三卷を撰して進呈す、寂年、及ひ壽缺く（本朝高僧傳）

ゲンオー　玄雄　二四六四／二五四一　〔眞宗〕攝津大坂專念寺の住持なり、玄雄は初め筑前國宗像郡下西鄉村正蓮寺に住持せしが、後、大坂の專念寺に移つる、宗學を龍華に受けて、善く其衣鉢を傳へ、廣如宗主の殊遇を蒙むり、未た五十歲に至らすして勸學職に登れり、古今其例なしと云ふ、天保十四年五月司敎となり、嘉永五年九月勸學職に擢てられ、安政二年、文久元年、慶應三年、明治四年、明治九年の五回の安居に學林に代講し、文久元年四月、明治三年九月の兩回侍講を命せられ明治十四年七月五日寂す、壽七十八、謚を勝行院といふ、著作、四法大意客釋、三經往生文類畧釋、一念多念證文畧釋、各一卷、八敎大意釋要四卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ゲンオン　玄音　ドーユ道瑜を見よ、

ゲンオン　玄音　ユーギ宥儀を見よ、

ゲンカイ　玄海（………）〔………〕陸奧小松寺の僧なり、玄海は陸奧新田郡の人、郡の小松寺に住し、日日法華經一部を讀み、大佛頂眞言を七遍講ず、夢に左右の腋に羽翼を生じ、西に向ひて飛び去り、十萬億土國を過ぎて七寶地に到り、自ら其身を見れば大佛頂眞言を以て左翼となし、法華經第八卷を以て右翼となす、此界を廻望すれは、寶樹、樓閣、光彩隱映す、一聖僧あり語りて曰ふ、汝今來る所は極樂邊地なり、却後三年汝を迎ふべし、と、玄海此語を受けて飛び歸る、夢覺むれば門弟子等相集りて其死を悲み、旣にして自ら蘇生せることを知り、益念誦を勤む、復三年にして寂す、（往生極樂記、本朝高僧傳）

ゲンカイ　玄海　……　〔淨土宗〕長崎大音寺の住僧なり、玄海號は馨蓮社惟譽と云ひ、曇香と云ふ鄉貫詳ならず、江戶增上寺の學寮に學ひ、內外の學に通し、殊に詩文を善くし、太宰純服部元喬等に交はり推重せらる、後肥前長崎大音寺に住し、詩文を以て一時に知らる、寂年享壽詳ならず、（大音寺返信）

ゲンカイ　玄海　二〇〇七……　〔眞言宗〕紀伊高野山法性院の學僧なり、玄海は和泉の人、十七歲にして高野山に登り、釋迦文院幸明に就きて出家し、學業を以て聞こゆ、法性院宥性の後を承けて法性院に住す、傳法灌頂を瓊算に受く、信堅、仁然、賴審等の門に入りて蘊奧を究む、憲淳僧正に師事して其法脉を繼く、貞和三年三月十七日寂す、壽缺く、（高野春秋、續傳燈廣錄）

ゲンカイ　玄海　ニチツー日通を見よ、

ゲンカク　玄覺（一七九七）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、玄覺は關白藤原師實の末子にして、大僧正覺信の弟なり、覺信に從ひて法相を承く、天治年中兩回興福寺に住し、山階寺を領し、權僧正に任す、保延三年春醍醐寺の定海僧正に轉し、師も亦僧正となり、正僧正二員を置くこと之より始まる、寂年缺く、弟子慧信、尋範二人あり、慧信尋範は共に藤原氏の出にして學成るに及ひ一乘院に住し、興福寺に遷り、大僧正に任す、（本朝高僧傳）

ゲンカン　玄鑑　一五二一／一五八六　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、玄鑑は攝津守高階義範の子、淸和天皇に宮仕して給仕中とな

る、元慶三年夏天皇落髪する時、師も亦出家す、時に年十九なり、翌年比叡山に登り、智證大師を拜して大乘戒を受け、法皇に水尾山に仕ふ、後、遍昭良勇二師に就きて顯密の法を學びほゞ其要を得たり、玄昭僧都に隨ひて淸涼院に灌頂法を受く、後辭して大和多武峰に登り、法華三昧を修して屢靈驗を見る、延喜三年七月玄昭の執奏により元慶寺を主とり、延長元年延暦寺座主に昇る、同四年三月十一日寂す、壽六十六、(本朝高僧傳)

ゲンカン 玄鑑(……)〔曹洞宗〕近江龍泉寺の開山なり、玄鑑字は洞巖と云ふ其姓氏生國を詳かにせず、泉福寺の無著に參して密囑を受け、遠江に到り雲巖寺を創建す、今の龍泉寺是れなり、道價日に盛んにして其門より如仲無範等の高僧を出す、後ちに至り豐後泉福寺に遷る、寂年壽欠く、(日本洞上聯灯錄)

ゲンキ 玄基(……)〔戒律宗〕大和大安寺の律僧なり、玄基字は興道と云ふ、興正菩薩に從ひて滿分戒を受け、又密灌を承く、大和大安寺に住し、盛んに法幢を樹つ、寂年及壽欠く、門下に大慈寺淨賢、隆賢、藥師寺の禪海、觀心、大乘院の良賢、道禪等あり、皆一時の名德なり、(本朝高僧傳)

ゲンキ 玄基(一四一八)〔法相宗〕山城山階寺の僧なり、玄基俗姓詳ならず、經律論に精通す、天平寶字二年六月上奏して諸國の寺塔を修繕せむことを請ふ、示寂の年時欠く、(本朝高僧傳)

ゲンキユー 玄球(一九七〇 二〇三七)〔臨濟宗〕普門寺の禪僧なり、玄球字は天琢俗姓不詳丹波の人なり、同國弘誓寺釣叟江に事ふ後京師に上り東福寺に留り參究す豐後崇祥寺に開法し釣叟の恩に酬ゆ播磨の太守赤松氏圓應寺に請す將軍足利氏普門寺に請す幾もなく病を以て辭す播磨の檀越某東禪開を剏立し師を開山とす尋て佛瀧の定光寺石井の慈恩寺に請せられ開山となる永和三年夏定光寺に在り疾あり六月廿六日寂す壽六十八遺偈、全生全死、如是如是、日照二十虛、月印二萬水、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

ゲンキヨー 玄慶(一九五八……)〔眞言宗〕山城醍醐山岳西院の開山なり、玄慶字は式部卿法印といふ、建長二年六月三日印可を受け、正嘉元年十月十八日幸心院にて傳法具支灌頂を受け、密學に精通す、受くる所の秘訣を撰して玄慶法則と題す、永仁六年十二月六日寂す、付法二人、定耀、聖忠と云ふ、(續傳燈廣錄)

ゲンキヨー 玄喬(二四五九 二五二八)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄喬字は蘇山、俗姓は高橋氏肥後熊本の人、幼にして見性寺啓邦に投し、稍長して月桂寺春澤を訪ひ、次に阿波興源寺玉潤に謁し、一たび母の病にかゝるを聞きて熊本に歸へり、幾もなく再び出遊し、尾張總見寺卓洲を訪ひ、滯留參究し、其印可を受く、卓洲の寂後備前國淸寺月珊の門を叩き、留錫一年にして熊本に歸り、道俗の請により碧巖錄を提唱す、四來の大衆五百餘人に及ふといふ、尾張侯遂に其高風を聞き、國に請し江湖道場を開き、師を開祖とす、後圓福妙心の二大寺に歷住し、慶應元年勅あり、神機妙用禪師の號を賜ふ、明治元年十二月十四日寂す、壽七十、臘六十二(近世禪林言行錄)

ゲンクー 玄空(……)〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧な

り、玄空は京都の人、出家して戒壇院圓照に師事す、寂年欠く。(本朝高僧傳)

ゲンクー　玄空（……）〔臨濟宗〕豐前久保手山の禪僧なり、玄空は豐前久保手山に住し禪餘書を嗜み、戲墨を善くす、(續本朝畫史)

ゲンクン　玄勳　二一八四……〔臨濟宗〕美濃大仙寺の禪僧なり、玄勳字は勳甫と云ふ、大雅耑匡禪の室に參して法を嗣ぎ、美濃大仙寺に主となる、永正十七年太守土岐政房光孝梅雪居士の進薦の爲め、師を天寧寺に請して昇座說法せしむ、大永四年四月二十六日大仙寺に寂す、壽欠く、(延寶傳灯錄)

ゲンクワク　玄廓　二二八五……〔淨土宗〕駿河常林寺の開山なり、玄廓は念譽と號し、駿河の人なり、法を了學に嗣ぎ、州の花盛村常林寺の開山となる、寛永二年十二月一日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゲンケー　玄珪　二〇四〇 二一〇九〔曹洞宗〕遠江雲林寺第一代なり、玄珪字は不琢、越後保見の人、族は源氏なり、康曆二年八月十五日を以て生れ、九歲にして彌彥の山寺に投じて薙髮し、二十三歲にして梅山和尙に從て滿分戒を納る、時に大洞寺如仲禪師の道價盛んなるを聞き、往て教を受け、辭して菴を龍溪の上に構えて住す、法印慧案と云ふ者師の德を慕ひ、其律居を禪にし、之を招く、乃ち遠江龍溪山雲林寺なり、後ち總持寺に出世し、移て大洞寺に主となる、復旨を奉じて再び總持寺に住し、敕に依り紫衣を賜はる、文安元年龍澤寺に主となり、幾くもなくし辭して雲林寺に歸り、寶德元年八月十五日寂す、壽七十(日本洞上聯灯錄)

ゲンケー　玄契（……）〔曹洞宗〕出雲某菴の僧なり、玄契は出雲の人、出家して曹洞の禪を究む、五宗錄中を抜出して曹洞二大師の語錄を校正刊行す、鷹城の覺城序文を作り、郡山の柳里恭題言を書す、共に平生相交る所なり、師禪林瓶瓦を著して獨菴、一線、萬回、天桂諸師を彈駁す、一時禪林を聳動せり、示寂の年時缺く、(續日本高僧傳)

ゲンケン　玄賢　一九八五 二〇八二〔曹洞宗〕遠江榮林寺の開山なり、玄賢字は直傳、伊勢の人、長じて出家し、偶々無著禪師の泉福寺に於て化を隆にするを聞き、往て師事し、無著の寂後東上して遠江雲巖寺洞巖禪師に依り、研究多年一宗の蘊奥に通ず、洞巖師に伽梨一領を付して其授受を表す、後同國二俣邑に赴き、東谷の間に榮林寺を創建し、應永二十九年九月二十四日寂す、壽九十八、偈あり荊屋三間天地闊、碧巖窟裏絕二紅塵一只知二黃葉一忘二年月一昨日貧勝二今日貧一(日本洞上聯灯錄)

ゲンゲンケン　玄々軒　ショーサン正三を見よ、

ゲンコ　玄故　二二一一……〔淨土宗〕江戶操信寺の開山なり。玄故は源蓮社本譽單信と號す、俗姓は藤原氏、信濃高遠の人なり、幡隨に師事して法をつぎ、鴻巢勝願寺を主どり、敕賜紫衣を拜す、後、江戶深川に玄信寺を築きて開山となり、寬文元年二月十三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ゲンコ　玄虎　二一六五……〔曹洞宗〕伊勢淨眼寺の開山なり、玄虎字は大空、武藏の人、敎院に投して薙髮し、邑の文殊堂に入りて靜住せしが、志を起して遊方し、遠江の石雲寺に到り、崇芝性岱に參して藏鑰となり、二十年にして了悟し、

乃ち總持寺に出世す、長享二年越前龍澤寺に遷る、明應三年石雲寺に主となり、辭して伊勢の淺香に菴居す、伊勢多氣の郡主某、師の德望を慕ひ、淨眼寺を建て師を延く、朝廷詔して召して親く宗旨を問ひ、紫衣を賜ひ、佛性活通禪師の號を授けらる、晩年田丸廣臺寺に退き、永正二年七月二十三日寂す、(日本洞上聯灯錄)

ゲンコー　玄康　二〇三六―二一〇〇　〔眞宗〕山城本願寺第六代なり、玄康巧如と稱し證定と號す、永和二年四月六日に生る、時藝上人の長子、童名は多賀麿、大納言資康の猶子たり、得度して權大僧都に任し、應永元年宗務を繼ぎ、永享十二年十月十四日寂す、壽六十五、(一說に六十九と)(門跡傳、本山寺誌、大谷畧譜)

ゲンジヨー　玄晟　(……)〔曹洞宗〕伯耆退休寺中興なり玄晟字は壺天京都の人、東福寺に入り、遊方して源翁心昭の同寺に在るに逢ひ、即ち就て得度し、源翁に從ひて筑紫に往き、山陰道の退休寺に止まり、執侍すること三年、源翁、宗溪、安穩の諸寺に遷るに當り、師亦隨侍す、遂に僧伽梨及塵尾を付せられ命に依り伯耆退休寺に住し、其頽廢を興す、後花園上皇敕して法を問ひ、特に金龍山の額を給ふ、(日本洞上聯燈錄)

ゲンコー　玄光　二二九〇―二三五八　〔曹洞宗〕肥前皓臺寺の禪僧なり、玄光字は獨菴、號は蒙山、肥前國佐賀の人なり、早年にして同國高傳寺の天國和尚に從て童侍となる、內外の典籍師授を借らず、一度び目を過ぐれば大義略々通して永く忘れず、天國之を撫して曰く、吾家の千里駒なり、前程測るべからず、と、得度の後南遊す、一時の尊宿參見せざるなし、後に長崎港の崇福寺に到り、明の道者禪師に見え、深く心服す、道者の歸國せんとするに方りて、海雲寺の林和尚に投して曹洞の宗旨を傳ふ、其後若狹國に往き、大藏を閱覽すること年あり、林和尚衰老を以て歸休を乞ひ、師を推す、是に於て幕命により海雲寺の席を繼ぐ、師一住七年、病によりて辭す、是れより筑前の國金丸に寓し、後、安房の勝山に隱れ、晩年河內の經山寺、攝津の大道寺を再興して掩息の處と爲す、師甚だ記述に富めり、總て護法集と名く、盛に世に行はる、其獨菴獨語流れて支那に入り、鼓山の爲霖禪師、一見して歎美し、遂に序幷に評註を作る、且つ偈を師に贈る、元祿十一年の春宿痾再發し二月十一日寂す、享年六十九門徒經山に荼毘して大道寺に塔す、著作獨菴護法集十四卷、續孝感編、擬山海經五卷、拾遺三寶感應傳、蒙山對客、同首書、善哉寶訓、辨々惑指南、永覺晚錄首書各二卷、善惡報恩編、儒釋筆陣、睡菴晉稿各一卷(日本洞上聯灯錄、近代名家著述日錄)

ゲンコー　玄廣　(……)〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、　玄廣字は大雲、肥後の人、幼にして法泉寺定林玄智に投して下髮す、定林の寂するに及ひ、明山春察其席を補す、師留りて之に侍し、入室して印可を受け、首座となる、明林の寂後席を承けて法泉寺に住し、移りて大慈寺に主となる、寂年及ひ壽缺く、法嗣龍伯廣瑞あり、(日本洞上聯燈錄)

ゲンコー　玄洪　(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　玄洪字は景筠と云ふ、出家して大原崇孚に師事し、遂に其印記を禀け、京都妙心寺に住す、寂年及壽缺く、(延寶傳燈錄)

ゲンコー　玄興　二一九八―二二六四　〔臨濟宗〕山城妙心寺の禪僧なり、

ゲン(玄)コ

玄興字は南化、俗姓は一柳氏、美濃の人なり、初め邦叔楨に隨つて剃髮受戒し、後崇福慧林寺の間に快川紹喜國師に師事し、遂に印記を受く、伊豫刺史稻葉一鐵美濃に花溪寺を剏め、師請せられて開山となる、天正の初年詔を奉して京都妙心寺に出世し、尾張妙興寺に遷る、豐臣秀吉洛東に祥雲寺を建て、師を請して開山祖となす、後陽成天皇數〻師を宮中に召して法要を問ひ給ひ、寵遇涯なし、土佐太守山内忠義大通院を建て、稻葉貞通智勝院を開き、脇坂氏隣化院を剏め皆師を請して開山となす、慶長九年夏微疾に罹り、隣化院に移り、五月二十日寂す壽六十七、著作虛白錄あり、其周忌に當り、後陽成帝特に定慧圓明國師の謚號を賜ふ、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

〔考〕本朝高僧傳に宗興に作る、今は虛白錄に依る

ゲンコー　玄弘（二一八五）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄弘字は大宗と云ふ、天縱宗受に參ずること多年、遂に印可を付せらる、大永五年秋瑞泉寺に住す、寂年缺く、（延寶傳灯錄）

ゲンコン　玄欣　二一九六……〔曹洞宗〕武藏青松寺の第二代なり、玄欣字は喜州、橘諸兄の裔なり、七世の祖飛驒に移りて居る、師も亦同國に生れ、幼にして出家し、諸尊宿に徧參し、後青松寺雲岡舜德に投して其法を嗣き、總持寺に出世す、永正九雲岡の龍穩寺に遷るに及ひ、師を青松寺に補せしむ、永正九年席を普山に付し、龍穩寺に移つる、享祿二年最乘寺に主となり、季年にして再ひ龍穩寺に皈へる、天文五年九月二十日寂す、壽缺く、塔を龍穩青松の二寺に建つ、法嗣節菴良筠あり、（日本洞上聯灯錄）

ゲンサク　玄策　二一七四……〔曹洞宗〕信濃觀勝寺の開山なり、玄策字は功巖、巨海祖綱に師事して旨を得、席を繼きて大澤寺に主となる、後請を受けて信濃松河鄕に觀勝院を剏して之に居り、永正十一年八月十九日寂す、法嗣節香德忠あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲンサク　玄朔（二〇八九）〔臨濟宗〕伊勢大樹寺の開山なり玄朔字は桃隱、京師の人、建仁寺に在りて輪藏を典る、永享年中妙心寺日峰舜の下に事へ、其法をつぎ、讃岐に下り慈明菴を構へて靜居す、偈あり烟雨三年南海涯、一簑空睡釣魚臺、幾多蝦蜆貪㆓香餌㆒、未遇㆓金鱗銜ㇾ涙來㆒四年の後伊勢保保鄕に往く、郡主朝倉氏大樹寺を興し、請して開山となす、後、尾張瑞泉寺に遷る、享德三年退隱す、偈あり、一住五年如ㇾ履ㇾ冰、春風捲ㇾ衲下㆓危層㆒、不ㇾ知何處得ㇾ安ㇾ枕、萬里江山七尺藤、尋て大樹寺の方丈に病沒す年時缺く勅謚佛源大澤禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゲンサク　玄朔　二二二六……〔曹洞宗〕安房長安寺の禪僧なり、玄朔字は龍湫、相摸鎌倉の人、俗姓は直井氏なり、壽福寺に出家し、去りて受天榮祐に依り印可を附せられ、受天の寂後席をつぎて安房長安寺に主となる、晚年上總東長寺に退去し、永祿九年八月八日寂す、法嗣天翁全播あり、（日本洞上聯灯錄）

ゲンサツ　玄察　二三三八……〔淨土宗〕武藏淨國寺の僧なり、玄察は順蓮社隨譽友阿と號す、其鄕貫詳かならず、信譽に就て剃髮受業し、初め岩付淨國寺に住し、次に瓜連新田にある二大刹に住し、後新田大原鄕に長建寺を建て丶退隱し、延寶

六年五月十三日寂す、壽缺く、法嗣順譽靈鑑の一人あり、(淨土總系譜)

ゲンサク　玄篤 二二二七 二二九八 〔曹洞宗〕豐前羅漢寺の禪僧なり、玄篤字は鐵村、筑前國小川氏の子、母梵僧錫を振て室內に入ると夢み、覺めて師生る、漸く長して聖福寺卜雲に投して童侍となる、受具の後遠く關東に往き、諸尊宿に偏參す、忽ち大寧寺闔翁の道化を聞き、往て謁す、翁之を器とし、侍香を命す、尋て藏を掌る、翁已に示寂し、安叟貴雲相次て住持す、師二禪師に隨侍し、貴雲の法を嗣く、總持寺に出世し、大寧寺を領す、再び總持寺に住す、明年事務を謝して大寧寺に歸る、周防國の玄齊寺に遷り、其荒敗を興す、退て大寧寺に歸る、元和六年の春豐前の耆闍崛山羅漢寺に退隱す、寺は元逆流の草創にかゝる、其住持、師の至るを喜んで席を讓りて禪刹と爲し、請て第一世と爲す、未だ幾ならず學徒來集す、師煩を厭て謝し去て、直に向津村に入り、關を掩ふ寛永十五年十月十二日寂す、壽七十二、(日本洞上聯灯錄)

ゲンシ　玄趾 二三五〇 二四二四 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、玄趾字は慈麟、號は典一と云ふ、越前燧城の人、俗姓中村氏元祿三年に生る、稍長して出家し、諸國の叢林を歷遊し、後加賀大乘寺に住し、大に曹洞の宗風を擧揚す、明和元年十月九日寂す、壽七十五、(近世禪林言行錄)

ゲンシキ　玄式　ニチジツ口實を見よ、

ゲンシキ　玄識　ソーケン相憲を見よ、

ゲンシツ　玄室　シユエキ守腋を見よ、

ゲンシツ　玄室　セキケー碩圭を見よ、

ゲンジツ　玄實 二四二四 二四八九 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、玄實字は妙峰、伊勢の人なり、初め龍雲和尚に師事し後周防山口常榮寺の性堂に侍して其印記を承け、三たび東福寺に住し、次に南禪寺に住し、次に備中の寶福寺に住す、其寶福寺に住すること二十六年の久しきに及び、諸伽藍の廢れたるを修めよく中興の功をなす、嘗て高野山にあること三年、密敎を兼學して其蘊奧を極め、旁ら諸宗に涉る、其鄉伊勢にありし時、阿彌陀經を眞宗の某寺に講し、また備前の岡山にありて法華經を松琴寺に講す、文政十二年四月九日寂す、壽六十六(近世禪林僧寶傳)

ゲンシン　玄津 ……一五四五 〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、玄津は出家して華嚴を平塞に學び、貞觀十七年四月二十八日東大寺別當に任ず、元慶七年七月律師に任せられ、仁和元年寂す、壽欠く、(東大寺別當次第)

ゲンシン　玄津 二二四六…… 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄津字は月航、京都の人なり、初め妙心寺に住し、後駿河清見寺に遷り、又請に應して常陸の筑波山禪源寺を主とる、里民永興寺を開き、師を開山とす、會津の大守師の名を聞き、聘して興德寺を司とらしむ、後靈雲院の塔を守り、天正十四年七月十一日偈を書して寂す、壽九十餘、勅諡普濟英宗禪師を賜ふ、(本朝高僧傳)

ゲンシン　玄晨 ……二〇五四 〔曹洞宗〕駿河桃源寺の開山なり、玄晨字は興國、天叟祖寅の法を嗣き、其席を踵きて近江新豐寺に住す、後駿河に往きて大平の里に桃源寺を建て、茲に住すること五十年、應永元年八月九日寂す、法嗣溪麟易の一人あり、

（日本洞上聯灯錄）

ゲンシヤ　玄砂（二四四九）〔淨土宗〕京師光玄院の僧なり、玄砂は鄕貫詳ならず、京師知恩院境內の光玄院に住す、壯年にして世情を厭ひ、院の傍の人語の聞えぬ所に草堂を構へ、机一脚を置いて經を誦して餘念なし、後鞍馬山の東麓に幽捿し、次に高雄山の麓に移りて幽棲し、正念して寂す、其年月日詳ならず、（續近世畸人傳）

〔考〕玄砂は寬政頃の人なるべし

ゲンシユ　玄首　ニチユー日祐を見よ、

ゲンジユ　玄樹（二〇八七－二一六八）〔臨濟宗〕薩摩桂樹院の開山なり、玄樹字は桂菴（一說に字は玄樹）號は島陰、俗姓は詳かならす、周防山口の人、應永三十四年に生る、永享七年甫めて九歲にして京都南禪寺に寓し、惟肖、景徐兩禪師に就きて四書新註等を學ぶ、嘉吉二年に十六歲にて髮を削りて僧となり始めて戒壇に登る、旣に長して內外の學に通し、長門永福寺の主席を領す、文正元年後土御門天皇僧惟肖に勅して遣唐使を擇はしむ、時に五山の僧侶にして知名のもの八十餘人なり、惟肖遽かに其材を試むる能はす、仍て之を南禪寺に聚め大梅梅子と題して即席に詩を作らしむ、師場に臨み賦して曰く、大梅梅子鐵團々、八十餘人下レ齒難、今日當レ機百雜碎、那邊一核與二他看一と惟肖終に師を擧く、是に於て應仁元年師使命を奉して海に浮ひ、明の燕都に到り憲宗に見ゆ、憲宗宴を設けて師を饗し幣帛を賜ふ、二年即ち明の成化四年正月一日大明宮に朝す、賀詩一首を作りて自己の齡（四十二歲）を挿む、後每歲旦必す詩を作りて其齡を言ひ永く其榮を忘れず、蘇杭の間に遊學し、倪士毅の四書輯釋、曾端の詳說、及ひ諸註解を讀み益ゝ宋學を講明す、其難解のところあれは一時の大儒に就きて其說を明にす、居ること七年にして學業大に進み、文明五年歸朝して復命す、時に大內氏の亂ありて京師大に騷く、師之を避けて石見に寓す、文明八年豐、筑、肥の間を遊歷す、時に肥後熊本藩に學堂を置き、隈部忠直等時に儒學を尊へり、因て師を熊本に招く、師往きて二愛亭に客寓す、是に於て源武貞、源重淸、藤原爲秀、藤原重貞、秋月種朝、白石兵部、釋珠林、珠光、嘯月、太極、自咲、專岳、靈巖寺周泉、熊峯山汝南、平觀寺、竹山寺皆厚禮を加へ、相競ひて師に就かんとす、是時に方りて薩摩の龍雲寺玉洞、冠岳寺宗壽等亦師の碩德あるを聞き、國老とともに之を閩室公に薦む、乃ち人をして肥後に往き、禮聘して藩に致さしむ、師往かんと欲したるも、薩隅の間事ありと聞きて果さす、文明九年正月薩摩に往かんと欲す、二月猶は熊本に客たり、釋奠を見て詩を献す、秋薩摩の僧溫岳といふ者肥後に來りて師に謁す、師因て豫め玉洞に公の徵に應せんことを報す、十一月隈部忠直衣一領を師に贈る、文明十年春專岳と共に阿蘇山を跋涉し、旣にして薩摩に往かんとす、二月忠直等に辭し、二十一日始めて薩摩市來長里村に往き、龍雲寺玉洞と相見る、玉洞師の祝薩の詩を見大に嘆して之に和す、尋きて公に見え、四月十一日冠岳寺に至りて詩を賦す、若文公愈々師を寵信す、時に公十六、師五十二、宗壽七十二なり、未たな幾らすして鹿兒島に來り、八月玉洞と日隅間に遊ふこと十七日、此間互に相唱和す、九月櫛間に於て久逸に謁す久逸は公の叔父にして日新君の祖父

なり、七日久逸舟を浮へて普門寺に游ふ、師等從ひて詩あり、十二月君母氏市來の稻荷廟を新にし、師に命して之が記を作らしむ、十一年公命を下して府下海岸に寺を創し二月落成す、乃ち公、師をして自ら院號を選ひて居住せしむ、師桂樹院と號す、其地嶋陰に向ふを以て自ら島陰と號す、是より師宋學を講し國中に教授す、且常に公の側に侍讀し、尚書を授く、公の族、吏部久逸、遠州勝久、攝州篤久、薩州國久、內匠頭忠廉、新納忠親、及び執政島取播州政秀、村田越州經安、伊地知防州重貞等以下衆士緇徒、朝野望を囑して業を受け、矜式するもの多く、其聲譽一世に鳴り、遠く支那に聞え、相傳へて、薩摩に仲尼の道興りて彝の風を移すといふに至る、十一月四日復た冠岳寺に遊ひ、彝論を講說す、寺主宗壽幼學六七人のために之を請ひしなり、此冬廣濟寺の湖月師を島陰に訪ふ、師詩を作りて之を謝す、十三年秋近衞公大醫陳祖傳をして師を聘せしむ、然れども藩公愛寵して措かず、師祖傳と交誼最も親しく、十月別に臨みて詩を賦して之に送る、祖傳京に歸り之を南禪寺蘭坡等に示す、蘭坡等節を擊ちて賞嘆し、十四年京師の騷客多く之に和す、間歲に藩公疾みて寢ぬ、十七年幕府特に、竹田法印照慶を遣し來りて公の疾を療せしむ、師か十八年歲旦の詩此事に及ぶ、凡そ賓客の薩摩に至る者あらは師必ず逢迎す、故を以て名益々著はれて京師に聞ゆ、長享元年三月二十四日、師釋玄甫等と公に從ひて妙谷寺に遊ぶ、初め師の寺海岸にあり、風潮のために破損せられ營治するに遑なし、是に於て師地を城西に相して菴を營む、其地清泉あり因て人之を泉菴と稱す、院號故の如し、是より先き飯尾大和守、布施下野守幕府の旨を承けて公室族人に遣る書に曰く、渡唐の船日州諸港に入る、其之を警護するは宜しく前規に從ふべしと、（文明十五年四月九日の事なり、）既にして內匠頭忠廉大隅帖佐より日向飫肥に封を移す、乃ち師を召して簡牘の用に備ふ、是に於て十二月錫を飫肥安國寺に轉し之か主席となる、寵遇日に厚く、學徒益進む、延德元年冬幕府惠日山の僧東陽をして日向の南部を遊說せしむ、翌二年藩公飫肥に遊び犬追物を講す、是に於て內匠頭客を饗し時に勝會を開く、師之と賦詠す、各其懷を寫すなり、是歲內匠頭京師に入朝し三年八月攝津に病沒す、師飫肥にありて訃を聞き大に哭慟し、乃ち法諡の字を分ちて各篇首に冠し詩十首を作る、嗣子忠朝立つ明應元年師島陰に歸り、二年復安國寺に往き、往來して兩寺を兼ね常居なきか如し、幕府忠朝をして渡唐船の事を掌とらしむ、故に明に入る者多く飫肥を過く、秋近江の人佐々木永春亦明に遊はんとし、飫肥を過きて師に謁す、師學を論し別に臨みて詩を贈る、延德三年十月藩公師及び攝州篤久をして飫肥に往き、忠朝を伊東氏に和せしむ、十一日俱に鹿兒島を發し夜廻浦（今の福山）に至り詩あり、十三日都城に入る、十五日三俣高城に登り、信宿下城して牛山に達す、詩あり忠親に示す、此日公村田氏に賜ふ書に師と共に之を謀らしむ、四年忠朝伊東尹祐三俣高城に皈る、公の命なり、是年僧東松亦明に遊ひ師に別を告く、時に永春島陰集を齎持して俱に明に至る、八月永春師の作を嚴克正等に示し因て和を求む、乃ち之か詩の頌詠を寄するもの十二人、而して克正序を作る、五年四月師島陰に歸る、七月永春等明にありて洪子經に島陰集に

ゲン（玄）シ

序せんことを求む。十六日子經亦之に序す、實に明宗の弘治九年にして、皆名卿鉅儒として並に一時に目ゆるものなり、十六年正月師飫肥より島陰に歸る、二月永春明より皈り、十九日また師を訪ひ、明人贈るところの詩文を致す、是月公猶ほ疾み師をして般若經を讀みて之を禱らしむ、三月永春辭して還る、八月藩に讀經して結願す、九年勅命を奉して建仁寺を主とる、蘭坡文を作りて之を賀す、十年師年七十五なり、是より先き、日本儒書を讀む者必す漢音を用ひ、佛書には吳音を用ゆるを法となす、師明の學校に在る時之を群儒に聞に皆曰く、吳漢何ぞ拘泥せん、只便に從ふべきなり、と、是を以て師岐陽の倭訓するところの四書を取り明儒の教に遵ひ既に之を改正して徒弟に授く、然れとも猶草味にして教導未た開けす、世の儒學を學ふもの往々未た註に新古あるを知らず、故に師書を著して粗ほ其新古を辨し、且つ國字を以て句讀法を說き、倭點の式を述ぶ、文龜二年伊敷村東歸庵を營む、五月天眞夫人其母多々良氏を夢みて心動く乃ち師をして經を桂樹院に誦して遂に其安寧を禱らしむ、（天眞夫人は豐前豐後筑後三州の太守大友政親の夫人なり）、永正五年六月十五日東歸菴に寂す、壽八十二、其地に葬る、著作桂菴和尚家法倭訓あり、（漢學起源、日本教育史料）

ゲンシユー　玄秀　二三一〇—二三五二　〔時宗〕甲斐吉積山の學僧なり、玄秀は覺阿と號す、遠江見付の人なり、出家して時宗四十四祖唯稱に師事し、學內外を兼ね、深く宗乘に思を致し、甲斐吉田の吉積山、出羽山形の光明寺等に在りて宗乘を講して後進を啓發す、元祿五年某月寂す、壽四十三、著作時宗統要篇七卷あり、（時宗統要篇序、清淨光寺記錄）

ゲンシユー　玄周　……—二三四四　〔淨土宗〕尾張正念寺の開山なり、玄周は尊蓮社三譽と號す、甲斐の人、其俗姓詳かならず、法を傳察に嗣ぎ、尾張清洲正念寺の開山となる。貞享元年二月二十四日寂す、（淨土總宗譜）

ゲンシユーイン　玄收院　ニチケン日賢を見よ、

ゲンシユーニ　玄秀尼　二三五六—二四一二　〔臨濟宗〕山城林丘寺の尼なり、玄秀尼號は、嶺普光院と稱す初め龜宮といへり、靈元天皇の皇女、母は宮人藤原氏なり、十二歲出家して林丘寺に入り、禪行を修す、寶曆二年六月寂す、壽五十七、（野史）

ゲンシユン　玄俊　（二〇七四—）　〔曹洞宗〕石見永谷寺の開山なり、玄俊字は快翁、俗姓生國を詳にせず、出家して天眞に師事し、法を慈眼寺に開き、後、永澤寺に遷る、應永二十一年龍泉寺に主となり、翌年辭して慈眼寺に皈る、石見の檀越永谷寺を開き伊賀の郡丰興禪寺を創め、皆師を迎へて第一世とし、化儀大に振ふ、寂年欠く、（日本洞上聯燈錄）

ゲンジユン　玄淳　（……—）　〔曹洞宗〕信濃靈松寺の僧なり、玄淳字は眞化、能登の人、其俗姓は詳ならず、實峰和尚に投して出家す、初め龍護寺に住し、總持寺に遷り、北住山の位次及び諸法則を正す、後中明の遺命により信濃の靈松寺を主どる、化風大に揚る、晩年に及び北能登に歸る、示寂の年月日及世壽共に缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゲンジヨ　玄恕　ロドー魯洞を見よ、

ゲンシヨー　玄淸　二〇一四—二〇六〇　〔曹洞宗〕雲門寺の僧なり、玄淸字一天、越前の人、天明を禮して薙髮し、受具の後通幻に參

し、次に大徹宗令に見ゆ、後寶峰良秀に參し其法を嗣ぎ、應永六年能登雲門寺に主となり、同七年五月十二日寂す、壽四十七(日本洞上聯燈錄)

ゲンシヨー　玄祥　二一一六……　〔臨濟宗〕美濃汾陽寺の開山なり、玄祥號は雲谷、初め曹洞の諸師に參し、後日峰舜に事へ、其法を嗣ぐ、美濃郡主齋藤利永武儀郡に乾德山汾陽寺を興し、開山とす、康正元年尾張瑞泉寺に遷り、幾くもなく汾陽寺に還り、二年七月八日寂す、勅謚佛智廣照禪師と云ふ、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

ゲンシヨー　玄詔　二〇五六 二一二五　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄詔字は義天と云ふ、土佐の人、俗姓は蘇我氏、入鹿の裔なり、小字は王法師と云ひ、十五歲はして州の天忠寺義山恩禪師に依りて落髮す、十八歲にして具足戒を受け、建仁寺に投し、古芳菊禪師住山の日、擧けられて經藏を掌る、職滿ちて福聚寺春夫宿により、尾張に遊び、瑞泉寺日峰に參す、五年を經て大悟徹底し、日峯禪師に衣法を付せらる、會々父の疾により鄕に皈り、龍門山瑞巖寺を剏して開山となり、美濃に往き、愚菴溪を開き、尋で尾張瑞泉寺に遷る、日峯の寂後京師に入り、養源院の塔を守り、衆の請に應じて妙心寺に主となる、寶德二年細川勝元の大雲山龍安寺を開きて師を請す、師乃ち日峯を開祖とし自ら二世に居す、勝元丹州の治內に龍興寺を剏して師をして、居らしむ、長祿二年妙心寺開山の百年忌に當るを以て、十月十二日龍安寺に於て大會齋を設く、享德二年冬勅を奉じて大德寺に主となりて、住八日にして龍安寺に皈る、寛正六年三月十八日衆を集めて從容に誡め、泊然として寂す、壽七十、臘五十三、龍安寺西北岡に葬る、嗣法雪江深一人あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンシヨー　玄昌　二四七一 二五九八　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄昌字は潭海、號は柏樹、美濃の人なり、文化八年に生る、文政元年、八歲郡の大仙寺忠道に投し、天保三年二十二歲虎溪山に至り、春應に師事し、同十二年三十一歲瑞龍寺に至り、雪潭に謁して參究し、後江戸を經て甲斐に入り、諸禪師を歷訪し、遂に伽陵の法を繼ぐ、明治十四年七十一歲虎溪山に皈り、法席を張り、門學雲集す、後妙心寺に昇り住す、明治三十一年三月廿七日、寂す壽八十八、

ゲンシヨー　玄昌　二二一五 二二八〇　〔臨濟宗〕日向龍源寺の禪僧なり、玄昌字は文之、號は南浦、別に雲興軒、時習齋、懶雲、狂雲、等の號あり、俗姓和仁氏、父は河內の人にして亂を避けて日向福島に到り、里人の女を娶りて師を生む、永祿四年師六歲にして父の意により福島延命寺の天澤に就て剃髮して、法華を學ぶ、翌年父河內に皈り、師獨り留る、僅かに十三歲の時、歲旦の詩を賦す、天澤大に感じ、州の龍源寺一翁に託す、一翁は桂菴の高足月渚の門人なり、師是に於て受戒して、玄昌と稱す、歲旦の詩詩林に喧傳し、遂に京都に聞ゆ、相國寺仁如其才を賞し、文之の號を與ふ、十五歲京都に上り、慧日山龍吟菴に於て熈春に謁し、其器宇俊爽なるを賞歎せらる、東福寺に留まる十餘年、內外の兩典を綜べ、深く蘊奧を究めて鄕に皈り、天正九年二月一翁の席を嗣ぎて龍源寺に主となる、後、大隅昌林寺、及正壽寺に遷る、島津義久師の儒學に精通するを聞き、請じて正興寺安國寺を主らしめ、

優遇日に渥し、慶長四年義弘に從ひて上洛し、伏見の邸に於て大學を講じ、且つ、後水尾天皇の詔により、宮中に於て四書新註を講したりと云ふ、同年五月藩に皈りて正興寺に住す、八年五月將軍德川家康の命により筑前禪光寺に主となり、又相摸建長寺に遷る、同九年二月家久に招かれて師となり、十六年大龍寺に住す、元和六年九月三十日寂す、壽六十六、安國寺に葬る、著作南浦文集、聖蹟同和鈔、日州平治記、砭愚論、決勝記等、各若干卷あり、（漢學起源、日本敎育史料）

ゲンシヨー　玄性（二一九二）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、玄性字は空深、俗姓生國詳かならす、妙音院に住し、學頭となる、寂年缺く、著作論議私記二十卷あり、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

〔考〕玄性は天文前後の人ならむ

ゲンシヨー　玄照（一五〇四―一五七五）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、玄照は慈覺大師に從ひて金剛頂經及台宗の章疏を習ひ露地和尙に就きて重ねて三部の秘法を受け、西塔院に住す、仁和某年皇太后五十の生辰に當り、陽成上皇諸名德六十人を請して諸宗の玅旨を講論せしむ、師奈良の勢範と因明の義を對論し、勢範をして答辯する能はさらしむ、醍醐寺の座主聖寶歎賞して師を因明王と稱す、後淸淳院に住し僧官を賜ふ、延喜十五年二月三日寂す、壽七十二、（本朝高僧傳）

ゲンシヨー　玄正　シヨーユ聖瑜を見よ、

ゲンシヨー　玄紹　ニチシユー日秀を見よ、

ゲンジヨー　玄常（……）〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、玄常俗姓は平氏、山城の人、比叡山に習學して常に法華を持す、俗塵の繁雜を厭ひ、播摩雪彥山に退き、精修勤苦、楮を以て衣となし、臥具を設けす、一粟一柿を食て一冬を過ごす、師天性法を貴び、人を見ては必ず拜し、鳥獸を見ても膝を屈す、山居久しふして寂す、（元亨釋書、本朝高僧傳）

ゲンズイ　玄瑞（二四〇一―二四六九）〔淨土宗〕伊勢寂照寺の中興なり、玄瑞（一に元瑞に作るは誤）號は月僊といふ、尾張名古屋の人、俗姓丹家氏、寬保元年に生る、十歲にして圓輪寺關通上人の下に投し度を受く、天性畫を嗜み、道暇あれば畫筆を手にせり、上人屢〻制すれとも廢せず、十餘歲東遊し、增上寺に入り、書を讀み、畫を習ふ、大僧正妙譽定月上人師の穎敏を愛し、號を與へて月僊と云ふ、後京師に上り、小松谷に居す、知恩院大僧正檀譽貞現上人屢召見して禮遇せり、三十四歲にして上人の命により、伊勢山田寂照寺に住して頹廢を興す、其畫益精妙にして、自ら一家をなす、師潤筆料を以て修繕の資に當て、功を畢ふ且つ轉輪藏堂を興さんとして、寬政十二年より享和三年まで三年間に亦功を畢ふ、文化二年妙法院親王内外兩宮に詣したまふ途次、寂照寺に臨み榮松山の三大字を賜ふ、同年の冬千五百金を官に納め、其息錢を以て永く、貧窮の郡民を救恤す、文化五年春痎あり、冬に至りて益重し、懇に弟子を諭し、蓄積するところの財を分與す、翌六年正月十二日寂す、壽六十九、臘五十四、著作列仙圖贊、耕織圖　月僊畫譜等あり（碑文、續近世叢語、續諸家人物志、）

ゲンセツ　玄節（一四一六―二〇四九一）〔臨濟宗〕伊豫龍潭寺の禪僧なり、玄節字は行應別に稱して捿神叟と云ひ、環芋子と云ふ、伊豫

國西宇和郡矢野庄大島の人、井上氏なり、寶曆六年三月廿一日生る、早年出家し禪行を修す、十九歲豐前中津自性寺に投じ、提州禪師に師事す、禪師寂後其嗣海門恪に師事して宗風を傳ふ、安永八年東福寺開山五百年忌あり、出發東行し、同寺に掛搭し、天猊禪師に參見す、結制後再び自性寺に歸り、舊の如く、副寺寮となり、後東行して峨山、快巖に歷事して其印可を受く、寬政六年龍潭寺に住し法席を張る、禪門寶訓を講ずるに、大衆二百人に餘る、享和元年國侯より宇和島の等覺寺に再三强請あり、遂に同二年二月同寺に住す、三年禪關策進を講ず、大衆四百六十人に餘る、天保二年十一月十一日疾に罹り、廿日に安然寂す、壽七十六、坐夏六十五、勅諡心鑑慈照禪師と云ふ、成佛道偈、榾柮爐邊養ニ舊痾一、草鞋芋栗裏ニ袈裟一、平生勒窣得ニ人笑一、殊勝須レ還ニ老釋迦一、達磨忌偈、達磨西來乾屎橛、指ニ人見性ニ破沙盆、山僧活計只這是、折脚鐺中野菜根、(近世禪林僧寶傳)

ゲンセン　玄顓　(二二〇一)　〔臨濟宗〕美濃東光寺の禪僧なり、　玄顓字は玉淵と云ふ、久しく希雲楚見禪師の室に侍して法を嗣ぎ、天文十年秋尾張瑞泉寺に住す、後、東光寺に遷り、某年寂す、壽缺く、(延寶傳燈錄)

ゲンソ　玄素　一九四八／二〇〇六　〔臨濟宗〕圓應寺の禪僧なり、　玄素字は大朴、釣叟江の上足なり、元應年間元に渡り、中峰、古林、虛石、月江の諸禪師に歷謁し、百丈山如庵、雲屋寺智者に謁し、分座說法す、宣宗道譽を慕ひ、眞覺廣慧大師の號を賜ふ、元に在ること十三年にして歸へり、曆應二年圓應寺を開く、赤松圓心金華寺に延請するも、素は雲林梅に讓る、後、豐前の崇祥寺に住す、貞和二年正月廿八日寂す、壽五十九、遺偈あり、大用現前、無レ途無レ轍、長劍光寒、虛空腦裂、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンソ　玄蘇　(二三〇六)　〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、玄蘇字は景轍と云ひ、號は仙巢、鄉貫詳ならず、靈源寺一絲和尙に師事して其法を嗣ぎ、豐臣秀吉明を伐つにあたり、文筆を以て重用せられ、後對馬に滯留し、朝鮮の俘虜金光等を返附し、媾和の事を謀る、著作仙巢稿二卷あり、◎增補を見よ、

ゲンチ　玄智　(二一九二)　〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、　玄智字は定林肥後託摩郡の人、俗姓は藤原氏なり、吉祥院に受度して後、曹源寺に入り、淸峰慶梵に師事して、其法を繼ぎ、肥後法泉寺に主となり、某年寂す、壽傳はらず、法嗣明山春察あり、(日本洞上聯燈錄)

ゲンチ　玄智　二三九四／二四六四　〔眞宗〕京都六條慶證寺の住持なり、玄智字は景耀一に若瀛と稱す、京都光德坊慶證寺に住す、師東門派の看坊河內岡の願宗寺に生る、幼齡の時父種哲誘ひて久寶寺の昨夢廬に至り、僧樸に拜謁して師資の約をなす、爾來日夜精硏其業益々進む、世に呼ひて文殊小僧と云ふ、僧樸其才器を愛し、敎諭他に異なる、後、終に其の紹介に依りて慶證寺玄誓の法嗣となる、師博識强記、其才世出世に亘る、而して寺は世々祖山の堂職たるを以て、常に寺法勤式等の商議に關かり大に功あり、寬政六年十月四日病を以て寂す、壽六十一、著作、三經字音考、三經字音考會釋、十二禮冠註、橫川法語述讚、與御書述讚、本典科圖、淨土和讚略解續編、眞宗法要稽據正誤、散德文管解、淨土要言、典據考類聚、宗

祖諸略傳、大谷쪾年譜、吉水宗派本末諸系圖、三論玄義飡受記、釋門自鏡錄附錄、日本釋門年表錄、淨肉文考證、唱讀指南遏蔻策、古今獨語、人物考、各一卷、往生禮讃崇聽記、本典諮卷講疏、報恩講式管解、各二卷、淨土眞宗七祖傳、大谷梵唄品彙、眞宗敎典志、各三卷、正信偈義指、正信偈瑣檢、各四卷、文類聚鈔讃仰編、祖門舊事紀、各五卷、淨土要言、考信錄各六卷、淨土眞宗七祖傳衍繹編十卷、本願寺通紀十五卷、本典光融錄四十卷あり、（淸流記談、本願寺派學事史）

ゲンチヨー　玄長　……二二四五　〔曹洞宗〕武藏正覺寺の開山なり、玄長字は久室、俗姓は平民、相模愛甲の人なり、伊豆國淸に於て剃髮し、在天宗鳳に參し、久しふして其法を得、總持寺に出世し、在天の席を嗣ぎて靑松等に住す、一住十二年天正十一年辭して城北平柳村に至り、正覺寺を剏めて逸老す、同十三年六月二十三日寂す、世壽缺く、法嗣瑞翁俊鷲の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲンツー　玄通　ニチイン日允を見よ、

ゲンテキ　玄滴　二二五四　二三三〇　〔曹洞宗〕美濃廣大寺の中興なり、玄滴字は白峰、近江彦根の人なり、美濃全昌寺にて出家受度し、偏く諸老宿に參し、終に加賀大乘寺明堂雄暾の正嫡となる、美濃大垣の城主戸田氏信全昌寺に迎へ居らしむ、同國安八郡平野鄕に故廣大寺ありて廢頽す、本多某の室壽心尼之を再興し、師を迎へて開堂せしむ、寛文十年八月十四日寂す、壽七十七、法嗣月舟宗胡單傳文淸の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲンテツ　玄徹　（……）〔曹洞宗〕能登正法寺の禪僧なり、玄徹字は大應、初め總持寺に出世し、正法寺に遷る、晩年塔山に正音寺を創めて住す、寂年缺く、法嗣仕山融松あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲントー　玄透　……二四六七　〔曹洞宗〕越前永平寺の第五十代なり、玄透字は即中と云ふ、尾張名古屋の人なり、出家して近江彦根淸凉寺頑極に師事し、其法を嗣き、武藏龍穩寺に住し、後、永平寺第四十九代國元禪師の後を承けて第五十代となり、大に一門の宗風を振ふ、當時永平總持の二寺軋轢し、總持寺は幕府に訴へて峨山派下の徒は永平寺に出世すべからざることとし、自ら別立せんとす、師幕府に出て抗論し、遂に舊例に復するを得たり、次に朝廷に奏して勅願祈禱の實を擧けんとし、享和元年に至り勅許を拜し且つ勅號洞宗宏振禪師を拜す、文化四年四月廿八日寂す、壽缺く、著作小淸規一卷あり、（禪宗史料）

ゲントク　玄得　……二二〇一　〔臨濟宗〕薩摩龍源寺の二代なり、玄得は一名永乘、（一に英乘に作る）字は月洛、號は宿蘆齋と云ふ、薩摩牛山の人なり、俗姓傳なし、出家して肥後に至り、淸源寺一枝に師事す、一枝は桂庵に交はり、儒佛の學に兼通す、明應三年京師に上り、東福寺に入り、藏鑰を司る、後西下して日向に至る、同六年雪溪を介して桂菴に刺を通す、雪溪は桂菴の弟子なり尋いで薩摩に歸り、龍源寺桂菴に謁し、師資の禮を執る、親しく佛儒の學を受け、殊に儒學は宋の新註を受く、遂に龍源寺の師跡を讓られ、後飫肥の安國寺に轉住す、大永三年大內義興の命を帶ひて明に航し、益儒學を講究す、幾もなく東歸し、勅を拜して京師建仁寺に上る、後飫肥の西光寺に退隱し、天文十年二月九日寂す、門下に一翁あり（漢學起源）

ゲントツ　玄訥　二二〇二　〔臨濟宗〕京都妙心寺の僧なり、玄訥字は景堂、山城の人なり、少にして景川和尙に師事し、其席を承けて大心院に住す、妙心寺に開法し、後尾張瑞泉寺を董す、退隱して幽棲するや、天文十一年十二月二十一日夜賊其室を伺ひて刄を加へ師を傷く、師遂に之か爲めに寂す、壽欲く、（本朝高僧傳）

ゲンニン　玄忍　一八七二／一九〇七　〔眞言宗〕奈良海龍王寺の律僧なり、玄忍字は證覺早く出家下髮し、嘉禎三年西大寺に往き、興正菩薩に從ひて沙彌戒を受け、常喜院に到りて大悲菩薩に滿分戒を受く、律章に通し、旁ら密典を究む、衆請により海龍王寺に出世し、寬元二年具足戒を增受して律儀を守り、寶治元年十二月十日寂す、壽三十六、臘十一、（本朝高僧傳）

ゲンニユー　玄柔　一九七八／二〇四八　〔臨濟宗〕山城東福寺の禪僧なり、玄柔字は剛中、豐後の人、幼きときより玉山提禪師を禮し、十四歲剃髮受具す、十七歲にして京都に登り、無德孝、虎關錬の二老に參し、南禪寺に掛錫す、嘗て南遊の志あり、歸りて玉山に其旨を告ぐ、玉山春秋に乏しきを以てこれを許さず、乃ち玉山の示寂に及び、席を繼ぎて大慈寺に居り、寺務四十年、平田南禪寺に住する時、招かれて後版に居す、師十禪客をして明に往き大藏經を求めしむ、三年を經て二藏を得て歸る、乃ち一藏を大慈寺に納め、一藏を東福寺に寄す、永德三年夏京都に入り、玉山の忌を修す、僧錄司春屋葩師と舊交あり、其來るを喜びて幕府に告げ、普門寺に住せしむ、幾何ならずして出でゝ常樂寺の祖塔を守る、嘉慶元年秋幕命を受けて東福寺を主どる、翌年即宗菴を剏めて退居し、劇かに寂す、實に嘉慶二年五月二十七日なり、壽七十一、遺骸を本菴に塔す、（本朝高僧傳）

ゲンハ　玄玻　二二二五　〔曹洞宗〕肥前高傳寺の開山なり、玄玻字は玲巖、肥前筥川の妙雲寺悟宗圭頓に參し、其法を嗣ぎ、悟宗の寂するに及び、席を繼ぎて同寺に住す、老年に至り檀越鍋島淸久慧日山の庵に迎へ居らしむ、後其子淸房菴を擴張し、高傳寺となし、師を開山となす、弘治元年五月二十三日寂す、壽欠く、法嗣嶠源珠德あり、（日本洞上聯燈錄）

ゲンピン　玄賓　一四七八　〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、玄賓俗姓弓削氏、河內の人なり、天平の頃出家して興福寺に投し、宣敎大德に師事し法相の敎義を學ふ、常に俗事を見聞するを厭ひ、山林泉石に思を寄す、遂に同寺を出て三輪山の麓に小菴を營み隱棲す、延曆の頃勅召を拜し京師に出て、律師に任せらる、師固辭すれとも逃るあたはす、後僧都に任せられ、尋て大僧都に任せらる、然とも師は每に固辭す、その大僧都の任命あるに際し、一首の和歌を留め小菴に皈る、和歌に曰ふ「三輪山の淸きなかれにあらひてしころもの袖はさらにけかさし」大同の頃小菴を出て飄然西國に歷遊す、和歌あり、曰ふ「とつくには山水きよし事多き君が都はすますまされり」嵯峨天皇立ち給ふに及び深く師の高風を慕ひ、屢勅使を遣して其安否を問はせたまふ、弘仁二年五月十六日勅書に被服を賜ひ、同年十二月十三日重ねて勅書、並に綿百屯布三十端を賜はり、翌三年五月廿日特に勅使を遣はして法服並に布三十端を賜はり、十二月四日翌四年五月十七日に同しく勅書並に綿布を賜り、五年五月廿二日に特に御製の詩等を賜は

り、七年五月五日には更に優渥なる勅書並白布三十端を賜れり、弘仁七年の頃 師は備中國沼田の山中に隱接して菩薩の大行を修す、天皇叡感したまひ、乃ち勅を下して同地方の人民に恩典を與へたまふ、同七年十月十二日翌八年十月九日、いつれも綿一百屯を賜ふ、その頃伯耆國に歴遊し、會見に草菴を營みて帶留す、九年六月十七日寂す、壽八十餘なり、(元亨釋書、本朝高僧傳、日本逸史、江談抄)

ゲンフー 玄風 シユーコー宗興を見よ、

ゲンポ 玄甫 二三九二 (眞宗)河內久寶寺村發願寺の住持なり、 玄甫は知空の門に入り、享保元年眞宗要義圖說四卷を撰し、一家の名相を辨明す、十七年十二月五日寂す、(本願寺通紀本願寺派學事史)

ゲンホ 玄輔 (……) (曹洞宗)常陸多寶寺の禪僧なり、玄浦字は明室、少傳宗誾の法を嗣き、永平寺に出世し、常陸多寶寺に還る、寂年及ひ壽歆く、法嗣祥山瑞貞の一人あり、(日本洞上聯燈錄)

ゲンホ 玄輔 (……) (曹洞宗)上野東雲寺第一代なり、玄輔字は助翁、覺翁能正に師事して其法を嗣き、上野小金井郷に往き茅菴を結ひて居る、州の富豪等寄捨して寺となし、名けて東雲寺と云ふ、寂年並に壽歆く、法嗣靈泉壽曹あり、(日本洞上聯灯錄)

ゲンポー 玄彭 二一六〇 (曹洞宗)相摸最乘寺の僧なり、玄彭字は天菴、俗姓は藤原氏、越前の人、稍長して里院に投じて得度し、諸老に徧參し、大泉寺の泰叟妙康に從ひ得悟し、泰叟の龍穩寺に住するにあたり、師亦隨從し、數年の後印可を受け、總持寺に出世し、文明十七年最乘寺の主となる、明應九年八月十七日寂す、世壽歆く、最乘寺に塔を建つ、法嗣雲岡舜德普山彭壽の二人なり、(日本洞上聯燈錄)

ゲンボー 玄昉 一四〇六 (法相宗)興福寺の學僧なり、玄昉俗姓阿刀氏なり、出家して龍門寺義淵に師事して法相を學び、靈龜二年八月に入唐の命を拜し、養老元年に遣唐使に附隨して西航し、撲陽の智周大師を問ひて法相の蘊奧を究む、留まること二十年に垂むとし高譽四傳す、玄宗召見して其學才を愛し、三品に准じ、紫袈裟を賜れり、天平六年十一月遣唐使從四位上多治比眞人廣成に附隨して歸朝す、菩提仙那、佛哲、道璿等皆一行中にあり、玄昉始めて一切經を賚し來り、興福寺に安置す、同八年二月に封一百戶、田一十町、扶翼童子八人を賜はる、踰えて九年八月に僧正に任せられ、且つ紫袈裟を賜はる、蓋し我國賜紫の恩典は師より始まるなり、之より內道場に在りて益寵榮を擅にす、皇太夫人(藤原宮子)の病牀に侍して看護し、絁一千疋、綿一千屯、絲一千絢、布一千端を賜はる、然るに其學藝才能を恃みて政治に參與し、藤原朝臣廣嗣と隙を生じ、廣嗣太宰府に貶出せられ、亂をなして捕殺せらる、尋いて師も亦天平十七年十一觀世音寺造營の監督を名として太宰府に逐はれ、同月悉く其封物を收らる、翌十八年六月太宰府に寂す、世に傳ふ觀世音供養の日導師となり、法會の間に廣嗣の亡靈の爲に世命を奪はる、と、玄昉の門に慈訓善珠あり、(續日本紀、扶桑畧記、傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳、)

〔考〕 傳通緣起等留學二十年とあれども、こは其遣唐大使の

任命より玄昉が歸へりて京に着するまでを通算したるなり、其唐にあるは十八年間なり、

ゲンミツ　玄密　二一六一……〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、玄密字は希菴、幼にして建仁寺月谷禪師を禮して得度し、雪嶺瑾によりて文墨を習ふ、後、去りて美濃に往き、悟溪寺明叔和尚に參し、宗訣に達し、其命に依り大心院に居る、藤原景衡聘して美濃の明覺山に住せしむ、後、妙心寺に出世し、前後同寺に主たること五回、聲價高し、甲斐の太守武田晴信請して慧林寺に主たらしめんとす、師固く辭して起たず、使者數回に及ぶ乃ち止むを得ずして入寺す、文龜元年十一月二十七日賊徒の爲に負傷し、之が爲に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ゲンモン　玄門　二三二八……〔淨土宗〕加賀玄門寺の開山なり、玄門は上蓮社向譽、一に直釣と號す、俗姓は花村氏甲斐の人なり、智譽上人の室に投じて剃髪受業し、遂に其法を嗣ぐ、加賀金澤に玄門寺を開き、萬治元年二月十五日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンモン　玄門　チユー智幽を見よ、

ゲンモン　玄文（二一一八）〔曹洞宗〕越前龍澤寺の禪僧なり、　玄文字は錦江、薩摩の人、明林宗哲に參して開悟す、初め乘慶寺に住し、後總持寺に出世す、長祿二年越前龍澤寺に遷る、又出羽に至り、瑞光寺を築きて隱棲す、（瑞光寺は後に光嚴寺と改む）寂年欠く（日本洞上聯灯錄）

ゲンユー　玄宥　二二八九　二二六五〔新義眞言宗〕山城智積院の中興一代なり、　玄宥字は蓮性又一に蓮品といひ、俗姓は滕付氏、下野皆川の人なり、父は又太郎と稱し吹上の城主なり、甫めて七歳持明院宥日僧都の弟子となり、受具の後根來山に上りて機鋒を義學に研く、業成りて鄕里に歸り持明院に住し初めて講筵を開く、位に居ること數夏、退きて再び根來山に登り請益益々深し、又宮賢、長善の諸友ともに奈良に遊び、興福寺に唯識を、東大寺に三論、華嚴を習ひ、後近江に往き三井寺にて倶舍を、比叡山にて天台を學ぶ、天正五年日秀の遺囑を受けて智積院に住す、然れとも賴玄の化權盛大なるを以て潛居して德を養ひ、十二年の秋に至りて初めて主位に據り衆を指揮す、十三年春根來山賊火に罹りて燒失す、師高野山に遁れて淸淨心院に寄遇す、徒衆師を慕ひて集り、院の狹隘を感して去りて醍醐寺に寓し、移りて高雄山に隱る、又北野に移りて大に法幢を建つ、慶長元年三月勅して僧正に補せらる、家康師を慕ひて豐國寺の三區を下し、幷に山林及ひ莊田を附す、師乃ち三區を併合して一となし、上の寺下の

玄宥僧正

寺と號す、上ノ寺は居室に充て、下ノ寺を講堂となし、其林間處に隨ひて僧坊を架し講肆を開く、師最も書を能くし、四方の道俗爭ひて師に書を求むるもの多し、師乃ち手に隨ひて之を書し與ふといふ、慶長十年十月四日寂す、壽七十七、臘五十七、遺骨を泉涌寺に葬る、（結網集、續日本高僧傳）

ゲンヨ　玄譽（二一九二）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、玄譽字は堯運、俗姓生國詳かならず、妙音院玄性に繼きて同院に住し、學頭と爲る、寂年缺く、（結網集）

〔考〕玄譽は天文前後の人ならむ、

ゲンヨ　玄譽（一七一二）〔淨土宗〕山城平等院の中興なり、玄譽は鄕貫詳ならず、都鄙に道化盛なり、天正年中宇治平等院に住す平等院は其始永承七年宇治關白賴通公別莊を捨て、精舍となしたるものにして眞言宗なりしが師淨土敎を弘通するより、以後知恩院の末寺となす、玄譽寂年月日缺く、（鎭流祖傳）

ゲンヨ　玄譽　イチフー一風を見よ、

ゲンヨ　玄譽　エーテツ永徹を見よ、

ゲンヨ　玄譽　エンケー圓冏を見よ、

ゲンヨ　玄譽　ゼンキヨー善慶を見よ、

ゲンヨ　玄譽　ゼンタツ善達を見よ、

ゲンヨ　玄譽　チカン智鑑を見よ、

ゲンヨ　玄譽　マンム萬無を見よ、

ゲンリヨー　玄了（……）〔曹洞宗〕越中法城寺の開山なり、玄了字は覺巖、日向の人、俗姓藤原氏、十七歲僧となり、諸老を歷參し、遂に越中玄川寺大徹に依りて開悟し、總持寺に昇り、玄川寺に遷る、越中の檀越法城寺を立て養老の所となす、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゲンリヨー　玄稜（……）〔曹洞宗〕阿波桂谷寺の禪僧なり、玄稜字は木庵、阿波の人初め大功圓忠に參し、尋て阿波桂谷寺傘庵一蘭に師事し、入室を許さる、其沒するに及んで命に依り其席を補す、寂年缺く、法嗣桐岡桂澤あり（日本洞上聯燈錄）

ゲンロ　玄路　トーゲン統玄を見よ、

ゲンロー　玄樓　オーリユー奧龍を見よ、

ゲンイ　元爲（一八四六―一九二四）〔眞宗〕陸前稱名寺の開山なり、元爲は俗名武田信勝といひ、奧州會津郡挪津の人、綾和に居る、親鸞に稻田に謁し弟子となる、後師命を受けて奧州を行化し、宮城に寺を創む、今仙台稱名寺（稱念寺ならん）是なり、文永元年十月廿三日寂す、壽七十九、（本願寺通紀）

ゲンエー　元昶（二三二三―二三九三）〔黃檗宗〕宇治萬福寺十二代なり、元昶字は杲堂、淛の人、揚氏なり、我享保六年七月東來し、悅峰童の法を嗣く、享保八年二月黃檗山に進み、一住十一年享保十八年六月十六日寂す、壽七十一、（黃檗譜畧）

ゲンエー　元榮（……―二四六二）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十四代なり、元榮字は本住、武藏兒玉郡秋山村の人なり、幼にして郡の小平村成身院元眞阿闍梨に投じて出家し、豐山に學び、業成りて總持寺に主となる、彌勒寺に出で、護持院に轉し、享和二年五月擢でられて豐山能化に晉み、第三十四世となる。然れども未だ西上の途に就かさるに十四日江戶護持院に寂す、（新義眞言宗史料）

ゲンエン　元圓（一八〇五）　三條一流の佛工なり、元圓は法印賢圓の子にして長圓の弟子なり、法橋に叙せらる、壽永久安年代の人なり、（古本僧綱補任、外記日記）

ゲンカイ　元海　一七五三 一八一六　〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり、元海は藤原雅俊の子なり京都に生る醍醐寺の定海僧正を師として顯密の二教を硏き、天承元年夏定海を拜して兩部の灌頂を受け、三寶院に住し、仁平年中東寺の長者に加はり、後醍醐寺の座主に任す、六年秋七月皇后の病を禱りて驗あり、皇后大に悅ひ、手から御衣を解きて賜ふ、師晩年寺側に小廬を構へ松橋菴と名けて宴居し、保元元年八月十日寂す、壽六十四、著作、厚草紙、玄微鈔、各一卷あり（本朝高僧傳）

ゲンギ　元義（……）〔臨濟宗〕相摸報國寺の禪僧なり、元義字は虎溪、俗姓は菅氏、京都の人なり、久しく天岸に參して法を嗣ぎ、報國寺に住す、後、伊豆香山寺に遷り、盛んに法幢を樹つ、寂年缺く、門下に立翁本笑、華嘉石牛、牛喝嵒欽等あり（延寶傳燈錄）

ゲンギ　元儀　リヨーキ了軏を見よ、

ゲンキツ　元佶　二二〇八 二二七二　〔臨濟宗〕京都圓光寺の開山なり、元佶一字は三要、號は閑室と云ふ、肥前小城郡の人なり、幼にして京師の圓通寺に祝髮す、學內外を兼ね、頗る奇才あり、命を受けて足利學校第九世の庠主となる、嘗て家康の寵遇を得、金地院本光國師崇傳長老と同じく共に諸寺の中を總管す、五山を經て南禪寺に昇り、紫衣采邑を賜ふ、家康の伏見にある時師命により、孔子家語、貞觀政要、武經七書等を活刻し、古書二百餘部、活字板等を賜ふ、關ヶ原の役、家康に從つて軍中にあり、常に筮を執て占を告ぐ、後京都に地を賜ひ、寺を建て丶圓光寺と名け、養老の地となし、田地二百石を給せらる、暮年鄕里に歸り、外守鍋島氏の歸依を受け、請せられて三岳寺に開山となる、慶長十七年五月二十日駿府に寂す、壽六十五、（足利學校書目、同事蹟考）◎增補を見よ、

ゲンキヨー　元慶（ケイ）　二三〇八 二三七〇　〔黃檗宗〕武藏羅漢寺の禪僧なり、元慶字は松雲（一に祥雲に作る）京師の人、佛工九兵衞の子にして、父の死後九兵衞の名を襲ぎ、佛工を業としたれども、放蕩のため家產を破り、始めて感憤して攝津難波に奔り、瑞龍寺鐵眼道光禪師に謁して心情を告け、强請して弟子となる、時に二十二歲なり、其後諸國に行脚して豐前に至り、下毛郡跡田村耆闍窟山に登り、石造の十六羅漢の像を禮し、景仰の念禁しかたく、延文の頃逆流建順といへる禪師の造立にかゝれるよしを聞いて、益感憤し、始めて手から開刻造立せんとの志を發し、蒼皇東歸す、當時道光禪師江戶に來たれは、師亦江戶に下り、其志を陳へ、大に勸奬せらる、貞亨の初より江戶に留り、鐵牛性機、慧極道明等諸禪師の贊助を得て、其業を剏め、淺草金龍寺の東北竹川と云ふ地に開刻したる一像を安置して諸人の禮拜に任せ、晝は市街に出て五百體阿羅漢造立を大呼して施主を求め、雨雪寒著一日も休むとなし夜は家に歸りて獨火の下に刀鋸を把り宂々彫刻を事とす、元祿五年淺草御藏前の道俗十六人相率ゐて施主となりたれば、師大に喜ひ、一時に數體造立し、其後續々施主となる者あり、同八年に至り本尊釋迦牟尼佛の一丈六尺の像以下五百餘體創造立の功を畢る、時に師四十八歲なり、同年五月幕府の聞くところとなり、

將軍綱吉の令により、本所に土地一千五百畝を給す、乃ち假に堂宇を營みて天恩山五百羅漢寺と號し、鐵眼道光禪師の靈を請して開山となし、同年八月黄檗山に請し、其末寺となる、翌九年黄檗山五代の主高泉性潡禪師東下して開眼の法會を行ふ、師は重ねて大願を發し、一大伽藍を興さんとしたるも、未た果さすして疾に罹り、寶永七年七月十一日寂す、壽六十三、(碑文、江戸砂子、江戸名所圖繪)

ゲンクワイ 元晦 二〇一八……〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、元晦字は無隱、豐前の人、出家して禪林を遍歴し、後、元に航し、天目山中峰本に謁す、嘉曆元年東歸す、建仁寺に留り、淸拙澄の下に第一座となる、近江の太守大友貞宗(直菴と號す)に請せられ、築前顯孝寺に住す、筑前の聖福寺、相模の圓覺寺、建長寺、京師の建仁寺に歷住す、敕あり南禪寺に住す、壹岐の檀越某安國寺を開きて師を請す、後鄕里に皈り、天目寺を開き住す、延文三年十月十七日福智寺に寂す、勅諡法雲普濟禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンクワイ 元恢 二〇二八……〔臨濟宗〕筑前正觀寺の開山なり、元恢號は大方、俗姓菅氏、肥後の人、筑前圓覺寺秀山中に師事し、後相模の建長寺嵩山中に依り、輪藏を司る、征西親王(南朝の皇子)及び菊地武光師に歸依し、正觀寺を開く、筑前顯孝寺に住す、晚年正觀寺に歸り住し、應安元年六月九日寂す、門下曇聰あり、元に渡る、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンケー 元圭(二〇二九)〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の僧なり、元圭字は方涯、俗姓不詳、佛燈國師(德儉)の下に參究す、初め駿河の淸見寺に住し、尋て建長寺に還る、應安二年尾張定光寺平心齊の寂に際し、師佛事を修す、示寂の年時缺く、遺偈𢸍示ニ雙趺一、手携ニ隻履一、入ニ定此巖窟一、千歲豈得レ起、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンコー 元皓 二二三六 二二四二八〔黄檗宗〕肥前龍津寺の禪僧なり、元皓字は月(ゲツ)枝、號大潮、一に魯寮と云ふ、俗姓諫早(イサハヤ)氏、肥前松浦の人なり、遠祖は大織冠鎌足なり、鎌足の後山城守家兼あり、家兼の曾孫を龍造寺家晴と云ふ、天正十五年軍功により、諫早を賜はる、後、諫早氏を姓とす、茂晴に至り治蹟大に顯はる、晚年深く佛敎を崇信す、四男四女あり、其仲は卽ち師なり、早年出家して龍津寺化霖龍に師事し、二十一歲東上し、黄檗山の獨湛瑩に見えて參究し、後、諸方に歷遊して佛儒の學を修め、長崎に於て國子靜と云ふ者に就いて支那音を學び、音韻を精究す、幾もなく江戸に出て、徂徠南郭等に交はり、大に名を揚く相國寺大典顯常東禪寺萬菴賫等と相交はり幷に詩文に達す殊に顯常と交深し、數年にして國に歸り、明和五年八月廿二日寂す、壽九十三、師衆に接するに五則あり、禪定、持呪、禮佛、稱名、讀誦なり、著作松浦詩集三卷、魯寮詩偈一卷、同文集四卷、同尺牘二卷、西溟餘稿三卷、別に明四大家文選鈔三卷あり、(續日本高僧傳、魯寮文集、近世高僧年表、近代名家著述目錄)

ゲンコー 元杲 一五七一 一六九五〔眞言宗〕近江石山寺の學僧なり、元杲は京都の人、藤原農省の子なり、幼にして醍醐寺元方大僧都により剃髮得度し、灌頂法を受くるに及び、奈良に往き壹定明珍二師に三論を學び、兼ねて密敎を聽く、後寬空僧

正に具支灌頂を受け、淳祐僧都に密印を受く、詔により內供奉となり、寵を得て常に東宮に侍す、天文五年敕を奉して神泉苑に雨を禱り、驗ありて權少僧都に任ず、永觀元年東寺の長者とあり、翌年法務を領す、此歲八月大僧都に昇る、寬和元年夏雨を祈り僧正に任する詔あり、師辭して受けず、先師元方に追贈を奏請し、大僧都を贈らる、永延二年延命院を剏し、職を辭して退居し、長德元年二月十七日寂す、壽八十五、（本朝高僧傳）

ゲンコー 元劼 二五一二…… 〔臨濟宗〕京都南禪寺の住持なり、元劼は字を拙堂といふ、俗姓は松岡氏、丹後田邊郡の人なり、幼にして州の德藏院文泉を拜して薙染し、法泰寺函海東福寺一山の二老に歷參し、更に建長寺眞淨に就きて其印可を受け、建長寺に住し、嘉永四年南禪寺を董す、翌年十二月十六日寂す、壽六十餘、

ゲンコー 元光 一九五〇 二〇二七 〔臨濟宗〕近江永源寺の開山なり、元光字は寂室、俗姓は藤原氏、美作の人なり、幼歲にして京都に入り、無爲元禪師に從ひて出世の法を學ふ、十五歲剃染受戒し、諸國を遊方して近江の田上に寓す、又去りて禪興寺の約翁和尙に謁して參堂し、名を元光とす、德治二年約翁京都の建仁寺に住する時、師命せられて湯藥に侍す、一日翁不安なり、因りて師末後の一句如何を問ふ、翁乃ち壁面に一掌す、師豁然大悟して大事を了す、時に十八歲なり、延慶二年約翁鎌倉に歸へる、命して師に金澤の慧雲律師に從ひて毘尼を學はしむ、九旬にして其梗概を盡す、復た東里會、一山寧、東明日の三禪師に侍して益々慧解を增し、元應二年可翁然、鈍菴俊等と海を渡りて元に入り、直に天目山に登りて中峰本和尙に謁す、尋いて元叟端、古林茂、淸拙澄、靈石芝、絕學誠、無見覩、斷崖義等の諸尊宿を歷訪し、悉く賞讃せらる、泰定三年歸朝し、長門の濱に着し、三角に寓す、建武元年備後吉津の平居士永德寺を剏めて師を延く、師俗喧を厭ひて美作三備の間に幽居すること二十五年、觀應の初攝津の福嚴寺に寓し、次いて近江の往生寺、美濃の東禪寺、甲斐の棲雲寺に歷住す、延文五年近江刺史佐佐木氏賴（號は雪江崇永）と云ふ者師の高德を欽慕して奧島及ひ雷溪の二地を贈る、師雷溪の幽邃を喜ひ、梵宇を立て、永源寺と號す、四來の高僧雲の如く、王畹芳、一關夫、月心圓、大拙巧等皆集り來りて嵒に倚り、澗に就き、茅を結ひて幽棲す、實に山林の盛事なり、光明天皇屢々詔を賜ひて其德を旌表す、幕府師を相模の東勝寺建長寺に請し次に豐前の萬壽寺に請すれとも固辭して赴かす、貞治六年九月一日偈を書して曰く、「屋後靑山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履、」又是空華結空子」と筆を投して寂す、壽七十八、臘六十三、著作語錄二帙あり、諡を賜ひて圓應禪師といふ、（續群二三五、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゲンゴー 元轟 二三四三 二四二三 〔曹洞宗〕武藏迦葉寺の開山なり、元轟字は默山、俗姓は熊谷氏、父は通稱林吉膺と云ひ、母は熊谷氏の出なり、天和三年十月二十九日出羽秋田に生る、元祿九年十四にして邑の滿福寺孤室林峯に投して祝髮受戒す、同十一年州の小安溫泉に浴す、佛國寺大仙和尙遊化して此地に到る、師之に見えて教を聞く、同十四年妙音寺龍峰に參す、寶永二年行脚して江戶吉祥寺に至り留る、大聖寺道場に鳳潭

華嚴をに講するに方り、師日々聽習す、同三年天龍寺竺堂の室に入りて大戒を受け、去りて下總の東昌寺に往き、隱之を拜し、勤究多年、正德元年秋辭して相摸大雄山に登り、開祖の塔を拜し、美濃小松寺に覺照を禮して首座となり、次に德巖寺惟慧、河内法雲寺慧極に歷參し、同二年春鷹峯に登り次に加賀大乘寺了爲に謁し、秋東昌寺に歸へり、同三年冬典座となり、同五年擢てられて首座となり、十二月衣法を付せられ、享保元年鄉里に歸へり、林峰和尙の塔を拂ふ、鄉人等曇華山渾藏菴を建てゝ師を請す、師隱之を開山に仰ぎ、自ら第二代となる、同六年五月勅を奉して永平寺に出世す、同十三年法弟紫山の建立したる美濃光明山阿彌陀寺に延かれて其規模を張る、同十八年請に應じ東昌寺を掌る、十九年一月披雲直歲、武藏西大輪村に迦葉院の故跡を得、村人白石氏と胥議して周旋し、翌年官許を得て一宗古刹の列に連ね、永く光明山の支院となし、天王耕地に寺基を移して別に一院を建て、師を請して開山第一祖とす、院を天王山と稱す、元文元年春師披雲等に命して天王峰に土木の役を開かしめ、二年を經て工畢り、四年秋東昌寺に歸へる、寬寶二年法系論興り、延享元年師敗訴すれとも伏せずして衣を剝かれ、且つ京都大阪江戶及ひ東海道驛程を警迹せらる、後十一年本多中務の閣老となるに及ひ、許されて江戶に皈へる、寶曆十三年出羽千眼寺玉宥に請せられ病を强ゐて往き、戒會を開き、七日說法授戒の儀則終りて同寺に寂す、時に寶曆十三年十一月五日なり、壽八十一、法臘六十八、著作語錄等あり、(默山和尙年譜)

ゲンゴン　元嚴(……)〔眞言宗〕山城醍醐山寂靜院の僧なり、元嚴字を遠江阿闍梨といふ、元海に都入室の高弟なり、得一の法を受け、寂靜院に住す、(續傳燈廣錄)

ゲンサ　元佐(二一一五)〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、元佐字は巨濟と云ひ、其俗姓生國詳かならず、朴文璞に參して法を嗣ぎ、京都東福寺に主となり、後三聖寺に遷る、寂年及び壽缺く、(延寶傳燈錄)

〔考〕元佐は康正年中の人なり

ゲンサン　元三(……)〔曹洞宗〕越中德城寺の開山なり、元三字は普門、出羽の人、大徹宗令の法を嗣く、檀越等越中德城寺を築き、迎へて師に居らしむ、後、總持寺に出世して某年寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ゲンシ　元志(二〇二八)〔臨濟宗〕肥後成道寺の禪僧なり、元志字は寰中俗姓小足氏、肥後合志郡の人なり、早年正觀寺大方恢の下に得度す、尋て京師に登り、建仁寺南禪寺の禪席に遊び、正觀寺に歸り恢の法を嗣ぐ、後元に航し、楚石琦に參謁す、琦寰中歌を作りて與ふ、應安の初東皈す、菊池持朝成道寺を創立して師を請ず、幾もなく寂す、壽八十三、遺偈、日本非ニ生土ニ大唐亦客鄕、虛空兼ニ法界ニ平等我家常(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ゲンシ　元志(二四七六/二五四一)〔臨濟宗〕伊豆龍澤寺の第三代なり、元志字は星定、尾張中島の人、十九歲にして出家し、輝東菴顧鑑に師事し、其寂後通應に師事し、遂に其法を嗣ぎて伊豆龍澤寺に住す、明治十四年六月十二日寂す、壽六十六、門下の俗弟子山岡鐵舟大に聞ゆ、

ゲンシ　元志(二四七二/二五三二)〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の僧なり、

元志字は願翁、陸前松島の人、内海氏の子、初め郡の海無量寺牧舟に師事し、稍長じて鎌倉に至り、眞浄苗を問訊し、苗の指示により周防の常榮寺諦州の室に投じて積年參究し、遂に印可を受く、後、大智山拙堂劼の法を嗣ぎ、同山に住す、萬延元年建長寺に住す、慶應三年南禪寺に住す、明治四年寶壽院を中興し居る、明治五年五月權少教正に補せられ、六月大教正に進む、後幾もなく寂す、壽六十一、

ゲンジヤク 元寂 二二八九／二三四〇 〔曹洞宗〕美濃大禪寺の禪僧なり、元寂字は默玄、岩代國會津の人なり、俗姓は源氏、母は大平氏、十一歳にして郡の天寧寺舉州和尚を禮して出家す、往て尾張國に至り、一老宿に參見す、尋いで三河の長圓寺に至り月舟胡禪師に參見し次に美濃の金山に上り枯心牛禪師に投して隨侍すること久し、終に法印を受く、寛文七年黄檗山に至りて木菴禪師に謁す、延寶元年の冬結制す、大衆千人に滿つ、三年の春加賀の前田孝貞師を請て廟院玉龍寺に住せしむ、五年の春退て美濃に還る、笠神郡に大禪古寺を重興して捿止す延寶八年年六月二日寂す、壽五十二（日本洞上聯燈錄）

ゲンジユ 元壽（二〇三四）〔臨濟宗〕攝津福嚴寺の禪僧なり、元壽字は太虚、俗姓不詳、早年佛燈國師德儉に師事す、國師示寂の後、元旨曇韶等と相携へて元に航し、靈石芝、月江印、竺田心等に參謁す、因りて佛灯國師の語錄を示し、諸禪師の題跋を請ひ、且上天竺の悟菴講主に謁して國師の銘塔を請ひ、並に倡て歸る、攝津福嚴寺に出世し、晩年鎌倉に下り菴居す、應安七年淨智寺に請せらる、春林翁、方無外、並に義堂信從邀するも堅拒して就かず、示寂の年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、）

ゲンジユ 元壽 二二一五／二三〇八 〔新義眞言宗〕山城智積院の第四代なり、元壽字は長存、俗姓は野口氏、下野藥師寺村の人、天正三年に生る、甫めて十四歳州の元翁阿闍梨に投して祝髮し、沙彌戒を受け廣澤の法水に沐し根來山の教風を汲む、未た進具に及はすして遊方して關東を徧歴し、慶長八年大和長谷寺に登りて專譽僧正に謁し講席に預る、又京都に入り智積院玄宥僧正の門を印さて蘊微の底を究む、玄宥の寂後祐宜僧正に侍す、慶長十七年春結城滿福寺の請を受けて席を補し講を張る、翌年幕命を受けて駿府に赴き家康に謁す、時に日譽僧正及ひ算賀あり城中に法を論す、師も亦之に與りて聲名高し、二師共に京に入り智積院に掛錫す、元和元年春奈良に往きて唯識有法、因明論等を一乘院の尊政大僧正に受け、賢首の五教を清凉院の卿公己講に聞く、元和五年秀忠師にに城北の大報恩寺を賜ひて留錫の地となし、命して智積院の次補となす、元和七年醍醐寺に登りて法務大僧正義演に就て小野の法流を汲む、寛永八年日譽僧正の智積院を退隱する及ひ、師代りて席に補す、太上法皇の勅を受けて參内して講を開く、賞して僧正に補せらる、寛永十五年詔を奉して秘識義章一巻を撰す、慶安元年閏正月十三日寂す、壽七十四、臘六十一、泉涌寺に葬る、（結網集、續日本高僧傳）

ゲンシユン 元春 ウンシヨー渾徹を見よ、

ゲンシヨー 元勝（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、元勝字は少納言といふ、京都の人、兵部丞公基の子、

ゲン（元）ジ

尚書侍郎公經の四世の孫なり、能く眞草を書し、常に得筆生の名を以て醍醐山にあり、（續傳燈廣錄）

ゲンシヨー　元性　クーショー空性を見よ、

ゲンシヨー　元昭　二三三五　一四二三　［黄檗宗］京都東山幻幻菴の禪僧なり、元昭字は月海、別號は賣茶翁、肥前蓮池の人、芝山某の子なり、十二歲龍津寺化霖に謁して得度す、稍長して化霖に隨行し、黄檗山に登り、獨湛瑩に謁し、一偈を得て亢亢參究す、二十二歲痢病に罹り、未た全癒せさるも、出遊の志禁しかたく、腰包頂笠して奥州に至り、萬壽寺月耕に謁し、益々參究し、尋きて湛堂律師に依りて戒律を學習す、一時筑の雷山に棲住し、粥屑を喫し、溪水を飲み、一夏を送る、其後龍津寺化霖の下に留り、寺務を監すること十四年なり、化霖示寂の後、法弟大潮を擧けて補席をなし、遂に去りて京都に遊ひ、東山に通仙亭を營み、茶を煎して賣る、自ら謂ふ僧伽の德を張踏し、人の信施を勞するは我れ自ら善くする所にあらす、と、大佛燕子の池、東福紅葉の溪、隨時に茶店を鋪く、賣茶翁の名喧しく傳はる、一時の名衲鉅儒相競ひて風交を通す、肥後の國法に僧侶たりとも國境を出づるものは十年すれは歸り、改めて藩許を請はさるを得す、元昭其煩を患ひ、七十歲の時國に歸り、肥後人の官遊して京都に滯留せるものに從屬すとなし、十年の期限を免れんことを請ひて藩許を得、乃ち自ら高遊外と號し、飄然として去り、京都に上り、舊の如く茶を煎して賣る、晩年岡崎に棲居し、一日茶具を取りて燒く、其語に曰く、「我從來孤貧無地無錐、汝佐二輔吾曹一有レ年、或伴二或春山秋水一、或驚二松下竹陰一、以レ故飯錢無レ缺、保得八十餘歲、今已老邁無レ力二于用一レ汝、北斗藏レ身將レ終二天年一、却後或辱世俗之手於汝一恐有二遺恨一、是以賞レ汝以上火聚三昧一直下二向火焰裡一、轉身去轉一句且如何、頁久云、劫火洞然毫末盡、青山依レ舊白雲中と爾來門を杜ち客を謝す、寶暦十三年七月十六日蓮花王院の南幻幻菴に寂す、壽八十九著作詩偈一卷あり刊行す、相國寺大典禪師其高風を喜び傳を撰す、（續日本高僧傳、蒹葭堂雜錄、良山堂茶話、小雲捿稿）

ゲンシヨー　元昭　ドーネン道稔を見よ、

ゲンジヨー　元丈　二四〇〇　二四六六　［臨濟宗］鎌倉建長寺の禪僧なり、元丈號は湛堂、肥前佐留志郡の人なり、郡の圓通寺祖山を禮して得度す、二十歲建長寺通玄禪師の宗風を慕ひて問訊し、參究功あり、其法を嗣ぎ、同寺に住持となる、文化三年五月二十日寂す、壽六十七、芝園集一卷あり、（近世禪林僧寶傳）

ゲンシヨク　元寔　（二四六一）　［臨濟宗］阿波興源寺の禪僧なり、元寔字は玉磵、京都の人なり、早年出家し、十六歲岡公翼に詩を問ひ後梅莊大典禪師に學び、詩文を以て聲譽あり、廿歲始めて其末技を悔ひ、發憤して禪行を修す、初め備中の大雲禪師美濃の隱山、大元、棠林等に事ふ、已にして阿波興源寺に住す、寂年缺ぐ、（近世禪林僧寶傳）

［考］　元寔は享和頃の人なり

ゲンスー　元嵩　二四二三　［黄檗宗］宇治萬福寺十九代なり、元嵩字は仙岩、近江五ヶ莊の人、塚本氏なり、出家して梅嶺雪の法を嗣く、寶暦十三年三月廿七日黄檗山主の命を受け、未た進山式を行はす、同年八月廿八日江戸に寂す、壽缺く、（禪宗史料）

ゲンズイ　元瑞　ゲンズイ玄瑞を見よ、

ゲンセー　元晴（……）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、元晴字は隨道、大和の人、十二歳出家して、戒壇院圓照に師事し、律密を傳ふ、殊に聲明に長ず、寂年缺く（本朝高僧傳）

ゲンセイ　元政　ニチセー日政を見よ、

センセツ　元拙　二三四三 二四一三〔黄檗宗〕宇治萬福寺十六代なり、元拙字は百痴、陸奥仙臺の人、俗姓佐々木氏、出家して黄檗禪に皈し、大仙覺の法を嗣ぐ、寛延元年十一月黄檗山主に進み一住六年なり、寶曆三年六月六日寂す、壽七十一（禪宗史料）

ゲンセン　元選　一九八三 二〇五〔臨濟宗〕遠江方廣寺の開山なり、元選字は無文といひ、後醍醐天皇の皇子なり、母は某氏、初め懷妊の時宮を出て、元亨三年梅津の私第に師を生み第五橋の邊に棄つ、一士人あり嗣子なきを患ひ常に淸水寺の觀音大士に禱り、師を見て喜ひ抱て家に歸る、七歳にて乳母を喪ひ悲戀の極遂に出家の志を生し、八歳にして山寺に入りて內外の書を讀み、十八歳父母に强請して建仁寺に至り第十八世明窓鑑の塔を禮して大僧となる、會中の儕輩數百人師の右に出づるものなし、時に可翁然、雪村梅相次て住持す、師二老に親炙して禪奥に達す、康永二年元に出航の途次、筑紫聖福寺を過きて無隱晦に謁し、後辭して海に浮び溫州の境界に著き、諸州を歷遊して智識の門を叩く、元の至正三年金陵の龍翔寺に至り笑隱訢に參し、同七年建寧府大覺寺に至り古梅友禪師に參して問答數十返、掛塔を許され左右に侍すること久し、遂に密契を得、法語幷に大戒を授けらる、又仰山に至りて子有有に謁して侍司に居り、尋きて天寧寺楚石琦、本覺寺了菴欲に見え、北地に至り德山の塔を拜し寓居三年、石霜より廬山に陟る、廬山開先寺を過くる詩あり曰く、「參差喬木藏樓閣、烟霧忽開山色淸、瀑落高巖翻雪浪、風生遠嶽起松聲、雲間喚鶴僧定、霜外啼猿動客情、此去再來知幾日、題詩青竹獨吟行、」と隱者を訪ひて詩あり曰く、「秋風杖錫翩々至、瀟灑幽居過客稀、深巷艸荒疎雨冷、孤村日落亂雲飛、一雙鬢髮帶霜老、萬里鄉關入夢歸、我亦平生丘壑志、殊來此地扣巖扉、」と、又伏龍山に千巖長和尙を訪ひ、龍翔寺に笑隱訢に謁す、元の至正十年義南菩薩碧巖璨首座と船を共にして博多に着す、實に本朝の觀應元年なり、翌歳京都に入り、其冬相模に下りて中巖月と古先元を訪ひ、再び京都に皈り居を城西巖倉にトし名けて歸休といふ、故舊道友師を起して名刹に住せしめんとすれとも起たず、菴居すること數年、後美濃武儀に菴居し詩あり曰く、「邪師說法數如麻、般若靈根正敗芽、祖道安危非我事、柴門深掩送生涯、」と一年にして再び京都の西山に歸り詩あり曰く、「杖錫飄々歸舊山、松杉寂々避塵寰、滿庭黄葉無人拂、唯有閑雲自往還、」又美濃に至り後參河廣澤に移る、時に遠江奥山の是棨居士師に參し師を招くに所居の地を以てす至德元年師錫を杖て奥山に至り其地の幽靜を愛し茅を結ひて居る、後寺となり深奥山方廣寺といふ、又美濃椿洞に往き瑞椿山了義寺を開く、師性慈仁にして或は疥癩のために沐浴剃髮し、或は衣盂を捨てゝ僧に施す、台密性相の徒來りて問難するものあれば宗旨不傳の妙を以て答へ問者服膺して去る、前後三十年誨導を以て務となし、遠近皆其德に歸す、晚年奥山に歸り、明德元年閏三月二十二日

俄に病に罹り、門下を誡め偈を説きて曰く、生平顚倒、今日郎當、末後一句、雪上加霜、と復た曰く、生如ニ出ㇾ岫雲ニ死似ニ行ㇾ空月ニ一念認ニ性相ニ萬劫繫ニ驢橛ニ、と正念にして寂す、壽六十八、臘五十一、門人遺骸を荼毘して塔を本山の西隅に建て嘿靈と號す、（續群一二三八、本朝高僧傳、延寳傳燈錄）

［考］元選禪師の行狀は延寳傳燈錄、本朝高僧傳、幷に收錄し、南方紀傳にも散見す、然るに往々誤謬を傳ふ、今は主として續群書類從に收むるところの別傳に依る、

ゲンゼン　元善　二二一八／二二九〇　［黃檗宗］山城佛國寺の僧なり、元善字は仁峯、俗姓は松田氏、鎭守府終軍秀鄕の裔なり、師夙に道心あり、出家せむとするも父母許さず、二十五歲にして遂に志を達す、京都北野の草菴に閑居し、念佛を事とす、三十三歲の時、黃檗の高泉潡に謁して禪を傳へ、擢てられて侍者となる、幾もなく天眞院に住す、後伏見佛國寺に移り衆を領すること三年なり、六十八歲の時佛國寺の法席を退き、獅子ヶ谷如意寺に隱棲し、禪餘大黑天を畫きて世人に施す、通計一萬餘幅なり、不退和尙に謁して淨土の宗要を聞き、日課佛名三万返なり、享保十五年十一月微恙にかゝる、十八日弟子梅文に終期を告け、二十日夜初更合掌して寂す、壽七十三臘四十九なり、（續日本高僧傳）

ゲンソー　元聰　……／二四四一　［臨濟宗］鎌倉建長寺の禪僧なり、元聰號は通玄、豐後竹田の人なり、七歲郡の松嵒寺に投じ、稍長して出遊し、武藏に入り、芝大智寺に掛搭し、海門東に參し、寶曆中大智寺に師跡を繼ぎ、尋て建長寺に住す、天明元年三月二日寂す、（近世禪林僧寶傳）

ゲンソーニ　元聰尼　二三〇六／二三七一　［黃檗宗］武藏落合泰雲寺の二代なり、　元聰字は了然、號は大休、初め名はふさ、（一に茂登）武田信玄の玄孫なり、信玄の子義久駿河の富士祠大宮司葛山某の義子となり、葛山十郎と稱す、義久久敬を生み、久敬爲久を生む、爲久京都泉涌寺の前に閑居して茶事を嗜み、能く古書畫を鑒定す、一女を生む即ちふさなり、ふさ長して東福門院に仕へ、やどりきと稱す、門院薨して後、家に皈る、詩歌を好み、頗る禪味を知る、或人婚嫁せんことを勸む、ふさ誓うて曰ふ、我婚嫁して三子を生まば、暇を與へよ、と、乃ち松田晩翠の妻となり、二十四五歲に至りて男女三人を生み、夫の爲めに妾を買うて出家し、髮を剃りて尼となり、始めて了然と稱す、後江戶に下り、牛島の弘福寺に至り、鐵牛性機禪師に謁を乞ふ、禪師尙ほ容色の美麗なるを見て、魔なりと云ひ、寺に入るを許さす、尼去りて駒込に至り、白翁道躰禪師（一に白鷗）を訪ふ、禪師亦入るを許さず、尼去りて民舍に入り、鐵を燒きて自ら我面に當て、眉額を焦爛す、乃ち鏡の裏に書して曰ふ、「昔遊ニ宮裡ニ燒ニ蘭麝ニ、今入ニ禪林ニ燎ニ面皮ニ、四序流行亦如ㇾ此、不ㇾ知誰是箇中移、」「いけるよにすてゝたくみやうからましつひのたきゝとおもはさりせば」と、再ひ白翁道躰禪師を訪ふ、禪師大に感し、寮中に居ることを許可せり、日夜參究して白翁禪師の法を繼く、鎌倉に居を搆へんとして發するに臨み、會々戶田茂睡來り訪うて歌あり、曰ふ「みづくさのきよきこゝろのことしげきさとをばよそにすまひもとめて」と尼答へて曰ふ「みなひとのさらぬわかれのそれならてありてうらむるよをそうらむる」、と、茂睡に一軸を授く、

その詠するところの歌、寄露釋教に曰ふ「きえぬともみれはまたおく露に知れさためなきよのもろ〳〵の影」、と、後武藏の落合村に泰雲寺を創立し、白翁を請うて開山となし、自ら二代となる、後別に連乘院を創立す、正德元年九月十八日に寂す、壽六十六なり、絕命の詩あり、曰ふ、六十六年秋已久、漂然月色向」人明、莫」言那裏工夫事、耳熟松杉風外聲、（近世叢語、安西筆談、江戶黃檗名刹記、善女人傳）

ゲンタン　元聃　二〇五九……〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、元聃字は老仙、養直に師事して法を嗣ぎ、長樂寺に出世し、後建長寺に主となる、晚年正法菴に退休し、應永六年二月九日寂す、壽欠く、（延寶傳灯錄）

ゲンチン　元椿　ゲンヨー元養を見よ、

ゲントー　元統（…………）〔曹洞宗〕甲斐法泉寺の禪僧なり、元統字は心巖、生國俗姓未詳、法泉寺圓應正瑩に從ひて周遊し、心要を悟る、後法泉寺の住持となる、寂年世壽欠く、法嗣淸峯慶梵の一人あり、（日本洞上聯灯錄）

ゲントー　元東　二四一九……〔臨濟宗〕武藏長德寺の禪僧なり、元東號は海門、武藏塚原の人、平田氏、始め郡の長德寺大岑禪師に師事し、後、西遊して日向古月和尙に謁す、數年參究して東歸し、建長寺長德寺に歷住す、寶曆九年六月八日寂す、壽缺く、語錄二卷あり、（近世禪林僧寶傳）

ゲントー　元棟　二三二三 二四〇六〔黃檗宗〕山城萬福寺の十四代なり、元棟字は龍統、攝津大坂の人、俗姓志方氏、出家して黃檗宗慧極道明禪師に師事し、其法を嗣ぎ、長崎東光寺に住し、道譽高し、元文四年萬福寺十三世竺菴卯幕府の命によりて退隱するに際し、嶺中雪巢、泰州百拙、實門翠峯相謀りて共に一山を監す、同五年四月幕府の特命により、出てゝ十四代の法席を繼く、時に七十八歲なり、國人にして黃檗山の法席に上るもの師を以て始めとす、師爾來專ら一山の興隆を謀る、幕府金帛を寄附し其志を助く、職に在ること五年なり、延享三年九月十六日寂す、壽八十四、（黃檗譜略）

ゲンニヨニ　元如尼（二三八八）〔黃檗宗〕肥前壽恩院の尼なり、元如字は躰眞、小字竹と云ふ、肥前蓮池鍋島之治の庶女なり、延寶八年六月七日に生る、之治の妻多久撫育して已の子となす、稍長して才色共に秀づ、五歲師に從ひ、書を學ふ、七歲にして黃檗宗の化霖禪師に謁し、九歲にして國風二首を詠し、世相の變遷を感發し、禪師に示し、且つ敎を請ふ、十一歲にして父を喪す、妻多久髮を剃り、壽恩院法英と號す、尼孝事し、傍ら和漢の學を究む、十九歲化霖禪師に就いて碧巖集を受く、後、戒律の章疏を得て精讀し、且つ淨寫するもの數百卷に及ふ、元祿十四年二月七日二十二歲自ら刀を操りて髮を斷ち、自誓法に依りて八關齋を受く、七月十日德善寺某和尙を禮して沙彌尼戒を受け、翌年四月廿三日二十四歲密敎師某を禮して瑜伽法を受け、自誓して具足戒を受く、某之が證明をなす、爾後戒律の弘通を以て任となす、四律五論を硏究す、直鳥村に壽恩院を開き、遺敎、阿彌陀、法華等の諸經、並に諸論章疏を講演し、諸道俗を勸諭す、適々病に罹るも女醫なきを以て診察を受けず、後、疑問八條を設け、諸大德に質す、一時の諸大德答決を與ふ、尼專ら比丘尼の戒律の興隆を謀る、黃檗宗の大潮を問ひ其指示により京師の靈

潭律師に謁せんとし、享保十二年普俊尼を携へて海路大坂に入り京師に上る、普俊尼は前の侍女なり、靈潭律師に謁し、具に志を陳し教を請ふ、律師其至誠に感し、比叡山の靈空律師に紹介す、然れとも空律師老衰を以て其師たることを辭す、因て再ひ靈潭律師に謁し、遂に其門に入り、戒律の章疏を聞く、一夏に六十餘卷を徹す、後に淨土教を聞き、正修正行す、靈潭律師尼法要決一卷を撰して附與し、靈空律師法語一篇を著はして附與す、同年國に皈り、翌十三年四月八日念佛修行し、第七日に至り靈相を感す、六月二十六日法に依り自受羯磨を了る、靈潭律師遙に聞て大に賀し、隨喜證明書一篇を貽る、後京師に上り、光攝菴を營み隱棲す、道俗男女相競うて法化を仰く、寛保二年正月大潮元皓禪師特に大尼躰眞大姉傳一篇を撰し尼の行業を詳にし、大に讃揚す、尼の示寂年月日未た詳かならす、(魯寮文集)

ゲンハク 元伯 (二二五四) 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、 元伯字は岐秀、大宗玄弘に參すること多年、遂に其證を得、文祿三年秋尾張瑞泉寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳灯錄)

ゲンハク 元璞 エコー慧珙を見よ、

ゲンホー 元方 (一六四五) 〔眞言宗〕山城醍醐山延命院の開山なり、 元方俗姓は藤原氏出家して聖寶の法を嗣き新正行院を建てゝ開山となる、某年寂す、後寛和元年元杲の請により、大僧都を賜ふ、(續傳燈廣錄)

ゲンマ 元磨 二四七五 二五二七 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、 元磨字は羅山、遠江の人、太元、儀山に歷事し、次に蘇に事へて印可を受く、安政六年勅を蒙りて妙心寺に登り、慶應三年二月十六日寂す、壽五十三、臘四十一、勅諡大綱正宗禪師といふ、

ゲンミヨー 元明 二三三三 二四一七 〔黃檗宗〕宇治萬福寺十七代なり、 元明字は祖眼俗姓糟谷氏三河八草村の人なり、出家して黃檗禪に皈し、雲岩巍の法を嗣く、寶曆四年九月黃檗山主に進み、一住四年なり、寶曆七年正月廿七日寂す、壽八十五(禪宗史料)

ゲンミヨー 元明 (……) 〔曹洞宗〕大隅園林寺の開山なり、 元明字は了巖、山城の人なり、少にして永澤寺通幻に投して薙髮し、次で興禪寺不見禪師に師事して印可を蒙り、興禪寺に主となり、後ち大隅に赴き、園林寺を創立し、專ら道化に勤め、道俗の皈向多し、某年寂す、世壽欠く、(日本洞上聯灯錄)

ゲンミヨー 元明 (……) 〔淨土宗〕伊勢正端寺の僧なり、 元明字は悟心、號は懶安、又は逍遙と云ふ、伊勢正端寺に住し、後洛東一雨菴に移居す、書を能くし、詩文に巧みなり、(鑒定便覽)

ゲンミヨー 元苗 二四三二 二五〇一 〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の禪僧なり、 元苗字は眞淨、紀伊田邊の人、細野氏の子、十一歲郡の興禪寺快應に師事し、後、蘭山、湛堂、等に歷事し、終に湛堂の印可を受く、初め大智寺に住持となり、文政七年建長寺の請により同寺に住持となる、同十年開山五百五十年忌を修す、大衆八百人に餘る、同十二年東福寺開山五百五十年忌の際、强請により、西上して大衆三千人に餘

る、天保三年官命により、南禪寺の住持となる、同十二年七月廿五日半山亭に寂す、壽七十、曇華集二卷寫傳す、蓋し、足利幕府の末より三百年の間南禪寺官命の例廢絶せらる、眞淨笛禪師に至りて再興あり、乃ち稱して賜紫の中興と云ふ、(近世禪林僧寶傳)

ゲンヨ 元譽 ホーヨー法道を見よ、

ゲンヨー 元養 二三二七—二四〇九〔黄檗宗〕山城法藏寺の開山なり、元養字は百拙、號は釣雪、一に苑樵、華庵と云ふ、京都の人なり、初め黄檗宗に入りて僧となり、近衞家熙の皈依を得、其盡力により洛西泉谷に海雲山法藏寺を開く、詩歌茶事に通し、最も書を善くし、多く蘭を畫く、寛延二年二月三日寂す、壽八十三、(扶桑畫人傳、鑒定便覽)

ゲンレー 元禮 (二〇八五)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、元禮字は履中、東福寺南嶺越に參して大事因緣を究め、南北の講筵に周遊し、道譽高し、天龍寺にありて金剛經を講し、輦下の老宿其席に列す、一日諸師と共に將軍義持の邸に至りて法を論ず、諸寺を歷遷して南禪寺に昇る、寂後淸泰院に塔す、其年時及壽欠く、(本朝高僧傳)

ゲンレキ 元歷 ジョーレキ淨曆を見よ、

ゲンロ 元盧 二三七七—二四四九〔臨濟宗〕駿河松蔭寺の第二代なり、元盧初の名は慧牧、字は遂翁、下野の人なり、三十餘歲にして白隱鶴禪師に謁し、師事すること二十年、東嶺大休等と共に知らる、後、東嶺の勸めにより松蔭寺の師跡を繼ぐ、然れども法門を問ふ者あれば東嶺の下に送り、參叩せしむ、寛政元年六月病に罹り、十二月寂す、壽七十三遺偈に曰く、歎瞞佛祖、七十三歲、末後一句、什麽什麽、諡して宏慧妙顯禪師と云ふ元盧天性磊落簡傲にして坐禪看經を事とせず、詩酒碁畫を愛玩し、自ら醉翁と稱し、後、人の勸めにより遂翁と改む、池大雅等と交を結び、優遊をなしたり、(近世禪林僧寶傳、正法山宗派圖)

ゲンイ 源意 (……)〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、源意號は蓮性山城の人戒壇院圓照の弟子となり、戒律を傳ふ寂年欠く、(本朝高僧傳)

ゲンウン 源運 一七七二—一八四〇〔眞言宗〕金剛王院の第二代なり、源運字は攝津僧都といひ、京都の人、淡路守輔明の子なり、初め後白河天皇に近侍せしか、出家して旦夕孜々修學して懈らす、早く悉地を得たり、治承四年八月十八日寂す、壽六十九、付法の弟子、賢朝、雅西、什海、隆元、觀濟、定賀、金海、仁賀、覺濟、舜賢、乘源、元勝、實果、全覺、守覺、杲海、覺敬、行運、源政、嚴實等三十六人あり、(續傳燈廣錄)

ゲンエ 源惠 (一九五二)〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、源惠は大納言藤原賴經の子、正應五年天台座主に任す、其寂年缺く、(天台座主記)

ゲンエー 源榮 二二七八……〔淨土宗〕相模大長寺第二代なり、源榮は星蓮社曉譽と號し、其俗姓生國共に詳かならず、觀智國師に師事して宗乘の奧義を究め、江戶淺草正覺寺中興となる、後、相模岩瀨の大長寺に移り、同寺第二代の主となり、州の玉繩貞崇寺、座間宗仲寺を開く、後、三河大樹寺に主となりて大に法化を揚く、元和四年十一月十日同寺に寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゲンエン　源延（一八八一）〔天台宗〕相模西明寺開山なり、源延字は淨蓮と云ふ伊豆走湯の人なり、夙に京都に至り、比叡山に登りて澄憲に從ひ、顯密二教の蘊奥を究む、相模の松田に至りて西明寺を剏し專ら念佛を誦すること一日三万遍なり、信濃の善光寺に參詣し行々法化を施す、承久三年春師駿河智滿寺にありて、曼陀羅供を修する大阿闍梨となり靈告により再び善光寺に到りて寶殿に入りて親しく本尊の靈相を拜瞻して自ら圖寫し、佛工越前の法橋海繩をしてこれを鑄造せしむ、後、師が終るところを詳にせず、（本朝高僧傳、淨土傳灯錄）

ゲンオー　源翁　シンショー心昭を見よ、

〔考〕淨土傳灯錄には相摸走水の人とあり

ゲンカ　源可（………）〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、源可は定蓮社然譽と號す、其俗姓生國詳かならず、觀譽上人に師事して法を嗣ぎ、相模光明寺に主となる、寂年壽欠く、（淨土總系譜）

ゲンガ　源雅（二一五一―二二二二）〔眞言宗〕山城東寺百八十六代の長者なり、源雅は水本大僧正といふ、中山尚書郞宣親の子、賢深大僧正の室に入りて出家し、賢深の寂後澄慧に就きて法を嗣ぎ、幸心院の十四代に居る、詔して東寺百八十六代長者法務大僧正に補し、護持僧となる、永祿五年十月八日寂す、壽七十二、（續傳燈廣錄）

ゲンカイ　源海（一四五九）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、源海は出家して華嚴敎を學び、延曆十八年東大寺別當に任ず、寂年、及壽缺く、（東大寺別當次第）

ゲンカイ　源海（一八八一―一九三八）〔眞宗〕山城佛光寺の第三代なり、源海一名は光信、俗名は安藤隆光といひ、姓は日野氏武藏を領す、深く塵網を厭ひ、康元々年三十四にして眞佛に就きて薙染し、後、親鸞に從ひて甲斐の等力山万福寺に至り、第二十四代となる、正嘉二年澁谷の興正寺に移り、第三代となる、文明年中武藏兒玉郡荒木村に滿福寺を創し、之を弟子海信に附す、寺は後三河靑木に移し、如意寺と改む、弘安元年二月廿三日寂す、壽五十八、（本願寺通紀）

ゲンカク　源覺（一七八八）〔眞言宗〕山城仁和寺の僧都なり、源覺は本寺僧都と稱す、大敎院覺意の弟子にして左大臣源俊房の子にして勝覺の家弟なり、大治三年傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

ゲンカク　源覺（………）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、源覺は左大臣源俊房の子、醍醐山勝覺の胞弟なり、後勝覺に醍醐山の法を受く、（傳燈廣錄）

ゲンクー　源空（一七九三―一八七二）淨土宗の開祖なり、源空は法然房と號す、美作國久米の南條稻岡の人なり、父は漆時國と云ひ、母は秦氏なり、師は長承二年四月七日に生る、幼名を勢至丸と云ふ、漆氏は世々土豪なり、父時國性憍傲にして稻岡令源定明に怨を結ぶ、永治元年某月某夜定明暗に乘して襲擊し、師小弓を提けて防禦し、時人其勇氣を稱し、字して小矢兒と云ふ、其夜父難に斃れ、命終に臨みて師に遺言し、出家の身とならしむ、師常に父の遺言を服膺し、幾もなく菩提寺の觀覺の下に投し、敎を受く、觀覺は秦氏の弟なり、久安五年十五歲にして觀覺に携へられて東上し、比叡山に登り、西

塔持寶坊源光の下に投して天台の敎觀を修習す、尋いて源光の意により功德院皇圓阿闍梨に師事し、為修習を事とす、同年十一月八日度を受け、戒壇院に登りて、圓頓戒を拜す、翌六年十六歲より三大部を講究し、三年にして了る、九年九月十八歲にして黑谷に至り慈眼房叡空を訪ひて敎を受く、叡空は良忍の法を嗣きて淨土敎を修行し、且つ圓戒眞言に通達す、師の至るを見て大に喜び、始めて法然房源空の號を與ふ。蓋し源空は源光叡空の各一字を採るなり、師報恩藏に入りて大藏經を披閱し、三國の經論章疏一として讀まさるなし、保元元年廿四歲にして叡空の下を辭し、先つ嵯峨の清涼寺に詣し、釋迦牟尼佛の前に七日の間參籠して出離の大事を祈禱し、後奈良に至り、興福寺藏俊を訪ひて法相宗を學ひ、京師に皈りて醍醐寺寬雅を訪うて三論宗を學ひ、仁和寺慶雅を訪うて眞言宗を學ふ、再ひ叡空の下に至り圓頓戒の印信として南岳の九條袈裟　妙樂の十二門の戒儀、

法然上人

道具、秘書等を授けらる、中川寺の實範を訪うて灌頂を受け、宗の大事を附せらる、安元元年三月四十三歲の時惠心の往生要集、善導の散善義を讀み、一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節、久近念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故の文に至りて、末世の凡夫阿彌陀佛の本願に乘して決定して往生することを得るを思ひ、立ところに餘行を捨てゝ一向專修念佛に歸す、即ち唐宋兩傳の中より、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五人を擧けて淨土宗の相承を立て玆に淨土の一門を開く、黑谷を辭して西山の廣谷に幽棲す幾ならして東山吉水の邊に草廬を結ひて一向專修念佛を弘通す、自ら常課念佛六萬聲を修行し、後七萬聲を修行したりと云ふ、同年高倉天皇勅請して宮中に於て圓頓戒を受けたまひ、後白河上皇法住寺の離宮に行幸したまひ、同しく圓頓戒を受けたまひ、且つ勅して延曆園城の兩寺の高僧をして輪次に往生要集を講說しせしめたまふ、師の講說精微に入り、上皇大に御感したまふ、後、後鳥羽天皇、幷に上西、宜秋、修明の三后皆師により圓頓戒を受けたまふ、治承四年東大寺再興の擧あるにあたり、後白河上皇勅して再興の勸進に當らしむ、師固辭して受けす、遂に弟子俊乘房重源を推擧す、文治二年比叡山の座主顯眞殊に問を下して、專修念佛に關して師の答を求む、同年の秋、南北の高僧大德を大原の勝林院に會し、師を引いて法門を論議す、世に大原談義と云ふ、其後、顯眞專修念佛の道場を興し、日夕修行を事とし、南北の高僧大德と云はるゝ靜眞、證眞、慈圓、良快、明禪、公胤　明遍、靜遍、貞慶、等前後皆師の敎を受け、關白藤原兼實深く師の盛德に歸服し、月輪の別業に一室

ゲン（源）ク

を構へ、數〻師を請して戒を受く、建久九年兼實の要請により、選擇本願念佛集を撰し、初め弟子安樂筆受の任に當り、後、感西を以て替へ、證空、勘文の任に當る、是時に方り、專修念佛大に興隆し、朝野靡然として師の盛德に皈服す、然るに師の弟子にして專修念佛を名として、諸宗を誹謗する者ありしかは、南北の衆徒數〻抗議す、元久元年比叡山の衆徒大講堂に相會し、相議して朝廷に出訴し、專修念佛の停止を請はんとす、師これを聞いて大に憂ひ、自ら起請文七箇條を作りて弟子に示し、師幷に弟子八十餘人連署して座主に贈り、漸く衆徒の激怒を解く　同二年正月靈山寺に三七日を期して別時念佛會を修行し、靈異を感す、同年九月奈良興福寺の衆徒亦相議りて朝廷に出訴し、師等を罰せんことを請ふも、朝廷聽許せす、建永元年後鳥羽上皇熊野に行幸したまふに際し、上皇の宮人出てゝ東山鹿谷の別時念佛會に參す、師の弟子住蓮安樂等六時禮讃を諷誦するに、其音聲哀婉にして人の心膽に徹す、宮人等忽ち感悟し、住蓮安樂等を仰いで度を受く、上皇宮に還りたまひて、大に怒りたまひ、即ち住蓮安樂を捕へて六條河原に於て斬に處す、然れとも上皇の意未た平ならす、遂に師の度牒を褫ひ、俗名を藤原元彥と云ひ、土佐に配流す、月輪關白兼實上疏して轉して讃岐に配流せられんを請ひ聽許せらる、讃岐は兼實の領地なり、即ち建永二年二月廿八日官符を下す、追捕使宗久經等小松谷の房に來り、急に配所に移らんことを促す、師邊地敎化の好緣なりと云ひ、將に京を出てんとす、月輪關白兼實深く別を惜しみ、法性寺の小御堂に迎へて一夜を留む、三月十六日法性寺を出つ、鳥羽の南門より船に乘り攝津國經ヶ島に着くに度を受くるもの多し、播磨高砂浦同國室の泊の遊女等來りて懺悔す、師爲に法要を示す、三月二十六日讃岐國鹽飽（シワク）（扇島小豆島と並べる小島なり）の地頭入道西忍か館に着す、幾ならすして其家を辭し、同州小松の生福寺を寓居とし、淨土敎を勸誘す、其寺の本尊に脇士なし、師之を造立し、自ら勢至菩薩を彫刻して安置す、師國中の靈地を巡禮す、承元々年十二月八日最勝四天王院落慶によりて大赦を行ひ、師召還せらる、已に赦免せられたりと雖、猶ほ京に往還するを許されす、之によりて暫く攝津神部（カウベ）（今の神戶）に留まる、未た幾ならすして同國勝尾寺に入り、草廬を西谷に結て幽捿す詠して曰く「柴の戶にあけくれかゝる白雲をいつむらさきの雲に見なさん」、當寺の恒例なる引聲念佛會に僧衆の服裝の垢弊せるを見特に弟子法蓮房を京都に遣はし、新衣十五領を裁して施與す、又一切經を寄附す、建曆元年七月藤原中納言光親月輪公の遺囑により上皇に奏請して師を召還せんことを請ふ、即ち許されて十一月十七日宣旨を賜ふ、師勝尾寺に住すること四年にして同月廿日京に入る、慈鎭和尙師の入京を聞き、使を發して之を迎へ、洛東大谷の禪房に住せしむ、道俗歸向するもの極めて多し、建曆二年正月二日病に罹る、これより以後更に餘言を交へす、偏に往生のことを談し、高聲に阿彌陀佛號を唱ふ日々病勢迫り、廿三日勢觀房源智師の敎誡を請ふ、師自ら筆を執りて曰く「もろこし我朝にもろ〳〵の智者たちのさたし申さるゝ觀念の念にもあらす、又學問して念佛の心をさとりなどして申す念佛にもあらす、往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申てうたがひな

く往生すへぞと思ひとりて申ほかには、別の子細さふらはす、たゞし三心四修など申ことの候は、決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内にこもり候なり、この外におくふかき事を存せは二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし、念佛を信ぜんはたとひ一代の法をよく／＼學せりとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して智者のふるまひをせすして一向に念佛すへし、云々、と、後に弟子相傳へて一枚起請文といふ、廿五日に至りて寂す、實に建暦二年正月廿五日正午時なり、壽八十、臘六十六、後鳥羽天皇文治四年後白河法皇の請によりて慧光菩薩の號を賜ふ、以後歴朝屢々號を賜ふ、即ち四條天皇天福某年に華頂尊者、嵯峨天皇寛元二年正月十日に通明國師、後花園天皇天下上人無極道心者、後柏原天皇大永年中に光照大士、東山天皇元祿十年正月十八日に圓光大師、中御門天皇寶永八年正月十八日に東漸大師、桃園天皇寶暦十一年正月十八日に慧成大師、光格天皇文化八年正月十八日に弘覺大師、孝明天皇萬延二年正月十八日に慈教大師の諡號を追贈せらる、師の弟子源智、聖覺、金光、證空、聖光、信空、湛空、心寂、感西、信寂、圓照、空阿、隆寛、禪勝、長西、重源、念佛、宗源、幸西、住蓮、安樂、成覺、幸阿、隨蓮、光明、道辯、行空、勝法、作佛、蓮生、善信、（後に親鸞と云ふ）等あり、著作、選擇本願念佛集二卷、淨土三經私記三卷、淨土經釋一卷、往生要集釋一卷、七個條起請文一通、一枚起請文一通、漢語燈錄十卷、同拾遺錄一卷、（文永十一年十二月八日了慧輯）、和語燈錄五卷、同拾遺錄二卷、（文永十二年正月廿五日了慧輯）等あり、（勅修圓光大師御傳記、十六門記、拾遺古德傳、正源明義鈔、黑谷上人傳、圓光大師行狀翼贊、鎮流祖傳、淨土傳燈錄、元亨釋書、東國高僧傳、本朝高僧傳、淨土宗三祖言行錄、吉水實錄、淨土總系譜、勅謚號集、）

ゲンクー　源空　ケンジヨ兼助を見よ、

ゲンコー　源光（一八〇〇）〔天台宗〕比叡山の學僧なり、源光字は持法（一に持賓）と云ふ、比叡山西塔の北谷に住し學解を以て聞へたるが、弟子源空淨土教を唱導し、一世の明師となり、源光の盛譽益揚れり、示寂の年月日欽く、（淨土傳灯錄）

ゲンゴー　源豪　二〇五八……〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、源豪始め名は行豪といひ、承基、觀昭、定顯、良曉、能有、尚範、泉惠の諸師に就きて顯密を究め、應永五年正月廿九日寂す、壽欽く（三井續灯記）

ゲンサン　源算　一六四三 一七五九（……）山城三鈷寺開山なり、源算は因幡の人なり、年十五に及び比叡山に上りて染衣受戒し、二十に及び故あり還俗す、母の喪に逢ひ後比叡山に上りて登壇受戒し、長久三年秋西山に入り、精修自適す、山中に三鈷寺を建て、毎年九月前法華八講會を修す、師良峰に居りてより紅塵を踏まさること七十餘年京畿の士庶化を慕ひて、雲集し大道場となる、後別に草廬を構へ阿彌陀像を安して往生院と號す、康和元年三月寂す壽白十七、全身を山中に葬むる、一説に嘉承二年三月二十九日壽百八にして寂すといふ、（本朝高僧傳）

ゲンサン　源讃　一九八三 二〇〇六〔眞宗〕山城佛光寺第十代なり、源讃一名は唯了といひ、佛光寺に住す、應永七年六月廿三日

寂す、壽七十八（一說七十九）（本願寺通紀）

ゲンシン　源心　一六三一―一七一三　〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、源心は奧州の人、俗姓は平氏なり、少にして比叡山に登り、西方院院源に隨つて剃髮し、寶幢院覺慶に就て顯密の法を承く、永正二年延曆寺の座主に補し、五年冬大僧都に任ず、天喜元年十月十一日寂す、壽八十三、（本朝高僧傳）

ゲンシン　源信　一六〇二―一六七七　〔天台宗〕近江比叡山慧心院の學僧なり、源信は大和葛木郡の人、俗姓は卜氏、父の名は正親、母は淸原氏なり、天慶五年に生る、幼にして父を喪ひ母に敎養せらる、後奇夢に感し比叡山に登り、慈慧僧正に師事して大小兩乘を究め、境觀に通達し、四種法門五種三昧習練せさることなし、慧心院に居りて一家の義學を弘め、僧都に補せらる天祿中橫川楞嚴院に屛居し、著作に從事す、長保五年天台宗の敎義二十七條を擧け、宋國南湖の智禮法師に寄問し、答釋を贈らる、これより數々宋に音信をなし、後宋より師の述作疏鈔幷に肖像を請ひ來る、宋の高僧遙に其盛德を景慕し、日本源信如來と云ふに至る、師淨土敎に意を傾け往生要集を撰す寬仁元年六月十日寂す、壽七十六、著作法華科文、法華略觀、六即義私記、三身義私記、四敎五時略頌、俱舍科文、俱舍求知鈔、義斷纂要註釋、阿彌陀經略記、觀心往生論、發起宿善鈔、決定往生緣記、勸心略要集、菩提要集、自行畧記、白毫觀、空觀、本覺讃註釋、夢想鈔、懈怠行記、正修觀記、臨終觀行記、菩提心義要文、速證菩提集、隨意行願、實相眞如觀、白骨觀、註本覺讃、一心三諦批、結緣集、悟法鈔、坐禪記、枕艸子、各一卷、大乘對俱舍鈔十四卷、因明四相違疏註釋、往生要集、一乘要決、各三卷、唐決、要法文、各二卷、被接私記、三觀義私記、各別義通私記、十如是義私記、十二因緣私記、二諦義私記、三周義私記、囑累義私記、五味義私記、師身成佛義私記、宗用集傳受口決、却義鈔、十念緣起、讀經用心、十善鈔、八塔讃六時讃等傳業、各若干卷あり（元亨釋書、本朝高僧傳、天台霞標、諸宗章疏錄）

源信僧都

ゲンシユー　源秀　（一九二二）　〔戒律宗〕河內泉福寺の開山なり、源秀字は戒印、夙に興正菩薩に師事し、剃染受業し稟の具の後泉福寺を河內に開き第一代となる、弘長二年菩薩東行する時師西大寺を監す、寂年、及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

ゲンジユー　源重　（三〇二〇）　〔天台宗〕近江百濟寺の僧なり、源重は近江の人、幼にして比叡山に登り、五時八敎を討習し、學行已に熟して僧都に任し、百濟寺に皈りて金蓮院

に住す、延文の末年寂す、壽缺く。（本朝高僧傳）

ゲンシユン　源俊（一八九七）〔戒律宗〕常陸東榮寺の律僧なり、源俊字は顯律、剃染以後奈良に遊び、嘉禎の末定舜律師海龍王寺に開講する時、師卷を持して聽講す、尋いで京都に入り、月翁鏡に從ひて律典を學ふ、不空院の圓晴律師に謁して資道相合ふ、遂に關東に遊び、常陸の東榮寺を開きて第一代はなる、某年寂す、（本朝高僧傳）

ゲンシヨー　源照（一九八三）〔曹洞宗〕越中信光寺二代なり、源照字は珍山、加賀の人、淨住寺の可鐵鏡西に投して出家し、可鐵の寂後遺命を受けて瑩山紹瑾の弟子となる、元亨三年八月二十七日入室して盂衣を傳承し、越中に到り信光寺を創し、瑩山を開山とし、自ら二代に居る、寂年、及び壽缺く、（日本洞上聯灯錄）

ゲンシヨー　源照　ゲンショー源性を見よ、

ゲンシヨー　源性（一九八七／二〇一三）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、源性一に源照に作る俗諱は業永、花園院の第三子、嘉曆二年に生る、建武四年親王宣下あり、康永二年三月十八日出家して仁和寺に居り、法守法師に從ふ文和二年正月廿九日寂す、壽二十七、著作無題詩集三卷あり、（仁和寺御傳、傳燈廣錄）

ゲンセー　源盛（一九九六）〔天台宗〕伯耆大山寺の僧なり、源盛字は信濃坊と云ふ俗姓名和氏、長年の弟なり、少にして大山寺に登り、出家修行す、後醍醐天皇窮に隱岐を出てたまふにあたり、師同宿十餘人を率ゐて兄長年等と共に船上山に奉し、爾來一山の大衆を率ゐて王事に盡す、後軍功を以て法眼に叙せられ、中將源忠顯に從ひ六波羅を攻め、延元の亂に一族顯長と共に懷良親王に從ひて鎭西に赴き、肥後八代に寂す、明治二十二年勅あり祭資料壹百圓を賜はり、天台宗座主より大僧正法印大和尙位を贈らる、（信濃房碑銘）

ゲンセー　源逝（……）〔淨土宗〕尾張正行寺の開山なり、源逝は愚蓮社禿譽と號す、俗姓は鈴木氏、尾張愛知郡の人あり、廓呑に師事して宗乘を究め、後東漸寺順長の法を嗣ぎ、鄉里南野村に正行寺を開く、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンセー　源誓　カクシン覺信を見よ、

ゲンセン　源泉（一六三七／一七一五）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、源泉は播磨の人、其姓を詳かにせず、久しく餘慶に隨ひ、後三井の法輪院に住し、顯密の敎を布く、長久四年淸凉殿の最勝會に際し、詔により講師となり、法眼に叙す、天喜元年三月藤原賴通宇治の平等院に阿彌陀堂を建て落慶の日に方り、大供養を營み、師其の導師となる、秋七月平等院の阿闍梨となり、尋で寺務を領す、此歲十月廿六日敕を奉じて延曆寺の座主となり、三日にして退還し、三年三月某日寂す、壽七十九（本朝高僧傳）

ゲンチ　源智（一八四三／一八九八）〔淨土宗〕山城知恩寺の開山なり、源智字は勢觀、俗姓は平氏、備中守師盛の子なり、内大臣重盛の孫なり、平家沒落の後、母に携へられて潜匿し、建久六年十三歲にして源空上人の室に入りて得度せんことを請ふ、上人これを慈圓僧正の下に送りたれば、師はその下に顯密の敎義を究め、後上人に依り親しく淨土の敎義を受け、爾後十八年の間上人に勤事し、宗戒を傳承す、建曆二年正月二十三

日上人一宗の肝要を手書して師に付せらる、即ち一枚起請文と云ふ、且つ佛像、經卷、房舍、資具等盡く師に付せられたり、上人示寂の後其後を繼紹し、曆仁元年十二月十二日念佛百餘聲して加茂神宮寺の功德院（後に知恩寺と改む）に寂す、世壽五十六著作選擇要決一卷、廣義隨決集等あり、（鎭流祖傳、淨土總系譜、淨土傳燈錄、）

ゲンチヨー　源朝　二二三六 二二九三　〔眞言宗〕山城醍醐山寶幢院の法印なり、源朝は雅嚴僧正に依りて柳本法眼榮精に師事す、雅嚴の正嫡を受け、寬永十年七月四日寂す、壽五十八、付法一人寬濟といふ、（續傳燈廣錄）

ゲンチヨー　源長　……二二八三　〔淨土宗〕上總正源寺の中興なり、源長は滿蓮社圓譽と號す、總州行德の人、俗姓は高橋氏なり、法を感譽に嗣ぎ、行德原町なる正源寺に住して中興の主となる、元和九年二月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンテー　源貞　……二三二二　〔淨土宗〕江戶大養寺第三代なり、源貞は靜蓮社寂譽と號す、三河奧平の人、其俗姓詳かならず、廓源の室に入りて剃髮受業し、江戶西久保大養寺に主となる後關に養國寺、麻布宗巖寺等を創して開山となり、明曆三年正月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンテー　源底　……二三二一　〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、源底は玉蓮社日譽直至と號す、俗姓は伊奈氏、武藏の人なり、不殘に師事して剃髮受業し、宗乘の奧義を究めて後、鴻巢勝願寺第十一代となり、秩父大宮聰圓寺を開く、後鎌倉光明寺に住し、承應元年七月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンテキ　源的　……二二九八　〔淨土宗〕京都知恩院第三十五代なり、源的は敬蓮社尊譽と號す、武藏河越の人、其俗姓詳かならず蓮馨寺に投じて習學し、法を感譽に嗣ぐ、江戶駒込蓮光寺の開山となり、次に蓮馨寺第四代となる、後京都知恩寺に移り、晚年上京長敎寺伊勢隱國淸雲院を剏めて開山となり、寬永十五年七月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンテツ　源哲　……二二七四　〔淨土宗〕武藏眞福寺開山なり、源哲は一蓮社宗譽と號す、感譽に師事して法を嗣ぎ、武藏埼玉郡江備村に眞福寺を開く、慶長十九年十一月三日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンテツ　源哲　……二三二六　〔淨土宗〕肥前正定寺の開山なり、源哲は現蓮社當譽直阿と號す、下總結城の人、業譽上人に就て剃髮受業し、法を嗣きて後、肥前唐津の正法寺を開く、寬文六年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゲンドー　源導　（……）　〔眞言宗〕山城小野大乘院の開山なり、源導は曾て大乘院を創めて開山となる、成尊を禮して傳法灌頂を受け、心印を傳ふ、（續傳燈廣錄）

ゲンニン　源仁　一四七八 一五四七　〔眞言宗〕京都東寺の學僧なり、源仁は初め奈良護命僧正に師事して相宗を學び、後東寺の長者實慧により密敎を傳へ、眞雅宗叡二師に從ひて益々其奧蘊を究む元慶二年內供奉となり仁和元年少僧都に任じ此歲東寺二の長者に加はる常に南池に居りて學侶のために宗義を開く仁和三年十一月廿三日寂す壽七十（密宗血脉鈔、本朝高僧傳）

ゲンポ　源甫　（……）　〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、源甫は圓蓮社岳譽と號す、觀譽上人に師事して淨土敎を學び、遂に其法を嗣ぐ、光明寺に住し、駿河寶臺院を主とり、第二

代となる、寂年、壽欠く、(淨土總系譜)

ゲンヨ　源譽　キヨーガン慶岩を見よ、

ゲンヨ　源譽　ジショー慈昌を見よ、

ゲンヨ　源譽　ショークー正空を見よ、

ゲンヨ　源譽　ズイリユー隨流を見よ、

ゲンラン　源鸞　一九二九／二〇〇七　〔眞宗〕山城佛光寺の第九代なり、源鸞一名は道儀といひ、佛光寺に住す、貞和三年八月廿三日(或はいふ廿八日)に寂す、壽七十九(一説廿九)(本願寺通紀)

〔考〕案するに源鸞の母了明の寂年却て源鸞の寂年に後る年代の錯誤ならん、

ゲンリユー　源立　……二二五三　〔淨土宗〕山城淨華院三十二代なり、源立字は道殘、然蓮社良智と稱す、武藏の人なり、十五歳にして大澤圓通寺に入る、詞辨最も巧敏なり、天資頭陀を善くす、壯年の頃五畿七道に遍游して越前敦賀に至る、高叡上人に請せられて大原山西福寺に住す、後黑谷に住す、文祿二年九月二十三日寂す、春秋詳ならず、著作和風安心書念佛安心大要鈔各二卷あり(鎭流祖傳、淨土惣系譜)

ゲンリユー　源立　リヨーチ良智を見よ、

ゲンレキ　源歷　二二四六／二三一四　〔淨土宗〕豐後回向院の開山なり、源歷は信蓮社深譽と號し、武藏の人、普光觀智國師に隨待して其法を嗣ぎ、豐後海部佐賀關に回向院を創して開山となり、承應三年寂す、壽六十九、(淨土總系譜)

ゲンサ　原佐　(……)　〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、原佐字は桂堂、在仲宗宥に法を嗣ぎ、下總總寧寺に住す寂年及壽欠く、法嗣天叟宗訓あり(日本洞上聯灯錄)

ゲンシ　原資　……二三九九　〔臨濟宗〕江戸東禪寺の禪僧なり、原資字は萬菴、號は芙蓉軒と云ふ、江戸の人なり、幼より學を嗜み殊に詩才あり時人稱して小文殊と云ふ、出家して南英祖梅禪師に師事し、其法を嗣く、內外の學に兼通し、荻生徂徠門下の諸子に交はり、詩名一時に高し、荻生徂徠、服部南郭、中井竹山等口を極めて推奬す、晩年芙蓉軒を營み、逸居するに至りて、興到れは口占し、日ならずして裒然卷をなす、然るに一朝翻然として取りて火中に投し、其技を忘れたるか如し、元文四年正月終期將に至らんとし、自ら書して源烏石に贈る詩に曰ふ、「屬君千古意、今日絕絃詩、天地蒼茫裡、江陵一部詩」と、同月七日寂す、壽詳ならす著作江陵集四卷、省行餘課一卷あり、江陵集は寬保元年に源烏石等其殘稿を編輯したるものにして收むる所、古躰近躰五百三十四首なり、南郭序して曰ふ、「當今右文海內嚮ㇾ風、乃釋門有ㇾ若ニ萬菴禪師ニ云、唯其玉石倶灰、其餘亡ㇾ幾惜也、其旨終不ㇾ可ㇾ知、己猶幸存ニ十一於千百ニ、豈不ニ家誦戶詠而珍ㇾ焉乎、」と、荻生徂徠序して曰ふ、「初覩ニ尊者詩ニ在ニ我東方ニ、古今無ㇾ齊、不ㇾ佞爲ㇾ之吐ㇾ舌矣、及ㇾ讀ニ此冊ニ則不ㇾ覺起座向ㇾ嚮再拜、廼中華緇流所ㇾ無、假使全面老子從事風雅則不ㇾ知其如何耳、其他支公休上人以下悉瞠ニ于後ニ、修多羅所ㇾ謂淵才雅思、文中王要當ㇾ屬ニ諸尊者ニ也、茂卿書と、今集中の一首を錄せん、將ㇾ雪有ㇾ懷、薄暮川巖肅、微風不ㇾ撓ㇾ林、海雲懷ニ雨雪ニ、月缺夜偏陰、茵席覺ニ淒緊ニ、濱若ㇾ佩ニ寒金ニ、遙思飛渺渺、積念轉沈沈、懷ニ吾疇昔契ニ、常同繕性襟ニ、春游蔭ニ芳樹ニ、夕訊度涵岑ニ、淫霖貫ニ秋節ニ、褰ㇾ飯偕ニ謠吟ニ、倏忽接遲阻、癥

憂歲月深、千里砦山曲、何繇繼ニ搖音一、玄英鷲ニ谿窒一、緬想絕ニ攜尋一、(近世叢語、諸家人物志、鑒定便覽、江陵集、近世高僧年表、)

ゲンシユー　原周(……)〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、原周字は學仲、越翁周超に師事して其法を享け、席を嗣きて下總總寧寺に主となる、寂年及ひ壽缺く、法嗣洞翁壽欣あり(日本上洞聯灯錄)

ゲンチユー　原冲　二〇八一……〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、原冲字は謙巖、出家して日用涉に師事して法を嗣き、東福寺に主となる、後、天龍寺に還り、應永二十八年九月二十一日寂す、壽缺く、師生平詩偈を以て夙に知らるといふ、(本朝高僧傳)

ゲング　還愚　(二二七七)〔淨土宗〕下總清光寺の僧なり、還愚は鑑蓮社森譽と號す、清譽上人に師事して元和三年十一月十日三日璽書を授けらる、佐倉清光寺に住し、又舘林善導寺に住し第四代となる、寂年、及壽缺く、(淨土總系譜)

ゲング　還愚　キヨーカン慶閑を見よ、

ゲング　還愚　リンザン林殘を見よ、

ゲンゲン　還源　ホーシユー法洲を見よ、

ゲンコ　還故　二二九九……〔淨土宗〕武藏喜德寺の僧なり、還故字は覺悶、光蓮社圓譽と稱す、房州の人なり、十五歲にして增上寺に修學す、普光國師に師事し、群書に通達す、殊に禪宗の妙旨に通す、城中の問答會に擢られ義辨の名あり、武藏國善德寺に住す、寬永十六年十月四日寂す、壽は缺く、(鎭流祖傳)

ゲンム　還無　二二三七 二三〇八〔淨土宗〕增上寺第二十一代なり、還無は辨蓮社業譽と號し、空脫と稱す、江戶の人なり、初め出家して禪宗に皈し、後淨土宗に皈し、幡隨上人に師事す、結城の弘經寺、鎌倉の光明寺を歷へて寬永十七年十二月增上寺に上り、幕府の皈依深し、慶安元年六月廿日寂す、壽七十二、(三緣山志、緇白往生傳)

ゲンヨ　還譽　ソンリユー存龍を見よ、

ゲンヨ　還譽　ホンカク本覺を見よ、

ゲンロ　還魯　(……)〔淨土宗〕下野弘經寺第六代なり、還魯は一蓮社堯譽と號す、祖洞に師事して淨土敎を學び、法を嗣きて相模小田原大蓮寺に住し、後飯沼弘經寺に遷り、第六代の主となる、寂年及び壽詳かならず、法嗣貞安一人なり、(淨土總系譜)

ゲンウン　幻雲　ジユケー壽桂を見よ、

ゲンエン　幻園　ダイジヨー大乘を見よ、

ゲンオン　幻飯　ジユンコ純固を見よ、

ゲンガン　幻弇　シユーヨー宗曄を見よ、

ゲンクー　幻空　ユーバイ友梅を見よ、

ゲンケ　幻華　シヨージユー照什を見よ、

ゲンケ　幻華　ウンドー雲幢を見よ、

ゲンシ　幻子　ニチセイ日政を見よ、

ゲンジヨー　幻成　二五二二……〔眞宗〕豐前宇佐郡四日市町福圓寺の住持なり、幻成は過查菴と號す、寮司となりて嘉永五年より高倉學寮にて三聖圓融觀門、華嚴五敎章、華嚴孔目章を講し、安政三年正月十四日(一に二月四日或は又三月十

二日と云ふ）擬講となり、安政四年より尊號銘文、圓覺經略疏を講し、文久二年八月寂す、（眞宗史料）

ゲンシヨー　幻生　ニチセイ日政を見よ、

ゲンチユー　幻仲　ズイシユー瑞宗を見よ、

ゲンシヨー　彦證　シヨーサン清算を見よ、

ゲンドー　彦洞（二〇九二）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、　彦洞字は明叟、其俗姓生國詳ならす、出家して蘭洲芳禪師の法を嗣ぎ、應永廿五年、伊勢神應寺に出世し、卅一年播磨法雲寺に移つる、永享四年建仁寺に主となり、晩年退居して其終る處を知らず、（本朝高僧傳、明叟和尚語錄）

ゲンカク　現覺　ギハン義範を見よ、

ゲンヨ　現譽　マンクー滿空を見よ、

ゲヨー　眼譽　イチドー一道を見よ、

ゲヨー　眼譽　ダンオク呑屋を見よ、

ゲンリヨー　絃良　二三九五……〔淨土宗〕三河大樹寺の僧なり、總良は松蓮社勁譽忠阿と號す、感隨の室に入り剃髮受業し、結城弘經寺に住し、後三河大樹寺に遷る、元祿八年二月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

コの部

コウン　孤雲　二二七六／二三五一〔淨土宗〕山城知恩院の第四十代なり、　孤雲は稱蓮社專譽と號す、別に名阿と稱す、道行高く、時の學者推して孤雲古岩兩虎と稱す、元祿元年二月十三日幕府の命に依て本山に住す、二年春龍松院公慶南都の大佛殿を營築す、時に師を請て念佛を傳ふ、四年（一説六年）十一月六日寂す、壽七十六歲、華頂山に葬る、（鎭流祖傳）

コウン　孤雲　エシヨー懷苹を見よ、

コサン　孤山　シオン至遠を見よ、

コシユー　孤舟　二二八〇……〔淨土宗〕和泉西福寺の中興なり、孤舟は稱蓮社專譽と稱し、俗姓は本原氏和泉の人なり、虎角に就いて淨土敎を學び、遂に其法を嗣ぐ、州の堺西福寺に住し、其廢頽を興す、元和六年二月二十九日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

コシユー　孤岫　シユーシユン宗峻を見よ、

コチク　孤竹　ギテン義天を見よ、

コトー　孤燈　二四四二／二四八七〔淨土宗〕八丈島多娛山の僧なり、孤燈號は轉譽といひ、京都の人なり、夙に西光寺慈雲の下に得度し、尋て皆川淇園に就きて經史詩文を修む、二十歲にして東遊し、深川道本山に投し、智燈和尚に就きて宗義を研究す、三緣山瑞華院に住し、自ら才藝を誇り亂行あり、文化十三年官譴を蒙むり、八丈島に配流せらる、是より先安房の僧篤富といふもの此に配流せらる、相共に交る、師大賀鄕金戸村に住し、奚婢を妻とし、二女子を生む、文政五年春茅舍火災にかゝり、師滿身惡瘡を發し、兩眼疼痛す、乃ち自ら業感なるを知る、時に三河信光明寺辨信、江戸無量院定龍、舊交を忘れす遂に書信を通し、警策懇到なり、師一見して落涙改悔す、又京都より阿孃の書來る、畧に曰く、妾今年六十八、餘年旦夕にあり、汝唯從前の惡知見を捨てゝ、出家の本志を全くすへし、若し然らすは母子何ぞ淨土の再會を得ん、と、慚愧

心肝に銘し、詩を作る、曰く、十歳飯無術、一身恨有餘、看悲倚門思、泣誦斷機書、兄亡兒孫幼、弟存孝養疎、唯須弱淨業、孤獨亦何儲、又一に曰く、破戒何唯誤此身、無由萬劫免沈倫、永兼妻子恩情斷、昨日畜生今日人、と、大に前非を悔い、善心憤發し、肉食妻帶を改めて持戒念佛す、文政六年八月瀧尾山の巖窟に幽棲し端坐經行す、かくて病患自ら平治す、山居偈に曰く、百般妄情生有身、不交餘念自無塵、稱名元是王三昧、日作華嚴踊躍人」願王報國不歸心、阿鼻獄中奈永沈、愧我罪根過五逆、一聲稱念涙沾襟、」同七年二月多娛山石室に移り、常坐不臥念佛三昧に入れり、詩あり、曰く風自清涼心上來、門前猛火化爲臺、行程十萬唯彈指、到日無生亦樂哉、と文政十年三月微恙に罹り、四月十一日靈異を感し、十二日合掌亂れずして寂す、壽四十六、著作東溟餘稿、山居草(共に詩偈集)各一卷あり、(續日本高僧傳)

コホー　孤峯　二二…四　〔淨土宗〕常陸專稱寺の開山なり、孤峯は心蓮社深譽と號し、其師貫詳かならず、觀智國師に師事して宗乘を究め、常陸眞壁郡下館專稱寺を開く、正保元年九月十三日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

コホー　孤峯　カクミヨー覺明を見よ、

コリユー　孤立　タイガ大我を見よ、

コシ　孤子　シユーイ宗淵を見よ、

コガク　古嶽　シユーコー宗亘を見よ、

コカン　古澗　ニンセン仁泉を見よ、

コカン　古磵　ミヨーヨ明譽を見よ、

コガン　古巖　二二八一／二三五二　〔淨土宗〕江戸增上寺第三十一代なり、古巖は入蓮社流譽願故と號す、其鄕貫詳かならず、幼にして父戰死し、母に隨つて流浪す、稍長して伊勢正受寺卓辨に師事し、剃髮學戒す、後江戸に下り、講學を事とし、諸國の靈場を巡拜して、紀行一卷あり、東漸寺弘經寺を經て貞享三年二月二十四日三縁山主に進み、三月十六日入院、元祿四年二月八日疾を以て退隱を請ひ、八月二十九日臨時會あり、幕府に出て塲中に法門を論議す、五年二月二十一日退隱の許を受け、一本松の隱室に移り、九月二十六日寂す、壽七十二、(三縁山志)

コキヨー　古鏡　二四四九／二五一五　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、古鏡字は月珊、俗姓村松氏、讃岐丸龜の人、幼にして出家し、備前宗藏寺松嶺の弟子となり、稍長して出遊し、相模了義寺關道を訪ひて教を稟け、關道寂後尾張總見寺卓洲を問ひて其法を嗣き、國淸寺に住し、後妙心寺に上る、安政二年四月九日寂す、壽六十七、

コキヨー　古鏡　ミヨーセン明千を見よ、

コクワン　古貫　(二四二六)　〔眞宗〕安藝某寺の僧なり、古貫は淡谷と號す、博學にして明和三年安居代講の命を奉して往生論註を講す、著作輔編一卷あり、(淸流紀談、本願寺派學事史)

コケー　古溪　シユーチン宗陳を見よ、

コゲツ　古月　ゼンザイ禪材を見よ、

コケン　古劍　ミヨークワイ妙快を見よ、

コケン　古劍　ミヨータク妙澤を見よ、

コゲン　古源　シヨーゲン邵元を見よ、

ココー 古香　キヨージユン敎遵を見よ、
コサン 古山　スーエー祟永を見よ、
コサン 古山　リヨークー亘空を見よ、
コシン 古心　ユーキヨー融鏡を見よ、
コセン 古先　インゲン印元を見よ、
コセン 古泉／　リモー利蒙を見よ、
コセンシ 古川子　ニチシユー日收を見よ、
コチク 古竹　モンエ聞惠を見よ、
コデン 古田　ケーガク啓學を見よ、
コドー 古堂　シユーシヨー周勝を見よ、
コハン 古範　二九…三…　〔臨濟宗〕江戸東輝庵の禪僧なり、古範字は願鏡、美濃厚見郡の人、俗姓尾關氏、七歳にして出家の志あり、父母之を許し、同郡名禮村中村院自宜首座に附す、尋て東嶺慈禪師に師事し、十六歳出遊し、諸方の講席に列す、二十歳伊豆龍澤寺に至り、三光和尚に謁し、其指示により江戸に入り、麟祥院義山蘂偉禪師に參す、隻手の公案を得て、鍊修頗精彩を着く、幾くもなく義山永田寶林寺に遷る、古範亦隨ふ、義山の滅後其遺言により且つ隱山琰等の勸により、輝東菴に住し東嶺圓慈の法嗣闇道靈樞の法嗣となる四十九歳大に法席を張り、宗門無盡燈論を提唱す、五十歳僧堂を興し、扁して新定機と云ふ、五十一歳隱山琰禪師の七周忌を修し、尋て甲斐寶林寺の請に應じ、歸途信濃飯山を過て正受老人塔を禮して供養料を寄附す、木曾開介山村某の請により、十日餘同地長福寺に滯留す、六十三歳妙心寺に推さるゝも固辭して出でず、六十七歳の冬尾張侯特に褒賞並に白金三錠を賜ふ、禪師偈を作り謝す、身貧久住此閑房、宛似ニ長庚殊月光一、如法修行元我分、老來何計賜ニ褒章一、六十八歳大に粥を煑て乞者に施す、こは東海道諸國五穀登らず、人民饑餓に苦しめばなり、尋て尾張侯の聘により妙興寺に住す、六十九歳東輝菴の堂宇を改築し、七十三歳遠江大通寺の請に應ず、七十四歳尾張侯の聘により泰雲寺に碧巖錄を講ず、伊豆龍澤寺に遷りて三光和尚五十年忌を修し、臨濟錄を提唱す、已にして痾を患ふ、弟子通應に後事を屬し、泊然として寂す、實に天保十四年八月二日なり、法嗣豐州全康、榮總了椿あり嘉永年中勅諡靈眼弘明禪師を賜ふ、（近世禪林僧寶傳、正法山宗派圖）
コリヨー 古梁　シヨーミン昭岷を見よ、
コオー 虛應　エンニ圓耳を見よ、
コクー 虛空　シヨーチユー性宙を見よ、
コクワク 虛廓　チヨーシヨー長淸を見よ、
コシユー 虛舟　シユオン宗溫を見よ、
コシユー 虛舟　ミヨーヨ明譽を見よ、
コシユーサイ 虛舟齋　ニチゴン日言を見よ、
コジユン 虛㝫　……一……　〔曹洞宗〕圓興寺の禪僧なり、虛㝫字は日鑑、洞谷寺瑩山に參し、藏鑰となる、後瑩山師に命して明峯素哲の法を嗣がしむ後總持寺に出世し終に圓興寺に退居して隱る寂年欠く（日本洞上聯灯錄）
コミヨー 虛明　二三六九—二四四八　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十代なり、虛明字は白心、武藏入間郡勝樂寺村の人、父は荒田氏、母は石川氏の出なり、十一歲にして州の小ヶ谷戶村圓乘寺智傳の室に投じて剃髮受戒し、未だ壯ならずして山口領町

海藏寺に住し、辭して豐山に登り、後、武藏中島金剛院に主となる安永二年二月彌勒寺に出で、天明元年八月八日能化職に進み、在職九年、天明五年三月十八日職を辭して黒崎與善寺に退き、同八年正月二十一日寂す、壽八十、（新義眞言宗史料）

コガク 故岳（……）〔淨土宗〕武藏源法寺第一代なり、故岳は信蓮社覺譽と號し、其師貫詳かならず、觀智國師に師事して宗乘を究め、武藏小松川源法寺に住し、第一代となる、後江戸芝の西應寺に遷りて寂す。其年時並に壽缺く、（淨土總系譜）

コゴク 故極（二三二〇……）〔淨土宗〕駿河大運寺の開山なり、故極字は心蓮社安譽と號す、相模瀨戸嶋の人、幡隨に師事して法を嗣ぎ、駿河に到りて吉原に大運寺を開く、萬治三年九月十七日寂す、壽缺く（淨土總系譜）

コシン 故信（……）〔淨土宗〕歸命院の僧なり、故信號は泰譽、甲斐の人、歸命院の第二代即ち開祖の嫡なり、示寂の年月日かく、（鎭流祖傳）

コシン 故信　ドンリユー呑龍を見よ、

コシヨー 故照　リヨーサン了山を見よ、

コドー 故道　ソンエー存榮を見よ、

コカク 虎角　ウンチヨー雲潮を見よ、

コクワン 虎關　シレン師錬を見よ、

コケー 虎溪　エーギ永義を見よ、

コケー 虎溪　ゲンギ元義を見よ、

コケー 虎溪　シヨージユン正淳を見よ、

コケー 虎溪　シヨーリユー昌隆を見よ、

コケー 虎溪　ドウニン道壬を見よ、

コケー 虎溪　リヨーニユー良乳を見よ、

コケー 虎溪　リヨーモン靈文を見よ、

コサイ 虎哉　シエーオツ宗乙を見よ、

コドー 虎童　チヨーシン潮心を見よ、

コハク 虎白（二三五九……）〔曹洞宗〕加賀寶圓寺の僧なり、虎白字は月嘯、加賀の人、其俗姓詳ならず、傑外雲英に師事して法を繼ぎ、總持寺に出世し、大巖寺に遷る、萬治三年加越能三州の大守菅原綱紀請して寶圓寺に進ましむ、天和元年丹嶺に席を讓り、元祿十二年八月二十日寂す、壽缺く、遺偈に曰く、生來鏡裡像、死也水中月、更要ᆞ問ᆢ端的ᆞ金剛嚼ᆢ生鐵ᆞと、法嗣丹嶺祖衷一人あり、（日本洞上聯灯錄）

コカイ 巨海　ソコー祖綱を見よ、

コカイ 巨海　トウリユー東流を見よ、

コカイ 巨海　リヨータツ良達を見よ、

コサイ 巨濟　ゲンサ元佐を見よ、

コサン 巨山　センテキ泉滴を見よ、

コセン 巨泉　リヨーチン良珍を見よ、

コカイ 湖海　ニヨサン如珊を見よ、

コゲツ 湖月　シンキヨー信鏡を年よ、

コドン 湖呑（二二九一）〔淨土宗〕山城光明寺の僧なり、湖呑は源蓮社往譽と稱す、姓は熊野氏、常に觀智國師に師事すること三十餘年、才名世に顯る、將軍秀忠の命により紫雲山光明寺を管し盛に法道を興し、伽藍を搆復し、中興の祖と

なる、寛永八年晩冬の末密旨を書して元祖の前に精祈して保證を請ふ、嘗て大塔を紫雲山に築き、妙德大士を安ず、後山中に一字を創し淸心院を名け、退隱の地をなす、示寂の年月日詳ならす(鎭流祖傳)

コチユー　居中　一九三八 二〇〇六　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、居中號は嵩山、俗姓源氏、遠江吉最縣の人なり、十九歲京師に上り、興聖寺敬翁欽を禮し得度す、無爲元、桂堂林の二禪師に歷事し、心地、白雲、南浦、高峰、鏡堂、無象の諸老宿の下に遊ぶ、一山西礀、建長、圓覺の二寺に法席を張る、鏡堂偈を作りて賀す、北條貞時諸山の僧に命じて和作せしむるにあたり居中亦與る礀殊に中の偈を賞し衆角多しと雖一麟足れりと云ひたりとぞ、延慶二年の春元に渡り天童山日東巖に謁す、東皈の後龜谷龍山に留り、一山禪師の下に依る、文保二年再び元に渡り、古林茂、雲外岫、曇芳忠、虛谷陵、定山一、靈石芝、獨孤明、東嶼海、元叟端、竺元道、中峰本の諸禪師に歷謁し、元亨三年(元の至治三年)の秋東歸し、京師の西禪寺に住す、瓣香して西礀禪師の法を嗣ぐ、三年にして愛宕山に退休し、後丹後の天橋立に一寺を開く、元德の初勅召あるも固辭して出てず、正慶元年再び勅召あり南禪寺に住す、同二年秋宮中に禪要を說き、寵光尤も渥し、幾もなく播磨に下り、集雲峰に卜居す、然るに戰亂あり劫賊疆を侵す、愴惶丹州に逃る、將軍足利尊氏の懇請により、出でゝ建仁寺に住す、尊氏及び足利直義、屢就きて禪要を問ふ、一住五年にして寺中の廣燈菴に退休す、勅あり大本禪師の號を賜ふも固辭して受けす、康永元年東下圓覺寺に住し、尋きて建長寺に住す、晩年に寺中瑞雲菴を構へて退休す、貞和元年二月六日偈を書し寂す、壽六十九、臘五十一、語錄外集あり、少林一曲といふ、遺偈に曰ふ生死涅槃、春行冬令、將錯就錯仲和提景、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

コホー　居方　シサイ子濟を見よ、

コカイ　瑚海　チユーサン仲珊を見よ、

コガク　箇學　コーシン光眞を見よ、

コカン　顧鑑　コハン古苑を見よ、

コサン　固山　イチキヨー一鞏を見よ、

コセン　胡僊　二四二〇 二四九三　〔臨濟宗〕京都妙心寺の僧なり、胡僊字は卓洲、尾張海西津島の人、鈴木氏なり、夙に出家の志あり、五十歲父に從ひて總見寺祥鳳禪師に謁して下髮納付し、禪師幷に法叔良哉の敎を受く、十九歲出遊し、美濃谷口汾陽寺に掛搭し、快嵓禪師に事ふ、尋て高野山に登り、京師に入り、等持院靈源禪師に謁し、再び尾張名古屋に歸り、同地の白林寺月鑑禪師より峩山禪師の高風を聞きて出發東行し、路駿河を經、菩提樹院に大會あり、因て遂翁禪師に謁し、遂に箱根を踰え、武藏永田寶林寺に投じ、峩山に謁し、趙州無字の公案を得て、日夜參究し、寢食を廢すに至る、峩山の下に留り、潛行密修十四年に亘る、寛政八年二月總見寺に住し、法化甚盛なり、國侯幷に太夫人數〻參請す、文化十年三河三玄寺の請により、碧嵓錄を講ず、同年十月勅を拜し妙心寺に出世し紫衣を賜はり、妙心寺境宗大隻の法嗣となる、十二年久々里東禪寺の請により、臨濟錄を提唱す、同年七月國侯書を以て褒賞し、幷に白金三錠を賜ふ、文政三年總見寺僧堂を

改築す。翌年美濃普濟寺の請に應じ、開提記聞を講じ、翌年瑠璃光寺の請に應じ、臨濟錄を提唱す、同年遠江東光寺の請に應じ、虛堂錄を提唱す。爾後美濃眞光寺清泰寺少林寺永保寺、信濃長久寺大雄寺、王川寺駿河蓮光寺、相模了義寺、三河天恩寺廿泉寺等の請に應じ、碧岩錄、臨濟錄、幷に槐安國語等を提唱す、天保二年總見寺開基織田信長二百五十年忌に當り結制開講す、國侯米百石金百兩を寄附す、天保三年四月總見寺內の東林寺に閑棲す、十二月疾あり、同四年八月廿日寂す、壽七十四、法臘六十、法嗣精洲奎明、總見寺を繼ぐ雪洲胡雄遠江貞永寺に住し、蘆應玄都、美濃西明寺に住し、昌山慧讓江戶松源寺に住す、四年十月廿二日勅諡大道圓鑑禪師と賜ふ、（近世禪林僧寶傳、正法山宗派圖）

コモク　枯木　ショーエー紹榮を見よ、

ゴシン　護信（二三七六）〔淨土宗〕下總環菴の僧なり、

護信俗姓は爲田氏、伊勢飯高郡の人なり、八歲父を喪ひて佛門に歸向の意あり、郡の樹敬寺祖山の下に投し、十二歲得度す、後江戶增上寺に寓し、經論を講究し、南山鈔等を見て戒律に志し、大小戒律の鈔疏を見る、斷戒緋章三卷を作り、戒緋の蘊奥を斷す晚年下總葛飾に隱棲し、居所を環菴と曰ふ、某年自ら菩薩一切學處を誓受し誓受一切學處菩薩と號す示寂の年時欲く、享保の頃世にありたれは其後なるは明なり、著書斷戒緋章あり（續日本高僧傳）

ゴシユー　護洲（二二九七―二三五七）〔曹洞宗〕近江深溝菴の僧なり、

護洲は界遠と號し、俗姓は大日向氏、信濃の人なり、十一歲郡の臥雲院に投し得度す、稍長して江戶に入り、天山雪に謁し、尋きて北陸の諸國に遍歷し、山城に入る、伏見にて一禪翁に遇ひて、敎示を受け、丹後の山中に隱れて參究し、頗る省發するところあり、翁に所見を呈す、翁呵す、乃ち去りて和泉に到り、蔭凉軒鐵心禪師に謁し、尋きて山崎の不禪禪師を叩きて參究す、延寶の初め近江の深溝に菴居す、是時善應寺惟慧禪師道聲高し、師謁を通し、一見夙契の如し。曰く、參禪多年未た省力の處あらす、和尙の開示を請ふと、慧曰く、參禪は祕訣なし、生死を脫するを要すと、師曰く、生死如何か透脫せん、慧厲聲して曰く、已に念念生死なりと、師言下に恍然重負を放つか如し、即ち謁あり、曰く、四十餘白、虛度歲華、青天殞地、更不著花、と、去りて深溝村の舊菴に歸り幽棲す、禪餘三千佛名經を書し、每字三拜して專ら精誠を盡す、元祿六年春惟慧禪師を省覲し、十年十一月微恙あり、廿一日寂す、壽六十一臘五十、（續日本高僧傳）

ゴニン　護忍（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、

護忍は椎の房と稱す、京都の人具平親王の子なり、中年にして出家し、仁海僧正に從ひて傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

ゴ子ン　護念　ジオー慈應を見よ、

ゴボーイン　護法院　テツソー哲僧を見よ。

ゴミヨー　護命（一四一〇―一四九四）〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、

護命俗姓は秦氏、美濃各務郡の人、十歲にして同國の金光明寺に入りて業を道興法師に受く、十五歲奈良に遊學し、元興寺の滿耀法師に依りて專精勤策し、同寺の勝虞僧都に從ひて唯識論を學ふ、業成りて僧綱の試業に應し、甲科に及第す、十六歲にして度を賜ひ、十九歲唐の法進僧都に從ひて沙彌戒

を受け、明年納具す、久しく僧都の左右に侍し、律を質し、經を究め、後辭し去りて吉野山に菴居す、延暦十年詔ありて京に入り、山城の山田に茅菴を結ひて居る、同二十四年正月最勝王經を大極殿に講す、講畢るの日、內殿に延きて戒法を受持せしむ、六月大法師位に任し、大同三年山階寺に維摩經を講す、弘仁二年大和の壺坂に止り、六年少僧都に任し、翌年大僧都に轉す、十四年勅命により、研心章を作りて法相宗を推擧す、老年の故を以て僧綱を辭すれとも許されす、依て潜に京を出て、梵釋寺、山田寺に歴遊して白雲に高臥し、餘年を樂しむ、淳和天皇天長の初特に敕して大僧都從者の貲を賜ふ、師天恩優渥に感し、再ひ起ち、同三年詔により藥師經を新藥師寺に轉讀し、翌年僧正に補す、此年三月天皇先帝親筆の金字法華經を横幷し、南北の碩德を集めて晝夜七日法華經を演說せしむるに方り、師亦講師に選まる、承和元年九月十一日元興寺の小塔院に寂す、壽八十五、臘六十二、著作法苑解節記、二十卷樞要解節記十七卷、唯識解節記、法華解節記、各十卷、法苑林章記、法華釋義決、了義燈解節記各三卷、最勝解節記、理門解節記、心經幽贊解節記、因明解節記各六卷、研神章五卷、慈恩傳解節記四卷、法苑記二卷、二十唯識略鈔、理門十四過類記、十輪略疏、唯識疏序釋、華嚴十住義、各一卷(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ゴオー 牛雄 二二八二 〔淨土宗〕近江西運寺の開山なり、牛雄は日擧と號し、其郷貫詳かならず、隨流に師事して法を嗣ぎ、近江蒲生郡に西運寺を剏して開山となる、元和八年五月五日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゴオツ 牛越 リョーユー良光を見よ、

ゴクワク 牛廓 二二九一 〔淨土宗〕京都長德寺の開山なり、牛廓は蓮社稱譽と號し、初めの名は萬悲と云ひしが、後改めて牛廓と呼ぶ、法を宣譽に嗣ぎ、京都今出川の長德寺開山となる、寛永八年十一月十七日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゴシユー 牛秀 二二六五 〔淨土宗〕武藏大善寺の開山なり、牛秀應蓮社贊譽と稱し、助給と號す、甲斐の人なり、(一說武藏の人)幼にして出家して增上寺に登り忍譽感譽に師事し、後に南北の講席に歴學し、諸宗を學修す、常に華嚴、法華、起信、釋論等を精究す、後、武藏瀧山に住し、大に法化を勸む、其寺を大善寺と號す、慶長十年六月十二日寂す、壽詳ならず、瀧山に葬る、著作說法式要十二卷あり、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

ゴソン 牛存 二三〇三 〔淨土宗〕山城光照寺の開山なり、牛存は鎭蓮社晃譽と號し、其郷貫詳かならず、虎角に師事して法を嗣ぎ、伏見光照等の開山となる、寛永二十年八月二十一日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゴタク 牛澤 二三〇一 〔淨土宗〕攝津圓通寺の開山なり、牛澤は燈蓮社傳譽と號し、河內花田の人、宇治平等院玄譽の孫弟にして其師を寂譽と云ふ、虎角上人に法を嗣ぎ、初め堺遍照寺西向寺に住し、後、淨源寺を再興す、攝津生玉の圓通寺を開きてこれに住し、寛永十八年十月十二日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ゴドー 牛道 二三二五 〔曹洞宗〕江戸青松寺第十代なり、

牛道字は心靈和泉郡山の人俗姓市野氏なり、南都の招提寺に依り得度す後伊豆の修禪寺撫外に參し次に一峯に師事すること三年遂に其法を嗣いで永平寺に出世し青龍寺に遷る後撫州萬年山より龍穩寺に徙るに方りて幕府の命により萬年山青松寺の席を嗣ぐ後光明帝の勅召を拜し慶安四年宮中に入り法を說く帝大に悅び僧伽梨幷に勅號陣山吐光禪師と賜ふ既に京師より皈り十洲に席を讓りて退隱し自ら源昌松久の二寺を創む後ち洲の遷化後復た席に據る明曆元年十一月十三日遂に寂す(萬年山志、日本洞上聯灯錄)

ゴラン 午欄 カンシン鑑心を見よ、

ゴア 悟阿 一九四三 〔華嚴宗〕奈良東大寺の學僧なり、悟阿は東大寺知足院に留りて戒律法相を究む、後、源空上人を問うて淨土教を受け、淨土教の章疏を究め、殊に群疑論に精通す、亦本願亦非本願義を立つ、弘安六年十一月十七日寂す、壽缺く、著作群疑論鈔廿五卷、新十因若干卷あり、門下禪心、制心、覺觀、了敏の四人あり、(淨土總系譜)

ゴカイ 悟海 ジユンカク純覺を見よ、

ゴクー 悟空 キヨーデン敬念を見よ、

ゴケー 悟溪 シユートン宗頓を見よ、

ゴコー 悟光 二四六五/二五六二 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第三十七代なり、 悟光字は萬丈と云ひ、俗姓は井上氏なり、後に光(ミツ)氏を稱す、豐前下毛の人なり、文化二年に生る、出家して黃檗宗に皈し、法を嗣ぐ、明治九年二月十四日黃檗山主に上り、一住五年にして退隱し、豐前に皈りて優遊す、明治三十五年六月九日寂す、壽九十七(黃檗山歷代表)

ゴシン 悟心 シンエ信惠を見よ、

ゴシン 悟心 モンミヨー文明を見よ、

ゴシユー 悟宗 ケートン圭頓を見よ、

ゴホー 悟芳 二四五八/二五二九 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第三十四代なり、 悟芳字は瑞雲といふ、肥後國佐賀の人、御廚某の子なり、出家して黃檗宗に皈し、法を嗣ぎ、安政四年正月十五日黃檗山主に上り、其職に在ること十三年なり、明治一年四月十六日寂す、壽七十二、(黃檗山歷代表)

ゴガク 五岳 モンエ聞惠を見よ、

ゴジヨーイン 五乘院 ジユンリヨー順了を見よ、

ゴチ 五智 ユーゲン融源を見よ、

ゴトーシツ 五斗室 シゲン孜元を見よ、

ゴホー 五峯 シギヨク師頊を見よ、

ゴラクイン 五樂院 ダイケン大玄を見よ、

コーア 光阿 テンカイ典海を見よ、

コーイ 光意 一三九七/一四七四 〔法相宗〕河內弘川寺の學僧なり、光意は俗姓河內氏河內石川郡の人なり、大同年中最勝會の座主となる、後河內に弘川寺を開きて學賓に接す、天皇其德を崇みて傳燈大法師位を賜ふ、弘仁五年三月四日住處に寂す、壽七十八、(本朝高僧傳)

コーウン 光雲 ミヨーシユー明秀を見よ、

コーエー 光瑛 二三八五/二三三一 〔眞宗〕京師東本願寺第十四代なり、 光瑛號を琢如と稱し、別に愚玄と呼ふ、寛永二年七月二日生る、十三世光從上人の第二子、母は左大臣幸家の女なり、師、童名を茶々麿と云ひ、九條左大臣道房の猶子となり、

寛永十五年得度し、慶安四年三月六日大僧都に任せられ、承應二年十二月宗務を繼く、同年將軍家綱東山の地を附與せしを以て同地へ祖廟を移つす、明曆元年十二月退隱し、寛文十一年四月十四日寂す、壽四十七、淳齋院と稱す、(門跡傳、本山寺誌)

コーエー 光映 二四六九―二五四五 〔天台宗〕近江比叡山延曆寺の座主なり、光映字は曇覺、號は棘樹、一に一如菴といふ、豐後國東郡中村の人、俗姓赤松氏なり、文政二年十二月十九日を以て生る、天性多病、且つ肉食を忌む、故に出家を求む、文政十一年十月江戶に下り、十三年十一月東叡山見明院光千を拜して薙染す、天保六年正月交衆の列に入り、其年三部密灌を受く、十年八月國に皈りて父母を省し、再び出遊して比叡山に登り、十二年十月廣學竪義の大業を遂く、十五年七月本住院に住し、弘化二年九月大阿闍梨位に進む、其年魚山梵唄秘曲を傳受す、嘉永元年六月金臺院に轉住し、三年三月東叡山修禪院に轉し、大僧正圓如の法統を繼く、安政二年十月壽昌院に轉し、別當職に任せらる、五年五月大僧都に進む、其年冷泉中納言爲理の猶子となる、文久元年盛岡に遊て國政を議す、十月昵近となり、淸淨林院を賜はる、且つ萠黃玉蟲衣の着用を許さる、俗に御用召と稱するものなり、二年八月法親現の命により、談山竹林坊に轉し、學頭職に任し、權僧正に進む、乃ち命して弟子光彌をして法統を繼かしむ、十月京都に於て天顏を拜す、靑蓮院法親王尊融紫衣を賜ふ、慶應三年八月正僧正となり、十月再び天顏を拜す、四年閏四月東叡山に兵難あり、師東下して法親王に謁し、師子王院の號並に緞子衣を賜ふ、五月十五日戰役あり、師陣中に奔走す、其年十二月西皈して大坂四天王寺に假居す、明治二年十月公現親王の天譴解くと聞きて金臺院の里坊に皈住し、自ら如々院と號す、爾來念佛業を事とす、明治三年三月嫌疑を蒙り、其月八日朝使に捕はれ十七日嫌疑解けて皈り、八年江戶に下り、三月八日權大僧正となり、四月延曆寺座主となる、九月探題相承し二十九日再び江戶に下り、九年七月北國を巡化し、九月戒檀院の制を再興す、十年九月十五日圓頓戒相承す、十二年五月十八日大敎正となる、七月十五日管長を辭して新里坊に移る、九月十一日法華會勅許せられ、十月一日よりこれを修行す、十三年五月滋賀院を再興し、後金臺院四天王寺毘沙門堂に移り、二十七年六月病に罹り二十八年八月十五日寂す、壽七十七、(四明餘霞)

コーエー 光影 ケンツー regular盛通を見よ、

コーエツ 光悅 ……二三二六 〔淨土宗〕江戶法安寺の開山なり、光悅は源蓮社周譽と號す、觀智國師に隨侍して其法流を禀け、江戶赤坂法安寺を開く、寛文六年三月二十九日寂す、世壽詳ならず、淨土總系譜)

コーエン 光圓 二二七二―二三二二 〔眞宗〕京都西本願寺第十三代なり、光圓一名は良如と稱し、光昭の次男なり、慶長十七年十二月七日に生る、寛永三年四月薙度し、關白九條忠榮の猶子となり、十五年十一月大僧正に任す、同年學黌を毅立し、翌年始めて能化職を置き河內光善寺准玄を擧けて任す、慶安四年五月江戶に赴き、尋いで日光山に詣つ、承應二年月感西吟の二人の宗意を爭ふに方り、師兩方を糾察して和熟せしむ、同年四月再び江戶に赴く、十二月月感東六條に迹を晦ます、是より先き師屢々此爭を論解せんとしたるも月感固く執りて

背せす興正寺准秀亦甚た調和を謀りしも中途にして志を變して月感に黨し、共に本山に反す、茲に於て師彈文を著して其非を辨明し、二條公、九條公、及所司代板倉重宗等に呈し、且つ門徒に敎示す幕府に訴ふるに方り幕府裁決して本山の學寮を廢せしめ、准秀を越後に遷し月感を出雲に遷す是れ明暦の初の頃なり、同三年正月江戸濱町の別院焼けしかば、幕府に乞ひ八丁堀の海を塡めて、寺基を移して再興す、此地之より築地と稱す、寛文元年三月宗祖の四百年忌を修し、二年七月疾に罹り、九月七日寂す、壽五十一、謚して敎興院といふ、師始めて學寮を設け、能化職を置きて緇徒を奬導す、師が宗風擧揚の功大なり、五子あり、四男、一女、就中光常照尊の二人顯はる、(本願寺通紀、大谷畧譜)

コーエン 光圓 ドーシユ道種を見よ、

コーオー 光雄 二四五六 〔眞宗〕播摩本德寺の住持なり、光雄字は靜如、童名は竹丸と云ふ、光常の季子、光啓の弟なり、享保某年に生る十七年閏月出てゝ本德寺照宣の嗣となり、十月廿九日薙度して昭貞と名く、寛保元年六月光啓病むに際し、立ちて嗣となり、八月入りて本山の席を繼ぎ、因て名を更む、十月内大臣九條植基の猶子となる、三年三月病に因り寺務を辭し、顯證寺常剛をして法統を接せしむるの志あり、乃ち之を朝廷に奏す、四月移りて北室に居り信行院と稱す、僧官大僧都に止まる、故ありて傳燈の數に入らず、寛政八年七月十六日寂す、十七子あり、昭義、闡舒、法修、闡琅法道、攝生等は其男なり、(本願寺通紀、大谷畧譜)

コーオンボー 光遠房 エクー慧空を見よ、

コーカイ 光海 二三〇九 二三六〇 〔眞宗〕京師東本願寺第十六代なり、光海號を一如と稱し、別に愚山と呼ぶ、慶安二年七月一日に生る、光瑛上人の第六子、母は廣橋賢兼の女なり、童名は利與麿と云ふ、萬治四年三月十日得度す、初め越前本瑞寺の住職となり、後轉して河内大信寺に主となる、延寶六年五月十二日長兄光晴上人の法嗣となり、八年十一月宗務を繼く、八年二月三日大僧都に任せらる、元祿十二年大谷の本堂を再建し、十三年四月十二日寂す、壽五十二、無礙光院と稱す、(門跡傳、本山寺誌)

コーキ 光暉 二四〇四 二四五九 〔眞宗〕京師西本願寺第十八代なり、光暉一名は文如といひ、光闡の長男なり、延享元年四月十九日に生る、寶暦三年二月左大臣九條尙實の猶子となり、明年九月得度す、八年三月光闡と共に江戸に赴き、明和二年十月大僧正に任す、寛政九年某月淨敎寺の智洞を以て能化職と爲す、是より先き、講主巧存沒す、茲に於て智洞を以て代ゆ、初め巧存願生歸命辨を著し、大過の說興り本支の宗徒書を著はして徵詰す、衆之に答へ、難陳已ます、智洞職を襲くに及ひ、更に入門六條の新規を立て專ら巧存の所說を主張し、夏大無量壽經を學林に講す、明年某日安藝の學徒十六問を作り之を智洞に質す、智洞時に答ふること能はす、宗意紛亂す、師深く之を患ふと雖も、此年多病之を救ふなし、十一年病重く、法嗣光攝に遺囑し必す安心を裁決せしむ、六月十四日寂す、壽五十六、私謚して信入院といふ、著作法語數十首あり、三男五女あり、三男は光攝、暉宣 覺珠とす(本願寺通紀、大谷略譜)

コーキヨー　光教 二一七六 二二一四 〔眞宗〕本願寺第十代なり、光教號を證如と稱す、光融法印の長子にして、第九世光兼上人の孫なり、母は顯證寺兼譽の女永正十三年十一月二十日に生れ、童名は光仙麿といふ九條關白尙經の猶子なり、大永元年父法印の寂するを以て代りて祖父の法嗣となる、同五年正月十八日剃刀式を行ひ、童形を以て就職す、同七年四月二日青蓮院の尊鎭親王に就いて得度す、天文元年八月六角定賴山科を襲ひ、堂宇兵燹に罹り願行寺勝忍下間融慶下間賴益等防戰して死す、師祖像を奉して大坂の石山別院に移り、五年正月後奈良天皇勅して光教に二品親王の宣下を賜ふ、初め天皇踐祚後九年を經て未た大典を行はず、大內義隆資を献し師亦資を助く、故に此宣下あり、六年正月本山內規九條を製す、八年(一說十八年)勅により權僧正に任す、二十三年八月十三日寂す、壽三十九、信受院と稱す、初光融兼壽の語を編輯删定し、八十篇を勒成して五帖となし、纔に完了して寂す、師其業を繼き、刊行し、每帖の尾に華押を署して證となす、遂に永式となす、(大谷略譜、門跡傳、本山寺誌)

コーキヨー　光教 ギヨーニン堯仁を見よ、

コークー　光空 (…………)〔天台宗〕近江金勝寺の僧なり、光空は近江の人、金勝寺に居て法華を誦持す、兵部郎中平氏の家に留ること數載、其歸依を受くること篤し、後去りて終る所を知らす、(本朝高僧傳)

コーケー　光啓 二三七六 二四〇一 〔眞宗〕京師西本願寺第十六代なり、光啓一名は湛如と稱し、光常の第十男、母は竹中氏、享保元年六月二十八日に生る、關白九條輔實の猶子となり、十五年十一月得度す、某年大通寺の南谷に就きて書及ひ文を學ひ、十九年二月光澄と共に江戶に往き、元文四年三月大僧正に任す、五年六月講主法霖に命して家司以下を召し法要を諭示し、日後其旨を記して之を與ふ、寬保元年六月八日寂す、壽二十六、私諡して信曉院といふ、子なし(本願寺通紀、大谷略譜)

コーケー　光冏 二一五二 〔淨土宗〕武藏增上寺の第四代なり、光冏號は文蓮社隆譽珠阿俗姓蒲生氏、近江國蒲生郡の人、蒲生秀胤の臣秀重の二男なり、秀重は猶子として秀胤の寵を得、其別業に在り、師をして本家を紹がしめむとす、然るに主家の遠ざかる所となりしかば、師其後音譽上人聖觀の淸操を慕ひ就て學ぶ、性俊逸、內外の典籍を修め、詩歌に志し、又禪を究む、文明十一年十一月廿六日增上寺第四代となり、駿河に至りつゝ衆人の歸依を得、仙年寺を建つ、明應元年五月十四日寂す(鎭流祖傳、三緣山志)

コーケー　光珪 タイヤク太益を見よ、

コーケン　光賢 (一九一〇)〔眞言宗〕山城醍醐東塔坊の僧なり、光賢は建長二年十月二十五日幸心院に入りて憲深僧正の許可灌頂を受く、(續傳燈廣錄)

コーケン　光兼 二二一八 二一八五 〔眞宗〕本願寺第九代なり、光兼號を實如と云ひ、第八代兼壽上人の第五子母は藤原氏長祿二年八月十日に生る、童名は光養麿といひ、左大臣勝光の猶子となり、文明五年得度し、靑蓮院尊應の門入となり、後權大僧都に任す、同十五年長兄光助法印寂するを以て、師代りて法嗣となり、延德元年宗務を繼く、永正四年六月細川政元

害に遭ひ都下騷擾甚しきを以て、近江堅田に亂を避け、五年十一月山科に歸へる、大永元年後柏原天皇即位大典の資を献し、香衣を賜ひ且つ准門跡に補せらる、五年二月二日寂す、壽六十八、敎恩院と稱す、著はす所法語數篇あり、五子あり、一は光圓、二は光融、三は兼珍、四は兼澄、五は女子なり、（門跡傳、本山寺誌、大谷略譜）

〔考〕本願寺門跡の起源に就いては、高代寺日記、加越鬪爭記等に明細なる記載あり、後柏原天皇文龜元年に踐祚したまひたるも、應仁の大亂後にして京師は大に荒敗し、且つ永仁元年には五穀登らす、諸國飢饉に苦めるを以て即位の大禮を行ひたまふに至らす、西三條實隆法名堯空これを本願寺光兼に謀りしかは、光兼は門徒を勸め、一萬貫を献し、即位の大禮の費用に充つ、天皇御感あり、行成自筆の三十六番の家集を賜ひ、且つ永代子孫准門跡に補任せられたるよし云へり、

コーケン　光謙　二三一二―二三九九　〔天台宗〕比叡山安樂院第二代なり、光謙は幻々菴と號す、靈空は其字なり、俗姓岡本氏、筑前福岡の人、後光明天皇承應元年に生る、幼名を辰といふ、蓋し歲壬辰に在るに由るといふ、父は庄三郎と稱し、國主忠之に仕へ、後、剃髮して龍意と號す、是より先き婦を娶りて三子を生む、師は其長子なり、年甫めて九歲、母の喪に丁り、悲痛して措かす、遂に出塵の志を發して未だ遂くる能はす、年十四其鄉松源院の豪光に從ひて薙染す、時に寛文五年八月十日なり、名を光舜と命し、後光謙と更む、豪光偶普門品を授けんと欲し、經函を啓くに、中に小白蛇の蟠るを見る、豪光以て瑞となし、益惠育す、年十七にして敎義を究めんと期し、比叡山に登り、正覺院に掛錫す、幾もなくして南谷觀泉坊に移る、輪王寺門主本照院宮の命により星光院を主る、年二十七妙立和尚坂本村に在りて敎觀の正旨を唱ふと聞き、乃ち往きて敎を稟く、是に於て昔日學ふところのもの甚た邪僻多きを知る、和尚を拜して十重禁戒を受く、年三十四和尚に從ひて沙彌となる、尋いて星光院を辭し、洛西泉谷に隱れんとす、詩を賦して曰く、「幽溪聊寄レ生、不レ釣二隱倫名一、因レ聽二眞常樂一、得レ知二身世輕一、雲松護二禪榻一、風竹拂二塵情一、來レ此多二間日一、懺摩誦二妙經一」と、乞食して佛制を嚴守す、山門の學徒追從して敎を受く、遂に北野に移り淨土宗山派の洞空の爲に天台戒疏を講す、洞空師の指摘を蒙りて戒疏顯正記を著す、是歲師闢邪篇一卷を撰して世に出たす、元旨歸命壇の邪を闢くなり、我國の天台敎は中古大に衰へ、姦徒私に摩多羅神を祭りて秘法と稱し、密かに之を授受す、師初め其法を受け、後、非を悟り、乃ち此書を著して鑑戒す、輪王

靈空大和上

寺一品親王公辨序を撰し、凌雲院大僧正義道跋を撰す、義道嘗て邪説を主張す、一旦妙立和尚の敎を蒙り其訛謬を知る、是歳靈室に移り大佛頂經を講す、伊藤東涯師と方外の友たり、往きて師を訪ひ、詩を贈りて曰く、欲尋遠公室移歩過西川、麥秀搖青穎、荷圓點碧錢、禮時鐘二六、胸宇界三千、借問離鄕國、幾年此地禪、元祿三年妙立和尚洛東聖護院村の草菴に寂し、即ち全身を北白川山に葬りて其弟子皆師に歸す、師其菴に移り、有門菴といふ、五年四十一、輪王寺門主の請に應し、山門安樂院に赴き、妙宗鈔を講す、秋有門菴に歸る、翌年門主安樂院を律寺に改め、師をして管せしむ、蓋し門主の妙立和尚の宿志に酬ゆるなり、八年法華文句を東照宮本地堂に講す、曼珠院宮特に駕を枉く、講を聽く者凡そ一千人ありたりといふ、輪王寺門主詩を賜ふ、其詩に曰く、聞在台嶠說一乘、僧家忽見臥龍興、從今化益無窮處、幾許光輝挑法燈、と、九年河内楠葉村に宗覺といふ者あり、彈妙立章を著す、其意妙立和尚が嘗て靈芝の戒體辨を破りて天台性無作假色の説を辨したるを嫌ふなり、師彈彈章を撰し、先師の説を恢張し、且つ辯辨謗比丘作樂章を作れり、後又宗覺辨惑章を撰す、師喩篋錄を著す、宗覺按刻喩篋錄を撰し、師喩篋錄續補を著す、宗覺復た辯する能はす、十年法華文句の講を了し、安樂院に歸り、占察懺を修す是時大將軍綱吉特に安樂院に田百石を賜ふ師江戶に赴きて恩を謝す、尋いて法華開題を祖師殿に講す、將に西歸せんとするや、輪王寺門主智者入定像、及ひ經案等を賜ふ、西歸の後妙立和尚の廟を北白川より移して安樂院の北隅に葬り、中興第一祖となす、此に於て大悲懺を修す、三月湖東安養寺の湛堂和尚を請して證明師となし、瑜伽戒沙彌十戒、自誓具足戒を受く、時に年四十七、五月再ひ湛堂和尚を請して證明師となし、弟子五人をして沙彌十戒を受けしむ、九月師自ら證明して五人に具足戒を授く、規を定めて曰く、自今一部の徒皆本院に具足戒を受けて止住五年專ら戒律を學ふへし、と是より先き輪王寺門主に向ひ、上言して曰く、謹みて開祖大師の本山の恆則を案するに、吾山敎を奉するものは、梵網重輕戒を受け。一紀十二年山を出でず、舍那止觀兩業を修す、然るに其恆則の廢たれたること久し、宜しく古規に復して祖敎を起すへしと、門主嘉納す、乃ち行者を一山に索む、偶護心院の素道と云ふ者、奮然として止觀行を修せんと誓ふ、師其人を獲たるを喜ひ、乃ち證明師となり比叡山の戒壇院に於て大戒を授く、六月觀音疏を安樂院に講し、九月攝津を遊化し、三句にして歸る、有明菴に指要鈔を講し、智積院の大衆與り聽く、十三年八波羅密寺に法華入疏を講す、十四年年五十にして菩薩戒、廣布薩會を本院に興す。寶永元年志賀の義瑞律師妙宗鈔を講し、師か嘗て講せし縱觀地境亦須約心の文を難斥す、師之を聞きて乃ち内外二境辨一卷を著す、二年義瑞辨内外二境辨を撰す、師の門人某問詰錄を撰し、義瑞内辨[illegible]境辨拾遺を撰す、正德二年師彈拾遺を述ふ、四年義瑞[illegible]百難の著あり、師一千酬を作る、三年玄門に命して本院を董せしむ、乃ち東麓別院に退き、專ら修懺を務む、正德元年年六十にして山衆と金光明玄句記を校訂す、二年伊勢を遊化し、又三年攝播二國に遊化す、紀行詩あり、草堂雜錄に載す、是歳本院正殿[illegible]を

コー(光)ゲ

竣ふ、門主弘律場一大字の額を書す、師略教誡經を講ず、四年十月比丘六人を集め、始て攝僧大會を結ふ、是冬飯溪圓乘院の楚善、一紀の住山滿ちて本院に來り、師に證明を請ひて具足戒を受く、五年秋東叡大政所に佛頂文句を講す、冬門主席を公寛親王に讓り、京師に入りて師の法話を受く、是年師釋門の風紀漸く染むを見て釋門祝誕辨を作る、其略に曰く、忌日を齋するは古なり、生辰を祝するは古に非す、佛誕生節を除くの外に、本邦曾て此禮なし、近世支那の禪者來りて此筵を開く、徒弟相聚りて詩を作り、茶菓を陳す、無識のもの見て文風となし、往々倣ふ、蓋し禪者の味は恕すへし、律徒相倣ふ無知痛むへきなり、と、是に於て世漸く其弊を改むといふ、秋傳法灌頂を本院に行ふ、悉地院の惠潤之か敎授となる、師之を傳へ、又玄門眞鮫に傳ふ、享保二年年六十五靑蓮院親王の爲に有門庵に融心解を講す、三年輪王寺門主のために有栖川に止觀大意を講す、六年本山願王院智周台宗二百題を撰して師の閲を乞ふ、師刪潤するところ多し、台家の論書此に至りて備はる、七年備前を遊化す、八年輪王寺門主崇保院宮自ら師の像を畵き、並に手刻の印章を賜ふ、此年東台淨名院を律刹に改む、院は圭海僧正の開基に係る、九年門人一庵を京師に建て、師をして之に住せしむ、師固辭すれとも懇請して止ます、乃ち往き住す、普說して曰く、世界身心是幻化なり、而して旦暮の人の住する所毀壞して久しからす、豈に幻の又幻にあらすや、と、因て幻幻庵と號す、十年七十四、幻々庵に備前大願寺の惠頂を招き、唯識論を講究す、師中古以來の謬解を正し、之を指摘す、十二年即心念佛談義本を撰す、冊石梁田蛻巖深く師に歸す、乃ち之が跋を書す、善瑞及び淨土宗の徒論鋒を向けて之に抗す、悉くこれを拆く、華嚴寺鳳潭評して曰く、他の淨業門其祖宗を誣罔せらると雖、老朽之を畏れて口を箝して辯ずる能はず、二三の末裔偶手を載して之に抗するあり、其れ猶ほ蟷臂を張か如きか、と、是歲靈峰宗論を刋行する者あり、師爲に序を撰す、十四年輪王寺門主律刹を日光山に建て興雲院と號す、是に於て三山の律塲定まる、十五年年七十九幻々菴に大悲懺を修す、十六年輪王寺門主師の八句を壽し福祿壽圖を賜ふ、圖は狩野探幽の畵くところといふ、十八年盧山空長老の請により富岳圖に題する詩を作る是歲四分廣布薩會を本院に行ふ、これより毎歲修す、十九年碧巖集を提唱す、一禪徒あり因果明々曾不レ昧、即今不レ墮野孤疑、依然百丈山頭月、五百生前汝是誰の頌を以て質す、師曰く、即今の二字穩かならず、故に此句終に義理なし、五百生前は乃ち迦葉佛遺法道人何ぞ誰そと問ふを須ひんや、渾て敎家の註解に似たり、必是本邦禪を知らざる者作るところ、今五字を易へて曰く、因果明々曾不レ昧、明々未レ免野狐疑、依然百丈山頭月、五百生來汝是誰、と、蓋し未だ全く是ならずと雖も、較勝れりと、二十年三月金剛經を講ず、妙法院堯恭親王親しく臨み詩を賜ふ、曰く、老師智德絕二儔倫一、慈雨悲風大臺春、獨坐講筵竟二遲日一、心期在レ出二世中塵一、と、五月京都所司代丹波守土岐賴稔師を招く、賴稔嘗て佛敎を排す、師の行譽を聞き、垂示を請ひ、遂に初志を翻すといふ、元文元年年八十六、魚山に赴く、是れ衆請を納れて勝林院證據阿彌陀佛開眼の爲なり、三年十月病を得、面目浮腫す、門人醫をして診

脈せしめんと請ふ、師笑ひて曰く、用ゆる勿れ、昔豐干禪師言ふあり、身四大に居る、病幻より生ず、若し之を除かんと欲せば須く淨水を用ゆべし、と、因て淨水を持ちて師に進む、師乃ち之を喫し、病遂に癒ゆ、翌四年春再び微疼を感ず、輪王、青蓮、妙法、聖護、梶井、諸寺院の親王慰問甚だ篤し、玄門、覺道、及び正覺院亮潤等を集め、四明の遺書を講授す、七月三日病を扶けて妙立和尚五十周忌を修す、威儀端然として人をして病の其身にあるや否やを疑はしむ、師恒に曰く、吾か志を生せし者は蘊益なり、吾志を成すものは先師なり、と、故に平日人と話して師の事に及はゝ、未た嘗て威儀を整へさることなしといふ、公辨親王曰く、妙立の靈空ある猶ほ智者の章安あるか如しと、八月九日圓珠院德明、輪王寺門主の命を奉し、特に東叡山より來り師の病を慰問す、十二日仙順貞道惠順二執行を招き外護の厚きを謝す、九月廿一日遺偈及ひ袈裟四領を以て四親王に呈す、其遺偈に曰く、老耄今年八旬八、久諸二眞德一萬般豐、從レ今以報二慈愛一、天眼遙觀振二道風一、と、此より復他事を言はす、十月四日夜半稱名して安然寂す、八日門人皆議して安樂本院妙玄和尚の塔側に葬る、壽八十八、臘四十二、安樂院幷に淨名院師を以て第二祖となし、他寺は皆第一祖となす、其著書、法華弘傳集序說、法華開題、法華壽量義說、止觀輔行開講要義、妙宗鈔拾遺、闢邪篇、觀心誦經法記略註、內外二境辨、始終心要略解、始終戒要略解、止觀大意講錄、彈々章、喩箴錄、箴喩錄續補、旁觀記、旁觀記釋難、即心念佛談義本、同餘說、同或問、同略箴細評、彌陀經要解俗談、同欲浦本俗談、答辯光明眞言名加持土砂義駁、圓覺經集註俗談、金剛經疏俗談、金剛經破空論俗談、三經解俗談、心經釋要俗談、齋食儀註、相輪樑銘略釋、敎行樞機、台宗綱要、十如是略解、開幃試問荅、佛心印記箋要、同講錄、境觀要門箋要、略敎誡經講錄、觀心食法講錄、各一卷、妙宗鈔講錄、法華會義錄外、傍觀記骨目驗非、各二卷、妙宗披雲決、辨々問詰錄、詳解諺詮、仁王疏講錄、各三卷、別行疏講錄、法華會義論錄、入疏決正、各四卷、指環返璧五卷、境觀二千酬、佛頂文句講錄、入疏續決正、草堂雜錄、各六卷、戒疏集註八卷、相語雜錄、法華入疏講錄各十二卷、止觀講錄二十四卷、文句講錄五十卷、通計六十二部、二百四卷、皆世に行はる、弟子比丘四十一人、沙彌道俗勝けて算ふへからす、創立の律寺四十五院、世に天台敎觀の中興と稱す、（靈空大和尚行業記、近代名家著述目錄）

コーケン　光劍　チトツ智訥を見よ、

コーゲン　光玄（一九五〇―二〇三三）〔眞宗〕京師常樂臺の開山なり、光玄字は存覺童名は光日麿といひ、本願寺第三代覺如の長子母は播磨局なり、正應三年六月四日に生る、前伯耆守親顯（チカアキラ）の猶子となり、親綱と名け、從五位下に叙せらる時に年八歲なり、親顯の沒後冷泉親業に養はる、嘉元元年十四歲にして發心院覺意房の論席に列し、經賓と名く、暫く興福寺に居り、十月十日東大寺に移り、薙髮して興親と名け、中納言と號す、明年京に歸り、覺惠覺如兩師を省覲し、心性院經恚の室に寓す、奈良に歸へりて經慧に招かれて磯島の引接坊に入り、名を親慧と改む、後、比叡山に登り、尊勝院玄智の室に入り、遂に青蓮院慈道親王の門入となる、三年二月六日日野中納言俊光

コー（光）ケ

コー（光）ゲ

の猶子となる、名を光玄と改む、尋いて十樂院（青蓮院の舊名）に參して有職に補し、中納言新阿闍梨と稱す、德治二年十樂院講師の選に當る、祖父覺惠の喪に遭ひ、轉して就かず、覺惠嘗て師に尊覺坊の號を與ふ、後存覺と改む、蓋し順德天皇第五皇子梶井宮尊覺法親王の名を避くるなり、是年阿日房彰空に從ひて觀經疏を聽く、延慶二年毘沙門谷證聞院僧正の坊に於て法を受く、三年正月大谷の外障已に除き、內議未た決せず、覺如院主曰く、事若し成らずは別に一宇を創めて之に居るべし、と、乃ち門下に募緣し、師をして化疏を草せしむ、宗主其文を見て深く感賞し、師を本山の嗣法となし、且つ若狹伊賀兩國の助力の事を委し親筆にて師に與ふ、十月大谷已に安し、嗣法定まるを以て、師を招きて一室に居らしめんとす、師固辭して往かず、應長元年五月父覺如宗主越前を行化し、師之に從ふ、三門徒祖大町如道廣文類の傳承を乞ふ宗主師をして授けしむ正和三年春宗主尾張に行化す、師亦從ふ、秋宗主師に寺務を委せんとす師固辭して受けず十二月廿五日遂に之を領す、時に年廿五なり。元應二年春澁谷流祖空性房了源宗主に見え法要を聞かんことを請ふ、宗主師をして授けしむ、師因て持名鈔等を製す、元亨元年三月北野祠を領す、二年五月朝廷最勝講を修し、錦小路僧正をして導師たらしむ、僧正師を擧けて初座表白文を製せしむ一夕にして成る、去年來師宗主と法義を論し、師服せず、今年六月に至り、宗主遂に師と絕つ、師乃ち關東に赴き、之を宗徒に諫る、父子の義を繼かんと欲し、三年三月師奥州を發して近江瓜生津に至る、秋奥州の宗徒若干人長井門源、鹿島順慶、成田信性等從ひ來る京に至り、宗主に署疏を呈し和解を乞はんとす、會々世亂れて其署疏燒失す、故に果さず、正中元年正月了源の請に應し淨土眞要鈔諸神本懷集を著し、八月破邪顯正申狀を作りて官府に呈す、此月彼岸會に了源山科の興正寺を慶讃し、師導師たり、後幾もなくして基を澁谷に移し、元化二年二月彼岸會に慶讃し、師亦導師となる、興正寺は後佛光寺と稱す　元弘元年眞弟允祖、妙高寺塔主無住に從ひ、東福寺普門院に居る、師屢々之を訪ふ、因て海藏院師鍊と交りを結ぶ、曆應元年三月師年四十九にして備後に遊ふ、宗徒の請に應して守護某の館に日蓮の徒と論戰し、其鋒を挫く、當時決智鈔、歩船鈔、法華問答等の作あり、七月京に歸へり、瓜生津愚咄に乞ひ、父子の和解を謀る、宗主俯後摧邪の功を嘉して之を許す、卽ち九月十八日和成り、同しく大谷に居る、師草堂を大宮街に營み、常樂臺と扁す、廿二日宗主訪問して和歌三十首を詠す、康永元年宗主重ねて師と絕つ、蓋し佛光寺了

存覺上人

コー（光）ゲ

源誓計を立て師之と交篤きを以て黨與の疑あり、加るに讒人の離間により此に及ひたるなり、是より師鹽小路の邊に居り、明年門侶をして和解を謀らしむるも成らす、貞和三年錦織寺慈空に業を授く、是年冬師伊賀に往き、歸路大和の向淵村を過き、馬場長者の菴に寄寓す、長者師に奉すること篤く供料を常樂臺に奉す、師其地に正定寺を創す、後應安三年三月畫工增賀をして阿彌陀像及ひ源空親鸞の兩祖像に畫かしめ、自ら讚銘を書し、之を村人に授く、道化四年、夏賓塔院叡憲、慈空を以て介となし信貴鎭守講式を乞ふ、師乃ち書して與ふ、五年九月師六十歳にして大和より還り大宮坊に居る、觀應元年九月、藏人佐日野時光和解を謀り、七月親睦舊に復す、十一日大谷祖忌を修す、七日師亦會に參す、時に南北戰爭し、世途艱難なり、師止むを得すして强ゐて恩情を割き、起ちて河内大枝に赴く、宗主宗祖の尊骨五粒を師に授く、二年正月上旬京師大に窮す、宗主急を告く、師法心を遣はして資財を奉す、法心途中兵難を冒して十七日大谷に達す、此夕宗主病に臥す、十九日大枝に報す。二十日朝師發足し、疾行して夕刻大谷に入る、然れとも命終の期に逢ふを得す、初七日の佛事畢りて大枝に歸る、五七日上京法事讚を修す、四月七日畫工をして覺慧覺如兩師の眞像を畫かしめ、各其讚を作る、七月七日錦織寺慈空沒す、愚咄遺命を奉し師を延きて其席を繼かしめんとす、師老身を以て辭し、季子綱嚴をして代り往かしむ文和二年大宮坊を今小路に遷す、出雲路乘專戮力して二事成る三年新坊に年を迎ふ、延文四年十一月善如宗主の請により宗祖歎德文を作り講式の後に續く五年八月六要鈔十卷を著し廣文類を釋す、應安五年七月自ら眞像を寫し、畫師良圓をして之を修飾せしめ、且つ其上に贊す、六年二月下旬病に嬰り廿八日辭世の頌並に和歌を書して寂す、壽八十四臘七十、頌に曰ふ「念彌陀佛、今詣西方、形名頓絕、生死永亡、」和歌に曰ふ、「今ははやひと夜の夢となりにけりゆきゝあまたのかりのやとく〱」大和願行寺に塔す、八子あり、一光女、（法名求禪）、二光祖、三愛光女、四光助（法名功覺）、五通蔭（法名如存）、六瑠璃光女（法名心光）、七綱嚴（法名慈觀）、八光童丸なり、著作六要鈔十卷、（延文五年八月撰す）、選擇集註解鈔五卷、（山南光照寺慶願の請により撰す）、破邪顯正鈔三卷、（一云破邪顯正申狀元亨四年八月廿二日邪徒の誣言を辨し官に訴ふる狀なり）、淨土眞要鈔、（元亨四年正月六日佛光寺了源の請により撰す）、步船鈔、（山南慶雲の請により撰す）法華問答、持名鈔各二卷、佛光寺空性了源の請により撰す）、女人往生聞書（同上）諸神本懷集、（元亨四年正月佛光寺了源の請により撰す）、決智鈔、（山南慶空の請により撰す、報恩記、（山南願空の請により撰す）顯名鈔、存覺法語、（文和五年三月四日契縁尼の請により撰す）、淨土見聞集（某の請により撰す）、兩師（道綽善導）講式、知恩講式、（一云謝德講式荒木滿福寺空遵の請により撰す源空上人歎德文なり）聖德太子講式、宗祖嘆德文、（善如上人の需により撰す）纔解記、（康安二年七月廿八日撰す）、淨典目錄、（康安二年五月廿六日善如上人の需により編す）、各一卷あり、（門跡傳、本願寺通紀、大谷冢譜、木山寺志、眞宗敎典志）

コーコ　光巨（……）〔臨濟宗〕相模淨妙寺の僧なり、

光巨字は縱翁といふ、飯山に參して法を嗣き、淨妙寺に主と

なる、寂年欠く、（延寶傳灯錄）

コーコ 光居　チツーヂ智通を見よ、

コーコク 光國　シユンギヨク舜玉を見よ、

コーゴン 光嚴　ジヨータイ乘躰を見よ、

コーサ 光佐　二二〇三―二二五二　〔眞宗〕本願寺第十一代なり、光佐は顯如と云ふ、本願寺第十代證如光教の長子、母は中納言庭田重親の女、天文十二年正月六日大阪石山に生る童名茶茶麿東光院關白内大臣植通の猶子たり（一說に猶子とならず）同二十三年八月十二日得度す同月十三日父光教の喪に遭ひ弘治元年四月權大僧都に任じ第十一代となり同年權僧正に永祿元年正僧正に進む同二年十二月十五日正親町天皇敕して本願寺を世襲門跡となし、同三年十月院家補任を許さる、是れ眞宗院家の始なり、十二年八月二十日天皇師の次子佐超を脇門跡となす、即ち興正寺第四代顯尊なり、元龜元年織田信長石山の形勝を愛して其地を本願寺に要請す、師これを宗徒に議するに、衆皆石山は蓮如上人以來深緣の地なれば、容易に去るべからずとなす、乃ち信長の要請を拒絕す、信長大に怒り、同年九月三好氏を討つといひ實は石山を襲擊す、師は徒を督して防禦に力を盡し、數々信長を苦しむ、天正三年毛利氏兵糧數百艘を饋り、本願寺に應ず、信長益々激怒し、四年六月信長自ら將となり大兵を擧げて本願寺を殄滅せんとするも遂に拔くこと能はず、七年十月に至り使を遣はして和を乞ふも、師門徒と共に其詐謀なるを疑ひて聽かず、八年三月信長天皇に奏請するところありしがば、天皇敕して庭田重通勸修寺晴豐を石山に遣し、和を講せしむ、師敕命を拜し、四月九日石山を出て、紀伊鷺森に至る、十年五月信長其將丹波長秀を遣り、急に鷺森を襲はしむるも事成らず、幾何もなくして信長弑せらる、十一年七月師法嗣光壽と共に和泉貝塚に遷り住し、十三年八月豐臣秀吉攝津天滿川崎の地を寄附す、乃ち同地に一字を搬す、同年十一月大僧正に任せらる、十九年秀吉京師堀川七條の地十餘萬步を寄附す、乃ち同年八月五日工を與し、文祿元年十一月祖堂落成す、師本願寺を遷し、祖像を安置す、同月二十四日暴疾に罹り寂す、壽の五十、二月十日七條東河原に火葬す謚して信樂院といふ三子あり一は光壽二は佐超三は光昭なり（本願寺通紀、大谷畧譜、門跡傳、本山寺誌）

〔考〕　光佐の事蹟は、諸書に見るところ一致せさるものあり、其出生の年月に關して、門跡傳には天文十二年正月六日とあり、本願寺通紀には四年四月十二日とあり、大谷畧譜には同年正月七日とあり、猶子の儀に關して門跡傳には內大臣植通の猶子となるとあり、本願寺通紀、大谷畧譜には火急の際にして其儀に及はすとあり、僧官の昇任に關して、門跡傳には永祿元年正僧正となるとあり、本願寺通紀、大谷畧譜には永祿二年十二月正僧正となるとあり、石山戰爭の始末に關しては諸傳大に相違せり、明智軍記、石山軍記等には天正十年光佐難を避けて紀伊鷺森に在り、信長は三男信孝をして襲擊せしめ、六月三日信孝大兵を率ゐて鷺森に至り本願寺を圍み、將に陷んとする際、本能寺の變報至り、信孝急に退散し、光佐等幸にして虎口を脫し、孫市と云へる者大に喜ひちんば躍りをなしたりと云ふ、門跡傳等亦略同し、然るに本願寺日記に記する所全く相違せり同日記に依れは天正十年光佐の鷺森に在る

時、信長は近傍の戰爭の爲め災の及はんことを恐れ、野村三十郎と云ふ者を遣はして本願寺を警衞せしめ、信孝阿波に至る途次、岸和田に屯するに方り、光佐は平井越後と云ふ者を陣中に遣はし慰問せしむ、然れは兩方相通し、鷺森の本願寺は毫も異變なきなり右の本傳に揭くる所は、姑く本願寺通紀大谷畧譜門跡傳等に從ひたるも、實は大に取捨せさるへからさるなり

コーサイ 光濟 一九八六 二〇三九 〔眞言宗〕山城東寺百二十七代の長者法務大僧正なり、光濟は後菩提寺大僧正と稱す、賢俊大僧正の室に入りて出家す、大行訖りて傳法職位を同師に受け、延文二年七月詔して醍醐山の座主に任し、三寶院十四世の僧正となりて、松橋を兼帶す、寺務を領すること四年にして退く康安元年六月再ひ六十六代の座主となり、尋いて東寺百二十七代の長者法務と爲り、宮中の修法を勤むること十二年にして辭す、後東寺百二十九代の法務に叙し、四年にして之を辭す、康曆元年閏四月二十二日寂す、壽五十四、(續傳燈廣錄)

コーシン 光眞 二一五六 二二一八 〔曹洞宗〕甲斐廣巖寺の禪僧なり、光眞字は簡學、相模の人、俗姓は大庭氏なり、雨降山に投して下髮し、密學を研め、後以船文濟に法要を問ひて言外の旨を得たり其法を嗣きて甲斐廣巖寺に主となる、永祿元年三月七日寂す、壽六十三、法嗣括橋帳因あり(日本洞上聯灯錄)

コーシン 光心 二二九九 二三六〇 〔臨濟宗〕肥後天草東光寺の禪僧なり、 光心號は泰林、俗姓は陳氏、肥前長崎の人、二十歲永昌寺某の下に投し、洞上禪を習ふ、幾もなく諸方に遊ひて諸禪師に謁し、元祿十三年三月永昌寺の席を繼く、幾もなく辭し去る、後天草東光寺の請により同寺に住す、寺中に加葉軒を搆へ閑接し、內外の典籍を閱讀す、嘗て曰ふ桑門は儒より入らすんは多く功ならす、と、享保十三年二月十二日寂す、壽六十二、(續日本高僧傳)

コーシン 光信 ゲンカイ源海を見よ、

コージン 光尋 ジシユン慈俊を見よ、

コージユ 光壽 二二一八 二二七四 〔眞宗〕東本願寺第十二代なり、光壽號は敎如第十一代光佐上人の長子、母は細川左京太夫晴元の女永祿元年九月十六日大坂に生る、童名は茶々麿、准后近衞前久の猶子たり、元龜元年二月十六日十三歲にして得度し、直に法眼に叙し、尋いて法嗣となる、同年九月織田信長本願寺を攻め、天正八年和議成るも信長の詐謀あるを慮り、父光佐上人の密旨を受け大坂に留る、七月に至り石山を出てゝ紀伊に到るにあたり父信長の意を解かんか爲陽に父子の義を絕つ師それより大和近江安藝等の諸國に遊歷し、同十年紀伊に歸へる、織田信長退陣後父と共に貝塚天滿より京都堀河に轉住す、これより先き既に權僧正に進み、元祿元年光佐上人寂するを以て師其席を嗣き、第十二代となり、同三年退隱す、慶長七年德川家康の命により御陽成天皇の敕許を得て本願寺を烏丸七條に遷つす、九年八月大僧正に叙せられ、十九年十月五日寂す、壽五十七、(門跡傳、本山寺誌)

〔考〕 本願寺の東西分立の事情は西本願寺に傳ふところ相同しからす、右の本傳は、姑く東本願寺に傳ふところを擧けたるものなり、西本願寺に傳ふなところに依れは、決して本願寺を烏丸七條に遷したるにあらす、本願寺通紀に詳記せり、關原

記大全によれは、秀吉が准如を推し、家康か教如を推すもの、共に深き事情あるを見るべし、家康の意により教如か別に東本願寺を興すに至るたるものなり、

コージユー 光從 二二六四 二三一八 〔眞宗〕東本願寺第十三代なり、光從號を宣如と云ひ、別に愚溪と云ふ、光壽上人の第二子なり慶長九年二月二十二日に生れ、童名を長麿といひ、九條關白兼孝の猶子たり、十九年十月五日得度し、同日父上人寂するを以て、直に宗務を繼ぐ、寛永四年十月十日大僧正に任す、同十六年德川家光六條七條間の地廿六ヶ町を加增す、承應六年祖堂の構造を改めて大伽藍とす、同二年十二月退隱し、東泰院と稱し、別邸涉成園に幽棲す、萬治元年四月廿五日寂す、壽五十五、(門跡傳、本山寺誌)

コージヨ 光助 二一〇二 二一四三 〔眞宗〕越前吉崎坊の僧なり、光助字は順如、童名は光高丸、假號を中納言と呼ふ、蓮如宗主の第一子、母は平氏なり、唯稱院左大臣勝光の猶子となる、十七歲剃髮し、定法寺僧正實助の弟子となり、蓮如の法嗣に立つ、某年河內出口光善寺興正寺歸屬の日、頗る力むるところあり、嘗て北遊して越前吉崎精舍に住す、未た法燈を續かずして文明十五年九月廿九日大津近松別院に寂す、壽四十二、願成就院と號す、四子一女子あり、(本願寺通紀)

コージヨ 光助 二〇一〇 二〇四九 〔眞言宗〕山城醍醐山七十一代の座主なり、 光助は日野大納言時光の子、幼にして聖尊親王の室に入りて出家す、延文年間醍醐山の座主となる、尋きて之を辭し康曆元年六月再ひ座主となり、十三日寺務に補す、居ること七年、康應元年正月十三日寂す、壽四十、(續傳燈廣錄)

コーシヨー 光勝 一五五三 一六三二 〔天台宗〕京都六波羅密寺の開山なり、 光勝字は空也(一に弘也)と云ふ、延喜三年京師に生る、其父母の事は自ら深く秘したりと云ふが、高貴の家に生れたるは事實なるか如し、仁明天皇の皇子常康親王の子とも云ひ、醍醐天皇の皇子とも云ふ、稍長して三寶を崇敬し、成年の頃優婆塞の身にして諸國を歷遊し、五畿內地方の勝區靈跡問はさる所なく、嶮惡なる道路に遭うては自ら耒鋤を把りて開鑿し、人馬行通の便利を謀れり、且つ當時の惡風として曠原荒野に死屍を打捨てたれは、師はこれを見るたびに、自ら死屍を一所に拾收し、油を灌いて火葬したり、我國の火葬はこの頃より漸く盛に行はるゝとなれり、延喜の末、尾張に遊び國分寺に投して沙彌となり、自ら空也と云ふ、それより再び五畿內を歷遊して播摩に到り、揖保郡の峯合寺に留りて大藏經を閱覽し、後阿波に渡り湯島の勝景を探りて觀自在菩薩の靈像を拜禮し、數ヶ月の間苦修鍊行の功を積み、菩薩の靈驗を感し、再び五畿內地方を經て、東北の諸國に歷遊し、陸奥出羽の地方に佛敎の未だ弘通せさるを聞き、即ち自ら佛像を背負うて、遠く陸奥出羽の地方に向ひ、行々法螺を吹いて男女老弱を驚したりと云ふ、天慶元年に京師に皈り、市鄽の間に住し、專ら感化誘引を事としたれは、時人呼ひて市聖(イチヒジリ)、市上人と云へり、市鄽の柱に和歌を書き附け、往來の人々の見るにまかせたり、其和歌に曰ふ、「一度も南無阿彌陀佛と言ふ人のはちすのうへに上らぬはなし、と、一夜靈夢に感して更に次の和歌を詠したり、「極樂はゝるけきほどときゝしかとつと

めていたる所なりけり、と、天慶七年京師に於て觀自在菩薩三十三身の像、幷に阿彌陀佛淨土の曼荼羅等を作りて供養し、京師男女老弱雲集して欽仰皈依したりと云ふ、天曆二年四月比叡山に登り、座主僧正延昌に就いて大乘戒を受け、大乘の比丘となり、始めて改めて光勝と云へり、されどもその後も常に自ら沙彌號空也を用ゐたり、同五年京師に惡疫流行して日々死亡するもの數知れず、乃ち師は其悲慘の狀況を見て大に志願を發し、自ら刀を把りて十一面觀自在菩薩の長一丈なる大像一躰、梵天帝釋幷に四天王の長六尺なる像一躰づゝを刻し、且つ金泥の大般若經一部六百卷を寫さんとし、日夜亢亢として勵み、十三年を經て漸く經像共に其功を竣へ、應和三年八月に至り、鴨川の西に一宇を建立して西光寺と號し、經像を安置し、同月六百人の僧侶を屈請して供養の大法會を行へり、天祿元年七月大納言藤原師成薨し、師其葬禮に列し、棺前に於て閻羅王廳に師成の死屍を送る牒文を朗讀して滿場の道俗を驚したりと云ふ、同三年九月自ら入寂の期至れりとて、淨衣を着し、柄香爐を把りて端坐し、靜に門下の道俗に遺訓を垂れ、後泊然として寂す、實に同月十五日にして、世壽七十七より、門下相謀り東山に火葬し、四條堀川の東に遺骨を埋め、後に同所に一宇を建立し、紫雲山極樂院光勝寺と號す弟子中信師跡を繼ぎ改めて六波羅密寺と號す、俗に櫛司道場と云ひ、鉢叩念佛の根本道場となる、我國にて阿彌陀佛の名號を盛に唱ふるとは、師以來のことにて、師は諸國を遊歷して感化誘引するに專ら阿彌陀佛の名號を唱へ、道路幷溝等を開鑿するにも、常にその名號を唱へたれは、時人呼びて阿彌陀聖（ヒジリ）と云ひ、其開鑿したる井を阿彌陀井と云へり、陸羽地方へ歷遊の途中、一群の盜賊の恣に劫掠するに遭ひ、潸然として泣く、盜賊は其樣を見て大に嘲笑し、出家の身にして其吝嗇は何事なるかと云ひしかは、師は彼等に對し、汝等適人身を受けなから、現世にかゝる罪業を積めは、來世亦苦果を免れず、我れは汝等か苦果を重ねて沈淪するを思ひ、泣かさるを得ずとて、懇に訓誡したれば、盜賊は其空也なるを知り、相戒めて逃れ去りたるが、後數年を經て、師を問ひ罪業を懺悔し、強て請ふて弟子となりたりと云ふ、天慶の初なりしか、鞍馬山に幽捿して諸弟子を敎養したるとありしが、一日飄然山を去りたるより、諸弟子は諸方に探りたるも其消息を得す、遂に相語りて分散す、後數月を經て、一弟子京師の市鄽の間に於て師が薦席を張りて居所となし、一個の破れ盆を置いて往來の人々より食を乞へるを見て大に驚き、即ち膝下に俯して其意を問へは、師は山林にもまさりて市鄽は閑靜なれば、我は今より市鄽に住して佛敎を修行せんと答へたり、これより後時人呼ひて市聖市上人と云ひたりと云ふ、京師に遊行の頃、園城寺の千觀大德の宮中の法事を了へて歸れるに遇ふ、千觀乃ち車より下り師に就いて出離の要道を問ふ、師曰ふこれ下凡の沙彌の能く知る所にあらず貴僧自らこれを知らんとて、走りて急に去らんとす、千觀其袖を引き、强ゐて請へば、師顧みて唯身を捨てよと言へり、千觀大に感悟し、即ち盛裝を脫し攝津箕面山に幽捿し、常に師の高德を欽慕したりといふその頃の事なりしか、師每夜阿彌陀佛の名號を唱へて市鄽の間を巡回し、貴布禰の邊にて鹿の聲を聞いて愛玩したるが、

コー（光）シ

後平家の武士某鹿を獵殺し其聲絶えたれは、師は大に愁傷し、某を問うて訓誡せり、某深く罪業を悔ゐ師の門に皈服し、師の教示に任せて鬚髮を剃らず、妻子を棄てず、俗躰にして一個の瓢を携へ、毎夜其瓢を叩いて阿彌陀佛の名號を唱へ、市廛の間を徘徊したり、これ後世の鉢叩念佛の起源なりと云ふ、されは此因縁にて爾司道場の鉢叩、德正菴、金光菴、壽松菴、東坊、正德菴、利正菴、南坊、西嚴菴、等は皆平家武士某の後裔相繼いて住し、茶筅を製して業となしたりと云ふ、(空也上人傳、空也上人誄、空也上人繪詞傳、明匠略傳、日本往生極樂記、元亨釋書、本朝高僧傳、歌道人物志、本朝文粹、)

コーシヨー　光性　二三四二／二四〇四　〔眞宗〕京師東本願寺第十七代なり、光性眞如と稱し、別號を愚海といふ、天和二年二月十日に生る、第十五世光晴上人の第七子、童名を悅麿と呼び、近衞攝政家熈の猶子たり、永樣六年得度し、十三年四月宗務を繼ぎ、十四年六月十六日大僧都に任す、延享元年十月二日寂す、壽六十三、功德聚院と號す、(門跡傳、本山寺誌)

コーシヨー　光勝　二四七七／二五五四　〔眞宗〕京師東本願寺第二十一代なり、光勝號は嚴如、別に愚皐と云ひ、初め名を朗澄、號を達住と呼ふ、光朗上人の第三子にして、文化十四年三月七日に生れ、童名讓君、近衞右大臣忠熈の猶子たり、文政十一年二月十八日得度し、近江長濱大通寺の住持となり、後播磨姬路本德寺を兼務す、天保十二年四月六日長兄光淨寂するを以て、十二月十八日法嗣となり、十四年正月十四日大僧正に任し、弘化三年五月二十三日宗務を續きて第二十一代となる、安政五年六月四日堂宇累燒せしを以て大谷に移住す、萬延元年八月新堂落成し、文久元年德川家康の廟を本堂の傍に建つ、元治元年堂宇兵燹に罹り、慶應元年朝廷より再建の綸旨を下し、併せて資を賜ふ、明治元年正月朝命を奉し、法嗣光瑩と道を分ちて各地に行化し、軍資金を募りて之を獻す、同五年三月八日華族に列せらる、六月十三日に大敎正に任す、同六年二月五日從五位に敘せらる、八年七月清國上海に別院を設く、蓋海外布敎の嚆矢なり、又十一年朝鮮釜山に別院を設く、廿二年退隱し、廿七年一月十五日正二位に敘せられて寂す、壽七十八、眞無量院と稱す、(本山寺誌)

コーシヨー　光松　二一六三……〔臨濟宗〕京都東福寺の僧なり、光松字は東皈出家して久しく斯立幢に參し印可を受けて後明に渡り、徧く名宿に請益す、東皈して慧日山にありて、藏主となり、出て、三聖寺に住す、後東福寺に主となり、文龜二年二月二十六日寂す、壽欠く、慧日山の夜泊軒に培す、(延寶傳灯錄)

コージヨー　光常　二三二一／二三八五　〔眞宗〕山城本派本願寺の第十四代なり、光常一名は寂如と稱す、光圓の長男なり、慶安四年七月二十八日に生る、寛文元年三月得度し、左大臣九條兼晴の猶子となる、二年十二月講主西吟に就きて選擇集を受け、三年二月江戸に往く、五年十一月幕府法制八條を定め、諸宗の僧侶に告示す、八年二月又令を下し諸門跡家を除きて、諸寺殿を營むに梁三間を以て限りとなす、九月師法制五條を立、又幕府に準して儉約を命す、別に十條を立て門徒に告示す、十二年六月大僧正に任す、延寶元年四月江戸に往く、六年冬靈元天皇和歌を賜ふ天和二年二月また江戸に往き、十一月

天文中の舊制を補し、法令十二條を定む、貞享三年十一月左大臣九條兼晴の第三子を養ひて法嗣となす、元祿二年十一月家寶器具若干を朝廷に進め、十六日上皇の御覽を賜ふ、五年二月法嗣光澄と共に江戸に往き、將軍に謁す、綱吉手つから伽羅を贈り且つ自から大學明德章を講して之を聽かしむ、十五年三月諸門跡家に準して系譜書を官府に呈し、十六年五月諸山に準して本山寺記を著し、之を官府に呈す、寶永元年九月南禪寺龜山天皇四百年忌を修す、十三日師香を進む、七年三月江戸に往く、幕府師を臨海の別墅に饗す、正德元年三月宗祖の四百五十年忌を修し、十一月上皇師に雁三隻を賜ふ、享保十年六月師病甚し、七月三日上皇使を遣して奇品三種を賜ふ、八日寂す、壽七十五、私諡して信解院といふ、著作讃佛講式一卷あり、毎年彼岸會に之を唱へ、遂に永式となる、師二十一子あり、就中光澄、寂禪、寂猷、寂心、寂信、光啓、光雄等著はる、（本願寺通紀、大谷冢譜）

コージヨー　光定　一四三九 一五一八　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、光定俗姓は贄氏、伊豫風早縣の人、武内宿禰の裔なり、弱冠にして父母を喪ひ、山林に幽遁し、大同の初年畿内に遊ひ、大學士に從ひて儒を學ふ、最澄の道風を慕ひて之に師事し、又奈良大安寺の勤操に謁し、後比叡山に歸へり、義眞に止觀を學ひ、五年正月宮中の齋會に詔によりて得度す、天台の徒にして宮中に得度するもの師を嚆矢とす、弘仁三年四月東大寺の戒壇に登りて具足戒を受け、又景深僧都に從ひて重ねて菩薩戒を稟けて律學を綜へ、空海に高雄山に謁して三部の祕法を傳へ、兼ねて法華儀軌を受く、五年興福寺の義延と宗義を論し。人皆師の博學を稱す、十年最澄戒壇を建設せんと欲すれとも奈良の衆僧之を拒む、師使命を帶びて奔勞し、最澄の寂後幾ならずして勅許あり、嵯峨天皇大に師を寵遇し、承和五年傳燈大法師位に叙す、嘉祥四年詔を奉して四王院を營み、天安二年師か八十の還暦を賀して度者八人、絁八十匹、布八十端、綿八斤、錢八十、稲米八十斛を賜ふ、此年八月十日院内に寂す、壽八十、臘四十七、世に別當大師と云ふ著作後傳法記二卷、一心戒文三卷、日本名僧傳、本迹爲二經、法華儀軌各若干卷あり、（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

コーセー　光晴　二二七一 二三三四　〔眞宗〕東本願寺第十五代なり、光晴號を常如と稱し、別に愚水と呼ふ、寛永十八年五月四日に生る、光瑛上人の長子母は近衞關白信尋の女なり、童名を茶々麿と云ふ九條關白幸家の猶子たり、承應三年四月二十一日得度し、萬治四年二月二十四日大僧都に任せらる、寛文四年十二月宗務を繼きて第十五代となり、七年九月本堂を再建し、延寶七年十一月退隱し、永祿七年五月二十二日寂す、壽五十四。泥洹院と稱す、（門跡傳、本山寺誌）

コーセツ　光攝　二四三八 二四八六　〔眞宗〕京師西本願寺第十九代なり、光攝字は不捨、一名は不如といひ、光暉の長子なり、安永七年十月二十四日に生る、天明七年九月攝政九條尙實の猶子となり、寛政四年十月薙度す。九年九月光暉と共に江戸に往き、十二年十一月大僧正に任す、此時門末の宗意二派に分る、一は講主智洞を以て首となし、一は河内西念寺の諦忍を以て首となす、師父の遺命を奉して、正義を確守し、享和元年二月師法語を著し、攝津の門徒に與へ、兼ねて諸方に及

コー(光)セ

ふ、黌衆肯て服從せす、十月師智洞を嚴責し諦忍以下の禁錮を弛む、十二月更に門徒に相承の正義を諭示す、是歳安藝の宗徒勝圓寺廓亮の蒭述横超直道金剛錍を刊行す、師の法語と符合するか如きを以て黌衆大に騷擾し相謀りて之を官府に告け、其流布を沮む、二年六月邪徒師の命を矯めて門下に布告し、新説を主張せんと欲す、是に於て諸國の門徒蜂起し、或は本山の姦臣に逼り、或は各地の領主に訴ふ是より先き美濃の宗徒糸貫川に群集し、烽火を舉けて鬨動す、七月再ひ青野原に蟻集す、近隣の官吏里正等之を制して鎮制するを得たり、事幕府に聞ゆ、寺社奉行脇坂安董本山に命して急に門末を鎮撫せしむ、九月師更に文を作り、門下に諭示す、十一月寺社奉行更に本山の鎮制し能さるを嚴責す、是歳智洞侍者普濟をして十六問通釋を筆し、之を安藝に贈らしむ、明年五月安藝の宗徒重ねて論衡編を作り、學林に寄贈す、閏月二十七日邪徒數百人本山に闖入し、妄に槍刀を揮ひ 師を刦かし安心を智洞に一任するの契劵を强取す、諸國の門徒相傳へて本山に逼る四月二條公府正邪僧俗を召して鞫問す、九月師攝津の毫攝寺闡幽に命し代りて江戶に往き、宗祖の正意を寺社奉行に申具せしむ、文化元年正月淨教寺智洞、西念寺諦忍、下間頼明以下數十人召に應して江戶に赴き、二月勝圓寺の廓亮亦江戶に抵り、五月脇坂安董親ら之を鞫治し、光攝を嚇すは智洞師弟の策に出つること發覺し、文化二年四月智洞罪に伏す、三年七月寺社奉行是非を裁決し、師も亦譴せられ、杜門一百日、既にして禁解く、十一月師安心裁斷書及法語を製し、門徒に諭示す、四年學林の舊習を一洗す、智洞獄中に沒す、師近世學林の專斷に懲り、能化職を置かす、一門の大學を舉けて輪次講師と爲し、四月大坂淨明寺衆鎧、越中西念寺慧航をして講筵を開かしむ、五年三月江戶に赴き七年十一月祖堂を修理して功畢る、光闡の再建以來二百年、光暉修理に志ありしも果さず、師統を承くる及ひ、漸く此に從事す、然とも法門擾亂の爲め速成するを得す、三四年間遠近の緇素力を戮せて工を督し、是に至りて祖像を安し、之を慶す、八年閏月寺社奉行脇坂安董、興正寺累年の爭訟を判決す、是より先き興正寺別立の志數々挫け未た已ます、嫁娶の事ありと雖も（光闡の條を參照せよ）和協はす、安董乃ち本末を斷決し、興正寺は本山の法を奉し、本山亦之を待つに自餘の末寺と同しからざらしむ、三月宗祖の五百五十回忌を修し、光格太皇華鬘一具、白銀百兩、後櫻町上皇戶帳一具、白銀五十兩を賜はる、十四年五月師親しく學林に臨み、大衆を諭し一に信因稱報の祖訓に遵はしむ、文政二年十二月姪顯證寺の攝衆を法嗣となし、名を光澤と改む、七年五月學林に勸學職十一人を置き、八年五月勸學下司教五人 及ひ主議助教得業各若干人を置き、皆其器に隨ひ之に任する差あり 九年十一月疾に罹り、十二月十二日寂す、壽四十九、諡して信明院といふ、（大谷冢譜）

コーセン 光闡 二三六七 二四四九 〔眞宗〕京師西本願寺第十七代なり、

光闡字は子武、一名は法如といひ、本德寺昭尊の次子なり、寶永四年十月九日播磨龜山に生る、享保五年九月薙染し常剛と名く、河內顯證寺の席を董し、寛保三年光雄隱退するに方り、師立ちて本山の席を繼く、因て名字を改む、時に年三十七なり、五月内大臣九條植基の猶子となり、延享四年

四月大僧正に任す、八月江戸に往き、寶暦元年八月再び學黌講堂を修し、明年春之を慶す、八月若狹寶重寺春東異義を立て衆を惑はす、因て使僧を遣はして檢覈せしめ、且つ宏山寺の僧僕をして其謬を辨破せしむ、五年八月都下の秘事法門發覺し、十二月衆僧をして其黨を糾彈せしむ、既にして官に訴へて巨魁三人を罰す、六月黌衆の黃色麻袈裟を着くるを聽るす、即ち恒式となす、十年三月本堂を改造し、功を竣へ、是より先き光常造佛殿を修するの志ありしが果さす、師其先志を繼ぎ、普く門下を諭示して凡そ十二年を經て落成す、二十六日之を慶す、十二月僧樸をして大信寺道粹、常光寺弟憲榮と與に長門圓空の邪義を檢覈せしめ、圓空罪に伏す、即ち終身禁錮す、十一年三月宗祖五百年忌を修し、桃園天皇祭文を賜ふ、十二年三月江戸に往く、明和二年七月眞宗法要の校刻成る、凡そ三十九部、三十一冊となす、師之に序し、嗣子光暉をして跋せしむ、初め攝津常光寺敎遵等二十五人宗祖以來の國字書を選錄し、寶庫の正本に就きて之を校し、資を捐し、梓に上せて之を本山に藏し、遍く門下に布かんことを請ふ、師之を許し、親ら秘典を檢し、正否を校讎し、且つ憲榮（敎遵の弟）僧樸をして事を幹せしめ、是に至りて方に緒に就く、四年五月黌衆播磨智暹と法義を本山に論す、六月命して智暹著すところの本尊義の版を毀つ、五年十一月石見濱田の密禪淨土諸宗の僧侶、眞宗を誣ひて天主敎となし、之を幕府に强訴し、却て譴責せらる、是月智暹撰するところの略述法身義を梓行するを許す、蓋し本德寺の懇請に依るなり、六年四月越前平乘寺の巧存を以て講主となす、之より先講主義敎世を厭ふ、故に巧存をして席を襲かしめたるなり、然るに黌衆中、法身義の刊布及び巧存の榮職にあるを憤り、之を幕府に越訴す、幕府之を本山に委ぬ、師乃ち召して裁決す、然れとも猶命を拒ばむものあり、再び官に訴へ嚴責に附す、本山其魁首數人を罰し、餘黨直に平く、安永三年正月紀伊領下に眞宗の宗名公稱を議するものなり、八月幕府に請ひ普く宗名を正さんとす、東本願寺も亦同く之を請ふ、幕府之を寬永增上二寺に問ふ、寬永寺は之を可とし、增上寺は否とす、五年某月大阪門徒坊間に刻するところの敎行證文類、及六要鈔古版を購ひて之を進む、七年江戸の秘事法門亦發覺し、官其首道榮を佐渡に謫す、天明四年閏月慶證寺玄智に命して本山實錄を編し、三月兼壽の領解文を梓行し、光暉に命して跋語を加へしむ、六年三月師の女映子興正寺法高に嫁す、是より先興正寺復本山に抗し、別に一家を立てんと欲し、比年爭訟して已ます、本山嘗て使を遣はして寺社奉行阿部正倫に訴ふ、彼亦使を遣はして之に應す、正倫此彼使を諭し本山と興正寺と姻を結ひ、訟を息め協和せしめんとす、乃ち此禮を擧くるなり、寬政元年六月八日師及ひ光暉法語を著し、門下の道俗に示す、蓋し近年安心の爭訟諸國に競起するか故なり。十三日師越前に遊化し、閏月京に歸り、十月病あり、二十四日辰の時寂す、壽八十三、諡して信慧院といふ、十二月某日遺骨を大谷祖廟の南側に埋む、師二十子あり 光暉、闡敎、闡耀、仲舊、闡道、闡實、闡幽、闡海、闡郁、闡侃、法住、昭堯、闡恪等は其男子あり（大谷畧譜）

コータク　光澤　一四五八／二五三一　〔眞宗〕京都西本願寺第二十代な

り、　光澤一名は廣如といひ、願宣の次子なり、母は敎諭寺闡敎の女にして寛政十年六月師を河内の久寶寺村に生む、文化六年八月得度し、十月顯證寺に主たり、文政一年十月本山の法嗣となり、十一月左大將輔嗣の猶子となる。七年十月大僧正に任す、十三年六月關東寺社奉行重ねて邪徒を逮捕す、初め智洞の門人善行寺正運、慈光寺大魯、西光寺義霜等、文化中の官裁後（光攝の條參照）諸所に潛伏し、陽に正意に歸服し、陰に邪義を主張し、書を著して衆を惑す、是に於て正運義霜再ひ獄に投せらる、或は傳ふ二人相尋い獄に死すと、大魯終る所を知らす天保五年二月師親ら京師の門徒に諭示し且つ使僧を四方に遣し、諸國の徒衆に諭示す、八年三月師板輿に乘るを許さる、初め光澄の聽されて以後此事なし、九年二月江戸に往き、十三年三月光佐の二百五十回忌を修す、仁孝天皇御香及び白銀を賜ふ、弘化四年顯證寺攝眞の長子澤潤を養ひて法嗣となし、名を光威と改む、嘉永二年正月光澤大僧正に任し、安政五年六月眞宗法要典據十八冊を校補して、版刻成る、初め石見の淨泉寺仰誓原本六卷を編輯し、備後の德聚寺大慶增補の撰あり、仰誓の法嗣履善亦其遺を拾ひ、嘉永中之を版刻せんと欲する者なり、師之を許し、近江覺成寺超然に命し、更に校補せしむ、是に於て始めて功畢るなり、萬延元年二月光尊得度し、光威の附弟となる、左大臣九條尚忠の猶子たり、文久元年三月宗祖六百回忌を修す、孝明天皇親翰の報恩講式、歎德文各一卷、及び御香を賜ふ、慶應二年正月天皇師に御衣を賜ふ、是より先き南禪寺内龜山天皇の山陵荒蕪するを憂ひ元治中師修理して舊に復す、依て此賜あり、三年三月大谷佛殿火災に罹る六月皇上再建の綸旨、及び材資白銀七百枚を賜ふ、十月加茂川吉田口新橋成る、明治元年正月三日德川慶喜の兵京師を犯す、勤王の諸藩討ちて之れを退く、師光威をして門徒家臣を率ゐ、朝廷に至り、宮内を守護せしむ、夜に及び飛鳥井某の宅に屯し、且つ九門の內外を巡邏せしむ、四日師金三千兩を獻す、二月朝廷北陸を鎭撫するに方り、明性寺容晶に命して官吏に隨ひて萬民を敎諭せしむ、三月御駕大坂に駐るや津村別院を以て行宮となす、閏月六日光威、尊光、天顏を拜す、此日小屏風一雙を師に賜ふ、十四日光威寂す、乃ち光尊を以て法嗣となす、七月師東本願寺光勝と來往して盟約を定め、九月五に盟書を呈す。專修寺圓提、佛光寺六十麻呂、綿織寺賢慈、亦同しく使を遣はして盟書に與せしむ、蓋し興正寺攝信主して周旋したるなり、明治三年四月光尊東京に赴く、六月師疾あり、十一月大谷佛殿成る、十五日師疾を力めて之を慶す。四年七月口つから遺訓一篇を光尊に授け、門下に布告せしめ、八月十九日寂す、壽七十四、私諡して信法院といふ、著作法語二百餘種、東遊紀行、並に世に行はる、十二子あり、廣義、廣入、廣位、廣注、光威、光尊、澤依、澤慶は其男なり（大谷略譜）

コーチ　光智 一五五四 一六三九 〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、光智俗姓は平氏、山城の人なり、東大寺良緒に師事して華嚴を學び、天曆四年旨ありて東大寺に住し、應和元年少僧都に任ず、三年敕を奉して雨を禱り靈驗あり、安和元年大僧都に進む、天元二年三月十日寂す、壽八十六、師學諸宗に涉ると雖、獨り華嚴を以て己れが任となし、天曆初年尊勝院を剏し、奏

して大經弘通の本處となす、門下に松橋、頼算、觀眞、寛朝等あり、皆一時の碩德なり、(本朝高僧傳)

コーチヨー　光超（……）〔眞言宗〕山城妙法院第四代なり、光超は妙法院の僧正といふ、詔して東寺百四十二代の長者法務に任し、紫宸殿後七日修法を勤め、松橋の跡を繼く、付法一人賢長と稱す、(續傳燈廣錄)

コーチヨー　光超　二三八〇／二四二〇　〔眞宗〕東本願寺第十八代なり、光超號を從如と稱し、別に愚川と云ふ、初めの名は性慧、號を眞聞に呼ふ、享保五年六月十七日生る、海慧法印の子、光海上人の孫、童名は季麿なり、十二年七月二日得度し、大和教行寺の住持となり、延享元年十二月光性上人の法嗣となり、尋いで宗務を執る、三年八月廿五日徳川家重大谷の地一萬方歩を加増す、寛延元年三月二十九日大僧正に任せらる、寶暦十年七月十一日寂す、壽四十一、清淨光院と稱す、(門跡傳、本山寺誌)

コーチヨー　光澄　二三三三／二三九九　〔眞宗〕京師西本願寺第十五代なり、光澄一名は住如といひ、光常の養子なり、左大臣九條兼晴の第三子にして、延寶元年十月十日に生る、貞享三年十一月年甫めて十四、光常養ひて嗣となし、其女を以て之に配す、元祿二年十一月得度し、十一年七月大僧正に任す、十二年二月江戸に赴き、光常寂するに及ひ席を繼く、秋來本德寺昭宣、及ひ父昭尊、顯證寺常剛等師と相協せす十一年春和解を請ひ、一月十五日所司代牧野英成、奉行本多忠英、小濱文隆來りて之を賀す、是日昭宣常剛共に師を見る、是月師江戸に往く、四月上皇牡丹花及嘉肴を賜ひ、十一月光常の男直麿を養ひて法嗣となし、大將軍寺宗使を遣はして之を賀す、師亦使はして之を謝す、十四年八月二條公昭宣父子及ひ常剛罪を光澄に得たるを以て本山をして命して其門を杜閉し、出入を禁ぜしめ、且つ家臣某々を遠島に謫す、十一月三僧の禁を弛め、其餘亦久しくして赦に遭ふ、十六年閏月別院を山科に造營し、前代の古迹を復す、七月鳳尾蕉一株を上皇に獻す、元文四年八月痢を患ひ、六日寂す、壽六十七、私謚して信順院といふ子無し(大谷畧譜)

コートク　光篤　二〇七九／二一三一　〔曹洞宗〕丹波圓通寺の僧なり、光篤字は竹馬、奧州白石の人、源義澄の子なり、十七歳にして京都に到り、一休に紫野大德寺に謁し、祝髮受具す、研究十餘年未た悟らす、出てゝ諸老に參し、虛屋性宙に謁して印可を受け、長祿三年丹波圓通寺に住し、靑原寺に遷つる、文明三年九月二十七日寂す、壽五十三、臘三十七、法嗣慈伯道順一人あり、(日本洞上聯灯錄)

コートクイン　光德院　ギヨーヱ堯慧を見よ、

コーニチ　光日（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、光日は郷貫師承詳かならず、叡山東塔十住院に住し、後梅谷に居を占むること數年、老に臨み愛太子山に移り、妙法を讀誦する數萬餘卷に及ぶ、寂年及壽缺く、(本朝法華驗記)

コー子ン　光然（二一九二）〔淨土宗〕京都知恩院第二十七代なり、光然は浩蓮社德譽と號し、後燈譽を改む、和泉の人聲譽に就て剃髮受業し、其法を嗣ぎて後京都知恩院に住す、又伊勢桑名に光德寺を剏めて開山となり、天文年中寂す世壽欠く、(淨土總系譜)

コーノー　光能　ボーノー房能を見よ、

コーヘン　光遍 二四四〇／二四五二 〔眞宗〕東本願寺第十九代なり、光遍號を乘如と稱す、別に愚聯と呼ひ、延享元年十一月十六日生る、光性上人の第五子、幼名は悅麿、後に光養麿と改む、近衞太政大臣内前の猶子たり、寶暦六年三月十二日得度し、十七年七月十七日宗嗣を繼く、天明八年正月三十日堂宇火災に罹り、大谷別院に移り、寛政元年三月祖堂の再建を企つ、二年將軍家齊飛驒山の巨材二千餘を投して其工を扶く同四年二月二十二日寂す、壽四十九、歡喜光院と稱す、(門跡傳、本山寺誌)

コーホー　光寶 (……) 〔眞言宗〕山城醍醐寺の學僧なり、光寶は中納言光雅の子、勸修寺成寶に師事して密教を習ひ、後醍醐寺成賢に就て兩部の灌頂を受く、幾何ならずして成賢に座主職を讓られしも辭して家傳の書を齎し關東に赴く、成賢朝に訴へ吏をして追しむ、橋下亭に至りて吏官命を告ぐ、師乃ち終夜自ら秘籍を寫し、遂に關左に居りて密肆を開く、寂年及壽欠く、門下に守海、定憲、宗禪等あり、(本朝高僧傳)

コーミヨー　光明 (一八六九) 〔淨土宗〕祖源空上人の高第なり、光明俗姓生國詳ならす、源空上人に師事して淨土宗を受け後越後に往きて法化盛なり、承元三年の頃越後に成覺の弟子一念義を唱ふ、光明極力其邪義を排して功あり、示寂の年月日缺く、(淨土傳灯錄)

コーモン　光聞 (……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の僧なり、光聞字は明溪と云ふ、此山妙在に參して法を嗣ぎ、建仁寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳灯錄)

コーユー　光融 二一五一／二一八一 〔眞宗〕山城本願寺の僧なり、光融字は圓如といひ實如宗主の第三子なり、母は藤原氏、十一歲にして薙度す、青蓮院尊應の門人となり、大納言と假號す、長兄照如早世せしかば法嗣となる、永正十年家衆師に就きて賀正の儀薙度の儀等を定めんことを請ふ、師乃ち實如宗主の旨を受け之を定む、同年法制數章を書して諸徒を諭示す、蓮如宗主の法語諸書に散在せるを採集して八十章を選ひ、年時の次に從ひて編し四帖となし、年時不明のものを第五帖となす、大永元年八月二十日早朝編集功成り午時寂す、壽三十一、偏增院と號す、二子一女あり、(本願寺通紀)

コーヨ　光譽 (……) 〔眞言宗〕山城東寺の第百二代長者なり、光譽は中納言僧正といふ、成瑟の法を嗣き、安祥寺に住す、詔して東寺百二代の法務に任し、僧正に叙す、師寺に居らずして常に上野に居る、付法の弟子眞伊、隆雅の二人を出たす、(後傳燈廣錄)

コーヨ　光譽　イチクー一空を見よ、

コーヨ　光譽　クワイサン快山を見よ、

コーヨ　光譽　マンリヨー滿靈を見よ、

コーヨ　光譽　シユバイ朱梅を見よ、

コーヨ　光譽　シユードン宗呑を見よ、

コーヨ　光譽　ソカク素覺を見よ、

コーヨ　光譽　ソキユー祖岌を見よ、

コーヨ　光譽　ソンヤ存也を見よ、

コーヨ　光譽　リテン利天を見よ、

コーリン　光林 二〇三三 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、

光林字は放牛俗姓不詳、關提具に師事し、其法を嗣ぐ、京師八坂の法觀寺に住す、建長、(鎌倉)建仁、天龍、南禪(以上京師)の諸大刹に歴住し、法化甚だ盛なり、應安六年八月九日東山護國院に寂す、遺偈、一來一去、全生全死、虎咬ニ大蟲ヲ、蛇吞ニ鱉鼻ヲ、(延寶傳灯錄 本朝高僧傳)

コーリン 光隣 二二九六 〔臨濟宗〕京都東福寺の僧あり、光隣字は芳卿と云ふ、圭甫璝に參して法を嗣ぎ、大永四年東福寺に主となる、天文五年六月十四日寂す、寶勝に塔す、(延寶傳灯錄)

コーリン 光輪 二四九九 二五五八 〔曹洞宗〕伊豆修禪寺の禪僧なり、光輪は新潟縣の人、後ち甲斐北巨摩郡折居に住す、因て折居を以て氏となす、幼にして出家の志あり、甲斐雨宮寺に投して薙髮す、壯年に及ひて相模の海藏月潭師に隨侍し、次て穆山禪師に師事すること數年、明治十一年甲斐の藏前院に住して初めて法幢を建つ、全年九月大學林の學監に任せられ、十二年助教師に任す、二十二年教師に進級し、廿五年志摩常安寺に移る、廿六年大學林教師に任せられ、廿八年總監を兼任し尋いて伊豆修禪寺に移る、全三十一年寂す壽六十、

コーリュー 光隆 ホーケン鳳健を見よ、

コーロー 光朗 二四四〇 二五二五 〔眞宗〕東本願寺第二十代なり、光朗號を達如と云ひ、別に愚泉といふ、安永九年四月一十六日に生る、十九世光遍上人の第五子にして、童名は光養麿、近衞内前の猶子たり、寛政四年二月十九日得度し、同月二十二日宗務を繼き、六年正月十三日大僧正に任す、八年本堂の再建を企て、十年落成す、又大門の再築に着手し、享和元年落成す、文政六年十一月十五日火災に罹り、大谷に移住し、天保六年兩堂の再興工了る、天保十二年法嗣光淨寂するを以て三子光勝を法嗣とし、弘化三年退隱す、安政六年十一月二十日孝明天皇勅して紫衣純色を着することを許し給ふ、萬延元年十二月齡八十に滿つるを以て鳩杖を賜ひ、特に杖朝を許さる、慶應元年十一月四日寂す、壽八十六、(門跡傳、本山寺誌)

コー 康(……) 〔曹洞宗〕某寺の禪僧なり、康字は泰伯長門大寧寺大菴須益に師事して其印可を受け、未た出世に及はすして寂す年時傳らす、(日本洞上聯燈錄)

コーイ 康依 二〇八九 七條佛所十四代佛工なり、康依は康俊の子なり、法眼に敘せられ辨殿法眼といふ、永享年間の人なるへし、

コーウン 康運 (一八七三) 七條佛所八代佛工なり、康運は湛慶の繼嗣にして實弟なり、後ち定慶と改む、又一に聖慶に作る、高山寺の四天王等身像各一軀並に各三尺の侍者等を作り、又後鳥羽天皇の御宇東寺中門二天を作るといふ、按するに建保年中の人にして、早世したるなるへし、(佛工系圖、高山寺緣起)

コーウン 康運(……) 七條佛所佛工なり、康運は康助の長子なり、式部卿と號す、

コーエ 康惠(……) 七條西佛所の佛工なり、康惠は康佑の子にして、右京と號し、大坂に住す、

コーエー 康永 (二一二〇) 七條佛所十七代佛工なり、康永は康吉の子なり、東寺佛師職に補し 法印に敘し、大夫法印といふ、數軀の佛像を作る、寛正永享の頃の人なり、

コーエー　康永（……）七條佛所二十三代佛工なり、康永は其血緣詳かならず、康人の系を引きて二十三代の佛工となり、法橋に任す、（大佛師系圖）

コーエー　康英（……）七條西佛所の九代佛工なり、康英は康慶の子なり、

コーエー　康榮（……）七條西佛所四代佛工なり、康榮は康祐の子なり、

コーエン　康圓（……）七條佛所佛工なり、康圓は康達の子なり、但馬法印と號し東寺佛師職に補す、其作多く傳はらず、

コーオン　康音（二三四三……）二十三代佛工なり、康猶の子にして父の系を受け、別脈相承す、東寺本佛師職に補し、法眼に叙す、天和三年三月二日寂す作るところ江戸城東照宮普賢延命伊勢御神體等あり、

コーオン　康音（二二八四）七條西佛所の佛工なり、康音は康溫の子なり、宮內卿と號す、寬永元年淸水寺諸佛半分之を作るといふ、（大佛師系圖）

コーオン　康溫（二二二六）七條西佛所の佛工なり、康溫は康秀の二男なり、法眼に叙せられて大藏法眼といふ、永享文正年代の人なり、

コーキツ　康吉（……）七條佛所十六代佛工なり、康吉は康滿の子なり、家系を嗣ぐ、

コーキヨー　康慶（一八五五）七條佛所五代佛工なり、康慶は肥前と號す、康助の二男なり、兄康朝に越えて父の業を繼ぎ五代たり、長寛二年後白河法皇の勅により平重盛蓮華王院建立の事に當る、其本尊千手千眼觀世音一丈六尺の像は、大佛師行慶の作と傳ふるも、實は康慶の造るところにして、行慶は開眼導師なり、其兩側の千手觀世音六尺三寸の像一千躰の內三百躰は康慶幷に其子運慶の造るところにして、餘は京師四流の佛工の造るところなり、壽永二年の頃、法橋に叙せらる、文治四年六月奈良南圓堂不空羂索觀音　幷に四天王六祖師の像を造る、建久二年九月南大門金剛力士を造る、六年東大寺四天王の內南方天を造る、世に佛像に玉眼を箝入する法は運慶に始まると云ふも、其實は康慶已にこれを創したりと云ふ、寂年缺く、一說に久安六年七月廿九日歿と云ふも信ずべからず、（玉海、東大寺造立供養記、僧綱補任、大佛師系圖）

コーキヨー　康慶（……）七條西佛所の八代佛工なり、康慶は七代康猶の子にして、法橋に叙せらる、

コークー　康空　シドー宗導を見よ、

コークー　康繼（……）七條佛所佛工なり、康繼は康運の二子にして宮內卿と號す、

コーサイ　康濟（一四八八―一五五九）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、康濟俗姓は紀氏、越前敦賀の人なり、比叡山に登り、光定に師事して顯密二教を學び、後智證大師を拜して傳法阿闍梨灌頂を受く、貞觀元年敕により大極殿最勝經の王講會に問者となり、寬平六年秋延曆寺の座主に任す、時に年六十七歲なり、職にあること三年なり、又詔ありて園城寺の長吏となる、昌泰二年二月八日寂す、壽七十二、臘四十八、（本朝高僧傳）

コーシユ　康守（一四七五）〔眞言宗〕空海上人の弟子なり、康守其詳傳なし、弘法大師の弟子にして、弘仁六年春夏の交

大師道俗を募りて祕藏の法門を寫せんとする時、師安行と共に之に力を盡すと云ふ(弘法大師弟子譜)

コーシユー 康秀 (二一九三) 七條佛所二十代の佛工なり、康秀は康琳の男なり、天文三年二月東寺佛師職に任す、(大佛師系圖、佛工系圖)

コーシユー 康秀 (二〇五四) 七條西佛處五代佛工なり、康秀は康榮の子なり、法眼に叙せられ下野法眼と號す、東寺佛師職たり、應永年中の人とす、(大佛師系圖)

コーシユー 康修 (……) [眞言宗] 祠空海上人の弟子なり、康修詳傳なく只空海の徒弟なりと云ふのみ(弘法大師弟子譜)

[考] 修と守と同音相通す故に或は康守のことならんと云ふ

コージユー 康住 (……) 七條佛所二十四代佛工なり、康住は其血緣詳かならず、康永の系を引きて二十四代の佛工たり、法橋に任せらる、(大佛師系圖)

コージユー 康住 (……) 七條西佛處の佛工なり、康住は六代康淸の二男にして七代康淸の弟なり、

コーシユン 康俊 (二〇〇七) 七條佛所十三代佛工なり、康俊は運助の長子なり、紀伊海部郡冷水蒲楞伽山海雲禪寺の本尊釋迦は寺傳に康俊の作と稱し、其後背に貞和三年六月と刻す、蓋し其時代の人にして、其自作たるへし、(佛工系圖)

コーシユン 康俊 (一八三五) 七條佛所佛工なり、康俊は康朝の弟子なりといふ、安元年頃の人なり、(多武峯略記)

コージヨ 康助 (一八〇二) 七條佛所佛工なり、康助は康吉の第二子なり、老僧と號す、

コージヨ 康助 (一八〇二) 七條佛所四代佛工なり、康助或は豪助に作る、賴助の子なり、長保二年の頃已に法橋となり、康治元年六月の頃法眼に上る、其沒年缺く、一說に天承元年二月八日寂すとあれとも、眞としかたし、其造佛多し、(僧綱補任、中右記、人車記、)

コーシヨー 康正 (二一九四 二二八一) 七條佛所二十一代佛工なり、康正は康秀の子なり、法印に叙し東寺佛師職に補す、四條烏丸永屋町に入居す、山崎寶寺の彌勒尊、觀自在菩薩二王行基の諸像を修覆す、天正十一年閏正月山門日吉神輿幷に佛像を修覆する等其修造の業多し、元和七年正月十日寂す、壽八十八、(大佛師系圖、佛工系圖、大佛師死亡年月取調)

コーシヨー 康正 コーシヨー康勝に同し、

コーシヨー 康尙 (……) 七條佛所佛工なり、康尙一に康昭高成又は康淨に作る、光孝天皇の皇子、一品式部卿是忠親王の第七子、(一に第六子)四品英我王の孫にして、父は從五位下日向守源康信なり、師初め尾張掾となり、次て從五位下丹波守となり、後淸水寺凡僧となる、長保寛弘の年間屢々命を奉して古佛を修し、彩色料を下賜せられ、又多く佛像を彫る、後淸水寺別當に補せられたりと云ふも詳ならす、其沒年月日亦詳ならす、(皇胤紹運錄、尊卑分脈圖、權記、長秋記)

コーシヨー 康淸 (……) 七條西佛處七代の佛工なり、康淸は康淸の子なり、父子同名なり、一に弘淸に作る、宰相と號し、東寺佛師職に居る、或は康淸は養子にして攝津の人なりといふ、(大佛師系圖)

コー(康)シ

コーシヨー　康清（………）　七條西佛所佛工なり、康清は康秀の子なり、法印にに敍せられ豐後法印と稱す、東寺佛師職たり、

コーシヨー　康勝（………）　七條佛所九代の佛工なり、康勝、に康定、康正に作る、運慶の四男にして本名を康海といふ、家名を嗣きて九代となる、法眼に叙す、東寺御影堂に安置する北面大師像は師の作なり、（東鑑、佛工系圖）

コーシヨー　康昭　コーショー康尙に同し、

コーシヨー　康乘（二三二二）京師の佛工なり、康乘は、寛文二年三月法橋に敍せられ、名工の稱あり、

コージヨー　康淨　コーショー康尙に同し、

コージヨー　康定　コーショー康勝に同し、

コーソン　康尊（二三三二）七條西佛處二代の佛工なり、康尊は康與の子なり、法眼に叙せられ、侍從法眼と號す、東寺佛師職に居る、

コータン　康湛（………）　七條佛所十五代佛工なり、康湛は康依の子なり、家系を繼く、詳傳なし、

コータン　康湛（………）　七條佛處の佛工なり、康湛は康音の子なり、江戸に住す、

コーチ　康知（二三二一………）　二十四代佛工なり、康知は康音の子にして東寺木佛師職に補し、法眼に叙す、正保四年八月日光山の虚空藏を作り、又慶安七月東叡山東照宮の隨身内陣及び外陣の獅子狛犬等を作り、其他にも幕命を蒙りて造るもの多し、寛文元年十一月二十二日寂す、

コーチン　康珍（二二五二）　七條佛所十八代佛工なり、康珍は康永の長子にして家系を繼き法印に叙せらる。明應年間の人なり、

コーチン　康椿（………）　七條佛所佛工なり、康椿は運助の三子なり、詳傳缺く

コーチヨー　康朝（一八一四）　七條佛所佛工なり、康朝は康助の男なり久壽元年の頃には法橋に叙せらしものゝ如し、詳傳缺く、（人車記）

コーニユー　康入（………）　七條佛所二十二代佛工なり、康入は康正より系を引き、二十二代となる、東寺の木佛師院御時御守本尊不動尊を刻すといふ、（大佛師系圖）

コーベン　康辨（………）　七條佛所十代佛工なり、康辨は運慶の三男なり、法眼に叙せらる、（大佛師系圖）

コーホ　康甫（二二九五／二二七八）〔臨濟宗〕仙臺東昌寺の禪僧なり、康甫字は大有、俗姓は伊達氏、左京大夫植宗の第十三子なり、甫めて六歲僧となり、虛寂禪師に從ひて法を受け、後廣智禪師の法を嗣きて無爲山東昌寺に住し。又東福寺に入り、庵を正覺菴の側に結ひてこれに住し、一風軒と號す、其後退きて一風軒を東昌寺の内に造り、終焉の室となす、且護國　智松、乾德三院を創め　東昌寺の塔頭となす、元和四年九月十日寂す、年八十四、其將に寂せんとするや、弟子玄淸、師の像を寫して讃を請ふ、康甫筆を執り自ら書して曰く、百醜千拙、老傀有餘、金縷衣衲、馬牛襟裾、と、東昌寺に鐵鉢あり、重さ數斤又一鎗あり氷鋩銳利。柄其鐵を衣す、長さ丈餘、皆康甫の遺

物と云ふ、其身材の雄健なる思ふへし（仙臺史傳）

コーユー 康祐（……） 七條佛所佛工なり、康祐は運助の二子なり、別居して七條東佛所といふ、別に一流を始め、法眼に叙せらる、

コーユー 康祐（……） 七條佛所佛工なり、康祐は康運の長子にして、或は康猶に作る、三位又は式部卿と號す、法印に叙す、

コーユー 康祐（……） 七條西佛處三代佛工なり、康祐は康尊の子なり、法印に叙せられ、豐前法印と號す、東寺佛師職に居る

コーユー 康祐（二三二二）京師の佛工なり、康祐は京師柳馬場二條上る町に住し、左京法眼と稱す、寛文二年六月法橋となり、その後法眼に上りたるものならん、

コーユー 康祐（……） 七條西佛處の佛工なり、康祐は康住の子にして、右京と號す、

コーユー 康猶 二二九二（……） 七條佛處二十二代佛工なり、康猶は二十一代康正の子にして、別に一脉を引く、東寺木佛師職となり法印に叙す、寛永八年十二月日光山及ひ増上寺等の佛像神躰を刻し、寛永九年六月十一日寂す、

コーユー 康猶 コーユー康祐に同し、

コーヨ 康譽（……） 七條佛處佛工なり、康譽は九代康勝の男なり、七條西佛處といふ、

コーヨ 康譽（……） 七條西佛處初代佛工なり、康譽は七條佛所九代法眼康勝の二男にして師法印と號し七條西佛處一流の始祖たり東寺木佛師職に補す然れとも其作傳はらす法印に叙せられしか慥かならす

コーリン 康琳（……） 七條佛所十九代佛工なり、康琳は康珍の男なり一說に美濃の人なりといへは或は養子ならん法眼に叙せらる高野大塔の本尊胎藏界大日像を作る（大佛師系圖）

コーイン 公尹 一七一二—一七九四〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、公尹は藤原伊房の子なり、幼より園城寺に入りて賴豪に師事し、顯密の法を學ふ、後覺圓僧正に傳法灌頂を受け、益々所業を究む、承暦元年法勝寺最初の阿闍梨に補し、尋いで聽衆に列し、寛治四年二會の講席を司とる、康和二年最勝會の講師となり、承久元年大僧都に轉す、大治五年證義者を兼ぬ、師嘗て四季の講を修し、諸祖の恩に報す、時人師及ひ證觀、禪仁、覺俊を併せて三井の四傑と呼ふ、長承三年閏十二月十九日寂す、壽八十三、（本朝高僧傳）

コーイン 公胤 一八七六……〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、公胤は中院右少將憲俊の子なり、夙に三井寺に投して、經論を習ひ明王院に任す尊勝陀羅尼を誦すること毎日二十遍なり、師三藏を周覽して顯密に粹なり、園城寺の長吏に補して僧正に任す、大貳僧正と云ふ嘗て源空の專念の法を唱ふるを嫌ひて決疑鈔三卷を作り學佛房に附し源空上人に呈す一日源空と宮中に逢ひ、一度語を交へて遂に決疑鈔を燒き、爾來屢吉水に往き、往生の法を問ふ、師晩年印を解きて禪林寺側に屛居し、建保四年六月二十日壽八十餘（一說七十三）にして寂す、（本朝高僧傳、淨土傳燈錄、淨土惣系譜）

コーイン　公因　インツン院算を見よ、

コーエン　公縁　一八三四一九二一　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、公縁は公胤に就きて得度受戒し、又顯密兩宗を學び、仁治二年本寺の長吏となり、九月十八日拜堂し、終に大阿闍梨位に登る、弘長元年十月廿九日寂す、壽八十八、（三井續灯記）

コーエン　公縁（一九〇九）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、公縁は參議藤原實相の子なり、初め興福寺の憲圓に從ひて法相學を研め、東北院圓玄の法を嗣きて其席を補す、建暦二年敕により維摩會の講師となる後興福寺々務を領し、權僧正に任ず、建長中寂す壽六十九、（本朝高僧傳）

コーエン　公圓　一八二八一八九五　〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、公圓は左大臣實房の子なり、出家して良圓慈鎭の二師に台教を學び、建暦三年四十六歳にして天台座主に任ぜらる、嘉禎元年九月二十日寂す、壽六十八、（天台座主記）

コーエン　公延　二四二三二四六三　〔天台宗〕近江滋賀院第十代の門跡なり、公延俗名は方仁、桃園天皇の養子にして閑院典仁親王の第四子なり、寶暦十二年十月四日に生る、安永元年十一月親王宣下、同九年滋賀院に住す天明六年五月八日天台座主職に補せらる、六月牛車を聽され、七月檢封阿闍梨に任す、八月座主職を辭し、寛政三年七月職を辭す、享和三年五月二十七日寂す、壽四十一、（門跡傳、滋賀院歷代）

コーガ　公雅（………）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、公雅俗姓は源氏右中辨雅綱の子なり、公顯に就て得度受具し、良慶に參して台宗を究む、寂年及壽歆く、（三井續有記）

コーカイ　公海　二二六七二三五五　〔天台宗〕江戸寛永寺の第二代なり、公海は久遠壽院と號す俗姓は藤原氏、花山院左大臣定熙の孫、左少將忠長の子なり、母は東本願寺敎如の女慶長十一年を以て生る、父忠長故ありて東奥に貶せられ、其弟定好家を襲ぐ、故に師幼にして母家に養はる、元和六年十四歳の時、慈眼大師關東より來りて京都に居り、師々乞ひ受けて繼嗣となす、九年十七歳大師に從ひて駿府に往き、總持院に於て薙髮す、寛永元年大師東叡山に寛永寺を開くと聞き、これより侍して同寺に居り、敎觀を習ひ、瑜伽を學び、傍ら國風を受く、初め後陽成院大師に皈依し、毘沙門堂門室久しく廢れたるを以てこれを興復せしめんと欲し、敕して其號を大師に賜ふ、大師これを師に授く、これより師を稱して毘沙堂門主と云ふ、將軍秀忠の命により九條幸家の猶子となり、同三年二十歳にして法眼に敘せられ、累官して權僧正に進む、十七年二品堯然親王奏請して師を一身阿闍梨職に補す、尋で親王に從つて五佛灌頂を受く、二十年大師寂するに及び、將軍家光の命により席を繼ぎて東叡山に住し、兼ねて比叡日光兩山を領し、天台宗を管攝す、これより家光の特遇を受け、正保四年僧正に轉じ、慶安四年大僧正に進む、承應二年四十八歳天台宗を統領すると凡そ十二年にして一品尊敬親王に法務を讓り、一室を築きて退居す、天和二年七十六歳毘沙門堂を公辨親王に付し、後西院上皇に奏して久遠壽院の號を賜ふ、元祿八年病に罹り京都に至りて保養し、幾何ならずして寂す、壽八十九、臘七十三、（事實文編、門跡傳）

コーカン　公巖　二四一八二四八一　〔眞宗〕羽前淨福寺十四代なり、公巖は海德院と號す、寶暦八年に生る、母は淨福寺十二代公

圓の女にして、妙貞尼と稱し、父は越後鬼伏西性寺常染院淨誓の子にして公勤と云ふ、淨福寺の養子なり、師廿歳に及ひて京都に出て、五畿の間に遊方して名師の門を叩き、安永年中成唯識論述記樞要、了義燈、及ひ圓覺經疏等を研究す、南海寄歸傳を讀む際、內典の傍ら外學を習ひて人を敎導すへきを覺り、以後內外の兩典を兼修す、初め徂徠派の學を汲み、後皆川淇園の門に入り、經史諸子百家、及ひ詩文を研究して造詣するところあり、天明五年七月廿四日父を喪ふ、此年十月和泉堺に顯道の觀音玄義を講するを聽く、六年正月京師の寓舍にて華嚴還源觀を講す、同年四月入院式を舉行す、八月本山燒失し、三月上京す、此年寓舍に於て末燈鈔、大原問題標譜義門問答決擇、唯信鈔文意を講し、且つ淇園の門に易原を學ふ、九年正月和泉堺常通寺に一念多念證文を講し、三月音記を學ふ、寛政元年三河伊勢等に至りて講說す、三年九月本間光丘鐘樓を寄進す、六年正月塔中及ひ檀越に書を遺して京に上りて華嚴天台の學問を事とす、普門律師より梵曆天文學を傳ふ、律師師に靑磁香爐と金襴袈裟を贈れり、時に三十七歲なり、十年寺堂燒失す、翌年本間光丘黃檗版大藏經を寄進す、同年寺の後庭に隱栖の處を築き靜思觀といふ、淇園其記を作る、享和年間宗義上の事に付き法主に糺問せられ、文化二年許を得て鄕に皈る、淇園の門下及ひ師の弟子數十人詩文を贈りて其行を壯にす、（淇園の文は文集第五卷に載たり）文化九年以後各地を巡錫し、文政二年の春修眞院韜光より書法大師流を皆傳す、文政四年八月十一日北國遊化の途中加賀國イブリ橋に於て寂す、壽六十四、師性博學强記なり、內典は華嚴天台の秘奧を探り、梵曆天文に通し、外典は和學に精しく、漢學は經史に達し、詩文を能くす、書法も初め王義之の草體を學ひしが、後大師流を得て筆致遒勁なり著作講錄は、雜行雜修、一念多年證文、憲章記、止觀大意、改悔文、天台佛心印記、正信偈逋元記、因願成就濟輔記、一心三觀略述、二河譬喩記、六字釋手記、易行品、淨土論略要、文類聚鈔行信記、改邪鈔、一念多念分別事記、歩船鈔手記、不如實修行五首和讃、末燈鈔錄　卷頭二首私考、廣文類深解科文、序題門稿、十字尊號略釋、御文大意、淨土眞宗敎相第一聖淨一躰圖說、梵曆筆記、眞義分錄、大乘義章、五敎章、倶舍論、探玄記、法華義疏、華嚴大疏章、易、史記、左傳、五經、老子假名解、易原九疇說解、其他寫本若干部あり、（菊池秀言氏返信、公嚴上人事歷）

コーキヨー　公曉（一九七七）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、公曉は文保元年東大寺の別當に任す、寂年欲く、（東大寺別當次弟）

コーキヨー　公慶（二三〇八—二三六五）〔華嚴宗〕大和奈良東大寺龍松院の僧なり、公慶字は敬阿、俗姓鷹山氏、丹後宮津の人、（一說河內の人と云ふは非なり、）父は賴茂、母は四宮氏なり、賴茂の先は源賴光より出つ、師は慶安元年十一月十五日に生る、第七子なるを以て小字を七之助と云ふ、父初め丹後の京極高廣に仕へたるも、故ありて致仕し、南都に移り住し、落髮して自省と號す、師は萬治三年十二月九日十三歲にして東大寺大喜院に入り、英慶法印に師事し、翌日得度し、式部卿公慶と云ふ、其後日夕大佛像の傾毀して瓦礫草萊の中に露坐するを見

て大息し、再興の志あり、蓋し大佛の殿宇は、永祿十年十月松永久秀の亂に兵火に罹り、以來再興の擧なし、師先つ學業を勉め、三論、華嚴、天台、眞言、律の諸宗研究せさるなく、知恩院の孤雲を請して念佛を傳ふ、幾もなく龍松院に住し、講席を張り名聲大に揚る、天和三年三十六歳諸院主に說きて再興の擧を謀し、貞享元年五月三十七歳江戸に至り、幕府に訴へて大勸進の許可を請ふ、幕府其大事業なるを以て、數々師を召して詰問したるに、再三固く請うて止ます遂に六月九日許可を蒙る師大に喜び南都に歸りて父母に告く、父母亦大に喜び、吾等寄附の首とならんとて、其齡の數に隨うて金額を寄附し、師を策勵せり、翌二年三月、再ひ江戸に至り、滯留數月にして西歸し、十一月二十九日、大佛の前に法會を修し、即日草鞋を着けて出發す、昔し治承四年十二月、平重衡の亂に殿宇兵火に罹りたりしが、養和元年俊乘坊重源再興の志ありて天下に勸進し、建久六年三月に落成したり、師は深く重源を景仰し、その遺蹟に勸化院を設け、且つ重源の用ゐたる小木杓を摸作し、自ら之を携ふ、難波京師を經て、六十餘州を遍歷す、富者は五百金二百金貧者は二錢一錢を投し、貴賤貧富皆其分に應して誠を致し、相競うて師の事業を助く、難波の商家某銅三百斤を寄附す、其大さ瓜の如きもの三千餘箇あり、人々相議して舟車の便により運送せんとす、師直に筆を執り書して曰ふ、※大佛殿所用の銅と、悉く路傍に捨てゝ去る、通行の人々各携へて東大寺に至り、七日にして其數全く備りたりと云ふ、同年七月十九日父賴茂卒す、壽八十五なり、師喪を修す、元祿元年四月二日より八日に至り、僧衆千人工匠五百人を招き、大佛殿造營の盛儀を擧く勸修寺宮二品濟深法親王これか導師たり、八月十二日勅あり上人號を賜ふ、六二年二月二十三日勅を奉して院内に金殿を搆へ、聖武天皇の尊像を安置す、三年難波の奉行に請ひ、南島の地を借り、木材を置く、因て後人大佛島と呼ふ、即ち大佛島より舟揖して淀河に入り、木津の岸上に至る、同地より大車を以て輓く、大木材は牛三四十頭、役夫三百餘人、小木材は牛三四頭、役夫七八人を要したりと云ふ、大佛像の躰中空廓にして、木材を交叉して支持す、師其木材を新にして修補し、舊木材の朽餘を以て自ら佛像を彫刻するもの凡そ一千餘躰なり、人々の請ふに任せてこれを附與したり大殿の焦土積集して石座を沒したりしかは、師自ら畚鍤を把りて勞役に服す、見聞する者皆師の熱誠に感し、相競うて勞役に服す、凡そ一萬餘人三日にして功を畢る、元祿五年三月八日佛像修補全く成る、勅して開眼の供養會を行はしむ、初

公慶上人

め師以爲らく佛像の修補は忽緒にすべからす、我豈安臥するを得んやと、貞享二年以來坐して眠ること七年なり、今年四月九日に至りて始めて側臥したり、八月母沒す、壽七十七、元祿七年六月師長門安武郡に至る、龍藏寺を問うて天平の遺事を聞く、九月將軍綱吉の召により長崎より馳せて江戶に至る、十一月十六日將軍特に命して諸國勸化の便宜を與へ、所謂人別奉加を許さる、十一年諸國に命して封祿一万石に一万疋、以下これに準して金額を寄附せしめらる、且つ南都の奉行妻木氏を大佛殿再興の總督となす、爾來天下の諸侯使者を送りて金額を寄附する者、常に總督の館に滿つ、寶永元年四月十一日南都大火あり將に大佛殿の木材に及はんとす、師大息して曰く今にして木材災に罹らば、予も共に焚死せんのみと、幸にして免るを得たり、寶永二年四月十日上棟式を行ふ天下の諸人來賀する者群をなせり六月一日師南都を發し、伊勢に過りて大廟を拜し、十四日江戶に入りて將軍に謁して、其恩光を拜謝す、二十七日江戶に在りて痢を患ふ、七月十二日に至り、師自ら死期を知り、弟子に遺言して曰ふ南都の奉行妻木氏幕府の命を承けて再興の經營に當る、不日落成すべし、予死すも遺憾なし、汝等勉めよ、と、晏然として寂す、壽五十八なり、弟子大進遺命により南都に歸葬せんとす、幕府故例諸侯のほか歸葬するを得さるを以て、大進の箱根今切兩關の繻を求むるを拒めり、大進遺命に違ふに忍ひずして再三哀訴し、遂に特例を以て許さる、七月二十日江戶を發し、八月一日南都に歸り、同十一日東大寺の管下五劫院に葬る、佛工性慶師の像を彫造し、弟子即念久しく師に親事したるを以て手つから頭面を模刻したり、今現に東大寺公慶堂に安置す、（本文の間に掲くるものは即ち其の縮寫にかゝる、）師著作重興大佛殿讚頌集一卷あり（公慶上人年譜、近世畸人傳、續日本高僧傳）

コークワン　公觀（一七七八）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、公觀字を成就と稱し、遠江阿闍梨といふ、京都の人、遠江守公房の子なり、元永九年三月八日三寶院道場にて定海に傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

コークワン　公寬（二三五七／二三九八）〔天台宗〕輪王寺門跡なり、公寬は俗名有定、三宮と稱す、出家して覺尊と云ひ、後公寬と云ふ、號を桂州と云ふ、東山天皇第三の皇子、母は春日局、小無瀨宰相兼豐の女、實は冷泉中納言爲經の女なり、元祿十年二月廿一日誕生し、三宮と云ふ、同十年八月十六日（一に十七日）圓滿院行悳法親王の附弟となる、寶永五年八月三十日親王宣下、同年十一月廿五日圓滿院入り得度し、覺尊と云ふ、戒師は寶性院の僧正なり、正德三年十二月十八日公辨法親王の附弟となり、法名を改めて公寬と云ふ、同四年正月四日坂本滋賀院に移り、二月一日關東下向、東叡山に赴き、四月廿三日二品に叙せらる、同五年五月二日受職、享保二年二月廿九日一品に叙せらる、三年六月十三日天台座主に任せらる、七月廿一日牛車を聽さる十月廿六日座主を辭し、十六年五月廿七日再び座主に任せらる、八月廿七日准后宣下、同十月九日座主を辭す、元文三年三月九日江戶に於て退隱、崇法院宮と號す、同月十五日寂す、壽四十二なり、師書を善くし、筆蹟世に傳はれりといふ、（本朝皇胤紹運錄書總、近代御由緒云、續門跡譜、門跡傳、書家人名畧）

コーケー　公啓　二三九二―二四三二　〔天台宗〕近江滋賀院の第八代門跡なり、公啓は始の名は良啓といひ、櫻町天皇の養子、（一說に中御門天皇の養子）にして實は閑院典仁の連枝（一說に直仁親王の子）なり、寶曆二年滋賀院に辭し同十二年五月十八日天台座主職に補す、六月に牛車を聽さる、十月檢封阿闍梨に補す、安永元年七月十六日寂す、壽四十、最上院と號す（門跡傳、滋賀院歷代）

コーケン　公顯　一七七〇―一八五三　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、公顯は安藝守顯康の子、智證の門徒なり、文治六年天台座主に任し、建久四年九月十七日寂す、壽八十四、（天台座主記）

コーケン　公顯　……二四三六　〔天台宗〕日光輪王寺門跡なり、公顯は淸淨心院と號す、安永二年十月毘沙門堂に入り、後、輪王寺に入る同九年七月十日寂す、（門跡傳）

コージユー　公什（―一九七三）　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、公什は正和二年に座主となり、橫川の長吏を兼帶す、寂年欽く、（天台座主記）

コージユン　公遵　二三八二―二四四八　〔天台宗〕近江滋賀院第七代門跡なり、公遵は隨意行院と號す、中御門天皇第二の皇子母は櫂典侍實業卿の女にして享保七年に生る、元文三年三月滋賀院に住す、延享二年五月二十六日天台座主に補し、六月牛車の宣を賜ひ、七月檢封阿闍梨に補す、九月座主職を辭す、寬延二年四月四日重ねて座主職に補す、同月十一日中御門天皇十三年忌に仙洞にて庭儀曼荼羅供、並に法華三昧を修するにあたり、師導師となる、七月准三后に宣せらる、寶曆二年八月職を辭す、安永元年九月二十七日また座主職に任して第九代となる、同九年三月職を辭し、天明八年二月二十五日寂す、壽六十七、（門跡傳滋賀院歷代）

コーシヨー　公紹　二四七五―二五〇六　〔天台宗〕近江滋賀院第十三代門跡なり、公紹俗名は彰信といふ、有栖川中務卿韶仁親王の子、仁孝天皇（一說に光格天皇）の養子なり、文化十二年九月十三日に生る、文政十年三月廿五日親王となる、四月廿五日里坊に入室して、即日得度す、弘化三年十月十九日寂す、壽三十二、普賢行院と號す、（門跡傳、滋賀院歷代）

コーシヨー　公證　二四三六―二四八八　〔天台宗〕近江滋賀院第十一代門跡なり、公證に公澄に作る、俗名は弘道といひ、伏見兵部卿邦頼親王の第二子にして後桃園天皇の養子となる、安永五年十月廿九日に生る、寬政元年六月十一日親王を宣下す同三年滋賀院に住す、十一年五月十日天台座主に補す、同年八月職を辭す文政十一年八月七日寂す、壽五十三、歡喜心院と號す、（門跡傳、滋賀院歷代）

コーシヨー　公紹　……一九七九　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、公紹俗姓は藤原氏、中納言實世の子なり、俊譽法師に灌頂を受け、權少僧都に任し、醍醐寺に住す、嘉元三年春東寺の長者となる、文保二年僧正に進み、護持僧となる、元應元年東寺の主となり、八月十日寂す、壽欠く、（本朝高僧傳）

コーシヨー　公聖（―一九二九）〔眞言宗〕京都發心院の學僧なり、公聖號を淨阿と云ふ、京都の人なり、初め大和中山寺に入りて密教を習ひ、南北の間に往返して仁和勸修の諸流を傳へ、文永六年戒壇院に於て、圓照に戒を受け發心院を創建して盛んに密敎を唱ふ、寂年及壽缺く（本朝高僧傳）

コーチヨー 公澄　コーショー公證を見よ、

コーハン 公範　一七四六……〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、公範は朝晴大夫平以康の子長保法師に從ひて法相を受け、天喜元年維摩會の講師に坐す、初め新院に住し、興福寺に補し、權僧正に任す、應德三年十月九日寂す、壽缺く、弟子俊範あり、藤原俊家の子にした法相を學び、承和三年維摩會の講主となり、應德元年四十歲にて寂す、(本朝高僧傳)

コーハン 公範　リョーキ了軌を見よ、

コーベン 公辨　二三三九……二三七六　〔天台宗〕輪王寺門跡なり、公辨は俗諱秀憲、字は修禮、號は玄堂、別に貴宮と稱す、後西院天皇第六皇子なり、母は六條局、前權大納言定矩の養女なり、寬文九年八月廿一日に誕生す、延寶二年五月一日毘沙門堂に入り、同六年十月十九日親王宣下、同月廿六日得度す、戒師は大僧正公海なり、天和二年八月十二日二品に叙せらる、元祿三年三月十九日關東下向輪王寺に入る、同五年四月七日一身阿闍梨となり、五月七日東叡山に於て公海より灌頂を受く、六年三月廿一日一品に叙せらる、六月九日天台座主に任せらる、九月廿三日牛車を聽さる、十月十八日座主を辭す、寶永四年六月三日再び座主に任せらる、十一月六日准三后宣下、十八日座主を辭す、正德五年五月五日江戶に於て退院、大明院と號す、享保元年四月五日入京山科毘沙門堂に隱居し、同月十七日寂す、壽四十八、滋賀院に葬る、師書法を狩野常信に問ひ、筆力柔順なり、(續門跡譜、門跡傳、本朝皇胤紹運錄書繼、近代御由緒云、扶桑諸人傳、)

コーヨ 公譽　リョーエン靈圓を見よ、

コーアン 高菴　シキユー芝丘を見よ、

コーウン 高雲　ソリョー祖稜を見よ、

コーガン 高巖　クンドー薰道を見よ、

コーガン 高巖　リハク理柏を見よ、

コーガン 高巖　チョートー長棟を見よ、

コークワン 高觀　二二六二……　〔天台宗〕上野勢多龍增寺の學僧なり、高觀は武藏入間郡三芳の人、慶長七年に生る、五歲にして江戶に入り沙門を見て崇敬の念あり、元和六年十九歲にして仙波星野山佛地院二十八代尊能に師事し、寬永二年二月廿八日廿四歲にして度を受け、始めて佛藏院の論場に列す、寬永六年七月廿六日尊能より天台慧心流七箇の法要を受く、後同十年佛地院二十九代廣海に師事し、次に淨土院舜海に止觀を受く、寬永十五年九月天海僧正の命により上野勢多の青柳山龍增寺に住す、亮賢佛光の二禪師より禪を傳へ佛光より曹洞の五位を受く、十八年人より舜海の止觀見聞を註せんことを請はる十九年七月播摩書寫山快倫の東叡山に登るに遭ひ、三大部本末の序等を聞く、再び人より見聞を註せんことを請はる、二十一年正月より東叡山東麓に寓居し、見聞を註せんとし筆を援る、同年四月星野山に皈り、九月龍增寺に功を畢ふ、正保三年比叡山に登り、慧心院僧正等學に就いて指要鈔を聞き、四年十二月比叡山執行正覺院探題僧正豪慶の室に入り、慧心流の七個の法要を受け、且つ玄旨皈命壇に上り、豪慶より其訣を受く、慶安四年四月京師二條堀河の寓居に見聞註十五冊を清書し了る、示寂年月日並に享壽詳ならず、(止觀見聞註)

コーゲ 高外　二三三〇……二四〇二　〔曹洞宗〕近江淸涼寺の禪僧なり、

高外字は全國、別に自ら臥龍道人と號す、俗姓は眞野氏、武藏國高麗郡中澤村の人なり、年甫めて十二の時宗穏寺の法瑞に依りて薙髮し、後加賀大乘寺德翁に師事し、二十五歲其印可を受け、三河の醫王寺に住し、又近江淸凉寺に移つる、寬保二年九月十八日寂す、壽七十三、臘六十二、

コーゲツ 高月 ニチヨー日養を見よ、

コーケン 高徤(　―　) 〔曹洞宗〕甲斐萬松寺の開山なり、高徤字は無敵、伊豆の人俗姓は伊藤氏なり、十三歲伊豆山に登りて薙髮し、密敎を習ふ、後捨てゝ禪林に入り、廣嚴寺一華文英に參し、服勤十四年雲岫所傳法衣を傳せらる、辭して遊方し、甲斐士峰の麓に寺を建て、萬松寺と號す、晩年弟子榮佑に衣法を付し、隱遁して終る處を知らす、法嗣受天榮佑の一人あり、(日本洞上聯灯錄)

コーサン 高算 エゲン懷玄を見よ、

コーサン 高山 ツーミヨー通妙を見よ、

コーサン 高山 ジシヨー慈照を見よ、

コージヨー 高成 コーシヨー康尙を見よ、

コーシヨーイン 高松院 ニチセンニ日仙尼を見よ、

コーシヨーイン 高松院 チヨーネン超然を見よ、

コーセー 高盛 二〇九一―二一六五 〔曹洞宗〕遠江圓通寺の僧なり、高盛字は、松堂、俗姓藤原氏、遠江寺田の人なり、祖父道印に從ひ、日高山に登り、大輝和尙を師とし、十五歲剃髮し、古山崇永に參すること數年、開悟し辭して諸禪林講席に遊ひ、再び古山を圖通寺に省し、待すること七年古山の寂するに及び、其席を嗣ぐ、永正二年二月十一日寂す壽七十五、六十一遺偈なり、曰く、七十有五歲、靑天起忽雷、片端的卷、露柱笑暗哈、と著作語錄あり、(日本洞上聯灯錄)

コーセン 高泉 シヨー性潡を見よ、

コータン 高湛 一九八三―二〇六八 〔戒律宗〕大和西大寺の僧なり、高湛號は明印と云ふ、俗姓は藤原氏、總州の人なり、十一歲にして金澤の湛濬法師に從ひて出家し、極樂寺本光律師を禮して具足戒を受く、貞和三年信照和尙に就ひ、重ねて大乘戒を受け、大小の律疏を究め、西大寺覺心に灌頂法を受け、小野廣澤兩派の奧旨を探り、康應の初め、速成就院に住す、明德四年極樂寺主席を缺く、師衆請によりて主となり、大に法幢を樹つ、後圓融上皇師の道譽を聞き、宮中に召して起信論を講せしめ、寵遇甚だ渥し、應永七年興福寺衆議して曰く、奈良の律學師を得ずんは軌範息むに幾からんと、旨を幕府に乞ふ、幕府乃ち命を下して師を戒壇院に主たらしむ、同十一年西大寺に遷る、將軍足利義滿寺に詣てゝ道を問ひ、其薨するに及び嗣子義持喪にありて師を召して般若心經を講せしむ、十五年九月二十五日寂す、壽八十六、臘六十二、(本朝高僧傳)

コーフー 高風 リヨーア了阿を見よ、

コーベン 高辨 一八二三―一八九二 〔華嚴宗〕山城高山寺の學僧なり、高辨は明慧と號す、紀伊在田郡の人、父は平重國、母は藤原氏の出なり、承安三年正月八日を以て生れ、八歲にして父母を喪ひ、高尾山に登り、伯叔上皇に師事して華嚴五敎章俱舍頌を讀み、十歲遊學して醍醐寺實尊に密乘を、奈良の景雅に華嚴を學び、又尊印に就て悉曇章を研習す、十六歲にして上覺に就て剃髮し、東大寺の戒壇に具足戒を受け、尊勝院聖詮に

謁して圓理を究む、十九歳小野の興然阿闍梨に兩部の灌頂を禀け、栂尾山に止まり、後紀伊白峯山に登りて菴居修行す、石水院に於て梵網經を講す、元久二年春同志と支那より天竺に達せんとし、準備已に成りて疾の爲め果さず、建永元年十二月後鳥羽上皇敕して栂尾山を賜ひ、永く華嚴興隆の地となす、因て號して高山寺と云ひ、院宇の廢頽を興し、盛んに華嚴宗を唱ふ、承久の初め敕を奉し奈良尊勝院の貫首となり、二年にして辭し、本山に返る、建保六年賀茂神山に菴を結びて禪坐す、皇后平德子師を請して戒を受けんとし、簾中にありて、下坐せしむ、師肯ぜずして曰く、持戒の比丘神明を拜せず、王臣を敬せず、下坐して法を說くは師資ともに罪に墮すなり、須く他人を請ふべし、と、起て宮を出でんとす、皇后驚き、簾より走り出で謝して師を高座に延きて戒を受け大に敬崇したまふ、承久の亂に敗士山に匿る義景これを搜索し師を疑ひこれを捕ふ、北條泰時師の德望を聞き庭に下りて禮拜し、誤りて捕ふるの罪を謝し、これより屢々山に入りて政道を問ひ、崇拜甚だ渥し、三年冬微疾に罹り貞永元年正月十五日門下を誡め、十九日朝に安祥として寂す、壽六十、臘四十六、栂尾禪堂院の後に葬る、法を承くる者、喜海、道澄、隆詮、高信、了辨の五人あり、著作坐禪次第、金師子章光顯鈔、華嚴唯心義釋、華嚴修禪觀照入解脫門義各二卷、摧邪輪三卷、菩提樹寶塔式四卷、盂蘭盆經總釋、華嚴信種義、功德義、菩薩戒儀各一卷等凡て七十餘卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、澁柿)

コーホー 高峰　ケンニチ顯日を見よ、

コーミョー 高明　(……)　〔天台宗〕筑前本山寺の僧なり、高明俗姓不詳出家して播磨書寫山に登り、性空上人の弟子となり、後筑前に遊び、太宰府の本山寺に住し、三衣一鉢餘資を蓄へず、念佛誦經の餘暇興建を勸む、博多の橋、青木寺の六角堂等あり、法華經八卷を書して井中に沈めて曰ふ、我若し成佛せば滅後此井變して溫泉とならんと、命終に際し、西向阿彌陀佛を念持す、滅後井の變ずること言の如く、相傳へて感嘆したりと云ふ、(本朝高僧傳)

コーヨ 高譽　二二八九—二三四六　〔淨土宗〕京都大雲院の僧なり、高譽は俗姓生國詳ならず、聖淨二門の學を通じ殊に敎導に長せり、延寶の頃九條に草菴を結び、念佛誦經を事とす、同五年五月大和に遊ぶ、當麻寺の曼陀羅の破損せるを憂ひ、百方意を用ひて修理し、同年閏十二月十五日に至りて其功を竣ふ、同寺に文龜の頃覺圓尼の本願にかゝる新曼陀羅ありてこれも破損したれば同年十月十五日より修理し、翌六年二月十五日にいたりて功を了ふ、且つ新に一丈五尺の大變相を寫し、これを重新曼陀羅といふ、勅書の銘文を添へて同寺に寄附せり、天和の初山科に空也上人の舊跡を與し念佛道場を建立す、同二年正月八日より四十九日間大雲院に於て貧民救助をなし、一人に十二錢宛施與す、每日施與を受くるもの群集し、四十九日間に二十六万六千二十九人に上る、師の慈心に感して寄附する者おほかりき、貞亨三年三月九日寂す、五十八(新著聞集)

コーヨ 高譽　テーザン貞殘を見よ、

コーヨ 高譽　キユードー休道を見よ、

コーヨ 高譽　ギテン義天を見よ、

コーヨ 高譽　ルデン流傳を見よ、

コーヨ 高譽　ソントー尊統を見よ、

コーリン 高隣　コーリン杲隣に同し、

コーリン 高霖　ナンリン南麟に同し、

コーリユー 高隆　二三九七／二四六八　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十七代なり、　高隆字は實健、其鄕貫詳かならず、豐山に學ぶこと三十八年、寛政六年十二月豐山月輪院より武藏總持寺に轉し、護持院惠翁を師と賴み、未だ灌頂せざるに沒せしを以て、靈灌頂を行ひ後彌勒寺に移り、文化元年擢でられて護持院より豐山能化職に補す、職にある五年にして同五年七月疾に罹り、其月十一日與喜寺に寂す、壽七十二、（新義眞言宗史料）

コーイン 興胤　二〇五四／二〇八八　〔眞言宗〕山城勸修寺第十九代の長吏なり、　興胤は常盤井彈正尹滿仁親王の子にして、尊興の弟なり、應永元年に生る、尊興の室に入りて得度し、便ち大僧都に任せられ、法印となる、十八年二月東大寺の別當に補せられ二十年尊興に傳法灌頂を受け、慈尊院の興繼に請ひて法流の職位を繼き、三十二祖となる、詔して僧正に敍し、長吏となり、大僧正に昇る、正長元年五月二十七日寂す、壽三十五、勝福院と稱す、（後傳燈廣錄）

コーウン 興雲（一四八六）〔華嚴宗〕大和東大寺別當なり、興雲は鄕貫詳かならず、天長三年東大寺別當に任ず、寂年、及壽缺く、（東大寺別當次第）

コーウン 興雲　ジユンジヨー純成を見よ、

コーオンイン 興遠院　ニチゼン日善を見よ、

コーガ 興雅（二〇三七）〔眞言宗〕山城安祥寺の僧正なり、興雅は隆雅の法を受け、安祥寺に住す、僧正に任し、永和三年高野山の宥快來訪して師に法を問ふ、後寂するに臨みて席を宥快に付す、（後傳燈廣錄）

コーギ 興義（……）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、興義は其鄕貫師承詳かならず、園城寺に住し、道暇畫を嗜み妙筆と稱せらる、其弟子成光閑院の障子に雞を畫き、人をして其妙に驚かしめしと云ふ、（本朝畫史）

コーギヨク 興勗（……）〔曹洞宗〕美濃汾陽寺の僧なり、　興勗字は景聰と云ふ、玉浦宗珉に參して法を嗣ぎ、妙心寺第一座より出て丶美濃乾德山に住す、後道樹寺を開きて第一代となる、師諸錄を錯綜して註鈔若干卷を著す、寂年及壽欠く、（延寶傳灯錄）

コーゴク 興國　ゲンシン玄晨を見よ、

コーザンシヨーニン 興山上人　オーゴ應其を見よ、

コージツ 興實　リヨーハン良範を見よ、

コーシン 興信　二〇一八／二〇五一　〔眞言宗〕山城勸修寺十七代の長吏なり、　興信は崇光天皇第二の皇子、母は庭田尙書源重資の女、延文三年に生る、貞治年間尊信の室に入りて得度し、便ち宣して親王となる、永和四年四月五日尊信に庭上具支灌頂を受け、康曆中長吏に補せらる、嘉慶元年結緣灌頂を行ひ、諸人を濟度す、又淨土院の繼助を仰きて慈尊院流の根底を竭くし、第三十祖となる、明德二年四月五日寂す、壽三十四、施無畏院と稱す、（後傳燈廣錄）

コーシユー 興宗　シユーシヨー宗松を見よ、

コージユン 興順　リヨーコ亮故を見よ、

コーショー　興昭　一五三七……　〔法相宗〕奈良興福寺の學僧なり、興昭俗姓不詳、修圓僧都に就きて法相を受け他學に兼ね通す、德一、壽廣、春德と名を齊くす、貞觀四年の冬維摩會講師となり、傳燈大法師位に昇る、五年正月最勝會講師となり、慧解衆を壓す、元慶元年正月二十八日寂す（本朝高僧傳）

コーチ　興智（一五二五）〔華嚴宗〕奈良東大寺の僧なり、興智俗姓不詳、正進僧都に就きて華嚴を傳へ兼て諸宗を傳ふ、維摩會講師となる、貞觀七年最勝會講師となる、示寂の年時缺ぐ、門下玄榮、豐藝あり、藝は律師となる、（本朝高僧傳）

コーチュー　興儔　二三〇二……二三五六　〔曹洞宗〕常陸水戶祇園寺の開山なり、興儔字は心越、號は東皐と云ふ、明の杭州金華府婺郡浦陽の人、俗姓蔣氏、母は陳氏なり、崇禎十二年八月廿八日に生る、吳門の報恩寺に投し、俗叔歛石公を禮して度を受け、初め覺浪に依る、淸の康熙七年、三十歲にして翠微闊堂に謁し　狗子話を參究し、二年にして印可を附せらる、淸の朝興るにおよび、西湖の永福寺に隱棲す、明僧澄一（チンイ）我國長崎の興福寺に住し、師の高德を聞き、遠く招致して其席を讓らんとす、師亦渡航の意あり、遂に澄一の書を得て出發す、延寶五年長崎に到着す、然るに異宗の僧某の誣言により、長崎に於て捕はれて幽閉せられ、將に其身を終らんとす、水戶光圀これを聞いて百方力を盡し、其寃を雪き、殊に使を遣はして迎ふ、師先つ京師に入りて暫く留り、後、東下して水戶に至る、光圀大に禮遇し、乃ち水戶の天德寺を改築して祇園寺と號し、師を請して開山となす、總寧寺丹心、大中寺連山、青松寺如實、經山寺獨菴、龍泰寺鰲山、慈德寺丹嶺等の諸禪師大に其法化を助く、元祿五年祇園寺に開堂の大典を擧く、大衆四來する者一萬七千餘人に至りたりと云ふ、其後貴賤道俗の敎を受くる者數を知らず、武藏相模等の諸地を歷遊して詩吟あり、金澤七景の如き師の選にかゝると云ふ、元祿九年の秋微疾に罹る、光圀親しく問候す、師諄々として法を說く、同年九月廿九日吳雲西堂を召して衣偈を附し、三十日椅子に倚り、侍僧を顧視して曰ふ、五十有餘年、游二生死海中一、擺手沒二巴鼻一喝、遂に寂す、壽五十五、臘四十七なり、師詩文書畫を善くす、著作東皐集一卷あり、且つ七絃琴に巧なり、我國古來七絃琴を傳ふるも、琴譜指法已に絕ゆ、師十六曲を傳へ七絃琴再び行はる、師の門下に人見竹洞、杉浦琴川の二人あり、其曲を傳へ、琴川東皐琴譜五卷を編す、琴川の門下に小野田東川あり、東川の門下に幸田親益、多紀藍溪、設樂純如、杉浦梅峯あり、親益の門下に兒玉空々あり、藍溪の門下に桂川月池、浦上玉堂あり、純如の門下に淺草眞龍寺の蘭室上人あり、此の如くにして七絃琴盛に行はるゝことゝなれり、師又書畫篆刻を善くし、光圀の爲めに數顆を刻したり、筆蹟等今祇園寺に保存せらるゝもの多し、（日本洞上聯灯錄、香亭雅談、東皐集、）

コードー　興道　ゲンキ玄基を見よ、

コートク　興德　二一三六……　〔曹洞宗〕和泉慶田寺第一代なり、興德字は海門、伊勢の人、幼にして奇叟異珍に依りて得度し、尋て補巖寺大容、永澤寺淸寧に見え、加賀に至り大辨了訥に投ず、大辨和泉の補巖寺に遷るに及び、師もまた侍從し、伊

賀刺史某に請ぜられて安養寺に主となり、後補巖寺に遷る、文明八年正月二十六日寂す、和泉廣田寺は梵香居士師の爲めに創めしところなり、（日本洞上聯灯錄）

コーネン　興然　一七八〇—一八六三　〔眞言宗〕山城勸修寺慈尊院の二代なり、興然字は理明、仁平三年十二月十八日念範に從ひて傳法灌頂を受け、保元二年二月二十九日醍醐山西光院道場にて具支灌頂を仁和寺亮惠に受く、慈尊院の二代となり、建仁三年十一月廿日寂す、壽八十四、付法の弟子行慈、高辨、榮然、文覺の四人あり、（後傳燈廣錄）

コーブ　興豐　コンリュー建隆を見よ、

コーリンイン　興林院　ニチトクロ德を見よ、

コーリュー　興隆　二三五一—二四二九　〔曹洞宗〕武藏埼玉全久院の第六代なり、興隆字は寶嚴と云ふ、越後の人、高橋氏なり、世々彌彥山の禰宜たり、父は太郎右衞門光宣、（天外宣光信士）母はお喜多（桃屋妙春信女）と云ふ、四男あり、師は其第三男にして、俗名谷伴藏と云ふ、十四歲にして禰宜の家を捨てゝ沙門となり、初名を慈海、字を具海と云ふ、幾もなく出遊して比叡山の靈空、三井寺の義瑞、五智山の如幻、浪華の天龍を歷問して台密の疏章、幷に義軌を學び、且つ鳳潭を問うて華嚴を學ふ、後、南北に巡遊して法相、三論、戒律、幷に悉曇等を學び、殊に悉曇の研究に力を用ゐ、舊新飜譯の例等を集めて大成せり、寶曆の初武藏埼玉騎西の全久院の第六代となり、同院にありて學問著作を事として、餘事を顧ず、寶曆十年正月櫻井流神道秘傳二十四册、源氏物語探海鈔二百五十卷、萬葉集義述百四十八卷を故鄕の實家に送附し、神道書和歌書四千卷を同院に寄附す、同十二年梵漢通釋十五卷を撰して同院に寄附す、後、州傳寺に遷り、同寺第十二代となり、明和六年十月二十六日同寺に寂す、壽七十九なり、著作華嚴玄義大畧鈔四十九卷、法華科註復宗記四十卷、唯識述記纂釋、法華玄義述聞、法華文句述聞、各三十卷、俱舍講苑指謬廿四卷、俱舍頌俗註、維集論述記纂釋、各二十卷、三十唯識操觚篇十七卷、維摩經註義心錄十一卷、楞嚴經顯密幽玄記十卷、法華和鈔九卷、梵網古迹記義畧、起信義記文心畧鈔、各八卷、法華纂靈記七卷、觀經妙宗鈔開心記、廿五菩薩和讚文心要鈔、各五卷、二十唯識纂釋、梵網經述記冠註、各四卷、聲明軌記、盂蘭盆折中開玄記各三卷、佛典疏鈔目錄、異部宗輪述記冠註、十不二門指要講鈔、各二卷、楞嚴經開譯畧選、法華開題、因明論惣攝錄、金錍論饒舌集、五敎章破塵記、護身法秘記、持明藏記、禪門五派錄、佛足千輻輪相記、諸說辨謬、各一卷、（以上內典。）三藏梵語集百卷、梵漢通釋二十卷、悉曇傳本十五卷慧琳音義梵語畧、淨土論梵語釋各三卷、悉曇字記相傳記、悉曇字記畧秘訣、悉曇字記開玄章、梵語釋例、可洪音義梵語畧、十二吉祥天經梵語釋、盂蘭盆梵語釋各一卷、（以上悉曇、）續感應錄四十卷、源氏四河入海三十卷　百人一首三家秘傳二十卷和歌八代秘要十一卷、中臣秡纂說、萬葉集義訣、各十卷、伊勢物語口訣鈔、古今集至要、各七卷、六根秡會說傳、秡具秘傳、各六卷、三種神器傳、徒然草玉葉秘屑、各四卷、秡神秘傳神事稿、諸秡秘傳、神道問辨、源語秘傳錄、源氏秘訓傳、和歌仙傳、各三卷、最要中臣本心錄、三種秡會說傳、三社神託故實傳、秡詞廣記、百人一首傳心錄、詠歌大概註解、以呂波

本記、曆學便蒙、周易啓蒙旁通記、各二卷、心御柱說傳、神道加持經畧註、神代卷畧註、神國雜記、神道童子訓、神道加持考、伊語秘傳集、徒然草秘訣、和歌八十玉籤、日本遷都考、各一卷、(以上外典)計八十五部、七百五卷あり、(興隆自記、高橋家系圖、全久院過去帳、近代名家著述目錄、)

コーリユー　興隆　エオン惠音を見よ、

コーイ　廣威（二四八三／二五三八）〔黄檗宗〕山城宇治萬福寺の第三十六代なり、廣威字は金獅武藏豊島郡下谷御徒町の人、醫師津呂右膳三男、文政六年四月十五日に生る、天保四年五月十八日山城の鹿ヶ谷如意寺松洞に就いて得度し、文久二年九月但馬興國寺に住し、明治三年九月攝津麻田の佛日寺に轉し、五年十一月本山に昇住し、十一年六月十二日示寂す、壽五十六、

コーオン　廣恩（……）〔眞言宗〕大和海峯寺の僧なり、廣恩は吉野山の海峰寺に居り、法華經を持誦す、(本朝高僧傳)

コーサン　廣山　ジヨヨー恕陽を見よ、

コージユ　廣壽（一六〇八／一六七三）〔眞言宗〕山城醍醐山持明院の開山なり、　廣壽は淡路の刺史廣遠の子なり、醍醐山上峰の坊を開きて閑居す、故に峯上人といふ、源賴義の師範たり、正曆二年正月七日大法心印を元杲法務に傳受し、元杲の錄する所の九會密記、三部秘尺、灌頂次弟等を寫して諸方に去り、長和二年六月二十八日寂す、壽六十六、(續傳燈廣錄)

コーシヨー　廣清（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、　廣清千手院に住し常に法華經を誦す、夢に八大菩薩あり、全身金色なり、一菩薩廣清に語りて曰ふ、一心勇猛に妙經を修誦せば、我等八人極樂に送るべし、と、夢覺めて歡喜し益行を勵む、命終の時端坐經を誦じて逝く、墓中永く其聲を絕たざりきと云ふ、(本朝高僧傳)

コーズイ　廣瑞（……）〔曹洞宗〕肥後大慈寺の僧なり、廣瑞字は龍伯、肥後八代の人なり、十六歲法泉寺に投し、大雲玄廣を禮して薙髮受具し、禪席を經て、再び法泉寺に歸へる、大雲の大慈廣燈の兩寺に移つるに及ひ、師隨侍して遂に發悟し、其囑を受けて法泉寺に主となる、大雲の臨終に方り、師晝夜看護して杖拂を授與せられ、後大慈寺にうつる、一住三年、廣燈菴に退去して某年寂す、法嗣大焉廣椿一人あり、(日本洞上聯灯錄)

コーセツイン　廣說院　ホーセン法宣を見よ、

コータツ　廣達（一四〇八）大和金峰山の修行僧なり、廣達俗姓下毛野朝臣、上總國武射郡の人、聖武天皇の朝出家して吉野の金峰山に登り、山中に阿彌陀佛、彌勒佛、觀世音菩薩等の像を彫刻す、示寂の年時缺く、(靈異記、本朝高僧傳)

コーチ　廣智（一四七七）〔天台宗〕下野小野寺の沙彌なり、廣智は鄕貫詳ならず、鑑眞大和上の弟子道忠に師事し學德共に高く、下野小野寺に位して國人尊稱して廣智菩薩と云ふ、弘仁元年五月十四日三部三昧印を受け、且つ大師唐より賚持の香爐峯の栢木文筎(四枚の二)一枚を附せらる、同八年五月十五日大師より兩部の灌頂を受く、後下野小野寺に天台の敎義を講す、これ東國に天台の敎義を傳ふる始めなり、(天台霞標、台密血脈譜)

コーチ　廣智　ヒヤクエー百叡を見よ、

コーチン　廣椿（……）〔曹洞宗〕肥後大慈寺の僧なり、

廣椿字は大焉、肥後宇土郡の人なり、初め侍童となりて法泉寺大雲廣に從ひ、出家受具して東遊し、大中、靜國、雙林等の諸老宿に歷參し、再び法泉寺に歸る、當時大雲已に寂して龍伯廣瑞席にありしかば、師之れに從ひ、其席を退くに當り、命に依り席を補し、遷りて大慈寺を司とる、後辭して廣燈菴に退居し、某年寂す、曹源山に塔す、法嗣萬安英種一人あり、（日本洞上聯灯錄）

コードー 廣道（……）〔眞言宗〕山城大日寺の僧なり、廣道俗姓橘氏、出家して山城の大日寺に住し、專ら往生極樂を願ふ、寺邊に一老婆ありて寄居す、兩男子あり、天台僧となる、兄を禪靜と云ひ、弟を延叡と云ふ、老婆沒し、此二僧一心に晝は法華經を讀み、夜は阿彌陀佛を念じ、偏に母の極樂に往生せむことを祈る、此時に當りて廣道夢に極樂貞觀兩寺の間に無量の音樂を聞き、驚きて其方を望むに三寶車あり、數十の僧侶香爐を捧けて圍繞し、直に老婆の家に到り、天衣を着けしめ、共に載せて還らむと欲す、即ち二僧に勅して曰ふ、汝母の爲に懇志あり、是を以て來迎するなり、と、一夢の中に亦廣道往生の相を見る、數年にして示寂す、其日音樂空に滿ち、道俗耳を傾け、隨喜發心する者の多し、（往生極樂記、本朝高僧傳）

コーホン 廣本 二三四六 二四〇六 〔黃檗宗〕近江馬淵福壽寺の開山なり、廣本字は覺芝と云ふ、京師の人なり、馬淵の福壽寺に住し、禪風高し、京師の醫太田見良等に交深し、疾に罹り其家に寓し療養す、妻女の起臥を扶くるを喜び、女ほとめてたきものは又もなし釋迦や達磨をひよい〳〵と生む、と、後、自ら醫術に通し、病者を救助せり、師亦其角の門人猩々庵と云ふ者に交はり、俳諧を善くす、猩々庵布袋和尚の圖に題して「小袋に大千いれて花ごゝろ」と云ひ、師に語りしかは、師微笑して未し、我ならば「底ぬけの俗に寶あり芥子の花」とすべしと示す、猩々庵大に服し、後數々敎を受けたりと云ふ、師常に只一事桶工の輪を入る味はしりかたしといへりと、延享三年五月十四日寂す、壽六十一、（近世畸人傳）

コーニヨ 廣如 コータク光澤を見よ、

コーヨ 廣譽 二三三九……〔淨土宗〕安房念佛院の開山なり、廣譽は安房の人、正譽意天上人に就て淨土敎を學び、州の橫須賀に念佛院を開く、延寶七年十二月十七日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

コーヨ 廣譽 リンチヨー林長を見よ、

コーヨ 廣譽 クワクデン廓傳を見よ、

コーヨ 廣譽 ジユンチヨー順長を見よ、

コーヨ 廣譽 センオー詮雄を見よ、

コーエン 幸圓（一九五〇）〔戒律宗〕奈良西大寺の律僧なり、幸圓は興正菩薩の門弟にして、毘尼を明む、寂年缺く著作懺六聚篇鈔一卷あり、（本朝高僧傳）

コーコン 幸金 一九四八……〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、幸金は八幡別當幸清の猶子にして別當に任す、正應元年十二月廿六日寂す、壽缺く、（三井續灯記）

コーサイ 幸西（一八七〇）〔淨土宗〕祖源空上人の高弟なり、幸西字は成覺、初め比叡山西塔の南谷に住し、鐘下房少輔と號す、後愛兒を喪ひて悲哀の餘り源空上人に就いて淨

土敎を受け、一念義を主張し、行空等と共に門下を排せらる、下總栗原に住し自義を弘通す、示寂の年月日欠く、著作略料簡、二諦記、稱佛記、等あり、門下に了智、正定、明信、入眞、善性、勤信等あり、(淨土傳灯錄、淨土總系譜)

コーシユン　幸俊　(一九九四)七條佛所佛工なり、　幸俊は運助の弟子なり、七條道場六代上人像を作るといふ、時に建武元年六月なり、一説に幸俊は康俊と同人なりと云ふも詳ならず、

コーソン　幸尊　(一九二七)〔戒律宗〕奈良海龍王寺の律僧なり、　幸尊字は長禪、興正菩薩に親炙し建長八年沙彌戒を受け、康元二年具足戒を、文永四年具支灌頂を進得す、後海龍王寺に住して律席を開く、寂年缺く、(本朝高僧傳)

コーソン　幸尊　一八八五―一九六三　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、幸尊俗姓は藤原氏、十六歲得度し、定尊、有禪、慶暹の諸師に學び、文永七年閏九月六日豁然大悟し、十二月四日入壇す、應仁元年九月勅して僧正となり、嘉元元年九月十一日寂す、壽七十九、(三井續燈記)

コーカイ　杲海　(……)　〔眞言宗〕山城醍醐山金剛王院第三代なり、　杲海初の名を豪海と稱す、字を治部卿僧都といふ、京都の人、尚書雅兼の子なり、諸祖に參して法脈を得蓮華院を建てゝ住す、付法賢海、尊基、海淵の三人あり、(續傳燈廣錄)

コークワン　杲觀　ソクワイ祖晦を見よ、

コーゾーシユ　杲藏主　(……)　〔臨濟宗〕京都天龍寺の藏主なり、　杲藏主は幼にして出家して、夢窓國師に參し、天龍寺にありて藏鑰を司とる、寂年及壽欠く、(延寶傳灯錄)

コードー　杲堂　ゲンチヨー元昶を見よ、

コーホー　杲寶　一九六六―二〇二三　〔眞言宗〕山城東寺の學僧なり、杲寶其俗姓生國詳ならす、一説に源氏にして但馬の人なりといふ、幼にして東寺に投し、寶嚴院の賴寶法印に受學し、後小野に往きて榮海を拜し、灌頂法を傳へ、尋いて諸尊の印契儀軌を受け、又奈良に至りて性相を習ふ、初め八坂吉祥院に住し後觀智院を開き住す、時論に曰く、南山の宥快賴瑜は空海の皮肉を得、東寺の杲寶は其骨髓を得たりと、師僧綱に任せす、專ら著述を事とす、貞治元年寂す、壽五十七、著作、大日經疏演奧鈔五十六卷、(一說賴寶の作)大日經疏二十七卷、(一名口筆鈔)二敎論研覈鈔、(第九卷以下の五卷は法悟賴我の作)、悉曇創學鈔、(第十一卷十二卷は賢寶增補)各十三卷杲寶私鈔、傳寶記、各十二卷、十住心論鈔、卽身義東聞記、秘藏記鈔、玉印鈔、秘藏要門、各十卷、菩提心論鈔、心經秘鍵鈔、(杲寶口說賢寶筆記)、各六卷、聲字義口筆、(杲寶口說賢寶筆記)、東寶記各五卷、纂要私記我慢鈔、(一名破邪顯正記)開心鈔、各三卷、金剛頂經開題鈔一卷、等あり、其師賴寶幷に弟子賢寶(一に元寶に作る)を併せ稱して東寺の三寶といふ、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

(考)杲寶手記の奧書に依れは、文和四年二月足利直冬東寺に戰ふ際、誤りて流矢に中りて死したりと云ふ、

コーリン　杲隣　一四二七……　〔眞言宗〕伊豆修善寺の開山なり、杲隣初の名は高隣、生國俗姓詳かならす、初め東大寺に掛籍し、性相兩宗を精研す、空海に隨侍して器許せられ、兩部の

密法及ひ諸餘の儀軌を受く、弘仁三年十二月空海高雄山に三綱を置くに方り、師を登庸す、天長十年春師金剛峯寺に入り觀行を精修す、空海の寂後京都に修學寺を建て又伊豆走湯山に修善寺を剏す、承和四年四月五日東寺の定額五十僧を二十四人に減するや、師亦其第二次に籍す、時に年七十一、夏三十、後終る處を知らす、元慶二年法光大師奏進して師を十大弟子の一とす、（弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜）

コーオン　宏遠　ジクー慈空を見よ、

コーカイ　宏海（……）〔臨濟宗〕相摸鎌倉淨智寺の禪僧なり、　宏海號は南洲、俗姓不詳、出家して行脚す、宋に禪宗の盛なるを聞きて出航し、南屏山に滯留し、後東歸して兀菴寧に師事し、法嗣となる、金峰に住し、菴を構ふ、示寂の年時歎く「弟子塔を立て兩曜と云ふ、遺偈あり、大唐日本、六十七年、欲レ知ニ此事一、看ニ取目前一」と、後勅諡眞應禪師と云ふ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

コーキヨー　宏敎（一八六七）〔眞言宗〕鎌倉雪下無量壽院の僧正なり、　宏敎は本名を禪徧といひ、常侍曹中郎敎經なり、少輔律師と呼ふ、承元元年五月二十七日慈尊院を開きて傳法灌頂を受く、詔により鎌倉無量壽院に補し、僧正に敍す、甫文抄を撰す、付法の弟子多し、就中能禪、元瑜、良慶等最も著はる、（傳燈廣錄）

コーゲン　宏源（二二八六―二三四二）〔眞言宗〕山城觀音寺の學僧なり、宏源字は覺翁、自ら大夢覺と號す、俗姓盧田氏、京都の人なり、其祖先は信濃の人にして、祖父某織田信長に仕ふ、織田氏亡びて後京都に住す、師生れて三歲なるも言はず、父母其啞なるかを疑ふ、偶〻人あり經函を授くれば初めて欣然として笑語す、十一歲觀音寺政應に就て得し、十六歲泉涌寺如周に就て受戒す、十九歲具足戒を受け、壽命院吳譽に師事す、二十八歲東寺の宗弘僧正に謁して秘密義軌を受く、爾來練業三十餘年なり、天和二年十一月病に罹り、同月十四日秘印を結びて寂す、壽五十七、門人遺骸を泉涌寺の辭光庵に葬る、（續日本高僧傳）

コーゼン　宏善（二一三五―二二一七）〔淨土宗西山派〕山城光明寺十八代なり、　宏善字は舜叔、其生國俗姓詳かならず、出家して一仲融舜に師事して淨土宗西山派の學を修し、禪林寺光明寺等に歷住して、盛んに法化を揚く、後柏原天皇其道譽を嘉し、紫方袍を賜ふ、弘治三年七月廿三日寂す壽八十三著作曼荼羅註記聚集聞書十卷世に宏善鈔と云ふあり、（淨土總系譜、光明寺記、森部選禪氏返信）

コードー　宏道　カクユー覺融を見よ、

コーベン　宏辯　ニヤクトツ若訥を見よ、

コーアン　巧安（一九一二―一九九一）〔臨濟宗〕相摸鎌倉建長寺の禪僧なり、　巧安號は嶮崖、肥前の人なり、幼年出家して天台止觀を學ぶ、後佛源禪師（正念）に師事し契悟す、肥の朝日山安國寺に開堂し、尋て相の世尊寺に遷り、壽福建長等に歷住す、瑞泉寺に遊びて詩あり傳ふ「題ニ徧界一覽亭一」「一峯正露半空間、孤峻清高絕頂寒、眼力窮邊休レ著レ意、古今十世似ニ天寬一」晚年龜谷の悟本庵に居す、元弘元年七月二十三日菴に寂す、壽八十、遺偈あり「臨ニ行一著、不レ假ニ兩脚一、踢ニ倒須彌一、踏ニ翻碧落一」勅

謚佛智圓應禪師と云ふ、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

コーアン 巧安 シンカイ眞海を見よ、

コーアン 巧安 ジュンチ順智を見よ、

コーチボー 巧智房 クワンオー觀應を見よ、

コーニヨ 巧如 ゲンコー玄康を見よ、

コーガン 功巖 ゲンサク玄策を見よ、

コーゾン 功存 （二三八〇 二四五六） 〔眞宗〕越前太田平乘寺の住持なり、 功存字は子成、初は義洞と云ふ、自ら號して靈山と云ふ、後に法主實明院の號を與ふ、越前今立郡小阪村靈鞍山下明正寺に生る、六歲の時父慧祐の敎により阿彌陀佛に皈命し、爾來相續歡喜すといへり、後平乘寺慧鐺に師事し學道を習ふ、十八歲出遊して京師に至り、本山龍谷山の本黌に入り演暢講主の講說を開き、次に大和輕邑道場に掛錫すると凡そ九年間瑞夢あり阿彌陀佛を感得す、學成りて後明正寺に皈住し、再び堂舍を修繕し、輪奐の美を盡す、復火災に遭ふ、四十歲法主の命を受け、師跡大田村平乘寺に移り住す、此時願生皈命辨を編述す、數京師に往來して學事に力を致し、五十歲龍谷山第六世の學職能化となり、一宗學問の興隆を以て已の任となし、門下敎を受くる者極めて多し、寬政八年丙辰九月三日寂す、壽七十七歲なり、挑花坊淨敎寺智洞碑銘幷に序を製す、著作領解文大意、肉食妻帶碎疑鈔、願生皈命辨、歸命疑問答釋、各一卷、序分義私鈔、定善義講錄、他力信行問答、各二卷、大經稱揚錄、安樂集太田錄、各五卷、往生論註凮航記九卷あり、（碑文、本願寺派學事史）

コーホ 功甫 ゲンクン玄勳を見よ、

コーオー 孝雄 （二二八八 二三四八） 〔眞言宗〕山城豐藏坊の僧なり、 孝雄字は信海、號は玉虛と云ひ、別に子覺、華堂、牛菴の號あり、孝乘の法嗣にして、八幡雄德山瀧本坊に住す、小堀政一に就て茶法を學び、又松花堂に從ひて書法及び茶事を學び、兼て狂歌を能くす、元祿元年五月二十七日寂す、壽六十一、（扶桑書人傳）

コークワン 孝完 リョーキョー良恭を見よ、

コーザン 孝山 ソヨー祚養を見よ、

コーシユク 孝淑 ミョージュンニ妙順尼を見よ、

コージユン 孝順 ニチケン日乾を見よ、

コーチユー 孝忠 （一五三八） 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、 孝忠法相に精し、元慶二年豐樂殿に於て最勝會講師となる、示寂の年時缺く（本朝高僧傳）

コーチヨー 孝暢 （二四九七 二五五九） 〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、 孝暢姓は有室、伯爵葉室大納言長順の猶子にして、實は武藏の國淺倉八左衛の男なり、天保八年三月生る、弘化四年東叡山吉祥院圓中僧正に就きて得業修學し、文久二年八月比叡山に登り、白毫院僧正に從ひ、舍那止觀の二業を練磨し、元治元年同山華王院に住し、明治六年十二月曼珠院門跡の職に就き、十六年中敎正に補せらる、十八年天台座主より、僧正に補せられ、廿四年一月に大僧正に累進し、比叡山學頭正觀院を兼管す、同年九月法華大會探題に補せらる、三十年九月天台座主に任せられ、三十二年一月十一日座主を辭し、曼珠院門跡に歸住し、同年五月卅一日心臓病にて寂す、壽六十三、

コーベン 孝辨 ニチギョー日堯を見よ、

コーエン 皇圓（一一七二）〔天台宗〕比叡山の學僧なり、皇圓は俗姓藤原氏道兼四世の孫三河守重兼（一說重亮に作る）の長子なり、出家して比叡山に登り杉生の皇覺に師事し、學解を以て聞へ、時人稱して肥後阿闍梨と云ふ、功德院に住して門下盛なり、源空上人尤も著はれたり、示寂の年月日缺く、著作扶桑畧記三十卷あり、俗に傳ふるところに依れば、皇圓慈氏の時を待たんかため長壽の身を得んとし、遠江笠原櫻ヶ池に人を使はし、池水を求めて手中に掬して觀想し、忽然として寂し、後、櫻ヶ池の大蛇に化したりといふ、（本朝高僧傳、淨土傳灯錄）

コーカク 皇覺（……）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、覺覺は忠尋の高弟にして、天台宗學を究め其一門を杉生流と云ふ、示寂の年月詳ならず、五時口決集、一代心地鈔、三十條口傳鈔、一千七百條を著す、（本朝高僧傳、明匠畧記）

コーキヨー 皇慶（一六三七 一七〇九）〔天台宗〕山城延曆寺の學僧なり、皇慶俗姓は橘氏、贈中納言廣相曾孫なり、書寫山性空法師の姪なり、谷阿闍梨と稱す、七歲にして比叡山に登り、法興院十禪師靜眞僧都に隨つて瑜珈の法を學び、護摩灌頂梵字悉曇等に至るまで、悉く研達す、鎭西に遊び、景雲阿闍梨に請益して秘奧を究め、弘法大師の寶鉼を授けらる、長德年中伊豫に遊び、國守知章朝臣の爲めに普賢延命法を修す、初め阿彌陀房に住し、次に南谷井房に住し、後萬治年中丹波池上大日寺に菴居し、刺史章任の請により十臂毘沙門の法を修す永承四年七月二十六日比叡山東塔井房に寂す、壽七十三、著作隨要記二卷、胎藏道場觀私記一卷あり、門下三十餘人あり、長宴、院尊、安慶の三人各一門を構ふに至り、比叡山の密法大に興隆す、（谷阿闍梨傳、元亨釋書、本朝高僧傳、台密血脈譜、諸宗章疏錄）

コーア 香阿　ザイゼン在禪を見よ、

コーウ 香雨　ドークワン道貫を見よ、

コーヴン 香芸　タイチ大痴を見よ、

コーヴン 香雲　トクゲー德貌を見よ、

コーヴンイン 香雲院　チヨーゲン澄玄を見よ、

コーヴンイン 香雲院　フテン普天を見よ、

コーカイイン 香海院　トクゲー德貌を見よ、

コーグワツイン 香月院　ジンレー深勵を見よ、

コーゲイン 香華院　ギテン義天を見よ、

コーコーシツ 香光室　フミヨー普明を見よ、

コーザン 香山　ニンヨ仁與を見よ、

コーザン 香山　ジユンセキ淳碩を見よ、

コーザン 香山　シユーロー宗郞を見よ、

コーザンイン 香山院　リユーオン龍溫を見よ、

コーシヨー 香聖　キヨージヨ經助を見よ、

コーヨ 香譽　リヨーサン了山を見よ、

コーリン 香林（……一二三五一）〔曹洞宗〕肥前天祐寺の僧なり、香林字は桂堂、肥前小城郡の人なり、幼にして出家し、伊豫如法寺に盤珪に參し、已見を發明し、終に鐵心月舟諸老に參し、玄谷宗覺の法を嗣き、攝津の臨南寺に住す、後鄕里に歸へりて諫早の天祐寺に住す、晩年正應寺に逸老し、元祿四年三月七日寂す、壽缺く、（日本洞上聯灯錄）

コーリン 香林　シユーカン宗簡を見よ、

コーリン 香林　サンケー識桂を見よ、

コーリユーアン 香流菴　リヨーオー了睢を見よ、

コーリヨー 香陵　エケン慧巘を見よ、

コーリヨーイン 香涼院　ギヨチユー行忠を見よ、

コーゼン 晃全 二二八七 二三五三 〔曹洞宗〕越前永平寺の三十二代なり、　晃全字は版橈、號は野水、後に勅賜應安萬國禪師と云ふ、讃岐の人なり、出家して曹洞禪に皈し、延寶の初武藏の泉岳寺に留る、同四年五十二歲にして誓を立て、釋迦牟尼佛の二千七百年に際し、法恩を報するために一業を企てんとし、遂に高僧の傳を編纂す、同年より貞享二年十二月に至り、一百五十卷稿を了ふ、僧譜冠字韻類と云ふ、支那歷世の高僧の傳を冠字の韻によりて分類編纂す、明僧心越興儔禪師大に其業を賛し序を製す、元祿元年に至り刻成り行ふ、後龍穩寺廿八代となり、永平寺三十二代となる、元祿六年二月廿四日寂す壽六十七、著作僧譜冠字韻類百五十卷あり、(僧譜序文、越祖山監院察返信)

コーヨ 晃譽　シヨーギン聖吟を見よ、

コーヨ 晃譽　クハクデン廓傳を見よ、

コーヨ 晃譽　ゴソン牛存を見よ、

コーサイ 浩齋　ケーヨー契養を見よ、

コータツ 浩達(………) 〔曹洞宗〕武藏高乘寺中興祖なり、　浩達字は通菴上野一宮の人、出家受具の後一州により服勤久けれとも未た悟ること能はす、最興寺に於て天倫正挺に參し、遂に印可を蒙り、席を繼きて住持し、辭して武藏の初澤に到り、高乘寺の荒敗を起し、之に居る、寂年並に壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

コーチン 浩然　リヨーオー良雄を見よ、

コーヨ 浩譽　シユーホ宗甫を見よ、

コーイン 耕隱　チクン智訓を見よ、

コーゼン 耕禪(……) 〔臨濟宗〕伊勢等觀寺の住僧なり、　耕禪字は挽古、俗姓生國詳かならす、初め京師に遊ひ後伊勢に到り、等觀寺に住す、淨土敎に意を傾け、每日念佛一万聲を修す、淨土宗の謙譽に就いて三經一論の意を受け、益精修し、日課念佛三万聲に至る、陶淵明歸去來辭に擬して願生淨土辭を作る、某年八月廿九日寂す、壽五十六、著作、竹隱夢草あり、(續日本高僧傳)

コーソー 耕叟　センゲン仙原を見よ、

コーア 向阿　シヨーケン證賢を見よ、

コーエー 向榮　エリユー慧流を見よ、

コーサイ 向西　タイヂユン苔順を見よ、

コーサイシ 向西子　タンチヨー湛澄を見よ、

コーヨ 向譽　ゲンモン玄門を見よ、

コーイン 江隱　シユーケン宗顯を見よ、

コーゲ 江外　カイチヨー海長を見よ、

コーサイ 江西　リユーハ龍派を見よ、

コーゾーシユ 江藏主　イチシ一之を見よ、

コーチユー 江中　ボンハ梵巴を見よ、

コーナン 江南　シユエー殊榮を見よ、

コーモン 江文　トクゲン德源を見よ、

コーコー 口光　エーソン榮尊を見よ、
コーシヨー 口稱　ジユンリヨー淳靈を見よ、
コーシユク 幸夙　ニチチユー日忠を見よ、
コーチヨー 幸長　ニチコン日近を見よ、
コーセツ 鴻雪　ダイガン大含を見よ、
コーゼン 鴻漸　リヨーキ了軌を見よ、
コーア 拱阿　リヘキ離碧を見よ、
コーア 皎阿　シヨーリン盛林を見よ、
コーイン 皎印　スイイン邃印を見よ、
コーエキ 交易　二二九五 二三五四〔曹洞宗〕下野大中寺の僧なり、
交易字は連山號を歸藏室と云ひ、別に海雲、定嚴、不白と云ふ、常陸水戸の人、俗姓岸氏、十三歲諸父に養はれて商業に從ひ、江戸に寓す、然るに出家の志切にして淺草金龍山の觀世音に祈禱し、遂に商業を捨て丶鄕に皈る、父母其志の奪ふへからさるを知り、村寺に托す、即ち十五歲にして度を受け、大に學業を力め、大法に念を注く、宇治興聖寺萬安道白の道風を聞き、出發して同寺に至り、敎を受く、寬文三年永平寺に出世し、常陸蒼龍寺に住す、水戸侯中納言光圀師の高風を慕ひ、天童山大雄院に請す、師同院の幽靜を愛して留住し、著作を事とす、元祿二年下野後大中寺に轉し僧祿に任せられ大に宗風を擧揚す、寺務を辭し、常陸の新宿に皈藏室を營み退隱す、元祿七年十一月廿二日寂す、壽六十、著作萬松錄首書十六卷、博山錄首書二卷、永覺錄首書十六卷、同錄管見錄二十卷、寒山詩管解七卷あり、（日本洞上聯燈錄、元祿書籍目錄）
コーエー 晄瑛　……二〇〇五〔曹洞宗〕能登永禪寺の一代なり、
晄瑛字は月菴、明章素哲に參して開悟す、永禪寺に住し、其一代となる、終に明峰の信衣を受く、時に貞和元年五月二日なり、寂年缺く、（日本洞上聯灯錄）

コーカクシ 扣角子　リヨーサイ令才を見よ、
コーゴン 綱嚴　……二〇五二〔眞宗〕近江綿織寺の五代なり、
綱嚴字は慈觀、幻名は光威丸といふ、存覺の第七子、建武元年二月七日に生る、康永二年九月隨心院僧正經嚴の室に入り廣橋大納言兼綱を養父となし、十月十七日薙度す、兼綱經嚴の各一字を取りて綱嚴と名く、東大寺に入りて修學し、尋いて青蓮院の門侶となり、觀應六年七月七日慈空下世す、愚咄の請により存覺の命を受け綿織寺に往きて席を嗣く、貞治二年三月廿五日存覺に從ひ大要鈔を受け、永德三年十一月廿八日宗門血脉譜を著す、時に五十歲、明德三年五月十六日要鈔を本願寺善如に傳へ、其終る所を知らず、二子あり、慈達仲憲といふ、（本願寺通紀）
コースイコジ 岡水居士　シユーロー宗郎を見よ、
コーセン 講仙（一六八四）〔天台宗〕京都六波羅密寺の僧なり、
講仙は洛東の六波羅密寺に居りて、久しく法華を讀み、懺悔の法を修す、萬壽年中寂す、（本朝高僧傳）
コーセン 洪川　シユーオン宗溫を見よ、
コーチユー 亨仲　スーセン崇泉を見よ、
コーテン 亘天　ヨーハン要播を見よ、
コーボー 悛丰　……二二〇一〔曹洞宗〕越前盛景寺の開山なり、
悛丰字は昌菴、越前朝倉氏の子なり、少より佛門を喜び、遂に同國願成寺に投し、芳菴嚴に就て出家す、左右に給事するこ

と久し、芳菴一日僧室に入り、衆に示すに身心脫落の話を以てす、師聞て釋然として深旨を領す、加賀國大守師を聘す、師乃ち盛景寺と名く、正長元年越前龍泉寺を主とり、幾何もなくして盛景寺に歸る、嘉吉元年八月廿三日寂す、世壽詳ならず(日本洞上聯燈錄)

コーモン　晛雯(二一六四)〔曹洞宗〕周防溪月寺の開山なり、晛雯字は韋山、周防の人なり、幼にして龍文寺爲宗に投して出家し、爲宗の寂するに及び、金岡用兼に師事すること五年、入室して衣法を付せられ、諸大老に徧參し、後に周防に回りて延命寺を剏立す、後溪月寺と改稱す、永正年中金岡安藝洞雲寺の主席を退き、師をして席を繼かしむ、寂年及び壽缺く、法嗣律翁道要の一人あり、(日本洞上聯灯錄)

コーヨ　皓譽　リョーカク良覺を見よ、

コーリユー　響流　エオン惠音を見よ、

ーチユー　剛中(二三四三)〔淨土宗〕尾張相應寺の學僧なり、剛中字は快玄、阿波の人なり、出家して江戶傳通院に學ぶ、最も起信論に通じ、大衆の爲めに講ずること數十回、仍て起信菴と稱ず、延寶三年科解を作る、六年宋の柯山倫師製作の法華經の科註を得て詳點を付し、後これを講ず、天和三年尾張名古屋相應寺に住す、寂年欠く、著作起信論科解二卷、起信義一卷、註略教誡經等あり、(續日本高僧傳)

コーチユー　剛中　ゲンニユー玄柔を見よ、

ゴーイン　恒胤　ソンシン尊信を見よ、

ゴーエ　恒惠　一八一九 一八六六〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、恒惠は後白河院の皇子なり、圓惠の室に入りて落髮受戒し、文永元年十月道勝に事へて灌頂壇に入り、護持僧となる、建永元年四月二十九日寂す、壽四十八、(三井續燈記)

ゴーク　恒久(……)〔天台宗〕京都大靈寺の僧なり、恒久は園城寺慶祚に隨ひて顯密の秘決を承け、嵓藏に蓮華坊を結びて居す、朝廷師の德を崇び、傳法阿闍梨の位に任ず、後其終るところを知らず、(本朝高僧傳)

ゴーコー　恒弘　二〇九一 二一六九〔眞言宗〕山城勸修寺二十二代の長吏なり、恒弘初めの名は恒興といひ、常盤井彈正尹恒明親王の嫡男、後崇光院の猶子なり、永享三年に生る、敎尊僧正の室に入り、嘉吉年間得度して大僧都長吏に任す、文安六年四月十六日慈尊院大僧正定紹に從ひて傳法灌頂を受け、第三十五祖となる、寶德三年二月東大寺別當に補し、宣して親王となる、永正六年八月二品に敍し、同月八日寂す、壽七十九號、して後勝福院といふ、(後傳燈廣錄)

ゴーコー　恒興　ゴーコー恒弘を見よ、

ゴージヤク　恒寂　一四八六 一五四五〔眞言宗〕京都大覺寺の第一代なり、恒寂は俗名恒貞、淳和天皇第二の皇子、母は嵯峨天皇の皇女正子內親王なり、天長二年に生る、同十二年九歲立てられて皇太子となり小野篁、春澄善繩の諸士侍講たり承和九年內變により廢嫡せられ三品に敍せらる、即ち淳和院の東亭に隱れ世に亭子親王と稱す、嘉祥二年二十四歲にして出家して沙彌戒を貞觀二年具足戒を受く、淸和天皇勅により眞如阿闍梨に就きて兩部の秘法を禀けしめ莊田數十所を大覺寺に施す、太覺寺は嵯峨天皇の故宮にて正子內親王の奏請により伽藍となる、師丈六尺の阿彌陀佛像を造立し、諸經論を

置き、寺額僧器を備へて寺観を一新す、仁和元年九月十日寂す、壽六十、太后の墓側に葬むる(本朝高僧傳、門跡傳)

ゴージユン 恒順 二四九五 二五六〇 〔眞宗〕豐前萬行寺の住持なり、恒順は越後三島郡飯塚村 明鏡寺井上宗鏡の子、後七里氏と云ふ、文久年間本山にて得度し、慶應元年十月博多萬行寺の住職となり、明治七年八月中講義に補せられ、八年一月大講義に進み、十三年九月權少教正に任せられしも之を固辭し、十二月遂に之を免せらる、明治十二年北畠道龍と大洲鐵然との間に軋礫起るや、師法主の命により本山に入り、大に斡旋して之を調停す、二十四年顯如上人三百回忌法要執事の際、召されて本山に說教すること一週間なり、法主感賞して法衣を授與せらる、二十六年四月十三日京都に上らんとして俄然中風症にかゝり、以後復た前日の如くならず、嘗て福澤諭吉と談論し編して梅霖叢談といふ、三十三年一月廿九日寂す、壽六十六、男あり順之と名く、

ゴーウン 豪雲 リヨージユン亮潤を見よ、

ゴーカイ 豪海 コーカイ杲海を見よ、

ゴークワン 豪寛 (二三六四) 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、豪寛は初の名は覺深と云ふ、比叡山の靜光院に住す、後、雞足院に移り住す、元祿六年擬講となり、十年探題となり、權僧正に任せられ、學頭正覺院に住し、改めて豪慧と云ひ、諸山の學頭を兼ぬ、寶永中大僧正に昇り、改めて豪寛といふ、(天台霞標)

ゴージヨ 豪助 コージヨ康助を見よ、

ゴーソン 豪尊 二〇六〇 〔天台宗〕上野龍增寺の開山なり、豪尊は武藏金鑽の人なり、永和年中比叡山に登り、無動寺の心聰法務幷に心圓心源の二師に從ひて敎行を受け今出川柳御所にて再ひ心聰に謁し、深く證位を決す、鄉里に歸へるに及ひ、大に天台教を弘む、應安三年上野滿源寺の界尊法師龍增寺を開き、師を招きて開山に居らしむ、師講席を開き學徒集りて談林となる、應永七年十月五日寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

ゴーチン 豪鎭 二〇三二…… 〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、豪鎭號は寶菩提院、京師の人、坊城氏なり、十四歲出家し、十五歲十八道を修し、十九歲入壇、四十八歲灌頂を受け、台密事相を以て聞ゆ、應安五年九月二十日寂す、(三國名匠畧記)

ゴーチヨー 豪潮 クワンカイ寬海を見よ、

ゴーユー 豪猷 一九九四 二〇八四 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、豪猷は建武元年に生る、永和元年五月良瑜に從ひて傳法灌頂壇に入り、不動力度二位を得、又南瀧に奉仕すること一千日なり、應永三十一年十二月十二日寂す壽九十一、(三井續灯記)

ゴークワン 仰觀 リヨーダイ良大を見よ、

ゴーセー 仰誓 二三八一 二四五四 〔眞宗〕伊賀明覺寺のの住持なり、仰誓字は欽順、號は合明と稱し、京都明覺寺寂便の子、蓮如上人九世の孫、十四歲祝髮して僧樸に學ふ、二十餘歲出てゝ伊賀明覺寺を主とり、眞宗を振興す、中年數々宗釁に入り樸、粹、巖、鎔、雲等と同學たり、寶曆十一年命を奉して石見安藝に長門圓空の異義を糺して功あり、時に石見の淨泉寺席を虛す、檀越本山に請ひ、師をして補せしむ、乃ち明和元年始めて住す、是より先き石見の宗風大に癈たる、師興隆に力を盡し專修念佛を弘む、明和八年命を受けて本山の諸臣

を敎諭し、居ること數年、或は殿內に侍講し、或は學校に開講し、或は諸國に派出し、天明二年六十二歲にして老を告く法主號を與へて實成房と云ふ、同五年命により石見に布敎し、七年再び講臣の典敎となる 寬政六年春三月、七十四歲請に應して海方諸寺に赴き、病に罹り、四月二日遂に覺永寺に於て寂す、法主諡を與へ、實成院と稱す、著述註解多し十二禮弊蓋錄、持妻食肉辨惑記、彈妄篇、僻難對辨各一卷、正信偈夏爐記、二卷鈔夏爐編、妙好人傳、各三卷、略書嘆慶錄、和讃岐望錄、各四卷、唱導蒙求五卷、三帖和讃略解、法要典據、各六卷、眞宗小部集十卷、及び選擇集代匠記、評授要編、講餘隨筆、各若干卷あり、（碑銘、本願寺派學事史）

ゴーウ 降雨 リユーテン龍天を見よ、

ゴーカイ 業海 ホンジヨー本淨を見よ、

ゴーサン 鰲山 ケンセツ見雪を見よ、

ゴーミヨー 合明 ゴーセー仰誓を見よ、

コーチ 弘智 二〇二三 〔眞言宗〕越後岩阪養智院の開山なり、弘智は下總國香取郡の人、俗姓見玉氏なり、出家して香取郡大浦村蓮花寺に住し、解行双秀を以て聞ゆ、後、諸國に偏歷して觀修を事とし、奧羽の地に至り、轉して北陸道を經て南方紀伊高野山の靈地に登らんとし、越後彌彥山に登り神祠に詣し、三寶鳥の聲を聞き、海雲山の岩坂と云ふ所に至りて其幽靜を愛し、遂に錫を留む、草庵を營みて養智院と號し、日夕觀修を事し、貞治二年十月二日一首を和歌を遺して寂す、和歌に曰ふ「いはさかのあるじはたそと人とはゞすみゑにかきし松風の音」、且つ其終にのぞみて弟子に語りて曰ふ、我れ入寂の後葬埋することなかれ、永く禪坐して彌勒の下生を待たん、と、其後毫も筋骨腐爛するなく現然として存す諸人相傳へて弘智法印と云ひ其奇瑞に感す、越後の道海（曹洞宗の僧なり）岩坂に至り一詩を作りて曰ふ、端座岩臺首少傾、上人行履作麽生、若無ニ墨書松風詠一脫躰千年野狐精、と、共に世間に喧傳せり、（海雲山緣起、道海事歷輪軒小錄）

コーボータイシ 弘法大師 クーカイ空海を見よ、

コーヤ 弘也 コーシヨー光勝を見よ、

コクア 國阿 ズイシン隨心を見よ、

コクイ 國伊（……）〔臨濟宗〕京師建仁寺の僧なり、國伊字は伊芳、號は蘭室と云ふ、佛燈禪師の弟子某の法を嗣き、建仁寺內に長慶菴を開き住す、寂年缺く、（日本名僧傳）

コクガン 國巖 ダイサ大佐を見よ、

コククワイ 國嵬 シユーチン宗珍を見よ、

コクドー 國道 二三一七 〔淨土宗〕江戶長圓寺の開山なり、國道は往蓮社傳譽と號し、伊豆伊東の人、隨流に法を嗣き、江戶高輪長圓寺を開く、明曆三年六月一日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

コクオー 谷翁 ドークー道空を見よ、

コクホ 克補 ケーギ契嶷を見よ、

コクリユー 瀫龍 エテン慧天を見よ、

ゴクア 極阿 ライヨ來譽を見よ、

ゴクエン 極圓（二三一六）〔臨濟宗〕磐城國長松寺の學僧なり、極圓は薛壁の人なり、明曆二年中村藩に至り、万年山長松寺に住し、大に儒學を講す、門下に蠻山あり、（日本敎

育史料）

コツアン 亢菴　フネー普寧を見よ、

コツザン 亢山　ニチニン日忍を見よ、

コンコー 金光　一八一五 一八七七 〔浄土宗〕祖源空上人の弟子なり、

金光は鎭西の人なり、初め筑後石垣寺に留り、尋て比叡山に登り内外の學に通す、後、源空上人に就いて浄土教を受け、奥義に達す、當時隆寛聖光と弁稱して門下の三傑と呼ばれたり正治の頃上人の命により奥州に遊化し、會津に留りて大に浄土教を弘通す、承元々年南部に一寺を建立し、同四年津輕に一寺を建立し、行岳山西光寺と號す、京師の勢觀房源智、遙に金光上人の遊化を喜び、建保の初善導大師の般舟讃一巻、源空上人の遺誓一篇を寫して寄送せり、上人大に悅び、乃ち西光寺に於て法筵を張り、般舟讃等を講釋す、日々聽衆堂に溢れたりと云ふ、中山に登り、頂上に草菴を結び、別時念佛を修行するに、諸人皈仰して良材を寄附したれば、山中の一廢寺を再與し、大中山梵場寺と號す、建保二年の夏大に旱す、師諸人の請により雨を祈るに、唯南無阿彌陀佛を口稱して大に靈驗あり、これより諸人益來附せり、建保五年三月廿五日西光寺に寂す、壽六十三遺言により全身を東の岡に葬る、著作末法念佛獨妙鈔六巻等あり、金光上人行精進にして、月々に轉經行道法事讃を修し、且つ七日別時念佛を行することを欽かず、旅行中と雖も、晝夜六時禮讃を行し阿彌陀經六巻を誦し阿彌陀佛名五万聲を唱ふると皆て怠らざりきと云ふ、（金光禪師行狀、浄土總系譜、浄土傳燈錄）

〔考〕浄土傳燈錄石垣寺金光上人傳に嘉祿三年天台宗の僧定照の讒言により奥州に配流せられ、其地に寂したりとあり、右に掲くる所に稍同かす、孰れか事實なるか詳ならず、

コンゲーエン 金猊園　カイヂョー戒定を見よ、

コンコー 金岡　ヨーケン用兼見よ、

コンゴーシンイン 金剛心院　タンコー謙厚を見よ、

コンコーミョーイン 金光明院　シンジュン眞淳を見よ、

コンザン 金山　ミョーコー明祠を見よ、

コンシ 金獅　コーイ廣威を見よ、

コンタイ 金胎　カクゼン覺禪を見よ、

コンポー 金峰　ミョーコー明祠を見よ、

コンリン 金輪　エンソン圓尊を見よ、

コンリユードーニン 金龍道人　キョーオー敬雄を見よ、

コンシツ 建室　シユーイン宗寅を見よ、

コンジユン 建順　ショーカク昭覺を見よ、

コンゼー 建撕（……）〔曹洞宗〕越前永平寺第十四代なり、

建撕は鄕貫詳ならす、永平寺第十三代建綱禪師の後を受けて同寺第十四代の住持となる、示寂年月詳ならす、著作道元禪師の行狀二巻あり、後人建撕記といふ、

コンリユー 建隆（……）〔曹洞宗〕下總孝顯寺の僧なり、

建隆字は與豐、下總の豪族なり、出家して諸老に編參し、的翁文仲に見えて印可を付せられ、龍源寺に住し、孝顯寺に遷る、其道望京師に聞こえ、召されて宮中にに入り、説法し、號を天桂禪師と賜ふ、寂年及ひ壽欽く、法嗣舜國洞授

あり、(日本洞上聯燈錄)

コンリューイン 建立院 ニチデン日傳を見よ、

コンリヨー 建梁 二一九五 二二七三 〔曹洞宗〕伯耆總泉寺中興なり、建梁字は棟室、伯耆の人、俗姓は源氏、山名氏の族なり、幼にして州の觀音寺秋山總菊に投して童子となり、十三歳祝髮し具足戒を受け、初め出雲の洞光寺竹堂に依り、尋て東海諸師の門に周歴し、年を越えて觀音寺に歸へり、總菊を省して座下に留り遂に其嗣となる、同國の刺史景盛、其道風を聞き、聘して觀音寺に主となるしむ、中村某眞福寺を捌し師を延きて第一代とす、文祿元年尼永吟大守源心居士に告けて美作の青蓮寺の基趾を移し、更めて總泉寺と稱し、師を中興祖とす、師一住四年法子吟嶺に命して住せしめ、自ら桂住寺を捌して退去し、慶長十八年九月十五日寂す、壽七十九、臘六十六、(日本洞上聯灯錄)

ゴングワン 欣願 ゴーセー仰誓を見よ、

ゴンシン 欣眞 二三三三 〔淨土宗〕山城地福寺の僧なり、欣眞字は徃譽、山城國深草村の地福寺の住僧なり、念佛相續すること晝夜を別せず、時處を論せず、勇猛精進なり、寛文二年八月十五日寂す、壽詳かならず、(緇白往生傳)

ゴンシン 欣心 クワクゲン廓源を見よ、

ゴンヨ 欣譽 チヨードン長呑を見よ、

ゴンヨ 欣譽 サンキユー三汲を見よ、

コンホー 近保 (一四五五) 〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、近保三論に精し、維摩會講師となり、仁和元年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

コンヨ 近譽 ジユンオー順應を見よ、

コンヨーイン 近要院 ニチジ日慈を見よ、

コンニチアン 今日菴 エンクワン圓環を見よ、

ゴンキヨー 勤慶 テーグ貞弘を見よ、

ゴンシヨー 勤性 ジンサン尋算を見よ、

ゴンソー 勤操 一四一八 一四八七 〔三論宗〕大和石淵(イハフチ)寺の學僧なり、勤操俗姓は秦氏、大和高市郡の人、天平寶字二年に生る、十二歳大安寺の信禮を禮して師となし、十六歳潜に高野山に入りて禪坐修鍛す、老母の招くに任せて還へりて東大寺に寓す仍て善議法師に就きて三論宗を稟く、神護景雲四年勅により宮中及ひ山階寺にて一千僧を度す、弘仁元年大極殿に昇り、最勝王經を講し、紫宸殿に諸宗の討論をなすや、師選はれて座主となる、勅して僧都は任し、東大寺を兼管す、淳和天皇擢てゝ西寺を主とらしむ、師、後、大和に石淵寺を開き、大に空宗を張り、兼ねて密法を授く、天長三年大僧都に轉し、翌四年五月七日西寺の北院に寂す、壽七十、臘四十七、洛東鳥部野の南岡に茶毘す、(元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕 弘法大師空海の傳記に依れは、勤操は空海が受戒の師なりとあり、然れとも性靈集に收むる空海か勤操を祭る文に依れは、受戒師たると見えす、故に事實如何は詳ならざるなり

ゴンソン 勤尊 一八四八 一九三〇 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、勤尊は備前の人、行勤法師に從ひて剃髮受具し、敎門を學ふ、晩年兼秀に就きて講究を事とし且玄圓に見えて智證一門の秘奥を授くる、遂に三會已講となり、又學頭第一座に居る、文永四年十二月廿八日探題に上り、七年二月某日寂す、壽八十

三、（三井續灯記）

ゴンカク　嚴覺　一七一六 一七八一　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、嚴覺は源基平の子、仁和寺覺意、園城寺行尊の弟なり、東寺の信覺に從ひて剃髮染衣し、秘法を受學す、永保三年信覺に灌頂を受け、康和四年冬範俊を拜して重ねて密灌を受け、小野流を盡す、勸修寺に住し、安祥寺に移つる、永久五年東寺の長者に加はり、同年敕を受けて神泉苑に請雨經法を修す、元永の初仁王經法を禁殿に行ひ、保安元年權大僧都に任す、二年閏五月八日寂す、壽六十六弟子五人あり、共に一時に名を揚く、就中增俊は隨心院を開きて第一世となり、寛信は勸修寺に宗慧は安祥寺に開法しこれより小野流三派に分る（密宗血脈鈔、本朝高僧傳）

ゴンカク　嚴覺（一七八八）　〔眞言宗〕山城仁和寺の僧都なり、嚴覺字は定法已講と稱す、大治三年十一月二日三寶院にて傳法灌頂を受け、禪惠は敎授護摩聖賢定祐の二人は嘆德たり、（續傳燈廣錄）

ゴンカク　嚴覺　ショーゲン尙彥を見よ、

ゴンケ　嚴家　一九六六………　〔眞言宗〕山城醍醐寺の座主なり、嚴家は一條關白藤原家經の子なり、大僧正靜嚴に從ひて灌頂法を受け、諸密軌を傳へ、嘉元元年東寺の長者を司とる、三年春寺務並に法務を領し、尋いて大僧正に任す、德治元年春仙洞に愛染の法を修して賞を受け、夏四月護持僧となる旨尋いて、醍醐寺の座主となる、性多病なるを以て隨心院に退居し、延慶元年十一月三日寂す、壽欲く、（本朝高僧傳）

ゴンジツ　嚴實（………）　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、嚴實は大和虛空藏嚴寺の僧なり、已に二十歲に及び、兩眼明を失ふ、乃ち高野山に登り大師堂に詣で禱ること三年、兩目明を得たり、師玆に於て益信を發し、精修を怠ることなし、寂年、及壽欠く、（本朝高僧傳、高野往生傳）

ゴンシン　嚴眞（一八九八）　〔眞言宗〕大和海龍王寺の律僧なり、嚴眞字は戒慧、出家して密行を精修し、二十三歲醍醐寺の信惠阿闍梨に就きて具支灌頂を受け、奈良の海龍王寺に住して大に眞言を弘む、嘉禎二年興正菩薩を請して毘尼を敷演せしめ、翌年八月就きて具足戒を受けんと欲するも年德あるを以て興正菩薩肯せす、師遂に自誓自受す、爾後興正菩薩を助けて化を布き、盛に戒律を弘む、曆仁元年興正西大寺に住するとき、師擧けられて維那の職に任す、寛元三年興正別受戒を開き、師家原寺にありて具足戒を稟受す、寺に歸へりて長く講經說戒し、其終を知らす、（本朝高僧傳）

ゴンジヨー　嚴城（二四七三）　〔眞宗〕美濃淨明寺第十七代なり、嚴城は美濃不破郡垂井驛專精寺に生れ、本巢郡十五條村淨明寺の敎雪の嗣ひなり、後同寺第十七代の住職を繼く、室は即敎雪の女にして、晚年薙髮して法名を壽專と號す、心行殊勝にして賢夫人の稱あり、妙好人傳初編に見ゆ、師宗學を淨信院に承けて大に得る所あり、學林に於て選擇集を講せし時、世評頗る高し、三業優亂の際、淨信院を助けて周旋大に勤む、其事同事舊記、並に師の淨信院に贈りし手簡の草案にて見るべし、師に子あり長を大愍、次を巖麗といふ、共に乘誓院に從ひて、宗學を習ひ、皆亦成る所あり、（父子相繼きて學林の事務を執ること數年なりきといふ、三師皆所著の講

錄若干卷あり、今猶寺庫に存せりと云ふ、(學苑談叢)

ゴンチ 嚴智 (一四〇八) 〔法相宗〕奈良元興寺の僧なり、嚴智俗姓不詳、初三論法相を學び、後審詳大德に就きて華嚴を學び、天平の末金鐘道場に於て開講す、標瓊性泰覆師となり華嚴經六十卷を畢ふ、門下智景あり、嚴智示寂の年時缺く、(三國佛法傳通緣起、本朝高僧傳)

ゴンチユー 嚴中　シユーガク周噩を見よ、

ゴンニヨ 嚴如　コーシヨー光勝を見よ、

ゴンヨ 嚴譽　リユーテキ龍的を見よ、

ゴンヨ 嚴譽　レキオー礫翁を見よ、

ゴンヨ 嚴譽　シユーシン宗眞を見よ、

ゴンヨ 嚴譽　クワクガン廓含を見よ、

ゴンヨ 嚴譽　テンレー典嶺を見よ、

ゴンチユー 權中　チユーソン中巽を見よ、

ゴンヨ 儼譽　ローゲツ朗月を見よ、

サの部

サガコジ 嵯峨居士　エリヨー慧亮を見よ、

サリユーケン 嵯留軒　チヨートー長棟を見よ、

サチヨー 佐超 (二二三〇／二二五九) 〔眞宗〕山城興正寺の第四代なり、佐超字は顯尊童名は阿古丸といひ、光壽の同母弟なり、永祿七年正月廿二日に生る、十年九月廿六日興正寺證秀の法嗣となり、明年三月證秀寂す、十二年八月二十日正親町天皇勅書を顯如宗主に賜ひ、師を本山の脇門跡となす、時に僅に六歲なり、天正三年正月廿八日十二歲にして薙髮し、四年二月九日直に法眼に叙し、十七年十二月十日權僧正に任す、慶長四年三月三日寂す、壽三十、諡して往還院といふ、四子一女あり、(本願寺通紀)

サブツ 作佛 (一八七二) 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、作佛は遠江國久野の人なり初め山伏となり、金峯熊野に登ること四十八度におよぶ、後、靈告により源空上人に謁して淨土敎を受け遠江國に宗義を弘通す、示寂の年月日缺く、(淨土傳灯錄)

サイイン 西因 (一七八一…) 〔天台宗〕加賀神宮寺の僧なり、西因は肥前松浦郡の人、十四歲出家得度し、二十歲京師に上り、比叡山の戒壇に大乘戒を受く、承曆年中加賀白山に登り、苦修すること四十三年、保安の初年三麓神宮寺に住す、同二年六月一日末後の記を作りて寂す、壽缺く、(續本朝文粹、本朝高僧傳)

サイイン 西胤　シユンシヨー俊承を見よ、

サイカン 西礀　シドン子曇を見よ、

サイガン 西岸 (二二三一／二三〇二) 〔天台宗〕伊勢西來寺の僧なり、西岸一に盛岸と云ふ、字は良澄、京師の人なり、俗姓詳ならず、青年の比出家し、天台宗に皈し、天台の敎義を研究すること年あり、次に高雄山に登りて眞言を學ぶ、後、伊勢國西來寺に住す、幾もなく京師に皈り、禪林寺、三鈷寺、壬生寺等の諸寺に寓す、四邊爭て師に慈訓を承る者多し、後、大和國に赴き法隆寺の東南斑鳩宮に寓居す、其後師の高弟高永律師の請を入れて、再び京師に歸り、壬生寺の地藏院に住す、

京師ハ衆僧師が歸京を聞きて來集す、師の化益を蒙るもの甚だ多し、寛永十九年九月十九日寂す、壽七十二歳、(緇白往生傳)

サイガン　西岸　ドンチョー呑潮を見よ、

サイガン　西岸　リョーチョー良澄を見よ、

サイギン　西吟　二二六六 二三二四　〔眞宗〕豐前永照寺の學僧なり、西吟は照默と號す、(一に昭默に作る)、俗姓村上氏と云ふ、豐前小倉の人なり、永照寺に住す、幼時學問を好まさりしが、嘗て中津に至り、紀伊性應寺了尊の講演の席に列す毎日學徒輪次に唱演し、師に至り辭して出てす、然るに學徒再三勸めて已まざれは、翌日出てゝ講演を覆述するに、一も脫漏なく、大に學徒を驚かせり、これより學問に意を傾け、先つ文字を記臆せんとし、韻略を取りて暗誦し、已にし暗誦すれは冊を破り、日々數十紙を棄て去りたりと云ふ、遂に經論章疏を閱讀し其義に精通するに至る、幾もなく出遊して京師に上り、慧日山東福寺に投し、臨濟の宗風を窺ひ、雪窓禪師等に交はる、二年にして小倉に皈り、專ら眞宗の宗意を講究し、且つ學徒を教授す、寛政十五年十二月三條銀座の野村宗句と云へる者、資財を寄附し、本願寺の本堂の西北に黌舍を建築す、翌十六年十一月講堂落成し、宗主慶讃會を行ふ、乃ち河内出口光善寺准玄を擧けて講主に任し能化と稱す、後正保三年十二月宗句の子講堂を改め建築す、然るに同四年准玄出口に歸りたれは、同年九月宗主光圓特に師を召して能化となす、慶安二年中村氏銀四百兩を投して衆寮を建築し、且つ書籍數十部を寄附す、師黌舍の規則を制定して、專ら學徒の教養に力を盡す、承應元年九月黌舍を興正寺の南邊に遷すに方り、師再び規則十二條を制定し小は學徒の服裝等に至る、翌二年肥後延壽寺月感圓海京師に入り、師の宗意を解するは禪に基き、全く開祖の意に背けりとなし、大に彈劾す、是れかため學徒騷擾を極め、遂に同年の安居を停止せられ、翌年も同しく停止せらる、明曆元年に至りて尚ほ落着せざるを以て、本山これを幕府に訴ふ、幕府兩方の意見を訊問糺察し　遂に宗主幷に西吟を責め、且つ命を下して黌舍を閉鎖す、然れど師の門下に教を請ふ者益加はり、道俗共に歸向せり、小倉侯忠信幷に夫人師の學德を崇重し、數〻召見して教を請ふ、師夫人の請により普門品を註して呈す、後侯より山林一區を給し、師の淨用に供せらる、寛文四年八月十四日侍者に告けて曰ふ、我明日逝くべし、今汝等に訣る、生死事大なり、各自ら努力せよ、と、十五日正午、沐浴して淨衣を着け、端然として寂す、壽五十九、足立山に葬る、著

成規院西吟師

正信偈要解四卷、破邪問答、普門品假名鈔、各三卷、客照問答二卷、無量壽經科概、四敎儀最要鈔、各一卷あり、寶曆中宗ト論を與へて成規院と號す、演慈院知空の師の圖像の贊あり、曰ふ、恭㆓奉眞像㆒思㆑報㆓篤恩㆒、吟㆓西方敎㆒、永照㆓兒孫㆒、繼㆑絕興㆑廢、盛排㆓祖門㆒、四方響至、執㆑塵泝㆑源、僧正懇遲、述㆓宗徽言㆒、望㆑之憲毅、卽㆑之怡溫、師子奮迅、象王回翻、學庠幹轄、推轂法園、八十二齡弟子知空謹贊、(本願寺通紀、龍谷講主傳、淸流紀談、本願寺派學事史)

サイギヨー　西行　一一七八〇一一八五〇　〔……〕京師の歌僧なり、西行は圓位と云ふ、俗姓は佐藤氏、名は義淸と云ふ、鎭守府將軍藤原秀鄉の孫にして左衞門尉康淸の子なり、後鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衞尉に任せらる、平素甚だ和歌を嗜む、上皇其才を愛し、寵遇甚た渥し、然れども名利を喜ばず、常に世を遁れんとする志あり、上皇諭旨して撿非違使に補せんとしたまふに、其職の罪人を逮捕して陰禍を招くを以て固く之を辭す、會鳥羽新宮成り、上皇一時の名流をして障子に書及び和歌を題せしむ、師卽日に十首を進め、大に嘉賞したまひ御劍朝日丸を賜ふ、嘗て憲康と共に鳥羽殿に參朝し其歸途別るゝに臨み相約し明日亦當に共に朝すべし、と、師期の如く至れは、其家に哭聲あり、怪みて之を問へは憲康昨夜暴かに死す、と、師これを聞き惕然とし出家の志益固く、具に情を陳べて官を辭す、然れとも上皇其才を惜みて許さず、師は益々出家の志禁ずる能はず、其夜遂に妻子を棄て、嵯峨に往き僧となり、西行と名け、圓位と號す、時に年二十三なり、其妻もまた尼となり、高野天野に居りて練行賢貞なり、師謂らく、出家は家なし、行脚して身を終ふべしと、東國西州遠近として到らざるなし、伊勢二見浦に菴居し草を藉て茵となし、石に穴して硏となし、和歌會毎に扇或は花筐を用ひて文臺に代ふ、神護寺の文覺師を悅ばずして曰く、出家の業は菩提の道を修するにあり、然るに西行は四方に周遊し、吟詠を以て日を渉る、實に釋門の賊なり、吾れ是れを見ば必ず擊て其頭を破らん、と、後師高雄山に登れる時、文覺與に語りて大に悅ぶ、其徒文覺に謂て曰く、師前に凌辱を加へんと言ふ、而して今此の如きは何んぞや、と、文覺曰く、爾曹西行の狀態を見さるか、固より我に毆るゝ者にあらず、却て將に吾を毆たんとするの狀あり、と、師鎌倉を過ぎ、路に賴朝に逢ふ、賴朝人をして名を問はしめ、召し見て和歌及射御を問ふ、師固辭して曰く、弓馬は畧箕業を繼ぐ、然れども出家の日秀鄉以來傳はりし書は悉く焚きたり、和歌の如きは時に感じ物に觸れて僅に能く之を成せども、微

西行法師

サイ(西)ギ

旨奥義は素より解せさるところなり、と、然れども頼朝の固く請ふを以て通宵弓馬を談じ、翌日辭するに及び、銀猫を贈らる、適々門前に兒童の遊戯するを見彼の銀猫を與へて去る、建久元年二月十六日京都に寂す壽七十三、師嘗て櫻花を詠じて曰く、「願はくは花のもとにて春死なん其きさらぎの望月のころ」と、竟に其言の如し著作山家集、御裳濯川歌合、撰集鈔等あり、(大日本史)

サイグワツ 西月 (二三一八……) 〔淨土宗〕京都某菴の僧なり、西月字は良眞京都の人なり、深く阿彌陀佛の本願を信す、上花山村に福應寺の廢頽を中興す、萬治元年正月十五日寂す、(續日本高僧傳)

サイゲボー 西華坊 シコー支考を見よ、

サイコ 西湖 リヨーケー頁景を見よ、

サイサ 西査 ジヨーイン淨因を見よ、

サイシン 西信 二三一八…… (……) 尾張某寺の僧なり、西信は尾張國の人なり、其俗姓は詳ならず、國に眞言寺あり、其寺の法印と深く相結び小菴を寺の側に結び、互に佛號を稱念す萬治元年十月十五日寂す、壽詳ならず、(緇白往生傳)

サイジユー 西住 (一八一九) 〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、　西住俗名は鎌倉二郎源次兵衛季正と稱し、勇武を以て人に知らる、保元平治の間源氏の衰微するに及び、出家入道し、西行と一雙となりて西住といふ、理性院の法脈を嗣き、蓮華院に住す(續傳燈廣錄)

サイジユン 西順 (……)(……) 京師の歌僧なり、西順は如是菴と號す、京都の人、和歌を好み秀作あり、著作九代鈔七卷、十一代鈔抜書四卷、廿一代名歌集要六卷、夫木鈔抜書四卷、同拾穗鈔十五卷、續古今玉葉風雅抜書三卷、歌林名所考五卷あり、(鑑定便覽、近代名家著述目錄)

サイシヨー 西笑 (……) 〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、　西笑は伊豫の人、比叡山大悲院に住し、好みて楞嚴維摩諸經を讀み、又た爾雅を喜ぶ、詩を善くし嶽を下れば必ず其友梅辻春樵を訪ひ、これと詩話して殆んど寢食を忘れ、皈れば即ち戸を閉ぢて苦讀するのみ、更に他の僧侶に親からす、寂年壽缺く、(事實文編)

サイセン 西川 シユージユン宗洵を見よ、

サイセン 西仙 シンジヤク心寂を見よ、

サイネン 西念 一八三八…… 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、西念は信濃の人、幼にして高野山に登り、心蓮を拜して出家受戒し、諸尊の義軌を傳へ、傍ら阿彌陀の供法を受く、治承二年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

サイネン 西念 一八四二 一九四九 〔眞宗〕信濃長命寺の住持なり、西念俗姓は源氏、信濃の人、父は井上盛長なり、親鸞に謫居に謁して弟子の禮を執り、其東化に從ひ、尋いて京師に伴隨す、後、東歸するに方り親鸞自像を刻して與ふ、正應元年覺如宗主東遊する時師謁見す、覺如長命寺の號を與ふ、明年三月十五日寂す、壽百八歲、信濃水内郡南堀村布野長命寺は其遺跡なり、(本願寺通紀)

サイネン 西念 マンキユー萬休を見よ、

サイフー 西風 レキオー歷央を見よ、

サイブツ 西佛 一八一七 一九〇一 〔眞宗〕信濃康樂寺の住持なり、

西佛俗名は藏人通廣、姓は海野氏、父は信濃守幸親なり、師剃髮して信叙と號し、興福寺に居る、學內外に通し、文章を善くす、慈鎭の門下に列して名を淨寬と改む、時に親鸞亦門下にあり、師之を欣敬し、自ら名を西佛と改めて其弟子となる、命を奉して信濃を行化し、小縣郡海野莊白鳥に康樂寺を造る、仁治二年正月廿八日寂す、壽八十五、法嗣淨賀（一に西佛の孫）書を善す、永仁三年宗昭祖傳を編する時、師繪を作りて之に副ふ、（本願寺通紀）

サイホ　西浦　シユーシユク宗肅を見よ、

サイホー　西法　一七一四 一七八六　〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、西法は壯年にして出家し、初め比叡山に居りしが、後、居處常ならず、四方に奔化して堂塔を修し、病飢を救ふ、又衆僧を勸めて一切經を書せしむ、大治元年祇園寺の東峰將軍塚の側に艸菴を結び、九月二十三日寂す、壽七十三、（本朝高僧傳）

サイヨ　西譽　ソーグワツ窻月を見よ、

サイヨ　西譽　チヨーシン潮心を見よ、

サイエン　濟延　（一七二九）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、濟延其俗姓生國詳かならず、密學に精通し、大僧都に任ず、治曆三年六月大旱に際し、敕により東寺に於て雨を祈りて驗あり、後、東寺の二長者に任じ、延久某年寂す、壽五十九、（本朝高僧傳）

サイキヨー　濟慶　一六四五 一七〇七　〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、　濟慶は京都の人、俗姓は藤原氏、參議有國の子なり、幼にして出家し、澄心に三論宗を學び、稟具の後諸師の門に遊び、性相の奧旨を究め、傳燈大法師に任す、萬壽元年維摩會の講師となり、尋で法華最勝二會を經、長元元年東大寺を主どる、律師より綱位に昇り、永承二年十月十四日東南院に寂す、壽六十三、（本朝高僧傳）

サイクワン　濟關　スートー崇透を見よ、

サイゲン　濟源　一六二〇……　〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、濟源其俗姓生國詳かならす藥師寺の延義僧都に從ひて三論を習學し空宗の薀を究め、兼て念佛三昧を修す、常に騎するところの白馬師が念佛三昧に感し、跪きて啼泣したりと云ふ、權少僧都に任す、天德四年四月五日寂す、壽缺く（往生極樂記、本朝高僧傳）

サイコー　濟高　一五一一 一六〇一　〔眞言宗〕山城勸修寺の學僧なり、濟高は出家して承俊慧宿の二師に從つて密敎を學び、後、聖寶に依つて灌頂壇に入り、且、密敎を質す、延喜三年の秋、醍醐天皇勸修寺を建立したまひ、師詔により落慶供養の導師となり、十年の秋同寺に住す、延長三年天皇法華經を御筆し、寺に就て慶讃し、師導師となり其賞により律師に任す、六年十二月東寺の長者となり、承平五年少僧都に任ず、天慶四年大僧都に昇り、十一月二十五日寂す、壽九十一、（本朝高僧傳）

サイシン　濟信　一六一四 一六九〇　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、濟信俗姓は源氏、左大臣雅信の子なり、勸修寺雅慶僧正の室に投じて諸密敎を習ひ、後、遍照寺寬朝に灌頂の大法を稟け、仁和寺の喜多院に住し、公卿士庶の信仰を受く、長德四年敕により東寺の長者となり、これより累進して、權少僧都に任ず、長保三年三月敕を奉して眞言院に於て攘疫の法を修して効驗あり、明年七月權大僧都に轉ず、寬弘二年冬東大寺主に

補し、三年四月大僧都を辭して園城寺の永圓阿闍梨に讓る、永圓は師の甥なり、僧官を他門に讓るは初例と云ふべし、寛仁三年十月詔により大僧正に任ず、明年春車に乘じ禁中に入るを聽さる、これ僧にして此宣を蒙る始なり、治安三年冬職を辭して舊院に歸り、長元二年十二月三十日封七十戸を給はり、三年六月十一日寂す、壽七十七、觀音院の灌頂堂後に葬る、師傳法灌頂の弟子五人あり、仁和寺性信、華藏院延壽山階寺賢尋、大僧都念縁、律師永昭等皆一時に鳴る、(仁和寺御傳、本朝高僧傳)

サイジン 濟深 二三三〇/二三六一 〔眞言宗〕京都勸修寺廿九代の長吏なり、濟深は中御門天皇第一皇子、母は中納言典侍小倉尙書實起の女なり、寛文十一年八月十六日生る、新上西門皇后取りて子となし、便ち一宮と稱す、甫めて五歳、鷹司前攝政房輔に養はれ、天和二年八月十六日寛俊大僧正の室に入り、十月二十五日宣して親王となり、諱を寛清と賜ひ、廿八日得度して名を濟深と改む、即ち長吏に補す、時に十二歳溪水と字す、貞享四年學に就く、十二月高野山西谷大德院下從三十六人來りて師に勸修大法を承く、五年詔して東大寺の別當に補し、三月四日二品に叙す、元祿二年安井侍官師堯海模造する所の聖武天皇の像を東大寺に安するや、師其開眼供養師となる、四年四月詔を受けて東大寺の戒壇に登り、二十一日具足戒を受く時に年二十一なり、五年二月宣して一身阿闍梨となり、十三日權僧正光曉に傳法灌頂職位を受く、十四年十二月二日寂す、壽三十二、(後傳燈廣錄)

サイジン 濟深 サイジン濟甚に同し、

サイジン 濟甚 (……) 〔眞言宗〕伊勢教王山の第二代なり、濟甚一に濟深に作る、後改めて圓空といひ、大夫律師と字す、宗寛の法を嗣き、教王山內證院の二代となる、寂年缺く、付法の弟子覺什の一人あり、(傳燈廣錄)

サイシユン 濟俊 一七五六/一八三九 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、濟俊は紀伊在田郡の人なり、少にして高野山に登り密教を習ふ、琳覽に從ひて兩部の灌頂を受け、諸尊の祕要を究む、阿闍梨に任し、撿校職を掌とる、治承三年三月某日寂す、壽八十四、(本朝高僧傳)

サイジヨ 濟助 一九一六 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、濟助俗姓は藤原氏、攝政敎實の子なり、康元元年公緣を拜して入壇し、名を理眞と改めしが、後再ひ舊名に復す、其寂年缺く、(三井續燈記)

サイセン 濟暹 一六八五/一七七五 〔眞言宗〕京都慈尊院の學僧なり、濟暹は朝臣文綱の子なり出家して仁和寺性信親王付法の上足となり、密教に精通し、僧都に任して慈尊院に住す、長治元年弘法大師の忌辰に當り、眞影供を獻す、長者職に非して此を司とるものは極めて稀なり、天仁二年冬詔して仁和寺に始めて傳法會を置き、理趣經を講せしむ、衆議師を以て講師に充つ、弘法大師文集の性靈集世を歷て末部三卷亡失す、師四方を搜索して脫漏を增補し、續遍照發揮性靈補闕鈔三卷を成す、又經論註疏の著作あり、永久三年十一月十六日寂す、壽九十一、(本朝高僧傳)

サイトー 濟棟 一四九九/一五六五 〔法相宗〕大和東大寺の學僧なり、濟棟は幼にして出家し、十九歲受戒し、興福東大兩寺の間に

周旋して法相の學を究め、敕して傳燈大法師となる、寛平四年維摩會の講師となり、尋で法華最勝二會の講主を歴、六年夏東寺に住し、律師に任ず、居ること四年にして唐禪院に退休し、延喜四年大僧都となり、五年六月寂す、壽六十七、臘四十八、時の人唐禪院の僧都と稱す(本朝高僧傳)

サイニシ　濟忍　二五一四……〔眞宗〕越前坂井郡宿浦圓藏寺の住持なり、　濟忍は寮司となりて天保十三年より高倉學寮に入論因明大疏、淨土見聞集、二十唯識論述記を講し、弘化四年四月卅日(一に廿日)擬講となり、安政元年寂す、(眞宗史料)

サイホー　濟寶(一九一〇)〔……〕　筑前觀世音寺の中興なり、濟寶は鎭西の人、寛元年中宋に入り一時の名匠に逢ひて經律を學ひ、靈地に巡遊して東歸し、觀世音寺に住す、時に寺宇荒廢せり、師大に之を慨き、建長二年自ら遊化して財を募り、殿閣門廡凡て觀を改む、且つ施者の姓名を書して聖觀音の像中に納む、寂年、及ひ壽歘く(本朝高僧傳)

サイウン　最雲　一七六四／一八二二〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、最雲は堀河天皇の皇子なり、比叡山に登り、座主仁豪に就きて落髮受戒し、仁實僧正に依りて習學し、顯密の堂奥に涉る、敕して一身阿闍梨に任す、久壽三年春延暦寺の座主に補し、保元三年僧正に轉す、此年三月一日日蝕を禱りて驗あり、敕して法親王に任し、僧綱に昇る、秋辭して座主職を退く、敕して騎士六人行路に扈從せしむ、師山房に閑居して禪誦に日を送る、應保二月十六日寂す、壽五十九、(本朝高僧傳)

サイキヨー　最教(一五二三)〔戒律宗〕大和東大寺の律僧なり、　最教は貞觀五年春三月奏して四爭を請ひ許さる、一に僧の戒を受くるに四月十五日より行はん、二に未た度緣を授けざる輩は官符を下すとも受戒に與らす、三に學戒畢りて受戒の僧數を奏聞せん、四に戒壇院に印を設け、戒牒に押さん、但し其印には東大寺の印を用ゆることなりとす、(本朝高僧傳)

サイクワン　最寛　一七九〇／一八六九〔眞言宗〕京都仁和寺の別當なり、　最寛始の名は澄任一に隆任とも云ふ參議藤原親隆の子なり、三位法印といふ、應保元年十一月二日觀音寺に登りて灌頂を受く、時に年三十一なり、北院親王の命により仁和寺別當となり、又良觀寺の座主に任す、始め香隆寺にありて慈尊院に移つる、遂に勝尾山に隱れ、承元三年十二月十日寂す、壽八十、付法の弟子宏敎一人あり、(傳燈廣錄)

サイゲン　最源(一九四二)〔天台宗〕近江延暦寺座主なり、最源は左大臣良平の子、良禪聖增の二師に習學し、弘安五年天台座主に任す、寂年及ひ壽歘く、世に關伽井僧正といふ、(天台座主記)

サイシンイン　最親院　ギトー義陶を見よ、

サイジヨ　最助(一九四六)〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、　最助は後嵯峨院の子、澄覚法師に習學し、弘安九年歳三十四にして天台座主となる、寂年及ひ壽歘く、(天台座主記)

サイシヨー　最勝　ツーサイ通濟を見よ、

サイセン　最仙(一四四二)〔天台宗〕常陸西蓮寺の開山なり、　最山は戒慧雙なから其蘊を究め、常陸の講師に任す、延暦元年西蓮寺を常陸行方郡に建立して敎法弘通し、普く慈

善を行ふ、俗に悲増大士と云ふ、寂年、及び壽歆く、（本朝高僧傳）

サイチン　最珍　一八〇三／一八七九　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、最珍は鄕貫詳かならず、常に直圓に侍して玄理を究め、又猷嚴に事へて天台の法義を習ふ、七十六歲の時傳法灌頂大阿闍梨となり、又智證大師將來の義釋に就て抄を著す、權律師に勅任し、承久元年十一月二日寂す、壽七十七、（三井續燈記）

サイチヨー　最澄　一四二七／一四八二　天台宗の開祖なり、最澄は（一說に字は藥澄といふ）、近江滋賀の人、俗姓は三津首なり、其先は後漢の孝献帝より出で、孝献帝の後孫高萬貴王我國に歸化し、近江滋賀三津の地を賜はり此に住居して一族繁榮す、其裔に百枝といふものあり、日枝の神祠に祈禱して好相を感し師を生む、即ち神護景雲元年八月十八日なりといふ、七歲（一說に八歲）にして家塾に學び、十二歲にして近江國分寺に投し、大安寺行表に師事す、寶龜十一年十一月十四歲にして行表を仰きて度を受け、始めて最澄といふ、（一說に十五歲といふ）延暦四年十九歲にして大に感發するところあり、同年七月獨り日枝の山中に遁れて草菴を構へ、四恩に報せんため、法華、金光明、般若等の經を轉讀して精勤す、願文を製して曰く、最澄上違ニ於諸佛一、中背ニ皇法一、下闕ニ於孝禮一、謹隨ニ迷狂之心一、發ニ三二之願一、以ニ無所得一、而爲ニ方便一、爲ニ無上第一義一、發ニ金剛不懷不退心一、願我未レ得ニ六根相似位一、以還不レ出レ假一其、自未レ得ニ照理心一、以還不ニ才藝一二其、自レ未レ得ニ其定淨戒一、以還不レ預ニ檀主法會一三其、自未レ得ニ般若心一、以還未レ著ニ世間人事緣一、務除相似位四其、三際中間所レ修功德獨不レ受ニ已身一、普同施ニ有識一、悉令レ得ニ無上菩提一五其、と、此願文世間に傳はり、内供奉壽興之を見て大に嘆賞し、師と道交を結ひたりといふ、延暦五年二十歲にして東大寺戒壇に登りて具足戒を受け、再び草菴に住して經論章疏の閲讀を事とし、華嚴の五敎章、起信論疏等を得て講究し、後、鑑眞大和上の齎持したる天台の止觀、玄義、文句の疏、四敎義、維摩經疏等を得て講究したり、延暦七年二十二歲にして日枝山虛空藏尾にありし自倒の木を採り、自ら藥師佛の像を彫刻して安置し、草菴を改めて比叡寺と號す、其建立に方りて誓願を發し、且つ詠して曰く「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせたまへ」と、同十二年に至りて大に規摸を擴張して藥師文殊の二堂幷に經藏を興し、改めて一乘止觀院と號す、翌十三年九月三日に初度の大供養會を行ふ、桓武天皇親しく行幸したまひ、大納言正二位藤原朝臣小野麻呂、左大辨從三位紀朝臣佐敎等、皆扈從して山に登れり、大導師には興福寺善珠、咒

傳敎大師

願師には藥師寺如實、引頭には義眞、玄賓、其餘の諸役は勤操、修圓、明一、忠惠、護命、觀敏、聞寂、延秀、賢玉、眞忠、藥澄、道給、圓也、賢筭等あり、いづれも南都諸大寺の大德なり、此大供養會は願主なる師一人の意に出てたるものなるも、其盛大なる狀況は大に朝野の視聽を驚したるなり、同年十月天皇長岡より平安に都を遷したまふこととなり、師か日枝山に於ける事業は益〻便宜を得たるなり、同十五年に勅して羅生門の兩側に東寺西寺を建立せられたるが、日枝山の一乘止觀院は、兩寺とゝもに京城の鎭護に備へらる、殊に日枝山は京城の東北に方りたれは、鬼門の鎭護に備へらるゝととなりたるかことし、古傳に依れは天皇の平安に都を遷したまふに方り、師は南都の賢憬等と共に經營に力を致し、其事に關して美濃信濃の地方に至り、同地に嶮岨なる長坂ありて旅行の客の苦むを見、美濃信濃に廣濟廣極の二院を設置し、旅行の客の宿舍に充てたれは、人民皆其恩惠に服したりといふ、且つ平安の京城を經營するに方り、妙法蓮華經を一字一石に書寫して四方の境界の土中に敷きたりと云ふ、是等の事實に依れは師は山中に靜住したりと雖、決して世間の事變を無視することなく、常に京城に往來出入したること明瞭なり、然れは師の盛譽は益朝野の間に傳はり、同十六年十二月十日に勅を拜して內供奉の列に加はれり、尋て近江の正稅を以て師か山中の供養に充てらるゝととなる、其後、南都の大安寺聞最（一に聞寂に作る）東大寺の道忠（鑒眞の遺弟なり）遠志（一に遠心に作る）等の贊助を請うて大藏經を書寫し、一乘止觀院の經藏に納めんとし、彼等諸高僧の贊助により、經珍、叡勝、光仁、經豐、經藏、妙澄等を共に其書寫に力を盡し、自らこれを讀誦して其義理に達するを得たり、延曆十七年十一月、始めて山中に十講法會を開きて南都の名僧十人を請し、法華、仁王、金光明、三部の經典を講し、同二十年十一月再ひこれを開く、此時會するもの勝猷、奉基、寵忍、賢玉、藏先、光證、觀敏、慈誥、安福、玄耀等にして皆當代の龍象なり、各一卷を講す、其後、例年之れを開き、後に十一月法華會、一に霜月會と稱す、明年一月十九日（一に十五日に作る）和氣弘世、同眞綱、高雄山寺に南都の高僧、善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修圓、慈誥、玄耀、藏先、道證、光證、觀敏等十餘人を屈請して法華の圓妙の敎義を講演せしめ、特に師に請ひて此會の證義たらしむ、是れ即ち高雄法華會の始なり、師其請を受けて之に赴く、事、叡聞に達し、天皇深く隨喜したまひ、勅使治部大輔正五位和氣入鹿を遣はし口宣を賜ふ、曰く、慧日光を增し、禪河流を澄まず、一乘の玄猷始めて域內に開き、三學の軌範遂に人天を被ふ、像季傳燈古今未た聞かず、法筵に隨喜し、功德を稱嘆す、と、此に於て來會の大德皆共に表を捧けて恩を謝す、此年九月六日、皇太子（後に平城天皇といふ）も亦內舍人正六位上紀鈴鹿麻呂をを遣はして高雄山寺の法會に隨喜す、善議等復た上表して之を謝す、高雄法華會の開くるに及ひ、師か南都諸大寺の耆宿の上に坐して其證義となり、善議勤操等をして口を極めて法華を稱揚し、自ら三論法相の爭は一乘の玄理に融解すと、嘆せしむるに至る、善議は當時七十三歲、勤操は將に五十歲に垂たらんとし、共に一世の大學匠を以て目せらる、而して師は尙ほ三

サイ（最）チ

十六歳の壯年なり、師か意氣の壯なるを想見するに餘あり、九月七日天皇時に法華の教義の諸宗に超越するを見て之を興隆せんとしたまふの念深くして聖旨を和氣弘世に告けたまふ、弘世乃ち之を師に語り、共に其興隆の道を畫し、終に師自ら唐に航して其未た傳へさるところを傳へんとの議を定めたるものなり、因て天皇に上表して勅許を請へり其上表によれは、師自ら弟子義眞を從へて還學生となり、別に留學生を派して十分學習せしめんことを期したるものにして、其譯語として義眞を伴はんと欲したるは、留學生の如く長く彼地にありて唐語を習熟するの暇なきか爲なるへし、天皇即ち勅許したまひ、特に師を以て還學生となし、圓基妙澄の二人を以て天台法華宗の留學生をなしたまひ且つ師は往還一年以內を期としたまふ、然れとも譯語として義眞を携ふることは勅許なかりしにや、十月二十日に再ひ上表して遂に勅許せられたるなり、皇太子特に師を召し、入唐求法資として金銀數百兩を施與したまひ、且つ好手の者をして法華、無量義、普賢觀の三部經二通を書寫せしめ、師に托して一通を天台山修禪寺の經藏に藏め、一通を日枝山の經藏に安置せしむ、延暦廿二年三月遣唐大使參議左大辨從四位上兼越前守藤原賀能（本名葛野麻呂）同副使、從五位上石川道益、判官從六位上菅原清公、錄事朝野鹿取等を召して節刀を賜ひ同月十六日難波より發す、海路會々暴風に遭ひて破船し明經博士大學助教豐村家達等溺死す明年三月再ひ發す、師は第二船に乘し遣唐使判官正六位上菅原朝臣清公等に同乘す、海上四船再ひ暴風に苦しむ、師之を悲しみ持するところの舍利を海中に投し、海龍王に與ふ、暴風始めて止む、漸くにして明州に到着す、時に唐の德宗皇帝貞元二十年九月一日なり、師これより遣唐使等と道を分ち、同月十五日台州に向ひて天台山に登り、二十六日刺史陸淳に謁す、國淸寺の衆僧交々來りて勞を慰す、會々刺史陸淳天台山修禪寺座主道邃和尚を龍興寺に請うて摩訶止觀等を闡揚せしむ、師の法を求むる志の切なるを見て和尚に就きて聽受せしめ、筆生を集めて止觀等を寫さしむ、師和尚に請ひて三聚戒を受けんとす、和尚乃ち龍興寺極樂淨土院に於て道場を莊嚴し、諸佛を勸請して菩薩の三聚大戒を授與す、之を天台本覺の法門圓頓大戒の傳受とす、圓頓戒の傳授は我國人大乘戒を傳ふるの始めなり、蓋し道邃和尚は天台大師より七世の法孫にして湛然妙樂大師の門に出つ、當時亦佛隴寺に行滿和尚あり道邃と同門なり、師佛隴寺を訪ひ、十月七日謁を取り、十三日佛隴寺道場に入る、師の法を求むる志切なるを見て法華經疏、涅槃經疏、釋籤、止觀、並に記等八十二卷に自ら印信の證を書して之を與ふ、是を天台始覺法門の傳授とす、其後行滿和尚に就きて業を受くること二十日許なり、十一月五日道邃和尚の室に歸る、同月十三日陸淳四千帳の紙を與へ龍興寺の經生二十人をして天台の法文を書寫せしむ、師此間十一月より明年二月の末に至るまで悉く法華の圓妙の教義を傳へ、兼ねて因明戒律、及ひ禪等をも受けたりといふ三月三日求法錄を判定し、陸淳の劵印を求め、二十五日明州に還る其台州より明州に至るに方り、義眞丹福成を從へ、且つ擔夫四人を雇ひて經論佛像雜物を運搬せしむ、然るに尙ほ越州龍興寺及ひ法華寺に經疏一百七十餘卷ありと聞き、四月六日明

州の牒を得、其十一日越州に遊ふ、偶越州龍興寺に於て泰岳靈巖山寺の內供奉順曉阿闍梨に遇うて秘密灌頂を受け、三部三昧耶圖樣、契印、法文、道具等を傳受す、實に唐の貞元二十一年四月十九日なり、此時龍興寺に於て求むるところの眞言並に雜敎迹等一百二部一百一十五卷あり、前後に得る所合して二百三十部四百六十卷とす、明州の刺史審則文を作りて其正傳を證明す、內證佛法相承血脈譜によれは師は密敎金胎兩部を順曉阿闍梨より受け、別に雜曼荼羅を惟象靈光の二和上、及ひ大素江秘等より傳へたり、然れは密敎を我國に傳へたるは師を第一とせさるへからす、奈良の朝に旣に毘盧遮那大像の鑄造あり、且つ道慈の傳ありといへとも明に知るへからす、相承血脈譜には大唐貞元二十年十月十三日大唐國台州唐興縣天台山禪林寺僧脩然天竺大唐二國付法血脈並に達磨付法牛頭山法門等を傳授し師頂戴し來りて比叡山藏に安すとあり、牛頭山は黃梅縣にありて禪宗四祖道信の住またる地といふ、脩然は天台山禪林寺に住して天台宗を奉し兼て禪を傳へたるものにて馬祖道一の支系に屬す師は亦脩然より道邃行滿二和上の傍傳として天台の血脉を受け、兼ねて達磨の血脉を傳へたるものなるへく、決して禪のみを主として受けたるものにあらさるへし、故に師の禪は出發以前に大安寺行表より受けたるものを正傳とし、脩然より受けたるものを傍傳とすへし、內證佛法相承血脈譜には明かに行表より直に之を師に續けたり、以上天台、眞言、禪、及ひ圓頓戒の傳を名けて四種相承といふ、義眞も亦師と共に受戒し、灌頂を受けたりしか如し、其餘師か茶を傳來したりしことは亦有名の事實なり、後世の池上（或は井上）茶園なるもの師の移植したるに基くものなりといふ、蓋し師はこれを日吉神に供し、佛祖前に獻したるものなへし、師旣に求法のことを了し貞元二十一年五月遣唐大使賀能等と共に第一船に乘して本國に回航す、道邃和尙師に書を贈りて法門の弘通を囑し、台州司馬吳顗以下官吏僧侶數名詩文を作りて之を送る、行滿和尙亦詩あり、師の唐に留ると僅に一年にして其訪ふところは實に兩三州に止まり終に洛陽長安の地を蹈ます、五月下旬纜を解きて明州を發し、海上難なく同年六月長門國に着す、（一に對馬國下縣郡にといふ）これ實に本朝延曆二十四年八月三日なり、同月二十七日入京して表文を上り其齎持するところ經論疏記二百卅餘部、四百六十卷、金字法華經　金字金剛般若經、金字菩薩戒經、金字觀無量壽經、智者大師靈應圖一張、智者大師の禪鎭、白角の如意、天台山香爐峰神送檉、柏木尺文四牧、等、表に隨ひて奉進す、勅して和氣弘世に命し七大寺のために將來の天台の法文各一通を書寫せしめ、時に禁中の上紙を給し、圖書寮をしてこれを寫さしむ、且つ勅して道證、守遵、修圓、勤操、慈蘊、慈寬等をして野寺の天台院（後の東福寺大慈菴の地）に於て新に書寫したる法文を受學せしむ、また和氣弘世に命し諸寺の知行兼備の輩を擧けて師により三摩耶灌頂を受けしむ、即ち高雄山に法壇を建立し、法會を設く、特に畫工二十餘人を召して毗盧舍那佛像一幅、大曼荼羅一幅、寶蓋一幅を圖し、佛菩薩神王の像幅五十餘旒を縫造し、莊嚴調度皆な內裏より出つ、其盛儀想見するに餘りあり、勅して秘密灌頂を受くる者を簡定し給ひ、其選に當れる大德は道證、修圓、勤

サイ（最）チ

操、正能、正秀、廣圓等なり、之を我國秘密灌頂の始とす、次に勅して石川檉生二禪師をして眞言の法文を傳受せしむ、師は灌頂を勤操に授く。然れとも師後に灌頂を空海に受く、此に於て末徒往々師資の爭をなす、而して却て空海が師より秘密灌頂を受けたりと云ふものあるに至るも事實にあらす、九月上旬弘世勅を拜して西郊の地を擇ひ、更に豐安、靈福、泰命等をして灌頂を受けしめ、且つ此等の大德に治部省の公驗を與へしむ同年比叡山十六院の別當三綱を任命す、義眞、眞忠、圓澄、圓證、光定、其任命を蒙むる者實に二十餘名なり延暦二十五年正月三日師上表して十二律呂に準して諸宗の絕えんとするを續き、更に法華宗を加へ年分の度者を定めて華嚴宗二人、天台宗二人、律宗二人、三論、成實兩宗三人、法相俱舍兩宗三人となさんと請ふ、翌日天皇藤原内麻呂をして之を僧綱に示さしむ、五日少僧都勝虞、常騰等頗る之を賛す、此に於て同月廿六日の治部省の官符を見るに至る、度者の數一に師の請に任せ、各試課の書目を定め、且つ各法華、金光明、二部の漢音、及ひ訓を讀ましめ、經義十條を問ひ、五以上に達するものを取り、既に授戒の後は、先つ二部の戒本を讀誦し、一卷の羯磨四分律鈔を暗んせしめ、更に本業十條戒律二條を試みて七以上に通するものは立義複講、及ひ諸國の講師たらしめ、本業に通すといへども戒律に習はざるものは任用するなからしむ、永く恒例とす、同月師に度者三人を賜ひ、三月桓武天皇崩し、太子平城天皇即位し給ふ、天皇の大同五年に一乘止觀院に於て金光明、仁王、法華、三部大乘經の長講をはじめ、嵯峨天皇の弘仁三年には法華三昧堂に於て淨衆をして晝夜不斷に法華經を奉讀して國家の祈禱をなさしむ、同四年に勅あり護持僧となり、同五年に筑紫に至りて先年渡海當時の願を遂けて佛像を造成し、（六處塔の一）八幡大神のために神宮寺に於て法華經を講し、太神隨喜して師に袈裟紫衣を賜ひたりと云ふ、弘仁五年正月十四日天皇法華の敎義を聞かんと欲し、師を召し宮中に於て諸宗の學僧と對論せしむ、これ師の諸宗と對抗することの始なり、明年八月和氣氏の請によりて南都大安寺に赴きて妙法を闡揚し、諸大寺の學僧と對論したりしが如し、之より比叡山南都の爭、漸く端を開き、師の事業の大成を見るに至るなり、爾後師は一方には南都に對して爭論し他の一方には比叡山の規律を肅整して一宗開立の基本を固うす、法華經一千部を書寫し諸國に多寶塔六基を造立して之を安置し、國家の福利を祈らんと企てたりこれ全く師か普く日本國に其宗を流演せんとしたる一方法なり、筑紫宇佐郡（安南）、上野綠野郡（安東）、下野都賀郡（安北）、三塔成りて餘の三千部三塔、即ち中國の二塔、叡山西塔院（安中）、東塔院（安總）、及ひ西國の一塔、筑前の寶塔院は未た成らすして師滅に就き、後年弟子等其志をなしたりといふ、師が入唐以前の法華の圓妙の敎義を闡揚するに方りては南都の諸高僧大に師を歡迎し師も亦敢て之れに向ひて對抗することなかりしが、其入唐以後は漸く一乘三乘の敎義を比較して權實の相異を論したれは、南都の諸大寺は三論法相を以て立てるものなれば、始めて師か其敵たることを覺り、漸く盛に師の論するところを駁撃するに至れり、古來入唐來朝の高僧大德甚た多し、最澄後進の一小沙彌にして彼等先進を踰

越し、一の僻説を主張して盛譽を擅にせんとするものなり、と云へり、然るに師は益權實の相異を論し、大乘圓頓の大戒を說くに至り、南都の諸大寺に關係なく、別に比叡山に一旗幟を樹てんとする狀勢あるを見、南都の諸大寺は大に驚き、且つ憤り、極力師を駁擊せり、こゝに於て南都比叡山は全く相敵視し、爭論益激烈なるを致し、一世を動搖するに至れり。一に權實敎義の爭、二に大小戒律の爭なり、初め大僧都護命等は僧綱の重職に在りて師を目して一小沙彌となしたり、然るに師は一々經論に證して周到精細に自家の主張するところを辨明し、其博覽强記は諸大寺の學僧の恐怖するところとなる、弘仁七年に依憑天台宗を製し、同八年二月陸奧の德一の佛性鈔を製し、法華を判して權敎となしたるを見、同年照權實鏡を製し、極力其誣妄を辨明す、同九年に守護國界章を製して再ひ德一の誣妄を辨明して大に駁擊を加ふ、同書の序に乃有奧州會津縣溢和上、(德一)執ニ法相鏡一、鑒ニ八識面一、擧ニ唯識炬一、照ニ六境闇一、忽造ニ中邊義三卷一、盛破ニ天台法華義一、披ニ閱章句一、麤語稍多、と云へるを見れは德一の中邊義に答へたるものなるを知るべし、守護國界章九卷五十一章あり、師が大に力を用ひたるものなり、然るに是等は權實の敎義の爭にして未た大小戒律の爭にあらす、蓋し古來我國に大乘圓頓の大戒傳はらさるにあらさるも、大小混淆して未だ大戒の正儀を見ず、是に於て弘仁十年二月十五日に師上表して大乘圓頓の大戒の勅許を請ふ其文中に曰ふ依ニ法華經制一、不レ交ニ小律儀一、毎年三月先帝忌日於ニ比叡山寺一、與ニ清淨出家一、爲ニ菩薩沙彌一、授ニ菩薩大戒一、亦爲ニ菩薩僧一、師便令ニ住山修學一、一十二年爲ニ國家衛護福利群生一、國寶國利具如ニ宗式等一、云々、と云ふにあり、天皇因りて之を南都の諸大德に咨問したまひ大僧都護命、長慧、施平、豐安、修圓、泰演等の僧綱先つ表を捧けて之を駁し、次に東大寺の最深、迷方示正論を作りて其二十八失を數ふ、天皇乃ち之を師に下す、師明年二月書を護命に與へて之を諭し、廿九日顯戒論三卷、顯戒緣起二卷を著はし、五十八條を擧けて其問に答へ、反詰して奏上す、其筆鋒極めて銳利なり、南都の學僧師に對しては輕佻の小沙彌のみとなしたるも師のこれに對するには一々典據を考へ、經釋に捜り、法華圓妙の敎義を主張し、且つ菩薩の大戒を顯揚したり、然るのみならず、顧みては切りに比叡山內の淸規を嚴整して佛敎革新の實を擧けんとしたり。得業學生式(弘仁九年五月十五日)、六條式(同十三日)、八條式(同年八月二十七日)、四條式(同十年三月十五日)、及ひ禪菴式(遺誡)等に於て之を見るへし、得業學生式によれは止觀業の得業學生九人、遮那業九人、一は法華金光明仁王を講し、一は遮那、孔雀、守護經を長講す、十五歲以上、二十五歲以下を取りて得業生とし、三部を讀むを上とし、二部を中とし、一部を下とし、漸次試業し、九年にして試業に堪へさるものは解退せしめ、住山十二年にして國寶、國師、國用となるを制定し、六條式は略ほ之に同し、國師國用は傳法及ひ國講師に差任せらるゝことゝす、而して最後に其國講師一任の內毎年安居の法服施料は當國官舍に收納し、國司郡司相對して檢校す、將に國裏に池を修し、溝を修し、荒を耕し、崩を理し、橋を造り、船を造り、蒔を植え、麻を蒔き、草を蒔き、井を穿ち、水を引き、國を利し、人を利せんとす云々、といへる

サイ(最)チ

か如きは、亦以て師の精神の一端を見るへし、八條式は得業生の數を十二人と定め、六年を一期とし、一期に二人を闕かは二人を補ふことゝし、六年にして試業の例に預り、十二年間山門を出てすして初六年は聞慧を正とし思修を傍とし、一日の內二分は內學、一分は外學とし、後六年は三部の念誦を修習せしむる等のことを制定し、十二年間住山せるものは大法師位となり、其業具せすといへとも十二年間山門を出てさるものは法師位を慰賜することゝせり、禪菴式は最も師の嚴律を示すものにして、第一定階、即ち坐次を定め、第二用心、第三充衣、第四充供、第五充房とし、特に充房は上品人は小竹圓房、中品人は三間坂屋、下品人は方丈圓室、造房料修理の分、秋節檀を行ひ諸國一升米、城下一文錢とし堂は唯衆人修行の處とす師の遺訓に基ける仁忠の禁制式にも造堂の本意は衆人をして修行せしめんが爲なり、兩三人執着して永宿するを得す云々といへり、第六臥具は上品人は小竹藁、中品人は一席一薦、下品人は一疊一席とし、最後に曰く故に巨畝地價是我等の分にあらす、萬餘の食封是我等の分にあらす、僧統檢する所の天下の伽藍是れ我等の居にあらす云云是を以て朝來乞食し撮飯を受けて而して山中の飢口に供し、秋節行擅して寸布を納れ、而して雪下の裸身に着く、衣服の外更に望むところなし、但た出假利生を除くなり、と、又衣服に關しては禁制式に凡そ佛子の衣服の色は五大の色を著くるを得す云云、又凡そ山家に在る一衆大師の志に依り唐袈裟を服用すへし、唯三年の內漸くにして染め改む云云、と、皆以て師の制禁を知るへし、山上に於て人を罰するには佛前禮拜對衆懺悔の外嚴科を用ゆるを得す、山中の童子は手掌を以て打つべからず、厠糞道に汚すは禽獸よりも甚し、各暗夜の爲に一把の松を備へ、厠に入らんとする時其穴を違ふ莫れといふに至る亦以て其用意の精密なるを察すへきなり、これより先き弘仁三年五月師病あり、義眞時に相模にあり乃ち弟子圓澄を召して付法の印書を與ふ、而して師病氣癒ゆ、義眞亦相模より歸る、然るに弘仁十三年二月十四日師傳燈大法師位となり、其夏四月自ら命の久しからさるを知り、諸弟子に遺言して曰く、酒を飲み、合藥をなすものは我が同法にあらす、佛弟子にあらす、比叡山の界地を踏ましむるなかれ、女人を寺に近くるなかれ、諸大乘經を長講して國家群生を利益せよ云云、禪菴式を以て遺誡となし、山事を義眞に囑し、一家の學生皆之に違ふことを得さらしめ、其他諸の後事を其徒に傳へ、六月四日辰の時比叡山中道院に於て右脅にして入滅す、春秋實に五十六なり、其訃朝聞に達するや天皇哀惜して止ます、六韻の詩を賦して哭したまふ、此月十一日官符を以て大乘戒を允許せられ且つ先帝の建て給ふところの天台法華宗を傳へんかために弘仁十四年二月二十六日比叡山に延暦寺の勅額を賜ふ、師の滅後四十四年淸和天皇貞觀八年七月十二日法印大和尙位を贈り、傳教大師と諡す、之を我國大師號の始とす、著作（宗受教觀部）天台宗文句私記、圓融本有文、三觀義、四悉檀義、六即義集、四土義集、十二因緣集、（一說に十二因緣義二卷）四諦十二因緣轉法論義、四諦證文、三軌私記（一に旨歸）、藏通位證文、通教共十地證文、小乘位義、三藏佛義證文集、五味證文、教時集、止觀義例科文、內證佛法血脈譜、金錍論註

釋、天台法華宗傳法偈、天台付法次弟、天台宗本決鈔、四教問答、三大部七面口決各一卷、法華玄義問答（一說法華義問答一卷）二卷、天台法華宗付法緣起三卷、顯法華義鈔（一に顯法華義）八卷、法華疏記十卷、天台文句音鈔、止觀文句、金錍論科文各若干卷、《弘讃經論部》法華心要（一に三十卷）、法華私記、法華法雨、法華二十八品大意、法華二十八品品品三門並普賢觀經科文、蓮華義、法華釋類名問答、（一に問答の二字を脫し又一に玄義問答となす）、經首如是義集、十如是集、法華事躰集、法華壽量品科文、佛身鈔、繫寶珠喩私記、八部義、十號義、法華開題、法華開講、註法華開發、金光明經料簡、金光明經雜義、金光明經釋題名、金光明經開題（一に金光明開題）仁王經開題、大般若開題、大般若經開發、豐前國宇佐會般若會開講文、最勝法華開講、梵網妙法兩經開題、維摩開發、不增不減經開發、勝鬘開講、二種生死集、四部大乘開題、十二分大乘開發、神祇伯藤開講文、新開題、法華論集解、法華論鈔（或云註法華論）法華論略頌、五怖畏諸家集、五怖畏集（或云五怖畏鈔）、破仁明一義集（或云破二妙一義集）、起信論科文、瑜伽發願、長講仁王經、長講金光明經各一卷、法華略決、長講法華科文、五甚八甚鈔出（一に一卷）、法華七喩鈔（一に三卷）各二卷、法華文句、法華開發、無量義經開發（或云註無量義經）仁王經註釋各三卷、金光明經註釋（或曰く註金光明經）五卷、法華註釋（一に註法華經或は二十卷又十二卷）十四卷、論釋法華科文（一に法華論科文）、法華論定性文、法華諸品大意各若干卷、《光顯大戒部》天台法華宗年分緣起、天台宗年分學生式勸獎天台宗年分學生式、天台法華宗年分度者小回向大式、比叡天台法華院得業生式、四分律鈔破文（一に六卷鈔破文）、授菩薩戒儀（一に十二問儀式）、圓頓戒具、圓頓戒文、菩薩十重四十八輕戒各一卷、顯戒緣起、勸奨天台宗年分學生八箇條式各二卷、顯戒論三卷、天台年分度者二人式、沙彌戒儀禪菴式各若干卷、《闡揚密乘部》金剛界灌頂戒、灌頂次弟儀軌、古印幷遮那雜記、遮那經第四卷記、註遮那經、遮那私記、胎藏造曼荼維支分毘盧遮那供養儀式、八心儀、大毘盧遮那經、供養次弟式、三種灌頂五種三昧文、陀羅尼集鈔、供八部等法、三十七尊私記金剛界三十七尊釋名、蓮華部次第通用儀軌、造立曼荼羅支分科文、三摩地印眞言錄、金剛界悔過、護摩集、胎藏緣起、藥師法、大佛頂集、莊嚴供物錄、百字眞言集、字輪品鈔、梵語集、四十二字門集、涅槃十四音鈔釋、十四音集、韻鈴紐宗、韻錄宗枚（枚の字誤か）、祕密大血脈、五相成身私記各一卷、灌頂儀式、毗盧遮那經雜鈔、住心品私記、遮那經疏鈔要決、新集韻鈴紐宗要錄各二卷、胎藏灌頂七日行事鈔（一說に一卷）、金剛界灌頂行事鈔、字門義各三卷、新集總持草十二卷（或は曰ふ草は章の誤り）、韻鈴三尊編紐宗音決若干卷《破權顯實部》照權實鏡、決權實論、四車妙行義（一に四車妙義）、三車四車義、四車文、一乘三乘權實文、一闡提文、三論一乘佛性解不解文、一闡提目錄、佛性鈔記、四句佛性等私記、楞迦論性文、成不成問答、無性有情成佛決義、定性二乘證文、二乘三課諍此量過、成佛諍緣起集、無性有情諍、新集定性二乘諍、定性二乘問答、再生敗種義、通定性六證、法爾種子問答、通六九證破比量文、種子界證決、法爾種子諍、法宗法師佛法々爾諍、種子義、大唐貞元新評諸宗鈔、治法師法爾五性雜決釋文、神昉師會釋鈔

サイ(最)チ

基公樑釋文、慈恩玄賛略鈔出、文謬釋謬等集、山家五量決（一に量重に作る）復道興諍、仁秀大德善議大德諍、釋迦成道諍、玄賛釋方便鈔、基公釋壽量品鈔、十論師及玄弉住（往か）還鈔集（一に鈔を銘に作る）、三時證文集、法相涅槃三德私記、相應十支論名鈔、因明眼等必爲他用祕記、名句文身集記、法華嘱累品諍集各一卷、無性有情通、法爾種子諍證文、名句文身集各二卷、法華補照、涅槃經佛性鈔、新集無諍、法相宗體各三卷、法華去惑、新集因明宗因喩通集各四卷、守護國界章九卷、一乘義集、三平等義、法華論決定諍鈔、法相宗化城品諍、增壽變易諍論章、大乘論十因證、心異識同異集、初集因明、因明論議疏目錄、名句文身私記各若干卷、（圖傳雜錄部）法華實傳記、遍照虛空藏序、六千部法華經銘、比叡山表銘、叡山相輪樔銘、七佛願々、法華二十八品發願、雜發願文、仁王經表白及願文、度海願文法華結願、一日法華結願、註法華會表白等、法華疏表白開發寶幢齊文、御法華會誦經文、諸義目錄、日本求法僧最澄目錄、祕密莊嚴論、天台依憑集、鏡喩集、正像末文、百鏡、比叡說鏡、（一に比叡訓聽記）、六因義集、經師觀解、不二義集、東塔緣起、三藏等名集（一に三藏本名集とす）三寶住持集蹟眞會記、菩薩嘆德文、羅漢十六德、彌勒刧義、法義鈔、千比丘舍利弗引道事證文、德義樂及ひ妙義樂、藥證不定念定行事、一乘義和歌、祖師傳記、本無生死論、常記鈔、法界心體論、色無色集（一に無卷色々集）、隨身錄、進官錄、詳諸宗章、評定鈔、法華銘、破十軍修佛道私記各一卷、法華論誦圖、新集聖敎序（一に三卷）、拂惑袖中策、各二卷、雜宗聖敎序、長講願文、頭陀集各三卷、法華音韻四卷、除難心鏡九卷、天台靈應圖本傳集（一に天台靈應傳一に靈應圖集と云ふ）十卷、諸宗興畧圖、下毛縣法華會願文、祭文、天台法華圓宗目錄、顯佛滅後年代述記吉祥天文集（一に一卷）盂天論宗私記、隨文讃經、三司九去決（一に三司九法去決一卷）、夢記（一に一卷）、佛法相傳鈔、掌中記各若干卷（以下眞僞未詳）二諦義集（一に二諦義私記）、愍喩辨惑章、末法燈明記、木理大綱集、略集句、牛頭決、生知妙悟決、一念成佛義（一に義を論に作る）、般若心經釋、法界心體論皆共に各一卷なり（叡山大師傳、最澄大師一生記、傳敎大師行業記、傳敎大師行狀、梶井門跡畧系譜、九院佛閣抄、元亨釋書、本朝高僧傳、東國高僧傳、天台霞標、撰集錄、諸宗章疏錄）

サイチヨー 最朝　サイチヨ｜齊朝を見よ、

サイニン 最仁（……）〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、最仁は土御門院の子、母は圓樂法眼の女なり、尊覺眞仙の二師に就きて宗義を學び、天台座主に任す、（天台座主記）

サイヨ 最譽　ゲンホ源甫を見よ、

サイヨ 最譽　キユーサイ急西を見よ、

サイレン 最蓮　ニチエー日榮を見よ、

サイソン 齊尊（一七五九）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、齊尊は信濃守藤原齊長の子なり、圓範と同門にして共に齊覺大僧都に就きて天台を學び承曆の初め法勝寺最初の阿闍梨に補す後法を覺圓大僧正に承け四年春最勝會講を開く、永保應德寬治の間屢々二會の講師となり嘉保元年最勝會の講師に座し康和年中寂す壽欵く、（本朝高僧傳）

サイチヨー 齊朝（……）〔眞言宗〕京都仁和寺の阿闍梨なり、齊朝一に最朝に作る、字は勝定後勅して慧什と改

む、京都の人、中納言尚書兼輔八世信濃守伊綱の子なり、信阿闍梨と稱す、芳源の法脈を嗣ぎ、其寂年歉く、(傳燈廣錄)

サイテツ 齊哲 (二〇〇七) 〔臨濟宗〕京師眞如寺の禪僧なり、齊哲字は[illegible]叟、俗姓不詳、文保二年元に航し、天目山の中峰本に謁し、嘉暦の初清拙澄の船に同乘して東皈す、建仁寺建長寺に歴住す、眞如寺に住して中峰本の爲に焚香す、次に甲斐の慧林寺に遷り、後正法寺を開きて始祖となる、竺仙仙、別源旨等と交深く、贈答の詩あり、貞和三年七月三日寂す、壽歉く、(延寳傳灯錄、本朝高僧傳)

サイゲ 蔡華 フキユー不及を見よ、

サイヨ 蔡譽 ランサン鸞山を見よ、

サイクワ 再過 ギクワン義完を見よ、

サイショー 裁松 ショーゴ青牛を見よ、

サイショー 宰相 コーショー康濟を見よ、

ザイア 在阿 (一九一七) 〔天台宗〕某寺の僧なり、在阿其氏姓詳ならず上總の周東に住す、天台宗の學徒にして一心三觀を練磨して圓融の妙旨に精し、建長の比吐血を病む、餘齡幾何ならざるを覺え偏に淨土往生を期す、異流の講席に預り、觀經疏を聞き、其義信解と差あり、後正嘉元年正月十七日下總に至り然阿に拜謁し、疑問の決答を受く、然阿疑問鈔一部二卷を錄して一一之を提示す、師頓に宿滯を消す、示寂の年月日歉く、(鎭流祖傳)

ザイア 在阿 チドー智堂を見よ、

ザイア 在阿 ネンカイ念海を見よ、

ザイア 在阿 ブガク豐嶽を見よ、

ザイアン 在菴 エンウ圓有を見よ、

ザイアン 在菴 フザイ普在を見よ、

ザイザン 在山 ユーショー融松を見よ、

ザイザン 在山 ソセン素璿を見よ、

ザイザン 在山 ドンエー曇璿を見よ、

ザイセン 在先 キジョー希讓を見よ、

ザイゼン 在禪 (二四七三) 〔淨土宗〕江戸增上寺第五十五代なり、在禪は寳蓮社薰譽香阿と號す、紀伊の人なり、和歌山大立寺に入りて剃度し、明譽潭光に師事して潭道と名く寳曆五年正月三緣山に掛錫し、後、三嶋谷祐全寮に入る、明和七年六月善導寺在定上人に隨ひ、九年三月十九日在禪と改む、後、皈山持寮し、安永五年正月二十五日稱讃淨土經疏を講す、六年二月學頭に補し、同年三月十日命ありて大念寺に主となる、弘經寺光明寺を經て文化五年四月一日增上寺に主となり、大僧正に任ず、七年赤坂の出火に際し、隨蓮院、東照院、寳珠院、一經院等悉く燒失せるを以て、師官に願ひ、新に一万二千坪境内とし隨蓮惠照の二院を移し、餘を除火の林となす、文化十年八月職を辭して山下谷妙心院に退隱す、寂年、及壽歉く、(三緣山志)

ザイチユー 在中 シユーユー宗宥を見よ、

ザイチユー 在中 チユーエン中淹を見よ、

ザイテン 在天 シユーホー宗鳳を見よ、

ザイレツ 在列 ソンキヨー尊敬を見よ、

ザイガク 材岳 シユーサ宗佐を見よ、

サクゲン 策彦 シユーリヨー周良を見よ、

サクデン　策傳　二二一四 二三〇二　〔淨土宗西山派〕京師誓願寺の學僧なり、　策傳字は日快、（一に諱日快とあり月快に作るは誤なり）鄕貫詳ならず、出家して禪林寺智空甫叔に師事して一流の學を究め、美濃の立政寺に住し、後、京師の誓願寺塔中竹林院に轉す、晩年退隱して風流を事とし、境地に草菴を搆へて安樂菴と號し、常に風流の士を招いて茶事をなす、八幡の瀧本坊昭乘等相往來したり、安樂菴には茶事に關する名器を藏し、且つ師自ら帛を製す、後世相傳へて安樂菴帛と云ふなり、元和元年の頃、板倉重宗の請により、滑稽詼謔の談話數百條を筆錄し、醒睡笑と云ふ、これ我國に於て滑稽詼謔の書ある始めなり、されは後に師を以て落語家の祖と稱するに至れり、寛永十九年正月八日寂す、壽八十九なり、誓願寺に葬る、著作醒睡笑八卷あり、其序を玆に錄せん、曰ふ「ころはいつ元和九癸亥の年、天下泰平、人民豐樂のをりから、某小僧の時より、耳にふれておもしろく、おかしかりつることを反故のはしにとゝめ置きたり、是年七十にて、柴の扉のあけくれ、こゝろをやすむるひま〱、こしかたしるせし筆の跡をみれは、おのつから睡をさましてわらふ、さるまゝにや是を醒睡笑と名つけ、かたはらいたき草紙を八卷となしてのこすのみ」と。（淨土承繼譜、淨土總系譜、醒睡笑奧書、都名所圖會）

サクムロシユ　昨夢盧主　ソーボク僧樸を見よ、

サツシユー　薩州　タイニン諦忍を見よ、

サツシヨー　薩生（……）〔淨土宗西山派〕相模鎌倉の僧なり、　薩生號を全報と云ひ、初め天台の學徒なりしが、成覺房に從つて淨土宗に入り、一念義を習ふ、後、善慧證空に師事して西山派の業を受く、後自ら臆見を執して相模鎌倉に居住し、盛んに自立の別義を弘む、寂年及壽欠く、（淨土總系譜）

サツモン　薩門　シユーオン宗溫を見よ、

サツア　察阿　セツモン攝門を見よ、

サツゲン　察眼　リヨーコン良欣を見よ、

サバノオキナ　鯖翁（一三八九）（……）　大和奈良の隱者なり、　鯖翁何地の產なるか詳ならず、天平の頃奈良にあり、華嚴に精し、常に鯖八十尾を荷ふ、これ華嚴經八十卷を表するものなりと云ふ、（今昔物語、三國佛法傳通緣起、本朝高僧傳）

サンガイムライ　三界無賴　ゼンガイ旃崖を見よ、

サンキ　三喜（……）〔臨濟宗〕鎌倉江春庵の僧なり、　三喜字は導道と云ひ、號は支山人と云ひ別に範翁と云ふ、武藏國河越の人、俗姓田代父を兼綱と云ふ、冠者信綱の後なり三喜初め妙心寺に入りて禪を修し、尋て足利學校主利陽に就いて醫を學び、後ち明に入り、李杲朱震亨の術を月湖及び恒德孫に受け、留學十二年にして業成りて東歸し、鎌倉江春庵に居る、後ち下總古河に居る、世に古河三喜と稱す、（皇國名醫傳）

サンキユー　三汲　二三二六……　〔淨土宗〕伊豫松源院の開山あり、　三汲は厭蓮社欣譽と號す、俗姓は星野氏、伊勢桑名の人なり、三甫の室に入りて剃髮し、增上寺業譽上人に師事して法を嗣ぐ、後州に歸り今治に松源院を剏して開山となる、寛文六年七月二十一日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

サンキユー 三休……二二三〇〔淨土宗〕山城淨華院第二十八代なり、三休は滿蓮社定譽、又は法光と號す、俗姓は源氏、石見の人なり、壽光の室に投じて出家受業し、其法を嗣きて後淨華院に住し、第二十八代となる、後、石見に長福寺を開き、元龜元年四月二十七日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

サンコー 三光 クワンドー觀道を見よ、

サンコーイン 三光院 ニチショー日精を見よ、

サンコーミヨー 三光明 クワンドー觀道を見よ、

サンシ 三芝 トーイ等惟を見よ、

サンシユー 三修……一五五九〔法相宗〕近江護國寺の學僧なり、三修は幼にして元興寺明詮僧都に從つて剃髮受業し、唯識論を學び、因明を究め、密教に通ず、受戒の後、名山勝地に巡遊し、仁壽中近江伊吹山に登り、茅菴を結びて禪座し、山を出でざる二十餘年、四民歸向して護國寺を剏す、寛平六年維摩會の講師となり、昌泰二年五月十二日寂す、壽七十餘(本朝高僧傳)

サンシユー 三洲 ハクリユー白龍を見よ、

サンジヨ 三恕……二二九九〔淨土宗〕伊豫大林寺の開山なり、三恕は道蓮社大譽と號す。遠江懸川の人、其俗姓詳かならず、三甫に就て剃髮し、觀智國師に師事して法を嗣ぐ、伊豫松山大林寺に住し、第二代となる、後圓樹院を建てゝ開山となり、寛永十六年正月三日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

サンシヨーイン 三松院 キベン基辨を見よ、

サンチイン 三智院 ニチシン日森を見よ、

サンチヨー 三澄 (一五二〇)〔眞言宗〕攝津忍頂寺の開山なり、三澄大乘經を學びて檀波羅密を行す、貞觀二年奏上して國家を祝するか爲に攝津國島下郡に神峯寺を建て、春は最勝王經を演說し、秋は法華妙典を講布す、御願眞言院となし名を忍頂寺と賜はんことを請ひて許可せらる、(本朝高僧傳)

サンテキ 三笛……二三二一〔淨土宗〕江戶光臺院の開山なり、三笛は本蓮社誓譽願心と號す、其鄉貫詳かならず、普光觀智國師に從つて法を受け、三田光臺院を開く、寛文元年九月二十五日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

サントードー 三東堂 ショーサン淸山を見よ、

サンポ 三甫……二二九一〔淨土宗〕遠江天然寺第六代なり、三甫は宗蓮社傳譽と號す、遠江佐野郡水無村の人、其俗姓詳かならず、觀智國師に師事して法を嗣ぎ、初め州の懸川天然寺に住し、後、伊勢桑名照源寺の開山となる、寛永八年三月二日寂す、壽欠く、弟子二人あり、三恕、三汲と云ふ、師生前伊豫松山大林寺を開きて、開山となる、(淨土總系譜)

サンミ 三位 コーユー康祐を見よ、

サンミアジヤソ 三位阿闍梨 ニチシン日進を見よ、

サンヤク 三益 エーイン永因を見よ、

サンヨ 三譽……二三〇五〔淨土宗〕[illegible] 光明寺の開山なり、三譽は其俗姓生國詳かならず、呑龍に師事して法を嗣ぎ、播摩明石光明寺の開山となる、正保二年十月二十二日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

サンヨ 三譽……二二三八〔淨土宗〕伊勢善稱寺の開山なり、三譽は緣蓮社と號す、伊勢山田の人、易譽に師事して法を嗣

ぎ、山田に善稱寺を開く、天正六年八月八日寂す、世壽欠く、（淨土總系譜）

サンヨ　三譽　キューテキ休的を見よ、

サンヨ　三譽　ゲンシュー玄周を見よ、

サンヨ　三譽　タイジュン苔順を見よ、

サンヨ　三譽　テンイ天意を見よ、

サンヨ　三譽　ドンチョー呑潮を見よ、

サンヨ　三譽　モンシュー聞秀を見よ、

サンヨ　三譽　リンチョー輪超を見よ、

サンヨ　三譽　ゲンキツ元佶を見よ、

サンリヨー　三了　リンタツ麟達を見よ、

サンレー　三嶺　ランリユー嬾龍を見よ、

サンヨ　讃譽（……）〔淨土宗〕三河城寶寺開山なり、讃譽は嘆蓮社と號す、俗姓は千葉氏、總州の人なり、聰譽西仰上人に師事して法を嗣ぎ、三河渥美郡田原に城寶寺を剏して開山となる、寂年、及世壽欠く、（淨土總系譜）

サンヨ　譽　ゴシュー牛秀を見よ、

サンヨ　讃譽　チゲン智眼を見よ、

サンヨ　讃譽　ムゲ無外を見よ、

サンコーイン　山光院　ニチセン日詮を見よ、

ザンオー　殘應　……二二六四　〔淨土宗〕江戸源壽院の開山なり、殘應は正蓮社學譽圓海と號す、俗姓は波多野氏、丹波の人なり、京都黑谷永眞に投じて剃髮し、法を感譽に嗣ぐ、後、江戸淺草新鳥越に源壽院を剏めて開山となり、慶長九年正月四日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ザンム　殘夢　二〇九八　二二三六　〔臨濟宗〕岩代實相寺の第二十二代なり、　殘夢字は日白、（一に寶山）號は大風道人と云ふ、時人呼びて常陸房と云ふ、鄕貫師承詳ならす、永錄年間東國に遊化し、常陸の福泉寺會津の實相寺に住し、奇行を以て知らる、數日食せさるも飢色なし、天文年間磐城郡の僧無無と云ふ者來りて師に遇ふ、師曰ふ、「なし〱といふは僞り來てみれは有れはこそあれ元の姿でと、無無對へて曰ふ、「なし〱といふは理り我姿あるこそなしのはしめなりけれと、共に往時を語り、恰も舊知の如くなり、常に七十歳餘に見ゆ、人の年齡を問へは遺忘せりとて答へす、天正四年三月廿九日の夜病なく俄に寂し、暫時にして蘇し、偈を書して曰ふ、墮在無間五逆聞雷唱下瞎驢死眼豁開と、筆を擲ち一唱して寂す壽百三十九歳なりと云ふ、慈眼大師天海就いて長生の方術を受けたりと云ひ、宇都宮の興福寺物外播禪師問答往來したりと云ふ、（野史、本朝高僧傳、名家畧傳）

〔考〕殘夢の事蹟諸書に見ゆる所稍相同しからさるものあり、野史に無無に關する事弁に問答の歌見え、本朝高僧傳、名家畧傳に天海物外に關する事、幷に遺偈見ゆ、共示寂年月日は皆一致せり、同人たると論なし、

ザンム　殘夢　ジシン慈心を見よ、

ザンヨ　殘譽　バイオー梅翁を見よ、

ザンレー　殘嶺　……二三二〇　〔淨土宗〕下總泉福寺の開山なり、殘嶺は誓譽と號し、其鄕貫詳かならず、不殘に師事して法を嗣ぎ、下總岩付泉福寺を開く、萬治三年九月四日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ザンユリー　暫龍（……）〔淨土宗〕阿波長福寺の中興なり、暫龍は透譽と號し、其俗姓生國詳かならず、法を靈巖に師事して法を嗣ぎ、阿波海部郡完喰の長福寺に住し、中興となる、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

シの部

シイン　思允（……）〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、思允字は我圓、俊芿に侍し、後、定舜に依る、後、泉涌寺に住し、某年十一月十二日壽す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シエン　思圓　エーソン睿尊を見よ、

シキヨー　思恭　エンシキ圓識を見よ、

シケン　思賢（……）〔臨濟宗〕紀伊興國寺の禪僧なり、思賢號は無住、俗姓原氏なり、華山院右大臣家忠の後裔なり、法灯國師（覺心）に師事し、紀伊の興國寺、山城の妙光寺に住す、後、將軍足利尊氏の歸依により、相模に聞修寺を開き、第一祖となる、示寂の年時缺く、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

シサイ　思偲（一九六一―二〇三〇）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、思偲は友山と號す、初の名は士思、字は友雲といひしが、後、今の名に改む、俗姓は藤原氏山城山崎の人なり、少にして東福寺南山雲に投して剃髮受具す、文保の初年南山鎌倉圓覺寺に住し、師隨從す、闡提寺に入りて南山に參して侍香となり、瑞龍山に入りて潛溪に謁して藏敎を司とる、嘉曆三年法兄正堂顯と共に同く元に遊ふ、時に年二十八なり、周く兩浙を歷て樵隱逸、月江印、南楚說、古智哲、平石砥、無見覩、了菴欲、夢堂噩の門を參敲し、殊に月江南楚に密邇す、其門に往來すること凡そ七年なり、此時本朝の僧元にある者石室玖、無夢淸、此山在、無涯浩、一峰玄、古鏡千、古源邵等なり、相共に策勵す、至正四年師姑蘇承天寺の南楚會中に在りて後版に居る、至正五年夏此山在と與に東歸の途に就き、二ケ月を經て博多に到る、我か貞和元年なり、翌年京師西山の臨川寺に柳溪愚を問ふ、席を分ちて共に居る、三年甲斐淨居寺に住し、居ること三年、觀應三年京都安國寺に移つる、延文二年春山崎に精舍を建て正續寺といふ康安元年命を蒙りて東福寺臨川寺に主となる、晚年臨川を退きて慧日山の萬年菴に逸老し、應安三年六月一日病に罹り、偈を書して曰く、生是何物、死是何物、打ニ破虛空一風生ニ八極一と、筆を投して寂す、壽七十、（續群二二八、延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

シジユン　思順（……）〔戒律宗〕攝津勝鬘院の律僧なり、思順其俗姓生國詳ならず、圓珠律師の法弟にして勝鬘院に住し、盛んに法義を唱ふ、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

シジユン　思順（一九〇九）〔臨濟宗〕山城勝林等の開山なり、思順號は天祐、俗姓不詳、初め天台を修め、後、禪宗に歸す、宋に渡りて北礀簡禪師に謁し、參究功ありて印記を受く、其下を去るに臨みて禪師偈を作り贈れり、曰ふ、粟散王都藐莫レ知、星分碁布海中泜、三韓未レ遠須ニ重譯一、九土雖レ中共秉レ彝、但見神僧巍跨レ水、弗レ聞君子陋居レ夷、由餘季札高ニ千古一、更復區區桀蹶爲、宋に留ること十三年にして歸朝し、洛

東のの艸河は勝林寺を開き、大慧の禪を唱ふ、由良の覺心初め其下に參す、思順二偈を作り覺心に示す、曰ふ「學道工夫須レ著レ力、從レ門入者被二人瞞一、三條椽下容レ身易、六尺單前參レ話難、退レ歩遠觀明歴歴、運レ思近覓黒漫漫、銀山鐵壁雖レ無レ路、透出透來且自看、」「大道本然何費功、不レ通二一歩一却能通、慮談寓物皆無味、身靜諸縁盡在レ空、法界聖凡非二念外一、微塵刹海出二胸中一、人疑二個事一吾應レ答、野草春來花自紅、」思順又和歌を善くし、多く宗乘を詠ず、晩年門を閉ぢて世事を謝す、示寂の年時欲ぐ、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

〔考〕思順は建長頃の人なり

シジユン 思淳 一九三八／二〇二三 〔戒律宗〕京那泉涌寺十三代なり、　思淳字は朴艾、我靜と號す、幼にして出家し、南北に歴遊して戒學を究め、大燈源智律師に法を得、相摸淨金剛寺、京都泉涌寺に住し、詔を奉して入內し、戒經を講すること前後數回、淨心誠觀等の疏章を著して玄致を發明す、建武延元の間天下大に亂れ、師難を避けて京外に屛居し、貞治二年八月十六日寂す、壽八十六、（本朝高僧傳）

シセン 思宣（……）〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、思宣は京都の人、夙に出家して俊芿國師に依りて業を泉涌寺に卒へ、國師の遺命により東山の席を領し二敎を布く、寂年、及ひ壽欲く、（本朝高僧傳）

シタク 思託（一四六五）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、思託、俗姓王氏なり、王喬の後なりと云ふ、唐の沂州の人なり、幼より佛敎に歸依し、玄宗の勅を拜して大雲寺に至り、鑑眞を問ひて剃髮納戒す、後天台山に住す、天寶二年眞和尚に從ひて出發し、數困厄に逢ひ、四回船を造り、五回海に浮ぶ、遂に天平勝寶六年到着し、勅を拜して東大寺に住し、戒壇法を行ふ、大安寺の唐院に於て忍基常魏等の請により法勵疏を講敷す、寶龜元年天皇崩御したまひ、大和高野に葬る、思託其導師たり、延暦の末壽七十餘にして寂す、其著延暦僧錄鑑眞和上東征傳あり、僧錄は今傳はらず、（元亨釋書、本朝高傳、律苑僧寶傳、）

シホン 思本（……）〔眞言宗〕山城醍醐山學講なり、思本字は想觀（觀を初め意に作る）といひ、醍醐山の執行實勝法眼の子なり、厚く意敎を信して傳法を受け、心印を得たり（續傳燈廣錄）

シアン 士安 一九〇六／一九九六 〔曹洞宗〕肥後大慈寺第三代なり、士安字は鉄山、肥後の人、寒巖義尹に參して玄理を發明す、斯道紹由の寂後肥後大慈寺の席定まらす、師其試驗に及第して第三世となる、筑後の檀越二尊寺を創し、師請せられて開山となる、居ること幾ならすして大慈寺に歸る、延元元年二月、十二日寂す、頌あり「九十一年、鐵山崩裂、地獄天堂、清風明月、」法嗣天菴懷義、東洞至遼の二人あり、（日本洞上聯灯錄）

シウン 士雲 一九一四／一九九五 〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、士雲號は南山、俗姓藤原氏遠江の人なり後深草天皇建長六年に生る、文永の初め東福寺聖一國師の下に投す、稍長じて諸老の門を叩き、建長壽福圓覺の諸寺の間に佛源禪師に謁す、後、佛光禪師に謁して參究功あり、契悟する所あり、佛光禪師より聖一國師贈る所の衣を付せらる、永仁五年請に應じて筑前の承天寺に住す、正安二年上京、一年美濃の法藏寺に遷

り、德治二年相模の東勝寺に遷る、延慶三年北條貞時の奏により東福寺に進み、應長三年退院、壽福寺に遷り、文保元年圓覺寺に住す、秋退院して傳宗菴を構へて退休す、元應二年建長寺に住す、元亨元年金剛崇壽寺を開きて諸山の列に陞す、元弘元年京師に上り、華嚴藏院に居す、南禪寺住持の詔あるも固持して受けず、建武二年十月七日示寂す、壽八十二、遺偈あり「了達三世、發轉一機、祖也不會、佛也不知、（行實、延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

南山士雲禪師

シガン　士顏　一九四三　二〇一六　〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、士顏號は卍菴、俗姓不詳、京師の人、南山禪師の法を嗣ぐ、相模の壽福寺圓覺寺筑前の承天寺相模の崇壽寺に歷住し、後東福寺に昇る、延文元年七月七日莊嚴菴に寂す、壽七十四、遺偈あり、四十四年、不レ談ニ禪道一、更問ニ如何一、七顛八倒、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シケー　士啓　二〇三四……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、士啓字は東傳、筑前の人、南山雲禪師の法を嗣ぐ、普門寺に住し、尋て京師の東福寺、鎌倉の崇壽、圓覺、建長の諸寺に歷住す、上野の太守某崇禪寺を創して延請す、尋て老病あり、弟子を鎌倉に遣し、石塔を求めしむ、弟子歸途小倉縣に及ぶ時、師已に寂す、時に石塔俄に重く人馬行かず、已むなく卸し、其處に塔を立てゝ靈骨を收む、應安七年四月十一日なり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シショー　士昭　二〇二〇……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、士昭字は鑑翁、俗姓不詳、南山禪師に師事し、天龍寺に留り、後、東福寺に住す、晩年寶壽菴に休し、延文五年十一月四日寂す、師の詩あり、賀釋書入藏「四海清平一事無、討ニ論文籍ニ萬機餘、喜聞勅下龍宮啓、秘在元亨釋氏書、」（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シドン　士曇　一九四五　二〇二一　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、士曇號は乾峰、別に少雲と稱す、弘安八年を以て筑前博多に生る、十四歲承天寺に入り、南山和尙に謁せんとすれとも導くものなし、師依て艸上に坐し、尙書を誦す、南山これを聞て異とし、薙髮受戒せしむ、これより鎌倉諸刹の間に歷侍し、淨智寺佛國禪師に參して省あり、會、明極禪師西來して建長寺に住す、師これに參して版首となる、元弘の亂に難を避けて上野の山院に寓す、院に大般若經六百卷ありて兩軸を失す、師暗記してこれを書す、後、明極を南禪寺に訪ひ、機語相合して首座となり、分座說法す、後、命を承けて相模崇壽寺に出世す、繼で京都の普門寺、安禪寺、東福寺、南禪寺、相模の圓覺寺、建長寺等に歷住す、文和四年相模より京都に皈り、詔

を受けて宮内に入り、清凉殿に於て法を演す、藤原丞相菩提院を刱して師の壽塔となす、康安元年十二月十一日東福寺に在りて偈を書して曰く、馬鳴出西天、龍樹入東海、聖箭已離弦、猶有返回勢、と、筆を投して寂す、壽七十七、臘六十四、全身を菩提院に葬る、著作見性義記、拔萃要若干卷あり、敕諡廣智國師の號を賜ふ、(續群一二三五、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シホー　士峰　ソーザン宋山を見よ、

シイチ　志一　(二〇〇六)(……)　相模鎌倉の僧なり、

志一は生國俗姓不詳なり、管領足利基氏の時に上杉氏の崇敬により鎌倉に入りたり、後京師に上り、佐々木佐渡判官入道道譽の許にありて細川相模守清氏の請により將軍を咒詛したりと云ふ、示寂の年時缺く、(太平記、新編鎌倉志)

〔考〕志一は正平頃の人なり

シオー　志雄　(……)〔臨濟宗〕京師天龍寺の禪僧なり、

志雄字は奇峰と云ふ、夢窓國師に參して法を嗣ぎ、天龍寺にありて記室を司とる、寂年欠く、(延寶傳燈錄)

シギヨク　志玉　二〇四三/二一二三〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、

志玉字は總圓、別に渡西と號し、一に談宗と稱す、幼にして戒壇院の融總律師を師として落髮受業し、同寺の融存に從ひて三聚淨戒を受け、三大律疏を學ひ、兼ねて華嚴を聽く、應永二十四年明に渡る、明の太宗宮に召して華嚴經を講せしめ普一國師の號を賜ふ、明に在ること五年、經疏什具を齎持して歸へり、東大寺に住し、遮那大殿に華嚴經を講す、後光天皇國師の號を賜ふ、相模の極樂寺、稱名寺、阿彌陀寺、加賀の大華嚴寺、京都の高山寺に開講し、西國を巡化して讃岐の屋島寺を再興して上足普開律師に付す、寛正四年九月某日京都梅尾山に寂す、壽八十一、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

シゲン　志玄　一九四二/二〇一九〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、

志玄號は無極と云ふ、京都の人、順德天皇四世の裔なり、幼にして願成院南洲海に事へ、十三歲にして落髮受戒し、東寺に於て密敎を習ふ、久しうして捨て去り、東福寺圓覺寺に無爲元に參す、元德中夢窓國師圓覺寺に住し、法席盛んなり、師國師に見え、機語相契ひ、擢んでられて版首となる、國師南禪寺に住するに方り、師擧けられて分座說法し、出て臨川寺に主となる、貞和二年國師より七處說法の衣を付せられ、勅命によりて天龍寺に住す、光明天皇道譽を慕ひ、屢幸して法を聽き、寵賜甚だ渥し、一住六年、聚景院に佚老し、夢窓國師寂するに及び勅を奉して再び天龍寺に住す、幾何ならず辭して舊院に退居す、文和三年南禪寺の詔を賜ひしが老を以て受けず、延文四年二月十六日寂す、壽七十八、臘六十六、敕諡佛慈禪師の號を賜ふ、(續群一二三四、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シセン　志宣　……/二一七五〔曹洞宗〕越前常牧寺の禪僧なり、

志宣字は明巖、俗姓は源氏、甲斐の人、常牧寺辰翁性寅に參して其法を嗣き、永平寺に出世し、常牧寺に遷る、永正十年石雲寺を司どり、仝十二年四月十一日寂す、世壽欠く。(日本洞上聯灯錄)

シテツ　志徹　(……)〔臨濟宗〕近江廣濟寺第一座なり、

志徹は其鄉貫詳かならす、夢窓國師に參して法を嗣ぎ、近江

廣濟寺にありて第一座となる、寂年欠く、(延寶傳灯錄)

シドーケン 志道軒　エーサン榮山を見よ、

シオン 至遠 一九三八 二〇二六 〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、至遠號は孤山、俗姓紀氏、紀伊の人なり、早年出家して法燈國師(覺心)に師事す、後、建長寺に到り、約翁儉に事ふ、明極俊を問ひて法灯國師の眞贊を需む、淸拙澄、一山寧、西礀曇の西來にあたり、相尋て見ゆ、紀伊興國寺、京師建仁寺に歷住し、法化盛なり、貞治五年七月九日寂す、壽八十九、臘七十六、勅謚廣照禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シカン 至簡 二〇〇一… 〔曹洞宗〕越中紹光寺の開山なり、至簡字は壺菴、加賀の人、俗姓は藤原氏なり、幼にして出家し、唯識を習ひ、後、發足行脚し、洞谷寺に於て瑩山紹瑾に參して法を嗣く、越中の刺史藤原氏紹光寺を建て、師を請じて開山となす、曆應四年九月十六日能登光孝寺に寂す、壽缺く、法嗣二人あり、(日本洞上聯燈錄)

シコー 至孝 一九四四 二〇二三 〔臨濟宗〕山城安國寺の開山なり、至孝號は無德と云ふ、俗姓は藤原氏、越前平葺の人なり、妙年にして京都に上り、無爲元和尙を拜して圓頂進具し、硏學三年、敎禪兼通し、且つ易に精し、元弘元年竺仙和尙師を擧げて南禪寺第一座となす、正中三年朝廷無爲を謚して智海禪師と云ふ、師奏して大禪師となさんとす、朝議例なき故を以て許さず、師重ねて奏請し、淸涼大法眼禪師を引て證し、終に制可せらる、初め城北北禪寺に主となる、曆應二年足利尊氏各州に安國寺を置かんとするに方り北禪寺を改めて安國寺と云ひ、寺基を四條大宮の西に遷し十刹に列し、師を以て開山とす、後東福寺に上り、讃岐長興寺に轉住す、勅により南禪寺に昇り、貞治二年正月十一日寶幢院に寂す、壽八十、(續群二三五、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シシン 至信 二四三四 二五〇九 〔臨濟宗〕長門常榮寺の禪僧なり、至信字は諦洲と稱し、豐後濱脇の人なり、甫めて十歲にして出家し、崇福寺篆山に業を受け、性堂の法嗣となりて長門の常榮寺に住し、衆に接すること三十餘年、後、東福寺に住すること五回、南禪寺を董して五祖錄を提唱し、嘉永二年七月二十三日東福寺の退耕菴に寂す、壽七十六、臘六十七、(近世禪林言行錄)

シシン 至心　シユンオー春應を見よ、

シゼン 至善 二四五九 二五二九 〔眞宗〕伊勢三重郡吉澤村源正寺の住持なり、　至善一名は觀導、別號は芳洲といふ、甫めて八歲の時外典を學ひ、詩文を修す、十八歲にして笈を負うて高倉學寮に入り、爾後十五年の間、安居を缺かす、天保五年經藏を建築せんと緣を募りて成る、十一年堂宇火災に罹り、十四年再築の功竣る弘化二年寺內に學舍を設け、門人を敎授す、後寮司となりて嘉永五年より學寮にて觀心覺夢鈔、解深密經、唯識述記を講し、安政五年七月十七日(一に六年)擬講となり文久三年春最要鈔を講し、明治二年九月二十七日同寺に寂す、壽七十一、二十一年十二月十一日嚴如法主師の學德を追賞し、命して嗣講を贈る、(碑文、眞宗史料)

シドー 至道　ムナン無難を見よ、

シリヨー 至遼 (一九九五) 〔曹洞宗〕肥後大慈寺の禪僧なり、　至遼字は東洲、俗姓は源氏、筑後の人、幼にして肥後

の大慈寺に投し、鐵山士安を師とし、大に器許せらる、已にして洞谷寺瑩山、永平寺の義雲等を歷訪し、再び大慈寺に飯る、鐵山より大衣拂子法語等を付せらる、時に建武二年正月十六日なり、鐵山示寂の後、神龜山に至り茅屋を結びて居る、菴は遂に寺となり、神龜山護眞寺と云ふ、衆の請に依り大慈寺に住す、朝廷其道譽を聞き、屢召せとも應せす、護眞寺に退きて示寂す、其年壽缺く、謚を賜はり佛鑑禪師と云ふ、法嗣梅巖義東一人あり、（日本洞上聯燈錄）

シカン　師侃（一九五三）〔臨濟宗〕京師三聖寺の禪僧なり、師侃字は愚直、俗姓不詳、寶覺禪師（湛照）より水紋の僧伽梨を付せらる、永仁年間元に渡り、諸老宿に參謁す、東歸の後京師の圓通寺に出世す、後三聖寺に遷る、示寂の年時缺く、師侃隱逸を好み詩を作る、寂寞山感春乂和、曾無二人跡到一柴扉一、屋頭自有二溪水一、洗盡多年兩月非、また臨終の偈あり隨レ緣出生、隨レ緣入死、本來面目、青山綠水、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

シギヨク　師頊（……）〔臨濟宗〕京師三聖寺の僧なり、師頊字は五峯其鄉貫詳かならず、東山照の法嗣なる西浦曇に師事して法を嗣ぐ、三聖寺聖福寺に歷住す、（延寶傳燈錄）

シシン　師振　一九七八 二〇四六　〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、師振字は起山、俗姓不詳、豐後の人、出家して京師圓通寺愚直和尚に師事し、圓通寺三聖寺に歷住す、應安五年僧錄司普明國師（妙葩）の推擧により眞如寺に住す、永和四年再び三聖寺に住し、永德二年東福寺に昇る、後、近江に往き、東禪、千光、玉田來迎等の諸寺に歷住し、至德三年十月十八日來迎寺に寂す、壽六十九、東福心源菴に塔す、四會語錄あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シトー　師透（……）〔曹洞宗〕周防龍豐寺の開山なり、師透字は春明、久しく龍文寺古宗仲心に參し、後、其法を嗣き、法兄金岡の席を嗣きて、周防龍文寺に主となり、晚年同國龍豐寺を剏して開祖となる、世壽寂年欠く、法嗣雲菴透龍あり、（日本洞上聯灯錄）

シバン　師蠻　二三八六 二三七〇　〔臨濟宗〕美濃盛德寺の中興なり、師蠻字は卍元、號は獨師と云ふ、相摸の人、俗姓熊澤氏、寛永三年を以て生る、三歲にして生死を疑ひ、十八歲にして出家し、妙心寺默水器の法を嗣く、十九歲諸國に遊歷して諸禪師を問訊し、我國の僧傳編修の志を發し、資料を採收するに力を盡すこと三十餘年なり、延寶六年に至り、延寶傳燈錄成る、臨濟曹洞の禪僧大凡一千人の傳を收む、同七年美濃加納盛德寺に住し、寺門の荒廢を興して大に功あり、爾來益僧傳の資料を採收し、元祿十五年に本朝高僧傳成る、梁唐宋の三傳に傚ひて科を分ち一千六百六十二人を收む、後、常陸の清音寺、京都の盛德寺に歷住す、晚年誓うて首楞嚴經を暗誦す、寶永七年二月十二日京都盛德寺に寂す、壽八十五、法嗣象先點等相謀り美濃久昌山に葬り、海雲塔を建つ、著作延寶傳燈四十一卷、本朝高僧傳七十五卷、東國高僧傳彈誤十卷あり、（盛德寺碑後、墓銘、延寶傳燈錄序、本朝高僧傳序）

シミヨー　師明　ショーシン性信を見よ、

シレン　師鍊　一九三八 二〇〇六　〔臨濟宗〕京都南禪寺の學僧なり、師鍊は自ら虎關と號す、俗姓は藤原氏、京都の人なり、父は

左金吾校尉、母は源氏の出にして、共に佛乘に歸す、五子あり師は其三男なり　弘安元年四月十六日に生る　甫めて七歲にして僧本證に就きて書を讀む、八歲にして三聖寺の寶覺和尙に依り、十歲祝髮して比叡山の戒壇に上り具足戒を受く、正應二年十二歲腹疾を患ふ、幾もなくして夢に奇瑞を感して癒ゆ、同三年寶覺病あり、因りて時に靑伽梨一頂を侍僧に托して後年を待ちて師に付與せしむ、蓋し師猶ほ幼なれはなり、正應四年八月八日寶覺寂せしかは、師閉居す、正應五年南禪寺に入り規菴圓禪師に謁して參究し、大に重せらる、龜山上皇屢々宮に召して師を寵したまふ、永仁元年十六歲にして相模鎌倉に赴き、圓覺寺桃溪悟に依る、永仁二年七月京に歸り太子賓客菅原在輔に從ひて菅家秘藏の文選を聞く、永仁三年南禪寺規菴の湯藥に侍す、此秋鎌倉に往きて圓覺寺に寓す、永仁五年四月壽福寺の道源長老に相部を習ふ、秋七月京に歸り、建仁寺無隱範に依る、仁和寺に往きて廣澤流の密敎を禀く、正安元年二十二歲の春二月再ひ南禪寺規菴に依りて記室となる、是時一山寧西來して京都に居る、師往きて謁す、師宋に渡らんと欲すれとも母許さす、正安三年規菴の命により客司となり、嘉元々年侍香となる、嘉元二年秋藏山空の道風を慕ひて東福寺に往き其下に寓す、冬醍醐寺に到り實賢の密敎を探る、嘉元三年上皇龜山宮に病み給ふ時、師規菴と共に御床に侍す、十一月藏山東福寺を退きぬ十一月元無爲寺務を領す、德治元年正月十六日師擢てられて藏司となる、德治二年春相模に往き、巨福山建長寺に至り一山寧に從ふ、夏四月一山常樂菴に退く、元無爲圓覺寺に移る、師屈せられて圓覺寺に入りて一山の侍者となる、延慶三年記室に進む、應長元年三十四歲の四月、駿河に到り、澄春に悉曇を問ふ、澄春僧都は乘澄僧正の徒にして、悉曇を善くす、六月十五日富士山に登る、正和元年春鎌倉建長寺にあり、寺主約翁儉師を厚遇す、正和二年京師に歸り、嵯峨に寓す、十二月後伏見天皇の勅を受けて京都歡光院に住す、翌年梅坡道人素滿なる者白河の北に菴を搆へて師を請す、師乃ち之に就き濟北菴と號し一山額を書す、正和五年伊賀を經て伊勢に遊ふ、文保元年四十歲の三月太神宮に詣して靈應を感す、伊勢の檀越某本覺菴を搬して師を請す、一日楞嚴經を閱し、生滅去來本如來藏云々の條に至りて豁然大悟す、元亨元年二月密法を椎山古寺に修す、元亨二年七月本覺菴より還る、八月元亨釋書三十卷既に成り同月十六日天皇に奉る、三年春本覺菴に至る、十二月京都圓通寺の請あるも赴かす、正中元年本覺菴より歸り、尋きて歡喜光院の寺務を辭す、重ねて圓通寺の請を受けしかば遂に四月十一日寺に入る、嘉曆元年三聖寺に出世す、正慶元年五十歲の春三月伊勢神贇寺に入る、此寺は元本覺菴西方なる敎寺にして、西明寺といひしを、禪宗に改めて神贇寺と號し、後に安國寺と號す、後醍醐天皇寺階を升せて官寺となす、五月再ひ釋書を新帝に奉す、秋九月太政官藤原氏師を請して東福寺に住せしむ、翌年宮中に法を說く、幾ならすして三聖寺に歸る、師三聖東福兩寺に住すること各二回、曆應二年光明天皇の詔を受けて南禪寺を領す、夏五月著作十勝論を宮中に講す、四年南禪寺の印を解きて海藏院に居り、康永元年後村上天皇より國師號を賜ひ、三月光嚴天皇柏野の地を賜ふ、師其地に就きて楞迦寺を

シ(師)レ

建つ、貞和元年足利尊氏師をして建長寺を補せしめんとすれとも老病を以て辭す、貞和二年七月二十四日寂す、壽六十九、臘六十、著作元亨釋書三十卷、濟北集二十卷、佛語心論十八卷、聚分韻略五卷、十禪支錄三卷、禪餘惑問、禪儀外文各二卷、正修論、禪戒規、各一卷あり、師生來多病にして常に著作を事とせり、平生作るところの詩偈文章等極めて多しといふ、(海藏和尚紀年錄、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シカン 子感 カクオー覺應を見よ、

シキ 子歸 ニューオン柔遠を見よ、

シギヨク 子勗 ジンレー深勵を見よ、

シケン 子賢 シユーユー宗遊を見よ、

シゲン 子元 ソゲン祖元を見よ、

シゴン 子嚴 セツオン雪音を見よ、

シサイ 子濟 (……)〔臨濟宗〕相摸圓覺寺の禪僧なり、子濟字は居方、其郷貫詳ならす、日東旭に參して法を嗣き、相摸圓覺寺に住す、寂年缺く、(延寶傳灯錄)

シサイ 子才 シヨーギヨー清鄴を見よ、

シジユン 子純 トクヨー得仏を見よ、

シジユン 子潤 エウン慧雲を見よ、

シジヨー 子成 コーゾン功存を見よ、

シドン 子曇 (一九〇九—一九六六)〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり、子曇號は西磵、俗姓黃氏と云ふ、宋の台州仙居郡の人なり、郡の紫籜山廣度寺に投して出家す、身長七尺、眼光人を射る、十七歲蘇州承天寺石樓明禪師の下に參し、內記となる、咸淳元年(我國文永二年)石帆衍禪師淨慈寺に主となり、道價一時に高し、子曇腰包して其下に參し、衍禪師の天童山に遷るに隨ひ、執待すること六年なり、常に東航の志あり、遂に文永八年を以て我國に來着す、時に年二十三なり、東福寺の聖一、建長寺の大覺、榻を下して相待つ、尙ほ弱年なるを以て一刹を董せず、弘安元年元に歸りて天童の環溪禪師に依り、藏鑰を司る、至元二十二年(我國弘安九年)台外の紫巖寺に出世す、一住四年、衣を拂ひて抗外に遊ぶ、徑山の雲峰禪師招きて首座とす、後、天柱寺を董す、數年を經て廬阜に回る、圓通の玉岬振擧げて第一座となす、一山萬、斷江恩、月江印と往來唱酬して盛聲を流す、大德元年(我國永仁五年)平江の萬壽寺に投して南洲珍に參す、珍禪師延きて着座となす、我正安元年一山寧に伴ひて再び來る、時に年五十一なり、北條貞時請して圓覺寺の住持となし、政務の餘暇就いて宗乘を參究し、弟子の禮を執る、後宇多上皇勅して禪要を問ひたまふ、子曇法語一段を献す、嘉元元年遷りて建長寺を董す、德治元年十月正觀精舍に退居し、同月廿八日手簡を貞時に送り、永別の言をなし、門人に後事を附し、安然として寂す、壽五十八、門人巨福山の傳燈菴に葬り、塔を定明と云ふ、勅謚大通禪師と云ふ、(續群一二八、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シブ 子武 コーセン光闡を見よ、

シヨー 子容 タイエー大瀛を見よ、

シガン 獅巖 バイフ梅廍を見よ、

シシアン 獅子菴 シコー支考を見よ、

シシクイン 獅子吼院 ギヨージヨ堯恕を見よ、

シシクツ 獅子窟 トクジユー得住を見よ、

シシアン 四四菴　シユー支考を見よ、

シトク 四德　センカイ詮海を見よ、

シバイロ 四梅廬　リヨーグー亮隅を見よ、

シサン 此山　ミヨーサイ妙在を見よ、

シドー 斯道　シヨーユ紹由を見よ、

シヨー 紫陽　ニヤクシ若芝を見よ、

シキユー 芝丘（……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、芝丘字は高菴、俗姓は雅樂氏、備後の人なり、出家して聖一國師の法嗣なる曇瑞慧に參して省あり、初め寶福寺に住し、備中神應寺を開く、後、京都東福寺に移り、某年十月五日寂す、壽欠く、天應菴に塔す、（延寶傳灯錄）

シコー 芝岡　シユーデン宗田を見よ、

シチユー 芝中（……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、芝中字は和翁、其鄕貫詳かならず、廣く大小藏を究め、聖一國師の法孫なる高菴丘に參すること多年、遂に契悟し、備中神應寺に出世し、後、東福寺に移る、寂年欠く、（延寶傳灯錄）

シハン 芝繁 二〇五三―二一四七〔曹洞宗〕備中洞松寺の禪僧なり、芝繁字は茂林、俗姓は平氏、天智天皇の後裔にして肥後高瀨の人なり、夙とに出家し、偏く諸老の門に遊び、諸經論を究む、相模の淨妙寺に至りて掛搭し、次に越後の龍澤寺に於て梅山に參す、辭して遠江の大洞寺に至り、如仲に謁す、八年にして未だ悟らず、去りて洞松寺に於て喜山に參し、居ること十三年、遂に其印可を受く、喜山寂するに及び、職を受けて洞松寺に補す、後永平寺に遷り、大に寺基の皇張に力を盡す蓋し文明五年に永平寺は兵火に罹り出世道場の勅書も燒失するに至る、師再興の任に當りて經營せり、次に總持、大洞、佛陀の諸寺に歷住す、等都三河に龍溪寺を剏するに方り、請に應して開山となる、總持寺に歸り紫衣を賜ふ、長享元年二月八日崇芝に後事を托して寂す、年九十五、臘八十四、法嗣盧嶽都、崇芝岱、秀峰俊、あり、（日本洞上聯灯錄）

シエン 旨淵 二〇二三―……〔曹洞宗〕能登光恩寺の開山なり、旨淵字は松岸、加賀の人なり、壯にして剃髮し、大乘寺瑩山に依る、後洞谷寺明峯素哲に參す、已にして法を播磨の永天寺に開き、次に越中光禪寺に住す、觀應元年、大乘寺に遷り、幾何ならずして洞谷寺に主となる、能登刺史無藏居士光恩寺を創建し、師を延て其一世となす貞治二年六月五日寂す、壽欠く、法嗣照菴智鑑、德翁正呈の二人なり、（日本洞上聯灯錄）

シクワク 旨廓（……）〔曹　宗〕筑前承天寺の二代なり、旨廓字は徹山、珠巖道珍の法を嗣ぎ、大乘寺に住し、移りて承天寺の第二代となる、寂年並に壽欠く、法嗣慶屋定紹、桂巖英昌の二人あり、（日本洞上聯灯錄）

シミヨー 旨明（一九八三―）〔臨濟宗〕山城西禪寺の開山なり、旨明字は石菴、俗姓不詳、宏辯訥の法を嗣ぐ、初め鎌倉の諸禪刹に請益し、巨福山建長寺に第一座となる、元亨の初、藤原範秀洛西檀林寺を再興して西禪寺と改號し、旨明を請して第一世となす、四方の禪客競ひて掛搭す、同三年鎌倉長勝寺に遷る、遂に同寺に寂す、年時欠く、（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

シゲン 孜元（……）〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、

孜元字は大元、號は無學、一に五斗室と云ふ、備中賀陽郡穴粟村の人、平田氏の子なり、世々名族にして父名は房近と云ふ、十三歳備前曹源寺に投じて得度受戒し、苦學功を積む、二十一歳豐後春澤禪師に師事し、尋て美濃隱山禪師に師事す、二禪師道學兼備し、殊に隱山は春秋左氏傳に通ず、孜元其下に修學參禪共に力めて閫奧に到る、三十四歳曹源寺に住す、寺は國侯の菩提所なり、侯(諱顯國)深く歸依し、禮待至て篤し、四十七歳同寺に碧巖錄を提唱す、雲衲四來一千餘名に至る、五十九歳再び大に法會を開く、大衆三千餘名に至る、六十二歳勅を拜して妙心寺に昇る、六十六歳參學上首儀山來に其席を讓り、幾くもなく疾あり、六十九歳にして寂す、某年八月十八日なり、遺偈あり曰ふ六十九年、謾地謾天、末後端的、虛空喫顚孜元禪師初め伊豫の行應に參し、教を受く、其辭し去るに臨み行應曰ふ、吾れ一物の子に贈るべきなし、これを贐となさむとて火箸を擧げ、熾火を挾み、吹て與ふ、孜元受くる能はず遽て起ちて一室に退き、七日間にして究明し、再び入て辭す、行應熾火を夾むこと初の如し、孜元已に其意を領す、行應乃ち休む、備前の國侯孜元禪師の豪邁の氣象を愛す、嘗て短銃を袖にして急に師を召し、師至れば即ち其耳邊に就て一發を放つ、師微笑して止む、已にして師亦驟に侯の耳邊に就て大喝す、侯驚悸して容を失ふ、これより益心服したりと云ふ、(近世禪林僧寶傳)

シジユン　孜純　二四六六／二五三一　〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、孜純字は雪航、豐前小倉の人、始め黃檗に歸し、後臨濟に轉す、備中の妙峰、尾張の卓洲、遠江の妙喜、下總の象匏を歷問し、遂に象匏の下に留り參究功あり、其法を嗣く、京師に入り天龍寺塔頭鹿王院内の正圓菴に住す、三年にして寺務の煩累を厭ひ、諸國に行脚し、美濃虎谿山の勝を愛して客留し、後、東遊して遠江の山中に菴居し、咄哉軒と號す、晚年山原の長福寺に病を養ひ、一日偈を書して曰く、咄々々、擺レ手行、六十六、怒二眼睛一と書し終り眼を瞋して寂す、壽六十六實に明治四年七月八日なり、(近世禪林言行錄)

シコー　支考　二三二五／二三九一　〔臨濟宗〕美濃小野大智寺の僧なり、支考初は鎭藏主と云ふ、後に獅々菴、四々菴、東花坊、西花坊、野子、盤子、蓮二、瑟々菴、華表人、桃花仙、等の號あり、別に渡邊狂橋、佐渡入道等と稱す、美濃の人渡邊氏なり、弱冠の時、吹毛劍也春三月、斷腸牡丹花下風と云ふ句を作り、衆僧を驚かせり、後、衆僧より其敏才を嫉まれ、遂に寺を出つ、元祿三年伊勢の俳人涼菟の紹介にて芭蕉の門に入り、徘句を學ひ、遂に十哲の一人となる、伊勢山田に居し、幻住菴を營み、徘句を事とし、奇想人を驚かせり、後に其門派を美濃派又は獅子門統と云ふ、支考法衣を脫するにあたり、蓮の葉に小便すれはお舍利かなと、人其酒肉を用ゐるを戒めたれは、答へて曰ふ、牛になる合點じや朝ね夕すゞみ、と、享保十六年二月七日寂す、壽六十七、著作、本朝文鑑、和漢文藻、十論爲辨、續五論、葛松原等あり、(俳林小傳、俳諧名譽談)

シサン　支山　一九九〇／二〇五一　〔臨濟宗〕播摩護聖寺開山なり、支山號を雲溪と云ひ、俗姓は源氏美濃の大守土岐賴清の子なり、出家して土岐の岐字を分ち支山と云ふ、法を雪村友梅に受け、播磨長良に往き護聖寺を剏して第一世となり、久しくして

京都安國寺の請を受けて之に遷つる、書法を雪舟に學び、山水花鳥人物を善くす、晩年玉龍菴に退隱し、明德二年十二月十四日寂す、壽六十二、著作、語錄、並に臘隱西巖の二集あり、（本朝高僧傳、扶桑畫人傳）

〔考〕扶桑畫人傳に天文中の人とあるは誤にて、實は天文より一百三十餘年前に寂せり、後世師の畫風を雲溪派と云ひ、雲谷派と併せ稱す、

ジイ　慈威　エチン慧鎭を見よ、

ジウン　慈雲　一四一九／一四六七　〔華嚴宗〕近江普光寺の學僧なり、慈雲俗姓は長尾氏、山城の人なり、景雲四年試業得度し、華嚴に精通す、嘗て五教章の指事六卷、五教章の見聞十卷、五教章の復古記十二卷、科文、簡註各一卷を著し、東大寺にありて無性の攝論等を論す、後旨を奉して近江普光寺の講師となり、學侶多く歸す、大同二年某日寂す、壽四十九（本朝高僧傳）

ジウン　慈雲（……）〔淨土宗〕京師の學僧なり、　慈雲は京師の人、菅原爲長の息男なり、師始め父の業を繼ぎ、儒學に精しく、且つ、又和歌を善くす、壯年にして然空に投して出家し道化盛なり、示寂の年月日欽く、（鎭流祖傳）

ジウン　慈雲　オンコー飮光を見よ、

ジウン　慈雲　ジユンカク純覺を見よ、

ジウン　慈雲　ニチジユン日潤を見よ、

ジウン　慈雲　ミヨーイ妙意を見よ、

ジウンイン　慈雲院　ニチシン日新を見よ、

ジエ　慈惠　リヨーゲン良源を見よ、

ジエー　慈永　一九六二／二〇二九　〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の禪僧なり、慈永字は靑山、紀伊玉津の人なり、幼年にして孔老の書を讀み日に千言を記す、且つ本郡の傳法院に依りて經論を閱す、一禪僧に遇ひ法門廣しと雖生死を斷するは禪宗に過ぎたるはなしと說けるを聞き、卽日髮を剪りて東福寺に到り、南山禪師に謁し、日夕大事を參究す、天龍寺夢想國師に謁し、親侍すること二十餘年にして契悟す、甲斐の慧林寺に住す、國師の命に出づるなり、尋て國師示寂の後、衆議師を天龍寺の後嗣に推し、東陵璵も亦同しく懇請す、乃ち甲斐を出で京に上り、天皇の勅請を拜して宮中に法要を說き叡寵甚渥く、天龍寺住持を命したまふも師謙退して住せず、多福寺に留る、尋て播摩の瑞光寺に遷る、將軍足利義詮等持寺に請す、鎌倉淨智寺京師臨川寺に遷る、太上天皇の勅を拜して、伏見の大光明寺に入る、寺中に光嚴光明の二上皇落飾して蹕を駐めたまひ、大臣長官等と共に法要を聞きたまへり、康安年中建仁寺に住す、寺は火災に罹り、堂宇跡なし、師經營功あり、不日にして舊觀に復す、晚年大統菴を構へて退休す、應安二年十月九日遺誡を書して寂す、壽六十八、臘四十九なり遺偈、無㆑禁無㆑枯、鐵樹開㆑花、萬象吐㆑舌、虛空咬㆑牙、勅諡佛觀禪師と云ふ（延寶傳灯錄、本朝高僧傳）

ジエン　慈圓　一八〇七／一八八五　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈圓は藤原忠通の子なり、十一歲にして延曆寺の座主覺快に師事して剃髮し、後、座主明雲に從ひて定戒し、十六歲一身阿闍梨に任す、承安四年江文寺に抵り、一百日を期して法華を研究す、養和初年法印に昇り、甘露王院の僧正念和尙に灌頂

法を受け、青蓮院に住し、無動寺三昧院、法性寺常壽院を兼管す、元曆元年護持僧となり、建久三年權僧正に任し、天台の座主に補し、明年春法務となる、七年冬座主法務を辭して吉水に退居す、建久元年再び天台の座主に補し、平等院の檢校となり、三年二月大僧正に任ず、五年詔により法勝寺に於て八万四千の小塔を造り、師供養の導主となる、後、座主を辭したるも重任四度に至る暮年東山に皈り、建保三年大乘院に於て布薩を修す、六年十一月勅して牛車に乘るを許さる、嘉祿元年寂す、壽七十九、臘五十九、仁治三年勅諡慈鎭と賜はる、師和歌に長し、其集を拾玉集と云ひ、秀作多し、(本朝高僧傳、諸門跡譜)

ジエン　慈淵　二一二三 二一八五　〔曹洞宗〕周防顯孝院の開山なり、慈淵字は九江、俗姓は平氏、深野の族なり、周防吉田に生れ、幼にして出家し、四方に行脚し、諸老宿に徧參し、後、妙喜寺西洲良景に見え、機契す、文龜元年十月二日入室し、所傳の法衣を受けて席を補し、次に永平寺に出世す、辭して妙喜寺に皈り、永正八年檀越顯孝院を創し、師其開山となる、仝十三年遷りて開雲寺に主となり、大永元年法明院に退休し、仝五年二月二日寂す、壽六十三、法嗣規川宗策、廓翁宗周、春山宗胤の三人あり(日本洞上聯灯錄)

ジエン　慈延　二四六六……　〔天台宗〕山城岡崎の歌僧なり、慈延字は大愚、號は咄居菴と云ふ、生國俗姓詳ならす、京師の東岡崎村に閑棲して道譽あり、後、冷泉爲村に就いて和歌を學び其道に達し、秀作殊に多し、澄月等と幷に稱せらる、文化三年七月八日寂す、壽缺く、(三十六家集略傳)

ジオー　慈應（……）〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、慈應は檀越の請に應して播磨飾磨の濃於寺に住し、九句法華を講す、寂年及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

ジオー　慈應　(一八五六)　〔天台宗〕越後無動寺開山なり、慈應字は護念、源爲義の末子なり、父戰死したる時越後に遁れ下髮出家し、顯密の敎を習ふ、越後菅谷山に無動寺を剏し不動尊を安す、建久七年冬鎌倉に到りて賴朝に謁し、大に禮遇せらる、賴朝の請に應して其女の病を加持す、賴朝府内に寺を建て師をして開法せしめんとすれども固辭して北歸し、某年寂す、壽缺く(本朝高僧傳)

ジオン　慈音　二一九八……　〔曹洞宗〕若狹芳春寺の開山なり、慈音字は觀雲、若狹の人なり、幼にして出家し、諸老に徧參して後大光寺行雲遵に參し、止まること十餘年、初め永平寺に出世す、文明十四年若狹三潟郡織田鄕日晨圓旭なる者芳春寺を建て其山を發光山と號し、師其開山となる、後、慈眼寺に遷り、一住三年、再び芳春寺に遷る、晩年退休して仙補恩に席を繼がしめしが、仙補先だちて寂せしかば、師再び寺務を執る、天文七年十一月二十二日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ジオンイン　慈恩院　ライエ賴惠を見よ、

ジカイ　慈海　二三五六……　〔天台宗〕武藏東叡山凌雲院の學僧なり、慈海字は宋順と云ふ、東叡山の凌雲院に住し、大僧正となり、學德を以て聞ゆ、訓點諸陀羅尼を刻し、世傳へて慈海本と云ふ、元祿九年十一月十六日寂す、壽詳ならず、著作四敎儀集註標指鈔三十卷あり、(江戸名家墓所一覽、近世佛家著作

目錄）

ジカイ　慈海　二三四一 二四〇六　〔眞宗〕某寺の學僧なり、慈海字は性謙と云ひ、性海の嗣法なり享保十年の夏學林にて大經玄概を講し、延享元年五月兩願成就文略釋二卷を著す、嘗て大般若經六百卷を親寫す、三年六月十八日寂す、壽六十六、宗主諡を下して開善院といふ。（本願寺通紀、本願寺派學事史）

ジカク　慈覺　ドーチン道琛を見よ、

ジキ　慈基（一九五三）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈基は鷹司兼平の子、慈禪法師に學習し、永仁元年天台座主となる、其寂年缺く、（天台座主記）

ジキン　慈均　二〇二四……〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、慈均號を平田と云ふ、相模鎌倉の人、徧く講肆に遊びて禪を學び、京都に上りて慧日寺道山晟禪師に參して單傳の旨を得たり、嘗て指血を瀝で五部の大乘經を書す、二十七歲の時支那に渡り、金陵に至りて古林茂に參し、去りて天目山の中峰本、月江印等に見え、次に靈石芝、竺雲曇、無言宣、清拙澄、雪竇常、鳳山泳等の門に遊び、天台山に登り請益して東歸す曆應二年冬豐州崇禪寺に出世し、播摩圓應寺、京都普門寺、に歷遷す、延文二年敕を拜して南禪寺に陞り、後、龍吟菴に退休し、貞治三年九月十六日寂す、壽缺く、南禪寺雲興菴に搭す、遺偈あり、曰く、生死去來、無レ此無レ彼、明月行レ空、淸風匝レ地と、著作語錄一卷あり、（續群二三一、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ジキヨー　慈敎　二二四八 二三〇三　〔眞宗〕近江錦織寺の第十二代なり、慈敎は慈養の弟子にして廣橋兼勝の猶子なり、寬永二十年二月九日寂す、壽五十六、（本願寺通紀、錦織寺歷代表）

ジクー　慈空　二四六八 二五五〇　〔眞宗〕近江圓照寺十四代なり、慈空一名は宏遠、俗姓は水原氏といふ、慈潮の第三子なり、文化五年十二月五日に生る、文政五年本山に受度し、十年父を喪ふ、時に長兄既に沒し、次兄出てゝ神崎郡覺成寺に住す、故に師父の後を承けて近江犬上郡高宮村圓照寺に住す、師少にして家庭に學び、遠遊する能はず、自坊に普行勸學を請して學び智積院薩明に從ひて唯識を究め、旁ら諸部に通す、外典に至りては其師承なしと雖維皆其要に通ず、常に喜びて史籍を讀み、且つ文辭を能くす、嘉永元年得業に登科し、尋いて助敎に進み、叢林を監す、信法法主の命を受け仲兄超然と共に眞宗法要典據を校補し、其成るに及びて法主額字幷に和歌を書して賜ふ、明治三年司敎に陞り、五年遂に勸學に任す、嘗て叢林に淨土論玄義分を講し、屢々法主に侍講し、且つ顧問となる、朝廷敎導職を設くるに方り師累補して權中敎正に至る、晚年眼聾二患に罹り、廿三年六月二十一日寂す、壽八十三、法臘六十九なり、三子あり、長を慈音といひ、師の嗣子たり、著作領解文略解、大谷略譜、眞宗要義、敎證二道辨・六字釋講苑、各一卷、淨土論講苑、原人論講苑、裁判申明書、信順記校補、各二卷あり、（碑文、本願寺派學事史）

ジクー　慈空　ショーケン性憲を見よ、

ジクン　慈訓（一四三七）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、慈訓、俗姓は船氏、河內の人出家して興福寺に住し、玄昉良敏に歷事して法相宗を受け、新羅の審祥の西來するに際し、親しく就きて華嚴宗を受く、天平十二年に審祥が始めて華嚴經を講するに方り、鏡忍圓證と共に其複師となる、天平十六年

に至り、審祥の後を繼ぎて鏡忍圓證と共に華嚴の講師となる、聖武天皇不豫の際、良辨と共に御床に侍して勞勤す、天平勝寶八年上皇崩御の後、勅して當戶の課役を免し、父母兩戶に及ぶ、且つ師は少僧都に任ぜらる、天平寶字元年に興福寺別當となりて寺務を掌る、興福寺別當の職師に始まる、同三年淳仁天皇勅して五位以上の朝臣並に師位以上の僧の意見を徵したまふに際し、師上表して僧尼の弊風を論ず、同七年道鏡勢威を張るに至り、師意に合はず、少僧都の位を停められ、興福寺の寺務は弟子仁秀これを掌どる、寶龜元年八月道鏡勢威衰へて高野の山陵に廬居せる後、即ち同月十六日に少僧都に復任し、興福寺別當の職も亦前に復す、同八年興福寺に寂す弟子永叡、仁秀、の二人法相宗を傳へ、同正義、明哲の二人は兼學せる華嚴宗を傳ふ、(續日本紀、七大寺年表、三國佛法傳通緣起、僧綱補任、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕元亨釋書、本朝高僧傳には唐に渡り賢首大師に學びたりとあれども取らず、同書天平四年に僧都となるとあれども是亦取らず、

ジクワン　慈觀　三四五四 二五二六　〔天台宗〕下野日光山修學院の學僧なり、慈觀號は無爲道人と云ふ、下野國佐野槇野村木塚某の子なり、寛政六年に生る、文化二年十一歲日光山に登り、華藏院慈傍を仰いで度を受く、文政五年華藏院に住し、天保十四年十一月妙道院に轉し、嘉永元年二月廿五日修學院に轉し、學頭に上り、大僧正となり、功德林院と號す、文久二年退隱し、慶應二年八月十一日寂す、壽七十三、臘六十二、師一生の著作火に罹り亡す、文章數篇あり、其學殖を窺ふべし、

ジクワン　慈觀(……)〔新義眞言宗〕江戶圓福寺の學僧なり、慈觀字は照空房と云ふ、智積院運敞に師事し學名高し、長久寺より圓福寺に住す、寂年幷に壽缺く、著作泊如僧正年譜一卷あり、

ジクワン　慈觀(一九七二)〔淨土宗〕下總正定寺の第二代なり、慈觀字は良嚴と云ふ、俗姓生國詳ならず、名越の尊觀に師事して一門の宗義を受け、下總古河大野正定寺第一代良心上人の後を繼いで第二代となる、示寂の年月日缺く、著作名越宗要一卷あり、(淨土總系譜)

〔考〕慈觀は正和の頃の人なり、

ジクワン　慈觀　ニチジョー日靜を見よ、

ジクワン　慈觀　コーゴン綱嚴を見よ、

ジケン　慈賢　二〇五三 二一二一　〔眞宗〕近江錦織寺第七代なり、慈賢は慈達の子にして廣橋兼宣の猶子たり、嘗て現世利益和讃鈔五卷を著す、二子あり慈範、叡尙といふ、寛正四年六月二十日寂す、壽六十九、(本願寺通紀、錦織寺歷代表)

ジゲン　慈賢　一八三五 一九〇一　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈賢は源三位賴政の親族攝津守源賴兼の子なり、慈鎭に師事して天台の教義を學び、仁治元年天台座主に任じ、同二年三月三日寂す、壽六十七、(天台座主記)

ジゲン　慈源　一八七九 一九一五　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈源俗姓は藤原氏關白道家の子なり、幼にして青蓮院に入り、慈鎭良快の二師に侍して顯密の法を學び、嘉禎四年延曆寺の雁主に補す、曆仁元年十二月阿闍梨三口を比叡山に置くを聽さる、寛元三年三月大僧正に任じ、三年にして印を解きて飯

室に退居す仁治二年春天台座主に再任し、兼ねて四天王寺を領す、師山を治むること前後九年なり、退て抄香院に居し、建長七年七月十九日寂す、壽三十七、（天台座主記、本朝高僧傳）

ジゲン　慈眼　エークー叡空を見よ、

ジゲン　慈眼　セツチン雪念を見よ、

ジゲン　慈眼　ニチエ日慧を見よ、

ジゲンイン　慈眼院　ニチリヨー日遼を見よ、

ジゲンダイシ　慈眼大師　テンカイ天海を見よ、

ジコー　慈綱（二三一八）〔眞宗〕近江錦織寺の僧なり、慈綱は萬治の頃慈忠の後を受けて寺務の復興を謀る。（本願寺通紀）

ジコー　慈恒　一四二三―一四八七〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、慈恒は俗姓茨田氏、山城の人なり、興福寺に住して法相を傳へ、且つ因明に精し、才多くして行少し、世人之を憾む、天長四年二月寂す、壽六十五、（本朝高僧傳）

ジコー　慈孝　……二一二六〔曹洞宗〕伊勢の千手寺開山なり、慈孝字は正海、伊勢長野城主工藤氏の子なり、京都南禪寺に投じ年滿て比叡山に登り具足戒を受け、遂に北地を經て關東に至り、復郷里に還り、洞津苔世山に菴居す、永享の初年偶々伊勢大廟に詣で、途にて玉叟良珍禪師に逢ひ、敎を聞きて印可を受く、父工藤氏千手寺を創し師を以て開山となす、文正元年正月二十八日寂す、世壽欲く、（日本洞上聯灯錄）

ジコー　慈光　リユーサン隆山を見よ、

ジコー　慈航　シヨーカイ性海を見よ、

ジコーイン　慈廣院　ニチニン日忍を見よ、

ジゴン　慈嚴　一九五八……〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、慈嚴は後山本左大臣藤原實泰の子なり、元德二年天台座主となる、時に年三十三、其終年を知らす、（天台座主記、三國名匠略記）

ジサイ　慈濟（二九〇三）〔戒律宗〕相模極樂寺の律僧なり、慈濟字は賢明、其氏族を記せす、山城の人なり、幼名を多聞童子と名く、寛元元年興正菩薩に從ひて剃染し、出世の法を學ひ、大僧の列に進みて、大悲菩薩の室に入り、招提、海龍王兩寺の間を周回し、戒律を學ひ、密敎を受けて深く幽微に通し、相模極樂寺に住す、寂年及ひ壽缺く、弟子善願忍律師あり、（本朝高僧傳）

ジザン　慈山　二二九七―二三五〇〔天台宗〕比叡山安樂院の開山なり、慈山字は妙立號は唯忍子、俗姓和田氏、美作の人なり、幼にして出家を願ひ、十七歲山城花山寺雷峯禪師に投じて得度す、日々道行を勵み幾何ならずして大に得るところあり、禪師の許可を蒙り、自ら大悟したりとなし、四方に漫遊す、寛文四年近江坂本に草菴を結び、山水に放浪す、八年叔父某大坂にあり。醫業をなし、師の放浪せるを見て大に激勵して。大藏經を閱讀せんことを勸む、これより奮然として東山泉涌寺に往き、大藏經を閱讀し、三年を經て未た半はならず、大に以前の非を悔悟し、誓ひて比丘とならんとし、大藏經閱讀の後、槇尾山に登り、戒を受けんとし、途中智本律師に逢て疑問を質して決せず、直に坂本に皈り、瓔珞經に依りて自誓受具し、且誓ひて曰く、有情の身分は一絲と雖、身に纒はず、微塵と雖、喉に入れずと、これ實に寛文十二年三月三

日なり、當時受戒は瑜伽の法を用うるを以て師が瓔珞の法を用るを非とする者ありしかば、詩を作りて其偏見を斥く、これより再び四律五論を閲讀し、南山道宣律師の流を汲み、遺敎、阿彌陀、金剛の諸經、莊嚴論、原人論等を講演して、盛んに法化を施せり、初め大藏經を閲讀するに方りて、天台宗の三大部を見て、敎觀の大に備れるを知り、益研究し、法華、涅槃、楞嚴の經意に通達す、乃ち禪宗を改めて天台宗に皈す、時に年三十六なり、翌年秘密灌頂を受け、次に比叡山の義道等に其證明を乞うて梵網の十重禁戒を受く、これより比叡山に於て戒律を唱へ、山家の一向大乘戒に代ゆるに、南山流の大小倶戒を以てし、僧風の廢頽を救はんとす、然るに一山の大衆師を小乘の比丘となして誹謗し、遂に異議者となして放逐す、延寶六年正月六日坂本に去り、攝津山城の間に流寓す、後、梶井法親王の請により、數〻魚山に遊び、法相宗を講ず、八年東山に草菴を結びて棲住す、

妙立和尚

天和二年、母の疾を看護せんがために攝津小松休世庵に止まる、尋で東山に皈りて棲住す、貞享三年法華三昧を修し、靈驗を感す、同年丹波に巡化し、初尾山に止まり、同山寺の廢頽を修繕す、四年琉珠の僧禪味の來つて法を求むるに方り、師菩薩戒を授く、元祿元年園城寺大衆の請によりて、妙宗鈔を講ず、聖護院道祐法親王の請によりて、指要鈔等を講ず、三年正月母の喪に逢ひ、禮誦祈禱を事とし、幾何もなく病に罹り、同年七月一日門下を召して曰く、法心念佛、身三觀、是吾住處なり、汝等思をこゝに止むれば、旦暮に我に遇ふなり、我死すとも憂ること勿れと、其夜阿彌陀佛の前に合掌念佛す、既にして唱へて曰く、中道即法界、法界即止觀、止觀即刹那、刹那者何、南無阿彌陀佛也、然れば則ち念佛の外に止觀なし、止觀の外に念佛なし、能所は情の取る所、法界は智の照す所と、懇ろに敎訓を垂れ、遂に七月三日夜寂す、壽五十四、門弟遺骵を北白川に葬る、後靈空光謙安樂院を開き、師を尊んで開山第一祖となす、著作圓頓章句解一卷、十重俗詮二卷、大乘止觀頌註一卷、三千有門頌大義一卷、野山艸集一卷、(妙立和尙行業記、續日本高僧傳)

ジジツ　慈實　一八九八—一九六〇　〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、慈實は藤原道家の子、母は少納言源重房の女、慈源和尙に習學し、弘安十一年天台座主に任す、正安二年五月九日寂す、壽六十三、(天王寺別當記、天台座主記、諸門跡譜、)

ジシン　慈心　二三一〇　〔淨土宗〕武藏善德寺の學僧なり、慈心字は殘夢と云ふ、俗姓は北條氏、相模の人なり、淨土宗に皈し、覺冏に師事し、强記人を驚せり、糅鈔四十八卷を諳

記したりと云ふ、淺草善德寺に住し、法化盛なり、慶安三年四月廿日寂す、壽缺く（淨土總系譜、鎮流祖傳、續日本高僧傳）

ジシン　慈心　カクシン覺心を見よ、

ジシン　慈心　チョーカイ澄海を見よ、

ジシン　慈心　リョークー良空を見よ、

ジシン　慈信（……）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、　慈信俗姓は藤原氏、實經の子、出家して尊信大僧正に師事して法相宗を學ひ、興福寺に住し、法務を管す、又長谷寺、橘寺を領し、金峯山の檢校に任す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ジシン　慈信（一五六一）〔……〕　山城山崎寺開山なり、慈信は何宗の人なるかを知らす、神異多く、鉢を飛して食を乞ふ、故に世人空鉢上人といふ、延喜年中師攝津中山に往き、聖德太子百濟の佛工に造らしめたる十一面觀音像を拜し、靈夢により山城山崎に像を移して化を布き、菴に安居す、靈應著しきを以て村民皆歸依し財を捨てゝ寺を建つ、俗に寶寺と稱す、後其の寂する地を知らす（本朝高僧傳）

ジシン　慈信（一八三二）〔天台宗〕比叡山の僧なり、　慈心字は尊慧、叡山にありて天台教を究め法華三昧を修す、後、攝津の淸澄寺に住し、有馬の溫泉寺に到り、淸涼院に止る、承安二年七月閻羅王の冥請に赴き、地界の衆を集めて法華十萬部會を修し、導師を勤めたりといふ、其後益精行し、示寂に至るまで法華經三萬六千七百五十餘部を誦じ、阿彌陀號三十万七千遍を唱へたりとぞ、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

シシンボー　慈信房　ゼンラン善鸞を見よ、

ジジヤク　慈寂　ケンクー見空を見よ、

ジシユー　慈舟（二四〇五／二四八二）〔曹洞宗〕尾張泉德寺の開山なり、　慈舟字は佛海、一號は石菴、常陸の人なり、延亨二年に生る、寶曆三年十一歲にして能登の香林山に登り、大忍和尙を見、薙髮受戒す、十三年州の杉室大雄院に挂搭し、內外の典を學ひ、日夜怠らさるもの三年、未ざ生死無常の苦を脫する底の力を得す、明和三年春二十二歲にして所持せる書典を悉皆抛擲し、遠く南遊せんと欲して香林山に歸省す、尾張の永安寺に到りて坐夏し、山主見桃和尙の下に留る、時に秋月寺の開寬祖闡典座たり、師祖闡の風を慕ひ、夏解けて祖闡秋月寺に歸るに從ひ、秋月寺に掛錫す、時に秋月寺師資二人のみ自ら一人にして、薪炭の勞を執り、餘暇あれは壁に面して靜坐し、日夜參究す、一日祖闡客と拈花微笑話を語る、師之を竈邊に聽て開悟す、便ち威儀を具し方丈に上りて禮拜す後、長門の大寧寺に到り、虎關和尙に參し、加賀大乘寺に往きて祖俊和尙に謁す、安永元年冬、師二十八歲の時祖闡尾張の靈鷲寺に移りて結制し、師をして分座說法せしむ、三年伊勢河俣山中に藏れ、十年間動もすれは旬餘糧を斷ち、長坐臥さす、或時村里に死靈ありて人に祟る、里人師に就きて之を除かんことを請ふ、師乃ち戒脉別唱法を授くるも應なし、自ら修行無力なるを耻つべしと謂ふ、二三ヶ月の後隣村に狂病あり、師を請して之を除かんことを乞ふ、師謂へらく前の日には心中除かんと欲しせしが故に應なかりしなりと、便ち道場に就き自他不二深三昧に入り、然る後前日の法を修せしかは、狂心止みたりといふ、天明四年四十歲にして祖闡の讓を受けて

其席を董し、靈鷲寺に住す、六年夏結制す、寛政十年春五十四歳にして尾張永安寺の請に應して同寺に移つる、文化元年六十歳にして尾張大光寺の空席に移つる、六年龜岳に移る、十年丸山に松林寺を再興し、祖闡を請して法地開山となし、自ら二世に居る、十一年春古稀の祝をなす、十三年七十二にして龜岳を退く、法弟宜見小牧古城北なる本莊村の廢寺を興し、師を請して中興開山となす、象頭山泉德寺と號す、師之に閑居して養老す、文政五年三月廿八日偈を書して曰く、平眼虛空無一偏、是非呑吐有餘員、從來天地權名仕、四海誰死個老傳と、此日終日山を巡り、手つから壽塔を掃ひ、暮景歸來して常の如く自ら湯を求めて澡浴し、入室して端坐し、病なくして化す、壽七十八、臘六十七、象頭山に荼毘す（泉德開山慈舟師行由）

ジシユー　慈周　二四六一……〔天台宗〕武藏明靜院の學僧なり、　慈周字は六如、號は白樓、別號無着菴と云ふ、近江の人なり、幼より學を好み、內外の書を讀む、彥根の野村東皐に詩文を習ひ、後、江戶に出遊し、宮瀨龍門に就く、佛儒兼通するも、殊に詩を以て聞ゆ、江戶明靜院に住して諸大家に交あり、晚年京都に上り、嵯峨長床坊に退隱し、道行高し、大般若經を眞讀すること三十六回、金剛般若經を誦すること五万部に至る、享和元年三月十日寂す、長床坊里坊に墓あり、著作金剛般若瑞應編三卷、放生功德集三卷、葛原詩話二卷、同後編二卷、六如菴詩鈔三卷あり、（近世叢語、近世名家著述目錄、樹下慈尙氏返信、）

ジシユン　慈俊　一九五五 二〇二〇〔眞宗〕山城本願寺の僧なり、

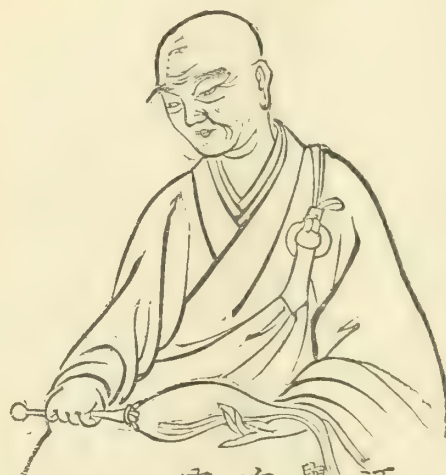
慈俊字は從覺初の名は光眞、後、光壽と改む、童名は光珠丸、存覺の同母弟なり、永仁三年生る、日野俊光の猶子となる、應長元年冬十七歲にして薙髮し、賴禪僧正の弟子となり、假に左衞門督と號し、尋いて大納言と稱す、永寬親王の門に列し、後、青蓮院慈道親王に從ふ既にして眞宗に歸す、元亨三年三月父兄と共に北野祠を領す、正慶二年四月祖師法語消息二十二章を編して校正す、名けて末燈鈔といふ、幾ならすして火に會ふ、建武五年七月之を重寫す、康永二年四月覺如宗主病中に宗要を述ぶ、師之を記し、最要鈔と云ふ、觀應二年十月慕歸繪詞十卷を著し、先師の行實、及ひ題詠等を敍す、覺如宗主存覺の絕交の後、師に寺務を付す、幾もなくして師之を善如宗主に付して自ら退く、故に祖系に入らす、延文五年六月二十日寂す壽六十六、二子あり、一は善如、二は光長丸といふ、（本願寺通紀）

シジユン　慈順　二三九三 二四七五〔新義眞言宗〕山城智積院第二十五代なり、　慈順字は通助、初めの名は慈忍、武藏埼玉郡莞木村の人、俗姓鑓田氏、享保二十年を以て生る、十二歲長久寺光淨の室に入り、後智積院に登り第二十二代能化動潮僧正に師事し、好學の名聲高し、寛正三年六月山城蓮臺寺に住し、仝年九月權僧正に任せらる、仝十一年十一月二十五日幕府の命を蒙り、智積院第二十五代能化となる、享和三年二月山城大報恩寺に退隱す、文化十二年九月十九日寂す、壽八十三、（墓誌）

ジジヨ　慈助　一九五五……〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈助は後嵯峨院の第十三子なり、尊助法師に學得し、正應二

年天台座主に任し、同三年また天台座主となる、永仁三年七月十七日寂す、（天台座主記、諸門跡譜）

ジシヨー　慈勝（一九七八）〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、　慈勝は淨妙寺關白左大臣家基の子、文保二年十二月十四日天台座主に任す、（天台座主記）

ジシヨー　慈昌　二二〇六 二二八〇　〔淨土宗〕增上寺第十二代中興なり、**慈昌**號は貞蓮社源譽、俗姓由木氏天文十三年（一說天文十年）正月十日武藏國埼玉郡由木に生る、父祖武門の業を傳へむとせしも故ありて十歲の時（一說十五歲寶臺寺感譽の弟子となる）全國新座郡片山村太平山寶臺寺に入りて蓮阿を拜し剃髮す、遊行上人の流を傳へ、清淨光寺に屬す、十八にして感譽存貞上人の室に移り、佛學を勤め、一宗興隆を任とす、天正二年同國上蓑に至り、長傳寺を創立す、諸宗の奧旨を極め學徒一百人に及ぶ、仝十一年十月十八日勅して香衣を賜はり、生實大巖寺、岩瀨大長寺に住

源譽存應上人

務說法し、同十二年（一說十七年）五月二日增上寺の第十二代となる、諸宗の學徒、笈を負うて集り、其風を仰ぐ、仝十八年四月豐臣秀吉小田原を攻むる時、武相兩國の大寺の住持を召し、其寺列に依て軍勢甲乙防非禁札を下す、仝年秀吉奧州を攻むる時、陣に入りて法話問議す、仝年八月德川家康關東八州を主領するや、永く師檀の約をなし、慶長三年八月寺地を貝塚より日比谷の邊に移す、仝四年九月六日紫衣を賜ひ仝十年本堂、三門、經藏、表門、等を建つ、寺領千石、一切經三部を寄附し、且つ宗義法制の許可あり、仝十三年十一月十二日家康の執奏により、永く紫衣を着すべき詔あり、仝十五年六月命に依て京師に至り、後陽成天皇に一宗の妙旨を授け奉る、七月十九日勅して普光觀智國師の號を賜ふ、江戶に歸る後家康秀忠の戒師となり、仝十六年像を刻し、片山寶臺寺に納む、此時鎭西流に改む、上野國新田庄に大光院を開くや、師は土井成瀨の兩使と共に趣き弟子呑龍を開山となす、將軍の歸依益深し、元和元年七月宗門の梵制卅五條を定む、後、正覺寺を淺草に創し、十八檀林を關東八州に設立す、仝年十月十八日西丸にて淨土の宗義を說く、仝二年四月十七日家康薨するや增上寺に靈屋を建て、法事を修む、元和六年九月師病あり、將軍醫に命せしも師之を辭謝し、大光院呑龍の爲めに勘氣の赦免を請ふて許さる、十一月二日門葉を集めて訓示して寂す、壽七十五、臘六十、在住卅七年、撰する所、論議決擇集あり、（鎭流祖傳、淨土列祖傳、淨土總系譜、三緣山志）

シシヨー　慈照（一九二六 二〇〇三）〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、慈照號は高山、京師白川の人、俗姓は菅原氏、右大臣道

ジ（慈）シ

眞の後裔なり、母は源氏なり、二歲父を喪ひ、七歲母の膝下に句讀を習ふ、十二歲出塵の志あり、十四歲淨土寺觀法師を禮して得度し、天台止觀を講究し、戒檀院示觀律師を仰きて登壇受具す、其後法華等諸の大乘經、及び行業八十一事を誦念す、法燈國師(覺心)を問ふ、國師曰ふ、汝の名は如何、曰ふ本の名は心鏡と、國師曰ふ、何ぞ老僧に呈似せざると、慈照一圓相を畫して曰ふ、請ふ和尙鑑せよ、國師曰ふ、石礫碑と、かくて隨侍すること六年、印可を受く、東福寺白雲曉、萬壽寺南浦紹に歷訊し、尋て相摸の萬壽寺高峰日に謁し器重せられ、壽福寺寂菴昭、建長寺西礀曇、圓覺寺一山寧に歷訊す、紀伊の大慈寺の席を補し、尋て和泉の香山寺、京師の妙香寺、紀伊の楞嚴寺、報恩寺、長樂寺、興國寺にうつる、大雄、龜山、興禪、海藏、延福、福城等の諸刹、皆檀請により開山始祖となる、再び大慈寺に住し、三十餘年一日のごとし、將軍足利直義京師の萬壽寺に請す、僅に二月にして建仁寺に遷る、曆應三年六月朝旨によりて雨を祈り靈驗あり、住持一年にして故山に歸へる、河內守橘氏楞嚴伽山寶壽寺を開きて請す、康永二年十二月十五日同寺に於て疾に罹り、廿五日に寂す、壽七十八、臘六十四、遺偈あり、呵レ佛罵レ祖、七十八年、末後一句、臘雪連レ天、嗣法二十餘人、剃度二十餘人、東山鷲峰の靈洞、大慈龜山寶壽に塔を建つ、勅謚廣濟禪師と云ふ、(塔銘、延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

ジシヨー　慈性　二五二七……　〔天台宗〕近江滋賀院第十四代門跡なり、慈性は有栖川韶仁親王の子にして仁孝天皇の養子となる、文久二年五月七日天台座主職に補す、元治三年還補し、慶應三年十二月七日寂す、大樂王院と號す、生前准三后一品の官位に進む、(天台宗史料)

ジシヨー　慈證　ジチヨー慈澄を見よ、

ジセン　慈泉　二三〇五―二三六七　〔淨土宗西山派〕山城安養寺の僧なり、　慈泉字は洞空、俗姓は岩越氏、京都の人なり、早年にして世を厭ひ、十七歲潛に遁れて高野山に登り、得度せむとするも寺僧許さす、乃ち京都に歸へり、後、二年にして安養寺慈空の下に投して得度す、慈空に隨ひて禪林寺に遷り、經論の講究を事とす、後淨心戒觀を讀みて歎して曰く、大聖の滅後戒是れ師とす、苟も遵守せすは佛子にあらす、と、乃ち覺彥律師を禮して菩薩戒を受け、延寶の頃慈空の讓を受けて安養寺に住す、常に淨土の念佛を行するもの佛願に托して戒律を遵守せさるを嘆し、吉水傳統の圓頓戒を宣揚して澆末の弊風を救ふ、淨土護法論を作りて辨說せり、安養寺に住すること三年にして、雙岡知足庵に幽庵す、梵網經を講して發揮することろあり、一日闢邪に坐せられ南都に謫居するも、幾もなく赦され、道俗の渴仰益盛なり、寶永四年十一月十七日病沒す、壽六十三、著作梵網經科註、古迹記撮要、幷に纂釋、天台戒疏順正記、賢首戒疏撮要等、十八部あり、(續日本高僧傳)

ジセン　慈專　リヨートン良頓を見よ、

ジゼン　慈禪　一八九一―一九三六　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈禪は猪熊禪定の子、慈源法師に師事して宗要を學ひ、文永五年天台座主に任し、後、又法務に補す、建治二年八月七日寂す、壽四十六、(天台座主記、諸門跡譜、)

ジゼン　**慈禪**　ウゴン有嚴を見よ、

ジタツ　**慈達** 二〇二五 二〇九一 〔眞宗〕近江錦織寺の第六代なり、慈達は慈觀の長子にして瑞應院上人と稱す廣橋仲光の猶子にして錦織寺を主とる、永享三年五月七日寂す壽六十七、(本願寺通紀、錦織寺歷代表)

ジタン　**慈潭**　ジョークー淨空を見よ、

ジチオー　**慈智翁**　キョーゾー敎藏を見よ、

ジチユー　**慈忠** (二三〇三) 〔眞宗〕近江錦織寺の僧なり、慈忠は廣橋兼茂の猶子なり、寛永の末に慈敎の後を受く、(本願寺通紀)

ジチヨー　**慈澄** 二一四九 二二一三 〔眞宗〕近江錦織寺第十代なり、慈澄(一に慈證とあり)童名は御壽丸といひ、廣橋大納言兼秀の實子なり、錦織寺の第十代となる、天正元年二月十日寂す、壽八十五、(本願寺通紀、錦織寺歷代表)

ジテツ　**慈鐵** (二〇六九)〔……〕京師の僧なり、慈鐵は郷貫詳ならず、應永の頃、平安の五條橋流失して士民の濟涉に苦むを見て、自ら勸進して資財を募り應永十五年より工を起し、十六年に至りて工を畢はり、士民皆其惠に浴したり(元亨釋書)

ジトー　**慈等** 二四七九 …… 〔天台宗〕江戶凌雲院の學僧なり、慈等は武藏の人なり、童年出家し、持戒精嚴智行拔群なり、始め喜多院に住し、後ち東叡山凌雲院に轉住し、大僧正となる、天台宗學に精通し且つ須彌說を主張し、數〻司馬江漢と論議す、文政二年の冬疾あり、弟子に命じて磁針盤を求め、西方に向ひて趺坐合掌して寂す、實に二年十二月五日なり、著作金錍論本爾鈔三卷、阿彌陀經要解心鈔三卷、十不二門文理一卷あり並に世に傳ふ、(無用閑談、天台宗史料、近世佛家著作目錄)

ジトー　**慈棹** 二三八七 二四五七 〔臨濟宗〕江戶麟祥院の禪僧なり、慈棹字は峨山といひ、奧州の人なり、幼にして三春光顯寺の月仙に依りて剃髮す、甫めて十六歲、出てゝ遊方し、直に豐前に赴き、萬壽寺の虛靈に謁して入室參禪すること九十日間なり、少しく省するところあり、後、日向の翠巖、丹波の大道等に見えて參究し、後白隱禪師江戶の桃林寺に碧巖錄を提唱すると聞き往きて之に謁す、遂に松蔭寺に追從して日夜參究す、師時に三十餘歲なり、白隱遷化の後永田寺に歸へり、依松に菴居す、江戶の天澤山麟祥院に住して大に法化を揚げ、寬政九年正月十四日寂す、壽七十一、勅して大方妙機禪師の謚を賜ふ、(禪宗史料)

ジドー　**慈道** 二〇〇一 …… 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、慈道は禪林寺殿の子、天台座主に任すること三度に及ぶ、二品親王に叙せらる、平生和歌をよくし、玉葉集に三首、千載集に五首、續千載集に三首、風雅集に四首、新千載集に七首を載す、曆應四年四月十一日寂す、壽缺く、(天台座主記、諸門跡譜)

ジドー　**慈道**　シンクー信空を見よ、

ジニン　**慈仁** (……) 〔眞宗〕近江錦織寺の僧なり、慈仁は慈綱の弟子なり、慈綱の志を繼きて寺務の復興に盡す(本願寺通紀)

ジニン　**慈忍**　エミヨー慧猛を見よ、

ジニン　慈忍　ニチコー日孝を見よ、

ジハク　慈伯　ドージユン道順を見よ、

ジハン　慈範　二二〇六―二二四九〔眞宗〕近江錦織寺の九代なり、慈範は慈賢の長子にして、廣橋兼卿の猶子たり、弟叡尙門徒と和せすして子兼爲と共に本願寺に屬し、下市の願行寺を主とるといふ、師は錦織寺に居りて第八代となる、延德元年十一月二日寂す、壽四十四（本願寺通紀、錦織寺歷代表）

ジヘン　慈遍（一九七九）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、慈遍は京都の人、吉田の卜部兼顯の子、兼好の弟なり、弱年にして比叡山に登り、剃髮受具す、碩匠に親近して天台を學ひ、世業を以て神書に通す、後醍醐天皇召して佛法及ひ神道を問ひ、後に奈良にありて大僧正に任す、寂年、及ひ壽歆く、著作神風和記三卷あり、（本朝高僧傳）

ジホー　慈寶　一四一八―一四七九〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、慈寶は大和平郡の人、俗姓は朝戶氏なり、元興寺勝悟に師事して法相宗を學ぶ弘仁十年十一月寂す、壽六十二、（元亨釋書）

ジホン　慈本　二四五五―二五二九〔天台宗〕近江比叡山無量壽院の學僧なり、慈本字は泰初、號は羅溪、一に水月道場と云ふ、伊勢の人、寬政七年國に生る、父は眞宗の僧なり、稍長して天台宗に入り、比叡山に登り、澁谷に無量壽院を開く、退山の後松尾の明壽院に隱棲し、大佛妙法院宮、曼殊院宮の侍讀となる、明治二年比叡山金光明院に寂す、壽七十五、近江滋賀郡坂本村穴太盛安寺に葬る、著作天台霞標二十八卷、一實神道記、天台傳敎兩祖畧傳、各一卷幷に遺稿五十餘あり、（天台宗史料）

ジミヨー　慈妙　一九五一―二〇二八〔天台宗〕尾張密藏院の學僧なり、慈妙俗姓は鹿島氏、常陸神田の人、正應四年四月八日に生る、十七歲にして出家し、比叡山に登りて眞辨を師とす、明年薙髮受具し、山に居ること十年、勤學精進して顯密の蘊を究む、伊勢の太神に詣て一千日を期して大般若經を轉讀し、神授を乞ふ、其散日に靈示あり、乃ち美濃に往く、國守土岐善忠寺を建て之を延く、師大に宗義を弘め、三年の後尾張に到る、篠木の民衆密藏院を開き請して宗風を唱へしむ、師藥師佛を殿壇に安す、笈を負ひて來るもの三千、道風大に揚る應安元年八月八日寂す、壽七十八、臘六十一、（本朝高僧傳）

ジミヨー　慈猛（一九二八）〔眞言宗〕下野藥師寺の長老なり、慈猛字は良賢、留興長老と稱す、藥師寺の上座なり、奈良招提寺に遊ひて諸方の戒關を叩き、鎌倉に往きて意敎和尙に謁し、示晦を得、大に覺悟し、直に佛行を行ひて高足となり、遂に其法を受く、時に文永五年二月なり、乃ち二十五祖となる、意敎の寂後下野藥師寺にありて法輪を轉し、堀河天皇詔して留與長老の綸旨を賜ふ、寂年、及ひ壽歆く、（續傳燈廣錄）

ジヨー　慈養（二二九七）〔眞宗〕近江錦織寺の第十代なり、慈養は廣橋國光の猶子にして他家の人なり、天和元年京二條城に家康に謁し寺の緣起を告く、家康寺領二十石を寄す、寬永十四年十月廿七日寂す、壽八十九（本願寺通紀、錦織寺歷代表）

ジリン　慈麟　ゲンシ玄趾を見よ、

ジエン　自圓　……二二四九〔曹洞宗〕甲斐歡盛寺第一代なり、自圓字は大虛、肥後臼杵郡の人、肥後守菊池直高の裔孫なり

十二歲にして安樂寺の天性によりて薙髮し、二十歲にして德音寺の關水法師に從ひて具足戒を受け、東福寺の慧雲岫龍に參し、後龍華寺の桂節宗昌に謁し、其下に止まること十餘年なり、郡主某府南に歡盛寺を建て師請せられて其一世となる、延德元年十一月十日寂す、壽缺く、(日本洞上聯灯錄)

ジエン 自圓 シンオー信應を見よ、

ジキユー 自休 (……)〔臨濟宗〕福山廣德菴の僧なり、自休は古先元の派下に出つ、廣德菴に居し詩名あり、題ニ江之竹生島一曰く、開說江湖跨ニ半州一、銜ニ天一島勢如レ浮、倚レ松撫去老龍背、坐レ石收來猛虎頭、綠樹影沈魚上レ木、清波月落兎奔レ流、靈蹤高顯無ニ今古一、不斷神風濟ニ渡舟一、と(延寶傳灯錄)

ジキユー 自休 シヨーシユ正受を見よ、

ジキヨー 自敬 (二〇一六)〔臨濟宗〕美濃正法寺の禪僧なり、 自敬字は信中、別號は一心と云ふ、嫩桂榮の下に契悟す、延文の頃月心圓等と共に明に渡り、季潭、無着、等に參謁す、天寧寺了堂琦一心歌、弁に說を贈る、歸來龜谷壽福寺に住し、幾もなく美濃の正法寺に出世す、後、紀伊の興國寺に遷り、壽六十餘にして其寺に寂す、年時缺く、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

ジケン 自謙 二四一一 二五〇六 〔眞宗〕石見瑞泉寺の住持なり、自謙は石見國川下村字尾原片山甚六の子なり、安永八年同村字笹細正安寺に剃度し、爾後實成院仰誓の門に入り、宗學を研習し、年廿九歲にして瑞泉寺に住持せり、法門惑亂の際、本山の常勤となり、自家の山林田畑を賣却して其費用に充て、全力を扶宗事業に致せり、裁判の後奉行錄を著して本如宗主に獻す、本如宗主六字尊號二幅、弁に自書一幅を賜ひて其功を賞す、廣如宗主の代に及ひて短冊を賜ふこと兩回、文政八年五月廿八日勸學職を命せられ、文化十年安居學林に代講し、弘化三年三月四日寂す、壽九十六、曾々江戶幕府言を本山に致して曰く、現今眞宗僧侶の品行端正學識醇粹にして名實相稱ふもの唯越後の僧朗、石見の自謙、兩人のみ、宜しく厚く遇する所あるべし、と、是を以て其訃至るや、特旨を以て善友院と諡す、著作高裁奉行錄一卷、後出彌陀偈經錄二卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ジコーイン 自厚院 ニチカン日鑑を見よ、

ジザイアン 自在菴 ホーゴン方嚴を見よ、

ジサン 自山 トクゴ得吾を見よ、

ジサン 自山 リンヒ臨罷を見よ、

ジシユン 自春 リヨーテー亮貞を見よ、

ジシヨー 自性 二〇七三 (……)〔曹洞宗〕奧州慈眼寺の開山なり、自性字は天眞、奧州の人、俗姓は藤原氏なり、壯にして龍泉寺通幻寂靈に師事し、四十二歲にして初めて典座となる、後奧州に皈へり、宅良に寺を建てんとし地を堀りて觀世音の金像を得たり、依りて普門山慈眼寺と稱す、應永二十年正月十三日寂す、壽缺く、法嗣英仲法俊、快翁玄俊の二人あり、(日本洞上聯灯錄)

ジシヨー 自性 ドーゲン道玄を見よ、

ジシヨーシ 自笑子 シユーイ宗謂を見よ、

ジシヨーシヨーニン 自性上人 ガジツ我實を見よ、

ジシヨーボー 自證房 カクイン覺印を見よ、

ジチヨー 自超（二一六〇）〔曹洞宗〕上野永源寺の第二代なり、自超字は賢室、上野の人なり、出家の後、諸老に徧參し、雙林寺一州正伊に參し、服勤三年、衣法を受く、去りて上野の三嶽に菴居し、菴後に寺となり、永源寺と稱す、一州を開山とし師は其二代に居る、明應九年最乘寺に遷り、居ること二年、再び永源寺に歸へり、某年寂す、法嗣嫩恕全芳一人あり、（日本洞上聯灯錄）

ジテツ 自哲 二四七二／二五三七〔臨濟宗〕筑前博多聖福寺の禪僧なり、自哲字は愚谿俗姓は大谷氏、出雲の人、六歲にして出家し、觀音寺大林に師事し、後、蘇山に師事して其法を嗣く、安政二年博多の聖福寺に住し、明治六年護聖院に退隱し、十年八月八日寂す、壽六十六、

ジトク 自德 二一六八……〔曹洞宗〕甲斐長生寺の禪僧なり、自德字は積桂、武藏大里郡の人、俗姓は小林氏なり、十三歲金峰寺淨智に投して出家受具し、甲斐長生寺の鷹嶽宗俊に謁して記室となり、分座說法す、鷹嶽寺に遷るに及び、師命せられて長生寺に主となる、永正五年十一月十七日寂す、壽缺く、（日本洞上聯灯錄）

ジトク 自得（一三四七）〔……〕陸奧の僧なり、自得陸奧の蝦夷の人なり、持統天皇の初、道信と共に出家す、三年七月勅して金銅藥師佛像、觀世音菩薩像各一軀、鍾娑羅寶幡草の物を賜ふ、事蹟の詳かなるは知るべからず、（日本書紀、本朝高僧傳）

ジネン 自然 リョーヤ了也を見よ、

ジネンサイ 自然齋 シユーキ宗祇を見よ、

ジモクシ 自牧子 ドーキ道機を見よ、

ジクワン 示觀 ギョーチン凝然を見よ、

ジドー 示導 二〇〇七……〔淨土宗西山派〕山城三鈷寺の僧なり、示導號は康空、初め比叡山に登り、天台宗忠圓の徒となり、後、淨土宗に入り、性空玄觀に師事して西山派の學を究め三鈷寺に住し、後醍醐天皇の戒師となる、貞和三年九月十一日寂す、壽欠く、敕諡廣慧と賜ふ、（淨土總系譜）

ジトン 示敦 二一八七……〔臨濟宗〕京都榮福寺の僧なり、示敦字は儀雲と云ふ、東昇杲に參して法を嗣き、初め伊勢安國寺に住し、後、東福寺に遷る、大永七年四月五日寂す、壽缺く、龍眠菴に塔す（延寶傳灯錄）

ジア 持阿 リョーシン良心を見よ、

ジキヨーシヨーニン 持經上人 ジヨーヨ定譽を見よ、

ジグワン 持願 チヨークー長空を見よ、

ジホー 持法 ゲンコー源光を見よ、

ジゲー 時藝 二〇一〇／二〇五三〔眞宗〕山城本願寺第五代なり、時藝號を綽如と稱す、觀應元年三月十五日生る、俊玄上人の子童名光德麿と云ふ、權大納言時光の猶子なり、得度して權大僧都に任し、明德元年宗務を繼き、幾ならすして職を法嗣玄康に付し、去りて越中杉谷に隱る、會々異邦書を朝廷に献し、文辭難澁讀むこと能はす、朝廷諸寺に詔して讀む者を募る、師勅に應して之を讀む、後小松天皇其博識を稱し、周圓上人の號を賜ひ、且つ勅して宮中に於て大無量壽經を講せしめ、聖德太子の肖像、及ひ巨勢金岡の畵きたる太子の傳繪八軸を賜ふ、因りて寺を越中井波に剏し、勅賜瑞泉寺と稱す、同四年

四月二十四日寂す、壽四十四、(門跡傳、大谷略譜、本山寺誌)

ジシユーサイ 時習齋 ゲンシヨー玄昌を見よ、

ジブキヨー 治部卿 (二三二五)〔…………〕 七條佛所佛工なり、治部卿は康珍の妹の子にして、康琳の猶子なり、弘治の頃の人なるへし、甲斐八代郡青島弓削神社に藏する獅子頭は其銘により師の作たるへし、(大佛師系圖)

ジブキヨー 治部卿 ニチサ日佐を見よ、

ジコー 字岡 ソモン祖文を見よ、

ジドー 字堂 カクマン覺卍を見よ、

ジウン 似雲 二三三三 二四一三 〔眞宗〕播摩須磨源光寺の僧なり、似雲初の名は如雲、春雨亭と號し、一に風月菴と號す、安藝廣島の人なり、資性和歌を好み、京都に入りて藤原實陰に就て學ぶ、實蔭古今を傳授するに及び、師を召して傳授の箱を托す、三年を經て辭し去り、名山奇勝を遍歴し、更に住所を定めず、時人呼びて今西行と云ふ、師聞いて「西行に姿ばかりは似たれともこゝろは雲と墨染の袖」と戯る、西行の墳墓詳かならさるを歎じ、百方これを探りて石山の觀世音の靈告により河内弘川寺に西行の墳を求め、其地に碑を建て、一草堂を造り、別に自ら菴を山陰に結びて居り、號して春雨亭と云ひ、詠して曰く「なみならぬ昔の人のあととめて弘川寺にすみ染の袖」と、享保十六年六月仙臺侯伊達吉村の招きに應して其地に赴き、幾何ならずして辭して皈り、靈元上皇の徵により、出て仕ふ、上皇師の頭寒を厭ふを聞き、詔して帽を賜ふ、晩年嵯峨天龍寺の境内大堰川の邊に一草菴を構へ、名を似雲と改む、寶暦三年七月八日和泉鱒尾の北村某の宅にて寂す、壽八十一、遺囑により遺骸を弘川寺に送り、西行の墳と並べて葬り、塚を築く、著作葛城百首、詞林拾葉、西行舊跡記各一卷、似雲類題一卷幷續二卷、十百首窓の曙、磯の波、奥州紀行、各二卷年並艸寫本二十卷等あり、(近世畸人傳、野史、別行傳、近代各家著述目錄)

ジグワン 只丸 ジクグワン竺丸を見よ、

ジジヨー 侍定 ゼンホー禪峰を見よ、

シキブキヨ 式部卿 コーウン康運を見よ、

シキジヨー 色定 リヨーユー良祐を見よ、

シキロ 識廬 エーキン永瑾を見よ、

ジキア 直阿 ゲンテツ源哲を見よ、

ジキアン 直菴 シユークワン宗觀を見よ、

ジキイ 直醫 リヨービン良敏を見よ、

ジキオー 直翁 シユーレン宗廉を見よ、

ジキオー 直翁 チカン智侃を見よ、

ジキオー 直翁 リヨーチユー良忠を見よ、

ジギオー 直翁 エーシヨー裔正を見よ、

ジキクー 直空 ズイシン隨心を見よ、

ジキシ 直至 ガンシユク巖宿を見よ、

ジキシ 直至 クワイザン快山を見よ、

ジキシ 直至 ゲンテー源底を見よ、

ジキシ 直至 シユードー秀道を見よ、

ジキシ 直至 ズイオー隨應を見よ、

ジキシ 直至 リヨーサン了山を見よ、

ジキシ 直指 シユーガク宗諤を見よ、

ジキシン　直心　センオー詮雄を見よ、

ジキシン　直心　モンエツ開悦を見よ、

ジキチヨー　直釣　ゲンモン玄門を見よ、

ジキデン　直傳　ゲンケン玄賢を見よ、

ジキデン　直傳　シヨーソ正祖を見よ、

ジキニ　直爾　キオク貴屋を見よ、

ジキニユーイン　直入院　ケンエー憲榮を見よ、

ジキミヨー　直明　エカイ慧海を見よ、

ジキヨー　直鷹　シヨートン正暾を見よ、

ジクアン　竺菴　シユーセン宗仙を見よ、

ジクアン　竺菴　ジヨーイン淨印を見よ、

ジクウン　笠雲　シヨーザン清山を見よ、

ジクウン　竺雲　トーレン等連を見よ、

ジクウン　竺雲　ボンセン梵仙を見よ、

ジクオー　竺翁　チユーセン仲仙を見よ、

ジクカン　竺巖　バイセン梅仙を見よ、

ジクゲン　竺源　一九二四－二〇〇六〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、

竺源字は東海、俗姓藤原氏、紀伊の人なり、法燈國師覺心の下に得度受戒し、後、東福寺無關門、南禪寺規菴圓に歷事す、龜山上皇寺寮に幸して法要を問ひたまふ、東下して圓覺寺西礀曇に謁し、其下に典藏となる、建仁寺建長寺に入りて約翁儉に隨ふ、建武の末、光嚴上皇勅して紀伊の誓度寺に往持せしめたまふ、尋て紀伊の興國寺、筑前の聖福寺、京師の萬壽寺、建仁寺に遷り、法燈國師の禪風を揚ぐ、晩年洛西の妙光庵に隱棲し、康永三年十月十六日寂す、壽七十五、臘六十二、東山に寂光塔を建て靈骨を收む、勅諡法光安威禪師と云ふ、（行實延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ジクゲン　竺源　チヨーサイ超西を見よ、

ジクサイ　竺西　トーボン等梵を見よ、

ジクサン　竺山　トクセン得仙を見よ、

ジクシン　竺信　二二九三－二三六七〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、

竺信字は梅峯、攝津大阪の人なり、俗姓は舟橋氏、八歲にして鄉塾に就て書を讀む、僅に旬日にして四書十卷を朗誦す、時人其穎敏に歎す、十一歲にして播摩國安養寺長屋養に投して出家す、受具の後奈良に適きて經論を硏究す、旣にして宇治興聖寺に至り、萬安に參見す、次て關東の叢林を徧歷す、後に山崎に懶禪を問ひ、其指示により、興聖寺龍蟠に見ゆ、蟠一見之を器とす、師朝參暮請、罄其機要を知る、問答數回、師便ち禮拜し、遂に衣偈を承く、嘗て播摩國護生寺に入り第一坐に居す、次に加賀を歷遊して播摩國に歸り、長屋養に省覲す、長屋師の至るを喜んで院事を領せしむ、寬文六年總持寺に出世す、但馬の養源寺に遷て緇素を風化す、名聲四邊に聞ゆ、豐岡の城主京極氏、幷に無生居士、深く師の德を欽て外護と爲る、元祿九年の秋信濃國の大守、永井氏懇請して興聖寺に住せしむ、貞享元年の春事を謝して墨江の臨南寺に隱る、四年の秋水戶中納言光圀遙に師の德風を聞て請て耕山に館す、三年病を以て謝して舊棲に歸る、十三年竊に鷹峰の卍山禪師と議して幕府に訴て宗弊を救はんと欲す、自ら洞門劇談を撰す、已にして江戶に到りて青龍寺に寓す、且つ宗門の利害を陳て自ら訴へて忠憤已まず、瑠璃光寺の田翁長

老穀力して之を助くるに會し、是に於て十六年春寺社奉行飛驒守阿部氏、本多氏、永井氏其誠意を察して其訴を容る、即ち永平總持等の住持數十員を召して各々處分を聽く、秋八月特に條令を下し永く一宗の惡弊を禁す、九月南歸して大和の白雲山興禪寺に入り、林丘客話を著して一宗の惡弊を革めて惑を解くの意を述ぶ、寶永四年十一月十九日寂す、享年七十五歲、臘六十五、(日本洞上聯灯錄)

ジクシン　竺心　キョーセン慶仙を見よ、

ジクセン　竺仙　ボンセン梵僊を見よ、

ジクドー　竺堂　エンク圓瞿を見よ、

ジクドー　竺堂　リョーゲン了源を見よ、

ジクホー　竺芳　シユーセン宗仙を見よ、

ジクホー　竺芳　ソエー祖裔を見よ、

ジクグワン　竺丸　……一三七二〔眞宗〕大坂欣淨寺の僧なり、竺丸本名は只丸、弄松閣と號し、鴨水子と稱す、眞宗高田派なる京都本誓寺中福昌菴に住し、後、浪花谷町欣淨寺に移る。俳諧を好み、椎木才麿に師事して出藍の譽あり、正德二年十一月二日寂す、壽七十餘(俳諧大系圖)

シツトードーニン　漆桶道人　シユーク集九を見よ、

ジツアン　實菴　ユーサン融參を見よ、

ジツイ　實伊　一八八三—一九四一〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、實伊俗姓は藤原氏、正二位伊平の子なり、實眞に就て薙髮受戒し、顯密を學び、祐曉寂基に事へて天台法相を傳ふ、師、和歌を善くす、建長六年圓淨を拜して秘密灌頂を受け、弘安二年敕して大僧正に任せられ、弘安四年八月二十六日寂す、壽五十九、(三井續灯記、)

ジツイン　實因　(一六五九)〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、　實因俗姓は橘氏、相模刺史敏貞の子、敏達天皇二十二世の孫なり、比叡山の弘延を禮して剃髮受戒し、天台教を學び、且つ密法に通ず、長保中法性寺の座主たらんことを望み、朝議許さず、これより怏怏として樂まず、小松寺に屛居し、法華經を誦す、寂年及壽缺く(本朝高僧傳)

ジツイン　實因　二四八〇—二五四九〔新義眞言宗〕山城智積院第四十二代なり、　實因字は法泉、號は成果と云ふ、尾張名古屋の人俗姓は北畠氏、後に松平氏を冒す、十歲にして州の福生院實珉和尚に就て剃髮し、天保五年智積院に登り、隆榮能化に師事す、後請せられて福生院に住し、安政六年竪義を勤む、萬延元年長久寺に移り、元治三年灌頂を修す、明治七年少講義を拜し、累遷して中敎正となる、同十二年撰まれて智積院能化に晉む、十九年僧正に轉し、長者に登り、大傳法院の座主を兼ぬ、主職にある十一年、明治二十一年辭して尾張に歸り、二十二年十一月二十日寂す、壽七十、臘六十、(新義眞言宗史料)

ジツウン　實運　一七六七—一八二〇〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり、實運は源俊房の子、弱冠にして醍醐寺座主勝覺に從ひて眞言敎を學び、勸修寺寬信の灌頂を受けて諸密軌を傳へ、兼ねて三論を受く、勸修寺に住して僧都に任し、盛に瑜伽を唱ふ、永曆元年二月二十日寂す、壽五十四、著作摩尼鈔、保元記、阿彌陀念誦次第、各一卷、瑜祇經祕決二卷、兩界鈔、兩界略釋、台藏略次第、五方鈴佛具等圖、緡雙紙、羅誐鈔、別記各一帖、

玄祕鈔四帖、金寶鈔十帖、諸尊要鈔十五帖、求聞持口決、本六戈各若干卷あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジツエ　實慧 一四四六 一五〇七　〔眞言宗〕京師東寺第二代なり、實慧俗姓は佐伯宿禰、讃岐多度郡の人なり、延暦五年に生る、幼年書博士佐伯直、葛野酒麻呂等に儒學を學び、稍長して奈良大安寺泰基に依りて出家し、唯識を學び、大に器許せられ、延暦二十三年受戒す、（遺告頭書に大同二年とせり）空海大同の初年歸朝し、眞言を弘むるに方り、師往きて之に從ひ、弘仁元年廿五歳にして兩部灌頂の職位を受く、世師を稱して日本第二の阿闍梨、最初入壇の弟子とす、既にして大法の深旨を得、盡く壇儀印契經軌秘訣を受け、三年十二月空海高雄山寺に三綱を置き、師を擢てゝ摩々帝に任す、四年四月廿七日天台の最澄に師兄の禮を執る、空海高野山を開く時、先つ師及ひ泰範をして地を相せしめ、菴を結ふに方り、專ら師をして土木を司らしめたりと云ふ、十四年空海敕により東寺に遷るに及ひ、師之に隨從す、天長元年九月慧雲東大寺より來りて師に投す、二年三月十一日東寺の道場にて空海より兩部の秘訣を受く、四年河内錦部郡故の雲心寺廢趾に寺を剏し、觀心寺と號し、密教を布く、（長者補任の一說に承和四年とあり）九年十一月空海の退くに際し、命により東寺の二代となる、承和の初め敕を奉して神護寺に祕法を修し、弘仁淳和二上皇に寵遇せられ、本院の別當に補せらる、二年三月十五日空海の遺命によりて其後事を監す、三年五月十日權律師に任し、東寺の長者に補す、一說に之より先本寺の別當を兼ぬと云ふ、其月敕命あり、毎年三長齋の月に東大寺の灌頂院に於て三七の供僧を選ひ、息災增益の法を修し、國家を鎭護するを以て永式となさしめ、師と圓明とをして之を幹とらしむ、四年正月上奏して圓行を入唐せしめ、書信法服等を付して唐の故和尚惠果阿闍梨の墓に奠し、遙に孫弟子の禮を執る、※四日上奏して東寺の定額五十僧を減して二十四口とし、僧綱牒に補任僧の名位を載せて別當三綱に下す、是れ空海の遺志を繼くなり、又七月奏請して金剛峯寺を修繕す、此月正律師に轉し、五年正月三日請に應して延暦寺四王院の供養會に赴き、咒願師となる、九月上表して東寺の俗別當を延暦寺の例に傚ひて眞言の雜事を撿校せしむ、帝不豫の際、師巨多の寶像を彫み、一切經幷に諸儀軌を寫す、七年九月二十八日少僧都に任す、八年二月七日上表し金剛峯寺を定額の諸寺に準し、燈分を施されんとを請ひて聽さる、師是より先空海の遺志を繼き、東寺に灌頂院を建て、十年十一月上表して國家の爲め東寺に於て眞言一宗の傳法職位を定め、並に結緣等の灌頂を修せんと

實慧贈僧正

ジツ（實）エ

請ひ、十六日官符を下して之を許す、同廿七日奏して自ら大阿闍梨と稱し、法師眞紹をして其職位を受けしめんと請ひて許され、十二月十三日灌頂院を開き、傳法の職位を眞紹に授く、是れ本邦眞言宗具支灌頂の始なり、晩年事を辭して河内に歸休し、檜尾の側に法禪寺を立て、(弟子傳には承和十二年法禪寺を建立すとあり)承和十四年十一月十三日寂す、壽六十二、臘四十四、大坂嵯峨陵の側に五輪の小塔あり、即ち師の墓なり、一說に御廟橋南二三丈許にありと云へとも分骨の地たるのみ、後安永三年八月十三日諡號を賜ひて道興大師と云ふ、著作金剛界次第、護摩略鈔、阿字觀用心口訣各一卷、五秘密次第、戒序胎藏海次第、灌頂儀軌、緣起實錄帳あり、(弘法大師弟子譜、弘法大師弟子傳、諸宗章疏錄)

ジツエン 實圓 …九四 一九六六 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、實圓俗姓は藤原氏、羽林公隆の子、文永二年三月仙朝を禮して入壇し、正應七年權僧正に任す、德治元年四月十一日寂す、壽七十三、(三井續灯記)

ジツエン 實衍 一八七七 一九五〇 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、實衍は建保五年に生れ、寬元二年出家して祐曉現舜二師に從ひ天台倶舍を聽く、弘長七年本寺大學頭となり、正應三年十一月廿三日寂す、壽七十四、(三井續灯記)

ジツオー 實翁 ソーシユー聰秀を見よ、

ジツカイ 實海 二一〇六 二一九三 〔天台宗〕武藏喜多院の學僧なり、實海武藏埼玉縣川崎(或は品川の人)の人なり、夙に叡寺に入りて剃髮受業す、稍長して論場に涉り、星野山喜多院に住す、天文二年示寂す、壽八十八、著作爽希集、鐵塵各十卷、鹽味集二卷、敎觀大綱見聞鈔三卷あり、(本朝高僧傳)

ジツカイ 實海 ……一九七九 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、實海は藤原公の子なり、勝寶院道耀僧正に師事して傳法密灌を受け、五智院に住す、應長元年僧正に任し、正和二年東寺の長者に加はり、四年春寺務を司とる、翌年大僧正に昇り、護持僧に擧けられ、元應元年五月七日寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

ジツカイ 實戒 リヨーア亮阿を見よ、

ジツガン 實巖 ……二四六二 〔曹洞宗〕信濃長國寺の十七代なり、實巖字は千丈、近江の人なり、出家して内外の學に通し、詩文を善くす、信濃松代の長國寺に住し、後華嚴寺を開き、退隱の所となし、享和二年三月廿二日寂す、著作幽谷餘韻三十卷刊行し、千丈錄五十卷寫傳す、

ジツキヨーアジヤリ 實敎阿闍梨 ニチイン日院を見よ、

ジツクー 實空 エンリ圓理を見よ、

ジツグー 實空 テイジユン貞準を見よ、

ジツクワン 實貫 ……二三八〇 〔新義眞言宗〕江戶眞福寺第十二代なり、實貫字は泰音號は梅國越前丸岡の人なり、寶積院快心に隨ひて剃染受戒し、四度行業を修練し、智積院に掛錫す、奧州守藤原公師を龍鳳精舍に請し、待遇優渥なり、詩書を討論し、古今を商確し、往來して虛日なく、侯和歌を善くし後素に巧なり、師亦畫を善くす針芥相投す、未た太平御覽を得ず、太守有司に命して長崎に使はし、淸本の御覽三通を得、一本を師に賜ふ、享保三年十二月二十六日寺社監土井伊豫守師を召し、四年正月十九日眞福寺に住せしむ、享保四年七月

二十八日寺社監戸田山城守封戸の朱印を賜ひ、五年四月六日寂す、著作寶鑰纂解鈔八卷、同序注一卷、付法傳纂解鈔六卷、性靈集便蒙鈔十六卷、全文考壹卷、全序一卷、全考語五卷、三敎指歸鈔九卷、櫻陰腐談二卷、光明眞言照闇鈔纂靈鈔、并拾遺十九卷、延命地藏經冠註二卷あり、（新義眞言宗史料、新義眞言宗史）

ジツケー　實繼　一八一四／一八六四〔眞言宗〕山城醍醐山二十四代の座主なり、實繼本は實信といひ、一條尙書公保の子なり、初め小野の行海雅寶に從ひて、傳法職位を受け、後、醍醐山に入りて勝賢の許可灌頂を得、元曆二年八月法眼に叙す、建久四年十二月宣して座主となり、五年四月三日三寶院に移住し、屢々命を受けて秘法を修し、八年五月少僧都に任じ、建仁三年病に罹り、座主を成賢に讓り元久元年正月二十一日寂す、壽五十一、（續傳燈廣錄）

ジツケン　實賢　一八三六／一九〇九〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、實賢俗姓は藤原氏、基輔の子なり、理智院の隆澄、法性寺の勝眞等に就て諸經論を學び、醍醐寺の賢海勝賢二師に從ひて兩部の密灌を承け、成寶僧正に重受す、四十歲を過ぎて金剛王院に住し、醍醐寺の座主に任す、嘉祿二年權大僧都に任じ、尋て法印に叙す、嘉禎三年春勅により北壇降三世を修して法驗を得、大僧都に昇る、此歲夏東寺の長者職に任し、翌年秋權僧正に進む、延應の初め諸職を辭し、仁治元年十月詔により僧官長者に還任す、寬元二年師雨を祈り、僧正に轉し、護持僧となる、建長元年九月四日寂す、壽七十四、著作小次第、務鈔、增益護摩次第、各若干卷あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジツケン　實賢　二〇一六……〔日蓮宗〕山城眞經寺第二代なり、實賢は初め眞言宗の僧にして鷄冠井眞經寺を領す、延慶三年の春日像弘宗の時極樂寺の良桂と同しく宗を改め日像の弟子となる、日像寺號を改めて眞經寺と云ふ、後、南北西眞經寺といふ三子又龍華第十代日堯、勝中山興隆寺を造り、佛乘房日運池上祖堂の影を模す、承應中通門院日祥北眞經寺を談林となす、觀樹院日空本敎寺と玄義講場となす、延文元年丙申二月二十九日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ジツケン　實賢　リョーチ了知を見よ、

ジツケン　實顯　一九九九／二〇五〇〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、實顯俗姓は藤原氏、毗沙門堂僧正といふ、實尊還俗の時の子、三條内大臣公茂の孫なり、覺譽、淸顯、經深の三師に習學し、嘗て法華顯昧抄を製す、明德元年六月二十一日寂す、壽五十二、（三井續灯記）

ジツケン　實健　コーリュー高隆を見よ、

ジツゲン　實眼（……）〔日蓮宗〕山城妙泉寺の開山なり、實眼初め台宗の僧にして、山城松崎山觀喜寺に主たり、靈夢に感して日像の敎を受け、松崎の村民四百七十餘人を牽いて其許に皈す、觀喜寺を改めて妙泉寺と云ひ、讀經唱題を事とす、某年七月十六日寂す、壽欠く、（本化別頭佛祖統紀）

ジツゲン　實玄（……）〔法相宗〕奈良興福寺の別當なり、實玄は近衞關白經忠の息、其師承詳かならず、興福寺の別當となり、一乘院に住し、權少僧都に任ぜらる、父經忠

吉野に奉仕するを以て毎に祇候し、大に南帝の寵遇を被る、寂年及び壽缺く、(興福寺別當次第)

ジツゴ　實悟　ケンリョー兼了を見よ、

ジツゴボー　實悟房　クワンシン觀心を見よ、

ジツコー　實弘(一九八二)〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　實弘は其生國俗姓詳かならず、南山東寺に徧遊して密教を研尋し、文保元年東寺の長者に任し、元亨初年の冬寺務を司とり、翌年法務を兼ねて大僧正に任ず。寂年及壽欠く、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

ジツゴン　實嚴(……)〔眞言宗〕山城小栗栖法琳寺の別當なり、　實嚴字は筑前律師といひ、宗意の法を嗣ぎ、毘盧の心印を佩く、安祥寺を董し、詔して小栗栖の別當となる、付法の弟子賴眞一人あり、(後傳燈廣錄)

ジツゴンイン　實嚴院　エケー慧景を見よ、

ジツサイ　實濟　一九八九／二〇六三〔眞言宗〕京都泉涌寺安樂光院の長老なり、　實濟は西南院の僧正といふ、常に泉涌寺安樂光院に在りて律學を善くし、禪淨を兼ねて密印を佩ふ、賢俊大僧正の灌頂を受け、應永十年八月廿四日寂す、壽七十五、(續傳燈廣錄)

ジツサン　實算(一九一二)〔法相宗〕大和修行院の學僧なり、　實算は其俗姓生國詳かならず、建長四年維摩會の講師となる、寂年、及壽欠く、(本朝高僧傳)

ジツサン　實算　二〇一三……〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、　實算字は實順、俗姓生國詳かならず、實相院に住し學寮あり、學頭に昇る、文和元年八月廿三日寂す、(結網集)

ジツシン　實深　一八六六／一九三七〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、　實深俗姓は源氏、大納言顯國の子なり、成賢僧正に就て灌頂を稟け、憲深座主にこれを重受し、悉く玄奥に達す、嘉禎三年權大僧都に任し、正元二年權僧正に進む、弘長元年春東寺の長者に加任し、文永元年十月長者幷に僧綱を辭し、奏して住房蓮華院に阿闍梨二人を置く、建治三年九月六日寂す、壽七十二、著作傳法灌頂三摩耶戒口決一卷、祖師德行記あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ジツシン　實信　ジツケイ實繼を見よ、

ジツシン　實信　レンショー蓮生を見よ、

ジツジョ　實助(一九六三)〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　實助は正中二年九月東寺の長者に任し、嘉元元年權僧正に任じ同廿三日法務に補す、其寂年幷に壽缺く、(東寺長者補任)

ジツショー　實掌　二四九五……〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十三代なり、　實掌字は深識、俗姓大山氏武藏葛西の人なり、十一歲其國福密寺實賢を仰いで度を受け、十四歲豐山に登り、解行を事とし、文化元年北野寺に住し、同九年十月權僧正となり、文政十一年十月幕府の命により小池坊に轉任す、六年退老し、天保六年十一月三日寂す、(新義派史料)

ジツショー　實芿　一九六三……〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　實芿は前大納言公持の子、實寶法師に學を受け、正安元年東寺の長者に任す、同二年權法務に補し、嘉元元年權僧正に任す、寂年缺く、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

ジツショー　實勝　一九〇一／一九五一〔眞言宗〕京都醍醐山覺洞院の

學僧なり、實勝は關白藤原公經の子なり、幼にして禪林に入り、書典を學ぶ久しく覺洞院の親快僧正に侍して兩部の秘を受け、其家傳を盡くす、覺洞院に住して熾に瑜伽を唱ふ、正應四年三月十三日寂す、壽五十一、(本朝高僧傳)

ジツジョー 實定(二三一七)〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、實定は滋野井正二位中納言季吉の子なり、寛永十七年法眼に叙し、仝二十一年少僧都に任し、慶安四年大僧都に昇る、明暦三年法印に叙す、寂年、及壽缺く、(仁和寺諸院家記)

ジツジョー 實乘　シンショー眞照を見よ、

ジツジョー 實乘　ケゴン希勤を見よ、

ジツジョー 實淨　レンジョー蓮淨を見よ、

ジツジョー 實成　ニチオー日雄を見よ、

ジツジョーイン 實成院　ゴーセー仰誓を見よ、

ジツジユン 實順(二四一二)〔眞宗〕武藏某寺の僧なり、實順一名は覺瑞、字は覺道一の字は珍成號は雪巖、別號茲堂、玩世道人と云ふ、武藏足立の人、詩を以て聞ゆ、著作唐詩譯說十二卷、唐詩笑一卷、勢陽風雅二卷、詩海錦帆八卷、唐詩結綱四卷、大東名勝詩集二卷、淨土百詠一卷、同二編一卷、詩門一覽、閑居放言、熟字千字文あり、(近代名家著述目錄)
〔考〕覺瑞は寶曆年間の人なり、

ジツセン 實宣(一九六七)〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、實宣は衍宣の門に入りて學習し、德治二年初めて報恩講に入る、既に講學の名ありて德泉惠泉の二師に對抗す、(三井續灯記)

ジツゼン 實全 一八〇一 一八八一〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、實全は右大臣公能の子、母は民部大輔忠成の女なり、出家して円實惠淵の二師に就て天台宗の教義を學び、建仁二年天台座主に任ず、承久三年五月十日寂す、壽八十一、(天台座主記)

ジツゼン 實禪 二四八六 二五五九〔臨濟宗〕土佐陽貴山の禪僧なり、實禪字は新羅、美濃の人なり、暘谷和尚を仰いで度を受け、正圓菴雪航に師事して印可を拜し、遠江萬勝寺に住し、大に宗風を擧く、幾もなく京都相國寺に掛錫し、獨園禪師に侍す、明治十二年土佐の諸居士の請に應し、其國陽貴山退畊菴に住し、四來の參徒に接す、三十二年二月十五日寂す、壽七十四、遺偈に曰ふ、七十年來、賣弄佛祖、末後一句、虛空舌吐、(土陽新聞)

ジツソー 實相　エンショー圓照を見よ、

ジツソン 實尊 一八九六 ……〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、實尊俗姓は藤原氏、基房の子なり、出家して信圓大僧正に師事して法相を究む、正治元年維摩會の講師となる、嘉祿二年興福寺主務に補し、長谷寺を領し、高峯山の檢校となる、僧階歴昇して大僧正に任す、後、諸職を解き、禪定院に屏居し、嘉禎二年二月十九日寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

ジツチン 實僘(……)〔眞言宗〕山城醍醐山金剛王院の七代なり、實僘は關白相國光明峰の子なり、傳法を勝尊に受くと雖も、未た秘密具支灌頂を得す、故に後雅西の法を嗣く、不幸短命にして夭折す、(續傳燈廣錄)

ジツチユー 實忠(一四七〇)〔華嚴宗〕奈良東大寺の僧なり、實忠俗姓生國詳ならす、良辨僧正に法門を習ひ、攝津

難波津に大悲の像を得、朝廷に請うて、羂索院を搬して安置す、師乃ち毎年二月像に對し、兜率宮軌を修すること二七日、天平勝寶四年より大同四年に至りて五十八年間、未た嘗て之を缺かす、宮中に召されて供齋す、師東大寺に在りて大佛殿を補修すること數ヶ所、弘仁中寂す、壽缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ジツテー　實底　チヨーシン超眞を見よ、

ジツテン　實典(……)〔日蓮宗〕山城靈光寺の開山なり、實典は初め眞言宗の僧都にして、法身莊嚴院に主たりしが、日像弘宗の時極樂寺良桂と共に宗を改め日蓮宗となり、深草山靈光寺と云ふ、寂年月欠く、(本化別頭佛祖統紀)

ジツデン　實傳　二〇四八……〔淨土宗西山派〕山城三鈷寺の學僧なり、實傳號は仁空、康空示導に師事して淨土宗西山派の學を究め、三鈷寺に住して門業を張る、嘉慶二年十一月十一日寂す、著作諦空上人傳六卷あり、敕謚圓應と賜ふ、(淨土總系譜)

ジツデン　實傳　シユーシン宗眞を見よ、

ジツドー　實道　二四六六／二五五〇〔淨土宗〕京都高樹院の僧なり、實道は法蓮社忍譽眞阿と云ひ、始め唯心菴と稱し、後梅花園蓮茵と號す、世に蓮茵を以て聞ゆ、伊勢桑名郡平賀村拜鄉新田の人、拜鄉東吾の二男なり、文化五年五月十八日に生る、父は醫を業とす、師幼名竹次郎と云ふ、十三歲山城宇治郡彌陀二郎村西方寺宗英蓮乘を訪ひ、其寺に於て平等院一道を請して度を受け、實道慧眞と號す、天性和歌を嗜み、時に臨み、物に觸れて秀作あり、十七歲山城北野花開院聖圓律師を仰いで大乘戒律並に天台の章疏を學び、傍ら嵯峨正定院隆道上人の下に通ひ、淨土口稱の一行の故實を受く、文政九年十一月東下し、江戶深川靈岩寺桂譽上人より宗脈並に圓頓大戒を受く、翌十年二十歲にして山城獅子谷法然院愷譽上人の下に投し、淨土の一行を勵み、天保三年廿五歲にして二條川東敎安寺に住し、益和歌を嗜み、秀作人を驚かし、其名朝野に聞ゆ、天保十年三十二年三條下る高樹院に轉す、明治七年退隱す、十三年華族會館京都支局の歌道敎師となり、テニヲハを講す、明治二十三年十二月疾に罹り、十二月十四日寂す、壽八十五著作菴の石文二卷あり、(拜鄉喜造氏返信)

ジツドー　實憧　キヨーゲン敬彥を見よ、

ジツニン　實任(　)〔眞言宗〕京都仁和寺の僧正なり、實任は大炊御門右大臣公能の子なり、覺性に依り出家して、傳法院流廣澤流の灌頂を受く、師の法を受くる弟子四人あり、信遍、元長、隆亶、實俊是なり、(傳燈廣錄)

ジツニン　實任(……)〔眞言宗〕山城勸修寺大法坊の阿闍梨なり、實任字は大法といふ、良勝の潟瓶を得て聲價時に高し、付法八人あり、即ち能覺、與然、尊實、寬杲、仁禪、睿信、長宗、朗澄なり、(後傳燈廣錄)

ジツニヨ　實如　コーケン光兼を見よ、

ジツハン　實範(一七八一)〔戒律宗〕大和中川寺の律僧なり、實範字は本願、一に蓮光少將上人と云ふ、京師の人藤原顯實の第四子なり、興福寺に投して法相を習學し、醍醐山に登りて嚴覺大僧都に密法を受く、橫川に往き明賢法師に就きて天台を學ひ、慧解縱達して忍辱山に居る、一日花を採りて中川

に到り、其勝形を愛して官に請ひ寺を建つ、號して成身院といふ、師受戒の師なきを嘆き、春日神社に祈り、靈夢により招提寺に到る、然るに同寺は既に荒廢す、會々一老僧に逢ひ之に從ひて影堂に入りて四部戒本を聞く、師歸へりて初めて開講說戒す、後移りて光明山に居り、某年寂す、著作大經要義七卷、戒壇式一卷あり、（元亨釋書、本朝高僧傳、後傳灯廣錄）

ジツビン　實敏 一四四五―一五一三〔三論宗〕大和西大寺の學僧なり、實敏俗姓は物部氏、尾張愛智郡の人、延曆七年に生る、幼にして伯父中安法師に從ひ、京都に入りて經論を讀む、中安、師の俊邁なるを知り、玄叡に付し、玄叡亦安澄に付す、師二和尙の室に侍して審問し、二十歲東大寺の戒壇に登りて滿分戒を受く、後、梵釋寺の永忠に從ひて益々智解を增し、西大寺に歸へるに及ひて盛に空宗を弘む、弘仁十年維摩會の講座に登り、承和九年大極殿最勝會に講師に任す、翌年律師より少僧都に轉す、嘉祥三年三月四宗の法匠を招請して法華經を淸涼殿に講せしむ、華嚴宗は正義、天台宗は圓修、法相宗は明詮、其選に當り、師は即ち三論宗に充つ、仁壽三年大僧都に任し、齊衡三年九月五日寂す、壽六十九、臘五十、（本朝高僧傳）

ジツポー　實寶（一九五二）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、實寶は藤原公基の子なり、法助親王に師事して灌頂法を傳へ仁和寺に居して門侶を誘掖す、弘安四年法務に任し、正應二年僧正に進む、明年冬東寺三の長者に加はり、五年大僧正に昇り寺務を領して護持僧となる、寂年、及壽欠く、（本朝高僧傳）

ジツポー　實峰　リヨーシユー良秀を見よ、

ジツミヨーイン　實明院　コーソン巧存を見よ、

ジツユ　實瑜 一八六一―一九二四〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、實瑜は侍從藤原公仲の子なり、出家して道助親王に師事して瑜伽灌頂秘密義軌等の玄旨を究め、嘉祿三年權律師より權少僧都に任ず、嘉禎四年法印に叙す、寬元六年權僧正に任し、冬東寺第三の長者に加す、文應元年北斗の法を修し寺務法務を領して護持僧となる、文永元年七月六日寂す、壽六十四、（本朝高僧傳）

ジツユー　實融 一九一〇―一九九九〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、實融は證道と號す、藤原氏の子なり、初め泉涌寺の明觀戒壇院の圓照に就きて戒を受け、律を習ひ、勝鬘院の圓珠に隨ひ密軌を傳へ、律鈔を質す、尊勝院の宗性に侍して華嚴及ひ五敎章を聽く、洛東の鷲尾山に居り、後、高野山に登り、安養院の賴賢に從ひて傳法灌頂を傳ふ、嘉元二年春金剛三昧院を補し文保三年大勸進して大塔を修理し、嘉曆元年大勸進して東寺二王率二天を修理す、曆應二年正月十九日（一說十五日）寂す壽九十、（一說九十三）其傳ふるところの密法を證道流といふ、（本朝高僧傳、高野春秋）

ジツユー　實祐　シヨーシヨン性俊を見よ、

ジツヨ　實譽　タイヤク太益を見よ、

ジツヨー　實養（……）〔新義眞言宗〕仙臺龍寶院の學僧なり、實養は長善房と號す、其俗姓生國詳かならず、運敞僧止に師事して眞言宗新義派の學を究め、仙臺龍寶院に住す、寂年及壽欠く、著作唯識序解一卷あり、（新義眞言宗史）

ジツリユーイン　實龍院　ニチリヨー日良を見よ、

シンア　信阿（…… ）〔三論宗〕奈良東大寺の論師なり、信阿字は行地論師上人と稱す、醍醐山得一の密印を得、兩宗の白拂を乘る、（續傳燈廣錄）

シンア　信阿　ギサン義山を見よ、

シンア　信阿　ニンチヨー忍澂を見よ、

シンア　信阿　ホードー法道を見よ、

シンウ　信有　二三二一／二三八三〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十九代なり、　信有字は專榮俗姓は增島氏、寛文元年三月十八日、武藏豐島郡谷原村に生る、邑の長命寺慈海に從ひ、十三歳江戸知足院にて薙髮し、業を信海に受く、翌年四度の軌を受け、瑜伽行を修し、十八歳豐山に登り、俊盛に師事す、元祿九年十月仁和寺法親王師を招きて即身義を講せしめ、翌年閏二月又秘藏鑰を談せしむ、後、醍醐寺に到り、大僧正寛順に謁して悉く東部の秘法經軌を受け、同十六年慈心院に住す、寶永四年命を受けて河內通法院に遷る、正德四年更に命を蒙り武藏の大護院に開法し、享保五年豐山に進み、秋九月幕府の執奏によりて權僧正に任し、同七年更に僧正に昇進す、同八年十二月十五日寂す、壽六十三、臘五十一、鳥野山祖廟の傍らに葬る、（豐山傳通記）

シンエ　信慧　一八一三／一九〇三〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、信慧大轉律師又は靜慶と稱す、六條右大臣源顯房の子、少將圓顯の三男なり、久安六年に生る、永萬元年醍醐山一海の室に入り、仁安二年出家す、時に十七歳なり、兩部の行業終りて傳法具支灌頂を同師に受く、時に卅五歳なり、去りて大和笠口別所に往き、靈山寺に移つる、仁治三年九月三十日通受法によりて大僧戒を受け、興福寺の覺盛を以て依師となす、時に既に九十歳なり、尋いて招提寺に掛錫して靜坐し、名を靜慶と云ひ、寛元二年三月十六日寂す、壽九十一、諡して圓行上人といふ、（續傳燈廣錄）

シンエ　信慧（一八〇五）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學頭なり、　信慧字は曜覺、俗姓は平氏、肥前の人、覺鑁上人の胞弟なり、天性剛膽にして少名を鬼四郎といふ、稍長して覺鑁上人に師事し、祕法を傳ふ、大傳法院に傳法會を立つるや、信慧勅を拜して學頭職に補せらる、是れ同院學頭職を蒙る始なり、示寂の年時缺く、（結網集、本朝高僧傳、）

〔考〕信慧は久安仁平頃の人なり

シンエ　信惠　一四〇二／一四七二〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十六代なり、　信惠字は悟心、武藏足立郡久保村の人なり、幼にして州の浦和玉藏院信應の下に投じて剃髮し、豐山に留學し、業成りて武藏三保谷廣德寺に主となる、後、根本院を經て護持院に晋む、弘化三年閏五月豐山能化に擧けられたるも病床にありて發途せざるに七月二十日寂す、壽七十一、著作唯識三十頌私記、唯識三十述記私記、各一卷あり、（新義眞言宗史料）

シンエイン　信慧院　コーセン光闡を見よ、

シンエー　信叡（……）〔眞言宗〕某寺の僧なり、　信叡其生國俗姓詳かならず、空海の弟子にして弘仁年中空海高野山を開くとき師をして先づ其他を相せしむ、詳傳欠く、（弘法大師弟子譜）

シンエン 信圓 二一八六三 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、信圓俗姓藤原氏太政大臣忠道の子なり、興福寺に投して大僧正慧信に侍して唯識を承け、博く性相に通す、後勅を奉して興福寺に住し、尋で法務となる、長谷金勝二寺を領し、金峯山檢校に補し僧階歷昇して大僧正に任ず、次に大乘院に居りて一乘院を兼帶す、又大和菩提山及內山の第一祖となる、建仁三年大佛殿落慶供養の導師となり、上皇幸して優賞を賜ふ、寂年、及壽欠く(本朝高僧傳)

シンオー 信應 二四六〇 〔新義眞言宗〕江戶彌勒寺の學僧なり、信應字は自圓、鄕貫詳ならす、豐山に學び武藏玉藏院に住す、後、彌勒寺に轉し、寬政九年四月五日護持院に昇る、十二年十月二日願により退隱し、同年十二月廿九日寂す、壽缺く、著作俱舍論根聞記三卷あり、(新義眞言宗史料)

シンガ 信賀 カクミョー覺明を見よ。

シンカイ 信海 二二七三 二三三八 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第七代なり、信海字は宗俊、俗姓は井狩氏、近江野洲郡永原村の人、慶長十八年に生る、幼にして蓮臺寺專海に事へ、平等寺にて出家受戒し、瑜珈の四度加行を修し、堯快に就きて兩部の灌頂を受け、寬永九年秋元壽僧正に見へ、講論の席に列なる、同十七年秋大覺寺尊性法親王元壽僧正を延きて三問一講の席を開かしむ、時に隆長講主となり、三學匠を選ひて敵者とす、師其一となる、正法四年春園城寺に遊ひて法泉坊の毫忠より一乘の理を聞き勸學坊實雄より半字の敎を聞き、去りて醍醐寺に到り、法務大僧正寬濟に見え、諸尊秘軌及ひ灌頂の儀則を授かる、慶安四年尾張の寶生寺俊雅寂し、請によりて師其席を繼く、承應二年秋國司中納言光友請して城中社司を兼領せしむ、明曆元年冬豐山に登り、良譽の室に投して多坊に住す、同三年秋良譽寂し、同十月幕命に師其席を補して第七代となる、後辭して黑崎邑に至り、大慈恩寺を剏して退隱す、東西に遊化し、武藏豐島郡谷原の長命寺、美濃山縣郡金光山蓮華寺、同郡上野村の源賴政の墓所等の荒廢を興す延寶六年二月廿一日寂す、壽六十六、興元寺の東岡に葬むる、(豐山傳通記)

シンカイ 信海 二四四三 二五一六 〔新義眞言宗〕大和智積院第三十七代なり、信海字は大幢、俗姓は渡邊氏、天明三年參河額田郡に生る、寬政十一年二月菩提寺に投して薙髮染衣し、文化三年師二十四歲の時、京都智積院に往き、海應に俱舍論及ひ唯識論述記を聽き經歷に兩一乘を習ふ、六年二月元瑜に密灌を受け、又弘基、元瑜、龍肝に隨ひて野澤諸流を究む、文政二年二月海應に傳法灌頂の印璽を承け同四年能化職となり前後俱舍論、唯識論述記、大乘義林章等を講すること數回、十二年九月二十五日集議席を董す、天保五年三月紀伊侯の請に依り、紀伊根來寺に移り、六月權僧正に任す、弘化二年八月傳法大會を設け、精義の任に當る、明年傳法灌頂壇を設く、根來寺に住すること十七年、其廢を興す、嘉永三年九月二十四日幕府命を蒙り、智積院貫主に登る、安政三年正月二十二日寂す、壽七十四、臘五十一、五百佛山の東巓に葬る、著作大疏傳授私記三卷、俱舍玄談一卷、異部宗輪論疏私記三卷あり、(信海大和上傳、新義眞言宗史)

シンカイ 信海 二四一 二五一九 〔法相宗〕京師淸水寺成就院の僧

なり、信海幼名は網五郎一に長丸と稱す、父は玉井宗江といひ、攝津大坂に住し、醫を業とし鼎齋と號す、師は其二男にして月照の弟なり、文政十二年甫めて九歳の八月十五日洛東清水寺成就院藏海上人の勸化により同寺中光乘院に投し、同年十月九日同寺中圓養院良宥に就きて薙染す、天保元年九月廿七日光乘院に住す、天保二年七月二十二日藏海の指授により四度加行を開白し、天保六年三月廿三日奈良東大寺眞言院龍肝阿闍梨に隨て灌頂を受く、同年九月病と稱して職を辭し、直に紀伊高野山に登り、大聖院靈明上綱に師事して請益す、天保七年讃岐に遊び、後藤某に儒教を學ふ、某師の才を愛し、且つ嗣子なきを以て還俗せしめて養子とせんと欲すれとも、師肯せす、去て再ひ高野山に上る、天保十三年昇口成滿す、同十四年九月二日夜高野山の伽藍炎燒す、師衆に先ちて影堂に入り、影像を奉して總持院に移す、闔山其功を賞揚し、生涯俸を出して學資に供す、其後京都下寺町太子堂に留錫し、倶舍、唯識、及ひ華嚴等を學ふこと凡そ三年、して高野山に歸る、弘化四年靈明遷化し、遺命により同山修學院を住持す、嘉永元年同山萬勝院に轉す、同二年學道新衆に列す、同三年秋勸學院間役を勤む、同六年八月清水寺に歸山し、光乘院に再住す、同年十二月十七日清水寺前長講職盛芳阿闍梨に千手觀音の祕印を受く、安政元年二月二日兄成就院忍向(月照)職を遁る、故を以て同院に轉し、一乘院宮の命を受けて正官本願兩職に補す、尋て紫重の綃衣を聽さる、同年四月六日同寺中執行寶性院を兼任す、同年八月將軍に謁す、時服二領黄金一枚を賜はる、同二年三月十一日近衛公に謁し、和歌の門葉に列す、同四年八月十五日東大寺慧訓阿闍梨に請ひ、兄忍向と同く同寺内戒壇院に於て具足戒を受く、同年九月高野山に登り、遍照尊院榮秀に小島流を傳受し、同年冬又高野山に登り、正知院良基に安祥寺流を受け、頗る源底を極む、同年十二月米國の商船邊海に來る師大に之を憂ひ、同月十三日より大衆を集めて本堂觀音前に十座十万遍の法を修し、外賊の降服を禱る、同五年四月廿五日更に八千枚護摩供を修し、寶祚長久、天下太平、外船退去を祈る、詠して曰く「動なき誓と君か眞心を玉の緒にこそよりて祈らめ」、同年十二月十九日近衛公の命を受け、兄忍向と共に高野山に登り、正智院良基に就きて青巖寺法印鋭山、寶性院門主海雄、及ひ有志の徒に謀りて種々の祈念別行等を修す、同年三月上旬再ひ登山して大衆と共に祕法を修す、後屢々祕法を修して王土の安泰を禱る、斯の如く王家の祈禱に力を盡せしかは、遂に幕府の嫌疑を蒙る、師免るへからさるを知り、詠して曰く「眞心を盡さん時と思ふには憂に逢ふ身そ嬉しかりける」同六年正月五日終に京都西町奉行所に幽囚せらる、此時に至り獄中にて兄忍向の僕重助に會ひ、去年十一月薩海にて兄の死せしことを聞き、大に慟哭す、二月廿三日江戸へ檻送せらる、幕吏屢々酷法を以て責むれとも師豪爽にして議論些も撓ます、却て時世の非を擧けて幕吏を詰る、同年三月十八日獄に死す、辭世の和歌に曰く、「西の海阿都万のそらとかはれとも故々呂は同し君か代のため」時に年三十九、其囚に就くに及ひて高野山寶性院海雄、正智院良基、增福院當賢等、數十人連坐せられたり、家來高田千柄師の遺骸を回向院に密葬し、後忍慶之を京都清

シン(信)カ

水寺成就院に改葬す、（信海上人履歴書）

シンカイ　信海　コーオー孝雄を見よ、

シンカイ　信戒　ショーエ正慧を見よ、

シンカク　信覺（一六七一—一七四四）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、信覺は藤原公季の子なり、幼にして出家し、大僧正深覺に師事して灌頂法を承け、延久元年法印に叙す、三年東大寺に住し、承保元年仁和寺に遷り、權大僧都に任す、明年東寺の長者となり、尋て法務を司どる、永保二年夏より秋に至るまで雨降らず、師敕により二七日を約して孔雀經の法を修し、十日にして霖雨連日、天皇大に喜び給ひ、敕して輦車を聽さる、同三年正月權僧正に任し、永曆元年の春正僧正となる、後僧綱を辭して福岡に幽居し、應德元年九月十五日正念にして寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

シンカク　信覺　リンカイ琳海を見よ、

シンキユー　信及　ゼンミヤク前脈を見よ、

シンキヨー　信慶（一七八八）〔天台宗〕大和興福寺の學僧なり、　信慶は右中辨藤原有信の子なり、法を賴嚴僧都に承け唯識に通し、大治三年維摩會の講師に任し、少僧部となる（本朝高僧傳）

シンキヨー　信曉（二四三四—二五一八）〔眞宗〕京都大行寺の住持なり、信曉は佛心院と號す、美濃不破郡靜里村東本願寺末寺長源寺に生る、京師に學び、後、佛光寺派に轉し、佛光寺前に大行寺を開く、同派の學頭に昇り、權少僧都に任せらる、安政五年六月十四日寂す、壽八十五、師勸導に長し、老後專ら法談を事とし、大に宗風を張れり、著作三帖和讃講話三卷、御文章講話二卷、大原問答勸錄一卷、四十八願講話一卷、正信偈談話一卷、等あり（多田鼎氏返信）

シンキヨー　信敎（……）〔淨土宗〕某寺の學僧なり、信敎字は長空と云ふ、東關の人、隆慶の甥なり、隆寬の孫弟子なる隆慶の室に入りて淨土門の深義を傳へたり、寂年缺く門下に寬海あり、（淨土總系譜、淨土傳燈錄）

シンキヨー　信鏡（二一七七）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、　信鏡字は湖月と云ひ、惟宗輔の法孫なる高霖佐に參して印可を受け、永正十四年命を受けて東福寺に住す、寂年及壽缺く、著作湖鏡集一卷あり、（延寶傳灯錄）

シンキヨー　信敬（……—一七九二）〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、信敬は叡山楞嚴院の徒なり、義學を事とせずして菩提の法を願ひ、手指を切りて不動明王に供へ、次に左脚骨を斬て釋迦の像を刻み、手皮を剝て彌陀三尊の像を摸作し、指骨を以て觀自在大勢至二像を彫刻す、長承元年六月時疫に染て寂す、壽缺く（本朝高僧傳）

シンギヨー　信行〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、　信行は元興寺に住し、涅槃經音義六卷、般若經音義三卷、瑜伽論音義四卷を著はす、寂年、及び壽缺く、（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シンギヨーイン　信曉院　コーケー光啓を見よ、

シンクー　信空（一八九一—一九七六）〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、眞空字は慈道、大和の人なり、幼にして佛法を尊ひ、仁治三年興正菩薩其家に遊化して梵網經を講する時、其菩薩を禮して弟子となり、西大寺に役して五戒を受く、時に年十二な

り、菩薩般若寺を再營し、師をして司管せしむ、師日に戒疏を講して四衆を策進す、弘安八年冬菩薩大御輪寺に住し師を擧けて上首となす、正應三年菩薩の遺命により西大寺の席に補す、後宇多上皇に具足戒を授け、宮中に梵網布薩を修す、上皇大に喜び、詔して六十餘州の國分寺を西大寺の子院となす、談天門院藤原忠子も亦師に就きて戒を受く、德治初年冬十月讃岐の鷲峯寺にありて比丘塚六十餘員と共に同く布薩を修す、正和五年正月二十六日病みて寂す、壽八十六、臘六十四、門弟子定泉定盛等あり、嘉暦四年後醍醐天皇勅して慈眞和尚と謚す、（本朝高僧傳）

シンクー 信空 一八〇六―一八八八 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、信空字は法蓮、號は稱辨、左大辨行隆の長子なり、久安二年に京師に生れ幼にして出家の意あり、十一歳にして比叡山の叡空に師事し、上人示寂の後、源空上人に師事し、淨土敎を受け、毘沙門堂明禪等と道交深し、二條天皇の勅請を拜し法要を上りたりと云ふ、安貞二年九月九日胸間に源空上人の遺骨を安置して寂す壽八十三、（鎭流祖傳、淨土傳燈錄）

シンクー 信空 ニョエン如圓を見よ、

シングワン 信願 一八五一―一九二八 〔眞宗〕下野慈願寺の開山なり、信願俗姓は源氏、藤井八郎信親と稱す、承久元年常陸の稻田に於て親鸞に謁して弟子となり、三所に寺を創む、即ち下野上那須郡栗野鹿崎慈願寺、沖内八尾慈願寺、三河中郷淨妙寺是なり、文永五年三月十五日寂す、壽七十八、（本願寺通紀）

シングワン 信願 リョーヘン良遍を見よ、

シンゲ 信解 ニチリョー日了尼を見よ、

シンゲイン 信解院 ニチジュー日從を見よ、

シンゲイン 信解院 コージョー光常を見よ、

シンケン 信堅 ……―一九八二 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、信堅は信日の同母弟なり、信日に師事す、嘉元元年龜山上皇に招かれて宮中に釋摩訶衍論を講す、又勅を蒙むりて釋論私記二卷を編して呈す、元亨二年豫め死期を知り、最勝院瓊算を招いて中院の秘訣、及び持期院方密印口訣を授け、悠然寂す、實に元亨二年十二年十六日なり、壽缺く、著作大疏鈔三十八卷、釋論私記二卷、高野山勸發信集、野山記各一卷あり、（本朝高僧傳、高野春秋、諸宗章疏錄）

シンケン 信虔 ―二〇四四 〔臨濟宗〕相摸淨妙寺の禪僧なり、信虔字は九峰と云ふ、明徹琛禪師の法を嗣き、中山穎と共に一時に名を擧ぐ、平常幽棲して出世を欲せず、晩年衆請相迫りて辭すること能はず、遂に相摸淨妙寺に住し、寺務三年にして退隱し、至德元年隨光菴に寂す、壽欠く（本朝高僧傳）

シンコー 信弘 ……―二〇三四 〔眞言宗〕紀伊高野山寶性院の大學講なり、信弘は宥快阿闍梨に師事し、醍醐の法脈を快成に嗣き印心を付せられて二十九代の祖となり、寶性院の席を董す、應安七年寂す、（續傳燈廣錄）

シンゴン 信嚴 （……―……） 〔法相宗〕和泉の僧なり、信嚴は元、和泉國泉郡大領血沼縣主倭麿なり、園樹に烏巣を作る、一日雌烏他の鳥と戯れ他に去り雄烏雛兒を抱きて餓死す、倭麿これを見て世間を厭ふ意を生じ、遂に出家し行基に随ひ弟子となり、西方往生を願求す、示寂の年時缺く、（靈異記）

シンサイドー　信西堂　ニョエン如淵を見よ、

シンジヤク　信寂　一九〇四……〔淨土宗〕祖源空上人の高弟子なり、信寂俗姓生國詳ならず、初め出家して播磨朝日山に住す、後、源空上人に師事し、山城鳥部野に草菴を營み住し、道譽高し、栂尾の明惠上人高辨、源空上人の選擇集を破して摧邪輪を選述するにあたり、信寂惠命義一卷を作り、極力辨駁す、毘沙門堂明禪述懷鈔を作り信寂に贈り、其功を讃す、遠江横路に西蓮法師といふものあり、京師に上り、信寂を請す、乃ち寛元々年相伴ふて遠江に下り、大に其地に淨土敎を弘通せり、同二年正月遠江に癰を患ふ、弟子醫療を請ふも許さず、食を絕して命終を期す、二月廿一日より諸弟子をして別時念佛會を修せしめ、三月三日念佛百餘聲して寂す、享壽欽く、（淨土總系譜、淨土傳灯錄、鎭流祖傳）

シンジユイン　信受院　コーキョー光敎を見よ、

シンシユク　信叔　ショーイン紹允を見よ、

シンシユー　信修　リゼン履善を見よ、

シンシユン　信俊　ジョーコー淨光を見よ、

シンジユンイン　信順院　コーチョー光澄を見よ、

シンジヨ　信助　一九五七一九九七〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、信助は太政大臣基具の子、正和五年入壇し、元德元年長者に加任す、延元二年七月十九日寂す、壽四十一、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

シンジヨ　信恕　二四二三……〔新義眞言宗〕大和長谷寺二十四代なり、信恕字は諦圓、下總葛飾郡二郷半の人、鄕の迎攝院隆祐に隨つて度を受け、後、豐山に登り、十四世能化英岳に師事す、第十九世能化信有に愛せられ、殊に諱の一字を與へらる、因て信恕と稱す、業成り武藏金剛院に住し、彌勒寺護國寺に歷住し、元文五年九月二十一日護持院に昇住し、延享三年三月二十一日豐山能化となる、職にあること十五年、寶曆十三年十二月十九日寂す、（新義眞言宗史料）

シンシヨー　信盛　二三五三……〔眞言宗〕山城智積院第八代なり、信盛字は陽春、幼にして智積院に登り、同院第七世運敞に學び、竹田安樂壽院より江戶圓福寺に進み、天和二年智積院に出で運敞に繼で第八世能化となる、其年諸堂火災に罹る、師苦心經營して再建す、能化の職にあること十二年、元祿六年正月八日寂す、壽欠く、著作起信論科註六卷あり、（新義眞言宗史）

シンシヨー　信承（……）〔淨土宗〕京師長樂寺の僧なり、信承俗姓生國欽く、初め延曆寺に在りて大僧都に昇る、後長樂寺隆寛の弟子なる智慶に就いて淨土敎を受け、大に門風を揚げたり、（淨土傳燈錄）

シンシヨー　信證　一七四六一八〇二〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、信證は輔仁親王の子、後三條天皇の孫なり、行意に就きて眞言を學ひ、仁和寺の寛助僧正に從ひて灌頂法を承け、一身阿闍梨に任す、天治元年女院の產を祈り、大治の初め權大僧都に任す、翌年六月東寺の長者と爲り、四年夏寺務を領す、冬法務を兼ね、五年正月女院の不豫を祈る、秋東寺にて孔雀經法を修し、阿闍梨五人を成就院に置く、長承元年朝命により北斗の法を修して賞を蒙むる、二年職を辭するも可かれず、二の長者となる、冬十二月廣隆寺を補し、保延三年權僧正に

昇り、十月正に轉す、永治の初め護持僧となる、上皇落髮し、師に就きて戒を受け、師又八條院にて皇后の産を禱り、賞を觀慧に讓りて法印に敍せしむ、康治元年四月八日寂す、壽五十五、著作千栗多鈔七卷、阿字觀鈔一卷、出家略作法一帖、菩提心論私記あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄、)

シンショー 信聖 セーケン政憲を見よ、

シンジョー 信乘 (………) 〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、 信乘字は律受、圓律玄律師に師事して戒律を傳へ、招提寺にありて戒律を說き秘密を傳へて後學を敎ふ、寂年、及壽欠く(本朝高僧傳)

シンジョー 信淨 (………) 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、 信淨は鎭西の人、信明と共に南北に居りて道譽高し故に山衆南の筑紫北の筑紫と稱す、某年壽八十にて寂す、(本朝高僧傳、高野往生傳)

シンショーイン 信證院 ケンジュ兼壽を見よ、

シンジョーイン 信靜院 コージュ光壽を見よ、

シンズイ 信瑞 (………) 〔淨土宗〕京師の學僧なり、信瑞字は敬西、初め隆寬に從ひ、後法蓮信空に投じて弟子となり、三經音義、上人傳等を作る、寂年、及世壽欠く、(淨土總系譜)

シンセー 信誓 (………) (………) 安房某寺の僧なり、信誓俗姓高階氏、安房の人なり、父は州の刺史なり幼より某寺に投し顯密を修し、後、法華の讀誦を業とす、二親と共に疫に罹る、二親沒し、讀誦して其蘇生を祈る、已にして靈驗あり、二親蘇生す、之より益精行す、示寂の年時、歟く(本朝高僧傳)

シンソン 信尊 (一九〇三) 〔天台宗〕武藏泉福寺の學僧なり、 信尊は其俗姓生國詳かならず、幼にして幸範に就て剃髮得度し、顯密二敎を受け、能信に就て天台の三部を學ぶ、後、比叡に登り、燈明院承瑜に謁して一心三觀一念三千の奧旨を傳ふ、寬元中武藏河田谷にありて東叡山泉福寺を剏し、第一世となる、寂年及壽缺く、門下の神足に海日、朗日、廣海、尊海の四人あり、(本朝高僧傳)

シンチ 信智 センサイ宣載を見よ、

シンチュー 信忠 ………一九八二 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、信忠俗姓は藤原氏、關白忠家の子なり、幼にして勸修寺勝信僧正に投して薙髮受業し、兩部の灌頂を受け、同寺の道寶僧正に就て密敎三論を學び、東南院に住し、後勸修寺に遷る、正安二年秋東寺の長者となり、寺務法務を兼領す、尋で僧正に進み、幾何ならずして大僧正となる、德治三年東寺の寺務を辭し、延慶三年東大寺を補し、元亨二年十月十九日寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

シンチュー 信中 ジキョー自敬を見よ、

シンチュー 信仲 イトク以篤を見よ、

シンチュー 信仲 エートク永篤を見よ、

シンニチ 信日 ………一九六七 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、信日は紀伊名艸郡神宮の人なり、父は世々神官を業とし、母は和泉大鳥官吏の女、與正菩薩の外甥なり、幼にして櫻池院の惠深阿闍梨に依りて剃髮受學し、十九歲大樂院賢雄阿闍梨に隨ひて釋摩訶衍論を學ふ、二十一歲惠深に傳法灌頂を受け、西大寺の信惠に隨ひて具足戒を受け且つ戒律を習ふ、二十五歲

にして大樂院に住し、大日經疏及び釋論を講す、嘉元三年龜山上皇勅召したまふも疾を以て出てず、德治二年二月二十四日寂す、壽缺く、著作金胎曼荼羅鈔四卷、大疏科文三十卷、綱要鈔三卷あり、師高野山八傑の一と稱せらる、（本朝高僧傳、高野春秋、諸宗章疏錄、）

シンニン　信忍（一九二四）〔眞言宗〕京都金山院の律僧なり、信忍字は知生、京都の人なり、二十二歲にして祝髮染衣し、高野山に登りて修練苦行し、招提寺證玄を禮して戒を受け、海龍王寺不退寺光臺寺等に遊學し、戒壇院に至り、圓照に師事して重ねて具足戒を禀く、文永の初め圓照京都金山院に遷るに及び、師隨從して其化儀を助け、後、同寺に主となり、某年寂す、壽欠く、（本朝高僧傳）

シンニュー　信入　チョードン潮呑を見よ、

シンニューイン　信入院　コーキ光暉を見よ、

シンバイ　信培（二三三三／二四〇四）〔淨土宗〕山城長時院開山なり、信培字は湛慧といひ、澄蓮社忍譽と號す、俗姓は谷口氏、母は渡邊氏、延寶三年十二月十日京都の三條白河に生る、未た生れさるに母息菴上人といふ者に約して曰く、若し男子を生まは必す上人に投して出家せしむべし、と、師生れて十一歲、出家を懇請して止ます、時に息菴江戶にあり、其歸へるを待ち、元祿元年師十四歲の時、息菴の歸りて京都の華開院に住するに方り師乃ち之に從ひて祝染す、息菴の法兄に聞證といふあり、一たひ師を見て其法器たるを知り、倶舍、唯識、性相の學を修めしむ、十七歲江戶に遊ひ、靈山寺に掛搭し、廓瑩上人に從ひて宗戒兩脉を相承す、東西に遊方し、諸師に參

謁し、深く教觀を究む、餘暇世典を學ひ、詩文を作る、荻生徂徠の門に遊ひ、又嘗て雲竹に就きて書を習ふ、檀林にありて徒を集め、七十五法名目、倶舍論頌疏、略述法相義、唯識論略解等を講す、後京師に歸り、息菴の讓席を受け、勅命を奉して華開院に住す、實に元祿十二年にして師二十五歲なり、常に俗を化し、阿毘達磨を尋究するを以て任となす、四阿含、六足、發智より深密、華嚴、瑜伽、攝大乘論の類に至るまて、偏く研究し、古德先匠の章疏を涉獵す、四方の徒群集して師の門を叩く、因て維摩、楞嚴、倶舍論、及ひ頌疏、唯識論、及ひ述記、法苑、表無表章、因明疏、起信論義記、及ひ註疏華嚴探玄記、及ひ五教章等を講說す、正德元年幕府諸國に令して封祿の符命を改めしむ、師華開院の事を以て江戶に赴き、淺草涼源寺に寓す、請に應して倶舍論、及ひ起信論義記を講し、次に說法勸化すること凡そ三七日、群衆信受す、此時に方りて鳳潭教學を以て鳴り、席を開くの際、著作するところ多し、師起信論義記を講して鳳潭の幻虎錄を駁し、五教章を講して其匡眞鈔を駁す、時に四十歲なり、師嘗て勿字の義を辨す、天台の靈空勿字解一篇を著して之を駁す、師亦一露濤一卷を著して之に對す、後、京都淨樂寺の請を受けて倶舍論章疏を講して冠註を駁す、茲に於て師の學譽大に振ふ、享保八年四十九歲にして法席を弟子素寂に讓りて退隱す、絹衣を脫して綿布を着し、珍玩の具を人に散與して唯た書籍を留め、俳諧一章を賦して意を叙し、洛西龍安寺の子院に寓す、師嘗て謂へらく、戒は是れ沙門の本軌にして慧命の依るところなり、吾れ毘尼を嚴淨して夙志を遂くべし、と、乃ち洛東靈

潭律師に投して沙彌戒を受け、門を杜ち、客を謝す、晝夜を別たす、專ら律教を究む、洛西の槇尾山、和泉の大鳥山に周旋し、僧坊の軌矩說恣等の行事を晤悉す、享保十年師將に自誓受戒せんとす、懺場を嚴淨して好相を祈求す、既に感見あり、因て靈潭玄門二律師を請ひて證明を得、瓔珞羯磨に依りて自誓受具す、之より德譽益々揚る、蓋し師の行法は五衆の禀戒を以て僧體となし、止作二持を以て僧行となし、念佛の正行を以て正因となし、性相弘通を以て正見と爲し、間々偈賛を作り風騷を事とし、墨妙を馳す、十一年奈良に遊ひ、雲松菴に入りて觀淸沙彌の請を受け、俱舍論、唯識論を講す、翌年息菴上人病に臥して遷化す、黄金五百兩を以て師に與へ、囑して曰く、幸に此を用ゐて廢寺を興復して以て吾か報土を資祟せよ、と、師之を受け、以爲らく吾か宗未た律寺なし、豈に缺典にあらすや、と、乃ち洛西に長時院の趾廢を求め、其荒頽を修す、本山其の功を賞して永世律院の規約を定む、本山の貫主到譽上人如意拂子を貽り、鎌倉光明寺の義譽上人布薩の法器を寄附す、享保十三年皇后の請を受けて宮中に梵網經を講し、菩薩戒を授け、日課念佛を誓ふ、享保十六年高野山學侶の請に應し、和泉の大寺明王院に在りて俱舍論を講す、因て指要鈔十卷を撰す、明年又唯識論述記を講す、後、京都長德院主大超上人の請に應し、梵網經法藏疏を講す、講畢りて菩薩戒を授く、其時に方り鳳潭金剛槌論を著す、師因陀羅手一卷を著して之を駁す、元文二年京都の智積院大和の豐山の大衆相謀り、師を請して因幡堂西坊にて唯識論述記の講席を開く、師畫工に命して寶冠の阿彌陀幷に觀音勢至の二大士を圖せしむ、乃ち靈芝律師の軌を承けて授戒の本尊となす、冬獅子谷の慧闇上人の請を受けて菩薩戒を授く、受くる者凡そ二十餘人あり、元文三年京の十念寺にありて俱舍論を講す、是れ武藏江戶增上寺の學侶の請に應じたるなり、元文四年興正菩薩の四百五十年忌辰に丁り、師法苑表無表章を講す、寬保元年浪華了常寺主の請に應して雜集論述記を講す、尋いて復た五教章表無表章を講す、黒谷の鏡譽、百萬遍眞徹等、皆師の道化に服す、師晚年殊に雜華の法門を闡揚するに意あり益新舊兩譯の大經、及ひ二祖の疏鈔を研究す、長時院の東隣に慶雅法印の遺跡あり、因て古昔吉水上人か雜華の法門を傳受したるとを憶ひ、華嚴弘通の祖意に萠せるを知りて其志益々進む、殆んと久しく廢絕す、師之を嘆惜し、化門を開きて三部假名既にして瑞泉寺主のために探玄記を講す、華開院十夜の法事抄を講すること十日、學徒山の如し、是れ實に寬保二年なり、此年探玄記を校合して之を梓に上ほし京師の淨樂寺に於て之を講す、既にして三緣山、豐山の學僧の請に應し、圓福寺に俱舍論を講す、此年十月十日復三部假名抄を講す、四年正月七日長時院に歸る、自ら病の起つべからざるを知り、二月十五日弟子法澤を呼ひて後事を託し、德門に命して往日誓戒の好相記を取り來らしめ、火に投して之を燒く、十九日午下泊然として寂す、壽七十二、臘二十二、著作俱舍論要鈔十卷、一露濤、因陀羅手、各一卷あり（湛慧和上傳）

シンヘン　信遍　二二六六　二三三六　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、信遍は冷泉中將爲親の子、光紹禪脊二師に習學し、東寺一の長者、及ひ大和菩提山座主となり、元和二年入室三年得度し、

仝年法眼に叙し、八年少僧都に任す、寛永四年入壇し、五年大僧都に任す、九年法印に叙し、十二年權僧正となり、十九年正僧正に轉し、萬治元年大僧正に昇る、寛文二年長者に加任し、三年長者法務に任し、護持僧となる、六年正月廿八日寂す、壽六十一、(仁和寺諸院家記)

シンヘン 信徧 ショーヘン勝遍を見よ、

シンホーイン 信法院 コータク光澤を見よ、

シンミョーイン 信命院 ニチゼン日全を見よ、

シンミョーイン 信明院 コーセツ光攝を見よ、

シンヨ 信譽 二三〇六 〔淨土宗〕京都念佛寺の開山なり、信譽は其鄕貫詳かならず、幡隨に師事して法を嗣ぎ、京都念佛寺を開く、正保三年寂す、其月日、並に壽欠く、(淨土總系譜)

シンヨ 信譽 二二一八 〔淨土宗〕三河信光明寺第四代なり、信譽は超蓮社と號す、存牛上人に師事して法を嗣ぎ、信光明寺に住す、永祿元年十月二十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シンヨ 信譽 エシユー惠秀を見よ、

シンヨ 信譽 エデン惠傳を見よ、

シンヨ 信譽 エーショー英松を見よ、

シンヨ 信譽 ウンリョー運亮を見よ、

シンヨ 信譽 ガンシユク巖宿を見よ、

シンヨ 信譽 キユークワク笈廓を見よ、

シンヨ 信譽 キユーゾン及存を見よ、

シンヨ 信譽 ギョーイ行意を見よ、

シンヨ 信譽 キョーハ曉把を見よ、

シンヨ 信譽 クワクゾン廓存を見よ、

シンヨ 信譽 ケンリョー見靈を見よ、

シンヨ 信譽 ジユーテー重貞を見よ、

シンヨ 信譽 ゾンドー存道を見よ、

シンヨ 信譽 ダイリユー大龍を見よ、

シンヨ 信譽 ドーコ洞庫を見よ、

シンヨ 信譽 リョーア良阿を見よ、

シンヨ 信譽 リョーアン良安を見よ、

シンヨ 信譽 リョートン靈頓を見よ、

シンラク 信樂 一九二二 〔眞宗〕下總弘德寺の開山なり、信樂俗名相馬義淸といひ、平將門の裔なり、親鸞に敎を受けしが師命を受けすして坐下を去り、下總岡田郡豐田村新地に寺を創む、後、覺如上人東遊し、適々寺に入る、師之に謁して前過を謝し、許されて門下に入る、蓮如上人東遊の時、弘德寺の號を與ふ、(本願寺通紀)

シンア 眞阿 二〇三五 二一〇〇 〔淨土宗〕山城十念寺の開山なり、眞阿は一に良仁と云ふ、後龜山天皇の皇子なり、初め帥宮と號す、出家して義恩と稱し、後眞阿と改む、初め誓願寺に居り、將軍足利義敎と和歌を以て問答をなす、義敎の皈依により菴室を營み住す、師和歌あり「萩をかき松を柱に柴の庵風は吹くとも寂しからめや」、義敎乃ち十念寺を創し供養田四十八石を寄附す、師開山となり、法化盛んなり、永亨十二年六月疾に罹り、七月二日南無阿の三字を書し、遂に寂す、壽六十六、遺言により下鳥羽淵に水葬す、(野史)

シンア 眞阿 カネン珂然を見よ、

シンア 眞阿 クオー舊應を見よ、

シンア、眞阿 ジツドー實道を見よ、

シンエ 眞慧（……）〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、眞慧字は總寂、山城の人、發心受戒して戒壇院竹林寺に留寓す、寂年欠く、（本朝高僧傳）

シンエ 眞慧 二〇九四 二一七二 〔眞宗〕伊勢專修寺の第十代なり、眞慧は九代定顯の嫡子なり、幼にして學を嗜み、諸山を歷詢して敎乘を研尋す長祿三年加越江諸州を巡化し、寛正元年伊勢に遊ぶ、錫を駐むること五年許、六年一身田に專修寺を移して建立し、文明四年近江に無礙光派と云へる異計を主唱する者あり顯正流義鈔二卷を著し、念佛安心を顯し、異計を彈斥す、當時比叡山の大衆大谷本願寺を襲擊し、專修寺に及はんとす、師、自ら比叡山に登り、一宗の要義を辨し大衆を服す、九年六月後土御門院綸旨を賜ひ依て專修寺を主とる、十年三月義政將軍公書を授けて之に副ゆ、爾來永式となり、歷代必す國書を賜ふ、是月又勅して祈願所となす長享元年十月法印に叙し大僧都に任す、永正九年十月二十二日寂す、（一說二十）壽七十九（一說七十）稱して中興となす、嘗て文章數篇を著し門侶に示す、後、應眞、堯慧、堯眞、堯秀、相尋ぎて之を著し今稱して高田五帖といふ、（本願寺通紀、佛敎各宗綱要）

シンエ 眞慧 一八二三 一八九九 〔眞言宗〕京都東寺長者なり、 眞慧俗姓は源氏、右少將通能の子なり、延杲僧正に從つて灌頂法を受け、建仁三年秋權少僧都に任し、承元二年法印に叙し、貞應元年石山寺の座主に補す、嘉祿二年夏權大僧正に進む、安貞二年冬藤原公經愛染堂を建し師に請して供養の導師となす、寛喜元年東寺三の長者に加り、嘉禎二年護持僧となり、東大寺の寺務を領す、曆仁元年秋東寺を主どり、法務を兼ぬ、延應元年正月乘車を聽され、同月二十一日寂す、壽七十七、（本朝高僧傳）

シンエン 眞圓（一四八二）〔眞言宗〕祖空海上人の弟子なり、 眞圓一に櫪律師と云ふ、俗姓生國不詳なり、幼にして出家し、經論を學習す、傳へ云ふ初め天台及び法相を宗とし、後、眞言に歸し、空海の弟子となり、弘仁四年十二月侍講に擢てられ、空海に就きて最勝王經の秘義を詢決し、空海自作の伽陀を付せらる、十三年十一月朝命により大和高市郡に益田池を鑿るの工を幹す、寂年、及び壽缺く（弘法大師弟子譜）

シンエン 眞圓 ……二三〇八 〔黄檗宗〕肥前長崎興福寺の開山なり、 眞圓は明の江西浮梁縣の人、出家して臨濟下の禪を修す、元和六年西來し、長崎に入る、同九年居留の明人相謀り、一寺を興し、興福寺と號し、師を請し開山となす、興福寺俗に南京（ナンキン）寺と云ふ、慶安元年寂す、（禪宗史料）

シンエン 眞圓 コーチヨー光超を見よ、

シンオー 眞雄（二一四四）〔曹洞宗〕伊豫洞光寺の開山なり、 眞雄字は大拙、幼にして定光寺機堂を禮して師とす、機堂の寂後淸寧之に住し、後、俊鷹道靑に謁するに及び初めて宗旨を悟る、文正元年三月衣法を受け席を繼きて定光寺に法を開く、伊豫大安尼子經久軍務の暇師に法を問ひ、弟子の禮を執り、出雲富田城に洞光寺を開設し、師を開山に仰く、文明十六年越中慈眼寺に遷り、晚年洞光寺に退隱す、寂年並

に壽缺く、法嗣文質甚才なり（日本洞上聯灯錄）

シンオー　眞翁　シューケン宗見を見よ、

シンオー　眞翁　シューリュー宗龍を見よ、

シンオーイン　眞應院　ニチショー日性を見よ、

シンオン　眞遠　二二〇九〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、眞遠字は嚳仲と云ひ、心岳知に參して法を嗣ぎ、東福寺に主となる、寶德元年五月二十九日寂す、壽欠く、（延寶傳灯錄）

シンオン　眞遠（…………）〔天台宗〕比叡山の僧なり、眞遠は參河の人、比叡山東塔院に居して法華經を誦持すること日課四十部、兼ねて密敎に通す、後、鄕里に蟄居す、適馬に騎して里閭に出で、刺史に遇ふも避けずして過ぐ、刺史怒りて曰ふ、國中は我管治する所なり、汝出家と雖亦吾民なり、何ぞ禮を失するや、と、士に命じて推下し、師を厩に繫ぐ、師厩中にありて一心に法華經を誦ず、其夜刺史夢に普賢菩薩厩に繫り、別に門外より一普賢來りて繫る所の事由を問ふ、刺史覺めて大に驚き、師の縛を解き懺謝し、且つ別館を構へて四事供養したりといふ、示寂の年時缺く（本朝高僧傳）

シンガ　眞雅　一四六一—一五三九〔眞言宗〕山城貞觀寺の開山なり、眞雅俗姓は佐伯氏、父は田公、弘法大師空海の弟なり、延曆二十年讃岐多度郡屛風浦に生る、大同四年甫めて九歲、京都に往き空海に就きて眞言を學び、東大寺にて得度す、弘仁十年具足戒を受け、顯密二敎を學修し密敎の祕訣を傳付せらる、天長元年九月廿七日高雄寺定額の例に準して廿一僧を置き師其一員となる、二年三月五日東寺に兩部灌頂の密契を承けて阿闍梨となる、八年六月七日敎王護國寺の道場に於て傳法灌頂兩部の秘印を承く、承和元年九月十三日東寺西院小子坊にて兩部不二大阿闍梨灌頂の極祕印を受傳す、二年三月空海の遺命により、弘福寺及び東寺大經藏の事を托せられ、遂に東大寺の眞言院を委ねらる、四年東寺の入寺供僧に加補せられ、十四年東大寺の別當に任し、職に在るを四年なり、時に聖寶十六歲にして師に投して剃度す、稍長して後、師之に無量壽の法を授く、嘉祥元年六月二十八日權律師となり、九月二十日正律師に轉す、天皇特に召して宮中に眞言三十七尊の梵號を誦せしむ、三年三月二十五日淸和天皇降誕したまふ時、師初め大和國藤原良房の請に依りて染殿皇后の爲に尊勝法を修す、既に天皇生れ給ひてより以來、常に宮中に徵されて日夜左右に奉侍す、仁壽二年十月二十五日少僧都に昇り、齊衡三年十月十八日大僧都に進む、貞觀元年三月十九日年度を嘉祥寺の西院に置かんことを請ひて許さる、二年二月師先任上﨟の眞紹を超えて長者に補せら

眞雅僧正

る、三年十一月父に宿禰姓を賜ふ、六年二月十六日僧正に任し、法印大和尚位に階す、同日師の請により故空海に法印大和尚位を勅賜す、十四年三月十四日正法務を管す、仁壽の初年相國忠仁公天皇の不豫を憂ひて師と謀りて更に寺を剏せんと請ひ、乃ち毘盧の寶塔を建て、尊勝の金像を彫り、灌頂堂を立つ、師自ら東堂を建てゝ安置す、七月十一日表を上りて退隱せんとすれとも許されす、後、上表二度に及へとも猶許されす、九月廿一日貞觀寺に定額十六僧を置き、尙ほ增補せんことを命せられ、十七年六月廿三日宮中に雨を祈る、十八年八月二十九日勅して貞觀寺に座主を置く、元慶二年二月奏請して嘉祥寺に定額七僧を置く、同三年正月三日寂す、壽七十九、臘六十一、寺務十九年法務八年、著作胎藏次第二卷、普賢延命口決、大勝金剛次第あり、(元亨釋書、密宗血脉鈔、本朝高僧傳、弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、諸宗章疏錄)

シンガ　眞我　シハク祖白を見よ、

シンカイ　眞海　(……)　〔眞言宗〕山城醍醐山勝俱胝院の僧なり、眞海初め巧安と稱し、字は行善房太輔律師といふ、定海大僧正の高弟たり、幼より書を好む、定海の命を受け、宋に入りて書を學ふ、在留六年の後、盛譽大に揚かり、法眼に叙せらる、寂年、及ひ壽缺く、(續傳燈廣錄)

シンカク　眞覺　(一六三七)　〔天台宗〕比叡山の僧なり、眞覺權中納言藤原敦忠の第四子なり、官、右衞門佐に至る、康保四年出家し、師に就きて金剛胎藏兩界法、幷に阿彌陀供養法を受けて三時に修す、小病あり、同法等に語りて曰ふ、尾の長き白鳥あり、去來去來と囀りて西に飛ひ去る、閉目すれば極樂の相髣髴前に現す、と、入滅の日誓願して曰ふ、我れ十三年修する所の善根、今月惣て極樂に回向せむ、入滅の後、三人共に夢中衆僧が龍頭舟に上り來迎し去りたることを見たり、と、(往生極樂記、本朝高僧傳)

シンカク　眞覺　一九九〇—二〇五九　〔曹洞宗〕加賀佛陀寺の開山なり、眞覺字は了堂、和泉結崎人、俗姓は平氏なり、十七歲にして奈良龍華院願顯に投して出家し、尋いて具足戒を受け、東山の永久寺の僧となり、三密の敎を習ふ、會々三光國師紀伊の能仁寺に開法するに方り、師衣を更へて弟子の列に入る、時に年二十四、後北陸東海に遊ひ、不一復菴珍山祖一心悟の諸老宿に歷參す、三光の寂後總持寺峩山に參し、貞治二年大源宗眞近江上野の報恩寺に住するを聞き、往きて之に參す、大源加賀の佛陀寺住にするに方り、師を侍司となす、後、入室して衣法を受く、時に應安二年八月なり、嘗て南遊の志ありしが、同六年十月攝津より發船し颶風に遭ひて薩摩羽島に漂着す、乃ち其地に庵を結ひて居る、市來邑の豪族某萬年山金鐘寺を剏し、師を開山とす、至德元年和泉の信官補巖寺を剏して師を迎ふ、明德四年席を智巖に讓りて退隱す、應永六年七月二日寂す、壽七十、偈あり、生命盡處、已一息中、淸風匝地、八面玲瓏、法嗣大容梵淸、竹窻知巖、奇叟黒珍の三人あり、(日本洞上聯灯錄)

シンガン　眞巖　ドークー道空を見よ、

シンキ　眞喜　一五九二—一六六〇　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、眞喜俗姓は平民伊勢多氣郡の人なり、出家の後空晴僧都に師事して法相を學び、大義に通ず、應和二年の宮會に第四座の

問者となり、園城寺智興と宗義と對論し、君臣をして其博識を驚かしむ、天延三年維摩會の講主となり、喜多院に居りて慈恩の敎を說く、永祚元年三月常春日神祠に幸し、師を召して權大僧都に任じ、尋で法務を兼ぬ、正曆の初め藤原道隆積善寺を建て諸山の衆僧を招きて落慶供養をなし、師を以て導師とす、帝寺に幸して其法儀を見敕して權僧正となす、此年興福寺を主どり、五年、正僧正に昇る、長保二年二月七日寂す、壽六十九、(本朝高僧傳)

シンギ 眞義 (一三五三)〔……〕 大和の僧なり、 眞義は持統天皇七年十二月勅を拜して、法員、善往等と共に、近江益須郡の醴泉を撿す、示寂の年時幷に壽歆く、(日本書紀、本朝高僧傳)

シンキヨー 眞慶 (二〇三五)〔眞言宗〕攝津天王寺の別當なり、 眞慶は宰相僧都といふ、諸師の法脉を受けて天王寺の別當となる、密說を僻解して大邪見を增長し、非法濫行にして妻妾を寵愛し子を生む、初め小野の勸修寺の衆に加はりしか、宗門より擯斥せられ天王寺に居り、不淨を行ひて天王寺流と稱す、付法一人增瑜といふあり、(後傳燈廣錄)

〔考〕 眞慶は初め勸修寺流を傳ふ、即ち嚴覺、眞勝、眞弘、眞慶の次弟なり、眞慶に至りて邪說を唱ふ、當時仁寬立川流唱へ、女犯を以て罪せられしかば、眞慶は眞言宗に於て女犯は行ふも可なりとの意見を主張したり、天授前後の人なり、

シンキヨー 眞慶 一八六四/一九四〇 〔天台宗〕近江國城寺の學頭なく、眞慶は其卿貫詳かならず、賢運に師事して天台の敎觀と學び、大に宗風を興す、當時三井に四傑なり、師は其一人と稱せらる、少僧都に任し、本寺の學頭となる、弘安三年三月十二日寂す、壽七十七、(三井續燈記)

シンキヨー 眞敎 ……/一九七九 〔淨土宗西山派〕山城金光寺の開山なり、 眞敎號は他阿彌陀佛、俗姓は源氏、京都の人なり、一遍智心に師事して淨土宗西山派の學を究め、諸國を遊歷して念佛行化し、大に道光を振ふ、世に遊行上人と稱せらる、京都七條金光寺相摸藤澤無量寺等は師を開山となす、元應元年正月二十八日寂す、壽歆く、(淨土總系譜)

シンキヨー 眞敎 ダイレン大廉を見よ、

シンキヨー 眞境 (……)〔眞言宗〕祖空海上人の弟子なり、 眞境俗姓は弓削氏弘法大師に就きて瑜伽敎を學ぶ、寂年、及び壽歆く、(弘法大師弟子譜)

シンキヨー 眞曉 (……)〔眞言宗〕祖空海上人の弟子なり、 眞曉生國俗姓詳ならず、弘法大師の徒弟なり、詳傳なし、(弘法大師弟子譜)

シンクー 眞空 一八六四/一九二八 〔三論宗〕 京都大通寺の律僧なり、 眞空字は廻心、自ら中觀と號す、俗姓は藤原氏なり、幼にして奈良の東南院に入り、定範法師によりて落髮し、圓寺の貞禪定舜に從ひて三論を習ひ、其奧義に達す、二十歲にして登壇受戒し、諸方に歷遊して性相學を究め、久しく醍醐寺の理性院にありて行嚴阿闍梨に兩部の灌頂を受け、小野廣澤の二流を究め、奈良に皈りて敕により律師となる、時の人皆師の名を呼ばずして東大寺の碩才と稱す、嘉禎三年大悲菩薩松院に移り律場を開くに方り、師重ねて滿分戒を受け、寬元の初め木幡の觀音院に住し、大に戒律を唱ふ、時に聖一國

師宋より返り、普門寺に住す、師其禪敎に通ずるを聞き錫を掛けて參禪し、宗鏡錄を聽き、三論の旨を決す、建長三年實相照師を戒壇院に迎へて法華疏三論玄義を講せしむ、高野山の榮信阿闍梨師を招きて三昧院に主たらしむ、弘長元年具支灌頂を行ひしに、中性性院の賴瑜音、木幡寺の明道性の如き、四方の大德來り敎を受くる者多し、二品本覺禪尼師の德を崇び、聽法受戒し、西八條の亭を改めて佛寺とし、師請せられて開山となる、乃ち扁して萬祥山大通寺と云ふ、文永四年鎌倉無量壽院主席缺け、師衆請によりこれに主となり、文永五年七月八日寂す、壽六十五、臘四十二、著作三論玄義撿幽鈔七卷、往生論註鈔十因、文集三廟鈔等あり（本朝高僧傳、後傳燈廣錄、諸宗章疏錄）

シンクー　眞空　一二八九—一三三七　〔淨土宗〕奈良隨曲菴の僧なり、眞空號は稱入、京都の人なり、十一歲にして京都松林菴に投し、稍長して東山に屛居し齊戒を持す、淨業を修し、日課三万遍す、尋きて壬生の唯稱上人、奈良の良乘上人を歷問して淨土敎を究む、後奈良の隨曲菴に住す、延寶四年秋微病にかゝり、東山に歸りて靜養するも醫藥功なく、翌年正月豫め死期を知り、益精勵して佛號を唱ふ、二月六日夜安然として寂す、壽五十、眞空天性慈に愍して同志を勸誘みて貧窶を救濟し、また自ら貨財を棄てゝ阿彌陀の尊像若干軀を修飾せり、（續日本高僧傳）

シンクー　眞空　ニョエン如圓を見よ、

シンクー　眞空　ミョーオ妙應を見よ、

シンクワイ　眞快　バンジョー鑁淨を見よ、

シンクワン　眞觀　一二〇一……　〔時宗〕山城金蓮寺第一代なり、眞觀號は淨阿彌陀佛、上總の人俗姓は源氏、牧野太郎賴氏の子なり、一遍智心眞敎に從つて淨土宗西山派の學を受け、戒を忍性菩薩に受け、禪を法燈國師に詢ふ、洛東祇陀林寺に住し、盛んに其敎を弘む、朝廷詔して寺號を改め、金蓮寺と賜ふ、世人稱して遊行上人と云ふ、曆應四年六月二日寂す、壽欠く、四條派の時宗と云ふは師の門流なり、（淨土總系譜）

シンクワン　眞觀　カンサイ感西を見よ、

シングワン　眞願（一五六三）〔華嚴宗〕奈良東大寺の內供奉なり、眞願は宣して內供奉十禪師となる、華嚴宗の僧なり、延喜三年六月五日官符を賜ひ、十一月八日聖寶に傳法灌頂心印を受く、（傳燈廣錄）

シンゲ　眞化　ゲンジュン玄淳を見よ、

シンケー　眞詣　リョーニン亮潤を見よ、

シンケン　眞賢（……）〔眞言宗〕山城醍醐の學講なり、眞賢は大夫律師といふ、中納言雅賴の子なり、勝賢僧正の法を嗣きて、同山の學講となる、（續傳燈廣錄）

シサケン　眞憲　チョーセー長盛を見よ、

シンゲン　眞源　一二六五—一三九二　〔天台宗〕近江比叡山雞頭院の學僧なり、眞源は播摩國姬路の人なり、同國增位山に登りて出家し、後比叡山に登り凌雲院覺林房豪潤に師事して天台の宗義を定め、尋て東大慈院に投し、享保十四年九月雞頭院に住し、同院天正再興後第十代の住持となる、同十七年（一說十八年）雞足院に遷り、同院天正再興後第十四代の住持とな

る、同十七年播磨に皈り、增位山に住し、同年(一說十八年)四月十四日寂す、世壽二十八法臘十五なり、眞源顯密の學に通し、殊に梵語に達す、著作梵語雜名一卷等世に行はる、(天台宗史料)

シンゲン　眞玄(……)〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、眞玄は號太白と云ひ、太淸禪師の下にありて大事因緣を究め、屢々諸刹を經て東山の建仁寺に昇り、晩年南禪寺の大周軒にありて寂す、其年時、及壽欠く、著作語錄、並に鵶臭集あり、(本朝高僧傳)

シンコー　眞廣(……一九七一)〔日蓮宗〕京師法華寺の開山なり、眞廣は元眞言宗東寺の僧なり、寶治二年日蓮に見え、別れて後ち卅年弘安四年の春老躯を厭はず嶮を越え身延山に至り、法を受けて衣を更へ、復東寺に皈り、應長元年五月二日寂す、後ち其東寺の門前なる舊跡を開敎の場となす、今の法華寺是れなり、(本化別頭佛祖統紀)

シンコー　眞興(一五九四—一六六四)〔法相宗〕大和子島寺の學僧なり、眞興俗姓生國詳かならず、幼より松室の仲算僧都に師事して慈恩疏を學び、兼ねて因明を稟く、子島寺に住して法相宗を講究す、長保年維摩會講主となり、寬弘元年詔により最勝會の講師となり、權少僧都に任し、此歲十月二十三日寂す、壽七十一、後人師の德を崇び其名を呼ばず子島先德と云ふ、著作唯識章私記十二卷、般若經音訓四卷、觀普賢略釋、般若心經略釋、各一卷四相違記、瑜伽略頌、瑜伽文義次第各二卷、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シンコー　眞幸(……)〔眞言宗〕西方院の僧なり、眞幸字は大和法橋といひ、本と小野眞慶の弟子なり、廣澤の門に入りて眞助の法を受く、嗣法の弟子祐尊、覺曜、智源り、(傳燈廣錄)等

シンサイ　眞際(……)〔眞言宗〕祖空海上人の弟子なり、眞際其俗姓詳ならす、空海に就きて密敎に通す、大師にあ先ちて寂す、(弘法大師弟子譜)

シンサイ　眞濟(ゼイ)(一四六〇—一五二〇)〔眞言宗〕山城神護國祚寺第二代なりし、眞濟俗姓紀氏、京都の人、武內宿禰二十世の孫にて、父は巡察彈正大弼正六位上御園(御園一に御國に作る)なり、延曆十九年に生る、幼年句讀を勤め世典に詳しく且詩賦に巧なり、出家して空海に師事し、大小乘を習ひ、專ら密敎を研究す、弘仁十一年空海師及大安寺の幹海を携へて關東に遊び、伊豆桂谷寺に往き、下野の補陀洛山に登り、四本龍寺に寓し、山名を更めて日光山と號す、師も亦別に寺を湖北の鉢山に建て、法華山密嚴寺と云ふ、天長の初め師既に兩部の大法を承け、傳法灌頂阿闍梨となる、時に年二十五にして、異數の出世なり、三年十一月三日空海より高雄山にて、親しく祕契を授かり、七年十一月十五日曼陀羅次第法、並に諸行事種々の祕要を附せらる、九年十一月空海火食を斷ちて禪味にふけり、高野山に歸へるに及ひ、遂に高雄寺を師に讓る、承和元年十一月十五日師空海の遺命を受けて宮中眞言院を監す、三年五月十四日藤原常嗣小野篁等入唐せんとするや、師命を奉して眞然と共に之に從ひ、七月の初出發し途中颶風に逢ひ、萬死を冒して二人漸く助かるを得、京師に歸へりて舊寺に復す、四年七月嵯峨天皇皇子從四位上源朝臣鎮師に投して髮

を錫り、白雲禪師と稱す、七年正月内供奉十禪師となる、一說に師之より先愛當護山に登りて出てさること十二年、嵯峨上皇其苦行を愛て丶此を授くと云ふ、十二月五日には本寺の別當に補せらる、十年十一月九日權律師に任し、二の長者に加へらる、長者に二を置くはこれより始るなり、十四年四月二十三日正律師に轉し、十一月九日一の長者となり、寺務を司とる、仁壽元年七月十七日文德上皇の特寵により少僧都に敍し、三年四月十七日神護寺の年度を賜ひ、承和二年正月廿三日殊に年分度者を給せられ、毎年九月廿四日金剛寺に課業を試み、得度せしめらる、奏請して神護寺に三人の度僧を置かんとし許さる、師先に上表して神護寺に五重の塔を建て、五大虛空藏の像を安し、僧七名を置き、春秋二節大法會を設け、空虛藏十輪等の經を轉讀し、國家を鎭護せんことを永式とし、此に至りて年度を置けり、十月廿五日權大僧都に任す、此任も亦た師に始まるなり、齊衡三年十月十八日僧正となる、眞言家の僧正となるも亦師を以て始とす、天安元年十月廿七日師の奏請により弘法大師に大僧正を追贈せらる。同二年十月職を辭するも許されす、貞觀二年一月二十五日寂す、壽六十一（一說に六十二）世に之を高雄僧正、一に紀僧正と云ふ、著作遍照發揮性靈集十卷（弘法大師の詩文を集め自ら序を書したるもの）胎藏界念誦私記、大悲胎藏曼荼羅中修一切佛母念誦法、金剛頂佛眼佛母瑜珈供養次第法、金剛吉祥一切成就宿曜祕記、金剛胎藏總行五部肝心記、佛部佛供養法、八字曼殊童子大聖持念略儀、寶金剛菩薩瑜珈法要、大佛頂陀羅尼梵漢諸本鈔集、略出經三十七尊契印諸本鈔集、空海僧都傳、高雄口訣各一卷、孔雀經諸本鈔集六卷、別行鈔一帖性靈集序あり（弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、諸宗章疏錄）

シンサツ　眞察　二三三〇／二四〇五　〔淨土宗〕山城知恩院の第五代なり、眞察圓阿と號す、俗姓武氏美濃の人なり、早歲父を喪ひ、出家を志し、武藏無量山に登り、懷龍に投して落髮受戒し顯密二教を學び、宗戒兩脈を春岳上人に受く、後、增上寺に移り、日夜研究三十餘年に及び、貧窶自ら甘んず、幕府の命により新知恩寺に住し、大に法幢を建て、次に總州壽龜山相摸鎌倉天照山に歷遷し、元文三年京都知恩院に住し、大僧正に任ぜらる、師華頂山知恩院にあること八年、大に宗風を振ひ、延享二年三月疾に罹り、四月日右手に數珠を執り、左手阿彌陀經を持ち、佛名を唱へ、睡るか如く寂す、壽七十六、臘六十八、著作布薩辨十念章等和解一卷等數十卷あり（眞察大僧正傳、日本高僧傳）

シンジヤク　眞寂（一五六三）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、眞寂は宇多天皇の子、初めの諱は齊世と云ふ、延喜三年金剛覺空理の室に投して落飾受戒す、時に十六歲なり、二十三歲の時胎金兩部の灌頂法を受け、益信の示寂後園城寺に住す、時の人園城王子と云ひ、眞如阿闍梨の再身と稱す、寂年及ひ、壽缺く、著作大日經對注、胎藏後出七日灌頂記、胎藏諸藏普通曼荼羅種子印形尊位不同記、胎藏曼荼羅指事、胎藏尊坐位撰集、胎藏曼荼羅尊號略頌、胎藏持明五事結護法、金剛界持明四事結護法、具支念誦私記、蘇悉地護摩鈔、妙成就持明事結法、供養護世八天私記、施一切鬼神食呪施八方天私記、四種護摩壇諸要集、文殊所說宿曜經音義、七日行法祕密成就

集、印度震旦兩國月朔不同記、一法界理趣法、胝醯摩訶曼荼羅壇圖、不灌鈴、各一卷、九曜攘災雜要二卷胎藏成就瑜伽本文鈔、胎藏成就瑜伽私記、具緣建立護摩支分通法鈔、金剛頂護摩鈔、孔雀經意義、各三卷、蘇悉、地羯羅成就要六卷、諸說不同記十卷梵漢、相對鈔二十卷、梵漢、語說集百卷、普賢延命次第一帖、胎藏成就祕要、胎藏本說曼荼羅壇圖、阿闍梨所傳曼荼羅壇圖、金剛界九會曼荼羅鈔記、金剛界契密語集鈔、大樂不空眞實三昧耶經十七尊念誦次第法、大樂十七壇圖、蘇悉地十四壇圖、施穌、宿曜略鈔、各若干卷あり（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シンシユー　眞宗　キショーニ宜詳尼を見よ、

シンシユン　眞俊（……）〔天台宗〕肥後飯田山の學僧なり、眞俊は少歲より比叡山に上り、座主忠尋に從ひて天台を承け、皇慶の門裔に就きて密灌を受く、其後、高野山に登りて心蓮に隨ひて南院の流を傳へ、俊覺法師に謁して中院の法を受く、凡そ顯密の二教大小の諸疏皆一として盡さゝるはなし、寂年、及ひ壽缺く（本朝高僧傳）

シンジユン　眞淳　二四〇七／二四六七〔眞宗〕伊勢三重郡川原田常超院住持なり、眞淳字は普嚴といひ、金光明院と號す、眞證和尙の眞弟にして、智慧光院の主たり、元文元年十月二十三日生る、幼より學に志し、壯年にいたりて笈を四方に負ひて、普く諸大德に歷詢す、比叡山に上りて天台敎を學ひ、京都に出てゝ德門律師等により性相及ひ華嚴の深旨を受け、又備中國井山の大雲禪師に就きて佛心宗の微旨を硏き、普く諸宗の法門に該通し、旁ら岡龍洲那波魯堂によりて外典を學ひ、殊に

文章に力を用ゆ、後國に歸へりて深く道心を發し、身に圓頓戒を護持し、口に念佛を專修す、廿七歲の秋先師眞證寂するや、師其遺訓を受け、悲嘆の餘りに西方辨岐二卷を著して追孝に擬す、四十歲にして少僧都法眼に任せられ、五十六歲大僧都法印に敍せらる、寬政八年二月六十一歲にして高田派專修寺第十八代法王の命を奉して學頭となり、遂に朝奏して權僧正に任す、同寺第三代顯智上人の先蹤に傚ひ、妙法院宮の令旨を蒙り、その支院光明王院の兼住となる、天明寶訓誘蒙記を著して一流安心の正意を述へ、法語の科記一卷を著し、當時の邪見を匡正して正信を得せしむ、其寶訓及ひ法語は本寺の法主の下せしものなり、下野傳戒記及ひ大戒秘要を撰し之を勸學堂に講して戒律を說き、一門の行業を嚴整す、文化四年四月病にかゝり、五月二十九日寂す、壽七十二、臘六十一（新選念佛往生驗記、玉樹眞凝氏返信）

シンジヨ　眞助（……）〔眞言宗〕京都上乘院の僧都なり、眞助は京都の人、常陸守國房の子、定覺の弟にして、且つ定覺の付法の弟子なり、詔して太元別當に補す、弟子有眞、眞幸、智源、覺曜等あり、（傳燈廣錄）

シンジヨ　眞助　シンチン眞徹を見よ、

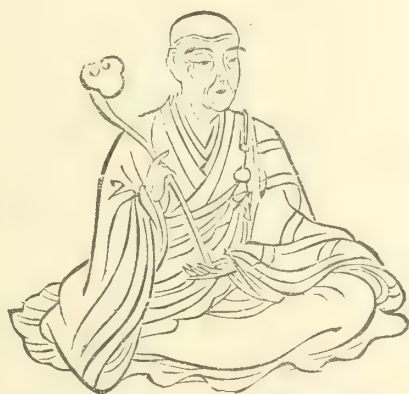
シンシヨー　眞性　一八二七／一八九〇〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、眞性は後白河院の孫以仁王の子、母は民部大輔忠成の女なり、出家して契中慈圓に台敎を學び、建仁三年八月二十八日天台座主に任ず、寬喜二年六月十四日寂す、壽六十四、（天台座主記）

シンシヨー　眞性　一八九六／一九六四〔戒律宗〕大和招提寺の律僧な

り、眞性號は勝順と云ふ、出家して業を圓律玄に受け、三藏に精通し、律篇に達す、圓律の寂するに及び、衆請により招提寺の第三世となる、嘉元二年二月一日寂す、壽六十九(律苑僧寶傳、本朝高僧傳)

シンシヨー　眞盛　二一〇三 二一五五　天台宗眞盛派の開祖なり、眞盛は俗姓紀氏貫之十七世の孫、伊勢國壹志大仰郷の人なり、母は西川氏、常に地藏菩薩を信し、靈夢を感して師を生む、蓋し嘉吉三年正月廿八日なり、小字を寶珠丸と云ふ、幼にして出家の志あり、寶德元年四月八日七歲にして父の意を受けて郡の光明寺盛源の下に投し、康正二年四月三日十四歲にして得度し、眞盛と云ふ、長祿二年八月四日父の喪に遭ひ、十六歲出遊して尾張の密藏院に至り、瑜伽を研究して三年を過く、寛正元年八月十八歲伊勢天照太神宮に詣し、擁護を祈願すること三七日、靈夢を感し比叡山に登らんとす、適、渡會郡の兵衞太夫と云へる者あり、外養を約す、二年二月十九歲、遂に比叡山に登り、西塔北上房(後に行榮院と云ふ)に入り、南上房(後に眞藏院と云ふ)慶秀に師事し、二十年の間專ら學解を事とす、應仁元年二十五歲五瓶灌頂法を傳へ、阿闍梨位に進む、文明七年十月三十三歲東塔法華の盛莚に列り、傳燈法師位に任せらる、九年三十五歲大乘會講師となり、權大僧都に任せらる、探題慶秀に從うて圓戒灌頂を傳ふ、十四年十二月十四日四十歲母の喪に遭ふ、十五年四十一歲黑谷青龍寺に幽棲し、大藏經を閱し、日課念佛六萬聲を修す、十七年六月四十三歲比叡山淨土院の阿彌陀堂に詣し、大菩提心を祈願すること三七日、靈夢により慧心の往生要集を感得し、十八年正月四十四歲青龍寺に於て摩訶伽羅神の法を修すること一千過、靈夢に感す、二月比叡山麓の生源寺に於て往生要集を講演すること一七日、學徒雲集す、三月晦日楞嚴大衆の請により西敎寺を再興して念佛道場となす、蓋し西敎寺は慈惠慧心の遺蹟にして、久しく荒廢に歸したりしが、師再ひ經營して佛殿、方丈、鐘樓、僧厨、寮舍、浴室等四十餘棟煥然として觀を改む、因りて中興第一世となる、長享元年九月朔日四十五歲日吉神社に詣し、十禪師に至る、適一猿あり袈裟の角を捉ふ、師乃ち十念を授く、二年三月五日四十六歲大將軍義政の請により東山の第に至り圓頓戒を授け、瑜伽の供具、木蘭袈裟一副青錢五百緡を贈らる、師唯供具袈裟を留め、餘は洛東の元應寺に寄附す、再ひ義政の請により、京師誓願寺に至り七日の間法を說く、四月疾あり法橋幸叡問候す、八月信濃善光寺に詣し、途、越前を過き、引接寺に留り、往生要集を講演す、學徒雲集して數を知らす、一乘谷に於て神社の馬に十念を授け、且つ狂人を化す、其月廿八日守護朝倉貞景の請により法を說く、廿九日西敎寺に皈るに臨み、安養寺に寓し、適、大鷹の飛來るを見て十念を授く、延德元年正月廿五日四十七歲西敎寺に於て始めて六八日の念佛會を設く、四月再び越前に遊び、朝倉氏の家臣上田某の請により岡莊に西光寺を開き、六月四日落慶す、二年四十八歲伊勢に遊び、觀音寺に法を說き、道俗の請により西來寺を開く、弟子盛算、盛品、相續て住す、八月越前に遊び、慈視禪師光玖と云へる者の請により土橋卿の道場に於て一七日の間法を說く、平泉寺の大學院某の請により阿彌陀佛號を書して與ふ、光玖の請により大野

シン(眞)シ

肥の蓮光寺蓮二寺を不斷念佛道場となす、明應元年正月五十歲伊賀の西蓮寺に寓し、十五日始めて六八日洪名會を開く、西蓮寺は傳敎大師の遺跡なり、師其荒廢を興し中興第一世となる、三月十日後土御門天皇の勅召を拜し淸涼殿に昇る天皇は圓頓戒を受けたまひ、皇太子（後に後柏原天皇となる）は十念を受けたまふ、其月河内の國守畠山義就の强請により其地に至り一七日の間法を說き、且つ一字を開く、五月越前西光寺に寓し、亡靈を吊慰して阿彌陀佛號一百萬聲の法會を修す、十二月二十七日後土御門天皇宸翰眞盛上人の四大字を賜ひ、皇太子は上人の自贊を親書して賜ふ、二年正月五十一歲伊勢西來寺に至り六八日の念佛會を開く、九日師西敎寺に還る、比叡山東塔の實報房賴全來附して弟子となり、改めて盛全と云ふ、八月二十二日伊勢の北畠村親近江の佐佐木高賴亂し、佛閣神祠を燒毀す、師人を遣はして切に諫む日吉二、宮十禪師神祠に於て土族四百餘人蜂起し、比叡山の僧徒一百人亦出て相鬪ふ、僧徒事に托して西敎寺を圍み、師を擯す、十九日師危難を逃れて越前に適く、十二月七日比叡山三塔の探題師に書を寄せ、僧徒の暴擧を陳謝す、三年五十二歲越前に留り、敎化大に盛なり、青蓮院尊傳法親王特に書を寄せて出離の要道を問ひたまふ、師答書を修め、具に淨土敎の深意を說く、法親王南無眞盛上人の六大字を親書して賜ふ、三月二十三日西敎寺に還り、八月伊勢に行化し蓮生寺を開く、十月北畠敎具の執政經成の請により小倭莊に成願寺を開く、其月牛に十念を授く、四年正月五十三歲伊賀西蓮寺に於て再び六八日の稱名會を開く、二月奈良の道俗相率ゐて至りて敎を受け、墨一笏を呈するも師已に畜ふるところあり、餘長を欲せすとて、遂に之を却く、二十九日疾あり、晦日に至りて彌重し、午時自ら往生の期至れりとなし、懇に弟子を敎訓し、端坐合掌し阿彌陀佛像に對し寂然として化す、實に明應四年二月晦日酉時なり、世壽五十三、法臘三十九、六日弟子相謀り遺骸を西蓮寺に葬り、十日西敎寺に於て六八日の稱名會を修す、師著作法語二篇、創建再興十五寺、淨書阿彌陀佛號十萬に餘る、法系を嗣く者、西敎寺盛全、西來寺盛算、引接寺眞慶、蓮生寺盛音、手度の弟子眞生、眞遍等二十六人、尼及び俗弟子五百人なり、後柏原天皇永正三年十月十二日勅して圓戒國師の諡號を賜ひ、今上天皇明治十六年六月二十六日勅して慈攝大師の諡號を賜ふ、（眞盛上人別傳、往生傳、西方尼寺傳、本朝高僧傳、緇白往生傳）

眞盛上人

シンシヨー 眞照（一九二二）〔……〕京都增福寺の律僧なり、眞照號は實乘と云ふ、京都の人なり、幼にして圓照

律師に投じて落髮し、三聚戒を受け、成光寺淨因に就て諸律疏を質し、泉涌寺思允に天台の觀法を學ぶ、文應元年海に航して宋に入り廣福寺妙蓮律師、竹林寺行居律師を拜して三大律鈔を決究し、弘長二年皈朝して圓照を省し、戒院の衆首に居し、日々法華義疏、三論玄義、戒本羯磨の兩疏、刪補鈔、梵網鈔記等を講演し、圓照に侍すること前後二十五年、後、京都增福寺に住して、大に講肆を張る、寂年、及壽欠く（本朝高僧傳）

シンショー　眞昭（……）〔曹洞宗〕土佐豫岳寺の開山なり、眞昭字は雪心、石見の人、覺隱永本禪師に師事し、業積みて分居說法し後總持寺に出世せしが退いて土佐に往き、豫岳寺を開き尋で闢雲寺に遷る寂年欠く、（日本洞上聯灯錄）

シンショー　眞紹（一四五七 一五三三）〔眞言宗〕山城禪林寺の開山なり、　眞紹俗姓詳ならず、十歲にて空海に師事し、諸の密軌を習ふ、初め大安寺に住し、弘仁十二年具足戒を受け、東大寺に隸す、天長七年十二月五日東寺の少別當に補せられ、幾もなくして內供に拔擢せらる、十年十一月廿七日一門の上﨟等の奏請により十二月十六日傳法の職位を賜ふ、十四年四月廿三日權律師に進み、十一月二の長者となり、嘉祥元年六月二十八日正律師に轉す、貞觀五年九月六日許されて河內觀心山寺に毘盧遮那佛、及び四方の佛像を造り、三年の後工事了る、京都なる從五位藤原朝臣關雄か東山の弟を買ひて禪林寺を創む六年二月十六日法眼和上位權少僧都に叙し、十一年正月廿七日正に轉す、十五年七月七日禪林寺に寂す、壽七十七、臘五十三、人師を稱して禪林僧都、又は石山僧都と呼ふ、師生前禪林十五條の寺規を定む（弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、元亨釋書、本朝高僧傳）

シンショー　眞照（一五三九）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、　眞照本名は眞祠、出家して華嚴敎を學び、貞觀元年東大寺別當に任し、幾何ならずして辭し、元慶三年二月四日再び別當に任し、元慶某年寂す、壽缺く、（東大寺別當次第）

シンジョー　眞乘（……）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、　眞乘字は爲全、長門の人平時繼の弟なり、出家して洛東小坂に居り念佛聲明に長ず、多年圓照に侍して病牀に奉給す、寂年、及壽欠く（本朝高僧傳）

シンジョー　眞乘　リョーエ亮惠を見よ、

シンジョー　眞淨　ゲンミョー元苗を見よ、

シンジョーイン　眞淨院　センガン千巖を見よ、

シンセー　眞政　エンニン圓忍を見よ、

シンズイ　眞瑞（二四三二 二五〇三）〔眞宗〕安藝善敎寺第十一代なり、眞瑞は安藝國郡燒山村圓福寺第十代宅淨の弟なり、安永元年に生る、少壯の時武陵の大運に從ひ修學數年、大運の歿するに及ひて家居獨學、螢雪倦むことなし、後、賀茂郡田口村善敎寺に入りて其第十一代となる、時に四十一歲なり、爾來職に在りて力を竭くすこと十有餘年、前住職の子稍長じて職に當るに堪ゆるを見て、決然退隱し、近隣學侶の望に應して帷を下し、敎授を事とす、不日にして負笈の徒門に滿つ、天保十四年十月司敎に進み、同年十二月病を以て沒す、享年七十二歲なり、著作多く散逸し、唯た略書講義、唯信義講義、成就文講義等の數部現存す、（學苑叢談）

シンタイ 眞體（一四八六）〔眞言宗〕山城神護寺の僧なり、眞體は和氣朝臣の子にして、早く父母を喪ひ、幼妹を家に遺して空海に投して剃髪受戒す、妹寂後家産を擧けて高雄寺の燈資とす、是れ天長三年十月八日のことなり、詳傳缺く、（弘法大師弟子譜）

シンタイ 眞泰（……）〔眞言宗〕大和牟漏寺の僧なり、眞泰其俗姓生國詳ならす、大和牟漏寺に住す、弘法大師の上足なり、寂年、及ひ壽缺く、（弘法大師弟子譜）

シンチン 眞儆（一九三一……）〔眞言宗〕山城醍醐山無量壽院第六代なり、眞儆初めの名は眞助、字は妙性と云ひ、左大臣法印と稱す、尙書公宣の子、閑院左大臣藤原實房の孫なり、仁和寺菩提院の大僧正行通に依りて灌頂を受け、鎌倉金澤に性名寺を剏し、開山となる、後、席を審海に讓りて歸來し、淨眞の淨を嗣き、松橋第六代に座す、又師命に因りて意教、の傳を承く、文永八年十二月十四日寂す、壽缺く、（續傳燈廣錄）

シンチユー 眞忠 カクショー覺昭を見よ、

シンチヨー 眞超（二三一九……）〔天台宗〕近江西教寺の學僧なり、眞超は京都の人、俗姓は齊部氏、初め日蓮宗に歸し、日迢と云ふ、後眞超と改む、妙顯寺に住し、日蓮宗學を究めて、未だ意に滿たず、寛永十一年十月十二日夜諸佛に解脱の法を祈禱す、靈驗を感し、念佛三昧に入る、手から八宗の鬮を作りて前佛に捧げ、天台宗の鬮を探り得たるを以て、即ち日蓮宗を改めて、天台宗に歸す、翌年比叡山に登り、首楞嚴院に寓し、日課念佛六万日々怠らず、數々靈驗を感ず、十七年攝津有馬に遊びて溫泉に浴し、行者用心集を讀み、益念佛を勵み、淨土往生を願求す、後、天海僧正に召されて江戸に下り、東叡山に止まる、未だ幾何ならずして叡山に歸り、橫川に止まり、舜統院と號し、大僧正に任せらる、尋で近江西教寺に住し、圓頓戒を擧行し、淨土教を弘通す、晩年醍醐に閑居し、明星山極樂寺を創開し、不斷念佛を興す、幾何もなく諸國に巡遊して法化盛んなり、万治二年十一月京都因播堂に寓して疾に罹り、十一月二日正念にして寂す、壽詳かならず、著作法華玄義訓釋玄籤十四卷、四敎義解新鈔六卷、西谷名目鈔六卷、觀心異論譯、念佛選擢評、十宗畧記、破邪顯正記等あり（續日本高僧傳）

シンテキ 眞滴（二一七八 二二三一）〔日蓮宗〕山城本誓寺開山なり、眞滴號は釋源院、俗名は竹内年治と云ひ、正三位に叙せらる、出家して眞滴齋と稱し、風月を友とし、和歌を善くす、晩年山城久我に閑居し讀經唱題を事とす、元龜二年九月二十八日示寂す、壽五十四、後人久我の草庵を更めて久我山本誓寺と云ひ、眞滴を立て開山とす、（本化別頭佛祖統紀）

シントー 眞統（……）〔天台宗〕山城月輪寺の僧なり、眞統は其俗姓生國詳からず、愛宕山月輪寺に住し、常に法華點を脩す、寂年、及壽欠く（本朝高僧傳）

シントー 眞等（……）〔眞言宗〕祖空海上人の弟なり、子眞等其詳傳なし、只弘法大師の弟子たるを知るのみ、（弘法大師弟子譜）

シンニン 眞仁 ミョータツ明達を見よ、

シンニヨ 眞如（一五四四）〔眞言宗〕大和超昇寺の高僧な

り、眞如初の名は高岳(タカオカ)(一に高丘)親王、平城天皇の皇子、母は贈從三位伊勢朝臣繼子正四位下勳四等老人の女なり、大同三年に平城天皇勅して山城國久世郡の地六町を賜ひ、嵯峨天皇の朝に方りて立ちて皇太子となる、弘仁元年九月平城上皇尙侍藥子並に其兄仲成の言を用ひて重祚を謀り給ふ、事ならずして上皇落飾し給ひ、師其謀に與かり給はざりしも、此事變の爲め皇太子の位を廢せられて親王となる、後、幾もなく出家し、法號眞如と稱し、後に字號を遍明といふ、奈良の諸大寺を歷問して道詮、修圓に三論法相の敎義を受け、禪林寺宗叡より經論の深意を傳ふ、後、空海を訪ひて弟子となる、兩部の灌頂を受け、阿闍梨位を得たり、承和二年勅あり奈良水陸の地四十餘町を賜ふ、師始め高野山に居り、後、大和宇知郡の山中に河窓院を營みて隱棲し、後、山城西芳寺に指東菴を營みて幽棲す齊衡二年九月勅を拜して修理東大寺大佛司檢校となり、奈良に到り專ら大佛修理のことを經營す、工事六年に亘り、貞觀三年に至りて全く功を竣り、同三年に東大寺に無遮大會を修行し、慶讃の盛典を擧く、其後奏請して諸國を經行せんとし、太政官より諸國司に符を下し師を供養すへき山を命せり、然るに唐に航せんとの志を起し、再ひ奏請して勅許を得、三年六月十九日奈良の禪院を出て、攝津難波より船を發し太宰府に至り、翌四年七月太宰府を發し西航す、同行には禪林寺宗叡等あり、九月七日唐の明州に着す、即ち唐の懿宗咸通三年なり、貞觀六年十二月に至り、上陸して北行し、沿道の諸大寺を歷問し、貞觀七年即ち唐の咸通六年五月二十一日長安に着し、留學僧圓載の奏聞により懿宗に謁し、阿闍梨法全を訪ひて祕密灌頂を受け、圓載によりて印度行の官符を請ひ、南方廣州に向ひ、貞觀八年即ち唐の咸通七年正月七日廣州を發し、嶺南道より雲南の山中に入り、印度に向ふ、其後全く消息を絕す、其前年即ち貞觀七年宗叡等歸朝し、師か印度行の事を奏聞す、師か出家以前の王子なる大和守從四位上在原朝臣善淵、前肥後守從五位上在原朝臣安貞等上表して師の封邑を返附せんと請へとも敕ありて師の存亡知りかたけれは許されす、陽成天皇元慶三年に至りて始めて許されたり、同八年に至り留學僧中瓘遙に上申して師印度行の途中流沙を渉らんとして羅越國に於て逆旅に寂せしことを傳ふ、蓋し羅越國は今の老撾なり、師出家前の著作瑜祇經疏一卷、胎藏次第一卷あり、弟子壹演、由蓮、隆海等聞ゆ(高岳親王事蹟)

〔考〕　高岳親王の事は諸書に散見せり、即ち文德實錄、三代實錄、帝王編年記、高野春秋、密宗血脈鈔、弘法大師行狀集記、弘法大師廣傳、弘法大師弟子傳、頭陀親王入唐略記、撰集抄、春湊浪話等に散見せり、余嘗てこれら數十部の書に散見せるものを拾收して高岳親王の事蹟一篇を編す、今一一引用書目を列擧する煩を恐れて其一篇を揭くるなり、然るに古來親王が猛虎の害に罹りたまひたりとて、諸書に其事見え、世間に喧傳することゝなるも、實は撰集抄に金光明經四捨身品最勝王經卷十捨身品に見ゆる摩訶羅陀王の王子摩訶薩埵の說話により親王の事蹟を緣飾したるに出るなり、決して歷史上の事實として信用すへからす、

シンニヨ　眞如　コーショー光性を見よ、

シンニヨイン　眞如院　ニチジユー日住を見よ、

シンゼン　眞然 一四六四 一五五一 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺第二代なり、眞然俗姓は佐伯氏空海の甥なり、延暦二十三年讃岐多度郡に生る、幼にして出家し、弘法大師に師事し、初め大安寺に掛籍す、後眞雅を拜して兩部の灌頂を禀く。承和元年十一月十五日大師の命により金剛峯寺の後住となる、同十二月十三日大師修法の次に即身成佛の秘文を授けられ、二年二月十三日納涼房にて大師親筆の愛染の秘法印書を傳へらる、三年五月眞濟と共に入唐せんとし、路にて颶風に遭ひ、逃れて歸へる、九月十三日師阿波大瀧寺に修法し、其寺の縁起を撰す、四年正月朔始めて朝拜の儀を行ひて永式とす、貞觀十六年十二月二十九日權律師に任す、是より先き師既に傳燈大法師位を拜せり、同十八年六月六日眞雅僧正に懇請し、貞觀寺の僧慧宿の手より弘法大師手澤の根本秘策三十帖を借讀す。元慶三年東寺の別當に補せらる、承和二年勅して年分度者三人を賜ふ、仁壽七年十月七日詔により仁壽殿に於て東寺の源仁、東大寺の玄津、祥勢、藥師寺の義叡、興福寺の房忠等と共に宗乘を論議す、乃ち權少僧都に擢てられ、二の長者に加補せらる、翌年一の長者となり。仁壽三年權僧都となり、次に僧都を經て、四月五日權大僧都に累進す、是年勅を奉して九丈の多寶塔を建て、眞言堂を創す、寛平元年十月二日僧正となり、三年九月十一日染三摩地にありて中院に寂す、壽八十八、寺務五十六年、東寺を管する七年、世に中院僧正と稱し、大師の跡を繼きて金剛峯寺を幹するか故に後僧正と呼び、西塔本願ともいふ、著作無障金剛次第、眞然僧正記、各一卷、攝一切佛頂輪王念誦法あり、(弘法大師弟子傳、弘法大師弟子譜、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シンハン　眞範 (一七〇九) 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり。眞範は播磨刺史平生昌の子なり、初め定好定照の二師に隨ひて法相の教を習ひ、清水寺の清範に見へて遂に其法を受く、萬壽三年維摩會の席に登りて賞せられ、出てゝ一乘院に住し、興福の寺務を領し、兼ねて元興山階長谷の三大寺を司とる、永承四年敕して僧正に任す、師志常に隱逸にありて名利を悅はす、茲に於て一日跡を近江の滋賀郡に潛む、數年にして里人其德を尊崇し稍集り來る。駿河宇津山に隱れ、托鉢して歳を送る、邑人延請す、師去りて越後の國府に在りて、乞丐人となり、舊識の者途中に逢ひ之を語らんと欲すれば、即ち瘂者のまねして椀を擊て急に去る。稍歳月を經て自ら死期を知り、大和三輪山下に歸へりて寂す、其寂時、及ひ壽缺く(本朝高僧傳)

シンブツ　眞佛 一八五五 一九二一 〔眞宗〕常陸眞佛寺の開山なり、眞佛俗名は平太郎、常陸那珂郡大部鄉の人にして、篤く親鸞に歸す、弘長元年五月十五日寂す、壽六十七、眞如上人寺號を下して眞佛寺といふ、今茨城郡大部村横曾根にあり(本願寺通紀)

シンブツ　眞佛 一八六九 一九一八 〔眞宗〕山城佛光寺第二代なり、眞佛は俗名椎尾彌三郎春時と稱す、平氏にして鎭守府將軍國香の裔、下野眞壁の人、父は下野國司大輔判官眞壁國春といふ常陸椎尾山神に祈りて靈夢を感して師を生む、實に承元三年二月十日なり、師夙に世典を學ひ六歳にして筑波山俊源に從ひ八歳にして深く道心を傳し每日三時十一面神咒を誦す

ること廿一遍、自ら其秘奥を解す、元仁元年始めて稲田に至り、親鸞上人に謁し教を受く、嘉祿元年七月年十七にして父を喪ひ、家職を襲く已にして家業を弟國綱に讓り十一月親鸞上人に從ひて薙髪す、十九歳京に上り、上人の命を受けて興正寺（佛光寺）を主とる、貞永元年正月十五日廿四歳の時亦命を受けて專修寺の席を繼く、乃ち七月十八日興正寺を源海に附す、諸方を遊化し淨土教を弘通す、天福元年奥州に至り、願樂、性意、慶西の異義を正し、懇切に教導す、延應元年甲斐信濃に至る、建長六年鹿島の神宮等の請により淨土教を説く、正嘉元年京師に上りて上人に謁し、同年東歸し爾來淨土三經を讀むこと凡て一千二百遍、正嘉二年三月八日辰刻諸弟に告げて臨終の念佛を修し、未刻獨高聲に念佛四十八遍し、晏然として坐化す、壽五十、高田山の南林に葬る、著すところ安心決定鈔等あり、（高田三祖傳、本願寺通紀）

シンベン　眞辨　（……一九二一）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、眞辨は紀伊名手縣の人、出家して高野山に登り、密教を究め、十輪院に住す、正元元年高野山の檢校となく、在職三年、弘長元年寂す、壽缺く、高野山八傑の一人なり、（本朝高僧傳）

シンホー　眞法　（一四二〇）〔戒律宗〕奈良興福寺の僧なり、眞法俗姓缺く、道璿の高弟なり、興福寺にありて戒律を講ず、示寂の年時傳はらず、（本朝高僧傳）

シンミョーイン　眞妙院　ニチジョー日乘を見よ、

シンムリョーイン　眞無量院　コーショー光勝を見よ、

シンヨ　眞譽　（……一七九八）〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の學僧なり、眞譽は持明房と稱す、初め、高野山に登りて北室の良禪阿闍梨に師事し、密灌を受け、諸部を習ふ、後仁和寺に入りて法を寛助に承け、覺鑁高野にありし時、師を崇みて密を聽く、師も亦覺鑁に重ねて灌頂を受く、師嘗て持明院を剏し國家を祈る、後、詔して御願寺に準し、傳法院の子院となす、長承三年五月鳥羽上皇覺鑁の執奏により、師を金剛傳法の二院の座主職に任す、保延三年三月、東寺、及び高野山の僧綱一百餘人師を東寺に復職せしめんと訴ふ、朝廷之を高野の撿校に任す、明年正月十五日寂く、壽缺く、著作持明院に傳二帖あり、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シンヨ　眞譽　エオン懐音を見よ、

シンヨ　眞譽　エンイ圓意を見よ、

シンヨ　眞譽　ソーカン相閑を見よ、

シンヨ　眞譽　チタン智短を見よ、

シンライ　眞頼　（……）〔眞言宗〕近江石山寺の僧なり、眞頼俗姓不詳、石山内供淳祐に師事し、眞言を傳ふ、姓純信にして三時の念佛一日も缺かず、命終の時受法弟子長敎を喚び相語りて曰ふ、今日必ず入滅せん、未だ授け畢らざる所金剛界印契眞言等一界書すべしと、便ち沐浴して授け畢る、諸弟子に命じて曰ふ、我寺中を出て邊山に移らむと欲す、と、弟子等肩輿を以てこれを移す。乃ち西向阿彌陀佛を念持して寂す、（往生極樂記、本朝高僧傳）

シンリュー　眞流　（二三七一……）〔天台宗〕比叡山禪定院の十代なり、眞流字は圓耳、伊勢國の人なり、正德元年に生る、比叡山に登り、禪定院第九代智濤に師事し、享保九年六月禪定院看坊となり、同十五年三月住持となる、享保二十年九月八日

受戒籠山し、延享四年九月八日滿期の後安樂院住持となり、寶曆八年安樂院法義復古改制に關し、法亂紛起す、因て明和八年三月十日同院を辭し、京都南禪寺の一草庵に隱棲す、座主の宮よりの命により再び山に登り、六月廿一日住持に復職す、安永元年十二月再び法亂紛起し、遂に治罰の厄に遭ひ、南禪寺院の草菴に歸り、幾もなく寂す、壽六十餘、著作苳谿弊帚一卷、山家圓戒往復書十卷、附贅一卷、大戒決疑彈妄錄三卷、詒謀三卷、圓戒要略一卷、菩薩戒疏山宗釋八卷、教苑摘要三卷、法華玄籤助覽十卷、顯戒論闡幽記四卷、學生式顯正解一卷、(吉村周俊氏返信)

シンリヨー 眞梁 二〇〇五/二〇八三 〔曹洞宗〕薩摩妙圓寺開山なり、眞梁字は石屋、薩摩國伊集院の人、俗姓は藤原氏島津の族なり父は忠國無等と號す、母は阿多氏、六歲にして廣濟寺に投して童役を執る、十六歲にして京師に入り、南禪寺の蒙山明公を禮して出家す、後、東陵璵に謁す、璵其骨相清奇なるを喜て授くるに今號を以てす、次て中巖月に見へ、藥局に侍す、寂室光に參して狗子の話を看す、古劍訥に見へて機語相投ず、明德元年島津大道妙圓寺を創して師を延て第一世と爲す、應永元年薩摩大隅日向の三國の太守島津元久梵刹を創し師を請て開山と爲す、初め妙圓寺に在て其化未だ廣からず、此に至て三州の道俗靡然として歸向す、後請に應して總持寺に上り應永三十年五月五日通幻禪師の三十三周忌に値ふ、師永澤寺に往て萬僧を請集して大會齋を修す、衆に告て曰く、我殘喘を留て今日に至るは正に先師の遠忌を期するなり、今や能事既に畢る、吾將に徂かんと、同月十一日寂す、壽七十九歲、臘六十三、(日本洞上聯燈錄)

シンリヨー 眞了 フギヨー普行を見よ、

シンリヨー 眞艮 ウキヨー有慶を見よ、

シンロー 眞朗 (……) 〔眞言宗〕山城高雄寺の僧なり、眞朗俗姓生國詳ならす、弘法大師の弟子にして大師に高雄寺に侍す、詳傳なし、(弘法大師弟子譜)

シンア 心阿 ……/二二六二 〔淨土宗〕江戸法禪寺の開山なり、心阿は長蓮社英譽と號し、山城伏見の人なり、觀智國師に師事して法を嗣ぎ、江戸深川法禪寺の開山となる、慶長七年九月二十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シンア 心阿 チテツ智哲を見よ、

シンヱ 心惠 (一四九四) 〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、心惠は出家して華嚴教を學び、永和元年東大寺別當に任す、寂年及壽缺く、(東大寺別當次第)

シンヱ 心慧 チカイ智海を見よ、

シンオー 心王 (二〇四四) 〔臨濟宗〕大興寺の開山なり、心王俗姓不詳、初め美濃遠山に登り、峰翁一に師事し、參究功あり、其法を嗣ぐ、因幡の擅越大興寺を開き請す、示寂の年時缺く、(延寶傳灯錄、本朝高僧傳)

〔考〕 心王は至德の頃の人なるか

シンオツ 心越 コーチユー興儔を見よ、

シンカイ 心海 一七七九/一八四八 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、心海は其鄕貫詳かならず、出家して範覺兼勝二師に天台教を學ぶ、壽永元曆の間平清盛師の德望を慕ひ、常に法敎を索む、文治四年五月二十日寂す、壽七十、(三井續燈記)

シンカイ　心海（一八八九）〔……〕攝津勝鬘寺の律僧なり、心海號は空月、俗姓生國詳かならず、深く顯密の玄秘を究め、和歌を能くす、寛喜年中攝津勝鬘寺を創して居る、寂年、及び壽缺く（本朝高僧傳）

シンカク　心覺（一八四一）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、心覺は參議太夫實親の子なり、園城寺に入りて剃髮納戒し、十乘觀法を學ぶ、一日詔を受けて宮中に興福寺の珍海と宗義を論ず、師答辭屈す、此より顯を捨てゝ密に入り、醍醐山の賢覺實運の二師に從ひ小野の法流を受く、大和光明山に入り山中を出でざること二十五年、後、高野山に登りて兼意阿闍梨に就き三部の玄奧を究め、兩界の灌頂を受く、密部を精練して多く疏鈔を著はす、常喜院を營みて三時誦經し、朝夕禮懺す養和元年夏四月病を得六月二十四日寂す、壽缺く、著作眞言宗印契、華藏院眞言宗本文、多羅葉鈔、要文集、表白集、讃集、諸尊曼荼羅集、八家總錄所漏舍利道具等、大師口傳集、大師德行鈔、造次用心、浮圖集、十二門戒體、悉曇十問答、十八道口傳、金剛界口傳私記、三十七尊種子三摩耶、十七尊類聚、胎藏院口傳、胎藏十問答、胎十三大院記、胎藏儀軌沙汰、五字鈔、灌頂眞言點、傳法灌頂相承略記、灌頂次第眞言記、灌頂雜鈔、灌頂私鈔、五色線法、釋迦鈔、金輪、大佛頂、理趣經段段印明集、瑜祇經註、瑜祇經眞言、孔雀經御修法、住心品私記、仁王經、仁王經本尊記、請雨經法、法華經陀羅尼梵漢辨書、佛眼、種子三形異說、如意輪、准胝不空羂索、千手、千手鈔、十一面、正觀音、馬頭、轉法輪、慈氏五字文殊、八字文殊、延命、普賢延命、金薩、普賢金剛薩埵、地藏、虛空藏、求聞持集、不動、不動集、降三世、軍荼利、金剛夜叉、愛染、大勝金剛、地天、水天、吉祥天、四天王形像異說、十二天集、聖天集、焰摩天集、訶利帝母、星宿供、星供鈔、北斗鈔、神供法、御質二智御素木加持、妊者帶加持、施餓鬼、光明眞言寶珠、舍利、三衣、護身法、護摩私記、護摩壇護摩要集、四種護摩類聚名目、八千枚鈔、命木穀支配、支度卷數各一卷、梵語集、成蓮鈔口訣、心密口訣、胎印鈔、兩界曼荼羅、阿彌陀、（廣略）藥師集（廣略）、尊勝佛頂、尊勝曼荼羅集、兩界印師傳、兩界印師傳各二卷、心目鈔、一遍集、雜要文集、作法集、諸尊私記、八家總錄、勸發道心鈔各三卷、靈林鈔、密宗法則集、別尊要記、灌頂發問集、五字文殊發問集、四天王類聚名目各四卷、悉曇字記勘文、眞言集各五卷、金剛界印明異說、六卷、胎藏界印明異說十卷、貝葉集、別尊雜記五十卷諸尊曼荼羅一帖、法華二帖、諸尊別記、隨聞記、胎藏口傳私記、金剛胎藏祕密壇、救蚶苦經註、摩利支天印、五種鈴、施主位署各若干卷あり（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シンガク　心岳　ツーチ通知を見よ、

シンガン　心岩（二三〇七 二三六六）〔淨土宗〕加賀大圓寺の中興なり、心岩號は縱譽と云ふ、加賀小松の人嘉波基の子なり、正保四年五月十二日に生る、寛文十二年二十六歲にして金澤淨安寺に入り、面譽上人を仰いで度を受け、同年下總大巖寺に遊學し、乘譽上人の法を嗣ぐ、貞享二年武藏傳通院に遊學し、貞譽に師事す、故鄉の大圓寺の荒敗を再興せんとし、自ら佛菩薩の圖像を作りて諸人に與へ、經營の資を募る、師の書精妙を極め、諸人爭うてこれを求め淨財を寄附す、三年にして故

鄉に皈り、再興の業を畢り、元祿二年落成の供養を修す、後江戶に出て、增上寺の心光院に住す、寶永元年十二月廿二日幕府の命により、桂昌院が墓所に念佛堂を建立して慧照院と號す、自ら發願し、淨土の三曼陀羅を圖せんとし、智光淸海の二圖を寫し、次に當麻の圖は諸師の註記に異說あるを以て伽藍神に祈禱して其眞を探り、靈驗を感して寫すを得、三圖功畢り大に喜び、供養を修す、寶永三年八月廿二日慧照院に於て六時讃護念經を修し、廿六日增上寺大僧正貞譽より十念を受け、廿九日寂す、壽六十、臘三十五、(心岩和尙傳)

シンガン　心巖　リョーシン良信を見よ、

シンガン　心巖　ゲントー元統を見よ、

シングワイン　心畫院　エハク慧白を見よ、

シンケ　心華(……)　〔臨濟宗〕京都建仁寺定惠院の僧なり、心華其生國俗姓を詳かにせす、杜史臆斷を著して世に行ふ、異本に曰ふ、相國僧杜子美抄を撰し、心華臆斷といふと、(日本名僧傳)

シンケ　心華　ジョーボー乘芳を見よ、

シンゲツ　心月　ジョーネン定然を見よ。

シンゲツ　心月　ボンショ梵初を見よ、

シンゲン　心源　ケテツ希徹を見よ、

シンコン　心建(……)　〔曹洞宗〕周防淸雲院の開山なり、心建字は德林と云ふ、俗姓生國詳かならず、覺隱永本禪師に師事し、後周防淸雲院を創して居せしが、總持寺に出世し、闢雲寺に主になり。晚年に至り、再び淸雲院に皈り、某年寂す、世壽欠く、法嗣寒江林あり、(日本洞上聯灯錄)

シンジヤク　心寂(……一八六四)　〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、心寂字は西仙、俗姓生國詳かならず、初め黑谷の叡空上人に師事し、後、源空上人に師事して淨土敎を受け、解行兼ぬ全し、常に山林の志あり河內讃良の里に幽居し、念佛誦經を事とし後、京師姉小路なる實妹の家側に草菴を營み住す、元久元年寂す、全身を東山延年寺に葬る、師天性淸淡にして俗事を厭ひ、常に紙衣を着したり、其寂したる後道俗相爭ふて紙衣を裂て分ち去りたりと云ふ、(淨土傳燈錄、淨土總系譜)

シンジユン　心純(二二七二……)　〔淨土宗〕攝津大道寺の開山なり、心純は應蓮社顯譽、魯道と號す、其俗姓生國詳かならず、法を虎角に嗣ぎ、攝津大坂大道寺の開山となる、寬永九年八月十七日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

シンシヨー　心昭(一八七〇—一九四〇)　〔曹洞宗〕下野泉溪寺第一代なり。心昭字は源翁、空外と號す、越後の人(又越前の人とも云ふ)俗姓は源氏なり、五歲にして鄉里陸上寺に投じて童子となり、十六歲にして得度し。經論を究む十九歲の時總持寺峩山紹碩に謁して侍司となり、後、伯耆八橋郡に至り遯居す、延文三年豐後の大守保長忠敦皈依厚く師の住所を改めて寺となす、五龍山退休寺是れなり、行脚して下野に至り、五峰山泉溪寺を建つ、應安四年結城の府主源直光安隱寺を創し、師を迎へて開山となす、師住すること四年、辭して陸前會津に至りて菴居す、其菴も寺となり慶德寺と號す、同國の刺史及び士民等奇瑞により以前火災に罹りたる慈眼寺を再興して師を迎ふ、永和元年四月十五日慈眼寺を改めて示眼寺と號す、將軍足利義滿泉溪寺を修繕し、且奈須莊田一千餘石を施し、師をして再ひ十

たらしむ、後小松上皇敕して號を能照法王禪師と賜ふ、退きて示現寺に皈り、應永三年正月七日寂す、(一說に弘安三年正月七日寂ともあり)偈あり曰く、四大假合、七十一年、末後的端、踏二飜鐵船一と壽七十一、臘五十六、塔を大寂と云ふ、法嗣齡山延、壺天玄晟、天海空の三人あり(日本洞上聯灯錄)

〔考〕新編鎌倉志に臨濟宗大覺禪師の法を嗣ぎ、鎌倉に開藏寺を開くとあり、尙ほ同書の說は本文中一說として擧く、

シンシヨー 心證　ニチギヨー日行を見よ、

シンシヨーイン 心性院　ニチオン日遠を見よ、

シンゾー 心窓　シユーデン宗傳を見よ、

シンチ 心地　カクシン覺信を見よ、

シンチユー 心忠　ケンコー賢孝を見よ、

シンデン 心田　シヨーバン清播を見よ、

シンミヨーイン 心妙院　ニチシユー日修を見よ、

シンヨ 心譽（……）〔淨土宗〕肥前立岩寺の開山なり、心譽は俗姓東氏、肥後の人なり、幼にして肥前南里正定寺に入りて出家し、知哲の法を嗣ぐ、後、州の松浦郡立岩邑に立岩寺を創して開山となり、某年寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

シンヨ 心譽　一六一七 一七〇[illegible]　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、心譽は京都の人、藤原重輔の子なり、園城寺の勸修穆算二師に從ひて顯密二教を受け、長和四年夏三條天皇の眼疾を祈りて驗あり、萬治三年夏御一條天皇に召されて五壇の法を各山の各德修するとき、師其中央を修す、長元元年權僧正に任し、此歲秋園城寺の長吏となる、初め寬仁元年冬師衆と議し、碩學立義を園城寺に始んとし、三月十一日これを朝廷に奏請し、許されて山中の唐院に阿闍梨五人を置く、治安二年藤原道長の請により法成寺に主となり、寬德二年八月十二日寂す、壽八十九、(本朝高僧傳)

シンヨ 心譽　ジユトン受頓を見よ、

シンヨ 心譽　ゼンカク善覺を見よ、

シンヨ 心譽　チヨーオツ潮越を見よ、

シンヨ 心譽　テンケー天冏を見よ、

シンヨ 心譽　ユーサツ祐察ヲ見よ、

シンヨ 心譽　リンテツ林哲を見よ、

シンヨ 心譽　ロネン魯年を見よ、

シンリヨー 心涼　二〇三四……〔臨濟宗〕東福寺の禪僧なり、心涼字は檀溪、因幡の人なり、虎關鍊の法を嗣ぐ、伊勢の正法寺を開き入住す、後、東福寺に住し、晩年龍眠菴に退休す、應安七年八月八日寂す、壽缺く、題二自眞一本來面目、如何分說剎界三千、一輪明月(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シンリヨー 心靈　ゴドー午道を見よ、

シンレー 心禮　二一一八……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、心禮字は用叟、其鄉貫師承詳かならず、業成り、後東福寺に住し、長祿二年六月六日寂す、壽欠く、(延寶傳燈錄)

シンレン 心蓮　一八四一……〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、心蓮字は理覺と云ふ、高野山に居ること多年、顯密性相の學を習ふ、堂宇を建て佛像を作ること若干、長日の護摩を修すること十餘年、千手の法を行ふこと四十餘座、常に法華を誦す、養和元年某月某日壽若干にして寂す、(本朝高僧傳)

シンエ　親慧 一九五七／二〇二〇 〔眞言宗〕山城八幡王智院の僧なり、親慧は五智法印といふ、地藏院に入りて房玄の法を傳へ、延文五年五月十四日寂す、壽六十四、付法の資弘賢といふ、(續傳燈廣錄)

シンカイ　親海 二〇一九 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、親海其郷國俗姓及び師承を詳かにせず、延文三年十二月東寺の長者となり、四年正月六日寂す、壽缺く、(東寺長者補任)

シンカク　親覺 一八七三 〔眞言宗〕京都華藏院の僧なり、親覺は内大臣忠親の子、仁和寺守覺親王に從ひて兩部の法を承け、覺成僧正に師承して密教を研む、建仁三年大僧正に任し、建永初年東寺の長者と爲る、建保元年九月二十九日寂す、壽缺く、師京都華藏院に居り、大和の忍辱山に移りて共に遺蹟あり、(本朝高僧傳)

シンクワイ　親快 一九三六 〔眞言宗〕山城遍智院の學僧なり、親快は醍醐寺道教に就て剃髮し、密教を學ぶ、次に同寺淨尊によりて一家の秘訣を傳へ、又深賢に隨ひて具支灌頂を受く、後座主憲深に傳法灌頂を重受し、遍智院に住す、初め三寶院を管し、後、地藏院に移る、憲深の寂後上足定濟護持僧となり、請いて座主となる、師常に其職に補せんことを欲し、屢々請求すれとも朝命なし師これを恨みて本山を去り、太秦の桂宮院に屛居す、一門の徒數々申奏して座主職を請ふ朝命已に出て、勅使院に到る、師の曰く、嚮に望めとも聽されず、今命終に賜ふは却て人を弄るなりと、宣を破して牀に投し、敢て拜せず、幾何ならずして寂す、時に建治二年五月二十六日なり、著作土巨鈔幸心鈔數部あり、(密宗血脉鈔、本朝高僧傳)

シンゲン　親玄 一九〇九／一九八二 〔眞言宗〕山城醍醐地藏院の學僧なり、親玄は關白藤原通忠の子なり、早くより親快に從ひて醍醐寺に受業し、文和九年灌頂法を受け、相承の聖經秘軌を付せらる、地藏院に住して眞言教を持し、敕して僧正に任す、元亨二年二月十七日寂す、壽七十四、著作愚按訣、灌頂記あり、法弟覺雄房玄あり、(密宗血脉鈔、本朝高僧傳)

シンゲン　親源 一九八三 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、親源は源雅家の子、元亨三年三月天台座主に任す、寂年缺く、(天台座主記)

シンゴン　親嚴 一八一一／一八九六 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、親嚴は飛彈守中原親光の子なり、初め尊念僧都によりて密教を習學し、後、顯巖僧正に隨ひて兩部の灌頂を受け、瑜伽を研練して隨心院に住す、元久の初年權少僧都に任ず、建保二年春權大僧都に轉し、秋七月東寺の長者となりて寺務を領し、法務を兼ぬ、承久元年權僧正に任し、七月法泉苑に於て雨を祈り、隨心院に阿闍梨五人を置くを許さる、師元仁嘉祿年間に神泉苑にて雨を祈ること三回、共に効驗あり、弟子數人を權大僧都等に任せらる、安貞元年阿闍梨三人を東寺の西院に置くを許され、寬喜二年五人を置くを許さる、貞永元年大僧正に任せられ、車に乗りて禁門に入るを聽され、文曆元年東大寺を補し、嘉禎二年十一月二日寂す、壽八十六、(密宗血脉鈔、本朝高僧傳)

シンシヨー　親性 (……) 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、親性は關東に居りて別當に任し、後權僧正となる、

(三井續燈記)

シンソン 親尊（一九一六）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、親尊は花山院中將兼繼の子、建長七年七月廿九日同院に入りて印可を承く、時に年二十一なり、康元々年三月三日憲深僧正に庭儀職位灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

シンユー 親宥 一五八八……〔華嚴宗〕奈良東大寺の僧なり、親宥は俗姓宗岡氏と云ふ大和の人なり、道義に師事して華嚴並に眞言を傳ふ、傳燈大法師位に任ぜらる、延喜十九年東大寺に住し、盛に顯密を說く、後僧都に任ぜらる、延長六年寂す、（本朝高僧傳）

シンヨ 親譽 二二七一……〔淨土宗〕播磨心光寺の開山なり、親譽は其俗姓生國詳かならず、大巖に師事して宗乘を學び、法を道譽に嗣ぐ、後播磨姬路に心光寺を開きて居住し、慶長十六年六月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シンヨ 親譽 シユーゴー周仰を見よ、

シンラン 親鸞 一八二八 一九一七 眞宗の開祖なり、 **親鸞は幼名**鶴滿麿と云ひ、一に松麿と云ふ、出家して範宴と云ひ、少納言と稱す、後に綽空と云ひ、善信と云ひ、最後に愚禿親鸞と云ふ、承安三年四月一日を以て京師に生る。父は皇太后宮大進藤原有範、母は某氏、一說に源氏對馬守義親の女吉光と云ふ）幼にして父母を喪ひ、孤子となる、（一說に六歲にして父を喪ひ八歲にして母を喪ふたりと云ふ）伯父若狹守範綱に養はる、夙に出家の志なり、母を喪うて後其志益切なり、養和元年九歲にして範綱に携へられて粟田口の青蓮院に至り、同年三月十五日慈圓僧正に就いて得度し、親附の弟子となる、同年比叡山の戒壇に登りて圓頓戒を受け、東塔無動寺大乘院に留りて大小顯密の敎義を學修し、當時の學僧なる竹林房靜嚴、毘沙門堂明禪、林泉房智海等を問うて敎を受けたりと云ふも詳ならず、且つ數々奈良に至り諸大寺の學僧を問うて法相三論の敎義を學修したり、河內磯長の聖德太子廟、攝津四天王寺の同太子廟に詣して並に祈願するところあり、靈異を感したりと云ふ、後、比叡山橫川飯室の妙覺坊に留り、一七日を期して一心三觀の妙定に入りたりと云ふ、建久八年學德を以て推擧せられ、少僧都となり、東山聖光院を領したりと云ふ、建仁元年二十九歲にして京師頂法寺（六角堂）の觀世音に參籠し、一百夜を期して出離の要道を祈願して靈異に感し、且つ偶々四條橋に於て聖覺法印に遇うて源空上人の盛德を聞きて大に景慕し、遂に意を決して比叡山を辭し吉水に至りて上人の禪室を問はんとしその比叡山を辭するに方りて、同學に一書を送る俗間相傳ふるものに「如今兵部を以て捧二愚書一以、予此年月台星の峯に在て舍那圓頓の果を拾ひ、三密止觀の水を汲とも、頑魯にていまた迷惑出離の曉を知らず、生死の顚倒を常に恐れ、福林、國淸、及修禪の寶殿に抽二丹誠一、仰二神冥慮一、終に山王權現の神託をうけ、今夜この觀音の寶前に通夜せしめて、重て菩薩の告命を蒙り、直に日頃の積願を滿足せしむ、仍て今日寶幢の場を謙下し、遁世の樞に隱れ畢ぬ今生の拜謁是を限りに候、以上、建仁元年二月十日僧都範宴印、寶幢院內學徒中」と、建仁元年源空上人の禪室に投して膝下に侍し、上人の敎を受けて淨土敎に皈し、始めて綽空と號す、蓋し道綽源空の各一字を取りたるものなりと云ふ、師自

ら記して曰ふ、建仁辛酉暦棄ニ雜行一兮歸ニ本願一と、而して尙ほ一百夜に滿たさるを以て頂法寺(六角堂)の觀世音菩薩に詣し、同年四月五日(一說に建仁三年四月五日と云ふ)靈異を感し、關白九條兼實の女玉日を娶り配となす、玉日時に十八歲なり、爾來五條西洞院なる兼實の別墅に寓し、全く俗儀に隨へり、尋いで同別墅に於て一男を擧け範意と云ひ、後に印信と云ふ、元久二年四月十四日特に源空上人より選擇本願念佛集、並に壽像を授與せらる、蓋し選擇本願念佛集は、上人か嘗て兼實の懇請によりて製作し、一門の宗要を盡くせり、師、上人の恩許を得て、これを手寫し、上人自ら筆を執りて其內題の選擇本願念佛集の七字、並に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本、釋綽空の十七字を書して授與したり、且つ亦師、上人の恩許を得て、上人の壽像を圖畫し、同年閏七月廿九日に上人自ら其壽像の上に、南無阿彌陀佛、並に若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生の一文を書して之を授與したり、是れ實に一門の宗要附囑の信契なりと云ふ、されは師大に喜ひて自ら其事を記し、且つ曰ふ、眞宗簡要、念佛奧義、攝ニ在于斯一、誠是希有最勝之華文、無上甚深之寶典也、涉レ年涉レ日蒙ニ其敎誨一之人雖ニ千萬一、云レ親云レ疎、獲ニ此見寫一之徒、甚以難、爾既書ニ寫製作一、圖ニ畫眞影一、是專念正業之德也、是決定往生徵也、云云、と、同年上人の命により綽空と云を改めて善信と號す、蓋し善導源信の各一字を取りたるものなりと云ふ、同年九月源空上人信行兩座を設け、一門の諸弟子に命し、各自ら意に任せて其座に就かしむるに、聖覺、信空、蓮生等信の座に就く、師も亦信の座に就く、其餘の諸弟子未だ決せず、源空上人師を顧て源空も亦信の座に就かんと、諸弟子皆釋然として領會する所ありたりと云ふ、蓋し當時上人盛に淨土教を說くと雖、其正意を領會する者鮮く、往々にして異見を執する者あり、故に上人其弊を救はんとして兩座を設け、諸弟子を試みたるものなるべし、建永元年師同門の輩信心一異の論をなし、上人深く師の說を感賞せり、承元元年二月奈良興福寺の衆徒等の上奏により、源空上人以下一門の輩罪科に處せらるゝに方り、師亦其一に加はる、師自ら記して曰ふ、竊以聖道諸教行證久廢、淨土眞宗證道今盛、然諸寺釋門昏レ教兮不レ知ニ眞假門戶一、洛都儒林迷レ行兮無レ辨ニ邪正道路一、斯以興福寺學徒奏ニ達太上天皇(諱尊成號後鳥羽院)今上(諱爲仁號土御門院)聖曆承元丁卯歲仲春上旬之候、主上臣下背レ法違レ義、成レ忿結レ怨、因レ玆眞宗興隆太祖源空法師、幷門徒數輩、不レ考ニ罪科一、猥坐ニ死罪一、或改ニ僧儀一、賜ニ姓名一、處ニ遠流一、予其一

親鸞上人 五十三歳

シン(親)ラ

也と因て師は俗名を附して藤井善信と云ふ、師曰ふ爾者己非レ僧、非レ俗、是以禿字爲レ姓云云、これより自ら愚禿親鸞と稱す、蓋し親鸞は天親曇鸞の各一字を取りたるものなりと云ふ、同年三月京師を發し配所なる越後の國府に赴き、淨土敎を弘通す、郡司某深く歸向し、國分寺の東南の地に草菴を構へて師を供養したりと云ふ、師自ら曰ふ抑又大師聖人(源空)もし流刑に處せられたまはずば、我また配所に赴かんや、我配所に赴かすんは、何に依りてか邊鄙の群類を化せん、是れ偏に師敎の恩致なり、と然れは師は罪科に處せられて、一たひは憤り、一たひは喜へるなり、建暦元年順德天皇位に即きたまふに方り、同年十月七日、源空上人並に師敕免を蒙る翌二年師即ち國府を發し、京師に上らんとし、會々正月二十五日源空上人の京師に寂したるよしを聞きて大に悲嘆し、京師に上る意を飜し、常陸に至り宇都宮城主頼綱、笠間城主時朝、並に稻田の邑主頼重等の皈向を受け、大に淨土敎を弘通す、(一説に同年八月一たひ京師に上り、九月山科に興正寺を興し、十月再ひ東下して常陸に至ると云ふも詳ならす、)此年間に信濃の善光寺に詣して靈異に感したりと云ふ、常陸稻田に幽棲するに方りて、配玉日亦至り、假に三善爲敎の女と云ひ、師に給仕したりと云ふ、修驗者辨圓等相尋いて師の敎に服し、遠近相傳へて來附し、門下雲集したり、元仁元年五十二歳にして顯淨土眞實敎行信證文類六卷を草し、淨土敎に關する意見を發表せり、是れ即ち淨土眞宗開立の本書なり、師は淨土敎を源空上人より受けたるものなるも、其淨土敎に關する意見は稍相同しからさるところあり、所謂三部經なる無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經に依るも、就中無量壽經に依り、同經に說ける阿彌陀佛四十八願の內、第十八願の成就の文を骨目とし、南無阿彌陀佛の聞信の一念を主張せり、而して師かこれを解釋するには、天台、華嚴、眞言等の深奥なる敎義を利用したるかことし、然れとも師か四方に巡化するに方りては、一言も高尙なる敎義に亘らす、簡明に聞信の一念を主張し、淨土往生の正業因となしたるなり、自ら光明の中に阿彌陀佛、釋迦牟尼佛、並に聖德太子の像を圖畫して安置し、殊に聖德太子の儀容を彫刻圖畫して深く景慕したりと云ふ、これ實に師か意のあるところを見るへきなり、數々鹿島、眞壁、並に下野の柳島等の地に巡化し、貴賤男女の歸向を受けたり、嘉祿二年、柳島に一宇を興す、(後に敕により專修阿彌陀寺と號す)、然れとも師土木を興すを好ます、常に諸弟子に語りて曰ふ、眞宗の道場は、少しく棟を高うし、民屋に簡へは可なりと同年相撲に至り、國府津に幽棲し、鎌倉に入りて北條氏の請により、一切經を校合す、且つ國府津より北に山路を踰えて甲斐の地方にも巡化したりと云ふ、此の如くにして東國に淨土敎興隆傳播し、大に人心を動搖したれは、鎌倉幕府の意を引く所となり、遂に令を下して其興隆傳播を制するに至りたりと云ふ、文暦の初め相撲を發し、箱根山に於て弟子性信等に別れて西上し、翌嘉禎元年に近江木部に一宇を興し、(後に敕により天神護法錦織寺と號す)同地に滯留して敎行信證文類を修治す、尋いて京師に入り西洞院に幽棲す、然るに門下に敎を請ふ者漸く多く、入西蓮位等常に給仕したるかことし、入西の請により定禪に命して自像を寫さしめたりと云

シン(親)ラ

ふ、（後、書師朝圓に命して淨寫せしめたりと云ふ）且つ東國の諸弟子の師の幽棲を訪問する者常に絕えす、常陸の平太郎と云ふ者、熊野に詣する途次、師を訪問し、佛陀神明一致の說を聞いて、大に感喜したり、師數東國の門下性信、眞淨等に書を送りて教示せり、蓋し當時幕府は淨土教の興隆傳播を制止し、且つ異宗の輩の淨土教を排擊するものありたれは、師の門下の諸弟子交々書を送りて師の教示を請ふたるかことし、師一方には數東國の門下に書を送りて教示し、他の一方には著作に力を盡したり、即ち寶治二年淨土和讃高僧和讃凡二百二十五首を製作し、（後、建長七年淨書す、）建長四年淨土文類聚鈔を製作し、（後、同七年淨書す）同年愚禿鈔を製作す、（同七年脫稿淨書す、）同七年淨土三經往生文類を製作す、（康元元年脫稿淨書す、）同年尊號眞像銘文を製作し、康元元年入出二門偈七十四行を製作す、同二年二月九日奇夢に感し、正像末和讃一百十三首を製作す、（後、正嘉二年脫稿淨書す、）後淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃三帖を合して一部となし、跋文を加ふ、正嘉元年一念多念證文、唯信鈔文意を製作す、其後法語等を製作する所甚た多し、弘長二年十一月病あり、念佛の聲を絕たず、同月二十八日正午晏然として寂す、壽九十歲なり、翌廿九日諸弟子相謀り東山鳥邊野の南、延仁寺に火葬し、遺骨を分ち下野の高田、東山の大谷に埋む、後、文永九年に至り師の男善鸞の子なる如信、覺信尼の吉水の北の地を寄附したるにより、其地に一宇を興す、（後に勅により久遠實成阿彌陀本願寺と號す）、師著作顯淨土眞實教行信證文類六卷、愚禿鈔二卷、淨土文類聚鈔、入出二門偈、淨土三經往生文類、淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃、尊號眞像銘文、一念多念證文、唯信文意、末燈鈔、（弟子の編、）御消息集、（弟子の編、）嘆異鈔（弟子の編、）各一卷等あり、師七子あり、範意、（後に印信と云ふ、）小黑女房、（初め呂姬と云ふ、）明信、（信蓮房と稱す、）善鸞、（慈信房と稱す、）道性、（初め有房と云ひ後益方入道と稱す、）高野尼、（初め嵯峨姬と稱す、）覺信尼、（初め彌女と稱し、日野大納言廣綱の室となり、覺惠を產む覺惠は覺如を生む、）門下の諸弟子甚た多し、性信、眞佛、順信、乘念、信樂、成然、西念、證性、善性、是信、無爲信、善念、信願、定信、道圓、入信、（穴澤の入信と稱す、）念信、入信、（八田の入信と稱す、）明法、慈善、唯佛、唯信、（外森の唯信と稱す、）唯信、（畠谷の唯信と稱す、）唯圓、等、聞ゆ、明治九年十一月二十八日勅して諡號見眞大師を賜ふ、（本願寺聖人親鸞傳繪、宗祖嘆德文、高田正統傳、高田三祖傳、本願寺通紀、宗祖世錄、門跡傳、本願寺系圖、眞宗寶璽傳、本願寺由緖記、大谷畧譜、本山寺誌、眞宗興隆緣起、善信聖人傳繪鈔、聖人傳照蒙記、御傳鈔視聽記、叢林集、眞宗假名聖教、眞宗法要、眞宗法要拾遺、淨土眞宗教典志、）

〔考〕以上後世の傳記を參酌して一篇となしたるのみ、眞宗諸派に傳ふるところ相一致せすして、各一家の傳として固執せり、高田派專修寺には、親鸞上人の高弟眞佛顯智の記錄したるものありたりと云ふも、今は傳はらす、僅に正德五年に良空か編せる高田正統傳に引用せるところによりて窺ふへし、然れども高田正統傳は、主として本願寺の傳を破却せんとしたるものなれは、其眞佛顯智等の記錄なりとして引用す

シン（親）ラ

るものも、故意に筆を加へたる所ありて一々信憑しかたし、本願寺には宗昭の本願寺聖人親鸞傳繪二卷、光玄の宗祖嘆德文一卷等あり、是等は古く傳ふるところなれども、共に專ら上人の靈德を讃揚せんとしたるものなれは、修飾に過きて事實を誤るところあり、佛光寺錦織寺等の傳あれとも、畢章眞佛顯智宗昭光玄の記錄を出てさるなり、今は以上の諸傳、其末註幷に諸書に散見するところを參照し、一家の傳に偏せさらんとを務めたれとも、時に余か見るところによりて取捨を加へたり、師か出家修學に關して、高田正統傳、高田三祖傳極めて詳密なるも一々取るべからず、源空上人を問ふ年時に關し、宗昭の傳繪には建仁三年とあれとも、元年の誤なり、親聽記等に辨するか如し、九條關白兼實の女玉日を娶る年時に關して、傳繪には建仁三年とし、正統傳には建仁元年となせり、是非容易に判し難しと雖、正統傳に師が頂法寺の觀世音に參籠せる年時等に關して辨するところに依り、これを考ふるに、其源空上人を問ふたる同年にして、元年なりと云ふ方事實に近かるべし、九條關白兼實の女なりと云ふに關して亦異說あり、一說に藤原氏の系圖に依れは、兼實に九男一女あり、其一女は宜秋門院任子即ち後鳥羽天皇の中宮なり・兼實に玉日と云ふ女なしといひ、其兼實の女と云ふことを事實にあらすとなし、且つ玉日惠信尼は全く別人にして、惠信尼は師の後配なりとなすものあり、是等の事は、史傳備はらさるを以て、全く明瞭ならす、姑く古く傳ふるところに隨ひたり、而して玉日惠信尼同人と云ふことも亦古くより傳ふるところなり、光闡房兼順の反古裏書にこれを明瞭に記せり、且つ建曆二年の頭師の一女か信濃に於て出生せるを以て見るに、其母たる惠信尼か常陸眞岡城主三善爲敎の女朝姬にして師か未た常陸に入らさる前師の後配となりたりといふと信用しかたし、故に今姑く玉日惠信尼同人なりといふを取る、師勅免後の事に關して建曆二年快賢僧都に迎へられて常陸に入りたりといひ、一たひ京師に上り再ひ常陸小島の郡司武弘の請により東下したりといひ、古より二說あり、今は姑く宗昭の傳繪、兼順の反古裏書の說に依り、越後より常陸に入りたりといふを取る、顯淨土眞實敎行信證文類の製作年時に關して、元仁元年なりと云ひ安貞二年なりと云ひ、嘉禎二年幷に同三年なりと云ふ、然れとも其實元仁元年に製作し、其後再三修治したるものなり、是等の事一々考證を要し尙其餘考證を要する事甚た多しと雖煩雜に渉るを以て省略に附す、

シンキ　眞機　二四七五 二五四九　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺三十五代なり、眞機字は獨唱と云ふ、筑後柳川の人、俗姓花岩氏なり、出家して黃檗宗に歸し、富峰如嶺の法を嗣く、明治三年十一月湖黃檗山主となり、一住四年にして退く、明治廿二年正月十七日塔頭別峯院に寂す、壽七十五、（黃檗山歷代表）

シンキヨウ　眞敎　一八九七 一九七九　〔時宗〕相模當麻の僧なり、眞敎は心阿と稱す、京師の人なり、嘉禎三年を以て生る、稍長して出家し、鎭西辨阿上人の弟子となり、後、建治三年の秋一遍上人に値うて法義を問答し、大に感悟するところあり、轉して時宗に歸し、上人の法化を助けて四方に遊行す、上人示寂の後、正應二年九月三日時宗第二祖の法位を繼く、元應元年正月廿七日相模當麻に寂す、壽八十三、著作、大鏡集十

卷、他阿上人法語七卷、三心料簡義、安食問答、元祖上人發心記、道場誓文、各一卷あり、(淸淨光寺記錄)

シンシヨー　眞證　二三六七/二四二二　〔眞宗〕伊勢智惠光院の住持なり、眞證一名は公報と云ふ、號は一佛乘院と云ふ、左大臣藤原公胤五世の孫なり、西園寺左大臣致季の猶子となり、高田派本山の院家智惠光院に住す、第十八代法主圓遵上人の師範となり、法印權大僧都に任せらる、寶曆十二年九月十四日寂す、壽五十六、(眞岡湛海氏返信)

シンチ　眞智　二一六四/二二四五　〔眞宗〕伊勢一身田專修寺の第十一代なり、眞智は後柏原天皇の第三子なり、親王となり、常磐井宮と稱す、永正七年六月專修寺に入室し、第十代法主眞惠上人の法嗣となり、同九年十一月廿四日勅を拜して第十一代法主となり、翌年十月廿六日紫衣參內を許さる、大永六年專修寺を其男應眞に讓りて退隱す、天正十三年七月四日越前國熊坂に寂す、壽八十二、喜雲院宮と稱す、(眞岡湛海氏返信)

シンビヤク　眞白(ハク)　二四二五/二四八九　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺二十八代なり、眞白字は梅岳と云ふ、美濃武儀郡八神村深川氏の子なり、出家して黃檗宗天外如空の法を嗣く、文化十年五月黃檗山主に進み、一住二年にして文政十二年九月十五日寂す、壽六十五なり、(黃檗山歷代表)

シンミヨー　眞明　二四三五/二四九九　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺三十代なり、眞明字は獨旨と云ふ、長門下關の人なり、出家して黃檗宗金成如鐵に師事し、其法を嗣く、天保九年黃檗山主に進む、同十年四月二十四日寂す、壽六十五、(黃檗山歷代表)

シンコク　森谷　フゴン普巖を見よ、

シンヨ　森輿　ゲング還愚を見よ、

シンヨ　森譽　レキテン歷天を見よ、

シンガン　審巖　シヨーサツ正察を見よ、

シンシヨー　審祥　……/一四〇二……　華嚴宗の開祖なり、審祥は新羅に生れ、夙に出家して唐に遊び、賢首大師法藏に就きて華嚴宗を傳ふ、天平の頃來航して大安寺に留る、而も其名未だ聞えず、時に良辨華嚴宗を興さんとし、偶夢中に元興寺嚴智の同經に通ずるを知り、就きて問ふ、嚴智答へて曰ふ、吾名は嚴智なれども、心は嚴智ならず、新羅學生大安寺審祥大德、是れ實に嚴智なり、大德を請じて華嚴を講敷すべし、と、良辨大に喜び、審祥を問ひて事情を陳ず、審祥辭して出でず、再三懇請するも出でず、良辨是に於て奏聞す、仍て勅請あり、審祥遂に同寺を出でゝ天平十二年十月八日、金鍾道場に於て華嚴經を講ず、慈訓、鏡忍、圓證、其複師となり、京城の名僧高德皆聽衆となる、開講の時上に紫雲を現し、春日山に亘覆したりといふ、天皇感嘆したまひ、綵帛一千餘疋を施したまふ、皇后並に公卿以下皆檀嚫を施す、三年に亘り、同十四年に滿講す、審祥同年を以て寂す、世壽法臘共に詳ならず、(三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕東大寺別當次第に華嚴經開講日を七月八日とし、本朝高僧傳には臘月十八日とす、今は傳通緣起に依るなり、

シンア　晋阿　ギヨーカイ行誡を見よ、

シンカイ　晋海　(……)　〔眞言宗〕山城高雄山法身院の

僧正なり、晉海字は守理、京都の人、俗姓は清原氏なり、幼にして高雄山法身院に入る、既にして出家受學し、兼て外學に通ず、仁助和尚に就きて傳法灌頂を受け、大毘盧心印を附せらる、德川家康深く師の道風に歸依し、土地三百石を供し寺産に充て、且つ附近三里程の山林樹木を以て大伽藍修構の料となす、是に於てか神護寺の舊廢崛然として興る、寂年及び壽缺く、(傳燈廣錄)

シンオー 辰應 ショーイン性寅を見よ、

シンリヨー 辰亮 二四九九 …… 〔淨土宗〕京都雙林寺の僧なり、辰亮は月峰又は菊澗と號す、京都東山雙林寺長喜菴に住す、大雅を師として畫を學び、其遺風を繼ぐ、天保十年十一月九日寂す(扶桑畫人傳)

シンア 身阿 マンクー滿空を見よ、

シンターー 秦閭 二五一八 …… 〔淨土宗〕下野弘經寺五十一代なり、秦閭は寶蓮社笑譽耶阿と云ひ、字は白純號は梅痴と云ふ阿波眉山の人、出家して佛儒の學に通し、殊に詩名高し、天保十二年九月幕府の命により弘經寺に住し、弘化三年十一月再び幕府の命により飯沼の弘經寺に轉し、天下の文人墨客を延き相交れり、大沼枕山、小野湖山等皆一時其寺に流寓したり、安政五年九月九日寂す、壽缺く、(弘經寺返信、湖山樓詩屏風)

シンシユー 愼終 (…… ……) 〔曹洞宗〕因幡讓傳寺第一代なり、愼終字は南壽、石見の人、初め覺隱永本禪師に參して因幡に到る、郡主某化に歸し、讓傳寺を開き請じて主たらしむ、後、闡雲寺に住せしが、復た讓傳寺に歸り、某年寂す、壽欠く、(日本洞上聯燈錄)

シンスイ 針水 二四六八 二五五三 〔眞宗〕肥後光照寺の住持なり、針水號は鬱潭、俗姓は原口氏、初の名を得慶といひ、後今の名に改む、文化五年八月三日肥後國山鹿郡內田村光照寺に生る、同寺第十代贈助敎密道の第六子なり、四歲にして母を喪ひ、繼母に養はる、父及び叔父顯明の薰陶を受け、幼より父より宗學の傍華嚴天台の學を修め、叔父より法相因明の義を聞き廿二歲始めて遊方を試み、慶恩、都西、到徹等諸匠の講席に遊ひ、後、曇龍に博多萬行寺に謁し、其行信の說に服し、遂に社中に加り、爾來十年間函丈に侍し、宗乘の研究を怠らず、兼ねて國學を傳習す、曇龍の沒するに及びて鄕里に歸へり、父叔父と共に鼎立して講學に從事す、四方の學徒名を聞きて雲集し、寮舍數々狹隘を告く、弘化二年七月得業に昇り、翌年助敎に進む、文久三年長崎に遊ひ、外敎師に就きて耶蘇敎の大意を學ふ、慶應三年司敎に遷つる、明治五年朝廷敎導職を置く、師中講義に補せられ、尋ぎて大講義に遷つる、翌年勸學職に登り、十五年權中敎正に進む、廿二年請ひて員外となる、廿六年五月浴湯の際失蹈し、遂に病を作す、月を越えて漸く篤し、法主特に病床に臨みて慰問せらる、特に院號を與へ見敬院と云ふ、中品の尊號を與へて一生の功勞を賞せられ、十二日寂す、十四日山費を以て大學林講堂の西に葬式を行ひ、花山に火葬す、生前安居の講師を勤むることは、明治二年正像末和讃を副講し、八年本講大阿彌陀經を講し、十六年本講易行品を講し、十九年本講入出二門偈を講し、廿三年別講安樂集を講し、廿四年本講觀念法門を講し、前後六回

の多きに及へり、著作四恩辯一卷、タノムタスケ玉へ兩語考二卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

シンドー　臻道　ジョーショー常照を見よ、

シンラ　新羅　ジッゼン實禪を見よ、

シンリュー　震龍　ケーシュン景春を見よ、

ジンウ　深有（二〇一二）〔眞言宗〕近江長尾山寺の僧なり、　深有字は覺然、俗姓は千葉氏、下總の人なり、十五歲にして京都に登り、玄慧法印に就て天台敎を聽き、河東寺虎關和尙を拜して禪錄を問ひ、醍醐寺に往て小野廣澤二流の祕奥を傳へ、文和元年大和忍上嶽に上り、一千日を期して求聞持法を修す、後、近江長尾山寺に住し、某年十二月四日寂す、壽八十五、(本朝高僧傳)

ジンエ　深慧　ショーシュ正受を見よ、

ジンエン　深圓（……）〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、　深圓は内大臣法印と號す、後三條入道公親の子、或は入道太政大臣實重の子なりといふ、詳傳なし、(仁和寺諸院家記)

ジンオー　深應（二一四九―二二三三）〔眞言宗〕山城醍醐山行樹院の權僧正なり、　深應俗姓は財河といふ、加賀守大江光重の子なり、前法務大僧正源雅の嫡傳を受けて三十六祖となり、權僧正に任す、天正元年七月七日寂す、壽八十五、付法三人、雅嚴、義堯と稱し、他一人は見えず、(續傳燈廣錄)

ジンオン　深音　ショーヨ聖譽を見よ、

ジンカイ　深海　シューカイ周海を見よ、

ジンカク　深覺（一六一五―一七〇三）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　深覺は藤原師輔の子、尋禪の弟なり、寬朝僧正に師事して祕密灌頂を受け、寬忠僧正に就て益々請益し、京都禪林寺に住し、當時勸修勝算と共に瑜珈の三傑と稱せらる、正曆應德中東大寺の寺務に補すること三回、長保五年東寺の長者となり、權少僧都に任す、長和元年權僧正に轉し、幾何ならずして諸職を解き、高野山に隱れ、同五年無量壽院を捌す、寬仁元年復長者となる、治安三年大僧正に昇る、雨を祈りて靈驗あり、長元四年諸職を辭し、六年長者となる、長久四年九月十四日寂す、壽八十九、(本朝高僧傳、高野春秋)

ジンキョーボー　深慶房　シューオー秀翁を見よ、

ジンクワイ　深快（一九五八）〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、永仁六年五月東寺の長者に任し、同廿八日權僧正に進み、十一月三日寺務となり、同十五日護持僧となる、寂年缺く、(東寺長者補任)

ジンクワン　深寬（一八八六―一九四七）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　深寬は仁和寺菩提院の行遍僧正に師事して傳法灌頂を受け、五智院に住して密行の名あり、文應元年勅により權大僧都に任し、弘安五年冬東寺の長者に補し、七年權僧正に進み、九年正僧正となる、弘安十年正月十七日寂す、壽六十二、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

ジンクワン　深觀（一六六一―一七一〇）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　深觀は華山上皇の子なり、幼にして落髮し上皇に就て密灌を禀く、後深覺大僧正に從つて傳法灌頂を承く、長元四年敕して權少僧都に任ず、長曆元年東大寺を領し居ること十四年、長久四年冬東寺の長者となり、尋で大僧正に昇り、永

承の初め寺務を補す、二年七月大旱師雨を祈りて驗あり、五年六月十五日寂す、壽五十、(本朝高僧傳)

ジンケン　深賢　一九二二……　〔眞言宗〕山城醍醐山地藏院の開山なり、深賢は按察法印といふ、初め淨林院を營みて居り、後地藏院を建て金剛王院聖賢の室に入りて灌頂を受く、建保三年九月九日遍智僧正の門を叩きて職位傳法を受け、弘長元年九月十四日寂す、壽缺く、著作秘藏記鈔、實皈鈔、秘鏡鈔、普賢延命記、五大虛空藏記、法輪印勘文、光菩薩印勘文、後七日記、灌頂記、灌頂私記、高野雜記、各一卷あり、附法雅西あり、(續傳燈廣錄、諸宗章疏錄)

ジンケン　深賢　二四三六 二五一一　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十七代なり、　深賢字は卓全、俗姓は杉本氏、近江淺井郡今西村の人なり、歲甫めて十一歲、州の坂田郡長濱八幡山內龍存院深盛に投じ、寬政三年正月二十六日薙髮受戒し、四年四度の加行を修す、五年三月元榮大阿闍梨に傳法灌頂を受け、八年豐山に掛錫し、能化法住僧正に謁す、時に師十七歲なり、後、珠光月輪兩院に遷任し、天保四年高祖大師一千年遠忌に當るを以て、闔山力を盡して大曼荼羅供並に結緣灌頂を修し、師其幹事となる、翌五年能化榮明の命により、三十九箇條の許狀を帶び、本願院に轉じ、居ること十二年、時に弘化二年六月二十七日幕府の命を蒙り、江戶根生院に住し、二十六代となる翌三年十月十六日擢でられて遂に豐山能化職に補し、十二月進山の式を行ひ翌年權僧正に任ず、在職六年嘉永四年七月十三日寂す、壽七十六、(新義眞言宗史料)

ジンゲン　深玄　エーミョー榮明を見よ、

ジンシキ　深識　ジッショー實掌を見よ、

ジンジョ　深助　(……)　〔眞言宗〕山城圓融寺の學僧なり、　深助は育助法師の弟にして圓融寺寶蓮院等の別當となる、寂年缺く、(仁和寺諸院家記)

ジンショー　深性　一九三一 一九五九　〔眞言宗〕京都六勝寺の檢校なり、　深性は後深草院の第六子、建治元年に生れ弘安十年出家し、正應二年受戒し、永仁二年灌頂す、仝三年六勝寺の檢校に補し、及び寺務に任じ、同五年綱所を賜ふ、正安元年六月七日寂す、壽廿九、(仁和寺御傳)

ジンショー　深聖　ジンショー尋淸に同し、

ジンジョー　深乘　オーショー應昌を見よ、

ジンタイイン　深諦院　エウン慧雲を見よ、

ジンミョーイン　深妙院　ショーヂュ正受を見よ、

ジンヨ　深譽　エンチ圓知を見よ、

ジンヨ　深譽　ゲンレキ源歷を見よ、

ジンヨ　深譽　コホー孤峰を見よ、

ジンヨ　深譽　ゼンテー全貞を見よ、

ジンヨ　深譽　デンサツ傳察を見よ、

ジンヨ　深譽　ドンヤク呑益を見よ、

ジンレー　深勵　二四〇七 二四七五　〔眞宗〕越前金津永臨寺の住持なり、　深勵字は子勗、號は龜洲、一に垂天社といふ、天性敏捷甫めて六歲にして善く三部經を誦し、九歲にして粗ぼ一端を悟る、播磨の隨慧に就きて學習し、越前の永臨寺に住す、傍ら顯密二教を究め、寬政三年六月宣明と共に擬講となり、入出二門偈を講し、五年夏進みて嗣講となりて往生論註を

講し、六年六月二十二日講師となり、香月院と號し、爾後宗學の興隆を期し講義に力を盡す、同年玄義分を講す、以後、累年定善義、散善義、正信偈、愚禿鈔、淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃、安樂集、大經、文類聚鈔、阿彌陀經、選擇集、淨土論註、觀無量壽經等を順次講説し、文化十二年に至る、同十四年七月八日永臨寺にて寂す、壽六十九、遺骸を寺後に葬むる、師博覽多識にして内外の書讀まさるなし、而して皆宗乘研究の資料に供す東本願寺高倉學寮の學風師によりて大成したり(碑文、眞宗史料)

香月院深勵講師

ジンカイ　尋海　一八二八……　〔眞言宗〕紀伊高野山傳法院十一代座主なり、　尋海初め寶譽といひ、字は肥後阿闍梨と稱す、隆海法師に從ひて灌頂を受け、建久四年八月七日重ねて寂光院に登り、覺尋に灌頂を受く、時に二十六歳なり、後、傳法院座主に任し、付法の弟子覺禪房海の二人を出たす、著作傳流小卷六十七卷あり、(傳燈廣錄)

ジンギョー　尋慶　一九六八……　(淨土宗)山城二尊院の僧なり、　尋慶字は、理覺、關白九條公の子にして正覺睿澄に師事して淨土教を修め、京都二尊院に住し、龜山後宇多二帝の戒師となる、延慶元年正月二日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

ジンサン　尋算　一八八八—一九六六　〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、　尋算字は勤性と云ふ、出家の後圓律玄に師事して其法を嗣き、嘉元の初め招提寺に住し、德治元年二月佛涅槃の日寂す、壽七十九(本朝高僧傳)

ジンショー　尋清　一七二一　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧都なり、　尋清一に深聖に作る、俗姓は藤原氏、右京太夫遠光の次子、關白兼通の孫、延尋僧都の弟なり、勸修寺雅慶の室に入りて出家し、傳法灌頂を受け、廣澤流の心印を傳ふ、去りて東大寺及び遍照寺の別當に補し、少僧都に轉す、小野所傳の仁海の法を扣き大僧都に任し、高野山に登りて十一代座主となり、永承六年六月十八日寂す、壽缺く、(傳燈廣錄)

ジンジョー　尋靜　(……)　〔天台宗〕比叡山の僧なり、　尋靜俗姓不詳、出家して覺惠律師の門に投し、後、楞嚴院に住す、性慈善にして人來れば先づ飲食を勸む、十四年山門を出でず、晝は金剛般若經を讀み、夜は阿彌陀佛を念す、修する所の種々の善根唯極樂往生を期す、行年七十三にして病に臥し、弟子に命じて三時念佛三昧を修せしむ、命終に臨みて正念にして西面合掌して寂す、(往生極樂記、本朝高僧傳)

ジンゼン　尋禪　(……)　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、　尋禪は禪僧となり、文才を以て有司に任ぜらる、晩年に及び世務を厭ひ再び僧となり、金剛峯寺に留まりて蓮社の

業を修す、寂年及壽欠く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ジンセン 尋禪 一六〇三 一六五〇 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、尋禪は藤原師輔の第十子なり、比叡山座主慈惠の弟子となり、顯密を究め、靈感多し冷泉帝不豫の時、師加持して平癒す、天延二年一身阿闍梨となる、天台僧徒の此職は師に始まるなり、天元四年秋權僧正に任し、永觀三年延暦寺の座主に補す、永祚二年印を解きて飯室に隱遁し、正暦元年二月十七日寂す、壽四十八、寛弘四年勅して慈忍と謚す、(天台座主記、元亨釋書、本朝高僧傳)

ジンユー 尋祐 (……) 〔……〕 和泉松尾山寺の僧なり、尋祐は河内國河内郡の人、脱俗の後和泉國松尾山寺に住し、常に阿彌陀佛を念誦し、兼ねて佛印を修す、行年五十有餘、正月一日自ら頭痛と稱し、戌刻より亥刻に至り、大光明あり、普く山中を照す、草木枝葉悉く分明にして晝日に異ならず、期に至りて寂すれば大光明漸く滅したりと云ふ、(往生極樂記、本朝高僧傳)

ジンエ 神慧 (一五五〇) 〔天台宗〕近江梵釋寺の僧なり、神慧は天台宗を學び、羯磨に通す、寛平二年四月八日禁殿に灌佛會を修するに方り、師之に先ちて白檀の四天王像を造り、上表して之を獻す、詔して天皇梵釋寺に遊びたまへる時師供を辨し行を迎へたる勞を賞して大威儀師に任す、寂年及び壽欠く、(本朝高僧傳)

ジンエー 神叡 一三九七 (……) 〔三論宗〕大和元興寺の僧なり、神叡は唐の人歸化して元興寺に留る、三論法相華嚴に兼通す、養老元年七月廿一日律師に任せらる、天平元年十月七日少僧都に任せられ、大安寺の道慈と並びて道譽高く釋門の二秀とせらる、封戸五十戸を賜はる、天平九年に寂す、(續日本紀、七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳)

ジンゴー 神興 二四七四 二五四七 〔眞宗〕越前南條郡金粕村憶念寺の住持なり、神興初の諱は界雄、老南と號す、俗姓は南條氏、贈嗣講德母院良雄の長子にして、文化十一年八月十五日越前南條郡金粕村に生れ、文政十一年父の後を承けて憶念寺の住職となる、後、紀伊三河に遊歴して餘乘を學び、雲華院大含講師の門に入りて宗乘に心を潜め、弘化以後越前に在りて宗乘餘乘を講し、安政元年以後唯識三類境選要、倶舍論、義林章を高倉學寮に講す、慶應元年五月二十九日年五十二にして擬講となりて五會法事讃淨土論を講し、明治四年九月嗣講に進みて玄義分を講し、又二等學師となりて散善義を講し、十一年十一月一等學師となりて愚禿鈔、無量壽經を講し、十六年五月講師となりて後淨土文類聚鈔を講し、同年十二月少教正に補して學事顧問を兼ねて學寮總監となり、往生要集、往生論註を講す、二十年一月京都にありて中風症に罹り、六月二十八日新法主親しく病床を訪ひて慰諭せらる、同日午後八時三十分寂す、壽七十四、雲濤院と號す、(碑文、眞宗史料)

ジンシ 神子 エーソン榮尊を見よ、

ジンタイ 神泰 (……) 〔三論宗〕奈良元興寺の高僧なり、神泰は俗姓不詳、福亮に師事し、元興寺に住し、三論を講敷す、智藏と名を齊うす示寂の年時欠く、弟子宣融あり、(本朝高僧傳)

ジンタイ 神退 (……) 歌法師なり、神退は近江滋

賀の人にして頗る和歌に巧なり、古今集雜部に一首を收む、(古今集目錄)

ジンニチ 神日（……）〔眞言宗〕山城愛宕山の僧なり、神日は愛宕山白雲寺に住し、律師となる、故に白雲上綱と云ふ、廣澤の延性の法を受く、(一說法皇の附法と云ふ、)醍醐山の法を加ふ、寂年月日詳ならす、著作、金剛九會圖、五秘密念誦次弟、灌頂式、各一卷あり、(傳燈廣錄、諸宗章疏錄)

ジンヨ 神譽 マンシユー滿秋を見よ、

ジンヨ 神譽 レーミヨー靈妙を見よ、

ジンリユー 神龍（……）〔曹洞宗〕安房長安寺の僧なり、神龍字は大雲、亘天要播に參し、其寂するにあたり衆請に依り席を補して安房長安寺に主となる、晚年法嗣齡山曆壽に法を付し出て、終るところを知らす、(日本洞上聯燈錄)

シンコー 諶厚 二四九三 二五五七 〔天台宗〕下野滿願寺の僧なり、諶厚號は樂只、又は掣龍子と云ふ、父は藤井穀昌、母は小泉氏、天保五年正月二十五日信濃の長野に生る、幼にして出家の志あり、父に强請して其許を得、日光山護光院第十二代大僧都諶貞に師事す、蓋し諶貞は師の叔父なり、弘化二年十三歲にして四度の加行を修了し、嘉永元年奧山實行院大僧都觀海に聲明を受け、同三年三部の灌頂を受け、迅疾金剛と號す、當時の碩學隆頂律師の門に入りて天台小部の講を聽き、梵網の十重戒を受く、慈觀大僧正に法華玄義を聽き、日大子一千日行法を修す、安政二年廿二歲の時、天台管領の宮一品慈性法親王の令旨を奉して法兄護光院十三代諶常の後を承く、尋いて大寶尙に悉曇の法を相承し玄法の軌を傳へ、後、密門諸儀軌を傳受す、文久三年大悲懺を修し、法華三昧を行す、慶應三年四月東照宮二百五十回の勅會大法會に出勤す、此年毛利氏を征す、天下漸く多事なり、三年大誓願を發し、三十三ヶ月を期して中禪寺に登り、寶祚無窮、天下太平、令法久住、山內安全を二荒の二神に祈る、明治元年七月三十四歲にして日光山總代となる、當時海內騷擾し亦山中害を蒙むる、師政府に歎願して救助ぜらる、其他神佛分離令發布に際し、頗る兩京の間に盡力して日光山寺社の保存を勤む、五年四月權訓導に補せられ、同年冬管長の命により岩代磐城陸前の三國を巡教す、此年官令によりて初めて姓を彥坂と稱す、六年三月二十二日訓導に任し、十一月二十五日宗務廳議事に推され、七年二月四日中教院庶務に任し、同月十二日教導取締となる、七月日光山寺院の堂塔移轉の官許を得、此時報塔の移轉に關して紛議を生し、解けさすること殆んと三年なり、同年八月廿四日少講義に補す、九月二日學頭代を改めて執事となし、師命を拜す、八年九月十九日大講義に補し、十一月二十五日中教院講究課の職を兼ぬ、十二年四月滿願寺の副住職に任せられ、翌年八月圓頓戒を大杉大教正に受く、旹十五年五月十二月滿願寺住職となり、十六年一月二十六日紫衣の敕許あり、同年十月五日輪王寺號復稱の官許を得、滿願寺住職を以て直に輪王寺住職となす、十八年六月廿七日權僧正に補し、八日十日正に轉す、十九年八月有栖川宮威仁親王殿下額を賜ひて得天眞といひ、廿年五月北白川宮能久殿下額を賜ひて清淨窟といふ、此月竪議を遂業し、圓頓戒

を受く、十二月八日權大僧正に補し十二月二十五日命あり翌年一月以降參內拜賀參拜を免さる、廿七年一月二十六日宗政顧問に任す、廿八年五月二十九日大僧正に昇進す、三十年七月五日寂す、壽六十五、舍滿に茶毘す、小松宮彰仁親王殿下金剛心院の四大字を書して下賜したまふ、(四明餘暇)

シヤリ 舍利尼(一四一〇)(……) 肥後某山の尼なり、舍利尼は肥後八代の人なり、天平勝寶二年十一月十五日生る自然智を具し、言詞巧妙なり、七歳にして法華華嚴二經を誦す、一日肥前の佐賀氏に安居戒を設け、大安寺戒明を請して華嚴の講席を開く、尼講席に列してこれを聽き、且つ大衆のために深義を解說す、時人稱して舍利菩薩と云ふ、示寂の年時缺く、(法華驗記、元亨釋書、本朝高僧傳)

シヤクア 綽阿(……)〔淨土宗〕豐後某寺の學僧なり、綽阿は豐後の太守なり、宿因の然らしむる所遂に國務を捨て、聖光上人に投して出家す、道化盛なり、示寂年月に缺く(鎭流祖傳)

シヤクニヨ 綽如 ジゲー時藝を見よ、

シヤクゲンイン 釋源院 シンテキ眞滴を見よ、

シヤクヨ 釋譽 ソンケー存冏を見よ、

シヤクヨ 釋譽 リンチ輪智を見よ、

シヤクヨ 迹譽 ソンジユ存樹を見よ、

ジヤクアン 寂菴 ジヨーシヨー上昭を見よ、

ジヤクイン 寂因(……)〔天台宗〕比叡山の僧なり、寂因は京の人、出家して西塔院に住し、天台を究め、殊に論議に長ず、壯歳を過ぎて小庵を結び、專ら讀誦を事とす、日に法華經五部を課す、示寂の年時缺く(本朝高僧傳)

ジヤクエ 寂慧 リヨーキヨー良曉を見よ、

ジヤクエー 寂永 ジヨーゴン常勤を見よ、

ジヤクエン 寂圓(一五三九)〔天台宗〕山城元慶寺の學僧なり、寂圓久しく比叡山にありて華山寺僧正遍昭に從ひ、兩部の密灌を受け、元慶寺に住して顯密を敷演す、元慶三年叡山に登り、圓珍和尙に謁して僧臘に關し疑を質す、某年寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

ジヤクエン 寂圓(一九五九……)〔曹洞宗〕寶慶寺の開山なり、寂圓は宋の人、安貞元年道元に從ひて入朝し、興聖寺永平寺に侍す、道元の滅後孤雲に依りて深造する所あり、遂に其印可を受く、下野刺史藤原氏越前に新に鷹福山寶慶寺を建て寂圓を請して開山第一世となす、義雲に心印を附し、正安元年九月十三日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ジヤクオー 寂翁 ゼンチユー善忠を見よ、

ジヤクオンイン 寂遠院 ニチツー日通を見よ、

シヤクゲン 寂源(一六七三)〔天台宗〕山城勝林院の開山なり、寂源俗姓は源氏、左大臣雅信の子、俗名は時信と云ふ、池上の皇慶に從ひて落髮受具し、顯密の法を學び、長和二年大原山に入り、勝林院を剏してこれに居り、某年寂す、其年時及壽欠く、(本朝高僧傳)

シヤクコー 寂晃(……)〔臨濟宗〕京都天龍寺の僧なり、寂晃字は徹叟、其鄕貫詳かならず、同閭首座と共に夢窻國師に天龍寺に參し、書記となる、寂年及び壽缺く、(延寶傳燈錄)

ジヤクコーイン 寂光院 ニチジユン日遵を見よ、

ジヤクゴン 寂嚴 二三六二 二四二一 (眞言宗)備中寶島寺の僧なり、 寂嚴字は諦乘、俗姓は富永氏、世々備中足守侯に仕ふ、師は元祿十五年九月十七日を以て生れ、九歳にして郡の普賢院超染律師に師事し、剃髪受戒し、經を受け業を習ふ、四度の密軌を習練し、佛經戒及兩部の灌頂を受く、徧く講席に遊びて名宿を訪問し、顯密性相に渉り、兼て梵學を善くす、元文元年京都五智山智積院に於て曇寂に謁し、弟子の禮を執り、醍醐院流の印璽を受く、六年和泉家原寺に於て曇寂に重ねて具支灌頂を受く、此年請に應し都羅島寶島寺に開講し、宗乘を擧揚す、寶暦十年三月長谷寺常明僧正三備の間を遊化す、師これに隨ひて蘊奥を傳へらる明和四年弟子文徹を擧げて席を補せしめ、倉敷の玉泉寺に退隱し、逍遙自適、安禪長養す、師嘗て井山了雲禪師と交誼殊に厚し、八年八月三日寂す、壽七十、臘六十一、著作大悉曇章稽古、悉曇字記大觀、梵本彌陀經私記、梵文心經私記、等若干卷あり、(續日本高僧傳)

ジヤクサイア 寂西阿 トンシユー頓秀を見よ、

ジヤクシツ 寂室 ゲンコー元光を見よ、

ジヤクシツ 寂室 リヨーコー了光を見よ、

ジヤクシン 寂心 一六五七 (天台宗)播摩八德山の學僧なり、 寂心は賀茂忠行の第二子、俗名は保胤、家世々天文暦數の學を以て朝に仕へ、天暦の末賦を試みられて高科に登り、近江の椽に任し、後、記箋を司る、師平素官にありと雖、佛を慕ひ、寛和中嗣子已に冠婚するに及び、遂に祝髪出家し、比叡山の横川に登り、増賀に止觀を聽き、源信に淨業を學び、性空、覺運、安慧等と講習研究す、後、四方に遊歴し、佛事を以て務となし、晩年播磨に到り、八德山に菴居す、長德三年洛東如意輪寺に寂す、壽欠く、師俗にありし時日本往生傳一卷を撰す、(本朝高僧傳)

ジヤクシユン 寂俊 一六九五 一七八一 (天台宗)近江比叡山の僧なり、 寂俊俗姓は源氏、後中書の嫡孫土御門右府の長男なり、俗名を俊房と云ひ、政事文學に通じ、朝事の暇佛學を務とす、保安二年挂冠し、同三年二月落髮して自ら寂俊と號し、比叡山に登りて受戒し、專ら念佛を唱へ、自ら華嚴經を書す、保安二年十一月十二日寂す、壽八十七、(元亨釋書、拾遺往生傳)

ジヤクシヨー 寂昭 一六二四 一六九六 (天台宗)山城如意輪寺の僧なり、 寂昭は諫議大夫大江齊光の子なり、俗名は定基、仕官して參河刺史となる、後、出家して八德山寂心法師を師として衣盂を受け、東山如意輪寺に住す、後比叡山の源信僧都に師事して台教を學び、醍醐寺仁海僧正に密乘を稟く、嘗て宋の敎法盛んなるを聞き、長保四年宋に往く、源信台宗の二十四問を作り師に付して南湖の智禮法師に寄す、智禮師を延て上賓となす、亟相丁晋寺に入りて師に見え、其德義に感ず、答釋成りて師將に東皈せんとす、丁晋これを留め、其に姑蘇に往き、吳門寺を淑して師に居らしむ、景德元年師阿彌陀佛の像、並に紺紙金字の法華經、水晶の珠數を眞宗皇帝に上る、帝大に喜び、紫袍衣を賜ひ、後敕して蘇州の僧錄司となし、特に圓通大師の號を賜ふ、師遂に皈朝せずして我朝長元九年宋地に寂す、壽七十三、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ジヤクシヨー 寂照 二三二〇 二三八六 (曹洞宗)肥前高傳寺の僧な

り、　寂照字は大光、俗姓は山田氏、肥前佐賀の人なり、十二歳高傳寺賢洛和尚に就きて得度す、五年の後、出て丶長崎に遊び、明僧徵一（興福寺に寓す）心越等に謁す、明年寺に歸へり洛和尚に隨行して京師に上る、延寶八年洛和尚加賀に下り、月舟和尚を訪ふ、師亦隨行す、後、京都に回り、諸講席に列す、尋て江戸に下り、吉祥寺に留まり、精勤衆を驚かす、時に正泉寺德翁高曹洞禪を唱へて盛聲あり、師其下に馳せ參究功あり、其法を嗣く、禪定寺月舟胡に事へて益功あり、元祿四年德翁高大乘寺に遷るにあたり、再び其下に事へ侍者となる、寶永四年高傳寺拍舟寂の請により其席を嗣き、法化盛なり享保七年六月十日病を以て韜光菴に退隱し、同十一年五月二日寂す、壽六十七、臘五十五、（續日本高僧傳）

ジヤクシヨー　寂照　チカン智鑑を見よ、

ジヤクシヨー　寂照　シユーキン宗昕を見よ、

ジヤクシヨー　寂清　シユンタイ峻諦を見よ、

ジヤクスイ　寂水　二二八九……（淨土宗）三河大樹寺の僧なり、　寂水は品蓮社九譽一吟と號す、其俗姓生國詳かならず、出家して觀智國師の室に入りて宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、初め江戸赤坂淨土寺に住し、後三河大樹寺に移る、寛永六年九月十八日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ジヤクセン　寂仙　一四一九……〔……〕伊豫石槌山の僧なり、寂仙伊豫國神野郡の石槌山に住し淨行を修す、道俗尊信して寂仙菩薩と云ふ、常に西方極樂を願求す、天平寶字三年示寂す、（靈異記）

ジヤクセン　寂仙　二三六九……〔淨土宗〕山城金戒光明寺の僧なり、　寂仙は心蓮社薫譽と號し、其郷貫詳かならず、春岳に師事して法を嗣ぎ、江戸幡隨院に住す、後京都黒谷に移り、寶永六年（一說元年）正月十七日寂す壽欠く著作光明記二卷原人論續解序一卷あり（淨土總系譜、淨土宗史料）

ジヤクゼン　寂禪　一六四五—一七二七　〔天台宗〕近江石塔寺の僧なり、　寂禪俗姓は菅野氏、京都の人なり、初め仕官して工部員外郎に至りしも、佛法を慕ひ、長和二年三十歲にして比叡山に登り、座主慶圓を拜して剃髮受戒し、專ら台敎を學び、又慶祚に從つて三部の密を受く、後、遊方して杖錫定まるところなし、晩年近江蒲生郡石塔寺に住し、坐觀念佛す、治曆三年八月二十一日寂す、壽八十三、臘五十、（本朝高僧傳）

ジヤクゼン　寂禪　キヨーエン慶圓を見よ、

ジヤクセンボー　寂仙房　ニチシヨー日證を見よ、

ジヤクチヨー　寂超　二三三〇—二三九六　〔天台宗〕筑後高良山某菴の僧なり、　寂超字は正行、別號は即心といふ、俗姓は粟谷氏、筑後高良山の人なり、萬治三年十二月に生る、幼にして聰敏なり、季父久信携へて京都に上り、延曆寺座主寂源僧正に見ゆ、僧正一見器重し門下とす、時に十二歲なり、延寶元年御井道場にて得度す、寂源僧正に從ひて東叡山に登り、天眞法親王に拜謁し、名香並に瑪瑙盒を賜はる、六年比叡山に灌頂し、靈空の門に敎觀を習修す、當時妙立の盛聲振へり、乃ち靈空に附隨して謁を取り、菩薩戒を受く、既にして鄕里に歸へり、空華庵に居り、修法誦咒を事とす、時に二十八歲なり、太宰府の戒壇院に到り、智圓律師を禮して登壇受具す、後、再び京都に上り、妙立の下に留り、十義書觀經疏等を聞く、

獅子谷忍澄上人に謁して淨土教を聞く、寂源僧正極樂無常院を營構して師に進む、乃ち同院に住し、顯密の一行を事とす、六十歲以後顯密の雜行を廢し、專ら淨土念佛の一行を事とす。自ら即心金剛觀と號し、誓ひて彌陀佛號日別に十幅を書し、衆人に授與す、道俗受戒受十念するもの數ふへからす、享保二十年夏微疾に罹り、冬に至り愈ゆ、翌元文元年夏四月再ひ發し、五月二十二日正念に命終す、壽七十七、臘五十三、著作淨土三部經圓信疏、菩薩戒經略解、授戒法、圓頓戒儀等あり、（續日本高僧傳）

ジヤクチヨー 寂超 ジヨージユン常順を見よ、

ジヤクニチボー 寂日房 ニチカ日家を見よ、

ジヤクニン 寂忍 リヨービン良敏を見よ、

シヤクニユー 寂入 一九四一…… 〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、寂入は出羽の人、戒壇院圓照に從ひて戒律を受け、後、京都東福寺木幡の觀音院京都增福寺に歷遊し、戒律を唱ふ、弘安四年六月寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ジヤクニヨ 寂如 コージヨー光常を見よ、

ジヤクニヨイン 如寂院 ニチタイ日迨を見よ、

ジヤクホン 寂本 二二九二 二三六一 〔眞言宗〕紀伊寶光院の學僧なり、 寂本號は雲石堂、俗姓は長谷川、山城深草の人なり、幼にして高野山に登り、應盛阿闍梨に從いて落髮し、兩部の密軌及灌頂を受く、幾何ならずして應盛寂したれば、更に快運に師事し、請益日に新なり、功積みて玄理に徹し、外典に精通し、詩を賦し、文を作り、兼ねて書畫彫刻を善くす、寶生院の玄宥師の多能を愛して侍者とす、師遂に安祥寺流の印璽を傳へらる、萬治二年高野山を退き、請により越前丸岡中台寺に住す、寛文十二年快運の遺命により、山に歸り、寶光院と主どる、時に年四十二なり、天和二年大雲院に退隱し、尋て家原寺に寓す平常都率の上生を願ひ、自ら彌勒の像を刻み、都率曼陀羅を書き、業行怠りなし、元祿十四年十月十五日寂す、壽七十一、著作、神社考辨疑、弘法大師弟子傳、異字編等二十餘部あり、（續日本高僧傳）

ジヤクミン 寂珉 ユージヨー由常を見よ、

ジヤクミヨー 寂明 二四五三 二五一七 〔曹洞宗〕攝津般若林の禪僧なり、 寂明字は覺巖、號は一雨、別に無用といふ、京都の人、九歲實巖に師事し、稍長して近江清凉寺實參の下に參究し、印可を受く、攝津兵庫に行乞し、海福寺內に一菴を結ひ、般若林といふ、禪僧文墨を樂む、殊に達磨の畫を善くす、安政四年十一月二日寂す、壽六十五、

ジヤクヨ 寂譽 二三二五…… 〔淨土宗〕筑後報身寺の開山なり、 寂譽は肥前上佐賀郡の人、其氏姓詳かならず、法を雪念に嗣ぎ、筑後五郎丸村に報身寺を創して開山となる、寛文五年十月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ジヤクヨ 寂譽 イチテキ一的を見よ、

ジヤクヨ 寂譽 ゲンテー源貞を見よ、

ジヤクヨ 寂譽 セツドー說道を見よ、

ジヤクヨ 寂譽 ソンテキ存的を見よ、

ジヤクヨ 寂譽 テツドー哲道を見よ、

ジヤクヨ 寂譽 ドンシユー呑宿を見よ、

ジヤクヨーイン 寂用院 杳旭を見よ、

ジヤクヨーイン　寂耀院　ニチケー日啓を見よ、

ジヤクレー　寂靈　一九八二 二〇五一〔曹洞宗〕丹波永澤寺の僧なり、寂靈字は通玄、俗姓は藤原氏、豐後國東郡武藏郷の人なり、其母初め嗣子無きを以て佛塔に詣て祈願す一夕靈夢を感して妊むあり師を生む師聰敏なり數年の間經史を讀む、深く世相を厭ひ、十七歳にして同國大光寺に至り、定山禪師に依て出家す、明年大宰府の戒壇に登りて大僧となる、暦應三年遠く加賀に遊て大乘寺に掛錫し文和元年の春、總持寺峨山和尚の道風を聞き、遂に往て謁す、峨山一見器とし、命して侍司に居らしむ、一日峨山の身心脱落の話を擧ぐるを聞き、忽然として大悟す、後圓融帝師の化を聞き、欽尚を加へ、特に勅黄を賜て天下の僧錄と爲す、是れより曹洞の宗風大に興る永徳二年詔を奉して總持寺に住す、後至徳丙寅越州の守某氏、新に龍泉寺を建て、師を延て第一世と爲す、嘉慶二年三たひ總持寺を董す、峨山の法嗣廿五人、山の寂後遺誡に達する者夥し、師唯十一人を留めて餘は皆之を擯す、其の嚴令常に斯の如し、晩に事を謝して龍泉寺に歸る、明德二年四月病を示し、五月朔日寂す、世壽七十歳、臘五十二、（日本洞上聯燈錄）

ジヤクレン　寂蓮（一九二四）〔淨土宗〕山城智恩寺の僧なり、寂蓮俗姓詳ならす法を源智上人に嗣ぐ、文永年中京師に於て四十八日を期して良忠と共に源智辨長の二流を校合す、其義悉く違はず、師曰く源智上人平日の言、今日已に符合す、予が門に於ては鎭流の相傳を以て源智上人の義となす可し、更に別流を立つべからず、是れに因て勢觀房源智上人の門流は鎭西流に同ず、と師示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

ジヤクケー　積桂　ジトク自德を見よ、

ジヤクスイ　積翠　ショーリユー正隆を見よ、

ジヤクホー　積峰　キヨーゼン慶善を見よ、

シユイチ　守一　無能ムノーを見よ、

シユイン　守印　一四四三 一五〇三〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、守印俗姓は土師、和泉の人なり、夙に勝虞を師として經論を學び、延暦二十四年年分得度す、法相を精練し、兼ねて俱舍を善くす、元興寺に住して後學を導く承和十年十二月二十八日寂す壽六十一（本朝高僧傳）

シユエ　守惠（一九五七）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、守惠は左大臣實雄の子、道融法師に就きて宗旨を究め、石山寺の座主となる、正嘉二年法眼に叙し、文應元年權少僧都に任す、文永三年權大僧都に轉し、同六年法印に叙す、正應五年權僧正に任し、永仁二年正に進む、同三年東寺長者に加任し、五年寺務法務を兼任し、又護持僧となりて、同年十月大僧正に昇る、其死歿の年時缺く、（仁和寺御院家記、東寺長者補任）

シユエキ　守腋　二一〇五 二一七四〔曹洞宗〕伊豫闢雲寺の禪僧なり、守腋字は玄室、伊豫の人、俗姓は源氏なり、出家して闢雲寺大功に參す、時に英巖希雄會にあり、後英巖玅喜華光の二寺に移つるに及ひ、師隨從して入室を許され、衣法を傳持す、時に文明六年なり、出てゝ總持寺に出世し、鄕に歸へりて安樂寺の故跡に棲む、延德三年華光寺に主となり、永正四年闢雲寺に遷つる、同十一年十一月二日華光寺に寂す、壽七十、法嗣華屋英曇あり、（日本洞上聯燈錄）

シユカク 守覺 一八一〇／一八六二 〔眞言宗〕京都仁和寺の學僧なり、守覺は後白河天皇の第二子、母は藤原氏、久安六年三月に生る、十一歳仁和寺に入りて大僧正覺性に侍し、十二歳剃髮納戒し、十九歳覺性に就きて灌頂法を受け、嘉應二年仁和寺に住し、明年圓宗圓融圓敎等の寺務を領す、承安元年六勝寺の長吏に補し、三年最勝光院の撿校に補す、翌年春蓮華心院落慶供養の導師となる、安元二年二品親王に叙す、治承二年冬六波羅亭に孔雀經の法を修して中宮の産を禱り、賞を覺成に讓りて權大僧都となす、四年冬上皇の病を祈り、六條院に北斗法を修し、元暦元年畿内の地震を祈り、六條院に一字金輪の法を修し、賞を親覺に讓りて法眼に叙す、文治二年牛車の敕を賜ひ、建仁二年八月二十五日寂す、壽五十三、京都紫金臺寺に葬むる、師野澤流の密灌を究め、梵漢の書法に巧なり、又和歌を善くし、文章を嗜む、著作甚た多し、御室法流の中興と稱せらる、著作、野月鈔九十卷、澤見新鈔五十八卷、野鈔十八卷、野決鈔十卷、澤鈔十卷、澤見六卷、修法要鈔六卷、十八道次第、十八道初行表白、廣澤印可次第、佛事略次第諸尊表白集、修瑜伽者用心、拾要集、舍利講一段式、右記、左記各一卷あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シユキヨー 守慶 (………) 〔淨土宗〕近江豐永寺の開山なり、守慶は其俗姓生國詳かならず、深譽圓知に師事して法を嗣ぎ、近江愛知郡中戸村に豐永寺を剏す、寂年及壽欠く、(淨土總系譜)

シユケン 守謙 二四七〇／二五四四 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、守謙字越谿、若狹の人、十歳出家し小濱常高寺大圍に師事し、後、曹源寺儀山善來の法を嗣く、明治維新の際志士と交り大に名を知られ、伊達自得居士等に師事せらる、後妙心寺に上り、第五百卅七代となる宗風を擧揚す、明治十七年冬病を獲同年十月十四日寂す、壽七十五、會下に眞淨宗詮、禾山禪鐵等あり、

シユゴン 守勤 (二一〇三) 〔曹洞宗〕丹波大寧寺の開山なり、守勤字は惟忠、攝津の人なり、出家して竺山禪師に師事し、後ち總持寺に出世し、竺山の嗣となり、立川護國寺に移る、嘉吉三年の秋細川下野守常忻の請に應し、丹州多記郡に神護山大寧寺を築き、第一世となり、某年寂す、壽缺く、偈あり一棚傀儡、舞袖輕飄、歌皷龍處、蹈二破乾坤一(日本洞上聯燈錄)

シユジヨ 守助 一九〇〇／一九五四 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、守助は西園寺太政大臣實氏の子、幼にして御室の大敎院に入り、隆助僧正に師事して密敎を熟習し、灌頂法を傳ふ、師性相學に精通し、眞言事相の秘奧を傳ふ、正嘉元年大敎院に住し、法印に叙す、建仁二年法務を兼ね、弘安四年權僧正に任し、此月法務を辭す、七年四月東寺の長者となり、九年僧正に進む、明年秋寺務法務を司とり、九月護持僧に補す、正應元年大僧正に昇進し、二年冬諸職を辭す、永仁二年五月五日寂す、壽五十五、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記、本朝高僧傳)

シユセツ 守拙 (………) 〔………〕 書僧なり、守拙は周文に就いて書法を學ぶ、水墨の觀音に秀作あり、(扶桑書人傳)

シユソー 守琮 二〇九三 二一六一 〔曹洞宗〕薩摩興國寺の禪僧なり、守琮字は泰雲、薩摩の人、俗姓は源氏なり、幼にして玉龍仲翁に投して出家し、後、普く禪門を叩き、心巖良信に參して其法を嗣き、總持寺に出世し、次に福昌寺を主とる、明應六年薩隅日三州の大守島津忠昌興國寺を剏し、師其開山に請せらる、文龜元年十月廿四日寂す、壽六十九、法嗣龍室良從あり、（日本洞上聯燈錄）

シユダツ 守脫 タイホー大寶を見よ、

シユチユー 守中 二一七五 二二四四 〔曹洞宗〕日向法華嶽の開山なり、守中字は代賢、俗稱は中役氏、薩摩の人なり、出家して初め敎乘を學び、後衣を更へて禪宗に皈す、福昌寺の喜冠龍慶に參して契悟あり、遂に其法を嗣ぐ、薩摩の太守島津氏師の道風を聞き、請して福昌寺に住せしむ、師同寺にあること二十年、法席最も盛んなり、刺史島津氏、皈依すること渥く、師に就て祝髮受戒し、弟子の禮を執るに至る、時に伊東氏國疆を侵し、ために士民斃るゝ者多し、太守これを憂へ、無遮齋を修す且朝廷に奏して佛光普照禪師の號、及紫衣を賜ふ、日向法華嶽は九百年餘の古刹にして百三十院あり、大守師のために合せて一寺となし、延て開山第一世となす、日向の永泰寺大隅天福萬年二寺を剏して開山となり、天正十二年二月十五日寂す、壽七十、（日本洞上聯燈錄）

シユチヨー 守朝 （……） 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、守朝は加賀山田郡の人、其姓を詳かにせず、空晴僧都に侍して法相の經疏を研習し、博議を以て衆に推さる、三會の講を經て興福寺に住し、法相を講ず、寂年及壽欠く、著作中邊論私記九卷、觀普賢經玄贊三卷等あり、（本朝高僧傳）

シユチヨー 守寵 一五〇一 …… 〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、守寵は護命に從ひて法相を受け、元興寺に住して常に經論を講す、承和八年十二月某日寂す、壽缺く、（本朝高朝傳）

シユテツ 守哲 二二二六 二二八七 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、守哲字は代翁、俗姓は惟宗氏、薩摩の人なり、長して法華嶽の代賢守中に依りて童子となり、祝髮受具の後、福昌寺桃尾仲圓に師事すること十年、席を踵きて同寺に住す、後總持寺に出世し、又福昌寺に歸へる、寬永四年十一月十七日寂す、壽六十二、臘四十三、法嗣日鑑壽益あり、（日本洞上聯燈錄）

シユトク 守篤 ホンジユン本純を見よ、

シユバン 守鑁 二〇七六 二一四三 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、守鑁は三條坊門、大納言通守の子、應永卅四年禪信の室に入り、三十五年出家す、正長二年直に法眼成就院管領に叙し、文明十五年長者に任す、同年十二月一日寂す、壽六十八、（仁和寺諸院家記）

シユビン 守敏 （一四八四） 〔眞言宗〕京都西寺の僧なり、守敏俗姓生國詳かならす、少にして、奈良に往き、勤操等の諸師に隨ひて空有の法を學び、兼て密敎に通し、空海と共に一時に名を揚ぐ、弘仁十四年天皇東寺を空海に賜ふ、時師に西寺を授く、天長元年春三月畿内久しく旱魃す、師奏して雨を祈る、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕守敏の事古傳に見えず、修圓の事を誤り傳へたるものにして、實は其人あらざるべし、

シユホー 守邦 二〇三九 二一〇五 〔曹洞宗〕大隅含粒寺の開山な

り、守邦字は仲翁、薩摩國主島津忠久の後元久の子なり康暦元年日向國飫肥に生れ、小字梅樹と云ふ、幼にして學を好み七歳にして世相を厭ひ出家の志あり、竺山仙に見へて其志を述ぶ、後、妙圓寺石屋和尚に師事して童子となり、十五歳にして剃髮す、石屋和尚福昌寺に遷るに及んで、師これに隨侍す、會國變に値ひ家臣等相議して曰く嗣君出家す、國誰れにか賴らん、將に勸諭して家に還らしめんとす、山に至るに及で、師の衆と共に作務するを見て驚嘆に堪へず、密に啓して曰く、君三州に藩守たるべし、今作務する所のものは何ぞや、師曰く、三州の藩守豈に吾が望む所ならんや、出家學道、庶くば三界の導師と爲らん、皆感嘆して去る、翌年遊方し足利學校に就て經史を學ぶ、久して棄て去り、美濃國に赴き、補陀寺の月江和尚に見ゆ、居ること二年、越前に至り、芳菴希明二師に謁し、次に日峯英仲二師に參す、應永十九年父の喪に値て歸り、再び石屋和尚に參す、石屋和尚美間作の西來寺の命に應ずるに及び、竹居を擧て補處せしむ、師囑を受て隨從し日夕咨扣す、應永二十八年竹居能登國總持寺に住す、師隨從して往き命せられて鑑寺と爲る、八月廿九日入室して親しく衣偈を附せらる、時に年四十三なり、明年總持寺に出世し、事を謝して再び薩摩に回る、太守島津久豐太平山常珠寺を創して師を請す、三十一年移て福昌寺の席を主る、永享元年島津忠國大隅始良の莊に於て福壽山含粒寺を創して師を迎へて第一祖となす、二年長門の瑞松菴に住す、四年旨を奉して總持寺に昇り、紫衣を賜ふ、後一寺を興し禹門山龍澤寺と云ふ、去て故鄕に還り、大隅怡佐の城主季久永源寺を創して請す、春山城主請て直林寺に住せしむ、文安二年の夏伊集院に寓して病を得、六月六日寂す、壽六十七、臘五十三、福昌含粒に分葬す、(日本洞上聯燈錄)

シユユ　守瑜（一九六〇）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、守瑜は久しく西大寺の本證上人に侍して密灌大法を受け、文永元年僧正に任ず、正安元年東寺二の長者に加はり、尋で寺務を領し、護持僧に擧けらる、正安二年諸職を辭し、某年寂す、壽欠く、(本朝高僧傳)

シユリ　守理　シンカイ晋海を見よ、

シユア　珠阿　コーゲー光囧を見よ、

シユガン　珠巖（……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、珠巖字は肅翁其鄕貫師承詳かならず、永明塔の禪衣を賀して曰く、永明金縷自家氈、列祖堂前光蓋天、一日徒門知所在、眞風解慍似薰弦と、寂年壽欠く、(延寶傳燈錄)

シユガン　珠巖　ドーチン道珍を見よ、

シユギヨクアン　珠玉菴　シユーギ宗祇を見よ、

シユコー　珠光（二〇八二―二一六二）〔臨濟宗〕山城紫野眞珠院の禪僧なり、珠光は大和の人、撿校村田杢市の子なり、世々奈良中御門に住す、師十歲にして奈良北市の稱名寺に投して髮を削り、始めて珠光と云ふ、十八歲にして稱名寺の塔中法林菴に住す、然るに幾もなく寺務の煩勞を厭ひ、二十歲にして菴を出て、四方に漂遊し、二十五歲にして俗に還る、後、紫野大德寺一休宗純禪師の盛德を聞き、禪師を問うて其俗弟子となり、三十歲にして大德寺塔中眞珠院に住し、專ら禪に參し工夫す、常に睡眠を催すを患ひ、大醫某を問うて睡眠を驅

除する藥方を求む、某、睡眠を驅除するは苦味を甞むるに如かす、茶は苦味にして心氣を養ふものなれは、茶を喫すへしと云ふ、珠光大に喜び、掬尾に至りて茶を求め、常にこれを喫するに、果して効驗あり、乃ち大に感するところあり、自ら茶の式を定む、一日一休宗純禪師珠光に喫茶の事を問へは、珠光千光祖師榮西の喫茶養生の說を以て答ふ、禪師再ひ趙州の喫茶如何と問ふ、珠光默然として言なし、是に於て禪師沙彌に命し、茶を持ち來らしめて珠光に與ふ、珠光茶を喫せんとする一刹那、禪師忽ち一喝し、鐵如意を揮ひて茶の碗を破碎す、珠光自若として毫も驚ける色なし、良久うして一拜す、禪師重ねて茶を喫する時如何と問ふ、珠光柳綠花紅眞面目と答ふ、禪師微笑して印可を與ふ、後珠光六條堀川に於て四疊半の室を搆へ、茶式を行ふ、宗純禪師か茶禪一味の旨を領會するを喜び、圓悟禪師の書一幅を與ふ、將軍義政茶式を問ひ、珠光菴の三大字を書して與ふ、晚年紹鷗に茶式を傳へ且つ圓悟禪師の書投頭巾の茶入鶴の一聲の花入を附與す常に門人を誡めて茶式の虛飾に流るゝことなからしむ、文龜二年五月十五日寂す、壽八十一（一說八十）門人甚た多し　其聞ゆる者は紹鷗、宗珠、道提、宗仁、紹滴、宗理、引拙、胤榮、道耳、珠報等なり、紹鷗の弟子に千利休宗易あり、茶道大に興る、（珠光傳、茶家譜）

シユゼン　珠善（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　珠善字は仁甫と云ふ、泰秀宗韓に參すること久時、遂に其法を嗣き、妙心寺に住す、寂年欠く、（延寶傳燈錄）

シユタン　珠端（……）〔曹洞宗〕周防瑠璃光寺の禪僧なり、　珠端字は勁巖、桃嶽端見に參して印可を受け、其席を繼きて周防瑠璃光寺に住す、寂年及ひ壽缺く、法嗣悟宗圭頓あり、（日本洞上聯燈錄）

シユハク　珠白（……）〔曹洞宗〕信濃西福寺の開山なり、珠白字は圭嶽と云ひ、才應總藝に徹證して永平寺に住し、信濃の長興寺に遷つる、後、西福寺を開き、晚年福壽院に退老し、寂年、及ひ壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シユモン　珠門　二一八一 二二六三〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、　珠門字は闘翁、俗姓は藤原氏、筑前穗波郡の人なり、十三歲永福寺心翁に依りて祝髮し、大寧寺異雪に參し藏鑰となり、服勤七年、異雪退き、繁與存榮代り住す、師之れに就きて法を得、天正五年春毛利輝元の請に依り、大寧寺に主となる、仝十七年退きて妙悟寺に逸老し、慶長八年二月十五日寂す、世壽八十三、法嗣安叟珠養あり（日本洞上聯燈錄）

シユヨー　珠鷹　二〇二三 二一三三〔曹洞宗〕磐城龍門寺の開山り、珠鷹字は靑岑、武藏埼玉郡の人、俗姓は平氏なり、十五歲にして同郡春巓和尚に投じて僧となり、受具の後、越前に赴き、明林宗哲に師事して典藏となり、尋で分座說法す、嘉慶元年伊勢朝熊山に至りて虛空藏菩薩を拜し、轉して奧州磐城に抵る、是れより先城主平朝義病に罹り、大士に祈り、靈應ありしを以て法門を慕ひ、師を迎へて化を受け、同國に禪勝山龍門寺を開きて開祖となす、寬正三年總持寺に出世し、文明三年再び龍門寺に住し、同四年九月十四日寂す、壽百十一、臘九十七、（日本洞上聯燈錄）

シユヨー　珠養　二二六四……〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧な

り、　珠養字は安叟、俗姓は村氏、長門の人なり、十五歳異雪珠に依りて祝髮し、保寧寺雲甫に謁し、又關東の諸老に徧參し、終りに大寧寺闕翁珠門に見えて其法を嗣ぎ、天正十七年席を補す、慶長三年大蘊軒に養老し、同九年十二月某日寂す、世壽缺く、法嗣貴雲嶺胤あり、（日本洞上聯燈錄）

シユリン　珠琳　二一七一……〔淨土宗〕京都知恩院の第二十二代なり、珠琳は棟蓮社周譽と號す、其俗姓生國詳かならず、了曉に師事して法を嗣ぎ、大譽上人の席を繼ぎて知恩院に住す、時に應仁の亂あり知恩院兵火に罹りて燒失す、師難を遁れて近江滋賀郡伊香立村に到り、新知恩院を築きて住す、後京都に皈り、知恩院を再建して中興となり、永正八年正月二十六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユリン　珠林　シユーサン宗珊を見よ。

シユエー　珠榮　二二二二……〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　殊榮字は江南と云ふ大宗玄弘禪師に參して印可を受け享祿三年春敕命を受けて妙心寺に住す、永祿五年某月二十九日瑞雲院に寂す、壽缺く（延寶傳燈錄）

シユゼン　殊禪　二一三三 二〇九二　〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、　殊禪字は定菴初め石屋禪師に參し入室す應永中石屋遊方して周防に到り闢雲寺を創して之に居り後に師に命して席を繼かしむ師茲に住すること五年去りて長門に到り瑞松菴を構へて退隱す會々大寧寺主席を缺く竹居禪師師を擧けて之に補す太守多々良敎弘歸依深し永亨四年三月廿七日寂す、壽六十臘四十四（日本洞上聯燈錄）

シユホーイン　珠芳院　ニチギヨクニ日玉尼を見よ、

シユオン　主恩　一五九三 一六四九〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、主恩は大和十市の人、興福寺眞喜僧正に法相を學び寬和元年維摩會の講師となる後朝旨に悖り筑前博多に謫せらる幾何ならずして宥され還りて興福寺に居り法相を弘め永祚元年六月十一日寂す、壽五十七、（本朝高僧傳）

シユシン　主眞　二三九五……〔新義眞言宗〕江戸護持院の僧なり、　主眞字は昌春、鄕貫詳ならす豐山に學び近江總持寺に住す、享保十五年護持院に轉す享保二十年閏三月十四日寂す、壽缺く、著作起信論注解疏略三卷あり（新義眞言宗史料）

シユキヨー　首慶（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の僧なり、　首慶字は雲英、出家して久しく高雲僑に參し遂に其法を嗣ぐ、京都南禪寺を主とり某年寂す、（延寶傳燈錄）、

シユシヨーボー　首唱房　ニチシヨ日唱を見よ、

シユバイ　朱梅（……）〔淨土宗〕常陸常福寺第十二代なり、　朱梅は法蓮社光譽と號す、空譽玉泉上人に師事して法を嗣ぎ常福寺に住す寂年及世壽詳かならず、（淨土總系譜）

ジユオン　壽遠　一四二一 一四九八　〔三論宗〕大和西大寺の學僧なり、壽遠俗姓は橘氏、武藏の人なり、延暦年中奈良の東大寺に到り、出家して性相の學を習ひ、兼ねて因明を學ふ、又安澄に三論を承禀し、西大寺に住して二諦を演述す、承和元年詔ありて維摩會講師と爲り、賞せられて傳燈大法師位に任す、五年十二月某日寂す、壽六十八（本朝高僧傳）

ジユガク　壽嶽　ケーチン景珍を見よ、

ジユキン　壽欣（……）〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、　壽欣字は州翁、學仲原周に師事して法を得、其席を踵きて下

總總寧寺に住す、寂年及び壽欠く、法嗣養翁盛訓あり、（日本洞上聯燈錄）

ジユケー　壽桂　二一九三……（臨濟宗）京都建仁寺の禪僧なり、壽桂字は月舟、別號は幻雲、近江の人なり、正中首座の法を嗣ぐ、正中は古先元の法嗣にして、古先は元に入りて中峰和尙の法を承けたるものなり、師初め越の弘祥善應の二寺に住し、永正中京都建仁寺に移つる、一住二十五年、晩年一華菴に退居し、天文二年十二月八日寂す、壽缺く、著作語錄並に幻雲集あり、（本朝高僧傳）

ジユコー　壽廣　一四四一｜一五〇二（法相宗）大和傳法院の學僧なり、壽廣は德一と共に修圓の門に入りて法相を學び、傳法院に住す、承和九年推されて維摩會の講師となり、同年某月寂す、壽六十二、（本朝高僧傳）

ジユサイ　壽采（……）（臨濟宗）京都妙心寺の禪僧なり、壽采は既白と號す、伯蒲惠稜の法嗣にして妙心寺に住す修禪の傍ら書を能くし、筆鋒松花堂の風あり、（皇朝名畫拾彙）

ジユセー　壽星　二一五〇……（曹洞宗）常陸大雄院の開山なり、壽星字は南極、相摸星氏の子なり、吾寶宗璨禪師に師事して印可を受け、遊化して常陸に至り、窮山に入り庵を構へて韜晦す、山尾邑主小野崎玄峰、師の道風を聞き、山に入りて面語し遂に其化に皈し、新に天童山大雄院を築き、師を迎へて之れに主たらしむ、文明七年相摸最乘寺に遷り住すること一年にして大雄院に皈り、延德二年七月九日寂す、壽欲く、（日本洞上聯燈錄）

ジユセン　壽戩（……）（臨濟宗）京都建仁寺の禪僧なり、壽戩字は繼天と云ふ、月舟桂に師事して法を嗣ぎ、建仁寺に主となる、寂年、及び壽欠く、（延寶傳燈錄）

ジユセン　壽仙　ニチトク日得を見よ、

ジユゼン　壽全（……）（淨土宗西山派）山城禪林寺の僧なり、壽全號を澄空と云ふ、智空甫叙に師事して淨土宗西山派の學を究め、奈良稱名寺に主となり、後、京都禪林寺に遷り、盛んに化を弘む、寂年、及世壽欠く、（淨土總系譜）

ジユソー　壽曹（……）（曹洞宗）上總東雲寺の禪僧なり、壽曹字は靈泉、助翁玄輔に師事して、其法を受け、席を嗣きて上總東雲寺に住す、寂年、及び壽欲く、法嗣吉宗梵貞あり、（日本洞上聯燈錄）

ジユチヨー　壽長（一五四八）（眞言宗）紀伊金剛峯寺の學僧なり、壽長其俗姓生國詳かならず、幼にして高野山に登り、眞然僧正に師事し、灌頂壇に入りて諸密印を授けらる、眞然老衰に及び、仁和四年朝廷に奏して師を以て金剛峯寺の座主に任ず、寂年、壽欠く（本朝高僧傳）

ジユテツ　壽徹　二三一七（淨土宗）因幡玄忠寺の開山なり、壽徹は品蓮社九譽、無道と號し、但馬の人なり、隨流に從つて法を嗣ぎ、因幡島取に玄忠寺を剏す、明曆三年四月二十五日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

ジユヤク　壽益　二三九一（曹洞宗）薩摩福昌寺の禪僧なり、壽益字は日鑑、俗姓折田氏、薩摩の人なり、代翁守哲に參して印可を受け、總持寺に出世し、薩摩福昌寺に遷る、寛永八年花舜寺に退去し、幾ならすして寂す、壽欲く、法嗣壽叟全珠

あり、（日本洞上聯燈錄）

ジユリヨー　壽陵（……）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、壽陵字は景甫と云ふ、瑞溪に參して法を嗣ぎ、洛北等持寺に主となる、後相國寺に住し、大に祖道を揚ぐ、寂する年時詳かならす、（延寶傳燈錄）

ジユリヨーイン　壽量院　ニチセン日詮を見よ、

ジユリヨーイン　壽量院　ニチユー日祐を見よ、

ジユオーケン　樹王軒　モンエキ文奕を見よ、

ジユシン　樹心（……）〔眞宗〕京都長覺寺の住持なり、樹心は京都の人長覺寺（一に長慶寺に作る）に住し噫慶慧空等と高倉學寮の開立に力を盡す（高倉學寮講者列傳稿本）

ジユハン　樹繁（……）〔曹洞宗〕阿波桂谷寺の禪僧なり、樹繁字は茂菴久しく阿波桂谷寺桐岡桂澤に參して其法を嗣き、後其席を補ぐ、備後の郡主鳳翔山香積寺に師を請す、寂年及世壽缺く（日本洞上聯燈錄）

ジユホーアン　樹法菴　エコー慧皓を見よ、

ジユロー　樹朗（……）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、樹朗は空宗を東大寺の理眞律師に禀けて東南院に住し三論を開講す、晩年淨土敎を修行す、（本朝高僧傳）

ジユカク　受覺　リヨーシヨー良淸を見よ、

ジユセン　受詮　ニチエー日英を見よ、

ジユテツ　受徹　リヨーセン良潛を見よ、

ジユテン　受天　エーユー榮祐を見よ、

ジユトク　受得　リヨーシユー良拾を見よ、

ジユトン　受頓　……二三二〇　〔淨土宗〕江戸天嶽院の僧なり、受頓は深蓮社心譽と號し、奧州の人なり、法を滿靈に嗣ぎ、江戸新鳥越貞巖寺を開き、後淺草天嶽院に移る、萬治三年八月十三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ジユラクイン　受樂院　エンチヨー圓超を見よ、

ジユオー　授翁　シユーヒツ宗弼を見よ、

ジユヨ　授譽　……二二七五　（淨土宗）總州淨專寺の開山なり、授譽は其師詳かならず人譽に師事して法を嗣ぎ總州小松村に淨專寺を剏す元和元年十二月二日寂す世壽缺く（淨土總系譜）

ジユコー　需糠（……）〔曹洞宗〕の禪僧なり、需糠字は箕外長門大寧寺大菴須益に師事すると久しくして其法を嗣き未た出世に及はすして寂す其年時缺く（日本洞上聯燈錄）

ジユドー　儒童　キヨーテン敬天を見よ、

シユーアン　宗安　二二九三　二三五五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百三十四代なり、宗安字は閑徹と云ふ、肥前國平戸津の人なり、翠巖珉の法を嗣く、天和三年二月六日大德寺に出世す、貞享三年九月東海寺の輪番となる、尋きて平戸の興國山正宗寺第四代となる、本山に東光菴を創し平戸に靜性護國の二菴等を創す、元祿二年十月廿四日開堂し同八年四月十六日東光菴に寂す、壽六十三、享保三年五月二日中御門天皇勅して法源知覺禪師と諡す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーアン　宗案（……）〔曹洞宗〕播磨眞光寺の開山なり、宗安字は禪室但馬の人、壯にして美濃妙應寺に出家し大徹宗令に師事すること十五年、宗令峨山より傳はりし法衣を付す、總持寺に出世し、立川寺に遷る、晩年播磨東條谷眞光寺を開きて居り、同寺に寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーイ　宗渭　二二四八／二三二一　〔臨濟宗〕京都大德寺第百七十代なり、宗渭字は清巖、自笑子、一に孤陋子と號す、俗姓は奥村氏、近江大石の人なり、慶安二年幕府の命により、東海寺に住し、清淨本然禪師の號を賜はる、兼ねて書畫を好み、書は張即之虛堂禪師に學び、畫は佛祖圖及び雜圖多し、寬文元年十一月二十一日偈を書して寂す、壽七十四、(紫巖譜略、續本朝畫史)

シユーイ　宗渭　一九八一／二〇五一　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、宗渭號は太清と云ふ、俗姓は藤原氏、相模鎌倉の人なり、十三歳出家して西禪寺雪村梅和尚に依り童子となり、十六歳薙髪受具す、雪村の播磨法雲寺に移るに及び、命せられて知賓となり、職滿ちて京都に歸り、瑞龍東山の間に歷遊す、夢窗古先等の諸大老其偉器を愛して要職を授く、再び雪村に參するに及び、遂に記別を蒙り、復南禪寺に歸り、後版より前堂に轉す、檀越の請により、美濃龍門寺に住し、永和承曆の間、相模の東勝寺淨智寺に歷遷す、應安五年夏播磨寶林寺に移り、印を解きて京都に入り、南禪寺に居り將軍足利義滿に招かれて金剛經を講ず、後、雲門菴に退居し、再び起て南禪寺に住す、嘉慶二年義滿請して相國寺に主たらしめ、且つ夢窗國師の三十三忌辰に師を請し、三會塔前に陞座して佛事を讃揚せしめ、特に金襴の袈裟を贈り、副るに偈を以てす、師晚年相國寺の側に菴を構へて居り、明德二年夏微疾を感ず、六月十二日將軍山に入りて親しく病を慰問す、夜に入りて傳法の偈、并に入壙の語を書して諸徒に付し、十九日偈を書して曰く、夢幻空華、不生不滅、撥轉大機、虛空迸裂、と、筆を投じて寂す、壽七十一、臘五十七、龍山の雲門菴に塔す、著作六會語錄若干卷あり、(續群一二三八、本朝高僧傳)

シユーイ　宗意　(……)　〔眞言宗〕山城安祥寺中興なり、宗意は大夫律師といふ、京都の人、東宮權大夫季宗の子なり、嚴覺の高弟にして傳法職位を受け、梵漢諸尊の密軌を學ぶ、先に慧運安祥寺を開きしが、付法の嗣なくて寂せしかば、法脈絕へたり、唯實慧傳燈の印璽寶篋慧運相承の祕訣道器のみ存せり、師此の如くして法王大寶を闕せすして得るを慶ひ小野流を合して一流となし、再び法脈を興す、之を安祥寺流といふ寂年缺く、付法の弟子、實嚴、實證、靜實、念範、淳實、仁嚴の六人あり、(後傳燈廣錄)

シユーイ　宗頤　二〇三六／二一一八　〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗頤字は養叟、俗姓は藤原氏、京都の人八歳にして東福寺九峯奏を禮して弟子となり、祝髮受戒するに及んで侍局に列居し、遊方して東山の藏鑰となり、職滿ちて土佐に往き、吸江菴に大周奝禪師に參し、其第一座に居す、時に華叟の風をきゝて近江禪興菴に至りて、禮謁し、服勤十六年、悉く玄旨を究め、衣法を付せられ、龍峯山に皈り、大用菴に居す、文安二年秋詔により大德寺に住し、紫衣を賜はる、紀伊の賽川氏某德禪院を搦して師を招く、師此寺を以て終老のところとなす、後細川勝元の請により、再び大德寺に皈る、後花園天皇師を召して禪要を問ひ、特に宗慧大照禪師の號を賜ふ、晚年檀越の請により和泉の陽春菴に休居し、長祿二年六月二十七日寂す、壽八十三、臘六十七、(本朝高僧傳)

シユーイ　宗濬　二二六六／二三五四　〔臨濟宗〕山城紫野寺大德第二百

八代なり、宗瀚字は大仲、京都の人なり、雪菴の法を嗣ぎ、寛文六年四月廿一日大德寺に出世し、十一月廿五日開堂す、元祿七年二月廿八日寂す、壽七十九、頌に曰く、七十九年、順行逆行、端的底漸、耳低聲々、と、元祿十二年勅して本寂心印禪師と號す。（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーイ　宗偉　二二一〇／二二六三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百四十一代なり、宗偉字は雲英、和泉の人、俗姓谷氏、呼雲齋宗臨居士の子なり、自ら乍住と號す、仙嶽の法を嗣く。蓋し師は仙嶽の姪たるなり、慶長二年三月廿日大德寺に出世す、時に三十八歲なり、慶長六年筑前の國主黑田長政師を請して崇福寺に住せしめて中興祖となす、是より先き師は和泉の海眼菴に住す、慶長八年十月四日寂す、壽四十四、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーイン　宗胤（……）〔曹洞宗〕周防法明寺の禪僧なり、宗胤字は春山、九江慈淵に參して玄旨を了し、九江の沒後周防法明寺に住持す、寂年、及び壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シユーイン　宗寅（……）〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、宗寅字は建室、生國俗姓詳ならず、韓嶺良雄に參して衣法を付せられ、席を踵ぎて下野大中寺に住す、寂年缺く、法嗣門菴宗關の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーイン　宗因　一九八六／二〇七〇　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗因字は無因、尾張の人、俗姓は平氏、荒尾の族なり、九歲にして京都に上り、東山の天潤菴に投して可翁然禪師を拜して剃髮し、侍童となる、十七歲大僧となり、能く詩を賦し、周易に精し、可翁建仁寺に住するに及び、師を請客侍者となす、尋て紀綱を主どる、常に參方の志を抱く。將に後版に任ぜんとすれども師辭して行かず、授翁弼妙心寺に主となるに及び、師往きて參請す、授翁法語を付して許可す、其寂後席を繼ぎて同寺に住す、出雲の太守波多野重通退藏院を建て、師其第一代なとり、莊園を附せらる、將軍義持迎へて相見んと欲す、師辭して往かず直に駕に命じて攝津海請寺に投ず、應永十七年に京都大德寺の虛席ありて幕命により、これに住せんとして京都に入り、劇かに病に罹り、開法に及ばずして六月四日寂す、壽八十五、臘六十九、遺骨を分ちて海清寺の退藏院に葬る、（妙心寺六祖傳、本朝高僧傳）

シユーイン　宗印　二二二〇／二二八二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百四十二代なり、宗印字は月岑、號は片菴、京都の人、俗姓は大森氏なり、古溪の法を嗣く、慶長三年五月八日後陽成天皇勅して大興圓光禪師の號を賜ふ、元和八年四月五日寂す、壽六十三、玉林院に塔す、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーイン　宗印　二二三九／二二八七　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十代なり、宗印一に紹印と云ふ、字は傳叟といふ、京都の人、太素の法を嗣く。慶長十二年閏四月十二日に出世す、寛永二年二十八歲の九月廿一日開堂す、寛永四年十二月十一日寂す、壽五十九、後水尾天皇勅謚佛性心宗禪師と賜ふ、金龍院に塔す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーウ　宗右　二二九〇／二三五一　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百二十三代なり、宗右字は旋峰、號は臥雲子、又は伴雲といふ、京都の人なり、傳外左の法を嗣く、延寶七年二月四日勅

を奉して大德寺に入る、八年東海寺の輪番となる、請泉宗鏡兩寺を兼領して皆其二十二代たり、元祿四年三月七日寂す、壽六十二、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーウン　宗雲（一九九四）〔臨濟宗〕近江積翠寺の開山なり、宗雲字は白翁、俗姓源氏、出雲の人、大德寺徹翁亨の族弟なり、大灯國師（妙超）の下に參究し、遂に其法を嗣ぐ、近江に積翠寺を開き住す、示寂の年時缺ぐ、遺偈あり曰く生也苦屈、死也苦屈、畢竟如何、苦屈苦屈、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕宗雲は建武の頃の人なるべし、

シユーエ　宗慧　二二三九………〔曹洞宗〕越後林泉寺の禪僧なり　宗慧字は泰室、益翁宗謙に依りて薙髮し、出て丶諸方に徧參し、歸りて益翁を省して旨を得たり、初め永平寺に出世、次に越後林泉寺に遷る、天正七年正月四日寂す壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シユーエー　宗英　二一四二………〔曹洞宗〕信濃定津院の禪僧なり、宗英字は拈笑、應永十六年九月二十日を以て武藏に生る、父は同國の刺史藤原賴久と云ふ、師は其第二子なり、十五歲にして教院に入り薙髮し、二十歲にして戒を納め、深く顯密の二宗を探る、二十九歲に至りて所學を捨て、禪要を慕ひ、相摸建長寺に入り、明年伊豆尼木山に上り、世祿を絕ちて、專ら坐禪す、後、山を下りて最勝寺吾寶宗璨禪師に師事して法を受け、尋で遊方して復最勝寺に皈り、主席を嗣ぐ、後嗣子風花をして最勝寺を領せしめ、自ら甲州武田氏の招きに依り、東林寺に主となる、寶德元年上總介滋野信貞、師を慕ひ、信州轤津城外に臨川山定津院を築き、師迎へられて主となる、應仁元年詔を奉じて總持寺に住す、文明十四年永澤寺に遷り、同年十月十七日寂す、世壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

シユーエー　宗英　二二六五／二三二六〔臨濟宗〕京都紫野大德寺の第百九十四代なり、宗英字は舊山、自ら閑眠子と號す、日向の人、天祐の法を嗣き、明曆元年十月九日出世し、梅岩菴に住す、明曆二年七月廿五日寂す、壽五十二、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーエー　宗瑛　二二三〇／二三二八〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十二代なり、宗瑛字は藍溪、近江の人、自ら忘苦子と號す、天叔の法を嗣く、慶長十三年十二月廿日に出世す、後陽成天皇勅して大規綱宗禪師の號を賜ふ、萬治元年十月廿日寂す、壽八十九、寬文四年十月廿日祖堂に安牌す、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーエー　宗永（………）〔曹洞宗〕伯耆瑞仙寺の禪僧なり、宗永字は大年、伯耆の人なり、初め天海和尙に依り、後、竺翁仲仙に法を享け、總持寺に主となる、已にして法兄海晏の席を繼きて、伯耆瑞仙寺に移る、寂年欽く、法嗣石菴宗鑑あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーエー　宗榮　二〇八三／二一六四〔曹洞宗〕下總乘國寺の禪僧なり、宗榮字は松菴、俗姓は藤原氏、奧州の人、八歲にして鄉校に入り、十七歲在仲宗宥に依りて保度し、文章を修む、寶德元年結城の府主藤原持朝幅巖寺を創して師を請す、文明十一年府內に乘國寺を建て師を開山となす、後、總林寺に昇り、辭して乘國寺に皈る朝旨に依り紫衣を賜ひ、敕黃を降し

て僧綱となす、永正元年七月二日寂す、壽八十二遺偈あり、曰く、石火電光、八十餘霜、安身時節、脫體堂堂、法嗣中明榮主あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーエー　宗榮　二二五七 二三二六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十七代なり、宗榮字は啓室大和の人なり、龍嶽の法を嗣ぎ、承應十年十月九日大德寺に出世し、肥後妙解寺に住す、其菴を臨流と稱す、寬文六年二月二十五日寂す、壽七十、貞享年中眞機良猷禪師の勅諡を賜ふ、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーエー　宗睿　一四六九 一五四四　〔眞言宗〕山城圓覺寺の學僧なり、宗睿は京都の人、俗姓は池上氏、眞紹僧都の族甥なり、十四歲にして比叡山に登り、載鎭法師に從ひて剃髮し、經論を學び、受戒の後ち、徧く諸市に遊び、興福寺義演師に法相を學び、延曆寺義眞座主に天台敎を學び、菩薩戒を受け、智證大師に兩部の密法を受け、實慧僧正に金剛界を受け、遂に禪林寺眞紹を禮して阿闍梨灌頂を受く、淸和天皇皇太子たる時常に師を召して講侍せしめ、其即位に及び、寵遇殊に厚し、貞觀四年眞如親王に從ひて唐に航し、初め汴州の玄慶に謁して金剛灌頂を得、天台山に登り大華嚴寺にて千僧に齋供し、青龍寺法全に胎藏灌頂を受け、金剛杵儀軌を付せらる、慈恩寺造玄、興善寺智慧輪等に隨つて盡く眞言の秘軌を探り、洛陽聖善寺に抵り、三藏の舊地を拜し、院主より三藏所持の寶杵梵夾儀器を授けられ、再び天台山に登り、敎觀を精究す、適李延孝來朝するに逢ひ、師これと共に舶に乘して太宰府に着す、時に貞觀九年なり、諸老宿師に新法を演んことを請ふ因て、即ち東寺に於て灌頂壇を開き、四方雲の如く集まる、十六年、帝、師に就て金剛界三摩地の法、幷に觀音の法を受け給ふ、元慶三年東寺の長者に任じ、冬僧正に任ず、四年四月上皇山城大和攝津等の各山佛寺を巡覽するとき、師隨從す、八年三月二十六日禪林寺に寂す、壽七十六、臘五十七、世に禪林寺僧正と云ふ、著作、胎藏次第二卷、火布惹耶私記、隨求八印法、納涼房次第、悉曇林記、進官請來錄、各一卷、眞言疑目、後入唐傳、秘密口決、(卷數未詳)等あり、(元亨書釋、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シユーエキ　宗懌（……）〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第六十二代なり、宗懌字は悅堂、其鄉貫詳かならず、景川に師事して印可を受け、京都大心寺に住し、後、大和興雲寺に移る、明應の初め、敕を奉じて大德寺に出世し、開堂畢りて闕に詣てゝ恩を謝し、退きて大心寺に皈る、寂年、及壽缺く、(紫巖譜略、大德寺世譜、延寶傳燈錄)

シユーエツ　宗悅（……）〔淨土宗〕下野弘經寺第四代なり、宗悅は曜譽祖一學愚得と號す、曜譽西岡に師事して法を受け、飯沼弘經寺に住す、後、上野男衾郡鉢形に淨福寺を搠して開山となる、寂年、及壽欠く、法嗣に祖洞あり、(淨土總系譜)

シユーエツ　宗悅　二三〇四 二三七四　〔臨濟宗〕武藏東海寺の禪僧なり、宗悅字は怡溪といふ、品川東海寺中高源院を開く、藤林宗源より茶道を傳へ、石州流の名家と稱せらる、後、京都大德寺に住す、正德四年五月二日寂す、壽七十一、法忍大定禪師と號す、

シユーエツ　宗悅　二一七八 二二四九　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百

五代なり、宗悅字は怡雲、伯耆の人、徹岫の法を嗣く、弘治元年十月十六日大德寺に出世す、永祿元年十二月三日勅して心燈慈照禪師の號を賜ふ、正親町天皇重ねて靈源大就國師の號を賜ふ、瑞峯院に住し、天正十七年八月八日寂す、壽七十二、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーヱン 宗圓 (一九一七) 〔眞言宗〕山城醍醐山の大法師なり、宗圓は祭酒二位隆遍の子、正嘉元年九月六日遍智院に入りて憲深に庭儀灌頂を受け、後名を改めて通海といふ、付法一人賢助といふ、(續傳燈廣錄)

シユーエン 宗圓 (一八九三) 〔淨土宗〕某寺の僧なり、宗圓自蓮社と云ふ、俗姓生國不詳、初め比叡山に登り、證眞に師事し、後、辨長上人に師事し、淨土敎を受く、天福元年辨長上人の命を受け宋に航し、廬山に登りて惠遠の宗風を傳へ、且つ文惠大師に謁して梵音を受け、東皈の後、大に道譽あり、示寂の年月日缺く、(淨土總系譜)

シユーエン 宗淵 (……) 〔……〕 京師の畫僧なり、宗淵字は如水、水才子と號す、相模の人なり、雪舟に就て畫法を學ぶこと數年、山水に於て秀作あり、(扶桑畫人傳、本朝畫史、鑒定便覽)

シユーエン 宗淵 (二二五〇 二三〇八) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百七十八代なり、宗淵字は默翁、肥州の人、龍嶽の法を嗣く、寬永十九年四月十九日出世し、同年六月十日開堂して祥雲寺に住す、慶安元年四月二十三日寂す、壽五十九、寶永七年六月四日朝廷諡を賜ひて禪慧大匡禪師といふ、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーエン 宗演 (二二八七 二三六七) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百廿一代なり、宗演字は說叟、號は痴默、京都の人、琢玄の法を嗣く、延寶四年正月十九日出世す、武藏廣德寺に住し、退後眞空菴に居る、延寶六年武藏品川東海寺の輪番となる、寶永四年三月廿日寂す、壽八十一、勅諡法海普融禪師といふ、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーエン 宗演 (……) 〔臨濟宗〕尾張瑞泉寺の僧なり、宗演字は儀中と云ふ、出家して久しく朴菴宗堯禪師に參し、遂に其記莂を稟く、輪請により尾張靑龍山瑞泉寺に主となる、寂年、及壽欠く(延寶傳燈錄)

シユーエン 宗歅 (二一四六 二二一一) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第百三代なり、宗歅字は天啓。越前の人なり、小溪紹怤禪師に參究久うして印可を付せらる、天文七年秋詔を奉じて大德寺に住し、特に大智佛勝禪師の號を賜ふ、二十年四月二十八日寂す、壽六十六、玉雲軒に塔す、遺偈に曰く、離ニ郤京洛一行ニ脚能州一、佛祖共殺、活機自由(紫巖譜略、延寶傳燈錄、大德寺世譜)

シユーエン 宗衍 (二四五一 ……) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第三百七十八代なり、宗衍字は無學號は把不住といふ龍門座元の法を嗣く(座元は大龍の法嗣)明和四年三月十六日勅使開堂あり即日參内し紫野玉林院に住す明和五年武藏品川東海寺輪番となる後櫻町天皇勅して特に至聖大妙禪師の號を賜ふ寬政三年正月十六日寂す壽缺く(紫巖略譜)

シユーオー 宗璜 (二二七二 二三五一) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百六代なり、宗璜字は桂山、號は露眠子、京都の人、機菴

の法を嗣ぐ、寛文三年十二月十九日出世す、武藏に龍興山臨江寺を開く、元祿四年十一月十二日寂す、壽八十、頌に曰く、幻化八十、草宿露眠、一機轉底、馬箬天明、と、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーオツ　宗乙　二二一九〇 二二七一　〔臨濟宗〕仙臺覺範寺の開山なり、宗乙字は虎哉小字は虎千代、美濃の人なり、其家禪房に隣す、日夕讀經の聲を聞き、悉く之を記誦す、父之を奇とし岐秀禪師に乞ひて徒弟ならしむ、時に年十一、後快川禪師に就きて法を問ふ、年未だ三十ならず、法譽喧傳世に稱して少年上人と云ふ、伊達輝宗其名を聞き、聘請して出羽米澤なる資福寺の住持となす、蓋し康甫の師となり、兼ねて世子藤次郎の學師たらしめんか爲めなり、後政宗父輝宗の爲に覺範寺を創め、師を以て開祖となす、後、妙心寺に輪住す、慶長十六年五月八日机に倚り、徒弟に遺命し、偈を書して寂を覺範寺に示す、年八十二なり、敕諡を賜ひ、佛海慈雲禪師と云ふ、(仙臺史傳)

シユーオツ　宗乙　二三一四 二三五七　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百五十二代なり、宗乙字は虎巖、和泉の人實堂の法を嗣ぐ、元祿六年二月二日大德寺に出世して高桐院に住し、嘉勝院に移る、元祿十年十月廿九日寂す、壽五十四、中御門天皇勅諡を賜ひて法眼眞淨禪師といふ、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーオツ　宗越　(……)　〔曹洞宗〕攝津大廣寺の禪僧なり、宗越字は天巖、越中の人、幼にして劫外禪師を禮して祝髮す、能登の定光寺實峰に參す、實峰立川寺大徹宗令に依らしむ、遂に徹の衣法を受く、越中の檀越妙川祇樹の二寺を建て、師をして居らしむ、後、總持寺に遷る、池田筑後守攝津に大廣寺を開き、師開山となる、寂年缺く、法嗣大壽宗彭あり(日本洞上聯燈錄)

シユーオン　宗恩　二二四七　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗恩字は澤彥、其鄉貫詳かならず、出家して諸方を遊歷し、泰秀宗韓に參して記莂を受け、妙心寺第一座となる、後、美濃に往き、大寶寺に寓す、適、織田信長其家臣平手清秀の爲めに政秀寺を建て、師請せられて開山となる、師正法山に住すること前後五回、同門の請に應し、美濃瑞龍寺に移る、天正十五年十月二日寂す、壽缺く、法嗣七人あり、貞享三年春諡して田通無礙禪師と賜ふ、(延寶傳燈錄)

シユーオン　宗溫　二四六五 二五三一　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗溫字は蘇門、山城の人、妙心寺內蟠桃院般啓に投じ、後玉潤棠林に歷事し、安政元年妙心寺に登る、明治四年一月十一日寂す、壽六十七、

シユーオン　宗溫　二二五〇 二二九五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百六十八代なり、宗溫字は光澤、京都の人、自ら闒茸子と號す、昌林院に住す、寬永二年三月五日出世し、同十二年六月九日寂す、壽四十六、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーオン　宗溫　二三二七 二三九三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百九十三代なり、宗溫字は艮堂、武藏の人、怡溪の法を嗣ぐ、正德六年正月廿日出世し、東海寺內の高源院に住し、武藏澁谷景德院に移る、武藏麻布に天現寺を創し、享保六年東海寺輪番となる、享保十八年十一月廿八日寂す、壽六十七、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーオン　宗慍　二四七六／二五五二　〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の禪僧なり、宗慍字は洪川、號は虛舟、攝津の人、俗姓今北氏、文化十三年を以て西成郡福島村に生る、初め藤澤東畡に就いて儒學を學ひ、十九歲にして折衷學を唱へ、子弟を教授す、二十五歲大に感するところありて妻を去り、相國寺大拙禪師の弟子となる、大拙は當時鬼大拙の稱あり、禪風の峻嚴を以て聞ゆ、師其下に刻苦精練し遂に印可を受く、安政五年防岩國侯吉川氏の請に應し、西下して大に禪風を擧揚す、文久二年禪海一瀾を撰す、明治五年大講義に補せられ、六年教導職務頭取を命せらる、八年東京十山總黌大教師に任せられ、禪宗十派の學徒を教育す、同年十一月鎌倉圓覺寺に住し、大に東國に禪風を擧揚す、十三年權大教正に陞進し、十五年七山管長に任せらる、二十五年一月十六日寂す、壽七十七、門下相謀り、蒼龍窟年譜一卷、廣錄五卷を編輯刊行す、師養痾謾吟に曰ふ、蚊蝿擾亂咬レ肌飛、把レ扇頻々懶ニ一揮一、不レ如レ委レ肉投ニ佩餓一、垢面蓬頭閑衲衣、（蒼龍窟年譜）

シユーオン　宗園　二一八九／二二七一　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百十一代なり、宗園字は春屋、山城の人、俗姓は園部氏、自ら一默子と號す、笑嶺宗訢の法を嗣く、永祿十二年三月出世す、正親町天皇勅して朗源大眞禪師の號を賜ふ、慶長五年十二月二十三日後陽成天皇勅して大寶圓鑑國師の號を賜ふ、慶長十六年二月九日寂す、壽八十三、遺偈に曰く、蹈ニ飜天地一喚レ東作レ西、柱杖々々、歸去來兮、と、三玄菴に塔す、師嘗て龍光、三玄、芳春三菴を創す、（紫巖譜略、大德寺世譜、延寶傳燈錄、）

シユーカ　宗可　（……）　〔曹洞宗〕洞谷寺の禪僧なり、宗可字は仲筵、長して洞谷山寂室了光に投して出家し、研究すること多年、祕訣を受け、辭して海に航して、支那に遊び、數十年間偏く名山道場を訪ひ、太白に登りて淨禪師の塔を禮す、後歸國し洞谷寺に主となり、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーカ　宗嘉　（……）　〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、宗嘉大象と號し、生國俗姓詳かならす、徹翁の要訣を受け、商遊して元に入り、普く諸山の名宿に參し、歸朝して龍寶山大德寺に住し、其終る處を詳にせす、（本朝高僧傳）

シユーガ　宗賀　二一八八／……　〔曹洞宗〕下野本光寺の開山なり、宗賀字は大朝、美濃の人、幼にして出家し、偏く諸方に遊ひ、惟通非儒に參して其法を嗣き、文龜二年檀越の請に應して下野佐野莊に大明山本光寺を剏す、永正八年敕を受けて永平寺に住す、幾ならすして龍淵寺に遷り、又再ひ本光寺に住す、享祿元年五月十三日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーガ　宗峩　（……）　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗峩字は雲山、幼にして大燈國師を拜して出家し、參侍久しふして後、關山慧玄の室に入る、關山の寂後翁宗弼に依り、遂に心印を蒙り、妙心寺に出世す、朝廷其道風を聽き、特に莊田を賜ふ、寂年、及壽欠く（延寶傳燈錄）

シユーカイ　宗海　（……）　〔眞言宗〕山城醍醐山蓮藏院の僧都なり、宗海は民部闍梨と稱す、上大夫阿古麿呂宗通の子なり、定海大僧正の法を受け、蓮藏院に住す、付法二人あり光海寶淳といふ、（續傳燈廣錄）

シユーカク　宗覺　二二〇六七／二二四四　〔曹洞宗〕下總東昌寺の開山な

り、宗覺字は即菴、俗姓は源氏、其先は常陸下總國の人なり、後相摸國鎌倉に移りて居す、七歳にして塾に就て書を習ふ、密に教外の宗を慕ふ父其宿志を察して大雄山に登り春屋和尚に依らしむ、十歳にして出家服侍すること九年、永享元年遊化して下總の山王山に至る、一夕靈夢を感し、遂に此地に住し、六國寺を創す、後に東昌寺と改む、八年陸奧國石川に至り長泉寺を開く、文安二年遠江國法泉寺に住し、第二代と爲る、文明二年最乘寺に住し、期年にして東昌寺に歸る、十六年十二月十三日寂す壽七十八、臘六十九（日本洞上聯燈錄）

シユーガク 宗鶚（……）〔臨濟宗〕尾張瑞泉寺の禪僧なり、宗鶚字は天關と云ふ、春江に參して法を嗣ぎ瑞泉寺に主となる、寂年欠く、（延寳傳燈錄）

シユーガク 宗諤（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の僧なり、宗諤字は直指と云ふ、龜年禪愉國師に師事すること多歲、遂に其記莂を受け、三度正法山妙心寺を主どる、晩年如是菴に退居し、某年寂す、其年時缺く、（延寳傳燈錄）

シユーカン 宗鑑 二一四七 二二三三〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、宗鑑字は龜洋、俗姓は藤原氏、豐後の人なり、十四歳廣林寺了然に投して祝髮し、受具の後東遊し、正音に謁し、三年にして省あり、辭して歸へらんとするや、正音頌を贈りて大寧寺助翁永扶に見えしむ、師往きて堂奧に延かれて衣法を付せらる、天文六年席を嗣く、同十八年九月辭して豐前の興國寺に退去し、永祿六年八月十九日寂す、壽七十七、法嗣異雪慶珠あり（日本洞上聯燈）

シユーカン 宗鑑（一九四一）〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、宗鑑字は明窓、俗姓不詳、大覺禪師の下に在りて參究功あり、弘安四年武藏東漸寺に住す、偈あり此地分形隣二少林一、二株嫩桂綠陰深、前村不斷漁歌曲、遠谷遙聞石磬音、親說舌頭無味話、全提鼻祖正傳心、但仰二聖加一頻懇禱、締構速成容二衆襟一、後建仁寺に遷住す、晩に普光菴を構へて居す、示寂の年時缺く、後、勅諡明覺禪師と云ふ（延寳傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーカン 宗閒（二〇五四）〔臨濟宗〕京都南禪寺の學僧なり、宗閒字は香林、久して但馬大明寺月翁によりて其法を嗣ぎ、美濃大圓寺に開法し、京都萬壽大德南禪の諸寺に歷遷す、晩年眞乘院に於て寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕宗閒は應永の頃の人なり

シユーカン 宗罕（……）〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗罕字は希叟、武藏の人なり、出家して久しく明叟宗普禪師に參し、遂に其印可を受け、紫野大德寺に住す、寂年缺く、遺偈あり、曰く、七十餘年、鐵樹華開、賊賊賊賊、五逆聽レ雷、（延寳傳燈錄）

シユーカン 宗韓 二三二一……〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗韓字は泰秀と云ふ、出家して久しく興宗宗松禪師に參し、遂に其印可を受け、席を繼ぎて美濃大寶寺に住し、永泉寺に移る、幾何ならずして京都妙心寺に出世し、天文十八年秋瑞龍寺に移る、同二十年十一月十五日寂す、壽缺く著作永泉餘滴集若干卷あり、（延寳傳燈錄）

シユーガン 宗巖 二二八五……〔淨土宗〕常陸長福寺の開山なり、宗巖は源蓮社傳譽と號し、常陸江戶崎の人、慶岩に師事し

て宗乘を究め、長福寺を開く、寛永二年三月十四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シユーキ　宗器（二一八七）〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗器字は傳菴、京都の人なり、出家して古嶽宗亘國師に參究し、遂に其法を嗣ぐ、大永の末年詔を奉じて大德寺に住す、寂年及壽缺く、(延寶傳燈錄)

シユーキ　宗器（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、宗器は延用と號す、京都の人なり、幼にして寶林寺の魯山周禪師に從ひて參究多年、宗要を悟得し、天龍寺に出世し、再び南禪寺に住す、後備前の臨濟寺を開き、龍寶山の德雲院に寂す、壽缺く、永享十年秋勅諡德光普照禪師と賜ふ、(本朝高僧傳)

シユーキ　宗熙（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗熙は號は釣船、美濃鵜沼の人なり、幼時父の足下に臥し父般若經函を蹈むと夢む、因て般若と名く、妙心寺義天詔に師事し、參究年あり、投機の偈に曰ふ、百千公案一無知、十載再酧十二時、超出同參是非窟、從茲天下樂阿彌、と、細川勝元龍安寺を創して義天を請す、土木の役繁し、師大に門板に書して曰ふ、普請頻々少參學、天生風顚以觸忤、と寺を出て、鄕里に草菴を營み、般若房と云ふ、漆桶道人萬里と相交はり、萬里屢稱遜推與す、越前刺史齋藤利藤卒するにあたり、遺命して師を迎ふ、師至りて偈を唱へ畢り、袖間より小鉦を出し、嗚すと三下阿彌陀佛號を三唱して去る、嘗て足利天王堂に登り、詩を賦す、晩年龍安寺特芳に招かれ、多福菴に居す、某年二月十日寂す、壽八十四、遺偈に曰ふ、遮莫人呼作狂人、佛法元來不掛唇、猶日必歸々亦好、高々峰頂釣金鱗、(延寶傳燈錄)

シユーキ　宗熙（一〇七六―二一五六）〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗熙字は春浦、俗姓は源氏、播磨赤松郡の人なり、幼にして業を東山の乾心禪師に受け、十八歲薙髮受具して藏鑰を司どる、二十四歲にして大德寺養叟和尙に參して省あり、遂に其衣法を付せられ、命により雲門祖塔を守る養叟の寂後洛東大蔭菴に居り、寬正二年大德寺に出世す、初め足利義滿洛東に妙雲院を建て、其女通玄寺の尼笠英釣旨を承けて額を養德と改め、師請せられて主となり、後寺基を城北に移す、應仁の亂に紫野兵火に罹り、師亂を避けて攝津城福寺和泉陽春菴に止まり、居ること八年、旨ありて再び龍寶山を董し、火後の廢を興す、文明十三年伏見に淸水寺を建て、翌年龍寶山に松原菴を構へて終焉の計をなす、後土御門天皇其德望を聞き、特に正續大宗禪師の號を賜ふ、臨終に偈を書して曰く、倚天長劍、忘磨刄來、祖佛共殺、五逆聽雷、と、筆を投して寂す、實に明應五年正月十四日なり、壽八十一、臘七十一、(續群二四三、本朝高僧傳、名僧行錄)

シユーキ　宗已（一九四〇―二〇一八）〔臨濟宗〕常陸淸音寺の禪僧なり、宗已字は復菴、俗姓宮家氏常陸の人なり、早年出家し、延慶三年無隱晦等と元に航し天目山に登り、中峰和尙に謁す、趙州無字の話を參究し、印記を受く、峰和尙遷化の後其塔を守もること三年にして東歸す、下總の二階堂氏、常陸の佐竹氏、下野の結城氏等歸依し、寺を開く、法雲、(常陸、)禪源、(同上、)華藏、(結城、)實相、(會津、)淸音、(常陸、)皆師を開山祖とす、

シユー(宗)キ

貞和二年門下悲侍者を元に遣はし、蘇州の幻住寺玉庭月、及び杭州の天目山塔主榮に書幣を贈る、二人答書並に先師の法衣眞贊の頂相を寄せ、慇懃の情を通ず、後、光嚴天皇勅召あり師老病を以て出でず、大將軍足利尊氏禪要を問ふ、乃法語一篇を呈す、延文三年九月廿六日法雲寺に寂す、壽七十九なり、語錄一卷あり、同五年九月勅諡大光禪師を賜ふ、(本朝高僧傳)

シユーキ　宗規　一九四五 二〇二一　〔臨濟宗〕筑前聖福寺の禪僧なり、宗規字は月堂、號は水月老人　俗姓宗氏、筑前太宰府の人なり、早年觀音寺に投じ、照律師に師事し、尋いて州の醍醐寺良範に師事して律並に密教を學ぶ、京師に上りて諸講席に遊び、ふたび國に歸へる、一宵靈夢を感じて横嶽に登り、南浦明禪師に謁し、禪宗に歸す、嘉元の初禪師京師に上り、萬壽寺に住す、師追從輪藏を典る、正和五年國に歸り、石城に菴居すること十年なり、聖福寺、建仁寺に獨照輝出づるに方り迎へらる、尋て龍翔寺に住す、延元の初、崇福寺に住し　貞和二年再び崇福寺に遷る、檀越石城の故菴を改めて一叢林となし、妙樂圓滿禪寺と號し、師を第一祖とす、師崇福寺に住する十三年、寺規大に傳ふ、尋てまた聖福寺に遷り住す、康安元年九月廿七日石城に寂す、壽七十七、臘五十八、語錄遺傳あり、脫身一路、無二古來今一、朝朝日上、夜夜月沉、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シユーキ　宗喜　二二七八 二三三二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百十代なり宗喜字は無隱攝津の人なり江雲の法を嗣く寬文七年二月六日大德寺に出世し石松庵に住す寬文十一年九月東海寺輪番職となる寬文十二年三月十一日東海寺にて寂す壽五十五元祿十六年十一月十九日勅諡妙應大忍禪師を賜ふ(紫巖譜略)

シユーギ　宗祇　二〇八一 二一六二　〔天台宗〕京師の歌僧なり、宗祇(ソウギ)は自然齋、見外齋、種玉菴等の號あり、三善姓、飯尾氏、紀伊の伎樂師の子なり、幼にして律僧となり、壯年の時苗猪代兼栽に就て連歌のことを問ひ、東常緣に師事して古今和歌集を受け、卜部氏に就て神書を學び、後、連歌を以て大に聞ゆ、嘗て比叡山に登り、種玉菴を結び、暫時にして山を下り、諸國を旅行し、到るところ連歌を以て名を擧ぐ文龜二年七月晦日箱根湯本の逆旅に死す、壽八十二、著作筑波集、吾妻問答、筑紫道記、(扶桑隱逸傳、野史)

シユーキク　宗菊　二二二五 ……　〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗菊字は南岑、京都の人なり、以天宗清に師事して法を嗣ぎ、永祿八年大德寺に出世す、某年六月二十四日寂す、壽欠く、遺偈に曰く、罵二倒佛祖一、鐵壁銀山、末後拄杖、打二破牢關一と(延寶傳燈錄)

シユーキン　宗忻　二二一六 ……　〔曹洞宗〕伊豫安樂寺の禪僧なり、宗忻字は喜山、俗姓生國詳ならす、出家して諸老に徧參し、大通山に入りて華屋英曇の室を叩き、親炙久しくして印可を付せらる、享祿の始華屋退居して師に命して伊豫安樂寺に主とならしむ、弘治二年二月二十九日寂す、法嗣泰菴文賢あり(日本洞上聯燈錄)

シユーキン　宗昕　二一九六 ……　〔曹洞宗〕駿河大祥寺の禪僧なり、宗昕字は寂照、三河の人なり、法を行之正順に得て、大祥寺を主とる、天文五年二月一日寂す、壽缺く(日本洞上聯燈錄)

シユーキン　宗昕　二三一四 二三六四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百六十四代なり、宗昕字は陽岑、万里小路大納言雅房の第

二子なり、仰堂の法を嗣く、元祿十六年二月十六日出世開堂して紫野玉林院に住す、寶永元年十一月十六日寂す、壽五十一、勅諡佛光慈照禪師といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーキン　宗訢　二一五〇／二二二八　〔臨濟宗〕京都大德寺第百七代なり、宗訢字は笑嶺號は喝雲叟と云ふ、伊豫河野の族、高田氏の子なり、幼にして州の宗昌寺に投して剃髮し、長ずるに及んで徧く諸老に參す、南禪寺に掛錫して書記を掌る。古嶽和尚大德寺にありて法化盛んなりと聞き、往て記室に居し、參侍すること十年、遂に契悟あり、第二座となる、後、和泉南宗寺に到り、大林宗套國師に參し、益々宗旨の奥旨に達し、印可を付せらる、永祿元年春勅を奉じて大德寺に出世す、後、攝津廣德寺席を虛し、師請せられて近邑の棲賢寺に移居す、三好義繼龍寶山內に聚光院を刱して師を請し、開山第一祖となす、師、和泉南宗海眼の二寺に歷住す、將軍足利義照師の道化を慕ひ、遂に南宗寺を陞せて十刹の列となす　永祿十年秋朝廷特に祖心本光禪師の號を賜ふ、十一年十一月二十九日病に臥し、門下を集めて懇ろに遺誡し、偈を作りて曰く、喝レ雲呵レ雨、七十九年、斬ニ卻魔佛一、吹毛

葬レ天、と、書し終りて寂す、壽七十九、臘六十五、門下檀越等全身を奉じて南宗先師の塔側に葬る、（延寶傳燈錄、紫巖譜略）

シユーキン　宗欽　（二二一二）　〔曹洞宗〕越後耕雲寺の禪僧なり、宗欽字は德嶽、初め越後耕雲寺瑚海仲珊に參し、後、諸老を歷問し、享德三年耕雲寺に皈り、寛正二年遂に同寺に主となる、寂年欠く、法嗣大安梵守あり（日本洞上聯燈錄）

シユーギン　宗誾　二二〇一……　〔曹洞宗〕常陸多寶院の開山なり、宗誾字は少傳、美濃の人、出家遊方して下總に至り、乘國寺中明榮主に依りて其法を嗣ぐ、多賀谷左近太夫祥潛居士常陸下妻縣に多寶精舍を建て、師其一世となる、天文十年十月三日寂す、世壽欠く、法嗣明室玄浦あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーギン　宗誾　二二五八……　〔曹洞宗〕石見大龍寺第二代なり、宗誾字は笑巖、石見邑智郡佐波の人、出家行脚し、龍文寺雲莅透龍に謁し、侍司となる、服勤十年にして其印可を受く、永祿十年三善隆秀惠連と共に花谷山に大龍寺を建て、師を請す、乃ち雲莅を開山とし、自ら次位に居す、天正七年天初麻香に席を讓り、顯親寺に退き、出雲の能儀郡常福寺に居り、慶長三年七月二十五日寂す、壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

シユーギン　宗岑（シン）　（二一〇四四）　〔臨濟宗〕山城宗昌寺の禪僧なり、宗岑字は大蟲、俗姓不詳、峰翁一の法を嗣ぎ、宗昌寺に住す、學人來り問へば曰ふ、汝に三十棒を放す、と、擬議すれば便ち曰ふ、閃電過了と、示寂の年時欠く、勅諡大證禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕　宗岑は至德の頃の人なるか

シユーギン　宗吟　リヨーカク良覺を見よ、

シユーキユー　宗球　二〇九七／二一六二　〔臨濟宗〕京都大德寺の第六十代なり、宗球字は天琢、尾張の人なり、宗熙禪師に參して法を嗣ぎ、京都大德寺に主となる、文龜二年九月二十八日寂す、壽六十六、（紫巖譜略、大德寺世譜　延寶傳燈錄）

シユーキユ　宗休　二一二八／二二〇九　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗休字は大休、少にして東福寺永明菴に入りて剃髮受

戒し、　普く山中の諸老に見え、後龍安寺の時芳和尚に參して宗記を受く、永正の初め勅を奉して妙心寺に出世し、暫くして退居し、靈雲院を寺側に剏して幽捿す、今川義元師の德望を聞き、駿河の臨濟寺に招く、後再ひ妙心寺に移り、尋きて尾張の瑞泉寺を主とる、一年にして舊院に歸へり禪餘講を開く、後奈良天皇召して法を問ひ、弟子の禮を執る、特に圓滿本光國師の號を賜ふ、天文十八年七月二十四日寂す、壽八十二、塔を靈雲院に建つ、（本朝高僧傳）

シユーキユーニ　宗久尼（・・・・）〔臨濟宗〕近江應聖寺の開山なり、宗久俗姓は内藤氏、初め近江鹽津の熊谷氏に嫁す、常に世愛を厭て出家を志し、遂に祝髮受具して洛東に卜居し、門を閉ちて禪坐す、時々大德寺に詣て養叟に參し、遂に大悟す。城北大原に居り、後、郷里に皈り、應聖寺を建て丶四衆に接す、臨終の偈に曰く、四十餘年、呵ㇾ佛罵ㇾ祖、轉身一路、靑霄獨步、と、寂年及壽欠く（延寶傳燈錄）

シユーキヨー　宗慶（二一五五—二二二六）〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗慶字は雲叔と云ひ、京都の人なり、天啓宗歆に參して印可を受け、大德寺に主となる、永祿九年正月九日寂す、壽七十二、遺偈に曰ふ、七十二歲、片雲點ㇾ空、牢關一喝、五送雷同と、後朝延謚して佛心廣通禪師の號を賜ふ（延寶傳燈錄）

シユーギヨー　宗堯（二一六四）〔臨濟宗〕尾張瑞泉寺の禪僧なり、　宗堯字は朴菴と云ふ、東陽妙心寺に住する時、之に侍し、參究して法を嗣ぎ、尾張瑞泉寺に住す、寂年欠く、法嗣三人を出す、（延寶傳燈錄）

シユーギヨー　宗堯（二二六三—二三二〇）〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十六代なり、　宗堯字は唐叔、隨流子と號す、京都の人なり、隨倫の法を嗣き、慶安五年八月廿三日出世す、同年九月廿日開堂す、豐前中津大雄山法性寺に住す、萬治三年九月九日寂す、壽五十八、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーク　宗玖（二二一八—二二七三）〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第四十八代なり、　宗玖字は瑤林といふ、和泉境の人なり、寶叔の法を嗣く、慶長十二年三月廿二日大德寺に出世して瑞峯院の禪菴に住す、慶長十八年七月四日寂す、壽五十六、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーク　宗九（二二四一—二三一七）〔臨濟宗〕京都大德寺の僧なり、宗九字は蔵岫、近江石山の人なり、出家の後小溪紹付禪師に參究して其法を嗣ぎ、大德寺に住す、後奈良天皇其道譽を聞き、宮中に召して禪要を問ひ、特に普應大滿國師の號を賜ふ、弘治三年四月十三日寂す、壽七十七、瑞峰院に塔す、遺偈に曰く、敎ㇾ佛敎ㇾ祖　遊戲神通、末後一句、猛虎舞ㇾ空、（延寶傳燈錄）

シユークン　宗訓（・・・・）〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、　宗訓字は天叟、桂堂原佐の法嗣にして下總總寧寺に主となり、某年寂す、壽缺く、法嗣趣翁周超あり（日本洞上聯燈錄）

シユークワク　宗廓（二三二三……）〔淨土宗〕江戸誓願寺第八代なり、　宗廓は超蓮社輪譽と號す、俗姓は大田氏、安房の人なり、宗呑に投じて剃髮受業し、後、增上寺定與隨波に師事して法を嗣ぐ、初め江戸淺草誓願寺に住し、元和元年淺茅原に玉蓮院を剏して開山となる、寛文三年十月二十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユークワン　宗寛　二三二七　二三八二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百九十一代なり、宗寛字は江西、京都の人、大英の法を嗣く、正德五年八月十五日大德寺に出世して東溪院に住す、雲林院を再興す、享保五年東海寺輪番となる、享保七年十一月十日寂す、壽五十六、勅謚法慧通明禪師といふ、(紫巖譜略大德寺世譜)

シユーグワン　宗覚　(……)　〔眞言宗〕伊勢敎王山の開山なり、宗覚は近江闍梨といひ、本の名は慧仟と稱す、法を受けて小野廣澤の秘奥を盡くす、華嚴僧正の職位を受け、傳法灌頂に滿す、時に四十二歲なり、伊勢敎王山に一院を建て、内證院と稱し、開山となる、付法一人なり、濟深といふ、一には濟甚に作る、(傳燈廣錄)

シユークワン　宗觀　(……)　〔曹洞宗〕石見靈光院の開山なり、宗觀字は直菴、永萬と號し、上野の人、大徹宗令によりて得悟し、總持寺に出世す、石見郡主周兼居士立川に靈光院を創め、師迎へられて開山となり、又妙義菴を立て隱棲し、遂に玆に終る、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユークワン　宗關　二二〇六　二二八一　〔曹洞宗〕江戸泉岳寺の開山なり、宗關字は門菴、俗姓は源氏、駿河の人なり、出家受具の後、朴堂に謁し、次に韓嶺に見え、建室寅に參するに及ひ、其法を得、永平寺に出世し、大中寺に移つる、江戸の檀信龍雲院を剏し、師を延きて之に居らしむ、(後寺基を澁谷に遷し改めて長谷と云ふ)後高松山泉岳寺を江戸に剏して始祖となり、元和七年十一月二十六日寂す、壽七十六、法嗣天南松薫あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーグワン　宗玩　二二三四　二三〇三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十六代なり、宗玩字は江月といひ、和泉堺の人、俗姓は津田氏なり、自ら欠伸子と號す、別號を懵袋子といひ、赫々子と呼ふ、春屋の法を嗣く、天正二年八月十八日に生る、慶長十五年十一月十五日出世し、後水尾天皇勅して大梁興宗禪師の號を賜ふ、師龍光院に住す、國主の請により筑前の崇福寺を董す、後本山に瑞源院を建て、師其祖となる、孤蓬菴、寸松菴を建つ、寛永廿年十月朔日寂す、壽七十、頌に曰く、喝々喝々、と、龍光院に塔す、正保三年七月祖堂に安牌す、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーケー　宗圭　二二五七　二三三五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十二代なり、宗圭字は雪菴、京都の人、自ら西翁と號す、藍溪の法を嗣き、慶安元年二月二日大德寺に出世す、勅して大珠法光禪師の號を賜ふ、祥瑞寺に住す、近江龍水菴を創す、延寶三年十月四日寂す、壽七十九、碧玉菴に塔す、辭世に曰く、上天無據、入地無門、咄、若問去處、口是禍門、咄と、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーケー　宗圭　(二四七五)　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第四百廿八代なり、宗圭字は玄道、武藏の人、一山の法を嗣く、文化十一年十二月四日綸旨降下して武藏祥雲寺内靈泉院に住す、自ら不忘と號す、文化十二年武藏品川東海寺輪番となる、寂年、及壽欠く、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーケー　宗桂　二二一六　二三〇三　〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、宗桂字は千林と云ひ、鄉貫詳かならず、東海宗朝禪師に參究久しふして、遂に記莂を受け、大德寺に主となる、天文

十二年二月十五日遺偈を書して曰く、六十八年、身藏二北斗一、掉レ臂便行、來時無レ口、と、筆を投して寂す、壽六十八、（延寶傳燈錄）

シユーゲー　宗猊（………）〔曹洞宗〕肥前保福寺の開山なり、宗猊字は威仙、肥前の人なり、出家遊方して天寧寺繁林瑞春に參し、其印可を受け、總持寺に出世し、保福寺を剏す、寂年及世壽欠く、法嗣春閣揚天、緣之等諸の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーケン　宗見　二一七六……〔曹洞宗〕甲斐慈照寺の禪僧なり、宗見字は眞翁、武藏足立郡岡部氏の子なり、小山田の大泉寺に投して剃髮し、諸老宿に徧參し、桂節宗昌に龍華寺に謁し、久しくして徹悟し、侍司となり、尋さて藏鑰となる、龍王邑主某、師の道望を慕ひ、請して慈照寺に主たらしむ、永正十三年五月二十四日寂す、壽缺く、法嗣天桂禪長あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーケン　宗顯　二一六六／二二二一〔臨濟宗〕京都大德寺第百二代なり、宗顯字は江隱、自ら破沙盆と號し、越前の人なり、古嶽宗亘に參して法を嗣ぎ、紫野大德寺に主となる、朝廷師の道譽を嘉みし、特に興智常照禪師の號を賜ふ、永祿四年二月六日寂す、壽五十六、遺偈に曰く、來時虛空七花、去處大地八裂、柱杖子轉レ機、跳二出龍峯窟一、（延寶傳燈錄）

シユーケン　宗賢　二一八七／二二六一〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第百廿四代なり、宗賢字は先甫、京都の人なり、和溪の法を嗣ぐ、天正十一年正月十七日出世して昌林院に住す、正親町天皇勅して法龍天源禪師の號を賜ふ、慶長六年八月廿五日寂す壽七十五、昌林院に塔す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーケン　宗賢　一八四四……〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、宗賢は紀伊水谷縣の人、少にして高野に登りて剃髮修學し、法相を興福寺に聞き、醍醐山の聖賢僧正に依りて金胎兩部を承傳す、後高野山に歸へりて東南院に住し、議論に長け、覺鑁と匹敵す、永萬二年高野の檢校に任し、仁安三年傳法院のことによりて薩摩に謫せられ、翌年赦を蒙むりて歸へる、師三間堂を建て、金色佛像丈六五軀三尺十軀、法華經二十部紺紙金泥理趣經一部を安置し、後堂位を鳥羽上皇に獻し、御願場となす、仁平元年供養し阿闍梨位を受け、元曆元年九月十三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユーケン　宗謙　二二三〇……〔曹洞宗〕武藏永林寺の開山なり、宗謙字は益翁、越後の人なり、天室光育の法を嗣ぎ、去りて諸方に遊び、一種純禪師武藏に永林寺を剏し、師を請して第一座とす、出てゝ永平寺に出世し、林泉寺に遷る、元龜元年二月十日寂す、世壽欠く、（日本洞上聯燈錄）

シユーゲン　宗源　一八二八／一九一一〔淨土宗〕祖源空上人の高弟なり、宗源字は乘願、初め出家して仁和寺に留り、眞言宗を修め、尤も悉曇章に精通す、後、源空上人に謁して淨土敎を受け、醍醐の菩提寺に隱捿し、晚に淸水寺竹谷に遷る、時人竹谷上人と云ふ、常に聲名を厭ひ、客に對して敎學の事を語らす、唯た醫藥音律の事を語れり、然れとも口に念佛稱號の聲を絕たず、門弟子に示して謂ふ、今人利劍を持するもの太た秘重し、晝床夜枕身に隨へて離さす、利劍の靈能く鬼怪妖精を防くものとなす、吾等亦かゝる思をなし、六字の佛號を

以て寶劍となすべし、と、建長三年七月三日寂す、壽八十四（淨土傳燈錄、鎭流祖傳、淨土總系譜、）

シユーゲン　宗源　二一〇二 二一七六　〔臨濟宗〕尾張瑞泉寺の禪僧なり、宗源字は桃雲、俗姓は可兒氏、美濃姫村の人なり、初め曹洞の學を修めしが、後、呆觀祖晦禪師に參して其證を得、梅龍寺に居りて雲龍院を開く、永正十三年二月瑞泉寺に遷り、同年三月十九日寂す、壽七十五、（延寶傳燈錄）

シユーゲン　宗源　一九二三 一九九五　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、宗源初の名は逢源、後宗源と改む、號は雙峰、俗姓不詳、筑前の人、弘長三年生る、建治元年十三歳にして東福寺聖一國師の下に投じて剃髮す、弘安六年廿四歳にして鎌倉に遊び、佛光禪師に謁す、尋て大休念、西礀曇、一山寧、寂菴照の門に周遊すること二十餘年なり。嘉元三年四十三歳、筑の横嶽山崇福寺に住す、延慶三年四十八歳京師に至り、一ヶ月にして筑に歸へる、正和四年五十三歳東福寺の請を受けて登山し、法化盛なり、元應元年五十七歳鎌倉に下る、北條高時迎へ禮し、防州の地を割きて東福寺に納め、禪師の用に供す、元亨元年五十九歳勅により南禪寺に住す、後宇多上皇宮中に召し法要を諮問したまひ、雙峰禪師の號を賜ふ、李部親王慶禪師の室を叩き法要を問ひたまひ、遂に契悟し、僧伽梨を付せらる、親王洛東后妃の故宮を捨てゝ禪苑を構へ、正法山大聖寺と號し、師を請して開山となす、後宮寺となる、正中二年六十三歳、大聖寺開堂を行ふ、また東福寺の東邊に一菴を結ぶ、上皇特に万年桂昌精舍の號を賜ふ、嘉曆二年六十五歳、再び東福寺に住し、秋鎌倉に下り、十二月東福寺に歸へり住す、同三年六十六歳東福寺を退きて桂昌菴に休す、再び南禪寺住持の詔ありしも固辭して受けず、建武元年七十二歳藤原相再び東福寺住持の請ありしも老衰を以て受けず、同二年七十三歳にして十一月微疾を示し、廿二日門弟子に後事を附し、東福寺正寢に寂す、遺偈あり、幻生幻滅、畢竟非實、本地風光、無固無必、示寂の前一日吏部親王師の頂相を圖し讃を請ふ、師迅筆書して曰く、泥洹一句、無入杳參、雲收碧嶂、月落寒潭、曆應三年十一月廿日勅諡雙峰國師を賜ふ、（年譜略、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

雙峯國師

シユーゲン　宗沅（……）〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、宗沅字は南江と云ひ、號は漁庵といふ相國寺に在りて詩名あり、後法衣を脫して俗に皈し、和泉堺海會寺に寓し、漁菴と號す、著作鷗巢集あり、（日本名僧傳）

シユーゲン　宗沅　二三〇九 二三八九　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百六十代なり、宗沅字は湘南、京都の人、大仲の法を嗣く、

元祿十一年五月十九日大德寺に出世し、同十二年十月廿五日開堂して碧玉菴に住す、朝廷大鑑眞宗禪師の號を賜ふ、享保十四年正月九日寂す、壽八十一、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーゲン　宗眼　二一九二 二二八〇　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百廿九代なり、　宗眼字は天叔、號は土槐子、一に、賓叔子といひ、丹後の人なり、怡雲の法を嗣き、天正十三年六月廿日出世す、正親町天皇勅して佛國大安禪師の號を賜ふ、元和六年二月廿一日寂す、頌に曰く、吹毛磨盡、八十九年、一機瞥轉、指地搭天、と、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーゲン　宗玄　二二九五 二三四四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百卅五代なり、　宗玄字は天岸といひ、肥後の太守細川忠利の子なり、啓室榮の法を嗣く、貞享元年正月十七日出世す、前に本山及び五山、師に薦めて歷住せしめんとし、請疏既に成りて將に綸命を請はんと欲す、時に師顏に疽を發して起ち難く、病中鳳書に接す、同二月朔日寂す、壽五十、師嘗て肥州妙解寺及び常樂菴に住す、正德元年七月四日中御門天皇勅して慈德慧濟禪師と諡す、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーコ　宗古　二二八五 二三六五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百十七代なり、　宗古字は德峯、武藏の人なり、默翁淵の法を嗣く、延寶三年正月廿日出世し、同九月東海寺輪番となる、武藏祥雲寺裡に靈泉院を創す、同國多麻郡菩提山常光寺を再興す、寶永二年七月廿三日寂す、壽八十一、眞常菴に塔す、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーコ　宗胡(ソウゲツ)　二二七八 二三五六　〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、　宗胡字は月舟、肥前國原田氏の子なり、早くより出塵を願ふ、十二歲にして圓應寺花嶽和尙に投して出家す、修學倦むなし、十六歲にして遊方し、關東に至りて常陸國多寶院に留り、居ること多年、一朝厠に在りて微風の扉に觸れて聲を做すを聞き、豁然として悟る所あり、丹波國の瑞巖寺に至り萬安に謁し、所解を呈す、萬安懇ろに訓誨す、師三十一歲にして遂に白峯和尙の室に入て法信を受く、出てゝ攝津國の宅原寺に住す、次て長圓寺大乘寺に遷り、興禪、々德兩院を創して第一世となる、師深く宗門の衰微を嘆して古規を恢復す、其法を嗣ぐ者悉く龍象なり、延寶八年の秋大乘寺を謝して京師の田原郡に隱る、古寺あり補陀洛山禪定寺と號す、師此に住し興復して行樂の所と爲す、元祿九年正月十日寂す、壽七十九、臘六十七、(日本洞上聯燈錄、續日本高僧傳)

シユーゴ　宗悟　二二一〇 二二九〇　〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、宗悟字は如幻、尾張の人、俗姓は菅原氏なり、十三歲同國の常樂寺雲岡に投して出家し、十五歲祝髮す、受具の後北遊し、偏く諸老に謁し、遂に承顏智順に總持寺に謁し、藏鑰となり、分座說法す、幾年ならすして辭して相摸に到る、吉澤の布施某松巖寺を剏し、師これか第一世となる、土佐の大守仙波氏、高座郡遠藤村に寶泉寺を建て、上杉乘國武藏山田に德翁寺を創し、皆師を請して開山とす、享祿三年再び總持寺に住し、同十一月二十日普藏院にて寂す、壽八十一、臘六十七、(日本洞上聯燈錄)

シユーゴ　宗悟　二二一二 二二八五　〔臨濟宗〕京都大德寺の第七十八代なり、　宗悟字は悅溪、近江の人なり、東溪宗牧に參すること久しくして遂に其印記を授けらる、紫野大德寺に住し、大

永五年五月二十六日偈を書して曰く、打ㇾ佛打ㇾ祖、五逆兒孫、萬機休處、露柱倒奔、と筆を投して寂す、壽六十四、參雨軒に塔す、敕諡佛照大鏡禪師と賜ふ、（延寶傳燈錄、紫巖譜畧）

シユーコー　宗亘（二一二五 二二〇八）〔臨濟宗〕京都大德寺の第七十五代なり、宗亘字は古嶽と云ふ、俗姓は佐々木氏、近江蒲生郡の人なり、甫めて八歲崇聞寺の義濟に投して剃髮し、法華を學ぶ、十六歲京都に上り、建仁寺喜足嚎に依り、十七歲受具して侍藥となる二十三歲春浦和尙に參し、如意菴に實傳眞に謁して服勤すること二十餘年、永正六年秋幕命により大德寺に出世し後、大仙菴に退居し、士大夫道を問ふ者多し、後柏原天皇特に勅して佛心正統禪師の號を賜ふ、後奈良天皇即位し、師を宮中に召し帽子を著けて拜謁し肩輿にて參內することを許し、重ねて正法大聖國師の號を賜ふ、天文十七年六月二十四日偈を書して曰く、柱杖兒二末後句一、倒擲二萬仞龍峰一、請汝試卓破看、滅二却臨濟正宗一と、筆を投して寂す、壽八十四、臘六十八、金剛經及ひ靑銅錢若干を下して、葬儀を營ましむ、全身を本菴の北隅に葬むり、塔を立て松關といふ、（本朝高僧傳、紫巖譜畧、大德寺世譜、龍門夜話、續本朝書史）

シユーコー　宗亘（……）〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、宗亘字は梅屋と云ふ、攝津兵庫の人、梅津に寓して詩名あり、（日本名僧傳）

シユーコー　宗興（二一七五 二五四〇）〔眞宗〕近江木津即往寺の住持なり、宗興字は玄風、一に遊識といふ、閑雲と號す、俗姓は瑕丘氏、尾張中島郡丸淵村本源寺主某の第二子なり、幼にして父を喪ひ、母に鞠育せらる十五歲にして出遊し勉學衆に超ゆ、近江の日溪願證寺主明公等の門に遊ひ、專ら內典を學ふこと九年なり、嘉永元年木津村即往寺主某に養はれ、本願寺に受度す、明年即往寺に住持す、萬延元年安居し、學林に掛搭し、得業に及第し、尋いて助敎となる、明治四年宗主の召に應して學林に入り、敎授に任す、留まること數年、司敎に昇り、權大講義に補し、十三年九月二日病を以て寂す、壽六十六、宗主哀悼して勸學職を贈り、號を與へて開藏院と云ふ、著作上宮慈視錄、曼强錄、眞宗二諦辨、進道初門學論、各一卷、步船鈔講義、四題帷策、二十八題辨略、山房夜話、各二卷、大藏輔國集科文、傍註略述法相義、訂正神道五部書、各三卷、三條叢說四卷あり、（碑文、本願寺派學事史）

シユーゴー　宗興（一九九三 二〇六六）〔曹洞宗〕加賀洞谷寺の禪僧なり、宗興字は溫老、能登の人なり、幼にして出家し、偏く師席を訪ひ、初め洞谷寺の明峰素哲に謁し、次に光孝寺の壺菴に依る、後加賀に到り承天寺珠巖に見へて示誨を蒙り、珠巖大乘寺に移るに及ひ、師も從ひて往き、其印可を受け、洞谷寺に主となる、應永十三年十一月八日寂す、壽七十四、塔を萬松菴に建つ、（日本洞上聯燈錄）

シユーコー　宗興（一九七〇 二〇四二）〔臨濟宗〕尾張妙興寺の開山なり、宗興字は滅宗と云ふ、俗姓は源氏、尾張中島郡の人、嵯峨天皇の後裔なり、七歲光明寺良澄法師に經書を習ひ、十九歲圓興寺に投して剃髮受具し、福山天源菴に於て柏菴に見へ大應の頂相を傳へて法信となし、尾張に皈りて妙興寺を創して開山となり、相尋で梵刹を建つること凡そ八ヶ所、近江、尾張、駿河の三州に接待菴を構ふ、應安中京都に遊び、定山

シユー（宗）コ

祖禪、夢巖祖應と交はり、東福寺の少林庵に居る、應安五年十月十二日六十二歳東福寺第一座となる、僅に三日にして辭す、筑前崇福寺席を虛うし師を延請すれども拒んて就かず、後洛西の龍翔寺に住し、久しからずして尾張の妙興寺に還り、天祥庵に老を投ず、寺の西南二里許松竹四圍の地あり、師自らその地に一穴を掘りて瓮を中に設け、弟子に命じ、吾れ死なば全身を瓮中に收めよ、天瑞塔と名づく、永德二年七月十一日端座して寂す、壽七十三、弟子遺命の如く全身を瓮中に收む、勅謚圓光大照禪師といふ、（禪林僧傳、本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

シユーコー　宗興　ゲンコー玄興を見よ、

シユーコー　宗杲　二二五四……〔臨濟宗〕駿河清見寺の禪僧なり、宗杲字は東谷といふ、太原崇孚禪師に參して法を嗣ぎ、清見善德の二寺に住し、後勅令を奉じて京都の妙心寺に遷る、文祿三年正月十五日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーコー　宗香　二一八四 二二四九〔臨濟宗〕京都大德寺第百十八世なり、宗香字は梅隱と云ふ、俗姓生國を詳にせず、出家して大德寺第九十五世にして相摸早雲寺第二世なる大室宗碩禪師の弟子となり法を嗣く、明叟宗普、太宙宗初同參なり、天正元年十月十日大德寺に出世し、相摸早雲寺第八世寶泉寺第二世となる、後祐德寺祐泉寺を創し伊豆相摸の地方に宗風を擧ぐ天正十七年十一月廿六日寂す、壽六十六なり、龍泉門上の梅隱派と云はれ、法嗣菊隱宗存あり、以天宗淸禪師一門の下に於て明叟派と對立したり、（正燈世譜、大德寺世譜、紫巖譜略）

シユーコー　宗香（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、宗香字は梅屋、攝津兵庫の人なり、南禪寺の香林簡に參して心地を發明し外學を兼有す、詔により南禪寺に住す、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユーコー　宗孝　二一九三……〔曹洞宗〕相摸總世寺の禪僧なり、宗孝字は忠室、伊豆初島の人、總世寺一宇俊箇に依りて祝髮受具し、遊方して諸老に參し、再び總世寺に皈り、一宇に奉侍すること凡十餘年、其寂後遺命に依り席を繼ぐ、後退させて相摸獺鄉に隱る、後東陽院を營み、養老の所とす、天文二年正月九日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーコー　宗高　二三八八 二三四七〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百二十二代なり、宗高字は仰堂、號は湛圓、京師の人、仙溪の法を嗣く、延寶六年二月四日出世す、貞享七年武藏品川東海寺の輪番となり、玉林院に住す、水戶常照寺の開山となる、貞享四年九月五日寂す、壽六十、元祿二年祖堂に安牌す、勅諡眞智圓應禪師を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーコー　宗光　二三〇三 二三七〇〔臨濟宗〕山城紫野大德寺二百五十七代なり、宗光字は鏡岩、號は露柱、但馬の人、眞岩の法を嗣く、元祿十年正月廿三日出世し、豐前小倉龍興山大隆寺に住す、寶永七年六月廿日寂す、壽六十八（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーコー　完光　一九八六 二〇四九〔臨濟宗〕但馬大明寺の開山なり、宗光字は月菴と云ふ、俗姓は大江氏、美濃の人なり、十五嘉暦元年四月八日を以て生れ、大圓寺峰翁和尙に投し、十五歳祝髮し、古先元、夢窻石の二老に參し、南禪寺笠仙仙に依る、竺山建長寺に遷るに及び侍香となる、觀應二年峰翁を省して師事すること久しく、遂に法衣を付せらる、延文二年

するに及び、常陸に往き、復菴己に謁し、明年大圓寺玉林燦に侍す、尋で出雲に至り、孤峯明に依り輪鑰を掌り、遂に印可を付せらる、貞治六年但馬黒川に遊び、其地の幽靜なるを愛し、錫を駐む、四方の道俗其道譽を慕ひ、遂に雲頂山大明寺を剏して師を延く、太守山名時熙、弟子の禮を執る、師、圓通、大同、禪昌の諸寺を開きて開山となる、康應元年三月廿一日疾に罹り、二十二日寂す、壽六十四、臘五十、門人塔を本山に樹て正法と曰ふ、嗣法の上首、圓通寺理有、大圓寺寶林の二人あり、著作語錄四卷あり、山名時熙其德を朝に奏して正續大祖禪師と諡す、（續群一二三八、本朝高僧傳）

シユーコー　宗杲　一九九二……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、宗杲字は天柱、駿河久能郡の人、奇出然の姪なり、聖一國師の法嗣となる、顯密の學にも併せ通ず、元に渡りて諸宗匠に謁見し、歸來益開ゆ、藤原相に請せられて東福寺に主となる、正慶元年八月二十七日寂す、遺偈あり、不レ離二當處一直下則行、地獄天堂、一片打成、大雄菴に塔す（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、）

シユーコツ　宗忽　二二八六／二三五七　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第二百十八代なり、宗忽字は天倫、號は不可得叟、丹州の人、上月氏の子なり、十二歲紫野淸岩渭禪師に謁して剃髮し、侍童となりて書を學び、久しからずして群籍に亘り、三藏に通ず三十歲に至るも未だ省せず、これより數老に參叩し、一夜定中豁然大悟し、淸岩の法語及法衣を受く、時に寬文元年三十六歲なり、延寶三年敕賜紫衣を拜し、命により龍寶山に住す、五年和泉の檀請により祥雲寺を主どる、中村氏南宗寺を再興し、師に請ひてこれに居らしむ、天和元年民大に飢う、師南宗寺にて濟餓戒を開く、元祿二年將軍綱吉の命を蒙り江戶東海寺に住す、七年五月寺火災に罹り、師これを再興す、九年辭して和泉の舊寺に歸り、十年六月二十二日寂す、壽七十二臘六十、遺偈あり曰く、生亦不可得、死亦不可得、喚爲不可得、不可得、朝廷勅諡國英法鑑禪師と賜ふ著作語錄あり、（續日本高僧傳、紫巖譜畧）

シユーゴン　宗嚴（一八〇五）（眞言宗）山城醍醐山理性院の第四代なり、宗嚴は大納言僧都といふ、宗命の法を受け、理性院の席を補して第四代となる、又治承二年五月四日醍醐山の座主乘海の法を嗣ぐ、時に年三十四なり、寂年欲く、（續傳燈廣錄）

シユーゴン　宗嚴（……）〔曹洞宗〕越後耕雲寺の禪僧なり、宗嚴字は周剛、霽巖正察の法を嗣き、越後耕雲寺に住す、寂年並に世壽欠く、法嗣天初蘂源あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーサ　宗佐　二二四六……〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗佐字は材岳と云ふ、希菴玄密に參して印可を受く、希菴の寂後大心院に居す、細川藤孝丹後宮津に寺を剏し、師請せられて開山となる、天正初年詔を奉じて妙心寺に出世す、晩年大心院を移して正法山中に置きて佚老す、幽齋居士山城長岡鷄冠井の莊田若干を割て、香積に寄す、天正十四年寂す、壽欠く、（延寶傳燈錄）

シユーサ　宗佐　二二六八／二三三五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百九十六代なり、宗佐字は傳外、號は凍雲子、山城の人、天祐

の法を嗣く、明暦二年八月八日出世し、清泉寺に住す、萬治元年十二月四日開堂す、敕して大通智勝禪師の號を賜ふ、寛文四年九月武藏品川東海寺の輪番となる、延寶三年四月三日寂す、壽六十八、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーサ　宗佐　ライシン賴申を見よ、

シユーサク　宗策(……)〔曹洞宗〕周防眞如寺の禪僧なり、宗策字は規川、九江慈淵に參して第一座となり、後衣法を附せられて周防の眞如寺に住す、寂年、及び壽缺く(日本洞上聯燈錄)

シユーサン　宗璨(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗璨字は說三、南溟紹北禪師に侍すること久しく、遂に入室印可を付せられ、妙心寺に住す、示寂年月日缺く、(延寶傳燈錄)

シユーサン　宗璨 二〇四八 二一一七〔曹洞宗〕伊豆最勝院の開山なり、宗璨字は吞貧、俗姓は藤原氏なり、嘉慶二年に生る、幼より佛門を慕ひ、鄉の敎寺に入りて出家す、遂に諸方を歷遊し、後、最乘寺に投して大綱に謁す、大綱一見して器とす、師親しく師事すること數年にして衣法を傳持す、時に永亨元年なり、管領上杉憲淸先考の冥福を追薦せんと欲し、伊豆大見の莊に妙高山最勝院を創し、師を招て開山となす、永亨十二年十一月十三日進院し大に祖宗を唱ふ、尋て總持寺に出世し、永澤最乘寺に移る、久からずして辭して復最勝院に歸り、長祿元年十月六日寂す、壽七十、最勝院の西南の隅に葬る、(日本洞上聯燈錄)

シユーサン　宗珊(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗珊字は珠林と云ふ、宗恕に參して印可を受け、妙心寺に住す、示寂の年月日缺く、(延寶傳燈錄)

シユーサン　宗山　トーキ等貴を見よ、

シユージク　宗竺 二二六五 二三二七〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百九十代なり、宗竺字は天室といひ、自ら一如子、雜道人、破笠子など〻號す、破漏船の印あり、尾張の人なり、玉室の法を嗣く、承應三年四月四日出世す、寛文三年九月東海寺輪番となる、寛文七年八月廿六日寂す、壽六十三、辭世に曰く、六十三年、要識去處、白日靑天、喝と、大源菴に塔す、勅謚大覺圓明禪師と賜ふ、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーシン　宗眞 二一九四 二一六七〔臨濟宗〕京都紫野大德寺第五十六代なり、宗眞字は曹傳と云ふ、美濃の人、師承詳かならず、大德寺に住し、第五十六世となる、法務の暇畫を好み、山水人物及十牛の圖を能くす、永正四年四月八日寂す、壽七十四、佛宗大弘禪師と謚す、(紫巖譜略、扶桑畫人傳、)

シユーシン　宗眞(……)〔淨土宗〕近江淨嚴院第三代なり、宗眞字は嚴譽と云ふ、俗姓は結城氏、下野の人なり、隆阿に投して出家受業し其席を繼ぎて淨嚴院に主となる、後寺を搬すること數ヶ所、盛んに所承の敎を弘む、寂年缺く(淨土總系譜)

シユーシン　宗眞 二〇三〇……〔曹洞宗〕加賀佛陀寺の開山なり、宗眞字は大源、加賀の人なり、幼にして某寺に就きて出家し、總持寺峩山に參して徹悟し、其法衣を付せらる、時に貞和五年六月一日なり、詔を受けて總持寺に出世し、永光寺に移つり、晚年加賀佛陀寺を開きて開山となり、應安三

年十一月二十日寂す、壽缺く遺偈に曰く、幻而來レ幻、幻而去レ幻、幻無ニ幻根一幻人幻レ幻、と、嗣法梅山、幻翁、了堂尼、江月尼、滿菴の五人あり、（日本洞上聯燈錄、本朝高僧傳、續群二一四三）

シユーシン 宗心（……　）〔臨濟宗〕筑前崇福寺の禪僧なり、宗心字は即菴、大應國師（紹明）に師事し、其法を嗣ぐ、筑前の廣德寺に住し、豐前の萬壽寺、筑前の報恩寺、崇福寺、京師の萬壽寺に歴遷す、示寂の年時缺く、遺偈あり、一蹈蹈翻如來地、一拳拳破祖師關、閃電光中山河走、大堂地獄響如閱、勅諡弘宗普門禪師と云ふ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーシン 宗心（二二九八／二三四三）〔曹洞宗〕美濃寶鏡山の禪僧なり、宗心字は祖道、越後の人、俗姓詳かならず、出家して播磨綱干の龍門寺弘濟に見え、親炙數年、次に加賀大乘寺月舟宗胡に參し、入室して印記を受け、美濃寶鏡山に住す、天和三年八月二十五日興禪寺に寂す、壽四十六、偈あり、曰く從來不レ昧鏡峰巔、體用齊彰接ニ滿天一、雖ニ我住山一斷鈯斧、無邊風月作ニ安禪一と、（日本洞上聯燈錄）

シユーシン 宗信（一九九八）眞言宗吉野山の修行僧なり、宗信は其師貫詳かならず、法印に叙せられ、吉水院に住す、後醍醐天皇花山院より出て〻穴太に幸するや、刑部大輔大江景繁を遣し、師を諭告して蹕を吉野に駐めしむ、師乃ち僧兵三百を發して奉迎し、行營を造りてこれに御せしむ、既にして帝崩するに逢ひ、衆沮敗して守る意なし、師告げて曰く、先帝の崩するに臨み幼主を翼けて賊を討たしむべしとの遺敕あり、豈遽かに離散を懷ふべけんや、と、衆を鼓舞して守る、寂年、及壽缺く、（太平記、大日本史、前賢故實）

シユーシン 宗莒（……／二一六一）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、宗莒字は蘭坡、詩を大拔軌に受け、夢窻國師第四世の孫なり、諸寺を歴遷して後南禪寺に住す、寺務を辭して正因菴に居り、文龜元年菴中に寂す、壽缺く、著作、仙館集、雪樵唱集あり、師在世の時、後土御門帝屢問法し、後柏原天皇諡を佛慧圓應禪師と賜ふ、（本朝高僧傳、）

シユーシン 宗津（二一二二／二一九二）〔曹洞宗〕薩摩隆盛寺の開山なり、宗津字は天祐、薩摩大守島津氏の子なり、福昌寺大雲に投して薙髮し、後龍室良從に參して心印を發明し、福昌寺に主となり、興國寺に遷る、後隆盛寺を剏して始祖となる、道譽都下に聞え、特に佛智法燈禪師の號を賜ふ、天文元年二月四日興國寺に寂す、壽七十一、法嗣喜冠龍慶、忍室文勝、恕岳文忠、大鷹宗俊、一川智濟の五人あり（日本洞上聯燈錄）

シユーシン 宗震（二一九二／二二六二）〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、宗震號は東漸といひ、美濃土田の人なり、幼より空門に入り、志學に及ひて薙染す、稍長して以安禪師の室に入りて參禪し、一旦遊方して諸宗匠の門を經由し、再ひ美濃に歸り、以安に隨事す、晝は以安の爲に事を辦し、夜は岩上に禪坐し、果して無碍の機用を得たり、以安に呈して其證を得、時に年三十七なり、以安師に號を與へて東漸といふ、妙心寺の前堂となり、後美濃土田村に河南山福昌寺を剏して開法の場とす、又妙心寺の空席あるに方り同門なる建章惟天と、共に交代して院務を監す、若狹の發心寺、播磨の隨鷗寺に住す、是より先き勅して紫衣を賜ひ、且つ妙心寺に住す、今再ひ山門の請を受けて再住すること一年なり、豐臣秀吉の姉松

シユー（宗）シ

嶽壽保信女慶長五年に本山妙心寺に長慶院を剏し、師を請して之に居らしむ、一住三年慶長七年三月二十三日寂す、壽七十一、臘五十七、法嗣庸山庸、南景岳、瑞林現、千英茂の四人あり（宗統八祖傳）

シユージン 宗仭（……）〔……〕加賀寶勝寺の僧なり、宗仭字は千岳と云ふ、攝津の人なり、出家して諸國に行脚し、加賀の城下に老を投す、甲午年七月藩主の召により城に登り寵遇せられ、藩主の命により長昌谷傳燈寺の荒敗を興す、明年三月工事成り 師住持となり、道學文章を以て聞ゆ、微妙公、陽廣公光高共に皈依推尙す、陽廣公の薨去になたり 師追福頌五十六句を捧げ、微妙公の薨去にあたり、追福頌七首を捧げたり、示寂年月日詳ならす、（燕臺風雅）

シユージン 宗深 二〇六八 二一四六 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗深號は雪江と云ふ、攝津の人、俗姓は源氏、其先は野間侍中某、將軍足利尊氏の旗下となり、武勇を以て聞ゆ、師幼にして出家の志禁する能はず、密かに逃れて家を出て、途に一僧に遇ひ、伴はれて東山に至り、五葉菴の文瑛長禪師の許に投じて剃髮受戒して諸名宿に參盆し、日峯の道譽を聞き、尾張に往き、瑞泉寺に於て參す、後、日峯妙心寺を再興せんとするに際して其命により瑞泉寺の後主義天に師事して玄旨に達し、養源院の塔を守る、義天の寂せんとするに臨み、法語を付して印可せらる、細川勝元師の道容を崇び、請して龍安寺を主とらしむ、幾何もなく妙心寺に遷り、攝津海淸寺、河內觀音寺、尾張瑞泉寺、丹波龍興寺等 皆師を以て住持たらしむ、寬正二年大德寺主席を虛す、師敕命を奉して入寺す、應仁元年天下大に亂れ、妙心龍安寺等皆兵燹に罹り、師亂を龍興寺に避く、文明の初め勝元城中に龍安寺を建て、師を迎へて居らしむ、九年天皇敕して妙心寺再興の詔を賜ふ、師大に喜び、專ら修營に勉め、周年にして工成り、これを帝に奏し、龍馬幷に銀券若干を下賜せらる、晚年病に罹り、正法山中の衡梅院に退き、文明十八年六月二日寂す、壽七十九、臘六十二、敕諡佛日眞照禪師と賜ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーシヤク 宗績 二四三四 二五〇八 〔臨濟宗〕駿河沼津蓮光寺の禪僧なり、宗績字は妙喜別に棘園と稱す、俗姓は星野氏、駿河駿東郡大岡莊の人なり、幼にして鄕の潮音寺に入りて薙染し、遊方して阿波の春叢に參し、後卓州に謁して其印記を受け、沼津の蓮光寺に住す、嘉永元年七月一日寂す、壽七十五、著作荊棘叢談あり、

シユーシユ 宗殊（二一八四）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗殊字は勝嵒と云ふ、桂峯玄昌に參して法を嗣ぎ、大永四年夏敕を奉して京都妙心寺に主となる、寂年壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーシユ 宗殊（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗殊字は文淵と云ふ、久しく妙心寺にありて獨秀乾才に參して其法を嗣ぐ、寂年及壽詳かならず、（延寶傳燈錄）

シユーシユ 宗珠 二〇六八 二一八八 〔曹洞宗〕甲斐龍華寺の禪僧なり、宗珠字は輝山、三河寶飯郡の人、俗姓は藤原氏なり、弱冠にして蓬萊寺に投して祝髮し、瑜珈の敎を習ひ、廿七歲龍華寺桂節宗昌に師事して其法を嗣き、桂節の寂に方り、其席

を踵き、住持たること三十餘年、享祿元年正月十二日寂す、壽百二十一、（日本洞上聯燈錄、）

シユーシユ　宗種（……）〔曹洞宗〕越後種月寺の禪僧なり、宗種字は月田と云ふ、久しく南英鎌宗に參し、開悟す尋で信衣を受け、南英の寂するに及び、越後種月寺に席を嗣で住す、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユージユ　宗壽（二一九二）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗壽字は仁岫と云ふ、獨秀乾才に師事して印可を受け、美濃崇福寺に住す、後、勅を奉して京都妙心寺に出世す、幾何ならずして崇福寺に退休し、天文中寂す法嗣十人を出す（延寶傳燈錄、）

シユージユ　宗壽　二四九七……〔臨濟宗〕京師花園妙心寺の禪僧なり、宗壽號は棠林飛彈國益田郡の人七歲同郡中呂村禪昌寺芳谷禪師に師事し、稍長して出遊し、讃岐の九峰、美濃の隱山等に歷事し、遂に隱山禪師の印可を受け、其法を嗣ぐ、文化元年美濃慈恩寺の師跡を繼ぎて法化盛なり、十四年龍福寺瑞龍寺の請に應じ、大衆を接得す、美濃の棠林・備前の太元・一双の甘露門と稱せらる、天保三年勅を拜して妙心寺に出世し、紫衣を賜ふ、同八年瑞龍寺に碧巖錄を提唱す、忽然寂す、翌年特に勅して大徹正源禪師の謚號を賜ふ、弟子其法語を編し、宗門玄鏡錄と云ふ、（近世禪林僧寶傳）

シユージユ　宗受　二一七二……〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗受字は天縱、初め東福寺の永明菴にありて文字を習ひ、後瑞龍山南禪寺に往き、悟溪頓により其印可を蒙むる、美濃の慈雲寺を開きて開山となり、京都の妙心寺に住するに及びて學徒雲集す、永正年中幕命により大德寺に往し、尾張の瑞泉寺に移つる、晩年慈雲寺に退休し、永正九年正月十一日寂す、壽缺く（本朝高僧傳）

シユーシユー　宗周　二二三二 二三〇〇〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百六十六代なり、宗周字は文室、號は暗螢子、土佐の人、萬江の法を嗣く、元和九年閏八月四日大德寺に出世し、寛永元年三月十四日開堂して、見性院に住す、寛永十七年九月七日寂す、壽六十九、勅謚普海本淨禪師を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーシユー　宗周（二一八二）〔曹洞宗〕周防顯孝寺第二代なり、宗周字は廓翁、九江慈淵に參して其法を嗣き、大永元年師命を受けて、周防の顯孝寺に住し、第二代となる、寂年及び壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーシユー　宗秀（……）〔臨濟宗〕京都大德寺の第七十四代なり、宗秀一に瑞秀と云ふ、字は雪岫と云ふ、玉浦に參して法を嗣ぎ、瑞龍寺に住し、後大德寺に出世す、寂年缺く、（延寶傳燈錄、紫巖譜略、）

シユーシユー　宗琇　二一八二 二二六四〔臨濟宗〕山城大德寺第百十二代なり、宗琇字は玉仲、日向櫛間の人なり、春林の法を嗣く、永祿十三年二月十三日大德寺に住す、正親町天皇敕して佛機大雄禪師の號を賜ふ、慶長九年十一月十六日寂す、壽八十三、頌に曰く、生也不來、死也不回、機輪回處、瞎驢聽雷、と、金鳳山天瑞寺に塔す（紫巖譜略　大德寺世譜）

シユージユー　宗什　二二七八 二三四四〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百十一代なり、宗什字は一溪といふ、松月老人、又は妙

膺無方の印あり、山城の人、雪舟の法を嗣く、寛文七年二月十二日出世開堂す、寛文十二年武藏品川東海寺の輪番となる貞享元年六月十六日寂す、壽六十七、芳春院に塔す、勅謚眞覺普應禪師といふ、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーシユク　宗叔 (……) 〔臨濟宗〕京都大德寺の第三十四代なり、　宗叔字は性三、養叟に參して心印を付せられ、大德寺に主となる、某年七月十二日臨終に及び、偈を書して曰く、「趯ニ塗毒鼓一、殺レ佛殺レ祖、急轉ニ一機一、須彌起舞」と、遂に寂す壽缺く、(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シユーシユク　宗俶 二一四八 二二二四 〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、　宗俶字は春林、自ら咄咄齋と號す、俗姓は大江氏、丹後の人なり、幼にして州の玉龍寺に入りて剃髮し、稍長じて大德寺に掛錫し、悅溪小溪の二師に參尋す、後徹岫に參すること三十餘年、遂に了達を得、印可を付せらる、勅を奉じて大德寺に住す、後柏原天皇宮中に召して法要を問ひ、特に佛通大心禪師の號、及び錦繡を賜ふ、後、和泉陽春菴に居り請に應して攝津禪通寺、但馬圓通寺に歷住し、大に宗風を張る、晩年大德寺の傍らに黄梅院を構へて退休し、永祿七年十二月二十八日寂す、壽七十七、臘六十三、遺偈に曰く來也咄咄、去也咄咄、七十七年、咄咄咄咄、と、(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シユーシユク　宗肅 (二二四六) 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第五十四代なり、　宗肅字は西浦と云ふ、景川宗隆に參して印可を受く、美濃の檀越曹源山正宗寺を創し、師を請して開山となす、文明の末、勅命を奉じて大德寺に出世す、寂年缺く、遺偈あり、曰く熱喝嗔拳、五十五年、末後一句、鑑在ニ機前一(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シユーシユク　宗宿 (……) 〔臨濟宗〕筑前崇福寺の禪僧なり、　宗宿字は春夫、號は不昧子と云ふ、京都の人なり、幼にして出家し、南北の講席に遊び、五山の諸老に接し、後無因因和尙に妙心寺に參し、機語相合して印記を受く、出て筑前崇福寺に主となり、後京都に皈りて普門山福聚院を剏して、これに居し、某年寂す、其年時及壽缺く、(本朝高僧傳)

シユーシユン　宗俊 二一三三 二一九七 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、　宗俊字は大鷹、俗姓は平氏、宮原の族、薩摩の人なり、福昌寺の天祐宗津に參して印可を受け、數寺に歷住し、後福昌寺に遷る、天文六年八月四日寂す、壽七十五、(日本洞上聯燈錄)

シユーシユン　宗俊 (……二二一五) 〔曹洞宗〕肥前龍雲寺第二代なり、　宗俊字は大用、俗姓は岡本氏、肥前小城郡の人なり、幼にして出家し、關東に遊び、諸老に歷參す、長門大寧寺奇伯瑞龐に參し、奉侍數年其法を嗣ぎ、鄕里に歸り、木島溝に菴居す、其菴、後、今の崇福院となる、同國八戶城主宗暘新に寺を建て師を請す、乃ち龍雲寺と名く、慶誾尼、般若山慶誾寺を剏し、師を開山とす、天文十七年嫩桂院に退き、仝二十二年正月二十五日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーシユン　宗俊 (……二二二五) 〔曹洞宗〕相摸香雲寺の開山なり、　宗俊字は噩叟、春屋宗能禪師の侍者となり、朝夕親炙し落髮して、其法を嗣ぎ、後相摸田原の山村に入り、菴を構へて居ること十年、道を慕ふ者陸續到り、遂に寶坊となる、今の香雲寺是れなり、天文十二年最乘寺に遷り、周歲にして

辭して香雲寺に歸り、寛正六年十一月十九日寂す、壽缺く、武藏總泉寺も亦師を以て開山となせり、（日本洞上聯燈錄）

シユーシユン　宗俊　二〇七〇／二一五二　〔曹洞宗〕甲斐天澤寺の開山なり、　宗俊字は鷹嶽、俗姓は源氏、美濃賀茂郡の人、補陀寺にて出家し、受具の後諸老に徧參し、雲岫宗龍に參して侍司となり、六年を經て去りて金峯山下龍澤に菴居し、居ること三年、都留の郡主小山田某用津院を剏し、師を請して住持せしむ、又山梨の郡主飫富某熊澤の舊菴を與へて師を請す、菴は號して天澤寺と稱す、明應元年十一月十二日寂す、壽八十三、法嗣積桂自德、明江德舜の二人あり（日本洞上聯燈錄）

シユーシユン　宗舜　二〇二八／二一〇八　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　宗舜號は日峰と云ふ、山城の人、俗姓は藤原氏、母は源氏の出なり、師幼名を菊夜叉と云ひ、九歲にして總山本源菴に投じ、岳雲登禪師に侍し、十六歲にして落髮、十九歲受具し、辭し去りて美濃に至り、南山薰菴主に謁し、其勸めにより攝津海清寺に往き、無因因禪師に參し、晝夜研究す、無因河内觀音寺に遷るに及び、師從侍して五年を經、其命により大悟菴に住す、後、無因京都圓福寺の請に應する　師もまたこれに從ひ、遂に印記を受く、無因の寂後美濃無著菴に隱れ、又尾張鹿尼山に登り　數寺に寄寓して大藏經を閱す、山下の居民其德を慕ひ、瑞泉寺を剏して師其開山となる、應永六年冬大内義弘の亂により、妙心寺の寺產悉く沒せらる、後將軍義滿に請ひ、寺產舊の如くし、師衆請により同寺に住す、文安四年敕を受けて大德寺に主となり、翌五年正月十六日寂す、壽八十一、遺骨を養源院の塔に葬る、後土御門天皇敕して禪源大濟禪師と諡す（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーシユン　宗俊　シンカイ信海を見よ、

シユーシユン　宗峻（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　宗峻字は孤岫と云ふ、仁岫宗壽禪師に參して法を嗣ぎ、妙心寺に住す、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーシユン　宗春　二二六五／二三三四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十九代なり、　宗春字は仙溪、美濃の人、龍嶽の法を嗣く、承應三年二月五日大德寺に出世す、武藏に佛陀山天眞寺を創し、尋いで千足山讃州寺を興す、門人美濃に圓通山吉祥寺を建て、師を舉げて祖となす、寛文二年九月東海寺輪番職となる、寛文六年國主の請を受け、下野妙高山東江寺に開堂す、貞享元年十一月廿五日武藏如是菴にありて寂す、壽八十、千足山普明菴に塔す、勅諡を賜ひて靈輝慧明禪師といふ（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーシユン　宗春　ニチヂョー日淨を見よ、

シユージユン　宗純（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　宗純字は濕中、出家して春夫宿により、久しうして密旨を得、海に航して明に入り、諸名宿に謁し、皈朝して建仁寺に出家す、後勅により南禪寺に住し、大に法幢を樹て、晩年福聖寺に居し　某年寂す、壽缺く（本朝高僧傳）

シユージユン　宗純　二〇五四／二一四一　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺四十六代なり、　宗純字は一休、號は狂雲といふ、母は藤原氏後小松天皇の後宮に入りて寵せらる、後、宮を出てゝ應永元年正月朔日師を民家に生む、甫めて六歲、京師安國寺の像外鑑に投して侍童となり、初め周建といふ、鑑は鐵舟濟の法嗣

シユー（宗）シ

なり、同十二年寶幢寺に於て清叟仁の維摩經を講するにあたり、師大衆に加はりて聽受す、同十三年十三歳にして出遊の志を發し、天龍寺を出てゝ東山の慕喆攀に依りて詩を學ひ、祥球書記等に交る、一日春草を詠して榮辱悲歡目前事、君恩淺處草方深の句あり、一時傳唱せらる、十五歳にして春夜宿花の詩を賦す、曰く、吟行客袖幾時情、開落百花天地清、枕上香風寐耶寤、一場春夢不分明と、これより詩を以て聞ゆ、應永十七年清叟仁に就きて内外の書を講究す、清叟慶西宮夫人の請を受けて法を説く、一日師を携へて共に行く、途、神泉苑を過くる時、蛇あり、清叟即ち安陀衣を授け法を誦すれは蛇馴れ伏す。師之を見て一口石を袖中に隱し、蛇の出つるを待ちて撃殺す、清叟之を見て其擧を壯なりとなし、大に賞揚したりといふ、時に謙翁（無因）西金寺にありて關山派の宗風を唱導し、高風一世に秀つ、師乃ち其室に入りて侍すること五年なり、應永二十二年近江堅田に赴き、華叟に謁を求む、華叟門を閉ちて峻拒す、師露眠草宿して毫も志を飜さす、數日を經たり、華叟たまく村齋に赴かんとて門を出つ、師の門側に蒲伏せるを見て、左右を顧みて曰く、前日の僧猶ほ此にありと、水を洒きて師を追ふ、既にして歸へるに、師猶ほ門にあり、屹として去らす、遂に延きて應接す、これより親附して孳々として參請す、應永二十五年師一日瞽者の妓王瀧を失して落飾するの物語を演するを聞き、忽然として省す、華叟師に一休の二大字を書して與ふ、因て號となす、應永二十七年五月二十日夜鴉聲を聞きて省あり、正長元年六月二十七日華叟寂す、師訃を聞きて堅田に至り、喪を修すること一七日にして京に歸る、永享四年和泉に至り幽棲す、毎に市街に出つるに一木劍を手にす、人あり師に問ふ、劍は人を殺すを以て能とす、師劍を手にするは何の用そ、と、師答へて曰ふ、汝未た知らず、今諸方の贋智識此木劍に似たり、收めて室にあれは殆んと眞の劍に似たるも、拔きて室を出つれは只木片のみ、殺能くせす、況や活をや、と、同五年後小松天皇不豫の際召されて御床に侍し、心要を說く、帝大に喜ひ給ひ、賓墨、及ひ草飛白等數帖を賜ふ、同八年開山國師一百年忌に當り、師詩を賦して齋に當つ、曰く、甕覔靑銅無半文、酬恩一句豈驚群、祖師遷化己百載、空拜婆年婆子裙、兒孫多跡上頭關、一個狂雲江海間、大會齋還在何處、白雲蒸飯五臺山、と、五年師土御門殿に寓し、禪風の敗頽を憤り、一門の嗣書を火に投して燒棄す、永享十年銅駝坊の北（冷泉萬里小路）に故人の一小敗廬あり、師此に一圓蒲席を設け坐して咨詢の輩にあらすは謝絕して接せす、永享十二年六月二十日請を受けて大德寺内如意菴に住す、嘉吉二年初めて讓羽山に入り、民家を借りて住す、後戸陀寺を擬して移る、文安四年大德寺事故あり、僧數人獄に繫かる、師大に痛心し、讓羽山に入り、決するところあり、天皇即ち勅を下し强請したまふ、遂に九月末京に入る、享德元年瞎驢菴に移る、寬正三年戯に勾欄の曲を製し、童子をして舞はしめ、且つ酒闌にして自ら舞へり、八月痢を患ふ、九月十三日亂を避けて桂林尼寺に寓す、翌年七月賀茂木山に入り、大燈寺に寓し十二月瞎驢菴に歸る、應仁元年六月京師兵亂あり、八月瞎驢菴を出てゝ東麓の虎丘菴に徙る、瞎驢菴兵火にかゝる九月朔日師虎丘菴を出て酬恩菴に入

る、尋いで文明元年八月二日奈良に遁れ、和泉を歷て住吉の松栖菴に寓す、二年檀越某菴を坂井の上に結びて師を延く、師諸徒を携へて此に徙り、雲門菴と號す、六年二月二十二日攝津尼崎廣德寺柔中隆和尙勅を奉して來り、大德寺住持の請を致す、即ち辭すへからすして之に應す、師頃者瘡を病み、夏日熱に苦しむ、牀榮菴の南畔の竹林に小亭を構へ、且つ轎子に乘りて林中を逍遙して凉を納る、九月亂を避けて和泉に至る、十一年六月新に法堂を大德寺に營む、十三年十一月七日病重く、水漿口に入らす、二十一日寂す、壽八十八、偈に曰く、須彌南畔、誰會我禪、虛堂來也、不直半錢、弟子平生の詩偈を編して狂雲集といふ、世に行はる、(一休和尙行實、同年譜、紫巖譜略、本朝高僧傳)

シユージユン 宗淳 (……) 〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、宗淳字は朴堂、白菴秀闕に參究して印可を蒙り、其席を嗣ぎて下野大中寺に主となる、寂年及壽缺く、法嗣韓嶺良維あり(日本洞上聯燈錄)

シユージユン 宗淳 セーヨ勢譽を見よ、

シユージユン 宗順 二〇九三／二一四八 〔曹洞宗〕尾張乾坤院の第二代なり、宗順字は逆翁、自ら藏鷺叟と稱し、俗姓は源氏尾張の人なり、幼にして儒書を讀み、殊に易學に精し、後出家して川僧慧濟に參し、一年の後記室となり、文明七年尾張緒川城主水野貞守宇宙乾坤院を創し、師を延く、師川僧を開山とす、川僧師に法衣及自贊の頂相を送る、同十一年一雲寺に主となり、十六年大洞寺に遷り、十七年再び一雲寺の請に依り、宗田をして替り行かしむ、十八年大洞寺を辭して乾坤院に皈り長享元年の秋席を退く、時に遠江の法弟石寶寂して長松院席を空しふせり、仍て往きて之れに補す、二年八月十五日寂す、壽五十六、塔を長松院に立つ、法嗣芝岡宗田あり(日本洞上聯燈錄)

シユージユン 宗順 二一五六／二二三六 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百三代なり、宗順字は和溪、但馬の人なり、雲叔の法を嗣く、弘治元年正月廿九日大德寺に出世し、玉雲菴に居る、天正四年十月廿一日寂す、壽八十一、勅諡德光眞照禪師を賜ふ、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユージユン 宗洵 (二一六二)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗洵字は西川、京都の人なり、出家して諸山宗師の門を叩き、悟溪の輪下に於て契悟を得、文龜二年美濃瑞龍寺に住す、後詔を奉じて京都妙心寺に出世す、美濃の檀越龍德寺を創し、師請せられて開山となり、盛んに法化を布く、寂年及壽缺く著作十樣錦一卷あり、(延寶傳燈錄)

シユージヨ 宗恕 (二一五八) 〔臨濟宗〕京都大德寺の第六十一代なり、宗恕字は仁濟と云ふ、悟溪に參して遂に印可を付せらる、美濃の檀越瑞林寺を剏し、師請せられて開山となる、明應七年夏大德寺に出世し、居ること二月にして瑞林寺に皈る、尋で瑞泉寺に遷り、法化盛んなり、晚年瑞林寺に皈休し、某年寂す、其年時缺く、(延寶傳燈錄

シユージヨ 宗恕 二三九四／二三四九 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百四十代なり、宗恕字は宥峰といひ、山城の人なり、法を一溪に嗣く、貞享二年五月二日大德寺に出世開堂し、芳春院に住す、元祿二年五月十八日寂す、壽五十六、正德三年五

月十八日中御門天皇勅諡月覺圓源禪師を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユージヨ 宗助 二二九三 二三六〇 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百卅一代なり、宗助字は頓叟といふ、京都の人なり、仙溪春の法を嗣く、天和二年二月十二日勅を奉して大德寺に入り、同三年九月東海寺輪番となる、元祿九年東海寺獨住天倫和尚職を解き、師公選によりて席を繼く、九月入山開堂す山門の知事頭首及ひ耆宿疏を撰し之を請ひて官刹の洪規を行ふ、十二年六月釣聽に達して席を退き、一時軒に居る、天眞菴の二世となる、元祿十三年六月廿八日寂す、壽六十八、寶永三年四月廿五日東山天皇勅して寶覺佛印禪師と諡す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーシヨー 宗松（………）〔曹洞宗〕備中善江寺の開山なり、宗松字は竹翁、鼎庵宗梅に侍して心印を發明し、宗梅に繼て備後德雲寺に主となる、備中に瑞泉山善江院を創するに當り、師其開山となる、師は鼎庵の子覺隱の孫なりと云ふ、明應八年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーシヨー 宗松 二二三七…… 〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、宗松字は萬仞、美濃の人なり、南岑宗菊に參して法を嗣ぎ大德寺に主となる、天正五年六月二日疾に罹り、門下を召して遺訓し、偈を書して曰く、岐陽湘浦、來無二來處一、急磨二吹毛一、去無二去處一と筆を投し安然として寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーシヨー 宗松 二一〇五 二一八二 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗松字は興宗、悟溪和尚の法を承く、文龜三年十月勅を奉して大德寺の席を補すへき旨を命せられ、翌年二月入寺す、後妙心寺龍安寺を歷渉して、尾張の瑞泉寺に住すること一年、美濃の郡守齋藤利國大寶寺を剏し、師を聘して第一世となす、大永二年六月二十一日寂す、壽七十八、勅して大猷慈濟禪師と諡す、（本朝高僧傳）

シユーシヨー 宗松 二〇九八 二一八七 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗松字は柏庭、景川禪師に參して印證を蒙むり檀越の請により參河の三玄寺の開山となる、又尾張犬山に德聚寺を開く請により京都妙心寺に住し、文龜元年秋尾張の瑞泉寺に移つる一住三年、又三玄寺に歸へる、永正六年後柏原帝妙心寺を昇せて賜紫とするや、師亦請せられて再住す、印を解きて歸休し、大永七年五月五日寂す、壽九十、（本朝高僧傳）

シユーシヨー 宗性（一九二〇）〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、宗性は其俗姓生國詳かならず、出家して東大寺に居り、道隆光曉二師に華嚴を學び、聖禪良忠の兩匠に請益して益々奧旨を究め、後、良禎僧正に法を承けて大安寺に住し、盛んに五敎を唱揚し、常に尊勝院に座す、後嵯峨上皇心を佛敎に皈し、諸宿德を召し、各宗要を演ぜしむ、師華嚴の深理を談し、本宗の義に依り、鈔數卷を撰して叡覽に供す、上皇大に喜び、官府に命して玉版六十帖を賜ひ、權大僧都に任ず後祖師道雄建設の海印寺中古主に乏しく他宗の僧これに住せしを、師奏して本宗に復せんと請ひ、許されて其廢頽を興す、文應元年敕を奉して東大寺に主となり、住持三年、尊勝院に退休し、壽七十餘にて寂す、其年時缺く、著作本義鈔香薰鈔若干卷あり、（東大寺別當次第、本朝高僧傳）

シユーシヨー　宗翔　二二〇九／二二八二　〔臨濟宗〕京都大德寺の第八十一代なり、宗翔字は龍江と云ふ、陽峯宗韶禪師に參して印可を受け、和泉陽春菴に住す、後詔を奉じて大德寺に出世し、大永二年十一月二日陽春菴に寂す、壽七十四遺偈あり、曰く鷺股割肉、五逆兒孫、末後業識、星飛雷奔、喝一喝と、（延寶傳燈錄）

シユーシヨー　宗昇（……）　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗昇字は天眞と云ふ、宗松に參して法を嗣ぎ、妙心寺に住す、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーシヨー　宗韶（……）　〔濟臨宗〕京都大德寺の第六十九代なり、宗韶字は陽峯、京都の人なり、出家して春浦宗熈に依り、參究久しうして心印を付せられ、命により藏鑰を司どる、後職を解いて自適菴に居す、幾何ならずして大德寺に出世し、大に宗風を揚ぐ、寂年缺く、龍泉軒に塔す、臨終の偈に曰ふ、八十三年、掌來踢報、吞轉二一機一、須彌崩倒、（延寶傳燈錄）

シユーシヨー　宗昭　一九三〇／二〇一一　〔眞宗〕山城本願寺第三代なり、宗昭は一名覺如別號毫攝親鸞の外曾孫にして、第二代如信上人の從姪、父は本願寺留守職覺慧房宗慧、母は周防權守中原光重の女なり、師文永七年十二月二十八日を以て京都三條富小路に於て生れ、權中納言兼仲の猶子となる八歲に至りて大內記藤原業範に就きて外典を習ひ、長樂寺澄海等に倶舍天台を學び、敬日坊圓海自筆の天台の初心抄五帖を與へらる、弘安中南瀧院僧正淨珍に從ひて顯密の奥義を究め、本僧聖救を授けらる、弘安九年十月二十日師十七歲にして攝津原殿の禪房に於て得度し、奈良一乘院信昭大僧正の門侶となる、爾來法相宗西林院行寬法印に瑜伽唯識の法門を學ぶ、同十年十一月九日所學を捨てゝ大谷に入り、如信より一宗の口訣を得、正應三年關東に行化す、正安二年二代如信寂せしが偶法流蹉跌ありたるを以て、師奥州に往き、延慶元年四月京都に還る、此年後伏見上皇より大谷坊舍故の如しとの院宣を賜ふ同三年師宗務を嗣ぎて第三代となる、建武三年堂宇兵火に罹り、師亂を近江に避け、延元二年春京師に歸り久遠寺に住す、曆應元年堂宇再造落成したるを以て、同二年秋移住す、觀應二年正月二十九日寂す、壽八十二、在職四十二年一流の法義師の世に至りて益〻其精を究む著作拾遺古德傳七卷、親鸞聖人繪傳二卷、口傳鈔三卷、改邪鈔、執持鈔、本願鈔、願願鈔、最要鈔、出世元意、報恩講式、各一卷等あり師二男一女あり長を光玄次を慈俊と云ふ弟子に乘專、道源、有昭、善敎、覺淨等あり、（慕歸繪詞、最須敬重繪詞、門跡傳、大谷冡譜、本山寺誌）

シユーシヨー　宗昌　二〇六一／二一五六　〔曹洞宗〕遠江龍華院の開山なり、宗昌字は桂節、俗姓は豐島氏、駿河安部郡の人、十三歲に遠江雲林寺に投して薙髮し、雲岫宗龍の道譽を聞きて、之に參し、心印を付せらる、曾禰祥雲なる者、吉國山に龍華院を創し師其開山となる、明應五年五月二日寂す、壽九十六、遺偈に曰く、漂二泊苦界一、九十六年、脫二卻簑笠一、明月滿船、と、法嗣輝山宗珠、大虛自圓、眞翁宗見の三人あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーシヨー　宗淸　二一九四／……　〔臨濟宗〕相模早雲寺の開山なり、宗淸字は伊天、自ら機雲と稱す、京都の人なり、大

シユー（宗）シ

德寺の東海朝禪師に參して心印を稟け、永正の末詔により、大德寺に住す　後柏原天皇特に勅して正宗大隆禪師の號を賜ふ、相摸の太守北條氏綱金湯山早雲寺を創して師を開山となす、天文三年正月十九日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユーシヨー　宗清　二一九一 二二六四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百卅代なり、　宗清字は拙堂といひ、京都の人なり、無隱喜の法を嗣く、延寶八年十二月十九日大德寺に出世す、天和二年九月東海寺輪番となり、桂昌院に住して其三代となり、名を改めて宗惠院といふ、東海寺内に法雲院を、武藏大丸に普門菴を創す、寶永元年六月廿二日寂す、壽七十四、頌に曰く、七十餘年、曾不レ說レ禪、末後一句、默然默然、と、法雲院に塔す、正德四年五月十二日中御門院勅して惠日定光禪師と諡す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーシヨー　宗章　二一九九 二二七四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十四代なり、　宗章字は龍室といひ、信濃の人なり、明叟の法を嗣き、慶長十四年十二月十六日大德寺に出世す、棲德寺を攝め表德號を一禿といふ、慶長十九年十一月十四日寂す、壽七十六、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーシヨー　宗璋　二二五七 二三四五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十三代なり、　宗璋字は琢玄、自ら牧牛子と號す、相摸の人なり、法を菊徑宗存に嗣く、慶安元年三月廿九日大德寺に出世し、桂香院に住す、明曆元年九月武藏品川の東海寺の輪番となる、貞享二年四月十七日寂す、壽八十九、偈に曰く、八十九年、滅却正宗、末後枯枝、打破虛空、喝、と、貞享三年四月十七日位牌を祖堂に入る、勅諡法梁隆德禪師と賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユージヨー　宗條　二一四〇 二二二一　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第九十二代なり、　宗條字は玉堂、美濃の人、休翁の法を嗣く、天文五年十月六日大德寺に出世す、天皇勅して佛德大輝禪師の號を賜ふ、永祿四年正月十七日寂す、壽八十二、（紫巖譜略大德寺世譜

シユージヨー　宗成　二一三二 ……　〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、　宗成字は躪菴、春浦に參して法を嗣き未だ出世に及ばすして、文明三年五月六日寂す（延寶傳燈錄）

シユーズイ　宗瑞（……）　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　宗瑞字は慕南、出家して享仲崇泉禪師に妙心寺に參し、遂に其法を嗣ぐ、然れども未だ出世に及ばすして寂す、（延寶傳燈錄）

シユーズイ　宗瑞　二二七九 二三五三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百十四代なり、　宗瑞字は祥山といひ、蘿月子、似則菴等の號あり、京都の人なり、天室の法を嗣く、寬文八年四月廿七日出世す、丹州に蟠龍院を創す、曠然自適の印あり、延寶元年九月武藏品川東海寺の輪番となる、元祿六年十二月十六日蟠龍院に寂す、壽七十五、頌に曰く、東漂西泊、七十五年、欲知端的、白日靑天歷々、と、元祿十二年東山天皇勅諡を賜ひて大圓鏡智禪師といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーセキ　宗碩（……）　〔臨濟宗〕京都大德寺の第十一代なり、　宗碩字は德翁、美濃弓削の人なり、幼にして大德寺徹翁亭により剃髮して諸方に參歷す、皈りて徹翁に侍し、研究七年遂に其許可を受け、大德寺に出世し、後長勝寺に居

る、臨終の偈に曰く、鐵佛鍊祖、七十六年、一機瞥轉、虛空穿天と、寂年時缺く、（紫巖譜畧、本朝高僧傳）

シユーセキ　宗碩　（二二……―二二……）〔臨濟宗〕京都大德寺の第九十四代なり、宗碩字は大室、但馬の人なり、以天宗淸に參して記莂を付せられ、相摸本光寺を剏して開山となる、天文七年敕を奉して大德寺に主となり、盛んに法幢を樹つ、永祿三年正月二十二日將に寂せんとするや、門下を集めて遺訓し、偈を書して曰く、好個柱杖、突二葛重關一、末後一句、置二枕泰山一、と筆を投じて寂す、朝廷諡して東光智燈禪師の號を賜ふ、（紫巖譜畧、延寶傳燈錄）

シユーセツ　宗拙　（二二三九―二三〇四）〔臨濟宗〕仙臺瑞鳳寺開山なり、宗拙字は淸岳俗姓は佐藤氏、初め伊達政宗に仕へ、禁法を犯して亡命す、後悔悟して僧となり、天下の諸老に參し、終に虎哉禪師に從ふ、一日政宗覺範寺に至り、師を見て本貫を問ふ、虎哉答ふるに實を以てす、公大に感喜して曰く、これ所謂昨日の外道、今日は迦葉なりと、これより其名大に著はる、政後妙心寺に住し、己にして歸へり、保春院の開山となる、政宗薨す、瑞鳳寺を創し師を開山とす、正保元年八月十二日寂す、壽六十六、（仙臺史傳）

シユーセツ　宗拙　（二四四二―……）〔臨濟宗〕江戸善昌院の中興なり、宗拙は京師の人なり、俗姓は小篠氏、桃井播磨守直常の後胤にして父は備中亮直治と云ふ、母は藤木氏なり、師元文五年十月十七日に生る、幼にして鹿苑寺無聞和尚に給仕す、因て出家たらんとを請ふも父母許さす、十七歳の時母大病に臥す、師鹿苑寺の觀世音に精誠祈念し、靈驗を感す、後益出家の志切なり、二十五歳に及び、遂に父母の許を得て、無聞和尚に就いて度を受く、天明二年大德寺に入り、江戸に至りて善昌院に住す、根津の昌泉院大僧都實心に就いて千手觀世音の密法を受け、精修一千日に及ふ、數々靈驗を感す、後其密法を精修して盛に法化を敷けり、示寂年月日詳ならす、（北禪遺草）

シユーセツ　宗雪　（二二七二―二三三九）〔臨濟宗〕山城紫野大德寺二百十三代なり、宗雪字は雪溪、號は芦栖子、京都の人、玉翁の法を嗣く、寛文八年三月四日出世して威德院に住す、寛文九年三月廿三日寂す、壽五十八、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーセン　宗仙　（二四〇一―……）〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百八十四代なり、宗仙字は桂隱といひ、淸閑寺大納言の第二子なり、天岸の法を嗣く、正德二年二月四日大德寺に出世開堂し、肥後妙解寺に住す、享保元年東海寺輪番となる、寛保元年正月二日寂す、勅諡海慧悟明禪師といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーセン　宗仙　（……）〔曹洞宗〕伊豆昌溪院の開山なり、宗仙字は竺菴、實山永秀の法を嗣き、伊豆に昌溪院を開きて居り、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーセン　宗仙　（……）〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、宗仙字は竺芳、其俗姓生國を詳かにせず、肥後法泉寺利蒙禪師の法嗣にして法泉寺に住ず、示寂年壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーセン　宗暹　（一九一四―二〇〇八）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、宗暹は崇敬和尚に從ひて密法を傳へ、印信を受く、後攝津に

シユー（宗）セ

住き倉垣庄に菴す、貞和四年四月十四日寂す、壽九十五、(三井續燈記)

シユーセン　宗佺 二一五二／二二二二 〔臨濟宗〕京都大德寺の第九十八代なり、宗佺字は松裔、號は芥舟子と云ふ、相摸糟谷の人なり、以天宗淸に師事して印可を受け、天文十四年秋大德寺に主となる、同二十一年五月十四日寂す、壽六十一、(紫巖譜畧、延寶傳燈錄)

シユーセン　宗詮 二三九八／二四五六 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第四百一代なり、宗詮字は明道、武藏の人、貫岑の法を嗣く、天明六年八月五日新命評定あり、即日綸旨降り、同月九日佛敎に就く、武藏廣德寺に住す、天明七年武藏品川東海寺の輪番となる、寛政八年二月四日寂す、壽五十九、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーゼン　宗繕 (……) 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗繕字は松岳、景川禪師に參して法を禀け、輪請に應して尾張瑞泉寺に住し、後敕を奉して妙心寺に遷る、寂年及壽缺く、(延寶傳燈錄)

シユーソン　宗存 二二二八／二二八七 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第百六十五代なり、宗存字は菊徑といふ、駿河の人、梅隱の法を嗣き、自ら三毬と號す、元和七年十月廿四日綸旨降り、師相摸早雲寺にありて之を頂戴す、寛永四年六月廿一日寂す、壽七十、頌に曰く、七十年前、殺活自在、末後拄杖、摧碎大千、と、師嘗て相摸に正眼寺を創すといふ(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユータク　宗卓 ……／一九九四 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、宗卓字は絕崖、大應國師(紹明)に親附して法源を究む、豐前の萬壽寺に開堂し、後筑前の崇福寺、京師の萬壽寺に歷住す、後宇多天皇詔を降し、南禪寺に住せしむ、後、東下鎌倉の淨智寺に住す、尋て京師の妙勝寺、豐後の圓福寺を開き、大應國師を勸請して始祖とし、自ら二世に居る、建武元年六月二十七日寂す、壽未詳、遺偈あり、逆行順行、自在縱横、天堂地獄、禁足護生、と、大明塔を建し骨を收む勅謚廣智禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シユータン　宗單 二二七一／二三三二 〔臨濟宗〕山城大德寺第百九十八代なり、宗單字は乾英、夢幻泡影の印あり攝津富田の人淸巖の法を嗣く、萬治三年三月廿六日出世し、淸源菴に住す、寛文五年九月東海寺輪番職となる、寛文十二年十二月廿九日寂す、壽六十二、勅謚慧燈神照禪師といふ、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーチ　宗智 二二七七／二三三七 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百九代なり、宗智字は愚溪、京都の人なり、默翁の法を嗣ぎ、寛文六年十月廿八日大德寺に出世し、武藏祥雲寺內景德院に住す、寛文十年九月東海寺輪番職となる、國主の請を受けて下野東江寺に住し、兼て祥雲寺を管す、延寶五年二月二十五日江戶天桂院にありて寂す、壽六十一、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーチク　宗築 二二四四／二三三九 〔臨濟宗〕越前大安寺の開山なり、宗築號を大愚と云ひ、俗姓は武藤氏美濃武儀郡の人なり、十一歲郡の乾德寺に投じて狀元禪師によりて得度し、稍長じて雜華院一宙和尙に參侍し、智門祚に嗣で第一座となる、元

和初年武藏の諸士南泉寺を捌し、師其第一世となる、後參河[illegible]到り、草庵を結びて幽捿し、後、近江に遷る、堀田信[illegible]某開[illegible]院を捌して師を迎ふ、寛永三年敕を奉じて妙心寺に出[illegible]す、上皇屢〻宮中に召せども固く辭して應せず、阿波の大守興源寺を以て師を請すれともまた辭して往かすして、夢想國師の捌したる播磨法幢寺の廢を興し、衆に請はれて中興祖となる、後に美濃瑞龍寺に主となり、正保四年の秋江戶に往く、將軍德川家光祖心尼に命して師を延見せんとせしに、其夕師潛かに遁れ去る、明曆二年加賀の温泉に浴して路を越前に取る、大守師の道譽を崇び、大安寺を捌して始祖となす、寛文六年朝廷特に諸相非相禪師の號を賜ふ、九年法幢寺にありしが、七月大安寺に歸り、十四日偈を書して曰く、西天的子、東海崑崙　平生受用、不二法門、と、十六日寂す、壽八十六、臘七十五、(本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

シユーチン　宗珍（二二八六）〔曹洞宗〕寶珠寺の開山なり、宗珍字は中華一の字國蒐、對馬國林氏の子なり、師國分寺に於て得度す、諸國に偏參し、嶺室に見ゆるに及んで師資の禮を執る、寛永三年總持寺に出世し、次に大寧寺を領す、後水尾上皇闕に召し、禪要を問ふ、奏對旨に稱ふ、勅して紫衣幷に本照禪一禪師の號を賜ふ、晚に寶珠長福の二刹を創す、師示寂の年月日、並に壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーチン　宗珍　二〇一七〔曹洞宗〕加賀永祥寺開山なり、宗珍字は寶珍、永安寺玄路玄禪師に參して曹洞の宗旨を傳へられ、又祇陀寺大智に依り、益〻智證を益す、後洞谷寺に出世し、永安寺に移る、大守某其道風を慕ひ、永祥寺を捌し、開山となし、河北郡に寶藏寺を建て第一世となす、後大守羽州の仙北に遷るに及び、郡の南郊に寺を建て寶藏寺と名け、師を迎へて之に居らしむ、延文二年の春寂す、壽缺く、嗣法寶山宗珍あり(日本洞上聯燈錄)

シユーチン　宗陳　二一九二 二二五七〔臨濟宗〕京都大德寺の第百十七代なり、宗陳字は古溪、號は蒲菴といふ、越前朝倉氏の子なり、出家して郡の驢雪灟禪師に師事す、尋いて出遊して足利學校に學ふ、灟禪師示寂の後、紫野大德寺江隱顯禪師に謁し、門下春屋園と同寮にありて參究す、寮方六尺許、壁間に六物蒲團淨机書籍を置く、春屋机に對して書を讀めは、師坐禪す、師書を讀めは春屋坐禪す、每夜三更索を以て机を壁上に掛け、兩人少時寐ね、鷄鳴必す起きて作務諷經するを例とす、師三十歲の時笑嶺訢に謁して參究功あり、密付を受く、天正元年九月勅により大德寺に住し、笑嶺訢に嗣く、同十一年秀吉紫野に惣見院を捌立し、師を請して第一世となす、同院に織田信長の祥忌を修す、拈香偈あり曰く、三年光景夢紛紛、半熟黃粱未足云、莫問上方香積界、千花萬草木欣々、と、十三年三月秀吉根來傳法院を毀ち、其古材を以て和泉に海會寺を建立し、師を請して開堂演法せしむ、十八年十二月其參徒千利休秀吉の怒に觸れて殺され、遂に禍大德寺に及はんとす、是より先利休紫野に樓門を建立し、已の肖像を彫し、樓上に安置す、秀吉責めて曰く、我常に山門を往來す、彼何そ不敬なると、利休を殺し尋いて四使德川家康、前田利家、前田玄以、細川忠興を遣はし紫野の伽藍を破滅せんとす、こゝに於て師四使に對し委曲辯するも四使肯せす、師懷中より

劍を出し、一揮して曰く、法の衰替此の如し、吾唯死あるのみ、と四使其勇氣に感し、歸りて秀吉に說き、始めて破滅の禍を免れたり、十九年正月大納言秀長卒す、師秀吉の請により葬祭の導師となる、偈あり、榮辱昇沈入ㇾ夢頻、閻浮五十有餘春、爲君誰贈還鄕錦、正月桃江依舊新、文祿元年大光院落成し、師居住す、明年紫野に歸住す、後、市原の常盤菴に隱る、慶長元年八月二日病革り、遺偈を書す、暫時にして蘇生す、十二月勅あり、大慈廣照禪師の號を賜ふ、同二年正月十七日示寂す、壽六十六なり、著作蒲菴稿二卷あり、遺偈に曰く、六十餘年、胡喝亂喝、末後轉機、不作一喝、（續日本高僧傳、紫巖譜畧）

シユーチユー 宗冑 二二三三 …… 〔臨濟宗〕京都大德寺の第九十二代なり、宗冑字は淸菴、攝津の人なり、小溪紹怤禪師に參して法を嗣ぎ、大德寺に主となる、永祿五年七月晦日寂す、壽缺く、敕諡廣德正宗禪師と賜ふ、（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シユーチユー 宗仲 二二〇九 二二六一 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百卅八代なり、宗仲字は董甫、播磨の人、瞎禿子と號す、春屋の法を嗣く、文祿三年十月十七日出世し、近江瑞岳寺に住す、慶長六年四月廿六日寂す、壽五十三、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーチユー 宗冲 （……） 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗冲字は月湖と云ふ、柏庭に參して印可を付せられ、妙心寺に住す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユーチユー 宗忠 一九七五 二〇五〇 〔臨濟宗〕京都大德寺の第七代なり、宗忠字は言外、俗姓は越智氏、伊豫の人なり、十九歲窃に逃れて家を出て、一小院に投して落髮受具し、近江積翠寺に白翁雲禪師に參し、遂に印記を受く、永和二年勅を奉して大德寺に住す、明德元年十月九日寂す、壽七十六、臘五十八、如意菴に塔す、伊豫の雲門寺、攝津の長蘆寺廣德等は皆師行化の地なり、大永八年四月勅諡密傳正印禪師の號を賜ふ、（續群一二三八、本朝高僧傳、紫巖譜略、名僧行錄）

シユーチヨー 宗朝 二一一五 二一七八 〔臨濟宗〕京都大德寺の第七十二代なり、宗朝字は東海、淡路の人、其俗姓詳ならす、陽峯宗韶に師事して印記を受け、大德寺に主となる、永正十五年十一月二十七日遺誡を書して曰く、全用全機、不ㇾ改ㇾ辛辣、大衆近前、喝䖏空裂、と筆を投して寂す、壽六十四（紫巖譜略、延寶傳燈錄、）

シユーチヨーニ 宗澄尼 二二九九 二三三八 〔天台宗〕山城靈鑑寺の尼なり、宗澄尼は後水尾天皇の女にして、寬永十六年二月を以て生れ、谷宮と稱す、承應三年五月靈鑑寺に入りて剃髮し、延寶六年二月寂す、壽四十、廬山寺に葬り、淨法身院月江と號す、（野史）

シユーテー 宗楨 （……） 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗楨字は邦叔 久しく興宗宗松に參して印可を受け、京都妙心寺に住す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユーテー 宗程 二二〇二 二二七四 〔臨濟宗〕京都大德寺の第百三十四代なり、宗程字は萬江と云ひ、平安城の人なり、久しく春屋宗園に參して記莂を稟け、天正の末年敕を奉じて大德寺に出世し、法化盛んなり、朝廷特に德輝普燈禪師の號を賜ふ、

慶長十九年七月八日病篤く、偈を說て曰く、說二甚嗔拳一論二甚熱喝一、化緣一機、十方通達、喝一喝、と、遂に寂す、壽七十三、塔を見性と云ふ（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シユーテー 宗貞 二五三三…… 〔臨濟宗〕遠江方廣寺の禪僧なり、宗貞字は龍水、遠江長上郡の人、俗姓澤木氏、早年安樂寺齡仙に就て得度す、十六歲出遊し、豐前に至り、中津寂光寺普照に師事す、十二年の間其下に參究し、三十二歲東歸し、奥山藏龍院（方廣寺の塔頭）に住す、美濃耕隱、備後靈機二神應一に師事して參究す、天保十五年藏龍院に臨濟錄を提唱す、嘉永三年奥山に僧堂を起し、虛堂錄を提唱す、入堂偈開卷偈あり、山有枯薪溪有水、曉天一鉢入二烟霞一、毳衣卜得幽棲地、坐見暮林枝上鴉一（入堂偈）從頭欲得二息耕禪一、霑雨晞風百畝田、時至二中秋一禾已熟、家家收レ稅簇二炊烟一（開卷偈）同六年藏龍の席を東明哲に讓りて開拔し、安政四年碧巖錄を提唱す、雲衲五百餘人なり、元治元年七月孝明天皇特召して紫衣を賜ふ、明治六年八月二十一日寂す、壽歃く（近世禪林僧寶傳）

シユーテキ 宗的 二二八四/二三五七 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百十五代なり、宗的字は傳心といひ、和泉の人なり、翠巖の法を嗣く、寛文十三年正月廿四日大德寺に出世し、同二月廿二日開堂す、小松菴に住し、後、慈眼菴に居る、延寶二年九月東海寺輪番職となる、東山天皇元祿七年二月八日勅して佛智無礙禪師の號を賜ふ、元祿十年正月三日慈眼菴に寂す、壽七十四、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーテキ 宗的 二二二五…… 〔曹洞宗〕播磨興雲寺の開山なり、宗的字は大透、俗姓は安間氏、淡路の人なり、幼にして京都栂尾山に入り薙髮し、具足戒を受け、律部を習ふ、後、これを捨て、折桂全袞に依り、服勤數年其寂に及び、席を嗣き、丹波圓通寺に主となる、天文年中播磨の檀越興雲寺を剏し、師其始祖となる、永祿八年五月十八日寂す、壽缺く、法嗣閑芝清麿あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーテツ 宗徹（……）〔曹洞宗〕相摸總世寺の禪僧なり、宗徹字は智海、安叟宗楞の法を嗣き、相摸總世寺に住す、寂年缺く、法嗣一字俊岡あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーテツ 宗哲（二一〇〇）〔曹洞宗〕出羽乘慶寺の開山なり、宗哲字は明林、奥州の人、藤原氏出家して諸嶽山大初禪師に參して之に師事し、第一座となり、松隱寺の主となる、永享十二年龍澤寺に主となり、總持寺佛陀寺等に遷る、晩年に至り、出羽に乘慶寺を築いて某年寂す世壽缺く、（日本洞上聯灯錄）

シユーテツ 宗哲 二一八九/二二六五 〔臨濟宗〕山城大德寺第百二十一代なり、宗哲字は明叔、越前の人、實叔の法を嗣ぐ、天正六年二月九日大德寺に出世す、正親町天皇勅して大寶普光禪師の號を賜ふ、眞常軒に住す、法嗣俊叟宗璧首座あり、慶長十年六月六日寂す、壽七十七、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーテツ 宗鐵 二二三七/二三〇二 〔臨濟宗〕京都大德寺の第百三十一代なり、宗鐵字は錬叔、奥州の人なり、萬仞宗松に參して法を嗣ぐ、天正末年大德寺に出世し、慶長十七年二月十五日寂す、壽八十一、遺偈あり、曰く八十一年、掣風掣顛、機輪皆轉、白日青天、（紫巖譜略 延寶傳燈錄）

シユーテン 宗點 二三〇三/二三六八 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二

シユー（宗）テ

百五十代なり、宗點字は梅岑、美濃の人なり、無隱の法を嗣く、天祿五年二月廿七日出世し、看松菴に住す、寶永五年十月四日寂す、壽六十六、正德四年七月中御門天皇勅諡眞應大觀禪師を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーデン 宗傳 二二七三／二三三六 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百二代なり、宗傳字は實堂、號は如寄子、近江の人、清巖の法を嗣く、寛文二年三月十八日出世す、高桐院裡の泰勝菴に住す、寛文八年九月武藏品川東海寺輪番職となる、延寶四年九月十八日寂す、壽六十四、元祿十一年勅諡法雄眞德禪師と賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーデン 宗傳（……）〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、宗傳字は心窓、加賀の人、佛陀寺大容に投して剃髮し、海門興德に參して旨を得、佛陀寺に出世し、總持寺を主とる、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーデン 宗傳（……）〔曹洞宗〕安房龍江寺の開山なり、宗傳字は續翁、奥州の人、出家の後諸老に徧參し、懐州周潭の法を嗣き、席を補して安房の長安寺に主となる、晩年龍江及晶福の二寺を開く、寂年並に世壽缺く、法嗣亘天要播あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーデン 宗田（二一五〇）〔曹洞宗〕尾張乾坤院の禪僧なり、宗田字は芝岡、俗姓は芝田氏、美濃の人、家世々武家なり、弱冠にして某寺に入りて剃髮し、具足戒を受け、諸老に徧參し、遂に逆翁宗順に依り、服勤十餘年、典座となる、長享四年逆翁遠江長生寺に遷るに及び、寺に一函を遺し、封鑰甚だ密なり、逆翁長生寺に寂するに及び、徒衆これを開けば、師に印記を付するなり、乃ち席を繼ぎて尾張乾坤院を主とる、延德二年越の龍澤寺に遷り、辭して乾坤院に皈る、寂年壽缺く、法嗣大素省淳あり、（日本洞上聯燈錄、）

シユートー 宗統（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗統字は一溪、獨秀乾才に師事して法を嗣き、妙心寺に住す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユートー 宗棟 二三二四／二四〇一 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百八十七代なり、宗棟字は龍岩、京都の人、月溪の法を嗣く、正德四年二月廿日出世して紫野寸松菴に住す、享保三年東海寺輪番となる、寛保元年二月六日寂す、壽七十八、勅諡實隆眞空禪師といふ、（紫巖譜略 大德寺世譜）

シユートー 宗唐 二二〇七／二二七〇 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百四十四代なり、宗唐字は盛叔、明國溫州の人、自ら閑田と號す、先甫の法を嗣く、慶長八年六月十七日大德寺に出世し、慶長十五年十一月廿七日寂す、壽六十四、本山に閑田軒を創す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユートー 宗洞 二一〇五／二一五五 〔臨濟宗〕山城大德寺第百廿二代なり、宗洞字は仙岳、和泉の人、俗姓谷氏なり、笑嶺の法を嗣く、天正七年九月十七日年三十五にして大德寺に出世し、和泉海眼菴に住す、自ら無底盌と號す南宗寺を創し、文祿四年十月二日寂す壽五十一、（紫巖譜略 大德寺世譜）

シユートー 宗棟（二一七〇）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗棟字は鄧林、細川氏の子、山城の産なり、久しく特芳和尚に侍し、後出てゝ大德寺に出世し、又妙心寺を主とる、永正七年秋尾張の瑞泉寺を董す、師細川右京に依りて執

奏し、妙心寺賜紫の寵を請ひ、後柏原帝允詔して之を許し、特に紫泥の綸旨を賜ふ、後丹の山中に入りて草菴を營み、此に住して某年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

シユートー 宗套 二一四〇/二二二八 〔臨濟宗〕京都大德寺第八十九代なり、宗套字は大林、俗姓は藤原氏、京都の人なり、天龍寺の天源院に入りて肅元巖禪師を拜して薙髮し、稍長して大藏を主とる、後、大德寺東溪和尚に參し、伊勢玉英禪師に依り、古嶽和尚に就き、大林の號を付せられ、第一座となり、京都德禪寺和泉の南宗菴に居る、天文五年春詔により大德寺に主となる、同十年春和泉に歸へり、栽松軒を剏し、弘治二年南宗菴を更め、南宗寺と云ひ、自ら開山となる、後奈良天皇特に佛印圓證禪師の號を賜ふ、永祿十一年正月二十七日寂す、壽八十九、臘七十三、正親町天皇重ねて正覺普通國師の諡號を賜ふ、(本朝高僧傳、紫巖譜略)

シユートン 宗頓 二〇七六/二一六〇 〔臨濟宗〕京都大德寺の第五十一代なり、宗頓字は悟溪と云ひ、尾張丹羽郡の人、其俗姓詳かならず、年十五に及んで郡寺に入りて剃髮し、瑞泉寺日峯舜に依る、日峯の妙心寺に遷るに及び、義天詔に從ひ、妙心寺に徃き日峯に侍す、後美濃汾陽寺雲谷祥、伊勢大樹寺桃隱朔等に參し、復京都龍安寺に雪江を問ひ、參叩すること數年、一日問答の次で豁然として大悟し、偈を作りて曰く、石火電光猶鈍遲、機先一喝碎須彌、衲僧更有轉身句、展鉢開單喫飯來、と、これを雪江に呈して印可を付せらる、鄕里に皈り青龍山中に臥龍菴を構へて幽居す、美濃の檀越越前刺史齋藤利藤瑞龍寺を創建し、師請せられて開山となる、後土御門天皇其道譽を聞き、寺格を陞せて官寺となし、特に宸翰を染めて金寶山の額を賜ふ、後、勅命を奉じて大德寺に主となる、師大德妙心瑞泉の三道場に坐すること、再度晩年瑞龍寺に皈り、亦盛んに法幢を樹つ、明應六年夏朝廷特に大興心宗禪師の號を賜ふ、九年九月六日寂す、壽八十五、臘六十一、瑞龍寺及東海菴に塔し名けて、虎穴と云ふ、(延寶傳燈錄、紫巖譜略)

シユートン 宗頓 二二三五/二二八六 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十五代なり、宗頓字は南隣、相摸の人、法を盛叔に嗣く慶長十五年八月廿九日出世し、虛白子と號す、寛永三年閏四月廿三日寂す、壽五十二、頌に曰く、五十二年、東漂西泊、撥轉機輪、看々虛白、と(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユートン 宗暾 二一九五/二二五一 〔臨濟宗〕京都妙心寺の僧なり、宗暾字は東菴と云ふ、久しく大休宗休國師に參して省悟あり、遂に印可を付せらる、妙心寺に住し、靈雲寺に遷る、晩年長慶寺に退休し、天正十九年十五日寂す、壽五十七、(延寶傳燈錄)

シユードン 宗鈍 二二七四/二三四五 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第二百七代なり、宗鈍字は鈍舟、號は恰々子、相摸の人、琢玄の法を嗣く、寛文五年三月九日出世す、寛文九年九月東海寺輪番となる、貞享二年四月二十七日寂す、壽七十二、相摸德藏山東溪院に塔す、勅諡空慧淨照禪師といふ、(紫巖譜畧、大德寺世譜、)

シユードン 宗鈍 二一九二/二二七七 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗鈍字は鐵山、俗姓は窪田氏、甲斐上條の人なり、幼にして州の慧林寺に投して剃髮得度し、駿河清見寺東谷宗杲

に師事し、京都祥雲寺南化玄興、天龍寺策彥周良等の諸師に請益し、學內外に涉る、後、鄉里に皈り、深山に入りて禪座す、永祿の初め東谷妙心寺に主となり、師これに隨侍參究して悟解し、印可を付せらる、駿河臨濟寺に住し、天正三年敕命を奉して妙心寺に出世す、德川家康幼より師を知る、乃ち招きて武藏平林寺に住せしむ、幾何ならずして潛かに駿府に皈り、慶長三年秋再び妙心寺に主となる、晚年正法山の傍らに大龍院を創して退休し、元和三年十月八日寂す、壽八十六（延寶傳燈錄）

シユードン　宗曇　二〇一二　二〇八八　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第廿二代なり、宗曇號は華叟、姓は藤原氏、播磨揖保郡の人、八歲にして京に登り、徹翁亨に師事して經を讀み、十四歲剃髮して左右に侍す、十八歲去りて河內の言翁盛に依り、壯年の時大德寺に歸へる、會々祥山龍丈室にあり、師入室して請益す、其命に依り言外に就きて參究し、遂に大事に徹し、記室となる、言外寂するに及び、近江禪興菴に幽居し、戶を出でざるもの殆んと十年、養叟頤屢々來りて問答す、堅田の檀越祥瑞寺を創し、師を請して開山となす、晚年攝津の高源院に移り、養病七年、一日偈を書して曰く、滴滴水凍、七十七年、一機瞥轉、火裡酌レ泉、と、書し終りて寂す、正長元年六月二十七日なり、壽七十七、臘六十四、後花園天皇勅して大機弘宗禪師と謚す、（續群二四一一、本朝高僧傳、紫巖譜略）

シユードン　宗吞　二二九二……　〔淨土宗〕江戶無量院の開山なり、宗吞は明蓮社光譽圓阿と號す、俗姓は內藤氏、三河の人なり、[illegible]君に就て剃髮受戒し、法を門譽不殘に嗣ぐ、數寺に歷住して後江戶小石川に無量院を築きて開山となり、寬永九年七月二十九日寂す、壽缺く、法嗣文宿宗廓意覺圓長の四人あり、（淨土總系譜）

シユードン　宗吞　二三〇二　二三五三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百四十七代なり、宗吞字は月溪といふ、京都の人なり、傳心の法を嗣き元祿四年四月六日大德寺に出世す、同年六月廿三日開堂し寸松菴に住す、元祿六年七月廿六日寂す、壽五十二、勅謚佛日永明禪師といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーヂン　宗諗（……）　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗諗字は道菴と云ふ、興宗宗松禪師に參して法を嗣き、妙心寺に主となる、後、衆請に應して尾張瑞泉寺に遷る、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユー　宗諗　二一八〇……　〔臨濟宗〕京都龍泉菴の禪僧なり、宗諗字は景趙、久しく景川和尙に參して印記を付せられ、龍泉菴に住す、永正十七年七月五日寂す、（延寶傳燈錄）

シユーヂン　宗然　二〇〇五……　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、宗然字は可翁、筑前の人、早年出家して大應國師（紹明）に師事し、印可を受く、文保の初寂室光、屯翁俊と元に渡り、天目山の中峰本に謁し、次に絕學誠、元叟端、古林茂、無見覩、斷崖義等の諸尊宿に歷謁し、所得愈深し、元に留ること十年、嘉曆の初東歸し、筑前の崇福寺に住し、後ち、京師の萬壽建仁に遷つる、和泉の大守某長松山禪通寺を開きて請す、宗然同寺開山となり、幾もなく弟子大用任に讓る、尋いて詔を拜し、南禪寺に昇り、法化盛なり、晚年建仁寺中の天潤菴に退居す、貞和元年四月廿五日寂す、弟子毘盧塔を建立

して遺骨を收む、勅謚普濟大聖禪師と云ふ、宗然畫に妙なり、其幅世傳賞秘重す、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シユーノー 宗能 二〇四二 二一一六 〔曹洞宗〕相摸報恩院の開祖なり、宗能字は春屋、陸奥國の人なり、幼にして出家し、具足戒を受けて後陸奧を出て、東關を歷て最乘寺を過り、大綱和尙に參謁す、師一日農家を過ぎ、米を舂く聲を聞き、忽然として悟る、大綱仍て贈るに春屋の號を以てす、師即ち辭し去りて遊方し、路遠江を經、渴して河流を掬して飮むに、其味美なり、自ら謂らく溪上必す靈境あらん、と、乃ち流に溯りて源に至る、雙山鏡に秀て一帶の瀑布あり、恰も支那曹溪山に似たり、側らに老尼あり、茆を結びて居す、師即ち其地を求めて菴を創す、今の曹溪山法泉寺是れなり、已にして總持寺に出世し、龍泉永澤の二寺に歷遊す、後に最乘寺を主とり、住持すること年あり、道化甚た盛なり、晚年院を大雄山中に建て、名けて報恩院と云ひ、養老の所となす、康正二年丙子二月十九日寂す、壽七十五歲(日本洞上聯燈錄)

シユーバイ 宗梅 (二一三七) 〔曹洞宗〕備後德雲寺の開山なり、宗梅字は鼎菴、大隅の人、闢雲寺覺隱永本禪師に師事して印可を受け、備後奴可山中に德雲寺を創す、文明九年遷つて闢雲寺に主となり、次に永澤寺に住し、某年寂壽缺く、法嗣玉泉皎、宗康南、竹翁松、幼中秀、自船應の五人あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーバイ 宗梅 ……二一六二…… 〔曹洞宗〕駿河洞慶院の禪僧なり、宗梅字は大巖、遠江の人、大洞寺如仲天誾和尙に依り、祝髮受具し、石叟圓柱禪師に見え其法を嗣ぎ、出世して總持寺を主とる、後ち駿河石上氏の請するところなり、久住洞慶院に住し、康正元年洪鐘を鑄長祿元年石叟寂するを以て命を受けて崇信寺に主となり、文正元年越前龍澤寺に遷り、寺務三年にして山中に逸老し、文龜二年六月四日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーハク 宗珀 二二三二 二三〇一 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百四十七代なり、宗珀字は玉室、京都の人、俗姓は園部氏、自ら噇眠子と號す、春屋の俗姪たり、春屋の法を嗣ぎ、慶長十二年二月十九日紫野大德寺に出世す、後陽成天皇特に勅して直指心源禪師の號を賜ふ、師大源菴高林院を創す、加賀の國主某先妣の爲に大德寺內に芳春院を建てゝ師を請す、寬永六年七月江戶に赴き、宗法の事ありて同月廿七日奧州赤館に配流せらる、寬永九年七月十七日免され、寬永十一年八月四日將軍家光に謁す、寬永十八年五月十四日寂す、壽七十、遺偈に曰く、天關地軸、當機踏飜、喝、隨處稱尊、と、芳春院に塔す、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーハン 宗範 ……一七四四…… 〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、宗範は薩摩刺史久任の子なり、三井寺の永範に從ひて習學し、承曆三年大乘會の講師となる、四年最勝會の講導に任し、應德元年七月某日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

シユーハン 宗範 (二一〇〇) 〔曹洞宗〕普門院の開山なり、宗範字は摸庵、伊豆人、最勝寺吾寶禪師に依りて出家得度し、京都に遊ひ、紫野に於て一休和尙に侍し、後最勝寺に皈り、遂に印可を受け、諸嶽山大雄院に歷往す、晚年伊豆の檀越普門院を築き、師迎へられて開山となる、寂年缺く、法嗣習巖

修、秀峰岱の二人を出す、（日本洞上聯燈錄）

シユーハン 宗範（……）〔臨濟宗〕京都大德寺の第十七代なり、 宗範字は大模、久しく言外忠禪師の門に入りて其法を嗣き、大德寺に出世し、道譽高し、將軍足利義持使を遣はして師に法を問ひ、數旬を經て將軍自ら大岳崇、仲方伊の二禪師を率ゐて山に入り、師を問ひて昏に至りて歸へる、後辭して其終る所を知らす、嗣法三人あり、即ち大德寺の格堂越、德禪寺の春作、興海印和尚あり（本朝高僧傳、紫巖譜略）

シユーハン 宗范（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、 宗范字は春湖と云ふ、西川に參して法を嗣き、妙心寺に出世し、美濃龍德寺に住す、後輪請を受けて尾張靑龍山に主となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユーハン 宗繁（……）〔臨濟宗〕和泉小林菴の禪僧なり、 宗繁字は茂林、初め建仁寺にありて第二座に居し、去つて日菴光に大明寺に參す、後華叟に見へて契悟し、和泉堺小林菴に居し、一生默して更に禪道を說かす、寂年及世壽詳かならす、（延寶傳燈錄）

シユーハン 宗胖 二二九四／二三五七〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第二百三十二代なり、 宗胖字は碩翁、號は曲兮子、京都の人實堂の法を嗣く、天和三年正月廿一日出世し、同年二月十八日開堂す、肥州の泰雲寺に住す、靈元天皇の御宇出世の和尚年禮の次を以て龍顏を拜せしか、自今師時ならすして參內すること此に始まる、貞享二年九月武藏品川東海寺の輪番となる、元祿十年十二月廿九日寂す、壽六十四、東山天皇勅して、妙乘神悟禪師の謚號を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーバン 宗璠 二二六〇／二三二八〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十五代なり、 宗璠字は玉舟號は靑霞山人別號は優遊自在、春睡、善哉と號す、山城の人、俗姓は伊藤氏なり玉室の法を嗣き、芳春院に住す、慶安二年二月五日出世す、片桐石見守貞昌大和小泉に慈光寺を建て、師を請して第一世となす、師大德寺內に高林院を創す、寬文元年九月武藏品川東海寺の輪番となる、勅して大徹明應禪師の號を賜ふ、寬文八年十一月十八日寂す、壽六十九、高林院に塔す、後西院天皇親しく塔額玄妙（一に玄明）の二字を書して賜ふ、寬文九年十一月十八日祖堂に安牌す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーバン 宗播 二一〇一（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、 宗播字は叔英播磨の人なり、幼にして太淸渭和尚に諸刹の間に歷待し、遂に其衣法を受く、將軍足利義持召されて相國寺に開法し禮遇渥く南禪寺に登る、晩年龍山の慧雲院に退居し、嘉吉元年九月十九日寂す、壽缺く、著作五燈會元鈔二十卷、曇華集三卷等あり、（本朝高僧傳）

シユーバン 宗播（……）〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、 宗播字は玉林と云ふ興宗宗松禪師に大德寺に參し遂に其印可を受く未だ出世するに及ばすして寂す其年月日缺く（延寶傳燈錄）

シユーヒツ 宗弼 一九五六／二〇四〇〔臨濟宗〕京都妙心寺第二代なり、 宗弼字は授翁、京都の人藤原宣房の子なり、俗名は藤房、後醍醐天皇に仕へ退朝の暇、明極俊に參し、後、大燈國師に參し、粗々所省ありて衣盂法號を稟く、建武元年意を決し、竊かに逃れ城北崇倉に至り、不二を拜して冠を裂き、

紱を投じて祝髮受戒す、時に年三十八なり、帝宣房に宣して諭し還さしむ、宣房乃ち嵓倉に到りしに壁上、棄恩入無爲眞實報恩者の句、幷に古人大義渡に題するの偈を書して師已に逃かれて跡を林藪に晦ます、暦應の初め關山慧玄詔を奉じて妙心寺を開くに方り師往て掛錫し、參究すること多時、一日了然として契悟し、便ち偈を作りて曰く、此心一了不₌曾失₋利₌益人天₋盡未來、佛祖深恩難₌報謝₋何居₌馬腹與₌驢胎₋とこれを關山に呈し、遂に記莂を受く、關山寂後將に遁走せんとせしが、一山の大衆の強請により、遂に席を繼ぎて第二代となる、康暦二年三月二十八日寂す、壽八十五、臘四十三、門人塔を本山の天授院に建つ、法嗣五人妙心寺無因因、妙心寺雲山峨、拙堂朴、藝藏曇、有隣德これなり、萬治二年秋敕して神光寂照禪師の諡號を賜ひ、明治二年勅して圓鑑國師の諡號を加賜したまふ（妙心寺六祖傳、本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

〔考〕妙心寺第二代授翁宗弼を以て藤原藤房なりと云ふこと古く傳ふるところにして、禪林諸祖傳、妙心寺六祖傳、正法山誌、扶桑隱逸傳、延寶傳燈錄等皆これを記載せり然るに本朝遯史、大日本史等これを駁し、其誤謬を辨せり、今考ふるに禪林諸祖傳等に記す所、一も明據なし妙心寺文書中北朝より授翁宗弼に賜はりたる綸旨院宣令旨等あり、是等によれは、宗弼か北朝の厚遇を蒙り、數々田園等を給せられたるなり、藤房一たひ出家して北朝の勅願なる妙心寺に安住して厚遇を蒙り、北朝の冥福を祈禱するを事としたりと云ふ事、當時の事情より見るも、藤房の心事より察するも斷して事實となすべからす、宗弼に賜はりなる綸旨院宣令旨等の文意を案すれは宗弼の藤房に非らさることは自ら明白にして、一點の疑を容るへきなし、然るに古くより此誤謬を踏襲して種々の牽強附會をなせり、近江の妙感寺、伊豆の興禪寺、溫泉寺、下野の長光寺等は、皆藤房か出家後の遺跡なりと云ひて喧傳するに至る、然れとも一も確證なし、明和四年四月長光寺の境内より出てたる古鏡に、藤三位資通藤從一位宣方云々の字ありて、其末に不二行者授翁敬白とあるを以て藤房か祖父幷に父の冥福を祈禱して製したるものなりと云へり、然れども其彫刻したる文を見るに拙陋にして語をなさす、後世何者か故意に捏造したるものなると明白なり、要するに授翁宗弼は其俗姓を缺けて傳はらさるも、藤房に何等の關係あるなし、故に本傳に言ふところ此數句を削るを可とす

シユーフ　宗普　二一七六／二二五〇　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百十二代なり、宗普字は明叟、俗姓は福富氏、但馬の人なり、出家して大室宗碩に參究し、遂に印記を受く、相摸早雲寺第五世となり、武州に廣德寺を開きて之れに住す、文龜二年大德寺に出世し、朝廷より眞如廣照禪師の號を拜す、天正十八年四月十五日寂す、壽七十五、遺偈あり、曰く、蹈₌殺佛祖₋一生風顚　末後把₋杖　跳₌出梵天₋（延寶傳燈錄、正燈世譜）

シユーフ　宗孚（……）〔曹洞宗〕下總乘國寺の禪僧なり、宗孚字は中雄、下總乘國寺中明棠主の法を嗣ぎ、同寺の主となる、寂年、及世壽缺く、法嗣信及前豚あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーフ　宗孚　ショーシユー性宗を見よ、

シユーフン　宗棼（……）〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧

なり、宗夢字は無學と云ひ、海巷光智に參して心要を發明し、敕請によりて永平寺に出世す、下野水代の檀越大中寺を剏して師を開山に延く、寂年及ひ壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーフン 宗賁 ……二五三三 〔臨濟宗〕遠江藏𧇊院の禪僧なり、宗賁字は龍水、俗姓は澤木氏、遠江國長上郡の人なり、幼にして鄉の安樂寺鈴仙に依りて出家し、遊方して中津寂光普照禪師に侍し、後金剛正眼禪師に美濃に、靈機神應禪師に備後に參し、悉く宗門の蘊奥を極む、奥山の藏𧇊院に住して衆に接し、明治六年八月二十一日寂す、壽六十餘、

シユーブン 宗分 二二五八 二三二八 〔臨濟宗〕武藏慧然寺第一代なり、宗分字は別傳、俗姓は黑川氏、安房の人、幼にして武藏大松寺舜鏡に投じて剃髮受業し、十六歲遊方して龍谷寺賢壽和尚に謁し、愚堂禪師に參し、再び大松寺に寓し、台巖の法を嗣ぎ、寬永七年法隆寺賢俊に謁し、菩薩戒を受け、高野新別所京都牧尾山に來り、多年毘尼を究む、後江戶淺草解脫寺に寓し、禪戒を四部に授く、尋で總州葛西に到り、雨を祈る、正保年中武藏雲巖寺に居り、寺を江戶深川に遷し、慧然寺と號す、正保四年故ありて派を改め、法を月桂雪山に繼ぐ、晚年寒江菴に退居し、寬文八年七月二十四日寂す、壽七十一、臘六十一、著作語錄あり、(本朝高僧傳)

シユーヘー 宗頸 二三八八 二三六九 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百二十四代なり、宗頸字は別源、號は養拙、京都の人、說叟の法を嗣く、延寶七年三月十八日出世す、元祿二年二月十日開堂し、清心菴に住す、後武藏廣德寺に住す、元祿十三年十月再ひ本山の清心菴に住す、寶永六年九月十七日武藏赤坂種德寺に寂す、壽八十二、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーヘン 宗遍 (……) 〔眞言宗〕山城尊壽院第三代なり、宗遍字は大夫法眼といひ、定遍の弟なり、其法を嗣きて尊壽院の三代となり、付法の弟子圓通、實遍、顯遍の三人を出だす、(傳燈廣錄)

シユーホ 宗甫 ……二二五八 〔淨土宗〕京都知恩院第二十八代なり、宗甫は九蓮社浩譽と號し、菊亭殿の息なり、祖洞に師事して法を嗣ぎ、知恩院に主となる、慶長三年十一月十七日寂す、壽缺く、門下の高弟に滿譽尊照、泉譽存徹の二人あり、(淨土總系譜)

シユーホ 宗甫 (二一七八) 〔曹洞宗〕遠江可睡寺の禪僧なり、宗甫字は林英、尾張の人、稍長じて乾坤寺逆翁順を禮して得度し、可睡寺大路一遵に參して其法を嗣ぎ、永正十五年大路寂するに及び、其席を繼ぎて可睡寺に住す、寂年並に壽缺く、法嗣大陽一鶴あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーホー 宗彭 (……) 〔曹洞宗〕遠江大輿寺の開山なり、宗彭字は大壽、大隅の人なり、出家して諸宗老に歷參せしが、後ち天巖禪師に師事し、研究多年にして印可を蒙り、總持寺に出世し、祇樹、妙川、大廣、諸寺に歷住し、晚年に至り、遠江相良の莊に往て大輿寺を建立し、某年寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーホー 宗彭 (二二〇三) 〔曹洞宗〕奥州峰全院の開山なり、宗彭字は州菴、出家して諸老宿に歷參し、遂に吾寶宗璨禪師に師事すること十二年にして印可を受け、後奥州に遊化し、白河郡將の請に依り、峰全院を開く天文十一年相摸

最乗寺に主となり、二年にして峰全院に歸り、某年寂す、壽缺く、付法弟子に賢宗遊、天室洞光、明巖以哲、俊天永球、宗正藏下の五人あり（日本洞上聯燈錄）

シユーホー　宗彭　二二二五〔臨濟宗〕武藏品川東海寺の開山なり、宗彭字は澤菴といひ、法を龍皐寺の明堂古鏡禪師一凍滴に嗣く、俗姓は平氏、但馬の人、正親町天皇天正元年十二月朔日出石村に生る、十歳邑の唱念寺に入りて衆譽上人の侍童となる、十四歳宗鏡寺内の勝福寺に入りて業を希先西堂に受け、戒法を授かり、名を秀喜と呼ぶ、更に佛經を讀み、世典を學ぶ、後陽成天皇文祿元年、師二十歳にして宗鏡寺に寓せる董甫仲の室に參す、同三年董甫仲歸京するに從ひて大德寺に至り三玄院に掛錫す、此にて圓鑑國師に見え、諱を改めて宗彭といふ、師貧にして朝夕の資なし、因て筆耕して口を糊す、大德寺内の諸老宿の門を歷訪して、多く得るところあり、慶長四年（二十七歳）近江瑞巖寺成り、圓鑑之を開堂す、師從ひて往く、尋いで董甫同寺に住するや、師も亦侍す、翌年京に歸りて三玄院に居る、藏する書を賣りて衣鉢の資に供す、六年四月廿六日董甫寂す、和泉に往き大安寺に寄寓せる文西洞仁に就きて文學を習ふ、七年和歌一百首を詠す、細川幽齋玄旨これを批評して稱讚す、六月海會寺の齋に與る、琛玉甫、偉雲英師の法器なるを知り、數々聘すれとも終に應せず、八年八月二十五日文西入寂す、臨終に師資の禮を請し、借其書籍を付せらる、此時古鏡禪師陽春寺に住す、師屢々其室を叩きて相見え、機辯相契す、因て桂塔を許さる、九年八月四日古鏡師に印證の語、及び澤菴の號を授け、偈を以て證す、十一年四月二十三日古鏡示寂し、師祖塔を守る、十一月十五日老父雲峯以閑居士物故す、十二年三十五歳にして大德寺の第一座となり、德禪寺の席を董す、四月十三日母枚田（ヒラ）氏歿す、十故鄕に歸りて佛事を修す、八月一日和泉の南宗寺に住す、十四年三月八日玉甫琛の執奏により詔を受けて大德寺を視篆す、幾もなく和泉に歸る、十六年二月九日圓鑑寂す、師三玄院の塔を拜す、豐臣秀頼使を以て大坂に召せとも、師固辭して赴かす、八月一日京都大僊院に寓す、豐後守細川忠興亡父の爲に一寺を創し、師を請すれとも往かす、十七年秋大僊院にありて詠歌大概否義一卷を著して信尹公に贈る、十八年二月二十九日南宗寺の鐘樓を建つ、七月に至りて功を畢ふ、此年大燈國師の年譜一卷を編す、十九年五月朔日養德院に遷る、夏八瀬村に橋を架して村人に便を與ふ、八月大仙院の書院を建つ、元和元年朝鮮人李文長和泉に來る、師書を往復す、夏四月大坂の亂興る、師南宗寺に往きて開山國師の伽梨、及び先師の證書を出して大德寺に歸る、幾もなくして南宗寺兵燹に罹る、七月德川家康法制數條を大德妙心二寺に下す、九月京を出てゝ和泉に往き、南宗寺の燒趾を見直に岸和田に到りて日光寺に寓す、十一月二十九日本光祖の二十三年忌に聚光院を領し、歸りて法事を修し、岸和田に赴き、日光寺に居る、其喧騷なるを厭ひて天下村極樂寺に移り寓す、二年二月岸和田の城主小出吉英に乞うて松三百餘株を南宗寺の趾に植ゆ、三月朝鮮人李文長、愼昌仙、裴元臣、李碩之と共に和泉水間及び牛瀧の二招提寺、及び攝津住吉に遊ひ、詩數十篇を唱和す、六月南宗寺に歸り、八月京都の大用菴甲乙住持の任に輔

シユー（宗）ホ

す、但馬の宗鏡寺廢壞久し、師出石郡主小出吉英、泉州より但州に轉任せり）に勸めて再興し、八月二十九日師但馬に徃きて落慶す、三年南宗寺を村の南に移し、開山塔及ひ鐘樓外門を建つ、筑前守黑田長政、大宰府の崇福寺の席を師に付するも、師辭して赴かす、八月京の玉井菴に寓す、九月十三日幕命を受けて大德寺前住長松岳、及ひ門徒の僧數人を擯出し、長く濫行の者を絕つ、四年二月大和奈良に遊ひて芳林菴に寓止す、八月歸京し、九月泊瀨寺に到りて閑居し、十二月山城の妙勝寺に移り寓す、五年夏南宗寺の方丈庫院を建つ、六年但馬に往き宗鏡寺の後山に菴居す、扁して投淵軒といふ、七年左右侍者のために理氣差別論一卷を作る、寛永元年（五十二歲）高松好仁親王但馬に來りて師の禪房を叩く、師堅く閉ちて謁せす、四年京都に歸り、玉室翁の法嗣正隱知を擧けて大德寺に出世せしめ、和泉に往く、天皇師を召す、師應せすして但馬に隱る、五年和泉に往く、將軍秀忠京都所司代に命して正隱の大德寺視篆の東照公制法に反するを責めしむ、山中愕然として陳謝するところなし、師之を聞きて京に赴く、然れとも衆議決せさるを以て和泉の大佛供に到りて一小菴に居る、某上座追ひ來り、強ゐて起たしむ、師已を得すして再ひ大德寺に歸り、諸老に代りて古法先規を錄して幕府に呈す、然れとも公義未た決せす、大和の大佛供に入る、六年二月京都に出つ、命により玉室月江の二人と共に江戸に出て、訊問を受く、師玉室と寺法を執て動かす、將軍有司に命して玉室を奧州棚倉に謫し、師を羽州の上山に貶けしむ、七月二十七日玉室と共に江戸を發し、下野太田原より分れて奧羽兩地に赴く、將軍大德妙心二寺の古老に命して紫衣を脫し、黑衣を着せしむ、師居る所の地に扁して春雨といふ、參徒輻輳す、和歌一千首を詠して謫處の幽閑を樂む、九年六十歲にして赦を蒙り、玉室と共に歸り、七月二十七日江戸に着し、神田廣德寺に寓す、冬駒込に幽居す、丹後守堀直寄別業に師を招き大に優遇す、十一年武野氏宗朝なるもの師の頂相を寫し、師に贊を請ふ、即ち書し與ふ　夏六月命により玉室と共に大德寺に歸り、七月將軍に二條城に謁す、八月宮中に入りて上皇に法を說く、九月和泉に到り、請を受けて祥雲寺を落慶す、同年但馬の故居に歸る、十二年幕府の命を受けて江戸に赴き、但馬守柳生宗矩か麻布の別邸に居る、十三年十月京に歸り、再ひ但馬に歸る、十四年三月二十四日大聖國師一百年忌を修し、京に入りて大仙寺の塔を拜す、四月命により江戸に赴き、麻布檢束菴に寓す、一位禪尼淸春鎌倉翁谷に英勝尼寺を建て其子水戸中納言賴房師に就きて山號を求む、師之を名けて東光山といひ、偈を作りて之を賀す、將軍師をして地を品川に相せしめ、十五年東海寺を創す、師此年但馬の溫泉に浴せんとて江戸を去り、和泉に往き、四月二十三日南宗寺に古鏡の三十三年忌を修す、但馬守柳生宗矩、神護山芳德寺を大和に建て、師を請して開山となす、七月京に入り、先師の塔を巡禮し、和泉を過きて但馬に徃かんとす、上皇の詔を受けて歸り、宮中に參し、原人論を講し、皇朝類苑一部、磁香爐、紫石硯を賜ふ、十月國師號を賜はんとす、辭して曰く、願くは之を故徹翁和尚に賜へと、因て十一月十五日徹翁に諡して天應大現國師と賜ふ、十六年三月廿八日江戸に赴く、命を受け

シユー（宗）ホ

て萬松山東海寺に住す、十七年堀田正盛東海寺内に臨川院を創す、將軍邸宅を師に賜ふ、十八年酒井忠勝長松院を東海寺内に剏す、十九年小出吉英の爲に上中下三字の解を作り、併に圖を繪きて座右の銘となす、二十年細川光尙妙解院を東海寺に建つ、寺後の山中より淸泉流出す、師之を引きて一池を室の北面に開く、幕府の命を受けて萬年石記を作る、祠堂の記を作りて東海寺の祠堂に掲く、正保元年伊勢守小出吉親東海寺に雲龍院を建つ、三月京に赴きて上皇に謁す、但馬に往き、十二月江戶に歸る、翌年畫工に命して自像を畫かしめ、親ら其中に一點を加へ、讃を其上に書す、斯の如きもの二軸、一は東海寺に置き、一は南宗寺に藏す、十一月二十九日病に罹る、十二月十日將軍松平信綱をして病を訪はしむ、十一日衆の强請により遺偈として夢の字一字を書し、筆を投して寂す、壽七十三、臘五十七、東海寺の後に葬る、實に正保二年十二月十一日なり、(東海和尙紀年錄　澤菴大和尙行狀、泉南祥雲禪寺開山澤菴禪師寂然塔銘、本朝高僧傳)

シユーホー　宗峰　ミヨーチヨー妙超を見よ、

シユーホー　宗鳳　二二五〇 二二三二　〔曹洞宗〕武藏大善寺の開山なり、宗鳳字は在天、尾張の人、十四歲にして白坂の雲岡寺に出家し、其足戒の後、三河の全久寺に光國禪師に參すれとも未た悟ること能はす、青松寺泰翁德陽に謁して印可を受け、辭して醫王山に大善寺を剏して鼻祖となる、弘治元年泰翁遷化し師遺命によりて青松寺に主となる、元龜三年正月二十三日寂す、壽八十三、臘六十八、法嗣久室玄長の一人あり、臨終の偈あり、曰く、世尊七十九、宗鳳八十三、撥ニ倒無影樹一、依レ舊緣鬣鬖、と、日本洞上聯燈錄)

シユーボン　宗梵　(……)　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第十九代なり、宗梵字は乾用といひ、法を德翁宗碩に嗣居を長松軒といふ、今紫野龍源院にあり、寂年及ひ壽傳はらす、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーマン　宗萬　二一二三 二一八六　〔臨濟宗〕京都大德寺の僧なり、宗萬字は休翁豐後の人なり出家して悅溪宗忢に參して法を嗣ぎ、筑紫崇福寺に住し後大德寺に遷る法幢最も熾んに其名朝廷に聞へ特に大傳佛燈禪師の號を賜ふ大永六年二月寂す壽六十四(延寳傳燈錄)

シユーミン　宗珉　二一七九 ……　〔臨濟宗〕京都大德寺の第六十四代なり、宗珉字は玉浦、俗姓は鹽三氏、丹州紅里の人なり、幼にして出家し、悟溪に參して遂に其法を嗣ぐ　瑞泉妙心大德の諸寺を歷て道譽禪林に重し、美作太守鷲見氏美濃の山縣に大智寺を剏し師を請し開山となす、永正十六年十一月三十日寂す、壽缺く、法嗣六人を出す(紫巖譜略、延寳傳燈錄)

シユーミン　宗珉　二二六八 二三二四　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百九十五代なり、宗珉字は翠巖といひ　別玉又は栖蘆子と號す、和泉の人、俗姓は半井氏、江月の俗甥なり、江月の法を嗣き、明曆三年三月十八日出世し、紫野寸松菴に住す、大德寺内に引淸軒、京都に山陰軒　肥前平戶に春江菴を創し、宇治藏勝菴を中興す　後肥前田平の是興寺、同州平戶の淸淨菴、凉月菴等の延請を受けて皆開山となる、寛文四年七月廿三日頌を書して曰く、來來去去、杵枝雖レ痩、附ニ朶梅一、驢年猫日、大衆珍重、

と筆を擲ち、茶二碗を喫して寂す、壽五十七、寸松菴に塔す、寛文十二年勅諡法雲大仰禪師を賜ふ、延寶八年三月廿三日祖堂歷住に入牌す、（紫巖譜略　大德寺世譜、）

シユーミヨー　宗命　一七七九／一八三一　〔眞言宗〕山城醍醐山理性院の第三代なり、宗命は鳥羽僧都といふ、內大臣宗能の子なり、賢覺の法を得、理性院の三代となる、眞言肝心抄一卷を著して後學に遺し、承安元年七月十日寂す、壽五十三、（續傳燈廣錄）

シユーミヨーイン　宗明院　ニチシユー日宗を見よ、

シユーム　宗無　二二七七……　〔淨土宗〕筑後善導寺第三代なり、宗無は淨蓮社淸譽と號す、明譽上人に師事して淨土宗を學び、慶長十九年十一月十八日上人より璽書を授けられ、善導寺第三代となる、元和三年二月三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユーメー　宗溟（……）　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第三十二代なり、宗溟字は季東と云ふ、養叟に參侍すること多年遂に印可を付せられ大德寺に出世す、寂年及壽缺く（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シユーモク　宗牧　二一七七……　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、宗牧字は東溪、俗姓は藤原氏、筑紫太宰府の人なり、七歲にして州の妙樂寺に投し、明照和尙を禮して出家し、十八歲西關文に參すること一年、寶山寺の春浦和尙に就き、十年を經たり、春浦寂するや、其遺命により實傳眞に依る、永正二年春詔を奉して京都大德寺に出世す、後柏原天皇特に佛慧大圓禪師の號を賜ふ、永正十四年四月十九日寂す、壽缺く、龍源院に塔す、（本朝高僧傳）

シユーモク　宗牧　二一六二……　〔曹洞宗〕武藏香雲寺の禪僧なり、宗牧字は養拙、出家して久しく靈叟宗俊に師事して、法衣拂子を付せらる、靈叟の寂後武藏金澤に菴居し、出て丶香雲寺に住す、文龜二年最乘寺に遷り、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーモク　宗穆　二三〇六／二三七六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百五十六代なり、宗穆字は穆岩、京都の人、春外の法を嗣く、元祿九年三月十七日大德寺に出世し、十一年九月廿八日開堂して黃梅院に住す、正德四年九月廿七日中御門天皇勅して佛統大明禪師の號を賜ふ、享保元年二月十六日寂す、壽七十一、（紫巖譜略、大德寺世譜、）

シユーモク　宗睦　二〇五七／二一三九　〔曹洞宗〕對馬田口菴の禪僧なり、宗睦字は蒲菴、對馬國の人、父は宗氏世々國の太守たり、師康應元年を以て生れ、幼より世相を厭ひ十歲にして出家し天台の敎義を學ぶ、後捨て去て瑞雲寺竹居禪師に謁す、後諸方に歷遊する數年、再び瑞雲寺に上て參究し、終に印可を蒙る、本國に歸りて田口菴を創し、尋で國分寺を改めて禪林となし、大に大寧寺の門風を弘む、師住山すると三十餘年、文明十一年九月廿一日寂す、壽八十三歲、臘七十、（日本洞上聯燈錄）

シユーモン　宗文　二二九三／二三四六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺二百卅九代なり、宗文字は質休、號は無住軒、近江の人なり、江雲龍の法を嗣く、貞享二年二月廿日勅を奉して寺に入りて開堂す、尋さて崇福寺八十二代孤蓬菴二代に歷遷す、同二年七月東海寺輪番となりしが、幕命によりて停止せられ、天倫和尙獨住となる、同三年十一月廿八日寂す、壽五十四、享保六年十月三日中御門院勅して圓機眞悟禪師と諡す、（紫巖譜

略、大德寺世譜）

シユーヤク 宗益 二三〇九／二三六五 〔曹洞宗〕奧州泰心院の禪僧なり、宗益字は損翁、俗姓は青木氏、出羽米澤の人なり、十二歲得度し、禪林寺蘭洲、館山寺要山に隨ふ、後江戶に遊び、楞嚴院の講席に列し、感發するところあり、一旦國に歸り、延寶中加賀の大乘寺に到り、月舟胡に見ゆ、貞享三年出羽東源寺に首座たり、翌年再び大乘寺に到り、卍山白に隨ひ、五位訣を聽く、白禪師偈を示す、曰く損中有レ益益中損、損益兼修道學全、爲レ示二正偏回互要一、三疊五疊俱幽玄、と、後、仙臺泰心院の可山悅に見ゆ、悅禪師喜びて衣法を附す、因て等澤に菴居す、元祿十年悅の讓を受け、同院の席を補す、乃ち老母、並に姉の二尼を迎へ、寺側に一室を營み、日々講事怠らず、元祿十四年老母壽九十一にて寂す、師姉尼と共に棺を舁き葬むる、寶永二年微恙あり、五月廿四日寂す、壽五十七、臘三十五、等澤普門菴に大容塔を建つ、遺偈に曰く、生也無二所從來一、死也無二所去處一、咄都來錯、と、（續日本高僧傳）

シユーヤク 宗益 二二一七／二二八〇 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百六十二代なり、宗益字は日新、號は哦松相模の人、田村氏なり、龍室の法を嗣く、元和五年二月十八日大德寺に出世し、相模早雲寺内の天用菴に住す、後、龍泉菴を再興す、同六年正月十六日寂す、壽六十四、偈に曰く、這赤酒壺、牧拾修補、一棒打破、滴水凍喝、と、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーユ 宗愈 二一三九…… 〔臨濟宗〕京都大德寺の第四十九代なり、宗愈字泰叟、其俗姓生國詳かならず、春浦禪師の法嗣にして、文明の初年、大德寺に出世し、文明十一年閏九月十日寂す、壽缺く、遺偈に曰く、佛界魔界、一蹋蹋飜、末來句彈、と、（紫巖譜略、本朝高僧傳）

シユーユー 宗友 ……二二一七 〔曹洞宗〕下野洞雲寺の開山なり、宗友字は只山、下總結城の人、十五歲にして出家し、山水を好みて菴を結び、獨學を事とす、後、雪光良訓に見えて其法を繼く、諸山に招かれて首座となること凡そ九度、遂に下野眞名子の梅樹谷に隱る、後其地に洞雲寺を建て、弘治三年五月九日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーユー 宗宥 ……… 〔曹洞宗〕美濃天德寺の開山なり、宗宥字は在中、春屋宗能禪師の法嗣にして、其室中の上首たり、總持寺に出世し、永澤最乘諸寺に歷住す、近江大守六角氏賴美濃關縣に天德寺を築き、師迎へられて始祖となる、寂年缺く、法嗣桂堂佐、松庵瑩、南溟穆の三人を出す、（日本洞上聯燈錄）

シユーユー 宗遊 （二二六一） 〔曹洞宗〕相模最乘寺の禪僧なり、宗遊字は子賢、峯全寺州庵宗彭の室に參し、其法を嗣き、總持寺に出世し、峯全寺に遷る、文龜元年最寺乘に主となり、晚年石雲寺を開き、某年寂す、世缺壽く、（日本洞上聯燈錄）

シユーユー 宗融 二二六九／二三三四 〔曹洞宗〕肥前圓應寺の禪僧なり、宗融字は松雲、俗姓は田氏、肥前の人なり、十歲にして圓應寺華嶽禪師を禮して得度し、二十一歲京都に上り、尋いて江戶に下り、洞濟の諸高德を歷訊し、後、國に歸り、老母を省す、長崎皓臺寺一禎禪師の下に往きて留り、寺側に一室を構へて老母を養ふ、一日市に出て魚を買ひ、草繩に貫き、

杖を以て荷ひ歸る、老母誡めて曰ふ、吁是れ釋氏の爲すへきことか他日また老母に饋らんとて魚を携へ歸ること前の如し、老母怒り、窃かに婢をして魚を捨てしむ、然れとも猶かくの如くするもの再三なり、老母益怒り、遂に自ら刀を握り髮を斷ち、師に告けて曰く、今より吾を妙喜と稱せよ、と、師大に賀し、緇衣を懷中に探り出し、授けて曰く、我願始めて滿つと、爾來老母と共に三寶に事ふ、承應三年隱元禪師東來す、師謁見して偈を呈す、明曆三年圓應寺に住す、寛文二年諫早天祐寺に到りて大藏經を閲す、五月老母鄕里に死す、師圓應寺に歸へり、喪事を治む、明年結制大衆雲集す、寛文四年正月朔日病あり、四日朝門人に遺誡を示し、父母の位牌を陳し、其前に禮して後晏然寂す、壽五十六、著作語錄二卷、詩集一卷、從容事畧十五卷、天龍直說、禪宗五派圖あり、遺偈に曰く、五十六年、隨ニ順世緣一、雨散雲斂、碧落月圓、と、師よく筝を鼓し、老母常に聽くを喜ぶ、師も亦常に廢せす、門弟月舟胡偈を作りて諷す、師笑ひて曰く、爾の知るところにあらず、亦偈を以て答ふ、唱和の偈左の如し、寄言借問誰家曲、只恐人呼ニ師曠孫一、止止莫レ彈ニ鳴鶴怨一、松風日夜普聞レ門、(月舟)老撫ニ秦筝一慰ニ困勞一、豈同ニ俗客事ニ風騷一、絲中佳趣無ニ人會一、門外松風入レ手高(松雲)(續日本高僧傳、日本洞上聯燈錄、名家略傳)

シユーヨ　宗璵(……)〔曹洞宗〕丹波德雲寺の開山なり、　宗璵字は希雲、薩摩島津氏の子なり、幼にして荊翁和尚に依り、出家して弟子となり、進戒の後偏く諸老に參し、太容梵清禪師に見えて敎を受く、太容玉雲寺を退くに及んで、師をして主たらしむ、未だ幾何ならずして總持寺を主どる、後ち丹波に德雲寺を築き、開山となり、某年六月一日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーヨ　宗礜　ゲンテツ源哲ヲ見よ、

シユーヨ　宗礜　リヨーユ了故を見よ、

シユーヨー　宗楊(……)〔臨濟宗〕京都大德寺の第四十四代なり、　宗楊字は岐菴と云ふ、養叟宗頤禪師に參して法を嗣ぎ、大德寺に主となる、寂年、及壽缺く(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シユーヨー　宗用　二一五八/二二二九　〔臨濟宗〕京都大德寺の第百九代なり、　宗用字は大欽、美濃の人なり、淸菴宗胄の室に參して法を嗣ぎ、弘治三年冬大德寺に主となる、永祿十二年四月二十一日疾に罹り、遺偈を書して曰く、末後一句、假吐ニ金亡、輝レ天輝レ地、只死譫語、と、筆を投じて寂す、壽七十二、(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シユーヨー　宗曄　二四一〇/二四七六　〔臨濟宗〕豐前崇福寺の八十七代なり、　宗曄字は曇榮、號は禪月、別に幻身と云ふ、俗姓龜井氏、龜井南溟の弟なり、七歲にして橫岳山崇福寺に投して度を受け、十二歲京都に上り、東福寺に投し、諸禪師に遍參す、後德禪寺德隱宗薩の法を嗣く、師道暇詩書畫を善くし、殊に詩名高し、晚年博多の妙樂寺永住院に居る、文化十三年寂す、壽六十七、著作禪月集一卷あり、(正燈世譜、禪宗史料)

シユーヨー　宗洋　二一七五(……)〔曹洞宗〕越中光嚴寺の禪僧なり、　宗洋字は東海、俗姓は神保氏、越中の人なり、幼にして出家し、龍淵寺旗雲祖旭を禮して祝髮得度し、偏く禪門を叩くこと凡そ五年、皈りて旗雲を省し、其印可を受け、光嚴寺に

住し、總持寺に遷る、住持二年、辭して光嚴寺に退休し、永正十二年四月二十四日寂す、世壽缺く、遺偈に曰く、夢幻空華、五十八年、末後一句、間不容髮、と、著作語錄あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーヨー 宗陽 二二九二／二二八五 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十一代なり、宗陽字は東嶺 近江の人、天叔の法を嗣く、慶長十二年九月十三日に出世す、後陽成天皇特に龍巖大雲禪師の號を賜ふ 正受院に住し、自ら點々子と號す、寛永二年八月二日寂す、壽五十七、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーラク 宗恪 二四二九／二五〇六 〔臨濟宗〕山城圓福寺の禪僧なり、宗恪字は海山、俗姓は藤原氏、三河國渥美郡牟呂莊の人なり、幼にして鄕の眞福寺に投して出家し、初は隱山に參し、芳仙の印記を受け、後卓洲に侍して宗奧を究む、駿河の臨濟寺山城八幡の圓福寺を董す、弘化三年夏月寂す、壽七十八、嘉永元年三月朝廷特に佛國妙嚴禪師の謚號を賜ふ、

シユーラン 宗嬾 二三九二…… 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第三百五代なり、宗嬾字は桂州、號は金粟室、京都の人、功海の法を嗣く、享保七年正月廿六日出世し、武藏祥雲寺內靈泉院に住す、享保十一年武藏品川東海寺輪番となる、享保十七年十二月十九日寂す、壽缺く、(紫巖譜略、大德寺世譜、)

シユーリン 宗林 三三四七…… 〔曹洞宗〕安藝洞雲寺の禪僧なり、宗林字は月舟、生國俗姓缺く、雪山の法を得て總持寺に出世し、藝州の洞雲寺に遷る、明曆二年幕命を受けて皓臺寺に住す、貞享四年六月三日偈を說て寂す、朝廷謚號を賜ひ、大德盤峯禪師と云ふ、(日本洞上聯燈錄)

シユーリン 宗林 (……) 〔曹洞宗〕越中正脈寺の開山なり、宗林字は大成、豐後の人、大徹宗令の法を嗣き、越中の村椿に到り、正脈寺を創して住し、諸嶽山に移る、辭して學皇院に退去し、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーリン 宗璘 二二二五／二二八四 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百四十九代なり、宗璘字は琢甫、越前の人、明叔の法を嗣く、慶長十二年四月廿二日大德寺に出世す、瑞光院を創す、寛永元年正月十六日寂す、壽六十一、瑞光院に塔す(紫巖譜略、大德寺世譜)

シユーリユー 宗立 二二五五／二三三六 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百八十一代なり、宗立字は江雪、和泉の人、自ら不如子、又は枯髏子、破鞋子と號す、江月の法を嗣く、初め和泉旭蓮社に入りて剃髮し、尋いて澤菴宗彭に隨ひ、遂に法を江月に嗣ぎて龍光院の第一頭となる、正保元年十二月十五日出世し、正保三年九月廿日開堂し、勅使門に入る、同卅日退院の儀式あり、黑田氏筑前に古心寺を創し、師を請して開山始祖となす、慶安四年九月江戶品川東海寺の輪番となる、京都大原村に即心東向の二菴を建て、東海寺內に松泉菴を創す、寛文六年六月十九日寂す、壽七十二、看松菴に塔す、勅謚大綱智海禪師といふ、天和二年五月十九日祠堂に入牌す、(紫巖譜略 大德寺世譜、)

シユーリユー 宗立 二〇四五…… 〔臨濟宗〕京都大德寺の第八代なり、宗立字は卓然、俗姓は津守氏、攝津の人なり、出家して徹翁義亨禪師の室に參し、遂に其法を嗣ぐ、鄕里に住吉に慈恩寺を剏して衆に接す、後勅命を奉じ大德寺に住し

久しからずして慈恩寺に歸り、死期の近きを知りて預め葬地を定め、時至りて偈を書して曰く、日用三昧、佛祖不レ知、機輪轉處、横ニ身乾維ニと、既にして自ら棺内に入り、人をして釘せしめて、曰く弁汾絶信眞活計、と、寂然として聲無し、時に至徳二年十二月二日なり、門人埋葬して塔を其上に建つ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、紫巖譜略）

シユーリユー　宗龍 二二九九／二三三九 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第百八十四代なり、宗龍字は江雲、自ら任運子、丿丶子、困兩子と號す、山城の人、小堀遠江守政一の姪なり、江月の法を嗣く、龍光院の輪番となり、尋いで崇福寺、及び孤蓬菴に歷住す、近江に孤蓬菴を營み、同國小室に西光寺を營み、筑前に望雲菴を營む、承應二年九月武藏品川東海寺の輪番となり、延寶七年六月十七日寂す、壽八十一、孤蓬菴に塔す、勅諡を圓慧靈通禪師と號す、延寶九年六月十七日祖堂に入牌す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーリユー　宗龍 二〇五四／二一三八 〔曹洞宗〕甲斐廣巖院の開山なり、宗龍字は雲岫、出雲大宮司國造の子なり、十七歲の時出家し、東西に徧歷して諸師の門を叩き、吾賓宗璨禪師に最勝寺に於て見え、これに師事して親しく印記を受く、寬正元年降矢道珠甲斐中山に妙龜山廣嚴院を開き、師迎へられて開山となり、文明十年十二月九日寂す、壽八十五、臘六十九、（日本洞上聯燈錄）

シユーリユー　宗龍 二二六三……〔曹洞宗〕伊勢花林寺の開山なり、宗龍字は眞翁、加賀の人、浮翁全槎に師事して其法を得、席を繼ぎて全久寺を主とり、永平寺に昇る、泉龍龍溪の二寺に歷遷す、三河菅沼氏新城に宗堅寺を建て、師其始祖となる、信濃小諸城主某宗心寺を創し、伊勢の長島に花林寺を祕し、皆師を延て一世とす、慶長八年四月七日寂す、壽缺く、法嗣九峰如珊あり（日本洞上聯燈錄）

シユーリユー　宗劉 二二一七／二二八八 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百六十四代なり、宗劉字は龍嶽、號は半隱、石見の人、月岑の法を嗣く、元和七年十月四日大德寺に出世し、同九年五月廿一日開堂す、後筑前の國守黑田氏江戸廣尾に瑞泉山興雲寺（今の祥雲寺）を建て、師を請して開山となす、後水尾天皇勅して特に竺仙大法禪師の號を賜ふ、是れ寬永三年三月五日なり、同五年十月廿八日寂す、壽七十二、玉林院に塔す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーリユー　宗隆 二〇八五／二一六〇 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、宗隆字は景川、俗姓は平氏　伊勢の人なり、幼にして州の圓明寺に投して剃髮し、十九歲遊方し、尾張瑞泉寺雲谷祥に參すること三年、恐溪寺義天詔・讃岐慈明菴桃隱朔に歷參すれとも悟らす、挑隱伊勢の大樹寺に移つるに從ひて研究し、京都龍安寺に再ひ義天に謁し、大樹寺を訪ひ其間を往來すること三四回、後龍安寺雪江深和尙に依り入室して大悟徹底す、大和高市郡主橘榮家興雲寺を建てて師を開山とす、文明七年勅を受けて京都大德寺を董し、京都の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹の龍興、伊勢の大樹の諸寺に歷住す、細川政元京都に大心寺を建て、師を請ひて住持せしむ、明應九年春太心院にて病み、三月一日偈を書して、元本無明、七十六歲、末後牢關、三千條罪、と云ひ、連喝兩喝して寂す、全身を正法山

の龍泉菴に葬むり、大龜塔と稱す、勅して本如實性禪師と諡す、（本朝高僧傳）

シユーリヨー　宗歸 二〇四七 二一四四 〔曹洞宗〕相摸最乘寺の禪僧なり、宗歸字は安叟、駿河の人、俗姓源氏、大森の族なり、幼にして最乘寺大綱禪師に投じて薙髮し、心を委ねて法を講せしが、大綱の寂後春屋宗能に師事して其法を嗣ぐ、相摸小田原城主總世寺を創し、土肥の待遠寶善院を建つ、師請せられて皆開山となる、（享祿元年北條氏綱寶善院を早川に移し改めて海藏寺と云ふ）尋で最乘寺龍泉寺に歷住し後總持寺に主となる、文明十六年九月二十二日寂す、享年九十八、嗣法天室運、模堂範、學甫富、無方相、笠翁符、智海哲、材仲棟、石室林、天叟林、光顯威の十人あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーリヨー　宗良 二二一七 二二八一 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百五十九代なり、宗良字は賢谷、號は泛梗　土佐の人、俗姓は吉良氏、玉甫の法を嗣ぐ　元和三年十一月十七日大德寺に出世す、時に六十一歲なり、元和七年十月二十五日安然寂す、壽六十五、勅諡本覺廣濟禪師を賜ふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シユーレー　宗令 一九九三 二〇六八 〔曹洞宗〕越中立川寺開山なり、宗令字は大徹、肥前の人なり、（一說に大隅の人と云ふ）業を無方に受け、後、總持寺峩山紹碩に參して了悟し、奉侍多年、總持寺に出世し、峩山の法嗣となる、美濃井谷の高峰靈妙菴主妙應敎寺を改めて禪宗となし　師を延て居らしむ、師乃ち峩山を始祖となす、將軍足利義滿山林田莊を喜捨す、越中の檀越新川郡眼目山立川寺を創し、師開山となる、康曆中攝津信官護國寺を建て笠仙師を招く、笠仙師を推して始祖となす應永十五年（一說十二年）正月二十五日立川寺に寂す、年七十六、塔を立て師子菴と云ふ、臨終の頌あり、曰く、生死無常人不識、從前佛祖不能及、頭長三尺更是誰、萬仭峰頭獨足立、と、法嗣普門元參、省元妙悟、大成宗林、春巖祖東、禪室宗安、闇道了闇　越叟了闇、月江應雲　日權玄素、覺巖玄了、笠山得仙、天巖宗越、日山良旭　直菴宗覲、不藏可直、浩齋契養の十六人あり、（日本洞上聯燈錄、俳藍開基記）

シユーレン　宗廉 二一〇七 〔曹洞宗〕尾張正眼寺の禪僧なり、宗廉字は直翁、大興寺天先祖命に謁し、其法を嗣ぐ、尾張正眼寺に主となり、次で總持寺に出世す、文安三年十一月二十四日寂す。壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーロー　宗朗（……　）〔眞宗〕安藝香林坊の住持なり、宗朗字は若拙、號は香山、一に岡水居士と云ふ、筑前岡邑の人なり、博學強記にして詩文を善くす、此時國人皆詩文を喜ばず、且つ若拙の豪邁なるを見、皆之を惡む、獨り姪濱の醫龜井聽因產を傾けて資給す、後聽因の子道載世に傑出せしは師の敎導多によると云ふ、師一家の說をなし親鸞の敎を振起せんとし、香山長語、及び大經刪註を作りて舊說を駁す、本山師を以て異解となし貶黜す、師大に憤悲す、後香林房失火して著書皆燒く、翌年纔かに疾みて寂す、壽缺く、胡蝶の詩に曰ふ黃蝶愛二黃花一、低飛日欲レ斜、縱令霜下死、猶自在二陶家一と、著作龍谷講主傳一卷世に存す（續近世叢語、淸流細談）

シユーオー　周應 二〇五四 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、周應字は曇芳、生國俗姓詳ならす、出家して久しく

夢窓國師に師事して其法を嗣ぎ、鎌倉管領の請により圓覺寺に住し、後建長寺に移つる、晩年瑞鹿山の瑞林菴に退休し、應永某年九月七日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユーオン　周恩（……）〔曹洞宗〕上總常泉寺の開山なり、周恩字は斷江、出家して天童寺南極壽星に師事して其法を嗣ぎ、後、法兄信中永篤の後を踵ぎて天童寺第三代となり、晩年上總伊篠鄕に常泉寺を剏めて老を養ひ、某年寂す、（日本洞上聯燈錄）

シユーオン　周恩　トークー等空を見よ、

シユーガ　周賀　二〇二三 二〇八五　〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、周賀字は慶中、號は瀧華道人と云ふ、春屋に參して法を嗣ぎ、相國寺に住す、後、天龍寺に遷り、應永三十二年八月二十八日寂す、壽六十三塔を勝寶菴と云ふ、（延寶傳燈錄）

シユーカイ　周海　……二四四九　〔新義眞言宗〕江戸根生院第十七代なり、周海字は深海と云ふ、初め豐山西藏院芳壽に師事し、後正珊に隨ひ、近江彥根に遊學し、正珊の寂後丹州西光寺に住し、再び豐山に登りて宗輿を研究し、本山地藏院日輪院を經て寶曆八年鷲宮大乘院に移り、明和元年命により根生院の主となる。翌年護持院光星席を退きたるを以て、師其補處を彌勒寺榮慶と爭ひ、敗して三年五月十八日西新井惣持寺末寺なる寶藏寺の下戸塚西光院に隱れ、寛政元年十一月五日寂す、壽缺く、著作倶舍講錄三十卷、因明纂解講林六卷、因明纂解紀文五卷、大日經肝心鈔十八卷、法宗源講要三卷等あり、（新義眞言宗史料）

シユーガク　周噩　二〇一九 二〇八八　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周噩字は嚴中、九條經教の第七子なり、夙に家を出て〻春屋國師の室に投して大事を發明し、內外の書を閱して頗る雅思あり、將軍足利義持其德を慕ひ、相國寺に住せしむ、後天龍南禪諸寺に歷遷し、晩年西山の持地院に退休し、正長元年六月二十六日寂す、壽七十、勅諡智海大珠禪師と賜ふ、（本朝高僧傳）

シユーカン　周鑑（……）〔曹洞宗〕伯耆瑞仙寺の禪僧なり、周鑑字は石菴、久坂の海晏性に投して出家し、瑞仙寺大年宗永に參して旨を悟る、伯耆の大守山名澄之師を請して瑞仙寺を主とらしむ、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーキユー　周及　一九九四 二〇六九　〔臨濟宗〕安藝佛通寺第一代なり、周及字は愚中、俗姓は藤原氏、美濃岐阜の人なり、學年に及び郡の敎院に投じて學習し、十三歲京都に上り、臨川寺にて夢窓國師を禮して剃髮し、其身長の人に超えたるより高沙彌と呼ぶ、命により春屋菴に師事して禪を學ぶ。春屋の勸めにより、首座鑑翁に侍し、德望高し、龍湫默菴二師に謁して、日に請益す、十七歲比叡山に登り、登壇受具す、十八歲建仁寺に掛錫す、曆應十四年秋元に入り、曹源寺月江印に參し　愚菴の二字を書して與へらる、師これを以て號となし、後、改めて愚中とす、偶日本の密禪人に逢ひ、共に金山に登り、即休了和尚に拜謁す、其記室となり、次で左右に侍す、將に皈朝せんとするや、即休自ら頂相に題して贈る、時に朝廷金山に敕して水陸會を修せしむ、即休師を留めて經藏を典せしむ、月江、楚石、夢堂の諸老偈を寄せてこれを賀す、石室玖、龍山見等、時々往來して互に硏究す、至正十一年三月中

句卽休の喪終りて皈朝の途に就き、四月博多に着す、實に我觀應二年なり、龍山見師の皈るを喜びて相伴ひて京都に登り、直に天龍寺に至りて夢窓國師を拜す、同年秋國師寂し、師塔下に止まりて心喪すること三年、龍山の南禪寺に住するに及び、其書記となる、後、少林院に寓し、招かれて萬壽寺竺堂羅の紀綱を司とる、職終りて遊方し、四年攝津の棲賢寺に寓す、貞治四年大中臣宗泰の請により、丹州天寧寺の席を補す、應永二年紀伊に遊化す、運勝居士龍門菴を剏して師に居らしむ、八月關西に赴かんとし、安藝を過ぐ、小早川春平佛通寺を建て師を第一世とす、八年播磨の雲門寺に遊び、景德菴を建てゝ居る、冬檀越の請により佛通寺に皈る、時に年已に八十餘なり、向上菴を營み、道俗を說法す、十一年肯心菴に退居す、十四年將軍足利義持使を遣して法語を求む、翌年義持州守平則平を介して師をして京都に入らしむ、師山崎に至るに及び、義持畠山細川の二臣に命して迎へて伏見の藏光菴に居らしむ、後、自ら等澄院に寓す、義持參見して法要を問ふ、都城の道俗競ひて拜謁を求む、師これを厭ひて紀伊禪頭寺に逃る、義持使を遣して紫衣を賜ひ、天寧寺に皈り、意に任かせて住持せしむ、八月十五日疾に罹り、二十四日自ら棺銘を書し、二十五日偈を說いて曰く、出行得ニ好日一快馬痛着ニ鞭一萬回躍ニ出後一雲門豈爭ニ先一と、跏趺して寂す、實に應永十六年八月二十五日なり、遺骨を分ちて天寧、佛通兩寺に塔す、壽八十七、臘七十一、著作語錄五卷、（卯餘集と云ふ、）一卷示衆、二卷供養、拈香、三卷下火、祭文、佛祖讃、自讃、四卷號題、號說、五卷題跋、書尺、應答、偈頌、附錄稟明鈔、應永十六年九月十三日勅あり佛德大通禪師の諡號を賜ふ、應永二十八年弟子禪慶年譜を編す、（年譜、延寶傳燈錄、本朝高僧傳、）

〔考〕 周及初め夢窓石に從ひ、後卽休了に就いて法を嗣ぐ、其東皈し、京都に入るに及び、疎石の一門より迫害を受け、僅に身を以て逃れ、一地方に宗風を擧揚したりと云ふ、

シユーキヨー　周鏡　二一六〇……　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　周鏡字は月翁と云ふ、號は江介老人と云ふ、嚴中周噩に參して印可を付せらる、文明の初年敕命を奉じて京都南禪寺に住す、明應九年九月二十六日寂す、壽缺く、（日本名僧傳、延寶傳燈錄）

シユーク　周九　リョーイン良因を見よ、

シユーク　周九　シユーク集九を見よ、

シユーケー　周奎　二四六四……　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、　周奎字は維明、號は羽山と云ふ、世俗姓師承詳かならず、京都相國寺の光明院に住す、畫法を伊藤若仲に學び、梅及鷄の圖に秀作あり、文化中寂す、壽缺く、（扶桑畫人傳、鑒定便覽）

シユーケン　周賢　（……）　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、　周賢字は天英と云ふ、在中に師事して法を嗣ぎ、相國寺に住す、後、慈雲菴に退居し、某年寂す、壽缺く（延寶傳燈錄）

シユーケン　周巖　二一二三……　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、　周巖字は東沼、號は祥光、別號留月道人といふ、南禪寺遊叟藝禪師の心印を受く、命を奉じて相國寺に出世し、後南禪寺に昇る、晩年建仁寺栖芳院に住す、好て莊子を讀む、寬正

三年正月二日五葉菴に於て寂す、壽缺く、遺偈あり、曰く、東沼行脚、北斗藏身、露千江月、花萬國春と著作流水集あり(本朝高僧傳)

シユーコー　周光 二〇三一 二一一五 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周光字は雲中と云ふ、雲中和尚に侍して記別を稟け、諸寺に歷住して南禪寺に昇る、寛正六年九月二日寂す、壽九十五、(延寶傳燈錄)

シユーコー　周公(………)〔淨土宗〕下總淨勝寺の開山なり、周公字は賴譽、金蓮社と號す、俗姓詳ならず、下總國舟橋に住す、其地方に宗義を弘通せんと欲す、日々諸所に轉回し、盛に化を施す、西光山を開き、淨勝寺と號す、後、德川家康齋供三十石を給す、寂年月日缺く、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

シユーコー　周興 二一八四 二一五一 〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、周興字は彥龍號は半陶子といふ、山城深草の人、父は土器師なり、横川景三の弟子となり、相國寺に住す、詩文に長ず、延德三年六月三日寂す壽三十四、著作半陶藁、半陶集あり、(日本名僧傳、五山名僧小傳)▲增補見よ

シユーコー　周皎 一九五一 二〇三四 〔臨濟宗〕京都地藏院の僧なり、周皎字は碧潭、鎌倉北條氏の裔なり、幼にして出家し、京都仁和寺の禪助に從ひて眞言教を學び、密學に通じて多く靈異あり、元弘の亂あるに際し、遁れて夢窓國師の座下に投し、教外の旨あることを知りて衣を更へ、國師に侍して玄機に冥契す、天龍寺寶塔落慶の日、國師特に僧伽梨尼師壇を付して師に供養の導師を勤めしむ、後醍醐天皇城南に狩し、鑾輿を駐め、師を召して法を問ふ、康永元年國師の命によりて西芳寺に住す、檀越地藏院を嵯峨に建て師を開山とせんとす、師國師を請して開祖とし、自ら第二世と稱す、應安七年正月五日寂す、壽八十四、勅して宗鏡禪師と謚す、(貫錄二三六、本朝高僧傳)

シユーコー　周亨(………)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周亨字は大椿と云ふ、義堂周信禪師に參して法を嗣ぎ、京都南禪寺に主となる、後常陸に遊び四書を講す、寂年缺く、(延寶傳燈錄、臥雲日件錄)

シユーゴー　周嚮　シユーゴン宗嚴を見よ、

シユーゴー　周仰 二二……〔淨土宗〕武藏增上寺第七代なり、周仰號は天蓮社觀譽、俗姓大平氏にして、父は武藏世田ヶ谷の人、吉良氏の臣なり、淺草の觀音に祈誓して病の愈えたるを以て、一子をして觀音院に入り出家せしむ、即ち師なり、師常陸國水戶藥王寺に到り、深く内外の典籍を究む、當時常總の間千葉、多賀谷、椎名、海上の諸侯相戰ふ、之を見て世間を厭ふ心を加へ、僧誉上人智眞の令名を聞くに及んで、淨土門の學に志し、武藏に至りて初めて改宗し、永正元年より常に論議の碩匠となる、永正十三年五月增上寺の第七代となり天文廿年三月十九日寂す、(鎭流祖傳、三緣山志

シユーサ　周佐(………)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周佐字は德叟、俗姓は源氏、常陸の人、幼より正覺國師を慕ひ、關東にて出家し、從ひて京都に往き、終に印可を受け、天龍寺に出世し、南禪寺に移つる、晩年正因菴を搠して退居し、將に寂せんとする時、侍者に命し著す所の語錄文

集を火に投せしめ、一年に嗣せり、壽缺く、勅諡宗猷悟達禪師の號を賜ふ、（本朝高僧傳）

シユーサ 周佐 リョーサ良佐を見よ、

シユーサツ、 周察（……）〔臨濟宗〕京都天龍寺の藏主なり、周察字は□溪、夢窓國師に參して法を嗣ぎ、藏鑰を司どる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユーサン 周山 カクオ・覺翁を見よ、

シユーシツ 周室 ユークワン宥觀を見よ、

シユーシン 周信 一九八五 四八 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周信字は義堂、空華道人と號す、土佐長岡の人、俗姓は平氏、母は藤原氏の出なり、幼にして淨義法師に從ひて出離の法を學び、十四歲薙髮し、比叡山に登りて登壇受戒し、十七歲京都道圓阿闍梨に密法を受け、深く別傳の旨を慕ひ、臨川寺夢窓國師を拜して師となし、參究久しくして遂に玄旨に契す、國師遷化の後、建仁寺龍山見に師事す、貞和年中鎌倉の管領基氏師を招きて圓覺寺に挂搭せしむ、時に大喜忻、東山丘、不聞開等共に師を舉けて第一座となす、貞治五年善福寺に主となる、應安四年上杉氏、鎌倉の城北に報恩寺を建て、師請せられて其開山始祖となる、康曆元年義滿將軍命して京都建仁寺を主とらしむ、至德三年南禪寺に移つる、夏義滿命下して京都鎌倉禪寺の位次を定む、南禪寺の位を昇して五山の上に置く、秋辭して慈氏院に退休し、嘉慶二年春病に罹りて攝津の溫泉に浴し、旬餘にして龍山の舊院に歸へり、四月三日衆を集めて出世の始終を說き、四日寂す、遺命によりて本院に葬むる、壽六十四、臘五十、著作語錄、空華外集、日用工夫集各若干卷、貞和類聚祖苑聯芳集十卷等あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーシユー 周宗 二〇二三 二〇九八 〔臨濟宗〕近江香積寺の開山なり、周宗字は南英、號は懶雲、俗姓は秦氏、武藏の人なり、六歲にして僧の來るを見れは喜ひて之を迎ふ、十歲にして建長寺の古天誓禪師の童子となり、十六歲にして薙髮進具して、侍局に居る、師文學を好み、廣く典籍を究め、藏海珍、大年登、古劍快の三師に從ひて其蘊奧を探る、伯英俊禪師建長寺を主とる時、師其藏鑰となる、後春屋葩、絕海津の諸老に謁して相摸に皈へり、病に罹り、三年を經て癒え、武藏の清水山中に入り出てさること五年、文章書籍を捨て、專ら禪觀を事とす、去りて近江の杤木山に入り、將に身を終えんとす、一日定座豁然として覺る、御史臺中原實齋居士請して山を出てしめ、京都の私第に館せしめて法を問ふ、文武百僚法を問ふもの戶外に滿つ、居士乃ち近江の地內に香積寺を剏建して、師を開山とす、大江氏泉龍寺に招けとも赴かす、將軍の命により辭すること能はす、建長寺に主となる、永享十年四月十九日寂す、壽七十六、臘六十二、著作語錄あり、（本朝高僧傳）

シユーショー 周勝 二〇三〇 二〇九三 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周勝字は古幢、離幻道人と稱す、京都の人、藤原氏の子管領源賴之の養子となり、不遷序禪師に投して童子となり、十三歲にして既に大僧の列に着く、將軍足利義光其俊邁を愛し、召して左右に侍せしむ、太淸滑、義堂信、絕海津、空谷應等に歷參して皆賞を蒙むる、常に遊方せんと欲すれと

も將軍許さす、師小指を切りて一偈を血書して遁れ去る、是より山川の佳勝名刹等に悉く參詣し、國中を巡遊すること十五年に及ふ、後景福寺に出世し、次に等持寺に遷る、應永二十六年秋相國寺に主となり、將軍より金襴の袈裟を授與せらる、三年を經て退きて三秀の塔を守り、相國寺に瑞芝菴を剏して終老の計をなす、後義教の請により天龍寺に住し、尋いて鹿苑院に移りて僧錄司となる、永享元年勅により南禪寺を董し、開堂の日將軍親しく臨駕す、四年將軍其夫人と共に鹿苑院に到り、師の衣鉢を受けて弟子の禮を執る、永享五年二月十二日壽六十四臘五十二にて寂す、將軍愛慕に堪へす、金十萬を送りて其塔を建つ、嗣法順溪助、心境致、敬芳欽等、皆天龍相國等の諸寺に住す、勅して鏡智法明禪師と謚す、（本朝高僧傳）

シユース！ 周崇 二〇〇五 二〇八三 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、 周崇字は大岳、自ら全愚道人と呼ふ、俗姓は一宮氏、阿波の人なり、幼にして深く禪に慕ふ、父其志を察して州の寶陀寺に投して默翁誠和尚に依らしむ、默翁の臨川寺に移つるに從ひて祝髮受具す、師禪餘學を好み、百家の篇皆涉獵し、相摸に赴きて金澤の庫書を閱す、諸寺の名匠に謁して之に侍し、京都に歸へりて默翁の印記を受け、將軍足利義滿の尊信を蒙むる、應永九年春相國寺に出世し、尋きて天龍寺に移つる、此日將軍師に金襴の袈裟を贈る、諸官員と共に山に入り、院に臨みて聽法し、特に相國寺の格位を登せて五山第一となす、南禪寺を司とる時に畿內旱久し、師將軍の命によりて雨を禱り効あり、後、鹿苑院に移り、僧錄司となる、萬年山慧林寺靈龜山性智寺に歷遷し、晩年天龍寺に住す、應永三十年九月十四日寶積寺にて寂す、壽七十九、臘六十六、（本朝高僧傳）

シユーズイ 周隨（……）〔臨濟宗〕相摸圓覺寺の禪僧なり、 周隨字は景初と云ふ、出家して法を芳林恩に嗣き、圓覺寺を主とる、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユーゾン 周存 三二九三…… 〔淨土宗〕安藝淨安寺の開山なり、 周存は眞蓮社乘譽と號す、甲斐の人、其俗姓詳かならず、靈巖に師事して法を嗣ぎ、安藝廣島淨安寺の開山となる、寬永十年九月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユーダイ 周大 二二九八 二三八〇 〔淨土宗〕江戶增上寺第百三十五代なり、 周大は初め秀大に作る、然蓮社慧譽、十郎生門と號す、俗姓は朝倉氏、慶安元年三月を以て江戶麻布に生る、出家修學業成りて大念寺に住し、大光院に遷る、傳通院を經て寶永元年十一月二十九日三緣山貫首となる、時に六十七歲なり、翌二年四月一日堂宇火災に罹り、悉く燒失す、同月二十七日官に請ひて造營に着手す、十月五日前從三位淸楊院の遺骸を傳通院より本堂の後へ改葬し、追贈大法會ありて大僧正に任す、在職八年にして職を辭し、一本松に退隱し、後靑山に移り享保五年九月十三日寂す、壽八十三、常照院に葬り、塔を累代の傍らに建つ、（三緣山志）

シユータク 周澤 一九六八 二〇四八 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、 周澤號は龍湫と云ふ、俗姓源氏、武田の族、甲斐の人なり、六歲にして夢窻國師に隨ひて沙彌となり、稍長して剃髮受戒し、辭して諸方に參し、回りて國師を省し、遂に省ありて印記を付せられ、初め甲斐の慧林寺、京都臨川寺等に歷

作す、應安の初め美濃に大興寺を剏し、後、建仁、南禪、天龍の諸大刹に歷遷す、朝廷其道價を聞き、勅して國師となさんとせしが、師固辭して受けず、嘉慶二年九月九日西山壽寧院に寂す、壽八十一、南禪寺の慧雲院に塔す、師生前、動靜を書くに妙を得、世に珍重せらる、又年譜語錄等を編するを許さず、竊かに書するものを見れば、直にこれを破る、故に師の道蹟世に傳らず、（續群一三八、本朝高僧傳）

シユータン　周潭（……）〔曹洞宗〕安房高照寺の開山なり、周潭字は懷州、幼にして安房長安寺龍湫に從ひて祝髮受具す、龍湫の寂後天翁令播其席を踵く、師命せられて記室となる、凡そ二師に侍すること二十餘年なり、天翁の遷化の後、席を襲ひて長安寺に主となる、晩年高照寺を開きて之が開山となり、某年寂す、壽缺く、法嗣續翁宗傳あり（日本洞上聯燈錄）

シユーチユー　周仲（二〇一八―二〇九二）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、周仲字は叔芳、丹後天橋の人なり、絕海に師事して法を嗣ぎ、建仁寺に住す、永享四年瑞勝院に寂す、壽七十五、遺偈に曰ふ、蘆花水月、全生全死、水月蘆花、無㆑隱㆓乎爾㆒、（延寶傳燈錄）

シユーチヨ　周楞（二四〇六―二四八）〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の禪僧なり、周楞字は誠拙、別號は無用道人といふ、伊豫宇和島の人、早年郡の佛海寺僧某の下に業を受く、道心日に堅く、出遊して豐後福聚寺東岩和尚に見へ、趙州狗子話を參究す、伊豫海藏寺に結制安居あり、荊林禪師臨濟錄を講す、師衆に加列す、時に十六歲なり、幾ならすして松蔭寺白隱禪師を問ひたるも禪師既に寂せり、武溪に到り、月船禪師に謁して隨侍す、安永六年十月圓覺寺佛日菴に居り、次に正續菴を修理して遷り居る、佛光禪師の塔、側に僧堂を構へて大に禪風の衰弊を刷新せり、文化十三年幕府の命により、圓覺寺の住持となり、開堂を行ふ、天龍寺大衆相議して金襴僧伽梨を贈る、其製夢窻國師に倣ふ、增上寺典海大僧正師の德風を欽仰し、圓覺寺傳來の佛牙舍利を增上寺に請し、一七日供養す、幕府之を城中に請し、大將軍以下羅拜恭敬す、師圓覺寺の廢頹を悲嘆し、修營に力を用ゐ、樓門殿塔等百廢一新す、時人佛光祖師の再來といふ、德風四被し、貴賤歸仰す、出雲大守不昧居士宇和島桑名等の諸侯皆入室問訊せり、文政三年京都相國寺僧堂を建立し、衆議師を請す、淸衆三百、禪軌齊整す、心華院を建立して棲息の所となす、夏六月微疾あり、十九日危篤なり、淡海敬紙筆を具し遺偈を請ふ、師書して曰く、時來人未㆑來、興來人將㆑來、炎羅大王令嚴、明日打爲君行、と、廿八日曉に寂す、壽七十五、心華佛日兩菴に塔を建つ、法嗣淸蔭竺、志山俊、淡海敬等あり、著作正法眼一卷、雲門關一卷、幷に忘路集（語錄）あり行はる、（續日本高僧傳）

シユーチヨー　周超（……）〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、周超字は越翁、近江の人、總寧寺天叟宗訓に師事して其法を嗣ぎ、同寺の主となり、遠江乘安寺相模廣澤寺等を開く、寂年世壽缺く、法嗣學仲原周あり、（日本洞上聯燈錄）

シユーテツ　周徹（二〇五四）〔臨濟宗〕播磨瑞光寺の開山なり、周徹字は靈光、出家して普く尊宿の門を叩き、海に航して支那に入り、諸刹を歷遊して專ら參禪を事とし、久し

く古林禪師に鳳臺寺にて敎を受け、東歸して夢窻國師の印を受け、天龍寺の主座となる、檀越の請に應して播磨の瑞光寺を開き、寶光寺を開きて第一世となる、臨終に偈を書して曰く、欲レ知ニ居處一、不レ隣ニ神仙一、金剛腦後、那吒面前、と、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕周徹は寶永頃の人なり

シユーテン　周恬（二〇五四）〔臨濟宗〕山城天福寺の禪僧なり、周恬字は牛覺と云ふ、夢窻國師に參して法を嗣ぎ、初め天龍寺の輪藏を司とり、後堂より前堂に轉し、出てゝ天福寺に住す、晩年辭して藏密菴に退き、某年寂す（延寶傳燈錄）

シユートー　周等（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺第一座なり、周等字は覺樹と云ふ、宗恕禪師に參して印可を付せられ、妙心寺第一座となる、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シユードー　周道（二〇九九―二一八一）〔曹洞宗〕常陸管天寺の開山なり、周道字は東淵、俗姓は藤原氏、伊豫の人、幼にして龍澤寺省文守正に投して剃髮し、十八歲具足戒を受く、初め土佐瑞應寺の雪心に參し、後長門に往き、大寧寺器之に謁し、大菴に參し、辭して備後に往き、德雲寺鼎菴に見え、其記室となり、久しうして關東に遊び、總世寺安叟、龍泰寺華叟、大泉寺泰叟、眞如寺密山、龍淵寺機雲等に歷參し、皆賞識を蒙る、文明元年再び西皈し、瑞應寺崑岡、大寧寺全巖、安樂寺海雲の諸老を訪ひ、宗英、箕外、傳翁の三老に見え、仝十一年四十一にして松岳寺の摸道永範に謁し、遂に法衣及印可を付せらる、適々永範永澤寺より招かるるに及び、師をして之に代り應せしむ、一年の後辭して皈る、時に摸道已に退休せり、師去りて遠江秋葉山に往き、菴居六年、延德二年美濃の大守土岐景成管天寺を興し、師其開山となる、永正十一年退休し、大永元年七月二十三日寂す、壽八十三、臘六十六（日本洞上聯燈錄）

シユートク　周德（……）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、周德は惟馨と號す、書法を雪舟に學び、殊に山水人物に長ず、其畫く所の山水に周良の贊あり、曰く、雲谷菴主周德以ニ繪畫一鳴ニ兩周一者也、其徒波月等薩出レ紙以見レ需レ畫本、周德所レ筆寫ニ玉礀所レ摹之佳山水一以付焉、（本朝畫史、扶桑畫人傳）

シユートン　周頓（二二八三―……）〔淨土宗〕大和龍巖寺の開山なり、周頓は壬蓮社鏡譽と號す、尾張の人、其俗姓詳かならず、法を道譽に嗣ぎ、大和添下郡郡山に龍巖寺を開く、元和九年十月二十八日寂す、剃度の弟子に了閑あり、（淨土總系譜）

シユーバン　周潘（二〇五四）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、周潘字は華山と云ふ、青山慈永禪師に師事して法を嗣ぎ、應永の初年圓覺寺に住す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シユーホー　周鳳（二〇五二―二一三三）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、周鳳字は瑞溪、號は臥雲山人と云ふ、俗姓は伴氏、明德三年十二月八日佛成道の日を以て和泉堺に生る、旬餘にして州亂れ、全家丹州桑田郡に移る、十歲の時丹州も亦た兵起りて父軍旅に沒す、母に從ひて京都に入り、外祖與性菴主に師事し、十四歲相國寺無求伸和尙に依り、十六歲下髮受戒し、天龍寺に留り大周奝に侍す、鹿苑の嚴中噩に從ひ、擇木寮

に居す、奈良に遊び、普一玄啓二講師に謁して賢首慈恩の教を聽き、兼て小乘部を學ぶ、回りて嚴中に侍し、學徒を教授す、嚴中相國寺に移るに及び、侍して藏鑰を司とり、後、後室に轉じ、永享八年寶華庵を分たる、此年將軍足利義教の命により景德寺に出世し、幾何ならずして洛北等持寺に移る、九年鎌倉管領持氏家臣上杉憲實と不和を生じ、將に相戰んとす、師將軍の命により、往てこれを諭し、講和せしむ、同十二年相國寺に移り、嘉吉元年夏義教薨したるを以て秋壽星軒に退住す、嗣子義政相續で崇信厚く、請して鹿苑に主たらしめ、僧錄司に任じ、明年壽德院に退く康正中再び鹿苑に住して僧錄司を總ぶ、職に居ること五年、北禪菴に退休し、將軍義政の請に應じ、知恩院にて法華を講ず、應仁元年京都大に亂る、因て北山嚴藏に入り、著述を事とす、後、命により僧錄司を掌る、時に年七十七なり、文明三年後土御門帝行在所に召し南禪寺の詔を降し、紫衣を賜はりたれとも辭して受けず、帝之に感し、將に國師號を賜ひ、戒法を受けんとしたまふも亦固辭す、義政奏して正覺國師を追請して、師に代らしめんとす、依て正覺に諡して大圓と云ひ、七朝の帝師となす、文明五年五月八日寂す、壽八十三、臘六十八、師生前蘇詩に精しく　贈說二十五卷、補遺一卷を作る、其他の著作語錄二卷、外集若干卷、人天眼目抄、竹鄉集、夢語集、善鄰國寶記、各一卷、日件錄六十卷、刻楮集二百卷等なり、後土御門天皇勅して興宗明教禪師と諡す、（續群一四二、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーユ　周諭　一九七八〔臨濟宗〕京師等持寺の禪僧なり、周諭字は默菴、俗姓不詳、武藏の人なり、出家して元に航せむとす、夢窓國師止めて曰ふ、子元に到るも我に過ぎたる師あらず、と、因て志を果さず、雪村梅　無極玄を問ひ、參究懈らず、金剛寺京師の等持寺に歷住す、應安六年六月十七日寂す、壽五十六、遺偈に曰ふ、籃縄牽挽、海嶽忽昏、欲レ求二蹤跡一、日月倒奔、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シユーヨ　周譽　コーエツ光悅を見よ、

シユーヨ　周譽　シユリン珠琳を見よ、

シユーヨ　周譽　リンオー林應を見よ、

シユーヨー　周陽　二二〇二〔曹洞宗〕武藏吉祥寺の開山なり、周陽字は青巖、出家して諸大老に徧參し嫩怨全芳に謁し、入室して衣法を付せらる、武藏大蟲宗心居士寺を創し、師を請して開山とす、名けて諏訪山吉祥寺と云ふ、天文十一年七月十八日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユーリン　周麟　二一七八〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周麟字は景徐、號は宜竹、用堂材の法を嗣く、館相國寺に住すること前後四度に及ふ、常に萬年山の宜竹軒に閑居し、永正十五年三月二日同軒に寂す、壽七十餘、著作翰林葫蘆集十一卷、親世小次郎信光傳一卷あり、（本朝高僧傳、日本名僧傳、五山名僧小傳）

シユーリヨー　周良　二二一五〔臨濟宗〕京師天龍寺妙智院の禪僧なり、周良字は策彥、號は謙齋と云ふ、丹波の人なり俗姓井上氏、出家して鹿王大龍寺に投し、心翁周安に師事して其法を嗣く、天文十六年二十九歲にして足利義晴の命を帶びて明に航し、翌年珍書を齎して東歸し、後、弘治元

年四十七歳にして再ひ命を帶ひて明に航し燕京に入りて世宗に謁し、大に優遇せらる、且つ當時の諸大家の間に往來し、詩を贈答す、東歸の後、天龍寺の妙智院に住し、盛名あり、示寂年月日、并に壽詳ならす、著作九千句二卷、三千句、入唐記、初度集、再度集、各一卷あり、師一生作るところの詩甚た多し殊に晩過西湖の二首膾傳せり、曰く「餘杭門外日將晡、多景朦朧一景無、參得雨奇晴好句、晴中摸索識西湖、」「日鼓暮奏興何住、晴度西湖々水涯、眼似老年看不見、六橋風景夢中花、」師の集中次の詩の如きは其俊偭を窺ふへし、詠史二首「可惜先生漉酒巾、有知中不宋家臣、栗桑門外五株柳、總是元嘉醉後春、」「二月驪宮雨始晴、催花一曲最關情、君王祇道春光好、更作漁陽鼙鼓聲、」と（禪宗史料　△增補見よ）

シユーロー　周朗　一九八二／二〇六三　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、周朗は相模の人、大法大闡の法弟なり、初め密敎を習ひ、後、捨てゝ禪に歸し、天龍寺に住し、後、南禪寺を司とる、應永十年五月二日寂す、壽八十二、明白菴に塔す、遺偈あり、曰く、八十二年、幻生幻滅、纔轉一機、虛空迸裂、と、（本朝高僧傳）

シユーオー　秀翁　二二八六／二三五九　〔眞言宗〕高野山蓮華三昧院の學僧なり、秀翁字は深慶房と云ふ、伊勢安濃津の人なり、幼にして州の智恩寺慶秀に投して度を受け、十二歳州の文性房に業を受く、十六歳高野山に登り蓮華三昧院に入り、學解益進む、中年武藏深川の旅館に光宥に隨ひ、後奈良に遊び、唯識因明等を究め、四十二歳賴仙の讓を受けて蓮華三昧院に住し、六十九歳碩學に任せられ、元祿十二年十月九日七十四歳撿校に補せらる、幾もなく十二月十五日寂す、壽七十四なり、著作十住心論科註廿一卷、倶舍論圖記四卷、倶舍世間品科注五卷、夏中問答四卷、法語後訓一卷なり、（高野春秋、眞言宗史料）

シユーカク　秀格　二〇七三……　〔臨濟宗〕近江退藏寺の開山なり、秀格字は越溪、學年にして近江永源寺寂室光禪師に參し、服勤多年にして契悟し、法語を付せられ、後退藏寺を剏して第一世となり、應永二十年四月十九日寂す、勅諡圓照佛慧禪師を賜ふ、

シユーガク　秀學　シユンカイ俊海を見よ、

シユーカン　秀感　ニチシユン日春を見よ、

シユーガン　秀岸　二五〇三……　〔眞宗〕越後蒲原郡一日市村安淨寺の住持なり、秀岸は雲華院と號す、寮司となりて天保四年より、高倉學寮に起信論義記、唯識三十頌を講し、天保十一年（一に十二年）十月二日擬講となり、十四年正月七日寂す、（眞宗史料）

シユーキヨー　秀慶　二三一三／二三八〇　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十八代なり、秀慶字は應春、俗姓は中氏、承應二年四月十五日武藏秩父郡矢那瀨邑に生る、寛文五年十三歳にして同國那賀郡小平村なる成身院實秀に投して下髮し、四度の瑜伽を習ひ、兩部の灌頂を受く、同十二年豐山に往き、留りて研究し、游方して因明唯識等を奈良の知足坊に學び四敎儀法華等を三井の勸學院に學ひ、元祿元年春醍醐山に登り大僧正有雅に謁し、諸尊の壇儀、及ひ經軌等を受け、同四年仁和寺に赴きて大僧正孝源に謁して西院の秘訣を受く、同七年八月卓玄の勸めに

より、金蓮院に住す、同十二年七月請に應し、近江金龜山に住し寶永二年冬武藏中島金剛院に轉し、同四年江戶の彌勒寺に轉す、享保元年正月命を蒙りて豐山の能化職に補し、二月進院す、三月幕府の執奏により權僧正に任し、同三年更に僧正に昇進す、同五年員辭して與喜院に退隱し、同年七月二十一日寂す、壽六十八（豐山傳通記）

シユーキヨー　秀鏡　ニチイ日意を見よ、

シユークワン　秀關（……）〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、秀關字は白菴、天嶺呑補に法要を問ひて言外の旨を得、席を躡きて下野大中寺に主となる、後同國奈須に往き、鏡山寺を剏す、寂年及び壽缺く、法嗣朴堂宗淳あり（日本洞上聯燈錄）

シユーケー　秀馨　二一九九—〔淨土宗〕山城淨華院の僧なり、秀馨は其鄉貫詳かならず、良玉玄珍二師に事へて淨土教を學び、淨華院及金戒光明寺に住し、天文八年七月九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユーサン　秀算　二二三二—二三〇一〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四代なり、秀算字は京識、俗姓須藤氏、上野高崎の人にして元龜三年に生る、十三歲同國後閑の北野寺にて薙髮し、慧算の弟子となり、從ひて松井田不動寺に寓し、兩部灌頂及秘藏の奧旨を受く、未だ弱冠に及ばず、游方して諸講莚に交はる、慶長六年比叡山に登り、後豐山に入りて專譽僧正に從ふ、同九年歸鄉し、幾何ならずして長谷寺に往く、同十四年夏合山事あるを以て、去りて後閑に歸り、慧算の席を嗣ぎて北野寺を主どること一年餘にして高崎大聖寺に遷る、十六年春奈良に入り、喜多院空慶僧正に百法五重の教を受け、四聖坊經助に三論五教の義を受け　留學三年、同十八年八月慧算松井田に八講を行ふに當り、師招かれてこれを助く、講莚終りて慧算退老し、師替りて不動寺に住す、同年十二月二十九日幕命に依り、城中に論莚を開き、永く行脚の糧を賜ふ、後、城中に論莚を開くこと幾回なるを知らず、元和元年家康の命に依り、長谷寺の席を補す、同五年將軍秀忠京師に上り、奏して師を僧正に任す、同七年秋長谷寺に八講を開く、同九年醍醐寺に至り　准三后法務大僧正義演に見え、兩部の許可及經軌等を傳へらる、寬永九年夏大覺寺尊性二品親王に謁し、秘密の深奧を受く、同十四年德川家光疹痘を病み、祈禱の爲め長谷寺を修營す、同十八年病に罹り、京都に往き醫療を受く、仝年十月十六日寂す、壽七十なり、師生前多く諸名家に知らる、家康・秀忠、家光、待從伊井直孝、紀伊中納言賴宣等、最も師を器重す、（豐山傳通記）

シユーサン　秀算　二二八五—二三六六〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、秀算俗姓小松原氏、播磨廣山領の人なり、出家して比叡山に學び、正保四年五月上乘院を領し、寬文九年寶園院に遷り住し、十一年六月法華會の擬講となり、延寶二年十月己講に補せらる、七年新探題に補せられ、學頭正覺院に遷り住す、八年權僧正に任せられ、執行職に補せらる、貞享三年僧正に轉し、元祿五年大僧正に昇る、十三年故ありて諸職を解かれ、武藏江戶の邊地に謫せられ、寶永三年四月十一日謫所に寂す、壽八十二、（天台霞標）

シユーシヨ　秀恕　二三三五—二四一二〔曹洞宗〕武藏吉松寺第二十

代なり、 秀恕字を嶺南と云ひ、武藏荏原郡の人吉岡氏なり、十五歳にして出家し、如寶禪師に投じて童子となる、二十餘にして三藏の聖經諸家の語錄等記誦せざるなし、後ち東西に歷遊すること二十年、寛永七年總持寺に出世し、岩城の大龍寺に住す、享保元年青松寺主を缺く、寛政院命じて之れに補せしむ、二年の秋貫山を召して席を嗣かしめ、西溪に退隱し、專ら著述を以て務となす、著す所ろ日本洞上聯燈錄、佛慈錄、宗派圖、萬年山志等あり、寶曆二年十一月廿三日寂す、壽七十八なり、

シユーセー 秀盛 二四七六 二五五〇 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十四代なり、 秀盛字は覺了、尾張名古屋の人、姓は榜嚴院氏なり、豐山千手院快盛の室に入りて度を受け豐山に學ひ、總持寺に住す、明治二十年十二月十五日撰まれて豐山第五十四代の能化職に補す、明治二十三年八月二十一日寂す、壽七十五、著作五教章私記若干卷あり、(新義眞言宗史料)

シユーゼン 秀善 二四七二 二五四六 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十三代なり、 秀善字は惠運、俗姓は守野氏、越後刈羽郡花田村の人、藏部與右衞門の五男なり、十八歳にして上野梁田郡下讃垂村自性寺慶運阿闍梨の室に入りて剃髮し、豐山に學び師席を繼ぎ、次で郡の覺本寺に移り、下總鰭ヶ崎東福寺に轉ず、明治六年四月十五日擢られて豐山能化職に補し、大に其頽基を恢復す、十二年眞言宗長者となり、明治十九年三月大傳法院中興第一代の座主に補す、在職十四年、豐山の今日ある師の力に由るもの少なからず、 明治十九年十二月十四日寂す、壽七十五、(新義眞言宗史料)

シユーソン 秀存 二四四八 二五二〇 〔眞宗〕播磨赤穂町加里屋萬福寺十八代住持なり、 秀存は一蓮院と號し小島氏たり、美濃國羽栗郡中屋村西入坊住職小島秀道の長子なり、幼にして漢籍を村瀬藤城に學ひ、享和元年甫めて十四歳にして京都に遊ひ、高倉學寮に入り、香月院鑑洲講師の弟子となり。從學すること八年、後諸山に遊び、倶舍瑜伽を三緣山照阿に、天台教義を東叡山慧澄に、華嚴三論律眞言を紀伊の宗英に一々之を學ひ藏中拔も華嚴に通す、寮司となりて天保六年より高倉學寮に探玄記華嚴旨歸を講し、同十三年八月二十九日擬講となり弘化二年より起信論義記、易行品を講す、其起信論義記の講錄は上梓して世に行はれ、顯正錄と題す、弘化四年四月十日嗣講に進み、嘉永元年より阿彌陀經、讃阿彌陀佛偈、安樂集、大經下卷を講す、當時頓成是海等あり、共に異說を執り、附和する者少からず、師乃ち本法院義讓等と命を奉して教諭に力を盡し、其功少からず、萬延元年閏三月二十八日(一傳に八日)學寮に寂す、壽七十三、明治十九年一月宗主特に師の功勞を賛して講師職を追贈す、師一男二女あり、(碑文、眞宗史料)

シユーソン 秀存 二二‥‥ 二二五八 〔天台宗〕近江比叡山尊林坊の再興なり、 秀存は山城の人なり、初め食邑一萬石を領す、元龜の變に遇うて護持の阿彌陀佛を負うて近江小松谷に遁る、天正年間比叡山に還り、尊林坊、(元祿五年改めて樹王院と云ふ)及ひ金山坊(後改めて千葉坊と云ふ)を建立す、常に淨土の念佛を修行し、一日も怠ることとなし、命終の際阿彌陀の密供を修ゑ、壇上に在りて寂す、慶長三年八月十日なり、

シユータイ 秀泰 ニチフ日阜を見よ、

シユーダイ 秀大 シューダイ周大を見よ、

シユーテキ 秀的 二三八一 二三三七 〔曹洞宗〕武藏青松寺第十三代なり、秀的字は不中、越前志比の人、山崎氏、母は波多野氏、九歳永平寺佛山に投して祝髮受具し、其命に依り大了に參すること半歳、猶悟らす、終に高巖薰道に謁して侍司となり、心印を付せられ、分座說法す、初め永平寺に出世し、上野耕雲寺に遷る、寛文七年青松寺を主とる、一住十一年、東堂に退去し、延寶五年の初め北遊して永平寺に到り、業師の塔を拂ふ、次に大了を問ひ、病を得て山房に臥し、同年九月十八日寂す、壽五十七、遺骨を萬年山の塔に埋む、偈あり曰く、如〻是來、如〻是去、十方界、不中的、と、法嗣獅巖梅嚬あり(日本洞上聯燈錄、萬年山志)

シユーテン 秀典 ニチモー日盂を見よ、

シユードー 秀道 二三…六七 〔淨土宗〕京都知恩院の第四十二代なり、秀道は本蓮社白譽直至と號す、其俗姓生國詳かならず、路白に投して剃髮受業し、宗乘を究めて後幡隨院常福寺傳通院等の三大刹を經、元祿六年(一說七年)京都の本山知恩院に主となる、寶永四年三月十一日寂す、壽欠く、(淨土總系譜)

シユーハン 秀繁 二三… 〔曹洞宗〕伊勢安樂寺の禪僧なり、秀繁字は茂林、泰菴文賢に依り曹洞の宗旨を究め、總持寺に出世し、次に泰菴の席を繼きて伊豫安樂寺に遷る、永祿九年圓雲寺を主とり、一住二年安樂寺に皈る、元龜元年正月八日寂す、世壽缺く、法嗣大龍存安あり、(日本洞上聯燈錄)

シユーホー 秀峰 ソンタイ存岱を見よ、

シユーホー 秀峰 ハンシユン繁俊を見よ、

シウホン 秀本 二三〇三 二三七七 〔曹洞宗〕武藏青松寺第十五代なり、秀本字は如實、肥前佐賀城の人、源氏にして馬渡の族なり、少にして龍泰寺の快巖等に依りて童子となり、十四歲にして薙髮し、具足戒を受け徧ねく講席に詣で、性相學を究む、後ち遊方して安州、賢巖、卽非、獨禪、鐵心等の諸禪師に謁し、武藏に至り、青松寺第十三代不中に師事すること七年、後ち十四代獅巖に師事し、寛文十一年大松寺の寂元に招かれ後永平寺に出世し青龍寺に住す、天和元年の春に至り獅巖寂するに迨び青松寺に主となる、周防長門の大守大江氏、安藝の大守淺野氏、土佐の大守山内氏等大に歸向す、後に不背菴を營みて退休す、享保二年十月廿六日に寂す、七十五歲なり、(日本洞上聯燈錄、萬年山志)

シユーヨ 秀譽 二三二六 〔淨上宗〕山城眞福寺の開山なり、秀譽は京都の人、俗姓は熊谷氏なり、幼にして大坂一心寺凡愚の室に投じて剃髮し、珂山に師事して法を嗣ぐ、山城綴喜郡多賀村に眞福寺を剏して開山となり、寛文六年六月六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シユーヨ 秀譽 ガンゴ含牛を見よ、

シユーヨ 秀譽 ショーサイ生西を見よ、

シユーリン 秀麟 (……) 〔曹洞宗〕能登雲興寺の禪僧なり、秀麟字は祥巖、初め尾張雲興寺永山本興に參し、入室印可を受け、總持寺に出世し、遷りて雲興寺に主となる、寂年並に世壽缺く、法嗣大雲永瑞あり、(日本洞上聯燈錄)

シューレー 秀嶺 二九二三……〔眞宗〕越後出雲崎淨玄寺の住持なり、秀嶺は蓮淨院（一に蓮成院に作る）智現子と號す、寮司となり、天保七年より高倉學寮に摩訶止觀、法華玄義、十不二門指要鈔を講し、弘化元年七月二十五日擬講となり、嘉永元年夏金錍論を講す、嘉永五年九月寂す、（眞宗史料）

シューカン 秋礀 ドーセン道泉を見よ、

シューカン 秋潤 ニチシユー日收を見よ、

シューグワツ 秋月 トークワン等觀を見よ、

シューヱー 修榮 ……一三八九、〔戒律宗〕大和大安寺の禪僧なり、修榮俗姓不詳、一說に唐の歸化僧なりといふ、天平の頃、菩提仙那に隨ひて三藏を學び、道璿に隨ひて戒律を究む、大安寺に住し、傳灯大法師位に上る、示寂の年時缺く、著作婆羅門僧正碑文一篇あり、（本朝高僧傳）

シューエン 修圓 一四三一 一四九五 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、修圓は其俗姓を詳かにせす、大和北谷の人なり、賢憬僧都に從ひて法相を學ひ、大小乘に通す、弱冠を過ぎて興福寺に住し、少僧都に任す、又傳法院を開きて第一世となる、師初め傳敎大師より密灌を受け、義眞に依りて顯敎を受く、義眞遷化の後其遺命により延暦寺の總事とならんとす、然れとも衆徒肯せす、乃ち大和の室生山に移居す、承和二年六月十五日寂す、壽六十五、著書因明纂要記鈔二卷、因明纂要記秘心、淸辨量決、五種[illegible]性義、法相燈明記、各一卷、法弟興照、德一、壽廣、春德の四人あり、（元亨釋書 本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シューカク 修覺 二〇〇三……〔淨土宗〕山城三鈷院の僧なり、修覺は土御門天皇の皇子にして理覺寺慶に師事して淨土敎を究め、京都三鈷院に住し、康永二年六月二十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シュークワン 修觀（……）〔淨土宗西山派〕某寺の學僧なり、修觀俗姓生國詳ならす、西山派の開祖證空上人に師事して淨土の宗義を傳へ、初め御殿に住し、後、東國に下り、宗義を弘通す、示寂の年時享壽缺く、門下綽空あり、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

シューコー 修廣 一八八三 一九七一 〔眞言宗〕京都法金剛院の中興なり、修廣字は道御、俗姓は大鳥氏、大和服部の人、貞應二年を以て生れ、三歲にして父を喪ふ、母養ふこと能はずして東大寺の側に棄つ、梅木なるものあり、春日祠に詣て丶抱へ皈りて養育し、東大寺に投じ、十五歲にして剃髮し、十八歲招提寺に往きて圓律玄に具足戒を受け、法隆寺にありて法華、勝鬘、維摩經を聽き、京都靈山院に屬して兩部の密法を傳受し、洛西の法金剛院嵯峨の淸涼寺に至りて念佛會を建つ、都下の緇素化に嚮ふこと十万人なり即ち大齋を設けて發願廻向し、終りて復始む、時の人依て十萬上人と呼ぶ、後、後宇多天皇師の道譽を聞き、圓覺上人の號を賜ふ、後愛宕山に登り、地藏菩薩に母に逢はんことを禱り、播磨に至りて邂逅し、大に喜びて共に鄕に皈り、父の遺迹に寺を營み、佛事を修して冥報を增す、嘉元年中招提寺の衆請して主席を備せしめんとせしが、固辭して應せず、勤性をして代り往かしめ、應長元年九月二十九日寂す、壽八十九、臘七十一、門人塔を法金剛院に立つ、師生前造るところの伽藍三十所、四部の弟子凡そ十万人あり、書を善くし自像あり（本朝高僧傳、續本朝書

史)

シユーニン 修仁(……) 〔眞言宗〕京都仁和寺の阿闍梨なり、修仁は大僧正深覺を禮して灌頂をうけ、廣澤流を嗣く、其の傳缺く、付法 弟子增蓮濟海の二人あり、增蓮は石山青龍院に住し、密學に精通し 護摩要抄を撰す、增蓮付法の弟子菩源あり、其下に齊朝相實の二子を出だす、(傳燈廣錄)

シユーニユー 修入(……) 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、修入は比叡山の朗善和尚の門に出て密教に精くして甚た神異あり、嘗て法幢院に淨藏と共に法を角し、奇靈の行を演して衆を驚かすと云ふ、(本朝高僧傳)

シユーギヨー 集堯(二二三三) 〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、集堯字は仁恕、號は雲泉齋といふ、信濃の人なり、出家して相國寺に留り、天正の頃詩名高し、(▲增補見よ)

シユーク 集九(二一四六) 〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、集九一に周九に作る、字は萬里、號は梅菴と云ひ、別に梅花道人、漆桶道人と云ふ、鄉貫詳ならず、京師相國寺に入りて大圭宗价禪師に師事し、寺中の雲頂院に住す、應仁の初、戰亂を避けて美濃尾張に浪遊し、遂に法衣を脫して居士と稱す、文明の末江戸に入り、太田道灌の眷遇を受け、詩文を以て聞ゆ、文明十八年上杉定正に招かれて鎌倉に赴き尋て美濃に歸り、草菴を結びて隱棲す、寂年月日詳ならす、門人二人あり、千里、百里と云ふ、著作天下白二十五卷、蘇東坡詩註、帳中香二十一卷、(黃山谷詩註)、幷に梅花無盡藏二卷、棘門集一卷あり、(日本名僧傳、五山高僧小傳、本朝通鑑、古今人物志、延寶傳燈錄、)

シユーヨー 集膺(二三九九 二四七一) 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、集膺字は天眞と云ふ、龍澤寺の東嶺に師事して參究功を積み、印記を蒙る、相國寺塔頭玉龍菴に住す、文化八年寂す壽七十三、

シユーガイ 衆鎧(二三八九 二四七一) 〔眞宗〕大坂淨明寺の住僧なり、衆鎧字は月皎、號は無爲室といふ、初め直入院に隨從して宗意を傳へ、後、明教院を師とす、文化四年安居初めて門末徒衆の懸緒を発されし時、師及び越中の惠航に代講を命せらる、同八年正月十六日寂す、壽八十三、著作易行品餘蘆十卷、二乘成佛章一卷、淨土論隨釋四卷あり、(淸流紀談)

シユーモク 衆目 センソー泉奘を見よ、

シユーゲー 聚藝(二二〇二 二二七二) 〔曹洞宗〕武藏禪林寺の開山なり、聚藝字は能山、薩摩國藤原氏の子なり、父の任に從ひて相摸國鎌倉に生る、幼にして世相を厭ひ、十歲にして上總の東昌寺に出家す、即菴和尚に師事し、後、諸禪師に參見すること凡そ十餘年にして歸る、卽菴付法傳衣す即菴將に示寂せんとするとき、師を舉げて席を繼かしむ、再び諸嶽山に住す、信徒請て興聖寺を開かしむ、關東の管領足利持氏大に歸依し、武藏國六浦の莊に就て禪林寺を創し師を請す、永正九年十一月廿六日寂す、壽七十一、臘六十一、(日本洞上聯燈錄)

シユーヨ 聚璵 イカク意覺を見よ、

シユーサンイン 鷲山院 ニチホー日鳳を見よ、

シユーシヨー 鷲翔(……) 〔曹洞宗〕越前福聚寺の禪僧なり、鷲翔字は翅天、武藏の人、初め大空に參し、次に

東木長樹に松巖寺に於て參し、其法を嗣く、越前の福聚寺に住し盛に宗風を舉揚す、寂年月日及ひ壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シユーセンイン 鷲仙院　ニチヨー日陽を見よ、

シユーホーイン 鷲峰院　ニチクワン日桓を見よ、

シユーアン 州菴　シユーホー宗彭を見よ、

シユーオー 州翁　ジユキン壽欣を見よ、

シユーズイ 拾隨　シヨートー紹等を見よ、

シユーデン 拾傳　リヨーキヨー良曉を見よ、

シユーガン 嘯巖　ゼツコ全虎を見よ、

シユーグワン 終願　シヨーガン清巖を見よ、

シユーゲンイン 收玄院　ニチユー日祐を見よ、

シユーヨーイン 取要院　ニチゴン日言を見よ、

ジユーイ 重怡 一七三五―一八〇〇 〔天台宗〕山城鞍馬寺の僧なり、重怡は伯耆の人、叡山に登りて顯密を究め年四十にして鞍馬寺に投す、寺の講堂に丈六の阿彌陀佛像あり、重怡其前に禁足し、六年の間兩界法を修す、大治元年三月より保延六年八月まで、十四年の間に阿彌陀佛號を唱ふるに小豆を以て算す、積て二百八十七斛餘に至る、一箱に蓮子木槵子を貯へて佛前に置き、來詣の人を見ては寶號を勸唱し、傍に筆硯を備へて自ら其數を記す、凡そ三千五百斛に滿つと云ふ、是年命終の期を知りて沐浴し、藕絲の衣を被り、一堂に諸弟子を集めて阿字觀を說きて懇に敎導し、左手に五鈷杵を持し、右手に念珠を拈し、西向して晏然眠るか如く寂す、壽六十六、(元亨釋書、本朝高僧傳)

ジユーエン 重圓 一八二三―一九〇九 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、重圓俗姓は源氏、忠重の子なり、幼にして出家し、大小乘を學び、眞圓に師事して兩部の大法を受け、傳法大阿闍梨となり、更らに良慶に謁して三大部を習ひ、金玉集を記す、寬喜年中眞言所習之義を記し、僧正に敕任す、これより四宗證義一寺探題長吏別當等を經、建長元年六月二十二日寂す、壽八十八、(三井續灯記)

ジユーキヨー 重慶 二二一三―二二七二 〔淨土宗〕大和觀音院の中興なり、重慶俗姓は橘氏伊賀國伊賀郡の人なり、幼にして薙髮し、東大寺重祐に師事して法藏大德の衲衣を付せらる、師密乘に精通し野澤の法流研究せざるなし、初め大和忍辱山に住し、次に觀音院を中興し、住持久しうす、師平常念佛三昧を勤め、兼て阿彌陀の式不動護摩を修す、慶長十七年十月十五日寂す、壽六十、(續日本高僧傳)

ジユーゲン 重源 一八五五―…… 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、重源字は俊乘、紀季重が子、長谷雄十二世の孫なり、俗名は重定、俄に佛門を慕ひて出家得度し、醍醐寺にありて密敎を習ひ、後源空に隨ひて專修念佛の法を受く、畿内に遊行して念佛修行を勸獎す、一時高野山に留り白蓮社に倣ひ同志相謀りて念佛修行す仁安二年宋に入る、四明山に明菴西と會し伴ひて天台山に登り、蒸餅峰の阿羅漢を拜し、又明州に還りて鄮嶺の舍利明光を發するを見、翌秋東歸す、治承四年東大寺燒け、火災佛殿に及ふ、朝廷源空の推擧により師に命して幹事に當らしむ、師一輪車を造り自ら其中に坐し、左に詔書を奉し、右に幹疏を持し、諸國を巡行して四民を勸化す、普く

淨財を募り、佛工を集め、十餘年を經て佛殿落成す、建久六年三月千僧を集めて供養し、鳥羽天皇百司を從へ寺に幸し、賴朝諸將を率ゐて同く列す、師此年六月六日東大寺の某院に寂す、壽七十餘、（本朝高僧傳、高野春秋、淨土總系譜、）

ジユーコ　重故　エーショー英松を見よ、

ジユーシユン　重舜　二〇二八 二〇八一　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、重舜は康曆二年春剃髮受戒して舜淸に就き、初め倶舍を學び、後天台を習ふ、應永二年夏大堂の立義となり、廿五年題者の職に居る、應永廿八年六月十九日寂す、壽五十四、（三井續燈記）

ジユーセン　重泉　二〇一五 二〇七〇　〔天台宗〕美濃長瀧寺の學頭なり、重泉は藤原氏、父の名は重孝、播磨の人、西宮左大臣高明の後なり、但馬に移りて師を生む、十五歲にして剃髮し、泉一、衍舜、泉尊、房淳の諸師に天台倶舍を學び、所聞の法を記

後乘上人

して意識分別と名け、三十餘帖に及ぶ、後美濃長瀧寺に入り、學頭職に居る　應永十七年八月十一日寂す　壽五十六、

ジユーゼン　重禪　（……）　〔律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、重禪は鄕貫詳ならず、律師に圓照師事す、初め眞言菩薩より滿分戒を受け、禪慧律師より教字を受け、後圓照の弟子となる、戒律眞言三論に通し、盛譽なり、寂年缺く、（律苑僧寶傳）

ジユーテー　重貞　二三三四 ……　〔淨土宗〕安房善生寺の開山なり、重貞は誠蓮社信譽と號し、伊豆伊東の人、法を傳察に嗣ぎ、安房朝夷郡加茂村善生寺を開く、延寶二年六月十四日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ジユーニヨ　重如　一八八二 一九五九　〔眞言宗〕大和金剛王院の僧なり、重如字は日蓮、大和の人なり、六歲にして東小田原寺に入り、胎蓮法師に師事し、胎蓮の金剛王院に住するや、師も隨從し、稍長じて灌頂を受け、秘呪を習ひ、普く密塲に遊ひて小野廣澤二流を究む、師寡欲にして居止を定めず、正安元年五月十八日白毫寺に於て寂す、壽七十八、（本朝高僧傳）

ジユーユ　重愉　一七五六 一八二四　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、重愉俗姓は藤原氏、右衞門權佐重隆の子なり、出家して仁實に天台教を學び、應保二年天台座主となる、長寬二年正月五日寂す、壽六十九、（天台座主記）

ジユーヨ　重譽　（一七九五……）　〔三論宗〕大和光明山の學僧なり、重譽は鄕貫詳ならず、東南院の覺樹に就いて三論を學び、中川の實範に就いて密法を傳ふ、後、大衆に交はるを厭

ひ、大和光明山に菴を營み、淨土敎を修す、某年其山に寂す、著作秘宗敎相鈔十卷、深密鈔、十住心論略鈔（一名肝心鈔）、菩提心論鈔、西方集、各三卷、字記鈔二卷、五相成身記一卷、護摩雜記（卷數未詳）あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

〔考〕重譽は保延頃の人なり、

ジユーヨ 重譽 タンヤク湛益を見よ、

ジユーイ 住意 二二九〇…… 〔淨土宗〕筑後二尊寺の開山なり、住意は傳譽と號し、筑後の人なり、廓山の法を嗣ぎ州の蛭池村に二尊寺を開き、寬永七年某月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ジユークワン 住關 リヨーシン良信を見よ、

シユーシン 住心 ニチヨー日耀を見よ、

ジユーテツ 住鐵（……） 〔淨土宗〕下野淨光寺の開山なり、住鐵は其鄕貫詳かならず、良信に師事して法を嗣ぎ、小山に淨光寺を開く、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

ジユーニヨ 住如 コーチヨー光澄を見よ、

ジユーヨ 住譽 イデン以傳を見よ、

ジユーレン 住蓮 一八六七…… 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、住蓮は東大寺の維那なる實遍の子なり、源空上人に師事して淨土敎を受け、念佛講經を事とす、建永元年十二月同門安樂と共に鹿ヶ谷に別時念佛會を修す、後鳥羽上皇の宮女等念佛會に參し落髮して尼となるものあり、上皇大に怒り、宮女誘引の故を以て承元元年二月九日同門安樂と共に近江蒲生郡馬淵に於て斬に處せらる、（愚管抄、淨土總系譜、淨土傳燈錄、安樂上人傳、）

ジユージ 十地 タンネン湛然を見よ、

ジユーシユー 十洲 ホドー補道を見よ、

ジユーシヨー 十聲 二〇八七…… 〔淨土宗〕岩城專稱寺の開山なり、十聲は號は成蓮社良祐、俗姓は源氏、山城八幡の人なり、良山に師事し、奧州岩城に專稱寺を創し、德望四邊に高し、應永三十四年十一月二十四日寂す、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

ジユージヨー 十乘 一九二〇 〔天台宗〕河內磯長の學僧なり、十乘は比叡山に居りて五時八敎を討究し、一心三觀を修練す、後、河內磯長に菴居す、正元元年貿相照金山院に住し、師を招きて、摩訶止觀を講せしむ、師京都にあること二年、又舊菴に皈り、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ジユータツ 十達 シユンサイ俊才を見よ、

ジユーニヨイン 十如院 ニチギヨー日行を見よ、

ジユーガ 從賀 二一六一 〔曹洞宗〕美濃龍泰寺の禪僧なり、從賀字は蘭恕大室祖圭に參し七年にして發悟、文龜年中大室の寂するに及び、遺命に依りて美濃龍泰寺の席を補す、某年同寺に於て寂す、壽缺く法嗣林叟正芳一人あり、（洞上聯燈錄）

ジユーカク 從覺 ジシユン慈俊を見よ、

ジユーニヨ 從如 コーチヨー光超を見よ、

ジユーガク 縱壑 コーキヨ光巨を見よ、

ジユーシヨー 縱性 エンシ圓旨を見よ、

ジユーヨ 縱譽 シンガン心岩を見よ、

ジユーケン 充賢（……） 〔眞宗〕越中某寺の學僧なり、充賢は越中の人なり、學自他に涉り宗乘は快樂院に承けて造

諳頗る深し、殊に唱導に巧なるを以て講説も亦自ら其習氣あり、諡して淨信房と云ふ、著作帖外讃講義、淨土和讃講義ありといふ、（學苑談叢）

ジユーベン　什辨（一九二〇—二〇一一）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、什辨俗姓は高氏師直の子なり、出家して長乘增仁の二師に事へて顯密を學び、名天下に達す、觀應二年四月廿三日盜賊に殺さる、時に年九十二、世に慈心上人と呼ぶ、（三井續燈記）

シユクヱー　叔英　シユーバン宗播を見よ、

シユクホー　叔芳　シユーチユー周仲を見よ、

シユクオー　肅翁　シユガン珠巖を見よ、

シユンエ　俊惠（……—……）京師の歌僧なり俊惠は京都の人、俗姓は源氏俊頼の子なり、和歌を善くし、頗る父の風ありて世に推重せらる、寂年壽缺く、著作歌苑鈔、歌仙合あり、（大日本史）

シユンエー　俊英（一九〇七）（……—）京都の畫僧なり、俊英は後深草帝時代の人なり、畫を能くし、嘗て發願して藥師如來十二神將の像を圖す、甚だ靈驗ありたりと云ふ（皇朝名畫拾遺）

シユンエン　俊圓（一七六七—一八二六）〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、俊圓は鄕貫詳ならず、季仁に就て天台敎を修め、長寬二年天台座主に任ず、仁安元年八月二十八日寂す、壽六十、（天台座主記）

シユンオー　俊雄（……—二一七六）〔眞言宗〕山城東寺寶菩提院權僧正なり、俊雄は醍醐山覺雄の流裔にして弘宣の門弟なり、弘宣に招かれて大法を付せらる、永正十三年八月二日寂す、付法二人高慧宗承の二人あり、（續傳燈廣錄）

シユンオー　俊雄（……—……）〔淨土宗〕江戸靈山寺の僧なり、俊雄は最蓮社勝譽と號し、其鄕貫詳かならず、詮雄に師事して淨土敎を學び、其法を嗣ぎて後、江戸靈山寺に住す、時に寺久しく檀林の外にあり、師これを嘆じ、再三檀林となさんことを幕府に請ひ、遂に許さる、後席を鑑了に讓り、熊谷寺に退隱し、某年寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

シユンオク　俊屋　ケーゲン桂彥を見よ、

シユンオン　俊音　ライユ賴瑜を見よ、

シユンガ　俊賀（二〇五七—……）〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、俊賀字は乘圓房といふ、公紹の法を得て二十八祖となる、應永四年五月五日寂す、付法二人あり義俊俊豪といふ、（續傳燈廣錄）

シユンカイ　俊海（二四六一—二五四三）〔新義眞言宗〕江戸護持院第四十三代なり、俊海字は秀學、俗姓は野中氏、武藏埼玉郡上大越村の人なり、十二歲にして邑の德性寺俊澄に從つて薙髮し、十六歲にして豐山に登り、留學三十四箇年、小野廣澤二流の奧義に達し、慈眼院に住し、一山大衆の第一座に昇る、嘉永二年三保谷應德寺に遷り、慶應二年幕府の命により、湯島根生院に轉す、明年二月護持院に進み、大僧都に任ず、明治十六年六月七日寂す、壽八十三、（新義眞言宗史科）

シユンカク　俊覺（二〇〇三—……）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、俊覺は康永二年東寺の長者となり、權僧正に任せらる、其寂年缺く、（東寺長者補任）

シユンキヨー 俊慶 二〇七五 二一四三 〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、俊慶は俊增大僧都の正脈を嗣ぎて松橋の第三十五祖となり、文明十五年十月十六日寂す、壽六十九、付法二人澄惠惠尊と稱す、（續傳燈廣錄）

シユンクワン 俊觀（……）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、俊觀は慶俊眞玄二師に就きて敎義顯門を學び、晩年茅菴を北山西岡寺畔に結びて屛居し某年寂す、世に心蓮上人といふ、（三井續燈記）

シユンケン 俊憲 二〇六二 …… 〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、俊憲は俊盛の灌頂を受け、小野松橋流の三十一祖となる、應永九年五月寂す、付法の弟子一人弘意といふあり、（續傳燈廣錄）

シユンゲン 俊玄 一九九三 二〇四九 〔眞宗〕山城本願寺第四代なり、俊玄號は善如、第三世宗昭上人の孫、從覺法印の子、正慶二年二月二日に生れ、童名を光養麿、權大納言俊光の猶子たり、得度して權大僧都に任じ、祖父宗昭上人の法嗣となり、文和元年就職し、康安元年宗祖一百年忌の法會を修し、康應元年二月二十九日に在職三十八年にして寂す、壽五十七、（門跡傳本山寺誌、大谷略譜）

シユンゲン 俊彦 リヨータ亮汰を見よ、

シユンコ 俊箇（……）〔曹洞宗〕相摸總世寺の禪僧なり、俊箇字は一宇、相摸の人、初め安叟に總世寺に參し、四年の後辭して參方し、再び總世寺に歸へろ、時に安叟既に寂し、智海宗徹主席にあり、乃ち入室して衣法を付せられ、後、永平寺に出世し 智海の席を踵ぎて總世寺に遷る、晩年宗淵寺に退去して某年寂す、壽缺く、法嗣忠室宗孝あり、（日本洞上聯燈錄）

シユンコー 俊光 二二五三 …… 〔淨土宗〕越後三光寺の開山なり、俊光は鎭蓮社麿譽と號す、其鄉貫詳かならず、道譽上人に投して淨土敎を學び、總州久留里正源寺、越後三光寺を開く、文祿二年寂す、（淨土總系譜）

シユンゴー 俊豪 …… 〔眞言宗〕山城醍醐山慈心院の大僧都なり、俊豪は俊賀の法を嗣ぎ、又公紹大僧正に就きて悉地を得、小野流の二十九祖となる、付法の弟子一人俊盛あり、（續傳燈廣錄）

シユンゴー 俊豪 一七七五 …… 〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、俊豪は早く比叡山に上りて東塔の玉泉房に住し名を顯密に擅にす、永久三年秋鎌倉に蟄居し、八月十五日寂す、（本朝高僧傳）

シユンゴン 俊嚴 一九一四 …… 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、俊嚴は關白藤原俊經の子なり、醍醐寺僧正親嚴に從ひて、兩部の灌頂を受け、英名高し、貞永元年秋權大僧都に任す、建長三年夏東寺の長者職に補し、四年六月雨を祈り法驗ありて僧綱に叙せらる、同六年十一月二十九日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユンサイ 俊才 一九一九 二〇一三 〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、俊才は十達と號す、少にして出家し、師に隨ひて登壇受具す、新禪院の聖然に從ひて華嚴を受け、眞言毘尼を兼ね修む、初め京都の大通寺に住しゝが、西國に巡禮し、歸へりて戒壇院を領し、眞言院に移つる、後醍醐天皇菩薩戒を受けて國師號を賜ひ、後鎌倉の稱名寺に住す、文和二年十月二日

寂す、壽九十五、臘七十六、著作五教章要文集三十二卷あり、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

シユンサク　俊篤 ……二二五六 〔曹洞宗〕武藏青松寺の第七代なり、俊篤字は瑞翁と云ふ、備中の人、俗姓源氏なり、早年にして三寶に皈し、洞松寺に投して得度し、具足戒を受くる後、四方に歷遊し、初め天嶺和尚に謁し、次に武藏江戶に下り青松寺第六代久室玄長の室に入る、玄長擧して語默は離微に渉り如何か不犯を通す、と、師曰ふ和尚を鈍置す、と、玄長一喝す、師省あり、次の日前話を理して問ふ、如何が不犯を通せん、と、師曰ふ出つれは戶に依り、入れは門に從る、玄長曰ふ、石頭道ふ、昔も亦達せす、信も亦通せす、如何か會す、と、師曰ふ、雪後始めて松柏の操を知る、と、玄長領し、遂に其法を嗣く、總持寺に出世し、後、玄長の讓を受けて青松寺の第七代となる、德川家康師の道譽を慕ひ、天正九年貝塚の地二十二石を寄附す、慶長元年六月二十九日寂す、壽缺く、法嗣頭室伊天あり、師の開創にかゝるもの、臥雲山龍昌寺、慈雲山長泉寺等あり、（萬年山志、日本洞上聯燈錄）

シユンサン　俊算 一八九二 一九七二 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、俊算は實行、靜勇、幸尊の三師に受學し、天台に精通す、應長年中大學頭となり、後三河に居り、正和元年蠟月九日寂す、壽八十一、（三井續燈記）

シユンシヨー　俊承（………）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、俊承は俊範僧都に師事して法を承け、門下の四神足と稱せらる、横川華林房に住す、寂年及壽缺く、著作智法藏重門界訣若干卷あり、（本朝高僧傳）

シユンシヨー　俊承 ……二〇八二 〔臨濟宗〕山城相國寺の禪僧なり、俊承字は西胤、筑後の人、鄂隱慧奯の法弟にして、相國寺に出世し、後雲松軒に退去し、詩偈を以て鳴り、應永二十九年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シユンシヨー　俊晴（一八四五）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、俊晴字は顯揚房と稱し、俗姓生國詳かならす、出家の後、諸師に歷謁して、密敎を究め、高野山大傳法院の學頭となり、蓮華院を開き第一代となる、後世其門流を蓮華院流と云ふ、寂年缺く、（結網集、本朝高僧傳）

〔考〕俊晴は文治前後の人なるべし、

シユンシヨー　俊證 一七六六 一八五二 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、俊證俗姓は源氏、中務大輔能明の子、出家して世豪に密敎を學び、文治五年五月二十八日東大寺別當に任じ、又東寺長者となる、建久三年三月十七日寂す、壽八十七、（東大寺別當次第、仁和寺諸院家記、）

シユンシヨー　俊芿 一八二六 一八八七 〔戒律宗〕京師泉涌寺の開山なり、俊芿字は我禪、號は不可棄、仁安元年八月十四日肥後飽田郡に生れ、甫めて四歲其舅池邊寺珍曉法師に就き、七歲釋典を讀む、九歲味木縣吏源憑の養子となり、飯田山の僧を延きて大般若經を學ふ、十歲にして吾平山の莊嚴房に依りて法華經を讀み、尋いて飯田山の眞俊に從ひて精進勤學、十八歲に至りて剃髮し、翌年四月八日太宰府觀音寺にて納具し、歸へりて眞俊の弟子相俊に隨ひて益々天台眞言を究め、戒律の

重要なるを感して京都奈良の間に周旋し大小の戒を問ひ、勝願院の蓮迎に謁して行事鈔を聽く、遊學三年の後、郷里に歸へりて筒嶽に棲み、正法寺を營み、密灌を傳へ、戒法を授く、建久十年四月安秀長賀の二子を率ゐて宋に渡る、時に寧宗の慶元五年なり、師兩浙の名刹を遊歷し、天台山に登りて五百の應眞を禮し、雪竇山に到りて禪要を咨詢し、去りて徑山の蒙菴聰に參し、同六年春四明山に掛搭して景福寺如菴了宏律師に依りて毘尼を習ひ、隨侍六年、嘉泰二年冬再ひ天台山に登り、赤城寺に寄寓し。翌春智者大師の塔を拜し、大慈寺に夏坐す、秀州超果寺の北峰印道譽一世に高きを慕ひ、之に造詣して居ること八年、天台の敎觀硏究して餘す所なく、屢々秘法を修して靈應を感す、曾て周氏の妻の難產を禱り、其德により阿彌陀、觀音、勢至の像を造りて贈らる、後師之を建仁寺の榮西に與へ、◎榮西は亦後鳥羽上皇に獻すと云ふ、嘉定元年師北峰を辭して下天竺に寓し、日に諸師と天台の敎義を討論し、衆僧靡然としを皆伏す、會稽山に朴翁詮は義銛字は無懷といふ者あり、廣く內外に涉獵し、禪敎並に通す、師の風を慕ひて長篇の詩、及ひ南山靈芝の二像を寫し、樓鑰參政の賛を付したるものを贈り來る、智瑞律師も亦師と道交深く、因りて師の頂相を圖して祖堂に入る、師書を能くし、寧宗帝の詔により如意輪咒を書寫す、彼國の王侯士大夫、多く師の德を稱嘆して措かす、來りて書を求め、道を問ふ者門に充つ、師宋にあること十二年、敎禪律部皆其蘊を極め、嘉定三年俄に東歸の意を生し、超果寺に北峰印を辭し、法語及ひ唯心淨土說を付せらる、岸福寺の志隱、開元寺の道源、景福寺の道

常、會稽山の曇秀、皐都の雷峰等、一時の諸大德皆序偈を寄せて之を送る、師四明山の律寺に寓して便船を待つの序次溫州に往き廣德律師に七滅諍を學ひ、四年春二月の初め四明山に歸へり、蘇長六の船に乘して出帆し、五晝夜を經て長門安武郡に達す、實に我か建曆元年なりとす、舶載し來るもの佛舍利三粒、戒律宗の經鈔三百二十七卷、天台の章疏七百十六卷、儒典二百五十六卷、雜書四百六十三卷、都合二千一百餘卷、其他圖書、碑帖、器物、若干なり、時に建仁寺の榮西周防に在り、師を博多に慰勞して勸めて京都に入らしむ、師乃ち、四月京師に入り建仁寺に寓し、二年冬稻荷の崇福寺に移つる、建保二年我か留學僧良祐歸朝するに際し、之に託して下天竺の古雲粹、北峰印の眞影を師に寄せ、景福寺の道常鐵鉢を贈り來る、六年夏法弟道賢師を京都仙遊寺に延く、後鳥羽上皇高倉上皇に資を得て殿堂を修繕す、二上皇師を賀陽持明の二宮に召して菩薩戒を受け、順德上皇も亦之を受けて永劫緣會の御約を賜ふ、貞應三年七月勅して仙遊寺を陞せて官寺となす。同年十月肥の刺史平家連の招により、相模三浦に到り、法を說き、戒を授く、特に如實尼平泰時師を幕府に召し、菩薩戒を受け、上下舉りて歸向す、嘉祿元年冬初めて仙遊寺に重閣講堂を建て、翌年春大殿、山門、經堂、祖堂、華構相尋きて成り、寺號を改めて泉涌寺と名く、卽ち安居を結ひ、講筵を開く、時人稱して台律の中興となす、師藤原道家の爲に佛法宗旨論、念佛三昧方法、坐禪事儀、各一卷、三千義備二卷を撰し、又唯心の號を授く、京畿の紳縉皆其高風を慕ひ、師の門を叩く者多し、二年冬病を示し、翌安貞元年春

其治すへからさるを知りて遺誡を書して法弟に囑す、道家來り訪ひて病を看、讃岐の一村莊を付す、師即ち北峰の北語、及ひ唯心淨土文を書し、宋刻の法華經を副へて返璧す、三月七日衆に訣を告け、八日偈を書して曰く、生來循學、經律論教、一時打拼、寂年無容、と、筆を擱きて寂す、壽六十二、臘四十四、遺骸を寺の南に葬むる、法弟思宜、心海、思眞、承仙、思敬、賴尊、尊隆、信圓、宗舜等あり、應永年中後小松天皇勅して師に大興正法國師の號を追賜す、明治十六年勅して月輪大師の諡號を賜ふ、(元亨釋書、本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

シユンシヨー　俊性　一九四七　〔淨土宗〕近江某寺の僧なり、俊性は其俗姓生國詳かならず、記主禪師良忠に參して淨土教を受く、弘安十年十一月八日近江に於て寂す、壽缺く、(鎭流祖傳)

シユンシヨー　俊盛　二二七二　二三四〇　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十代なり、俊盛字は存仙、俗姓は折本氏、常陸天神宮地の人、慶長十七年の春を以て苅部邑に生る、十九歳密かに家を出で、長福寺に入り、自ら剃髮し、俊宥に師事して沙彌戒を受け、尋で瑜伽行を修む、寛永十年秋俊宥南圓寺に遷りしを以て師も隨從して三摩耶戒壇に登り、密灌を傳へらる、同十二年京都智積院に往き、元壽僧正に見え、服勤十年、皈りて俊宥に從ふ、正保四年十月京都に赴き、良與に教を叩く、承應元年冬良譽豐山に主たるに及び、師も山に登る、明暦元年春梅心院に住し、徒弟を教諭す、寛文七年の秋苅部長福寺に於て具支灌頂を修し、復長谷寺に皈る、仝九年夏官命を蒙り、江戸知足院に住し、十年冬筑波の本院に赴き、論講を開張すること凡そ五次、三旬を經て江戸に歸る、延寶二年春有司に命じて筑波山の堂寺及び社頭を修造せしに、十月落成せるを以て大曼荼羅供養を行ひ、次で兩部灌頂を修す、仝三年七月命に依り賴意の席を繼ぎ豐山第十代となり、仝年九月僧正に任せられ、仝四年春江戸に往き、將軍家綱に謁してこれを奉謝し、五月日光に東照宮の神祠を拜し、且つ筑波兜島を巡視す、師一住六年、延寶八年三月二十六日補を尊如に囑して寂す、壽六十九、(豐山傳通記)

シユンシヨー　俊正　ミヨーニン明忍を見よ、

シユンジヨー　俊乘　ジユーゲン重源を見よ、

シユンセン　俊泉　センソン泉尊を見よ、

シユンゾー　俊增　二〇五〇　二一一六　〔眞言宗〕山城慈心院の大僧正なり、俊增は顯祐の法を嗣きて松橋の三十四祖となる、康正二年八月廿日寂す、壽六十七、付法一人俊慶と云ふ、(續傳燈廣錄)

シユンテン　俊典　クワイイ快意を見よ、

シユンドー　俊道　エガク惠岳を見よ、

シユンパ　俊把　二二五七　二三一七　〔淨土宗〕山城清涼寺の學僧なり、俊把一名堯鑑、號は仙譽と云ふ、俗姓は有原氏、山城國愛宕郡の人、慶長二年四月八日に生る、十四歳にして嵯峨清涼寺堯然に就て出家す、十六年大和國長谷寺覺忍に謁して密教を學修す、後、洛東禪林寺に至りて小坂の法流を果空より受く、十九年にしを下總國大岩寺潮龍の會下に參し、十三回の階臘を歷て鎭西の教義を精研す、手燈斷食して義學を勉勵す、潮龍甚だ之を異として、一及と字す、遂に宗脈圓戒璽書布薩等を

傳ふ、寶永三年京師に出で白旗流の宗義を弘通す、帝召して圓戒を稟く、后妃公卿皆其會に預る、皇太后慧通の大法を稟け給ふ、帝喜賞して上人の號を賜ふ、清凉寺火災に罹る、師再興して功あり、其餘寺を修營すると十五所なり、明曆三年六月一日寂す、壽六十一歲、(鎭流祖傳、續日本高僧傳)

シユンハン　俊範（一八八一）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、俊範は其俗姓生國詳かならず、久しく奈良にありて法相宗を學び、後範源に師事して智者の旨を受け、且性相の奥旨に達す、永久三年僧都に任し探題となる、後嵯峨上皇師に就て止觀を受け、敕により山麓の太和莊に居りて學徒を誘掖す、寂年及壽歆く、門下の神足に靜明、經海、承瑜、俊承の四人あり、(本朝高僧傳)

シユンハン　俊範　コーハン公範を見よ、

シユンヨ　俊譽（一九六一）〔眞言宗〕山城醍醐山無量壽院の七代なり、俊譽は竹內法印と稱す、閑院左大臣藤原實房の孫にして知足院二位公俊の子なり、建長六年六月二十一日許可灌頂を憲深僧正に受け、康元二年二月二十七日遍智院に庭儀灌頂を行ひ、眞俶の法を受けて松橋の七世となる、文永二年十一月八日少僧都に任し、正安三年十一月二十六日寂す、壽歆く、(續傳燈廣錄)

シユンヨー　俊鷹　ドーショー道靑を見よ、

シユンリヨー　俊良　ソンニョ尊如を見よ、

シユンレー　俊嶺（二三九六）〔眞宗〕肥前田代西法寺の住持なり、俊嶺は知空の高足にして、西國を弘化し、頗る家聲あり、西法寺を重興し、本山別院と爲し、筑紫御坊といふ、元文年中寂す、壽歆く、(本願寺通紀)

シユンエ　舜惠（一九七四－二〇四二）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、舜惠は十五歲にして出家し、剃髮の後倶舍天台眞言の深義を學び、又授決集を習ふ、所聞の法を記して法界記と號す、永德二年二月九日寂す、壽六十九、(三井續燈記)

シユンエツ　舜悅（二一六七－二二八六）〔曹洞宗〕遠江石雲寺の禪僧なり、舜悅字は隨翁　山城國多麻郡の人なり、其母未だ嫁せず、偶々奇夢を感して孕むことあり、永正四年二月五日生る、其父母其父なくして產するを疾み、之を逐ふ、女乃ち去つて樹頭に棄つ、三日の後之を見れば氣貌明潤なり、大に驚て之を收む、長するに及んで聰敏なり、十三歲にして山田の廣園寺に出家す京師の南禪寺相國寺に歷參す、天文九年傑山遠江國石雲寺に開法す、師乃ち往て師事して、翌年に至れり、山井城主北條氏照師の德に皈し永祿九年牛頭山宗關寺を興して師を請す、相摸國小田原城主北條氏康師を招て道を問ひ、戒を受く、其奏により勅あり紫衣幷に佛國普照禪師の號を賜はる、天正元年の秋に至りて開堂す、天正十七年遠江國石雲寺に住す、翌年春狹を得て牛頭山に歸る、是夏騷亂に由て寺兵火に罹る、是れより後東西至る所緣に隨て化導す、信徒地を捨て禪室を建るもの六所なり即ち寶珠、輝窻、興嶽、雲龍、良泉、信松等皆師を延て第一代となす、寬永三年秋牛頭に還て疾む同しき十月廿六日寂す壽百二十歲臘百七(日本洞上聯燈錄)

シユンオー　舜翁　リヨーオー良雄を見よ、

シユンギヨク　舜玉（二二一七－二二三一）〔曹洞宗〕美濃安住の開寺山

なり、舜玉字は光國、伊豆の人、俗姓は平氏、北條の族なり、里院にて落髮し、三河泉龍寺にて克補契嶷に參し研究久しくして入室し、永平傳來芙蓉楷祖の法衣を付せらる、丹波剌史戶田全香居士三河の渥美郡に全久院を建て師を請す、師乃ち克補を開山とし、自ら二世となる、享祿四年遠江の大洞寺に住し、三河の龍溪寺泉龍寺に歷遷す、尋いて同國安養寺、信濃の瑞光寺を剏して始祖となり、晚年美濃明智に到りて安住寺を建つ、永祿四年八月十一日寂す壽八十五法嗣巧安順智あり(日本洞上聯燈錄)

シユンクー　舜空 二二五九 二三三四 〔融通念佛宗〕攝津平野大念佛寺第四十三代なり、舜空一名は良惠、攝津花田の人なり、俗氏名を澤池源右衛門と云ふ、家富豪の聞えあり、萬治三年正月三日四十六歲にして大に感發するところあり、家を男源治に讓り、出家して舜空と云ふ、大念佛寺に入り、四十二代良實上人の弟子となりて宗意を傳へ、精修鍊行す、幾もなく大念佛寺の第四十三代となる、寬文元年大念佛寺と大原南坊との爭論あり、師江戶に出て大念佛寺の爲めに力を盡し、遂に二寺別立し、大念佛寺は一宗の惣本山となる、寬文七年大堂建立の志を發し、同十二年夏梁桁二十間四方の大堂工事落成す、萬治元年十月職を弟子崇觀に讓り、花田に皈隱し、舜空寺を開く、延寶二年七月四日寂す、壽七十六、(大念佛寺記錄、西本良察氏返信)

シユンコク　舜國　トージユ洞壽を見よ、

シユンサン　舜山　ホタク補澤を見よ、

シユンシユク　舜叔　コーゼン宏善を見よ、

シユンシヨー　舜昌 一九一五 一九九五 〔淨土宗〕京師知恩院第九代なり、舜昌俗姓は橘氏、近江國志賀の人なり、父は弓削正家、母は小野氏、正月二十五日に生る、十一歲比叡山に登り、天台の隆眞に歸して出家す、天資文才あり、法印に擢でられ、功德院に住す、後伏見太上皇勅して圓光大師の傳を編せしむ、師諸傳を集めて一部四十八帖となして天裁を請ふ、上皇感喜し、勅して畫圖を附せしむ、所謂勅修御傳記なり、師尋て述懷鈔一篇を製す、如一國師に法を嗣き、知恩院第七代の住持となる、建武二年正月二十五日寂す壽八十餘、著作述懷鈔、上人繪詞傳後世に盛行す、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

シユンシヨー　舜政 二二二八 二二八七 〔曹洞宗〕下野鷄足寺の開山なり、舜政字は天海、出羽米澤の人、俗姓は藤原氏なり、幼にして常陸の龍谷院に投して秀峰存岱を禮して下髮し、出て、獨峰に多寶寺に謁し、普門寺模菴に參し、徹悟の後龍谷院に歸へり、秀峰の印可を付せらる、常陸片野の檀越大寧寺を剏し、師請せられて第一世となり、居ること數年、辭して游方し、下野に到り、鷄足寺を建て、其開山となる、大永七年六月二十七日寂す、壽六十、(日本洞上聯燈錄)

シユンセツ　舜說　ニチコン日近を見よ、

シユントク　舜德 二〇九八 二一七六 〔曹洞宗〕武藏靑松寺の第一代なり、舜德字は雲岡、伊勢國の人、俗姓は源氏、十三歲にして美濃に至り、補陀月江和尙に投して侍童となり、後出家受戒す、月江の遷化に及んで、武藏の大泉に至り、泰叟に見ゆ、後去て大和國芳野山に入り、伊勢の鞆の神官一夜靈夢を感し勝地を求めて精舍を建て、師を芳野より迎へて住せしむ

師辭するを得ずして赴く、南陽山清涼院と號す、此れより道譽高く、四方來學の者衆し、上皇勅召したまふも師疾と稱して起たず出世の早きを恐れて竊に遁れて東海に漫遊す、武藏河越に茅菴を結て住居す、文明八年江戸城府主太田持資（道灌）城西を求めて寺を創し、師を聘し第一代と爲す、萬年山靑松寺と號す、己にして天菴の席を繼ぎ、龍穩寺に移る、永正二年最乘寺に住し一年にして龍穩寺に歸る、永正十三年五月十五日寂す、壽七十九、師を以て開祖と稱するもの圓福、靜勝、靑原、長福、等の諸寺なり、（日本洞上聯燈錄、萬年山志）

シユンホ　舜甫　ミヨーシヨ－明詔を見よ、

シユンユー　舜融　二三七三　二三三二　〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、舜融字は懶禪、薩摩の人、八歲多福山護國禪師に投して得度し、十七歲東遊し、丹波大原寺慈雲に依りて具足戒を受け、徧く關東の諸老に參す、終に美濃水晶山萬安英種に參し、入室して其法を嗣ぐ、萬安の瑞巖寺に住するに方り、從ひ赴く、臨南寺に遷るに及び、其席を補して瑞巖寺に主となる、萬安の興聖寺に遷るとき、寺務を辭して其化を助く、承應三年萬安寂せしかば、太守永井尙政請ひて其席を補せしむ、寬文十二年四月三日寂す、壽六十、遺偈に曰く、一生習」懶、聖諦不爲、今日遊戲、雙眼戴」眉、法嗣龍蟠松雲あり（日本洞上聯燈錄）

シユンリ　舜利　二一八四　二二六三　〔曹洞宗〕甲斐廣嚴寺の禪僧なり、舜利字は吉岫、俗姓は源氏、美濃土岐郡の人、十五歲谷汲寺に投して下髮受具し、密敎を習ふ、尋て捨て去りて三嶺孄龍に參し、禪定を悟り、分座說法す、三嶺の寂するに方り、席を補して甲斐廣嚴寺に住す、慶長八年十月二十一日寂す、壽八十、偈に曰く、行年八十、酤ニ水河頭一、濟ニ翻華藏一、倒騎ニ泥牛一と（日本洞上聯燈錄）

シユンウテー　春雨亭　ジウン似雲を見よ、

シユンエン　春圓　クワイツユ快壽を見よ、

シユンオー　春應　二三六一　〔淨土宗〕駿河寶臺院の僧なり、春應は念蓮社愍譽至心と號す、俗姓は伊藤氏、伊勢神戸の人なり、幼にして總州行德大蓮寺潮譽の室に入りて剃髮し、初め傳通院の輪下にあり、久しく巖宿に侍し、後、增上寺の座下に入り、貞享三年靈巖寺に主となる、後、駿河寶臺院に移り、元祿十四年三月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユンオー　春應　二二六二　三四六二　〔淨土宗〕佐渡專光寺の開山なり、春應は專譽と號し、甲斐の人、普光國師に師事して法を嗣ぎ、佐渡雜太郡相川に專光寺を開く、貞享三年寂す、世壽八十七、（淨土總系譜）

シユンオー　春翁　ケーヨー圭陽を見よ、

シユンオーイン　春應院　ニチフ日阜を見よ、

シユンオク　春屋　シユーエン宗園を見よ、

シユンオク、春屋　ミヨーハ妙葩を見よ、

シユンガク　春岳　二三四六　〔淨土宗〕江戸傳通院の僧なり、春岳は念蓮社專譽一故と號し、其鄉貫詳かならず、江戸西久保天德寺に投じて薙髮し、十二歲增上寺に入りて學び知鑑に師事して法を嗣ぐ、初め酒井忠淸の母の歸向を受け館林新田の二寺に住し、後、江戸傳通院に遷る、貞享三年九月十五日

寂す、法嗣遊安寂仙の二人あり、（鎮流祖傳、淨土總系譜）

シユンガン 春巖 ソトー祖東を見よ、

シユンケー 春繼 ニチショー日性を見よ、

シユンコ 春湖 シューハン宗范を見よ、

シユンコー 春興（一五三六）〔法相宗〕奈良大安寺の僧なり、春興法相に精し、維摩會講師となり、貞觀十八年最勝會講師となる、示寂の年時缺ぐ、（本朝高僧傳）

シユンコー 春岡 ヨーフ楊富を見よ、

シユンコー 春岡 エジョー慧成を見よ、

シユンコー 春江 ショーバイ紹倍を見よ、

シユンコー 春耕 ショーハン清播を見よ、

シユンコク 春谷 リョーエー量榮を見よ、

シユンゴク 春谷 エーラン永蘭を見よ、

シユンサツ 春察（……）〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、春察字は、明山定林玄智の法を嗣ぎ、肥後法泉寺に住す、寂年並に壽缺く、法嗣大雲玄廣あり（日本洞上聯燈錄）

シユンサン 春山 ニチエン日延を見よ、

シユンサン 春山 リョーア了阿を見よ、

シユンサン 春山 ニチリュー日隆を見よ、

シユンサン 春山 シューイン宗胤を見よ、

シユンショー 春星 ニチエン日衍を見よ、

シユンソ 春素（……）〔天台宗〕比叡山の僧なり、春素定心院に住し、日々摩訶止觀を披見し、且つ常に阿彌陀佛を念持す、行年七十四の冬十一月、弟子僧溫蓮に語りて曰ふ、阿彌陀佛我を迎接せむとす、明年三四月其期なり、今より飯茶を絕たむと、果して四月に至り寂す、（日本往生極樂記、本朝高僧傳）

シユンソー 春叢 ショーシュ紹珠を見よ、

シユンタク 春澤 エーオン永恩を見よ、

シユンチョー 春朝（……）（……） 京師の僧なり、春朝出家して法華を誦するに巧みなり、師慈悲の心厚く、嘗て囹圄を見て大誓を發し、七返獄に入りて四人に法華を聞かしめん、と、即ち貴家に入りて銀器を盜み、獄に下りて法華を誦す、罪人これを聞いて皆合掌して泣く、後獄吏奇夢により師を獄より出す、師出つれば復た盜をなし、獄に入る、かくの如く出入すること五六度、獄吏議して曰く、師の罪狀一二に非ず、僞奇刑を免れ、心を恣にして盜をす、宜しく二足を切りて後を犯止めんと、獄吏師を追ひて北野に往き、將に斷切せんとす、師聲を舉けて法華を誦するに其音哀婉なり、獄吏感泣して捨て去る、師後北野に於て寂す、其年時、及壽缺く、（本朝高僧傳）

シユンチョーボー 春潮房 エエー懷英を見よ、

シユンテー 春庭（二一四七）〔曹洞宗〕山城淨德寺の開山なり、春庭俗姓生國詳ならす、長享年中山城淀の南橋にの東北に淨德寺を開き住す、將軍足利義尚に召されて文筆を掌る、當時將軍は必す僧一人を作ひこれを陣僧と云へり、師即其一人なり、寂年月日詳かならず、（貞丈雜記）

シユンテー 春庭 ゲンポー見芳を見よ、

シユンテー 春貞（……）〔淨土宗〕江戸一行院の開山なり、春貞は然蓮社本譽と號す、其俗姓生國詳かならず、

明譽文宿の室に入りて剃髮受業し、江戸小石川に一行院を創じて開山となる、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

シユンテー　春貞　エカイ慧海を見よ、

シユントー　春登（二四九〇）〔時宗〕甲斐上吉田西念寺の住僧なり、春登の鄕貫詳かならず、甲斐南都留郡上吉田西念寺の住持の名を帶びて總本山藤澤清淨光寺に留り、與德院と云へる職に就いて宗務に參し、傍ら國學を講す、後、京都二條聞名寺に轉し、天保の頃同寺に寂す、其年月日詳ならず、師音韻の學に精しく、國語の研究に力を盡せり、著作萬葉用字格一卷なり、(清淨光寺記錄)

シユントク　春德（一五二一）〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、春德俗姓不詳、修圓に師事して法相三論を受學し、維摩會の講師となる、貞觀三年大極殿の最勝會の講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

シユンパ　春把（二三三九）〔淨土宗〕江戸涼源寺の開山なり、春把は傳蓮社肇譽頑立と號す、俗姓は北條氏、相模小田原の人なり、江戸本誓寺文貿に就て剃髮し了學に師事して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、佐倉松林寺に住し、第二代となり、後、江戸淺草に涼源寺を開く、延寶七年五月十九日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

シユンポ　春浦　シユーキ宗熙を見よ、

シユンミヨー　春明（……）〔天台宗〕比叡山の僧なり、春明西塔院に住して專ら法華經を誦持す、一夜安座す、曉に天女忽ち半身を現し告げて曰ふ、汝の前生は野犴にして法華堂の梁間にありて僧の法華經を讀むを聞く、此勝縁によりて人身を受けたるなり、人身受けかたなし、策勵を加へて速に苦海を度るべし、云々、春明これより誦持六萬部に至る後算を記せず、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

シユンミヨー　春明　シトー師透を見よ、

シユンヤク　春益（二三四四）〔淨土宗〕江戸增上寺の僧なり、春益鄕貫詳かならず、增上寺新谷に住して德風あり、戒臘三十年にして貞享元年に寂す、(鎭流祖傳)

シユンヨ　春譽（二二七四）〔淨土宗〕佐渡極樂寺の開山なり、春譽は佐渡羽黑村の人、其俗姓詳かならず、靈巖に師事して法を嗣き、州の加茂郡吉住村極樂寺の開山となる、慶長十九年正月十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シユンリ　春利　ニチリ日利を見よ、

シユンリン　春林　シユーシユク宗俶を見よ、

シユンオー　峻翁　レーサン令山を見よ、

シユンダイ　峻諦（二三二四―二三八一）〔眞宗〕越前勝授寺の住持なり、峻諦一名を寂淸といふ、越前福井本覺寺良秀の弟にして同國三國港勝授寺に住持す、京畿に出遊し臥雲空に業を受く、身院室たりと雖も、己を卑くし奴隷の如くす、貞享五年九月信解宗主師の學を嗜むを聞き、命して紫栢語錄を訓點せしむ、十二日宗主親しく訂正し、且つ白銀二十枚を賜ふ、業已に成りて弘法を以て任とす、嘗て楞嚴經を講す、臥雲書を贈りて末世の法鏡と稱す、享保四年宗主進學圖の三字を親書して之を賜ふ、六年正月五日福井に赴く途中暴疾あり、高屋村の民家に入り、念佛して寂す、壽五十八、著作本尊義斥謬一卷、無量壽經會疏十卷、四帖疏會疏二十卷、(欠本)淨土眞宗略名

目圖一卷、小經聞持記引證二卷、北窓偶談一卷、及び祖德頌言百句あり、（清流紀談、本願寺通紀、本願寺派學事史）

シユンアン 蕣菴 トクショー德昌を見よ、

ジユンエー 順榮（……）〔曹洞宗〕加賀雲龍寺の禪僧なり、 順榮字は以州、久しく惟通圭儒に侍して入室し、惟通の寂後席を繼きて武藏の龍淵寺に主たる、晩年加賀に到り、雲龍寺を建つ寂年、及び壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユンオー 順應（……二三一五）〔淨土宗〕江戸大雲寺の開山なり、 順應は蓮社專譽と號す、江戸の小石川の人、其俗姓詳かならず、能悦の室に入りて剃髮し、隨波に師事して法を嗣く、小石川大雲寺の開山なり、明曆元年九月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シユンオー 順應（……二三〇五）〔淨土宗〕加賀松緣寺の開山なり、 順應號は近譽と云ひ、其俗姓詳かならず、法を不殘に嗣ぎ、加賀大聖寺に松緣寺を開く、正保二年正月三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ジユンオー 順應 キョーズイ慶隨を見よ、

シユンキヨー 順敎（……）〔淨土宗〕山城岩倉の學僧なり、 順敎字は良融、其鄕貫詳かならず、初め山城岩倉に住し、金胎兩部の秘奧を究む、後大淵上人に從ひて淨土敎を窺ひ、尋で然空に參して玄奧を究む、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

ジユンクー 順空（一八九三―一九六八）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、 順空號は藏山、俗姓源氏なり、夢に一沙門あり、寂昭なりと云ひ、宿を乞ふ、寤めて妻娠めり、天福元年正月元旦生る、三歲父母其前身を問へば圓通大師なりと答ふ、相傳へて異とす、長して後水上山の神子榮尊に師事し、榮尊に携へられて辨圓（聖一國師）に謁す圓の下に留ること三年なり、蘭溪道隆の道譽を聞きて東下し、建長寺に投して謁を通す、弘長二年宋に渡り、徑山に登りて偃溪聞禪師に謁す、明年禪師聞寂す、荊叟珏淮海纘て席を董す、師歷事し、尋て東山の斷溪用、萬壽の退耕寧、太白の巖慧を問ふ、後、石林鞏に就きて所得尤多し、辭し去るに臨み、輩送行の謁あり、十載中原一棹還、碧瑠璃外更無ㇾ山、扣ㇾ舷二下知誰會、自作二吳音一唱二月彎一、歸て東福寺に住し、記室を掌る、文永七年肥後に高城寺を開き、後、筑の承天寺に遷り住す、正安二年東福寺に主たり、延慶元年五月九日双輪菴に寂す、壽七十六、遺偈あり、無生一曲、調滿二指端一、九山崩倒、八海枯乾、勅謚圓鑑禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ジユンケー 順繼（一九六三）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、 順繼字は勝圓、俗姓生國詳からす、嘉元元年中性院賴瑜の遺囑を受け、勸劣同勝不退門廣短冊を作り翌年九月成る、時に四十五歲なり、尋いて傳法院學頭に昇る、著作釋論廣短冊一卷あり、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジユンコ 順故（二三九一―二四五一）〔眞宗〕攝津光得寺の住持なり、 順故は攝津の人なり、享保十七年同國島下郡田中光得寺に生る、父は同寺の住持順諦なり、師幼より學に耽り、安永二年二月三日順諦の後を繼いて住持となり、寺務の暇あれは內外の書を讀み、殊に悉曇音韻の學に力を盡せり、寛政三年正月廿一日寂す、壽六十一、著作韻鏡聞書三卷、韻鏡私記一卷、並に韻

鑑古義標註、音藏寶匙、音韻相通門記等の頭書註釋、梵字拔書等あり、(寺記)

シユンコ　順故　ソンモ存茂を見よ、

シユンコー　順孝　二一九二……〔曹洞宗〕武藏雲松院の禪僧なり、　順孝字は天叟、俗姓は永井氏、下總の人なり、石雲寺季雲永嶽に參し、其記印を受け、文明十六年武藏由井城主大石定久心源院を興し、師を請して開法せしむ、後、總持寺に出世し、幾何ならずして辭す武藏檀越雲松院を建て、師を請す、下野佐野郡主師に乞ひて天應院を開かしむ、何れも季雲を第一世となし、自ら第二世となる、永正十六年石雲寺に遷り翌年心源院に歸る、天文元年七月十七日寂す、塔を傳通と名く、法嗣傑山道悦あり、(日本洞上聯燈錄)

ジユンシン　順信(二八四五)〔眞宗〕常陸無量壽寺の住持なり、　順信俗名は信廣、俗姓は大中臣氏、常陸鹿島郡豐田の人、父は尾張權守片岡信親といひ、鹿島神社の社司たり、親鸞上人に歸依し、其子を弟子となす、即ち師なり文治年中常陸の刺史村田刑部無量寺を鳥栖村に再興し、禪宗の道場とせしか、後之を親鸞に奉す、親鸞之を改めて無量壽寺と稱し、居ること三年、之を順信に附して去る、後、西國を巡化す、攝津溝杭佛照寺は師の遺跡なり、下野緣起書二卷あり、(本願寺通紀)

シユンジヨ　順助　一九三七/一九八〇〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、　順助は禪林寺法皇の子、正應四年十二月二十六日出家し、五年十一月十六日受戒す、元應二年十月十四日寂す、壽四十四(三井續灯記)

ジユンシヨー　順證　一九九一/二〇五〇〔眞宗〕伊勢專脩寺の第七代なり、　順證は專空の從子なる證西の子にして康曆二年四月專修寺に住し、明德元年六月十六日寂す、壽六十、(本朝寺通紀)

ジユンシヨー　順性　ニチゴ日護を見よ、

ジユンソ　順祖　リヨーガク良岳を見よ、

ジユンソー　順叟　シユージヨ宗助を見よ、

ジユンチ　順智　二一二一/二一九三〔曹洞宗〕三河蓮華寺の開山なり、順智字は巧安、俗姓は藤原氏、倉知の族、三河安城の人なり、十五歲京都に遊學し、黑谷に投して薙髮し、淨業を勤脩す、後禪を慕ひて諸尊宿に徧參して鄉里に歸へり、全久寺にて光國舜玉に見えて服勤すること多年、首座となり、分座說法す、出て、永平寺に出世し、全久寺に遷る、後泉龍谿長養の諸寺に歷遷し、晚年芙蓉山蓮華寺を搆して逸老し、天文二年十月一日寂す、壽七十三、法嗣萬久永歲あり、(日本洞上聯燈錄)

シユンチヨー　順長　二三三六……〔淨土宗〕山城光明寺の僧なり、順長は闡蓮社廣譽と稱す、三藏に通達し、論才諸檀林を壓す、遂に幕命に依て紫雲山の主務を領す、延寶四年十月二十三日寂す、壽は詳ならず、(鎭流祖傳)

ジユンドー　順道　キヨートク敬德を見よ、

ジユンニ　順爾　クワイリユー恢龍を見よ、

ジユンニヨ　順如　コージヨ光助を見よ、

ジユンバ　順波　二三三二……〔淨土宗〕江戶淨閑寺の開山なり、順波は天蓮社晴譽隨行と號す、俗姓は梶川氏、岩代會津の人なり、隨波によりて剃髮し、左右に侍すること多年、遂に宗

の奥義を究む、江戸箕輪に淨閑寺を剏して開山となり、寛文二年二月二十九日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

ジユンヨ　順譽　二〇九三〔淨土宗〕相撲光明寺の五代なり、順譽は俗姓詳ならず、光明寺良順に師事し、其後を承けて第五代となる、後問禪師に師事す、永亨五年十一月三日寂す、享壽詳ならず、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

ジユンヨ　順譽　キユークワン炭觀を見よ、

ジユンヨ　順譽　ナンテキ南的を見よ、

ジユンヨ　靈譽　リヨーカン靈鑑を見よ、

ジユンヨー　順耀（………）〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、　順耀は忠尋に從ひて天台を學び、最も義論に長す、著作疏記鈔十卷、四教顯鈔三卷、大論義鈔數十卷、雜雜集三十卷あり、(本朝高僧傳)

ジユンリヨー　順良　二二九〇〔淨土宗〕武藏法界寺の開山なり、　順良は燈蓮社傳譽と號し、紀伊小倉の人なり、法を存龍に嗣ぎ、武藏幡合に法界寺を開く、寛永七年七月十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ジユンリヨー　順艮　オーキ應基を見よ、

ジユンリヨー　順了　二四〇六／二四八八〔眞宗〕江戸淺草光圓寺の住持なり、　順了字は寶景、號は東海と云ふ、出羽酒田の人なり、江戸淺草光圓寺に住し、人となり强毅にして頗る慷慨の志あり、安永天明の間、大旭頓朗等とゝもに淨土眞宗の宗號に關し、淨土宗の故障ありて大に紛擾するにあたり、自ら死を決し、幕府に出訴すること前後二十餘回なり、幕府大に師の熱誠に感し、且つ輪王寺法親王の助言により三萬日後を期して判決を與ふへきことゝす、世に傳へて三萬日御預と云ふ、是れより輪番の忌諱に觸れ、數年の間禁錮せらる、後、赦されて京師に上り、享和三年六月十九日擬講となり、九月高倉學寮に華嚴旨皈を講す、文化元年入出二門偈を講し、三年七月二十三日嗣講に進み、五年探玄記を講す、後、阿彌陀經、往生禮讃、俱舍論、無量壽經、五教章を講す、文政四年五月廿七日講師に進み、玄義分、序分義、愚禿鈔、淨土和讃、正信偈を講す、深勵宣明二講師の後を受けて大に高倉學寮の門風を張る、同十一年九月十七日寂す、壽八十三、(眞宗史料)

五泉院寶景講師

ジユンエ　純惠　二四四三／二五一七〔………〕美濃淨導寺の僧なり、純惠字は榮興、號は梅山、又雪香齋無我道人等の別號あり、尾張の人、俗姓は松野氏なり、幼より書を嗜み、岩井正齋に學び、長ずるに及び薙髮して僧となり、美濃岐阜淨樂寺に住し、多く佛書を講く、後法眼に叙せられ、安政四年八月寂す、壽

七十五、（扶桑畫人傳）

ジユンエ 純慧 ニチシン日新を見よ、

ジユンエー 純榮（…………）〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、純榮字は柏堂、在中衍に師事して法を嗣ぎ、相模淨智寺に住し、法化盛んなり、寂年並に壽缺く、（延寶傳燈錄）

ジユンオー 純應 リョーズイ良隨を見よ、

ジユンカク 純覺（二五〇九）〔天台宗〕下野大平山の僧なり、純覺字は慈雲一に悟海と云ひ、號を白痴子と云ふ、天性豪毅なり、栃木の大平山に住し、內外の學に通し、且つ書を善くす、淨名律院の痴空に交はり、嘉永二年痴空の爲めに般若心經講要の序を製す武田耕雲齋兵士を率ゐて太平山に登り、山中に屯するにあたり、兵士等寺境に狼藉す、師大に怒り、其狼藉を責む、耕雲齋師に面して深く其豪膽に服し、部下の兵士を誡めたりと云ふ、師寂年月日詳ならず、

ジユンケン 純賢 ホーショー芳勝を見よ、

ジユンコ 純固（…………）〔淨土宗西山派〕三河法藤寺の學僧なり、純固字は鐵空、號は幻飲と云ふ、俗姓は小栗氏京都の人なり、禪林寺眞空林圓に投じて薙髮し、後、積峯慶善に師事して三河法藏寺に於て業を修め、圓頓戒の廢頽を悲み、佛像の前に自誓受戒す、後、京都西山に退休す、寂年及世壽缺く、著作觀經疏記、儒釋問辨、善導別傳記、西山略譜等數十部あり、（淨土承繼譜、淨土總系譜）

ジユンシ 純志 ニチシユー日秀を見よ、

ジユンシヨー 純清（二一〇四……）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、純清字は德標、普く諸老に參し、後、無外圖方に謁し、問答の際忽ち所省あり、遂に印可を蒙り、屢々諸寺に主となり、終に圓覺寺に遷住す、文安元年十一月二十七日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ジユンシヨー 純證（…………）〔曹洞宗〕自得寺の禪僧なり、純證字は德標能登の人なり、早歲にして洞谷瑩山和尙に師事し出家す、執侍すること六年、

ジユンシヨー 純成（二三九五 二四一七）〔淨土宗〕尾張圓輪寺の僧なり、純成字は興雲尾張日置村の人なり、父母嘗て關通和尙に歸し念佛す、師出家の志あるも父母許さず、十二歲の時私に遁れて關通に待す、父母師の志の奪ふべからざるを知り、遂に許す、因つて和尙に就きて得度す、十五增上寺に投じ宗脈を相承し、鄕に歸りて圓輪寺を開き、梵行淸白、六時精勤、日課念佛六万聲す、二十歲病に罹り、久しく癒へず、寶曆七年正月三日寂す、壽二十三、（續日本高僧傳）

ジユンソー 純叟 ドウスイ道粹を見よ、

シユンユー 純瑜（…………）〔眞言宗〕藥王寺の僧なり純瑜は意教上人賴賢の法流を傳へ、藥王寺に住す、著作四度記四卷、印決十帖、灌頂記二十五帖あり、（諸宗章疏錄）

ジユンヨ 純譽（二三三七……）〔淨土宗〕攝津法泉寺の開山なり、純譽は攝津の人、其俗姓詳かならず、觀智國師に師事し師法を嗣ぎ、州の多田庄新田に法泉寺を刱して開山となる延寶五年八月二十七日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ジユンヨ 純譽（二三〇二……）〔淨土宗〕薩摩昌了寺の開山なり、純寶は肥前の人、其俗姓詳かならず、宣譽に師事して法を嗣ぎ、薩摩樋脇に昌了寺を開く、寶永十九年八月十四日寂す、

壽缺く、（淨土總系譜）

ジユンヨ　純譽　カンテー感貞を見よ、

ジユンキヨー　淳享（………）〔曹洞宗〕信濃靈松寺の僧なり、　淳享字は大養、能登の人眞化玄享の法を嗣き、總持寺に出世し、次て能登の龍護寺、信濃靈松寺に歷住し、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

シユンクワン　淳寛（一七八七）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、　淳寛字を宰相阿闍梨といふ、京都の人、藤原家政の子、大治二年二月六日無量光院にて傳法職位を受く、聖賢は護摩教受に當たり、賢覺其導師禪惠は其嘆德たり、（續傳燈廣錄）

シユンセキ　淳碩（一二八五………）〔曹洞宗〕三河全久寺なり、淳碩は香山、俗姓は橘氏、京都の人と、出家しての禪僧九峰如珊に參し開悟す、總持寺に出世し、次に三河の全久寺、泉龍寺、籠溪寺、上野の全久寺等に歷住し、寛永二年十二月三日三河全久寺に寂す、壽缺く、法嗣時雄專英あり、（日本洞上聯燈錄）

シユンホ　淳甫（………）〔曹洞宗〕肥前天祐寺の禪僧なり、　淳甫字は大尖、加賀の人、春岡揚富に師事して眞訣を受け、席を襲ひて肥前天祐寺に主となる、寂年及ひ壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シユンネーイン　淳寧院　コーエー光瑛を見よ

ジユンユー　淳祐（一五五〇 一六一三）〔眞言宗〕近江石山寺の學僧なり、　淳祐は山城の人、右中辨菅原淳茂の子、菅丞相の孫なり、幼にして家塾に就て漢籍を學び、後般若寺の觀賢僧正に就て剃髮受戒し、延長三年二月一宗の秘奧を密附せらる、胎金の大法を受けて普賢院に居り、專ら密觀を事とす、天曆七年七月二日寂す、壽六十四、著作、胎藏集記十卷、胎藏界次第八卷、金剛界次第六卷、（一本四卷）、四種護摩以下、同、各四卷、胎藏七集、悉曇集記、各三卷、金剛界次第、金剛界七集、不動次第、金剛隨心法、字輪觀集、各二卷、如意輪念誦次第、如意輪書合次第、金剛界略次第、金剛界念誦次第私記、金剛界秘鈔、金剛界諸尊料簡、胎藏念誦次第私記、胎藏諸尊眞言註釋、息災護摩次第、內護摩次第、外護摩次第、六種護摩略記、護摩儀軌中四臂不動事、吉祥天護摩鈔、八大佛頂諸說不同、熾盛光次第、孔雀經法鈔、陀羅尼集經鈔、如意輪經鈔、住心品指記、隨求陀羅尼供養次第、千手陀羅尼梵本不同文、十一面次第、普賢延命秘釋、護世八天次第、吉祥天次第、大自在天次第、聖天次第、十二天次第、炎魔天次第、金剛童子鈔、神供密記、建立曼荼羅私記、灌頂鈔、五色絲鈔、擇地鈔、四種檀法、金剛隨心鈔、金剛隨心呪、脇机記、眞言宗要文、眞言雜要鈔、細記集諸尊梵密號等、舍利禮秘決、各一卷、胎藏略記、胎藏梵語、無量壽軌、囝宝、若干卷あり、（密宗血脉鈔本朝高僧傳傳、燈廣錄、諸宗章疏錄）

ジユンヨ　淳譽　ニチギヨー日堯を見よ、

ジユンリヨー　淳亮　タクゲン卓玄を見よ、

ジユンシン　遵眞　ヨーシン揚眞を見よ、

ジユンヨ　遵譽　キオク貴屋を見よ、

ジユンヨ　遵譽　キユーガン休岸を見よ、

ジユンリヨ　遵慮　ニチタイ日逍を見よ、

ジユンゲン　準玄　エンガ圓雅を見よ、

ジユンシユー 准秀 シヨーチヨー昭超を見よ、

ジユンソン 准尊 シヨーゲン昭玄を見よ、

シユンカイ 準海 二三三二 四〇一 〔融通念佛宗〕河内大聖寺の學僧なり、準海は字は卓巖、號は龍照院と云ふ、大通上人に就いて度を受け、一宗の宗意を傳ふ、河內春日の大聖寺に住し專ら宗風の擧揚に力を盡し、寶曆十三年即ち大通上人寂後四十八年融通圓門章集註八卷を作り、大通上人の說を敷演す、寶曆十二年弟子圓應準澄等版行す、後良山の私記と幷へ稱して宗門の二書と云ひ倶舍の光寶二記に比すと云ふ、大聖寺の本堂を建築し地藏菩薩三千躰を安置す寬保元年正月九日寂す壽八十一なり、著作圓門章集註八卷、融通本緣起黃葉鈔一卷、融通如法念佛圖解一卷あり、(西本良察氏返信)

ジユントクサイ 潤德齋 ゲワツコ月胡を見よ、

ジユンレー 筍靈 二二七三 二三一二 〔淨土宗〕大和光明寺の僧なり、父筍靈字は本譽、一に口稱と號す、加賀國小松庄の人なり、父の名は賢海と云ふ、即ち親鸞の末流なり、幼年にして出家し、同國金澤に到りて三光寺の和尙に師事す、十五歲にして武藏の增上寺業譽上人に從て修學す、鎭西流を傳へ後、本國に歸り、住すること一年にして出遊し、京師嵯峨の平山に菴居す、其後大和に至り、光明寺に住すること四年、日課念佛六万聲、勵行すること頗る常輩に勝れり、承應元年三月二十九日寂す、壽四十歲、(緇白徃生傳、續日本高僧傳)

シヨケン 處謙 ……一九九〇 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、處鎌字は潛溪、武藏の人なり、初め佛光禪師に事へ、後、東福寺に入りて字聖一國師に事ふ、正和九年筑の承天寺に主たり、尋て東福寺に住し、南禪寺に昇住し、後醍醐天皇勅召したまひ、宮中に法要を說き、龍涎念珠金紙御扇の賜を拜す、其後天皇屢南禪寺に行幸あり、密灌幷に衣盂を受けたまふ、特に普圓國師の號を賜ふ、祝聖の偈あり、從來皇道自平平、人樂二堯風舜日天一、草木百年新雨露、乾坤一統舊山川、後播磨に寶光寺を開く、これ同國禪林の始めなりと云ふ、尋て攝津に澄心寺、伊勢に淨法寺を開く、元德二年五月二日寂す、慧山の本成寺に塔を造る、後、紹侍者謙の照容を携へて元に渡り、本覺寺靈石芝の贊を請ふ、芝禪師贊を作り稱揚す、(延寶傳燈錄本朝高僧傳)

シヨサイ 處齊 一九四七 二〇二九 〔臨濟宗〕三河定光寺の開山なり、處齊字は平心、俗姓千葉氏、重胤の子、肥前小味莊の人なり、適林叟瓊禪師支那より歸り、小味莊に留まる、母師を携へ請ひて弟子となす、幾もなく禪興寺より瓊禪師を請す、師隨侍す、十七歲延曆寺に登り、興圓僧正に就きて顯密二教を學ぶ、尋て東下して鎌倉に入り、壽福寺に至り、林叟瓊、淸拙澄に歷事す、下野雲巖寺に至り、高峯日に見ゆ、夢窓石、寂室光同會中にあり、相共に參究す、日禪師に隨侍し、圓覺寺に遷り、尋て美濃丹坂の竹翁禪師を問ふ、留ること三年にして鎌倉に歸へり、桂光庵の屛居に瓊禪師を省し、益參究し、遂に法衣を受く、瓊禪師の寂後三河遠江の間に隱棲す、元德元年實相寺一峯一東福寺の請に應じ、師を招く、幾くもなく三河に歸りて菴居す、山中に應夢山定光寺を開き住す、尋て退藏洞雲等の諸寺を開く、延元元年美濃の郡司長藏寺を建立して師を請す、應安二年長藏寺にありて老病あり、十二月廿九日

寂す、壽八十三、臘七十六、師諸國に寺を開くこと十六所なり、永和四年勅謚覺照禪師を賜ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨアン 蔗庵 タイシユク大俶を見よ、

シヨアン 楮菴 ニチシヨー日昇を見よ、

シヨ 曙藏主 （二〇〇〇） 〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり、曙藏主俗姓生國詳ならず、圓覺寺に於て東明に謁し藏鑰となる、曆應三年冬東明寂するに及び專使となりて訃を東福寺乾峰に告く、寂年及壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

〔考〕曙藏主は曹洞法派なり

ジヨウン 徐芸 二二七九 〔曹洞宗〕加賀桃雲寺の開山なり、徐芸字は象山、俗姓は三田村氏、越前の人、朝倉義景に仕ふ、寶圓寺大透圭徐に從ひて祝髮し、侍者となる、去りて諸名宿に歷參し、寶圓寺に歸り、首座となり、其席を補して同寺に住す、總持寺に出世し、永澤龍泉二寺に歷遷す、加賀寶圓寺に前田利家の請に依りて住す、慶長五年前田利長高德山桃雲寺を剏し、師其一代となる。同六年宗富尼總持寺の三門を造り、師に請ひて說法せしめ、其傍らに芳春院を構へ、師を開山に招く、輪島の檀越蓮江寺を剏し、師を迎へて住せしむ、師大透を開山とし、自ら次位に居し、後桃雲寺に退き、元和五年五月二十四日寂す、壽欠く。法嗣廣山恕陽あり、（日本洞上聯燈錄）

ジヨテン 徐天 二三三四 二三二〇 〔曹洞宗〕加賀護國寺の禪僧なり、徐天字は闕室、俗姓は河合氏、越前の人、少にして同國寶圓寺徐芸に依りて出家し、護國寺量山に參し、藏鑰となる、長齡寺泰山雲堯に謁し、遂に印可を受け、其席を繼ぎて加賀寶圓寺に住し、尋で總持寺に昇り、桃雲寺に遷る、寬永八年中納言利常乞ひて護國寺に住せしむ、慶安三年正月一日寂す、壽七十七、遺骨を護國寺に塔す、法嗣傑外雲英あり、（日本洞上聯燈錄）

ジヨオー 助翁 エーフ永扶を見よ、

ジヨオー 助翁 ゲンホ玄輔を見よ、

ジヨキヨー 助慶 （……） 〔天台宗〕比叡山の僧なり、助慶は慶祚阿闍梨に師事して顯密を兼ね傳へ初め園城寺にあり、後比叡山慧心院に遷り、名聞を捨離して專ら淨土往生を願ふ、平生後學の來りて經論の學解を乞ひ、專修を妨ぐるを憂ふ、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ジヨク 助給 ゴシユー牛秀を見よ、

ジヨク 助給 テンレー典嶺を見よ、

ジヨク 助久 キユーソン及存を見よ、

ジヨシン 助心 カンテキ閑的を見よ、

ジヨシン 助心 ロギン露吟を見よ、

ジヨガク 恕岳 モンチユー文仲を見よ、

ジヨクワン 恕觀 リヨーサツ良察を見よ、

ジヨヨー 恕陽 二二八三 〔曹洞宗〕加賀瑞龍寺の開山なり、恕陽字は廣山、上野の人、俗姓は源氏なり、幼にして下野水代の大中寺に到りて至心道を禮して薙髮し、象山徐芸の太白寺に住すと聞き、往きて之に參し、久しくして發悟したり、總持寺に出世し、寶圓寺に遷る、丹州永澤寺越州龍泉寺に歷住し、慶長五年加賀護國寺を領す、凡そ七年にして越中關野莊に退去して菴居す、同十九年春國守前田利長卒し、供養の

爲め利常卿瑞龍寺を建て、師請せられて開山となる、元和九年正月十四日寂す、延暦、信光、常松、廣乾、長壽、長朔の六院皆師を開山とす。法嗣華山繁應あり、(日本洞上聯燈錄)

ジヨギヨー　除業　ゼンテキ善的を見よ、

シヨーイ　正伊　二〇七六 二一四七〔曹洞宗〕上野雙林寺の開山なり、正伊字は一州、周防の人、俗姓藤原氏なり、幼にして國の般若寺に投し侍童となり、十三歳度を受け、顯密の法を習ふ、京師に入りて妙心寺日峯舜に師事し參叩多年、心印を受く、後大川寺月江文に謁し其法を受く、太田道眞相模に一寺を興し、師を請すれども自ら赴かす、法兄華叟芬をして代り往かしむ、長尾俊慶雙林寺を興し、師を請す、師月江文を推して開山となし、盛に宗風を擧揚す、能登惣持寺に昇り、尾張楞嚴寺、出羽王泉寺、石井三鈷寺に歷住し、相模最乘寺に住すると三四に及ふ、晚に双林寺に皈り住す、長享元年十一月四日寂す、壽七十二臘五十九、(本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄)

シヨーイ　正爲　二〇一八……〔華嚴宗〕相摸極樂寺の學僧なり、正爲字は圓成といひ、弱年にして出家し、俊才に隨侍して戒律を講究し頗る勤學の譽あり、七大寺に開講あることに、師必す卷を持して席に臨む、此故に三藏の奧義凡て總括せさるはなきに至れり、然れとも殊に華嚴を以て宗となし、延文三年秋照玄の跡を接きて相摸の極樂寺に住し、奈良の戒壇院に入り、屢々三大律部華嚴大經を講す、後鎌倉に歸へり、應安元年八月二十一日極樂寺に寂す、壽缺く、(本朝高僧傳律苑僧寶傳)

シヨーイ　正異　……〔曹洞宗〕武藏慶德寺の禪僧なり、正異字は仲孚、武藏慶德寺嫩桂祖香に師事して其法を嗣き、嫩桂の寂後席を繼ぐ、寂年世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シヨーイン　正因　二〇二九……〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり、　正因字は明巖、俗姓不詳、相摸の人なり、建長寺西磵曇に師事し、尋て圓覺寺に住す、晚年正傳菴に退休し、應安二年四月八日寂す、遺偈あり、寂滅爲樂、猶涉ニ多岐一、死蛇出レ草、踢ニ倒須彌一、勅謚大達禪師と云ふ(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シヨーエ　正慧　(……)〔眞言宗〕京都泉涌寺の僧なり、正慧字は信戒といひ、幼年より泉涌寺に入り智鏡淨因の二師に歷事して、南山鈔を研き、後聞照に從ひて戒疏を學ふ、其寂年缺く、

シヨーエー　正榮　一九二六 二〇一三〔臨濟宗〕美濃正法寺の禪僧なり、　正榮字は嫩住、俗姓不詳、法燈國師(覺心)の法を嗣ぐ、初め建仁寺に在りて藏典を掌り、後、諸方に遊び、諸老宿に參見せざるはなし、美濃の大桑に菴居し、世事を杜絕すること二十年なり、三衣一鉢蕭然として日月を送る、同門の請により、紀伊の常興及び鷲峰に住す、美濃の國守土岐氏厚見郡に靈樂山正法寺を創立し、香火の墳寺となす、正榮を請して開山となす、文和二年正月二十一日寂す、壽八十八、勅謚大醫禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シヨーエツ　正悅　二一〇二 二一八四〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、　正悅字は培芝、一州禪師に投して薙髮受戒し、遊方して下野大中寺快菴妙慶に謁し、服勤數年、遂に席を繼きて大中寺に主となる、大永四年正月二十日寂す、壽八十三、法嗣

圭菴伊白獨放麿衆の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

シヨーカイ　正海　ジコー慈孝を見よ、

シヨーカク　正覺（……）〔天台宗〕播磨增位寺の學僧なり、正覺は播磨の人なり、少にして比叡山に登り、諸師の門に遊び、天台教を研究し、姫路山に皈り、著述を事とす、時の人播磨道邃と呼ふ、著作宗要科文鈔三卷、天台三大部鈔三十卷(世に姫路鈔と云ふ)等あり(本朝高僧傳)

〔考〕增位山長吏記(隨願寺集記所引)に依れば、十七代長吏道邃は大江匡房の男嘉承二年出家し、毘道法師に從ひ、康治中姫路山稱名寺を建立し、久壽中三部鈔吉祥天女護摩私記を撰し、保元二年四月十五日千地藏院に寂すとあり、本朝高僧傳は、峰相記に依りたるもの、今長吏記に依り事蹟を詳にす、

シヨーカク　正覺　エーチヨー叡澄を見よ

シヨーカクイン　正覺院　ニチジヨー日條を見よ、

シヨーカクイン　正覺院　ニチヨー日陽を見よ、

シヨーガク　正蕚　二〇七二/二一四二　〔曹洞宗〕美濃龍泰寺の開山なり、正蕚字は華叟、越後太守仁木義長の子、應永十九年三月十八日に生る、幼にして大和の常觀寺に投じて出家し、比叡山に登て諸師に請問す、横川の淨高律師の指示により、尾張の月江禪師に謁し、入室して密に寶鏡三昧を付せらる、後に美濃國關に龍泰寺を創す、將軍義尙莊田を付して僧供に充つ、文明十四年六月六日寂す、壽七十一、臘六十三、(日本洞上聯燈錄)

シヨーギ　正義（……）〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、正義俗姓不詳、慈訓に師事して法相華嚴を學び、藥師寺に華嚴の講席を張れり、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

シヨーギ　正巍（……）〔臨濟宗〕豐後法界菴の僧なり、正巍字は獨峯、清拙に參して印可を付せらる、然れども更に出世を好まず、州守時氏法界菴を構へて延てこれに居らしむ、寂年及世壽缺く、(延寶傳燈錄)

シヨーキン　正忻（……）〔曹洞宗〕上野龍源寺の禪僧なり、正忻字は笑顏、上野龍源寺の獨放麿衆の法を嗣ぎ、其席を補し、次に常陸圓通寺、下總孝顯寺に歴遷す、寂年並に世壽缺く、法嗣傳菓善迦あり、(日本洞上聯燈錄)

シヨーキヨー　正慶　二四三五/二五一一　〔眞宗〕越中稗田圓福寺の住持なり、正慶字は靈畦、後、開悟院と號す、安永四年十二月二十八日新川郡稗田村圓滿寺に生る、八歲にして京都の黌に入り、十六歲能く經典を講す、壯歲に及ひ、高野山豐山の講席に遊ひ、特に華嚴天台の蘊奥を究む、後、宣明に師事し聲名一時に高し、文政三年（一に文化十年）擬講となり、同七年三月二十八日嗣講に進み、翌年淨土論註を講し、後觀念法門文類聚鈔觀經を講し、弘化三年代講師となりて入出二門偈を講し、嘉永二年十月十六日講師となり、以後正信念佛偈、愚禿鈔を講し、同四年八月十五日寂す、壽七十七、圓福寺に葬むる、(碑文、眞宗史料、)

シヨーギヨー　正行　ジヤクチヨー寂超を見よ、

シヨーク　正玖（……）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、　正玖は建仁寺大統嘉隱の嗣なり、辭世の偈なる夫子不レ知レ字、達磨不レ會レ禪、入二無間獄一、咲叫二四禪天一の一首人口に膾炙す、(日本名僧傳)

シヨーグ 正具（……）〔臨濟宗〕筑前顯孝寺の開山なり、正具字は闡提、俗姓不詳、京師法觀寺救海禪師（榮西六世の法孫）の法を嗣ぎ、同寺に留る、近江の太守大友貞宗、（直菴と號す）豐前の萬壽寺に請す、檀越某筑前に顯孝寺を興して請す、乃ち開山となる、示寂の年時缺く、遺偈あり、離ニ却殼漏一處處相見、馬腹驢胎、日面月面、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨークー 正空 二一七九……〔淨土宗〕武藏光明寺第九代なり、正空は忍蓮社源譽と號す、觀譽上人に師事して淨土教を學び、文龜三年十二月六日爾書を授けらる、後、武藏品川光明寺に主となり、相模玉繩二傳寺駿河府中新光明寺を剏して開山となり、永正十六年三月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シヨークン 正觀 二五〇六……〔眞宗〕大阪米屋町正行寺の住持なり、正觀は弘化二年十二月擬講となり、見性院と號す、弘化三年五月寂す、（眞宗史料）

シヨーゲイン 正化院 センカイ宣界を見よ、

シヨーケー 正瑩（……）〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、正瑩字は圓應、肥後法泉寺竺芳宗仙の法席を嗣ぎ、某年寂す壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーケー 正啓 ニチチン日珍を見よ、

シヨーケン 正謙（……）〔曹洞宗〕下野瑞光寺の開山なり、正謙字は益之、初め一州正伊に參して旨を得、總持寺に出世し、後、諸寺に歷遷す、下野の某鹿沼の莊に瑞光寺を剏し、師を延きて開山とす、師自ら任せす、一州を奉して始祖とし、自ら第二世に居る、晩年最乘寺に移り、期年にして瑞光寺に歸り、某年寂す、法嗣雪光良訓、雪菴壽欽あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーケン 正顯 キヨーシユン經舜を見よ、

シヨーコー 正光（二一〇二）〔曹洞宗〕越前金剛院の開山なり、正光字は玉翁、武藏の人なり、鄕里某寺に出家し、出遊して最乘寺の了菴總持寺の實峰に參し、太平寺普濟に師事して學行大に進み、總持寺に主となり、次に永澤寺に住し、嘉吉二年龍泉寺に遷りしが、辭して後自ら越州に金剛院を築いて住し、某年寂す壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーコーイン 正孝院 ニチチユー日忠を見よ、

シヨーコン 正鯤 二三五一 二四三四〔黃檗宗〕山城萬福寺の十五代なり、正鯤字は大鵬、號は笑翁と云ふ、清の泉州の人、俗姓王氏出家して黃檗山全岩昌の法を嗣く、享保の頃西來歸化して長崎に留る、延享元年黃檗山第十四代龍統元棟の推擧により、同二年六月十二日進て十五代の法席を繼く、四年にして退隱し、再ひ寶曆八年二月五日十八代の法席を繼く、安永三年十月十三日寂す、壽八十四なり、師書を善くし、殊に竹を寫すに妙なり、（黃檗譜略、鑑定便覽）

シヨーゴン 正嚴 二一四九……〔曹洞宗〕三河眞如寺の開山なり、正嚴字は密山、武藏の人、源直忠（太田氏）の子なり、幼にして月江正文禪師に投じて下髮受具し、左右に執侍すること三十餘年印可を受け、諸方に遊び、京都に往て五嶽の諸師を訪ふ、三河大守太田氏上總眞里谷天寧山眞如寺を開き、師請せられて開山の始祖となる、文明中最乘寺の請に依り主とな

り、期年にして歸り、延德元年七月二十四日寂す、法嗣陳叟道、挺菴秀の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

シヨーサツ　正察(……)〔曹洞宗〕出羽勝傳寺の開山なり、正察字は審巖、耕雲寺大安梵守の法嗣にして其席を繼き、後院務を謝して出羽莊内に到り、勝傳寺を捌し、某年寂す、壽缺く、法嗣周剛宗巖あり、(日本洞上聯燈錄)

シヨーサン　正三　二二三九 二三一五〔臨濟宗〕三河了心菴の僧なり、正三は一に昌三、又聖三に作る、玄玄軒又は石平道人と號す、俗姓は鈴木氏、通稱九太夫、三河の人、松平氏に仕へ、大坂、關ケ原の役共に功あり、後髮を削りて僧となり、臨濟の雲居、物外、大愚、愚堂、曹洞の萬安等に師事し大に得るところあり、諸國を遍歷して三河石平山に了心菴を結ひて居り、座右金剛經一卷を備ふるのみと雖、能く諸經卷の蘊奧に通曉す、後、江戶に出てゝ仁王座禪を唱ふ、蓋し膽を練る術なりと云ふ、明曆元年六月廿五日江戶に寂す、壽七十七、淺草七軒町法福寺に墓あり、著作驢鞍橋六卷、草菴雜記五卷、因果物語三卷、念佛双紙、麓の草分、二人比丘尼、各二卷、盲安杖、万民德用、破吉利支丹、でうす物語、自己安心、各一卷あり、(戲曲小說通志、江戶名家墓所一覽、近代名家著述目錄)

シヨーシン　正進　……一五三四〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、正進は華嚴を等定僧都に受けて善く圓理に通す、承和十年詔ありて東大寺に住す、居ること四年、大に宗綱を整ふ、齊衡二年勅を拜して興福寺の維摩會講師となる、華嚴の宗徒にして此選に預ること師を以て始とす、貞觀十六年寂す、壽缺く、弟子長歲興智の二人あり、(本朝高朝傳)

シヨーシン　正信　タンクー湛空を見よ、

シヨーシン　正心　チテツ智哲を見よ、

シヨージユ　正受　二三一一 二三九一〔眞宗〕大和磯野順照寺の住持なり、正受初の名を深慧といひ、後、聞號と稱し、別に號して石園と云ひ、後、自ら自休と呼ふ、大和山邊郡向淵村に生れ、葛下郡花內村圓通寺天足法師の勸誡を受けて出家し、其法嗣となり、後、同郡磯野村順照寺の住持となり、安藝の大瀛興情二師に就きて宗乘を學ひ、豐山の快道法印に從ひて俱舍、唯識、因明の學を修して攝津經歷和尙に侍すること多年、華嚴天台の學を受け、河內の慈雲明道の兩比丘に隨ひて悉曇律家の作法を傳へ、普門律師に依りて佛曆を習ふ、本山能化職を廢したる際、學林に階級なく、諸生勉學の氣を沮喪せるを以て、師本山に請ひて勸學已下の五級を定む、而して師首に勸學に補せられたり、興正寺攝信上人の侍講たること多年、天保二年疾に罹り、五月二十八日興正寺に寂す、壽六十一、諡を深妙院と云ふ、師四男二女あり、其第四子玄珠司敎となる、師の著作、般舟讃記、八宗綱要攻證、起信論義起賁講、敎誡律儀講述、各二卷、天台菩薩戒疏講演義三卷、日本紀神代卷講述一卷あり、其餘宗典の講錄三經七釋に涉りて四十餘部ありといふ(學苑談叢)

シヨージユ　正授　二一七一……〔曹洞宗〕越後雲門寺第三代なり、正授字は牧中出家して雲門寺鼎山存毓に投して心要を問ひ、服勤數年の後雲門寺を領して其三代となり、永正八年六月十四日寂す、壽缺く(日本洞上聯燈錄)

ヨージユローニン　正受老人　エタン慧端を見よ、

シヨーシユー　正琇　二二一五……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、正琇字は溫伯、其嗣承詳かならず、京都東福寺に住し、永明塔の獲衣を賀して曰く、爛斑色勝二紫茸氈一雙徑傳衣越二海天一、祖令于レ今留二付囑一、鸞膠再見續二來弦一、と康正元年五月八日寂す、（延寶傳燈錄）

シヨーシユー　正宗　リユートー龍統を見よ、

シヨージユーイン　正住院　ニチチユー日中を見よ、

シヨージユン　正順　二一七五……〔曹洞宗〕駿河大祥寺の開山なり、正順字は行之、信濃の人俗姓は櫻井氏なり、出家の後遊方し、洞慶寺大巖宗梅の法を嗣き、總持寺に住す、駿河大谷里に大祥寺を開く、明應八年敕を受け、總持寺に住す、駿河大谷里に大祥寺を創して養老す、永正十二年六月十九日寂す、法嗣大蒲正睦、寂照宗昕の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨージユン　正純　二五二八〔眞宗〕京都堀川瑞蓮寺の住持なり、正純は開發院と號す、寮司となりて嘉永六年より高倉學寮に入り阿毘達磨論倶舍論慧日論を講し、安政六年七月十六日擬講となり、同年より末燈鈔唯信鈔文意を講す、明治元年九月十三日（一に十四日）陸奥松前に寂す、一說に北海道江差に客死すといふ、（眞宗史料）

シヨージユン　正純　ニチヨ日譽を見よ、

シヨージユン　正淳　二二一五……〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、正淳字は虎溪、出家して諸名宿に徧參し、提室智闡に謁して其法を嗣き、分座說法す、天文五年提室寂するに及び、其席を繼ぎて加賀大乘寺に主となる、晩年承天寺に遷る、弘治元年二月二日寂す、壽缺く、承天寺に塔す、法嗣雪窓祐補あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨージヨーイン　正定院　セーシン制心を見よ、

シヨーセン　正專　ニヨシユー如周を見よ、

シヨーゼン　正善　（二八九七）〔天台宗〕攝津天王寺の僧なり、正善其氏姓を詳にせず、攝津天王寺に住す、始め圓光大師に師事し、嘉禎三年六月鎭西の辨圓に從ふ、德望世に顯はる示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

シヨーソ　正祖　（二〇八七）〔曹洞宗〕越前寶圓寺の二代なり、正祖字は直傳、丹波の人、十三歲にして永澤寺通幻禪師の許に投じて落髮し、大原寺に至りて普濟に參し、左右に給仕す、普濟の總持寺に遷るに及んで之れに從うて印可を受け、諸嶽山を司どり、後ち永澤寺に移る、應永中龍泉寺に主となる、高瀨某越前に寶圓寺を建立し、請して第二代となす、道風最も盛んなり、後ち命を受けて總持寺に住せしが、老を告げて寶圓寺に歸り、某年寂す、世壽缺く、法嗣心忠孝等七人あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーソー　正曹　（二一四四）〔曹洞宗〕上野茂林寺の禪僧なり、正曹字は南溪。上野茂林寺の大林正通の法を嗣き、其席を承けて同寺に主となる、信濃村上義淸風幡山龍洞院を開き、師請せられて開山となる、寂年及び壽缺く、法嗣嫩桂祖香あり（日本洞上聯燈錄）

シヨーチ　正智　二二九五　二三三三〔曹洞宗〕伊勢長昌寺の禪僧なり、正智字は明堂、奧州會津の人なり、天寧寺に入りて剃髮得度し、若狹發心寺に往き、丹嶺に謁し、其敎を受け、次に黃檗山木菴に參し、戒を受く、後紀伊林泉寺傳室文的の室に入り

て衣法を受け、伊勢長昌寺に住す、禪誦の暇經典を血書し、每字三禮す、延寶元年八月六日寂す、壽三十九、遺偈あり、昨夜須彌飛入レ海、天明踍跳大虛空、生生死死是何物、火裏優曇徧界紅、青天白日、白日青天、作日恁麼、今日恁麼、古往今來、只如レ斯(日本洞上聯燈錄)

シヨーチ 正智 キヨーカク教覺を見よ、

シヨーチヨー 正澄 一九三四 一九九九 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、正澄字は淸拙、元の福州連江邑劉氏の子なり、家世〻儒なり、母孫氏靈夢に感じ孕むあり、四歲學に入る、十五歲報恩寺月谿圓に師事す、圓は其伯父なり、十六歲開元寺に投じて具足戒を受く、明年鼓山の平楚聳に謁し、參究大に力む、誓ひて臂香を燃して危坐すること六年なり、會中に谷源岳、無方普、大歇眞あり、師隨ひて敲問怠らず、二十二歲浙に往きて淨慈寺愚極慧に謁し、十五年の後諸方に遊び、靈隱寺の虎巖、育王山の東巖、蔣山の月庭等の諸老宿に參し、皆器重せらる、一時の龍象、古林茂、東嶼海、竺田心、斷江恩の如きは皆同參にして相交る、後、仰山の虛谷陵に謁す、陵徑山に遷り、晦機熙仰山の席を補ふ、師同じく衆に首たり、袁州太守玉本齋一面して道を問ひて相交り、雞足山に請す、師一住四年、道俗歸仰深し、尋て松江の眞淨寺に遷り住す、我朝嘉曆元年(元泰定三年)六月我國請を受け、高弟永鎮等と共に東航出發す、秋八月博多に着す、翌二年正月京師に上る、北條高時專使を遣はして建長寺に迎ふ、寺制一に支那に則り、鐘鼓響を改む、高時二千石を施し、食輪に資す、三年にして淨智寺に遷り、結制上堂す、尋て圓覺寺に遷りて上堂す、住持四年にして福山の禪居菴に退居す、元弘三年後醍醐天皇龍駕京師に歸り、師を召し、建仁寺に住せしめたまひ、莊田若干畝を賜ふ、三年にして南禪寺に住せしめたまふ、師再三辭するも許されず、遂に恩命を拜す、信濃の太守小笠原貞宗歸依し、戒法を受けて弟子の禮を執る、延元の初め同國伊賀良庄に疊秀山開善寺を開きて師を迎へて開山となす、一住三年にして東山の禪居菴に歸へる、朝旨あり再び建仁寺を董せしむ、師老病を以て辭すれども許されず、乃ち職に就く、江湖の雲衲歡喜附隨す、曆應二年正月十日俄に微恙あり、十二日信濃の太守某の强請により、其女を度し、戒を授く、歸後大に疲勞す、十五日に至り上表して辭謝し、十七日に沐浴新衣を著く、而も談笑常のことし、伯耆の太守土岐賴貞、(存孝居士)同子彈正少弼賴遠、同孫刑部少輔賴康共に來り慰問す、師遺偈を書し、且つ古銅香爐を附與す、大夫將監足利某吏部少輔大友某慰問法益を被る、道俗の弟子皆永訣を惜みて悲泣す、師大笑して曰ふ、今日は百丈祖忌の辰なり、吾將に行かむ、と、弟子を呼び、筆を索めて遺偈を書し、晏然として寂す、壽六十六、臘五十三なり、語錄七卷、並に大鑑淸規あり、遺偈に曰ふ、毘嵐卷レ空海水立、三十三天星斗濕、地神怒把鐵牛鞭、石火電光追不レ及、建仁建長の禪居菴に塔を建つ、勅諡大鑑禪師と云ふ、(塔銘、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

シヨーツー 正通 二〇五四 二一四四 〔曹洞宗〕上野茂林寺の開山なり、正通字は大林、美濃の人、俗姓は土岐氏なり、幼にして出家し、京師及相摸の諸老に歷參し、鄕里に歸りて親を省す、因に龍泰寺の華叟正蕚に侍すること三年にして得悟す、應仁

元年最乘寺に住し、上野館林に青龍山茂林寺を開く、文明十六年四月十九日寂す、壽九十一、臘六十三、法嗣南溪法曹あり（日本洞上聯燈錄）

ショーテー　正呈　二〇六〇……〔曹洞宗〕播磨永天寺の禪僧なり、　正呈字は德翁、壯にして出家し、徧く諸老の門を叩き、松岸旨淵に大乘寺に參し開悟す、播磨の永天寺に住し、尋いて越前の光禪寺を主とる、應永七年三月十二日寂す、（日本洞上聯燈錄）

ショーテー　正挺　二〇七七　二一六一　〔曹洞宗〕上野最興寺の第二代なり、　正挺字は天倫、俗姓は平氏、上野甘樂郡の人、幼にして雙林寺一州正伊に師事して其法を嗣き、小幡の城主平憲重南蛇井鄕に最興寺の古跡を興して一州を開山とし、師を第二代に延く、文龜元年二月二十二日寂す、壽八十五、臘六十三、法嗣通菴浩達あり、（日本洞上聯燈錄）

ショーテツ　正徹　二〇四〇　二一一八　〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、　正徹字は淸岩、號は招月菴、備中の人小田氏なり、兩親に從ひ京師東洞院に家居し、幼より好みて和歌を詠す、稍長して奈良に遊び、釋門に投す、後東福寺に入り栗棘菴に住し、書記となる、因て徹書記といふ、冷泉爲秀に就いて和歌を學び、益其道に達し、盛譽一時に揚る、京師の東なる今熊野に閑棲し、門學大に榮ふ、偶火災に遭うて詠草三万餘首を燒失す、其後の詠草三万餘首あり、長祿二年五月九日寂す、壽七十九、著作草根集、徹書記物語等あり、門人正廣、正般、正周等皆和歌を以て聞ゆ、（徹書記物語、翁草、梅菴古筆傳）

ショートー　正燈（……）〔臨濟宗〕京師梅熟菴の開山なり、　正燈字は無傳、羽州の人なり、永源寺寂室和尙を禮して剃髮し、龍湫に參す、久しうして了悟し、法衣及び龍湫自畫の不動明王を付せられて信印となす、洛西に梅熟菴を構へて幽居し、諸方の招きに應せず、後、諸州に遊化して精舍を營構す、攝津の梅子寺、出羽の金勝寺、越前の梅林寺等これなり、師また楞嚴法華に精しく、禪餘講を開きてこれを講す寂年缺く（延寶傳燈錄）

ショートツ　正訥（……）〔臨濟宗〕相摸萬壽寺の禪僧なり、　正訥字は大辨、出家の後耕雲原に參して法を嗣ぎ、相模萬壽寺に住す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

ショードン　正暾（……）〔曹洞宗〕越前寶圓寺の禪僧なり、　正暾字は直鷹、久しく桂質皜芳に參して首座となり、總持寺に出世して桂質の嗣となる、桂質の寂後、越前の寶圓寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣大透圭徐あり（日本洞上聯燈錄）

ショードン　正曇（……）〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、　正曇字は天海、俗姓は藤原氏肥後の人なり、悟宗に投して出家受具し、代賢守仲に參すること三年、其法を嗣き、出世歷遷して薩摩福昌寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣大麟全索あり、（日本洞上聯燈錄）

ショーネン　正念（……）〔淨土宗〕京師某菴の僧なり、正念俗姓詳ならす、初め蓮華谷の明遍僧都に師事して顯密二敎を究め、後、淨土敎に皈し、鎭西の聖光に謁し弟子となる、蓮華谷の妓女某の念佛往生の祥瑞を聞いて深く隨喜感嘆す、示寂年月日詳ならす、（鎭流祖傳）

シヨー子ン　正念（……）〔淨土宗〕山城岩鼻念佛堂の僧なり、正念初は黑谷に住し、念佛を事とす、日々京師に出てゝ托鉢し、人々其念佛の聲を聞いて米錢を施す、念佛堂に皈り、其米錢を佛前に持ち至り、其四邊を回行し、佛像に向ひ願け々々と言ひ、後に食したりと云ふ、其餘奇行を以て聞ゆ、示寂年月日詳ならす、一枚起請文、並に辭世の歌あり一枚起請文にいふ、もろこし我朝のもろ〳〵の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず、又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず、只不用の者のためには世の妨となるましとさへ心得れは、疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて隱居するより外別の子細候はず、但し肝心の世わたりと申すことの候へども、みな衣食住のうちにこもり候なり、この外に欲深きことを存せば、諸人のあはれみにもはづれ候べし、假令薦をかぶり、糟糠をなめ、人の軒端に臥せるとも、食ひては寢、食ひては遊ぶ君か代のありがたきを忘れは、身は安樂になりたりとも、生きたるかひもあるまじく候、あなかしこ、辭世に曰ふ來て見ても來て見ても皆同しとこゝらでちよつと死んで見やうか（正念の傳）

シヨー子ン　正念　一八七五—一九四九　〔臨濟宗〕相摸淨智寺の禪僧なり、正念號は大休、宋溫州永嘉郡の人、初め靈隱寺に投じて東谷光に參して省あり、偈を作りて呈し、後、石溪禪師に參す、師問ひて曰ふ、達磨葬ニ熊耳一、因レ甚隻履西歸、師曰ふ、眼觀ニ東南一、意在ニ西北一、禪子打つこと一拂子、師當下に脫然たり、文永六年（宋咸淳五年）の夏商船に乘り來る、鎌倉に到り建長寺蘭溪道隆に依る、尋て壽福、禪興、圓覺諸寺に歷住す、後圓覺寺內に藏六菴を開き、觀世音像を安置す、道聲四振し、北條時宗屢就きて法益を受く、正應二年十一月三十日寂す、壽七十五、語錄あり、遺偈に曰ふ、拈ニ起須彌槌一、擊ニ碎虛空鼓一、藏レ身沒ニ影踪一、日輪正當レ午、勅諡佛源禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨーモク　正睦　二一九二……〔曹洞宗〕駿河永明寺の禪僧なり、正睦字は大蒲、旨を行之正順に得て其席を繼き駿河の永明寺に主となり、又遠江大洞寺に遷る、後辭して永明寺に皈る、永正八年の冬總持寺に住し居ること僅に二日にして永明寺に退居す、天文元年八月十日寂す、壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シヨーモン　正文　二二二三……〔曹洞宗〕上野雙林寺の開山なり、正文字は月江、藤原氏の子なり、幼にして出家し、徧く諸講席を歷遊し、後相摸に至る、一日講了て衆退く、唯一老婆あり獨坐默然として悲泣す、師其所以を問ふ、婆曰く、師の稟質を見るに、應に大器と成るべし、惜らくば只義學に止る、十里の內に了菴和尚あり、盛に禪道を唱へ、學人を誨諭す、請ふ去て之に見へよと、師乃ち講を棄て直に大雄山に登り、了菴和尚に謁し、後、辭して補陀山に徃き、無極和尚に禮謁し、月江の號を贈らる、師事すること數年、無極の寂後徒衆師を起て之を補せしむ、四方の學者輻湊す、尾張の檀越某楞嚴寺を創し、師の道風を聞き請て主たらしむ、尋て永澤寺最乘寺等に遷る、應仁の歲最乘寺を退き、武藏の小山田に卜居す、即ち无極住菴の地なり、師改め遷り、大泉寺を建立す、無極を以て始祖と爲し、自ら二代に居す、長尾金吾上野國白井の莊に於て雙林寺を創し、師を奉して開山第一世と爲す、晚年

行化して武藏國足立郡に至り、其境致の勝絕を愛して、普門院を築て逸老す、寛正四年正月廿二日寂す、世壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

シヨーユー 正猷 二〇四〇 二一二一 〔曹洞宗〕周防龍文寺の開山なり、正猷字は竹居、自ら化化禪と號す、俗姓は長氏、薩摩伊集院の人なり、家に二子ありて師は其長子なり、父甞て其弟に謂て曰く、我聞く一子出家すれば九族天に生ず、と、汝出家學道して宜しく我迷津を度すべしと、乃ち師に命して弟を携へて妙圓寺石屋和尙に投じ剃度を乞はしむ、其將に剃度の場に及び弟俄かに叫喚して走る、師乃ち弟に代りて祝髮し、參叩久ふうして省あり、時に惟肖巖京都南禪寺に住す、師往て此に謁し、竹居の號を授けらる、辭して相模遠江等を歷て諸名宿に參し、妙圓寺に歸りて石屋に省す、尋で席を繼ぎて妙圓寺に住し、直林、福昌、永澤、龍泉等の諸寺に歷住す、後、大內弘忠の請に應じて長門大寧寺に主となり、一住十年、大に其廢頽を興す、周防の龍文寺、薩摩了心寺、松仙寺、堅忠寺、德住寺を剏して開山となり、法化最も盛んなり、應永二十八年旨を奉して總持寺に出世す、寛正二年疾に罹り、衆に告て曰く、我命僅に五日なり、と、檀越大內敎弘之を開き、遠く來りて慰問す、師對話常の如く、偈を書して曰く、混沌破了、八十二年、蚊子眉上、好打鞦韆、と、筆を投して寂す、時に十月二十五日なり、壽八十二、臘六十六、（日本洞上聯燈錄）

シヨーヨ 正譽 イテン意天を見よ、

シヨーヨ 正譽 オクドー憶道を見よ、

シヨーヨ 正譽 ギンジヨ誾助を見よ、

シヨーヨ 正譽 クソクサン廓山を見よ、

シヨーヨ 正譽 ヨーシユー陽洲を見よ、

シヨーヨ 正譽 リンサク林作を見よ、

シヨーヨ 正譽 リユーオク龍屋を見よ、

シヨーリン 正鱗（……）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、正鱗字は德祥と云ふ、絕海中津禪師に參侍すること久しうして遂に印可を付せらる、初め相模萬壽寺に住し、後京都建仁天龍二寺に遷住す、晚年靈源院に逸老す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シヨーリユー 正隆（……）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、正隆字は淸松大鑑禪師と號す、建仁寺禪居院の祖師なり、略淸規、坐禪牓、出班燒香圖等を作る、寂年缺く、（日本名僧傳、）

シヨーリユー 正隆 二〇四三 二一二二 〔臨濟宗〕豐前靜泰院の禪僧なり、正隆字は蘭山、號は積翠、出羽山形の人なり、早年出家の志あり、葷肉を食はず、父母勝因寺臺禪嶽に附す、陸奧の月船慧禪師一見して大に器許し、策勵する所あり、乃ち出遊し、丹波の大道可禪師に謁し、服侍すること六年に亘り、脫然省する所あり、日向に遊び、古月材禪師に謁す、當時古月材其嗣翠巖眞其孫拙堂敬弁に法化盛なり、正隆是等諸禪師の間に周旋す、有馬侯福壽寺を建立して古月材を開山となす、材禪師正隆を擧げて繼かしめむとするも、固辭して出てす、後豐前開善寺に住す、寶曆九年正法山第一座に列せらる、明和二年開善寺に鳥耕錄を提唱す、大衆三百餘人なり、小笠原侯忠總金穀を寄附す、同七年二月柳浦戶上山下の靜泰院に退

休す道譽益高く、僧俗追隨す、幾くもなく院は一大叢林となる小笠原侯年年金穀を寄附して衣鉢の資に充つ、寛政三年小笠原侯忠苗江戸に在り、遠く招聘し、優禮を加ふ、其夫人手裁の僧伽梨を贈る、寛政四年靜泰院に大鑑錄を提唱す、大衆三百三十餘人なり、尋て京都龍泰寺の請に應じ碧巖錄を提唱す、同年四月二十九日寂す、壽八十、弟子大蘇智玲、揚宗智旭、洪巖慧範其法を嗣ぐ、勅諡圓機應禪師と云ふ、（近世禪林僧寶傳）

シヨーアン　性安 二二九六 二三六五 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第六代なり、　性安字は千獃一に千呆と云ふ、號は曇瑞と云ふ明の福州府長樂縣の人、俗姓陳氏なり、十七歲にして僧となり、即非如一禪師に師事し其法を嗣ぐ、後、東航して長崎崇福寺中興二代となり、寛文二年退隱し、同三年即非如一禪師に從うて宇治の黃檗山に登る、幾もなく長崎に皈り、再び崇福寺に住す、天和元年國內饑饉す師書籍器具を賣り、九月十五日より粥を施與す、同二年益饑饉なり、師徑五尺五寸の大釜を鑄造し、粥を施與す、元祿八年再び黃檗山に登り、同九年第六代の山主となり、正月廿八日進山の式を行ふ、元祿十一年紫衣を賜はる、寶永二年二月朔日寂す、壽七十なり、（黃檗宗史料）

千獃禪師

シヨーイン　性印 二〇六八 二一三〇 〔曹洞宗〕美濃開元院の禪僧なり、　性印字は月泉、俗姓は大江氏、京都の人、應永十五年正月二十日を以て生れ、幼にして比叡山首楞嚴院に投じて受戒し、顯密の敎を學ぶ、然れども密かに禪門を慕ひ、諸老を歷問し、備中洞松寺を過ぎり喜山に參し、服勤二年、其寂に際して遺命に依り、靈嶽洞源に參す、後、辭して諸方に參し、永平寺に出世し、耕雲寺大洞寺に歷遷し、尾張野口に茅菴を結びて居り、美濃日吉に入り、茲に菴を結び養老す、永亨十年三月大悟し、靈嶽の用所に徹す、乃ち往て靈嶽に逢ひ、號を與へられて月泉と云ひ、且つ金襴の袈裟を付せらる、嘉吉三年美濃國主土岐賴元鷹巢山開元院を開き、師之れを開堂す、後總持寺を主とり、開元院に皈る、文明二年十二月二十八日寂す、壽六十三、臘五十三、塔を開元院に立つ、法嗣盛禪洞奭あり（日本洞上聯燈錄）

シヨーイン　性寅 二二〇〇 二二七一 〔曹洞宗〕駿河增善寺の開山なり、　性寅字は辰應、尾張吉田氏の子なり、十三歲美濃開元院月泉に投して出家し、游方して石雲寺崇芝性岱に參し、印可を蒙り、永平寺に出世し、石雲寺を司とる、駿河の今川氏增善寺を剏し、師其開山に請せらる、後武藏箭澤に到り、淨牧院に居り、永正八年九月寂す、壽七十二、臘六十、法嗣明巖志宣あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーウン　性雲 二三八八 二四二一 〔淨土宗〕江戸增上寺の學僧なり、性雲字は託龍、玉蓮社淵譽と云ふ、周防德山の人なり、幼にして八正寺膽譽上人に師事し、延享中十七歲にして江戸に出遊し、增上寺に錫を掛け、隨典上人に學ふ、後、相摸の海濱に幽棲し專ら念佛を事とし、靈感多し、寶曆中周防に歸り、西照寺に留り、益念佛を力む、後再ひ江戸に入り、淨土敎の弘通を以て任となす、寶曆十一年六月二日江戸築地に寂す、壽三十四、增上寺境に墓あり、(三緣山志)

シヨーウン　性雲　シユーエツ宗悅を見よ、

シヨーウン　性雲　タクリユー託龍を見よ、

シヨーエ　性慧　コーチヨー光超ヶ見よ、

シヨーエー　性叡　キヨーニン慶忍を見よ、

シヨーエキ　性易 二二五六 二三三二 〔黃檗宗〕豐前廣壽山の禪僧なり、性易字は獨立、明の杭州仁和縣の人戴笠字は曼公と云ふ、其先は戴安道より出づ、世々山陰會稽に家す、父詮部敬橋善行あり、母陳氏姚陳龍江の女、六產七子を乳す、末產双にして師即ち其一なり、萬曆二十四年(我慶長元年)二月十九日に生る、幼名觀胤、(觀自在菩薩の靈辰なるに由る、)天資穎悟なり、夙に黌に登り學ぶ、二十五歲戰亂を避けて出遊し、山川の勝を探る、五十歲明亡び淸興るに方りて慘憤に勝へずして自晦す、會〻人の誘ふありて東航し、承應二年三月長崎に到着す、奉行橋正述請留するに任せ、不歸の歌を作り住す、翌三年隱元琦禪師東航し、大に法威を振ふを見て感嘆し奮然禪師の下に歸し得度す、時に五十八歲なり、是に於て獨立性易と云ひ、天下一閑人と號す、明曆元年八月琦禪師に隨行し、攝津普門寺にあり、書記を掌る、萬治元年九月同じく隨侍して江戸幕府に到る、幕府の重臣松平信綱、源正重等深く師の才識學德に服し、住錫を請ふも事阻みて果さず、同二年病に罹り長崎に還る、寛文五年即非一豐前の廣壽山を開くにあたり、師同山に登り、法化を助く、豐前侯山內に白雲室を構へ幽棲に充つ、後琦禪師に省覲せむとし、途次に疾に罹りて果たさず、廣壽山に還り遂に寂す、詩あり曰ふ、鑿々塵々傍海村、不忘殘夢繞空軒、咄、任他凍折梅花就、接起江南白玉魂、と、壽七十七、臘十九、實に寛文十二年十一月六日なり、闍維の後靈骨を黃檗山に葬る、著作永陵傳信錄、流寇編年錄、殉國彙編(以上渡航以前作)一峰雙詠、有樵別緖記、就菴獨語、東矣吟(以上渡航以後作)等あり、師詩文翰墨篆刻醫術に通ず、俗弟子長崎の高玄岱其書風を傳へて名あり、正德の末江戸に入り、信綱等に謁し、相謀りて武藏金峰山平林寺に堂を構へ、梅花關と署し、性易の像を安じ、

獨立禪師

碑を建立す、享保元年三月功畢り供養を行ふ、(碑銘、名家略傳、坤齋日抄、先哲叢談續編)

シヨーエン　性圓　二一一七 一三九四　〔黄檗宗〕攝津正樂寺の開山なり、性圓字は獨照、近江の人、俗姓は富田氏、幼にして父を失ひ、叔父に從ひ、居を但馬出石郡に移す、十一歳郡の青龍寺に投じ剃髮受業す、十八歳遊方し、和泉祥雲寺の澤菴和尚に依る、適一絲禪師來る、師即ち謁して法を問ふ、時に年二十二なり、師性多病、遂に高峰に傚ひ、三年の死限を立て、心に研究す、其期限終り、再び丹波大梅山に一絲に謁し、所解を呈す、然れとも未だ契せず、其命により、衆を避けて栖雲菴に居す、正保三年、一絲近江永源寺に於て寂するに方り、師病を力めて喪に奔り、後、嵯峨細谷に直指庵を設け、終焉の計をなす、正應中隱元禪師東明寺に住す、師長崎に往き、參謁して所解を呈す、然れども契する能はず、これより大に奮勵して、朝參暮叩甚だ力む、後命により侍司となり、明年普門の行に從ふ、萬治二年春、嵯峨に遊び、菴に止まること旬餘、寛文十年十一月薄暮、丈室に兀座し、忽ち枯松の地に落つるを見、豁然大悟す、明年正月松隱菴に隱元を謁し、機語相合し、拂子を付せらる、時に年五十五なり、翌年新に方丈を建て、冬夏二季禁足安衆し菴居すと雖一方に旗鼓たり、延寶元年隱元の寂するや、柏巖節遺命を受け、源流の法衣を齎し、兼ねて眞賛を題して師に付す、貞享三年奈良に遊び、聖跡を歷覽し、又攝津正樂寺主貞竹巖に請はれて開山となる、元祿元年衆の爲めに菩薩戒を授け、七年五月病に罹り、七月十七日偈を書して曰く、鏡象不レ生、水月不レ滅、打二破虛空一生滅不別、阿呵呵是什麼、咄と、筆を投して寂す、壽七十八、臘六十八、法嗣澄月潭等三人あり著作語錄若干卷あり、(黄檗譜略、續日本高僧傳)

シヨーオー　性應　二一一八　〔曹洞宗〕遠江海藏寺の開山なり、性應字は物先、信濃國の人なり、十五歳にして大洞寺如沖禪師に師事し、一時の高僧に歷謁すれども機緣皆契はず、再び如仲を訪ひ自ら松雲菴を築て居る、衆其德風を聞き、來歸するもの市の如し、初め總持寺に出世し、大洞寺瀧澤寺に移る、伊豫國太守今川貞世、海藏寺を創し、請て開山と爲す、晩年行化して羽前國高玉に至り、地を得て瑞龍院を創す、長祿二年二月廿二日寂す、世壽詳ならず、(日本洞上聯燈錄)

シヨーオー　性應　チクー知空を見よ、

シヨーオン　性音　リヨーシヨー良勝を見よ、

シヨーカイ　性海　二四二五 二四九八　〔眞宗〕和泉萬福寺の住持なり、性海一名は道超といひ、明和二年越中射水郡樂々寺に生る、後、和泉大鳥郡堺萬福寺に住す、少壯より笈を負ひて諸國を遊歷し、比叡山豐山に登り、天台及ひ性相の學を研き、後淨信院に師事して宗乘を學ひ、其衣鉢を傳ふ、文政五年讃阿彌陀偈を副講し、六年安居本講正信偈を講す、七年九月學林始めて勸學職を置く、師も亦擢てられて其職に居る、天保九年正月寂す、壽七十四、號を下して乘著院といふ、著作囘願遠慶錄四卷、淨土論服膺記二卷、阿彌陀偈記　卷本典講義若干卷あり、(學苑叢談　本願寺派學事史)

シヨーカイ　性海　二〇四七 一三八七　〔眞宗〕近江高宮圓照寺の住持なり、性海字は無涯、後慈航を名とし、性海を字とす、京都

眞覺寺明性の男にして知空の弟なり、篤學を以て聞ゆ、兄圓海の後を繼きて圓照寺に住す、宗主師を嘉みす、享保十二年正月十日寂す、壽八十四、諡して誠實院といふ、著作無量壽經顯宗疏十七卷、正信偈要解刊定說五卷、小經聞持記補科三卷、因果經首書一卷あり、（本願寺通紀、淸流紀談、本願寺派學事史）

シヨーカイ　性海　二三四四／二四二四　〔眞言宗〕大和長谷寺第二十五代なり、　性海字は敎任、父は平石氏、母は白澤氏、下野鍋山に生る、夙に寶蓮寺圓海に就きて剃髮受戒し、顯密を學ぶ、後小野廣澤に往きて灌頂を受く、衆請に依り雨を祈ること前後三回、故に師を雨法印と云ふ、寬延三年秋命により江戶根生院に國家安寧を祈る、寶曆十年六月十八日再ひ命ぜられて妙音派の能化となる、明和元年八月二日豐山の方丈に寂す、壽八十一、臘六十八、（豐山傳通記追加）

シヨーカイ　性海　リヨーカ良迦を見よ、

シヨーカイ　性海　ガカイ雅海を見よ、

シヨーカイ　性海　リヨーケン靈見を見よ、

シヨーカク　性覺（…………）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　性覺は猶親王と號す、禪林寺法皇の子なり、三たび三井寺の長吏となる、寂年缺く、（三井續灯記）

シヨーキ　性機　二二六九／二三四一　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺第三代なり、　性機字は慧林、初の名は獨知と云ふ、俗姓は鄭氏、支那福州福淸の人、宋の一拂先生生介公の後なり、幼にして舉業を習ふ、されと頻に佛法を慕ひ、俄に明淸交代の節出家し、祇園卉に從ひ業を補山に受く、時に年四十なり、順治六年黃檗山に登り、隱元禪師に參謁し、僧堂に進み、力めて道州布衫の公案を究め、屢々心盤即非一禪師に就きて請益す、此年冬比丘戒を受く、明年隱元の命により記室となる、本朝承應三年年四十六歲にして隱元に從ひて東航し長崎に來る、隱元初め東明寺に開法し、次に聖壽寺及ひ普門寺に歷住す、師記室となり、後綱維に任し、參扣敢て廢せす、遂に隱元の證明を得、舉けられて西堂となる、寬文中靑木侯攝津に佛日寺を建て隱元を延きて開山とす、師元の命により往き住す、寬文五年黃檗山の木菴和尚戒會を開き、師を請して羯磨師とす、歸山して接衆の餘暇、手から華嚴等の諸經を書し、普觀堂を設けて安置し、又父母及ひ受業師の爲に鉢資を減して腴田を置く、延寶八年春黃檗山に住す、老病交々累ひ、自ら報緣の久しからさるを知り、山中に龍興院を造りて養老の所とし、是秋毘尼壇を開く、受くるところの七衆五百餘人なり、天和元年冬結制す、病重なるに及ひ、乃ち法語、並に遺囑を書し、天和元年十一月十一日寂す、壽七十三、臘三十四、遺偈あり曰く、來也錯、去也錯、一隻草鞋活如龍、打箇翻筋斗錯々々、と、塔を龍興と云ふ、生前著作する所二會語錄、滄浪聲、及ひ耶山集二卷あり、嗣法盧山經等若干人を出す、（黃檗譜畧續日本高僧傳）

シヨーキク　性菊　二一七六…………　〔曹洞宗〕伯耆龍仙寺の禪僧なり、　性菊字は仙林、華庭良椿に依りて得度し、永祥寺密山に參して歸り、華庭の法を嗣きて伯耆龍仙寺に主となり、永正十三年五月八日寂す、壽缺く、法嗣嘯巖全虎あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーキン　性欽　二〇四四 二一一五　〔曹洞宗〕丹波松山寺ノ開山なり、性欽字は牧翁、京師の人、近衛亟相の季子なり、早年丹波永谷に入り、英仲俊に隨事し、十三歳落髮受戒す、應永十一年葛野に菴居し、禪坐十三年なり、雲衲四來し叢林をなす、乃ち松山寺と號す、應永廿三年英仲俊示寂す、師遺命により其席を補す、十年にして寺宇火災に罹る、師募力化財して再興す、晩年永澤寺に住す、文安五年越前慈眼寺に遷る、門下五百隨從す、明年再び永谷に還る、康正元年十二月十九日寂す、遺偈あり、牧ㇾ得牯牛ㇾ住、七十有二年、如今和ㇾ雪放、端的臘梅天、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄）

シヨーキン　性均　二三三九 二四一七　〔眞宗〕江戸築地安養寺の住持なり、性均字は唯阿、號は白蓮室、俗姓は木村氏、父は祐西、天和元年に生る、本願寺能化知空に謁して宗學を受く、安養寺に住し、後寺側に小菴を營み、學問を事とし、內外の學徒に重せらる、寶曆二年京都に上り、叢林に選擇集を講す、大衆宗義に左ふを以て、屢々難問を加ふ、往復決せす、遂に逼れて京を去る、寶曆七年八月十四日寂す、壽七十九、師內外の學に通し淨土敎に關し華嚴の鳳潭、天台の靈空等と對論す、著作俱舍論頌疏資講鈔二十卷、西域通路記五卷、大經欣厭鈔四卷、阿彌陀經欣厭鈔、法相義徵考、各三卷、蓮門詮要編、二十唯識冠解、新撰發心傳、眞宗勸誡集、同後編、追薦要決資講鈔、性學開蒙註、各二卷、追薦要談、遣身往生傳、台淨念佛復宗訣、雷斧辨訛、僻難檢非、梵網古迹玄談、一紙法語講註、松戶隨筆、各一卷あり、（本願寺通紀、本願寺派學事史、近代名家著述目錄）

シヨーキヨー　性慶　二三二七 二三九七　〔天台宗〕近江法明院の中興なり、性慶字は義瑞、近江滋賀の人、俗姓は井上氏、其先は安藝太守福島正則に事ふ、父の名は常庚、母は大溝侯の臣小野寺秀介の女なり、寛文七年正月二十三日を以て生る、寛文十二年六歳にして園城寺に入り、大僧都亮慶に師事して經書を習ふ、八歳摩訶止觀を讀み、延寶三年九月二十八日慶元僧正を拜して祝髮す、延寶七年十三歳にして父を喪ひ、天和二年母を喪ふ、時に十六歳なり、貞享二年亮慶僧都痾に罹り、師夙夜病に侍し、僧都寂する後、千葉院に歸り、四年春宥雅僧正を拜して瑜伽法を受け、十年論場の講師となる、元祿二年妙立和尙天台學を洛東に唱ふと聞き、往て依止し、妙宗十義の諸書を聽く、尋で菩薩の大戒を受けて山に歸る、四年秋宗覺律師京城に於て行事鈔を講ずるを聞き、四月十六日自誓して菩薩の沙彌戒を受け、律師を請して證明となす、十一月聖護院道祐法親王師に大仙院を賜ふて住持せしむ、八年春道尊親王の請に應じて小止觀を講す、九年九月近江石山の南に茅廬を結びて幽棲す、十二年各本山の僧正敬祐僧都祐慶人をして師に請はしめて曰く、志賀山寺は正純禪師中興の地なれとも殆んど荒圮に及ぶ、師請ふ興隆せよ、と、師乃ち之に從ひ、明年工を初め、遂に舊觀に復す、十六年本山に請はれ、春より秋に至りて法華入注を講ず、蓋し其書初め入疏と名けしを、師入注と改め、其說・篇を著す、寶永元年春觀經疏鈔を講し靈空の筆記を駁す、靈空乃ち內外二境・撰して强て其前說を救ふ、師復辨內外二境辨を著し、大に四明の正義を發す、二年靈空の弟子問諳錄を作りて其師說を扶く、師重ねて內外

シヨー（性）キ

止觀拾遺五卷を撰して之を斥く、寬永五年春伏見中務卿邦永親王師に法要を諮ひ、世子兵部卿貞建親王と俱に殿中に請し菩薩大戒を受け給ふ、此歲泉近鄉淨信士女の請により、念佛會を建てゝ勝蓮社と號す、正德二年八月貫首圓滿院覺尊親王師の德風を仰ぎ、遠く貲山に到り、弟子の禮を執り給ふ、三年久靈空未だ前義に伏せず、彈拾遺を著す、翌年四月師內外境觀二百難三卷を作りて之を斥く、享保二年八月內外境觀大義三卷を撰して篋中に藏し、後人の需に依り、更に書二卷を製して十不章と云ふ、六年知積院の支院京都六波羅密寺開基空也上人の七百五十年忌なるを以て本院の大衆に請はれて法華入註を講演す、八年春讃岐天台徒の請に應じ、蓮門院に於て觀經疏鈔、及小經要解を講す、高松侯席に臨みて聽講し、有司に命して遍く勞問せしむ、講終りて歸途播磨書寫山に登り、衆徒のために始終心要大義を講す、此歲十一月唐土山法明院の古趾に工を始め、翌九年落成す、因て永く園城寺の律院となす、時に年五十八なり、靈元法皇師の道譽を聞き、十一年八月宮に召して淨土の法要を問ひ、これより數々離宮に召して道話せられ、崇信最も深し、元文二年諸徒の爲めに囑辭三編を作り、四月疾に罹り、更に醫藥を用ひず、六月六日遂に寂す、壽七十一、臘二十九、著作行事鈔資持記節要四十二卷、業疏撮解七卷、法華入注義苑三十卷、法華畧疏十卷、同輯釋二十卷、觀經疏鈔釋要六卷、觀音玄疏記講錄八卷、普賢義疏講錄二卷、觀行節要二卷、十義書講錄二卷、四敎義直解三卷、辨內外二境辨二卷、內外境觀拾遺五卷、內外境觀二百難三卷、內外境觀大義三卷、內外境觀十不章二卷、圓戒荅問、行事明鑑、即心念佛談義本辨僞、同彈忘錄、法華釋題、弘傳序集註、敎觀綱宗講錄、止觀大意講錄、念佛心印記講錄、敎觀要門講錄、沙彌威儀經註、玄義節要註、各一卷あり、外に法語雜文輯して二卷となし、題して唐山集と云ふ、（義瑞和尚行業記）

シヨークー　性空　一五七〇／一六六七　〔天台宗〕播磨圓敎寺の開山なり、

性空は京都の人、橘諸兄六世の裔、大中大夫善根の子、母は源氏なり、延喜十年を以て生る、十歲にして始めて法華を持す、承平七年父を喪ひ、母に從つて日向に往き、天慶八年三十六歲にして比叡山に登り、慈慧僧正を師として剃髮受戒し、敎觀を習ひ、辭して日向に歸り、霧島に菴居し、四年を經て筑前脊振山に登り、晝夜勤修し、康安三年出てゝ諸名山を巡り、播磨書寫山に登り、圓敎寺を剏し、其開山となる、圓融上皇使を遣して招けとも師堅く辭して起たず、晚年通寶山彌勒寺を剏して終焉の處とす、寬弘四年三月十日寂す、壽九十八、（元亨釋書、本朝高僧傳）

性空上人

シヨーケー 性瑩 二二八八 二三六六 〔黄檗宗〕山城宇治萬福寺第四代なり、性瑩字は獨湛、支那福建莆田の人、姓は陳氏、宋の丞相陳俊の裔、明の孝廉御史茂烈の雲孫、父は翊宣、母は黄氏、世々儒を業とす、母没するに及び、生死の無常を知り、十六歳にして積雲寺衣珠に依りて薙髮し、此日血を刺して疏を書し、佛に誓ふ、法華、楞嚴、並に高峰の語錄、雲棲の諸書を閱して坐禪の要を明にし、日夜萬法歸一の話を參究し、一夜佛燈に影して坐して四更に至り、了然として其旨を會得したれとも、未だ之を以て究竟とせず、石壁高絶の處に安坐す、淸の順治六年承天寺亘信和尙に參謁し、八年夏黄檗山にて隱元に參し、鼓山に登り、永覺禪師に謁す、十年冬登壇受具す、二十七歳隱元に從ひて來朝す、寬文三年隱元法を黄檗山に開く時、師西堂に任して分座說法す、翌年遠江近藤語石居士の請に應じ、六月初山に寶林寺を建て、五年十一月開堂し、大に法化を敷く、次に上野に赴き、國瑞寺を剏し、天和二年春命を受けて黄檗山に主となり、接衆十一年、寺務繁多の間にありて淨土敎を修し、日に阿彌陀經四十八卷を誦す、元祿五年獅子林に退隱す、遠江の語石居士、屢々請して山に歸へらしむ、十年二月再び菩薩戒を初山に開き、受者萬餘人、會終りて獅子林に歸へる、寶永三年正月廿五日の夜、偈を書して曰く、我有ニ一句ニ別ニ于大衆、若問ニ何句ニ不說不說、二十六日念佛正念にして脫然として寂す、壽七十九、嗣法圓通成、悅峰章著十人、著作語錄二十卷 扶桑寄歸往生傳二卷、稱揚淨土詠讃、授手堂淨土詩 作福念佛圖說、當麻曼荼羅緣起說、各一卷、あり（黄檗譜略、續日本高僧傳、蓮門經籍錄）

シヨーケン 性憲 二三〇六 二三六九 〔淨土宗西山派〕山城眞宗院の中興なり、性憲字は慈空、別號は、蓮居、父は馬杉氏、京都の人にして、世々官吏たり、年甫めて十一歳にして安養院龍空瑞山和尙に就きて侍童となり、日々經書を習ひ、十四歳薙髮染衣す、時に專意向老なる者市中に隱棲し、淨土の行業を勸修せり、師之と交る、十六歳向老と共に太秦の桂宮院にて慈忍猛律師に謁して菩薩戒を受け、甚だ器重せらる、之より多く律門の諸老に隨ひ、且つ諸宗の大德を詢ひ敎觀を究め、儒老百家の書と雖も、苟も內典講究の補益あるものは通誦せざるなし、安養院席を缺くに及び、師請せられ、辭退効なく遂に董し、一住三年、大に宗風を揚ぐ、龍空深艸に退隱するや、師其蹤を追ひ、側に茅菴を營みて幽棲す、四衆道風を慕ひて到るもの多し、遂に河內埜中寺に往き、上座に禮謁し、懺摩を修し、具足戒を受く、龍空深草四百餘年の廢趾を中興するに及び、師緖を繼きて佛殿、經藏、祖塔、僧寮、方丈、厨庫、鐘鼓、二樓門、浴室等を成就し、道俗雲聚の地となり、日に源信僧都の往生要集を開演す、師別に一院を建て、通西と號し、佛を安し、自ら居る處を東林堂と名け、池を設け蓮を植え、自ら愛蓮の說を作りて高く揭く、黄檗山獨湛高泉の二老禪師來訪し、山風の高邃を喜ひて詩を贈り、互に法盟を結ぶ、以後往來して相親む、師嘗て蓮華勝會を開き、月の朔日より望夜まて之を續く、隣山の瑞光寺主慧明燈師と親交し、慧明師を推して依止闍梨とす、元祿年間眞宗院火災に罹り、殿堂僧房悉く烏有に歸し、師洛北の蓮養菴に退隱す、門人頻に回へらんことを請ひ、止むことを得すして諸

シヨー（性）ケ

し、復興を議し、幾なくして竣功す、正德年間大僧を集會して戒律を舉揚し、結界して永く衆僧の法地とす、享保四年十一月二十一日寂す、壽七十四、臘三十四、著作艸山法藥、(蓮門小清規、臨終節要、重修蓮門課誦の三卷合冊、)あり門弟瑞堂直高 忍草玄門 宜靈潭澄等あり、(慈空和尚行實、續日本高僧傳)

シヨーケン 性憲(……) 〔戒律宗〕大和戒壇院の學僧なり、性憲は美濃の人、圓照に從事して五篇七聚を學び、圓珠に從ひて灌頂法を承け、三學を研究し、宋に入りて留學し、遂に彼地に寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

シヨーケン 性謙 ジカイ慈海を見よ、

シヨーゲン 性源 二二七六 二三四七 〔黃檗宗〕相模淨業寺の開山なり、性源字は獨本、俗姓は法木氏、安房の人なり、六歲にして父と共に江戶に來り、靑松寺春道に從ひて祝髮受具し、寬永八年十四歲にして遊方參請し、五位の宗旨を探ること十餘年、後、龍安寺龍谿潛に見え、臨濟宗を傳ふ、正保四年辭して江戶に歸へり、深川に自肯菴を建て、承應二年維摩經を講す、捨て去りて石戶山に籠る、明曆元年隱元禪師の西來を聞きて諸徒を率ひて弘福寺に往き禮謁す、師時に三十八歲なり、萬治元年嚴有院隱元を延見して法を開く、師時に海福寺に住せしかは、乃ち請して開山とす、寬文二年黃檗山に掛錫し、藏司を知る、十二月登壇受戒し、明年辭して寺に歸へる、寬文十一年隱元師に偈並に琥珀の念珠を贈る、越えて二年隱元師に附囑の偈を書して其登壇を待つ、未た到らすして隱元寂す、天和元年相摸石藏山の基を得て淨業寺を開き、大に法幢を樹つ、貞享四年齡既に七十に垂んとするを以 龍潭を擧けて席を補せしめ、淨業寺に元祿二年八月十一日に寂す、壽七十二、臘六十七、偈あり曰く、七十二年、竪行橫還、履底今斷、生落黃泉、咦、(黃檗譜略、續日本高僧傳)

シヨーゴン 性嚴 ユークワイ宥快を見よ、

シヨーサイ 性才 ボーシン法心を見よ、

シヨーサン 性讃 二〇三七 二一〇二 〔曹洞宗〕備中洞松寺の開山なり、性讃字は喜山、信濃の人、妙齡にして出家す、時に如仲禪師遠江の大洞寺に在り、化門甚だ盛んなりと聞き、乃ち往て師事し、研究久しうして印可を受く、時に衲子七百人あり、師擢でられて座元となる、應永十九年備中舟木邑に洞松寺を創開し、盛んに洞上の旨を唱ふ、住すること三十一年、嘉吉二年七月四日寂す、壽六十六、(日本洞上聯燈錄)

シヨージン 性山 ……二四四五 〔天台宗〕信濃坐光寺の住僧なり、性山は信濃の人、妙齡にして出家し、比叡山に登り、備中の僧澄月、待雲と莫逆の交を結ひ、專ら天台教を練習す、後同志三人と共に笈を負ひて江戶東叡山に到り、解行益々進む、幾ならすして請に應して信濃伊奈郡大島山に主となる、後、澄月等も信濃に來り、師と相見て共に畿內山陽南海九州等普く名家に歷參し、京都に上り、新黑谷に籠居し、別れて信濃坐光寺に歸へり、天明五年十二月二日寂す、壽缺く、(續日本高僧傳)

シヨーシ 性獅 二二八四 二三四八 〔黃檗宗〕山城漢松院の開山なり、性獅字は獨吼、俗姓は朱氏、支那福州府鎭東衞の人なり、少にして嘉福寺に雲潤弘を拜して業を受け、年二十にして弘と

共に黄檗山隱元に參す、冬具足戒を受け、尋で左右に侍す、順治十一年隱元日本に渡來するとき、師三十一歲共に來朝す、寛文元年隱元黄檗山に遷るに方り、師堂司となり、幾何ならずして監院に進み、十一年秋山下に漢松院を建て、明年職を辭してこれに住す、延寶元年隱元寂するに際し、其法衣及自贊の像を受く、元祿元年十一月十六日偈を書して曰く、我是西來吼比丘、扶二師東海一振二宗猷一、化緣酬盡超レ空去、在處晏然得二自由一と、筆を投じて安祥にして寂す、壽六十五、臘五十三、門人岱峰師の語錄を編し、丘雲別集四卷あり、（黄檗譜略、續日本高僧傳）

ショーシン　性信　一八四七―一九三五　〔眞宗〕下總報恩寺の開山なり、性信俗姓は大中臣氏、名は與四郎常陸鹿島の人なり、性强暴なるを以て惡五郎と字せらる、十八歲の時法然上人に歸し弟子となり後親鸞に師事して、諸處に追隨す、親鸞越後に配流せらるゝ時亦追隨す、其京都に歸るに及び、箱根に至り命を受けて東國に一門の敎義弘通のことを掌る、下總の横曾根に住し、飯沼に寺を營み、報恩寺と號す、寶治元年親鸞自像を刻して師に與ふ、建長二年七月夢告に感し、奧州信走郡土湯山に到りて己か前生の骸骨を得、其地に法得寺を建つ、相模鎌倉、上總藻原、下野佐沖野の三所に寺を建て、幷に得法寺と號す、親鸞法語を師に與ふ　建治元年七月十七日下總に寂す、壽八十九（本願寺通紀、報恩寺緣起）

ショーシン　性信　一六六五―一七四五　〔眞言宗〕京都仁和寺の撿校なり、　性信は大御室と稱す三條天皇の第四子、母は藤原濟時の女なり、寛弘二年八月一日を以て生る、七歲にして親王となり、諱を師明と云ふ、十四歲にして仁和寺に入り、大僧正濟信を師として落髮し、東大寺に往きて登壇受戒す、十九歲仁和寺の觀音院に於て濟信より傳法灌頂を受く、萬治二年灌頂阿闍梨となり、治曆元年皇太子の病平愈を祈りて驗あり、これより屢々他の病を濟ひ、時人をして驚歎せしむ、承曆元年二月洛東法勝寺落慶供養の導師となり、敕により寺務を領す、永保二年六條宮に於て孔雀法を修し、二品に敍す、皇子出家して品階に昇ること師を以て始とす、これより師孔雀經法を修する前後二十餘度、每に應あり、應德二年九月二十九日（一說寛弘二年八月一日）寂す壽八十一、時人皆稱して弘法大師の再身なりと云ふ、著作護摩私記、灌頂所用目錄各一卷あり（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ショーシン　性眞（一九四八）〔淨土宗〕下總高聲寺の開山なり、　性眞號は唱阿、武藏秩父の人、藤田の領主民部丞利貞の子なり、初め比叡山に登り、天台宗に歸し、後、良忠上人に師事して淨土敎を究め、正應の頃下總猿島郡藤田庄岩井に高聲寺をひらく、故に其一門を藤田流と云ふ、著作數部あり、某年二月七日寂す、（淨土總系譜）

ショーシン　性眞　リョーシン良心を見よ、

ショーシユ　性守　一九八五……　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、性守は北山太政入道實兼の子、正中二年天台座主に任し、同年五月廿一日寂す、壽缺く、（天台座主記）

ショーシユー　性秀（……）〔曹洞宗〕能登曹泉寺の開山なり、性秀字は靑山、能登の人、諸嶽山義山和尚に投して薙髮し、後、宗圓寺瑞巖に師事して業成り、分座說法す、能登

堀松の檀信曹泉寺を建て、迎請せられて主となる、再び諸嶽寺に昇り、化權大に張りしが、死を告げ曹泉寺に退隱し、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーシユー　性宗　二〇一二／二〇九一　〔曹洞宗〕美作瑞景寺の開山なり、性宗字は綱菴、美作の人、俗姓は源氏なり、貞治元年太守赤松氏實峰良秀を其邸宅に延き、法要を咨詢する時、投して實峰の弟子となり、其法を嗣ぎ、畿内に遊び、納古劒に謁す、去りて郷國に隱棲す、太守靑蓮寺を剏し、師を請す、師乃ち實峰を開山とし、自ら二世に居る、至德元年將軍足利義滿田莊若干を寄捨す、應永六年瑜景寺を剏して第一世となり、永享六年八月一日寂す、壽八十三、臘七十二、嗣法江中梵巴禪室珍日あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーシユン　性俊　二四三二／二四七二　〔眞言宗〕山城大通寺の學僧なり、性俊字は實祐、尾張名古屋の人、俗姓は伊藤氏なり、少にして八事山諦忍律師に投じ、剃髮受戒す、律師寂するに及び、出て、紫野蓮臺寺隆辨僧正により、四度の瑜伽及灌頂を受け、報恩院流の流を汲む、又河内延命寺頁常和尙に從ひし諸義軌を受け、後、天猊禪師に謁し、天猊の寂するや、更に性堂和尙に請益すること七年、密かに心印を傳へらる、師性多病にして尾張に歸り禪を修すること十五年、文化七年性堂東福寺にて臨濟宗を提唱するや師往きてこれに謁し、衆と共に四敎義　及護法資治論等を講ず、明年八月蓮臺寺慧嶽阿闍梨大通寺にて地藏院密儀を授くるに方り、師もまたこれを受く、九年三月東福寺に歸り、金剛經、禪關策進等を講じ、十一月末日寂す、壽五十一、大通寺に葬る、（續日本高僧傳）

シヨーシユン　性舜　カクチヨー覺澄を見よ、

シヨーシヨ　性初　二〇九三　〔曹洞宗〕石見永明寺第一代なり、性初字は月因、其生國俗姓未詳、出家して久宿を徧參し、大洞寺如仲和尙に親炙すること多年、遂に印可を受け、總持寺に出世し、盛んに如仲の道を唱ふ、應永七年三河の大守吉見賴弘石見津和野を鎭し、永明寺を築き、師を請じて第一世となす、永享五年九月二十五日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨージヨ　性助　一九〇四／一九四二　〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、性助字は後中御堂と稱す、後嵯峨院の第六子なり、正嘉元年出家し、法助に就て密敎を學び、全二年六勝寺檢校に補し、十二月總法務及寺務に任し、文永十一年直に二品に叙す、弘安五年十二月十九日寂す、壽三十六、（仁和寺御傳）

シヨーシヨー　性承　二二九七／二三三八　〔眞言宗〕山城仁和寺二十二代なり、性承は後水尾帝第三子、母は水無瀨尙書郞氏成の女なり、正保四年九月十五日宣して親王となり、甫めて十一歲、諱を周敦と賜ふ、覺深親王に隨ひて得度し、明曆二年三月特進に叙し、三年三月廿六日仁和寺金峰樓閣に登り、信遍大僧正に傳法灌頂を受けて第二十七の嗣となる、延寶六年二月廿五日一品に昇り、俄に病を得て寂す、壽四十二、後大御室と稱す　法嗣考源あり、（傳燈廣錄）

シヨーセー　性盛　二二一七／二二六九　〔新義眞　宗〕大和長谷寺第二代なり、性盛字は賴心、俗姓は奧田氏、尾張中島郡の人なり、九歲にして書を能くす、尋て無量光院に投じて弟子とな

り、經典を習ひ、十五歳剃髮し、沙彌戒を受け、四度の瑜珈行を脩す、長野萬德寺にて兩部の灌頂を傳へられ、根來山に往き、普ねく宗匠に見え、殊に妙音院玄譽に心服し、宗旨の蘊奧を究む、弘治初年奈良に赴き、東大寺にて三論華嚴を、興福寺にて瑜珈唯識を習ふ、元龜元年園城寺に至り、一乘の妙理を聽く、仝三年織田信長土田莊に正八幡及び寶幢院を搆し、師を延きて住持せしむ、幾何ならずして一乘山に往き、清淨金剛院に住す、天正十三年兵亂に逢ひて京都平等院に遁れ、文祿三年正月灌頂壇を擧行し、兩部の印璽を弟子東油に授け、洛東歌中山清閑寺に遷りて大悲の殿堂及び僧院一區を修營す、仝四年上品蓮臺寺にありて廿廢を興す、慶長九年德川家康の命に依り、豐山長谷寺の席を補す、仝十四年七月十六日寂す、世壽七十二、臘五十八なり、之れより先き師初め根來山に住りて賴玄專譽の二師に謁し、中性院流の法脈を傳へ醍醐寺に往きて大僧正源雅に從ひ、憲深の流　並に重秘訣を稟け、東寺にて廣澤流の奧旨を受く、近江日譽、土佐空鏡、紀州宥鑁等は皆師の上足なり、（豐山傳通記）

シヨーセン　性潜（二二六二—二三三〇）〔黄檗宗〕近江日野正明寺の禪僧なり、性潜字は龍溪、號は如常老人と云ふ、京師の人、俗姓奧村氏なり、慶長七年七月二十日を以て生る、幼にして多病なり、八歳父母に携へられて東寺に入り眞言を習ふ、叔父果常に禪に意を傾け、禪に入らんとを勸む、十六歳臨濟宗普門寺に至り、度を受け、禪を修す、十九歳出遊して諸國の叢林を徧歷し、遠く支那に航せんとしたるも、國禁を以て果さず、慶安四年五十歳にして勅命あり紫衣を賜ひ、妙心寺に住す、幾もなく退き、承應三年再び住し、宗風の擧揚に力を盡し、後攝津慶瑞寺を再興す、會々明の隱元隆琦禪師長崎興福寺逸然性融等の請に應して西來し、長崎の興福寺崇福寺に留る、師妙心寺に在り、適々竺印の西國より歸り、隆琦禪師西來の事を傳へ、且つ禪師の偈、挑レ雲入レ市無ニ人買一惱ニ殺杖黎一歸去來を示す、師これを聞いて好期失ふへからすとなし、衆に謀り普門寺に請せんとし、竺印を遣はして請書を送る、隆琦禪師其請書の懇誠に感し、復書を送り、遂に明曆元年九月五日大坂に着す、翌日師衆を率ゐて迎へ、普門寺に請し、自ら弟子の禮を執る、同三年師後水尾上皇の勅召により、內殿に禪要を說き、優賞を蒙る、萬治元年大將軍家綱隆琦禪師を相見し、山城宇治に土地を給す、師隆琦禪師を輔けて、黄檗山開立の事業に當る、寛文四年正月六十三歳にして近江日野正明寺の請に應し、同寺に住す、同年四月上皇の勅召により　內殿に禪　を說き、栴檀香黄金帛を賜ふ、尋て上皇正明寺額を賜ふ、五年十一月八日光子內親王元瑤に戒を授く、六年三月十九日天壽山資福寺に轉住し、同年八月廿六日後陽成天皇五十周の大忌に際し、內殿に齋を賜ふ、十一月後水尾上皇の勅問を拜し、心經口譚一卷を撰し上る、同月柏樹子の公案を上る、上皇參究洞徹したまひ、宸翰を下し賜ひ、且つ大宗正統禪師の號を賜ふ、特に勅して師の語錄請益錄を改めて宗統錄と號し、資を出し刊行流通せしめらる、八年夏制の日內殿に於て上皇に菩薩の大戒を授け奉る、九年四月八日隆琦禪師專使を遣はして源流の法衣を送る、十年四月正明寺に坐夏期滿ちて黄檗山に登り、禪師に省覲す、八月大坂の檀越の

請により九島院に至り滯留す、八月二十二日檀越の齋に應し、其夜檀越の爲めに禪要を說く、適暴風雨あり諸川洪水溢れ、人家を流す、師其難に遭ひ、水中に溺れて寂す、初め弟子拙道徵師を促して避けんとしたるも、師詰責して曰ふ、生死は數なり、豈逃るべけんや、と、從容として偈を作り、狂瀾怒濤に捲き去れたりと云ふ、實に寬文十年八月廿二日なり、壽六十九、夏五十二、偈に曰ふ、三十年前恨未レ消、幾回受屈爛藤條、今晨怒氣向二人噴一、喝二倒胥江八月潮一、と、隆琦禪師其韻を次し、悼惜の偈あり、上皇痛嘆したまひ、數日御膳を減したまふ、且つ敕して塔を築かしめたまふ、著作語錄三卷、鐵帚錄一卷、辨正錄一卷、心經口譚一卷、宗統錄五卷あり、(碑銘、續日本高僧傳)

シヨーゼン 性善 二〇八七―二一二九 〔眞宗〕山城佛光寺の第十二代なり、 性善は文明元年五月十一日寂す壽四十三(本願寺通紀)

シヨゼン 性善 二二七六―二三三三 〔黃檗宗〕山城東林菴の開山なり、性善字は大眉、支那溫陵晉江許氏の子、父は瑞宇、家衰へて日本に客遊す、師家に留まりて母李氏に事ふること至孝なり、母沒して舅氏に依り、居を玉融に遷す、龍田良治禪師と方外の交を結ひ、淨業を修す、隱元禪師邑の獅子巖に居ると聞き、乃ち往きて之に投す、時に十七歲、遂に剃髮得度す、崇禎十年隱元黃檗山に出世し祖席を重興するや、師俱に之を助く、依りて監寺を領す、順治九年徑山費隱和尙に參し、次に三吳兩浙の名刹に遊ひ、徧く具德、百癡、孤雲、諸老に參し、福建に歸へりて永寬互信兩師に謁す、各機語あり、十一年隱元日本の請に應するとき、師其船を備へて用意周到なり、隱元と共に長崎に至り、初め興福寺、崇福寺より福濟寺に遷り、常に隱元に隨ひて維那となる、寬文元年新に萬福寺を開くとき師盡力して都寺に轉じ、工を司どる、二年秋職を辭し茅菴を山中に結び、東林菴と稱し、池を鑿ち蓮を植えて日に禪誦を修す、明年八月十五日庭際に禪座し、忽ち明月の東に昇るを見て、豁然として大悟し、心身世界打成一片の旨を覺得す、これより別に追尋せず、愈々退隱す、五年八月松隱丈室に於て隱元に見えて歸る、十年黃檗山三檀戒を開き、師を請して羯摩師となす、延寶元年七月末日鐵眼禪師の募刻せし大藏の版を鎭藏するところなきを憂ひ、東林菴を捨て、寶藏院となし、十月梅嶺雪に國師所傳の衣拂を付す、同月十八日偈を書して曰く住世五十八年、了却人間報緣、而今撒レ手歸去、大千世界坦然、と、筆を投じて寂す、壽五十八、臘四十二、著作東林夢語あり、(黃檗譜畧、續日本高僧傳)

シヨータイ 性岱 一九七二―二〇五四 〔曹洞宗〕遠江石雲院の開山なり、 性岱字は崇芝、三河の人、十歲にして敎菴の主により、般若心經を習ひ、尋いて遠江大洞寺に入りて喜山に見へ、其勸めにより如仲天誾を禮して得度す、後、喜山に從ひ、精勤十餘年、其寂するに及ひ、諸方に歷遊し、茂林芝繁の門に入る、寶德元年入室して衣法を受け、席を繼きて洞松寺に主となる、康正元年辭して遠江高尾山に龍門山石雲院を創し、白ら一世となる、郡將葛役氏田牢を寄捨す、寺務二十四年、應永元年十月二十七日寂す 壽八十三、臘六十九、法嗣隆溪繁紹、大有良榮、界巖繁越、辰翁性寅、季雲永嶽、賢仲繁哲の

六人あり、(日本洞上聯燈錄)

ショーチ 性智 二〇九九…… 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、性智、大愚と號し、別に堆雲軒倚松道人と云ふ、其俗姓を詳にせす、山城の人なり、東福寺に投して出家し、大海弘禪師に師事し、後洛中に退隱して四十年を過ごす、應永三年秋同門の請に應して伊勢安養寺に出世し四年にして駿河の清見寺に移つる、將軍足利義滿に招かれて東福寺南禪寺等に歷住し、又天龍寺、建仁寺、普門寺、鹿苑院、常在光寺等に歷遷し、法化大に振ふ、永享十一年六月二十日慧日山の堆雲菴に寂す、壽八十餘、(本朝高僧傳、日本名僧傳)

ショーチン 性珍(……) 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、性珍字は藏海、俗姓不詳、山城の人なり、初め南禪寺に留まり、尋て臨川寺に入り、夢窓石、江西湛に事ふ、後近江の山中に菴居したるも、淨智寺物外什に招かれて東下し、其下に留る、丹後の普濟寺に出世し、江西湛の法を嗣ぐ。晚年建長寺に出世して法花甚盛なり、吉祥菴に退休し、其所に寂す、壽七十五、年月缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ショーチユー 性忠(……) 〔臨濟宗〕駿河清見寺の禪僧なり、性忠字は義空と云ふ、清拙の室に參すること多年、遂に其法を嗣ぐ、後、海に渡りて元に入り、偏く諸山に遊び、後智者に造て第一座に居す、職滿ちて皈朝し、駿河清見寺、相模禪興寺等に歷住す、寂年、及壽缺く(延寶傳燈錄)

ショーチユー 性宙 二二二〇…… 〔曹洞宗〕丹波圓通寺の禪僧なり、性宙字は虛空、俗姓は源氏、赤松の一族、播磨の人なり、十一歲にして同國書寫山に登り、十五歲にして剃髮し、天台の敎を究め、未だ悟らず、五十五歲にして密に禪門を慕ひ、諸老に參すること十餘年、牧翁性欽を丹波圓通寺に拜して法を受け、發悟し、遂に印可を受け、牧翁の寂するに及び圓通寺に住す、永祿三年四月二十九日寂す、法嗣竹馬光篤あり、(日本洞上聯燈錄)

ショーツー 性通 リョーハ靈波を見よ、

ショートー 性瑫 二二七一—二三四四 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺第二代なり、性瑫字は木菴、俗姓吳氏、支那泉州晋江の人なり、五歲父母前後して沒す、祖母蘇氏に養育せられ、十歲觀世音の靈驗を感して出家の志あり、崇禎二年開元寺印明和禪師に就きて得度す、時に十九歲なり、爾來敎禪を勵み、八年鼓山の永覺禪師に謁して具足戒を受け、初めて宗門の大事あるを知る、翌年出遊し、屢兵禍に罹るも學業を廢せす、杭州接待寺に到り、雪關禪師に謁して敎を受け、次に天童山に登り、密雲禪師に參し、禪師の棒を受けて流血淋漓たるに至るも未た其旨を解せす、再び永覺禪師に見え、益々勇進し、一夜燈火の影の動くに對し、豁然として契悟し、偈を作る、時に二十七歲なり、十一年費隱禪師に謁し、明年春費隱禪師の下にて副寺となる、十三年職を辭して祖母を省し、順治四年紫雲山に隱栖し、翌五年黃檗山に登り、隱元に謁す、七年禪師の下を辭して歙石太平寺の請に赴く、八年隱元禪師に召されて首坐となり、尋きて法信の大衣源流を付せらる、十一年冬象山慧明寺の請に從ひ、同寺に移る、明年鐵山を擧けて席を讓り、自ら紫雲山に歸へる、六月日本より招かれて出發東航す、是れ日本の明曆元年にして、師四十五歲なり、寛文元年山

城黄檗山に到り、三年冬結制し、四年九月黄檗山の法席を繼く、始め黄檗山の法席、三年輪流の制なりしも、玆に到りて隱元改めて木菴の獨住に任せり、翌五年三月鐵牛慧極の請により、三壇戒場を開く、登山受戒するもの五千餘人なり、七月江戸幕府に出て、將軍家綱に謁し、大に優遇せらる、特に幕府より宇治萬福寺に寄附せらる、山林田園の朱印を拜領す、

木菴禪師

尋いて將軍より白金二萬兩を拜領す、師卽ち天人師殿佛殿等を增營し、輪奐の美を極む、同十年五月天皇勅して師に紫衣を賜ふ、黄檗山之より益振興す、靑木端山居士深く師に歸依し、同年江戸白金に紫雲山瑞聖寺を興し、其法化を請ふ、乃ち再ひ江戸に下り、瑞聖寺の開山となる、延寶二年十二月瑞聖寺に三壇戒場を開き、同三年瑞聖寺を鐵牛機に讓り、八年黄檗山の法席を慧林機に付して退隱す、貞享元年正月病に罹る、懇に弟子を諭し、正月二十日寂す、壽七十四、臘五十六、弟子全身を萬壽塔に瘞る、法嗣五十餘人あり、殊に鐵牛機、慧極明、潮音海の三人は門下の三傑と稱せらる、開刱の寺院信濃の慈明寺、江戸の瑞聖寺、上野の廣濟寺、伊豆の高勝寺、近江の圓通寺、三河永福寺、紀伊の龍興寺、攝津の方廣寺、常休寺、美作の千年寺等あり、著作、黄檗木菴禪師語錄十二卷、木菴禪師語錄十卷、木菴禪師東來語錄七卷、紫雲山草、象山語錄、紫雲開士傳各一卷あり、（木菴禪師年譜、續日本高僧傳）

ショードー　性堂　エクワ慧果を見よ、

ショートン　性潡　二三九三 二三五五　（黄檗宗）山城宇治萬福寺の第五代なり、性潡字は高泉、號は雲外、一に曇華道人と云ふ、淸の福州福淸縣の人、俗姓林氏なり、十三歲にして出家し、福建の黄檗山に登り、慧門沛禪師に師事し、其法を嗣く、寛文元年隱元琦禪師に召されて東航し、長崎に到着し、直に宇治黄檗山に登り、龍溪潛等に道交深し、寛文十二年聘に應して加賀に至り、獻珠寺に寓すること一年餘なり、隱元の寂するに方りて、一たひ宇治黄檗山に歸り、延寶二年再ひ聘に應して獻珠寺に入り、中興開山となる、藩主松雲公の金龍山に先祖の廟を建立するに方り、師命を受けて工事を督し、全く明風を用ゆ、元祿六年諸宇工を竣り、其功勞を賞せらる、明年二月金澤に遊ふ、前後藩主の供養を受くること二十一年なり、後、宇治に歸り、數々宮中に候し、法要を說く、延寶三年六月扶桑禪林僧寶傳五卷を撰して上り、優賞を蒙る、山城に佛

國寺を開き住す、靈元上皇殊に勅して寺額を賜ふ、元祿五年正月十九日佛國寺より入りて黃檗山萬福寺の法席を繼き、第五代となる、乃ち紫衣の賜を拜す、同八年江戶に下り、將軍綱吉に謁し、城中に法要を說く、法席に在ること四年、元祿八年十月十六日寂す、壽六十三、勅諡大圓廣慧國師と云ひ、加諡して佛智常照國師と賜ひ、後世黃檗山中興祖と稱す、開刱并に中興の寺院、奧州甘露山法雲院、加賀明法山獻珠寺、山城天王山佛國寺、及び黃檗山の法苑院等なり、著作扶桑禪林僧寶傳十卷、同續三卷、東國高僧傳十卷、洗雲集十卷、佛國高泉禪師語錄八卷、山堂清話三卷、東渡諸祖傳、高泉禪師語錄、法華略集、翰墨禪、各二卷、有馬溫泉記、釋門孝傳、各一卷あり、（黃檗譜略、黃檗宗史料、近世名家著述目錄）

シヨードン 性曇 二三〇九 〇九九 〔眞宗〕山城佛光寺の第十一代なり、性曇は（一名堯經）佛光寺に住し、永享十一年十二月四日寂す、壽七十一、（本願寺通紀）

シヨーニン 性仁 一九二七 一九六四 〔眞言宗〕京都六勝寺の檢校なり、性仁一に滿仁といひ、高雄御室を號す、後深草院の第四子、文永四年に生る、弘安元年出家し、性助法助の二師に從ひ、仝二年六勝寺の檢校に補す、同五年寺務となり、九年法務に任す、十一年二品に敍し、嘉元二年一品に登る、同年八月廿日寂す、壽卅八、（仁和寺御傳）

シヨーニヨ 性如 ホーガン法岸を見よ、

シヨーハ 性派 二三九一 二三五二 〔黃檗宗〕河內正興寺の中興なり、性派字は南源、俗姓は林氏、支那福唐福淸の人なり、學年にして黃檗山の無淨瑋に就きて出家し、隱元禪師に事ふること久しく、書を讀み經に通ず、順治十一年隱元日本に渡るとき、師も從ひて來る、寬文八年黃檗山の左方に華藏院を開き、且つ慈光堂を建つ、十一年八月隱元に偈拂を受く、時に四十一歲なり、翌年冬退きて華藏院に住す、延寶元年隱元寂するや、廣錄を編し、年譜を修補す、後、畿內及び關東の諸勝を遊歷し、八年攝津國分寺の請に應じて主となる、元祿元年四月東大寺公慶上人大佛殿を重興し、千僧齋を設け、師を請して法會の首領となす、三年冬結制す五年の春河內正興寺に至り、寺主覺峰曜の請により、中興の祖となる、久しからずして山を降り、高壽軒に退居し、柏堂首座に席を附し、六月二十五日偈を書して寂す、壽六十二、臘四十八、法嗣因光晏、鐵梅香等、作茶鑑古錄二十卷、芝林集二十四卷、藏林集一卷あり、（黃檗譜略、續日本高僧傳）

シヨーユ 性瑜（一九二四）〔戒律宗〕大和護國院の律僧なり、性瑜字は本照、興正菩薩に親炙し、律部を究め、密灌を受く、進具の後京都に遊學し、仁和寺に入りて廣澤流の密法を受け、醍醐寺の阿性に依りて小野流の法を傳ふ、西大寺第二阿闍梨位に居り、律を授け密を弘む、文永年中興正住吉祠に五部の大乘經を轉する時、師命せられて梵唄を唱ふ、後護國院を開きて木叉瑜伽並に行ふ、又悉曇字次第を著して後學に貽す、世傳へて西大寺流と謂ふ、（本朝高僧傳）

シヨーユー 性融（一九三七）〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、性融は上野の人、出家して戒壇院圓照に師事し、後、關東に戒律を唱ふ寂年缺く、（本朝高僧傳）

シヨーユー 性融 二三六二 二三二八 〔黃檗宗〕肥前長崎興福寺の三

代なり、　性融字は逸然、號は浪雲菴と云ふ、明人なり、正保元年に西來し、興福寺に住す、承應元年四月明の黃檗山隱元禪師に書を送りて其東渡を請ふ、八月再び書を送り、尋て自恕古石等を遣はし禮を厚うして請ふ、翌二年十一月第四の書を送り、懇切に請ふ、遂に隱元の東渡を見るもの、全く師の力なり、後隱元に從うて教を受く、平素畫を好み、筆を揮へは縱橫にして雅致あり、長崎に於ける漢畫の祖と稱せらる、門下に渡邊秀石僧存芝等あり、寬文八年七月十四日寂す、壽六十七、（國師廣錄、長崎年表、皇國名畫拾彙）

シヨーヨ　性譽　ダイサン臺山を見よ、

シヨーリユー　性隆　二〇八二 二一五三　〔曹洞宗〕越後轉輪寺の開山なり、　性隆字は雷菴越後の人、幼にして出家し、具足戒を受けて後關東の諸老に參し、京都に赴き、妙心寺に日峰に見え、又牧翁性欽に師事し、其青原寺に移るに及びて、之に侍從し印可を受けて鄕里に歸へる、大守某轉輪寺を建て其請に應して開山となる、晚年丹波圓通寺の請により、其主となり、明應二年一月廿三日寂す、壽七十二、臘五十四、偈あり、本來觸目現成了「莫怪生平不」說」禪（日本洞上聯燈錄）

シヨーレン　性蓮（……）　〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、　性蓮は關東の人、母の骨を負ひて高野山に到る寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

シヨーイチ　聖一（一四一四）　〔戒律宗〕大和佛國寺二代なり、　聖一俗姓不詳、唐の人、法進に師事して戒律を傳へ、天平勝寶六年鑑眞法進に隨ひて來朝し、吉野の佛國寺に住し、同寺第二世となる、示寂の年時缺く、（律苑僧寶傳、）

シヨーイチコシ　聖一國師　ベンエン辨圓を見よ、

シヨーウン　聖雲　一九三四 一九七四　〔眞言宗〕山城醍醐寺の學僧なり、　聖雲は龜山天皇の皇子なり、實勝僧正に隨ひて剃髮得度し、覺洞院に住す、中性院の賴瑜に從ひて、具支灌頂を受け、醍醐寺の座主に任す、敕ありて親王に敍し、大僧正となる、正和三年五月五日寂す、壽四十一、（本朝高僧傳）

シヨーエ　聖慧　一七八四 一七九七　〔眞言宗〕京都仁和寺の法親王なり、　聖慧は白河天皇の第五子、覺法の弟なり、仁和寺に入りて出家下髮し、成就院の寬助僧正に從ひて金胎兩部を稟く、諸尊の秘法を習ひ華藏院に住し、一身阿闍梨に任す、天治元年中宮の產を禱り五壇の法を修する時脇壇を修す、俗に王子五壇と稱す、大治元年女院の產を禱り、五壇の法を修す、翌年春三品に敍す、長承元年九月上皇の病を禱り孔雀經の法を修し、牛車の宣を賜ひて弟子寬曉を法印に轉せしむ、保延三年二月十一日寂す、壽四十四、（本朝高僧傳）

シヨーオン　聖音（……）　〔曹洞宗〕周防洞泉寺の開山なり、　聖音字は無聞土佐の人なり、出家して量外和尚に師事して總持寺に出世し、大隅の永興寺に遷る、晚年に至り、周防に遊行し、盤目山洞泉寺を開きて自ら住し、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーカイ　聖海（一八八八）　〔眞言宗〕山城醍醐山三十代の座主なり、　聖海初め聖眞と稱し、宮法印性明親王の子なり、成賢の室に入りて傳法職位を受け、元仁元年詔して醍醐山三十代の座主となり、二年二月十一日宮符を奉し、十一月十日拜堂す三寶院の七世を兼ね、三品親王に昇敍す、安貞二

年正月觀訓の山衆和せず、故に自ら職を辭し去る、（續傳燈廣錄）

シヨーカイ　聖戒　一九八三……　〔時宗〕京都錦小路歡喜光寺の僧なり、聖戒は伊豫河野通慶の第四男なり、一遍上人の從弟にして眞教の徒弟たり、時宗舊六條派の派祖なり、元亨三年二月十五日寂す、著作六條緣起十二卷あり、（佛敎史料、倭歌作者部類）

シヨーカク　聖覺　一八二七　一八九五　〔天台宗〕京都安居院の僧なり、聖覺は京師の人藤原通憲の孫、澄憲法印の子なり、初め出家して比叡山の靜嚴に師事し、夙に解行并に秀て、就中法談に妙なり、安居院に閑棲し、安居院法印と呼はる、後、源空上人の化風を欽仰し、其下に師事し、淨土敎の蘊奥を傳ふ、乃ち唯心鈔一卷を作り、廣く淨土敎を弘通す、元久二年八月源空上人瘧を患ひ、藤原兼實甚た之を憂ひ、大醫を遣し、治療せしむるも効驗なし、兼實乃ち畫工澄賀に命して善導和尚像を作らしめ、像前に法會を修し、法救を請はんとして、特に聖覺を請待す、然るに聖覺亦瘧を患ひたるも、強いて法會に列して法を說きたるが滿座感嘆して言なく、上人の患頓に除たれは、相傳へて奇なりと云ふ、承久三年雅成親王淨土敎に關して問日敍條を作り、遍く當世の高僧に質す、聖覺亦其選に當り、具に答解す、嘉祿二年後鳥羽上皇より隱岐の行在所より遂に西林院僧正承圓に書を降したまひ、淨土敎の宗義に關し、明禪聖覺の二師に敕問あり、聖覺即ち宗義を書して上る、建保二年正月廿五日源空上人の三年忌に當り、眞如堂に念佛會を盛修して、唱導說敎一世を感化す、嘉禎元年三月五日念佛す百聲にして寂す、壽六十九、著書唯心抄一卷（百錬鈔、法然上人行狀畫圖、淨土傳燈錄、淨土總系譜）

〔考〕聖覺の著作黑谷源空上人傳（世に十六門記と云ふ）一卷ありとし、今世間に流布す、署して、安居院沙門釋聖覺記とあり、然れども古傳に見えず、文章體裁當時の書に類せず、僞撰ならん、

シヨーキ　聖基　一八六四　一九二七　〔眞言宗〕山城東寺五十二代の長者法務なり、聖基は南谷大僧正といふ、攝政藤原基房の子、從一位左大臣隆忠の子なり、元久元年に生る、幼にして禪林寺の靜遍に從ひて出家し、廣澤流の法を受く、貞應元年七月上皇の詔を受けて成寶の室に入り、傳法灌頂を受く、嘉祿二年維摩會の竪義者となり、三年勸修寺長吏の席を續く、時に年二十四なり、安貞二年法眼に任し、寬喜元年最勝會の講師となる、寬喜二年四月榮然に具支庭上成道の灌頂をけ、法身正宗佛々授手の傳璽寳篋を付せられ、二十三世の祖となる、即ち傳法灌頂は榮然に受明灌頂は成寶に受承したるなり、四年法印に轉し、嘉禎三年長吏を道寶に付し、四年法務となり、翌年大僧都に任す、延應二年六月權僧正に敍し、仁治元年法務を辭す、二年宣して護持國師となり、三年四月十日東寺五十二代の長者に補す、然れとも八月病あるを以て長者を辭す、故に譜に載せず、寬元中再ひ東寺長者に復し、建長中之を勝信に讓り、弘長二年六月詔して東大寺の別當となる、文永四年大僧正に敍し、十二月九日寂す、壽六十四、施無畏院と稱す、（東大寺別當次第、後傳燈廣錄）

シヨーキン　聖欽　二〇四七……　〔淨土宗〕常陸常福寺第五代な

り、　聖欽は昇蓮社超譽と號し、其俗姓生國詳かならず、盛譽良慶上人に師事して法を嗣ぎ、常福寺に住す、長享元年十一月二十四日寂す、壽缺く、法嗣に晋譽、聖譽、了秀等あり、(淨土總系譜)

シヨーキン　聖欽　**リヨーギヨー**良堯を見よ、

シヨーギン　聖吟　……二二七九　〔淨土宗〕常陸大念寺の第二代なり、　聖吟は源蓮社晃譽と號し、其鄉貫詳かならず、慶岩に師事して法を嗣ぎ、大念寺に主となり、元和五年二月二十一日寂す壽缺く、(淨土總系譜)

シヨーキヨー　聖慶　一八一四—一八三五　〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、　聖慶は藤原師行の子、幼にして慧珍に從ひて三論を學び、未だ二十歳ならずして性相の理義を了す、嘉應元年大安寺を董し、維摩會に列りて答解に勞す、時に年十九なり、平淸盛南北の耆宿を請して法華經を講せしむる時、師を召して演說せしむ、安元三年三月六日短命にして寂す、壽二十二、法弟道慶あり(本朝高僧傳)

シヨーキヨー　聖慶(……)　〔淨土宗〕奧州成德寺第三代なり、　聖慶字は良寂と云ふ、其鄉貫詳かならず出家して尊觀上人の法を嗣ぎ、奧州楢葉成德寺に主となる、寂年壽缺く、門下に眞本、良冠の二人あり、(淨土總系譜)

シヨーキヨー　聖慶　**コーウン**康運を見よ、

シヨーギヨーボー　聖行房　**インソン**院尊を見よ、

シヨーク　聖救(一六四五)　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、　聖救は進賀僧正の族弟なり、慈慧に隨待して天台敎を學習し、比叡山西塔院に居す、應和宮會に夕座の講師となり、奈良の仲算と宗義を論ず、大僧都に歷昇し、其年寂す、壽缺く、(本朝高傳僧)

シヨークワイ　聖快(二一〇四)　〔眞言宗〕山城東寺百三十一代長者法務なり、　聖快初め道快と稱し、中ころ快賢と呼ふ、成賢大僧正の室に入りて出家し、其傳法灌頂を受けて成立し、後、其正嫡となりて二十九祖となる、弘顯に請ひて具支內作業職位を稟け、至德元年東寺百三十一代の長者法務に補す、地藏院を建てゝ密幢を張る、其付法の弟子快玄宗壽俊雄持嚴通快宗承眞海の諸子あり、(續傳燈廣錄)

シヨークワン　聖觀　二一三九　〔淨土宗〕武藏增上寺第三代なり、　聖觀號は定蓮社音譽、俗姓望月氏、近江國甲賀郡の人なり、父は望月幸俊應永二十一年二月十八日生る、七歲の時同國の青木氏は望月氏を滅ほして領地を奪ふ、師之を悲み、九歲の時に同郡稱名寺運譽上人を拜して師とす、上人其才を異とし、名けて聖觀といふ、十五歲志す所あり、諸國を遊歷して東國に下り、增上寺に入りて學ぶ、山主西譽之を愛し、附法遺す所なし、後、本國に歸り、瀧の神祠に詣し、諸州を巡りて靈場を拜し、精舍を建つ、攝津の國兵庫に宗祖の遺跡を得て、西光寺を開き、又關東に至り、師の命に依りて法源寺の二代となり、同國都筑郡金河に慶運寺を開く、寶德元年三月增上寺の第三代となり、其職に勤む、長祿二年太田道灌の江戸に居るや、師と交り深く、又當時の禪僧蘭坡龍澤橫川等との間に詩文の贈答ありしと雖も、世に傳ふるものなし、文明十一年七月二日寂す、(鎭流祖傳、三緣山志)

シヨーゲー　聖冏　二〇〇一—二〇八〇　〔淨土宗〕江戸傳通院の開山な

り、　聖冏號は西蓮社了譽と云ふ、俗姓は源氏にして、常陸久慈郡、巖瀬の人なり、父は下岩瀬の城主白吉志摩守義光、母は橘氏なり、父母壯歲にして子なきを憂ひ、上岩瀬の神祠に祈りて祥夢を感す、曆應四年正月廿五日に生る、貞和元年父戰場に死す、母懷いて山中に幽捿す、貞和四年八歲にして常福寺了實の下に投し、師資の禮を執る、了實上人出家名を命し、聖冏と云ふ、文和四年十五歲蓮勝上人の下に學び、延文三年十八歲箕田乘願寺定慧の下に學ひ聖淨二門の義を講究し、康安元年二十一歲にして口述二卷を作り、貞治四年廿五歲にして出遊し、常陸法幢院祐存を問うて眞言を受く、祐存は師の舅なりと云ふ、又眞源を問うて天台を受け、月庵大命の二禪師を問うて禪宗を傳へ、傍ら唯識俱舍因明に及ふ、權禰宜某に神道を學び、麗氣記鈔を作り、頓阿に和歌を學ひ、古今集序註を作る、後、圓融天皇の勅召により宮中に淨土敎を說き、且つ和歌を製して上る、鎌倉に遊び、

了譽聖冏上人

建長寺に於て禪林歌一篇を製して禪扉に書す、鹿島安居寺に遊び、顯正記を作る、永和四年了實上人より宗脈を受け、至德二年千葉貞胤の請に赴き、淨土敎を說く、法益東國に遍し四年北相馬會根鄕に於て一家の綱目を提け、頌義本末三十一軸を述へ、弟子聖聰に附す、同三年常福寺に住持となり、嘉慶元年七月傳戒論を撰し、又十八通を輯す、明德元年頌義見聞を著し、翌二年心具往生義を作り、同三年往生寺南瀧法師の請に因て、下野大底山に至り、淨土敎を說く、是より先建曆元年八月法然上人攝津勝尾寺に於て淨土の敎相をを講し、聖覺法印筆記して大名目と云ふ、聖冏大名目を略して略名目圖を作り、大底山に於てこれを講す、應永二年糅鈔四十八帖を撰し、三年直牒十冊を綴る、同六年九月淫滑分流集を作る、當時佐竹義秀の亂を避けて下徑山に隱れ、念佛を事とす、弟子聖聰武藏に增上寺を建立し、師慶讚の法會に請せらる、應永二十二年二月武藏小石川に一寺を建立し幽捿す後に號して無量山傳通院と云ふ、同廿七年九月廿七日偈を作りて弟子に示す、曰ふ、放行把住、滿八十年、即今端的知不識、日曜東山月西天、と念佛して寂す、壽八十、臘七十三、稱光天皇勅して禪師の號を賜はる聖冏時人稱して三日月上人と云ふ、眉間より新月の如き光を放つ靈相あるに因るとて、種々靈異の說傳はれり、（淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄、東國高僧傳、緇白往生傳、）

ショーケン　聖兼　一九〇二―一九五三　〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、　聖兼俗姓は藤原氏、太政大臣家實の子なり、幼にして東南院に入り、族兄聖實大僧正に就て三論の書を讀み、顯密二敎の奧旨を究め、東南院に住して學徒を誘掖す、後醍醐寺

の座主に補し、三寶院を領して大僧正に任す、法務を兼管し、建治弘安の間東大寺を主とること兩次、永仁元年九月十一日寂す、壽五十二、（本朝高僧傳）

シヨーケン 聖賢 （一七八九）〔眞言宗〕山城金剛王院の學僧なり、聖賢は勝覺の付法なり著作十八帖、諸尊略頌、具支灌頂私記並敎授次第、大師廣傳（二卷）あり、（諸宗章疏錄）

〔考〕聖賢は、大治頃の人なり

シヨーケン 聖憲 （……）〔眞言宗〕大和吉野の僧なり、聖憲吉野山に住して眞言事相を以て聞ゆ、著作金簿鈔あり、金峰山の金字と簿双紙の簿字とを取りて書名となしたるものなりと云ふ、（諸宗章疏錄）

シヨーケン 聖憲 一九六七／二〇五二 〔眞言宗〕紀伊根來山中性院の學僧なり、聖憲字は定林、和泉の人なり、幼にして彌勒寺の實俊僧都に侍し、歲弱冠にして中性院の增喜に隨ひ、密敎を學ふ、順繼賴豪の二室に出入して益々其玄旨を探り、諸流兼ね修めて皆洞徹す、後中性院の院務を司とる、衆に推されて學頭となる、正平年中病に罹り、大徹禪師の慰問を受け、阿字觀を示す、明德三年五月三十日寂す、壽八十六、著作大疏百條論艸十卷、自證說法十八段論艸一卷、釋論百條論艸十卷、阿字觀法一篇、五敎章聽鈔六卷、王心鈔一卷あり、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

聖憲和尚

ジヨーゴ 聖護 （一八九八）〔淨土宗〕某寺の學僧なり、聖護姓は草野氏筑後の人なり、聖光に師事して修學す、曆仁元年冬聖光疾に罹り、師之を看護して倦まず、聖光示寂の時自筆の阿彌陀經を付せらる（鎭流祖傳、淨土總系譜、）

シヨーコー 聖皐 一九八四／二〇六二 〔戒律宗〕京都雲龍寺の律僧なり、聖皐字は竹巖、俗姓は藤原氏、京都の人なり、正中元年に生れ、十七歲にして剃髮し、二十三歲にして具足戒を受け、拙叟珍の法を嗣ぎ、兼ねて密敎を究め、泉涌寺に住す、文和年中上皇師を召して戒法を受く、師又龍華院を建て其開山となる、後圓融天皇深く師に皈依し給ひ、宮中に召して受戒し、數寺に幸して聽法す、康應元年勅を奉して法華經を寫し、懺摩の法を修して寶塔に藏む、所謂如法經これなり、應永九年六月二十七日寂す、壽七十九、臘五十六、著作南山敎觀名目二卷あり、（本朝高僧傳）

シヨーコー 聖光 ベンチヨー辨長を見よ、

シヨーサイ 聖濟 （一九二〇）〔眞言宗〕山城慈尊院の五代なり、聖濟は榮尊の瀉瓶を得て慈尊院の五世となり、詔して權僧正となり、高雄山神護寺の別當となる、付法二人、榮海、榮紹といふあり、（後傳燈廣錄）

シヨーサン　聖三　シヨーサン正三を見よ、

シヨーシン　聖信　（二二〇四／二二五二）〔眞言宗〕山城勸修寺の二十六代長吏なり、聖信は從一位左大臣房通の子、伏見院二品式部卿貞康親王の猶子にして、天文十三年に生る、寛欽法親王の室に入りて出家し、弘治年間大僧都に任し、永正年中に長吏に補す、高雄山普賢院尊進に隨ひて傳法灌頂位を受けて第三十九祖となり、權僧正となる、永祿年間大僧都に轉し、元龜年間宣して准三后となる、文祿元年三月八日寂す、壽四十九、慈光院と稱す、（後傳燈廣錄）

シヨーシン　聖眞　シヨーカイ聖海を見よ、

シヨージン　聖尋　（一九八三）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、聖尋俗姓は藤原氏、關白鷹司基忠の子なり、三寶院に入りて聖尊法親王に從ひて落髮受戒し、四度の加行を修し、兩部の灌頂を受け阿闍梨となり、去りて奈良に往き、法和の義旨を究め、東南院に寓す、後大僧正に任す、文保初年東寺の第一長者となり、尋いで法務を掌る、元應の末醍醐寺の座主に補し、傳法院の座主を兼ぬ、元享三年東大寺に住し、其終るところを知らず、（東寺長者補任、本朝高僧傳）

シヨージン　聖深　（……）〔淨土宗〕山城淨華院の僧なり、聖深字は阿縁其郷貫詳かならず、泉秀に師事して法を嗣ぎ、淨華院及び金戒光明寺に住す、寂年缺く、嗣法の弟子に等珍あり、（淨土總系譜）

シヨーシユ　聖珠　（……）〔臨濟宗〕越中崇聖寺の僧なり、聖珠字は南海秀峯奇に師事して法を嗣ぎ、越中崇聖寺に住す、某年十一月二十九日寂す、（延寶傳燈錄）

シヨーシユ　聖守　（一八七九／一九五一）〔眞言宗〕大和眞言院の中興なり、聖守號を中道と云ふ、奈良の人、圓照の俗兄なり、十八歳にして剃髮し大悲菩薩を禮して具足戒を受け、兩京に遊歷して家學を究め、醍醐寺の座主憲深より密教を傳へ、東南院の樹慶僧都に三論を聽き、戒律顯密の學に精通す、初め大和白毫寺に住し、次に眞言院、新禪院を開きて瑜伽の道場となす、石清水の檢校行清新に法圓寺を建て師請せられて開山となる、正應四年十一月二十七日寂す、壽七十三、臘五十六、寺の西北隅に葬る、著作西四大事口決一卷あり、門下聖然惠談あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シヨージユ　聖壽　（二〇五一）〔曹洞宗〕大隅永興寺開山なり、聖壽字は量外、大隅蒲生の城主清種か子、俗姓は藤原氏、幼にして出家し、普く諸名宿に參し、後に永澤寺通幻寂靈に師事すること十二年、遂に其法を嗣き、辭して郷に歸る、郡主藤原氏永興寺を刱し、其開山となる、某年正月六日寂す、壽缺く、法嗣無聞聖音あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨージヨ　聖助　（二三〇七）〔眞言宗〕近江石山寺の座主なり、聖助は退院一位賴國の孫刑部大輔賴兼朝臣の子、石山寺の座主となり、寛永十三年入室し、十七年得度す、十八年直に法眼に敘し、卅一年少僧都に任し、正保四年大僧都に轉す、（仁和寺諸院家記）

シヨーシヨー　聖昭　（一七〇六）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、聖昭字は大慈房、一に少將阿闍梨と云ふ、郷貫詳かならす、佛頂房行嚴に師事して池上阿闍梨皇慶流の事相を究め、後に穴太流の祖と稱せらる、寂年幷に壽缺く、著作

十八道口決四卷西圓鈔二十帖口決あり、(台密血脈譜、諸宗章疏錄)

シヨーシヨー　聖照（一七二六）〔眞言宗〕京都仁和寺の律師なり、聖照は成典僧正の高足なり。長曆年間延殷と共に仁海僧正の灌頂を受け、治曆二年十二月十九日權律師に任す。(續傳燈廣錄)

シヨーズイ　聖瑞（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、聖瑞字は一曇と云ふ復菴に師事して印可を付せられ、圓覺寺より南禪寺に昇る、晩年印を解きて福山靈芝軒に居す、寂年缺く(延寶傳燈錄)

シヨーゼン　聖禪（一九二四）〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、聖禪俗姓は藤原氏任尊の子なり、常に東大寺にありて三學に思を凝らす、時人秀慧顯範覺雄と共に四天王と稱す、尊玄に師事して華嚴を學ぶ、兼て俱舍を學ぶ、又京都仁和寺に寓して宥尊行遍二師に密敎を稟く、後城西に常樂寺を構へて居す、寂年、及壽缺く(本朝高僧傳)

シヨーソー　聖聰（二〇二六 二一〇〇）〔淨土宗〕武藏增上寺の開山なり、聖聰、號は大蓮社、酉譽、下總千葉の人なり、俗姓は平氏千葉氏胤の二男、女は新田氏、貞治五年七月十日に生る、幼名德壽丸、(一說德千代丸)冠して胤明と云ふ、幼より出家の志あり、庶兄滿胤家を嗣ぐ、乃ち母の意を受けて千葉の明見寺に投し、眞言宗を學ぶ、時に九歲なり、後、至德二年二月十歲にして橫曾根に於て聖冏上人に謁し、淨土敎を受け、親附の弟子となる。聖冏上人より略頌二藏義等を授けられ、尋で圓頓戒を授けらる、明德四年十二月十八日傳を襲ひ、後、岩殿の大藏に入りて諸經を通覽し、大に啓發するところあり、五畿內地方に入りて遍く各山靈蹟を訪ひ、後ち故鄕に歸りて道譽高し、適ゝ武藏貝塚に地を相し一寺を建立して三緣山增上寺と云ひ、念佛の道場となす、(慶長の初め江戶芝に移さる)應永十年九月聖冏上人より宗脉を授けらる、十七年四月行儀分の講會に參與し、見聞八卷を作る、永享五年無量壽經要註記二十四卷、阿彌陀經要註記八卷、觀無量壽經要註記十六卷を作る、八年當麻曼陀羅鈔四十八卷を作る、又註記見聞十卷、大原談義見聞五卷、五大集金明

西譽聖聰上人

徹髓論藏拾遺等を作る、永享十二年七月十八日寂す、壽七十五臘六十七、(淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄、東國高僧傳、三緣山志、緇白往生傳)

シヨーソン　聖尊（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、聖尊は佐渡阿闍梨と稱す、京都の人、尚書基俊の子なり、醍醐山に入り、禪惠に從ひて灌頂を受け、密印を付せら

る、（續傳燈廣錄）

シヨーソン　聖尊　一九六四 二〇三〇　〔眞言宗〕山城醍醐山五十八代の座主なり、聖尊は後二條帝の皇子二品親王なり、聖雲親王の室に入りて出家し、文保二年醍醐山五十八世座主に補す、元德元年十二月二十六日遍智院に於て賢助大僧正より傳法灌頂職位を受け、席を聖尋に讓りて遍智院に退く、尋さて聖雲親王より實勝の聖軌寶篋を相承す、應安三年九月二十七日寂す、壽六十七、著作初心行者用心、音律菁花葉若干卷あり、（續傳燈廣錄、諸宗章疏錄）

シヨータツ　聖達　……一九〇七　〔淨土宗西山派〕肥前知恩寺の開山なり、聖達は鎭西の人なり、俗姓詳ならず、西山派の開祖證空上人に師事して、淨土の敎義を傳へ、後肥前藤津郡の原山に智恩寺を開き住し、講席を張りたり、示寂の年時享壽缺く、門下聖觀あり、其後を繼ぎたり、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

シヨーチン　聖珍　二〇一四　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、聖珍は伏見天皇の季子なり、幼にして醍醐寺の聖尋僧正に師事して三論三密を稟け、無品親王に敘し、奈良の東南院に住す、建武貞和の間に三度び東大寺に住し、文和三年秋東寺の長者となり、大僧正に任し、又高野山の金剛三昧院に住す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

シヨーチユー　聖忠　一九八二　〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、聖忠は關白藤原基忠の子、幼にして東南院に投し、聖兼大僧正に從ひて剃髮受具し、東大寺の戒壇に登りて具足戒を受け、賴瑜の室に入りて灌頂法を承く、早く三藏に通し、三會の講師となり東南院に住し大に宗乘を調へ、醍醐寺の座主に補して大僧正に任し、德治元年十月東寺の一長者を拜し、延慶元年三月東寺の法務を領し、正應初年より正和五年にいたる間、頻に宣旨を賜ひて三たび東大寺を管し、法柄を秉ること前後十餘年なり、晩年諸職を辭し、東南院に退去す、其示寂の年を知らず、弟子聖尋あり、師の弟にして師に從ひて深秘を盡し、正中の初醍醐寺の座主に補して大僧正に任す、嘉暦二年夏東寺一の長者に補し、元亨二年東大寺に住す、又傳法院の座主に任し、後其終を詳かにせず、（本朝高僧傳）

シヨーチユー　聖中　シユーコー周光を見よ、

シヨーデン　聖傳　……二二七〇　〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、聖傳は昇蓮社奉譽と號す、範譽上人に師事して淨土敎を學び、元祿十三年八月六日上人より璽書を授かる、初め二傳寺に住し次に鎌倉光明寺に遷る、後八幡正法寺、京都知恩寺等に歴住し、慶長十五年正月十八日寂す、嗣法の弟子あり道山と云ふ、（淨土總譜系）

シヨート　聖徒　ミヨーリン明麟を見よ、

シヨートクタイシ　聖德太子　一二三四 一二八二　〔……〕用明天皇の皇子なり、聖德太子は初め諱厩戸と云ふ、用明天皇の第二皇子なり、母は欽明天皇の皇女穴穗部間人皇后なり、敏達天皇の三年甲午（一傳元年）正月元日に出生す、皇后大内を巡行し、厩の下に至りて産す、故に厩戸と名くと云ふ、後磐余池邊宮の南上殿に居せるを以て上宮皇子と云ふ、幼より聰明衆人に超え、百濟等より舶載せる諸種の書籍、得るに隨ひて閲覽し、其義に通達せり、用明天皇の病に罹りたまふに方り、晝夜衣帶を解かずして看護し、自ら香爐を擎けて其平

癒を佛天に所禱す、二年天皇の崩御したまふに及ひて厩戸甫めて十四歲（傳十六歲）悲哀慟哭し、數々絕えんとして漸く蘇したりと云ふ、大臣蘇我馬子等の大連物部守屋を攻伐するに方り、軍後にあり、白膠木を斫りて四天王の像を刻し、頂上に戴み、誓言して曰ふ、此戰爭にして勝たは、必す寺塔を建立して四天王を奉安せん、と果して守屋敗死し、馬子等の軍大に勝つ、仍て厩戸誓言を踐み、攝津の玉造に四天王寺を建立し、且つ守屋の子孫從類二百七十三人を收めて其寺の奴婢となし、且つ河內攝津なる領地十八萬六千八百九十代を收めて其寺の資產となす、是れ寺田寺奴の始めなり、爾來厩戸は佛敎の興隆に意を傾け、馬子等と共に經營せり、馬子の大逆を犯すに方りて、痛く憂戚したるも、誅戮を加へんとするに至らず、推古天皇元年十九歲（一傳二十二歲）にして皇太子となり、且つ攝政の要職に當り、一人にして一時に八人の訟を聞きて、其理を辨するより、豐聰八耳命の號あり　同二年三寶興隆の大詔出つるに方り厩戸は大臣馬子等と共にこれを拜し、專ら經營せり、其本願にかゝる玉造の四天王寺を難波の荒陵に遷し、改めて建築の工事を起し、崇竣天皇朝の末に來りたる百濟の寺工等を督して一大設計をなし、且つ用明天皇の御願にかゝる法隆學問寺の工事を起せり、同三年五月高麗より惠慈、百濟より慧聰、相尋いて來貢したれは、厩戸は禮請して佛敎弘通の事を任す、二僧は馬子の本願にかゝる法興寺の新堂に留りて佛敎弘通し、就中惠慈は厩戸の禮請を受けて經論を講授したり、厩戸は內典を惠慈に學ひ、外典を博士覺哿に學ひ、幷に通達し、內典は法華維摩等の諸經の義理に通達し、數々惠慈の驚嘆して推服したるところなりと云ふ、厩戸百濟の王子阿佐の來貢を喜び、宮室に引いて相見る、阿佐其德容に接して大に推服し、後、筆寫して傳へたりと云ふ、同六年（一傳十四年）四月十五日に勅を拜して法華經勝鬘經を講し、諸王諸臣連より公民に至るまで拜聽することを許され、皆信受して歡喜したりと云ふ、厩戸は其講場に出つるに方りては、全く出家の風儀に從ひ、袈裟を掛けたり、天皇大に喜ひたまひ、播磨の佐西の地五十萬代を布施したまへり、九年二月斑鳩に宮室を造營して移り住す、十一年十一月百濟より貢獻したる彌勒菩薩の像（一傳に觀世音菩薩の像と云ふ）を秦河勝に附し、且つ命して葛野に蜂岡寺（後に廣隆寺と號す）を建立せしむ、同月天皇に請うて大楯及び靭を作りて旗幟に繪く、十二月勅を拜して冠位十二階を制定し、十二年正月勅して冠位を諸臣に賜ふに各差あり、四月厩戸自ら憲法十七條を制定し、諸臣に頒與す、其第二條に曰ふ、篤敬三寶、三寶者（佛法僧也）則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人非貴是法、人鮮尤惡、能敎從之、其不歸三寶、何以直枉、と、蓋し冠位を制定して氏族の習慣制度を打破し、憲法を制定して上下の道德を扶持せんとしたるものにして、憲法第二條は其主とし佛敎に依らんとする意を示せり、十三年四月勅を拜して銅繡の佛像一丈六尺なるもの各一軀を造立せんとし、鞍作止利に其工事を命す、高麗王其盛擧を聞いて黃金三百兩を貢献せり、七月厩戸諸王諸臣に命して褶を着けしむ、十四年四月に至りて像二軀、幷に狹侍皆功を竣ふ、其銅像に用ふるところの銅二萬三千貳百斤、金七百五十九兩な

りと云ふ、これ我國に於て新規摸を以て佛像を造立する始めなり、同月八日大に齋會を設けて開眼の供養を行へり、同年七月勅を拜して勝鬘經を講し、三日にして畢ふ、後、岡本宮に於て法華經を講す、天皇大に喜ひたまひ、播磨の水田一百町を布施したまふ、これ六年の擧の同事異傳とも見ゆるところなれとも、厩戸は毎年これを講せんを誓ふたれは、數々此盛擧ありたるものなるべし、十五年に難波の四天王寺、斑鳩の法隆學問寺等皆落成す、共に工事十餘年に亘り、金堂、講堂、寶塔、食堂、等の七堂伽藍缺くるなく、結構壯麗を極め、一世の人目を驚したりと云ふ、四天王寺には四天王を奉安し、法隆學問寺の金堂には、同年に造立したる藥師佛を奉安し、用明天皇か崩御の際の本願を果せり、同年に中宮尼寺、片岡僧寺、等皆落成す、厩戸は天皇より布施したまひたる播磨の地を法隆學問寺中宮尼寺片岡僧寺に分ちて納め、殊に法隆學問寺の地を四分して功德分、(佛法弘通の

聖德太子

料、)食分、(學問僧の食料、)衣分、(學問僧の衣料、)主分、(堂塔の修補料、)となし、永く同寺の領とせり、其後橘尼寺(後に菩提寺と號す、)池後尼寺、(後に法起寺と號す、)葛城尼寺、(後に妙安寺と號す、)坂田尼寺(後に金剛寺と號す、)等相尋いて工事落成す、皆厩戸の經營に意を用ゐたるものなりと云ふ、十五年七月に大禮小野妹子を隋に發遣し法華經等を求めしむ、翌十六年四月妹子隋より還りて復命し、且つ隋の使裴世清等來り謁す、九月勅ありて妹子を大使となし、吉士雄成を小使となし、國書を齎して隋に發遣す、これ我國より國書を外國に送る始めなり、蓋し國書は厩戸の草するところなり、大使小使に附して留學生留學僧を送る、これ我國より支那に留學する始めなり、十七年妹子隋より歸りて復命し、支那交通の端を開き、漸く制度文物等の輸入を見るに至る、同年五月厩戸の奏請により、天皇獸獵の儀を廢し、菟田野に藥獵す、蓋し藥獵は藥草を採集するなり、二十一年十二月片岡を巡行し、偶々飢餓に迫りて路傍に困臥する者を見て大に憫み、飲食を與へ、且つ親ら衣裳を脱して與へこれを慰め、歌を詠して曰ふ、級立てる片岡山に、飯に飢て臥在るその旅人あはれ、親無しに汝成りけめや、刺竹の君はや無き飯に忍てこやせるそのたひとあはれ、と、是等の事實は厩戸の慈仁なる性情を察するに餘りあり、其德澤乞丐禽獸に及べるものと云ふへきなり、二十八年十二月馬子と共に議し、國史の編修を企て、天皇記、國記、臣、連、伴造、國造、百八十部、幷に公民等の本記を錄す、これ我國に國史を編修する始めなり、三十年(一傳二十九年)二月廿二日妃菩岐々美娘薨し、其翌二十二

日半夜厩戸斑鳩の宮室に薨ず、壽四十九なり、其薨するに臨み、推古天皇の勅問に對して遺言し、熊凝の精舍を盛に興して皇統を萬世に保護祈禱せんことを願ひ、王子山背王等を召して遺言し、諸惡莫作諸善奉行等の數句を附す、天下の百姓慈父慈母を亡ひたることく、耕夫は耟を止め、舂女は杵を止めて哭泣の聲街衢に滿ちたりと云ふ、同月磯長陵に葬り、謚して聖德といふ。高麗の惠慈は國にありて訃音を聞き、僧を請し、齋を設け、大に法事を行ひ、且つ誓ひて日を期し、厩戸の後を追うて寂したりと云ふ、厩戸の著作憲法十七條、幷に法華、勝鬘、維摩の三部經の義疏世に傳へて行はる、（法王帝說、日本書紀、扶桑畧記、一代要記、皇胤紹運錄、古今目錄鈔、法隆寺資財帳、廣隆寺資財帳、東院緣起資財帳、古京遺文、七大寺年表、上宮皇子菩薩傳、太子傳曆、太子傳補闕記、太子傳通要）

〔考〕聖德太子の傳の最も確實なるは法王帝說に若くなし、今主として同書、幷に日本書紀に依り、且つ資財帳等の確實なる史科を參照採集して本篇を撰す、普通に用ゐらるゝ太子傳曆以下後世の書は、唯一面の參考に供したるなり、太子出生の年に關して異說あり、太子傳曆等は敏達天皇元年壬辰とすれとも、今は法王帝說に依り、同三年甲午とす、薨去の年に關して亦異說あり、日本書紀等は推古天皇廿九年辛己とすれとも、今は法王帝說に依り、三十年壬午とす、其餘に異說の考證を要するものあれとも、煩に涉るを以て略す、

シヨーニン　聖仁　一七一八 一七九九　〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、聖仁は大和の人、醍醐寺の勝覺に從ひて密印を承け、遍明院に住し、保延五年高野の檢校を司とる、同年六月十二日寂す、壽八十二、（本朝高僧傳）

シヨーニユー　聖入　一九〇四　〔淨土宗西山派〕信濃善光寺の僧なり、聖入生國俗姓詳ならず、東山證入の弟子觀日に師事して淨土の宗義を受け、後信濃善光寺に往いて宗義を弘演す、示寂の年月日缺く、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

シヨーネン　聖然　一九七二　〔三論宗〕大和新禪院の學僧なり、聖然字は道明といひ、中道守に從ひ眞言院に入りて剃髮受業す。圓照證玄の二師に就きて稟具學律し、後智舜に嗣く三藏に通すれとも獨り三論を宗となし、空宗の中興となる、新禪院に住して宗旨を弘め、正和元年八月十五日同院に寂す、壽缺く、著作戒壇院緣起二十卷あり（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

シユーホー　聖法　一九四六　〔淨土宗〕某寺の僧なり、聖法は其氏族詳ならず、聖光に師事し出離の思篤し、其師の風彩に習て正行を修す、弘安九年二月十五日寂す、享壽詳ならず、（鎭流祖傳）

シヨーボー　聖寶　一四九二 一五六九　〔眞言宗〕山城醍醐寺の開山なり、聖寶は大和の人（一に讃岐の人と云ふ）光仁天皇の末葉なりと云ふ、（一に嵯峨天皇の末なりとも云ふ）天長九年に生れ。十六歲にして東大寺に入り、眞雅僧正に師事し度を受く、次に元興寺に入りて願曉圓宗の二師に就いて三論を學び東大寺平仁に就いて法相を學ふ、且つ同寺の玄榮（一に玄永に作る）に就いて華嚴を受く、貞觀十一年興福寺の維摩會講師に推され三論宗の一義を立てゝ衆議を論破し、其名大に聞ゆ、顯敎の諸宗を講究して、後、再び眞雅僧正の下に歸し、

眞言宗を學び、秘密儀軌を受けて、諸國の山川を經行し、閑寂の土地に至り、儀軌によりて苦修錬行す、殊に役小角の跡を慕ひて、大和の諸高峯を登蹈し、金峰山の頂上に金剛藏王の像等を造立安置し、且つ吉野川に渡船を設けて登蹈の路を開けり、之より小角の遺風大に興り、修驗道の稱を得るに至れり　傳へ云ふ師山に登濟するに、三衣を着するは煩はしきを以て、三衣の種子阿鑁吽を帛段に書し、縫ふて連環し、頸に掛けこれを種子袈裟と云ふ、後世略して輪袈裟となりたりと云ふ　貞觀の末醍醐の山中に一寺を草創し、修行の道場となす、即ち醍醐寺なり、眞雅僧正示寂後其附法眞然僧正に師事して兩部の灌頂を受け、尋て源仁を問うて益眞言の秘奥を究む、寛平二年眞然の推擧により眞雅僧正の後を繼いて貞觀寺座主となり、且つ東寺權法務を兼ぬ、延喜二年六月權僧正に進む、南都に至り東大寺の修營に力を盡し、中門の二天王像長二丈なるを造立し、南北の衆僧一千二百餘人を請して開眼供養を行ふ、東大寺境に東南院を建立し、三論宗の本所となし、自ら其第一世となる、延喜六年益信の示寂の後東寺一長者となり僧正に進み、東寺の諸堂宇を修營し、且つ佛菩薩の形像を造立安置す、四天王の開眼供養には宇多法皇親ら臨幸したまふ、延喜九年六月老病を以て諸官職を辭し　深草の普明寺に退隱し、七月十六日に至りて同寺　寂す、壽七十八、勅して御讀經あり、且　調布二百端を賜ふ、門下に顯密の學僧輩出す、就中三論の延敏、眞言の觀賢嫡統と稱せらる、東山天皇寛永四年勅諡理源大師の號を賜ふ、著作疏鈔、胎藏次第、五大虛空藏式法、持寶金剛次第各一卷あり古今集に師の和歌を收む、（聖寶僧正傳、密宗血脈鈔、元亨釋書、傳燈廣錄、本朝高僧傳　諸宗章疏錄）

聖寶尊師

シヨーボク　聖僕　ミヨータイ妙諦を見よ、

シヨーマン　聖滿　リヨージユン良順を見よ、

シヨーユ　聖瑜（二一九二）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、　聖瑜字は玄正、俗姓生國詳かならず、十輪院に住し、聖譽に繼きて學頭となる、寂年歃く、（結網集）

〔考〕　聖瑜は天文前後の人なり、

シヨーユー　聖融（二〇〇〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、　聖融字は空識俗姓生國詳ならず、中性院聖增の室に入り學擧あり、中性院第六世の祖となり、學頭に昇る、聖增の灌頂記五卷を節略して三卷となし、世に行はる、諸宗章疏錄には三卷となせり、寂年歃く、（結網集、諸章宗疏錄）

〔考〕　聖融は南北朝時代の人なり、

シヨーヨ　聖譽　……一八二七〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、

聖譽初め仁和寺に居り、後、高野山に遷る、時の人西谷の勝寶房と稱す、入壇灌頂の後千日十座の法已に九百九十九日を充たし、仁安二年二月二十九日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

シヨーヨ 聖譽 (二一九二) 〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、聖譽字は深音俗姓生國詳かならず、十輪院に住し、學頭に昇る、寂年缺く、(結網集)

〔考〕聖譽は天文前後の人なり、

シヨーヨ 聖譽 二三四一…… 〔淨土宗〕丹波正覺寺の開山なり、聖譽は江戸下谷の人、其俗姓詳かならず、廓源の法を嗣ぎ、丹波中山に正覺寺を創して開山となる、天和元年二月十三日州の黑井稱名寺に寂す、(淨土總系譜)

シヨーヨ 聖譽 (……) 〔淨土宗〕京都知恩寺の僧なり、聖譽は千蓮社と號す、其鄕貫詳ならず、超譽聖欽上人に就て法を嗣ぎ、八幡正法寺に住して第十世となる、後ち後柏原帝の詔を奉して京都知恩寺に住す、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

シヨーヨ 聖譽 キヨージユン慶順を見よ、

シヨーヨ 聖譽 テーアン貞安を見よ、

シヨーヨ 聖譽 ロドー魯洞を見よ、

シヨーヨ 聖譽 クヮクホー廓法を見よ、

シヨーエ 勝惠 一九〇八 一九五九 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、勝惠は太政大臣公助の子、正應五年東寺の長者に任し、永仁二年正僧正に轉し、同十一月寺務法務に補す、後護持僧となり、同三年大僧正となる、正安元年二月八日寂す、壽五十二(東寺長者補任、仁和寺御傳)

シヨーエン 勝圓 (一八〇五) 三條一流の佛工なり、勝圓は長俊の子なり、法眼に敘せらる、康治久安年代の人なり、(外記日記)

シヨーエン 勝圓 ジユンケー順繼を見よ、

シヨーカク 勝覺 一七一七 一七八九 〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、勝覺は源滾房の子なり、醍醐寺座主定賢に師事して密灌頂に入り、又義範範俊に從ひて益其蘊奧を究む、初め三寶院に住し、應德二年醍醐寺座主に補し、寛治六年廣隆寺に住し長治元年東大寺に移つる、二年春彗星出てし時勅を奉して仁王經法を修す、嘉承二年權少僧都に任す、天永三年六月神泉苑に請雨經の法を修し、大に賞賜あり、永久五年夏亦神泉苑に雨を禱る、保安元年少僧都となり、天治元年春東寺の長者に任す、翌年春法務を兼ね尋きて寺務を領す、夏五月三條殿に孔雀經法を修して皇后の產を祈り、權僧正に任す、此年再び東大寺に補し、住持前後十四年なり、大治四年春病にかゝり、四月一日寂す、壽七十三、弟子二十四人、定海、賢覺、聖賢は皆英俊にして三人各一家をなし、醍醐寺の密派分れて三となる、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

シヨーガン 勝嵓 シユーシユ宗殊を見よ、

シヨーキン 勝均 (……) 〔法相宗〕大和西大寺の學僧なり、勝均は西大寺に住して法相の宗義を講す、著作註樞要二卷あり、(諸宗章疏錄)

シヨーギヨー 勝曉 (一三八〇)〔……〕奈良の僧なり、勝曉は轉經唱禮に長す、養老四年十二月唐僧道榮幷に勝曉に詔して、轉經唱禮の法を正さしむ、示寂の年時缺く、(續日本

紀）

シヨーギヨーイン　勝行院　ゲンオー玄雄を見よ、

シヨーグ　勝虞　一三九三　一四七一〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、勝虞俗姓は凡直氏阿波板野郡の人、初め行基を師として法相を學び、後尊應に從ひて深く蘊奥を究め、善く唯識因明に通す、元興寺に住して宗義を張る、延暦二十四年正月桓武天皇の不豫の際、勅により召されて法を說く、弘仁二年六月某日寂す、壽八十、法弟護命、守印、慈寶、泰演あり、（本朝高僧傳）

シヨーケン　勝賢　一七九二　一八五〇〔眞言宗〕山城東寺二の長者なり、勝賢初め勝憲と呼び、岳東院侍從僧正と稱す、本と仁和寺の越中法印最源の弟子、給事中通憲の子なり、平治元年四月十六日三寶院にて實運傳法職位を受く、時に二十歲なり、永暦元年五月一日醍醐山十九代の座主となり、又常喜院心覺に謁して諸尊の秘訣を受く、應保二年四月故ありて高野山に逃る、壽永元年十月十五日詔して醍醐山に歸へらしめ、二十三世座主に補す、之より先き仁安二年正月少僧都となり、嘉應二年少僧都を辭して師最源に遜つる、承安四年十二月大僧都に任し、治承二年五月勅して座主に補す、但し還補なるが故に官符なし、暫く無量光院に在り、三年法印に轉す、十二月座主職を實海に讓り、覺洞院に退閑す、此間寺務を執るこ と二年なり、文治元年八月權僧正となり、三年十二月二十一日東寺二の長者に加補す、四年三月二十九日長者及び權僧正を辭し、十月座主を實繼に讓り、建久元年六月二十二日寂す、壽五十九、著作灌頂秘訣一卷、及び六月抄あり、（續傳燈廣錄）

シヨーケン　勝憲　シヨーケン勝賢を見よ、

シヨーコー　勝皎（一五五〇）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、勝皎は出家して華嚴を學び、寬平二年三月五日東大寺別當に任し、同年五月二十二日寂す、壽歆く、（東大寺別當次第）

シヨーコー　勝光　ニチヨー日耀を見よ、

シヨーゴー　勝剛　チヨーニユー長柔を見よ、

シヨーサン　勝算　一五九九　一六七一〔天台宗〕京都修學院の僧なり、勝算俗姓は滋野氏、京都の人なり、十四歲出家して運昭に止觀を學び、餘慶に灌頂を受く、播磨の刺史佐公行洛北に修學院を搆し、師を開山とす、一條帝上げて官寺とせらる、師嘗て靈夢により自ら等身の不動尊像を刻みて安置す、正暦二年園城寺の長吏に補し、長保四年權僧正に任ず、寬弘八年八月二十二日（或は十月二十九日とも云ふ）門人をして彌陀の寶號を唱へしめ、自ら彌陀の大呪を誦して寂す、壽七十三、臘六十一、病中に朝廷智觀の號を賜ふ、（本朝高僧傳）

シヨーシン　勝信　一八九五　一九四七〔眞言宗〕京都東寺七十二代の法務なり、勝信は福岡僧正といふ、光明峰關白藤原相國准三后道家の子、嘉禎元年に生る、幼にして東大寺尊勝院に入りて出家す、時に年十一なり、乃ち勸修寺道寶の資となり、寬元三年五月權大僧都に任し、寶治二年大僧正に移つる、四度の大業訖りて建長中法印に任し、五年勸修寺十二世の長吏に補し、牛車の宣を賜ふ、六年四月五日榮然に傳法灌頂を受け、文應中に長吏を辭す、文永三年十月廿六日聖基に秘密具支灌頂を受け、小野流の第廿五祖となる、六年權僧正に叙し、十一年勸修寺の檢校となる　弘安元年正月十四日正僧正に轉し、

三年八月東寺二の長者に加任す、四年八月東大寺の別當となり、又勸修寺の長吏に復す、道寶師に無上の寶篋を附す、五年十月詔して東寺七十二代長者法務僧正に任し、護持の國師となる、六年六月月蝕を祈りて大僧正に轉し、七年二月之を辭し、十年五月牛車の宣を賜ひ、七月長吏を信忠に屬し、四日寂す壽五十二慈金剛院と稱す。(後傳燈廣錄、本朝高僧傳)

シヨーシン 勝心 (一八九七) 〔眞言宗〕京都三寶院の僧なり、 勝心は京都の人、其姓詳かならず、最も密典に精しく三寶院に住し、後、高野の檢校となる、嘉禎三年職を辭し、其終るところを知らず、(本朝高僧傳)

シヨージユン 勝順 シンシヨー眞性を見よ、

シヨージヨー 勝成 一七九二 一八六九 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、 勝成は其鄕貫師承詳かならず、承元二年十二月別當に任じ、拜堂なくして同三年六月二十四日寂す、壽七十八、(三井續燈記)

シヨージヨー 勝乘 二四三九 二五〇〇 〔眞宗〕播磨常德寺の住持なり、 勝乘は播磨護持村本誓寺密嚴の弟なり、少にして父母を失ひ、兄の教育を受く、二十二歲にして學林に入り、諸匠の講席に陪し、或は學徒の爲めに私かに自他の書を講授せり、文化十一年安居して天台佛心印記を附講し、文化十三年龜山本德寺主の薦に因りて同國神東郡御立村(船津)常德寺に住す、學階創設の後司教に擢てらる、天保十一年安居副講し、觀經散善義を講す 秋に及ひて伊勢學徒の講に應し往きて略文類を講し、其歸途病を得京都の旅宿に着し、數日にして寂す、壽六十二なり、著作義林總料簡章略記、佛心印記講翼、各一卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

シヨージヨーイン 勝定院 サイチヨー齊朝を見よ、

シヨーセン 勝暹 (……) 〔華嚴宗〕大和尊勝院の學僧なり、 勝暹は俗姓生國を詳にせず、勝快に從ひて華嚴を問尋し、三會の講を經て尊勝院に住し、華嚴を敷說す、寂年及ひ壽缺く、高弟嚴意、眞覺の二人共に光智五世の孫なりといふ、(本朝高僧傳)

シヨーソン 勝尊 (一九二一) 〔眞言宗〕山城醍醐山第三十四代の座主なり、 勝尊は松殿僧正といふ、宇治小松相國の孫、師家の子、寬元三年十二月宣して醍醐山三十四世座主となり、廿九日官符を下し、四年三月十一日拜堂す、寶治元年五月廿二日祈雨の功を賞して阿闍梨二口を賜ふ、建長三年六月四日寺務を讓へて法性寺の坊に移つる、寂年缺く、(續傳燈廣錄)

シヨードー 勝道 (一四八三) (……) 下野神宮寺の開山なり、 勝道俗姓は若田氏下野芳賀郡の人、夙に出家して道業を修し、戒範を持し、意興法にあり、洲の補陀落山に地を相し、天應二年神宮寺を剏し、經像を安置す、居ること四年、道譽四方に高し、桓武天皇勅して上野講師に任す、師都賀郡に華嚴寺を造り、州民を遊化す、大同二年夏二荒山にて雨を祈り靈應あり、弘仁末年壽七十餘にして寂す、後、弘法大師空海師の道跡を慕ひ二荒山に登る、(本朝高僧傳)

シヨーニヨ 勝如 (……) (……) 攝津彌勒寺の僧なり、 勝如俗姓不詳攝津彌勒寺中に一草庵を結ひて蟄居し、十餘年の間言語を禁斷す、偶夜中人あり柴戶を叩く、勝如言

語を忌むを以て問ふを得ず、唯咳聲を以て人あるを知らしむ、戸外の人曰ふ、我は是れ播磨國賀古驛邊に住する沙彌敎信なり、今日極樂に往生せんと欲す、上人某年月其迎を得べし、これを告げむが爲に來るなり、と、言訖りて去る、勝如驚怪し、明日弟子僧勝鑒を遣はし彼地に尋ね、眞僞を驗せしむ、勝鑒歸り來りて曰ふ、驛北の家竹廬あり、廬前死人あり、群狗競食す、廬内に一老嫗一童子あり、相共に哀哭す、老嫗語りて曰ふ、死人はわが夫沙彌敎信なり、一生の間阿彌陀の號を稱し、晝夜休まず、己の業となす、隣里の人々皆呼びて阿彌陀丸となす、今我れ老後相別るゝを以て哀哭す、此童子は即ち敎信の子なり、云云と、勝如此言を聞て自ら謂ふ、我れ言語なし、敎信念佛するに如かず、故に聚落に往詣し、自他念佛し、他日に及びて入寂す、（往生極樂記、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕彌勒寺は清和天皇の朝に改めて勝尾寺と號す、今は眞言宗の一名刹なり、

ショーハン　勝範 一六五六 一七三七 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、勝範俗姓は清原氏近江野洲の人なり、初め座主覺慶に從ひ後都率院の覺超を師とし、天台宗を學ふ、尤も止觀に精しく、義釋多し師資持院に居りて大に慧心の道を唱へ、延久二年延暦寺の座主に住す、承暦元年正月十八日寂す、壽八十二、（本朝高僧傳）

ショーフクイン　勝福院 コーイン興院を見よ、

ショーヘン　勝遍　　）〔眞言宗〕京都仁和寺理智院の開山なり、勝遍初め信偏といふ、中太夫源信時の子なり、寬遍の心印を承け、仁和寺理智院を開きて祖となり、太元阿闍梨に任す、付法の弟子良遍一人あり、（傳燈廣錄）

ショーホー　勝法（……）〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、勝法俗姓詳ならず、源空上人に師事して淨土敎を受く、書事に妙にして、上人の像を寫す、上人自ら讃を書して其妙技を賞したりと云ふ、示寂の年月日缺、（淨土傳燈錄）

ショーヨ　勝譽　カオク珂憶を見よ、

ショーヨ　勝譽　クオー舊應を見よ、

ショーヨ　勝譽　シユンオー俊雄を見よ、

ショーヨ　勝譽　ヘキサン碧山を見よ、

ショーイン　證印 一七六八 一八四七 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、證印號は大乘傳法院の學頭となる、學顯密を統べ、密嚴院に住し文治三年七月の初め寂す、壽八十、（本朝高僧傳、高野往生傳）

ショーエ　證慧 一八五五 一九二四 〔淨土宗西山派〕山城淨金剛院の開山なり、證慧字は道觀と云ふ、京都の人、文章博士孝範の猶子なり、初め證空上人の弟子證入に從ひ、後證空上人に師事して淨土敎の奥義を受け、法化盛んなり、後嵯峨天皇の敕請を拜して法門を説き、天皇の本願により嵯峨小倉山の麓に淨金剛院を開き、第一祖となる、善導和尚の觀無量壽經疏等の記を作りて弟子に與ふ、弟子道忿等あり、門業一時盛んなり、乃ち嵯峨流と稱す、文永元年五月六日寂す　壽七十、著作淨土名目二卷行る、（淨土總系譜、淨土傳燈錄、吉水實錄、淨土承繼譜）

ショーカク　證覺　ゲンニン玄忍を見よ、

ショーキョー 證慶 一八三〇 一九〇六 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、證慶は其郷貫詳かならず、珍玄に從つて宗義を學び、聞くところの法皆鈔を著す、曆仁元年十一月圓淨を拜して灌頂を受け、本寺顯者並大學頭となり、寬元四年九月四日寂す、壽七十七、(三井續灯記)

ショークー 證空(……) 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、證空其俗姓國詳かならず、幼にして園城寺の智興阿闍梨に師事して顯密の法を稟け、後、常住院を搬して其開山となる、寂年、及壽欠く(本朝高僧傳)

ショークー 證空 一八三七 一九〇七 淨土宗西山派の開祖なり、證空字は善慧、俗姓は源氏加賀守親季(入道證玄)の長男なり、治承元年十一月九日を以て生れ、建久元年四月十四歲にして出家の志禁じかたく、吉水に至りて源空上人に謁し得度して解脫と號す、後笠置山の解脫上人貞慶に同しきを以て改めて善慧と云ふ、これより上人に親附して淨土敎の宗義を受く、建久九年二十二歲にして菩薩戒を受け、且つ諸高德を歷問して顯密の敎義を學ふ、即ち顯敎を願蓮に受け、密敎を政春、慈圓、公圓に受く、源空上人選擇集を著すに際し、勘文の任に當る、正治元年六月選擇集を相國藤原兼實の第に源空に代りて講ず、同二年九條道家の請により觀無量壽經疏十卷を作り呈進す、建保元年慈圓僧正の意を受けて西山の善峯寺に住し、盛んに淨土敎を說く、同二年白木念佛の法語を著す、文曆元年正月以來大藏經を讀誦す、寬元元年後嵯峨天皇の敕請を拜して淨土敎を宮中に說き、且つ菩薩戒を奉る、仝年敕して彌天の號を賜ひ、觀喜心院を創立し、鎭護國家不斷說戒の敕願寺となす、仝二年道覺親王の請により鎭勸用心と名くる法語を作る、尋で皇太后に解を奉り、且和字念佛法語を作る、後に女院御鈔と云ふものこれなり、寶治元年十一月疾あり、二十五日門人を集めて法要を說き、二十六日門人と共に阿彌陀經を讀誦し、念佛二百聲にして寂す、壽七十一、臘五十七門人塔を西山三鈷寺に建て華臺と云ふ、著作觀經疏秘訣鈔二十卷、觀門要義鈔四十八卷、曼陀羅註記十卷、四十八願鈔、修業要訣、選擇密要訣五卷等あり、寬政八年八月敕諡鑑知國師の號を賜ふ、(西山上人緣起、法然上人行狀畫圖、淨土傳燈錄、淨土總系譜、佛敎各宗綱要)

ショークワン 證觀 一七九六 〔天台宗〕近江三井寺の學僧なり、證觀は源俊房の子なり、少にして園城寺に入り、淨覺法印に從ひて落髮得度し、經疏を研く、應德二年冬法成寺の勸學講の竪者となり、承德二年青龍院の最初の阿闍梨に補す、最勝會の聽衆を經て三會の講師となり、五年冬最勝會の講司となり、康和二年權律師より少僧都に昇る、嘉承の初め更に大僧都に轉し、法印に叙す、長治元年探題の宣を蒙むりしも山徒の訴によりて止む、天治元年の最勝會に講師となり、興福寺の勝越と問答す、同七月瞻西上人雲居寺を建て八丈彌陀の像を慶讃する時、師請せられて導師となる、天承二年最勝會の證義となり、長承元年法勝寺八講會を主とる、三年八月園城寺金堂の落慶供養會に導師となる、保延二年二月十一日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ショーケン 證賢 一九三三 二〇〇五 〔淨土宗〕山城清淨華院第五代なり、證賢號は向阿、別に是心と云ふ、俗姓は源氏、父は

安藝守武田時綱、母は遠江守朝綱の女なり、童名は德光丸、甲府に生る、建治三年十一月相摸守時宗鎌倉に於て加冠して信宗と名け、伊豆甲斐駿河安藝等の守たり、俗世の榮盛を樂まず、遂に園城寺に登りて得度し、諸典を研究し、後、京都に入り淨土敎に歸し、禮阿に師事し、尋で淸淨華院に住す、平生和歌を嗜み、其道に通ず、勅を奉して集を選す、弘安十年離山の詠を如意の門柱に書して曰く、於茂比多津古路茂能伊路波字寸貝登茂可惠良自茂能與寸美曾女能曾天、乃ち隱遁して双岡に棲止す、後往生至要決一篇を製し代々相傳の的旨を述ぶ、草隸を善くす、貞和元年六月二日双岡池上の西光菴に於て念佛して寂す、春秋八十三、著作、飯命本願鈔三卷、西要鈔二卷、父子相迎二卷、(鎭流祖傳、淨土總系譜、蓮門經籍錄)

【考】三井續燈記等に依れば、建武三年六月二日寂、壽七十一なり、且つ本文武田時綱とあるは附會なり信ずべからず、

シヨーゲン 證玄 一八八〇―一九五二 〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、澄玄字は圓律其俗姓生國詳ならず、常喜院覺盛に依りて剃髮し、嘉禎三年秋沙彌戒を受け、次に具足戒を受く、時に十八歲なり、寬元年中家原寺に抵り、別受の法によりて重ねて具足戒を受く、覺盛寂するに及び、師其囑を承けて招提寺に主となる、正應五年八月十四日寂す、壽七十三、臘五十五、門下道御、廣勝、順性、勤性、算了、寂證等あり、(本朝高僧傳)

シヨーシン 證眞 一八六四 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、證眞は隆慧、永辨の二師に從ひ、慧心壇那法流の源底を盡す、寶處院に入りて世を離れ戶を閉ち、大藏を遍閱すること十六遍、源平の擾亂を知らず、東塔の華王院に住し、大に講席を張る、後寶地房を構へて獨り著述を任とす、三大部私記三十卷を著し一家の說あり、文治五年勅を奉して論義の探題となり、尋いて法印に任す、嘗て源空に謁して圓頓戒を受け、專修念佛の旨を問ふ、元久元年師座主慈鎭を勸めて四谷の碩才二百七十人を選び、根本中堂に九旬安居して法華仁王經等を決擇せしむ、高倉上皇宣して師に衆義を判せしむ、寂年及び壽缺く、著作三大部私記三十卷、涅槃論疏義鈔四卷、涅槃私記四卷、智度論私記二卷、金錍論私記一卷、觀音玄義略鈔一卷、金光明玄義略鈔一卷、觀音疏略鈔一卷、(上三部は小部集に入る、)天台眞言同異集一卷あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シヨーシン 證信 一八三四―一九一一 〔眞宗〕常陸上宮寺の僧なり、證信字は明法と云ひ、常陸那珂郡東野尾村の人なり、初あ修驗道を學ひ、播磨公辨圓と稱す、承久三年眞宗に歸し、建長三年十月十三日寂す、壽六十八、今の常陸那珂郡米崎松原楢原山上宮寺は其遺跡にして、墓は東野にあり、(本願寺通紀)

シヨーシユー 證秀 キヨーギヨー慶堯を見よ、

シヨーシヨー 證性 一八四九―一九二五 〔眞宗〕常陸靑蓮寺の中興なり、證性は俗名を畠山重秀といふ、重忠の子なり、建久六年父に伴はれて栂尾の明惠に禮し、之に師事して惠空と稱す、師時に七歲なり、承元四年栂尾を出てゝ東國に歸り、建暦三年親鸞上人に稻田に謁し、師資の禮を執る、乃ち今の名に改む、常陸久慈郡東蓮寺邑に靑蓮寺を再興す、文永二年四月廿五日寂す、壽七十七、嗣了證下野戌飼に蓮生寺を創し、寬永

四年、奥州棚倉に移す、（本願寺通紀）

シヨージヨー 證定 ゲンコー玄康を見よ、

シヨードー 證道 ジツユー實融を見よ、

シヨーニユー 證入 一九〇四…… 〔淨土宗西山派〕山城東山の學僧なり、 證入字は觀鏡、仁田四郎忠常の子なり、西山派の開祖證空上人に師事して淨土の教義を傳ふ、後東山宮辻に阿彌陀院を剏し、盛んに淨土教を說く、故に東山流と云ひ、一に宮辻義と云ふ、寬元二年七月七日寂す、門下に覺入、觀日、觀明、唯覺、正乘、蓮宿、證佛等あり、皆當時に聞へたり（淨土總系譜、淨土傳燈錄、吉水實錄、淨土承繼譜）

シヨーニヨ 證如 コーキヨー光教を見よ、

シヨーブツ 證佛（……） 〔淨土宗〕京都東山の學僧なり、 證佛は備中の人、本と官に仕へて雄武の譽ありしが、出家して京都に上り、證入に師事して念佛を學び、後歷遊して高野山に登り、正智院道範に眞言教を稟學し、又奈良に往き戒壇院實相に就て木叉戒を受け、寺を京都に剏し淨土教を弘め、大八幡某寺に住し、其終るところを知らず、（本朝高僧傳）

シヨーヨ 證譽 ウングワ雲臥を見よ、

シヨーヨ 證譽 シヨーニユー誠入を見よ、

シヨーヨ 證譽 シヨーデン清傳を見よ、

シヨーヨ 證譽 タイオー泰應を見よ、

シヨーイン 承胤 二〇三七…… 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、 承胤天台座主となること三度、永和三年四月九日寂す、（天台座主記）

シヨーエン 承圓 一八四〇 一八九六 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、 承圓は松殿禪定殿下の子、母は前大政大臣忠雅の女なり、出家して承仁仙雲の二師に天台教を學び、天台座主となること前後二回、大原に閑居し、嘉禎二年十六日寂す、壽五十七、（天台座主記）

シヨーエン 承演 二四五八 二五一六 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、 承演、字は大拙、俗姓は友本氏 若狹大島の人なり、幼にして鄉里の東源菴實堂に依りて受度し、十八歲竊かに實堂の下を逃れ出て、四方に歷遊す、美作備中に入り、寶福寺妙峯曹源寺太元に參し、播磨に到り行應に參せんことを請ふも事に妨けられて果さす、相國寺拙菴の招により同寺に到り、心華院に入る、嘉永三年相國寺に普明錄を提唱し、會下群をなす、其威形嚴肅にして接契峻厲なるを以て鬼大拙の稱あり、安政三年十月二十一日寂す、壽五十九、門下洪川あり、（近世禪林僧寶傳）

シヨーカク 承覺 （一九八五） 〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、 承覺は後宇多院の子、出家して範胤に師事し、顯密二教を對習し、正中二年五月天台座主に任ず、寂年、壽缺く、（天台座主記、三國名匠略記）

シヨーカク 承覺 一八四一 一九〇八 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、承覺は其卿貫詳ならず、經玄の室に入りて得度受具し、俱舍天台を練り、大に講學の譽あり、寶治二年十一月十三日寂す、壽六十八、（三井續燈記）

シヨーガン 承顏 チジユン智順を見よ、

シヨーキン 承均 （一五三七）（……） 大和の歌法師なり、

承均大和大掾某の子、元慶の頃世にあり、和歌に巧なり、古今集春部に二首、雜部に一首を收む、(古今集目錄)

シヨーケン 承憲(……) 〔戒律宗〕大和戒檀院の律僧なり、承憲號を通觀と云ふ、俗姓は藤原氏、奈良の人、興福寺圓憲法印の俗弟なり、四十六歲にして具足戒を受け、金山院に住し、善法院に移りて戒律を唱ふ、寂年、及壽缺く(本朝高僧傳)

シヨーコー 承廣(……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、承廣字は無外と云ふ、空谷明應に參して法を嗣ぎ、建仁寺に主となり、南禪寺に遷る、將軍師の道譽を崇ひ、屢召して法要を問ひ、寵遇渥し、寂年缺く、遺偈あり、曰く、謗佛謗法、六十三年、末後一句、霹靂青天、(延寶傳燈錄)

シヨーシン 承信(……) 〔三論宗〕大和東南院の學僧なり、承信は義海と同しく東南院の重器に依り、小乘論に節目を解折す、東南院に居りて講席を開く、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

シヨーシユー 承秀(……) 七條佛所佛工なり、承秀は康運の弟子なり、兵部卿と號す、

シヨーシゴン 承俊(一四八四・) 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、承俊興福寺にあり、顯密に兼ね通す、勸修寺を開きて第一世となる、天長の頃寂す、(本朝高僧傳)

シヨーセン 承先 ドーキン道欽を見よ、

シヨーチン 承鎮(一九八六) 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、承鎮は後字多院の猶子、岩倉宮の子なり、嘉曆元年天台座主に任す、其寂年缺く、(天台座主記)

シヨーチヨー 承澄 一八六五―一九四二 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、承澄は小川僧正と稱す、松殿小殿下師家の子、十一歲(一傳八歲とも云ふ)出家受戒し、忠快法印に師事し、相摸覺審大僧都に法曼院を受け、灌頂法を究む、書に巧にして馬を描き、其法覺猷に似たり、弘安五年十月二十二日寂す、壽七十八、著作阿娑縛鈔二百二十八卷、明匠略傳三卷、并に自書韋駄天馬等あり、(三國名匠略記、扶桑畵人傳)

シヨーチヨー 承朝 二〇三四―二一〇三 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、承朝字は海門と云ふ、空谷に參して法を嗣ぎ、相國寺に住す、後、南禪寺に法を開き、晩年に及び、景壽院に居す、嘉吉三年五月九日寂す、壽七十、敕諡寶智圓明禪師の號を賜ふ、(延寶傳燈錄)

シヨードー 承道 二〇六八―二一一三 〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、承道は法金剛院と號す、木寺殿世平王の子、應永十五年八月廿日生る、同廿六年出家して求助に習學し、廿四年直に二品に敘す、正長二年寺務に任し、享德二年一品に昇る、同年九月十日寂す、壽四十六、(仁和寺御傳)

シヨーニン 承仁 一八二九―一八五七 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、承仁は御白河院の皇子なり、出家して明雲顯眞二師に天台教を學び、建久七年二十八歲にして天台座主に任じ、同八年四月二十七日寂す、壽二十九、(天台座主記)

シヨーヨ 承譽 ホーシユー法洲を見よ、

シヨーアン 清菴 シユーチユー宗冑を見よ、

シヨーアン 清菴 シユーム宗無を見よ、

シヨーイン 清陰(……) 〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の禪僧

なり、清䕫は周防の人なり、遊方して誠拙に圓覺寺に侍することと數年その印記を受けて、圓覺寺の僧堂を董す、示寂年月日詳ならず

シヨーカイ 清海（一七〇六）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、清海は常陸の人、其俗姓師承詳かならず出家して興福寺に住し、後、超證寺に移る、永承年中寂す壽缺く、（拾遺往生傳）

シヨーガク 清岳 シユーセツ宗拙を見よ、

シヨーガン 清岩 シヨーテツ正徹を見よ、

シヨーガン 清巖 二二五二 〔淨土宗〕上野大信寺の開山なり、清巖は圓蓮社總譽終願と號す、相模小田原の人なり、其俗姓詳かならず、幼にして相撲鎌倉天照山光明寺に投して度を受け、專ら學業を勉勵し、夙に盛譽あり、鎌倉の諸禪寺を歷問して禪宗の深旨を傳へ大に啓發するところあり、後、光明寺呑譽上人に師事して一流の宗意を受學し尋いで武藏河越の蓮馨寺に至り感譽に師事し、遂に其法を嗣く、初め武藏平方馬蹄寺に住して第二代となり、後、蓮馨寺に留り、大衆に推されて學頭となる、元龜元年上野高崎に大信寺を剏して開山となり、天正十五年武藏埼玉郡岩付に淨國寺を開き開山となり、盛んに法幢を樹つ、文祿元年六月二十七日同寺の方丈に寂す、壽詳ならす、（淨土總系譜、鎭流祖傳）

シヨーガン 清巖 シユーイ宗渭を見よ、

シヨーキヨー 清狂 グワツシヨー月性を見よ、

シヨーギヨー 清鄴（二一二九）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、清鄴字は子才と云ふ、心田和尚に參して法を嗣ぎ、文明の初め敕命を奉して建仁寺に主となる、寂年缺く（延寶傳燈錄）

シヨーケー 清啓（二一一七）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、清啓は萬里叟と號す、天興伯元の法嗣にして清拙の法孫なり、明に渡り、諸老宿に謁し、皈朝して建仁寺に住す、長祿中寂す壽缺く、著作戊子入明記一卷

シヨーケー 清溪 ツーテツ通徹を見よ、▲増補見よ

シヨーケン 清見（……）（……）大和の歌法師なり、清見は萬葉集作者の一に列し、和歌を能くするを以て知らる、詠歌は萬葉集に載す、（萬葉集作者履歷）

シヨーケン 清顯 一九四八 二〇二三 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、清顯は高泰繼の子なり、乘伊定顯の二師に習學し、曾て灌頂の軌に就き、十五帖の抄を製し、又修惠抄問口抄の著あり、貞治六年十二月十三日寂す、壽八十四、（三井續燈記）

シヨーサン 清算 一九四八 二〇二二 〔戒律宗〕大和白毫寺の律僧なり、清算字は彥證、總願盛律師に戒波羅密を受け、奈良白毫寺に開法す、延文年中西大寺に主となり、又洛西大覺寺の招きを受けて盛んに同寺に於て律幢を樹て、貞治元年十一月十四日寂す、壽七十五、著作三宗綱義、三寶綱義、持犯綱義、梵網古迹綱義、菩薩戒綱義、三聚綱義、四藥綱義、戒體章綱義等若干卷あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シヨーザン 清三（……）〔臨濟宗〕伊勢無量壽寺の禪僧なり、清三字は笑雲、號は三東堂と云ふ、伊勢無量壽寺に住して詩名あり、著作四河入海（東坡詩鈔）、古文眞寶鈔十卷あり、（日本高僧傳）▲増補見よ

シヨーシン　清心　二〇九三……〔法相宗〕大和の學僧なり、清心は其俗姓生國詳ならす、出家して唯識を究む、時に維摩會の講絕えて久しく續かず、應永三年師敕を奉して講師となり、尋て權大僧都に任す、永享五年某月某日寂す、壽歛く、（本朝高僧傳）

シヨージン　清尋　一七一一……〔眞言宗〕大和東大寺別當なり、清尋は堀川中納言時光の三子なり、出家して密敎を學び、寬仁元年律師に任し、長元元年少僧都となり、同八年大僧都に昇る、永承四年東大寺別當に補し、六年六月十八日寂す壽歛く、（東大寺別當次第）

シヨージユ　清壽　一六七五……〔眞言宗〕京都東大寺の僧なり、清壽は寬朝大僧正の門弟にして、寬朝に密灌を受け、長德四年僧都となり、長和二年東大寺に主となり、居ること二年、同四年四月二十七日寂す、壽歛く、（本朝高僧傳）

シヨージユー　清住　ショーサン盛算を見よ、

シヨージユン　清順　二四五三……〔曹洞宗〕能登龍淵寺の開山なり、清順字は和菴、能登の人、俗姓は源氏なり、幼にして七尾の實相寺に投して一菴如清に依り、出家受戒し諸方に偏參して歸へり、遂に印可を受く、一菴の寂後關東に行き、忍城皿尾村に掛搭す、成田の府主左京兆藤原家時其道化を慕ひて法を問ふ、受戒して龍淵寺を建て、師を請して開山となす、寬政五年十一月十五日行脚し、其終る處を知らす、（日本洞上聯燈錄）

シヨーシヨー　清松　ショーリユー正隆を見よ、

シヨージヨーコーイン　清淨光院　コーチヨー光超を見よ、

シヨーセツ　清拙　ショーチヨー正澄を見よ、

シヨーソ　清祖　二一五八……〔臨濟宗〕京都嘉隱菴の開山なり、清祖字は柏庭、將軍足利義詮の庶子なり、夢窓國師を拜して祝髮受具し、國師寂する後、西山永に依り其印記を蒙むり、龜山天龍寺に主となり、後、東山に嘉隱菴を構へ門を閉ぢて諸方の請に應せす、應永五年六月二十八日寂す、遺偈あり、曰く說二甚安居一說二甚麽足一隨處道場天堂地獄、と、法嗣南禪寺の遊慶藏、相國寺の友山師、建仁寺の釣文渭、南禪寺の心田播、建仁寺の嘉泉慶、瑞雲嘉、玖書記の七人あり、勅謚佛蓮禪師と賜ふ、（本朝高僧傳）

シヨーデン　清傳　二二八四……〔淨土宗〕武藏清傳寺の開山なり、清傳は信蓮社證譽と號し、武藏江戸の人なり、觀智國師に師事して、法を嗣ぎ、後、州に新方增林清傳寺等を剏して開山となる、寬永元年十月十七日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

シヨードン　清曇　二〇五〇……〔臨濟宗〕山城天龍寺の住僧なり、清曇字を獨芳と云ひ、生國俗姓を詳にせず、久しく清拙澄和尚に參し、後支那に往き諸刹を歷叩し、其名高く、元人稱して曇菩薩といふ、永德年中歸朝して清拙の面證を稟く、將軍義滿聘して天龍寺に住せしむ、至德二年衆請により萬壽寺に移つる、藤原玉菴居士其道化を慕ひ請して豐州の萬壽寺に住せしむ、後、大智寺を剏して終老の謀をなす、明德元年京都興聖寺にありて八月六日病に罹り、手翰並に袈裟を玉菴居士に贈りて永訣となし、八日衆を集めて遺訓し、泊然とし

て寂す、壽缺く、門人靈昌師の寫照を持して明國に入るといふ、（本朝高僧傳）

シヨーニン　清仁　一七三三……〔法相宗〕山城清水寺の僧なり、清仁攝津榎並縣の人清水寺に住し、毎日花を摘みて佛菩薩に供す、嘗て人に語りて曰ふ、我れ一生女身に觸れずと、衆崇みて布薩の戒師となす、凡そ檀嚫あれば一毫も留めず、卽ち命じて分與す、或は法樂院の三昧一和尚に施し、又無緣の捨を行して寒素を悲濟す、金住寺を建立して毎夜堂に入りて定坐す、延久五年九月二十二日寂す、（本朝高僧傳）

シヨーハン　清範（……）〔法相宗〕京都淸水寺の學僧なり、清範は播磨の人、幼より、興福寺守朝に師事して法相を稟習し、又小島の眞興に依りて毅〻玄旨に達す、出てゝ洛東清水寺に住し、盛んに法相を講す、皇后藤原定子先考の爲めに齋を設け、師を請して法を說かしむ、其深微を講ずるや、滿座をして感泣せしむ、僅かに三十八歲にて寂す、時人其德を崇で清水寺上綱と號す、著作般若理趣分註一卷あり（本朝高僧傳）

シヨーハン　清範　ジヨーセン乘專を見よ、

シヨーバン　清播　二〇三二―二一〇四〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　清播字は心田、號は春耕と云ふ、九歲柏庭に侍して學を得十四歲にして剃髮受戒す、十八歲遊方し、一菴麟、大中益、聖徒麟等の諸禪師に建仁南禪等の諸寺の間に參究すること十年、後東山建仁寺の藏鑰を司とり、柏庭の印記を受く、諸菴肇建仁寺を司とるとき師其第一座となる時に已に四十八歲なり、將軍足利義持命を下して伊勢の正興寺に主たらしむ、居ること十年、又將軍の命により京都寳幢寺に移つる、數年を經て建仁寺南禪寺を司とる、時に六十九歲なり、後義政の請により伏見の常在光寺を司とり、久しからずして退隱し、東山の大統院に棲居し、文安年中寂す、壽七十三、著作四會語錄、及び聽雨集、春耕集等あり（本朝高僧傳）

シヨーフー　清風　ハクゲン白玄を見よ、

シヨーホー　清峰　キヨーボン慶梵を見よ、

シヨーマ　清麿　二二二三……〔曹洞宗〕丹波圓通寺の禪僧なり、清麿字は闇芝、俗姓は源氏、佐々木の族なり、近江の人、十三歲總寧寺に投し十五歲落髮受具す、初め法華を誦せしが捨てゝ禪林に入り、十餘年の後大透宗的に參し、堂奥に昇る、天文二十一年其席を補して丹波圓通寺に住す、永祿六年四月十日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーユ　清瑜（……）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、　清瑜字は溫中と云ふ、清拙に師事して衣印を付せられ、興聖萬壽建仁の三寺に歷住す、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

シヨーリヨー　清良　二一〇五……〔曹洞宗〕越前龍興寺の開山なり、　清良字は希明、越前味美郡井白の人、母は武田氏なり、七歲にして清水寺に投じて下髮受具し、天台の敎觀を學びしが、後ち南禪寺龍山和尙に見えて敎を聞く、會々天眞の越前慈眼寺に住して曹洞の宗旨を弘むと聞き、徃て師事し、勤究十年にして印可を受け、山中に默昧菴を構へ閉關せしが、請に依り遂に慈眼寺に住し、龍泉寺に遷る、越前安居の信官藤清長龍興寺を築き、師を聘して開山第一世と爲し、時の將軍足利義政莊田若干を寄附す、文安二年九月十六日寂す、

世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーアン　昌菴　コーボー杖丰を見よ、

シヨーカイ　昌海（一四四二）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、昌海は奈良の人、幼にして善珠僧正に師事して唯識の奥義に達し、大和醫岡に蟄居す、寂年及壽缺く、弟子某繼一人あり、著作西方念佛集、阿彌陀悔過、各一卷あり、（本朝高僧傳）

〔考〕昌海は延暦頃の人なり

シヨーキン　昌謹（……）〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、昌謹字は無言と云ふ、義堂に參して法を嗣ぎ、相模淨智寺に住す、寂年及世壽詳かならず、（延寶傳燈錄）

シヨーケー　昌桂（……）〔曹洞宗〕阿波丈六寺の禪僧なり、昌桂字は月殿出家して徧く禪席に歷參し、後に金岡用兼に師事して其法を嗣ぎ、永平寺に出世し、移りて阿波丈六寺に主となる、寂年、及び壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーケー　昌馨　セーガン誓岩を見よ、

シヨーサン　昌三　シヨーサン正三を見よ、

シヨージユー　昌住（一五五〇）（……）平安京の學僧なり、昌住は昌泰の頃新撰字鏡十二卷を作り上る、事歷詳ならず、著作新撰字鏡十二卷、同抄錄二卷傳はる、

シヨーシユン　昌俊（一五一〇）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、昌俊字は東海、備後の人なり、圓覺寺誠拙の下に參究し、其印記を受く、佛日菴に住し、雲衲に接す、嘉永三年天龍寺の請により、同寺に至り、夢窓國師五百年忌を修す、夢窓錄を提唱す、雲衲一千餘人なり、近世の盛事となす、寂年缺く、（本朝高僧傳）

シヨーシユン　昌春　シユシン主眞を見よ、

シヨーセキ　昌碩（二五二五）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、昌碩字は義堂、初め曹源寺儀山、後、相國寺大拙に師事し、其法を嗣ぎ、天龍寺内の鹿王院に住す、元治元年長門藩天龍寺に兵を屯し薩摩會津諸藩と事を爭ひ、遂に天龍寺に火を放つに至る、師兵馬の間にありて豪氣を以て知らる、慶應の頃寂す、壽五十一、

シヨートン　昌暾（……）〔曹洞宗〕大隅西福寺の第二代なり、昌暾字は明室、大隅佐多城主島津氏義の第九子なり、十六歲の時薩摩福昌寺に投し、覺隱永本禪師に依り、祝髮受具し、孜々業を積み、十八歲にして印可を受く、父氏義同國佐多極樂山に西福寺を創立し、覺隱を延て第一世となす、覺隱之れに住する數年にして周防に還る、師命を受けて其跡を嗣ぎ、後總持寺に出生し、歸雲寺に遷る、晩年に至り、西福寺に歸り、某年寂す壽缺く（日本洞上聯燈錄）

シヨーヨ　昌譽　ライオー來應を見よ、

シヨーリユー　昌隆（二二七五）〔曹洞宗〕能登安樂寺の禪僧なり、昌隆字は紹屋、南榮禮三に參すること十年、其印可を受け、總持寺に出世し、安樂寺に遷る、一住十四年、木下延俊請して松屋寺に住せしむ、住後三月にして其廢を興す、元和元年四月一日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーリユー　昌隆（二二六五）〔曹洞宗〕薩摩妙圓寺の禪僧なり、昌隆字は虎溪、薩摩の人、業を竹居禪師に受け、後諸方に徧參し、妙圓寺愚丘妙智により久しくして印可を蒙る、

長享元年大守聘して妙圓寺に開法せしむ、道譽朝聞に達し、特に紫衣並に廣佛快巻禪師の號を賜ふ、明應五年病に罹りて松尾山に退隱し、永正二年八月九日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーウン　祥雲　ゲンキョー元慶を見よ、

シヨーウンボー　祥雲房　リョーグワン了願を見よ、

シヨーガン　祥巖　シュミリン秀麟を見よ、

シヨーキヨーイン　祥慶院　ギホ・義寶を見よ、

シヨーケー　祥啓　……二〇〇五　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、祥啓字は雪溪、號は貧樂齋と云ふ、又依月齋、龍杏、榮普齋の別號あり、下野宇都宮の畫師丸良氏の男なり、鎌倉建長寺に入りて書記となる、人呼びて啓書記と云ふ、天性畫を好み、殊に佛畫を善くす、山水人物これに次ぐ、後宋人牧溪の畫風を慕ひ、其妙を極む、彩色を好まず、墨色を主とす、貞和元年寂す、壽缺く（本朝畫史、扶桑畫人傳）

シヨーサン　祥參　……二一一七　〔曹洞宗〕能登瑞龍寺の第二代なり、祥參字は實庵、駿河の人、幼にして海藏寺物外性應禪師に投じて下髮し、出でゝ諸方を參歷すること數年にして歸り、遂に衣法を付せられ、總持寺に出世し、繼で瑞龍寺第二代となり、堂屋の老弊を修し、再び總持寺を主り、紫衣を賜はり、應仁元年正月十九日寂す、嗣法明翁永、九皐鶴、月窓印、勝山最、栽松牛の五人あり（日本洞上聯燈錄）

シヨーサン　祥山　シューズイ宗瑞を見よ、

シヨーサン　祥山　ズイテー瑞禎を見よ、

シヨーサン　祥山　ニンテー仁禎を見よ、

シヨーヨ　祥譽　ゲンズイ元瑞を見よ、

シヨーセー　祥勢　……一五五五　〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、祥勢は出家して華嚴を學び、貞觀十三年東大寺別當に任せられ、元慶七年十月七日律師となり、寛平元年九月二十五日少僧都に昇任し、二年十月二日大僧都に轉ず、同七年寂す壽缺く、（東大寺別當次第）

シヨーズイ　祥蘂　二四八三　〔眞言宗〕阿波正興菴の僧なり、祥蘂は阿波板野郡木津野村の莊官湯淺官次の子、十六歲にして出家し、正興菴の普海尼に師事して專ら文學を修練し、長ずるに及び學才あり、善く詩を賦し、文を作る、五十歲の時正興菴に住し、十年を經て弟子に讓りて黑崎長谷部幻夢庵を構へて退居し、文政六年十一月十九日寂す。

シヨーチン　祥椿　二一九四／二一七三　〔曹洞宗〕能登一雲寺の禪僧なり、祥椿字は大年、遠江の人、十三歲山寺に入りて祝髮し、法華經を讀む、山の一大士の勸めに依り、一雲寺の川僧慧濟に參し、一雲寺に住し、總持寺に昇る永正十年四月四日寂す、壽八十、法嗣大路一遵あり、（日本洞上聯燈錄）

シヨーテー　祥貞　……二一七一　〔曹洞宗〕信濃龍雲寺の禪僧なり、祥貞字は天英、播磨の人なり、俗姓藤原氏と云ふ、家世々儒を業とす、年十五にして京都に遊び、經傳を學び、廣く群書に通す、建仁寺に投して祝髮し、奈良に往きて具足戒を受く、文明二年關東に遊び、諸老を參訪し、傑傳禪長に見えて研究すること多年、其法を嗣き、仝十二年長源寺に住す、明應二年信濃佐久郡大井氏龍雲寺を剏し、師其開山となり、道風盛大にして同郡の正眼寺、槇島の興禪寺、長沼の妙笑寺

須坂の興國寺等皆師を開山とす、明應九年傑傳下野成高寺に寂す、師訃を聞きて到る、同國の刺史堅く師を請して席を補せしむ、永正八年三月二十四日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

シヨートー 祥登(……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、祥登字は大年、建長寺了堂安禪師の高弟なり、應安の初年法兄伯英俊に從ひて元に入り、諸老に請益し、東歸して建仁寺に出世し、後、南禪寺に移つる、一日諸山の尊宿と共に將軍義持の第に會に到り、請に應して軸に賛し、其達筆を賞せられ、之より優遇最も篤し、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

シヨーミヨー 祥明(二四八四―二五四四) 〔眞宗〕伊勢小山青巖寺の住持なり、祥明は功德池院と號す、專修寺大僧正圓祥の子なり、准講師に任し、權少教正に補す、明治十四年十月十四日寂す、壽五十八、

シヨーレン 祥蓮(……) 〔天台宗〕近江楞嚴院の僧なり、祥蓮は鄉貫師承詳かならず、楞嚴院に住し久しく西方業を修し、又毎日懺悔法を修む、寂年、及壽缺く、(三外往生傳)

シヨーアイ 松靄　トクガン德含を見よ、

シヨーアン 松菴　チドー智幢を見よ、

シヨーアン 松菴　シユーエー宗榮を見よ、

シヨーウン 松雲(二二六六―二三四二) 〔曹洞宗〕山城宇治興聖寺の禪僧なり、松雲字は龍蟠、陸奥國の人なり、十一歲にして禪龍寺の傑山和尚に從て出家す、十六歲にして歷遊し、關東の名宿に參す、時に萬安道を瑞巖寺に唱ふ、師往て謁す、執侍すること七年、次に五嶽華園の諸老に參して鄉に還る、正保二年西藏岑牛龍淵寺に住し、師を招て衆に首たらしむ、再び瑞巖寺に抵る、時に懶禪和尚席に據る、師誠を傾けて叩請す、禪師公案を擧して之を語る、應酬滯るなし、禪師之を領す、會々萬安寶林寺を重興す、師禪師と同く往て補佐す、明曆二年杉山の神應寺に住す、萬治二年興聖寺に遷る、信濃大守永井尙政弟子の禮を執て戒法を受んと乞ふ、黃檗山隱元禪師の旺化を聞き、來謁して隨喜す、師亦黃檗山を訪ふ、師興聖寺に居る十八年、晚に東林院を創して佚老す、天和二年十一月朔日寂す、壽七十七(日本洞上聯燈錄)

シヨーウン 松雲　ゲンキヨー元慶を見よ、

シヨーウン 松雲　シユーユー宗融を見よ、

シヨーエー 松裔　シユーセン宗佺を見よ、

シヨーガク 松岳　シユーセン宗繕を見よ、

シヨーガク 松嶽　シヨーチヨー紹長を見よ、

シヨーガン 松岸　シエン旨淵を見よ、

シヨーガン 松岩　ニチチヨー日潮を見よ、

シヨークン 松薰(二二七五―) 〔曹洞宗〕武藏天曉寺の禪僧なり、松薰字は天南、遠江の人、俗姓不詳なり、九歲可睡寺鳳山膳に從ひて童子となり、受具の後大中寺韓嶺に參し、執侍數年、門菴宗關に謁して印可を受け、江戶天曉寺に住す、家康曾て鳳山の室に詣て、禪を問ひて、待遇最も篤し、元和元年旨を受けて大中寺に住し、僧綱を領す、某年寂す壽缺く(日本洞上聯燈錄)

シヨークワシ 松花子　ホーリン法霖を見よ、

見よ、

シヨーグワツローニン　松月老人　シユージユー宗什を

シヨーコー　松江　シヨートー紹等を見よ、

シヨーサツ　松颯　二一九三〔淨土宗〕伊勢樹敬寺の開山なり、松颯は勢蓮社敬譽と號す、其郷貫詳かならず、勢譽上人に投して剃髪受業し、享祿元年伊勢飯高郡松坂に樹敬寺を開く、天文二年四月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シヨージユ　松壽　ニヨリユー如隆を見よ、

シヨードー　松堂　コーシヨー高盛を見よ、

シヨーフー　松風　二二二一―二三〇一〔淨土宗〕武藏靈岩寺の開山なり、　松風字は靈岩、號は檀蓮社雄譽と云ふ、上總の人、里見某の子なり、（一說駿河の人）十三歲にして青龍寺秀岩に投して度を受け、次に道譽の門に入り、安譽虎角に師事し、其法を嗣く、慶長十年生實の大岩寺に住し、次に大和奈良に遊び、靈岩寺を開き住し、幾もなく再び生實に仮住し、一旦幕府の命に忤ひ、安房大綱に流さる、一說に幕府師を推して知恩院に住せしめむとするも、師應せさりしに由ると云ふ、師安房に在り、大岩院を開き上總に遊ひて佐貫の善昌寺湊の宗濟寺を開く、後、伊勢に遊び、山田の靈岩寺を開く、安房に歸り、大勝院別願院を開く、江戶に歸りて深川に新地を築き一寺を開く、靈岩島靈岩寺と云ふ、後、智恩院第三十二世となる、江戶の英信寺伯耆の大雲寺皆師の開くところなり、寛永十八年九月一日寂す、壽八十一、（淨土總系譜、鎭流祖傳）

シヨーホンボー　松本房　ニチネン日念を見よ、

シヨーヨ　松譽　二三四〇〔淨土宗〕美作念佛寺の開山なり、松譽は貞蓮社と號し、出雲の人なり、法を潮龍に嗣ぎ、美作新庄に念佛寺を剏す、延寶八年十月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

シヨーヨ　松譽　リヨーシン了心を見よ、

シヨーヨ　松譽　センサツ詮察を見よ、

シヨーリンイン　松林院　ニチギヨー日行を見よ、

シヨーレー　松嶺　ドーシユー道秀を見よ、

シヨーレー　松嶺　ゲンシユーニ玄秀尼を見よ、

シヨーレー　松嶺　チギ智義を見よ、

シヨーア　照阿　一九二四〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、　照阿字は禪一、出家して戒壇院圓照に師事し、竹林寺に住す、文永年中宋に入り蒙古の亂に逢ひて山谷に逃れ隱れ、後本邦人の元に入るものに逢ひて大に喜びたりと云ふ、其終るところを知らず、（本朝高僧傳）

シヨーアン　照庵　チカン智鑑を見よ、

シヨーヱ　照慧　二〇三一〔戒律宗〕大和戒壇院の學僧なり、照慧字は淨心、照玄に從ひて具足戒を受け、諸寺に歷遊して三藏を探る、文和年中諸見に遠涉して耆宿の門に請益して歸へる、盛覺上人師を延きて久米多寺に住せしむ、師亦衆請に隨ひて戒壇院を主とる、戒密の二壇を開くへと雖華嚴を以て宗となす、晚に八幡の善法寺に住し、應安四年十一月二日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

シヨーオー　照應　ヱシヨー慧照を見よ、

シヨーエン　照遠　二〇二一〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、　照遠其俗姓生國詳かならず、元亨二年招提寺に於て

通受の法によりて具足戒を稟く、嘉暦年中覺世覺慧二律師の講堂に梵網經を聽き、深く律疏を研究し、大悲菩薩興正菩薩の後律學稍衰へたるを以て、師常にこれを回復の志あり、遂に三大律部の鈔六十五卷を著作す、即ち資行警意顯義と名く、暦應二年八月に筆をとり、貞和五年八月稿を脫す、又梵網經古迹述鈔五卷を著作す、康安年中招提寺に講席を開く、其終るところを知らず、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

シヨークー　照空　ニヨニチ如日を見よ、

シヨークーボー　照空房　ジクワン慈觀を見よ、

シヨーゲン　照源(……)〔天台宗〕京都廬山寺の學僧なり、照源字は明導、源有房の子なり、少にして比叡山に登りて諸師の席に陪し、顯密に該通す、大原の來迎院に住して台密乘を講し、圓頓戒を授け淨土業を勸む、後檀請によりて京都金剛院に移り、額を廬山と改む、屢々勅を蒙りて宮中に天台を說き、法衣を賜ふ、師嘗て猪熊亭に三大部を講す、學者筆記して一百卷をなし、猪熊鈔と名け、或は廬談と云ふ(本朝高僧傳)

シヨーゲン　照源(……)〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、照源字は道明、京都の人、金山院に入りて落髮受戒し、戒壇院に往て戒を受け、眞言院に留まつて三論を習究す、又智舜の道譽を聞き、光明山に登りて左右に侍し、益々空宗の玄旨を探る、其終るところを知らず、(本朝高僧傳)

シヨーゲン　照玄(二三二五—二三九九)〔曹洞宗〕信濃玉泉院の開山なり、照玄字は智燈、山城宇治の人、俗姓下司氏なり、出家して卍山道白の法を嗣く、元文四年十一月廿八日寂す、壽七十五、(鷹峯系譜)

シヨーゲン　照玄(一九六一—二〇一八)〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、照玄字は覺行、戒壇院に入り、本無に就きて得度し、俊才に依りて納具し、律部密敎を討究し常に華嚴を業とす、康永四年三月敕を奉して關東を巡化して東大寺の齋堂を建つ、相模の極樂寺、大和の戒壇院、京都の大通寺に歷住して講席を張り、延文三年六月五日大通寺に寂す、壽五十八、(本朝高僧傳)

シヨーシン　照眞　エンセー圓晴を見よ、

シヨージユー　照什(二三二三—二三九六)〔眞言宗〕京都大通寺の僧なり、照什字は南谷、別號は幻華といひ、佐々木氏なり、石見吉永の人、幼名勝之允といふ、父は源太左衞門忠綱と云ひ、初め會津侯に仕ふ、致仕して後京都に寓す、寬文九年長男豐長の爲に官途を求めむとて江戶に下り、赤坂田町の旅舍に滯留せしが、三月二十一日の夜、早川八之亟といへる者に殺害せらる、同十二年豐長十四歲にして攝津芥川に於て八之亟を殺し、父の讐を復す、師初め兄豐長に從ひ、諸國を巡歷して父の讐を搜し、共に復仇せんとせしも、幼穉なるを以て兄許さず、是に於て出家し、父の冥福を禱る、時に九歲なり、十一歲の時六孫王經基の古跡なる遍照心院に投し、義洞長老に從ひて得度す、眞言宗に歸し、地藏院流を究む、智積院泊如、嵯峨の月潭、及ひ熊谷某に就きて詩文を學ひ、尋いて禪林寺快玄和尙に謁し楞嚴義疏を聽き、安樂院靈空和尙に謁して法華文句を聽き、講錄八十卷を謄寫す、三十歲大通寺大聞院に歸住し、大に講席を張る、梵網古迹記筌を講し聽衆常に千人

に滿つ、師源廟（六孫王經基）の興復を計り、幕府に訴へ、元祿十二年十月工事成り壯觀を呈す、源廟のことにより江戸に至ること前後二十九回なり、天皇嘉賞して紫衣を賜ふ、將軍六孫王權現の額を下す、水戸光圀手書を送りて盛事を祝す、晩年東林院に隱れ白業を事とす、元文元年十月三日疾に罹りて寂す、壽七十四、偈あり、曰く陰來則陰、晴來則晴、君家歸去、天朗月滿、と、師また書を善くし江戸に至る毎に侯伯等の揮毫を需むるもの夥しかりしといふ、著作楷書千字文五卷、克己銘、六景法帖、大通寺開山師行業記、幻華消息、各一卷あり、世に行はる、（名家略傳、續日本高僧傳）

シヨーチン 照珍 二二一五 二二八八 〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、照珍字は寶圓號は玉英と云ふ、俗姓は津田氏河内の人なり、壽德院の照瑜を禮して滿分戒を受け、業を泉奘に受け、兼ねて顯密に通ず、南北の律苑に止まりて講筵を開く、德川家康嘗て師を召して宗要を問ふ、文祿二年敕命により泉涌寺に住し、慶長十年奈良の招提寺、京都の法金剛院に住し、詔により戒師となる、寛永五年十二月六日寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

シヨーヒヨードー 照冰堂 ドーチユー道忠を見よ、

シヨーマン 照滿 ソンクー尊空を見よ、

シヨーモク 照默 サイギン西吟を見よ、

シヨーヨ 照輿 クワイウン快運を見よ、

シヨーヨー 照陽 （……）（……） 京都の畫僧なり、照陽は朱玉と號す、畫法を雪舟に學び、山水人物を能くす、（扶桑畫人傳、鑒定便覽）

シヨークン 詔勳 （……） 〔曹洞宗〕某寺の禪僧なり、詔勳字は大方其鄕國を知らず、我山紹碩を師とし印可を受く、未だ出世せずして終る、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨークン 詔薰 （……） 〔曹洞宗〕能登靈松寺の禪僧なり、詔薰字は龍門、大養淳亨の法を嗣ぎ、總持寺に住し、龍護靈松の二寺に歷遷す、寂年、及び壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーコー 詔興 （……） 〔曹洞宗〕能登慶德寺の開山なり、詔興字は雲澤、能登の人、世々儒を業とせしが、瑞巖禪師に投じて出家し、後ち諸方を參歷して歸り、遂に印可を受け、總持寺に出世し、能登阿岸鄕に退休して慶德寺を創立し、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーシユン 詔春 （二〇八四） 〔曹洞宗〕能登靈泉寺の開山なり、詔春字は日東、加賀の人、幼にして能登の宗圓寺に投じて出家し、詔麟禪師に師事して寵せられ、詔麟の洞谷山に移り、再び諸嶽山に住するに及んで、師も亦從ひ遂に印可を受け、總持寺に出世し、諸橋の洞光寺に退居せしが、能登七尾の檀越靈泉寺を築き師を迎へて開山となす、某年寂す、偈あり、七顚八倒、五十二年、功位共轉、歸來分明、法嗣詔遵麟貞の二人を出す、（日本洞上聯燈錄）

シヨーシユン 詔舜 二四八五 二五四六 〔天台宗〕武藏淺草寺の僧なり、詔舜字は薰契、號は如風と云ふ、姓は唯我氏木村氏の子出雲島根郡の人なり、文政八年四月一日に生れ、天保八年十三歲にして郡の圓流寺に詣り、泰道阿闍梨に從つて剃髮し尋で鰐淵山に登り、天台の學を修め、弘化元年嚴王院を主どる、三年比叡山に登り、三密瑜伽の灌頂を受けて故山に

歸り、止惡行善の十條を制して山規を改め、四年再び比叡山に登り、白毫院覺洞に隨つて顯密の學を修め、遮那止觀の兩業を勵精す、三七日を期して法華三昧を修し、法華經を血書す、嘉永二年十月權大僧都に任ぜらる、三年覺洞僧正宗淵阿闍梨の二師を鰐淵に屈請し、顯密梵唄の法義を習ひ、兼ねて闔山の規則數條を制定す、此歲因幡伯耆の二州を遊化し、安政元年院を辭して東溪雙嚴院に住し、三年東塔西溪の護心院に轉す、五年十月仁孝天皇十三齋忌に當り、孝明天皇親しく法華懺法を淸涼殿に行はせ給ふ、此時師其衆に加はり、大法印の敕賞を賜はる、元治元年西塔の行光坊に移り、大僧都に任ず、蓋し行光坊は穴太流行傳の灌室にして、延曆寺子院中の巨刹なり、慶應元年十月法華敕會の會行事を勤め、二年宗務を帶びて關東に出で、留まること一年、公私眞俗の事を幹し、屢書を幕府に致す、明治元年、朝廷神祇官を置きて神佛混淆を廢す、國中到る處廢佛毀釋の論興り、神儒二道の徒頻りに佛徒を攻撃し、其極動もすれば暴行を加ふるに至る、此時に方り師東塔の執行代に選ばれて京都に出で、考恭信如の二師と相提携して政府に建言し、死を以て其不可を論じ、廟議之れが爲めに動き、廢佛論漸く其勢を減ず、此歲再び關東に出で、宗務取締の職に任じ、二年八月淺草寺別當となり、尋で管領執事に任ず、師嘗つて閱藏の志あり。聖觀世音一千軀を刻して願を滿たさんことを祈る、四年夏各宗同盟會興り其總黌を谷中天王寺に設け、師之れが主となる、五年朝廷敎部省を置き、神佛合併大敎院を開設するや、師日夜敎義に勵精し、功を以て大講義に補せらる、同年十月各宗僧侶姓氏を用ゆることを得るに當り、師は平素天上天下唯我獨愚と自稱せしを以て唯我を以て姓となす、六年一月大敎院議事職となり、二月四日淺草寺住職に任じ、三月三日權少敎正に補す、此歲惡徒の讒に罹り無辜の罪に座して大政官敎職を免せらる、幾何ならずして白日の身となり、九月中講義に補し、八年二月中敎院會計課長となり、尋で副院長心得に任ず、同年三月說敎取調掛を兼ね、大講義に補し、十月更に權少敎正に進む、九年春少敎正に補し、九州を巡化し、十二月權中敎正に補し、十二年一月中敎正に轉ず、同年八月大坂四天王寺實戒の下に詣で密乘の秘蘊圓頓大戒の奧義を受けて歸る、十四年七月權大敎正に補せらる、十五年四月東叡山天台宗中學林校正となり、十六年三月之を辭す、十七年六月日光山に登り安居結制し、衆徒の爲に經論を講ず、同十月東京に歸り、幾何ならずして肺患に罹る、十八年三月鳥尾小彌太等設立にかゝる明道協會長に擧げらる、七月大學林支校を置くに方りて師其校長に任ぜらる、官、各宗僧侶の職位を廢し、各管長に一任するに方り、師は新たに權大僧正に補せらる、十九年大僧正に進む、其歲三月三十日近江坂本雙嚴院に寂す、壽六十二、臘五十、（事歷）

シヨーソー　韶奏　一九八五 二〇六五　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、韶奏字を九峰と云ふ、出雲の人なり、東福寺の靈鋒慧和尙來りて州の華藏寺に住するに當り、師之に投して遂に記莂を得、豐後の萬壽寺に出世す、後印を擲きて華藏寺の東菴に隱居す、藤原太相其道譽を聞き之を招き、東福寺に住せしむ、次て南禪寺に登る、定光院を龍山の傍に剏して退休し、應永

十二年十一月十二日寂す、壽八十一、臘六十六なり、（本朝高僧傳）

シヨーチン　詔珍（……）〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、詔珍字は大琳肥後の人にして宗園寺瑞巖禪師の法嗣なり、能登總持寺に出世して某年寂す、壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

シヨーホー　詔鳳　キヨーオー敬雄を見よ、

シヨーヨー　詔陽　イオン以遠を見よ、

シヨーリン　詔鱗（二〇八四）〔曹洞宗〕能登宗園寺の開山なり、詔鱗字は瑞巖、能登の神保氏の子なり、幼にして總持寺峨山和尚に師事し、後、瑩山に依ること年あり、又大乘寺明峯素哲淨住寺無涯知洪に參して開悟し、祥園寺に赴き、無端祖環に見え其侍司となる、後諸嶽山に出世し、祥園寺に主となる、能登の大守畠山滿家宗園寺を創し、師其開山となり、又遷りて永光寺を主どる、應永卅一年再び諸嶽山に主となる、寂年缺く、宗園寺に塔す、法嗣靑山性秀、直林詔天、日東詔春、大琳詔珍、雪澤詔興の五人あり皆一方に法化を敷く（日本洞上聯燈錄）

シヨーイン　紹允（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の僧なり、紹允字は信叔と云ふ、獨秀乾才に參して法を嗣ぎ、妙心寺に住し、後美濃瑞龍寺に主となる、寂年、及壽缺く（延寶傳燈錄）

シヨーイン　紹印　シユーイン宗印を見よ、

シヨーエー　紹榮（……）〔臨濟宗〕山城安國寺の僧なり、紹榮字は枯木出家して夢窓石に參すること久しくして密契を得、藏主寮より、第一座となる、後、檀越の請を受けて安藝長保寺に住し、山城の安國寺に移る、寂年、及び壽缺く（本朝高僧傳）

シヨーオク　紹屋　シヨーリユー呂隆を見よ、

シヨーキ　紹喜　二二四二……〔臨濟宗〕甲斐慧林寺の禪僧なり、紹喜字は快川、美濃の人、俗姓は土岐氏なり、仁岫壽禪師に法を嗣ぎ、妙心寺に出世し、美濃の崇福寺に住す、大守藤原義龍の不敬を怒り、衣を拂ひて甲斐に往く、大守武田晴信師の名を聞き、迎へ請して慧林寺に住せしめ、禮遇甚た篤し、正親町天皇其德望を聞き、特に大通智勝國師の號を賜ふ、天正十年春信長父子勝頼と隙あり、攻めて城壘を拔き、武田の全家壞滅す、府内の禪衲慧林寺に會し、皆議して共に武田氏の爲めに死せんとす、近江の大守佐々木義弼敗軍して甲府にあり、慧林寺に寄寓せしが、師竊に北國に逃れしむ、信長大に怒りて兵を遣し、四面より火を放つ、師寶泉寺の雪峰存、東光寺の藍田靑、長禪寺の高山壽等、及び學徒百餘人と共に烟焔の中に死す、實に天正十年四月三日なり（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨーキン　紹瑾　一九二八／一九八五〔曹洞宗〕能登總持寺の開山なり、紹瑾字は瑩山と云ふ、越前多禰の人、俗姓藤原氏なり、文永五年十月八日を以て生る、（一傳甫めて八歳にして徹通義价に就き沙彌となる）甫めて十三歳にして永平寺に至り、孤雲懷弉の下に投し、祝髮納戒す、同年八月懷弉寂し、師遺言を奉して徹通義价に師事す、十八歳にして出遊し、寶慶寺寂圓を訊ひ、次に京師に上り、萬壽寺寶覺、東福寺慧曉を歷訊し、次に紀伊に至り、由良の興國寺覺心を訊ひ、臨濟の宗

風を窺ふ、一年にして寶慶寺に皈り、寂圓の下に留る、正應二年大乘寺に至り、徹通義价に省覲す、曾て法華經を讀みて父母所生眼悉見三千界と云ふ文句に至り省あり、即ち所解を義价に呈す、義价曰ふ、此事を究めんと欲せは、些子の覺觸に則を取るを得ざれ、汝去りて工夫を做せ、と、師これより益勵精し、攝心工夫し、七年一日の如し、義价の上堂して平常心是道の話を擧示するを聞いて、豁然として徹證す、乃曰ふ、我會せり、我會せり、と、義价曰ふ、子作麼か會す、師曰ふ、黑漆崑崙夜裏に走る、と、義价曰く、未在更に道へ、と、師曰ふ、茶に逢は茶を喫し、飯に逢は飯を喫す、と、義价笑うて曰ふ子向後當に洞上の宗風を興すべしと、尋て寶鏡三昧三滲漏等の玄旨、一々究盡し餘蘊あるなし、永仁三年正月十四日義价より道元禪師傳ふる所の法衣を附屬せらる、翌年阿波の郡司某城滿寺を建立して師を請す、師請に應し開山となる、正安元年大乘寺に歸り、翌二年歷代佛祖

圓明國師

の相承機緣を提唱し、これを編錄して傳光錄と題す、乾元元年義价に繼いて大乘寺に住す、一住十年、大に寺門を張る、應長元年明峯素哲に法衣を附屬し、大乘寺を退いて淨住寺の請に應す、正和二年能登の滋野信直及ひ其夫人平氏、師を請し、酒井の莊を寄附す、師其地の幽勝を愛して一字を開き、洞谷山永光寺と號す、翌年羽咋の郡司光孝寺を建立して師を請す、是より淨住、永光、光孝の三寺を兼管し、往來敎化す、後醍醐天皇師の高風を聞きたまひ、特に十種の疑問を下し、師の答話を徵したまふ、師一々奏對して感賞を蒙りたりと云ふも詳ならす、能登諸嶽山總持寺の定賢律師、師に歸依し、寺を擧けて師に附す、寺は戒律宗なりしも、師入りて開山となり、改めて曹洞宗となる、後醍醐天皇勅して寺額を賜ひ、陞せて官寺に列し、且つ賜紫出世の道場となしたまひたりと云ふ、應長三年光孝寺を弟子壺菴至簡に附し、淨住寺を無涯智洪に附し、正中元年總持寺を峨山紹碩に附し、自ら永光寺に住す、二年八月永光寺を明峯素哲に附し、同月十五日沐浴淨髮し、夜半に大衆を集め、示して曰ふ、念起是れ病、續かさる是れ藥、一切善惡すへて思量すること莫れ、纔に思量に涉れは白雲萬里、と、偈を書して曰ふ、自耕自種閒田地、幾度賣來買去新、無限靈苗繁茂處、法堂上見揷鍬人、と、筆を擲て寂す、壽五十八、坐夏四十六、遺骨を分ちて大乘、永光、淨住、總持の四寺に葬り、塔を立て院を傳燈院と云ふ、法嗣七人あり、素哲、智洪、紹碩、至簡、源照尼、祖忍尼、瑩球なり、就中素哲紹碩の二人門風大に盛なり、著作傳光錄二卷、坐禪用心記、三根坐禪說、淸規、信心銘拈提、各一卷あり、正平

七年後村上天皇勅して佛慈禪師の謚號を賜ひ、安永元年後桃園天皇勅して弘德圓明國師の謚號を加賜したまふ、後世曹洞宗の中興祖と云ひ、太祖と云ふ、（行錄、洞上諸祖傳、日本洞上聯燈錄、本朝高僧傳）

ショーキュー　紹及　二三六八 二三五二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百代なり、紹及字は見岩、號は命々子、京都の人なり、天祐の法を嗣き、萬治三年十二月九日出世し、萬治四年正月廿九日開堂す、寬文六年九月東海寺輪番職となる、延寶年中勅して慈光圓照禪師の號を賜ふ、大和宇多擁護山千眼寺、及ひ、法林寺法性寺慈恩寺等を創す、元祿五年七月廿八日寂す、壽八十五、頌に曰く、八十五年、喚レ地爲レ天、要レ知ニ端的一脫休如然、と、（紫巖譜略、大德寺世譜）

ショークワ　紹果　二二四六 二三二六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百六十九代なり、紹果字は天祐、號は夢作子、又は實夢叟といふ、近江の人、俗姓菅原氏美濃部と稱す、萬江の法を嗣き、寬永二年六月十八日出世す、後水尾天皇勅して佛海祖燈禪師の號を賜ふ、師大和宇多に長泉山德源寺を剏し、寬文六年九月廿一日寂す、頌に曰く、兩曜相積、八十一年、即今底也、淸風拂天、と、塔を梅岩菴といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

ショークワ　紹化（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧あり、紹化字は南溟と云ふ、玉浦に參して得法の後江南榮と共に行脚し、賊の爲めに捉はれ、奴隸となる、後、賊酋師の德に化し、尾張熱田に龍珠寺を剏して師を請し開山とす、後、妙心寺に出世し、九十餘歲にして寂す、（延寶傳燈錄）

ショーシュ　紹珠　二四二六 二四九五　〔臨濟宗〕美濃大仙寺の禪僧なり、紹珠字は雪關、美濃の人、早年美濃慈恩寺隱山の室に投じ、太元棠林古鑑と伴たり、併稱して隱山輪下の四哲と云ふ、隱山禪師の法を嗣き、天澤菴に居り、法席を張る、天保六年二月三日寂す壽七十、遺偈あり、曰ふ、百前古路、一條曆博、末後商量、有レ棺無レ槨、（近世禪林僧寶傳）

ショーシュ　紹珠　二四九五 ……　〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、紹珠字は春叢、豐後佐賀の人、十一歲地藏寺大百丈に就きて出家す、十八歲出遊し、臼杵多福寺に掛搭す、偶禪關策進を讀みて發憤し、豐前開禪寺に到り、蘭山隆に謁し、次に天猊大休霛源遂翁に歷謁し、遂翁盧の下に大事を了す、慈光寺圓福寺に住し文政六年妙心寺に昇り、法化盛なり天保六年十月廿五日寂す、壽八十餘、初め天皇紹珠に皈依し、勅して紫衣を賜ひ、且つ大鑑廣照禪師の號を賜ふ、（近世禪林僧寶傳）

ショーショー　紹淸（……）〔臨濟宗〕山城長福寺の禪僧なり、紹淸字は月菴、俗姓不詳、月林皎禪師に師事し、長福寺に住し、後藏龍菴に退休す、示寂の年時、缺く（本朝高僧傳）

ショーシュー　紹肅　二二八八 二三七三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百廿六代なり、紹肅字は端堂、號は克々子、京都の人、賢峰の法を嗣く延寶七年十月廿二日出世す、元祿元年十二月十四日開堂し、正受院に住す、後慈峰菴に居り、正德三年十月廿六日寂す、壽八十六、勅謚太寂法明禪師といふ、（紫巖譜略、大德寺世譜）

ショーセキ　紹碩　一九三五 二〇二五　〔曹洞宗〕能登總持寺第二代なり、紹碩字は峨山、俗姓は源氏、能登羽喰郡瓜田の人なり、

甫めて十六歳の時、比叡山に登りて剃髪受戒し、摩訶止觀を學ふ、後加賀大乘寺の瑩山紹瑾に謁し、問うて曰く、天台の祖は脫體の機情妄想を得す、又法性を得すといへり、性に法相を存せさるは是れ吾か宗の密旨なり、豈に敎外の旨と異ならんや、と、瑩山笑うて曰く、別、別、師問ふ別處は作麼生、瑩山便ち寢室に入る、師沈思す、因て衣を更へて掛搭す、一日問うて曰く、是非不到の處請ふ師一句を道へ、と、瑩山曰く、道はす、と、師曰く、甚麼の爲にか道はさるぞ、瑩山曰く、蹉過し了せり、師硏究措くことなし、一日瑩山師に曰く、是非不到の處何そ道ひ將ち來らさると、師口を開かんと擬すれは、瑩山便ち打つ、師省あり、一夜月を賞す、瑩山曰く、汝月に兩個あるを知るや、師曰く知らす瑩山曰く、月に兩個あるを知らすば以て洞上の種草となすこと能はすと、師是より激勵甚切にして三年を越ゆ、一夜月に對して趺坐す、夜半に至り、心身湛寂にして物我共に忘す、瑩山師の耳邊に於て彈指一聲す、師豁然として大悟し、遂に印可を蒙る、依て諸方に徧參し、智識の門を叩き、大乘寺に歸る、瑩山の洞谷山に移るに及ひ、師之に從ふ、元亨元年の秋入室して所傳の衣法を附せらる、正中元年總持寺の席を繼く、曆應三年能登の洞谷山永光寺を董す、貞治二年再ひ席に臨み、久しからすして退院し、總持寺に歸る、貞治四年十月初旬疾を示し、二十日の夜沐浴し、諸徒を遺誡し、頌を書して曰く、合ニ成皮肉一、九十一年、夜來依レ舊、橫ニ身黃泉一、と、筆を投して寂す、遺骨を本山に塔す、法嗣に大源、通幻、無端、大徹、實峰等あり、此五人殊に著はれ峩山門下の五哲と呼はる、(日本洞上聯燈錄)

峩山禪師

シヨーソ　紹蘇　二二七二　二三二七　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第二百三代なり、紹蘇字は昭海號は睡雲、京都の人、天祐の法を嗣く、寬文二年十月二十五日出世す、寬文六年九月十三日開堂す、寬文七年九月十九日寂す、壽五十六、梅岩菴に塔す、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シヨーソー　紹琮　二二〇六　二二七三　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百卅代なり、紹琮字は玉甫、號は半泥子、京都の人なり、古溪の法を嗣く、師は三淵伊賀守晴員の子にして細川幽齋の弟なり、天正十四年十月十三日大德寺に出世す、正親町天皇勅して大悲廣通禪師の號を賜ふ、天正十六年古溪事ありて總見院を退けられ、筑紫博多に徙さる、豐臣秀吉師に命して其席を繼がしめ第二世とす、慶長中本山に高桐院を創す、慶長十八年六月十八日寂す、壽六十八、頌に曰く、末後牢關絕ニ點埃一、と、高桐院に塔す、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シヨータ　紹佗　二二六五／二三四八　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百九十一代なり、紹佗字は方充といひ、野雲子興午等の號あり、山城の人なり、璧鞏宗趙の法を嗣く、（宗趙は州甫の法嗣とす）承應四年二月九日出世す、前堂法嗣出世の始なり、萬治元年十一月武藏廣德寺の諍論非理の科に落ち、將軍家綱命を下して江戸を追はる、京都久米川永春庵にあり、元祿元年九月廿三日寂す、壽八十四、永春庵に塔す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シヨータク　紹琢　（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、紹琢字は大圭、景聰興勗禪師に參して法を嗣き、妙心寺に住す、佛成道の偈に曰く、元坐六年麤弊衣、明星穿眼不投機、臘天莫怪梅花笑、三脚驢兒蹈雪歸、と、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シヨーチヨー　紹長　二二一四／二二八六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺第百卅七代なり、紹長諱は松嶽、和泉堺の人、俗姓牛井氏なり、玉仲の法を嗣く、文祿二年九月十三日出世す、時に四十歲なり、元和三年九月十三日擯せらる、寛永三年三月朔日三非の麓にて寂す、壽七十三、曾て金龍院を創す、（紫巖譜略、大德寺世譜）

シヨーテキ　紹滴　二一九九／二二七二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、紹滴字は一凍、和泉の人、俗姓は源氏、高屋の族なり、幼にして邑の龍門寺に投じて雪岫祥首座に依る、十五歲にして剃髮得度し、和泉南宗寺大林宗套に從侍す、後笑嶺席を繼ぐ、師また之に參すること久しくして遂に印可を付せらる、天正十一年春京都聚光寺に主となり、冬德禪寺に移る、後同門の請に應して和泉南宗寺を司どる、文祿三年夏敕を奉じて大德寺に住し、晩年職を辭して南宗寺に退休す、朝廷師の道譽を聞き、特に明堂古鏡禪師の號を賜ふ、慶長十七年四月二十三日寂す、壽七十四、遺偈あり、曰く、七十四年、熱喝嗔拳、末後一句、動搖大千、（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シヨートー　紹董　二一七三／二二三五　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、紹董字は將宗山城の人なり、徹岫宗九に參尋すること多年遂に契悟あり、永祿七年春大德寺に住す。天正三年七月十一日寂す、壽六十三、（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シヨートー　紹等　二一五六／……　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、紹等字は沒倫、號は墨齋、又月婿、止濟、拾墮、禿樵、墨隱漁白樵、青松江等の號あり、大德寺一休和尚の高弟なり、一休城南薪里に酬恩庵を開き師命せぜられて第一世となる、畫を嗜み、蛇足に學びて、師の一休に伯仲す、其畫きし山水樹草は密畫にして多くは一休其上に賛す、明應五年五月十六日寂す、壽缺く、（扶桑畫人傳、鑒定便覽、皇朝名畫拾彙）

シヨーニン　紹仁　（一九〇六）　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、紹仁字は義翁　宋西蜀涪江の人なり、寛元四年蘭溪道隆に從ひて來る、建仁寺に在り、後、建長寺に移り、大に大覺禪師の道を唱ふ、晩年東山正傳菴に屏居し、某年六月二日寂す、勅諡普覺禪師と云ふ、（本朝高僧傳）

シヨーバイ　紹蓓　二〇八〇／二一五九　〔臨濟宗〕美濃梅龍寺の開山なり、紹蓓字は春江、關東の人なり、初め京師の諸山を徧歷し、南都の講肆を遊歷して、大小乘に精し、後、景川和尚の禪化を慕うて掛錫參究久しふして遂に宗機に達す、景川乃

ち師に印證を付し、命して大德寺第一座となす、辭して美濃武藝郡に往き、敎寺に寓して大藏經を閱す、檀信等謀りて梅龍寺を刱し、師請せられて開山となる、後瑞龍寺悟溪和尙師の臘德共に高きを見て、屢々大德寺に出世せんことを勸む、師遂にこれを諾し、未だ開堂せさるに明應八年三月二十六日梅龍寺に寂す、壽八十、(延寶傳燈傳)

シヨーフ　紹怤　二一三五／二一九六　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、紹怤字は小溪、俗姓は菅原氏、美濃の人なり、七歲にして南豐の梅心和尙に從つて童役を執り、稍長じて剃髮受戒し、錫を東山に掛くること久し、大德寺東溪宗牧に參し、服勤十年に及ぶ、一日世尊拈華の因緣を看て豁然省悟す、後法兄悅溪の法を嗣ぎ、享祿年中詔を奉して大德寺に住し、盛んに法幢を樹つ、朝廷特に佛智大通禪師の號を賜ふ、晩年興臨院を刱して退居し、天文九年七月二十八日寂す、壽六十二遺偈あり、曰く一挨一撥、魔佛失心、行脚好事、生鐵鑄金(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シヨボク　紹璞　二四六一／二五三三　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、紹璞字は雪潭、俗姓吉田氏、紀伊國牟婁郡の人、十歲出家して郡大泰寺桐嶽により、後、出遊して播磨慈音寺棠林に師事し、參究功あり、印記を承く、弘化四年伊深の正眼寺に住し、關山下の宗風を擧揚し、慶應三年九月、勅あり、眞如明覺禪師の號を賜ふ、明治六年九月十八日寂す、壽七十三、

シヨーミ　紹彌　(二一五二〇)　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、紹彌字は天釋、特芳に參侍して印可を受く、明應の初め勅命を奉じて大德寺に主となる、寂年及壽缺く、嗣法甫英暉一人あり、(紫巖譜略、延寶傳燈錄)

シヨーヤク　紹益　二二七七／二三五二　〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第二百十二代なり、紹益字は堅峰號は三江子京都の人、笑堂の法を嗣く、寬文八年二月十日出世して正受院に住す、丹州に林泉寺を創立す、元祿五年十一月四日寂す、壽七十六、(紫巖譜略、大德寺世譜)

シヨーミヨー　紹明　一八九五／一九六八　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、紹明字は南浦、俗姓藤原氏駿河國安部縣の人、幼にして州の建穗寺淨辨法師に就きて學問し、十五歲剃髮受具し、鎌倉に往き建長寺蘭溪隆に謁し、正元の頃(同元年か)宋に渡り、諸刹を徧訊す禪師問ひて曰ふ、古帆未掛時如何、師曰ふ、蟭螟眼裏五須彌、禪師曰ふ、掛後如何、師曰ふ、黃河向北流、禪師曰ふ、未在更道、師曰ふ、某甲恁麼和尙又作麼生、禪師曰ふ、參堂去、文永二年(唐咸淳元年)の夏禪師の頂相を寫して贊を請ふ、禪師即ち書して曰ふ、紹既明白、語不失宗、手頭簸弄、金圈栗蓬、大唐國裏無人會、又却乘流過海東、と、同年八月愚禪師徑山に遷る師を携へて倶に行く、師益參究一宵定より起ちて大悟偈を呈して曰ふ、忽然心境共忘時、大地山河透脫機、法王法身全體現、時人相對不相知、と、文永四年(唐咸淳三年)の秋東歸の途に上る、愚禪師贈偈あり曰ふ、敲磕門庭細揣摩、路頭盡處再經過、明明說與虛堂叟、東海兒孫日轉多、建長寺蘭溪隆の下にあり、七年の冬、筑の興德寺に出世すと、嗣法書並に入寺の法語を錄し、曇侍者に付し、徑山虛堂愚禪師に呈す、禪師大に喜び、衆に謂ひて曰ふ、吾道東矣、と、九年太宰府の崇福寺に遷る、住持三十餘年、西國風靡す、嘉元

三年の秋詔を奉じ京師に上る、伏見太上皇宮中に禪要を問ひたまひ、勅して萬壽寺に住せしめたまふ、上堂の法語あり、太上皇大に感嘆したまひ東山の故趾に嘉元寺を興し、師を延きて第一祖となしたまふ、德治二年北條貞時の聘により東下し、正觀寺に留まる、尋て建長寺に住す、翌延慶元年太上皇詔を降し存問したまふ、建長入寺の夕小參に曰へるあり、今年臘月二十九日來無₂所來₁、明年臘月二十九日去無₂所去₁、と、大衆驚訝して其意を了するなし、延慶元年臘月廿九日に至り突然微疾を發し、二更に至り偈を書し、跏趺して寂す、壽七十四、夏六十、偈に曰ふ、訶ν風罵ν雨、佛祖不ν知、一機瞥轉、閃電猶遲、勅諡圓通大應國師と云ふ、重て勅して西京に龍翔寺を建立し、寺後に普光塔を構へて靈骨を收む、菴を祥雲と云ふ、建長崇福にある弟子靈骨を分ち收む、建長寺にあるを天源塔と云ひ、崇福寺にあるを瑞雲塔と云ふ、語錄三卷あり、徑山の及愚菴、天界の泐季潭、其首に題し、俊明極、曇西磵、其尾に跋す、抗州中天笠住持廷俊大師塔銘を作る、幷に世に刋行せり、（塔銘、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨーユ　紹由（……一九六一）〔曹洞宗〕肥後大慈寺の二代なり、紹由字は斯道、肥後の人幼にして如來寺寒巖に投して出家し、寒巖の肥後大慈寺に遷るに及ひて、師も亦從ひて行き、執務すること十年、遂に印可を付せらる、永仁六年其席を繼きて第二代となる、正安三年寂す、（日本洞上聯燈錄）

シヨーリン　紹鱗（……）〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、紹鱗字は一岫と云ふ、東溪宗牧に參して印可を受け、紫野大德寺に住す、寂年及壽缺く、（紫巖譜略、延寶傳燈錄）

シヨーリユー　紹立（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、紹立字は雪叟と云ふ、東菴宗暾に參して印記を禀け、三河太平寺に主となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

シヨーリヨー　紹良（一六八八）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、紹良は夙に叡山に登り、源信僧都に師事して山家の法を學び、其大旨に通し、又諸師に請益す、長元の初め支那に渡り、延慶寺尙賢法師に謁し、齎せし金字の法華經を呈す、留學すること三年、三觀十乘の奥旨に達し、歸朝して近江比叡山に住し、所業を敷演す、寂年月日及壽詳ならず、（本朝高僧傳）

シヨーカイ　昭海　シヨーソ紹蘇を見よ、

シヨーカク　昭覺（……二〇四四）〔臨濟宗〕豐前羅漢寺の禪僧なり、昭覺字は圓龜、壽福寺の寂菴昭に隨ひて禪觀を參究し、曆應の初出遊して豐前大嵓屋に到るに、大石窟あり、師自ら十六羅漢の像を圖して窟内に奉し、耆闍窟と名け、幻住菴を嵓下に結び、其近地に智剛寺を剏し、錫を移して安居す、延文四年春三光圓師の徒逆流建順來り師と相見て舊識の如く、洞窟に遊ふに及ひて追憶するものあるか如く、遂に窟に入りて晏坐すること一年、後、幻住菴を改めて安心と稱し、師と志を同しくして石像長け各三尺許なるを造り、中央に釋迦左右に文殊普賢當面に十大弟子、五百阿羅漢侍衛給侍まて七百餘軀を窟内に安置す、五年十月十五日一千僧を招き、聖福寺の月堂和尙開導師となり、慶讚供養す、翌日建順偈を書して意を示し、支那天台山に歸へる、師普く地方を化し、至德元年九月十一日寂す、壽缺く、弟子祖訣省卓あり、（本朝高僧傳）

シヨーギ　昭義　クワンドー觀道を見よ、

シヨーギボー　昭儀坊　リヨーイ了意を見よ、

シヨーゲン　昭元　一九七一……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、　昭元字は無爲、平安城の人なり、辨圓（聖一國師）の下に在り、法嗣となる、道隆（大覺禪師）祖元（佛光禪師）の下に遊ぶ、筑前の承天寺、京師の三聖寺、東福寺、鎌倉の圓覺寺に歷住す、應長元年春病に因りて圓覺寺に退休し、寶滿寺に寓す、五月十六日寂す、遺偈あり、倒却刹竿、縱橫自在、左右逢懽、威音王外、後勅謚大智海禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

シヨーゲン　昭玄　二二四五／二二八二〔眞宗〕山城興正寺の第五代なり、　昭玄字は准尊といひ、顯尊の第二子、母は冷泉中納言爲益の女なり、文祿三年三月准如宗主に就きて得度し、先考の例によりて宗主の名字一字を賜ふ、是れ遂に永式となる、元和二年七月十三日權僧正に任し、八年四月四日寂す、壽三十八、謚を不退院といふ、十三子あり、（本願寺通紀）

シヨージヨー　昭乘　二二四四／二二九九〔眞言宗〕山城瀧本坊の學僧なり、　昭乘號は惺々、晩年松花堂と云ふ、俗姓は中沼氏名は式部、大和奈良一乘院坊官中沼左京の弟なり、早歲にして出家し、山城男山瀧本房實乘に師事して眞言宗を受く、傍ら書を學び、弘法大師の筆法を學ふ、具足戒を受くる後、攝津天王寺に寓し、益筆法を究め、靈驗を感じ、六書八體六十餘體に通達す、且畫を好み、牧溪の遺風を愛慕して其妙に入る、初め近衞龍山に書を學び、狩野山樂に畫を習ひたるが、茲に至つて書畫共に自得の妙趣を發揮し、別に一家をなす、殊に書は寛正三筆の一と稱せらる、後、吉野山に幽棲し、道行を勵み、數靈驗を感ず、晩年男山に草菴を結び、松華堂と號す、寛永十六年七月背に癰疽を發し、九月十八日寂す、壽五十六（續日本高僧傳、扶桑畫人傳）

シヨーチヨー　昭超　二二六七／二三三〇〔眞宗〕山城興正寺の第六代なり、　昭超字は准秀といひ、童名は岩丸准尊の第四子なり、元和七年四月十九日得度し、年十五にして權僧正に任す、明曆元年七月廿九日越後今町に遷り、四年十月歸京す、万治三年十二月十二日寂す、壽五十四、寂靜院と謚す、六子あり、（本願寺通紀）

シヨーガ　省賀　……二二一〇〔曹洞宗〕丹波圓通寺の禪僧なり、省賀字は慶香、尾張の人、孝山祚養に依りて曹洞の宗旨を究め、法の源底を盡す、大永元年圓通寺を剏し、後永平寺を主とる、天文十一年關雲寺に遷る、七州大守大内義隆請して永福寺に住せしむ、寺は本大内弘幸の開基にして師其始祖となる、天文十九年四日五日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーキ　省己　ニチチユー日中を見よ、

シヨーゴ　省吾　一九七〇／二〇四一〔臨濟宗〕明牛頭山の禪僧なり、省吾字は無我、京師の人、早年出家し、顯密兼ね學ぶ、後、大德寺宗峰國師の下に事へ、器許せらる、嘉曆二年龍翔寺月堂禪師の下に輪藏を典り、月堂崇福寺に遷るにあたり、師亦隨侍し、遂に其法を嗣ぐ、貞和二年石城山妙樂寺成る、師一樓を建て呑碧樓と云ふ、四年春月堂の下を辭し元に渡り、承天寺仲銘新、淨慈寺用章俊、靈隱寺用貞良、天寧寺楚石琦、本覺寺了菴欲、育王山月江印に歷謁す、徑山に登りて虛堂敞

の塔を禮し、五臺の金剛窟に登り、親しく化佛を拜して、妙戒訣を受け、尋て靈隱寺に入り、見心復に謁し、呑碧樓記を乞ふ、是に於て一時の老宿皆讃贈あり、道俗の勸により金陵の牛頭山に開法す。元に留まること十餘年、延文二年牛頭山住持の職を辭して東皈す、諸老宿の送別の偈甚だ多し、石城山に赴きて月堂を拜觀す、月堂の寂後衆外越妙樂寺に請するも出でず、貞治二年再び遠遊す、元明の亂後牛頭山荒廢す、吾弟子痴禪柏に命じて修理の事を幹せしむ、大衆隨喜師を推して住持とす、明太祖道望を聞き、(明洪武六年)延見して法要を問ひ、紫金衣を賜ふ、永徳元年(明洪武十四年)心華堂に在り、平生の文字數十卷を焚き、法弟無法應を召し遺誡を附して示寂す、壽七十二、臘五十九なり、辭世の偈に曰く此岸彼岸、一蹈蹈翻、迦文求藥、拚呑乾坤(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ショーサン 省山 ミョーゴ妙悟を見よ、

ショーテツ 省鐵(……)〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、省鐵は夢窻國師に參して其法を嗣ぎ、天龍寺に居して藏主となる、(延寶傳燈錄)

ショーサイ 生西 (二二四四……)〔淨土宗〕山城極樂寺第三代なり、生西は秀譽と號し、其師貫詳かならず、能信に投じて剃髮受業し、山城川島村に冷聲院を建てゝ開山となり、又桂の極樂寺に住す、天正十二年九月二十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ショーサイ 生西(……)〔眞言宗〕山城醍醐山の隱士道者なり、生西字は乘蓮といひ、辨道者と稱す、尙書郎通憲信西の家嗣俗名は權右中辨貞範、笠置解脫上人貞慶の父なり、得一の法を嗣きて醍醐山に居る、(續傳燈廣錄)

ショーショー 生茗 シューコー宗亘を見よ、

ショーブツ 生佛(一八九三)〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、生佛一に性佛に作る、東國の武人なり、四條天皇の時出家して比叡山に登り、撿挍となる、後、俄に盲人となりたれば、山王權現に祈禱し、盲人の業には何事をなすへきか託宣を請ひ、平家物語を語るへしとの靈告を受け、爾來平家物語を語るを業とし、悲凄幽婉の聲音を以て聞く者を感動せしめたりと云ふ、後世の盲人其技を習ひ、琵琶法師と云へり、(徒然草、聲曲類纂)

ショーヨ 生譽 シキシ直至を見よ、

ショーヨ 生譽 リョーケン靈玄を見よ、

ショーア 尙阿 ゲンドー玄道を見よ、

ショーケードー 尙絅堂 モンオー文雄を見よ、

ショーゲン 尙玄(二二七五)〔日蓮宗〕能登妙成寺開山なり、尙玄阿闍梨何れの人なるを知らず、日像の能登加北郡大野村に巡化するに方つて、德に服し、弟子となり、化を助く、寂年詳かならす、元和元年同國瀧谷妙成寺第十五代正覺院日條大野村の日像の舊跡を再興するに方り、尙玄阿闍梨を開山となす、(本化別頭佛祖統記)

ショーゲン 尙彥 (二三二六／二三九六)〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十代なり、尙彥舊名は賢如、字は嚴覺、舊字は海說、俗姓は波根氏、其先は石見波根の城主なり、寛文六年の春武藏江戶に生れ、幼名を小十郎と云ふ、十四歲父に從ひて知足院尊

如に謁し、延寶八年正月中島金剛院に往き、慧賢の室に入りて剃髮受戒し、四度行を修す、天和元年尊如豐山を司どるに方り、師隨從して山に至る、尊如の寂する後、都鄙の間を往返して諸宗の章疏を學び、又大乘の請に應して法門を開演す、寶永四年春亮貞僧正の許狀を蒙り、護國寺にて快意大僧正より傳法院流を受け同五年春醍醐寺にて大僧正寛順より三寶院流を傳ふ、六年春再び豐山に登り、隆慶僧正の命に依り、梅心院を主どる、正德元年秋隆慶傳法大會を開くに際し、師初會の精義者となる、仝三年請に應じて下總北斗に講席を張る、享保元年幕命に依り、彌勒寺に住し、仝七年神齡山に歷遷し、仝九年正月豐山の主席を命ぜられ、三月幕府の執奏に依り權僧正に任ず、仝十一年春江戶に登り、僧正に昇進す、仝十五年春江戶に往き輿喜院に退隱し、元文元年五月一日寂す、壽七十一、臘五十七、奧の院に葬る、著作密嚴遺珠錄一卷あり、(豐山傳通記追加、新義眞言宗史)

シヨーソ　尙祚　一九〇五　〔眞言宗〕高野山心南院の學僧なり、尙祚俗姓生國詳かならす、密敎を習究して其奧旨に達し、高野山八傑の一人に推さる、心南院を開き、彌陀の像二を安置し、密誦の外兼ねて淨業を修す、寛元三年十一月二十五日寂す、壽缺く、著述數篇世に行はる、(本朝高僧傳)

シヨーア　稱阿　エトン慧頓を見よ、

シヨーア　稱阿　カンシユク巖宿を見よ、

シヨーイ　稱意　ユイクワン唯觀を見よ、

シヨーオー　稱往　二二六五　〔淨土宗〕相摸稱往院の開山なり稱往は幡蓮社白譽と云ふ下野宇都宮の人、俗姓飯田氏、出家して幡隨に師事し、相模小田原に於て道化し、遂に一宇を創して稱往院と稱す、後武藏湯島に住す、亦精舍を創して稱往院と云ふ、慶長十年五月二十五日伊勢國菩提山に於て寂す、春秋詳かならす、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

シヨーチイン　稱智院　ニチゼン日禪を見よ

シヨーニユー　稱入　シンクー眞空を見よ、

シヨー子ン　稱念　二一七三—二二一四　〔淨土宗〕山城一心院の開山なり、稱念字は吟應、三蓮社緣譽と稱す、永正十年に生れ、十五歲にして出家す、鎌倉大照山に至り、眞譽に隨て宗學を修め大谷寺に脇司す後避隱の地を選して一宇を卜す、一心院と云ふ、天文二十三年七月十九日寂す、壽四十二(鎭流祖傳)

シヨー子ン　稱念　ギンオー吟翁を見よ、

シヨーベン　稱辨　シンクー信空を見よ、

シヨーヨ　稱譽(……)〔淨土宗〕播磨廣度寺の開山なり、稱譽は其俗姓生國詳かならず、貴屋に師事して法を嗣き、播磨赤穗に廣度寺を刱して開山となる、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

シヨーヨ　稱譽　ゴクワク牛廓を見よ、

シヨーヨ　稱譽　ジヨーオー淨往を見よ、

シヨーヨ　稱譽　ユー子ン西念を見よ、

シヨーヨ　稱譽　デンジヨ傳序を見よ、

シヨーヨ　稱譽　マンキユー萬休を見よ、

シヨーカイ　政海(……)〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、政海は其俗姓生國詳かならす、出家して靜明に師事し天台敎の奧義を究め、無動寺の松林房にありて盛んに天台敎を

敷演す寂年及壽缺く、著作宗要類聚若干卷あり、（本朝高僧傳）

シヨーケン 政憲（二〇〇〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、政憲字は信瑩、俗姓生國詳かならず、總持院に住し、妙樂院融秀に繼きて學頭となる、寂年缺く、（結網集）
〔考〕政憲は南北朝時代の人なり

シヨーカサンニン 青霞山人　シユーバン宗璠を見よ、

シヨーガクイロー 青岳遺老　トクシユン德俊を見よ、

シヨーガン 青巖　シユーヨー周陽を見よ、

シヨーギン 青岑　シユヨー珠鷹を見よ、

シヨーゴ 青牛　二一六六〔曹洞宗〕奧州頭陀寺第一代なり、青牛字は栽松、肥後の人、出家して偏く師席に遊び、出羽米澤に往き、瑞龍寺實菴祥參に謁し、其法を嗣ぎ、辭し去りて各地に漂遊すること多年、後、奧州小牛郡の山中に入り菴居し、常に石上に座禪し、又山に登り松を植へ。自ら栽松道者と號す、斯くの如くして二十年の後、國主某寺を建て師を延く、頭陀寺是れなり、永正三年六月二十六日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーサン 青山　ジエー慈永を見よ、

シヨーサン 青山　シヨーシユー性秀を見よ、

シヨーレン 青蓮（……）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、青蓮は阿波の人、七歲にして出家し、大僧となるに及ひて、遍く密場に遊び、瑜伽乘に通す、會々覺鑁和尚の登山するありて師之と大塔の下に遇ひ、互に道交を結び、覺鑁を延きて菴に居らしむ、寂年、及び壽缺く（本朝高僧傳）

シヨーレンボー 青蓮房　リンゴー林豪を見よ、

シヨードー 昇道　二五二九〔眞宗〕京都釜座圓重寺の住持なり、昇道は寮司となり、嘉永七年以後、百法明門論、心經幽賛、義林章、成唯識論を講し、慶應二年三月廿一日（一に七月五日又八月に作る）擬講となり、明治元年より大乘起信論唯信鈔文意を講し、明治二年六月寂す、（眞宗史料）

シヨーヨ 昇譽　テンキ天機を見よ、

シヨーウン 少雲　シドン士曇を見よ、

シヨークン 少薫　ボンキ梵鮚を見よ、

シヨーシツ 少室　キヨーホー慶芳を見よ、

シヨーデン 少傳　シユーギン宗誾を見よ、

シヨーリン 少林　ケーガク桂萼を見よ、

シヨーリン 少林　ニヨシユン如春を見よ、

シヨーオー 笑翁　シヨーコン正鯤を見よ、

シヨーガン 笑顏　シヨーキン正忻を見よ、

シヨーガン 笑巖　エキン慧忻を見よ、

シヨーガン 笑巖　シユーギン宗誾を見よ、

シヨードー 笑堂　ジヨーソ常沂を見よ、

シヨーヨ 笑譽　シンケー秦冏を見よ、

シヨーレー 笑嶺　リユーシヨー隆盛を見よ、

シヨーシン 精眞　リユーシヨー隆盛を見よ、

シヨージン 精進　ユーゲン祐源を見よ、

シヨージンイン 精進院　ニチエー日英を見よ、

シヨージンイン 精進院　ニチリユー日龍を見よ、

シヨージンボー 精進房　ニチソン日存を見よ、

シヨーウ 蕉雨 ズイセン瑞仙を見よ、

シヨーケン 蕉堅 チユーシン中津を見よ、

シヨーチユー 蕉中 ケンジヨー顯常を見よ、

シヨーリヨー 蕉了 ズイセン瑞仙を見よ、

シヨーサン 章山 ユーモン晛雯を見よ、

シヨーハン 章範 タイリヨー大了を見よ、

シヨーヨ 章譽 リヨーシユー了秀を見よ、

シヨーアミ 鐘阿彌 ニチシヨー日唱を見よ、

シヨーコク 鐘谷 リモン利聞を見よ、

シヨーサン 鐘山 リヨーヨー靈曜を見よ、

シヨーコク 樵谷 イセン惟僊を見よ、

シヨーシヨー 樵青 シヨートー紹等を見よ、

シヨージヨー 星定 ゲンシ元志を見よ、

シヨーヨー 星陽 ニチシヨー日紹を見よ、

シヨーオク 春屋 シユーノー宗能を見よ、

シヨーフ 春夫 シユーシユク宗宿を見よ、

シヨーア 唱阿 シヨーシン性眞を見よ、

シヨーミヨー 唱名 ……二〇一九 〔淨土宗〕武藏聖德寺の開山なり、唱名は其俗姓生國詳かならず、出家して高聲寺持名に師事し其席を繼ぎて高聲寺第四代となる、後、武藏樋河聖德寺を剏して開山となる、延文四年九月十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

シヨーアン 請安 〔一三〇〇〕〔……〕 入唐學問僧なり、請安一に清安に作る、推古天皇十六年西航す、日文、惠隱、廣齊等同行せり、舒明天皇十二年十月新羅を經て歸朝す、示寂の年時缺く、(日本書紀)

シヨーウン 召雲 トクリユー德龍を見よ、

シヨーオン 葯園 ダイエー大瀛を見よ、

シヨーグワツアン 招月菴 シヨーテツ正徹を見よ、

シヨーケー 小溪 シヨーフ紹怤を見よ、

シヨーゲン 邵元 一九九五 二〇二四 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、邵元字は古源と云ふ、俗姓は源氏越前の人なり、初め南山雲に侍し、後、雙峰和尚に師事して遂に密契を承く、嘉曆二年元に渡り、雪峰に於て樵隱逸に見え法を問ひ、偈を呈し、去りて天台山に登り、無見覩を禮し、天目山斷崖義に謁し、龍山千巖長に參して法語を需め、玉泉少林寺にありて版首に居し、二祖菴に寓す、會朝廷僧百人を撰び宮中に大藏を轉し、師亦これに與り、後水月に居して大般若經を閱す、師元にある二十一年、本朝貞和三年東皈し、夢窓國師により天龍寺前堂に居す、幾何ならずして京都大聖寺に住し、次に等持、東福、及び播磨の法雲寺等に歷遷す、後藤原丞相の請により、再び東福寺に住し、晩年南泉菴に退休し、貞治三年十一月十一日偈を書して曰く 末後一句、始到牢關、擊碎鐵壁、踢倒銀山、阿阿阿と、書し終りて寂す、壽七十、師如道人と號し、又物外子と稱す、(續群二三五、本朝高僧傳)

シヨーサン 嶂山 ユーケー融珪を見よ、

シヨーサン 蔣山 ニンテー仁禎を見よ、

シヨーシユー 雀洲 トーテキ凍滴を見よ、

シヨーテン 詔天 (……) 〔曹洞宗〕能登慧眼寺の開山なり、詔天字は玉鱗、羽州の人、出家して毘尼を習ふ、偶

々楞伽經を閱して大に悟り、遊方して曹洞の諸老宿に從ふこと十年、後、瑞巖に師事して總持寺に出世し、辭して鄕里に退隱せしが、能登畠山家臣佐藤氏慧眼寺を築き、師を請して開山の祖とす、忠與寺得雲寺榮芳寺等は皆師の前後請に依り開設せるものなり、後、慧眼寺に皈り、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

シヨーナン　湘南　シユーゲン宗沅を見よ、

シヨーミン　岩岷　二四一三／二四九九〔臨濟宗〕山城妙心寺の禪僧なり、　岩岷字は古梁、號は南山、一號山菴、別に南屏山人と云ひ、俗姓笹野氏、相模高座郡大澤村の人、幼にして佛門に入り、江戸東禪寺に投じて內外の學を力め、後仙臺瑞鳳寺に住し、覺範寺を主とり、再び瑞鳳寺に移つる、曾て敕を受けて本山妙心寺に入る、其後歸へりて瑞鳳寺に住すること若干年雄心院に退老す、師傍ら儒學を修め、緒餘詩文書畫に涉り、皆な能くせさるなし、一時の名流皆交を結ふ、天保十年十一月八日雄心院に寂す、壽八十七、遺言により其屍を水葬す、齋藤竹堂天下を周遊し、當世の學僧を擧け、西に玉潤あり、東に南山ありと云ふ、師の著作叢林貫華集、法苑詩規、南屏燕語、南山外集ありて、世に行はる、未た梓に上らさるものに南山內集あり、（遺跡之碑、仙臺史傳）

シヨーヨ　肇譽　クンヨー訓公を見よ、

シヨーヨー　逍遙　モンミヨー文明を見よ、

シヨーリユー　敝隆（……）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、敝隆傳詳かならず、根來山に住りて高野山妙瑞の新義を破するにあたり、根來家語一卷を著はして辨駁し、一時宗門を騷かせり、寂年、并に壽缺く、

シヨーサン　賞山（二三六四）〔時宗〕駿河西光寺の僧なり、賞山は四十五祖尊遵の弟子にして元祿寶永間に於ける宗學を以て聞ゆ、鎌倉の天照山、下野茂木の蓮華寺、出羽秋田の龍泉寺、兵庫の眞光寺、駿河沼津の西光寺等に歷住す、著作一遍上人繪詞傳直談抄十八卷、播州問答私考抄五卷、淨土二藏義引文私考三卷、諸經彌陀採摘二卷、廿五菩薩名義抄一卷あり（淸淨光寺記錄）

ジヨーアン　定菴　シユゼン殊禪を見よ、

ジヨーエ　定慧　一三七四……〔法相宗〕大和多武峯の開山なり定慧は俗姓藤原氏內大臣鎌子の長子なり、母は車持國子の女にして、初め天智天皇の妃となる、女娠めるあり、天皇鎌子に賜ひて曰ふ、生める子男子ならば卿が子とせよ、女ならば朕が子とせむと、而して其子は即ち定慧なりと云ふ、小字眞人、慧隱に就きて出家して三論を修習す、孝德天皇白雉四年に道昭等と共に唐に航し、慧日寺神泰に師事し、後東歸し、大和の多武峯を開き、父鎌子の遺骸を攝津安威山の墳より遷し葬り、其上に十三層の塔を建立す、これ唐の淸凉山寶地院の塔を摸したるなり、後和銅七年六月寂す、壽八十餘なり、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳、）

〔考〕　日本書紀の註に定慧以乙丑年付劉德高等船歸とあり乙丑は天智天皇四年なり、此說稍信すべし、多武峯略記に白鳳七年と云ひ、元亨釋書本朝高僧傳に白鳳八年と云ふ、多武峯略記に示寂の年時等にも異說あれども、今は姑く元亨釋書本朝高僧傳に從ふなり、多武峯は初め法相宗なりしも、後增賀

の住するに至りて轉して天台宗となりたり、

ジヨーエ 定慧 一九五六 二〇三〇 〔淨土宗〕相模光明寺の三代となり、定慧字は良譽、俗姓大森氏、相模小田原の人なり、幼にして出家の志あり、十五歳光明寺良曉上人に就いて得度し、京師幷に奈良に歴遊して顯密の講席に列す、元應二年七月六日良曉上人より一家の蘊奥を傳へられ、觀應文和の頃、武藏足立郡箕田に往化し、淨土教を弘通し、遂に一寺を建立し乘願寺と號す、將軍尊氏師の往化を喜び、殊に寺祿百石を附したり、尋て光明寺の師跡を繼き、同寺第三代の住持となる、後ち相模桑原に隱棲し、淨蓮寺を開き、且つ聖冏の請により起信論釋論等の講席を開けり、應安三年十二月廿六日寂す、壽七十五、弟子光明寺に塔を建つ、定慧自ら號して良譽と云ふ、蓋し善導大師觀無量壽經に依りて五種の嘉譽を釋せる者に取れるなり、淨土宗の譽號と云ふもの、師より始まり後世皆法諱に加へて譽號を附するとゝなる

定慧上人

（淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄）

ジヨーエ 定慧 カイジヨー戒定を見よ、

ジヨーエン 定圓 〔一八六四〕 三條一流七代の佛工なり、定圓は寬圓の子なり、法橋に敍せらる、又法眼に任すといふ、元久年代の人なり、（明月記）

ジヨーオー 定翁 エーマン永滿を見よ、

ジヨーカイ 定海 一七三五 一八〇九 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、定海は源顯房の子にして、出家して醍醐寺の義範に從ひ、後三寶院の勝覺に灌頂法を受け、一乘院良雅に就きて要旨を盡す、永久四年醍醐寺の座主となり、大治四年東大寺を補す、翌年春權僧都に任す、七月醍醐寺に孔雀經法を修して雨を請ひ、功により阿闍梨五人を同寺に置く、天承の初年護持僧となり、長承元年上皇の病を禱り、東寺の長者に加はり、法印に敍す、尋きて權大僧都に轉し、東寺一の長者に任す、三年秋法務を兼ね、待賢門院の病を禱り、賞賜を受く、保延元年權僧正に任す、二年秋皇后の病を禱り、勅により阿闍梨五人を三寶院に置き、御衣及び駿馬を賜ふ、三年正僧正となり四年九月大僧正となる、醍醐院流の僧都此職を得るもの師を始とす、永治元年職を辭するも許されす、久安元年再奏して遂に免し、五年四月十二日寂す、壽七十五、著作大治記 保延記各一卷あり、（東寺長者補任、本朝高僧傳）

ジヨーカク 定覺 〔一八五五〕 七條佛所佛工なり、定覺は康慶の二男にして法橋に敍し、別に一派をなして奈良一流の祖となれり、後鳥羽天皇建久六年正月東大寺中門の西方持國を刻す、康慶運慶快慶と倂せて東大寺の四大佛師と稱せらる、

(東大寺造立供養記、佛工系圖)

ジヨーカク 定覺(……)〔眞言宗〕京都上乘院の巳講なり、定覺は上乘院巳講といふ、常陸守國房の子、眞助僧都の兄弟にして眞助の師なり、上乘院は初め洛東山に在り、長和親王の乳母左近衞少將源定季の母尼の創建にして定覺を院主となし、後性信親王此に住す、(傳燈廣錄)

ジヨーガン 定巖 コーエキ交易を見よ、

ジヨーキ 定喜(二三〇四) 京師の佛工なり、定喜は伊賀の人、正保の頃京師に入り佛像の名工を以て聞ゆ、神護寺甑玉院の弘法大師の像、伊賀郡來迎寺の阿彌陀佛の像等を造る、死沒の年月詳ならず

ジヨーキヨー 定慶(二四 九) 京師の佛工なり、定慶は明和七年仙洞御所御用の大隨求菩薩を作り、同九年不動明王を作る、寛政元年御所御黑戸本尊釋迦地藏臺坐後光を作る、死沒の年月詳ならず

ジヨーキヨー 定慶 コーウン康運を見よ、

ジヨーギヨー 定曉 一九八七 〔眞言宗〕山城醍醐山妙法院の開山なり、定曉は定勝の法を得て妙法院を開く、僧正に任せられ、嘉曆二年十月二十三日寂す、(續傳燈廣錄)

ジヨーグワツ 定月 二三四八／二四三一 〔淨土宗〕江戸增上寺第四十六代なり、定月は觀蓮社妙譽道阿と號す、伊勢國二見鄕の人なり、早く世塵を厭ひ、十二歲にして同國西光寺誓譽祐定に投して出家す、尋で增上寺に來り、梁道に師事す、後、鄕に歸り法化に勤む、寛保二年東漸寺に住し、九年を經て常福寺に住す、四年にして寶曆三年傳通院に轉住す、同六年の秋增上寺に住し、例により大僧正に任ぜらる、明和七年十一月官命別に二百石を賜り閑室の資糧に給ふ、列侯貴紳益々其高德に感し、山門車馬輻輳す、明和八年十二月三日寂す、壽八十四、法臘七十、著述明燈章一卷、師子絃十卷、倶舍講林折條數卷論注眼髓等あり、(三緣山志)

ジヨークワン 定觀(……)〔眞言宗〕紀伊高野山第七代の別當執行なり、定觀は其姓氏を記せず、詔して若狹講師となり、元杲の燈を傳へ、聲價時に高し、後、高野山小別當執行となり、第七代執行に轉す、寂年缺く、(續傳燈廣錄)

ジヨーケン 定顯 二〇七六／二一二四 〔眞宗〕伊勢專修寺の第九代なり、定顯は定順の子なり、嘉吉三年四月專修寺を主とる、寛正五年五月廿四日寂す、壽四十九、(本願寺通紀)

ジヨーケン 定憲(二〇一九)〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、定憲は京都の人なり、密敎に精通し、後村上帝の詔により僧正に任し、文和三年東寺の長者となり、延文元年法務を兼ぬ、四年僧職を辭し、其後を詳かにせず、(本朝高僧傳)

ジヨーケン 定兼 一七六六／一八四四 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、定兼は大和宇智郡の人なり、北室の兼賢に侍して密法を修す、敎覺阿闍梨其機辯を愛して師を正智院に付す、此に於て、講席を開き、學徒を化導す、治承三年高野の檢校を管し、元曆元年八月二十五日寂す、壽七十九、(本朝高僧傳)

ジヨーケン 定兼 一七六一／一八〇〇 〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、定兼は比叡山に住し後阿彌陀院の供僧となる、保延六年八月二十四日寂す、壽四十、(本朝高僧傳)

ジヨーケン 定賢（一六八四―一七六〇）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、定賢俗姓は源氏、大納言隆國の子なり、幼にして醍醐寺の座主覺源僧正に師事して灌頂法を受け、康平五年醍醐寺の座主に任し、永保三年權少僧都に補し、東寺の長者を司どる、應德元年寺務を領し、二年冬十月東寺の寶塔成り、落慶供養の導師となる、寶治三年五月大旱、敕により東寺に於て雨を祈り、靈驗ありて權大僧都に任す、永長元年法印に敍し、康和二年十月六日寂す、壽七十七、（本朝高僧傳）

ジヨーケン 定顯（一九一六―一九九〇）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、定顯俗姓源氏、中納言資平の子、永仁元年實圓を拜して登壇受戒し、後大阿闍梨位に居る、元德二年二月十四日寂す、壽七十五、（三井續燈記）

ジヨーゲン 定玄（……）〔淨土宗〕山城淨華院第九代なり、定玄字は僧然と云ふ、其鄕貫詳かならず、敬法大僧正に師事して淨土敎を修め、其席を繼ぎて淨華院に住し、僧正に任ず、後金戒光明寺に住し、第九代となり、又近江坂本に法藏院を開く、寂年壽缺く、嗣法の弟子に隆堯、等凞の二人あり、共に一代に傑出す、（淨土總系譜）

ジヨーコー 定興（……一四六五）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、定興は出家して華嚴の敎を學ひ、延曆廿二年東大寺別當に任ず、同二十四年十二月寂す、壽缺く、（東大寺別當次第）

ジヨーゴー 定豪（一八一二―一八九八）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり定豪俗姓は源氏、侍從民部少輔延俊の子、良豪法印灌頂の高足なり、承久元年夏權少僧都に任じ、三年冬熊野三山の檢校を司とり、貞應二年權僧正に任ず、嘉祿元年冬東寺の長者に補し、安貞二年秋東大寺を司どる、貞永元年閑院に於て修法し僧正に進み、嘉禎二年十二月寺務法務を管し、三年高野傳法院の座主に補し、翌年護持僧となり、乘車宮中に入るを聽さる、曆仁元年九月二十四日寂す、壽八十七、（本朝高僧傳）

ジヨーゴー 定毫（……）〔眞言宗〕京都東寺の第五十三代長者なり、定毫は辨僧正といふ、民部少輔延俊の子なり、詔により東寺五十三代の法務に任す、兼毫の法を受けて一方に鼎立し忍辱山流と稱す、付法の弟子隆毫、正範、貞瀟、顯宴、寬耀、定燈、定信、定濟、定淸、定融あり（傳燈廣錄）

ジヨーゴン 定嚴（一八一三……）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、定嚴字は調御、俗姓は紀氏、紀伊相賀の人なり、高野山に登りて眞言敎を學び、多武峯に登りて天台の法を習ふ、後高野に皈り、草菴に居りて法華を誦す、仁平三年八月二十三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳、高野往生傳）

ジヨーゴン 定嚴 ライヨ賴譽を見よ、

ジヨーサイ 定西（二二三三）〔淨土宗〕武藏靈巖寺の僧なり、定西は石見の產なり、俗姓詳ならず、天正の頃壯年にして鹿兒島に遊び、醫師某の家に寄留して藥法を學び、後、琉球に渡航し同地に於て王女の疾を治して大に厚遇を受け、同國主の許を得て便船により福建に渡航し、產物の貿易を營む、幾もなく琉球を經て石見に歸り、石見國代官大久保十兵衞の厚遇を受け、相共に專横の行あり、後十兵衞罪に處せられ、定西深く自ら前の行を悔ひて法華寺に投して得度し、元和の頃江戶に下り、靈岩寺の上人に從うて淨土敎を受け、念佛誦經を事とす、示寂の年月日詳ならず、（定西法師傳）

ジヨーサイ　定濟　……一九四二　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、定濟俗姓は源氏、久我内大臣定通の子、母は後嵯峨帝の乳母なり、幼にして憲深僧正に就て落髮受業し、稍長して母に隨つて帝に謁す、帝の曰く他日學道成熟せば、汝を以て護持僧となさん、と、師これより辛勤精進して性相の學を究む、初め東南院樹慶に三論を習ひ、醍醐寺に歸り、定親僧正に兩部の灌頂を受く、寛文元年三會の講を畢り、建長五年法印に叙す、八年秋醍醐寺座主となり、正元元年法務を兼ね、弘長二年東寺の長者に補し、文永二年五月權僧正に任し、四年春東大寺の寺務を領す十年七月十六日月蝕を禱り、僧正に進み、此歳十一月座主職を前の權僧正道朝に讓る、帝寵遇日に渥く、遂に大僧正に昇る、弘安四年正月勅を奉して伊勢太神宮に蒙古調史を禱り、五年十月三日寂す、壽缺く、著作報恩院口決若干卷あり、門下定勝通海定海あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジヨーサン　定算（一九一二）〔法相宗〕大和修行院の學僧なり、定算は其俗姓生國詳かならず、實算に師事して法相を究め、年二十に及ひ、三會の講を經たり、寂年及壽缺く（本朝高僧傳）

ジヨーサン　定山　ソゼン祖禪を見よ、

ジヨーシキ　定識　ライゲン頼玄を見よ、

ジヨーシン　定親　一八六三―一九二六　〔眞言宗〕京師東寺の長者なり定親は藤原氏、内大臣通親の子なり、定豪僧正に師事して灌頂法を受け、行遍僧正に重受し、東南院樹慶僧正に三論を受く、嘉祿三年法眼に叙し、寛喜元年三會の講師を經て權少僧都に任す、仁治二年春東大寺の席を補し、化儀振ふ、明年夏東寺の長者に補し、法務を兼ね、建長五年權僧正となり、康元元年醍醐寺の座主に補せらる、文永三年九月九日寂す、壽六十四（本朝高僧傳、東寺長者補任）

ジヨーシユー　定秀　一四九六……　〔天台宗〕近江楞嚴院の僧なり、定秀は近江蒲生郡の人、出家の後、源慶源照の二師に就て天台教を學び、初め楞源院に住すること二十一年土佐國鹿園寺に住する六年、後、備中新山に移り、居ること十二年、其間諸國を巡遊して一處に留まらず、承和三年三月三日寂す、壽缺く、（拾遺往生傳）

ジヨーシユン　定舜　一九〇四……　〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、定舜字は來緣、俊芿に師事して開遮の法を傳へ、性相の場に遊ひ、東山の徒を敎導す嘉禎三年春海龍王寺主の招により奈良に九十日開講す、寛元二年三月五日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ジヨーシユン　定春（……）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、定春は十五歳にして東大寺に入り、東南院樹慶に師事して三論を學び、兼て俱舍論に精し、後、嵯峨天皇の御宇にありて聲譽朝野に高し、寂年、及壽缺く（本朝高僧傳）

ジヨーシユン　定俊　リヨーデン良殿を見よ、

ジヨーシユン　定俊　クワイジン快深を見よ、

ジヨージユン　定順　二〇四九―二一一七　〔眞宗〕伊勢專修寺の第八代なり、定順は順證の子にして明德元年專修寺を主とり、僅に二年にして嘉吉三年寺を定顯に囑して隱居し、長祿元年正月廿八日寂す、壽六十九、（本願寺通紀）

ジヨージヨ　定助　一五六九―一六一七　〔眞言宗〕山城醍醐山第七代の座

主なり、定助號は東院律師といひ、一定の法を嗣きて醍醐山第七代の座主となる、師初め東大寺延慨の法を受け、後一定の法を合せて一流となす、之を壺坂流といふ、元德元年四月十三日寂す、壽四十九、(續傳燈廣錄)

ジヨーシヨー 定勝 一九〇五 一八四三 〔眞言宗〕山城醍醐山四十一代の座主なり、定勝は東塔の檢校法印といふ、左大臣實雄の子なり、定濟大僧正の室に入りて得度し、建治三年十二月二十三日醍醐山の座主に補せらる、弘安六年十一月九日寂す、壽三十九、(續傳燈廣錄)

ジヨーシヨー 定昭 一五七一 一六四三 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、定昭は藤原師尹の子、仁斆和尚に法相を學び、寛空僧正に密灌を受け、應和二年維摩會の講師となり、安和二年東寺四の長者となる、此職師を以て始とす、天祿元年冬興福寺に住し、勅して大會の探題となる、天元二年金剛峰寺の座主となり、大僧都に任じ、兼ねて法務を掌とる、又一乘院を開きて第一世となる、常に法華を誦して日課となす、晩年職を辭して舊院に退居し淨土往生を願ふ、永觀元年三月二十一日寂す、壽七十三、(本朝高僧傳、高野春秋)

ジヨーシヨー 定照 (一八八七)〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、定照は並榎竪者と云ふ、比叡山に天台宗を修め、源空上人の淨土教を排撃し、彈選擇集を作りて上人の高弟なる長樂寺隆寛に送る、隆寛即ち顯選擇集を作りて痛く定照の說を斥く、定照大に怒り、比叡山の大衆と謀り、貫主淨土寺圓基に訴へ、且つ朝廷に上奏して隆寛等の罪を數ふ、遂に隆寛等は配流せらる、安貞元年六月二十二日比叡山の大衆相率ゐて源空上人の遺跡大谷を圍み、上人の墳を發く、平時氏は藤原盛政等を遣はして大衆を制止し、武威を以て驅逐したりと云ふ、後定照比叡山に寂す、其年月日缺く、(淨土傳燈錄)

ジヨーシヨー 定紹 一九九九 二〇六七 〔曹洞宗〕周防禪昌寺の開山なり、定紹字は慶屋、能登の人、俗姓は長氏、光禪明峰に投じて出家受戒し、明峰の寂後加賀大乘寺徹山に師事すること多年、印可を受け、後に周防に遊化し、鯖山の勝地に法幢山禪昌寺を創建して大に大守大內義弘の歸依を受く、應永十四年六月二十日寂す、世壽六十九、臘四十三、嗣法崇裕說通、令應柏巖、大虛等五院を山中に建つ、(日本洞上聯燈錄)

ジヨーセン 定泉 (一九七二)〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、定泉號は堯戒と云ひ、西大寺慈眞和尚の高弟なり、正應五年二十歲にして進具し、毘尼の幽旨を究め、正和の初年梵網經の古迹を講ず、某年九月二十一日寂す、著作補忘鈔、三聚淨戒通受懺悔、三聚淨戒四字鈔等若干卷あり、(本朝高僧傳)

ジヨーセン 定專 一九七七 二〇二九 〔眞宗〕伊勢專修寺の第五代なり、定專は專空の第二子にして康永二年六月專修寺を主とる、延文三年自要集を著し、口傳法義を述ふ、應安二年七月十一日寂す、壽五十三、(本願寺通紀)

ジヨーソー 定聽 (……)〔眞言宗〕山城醍醐山松本最勝院の已講なり、定聽字は養性房といひ、聖雲親王の法を嗣き、實勝の流を受く、付法一人定位といふ、(續傳燈廣錄)

ジヨーソン 定尊 (……)〔……〕信濃善光寺の僧なり、定尊は尾張熱田の人、生れて六歲にして法華經を習はむことを請ふ、父母驚異して郡の某寺に托す、九歲にして八

軸を暗記す、出家の後讀誦を業となし、三十二年の間に四万八千九百二十部を讀誦す、其後每字に阿彌陀の號を唱へて一千部を課す、建久五年に每字に念佛して阿彌陀經一千部を課す、夢に一沙門あり、團扇を持し告げて曰ふ、我は善光寺如來の使なり、汝當に來詣すべし、と、師即ち善光寺に到り、九十日の間堂上に坐して、讃禮念佛す、十月十五日に夢覺め恍として繡張開けて三尊並現し靈告あり、後、同五年四月廿一日の夜寺僧燈阿俊圓如來の靈告により師を召す、乃ち繡張自ら開き妙相を現す、師靈告により三尊を圖す、同年六月勸化して金像を鑄造す、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ジョーソン 定尊 (……) 〔眞言宗〕京都仁和寺の學講なり、 定尊字は禪定、京都の人、朝日威儀師の子なり、比叡山寛印供奉に依りて出家し、寛意を禮して眞言を傳へ、乃ち灌頂を受けて其法を嗣く、覺鑁曾て師に隨從敎相の奥旨を聞くといふ、其寂年缺く、(傳燈廣錄)

〔考〕 傳燈廣錄に曰く小野の定尊を覺鑁の師なりといふは誤なりと

ジョーチユー 定忠 (二〇五四) 〔眞言宗〕山城醍醐山七十三代の座主なり、定忠は應永元年四月詔して醍醐山七十三世の座主となりしが、將軍義滿の意に應せずして退く、師先に敎を光助に受と雖も泉涌寺安樂光院實濟の法燈を繼げり、寂年缺く、(續傳燈廣錄)

ジョーチョー 定朝 一七一七…… 七條佛所初代佛工なり、 定朝は佛工康尚の子なり、後一條天皇治安二年七月十六日法成寺會堂佛像造立の恩賞により法橋に敘せらる、これ工人綱位の始なり、萬壽中章任朝臣の命により阿彌陀佛三尺の像を造立し、長暦四年五月二日勅命を拜して御持佛を造立す、永承三年三月三日山階寺の佛像造立の恩賞により法眼に轉し、淸水寺別當に補せらる、後冷泉天皇天喜五年八月一日に寂す、定朝七條通東洞院東に住したりしを以て其後を七條佛所と云ふ造立の阿彌陀佛等極めて多し、(釋家初例鈔、下學集、谷阿闍梨傳、資房卿記、重隆記、)

ジョーニン 定仁 一八三一…… 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、定仁高野山にありて金堂の職を守り、常に地藏尊を念し、承安元年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ジョーニン 定任 一九六九…… 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、定任は藤原經任の子なり、出家して定勝僧正に灌頂を受け、三寶院に住す、德治元年冬東寺の長者となり、權僧正に任ず、延慶二年醍醐寺の座主となり、同年八月二十七日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ジョーネン 定然 (……) 〔眞言宗〕山城醍醐山の入道隱者なり、 定然字は心月、在俗の時に仕官し、按察使光親の子尙書郎定嗣と稱す、大藏卿正二位となる、母は參議定經の女なり、師家產を子の參議正三位定藤に讓りて出家入道し、醍醐山に退閑し、篤く意敎の法燈を得、(續傳燈廣錄)

ジョーハン 定範 (一八七三) 〔三論宗〕大和東大寺の別當なり、 定範は東南院成範の子なり、出家して三論の宗義を學び、兼ねて眞言に通ず、遂に法印に至り、大僧都に任し、醍醐山の座主となる、建保元年十二月六日東大寺別當に任せらる、寂年幷壽缺く、(東大寺別當次第)

ジヨーハン 定範（一九七六）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、 定範は和泉横山の人なり、出家して高野山に上り、密學を研習して、其奥旨に達す、正和三年撿校となり、引接院に住す、五年冬法印大和尙の位に任す、寂年及壽缺く（本朝高僧傳）

ジヨーヘン 定遍（一七九三―一八四五）〔眞言宗〕京都仁和寺の別當なり、 定遍は藤原顯定の子、寛遍僧正に灌頂法を受け、深く密學に通す、平治年中僧官に歴任し、嘉應二年大僧都に任し、安元二年冬東寺の長者を司とる、治承四年夏勅を奉して雨を神泉苑に祈り、壽永元年權僧正に任す、二年東寺の寺務を領し、東大寺を董す、元暦初年仁和寺の圓宗院に移りて法務を兼ぬ、文治元年京都法勝寺に住し、正僧正となる、八月奈良大佛の開眼供養導師となり、十月宮中にて五壇の中中壇の法を修し、法眼に叙す 此歳十月八日六條の北西洞院に寂す、壽五十三、（本朝高僧傳）

ジヨーホー 定寶（………）〔眞言宗〕山城勸修寺寶滿院の法印なり 定寶は中院尙書持進定平の子にして伯父太政大臣俣氏の猶子なり、尊信親王の脈を傳へ、又東寺山門三井の諸流を合して密敎に精し、寶滿院を建てゝ法門を弘通す、（後傳燈廣錄）

ジヨーホーイコー 定法已講 ゴンカク嚴覺を見よ、

ジヨーユー 定祐（一九三一）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、 定祐字は戒光、文永九年三月十八日傳法職位を三寶院にて聖賢に受け、所住を戒光院と稱す、（續傳燈廣錄）

ジヨーヨ 定譽（一九一四）〔天台宗〕近江園城寺の別當なり 定譽は前大僧正雅縁の子なり、出家して恒憲に天台敎を學び、仁治二年七月別當に任ず、後權僧正に任し、寛元二年七月三日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

ジヨーヨ 定譽（一六一八―一七〇七）〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、 定譽は別に持經上人、祈親上人と云ふ、何許の人なるかを知らす、七歳父を喪ひ、稍長して母に謹事し、十三歳興福寺に投して眞興、仙救に師事して法相宗を學ふ、母の疾にあたり家に皈りて看護し、母の大恩を酬ひんとし僧となる、母沒せる後、師益堅志を持し、常に法華を讀誦す、故に祈親上人、持經上人の名を得たり、後兩親か再生の土地を知らんとし、長和五年大和長谷寺に一七日間參籠、其靈告によりて高野山に登り、弘法大師廟に詣し、益祈禱し、治安元年大師の靈告により父母再生の土地等を知り、其家に就いて小兒を請得て養育す、即ち明算上人なり、當時高野山の諸堂頽敗したれは、師大に慨嘆し、長元元年大勸進して修理興復に力を盡す、幾もなく前觀に復したり、師因りて峰禪和尙を推して座主となし、相共に一山の興隆を謀りて大に功あり、永承二年二月寂す、壽九十、正平五年四月晦日後村上天皇勅して常照大和尙の謚號を賜ふ、（高野春秋、續傳燈廣錄、元亨釋書、本朝高僧傳）

ジヨーヨ 定譽 エテン慧天を見よ、

ジヨーヨ 定譽 サンキユー三休を見よ、

ジヨーヨ 定譽 ソテー祖貞を見よ、

ジヨーリン 定林 ゲンチ玄智を見よ、

ジヨーリン 定林 シヨーケン聖憲を見よ、

ジヨーアン 靜安（一五〇〇）（………）近江比良山の僧な

り、靜安は俗姓不詳、西大寺常騰僧都に就きて法相宗を受け、元興寺に住す、後、近江比良山麓に草庵を結び、佛名經を讀みて禮拜修懺す、承和五年十二月天皇の勅召により、宮中に參候し、三日三夜清涼殿に於て三千佛名を稱ふ、靜安、道昌・願安、實敏、願定等かはる〱導師を勤む、之を御佛名會と云ひ例時御佛事となり、年々盛に行はる、同七年四月に奏して宮中に灌佛會を行ふ、これも同じく例事御佛事となれり、後、比良山に妙寶寺、最勝寺を開きたりと云ふ、示寂の年時缺く、弟子賢護賢眞あり、（續日本後紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕帝王編年記承和五年の條に淨安勅召により御佛名會の導師となるよし見ゆ、淨安は即ち靜安の事なり、

ジヨーイ 靜意（：：・）〔眞言宗〕山城德大寺の開山なり、靜意は京都の人、京極尙書贈大相國經實の子なり、醍醐山義範の室に入りて出家し、賴觀に依りて毘盧心印を續き德大寺を開く、（傳燈廣錄）

ジヨーウン 靜雲 一四八一…… 〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、靜雲は鄕貫詳かならず、弘仁十年東大寺別當に任ず、同十二年十一月寂す、壽缺く、（東大寺別當次第）

ジヨーエ 靜惠 一八六三…… 〔天台宗〕三井聖護院法親王なり、靜惠は後白河天皇の第七子にして、母は坊門局と稱し、兵衞尉信業の女なり、（一說に母は遊女丹波）、始の名は眞慧といひ、後靜惠と改む、三井聖護院覺忠の弟子となり、建久二年三月十七日（一說に廿七日）一品親王となり、法印大僧都に任し、聖護院大宮と稱す、元曆元年十二月十八日千手觀音丈六像並廿八部衆を圖繪して粉川寺に安置せられたりといふ、建仁三年三月十三日（一に十二日）寂す、壽缺く、（粉川寺緣起本朝皇胤紹運錄、諸門跡譜、僧官補任、明月記、百練抄）

ジヨーエ 靜慧 ニチトー日等を見よ、

ジヨーエン 靜衍 一九八六 二〇四五 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、靜衍父を阿靜といふ、嘉曆元年に生れ、十五歲出家し、深く天台、倶舍及び密乘を究む、至德二年二月八日寂す、壽六十、（三井續燈記）

ジヨーカク 靜覺 二一〇二 二一六三 〔眞言宗〕山城仁和寺の門跡なり、靜覺は木寺邦康親王の子、後花園上皇の猶子となり、享德二年十二月十八日宣して親王となる、時に十五歲なり、諱を師熈と賜ふ、廿一日得度し、長祿元年十二月十三日禪信僧正に傳法灌頂を受けて一品に叙す、文龜三年七月十五日寂す、壽六十二、稱して後光臺院御室といふ、付法の弟子一人あり、尊海といふ、（傳燈廣錄）

ジヨーキヨー 靜慶 シンヱ信慧を見よ、

ジヨークワイ 靜槐（二七六六）〔眞言宗〕大和金峰山の僧なり、靜槐字は上東といふ、嘉承元年二月十七月兼俊と共に金峰山鳳閣寺に傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

ジヨークワン 靜觀 ゾーミヨー增命を見よ、

ジヨーケン 靜見 リヨーニチ良日を見よ、

ジヨーゴン 靜嚴 一九〇二 一九五九 〔眞言宗〕山城隨心院の僧なり、靜嚴は俗姓藤原氏、攝政關白一條實經の子なり、幼にして嚴舜僧正に隨つて剃髮し、灌頂法を稟けて小野隨心院に住す、文永元年冬權少僧都に任す、弘安六年僧正に轉し、八年冬東寺の長者に加任し、正應元年護持僧となる、二年十月大僧正に

昇り、尋て寺務を領す、正安元年正月七月寂す、壽五十七、著作密典疏鈔あり、（本朝高僧傳）

ジヨーシヨ 靜助 リヨーユ良瑜を見よ、

ジヨーシヨー 靜照 一八九四 一九六六 〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、靜照字は無象俗姓平氏なり、相模鎌倉の人なり、出家して東福寺に投し、聖一國師に侍し、尋て諸禪師に歷訊す、建長四年十九歲にして宋に渡り、徑山の石溪禪師に謁し、趙州放下著話を參究し、印證を拜す、服勤すること五年なり、弘長二年（宋景定三年）天台山に登り、五百羅漢に茶を供す、偈二首あり、「崎嶇得得爲煎」茶、五百聲聞出二晚霞一、二拜起來開夢眼一、方知法法總空華」「瀑飛雙㵎一雷聲急、雲歛二千峰一金殿開、尊者家風只如」是、何須賺」我東海來」、一時の名衲、琪横川、度虛舟等四十二人唱和あり、弘長三年（宋景定四年）天童淨慈の間に虛堂愚に隨ふ、文永元年（宋景定五年）洞庭湖に遊び、偈あり、「雁落洞庭蘆岸秋、楚天雲淡畫圖幽、孤舟游泳波心月、七十二峰一目收」同二年宋（咸淳元年）虛堂愚の下を辭して歸る、偈あり、「十載從」師幾話擧、到頭一法不曾傳、有無句蕩家私盡、萬里空歸東海船」、我國の學僧圓海と云ふ者、深く師の學德に服し、同船して歸り、京師に平安山佛心寺を開き、師を請す、師は先づ鎌倉に下り、龍華山眞際精舍を開き、翌三年佛心寺に遷り住す、丹後の佐野某寶林寺を開きて請ず、尋て再び鎌倉に下り、胡桃谷の法源寺に住す、時に比叡山の徒衆禪宗の隆盛を嫉み、上奏して之を停めむことを請ふ、師書一篇を作り上る、朝命あり興禪記と云い、常陸の吉源入道善行一寺を開きて師を請す、仍て號して興禪寺と云ふ、建治三年十月衆請により筑前の聖福寺を董す、二年にして三たび東下し、相模ノ慶寺に遷り住す、弘安八年五月佛光禪師法衣を傳付す、正安元年北條貞時延きて淨智寺の主とす、德治元年五月十五月諸弟子を集めて喪儀を條畫し、遺偈を書して曰ふ、諸佛來也如是、諸佛來去一般、今我說也如是、端坐して化す、壽七十三、臘五十五、四會語錄三卷、興禪記一卷あり勅謚法海禪師と云ふ、（續群二二八、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ジヨーシヨー 靜聖 ケンシン賢信を見よ、

ジヨーシヨー 靜定 リユーシン隆眞を見よ、

ジヨーセン 靜泉 ……一九九〇 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、靜泉は出家して幸尊法師に習學し、聲譽高く、乾元弘安正應正安の諸年間、當時の高德の間に知らる、文保二年丹羽の普甲寺に移り、門弟四人を出たす、元德二年十一月廿一日寂す、壽歆く、（三井續燈記）

ジヨーチユー 靜忠 一八五〇 一九三二 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、靜忠は普賢寺殿の子、嘉禎元年十二月長吏に任す、弘長三年十月二日寂す 壽七十四、（三井續燈記）

ジヨーニン 靜仁 （一九一三） 〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、靜仁は土御門院の子、建長五年四月長吏に任す、寂年及び壽歆く（三井續燈記）

ジヨーニヨ 靜如 コーオー光雄を見よ、

ジヨー子ン 靜然 （……） 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、靜然字は戒光房 京師の人、和泉守有成の子なり、出家して比叡山の學僧相實に師事して一流の中相を傳ふ、著作行林鈔一百卷あり、（台密血脈譜、諸宗章疏錄）

ジヨーヘン 靜遍 ……一八八三 〔眞言宗〕京都禪林寺の學僧なり、靜遍は平頼盛の子なり、醍醐寺の座主勝憲を師として小野流の法を傳へ、仁和寺上東院の仁隆に依り、廣澤流を受く、初め仁和寺に居り、源空の聖道門を捨てゝ專修の法を立つるを謗り、書を著して之を破らんと欲せしが、撰擇集を讀むに及び、其末世に益あることを知り、續撰擇集を作る、高倉上皇勅して禪林寺に住せしむ、貞應二年四月二十日寂す、壽缺く、著作三角院口決、三角院目錄二帖、西酉本流口決、三室院問答記、秘藏記鈔、秘鈔口決十三帖若干卷、あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

シヨーミヨー 靜明 （一九〇三） 〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、靜明は山城の人、俗姓は藤原氏なり、出家して範源に天台教を學び、後俊範に法を嗣ぐ、又東福寺聖一國師に謁して禪を學び、玄旨に達す、後嵯峨天皇召して天台の義を問ひ、敕して法印に叙す、常に粟田にありて學徒を誘掖し、嘗て論題百條を撰す、寂年及壽缺く、門下の神足に性遍、靜運、心賀、政海の四人あり（本朝高僧傳）

ジヨーヨ 靜譽 （一七六五） 〔眞言宗〕山城光明山の僧なり、靜譽は越前阿闍梨といふ、初は小野に在り、長治二年に範俊國師を拜禮して法を傳受し、後嚴覺に就きて金剛界會を稟承す、去りて石山に住し、後、相樂郡光明山に往きて一方の法幢を建て、光明山流といふ、其寂年缺く、著作入曼荼羅鈔七卷、入壇鈔一卷、小野赤緒（卷數未詳）付法の弟子眞譽、重譽、增忍、覺暹の四人あり、（後傳燈廣錄、諸宗章疏錄）

ジヨーア 淨阿 一九二九—二〇〇一 （時宗）京都金蓮寺の僧なり、淨阿俗姓は源氏、總州の人なり、十九歲にして州の圓通寺に入り、大小乘を習ひ、鎌倉の極樂寺に往て忍性律師を拜して受戒す、永仁の初め法燈國師を拜して禪說を問ひ、辭して諸方を巡化し越中の野尻にありて淨土教を說く、正安二年武藏にありて、陀阿に會し、淨土教を論量し、其法義を承けて當麻山に居す、延慶二年京都に上り、祇陀林寺に寓し、後敕により同寺に主となり、錦綾山金蓮寺の名を賜ひ、上人の位に補せらる、曆應四年六月二日寂す　壽七十三（本朝高僧傳）

ジヨーア 淨阿 テツガン哲顏を見よ、

ジヨーア 淨阿 コーシヨー公聖を見よ、

ジヨーア 淨阿 オンチヨー音徵を見よ、

ジヨーアミダブツ 淨阿彌陀佛 シンクワン眞觀を見よ、

ジヨーイン 淨因 一八八七—一九三一 〔戒律宗〕京都戒光寺の律僧なり、淨因字は圓悟、自ら西杳と號す、京都の人なり、曇照を禮して削髮受戒し、智舜智鏡二師に執侍して三大律鈔の蘊奧を討究す、三聖寺に入りて禪關を參請し、東林寺に住す後戒光寺に移り、大に學徒を延く、正元元年戒壇院の圓照師を招きて律章を講せしむ、後請に應して相模の無量寺に住し尋きて飯山の放光寺を開きて第一代となる、文永八年十一月十二日飯山に寂す、壽五十五（本朝高僧傳）

ジヨーイン 淨印 二三五六—二四一六 〔黃檗宗〕宇治萬福寺十三代なり、淨印字は竺菴、淸の人、陳氏なり、享保八年七月二十八歲にして西來し、杲堂昶の法を嗣ぐ、享保廿年三月黃檗山に進む、當時一山の宗風漸く荒敗し、漫然として慣例により歸化僧を推本し、種々弊害あり、師一住六年幕府の命により

退隱す、寶暦六年七月六日寂す、壽六十一（黄檗譜略）

ジヨーウン　淨雲　クワンショー寬昌を見よ、

ジヨーエ　淨慧（・・・・・）〔臨濟宗〕相模壽福寺の僧なり、淨慧は號を愚溪と云ひ、其鄉貫詳かならず、或は云ふ支那の僧なりと、壽福寺に居りて無惑に師事す、書法牧溪を學び、秀作あり、寂年並に壽缺く、（本朝畫史）

ジヨーエ　淨慧（二四〇五）〔眞宗〕伊勢國無見金剛寺の住持なり、淨慧は伊勢の人、眞宗高田派金剛寺に住し、學譽あり、延享二年高田派の安居本講を勤む、寂年月日詳ならす、

ジヨーエー　淨英（二三八二―二四五六）〔黄檗宗〕山城宇治萬福寺の第二十三代なり、淨英字は蒲菴と云ふ、攝津大坂の人なり、出家して黄檗山に入り、香林椿の法を嗣き、寛政四年進山して第二十三代の法席を繼く、一住五年、寛政八年十月朔寂す、壽七十五、（黄檗山歷代表）

ジヨーヱン　淨圓（・・・・―二三二五）〔淨土宗〕攝津滿福寺の僧なり、淨圓字は頓譽其俗姓は詳ならずと云ふ、攝津芥川村滿福寺の僧なり、常に專精念佛して淨業となす、道化盛なり、寛文五年三月九日寂す、壽詳ならず、（緇白往生傳）

ジヨーオー　淨往（二二三二―二三〇一）〔淨土宗〕山城攝取院の開山なり、淨往字は稱譽、京師の人なり、俗姓詳ならず、初め西陣に住し、工匠を以て家業と爲す、壯年の頃品行修らず、後、大に其の不心を悔悟し、大原に往て小菴を結び、別時念佛を修すること日久し、攝取院を創し住す、後、京師に眞敎寺を開き後近江丹波に寺を開き、一年にして九ケ寺を建立す、寛永十八年十月二十八日寂す、壽七十、（緇白往生傳）

ジヨーオン　淨音　ホーコー法興を見よ、

ジヨーガ　淨雅（一九一九―一九七九）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり　淨雅俗姓は藤原氏、右大臣定雅の子なり、忠尊法師に學修し、永仁元年三井寺別當職に居り、五年五月長吏に補す、嘉元三年四月密灌大阿闍梨となり、元應元年四月七日寂す、壽六十一（三井續燈記）

ジヨーカク　淨覺　センユ宣瑜を見よ、

ジヨーカンイン　淨感院　ニチオー日應を見よ、

ジヨーキ　淨凞（・・・・―二〇二四）〔曹洞宗〕肥後法泉寺の開山なり、淨凞字は仁叟肥後の人、幼にして寒巖義尹に依りて薙髮し、左右に執侍すること久しくして信印を受く、肥後宇土の郡主某法泉寺を創し師迎へられて開山となる、正平十九年十月十八日寂す、壽缺く、嗣法能翁玄慧あり、（日本洞上聯燈錄）

ジヨーキヨー　淨慶（二三四八）京師の佛工なり、淨慶は京師寺町三條上る町に住し、元祿の頃東國に下り、下總印播郡鏑木村千葉山海隣寺の阿彌陀、幷に二菩薩像を造る、後法橋に敍せらる

ジヨーキヨー　淨慶　エンキ圓喜を見よ、

ジヨーギヨー　淨業（一八四七―一九一九）〔戒律宗〕京都戒光寺の開山なり、淨業字は法忍、號は曇照、山城の人なり、十五歲剃髮し弱冠にして受具す、園城寺に投して顯密の學を得、奈良に遊學し、宋の律學盛大なるを聞き、建保一年春彼地に往き鐵翁一に市峰に從ひ、具足戒を重受し諸州縣に遍遊し、徧く大德を歷問す、理宗召して忍律法師の號を賜ひ、紹定元年春藏經を求めて歸朝す、我か安貞二年二月なり、尋いて京都に

入り、盛に戒律を說く、靈夢により地を京城の南に卜して戒光寺を建て、戒を說くの外顯密時に應して弘布す、人以て泉涌戒光二寺を以て教律の窟となす、天福の初め席を上足淨因に讓りて再ひ宋に入り　多く佛像梵夾を得て仁治二年太宰府に歸へる、地の檀衆西林寺を建て師を迎へて法を問ふ、後、京都に歸へり、東林寺を建てゝ戒光寺の子院となす、晚年退きて念佛三昧にふけり、正元元年二月二十一日寂す、壽七十三臘五十四、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ジヨーギヨー　淨業（……）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、心淨業字は子建、中岩に從ひ、坐禪參究し、後明に入る、詩あり曰はく不識何山松竹底又添一箇土饅頭と、彼地に寂す、（日本名僧傳、異國使僧小傳）

ジヨークー　淨空　二三五三 二四三五〔新義眞言宗〕山城智積院第二十代なり、淨空字は慈潭、號を白壤と云ひ、後に改めて法國といふ、下野舟津川村の人、俗姓は鈴木氏、母は同鄉の新井氏の女なり、元祿六年十月十日に生る、甫めて七歲四書を父に學ひ、翌年村の寬光寺に投して三體詩、古文を讀み、九歲の時龍華院に往き、至日院主に五經文選幷に佛書等を受け、十歲にして詩を賦し、文を綴るに至る、初め叔父出家して名を海淨、字を善衣と稱し京都に在り、十三歲の時、師照阿闍梨海淨に代り、師の髮を剃り、戒を授く、十四歲の冬論場に於て論鋒を交へ、老宿舌を捲き、敢て當る者なし、十七歲の時、海淨武藏倉田明星院に住す、師從ひ往きて常に給仕す、師袁中郎の集を愛讀す、十八歲和上の住心品疏起信論藏疏四敎集解等の講席に侍す、二十歲智積院に掛搭し、祖堂に於て

十住心論を讀み、自誓して曰く、住心次弟、大小權實、孔老勝數の道の如きは、一一宗祖の範を涉獵して分別すへからす、戒を學ひ、定を學ひ、惠を學ふとも、中間期なからん、大毘盧遮那如來を俟ちて止まんのみ、と、論場匹敵するものなし、爾後備林に遊學し、盛唐の詩調を學ふ、後、華開院湛惠の下にて圓暉頌疏を聽き、奈良藥師寺高範の下にて因明唯識を聞き杏掛の如山禪師の下に往き、俱舍論光記を討論し、退きて光寶二記、俱舍、婆娑、正理、顯宗等を對撿すること一年、尋いて鳳潭の輪下に因明瑞源記、四敎儀集註、起信論義記、五敎章匡眞鈔の講述を聞き、北野高麗寺に於て三論及ひ金錍消毒講莚に交はり成唯識疏を聞かんと欲して半途退隱し、自ら三十論、廿論兩疏瑜伽等を見ること一年、其餘暇五智山如幻を訪ひて問尋す、其後三井の義瑞の入疏を聽受せんと欲し、兩三席にして市中に屏居し、入疏三大部、觀音玄義、光明玄義、涅槃經會疏、指要抄等を講究し、鳳潭梵網經疏を講するを聽受し、新舊華嚴を決擇し　尋いて範僧正に隨ひて報恩院流の聖敎を受け、實詮和上に安流の聖敎を授かり、其源底を盡くし、秘密諸軌を傳授す、後、大日經疏諸鈔を集め、沈潛反復して怠ることなし、時に智山喧擾あり、師黑谷の傍に幽棲し、總て人事を絕ち、書卷中に遊ふこと三年、其中百日百夜誓て無言を保ちて思惟す師智山野山豐山三山を離れて孤峯頂上に隱棲し、一門を立てんと欲すること數度なれとも老師其法脈を絕たんことを恐れて許さす、是に於て隱棲を遂けす、享保十年四月三十日老師の病報來る、即ち智山より起ち、百三十四里の間を馳せ　五月九日病床に着し、兩日兩夜手つから湯藥を

奉す、老師八日に寂す、其臨終に方り持寶山淨妙に法を授け、諸流の印可を授く、師乃ち淨妙の下にありて西院流四度の灌頂三部厚紙艸等悉く付可せらる、仍て席を嗣き、明星院に住し、其三十二代となり、翌年集解を講す後二十二年間年は智山に在りて學業を力む寶曆六年六十四歲にして幕命を蒙むり、江戸圓福寺に住すること四年、寶曆九年再ひ命を承けて智積院に進み、參内して龍顏を拜す、學徒を指揮すること八年、明和三年三月退隱す、六年大衆の請を容れて奧疏を講授し、八年六月五日瑞應山に移住し　同十二日より九月九日に至るまて住心品疏、蘇漫聲、殺三摩婆釋を講す、安永四年十月廿四日病に罹り、同二十八日夜寂に入る、壽八十三、著作、禪餘筆陳四卷、滅行滅緣俯睴論游外一卷、釋難一卷、八轉聲鈔批點一卷、六釋通開批點一卷、因明講述五卷、俱舍執中十九卷、唯識執中三十一卷、起信論執中十卷、集解通釋十卷、指要通釋五卷、敎分記執中十二卷、大日經疏鈔執中四十九卷、大毘盧舍那心地法門十八卷、即身成佛安心決定一卷、付法寶錄一卷あり、(新義眞言宗史料)

ジヨーグワツアン　淨月菴　ケンドー賢幢を見よ。

ジヨークワン　淨觀　二四一〇／二一九六六　〔天台宗〕周防德山敎學院の修驗者なり、　淨觀字は道甫、號は藍泉と云ふ、別に興山といひ、右京と稱す、本姓は島田氏なり、役小角の法系を繼き、役氏と稱す、周防德山の人なり、世々毛利氏に仕ふ、七代の祖良榮始めて毛利元就の命によりて修驗宗に入る、蓋し永祿五年毛利元就大友宗麟の二氏軋轢するに方り京師より道增法親王安藝に下り、二氏を調訂す、元就法親王を德として家臣一人を法親王の下に送る、良榮其選に當り、修驗者となる、後、輝元の子就高周防德山に分封せらるゝに方り、一族德山に移り住し、世々修驗者となる、淨觀は瀧鶴臺に就いて徂徠派の學を受け、且つ詩文に長す、文明の頃藩儒本城貫治(號は紫巖)の後を繼き、藩學鳴鳳館を興し、(後に興讓館と云ふ)藩士の教授を擔任す、賴春水龜井南冥等に交はり、大に推重せらる、龜井昭陽嘗て當世の文人を擧けて西に藍泉あり東に古梁(南山)ありと云へり、文化三年正月寂す、壽五十七、著作學範、藍泉一家言、大道公論　各一卷、詩文集若干卷あり、其孫島田蕃根東京に移り住し世に知らる、

ジヨークワン　淨觀　二四八八／二五四〇　〔新義眞言宗〕佐渡大聖院の中興なり　淨觀俗姓は鈴木氏佐渡加茂郡柿野村の人なり、幼にして郡の吉井本郷大聖院佛如の室に入りて剃髮し、弘化二年豐山に登り、留錫四年、嘉永二年更に智山に抵り、習學久しうして內外の敎典に通ず、弘化二年吉井本郷下之房に住し、後、瀉澤村正福寺に移る、元治元年靑木村藥泉寺に遷り、在職十六年、明治十二年六月大聖院に主となり、同寺の廢頽を興し、舊觀に復す、此歲夏旨ありて東上し宗局に滯在して年を閱し、疾に罹り、十三年一月二十一日寂す、壽五十三、(新義眞言宗史料)

ジヨーコ　淨踞　二四一九／二四八六　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第二十七代なり、淨踞字は金猊といふ、俗姓生國詳ならす、出家して黃檗山に登り、梅峯玉の法を嗣く、文政六年二月十九日進山して第二十七代の法席を繼く、一住四年、文政九年十一月十六日寂す、壽六十八、(黃檗山歷代表)

ジヨーコー　淨光　二三八九／二四六三　〔新義眞言宗〕山城智積院第二十六代なり、淨光字は信俊、安房の人、智積院に留學し、江戸圓福寺に住す、享和三年四月二十一日圓福寺より入りて智積院第二十六代能化となる、其職にあること一年に滿たず、仝年九月十五日寂す、壽七十五、同日僧正を贈らる、（密嚴諸脈新義眞言宗史）

ジヨーコー　淨光　キヨーエン鏡圓を見よ、

ジヨーコー　淨光　ハンケン範賢を見よ、

ジヨーゴン　淨嚴　二五二一……〔淨土宗〕京師知恩院第七十二代なり　淨嚴號は莊譽と云ふ、鄕貫詳ならす、出家して山城光明寺に住し、嘉永五年八月四日光明寺より出てゝ知恩院第七十二代となり、第七十一代萬譽顯道の後を繼く、同年十二月十二日大僧正に任せらる、文久元年四月十六日（一說五月六日）に寂す、壽缺く、著作閑敎齊緣記三卷あり、（淨土宗史料）

ジヨーゴン　淨嚴　二二九九／二三六二　〔眞言宗〕江戸靈雲寺の開山なり、淨嚴字は覺彥、號は雲農と云ひ、別に妙極と云ふ、河內錦部郡鬼住村の人、俗姓は上田氏、世々鄕邑に長たり、父の名は道雲、母は秦氏、共に厚く佛に歸す、寬永十六年十一月二十三日師を生む、其生るゝや腥血流れず、俗に乾子と稱す三四歲にして能く普門品尊勝咒等を誦し、自ら空經と名けて專ら僧伽の風を樂む、正保元年肥前の大德桂巖禪師檜尾山觀心寺に寓して碧巖錄を講す、師席に陪して之を聞く、同三年八歲にして高野山に登り靈跡を拜す、慶安元年再ひ高野山に登り、悉地院に寓す、遂に撿校雲雪を禮して薙染納戒し　業を受く、雲雪寂するに及ひ、釋迦文院に寓し、朝遍に師事して密乘を習學す、四年紀伊守中納言南靈君に謁し、唐刻の通鑑綱目の序を授けらる、明曆元年南院の良意僧都に從ひて中院流十八契印兩部の廣法、及ひ護摩の密軌を受け、三月廿一日より十月廿八日迄、二百餘日修習精勤し、多く祥瑞あり、翌年金剛山寶相院の長快を禮して二界灌頂に沐す、二年十九歲にして高野山の衆に加はり、學侶に交を結ふ、師生平苦學して日夜書を閱し、凡そ密部の典籍より、法華、華嚴、倶舍、唯識の諸典、乃至諸子百家の書に至り、未た嘗て其奧を究めさるはあらす、詩文書畫を巧にす、萬治元年六月廿八日良意僧都に從ひて安流の許可を受く、三年朝遍幕命を蒙りて寶性院に住す、師朝遍に從ふ、寬文元年正月廿一日良意僧都を禮して傳法阿遮梨の職に登る、既にして朝遍の東行に從ひ、江戸に往き、四年辭して高野山に皈る、良意僧都に從ひて安祥院流の法を受け、遂に附法の印璽を得たり、七年十一月十五日朝遍法印を禮して重ねて印可を受け、同十二月十三日傳法密灌を同師に受く、師平生譜曲に達し、理趣の譜曲を訂正して衆に示す、當時梵言を解する者なきを慨し、自ら研究に力を盡す、十年師三十二歲にして高野に即身義、及ひ悉曇字記等を講し　學徒雲集す　朝遍良意の諸師に深く愛重せらる　然るに賴周といふもの師の英才を憎み、之を害せんと欲す、其動屢々現はれしかは、師護法の大任を有する者　輕々しく命を失ふへきにあらすとし、難を避けて鄕に還る、良意大に驚きて人を走せ、師を諭して曰く、師若し賴周と和せさる所あらば余宜しく力めて和せしめんと、而して父母親戚師を警め

て曰く、佛門に歸したる者家に歸へるは恐らく非ならん、と、師是に於て再ひ山に歸る、良意頼周を招きて問ふ頼周曰く、我淨嚴と何の挾む所なしと、乃ち良意欣然として曰く、僧伽は梵言にして一味和合と釋す、子今日より以往淨嚴と共心同力して背違するなかれと、且つ師を呵して曰く、頼周怨なし子何ぞ鬼形を見るや、向後當に繩麻の糾合せるか如くなるへし、師乃ち諾して寶性房に歸へる、然れとも頼周未た意解けす今宵恐く害せられんと遂に自房を去りて他室に入る、老僧某師の房を監す、夜三更に垂とする時、頼周燭を執り刀を提けて師の室に入る、老僧駭きて起つ、頼周見て奔り去る、翌朝師に告く、師曰く、我嘗て之を知れり、と、恐らくは是れ邪神の祟るならん、宜しく之を祭らんと、香華を備へ堂に上りて供を修す、夜深更に到り、頼周刀を提け師の左腋及ひ頭上を穿つ、師高聲に呼ひて走る、衆駭き馳せ集まるに頼周の所在を失す、良意之を聞きて驚き、師を諭して曰く、是我が誤より、遂に是に至るものなり、若し此の如きならんを知らは、何そ子か歸院を勸めんと、哀歎甚し、父母も亦切に之を愁ふ、乃ち家に歸り、醫を招き瘡痍を療す、日ならすして舊に復す、十一年良意師の歸山を求む、師閑地にあらんことを思ひて固辭す、正月二十六日朝遍寂し、秋九月師の父道雲兄良清相繼きて逝く、師休隱の思倍々切なり、母を養ひて家に住す、近里の道俗風を慕ひて禮謁す、天野山の徒師を招きて普門品を講せしめ、觀心寺の衆、師を請して即自義の講を開く、又理趣般若を講して朝遍法印の恩德に報す、十二年春鄉里に如晦菴を營む、檜尾山地藏院主の請に應し、菩提心論及ひ理趣經を講し、又加賀田村氏の爲に普門品を講す、又鄉里の徒衆を勸めて大般若經を請し、常樂蘭若を鎭す、延寶元年春清水に因果經八齋戒を講し、茱萸木新田に普門品を講す、又吉野の極樂寺に阿彌陀經を講し、後如晦菴に歸る、快圓慧空律師を禮して菩薩の大戒を受く、翌年和泉小寺村常念寺に即身義を講し、丹波發光寺に藥師經を講し、旣にして故居に還る、春三月師謂はく夫れ密藏の法源は一なり、師資相承して支流分る、苟も大成せすは安んそよく淵源の深廣を觀ることを得ん、然れとも密敎は專ら其口授を貴む、今旣に小野流の蘊底を得たり、未た廣澤流の淵源を知らす、應に明師を訪ひて之を禀承せんと遂に僧龍海、及ひ弟子蓮體と共に京に入る、東山の觀善院主臥雲菴に師を請す、先きに神鳳寺の政律師修善要法及ひ觀行要法二典を上梓せんとするや、師其校閲を助く、其時仁和寺の顯證に遇ふことを得たり、顯證師を見て欣然として曰く、吁我れ歳老いたり、幸に此良器に遇ふと、乃ち尊壽道場に就

淨嚴和上

ジヨー（淨）ゴ

きて密經秘軌の蘊奧を授く、師高山法鼓臺の聖教を待て書功畢る、然れとも顯證老衰を以て其傳法を辭す師此を以て法務大僧正孝源に見え、求法の志を告く、孝源其意を美とし、函底を傾附し、具に三年を閲す、師詩を賦して謝す、曰く日日轉來正法輪、萬年橋木巳回春、吾端非是自誇等、稍覺歸除心裡塵、と、時に黄檗山の道光禪師師と相善し、其刻するところの大藏經を梓し、山に鎭す、一日師を延きて其本刻するところを閲せしむ、師之を見て曰く、世運澆李にして人太た尫弱なり、彼の密軌の如きは數百軸誰か之を書寫せん、希くは之を梓に上して弘通を助けんとの意あると日久し、今に大藏經を閲するに及ひ、我願方に成りぬ、冀くは密軌を抜粋して同學に示さん、禪師乞ふ之を憶へと、道光欣然として之を諾す、乃ち密軌を擇ひて若干軸、別に題して秘密儀軌と稱し、通計若干軸となし、密徒に示す、三年攀田に詣て神の爲めに理趣般若を講す、二月法華を東野の蓮華寺に講し、一如の科註に依る、此書は深草の日政の梓に刻せしものにして、後世肆に遺棄して敢て識るものなし、師之を見て沙中に金を得たるの思をなし、此年法華經を講するに及ひ、是を諸方に弘通す、七月再ひ仁和寺に入る、孝源僧正の命を受けて般若寺を主とる、寺は観賢僧正の遺地なり、九月河内に歸り、常樂精舍に就きて即身義を講し、梵網經を講す、伯父良信の求に應して其諺註を著す、冬和泉の大鳥に高山寺を刱す、四年常樂精舍に於て始めて學法灌頂檀を設く、蓋し宗祖空海唐に入り、青龍和尚に隨ひ、兩部の灌頂を受く、時に六月七月にして八月上旬に傳法灌頂に浴すといふ、其六月七月の灌頂といふは何ぞや、所謂學法灌なり、一に持明と名く、傳密の人先つ此密灌に浴して徧く諸尊經軌を學ひ、而して後阿遮梨の職位に昇るなり、夫れ空海は學法傳法二種の灌頂を行ふ、其後師資相繼きて實嚴等に及ふ、時に兵革競發し、授受するに餘暇なし、是に於て此法廢せり、此に於て師其因縁を經軌章疏の幽賾に探り、其儀則を編し、春二月遂に其所志を果す、許可及ひ結縁灌頂を行ふ、其受くるもの通計一千六百餘人なり、三月仁和寺に入りて西院の法流を繼承す、圓頓大戒を頂受せんと欲し、先つ鳴瀧の般若寺に就き、豫め一字頂輪王時處念誦の儀軌に依りて精修鍊行し、好相を感することを得たり、遂に五月十四日和泉の高山寺に於て慧隆念と共に自ら誓ひ、滿分戒を納る、紀伊名艸郡和佐村　慈光寺玄忍海之を證明す、次て高野寺に安居し、圓行賴圓等の求に應して密軌を傳授す七月來迎寺に秘鍵を講し、八月竹谷の明王寺に三教指皈を講す、十二月密軌を高山寺に繼授し、因に二時食及ひ施餓鬼の軌則を作る、五年正月理趣般若を如晦菴に講して朝遍七回の遠忌に薦む、次に和泉の陶器村に往き、里民の請に應して善惡因果經、及ひ尊勝咒經を講す、二月密灌を常樂寺に行ふ、其浴する者總計二千四十餘人なり、播磨飾東の牛堂山國分寺にて即身義、梵網經を講す、大戒を受くる者萬餘人なり、灌頂曼荼羅を開き、法を受くるもの五千餘人なり、次て印南山報恩寺に至りて普門品を講す、五月延命寺を郷里に建てんと欲し、其基地を卜かにするに古簡一紙を得たり、之れを讀むに父道實の誓狀なり、師大に悦ひ、其の地の古縁を探るに昔日一草堂ありたりといふ、村民相謀り一字を興し、師を請せ

ジヨー（淨）ゴ

んとし、之を仁和寺の法親王に聞す、乃ち令旨を賜ひ、伽羅山延命寺と號す、師自ら斧を執り、工事を助く、七月和泉の陶器村大村寺に梵網經を講し、大戒を受くる者五百人、九月僧房食堂成る、因て四敎集解を講す、冬十二月神鳳寺の政律師寂す、師其行狀及ひ道影の贊を作る、六年二月灌頂曼荼羅を延命寺に開く、三月下旬讃岐善通寺の請に應して善悪因果經を講し、次いて妙法蓮華經の講莚を開く、六月を越えて其功を畢ふ、此夏炎暑甚し 師緇衆の求に應し、四階堂邊の池中に小祠を經營し、善龍王を請し、菩提場咒一千遍を持し、兼て梵文を血書し、龍王に法施す、忽にして黑雲起り、大雨降る師金比羅山に登り、萬農の池を見る、是れ弘法大師手つから穿鑿せし所なり、高松城主羽林次郎頼重の請に應し、藏六菴に宿す、翌年相見て大に歸仰せられ、大守弟子の禮を執る、二年梵網經を聽德菴に講し、大守幷に貞娘日に席に臨む、三月大守現證菴を建て、師を延きて之に居らしむ、夏四月母を鄕里に省す、讃岐に赴く、大守巨船を發して來迎す、五月觀音寺に寶鑰論を講し、六月北鴨桑多山道隆寺に止まる、土沙を加持すること一七ヶ日なり、阿字觀を講す、七月伊豫有麻郡を過きて高松城に入り、心經秘鍵を現證菴に講し、理趣般若を講す、九月延命寺に歸り、母を省す、冬尊覺空の囑を受けて敎興寺を主とる、寺は乃ち聖德太子手創の地、興正菩薩再建の場なり、然れとも數百年來廢荒す、師再興す、八年二月延命寺に密灌を行ひ、三月高松に到り、法華經を聽德菴に講し、五月講半にして止む、八月一日續講す、太守の請により秘略要鈔十二卷を著す、十二月延命寺に歸る、天和元年正月一七ヶ日金門鳥敏の法を修し、國家の災を攘ふ、二十一日攝津東成郡大今里妙法寺に即身義の講を開く、三月灌頂を延命寺に行ひ、夏四月理趣般若を講す、五月攝津西成郡天滿寶珠院に寶鑰論を講す、七月四日良意僧都寂す、師登山拈香して受法の恩を謝す、九月朔悉曇字記を講し、三密鈔八卷を撰す、十月攝津小橋興德寺に秘鍵を講し、復た津村の新坊に赴きて大灌頂光明眞言經を講す、十一月重ねて灌頂道場を延命寺に開く、二年正月大元帥金剛の法を修して國家の安穩を祈り、永く恒規となす、二月攝津の興德寺に住心品を講す、蓋し良意僧都一回の周忌に薦むるなり、八月二十二日奈良の西大寺に留る、四月高松に往き、十住心の疏を聽德菴に講す、三年正月灌頂道場を聽德菴に開き、三月鹽飽の正覺道場に再ひ曼荼羅を建つ、夏四月備前小島の近壽院に至り、國中の庶民禮謁するもの多し、備後尾道に往き、西大寺に安居す、夏八月京都に登り、仁和法親王の薙染を賀し、延命寺に歸へる、此年觀誦要門を上梓す、貞享元年宗祖の八百五十遠忌に方れは、師は敎興寺の祖堂を營搆して、聖德太子及ひ空海の肖像を其堂に奉す、曼荼羅供を修して寶殿を落慶す、三月二十一日京都東寺に往き、宗祖遠忌の席に陪す、黃檗山を經て延命寺に歸る、諸信士の請に應し光明眞言觀誦要門を撰す、秋八月天野山の僧侶の爲に延命寺にて密軌を授く、又和泉坂本村に至り、禪寂寺に就きて菩提心論を講す、十月伊東信濃守藤原長興地若干を敎興寺に寄す、同月江戸に下り、十一月六日三田に僑居す、牛込南藏院に法華經を講す、三寶寺主師を請して歸戒を道俗に授けしむ、二年三田明王院に即身義及ひ菩提論

ジヨー（淨）コ

を講す、道俗歸仰盛なり、牛込多聞院内に息障菴を搆へて師を請す、夏四月往きて之に安居す、次いて即身義等七部十卷を講す、年を越ゑて講を畢る、其餘暇許可灌頂を授く、八月南藏院の齋に應す、[illegible]年春寶鑰論等を續講し、三月穴八幡放生寺に曼荼羅を建て、檀場に入る者万三千人と稱す、夏住心疏及悉曇字記を講し、六月衆請に應して密軌を授け、四年春梵網經を講し、牧野備州侯、喜多見若州侯、松平和州侯、隱州長州侯等に見ゆ 八月日光山に詣て東照宮を拜す、九月河内に歸る、元祿元年正月國禱を修すること例の如し、攝津武庫郡野間村に赴く、時に觀音寺大殿の營構成る、寺主の請により慶讃の會を設く、次て淡路福浦に到り、灌頂檀を慈眼寺に開き、高松に往きて太守に謁し、去りて備中河邊城に到る既にして備後西國寺の請に赴き、曼荼羅會を開き、結緣密灌を開く、三月下旬鞆浦に遊ひ、福禪增福二寺を經て敎興寺に歸る、四月敎興寺の大殿を營構し、彌勒慈尊の寶像を奉す、梵網經を境浦の十輪院に講し、敎興寺に移りて安居す、諸徒の爲に淸規を著し、題して妙極敎誡といふ、秘密要咒を集梓し、朝夕の課誦に充つ、八月巨鐘を鑄て敎興寺の高樓に置く、經藏一基を建て大藏經を安す、冬十月敎興寺に灌頂を行ふ、二年江戶に往き二月谷中多寶院の請に應し、四敎集解を講す、九月許可灌頂を授く、冠解妙法蓮華經を著す、三年二月法華經を講す、羽州侯柳澤保明篤く崇信し、十月靈岸島の別業に一宇を建て、師を請して瑞雲寺と號す、十一月許可灌頂を王子の金輪寺に行ふ、四年正月上野上石の請に赴き、梵網經を講す、三月朔夜普く緇素の爲に臨終の要誓を勸奬し、兼て密印秘咒を授く、歸路板橋を過ぎり、安養院に菩提心論の講筵を開く、三月二十二日將軍綱吉に羽州侯の宅に謁し、觀音普門品を講す、將軍深く信仰し、四たひ齋を賜ひ、三たひ香を賜ふ、夏許可灌頂を瑞雲寺に行ひ、辨惑指南を著す、八月二十二日將軍命を下し地を與へ精舍を搬建す、即ち今の寶林山靈雲寺なり牧野備州侯巨鐘を鑄て寺に寄進す、十月寶林山に移り、次て普門品を講し、隨行軌を授く、五年正月一七ヶ日大元帥の秘法を行ひ、兼て息災增益の兩護摩を修す、二月秘鍵及ひ盂蘭盆の疏を講す、亦護國僧正賢廣等の求に應し、許可灌頂を行ふ、寶幢閣を建つ、六年國禱を修すること例の如く僧三十人を率ゐて大般若經を轉讀し、將軍の武運を禱る、五月諸徒の爲に密軌を授け 結緣灌頂を行ふ、七月十五日理趣經千部を轉し、先亡の追薦に擬す、十月二日將軍武藏多麻郡上圖師莊を賜ふ、七年正月六日輿に乘りて登城を許され、六月二十九日將軍に召され、關八州眞言律儀の僧統に敘せらる、即身義、及ひ六物圖等を講し、冬二三子の爲に安祥寺流の蘊奥を授く、八年二月梵網經古迹を講し、南山の敎誡を講す、五月十一日將軍親筆して大元帥金剛の像一軀を賜ひ、靈雲寺に鎭す、九月十日大に結緣の曼荼羅を開く、十一月源輝貞上野高崎に大染寺を建て靈雲寺の支院となす、師其高弟戒深光に命して主とらしむ、同月悉曇字記を講し、那地鈔を草す、九年六月本多伊豫守忠恒田園を延命寺に寄せ、檀信を表す、寶林寺に許可灌頂を行ふ、十年正月辨顯密二敎論を講す、因に集解、及ひ沙蘗羅鈔 草す、閏二月三七日夜間結緣灌頂を設く、水戶の儒者森尙謙師の徳を慕ひ 此の灌頂を視して詩

を寄す、七月聲字實相、及び吽字義を講す、九月に至り許可灌頂を重行す、高野山寶性院主唯心阿闍梨の爲に安祥寺流の蘊底を授く、即身義の冠解を撰し、十月高弟本淨體に命して河内教興寺を掌らしむ、十一年三月首楞嚴經を講し、兼ねて冠註を著す、秋九月三密鈔の中字義門を講し、十一月門徒の爲に密軌を授け、灌頂を行ふ、幕府谷中の地若干を賜ひて沒後の塔院に擬す、十二月灌頂大殿を建て、四月二十三日落成す、大に曼茶羅供を設け、廣く慶讃の會を修す、尋て灌頂會を設け、五月即身義、秘藏寶鑰、及び菩提心論を講す、十月戒深光の請により結縁曼茶羅を大染寺に行ふ、十三年三月大に灌頂檀を開き、毘盧成道經疏一部二十卷を講す、既にして住心疏を講す、餘暇住心品疏冠註略解を著す、講學の餘暇杲寶僧都の演奥鈔を梓に附せんと欲して校正す、（其業畢らすして寂せしかば、門弟戒深光其遺志を繼きて完成したりといふ、）此年九月結縁灌頂を開く、十四年正月幕命により染王密供を修し、兼ねて般若を轉して將軍の子鶴千代公の疱瘡を癒す、此年復た梵網經を講し、灌頂を行ひ、大疏を授く、十五年正月不可思議の疏を講授し、許可灌頂を授く、二月秘藏記を傳授す、六月十三日暑氣に中り、醫師田中東說、近藤宗泉、交々藥を投するも効なく、幕府大醫令藥師寺宗仙院法印、及ひ船橋宗廸等に命して藥を配せしむるも、猶ほ應なし、再ひ澁江松軒、木村謙菴、須原通玄、關正伯等に命して晝夜病床に侍せしむ、遂に廿七日朝頭北面西して手に印契を結ひ、恬然として脫化す、壽六十四なり、谷中の地に葬り、妙極院と號す、得度の弟子四百二十六人、灌頂を受くる者百六十七人菩薩戒を受くる者万五千餘人、著作、悉曇三密鈔八卷、法華秘略要鈔十一卷、法華新註首書十二卷、住心品冠註九卷、辨惑指南四卷、大辨才天秘訣三卷、眞言大科證三卷、諸眞言要集四卷、普通眞言藏三卷、光明眞言觀誦要門、秘密觀行要覽、授法撮要、法界一觀圖、即身義冠註、眞言開庫集、十八道作法、各二卷、法華略要、梵網經集解、頭書種子眞言集、朝昏科誦二時作法、眞言施餓鬼作法、法華要略妙義、妙極堂誡義通用字輪卷、念珠略詮、隨求陀羅尼異本義、答四問編、摩多體文、二敎論通解、全婆誐羅鈔、各一卷あり、（淨嚴大和尚年譜草稿、淨嚴和尚行狀記、續日本高僧傳、近代名家著述目錄）

ジヨーゴン　淨嚴　カクキ覺彦を見よ、

ジヨーゴン　淨嚴　ニチゼン日禪を見よ、

ジヨーシン　淨眞　……一九〇〇　〔眞言宗〕山城醍醐山無量壽院の五代なり、淨眞字を侍從法印といひ、右中辨貞憲の孫成賢の甥なり、貞敏僧都に依りて出家し、建曆二年三月二十六日成賢に從ひて三寶院に登り、職位灌頂を受け、後松橋の法燈を續き、無量壽院の五代となる、仁治元年十月二十八日寂す壽缺く、（續傳燈廣錄）

ジヨーシン　淨眞　（二四四二）〔眞宗〕安藝廣島眞行寺の住持なり、淨眞は紀伊の芳英に隨ひて華嚴天台を承け、宗乘は深諦院の遺流を汲み、論議問答に長したりといふ、（學苑談叢）

ジヨーシン　淨心　一七五八‐一八二六　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、淨心は紀伊花園村の人なり、高野山に掛錫して諸老に親近し、密部に該通し、傳法灌頂を受く、仁安元年七月十三日

寂す、壽六十九。(本朝高僧傳、高野往生傳)

ジヨーシン 淨心 ショーヱ照慧を見よ、

ジヨーシンイン 淨心院 ニチカイニ日海尼を見よ、

ジヨージユン 淨純 エーショー榮祥を見よ、

ジヨーシヨー 淨勝 ……一九〇七 〔淨土宗西山派〕山城光明寺の學僧なり、淨勝字は良空と云ふ、證空に師事して淨土宗西山派の學を究め 光明寺遣迎院等に住して盛んに所承の教を弘む 文和九年二月十三日寂す、著作候詞鈔若干巻あり、(淨土總系譜)

ジヨーシヨー 淨清 二三六三 一四二五 〔淨土宗〕江戸麻布某菴の僧なり、淨清は江戸湯島の人なり、家世々豪富にして酒造を業とす、淨清早年三寶を欽崇し、肉食を忌み 女色を厭ふ、兩親の喪を畢り、三女弟を嫁せしめて後、貸附の券を取りて盡く借主に與へ、家財を從者等に配與し、飄然として出てゝ成覺寺團譽に就きて得度す、時に廿四歳なり、檀林に投して宗脉を相承す、されとも學問を事とせす、陶鍋一個を存し、日に一握の糯米を粥となし、鹽を和して喫す、阿彌陀佛を禮拜し、深信感激、泣涙するに至れり、親族相謀りて金帛を贈れは、直に丐兒に回施す、府中侯の母堂慈本院禪尼、一本松の邸にあり、其地師の菴に接するを以て延請して法要を問はんとするも、固辭して出てす、再三使來る、遂に使に伴ひ至る、破笠弊衣僅に身を覆ふなり、禪尼仰きて十念を受け、嗟嘆甚た多し、師固辭して一も受けす、其後禪尼等の問候を厭ひて其跡を晦ます、數年の後妹夫夏目氏の臣某の家に至りて曰く、我己に老衰す、死を取らん、と、某 室を造り、安居念佛せしむ、明和二年九月十三日端坐合掌して寂す、壽六十三(續日本高僧傳)

ジヨーセン 淨泉 リヨータ亮汰を見よ、

ジヨーゾー 淨藏 一五五一 一六二四 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、淨藏は京都の產、諫議大夫殿中監三善清行の第八子、母は嵯峨天皇の孫女なり、師寛平二年に生れ、七歳にして出家す、勝地を遊歷して專ら修練をことゝす、十二歳宇多法皇の弟子となり、勅により比叡山に登りて登壇受戒し、玄昭阿闍梨に就きて密教を受け、大慧法師に從ひて悉曇章を學ふ、天慶三年正月平將門叛する時、比叡山の首楞嚴院にて大威德の法を修す、朝廷諸名宿を召して仁王會を修する時、師待賢門の講師となる、天曆年中八坂寺に寓す、康保元年十一月二十一日、東山の雲居寺に寂す、壽七十四、(本朝高僧傳)

ジヨーソン 淨尊 (一八九二)〔眞言宗〕山城醍醐山御園の律師なり、淨尊は中納言律師といふ、成賢の室に入り、許可灌頂を受く、(續傳燈廣錄)

ジヨーソン 淨尊 三〇〇八 二〇五二 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、淨尊は貞和四年十七歳出家受具し、靜衍衍舜朝圓の三師に就學し、天台倶舍を習ふ、十九歳初めて諸社例講に出て康曆の夏大堂の立義者となり、至德二年の大會に初問役となる、明德二年六月七日寂す、壽四十五(三井續燈記)

ジヨーソン 淨尊 (……)(……)筑前の僧なり、淨尊は筑前の山中に菴居し、常に死肉を喰ひ、法華懺を修す、某年寂す、壽缺く(本朝高僧傳)

ジヨータツ 淨達 (一三六九)〔法相宗〕大和元興寺の僧な

り、淨達は慶雲四年九月に義法、義基、惣集、慈定等と共に新羅より歸來し、和銅二年十月右大臣不比等植槻道場に於て維摩會を修する際淨達を推して上首となす、示寂の年時缺く、（續日本紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ジヨーチヨー 淨超 二三七二 二四五一 〔黄檗宗〕山城宇治萬福寺の第二十二代なり、淨超字は格宗と云ふ、伊勢多氣の人なり出家して黄檗山に入り、衛天統の法を嗣き、天明六年六月二十二日進山して第二十二代の法席を繼く、一住五年にして寛政三年八月廿二日寂す、壽八十、（黄檗山歷代表）

ジヨーホー 淨法 ケンカイ兼海を見よ、

ジヨーミヨーニ 淨明尼 二四一二 二四七二 〔融通念佛宗〕大和高林寺の尼なり、淨明尼一名壽保尼といふ、攝津平野の人なり、俗姓は藤井氏なり、幼にして世塵を厭ひ、大念佛寺に居る、十四歳にして父を喪ひ、ます〳〵諸行の無常を知り、母に懇請して出家せんと欲す、母之を惜みて敢て許さす、廿歳に及ひて十月十四日の夜、手つから髮を切りて其志のあるところを示す、母も遂に其志の奪ふへからさるを知り、奈良法德寺の良虎和尙（尼の兄）の許に送りて剃度せしむ、即ち宗門の經敎を習ひ、尋いて故鄕なる長寶尼寺に寓居して大念佛寺の觀山和尙に從ひ、顯密の敎相を學ふ、寛政元年三十八歲にして大和辰の市藏野寺に居て勇猛精進す、融通念佛を以て往生の正業となし、每日行すること五十二匝して、五十二位に配す、一匝する每に一位に回向す、次に廿五匝して廿五菩薩を讃詠す、行業日を積みて好相を感す、後に奈良高林寺に移りて住す、歸依信仰の徒諠益增加す、時の人呼て今中將姬と稱す、嘗て謂へらく我れ嘗て密敎を聞きしも、未た其法を傳へす、實に遺憾なりとて、慈雲尊者の徒弟慈幢律師に從ひて四度の行法を傳受す、是より日に密供を兼ね修す、六十歲の夏より乳癌といへる病を患ひ、文化九年三月十五日寂す、壽六十一附法の弟子には壽照尼、壽惠尼、壽眼尼、壽信尼、壽蓮尼、壽養尼、壽戒尼、壽調尼、壽直尼、壽演尼、壽榮尼、壽仙尼等十二人あり、（壽保尼行業記）

ジヨーヨ 淨譽 イチネン一念を見よ、

ヅヨーヨ 淨譽 カクウン覺雲を見よ、

ジヨーヨ 淨譽 ソンホ存保を見よ、

ジヨーヨ 淨譽 ベンギヨク辨玉を見よ、

ジヨーヨ 淨譽 リヨーホ良補を見よ、

ジヨーリン 淨林 ジンケン深賢を見よ、

ジヨーレキ 淨歷 二三三六 二四〇八 〔黄檗宗〕武藏羅漢寺の二代なり、淨歷一に元歷字は象先號は如々子、鄕貫詳ならす、出家して黄檗宗瑞龍寺二代寶洲元聰に師事し、其法を嗣く、鐵眼道光禪師の遺命により、正德三年江戶に下り、羅漢寺に住し、松雲元慶の志を繼き、羅漢寺の大伽藍造立の經營をなし、享保二年正月より日々江戶市街を行乞して淨財を積み、困苦十餘年にして佛殿僧房等の工事功を竣ふ、同十二年二月大供養を修す、寛延元年六月五日寂す、壽七十三なり、師平素道行高く、日々般若理趣分ヵ卷、華嚴經行願品百五十卷を讀誦す、且つ一字百禮して大般若經六百卷を書寫し、三年間日々手指を刺して華嚴經八十卷を血書したり、其本今に羅漢寺に傳ふ、（黄檗宗鑑錄、江戶墓所一覽、江戶名所圖繪、舊事

若話）

ジヨーレン　淨蓮　ゲンエン源延を見よ、

ジヨーレン　淨蓮　ホーシン寶心を見よ、

ジヨーアン　常安（……一三〇五）大和元興寺の僧なり、常安は元興寺に住す、孝德天皇の朝十師に選はる、示寂の年時缺く、日本書紀、本朝高僧傳

〔考〕本朝高僧傳に入唐嘉祥寺吉藏に學びたりとあれども詳ならず、

ジヨーアン　常菴　リユースー龍崇を見よ、

ジヨーオン　常音　二四六六〔眞宗〕紀伊海部郡丁村眞敎寺の住持なり、常音は越中の人にして藥を鬻きて紀伊に來れり、生來道心深く、廿歲の時鷺森別院に於て桃花房智洞に謁し剃度を受け、爾來函丈に侍し、毎日宗餘乘に就き、二三個の不審を尋ぬるを例とせしかは、桃花房も大に其殊勝を稱したりと、宗義擾亂の時速に翻邪歸正して毫も餘臭を帶びず、後司敎となる、平素孜々學を勉めて身机案を離れず、睡眠を催すときは、額を爪して自ら警醒したるも、老年に至るまて變るなし、故に額の中央常に赤く、時々鮮血を出せりといふ、紀伊有田郡神職某曾て淨土宗西山派檜林椙取村總持寺住職辨才僧正に向ひて神佛の諍論を企つ、寺社奉行九鬼某陰に神道に左袒し、殆んと法門の大厄となる、當時其派内及び鎭西派に於て國書に通曉せる者全國に其人なし、師國學に深きを以て請に應して數々問答案を製し、遂に能く厄運を挽回せり、師所在の里は特に無法義にして唱導を參聽するものなかりしかは、毎月兩度の法鉢に師自ら村中戸毎に巡回して參聽を促せること數十年間怠らさりしに、遂に闔村其德化に歸して毎朝各家の家族かはる／＼參詣するを常となすに至りたりと云ふ、著作神佛逆源（卷數未詳）二辨龍燭篇一卷、返破一卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ジヨーキ　常輝（一三四一）〔……〕百濟の皈化僧なり、常輝は百濟の人なり、天武天皇十四年百歲の高壽に達す、同年勅して封三十戸を賜ふ、示寂の年時缺く（日本書紀、本朝高僧傳）

〔考〕日本書紀に天武天皇十一年の條並に十四年の條に常輝に封を賜ふと出づ而も十一年の條は後人の攙入なり、

ジヨーキ　常喜（……二〇六七）〔曹洞宗〕備中聖光寺の開山なり、常喜字は悅堂、京都の人、俗姓は平氏なり、十四歲天龍寺にて得度し、永澤寺の通幻寂靈に參し、能登に赴き、定光寺寶峰良秀に參して其法を嗣き、寶峰の總持寺に出世するに及び、其席を繼きて定光寺に主となる、備中守毛利元春安藝に聖光寺を剏し、師迎へられて之か開山となる、應永十四年正月一日寂す、（日本洞上聯燈錄）

ジヨーキ　常魏（……）〔戒律宗〕大和大安寺の僧なり、常魏俗姓を缺ぐ、道璿の高弟なり、大安寺にありて疏鈔を講ず、示寂の年時傳はらず（本朝高僧傳）

ジヨーキヨー　常曉（……一五二六）〔眞言宗〕山城法琳寺の學僧なり、常曉生國俗姓詳かならず、一說に大和秋篠の人なりと云ひ又一に山城小栗栖の人なりと云ふ、幼にして捨てられ、或人によりて養はる、元興寺の豐安に師事し、落髮して空宗を學ぶ、弘仁六年東大寺にて具足戒を受け、後弘法大師に從

ひて眞言の敎を習ひ、灌頂壇に登り、天長六年御齋會の導師となる、承和三年正月廿八日留學を命せられ、同月海に泛び風に逢ひて果さず、五年五月(一に六月に作る)遣唐使に從ひて入唐し、揚州に到る、棲靈寺灌頂阿闍梨文璨和尙、及び花林寺三敎講論、德元照座主に謁し、十二月節度使の處分を請ひて棲靈寺の大悲持念院に住し、和尙を拜して師となし、始めて法儀を學び、更に花林座主に從ひて三論の宗義を問ひ、並に章疏を得、太元帥明王の秘法を附せらる、これより先き唐に留學したる日本の僧靈仙抑留せられて歸へるを得す、遂に彼地に寂す、其遺命により侍僧より師に靈仙所傳の諸曼荼羅法文道具等を附す、師夜は瑜伽を學ひ、晝は諸寺を歷訪して法門を求め、李含等をして大元帥曼荼羅、諸尊の像、並に經軌を圖寫せしむ、六年二月十九日傳法阿闍梨位の灌頂を受け、五智の灌頂を得、承和六年八月歸朝す、七年六月三日山城宇治郡法琳寺に太元帥の靈像秘法を安置せんと請ひて許さる、師其木像を作り、先つ淸涼殿に置く、所謂御願堂なり、仁壽元年十二月廿九日眞言院御修法の例に准して毎年正月八日より七日間太元帥の法を修して常典となす、齋衡三年三月天下大に旱し、師詔により雨を禱りて驗あり、法琳寺の山號を改めて福德龍王山と云ふ、貞觀六年二月十六日法橋上人位權律師に任し、八年十一月三十日寂す、壽缺く、(一に七年寂すと云ふ)著作尊勝佛頂次第、入唐根本大師記、進官請來錄各一卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、弘法大師弟子譜、諸宗章疏錄)

ジヨーキユー　常久　一八〇〇 一八七三　〔天台宗〕近江園城寺の學頭なり、常久は其鄕貫師承詳かならず、南院にありて智證の一流を究め、亦龍淵の奧義に達す、常に信僧の座下に詣で、授決集の玄理を兼習し、本寺の學頭となり、法橋に叙す、建保元年三月十四日寂す、壽七十四、(三井續燈記)

ジヨーグ　常弘　二一二一 二一七三　〔眞言宗〕山城勸修寺第二十三代の長吏なり、常弘は伏見贈一品吏部卿貞常親王の第四子、後花園上皇の猶子、母は庭田贈一位源重有の女從二位盈子といふ、寬正二年に師を生む、師文明年間恒弘親王の室に入りて出家し、宣して親王となる、明應元年十二月十五日傳法灌頂を恒弘親王に受け、第三十六祖となり、長吏に補す、文龜二年兵を避けて加賀に往き、永正七年勸修寺に歸へる、十年宣して二品に叙し八月二十八日寂す、壽五十三、號して染王院と呼ふ、(後傳燈廣錄)

ジヨークワン　常觀　二二八八……　〔眞言宗〕京師の學僧なり、常觀は自息軒と號す、京師の人、舟橋式部少輔經方の官人なり、後水尾天皇の侍讀となる、三十四歲にして出家し、太秦の慈觀僧正に就いて灌頂を受け、四十九歲にして東下し、安藤爲實の客となり、水戶義公に招かれ、水戶藩に留寓す、義公白金十枚米百俵を給す、寬永五年閏正月六日江戶芝カハラケ町の假居に寂す、(舊得聞)

ジヨークワン　常觀　(……)〔眞言宗〕大和三輪の僧なり、常觀は大和三輪の人、久しく密法を修す、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

ジヨーケン　常賢　一九九九……　〔曹洞宗〕肥後鷲林寺の開山なり、常賢字は愚谷、幼にして出家遊方す、弘安六年寒巖義尹如來寺より大慈寺に遷る、師往きて之に師事し、記室となる、五

年の後檜越某鶴林寺を建て請して開山とす、後智足菴に退去し、曆應二年十一月三日寂す、法嗣五人あれども傳なし、（日本洞上聯燈錄）

ジヨーゴイン　常護院　リジユン理準を見よ、

ジヨーコーイン　常光院　ニチタイ日諦を見よ、

ジヨーゴン　常勤　二三三一　二四一四　〔眞宗〕山城興正寺の第九代なり、常勤字は寂永、童名は藤丸といひ、淮秀の孫にして圓尊の子なり、元祿三年四月二十八日得度す、二十歲五年二月廿日本山の晨課に始めて北座院家の上首に座す、五月廿七日助和を許され、十二年三月廿三日幕府に詣り、四月三日寺に歸る、享保元文の間始めて佛殿再興の擧を唱ふ、寶曆四年二月本山の執奏により大僧正に任す、是年七月十七日寂す、壽八十四遠慶院と謚す、（本願寺通紀）

ジヨーサイ　常濟（一五三六）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、常濟は初め慈覺大師を拜して剃髮得度し、長するに及び慧亮に就て顯密の法を學び、後慈覺の室に入りて兩部の大法を受く、貞觀四年敕を奉して西塔院に住し、第二代となる、十八年夏智證大師朝に奏し、師を延曆寺の總持阿闍梨となす、寂年、及壽缺く（本朝高僧傳）

ジヨーザイイン　常在院　ニチチヨー日朝を見よ

ジヨーザイイン　常在院　ニチゴー日豪を見よ

シヨージ　常慈　二二一四　二三七九　（眞宗）近江木部錦織寺の第十六代なり、常慈は第十五代の門主良慈の子にして京師京極家仁の猶子となり、天明七年良慈の後を繼いで錦織寺第十六代の門主となり、門末を敎導し、一派の法化を揚く、文政二年五月十三日錦織寺に寂す、壽七十六なり、（本願寺通紀、錦織寺歷代表）

ジヨージヤク　常寂　一六五〇　一七三四　（眞言宗）山城醍醐山の僧なり、常寂は北尾上人といふ、京都の人、俗姓は平氏、右大將惟範五代の孫、播磨守生昌の子、眞範僧正の弟なり、十九歲にして出家し、初め廣壽に四度の法を受け、長曆三年十一月十四日小野に仁海に謁し、醍醐山照阿院に灌頂を受け、密印を授けらる、承保元年四月十三日寂す、壽八十五、（續傳燈廣錄）

ジヨージヤク　常寂　ニチコン日近を見よ、

ジヨージヤクボー　常寂房　ケイチユー契中を見よ、

ジヨージユイン　常誦院　ニチキヨー日度を見よ、

ジヨーシユーイン　常修院　ニチジヨー日常を見よ

ジヨーシユン　常俊　二二六七　〔曹洞宗〕駿河眞珠院の開山なり、常俊字は賢窓出家して諸老の門を叩き、洞慶寺大巖宗梅に參すること久しうして、其法を嗣き、總持寺に出世し崇信洞慶二寺に歷遷す、次で駿河梅谷に眞珠院を創し、文明十六年越前龍澤寺に住す、明應二年大洞寺に補し、永正四年十一月四日寂す、弟子相謀りて塔を眞珠院に建つ、（日本洞上聯燈錄）

ジヨージユン　常順　二三六四　二四四七　〔眞宗〕山城興正寺の第十代なり、常順字は寂聽、童名は辨丸といふ、寂永の第三子にして鷹司房洪の猶子となる、享保七年十二月廿四日得度す、時に年廿九、本願寺寂如宗主の女竹姬を娶る、元文二年九月二日竹姬沒せしかは、其妹信姬を娶る、寬保元年三月幕府に詣り、江

戸築地の別院に館す、寶曆六年正月正僧正に任す、安永元年六月末寺阿波東光寺主興正寺本堂の再建の地に幟布を建て御本山と書す、十五日京都所司代之を禁す、三年七月太后藤原氏洪鐘を興正寺に寄す、此年七月江戸幕府の官女白銀二十枚錦戸帳一組を施し、京都所司代に告くる文に、本山興正寺の語あり、廿三日所司代之を却く、六年六月中旬近衞前關白内前公右小辨某をして興正寺寺務不正の事十條を警諭せしむ、天明元年十二月本山諸末寺の金を貢して色衣を著くるを許す、興正寺獨り古制を守り、敢て適從せす、二年二月讃岐高松領主に託して領下異計の徒十二寺を罰せしむ、此夏藤原太后の請に應し、淨土三經を寫して之を進む、三年五月寺社奉行本山に告けて去春以來興正寺門主天滿別院に揭けし本山號の標牌を徹せしむ、六月八日寺社本行興正寺家司に諭すに本願寺と和親し速に婚儀を成さしむ、四年八日佛殿上棟す、天明七年六月廿九日寂す、壽八十六、(本願寺通紀)

ジョーショー　常昭　(……—……)〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、常照は鄕貫詳かならず、幼時より戯れに自ら比丘の像を刻み、日々採花致供す、稍長するに及び園城寺に入りて天台敎を學ぶ、年三十にして寂す、其年時缺く、(拾遺往生傳、本朝高僧傳)

ジョーショー　常照　(二四二八)〔眞宗〕肥後玉名郡野部田村法光寺の住持なり、常照は一名は臻道、超倫菴と稱す、肥後八代郡某村の俗家に生れ、智蓮の門弟たり、東派某寺に於て薙髮し、後故ありて西派の法光寺に投す、寺主は少しく宗學を修めたる人にして、法務の暇には孜々として師に宗學を授けたり、同地は川上の願正寺なと云へる三業派の有力者ありて、該寺の法類は多く其徒なりしに、師法中講の法談に於て痛く三業義の非を排撃せしかは、大に法類の忌むところとなり、終に寺を脫して讃岐に遊へり、晚年に及ひて歸へれとも復た寺に住持せさりしといふ、著作眞宗安心相承義、同追說、各一卷、三帖和讃述要五卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ジョーショー　常精　トンジョー頓乘を見よ、

ジョーセツ　常說　リョートク靈督を見よ、

ジョーソ　常祚　二〇二三—二〇七一〔臨濟宗〕美濃大安寺の開山なり、常祚字は笑堂、俗姓は橘氏、攝津兵庫の人なり、十六歲にして剃髮受具し、業を京都建仁寺に受くること年あり、擧けられて記室となり、去りて大明寺の月菴光禪師に參す、月菴寂するに及び、大有席を嗣ぎ、師またこれにより玄旨を究む、美濃鵜沼に大安寺を剏してこれに居り、數年にして大明寺に遷り、應永十八年七月九日寂す、壽五十、臘三十七、敕諡圓應大機禪師の號を賜ふ、(本朝高僧傳)

ジョーソクドーニン　常足道人　イッサン佚山を見よ

ジョートー　常騰　一四〇〇—一四七五〔法相宗〕大和大安寺の學僧なり、常騰俗姓は高橋氏、京都の人なり、敎嚴大法師に就きて法相を學び、普く諸部を究め、殊に唯識を善くす大安寺に住して講を開き、延曆二十二年詔により崇福寺の檢校を兼ぬ、大同元年少僧都に任し、弘仁六年某日寂す、壽七十六、著作顯唯識疏隱決鈔十卷、唯識樞要要決八卷、唯識樞要鈔七卷、唯識論記二卷、了義燈記一卷、無垢稱註六卷、最勝註十

卷、法苑記六卷、樞要記二卷、（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジョーニン 常忍　ニチジョー日常を見よ、

ジョーニョ 常如　コーセー光晴を見よ、

ジョーネン 常然　ニチトー日東を見よ、

ジョーユイン 常瑜院　クワンショー寬性を見よ、

ジョーヨ 常譽　セツモン攝門を見よ、

ジョーラクイン 常樂院　ニチキョー日經を見よ、

ジョーロー 常樓 一四〇一 一四七四 〔法相宗〕大和秋篠寺の學僧なり、常樓俗姓は秦氏山城の人なり弱齡にして善珠僧正に從ひて出家し慈恩の宗旨を學び外學を兼ぬ、年二十歲に及び登壇受具す延曆の末勅を奉して秋篠寺に住し誓願を發して四十年間法華經を轉すること一十二萬四千九百六十卷又日に般若心經を誦すること一百八遍なり弘仁五年十月某日寂す壽七十四著作最勝王經鈔十卷あり（本朝高僧傳）

ジョーア 成阿　リョージツ了實を見よ、

ジョーイ 成意 （……）〔天台宗〕山城比叡山の僧なり、成意は叡山定心院十禪師の一なり、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ジョーエ 成慧 一九〇三 一九七五 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、成慧は安禪寺の寬伊僧正に隨ひて兩部の灌頂をうけ、安祥寺に住し、正安二年權僧正に任す、嘉元三年東寺三の長者に加任す、二年七月故ありて僧正の僧位を貶黜せられ、明年十月月蝕を加持して舊官に復さる、延慶三年第二の長者に加し、兼て寺務を領す、正和四年十二月二十三日寂す、壽七十三、東寺長者補任、本朝高僧傳）

ジョーオー 成雄 二〇四一 二一一一 〔眞言宗〕紀伊高野山寶性院の學僧なり、成雄は甲斐の人、二十歲の頃、關東に出て丶學問し、應永年中京都に游ひて顯密を究む、傍ら性相に通す、後高野山に登り、寶性院の宥快に謁す、兩部の大法を傳へ、寶性の席を補す、寶德三年五月八日住院に寂す、壽七十一、（本朝高僧傳）

ジョーケン 成賢 一八二二 一八九一 〔眞言宗〕山城醍醐寺の座主なり、成賢姓は藤原氏、中納言成範の子なり、幼より醍醐寺の勝賢僧正に投して落髮受業して灌頂法を稟け、遍照院に住す、承元三年大僧都に任ず、明年冬東寺の長者に加り、醍醐寺の座主に補す、建曆元年秋勅をうけて雨を禱りて驗あり、賞せられて、權僧正に任す、寬喜三年九月十九日寂す、壽七十、弟子四十人あり、著作兩界略次第、護摩次第各二卷、後七日法、佛頂鈔、駄都口決、結緣灌頂私記、各一卷、阿彌陀次第小次第、各二帖、灌頂護摩、野決鈔、各一帖、作法集、護摩理鈔、薄雙鈔若干卷あり、（密宗血脈鈔、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ジョーオー 成翁　ニチソー日窓を見よ、

ジョーカク 成覺　コーサイ幸西を見よ、

ジョークワ 成果　ジツイン實因を見よ、

ジョーグワン 成願　カクニョ覺如を見よ、

ジョーサン 成算 一六七二 一七三四 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、成算は興福寺仁盛威儀師の子なり、幼にして仁海僧正に養はれ、稍長するに及ひて、學日進す、二十八歲に至りて

灌頂を受け、野澤の兩流を汲みて餘さす、東寺の阿闍梨となり、曼荼羅寺に住して大に密藏を啓く、康平八年神泉苑に請雨經の法を修し、賞賜あり、延久元年春東寺の長者となり、六月權僧都に任じ、四年冬寺務を領す、承保元年正月七日寂す、壽六十三、眞言付法纂要鈔を著す、世に小野僧都と稱す、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

ジヨージツ 成實 (一八七三)〔三論宗〕京都東寺の長者なり、成實は寛信法師の孫弟子にして、學顯密に通し、僧正に補任す、東寺兼學の長者となり、寛信の後を續く、建暦建保の間請雨經の法を修し、靈驗あり、寂年、及び壽缺く、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

ジヨーシン 成信 (一九〇四)〔淨土宗西山派〕山城東山の學僧なり、成信は伊豫の人、其俗姓詳かならず、出家して東山證入の弟子觀日に師事して淨土の宗義を受け、後、伊豫に皈り、盛んに宗義を弘通す、寂年月日缺く、(淨土傳燈錄)

ジヨージン 成尋 (一六七一―一七四一)〔天台宗〕山城大雲寺の僧なり、成尋俗姓は藤原氏、參議佐理の子なり、寛弘八年を以て生れ、七歳にして岩倉大雲寺に入りて族兄文慶に師事し、剃髮受戒して內外の書を學ぶ、稍長して顯密の法を受け、大雲寺に住し、常に法華を轉す、延久四年六十二歳にし宋に渡り、天台山五臺山に歷遊し、靈異を感し、尋て汴京に入り、神宗皇帝に謁し、敕により太平興國傳法院に止まり、紫服絹帛の賜を拜す、時に西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿宣梵大師賜紫日稱翻譯に從事し、宋の沙門朝散大夫試鴻臚小卿宣祕大師賜紫慧賢、徒才大師、賜紫慧詢、中印土の沙門證梵、義廣、梵大師賜紫天吉祥等皆參與す、師其間に交りて論談す、六年夏敕を拜して雨を禱り、靈驗ありて帝の感賞を蒙る、後、十餘日善慧大師の號を賜ひ、譯場監事に任ず、此歳日本の便船に托し大小乘經律論五百二十七卷を寄送す、明年方物を白河天皇に獻じ、宋后贈るところの十六羅漢、及び僧伽の畫眞自肯等を大雲寺に寄す、師皇帝の優遇を蒙りて東皈するを許されず、開寶寺に住す、我永保元年宋の元豐四年疾に罹り、念佛して寂す、壽七十一、敕ありて天台山の國淸寺に全身を葬り、塔を建て題して日本善慧國師之塔と云ふ、師大雲寺にある時、觀心論註、法華經註、法華實相觀註、觀經鈔、普賢經科、善財童子知識集等若干卷を著作す、(朝野群載、元亨釋書、本朝高僧傳、寺門傳記補錄、佛祖統紀)

〔考〕百鍊鈔に成尋延久五年十月宋主の意により金泥法華經一切經錦二十段を獻すと云ひ、承保二年正月二十六日再び貨物を獻ずと云ひ、二度皈朝したるが如く見ゆるも、詳ならず

ジヨージユ 成就 コークワン公觀を見よ、

ジヨージユイン 成就院 ニチガク日學を見よ、

ジヨージユイン 成就院 ニチエン日圓を見よ、

ジヨージヨ 成助 (二〇〇〇)〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、成助は大臣僧正入道と號す、內大臣道重の子なり、禪助法師に就きて受學し、仁和寺別當傳法院座主を歷て嘉曆二年長者に任す、尋いて權僧正となり、元德二年正に轉す、元弘二年寺務に補し、建武三年法務に任じ、曆應三年大僧正に昇る、其寂年及び壽缺く、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

ジヨーゼン 成禪 (一六九六)〔眞言宗〕山城醍醐山の座主な

り、成禪は辨成房上人といひ、本比叡山の學徒なり、退きて醍醐山に在り、長元九年十一月十一日仁海僧正の法を嗣き法匠となる、後其終を知らす、（續傳燈廣錄）

ジヨーソン　成尊（一六七二—一七三四）〔眞言宗〕山城小野曼荼羅寺第二代なり、成尊は奈良の人、興福寺眞喜僧正の侍童にして延命麻品の子長和三年に生る、仁盛威儀師の猶子となる、稍長して小野の仁海僧正に投して出家す、先つ五經三史を讀み、諸陀羅尼を受く、尋いて四度の大法を習ひ、遂に長曆三年九月三日三昧耶戒壇に入りて傳法灌頂を受く、時に二十八歲なり、寂日和尚を受業師に仰き、南部の儀軌灌頂を受く、請雨の法を修錬し、夙に悉地を得たり、大阿闍梨位となり、仁海に入祖傳來の舍梨寶珠を與へられて人天の導師となり、其囑を受けて曼荼羅寺第二代となる、天喜八年五月旱魃に際し、師命を受けて六月十五日一七日間請雨の大法を修して驗あり、延久元年五月二十五日權律師に任し、三年二月三長者に加任す、六月二十九日少僧都に轉し、四年九月東寺二十八世の長者法務となり、承保元年正月七日寂す、壽六十三、著作愛染大次第口决、觀心月輪記、舍利講式、眞言付法纂要鈔、各一卷、六帖口决五卷あり、眞言付法纂要鈔は後三條天皇の勅を奉して撰したるものなり、法弟義範、範俊、明快等あり、（密宗血脈鈔、後傳燈廣錄、諸宗章疏錄）

ジヨーチヨー　成朝（一八四一—）七條佛所佛工なり、成朝は康朝の子なり、時に明圓と云ふ者興福寺佛師の職にあり、明京師の人佛師圓は定朝の弟子にして、三條一流の祖たる長勢より四代に當るものなり、師之を不當とし養和元年六月二十七日參內して已は定朝より六世の血統なるを演へて之を故障したれとも採用せられず、後鎌倉に下り、圓明の後を受けて院承と云ふ者職に就きたるを憤り、之を幕府に訴ふ、院承は七條大宮佛處院覺の孫に當れり、賴朝其狀を具して京師の裁判を請ひしか、興福寺佛師の事は遂に師の手に落ちすして其伯父なる康慶の子弟勤任することゝなりたり、（吉記、吾妻鏡）

ジヨーテン　成典（一六一八—一七〇四）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、成典は小野の仁海僧正の上足なり、灌頂を得て後仁和寺の圓堂院に居し、法驗の譽高く、封戶七十五を敕賜せらる、治安二年東寺の長者となる、萬壽四年春權少僧都に任ず、長元四年權大僧都となる、長曆二年六月十八日仁海と共に權僧正に轉す、長元八年敕により皇子誕生を祈りて住房を改めて寺となし、圓敎寺なる敕額を賜はる、寬德元年十月二十二日寂す、壽八十七、（密宗血脈鈔、本朝高僧傳）

ジヨーネン　成然（一九七二—）〔眞宗〕下總妙安寺の開山なり、成然俗名は行實、俗姓は中村氏、九條家の一族なり、事に坐して下總猿島郡一谷に謫せらる、親鸞に稻田に謁し弟子となり、成然と名く、寺を一谷に創して妙安寺といひ、後同郡三村に移つす、壽を善くし秀作世に傳ふと云ふ、（本願寺通紀、續本朝畫史）

ジヨーベン　成辨（二三三三……）〔淨土宗〕江戶蓮花院の開山なり、成辨は覺蓮社轉譽傳夢と號す、俗姓は川田氏、上野館林の人なり、善覺に就て剃髮し、法を增上寺智童に嗣ぐ、江戶淺草今戶蓮花院を剏して開山となり、寬文十二年四月十三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ジヨーホー　成寶　一八一九 一八八七　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、成寶姓は藤原氏、參議惟方の子なり、顯慧僧正に從ひて三論を學び、雅寶法印より密灌を受け、悉く玄秘を究む、治承三年三會の講師を經、建久八年權大僧都に任ず、正治元年元興寺に住し、冬法隆寺に移る、建永元年東寺の長者となり、法務を兼ぬ、承久三年權僧正に叙す、冬十二月僧正並に長者職を奏辭すれども許されず、四年春東大寺の主務に補す、建保元年詔を奉して神泉苑に雨を禱りて效あり、冬十月大安寺に遷る、承久元年四月大僧正に進み、三年正月又長者となり、寺務法務を領す、安貞元年十月七日寂す、壽六十九（密宗血脈鈔、本朝高僧傳）

ジヨーヨ　成譽　クワクドン廓呑を見よ、

ジヨーヨ　成譽　タイゲン大玄を見よ、

ジヨーヨ　成譽　チゲン智幻を見よ、

ジヨーヨ　成譽　テキドー的道を見よ、

ジヨーレン　成蓮　ケンイ兼意を見よ、

ジヨークン　盛訓（……）〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり。盛訓字は義翁、州翁壽欣に參して其法を嗣き、席を襲ひて下總總寧寺に主となる、寂年及ひ壽歆く、法嗣養室壽孝あり、（日本洞上聯燈錄）

ジヨーサン　盛算　一五九二 一六七五　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、盛算は字を淸住と云ふ、鄕貫詳かならず、長和二年東寺長者に任し、同三年權少僧都となる、長和四年七月寂す、壽八十四、（東寺長者補任）

ジヨーシユク　盛叔　シユートー宗唐を見よ、

ジヨーゼン　盛全　二一〇九 二一六五　〔天台宗〕近江西教寺第二代なり、盛全初の名は賴全と云ふ、鄕貫詳ならず、出家して比叡山に登り、西塔寶報坊に在り、顯密の學を究む、性酒を嗜み、數酩酊す、眞盛上人の比叡山に留るにあたりて相交り、上人の勸誡に遭ひ、靈夢を感し、遂に其弟子となり、盛全と改め、淨土敎に意を傾け、德化甚盛なり、永正二年七月十八日疾に罹り、八月十五日志賀の比良山西光寺に寂す、壽五十七、（眞盛上人往生傳記追加）

ジヨーセン　盛禪　トーセキ洞璿を見よ、

ジヨーソン　盛尊　……二四六四　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十六代なり、盛尊字は琪識、大和宇智郡野原鄕の人なり、出家して豐山に留學し、業成りて千葉妙見寺に住し、彌勒寺護持院を歷て享和三年豐山能化職となる、翌文化元年五月九日寂す、（新義眞言宗史料）

ジヨーテン　盛典（二四〇一）〔眞言宗〕下野佐野大聖院の學僧なり、盛典は鄕貫詳ならず、出家して眞言宗に歸し、內外の學を究む、寬保の頃、下野佐野植野大聖院第二十八代となる、同二年八十歲なり、其後幾もなく寂す、年月日詳ならず、著作悉曇字記指南鈔七卷、韻鏡易解新增大全、入定冥祥錄、冠註普籤大全、各五卷、韻鏡易解四卷、伊呂波童蒙鈔三卷韻鏡九弄和解、讀書暗論、聖道衣料編、入定記、普籤初心鈔、阿彌陀如來出現記、各二卷、韻鏡易畫易引、韻鏡易解字子、印判秘決集、各一卷あり、（聖道衣料編序文、近代名家著述目錄）

ジヨーノー　盛能　……二一五五　〔天台宗〕伊勢西蓮寺の禪僧な

り、盛能は北越の人、西教寺眞盛上人に師事し、眞盛派の念佛を行し、伊勢長田の西蓮寺に住し、化導盛んなり、明應四年正月十二日寂す、（緇白往生傳）

ジヨーヘン　盛遍（……）〔眞言宗〕山城理智院の第四代なり、盛遍は忠遍の法を受けて理智院の第四代となり、早く隱遯して、理智院の席を隆澄に付す其詳傳なし、（傳燈廣錄）

ジヨーヨ　盛譽　二〇三三　〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、盛譽字は明智といひ、業を禪爾及び凝然に受け、三學を精練す、初め久米多寺に住し、戒壇院に遷りて大に羯磨を張り、華嚴を敎へ兼て密乘を授く、貞治元年正月二十一日所住に寂す、壽缺く、著作五敎章鈔五卷あり、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ジヨーヨ　盛譽　ソンオー存雄を見よ、

ジヨーヨ　盛譽　リヨーキヨー良慶を見よ、

ジヨーリン　盛林　二二七七……　〔淨土宗〕伊勢淨閑寺の開山なり、盛林は泰蓮社琴譽卽阿と號す、伊勢の人、其俗姓詳かならず、虎角に師事して法を嗣ぎ、天正文錄年間山田に淨閑寺天機院等を剏して開山となり、後、京都金戒光明寺に移る、元和二年再び伊勢に皈り、同三年十一月二十一日天機院に寂す、壽缺く、法嗣淨譽淸印、體譽慶壽、敎譽隨門の三人あり、淨譽は京都聚樂松枝寺を開き、體譽は昌福寺を剏す、敎譽門隨の傳は別に擧ぐ、（淨土總系譜）

ジヨーレン　盛蓮（……）〔淨土宗〕相模某寺の僧なり、盛蓮は其鄕貫詳かならず、出家して尊觀に從ひ、後寂慧良曉上人に師事して淨土敎を學ぶ、寂年壽缺く、著作領解業成圖一卷あり、（淨土總系譜）

ジヨーア　乘阿　リユーゼン隆善を見よ、

ジヨーイ　乘伊　一七三四／一九九八　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、乘伊俗姓は藤原氏、聖勝の子なり、覺助、幸尊、實圓の諸師に歷事して深く天台を究め、後醍醐天皇に尊星王法、幷に不動秘法を授け、帝親ら水精念珠を賜ふ、師曾て除暗遍明抄、重書抄、守口抄、祖對抄等若干卷を著はす、曆應元年十一月十五日寂す、壽六十五、（三井續燈記）

ジヨーウン　乘運（……）〔淨土宗西山派〕尾張曼陀羅寺の開山なり、乘運字は光融、妙靜に師事して淨土宗西山派の學を修し、尾張久野庄飛保曼陀羅寺を剏し、其開山となり、又粟生野の光明寺に住し、盛んに道化を布く、寂年、及世壽缺く、（淨土總系譜）

ジヨーウン　乘運　二〇四六……　〔日蓮宗〕加賀本興寺開山なり、乘運は日像の弟子なり、加賀藥師村なる日像の舊跡に本興寺を開き、自ら開山となる、至德三年四月二十七日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ジヨーエン　乘圓　二二八八／二三三三　〔眞言宗〕山城五智山の中興なり、乘圓字は朗然、號を玄玄と云ふ、俗姓岡本氏、攝津大阪の人、男山昭乘に師事す、後智積院に投じ、隆長、宥貞、運敬の三能化に師事し、一宗の奧蘊を受け、且密乘院宥雄に見え秘密義規を受く、後山城五智山の廢頽を興し、中興祖となる尋で六波羅密寺に住し、修業の餘暇松花堂昭乘に就いて繪畫草隷を善し、自ら一家をなす、延寶元年五月二十一日暴に疾ありて寂す、壽四十六、（續日本高僧傳、扶桑畫人傳）

ジヨーエン　乘圓　ドウチユー道忠を見よ、

ジヨーエンボー　乘圓房　シユンガ俊賀を見よ、

ジヨーオン　乘恩　一二三八五-一二四四五〔眞宗〕京都一條淨敎寺の住持なり、乘恩字は湛然、號は大珠と稱す、近江河原村の人なり西吟の門下にして學諸部に通し、兼ねて古文辭を修す、延享元年際光韻鏡序を書し、太宰純序後を繼く、時に年十九歲なり、堺の覺洲嘗て師を門弟たらしめんと欲し、名を德州と授く、己にして德望を以て淨敎寺に住す、寶曆五年淨土三經音義五卷を著し、三井門主祐常、與門主法高、各序を書し了蓮寺文雄跋を作る、大經莊嚴記を著し、未た稿を脫せすして病を得、手足攣し、語言謇澁す、百療醫せす、終に廢人となること凡そ三十年、天明五年十月廿九日寂す、壽六十一洛西塗阪に葬むる、著作大經莊嚴記五卷、三經音義五卷あり（本願寺通紀、本願寺派學事史）

ジヨーオン　乘音　ウンドー雲堂を見よ、

ジヨーカイ　乘海　一七七六-一八三八〔眞言宗〕山城醍醐山第二十代の座主なり、乘海字は圓月、中將法印と稱す、中將師金の子なり、實運の灌頂を受け、應保二年勝賢の職を奪ひて二十代の座主となり、圓光無量壽兩院を帶ふ、屢々宮中に召され秘咒を誦して効驗あり、治承二年五月四日寂す、壽六十三、（續傳燈廣錄）

ジヨーカン　乘感　リヨーケー良冏を見よ、

ジヨーギヨーイン　乘行院　エグワツ慧月を見よ、

ジヨーグワン　乘願　シユーゲン宗源を見よ、

ジヨーグワンイン　乘願院　キヨーニン慶忍を見よ、

ジヨーシン　乘心（……）〔眞言宗〕大和五智院の律僧なり、乘心字は禪忍と云ふ、初め大悲菩薩に三聚の法を受け、後、實相上人に五篇の軌を承け、性相の學に通し、密敎に精しく、三輪の五智院に住す、世に阿門大乘心、又は三輪の上人と稱せらる、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

ジヨーシヨクボー　乘織房　インケン胤憲を見よ、

ジヨーセーイン　乘誓院　シヨーカイ性海を見よ、

ジヨーセン　乘專（…〇一二…）〔眞宗〕越前毫攝寺の僧なり、乘專初の名は淸範、姓は和氣氏、淸麿の裔なり、出家して禪宗に入り、兼ねて法華を讀む、丹波天田郡六人部莊大內林に梵刹を創す、元弘元年十一月覺如上人に歸仰し、眞宗の要訣を受く、建武四年九月重ねて請ひ、改邪鈔を著して與ふ、某年上人殊に師の創立したる寺に毫攝寺の額を與ふ、後丹波を出てゝ京都出雲路に住し、攝津川邊郡小濱に移る、丹後但馬を歷巡して寺を營み、大和吉野郡を巡化す、越前に遊ひ寺を今立郡横越、及ひ淸水頭に刱す、横越の誠證寺、淸水頭の出雲路山毫攝寺是なり、師覺如上人の季子菊壽丸を請して嗣となし、長するに及ひて寺務を委ね、丹波六人部に隱る、文和元年十月自ら最須敬重繪七卷を著す、某年三月八日大和吉野郡平尾村に寂す、（本願寺通紀）

〔考〕毫攝寺の傳によれは、天福元年親鸞京都出雲路に毫攝寺を開きて嫡子善鸞に附し、後越前に遷し、漸く廢頹す、乘專に至りて再興し覺如の子善入を請したるものなりと云ふ、然れとも其實乘專これを創して善入を請したるものなるべし、

ジヨータイ　乘躰 二四〇〇／二四六七 〔眞言宗〕高野山釋迦文院の學僧なり、乘躰字は光嚴房と云ふ、阿波板野郡竹瀬村の人、俗姓木内氏、出家して高野山に登り、顯密の學を究め、殊に倶舍論に精通し、發明するところおほく時人倶舍光嚴と云ふ、文化四年正月十日寂す、壽六十八、著作得捨逢源一卷等若干部あり、（高野山某氏返信）

ジヨータイイン　乘躰院　コーヘン光遍を見よ、

ジヨーニヨ　乘如　ニチウン日運を見よ、

ジヨーネン　乘念（一八八七）〔眞宗〕常陸如來寺の住持なり、乘念俗姓は藤原氏、尾張守親綱と稱す、兄は信親といひ、驍勇の名高し、師大に世を厭ひ、貞應元年に親鸞に謁して淨土敎を聞き、弟子となる、安貞元年親鸞常陸霞ヶ浦信田浮島に如來寺を創して、師に屬すといふ、（本願寺通紀）

ジヨーハン　乘範（一九一七）（法相宗）大和竹林院の學僧なり、乘範は敎尹に師事して、法相宗を學び正嘉元年維摩會の講師となり、竹林院に住す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ジヨーホー　乘芳（……）〔曹洞宗〕能登乘碩寺の禪僧なり、乘芳字は心華、天巽慶順の法を嗣ぎ、上野高夢院に出世し、後總持寺に遷り、又乘碩寺に轉住す、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ジヨーヨ　乘譽　カテン珂天を見よ、

ジヨーヨ　乘譽　ガクシユー學宗を見よ、

ジヨーヨ　乘譽　シユーソン周存を見よ、

ジヨーヨ　乘譽　ルトン流頓を見よ、

ジヨーヨ　乘譽　リユートン龍頓を見よ、

ジヨーレン　乘蓮　シヨーサイ生西を見よ、

ジヨージツアン　誠實菴　エケン慧見を見よ、

ジヨーセツ　誠拙　シユーチヨ周樗を見よ、

ジヨーチユー　誠仲　チユージユン中諄を見よ、

ジヨーニユー　誠入 二三ゝ六…… 〔淨土宗〕越前西福寺の僧なり、誠入字は聞益、行蓮社證譽と稱す、三縁山中谷に住し法門を研究す、後、敦賀西福寺に擢てられ法を江越若の三州に弘通し、諸堂を構營せり、貞享三年八月二十五日寂す、大原山に葬る、（鎭流祖傳）

ジヨーヨ　誠譽　ロテン露天を見よ、

ジヨーヨ　誠譽　テキサン的山を見よ、

ジヨーレン　誠蓮 二〇三五…… 〔戒律宗〕京都安樂院の律僧なり、誠蓮俗姓は藤原氏冬嗣四世の孫なり、俗名は俊經と云ふ出家して戒律を學び、受具の後敎を諸宗に問ふ、延文年中安樂院火災に罹る、師これを再興して開法し、晩年辭して專ら淨業を修し、永和元年五月二十五日寂す、壽缺く（本朝高僧傳）

ジヨーギヨーイン　上行院　ニチエー日叡を見よ、

ジヨーシユン　上俊（一九三七）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、上俊號は阿寶越後の人なり、出家して戒壇院圓照律師に師事す後善法院に住す、寂年缺く、（本朝高僧傳）

ジヨージヨー　上生　ゼンチユー善忠を見よ、

ジヨートー　上東　ジヨークワイ靜塊を見よ、

ジヨーシヨー　上昭 一八八九／一ゝ七六 〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、上昭字は寂菴、姓里共に未詳、藏叟叟に師事し、其法

嗣となる、後、宋に渡り、南浦、約翁、無象、樵谷と共に虛堂愚、偃溪聞、介石明、簡翁敬の諸老宿に參す、歸來大休念に依り、壽福寺に分座し、後、出世して藏叟の後をうく、晩年松鶴菴に退休す、正和五年六月十六日寂す、壽八十八、勅諡宏光禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

スの部

スエキ 須益 二〇六六 二一三三 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、須益字は大菴、薩摩の人なり、少にして福昌寺竹居に投じて剃髮す、寶德元年六月一日器之爲璠の室に入るを許され、法衣並に從上相承の嗣を付せらる、寬正四年長門大寧寺に住し、應仁二年龍文寺に遷り、文明二年耕雲軒に隱棲し、同五年三月二十二日寂す、壽六十八、臘五十二、大寧龍文二寺に塔す、法嗣全巖東純、爲宗仲心、平室安、海雲道會、泰伯康、箕外需糠、道圓あり、（日本洞上聯燈錄）

スーエー 崇永 二〇六一 二一二七 〔曹洞宗〕遠江圓通寺の禪僧なり、崇永字は古山、遠江周知郡飯田莊の人、七歲にして大洞寺如仲和尙に依り童役を執り、進具の後、大輝靈曜禪師に師事して法を嗣ぎ、遠江圓通寺を主とる、寺務二十餘年、應仁元年七月十三日寂す、壽六十七、（日本洞上聯燈錄）

スーキ 崇喜 ……一九八三 〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、崇喜字は見山、上野の人なり、祖元元の下に大事を了し、印可を附せらる、宋に遊びて諸老宿を歷訊す、後歸朝し、鎌倉の淨智寺に住し、尋て京の南禪寺に遷り、道聲益高し、天皇勅召あり禪要を問ひたまひ、佛宗禪師の號を賜ふ、後、東下して常陸の三會寺を開き、四來の學人を引接す、檀越の招により信濃の興福寺を開く、元亨三年六月八日金峯の正紹菴に寂す、壽不詳、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

スークワク 崇廓 （……） 〔眞宗〕豐前森山敎覺寺の住持なり、崇廓は陳善の上足にして、九州の學徒を領す、當時僧鎔慧雲の二師と併せ稱せらる、沒後諡して窮達院と稱す、嘗て繼成天倪二師同國にありて英名を擅にし、邪義を唱ふるや、師之を糾問して大に法を興す、繼成は小倉永照寺に、天倪は中津西淨寺に住したりといふ、師の著作に大經獨留記、六要鈔助覽、旁觀正僞編、各一卷、往生論註疏、往生要集唯稱記起信論義記箋蹄、各五卷、二卷鈔記七卷、幷に安樂集覆述若干卷あり、（淸流紀談、本願寺通紀、本願寺派學事史）

スーゴン 崇言 二五一六…… 〔眞宗〕出羽莊内田川郡鶴岡廣濟寺の住持なり、崇言は大寶院と號す、嘉永二年二月二十八日（一に二十三日）擬講となり、六年以後高倉學寮に四敎義集註、法華經、易行品を講し、安政三年二月二十六日寂す、（眞宗史料）

スーシ 崇芝 ショータイ性岱を見よ、

スーシン 崇信 グワッセン月筌を見よ、

スーシユー 崇酉 （……） 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、崇酉字は數夫、俗姓は平氏、長門大寧寺大菴須益の法を嗣ぎ、未だ出世に及はすして寂す、（日本洞上聯燈錄）

スーシユン 崇春 二一六九 二二三九 〔臨濟宗〕日向延命寺の開山なり、崇春字は天澤といふ、俗姓生國詳ならず、建長寺雲夢和

尙に師事して其法を嗣く、十九歳東國に下りて足利學校に學ふ、時に不閒と稱す、後、越前に遊び、一拍上人に師事して內外兩典を究め、四十九歳にして日向に入り、日井の延命寺を開き住す、永祿十二年同寺に寂す、壽六十一、門下に南浦玄昌出つ、（南浦文集）

スーセン　崇泉 二二〇九……（臨濟宗）京都妙心寺の僧なり、崇泉字は亨仲、少にして出家し、東陽に參して宗旨の奧義を究め、旨を奉して妙心寺に出世す、大永の初年、兩回尾張瑞泉に住す、天文十八年四月五日少林寺に寂す、（延寶傳燈錄）

スーチン　崇珍（……）（曹洞宗）越前洞源寺第一代なり、崇珍字は寶山、越前の人なり、幼にして出家し、聖興寺に於て普濟の敎を受け、久うして出て丶歷遊す、朝倉兵庫元勝越前に洞源寺を創建し、師を招きて居らしむ、後旨を奉じて總持寺に住し、盛んに普濟の道を唱へしが、辭して復洞源寺に歸り、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

スーデン　崇傳 二二二九―二二九二（臨濟宗）江戶金地院の開山なり、崇傳字は以心、俗姓は一色氏、紀伊守秀勝の子なり、南禪寺の長老にして金地院の住持たり、德川家康に侍して常に陣中に扈從して、筆札を司どる、味方原の役、敵兵家康の牙營を襲ふ、時に左右に侍するの士頗る少し、師刀を執りて鬪ひ、敵首三を得たり、家康之を賞し、黑星三を以て徽號となさしむ、慶長十三年召されて駿府に至り、家康に謁して命を受け、主として諸寺を管し、京都所司代板倉勝重と共に諸事を行ふ、十五年命によりて駿府に金地院を建て、後、京都南禪寺に亦金地院を建つ、十六年墨士哥に使を遣して通交を乞ふに方り、師召されて其復書草案を命せらる、元和元年足利氏の舊制に倣ひ、諸寺の僧錄職を命せられ、元和五年江戶に地を賜ひ金地院を增上寺の傍らに建立し、寬永三年敕して圓照本光國師の號を賜ふ、寬永十年一月寂す、壽六十五、師生前家康の寵遇を受くること最も深く、元和二年其薨するに臨み、本多正純と共に召されて枕頭に伺候し、秘密の遺言を受けたりと云ふ、又公家法度を初とし、禁中公卿に關する文書は、多く師の手に成る、其他比叡山法度、關東古義眞言宗法度、高野山法度、曹洞宗法度、興福寺法度、七大寺法度、關東天台法度、智積院法度、關東新義眞言宗法度、五山十刹諸山法度、淨土宗法度、淨土宗西山派法度、眞言宗法度、永平寺總持寺增上寺等の法度等、一として師の手に成らさるなく、武家法度案文の如きも亦其の筆になれりと云ふ、別に語錄、日記あり（史徵墨寶、寺社奉行記錄）

スートー　崇透（二二〇九）（臨濟宗）尾張瑞泉寺の禪僧なり、崇透字は濟關と云ふ、亨仲崇泉に參して遂に印可を受く、天文十八年尾張瑞泉寺に主となる、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

スーフ　崇孚 二二一五……（臨濟宗）京都妙心寺の禪僧なり、崇孚字は太原、駿河の大守今川氏親の子なり、幼にして京都建仁寺に入り僧となりて雪齋と稱し、西堂の位に居す、大休和尙の道風を慕ひ、參問久しくして玄旨に達す、後妙心寺に出世し、駿河の臨濟寺に住す、太守今川義元善德寺を創し、師を請して開堂說法せしむ、弘治元年十月十日臨濟寺にて寂す、壽臘缺く、勅して寶珠護國禪師と謚す、（本朝高僧傳）

スーボク　崇睦（……）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、崇睦字は天淳と云ふ、月航玄津に參して法を嗣ぐ、然れとも未だ出世に及ばずして寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

スーユー　崇祐（……）〔曹洞宗〕周防禪昌寺の禪僧なり、崇祐は其俗姓生國を詳かにせず、初め久しく周防禪昌寺慶屋禪師に師事して信衣を得、總持寺に出世し、次で禪昌寺に遷る、晩年に至り、山中に圓通菴を築いて退去し、某年寂す、世壽缺く、法嗣に聰徹あり、（日本洞上聯燈錄）

スーロク　崇六（[illegible]）〔臨濟宗〕武藏東禪寺の開山なり、崇六字は嶺南と云ひ、俗姓は守永氏、日向飫肥の人なり幼にして禪門を慕ひ、郡の角隱西堂に投じ、學年に及びて剃髮し、佐土原に往き、定山慧和尚に侍し、南北の京に遊び、差別の敎を聞き、駿河淸見寺に至り、說心宣禪師に謁し、復京都に歸り、大心院に掛錫し、芳澤恩和尚の下に參究し、印可を付せられ、妙心寺に分座す、後、東遊して江戶に到り、日向飫肥の郡主伊藤祐慶の第に投ず、祐慶待遇甚だ渥く、江戶櫻田に東禪寺を剏し、師を請して開山とす、出世して紫方袍を賜ひ、寬永初年妙心寺の請に應じて開法す、寬永二十年七月二十七日疾に罹り、後事を定州陶禪師に付し、安然として寂す、壽六十一、嗣法二十二人を出し、其中賜紫の者五人琉球に化を擧ぐる者一人あり、剃度の弟子六十餘人、明年六月勅諡大天法鑑禪師と賜ふ、（本朝高僧傳）

スーザン　嵩山　コチユー居中を見よ、

スーザン　嵩山　ドーシン道振を見よ、

スーオー　樞翁　ミヨークワン妙環を見よ、

スークシ　蒭狗子　ダイケン大賢を見よ、

スードーニン　雛道人　シユージク宗竺を見よ、

スイグワツ　水月　ロータン朗湛を見よ、

スイグワツドージヨー　水月道場　ジホン慈本を見よ、

スイグワツローニン　水月老人　シユーキ宗規を見よ、

スイサイシ　水才子　シユーエン宗淵を見よ、

スイウンケン　翠雲軒　チヨーグワツ澄月を見よ、

スイガン　翠巖　シユーミン宗眠を見よ、

スイウン　睡雲　シヨーソ紹蘇を見よ、

スイシンビヨーソー　睡心病叟　ニチシユー日收を見よ

スイオー　醉翁　ゲンロ元盧を見よ、

スイムアン　醉夢菴　チヨークー澄空を見よ、

スイイン　邃印（二三五九……）〔眞宗〕豐後長福寺の住持なり。邃印字は皎印、號は躰堂、東本願寺末なる山城淀願成寺に生れ、豐後日田長福寺に入り住す、內外の學を究め、尤圓覺楞嚴維摩の諸經に通じ、兼ねて禪を喜ぶ、元祿十二年五月十七日寂す、壽缺く、（豐綸詩史）

スイオー　遂翁　ゲンロ元盧を見よ、

スイテンシヤ　垂天社　ジンレー深勵を見よ、

ズイエンイン　瑞圓院　ニチイニ日怡尼を見よ、

ズイオー　瑞雄（二二三三）〔曹洞宗〕常陸芳全寺第一代なり、瑞雄字は威巖、俗姓は源氏、定利の族なり、幼にして下野の藥師寺にて出家受具し、後捨てゝ禪に入り、良室榮祈に乘國寺にて參し、服勤十二年、心要を付せらる、天文十四年水谷正村久下田に蟠龍山芳全寺を剏し、師を請して第一代

とす、天正某年正月十三日寂す、壽七十八、遺偈に曰く、虛空銷殞、大地平沉、日面月面、山高海深、(日本洞上聯燈錄)

ズイオー 瑞翁 シユンサク俊犢を見よ、

ズイオーイン 瑞應院 ニチヂニ日慈尼を見よ、

ズイカツ 瑞曷(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、瑞曷字は末宗といふ、紹喜に師事して法を嗣ぎ、妙心寺に住す、寂年及壽缺く、(延寶傳燈錄)

ズイガン 瑞巖 ショーリン詔麟を見よ、

ズイガン 瑞巖 ドンゲン曇現を見よ、

ズイガン 瑞巖 リユーセー龍惺を見よ、

ズイケー 瑞奎(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、瑞奎字は文益と云ふ、明叔慶浚に參して法を嗣ぐ、寂年、及壽缺く、(延寶傳燈錄)

ズイケー 瑞溪 シユーホー周鳳を見よ、

ズイケン 瑞見 二一七八 〔曹洞宗〕周防瑠璃光寺第三代なり、瑞見字は桃岳、備後下見氏の子なり、初め全巖東純に參して其法を嗣ぎ、周防瑠璃光寺に住し、第三代となる、明應三年長門妙榮寺の全巖を訪はんとして、萬倉鄉を過ぎ、正樂寺の古趾を再興し、天龍寺と更め稱す、筑前の原田某金龍寺を剏し、師請せられて開山となり、一年餘にして瑠璃光寺に歸り、永正十五年六月二十一日寂す、壽缺く、法嗣頸巖珠瑞あり、(日本洞上聯燈錄)

ズイコー 瑞光 (二三七三)〔新義眞言宗〕下野金蓮院の學僧なり、瑞光字は智瑞、鄉貫詳ならず、正德三年醍醐山寬順僧正より秘法を傳ふ、著作、醍醐住山日記五卷あり、(新義眞言宗史料)

ズイケン 瑞建(……)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、瑞建字は立叔、出家して明叔慶浚に京都妙心寺に參し、遂に其印可を受く、出世に及ばずして寂す、其年時缺く、(延寶傳燈錄)

ズイザン 瑞山(……)〔淨土宗西山派〕山城誓願寺の住僧なり、瑞山字は龍空、積峯慶善に師事して淨土宗西山派の學を究め、京都安養院三河山中の法藏寺等に歷住し、後、洛東誓願寺に主となり、其化を弘め、晩年洛南深草眞宗院に退隱す、寂年、及世壽缺く、(淨土總系譜)

ズイシユー 瑞宗(……)〔曹洞宗〕能登興禪寺の禪僧なり、瑞宗字は幻仲、初め講席に遊び、後鼎庵宗梅に參し、其法を嗣ぎ、總持寺に出世し、興禪寺を開く、晩年周防に至り瑞光院に居る、寂年缺く(日本洞上聯燈錄)

ズイシユン 瑞春 二一七八 〔曹洞宗〕豐前大寧寺の禪僧なり、瑞春字は繁林、出家して諸老宿に徧參し、次に足翁永滿に師事し、足翁の大寧寺天寧寺に歷遷するに從ひ、往きて衣法を付せられ、天寧寺に出世す、喜福寺及び筑前龍昌寺に主となり、永正十五年十二月十九日寂す、壽缺く、法嗣威仙宗貌あり、(日本洞上聯燈錄)

ズイシヨ 瑞初 (二一九二)〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、瑞初字は先照、功甫玄勳に師事して印可を受け、天文の初年尾張靑龍山瑞泉寺に主となる、寂年、及壽缺く、(延寶傳燈錄)

ズイシヨーイン 瑞照院 ニチツーニ日通尼を見よ、

ズイショードー 瑞松堂 ニチチョー日潮を見よ、

ズイセン 瑞仙(……)〔臨濟宗〕京師相國寺の僧なり、瑞仙字は桃源、號は蕉雨、別號は亨子と云ふ、相國寺にありて史記鈔十九冊、易鈔廿四冊を作る、▲増補見よ

ズイセン 瑞仙 二二四六…… 〔曹洞宗〕武藏宗關寺の二代なり、瑞仙字は碧山、由井城主大石定久の子、木曾義仲の裔なり、年廿五歳、心源寺主田に投して薙髮し、辭して乾晨寺自山に謁し、終に永林寺一種により、再び心源寺に歸へる、時に龍翁舜悅主席にあり、師親炙して印可を稟むり、永祿七年郡の牛頭山に入り、神護寺の廢趾に居る、城主北條氏照殿堂を修し、師更めて禪寺とし、名けて宗關寺と云ひ、瑞翁を請して開山とし、自ら次位となる、天正元年席を續きて主となる、晩年華嚴院に逸老し、同十四年二月二十一日寂す、壽缺く、法嗣谿州達翁あり、(日本洞上聯燈錄)

ズイタン 瑞潭 二二〇七/二二八四 〔曹洞宗〕甲斐廣嚴寺の禪僧なり、瑞潭字は菊隱、但馬城崎郡上杉村の人、俗姓荒木氏なり、父に從ひて越後に往き、十六歳同國の雲門寺鼎山に投して薙髮し、京都に入り、大德寺日峯に參し、奉侍三年、時の諸老に徧參せさることなし、廣嚴寺一華文英に謁し、參究一年を經て、遂に印可を蒙る、後、一華甲斐永昌寺に遷る、時に師隨侍して往き、後に其席を踵き、永昌寺を主とる、檀越の乞に應して甲斐の善應寺、武藏の瑞泉寺を開きて其開山となる、永正九年丹波の永澤寺に住し、後辭して歸へり、大永四年十二月八日廣嚴寺に寂す、壽七十八、臘六十六、(日本洞上聯燈錄)

ズイテー 瑞禎(……)〔曹洞宗〕常陸正法寺の開山なり、瑞禎字は祥山、明室玄浦に參じて法を得、玄浦の寂後席を繼ぎて多寶寺に主となる、晩年正法寺を剏し、某年寂す、壽缺く、法嗣獨峰存雄あり、(日本洞上聯燈錄)

ズイドー 瑞堂 ショーシュク紹肅を見よ、

ズイホー 瑞麗 二二二三/二三〇七 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、瑞麗字は奇伯、肥前の人、十一歳明鑑を禮して落髮し、出遊して長門大寧寺に往き、足翁に見え、未だ契せず、辭して近江徹月菴に往き、慶文長を訪ひ、止まること二年、又長門に皈り天甫存佐に參し、其嗣となり、其席を補して長門大寧寺に主となる、大永六年退隱し、玉雲寺に隱る、天文十六年七月七日寂す、世壽八十五、臘七十五、法嗣助翁永扶、大用宗俊の二人あり、(日本燈上聯燈錄)

ズイホー 瑞方 二三四三/二四二九 〔曹洞宗〕若狹空印寺の禪僧なり、瑞方字は面山、俗姓は今村氏、肥後三島の人なり、元祿十一年十六歳にして得度し、流長院遼雲に師事す、同十三年泰勝寺性天の下に臨濟錄を聞く、翌年湛堂律師に梵網經を聞く、同十六年江戸青松寺に掛錫し、卍山白、損翁益に見ゆ、次に德翁高に見えて示誨を受く、同年八月損翁益奥州に歸へる、師隨侍して恭心院に留る、寶永二年正月遍く關東の尊宿を問訊す、三月仙臺に歸へり、損翁益に事ふ、親しく法脉を付せらる、中陰畢りて後、東昌寺隱之顯に隨ふ、翌年江戸靈雲寺慧光律師より秘密三昧耶戒を受く、夏相模老梅菴に留る、寶永六年正月東昌寺に歸り、大藏經を閲す、享保四年肥後禪定寺に住して結制し、六祖檀經を講す、十四年春若狹空印寺

に住す、寛保元年永福菴に幽棲す、明和六年九月建仁寺西來菴に寓して、微疾あり、同月十六日寂す、壽八十七、臘七十二、永福菴に葬むり、老梅塔を建つ、法嗣二十七人あり、師初め泰勝寺性天の臨濟錄を聞き、次に正宗賛を聞く、日夕精研し、徹夜眠らす、遂雲之を嫌ひ訶責すれとも師背せす、遂雲一朝巡察するに點燈未た滅せす、驀然柱杖を携へて突入す、師篋中に蔵る、遂雲亂打して篋碎く、翌朝師偈を作り方丈の扉に貼す、曰く無似蘇山穿鐵壁、曉々活棒護雲門打住打沒祖師意、何說老婆望子孫、と遂雲大に怒りて擯出す、師深く懺謝して漸く赦されたりと云ふ、著作、永平得度畧作法、吉祥草、天童如淨行錄、釋氏洗淨法、洞上唱禮法、梵網素本口訣、洞上夜明簾、寶鏡三昧吹唱、續唱禮法、羅漢講式、天童淨禪師事略、諸堂安像記、得度或問、句中玄、普勸坐禪儀聞解、龜鑑文聞解、典坐敎訓聞解、各一卷、學道用心集聞解、衆寮箴規聞解、羅漢應驗傳、茗州永福和尙說戒頌古、稱提建撕記、永平家訓、觀音懺法、各二卷、洞上僧堂淸規考訂、大智禪師偈頌聞解、各三卷、洞上僧堂淸規行法鈔五卷、正法眼藏涉典錄十卷、正法眼藏聞解若干卷あり、(年譜、續日本高僧傳、近代名家著述目錄)

ズイホーイン　瑞法院　ニチジュ ニ日壽尼を見よ、

ズイヨ　瑞璵　二一六〇—二二三八　〔臨濟宗〕某寺の學僧なり、瑞璵字は玉崗號は九華と云ふ、鄕貫詳ならず出家して臨濟禪を傳へ、佛儒に兼通し、殊に漢詩文を以て聞ゆ、下野足利學校第七世學頭となり、天正六年八月十日寂す、壽七十九、(寒松稿)

ズイリューイン　瑞龍院　ニチシュー ニ日秀尼を見よ、

ズイオー　隨應　……—二三〇二　〔淨土宗〕信濃法藏寺の僧なり、隨應は還蓮社本譽直至と號す、俗姓は勝田氏、江戶の人なり林長に師事して宗乘を究め、信濃法藏寺に主となる、寛永十九年六月八日寂す、世壽詳かならず(淨土總系譜)

ズイオー　隨翁　シュンエツ舜悅を見よ、

ズイガン　隨巖　……—二二九六　〔淨土宗〕江戶幡隨院第二代なり、隨巖は咋蓮社阿譽と號す、智譽上人に師事して慶長七年十一月十四日璽書を授けられ、幡隨院第二代となる、寛永十三年十二月十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜　鎭流祖傳)

ズイギョー　隨行　ジュンパ順波を見よ、

ズイグワン　隨願　(……—……)〔淨土宗〕某寺の僧なり、隨願は大隅の人なり、德行甚だ高し、聖光の道譽を崇敬し、淨土門に入り化を助く、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

ズイシン　隨心　……—一九七四　〔淨土宗西山派〕山城雙林寺の僧なり、隨心字は國阿、號は直空と云ふ、播磨の人、俗姓は安氏、宮崎の城主國利の子、俗名は國明と云ふ、文和四年師四十二歲にして發心出家し、澤阿に師事して、淨土宗西山派の學を修し、洛東靈山正法寺、及雙林寺等に住して門業を張る、寂年、及世壽缺く、(淨土總系譜)

ズイシヨロー　隨處樓　タイゼン泰禪を見よ、

ズイジョー　隨乘　タンエ湛慧を見よ、

ズイテキ　隨的　……—二三〇七　〔淨土宗〕伊勢一行寺の開山なり、隨的は典蓮社忍譽と號す、阿譽上人の法を嗣ぎ、伊勢山田の一行寺、及び淨林院を開く、正保四年九月七日寂す、壽

缺く、（淨土總系譜）

ズイドー　隨道　ゲンセー元晴を見よ、

ズイドー　隨道　リョータイ良諦を見よ、

ズイニヨ　隨如　ギョーヨー堯庸を見よ、

ズイハ　隨波　二二二三／二二九五（淨土宗）江戸增上寺の第十八代なり、隨波號は定譽、俗姓藤原氏にして筑前檜屋の人、藤原端山の子なり、（一說江戸に生る父は麾下の士蜂屋氏と）幼より聰睿なり、慶長三年鄉の長德寺に入りて出家し、其後義學に志し、檀林に投し、關東の學匠を訪うて論場を重ね、幡隨上人に服し、師事すること數年にして圓戒を受く、又源譽觀智國師に從學し、上野國舘林善導寺に職を奉す、去て諸國に遊び、武藏小塚原誓願寺の廢亡を興し、駒込に常泉寺を開き、小石川に玄覺寺を建つ、寛永二年命に依り傳通院に住し、龍閑寺を神田龍閑町に開く、同十一年二月增上寺の第十八代となり、同十二年正月北谷に瑞花院の廢絕を興し、再建改修す、同年九月十日寂す、壽七十二（鎭流祖傳、三縁山志）

ズイヨ　隨譽　二三五四／……（淨土宗）筑後榮長寺の中興なり、隨譽は筑後嘉摩郡幸袋の人なり、傳譽に就て剃髮し、廣譽順長に師事して其法を嗣ぐ、後鄉里に皈り、日尾村榮長寺に住して中興祖となる、元祿七年十一月二十九日寂す、世壽缺く（淨土總系譜）

ズイヨ　隨譽　ゲンサツ玄察を見よ、

ズイヨ　隨譽　タンキユー單笈を見よ、

ズイヨ　隨譽　リョータツ了達を見よ、

ズイヨー　隨庸　二三四九／……（眞宗）山城佛光寺の第十九代なり、隨庸は二條攝政康通の猶子にして、堯然二品親王を戒師となし、僧正に任す、書畫を善し、寛文年中後水尾法皇の院宣を蒙り、後醍醐帝宸翰祖傳繪及詞を寫して之を奉る、甞て本願寺に倣ひ、文章廿九章を著し、法要を和述して門徒に授く、俗に廿九日御書といふ、元祿二年三月廿九日寂す、壽缺く、良正院と號す、（本願寺通紀）

ズイリユー　隨流　二二九六／……（淨土宗）相模光明寺の僧なり、隨流は肇蓮社源譽一法と號す、山城山科の人、雲潮虎角に師事して法を嗣ぎ、大に唱導に妙を得たり、初め上總撿見川善勝寺を創して開山となり、後生實の大巖寺に住し、第四代となる、又鎌倉光明寺に住し、越前福井の運上寺に遷る、晩年大巖寺に皈り、寛永十三年十月二十日寂す、世壽缺く、師生前江戸赤坂龍泉寺を刱して其開山となる、門下に世に傑出したる者多し、（淨土總系譜）

ズイリユーシ　隨流子　シユーギヨー宗堯を見よ、

ズイレン　隨蓮　（……）（淨土宗）祖源空上人の高弟なり、隨蓮俗姓生國詳ならず、源空上人に師事して淨土敎を受く、上人讃岐に流さるるにあたり、隨從して俱に困難す、上人滅後京師に在りて淨土敎を弘通す、示寂の年月日缺く、（淨土傳燈錄）

ズイゲン　蘂源　二一一一／二一八四（曹洞宗）奥州輪王寺の禪僧なり、蘂源字は天初、奥州太守伊達持宗の子十五歲得度し、敎部を習ひ、後耕雲寺周剛宗巖に參し明應七年輪王寺に出世し、耕雲寺光明寺に歷遷し大永四年五月十四日寂す、壽七十四、（日本洞上聯燈錄）

セの部

セキヨー 施曉（一四九七）（……）近江梵釋寺の僧なり、施曉俗姓不詳、延暦の頃學德を以て顯はる、桓武天皇近江梵釋寺を建立したまふに際し、請せられて住持となる、延暦十一年に上奏して曰ふ、竊以眞理無二、帝道惟一、敷化之門雖レ異、覆載之功乃同、故衞二護萬邦一、唯資二於佛化一、弘二隆三寶一、靡レ非二帝功一、又夫沙門釋子三界旅人、離レ家離レ鄕、無レ親、無レ族、或坐二山林一而求レ道、或蔭二松柏一而思レ禪、雖レ有三避レ世出レ塵之操一、不レ忘二護レ國利レ人之行一、而粮粒罕レ得、飢餓常切、伏望本州國分之供分二給彼所一、然則緇徒得レ不レ廢而修、聖恩有二不レ督而化一、云々、又上奏して曰ふ山背之民秦氏、及男女等三十一人、自二寶龜三年一迄レ今每歲春秋悔レ過、修二練其精誠一實可レ憐、伏願天慈賜レ度、又旌レ善之一化也、云々、即ち同年に勅して田百畝を梵釋寺に納れたまひ、後田千畝封五千戸を納れて修營の費に備へたまふ、されば施曉によりて梵釋寺大に興れり、延暦十三年律師となり、同十六年正月十四日少僧都となる、示寂の年時缺く、（七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳）

セヘー 施平（一四八七）〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、施平其生國俗姓詳かならず、天長四年淳和天皇藥師佛像を作り、蓮華法曼荼羅を金書し、宮中に法會を設け供養慶讃したまふ時、空海、豐安、世榮、明福等と共に法を論じ、優賞を賜はる、某年元興寺に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

セムイイン 施無畏院　クワンカイ寬海を見よ、

セムイイン 施無院　コーシン興信を見よ、

セムリヨーイン 施無量院　ショーキ聖基を見よ、

セゲン 世源（一八九三／一九八一）〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、世源字は太古、常陸の人なり、初め亢庵和尚に參謁して省し其下に在ること十年、後佛光禪師に見ゆ、禪師の巨福山に遷れる後、相從ひて益工夫參究し、師未だ契悟せず、禪師香嚴擊竹の偈を舉す、遂ひに廓然契悟す、謁を作り呈す、草鞵破處脚頭穿、纔到レ家時洗レ脚眠、昔日枉成二岐路泣一、今朝見得火中蓮、即ち第一座に推さる、永仁年中光福寺に住し、尋いで萬壽建長寺に歷住す、後巨福山中に向上菴を構へて屏居し、元亨元年九月廿五日寂す、壽八十九、勅諡國一禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

セゴー 世豪（一八二三／……）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、世豪本の名は範覺、靈夢によりて今の名に改む、筑前刺史藤原基實の子なり、仁和寺に居りて寬助に從ひ、密敎を學ぶ、嘗て觀慧を超えて冒進せしを以て高野山に斥けらる、眞譽闍梨は師と同學なり、先に山中に隱る、師逢ひて共に道を修す、大治五年僧都に任し、仁平三年四月某日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ゼアン 是菴（……）〔臨濟宗〕京都相國寺の僧なり、是菴は其鄕貫師承詳かならず、相國寺に住し、畫を能くし、瀟湘八景を畫きて其名を知らる、（本朝畫史、鑒定便覽）

ゼウン 是雲（二三三六／……）〔淨土宗〕周防實相院の開山なり、是雲は典譽と號し、俗姓は佐々木氏　出雲松井の人なり、法を潮龍に嗣ぎ、周防岩國に實相寺を開きて住し　延寶四年十

月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゼエー　是英　二〇三八〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、是英字は傑翁、俗姓不詳、早年相模の大度寺に入り、菴貫禪師を拜して得度し、尋で圓覺寺に入り、東峰川、大川通に師事し、元弘三年甲斐の心經寺に出世す、貞和觀應の間長谷寶福二寺を開く、出羽の資福寺、相模の大廣寺、淨智寺、圓覺等寺に歷住す、永和四年三月十二日圓覺寺中蹄源菴に寂す、勅謚佛慧禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼカイ　是海　テッシュー徹周を見よ、

ゼゲン　是還　クワクドー廓同を見よ、

ゼシン　是心　一九二六／一九九六〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、是心其俗姓生國詳かならす、文永三年に生れ、十四歲三井寺に入り、剃髮して後佛乘を究めしが、專修念佛の道に入り、名を向阿と更む、延元元年六月二日寂す、壽七十一、（三井續燈記）

ゼシン　是心　クワイソン快存を見よ、

ゼシン　是心　ショーケン證賢を見よ、

ゼシン　是心　ニチソー日相を見よ、

ゼシン　是心　ニチニョ日如を見よ、

ゼシユン　是春　クワイカン快侃を見よ、

ゼシヨー　是生　ニチシュツ日出を見よ、

セタン　是湛　二三二六／二四〇九〔淨土宗西山派〕京師東山禪林寺の僧なり、　是湛字は靈空と云ふ、父は佐久間義道、母は加藤氏なり、尾張熱田に生る、九歲家塾に入りて四書等を素讀し、十三歲伊勢大井寺に至り、鑒空上人に就いて得度し、內外の典を學ふ、十七歲尾張正覺寺に入りて學を力め、二十一歲炬範上人より法を傳へ、二十四歲洛西報國山に至り、絕道上人に師事し、二十七歲聖來山に遷り、普及上人に依り、大小性相の學を受く、三十九歲大井寺に入り、鑒空に師事し、五十一歲請に應して桑名淨土寺に住す、享保八年五穀登らす、師米三百餘石、銅錢二千餘貫を救與し、大施主と稱せらる、五十八歲請に應して東山禪林寺に住し、紫衣を賜はり、宮中に參候し、天顏を拜す、同年東下將軍に謁す、六十八歲信行菴に退隱す、後、京極佛光寺に入り、寬延二年八十四歲にして寂す、著作西山上人傳報恩鈔七卷あり、（靈空上人傳、蓮門經籍錄）

ゼテツ　是哲　二三一三〔淨土宗〕江戶重願寺の開山なり、是哲は本蓮社願譽と號す、下總の人、俗姓は椎名氏なり、州の光泉寺に入りて剃髮し、普光觀智國師に師事して宗學を稟く、江戶本所に重願寺を剏す、明曆二年十二月七日寂す、壽詳かならす、（淨土總系譜）

ゼデン　是傳　二三二六〔淨土宗〕駿河照久寺の開山なり、是傳は相譽と號し、出雲の人其俗姓詳かならず、隨波に師事して法を嗣ぎ、駿河久能に照久寺を剏す、寬文六年十二月十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゼトン　是暾　二二六二〔曹洞宗〕武藏龍穩寺の禪僧なり、是暾字は朝谷、俗姓生國詳かならす、永源寺大鏞良賀に師事して法を嗣き、武藏龍穩寺に住す、慶長七年十一月二十四日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゼネン　是然　ニチシュン日春を見よ、

ゼホー 是法（…………）〔淨土宗〕某寺の僧なり、是法は俗姓詳ならず、內外の學に精し、且つ世事に染まず、吉田の兼好法師等に交り、和歌に思を述ぶ、其作新千載新後拾遺集に載たり、示寂の年月日缺く、（鎮流祖傳）

セーア 誓阿 二五二三〔淨土宗〕京都知恩院第十二代なり、誓阿は圓智に師事して法を嗣ぎ、其席を受けて知恩院に住す、文中三年七月十九日寂す壽歆く、（淨土總系譜）

セーカイ 誓海 一九二五―一九七六〔眞宗〕山城佛光寺の第五代なり、誓海一名は願念といひ、佛光寺に住す、正和五年五月廿六日寂す、壽五十二、（本願寺通紀）

セーガン 誓岩 二二六三……〔淨土宗〕三河松應寺第三代なり、誓岩は光蓮社演譽昌馨と號す、俗姓は內藤氏三河の人なり、貞鈍に從つて淨土敎を學び、初め州の松應寺に住し、後奧川飯野の口善昌寺、及び總州佐貫勝隆寺等を剏して開山となり、慶長八年七月十四日寂す、壽缺く、法嗣宗呑あり、（淨土總系譜）

セーシン 誓眞 二四〇二―二四六〇〔淨土宗〕安藝光明院の僧なり、誓眞俗姓は村上氏、伊豫國務司城主村上賴冬の後裔なり、家道衰微して安藝廣島大工町に移り、白米商となれり、一夕婦人の店頭に來り、一領の着衣を出し、白米に易へんことを乞ふ、乃ち其衣を撿するに猶溫氣ありしかは、異しみて其故を問ふ、婦人曰ふ、妾明朝米の炊ぐべきものなし、因て今小兒の眠れるを伺ひ、着衣を褫ひ來り、一時の急を凌かんとす、と、師其實情を聞き、頓かに世味の冷淒なるを覺え、奮然として意を決し、嚴島に奔り、光明院了單和尙の室に入りて剃度す、時に二十五歲なり、爾來苦修鍊行を事とし、神泉寺に住し、道化高し、師嚴島の地狹隘にして、人口稠密に過ぎ皆生計に苦しめるを見、百方苦心し自ら山林に入りて、竹木を採り、念佛誦經の傍ら、刀鋸を執りて種々の器具を製し、島中の諸人に其製造を勸奬敎授し、遂に島中の人民耕職を知らずして衣食足るに至る、又飮用の水に乏しきを憂へ、四方に行乞して工費の料を積み、井十ヶ所を鑿ちて諸人の用に供す、其他道路溝渠堂廟等を修し、專ら心を公供に盡す、藩侯師の功勞を賞して物を賜ひ、且つ命して藝備孝義錄に其事績を錄せしむ、寛政十二年八月三日突然廣島の生家に歸り家人に永訣して曰く、吾命纔かに四日なり、と、果して六日に至り病なくして寂す、壽五十九、人々驚いて神泉寺に訃を通ぜしに、同寺に留めたる一匣中に、已れの葬具を悉く備へて收めありしと云ふ、（碑文）

セータツ 誓達（…………）〔淨土宗〕尾張善住寺の開山なり、誓達は音蓮社潮譽と號す、俗姓は田中氏、尾張愛知郡の人、廓呑に就て剃髮し、東漸寺順長に師事して法を嗣ぐ、御里本地村に皈りて善住寺を開く、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

セーハン 誓般 二二六二……〔淨土宗〕武藏月宗寺の開山なり、誓般は乘蓮社敎譽法林と號す、別に自ら無月と云ふ、其俗姓生國詳かならず、感譽に就て剃髮受業し、又清巖に從つて宗乘の奧義に達す、岩付淨國寺騎西大英寺に住し、共に第二代となる後武藏笠間月宗寺を建てゝ開山となり、慶長七年六月二十日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

セーヨ 誓譽 二二三三四……〔淨土宗〕駿河亨德寺の開山なり、

誓譽は江戸西久保の人、其俗姓詳かならず、知童に師事して宗乘を究め、駿河富士郡栗倉に亨德寺を開く、延寳二年七月十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

セーヨ　誓譽　キョーテン曉天を見よ、

セーヨ　誓譽　サンテキ三笛を見よ、

セーヨ　誓譽　ザンレー殘嶺を見よ。

セーヨ　誓譽　デンズイ傳隨を見よ。

セーエン　勢緣　（一七三四）〔眞言宗〕伯耆某寺の僧なり、勢緣は、出雲能義北部の人なり、少にして出家し、眞言を尊隆嚴範に師に受習し、後、兩界法を受く、晩年寺を伯耆に建てゝ移住し、承保年中八月十八日寂す、壽缺く（新修往生傳）

セークワン　勢觀　ゲンチ源智を見よ、

セーゾー　勢增（一七九四）七條佛所佛工なり、勢增は康助の弟子なり（一說には賴助の弟子といへり）、崇德天皇長承三年に仁增と共に東寺の二王を作る（大佛師系圖）

セーヨ　勢譽　二二七二　〔眞言宗〕高野山文殊院の僧なり、勢譽字は宗淳、號は可中、俗姓阿部氏、和泉の人なり、出家して高野山に登り、行人方となり、興山寺應其の後を繼きて同寺二代となり、大に行人方の勢力を張る、慶長十七年三月廿三日興山寺に寂す、壽缺く、（高野春秋、南紀風雅集）

セーヨ　勢譽　グテー愚底を見よ。

セーシン　制心　二五二六　〔眞宗〕尾張津島成信坊の住持なり、制心は正定院と號す、寮司となり、天保十五年高倉學寮に阿毗達磨論を講じ、弘化元年七月廿五日に擬講となり、嘉永二年夏秋の間鎭西十八通、三經往生文類を講し　安政六年七月十六日嗣講に進み、文久元年二月十日故ありて嗣講職を罷められ、慶應二年正月二十三日寂す、（眞宗史料）

セージヨー　栖城　二四五三／二五二一　〔眞宗〕若狹妙延寺の住持なり、栖城は肥前諫早に生る、俗姓は大坪氏、幼にして金光寺に投して落髮す、文政元年叢林に掛搭し、南遊して芳樹に從ひ、宗乘を硏む、兼ねて華嚴を學び、後、天台を三井の敬長に受く、適々學林にて龍華に謁し、其行信の說に服し、拜して師とす、同十二年龍華の薦により、若狹妙壽寺に住す、天保二年科に登り、漸く進みて司敎に任す、嘉永二年探玄記を副講し、五年歸省す、會々師を本國に請ふの議あり、故を以て若狹に歸へり、寺務を辭す、安政元年往生要集を副講し、冬肥前に歸へり敎宗寺住持たり、此年勸學に任し、翌年本黌を領し、其翌年小經を講す、且つ命を奉して高僧和讃龍樹章を侍講す　文久元年東上して大會に値ひ、四月若狹に抵り、春來疾に罹り　遂に七月十六日を以て寂す、壽六十九、謚を易行院といふ、著作、因願成就兩文對辨、往生要集義例、各一卷、眞宗要義決若干卷あり、（碑文、本願寺派學事史）

セーロシ　栖蘆子　シユーミン宗珉を見よ、

セーシンソー　棲神叟　ゲンセツ玄節を見よ、

セーヨ　晴譽　ジユンパ順波を見よ、

セーリユーシ　掣龍子　ジンコー諶厚を見よ、

セキオー　碩翁　シユーハン宗胖を見よ、

セキケー　碩圭　（……）〔臨濟宗〕筑前覺晶菴の僧なり、碩圭字は玄室、其鄉貫詳かならず、運勝の室に參して印可を受け、筑前に覺晶菴を創してこれに住す、寂年、壽缺く、（延

寶傳燈錄）

セキシユー 碩宗　クワ果を見よ、

セキユ 碩由 二一〇七／二一六七 〔臨濟宗〕筑前聖福寺の禪僧なり、碩由字は一華、俗姓は秦氏、筑前の人なり、幼にして郡の建德寺梅隱禪師に投じ、十七歲にして落髮受戒す、後、徧く諸老に謁し、覺晶菴に玄室碩圭に參し、勤侍六年、遂に省あり、偈を呈して曰く、趙老無無已絕レ無、無無絕處卻呈レ無、芭蕉葉上題ニ無字一、蕉葉破時無亦無、と、碩圭遂に印可を付す、文龜三年聖福寺に住し、禪餘諸經論を講じて學徒を誘掖す、晚年覺晶菴に歸り、永正四年二月疾に罹り醫藥を卻て用ひず、三月四日偈を書して曰く、脫ニ卻三界一、六十一年、一機轉處、日月交レ肩、と、泊然として寂す、壽六十一、（延寶傳燈錄）

セキアン 石菴　シミヨー旨明を見よ、

セキアン 石菴　ジシユー慈舟を見よ、

セキアン 石菴　シユーカン舟鑑を見よ、

セキオク 石屋　シンリヨー眞梁を見よ、

セキオン 石園　シヨージユ正受を見よ、

セキサン 石山　リヨーゲン良源を見よ、

セキシツ 石室　ゼンク善玖を見よ、

セキスイ 石水 二三九九／二三四九 〔臨濟宗〕奧州圓同寺の禪僧なり、石水は幕府麾下の士落合某の子なり、少小薙髮して僧となり、諸州を行脚す、後來りて涌谷圓同寺に住す、曾て閣老板倉氏と舊交あり、伊達家寛文の事變あるに方り、伊達安藝の密旨を受け、屢々江戸に往來して當日の事情を幕府に伸ふ安藝等忠義の志を達し伊達家を安んずるもの石水與りて力ありとす、事平ぐに及び、安藝の子之に酬ひんとす、石水一詩を壁書して曰く、石居水宿也風流、到處溪山任ニ杖頭一、此去禪捿天下濶、扶桑六十有餘州、と飄然として去り、後、攝津島上郡眞上村光德寺に住し、元祿二年正月二十九日同寺に寂す壽六十、（仙臺史傳）

セキセン 石泉　ソーエー僧叡を見よ、

セキソー 石叟　エンケー圓桂を見よ、

セキチユー 石宙　エーサン永珊を見よ、

セキヘードーニン 石平道人　シヨーサン正三を見よ、

セキモン 石門　トクレー德令を見よ、

セキリヨー 石梁　ニンキヨー仁恭を見よ、

セツアン 雪菴　シユーケー宗圭を見よ、

セツエン 雪園（　）〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、雪園は雲舟の畫法を學び花鳥を書くに最も妙を得たり、（扶桑畫人傳）

セツガン 雪巖　カクズイ覺端を見よ、

セツガン 雪巖　ユーシヨー侑松を見よ、

セツクワン 雪關　シヨーシユ紹珠を見よ、

セツケー 雪溪　シヨーケー祥啓を見よ、

セツケー 雪溪　シユーセツ宗雪を見よ、

セツコー 雪江　ホコー保廣を見よ、

セツコー 雪航　シユーシン宗深を見よ、

セツコー 雪光　シジユン孜純を見よ、

セツサイ 雪齋　リヨークン良訓を見よ、

セツサイ 雪齋　スーフ崇孚を見よ、

・**セッサン** 雪山 クツクドン鶴雲を見よ、

セッサン 雪山 エガン慧岩を見よ、

セッサン 雪山 ソーヨー僧鎔を見よ、

セッシン 雪心 シンショー眞昭を見よ、

セッシユ 雪主 ミツウン密雲を見よ、

セッシユー 雪舟 トーヨー等楊を見よ、

セッシユー 雪岫 シユーシユー宗秀を見よ、

セッソー 雪窓 ユーホ祐輔を見よ、

セッソー 雪窓 ホーシヤク鳳積を見よ、

セッソー 雪叟 イチジユン一純を見よ、

セッソー 雪叟 シヨーリユー紹立を見よ、

セッソン 雪村 ユーバイ友梅を見よ、

セッタク 雪澤 (……)〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、雪澤は奥州の人にして常に仁王經を讀む畫を好み能く佛像を畫く、雪舟の筆意を宗とす、(皇朝名畫拾彙)

セッタン 雪潭 シヨーボク紹璞を見よ、

セッテー 雪鼎 エジツ惠實を見よ、

セッネン 雪念 二二三四 二三〇〇 〔淨土宗〕江戸增上寺第二十代なり、雪念は良蓮社南譽と號し、慈眼と稱す、俗姓詳ならず、初め甲斐國巨摩郡龍王村曹洞宗慈昌寺に住し、宗内の弊風を厭ひ、江戸に入り青松寺に留り、尋て淨土宗增上寺存應上人に皈して教を受く、幾もなく學德衆に抜んじ、飯沼弘經寺に住し、寛永十六年二月增上寺第二十代の貫主となる、同十七年九月十八日寂す、壽六十七、(三緣山志)

セッドー 雪洞 (……)〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、雪洞は奥州會津の人、其姓氏詳かならず、書法を雪舟に學ぶ半身の達磨、及花鳥の秀作あり、(本朝書史、扶桑畫人傳、鑒定便覽)

セッドー 雪堂 二三一五 二三四六 〔黄檗宗〕肥前長崎崇福寺の住僧なり、雪堂は明の人、延寶二年西來し、長崎崇福寺に留て後、聘に應して伊豫松山に遊化す、貞享三年二月十六日寂す、壽三十二、(黄檗史料)

・**セッポー** 雪峯 (……)〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、雪峯は大覺良高禪師の法孫恬存和尚の法嗣なり、畫を能くして嘗て少林寺の祖像及芙蓉峯の圖を畫きたりと云ふ、(鑒定便覽)

セッポー 雪舫 (……)〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、雪舫は雪舟の畫法を學び、雜畫を能くするを以て知らる、(本朝書史、鑒定便覽)

セツレー 雪嶺 エーキン永瑾を見よ、

セツアン 拙菴 チドー智幢を見よ、

セツガン 拙巖 ……二五二〇 〔眞宗〕肥前平戸龍溪山光明寺十一代なり、拙巖は百癡道人と號す、豐前の人なり、少にして淨信院の門に入りて宗典を研究し、長崎の光源寺に住す、松浦肥後守源熙侯の側室幾世の歸依を得、侯に招かれて平戸光明寺に移住す、嘉永四年六月助教となり、七年六月司教に進み、安政四年安居佛心印記を學林に副講す、萬延元年六月二十三日病を以て寂す、私謚して全痴院といふ、明治十四年法主巡教の際生前の學德を追賞して厚く香花料を賜ひ、廿四年十一月勸學職を贈らる、著作、眞宗要義論、眞宗關節義、正

信偈講讃、光號因緣義、二種深信釋、江湖錄、淨土和讃攝釋末代章柳川錄、眞宗斷疑辨、雪朝茶話、國家繁昌記等若干卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

セツドー　拙堂　ゲンコー元劼を見よ、

セツドー　拙堂　シユータ宗汰を見よ、

セツサン　說三　シユーサン宗璨を見よ、

セツソー　說叟　シユーエン宗演を見よ、

セツドー　說道　二三二九……〔淨土宗〕江戸道林寺の開山なり、說道は照蓮社寂譽と號し、上總の人なり、幼にして江戸天德寺滿龍の室に入りて剃髮し、潮龍に師事して宗乘を究む、後、江戸淺草三谷に道林寺を開きて此に住し、萬治二年四月十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

セツモン　攝門　二四四一 二四九七〔淨土宗〕江戸增上寺の學僧なり、攝門は常譽察阿と稱す、武藏江戸の人なり、天明元年に生る、寬政五年十三歲にして伊勢に赴き。翌六年十四歲にして伊勢深野村にて得度し、察龍と云ふ、同年の冬漢文にて妙俊尼傳を作る、同地に留りて講學修行を事とす、和漢內外の典籍手に任せて繙き、且つ數年の間に阿彌陀經を讀誦すること十七萬部、佛菩薩を禮すること三十六萬遍に餘る、文化四年京師に上りて嵯峨淸凉寺に留り、爲講學修行に耽る、芝山大納言に和歌を學びて秀作あり、同十年江戸に下りて增上寺に投じ、境內中谷の寮舍に學徒を敎授す、十二年同寺の大僧正敎譽上人より攝門と云ふ名を與へらる、爾來攝門を以て聞ゆ、文政元年七月二十日寮舍に於て原人論の講席を開き、且つ講解三卷を撰して學徒に與ふ、二年三緣山志十二卷を撰し、敎譽上人に進む、翌三年續三緣山志十卷を撰す、尋いて四年十月廿一日增上寺を辭し俗に歸す、其增上寺を辭するに方り進學日札三卷同續編一卷を作りて大衆に與へ、置文一篇を作りて寮舍に止む、其文意に德行なくして供養を受くる罪業恐ろしければ、今より供養を受けざる身となるよしいへり、乃ち湯島に隱棲し、覺齋と號し、讀書を事とす、當時和漢學の名家皆親交あり、近藤守重、（正齋）松崎復、（慊堂）立原萬、（翠軒）松平定常（不輕居士）塙保己一、尾代弘賢等常に往來したり、後、幕府の侍讀となり、天保二年舊考餘錄五卷を上り、金五十兩を賜はる、天保九年某月江戸に逝去す、壽五十七、（一に五十八）著作頗る多し、寬政五年より文政四年俗に歸するまで九十七部二百十九卷に及ぶといへり、然れども其目詳ならず、三緣山志十二卷、續三緣山志十卷、（首卷一卷存し、餘は散佚す、）四本山志十卷、十七檀林志十卷、無量山志六卷、新撰淨土系統略五卷、廣濟和尙傳三卷、淨宗祭神祝禱篇三卷、釋迦佛傳來記三卷、善光寺如來渡證考二卷、法儀職令一卷、舊考餘錄五卷、原人論義解三卷、進學日札三卷、續進學日札一卷、妙俊尼傳一卷、崇廟祭名錄若干卷等あり、（淨土宗史料）

セツアン　節菴　リヨーキン良鈞を見よ、

セツコー　節香　トクチユー德忠を見よ、

セツサン　節山　リヨーグワン了願を見よ、

セツドー　節堂　ソチユー祖忠を見よ、

セツケー　折桂　ゼンチユー全衷を見よ、

ゼツカイ　絶海　チユーシン中津を見よ、

セツガイ　絶崖　シユータク宗卓を見よ、

セツガン　絶巖　ウンキ運奇を見よ、

セツシヨー　絶照　チコー智光を見よ、

セツホー　絶方　ソチヨー祖裔を見よ、

センカイ　仙崕　ギボン義梵を見よ、

センガク　仙覺（一九三四）〔天台宗〕相模新釋迦堂の僧なり、仙覺は其郷貫を詳かにせず、初め鎌倉新釋迦堂に居り、權律師に任せられ、後遷りて武藏比企郡に居る、和歌を善くし、萬葉に通ず、龜山天皇の時其の訓を施して古訓を改竄し、後、後嵯峨上皇に獻す、上皇大に嘆賞し、敕して其歌を續古今集に收めたまふ、（大日本史）

センカク　仙岳　シユードー宗洞を見よ、

センガン　仙巖　ノーハン能範を見よ、

センガン　仙岩　ゲンスー元嵩を見よ、

センケー　仙溪　シユーシユン宗春を見よ、

センゲン　仙原（……）〔臨濟宗〕筑前承天寺の禪僧なり、仙原字は耕叟、俗姓生國不詳、聖一國師の下に在り、尋て鎌倉に下り、無學元に謁す、後國師の下に歸へり、其法嗣となり、筑前承天寺に出世す、肥後の檀越某竹林寺を開きて師を請す、師乃ち開山となり留住す、西國の學侶皆其下に集る、因レ雪示レ衆偈、寥寥宇宙無ニ遮欄一、佛國三千一日間、誰把ニ須彌一藏ニ芥子一、白乾坤外更無レ山、示寂の年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

センジユイン　仙壽院　ニチカン日閑を見よ、

センチヨー　仙朝（一八六二—一九三八）〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、仙朝は其郷貫師承詳かならず、文永四年別當に任し、七年護持僧に補し、建治二年大僧正に勅任せらる、弘安元年十二月十四日寂す、壽七十七、（三井續燈記）

センチヨー　仙丁　ユーテー宥貞を見よ、

センミヨー　仙命（一六七四—一七五六）〔天台宗〕近江無動寺の僧なり、仙命は丹波の人、幼にして比叡山に登り、天台敎を學び無動寺法花坊に住し、止觀を究め、坐禪をなす、中年より法華三昧を身行とし、彌陀念佛を以て口業となす、額に三寶名字を彫み、背に彌陀形像を鏤め、手足の指を燒きて佛を供養し、永長元年八月十三日寂す、壽八十三、（拾遺往生傳）

センヨ　仙譽　シユンハ俊把を見よ、

センリン　仙林　シヨーギク性菊を見よ、

センアン　宣安　ミヨーゴン明言を見よ、

センエン　宣圓（一八七二）三條一流八代佛工なり、宣圓は定圓の子なり、法眼に叙せらる、建暦年代の人なり、（明月記）

センカイ　宣界（二四七一—二五五〇）〔眞宗〕越後本與坂光西寺の住持なり、宣界は越後頸城郡櫻町新田眞常寺惠照の長子にして三島郡本與坂村光西寺に住持せり、志學の年崑崙社に入り、興隆僧朗二師に師事し、慧麟師に兄事して宗乘を研究すること凡十年、造詣頗る深し、後私塾を寺側に開き、子弟を敎授す、興正寺攝信上人額を賜ひて德水社といふ、慶應三年秋司敎となり、明治五年朝廷敎導職を置く、師十一級試補に命せられ、後進みて權少敎正に至る、十六年夏勸學職に登り、十七年安居讃阿彌陀偈を大敎校に代講す、廿三年二月病を現し、二十

八日寂す、壽八十、宗主諡を與て正化院といふ、著作易行品拾遺鈔、同安政錄、玄義分明治錄、選擇集二行章明治錄、入出二門偈安政錄、同慶應錄、聖德太子奉讃明治錄、正信偈拾遺、本類成就文安政錄、同撮要、十八願文安政錄、六合釋元治錄、大經五惡段東京記、因明入正理論玄談、各一卷、淨土論招拾錄、讃阿彌陀偈弘化錄、同明治錄、正信偈、乙酉錄、起信論義記明治錄、各二卷、序分義定善義、慶應錄三卷、安樂集元治錄、愚禿鈔安政錄、各四卷、文類聚鈔文久錄、高僧和讃弘化錄、各五卷、起信論義起拾遺錄、四敎儀集註天保錄各六卷、往生論註嘉永錄、四敎儀集註明治錄、共に未完若干卷あり、師の二男師の言行を記し名けて居喪雜記といふ、（學苑談叢、本願寺派學事史）

センカイ　宣海　ニチゼン日禪を見よ、

センカク　宣覺（一九八五）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、宣覺は延慶三年東寺の長者に任し、正中二年大僧正に轉す、（東寺長者補任）

センゴン　宣嚴　……一九一一〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、宣嚴は其鄉貫師承詳かならず、寶治二年東寺の長者に任し、建長元年權僧正に任す、同三年八月七日寂す、壽缺く、（東寺長者補任）

センソン　宣存　二二九九—二三六八〔天台宗〕武藏江戸淺草寺の僧なり、　宣存號は默堂、俗姓は反町氏、母は瀨下氏なり、上野群馬西鳥の人、父母菅亟相の廟に祈り嗣を求む、誕生の後祥瑞あり、神童と稱せらる、九歲にして石塔寺長淸に依り三寶に給仕す、東叡山圓珠院第二代宣海請うて弟子となす、承應二年得度し、久遠壽院公海を戒師となす、名を公祐と云ふ、寛文四年比叡山敎王坊を主り、改めて賢空といふ、後水尾天皇盛胤親王を請して法華懺法を修したまふに方り、師亦預れり、天皇親ら諸惡莫作等の八字を書して賜ふ、十二年東叡山の東漸院に遷り任し、天和二年執當職に補せらる、解脫親王守快と云ふ名を賜ふ、圓珠院に轉し、傳法心院と云ふ號を賜ふ、三年越後の藏王院を兼ぬ、疾に罹り職を辭し、改めて宣存と云ふ、元祿元年紅葉山別當より擢てられて權僧正となり、金龍山淺草寺を主る、幕府の命により淺草寺の堂舍を改新し、五年梵鐘を改鑄し、師自ら銘を撰す、同年東叡山の林麓に退隱す、六年淺草川觀世音出現の靈地なるを以て、請うて魚族を捕ふることを禁斷す、即ち南、諏訪町より、北、聖天町の岸に至る十町餘を境界す、師自ら文を撰し、禁殺碑を立つ、寶永五年三月十七日寂す、壽七十、著作顯戒論鈔三卷、詩文集一卷あり、（天台霞標）

センニヨ　宣如　コージユー光從を見よ、

センミヨー　宣明　二四一〇—二四八一〔眞宗〕越中高岡開正寺の住持なり、　宣明號は巴陵、越中高岡の人、父は惠山、母は石井氏、寛延三年三月五日加賀の某地に生る、幼にして俗典を州の了現翁に學ひ、十八歲初めて京都高倉學寮に入り、業を伊勢の慧琳、播磨の隨慧に受け、奈良初瀨等の諸名刹に遊ひ、諸學匠に就きて俱舍、唯識、維摩、勝鬘の諸經を學ひ、就中俱舍論に力を竭くす、故に俱舍宣明と稱せらる、某年高倉大學寮に開筵して瑜伽師地論を講す、安永八年瑜伽釋論を校讐し、九年敎行信證自釋を刊行す、天明七年越中高岡の開正寺

に住し、寮舍を修理し、一切經藏を建つ、寛政三年六月擬講となり、翌年二十述記を講し、五年夏嗣講に進みて群疑論を講じ、以後累年文類聚鈔、義林章書末、往生禮讃、勝鬘經、選擇集、一念多念證文、維摩經、正信偈、正像末和讃を順次講說し、文化八年閏二月十二日に至りて講師に進み、同年文類聚鈔を講し、爾後安樂集、高僧和讃、正信偈、入出二門偈、文類聚鈔、往生論註、選擇集を講し、文政四年五月十七日寂す、壽七十二(眞宗史料)

圓乘院宣明講師

センユ 宣瑜 一九二〇 一九八五 〔戒律宗〕大和西大寺の律僧なり、宣瑜字は淨覺といひ、其俗姓生國詳かならず、出家して興正の律を稟け、顯密の二敎を學び、興福寺に居し、正和五年西大寺に遷る、師一住十年、法化盛なり、正中二年三月二十九日寂す、壽六十六、(本朝高僧傳)

センヨ 宣譽 ソハク祖白を見よ、

センヨーボー 宣陽房 リキヨー利慶を見よ、

センアミダブツ 專阿彌陀佛 (……)〔眞宗〕山城安養寺の住持なり、專阿彌陀佛俗名は袴殿、姓は藤原氏、父は左京大夫信實なり、某年親鸞に就きて剃染し、京都西武者小路常磐井殿地太子堂に住す、親鸞の立像一尺許なるを寫す、世に鏡御影といふ、今本山の寶庫にあり、今西武者小路常盤井辻子の安養寺は師の遺跡なり、(本願寺通紀)

センヱ 專惠 一八四六 一九三九 〔眞宗〕三河專光寺の住持なり、專惠俗名は唯重左衞門といひ、姓は加藤氏なり、筑前の人、父は左兵衞督といひ、源平の軍に死す、唯重將軍賴家の臣たり、賴家弑に遇ふ、乃ち宗祖考妣に薦せんと欲し、諸國の靈場を巡拜し、暫く三河幡豆郡野場村法名院に寓す、時に親鸞柳堂に弘化す、師之を禮して弟子となる、名を專惠と與へらる、親鸞師に九字佛名、及び吉水輪光眞像を授く、弘安二年十二月十二日寂す、壽九十四、今野場村專惠寺は其遺跡なり、(本願寺通紀)

センエー 專英 ……二二九五 〔曹洞宗〕三河龍谿寺の禪僧なり、專英字は特雄、俗姓生國詳かならす、香山淳碩に徹證して、永平寺に出世し、上野全久寺に遷り、次に參河の龍谿寺を領す、寛永十二年六月二十五日寂す、壽缺く、法嗣天外梵舜あり、(日本洞上聯燈錄)

センエー 專英 (一九〇八)〔法相宗〕大和某寺の學僧なり、專英は其俗姓生國詳かならず、新院の良算僧都に師事して法相を學び、其玄旨を究む、寶治二年維摩會の講師となる、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

センヱー 專榮 シンウ信有を見よ、

センカイ 專海 (一八八八)〔眞宗〕三河願照寺の僧なり、

專海は專信房と號す、鶴見專信房と稱す、遠江桑畑の人、安貞元年顯智と共に眞佛の門下に投し、二年また顯智と共に親鸞に師事す、遠江を出て丶三河に移る、時、親鸞消息を與ふ、今三河碧海郡長瀨村願照寺は其遺跡なり、三河の照心、和田の圓善は幷に師の門人なり、(本願寺通紀)

センカイ　專戒　二三〇〇 二三七〇　〔眞言宗〕山城智積院第十代なり、專戒字は芳春、幼にして出家し、安樂壽院專教の弟子となり、長じて智積院に投じ、第七代運敞僧正に師事す、後、江戸圓福寺に住し、將軍大奥小谷の方の皈依を受く、元祿十年智積院第十代能化となり、其職にあること九年、寶永二年瑞應山に閑居し、寶永七年六月二十四日寂す、壽七十一、(新義眞言宗史)

センキユーサイ　專求西　ソンエキ存易を見よ、

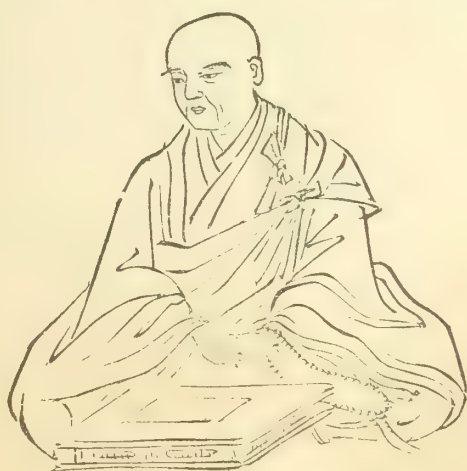
センキユー　專慶　二二九六　〔淨土宗〕安房淨蓮寺の開山なり、專慶は相蓮社傳譽愚極と號す、安房の人、其俗姓詳かならず、虎角に師事して法を嗣ぎ、州の勝山淨蓮寺を開く、寛永十三年二月一日寂す、壽缺く(淨土總系譜)

センクー　專空　一八七一 二〇〇三　〔眞宗〕伊勢專修寺の第四代なり、專空俗姓は平氏、俗名は在弘、大内冠者と稱す、大內國行の第三子なり、安貞二年五月親鸞の弟子となり、正應二年三月專修寺に住し、康永二年十二月十八日寂す、壽百三十三、(本願寺通紀)

センシンボー　專信房　センカイ專海を見よ、

センジユン　專順　リユーキヨー隆慶を見よ、

センセン　專々　カイオン海音を見よ、

センヨ　專譽　二一九〇 二二六四　〔新義眞言宗〕大和長谷寺中興第一代なり、專譽字は宥賢、俗姓は石垣氏、和泉大鳥郡の人なり、享祿三年を以て生れ、九歲根來山に上りて、玄譽に投じ習學を事とし、十三歲剃髮受戒し、同年春玄譽灌頂密壇を開きて兩部の秘奥を授く、弘治初年師奈良に遊び、多聞院僧都英俊に唯識を學び、四聖坊法印宗助に華嚴を學ぶ、元龜元年園城寺比叡山にて天台の教理を探り、醍醐寺無量壽院僧正堯雅に諸尊の儀軌印契、及び三部の經を習ふ、數年間聖空に從ひて中性院の一流を究む、法主賴玄師を助能化に補す、職にあること多年、後妙喜院に住す、天正十二年八月十一日玄譽の席を繼ぎて根來山に住す、後玄譽の弟子玄宥一方の化主となり、法主と號するに至り、妙音智積の兩派始めて分る、同十三年三月七日豐臣秀吉根來山を攻むるに方り、二十二日深更遁れて和泉國分寺に隱る、夏四月師高野山に上り、淨智院に寓す、上足宥儀、日譽、賢眞、典

專譽僧正

慧等追隨す、同十四年二月宥儀等も醍醐寺に上り、堯雅の室に入りて密藏の秘訣を傳へ、其需めに應じ論筵を開くこと三回、和泉國分寺に隱る、同十五年大和大守豐臣秀長の請を受け長谷寺の房に住す、名を更めて小池房中性院と號す、道譽天聽に達し、敕により僧正に任ぜらる、同年冬再び講筵を開き、學徒雲集す、同十六年正月秀長に請ひて殿堂の頽廢を造營し、九月落成す、豐臣秀吉、德川家康、歸依最も渥し、慶長九年五月五日寂す、壽七十五、奥院に葬る（豐山傳通記）

センヨ 專譽　クワクオー廓翁を見よ、

センヨ 專譽　コウン孤雲を見よ、

センヨ 專譽　コシユー孤舟を見よ、

センヨ 專譽　シユンオー春應を見よ、

センヨ 專譽　シユンガク春岳を見よ、

センヨ 專譽　ジユンオー順應を見よ、

センヨ 專譽　ソンキヨー存慶を見よ、

センヨ 專譽　タツドー達道を見よ、

センヨ 專譽　タツリヨー達亮を見よ、

センヨ 專譽　ダンリユー團龍を見よ、

センヨ 專譽　トククワン禿頑を見よ、

センヨ 專譽　ボシユー慕秀を見よ、

センヨ 專譽　ルネン流念を見よ、

センヨ 專譽　リヨーヤク靈益を見よ、

センガク 千岳　シユージン宗仞を見よ、

センガン 千巖　二四九一―二五五七　〔眞宗〕筑後伯東寺の住持なり、千巖は初め法名を知海といふ、後改めて現方といひ、來來子と號す、姓は細川氏なり、天保五年正月廿五日美濃安八郡南條村に生る、九歳にして父母に出家を請ひ、弘化二年東本願寺に得度し、慶應元年筒井伯東寺の住持となる、宗主の命を受けて長崎に往き、耶蘇教を偵察し、後、破邪に力を盡す、明治四年に靈崎頓成の黨、東鳳、無性等が異義を主張して香山院講席を敵視し、學寮に暴論を以て挑むに方り、師、闡彰院嗣講と共に間役を命ぜられて大に盡力す、又明治十五年二等學師占部觀順、異義を主張するや、師之が調理に力む、師の任職を年代順に擧ぐれば下の如し、嘉永六年擬寮司、安政三年寮司、明治二年員外擬講、四年九月擬講、四年五月訓導、七年四月三等學師、八年五月錄事、十四年五月二等學師、十六年十二月贊衆、十九年一月嗣講、廿一年三月一等學師補、同年六月權少贊教、廿六年一月大學寮學監、廿七年七月講師、同九月大學寮教授、卅年十一月權中贊教に昇歴す、明治卅年十一月廿五日寂す、壽六十七、著作起信論講義、傳通緣起典據、安心道の志らべ、二種深信決擇記等あり、

センクワン 千觀　一五七八―一六四三　〔天台宗〕攝津金龍寺の學僧なり、千觀俗姓は橘氏相模刺史敏貞の子なり、父母初め子なく千手觀音の像に禱りて師を生む、因て千觀と名く、弱齡にして園城寺に入り、落髮受業し、常に淨業を修し、阿彌陀の和讚二十餘行を作る、應和二年夏旱し、朝議師に詔して雨を禱らしむ、時に師攝津箕面山に在りて自他相對の釋文を撰す、勅使菴に到る師乃ち菴後三里程にある大柳樹に登り、香爐を持して持誦し、忽ち大雨降る、攝津安滿に勝地を得、菴を結びて居る、里民其德に皈し、遂に寺を建つ、即ち金龍寺と號す

師常に八誓を以て衆徒を誡め、十願を以て群生を導く、一時淀河邊に出て馬夫となりて往來の人を惠む、永觀元年十二月寂す、壽六十六、著作四十問答、三宗要錄、十大願六即義私記、被接義私記、十如是義私記、十二因緣私記、三觀義私記三諦義私記、十妙義私記、三周義記囑累義記、即身成佛義記七聖義記、五味義記、等各一卷あり、（元亨釋書、本朝高僧傳諸宗章疏錄）、

センコー 千江（二三一五）〔臨濟宗〕磐城國某寺の學僧なり、千江は寛永中中村藩城下に寓居す、藩侯の請により、四書を講す、明曆元年藩侯の意により某寺に住す、寂するに臨みて極圓を薦む、（日本教育史料）

センザン 千山（……二二八五）〔淨土宗〕江戸光感寺の開山なり、千山は長蓮社英譽と號す、上野の人、其俗姓詳かならず、法を普光國師に禀け、江戸淺草光感寺を開く、寛永二年十二月九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

センシヨー 千丈　ジツガン實巖を見よ、

セントー 千到（一六三三）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、千到は興福寺延空に師事して唯識を討究し、大小乘に涉る　應和の宮會に比叡山の禪愉法華經を講し、師問者となり對論數遍、衆を驚かす、天延元年維摩會の講主となり、興福寺に住し、後、南都戒壇院に移る、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

センナ 千那　ミヨーシキ妙式を見よ、

センハン 千攀（一五七〇—一六四〇）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、千攀は鄉貫詳かならず、天延元年東寺長者となり、貞元二年權少僧都に任し、天元二年正僧都に昇る、同三年正月四日寂す、壽七十一、（東寺長者補任）

センホー 千峰　ホンリユー本立を見よ、

センリン 千林　シユーケー宗桂を見よ、

センイチ 泉一（一九九一—二〇五〇）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、泉一俗姓は藤原氏、依田兵庫重綱の弟なり、泉尊に師事して專ら俱舍宗を究め他學に涉らす、明德元年十二月二十二日寂す、壽六十、（三井續燈記）

センエ 泉惠（一九四五—二〇二一）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、泉惠は袈裟法師といふ、弘安八年に生れ、十五歲剃髮し、靜泉長乘二師に從ひて學習し、延慶三年十一月傳法灌頂壇に入り、文保二年義釋問題を撰し、元亨二年義釋要文を撰し、又金剛頂經疏要文を撰し、康安元年十二月十日寂す、壽七十七（三井續燈記）

センヱン 泉圓　チヨーエン朝圓を見よ、

センサツ 泉察（……二二八一）〔淨土宗〕武藏西光寺の中興なり、泉察は便蓮社芳譽と號し、其鄉貫詳かならず、呑龍に師事して法を嗣ぎ、武藏新方大畠西光寺に住し、其廢頹を興す、元和七年八月十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

センシヨー 泉奘（二一七八—二二四八）〔戒律宗〕大和傳香寺の律僧なり、泉奘字は象耳、寬順と號す、俗姓は今川氏、駿河の人なり、華藏山に投じて祝髮し、招提寺高範に受具す、後旨を奉して泉涌寺に住す、正親町天皇宮中に召して菩薩大戒を受け、これより數帝に召されて經論を講ず、大和刺史筒井順慶傳香寺を刱し、師請せられて開山となる、晚年招提寺を主と

り、天正十六年五月十八日泉涌寺に寂す、壽七十一、門下に照珍律師あり、(本朝高僧傳)

センソン　泉尊　一九四八 二〇二九　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、泉尊初の名は俊泉、藤原久行の子なり、靜泉定憲長乘衍等の諸師に就き、文保二年戒壇を建立す、山衆の訴により奥州に流さる、曆應元年本寺に歸へり、康永元年五月谷堂、六月峰堂の學頭となり、延文三年法勝寺三十講に召され法印權大僧都となる、應安二年十二月二十五日寂す、壽八十二、(三井續燈記)

センテキ　泉滴　二二二一 二三〇一　〔曹洞宗〕加賀天德寺の開山なり、泉涌字は巨山、武藏の人、其俗姓詳かならず、出家して諸老に遍參し、長安寺に嫡宗田承に師事して記室となり、久しからすして首座に上り、分座說法す、宗田の寂後席を踵きて長安寺を領す、德川秀忠の招に應し登城して說法し、其寵を蒙り、前田利家金澤に金龍山天德寺を創して師を聘す、師固辭すれとも秀忠の命により止むを得すして應す、寬永十八年十月二十五日寂す、壽八十一、(日本洞上聯燈錄)

センヨ　泉譽　ヱリユー慧流を見よ、

センヨ　泉譽　ソンテツ存徹を見よ、

センリヨー　泉良　(……)〔淨土宗〕江戶法眞寺の開山なり、泉良は源蓮社榮譽と號す、甲斐府中の人、俗姓は竹田氏なり、潮龍の室に入りて剃髮受業し、江戶本鄉法眞寺の開山となる、寂年、及世壽缺く、(淨土總系譜)

センヱ　詮慧　(……)〔曹洞宗〕越前永興菴の禪僧なり、詮慧俗姓源氏、近江の人なり、幼にして出家し、横川に住す顯密兼修し通達せざるなし、尤論議に長じ、敵するものなし、道元禪師の新に宋より歸り禪風を揚ぐるを聞き、深草に至り訪問す、偶禪師の上堂するに際す、禪師說きて曰ふ、有㆑人道㆓得一句㆒、法界量滅、未㆑免㆓春夢說㆓吉凶㆒、更若道㆓得一句㆒、破㆑塵出㆑經也、是紅粉舫㆓佳人㆒、直下照㆓了面㆑夢之眞覺㆒、便見㆓法界㆒未㆑爲㆑大、微塵未㆑爲㆑小、兩既不㆑實一句何憑、井底蝦蟆呑㆓却月㆒、天邊玉兎白眠㆑雲、詮慧欣聽して此に至り茫然として測るなし、即ち改衣して隨待し後契悟す、永興菴を開きて住す雲衲四來し、一方の叢林となる、示寂の年時缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄)

センオー　詮雄　二二六七 二三四七　〔淨土宗〕江戶增上寺の第廿八代なり、詮雄は一に詮翁につくる、深蓮社廣譽と號し、直心蓮阿良海と云ふ、武藏江戶の人なり、父は石野新藏廣繼と云ふ、其嫡子なりと雖も、自ら請て出家となり、後、熊谷蓮生山熊谷寺に止る、四方遠近の徒來て師の德化を蒙る、母死去の後は其追福の爲に武藏小石川に智願寺を創立す、慶安四年十二月廿四日淺草誓願寺に住す、承應二年の春命により大善寺に住す、此時幕府より新境內一万五千坪を加賜せらる、本堂門庫を再修し、學徒を敎育す、故に當山の中興と稱せらる、後、大光院に轉し、延寶三年增上寺第廿八代の貫主となる、天和二年二月十八日伊勢國蓮花谷梅香寺に住す、專ら念佛を修し、貞享四年七月八日寂す、壽八十一、(緇白往生傳・三緣山志)

センオー　詮翁　センオー詮雄に同し、

センカイ　詮海　二四四六 二五〇〇　〔融通念佛宗〕大和常樂寺の學僧

なり、　詮海字は幡光といひ、戒珠院と號す、別號四德、坊主墨海、天竺老人の稱あり、大和山邊郡筑紫村の人、中島氏の次男なり、母は庄司氏の出なり、天明六年六月（一に十月）十六日に生る、幼名は馬之祐といふ、寛政五年八月甫めて八歳にして大和平群郡奥留西念寺東海上人に投して得度し、詮海と名く、寛政十一年十一月大源山に上り、法脈及ひ圓戒を受く、號を幡光といふ、寛政十二年六月親教に從ひて大和添上郡稗田常樂寺に住持す、享和元年夏深戒律師に就きて悉曇章を受く、享和二年春杉山儒生に從ひて詩を習ふ、享和三年慈雲大和上に七條松の坊にて參禪す、文化二年十一月宗脈を受く、文化三年四朝高僧傳を讀みて緇林蒙求を撰す、五年二月上京して香衣を拜す、八月河内髮切山鑁慶阿闍梨に謁して法要を問ふ、文化六年六月二十九日鑁慶阿闍梨に從ひて菩薩戒を分受す、七年北室院叡辨和上に從ひて唯識論を聽く、八月廿一日鑁慶阿闍梨より形同沙彌戒を受く、文化八年三月起首四度加行、十年三月鑁慶阿闍梨に從ひて豐山に赴き、大日經疏を聞く、文化十一年秋豐山に遊ひ眞應和尚の倶舍論の講を聞く、文化十二年八月常樂寺より北の方字西の堂に我淨庵を經營す、文化十三年貫主の命を奉し阿彌陀經を大源山に講し課誦を以て副講とす、八月豐山に遊ひ、道源和尚の尙書を聞き、眞應和尚に八轉義を習ふ、十一月浪華に赴きて普門和上に就きて須彌山儀を聽き、應天曆を受く、文化十四年秋巨岡道人に謁して書法を問ふ、十一月鑁阿闍梨に從ひて報恩院流密灌を受く、文政元年二月豐山に赴き、眞應に從ひて再ひ大日經疏を聞く、文政二年夏重ねて命を奉して大源山に梵網經を講す、九月廿三日道源と共に重ねて形同沙彌戒を明堂大和上に受く、文政三年夏また貫主の命を受けて圓門章を大源山に講す、文政四年二月菩薩戒を授く、受者五十四人なり、三月例月念佛會を創建す、文政五年閏正月斑鳩常念寺に赴きて圓門章を講す、此夏往生要集を大源山に講し、六物圖を以て副講とす、文政六年二月十四日明堂大和上より法同沙彌戒を受く、三月廿一日起首別行を行し、六月二日に滿行す、八月廿一日播磨の覺淳と共に得戒和尚より具足戒を受く、智幢和尚を請して依止闍梨となす、貫主隨喜して師に戒珠院の號を下す、文政七年四月五日比叡山の戒壇に登りて圓頓大戒を受け、本山金光院主亮照律師を請して傳戒和上となす、同日に大趙良本因に沙彌戒を受く、九月下旬宇治平等院を過くるに、會、立道上人が選擇本願念佛集を講するを見て、之に就きて淨土要義を咨決す、十月明堂大和上に從ひて光明眞言の深義を聞く、十一月良本等十餘人に十善戒、

詮海和上

及び菩薩戒を授く、文政十二年課誦を改刻す、阿彌陀經の振假名は西來寺眞阿僧都より相傳するところを取りしなりといふ、當時大源山の講主となり、眞光院と號す、天保八年冬駒塚東福寺に兼住す、寺は正法律源無和上の開基にして、和上は融通念佛宗を唱導せしが、師の住するにあたり、廢を興し蹟を求めて、融通念佛宗の弘布に勉めたり、萬延元年十月一日稗田常樂寺に於て辭世の和歌一首を詠して寂す、壽七十五臘六十七、歌に曰く「いつの年いつの頃そと思ひしに今月のけふ今そ往生」と師嘗て自鳴鐘十德なるものを作て自他の規となし、弟子を訓戒す、十德に曰く、一、朝起を早くする德、二、宵寐を晚くする德、三、齋食の規となる德、四、懈怠を誡しむるの德、五、精進を進むる德、六、時の過不及を知る德、七、寂寞を慰むる德、八、作業の限を立つるの德、九、氣を養ふの德、十、無常を觀せしむるの德、と師六十一歲の時愚身十喜なるものを作りて曰く一、生爲男子喜、二、六親完具喜、三、時世泰平喜、四、出家無累喜、五、値遇正法喜、六、師友提携喜、七、行學日新喜、八、子弟孝順喜、九、無病長壽喜、十、後生淨土喜と師は天明丙午に生れ弘化丙午は則ち六十一歲に當りて、世俗丙午に生れしものを忌むこと甚し、師之を慨して弘化丙午サトシ書なるものを作り、一枚摺にして普く施印して人の迷を解けり、師は自ら坊主墨海と名乘りて我は全體糞坊主の外一文の値なしとて詩を賦して曰く、「我是一體糞坊主、數着二味噌一不レ懐レ媿、休レ張殊勝知識顏、遂被レ拜レ顏至二放庇一」と平素持律堅固にして時人の爲に敬服せられ、稗田の和上、又は稗田の眞人と通稱せらる、弟子には大超樂山圓超、明意、州山、信善、諦住、樂信、明立、能海、戒善、靜眞、詮應、嘿乘、浩然、賢靜、超染、忍了、戒道等あり、就中初の四子最も著はる、師の著作には、入道初門、融通宗意辨、融通課誦補妄抄、引接贊講義、融通他力解、宗法口決、十一尊秘訣抄、融通妙宗行事要錄、圓念法語、剃刀略作法、聖應大師十德諺註、聖應行狀和贊、融通念佛大宗記、水藥師中興緣起、正法律宗名義、大念佛事蹟考、緇林蒙求、融通法脉異傳、丙午サトシ物語、各一卷、融通念佛驗得傳、圓門章大意各二卷其他未た卷をなさゝる篇章夥多ありといふ（戒珠放光錄、及び西本良察氏返信）

センサツ　詮察　二二九八／二三七七　〔淨土宗〕江戶增上寺第三十七代なり、　詮察は雄蓮社松譽忠阿觸光と號す、伊勢の人、慶安元年正月を以て生れ、七歲にして出家し、詮雄上人に師事す、詮雄寂する後、增上寺に登りて修學し、遂に學頭となる、後大光院光明寺等に歷住し、正德四年六月二十八日三緣山貫主となり大僧正に任す、享保元年四月三十日將軍家繼薨し、師大導師となり、中陰法會にも大導師を勤む、同二年疾に罹り二月十七日辭して一本松に退隱し、三月十八日寂す、壽八十臘、六十七、芝峰に塔を建て蓮花谷に碑を立つ、（三緣山志）

センヨ　詮譽　ビャクゲン白玄を見よ、

センガ　暹賀　一五七四／一六五八　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、暹賀俗姓は藤原氏、駿河の人、（一傳近江志賀の人）幼にして弟聖救と共に比叡山に登り、座主慈慧の室に投して剃髮受戒し、顯密教を究む、本覺院を捌して此に居る、正曆元年十二月廿日敕を奉じて延曆寺座主となる、時に七十七歲なり、

職にある八年、辭して本覺院に歸り、長德四年八月一日寂す、壽八十五、(天台座主記、本朝高僧傳)

センカク 暹覺 一七〇六/一八〇〇 〔天台宗〕大和崇敬寺の僧なり、暹覺は豐後の人、俗姓は三峯氏、壯にして出家し、後、大和に往き、崇敬寺の東北に別院を結び、深く禪定を修す、保延六年正月某日寂す、壽九十五、臘六十六、(本朝高僧傳)

センク 暹救 (……) 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、 暹救は字地藏房と云ふ、雙嚴房賴昭、幷に其弟子經暹に就いて一流の事相を傳へ、當時に名あり、(台密血脈譜)

センゲン 暹玄 (……) 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、 暹玄は後に改めて圓運と云ふ、陸奧守源信雅の子なり、出家して比叡山に登り、三昧阿闍梨桂林房良祐の正統なる相實法印に師事し、一流の事相を傳へ、勅を拜して內供となり、法印に敍せらる、寂年月日詳ならず、門下に貞覺圓智の二人あり、(台密血脈譜)

センコー 暹斅 (一七三八) 〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、 暹斅は比叡山に隷し、諸老に親近して天台を學び、他部を兼讀す、承曆二年正月十五日始めて白河上皇詔して大乘會を法勝寺に修す、師講師となり、上皇に賞せられて權律師に任す、後其終る處を知らず、(本朝高僧傳)

センシュン 暹俊 (……) 〔天台宗〕攝津別所寺の僧なり、 暹俊は俗姓生國詳かならず、初め比叡山に登りて顯密の學を習ひ、後攝津渡邊の別所寺に住し、藕絲三衣を傳持せり、是は本禪瑜僧都の所持したるものなり、加茂長明の發心集に其緣起を載す、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

センミョー 暹命 一八〇三/一八八五 〔天台宗〕近江無動寺の僧なり、 暹命は丹州の人幼より、比叡山に登りて天台教を傳習し、兼て淨業を修す、額に三寶の字を鏤み、背に彌陀の像を黥す、初め畿內に往遍して四天王寺に詣で、後、無動寺內に菴を結びて居し、更に信施を受けず、一僧來る每に山衆に巡乞して食を供す、順德皇后布袈裟を裁して贈りたまふに、師熟視して三世の諸佛に供養と唱へて溪谷に投す、師の奇行を知るべし、嘉祿元年八月十三日寂す、壽八十三、(本朝高僧傳)

センヨ 暹與 一八二五 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、暹與は紀伊の人、高野山に在りて金堂に供役し、私財を捨てて佛具を造り、金堂に寄附す、永萬元年十二月十六日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

センヨ 暹譽 ソテキ祖的を見よ、

センケー 潛溪 ショケン處謙を見よ。

センリユー 潛龍 二四九四/二五五六 〔眞宗〕美濃安養寺の住持なり、 潛龍は三河幡豆郡室村順成寺得成の二男にして、天保五年十二月廿三日生る、八歲より臨濟宗華岳寺烏居廉溪に從ひて文選五經等の素讀講義を受く、本法院義讓、師の秀才を知り京都に伴ひて漢籍を學ばしめ、又江戸の聖堂に入らしむ、後、京都に皈り、智積院に入りて倶舍を學び、又叡山坂本にありて專ら天台を究む、大坂善覺寺法宣の養子となりしが、繼父了海の實家專覺寺了演沒し、嗣子幼なりしかば、師其寺に入りて在住すること三十一年、春風舍に學徒を集めて教授し、維新の際には各宗と會議して大に宗教に力を盡す、三十歲の時、擬講に任し、明治五年教部省の時渥美契緣等と共に、

本山に身を委ね大に事務の改正を計る、同年六月權訓導に、同九年七月三等敎師に、十二年五月三等學師に、十七年四月贊衆に、十九年二月二等學師に歷任す、同年六月十二日美濃國郡上郡八幡町安養寺に住持となる、廿一年三月一等學師に、六月廿二日權少贊敎に歷昇す廿四年三月十七日三河別院に出張し是海の安心を調理す、廿八年九月顧問に任じ、特受參務の侍遇を得、廿九年一月廿三日、病に罹り、法主親く其病床を訪ふ、二月廿五日權中贊敎に補し 廿六日午前五時寂す壽六十三

センリユー 潛龍 エタン慧湛を見よ、

センガイ 旃崖 二四六五 二五三九 〔曹洞宗〕能登總持寺獨住第一代なり、旃崖字は奕堂、號は無似子、別に三界無賴といふ、俗姓平野氏、尾張名古屋の人、十四歲出家し、聖應寺曉林に師事し、後出遊して越後に到り、黃龍寺道契に仕へ、天保四年美濃に到り、全昌寺洞門を訪ひ、次に大坂に住き風外を問ふ、天保十二年風外京都に上り、眞如堂の子院に寓す、師隨侍して其敎を受け、遂に印可を受く、弘化元年大慈山に移り、同二年播磨龍海院に住し、安政四年加賀天德院に轉住す、明治元年永平總持の二寺相爭ふに方り、師其調和に力を盡し、遂に同三年大衆の推擧により總持寺獨住第一代となる、勅あり弘濟慈德禪師の號並に紫衣を賜ふ、十二年東國に巡化し羽前の善寶寺に入り、八月二十四日同寺に寂す、壽七十五、臘六十二、著作懶眠餘稿あり、

センリンイン 旃林院 ニチエン日衍を見よ、

センケー 識桂 一九七三 二〇四五 〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、識桂字は香林、俗姓不詳、青山悟の法を嗣ぐ、永德二年圓覺寺に住す、後、慶雲菴に退休す、至德二年二月十八日寂す、壽七十三、遺偈死似レ脫レ袴、生如レ著レ衫、全無二生死一討二其生死一前三三 後三三、勅諡等慈禪師と云ふ（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

センサイ 瞻西 （一七八四）〔天台宗〕京都雲居寺の開山なり、瞻西は比叡山の住僧なり、京都に移り、止觀に意を注き、天治初年雲居寺を開き、八丈の金色大像を彫刻して勝應院に安す、寂年及び壽缺く（本朝高僧傳）

センカク 先覺 シユーテン周恬を見よ、

センシン 先晉 二四三二 二五〇七 〔新義眞言宗〕山城智積院第三十五代なり、先晉字は音長、武藏の人なり、馬室常勝寺に入りて剃度し、智積院に留學し、學業功を積み、天保十二年能化職に任ず、法務を執る六年老を以て職を辭し、弘化四年十二月十七日寂す、壽七十六、（新義眞言宗史料）

センシヨー 先照 ズイシヨ瑞初を見よ、

センホ 先甫 シユーケン宗賢を見よ、

センチ 尖智 （二一四八）〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、尖智字は海菴、龍州文海に參して其法を嗣き、記室となる、龍州の寂後席を繼きて下野大中寺を主とる、寂年及び壽缺く、法嗣快叟良慶無學宗棻の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

センヘン 仟遍 二一一四 二一七六 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり仟遍は少き時より諸方を巡遊し、廿四歲眞言敎を慕ひて、高野山に登り、寶性院の良雄阿闍梨に兩部の灌頂法を得たり、文明九年寶性院に住し、顯密兩敎を布敎し、永正十三年五月十・日寂す、壽六十三、（本朝高僧傳）

センシヨーイン　闡彰院　トーエー東瀛を見よ、

センタイ　闡提　シヨーグ正具を見よ、

センヨー　闡揚　二三九七／二四五五　〔眞宗〕山城興正寺の廿四代なり闡揚字は法高寂聽の弟一子　寶曆三年秋以來憲榮侍講に就きて宗乘を習學す、六年二月權僧正に任し、八年三月乘惠の請により其著淨土三經音義の序を作る、天明六年映姫を娶りて室となす、寛政七年十月十日寂す壽五十九（本願寺通紀）

センオーイン　染王院　ジヨーグ常弘を見よ、

センコーニン　染香人　ダイガン大含を見よ、

センモン　染問　タンチヨー湛澄を見よ、

センケー　鮮溪　インジヨー印定を見よ、

センシンシ　洗心子　ゲンヱ玄慧を見よ、

センソー　川僧　エサイ慧濟を見よ、

セントー　牷蒼　ギヨーネー行寧を見よ、

セントー　錢塘　エンモン圓門を見よ、

センホー　旋峰　シユーウ宗右を見よ、

ゼンア　善阿　クーエン空圓を見よ、

ゼンア　善阿　レキテン歷天を見よ、

ゼンアン　善菴　リヨーチ良置を見よ、

ゼンイ　善意　一七八九……〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、善意は備前の人、比叡山に登りて僧房に見役し、受具の後顯密に精しきを以て衆に推さる、西塔の黑谷に室を閉ぢ、誦呪觀心苦修精練す、千日を期して法華を講演し常に衆に云ひて我は佛と日を同しふして死せん、と、果して大治四年二月十五日を以て寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ゼンイ　善意（二四二七）〔眞宗〕越中氷見西光寺の住持なり、善意は字を芳山といひ、凡伸堂と號す、西光寺安定の下に學び義敎と同輩たり、一に峻諦の弟子といふ、明和四年六月（一傳六年）評僞宗を駁するに方り師大に助く、東派なる越後法義異諍を評駁す、東派の慧琳は彈評僞辨を作りて師の說を彈斥す、師慧日霜露篇三卷を作りて之を再駁せり、後本山に出て無量壽經を侍講す、某年二月廿三日寂す、諡して明達院といふ、著作評僞辨一卷、阿彌陀經述聞、白糸編、慧日霜露編、各三卷、正信偈歸仰錄四卷、大經弘願釋七卷あり、（本願寺通紀、本願寺派學事史）

ゼンイ　善偉　二〇五五……〔淨土宗西山派〕京都圓福寺の學僧なり、善偉字は堯慧、鴨空頓葉に師事して淨土宗西山派の學を究め、圓福寺に住して其門業を張る、應永二年七月二十九日寂す、壽缺く、著作論註私集鈔若干卷あり、（淨土總系譜）

ゼンイク　善育　二〇三三……〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、善育字は大林、相模の人、淨智寺無象照の下に師事し其法を嗣ぐ、足利氏天龍寺に請すれども出でず、後、建仁寺南禪寺に住す、晩年正宗菴に屛居す、應安五年十二月三日、美濃瑞巖寺に寂す、勅謚僧海禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンエ　善慧　シヨークー證空を見よ、

ゼンエイン　善慧院　ニチテー日貞を見よ、

ゼンエー　善榮（一四五四）〔……〕孝謙天皇の朝の僧なり、善榮俗姓不詳、神護景雲元年に中律師となり、延曆十三年に其官を去り幾もなく寂したるもの丶如し、（七大寺年表）

ゼンエー　善榮 二三五〇……〔淨土宗〕三河誓滿寺の開山なり、善榮は磐蓮社開譽と號す、俗姓は平野氏、三河碧海郡小垣井村の人なり、廓呑に投じて剃髮受戒し、萬無に師事して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、後、郷里に歸り、誓滿寺を創立して開山となり、元祿三年七月五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ゼンエツ　善悅 (……)〔淨土宗〕下野弘經寺の第七代なり、善悅は名蓮社見譽退堂と號す、筑紫の人、其俗姓詳かならず、祖洞に師事して法を嗣ぎ、飯昭弘經寺に主となる、武藏都築郡小机の泉谷寺、及相模酒匂の大見寺を剏して開山となる、寂年幷に壽缺く、(淨土總系譜)

ゼンオー　善往 一三七一……〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、善往は元興寺に住す、持統天皇七年十二月勅を拜して法員眞義等と共に、近江國益須郡に至りて醴泉を撿す、文武天皇二年三月十八日律師に任せらる、是れ元興寺律師の始なり、大寶二年大僧都に任せらる、和銅四年に寂す、(續日本紀、七大寺年表、僧綱補任、本朝高僧傳)

〔考〕本朝高僧傳に大僧正に任せられたりとあるは誤なり

ゼンカ　善迦 (……)〔曹洞宗〕上野龍源寺の禪僧なり、善迦字は傳藥、龍源寺笑顏正忻に參して其法を嗣ぎ、龍源寺に主となり、次に常陸圓通寺に遷る、晩年結城安穩寺を司どる、其頹廢を興す、寂年並に壽缺く、法嗣春翁桂陽あり、(日本洞上聯燈錄)

ゼンカイ　善海 (……)〔淨土宗〕江戸法界寺の開山なり、善海は光蓮社明譽と號し、其郷貫詳かならず、隨波の法流を受け、江戸三河島に法界寺を剏して開山となる、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

ゼンカク　善覺 二二八八……〔淨土宗〕江戸淸德寺の開山なり、善覺は專蓮社心譽念阿と號し、其郷貫詳かならず、靈譽の室に入りて剃髮し、虎角に師事して法を嗣ぐ、江戸淺草に淸德寺を開きてこれに住し、寛永五年九月十三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ゼンカクイン　善覺院 ニチキヨー日鏡を見よ、

ゼンギ　善議 一三八九 一四七二〔三論宗〕大和大安寺の僧なり、善議俗姓は慧賀氏、河内錦織郡の人なり、幼にして俗塵を絕ち、大和大安寺の道慈に從ひて三論を習ひ、其奧蘊を盡す、後唐に入り、遍く名德を尋ねて敎門を探り、歸朝して大安寺に住し、盛に空宗を說く、弘仁三年八月某日寂す、壽八十四、法弟安澄勤操の二人あり、(本朝高僧傳)

ゼンキン　善均 (二〇五四)〔臨濟宗〕山城臨川寺の禪僧なり善均字は平山、其生國俗姓詳かならず、久しく夢窓國師に從ひて宗旨を硏め、命を享けて臨川寺に主となる、寂年、及び壽缺く、(本朝高僧傳)

〔考〕善均は應永の頃の人なり

ゼンキヨー　善慶 二三七四……〔淨土宗〕常陸常福寺の僧なり、善慶は信蓮社澄譽魯光と號す、存樹に師事して淨土敎を學び、初め館林善導寺に住し、後瓜連常福寺に移る、正德四年七月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ゼンキヨー　善慶 二二六三……〔淨土宗〕總州光岳寺の開山なり、善慶は道蓮社玄譽天機と號す、總州の人、其俗姓詳か

ならず、存把に師事して法を嗣ぎ、飯沼弘經寺に住し、第十代となり、後總州關宿に光岳寺を開く、慶長八年三月八日寂す、壽缺く。（淨土總系譜）

ゼンク　善救　二〇〇五／二〇六六　〔曹洞宗〕越前願勝寺の開山なり、善救字は普濟、加賀河北郡の人、俗姓は藤原氏なり、十三歳にして淨住寺寂室を禮して薙髮し、十五歳にして受戒し、徧く諸老宿に謁し、永澤寺通幻寂靈に依り侍司となる、通幻總持寺を司とるに及ひて、師從ひて諸職に歷住す、康應元年十二月六日印可を受けて分座し、加賀の聖興寺に出世す、明德四年詔を承けて總持寺に住す、已にして辭して聖興寺に歸へり、應永三年丹波の永澤寺に主となり、同五年越前龍泉寺に遷る、同國の棋富の檀越願勝寺を𠞊して延きて此に居らしむ、應永十三年正月十二日寂す、壽六十二、臘四十七、法嗣玉叟良珍、大圓禪雄、寶山崇珍、玉翁正光、直傳正祖の、五人あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンク　善玖　一九五四／二〇四九　〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、善玖字は石室、筑前の人、文保二年古先元無涯浩等と船を同くして元に入り、一時の禪匠徧く其門を叩き、久しく古林茂和尚に金陵の鳳臺寺に參し、遂に印可を受け、嘉曆の初年諸友と共に歸朝す、時に竺仙梵和尚南禪寺に住して師を待つ、會々仲巖月萬壽寺の席を退きしを以て師を擧けて補せしむ、尋いて天龍寺に移る、法幢盛にして鎌倉管領基氏其道譽を慕ひ圓覺寺を主とらしむ、應安元年六月建長寺に移る、住持六年、金龍菴を福山の傍に建てゝ幽居す永和元年檀越等武藏巖築に平林寺を建て師を招きて開山とす、康應元年九月二十五日平林寺に寂す、壽九十六、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンクワク　善廓　クワンクー關空を見よ

ゼンサク　善作　二二九七……　〔淨土宗〕江戸敎善寺の開山なり、善作は信蓮社行譽と號す、甲斐の人、俗姓は高坂氏なり、虎角に投じて剃髮受業し、其法を嗣ぎて後、江戸麻布に敎善寺を𠞊して開山となる、寶永十四年五月十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンサン　善算　ゼンチユー善仲の傳を見よ

ゼンシンニ　善信尼　（一二五〇）〔……〕我國最初の尼なり、善信尼俗名は鞍部島女と云ふ、鞍部村主(スグリ)司馬達等の女なり、敏達天皇の十三年九月に鹿深(カフカ)臣（名缺く）佐伯(サエキ)連（名缺く）新羅より彌勒の石像幷に佛像を齎し歸る、蘇我馬子之を請ひ得て祀らむとし、播磨より修行者惠便を請じ、島女を度せしむ、島女時に十一歳なり、出家して善信尼と云ふ、我國に於て出家せる者實に善信尼に始まるなり、同時に漢人夜善の女豐、錦織壺の女石、慧便に就きて出家し、豐は禪藏尼と云ひ、石は惠善尼と云ひ、善信尼の弟子となる、同年に善信尼等は馬子に請せられ、像の前に大齋會を行ふ、同十四年に物部守屋中臣勝海再び奏して佛敎を排す、善信尼等は捕はれ海石榴市の亭に引出されて鞭打たる、後、赦されて馬子に附せらる馬子再び精舍を興して善信尼等を供養す、用明天皇二年六月善信尼等馬子に請ひて曰ふ、出家の途戒律を以て本とす、百濟に航して戒律を受學せむ、と、崇峻天皇元年に馬子の意を得て百濟國使恩率首信等に隨ひ同國に航し、同三年三月に歸り、櫻井寺に住す、我國の出家にして戒律を受學

するもの之を始めとす、同年大伴狹手彥連の女善德狛(ママ)夫人、新羅媛善妙、百濟媛妙光、漢人善聰、善通、妙德、法定照、善智聰、善智惠、善光等出家する者皆善信尼の度せるものなりと云ふ、善信尼の示寂の年時缺く、（日本書紀）

ゼンシヤ　善謝　一三八五 一四六四　〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、善謝俗姓不破氏、美濃不破郡の人なり、理教法師に就きて法相を受け、興福寺に住す、延曆五年に律師となる、晚年梵福山を開き、人事を屛絕して淨土の行業を修す、延曆二十三年五月同山に寂す、壽八十、（七大寺年表、往生極樂記、元亨釋書、本朝高僧傳）

ゼンシユ　善珠　一三八三 一四五七　〔法相宗〕大和秋篠寺の學僧なり、善珠俗姓は阿刀氏、大和の人なり、興福寺に投して玄昉に師事し、法相を傳ふ、平素學問に勸勉し、盛暑に頭熟瓜の如く、髮毛半落するも、確乎として撓まず、弱冠に至らずして三藏に通じ、最も法相因明に精し、秋篠寺を開き住す、比叡山の最澄根本中堂の落慶供養を行ふに際し、善珠請せられて導師となる、延曆十六年宮中に召されて般若經を講じて皇子の病を祈禱し靈驗あり、擢てられて僧正となる、（一說延曆三年僧正となる、）同年四月廿一日示寂す、壽七十五なり、著作甚だ多し、唯識燈明抄十二卷、唯識肝心八卷、因明論燈鈔六卷、了義燈增明記四卷、彌勒經畧贊二卷、最勝王經遊心決三卷、梵網經略鈔二卷、法華肝心一卷、藥師經疏一卷、八石經私見記一卷、法苑林章記一卷等なり、（七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ゼンシユン　善俊　一四一七　〔戒律宗〕大和大安寺の高僧なり、善俊俗姓闕く、道璿に師事して戒律を傳へ、行事鈔を講究す、後、思託に就きて法勵疏を聞く、天平寶字の間大安寺に住す、示寂年時傳はらず、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ゼンシヨー　善性　一八五九 一九二八　〔眞宗〕越後淨光寺の住持なり、善性は後鳥羽天皇の第二子なり、出家して圓觀と稱し、比叡山に登り修學す、建保六年常陸稻田に親鸞に謁し、眞宗に歸し、善性と改む、是より先き親鸞稻田の吹雪谷に常光寺を建つ、乃ち師命を受けて此に住す、又近江木部の錦織寺に住し、嘗て下總石下大房東弘寺、及び磯部勝願寺に住す、文永五年八月廿日寂す、壽七十、常光寺は後諸處に基を移し、十二代了性之を越後高田町に移したりと云ふ、（本願寺通紀）

ゼンジヨー　善讓　二四六六 二五四六　〔眞宗〕豐前蠣瀨照雲寺の住持なり、善讓字は龍天、父は戒文、母は渡邊氏、文化三年七月十五日に生る、文政十年始めて京都に登り、本山に得度し、性海老人に師事して宗義を學ぶこと十年、業成りて鄕に歸へる、乃ち學舍を建て、諸生を教授す、某年得業科に登り、此より累年召さたて黌務を掌とる、安政六年秋司敎となり、万延元年學林に副講し、文久二年勸學職に任し、慶應元年夏學林に安樂集を講す、此秋某の稱名正因の異計を糾す、是より先き某等督責せられしと雖保執して改めず、故に再び師に命を下さる、なり、師專ら敎理に依りて難詰し、遂に之を服す、明治五年夏朝廷敎導職を置く時、師を大講義に任す、後中敎正に昇る、同六年、同十二年の安居に代講を命せらる、十二年疾あり、會々大敎校落成するに方り本山の召により疾を勤めて出て新講堂に大經を講す、老疾年に加はる、大法主特

に使を遣はして慰問し物を賜ふ、十九年七月六日寂す、壽八十一、諡を勞謙院といふ、明年六月十三日葬儀を行ふ、著作大經錄、本典錄、各十一卷、往生要集錄十卷、選擇集指津錄、指津錄各八卷、安樂集前記、論註記、文類聚鈔聞書、各六卷、眞宗論要前後編、信卷錄、各五卷、安樂集後記四卷、四法大意觀窺錄、五惡段洗心錄、二門偈錄、行一念猶存錄、易行品錄、各一卷、愚秀鈔橫超錄三卷、大經奉命錄若干卷あり、（學苑談叢、碑文）

ゼンシユー　善集　クセー救世を見よ、

ゼンジユー　善住　ニチオー日雄を見よ、

ゼンソー　善叢　二二〇一……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、善叢字は茂彥、其鄉貫詳かならず、松嶺義に參して印可を受け、東福寺に主となる、天文十年十二月十四日寂す、世壽缺く、有隣菴に塔す、（延寶傳燈錄）

ゼンタツ　善達……〔淨土宗〕江戶常德寺の開山なり、善達は建蓮社立譽と號す、俗姓は安藤氏江戶の人なり、潮呑に投じて剃髮し、萬量に師事して法を嗣ぐ、江戶本鄉駒込に常德寺を開く、寂年及世壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンチユー　善忠　二〇五五……〔淨土宗〕三河悟眞寺の開山なり、善忠は上生寂翁と號す、唱名に師事して淨土業を修し、貞治五年三河吉田に悟眞寺を建てゝ開山となる、應永二年八月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンチユー　善仲　一三六八……〔……〕攝津勝尾山の僧なり、善仲は俗姓藤原氏、攝津權守致房の子なり、母は源氏、紀伊守懷信の第八女、慶雲四年正月十五日の夜蓮華二莖空中より降りて口に入ると夢みて娠あり、即ち葷腥を絕ち、佛前に危坐す、和銅元年正月十五日雙子生る、母難苦なく、一胞の中に二兒相對して笑ふ、即ち善仲善算なり、二子共に九歲にして天王寺榮堪に師事し、十七歲にして菩薩戒を受け、學內外を兼ぬ、神龜四年二人共に潛に出て世間を遁れ、攝津の勝尾山に登り、草菴を結びて淨行を事とす、神護景雲二年二月十五日善仲草菴を出て、天に飛び去る、年六十一、其後算不語禪に坐し、翌年七月十五日同じく天に飛び去りたりと云ふ、（神仙傳、往生傳、元亨釋書、本朝高僧傳）

ゼンチヨー　善長……〔曹洞宗〕遠江可睡寺の禪僧なり、善長字は天叟、潛龍慧湛の法を嗣ぎ、其席を襲ひて遠江可睡寺に住す、寂年並に壽缺く、法嗣鳳山等膳あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンツー　善通　リヨーテツ良哲を見よ、

ゼンテー　善貞　二三三七……〔淨土宗〕武藏淨林寺の開山なり、善貞は截蓮社運譽と號す、其俗姓生國詳かならず、源底に師事して法を嗣ぎ、武藏埼玉郡柚木村に淨林寺を創して開山となる、延寶五年四月二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンテキ　善的　二三五四……二四一八〔淨土宗〕備中智光寺の僧なり、善的字は除業障、笠岡智光寺に住して道聲高し、寒厨煙斷て三衣時に缺くも意となさす、念佛稱名す、寶曆八年九月微疾にかゝり、十一月十五日寂す、壽七十五、（續日本高僧傳）

ゼンニヨ　善如　シユンゲン俊玄を見よ、

ゼンホ　善保　リヨーホ良補を見よ、

ゼンヤ　善也　シンイ眞爲を見よ、

ゼンヤク　善益（二〇三二）〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、善益字は大中、俗姓不詳僧海禪師善育に師事し法を嗣ぐ、建仁寺南禪寺に歷住す、某年壽七十四にして寂す、遺偈あり曰く一機瞥轉、閃電猶遲、拗ニ翻大海一、踢ニ倒須彌一（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンヨ　善譽　ウンパ雲把を見よ、

ゼンヨ　善譽　リョーピン良敏を見よ、

ゼンヨ　善譽　リンテー林貞を見よ、

ゼンライ　善來　一四六五 一五三八〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の禪僧なり、善來字は儀山　若狹の人、十一歲出家し二十二歲出遊して備前曹源寺太元に謁し、參究十餘年、遂に其法を嗣く、後京都の妙心大德二大寺に歷住し、慶應二年勅あり佛國興盛禪師の號を賜ふ、明治十一年三月二十八日寂す、壽七十七、

ゼンラン　善鸞　一八六五 一九三八〔眞宗〕開祖親鸞上人の第三子なり、　善鸞假の名は宮內卿、遁世して慈信房と號す、親鸞の第三子にして、覺信尼の同母兄なり、（一說親鸞の第二子）嘗て父の命を奉して關東を弘化す、而して一宗の敎義に反するところあるを以て法を嗣くを得ず、後相摸（鎌倉）越前等の諸地に流浪し、弘安九年三月六日奧州大網に寂す、壽七十なり、一子あり如信といふ、（本願寺通紀）

〔考〕　善鸞の事蹟に關し諸傳一致せず、越前山元派の傳に建治三年九月十四日寂壽七十一といひ、越前出雲路派の傳に弘安元年三月廿二日寂壽七十四と云ひ別の一傳に正應五年寂壽八十一といふ。是非未た詳ならず、今姑く本願寺通紀に依る

ゼンリユーイン　善立院　ニチネン日念を見よ、

ゼンイ　禪意　一七四九……〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、禪意出家して密灌頂を尋禪僧正に受けて、山中に菴居し、寬治三年春寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ゼンイチ　禪一　ショーア照阿を見よ、

ゼンウン　禪雲　一四五一〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、　禪雲は其俗姓生國詳かならず、出家して華嚴宗を等定に學び、延曆十年東大寺別當に任ず、寂年缺く、（東大寺別當次第）

ゼンエ　禪惠（一八〇四）〔眞言宗〕山城醍醐山の學僧なり、　禪慧は字敎王房と云ひ、別に心一と稱す、初の名は義覺と云ひ、奈良に留り、法相宗を究め、論議に長す、興福寺學徒湛秀と幷に名あり、數〻論議を戰はして勝敗決せす、後、師感發する所あり、奈良を去り、醍醐山に登り、賴照阿闍梨に從うて眞言宗に皈し、事相を修習し、次に定海大僧正に從うて法嗣となる、晚年相模の極樂寺第二代となり、大に眞言を弘通す、示寂年月缺く、門下に元海等あり、（續傳燈廣錄）

〔考〕　禪慧は天養元年の頃播磨の極樂寺別當となれり、當時願主となり、瓦の兩面に諸經文を彫刻して土中に埋み、永劫に傳へんとを期したり、寬政十一年同國神崎郡須賀院村の土中より之を發堀し、世に播磨の瓦經と云ふ、

ゼンエ　禪慧（一九〇三）〔戒律宗〕大和大安寺の律僧なり、　禪慧字は本性、東南院にありて三論を學び、其玄旨に達す、常喜院の覺盛によりて滿分戒を受け、大安寺に住す、仁治の末竹林寺の良遍律師の招きにより行事鈔を講じ、尋で海龍王寺の請に應し、行事鈔を講ず、寂年及壽缺く、（本朝高

僧傳）

ゼンエ 禪慧 二三六二―二四四一 〔臨濟宗〕奥州高乾院の禪僧なり、禪慧字は月船、奥州田村郡小野の人なり、郡の高乾院北禪濟禪師に師事す、後、東溪門禪師の法嗣となる、高乾院に住持となること十餘年なり「晩年江戸東輝菴に隠るゝこと三十七年なり、其間の偈あり、蓮華峯北竹溪南、借個蒲團坐草菴、將謂山中無一事」「又隨月色下烟嵐」、又曰く、一臥十年深鎖關、白雲明月照衰顏、丁々伐木如相問、人在西山烟翠間、と又曰ふ白雲深鎖舊青山、一枕清風萬境閑、入海泥牛絕消息、隨流茶葉到人間、と、天明元年六月十二日寂す、壽八十、遺偈あり有過無過、不敢覆藏、末後大罪、驚殺閻王、と、著作武溪集あり、（續日本高僧傳）

ゼンエー 禪英（二〇二二） 〔臨濟宗〕近江曹源寺の開山なり、禪英字は靈仲と云ふ、出家して京都の諸寺に歷參し、後、寂室の許に皈し、心要を發明す、松嶺秀備中にありしとき師を招きて松泉菴に居らしむ、師これと相往來して共に道を語り、玄旨を悟り、永源寺に皈り、寂室を省し、機語相契して印可を蒙る、貞治年中丹州大中臣宗泰師を招きて金山に住せしむ、會愚仲支那より皈るに方り、師舊交あるを以て金山の席を讓り、自ら近江に往き、曹源寺を開き、第一世となる、永源寺に遷り、道譽高し、將軍足利義持使を遣して法要を問ふ、寂年、及壽欠く、（本朝高僧傳）

ゼンエーボー 禪榮房 インシェン胤舜を見よ、

ゼンエキ 禪懌（………） 〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、禪懌字は悅禪と云ふ、般賢に師事して印可を受け、相模圓覺寺に主となる、寂年、及壽欠く、（延寶傳燈錄）

センエキ 禪易（二二五六） 〔曹洞宗〕遠江可睡寺の禪僧なり、禪易字は一柱、參河の人、初め鳳山等膳に參して法を得、席を繼ぎて遠江可睡寺に主となる、慶長の初め詔に依り京に入り、參内して法を說く、特に覆天一柱禪師の號を賜ふ、寂年並に壽欠く、法嗣士峯宋山あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンオー 禪雄（二〇七二） 〔曹洞宗〕能登曹龍寺の開山なり、禪雄字は大圓、加賀の人なり、初め妻孥を捨てゝ空宗を學び、後ち禪林寺善救に師事して侍司となり、善救の永澤寺に遷るに從つて行き鑑寺を典り、復た首座となる、後ち總持寺に出世す、應永十九年龍泉寺に主となる、郡主其道風を聞き、曹龍寺を建立し、延て開山となす、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゼンカイ 禪海（………） 〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、禪海字は無聖、東福寺に出世し、化儀甚だ盛なり、臨終に弟子偈を乞へば、辭世の偈は老僧の欲せざる所なりとて喝一喝して化す、其年時缺く、勅諡法源禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンカク 禪覺 一八七四…… 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、禪覺は鄉貫詳かならず、天仁三年五月寂勝の講に聽衆と共に侍し、承元三年六月二十七日別當に任じ、四年四月七日拜堂、建保二年二月十一日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

ゼンカン 禪鑑 二〇一五…… 〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり、禪鑑字は象外、肥前の人、桃溪悟の法を嗣ぐ、建長寺に住す、晚年同契菴を構へて退休す、文和四年十一月十八日

寂す、遺偈あり、上無ニ攀仰一、下絶ニ已躬一、若又有ニ生可レ度、不レ妨隨處露レ蹤、軸渝妙覺禪師と云ふ、題ニ一覽亭一、等見ニ乾坤一沒ニ兩般一、飛鳥走東遶ニ欄干一、不ニ徒絶頂施ニ牀座一、只貴人人向上看、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンキ　禪喜　一五三四／一六一五　〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、禪喜俗姓は藤原氏、京都の人なり、七歳の時父と共に比叡山に登り、出家の志を起し、十六歳山に入りて座主尊意を拜して祝髮受業し、尊意の神足二百餘人の上首となる、延長中三會の講主となり、僧都に任せらる、晩年極樂寺内に竹林院を構へて終焉の所とし、天曆九年六月九日寂す、壽八十二、師生前孝順にして母死して後肖像を離み、室中に安置し、飯蔬菜先つ其像に供へ、而して後食し、身を終るまで怠らざりきと云ふ、（本朝高僧傳）

ゼンクー　禪空　ニヨシヨー如性を見よ、

ゼングワツ　禪月　シユーヨー宗曄を見よ、

ゼンクワン　禪觀（一九〇九）〔戒律宗〕大和東大寺の律僧なり、禪觀は長聖と號す、戒如の弟子なり、常喜院の覺心に從ひて大和海住山に住す、後如意輪寺に移り、戒律を弘通す、建長年中戒壇院の圓照に招かれて梵網の古迹を講し、諸寺の請に應して屢々講筵を開く、寂年缺く、著作、鈔三卷、文集十九卷、及ひ大賢疏を釋したるものあり、（本朝高僧傳）

ゼンケツ　禪傑　二〇七九／二一六六　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、禪傑字は特芳、尾張熱田の人、幼にして京都に上り、業を妙喜院瑞嵒禪師に受く、後、悲峰に掛搭して才學を錬る、關山派下の禪道盛なりと聞き、龍安寺の義天詔に參し、汾陽寺の雲谷祥、大樹寺の桃隱朔に依ること年あり、出て丶丹波の龍興寺、攝津の海清寺に歷住す、文明十年勅を奉して京都の大德寺を董す、京都妙心寺尾張瑞泉寺に歷遷す、檀越丹波に龍潭寺を開き、師を招きて法を布かしむ、終に京都龍安寺の席を補し、晩年山の側に西源院を建て、自ら壽塔をトし、永正三年九月十日寂す、壽八十八、著作西源錄あり、勅して大寂常照禪師と諡す、（本朝高僧傳）

ゼンゴ　禪牛（……）〔淨土宗〕攝津楞嚴寺の開山なり、禪牛は心蓮社團譽覺齊と號す、法を虎角に嗣ぎ、攝津大坂寺町に楞嚴院を創す、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンコー　禪亨（二一六二）〔曹洞宗〕美濃龍泰寺の禪僧なり、禪亨字は乾叟、俗姓生國詳ならす、初め久しく月江に參し、又華叟一州密山の諸老に從ひて研究し、終に絶方祖奝に美濃龍泰寺にて謁し、其法を嗣き、席を繼きて龍泰寺に主となり、信濃の大澤寺に遷つる、某十月十四日寂す、歛壽く、法嗣大室祖圭あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンサイ　禪才（……）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、禪才字は奇文と云ひ、叔悅禪懌に參して記莂を受け、圓覺寺に主となる、寂年世壽共に詳かならず、（延寶傳燈錄）

ゼンザイ　禪材　二三二七／二四一一　〔臨濟宗〕薩摩大光寺の禪僧なり、禪材字は古月、俗姓金丸氏、初め日向那珂郡佐賀利村瀨川氏夫妻文珠菩薩を崇信し、男子を生まむことを祈る、其婦一夜靈夢に感じ身むあり、寛文七年九月果して男子を生む、即ち師なり、七歳同村瑞光院に詣り、梵唄を習ふ、父母松巖寺一道棟に歸依し、師を一道に附す、十歳自ら出家を求め

一道の下に剃髮染衣す、後一日楞嚴經を讀み、汝修三昧本出塵勞、婬心不除、塵不可出、縱有多智禪定現前如不斷婬、必落魔道と云ふに至りて大に感激し、佛前に跪拜し、祈誓して初志を改めず、と、二十三歲阿波慈光寺湛梁巖の禪風を聞きて其下に馳す、一日巖の命により禪燈偈を作り、賞せらる、光明照破盡乾坤、這裡何人著議論、四七二三直吹滅、今來古往暗昏昏、次に豐後多福寺に往き、賢巖悅に謁し、日夜參究を事とし、三十三歲黃檗山千獃侒三壇戒會を開き、四衆に授く、師登檀受具す、三十四歲紀伊禪林寺大洞柏の請により楞嚴經を講す、三十七歲碧巖集を講ず、尋て同國海藏寺に寓す、三十八歲法兄英山の勸により大光寺に住し、四十一歲島津惟久の命を承け大光寺住持となる、尋て一菴を營みて知又軒と號す、四十二歲檀越宗恕居士一百年忌に値ひ、大齋會を設け、金剛經を提唱す。四十二歲大般若經書寫の業を始め、助筆三十人、二年を越て功畢る、尋て大藏經を求むる意ありて未だ果さず、妙句尼等數人相謀りて淨財を投じ、支那より全藏六十函、幷に傅大士二童の像を購ひ安置す、五十二歲退隱の計をなす、惟久公廩米五十石、幷に山林若干を知又軒に寄附す、五十四歲竟に知又軒に退隱し、次歲備の鳳源寺の請に應じ結制す、淸衆三百餘人法化を蒙る、尋て甲斐慧林寺の請に應じ結制し、圓覺經を講ず、淸衆四百餘人なり、其後江戶に赴き、惟久公に謁し優遇せらる、延岡侯使を遣はして請ふも出でず、惟久公知又軒を修繕し、改めて寺となし、天壽山自得寺と號し、師を開山始祖となす、後、三年八月火災に罹るも幾ならずして再建す、寺側に小院を營みて骨淸堂と云ひ隱退す、三十年來立化城、點過寶所接群情、累思寂室好言語、死在巖根骨亦淸、筑後久留米侯有馬氏深く欽仰し、朝日寺主を遣はして請す、師再三辭せども强請して已まず、乃ち久留米に向ふ、時に七十八歲なり、梅林寺に留り法要を說くこと三十餘日、上下翕然として歸仰す、二月廿五日同地に慈雲山福聚寺を開き、開山始祖となる、八十二歲薩摩大龍寺の請に應す、翠巖眞臨濟錄を代講し、師は唯參禪を主る、淸衆二百五十人なり、八十三歲大慈寺の請に應じ、開山佛智大通禪師の四百年忌を修す、既にして骨淸堂に歸る、八十四歲長門長府侯の請に應じ、日來寺に法要を說く、歸後福聚寺側に濟松軒を築きて幽棲す、京都妙心寺より招かるゝも出でず、寶曆元年四月二十四日福聚寺に寂す、壽八十五、遺偈を二紙に書し、福聚自得の兩寺に留む、好不唧留、八十五年、翻身一擲、棒殺靑天、（續日本高僧傳、近世禪林僧寶傳）

ゼンシツ　禪室　シューアン宗安を見よ、

ゼンシツ　禪室　チンモク珍目を見よ、

ゼンシン　禪信　二〇六〇―二一二七　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、

禪信は洞院大納言實信の子、應永七年に生る、廿年六月禪守の室に入りて得度し、廿五年正月入壇す、時に僧都たり、廿七年七月權僧正に任し、同月同日東寺の長者に加任す、卅三年寺務に補し、永享五年法務に任す、應仁元年十一月八日寂す、壽六十八、（仁和寺諸院家記）

ゼンシュ　禪守　（二〇七五）　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、

禪守は僧正花町入道と號す、式部卿親王邦省の子永和

二年六月二日成助に從ひ灌頂し、應永二十一年五月十一日寺務に補し、同廿二年八月廿八日長者に加任す、寂年缺く、(仁和寺諸院家記)

ゼンシユー　禪鷲 二二三九 二二九六 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、禪鷲字は嶺室、俗姓高氏、壹岐の人なり、十一歲の時眞翁達に投して薙髮し、關東の諸老に徧參し、長門大寧寺鐵村玄鐵に見え、留りて左右に侍し、元和六年席を踵ぎて同寺を司とる、寛永十三年十一月九日寂す、壽五十八、臘四十二法嗣國蒐宗珍あり、(日本洞上聯燈錄)

ゼンシユー　禪秀 (一九七五) 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、禪秀は美濃守秀時の子なり、出家して禪助に師事し、正和四年入壇し權大僧都に任せらる、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

ゼンシヨ　禪曙 (……) 〔曹洞宗〕加賀開禪寺の禪僧なり、禪曙字は天菴、能登の人、初め童子となりて洞谷寺の三峰素哲に從ひて祝髮し、無等慧宗によりて進究す、其法を嗣ぎ、遂に洞谷寺に出世し、諸嶽山に轉す、後辭して加賀の開禪寺に退去し、同寺に終る、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

ゼンジヨ　禪助 一九〇七 一九九〇 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、禪助は源通成の子なり、幼にして仁和寺法助僧正によりて祝髮受戒し、文永二年冬法助の傳法灌頂を受けて眞乘院に住し、永仁元年大僧正に任ず、翌年二月東寺の長者に任し、寺務法務を領して護持僧となる、德治二年七月伏見上皇薙髮し給ひ、師を以て戒師となす、三年正月後宇多法皇師に就て灌頂を受け、牛車の宣を賜ふ、同年三月東寺の座主となる、延慶四年仁和寺を主とり、文保三年秋再び東寺の長者に任し、元應二年七月諸職を辭して舊院に退き、元德二年二月十二日寂す、壽八十四、(東寺長者補任、本朝高僧傳)

ゼンシヨー　禪勝 一八三〇 一九一八 〔淨土宗〕遠江某菴の僧なり、禪勝俗姓生國詳ならす、出家して遠江國蓮華寺に止り、天台宗の敎義に通す、後武藏熊谷に到り、蓮生に逢うて淨土宗の敎義を問ひ、蓮生の指示により京師に上り、源空上人に謁し、其敎示を受け、常に念佛誦經を事とす、尋て上人の下を辭して遠江に歸り、市鄽に住居して出家の風儀を掩へり、國人禪勝に皈依し、一菴を開きて請待す、嘉祿三年長樂寺隆寬の東國に配流せらるゝ際、暫く遠江見付に滯留し、特に禪勝を訪問して尊仰せり、當時禪勝備作して民家に往來したれは、其學德を知るものなかりしが、こゝに至りて守令吏民共に大に驚き尊仰したりといふ、正嘉二年九月疾あり、十一月四日念佛して寂す、壽八十九、(淨土傳燈錄、淨土總系譜)

ゼンシヨー　禪性　クーグワツ空月を見よ、

ゼンジヨー　禪定　ジヨーソン定尊を見よ、

ゼンゾー　禪藏 (一二三二) (……) 我國最初の尼なり、善信尼の弟子となる、善信尼の下を見よ、

ゼンタク　禪宅 二四四五 二五一一 〔新義眞言宗〕山城智積院第三十四代なり、禪宅字は戒舟、武藏足立郡の人、謙順の法資なり、移轉地の制改正せられて越前瀧谷寺に移轉し、圓福寺に進み、尋で天保八年智積院能化に任せしが、一年餘にして其職を辭し、江戶谷中加納院に幽棲し、十四年を經て嘉永四年二月十六日寂す、壽六十七、遺命により加納院に葬る、(新義眞

言史料）

ゼンチ　禪智　レンゲン蓮眼を見よ、

ゼンチイン　禪智院　ニチヨー日好を見よ、

ゼンチヨー　禪長　二一二二/二一八四　〔曹洞宗〕甲斐大泉寺第一代なり、禪長字は天桂、俗姓は源氏、加賀能美の人なり、幼にして郡の敎寺に投して祝髮し、廿歳衣を更えて越前の龍泉寺に入り、禪觀の法を習ふ、永正十四年甲斐慈照寺眞翁宗見の道學を聞き、往きて參謁し、遂に衣法を付せられ、山谷に菴を結ひて隱棲す、大守武田信虎府内に大泉寺を剏し、師を第一祖に延く、大永四年九月二十九日寂す、壽六十三、（日本洞上聯燈錄）

ゼンチヨー　禪長　二一六〇　〔曹洞宗〕下野慈眼寺の禪僧なり、禪長字は傑傳、奧州伊達郡の人、幼にして出家し、遊方して越前に到り、龍興寺大見禪龍に參し、康正二年十一月四日入室して衣法を受け、上野長源寺に出世す、後、下野長林寺に移り、慈眼寺に主となる、明應九年八月十日寂す、壽缺く、法嗣天英祥貞あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンドー　禪洞　二一四五　〔曹洞宗〕越前心月寺の開山なり、禪洞字は桃菴、越前國の人、其俗姓は詳ならず、大見に師事し龍興寺の席を嗣き、遷て龍泉寺を董す後詔を受けて總持寺に出世す、美作の大守朝倉敎景越前に心月寺を創し、師を請て開山と爲す、文明十七年三月十二日寂す、壽詳ならす、（日本洞上聯燈錄）

ゼンナイン　禪那院　ニチチユー日忠を見よ、

ゼンニ　禪爾　一九一三/一九八五　〔華嚴宗〕和泉久米多寺の學僧なり、禪爾字は圓戒、京都の人、俗姓は阿部氏、陰陽博士晴明の遠裔なり、十九歳にして八幡大乘院の琳海に就きて剃髮し、凝然に師事して戒律を學ひ、華嚴の敎理を探ぐる、三十三歳圓照に具足戒を受け、京都金山院に住し、加賀の無量壽福寺に移り、華嚴、及ひ戒律を講す、又奈良に移り、眞言院の聖守に隨ひて密敎を受け、灌頂壇に入る、法燈國師の道風を聞き、興國寺に至りて謁し、參尋して其玄旨を得たり、弘安六年和泉久米多寺の顯尊の招により其後を嗣きて同寺に住し、禪堂を構へ、晝夜二時衆と共に靜坐す、禪餘華嚴及ひ三大律疏を講し、住持四十年尙一日の如し、正中二年正月八日寂を示す、壽七十三、臘五十一、遺骸を寺後に葬むる、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ゼンニン　禪仁　一七九二　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、禪仁は越前守源基行の子、禎範僧都に顯密を受け、康和五年尊勝院の初阿闍梨に任す、嘉承元年の最勝會に興福寺の永緣僧正講師となり、師問者となる、嘉承元年二會の講師となり、天仁二年最勝會の講師に任す、大治二年律師より少僧都に轉し、翌年大僧都に昇り、法印に敍す、天承元年法勝寺八講會の講主となり、證義者を兼ぬ、年七十餘にして園城寺に住し、兼ねて探題となる、其終を詳にせす、（本朝高僧傳）

ゼンニン　禪忍　ジヨーシン乘心を見よ、

ゼンニヨ　禪如　タンシヨー湛照を見よ、

ゼンノー　禪能　ギユー義融を見よ、

ゼンヘン　禪徧　コーキヨー宏敎を見よ、

ゼンホー 禪峰 二三四六／二三九二 〔淨土宗〕出羽松高山某菴の僧なり、禪峯字は侍定、俗姓は東海林氏、出羽國村山郡藏增村の人なり、家世々豪富なり、師生れて凡ならず、夙に佛敎を信して葷腥を嗜まず、羽鱗を害せず、奥州の無能和尙道聲振ひ、出羽に遊化し、誓願寺に選擇集を講ず、師日々講筵に陪し、爾來日課念佛三万遍す、後妻子田宅を捨て丶行脚す、時に三十三歲なり、初め羽黑山に登りて岩窟の間に端坐し、一食長齋晝夜臥せず、一心念佛十萬聲、四十八日間斷なし、次に月山湯殿山に登り二七日斷食念佛し、次に最上山に登り三七日念佛す、奥州藏王嶽に登り三七日斷食念佛し、鳥海山、(羽後)淺間嶽、(信濃)熊野山、(紀伊)富士山、(駿河)、筑波山、神波山、(常陸)妙義山、(上野)大山箱根山、(相模)立山(越中)等の諸名山を經歷し、到るところ三七日、或は五十日百日苦修鍊行す、享保五年六月自ら刀を把りて勢を截る、九月出羽の寶勝禪師瑞峰和尙を仰ぎて受戒し、且つ不思善不思惡の話を得て參究す、斧搬柴運水の作務を辭せずして工夫相續す、機緣初發心より念佛三昧にあり、幾もなく和尙の下を辭し、用村の草菴に住す、晝夜念佛十五万聲す、衆人歸敬し、來者市をなす、師十念を授く、後和合村の菴に移り住し、兩所に往來す、常に枕席蚊幮を用ひず、三日に一喰木果草實によりて支ゆ、冬夏一葛衫なり、赤脚にて步す、每年嚴冬の日最上川の中流に立ちて一七間勵聲念佛す、遠近の士女兩岸に群集し、念佛相和す、また時々自他業障懺悔のため頭燈掌燈を燒きて諸佛に供養す、享保十年夏松高山に登り、一七日間斷食し、日課念佛十五萬遍す、山上に靈告を蒙り、鐘樓建立の願を發し、四方に募緣し、十五年六月鐘及び鐘樓成る、尋て大悲閣を建立し、阿彌陀佛並に大悲三十三身の像を安置す、鐘樓の側なる巉巖を穿ち、縱橫五尺、恰も石槨の如し、是れ自ら遺身の地となす、十七年七月十六日の夜自ら利刀を把り、兩眼睛を刳り、次に身肉を斬り、兩耳唇舌腕腹足指等八十七片を机上に置く、白乳出迸して腥血なし、十七日正午道俗に永訣し、徐步窟前に到り、悉く衣被を脫し、裸形にして巉巖の裡に投し、低頭合掌西に向ひ、念佛十餘遍結跏趺坐して寂す、壽四十七、臘十一なり、道俗感激涕泣す、八十七片の肉を有緣の地に送りて葬り、其上に塔を建つ、(續日本高僧傳)

ゼンポー 禪芳 二二三四…… 〔淨土宗〕武藏願行寺第三代なり、禪芳は法蓮社然譽と號す、其鄕貫詳かならず、出家して法興智聰上人に師事して淨土敎を學び、遂に其法を嗣ぐ、初め武藏品川願行寺に住して第三代となり、次に鎌倉光明寺に主となる、後、相模芹澤來迎寺、州の金澤天然寺、三浦長安寺等を刱して開山となる、永祿七年二月二十六日寂す、壽缺く、嗣法洞雁の一人あり、(淨土總系譜)

ゼンモ 禪茂 (……) 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、禪茂字は南英と云ふ、景堂和尙に參して法を嗣ぎ、妙心寺に主となる、寂年及世壽缺く、法嗣春澤榮奕一人あり、(延寶傳燈錄)

ゼンモク 禪睦 二二四四…… 〔曹洞宗〕武藏龍穩寺の禪僧なり、禪睦字は天室、上總長南の人、俗姓は平氏なり、幼にして同國三途臺に依りて薙髮し、天台を學ぶ、時に節菴良筠武藏龍穩寺に於て開法するを聞き、往きて之に見え、親炙久

しくして遂に宗奥を究む、筋菴の退席するに及ひ、衆請により龍穩寺に主となる、天正五年移りて最乘寺を領し、二年にして龍穩寺に歸へる、天正十二年八月二日寂す、法嗣布州東播あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンユ 禪愉 二二二一…… 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、禪愉字は龜年、京都の人、俗姓は源氏、遠山の族なり、幼にして特英和尙を禮して薙髮受戒し、諸山に徧歷して建仁寺にて桂月舟璉雪嶺二師に新近して硏究多年、靈雲寺に歸へり、大休國師に依りて其法を得て妙心寺に出世す、後奈良天皇深く師の道化を崇み、恩遇甚た篤く、屢々法を宮中に問ひ、特に照天祖鑑國師の號を賜ひ、歲時の朝覲あるごとに、先つ師の到るを待ちて而して後他僧の入内を許す、晩年辭して退藏院に逸老し、永祿四年十二月十三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ゼンヨ 禪譽 一七一八 一七八六 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、禪譽賢聖房と號す、肥後守重房の子、性信親王傳法灌頂の嗣なり、官僧都に昇りて仁和寺に居る、白阿上皇女院の產の爲に時の名德に五壇の法を修せしむるや、師降三世の壇を修す、承德三年上皇の病を禱り、師護摩壇を修す、天仁年中東寺の長者に補し、大治元年三月十七日寂す、壽六十九、（本朝高僧傳）

ゼンリウ 禪龍 二〇五一 二一一六 〔曹洞宗〕下野長雲寺の開山なり、禪龍字は大見、奧州の人越前龍興寺に於て希明淸良に師事し、文安二年八月一日印可を受け、同四年法席を嗣ぐ、同五年但馬守長美下野足利に長雲寺を建立して師を招く、師乃ち其第一世となる、長雲寺後に長林寺と云ふ、寺務六年にして傑傳に讓り、再び龍興寺に主たり、康正二年十一月十一日寂す、壽六十六、（日本洞上聯燈錄）

ゼンアン 全菴 イチリン一繭を見よ、

ゼンガン 全巖 トージユン東純を見よ、

ゼンギヨー 全行 ユーシン友心を見よ、

ゼングドーニン 全愚道人 シユースー周崇を見よ、

ゼンクワイ 全快 一九六九 二〇四四 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、全快字は鈍夫、俗姓不詳、靈巖昭の法を嗣ぐ、元に渡り育王山月江印に依る、歸後信濃に善應寺を開き、尋て圓覺建長の二寺に上る、上杉心傳居士に歸依せらる、晩年華光菴を構へて退休す、至德元年八月十四日寂す、壽七十六、瑞應塔を立つ、遺偈、末後一句、應用無レ虧、手把ニ明月一到ニ上須彌一、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ゼンギヨー 全堯 二二三七 二三〇四 〔曹洞宗〕越前龍泰寺の禪僧なり、全堯字は天花、筑前の人、俗姓詳ならず、初め萬安鐵心等と共に諸國に行脚し、龍泰寺朝國正補に謁して衣法を享く、和泉の刺史源乘壽美濃岩村を鎭し、師を請して盛嚴寺に住せしむ、後遷りて總持寺に升り、寛永十年龍泰寺を領す、晩年倉知の大龍院に退去し、正保元年十一月二十八日寂す、壽六十八、偈あり虛空粉碎、大地平沉、末後一句、的的分明、と、大龍滿願淨光千手の諸寺は皆師の開く所とす、（日本洞上聯燈錄）

ゼンケン 全賢 一八四四 一八九三 〔眞言宗〕山城醍醐山無量壽院の四代なり、全賢字は中納言僧都といふ、南家備中守藤原光

衆の子なり、雅海の燈を續き、松橋の二十三祖となり、無量壽院に住す、後又成賢の傳を受け、清住寺の別當となる、天福元年正月二十八日寂す、壽五十、付法の弟子淨眞といふあり、(續傳燈廣錄)

ゼンゲン 全玄 一七七三／一八五二 (天台宗)近江延暦寺の座主なり、 全玄俗姓は藤原氏、少納言實明の子なり、行玄最嚴二師に天台教を學び、壽永三年天台座主に任ず、建久三年十二月十三日寂す、壽八十、(天台座主記)

ゼンコ 全虎 (二一七六) (曹洞宗)伯耆東昌寺の開山なり、 全虎字は嘯巖、久しく龍泉寺の仙林性菊に依り、心旨を發明し、總持寺に出世し、美作青蓮寺に遷る、伯耆の牧某安泰東昌の二寺を剏し、共に師其開山たり、寂年並に壽缺く、法嗣秋山總菊あり、(日本洞上聯燈錄)

ゼンコク 全國 コーゲ高外を見よ、

ゼンサ 全槎 二二五二 (曹洞宗)三河全久寺の禪僧なり、 全槎字は浮翁、初の名は志淳、遠江の人なり、幼にして出家し、萬休永歲に師事して印可を蒙り、其席をつきて參河全久寺に住し、永平寺に出世し、泉龍寺龍溪寺に歷遷し、又全久寺に皈へる、文祿元年十月八日寂す、本山に塔す、法嗣眞翁宗龍あり、(日本洞上聯燈錄)

センサク 全索 二二六八 (曹洞宗)薩摩福昌寺の禪僧なり、 全索字は大麟、薩摩國の人、鎌田氏の子なり、初め諸方に參して鉗芥投じ難し、後に天海に依り、一日豁然として旨を領す、天海之を印可す、未だ幾ならず衆に首たり、後に信衣を受け、妙谷寺に住し、福昌寺に移る、大に石屋の道を唱ふ、詔に應して禁中に入り、法を說き、旨に稱ふ、金襴の伽黎と、佛印眞證禪師の號を賜ふ、慶長十三年九月朔日寂す、世壽詳ならず、(日本洞上聯燈錄)

ゼンシユ 全珠 二二四八／二三〇二 (曹洞宗)薩摩妙圓寺の禪僧なり、 全珠字は集叟、薩摩の人、俗姓は紀氏、父は景次、母は源氏の出なり、幼にして福昌寺大麟に依りて祝髮受具し、上野に到りて泉通寺應朔に謁し、服勤四年、薩摩福昌寺に皈へり、日鑑壽益に參し、其法を嗣ぐ、寛永中島津家久請して妙圓寺に住せしむ、道譽京師に達し、召されて參內し、紫衣並に佛證古心禪師の號を賜ひ、且つ手詔を賜はる、住六年、同十四年辭して、谷山の藏六軒に退隱し、寛永十九年六月二十四日寂す、壽五十五、(日本洞上聯燈錄)

ゼンシユー 全宗 二一八八／二二五六 (天台宗)近江比叡山の僧なり、 全宗號は德運院、近江甲賀郡の人なり、橫川にて得度し、敎觀を學習す、元龜二年織田信長の兵火に罹り、一山の堂塔悉く灰燼となり、山僧四方に離散す、師還俗し醫業をなす、豐臣秀吉に舊識あり、其勢あるに及ひ、師擢てられて大醫院となり、正四品に叙せらる、會々京都疫病流行するにあたり、師藥を施こすこと一百日、其によりて平治したる者數ふへからす、幾もなく再ひ出家し、藥樹院に住し、法印に任せらる、竊かに比叡山再興を計り、秀吉に勸說せり、遂に自ら四方に勸化して資財を募り、中堂戒壇堂等次第に營興す、秀吉食封三千石を寄附して助く、師晚年念佛三昧に入り、慶長元年十二月十日寂す、壽六十九、(續日本高僧傳)

ゼンシユー 全洲 リヨーオ・良雄を見よ、

ゼンシユク　全祝　二二六七／二二四六　〔曹洞宗〕信濃龍雲寺の開山なり、全祝字は北高、出羽の人、俗姓は源氏、父を北殿と號し、奥州の國司北畠顯家の裔なり、十二歳州の廣頑禪師に投して薙髮し、遊方して關東の諸老宿に徧參し、越後の雲洞寺に往き、不點存可に見えて侍司となり、明年登りて第一座となる、久しくして總持寺に出世し、繼きて不點の席を補して雲洞寺に移つる、甲斐の大守武田晴信信濃龍雲寺を重興して師を聘して其一世とす、天正十三年辭して長壽院に退院し、仝十四年十二月二日寂す、壽八十、遺偈に曰く、狂言妄語、滿八十年、末後端的、孤舟沒㆑煙、（日本洞上聯燈錄）

ゼンゾー　全象　……）　〔眞宗〕近江顯了寺の住持なり、全象は宗學を龍華に承け、兼ねて詩文に通す、當寺近江各處に三業の餘黨あり、愚俗の惑未た去らさりしかは本山師に命して之を說諭せしむ、到る處皆正義に歸す、嘗て學徒に送る詩に曰く、往矣再遊應㆑有㆑期、暫時何必說㆓離思㆒、由來男子四方志、笑折㆓門前楊柳枝㆒と、著作淨土和讃復集記等あり、（學苑談叢）

ゼンチイン　全痴院　　セツガン拙巖を見よ、

ゼンチユー　全衷　二二〇〇……　〔曹洞宗〕丹波圓通寺の禪僧なり、全衷字は折桂、備後の人、幼にして敎寺に於て祝髮し、後出遊して關東に往き、諸名宿を歷參し、永澤寺に於て安室永忍に參し、七年にして其蘊奧を究め、亨祿二年安室の遺命を受けて丹渡の圓通寺に住し、青原寺普門寺に歷住す、幾ならず再び圓通寺に歸へる、天文九年二月十四日寂す、壽缺く、法嗣大透秀的あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンテー　全貞　二二七六……　〔淨土宗〕甲斐西凉寺の開山なり、全貞は信蓮社深譽と號し、其俗姓生國詳ならず、觀智國師に投じて剃髮し、後、鎌倉光明寺存譽に師事して法を嗣ぐ、甲斐郡內西凉寺の開山となる、元和二年寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ゼンハン　全播　（二二二六）　〔曹洞宗〕安房長安寺の禪僧なり、全播字は天翁、俗姓海野氏信濃の人なり、龍湫玄朔に參し、其提唱を聞きて發悟し、席を嗣きて安房長安寺に住す、晩年安國寺に養老し、某年寂す、壽缺く、法嗣懷州周潭あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンポー　全芳　（二二六四）　〔曹洞宗〕上野永源寺の禪僧なり、全芳字は嫩如、初め曇英慧應に隨ひ、次に賢室自超に師事して印可を蒙り、賢室の寂後其席を繼きて上野永源寺に主となり、某年寂す、壽缺く、法嗣青巖周陽あり、（日本洞上聯燈錄）

ゼンポー　全報　　サツショー薩生を見よ、

ゼンミヨー　全苗　　グワツタン月湛を見よ、

ゼンヨ　全譽　　モサン茂産を見よ、

ゼンヨー　全用　（二〇四一）　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、全用字は大用、出家して少林蔓禪師に印可を受け、下野の長樂寺に出世し、盛に法鼓を鳴す、後、勅を奉して京都の南禪寺に住し、晩年聚松院を刱して退休し、將に寂せんとするや衆を集めて遺誡訣別し、觀自在の像に對して偈を稱へて曰く、七十有一、大事了畢、虛空紙窄、閣㆓須彌筆㆒と、安然として寂す、壽七十一、（本朝高僧傳）

ゼンリユー　全龍　……二二二五　〔曹洞宗〕相模寶珠寺の禪僧なり、全龍字は月潭、肥後熊本の人、初め郷塾に儒學を習ひ、後比叡山に登り、天台の學を研究し、次に禪に入る、尾張の默旨相模の養壽を歴問し、養壽の下に滯留參究すること年あり、遂に其法を嗣ぎ、寶珠海藏二寺に歴住し、大に宗風を擧揚す、慶應元年六月二十四日寂す、門下に梅仙穆山等あり、

ゼンクー　漸空　リョークワン了觀を見よ、

ゼントン　前豚（……）〔曹洞宗〕下總乘國寺の禪僧なり、前豚字は信及と云ひ、中雄宗字の法を享け席を嗣ぎて下總乘國寺に主となる、寂年及ひ壽缺く、法嗣良室永忻あり、（日本洞上聯燈錄）

ソの部

ソアン　祖安　二四四八 二五二四　〔臨濟宗〕尾張大山寺の禪僧なり、祖安字は伊山、俗姓は山田氏美濃國高柳の人なり、甫めて九歳州の市瀨村天喜寺栴叟に投して剃染し、隱山に天澤菴に參し、後、隱山の命を受けて尾張大山寺の雪關に侍し、刻苦するもの十餘年、大悟徹底して印可を蒙むる、元治元年五月十六日寂す、壽七十七、臘六十九、

ソイチ　祖一　一九三四 二〇一七　〔臨濟宗〕美濃大覺寺の開山なり、祖一字は峰翁、俗姓不詳、家居書を好み、學内外に渉る、二十四歳禪宗に歸し、雲巖寺に掛搭して一夏高峰禪師に參し、西國に向ひ横嶽に登りて南浦禪師に參し、其下に留侍すること六年なり、其間辛勤苦修し、疲勞疾をなす、一信士あり請ひて迎へ歸へり、供養醫治す、尋て南浦禪師より印記を受け、京師に登り、紫野に宗峰國師を訪ひ、日に碧巖集を擧揚す、崇福寺に住し、法化大に盛なり、後、美濃の明覺山大覺寺の開山となる、郡守某の創立して請侍したるによる、延文二年三月某日寂す、壽八十四、勅謚正宗大曉禪師と云ふ、著作佛祖正傳一卷あり、上七佛より密菴咸傑に至るまで、臨濟下正傳の大較を列したるものなり、梓行したるも今傳はらず、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソイン　祖寅　（二二一五）〔曹洞宗〕近江新豐寺の禪僧なり、祖寅字は大叟、近江の人なり、美濃妙勝寺に於て出家し、月洞禪師に師事して戒を受け、後、雪叟一純に見え、其席を嗣ぎ、近江新豐寺に主となる、後總持寺慈眼寺に歴住す、瑞泉寺光嚴寺を開きて終る、寂年、壽缺く、法嗣龜阜豐壽、機雲祖旭、興國玄㫍の三人あり、（日本洞上聯燈錄）

ソエー　祖裔　一九七二 二〇五四　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、祖裔字は笠芳、俗姓不詳、遠江の人なり、禪敎兼通し、且つ文藻あり、曆應の頃本師石梁の跡を繼ぎて信濃慈壽寺に住す、貞和の初詔を拜して京師の建仁南禪兩寺に歴遷し、晚年東山に海雲院を構へて屏居す、應永元年七月廿七日寂す、壽八十三、祖裔嘗て筑の呑碧樓に登りて東陵璵の韻を次して詩あり、樓呑碧海景殊奇、不登臨孰敢知、壁躍清波明月夜、錦翻孤島夕陽輝、星槎秋平期無忒、海鳥忘機狎有宜、祇爲望中風味好、未知日影向西移、又東漸寺の作あり、傑出東州仙境地、千峰環拱鎖烟雲、杖頭活落生平眼、月印海心玉一痕、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソエー　祖永　ホーゴン方巖を見よ、

ソエン　祖圓　一九二一／一九七三　〔臨濟宗〕京部南禪寺の禪僧なり、祖圓字は規菴、俗姓不詳、信濃水內郡長池の人、弘長元年正月に生る、幼にして鎌倉に出で、淨妙寺龍江禪師に就きて剃髮受戒し、稍長して建長圓覺二寺に遊び、佛光國師に參す。國師示寂の後、京師に上り、東福寺大明國師普門に師事し、入室請益す、また紀伊の鷲峰に登る、法燈國師瑞龍山を開き、師を率ゐて往き住す、龜山上皇慶ぶ學德を稱したまふ、正應四年大明國師寂す、上皇勅して祖圓を擧ぐ、師時に三十一歲なり、鎌倉に下り佛光禪師の塔を拜し、高峰顯日に謁して證明を得、既にして瑞龍山に據る、四方の英俊雲集す、上皇歸依殊に深く、常に宗乘を問答したまふ、上皇病中御製の偈あり師に賜ふ、祖圓韻を次し上進す、玉皇仙是病無垢、一朶紅雲擁九關、常寂光中塵不到、上方香散手擎盤、師の時南禪寺の構造未だ備はらず、師經營功あり、大殿、法堂、廚庫、雲堂、三門、廊廡、叢林等皆全備す、住持すること二十四年なり、正和二年の春末疾を示し、四月二日の夜寂す、壽五十三、遺偈あり、一躍躍翻黃鶴樓、一拳拳倒鸚鵡州、臨行一著元無別、黃鶴樓前鸚鵡州、南禪寺中の歸雲菴に葬る、嘉曆三年十一月天皇御駕親臨したまひ、勅諡南院國師を賜ふ、（行狀、元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソエン　祖緣　（……）　〔臨濟宗〕加賀慈照院の禪僧なり、祖緣字は別宗、號は頤神、其先は近江の人、俗姓源氏、佐々木氏加賀金澤に生れ、出家して中興光雲寺英中賢禪師に師事し、前住相國寺覺雲古禪師の法を嗣き、景德眞如二寺を經て相國寺に住し、紫衣の賜を拜す、後南禪寺に轉し、詩文の技に長す、示寂の年月は缺く、（燕臺風雅）

ソオー　祖雄　一九六／二〇四　〔臨濟宗〕丹波高源寺の禪僧なり、祖雄字は遠溪、俗姓藤原氏、丹波氷上郡佐治莊の人、父は光基と云ふ、師早年出塵の志あり、十九歲某寺に投じて落髮受戒し德治元年元に渡り、天目山中峯禪師に謁し、勤侍十年、心印並に禪門戒法を受く、尙ほ留ること三年、母の書に接して東歸す、中峯自讃の頂相を與ふ、正和五年東返す、母既に死せるを聞き、筑前に留り一巖穴に棲むこと十餘年にして丹波に歸へる、瑞巖山高源寺を開きて禪風を揚ぐ、道譽朝に聞え屢々寵錫を蒙る、康永三年六月廿七日同寺に寂す、壽五十九、遺偈あり、悟了牛死、五十九年、來來去去、白日靑天、門人靈光塔を建て骨を收む、嗣法了悟菴あり、（行實、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソオー　祖應　二〇三四……　〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、祖應字は夢巖、出雲の人、東福寺潛溪謙に師事して宗乘を參究し、後國に歸り、門を閉ぢて靜養すること二十年なり、道譽四傳し、東福寺より請せらる、法化甚だ盛なり、大岳崇、東漸易、大愚智、岐陽秀、惟肖巖等皆前後其門に遊ぶ、應安七年十一月二日寂す、語錄、並に旱霖集あり、勅諡大智圓應禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソオン　祖恩　二二八四……　〔臨濟宗〕京師妙心寺第八十二代なり、祖恩字は芳澤、號は探春と云ふ、姓氏詳ならず、少時より東西に雲遊して諸禪德に歷參し、後、材嶽宗佐禪師の室に投し其法を嗣ぎ、妙心寺塔頭大心院第五代となり、慶長五

年詔を奉して妙心寺に升り、第八十二代の住持となる、長門の大守妻木氏法名宗鐵居士、妙心寺塔頭瑞松院の廢を興し師を請す、師其院に住し、起居進退規矩を脫せず、時人百丈禪師に比す、寛永元年四月十七日微疾を示して寂す、法を嗣く者三人、嶺南六、龜峯元、秀巖說なり、師詩文に通し、其作世間に傳はる、（野原稻藏氏返信、松山七祖錄）

ソカン　祖鑑　二二一二　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、祖鑑字は天室と云ふ、久しく妙心寺明叔慶浚禪師に參して法を嗣ぐ、然れども未だ出世に及ばずして遂に寂す、（延寶傳燈錄）

ソキ　祖輝　（一九〇六）　〔臨濟宗〕京師建長寺の禪僧なり、祖輝字は獨照、京師の人、義翁仁の法を嗣ぐ、初め奧州太守の請により松島寺に住し、後筑前の聖福寺、相模の淨妙寺、京師の建仁寺に遷り、終に建長寺に升る、元弘元年三月二十四日寂す、世偈あり、生死如幻、去來如電、生死去來、打成一片、勅諡眞覺禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソキユー　祖岌　二三一二　〔淨土宗〕武藏圓福寺の開山なり、祖岌は光譽と號す、武藏埼玉郡の人、其俗姓詳かならず、呑龍に就て淨土教を學び、都の一割村に圓福寺を創して開山となる、承應元年寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ソキユー　祖休　ドーカク道覺を見よ、

ソキヨー　祖京　二三二七　二二七二　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、祖京初の名は舜海と云ふ、俗姓山野氏、丹波篠山の人なり、幼にして無量院賀順法印に從うて度を受け、貞享三年囑を受けて坊を領す、元祿十一年本坊を改造す、十二年輪王寺法親王衆に命して開山大師制定の一紀住山を中興するに方り、禪定院燈外、護心院祖室と其事に從ふ、名を祖京、字を覺門と改む、靈空和尚に學び、一旦教義を論して意見合はす、遂に門下を去る、寶永三年五月故ありて山を下り、洛東岡崎に居す、正德二年十月廿九日寂す、壽四十六、臘三十二、全身を鈴聲山眞如堂に葬る、（天台霞標）

ソキヨー　祖曉　二三二七　二三八一　〔曹洞宗〕甲斐法泉寺の第二世なり、祖曉字は天巖、甲斐都留郡寶村の人、同村江西院に入りて某師に就いて度を受け、性行豪邁なり、後法泉寺第二世となり、相模國足柄郡萩野松石寺、近江國滋賀郡彥根清凉寺に歷住し、晚年駿河國富士郡秀道院に退隱し、享保十六年十一月七日寂す、壽六十五、世に傳ふ師黃檗の宗風を惡み、幕府に請うて禁制せんとし、大に奔走したるも遂に果さす、然れとも畢生攻擊して止まさりきと云ふ、（法泉寺返信）

ソキヨー　祖慶　（二一三五）　（曹洞宗　能登總持寺の禪僧なり、祖慶字は雲窓、越後の人、俗姓源氏なり、出家して慈光顯窓に依る、稍長して諸老の門に遊び、一雲寺に於て川僧に侍す、川僧總持寺及び龍澤寺に歷住するに當り、尙之れに從ひ、或は記室となり、或は藏鑰となる、川僧師に雲窓の號を與ふ後總持寺に出世し、雲洞の席を嗣きて住す、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ソキヨク　祖旭　二〇七三　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、祖旭字は日東、桂嵓昌に師事して法を嗣ぎ、京都南禪寺に主となる、應永二十年四月五日寂す、常照菴に塔す、（延寶傳燈錄）

ソキヨク　祖旭　二〇八四 二一五二　〔曹洞宗〕越中光嚴寺の禪僧なり、祖旭字は旗雲、俗姓は藤原氏、越前の人なり、幼にして慈眼寺希明に依りて祝髮受具し、稍長して遊方し、定光寺機堂に見え、又青原寺雪叟に謁す、終に新豐寺天叟祖寅に參して其法を嗣き、諸嶽山を領し、慈眼寺に遷る、寬正五年下總の大守藤原顯泰聘して龍淵寺に住せしむ、文明年間越中光嚴寺を主とり、明應元年十一月二十八日寂す、壽六十九、遺偈あり、曰く、拂二佛魔塵一、拭二眞如月一、六十九年、傀儡一橛、と、遺骨を分ちて新豐寺、光嚴寺、龍淵寺に塔を建てゝ葬むる、法嗣東海宗洋、惟通桂儒二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ソクワイ　祖晦　二〇八一 二一六二　〔臨濟宗〕伊勢萬笑院の禪僧なり、祖晦字は杲觀と云ふ、春江に參侍して心印を付せられ、萬笑院に住す、文龜二年三月二十七日寂す、壽八十二、（延寶傳燈錄）

ソクワン　祖環（一九八五）〔曹洞宗〕越前祥園寺の開山なり、祖環字は無端、能登の人、幼にして大乘寺瑩山を禮して得度し、瑩山の命により明峰素哲、無外圓照に師事し、後に峩山の門に入りて信衣を受く、曾々諸嶽山席を虛くせるを以て請せられて主となる、越前の檀越祥園寺を創し、師請せられて開山となり、某年二月二十四日寂す、法嗣瑞巖韶麟あり、（日本洞上聯燈錄）

ソクワン　祖關　リヨーギヨク眞玉を見よ、

ソケー　祖繼　ダイチ大智を見よ、

ソケー　祖圭　……二一六二　〔曹洞宗〕美濃龍泰寺の禪僧なり、祖圭字は大室、乾叟禪亨の法嗣にして美濃龍泰寺に住し、後大澤寺に遷る、文龜二年三月三日寂す、塔を龍泰寺に建つ、法嗣巨海祖綱、蘭翁從賀の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ソゲン　祖元　一八八六 一九四六　〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の開山なり、祖元字は子元、號は無學、宋の明州慶元府の人、俗姓は許氏、父は伯濟、母は陳氏の出なり、甫めて七歲家塾に就き、十三歲父の喪に際し、伯父沖虛禪師に携へられて杭の淨慈寺に往き、北礀簡和尚を禮して出家得度し、服勤すること五年、徑山に趨りて無準和尚に依ること五年、一夜首座寮前の版聲を聞きて忽然として省あり、偈を作りて曰く、一槌擊碎精靈窟、突出那吒鐵面皮、兩耳如レ聾口如レ啞、等閑觸著火星飛、と、之を無準和尚に呈す、和尚更に香嚴擊竹の頌を擧して之を問ふ、師應對に滯ふる、既にして和尚寂す、師乃ち靈隱寺石溪月、育王山偃溪聞に歷參し、錫を小朶峰に寄す、時に虛堂愚鷙峰菴にあり、師往來して講明す、後、鄉里に歸へり、大慈寺の物初觀に依り、侍坐二年、一日井樓に登りて水を汲む、轆轤を牽動して廓然として大悟す、向さに諸老示す所の話頭一旦釋然たり、時に年三十六歲なり、翌年邑主羅季莊に招かれて東湖の白雲菴に住し、居ること七年、母歿して後靈隱寺の退耕寧の下に歸し、第二座となる、大傳賈秋壑に請せられて台州の眞如寺を主とること七年、德祐元年元兵中國を蹂躪す、師難を辟けて溫州の能仁寺に至る、翌年元兵溫州を壓す、衆擧りて竄匿すれとも、師獨り堂に居る、虜酋刃を以て己に師の頸に擬す、師神色自若として偈を說きて曰く、乾坤無レ地卓二孤筇一、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬二春

風」と、群房之を聞きて敢て刃を下すこと能はずして去る、翌年四明山に歸へり、天童山の法兄環溪一を訪ひ、留まりて前版に居り、衆の爲に法を說く、弘安二年冬日本建長寺席を虛す、北條時宗書幣を具し、詮慧の二禪師を遣はし元に入り、高德の禪師を聘せしむ、官師を推す、茲に於て師將に渡東せんとする時、環溪師に佛鑑の法衣を授く、祥興三年夏五月太白山を離れ、六月三十日太宰府に就く、即ち我か弘安三年なり、秋八月鎌倉に到る、時宗迎接慰勞し、請して建長寺に住せしむ、五年冬十二月時宗圓覺寺を建てゝ師を請して開山第一祖となす、開堂の日群鹿筵に來る、衆驚く、師以て吉徵となし、因て山を名けて瑞鹿山と稱す、七年秋大に旱す、師貞時の請を受けて雨を禱る、九年八月病を示し、九月三日自ら遺書を書して將軍及び諸檀に別れ、晩に至り遺偈を書して曰く、諸佛凡夫同是幻、若求實相眼中埃、老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰」と、夜三更に至りて衣を易へ、端坐し筆を求め、書して曰く、來亦不前、去亦不後、百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼、筆を投して寂す、壽六十一、臘四十九、遺骨を同寺に窆む、著作、語錄若干卷あり、勅して佛光禪師と謚し、光嚴天皇重ねて圓滿常照國師を賜ふ、（元亨釋書、本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

ソゲン　祖玄　二三〇二……　〔淨土宗〕尾張西林寺の開山なり、祖玄は本譽と號し、尾張白山村の人なり、祖的に師事して淨土教を學び、州の小牧村に西林寺を開く、寬永十九年八月十四日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ソゲン　祖玄　二四〇七　二四九〇　〔曹洞宗〕肥前長崎皓臺寺の禪僧なり、祖玄字は活步、俗姓は秋本氏、周防國吉敷郡の人なり、首めて八歲郡の正福寺大朝に依りて出家し、天苗の法を得て皓臺寺に住す、天保元年十一月九日寂す、八十四、臘七十七、

ソゲン　祖眼　ゲンミョー元明を見よ、

ソコー　祖香　（……）　〔曹洞宗〕武藏慶德寺の開山なり、祖香字は嫩桂、南溪正曹に參して其法を嗣き、數寺に歷住して後武藏慶德寺を剏す、寂年、及び壽缺く、法嗣仲孚正巽あり、（日本洞上聯燈錄）

ソコー　祖香　（……）　〔曹洞宗〕越前寶圓寺の禪僧なり、祖香字は桂林、心忠賢孝の法嗣なり、越前寶圓寺に住す、寂年壽缺く、法嗣高巖理柏あり、（日本洞上聯燈錄）

ソコー　祖綱　（……）　〔曹洞宗〕信濃大澤寺の禪僧なり、祖綱字は巨海、美濃龍泰寺大質祖圭の法を嗣き、信濃大澤寺に主となる、寂年、及び壽缺く、法嗣功巖玄策あり、（日本洞上聯燈錄）

ソゴン　祖巖　（二二一二）　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、祖嶺字は義雲と云ふ、月湖宗冲に參して法を嗣ぎ、天文の末年尾張瑞泉寺に移る、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

ソゴン　祖嚴　二〇七八……　〔曹洞宗〕越前願成寺の開山なり、祖嚴字は芳菴、攝津の人、幼にして出家し、長して諸老に參し、龍泉寺通幻寂靈に謁して司侍となり、久しくして發悟し、僧伽梨拂子及自賛の頂相を付せらる、初め總持寺に出世し、龍泉寺に遷る、智本と云ふ者越前丹生の北郡に寶土山願成寺を建て、師其開山となり、應永廿五年四月二十三日寂す、壽

缺く、臨終の頌あり、曰く、本離ニ死活一、今絶ニ去來一、不レ住ニ正偏一、豈染ニ塵埃一、法嗣嫩桂祐榮、昌菴悛丰の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ソサン　祖璨　○八〇　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、祖璨字は大輝、日東旭に參すること多年、遂に其法を嗣ぎ、東福寺內續燈菴に居す、應永二十七年十二月二十一日寂す、續燈菴に塔す、（延寶傳燈錄）

ソザン　祖山（……）〔淨土宗〕伊勢樹敬寺の僧なり、祖山は其郷貫詳かならず、無絃に就て剃髪受業し、其法を嗣ぎて後、伊勢松坂樹敬寺に住す、寂年、及壽缺く、法嗣一人あり岸了と云ふ、（淨土總系譜）

ソサン　祖山　ホサン輔山を見よ、

ソサン　祖殘　リョートー良燈を見よ、

ソシン　祖心　二五三四　〔曹洞宗〕越前永建寺の第二十五代なり、祖心字は傳翁といふ、信濃更科郡東和田村の產なり、姓は戸根川氏、幼にして州の龍泉寺一滴全和尚に隨ひて薙髪し、後、全久洞門龍泰來應諸寺に歷遊す、後、遊方して加賀實性寺の爲霖和尚に參し、機々投合し、親炙すること多年、爲霖和尚越州の永建寺に移るに從ひて補翼勤務し、典座すること都て十有餘年、後、師洲江菴の請に赴きて住すること多年なり、安政三年秋爲霖の讓を受けて永建寺に住すること六年、夏本院を移轉して住山十四年、僧堂を再建し、僧衆を安す、明治七年秋法弟忍海を召して美濃全昌寺の席を繼かしめ、同年十二月三日寂す、（行實）

ソシン　祖心（……）〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、祖心字は大輪、其郷貫詳かならず、無等中の法孫なる大機用に參して法を嗣ぎ、東福寺の藏鑰を司とり、後淨智寺にと主なる、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

ソシュン　祖濬　一九八四 二〇六五　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、祖濬字は哲巖、播磨の人、俗姓は佐伯氏、母は紀氏の出なり、學年に及びて州の長福寺に投して梵經を讀む、龍雲播磨を遊化するとき、師之れを拜して薙髪受戒し、左右に侍すること久しく、辭して比叡山に登り、密敎を座主に受け、一心三觀の宗を聽く、皈りて又龍谷に侍し、印記を受く、應安三年攝津澄心寺に住し、至德三年京都普門寺に、明德二年萬壽寺に、翌年東福寺に歷住し、晚年本成の祖塔を守り、藤原亟相の執奏により南禪寺を司とる、三年慧日寺の常喜庵に退居す、應永十二年八月十七日寂す、壽八十二、臘六十七、（本朝高僧傳）

ソショー　祖生（……）〔曹洞宗〕日向一雄院の開山なり、祖生字は南天、備後の人なり、出家して諸名宿に歷參し、後、明窻禪師に師事すること十餘年、總持寺に出世し、日向に一雄院を開き、某年寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ソゼン　祖禪　一九五八 二〇三四　〔臨濟宗〕京師南禪寺ノ禪僧なり、祖禪字は宗山、俗姓不詳、相模の人なり、出家して東福寺雙峰源に師事し、京師の大聖寺筑前の承天寺京師の東福寺南禪寺に歷住す、應安七年十一月二十六日寂す、壽七十七、東福寺芬陀利華院に塔を立つ、遺偈に曰ふ順緣逆緣、冠レ地履レ天、打ニ翻筋斗一、歸路坦然、勅諡普應圓融禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソチク　祖竹　ギリユー義龍を見よ、

ソチユー　祖衷　二八四 二三七〇　〔曹洞宗〕丹波慈德寺の開山なり、　祖衷字は丹嶺　俗姓は田邊氏、若狹佐田郷の人、九歳清芳叟に投して童子となり、十二歳出家し、十六歳遊方し、諸老に徧參す、終に川崎虎白に參して法要を付せられ、去りて近江深溝邑に菴居し、後、山城平尾山にありて大徹す、寶圓寺に歸りて月嘯を省し、其法を嗣ぎ、總持寺に出世し、若狹發心寺、芳春寺に歷住す、近江菴原主税居士靈水寺に招き居らしむ、後、辭去す、美濃加納の城主丹波刺史松平氏聘して全久寺に主たらしむ、兼て參河の龍溪寺を領す、尋て加賀太守前田氏請して寶圓寺に主たらしむ、住持多年退院し、丹波小尾山に慈德寺を開き、虎白を始祖に仰ぎ、法華寺を營みて之に移る、寶永七年七月十六日寂す　壽八十七、（日本洞上聯燈錄）

ソチユー　祖忠（二〇五一）　〔曹洞宗〕大隅圓林寺の禪僧なり、　祖忠字は節堂、俗姓生國詳かならず、了巖元明禪師に謁して其提唱を聞き、後、其席を繼ぎ、大隅圓林寺に主となり、復朝命に依り總持寺に出世し、遷つて永澤寺龍泉寺に歷住し、某年寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ソチヨー　祖奝　二一六二　〔曹洞宗〕信濃大澤寺の開山なり、　祖奝字は絶方、一名素奝と云ひ、美濃山縣郡福富村の人、父は對島守大野氏なり、幼にして出家し、諸方に徧參し、龍泰寺華叟正蕚に投じ、入室して其嫡子となる、華叟の示寂に及び、席を繼さて龍泰寺に居る、後、最乘寺に遷り、法弟快菴大林の董其化を助く、信濃平盛直仁科莊に神龍山大澤寺を創し、師其開山となる、文龜二年九月五日寂す、世壽缺く、法嗣乾叟禪亨あり、（日本洞上聯燈錄）

ソテー　祖貞　二二二八　〔淨土宗〕越後淨泉寺の開山なり、　祖貞は宣蓮社定譽と號し、其俗姓生國詳かならず、道譽上人に師事して法を嗣ぎ、越後蒲原郡に淨泉寺を開く、永祿元年三月一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ソテキ　祖的　二一八五　〔淨土宗〕尾張西蓮寺の開山なり、　祖的は慶蓮社退譽と號す　甲斐の人、世々武田の武族たり、道譽に投じて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、尾張名古屋西蓮寺の開山となり、寛永二年九月二十七日寂す、（淨土總系譜）

ソテキ　祖的　二二七七　〔淨土宗〕三河大樹寺第十八代なり、　祖的は昌蓮社乘譽信三と號す　觀智國師に師事して法を嗣ぎ、三河大樹寺に住し、第十八代となる、元和三年八月六日寂す壽缺く、（淨土總系譜）

ソテツ　祖徹　一四六一 二五一四　〔臨濟宗〕下野東光寺の禪僧なり、　祖徹字は通應、尾張清洲の人なり、甫めて十二歳桑名大藏寺褒山に投して祝髮受具し、顧鑑に侍すること十餘年、終に其印可を受け、三十九歳下野の東光寺に請に應して住す、又遠江大通院の請により法幢を知勝院に移つす、この夏大に旱す、師法力を以て雨を降らす、安政元年二月二十八日寂す、壽五十四、臘四十三、

ソトー　祖東　二〇一二 二〇七四　〔曹洞宗〕大隅瑞光寺の開山なり、　祖東字は春巖、俗姓作部氏、伊豫喜多郡大野の人なり、十二歳木容和尚に投して童子となり、明年の夏薙髮し尋て受具す、初め黑川寺月庵に參し、其印可を受く、後、美濃妙應寺に往

き、大徹宗令に依る、大徹これに曹洞の宗旨を授く、應永七年竺山得仙總持寺に住するに當り、師を招きて首座となし、分座說法せしむ、同九年二月大隅高山に曹溪山瑞光寺を創し、法を開く、同二十一年十月二十八日寂す　壽六十三、臘五十一、塔を大寶と云ふ、(日本洞上聯燈錄)

ソドー　祖洞　二二一七　〔淨土宗〕下野弘經寺第九代なり、祖洞は呈蓮社鎭譽魯耕と號す、丹後の人、元は禪宗の徒なりしが、淨宗に入り、一譽を師として法を嗣ぐ、飯沼弘經寺第五代となる、永正年中下野中里の龍門寺宇津宮の慈光寺を剏して開山となり、後三河大樹寺に住し、第九代の主となる、弘治三年正月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソドー　祖道　シユーシン宗心を見よ、

ソニン　祖忍尼　(一九八二)　〔曹洞宗〕能登圓通院の尼なり、祖忍字は默譜、能登酒勾八郞賴親か女なり、早歲にして滋野信直に嫁す、瑩山大乘寺に住し、道を唱ふるにあたり、信直と共に瑩山を邸に迎へ、供養して戒を受け、法を問ふ、正和元年鎌倉幕府に乞ひて、酒井保なる山莊を瑩山に寄附す、瑩山其志に感し、其處に茅菴を結びて居る、茅菴後寺となり、永光寺と云ふ、元應元年八月師永光寺に入り、瑩山に依つて剃髮す、元亨元年十二月二十二日衣法を付せらる、翌年亦瑩山勝蓮峯に圓通院を構へ、師の母頂禮せる觀音を奉安し、師に命して居らしむ、寂する壽八十餘、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソノー　祖能　一九七三　二〇〇七　〔臨濟宗〕常陸楞嚴寺の禪僧なり、祖能字は大拙、俗姓藤原氏、相模鎌倉の人なり、早年善福寺大川通の下に事ふ、十四歲比叡山に登り、落髮受戒す、十七歲東福寺雙峰源に謁し、一たび大慶寺大川通の下に歸へり、尋て出遊し、建長寺嶮崖安、東明日の下に參究す、大川通圓覺寺に遷り、師其下に記室を司る、天龍寺夢窓石の下に參究す、曆應二年大川通の喪事を修め、天外高の下に侍す、康永元年元に航せむとし、翌二年同志數十人と出發し、福州長樂縣に着す、初皷山に登る、溫州江心寺無言宣、婺州雙林寺東陽輝に歷謁し、偈を呈す、輝に呈せる偈に曰ふ、尋師訪道入中華、却與扶桑事不差、若有少林春色在、黄梅碓觜又生花、輝の答詩あり、曰く、獨存眞實落浮華、動舌搖脣事即差、未跨船舷三十棒、千龄鐵樹開花、伏龍山千巖長に謁して參究功あり、長許可し、中峰國師の法衣を付す、尋で明州定水寺無印證に謁す、延文三年東歸し、薩摩甑島に着す、肥後永德寺に寓して法化あり、大友氏時顯孝寺に請す、尋て豐前の天目萬壽の二寺を領す、貞治二年相模に入り、翌三年上野吉祥寺に住す、駿河の太守大江氏上總眞福寺を剏立し、皆師を請す　應安六年足利義滿圓覺寺に請するも辭して出でず、强請により僅に十日間住して去る、常陸笠間に遊ぶ　郡主律寺を改め佛頂山楞嚴寺と號し、師を請す、後圓融天皇勅あり天龍寺に召さる、固辭して出でず、僧如林と云ふものあり、知定寺に請す、永和二年楞嚴寺に在り、僧堂を造營す、同年十月建長寺に請せらる、請狀再三にして赴く、足利氏滿能を請し、先考の法事を修す、三年八月五日微恙あり、十八日圓覺寺青松菴に回り、應接常の如く、門人の需に應じ眞讃を書す、二十日に至り寂す、

壽六十五、臘九十二、明日崇福寺に火し、靈骨を青松菴に瘞む、所度の弟子二千餘人あり、勅謚廣圓明鑑禪師と云ふ(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ソノー 祖濃 (二二〇一) 〔曹洞宗〕越前興禪寺の開山なり、祖濃字は茸庵、伊豫の人なり、盛景寺昌庵悅丰に師事し、其法を嗣ぎ、越前丹生郡に興禪寺を開く、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソハク 祖白 (……) 〔淨土宗〕下野弘經寺第八代なり、祖白は堯蓮社宣譽眞我と號す、鎮譽祖洞に師事して法を嗣ぎ、飯沼弘經寺に住す、常陸土浦に高翁寺を刱して開山となる、寂年、及壽缺く、(淨土總系譜)

ソミヨー 祖命 (二〇二七 二一二八) 〔曹洞宗〕尾張雲興寺の禪僧なり、祖命字は天先、加賀の人、菅原道眞の裔なり、十六歲出家し、祖祐禪師の道譽を聞き正眼寺に至りて師事す、應永十年八月祖祐師に命じて尾張雲興寺に住せしむ、同十八年の秋正眼寺に遷り、直翁に命して雲興寺を補せしむ、文安中祖父江氏の請に應じて慧日寺を開き、自ら第一代となり、後亦鑑翁を留めて慧日寺を守らしめて雲興寺に歸り西菴に老を養ひ、長祿二年八月四日寂す、壽九十二、偈あり、有レ生有レ滅、九十二年、虛空迸裂、獨ニ步天先一、(日本洞上聯燈錄)

ソモク 祖默 (二二二七……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、祖默字は存㕛、東福寺の少室量禪師に法を嗣ぎ、初め東福寺に住し、後南禪寺に昇る、晚年慧日山に皈り、應仁元年二月十四日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)、

ソモン 祖文 (二一六八) 〔曹洞宗〕加賀泉龍寺の禪僧なり、祖文字は字岡、俗姓生國詳ならす、出家して聞菴道見に師事して其法を嗣ぎ、總持寺に出世し、後泉龍寺に遷る、永正五年龍澤寺を司とり、又泉龍寺に歸へり、某年寂す、壽缺く、法嗣克補契嶷あり、(日本洞上聯燈錄)

ソモン 祖門 (二四五一 二五三一) 〔臨濟宗〕長崎春德寺の禪僧なり、祖門字は鐵翁と云ふ、肥前長崎の人、俗姓日高氏、出家して臨濟宗某禪師に師事す、道暇稼圃に就いて南畫を究め、殊に蘭に妙なり、然れとも漫に人の其畫を求むるも應せす、曾て久留米の藩士某遠く來りて刺を通し、蘭を請ふ、師自ら意に契はさるところありて峻拒して斥く、某激怒し、刀を揮うて師を斬らんとするも師自若として曰ふ、衲か首は得べし、衲が蘭は得べからす、と、其平生想ふべきなり、道行洒落常に鎌倉の無作禪師の遺風を慕ひ、砂石集を愛讀したり 明治四年十二月七日寂す、壽八十一、俗弟子煌園編鐵翁書談一卷あり、(鐵翁書談、近世高僧年表)

ソヤク 祖益 (二一六二……) 〔曹洞宗〕奧州關錢寺の中興なり、祖益字は大嶽、出家して諸方を遊歷し、鳳菴英麟に見ゆるに及ひて印可を付せられ、總持寺に出世す、結城宗廣奧州の白河を鎮す、此地に古寺あり關錢寺と稱す、師請せられて之を再興し、更めて禪寺とす、文龜二年四月十八日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソユー 祖祐 (一九九六 二〇七三) 〔曹洞宗〕尾張雲興寺の禪僧なり、祖祐字は天鷹、加賀の人、俗姓は藤原氏、波多野氏の族にして大織冠鎌足の後なり、幼にして同國の律院に入り、具足戒を受く、後、禪門を慕ひて通幻寂靈の敎を聞き、丹波の村雲

山に菴を建てゝ居り、明德二年再び寂靈に謁し、衣法を附せらる、將軍足利義滿僧侶を內野に集めて法華萬部を誦せしめ、師を招きて式を讃揚せしむ、尾張の大守直政其德を慕ひて弟子の禮を執り、應永元年同國の下津城東に青松山正眼寺を刱建して師を迎ふ、師乃ち通幻を始祖となし、自ら第二代となる、總持寺に出世し泰平寺竹原寺に歷住す、丹波の洞光寺尾張の雲興寺等皆師を請して第一世となす、應永二十年正月二日寂す、壽七十八、臘六十五、法嗣澄照良源大光祖命の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

ソリユー 祖瀏(……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、祖瀏は河淸と云ひ、其鄉貫詳かならず、朴堂淳に勤侍すること多年、遂に印記を受く、これより建仁寺に主となること前後四度、某年寂す世壽缺く、(延寶傳燈錄)

ソリヨー 祖稜 二一九六/二二五六 〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、祖稜字は高雲、俗姓竹內氏、大隅加治木の人なり、十三歲にして薩摩福昌寺の天室によりて祝髮受具し、十九歲關東に遊ひ、一時の名宿に歷參せさることなく、龍泰寺愚要に謁し、次に梅峰竺信に參して其印可を蒙り、延寶七年越前敦賀永嚴寺に住す、貞享元年興聖寺に主となり、一住十年、元祿六年の春近江德應寺に退居し、河內の安養寺に遷る、同九年二月一日寂す、壽六十一、遺偈あり、曰く、來時非有、去時非無、不來不去、須彌倒趯、と、(日本洞上聯燈錄)

ソアン 素安 一九五二/二〇二〇 〔臨濟宗〕相模鎌倉建長寺の禪僧なり、素安字は了堂、俗姓不詳、筑前博多の人、十三歲同國保寧寺に投して同原本禪師を禮し、剃髮受具し、參究年あり、一日其下を辭す、禪師云ふ、何處にか去る、師曰ふ參方し去る、原曰ふ、參方の事作麼生、師口を開かむとす、禪師便ち打つ、師忽然開悟し、去りて相模に遊び、圓覺寺西礀曇禪師に謁す、曇禪師曰ふ、甚處よりか來る、師曰ふ、鎭西よりと、曰ふ阿誰にか見え來る、師曰ふ即今和尙に見ゆ、と、曇禪師休し去る、禪師常に衆に對し之を稱す、東明日和尙建長寺に住す、師を延きて第一座とす、紀伊太守畠山國淸其德を景仰し、弟子の禮を執る、鎌倉の城西に法泉寺を建立し、請して開山となす、伊豆に吉祥寺を建立し同じく請して開山となす、越後の檀越某氏禪寺を建立し、使を遣はして請す、後、諸山の選に應じ、東勝壽福建長の三大刹に歷住す、晚年寶珠菴を營みて退休す、延文五年十月二日寂す、壽六十九、臘四十三、寶珠菴に如意塔を立つ、勅諡本覺禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ソウン 素雲 ニチギ日宜を見よ、

ソエー 素瑛(……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、素瑛字は藍田、大業基禪師の法を承けて南禪寺に出世し、晚年金地院に退居し、某年寂す、其年時、及壽缺く、(本朝高僧傳)

ソエン 素淵 二三三三/二四〇六 〔曹洞宗〕遠江少林寺の開山なり、素淵字は默子、俗姓馬場氏、肥前佐嘉の人なり、良高禪師の法を嗣く、後、黄檗山の高泉鐵牛等の諸禪師に謁す、備中の西來寺に住し、後、州の梅長院伊勢の東雲寺、遠江の少林寺を開く、延享三年六月二十日寂す、壽七十四、

ソカク 素覺 二二七二 〔淨土宗〕河內一乘寺の開山なり、

素覺は明蓮社光譽と號す、大和奈良の人、其俗姓詳かならず、靈嶽に事へて淨宗を修め、河内牧方一乘寺の開山となる、慶長十七年三月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソケー　素溪　(二〇一〇)〔曹洞宗〕加賀放生寺の二代なり、　素溪字は龍松、初め洞谷寺瑩山に參すること多年、遂に開悟す、其命に依り、明峯素哲の法を嗣ぐ、加賀の檀越放生寺を初めて明峯を請して開山とし、師を二代とす、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソケー　素溪　ダイチ大智を見よ、

ソゲツ　素貞　ニチゼン日禪を見よ、

ソゲン　素眼　(……)〔時宗〕京都金蓮寺の僧なり、素眼は其郷貫師承詳かならず、京都四條道場金蓮寺に住し、能書の譽れ高く、遂に素眼流の一派を興したり、寂年壽缺く、(金蓮寺記)

ソシヨー　素性（ソセイ）　(一五六九)〔……〕京都の歌僧なり、素性は良峯朝臣左近衞少將宗貞の子、俗名を玄利と云ふ、淸和天皇に仕へて左近將監に任ぜらる、後、父の勸めにより兄と共に出家す、雲林院及良因院に住す、寬平八年閏正月宇多天皇雲林院に行幸の時權律師を拜し、度者一人を賜ふ、昌泰元年良因朝臣を賜ふ、因て良峯朝臣を改め、良因朝臣と云ふ、延喜六年二月敕召により御屛風を書し、同九年十月御前に於て屛風を書す、因て酒を賜ふ、素性歌を獻じて天恩を謝す、再び敕して綠赤絹綿御馬等を賜ふ、(三十六歌仙傳、大日本史)

ソセン　素璿　(……)〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、　素璿字は在山、其郷貫詳かならず、神子尊の法孫なる岩窟海に師事して法を嗣ぎ、京都東福寺に住す　某年三月十二日寂す、壽缺く、塔を如意山寶珠と云ふ、(延寶傳燈錄)

ソチヨー　素脩　ソチヨー祖脩に同じ、

ソテツ　素哲　一九二七 二〇一〇〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、素哲は字は明峯、加賀國富樫氏の子なり、比叡山に出家し、具足戒を受く、專ら顯密を究め　幾何もなくして棄て去て、加賀大乘寺瑩山に參す、瑩山之を器とし、侍司に居らしむ、室中常に喚て曰く、哲侍者と、師應諾す、瑩山曰く、是れ什麽ぞ、師對するなし、斯の如くする者凡そ八年、後辭して東西に歷遊し、諸善智識を訪ふ、至る所皆印可を蒙る、元亨の間瑩山洞谷に據る、師往て省覲す、山喜て第一座に居らしむ、同三年夏六月入室す、一住十餘年、叢席を成す、道聲彌〻高して玄化益〻廣し、是に由て名聲輦下に達す　後醍醐帝深く仰慕し、屢〻之を徵せとも病と稱して起たず、元弘の初天下大に亂れて戎馬野に滿つ、二品尊雲親王高德の沙門を擇て兵災を禳はしむ、師も亦與る、帝之を聞て大に悅び、特に州の若部保を捨てゝ寺產に充て、寺を陞して敕願道場と爲す、曆應の初め大乘寺に移る、事を謝して越中に歸り、光禪寺に棲む、觀應元年三月廿九日寂す、壽七十四　臘五十八　(日本洞上聯燈錄)

ソハン　素範　ギホー義寶を見よ、

ソケン　楚見　二一二九 二一九六〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、楚見字は希雲、幼にして出家し、東陽に參して印可を受け、後、徧く諸老を歷見して益〻玄旨に達す、美濃伊志良に東光寺を

拁してこれに住し、後、詔を奉して妙心寺に遷る、天文五年四月六日寂す、壽七十二、嗣法玉淵頟あり、(延寶傳燈錄)

ソシユン　楚俊　一九二二―一九九六　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、　梵僊字は明極(ミンキ)、元の明州慶元府黃氏の子、母は李氏、神光香氣を感じて生む、十二歲靈巖寺竹牕喜禪師に投じ、剃髮受具す、後、橫川珙虎巖伏に歷謁す、尋ぎて天童の止泓鑒の下に藏鑰を掌り、金陵の奉聖寺に出世し、虎巖伏の法を嗣ぐ、瑞巖普慈の二寺に遷り、徑山靈隱天童淨慈皆第一座を以て聘す、元德二年(元至順元年)書幣に應じて東渡す、時に六十九歲なり、後醍醐天皇勅召法要を問ひたまひ、特に佛日燄慧禪師の號を賜ふ、攝津に廣巖寺を開きて住す、尋て相模に下る北條高時建長寺に請す、住持二年にして後雲澤菴に退休す、幾くもなく再び建長寺に入る、檀越某戒律宗の報恩寺を改めて禪宗とし、師を開山祖とす、開堂の法語あり、後詔あり南禪建仁兩寺に歷住す、延元の初退休して廣巖寺に在り、楠正成の來問に接し法化あり、同年九月二十七日に寂す、壽七十五、臘六十三、嗣法六人、九會語錄若干卷あり、遺偈に曰ふ、七十五年、一條生鐵、大地紛碎、虛空迸裂、建長寺に雲澤菴南禪寺に少林塔を建て靈骨を收む、(塔銘、廣巖寺緣起　延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕廣巖寺緣起には正成請益の事を錄して頗る詳密なるも搭銘之を揭けず事實信ずべからざるが如し、今姑く同寺傳ふる所を存す、

ソセキ　疎石　一九三五―二〇一一　〔臨濟宗〕山城嵯峨天龍寺の開山なり、　疎石字は夢牕、俗姓は伊勢源氏にして宇多天皇九世の孫なり、母は平氏なり、建治元年に生る、弘安元年父故ありて一家を率ゐて甲斐に移る、此年八月母を喪ふ、弘安六年九歲の時平塩山空阿の室に投して佛敎を學ふ、父後妻を娶る、師これに事ふること至孝にして常に歸省を怠らす、正應五年十八歲祝髮して奈良に到り、叔父內山の明眞に從ひて其敎を受け、戒壇院慈觀律師を禮して登壇受戒す、乃ち平塩山に歸る、永仁二年開無門の法嗣なる由良和尙に參せんと欲し、路次京都に入り適〻德照禪人といふ者に逢ふ　德照曰く、汝宜しく當に叢林にありて其規矩々學ぶべし、然る後深山巖崖に佛法を訪問するも亦た妨けず、と、蓋し當時師か參せんとする由良未た叢林をなさゝればなり、乃ち師先つ建仁寺の無隱範に依る、永仁三年十月建仁寺を辭して鎌倉に往き、東照寺の無及和尙に參す、東勝寺火災ありしが故に、建長寺の葦航及び痴純、圓覺寺の桃谿等に歷參す、永仁五年京都に上りて無隱に侍す、八月一山寧近江より京都に來りしかば師謁して參叩す、正安元年二十五歲鎌倉建長寺に往き、一山寧に追隨す、正安二年秋舊識を羽州に訪はんとして發途し、途中にて其訃を聞きて陸前松島寺に止まる、其近地に一僧あり、草河の眞觀の弟子なり、天台止觀を講す、師之を聞く、是歲臘月佛國禪師に參せんと欲し、那須に到る　時に禪師相模の淨妙寺を董し、太平雲巖寺に留りて院事を監す、師脚疾を患ひて此に宿留す、正安三年圓通懺摩の法を修し、二月再ひ鎌倉に往き、建長寺に一山寧に侍す、一山師に時を限らすして入室することを得せしむ、嘉元々年翻然として感するところあり、所持の書冊一切を執りて焚火に投し、一心に工夫を務む、時に佛

國禪師乾明寺に住す、師往きて參叩す、少しく省あり、去りて奥州白鳥の鄕に往く、蓋し道友の招に依るなり、翌二年二月白鳥を去りて內草山に入り、草廬を結ひて居る、三年正月元日より一七日間觀音妙懺を修し、舊業宿習を消滅せんとす。遂に所疑を佛國禪師に質さんと欲し、二月內草山を出て、常陸臼庭に至る、比佐居士といふもの師を草菴に請するに因り此に居る、十月臼庭を出て、相摸に到る、時に佛國禪師淨智寺に住す、仍て往き謁し機辯相合す、翌日辭して甲斐に入りて父母を省す、牧山の里正の請に應して淨居寺に居る、檀徒日に信を益し、四衆雲集す、德治二年佛國禪師萬壽寺に住す、師其頂相を書き、万壽寺に至りて題を求む、佛國禪師師に法衣を附す、遂に止りて參叩す、延慶元年正月擧けられて紀綱となる、夏甲斐に歸らんと欲し、禪師を辭す、禪師法語一篇を師に送る、又玉雲に謁して別を告く、八月舊業の敎院に到り、本師靜達上人を省す、延慶二年三十五歲佛國禪師雲巖寺に歸隱す、師往きて問ひ、選はれて記室となる、夏畢りて禪師を辭して歸らんとす、禪師佛光の遺書を贈りて師に附す、師之を懷にして甲斐に歸る、後屢々書を往復す、延慶三年師佛光國師の頂相を書き、佛國禪師之に賛す、應長元年春龍山菴を刱して居る、地幽僻にして人烟を去ること三十里なり、道を問ひて集るもの稍多し、正和元年二月野燒の火焰風に隨ひて將に庭に延燒せんとす、師唯た佛國禪師より附せられたる法衣を擁して巖上に坐す、俄に猛風あり逆に吹き、諸庵皆恙なし、見る者また神衞といふ、師笑ひて曰く、風吹きて方向を易ゆるは山間の常事なり、偶災を免れたるのみ、何そ奇となさんや、と、四來の學徒日を追ひて多く、巖阿澗際茅屋相連なる、師曰く、吾初め居をトして龍山菴と云ふものは、隱山和尙の風を慕ふに出つるのみ、今此山中居る者亦多く、恰も聚落に似たり、是れ我が素志に非さるなり、と、是に於て菴を遷して深山に入らんと欲する志あり、正和二年龍山菴を出つ、然れとも未た往くへきところ定まらす、且つ將に居るところの菴を壞ちて淨居寺に施し、僧寮に成さんとす、故に暫く淨居寺に寓す、時に遠濃二州の閑地を報するものあり、師意未た肯せす、時に佛國禪師淨智寺にあり、師を招きて上野長樂寺を董せしめんとす、一僧あり豫め師に告く、師之を避けんと欲し、潛に淨居寺を出て、先つ遠江に到る、元翁、不二、祖用等七八人偕に來り、苟も意に適するあらは宜しく其地を以て緣となす、徐々として美濃長瀨山に到る、其境たるや四隣人なく、數里の間山水景物恰も天開の圖書に似たる幽致あり、即ち此に居をトし、古谿菴と云ふ（後虎谿と改む）兩月を過きて訪來するものなし、師其徒に謂ひて曰く、吾素志已に成れり、と、既にして四方の徒來集すること猶ほ龍山菴に於けるか如し、師門に貼し書して曰く、四來の學徒此山に群居するの意何くに在るか、若し參學せんと欲せは諸方自ら尊宿あり、若し閑棲せんと欲せは亦自ら他山あり、何そ必すしも此に來るを要せん切に閑懷を相妨くること莫れ、と、然れとも四方の來者益々多し、師乃ち曰く、此地は我が有にあらず、已に自ら占めて他人の來るを忌むは理にあらす、宜しく自ら遁去すべし、と、西郡に淸水敎院あり、彼の衆中篤く師の道を信する者あり、師の閑地を求むるを知り、

密に小庵を以て迎ふ、師喜ひて明年を期し往かんことを約す、正和五年春古谿菴を出て弟子二人と共に彼の小庵に移り、一夏を過く、清水寺の衆亦遂に師の名を知り、競ひ來りて訪問す、四隣師の高風を傳聞し來皈するも漸く多し師固辭すれとも止ます、古谿菴の衆稍散し、初の六七名のみ止住せることを聞き、再ひ古谿に到る、時に元翁本菴に住す、師別に小庵を搆へ、大包菴と云ふ、冬佛國禪師の訃至りしかば、法の如く祭儀を執行す、文保元年九月古谿を出てゝ京都に游ひ、北山に寓す、文保二年將軍北條高時の母覺海夫人佛國禪師の遺囑を受けて師を請せんと欲す、師之を聞きて延請を避けんが爲に、正月京を出て土佐の五臺山に入りて一菴に閉接す、菴は西江に臨むを以て吸江菴と云ふ、元應元年四月覺海夫人使を土佐に遣はし、師に逼りて起たしむ、夫人固く使者に囑して曰く、師若し起たすは、汝歸ること莫れ、と、使者已に境に入る、師先つ海島の間に潛む、使者命を傳ふ、和州の國守も亦官使を發し、倶に來る、各戸に諭して曰く、若し師を隱慝するものあらは罪に坐せん、と、是に於て師も亦計策を廻らし、百方遁逃すれとも遂に免るへからす、師曰く、業債逃れ難し、と、遂に其請に赴く、夫人厚く禮して假寓勝榮寺を以て待つ、道友相訪ふも、門を杜ちて接せす、時に崇巖寺席を虛す、太平準覺海夫人に白し、師を請して住持せしめんとす、師固辭して赴かす、夏終に三浦に抵り、横洲に泊船庵を營みて居る、問訊の客愈々多ければ、師門を杜ちて益々絕す、舊好ある者師に曰く、出てすは已まん、既に出づれば宜しく須く人のため挨すべし、然るに堅く關を掩ふは何そや、是れ人の怪むところなり、と、師笑ひて曰く、我れ未た人の怪む所を知らす、苟も具眼者たらば、必す當に機を知り、時を知りて門を掩ふへからさる怪しとすべし、若し無眼者ならば門を開き接を爲すも何の益かあらん、即ち一偈を壁上に書して曰く、一把茅茨天宇闊、山爲二籬落一海爲レ庭、庵中消息無二囊蓋一、來者徒言掩二竹扃一、と元應二年二月覺海の請により齋に赴き、歸路使によりて建長寺靈山和尚を訪ふ、元亨元年泊船菴後の山角聳然として海中にあり、師其上に一塔を建て、船舶の仰觀に充て、亦海中の魚族にして塔影の下に游泳するもの並に華藏海印三昧の中に結緣するを得せしむ、元亨三年上總千町莊に住きて退耕菴を捌す、正中二年五十一歲の春後醍醐天皇京都南禪寺の席席を以て師に付さんと欲し、特に使を發して請せしむ、師病と稱して應せす、將軍切に勅に應せんことを勸めしかは已むを得すして起ち、甲斐を經山し、八月古谿の舊隱に至り、元翁等と共に京都に入る、翌日宮中に入りて天顏に咫尺し、佛心宗要を坐說す、勅して南禪寺に住せしめんとすれとも應せす、再ひ詔あり、竟に寺を領し、常に天皇の爲に法を說く、嘉曆元年七月高時壽福寺の席を囑せんことを請へとも赴かす、八月伊勢に往き、善應寺を開き、幾もなくして歸る、九月鎌倉に到り、永福寺の傍に南芳菴を結ひて居る、嘉曆二年二月高時淨智寺に延く、固辭すれとも免るへからす、強ゐて之に應し、一夏を過きて勇退し、南芳菴に歸る、八月錦屏山に居を移し、瑞泉寺を開く、嘉曆三年瑞泉寺に觀音堂を造り、絕頂に一亭を構へて遍界亭と名く、高時圓覺寺に請すれとも赴かす、元德元年八月將軍再ひ圓覺寺に請すれ

とも赴かす、是に於て密に師の門弟、并に先輩に言ひて勸めしむ、師遂に淮院す、元德二年師圓覺寺を領すること二年にして百廢皆興る、九月潛に遁れて瑞泉寺に歸る、一衆追ひ至るも師門を杜ちて之を避く、翌日早朝甲斐に往き、牧莊に慧林寺を捌して居る、元弘元年二月瑞泉寺に歸る、將軍建長寺の席を以て付するも辭して赴かす、元弘二年春再び慧林寺に往く、此年瑞光寺を開く、元弘三年正月嶮崖和尚建長寺を辭す、北條高時其席を以て再び師に囑せんとす、師辭するに病を以てす、此年後醍醐天皇伯耆に蒙塵し、四方の兵戈動く、三月師瑞泉寺に歸る、五月鎌倉滅亡し、士卒檎へらる、師其間に斡旋して救助するもの多し、六月天皇還幸し、勅を拜して師京に上る、翌日參內して玉顏に對し、八月勅あり臨川寺に居る、建武元年秋皇后の爲に法を說く、南禪寺に住せしめんとすれとも固辭す、然れとも勅請止ます、依て再び南禪寺の席を董す、建武三年正月京師兵亂あり、師南禪寺を謝し、臨川寺に歸る、足利尊氏師を延きて弟子の禮を執る、十一月建仁寺席を虛す、衆師を請すれとも固辭して出てす、曆應二年三月師臨川家訓を作りて門人に示す、四月西方敎院を革めて禪院となす、蓋し行基菩薩の捌立するところなり、即ち改めて西芳寺といふ、蓋し祖師西來五葉聯芳の義なり、同年八月十六日天皇崩し、其冥福の爲に龜山に寺を建つ、師請せられて開山となり、寺を靈龜山天龍資聖禪寺と號す、曆應三年阿波の太守細川氏補陀寺を建て師を請して開山となす、康永元年四月十五日高師直師を請して眞如寺を兼ねしむ、是れ佛光禪師の遺跡にして師か師直に勸めて寺を建てしめしものなり、七月眞如の寺務を辭す、三年正月靈庇菴を捌す、貞和二年八月二十七日特に金襴紫衣を賜ふ、同年十一月廿五日參內して衣服を賜はり、翌日特に夢窓正覺國師の號を賜ふ、觀應二年八月十五日再び夢窓正覺心宗國師と追加したまふ、十六日衆を辭して三會院に退き疾を示し、九月一日朝廷醫藥を賜ふも師辭して請けず、十九日太上天皇親しく幸して病を問ひ給ふ、廿九日偈を書して曰く、轉身一路　橫該豎抹、畢竟如何、彭八剌札、と、翌日終に寂す、壽七十七　後曆朝勅して普濟、玄猷、佛統、大圓の國師號を追贈したまふ、（年譜、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソトー　疎棟　二四六八　二三三八　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、疎棟一に楚棟、字は海州、號は拈華室　美濃大野郡の人、九歲州の觀音寺に投し、大鷄に事へ、十六歲尾張總見寺に到り、卓洲に謁し、參究數月にして印可を受く、十七歲一たび鄉里に歸り、十九歲再び總見寺に到り、卓洲に師事し、益々參究を事とし、大に大衆に重せらる、安永元年四十七歲近江永源寺に住し、宗門を張る、其後幕府政を失し、國事多端の際、出てゝ志士と交を結ひ、屢尾張侯に謁し、國事を謀る、明治元年侯の請により尾張に歸り、國內を巡敎す、明治二年京都東福寺の請により、同寺に住す、同十一年四月二十一日寂す、壽七十一、臘六十三、（近世禪林僧寶傳）

ソヨー　祚養　二一八〇　〔曹洞宗　能登總持寺の禪僧なり、祚養字は孝山、出家して龍文寺器之に見え　後龍華院に至り、西湖良景に參し、侍司となり、明應七年西湖闢雲寺に遷るに及び、其命に依り、龍華院を司とり、居ること二十餘年、後

總持寺に出世し、永正十七年三月十一日寂す、世壽缺く、法嗣慶香省賀あり、（日本洞上聯燈錄）

ソレン　祚蓮（一三三九）〔……〕大和の僧なり、祚蓮は天武天皇八年十一月に皇后病みたまふに際し、勅して藥師寺を造營し、冥救を祈禱せむとしたまふ、祚蓮定に入りて龍宮伽藍を見、營構の風を奏す、天皇大に悦びたまひ、其奏する所に因り營構したまひたりといふ、示寂の年時缺く、（元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕日本書紀に祚蓮の事なし、一代要記等に藥師寺建立の年時の異說あり、七大寺日記には天武天皇の朝、乘永和尙定に入りて龍宮の伽藍を見來りて營構すとあり、祚蓮乘永同人なるか未だ詳ならず、

ソオー　蘇翁　タクシユー琢宗を見よ、

ソザン　蘇山　ゲンキヨー玄喬を見よ、

ソーエー　僧叡（二四一三／二四八五）〔眞宗〕安藝專敎寺の學僧なり、僧叡は鷹城と號し、石泉一にと云ふ、安藝山縣郡戶河內村眞敎寺圓諦の嫡子、寶曆三年某月同寺に生る、甫めて十二歲從兄大瀛に從ひて深諦院の門に入り、專ら宗典を硏き、夙に造詣する所あり、諸方の講肆に遊ひ、權實の學に通す、業成りて後高田郡船木村專敎寺に住し、幾もなくして加茂郡川尻村光明寺に轉す、常に讀書に耽けり、檀越の請に赴かす、遂に寺を捨てゝ去り、將に廣島に往かんとし、廣村を過く、多賀屋某地を長濱に相して小廬を建て、師を抑留して住せしめ衣食を給し、黃檗山藏經を購ひて施こす、玆に於て學徒を集めて敎授す、笈を負ふ者門に滿つ、文化元年安居す、大瀛寂洞の事を以て江戶に赴きて在らす、佛護寺主師に請ひて般舟讃を講せしむ、此時始めて弘願助正の義を立て、頗る師說と乖く所あり、大瀛の徒之を寺主に訴へ、誣て不正義となす、師乃ち助正釋助正芟柞を著して辨破甚た銳なり、復た敢て當る者なし、十四年安居し、命を受けて大經を大學林に講す、是より先き師祖典を家塾に講し、法相表裏稟受前後の目を設け、詳かに行信交際を辨す、而して學林の講說亦其目を用ゆ、聞く者大に訝かり、稱名正因となす、世評漸く囂然たり、遂に本山に叫問せらる、乃ち著すところの柴門玄話を上る、宥して罪せす、但諭して名目を用ゆることなからしむ、文政八年學林創めて司敎五員を置く、師其一に擢てらる、三月廣島學侶の請に應し、專立寺に淨土論を講す、未た半ならすして病暴發して逝く、實に同月四日なり、壽七十三、著作易行品義疏、淨土論義疏、序分義々疏、定善義々疏、往生要集偏歸箋、二門偈義疏、御傳鈔私記、十八願文津江漫錄、六字釋錄助正釋問、柴門玄話、寒風夜話、十八願卒應、會疏典據、三一問答、四敎義講錄、四敎儀科圖　八敎大意科節、和語イロハ分類、各一卷、往生論註海岸記、安樂集義疏、選擇集義疏、正信偈要訣、助正芟柞、大經丁丑記、安永錄校、各二卷、玄義分義疏、愚禿鈔義疏、十義書煥宗記、各三卷、般舟讃懷愧錄四卷、大經義疏五卷、文類聞、三帖和讃觀海、各八卷、標誌イロハ印十一卷、及ひ散善義々疏（未完）あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ソーエー　僧頴（二五一九）〔……〕〔眞宗〕筑後三井郡久留米西福寺の住持なり、僧頴は日觀院と號す寶景の門人なり、寮司と

なりて天保八年高倉學寮に略八轉聲を講し、弘化元年七月二十五日擬講となり、嘉永二年寂す、(眞宗史料)

ソーオン　僧溫 二四四八 二五二九 〔眞宗〕越中正念寺の住持なり、僧溫字は慧麟といふ、越中中頸城郡滸柿村專念寺某の弟なり、文政六年九月正念寺に入りて僧朗の嗣となる、同十年六月得業となり、天保二年四月助教兼主儀に進む、同七年四月學林造營掛を命せられ、九年學林教諭役を命せられ、七月司教に昇る、十二年の安居に成唯識論を副講し、十月に至りて擢てられて勸學職となる、此時與隆、僧朗、尚ほ健在にして一寺中勸學職三人あり、世稱して三葉勸學といふ、同十四年安居學林に愚禿鈔を講ず、嘉永三年安居學林に安樂集を講す、五月本山黑書院に願生偈を侍講し、七月院家格に列せられ、十月等壽院の號を與らへる、同四年の安居、學林に正信偈を講し、黑書院に選擇三心章を侍講す、文久二年安居に入出二門偈を學林に講し、同三年二月黑書院に三經徃生文類を侍講す、慶應二年安居特別の命に因て玄義分を學林に講し、黑書院に序題門を侍講し、尋て南殿に四法大意を侍講す、是に至りて安居の講筵に上ること本副併せて六回、侍講を命せらるゝこと五回なり、明治二年九月二十七日病を以て逝く、壽八十二、師一生の講筵一百五十二會に及ふ、著作三誓偈重笠錄、三寶偈記、選擇集玄談、成就文記、易行品記、讃阿彌陀偈記、玄義序題門記、往生要集大意、小經讃記、四法大意錄、六合釋記、天台佛心印記略記、金剛錍論生宦記、列祖綱要略註、勸章丘帖目丙午記、四教儀丁亥記、各一卷、小經講錄、觀念法門記、愚禿鈔癸卯錄、正信偈講錄、尊號眞像銘文記、淨土和讃辛卯記、起信義記戊申記、各二卷、入出二門偈錄、安樂集記、觀經講錄、各三卷、論註庚寅記、散善義記各四卷、成唯識論甲午記、大經講錄、各九卷、安心決定鈔記若干卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ソーカ　僧可 (……) 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、僧可字は久菴と云ふ、無礙に參して法を嗣ぎ、明に入りて偏く各宿に參し東皈して圓覺寺に住し、建長寺に遷る、府內の檀越實際菴を建て歸請せられて開基となる、某年正月二十六日寂す、嗣法伯溫生瑛、宇江德永、星嵓統悟の三人あり、共に建長寺に住す、朝廷其德を聞き勅謚佛印大光禪師の號を賜ふ、(延寶傳燈錄)

ソーカイ　僧海 (……) 〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、僧海道元禪師に隨ひ、心印を傳へ、興聖寺に留る、不幸にして短命なり、其示寂の年時缺く、遺偈あり、二十七年、古債未ㇾ轉、蹈二翻虛空一、投ㇾ獄如ㇾ箭、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本洞上聯燈錄)

ソーカイ　僧海　トーチン等珍を見よ、

ソーケー　僧谿　モンオー文雄を見よ、

ソージン　僧尋　リョーシュー良秀を見よ、

ソーシユン　僧濬 二三一四 二三九八 〔華嚴宗〕山城松尾華嚴寺の開山なり、僧濬字は鳳潭、(一に芳潭に作る)號は華嶺道人と云ふ、越中西礪波の埴生村に生る、俗姓詳ならす、資性豪邁にして奇氣あり、夙に出塵の志あり、比叡山に登りて度を受け、教觀を兼ね修め、勵精衆に超ゆ、某講師(一に安樂院光謙なりと云ふ)の三大部を講するに方り、師聽衆の列に加

はる、其初め聽衆群をなしたるも、日々席を重ぬるに隨うて漸く減す、獨り師は一日も缺くるなく謹聽す、一日某講師は聽衆なきを見て講を廢せんとす、師曰ふ、明日必す聽衆を誘ひ來るべし、と、次の日伏見より土偶數十個を購ひ來り、豫め席に陳列す、講師出てゝ大に驚異す、師進て曰ふ、其初め聽衆群をなすも、實は土偶に同し、和尚今日何そ躊躇す、と、某講師遂に師一人に對し三大部を講了したりと云ふ、後、大志を抱き、支那を經て印度に渡らんとしたるも、國禁ありて出發する能はず、攝津山城の地方を往來して學問研究を事とす、一時大阪に留住し、自ら浪華の鳳潭と云へり、內外大小の典籍を研究し、三論玄義首書起信論幻虎錄等を撰す、後、華嚴宗の章疏に心力を盡し、華嚴宗の再興を以て任す、寶永の初江戶に下り、大聖道場に華嚴經を講す、諸宗の學徒相競うて敎を受け、門學市をなしたりと云ふ、當時荻生徂徠儒學を以て盛聞あり、師牛込の居を訪問して徂徠に面し、曰ふ、伊藤仁齋佛敎を論して唯空と云へると尤當らす、佛敎決して空の一句に盡きさるなり、先生の高見如何、と、徂徠直に其聲に應して曰ふ、仁齋の言常に當らす、然れとも佛敎を論して唯空を云へるは大に當れり、達言なり、と、師默然として座を起ち、獨言して曰ふ、緣なき衆生は度し難し、と、同四年匡眞鈔十卷を撰し、華嚴宗に就いて一家の見を發表す、眞言宗の慧光密軌問辨を作り、師の說を破す、正德三年師圓宗鳳髓を撰して反駁す、享保四年鐵壁雲片三卷を撰して禪宗を破し、同年徧界紅爐雪三卷を撰して眞言宗を破し八年山城松尾に大華嚴寺を開き、益華嚴宗の再興に心力を盡し、且つ一方には陸續書を撰して諸宗を破せり、淨土宗西山派の顯惠幻虎錄辨疑三卷を作りて師の說を駁したれは、師即ち解謗、斥謬等を撰す、眞言宗の實詮一唾編を作りて師の徧山派爐雪に當りたれは、師即ち紅爐反唾劄を撰し、實詮再ひ反唾汚己情笑篇を作り、相論難す、師淨嚴の說を排し、其一門の實詮慧光等の書を見るに隨ひて破し、菩提心戒義破文密軌問辨破書等を撰す、享保十五年安樂院光謙、三井の法明院性慶の二師念佛に關して論諍す、師念佛往生明導劄二卷を撰して光謙の說を評し、性慶の說を排し、念佛即ち觀佛の說を主張す、諸宗の學徒相競うて師の說を評論駁擊し、眞宗の法霖は淨土折衝篇二卷を作り、知空は指迷顯正決二卷を作り、慧海は連環辨導略一卷を作り、淨土宗の義海は蓮宗禦寇篇二卷を作り、天台宗の守一は蓮門却掃篇一卷を作り、日蓮宗の日達は顯揚正理論三卷、決膜明眼論四卷を作り、日諦は窓燈塵壺篇一卷を作り、各、師の說を評論駁擊し、諸宗の學徒大に騷

鳳潭和上

擾を極む、師即ち淨土折衝篇雷斧一卷を撰して法霖に答へ、指迷顯正決索印二卷を撰して知空に答へ、蓮宗禦寇篇雪鵝箋一卷を撰して義海に答へ、蓮門却掃篇牙旂一卷を撰して守一に答へ、金剛槌論一卷を撰して日達に答へ、殆と其應接に遑あらず、法霖再び笑蜋臂五卷を作り、性均雷斧辨訛一卷を作り義海再び雪鵝箋斷非二卷を作り、守一再び牙旂虛僞決二卷を作り、相論難して盡くるなし、師學問敎義の論難攻擊には毫も假借するところなしと雖、相見れは親情を以て交れり、南都般若寺の僧某常に學問を以て師に抗敵し、二人相下らず、論難攻擊して仇讐の如し、某偶〻病に臥す、師聞いて南部に赴き某を訪問す、某の徒弟師の名を聞いて峻拒して通せす、師長吁して曰ふ、我れ京師より來るは某師を一見し、吾思ふところを告けんとするなり、今相見るを得すして某師世を厭はは、終天の恨止むなしと、徒弟已むを得す事を某師に告く、乃ち二人相見て大に喜ぶ、師は某師の手を握り、其衰羸を見て漣然として涙を流し、携ふるところの延命酒一瓶を出し贈る、某、侍者に命して杯を取り來らしむるも、徒弟其毒あらんことを疑ひ、遲疑して出さす、某再三促し、杯を把りて一嚼して盡すや、師涙を攪うて拜辭して出てたりと云ふ、元文三年二月廿六日華嚴寺に寂す、壽八十五なり、弟子覺洲亦學譽あり、師著作華嚴經五敎章匡眞鈔十卷、同略匡眞鈔五卷、五敎章傍註三卷、華嚴宗輪毘盧法戒觀探玄記玄譚各一卷、倶舍論冠註十四卷、因明大疏瑞源記八卷、四敎儀集註增暉記七卷、大乘起信論幻虎錄、楞嚴經千百年眼髓、梵網戒本疏紀要、維摩經發矇鈔、圓覺經集註日本訣、兩部神道心鏡錄、十不二門指要鈔選翼四卷、佛門衣服正儀篇、徧界紅爐雪、鐵壁雲片、金剛錍逆流批、各三卷、三論玄義首書、圓宗鳳髓、紅爐反唾劄、布鼓集、念佛明導劄、指迷顯正訣索印、淨土折衝篇雷斧、僧服正撿却撓訓各二卷、倶舍論新鈔、梵網戒本疏龍鳴斥謬、戒躰續芳訣、圓門境觀還源策、金剛槌論、幻虎錄辨疑解謗、起信論講義斥謬、起信論註疏非詳略訣、密軌問辨破書、菩提心戒義破文、蓮門禦寇篇雪鵝箋、蓮門脚掃篇牙旂、搏桑藏外現存目錄、萬國掌菓圖、各一卷あり、(燕臺風雅、筆疇、讀書會意、尙友小史、近代名家著述目錄)

ソーショー　僧照　〔三七一〕〔……〕大和の僧なり、僧照一に僧昭に作る大寶二年正月、律師となり和銅四年の頃寂す、(續日本紀、七大寺年表)

ソーショー　僧生　〔二〇一〇〕〔曹洞宗〕能登靜泰寺の開山なり、僧生字は館開、俗姓は德田氏、能登の人、長して明峯素哲に依りて剃髮す、出でゝ素哲に參すること十余年、再び明峯を省す、初め大忍寺に住し、又洞谷寺に遷り、美濃に靜泰寺を開き、後同寺に寂す、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソーニン　僧忍　〔一三一三〕〔……〕入唐學問僧なり、僧忍白雉四年五月遣唐使に隨ひて唐に航す、事蹟傳はらず、(日本書紀)

ソートク　僧禿　リョーギョク良玉を見よ、

ソーナイン　僧那院　ニチホー日豐を見よ、

ソーネン　僧然　ジョーゲン定玄を見よ、

ソービン　僧旻　〔一三二三〕〔……〕入唐學問僧なり、僧旻は推古天皇の末唐に航し、舒明天皇四年八月靈雲と共に歸

朝す、同九年二月大星東より西に流る。聲あり雷に似たり、時人流星の聲と云ふあり、地雷なりといふあり、是に於て僧旻說明して曰ふ、流星にあらず、是れ天狗なりと、孝德天皇大化の初、高向史玄理と共に國博士となる、僧にして博士號を得るもの之を始めとす、尋で勅して十師を置きて衆僧の教導に當らしむるに際し僧旻其一に選ばる、同五年勅を拜し高向史玄理と共に八省百官の制を置く、白雉元年二月穴戶の國白雉を獻す、僧旻奏して其瑞祥たるを說く、同四年五月病を獲て阿曇寺に臥す、天皇行幸して親しく慰問したまふ、同六月寂す、天皇大に悼措したまひ使を遣はして賻を賜ふ、且つ僧旻の爲に畫工狛堅部子麻呂鯽魚戶直等に命し、多く佛菩薩の像を造らしめて川原寺に安置せしめたまふ、（日本書紀）

ソービン　僧敏　二四三六／二五一一　〔天台宗〕備中甘露菴の學僧なり、僧敏字は密成、俗姓は小西氏、讃岐三野郡寺家村の人なり、幼にして沈重群童に狎れす、九歲にして福壽院慈圭に就きて得度し、天台教を學ふ、寬政九年比叡山に登り、益々教觀を習練す、八月天王寺唯門和尙に謁して菩薩戒を受く、文化六年二月勝尾寺に登りて德本上人に謁し、安心起行の要を問ひ、信解開發す、八年二月唯門和尙有門菴に寂す、僧敏備中に歸へり、黑崎の茅菴に隱棲し、禪誦を事とす、幾もなく出てゝ安藝に行脚し、嚴島に茅菴を結ひ住す、謁あり曰く、單居孤島直垣空、偶遇二芳春一感不レ窮、世事百端晨夕改、年華一樣古今同、禪踏義虎跡二泉下一、野鬼閑神遍二域東一、法運陵遲難忍見、誰人後世仰二眞風一、と後寶壽院法憧より安祥寺流の事相を傳へ、石見に遊び、泥牛禪師より禪を傳ふ、嚴島に歸住し、虛堂錄を閱し省發する所あり、文政八年廣島教禪院に移り、四教儀法華會義三教指揮歸を講し、兼ねて專修念佛を弘む。十二年二月京都建仁寺に寓す、後安藝に歸へり、猪口島に蟄居す、一千日を期して門を出てす、嘉永四年三月石見に遊び、專修念佛を弘む、日課を誓約するもの二千六百餘人あり。五月猪口島に歸へり老病あり、九月七日輕舟を棹し、備中甘露菴に歸らんとし、九日舟笠岡の海中に泛ふ、俄然阿彌陀佛を念唱して寂す、壽七十六、臘六十九、眞岳山に茶毘す、著作神國決疑篇考證、念佛追福編、散心持名往生編、六字名號呼法辨等十餘部あり、（續日本高僧傳）

ソーボク　僧樸　二三七九／二四二二　〔眞宗〕京都六條宏山寺の學僧なり、僧樸初の名は關樸、字は休々子といひ、居を昨夢靈と云ふ、俗姓は高橋氏、越中射水郡小泉村の人なり、郡の誓光寺に於て薙髮得度し、京都に遊び、日溪に從ひて宗教を聽く、未た幾ならすして大器と

陳善院僧樸師

なり、名字内に轟く、常に聖典を講し、傍ら唱導を善くす、某年攝津住吉に祐貞寺を創建し、寶暦八年本山黑書院にて往生禮讃を講す、是より常に侍講し、十年秋京都六條の宏山寺に住持す、本山祖像及び先宗主像を下し、且つ僧階を進む、十二年九月二十三日寂す、壽四十四、狐塚に闍維し、遺骨を大谷に藏む、宗主諡して陳善院といふ、筑前の大同師の年譜を作り、具さに行狀を敍す、師著述頗る多し、阿彌陀經錄、易行品懸談、幷科、十二禮講錄、選擇集科、選擇集錄、與御書餞飮錄、淨土和讃略解、御傳鈔大旨、淨土眞宗現益辨、管窺錄、行信辨疑、昨夢廬法語、宗某室人法語、別時意趣章講解、十疑論升量錄、平生臨終業成辨、紫朱稿、昨夢遺稿、各一卷、正信偈五部評論、往生禮讃錄、各三卷、安樂集講義四卷、往生禮讃甄解、文類襲鈔講錄、各五卷、法事讃甄解七卷、選擇集知津錄十二卷、及び往生要集私考、維行維修七家說、顯彰隱密義、各若干卷あり、（本願寺通紀、淸流紀談、本願寺派學事史）

ソーボク　僧墨　ケンジュ研壽を見よ、

ソーヨ　僧譽　チウン智雲を見よ、

ソーヨー　僧鎔　二三八三 二四四三　〔眞宗〕越中浦山善巧寺の住持なり、　僧鎔は空華と號し、一に雪山といふ、俗姓は渡邊氏、越中新川郡市江村の人なり、父は東本願寺下に屬す、十一歲靈潭に就きて祝髮し、法名を靈闇といひ、後、今の名に改む、家塾に在りて學修し、每に粟實を以て食となす、十九歲善巧寺に入りて嗣となり、笈を京都に負ひ、宗乘を硏究す、陳善院僧樸の門下師を推して上首となす、陳善院沒するに際し、其秘籍悉皆を附囑せらる、因りて法脉を受け、兼ねて祐貞寺を主とる、明和元年四十一歲再び學林に出て上座に進む安永二年賞せられて位餘間に昇る、年五十一の時飛彈古川に異安心の諍あり、命を奉して之を治す、宗主親ら九字十字尊號を書して與ふ、六年四月亡師著すところの法事讃註七卷を校刻し、題して甄解といふ、天明三年富山の客舍にて病を示し、九月法事讃念佛を修し、二十五日以來一心稱佛し、十月二日寂す、壽六十一、宗主諡して明教院といふ、著作如來會述要、後出阿彌陀偈錄、觀經玄談、易行品彌陀章法音鼓、淨土論述要讃、阿彌陀偈答讃、阿彌陀偈法音鼓、玄義分箋述、一枚起請文遺語訣、淨土寶綱章、本典畧註、正信偈疏略、帖外讃略註、述懷讃略註、聖淨二門義、三定聚義、宗目秘錄、勤式問答、末法燈明記箋述、十邪問辨、各一卷、散善義文類聚鈔箋述、正信偈講讃、口溪學則聞信鈔、各二卷、阿彌陀經受信錄、二門偈錄、各三卷、和讃開講說要四卷、觀念法門甄解、二卷鈔溫古錄、安樂集錄、各五卷、正像末讃後記、末燈鈔管窺、各六卷、如來會記九卷、三帖和讃集義方軌十二卷、本典一諦錄、（或は顯考記といふ）十六卷、及び信行一念辨改悔大意、小兒往生辨、尊號爲體辨、讃揚法則、各若干卷あり、（本願寺通紀、淸流紀談、本願寺派學事史）

ソーリュー　僧隆（一二六二）〔……〕　高麗の歸化僧なり、　僧隆は推古天皇十年十月雲聰と共に來り歸化す、事蹟詳ならず、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ソーリョー　僧亮（二四九八）〔眞宗〕肥後小島專稱寺の住持なり、　僧亮は宗乘を乘誓院に承けて造詣頗る深し、斷鎧

の肥後に在る時に方りて才名相抗せり、人稱して行信僧亮、正雜斷鎧といふ、近年宗瀛司敎師の隨筆を抄して一卷となし、淸涼遺芳といひ、上梓して世に行ふ、明治十七年司敎を追贈す、著作秋夜夢物語一卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ソーロー 僧朗 二四二九—二五一一 〔眞宗〕越後正念寺の住持なり、僧朗は越後中頸城郡姫川原正念寺覺音の第九子にして、興隆の異母弟なり、明和六年五月生る、安永八年甫て八歲高田小森氏に就きて儒典を習學し、寛政十年九月得度して興隆の法嗣となる、十一年十月越中に赴き、北天籟滿に就き宗乘を硏究す、文化八年五月住職を繼く、爾來兄と共に興學布敎懈たらす、文政十一年興隆と同時に司敎に擢てられ、同年安居し學林にて起信論議記を副講し、十三年の安居に學林にて起信論義を副講す、天保二年三月興隆と共に勸學職に任せられ、同三年の安居に學林に大經を講す、同八年十月隱居して擇善房と號す、蓋し法主の與ふる所なり、同十年安居して學林に觀經を講し、同十四年三月本山殿内に易行品を侍講し、五月本山白書院に於て御一代聞書の講話を開く、十二月法主眞綿五把を下して從來の勤勞を慰す、弘化二年の安居に學林に於て小經を講す、講終りて法主三葉勸學精舍の六字を親書して師に下し、併せて法主依用の杖一枝を與ふ、嘉永二年安居し、學林に定善義を講す、是に於て安居本講の任に當ること既に四回、蓋し異數なり、其四月十三日より更に讃阿彌陀偈の侍講を命せられ、同時に虎の間段下乘輿參入の許可を受く、滿講に及ひ懷紙、並に實行院の號を與へらる、同四年十月二十七日寂す、壽八十三、一生開くところの講筵凡て一百九十三會といふ、著作易行品丙申記、讃阿彌陀偈嘉永錄、正信偈壬寅錄、尊號銘文記、本願成就文戊丑記、論註八番問答記、法事讃錄、二門偈記、三經往生文類甲午記、唯信文意庚辰錄、淨土和讃戊寅記、勸章二帖目壬午記、日溪學則綱要鈔、三論玄義科、華嚴綱目甲午記、六合釋錄、諸神本懷集甲辰記、領解文略解、三論玄義甲申記、妄盡還源觀戊寅記、四敎略頌略註、四敎儀天保記、四敎義集注錄、僧分敎誡、各一卷、序分義甲戌記、愚禿鈔辛丑記、末燈鈔丙子記、往生論丁亥記、略文類記、口傳鈔記、步船鈔丙子錄、起信論戊子記、十不二門指要鈔記、同略註、曇鸞和讃丁丑記、各二卷、三十論疏私記、金剛錍論乙巳記、法華玄義略解、起信論義記戊寅記、法相義癸酉記、小經乙未記、玄義分癸酉記、定善義丁丑記、各三卷、散善義庚寅記、選擇集戊寅記御一代聞書癸卯錄、各四卷、大經述記、觀經述記、五敎章卯巳記、各五卷、論註丙子記六卷、探玄記丙戌記十卷、法華文句記戊申記十三卷、本典丙申記十五卷、善導和讃乙亥記、正像末知讃記、法華入疏癸丑錄、各若干卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ソーオー 相應 一四九一—一五七八 〔天台宗〕近江無動寺の開山なり、 相應俗姓は櫟井氏といひ、近江淺井郡の人にして其先は孝德天皇の第一皇子天帶彥國押人命の裔なり、天長八年母一夜劍を吞むと夢みて師を孕み、幾もなくして生まる、承和十二年鎭操和尙に隨ひて比叡山に登る、時に十五歲なり、十七歲剃髮して十善戒を受く、經を學ひて法華經常不輕菩薩品に至り、大菩提心を發し、不輕菩薩の行を修せんと欲するの念甚し、毎日和尙に侍する餘暇、必す花を折りて中堂に奉す

ること六七年曾て毫も懈怠なし、慈覺大師之を見て奇となし、齊衡元年師を召して度を加へんとす、師大に喜ふ、幾ならすして師夜半中堂に參し一人の僧ありて五體を地に投し涙に咽ひて得度受戒を祈請せるものを見、心中大に感激し、大師に告けて曰く、願くは先づ彼の某丸を度せよ、彼願滿たば、我願成就するのみ、と、大師其謙讓の志を知りて之を許し、衆に告けて曰く、陰德必す陽報あらん、と、齊衡三年西三條大納言良相度者狀を大師に賜りて修行謹愼の者を賜ひ、身に代りて度せしめ、其擁護の力に依りて息災の謀を爲さんとす、大師即ち師を召して曰く、大納言より度を給せられ、且つ身に代りて謹厚の者を度せしめ、將に一生の師とならんとす是れ汝良緣の相應なり、仍て汝に相應と云ふ名を與へん、此一字は大納言良相の一字を取るのみ、汝若し去年人を推すの德なくは豈今日自ら當るの運あらんや、と、即ち名簿を奉す、此年受戒す、時に二十五歲なり、得度の後誓ひて十二年間山を出てすして籠居す、大師より不動明王法、並に別尊儀軌護摩法等を承習す、師比叡山の南岫に幽邃の地をトし、草菴を構へて苦修錬行し、三年の間六時に行す、天下國土の鎭護の爲に四季每に般若經を轉讀し、自他の罪障を消滅せんか爲に、十二月一日より三夜佛名懺悔を修す、此の如き展轉の間、不輕菩薩の行を遂けす、籠山の後若干年を歷て天安二年西三條女御重病に罹る時、師懇囑を受け、止むとを得す、住山十二年に滿たすして、下り殿中に入り、呪を誦して病魔を除く是より世人師の靈德なるを知る、貞觀元年大願を發し、三箇年を限りて粒食を絕ちて蕨類を食し、比羅山の西阿都河の瀧に安居して智慧を祈請す、夢に普賢菩薩より一分の智慧種子を得、其後苦學せすと雖も、聖敎の深旨を悟る、貞觀三年、天皇勅して師を召したまふ、師止むことを得す三年に滿たすして下山參內す、詔ありて阿比舍法を修し、野狐を驅出す、賞として度者及び御衣を賜ふも師固辭して受けす、同年西三條女御また惱あり、大臣師を請して加持せしむ、幾ならすして平復す、大臣大に喜ひ、入唐三品親王唐より賜りたる不動明王呪佛慈護を銘鏤したる刀を師に賜る、師名望一時に高く、先師鎭操和尙か定心院十禪師の任は師か右大臣及ひ朝廷の間に斡旋したるによるといふ、貞觀四年金峯山に登りて三ケ年間安居す、湛譽院主も同しく登り東西兩岫に草菴を結ひ、互に使者を送りて其法驗を試む、朗善和尙師と共に夜菴を出つ、大叫して地に仆る、師走りて之を見れは舌を嚙みて死に頻せり、師直に刀を拔きて加持し、遂に蘇生するを得たり、朗善曰く鬼の爲に打たれたりと、これより益々師に敬伏す、安居終りて本山に歸る、其年の秋天皇齒痛あり、師參內して理趣經を誦して平癒するを得たり、貞觀五年等身の不動明王像を造り、後佛工仁算をして之を修造せしむ、貞觀七年佛堂を造立し、此像を安置して伽藍となし、無動寺と號す、同年染殿皇后の狐疾を祈りて平癒す、此年三條右大臣備前國臨庄の地を施入す、師之を自坊に留めすして延曆寺に寄附す、同年七月十四日先師圓仁及び最澄に諡號を賜ふは師の斡旋多きに居るといふ、天慶五年示現により金銅毘盧舍那佛像、不動明王像各一軀を鑄造し同年亦洪鍾を鑄造す、元慶六年堀河太政大臣の執奏により官符を下して無動寺を天台別院となす、同年師上表して

ソー（相）オ

中堂長講師並に常行堂堂童子等料度者各一人を置く、其年始めて中堂長講基延法師、常行堂堂童子基命法師を得度す、西三條女御滋賀郡倭庄を寺に施入す、其年常行堂を造立す、仁和元年六條皇后の疾を加持して平癒す、勅あり度者及ひ被物を賜ふ、仁和三年大宮社前に率都婆一基を建てゝ法華經一部を納む、華臺大菩薩寶殿一宇を建立す、寛平元年華芳廟前に率都婆一基を建て、法華經一部を納む、寛平二年宇多天皇の齒痛を加持して平癒す、勅して法橋位及ひ度者を給はんとすれとも、固辭して受けす、依て內供奉に配し、御衣を賜ふ、寛平四年舍利會の職衆並に瓶華四口を奉供す、昌泰三年大般若經一部を寫す、延喜三年玄照律師の病を癒し、其年醍醐天皇の不豫を加持す、乃ち度者二人及ひ御衣を賜ふ、其年五條女御の產を祈りて度者二人を賜ふ、後本山に於て八月不斷念佛の壇供を調へ、兼て念佛僧及ひ滿山の僧を供養す、延喜十年六道の衆生を引接するために阿彌陀佛並に六觀音を造立し、天下國土を鎭護するために半出五大尊、並に般若菩薩像を造立し、三千佛名經一部を書寫す、是年草菴を結ひて修行を事とし、十二月一日より三日まて日夜一切衆生滅罪生善薦福の爲に佛名懺悔を修す、爾後每年缺くることなし、延喜十一年秋より世事と絕ち、爾後門を杜ちて一室に籠居し、專ら本尊並に諸佛に奉す、延喜十四年佛經開題を書寫し、闍梨供養導師に令祐阿闍梨を咒願師に玄照律師を請す、延喜十五年本尊に祈禱して後生の處を示さんことを請ふ、夢に明王師を導いて十方淨土都率極樂を見せしめ、願に隨ひて往生すへきよしを告ぐ、師覺めて後感歎し、都率內院に念を係く、後、再ひ夢に都率外院に至るに、慈慶大德內院に坐し、紫磨金色の獅子に乘り、師を見て告けて曰ふ、我れ法華經讀誦の力によりて內院に上生す、子早く本山に歸り、一心一向に法華經を讀誦すべし、と、師覺めて後、專ら法華經を讀誦す、其年枇杷大納言等身の不動明王像を造立し、且つ三間の堂宇を建築して無動寺に寄附す、十八年十月本尊の右膝に對し、慇懃に啓白し涕泣すること常と異なり、恰も人の父母に別るゝを悲むか如し、踟躊廻顧して謝辭し去り、後、復た參拜せす、十一月二日佛像を隔離せる十妙院に遷し、香花を點し、西方に向ひて阿彌陀佛の名號を唱ふ、容貌常よりも嚴に、音聲常よりも雅なり、翌三日の夜半右脇して寂す、壽八十八、(相應和尙傳、明匠略傳、元亨釋書、本朝高僧傳)

ソーカン　相閑　二三四三 〔淨土宗〕江戸傳通院の僧なり、相閑は源蓮社眞譽空寂と號す、其俗姓生國詳かならず、了的に師事して宗乘を究め、瓜連飯安の二刹に住し、後、江戸小石川傳通院に遷る、天和三年二月二十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソーケン　相憲　二四九二 二五五八 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十六代なり、相憲字は玄識、號は竹堂、一に塚間と云ふ、姓は上野氏、江戸小石川に生る、染井西福院田下憲尊の下に投じて度を受け、豐山に學び、眞言宗大會議の議長を勤むること兩度、下野鷄足寺東京彌勒寺に歷住し、明治二十七年遂に擧げられて豐山能化職に補す、同三十一年十二月二十日寂す、壽六十七、著作義林章目講記十卷、淨菩薩心私記要錄、住心品私記、水波同異章私考、慈猛流口訣、興敎大師行狀記、各

三卷、極微成折考二卷、懺悔文私記、倶舍論日詮記、因明入正論科注玄談、同宗過幷不決擇、同入正理論講錄、六合釋茶談、有宗七心考、標眞遮異、悉曇章指南、三論宗綱要、眞言宗綱要、密海慈舟、豐山眞砂集、各一卷あり、(新義眞言宗史)

ソーザン　相山　…一三五〇　〔淨土宗〕駿河寶臺院の僧なり、相山は眞蓮社譽學と號し、其俗姓生國詳かならず、法を巖宿に嗣ぎ、傳通院の學侶となり、後增上寺に入りて學頭となる、貞享三年水戶中納言光圀の請により駿府寶臺院に住して、法化を布き、元祿三年十月三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソーサン　相山　リョーエー良永を見よ、

ソージツ　相實　一八二五…　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、相實は字法曼院と云ふ、鄉貫詳かならず、比叡山に登り、三昧阿闍梨、桂林房良祐、圓陽房陽宴、相豪に歷事し、事相の秘奧を傳ふ、永萬元年七月七日寂す、壽欲く、著作息心鈔、相實私記、密印信謬譜あり、(台密血脉譜、諸宗章疏錄)

ソーシユン　相俊　(一八八七)　〔天台宗〕肥後飯田山の學僧なり、相俊は鎭西の人兄般若房に從ひて受學し、顯密を盡す、泉涌寺の俊芿師に顯密の法を受く、寂後人師を後般若房といふ、師の兄般若房は祕密莊嚴記一百卷を撰す、共に寂年欲く、(本朝高僧傳)

ソージヨ　相助　一六五三…　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、相助は其鄉貫詳かならず、增賀に師事して天台敎を學び、平常念佛怠りなし、正曆四年寂す、壽缺く、(三外往生傳)

ソーヨ　相譽　ゼデン是傳を見よ、

ソーヨ　相譽　ホーウン法運を見よ、

ソーエン　總圓　シヤヨク志玉を見よ、

ソーカク　總覺　(一九四九)　〔臨濟宗〕越前淨福寺の禪僧なり、總覺俗姓生國不詳、幼より建長寺に入り、兀菴寧に師事し、後、支那に渡り、叢林を遍歷す、東歸の後佛源禪師正念に參し、趙州狗子無佛性の公案を提持す、偶大慧の法語を閱し、不壞世間相而談實相の語に至りて信入の處あり、趨りて佛源禪師正念に告ぐ、禪師呵して曰ふ、門より入るものは是れ家珍にあらず、と、一日禪師上堂狗子の話を擧して曰ふ、有無の會を作すを得され、但直下に個の無を提せよ、と、遂に高聲に無と云ふ、總覺聞得て豁然大悟す、禪師即ち法衣を付して印可す、越前の檀越某淨福寺を創し、請して開山とす、示寂の年時缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ソーキク　總菊　…二二一五　〔曹洞宗〕伯耆觀音寺の禪僧なり、總菊字は秋山、靑蓮寺嘯巖全虎に法を受け、觀音寺に出世す、伯耆守豐興師の道風を慕ひ、弟子の禮を執り、厚く田園を施す、弘治元年十月七日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ソーゲー　總藝　(……)　〔曹洞宗〕越前心月寺の禪僧なり、總藝字は才翁、幼にして出家し、諸老を徧參し、大室總芳に參して其法を得席を踵ぎて越前心月寺に住す、檀請により信濃長興寺を開く、詔により總持寺に出世す、寂年及び壽缺く、長興寺に塔す、法嗣圭嶽珠白あり、(日本洞上聯燈錄、

ソージ　總持　(一九五〇)　〔戒律宗〕河內西林寺の律僧な

り、總持は號を日淨と云ひ、大和の人、源景親の子、睿尊の姪なり、幼にして佛經を崇び、多羅尼童子と名く、寛元二年睿尊を師として剃髮し、尋で具足戒を受く、建長の末睿尊の屬命により河内西林寺を領し、開會說戒し、弘長二年重ねて自誓受具す、弘安九年支那の僧行禪をして法華經を書せしめ、且七日を期して法華を手書し、懺法を修し、父の冥福を資く、又母恩に報して尼鈔資行錄を撰す、正應三年四王院に就て最勝會を開きて睿尊の疾を祈り、其寂するに及び、忍性信空等と共に心に誓ひて其遺託を墜さず、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

ソージボー　總持房　リューセン隆暹を見よ、

ソージヤク　總寂　シンエ眞慧を見よ、

ソーツー　總通　二三三三……〔淨土宗〕越前欣淨院の開山なり、總通は英譽と號し、越前の人、隨流に投じて剃髮受業し、州の丹生郡白濱の欣淨寺開山となる、後、伊勢山田に於て寂す、時に延寶元年なり、壽缺く、（淨土總系譜）

ソーホー　總芳（……）〔曹洞宗〕越前心月寺禪僧なり、總芳字は大室、大英梵策の法を嗣ぎ、越前心月寺に住す、寂年並に世壽缺く、法嗣才應總藝あり、（日本洞上聯燈錄）

ソーユー　總融　二〇四六……〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、總融字は通識、別號は雪心、久しく靈波に侍して戒律を學ひ、學諸敎に涉りて尤も華嚴に通す、大和の龍華院に住し、戒壇院に移つる、至德三年四月二十一日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ソーヨ　總譽　ショーガン淸巖を見よ、

ソーキ　聽暉（……）〔臨濟宗〕相模建長寺の僧なり、聽暉字は東海と云ふ、無礙妙謙に師事して印可を受け建長寺に住し大に宗風を揚ぐ寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

ソーシユー　聽秀　二〇三二……〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、聽秀字は實翁、俗姓不詳、葦航道然に師事し、後に高峰顯日に事ふ、元に航し、諸刹を遍歷す、東歸の後淨智建長に歷住す、貞治年間長福寺を開く、晚年建長寺中の大智菴に退休し、應安四年三月廿七日寂す、聽秀書に巧妙なり、元の天子詔して浪りに書することを許さゞりきと云ふ、又詩を善くす、一二首を傳ふ、遊ニ吉備中山一作、に曰ふ三月三春盡、風光一夢間、偶逢ニ無事日一、遠尋ニ有花山一、路與レ巖高下、人隨レ雲往還、雨天欽ニ我友一、隱約自來攀、遺偈に曰ふ末後一句、佛祖不レ知、掀翻四大海、踢倒五須彌、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ソーホ　聽保　二三二一……〔淨土宗〕武藏勝願寺の僧なり、聽保は聖蓮社冏譽如忍と號す、相模小田原の人なり、廓山に師事して淨土宗を學び、鴻巢勝願寺に住す、寛文元年四月二十四日寂す、壽缺く、嗣法聽譽保山あり、（淨土總系譜）

ソーヨ　聽林　ユーコー西仰を見よ、

ソーリン　聽林　二二五四……〔淨土宗〕江戸善德寺の開山なり、聽林は十蓮社樂譽と號す、俗姓は千葉氏胤行の子なり、酉譽上人に就て剃髮し、法を聽譽上人に嗣ぐ、江戸淺草に善德寺を剏して開山となり、明應三年七月十六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ソーゲツ 窓月 二三二一 〔淨土宗〕山城善法寺の開山なり、 窓月は西譽と號し、山城の人なり、靈巖に師事して法を嗣ぎ、州の久世郡宇治善法寺の開山となる、慶安四年八月十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソーサン 宋山 二二〇四 二二九五 〔曹洞宗〕遠江可睡齋の禪僧なり、 宋山字は士峯、伊勢國篠島の人なり、俗姓は石橋氏幼にして妙見寺等膳禪師に依て出家す、十八歲にして具足戒を受く、膳可睡齋に遷る、師侍從す、膳の遷化に及んで、一柱位を嗣ぐ、師入室し、機語相契ふ、慶長二年幕府の命を承けて可睡齋に住し、僧錄司に任せらる、五年幕府命して江戶の城中に曹洞の高僧を召し論議せしむ、師其事を司る、家康大に師の德望を歎して親しく法門を問ひ、賜賚最も多し、已にして事務を謝して金生寺に退居す、秀忠寺產を寄附して老を養はしむ、寬永十二年九月廿三日寂す、壽九十二歲、(日本洞上聯燈錄)

ソージュン 宋順 ジカイ慈海を見よ、

ソーエン 雙圓 キョーシュン慶舜を見よ、

ソーク 雙救 ドーシュー道宗を見よ、

ソーホー 雙峯 シューゲン宗源を見よ、

ソードー 草堂 トクホー得芳を見よ、

ソードー 草堂 リンホー林芳を見よ、

ソークワン 想觀 シホン思本を見よ、

ソーヨ 想譽 クワクドー廓道を見よ、

ソーデン 桑田 ドーカイ道海を見よ、

ソーヨ 桑譽 リョーテキ了的を見よ、

ソーア 叟阿 リョーカク良覺を見よ、

ソーグワ 甑瓦 ドーケー道契を見よ、

ソーゲン 曹源 テキスイ滴水を見よ、

ソーシューローショー 竈洲老樵 エンシキ圓識を見よ、

ソーヨ 走譽 レンサツ連察を見よ、

ゾーエン 增延 (一八二五) 〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、 增延は和泉の人、高野山に登り良幸阿闍梨に師事し、秘軌を受く、勤學力行なり、一字三禮して經典を寫す、每朝大佛頂呪尊勝呪、幷に理趣經二千遍慈救呪一萬遍を誦じ、每夜千禮す、永萬元年十月廿五日寂す、(本朝高僧傳)

ゾーガ 增賀 一五七七 一六六三 〔天台宗〕大和多武峯寺の僧なり、 增賀は俗姓橘氏、京都の人、參議恒平の子なり、延喜十七年に生る、幼稚の時より異相あり、四歲にして始めて父母に告け、自ら出家せんことを請ふ、十歲にして父母に携へられて比叡山に登り、慈惠僧正良源を問ひて侍童となる、幾許もなく解行共に優れ、三塔の間に盛譽喧し、乃ち僧正を仰きて得度受戒し、大乘の比丘となる、爾來比叡山の法規に遵ひ、十二年の間山を下らす、修行の功を積む、其後大乘の比丘の威儀を整へ、僮僕をも從へて京師に入り、五條西洞院なる父母の家を訪ふ、然るに當時父已に沒し、母寡居して家を守り、一門零落し、牆壁破れ、檐庇傾き、舊時の觀をとゝめす、師其荒廢を見て大に驚き、且つ悲み、母に謁して具に侍養を怠りたる罪を謝す、然るに母は却て悅はす、嚴然として誡めて曰く、汝は已に出家の身なれば汝の侍養を求めす、唯汝か修

行の功を積みて、一日も早く菩提の道を成就し、兩親を救はんことを望むなり、然るに今汝を見るに美麗なる袈裟を着け、僮僕を從ふは汝の心菩提にあらすして名聞にあるにあらさるか、汝徒に名聞を求むるならは、兩親も永く出離得脱すること能はさるへし、云云、と、增賀は母の言を聞きて大に愧ち、且つ感し、膝下に拜俯して慈訓を受け、直に比叡山に還り、以前に倍して解行を勵み、誓を立てゝ一千夜の間根本中堂に籠り、毎夜本尊藥師如來の前に一千禮をなして菩提の心の發こるやう祈願し、一千夜の期滿ちて何の靈驗をも覺えすとて一錫飄然として山を下り、近江路より東行して伊勢に入り、太神宮に詣て、同樣の祈願をなし、一夜夢に菩提を發さんとするには、其肉體を見るなかれと告くるものありと覺え、全く太神宮の靈告なりと信して大に歡喜し、これより名聞を嫌ふこと蛇蝎の如く、即時に袈裟等一切着用するところを脱き棄てゝ路傍の乞食に施與し、身に寸絲を掛けすして歸途に趣く、行人笑嘲すれとも師自若たり、四日を經て比叡山に歸る、儕輩狂となし、或は笑ひ、或は憐む、慈惠竊に師を招きて曰く、我れ汝の名利を捨つるを知る、但た狀貌玆に至りては甚しからすや、外は威儀を正しうし、内は名利を捨つれは可ならすや、と、師曰く、我れ永く名利を離るゝを得て後、師の訓に遵はん、と、高く叫ひて走り去る、慈惠門に出て目送感泣すること久し、是より後破笠瘦笻四方に雲遊し、實を隱す、冷泉上皇勅して供奉となさんとす、師輙ち佯りて狂し去る、東三條院詮子（一條天皇の母）師を宮中に延きて戒師となす、師即ち南殿の高欄に倚り、宮女に向ひ放屁して去る、一日人あり新に佛像を作り、師の慶讃を請ふ、途中惟た何法を說くへきかを思ふ、忽ち猛省して曰く、是亦名利を邀ふるなり、我今魔に魅せらるなりと、檀家に至り大に檀主を罵りて慶讃せすして歸へる、比叡山に内論義あり、其法は論義訖りて後大衆供佛の餘饌を以て之を前庭に擲ち、乞食をして競ひ集りて食はしむるを以て常例とす、師或時衆中より出て之を取りて食ふ、衆嘲りて曰く、增賀は狂せりと、師曰く、我狂せす、貴坊等こそ却て狂せるなれ、と、慈慧の僧正に任せられ、宮に入りて恩を謝するに方り儀衛甚だ盛なり、都人聚りて見る、師乾鮭魚を帶して劒となし、瘦牛に乘り前驅の列に交る、諸徒叱して之を去らしむ、師厲聲して曰く、僧正の前驅我を去りて誰かせん、常に歌ひて曰く、名聞は乞食の樂に若かんや、と、應和三年七月如覺禪師に勸められて多武峯に上る、其山川風物嘗て夢みたる如くなりとて深く感喜し、終焉の志を決し、錫を智朗の舊菴に駐む、其住持千滿、寺主平仙なる者、新に三間の精舍を建て師を奉して之に居る、師其精舍にありて山月に對して三觀を凝し、磵泉を聞きて一心を澄ます、或は密供を修し、或は妙經を諷し、造次顚沛間斷なし、如覺、千滿、泰善、聖昭、平救等敬事して學を受け、仁賀、行眞等德を慕ひて來り居る、每歲四季各法華三昧三七日を修す、康保元年止觀を講し、明年文句を講す、天延二年十月十五日初めて維摩會を改めて法華會となし、一僧をして竪義せしめ、奥義を論決す、寛政年中鈔釋玄義を著す、師多武峯に住すること四十一年なり、一日門弟を集めて死期遠からさるを語り、即ち講筵を設けて深義を演說し、侍僧に命し碁局及ひ韓泥を

持ち來らしめ、便ち局に就き手から談し、韋を被りて胡蝶の曲を奏す、仁賀其故を問ふ、師曰く、我少時此二事を嗜む、然れとも人の爲に諫止せらる、餘習除きかたく、動もすれは持念す、一毛繫着すれは万劫の苦因なり、故に今之をなして消遣するなり、と、然る後弟子をして念佛せしめ自ら靜室に入り、繩床に坐し法華を誦し、誦讀罷みて俄に曰く、聖衆來れりと、乃ち辭世の和歌を吟し、金剛印を結ひ泊然として寂す、壽八十七、實に長保五年六月九日なり、（增賀傳、往生極樂記、本朝高僧傳）

〔考〕蓋し多武峰は定慧の開くところにして法相宗に屬したるも、增賀入りて住する後、轉して天台宗となり、比叡山延暦寺の別院となる、

ゾーキ　增基　一九四二 二〇一二　〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、增基俗姓は藤原氏關白基忠の子なり、出家して覺助淨雅の二師に師事し、元亨年中三井の長吏となる、文和元年七月廿一日寂す、壽七十一、（三井續燈記）

ゾーコ　增護　……… 二五三五　〔眞言宗〕山城東寺長者なり、增護は二條左大臣治孝の息、童名家壽君と云ふ、文政三年五月七日山城隨心院に入り得度し、大僧都となり、同八年十二月十九日大僧正に昇り、護持僧となる、安政二年七月東寺一長者法務となり、明治八年十一月十二日寂す、

ゾーシユン　僧俊（………）　〔眞言宗〕山城小野隨心院の開山なり、　增俊は中納言阿闍梨といふ、京師の人常鄉國俊の子なり、幼にして出家し、四度の法業訖はりて傳法戒壇に登り、灌頂職位を受け嚴覺の法を嗣き、去りて一方に法幢を建て、隨心院派と稱す、即ち曼荼羅寺一院なり、寂年缺く、附法一人顯嚴あり、（後傳燈廣錄）

ゾーゼン　增全　一四九七 一五六六　〔天台宗〕近江極樂寺の僧なり、增全は河内國河内郡の人、十八歲比叡山治哲法師に就て出家し、天安二年定光大師により大僧となる、慈覺大師に秘密敎を受け、内供奉となり、後、極樂寺最初の座主となり、延喜六年正月六日寂す、壽七十、（三外往生傳）

ゾーチ　增智（　　）　〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　增智は藤原師實の子、少にして園城寺に入り、增譽僧正を師として落髮受具し、顯密の敎を學ふ、千光院に住し、法印權大僧都に任す、幾ならすして園城寺の長吏となり、僧正に轉し、法務を兼ね、某年日蝕を祈りて牛車の宣を賜ふ、寂年、及ひ壽欽く、（本朝高僧傳）

ゾーチユー　增忠　…… 一九五八　〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　增忠は猪熊殿の子、弘安八年十二月七日園城寺の長吏に任し、永仁六年正月廿四日寂す、（三井續燈記）

ゾーミヨー　增命　一五〇三 一五八七　〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、　增命は京都の人、左大夫桑原安岑の子なり、少にして比叡山に登り、西塔院の延最に師事す、齊衡二年詔により試席に登る、時に十四歲なり、二年を經て東大寺の戒壇に登り、具足戒を受け、貞觀九年比叡山に登りて菩薩大戒を具し、慈覺大師に天台敎を習ふ、仁和元年圓珍座主に三部灌頂を受く、寬平三年夏西塔の釋迦堂後に菴を結ひて禪坐す、昌泰二年園城寺の長吏に任す、延喜二年齋宮公主病あり、無動寺相應に命して持念せしむること十日なるも効なし、因りて師を召し

て持誦せしむ、日ならすして癒えたり、此年長公主師を六條院に迎へて出家受戒し、灌頂を稟く、五年四月宇多上皇比叡山に幸し、師に隨ひて受戒灌頂す、十一月總持院にて蘇悉地の法を受く、翌年比叡山の座主となる、十年九月上皇千光院に幸し、阿闍梨位を受け、親しく磨衲の袈裟、香爐、數珠、並に御衣を賜ふ、十五年秋天下疱瘡大に流行す、帝も亦不豫なり、師に詔して宮に入り持念せしむ、尋きて少僧都に任せられ、延長元年春宮中騷擾あるの際、命を奉して之を治む、五月一日山に歸へり、僧正に任せられ、法務を兼管す、天台の此任命は師に始まるなり、三年秋天皇瘧を病む、師亦之を禱りて癒やす、延長五年十二月の初旬病を得、十日寂す、壽八十五、此月十七日圓珍に智證大師と追號す、蓋し師の先に奏請する所に依るなり、師の遺命により師を靜觀と謚す、（本朝高僧傳）

ゾーユー　增祐　……一六三六　〔天台宗〕山城如意寺の僧なり、　僧祐播磨賀古郡蜂目郷の人なり、京に入り如意寺に住し、念佛誦經を事とし、貞元元年正月身に十瘡あり、飲食例にあらず、夢に寺中西井邊に三車あり、問ひ曰ふ、何車か、車下人あり、答へて曰ふ、增祐上人を迎へむためなりと、重ねて夢に車初め井邊にありしもの房前にあり、同月晦日增祐弟子に謂て曰ふ、死期既に至る、葬具を儲ふべし、と、弟子等に扶けられて葬所に向ひ、豫め鑿ちおける一大穴の中に陷り、阿彌陀佛を念誦しなから寂す、（往生極樂記、本朝高僧傳）

ゾーヨ　增譽　一六九二—一七七六　〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、增譽は權大納言藤原經輔の子、少時より佛に歸し、園城寺行觀僧正に師事して得度す、普く聖跡を巡り、呪練難行して神感あり、三井の千光院洛東の聖護院を建て、熊野神を勸請す、應德元年秋中宮賢子崩す、白河天皇召して師に法華實相の深旨を聞き、勅して法印に任す、寬治三年三井の覺圓の讓を受けて法務となる、同五月勅を受けて神泉苑に孔雀經法を修して雨を禱る、八年秋天王寺の主となり、永長元年權僧正に任す、承德二年廣隆寺を司とり、康和二年園城寺の長吏に補す、三年春白河上皇鳥羽院に論議を開き師に命して證議者たらしむ、四年正僧正に轉し、三山の檢校を主とる、此職師より始まるなり、又洛北の一條寺に住し、長治二年延曆寺の座主に任す、尋きて大僧正に任し、尊勝梵釋崇福等の十三寺を兼領す、嘉承二年最勝會の證義者となる、永久四年二月十九日寂す、壽八十五、（本朝高僧傳）

ゾーリ　增利　一四九六—一五八八　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、增利俗姓は坂氏、中納言家時の子、紀伊の人なり、或は云ふ姓は伴氏山城の人なり、と、興福寺載豐空操二師に事へて法相を學び、二十歲にして東大寺に受戒す、貞觀の末大安寺眞然に從つて胎金の秘奧を傳へ、興福寺に居して法相を說き、兼て密法を修す、延喜三年維摩會の講師となり、六年律師に任ず、十一年敕により維摩會の探題となり、十六年少僧都に昇る、延長三年大僧都に轉し、西唐院に退き六年七月十三日寂す、壽九十三、臘七十二、（本朝高僧傳）

ゾーウ　藏有　……一八八一　〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、藏有字は三河僧都といふ、理性院宗嚴の傳法灌頂を得、照

阿雅西の法を受く、承久三年十一月九日寂す、附法九人あり、寛秀、藏秀、藏賓、叡覺、琳經、叡賢、深尊、昌祐、藏尊等、是なり、（續傳燈廣錄）

ゾーエン 藏緣（……）（……） 越前白山の僧なり、藏緣は泰澄和尚の徒なり、專ら地藏の名號を持して他を省みず、北國に遊化して他方に出てす、白山立山を以て修練の場所とす、晩年白山の筒笠に菴居し、某年寂す壽缺く、（本朝高僧傳）

ゾーカイ 藏海（二四四四）〔曹洞宗〕武藏某寺の禪僧なり、藏海は、俗姓生國詳ならす、一に越後の人と云ふ、出家して曹洞宗の宗學に力を用ゐ、天明四年武藏川越某寺に於て正法眼藏を講し、後、編して正法眼藏私記と云ふ、示寂年月日缺く、著作正法眼藏私記若干卷あり、

ゾーカイ 藏海 ショーチン性珍を見よ、

ゾーカイ 藏海 ムジン無盡を見よ、

ゾーサン 藏山 ジユンクー順空を見よ、

ゾーシユン 藏俊（一八三八）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、藏俊は京都貴族の子、覺晴、覺超二師に從ひて法相を受け、諸師の門に遊ひて益々玄致を研く、仁安二年維摩大會に登り、後、菩提院に住し、本宗を弘む、安元年中高倉天皇の詔により相宗章疏の目錄を纂して呈進す、治承二年興福寺を董し、某年寂す、平清盛奏して僧綱を追贈す、法弟七人あり、就中覺憲、堯詮等最も顯はる、著作因明疏廣文集三十八卷、因明疏鈔四十一卷、並に注進法相錄一卷あり、（元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ゾーシユン 藏春 チユードン中曇を見よ、

ゾーソー 藏叟 ローヨ朗譽を見よ、

ゾーチン 藏珍（一九七五 二〇五五）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、藏珍字は玉岡と云ふ、別傳妙胤に從つて東來し、出てゝ相模善福寺上野長樂寺相模圓覺寺等を歷遷す、應永二年四月二十二日病に罹り、偈を書して曰く、來不入門、去不出戶、赤肉團頭、淨寂光土、と、筆を投し、卽時に寂す、壽八十一、（延寶傳燈錄）

ゾーマン 藏滿（一八二二）〔法相宗〕山城笠置山の僧なり、藏滿は俗姓不詳、東大寺義藏法師に師事し、諸經論を習ふ、相者通照と云ふ者、師を見て曰ふ、子學に敏なれども、壯年に至らず、須く學を棄てゝ精修すべし、師乃ち山城笠置山の岩窟に禪坐して苦修練行頭燃を救ふかごとし、毎朝必ず地藏菩薩の號を唱ふ、三十歲にして益精修し、九十餘にして寂す、（本朝高僧傳）

〔考〕本朝高僧傳藏滿の年代を錄せず蓋し仁平の前後の人ならむ、

ゾーロソー 藏鷺叟 シユージユン宗順を見よ、

ゾーロク 藏六 エクワ慧果を見よ、

ゾーロクアン 藏六菴 リヨーグワン了願を見よ、

ゾーカイ 象海 エタン惠湛を見よ、

ゾーゲ 象外 ゼンカン禪鑑を見よ、

ゾーサン 象山 ジヨウン徐雲を見よ、

ゾーシヨ 象初 チユーコー中杢を見よ、

ゾーセン 象先 モンギン文槼を見よ、

ゾーセン 象先 ジョーレキ淨歷を見よ、

ゾーホー 象匏 モンガ文雅を見よ、

ゾーウン 象雲 ギョーテー行貞を見よ、

ゾーゲドー 雜華堂 ドーヒ道費を見よ、

ソクア 即阿 シンケー秦冏を見よ、

ソクアン 即菴 シューカク宗覺を見よ、

ソクアン 即菴 シューシン宗心を見よ、

ソクイチ 即一 ゲンシ玄趾を見よ、

ソクオーイン 即往院 エンリュー圓龍を見よ、

ソクシン 即心 二三九六 〔曹洞宗〕甲斐文珠院の第二代なり、即心は號を圓瑞と稱し、甲斐の人なり、大乘寺卍山に師事して其法を受け、鄕に歸へり、文珠院を建て、卍山を請して開山となし、自ら二代に居る、元文元年正月六日寂す、壽七十餘なり、

ソクシン 即心 ジャクチョー寂超を見よ、

ソクゼイン 即是院 ニチクヮン日完を見よ、

ソクトー 即到 リョーシュー良拾を見よ、

ソクドー 即同 二四七二 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十八代なり、即同字は逮見、武藏幡羅郡俵瀨村の人なり、幼にして邑の成就院に入りて剃髮受度し、豐山に登り、學業成りて武藏金剛院に住し、彌勒寺に移る、文化五年選はれて豐山能化となり、在職四年辭して閑居し、文化九年九月二十四日寂す、(新義眞言宗史科)

ソクドー 即道 二三五〇 二四二五 〔曹洞宗〕大和靈鷲山某菴の僧なり、即道字は雲門、肥前の人、俗姓は富永氏といふ、甫めて八歲法華提婆品を聽き、激奮して父母に出家の事を乞ふも許されず、漸く十一歲にして許され、玉林寺天淳禪師に見ゆ、十四歲、論孟、五經、文選、老莊、荀列等を讀み、次に周易、韻鏡、倶舍世間品等を讀む、尋いて江戶に留學すること五年なり、病に罹りて感發し、學解を放擲し、諸方の知識宗匠を歷訪して請益する所多し、後國に歸へり、天淳の命により攝津大道寺を領す、享保十二年長門大寧寺玉洲に招かれ首座となる、後、攝津の大道寺、三河の龍海院に歷住す、寶曆二年三月大和靈鷲山の請に應す、明和二年正月微疾ありて寂す、壽七十六、臘六十六、著作語錄若干卷、法嗣未徹玄機等三十六人あり、(續日本高僧傳)

ソクドー 即道 クヮンサン觀山を見よ、

ソクニョイン 即如院 ニチゲン日限を見よ、

ソクヒ 即非 ニョイチ如一を見よ、

ソクチュー 則中 (二三四二) 〔淨土宗〕尾張相應寺の僧なり、則中字は快玄、阿波の人、無量山に留り常に起信論を愛讀して微旨を發明し、大衆に講說すること數百回なり、世人其菴を呼で起信菴と云ふ、延寶三年四月學者の請に因て起信論文を科解して二卷となす、別に起信義一卷を述ぶ、六年七月宋柯山の倫師の法華科註一帙を得て評を加へ、世に流行す、八年秋畧教誡經を註す、天和二年秋冬の間量岳東谷に於て法華經を講す、乃ち倫公の科註に依る、諸宗の學士翕然として集る、聽徒千を以て數ふ、三年尾州大納言延て名護屋相應寺に居らしむ、示寂の年月日詳ならず、(鎭流祖傳)

ソクデン 則傳 (二三一八) 〔眞言宗〕豐後彌彥山の修驗者

なり、則傳一に即傳に作る、阿吸房と稱す、筑前柳川の人なり、初め眞言宗の僧なりしが、後、彌彥山に登り、修驗者となり、諸國を周遊す、永祿元年三峰相應法則五卷を製し、弟子智積房定珍に附す、寂年月日詳ならず、

ゾクバイ 息梅（一九二九）〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、息梅は越前の人、丹青を雪舟に倣ふ、墨畫に最も妙を得たり、寂年壽詳かならず、（本朝書史、鑒定便覽）

ソクコー 息耕　ゲサン餓山を見よ、

ソクシツ 足室　エンキュー圓給を見よ、

ソクジョーイン 速成院　ドダイ義諦を見よ、

ゾクオー 續翁　シューデン宗傳を見よ、

ソンイ 尊意（一五二六—一六〇〇）〔天台宗〕近江延暦寺座主なり、尊意俗姓は丹生眞人と稱し、京師の人にして、其先は應神天皇第七皇子に出づ、貞觀八年七月十五日に生る、甫めて十一歲の時僧賢一に從ひて賀尾寺にて受度し、三年の間寺を出でず、日夜千手陀羅尼を暗誦す、賢一越中白山に入るに方り、所持の藥師佛像を師に附す、元慶三年九月十四日十四歲にて比叡山に登る、十七歲に及びて剃髮し、山を下り京師奈良の間に巡禮し、河内國に宿す、時に若江郡に白心木あり、師其の枝を斫りて千手觀世音像を彫刻し、一生歸依本尊となす、仁和三年四月十三日廿二歲にて登壇受戒す、天台敎の奧義に達するを得たり、師初め極樂寺最初座主內供奉十禪師增命阿闍梨に從ひて、兩部の大法諸尊の護摩等を稟け、後、內供奉十禪師律師玄昭阿闍梨に依り重ねて先に學ふところを研覈し、並に蘇悉地法を稟く、これより靈驗を感すること多し、延喜十九年八月七日傳法阿闍梨位を賜ふ、延長三年夏旱し、天下大に苦む、七月十四日勅を下し、師をして十六日より三ヶ日間延暦寺にて雨を祈らしむ、師即ち六口の僧を引率して佛頂尊勝法を修す、既にして大雨降下し、天下皆驚喜す、尊勝秘法の興隆此より始まるといふ、延長四年五月十一日六十一歲にて延暦寺座主に任せらる、此月勅を奉して中宮の產を祈らんために七日間不動法を修し、修法三日にて皇子成門宮誕生す、延長六年閏八月廿八日勅して法橋位を賜ふ、延長七年三月京畿諸國に惡疫漫延す、師勅を奉して三十口の伴僧と共に一七日間豐樂院にて不動法を修し靈驗あり、賞して度者三十人を賜ふ、其他勅を奉して延長八年六月には雨を禱り、同月雷を治す、天慶元年八月二十九日大僧都を賜ひ、同日法務に任す、翌二年七月廿五日亦雨を禱り、度者廿三人を賞賜せらる、天慶三年二月廿三日剃髮沐浴し、夕刻に及び、弟子恒昭を召して千手陀羅尼を誦せしめ、且つ曰ふ我れ積年極樂に往生せんとを願ふも、今蓄念を改めて兜率に上生せんとす、燒葬の後骸骨を留むへからず、墓所に石柱を造立し、見聞する者をして兜率上生の因緣を結はしめん、云云、輿に乘し定印を結び、五字を誦して習禪房に趣き、翌二十四日悄然として寂す、壽七十五、著作法性私記、法性別記四卷あり（明匠略傳、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ソンイン 尊胤（一九九九）〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、尊胤は後伏見院の子承鎭法親王に灌頂を受け、天台座主となり、曆應二年四月十六日二品親王に叙す、寂年歡く、

ソンウン 尊雲（一九九九）〔天台宗〕近江延暦寺の座主な

り、尊雲は後醍醐院の子、天台座主となること二度に及ふ、（天台座主記）

ソンヱ 尊慧　ジシン慈心を見よ、

ソンヱン 尊衍（一九三五—二〇〇一）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、尊衍は幼にして靜泉幸尊二師に歷事して天台俱舍を學ひ、十五歲剃髮す、嘉元四年四月六日十九歲にして大堂立義者となる、曆應四年正月十四日寂す、壽六十七、（三井續燈記）

ソンヱン 尊圓（一九五八—二〇一六）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊圓諱は尊彥といひ、大乘院宮と號す、伏見院の第五皇子、母は俊衡朝臣播磨內侍なり、慈深僧正の入室弟子となる、天台座主となること四度に及ひ、二品に叙せられ、一身阿闍梨となり牛車を聽許せらる、粟田宮撿挍となる、平生書並に歌を善くし歌は千載集に二首續千載集に二首、風雅集に八首、新千載集に十首を載す、書は一家の風を成し、後世入木道高祖と稱せらる、延文元年九月十三日寂す、壽五十九、（天台座主記、諸門跡譜、門跡傳）

ソンエン 尊圓　ライケン賴賢を見よ、

ソンガ 尊賀　ニチテー日延を見よ、

ソンカイ 尊海（二二五二—　）大和の僧なり、尊海は芝法眼と名聲を齊うす、世誤りて芝法眼となすもの多し、奈良に住し、佛畫を能くす、文祿中の人なり、（本朝畫史、鑒定便覽）

ソンカイ 尊海（………）〔天台宗〕武藏星野山の學僧なり、尊海字は圓頓、武藏足立郡の人なり、信尊を拜して剃髮受戒し、顯密の旨を解し、初め武藏の慈光寺に住して抄經を講す、師京都比叡山に隸し、研學七年、心賀僧正の室に入り、七科の法要を傳へ、三重の脉略を極む、歸へりて佛地院を創して大に天台教を弘め、關東の天台教寺五百八十皆附屬し來る、又佛藏院を建て求聞持の法を修す、寂年、及び壽缺く、弟子宥海あり、顯密に博通し、泉福寺に住す、顯密論談鈔、肝心要義鈔、心觀明鈔等數十卷を著はす、（本朝高僧傳）

ソンカイ 尊海（二一三二—二二〇三）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、尊海は東久世生國通傳の子、文明四年九月七日に生る、十六年に出家し、弘覺信嚴二師に習學し、同年四月直に法眼に叙す、明應元年法印に登り、六年入壇す、七年權僧正となり九年正に轉す、同十一年大僧正となり、同年御室御傳幷に序を製す、天文十二年十一月四日土佐に寂す、壽七十二、（仁和寺諸院記、仁和寺御傳）

ソンカク 尊覺（一八七五—一九二四）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊覺は順德院第一の皇子、母は從三位清季の女なり、出家して尊快に就て天台教を學び、建長元年天台座主に任ず、文永元年十月二十七日寂す、壽五十、（天台座主記）

ソンキョー 尊敬（一六〇四）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、尊敬俗姓は橘氏なり、名は在列、字は卿と云ふ、和州員外刺史秘樹の第三子なり、少にして大學に遊び、聰識群を出づ、三十歲始めて文人に補せらる、人皆名士の晚選を痛む、在列も亦自ら倦む、後御史中丞となり、一年餘にして朝市の榮曜を厭ひ、佛教の門に意を傾け、經論の奧義を探る、天慶七年十月遂に比叡山に登り僧となり、道行の餘暇に詩文を樂む、寂年月日詳ならす、門下に源順出つ、天曆八年順師の

詩文を編纂して七卷となし、自ら序を作れり、（本朝文粹、日本詩史）
〔考〕信西藏書目錄に沙門敬公集三卷を錄するも傳らず、然れとも本朝文粹 朝野群載、扶桑集拾に其詩を收錄せり、

ソンキヨー 尊敎（一九五六）〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり 尊敎は太政大臣藤原公相の子、房舍尊超二師に從ひて宗義を學ひ、永仁四年天台座主に任す、其示寂の年時缺く、（天台座主記）

ソンキヨー 尊慶（[illegible]）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五代なり、尊慶字は賴心、俗姓は會田氏、天正七年武藏の越ヶ谷に生る、十三歳にして尊阿上人の室に入りて落髮受戒し、之に隨從して經論を習ひ、續きて四度の密行、及ひ兩部の灌頂を傳へらる、受具の年洛東に至り、日譽僧正に就きて習學すること多年、常に其講筵に列なる、元和二年春奈良に遊ひ、俱舍、唯識、三論、五敎を學ひ、廣く權實性相の理に通す、同四年春醍醐寺に登り光臺の亮濟に謁して兩部の大法諸尊の儀軌、及ひ重書秘訣を受く、寬永元年三月金剛院賢尊に從ひ廣澤流の許可、及ひ諸部の契明を受け、同十年春大覺寺尊性法親王に見え、兩部の許可、及ひ灌頂を受け、猶諸尊の儀軌を傳へられ、廣澤の源底を極む、同年夏請により越後高田の毘沙門堂に住し、封戸二百石を賜ふ、同十二年賢尊入寂し、師席を嗣きて中島金剛院に主となる、師即ち安藤右京進重長に告けて金剛院主をして永く毘沙門堂を兼ねしめんとす、重長幕府に乞ひて之を許す、同十五年秋金剛院を宥重に讓り、智積院に往き、元壽僧正に見ゆ、同十八年冬四代秀算僧正病篤く、師に豐山の席を囑して寂す、時に妙音院に住す、家光の命を蒙むりて此に遷り、講筵を開く、翌年春江戸に趣き、將軍に謁し、且つ豐山の修營を寺社奉行に請ひ、二十年五月許され黃金貳萬兩を賜ひ、中坊美作守時祐をして監せしむ、正保二年五月工を擬し、慶安三年五月に到る、六ヶ年にして漸く成就す、同年六月幕命により落慶供養を勤め、九月江戸に往きて之を謝す、將軍大に喜ひて奏請して僧正に任す、承應元年十二月十九日寂す、壽七十三、（豐山傳通記）
〔考〕豐山傳通記に師天正乙亥年に生るとせり、乙亥は三年に當り、寂年、及ひ壽と合はす、故に之を改む、

ソンクー 尊空（二三四八）〔淨土宗〕京都知恩院の僧なり、尊空は天蓮社帝譽照滿と號す、伏見宮守邦親王の子にして靈巖の室に入りて剃髮嗣法し、京都知恩院に住す、元祿元年十一月七日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ソンクー 尊空（一九三二）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、尊空號は禪林、伊勢の人、圓照の弟子となる、後、十六羅漢の像を寫して金口院に安置す、寂年缺く、（本朝高僧傳）

ソンクワニ 尊果尼（二三三五 二三七九）〔天台宗〕山城光照院の尼なり、尊果尼は後西院帝の女にして延寶三年六月を以て宮人藤原氏の腹に生れ、榮宮と稱す、天和二年九月光照院に入り、貞享三年四月剃髮し、玄龍に就て戒を受く、享保四年十月寂す、壽四十五、花關院に葬る、（野史）

ソンクワイ 尊快（一八六四 一九〇六）〔天台宗〕近江延暦寺の座主な

り、尊快は後鳥羽院の子、母は修明院なり、承圓に師事して天台教を承け、承久三年十八歳にして天台座主に任す、寛元四年四月二日寂す、壽四十三、（天台座主記）

ソンクワン　尊觀　一九七六　〔淨土宗〕相模善導寺の二代なり、尊觀字は良辨、俗姓生國詳ならず、出家して良忠上人に師事し、淨土教を受け、鎌倉名越の善導寺に住し、尋て名越の安養寺の第三代となる、その一門を名越流と云ふ、一に善導寺義と云ひ、一念業成等の義を立てたり、正和五年三月十四日寂す、著作大經口筆鈔等あり、門下慈觀慧斷等あり、（淨土總系譜、鎭流祖傳）

ソンケン　尊顯　一九六七／二〇四〇　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、尊顯は圓顯道猷の二師に師事し、四十二歳灌頂法を得、八十一歳初めて大阿闍梨位に昇る、後、法を尊順賴昭の二子に授く、之を如意寺流といふ、康曆二年六月廿五日寂す、壽八十四、（三井續燈記）

ソンゴ　尊悟　一九六二／二〇一九　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、尊悟は伏見院の子、九歳平等院に入り、十二歳出家得度し、淨雅觀昭二師に從ひ、元應元年密灌を受け、曆應四年三月初めて大阿闍梨位に上り、延文四年七月三十日寂す、壽五十八、（三井續燈記）

ソンコー　尊興　二〇三五／二〇八四　〔眞言宗〕山城勸修寺第十八代の長吏なり、尊興は龜山天皇の四世の裔、常盤井彈正尹滿仁親王の子、崇光天皇の猶子なり、永和元年に生る、興信親王の室に入りて至德年間出家す、明德二年三月長吏に補し、僧正に叙す　應永十一年十一月十六日慈尊院實順より傳法職位を受け、三十一祖となり、大僧正に轉す、二十年准三后となり、三十一年五月廿七日寂す、壽五十、安養院と稱す、（後傳燈廣錄）

ソンシン　尊信　一九八四／二〇四〇　〔眞言宗〕山城勸修寺十六代の長吏なり、尊信始の名は恒胤といふ、龜山上皇の子、式部卿常盤井一品親王恒明の子にして南朝天皇の猶子となる、正中元年に生れ、一德公と稱す、建武年中寛胤二品親王の室に入りて得度し、貞和四年三月廿四日寛胤に從ひて傳法灌頂を受け、時に二十四歳なり、俊然に依りて慈尊院流を汲み、權僧正に叙す、應安六年長吏に補し、九月七日東大寺の別當に任し、宣して親王となる、康曆二年四月長吏を辭し、同年寂す、壽五十七、號して後寶山院といふ、附法の弟子實信、興信、繼助、公海、定寶の五人あり、（後傳燈廣錄）

ソンシン　尊信　一九四三　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、尊信俗姓は藤原氏、太政大臣教實の子なり、圓實僧正に就て剃髮受戒して法相を習究し、圓實專英の二師に師事して益々秘奧を究む、寶治元年維摩會の講主となり、後師命に遵ひて大乘院に住す、幾何ならずして興福寺を領し、尋で法務に任し、長谷寺菩提山を兼ね、大僧正に任ず、弘安六年七月十二日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ソンシューイン　尊周院　ニチウン日運を見よ、

ソンシュン　尊俊（三一八八）　〔眞言宗〕大和報恩院の僧なり、尊俊は文筌と號す、俗姓は柳原氏、大和菩提山報恩院に住し、僧正に任ず、書法を狩野元信に學び、佛像及雜畫を能くし、龍虎墨畫竹及半身の達磨に秀作あり、又和歌及び和

字の書を能くす、世に菩提山の古僧正と呼ぶ、享祿中寂す、壽缺く、（本朝書史、扶桑畵人傳）

ソンシユン　尊舜（二一七四）〔天台宗〕常陸那珂月山寺の學僧なり、尊舜は常陸那珂郡友部の人なり、出家して月山寺尊叡に師事し、明應年間月山寺に住し、大衆の請により三大部見聞を講談す、示寂年月日幷に享壽詳ならず、（止觀見聞註）

ソンジヨ　尊助　……一九四九〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊助は土御門院の長子、母は法印尋惠の女、尊性、尊快、最守、公圓の四師に歷事して宗義を學ひ、天台座主になること四度に及ふ、正應二年十一月朔日壽若干にて寂す、（天台座主記、諸門跡譜）

ソンシヨー　尊照　二二二二 二二八〇〔淨土宗〕京師知恩院の中興なり、尊照字は滿譽行蓮社と號す、俗姓は橘氏、京師の人なり、父は恒平の後胤家貞なり、元龜三年廬山寺に投して受度す、天正四年十五歲にして諸檀林に修學し、大藏に通す、將軍秀忠崇敬最も厚し、文祿四年十月廿二日華頂山知恩院第二十九代の主に推さる、幕府の命により新に殿堂を建立し、齋田千七百石餘を寄附せらる、慶長元和の間盛に法化を爲す、天皇擢て僧正となす、元和六年六月二十五日寂す、壽五十九、（鎭流祖傳、勅修傳纂質）

ソンシヨー　尊性　一八五四 一八九九〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊性は高倉院第二皇子なり、出家して實全隆安二師に天台教を學ひ、天台座主となること二度、延應元年九月三日寂す、壽四十六、（天台座主記）

ソンシヨー　尊性　エンシヨー圓晴を見よ、

ソンシヨー　尊聖　……二〇九二〔眞言宗〕山城勸修寺第二十代の長吏なり、尊聖は長慶帝寛成の子なり、應永某年に生れ、佐山宮と稱す、興胤大僧正の室に入りて出家し、僧都に任じ、權僧正を歷て大に轉す、慈尊院興繼に從ひて傳法灌頂位を受けて第三十二祖となり、長吏に補す、永享四年七月四日寂す、壽缺く、（後傳燈廣錄）

ソンシヨー　尊勝　イチカイ一海を見よ、

ソンチユー　尊忠　ニチクワン日桓を見よ、

ソンチヨー　尊朝　二〇〇四 二〇三八〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、尊朝諱は尊敎、初の名は惠仁、後に改めて尊朝といふ、光嚴院の子、康永三年三月生る、文和四年出家して法守和尚に從ひて學習し、貞治元年灌頂す、永和四年七月十六日寂す、壽三十五、（仁和寺御傳）

ソンチヨー　尊澄（一九九三）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊澄は後醍醐院の皇子、元德二年天台座主に任す、元弘三年讃岐より、上洛して再び舊職に復す、（天台座主記）

ソンツー　尊通　二〇八七 二一七六〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、尊通は拓菴と號す、別號、葉老人、三井寺の南泉坊北林坊に歷住す、明應元年臨濟宗の宗印の明に航するに方り送詩あり、明人詩を贈りて大師と稱す、永正七年六月十九日大學頭となる、永正十三年八月二日寂す、壽九十、著作科註養愚七卷、三井續燈記五卷、授決集扶老、童稚鈔見聞二卷、智證大師年譜、北林名目集、禿丁記各一卷等あり、

ソントー　尊統　……二二九一〔淨土宗〕京都知恩院の僧なり、

尊統は源蓮社高譽と號し、有栖川宮の子なり、出家して圓理に師事し、淨土敎を學ぶ、寶永八年五月十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ソンドー　尊道　一九九二―二〇六三　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、尊道は後伏見天皇の第十一皇子、母は藤原氏の出なり、正慶元年を以て生れ、七歲にして靑蓮院に入り、延曆寺座主尊圓に隨ひ、曆應四年十樂院に移り、十歲の時尊圓に就て落髮受戒し、辨靜僧都に從ひて四敎儀摩訶止觀を習ひ、十歲靜範法印に三大部を受け、十六歲入壇加行一身阿闍梨に任す、此歲冬兩部の灌頂を受け、觀應元年秋仙洞院に於て佛眼の法を行ひ、修學成熟して尊圓の一心三觀の血脉を傳承す、文和四年十一月延曆寺の座主に補し、延元初年護持僧となる、三年七月座主を辭し、貞治四年再任し、應安元年夏牛車に乘るを聽さる、六年二品親王に叙す、永和四年秋彗星北に出で、師敕により五壇の法を修す、これより五壇を修する前後五回、皆成就するを得たり、應永六年相國寺の寶塔落慶供養の導師となり、十年七月五日花園の妙心寺に寂す、壽七十二、西山の靑龍寺に葬る、（天台座主記、門跡傳、本朝高僧傳）

ソンニヨ　尊如　二二八二―二三四七　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十二代なり、尊如字は俊良、俗姓は横山氏、土佐高知の人なり、鄕の常通寺嚴昭に投じ、十二歲薙髮し十六歲にして四度加行を修し、十七歲にして五臺山に於て兩部の灌頂を傳へ、十八歲の時長谷寺に登りて尊慶僧正に謁して弟子となり、左右に奉侍す、慶安三年豐山堂宇の築工落成したるを以て三問一講を行ひ、師其第三の問者となる、奈良に遊び華嚴五敎唯識百法を稟習し、醍醐寺に登ること都て六度にして大僧正寬濟に見え、憲深一流の秘奧を究め、東寺に至り寶嚴僧正眞源に就きて西院の秘密を傳へらる、寬文二年四月尊鏡に招かれて武藏の大聖寺に住し、同六年秋賴意席を主どるに及び、再び豐山に登り、梅心院に住し、第一座となる、翌年尊鏡示寂し、師其遺囑に依り、金剛寺に移り、越後多聞堂を兼ぬ、延寶三年幕命を蒙り、筑波山知足院に主となる、同八年春俊盛寂し、遺命して師を以て後補とす、師堅く辭して亮汰に讓る、同年十一月亮汰寂するに方り將軍の命に依り師其席を繼きて第十二代となる　天和元年二月敕して僧正に任せらる、同三年夏護國寺由山亮賢幕命に依り、洛西に入る、師共に隨行し、仁和寺に往て大僧正孝源に見え、傳流の許可及び重書秘密を受く、貞享元年二月に至り、食を斷ち、三月六日寂す、壽六十三、遺命により奧院堂前に葬る、（豐山傳通記）

ソンミヨー　尊明　ニチキ日輝を見よ、

ソンユー　尊祐　二三〇五―二三七七　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十六代なり、尊祐字は敎算、俗姓は篠原氏、下野都賀郡鍋山邑の人なり、正保二年に生る、七歲西方禪寺に入りて書を習ひ、十二歲龍榮寺尊精を禮して落髮し、十四歲四度の瑜珈行を修し、十八歲小山の持寶寺にて兩部の灌項を受け、東西に遊方して諸講肆に列なり、寬文九年の秋京都に往き、運敞僧正に謁して密敎を習ひ、同十二年春法隆寺に到り、倶舍唯識を學ふ、延寶二年園城寺にて法華經を聽き、同四年の春歸鄕して寶蓮寺に住す、同五年の秋仙波の金藏寺に遷り、四年の後寶蓮寺に歸へる、天和元年豐山に到り尊如僧正に見えて其敎を

受け、同二年隆光快意等と共に護國寺に大僧正亮雅に謁し、憲深一流を傳へらる、貞享二年の冬卓玄の命により鳳梧院に住し、屢々講筵を開く、元祿二年春卓玄の命に從ひ喜多坊に移る、同十二年中野の寶仙寺に住し、寶永元年光大僧正の執達により、命ありて江戸大護院に移る、同四年二月豐山に遷住を命せられ、其第十六代となり、幕府の執奏によりて權僧正に任じ、四月進院す同五年二月護國に轉住を命せられ、勅して僧正に昇る、享保二年四月十八日寂す、壽七十三、著作二教論略解五卷、梵字眞言十六玄門義一卷、吽字略解三卷、菩提心論文林一卷、三論玄義科注七卷、起信論專釋鈔蒙引十卷あり、(豐山傳通記、新義眞言宗史)

ソンヨ　尊譽　二二九三……　〔淨土宗〕山城悟眞寺の開山なり、尊譽は武藏熊谷の人法を處譽に嗣き、山城伏見に悟眞寺を開く、寛永十年九月二十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ソンヨ　尊譽　ゲンテキ源的を見よ、

ソンヨ　尊譽　リョーハン了般を見よ、

ソンアン　村菴　リョーゲン靈彦を見よ、

ゾンイ　存彝(……)　〔曹洞宗〕越後雲門寺第二代なり、存彝字は鼎山久しく湖海仲珊に侍して印可を受け、出てゝ越後雲門寺に住し、第二代となる、後、少林山禪長院を開きて居れり寂年缺く法嗣枚中正授あり、(日本洞上聯燈錄)

ゾンイ　存易　二一九九 二二一四　〔淨土宗〕安藝嚴島光明院の僧なり、存易字は以八、別號は專求西といひ、行蓮社信譽と稱す、俗姓は賀氏、岩代の人なり、母は幡氏の女、天文八年師を生む、師幼より出家の志あり、十一歳郡の能滿寺存洞に師事し、大澤圓通寺に投じ、淨土教を講究す、幾もなく出遊し、諸國に行脚す、時に二十八歳なり、北越西備法化を敷き、專ら淨土往生を觀說す、後、某禪院に投して薪水の勞に服するも念佛の聲を斷たす、伊勢山田源福寺石見都川枝溪寺京都一心寺吉野西行菴皆錫を駐めたる地なり、安藝嚴島の小河及西光明院を創立し、請して開山とす、師同院に住して淨土往生を勸說し、屢々靈異あり、是より先天正六年五月宇喜田直家美作誕生寺を破却し、經像灰燼となる、師祖跡の廢亡を悲嘆し、弟子雲譽をして再興の朝命を請はしむ、幾もなく寺塔舊觀に復す、慶長十九年夏微恙あり、九月十四日正午頭北面西にして眠るかごとく寂す、壽七十六、臘六十五、(以八上人行狀記、續日本高僧傳、緇門往生傳)

ゾンエー　存榮　二二九五……　〔淨土宗〕山城心光寺の開山なり、存榮は號を故道と云ひ、三河の人なり、觀智國師の室に入りて剃髮し多年隨侍遂に其法を嗣ぎ、山城伏見毛利橋心光寺を創す、寛永十二年四月十一日寂す、(淨土總系譜)

ゾンエー　存榮　二三〇八……　〔淨土宗〕江戸淨土寺の僧なり、存榮は光蓮社燈譽願故と稱す、普光觀智國師に師事して法を嗣ぎ、江戸赤坂淨土寺に住し、後三河大樹寺に移る、慶安元年十月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ゾンエー　存榮　二一七四 二二三七　〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、存榮字は繁興、俗姓は永氏對馬の人、十三歳國分の昌春寺に到りて受度し、尋いて異宰慶珠に依りて其法を得、永祿四年席を嗣きて長門大寧寺に住し、天正五年正月十五日寂す、壽六十四、臘五十、法嗣習翁珠門あり、

ゾンエン 存圓（二〇四三）〔臨濟宗〕相模建長寺の僧なり、存圓字は天鑑、俗姓生國詳かならず、出家して圓覺寺無礙謙禪師に隨侍して其法を嗣ぎ、伊豆の國淸寺に法を開き、宗風大に振ふ、永德三年八月命を受けて相模の淨智寺に主となり、後圓覺建長二寺に歷遷す、寂年、及び壽缺く、勅諡佛果禪師の號を賜ふ、（本朝高僧傳）

ゾンオー 存雄（二二四五……）〔曹洞宗〕駿河多寶寺の禪僧なり、存雄字は獨峰、駿河國藤原氏の子なり、母は某氏、富士淺間の廟に祈りて奇夢を感じて師を生む、幼にして出家す、徧く諸方に歷遊し時に祥山多寶寺にありて道風最も高し、師往て謁す、機鋒相契ふ、初め布川の頼繼寺に住す、永祿十一年相模國報恩寺に住す、粹年にして多寶寺に歸る、偶々法に坐して斬に當るものあり、免を祈れとも赦さず、師其人を度して僧となし、携へて下野國に至り、次に長野に往く、邑主師の道風を慕ひ、遂に長谷寺を建てゝ居らしむ、多寶寺檀越多賀谷重經使を遣はして再び多寶寺に還らんことを願ふ、師許さず、是に於て城外に就き別に覺心院を建立し師を請て開山祖となす、師罷むことを得ずして請に應ず、天正上皇詔して道を問ひ、戒を說かしむ、是れに由て諸大臣等歸依信仰する者甚だ多し、十年夏勅して大光佛國禪師と賜ふ、天正十三年正月七日寂す、世壽は缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゾンオー 存雄（二二七五……）〔淨土宗〕越前大法寺の開山なり、存雄字は盛譽其鄕貫詳かならず、源立に就いて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、慶長八年越前南條郡府中に大法寺を捌して開山となり、後州の今立郡正高寺に隱接し、元和元年九月十二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンオー 存應　ジショー慈昌を見よ、

ゾンカイ 存海（……）〔天台宗〕山城比叡山の學僧なり、存海は比叡山東谷の神護寺に住し、禪 を樂とす、西谷の行光房に入りて久しく阿字觀を修す慧日山に往きて佛心宗を探る、常に楞嚴經宗鏡錄を閱し、口稱念佛を制立す、某年寂す、著作、觀心類聚九卷、正因果鈔二卷、三重鈔三卷、自心決夜字大意、直顯集各一卷、眞要十一條あり、（本朝高僧傳）

ゾンカイ 存海（二二三七二二七八）〔眞宗〕山城佛光寺第十七代なり、存海は堯尊無品親王を戒師となし、權僧正に任す、元和四年八月四日寂す、壽四十二、即性院と號す、（本願寺通紀）

ゾンカク 存覺　コーゲン光玄を見よ、

ゾンキョー 存慶（二三四二……）〔淨土宗〕三河昌福寺の開山なり、存慶は念蓮社專譽と號す、尾張の人其俗姓詳かならず、廓譽の室に入りて宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、三河碧海郡重原庄野田村に昌福寺を捌し、天和二年七月二十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンケー 存冏（二二五九……）〔淨土宗〕三河信光明寺の開山なり、存冏は音蓮社釋譽と號す、俗姓は千葉氏、總州の人なり、西譽上人の室に入りて出家受業し、後、嘆譽上人に就て法を嗣ぐ、寶德三年源信光の請に依り、三河額田郡岩津の信光明寺の開山となり、在住四十九年法化益盛んなり、明應八年三月四日寂す、法嗣超譽存牛あり、（淨土總系譜）

ゾンゴ 存牛（二二〇九……）〔淨土宗〕京都知恩院第二十五代な

り、存牛は實蓮社超譽と號す、俗姓は源氏松平左京亮親忠の子なり、釋譽存冏上人に師事して法を嗣ぎ、初め三河信光明寺に住し、後、京都知恩院に主となる、天文十八年十二月二十日寂す、世壽缺く、法嗣信譽あり、（淨土總系譜）

ゾンコー　存畊　ソモク祖默を見よ、

ゾンサ　存佐（二一〇九―二一七七）〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、存佐字は天甫、奥州の人、俗姓は大野氏なり、十五歳にして正法寺に投じて祝髮し、受具の後南遊して遠江松巖寺に至り東木に見え、留まること五年、辭して薩摩に往き、福昌寺愚丘に謁し、次に長門に到り、大寧寺足翁永滿に參し、其法を嗣ぎ、席を承けて大寧寺に主となる、永正十四年寂す、壽六十九、臘五十五、法嗣了然永超、奇伯瑞麟の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ゾンサツ　存察（二三〇九）〔淨土宗〕三河悟眞寺の僧なり、存察は其俗姓生國詳かならず、河越蓮馨寺存龍の室に入りて出家受業し、宗乘の奥旨を究めて、後、同寺の學頭となり、增上寺に入り、三河吉田悟眞寺に住す、寂年缺く、（淨土總系譜）

ゾンシン　存心　リョークワイ亮快を見よ、

ゾンシュ　存守（二二三九……）〔曹洞宗〕伊豫安樂寺の禪僧なり、存守字は大龍、久しく茂林秀繁に參して印可を蒙り、總持寺に出世す、既にして茂林の席をつぎて伊豫安樂寺に移つる、天正六年聞雲寺を主とり、又乘慶寺を剏して第一世となる、同七年十二月五日寂す、壽缺く法嗣大室永廓あり、（日本洞上聯燈錄）

ゾンシュ　存首　ニチテー日貞を見よ、

ゾンシュ　存樹（二三四〇）〔淨土宗〕三河大樹寺の僧なり、存樹は源蓮社逵譽信と號す、了的に師事して法を稟け、河越蓮馨寺に主となり、後、三河大樹寺に遷る、延寶八年十月二十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンセン　存仙　シュンショー俊盛を見よ、

ゾンセン　存詮　キョーエ曉惠を見よ、

ゾンソク　存則（二二四六……）〔淨土宗〕近江西願寺の開山なり、存則は源蓮社應譽と號し、三河の人なり、法を感譽に嗣ぎ近江舟木西願寺の開山となる、天正十四年八月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンタイ　存岱（二二五七）〔曹洞宗〕常陸龍谷院の開山なり、存岱字は秀峰、普門寺拱菴宗範に謁し、入室して其法を嗣ぎ、後遊方して常陸に至り、龍谷院を創す、明應六年最乘寺に出世し、某年寂す塔を其寺に立つ、法嗣天海舜政あり、（日本洞上聯燈錄）

ゾンチョー　存長（二二四八……）〔曹洞宗〕伊豆最勝寺の禪僧なり、存長字は大洞と云ふ、鳳菴英麟に師事し、其法を得て首坐となり、明應五年鳳菴寂し其席を補し、伊豆最勝寺に住す、晩年辭して武藏に到る、士民其道化を慕ひ寺を建つ、骨品の長泉寺、市河の永福寺、葛蒲の長龍寺等皆師を開山とす、永正十六年十月十七日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ゾンテー　存貞（二一八二―二二三四）〔淨土宗〕江戸增上寺の第十代なり、存貞號は鎭蓮社感譽といひ別に願故と云ふ、俗姓平氏にして相模國小田原の人、北條家の藩老平政繁の男なり、大永二

年三月に生る武藏傳肇寺に入りて學業日に精し、天啓上人に師事し、後飯沼に弘經寺祖洞上人に從うて法を受く、梵行甚嚴なり、傳肇寺に住す、政繁時に武藏國川越城主たり、先妣追福のために一巨刹を創設し、師を請うて開山と爲す、孤峰山蓮馨寺是なり、天文十八年廿八歲にして始めて弟子を集めて、法を說く、近鄉に勸諭し、請に依て寺院を建つること數十餘、平方の馬蹄寺、小林寺、清戸の長命寺、高澤の大蓮寺、見立寺、信濃國更科郡網嶋安養寺等なりとす、槇井北條氏繁の母大超院の爲に相模國鎌倉郡岩瀨鄉に大超寺を建て、後深谷に專念寺を開く、永祿六年四月四十三にして增上寺の第十代となり、學徒の爲めに清規二十三條を制し、宗風を起す、永祿九年職を辭し、天正二年病を得、五月十八日別を門徒に告け、學則勵策して寂す、壽五十二、（三緣山志、鎮流祖傳、淨土總系譜）

ゾンテキ　存的　二三六一　二三二〇　〔淨土宗〕安藝禿翁寺の開山なり、存的は靜蓮社寂譽と號す、紀伊和歌山の人、其俗姓詳かならず、信譽の室に入りて剃髮受業し、安藝廣島に禿翁寺を剏す、萬治三年六十歲にして寂す、（淨土總系譜）

ゾンテツ　存哲　二三三一……〔淨土宗〕筑前隨專寺の開山なり、存哲は三蓮社總譽と號す、筑前遠賀郡の人、其俗姓詳かならず、法を隨波に嗣ぎ、州の直方隨專寺開山となる、寛文元年七月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンテツ　存徹　二二七七……〔淨土宗〕攝津金臺寺の開山なり、存徹は寶蓮社泉譽と號し、京都の人なり、浩譽上人に投じて薙髮受業し、攝津大坂に金臺寺を開く、元和三年六月九日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ゾントー　存當　……リョーケン良賢を見よ、

ゾンドー　存道　二二九八……〔淨土宗〕筑前淨蓮寺の開山なり、存道は單蓮社信譽と號す、俗姓は麻生氏、筑前黑崎の人なり、幼にして州の弘善寺雄譽の室に入りて剃髮し、觀智國師に事へて法を嗣ぐ、後鄉里に歸り、明願寺を開き、仲間村に淨蓮寺を剏して開山となる、寛永十五年正月八日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンドー　存道　ニチエー日英を見よ、

ゾンドー　存道　ニチユー日勇を見よ、

ゾンニョ　存如　エンケン圓兼を見よ、

ゾンパ　存把（……）〔淨土宗〕下總弘經寺の開山なり、存把は相模の人、九歲にして貞把に投して出家す、後下總國結城に住し、弘經寺を創す、龜山に葬る、某年某月二十一日寂す、壽詳ならず、道化甚だ盛なり、（鎮流祖傳）

ゾンポ　存保（　　）〔淨土宗〕武藏淨音寺の開山なり、存保は音蓮社淨譽と號し、武藏足立郡の人、俗姓は宇田氏なり、法を普光觀智國師に嗣ぎ、郡の大和楔淨音寺開山となる、寂年、及世壽詳かならず、（淨土總系譜）

ゾンム　存牟　……リョードー了道を見よ、

ゾンモ　存茂　二三七九……〔淨土宗〕江戸正信寺の開山なり、存茂は學蓮社當譽順故と號す、筑後柳川の人、其俗姓詳かならず、幼年にして州の稱念寺に入りて剃髮し、觀智國師に師事して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、江戸麻布に正信寺を剏して開山となり、元和五年七月十六日寂す、壽缺く、（淨土總系

譜）

ゾンヤ　存也　二二六五（……）〔淨土宗〕總州東國寺の開山なり、存也は心蓮社光譽と號す、其鄕貫詳かならず、上野新田大光院開山存龍上人に師事して遂に其法を嗣ぎ、總州藤塚東國寺の開山となる、慶長十年正月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ゾンヨ　存譽　イチサン一山を見よ、

ゾンヨ　存譽　タクサン澤山を見よ、

ゾンヨ　存譽　リヤク理從を見よ、

ゾンリン　存鱗　二二四六（……）〔曹洞宗〕武藏皎月院の開山なり、存鱗字は玉山、信濃の人、俗姓は源氏なり、七歲にして出家し、心源寺傑山に參し、次に自由臨龍に參ずること二十餘年、遂に其法を得、永平寺に出世し、心源寺に遷る、後武藏に皎月院を開き、天正十四年四月二十六日寂す、壽缺く、法嗣陶翁齊悅あり、（日本洞上聯燈錄）

ゾンリユー　存龍　二三〇九（……）〔淨土宗〕相模孤峰山の僧なり、存龍號は本蓮社讃譽と云ふ、相模の人なり、論辯の令名一時に播る、常に般舟定を修し、相模孤峯山に住す、慶安二年五月七日寂す、孤峯山に葬る、其の壽命は詳ならず、（鎭流祖傳）

タの部

タアミダブツ　他阿彌陀佛　シンキヨー眞敎を見よ、

タジヨー　多常（一三四七）（……）百濟の歸化僧なり、多常は持統天皇の朝聖化を慕ひて來り、大和高市の法器山寺に住し、大乘經の神呪を誦じて專ら度生を事とす、死者驗を受けて蘇生せり、されば門前病者常に群をなす、奇異の行甚だ多し、示寂の年時缺く、（靈異記、本朝高僧傳）

タイ　泰（一四九五）〔眞言宗〕某寺の僧なり、泰其俗姓生國詳かならず、弘法大師の弟子にして密灌を受く、故に泰金剛と稱す、寂年、並に壽缺く、（弘法大師弟子譜）

タイアン　泰菴　モンケン文賢を見よ、

タイアン　泰菴　リヨーウン了運を見よ、

タイアン　泰安　エーコー永康を見よ、

タイウン　泰運　ニチミヨー日妙を見よ。

タイウン　泰雲　シユソー守踪を見よ、

タイエン　泰演（一三九六）〔法相宗〕奈良西大寺の僧なり、泰演俗姓不詳、西大寺に住して法相宗を弘む、神龜二年に律師となり、天平八年正月四日寂す、（七大寺年表）

タイオー　泰應　二三一八（……）〔淨土宗〕江戸通照寺の開山なり、泰應は誠蓮社證譽と號し、相模小田原の人、俗姓は平野氏なり、江戸淺草天岳院に入りて剃髮し、普光觀智國師に師事して法を嗣ぐ、麻布に通照院を創建して、萬治元年十月十四日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

タイオー　泰翁　トクヨー德陽を見よ、

タイオン　泰音　ジツクワン實貫を見よ、

タイガン　泰岩（一五〇四）〔眞宗〕安藝安藝郡專念寺の住持なり、泰岩は安藝國安藝郡大屋村安定寺に生れて中野村專念寺に住持せり、初め筑前の寶雲師に隨ひて性相を研磨し、

後石泉に就きて專ら宗乘を講す、（學苑叢書）

〔考〕泰嵒は弘化頃の人なり、

タイゲン　泰玄　二四七三 二五二九　〔眞宗〕伊勢十宮本淨寺の住持なり、泰玄は顯正院と號す、講師に任し、權少敎正に補す、明治十二年一月一日寂す、壽六十七、

タイゴン　泰嚴　ケンニュー憲永を見よ、

タイサン　泰山　ニチショー日昇を見よ、

タイシツ　泰室　シューエ宗慧を見よ、

タイジン　泰尋　トンア頓阿を見よ、

タイジユイン　泰壽院　ニチリョー日量を見よ、

タイシユー　泰宗　二二三〇九　〔淨土宗〕甲斐定得寺の開山なり、泰宗は松蓮社岩譽と號す、俗姓は古屋氏甲斐の人、法を阿譽上人に嗣ぎ、州の八代郡二宮に定得寺を開く、慶安二年六月十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

タイシユー　泰秀　シューカン宗韓を見よ、

タイシユン　泰舜　一九三七 一六八九　〔眞言宗〕山城法琳寺の僧なり、泰舜俗姓は藤原氏、山城の人なり、初め蓮舟阿闍梨に從ひて灌頂を受け、小栗栖の命藤供奉に從ひて大元帥の法を受く、命藤は常曉の法孫なり、承平元年師藤師の命により法琳寺に住し、勅して大元阿闍梨に任す、天慶三年平將門を降服せしめんとし、勅により其法を修し、功により律師に任す、四年東寺の長者と爲り、七年法務を兼ね司とる、天曆三年十二月二日寂す、壽七十三、（本朝高僧傳）

タイシヨ　泰初　ジォン慈本を見よ、

タイゼン　泰善（一六三七）〔法相宗〕大和國源寺の開山なり、泰善は初め武峰に住して寺の撿校に補し、天延二年三月十一日大和高市郡畝傍山の側に菴居し、每年三月十一日法華經を講す、貞元二年大和守藤原國光之を聞きて方丈、及び堂閣を建て觀世音の像を置く名けて國源寺と云ふ、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

タイゼン　泰禪　二四一二 二四七六　〔曹洞宗〕志摩常安寺の禪僧なり、泰禪は雲樞と號し、別に夢遊、矮道人、隨處樓、爾時菴等の號あり、俗姓は長野氏越後國新潟の人なり、甫めて九歲宗現の嶺隨に依て薙染し、鐵文の法を得て志摩國常安寺に住す、文化十三年二月十七日寂す、壽六十五、臘五十七、

タイソー　泰叢　シュユ宗愈を見よ、

タイソー　泰叟　ミョーコー妙康を見よ、

タイチヨー　泰澄　一三四二 一四二七　〔……〕加賀白山の僧なり、泰澄は俗姓三神氏、越前國麻布の人なり、（一に加賀の人なりといふ）父の名を安角（アヅミ）といふ、（一に安澄に作る）白鳳十一年六月十一日に生れ、幼にして三寶を崇敬し、十四歲の時越知山に登り、岩窟の中に棲住し、十一面觀世音の號を唱ふ、時人呼びて越（コシ）の大德と云ふ、其靈德朝聞に達し、大寶二年勅して鎭護國家大法師の號を賜ひたりと傳ふ、養老元年に弟子淨定行者等を率ひて白山に登り、妙理菩薩を感見す、後、山を下りて京に出で、行基等と相知る、元正天皇勅して神融禪師の號を賜ひたりと傳ふ、天平寶字二年越知山に歸へりて岩窟に棲住し、讀經持呪を事とし、餘暇に小塔婆を彫作して衆人に施與せり、神護景雲元年三月十八日岩窟の中に寂す、壽八十六、（本朝神仙傳、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕元亨釋書に泰澄の事蹟を揭ぐること詳細なれども、まゝ信憑しがたし、今唯其要を摘むのみ、

タイドー　泰堂　ニチセー日政を見よ、

タイハク　泰伯　コー康を見よ、

タイハン　泰範　一四三八……〔眞言宗〕山城高雄山の僧なり、泰範は其俗姓生國を傳ふるなし、敎乘に通し、元興寺に掛搭し、一時近江高島に遊息す、初め最澄に從ひて天台を學び、稍聲譽あり、弘仁元年正月十九日師比叡山にありて最澄と相謀り、寺規を定む、三年十二月十四日高雄山に到り、空海に胎藏界の灌頂を受け、最澄亦席にあり、同月廿三日最澄師を介して空海に寄する書に南院範闍梨と云へは師此時南院に住せしなるへし、四年正月十八日師圓澄賢榮等と相謀りて比叡山より高雄山に往き、重ねて眞言の道を空海より受く、七年五月九日但馬より歸路乙訓寺に寓す、同年大師高野山を擬せんと欲し、師及ひ實慧をして先つ地を相せしめ一兩の草菴を建てしむ、承和四年四月東寺の定額を五十僧を二十四人に減する際、師其補任入寺の僧籍中にありて上首に載す、時に師年六十、法臘三十六なり、後終る處を知らす、（弘法弟子譜）

タイヨ　泰譽　コシン故信を見よ、

タイリン　泰林　コーシン光心を見よ、

タイリユー　泰龍　モンイ文彙を見よ、

タイア　諦阿　リヨーシヨ良處を見よ、

タイエン　諦圓　シンジヨ信恕を見よ、

タイキヨー　諦鏡（……）〔眞言宗〕大和毛野寺の僧なり、諦鏡は大和の毛野寺に居りて修法す、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

タイシユー　諦洲　シシン至信を見よ、

タイジユー　諦住　二四五九……〔眞宗〕近江響忍寺の學僧なり、諦住字は義圭と云ふ、近江膳所響忍寺に生る、高倉學寮に入りて宗乘を研究し、後、唱導に力を盡し、粟津義圭の名大に著はる、寛政の頃東西本願寺共に宗學盛興し、異解競行す、師同三年二月徹照西方義を作りて西本願寺下の功存かが主張にかゝる願生義を駁擊し、行の一念は正因にして、第二念以後は報謝なりと云ふ義を唱へ、一時の議論となる、然れども師が主とするところは學解にあらず唱導なり、眞宗東本願寺下の唱導談義は師より興り、益盛行することゝなる、寛政十一年五月十日寂す、壽缺く、著作阿彌陀經依正譚六卷、一枚起請文說藪三卷、和讃即席法談九卷、高僧和讃闡導三卷、二河白道護信錄三卷、同後編三卷、現世利益辨三卷、改悔文便導二卷、新選即席譚三卷、御傳鈔演義十三卷、善光寺如來東漸錄五卷、帳五十座法談二卷、卷懷五十座法談二卷、袖珍勸考一卷、袖珍勸錄一卷、袖珍勸序考一卷、淨土現世利益讃二卷、一枚起請文信鈔二卷、眞宗鬪論二卷、徹照西方義二卷、（響忍寺返信、大學寮講者鏡、即席法談奧附）

タイジユン　諦純　エーシヨー榮性を見よ、

タイジヨー　諦乘　ジヤクゴン寂嚴を見よ、

タイドー　諦道　チドー智幢を見よ、

タイニン　諦忍　二四〇一　二四七二〔眞宗〕豐前福島長久寺の住持なり、諦忍別名は薩州字は道隱といふ、薩摩の人なり初め河内西念寺に住し、後豐前福島の長久寺に轉住す、師は元遊行

派に歸し、專ら性相を習學せしが僧僕の與學を欽敬して其門弟となりたり、僧僕寂後僧鎔に學ぶ、後學林に於て講義せしが享和の初め學徒に追はれて出て市中に隱る、惑亂の時師大に功を奏すといふ、文化十年六月四日寂す、壽七十三、謚して淨心院といふ、著作十二禮隨筆、蘇洛傍觀、末法燈明記箋述刪補鈔、簡[illegible]五[illegible]各一卷、寶章明燈鈔論關二卷、正信偈甄解三卷、淨土論註記四卷、文類聚鈔與燭錯　愚禿鈔知津錄、各五卷、文類聚鈔六卷、本典略讃八卷、選擇集要津錄十二卷、寶章明燈鈔十七卷、大經甄解十八卷、小經增明記若干卷あり、（清流紀談、本願寺派學事史）

タイニン　諦忍　ミョーリュー妙龍を見よ、

タイヨ　諦譽　エゴン會言を見よ、

タイヨ　諦譽　ソーサン相山を見よ、

タイヨ　諦譽　トーイン東胤を見よ、

タイアン　太安　ボンシュ梵守を見よ、

タイグ　太愚　リョークワン良寛を見よ、

タイケン　太賢　クワイシキ快識を見よ、

タイコ　太虚　ゲンジュ元壽を見よ、

タイコ　太古　セゲン世源を見よ、

タイサン　太山　ニョゲン如元を見よ、

タイショー　太清　シューイ宗渭を見よ、

タイチ　太痴　二四八一／二五四二　〔曹洞宗〕甲斐都留郡泉福寺の僧なり、太痴號は香芸、俗姓大森氏、都留郡境村泉福寺に住し、後、東山梨郡永昌院に轉す、俳句を以て聞ゆ、「春寒し思ひ筑紫の博多船」」人口に膾炙す、明治十五年寂す、壽六十二、（俳諧名譽談）

〔考〕寺記に依れば太痴は太痴の誤なり、

タイハク　太白　シンゲン眞玄を見よ、

タイヘー　太平　ミョージュン妙準を見よ、

タイヤク　太益（二三一七）〔淨土宗〕近江稚平寺の開山なり、太益は生蓮社實譽光珪と號す、武藏江戸の人、大巖に投じて剃髮受業し、珂山に師事して法を嗣ぐ、近江膳所別保村に稚平寺を刱めて開山となる、（淨土總系譜）

タイヨー　太陽　イチレー一鴒を見よ、

タイヨー　太陽　ギチュー義沖を見よ、

タイヨー　太容　ボンショー梵清を見よ、

タイリョー　太了　エーテン榮天を見よ、

タイアン　體菴　ミョーゼン明全を見よ、

タイオー　體應　二四七八／二五四六　〔新義眞言宗〕越後曼荼羅寺の僧なり、體應字は靈幢、俗姓は加藤氏越後雜太郡後尾村の人、父の名は謹吾と云ひ、母は朝山氏の出なり、文政元年七月二十七日を以て生れ、甫めて七歳州の高下金剛密寺憲應阿闍梨に就て剃髮し、天保六年京都智積院に登り、信海隆榮二師に俱舍唯識を學ぶ、十二年二十四歳の時憲應寂を示したるを以てこれより信海の室に入りて徧く法燈を嗣ぎ、十四年二月文英和上に從つて密灌を承け、又小野廣澤二流を習究す、弘化三年信海大和上に重ねて秘密灌頂を稟け、嘉永元年不退位に昇り、初めて法燈を樹つ、安政元年集議席を董し、五年傳法大會を設け、精義の任に當る、萬延元年學徒の請に應し、翌年傳法灌頂を修し、六十三人

にこれを授く、同年四月奈良戒壇院志訓に從ひて具足戒を受け、三年第一座に昇る、元治元年高邁の大寺慶昭の請により同國性海寺に主となる、時に四十七歳なり、明治三年濤に各宗教院を興し、師其敎頭に任し、又本願寺別院に五敎章及唯識論を講す、五年權少敎正に任し、布敎使となりて諸縣に出張し專ら化導に勤む、七年本宗の管長職に補し、仝九月これを辭す、翌年越後曼荼羅寺に住し、十年少敎正に任ぜらる、十六年定額位に補し、幾何ならずして疾に罹り、十九年二月二十五日寂す、壽六十九、臘六十三、門弟瑠璃山の西巓に葬る、二十一年中僧正を追贈せらる、（新義眞言宗史料）

タイシン　體眞　ゲンニョニ元如尼を見よ、

タイドー　躰堂　スイイン遂印を見よ、

タイニチ　躰日　インシュン印俊を見よ、

タイソ　躰素　ギョージョ堯恕を見よ、

タイシツ　提室　チセン智闡を見よ、

タイシュー　提州（二四二八）〔臨濟宗〕豐前自性寺の僧なり、提洲伯耆の人なり、內外の學に通ず、未だ易に通ぜざればこれを大儒に問はむとて江戶に下る、路次白隱鶴の門前を過ぎ、入りて謁す、鶴曰ふ、苟も禪に通ぜずば易を解する能はず、汝且く留りて我禪を味ふべし、と、提洲乃ち掛搭して敎示を受くること十餘年に至り、荊叢毒蘂を編す、後豐前自性寺に住して法席を張り、大衆を接得す、其下に愚溪　行應、海門、芝山、松山等を出せり、寂年缺く、（近世禪林僧寶傳）

タイキ　台機（……）〔曹洞宗〕甲斐法泉寺の僧なり、台機は其鄉貫詳かならず、甲斐法泉寺の住持にして畫を能くし、殊に佛像に於て秀作あり、（續本朝畫史）

タイロク　台麓　リョーア了阿を見よ、

タイコー　退畊　キョーユー行勇を見よ、

タイドー　退道　ゼンエツ善悅を見よ、

タイロ　退魯　テーアン貞安を見よ、

タイウンケン　堆雲軒　ショーチ性智を見よ、

タイジュン　苔順（……）〔淨土宗〕安房護國寺の開山なり、苔順は信蓮社三譽又は向西と號す、安藝廣島の人、正譽上人に師事して其法を嗣ぎ、安房に往き米津に護國寺を開く、寂年、及世壽詳かならず、（淨土總系譜）

タイチュー　袋中　リョージョー良定を見よ、

タイツー　胎通（二三三―三三五二）〔眞言宗〕山城智積院第二十四代なり、胎通字は意純、磐城の人と云ふも詳かならず、天明七年四月七日、智積院第二十四代能化となる、寛文六年館林忠善伊與泰山等五人首謀となり、能化以下二十餘人の非行を發き、官に訴へしかば、師は其禍に羅りしが、仝八年に及び、忠善等の罪も發覺せられて獄に下され一山の紛糾益甚し、世に之を忠善騷動と云ふ、師此間にありて自若として屈せず、其見を主張し、能化職に居ること、十二年紛糾未だ治らざるに、寛政十年二月二十四日寂す、壽七十九、（新義眞言宗史）

ダイア　大阿　ドンリュー呑龍を見よ、

ダイアン　大安（……二四六三）〔眞宗〕伊勢香取法泉寺の住持なり、大安は伊勢の人高倉學寮に學び、寛政七年八月七日擬講となり、享和元年學寮に淨土論を講す、同三年五月寂す、

世壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

ダイアン 大菴　スヤク須益を見よ、

ダイウ 大有　コーホ康甫を見よ、

ダイウ 大有　リウ理有を見よ、

ダイウ 大有　リヨーエー良榮を見よ、

ダイウン 大運 二四一七 二四六〇〔眞宗〕安藝品秀寺第九代なり、大運は安藝山縣郡寺原村永末某の子なり、幼にして佛門に歸し、業を深諦院に受け、內外に通涉し、最も宗乘に精し、後畑賀村品秀寺第九代の住持となり、寬政十二年正月六日寂す、壽四十四、著作阿彌陀經錄、述懷和讚、日溪學則、自省錄各一卷、易行品管蠡記、孝經錄、各二卷、二門偈錄、高僧和讚錄、正像末知讃錄、各四卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ダイウン 大雲　エーズイ永瑞を見よ、

ダイウン 大雲　ゲンコー玄廣を見よ、

ダイウン 大雲　シンリユー神龍を見よ、

ダイウン 大雲　モンリユー文龍を見よ、

ダイウン 大雲　リヨージユン亮潤を見よ、

ダイエ 大慧 一八八九 一九七二〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、大慧字は癡兀、伊勢の人、平清盛の後なり、初め平等と號す、比叡山に登り、天台を學び、兼ねて諸宗に通す、就中眞言に發明する處多し、當時東密台密の學者傳へて平等義と云ふ、聖一國師の禪化を聞きて憤然論議せんと欲し、東福寺に往きて謁見問答す、國師曰ふ、經に云はずや緣心を以て法を聽けば此法も亦緣なり、法性を得るにあらずと、汝何ぞ義解に涉るや、と、大慧伎倆頓に盡き、法衣を改めて弟子となる、參究功あり、法嗣となる、伊勢に長松山安養寺瑞雲山大福寺の二寺を開きて禪を唱ふ、晚年安養寺の側に塔院を構へ、寶篋と云ふ、應長元年の秋東福寺に主となる、正和元年十一月廿二日寂、壽八十四、遺偈あり、高超二方便一、自證自然、爲レ物應レ世、八十四年、塔を大慈と云ふ、著作法華要鈔、枯木集、十牛訣あり、滅後三十三年、勅諡佛通禪師を賜ふ、（續群二二八、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ダイエ 大惠 二四六三〔眞言宗〕江戶三念寺の學僧なり、大惠は律學を以て聞ゆ、享和三年二月卅日寂す、（江戶名家墓所一覽）

ダイエー 大瀛 二四二〇 二四六四〔眞宗〕安藝可部勝圓寺の住持なり、大瀛一名は廓亮、字は子容といひ、芿園と號す、安藝山縣郡壬村の人、寶曆九年正月二日に生る、父は森養哲、母は河本氏の女なり、十一歲にして正傳を禮して剃髮得度し、後、報專寺師に事ふ經論を學ふの餘暇武藝伎樂を嗜み、更に遊方して、深諦院の衣鉢を傳へ、東嶽門下の顏回と稱せらる、已にして觀經、論註、讃阿彌陀偈、文類聚鈔等の講席を張るや、四方雲集して聽者欣喜す、初め甲山正滿寺に任し、三年の後可部勝圓寺に移つる、而して俗事道業を碍くるを厭ひ、廣陵城西に隱れ、自ら芿園と號す、人追隨して已ます、道を問ふもの常に門下に充つ、寶曆中南越の功存願生歸命辨を作り、宗學の異說を斥く、而して功存も亦中道を知らす、其辨亦更に異說を生す、京都の智洞其說を承けて異說を張る、茲に於て天下大に惑亂す、師宗門の疲頽を坐視するに忍ひす、橫

超直道金剛錍を作る智洞答ふること能はす、是に於て其徒と謀りて曰く、法主を脅かし、命を乞ひて之を禦かん、と、乃ち兵器を執り法主の室に入る兇暴制すへからす、之を官に附す、官師及ひ河内西念寺道隱等を東都に召し、懇に本末を問ふ、智洞遂に罪に伏して禁錮せらる、宗門の大事玆に至りて定まる、師嘗て骨疽を患ふ、毒全く除かす、江戸の水土身に適せす、舊痾重發し、藥石効なく、臥蓐二十日遂に寂す、壽四十五、實に文化元年五月四日なり、官僧家の禮を以て葬らしむ、侍者普嚴遺骨を載せて歸へる、諡して眞實院といふ、著作、本典義例略贊、本典科說、三帖和讃玄談、金剛錍釋難筆澤、行一念義、信樂一念義、一心歸命辨、東行詩艸、各一卷、觀經述義二卷、横超直道金剛錍三卷、讃阿彌陀偈繼聲記、文類聚鈔崇信記、愚禿鈔仰高記、各五卷、往生論註原要六卷、眞宗十論若干卷あり、（碑文、清流紀談、本願寺派學事史）

ダイエー　大英　ポンサク梵策を見よ、

ダイエン　大緣　二〇九九……〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、大緣字は竹菴と云ひ、出家して登山庸の堂に參して其法を嗣ぎ、初め東福建仁寺に歷住し、後、天龍寺に移る、永享十一年四月二十三日寂す、聖壽菴に塔す、（延寶傳燈錄）

ダイエン　大圓　二四六九―二五四〇〔眞宗〕近江日野晴明寺の住持なり、大圓號は白堂と云ひ、一に如是院と云ふ、俗姓安部氏なり、河内國丹北郡黑土村の人、文化六年に生る、幼にして孤となり、皆遵院宜成に養はる、甫めて十歲度を受け、同國金田村照光寺の衆徒となり、稍長して根來伯瀨並に比叡山に歷遊して、性相の學を修め、後、京都高倉學寮に入りて宗乘を學ふ、天保二年擬寮司となり、六年寮司となり、嘉永七年學寮に唯識三十頌を講し、安政五年唯識了義燈を講す、同年近江日野晴明寺の住持となり、翌年成唯識論を講す、慶應三年三月擬講となり、明治十三年二月二等學師となり、十三年二月大講義に補せられ、同年十二月十日寂す、壽七十二なり、明治二十一年七月權少講義を贈らる、著作唯識三十頌帷中策一卷、三類境溫知錄三卷等あり、（碑文）

ダイエン　大圓　ゼンオー禪雄を見よ、

ダイエン　大圓　チセキ智碩を見よ、

ガイエン　大圓　リョーイン良胤を見よ、

ダイエン　大焉　コーチン廣椿を見よ、

ダイエン　大淵　モンセツ文刹を見よ、

ダイオー　大應　ゲンテツ玄徹を見よ、

ダイオー　大雄　リョーマ亮麿を見よ、

ダイカシ　大可子　チクー知空を見よ、

ダイガ　大我　二三六九―二四四二〔淨土宗〕山城八幡正法寺第二十二代なり、大我字は孤立白蓮社天譽と稱す、赤穗藩士某の側室師を孕み、正妻の嫉妬に逢ひて家を追はれ、寶永六年江戸城北の閭里に師を生む、幾ならすして母歿し、乳母蓮心の手に養育せらる、蓮心佛に歸し、師も亦逆境に臨みて世の無常を覺り、自ら髮を斷ち眞言宗靈雲寺に投し、慧光和尙に就きて戒を受け、其門下にあること二年、内外の墳典を研鑽し、兼て和歌を善くす、衆僧の嫉妬に逢ひて靈雲寺を出て、廣く天下の名山靈地を跋涉すること數年、遂に吉野山西行菴に留りて道を修す、歌あり「苦清水汲みほすほともなき身にもとく〳〵

落つる我が涙かな」、「露の身の置所とて草の庵の出て入ることに袖は濡けり」師常に奥院に往來して苦修練行し、漸く省あり、乃ち山を下らんとして年來吉野郷人の衣鉢を給する者を會し、初めて自得の法を說き、盛に念佛の門戶を開く、歌あり「咲き散るも世の習そとみよしのゝ花の木陰に南無阿彌陀佛、」是れ享保十六年にして師二十三歳なり、既にして眞言より轉して淨土宗に歸し、江戶に往く、時の名僧の相競うて名利を好むを慨し、金龍山淺草寺觀世音に祈る、啓示によりて明師を得んとを祈る、啓示により鎌倉光明寺に到りて稱譽眞察に從ひ、常に坐右に侍すること十餘年、傍ら交を南北の學匠に結ひ、法華、華嚴、戒律、禪宗、皆參究せさるなく、日蓮宗の宗義に至るまて涉獵して餘さす、即ち背て身延山に登り、某上人に謁し宗趣を講習し、稱題成佛論を草す、其他儒學、國學、武技、諸禮と雖、苟も一能に名ある者は之を訪問す、尋て稱譽知恩院に遷るに從ひ、師も亦共に往く。延享二年稱譽

大我上人

の寂するや、知恩院を下り、紫雲山下の風松軒に隱れ、專ら道業を修し兼ねて大藏經を閱す、同冬正小寺風譽寂し、翌年師其後を承けて同寺二十二代となる、寶曆五六年の頃、師山務の鞅掌に倦み、事を辭して雲水を追はんと欲すれとも、衆押留して聽さす、師乃ち佯りて狂となり、因りて山を下ること を得、岡崎に一菴を營み、夢菴と號して居す、增上寺妙譽定月大僧正遠く召して相親み、詩韻相和す、師の江戶に往くや、姥池愛蓮菴に寓し、武藏野の草端房と稱す、安永二年同菴にありて遊芝談を作り、普寂律師を指彈し、盛に論鼓を鳴らす、是より先性惡論を述へて律師を貶し、扶宗編を作りて關通和尙を斥けたり、終に其寂する處を知らす、一說に天明二年八月十五日寂し、壽七十四なりと云ふ、一說に遺命により魚類と結緣ある爲め綾瀨川に水葬すと云へり、著作一枚起請辟邪訓、眞察大僧正傳、新撰念佛和讃、專修祈禱辯、唯稱辟魔訣、伏虎錄、紫朱論、降魔決、金鑰論、曇花論、大學考、辨惑論、淨業論、獅蟲論、春遊興、性惡論、唯稱安心鏡、遊芝談、圓敎論、愚考問、遊江吟、俳諧論、風詠林、破二痴、釋敎論、眞宗論、僞論解、善光寺緣起、淺草遊文、西路談、（寫本）扶宗論、夢菴戲歌集、三彝訓、辨正論、各一卷、唯稱問津訣、楠石論、玉石論、彌陀經略纂、各二卷、鼎足論四卷あり、（大我上人小傳、淨土宗經論章疏錄）

〔考〕僧大我傳に大我は大石良雄の庶孽子との一說を擧げたるも、大我上人小傳の末に、師は良雄歿後八年にして誕生したりと云ふ一事を以て否認せり、當然なりとす。

ダイカク　大覺　ウンホー雲峯を見よ、

ダイカク　大覺　ミョージツ妙實を見よ、
ダイカクイン　大覺院　ニチキョー日教を見よ、
ダイガク　大岳　シュースー周崇を見よ、
ダイガク　大岳　ミョーシャク妙積を見よ、
ダイガク　大嶽　ソヤク祖益を見よ、
ダイカツ　大歇　モンテー文禎を見よ、
ダイカツ　大歇　ユーケン勇健を見よ、
ダイカツ　大歇　シューヨー宗用を見よ、
ダイカツ　大歇　リョーシン了心を見よ、
ダイガン　大巖　……二三二七　〔淨土宗〕伊勢大巖寺の開山なり、大巖は德蓮社本譽愚閭と號す、上總富津の人、其俗姓詳かならず、法を靈巖に嗣ぎ、伊勢鈴鹿大巖寺を刱して開山となる、寛文七年四月六日寂す、壽缺く、法嗣實譽太益あり、（淨土總系譜）
ダイガン　大巖　シューバイ宗梅を見よ、
ダイガン　大含　二四三三―二五一〇　〔眞宗〕豐前古城正行寺の學僧なり、大含號は雲華といひ、後に雲華院と云ふ、別號鴻雪といひ、染香人と云ふ、東本願寺末なる豐前岡滿德寺住持某の子、安永二年癸巳四月朔を以て生る、稍長して學を嗜み、古城正行寺鳳嶺に養はれ、其寺務を繼く、後京都に上り、佛儒の學を修め、文政二年六月晦日高倉學寮擬講となり、學寮に瑜伽釋を講す、四年八月五日進みて嗣講となり、六年夏學寮に安樂集を講し、九年夏文類聚鈔を十三年夏淨土論を、天保五年夏正信偈を講す、同年八月廿五日講師に昇る、七條枳穀殿の東に住居し、自ら枳東園と號し、講演の餘暇書畫を樂む、六年夏選擇集を講し七年夏同續講す、八年夏淨土論註を講し、九年夏同續講す、十年夏二門偈を、十一年夏阿彌陀經を、十二年夏往生禮贊を、十三年夏安樂集を、弘化元年夏講阿彌陀佛偈を、弘化二年夏正信念佛偈を、四年夏往生論を、嘉永二年夏無量壽經を各講す、此年間京都に留りて世間の文人に交れり、賴山陽、篠崎小竹、貫名海屋、田能村竹田等、常に往來したり、師の書畫共に聞えたるも、殊に墨蘭は獨得の妙趣ありと稱せられ、嘗て仁孝天皇の御覽に上り、優賞を蒙る、師因て塗鴉經御覽野雀躍中林の句あり、講師の職に在ると十七年にして嘉永三年十月八日寂す、壽七十八なり、師自照贊あり、曰ふ、誕生何歲、宗祖同庚、經藏前日、桑弧喜呈、自少志學、隨分研精、偶然承之、一朝擢贊、業蹈先轍、職誘後生、愧將淺識、叨推老成、師主優恤、父子寵榮、風波閱世、詩書寄情、不移時俗、不屑利名、年踰七十、心安身輕、天保癸卯秋應門生制心之索、

雲華院大含講師

雲華大含時年七十一、（高倉學寮講者列傳稿本、豐緇詩史）

ダイキ　大輝　ソサン祖璨を見よ、

ダイキ　大輝　リヨーヨー靈曜を見よ、

ダイキ　大喜　ホーキン法忻を見よ、

ダイギ　大義（……）〔臨濟宗〕豐前萬壽寺の禪僧なり、大義は俗姓源氏、甲斐の人、善玖の法脉を受け、瑞田寺に出世し、豐州の萬壽寺に移り、晩年恩光寺に主となり、此寺にて寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ダイギイン　大義院　ホーイ法位を見よ、

ダイキユー　大休　エボー慧昉を見よ、

ダイキユー　大休　ゲンソー元聰を見よ、

ダイキユー　大休　シユーキユー宗休を見よ、

ダイキユー　大休　シヨーネン正念を見よ、

ダイキヨーイン　大敬院　ホーギン芳誾を見よ、

ダイキヨーボー　大教房　チユークワイ忠快を見よ、

ダイグ　大愚　ジエン慈延を見よ、

ダイグ　大愚　シユーチク宗築を見よ、

ダイグ　大愚　シヨーチ性智を見よ、

ダイグ　大愚　ユーケー酉岡を見よ、

ダイクー　大空　ゲンコ玄虎を見よ、

ダイクーボー　大空房　ダイリヨー大了を見よ、

ダイクワン　大觀　ボンエー梵英を見よ、

ダイクワン　大觀　モンジユ文殊を見よ、

ダイケー　大圭　シヨータク紹琢を見よ、

タイケー　大溪（……）〔黄檗宗〕筑後柳川某寺の禪僧なり、大溪は號を天山と云ふ、筑後柳川の人なり、道暇詩を嗜み傑作あり、大潮元皓に交はり、常に往來す、寛保元年詩稿を刻す、元皓序を撰せり、師寂年月日詳ならず、著作天山詩稿二卷あり、（魯寮文集）

ダイケン　大賢（二四一八―二四八二）〔曹洞宗〕仙臺輪王寺の禪僧なり、大賢字は鳳樹、號は右龍、晩に芻狗子と號す、俗姓は桑島氏、父は仙臺亘理邑主伊達氏の臣なり、薙髮して僧溪水の徒弟となり、次に文堂禪師に從ひ、次に江戸青松寺に赴く後歸て輪王寺の席を曇龍の後に嗣く、釋迦十六羅漢像を山門に安し、二十二史等の諸書を買ひて文庫に置き、後遺命して藩の學館に納れ、其散佚を防き、一山の衆徒は隨意閲覧を許さんことを請ふ、文政五年下總國府臺總寧寺に寓して微恙あり、青松寺に來りて病を養ふ、都下の老宿士大夫の病を訪ふ者多し、同年七月廿七日寂す、壽六十五、（仙臺史傳）

ダイケン　大見　ゼンリユー禪龍を見よ、

ダイゲン　大玄（二五三一―……）〔眞宗〕越前專念寺の住持なり、大玄字は無休、別に五樂隱と號す、伊勢水澤の人常願寺住持某の子なり、越前福井に住し、日々勸導を事とし、東本願寺の說敎師として世に其名を知らる、明治四年五月三日福井に寂す、著作十八願勸錄三卷、帖外和讃勸錄三卷等あり、

ダイゲン　大玄（二三三七―二四一六）〔淨土宗〕江戸增上寺第四十五代なり、大玄は遠蓮社成譽と號し、單直水月聖引と云ふ、下野國の人、父は但馬守惟守五世の孫なり、母は高橋氏、師幼にして隱遁の志を起し、同國黑羽の長松院に至り、住持俊能の下に投して出家す、尋て弘經寺祐天上人に從て修學し、宗

脉を受く、將て京師に學はんとす、後能京師の繁華に雜りて婦女の難の怖るべきを戒めしかは、即時に男根を斷つ、學成りて東皈し、增上寺に入る、元文元年行事となる、初學の爲め圓戒略撰圓戒啓蒙を著す、元文五年命を奉て弘經寺に住す、延享二年大光院に轉ず、寬延三年十二月傳通院に移る、寶曆三年十一月二十八日增上寺に主たり、大僧正に任せらる、師目黑に一宇を創し、陸奧の無能和尙を請じ、大に戒律を主唱す、寶曆六年八月四日寂す、享年八十歲、（緇白往生傳、三緣山志）

ダイゲン　大元　シゲン孜元を見よ、

ダイゲン　大源　シユーシン宗眞を見よ、

ダイゲン　大幻　チクン智瞕を見よ、

ダイゲン　大原　スーフ崇孚を見よ、

ダイコ　大虛　ケージユー契充を見よ、

ダイコ　大虛　ジエン自圓を見よ、

ダイコー　大江　二三五一 二三三一　〔淨土宗西山派〕紀伊總持寺の學僧なり、大江字を南楚といふ、紀伊六十谷の人なり、紀伊總持寺の長威應沾に師事して西山派の學を受け、比叡山に登り、南光坊天海に就きて天台の秘要を受け、知恩院靈巖に就て鎭西流の宗要を聞き、南禪寺の裁長老、興聖寺の圓耳禪師を問ふて禪に參す、後、總持寺に歸りて上首となる、寬永二年方丈に入り講授倦まず、聽衆甚た多し三度光明寺の請あれとも固辭して往かす、晚年幽地を卜して隱棲す、寬文十一年三月四日寂す、壽八十、著作大經義苑七卷、論註隨聞記五卷、具疏記八卷、重笠十三卷、抒海一卷、六物採摘三卷、隨信鈔二卷、窓骨辨一卷、布薩辨正二卷、西鎭輿記一卷　光明寺緣記三卷等あり、（總持寺記錄）

ダイコー　大衡　（二三五四）　〔黃檗宗〕肥前長崎崇福寺の三代なり、大衡は明の福州の人、姓は翁なり、十四歲出家して禪に皈す、元祿五年西來して長崎に留り、同七年崇福寺三代となる、翌年退隱して綠蘿菴に居す、寂年詳ならず、

ダイコー　大綱　キセー歸整を見よ、

ダイコー　大綱　ミヨーシユー明宗を見よ、

ダイコー　大功　エンチユー圓忠を見よ、

ダイコー　大光　ジヤクシヨー寂照を見よ、

ダイゴン　大嚴　（……）　〔眞宗〕長門某寺の學僧なり、大嚴は長門江崎の人履善に師事し、後說を改めて能稱正業の異義を取る、然るに學內外を通して及ふ者なし長州萩に在る時學徒の請に應して易經を講す解說縱橫奧蘊を盡くすを以て名聲頓に高く、城中讀書の士爭ひ來りて其席に陪し、藩校明倫館之か爲に其講を休むに至りたりといふ、著作本典襲石、行信略論、敎章誂言餘論、正信偈記、眞宗要義問答、領解文勸鎌、易行品渡海篇、正像末讃記あり、

ダイサ　大佐　二二七六　〔曹洞宗〕磐城長源寺の開山なり、大佐字は國巖、遠江種智郡川上の人なり、出家遊方して舜國洞授に旨を得たり、結城考顯寺に出世す、奧州磐城城主鳥居忠政淵室山に長源寺を剏し師其一世となる、慶長十三年舜國越前孝顯寺に於て寂するに方り、中納言源秀康師に請ひて之れに住せしむ、幾何もなくして辭退し、長源寺に皈り仝十四年退老し、元和二年某月某日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈

錄）

ダイザイ　大材　ケンリョー堅梁を見よ、

ダイジボー　大慈房　ショーショー聖昭を見よ、

ダイシキ　大識　ユーブ宥豐を見よ、

ダイシツ　大室　エークワク永廓を見よ、

ダイシツ　大室　シユーセキ宗碩を見よ、

ダイシツ　大室　ソーホー總芳を見よ、

ダイシツ　大室　ソケー祖圭を見よ、

ダイジツイン　大實院　スーゴン崇言を見よ、

ダイシン　大進　テンハン念範を見よ、

ダイシン　大進　ミチユー彌忠を見よ、

ダイシン　大進　エタン慧旦を見よ、

ダイシン　大心　ギトー義統を見よ、

ダイシンアン　大進菴　ギョーグワン行願を見よ、

ダイシンカイ　大心海　ギキョー義敎を見よ、

ダイジヤクアン　大寂菴　ゲンコー玄綱を見よ、

ダイシユ　大殊　一九八一　二〇六二　〔臨濟宗〕河内光通寺の禪僧なり、大殊は別峰と號す、周防の人なり、出家受戒の後、諸國に游方す、偶々義南菩薩關西に化を布く、師往きて問答省あり、三光國師に雲樹寺に參するに及ひ、國師其省所を證す、後、備中の呑海に靈嶽穆に參して機語相契す、師の名漸く顯はれ、人爭ひて之を請す、和泉の興聖寺、伊勢の淸水寺、播磨の臨濟寺、備前の定林寺、河内の光通寺、紀伊の西光寺等は皆師の歷住せし所なり、永德二年夏伊勢の太廟に詣てゝ靈應あり、西光寺に住する時、後龜山院紀伊に幸したまふの序次駕を枉けて道を問ひたまひ殊に大珠圓光國師の號を賜ふ晚年光通寺に退去し、應永九年八月二日寂す、壽八十二、（本朝高僧傳）

ダイジユ　大壽　シユーホー宗彭を見よ、

ダイシユー　大宗　ゲンコー玄弘を見よ、

ダイシユーイン　大周院　ニチソー日聰を見よ、

ダイシユク　大俶　二一四七　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、大俶字は季弘號は蔗菴と云ふ、竹菴緣に參して法を嗣ぎ、文明十二年東福寺に主となり、長享元年八月七日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

ダイジユン　大順　リキショー力精を見よ、

ダイシヨ　大初　ケーカク繼覺を見よ、

ダイシヨ　大初　ケーゲン啓源を見よ、

ダイシヨー　大聖（一七四七）〔眞言宗〕遠江潮海寺の住僧なり、大聖其俗姓生國詳かならず、遠江城東郡潮海寺に主となり、德行人に邁れ、常に阿彌陀の法を修し、寬治年中寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ダイシヨー　大鐘　リョーガ良賀を見よ、

ダイシヨーイン　大聖院　ニチエン日延を見よ、

ダイシヨーイン　大聖院　ニチギョー日堯を見よ、

ダイジヨー　大成（……）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、大成は越前の人、幼にして州の善應寺に入りて剃髮し、二十五歲にして京に入り建仁寺に留る、初め經藏を掌り、後首座となる、出てゝ州の善應寺に住し、後、京都の眞如寺建仁寺に歷住し、某年八月二十一日寂す、壽五十九、臨終の

偈に曰く、一出一入、五十九年、浮雲不レ帶、明月在レ天、と(延寶傳燈錄)

ダイジョー 大成　シューリン宗林を見よ、

ダイジョー 大乘 二四一三 二八三 〔眞宗〕筑前嘉摩郡臼井村長源寺の住持なり、大乘字は慧雲、幻園と號し、後、福岡光圓寺に住す、少時大同師の門に遊び、日夜學を積み、出藍の名あり、よく大同の風儀を傳へ、行儀作法甚だ嚴重なり、法門惑亂の後命を奉して居敬履善等の諸師と同く祖山を護守し、大に法門に功あり、文化八年夏居敬と同しく代講の命を蒙り、觀經を叢林に講ず、聽衆一千二百有餘人なり、其後國に歸へり疾を以て寂す、壽七十一、實に文政六年正月廿二日なり、諡して遍照院といふ、明治十八年司敎を追贈せらる、著作觀經講述五卷、易行品毛謗錄二卷あり、(淸流紀談、學苑談叢、本願寺派學事史)

ダイジョー 大乘　ショーイン證印を見よ、

ダイジョーベン 大成辨　ニチショー日昭を見よ、

ダイセツ 大拙　シンオー眞雄を見よ、

ダイセツ 大拙　ショーエン承演を見よ、

ダイセツ 大拙　ソノー祖能を見よ、

ダイセン 大宣 二五一三……〔眞宗〕能登羽咋郡此浦村專稱寺の住僧なり、大宣は寮司となりて天保十三年より遊心法界記華嚴五敎章を高倉學寮に講し、嘉永二年十二月二十三日擬講となり、文久三年五月二十六日寂す、(眞宗史料)

ダイセン 大闡 (二三一四) 〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、大闡字は大法、俗姓は源氏、武藏の人なり、幼にして夢窻國師の下に侍し、入室衣法を附せられ、諸方に遊歷して悉く推奬を蒙むる、應安元年命を享けて相模の淨智寺に住し、居ること七年、圓覺寺に移つる、後、將軍の命に應して京都天龍寺に主となり、幾ならずして寂す、壽七十九、勅諡佛範宗通禪師の號を賜ふ、(本朝高僧傳)

ダイセン 大川　オンリュー音龍を見よ、

ダイセン 大川　チョーヤク長嶽を見よ、

ダイセン 大川　ツーエン通衍を見よ、

ダイセン 大川　ドーツー道通を見よ、

ダイセン 大尖　ジュンホ淳甫を見よ、

ダイゼン 大千　ダイキ大熹を見よ、

ダイゼン 大全　イチガ一雅を見よ、

ダイセンボー 大泉房　ニチジョー日成を見よ、

ダイゾー 大藏 (……) 七條佛所佛工なり、大藏(オホクラ)は康永の二子なり、淸水寺阿吽の二王を作る、

ダイゾー 大象　シューカ宗嘉を見よ、

ダイゾーイン 大相院　ホーリン法霖を見よ、

ダイチ 大智 一九五〇 二〇六 〔曹洞宗〕加賀祇陀寺の開山なり、大智別に祖繼と云ひ、素溪と云ふ、(一說に祖繼素溪は共に後人の稱するところにかゝると云ふ、)肥後宇土郡長崎の人なり正應三年を以て生れ、幼名萬十と云ふ、幼にして出家の志あり、七歲親に携へられて大慈寺寒巖尹禪師に謁す、尹禪師一見器許し、手づから饅頭を把りて師に與へ、其名を問ふ、師曰ふ、萬十と、尹禪師戲れて曰ふ萬十饅頭を喫する時如何と、師曰ふ、大蛇の小蛇を呑むか如しと、禪師大に奇とし、命し

て小智と云ふ、師曰ふ願くは大智と云はれよ、禪師益其才に感し、遂に命して大智と云ひ、度を授く、正安二年尹禪師示寂す、師喪を修して後出遊し、相模建長寺南浦明に謁したるも機縁契せす、尋て釋迦西堂に謁し、許可を受く、後加賀大乘寺瑩山瑾に謁し、百丈野狐話を參究して七年を經、一日東廊に作りて、僧の西廊を過くるを見て忽然として省あり、許可を受く、正和三年師廿五歳にして元に航し、古林茂、雲外岫、中峯本、無見覩等の諸禪師に歴謁し、徧く靈場を巡禮し、滯留十一年におよふ、（正中元年元泰定元年甲子）元の帝に謁し、東皈のことを奏す、詩あり曰ふ、萬里北朝宣二玉詔一、三山東海送二歸船一、皇恩至厚將レ何報、一炷心香祝二萬年一、と、既にして纜を解き、半途にして風浪の難に遭ひ、高麗に飄泊す、高麗王に呈する詩あり、曰ふ、曠刧飄生死海、今朝吏被二業風吹一、無二端失一却歸家路一、空望二扶桑一日出時、と、高麗に上り、白蓮社に遊ふ、詩あり、曰ふ、千

大智禪師

峯頂上白蓮社、十里松門入更深、僧舍不レ留二塵世客一、一輪明月照二禪心一、と、王の好意により、再ひ出發し、加賀宮腰津に着す、即ち能登洞谷に至り、瑩山瑾禪師に省覲す、瑾禪師の意を受けて明峯哲禪師に謁し、師資の禮を執る、加賀河內莊吉野鄕の峰巒の幽靜を愛し、菴を營み閑居す、未た幾ならすして參徒四來し、遂に一寺を開き、師子山祇陀寺と號す、正慶二年正月明峰哲禪師より法衣を附せらる、後肥後に歸り、菊池郡穴鄕斑蛇口山に鳳儀山聖護寺を構へて住居す、大守從五位下菊池武時（入道心空寂阿居士）深く崇仰す、師鳳儀山を下らさると二十年なり、觀應二年武時の男武重玉名郡石貫鄕に紫陽山廣福寺を築き、師を請して開山となす、師一日手から自影を寫して、別源旨禪師に賛を求む、（本文の間に揭くる圖像は即ち其自影に依る、）正平の際、肥前高來郡に水月菴を營み閑居す、詩あり、曰ふ、聞思修ヨ入三三摩地一、五五圓通一念觀、永夜淸風翻二白月一、松聲長似二雨聲寒一、」毘盧海上起二波瀾一、江月松風永夜寒、箇箇面前觀自在、人人一座補陀山、」と、同地なる笠津遠望の詩あり、曰ふ、「蓬窓冷對一江秋、智鏡融時見處周、岸上靑山雖レ不レ動、波心明月去隨レ流、」性海無二風寶鑑明、猿啼未レ足第三聲、寒濤打二碎蒼崖月一、萬仞峰頭無レ路行、」と同地河尻の蘆月菴の景を賞し、詩あり、曰ふ、「長年獨坐隻岩草、一色功中轉レ步難、昨夜長鯨吸二海盡一、珊瑚枝上月團團、」「洞上宗風最尊貴、何勞默默守二功勳一、麒麟掣二斷黃金鎖一、獨步丹霄五色雲一、」正平二十一年の冬微恙あり、十二月十日端然として寂す、壽七十七、臘六十九、闍維して遺骨を聖護祇陀廣福水月の四處に分ち、塔を立て大梅と云ふ、著作偈頌一卷

あり、世間に盛行す、法嗣一人あり、禪古と云ふ、法孫梵丁其傳を作る、（大智禪師傳、日本洞上聯燈錄）

ダイチ　大智　ケンエン賢圓を見よ、

ダイチ　大癡　イガク爲學を見よ、

ダイチン　大椿　シユーコー周亭を見よ、

ダイチユー　大蟲　シユーギン宗岑を見よ、

ダイチユー　大蟲　チヨーコ超虎を見よ、

ダイチユー　大仲　シユーイ宗潙を見よ、

ダイチユー　大中　ゼンヤク善益を見よ、

ダイチユーイン　大中院　ニチコー日孝を見よ、

ダイチヨー　大潮　ゲンコー元皓を見よ、

ダイチヨー　大朝　シユーガ宗賀を見よ、

ダイチヨー　大超　トクグワン禿頑を見よ、

ダイツー　大通（二〇五八―二一四九）〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、　大通は尾張の人、俗姓は源氏新田の族なり、精しく宗義に通し、善く毘尼を持す、春嶽喜に師事して其法を嗣ぎ、伊勢朝熊山に隱逸す、後、丹波婆娑山に移りて菴居す、里民其德に嚮ひ、遂に寺を名けて瑞巖寺と云ふ、將軍足利義尙其道譽を聞き相模淨妙寺に請す、師辭すること再三、終に止むことを得すして往き住し、居ること一年にして瑞巖寺に皈る、延德元年正月十日病に罹り、懇に門人を誡め、恬然として寂す、壽九十二、臘七十一、（本朝高僧傳）

ダイツーイン　大通院　ギジユン義順を見よ、

ダイツーイン　大通院　ニチエー日永を見よ、

ダイテツ　大哲（二三二一）〔淨土宗〕江戸正命寺の僧なり、　大哲は常陸の人、出家して論辨演說に達す、日蓮の徒を論伏して敵するものなし、然れとも彼等常に之を恨みとす、他日常野二州に頭陀す、日蓮の徒數百人竊に師に暴を加へんとす、師膂力あり大樹を拔きて之を打つ、日蓮の徒恐れて去る、寬文年中武藏の國下谷に於て別時會を修す、道化する所甚た多し、後駒込正命寺に住し、大に法門を弘通す、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

ダイテツ　大鐵（二四八九）〔眞宗〕越前米浦蓮光寺の住持なり、　大鐵は越前の人、高倉學寮に學び、文政三年寮司となり、俱舍頌疏を講じ、其秋擬講となる、後、四敎儀、末燈鈔を講ず、文政十二年八月五日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

ダイテツ　大徹　シユーレー宗令を見よ、

ダイテン　大典　ケンジヨー顯常を見よ、

ダイテン　大轉　シンエ信慧を見よ、

ダイテン　大顚　ボンセン梵千を見よ、

ダイデン　大田　リヨーヨー靈用を見よ、

ダイトー　大透　ケージヨ圭徐を見よ、

ダイトー　大透　シユーテキ宗的を見よ、

ダイトー　大等　イチユー一祐を見よ、

ダイドー　大同（二四一一）〔眞宗〕筑前夜須郡甘木敎法寺の住持なり、　大同は陳善院の門人なり、學內外を兼ぬ、道心深くして眞宗律の名あり、殊に詩文に長し、龜井南冥と文雅の交をなす、門人其詩を集めて玄瀾錄と名く、師の著作陳善院僧樸年譜一卷あり、（淸流紀談、本願寺派學事史）

〔考〕大同は寶曆頃の人なり、

ダイドー 大同　ミョーキッ妙喆を見よ、

ダイドー 大幢　ライニョ賴如を見よ、

ダイドー 大幢　シンカイ信海を見よ、

ダイドー 大道　イチイ一以を見よ、

ダイドー 大洞　ソンチョー存長を見よ、

ダイドーボー 大同房　キベン基辨を見よ、

ダイニ 大貳(……)　七條西佛處の佛工なり、大貳は康住の養子なり、事蹟詳ならず、

ダイニチ 大日　ノーニン能忍を見よ、

ダイニン 大任(二四五九)　〔淨土宗〕江戸山谷瑞泉寺の僧なり、大任は號を墨庵と云ふ　詩文を以て名あり、寛政十一年三月山谷を出て東海道を經て五畿内地方に歴遊し、六月寺に皈り、雲遊文蔚五卷を著はす、抱一、月仙、雲室、司馬江漢、谷文晁等數十人の書を附し刊行す、師寂年月日詳ならず、著作元亨釋書輔珆十二卷、雲遊文蔚五卷、莵道夢枝唹哩二卷、佛舍利考、墨庵々話各一卷あり、(雲遊文蔚)

ダイネー 大寧　リョーニン了忍を見よ、

ダイネン 大年　シユーエー宗永を見よ、

ダイネン 大年　ショーケー祥啓を見よ、

ダイネン 大年　ショートー祥眷を見よ、

ダイネン 大年　ホーエン法延を見よ、

ダイバイ 大梅　ホーセン法撰を見よ、

ダイビ 大眉　ショーゼン性善を見よ、

ダイベン 大辯　ショートッ正訥を見よ、

ダイベン 大辯　リョートッ了訥を見よ、

ダイホ 大蒲　ショーモク正睦を見よ、

ダイホコー 大輔公　ニチユー日祐を見よ、

ダイホー 大寶(二四六四—二五四四)　〔天台宗〕近江園城寺日光院の學僧なり、大寶は一名守脫と云ふ、伊勢佐倉の人なり、東本願寺末なる佐倉の安性寺に生る、稍長して天台宗に入り、比叡山に登りて三大部の講究をなし、安樂院に留寓して慧澄律師の講席に列す、後、下野日光山に留り、三大部の講席を開き、慧澄の學風を襲はす、別に一旗幟を樹つ、遂に安樂院一門の容るところとならず、山内の學籍を脫し、寺門に入り、園城寺の日光院を管す、然るに常に同寺の自性院に留寓し、三大部の講席を開く、大衆四來し、門學漸く盛なり、明治十五年の頃、西本願寺の聘により、京都に至り、西本願寺大敎校に三大部等を講し、大に學徒の敎育に力を盡す、師天台の學に精通し、兼ねて儒學に該通す、殊に音韻の學に長したれは、一時の儒家等常に師に就いて敎を受けたりと云ふ、明治十七年二月十日京都の寓舍に寂す、壽八十一、前後師の門に學ひたる者甚た多く、殊に前川慧雲等聞ゆ、著作法華玄義釋籤講述十五卷、止觀輔行講述、冠註四敎儀集註、觀經妙宗鈔講述、各六卷、十不二門指要鈔講述、金錍論講述、八識規矩講述天台菩薩戒疏講述各二卷、起信論講述、六合釋講述、敎誡律儀鈔、各一卷、法華文句、觀音玄義記　五敎章、倶舍頌疏等の講述若干卷、學庸講述一卷あり、

ダイホー 大鵬　ショーコン正鯤を見よ、

ダイホー 大法　ジッニン實任を見よ、

ダイホー　大法　ダイセン大闡を見よ、
ダイホー　大方　ゲンクワイ元恢を見よ、
ダイホー　大方　ショークン詔勳を見よ、
ダイホー　大芳　ユーシン融眞を見よ、
ダイボク　大朴　ゲンソ玄素を見よ、
ダイミヨーボー　大明房　ニチエー日榮を見よ、
ダイムカク　大夢覺　コーゲン宏源を見よ、
ダイモク　大默　エジヤク慧寂を見よ、
ダイモ　大模　シユーハン宗範を見よ、
ダイヨ　大譽（……）〔淨土宗〕河内報土菴の開山なり、大譽俗姓は小田氏、伊賀上野の人なり、州の念佛寺に投じて剃髮し法を知哲に嗣ぐ、河内に往きて報土菴を搆へ、某年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）
ダイヨ　大譽　エンチ圓智を見よ、
ダイヨ　大譽　カンテキ閑的を見よ、
ダイヨ　大譽　ギネン巍然を見よ、
ダイヨ　大譽　キヨージク慶竺を見よ、
ダイヨ　大譽　サンジヨ三恕を見よ、
ダイヨ　大譽　ドグワン土丸を見よ、
ダイヨ　大譽　ドーウン洞雲を見よ、
ダイヨ　大譽　ムゴク無極を見よ、
ダイヨー　大用（……）〔曹洞宗〕奧州泰心院の禪僧なり、大用俗姓は平氏、出羽莊内の人なり、晩年に及びて僧となり、泰心院に住し、後、辭して三河の龍海院に寓し、小室を街路の傍に營みて閻羅王の像を安置して居る、岡崎の城主水野氏師を招きて法要を問ひ金帛を贈る、師之を受けて悉く乞丐に與へ去り、東西意に任して遊行し、其終る處を知らす、（日本洞上聯燈錄）
ダイヨー　大用　エタン慧湛を見よ、
ダイヨー　大用　シユーシユン宗俊を見よ、
ダイヨー　大用　ゼンヨー全用を見よ、
ダイヨー　大鷹　シユーシユン宗俊を見よ、
ダイヨー　大養　ジユンキヨー淳享を見よ、
ダイヨー　大陽　ミヨーチユー明中を見よ、
ダイリン　大林　シユートー宗套を見よ、
ダイリン　大林　シヨーツー正通を見よ、
ダイリン　大林　ゼンイク善育を見よ、
ダイリン　大琳　シヨーチン詔珍を見よ、
ダイリン　大鱗　ゼンサク全索を見よ、
ダイリン　大輪　ソシン祖心を見よ、
ダイリユー　大龍（……二三三三）〔淨土宗〕尾張大森寺の開山なり、大龍は行蓮社信譽と號す、俗姓は酒井氏、肥後松本の人なり、幼にして郡の西福寺に入りて剃髮し、聞悅に師事して宗乘を究む、後、尾張春日井郡に大森寺を刱して住し、延寶元年二月四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）
ダイリユー　大龍　ゾンシユ存守を見よ、
ダイリヨー　大了（二四九四―二五九八）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十五代なり、大了字は章範、初め大空房智燈と云ふ、伊豫國溫泉郡高岡村の人、俗姓は河合氏なり、父は伊左衞門と稱し、師は其第二子なり、天保五年七月十一日を以て生れ、幼

にして出家の志禁じ難く、十六歳にして理正院章榮阿闍梨の室に投して薙髪す、嘉永四年冬豐山に登り、永雅僧正に謁し、六年二月入壇灌頂す、これより眞淨覺了の二師に性相の奧義を聽き、海如啓本二師に小野廣澤二流の秘訣を究め、雲井坊に住す、明治二年奈良戒壇院惠訓に隨ひ、登壇受戒し、東大寺主の懇請により、新藥師寺に住す、同八年伊豫石手寺に移り、十一年命により東京に出で、教導職に補せられ、累進して少教正に至り、宗務を大教院に執る、護國寺俊海僧正常に師の學德を慕ひ、延て副住職となり、遂に其職を讓る、時に明治十六年八月なり、後、幾何もなく寺中火を失し、殿宇坊舍悉く烏有に皈す、師刻苦經營、出てゝは宗務を執り、入りては再建の事を謀り、高城義海僧正を延て再建の事を托し、相助けて漸く舊觀に復するを得たり、明治二十四年選ばれて豐山の化主となり、大傳法院の座主を兼ぬ、二十七年六月更に選ばれて眞言宗長者となり、大僧正に補す、明年淸と戰を開くや、師勅を奉じて大元帥の神法を修し、征淸の戰勝を祈る、同年十月疾に罹りて職を辭し、退て護國寺に居り、靜養怠たらざりしが、遂に明治三十一年八月二十五日寂す、壽六十五、臘五十、著作野根教相和會論一卷あり、（新義眞言宗史料）

タイレン 大廉 二四二七 二五〇四 〔眞宗〕飛驒願念寺の僧なり、大廉一名を眞敎と稱し、鳥溪と號す、明和四年三月飛驒吉城郡新名村願念寺に生る、少にして越中の快樂院柔遠に從ひ、宗餘乘を學ぶ、後、攝津得聞院の教授を囑せられ、往きて寓することと多年、後美濃攝津山城河內越中等の諸國を巡錫して學徒を獎勵す、文化九年安居代講の命を承けて文類聚鈔を講す、文化十一年寺號を下して隨緣寺といふ、天保二年助教に昇り、弘化元年九月廿九日寂す、壽七十八、著作文類聚鈔記一卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ダイロ 大路 イチジユン一遵を見よ、

ダイオク 臺屋 二三一八…… 〔淨土宗〕安藝源光院の開山なり、臺屋は三蓮社緣譽と號す、遠江濱松の人、其俗姓詳かならず、信譽に師事して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、安藝廣島に源光院を創して開山となり、慶安元年八月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ダイサン 臺山 （二三一五） 〔淨土宗〕越後大嚴寺の開山なり、臺山は行蓮社往譽と號す、越後春日山の人なり、智譽上人に法を嗣ぎ、越後の高田に大嚴寺を開きて淨土宗を弘通し道俗の皈向盛なり、明曆中大嚴寺に寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ダイザン 臺山 二三〇八…… 〔淨土宗〕下野大光院の僧なり、臺山は乘蓮社傳譽と號す、俗姓は岩木氏江戶の人なり、初め父母大山の明王に祈りて師を生む、稍長して了的の室に入りて弟子となり、大山と名け、後、臺山と改む、學行年を積みて瓜連常福寺に住し、後、新田大光院に遷る、慶安元年九月十七日大光院に寂す、壽缺く、門下に靈玄梵貞等あり、（淨土總系譜）

ダイオー 代翁 シユテツ守哲を見よ、

ダイケン 代賢 シユチユー守中を見よ、

タカオカシンノー 高岳親王 シンニヨ眞如を見よ、

タクガン　卓巖　ジユンカイ準海を見よ、

タクガン　卓岩　ドークワツ道活を見よ、

タクゲン　卓玄　二二九二 二三六四　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十三代なり、卓玄字は淳亮、俗姓は兒玉氏、寛永十年を以て薩摩伊作郡麑島に生る、正保四年十五歳にして儒書を學び、廣く經史に通達す、慶安四年十九歳にして出家して沙彌となり、海藏寺覺有に師事して三密の抄行を精修し、又安養寺秀瑜に隨ひて金胎兩部灌頂を承く、明暦元年二十三歳にして出遊し大和豐山に赴き、良譽に謁して初めて一山の大衆に加はり、法論の席に列なる、多年淨泉和尚に親炙して、事敎二相を講究し遂に和尚より兩部の大法、諸尊の儀軌經疏及び秘訣を傳へられ、無量壽院一流の蘊奥を究む、後、轉して奈良に赴き、法隆寺高榮を問うて維摩經を講究し、興福寺盛源を問うて成唯識論等の章疏を聽き、寛文四年三十二歳にして始めて講筵を開く、賴意僧正豐山に主となるに及び、寛文九年師を推して喜多坊に住せしむ、延寶元年一たび鄕里に皈りて老母を省し、二年夏再び豐山に歸り、法臘二十二に滿つるを以て許狀を掌る、仝年七月賴意の讓りを受けて總持寺に移る、仝六年尾張大納言光友の聘によりて長久寺に住す、貞享元年三月五十二歳にして將軍綱吉の命に依り、豐山の能化職に任せられ、五月進院す、八月敕して僧正に任せられ、仝月參內して奉謝し、九月江戶に至り、進院のことを謝す、後、菩提院結衆三十人を能屬と定む、元祿元年仁和寺に往き、大僧正孝源に就いて傳法院流の許可重書秘訣を受く、仝三年夏開祖覺鑁の五百五十回の忌辰に當れるを以て信盛と議し、諡號を朝廷に奏請し、冬十二月特に勅なり興敎大師の諡號を賜ふ、師將軍に寵せらるゝこと最も厚く、數〻懇請により江戶に出て城中に於て論筵を設く、將軍自畫自贊の觀音の圖を賜はる、元祿四年八月牧野備中守成貞の寄捨に依り、豐山に經藏を造營す、仝八年三月江戶に赴き、將軍に謁し、且つ桂昌院一位尼公に見えて、後ち圓融帝の宸翰豐山の繪緣起を賜はる、師一住十二年に及ぶ、元祿八年老を告けて興元寺に退隱し、寶永元年正月二十五日寂す、壽七十三なり、菩提院に葬むる、著作、疏艸第五私記一卷、精談一卷等あり、（豐山傳通記、新義眞言宗史）

タクシユー　卓洲　コセン胡僊を見よ、

タクチユー　卓中　二四二四 二四八九　〔淨土宗〕信濃敎念寺の學僧なり、卓中初の名は卓道、號は亣禪と云ふ、時人呼ひて曼荼羅和上と云ふ、信濃國諏訪郡文出村の人、明和元年九月を以て生る、幼にして三寶を崇敬し、父母に出家せんとを求むるも許されす、安永四年十一歳にして敎念寺卓巓に遇ひ、出家せんとを求め、寺に至りて強請悲泣す、卓巓即ち兩親に告け剃度を授く、安永三年可圓和上巡敎の途次此地に至る、師就いて敎を受く、同七年師の兄弟三人相尋て歿す、兩親師の家に皈りて業を繼かんとを求む、師固く辭して出家の形相を全うせんとす、兩親も其堅志に感し、遂にこれを許す、師解行共に力を盡し、漸く盛譽四方に傳ふ、諏訪の正光寺に留まりて敎化をなすに方り、高遠城主內藤氏禮請するも固辭して出てず、寛政三年三十八歳にして行脚し、文政七年四十七歳にして江戶增上寺悲照律院の玉釧和上に就て戒律を修習し、箕輪

の立巖和尚を仰いて沙彌戒を受け、初めて名を立禪と云ふ、文化九年正月一百五十日別行を修して具足戒を受け、別行中卍字を感得す、攝津勝尾山に登り、德本行者に謁して卍字感見の其見を問ふ、行者具に其深意を解說し、彌勒の印可證誠なりとし、特に道號を附與して德正と云ふ、文化十一年信濃に遊化し、海津の菩薩菴に住す、十四年薩摩島津氏遙に增上寺の敎譽上人を介して禮請す、同年十月卓嶺寂す、師其喪に服し、翌十五年四月薩摩に赴き、大に宗風を擧揚す、文政六年去りて筑紫に遊化し、轉して肥前の佐賀等を經て、長門周防に至り、舟路難波に着し、尋て京師に入り、轉輪寺に講席を張り、後東下江戶に入り轉して鎌倉に至り、光明寺に留り、文政八年信濃に至り、同年十一月松本に入り、淺間に一菴を營み住す、幾もなく再び江戶に入り、十年京師に上り、華頂山尊超法親王の命により、六月十一日より當麻曼茶羅を講し、九月十日に至りて終了す、法親王大に喜び、曼茶羅院の號を賜ふ、文政十一年十月信濃松本の玄向寺に曼陀羅を講し、中途にして病に罹る、師弟子に告けて曰ふ、是れ最後の講席なり、終了すれは我れ西皈せんと欲す、と、翌十二年正月二十二日講席終了し、一刻を過きて晏然として寂す、壽六十六、法臘五十一、戒臘十八、師一生當麻曼茶羅の研究に心力を傾け、其講席を張ると四十八回に及ひたり、門下立亭法席錄十五編を編せり、

タクゼン　卓全　ジンケン深賢を見よ、

タクネン　卓然　シユーリユー宗立を見よ、

タクア　託阿　ホーシユー法洲を見よ、

タクア　託阿　一九一〇 一九七九　〔時宗〕京都七條金光寺の僧なり、託阿は上總の人、弘安八年に生る、中聖の弟子なり、常に天下を遊行して四衆を化し、器朴論三卷を撰し大に敎理を闡明して時宗の眞面目を發揮す、遂に元應元年八月十日京都七條の金光寺に於て寂す、壽七十、著作、器朴論三卷、禁荔和傳要、佛心解、無上大利註、東西作用抄、用心大綱註、各一卷等あり、（淸淨光寺記錄）

タクリユー　託龍　二三八八 二四二一　〔淨土宗〕周防八正寺の僧なり、託龍字は性雲、周防德山の人なり、早年得度し、郡の八正寺に投す、幾もなく東遊し、增上寺に寓し、淨土敎を講究し、宗戒兩脈を嗣く、後、諸國に歷遊し、一時相模眞名鶴村藥師堂に寓し、日課念佛七八万より、十二三万に上る、寶曆九年九月尾張に遊ひ、八事山諦忍和尚に師事し、菩薩戒八齋戒を受く、時に二十八歲なり、翌年周防の受業師の下に歸覲し、尋きて西照寺に寓し、一向專念に練行す、八年五月江戶に飛錫し、麻布の小菴に寓す、九年七月尾張に遊化し、奈良村の阿彌陀堂に閑棲す、嘗て諦忍和尚に謁して具に從上三昧發得の狀を語る、和尚證明許可せり、十一年三月疾に罹り、六月二日正念念佛して寂す、壽三十四、（續日本高僧傳）

タクリユー　託龍　シヨーウン性雲を見よ、

タクアン　澤菴　シユーホー宗彭を見よ、

タクゲン　澤彥　シユーオン宗恩を見よ、

タクザン　澤山　二三二六　〔淨土宗〕豐後長昌寺の開山なり、澤山は滿蓮社作譽一無と號す、安藝廣島の人、法を隨波に嗣ぎ、豐後木付長昌寺、舊野來迎寺の開山となる、寛文六

年二月二十七寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

タクシユー　澤秀　二三六七　〔淨土宗〕京都知恩寺の僧なり、澤秀は辨蓮社懷譽と號す、法を知哲に嗣ぎ、初め鴻巢勝願寺に住し、後京都知恩寺に移る、寶永四年六月一日寂す、（淨土總系譜）

タクスイ　澤水　チヨーモ長茂を見よ、

タクゲン　琢玄　シユーシヨー宗璋を見よ、

タクシユー　琢宗　二四九六—二五五七　〔曹洞宗〕越前永平寺六十三代なり、琢宗字は魯山、號は蘇翁と云ふ、越後の人、小川氏なり、後瀧谷氏と云ふ、嘉永元年眞福寺に投し度を受く、長して江戶に遊び、吉祥寺の學寮に入り、内外二典を學び、尋て奕堂禪師に謁し、其法を嗣く、後、永平寺に住し大に宗門の隆盛を謀る、勅號眞晃斷際禪師を賜はる、明治三十年一月三十一日東京麻布の寓舍に寂す、壽六十二、

タクニヨ　琢如　コーエー光瑛を見よ、

タクホ　琢甫　シユーリン宗璘を見よ、

タツオー　達翁　二二九八……　〔曹洞宗〕武藏宗關寺の禪僧なり、達翁字は谿州武藏の人、隨翁に依りて剃髮し、碧山瑞泉に參し首座となり、出世歷遷して宗關寺に至る、寛永十五年十月五日寂す、壽缺く、法嗣北巖寅嘯あり、（日本洞上聯燈錄）

タツクー　達空　エリヨー慧亮を見よ、

タツジユー　達住　コーシヨー光勝を見よ、

タツトー　達等　（一一七〇）　我國最初の佛教信徒なり、達等（一に達止に作る）は南梁の人、司馬氏なり、繼體天皇の朝に始めて佛像を奉して西來し、大和高市の坂田原に草堂を營みて安置崇禮す、然れとも我國人未た佛像の何たるかを知らす、唯異國の神と稱したり、後我國に皈化志河内澁川なる鞍作（一に鞍部）と云ふ地の村主（スグリ）となる、欽明天皇の朝に百濟の聖王明禮の佛像經卷等を獻上するに方りて、蘇我物部兩氏の權柄爭奪を媒したるが蘇我氏か佛教を信するに至りたるは達等の力與りて多きに居るなり、敏達天皇の十三年九月に鹿深臣、佐伯連は各佛像一軀を齎して百濟より歸るにあたりて、蘇我馬子は司馬達等、池邊直氷田等と之を迎へ、堂宇を築きて安置す、この時始めて大齋會を設けたるに、達等は齋食の上にて佛舍利を得、これを馬子に獻せしかは、馬子試に舍利を鐵器中に置き、鐵鎚を以て打ちたれとも、摧毀することなく、水中に投すれは、心の願ふまゝに浮沈したりしかは、馬子大に佛德の靈異なるに感し、これより崇敬の念を生し、堂宇を修治して興隆を謀れり、達等の一家皆佛教に力を盡せり初め鹿深臣等か佛像を齎して還るやこれを安置せむとするも奉持するものあらさりしかは、馬子は達等らと謀り、達等の女島といふ者をして出家せしめて比丘尼とならしめたり、これ我國に出家ある始めなり島後に百濟に渡りて戒律を學び歸る、我國にて出家し且つ外國に佛教を求めたるは此女を以て始とす、達等の子多須奈は用明天皇の瘡を患ひ給ふ時に、自ら誓ひて出家して比丘となる、是れ男子出家の始なり、共に達等の一家より出てたるなり且つ上古の佛工として有名なる鳥佛師は達等の孫なりとす、達等の寂年壽等は一切傳はらす（日本書紀、法王帝說、扶桑略記、水鏡、元亨釋書）

〔考〕司馬達等の西來は扶桑略記に依れは繼體天皇十六年二月とあり、然れとも我國歷史の此年間の紀年正確ならさるものあるを以て、遽に信憑すべからす、日本書紀に依れは達等の女島は敏達天皇の十三年に十一歲にして出家したり、されは島は達等西來より五十三年の後なる敏達天皇三年に出生したるものなり、此事實如何は未た詳ならされとも、達等が弱年にして我國に來り、殆と一生を此國に送りたるとは、略ほ推測せられさるにあらず、

タツドー　達道（……）〔淨土宗〕江戶正行寺の開山なり、　達道は念蓮社專譽と號す、其鄉貫詳かならず、蓮馨寺に入りて習學し、法を源的に嗣ぐ、江戶駒込に正行寺を創してこれに住し、某年寂す、其年時、並に壽歆く、（淨土總系譜）

タツニヨ　達如　コーロー光朗を見よ、

タツリヨー　達亮　二四一一／二四八三　〔淨土宗〕三河隨念寺の僧なり、　達亮字は仟阿、向蓮社專譽と稱し、蒙光と號す、三河國刈谷の人、父は山比又左衛門、母は印東氏、共に刈谷の藩なり、寶曆元年十一月一日誕生す、七歲の春より鄉里の利勝寺に入り、列譽上人に入木道を學ひ、寶曆十年池鯉鮒の了運寺忍譽上人の意により岡崎隨念寺達源上人に投して出家剃髮し、　翌年正月江戶增上寺に到り、先つ宗の疏抄を硏尋し、漸く其蘊奧に通み、明和三年日課念佛三万遍を自誓す、同五年十一月宗戒兩脈を禀けて一宗の秘訣を傳承す、後、目黑長泉院德門律師の下に俱舍、唯識、華嚴、法華等大小權實の宗乘を習ひ、明和七年春二月鄉里に歸へり、達源の化を助く、安永二年春增上寺法主大僧正の書翰を携へて知恩院に登り、大僧正に見え、其奏上によりて賜衣の綸旨を下さる、歸路東大寺龍松院、天の香久山、當麻寺、高野山蓮華谷、紀伊大川報恩寺等宗祖の舊蹟を訪ひ、西國三十三所觀音の靈場を拜して歸へり、十月一宗の奧義の相承を得んとし、再ひ增上寺に赴き、悅譽中春和尙の學筵に列し、和尙より聖淨二門の秘奧を傳へられ、四年の後に歸へる、時に達源隨念寺の諸伽藍再建を企て、師も命せられて之を助けて工を畢ふ、寬政二年六月先師の席を補し、同寺を主とる、翌年正月江戶城に登り、將軍に謁す、師隨念寺を退きてより畿內、東海、東山の諸州十六ヶ國を遊化して念佛を弘め、請待されたる寺には必す祠堂金を寄す、後可久寺に住し、寬政十一年七月辭して達源の隱室に退き、念佛三昧を修す、信濃の山吹の領主座光寺の請により、領內の某寺に開法し、大衆を化す、文化七年六月一日知恩院宮の命により京に上り七月八日華頂御殿に召され準院家の職となり遍照院の號を賜ふ、石見大興寺の眞海と相見て交を結ふこと深し、文政二年秋江戶に往き、四年に歸へり、六年正月三十日隨念寺に寂す、壽七十三、臘六十三、遺命により隨念寺に葬る、著作二利要文拔藥、二利要文拔藥、誘蒙若干卷、雜詠集二卷、一枚起請文諸說談正誤、念槌等あり、（遍照院任阿上人傳）

タンエ　湛慧（……）〔臨濟宗〕筑前崇福寺の開山なり、　湛慧字は隨乘、筑前の人なり　顯密の二教に精しく、宋に參遊して無準の法を受け、圓爾に請益す、既にして歸り橫嶽山を創し、圓爾の來るに及ひ、延きて主たらしむ、關白藤

原良實師を延きて顯密及び淨土教を問ふ、其父道家亦召して禪要を問く、師鎭西に多く禪寺を建つ、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

タンエ　湛慧　シンバイ信培を見よ、

タンエー　湛睿（一九九四）〔華嚴宗〕武藏稱名寺の學僧なり、湛睿字は本如と云ふ、少より凝然に從ひて羯磨に從事す、華嚴を學ひて圓理に通し、禪爾の後を繼きて戒壇院の學頭となる、元應初年檀請を受けて金澤の稱名寺に住し、戒を授け、經を講す、元亨二年敎理鈔を著し、建武元年纂釋三十二卷を撰し、華嚴大疏を翼解す、某年同寺に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

タンエン　湛圓　シユーコー宗高を見よ、

タンカイ　湛海（一九一五）〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、湛海字は聞陽と云ひ、夙に經論に通し、戒律を奈良に學ふ、俊芿の室に入りて東山に首座たり、嘉禎の末宋に入り、兩浙を歷て南湖に遊ひ、晦嵓照に謁して一心三觀の旨を受く、淳祐四年泰山の白蓮教寺に寄寓し、同年秋經論數千卷を持して東歸す、然れとも白蓮教寺にある釋迦牟尼の佛牙を慕うて止ます、數年の後再遊して白蓮寺に留まるに、寺既に廢せり、依りて貝材數千を得、工を督して同寺を再興す、功により佛牙を付せられ、歡ひて山を下り、天竺寺を訪ひ又上天竺寺に到る、寶祐三年佛牙舍利を奉して東歸し、泉涌寺を主とる、某年某月二十四日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

タンカイ　湛海（二二八九―二三三三）〔眞言宗〕大和寶山寺の開山なり、湛海字は寶山、伊勢安濃郡一色村の人、父の姓は山田氏、母は辻氏、寛永六年二月一日生る、正保三年師十八歳にして竊に薙髮染衣し、武藏に往き深川永代寺周光に事ふ、高野山の蓮華三昧賴仙に投して五部の密灌を受け、次に仁範に學ひ、後、京都に到り、某儒に就きて詩書六經を學ふこと三年、其間每に二十四日に値へば穀を斷ち、徒跣して洛西の愛宕山に登り、嚴寒炎熱をことゝせす、來往必らず心經一千卷を誦す、三年の期滿ちて後、終に山中に寓し、斷穀七日、精進猛勵して證果を祈る、幾ならすして東京に返へり、講肆に周遊して研究す、師深く名利を忌み、苦行を重し、常に小角泰澄の人となりを慕ふ、無畏三藏の禪要に依りて自誓受戒し、諷誦懈ることなく、修行甚だ勤む、時人稱して如來房と稱す、時に鼎峯に光宥と云へる者あり、迦文羸髻の舍利を奉す、師之を求むれとも應せす、宥の寂後其遺弟に乞ひて一を得、忽にして其一殖えて十二となり、四十八となり、後靈現ありて百六十となる、靈夢を感すること幾回なるを知らす、其度々に愈々精勤し、常に護摩或は八千枚を修す、密軌に依り華水供を修すること二万三千餘回、浴油供を修すること二千餘日なり、師萬座の天供を行ふと數千座に及び、啓示によりて京都に緣あるを知り、往きて粟田の天王坊に住す、後檀越某歡喜院を建立して師を請す、一住二年、周光八幡宮の經始の任を托し、承應三年より翌年の間土木功畢りて財足らさる際、師祈禱して之を助く、京都に歸へりて浴油供を修し、靈驗ありて永代寺に周光の席を補せしめんとすれとも師背せず、年四十五歲眞政忍律師に就きて菩薩大戒を受け、沙彌となりて威儀を學習す、後、大和の法隆寺に到りて北室院に寓し、延寶四

年壽四十七和泉神鳳寺に入り登壇受戒す、役小角の古跡なる寶山に入りて難行苦修す、延寶元年正月十六日寂す、壽八十八、臘七十一、（湛海律師行狀、續日本高僧傳）

タンキヨー　湛慶（一八九七）七條佛所七代佛工なり、　湛慶は佛工運慶の子なり、尾張法印と云ふ、彫刻の技を祖父康慶、父運慶に授かり、早く名工の聞あり、彫刻繪畫兼ねて善くす、建久年中運慶と共に東寺の本尊を修理し、南大門の二王を造る、東方金剛力士運慶彫刻し、西方湛慶彫刻す、又共に二天を造る、東方は康運、康勝、運助彫刻し、西方は湛慶、康辨、運賀彫刻す、湛慶大門の金剛力士十三重寶塔の脇士制多迦童子、梵天、帝釋、毘沙門を彫刻す、嘉禎の頃新大納言賴經の請により、一切經供養の本尊等身の釋迦牟尼佛を畫く、嘉禎三年高野山金剛力士二躰を造る、貞慶三年高山寺善州寺の善妙幷に獅子狛犬を造る、其餘彫刻するところ甚た多し、沒年缺く、一說に元久二年五月十四日沒すと云ふも信すべからす、（東寶記、高野春秋、高山寺緣起、大佛師系圖）

タンクー　湛空（一八三六／一九一三）〔淨土宗〕京都二尊院の開山なり、　湛空字は正信、左大臣實能の孫、法眼圓實の子なり、初め比叡山に登りて出家して圓實僧正に從ひ、次に實全僧正に從ふ、後、源空上人に師事して淨土教を受け、道譽高し、毘沙門堂明禪疾革るに際し、師請せられて枕上に淨土教を說き、大に尊重せらる、源空上人讃岐に流さるにあたりて隨待す、海船の中に於て自ら紙を聚めて上人の像を造る、後赦されて京師に入り、嵯峨の東麓に上人の舊跡を求め、一寺を開き號して二尊院と云ふ、蓋し阿彌陀釋迦牟尼の二尊を安置するを以てなり、二尊院落成の後上人の紙造の像を塔中に納む、建長五年五月疾あり、七月廿七日（一說廿二日）念佛して寂す、壽七十八、（淨土傳燈錄、鎭流祖傳、淨土總系譜、本朝高僧傳）

タンクー　湛空（二四九八／二五五〇）〔眞宗〕伊勢高田隆崇寺の住持なり、　湛空は普妙院と號す、梅仙、梅花仙嶺道人等は其別號なり、俗姓稻垣氏天保九年十月十七日を以て伊勢河藝郡磯山村專照寺に生る、後、本山寺中隆崇寺の養子となり、悅淨院至妙院に就きて佛典を硏究し、齋藤拙堂土井有恪等に就きて漢學を修む、傍ら書を好み、宮崎青谷に學ふ、晚年洋畫を習ふ、明治十一年權少教正に補す、屢々法務に參與し、高田派の爲に盡すところ多し、明治二十三年九月三日寂す、壽五十三、著作法海一瀾、改悔文圖說、三重縣監獄教誨記あり、

タンシヨー　湛昭（一六四七）〔法相宗〕大和東大寺の學僧なり、　湛昭俗姓は菅氏、山城の人なり、寬盛僧都に師事して法相を學び、應和二年宮會に講師となり、比叡山の崇壽問者と論戰し、師酬答明斷、一座を驚かす、康保三年敕を奉して維摩會の講首となり、天元四年少僧都に任ず、貞元三年東大寺主務を領し、五年の後吉祥院を搬し、永延元年寂す　壽缺く、時人吉祥院僧都と呼ぶ、（本朝高僧傳）

タンシヨー　湛照（一八九一／一九五一）〔臨濟宗〕京都東福寺二代なり、　湛照字は東山、號は十地、俗姓不詳、備中一萬鄉の人、初め淨土の行業を修む、辨圓（聖一國師）の禪風を仰ぎて其下に歸し、三聖寺を開きて第一代となる、伏見天皇勅召し禪を問ひたまふ、師萬壽寺に住す、天皇寺產を賜ふ、雨を禱りて靈驗あり、特に水紋伽棃を賜ふ、弘安三年辨圓寂す、東福寺の席

を補すべきよしの遺命ありしも謙讓して嗣かず、藤原丞相再三堅請し、遂に第二代となるも、纔に九旬にして三聖寺に退隱す、正應四年八月八日寂す、壽六十二、法臘四十一、後勅謚寶覺禪師を賜ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

タンシヨー 湛照（一八九一）〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、湛照字は禪如、京都の人、比叡山の經海僧正の門人なり、文應元年三十歲にして山を離れ、招提寺に入り、戒律の學を研む、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

タンゾー 湛增（一七五〇）〔眞言宗〕紀伊新熊野別當なり、湛增は武藏坊辨慶の祖父なり、紀伊田邊にあり、大峯の修驗行を以て聞ゆ、寬治四年白河上皇の敕を拜し、高野山に登り、遍照光院を修繕す、これより高野山大峯兩山始めて關係あり寂年詳ならず、（高野春秋）

タンチヨー 湛澄 二三一一 二三七二 〔淨土宗〕山城報恩寺の僧なり、湛澄字は染問、別號向西子と云ふ、俗姓生國詳ならず、出家して淨土敎に皈し、智行共に高く、殊に和歌に長す、貞享三年三十六歲にして三部假名鈔諺註を作る、後法然上人の和歌を注して數〻靈告を蒙りたりと云ふ、正德二年二月疾あり、廿九日偈を作りて曰く、四大五蘊本是空、終時弗ㇾ免業力風、湼槃生死兩般浪、同入₌彌陀性海中₋と泊然として寂す、壽六十二、著作三部假名鈔諺註十四卷、同要解七卷、桑葉和歌集三卷、說法用歌集十卷、空花和歌集、秋の初風、淨土長歌註、音曹一言芳談、往生至要決要解、阿彌陀勸持鈔、女人往生傳、有鬼論等なり、（近世往生傳、續日本高僧傳）

ダンドー 湛堂 ゲンジヨー元丈を見よ、

タンニヨ 湛如 コーケー光啓を見よ、

タンネン 湛然 ジヨーオン乘恩を見よ、

タンヤク 湛益 ……二三二〇 〔淨土宗〕山城大善寺の僧なり、湛益は尊蓮社重譽幽海と號す、龍山に師事して法を嗣ぎ、初め瀧山大善寺に住し、後、新田大光院に移る、萬治三年十二月二十日寂す、壽缺く、法嗣門周あり、（淨土總系譜）

タンキユー 單岌 ……二三三五 〔淨土宗〕信濃隆芳寺の開山なり、單岌は順蓮社隨譽と號す、出家の後知哲に隨侍して宗乘を究め、遂に其法を嗣ぐ、信濃伊那郡上中關に隆芳寺を創して開山となり、延寶三年四月二十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

タンキヨー 單況（二〇一六）〔臨濟宗〕攝津報國寺の開山なり、單況字は無比、幼にして虎關和尙に從ひ、延文元年法兄龍泉淬に勸めて上書して元亨釋書を大藏に入れ後世に流傳せしめんとす、勅あり許さる、後、攝津報國寺に住し、開山となる、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

タンコー 單仰 キユークワク岌廓を見よ、

タンシン 單信 ゲンコ玄故を見よ、

タンシヨー 單淸（……）〔淨土宗〕佐渡某寺の僧なり、單淸は佐渡の人、壯年の比百餘輩を率ひて山に入り、礦を堀り穿入すること數里嗣窟一時に崩陷す、數日にして堀り出すに師獨り全し、直に世事を棄て出家す、長髮双肩に亂る人恠まさるなし、寂年詳ならず、（鎭流祖傳）

タンシヨー 單稱 チヨーサツ長察を見よ、

タンデン 單傳 モンシヨー文淸を見よ、

タンヨ　單譽（二三四四）〔淨土宗〕攝津安養寺の開山なり、單譽は其鄕貫詳かならず、法を聞悅に嗣ぎ、攝津河邊郡多田庄槻並に安養寺を開く、貞享元年二月三日寂す、（淨土總系譜）

タンク　堪久（一四九五）〔華嚴宗〕奈良東大寺の僧なり、堪久は桓武天皇の皇子なりと云ふ、出家して東大寺に投し、良慧僧都に師事し、華嚴宗を傳ふ、延暦十四年に空海登壇し、堪久に就きて具足戒を受けたりと云ふ、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

タンシキ　堪識　ショーソン盛尊を見よ、

タンヨ　堪譽　リョーツー靈通を見よ、

タンカイ　探海（一八九一／一九六八）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、探海字は月船、俗姓菅氏、播磨賀古郡の人なり、早年出家して書寫山に登り、後南北二京に笈を負ひ、講席に列し、三藏の聖敎該通せざるはなし、殊に密典に精し、既にして書寫山に歸へり、菴居して禪觀を事とす、龜山天皇師の學德を聞きたまひ、權法眼に昇す、飄然として去り、上野長樂寺に抵り、一翁豪の下に投ず、豪禪師曾て盛聞を耳にしたれば、厚く禮す、師始めて臨濟の宗風を知りて大に喜び、禪宗に歸す、時に聖一國師東福寺にありて盛聞東西に振ふ、師其下に掛搭すること數年なり、弘安四年一翁豪寂す、高弟斷岸空長樂寺の席を繼ぎ、僅に一年にして寂す、北條時宗長樂寺に請す、師住持二十年、禪敎律を以て大衆を示導し、法化大に揚る、この時高峰禪師下野の雲巖寺に留る、高峰月船併稱して東方の二甘露門と呼ばる、武藏の太守平氏、東永精舍を創立して師を請し、弟子の禮を執る、赤城山の修行者師の道譽を景仰し、就きて三歸戒を受く、師下野日光山に登り、山上に灌頂法を修す、德治二年關白九條師敎に迎へられ東福寺に住す、未だ期年ならずして微疾あり、先師聖一國師常樂閣に坐して涅槃に入る、老僧も亦之に倣はむとて、國師像の右に屹立し、筆を索めて偈を書す、四大假合、七十八年、末後一句、威音王前、泊然として寂す、實に延慶元年六月二十六日なり、門人正統塔を建立して遺骨を收む、後長樂寺牧翁一、普光塔を建立す、勅賜號法照禪師と云ふ、（行狀、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

タンイカ　潭海　ゲンショー玄昌を見よ、

タンコク　淡谷　コクワン古貫を見よ、

タンザン　坦山　リョーサク良作を見よ、

タンシユン　探春　ソオン祖恩を見よ、

タンシヨー　但唱（二二九五）〔天台宗〕武藏大日院の開山なり、但唱は攝津有馬高須の人なり、其母有馬藥師に祈請して子を擧く、即ち師なり、九歳出家し、十五歳木食但善の弟子となり、後、信濃の山中に籠り、百日間念佛三昧を修し、次に淺間嶽、及び紀伊那智山等に籠りて苦行す、終に江戸に至り、寛永十二年高輪に一寺を開き、皈命山如來寺大日院と云ふ、自ら五智如來の像を刻して安置す、時人芝のおほゝとけと云ふ、後、攝津有馬興勝寺の釋迦牟尼佛、山城鳴瀧の五智如來等を造りたりと云ふ、寂年月日詳ならす、（芝のおほゝとけ緣起、江戸名所圖繪）

タンショー　端照（……）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧

なり、端照は天龍寺夢窓國師の下にありて前堂に居し、其首座となりて國師の化を助くといふ、其寂年、及壽缺けて傳はらす、（延寶傳燈錄）

タンセー　彈誓　二二三三　二二七三　〔淨土宗〕山城古知谷某菴の僧なり、彈誓は美濃の人なり、母靈夢に感して孕むあり、師乃ち生れて奇瑞あり、幼名は彌釋麻呂といふ、生來俗世を厭ひ、十四歲道れて尾張に至り、次に伊勢に往き、天岩戶に籠居し、一七日間菩提心を禱る、後、紀伊熊野山に詣りて神異あり、甲斐ヶ澤に遊ひ、石窟に住すること三年なり、相模箱根山に登りて神異あり、後幡隨上人と交り、法化四方に擴かる、讃岐八島に遊ひ、古戰塲を吊ひて法施をなす、京都に上り鳥部野に菴居し、次に城北古知谷の石窟に住し、專修念佛を事とす、慶長十八年五月二十四日弟子を誡め、廿五日念佛回向し、寂然として化す、壽四十一、弟子石窟の側に精舍を營構し、一心歸命決定光明山阿彌陀寺といふ、師を請して開山となす、（續日本高僧傳、緇白往生傳）

タンソー　冉叟　シンレー心禮を見よ、

タンヨ　短譽　モンキヨー文慶を見よ、

タンヨ　嘆譽　リヨーチヨー良肇を見よ、

タンレー　丹嶺　ソチユー祖衷を見よ、

ダンシ　團芝　シヨーマ淸麿を見よ、

ダンヨ　團譽　二三三二……　〔淨土宗〕山城吟松寺の開山なり、團譽は俗姓波多野氏石見の人なり、法を不殘に嗣き、山城愛宕郡千束村吟松寺の開山となる、寬文十二年七月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ダンヨ　團譽　ゼンゴ禪牛を見よ、

ダンヨ　團譽　オクドー屋道を見よ、

ダンヨ　團譽　モンタイ聞諦を見よ、

ダンヨ　團譽　ギヨクオー玉翁を見よ、

ダンリユー　團龍　二三三九……　〔淨土宗〕江戶泰壽院の開山なり、團龍は成蓮社專譽と號す、常陸吉生の人、江戶小石川小日向なる還國寺に入りて剃髮し、普光國師に法を嗣く、後下谷坂本泰壽院の開山となり、延寶七年五月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ダンリヨー　團了（……）〔淨土宗〕下總延命寺の開山なり、團了は繁蓮社榮譽と號し、武藏大宮の人なり、了學に投して剃髮受業し、下總羽生に延命寺を開く、寂年、及ひ壽缺く、（淨土總系譜）

ダンカイ　斷鎧（……）〔眞宗〕長門萩光明坊の住持なり、斷鎧は肥後の人にして宗學を繼興院に承くといへとも師說に拘泥せす、自ら發揮するところ頗る多し、學階司敎に至りて終る、明治十九年六月勸學を追贈せり、著作淨土論註錄、六字釋提要、本願成就文錄、行信決決擇編各一卷、選擇集錄、本典錄、法要類文、和語類文各二卷、七祖論題三卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ダンコー　斷江　シユーオン周恩を見よ、

ダンシキ　斷識　カイセキ介石を見よ、

ダンケー　檀溪　シンリヨー心凉を見よ、

ダンズイ　檀隨　二三四〇……　〔淨土宗〕伊勢金剛寺の開山なり、檀隨は源蓮社本譽と號す、武藏江戶の人、業譽上人に

師事して法を嗣ぎ、伊勢馳出村に金剛寺を開く、延寶八年十一月十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ダンヨ　檀譽　モンテツ門哲を見よ、

ダンシユー　談宗　シギョク志玉を見よ、

チの部

チイ　智威（一四二三）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、智威俗姓不詳、唐に生れ、鑑眞に師事して戒律を傳へ、兼て天台を學ぶ、眞和尚に隨ひて來朝す、示寂の年時缺く、（律苑僧寶傳）

チウン　智雲（二一七六……）〔淨土宗〕武藏增上寺の第六代なり、　智雲號は上蓮社僧譽、俗姓は三浦氏、相模國の人、三浦家久の庶子なり、病弱にして戰を好まず、武藏國岩槻に至り、谷土田城主太田氏に寓し、延德の末花又村に天譽上人了聞の說法を聞き、其門に入りて學を究む、和歌を嗜みて了譽聖冏上人音譽聖觀上人の風を慕ひ、頻りに淨業を修む、文龜二年二月十二日師の讓りを承けて增上寺第六代となる、永正元年上杉顯定の朝良と戰ふや、愈世を厭ひ長松寺を建て隱栖す、仝十三年八月十四日寂す、（鎭流祖傳、三緣山志）

チウン　智運（二一一九　二一七三）〔時宗〕某寺の僧なり、　智運は上野新田の人なり、出家して時宗の第廿一祖となる、永正十年寂す、壽五十五、著作時宗要法記、神宣遊行念佛記若干卷あり、（淸淨光寺記錄）

チエー　智瑛（二四三三……）〔淨土宗〕江戸增上寺第四十八代なり、　智瑛は到蓮社典譽凉如海と號す、伊勢の人なり、幼にして度會郡射和村延命寺に入り、二十八代空譽の弟子となり、後三緣山嶋谷白隨上人の室に入りて修學し遂に學頭に進み、大念寺弘經寺傳通院等に歷住し、明和七年十一月增上寺に主となり、大僧正に任ず、安永二年二月二十五日寂す、壽缺く、筑前善導寺住務は三緣山より命する例なりしが明和八年二月十一日師の願により幕府より任命の事と定めらる、（三緣山志）

チエー　智英　ニチミョー日明を見よ、

チエン　智圓（一三三四）（……）大和元興寺の僧なり、智圓は俗姓鞍部氏、推古天皇の末に唐に渡り、歸朝の後元興寺に住す、天武天皇二年僧正となる、示寂の年時缺く、（僧綱補任、本朝高僧傳）

〔考〕本朝高僧傳に唐の嘉祥寺吉藏に師事すとあれども詳ならず、

チエン　智演（二〇三三……）〔淨土宗〕鎌倉光明寺の僧なり、智演は旭蓮社澄圓と云ふ、俗姓は源氏、和泉大鳥の人なり、父は和泉守義貞、母は百濟氏、九歲にして東大寺圓雅法師を頂禮して出家す、槇尾山に登りて兩部秘奥を究め、承遍觀豪の二老に參して天台宗を學び、東福寺に往き、虎關禪師に謁す、後京師に出で丶淨土宗小坂九品の流義を受け、東下して鎌倉光明寺に投し、寂惠定惠の二師に就いて、白旗流を受く、文保元年支那に遊び、廬山に登り、優曇普度大師に參して宗義を精窮す、留學すること五年、靈地を跋涉し、顯密の敎を究め、元の英宗至治元年佛圖澄將來の舍利、慧遠所持の蓮花

漏、幷に佛像經論等を携へて歸る、卽ち我が元亨元年なり、後正中元年後醍醐天皇の勅を拜して旭蓮社を創し、般舟三昧を修す、後村上天皇の勅を拜し、宮中に淨土敎を説く、南北の碩德之と論爭す、天皇益崇敬し、紫衣及び大經寺の額を賜ふ、永康元年天皇師を召して圓頓大戒を受け給ふ、其年天變地妖疫病等あり、勅あり師をして禳はしむ、天皇其功を賞して澄圓大菩薩の號幷に封戶田二頃を賜ふ、重て扶桑廬山の額を賜はる、世人淨土宗の中興と稱す、應安五年七月廿五日寂す、享壽九十歲、著作十勝論、驚覺論、松風論、獅子伏象論等あり、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

〔考〕本朝高僧傳に澄圓は宋人なりとあるも事實にあらず、

チエン　智淵（一三六三）〔……〕大和藥師寺の學僧なり、

智淵は俗姓大原氏といふ、惠輪が出家以前の子なり、藥師寺に住す、大寶二年三月少僧都に任ぜられ、同三年正月僧正となる、同年十二月寂す、（續日本紀、七代寺年表）

〔考〕七代寺年表、僧綱補任には、文武天皇二年三月十八日に少僧都となり、同十二月に大僧都に轉し、大寶二年僧都に登るとあり、今は暫く續日本紀に從ふ、

チエンニ　智緣尼　智泉の條を見よ、

チオー　智翁（……）〔臨濟宗〕近江靑蓮寺の禪僧なり、

智翁字は無才、幼にして聖一國師に侍し、後寶覺禪師に師事し、法燈國師の法嗣となる、萬壽寺に開堂し、後近江に靑蓮寺を開き、第一世となる、嘗て自ら頂相に題して曰ふ、爾不ㇾ似ㇾ吾、吾不ㇾ似ㇾ爾、畢竟如何、不是不是、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

チオート　智翁　エーシユー永宗を見よ、

チオー　智雄（一三六三）〔法相宗〕某寺の學僧なり、

智雄は大寶三年勅を拜し智鳳智鸞と同乘して唐に渡り、法相宗を傳ふ、此等智鳳智鸞智雄の傳を同宗の第三傳と稱す、（三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳）

チオツ　智越（……）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、

智越字は雲山、無隱範に師事し、印記を受く圓覺寺に住し、後淨妙寺に遷る、晩年禪昌菴に退居す、示寂の年時欽く、遺偈あり、問ㇾ佛佛不ㇾ知、問ㇾ祖祖不ㇾ會、百不會、百不知、是唯生、是唯死、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

チオン　智遠　キヨーチヨー敬長を見よ、

チカイ　智海（一九五六）〔戒律宗〕相模覺園寺の律僧なり、

智海字は心慧、號は道照と云ふ、宗燈の室に侍して毘尼を保受し、兼て密乘を傳へ、忍性に從ひて通受の羯磨を承く永仁四年北條貞時鷲峰山覺園寺を開き、師請に應して其開山となる、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

チカイ　智海　シユーテツ宗徹を見よ、

チカイ　智海　ニチゲン日源を見よ、

チガイ　智鎧（一五一一―一五七八）（華嚴宗）大和東大寺の學僧なり、

智鎧は一に智愷に作る、俗姓は内藏氏、京都の人なり、道雄僧都より雜華を傳へ、密敎を學び、傳燈大法師に任ず、延喜十年維摩會の講師となり、尋て法華最勝二會の講師を經、十二年春東大寺に住す、同十八年八月八日寂す、壽六十八、臘五十一、（本朝高僧傳）

チガイ　智愷　チガイ智鎧に同し、

チカクイン　智覺院　ニチケー日啓を見よ、

チカン　智鑑　二三三八……〔淨土宗〕京都知恩院第三十六代なり、智鑑は信蓮社玄譽忠阿寂照と云ふ、俗姓は平氏、遠州濱松の人なり、父は和田主水、師十三歳にして智童に從て出家し、諸宗に通達す、鎌倉建長寺に遊學すること三年、碧岩錄を研究し、禪宗を傳ふ、始め孤峯山に住し、尋て光明寺に住し、後に華頂山知恩院に上り、三十六代の住持となる、寛文年中勅あり、師を召して紫宸殿に淨土敎を說かしむ、是れより先寛文十五年七月智童より十八通の鈔を遺屬せらる、故に職に在る間を以て事理縱横鈔一部十五卷を編して師命に報す、時に攝津大坂に黃檗宗鐵眼道光と云ふ者あり、師の名を聞き、一日大谷に參す、師高座に坐し拂子を拈し、勢至觀音の兩圓通に依て三般の試問を擧ぐ、鐵眼惝縮して出づ、後伊勢山田に寂照寺を開く、延寶六年三月六日寂す、壽八十有餘、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

チカン　智鑑（……）〔曹洞宗〕能登長松寺の開山なり、智鑑字は照庵、初め祇陀寺に大智に參し、後松岸旨淵に師事して遂に印可を受け、能登永光寺に出世し、同國孝恩寺に移る、同國の刺史某長松寺を𠜇め師其開山となる、寂年幷に壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チカン　智侃　一九〇五／一九八二〔臨濟宗〕京師萬壽寺の禪僧なり、智侃字は直翁、上野の人、俗姓足利氏、工部侍郎足利泰氏の男なり、夙に出家し天台を學び、眞言に兼通す、建長寺に到りて蘭溪隆に謁す、隆一面器許す、後宋に渡り、諸宗匠を歷訊し、歸朝以來再び隆和尚に隨ふ、尋て東福寺に到り聖一國師に謁して益參究す、嘉元の末筑の承天寺に主たり、德治の初出羽太守大友親平豐後に萬壽寺を開きて師を請す、乃ち開山となり、禪風西國に振ふ、延慶三年相國九條忠教東福寺に迎ふ、乃ち同寺に主たり、僅に一年にして大友氏疾あり、切に末後の敎示を仰く、師東福寺を辭して西皈し、再び萬壽寺に住す、元亨二年四月十二日同寺に寂す、壽七十八、偈あり、應レ世隨レ緣、七十八年、撒レ手便行、古路坦然、諸弟子靈骨を分ち、萬壽寺の常樂塔、東福寺の光明藏に安す、南禪寺椿庭、壽塔銘を作る、勅諡佛印禪師といふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

チギ　智義　一九八六……〔臨濟宗〕京都萬壽寺の禪僧なり、智義號は松嶺後深草天皇の皇子なり、寶覺禪師（湛照）に就て出家し後建仁寺に投じ鏡堂圓禪師に隨ひ參究す、寶覺禪師の法嗣となり圓通三聖萬壽の三寺に歷住し後如意菴に退休す、嘉曆元年十月十一日示寂す、遺偈あり、昔年恁麽來、著趙州布衫、今日恁麽去、脫貼肉布衫、一去一來莫二相嫌一、發明千山與二萬嶽一、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

チギン　智誾　（……）〔臨濟宗〕京都天龍寺の首座なり、智誾字は悅巖、其嗣承詳かならす、天龍寺に居りて首座となり、說法に長ぜり、寂年、及壽缺く、（延寶傳燈錄）

チキユー　智丘　二二二八……〔曹洞宗〕肥前龍泰寺の開山なり、智丘字は降室、周防の豪族なり、夙に出家し、龍文寺雲菴透龍に從ひて遊方し、心要を發明して後永平寺に出世し、雲菴の席を繼きて龍文寺に住す、肥前檜越龍泰寺を立て師其開山となる、永祿十一年二月二十五日寂す、世壽缺く、（日

本洞上聯燈錄)

チキヨー　智慶(……)〔淨土宗〕鎌倉長樂寺の開山なり、智慶字は南無、出家して東國に在り、教觀を研究す、後京師に上り長樂寺隆寛に師事し、淨土教に皈し、東國に歸りて鎌倉に長樂寺を開きて大に弘通す、寂年缺く、門下信樂、隆慶、信承等聞へたり、(淨土傳燈錄、淨土總系譜)

チキヨー　智鏡(一八九八)〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、智鏡字は明觀、別號は月翁、久しく俊芿に侍し、教律を稟受す、俊芿の寂後定舜に咨決し、南北に赴きて性相の旨を學ふ、曆仁の初め宋に入り、諸刹を敲き、學成りて歸へる、泉涌寺を主とり、後來迎院に退く、靈芝の風を慕ひて晩に安養を修す、師宋にあるや蘭溪隆禪師と交り篤く、其東渡を進め其來朝して來迎院を訪ふ時、優遇して相模に赴かしむ、某年三月二日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

チキヨー　智鏡　クワンカク觀覺を見よ、

チキヨー　智敬　クワクショー赫照を見よ、

チグ　智弘(一四九五)〔眞言宗〕土佐金剛定寺の僧なり、智弘は空海に投し專ら定を修し、空海の禪座したりと云ふ土佐の金剛定寺の樹窟内に棲みて一生を終りたり、(弘法大師弟子譜)

チクー　智空(二三七七／二三四)〔淨土宗〕山城安養菴の開山なり、智空字は唯稱、號は覺雲、京都の人、俗姓は仲村氏なり、母は味岡氏の出、十四歳出家し、十八歳選擇集を講ず、十九歳良澄和尚に師事して倶舍、並に天台宗の三大部を學ぶ、二十三歳大衆の請に應し法華玄義を講ず、二十四歳大和法隆寺に往き了性律師に謁し戒律を學び、觀音院高榮に謁して法華勝鬘等の經を學び、勸學院に於て倶舍を講ず、後、高野山に登り、秘密灌頂を受く、尋で京都に皈り、草菴を營み、塞耳茅と名け、日々念佛三万聲に至る、幾何もなく壬生寺の下に移り、草菴を結び安養菴と名け、淨土の業行を修す、草菴を訪うて教を受け、得度受戒するもの二百餘人、遂に念佛の一流をなす、世にこれを壬生派と云ふ、延寶八年五月疾に罹り同月十八日寂す、壽六十四、門人遺骸を壬生寺の西南隅に葬る、著作念死念佛集七卷、自警集五卷、諫母艸一卷あり、(緇白往生傳、續日本高僧傳)

チクン　智暉(二三七七／一四四四)〔眞言宗〕山城春日寺の開山なり、智暉字は大幻、號は空空菴、俗姓不詳、播磨三草村の人なり、幼にして明石寶藏寺に投じて剃髮し、瑜伽を學ぶ、稍長じて京師に上り、智積院に止まり、專ら顯密性相を學ぶ、次に槇尾山に登り、毘尼藏を習ひ、五智山の曇寂に謁して顯密の蘊奥を究む、師大原野春日寺及播磨加東郡小山寺を刱し、兼て主どり、兩所に衆を接し、大法幢を立て、頻りに古三藏を唱ふ、晩年請に應して粟賀の法樂寺に遷り、天明四年二月十五日寂す、壽六十八、(續日本高僧傳)

チクン　智訓(二三一〇)〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、智訓字は耕隱、美濃池田郡小島村杉島氏の子なり、早年出家して圓成寺にあり、後南遊して阿波に到り、慈光寺廣照禪師の下に飯頭となり、舂炊の勞に服し、一日淘米の時、沙米倶に淘くの語に警省し、靈機轉撥す、行應、愚溪、龍門、抗州等の諸禪師に歴參し、後、福田大勝寺葦溟勸の嗣となり、同寺に住

し、法化盛なり、文化元年槐安國語を提唱す、江湖の雲衲來集するもの二千餘名なり、後勅を拜して妙心寺に昇り、特に勅號金剛正眼禪師を賜はる、嘉永三年七月一日疾を得、三日に寂す、（近世禪林僧寶傳）

チグワン　智願　ハクズイ白隨を見よ、

チケンイン　智見院　ニチセン日暹を見よ、

チゲン　智玄（一八五〇）〔……〕　下野の醫僧なり、智玄は下野安蘇郡糖尾村に居る、嘗て宋に赴きて醫方を受く、後鳥羽天皇不豫なるとき藥を進めて効あり、因て法眼に叙せらる、世に錄事法眼と云ふ、沒年傳はらず、（皇國名醫傳）

チゲン　智眼　二二九七……　〔淨土宗〕遠江心造寺の開山なり、智眼は廣蓮社讃譽怨目と號す、感譽に師事して法を嗣き、遠江濱松に心造寺を剏す、慶長二年三月二十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チゲン　智幻　二三四四……　〔淨土宗〕上野專修寺の開山なり、智幻は成譽と號し、其俗姓生國詳かならず、法を路白に嗣ぎ、上野下三田村に專修寺を剏して住し、貞享元年九月九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チゲン　智現　二四九五……　〔眞宗〕越後出雲崎淨玄寺の住持なり、　智現號は長生院　越後の人、高倉學寮に學び、文政元年寮司となり、金錍論を講ず、二年六月晦日擬講となり、法華文句を講ず、後歩船鈔、決智鈔、科註法華經を講ず、天保二年二月二十一日嗣講となり、三年約舟讃を講ず、天保六年正月十四日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

チゲンシ　智現子　シユーレー秀嶺を見よ、

チコー　智光（一三三三）〔三論宗〕大和元興寺の學僧なり、　智光は河内國の人、俗姓鋤田連、後改めて上村主と云ひ、出家して安宿郡鋤田の寺に居る、後、元興寺智藏に從ひて三論宗を受け、兼て諸經論に通ず、同時に禮光あり、亦三論宗に盛譽あり、智光相交り共に道行を修す、後禮光淨土の行業に意を傾け示寂す、智光大に悼惜し、日夜追懷す、偶夢中禮光の阿彌陀佛の淨土にあり、智光を見て淨土の行業を勸むるに遭ひ、大に感發し、これより專念阿彌陀佛に歸依す、夢中に見たる淨土の相を圖畫し、極樂寺を開きて安置す、これ智光の淨土曼陀羅と云ひ、日本三曼陀羅の一に數へらる、其示寂の年時缺く、著作淨土論疏釋五卷等ありしも今傳はらず、（日本現報善惡靈異記、往生極樂記、元亨釋書）

チコー　智光（二〇一二）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、智光字は絕照、夢窓國師に參して天龍寺に居り記室を掌り、後擢でられて第一座となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

チコー　智洪　二〇一一……　〔曹洞宗〕加賀淨住寺の禪僧なり、智洪字は無涯、加賀の人、幼にして出家し、業を可鐵鏡に受け、大乘寺に往きて瑩山紹瑾に謁し印可を蒙る、元亨三年加賀淨住寺に住む、晩年洞谷寺に移り、淨住寺に歸る、觀應二年五月九日寂す、遺骨を淨住寺と洞谷寺とに分ち納む、塔を新豐塔と號す法嗣寂室了光あり、（日本洞上聯燈錄）

チコー　智興　二三八八……　〔眞言宗〕山城智積院第十四代なり、　智興字は法音俗姓生國詳かならず、智積院に學び、越前瀧谷寺江戸圓福寺を經て享保三年智積院第十四代能化となる、師長谷寺第十八代能化秀慶僧正と相議し、仁和大覺に請

うて色衣の許可を受け、一山華美の風をなせり、能化の職にあること十一年、享保十三年六月十八日寂す、壽缺く、(密嚴諧脉　新義眞言宗史)

チコク　智轂 二二二六／二四九三 〔眞言宗〕出雲朝日寺の僧なり、智轂字は法輿、別號は海印、出雲松江の人なり、世々修驗の行者なり、智轂早年にして聰敏なり、稍長して學を好む、天明の頃例に依り金峯山に登る、時に廿一歳なり、道心奮興し、道俗に依りて志を父母に通し、自ら播磨相模寺に詣て、慧岳阿闍梨に師事し、剃度納戒す、寛政元年高野山に登り、普賢院深覺を禮し、灌頂を受く、爾來京攝に寓し、諸師の門に歷遊す、三十歳にして出雲に歸へり、鰐淵山敬光に就きて圓頓戒を受く、幾もなく京師に上り、東寺智積院に歷遊し、瑜珈の奧義を究め、且つ性相二門に通す、智積院にありて普門律師圓通と交り、且つ囑により佛國曆象編を校讐す、文化四年出雲に歸り、朝日寺に住す、時に四十二歳なり、文政十一年京都大道寺大衆の懇請に依り慈眼院に留る、天保年中仁和法親王の招請により南勝院に住し、顯密の敎義を講す、法親王特に摩尼院の號を賜ふ、天保五年三月九日寂す、壽六十九、法金剛院に葬むる、(續日本高僧傳)

チゴン　智嚴 二〇八三 〔曹洞宗〕大和補巖寺第二代なり、智嚴字は竹窓、近江の人なり、大源を拜して祝髮し、諸名宿に參して稍所省あり、了堂眞覺に補巖寺に參し、服勤して印可を付せられ、繼で其席を讓られ、第二代となる、後出てゝ總持寺に住し、大に宗旨を唱ふ、應永二十年加賀に往きて龍貞山瑞川寺を刱し、了堂を迎へて第一代となす、了堂の寂後遺命によりて院事を領す、應永三十年八月九日寂す、遺偈に曰く、金烏東出、玉兎西走、生也死也、全機現時と、茶毘して瑞川寺に塔す、(日本洞上聯燈錄)

チサイ　智濟 二一八一 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、智濟字は一川、俗姓は藤原氏、大重の族薩摩の人なり、同國福昌寺天祐宗津に參して印可を蒙り、永正十五年大守島津公の命に依り、福昌寺の虛席を補す、大永元年七月二十六日寂す、(日本洞上聯燈錄)

チサツ　智察 二一七四／二二四七 〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、智察字は以安といひ、美濃細目の人、姓は古田氏なり、性强暴にして里民に恐れらる、大仙寺先照一日村齋に赴き、黄昏に及ひて寺に歸らんとす、其の家師をして先照を送らしむ、途路先照の法話を聞きて頓に道心を發し、直に剃髮して道に入る、時に二十九歳なり、精修勤苦して業を勵む、後出て、行脚し、遍く諸方の禪師を歷問し、再ひ鄉に歸り、大仙寺先照の室に入る、所見を呈して遂に證語を受く、時に天文十七年五月一日なり、即ち首座となる、六月先照寂せしかば師其席を繼きて大仙寺に住す、勅を奉して妙心寺に住し、請を受けて瑞泉寺を主とる、一住一年にして栗栖の大泉寺に歸る、時に長藏寺席を缺く、師之を監す、再ひ妙心寺に住し、一年にして美濃長藏寺に歸る、後、尾張の劍光寺に移る、衆の請により美濃伊自良の東光寺を再興す、後大仙寺に居り、天正十五年三月二十六日寂す、壽七十四、臘五十、塔を大仙寺西北の山に建つ、附法の弟子東漸震、建章寅、惟天縱、斗山泰、瑞雲量の五人あり、(宗統八祖傳)

チシ　智至（・・・・）〔臨濟宗〕京都萬壽寺の禪僧なり、智至（一に知至に作る）字は愚溪、龍泉淬の法を繼ぐ、重ねて元亨釋書を刊行するとき、師一筆に繕寫す、南禪寺の笠仙和尚偈を寄せて祝す、初め筑の承天寺に住し、京都萬壽寺に遷る、寂年、及世壽缺く、（本朝高僧傳）

一遍上人

チシン　智眞（一八八九―一九四九）時宗の開祖なり、智眞（一に智心に作る）、一遍と號す、俗姓河野氏なり、伊豫刺史河野道廣の第二子なり、延應元年に生る、幼名松壽丸と云ひ、夙に三寶を崇敬す、七歲にして同國得智山繼教寺に入り、大衆の間に交はる、寶治二年十歲にして母を喪ひ、出家の志益切なり、建長五年十五歲にして同寺の緣教律師を仰いで剃度し、始めて隨緣と云ふ、專ら天台の教觀を修す、然れとも末代の凡夫出離の要路は淨土教にあるを思ひ、筑前太宰府に至り、西山派の開祖證空の弟子聖達を問ひ、親しく念佛の奧義を受けて信受し、自ら改めて智眞と云ふ、弘長二年父の喪を聞いて國に皈り、道心益堅固なり、文永八年に東國に遊ひ、信濃善光寺に詣し、數日參籠祈願して靈驗を感し、善導大師の二河白道の圖一幅を手寫し、伊豫に皈りて窪寺に一小菴を營み、日々戶を閉して念佛修行すること三年なり、文永十年に至り、自ら念佛の奧義を領悟し、一頌を作りて曰ふ、十劫正覺衆生界、一念往生彌陀國、十一不二證無生、國界平等坐大會、と、これより遍く諸國を遊行して十方衆生を濟度せんとし、先つ諸國の靈場に參籠して佛陀神明の加護を請はんとし、伊豫菅生の岩屋、豐前宇佐の八幡宮、攝津大坂の四天王寺、山城男山の八幡宮等に巡拜參籠し、後建治元年十二月紀伊に至り、熊野權現に參籠し、一百日を期して祈願し、靈驗により一頌を感得す、曰ふ六字名號一遍法、十界依正一遍躰、萬行離念一念證、人中上々妙好華、と、是に於て師大に喜び、自ら一遍と號し、建治二年三月廿五日勸進帳念佛札を携へて諸國遊行の途に上る、念佛札には南無阿彌陀佛決定往生六十萬人と記せり、蓋し六十萬人は、神授感得の頌の四句の初の各一字を取りたるものにして人數を限れる意にあらすと云ふ、先づ西國に至り、九州を遊行し、四國を經て京師に出て、北陸道の諸國を經て、信濃に入り、武藏より、上野、下野、奧州を遊行し、常陸を經て武藏に回り、伊豆相模を經、東海道の諸國を經、再ひ京師に入り、西の方山陰山陽の二道の諸國を遊行し、伊豫に歸り、再ひ出發して攝津に至る、此に至りて師か熊野權現の寶前より遊行の途に上りて以來十六年なり、日本六十餘州殆と足跡を印せさる地なし、念佛札を授け勸進帳に名を記したる者二十五億一千七百二十

四人に及びたり、正應二年八月兵庫の觀音堂に滞留して最後の法談を開き、自作の書冊を火中に投し、一代の聖敎は今日滅盡して唯南無阿彌陀佛を留む、と、弟子を顧みて曰ふ、自も南無阿彌陀佛、他も南無阿彌陀佛なり、故に汝を他南無阿彌陀佛と名くべし、と、これより法脈を嗣く者皆他阿彌陀佛と號す、同月廿二日阿彌陀經を誦しなから眠るか如く寂す、壽五十一、師和歌を善くし、秀作多し、著作の傳はるもの語錄二卷、播州問答集二卷（持阿記）あり、後に諡號を圓照大師と云ふ、（六條緣起、繪詞傳緣起、播州問答集、本朝高僧傳、淨土總系譜）

〔考〕一遍上人の事蹟諸傳を參照するに其年時等往々にして一致せす、今主として六條緣起、繪詞傳緣起、播州問答集序文等を參照斟酌したり、其異說は煩を恐れて一々擧けす、

チシン　智津　エーサン榮山を見よ、

チジヤクイン　智寂院　ニチショー日省を見よ、

チシユー　智宗（一三五〇）（……）入唐學問僧なり、智宗入唐の年時詳ならざるも、持統天皇四年九月義淨願等の一行と共に筑紫に歸着す、同十月京師に入る、事蹟詳に知る可からず、（日本書紀）

チシユー　智周　二三一九 二四〇三　〔天台宗〕薩摩佛日寺の學僧なり、智周字は徧詢、號は願王院と云ふ、近江膳所の人なり、出家して比叡山に登り、靈空に師事し學名高し、寛保三年九月廿一日寂す、壽八十五、著作台宗二百五十題十五卷あり、

チシユー　智秀　ニチカク日覺を見よ、

チシユン　智舜（一九二九）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、智舜は幼にして奈良に遊び、八宗を綜研し、東南院樹慶に師事して三論を承け、僧都に任す、初め東大寺にありて後大和光明山に移る、正嘉元年中請に應して知足院に三論を講ず、文永六年實相照に招かれて戒壇院に三論を講す、寂年及壽缺く、門下の神足に聖然、證禪等九人あり、皆能く師道を唱ふ、（本朝高僧傳）

チジユン　智順（……）〔曹洞宗〕越前松隱寺の禪僧なり、智順字は承顏、出家して敎乘を習ひ、玉田榮珠に參して得悟し、其席を繼きて越前松隱寺に住し、後總持寺に遷る、寂年缺く、法嗣虎溪正淳あり、（日本洞上聯燈錄）

チジユン　智順　二二七八　〔淨土宗〕對馬海岸寺の開山なり、智順は心蓮社傳譽と號す、俗姓は佐伯氏、肥後の人なり、阿譽隨巖上人に師事して法を嗣ぎ、對馬府中に海岸寺を開きて法化を布く、元和四年十月二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チシヨー　智樵（……）〔曹洞宗〕越前慈眼寺の禪僧なり、智樵字は天巖、越前心月寺海團梵覺に參すること十年にして印可を蒙り、其席を補し、慈眼寺に遷る、晩年英林寺を剏して住し、某年寂す、世壽缺く、法嗣大雄亮磨の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

チシヨーイン　智照院　ニチゲン日玄尼を見よ、

チジヨーイン　智靜院　ニチテー日貞を見よ、

チジヨーイン　智定院　ニチエ日慧を見よ、

チスイ　智水　リヨーニヨ良如を見よ、

チセー　智盛　ダイリヨー大了を見よ、

チセキ　智碩 (二〇六〇) 〔臨濟宗〕周防正法寺の開山なり、智碩字は大圓、周防の人、州の高山寺棊山仙に投じて剃髪得度し、其印可を蒙り、京都に登り、建仁東福兩寺の間に掛錫し、諸老に擧けられて數々高職に任ず、久しくして郷に皈り、高山寺に開法し、其廢頽を興す、應永七年豐後大守大友氏師の名を聞き奏上し、萬壽寺に招く、然れとも師固辭して往かす、後正法寺を剏し、門を閉ちて跡を晦まし、某年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

チセン　智闡 二一二一／二一九六 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、智闡字は提室、大東寺の幾年豐隆に參して其法を嗣き、其席を補す、大永二年夏雨を禱り靈驗あり、天文五年四月二日寂す、壽七十六、塔を承天寺に建つ、法嗣虎溪正淳あり、(日本洞上聯燈錄)

チセン　智暹 二三五〇／二四二八 〔眞宗〕播磨魚崎眞淨寺の住持なり、智暹は遊心齋と號す、汝岱に就きて業を受け、二巖寛水等と學友たり、諸部に該通す、寶曆の初め學黌にて論註五教章等を講し、義敎と共に譽を馳す、時に能化職缺くこと久し、大衆義敎を立てんと欲し、或は智暹を立てんと欲す、而して義敎に歸するもの稍多し、義敎遂に能化の任命を受く、是より智暹一方に僻處して法化を務となす、門戶繁盛して英才に乏しからす、明和元年本尊義を著し、暗に日溪の義を彈す、大衆憤激し、本山に對論して本尊義版を毀つ、後、題を易へ文を修し改刻流布す、明和五年五月十四日寂す、壽七十九、著作大經正義錄四卷、本典校本六卷、阿彌陀經展持鈔九卷、選擇集瀉瓶鈔十卷、本典樹心錄九卷、二卷鈔樹心錄四卷、二門偈流情記三卷、御文解十四卷、略述法身義一卷、或問篇一卷、高僧和讃正説六卷、正像末和讃正説十二卷、本尊義一卷、本尊義斥謬答釋一卷あり、(本願寺通紀、本願寺派學事史)

チセン　智泉 一四四九／一四八五 〔眞言宗〕山城報恩院の開山なり、智泉は讃岐の人、弘法大師の甥なり、俗姓は菅原氏、家世々州の瀧の宮宮司たり、母は佐伯氏の出にして大師の姉なり、後に染衣して智緣尼と號す、師延曆八年二月十四日生る、九歳の時空海に携へられて大安寺に入り勤操に事ふ、十四歳近士となり延曆廿三年剃髪受戒し、大師入唐するに從ひて侍者となり、觀風弘益して歸へり、兩部の密灌を受け、且つ諸の秘義を質す、大同の末年河内高貴寺にあり、父母を思ふの情禁すること能はす、歸省して父の病を見る、父逝去して喪に居ること百日、後、入京して高雄山に空海の室に入る、橘皇后嘉智子密かに子を祈ることあり、山城相樂郡に報恩院を剏し、師を請して禱らしむ、弘化三年十二月空海の命により、高雄寺の三綱司となり、十二年四月十六日大師の指授により諸天灌頂神菩薩灌頂神二尊を圖寫す、天長元年九月廿七日高雄神護寺に廿一口の定額を置くに方り、師も亦其數に入る、同二年二月十四日高野本院に寂す、壽三十七、臘二十二、(弘法大師弟子譜、弘法大師弟子傳)

チセン　智泉　ニチリ日利を見よ、

チソー　智聰 (二一六五) 〔淨土宗〕相模宗圓寺の開山なり、智聰は督蓮社法譽と號す、其鄕貫詳かならす、源譽上人に就て出家受業し、永正六年九月十七日上人より璽書を授與せらる、光明寺に住し、相模三浦に宗圓寺長井寺を開き、

駿河に報士寺を剏して開山となる、寂年壽缺く、嗣法の高弟に阜安、叡譽、禪芳等あり、(淨土總系譜)

チゾー 智藏(一三四七)(……) 入唐學問僧なり、智藏俗姓は禾田氏、出家して學譽あり、弘文天皇の朝に唐に渡る、時に吳越の間に高學尼あり、智藏就きて業を受くること六七年、學業大に進む、同伴僧等頗る忌害の心あり、智藏これを察知し、遂に髮を被りて狂のまねし、身を全くするを得、持統天皇の朝に東歸の途に上る、同伴陸に上り、經書を曝す、智藏襟を開きて風に對して曰ふ、我も亦經書の奧義を曝さむと、同伴皆嗤笑す、後試業に際し座に昇り敷演し、辭義峻遠、音詞雅麗なり、論難蜂起すと雖應對流るゝが如し、皆屈服す、天皇嘉して僧正に任じたまふ、時に年七十三、示寂の年時缺く、(懷風藻)

チゾー 智藏(一三三三) 〔三論宗〕大和法隆寺の學僧なり、智藏俗姓は熊凝氏といふ、福亮が出家以前の子なり、父福亮と共に慧灌に師事し三論を學ぶ、白鳳二年三月大和川原寺(後に弘福寺と號す)に於て始めて一切經謄寫の事あり、智藏與りて功勞ありしかば、同月僧正に任せらる、後法隆寺に住して三論宗を弘演す、示寂の年時缺く、門下に道慈、智光、禮光の高僧あり、(扶桑畧記、僧綱補任、元亨釋書)〔考〕元亨釋書、本朝高僧傳に、唐に航し嘉祥寺吉藏に謁したりとあれども、年代相違すれば取らず、三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳に僧正任命年時に異說あり、今は僧綱補任、扶桑略記を取る、

チタク 智琢(……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、智琢字は玉峰其鄉貫詳かならず、極仙初に參して其法を嗣ぎ、駿河淸見寺に住し、後京都建仁寺に遷る、寂年壽缺く、(延寶傳燈錄)

チタツ 智達(一三一八) 〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、智達俗姓生國詳ならず、齊明天皇四年七月に勅を拜して智通と共に出發し唐に渡り、玄奘三藏並に其門下なる窺基に就きて法相宗を學ぶ、歸朝、並に示寂の年時缺く、(日本書紀、三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳)

チタン 智短(二二二三……) 〔淨土宗〕駿河華陽院の開山なり、智短は尊蓮社眞譽頗故と號す、其俗姓生國詳かならず、感譽の室に入りて剃髮受業し、宗乘の奧義を究め、遂に其法を嗣ぐ、亨祿中將軍德川家康祖母源應尼の爲めに駿府に華陽院を建て、師請せられて其開山となる、永祿六年三月十五日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

チツー 智通(一三三三) 〔法相宗〕大和觀音寺の開山なり、智通は俗姓未詳、天性聰敏、道を學びて倦まず、齊明天皇四年七月に勅を奉じて新羅船に乘じ唐に渡り、玄奘三藏に待して法相宗を受け、窺基にも學ぶ、歸朝の後大和に觀音寺を開き、法相宗を弘演す、白鳳二年に僧正に任ぜらる、同年に同國矢田に金剛山寺を開きたりと傳ふ、智通並に智達の傳を法相宗の第一傳と稱す、示寂の年時缺く、(日本書紀、三國佛法傳通緣起、元亨釋書、僧綱補任〔考〕本朝高僧傳に白鳳元年三月僧正に任せらるとあれども、今は僧綱補任に從ふ、

チツー 智通(一九七四 二〇六三) 〔淨土宗西山派〕美濃立政寺開山な

り、智通字は光居といふ、石見國池田莊の人、正和三年に生る、因幡の智圓に就きて得度す、智圓は源空上人の六世の法孫なり、學成りて後東國に化導す、文和二年四十歳にして葛西庄司の家に宿す、岐山の下に達智玄了といへる修驗者あり、師と對論して遂に降服す、文和三年後光嚴天皇南軍を避けて美濃小島里に行幸す、二條關白良基の執奏に因りて始めて天顔を拜す、勅を奉して天下の安寧を祈る、文和四年詔を受けて立政寺を搬す、關白良基奏して境內四町の地を賜ふ、永德二年後圓融天皇不豫の時、召されて金光明最勝讖儀を修す、此年龜甲山立政寺の額を賜ひ、且つ六字名號の宸翰を賜ふ、至德三年後小松天皇勅して黃衣を賜ふ、明德二年代々の住職常に紫衣大和尙位に任するの綸旨を賜ふ、是れ淨土宗紫衣着用の始なりといふ、應永八年八十八歳、勅あり、菩薩の尊號を賜ふ、應永十年五月朔日寂す、壽九十、臨終示衆に品、曰く、往生在₂初一念₁、當得在₂死期₁、猥托₂本願₁、勿ㇾ誤₂戒₁と、著作四帖疏口筆錄十卷、選擇集口筆錄三卷、照明記三卷、論註口筆錄若干卷あり、（光居菩薩傳）

チテツ　智哲　二二六二 二三三九　〔淨土宗〕武藏江戶增上寺の第二十五代なり、　智哲は乘蓮社頓譽と號し、心阿正心と云ふ、美濃國の人なり、俗姓は戶田氏、慶長七年に生れ、七歳にして京師に上り、稱名寺に於て出家す、元和元年增上寺に登り、國師に師事し、其才譽檀林に冠たり、始め命を受けて大嚴寺に住す、再命を受けて傳通院にうつる、寬文二年九月廿五日增上寺第二十五代の貫主たり、同しき九年七月廿三日麻布に居し、八月十日寂す、壽六十八、師は詩文に長し、待月雜集三卷あり、（鎭流祖傳、三緣山志）

チトー　智燈　ショーゲン照玄を見よ、

チドー　智幢　……二五二四　〔眞宗〕美濃須脇覺明寺の住持なり、智幢は（一に智道に作る）松菴（一に拙菴）と號す、寮司となりて天保三年より高倉學寮に義林章解深密經を講し、弘化元年七月廿五日擬講となり、同四年より成唯識論を講し、安政六年七月十六日嗣講に進み、萬延元年正信念佛偈文類聚鈔入出二門偈を講し、元治元年七月十三日寂す、壽詳ならず（眞宗史料）

チドー　智幢　（……）　〔曹洞宗〕備中吉祥寺の開山なり、　智幢字は說通俗姓生國未詳、初め慶屋に師事して法眼を印せられ、後備中小田郡に遊化して棲隱の地を求め、寺を築き萬松山吉祥寺と云ふ、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

チドー　智幢　二四四〇 二四九三　〔眞宗〕尾張赤津萬德寺の住持なり、　智幢初の名は諦道といひ、初め高田派萬德寺に住せしか後本山常照院に住す、講師に任し、天保四年十一月廿二日寂す、壽五十四、本定院と號す、

チドー　智幢　ホージユー法住を見よ、

チドー　智道　チドー智幢に同し、

チドー　智道　ニチミヨー日明を見よ、

チドー　智洞　……二四六五　〔眞宗〕京都一條淨敎寺の住持なり、　智洞は桃花房と號す、京都五辻勝滿寺淨謙の男にして出てゝ淨敎寺を繼く、其寺一條街にあるを以て桃花房と號す、少にして陳善院の門に入りて宗乘を習學し、後華嚴を究め造詣する所あり、敏才を以て世に知らる、明和四年本尊義に就

き智暹と對論の時、巧存、繼成、天倪と共に一方に名あり、巧存沒するに及び、寛政九年五月第七代の能化職となる、遂に宗内の騷擾を起す、是を三業惑亂といふ、蓋し巧存の遺說を紹述し、欲生正因三業歸命を唱導して正義の徒を宗義に背するものとしたるなり、幕府の命により罪に伏し獄中にて寂す、實に文化二年十月二十二日なり、著作、選擇集玄談、歸三寶偈摘要記、本書分科、麗藏明藏互闕目錄、各一卷、般舟三昧經講林、二卷鈔講林、略文類講錄、正信偈講林頭解、各二卷、觀經講林桃華錄、二門偈講林、龍谷學黌現存書籍目錄、華嚴綱目記、各三卷、勝鬘經隨疏義記、正信偈講林助覽、往生禮讃講林、玄義分講林、小經講林、各四卷、維摩詰經隨疏義記五卷、高僧和讃講林六卷、般舟讃講林十卷、(本願寺派學事史)

チドー 智洞 二三八八 二四三九 〔眞宗〕能登菅原明傳寺の第八代なり、智洞は法名如達能登の人なり、京坂に出學し内外の學に兼通し、勸導に巧なり、安永八年十月二十八日寂す、壽五十二、後世眞宗の勸導は、粟津の義圭、菅原の智洞の二人を推す、著作勸導簿照二十卷、芙蓉篇十卷、巍々篇五卷、言々海、同後篇、無盡藏、各三卷等、戲作浄瑠璃七種あり、詩一首を左に錄すべし、奉寄痴龍富君、君家彩筆若レ存レ神、明月清風字々新、豫識自今楮皮貴、宣レ流二海内一不朽珍、

チドー 智童 二二三四 二二九九 〔淨土宗〕武藏增上寺の第十九代なり、智童號は登譽、江戶淺草の人。(一說に父は山口好景)天正二年三月に生る、文祿二年廿歲にして淺草法源寺聞諦上人に從ひ剃髮し、其の駿府寶臺院に移住するに從ひ、世務を助く天性穎銳なり、志を起し敏利ならむことを相模大山の不動尊に祈り、江の島に詣づ、初め師に寶臺院に從ひし時、請ひに依りて西福寺に住し、聞諦寂するに及びて寶臺院に主たりしが、命に依りて大光院に轉し、傳通院に第三代となり、寛永十二年九月增上寺の第十九代となり、仝十六年正月九日寂す、壽六十六、(一說五十四)法臘五十二、(三緣山志)

チドー 智堂 二三八六 二四六〇 〔淨土宗〕武藏增上寺第五十三代なり、智堂は耀蓮社巖譽在阿と號す、伊勢國多氣郡丹生村の人、父は梅田某と云ひ醫業なり、師幼より學業を勵み、塵事を厭ふ、同國度會郡射和村延命寺還譽に事へ、十七歲にして出家す、元文六年正月十一日增上寺に入り、翌年智瑛上人に師事す、延享元年十一月尊譽大僧正の下に五重相承し、安永四年十二月十六日命を奉して靈巖寺に住職す、天明四年六月隱居す、是れより諸方の名山勝塲を巡拜し、獨り山水風月を樂み、大崎村の古堂宇に幽居す、寛政二年十一月廿日不時に幕府の命を蒙り、傳通院に進み賜紫の光榮あり、同四年二月增上寺貫主となり、十一年三月廿四日職を辭して麻布一本松に移り、翌十二年五月十六日寂す、壽七十五。法臘五十九、

チトク 智得 チユーシヨー中聖を見よ

チトツ 智訥 (一九九九) (臨濟宗)和泉大雄寺の禪僧なり、智訥字は古劍、三光國師に參して宗旨を究め、和泉の大雄寺に出世し、法化盛なり、後村上天皇宮中に召して法要を問ひ、寵遇殊に篤く。佛心慧燈國師の號を賜ひ、大雄寺を登して南禪寺に比す、寂年、及び壽缺く、(本朝高僧傳)

チヂン 智念 オクドー憶道を見よ、

チハク 智白 (二二九九) 〔淨土宗〕尾張建中寺の僧なり、

智白姓は長谷川氏、武蔵の人なり、六歳にして増上寺智童に見ゆ、稍長して南都に遊び、宗學を受く、紀州大納言酒井雅樂守其道譽を慕ひ崇敬渇し、高野山善導寺に住し、幾何ならすして尾張國大納言の請により、退中寺に住す、示寂の年月日缺く、（鎮流祖傳）

チホー　智鳳（一三六八）〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、智鳳俗姓生國詳ならず、大寶三年に勅を拜して唐に航し、濮陽の智周に謁して法相宗を受け、數年にして歸朝し、慶雲三年十月に維摩會の講師となる、示寂の年時缺く、門下に義淵出づ、（三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳）

チホン　智本　カイオー海應を見よ、

チミヨー　智明（二四七〇……）〔眞宗〕豐後古城淨證寺の住持なり、智明は豐後の人、正行寺内淨證寺に住じ、文化二年東本願寺擬講となり、四年學寮に三論玄義を講ず、七年五月一日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

チミヨー　智明（一九五二 二〇二六）〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、智明字は蒙山、俗姓不詳、攝津玉造の人、幼時父母を喪ひ、元の皈化人なる將軍某に養育せらる、施藥院に投じて僧となり、戒律を學ぶ、十六歳南禪寺の規菴圓を問ひ、師資の禮を執る、圓寂後一山寧に依る、嘉曆の末相模に下り、諸禪刹を歷問す、明極俊の下に第一座となる、既にして建長寺中の宗蒲菴に屏居し、大藏經を閲讀し、課餘韵事を樂む、曆應の初將軍足利尊氏に聘請せられ筑前の聖福寺に出世す、一住六年にして京師に上り、足利直義に歸依せらる、建仁寺南禪寺に歷住す、南禪寺に上搊院を開き、退休の所となす、將軍足利義詮に請せられ、營中に法要を說く、後光嚴天皇臨幸あり、金字法華經一部、水精念珠一臂、錦袴三領を賜はる、師は少時より日課法華經一部を讀誦し、寒暑闕くるなし、毎夏首楞嚴經を講す、貞治五年八月二十日示寂す、壽七十五、門人無欲舍利塔を建て、靈骨を收む、遺偈に曰ふ、住ニ妄想境一滿九十年、虛空崩裂、倒上ニ梵天一、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

チミヨーボー　智明房　ライサイ賴西を見よ、

チユ　智踰（一三一五）（……）奈良の僧なり、智踰は一に知由に作る齊明天皇四年十一月に指南車を造り獻す、事蹟缺く、（日本書紀）

チユー　智幽（二三七九 二三六五）〔天台宗〕比叡山安樂律院の中興なり、智幽字は玄門と云ふ、伊藤安濃津中島の人、俗姓は茨木氏なり、父理兵衞は伊賀國主藤堂家の臣、母は山中氏の出なり、寛文六年正月晦日を以て生れ、延寶六年十一月十三歳にして州の神山一乘寺に登り、順海阿闍梨の室に投ず、翌年十一月尾張觀心院珍舜僧正に從て剃髮し、天和二年十七歳にして比叡山に登り、滋賀院に寄住し、明年西塔喜見院に移る、貞享元年十九歳の時妙立和尙を拜して法要を聽き、齋戒を受け、二年正月菩薩戒を受く、三年妙立の法を慕ひ、山を下りて平野等の處々に寓居して法要を稟く、元祿元年二十三歳にして伊勢神山に皈り、師友の勸請により、一乘寺に主となる、幾何ならずして寺を棄てゝ京都に上り、妙立に從ひて律徒となり、專ら道業を修し、二十五歳形同沙彌となる、同年七月妙立和尙寂す、これより靈空和尙に從うて法を受く、五年靈空和尙に從ひて安樂院に寓居し、秋洛東に歸る、翌年安樂院

改めて律院となし、靈空請に應して移り住せしかば、師も亦了轍端峯義節即超と共に隨ひ行き、十一年五月三十三歳にして安養院の灌堂和尚を證明とし、了轍等と梵網瑜伽及十戒を受け、法同の沙彌となり、同年具足戒を受く、十四年三十六歳の時伊勢神山一乘寺を改めて律院となし、盛んに法幢を樹つ、寶永三年靈空安樂院を辭して山麓の別院に退き、師をして席を繼かしむ、師時に四十一歳なり、七年輪王寺宮の命により、安樂院正殿建立の工を始め、正德三年落成し供養の儀を設く、此歳病を以て席を辭し、山麓に草菴を結びて退隱す、享保元年七月悉地院慧洞より秘密灌頂を受け、同月二十九日靈空より兩部灌頂密印等を傳へ、八月二十四日安樂院に於て南部灌頂を行ひて眞蛟に授く、是れ安樂院密灌の始めなり、同二年備前岡山圓然廢寺を興して律院となし佛心寺と號し、安樂院の枝院に屬せしめ、靈空を請ず、靈空老を辭し師をして代り赴かしむ、師因て佛心寺に赴き、律軌を定め諸徒の請に應じ、講經説法す、齋を受け、佛號を課する者擧けて數ふべからず、歸路書寫山、增位山、法華山、刀田山等遍く經歷し、書寫山に於て叡山灌頂幷寫山灌頂を授く、五年洛東岡崎功德菴に住し、翌年聖護院邑至心菴に移る、八年東叡山淨名院律院となり、秋靈空に代りて赴き律軌を定め、衆の請に應して講經説法し、大に親王の崇信を蒙る、九年日光山に詣で、中禪寺に登り、華藏院にて法要を説く、寶永十四年公寛法親王日光山に律院を興し、師をして東叡山より日光山に赴き、律院清軌を立てしめたまふ、十八年三月安樂院に於て四分衆法布薩を行ひ、二十年正月十一日神山義節和尚入寂す、因て師四月大乘寺に往き、夏過ぎて至心菴に歸る、元文元年九月安樂院に於て傳法灌頂を行ひ、義珍、性貫に授け、寶道、覺道、珍州、現脫、籠山の僧禪光院妙中の五人に受明灌頂を授く、これ安樂院受明灌頂の始めなり、四年十月四日靈空幻幻菴にて寂し、公遵法親王令して曰く、今より玄門を崇信すること靈空に異ることなし、一派の徒亦靈空の如くすべし、と、同年冬妙法院宮至心庵に來り、師に菩薩戒を受け、數ゝ殿に請し法要を問ふ、五年伊勢榊原の溫泉に浴し、太守藤堂高豐と寒松院に相見へ、これより崇信最も渥し、寬保三年八十一歳の時安樂院一年輪番の式を定め、條制を製し、永く一派の準繩とす、延享二年四月傳法灌頂を行ひ、忠谷、全空、珍洲、現脫に傳へ、時に受明灌頂を受くる者多し、同年輪王寺宮上洛し、數ゝ有門菴を訪ひて師に見え、法要を問ひ、且師の老衰を憂へ、其輔佐となる者をして近く住せしむべきの旨、安樂院の衆に命ず、衆即ち議して忠谷和尚をして至心菴に住し、師の輔佐たらしむ、法親王畫工に命じ、師の像を圖せしめ、自贊辭を製す、又更に一幅を圖し、自ら其贊辭を寫し、東台山に送り安樂院に藏す、寶曆元年紀伊和歌山明王院高映新に律院を建て寂光院と號し、師を請して第一世たらしめんとす、師老病自ら往く能はず、珍洲をして代り往かしめ且つ高映の願に應し、圓戒場の三大字を書して與へ、彫て僧堂の額となさしむ、翌寶永二年五月十三日有門菴に於て眠るが如く寂す、壽八十七、臘五十三、同月十六日遺骸を山門安樂院靈空和尚の塔南に葬る、（玄門大和尚年譜）

チユー　智祐　ニチユー日祐を見よ、

チ（智）ユ

チユー 智友　ユーシヨー宥性を見よ、

チユーイン 智勇院　ニチシユー日收を見よ、

チヨ 智譽　ピヤクドー白道を見よ、

チラン 智鸞（一三六三）〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、智鸞俗姓生國詳かならず、大寶三年に勅を奉して唐に航し智鳳と同乘す、歸朝、並に示寂の年時缺く、（三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳）

チリユー 智隆 二四七六 二五二五〔眞言宗〕土佐發生寺の僧なり、智隆は土佐高岡郡仁井田村の人、堀内新助の二男、幼名を勇次と云ふ、同郡半山郷繁國寺に入りて剃髮し、智隆と改む、學行日に進み、後擧けられて須崎發生寺に主となる、これより先き須崎の土人久しく惡風に染み、墮胎拉殺の弊盛んに行はる、師寺に入りて其惡風を洗除せんと欲し、富者に向つては恒に倫理を說き、貧者には金穀を給與して生兒を鞠育せしむ、而して尙ほ育するに苦しむものあれば乳母を傳して撫育せしめ、稍長して父母に還す、かくすること數年、弊風大に改まり、救養するもの三十餘人に及ぶ、文久二年同郡多の郷觀音寺に移る、別れに臨み、村民父母に別るゝの思をなし、道路に相哭す、初め國勢の日に衰頽に趣き、上下騷然として人心穩かならざるを憂へ、身を以て國家の犧牲に供せんとし、遊學を以て名とし、遂に國を去り、此歲十一月京都に上り、各藩の志士と交はる、明年二月廟議外攘に決す、師大に喜び、同志と爲すあらんとし、五月土佐に歸り、諸寺の佛器冗具を集め、砲礮を鑄造し、國用に供せんとし、國中を遊說せしも諸寺の僧皆師の言を肯せず、師其益なきを覺り、去りて伊豫に入り、大和を經て再び京都に往く、事皆蹉跌し、憂悶措く能はず、十一月豐後に往き、庄内谷中原村正徳寺の別菴に潜居し　慶應元年七月二十六日寂す、壽五十、紹圓法師と謚す、（南海義烈傳）

チリユー 智隆（一三四七）〔……〕新羅の歸化僧なり、智隆持統天皇元年新羅の國使に隨ひて來朝す、事蹟詳かならず、（日本書紀）

チリヨー 智了 二三七〇 二四四〇〔淨土宗〕山城法然院の僧なり、智了字は明覺、俗姓不詳、但馬廣谷の人なり。幼にして了海和尚の弟子となる、十一歲の時佛前に誓ひて曰く。我れ生涯出家相續して道心堅固に一心念佛して上品に往生せむ、と、乃ち日課念佛一万聲せむことを約す、十五歲增上寺に登り、精勤を以て聞ゆ、二十一歲奥州に遊び、出羽本庄に到る、檀越等の請により常念寺に住す、三十一歲の時に遁れて尾張に遊ひ、義燈和尚を問ひて八齋戒を受く、花頂山眞察大僧正の推擧により、獅子谷法然院に住す、一住七年。山門觀を改む、後、岡崎法春菴に居る、次に一乘寺村清賢院に居る、安永九年八月二十三日正念に寂す、壽七十一、（續日本高僧傳）

チロー 智朗　ニチケン日賢を見よ、

チエン 知圓　グワツシヨー月性を見よ、

チオン 知恩（……）〔曹洞宗〕越前慈眼寺の禪僧なり、知恩字は報扇、慈伯道順の法を嗣ぎ、備後龍雲寺に主となり、越前慈眼寺に移る、後、能登の總持寺に出世し、某年寂す、壽缺く、法嗣順應慶隨あり、（日本洞上聯燈錄）

チクー 知空 二二九四 二三七八〔眞宗〕京都光隆寺の學僧なり、知

空字は性慶、三去叟と號す、俗姓は渡邊氏、京都三條東下粟田の人、父を明性、母を妙喜といふ、俗姓は田原氏なり、十歳にして内外の典籍を誦通し、既に參究の志あり、翌年鳩峯山下念佛寺に登り、密道に從ひて鎮西義を學ひ、兄圓海に從ひて密教を受け、居ること五年の後、眞覺寺（父の開基に係る）にて圓海に從ひて落髪し、宗義を學ふ、時に十五歳なり、泉涌寺に入り、天圭長隆に從ひて法華、楞嚴、圓覺、梵網、盂蘭盆新記起信唯識の諸經論を學ひ、粟生に到り、念瓚談篋に從ひて西山義を學ひ、十七歳にして豐に入り。西吟を禮して之を師とし、説法明眼論の序註を作りて智積院の運敞に贈り大に稱せらる、十九歳西吟の安樂集を講するを聞き、私かに鈔聞を著す、秘して傳へす、十月二十五日典使に擧けられ、典籍を兼ねしむ、法主の命に依り建仁寺に詣り高麗本を見て藏本の脱漏を補ふ、二十四歳論註翼解を著し、爾法主に江戸に從ひ、二十七歳和讃首書思齊記を作り、萬治三年龍谷山の佛堂を修し、土木を司とる、私院を創造し、號を光隆寺と云ふ、寛文元年開山親鸞上人の四百年忌大會を修し、師主辨す、已にして大坂に到り、寺に歸りて論註を講す、法主號を與へて大可といふ、光圓僧正寂し、第十四代光常僧正立つや、師江戸に至りて拜賀す、六月南紀伊に至り、黒江の異義を論破し、攝津に歸へる、已にして江戸の別場を監すること三年にして歸へる、法主召して經を講せしめ、華幔、白銀、緋衣を賞與せらる、近江の野須粟本に邪義流傳す、師之を論破矯正し、美濃黒野の別場に至りて修營す、延寶元年西山の久遠寺を修營し、土木を司とる、紀伊に到り河那部の地方邪義を流傳するを聞き論破して之を正す、二月法主の命を奉して美濃より越に入り、翌年夏五月信濃に到る、信越の地方邪義を流傳するを論破して之れを正す、三越を巡り、近江を經て歸へり、豐にて講授す、本山藏庫を建つる時、其土木を司とり法主の敎を奉して播磨龜山に到り、法主に從ひ大和畝火別場に演唱す、天和二年江戸の別場に楞嚴經を講し、諸宗の學人雲集す、攻異十卷を著す、時の諸名德各詩を賦して之を稱す、攝津を巡化し和泉に到りて歸へり、美濃妙德の地方邪義を流傳するを聞いて其黨を本山に召し、之を正す、光澄僧正立ちて法嗣となるに方り師に從ひて江戸に入る、元祿六年大阪の別場に修し、化緣を司とる、河内出口の光善寺の寂玄、攝津名鹽の教行寺の寂超等邪義を立て國内に流傳す、乃ち法主の命を奉して大和に入り、五所の別場を巡くり、説法勸諭し、邪を回へし正に歸せしめ、法五章を約す、已にして河内に到り、其黨を責む、寂玄是に於て逃亡す、六十四歳西安藝に到り、廣島佛護寺に

濱慈院知空師

チ(知)ク

在りて寶王論を講す、法主の命を奉して八郡の檀越に告諭し、三備を過き、兩播を經て大阪より歸へる、十三年加賀に至り、金澤別場を修繕し、九月歸へる、十月大阪の別場成る、師修會を典る、翌年三月近江より出てゝ美濃越前を過きて加賀に至り、金澤より能登七尾に至り、海を越えて松波に至りて歸へる、法主選擇集を訓授す、師に命して聽かしむ、師が積年の勤勞を慰して參唱となし、內陣に列座することを聽許す、時に七十七歲なり、寶永三年五月大阪に往き、尼姑を化して本山の石橋、正門の華礴及ひ經庫鐘樓の石基を造る、寶永七年秋大阪に講授し八月九日病を得て歸へる、九月黃金二千兩を獻して賞せらる、八年三月開山四百五十年忌大會に十日十夜唱導師となり、內陣に坐す、已にして大阪に往き、病を力めて法主を迎へて別場を修繕す、正德三年越前勝授寺峻諦、近江圓正寺性海を擧けて代講せしめ、命を承けて黌中の法五章を制す、病再發す、秋に至りて癒え、大阪より和泉紀伊を巡化し、享保二年四月高僧和讃を講し畢りて病甚た篤し、翌年八月十三日寂す、壽八十五、龍谷に葬る法主師を諡して演慈院といふ、著作往生論註翼解九卷、安樂集鑰七卷、選擇集私考三卷、正信偈要解助講二卷、文類聚鈔講錄三卷、淨土和讃思齊記三卷、高僧和讃思齊記十卷、御傳照蒙記九卷、三帖和讃首書三卷、正信偈要解首書四卷、十六條答問一卷、淨土問辨一卷、鷺森含毫一卷、三條答問二卷、蓮窓塵壺二卷、南窓塵壺一卷、淨土眞宗作法書一卷、眞宗錄外聖敎目錄一卷、現世利益辨一卷、持妻食肉辨一卷、金鍮記一卷、甲陽軍鑑評談一卷、淨土惑問鉤隱一卷、遺敎經論疏節要補注私考一卷、註維摩經日講左券十卷、觀經義疏、正觀記補闕若卷、念佛三昧寶王論語錯三卷あり、（龍谷講主傳、知空自傳、本願寺派學事史）

チシン　知新　エンシュー圓秀を見よ、

チショー　知生　シンニン信忍を見よ、

チジョー　知常　二五〇〇 二五五五　〔曹洞宗〕伊豆修禪寺の禪僧なり、知常字は古知、普明と號し、別に去來菴亂鴉の號あり、俗姓は野田氏、世々大久保伊賀守に仕ふ、天保十一年小田原の第に生る、幼にして出家し、早川海藏寺月潭和尙に從ひて得度す、月潭壁間の文殊像を指して問うて曰く、是れ男か、將た女か、師答へて曰く、是れ男に非す、女に非す、文殊なりと、月潭曰く、此小僧と、入室傳法の後、駿河の如來寺に住す、蓋し月潭和尙開創の道場なれはなり、明治八年駿河洞慶院に移り、法幢を開きて獨住第一世となる、明治十年大學林學監に任す、仝廿一年靜岡縣第一號宗務支局敎導取締に任す、仝廿三年九月大學林敎授に任し、仝廿五年一月敎頭に進む、仝廿六年伊豆修禪寺に移り、廿八年七月廿五日寂す、壽五十六、臘四十九、

チジョー　知定　ガサイ雅西を見よ、

チセン　知闡　二三三五 ……　〔淨土宗〕江戶幡隨院の學頭なり、知闡は心蓮社演譽盛阿と號す、其俗姓生國詳かならず、知童に師事して剃髮受業し、幡隨院に於て學業を積み、遂に學頭となる後下野飯沼に到りて山衆を誘掖し、延寶三年四月二十七日寂す、壽欲く、（淨土總系譜）

チソー　知聰（一三一三）（……）　入唐學問僧なり、知聰は白雉四年五月遣唐使に隨ひて唐に航し、海に投して死す、

(日本書紀)

チソク　知足　カイニョ戒如を見よ、

チデン　知傳（……）〔淨土宗〕近江永福寺の開山なり、知傳は其俗姓生國詳かならず、聞知に師事して法を嗣ぎ、近江愛知郡大津村に永福寺を剏して開山となる、寂年、及壽缺く、(淨土總系譜)

チベン　知辨　……二三七〇〔淨土宗〕駿河實相寺の僧なり、知辨は燈蓮社傳譽愚休と號す、知鑑に法を嗣ぎ、駿河清水の實相寺に主となる、寶永七年九月十五日寂す、壽缺く、法嗣燈譽辨龍あり、(淨土總系譜)

チユ　知由　チユ智踰を見よ、

チヨー　知影　二四二二―二四八五〔眞宗〕京師光隆寺の學僧なり、知影號は獨鶴と云ふ、京師の人なり、母は讃岐の人にして師は母の家に生れ、京師に長す稍長して詩文の名高し、文政八年九月廿四日寂す、壽六十四、著作獨鶴集二卷あり、(光隆寺返信)

チクー　癡空　二四四〇―二五二二〔天台宗〕江戸淨名院の學僧なり、癡空字は慧澄、號は愚谷と云ふ、近江滋賀郡仰木村の人、俗姓は高橋氏、母は松野氏の出なり、安永九年十二月五日を以て生る、幼なる時より群兒を集め、自から高座に登り、法談するの狀をなして遊戲す、寛政元年十歳にて比叡山の安樂院に登り、豐忍和上を拜して剃髮し、五戒を受けて大雲律師の法嗣となり、紀伊和歌浦作是菴に隨侍す、四年律師寂するに方り、安樂院に皈り、文道沙彌に依る、九月海忍和上に從ひて八齋戒を受く、十年二月性潭和尚を請うて證明とし、自誓して菩薩の十重戒を受け、同年十月胎藏界の學法灌頂を受く、時に十九歳なり、享和元年二月金剛界の學法灌頂を受け、五月性脫の倶舍論を講するを聞き、これより山城尾張の間に遊學し、出藍の稱あり、文化六年二月安樂院にて仁海を拜して、形同沙彌となる、時に三十歳なり、此年三月衆請に應し、始めて比叡山の無動寺に筵を開き、倶舍論の頌疏を講ず、九年春東叡山に抵り、留錫六年、法華玄義文句を講し、終りて安樂院に皈る、十四年三十八歳にして具足戒を受く、文政元年傳法灌頂を受け、大阿闍梨となる、六年比叡山麓の世尊寺に移り、摩訶止觀を講ず、天保元年三月從一位紀伊侯粉河に十禪院を剏し、師請せられて開山となる、八月東叡山淨名院に轉住し、自在心院普賢行院の兩親王に侍讀す、十年安樂院に轉住し、文久二年二月疾に罹り、三月一日門下を集め、懇ろに遺誡し、二日午後泊然として寂す、壽八十三、臘四十四、淨名院に葬る、著作十不二門指要

慧澂和上

鈔講義二卷、妙宗鈔講義三卷、觀音玄義講義三卷、菩薩戒疏講義二卷、四教儀集註半字談五卷、法華文句記講義十五卷、法華玄義講義十卷、法華綸貫講要一卷、摩訶止觀輔行講義十卷、四教儀集註匡謬一卷、四教儀山箕三卷、大乘起信論講義三卷、倶舍七十法大意一卷、六合釋講義一卷、因明大三支一卷、後世の道栞一卷、等あり、（行業記）

チコツ 癡兀　ダイエ大慧を見よ、

チゼツ 凝絶　デンシン傳心を見よ、

チドー 痴堂　クワイレー恢嶺を見よ、

チドン 痴鈍（……）〔臨濟宗〕周防保壽寺の禪僧なり、痴鈍は無傳禪師の法を嗣ぎ、未だ出世に及ばずして寂す、塔は周防長松山保壽寺にあり、詳傳なし、（日本名僧傳）

チドン 痴鈍　クーショー空性を見よ、

チモク 痴默　シユーエン宗演を見よ、

チグワツ 遲月　ニヨニチ如日を見よ、

ヂゾー 地藏　ニンサイ仁濟を見よ、

ヂゾーニ 地藏尼　ニヨゾーニ如藏尼を見よ、

チクアン 竹菴　ニチカ日可を見よ、

チクオー 竹翁　シユーシヨー宗松を見よ、

チクガン 竹巖　シヨーコー聖皐を見よ、

チクコ 竹居　シヨーユー正猷を見よ、

チクソー 竹窓　チゴン智嚴を見よ、

チクタン 竹端 二三四七／二四一六〔淨土宗〕伊勢宇治の僧なり、竹端俗姓不詳、山城の人なり、近江宗淸寺元瑞禪師に就きて得度し、次に良悟和尚に參し、面壁多年省悟するところあり、四十歲の時、大我上人に値ひて淨土の宗要を聞き、爾來日課念佛七万聲、寶曆五年十二月疾に罹り、日課倦むなし、翌六年正月十五日安祥として寂す、壽七十、（續日本高僧傳）

チクドー 竹堂　ソーケン相憲を見よ、

チクドー 竹堂　リケン利賢を見よ、

チクバ 竹馬　コートク光篤を見よ、

チンカイ 珍海　リヨーチン良珍を見よ、

チンゲン 珍玄 一八一八／一八六四〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、珍玄は鄕貫詳かならず、良慶の座下にありて天台の宗旨を受け、建仁二年五月十八日眞圓に從つて灌頂壇に入る、元久元年十二年十九日寂す、壽四十七、（三井續燈記）

チンサン 珍山　ゲンシヨー源照を見よ、

チンジヨー 珍成　カクズイ覺瑞を見よ、

チンセー 珍西 一七九六／……〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、珍西は比叡山無動寺に住して、天台敎を學び、其大義に通ず、檀越秦行季寺を構へ請してこれに居らしむ、晩年所學を捨てゝ淨業を專修し、保延二年三月十五日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

チンモク 珍目 二〇六七／二一三三〔曹洞宗〕美作靑蓮寺の開山なり、珍目字は禪室、出雲の源氏の子なり、幼より俗に混せず、天性禪を好み、永祥寺に至り、實峰和尚に師事す、十五歲に及ひて永澤寺通幻に謁し、新豐寺機堂龍泉寺無極を叩く、後、諸國の高僧を歷遊し、尋で備中に歸りて實峯を省す、峯曰く汝美作に至りて綱菴師に依る可しと、師命を受けて往て謁す、菴一見機語相合し、密に法衣を授けて附屬す、應永六年

靑蓮寺に主となり、法化盛んなり、筑州の守赤松滿祐法要を問ふ、大來相足利義政莊田を寄附す伯耆國黑坂の城主葉氏泉龍寺を創し、相模國守源敎三山名氏觀音寺を創し、皆師を請て開山となす、文明五年三月三日寂す、壽六十七、（日本洞上聯燈錄）

チンレン　珍蓮（……）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、珍蓮は奧州の人、出家して園城寺長吏明尊に就きて顯密を兼ね傳ふ、平生法華經を誦持す、嘗て奧州より東に赴く途中、野燒に逢ひ、烟焔迫り來りて廻避すべからず、奴僕悲泣し、馬牛嘶鬥す、珍蓮精心に法華を誦すれは野燒自ら熄み、主僕相顧みて感嘆す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

チンケー　鎭冏　二三〇四〔淨土宗〕武藏泉谷寺第十代なり、鎭冏は眞蓮社天譽と號し、其鄕貫詳かならず、了學に師事して淨土敎を學び、其法を嗣きて後、武藏木杌泉谷寺に住す、後同所に本心寺を創して開山となり、正保元年五月二十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チンシヨー　鎭松　モンチヨー文超を見よ、

チンゾーシユ　鎭藏主　シコー支考を見よ、

チンチヨー　鎭朝　六二四：〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、鎭朝俗姓は橘氏京都の人なり、康保元年天台座主に任し、康保元年十月五日寂す、壽缺く、（天台座主記）

チンヨ　鎭譽　イチゴ一牛を見よ、

チンヨ　鎭譽　ソドー祖洞を見よ、

チンナケー　陳和卿（一八五六）宋の歸化佛工なり、陳和卿は宋の人、其弟陳佛壽と共に、我國に歸化す、壽永二年四月十九日東大寺の大佛鑄造に着手し、五月二十八日功畢る、「當時別當前法務大僧正禎喜馬一疋絹十疋を陳和卿に贈る」又鎌倉長谷寺の觀音を造る、建久元年勅して東大寺鑄佛を賞し、伊賀國阿波廣瀨山有丸莊及ひ播磨大部莊を賜ふ、乃ち前者を淨土堂領に、後者を大佛領に寄進す、建曆六年十一月二十四日將軍實朝の命を受けて唐船を作り、建保五年四月十七日成る。是れ實朝か支那に渡らんと企てしに依る、建久七年後鳥羽天皇の命を奉して、東大寺中門を建て石を支那より取寄せ、獅子を彫むと云ふ、其沒年缺く、（山槐記、吾妻鏡、東大寺要錄、東大寺大佛供養記、工藝志料）

チンソー　陳叟　ミヨージユン明遵を見よ、

チンブツジユ　陳佛壽（一八四二）宋の歸化佛工なり、陳佛壽は宋の人にして、兄陳和卿と共に本邦に歸化し、壽永年間東大寺鑄佛の業に就きて兄陳和卿を助く、（東大寺大佛供養記）

チンテー　椿庭　カイジユ海壽を見よ、

チヤクシユー　嫡宗　デンシヨー田承を見よ、

チユーア　中阿　エンチ圓智を見よ、

チユーエン　中淹　二〇〇二 二〇八八〔臨濟宗〕京都南禪寺の僧なり、中淹字は在中、能登の人なり、母京都に登り、東西の靈跡を拜し、天龍寺に到りて殿堂の莊嚴衆僧の威儀を見て誓ひて曰く、若し男子を得れは、斷して此寺に入れ僧となさん、と、既にして師を生む、稍長して母夙誓を思ひ、師を携へて京都に入り、龍湫澤和尙に見えて師を托す、即日剃髮し、比叡山に入りて登壇受戒す、學業進みて諸方に遍歷し、再ひ龍湫を省

して親しく印可を付せられ、相國寺に出世し、天龍寺南禪寺等に歴住す、若狹の安養寺、遠江の總持寺、丹後の慈光寺、丹波の妙樂寺等は、皆師の錫を留むる地なり、晩年瑞龍山に瑞雲菴を搆へて終焉の處とし、正長元年十月七日寂す、壽八十七、(本朝高僧傳)

チユーエン　中圓　ホーホー方法を見よ、

チユーオー　中雄　シユーフ宗孚を見よ、

チユーガン　中巖　エングワツ圓月を見よ、

チユーガン　中嵒　チユーホン中本を見よ、

チユークワン　中觀（二五二七）〔眞宗〕越後蒲原郡出雲崎淨嚴寺の住持なり、中觀は寮司となりて安政六年以後高倉學寮にて法華經佛心印記を講し、文久元年十二月二十日擬講となりて慶應三年夏秋の間、金牌論改邪鈔を講し、後嗣講に進み、欣淨院と號す、(眞宗史料)

チユークワン　中觀　シンクー眞空を見よ、

チユークワン　中觀　チヨークワン澄觀を見よ、

チユークワン　中觀　リヨーシヨー良聖を見よ、

チユーケ　中華　ケーホー桂法を見よ、

チユーケー　中啓（……）〔臨濟宗〕京都寶幢寺の僧なり、中啓字は東輝、其郷貫詳かならず、幼にして京都建仁寺に投して剃髮し、春屋葩の法孫なる松嶺岳に參して契悟あり、遂に其法を嗣ぐ、寶幢寺に住して法化盛んなり、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

チユーコー　中交（二〇四五／二一一三）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、中交字は象初、其郷貫嗣承詳かならず、京都東福寺に住し、享德二年三月十一日將に滅度に入らんとし、雲章に偈を寄せて曰く、老病相逼已到二牢關一、訃音若達恐煩二一潜一、と、檀越偈を請ふ、師便ち書して曰く、倒騎二鐵馬一、躍二出閻浮一、燈籠合掌、露柱點頭、と、筆を抛て寂す、壽六十九、(延寶傳燈錄)

チユーサン　中山　ホーエー法穎を見よ、

チユーサン　中山　ホーギン法誾を見よ、

チユーシン　中津（一九九六／二〇六五）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、中津字は絕海、自ら蕉堅道人と號す　土佐國津野の人なり、父は藤原氏、母は惟宗氏、五臺山の文殊菩薩の像に禱て劍を授くと夢みて身むことあり、實に延元元年十一月十五日鄕里に誕生す、正平三年師十三歲にして天龍寺に入る、時に疎石西芳寺に老を養ふ、師時々往て之に侍す、適々月夜に聲を勵して書を讀む、疎石禪師出て、燈下に呼び來て之を試む、師輙ち卷を掩て暗誦琅々たり、疎石云ふ、此兒他日必ず禦侮の器と爲らん、叢林に文字を學はしむべし、徒らに筵に使役すべけんや、と、師固く請て曰ふ、見性は文字にあらんや、左右に執侍せんこと素願なりと、疎石其言を奇とす、正平五年師十五歲にして剃髮して沙彌となる、疎石時に西芳寺に在り、雲居の葩首座に命じて曰ふ童蒙の左右に執侍すべき者をして來らしめよと、師傍に在て聞て曰ふ、某執侍を以て幸と爲す、と、乃ち西芳寺に侍す、疎石一日圓覺經を講ず、講畢て學徒あり相ひ詰問して未だ決せず、師傍に在りて疎石引く所の釋、講する所の義を以て告けて一字を謬らず、掌を指すが如し、學徒驚て碧潭に告げ、潭驚いて疎石に告へ、

疏石此に於て師を召して之を驗して悅ぶ、是より入室し、徵詰せらるゝごとに應答響の如し、曰ふ子他日能く臨濟を支へん者か、厚く自愛せよと、正平六年師十六歲にして大僧と爲る、天龍寺に在て一夏百日の間、每日四更の一點、坐禪の後ち徒跣して法輪寺に詣して燒香禮拜し、風雨と雖も之を怠らず、益し專ら白業を進み、魔事なからんことを祈るなり、正平八年師十八歲、東山の建仁寺に錫を掛く、義堂信、先覺恬、月舟勳、天錫壽等と同く龍山和尙の高風を慕うて往て之に依る、次て大林和尙東山の席を董す、師をして侍藥の職に登らしむ、建仁寺東堂放牛和尙例年冬至に大齋を設けて八坂の法觀寺に就て大衆五人を請して各座に登り法を說かしめ且つ門下をして問禪せしめ放牛座下に立て證明す、年々常となす、一年例に隨て亦然り、而も問禪の人を使はさず、唯だ師一人放牛に隨伴して至る、第一座の座に登るに及で、放牛、師に向て曰ふ、子を煩はして問禪せしむと、師辭することを得ず、大衆を出でゝ問話す、次に四人の座に登るごとに放牛亦之に命ずること前の如し、師讓る所なし、愈々出でゝ愈々奇なり、是に於て一座靡然として之が爲に歎服す、當時師十九歲なり、正平十九年一策翻然として關東に行く、萬壽寺の石室玖偈を以て餞して云ふ、仲靈發歲出潭津、五百年來間出人、靈簡陳篇消白紙、紙衾瓦鉢樂清貧、非唯廣域海中寶、便是諸方席上珍、拓出東山左邊底、何妨侍者續芳塵、即ち相模に到て法兄義堂周信を省す、遂に建長寺の青山和尙の化を助け、次に佛滿禪師盛に法席を巨福山に開く、師佛滿の會下に在て上首を以て賞異せらる、正平二十年師三十歲、當時凡そ叢林の職事は德ある者に非ざれば擧げず、率ね提唱偈頌を試む、特に師を拔て藏鑰を典らしめ、次に侍香に遷る、正平二十三年師三十三歲なり、同年二月海に航して支那に遊ぶ、明太祖の洪武元年なり、師杭州の中竺寺に寓して全室和尙に依る、全室甚だ器重して命じて燒香侍者たらしむ、後、復た藏主に轉ず、師靈隱寺に登りて用貞良、淸遠渭の間に周旋す、師嘗て自ら謂て曰ふ、余大明に入て最初に道場の淸遠に依り、侍局を命せらるも辭して就かず、遂に中竺寺の季潭和尙に依る、と、師未だ中竺寺の藏司たらざる前、良用貞靈隱寺の書記を以て引くも辭して就かず、故に了堂一、師に與ふる偈に「展開佛手伸出驢腳」の語あり、建德二年師、徑山に登て全室和尙を省す、後堂和尙を以て延く、師辭して就かず、天授二年師四十一歲明の洪武九年正月太祖師を召して英武樓に延き、親しく法要を問ふ、奏對旨に稱ふ、板房に至て日本の圖を指し顧みて熊野の古祠を問ひ、敕して詩を賦せしむ、師の應制の作に曰ふ、熊野峯前徐福祠、滿山藥草雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須早歸、太祖和を賜ふ曰ふ、熊野峯高血食祠、松根琥珀也應肥、當年徐福求仙藥、直到如今更不歸と同年辭して東歸す、太祖僧伽梨、鉢多羅、茶褐裰、椰栗杖并に寶鈔若干を賜ふ、天授五年十月普明國師師を招きて靈龜山の雲居庵に館せしむ、性海見和尙天龍寺の席を主さどる、十二月師を請して第一座に居らしむ、明年に至て解く天授六年師四十五歲、春赤松氏師を法雲寺に聘すれども就かず、汝霖佐を擧て之に代らしむ、秋幕府の命を以て甲斐國乾德山慧林禪寺に開法す、九月三日靈龜山の雲居庵に就て請を受け、十月八日入

チユー（中）シ

寺す、時に京師幷に相模に在る有名の學徒雲の如くに集り、寺屋殆んど容るゝ所なし、師之を拒まず、孜々として誘掖す、學徒の爲め、禪宴の餘暇に法華、楞嚴、圓覺等を講ず、緇素の聽衆汎溢するに至る、元中元年師四十九歲にして宗柄を執り、議論公評避る所なし、適々直言を以て相國足利義滿の旨に忤ふ、師長揖して去り、夏六月攝津の錢原に隱る、元中二年四月師始めて羅羊谷の牛隱庵に到る、是歲の秋伊豫土佐讚岐阿波四州の太守桂岩居士禮を厚うして師を邀ふ、七月の末讚岐に到る、居士郊迎して州の普濟院に安置す、居士是に於て新に寺を開創せんとし、國內を巡徧して地を相る、卽ち阿波に地を得たり、居士乃ち躬から士を撥び、基を築く、其主山の形狀寶冠に似たり、因て寺を名けて寶冠寺と云ひ、師を請して開山となす、同年十月相國義滿慈氏和尙に命じて專使を發して師を徵す、師固辭するに病を以てす、十一月相國親しく手書を制して四州の太守桂岩居士に與へて命じて師を徵す、居士卽ち駕を命じて夜寶冠寺に到り、相國義滿の命を諭し、涕泣して曰く、法門の汚隆と弊邦の安危は師の出處に係る、と、師已を得ずして京師に上る、十二月幕府の命を以て等持寺の席を董す、二十五日入寺す、元中三年二月十二日義持誕生す、一日慈聖寺龍湫和尙師が說法の席に陪す、龍湫感喜して曰く、先師（夢窓疎石）說法の躰裁これありと、遂に正覺國師夢窓疎石の法衣一領を以て之を師に贈る、元中五年春正月九日に師京師三條の宮第に於て始めて金剛經を講ず、十九日に至りて講し了る、同廿三日香嚴芳林太夫人、師を請して圓覺經を講ぜしむ、月尾に至りて講し了る、此年法兄義堂周信寂す、元中八年七月十六日に師等持寺を退いて等持院に移住す、向に師が等持寺に在るの日、相國義滿、師の室內に到て親しく師の常に着する所の安陀衣を乞うて之を奉持す、是冬十二月晦日藩臣謀反して內野に戰ふ、遂に之を平らぐ、朝野歡呼して大に昇平を賀す、禪林の諸老俱に幕府に入て之を賀す、相國義滿法服を着けて相見し、手を以て衣を擧げて云ふ、敵を亡すは乃ち衣の靈驗なりと、相國の師を崇信するの一端を知るべし、應永二年某日相國義滿十牛の圖に依て宗旨を請益す、師云く宗門直指の旨紙墨言說の能する所に非ず、然れども古德十牛の說は中下の機の爲に強て途轍なき中に途轍を立てゝ無功用の功用を顯はすなり、と、說て始め牛を尋ぬるより終り人牛俱に忘ずるに至る、入鄽垂手に及び師曰ふ、此は是れ相國自己本地の風光人より得るに非す、得て後ち只是れ門を叩く瓦子のみ、と、相國是に於て頗る至訣を得たり、遂に師に請うて手から梁山廓庵十牛の圖の敍幷に偈を書せしむ、又工に命じて之を常に居る所の禪觀の室の壁に繪かしめ、敍偈を上に貼て公暇に之を覽て修禪の資と爲す、應永八年師六十六歲、幕府強て起たしめして復た相國寺に住す、卽ち第三次なり、七月十六日鹿苑院に就て請を受け、寺位を以て陞して五山第一と爲す、八月十一日入寺兼て鹿苑院を領す、應永十二年四月五日寂す、壽七十、遺頌に曰ふ「虛空落レ地、火星亂飛、倒打二筋斗一、抹二過鐵圍一」、師日常課する所圓覺、首楞嚴なり、師嘗て曰く我れ首楞嚴に於て失笑の分ありと、後小松天皇應永十六年特に國師の號を追贈せらる勅に曰ふ尊二其德一、樂二其道一、必建二徽號一以示二天

下後世一、乃是古今之通規、國家之盛典也、朕聞前住相國、後住南禪絶海和尚、紹二圓照之緒一、承二正覺之宗一、德溢二寰區一、澤被二殊域一、所レ謂儀二範佛祖一、師二表人天一者也、其諡可レ曰二佛智廣照國師一、應永十六年九月十四日」越て八年、稱光天皇應永二十三年に更に徽號を加贈せらる、勅に曰ふ、朕聞昔在二暦應康永之間一發二大願力一、痛救二末法之弊一、具二大辯才一普應二十方一、而無礙者夢窓正覺國師面已升二其堂一入二其奥一親獲二本有清淨之心印一、印二定萬像於方寸一、陰翊二四海同文之聖治一、乃佛智廣照國師也、茲恨三生晩不レ睹二其光儀一矣、昨迎二慈像於内殿一、頂二戴衣盂於眞前一、自レ非三特立二稱號一以表二示天下一、無三以昭二慕道欽德意一、先レ是巳丑歲　上皇既賜二大諡一今加二徽號一、宜レ曰二淨印翊聖國師一、應永二十三年十二月日」著作四會語錄二卷蕉堅稿二卷世に行はる、(年譜、本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

チユージユン 中諄(　・・　)〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、　中諄字は誠仲、幼にして出家し禮嵓和に參して法を嗣ぎ、相模圓覺寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

チユージヨ 中恕(　・・　)〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、　中恕字は如心、筑紫の人なり、古劍妙快禪師に師事して法を嗣ぎ、天龍寺にありて夙に才名あり、(延寶傳燈錄)

チユーシヨー 中聖 一九二一 一九八〇 〔時宗〕相模無量光寺第三代なり、中聖一に智得と稱す加賀堅田の人なり、初の名良道、弘安四年一遍上人に謁し翌年金光院に入る、元應二年七月相模當麻無量光寺に寂す、壽六十、著作知心修要記一卷、念佛往生綱要等あり、

チユーシヨーイン 中正院　ニチゴ日護を見よ、

チユーソー 中叟　ケンシヨー顯正を見よ、

チユーソン 中巽(・・・・・・)〔臨濟宗〕京師某寺の禪僧なり、　中巽字は權中と云ふ、明に航し、書を以て聞ゆ、虞世南の筆法を學び、明人に感賞せらる、(半陶藁、書史會要補遺)

チユータイ 中諦 二〇〇二 二〇六六 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、　中諦字は觀中、俗姓は日奉氏、阿波の人なり、觀應元年九歲にして京都に入り、正覺國師を拜して侍童となり、翌年薙髮受戒す、此年秋國師寂するよりて諸兄に就て習學す、南北の教肆に遊び、後棄てゝ相模に往き、諸老に徧參し、劇かに元に往き、台州より福州に入る、時に黄巾の亂ありて道通せず、故に東歸して天龍寺に春屋葩により、記室となり、遂に玄旨に徹す、幾もなく、分座說法し出てゝ阿波の寶陀寺を主どる、後、京都等持寺に遷り、應永七年將軍足利義滿の招に應じ、相國寺を領す、義滿乾德菴を建て、退休の處となす、細川頼之永泰院を建てゝ師を延く、應永十三年四月三日寂す、壽六十五、臘五十六、勅して性眞圓智禪師と諡す、著作三會語錄、及青幛集若干卷あり、(本朝高僧傳)

チユーツーイン 中通院　ニチセー日栖を見よ、

チユードー 中道　シヨーシユ聖守を見よ、

チユードーイン 中道院　ニチシユン日春を見よ、

チユードーイン 中道院　ニチヨー日陽を見よ、

チユードーイン 中道院　ニチリヨー日了を見よ、

チユードーシヨーニン 中道上人　シヨーシユ聖守を見よ、

チユードン　中曇（二〇八八）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、中曇字は藏春と云ふ、任中中淹に參して法を嗣ぎ、安養天龍二寺を歷て南禪寺に昇る、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

チユーホン　中本（二〇一一）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、中本字は中嵓と云ふ、夢窓國師に參して法を嗣ぎ、天龍寺に居りて記室より、首座となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

チユーリシユボー　中理趣房　ライショー　賴照　を見よ、

チユーリヨー　中亮（二〇四八）〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、中亮字は菊隱と云ふ、義堂和尙に參侍久うして遂に其法を嗣ぎ、相模建長寺に主となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

チユーミヨー　中明　エーシユ榮主を見よ、

チユーミヨー　中明　ケンホー見方を見よ、

チユーア　忠阿　ゲンリヨー絃良を見よ、

チユーア　忠阿　センサツ詮察を見よ、

チユーア　忠阿　チカン智鑑を見よ、

チユーエ　忠慧（……）〔戒律宗〕大和大安寺の律僧なり、忠慧は俗姓缺く、道璿の高弟なり近江にありて法勵の疏を講敷す示寂年時傳はらず、（本朝高僧傳）

チユーエ　忠惠（一四三四）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、忠惠は出家して良辨に師事し、華嚴宗を學び、寶龜五年東大寺別當に任す、寂年、及壽缺く、（東大寺別當次第）

チユーエン　忠圓（一七七五）三條一流第三代の佛工なり、忠圓は圓勢の長子なり、永久三年十一月二十九日法橋に叙す、（中右記）

チユーエン　忠緣（一七六四）〔眞言宗〕京師仁和寺相應院法の橋なり、中緣字は南證といひ、音聲に巧なり、經範の法を嗣きて仁和寺の學講となる、（傳燈廣錄）

チユーエン　忠延（一四八四）〔眞言宗〕山城神護寺の僧なり、忠延其俗姓生國詳ならず、一に忠仁公（良房）の子にして、母は宗方氏なりと云ふ、天長の初年東大寺戒壇に登り、滿分戒を受け、諸寺を巡遊し、性相の義を學ぶ、九月廿七日神護寺定額二十一僧の一員となる、師親く弘法大師に就き、兩部の祕法を稟け、東寺又は西山に棲止す、弘法大師十大弟子の一人にして道譽高し、寂年、及び壽缺く、（弘法大師弟子譜）

チユーギ　忠義（二〇八六／二一五八）〔眞言宗〕紀伊高野山明王院の學僧なり、忠義字は長泉房と云ふ、鄕貫詳ならず、高野山に登り勝義阿闍梨に師事し、敏才を以て知らる、一休宗純禪師の山に登るにあたりて問答す、師山中の神社に詣し、印言默所す、傍に一客僧あり、大般若經函に踞す、師拜して後告けて曰ふ、客僧の踞するものは大般若經の函なり、と、客僧平然として曰ふ、大般若經の上に大般若經を置く何の妨かあらん、と、師即ち客僧の膝の上に踞す、客僧痛に堪へずして師を排せんとす、師曰ふ、大般若經の上に大般若經を置き、倘ほ其上に大般若經を置く、何の妨かあらん、と、敏才常に此類なり、客僧は即ち一休宗純禪師なり、後大僧都となり、明王院に住す、明應七年十月八日和泉に至り、行基の古跡なる

久米多寺を修營す、同月廿三日明王院に寂す、壽七十三、（高野春秋）

チユークワイ　忠快（一三六一）〔天台宗〕比叡山の學僧なり、　忠快は字は大教房、世に小川法印と云ひ、又中納言法印と云ふ、京師の人、平教盛の子教經の弟なり、出家して比叡山に登り、但馬阿闍梨昇仲に師事して台密の秘奧を傳ふ、寂年幷に壽缺く、著作船中鈔三卷、密談鈔六十卷あり、（台密血脈譜、諸宗章疏錄）

チユーケー　忠桂　ニチニヨー日遶を見よ、

チユーサン　忠讃　カクシン覺信を見よ、

チユーザン　忠殘　二二四一 二三三一〔淨土宗〕下總清岸寺の開山なり、　忠殘は正蓮社行譽と號す、下總行德高谷の人、其俗姓詳かならず、不殘に師事して法を嗣ぎ、行德源心寺に住し、第二代となる、後、同所伊勢宿に淸岸寺を建て丶開山となり、寬文十一年寂す、壽九十一、（淨土總系譜）

チユーシツ　忠室　シユーコー宗考を見よ、

チユージン　忠尋　一七二五 一七九八〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、　忠尋は佐渡刺史源忠季の子なり、少にして比叡山に登り、顯教を長豪覺尋の二師に學び、密灌を良祐阿闍梨に承く、京都曼殊院に住し、化導甚だ盛なり、保安二年正月最勝會講師となり、大治五年天台座主に補し、大僧正に任す、天承元年三月鳥羽上皇得長壽院を建て、山門三井の衆僧を召して落慶供養を伸ふる時、師詔により導主となる、二年冬最勝會の證義者となる、保延二年春上皇鳥羽の勝光明院を落慶し、師また導師を命せらる、翌年十月十四日寂す、壽七十四、著作止觀心要鈔四卷、法弟順耀、皇覺、瑜伽、觀昭の四人あり、（本朝高僧傳）

チユーシユン　忠俊（一八七二）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、　忠俊字は道悟、俗姓生國詳ならす、高野山に住し其房を東別所と號す、大傳法院學頭に昇る、寂年缺く、（結網集、本朝高僧傳）

〔考〕忠俊は建曆前後の人ならむ

チユーヘン　忠遍　一八三二〔眞言宗〕理智院の第三代なり、　忠遍は大夫法印といひ、内給事長信の子大藏卿長成の孫なり、建曆元年四月十二日理智院に登りて傳法職位を受く、時に四十二歲なり、附法の弟子盛遍道俊等あり、（傳燈廣錄）

チユーオー　仲翁　シユホー守邦を見よ、

チユーカク　仲覺（一七九五）〔眞言宗〕大和金峰山の阿闍梨なり、　仲覺字は觀明といふ、勝賢座主の法燈を受け、金峰山に在りて修驗す、保延年中の人なり、（續傳燈廣錄、竹林院見記）

チユーケー　仲繼　一五〇三〔法相宗〕大和藥師寺の學僧なり、　仲繼は元興寺の護命僧正に侍すること三十餘年、有空の妙理に達し、大和の藥師寺に住して大に法相宗を弘む、天長六年最勝會を藥師寺に修し、永式となさんと請ひ、可さる、仍て三月朔日名德を招きて一七日最勝王經を講す、勅して律師に任し、永和十年某日寂す、壽缺く、法弟明詮、眞慧、隆光の三人あり、（本朝高僧傳）

チユーコン　仲建　リユーセー龍惺を見よ、

チユーサン　仲算（一六二九）〔法相宗〕大和興福寺の學僧

なり、　仲算は其俗姓生國詳かならず、空晴僧都一日興福寺の北門を過ぎ、師に逢ひ、其器字非凡なるを見て携へて寺に歸り、經論を敎ふ、稍長して內外の典籍を極め、尤も論義に長ず、然れども師僧官を喜ばず、遷ある每に他に讓り、常に松室に蟄居す、應和三年村上天皇法華經を御寫し、八月淸涼殿に南北の碩匠を召し、齋を賜うて慶讃し、五日十座深義を講論せしむ、玆に於て法相天台の學僧對論す、第二日に至り、比叡山の良源講師となり、法藏平州問者となり、二人詞屈す、時に藤原文範官席に陪し、夜を侵して南行して師に逢ひ、事の急なるを告ぐ、師大に驚き、文範と共に宮に入る、散筵の日に比叡山の壽肇聖救講師となり、奈良の仁賀圓藝問者となる、師乃ち二人に代り出づ良源前に出せし衆生皆成佛の文を擧げて一々難詰し、講師をして辭屈せしむ、講筵終りて帝師を便殿に召し、優賞を賜ひ、尋て法相宗を以て六宗の長官となし給ふ、安和二年喜多院林懷と共に熊野山に登り、往くところを知らず、或は慈恩寺の山に入りて出でざるなりとも云ふ、著作法華音釋三卷、四分義私義二卷、法華略頌、陀羅尼集、各一卷あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

チユーサン　仲珊 二〇六三／二一二九 〔曹洞宗〕下野雲門寺の開山なり、　仲珊字は瑚海、備中の人俗姓は源氏なり、幼歲にして深く官榮を厭ひ、牛頭山の南英和尙に投して出家し、受戒の後諸方を徧歷して諸師に參見す、永享六年舶に乘して明に入り、天童山に掛搭す、偶々南谷菴に寓す、菴は如淨和尙の塔所なり、師自ら衣財を出し、燈油の田若干畝を買うて寄附す、明に留ること十九年にして歸朝す、享德元年の秋英和尙耕雲寺を主ると聞き、往て省す、參持すること數年、悉く蘊底を究む、南英の耕雲寺を退くに及んで、師席を繼で此に住す、寬正二年春上野國太守齋藤氏の請に應じ、赤田莊に洞福院を開き、原英和尙を以て開山となし、自ら第二代となる、後瑞鳳山雲門寺を創し、法門大に興る、文明元年正月廿四日寂す、壽六十七、(日本洞上聯燈錄)

チユーシン　仲心 (二一三三) 〔曹洞宗〕周防龍文寺の禪僧なり、　仲心字は爲巖初め大菴須益に參して印可を受け、周防龍文寺に住して某年寂す、法嗣金岡用兼、默巖爲契、春明師透の三人あり、(日本洞上聯燈錄)

チユーシヨー　仲正 (二〇六一) 〔臨濟宗〕京師相國寺の僧なり、　仲正字は仲芳と云ふ、相模鎌倉の產にして中巖圓月と同鄉なり 應永八年國使に隨ひて明に入り、書を以て聞ゆ、明に留る時、相國承天禪寺の六字を大書して我相國寺に贈る、永樂通寶の四字を書し、錢に鑄る、世に其筆法を正藏主樣と云ふ、足利義滿に厚遇せられ、義持義敎にも厚遇せられ、蔭涼軒に留る、寂年月日缺く、門下に心月梵初あり、亦書を善くす、(補菴京華集)

チユーセン　仲仙 (二一二六) 〔曹洞宗〕伯耆瑞仙寺の開山なり、　仲仙字は竺翁、薩摩の人、俗姓は藤原氏なり、十五歲にして日向國長善寺に至り、天海和尙に業を受く、出遊して石屋和尙に福昌寺に謁し、後諸方に徧歷す、天海衣盂を附し、其席を繼かしむ、幾もなくして諸嶽定光寺に住す、隱岐太守山名重成伯耆の瑞仙寺を創し、師を迎へて開山となす、文正元年相模國守山名敎之田園若干を施して永く食邑

となす、晩年海晏性を招て席を附し、自ら東菴に退く、師示寂の年月日幷壽詳ならず、(日本洞上聯燈錄)

チユーテー 仲庭　シユーカ宗可を見よ、

チユーフ 仲孚　シヨーイ正巽を見よ、

チユーホ 仲圃 (二二八四)〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、仲圃字は桃屋俗姓は中滿氏、薩摩の人なり、弱冠にして出家し、關東の諸老に徧參し、歸へりて大川長益に參し、其信衣を附せられ、元和七年薩隅日三州の太守の請により、薩摩福昌寺に住す、寛永元年上足守哲をして席を補せしめ、花舜寺に退休し、某年寂す、壽缺く、法嗣代翁守哲あり、(日本洞上聯燈錄)

チユーホー 仲芳　コクイ國伊を見よ、

チユーホー 仲芳　チユーシヨー仲正を見よ、

チユーワ 仲和　リヨーモク良睦を見よ、

チユーア 冲阿　リヨーミヨー靈妙を見よ、

チユーサン 籌山　リヨーウン了運を見よ、

チヨカン 塚間　ソーケン相憲を見よ、

チヨーイ 長意 一四九六 一五六六〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、長意俗姓は紀氏、和泉大鳥の人なり、弱齡より慈覺大師に隨つて顯密を習ひ、安慧座主に灌頂を受く、二十歲にして圓澄を拜して菩薩大戒を受け、尋で傳法灌頂を稟く、時の人師の其德を崇めて露地和尚と號す、昌泰二年十月內宣ありて延曆寺の座主に任し、翌年內供奉十禪師に補す、延喜六年七月三日寂す、壽七十一、臘四十七。明年四月勅して僧正法印大和尚の位を贈らる、(延曆寺座主記、本朝高僧傳)

チヨーイン 長胤 (一四九五)〔眞言宗〕祖空海の弟子なり、長胤生國俗姓詳かならず、初め大安寺上座某の弟子となり、後空海に師事す、寂年並に壽缺く、(弘法大師弟子譜)

チヨーエー 長榮　ニチリユー日隆を見よ、

チヨーエツ 長悅 二三三七〔淨土宗〕江戸長安寺の開山なり、長悅は九蓮社品譽一西と號す、肥後熊本の人、其俗姓詳かならず、法を雩念に嗣ぎ、江戸青山に長安寺を開く、寛文七年三月十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

チヨーエン 長宴 一六七六 一七四一〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、長宴世に大原僧都と云ふ、京都の人、伊賀守重經の子なり、出家して慶命寛圓に歷事し、顯密の學を受け、後皇慶に事へて事相の秘奥を傳ふ、治曆元年十二月律師に任せられ、承保三年十二月少僧都に任せらる、永保元年四月二日寂す、壽六十六、著作四十帖決十五卷は師十二年間皇慶の下に通ひ、其口授を錄したるものなり、其外に隨聞鈔、五相成身私記、(二部卷數未詳)、秘要記二卷、胎灌問受集五卷、金灌問受集三卷あり、(台密血脈譜、諸宗章疏錄)

チヨーエン 長圓 一八一　三條一流の佛工なり、長圓は圓勢の二子なり、法印に叙せられ、山階寺大佛師となり、又淸水寺別當に補す、久安六年寂す、(外記日記、長秋記)

チヨーエン 長圓 (二七〇七)〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、長圓は鎭西の人、出家して比叡山に登り、法華經を誦持し、不動法を修す、葛木山に登りて三七日の間食を絕し、誦經修法す、夢に八金剛童子鈴杵劍等を持して異口同音に合掌讃嘆して曰ふ　勤苦修業するものは婆伽梵の如し、三摩地

に上りて諸菩薩と倶なることを得、云云熊野山金峰山等に登りて修行し、長久年中寂す、（本朝高僧傳）

チヨーエン　長圓　ニチリヨー日了を見よ、

チヨーオー　長應（一四三〇）〔曹洞宗〕近江新豐寺の開山なり、長應字は機堂、伯耆の刺史南條氏の子なり、出家して偏ねく講席を歷遊して、三藏の聖教を究め、後遊方して北越に至り、慈眼寺天眞に親炙すること久しうして丹波の永澤寺越前の龍泉寺、大隅の楞嚴寺等に歷住す、近江の佐々木氏新豐寺を創建して開山となし、又伯耆の南條氏曹源寺定光寺の二刹を創し、皆師を請して開山となす、某年寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チヨーオンイン　長遠院　ニチジユ日樹を見よ、

チヨーカク　長覺　二〇〇六／二〇七六〔眞言宗〕紀伊高野山無量壽院の學僧なり、長覺は出羽の人なり、靑年の頃鄕を去り、高野山に登り、眞祕に面承す、嘗て俊譽阿闍梨西院流を極むと聞き、之に就きて其眞印を傳ふ、應永初年無量壽院に住し、金剛幢を立て密門を管す、二十三年十一月十五日寂す、壽七十一、著作大疏指南九卷あり、（本朝高僧傳）

チヨーガン　長巖　テンエツ田悅を見よ、

チヨーギ　長義（一四三二）〔法相宗〕奈良藥師寺の僧なり、長義寶德三年の頃眼病を患ふ、五月許にして癒えず、衆僧を屈請して三日三夜金剛般若經を讀誦す、即ち癒えて舊に復す、皆傳へて般若經の功德に感嘆す、長義示寂の年時缺く、（靈異記、本朝高僧傳）

チヨーキヨー　長慶　……二〇二〇〔天台宗〕山城施無畏寺の僧なり、長慶俗姓は源氏安藝の刺史雅房の外舅なり、少にして比叡山に登り、密教を究め淨業を修す、後洛北施無畏寺に住し、延文五年七月某日寂す、壽缺く、（拾遺往生傳、本朝高僧傳）

チヨークー　長空　シンキヨー信敎を見よ、

チヨークー　長空　……一九二九〔淨土宗〕某寺の僧なり、長空字は持願、其氏姓を詳にせず、聖光辨圓に師事して宗義を學ぶ、嘉禎三年四月辨圓門輩の爲めに宗要を說く、時に五哲あり、師は其隨一なり。文永六年四月十八日寂す、壽詳ならず、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

チヨークン　長訓　一四三四／一五一五〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、長訓俗姓は錦氏、近江滋賀の人なり、少より玄賓僧都に從ひ、延曆十年南都戒壇に登りて具足戒を受け、法相を研究す、擢てられて同寺の維摩講師となり、數年を越えずして宮中の最勝講座に昇る、僧官累りに轉進して遂に僧正に進み、興福寺の席を董す、齊衡二年某月日に寂す、壽八十二、（本朝高僧傳）

チヨーケン　長賢（一五二二）〔三論宗〕奈良法隆寺の僧なり、長賢は俗姓不詳、道詮に師事して三論を受學し、法隆寺に在りて八不中道を說く、維摩會の講師となり、貞觀四年正月初八最勝會講師となり、盛譽を博す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

チヨーゲン　長玄（……）〔曹洞宗〕下野長安寺の禪僧なり、長玄字は玖峰といひ、體菴明全に參し、服勤十五年、其法を嗣ぎ、下野長安寺に住す、寂年、並に壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チヨーゲン　長源（一五三三）（…―…）奈良元興寺の僧なり、長源經論に該通し法相に精し維摩會講師となり貞觀十四年最勝會講師となる示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

チヨーコー　長幸（一七六二―一八三三）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、長幸は鄕貫詳かならず、嘉應元年東寺長者に任ず後權大僧都に任せらる、承安三年八月十三日寂す、壽七十二、（東寺長者補任）

チヨーコー　長江　ニチゴン日言を見よ、

チヨーコン　長緄（…―…）〔新義眞言宗〕下總香取根本寺の僧なり、長緄字は呑舟、號は北溟子と云ふ、俗姓松永氏なり、紀伊有田郡廣縣の人なり、初め諱友也、字宗弼と云ふ、九歲にして江戶に來り、林氏の塾に入り、儒敎を學び英才を以て衆に推されたり學成りて後山城越智氏に仕へ、祿二百五十石を食み、甚た優遇せられたり、後數年にして致仕し、佛敎に歸し、今の名に改め、大和長谷寺に遊び、次に京師に遊び、善師を問ふ、晚年下總香取根本寺に住し、儒佛を并せ講す、示寂年月日詳ならす、著作北溟集二卷あり、門人の編にかゝる、門下に儒家久保木竹窓あり、德行を以て聞ゆ（碑文）

チヨーサイ　長西（一八七二）〔淨土宗〕京都九品寺の學僧なり、長西字は覺明讃岐の人、伊豫守藤原國明の子なり、九歲にして京師に上り儒學を學び十九歲にして出家し、源空上人に師事して淨土敎を受け、上人示寂の後、俊芿律師に就て止觀を學び、佛心禪師に就いて禪宗を傳ふ、然れとも尤淨土敎に意を傾けて硏究し、出雲路住心と云ふものより諸行本願の義を聞きて大に服し、京都九品寺に住し、諸行本願の義を主張し、九品流と稱す、門下大に興る、讃岐西三谷に一寺を開き、同地方に法化盛んなり、示寂の年月日缺く、門下上衍證忍九品寺の後を繼ぐ、著作五却思惟評論章あり、又門下證空理宗二人の間に法藏比丘五劫思惟に關し、唯思唯行の評論あるを判し、修行思惟兩具するものなりと云へり、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

チヨーサイ　長歲（一五三四）〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、長歲は正進の高弟にして、華嚴を硏究し、兼ねて唯識に通す、時人日域因明の祖となし、稱讃措かす、（本朝高僧傳）

チヨーサツ　長察（二三一五―…）〔淨土宗〕江戶西岸寺の開山なり、長察は本蓮社覺譽單稱と號す、相模小田原の人なり、能悅に就て剃髮し、廓山に法を嗣ぐ、小石川に西岸寺を開き、延寶三年五月九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チヨーサン　長算（一六五一―一七一七）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、長算俗姓は藤原氏、中納言朝範の子なり、比叡山に登り、覺運に師事し、圓宗の奧義を究む、池上の皇慶阿闍梨に秘密灌頂を禀け、檀那院に住して、天台敎を弘む、天喜五年寂す壽六十七、（本朝高僧傳）

チヨーシン　長信（一六七四―一七三二）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、長信は藤原道長の子なり、初め延尋僧正に從つて、剃髮受戒し、後、性信親王を拜して灌頂密印を傳ふ、永承五年の冬權少僧都に任じ、尋で一身阿闍梨に叙す、天喜二年秋東寺の長者となり、治曆元年の秋寺務幷に法務を領す、二年權僧正に

轉す、此年七月大旱勅により師二十僧を率ゐて雨を祈りて驗あり、延久二年詔を奉じて圓宗寺に住し、後三條天皇百僚を率ひて行幸し、封二十五戸を賜ふ、翌四年九月三十日疾により寂す、壽五十九。(本朝高僧傳)

チヨージユ　長樹（二一六六）〔曹洞宗〕越前福聚寺の禪僧なり、長樹字は東木、久しく大空玄虎に參して印可を受け、福聚寺に出世し、次に遠江松巖寺に遷る、永正三年龍澤寺を董す、某年福聚寺に寂す、壽缺く、法嗣翅天鸞翔あり、(日本洞上聯燈錄)

チヨーシユン　長舜 一八〇四／一八八六〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、長舜は伊豫守康宗の子なり、十歲にして出家し、良慶に師事して天台教を學び、建保六年十一月十四日覺朝に隨つて傳法灌頂を受く、承久年間大學頭となり、敕して法眼に叙せらる、嘉祿二年四月九日寂す、壽八十三、(三井續燈記)

チヨーシユン　長俊 ……／一七九四　三條一流の佛工なり、長俊一に長助、一に長順に作る、法眼長圓の子なり、法眼に叙せらる、長承三年正月二十九日寂す、(古本僧綱補任、長秋記)

チヨージユン　長順　チヨーシユン長俊を見よ、

チヨージヨ　長助 一九八〇／二〇二一〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、長助は後伏見院の子尊悟法師に從ひて天台教を學び、建武四年正月十日無品親王を賜ふ、師嘗て大師の八帙を讀み、撮約して六卷抄を作る、康安元年二月八日寂す、壽四十二、(三井續燈記)

チヨージヨ　長助　チヨーシユン長俊を見よ、

チヨーシヨー　長淸（二〇九二）〔曹洞宗〕越後慈光寺の禪僧なり、長淸字は虛廓。俗姓生國未詳出家して講肆に遊び、後傑堂禪師に師事して印記を受け、總持寺に出世す、永享五年法兄顯窻示寂したるに依り、請に依り越後慈光寺主となり、某年寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

チヨーシヨー　長聖　ゼンクワン禪觀を見よ、

チヨージヨー　長乘 一九〇四／一九八三〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、長乘は俗姓藤原氏、出雲守長貞の子なり、寬乘親融寬師の諸師に就きて天台俱舍の旨を得、文永五年入壇し、翌年大阿闍梨となる、後罪を蒙むりて遠島に流され、元亨元年三月本房に歸へる、元亨三年十一月五日寂す、壽八十、(三井續燈記)

チヨーセー　長盛（二〇〇〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、長盛字は眞憲、俗姓生國詳かならず、博學多識にして學頭に昇り、大衆に推服せらる、智積院を開き初祖となる、寂年缺く、著作論草十卷あり、(結網集、諸宗章疏錄)
〔考〕　長盛は南北朝時代の人なり

チヨージヨー　長成　チヨーセー長勢を見よ、

チヨーシヨーイン　長生院　チゲン智現を見よ、

チヨーセー　長勢 一六七〇／一七五一　三條一流初代の佛工なり、長勢一に長成に作る、定朝の弟子にして三條一流の祖たり、治曆元年十月十八日法成寺造佛賞として法橋に叙し、延久二年十二月二十六日圓宗寺金堂造立の賞として法眼に轉し、承曆元年十二月十八日法印に轉ず、是れ法勝寺阿彌陀堂造佛の賞なり、寬治五年十一月九日寂す、壽八十二、(釋家初例抄)

チョーゼン 長善　ユーギ祐宜を見よ。

チョーゼン 長禪　コーソン幸尊を見よ。

チョーセンボー 長泉房　チユーギ忠義を見よ、

チョーゼンボー 長善房　ジツヨー實養を見よ、

チョーソン 長存　ゲンジユ元壽を見よ、

チョーテン 長典（……）〔新義眞言宗〕大和長谷寺の學僧なり、長典は伊豫の人なり、豐山に登り金蓮院に住して學解を以て聞え、一時亮汰と肩を比ぶ、寂年幷に壽缺く、著作心經科鈔一卷、釋論三帥、指掌圖六卷あり、（新義眞言宗史料）

〔考〕長典は延寶頃の人なり、

チョーデン 長傳　一二三八……〔淨土宗〕大和西方院の開山なり、長傳は白譽と號す、路書に師事して淨土宗を究め、大和西方院を剏して開山となる、延寶六年九月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チョートー 長棟　一二二七〔曹洞宗〕伊豆雲洞寺の中興なり、長棟字は高巖、俗名は憲貫、上杉氏の一族なり、初め管領持氏を輔けて鎌倉に住せしが、後伊豆國淸寺に投じて僧となり、名を高巖長棟と改め、雲洞寺の廢を興し專ら禪誦を務となす、後、耕雲寺顯窓和尙を迎へて住せしめ、長門に到り大寧寺に於て竹居眞梁禪師に謁し接待多年遂に印可を受け、山中に廬を構へ、棲留軒と號す、應仁元年寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チョードン 長呑（……）〔淨土宗〕常陸稱名寺の開山なり、長呑は其俗姓生國詳ならず、出家して良信に法を嗣ぎ、水戶に稱名寺を築きて開山となる、寂年、及世壽缺く、（淨土總系譜）

チョードン 長呑　二三一八……〔淨土宗〕武藏還到院の開山なり、長呑は淨蓮社欣譽と號し、其鄕貫詳かならず、呑龍に師事して法を嗣ぎ、武藏新後備後村に還到院を開く、後、勝林寺に移り、萬治元年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チョーニン 長忍　ウゴン有嚴を見よ、

チョーニユー 長柔　二二一六……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、長柔字は勝剛、其鄕貫詳かならず、久しく傳宗派に參して契悟し、出てゝ普門寺に住す、晚年石見東光寺に佚老し、康正二年十二月十二日莊嚴院に寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

チョーヘン 長遍　一八八三
一九六二〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、長遍は正三位辰季の子、寬典賢長靜瑜行遍了遍の五師に學を受け、正安二年東寺の長者に任す、乾元元年正僧正に轉し、同年七月九日寂す、壽八十、（東寺長者補任、仁和諸院家記）

チョーホ 長保　一六〇七
一六八八〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、長保は出家して法相宗を學び、新院に住し、治安の初め維摩會の講首となり、長元初年十一月十八日寂す、壽八十二、（本朝高僧傳）

チョーホ 長甫　二〇二三……〔臨濟宗〕日向大光寺の開山なり、長甫字は嶽翁、伊勢中原の人なり、朝峰禪師に師事し、其法嗣となる、諸方に歷遊して日向に到り、郡主田島氏の歸依により大光寺を開く、法化甚だ盛なり國中に興聖大乘等の

六寺を開けり、貞治元年八月二日寂す、壽不詳、門下多福塔を建つ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

チヨーミヨー　長明 (一七一八)　〔天台宗〕信濃戸隱山の僧なり、長明は俗姓生國詳かならず。戸隱山に居り二十五歲にして誓て言語を絕ち法華を誦し。橫臥せざること三年、一日邑人に謂ひて曰く、我はこれ一切衆生喜見菩薩なり、此の所に來り身を燒くこと已に三回、今命盡て兜率に昇る、と、即ち薪を積みて內に入り自ら火を放ちて寂す、實に康平年中なり、壽缺く、(元亨釋書、拾遺往生傳、本朝高僧傳)

チヨーモ　長茂 (二四〇〇)　〔臨濟宗〕江戶大住菴の禪僧なり、長茂は澤水と號す、久しく龜菴珠光に參して其印可を受く、實に中峰第十四代の法孫なりといふ、江戶の大住菴に住し、元文の末年化す壽百六十餘歲なりといふ、

チヨーヤク　長益 二二七七　〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、長益字は大川、俗姓は平氏、兒玉の族なり、諸老に歷參し、終に三了麟達に參して記室となる、親炙七年元和二年席を繼ぎて薩摩福昌寺に住す、同三年九月二十三日寂す、潮音に塔す、(日本洞上聯燈錄)

チヨーユー　長祐 二〇七六　二一六二　〔曹洞宗〕近江洞壽寺の禪僧なり、長祐字は以翼、村上天皇の後裔にして、尾張の人なり、幼にして薙髮し、出遊して大雄寺吾寶龍澤寺如仲に參し、洞壽寺川僧悲濟に參し、遂に印可を受け、其席を嗣き、同寺に主となり、文明七年龍澤寺に遷り、同九年大洞寺に、長享元年佛陀寺に歷住す、延德元年遠江八幡山に入り菴居す、安心尼なるもの喜見菴を建てゝ師を迎ふ、文龜二年四月二十七日寂す、壽八十七、夏五十八、遺偈あり、曰く、八十七年、腐臭神奇、蹈飜華藏海、白日遶須彌、法嗣梅叢與芬然室與廓の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

チヨーヨ　長譽 二〇八三……　〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、長譽は能登の人なり、應永十四年丹生の神託により山王院に論席を開く、宥快證義者となり、師豎者となる、常に無量壽院に居りて學徒を誘掖し、同三十年七月十四日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

チヨーヨ　長譽　エツユン悲順を見よ、

チヨーヨ　長譽　リヨーケー良閤を見よ、

チヨーヨ　長譽　ルアン流安を見よ、

チヨーロー　長朗 ……、〔華嚴宗〕大和藥師寺の學僧なり、長朗は本と法相宗の學者なりしが、後正義に從ひて華嚴を學び、能く圓融の旨を解す、正義の執奏により勅命を蒙むり、藥師寺に入りて開講す、寂年、及び壽缺く、法弟義聖あり、善く五教章に通す、(本朝高僧傳)

チヨーイ　澄意 (……)　〔日蓮宗〕某寺の僧なり、澄意は肥後の人、身延山に入りて讀經を事とす、三十六年山を出てす、讀む所九千部、示寂年時缺く、(本化別頭佛祖統紀)

チヨーイチ　澄一(チンイ) 二二六八　二三五一　〔黃檗宗〕肥前長崎興福寺中興二代なり、澄一は明人なり、承應二年七月西來し、興福寺に入り。後、中興二代となる　延寶五年明の心越興儔禪師を招いて其法化を請ふ、元祿四年四月八日寂す、壽八十四、

チヨーエ　澄慧 一八二九　〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の學僧なり、澄慧は久しく高野山に留りて高德の室に陪し、兩界灌

頂を受け、三部の秘經を學び、尊勝理趣經を講し、持咒勇鋭にして缺くることなし、これに依つて道俗歸仰す、嘉應元年八月二十二日密印を結び、眞言を唱へて寂す、壽傳はらす、（本朝高僧傳）

チヨーエ 澄慧 二〇九二 二一七六 〔眞言宗〕山城醍醐山行樹院權僧正なり、 澄慧は財河河內守大江親重の子なり、前大僧正賢深の燈脉瀉瓶を得て三十四祖となる、是より先慈心院俊慶大僧都に請ひて松橋を嗣ぎ三十六祖となる永正十三年八月六日寂す、壽八十五、附法の弟子源雅俊聰の二人あり、（續傳燈廣錄）

チヨーエー 澄睿 ……一四七七 〔戒律宗〕大和大安寺の僧なり、 澄睿俗姓は齒屋氏なり、京都の人、出家して大和の大安寺に入り、諸學僧の門を叩いて、經論を研究す、大寺に住することなく、專ら後學勵ます、弘仁八年三月某日寂す、享壽傳はらず、（本朝高僧傳）

チヨーエン 澄圓 チエン智演を見よ

チヨーガ 澄雅 （一七七〇）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、 澄雅字は密藏と云ふ、俗姓生國を詳にせず、醍醐山にありて僧正勝覺に師事し、天永元年四月四日醍醐山の無量光院に於いて傳法灌頂を稟受して阿闍梨となる、傳法灌頂の職衆八口、教授師同門の賢覺なり、即ち僧正勝覺の附法弟子十四人の一人となる、示寂年月日及び享壽を詳にせず、附法弟子なし、（續傳燈廣錄）

チヨーカイ 澄海 （………） 〔淨土宗〕京師の學僧なり、 澄海字は慈心、（一に慈信に作る）俗姓生國詳かならず、初め天台宗の教義を究め、後長樂寺隆寛の弟子、敬日に師事して淨土教を受け、一義を立てゝ京都に弘通す、寂年壽缺く、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

チヨーカイ 澄海 （……） 〔眞言宗〕大和菩提山の學僧なり、 澄海字は本心、山城の人なり、長樂寺に居りて初め僧侶を司り延暦寺に登りて天台を習ひ、戒壇院に入りて圓照に木叉を受く東福寺に掛錫し、聖一國師に參請す、晩年菩提山に登りて密印を、稟承し主職となる、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

チヨーカイ 澄海 （一五三四）〔三論宗〕奈良東大寺の僧なり、 澄海俗姓は清海氏、攝津國の人なり、漁釣を業とす、海幼にして漁夫に從ひて海濱に遊戲す、同國の講師舉圓見て携へ歸り、律師願曉に附し、三論を受學せしむ、貞觀十六年に維摩會の講師となり、盛譽を馳す、晩年風疾を患ひ、門弟子に告けて曰ふ、命終時至れり、極樂を念せむ、と、毎日沐浴し、無量壽經要文、龍樹菩薩、羅什三藏の彌陀讃を誦して化す、右手無量壽如來印を結び、荼毘の間印爛れず（往生極樂記）

チヨーカク 澄覺 （二〇一九）〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、 澄覺は六條宮雅成の子、尊快眞仙に師事して宗義を學び、天台座主となること二度なり、其死沒の年時缺く、（天台座主記）

チヨークー 澄空 （一八七二）〔淨土宗九品寺流〕山城大報恩寺の僧なり、 澄空號は如輪、別に明院律師と云ふ、關白師家の息なり、覺明長西に師事して淨土宗九品寺派の學を究

め、洛西千本大報恩寺に住し、定覺（寛仁の頃の人）の主唱したる所謂釋迦念佛（釋迦堂念佛の略稱）を再興し、大に念佛を弘通す、寂年及壽缺く、（淨土總系譜、塵塚物語、古今著聞集）

〔考〕徒然草に嵯峨の釋迦念佛は文永のころ如輪上人はしめられけり云々とあれとも、然らす、如輪は再興したるのみ、委くは塵塚物語古今著聞集にあり、

チヨークー　澄空　ジユゼン壽全を見よ、

チヨーゲツ　澄月　二三七五 二四五九　〔天台宗〕山城岡崎某菴の僧なり、澄月は醉夢菴、又は翠雲軒と號す、備中の人、或は備後福山の人なりとも云ふ、幼にして出家し、玉島なる天台派の某寺に入りて勸學し、十三歲の時寺を出奔して、比叡山に登り、後志を變じ風流文雅を以て身を終らんと欲し、武者小路實岳卿の門に入りて和歌を學び、遂に其妙所に至る、洛の東岡崎邑に住し專ら諸文人と交はり、徒を延て教示す、時人師及び蒿蹊、蘆菴、慈延を以て平安和歌四天王と稱す、寛政十一年五月二日寂す、壽八十五、（近世三十六家集）

チヨーケン　澄賢　一八一八……　〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、澄賢は紀伊の人、高野山に登り、良幸を師として出家受戒し、琳賢に從ひて兩部の灌頂を受け、諸尊の法を學ぶ、保元三年三月十一日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳、高野往生傳）

チヨーゲン　澄玄　二五一一……　〔眞宗〕近江大津唯泉寺の住持なり、澄玄一名普天、號は香雲院、近江の人、高倉學寮に學び、文政元年寮司となり、因明大疏を講ず、後改邪鈔、唯識述記、四教義、倶舍論を講ず、文政十一年九月二十三日擬講となる、義林章、往生文類、成唯識論、口傳鈔を講じ、天保十一年十月嗣講となり、十三年論註を講じ、後、易行品玄義文を講ず、嘉永四年八月十二日寂す、壽缺く、明治二十年一月講師を贈らる、（高倉學寮講者列傳稿本）

チヨーゴー　澄豪（　　）　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、澄豪は慧光房と稱す、初め比叡山清朝僧都に從ひて圓教の旨を受け、後隆範に就きて三藏に貫通し、最も天台に精し、其示寂の年時を知らす、著作總持鈔十卷、理界印義、智界印義各五卷、法弟辨覺永辨智海長耀尊珍等あり、（本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

チヨーゴー　澄豪　一九一九 二〇一〇　〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、澄豪は傳法和尚と稱す、一に法圓上人と呼ぶ、冷泉院宰相顯成の子、十九歲出家し、廿三歲灌頂入壇す、四十九歲初めて大阿闍梨となり、觀應元年正月廿七日寂す、壽九十二、（三國名匠畧記）

チヨーシン　澄心　一五九九 一六七四　〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、澄心は加賀の人、觀理僧都に經論を學び、專ら空宗を唱ふ、長德二年維摩會の講師となり、少僧都に任す、寛弘四年東大寺を主とり、一住七年衆徒和す、長和三年二月寂す、壽七十六、（本朝高僧傳）

チヨージユン　澄順　一九九三　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、澄順は行順大燈二法師に業を受け、密乘に通し、兼ねて禪を能くす、某年寂す、壽缺く、（三井續燈記）

チヨージヨ　澄助　二〇〇五……　〔天台宗〕近江延暦寺の座主

なり、　澄助は一條太政大臣實家の子、元亨二年十一月天台座主に任し、翌年辭し、貞和二年六月廿日寂す、（天台座主記）

チヨーシヨー　澄照　リョーゲン良源を見よ、

チヨーシヨー　澄成　一七〇三……　〔眞言宗〕山城醍醐山大谷持寶院の僧なり、　澄成は康和二年十一月二十八日法務勝覺僧正を禮して持寶院に具支灌頂を受け、仁寛之を證明す、時に五十八歲なり、（血脈傳燈廣錄）

チヨーゼン　澄禪　二三一二　二三八一　〔淨土宗〕山城大原山某菴の僧なり、　澄禪は何處の人なるか詳かならす、十四歲出家の志あり、近江日野川邊にて自ら頭髮を薙る、大聖寺在心に師事して業を受く、梵行淸白にして目を擧けて女人を視ず、一時錫を振ひて東湯殿山に登り、西巖島に詣て道心堅固を祈禱し、十八歲增上寺に投し、宗戒二門を相承す、然るに義學を要とせすして坐禪稱名を事とす、貞享五年叢林を逃れ去り、諸國に歷遊す、同年二月相模曾我の岩窟に棲み、觀佛稱名すること、百日なり、次に塔ケ峰阿彌陀寺に登り、岩窟を求めて隱棲し、樹果草實に命を保ち、觀佛稱名すること前の如し、九月九日富士山に登り、雪氷に坐臥し、水穀を絕ちて業障を懺悔し屢靈應を感す、後、再ひ富士山に登り、靈應を感す、近江平子山に隱棲すること十六年なり、享保元年十月山城大源山に登り、同しく觀佛稱名を事とし、日課十萬遍なり、同五年豫め死期を知り、後事を當宇隱士に托し、明年二月三日阿彌陀寺某來り訪ふ、師慇懃に永訣の辭をなし、翌日結跏趺坐合掌西向して寂す、壽七十、實に享保六年二月四日なり、（續日本高僧傳）

チヨーゼン　澄禪　一八八七　一九六七　〔戒律宗〕京都桂宮院の律僧なり、　澄禪號は中觀、俗姓は秦氏、山城小栗栖の人なり、建長三年具足戒を興正菩薩より受け、三論を東南院の智舜に習ひ、密敎を覺洞院の親快に學ふ、正嘉二年冬戒壇院圓照の招に應して行事抄を講し、又三論及ひ法華の疏を講す、洛西の桂宮院に住して戒律を說き、四衆を誘掖す、乃ち法財を捨てゝ堂宇を修繕す、寺衆稱して弘律の祖となす、德治二年二月二日寂す壽八十一、臘五十一、著作三論玄義檢幽鈔、神託記あり（本朝高僧傳）

チヨーゼン　澄禪　二三三四……　〔眞言宗〕肥後地藏院の學僧なり、　澄禪字は悔焉、號は知等庵、肥後求摩の人、俗姓菱川氏、夙に出家し、眞言宗に歸し、稍長して京都に登り、智積院に投じ、僧正運敞に師事し、事敎二相を究む、兼ねて悉曇學に通ず。巧みに木筆を用ゐて梵字を書す、且書をよくす、後水尾法皇　敕請を拜し、宮中に於て梵字を書し、御感を蒙る、後、法皇の勅を拜し高雄山に藏する木筆の十如是を臨摸し、二本を作り、一本を獻し、一本を高雄山に留む、元本は傳に弘法大師の筆澤なりと云ふ、師臨摸して妙神に迫れり、晚年肥後に皈り、愛宕山地藏院に住し、權僧正に任ぜらる、延寶八年六月十二日身相舉動、皆是密印、所出言語、便成眞言の四句の偈を書し、從容として寂す、著作種子集二卷、四十九院梵文一卷、無常偈一卷、校正悉曇愚鈔二卷、悉曇字記初心鈔、悉曇連聲、悉曇𦽵文、各一卷あり、（續日本高僧傳、瑞林集、近世佛家著作目錄稿本）

チヨーニン　澄任　サイクワン最寬を見よ、

チヨーヨ 澄譽　ゼンキヨー善慶を見よ、

チヨーヨ 澄譽　デンクワク傳廓を見よ、

チヨーヨ 澄譽　ベンリユー辨龍を見よ、

チヨー 超首座　（二四二九）〔臨濟宗〕備前岡山淨心菴の禪僧なり、超首座は伊豫の人なり、業を大洲の曹溪院に受け、隱山行應の二老に參し、誠拙の記莂を受く、壽七十餘にして岡山の淨心菴に寂す、

チヨーウン 超運　（二三〇〇）〔淨土宗〕上野大善寺の開山なり、超運は武藏八王子の人、其俗姓詳かならず、吞龍に投じて出家受業し、上野新田に大善寺を剏す、寛永十七年正月四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

チヨークー 超空　エンクワン圓環を見よ、

チヨーコ 超虎　（二〇八三）〔曹洞宗〕肥後永國寺の禪僧なり、超虎字は大嶽、肥後菊池氏の子なり、同國永國寺實底超眞に投じて剃髮し、後、諸方に徧參し、印可を受け總持寺に出世す、應永三十年永國寺に住し、晩年旨を承けて再び總持寺を司どり、敕により紫袍を賜ふ、居ること一年にして永國寺に老を養ひ、某年寂す、門徒等塔を本山に建つ、（日本洞上聯燈錄）

チヨーコーイン 超光院　ギヨーシン堯眞を見よ、

チヨーサイ 超濟　（二〇七六）〔眞言宗〕山城東寺百四十代の長者法務なり、超濟は妙法院僧正と稱す、詔して東寺百四十代の長者法務に補し、後七日御修法を行す、妙法院の三世たり、應永二十三年十月三日寂す、附法の弟子滿濟光超玄慶の三人あり、（續傳燈廣錄）

チヨーサイ 超西　（二〇二五）〔曹洞宗〕梅香院の開山なり、超西字は笠原、俗姓は大島氏、其生國詳かならす、壯にして淸嶽山の巽山和尚を師となして發悟す、梅香院を創して居り、其處に寂す、年壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チヨーサン 超山　ギンシユ誾趣を見よ、

チヨーシン 超眞　（二〇八三）〔曹洞宗〕肥後永國寺の開山なり、超眞字は實底、肥後求麼郡原田の人、姓は西氏なり、幼にして某寺に入りて出家受戒し、其師の勸めに依り、丹波永澤寺に到り、永就禪師に師事して印可を受け、總持寺に出世し、攝津の景福寺に主となり、五年にして鄕里に歸り、業師の塔を掃ふ、內田氏なる者山鹿郡回猿峯下に淸潭寺を營みて主となす、亦た肥後求麼の城主藤原氏道化に歸し、府內に蓬萊山永國寺を創建し、請じて開山となす、應永三十年七月二日寂す、偈あり曰く、生也死也、推レ車撞レ壁、撥ニ倒須彌一、性海風息、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

チヨーゼツイン 超絕院　ドーコー道晃を見よ、

チヨーネン 超然　（二二八九）〔黃檗宗〕肥前長崎崇福寺の開山なり、超然は明の人、出家して臨濟禪を修す、寛永六年西來して長崎に入り、滯留の福州人に請せられ、崇福寺を開く、時人其寺を福州寺といふ、師寂年詳ならす、（長崎年表）

チヨーネン 超然　（二四五二／二五二八）〔眞宗〕近江復道覺成寺の住持なり、超然字は不群、一名は若英、號を虞淵と云ふ、近江高宮驛圓照寺主大濤の第二子なり、幼より好みて史籍を讀み、詩歌を嗜む、文化五年受度し、福堂村覺成寺に住持す、明年

本宗學黌に掛搭し、內典を研精す、文政四年雲幢義諦二師並に叢林に在りて解義時に異同あり、兩黨相軋る、師雲幢と善し、然れども軋轢却て禍の基とならんことを憂ひ、乃ち義諦の門に入りて協和を謀る、八年安居の時主講を命せらる、翌年信明宗主寂す、此時新義の獄既に決し其餘燼猶は存す、師乃ち京に入り、諸老を糾合して邪義を闢さんとす、十年信法宗主師をして異徒を矯正せしむ、天保二年歸休を請ふ、嘉永四年宗主師に命して眞宗法要典據を校補せしめ、數年にして功成る、明治元年二月病に罹り二十九日寂す、壽七十七、臘六十一寂する日宗主司教を授け、明治十三年宗主諡して高尚院と稱す、著作、十住毘婆娑論一覽、選擇集一覽、三界義一覽、八宗綱要一覽、三國佛法傳通緣起、石山禦寇記、大谷本願寺嫡庶實記、鳥邊野問答、駁一鞭千里、玄言考駁、延仁寺舊地考、杞天私言、十二箇條答問、曰群夢、松陰慨談、儆戒小纂、里耳談、正信偈句題和歌、仰信餘筆、裁斷申明書信順記、風濤萃響、同續編、名言考、續名言考、遂家錄、百花叢、雅語考、西洋小品、梅花紙帳放吟、山居餘課、續山居餘課、北錫紀程、諸家判自歌合、一葦紀行、秋役日紀、寧樂紀行、護法小品、各一卷、夕陽廬文艸、幻華詠艸、虎淵文鈔、撫松園詩鈔、洋峨存稿、醒心和歌集、冬夜雜記、和漢駢事、同續編、磯藻府、親傳集、續里耳談、南柯法語、各二卷 和智叢、折薇線、薦蒿筐記、俗語考、新撰近世畸人傳、各五卷、水鹽偶筆、同續編、歲寒窓放言、同續編、各六卷、歲寒窓憶語七卷、反正紀略十二卷、日本僧寶事苑、日本絶句類苑、各十六卷、校補眞宗法要典據十八卷あり、(碑銘、本願寺派學事史)

チヨーヨ 超譽　ショーキン聖欽を見よ、

チヨーヨ 超譽　ゾンゴ存牛を見よ、

チヨーヨ 超譽　モンシユー文宗を見よ、

チヨーリンアン 超倫菴　ジヨーシヨー常照を見よ、

チヨーオツ 潮越 二三四五 〔淨土宗〕武藏養伯寺の開山なり、潮越は定蓮社心譽と號し、俗姓は高村氏、武藏練間の人なり、幼にして江戸淺草清光寺に入りて剃髮し、知哲に師事して法を嗣ぐ、後新鳥越に養伯寺を創して開山となり、貞享二年十月二十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

チヨーオン 潮音　エカイ慧海を見よ、

チヨーオン 潮音　ドーカイ道海を見よ、

チヨ・シン 潮心 (二二五三) 〔淨土宗〕下總稱念寺の開山なり、潮心は直蓮社西譽虎童と號す、下總結城の人、虎角に投して淨土敎を修し、結城の存把に法を嗣ぐ、州の八幡稱念寺を開きて居住す、寂年、及壽缺く、(淨土總系譜)

チヨードン 潮呑 二三三九〜二三二〇 〔淨土宗〕江戸雲光院の開山なり、潮呑は還蓮社往譽信入と號す、武藏埼玉郡奇西上佐久村の人、其俗姓詳かならず、慈昌に師事して法を嗣ぎ、深川に雲光院を建つ、後京都黑谷に住し、慶安三年四月十二日寂す、壽七十二、(淨土總系譜)

チヨーや 潮也 二三二二 〔淨土宗〕江戸靈山寺の僧なり、潮也は然蓮社法譽と號す、潮能に就て剃髮受業し、初め江戸靈山寺に住し、後館林善導寺に移る、承應元年六月十九日寂す、世壽缺く、法嗣一人あり周譽琳也と云ふ(淨土總系譜)

チヨーヨ 潮譽　キユーガン休岸を見よ、

チヨーヨ 潮譽　セータツ誓達を見よ、

チヨーリヨー 潮龍 二三二一―二三九〇 〔淨土宗〕武藏增上寺の第十五代なり、潮龍號は聞譽、俗姓詳ならず（一說秋庭氏）上總國市原郡菊間の人、始め龍澤山大巖寺に入り、虎角上人に就て剃髮修學し、諸檀林に遊ひて耆老を問ふ、後隨流上人より嗣法稟戒し、里見家生實御所の歸崇を受け、房總二州に敎を布くと多年、元和二年七月生實大巖寺に住して數百の學徒を指訓す、後專修圓戒の統を繼て弘敎に勤む、寬永七年五月新田大光院に轉じ、仝年十月命を奉じて增上寺第十五代となる、在職三ケ月にして十二月九日寂す、壽七十、（鎭流祖傳、三緣山志）

チヨーア 朝阿　クワンチ觀智を見よ、

チヨーエン 朝圓（一八四二）三條一流五代佛工なり、朝圓は明圓の子なり、法橋に叙せらる、壽永頃の人なり、（僧綱補任）

チヨーヱン 朝圓 一九八三―二二六三 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、朝圓初の名は泉圓といひ、宗義を專攻し、延文三年の法勝寺三十講に勅招せられ、以後名聲高し、應永十年二月十日寂す、壽八十一、（三井續燈記）

チヨーゲン 朝源（一八〇七）〔眞言宗〕京都德大寺の第二代なり、朝源は京都の人、北野二位遠度の子、師輔の孫なり、朝壽律師の室に入りて出家し、深覺大僧正を禮して傳法灌頂を受け、遂に德大寺の二代となる、其寂年缺く、（傳燈廣錄）

チヨーコク 朝谷　ゼトン是暾を見よ、

チヨーコー 朝幸 一九四六―二〇二一 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、朝幸は諏訪神人大進圓忠の弟なり、英朝靜泉二師に從ひて宗旨を學び、嘉元元年得度し、天台倶舍法相三論華嚴に通す、建武二年季の御讀經講師となり、康安元年十月十六日寂す、壽七十六、（三井續燈記）

チヨーサン 朝山　ホートン芳暾を見よ、

チヨージユ 朝壽（一八〇七）〔眞言宗〕山城德大寺の開山なり、朝壽は京都の人、左兵衞督藤原忠尹の子、大臣忠仁の孫なり、寬朝國師を禮して灌頂を受け、心印を佩ふ、左大臣實能の宅を獲て德大寺を開き、久安三年六月五日慶讃供養す、（傳燈廣錄）

チヨーセー 朝晴 一六八一…… 〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、朝晴は大和添下郡の人、禪徵僧都に師事して三論を學び、長和三年興福寺南圓堂に於て維摩經を講し、尋で最勝法華二會を經て寬仁四年東大寺に住し、別當となる治安元年四月寂す、壽缺く、（東大寺別當次第、本朝高僧傳）

チヨータツ 朝達　リヨーエン了圓を見よ、

チヨーアン 趙菴　シユーネン宗諗を見よ、

チヨーイン 倀因 二二五一…… 〔曹洞宗〕甲斐景德院の開山なり、倀因字は拈橋甲斐山梨郡小宮山氏の子なり、十五歲にして父母を喪ひ、三寶の志あり、西山慈照寺に出家す、初め廣嚴寺箇學に謁し永祿元年箇學遷化す、國守武田晴信（信玄）師を請て其席を主しむ、天正十年織田氏國境を壓し太守勝賴田野の天目山に入りて戰亡す、師衆を携へて倶に國主妻子の遺骸及び兄內膳と義士官女六十一人を收めて之を葬る、德川

家康甲斐に軍を督し師を召して法を問ひ戒を説かしむ、謂て曰く、師の兄内膳勝頼の爲めに忌まれ流落すること三年、終に田野に歸て戰死す、師方外に在りと雖も信義を忘れず、大軍の兵を憚らず、戰場にて亡主の遺骸を葬る、賢兄弟と謂ふべしと、遂に禪院を建てゝ景德院と云ふ勝頼の冥福を修す、師を移して始祖となす、家康田野の莊を寄附す、天正十九年十月十五日寂す、壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

チヨーケー　兆溪　一三九四……〔黄檗宗〕武藏弘福寺の禪僧なり、兆溪諱元明と云ふ、鐵牛機に師事して黄檗禪を傳ふ、常に念經を喜はす、獨り書を喜ふ、殊に兆殿司の畫を愛し、之を摹せむとの意あり、長崎に遊びて、素絲五十幅を得、直に京師に上り、東福寺に通謁す、寺僧曰ふ、上人兆殿司の五百羅漢を摹せむと欲するに非るか、殿司識記あり、某年一道人來り、吾畫く所の五百羅漢を觀むことを請ふ者ありと云へり、而して實に今月今日なり、と、兆溪大に驚き、宿志を告げ、毎日之を摹し、其功を竣ふ、木菴禪師の題賛を請ひ、携へて江戸に歸へり、牛島の弘福寺に寄附す、後吉法大に進み、阿彌陀、觀音、勢至等を寫す、明人傳へ賞して東方の王摩詰と稱したりと云ふ、享保十九年某月寂す、壽九十九なり、（譚海、古畫備考）

チヨーグワン　聽願（一八七二）〔淨土宗〕祖源空上人の高弟なり、聽願は俗姓詳かならす、阿波に住す、始め圓光大師の弟子となり、後に辨圓に就きて其手印を受承す、道聲一時に高し、示寂の年時詳ならす、（鎭流祖傳）

チヨーケー　鳥溪　ダイレン大廉を見よ、

チヨーゴ　調御　ジヨーゴン定嚴を見よ、

チヨージユ　寵壽（一五三八）〔眞言宗〕山城法琳寺の僧なり、寵壽俗姓不詳、小栗栖常曉に師事して大元帥法を受け、元慶の初東國亂あり、二年正月に勅あり寵壽僧七人を率ゐて出羽國に出張し、降伏の祈禱をなす、靈驗あり、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

チヨージヨ　奝助　一八七七／一九五〇〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、奝助俗姓は藤原氏、右大臣實親の子なり、仁和寺の房圓僧正に隨つて灌頂法を受く、帝師の密行を聞きて正嘉二年敕して權僧正に任ず、師眞乘院に居して密敎を開演す、文永三年夏東寺三の長者に加任し、五年大僧正に昇進す、弘安元年法務寺務を領し、四年七月仁和寺の寺務に補し、正應三年十二月二十六日寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

チヨーネン　奝然　一六七六……〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、奝然俗姓は藤原氏、京都の人なり、幼にして東大寺に入り、東南院觀理に三論を習ひ、石山寺元杲に密法を稟く、師常に五臺山に登り、文殊の現身を拜し、中天竺に渡り、釋迦の遺跡を禮せんと欲すれとも、老母のあるを以て果さず、天元五年夏母の許を得、彌勒文殊の像を圖し、常住寺に南北の淸衆を請し、法華、仁王、五日十講供養演説せしむ、これ豫め老母七七の忌を修すなり、永觀元年秋徒六人を率ひて宋に渡る、時に宋の太平興國八年なり、直に帝都に抵り銅器十餘品、幷に本朝職員令、年代記、唐越王孝經新義各一卷を獻す、太宗師を便殿に召して紫衣及び法濟大師の號を賜ひ、太平興國寺に館せしめ、侍遇尤渥し、師因て五臺山に詣でん

ことを請ふ、太宗勅を下して過くるところ食を續かしむ、後再び帝都に至り、刻本大藏經を賜はる、汴都西華門外に往きて聖禪院に詣で、優塡王第二栴檀の模像を拜し、佛工張榮に模刻せしむ、雍熙二年台州寧海縣の商人鄭仁德の船に投じて筑紫太宰府に着す、實に本朝永延元年の春なり、翌年師釋迦牟尼佛の模像、十六羅漢の畫像、大藏經五千卷を齎し、蓮臺寺に來り、其模像を嵯峨棲霞寺に納む、一條天皇清涼院を捌して安置崇奉せしめたまふ、永延二年秋東大寺に住し、三年にして退く師奏請し愛宕山を改め稱して五臺山と云ひ、一伽藍を建立して大清涼寺と號し、自ら三學宗を開かんとす、然るに其事業未た成すして疾に罹り、長和五年某月寂す、壽缺く、

チヨーム　蝶夢　二三九二／二四五五　〔淨土宗〕京師阿彌陀寺の僧なり、　蝶夢字は幻阿、號は泊庵と云ふ、京師の人なり、出家して中川阿彌陀寺の子院なる皈白院に住す、明和四年に住持の職を辭し、山城の岡崎に小菴を營み、徘諧を嗜む、芭蕉翁の眞筆米五斗の句を獲て大に喜ひ、小菴を五斗菴と號す、粟津の芭蕉堂を再興し、芭蕉繪詞傳を撰して義仲寺に納め、且つ芭蕉翁の舊跡を搜索して世間に傳ふ、後諸國に行脚して到る處に徘諧あり、天明五年山城に皈り、岡崎の小菴の跡の後の地に再ひ小菴を營み泊菴と號す、相國寺大典禪師泊菴記を作りて贈る、天明一年阿彌陀寺火災に罹り堂宇本尊皆灰燼となる、師大に悲み灰燼の底より本尊阿彌陀佛像の片頰を拾ひ、大坂の佛工田中康朝に命して修補して其首を造らしめ、京師の佛工隆慶に命して身躰を造らしむ、自ら再興を謀りて大に功あり、後貞享元祿の俳諧書數部を再刻流布して後人を益せり、寛政七年十二月廿四日寂す　壽六十四、「うつせみやきたなきものは人のはて」、「角落ちてはつかし氣なり鹿の顏」、「あつき日や枕一を持あるく」等人口に膾炙せり、著作芭蕉繪詞傳あり、（近世畸人傳、小雲棲稿。俳諧名譽談）

チヨーシヨーアン　聽松菴　ニチケン日謙を見よ、

チヨーヨ　聽譽　グクワン弘願を見よ、

チヨーヨ　聽譽　ホーサン保山を見よ、

チヨーヨ　頂譽　ナンリユー南龍を見よ、

ツの部

ツーアン　通菴　コータツ浩達を見よ、

ツーエン　通衍（：……）〔臨濟宗〕京都東福寺の僧なり、　通衍字は大川、進翁光に師事して法を嗣ぎ、慧日山東福寺に住す、某年十二月二十日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

ツーオー　通翁　キヨーエン鏡圓を見よ、

ツーオー　通翁　ソテツ祖徹を見よ、

ツーオーイン　通王院　ニチユー日祐を見よ、

ツーオン　通遠　ニチゲン日眼を見よ、

ツーカイ　通海　シユーエン宗圓を見よ、

ツーカイ　通海　リヨーギ良義を見よ、

ツーカク　通覺　二〇三五／二〇八八　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、　通覺は十二歲にして剃髮受戒し、道意範伊の二師に習學す、後大阿闍梨位となり、此法を人に授くること四人なり、

公武の護持僧、五壇の阿闍梨、三井の別當等に歴任し、善光寺、粉川寺、平等寺の別當職となる、正長元年二月十三日寂す、壽五十四、(三井續燈記)

ツーカク 通覺 ニチジツ日實を見よ、

ツーギ 通義 ニチカン日鑑を見よ、

ツークワン 通觀 (一四三〇) 奈良の歌僧なり、通觀は天平寶龜間の人にして和歌を以て聞ゆ、其詠歌は萬葉集に載す、(万葉集作者履歴)

ツークワン 通觀 ショーケン承憲を見よ、

ツーケン 通賢 (……) 〔眞言宗〕山城醍醐山松橋の十五代なり、通賢は武者小路尚書の子なり、大僧正となり、東寺二の長者に加はる、灌頂を受けて新熊野及び閻魔堂の別當となる、(續傳燈廣錄)

ツーゲン 通玄 (二〇一六) 〔臨濟宗〕山城普門寺の禪僧なり、通玄字は一槩、幼より東福寺の天柱吳禪師に從ひて染衣剃髮し、多年參禪研究して京都普門寺に住し移りて出雲の安國寺に主となる、延文の初め元亨釋書敕により藏に入る、師其尾に跋す、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

ツーケン 通玄 二三九一 〔眞言宗〕河内蓮光寺の學僧なり、通玄は讃岐多度津の人、出家して眞言宗に皈し、高野山に學び、事敎二相に通す、河内蓮光寺に住し、著作を事とす、享保十六年六月廿五日寂す、壽缺く、著作梵網古迹資講鈔五卷、梵網戒經資講鈔五卷、梵網戒經本疏引據、即身義圓鏡鈔、辨惑通衡、敎戒律義箇釋、三敎指皈箇註、行者靈驗記、各二卷、法華會義引據四卷、敎戒律儀指　鈔、梵字八轉聲、戒本宗要資講鈔、八齋戒得道鈔、光明眞言勸發記、梵網本疏引據增補各一卷あり、(蓮光寺返信、近代名家著述目錄)

ツーゲン 通玄 ゲンソー元聰を見よ、

ツーゲン 通玄 ジャクレー寂靈を見よ、

ツーゲン 通元 (二三六四) 〔眞宗〕豐後長福寺の學僧なり、通元は豐後の人、東本願寺なる日田長福寺道印の後を繼いて同寺に住し、學德並に高し、十住論の易行品の講解に全力を盡し、大藏經を通覽すると數十回、易行品の敎義に關係する文を抄出し、十二年にして讀易行品一部を作る、因て自ら易行菴と稱す後法嗣寶月京都に携へて開刻す、寶永の初本願寺學舍を興し、一宗の徒の學問所となさんとし、惠空等力を盡すも、幕府舊例なき事を創するを禁す、惠空等學舍の名義なきを憂ひて通元に謀る、師乃ち昔し大宰府觀音寺に學寮ありて今廢せるを知り、太宰府に至り土人に謀り、學寮の名義を再興し、京都に遷すことゝす、これより本願寺に高倉學寮の稱ありて、講堂の構營、並に講師寮司等の日皆舊例による、依これ師の計畫に出つるもの多しと云ふ、寂年月日並に享壽缺く、

ツーゲン 通源 ニチサイ日齋を見よ、

ツーゲンイン 通玄院 ニチエン日演を見よ、

ツーサイ 通濟 二四四八 二五三二 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十九代なり、通濟字は最勝、江戸大塚の人、護持院役者通辨の室に入り、豐山及諸方に學び、州の三保谷廣德寺に住す、後根生院に移り、護持院を經て嘉永三年豐山能化に舉けらる、大に山風を改め、寺堂を修す、一住七年辭して與喜寺に退隱し、

明治五年十月十八日寂す、壽八十五、(新義眞言宗史料)

ツーシキ　通識　ソーユー總融を見よ、

ツーシン　通心　ニチジユー日從を見よ、

ツーシン　通心　ニチチユー日忠を見よ、

ツーシンイン　通心院　ニチキヨー日境を見よ、

ツージヨ　通恕(……)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、通恕字は惟忠、出家受具の後諸禪刹敎場等を探問し學內外に通するを以て衆に推さる、初め建仁寺に住し、次に南禪寺に移る、寂年及ひ壽缺く、師詩偈を善くす、著作雲壑猿吟集若干卷あり、(本朝高僧傳)

ツーシヨー　通照　ドーチヨー動潮を見よ、

ツーシヨー　通紹　ケンシヨー賢紹を見よ、

ツーセン　通川(一九四九)〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、通川字は東峰、俗姓不詳、出羽の人なり、大休念に師事す、初め龜谷に住し、後鹿山に遷る、晚年鹿山利濟菴に屏居す、示寂年時缺く、壽七十九なり、遺偈あり、大用現前、不存規則、此是什麼規則、上天堂入地獄、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ツーチ　通知(……二〇七三)〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、通知字は心岳と云ひ、出家して痴兀慧の法孫なる南明詢に參して其法を嗣ぐ、初め東福寺に在りて後版に居し、後東福寺に主となる、應永二十年五月十日寂す、壽缺く、春輝菴に塔す、(延寶傳燈錄)

ツーテツ　通徹(一九六〇—二〇四五)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、通徹字は淸溪、自ら天遊と號す、俗姓は三浦氏、相模の人なり、幼にして壽福寺寒潭雲を拜して剃髮受戒し、京都に上りて遊學す、壯歲にして元に入り、諸刹に歷遊し、三十餘年雙徑に藏鑰を掌る、歸朝して天龍寺夢窓國師に依りて印可を付せられ、甲斐淨居寺に出世す、次に臨川寺に擄り、遷りて天龍寺に住す、後勅命を奉して南禪寺を主とり、將軍足利義滿に紫衣を賜らる、後丹波常照寺に居り、至德二年十一月四日偈を書して曰く、五彩畫ニ虛空一、空何有ニ形容一、虛空乃萬象、萬象乃虛空、と、筆を投して寂す、壽八十六、門人遺命により遺骨を大井河に投す、著作語錄若干卷あり、(本朝高僧傳、續群二三七)

ツーミヨー　通妙(二〇四二)〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、通妙字は高山、俗姓不詳、壽福寺寒潭雲(明菴西六世の法孫)に師事し、其法を嗣く、初め壽福寺に住し、後、圓覺寺に遷る、晚年龍門菴に退休す、示寂の年時缺く、遺偈呵ニ罵佛祖一、七十八年、末後一句、臘雪連レ天、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕永德前後の人ならむ

ツーミヨーイン　通明院　ニチシヨー日祥を見よ、

ツーミヨーイン　通明院　ニチリユー日隆を見よ、

ツーヨ　通譽　ガンリヨー岸了を見よ、

ツーヨ　通譽　トンシユー頓秀を見よ、

テの部

テーア　貞阿　ウンセツ雲說を見よ、

テーアン　貞安　二二七五　〔淨土宗〕京師大雲院の開山なり、貞安號は敎蓮社聖譽と云ひ、別に退譽と云ふ、俗姓北條氏、相模の人なり、大蓮寺堯譽に投して度を受け、後、飯沼に至り、見譽の法を嗣く、天正の初近江安土に遊び、日蓮の徒を論伏し、大に盛名なり、山城八幡の西光寺、伏見の勝念寺を開き、京師に大雲院を開き住す、元和元年七月十七日寂す、(淨土總系譜)

〔考〕鎭流祖傳に依れは、貞安俗姓秋篠氏、京師の人、大江正時の子、七歲にして淨華院良安に師事し、後、增上寺に學ひ、天正六年五月安土城の法論に名を揚け、信長に皈依せられ、大雲院を開き、元和元年七月十七日七十七歲にして寂したりとあり、其事實稍相異するところあり、是非を知らす、

テーアン　貞安　二二二二　〔淨土宗〕武藏相即寺の開山なり、貞安號は天蓮社忍譽と云ふ、督蓮社法譽の法を嗣き、武藏多摩郡に相即寺を開く、天文廿一年四月十九日寂す、(淨土總系譜)

テーイン　貞院　(一八九七)〔眞言宗〕奈良海龍王寺の律僧なり、貞院字は修蓮、嘉禎三年興正菩薩に就きて息慈戒を受け、二年を經て具足戒を納る、能く律部を究め、興正菩薩に密敎を學ひ、海龍王寺に住して、密を弘め、律を布く、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

テーカク　貞覺　ドーゲン道玄を見よ、

テーギン　貞吟　リヨーキヨー良經を見よ、

テーキヨー　貞慶　一八一五／一八七三　〔法相宗〕山城笠置寺の學僧なり、貞慶は字は解脫、左少辨藤原貞憲の子なり、久壽二年五月に生る、學年の時興福寺の權僧正覺憲に師事し、十歲剃髮受戒し、貞慶と名く、壽永の初維摩會の主座に陞り、文治二年再ひ推選せらる興福寺に居ること二十餘年なり、夙に顯榮の位地を捨てゝ山城笠置寺に隱る、時に二十九歲なり、後鳥羽上皇好みて麋鹿を射る、暮年其過を悔い、梵宇を建て師を召して落慶供養せしむ、承元二年海住山寺に移り、一住六年、學徒多く集まる、師法相を宗とすれとも、常に律を持することを務とす、警誡十一條を作り、儀觀鈔といふ、建曆二年海住寺にあり、十月疾を得、翌建保元年二月三日寂す、壽五十九、臘四十九、朝廷解脫上人と諡す、師兄弟四人、皆僧となり、延曆園城兩寺に入る貞雅、貞覺、實玄、貞圓、是なり、上足明光院の覺遍、東北院の圓玄、新院の良算、角院の璋圓等當時に名あり、著作唯識同學鈔六十二卷、(良算興玄等の草本を編したるものなり)、あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

テーキヨー　貞慶　一五三三／一六〇四　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、貞慶俗姓は大田氏、美濃の人なり、州の延命院承俊僧都に從ひて兩部の灌頂法を受け、京都に入りて諸師に請益し、よく其蘊を究め、延長七年東寺を主とる、承平三年春詔により貞觀寺に住し天慶三年冬律師に任す、七年夏勸修寺の檢校を司とり、七年七月八日寂す、壽七十二、(本朝高僧傳)

テーキヨー　貞曉　一八四六／一八九一　〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、貞曉は鎌倉法印と號し、又高野法印とも云ふ、俗姓は源氏、右大將賴朝の子なり、出家して後高野御室隆曉の二師

に就て密教を習ひ、建久三年六月隆曉の室に入りて密灌を受く、寛喜三年二月二十二日高野に於て寂す、壽四十六、（仁和寺諸院家記、高野春秋）

テーグ　貞弘（－九一八）〔法相宗〕大和修行院の學僧なり、貞弘字は勸慶と云ふ、正嘉二年維摩會の講師となり、修行院に住し法相を唱ふ、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

テーゴク　貞極（二三三七－二四一六）〔淨土宗〕武藏四休菴の開山なり、貞極號は一蓮社立譽と云ふ、京都室町の人、俗姓大西氏、世々豪商なり、母某は本宮女、後父に嫁す、師延寶五年に生る、幾何もなく母を喪ふ　父の後妻の逆遇を受け、八歲にして斷然出家す、二十七歲山城岡崎に至り、廣譽厭求上人に謁して、得度受戒し、其下にあること、四年にして關東に遊び、小石川傳通院に入り、了因に師事し、慧行共に進む、但譽上人より宗戒兩脉を受け、三年にして厭求の下に歸省す、尋で再び關東に遊び、楞嚴經等を讀むこと

貞極上人

三年、再び厭求の下に歸る、一日慧心僧都の傳を讀み、其母の僧都を教誡するのことを讀むに至り、深く感激し、道心愈堅し、正德三年十一月厭求の寂せる後、江戶小石川に隱棲し、誦經念佛をことゝす尋て五畿中國九州を歷遊し、享保元年江戶に歸り、麻布に居り、後三河島通津菴、根岸四休菴に寓し、法化盛んなり、前後其菴を訪うて教を受くる者八万人に及ぶと云ふ、選擇集を講ずること一百餘度に至る、寶曆六年五月廿日豫め死期を知り、大に道俗を集め、懇ろに教誡し、六月二日寂す、壽八十、臘五十三、門人了山塔を葛西善應寺に建つ、師一代の著作頗る多し即ち鎚砧鈔十卷、六波羅密寶林鈔四卷、涅槃像隨文畧贊、法の道芝、三十二相顯要鈔、兩派自他二要、五重廢立鈔、六波羅密拾玉鈔、二十五菩薩拾穗鈔、各三卷、本願念佛感光章二卷、淨土回向要決、如來十力得勝論、三心教訓抄、深草問答、淨土八祖畧傳要註、淨土和語宗要增一法門、或難白高下論決、白旗大澤業成論決、選擇辨、同九門玄談、安心請要決、即心念佛談義本、曼陀羅大意鈔、黑談和解、易往而無人和解、百萬遍勸誡抄選翼、女人往生發蒙抄、如來十號隨文畧贊、菩薩在天定壽論、放生修行眞僞論決、翻迷入正論、談義七章和解、觸光柔輭天仁添削私考、念佛往生授幻鈔、本願顯宗記、念佛燈明畧解、同飲食畧解、百華畧解、佛說善生經和解、光明遍照訓方章、黑谷永觀兩家異相、三寶示正記、三不遠畧解、教相辨異鈔、同續、正雜得失論、四恩孝順鈔、十自在光順鈔、實義無輩品畧圖篇、眞俗一事鈔、四休庵釋教和歌集、常陸帶、小寺法則、十五條提要鈔、圓頓戒選要鈔、同圓頓戒二掌記、同選要鈔、同教示鈔、

施化發迹二門畧解、中有年忌定數論决、辨文字般若記、灌佛法則報恩鈔、勸勝論、補處菩薩在天定壽論、各一巻あり、(貞極上人畧傳、續日本高僧傳、淨土宗經論章疏錄)

テーサン 貞山 ニチリョー日遼を見よ、

テーザン 貞殘 ……二二九七 (淨土宗)甲斐壽清院の開山なり、貞殘は稱蓮社念譽と號す、其俗姓生國詳かならず、傳察に師事して宗乘を究め、甲府壽清院の開山となる、寛永十四年八月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

テーザン 貞殘 ……二三一九 (淨土宗)江戸嚴淨院の開山なり、貞殘は專蓮社高譽と號す、俗姓は鈴木氏、武藏の人なり、初め浦川淨福寺に入りて剃髮し、次に廓山に從つて淨土教を學び、觀智國師の法を嗣ぐ、江戸小石川に嚴淨院を剏して住し、萬治二年九月二十八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

テージツ 貞實 ……(眞言宗)山城醍醐山の僧なり、貞實字は肥後已講といひ、京都の人、賴基の子、肥後守盛房の孫なり、附法一人あり、眞觀といふ、字は覺性、初め在俗の時尚書となり、退きて出家受法す、(續傳燈廣錄)

テージュ 貞壽 (一五六七) (眞言宗)大和東大寺の學僧なり、貞壽は延喜七年春大覺寺聖寶に從つて密灌を受け、東大寺に住し、後高野山に退居し、某年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

テーシュン 貞舜 一九九四 二〇八二 (天台宗)近江比叡山の學僧なり、貞舜は比叡山に登り、貞濟に親附して多年習學す、西塔の寶圓院に在りて道譽高し、應永年中近江柏原に成菩提寺を開きて圓頓の法を說く、師常に天台教の衰微を慨し、常に挽回の志あり、因て七帖見聞を輯す、慈慧僧正九十餘歳の時問答鈔を作りて寶要安立といふ、應永二十九年正月寂す、壽八十九、

テージュン 貞準 二二八七 二三四五 (淨土宗西山派)山城禪林寺の學僧なり、貞準號は寰空、後自ら一中と號す、俗姓は山村氏、京都の人なり、初め但馬生野來迎寺貞岸によりて剃髮し、業を積峰慶善に受く、伊勢の淨土寺尾張曼荼羅寺に歷住し、延寶九年の冬京都禪林寺に住し、盛んに法化を布く、貞享二年三月二十一日寂す、壽五十九、著作、觀經疏新記十六巻、阿彌陀經指要抄二巻、仐直辯三巻、淨土宗派一巻、往生十因新抄三巻、般舟三昧經疏一巻、安樂集新抄五巻、淨土承繼譜若干巻等あり、(淨土總系譜、禪林寺記錄、淨土宗經論章疏錄)

テージュン 貞順 ニチクー日空を見よ、

テースー 貞崇 一五二六 一六〇四 (眞言宗)山城醍醐寺の僧なり、貞崇俗姓は三善氏、貞觀八年山城に生る、初め貞觀寺の惠宿に從ひて密教を學び、後醍醐寺の聖寶に依り、灌頂法を禀け、兼て三論を質たす、出てゝ大和鳳岳寺に住し、藥師寺に移つる、延長八年醍醐寺の座主に補せらる、此年帝不豫にして師に詔して加護せしむ、承平三年東大寺を董し、冬十月東寺の三長者に加はり、天慶元年權大僧都に任し、五年十月金剛峰寺の座主を領す、明年上表して昌泰二年東寺の二十僧を辭し、金峰山に隱れ、菴居して三十餘年山を出でざらんことを期す、延長五年詔を蒙むりて俄に宮に侍し、奏請して山に歸へり、天慶七年七月二十一日寂す、壽七十九、(本朝高僧傳)

テーゼン 貞禪（……）〔三論宗〕大和東南院の學僧なり、貞禪は貞敏に隨ひて三論を受け、久しく京都奈良の間に遊び、大小乘に通す、東南院に住し、倶舍、婆娑、發智論等を講し、覺澄等と共に名高し、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

テーゾン 貞存（……二二八八）〔淨土宗〕總州大雲寺の開山なり、貞存は天蓮社梵譽と號す、俗姓は岡部氏、武藏江戸の人なり、靈巖に師事して淨土教を修め、下總本所に大雲寺を開く、寛永五年二月二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

テードン 貞鈍（二二三一）〔淨土宗〕三河大樹寺第十代なり、貞鈍は重蓮社隣譽と號す、祖洞に師事して法を嗣ぎ、三河大樹寺に主となる、州の岡崎松應寺開山となる、元龜二年七月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

テーハ 貞把（二一七五—二二三四）〔淨土宗〕武藏增上寺の第九代なり、貞把號は感蓮社道譽、俗姓大谷氏、畠山の麾下なり、和泉國日根郡鳥取庄波宇手村の人、父は刑部氏、永正十二年九月廿八日に生る、大永七年三月十三日十三歳にして同庄寶國寺貞也上人に投し薙染す、性魯鈍にして道心甚深し、十七歳の時享祿四年二月果譽上人天啓の高風を慕ひ、就て學ばむとす、天啓之を許す、精勵九年にして歸省し、師の命に依り齊講筵を開きしも訥辯にして衆の嘲笑を招き、再び去て東關に至り、下總成田不動尊に祈り、且つ祖洞上人に從ひて法を受け、攻學甚だ勤む、弘化の時武藏國小机庄泉谷寺に小松を植えて誓ふ所あり、天文年中下總國千葉郡生實龍澤の水中に證悟す、故に師を以て傳法の中興となす、其澤沼を塡めて大巖寺を建つ、原式部其費を資し、弘治元年七月增上寺の第九代となり、永祿六年生實に歸住し、武藏臼井村に長源寺を創立して遷り住す天正二年十二月七日寂す、壽六十、法臘四十八、龍澤山に歸葬す、（三縁山志）

テーベン 貞辨（一九八九—二〇四〇）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、貞辨は朝圓仕承二師に學習して台密兩宗の蘊を盡し、一寺の老と稱せらる、康曆二年七月廿四日寂す、壽五十二（三井續燈記）

テーヨ 貞譽（……）〔淨土宗〕信濃來迎寺の開山なり、貞譽は其俗姓生國詳かならず、智譽上人に師事して法を嗣ぎ、信濃飯田に來迎寺を開く、寂年月日、及び壽缺く、（淨土總系譜）

テーヨ 貞譽（一五三三—一六〇四）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、貞譽は鄕貫詳かならず、天慶五年東寺の長者に任し、同七年七月八日寂す、壽七十二、（東寺長者補任）

テーヨ 貞譽（……二二九七）〔淨土宗〕肥後源空寺の開山なり、貞譽は筑後の人、法を觀智國師に嗣ぎ、肥後熊本源空寺の開山となる、寛永十四年三月二十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

テーヨ 貞譽　ナンガン南岸を見よ、

テーヨ 貞譽　リョーゴク靈極を見よ、

テーヨ 貞譽　リョーヤ了也を見よ、

テーリュー 貞龍　リョーショー良聖を見よ、

テーガン 庭岸（二三四七……）〔淨土宗〕美濃大蓮寺の開山なり、庭岸は生蓮社岸譽と號す、俗姓は青木氏、近江膳所の人なり、知童に師事して法を嗣ぎ、美濃大垣に大蓮寺を創立す、

貞享四年十月二十日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

テーキ 禎喜 一七五九／一八四三 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、禎喜は藤原宗信の子、世豪法印密灌の高弟にして瑜伽法に修練の名を得たり、保元二年勅して法眼に叙し、圓城寺覺隆の二寺を司とらしむ、永曆元年東寺の長者に加へ、權少僧都に任す、應保元年六月詔により神泉苑に雨を禱りて驗あり、仁安の初め大僧都に任し、六月雨を禱り東寺の一の長者に賞任す、此秋寺務法務兼帶の宣を承く、二年正月權大僧正に轉し、嘉應二年春仁和圓教二寺の寺務を見る、此歲春また雨を祈り、輦車に乘ることを許さる、承安二年秋後白河上皇の病を加持し、賞して阿闍梨五人を東寺西院に置き、尋で東寺修營の費を賜ふ、治承元年東大寺を管す、四年七月高倉上皇の病を加持し、賞して弟子任遍を權律師に任す、冬亦同しく病を祈りて官馬を賜ひ、眞禎を舉けて法眼に叙す、壽永二年庇輿に乘りて禁に入ることを許され、十月一日寂す、壽八十五、(本朝高僧傳)

テーヨ 禎譽 マンテキ萬的を見よ、

テーアン 鼎菴 シユーバイ宗梅を見よ、

テーサン 鼎山 ソンイ存彝を見よ、

テーヨー 廷用 シユーキ宗器を見よ、

テーヨー 延用 モンケー文珪を見よ、

テーヨ 帝譽 ソンクー尊空を見よ、

テーヨ 底譽 ドンキユー呑岌を見よ、

テキオー 的翁 モンチユー文仲を見よ、

テキサン 的山 二三二三 〔淨土宗〕伊勢大安寺の開山なり、的山は明蓮社誠譽と號す、其鄕貫詳かならず、隨流に法を嗣ぎ、伊勢山田に大安寺を剏して住し、寬文三年十二月十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

テキドー 的道 二三三三 〔淨土宗〕筑前報光寺の中興なり、的道は道蓮社成譽と號し、筑前糟屋の人なり、法を隨波に嗣ぎ、曾の博多報光寺に住して中興となり、大隈の成榮寺に主となり、其廢頽を興す、延寶元年十月二十七日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

テキヨ 的譽 レキサン歷山を見よ、

テキリン 的林 ユーチユー融中を見よ、

テキアン 適菴 ホージユン法順を見よ、

テキスイ 滴水 二三二一／二三七七 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、滴水字は曹源、石見津和野の人、俗姓は神代氏、龜井侯の家臣神代信記の季子、母は原田氏なり、寬文元年五月七日に生る、稍長して出家し、諸國の叢林を歷遊し、後、加賀大乘寺に住し、大に曹洞の宗風を舉揚す、享保二年四月十一日寂す、壽五十七、曹源二會錄二卷あり、

テキスイ 滴水 ギモク宜牧を見よ、

テキネン 適然 二九三七 〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、適然字は覺靜大和の人、圓照律師に師事して戒律を傳へ、海龍王寺に投し禪慧の講義を聞き、光明山に入り、智舜の三論講義を聞く、寂年缺く、(本朝高僧傳)

テツガン 哲顏 二三五四／二四一四 〔淨土宗〕京都清蓮寺の僧なり、哲顏號は淨阿、俗姓詳かならず、肥前の人なり、早年出家し道心堅し、日課念佛七万遍す、清蓮寺に住し、毎日晨朝獨り

曠野に出でゝ西方を望みて高聲念佛す、終日兒女を集めて念佛を勸め、法澤を蒙むるもの甚た多し、時人呼ひて念佛和尙といふ、寶暦四年正月豫め死期を知り、四日に道俗を招集し異口同音に阿彌陀佛號を唱へ、少頃して合掌して安然寂す、壽六十一、師一生に彌陀經を誦すること二十萬部なり、死後舌根に舍利を生したりといふ、（續日本高僧傳）

テツガン　哲巖　ソシユン祖濬を見よ、

テツシユー　哲秀（一三四四）〔淨土宗〕京都正念寺の學僧なり、哲秀字は楊柳、常陸の人なり、幼にして出家し、哲翁に師事し三緣山に登り、諸部を研究す、南北二京に周遊して倶舍因明唯識を研究し、且つ儒書に通す、貞享元年伊勢桑名に往き、法門を弘通し、後京都正念寺に住す、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

テツソー　哲僧　二五四三……〔眞宗〕加賀河北二日市誓入寺の住持なり、哲僧は護法院と號し、倉谷氏を姓となす、寮司となりて天保十三年より高倉學寮に八識規矩倶舍論を講し、明治二年擬講となり、同五年十月職を免し、六年員外に轉し尋きて三等學師となりて明治十三年五教章を講し、後二等學師となり、十六年七月二十日寂す、（眞宗史料）

テツドー　哲道（二三〇一）〔淨土宗〕安房眞勝寺の開山なり、哲道は圓蓮社寂譽と號し、肥前長崎の人、俗姓は三浦氏なり、珂山に師事して宗乘を研究し、其法を嗣ぎて後安房賀茂村眞勝寺を剏す、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

テツアン　鐵菴　ドーショー道生を見よ、

テツオー　鐵翁　ソモン祖門を見よ、

テツクー　鐵空　ジユンコ純固を見よ、

テツゲン　鐵眼　ドーコー道光を見よ、

テツギユー　鐵牛　ドーキ道機を見よ、

テツギユー　鐵牛　ケーイン景印を見よ、

テツギユー　鐵牛　エンシン圓心を見よ、

テツサン　鐵山　シアン士安を見よ、

テツサン　鐵山　シユードン宗鈍を見よ、

テツシン　鐵心　ドーイン道印を見よ、

テツシン　鐵心　ドーハン道胖を見よ、

テツシユー　鐵舟　シユードン宗鈍を見よ、

テツシユー　鐵舟　トクサイ德濟を見よ、

テツセン　鐵船　シユーキ宗熙を見よ、

テツソン　鐵村　ゲンサク玄鷟を見よ、

テツネン　鐵然　二五六二……〔眞宗〕周防妙遠寺の住持なり、姓は大洲氏、周防の人妙遠寺月性の弟子となる、鐵然は賢正院と號す維新の初年本山大改革に際し、力を盡し、明治三年七月會計加談に任し、四年八月赤松連城と共に參補となり、八年一月執綱代理となり、同五月執事となり、九年鹿兒島開教のため開教長として善正寺龍川賢流、光專寺桑門垂着等を從へて同地に出張したるに、西南の事變起り、私學校の徒は師か木戸參議の内命を受け、開教に名を托して出張したるものなりと誤傳し、十年一月卅一日賊徒坂本佐一郎、大山某等兇器を携へて師の寓居を襲ひ、金品を奪ひて暴行す、二月六日に至り再ひ賊徒二十名許り來襲し、師の一行を捕へて獄に投し、師に木戸參議の内命を白狀せよと迫りしも、師

は知らざるを以て唯知らずと答ふ、賊徒之を苛責して獄中の慘狀いふへからず、爾來三十餘日を經て三月十日に至り喇叭の音の聞こえしかば、必定官軍の來襲せしならんと思ひしが、果して渥美少警視數十名の巡査を率ゐ來りて師を獄中より救ひ出したれば、師は同三月十三日同地を出發し十九日大坂に於て解散せられ、京都に歸る、本山其功を表して數百金を與ふ、後二十七年日清の戰役に方り、朝鮮に航して宗務に力を盡す、明治卅五年四月廿五日寂す、師は本願寺派に於て一默雷、二鐵然、三連城と呼ばれたりと云ふ、

テツシユー　徹周　二四七八―二五五四　〔眞宗〕越前新保專久寺の住持なり、　徹周は是海と號す、俗姓佐々木氏なり、文政元年二月三日越前足羽郡花堂村の一農家に生る、八歲の時自ら寺に走りて衆徒となる、十八歲京都高倉學寮に投し、極貧の間に善く業を研く、二十四歲當時北陸唯一の資産家三國鶴叟の請に應し、三國新保村專久寺に住す、尋いて寮司に擧けらる、益學問を怠らす、龍山學師に謁して疑義を質し、圓乘院の說を受得す、玆に於て名聲四方に顯はる、偶々派內圓乘院學派と香月院學派と軋轢するあり、師は圓乘院學派に固執するの故を以て、前後二回說教を制止せらる、前は三年、後は無期なり、師、說を曲げず、文久元年元鷹司家の儒臣なる三國大學（號は幽眠）其間に斡旋し、專久寺を九條關白家の菩提所と爲し、次で師を日野中納言の猶子に薦めて本山に迫りて其苛禁を解かしむ、後師は猶說を曲けす、明治三年金澤に赴き、嘗て師事したりし頓成に會し、二種深信に就きて其所信を翻へさんことを勸む、日を越えて對論すること三回に及ふ、明治十年遂に一派內の紛擾に忍びす、退隱を願ふ、遂に大谷派より擯斥せらる、東京に出て內務大臣西鄉從道の周旋を以て時宗に轉し、直に大講義に補せらる、後累進して僧正に至る、然れとも外儀所信共に變改せす、眞宗の教理を說く、明治二十一年實語教會を組織し、本部を福井市江戶下町に構へ、十餘ヶ所に支部を置き、布教に努む、明治二十七年七月十一日巡錫の途に寂す、壽七十七、師の教義は越前、加賀、越中、三河、尾張、美濃、大坂、京都、東京に傳播す、俗間に南本山と稱す、著作改悔文偶語錄、機法二種深信問答あり、師の說は佛心と凡心とは一躰にして佛心は攝取不捨、凡心は歸命の信心として南無の二字に於て一躰融和すといふなり、當時の法躰の弊と半自力の迷を破して全他力の教を主張したるなり、

テツオー　徹翁　ギコー義亨を見よ、

テツサン　徹山　シクワク旨廓を見よ、

テツシユー　徹岫　シコーク宗九を見よ、

テツジヨー　徹定　二四七四―二五九一　〔淨土宗〕京師知恩院の第七十五代なり、　徹定は法號、隨蓮社順譽といひ、別號松翁、古溪、古經堂等あり、筑後有馬の人、文化十一年三月十五日に生る、父は藩士鵜飼萬五郎政善、母は久保氏なり、師は其二男なり、文政二年三月六歲にて久留米瀨之下町西岸寺光譽禪龍に投し、手度を受く、同十年京師に出遊し、佛儒二教を講究す、天保三年十一月江戶增上寺順應寮に就いて五重相承し、同五年十一月大僧正功譽念成に就いて宗脉を受け、同十三年四月增上寺新谷の學寮を司り、安政二年十月月行事に進み、文久元年四月廿四日武藏岩附檀林淨國寺に住し、明治五

年敎部省の徴に應し十等出仕となり、同年六月權少敎正に補せられ、淺草誓願寺に轉住し、翌七月權大敎正に補せらる、同九月傳通院六十二代となり、五年十月十九日淨土宗管長となる、是れ淨土宗管長の始なり、七年四月知恩院七十五代となる、同八年大敎正に補せらる、九年十月式部寮雅樂大曲を傳授せられ、大伶人となる、十年薩摩鹿島に巡化し、暴徒に苦めらる、二十年四月知恩院を辭し、福壽院に退院す、二十四年二月廿五日尾張に巡化し、三月十五日愛知郡名古屋村阿彌陀堂に寂す、壽七十八なり、十六日茶毘し、十八日知恩院に遺骨を送り、四月廿六日葬儀を行ふ、著作釋迦正謬初破再破、瑞蓮奇賞羅漢圖讃集、各三卷、傳語匡謬、緣山詩叢、闢邪管見錄、各二卷、甘露記、闢邪集、佛法不可斥論、笑耶論譯場列位、古經題跋、各一卷、別に文雄の蓮門經籍錄訂正二卷あり、

テツソー　徹叟　ジヤクコー寂晃を見よ、

テツツー　徹通　ギカイ義价を見よ、

テツハン　徹範　エーガ永雅を見よ、

テンア　天阿　ニチオー日雄を見よ、

テンア　天阿　ベンシユー辨秀を見よ、

テンアン　天者　エギ懷義を見よ、

テンアン　天菴　ゲンホー玄彭を見よ、

テンアン　天菴　ゼンギヨー全堯を見よ、

テンアン　天菴　ゼンシヨ禪曙を見よ、

テンイ　天意（二三〇一）〔淨土宗〕安房大泉寺の開山なり、天意は心蓮社三譽と號し、肥前唐津の人なり、法を珂山に嗣ぎ、安房平群郡正木村に大泉寺を建てゝ開山となる、寂年及世壽缺く、（淨土總系譜）

テンイン　天隱　リユータク龍澤を見よ、

テンエ　天慧　ニチユー日勇を見よ、

テンエー　天英　シユーケン周賢を見よ、

テンエー　天英　シヨーテー祥貞を見よ、

テンエー　天永　リンタツ琳達を見よ、

テンオー　天翁　ゼンバン全播を見よ、

テンカイ　天海（二一九六　二三〇三）〔天台宗〕武藏江戸東叡山の開山なり、天海初の名は隨風と云ふ、俗姓蘆名氏、（一に三浦氏と云ふも共に同系なり、）天文五年に奥州會津の高田に生れ、幼にして聰穎群を出づ、天文十五年十一歳にして會津の稻荷堂に投し、別當辨譽法師を仰いて手度を受け、同十八年十四歳にして出遊の志あり、自ら請うて辨譽法師の下を辭し、下野宇都宮粉河寺に至り、權僧正皇舜に謁して弟子となり、天台の敎觀を修習す、幾もなく遠く比叡山に登り、神藏寺實全の室に入り益敎觀の秘奥を探り、玄旨歸命壇に上りて七重の印信を受く、次に園城寺に轉し、勸學院尊實に就いて倶舍、法相等の學を受け、華嚴、圓覺等に及ぶ、後、南遊して奈良に至り、興福寺に滯留して三論、法相を究め、且つ日本書紀等を熟讀す、偶ゝ母の疾に罹るを聞いて東歸し、自ら湯藥を奉して看護に心力を盡す、然るに母の疾革りて遂に起たす、當時會津に殘夢和尙と云ふ者あり、師就いて養生の法を問ふ、後再び出遊し足利學校に至りて儒敎を講究し、上野新川の善昌寺に至りて臨濟の禪風を窺ふ、當時師の盛譽は四方に傳は

り、貴賤共に其風を仰けり、甲斐の武田信玄殊に使を遣はして祈禱を請へり、天文二十三年八月師甲斐に巡化し、信〻の信濃河中島に出陣せるを聞き、路を轉して河中島に至り、陣中に信玄を問ひ、大に厚遇せらる、元龜二年九月織田信長比叡山を攻めて火を放ちたれは、一山の大衆難を避けて四方に散し、滿藏院亮信、正覺院豪盛等甲斐に下りて信玄に依る、信玄大に喜びて是等の學匠を迎へ、且つ東國の諸學匠を請して大論議場を開く、師主として其事に周旋し、且つ論議場に列して諸學匠の間に法門を論議し、益盛譽を馳す、豪盛深く師の秀發に感し、惠心流の秘奧を傳へ、且つ四個三重の大事を附す、信玄亦深く崇重し、甲斐に留まらんことを請ふも、會津より東歸を促す者あり、遂に甲斐を去り、會津に歸る、途次上野世良田の長樂寺に錫を掛け、春豪禪師の教を受け、葉上流の灌頂を拜す、一年にして會津に還り、稻荷堂に留る、圓密禪の三宗の講究を事とし、天寧

天海僧正

寺の善怒和尙に就いて碧巖集を聽く、天正十七年仙臺の伊達政宗軍を率ゐて會津に亂入し、高田城を攻め、城主蘆名盛重防戰して利あらず、僅に身を以て逃る、師陣中に奔走して盛重の難を救ひ、大に盡すところあり、翌十八年豐臣秀吉大軍を率ゐて東下し、相模小田原城を拔きて武威東國に振ふに方り、盛重小田原城に至りて秀吉に歸す、秀吉命して常陸河內郡信太莊の地を領せしむ、盛重乃ち信太莊江戶崎の不動院を修繕して師を禮請す、是に於いて不動院に入り住し、圓密禪の三宗を弘通し、殊に葉上流の事相を精修し、數〻靈驗を以て人を驚かせり、後權僧正豪海の招により、武藏川越仙波の喜多院に入り住し、二院を兼帶し、常に武相常野の地方を往復して法益を施せり、慶長五年七月武藏神田の藥師堂に於て鎭護國家の祈禱を精修し、德川家康に謁して卷數を獻し、始めて禮遇せらる、後久下田の宗光寺亮辨の招により同寺に入り住し、大に宗風を張る、慶長十二年比叡山の大衆確執して相爭ふ、施藥院宗伯駿河に走り、家康に上言して裁決を請ふ、家康宗伯に命して師を召し事に當らしむ、是に於て師久下田より出てゝ比叡山に登り、大衆の請により、南光坊に入り住し大衆の確執を調訂し、一山平穩に歸す、師は梨木門主二品最胤親王に就いて法曼流の灌頂を拜す、幾もなく駿河に下り家康に謁し、深く崇重せられ、其請により天台の教觀を講說す、十四年比叡山の大衆の强請により再び西上し法華會を修す、後陽成天皇特に勅請により、宮中に參し、天台の教觀を講說し、御感を蒙り、權僧正に任し、智樂院の號を賜ふ、十六年勅して正僧正に任し、宸翰を降し毘沙門堂の內室を賜ふ、同年家康

テン（天）カ

の召により東下して駿河に至り、城中に教觀を講說す、家康益崇重し、東國に留住せんことを請ひ、師の意により仙波の喜多院を修繕す、乃ち師は喜多院に遷り住す、家康の江戸に入る後、常に城中に出入す、十七年家康の命により世良田の長樂寺を兼帶し、大に堂塔を修營して舊觀に改む、後陽成天皇師の喜多院に住するを聞きたまひ、特に勅して額を賜ふ、十八年家康下野日光山を師に寄附す、師は京師江戸の間を往復して朝廷幕府の皈向崇重を一身に受く、數後陽成天皇の勅請を拜して宮中に法會を修行し、江戸に下りては幕府に入り、城中に大論議を開き、毎に其講師となる、且つ家康に親近し、內外の機務にも參與せり、元和二年家康の薨するに際し、後事を遺囑せられたりと云ふ、後葬祭諡號の事に關して崇傳、並に本多正純等の言を排して大に爭へり、秀忠師の言を用ひ、其意により一年を經て家康の靈柩を久能山より日光山に遷す、天皇勅して東照大權現の諡號を賜ふ、實は師の上奏に由るものなりと云ふ、同年師大僧正に昇る、秀忠の日光山に家康の廟を興すに方り、師自ら經營せり、爾來秀忠家光の皈向崇重を受け、常に內外の機務に參與したりと云ふ、元和八年秀忠、家光は師か喜多院より江戸に入るに一日程にして、其煩勞なるを憂ひ、江戸に一伽藍を興し、師を迎へんとす、師乃ち忍岡の幽靜を愛し、其地に一伽藍を興さんことを請ふ、寛永元年に至りて土木功成り、東叡山寛永寺圓頓院と號す、諸侯相競うて金品を寄附し、且つ子院を建立し一山隆盛を極む、師入りて住し、國家鎭護の祈禱を精修す、後山城太秦の廣隆寺に退隱し、幾もなく家光の請により再び東下して世良田の長樂寺に幽棲し、寛永二十年七月疾に罹り、十月二日寂す、壽一百八なり、日光山に葬る、弟子公胤等あり、慶安元年四月勅して慈眼大師の號を賜ふ、（慈眼大師傳記、同年譜、同年譜附錄、本朝高僧傳）

〔考〕　天海の世系、並に生年生地に關しては大に異說あり、慈眼大師年譜に十餘說を列擧す、其內重なるものを擧けんに、阿部正信の考には、將軍足利義澄の子にして永正六年九月十八日に近江朽木谷に生れたりと云ひ、一に山城に生れたりとあり、宇都宮家譜、北越軍記には足利高基の子にして永正七年下總古河に生れたりとあり、王代一覽、寛明事跡錄には永正八年に生れたりとあり、足利系譜には永正九年に生れたりとあり、本朝續史記、開運記には永正十五年に生れたりとあり、參州松平系圖大全には天文十一年に生れたりとあり、奧州會津浮身觀音緣起には天文十三年に生れたりとあり、東叡山文殊樓記には奧州會津高田に生れたりとあり、此くの如くにして殆と其事實を求めかたし、然るに其世系に關して將軍足利義澄の子なりと云ふとは、後世一門の徒の率ね信用するところなり、天正日記の天正十八年十月一日の條に、將軍の落胤なりと云ふこと見へたれは、當時其風說の傳はりたるものなり、然れとも足利義澄の傳に徵するに、未た遽にこれを事實として信用すへからさるなり、阿部正信の考に永正六年九月十八日に近江朽木谷に生れたりとあるか、當時義澄は京師を逃れて朽木谷に留りたるも、其地に於て子を擧けたると全く傳はらず、且つ天海が永正六年に生れ寛永二十年に寂したるものとすれは、享壽一百三十五歲となるなり、前にも

列擧したることく、天海の生年生地に關しても諸說あるも、以上の諸說は皆信用しかたし、孝亮宿禰日次記寬永九年四月十七日の條に、於₂東照社之藥師堂₁法華萬供有ㇾ之云云、導師南光坊大僧正今年九十七歲とあるは大に信用すべきものにして、九年に九十七歲なれば卄年に享壽一百八歲にして寂したるものなり、然れは天文五年に生れたるものなれは、義演の薨後二十五年なり、天正日記等は當時の風說を記したるものにして、阿部正信の考は其風說を敷演したるにとゝまり、たゝちに取りて事實として信用すべからさるがごとし、

テンカイ　天海　クーコー空廣を見よ、

テンカイ　天海　ケドン希曇を見よ、

テンカイ　天海　シユンセー舜政を見よ、

テンカイ　天海　ショードン正曇を見よ、

テンガク　天岳　ウンドー雲堂を見よ、

テンカン　天鑑　ゾンエン存圓を見よ、

テンガン　天巖　ソキョー祖曉を見よ、

テンガン　天巖　シユーオツ宗越を見よ、

テンガン　天巖　チショー智樵を見よ、

テンガン　天岸　エコー慧廣を見よ、

テンガン　天岸　シユーゲン宗玄を見よ、

テンキ　天機（……）〔淨土宗〕伊勢樹敬寺第二代なり、天機は曉蓮社昇與又は魯鈍と號す、愚底に師事して淨土敎を學び、遂に其法を嗣ぐ、初め三河大樹寺に住し、後伊勢樹敬寺第二代となる、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

テンキ　天機　ゼンキヨー善慶を見よ、

テンギン　天誾　二〇二三／二〇九七〔曹洞宗〕遠江大洞院の第二代なり、天誾字は如仲、信濃上田の人、俗姓は海野氏なり、貞治四年九月五日を以て生れ、五歲にして父を喪ふ、九歲にして伊那郡上穗山の惠明法師に投じて釋典を習ふ、偶法華を誦し成佛已來甚大久遠の文に到りて省あり、竊かに禪門を慕ひ、上野吉祥寺大拙能の室に入りて剃髮す、受具の後梅山聞本に平田寺に參す、一日入室して機語相契ひ、遂に印可を蒙る、時に梅山、師に囑して曰く、汝これより深山絕壑の地に草菴を結びて長養せよ、速かに說くこと勿れと、師乃ち辭して近江鹽津の祀山に入り、洞春菴を構へて幽棲し、山を出てさること三年、學徒四來して室に充つ、師これを厭ひ、捨て去りて管並の山村に移る、遠江飯田の城主山內對馬守深く師の道風を慕ひ、崇信寺を剏し、請して此に居らしむ、久しからすして師人事の繁雜を厭ひ、潛かに遁れて隱棲の地を求め、橋谷に到り大洞院を建て、梅山を奉して開山となす、時に應永十八年なり、將軍足利義持遠く其道風を聞き、莊園を寄附す尋で敕請を奉して總持寺に出世す、晚年佛陀寺に遷り、再び總持寺に昇る、時に梅林和尙龍澤寺に於て寂し、堂宇大に荒廢す、衆議して師に請ふ、師乃ち起て請に應し、未だ數年ならざるに調御の殿、演法の堂皆舊觀に復す、永享九年二月四日寂す、壽七十五（日本洞上聯燈錄）

テンキヨー　天境　リヨーチ靈致を見よ、

テンクー　天空　二二九八／二三七六〔淨土宗〕佐渡念佛堂の僧なり、天空字は月西、俗姓は源氏、上野の人なり、太田道灌の末なりといふ、九歲新田大光院貞譽に師事し、得度の後增上寺に

入り、性相を研究し、また京都に上り、淨花院天譽に學を受く、晩年佐渡に渡り、梵字水を拜す、小木の念佛堂に寓す、十七年の間念佛を事とし、野菜山果を以て命を支ゆ、享保元年二月微恙に罹り、同月廿八日端坐合掌して寂す、壽七十九、(續日本高僧傳)

テングワツ　天月　バイオー梅翁を見よ、

テンクヮン　天關　シューガク宗鶚を見よ、

テンゲ　天外　ボンシュン梵舜を見よ、

テンケー　天啓　……二二二三　〔淨土宗〕武藏增上寺の第八代なり、號は昌蓮社某譽、俗姓田村氏にして陸奧國の人なり、坂上田村丸十八代田村俊季の末葉家の紛爭を避けて出家し、諸國を廻りて親譽上人周仰に歸し、不斷稱名を行じ、德漸く高くして遂に天文廿年五月廿五日增上寺の第八代となる、弘治元年職を辭し諸方を巡りて寺院を建て、伊勢國多氣に至り國司大納言及藩士等の崇敬を受く、永祿五年八月十八日寂す、(鎭流祖傳、三緣山志)

テンケー　天啓　シューイン宗歎を見よ、

テンケー　天冏　……二二三三　〔淨土宗〕武藏善導寺の開山なり、天冏は心譽と號す、其鄕貫詳かならず、法を源底に嗣ぎ、武藏兒玉郡臺川岸上善寺を開く、寬文二年七月十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

テンケー　天桂　シューコー宗昊を見よ、

テンケー　天桂　ゼンチョー禪長を見よ、

テンケー　天桂　デンソン傳尊を見よ、

テンゲー　天藝　リョーグ良弘を見よ、

テンコー　天功　……二二一四　〔曹洞宗〕能登總持寺の僧なり、天功字は無功、肥前の人、大洞寺如仲天誾に依りて出家し、松隱寺明林宗哲の法を嗣ぎ、享德二年越前龍澤寺に主となる、時に總持寺主席を缺くを以て請ぜられて其席を嗣ぎ、勅賜紫衣を拜す、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

テンジクローニン　天竺老人　センカイ詮海を見よ、

テンシツ　天室　……二二三四　〔淨土宗〕京都一心院第四代なり、天室は信蓮社登譽と號す、相模小田原の人其俗姓詳かならず、稱念に師事して淨土教を學び、初め京師の一心院に住し、下桂村に往生院を開きて居り、後三河大樹寺に遷る、天正二年六月十七日寂す、壽缺く、法嗣存阿あり、(淨土總系譜)

テンシツ　天室　(二二七五)　〔臨濟宗〕土佐雪蹊寺の學僧なり、天室は鄕貫詳ならず、幼より僧となり吾川郡長濱村雪蹊寺に居る、南村梅軒の儒學を講ずるを聞き、乃ち其下に敎を受け、忍性如淵の沒後、獨り梅軒の風を傳へ、慶長元和の頃盛に程朱の說を唱ふ、其門下に慈沖あり、沖後俗に歸し谷素有字は時中と云ふ、これより土佐の儒學大に振ひ、所謂南學は諸國に行はるゝこととなれり、(南學傳、日本敎育史料)

テンシツ　天室　イギョー伊堯を見よ、

テンシツ　天室　シュージク宗竺を見よ、

テンシツ　天室　ゼンモク禪睦を見よ、

テンシン　天眞　ソカン祖鑑を見よ、

テンシン　天眞　ジショー自性を見よ、

テンシン　天眞　シューショー宗昇を見よ、

テンシン 天眞 シユーヨー集膺を見よ、

テンシン 天眞 ユーテキ融適を見よ、

テンシヤク 天釋 シヨーミ紹彌を見よ、

テンジユー 天縱 シユージユ宗受を見よ、

テンシユク 天叔 シユーゲン宗眼を見よ、

テンジユン 天淳 スーモク崇睦を見よ、

テンシヨ 天初 ズイゲン瑞源を見よ、

テンシヨー 天章(……)〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、天章は字なり、諱は澄彧と云ひ號は呆菴と云ふ、相國寺に留りて詩名あり、著作梅城錄あり、(日本名僧傳)

テンシヨー 天祥 イチリン一麟を見よ、

テンセン 天先 ソミヨー祖命を見よ、

テンソー 天叟 シユークン宗訓を見よ、

テンソー 天叟 ジユンコー順孝を見よ、

テンソー 天叟 ゼンチヨー善長を見よ、

テンソー 天叟 ソイン祖寅を見よ、

テンソン 天巽 キヨージユン慶順を見よ、

テンタク 天琢 ゲンシユ玄珠を見よ、

テンタク 天琢 シユーキユ宗球を見よ、

テンタク 天澤 スーシユン崇春を見よ、

テンチユー 天宙 ボンシヨー梵濤を見よ、

テンナン 天南 シヨークン松薰を見よ、

テンニ 天爾 マンリヨー萬量を見よ、

テンネン 天然 リヨーハン了般を見よ、

テンホ 天甫 ゾンサ存佐を見よ、

テンモク 天目 一九九七……〔日蓮宗〕下野妙顯寺の開山なり、天目美濃阿闍梨と呼ぶ、伊豆國波多郷の人なり、母は駿河國熱原甚四郎國重の女なり、甚四郎日蓮に歸依す、師の母之に傚て師をして日蓮に侍せしむ、日蓮の沒後專ら遺教を弘通し、下野國阿蘇郡奈良淵妙顯寺を開く、晩に武藏國の荏原郡品川村に廬す、又常陸國の水戸領に修多羅寺を創して居す、延元二年四月二十六日寂す、世壽詳ならず、(本化別頭佛祖統紀)

テンユー 天祐 シジユン思順を見よ、

テンユー 天祐 シユーシン宗津を見よ、

テンユー 天祐 シヨークワ紹果を見よ、

テンユー 天祐 ボンカ梵嘏を見よ、

テンユー 天遊 ツーテツ通徹を見よ、

テンヨ 天譽 ギンテツ吟徹を見よ、

テンヨ 天譽 クワンゼン觀禪を見よ、

テンヨ 天譽 ダイガ大我を見よ、

テンヨ 天譽 チンケー鎭冏を見よ、

テンヨ 天譽 テンゴ典牛を見よ、

テンヨ 天譽 リヨーモン了聞を見よ、

テンヨー 天陽 イチチヨー一朝を見よ、

テンヨー 天鷹 ソユー祖祐を見よ、

テンリン 天倫 シユーコツ宗忽を見よ、

テンリン 天倫 シヨーテー正挺を見よ、

テンリヨー 天靈 ドーケー道契を見よ、

テンレー 天嶺 ドンホ呑補を見よ、

テンカイ　典海　二三九〇 二四六九　〔淨土宗〕江戸增上寺第五十六代なり、典海は演蓮社教譽光阿義圓と號す、紀伊名草郡出島の人、俗姓は出島氏なり、幼にして大坂天滿大信寺に入りて剃髮し、十三歲にして江戸に下り、三田林泉寺眞譽說典に師事し、後、增上寺に入りて專ら內外の經典を學ぶ、寬政三年十月二十二日學頭に補し、十一月三日新谷より袋谷に移り、四年六月十七日命ありて、連馨寺に住す、尋で大光院光明寺に歷住し、同十年十月一日三緣山主となり、大僧正に任ず、文化元年十二月十日寂す、壽八十、臘六十六、廿一日源興院に於て葬式を行ふ、（三緣山志）

テンゴ　典牛　二二九七……〔淨土宗〕京都智惠光院第五代なり、　典牛は眞蓮社天譽と號す、俗姓は三好氏、阿波の人なり、幼にして牛澤に就て剃戒受業し、法を隨流に嗣ぐ、攝津菟原郡住吉に阿彌陀寺を剏して開山となり、後、京都智惠光院に住して第五代となる、寬永十四年六月一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

テンジュ　典壽　二四七五……〔淨土宗〕山城獅子谷法然院の學僧なり、　典壽は鄉貫詳ならず、初め獅子ヶ谷に寓したるも、住持現定と意契はず、去りて天龍寺內に潛居し、學解を事とす、殊に華嚴に通するを以て名あり、文化十二年七月廿三日寂す、壽缺く、諸章疏校正本行はる、（淨土宗史料）

テンシュー　典宗　二二七〇……〔淨土宗〕大坂九品寺の開山なり、　典宗は正蓮社念譽と號す、俗姓は三好氏、攝津の人なり、稱念に從ひて剃髮受戒し、業成りて法を嗣ぎ、大坂天滿九品寺の開山となる、慶長十五年十一月二十五日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

テンヨ　典譽　ゼウン是雲を見よ、

テンヨ　典譽　チエー智瑛を見よ、

テンヨ　典譽　モンチョー文超を見よ、

テンレー　典嶺　二三一九……〔淨土宗〕江戸大善寺の開山なり、典嶺は顏蓮社嚴譽助給と號す、駿河の人、其俗姓詳かならず、江戸本誓寺文賀に就て剃髮し、了學に師事して法を嗣ぐ、初め下總善雄寺に住し、後、駿河淨國寺に移る、江戸小石川に大善寺を剏して開山となり、西久保大養寺に遷る、萬治二年二月二十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

テンジョー　轉乘　一五九〇……〔　　〕大和金峰山の僧なり、轉乘大和の人、金峰山に登り住す、性瞋多し、勤めて法華經を持し、七八兩卷通誦する能はず、發憤して讀誦すること三萬遍に至る遂に記せず、乃ち藏王菩薩に誥して九十日の間六時に香花を献し、夜は三千拜を課して救助を乞ふ、夢に異形の人あり、龍を以て冠となし、天衣瓔珞を着け、金剛杵を執り、足に寶花を蹈めり、告けて曰ふ、昔播磨赤穗郡驛舍の梁上に丈餘の毒蛇あり、一比丘驛舍に宿するに、毒蛇吞まむとす、比丘これを知らず、至心に法華經を誦す、其言和雅なり、毒蛇自然に害心を消す、第六卷に至り天明け、比丘發し去れり、毒蛇は此功德により人類に轉生す、即ち汝の身なり、末卷を聞かず、故に記する能はざるものなり、瞋多きは餘習のみ、今より堅志して通誦せば、必ず出離を得むと、轉乘覺めて感喜す、後果して通誦するを得たり、嘉祥二年に寂す、（元亨釋書）

デンヨ 轉譽 コトー孤燈を見よ、

テンヨ 轉譽 ジョーベン成辨を見よ、

テンニ 沾備 ニチカン日閑を見よ、

デンアン 傳菴 シユーキ宗器を見よ、

デンオー 傳翁 ソシン祖心を見よ、

デンオー 傳翁 ホントー品騰を見よ、

デンクワク 傳廓 二二二五 〔淨土宗〕肥後極樂寺の開山なり、傳廓は金譽と號し、筑後島の人、傳譽に就て剃髮し、後肥後熊本に極樂寺を創して開山となる、寛文五年四月九日寂す、世壽詳かならず、（淨土總系譜）

デンクワク 傳廓 二三〇九 〔淨土宗〕江戸專稱寺の開山なり、傳廓は稱蓮社澄譽と號す、信濃の人、俗姓は井上氏なり、傳察に投じて剃髮嗣法し、江戸麻布に專稱寺を創す、慶安二年十月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

デンサツ 傳察 二二二一 二二九二 〔淨土宗〕武藏增上寺の第十六代なり、傳察號は深譽、俗姓宇田川氏武藏國品川の人、蛇窪帶刀に養はる、才學深く、武術に長じ、蛇窪氏を嗣ぎしが、故ありて仕を致し、釋門に意を寄す、永祿五年の春世を厭うて出家を望む、養父之を悲む、仝國岩槻淨國寺開山清巖上人の品川願行寺に至るや、父子之に詣て、遂に隨うて剃髮受具し、從學怠らず、嗣法潰る所なく、淨國寺の第二代に舉げらる、之より學徒を導きて德名高く、命に依りて鎌倉光明寺に轉じ、寛永七年十月增上寺の第十六代たり、仝九年正月元日寂す、壽七十二、（鎭流祖傳、三縁山志）

デンシン 傳心 二三〇八 二三六八 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、傳心字は痴絶、三河國墨瀨小野田氏の子なり、十歲にして龍源寺周峰徹を拜して出家す、初め美濃國龍泰寺に至り、鰲山雪に見ゆ、既にして和泉に遊び、雲山白、鐵心印に謁す、後去て賢巖、月舟、心越、獨湛、惟慧の諸師に見ゆ、天和の初尾張國の雲山に首衆たり、師參請十餘年にして美濃國大禪古寺に栖遲す、時に明山仙壽寺に在て機用峭峻なり、直に往て謁す、遂に大悟する所あり、元祿四年天德寺に居る、八年大寧寺明山席を退て師をして其處を補はしむ、師天德寺に謝して大寧寺に登る、十二年總持寺に進む、翌年秋退院し、十月大寧寺に歸る、寶永五年十月十三日寂す、壽六十一、（日本洞上聯燈錄）

デンシン 傳心 シユーテキ宗的を見よ、

デンジヨ 傳序（二三三〇） 〔淨土宗〕近江西方寺の開山なり、傳序は讃蓮社稱譽と號し、遠江見付の人なり、幼にして州の大見寺言譽の室に入りて剃髮し、遵譽貫層上人に法を嗣ぐ、近江栗太郡蜂屋に往き、其地に西方寺を開く、寂年及世壽缺く、（淨土總系譜）

デンズイ 傳隨 二三三八 〔淨土宗〕信濃願行寺の僧なり、傳隨は圓蓮社誓譽と號す、俗姓は增田氏、信濃小縣郡の人なり、岌譽上人の末弟にして法を岩築の檀說に嗣ぐ、後願行寺に住し、盛んに所承の教を弘め 延寶六年十月七日寂す、世壽缺く、嗣法一人 與譽慧存と云ふ、（淨土總系譜）

デンズイ 傳隨 ギクワン義觀を見よ、

デンソン 傳尊 二三〇八 二三九五 〔曹洞宗〕駿河靜居寺の禪僧なり、傳尊字は天柱、一の號を滅宗といふ、自ら老螺蛤と稱

し、齢八十八に及ひて老木齋と號す、父は大原氏、母は鈴木氏、師は其二男なり、慶安元年五月五日紀伊和歌山に生る、甫めて八歳の時地の窓興寺に投し、傳弓和尚を禮して下髮し、初め儒典を讀み、後内典を習ふ、遊方を請へとも和尚許さす、十八歳の春潜に寺を出て、尾張に到りて含笑寺に掛錫す、時に萬松寺の祖海和尚道譽あり、師往きて參究す、十九歳遠江の可睡齋に往き、衝天和尚に參して曹洞の宗風に浴す、二十歳京都の興聖寺龍蟠和尚に參し、翌年攝津の瑞龍寺に入り、鐵眼禪師の楞嚴經の講説を聞く、二十二歳鄕里に歸りて父母を省し、清涼山慈光寺玄忍比丘に就きて戒律を攻究し、且つ菩薩戒を重受す、二十三歳春京都泉涌寺に往き戒光院如周律師の法華經講説を聽く、翌年畿內の曹洞臨濟兩宗の諸老を歷參し、秋より冬に至る間、攝津天王寺二舍利法印の別舘に寓す、二十五歳衝天和尚を慕ひて可睡齋に往く、衝天師に天桂の號を授け侍司となす、翌延寶

天桂禪師

元年春駿河に往き、五峰海音和尚に島田の靜居寺に謁し。大に器重せられ、此處に夏を越す、一日出てゝ他に往く、途中山川明媚の景を見て忽然として省發す、即ち歸りて所證を呈す、延寶二年遠江十輪寺の別山禪寺法會を營み、師を第一座とす、師衆請により維摩經を講す、終りて可睡齋に歸る、和泉の鐵心和尚は當時の名匠なり、師往きて參見し、紀伊に赴く、延寶三年尾張含笑寺に入りて道化を助く、翌年近江壽原寺に夏を過し、冬衝天和尚の命により遠江龍眠寺の會に臨み、楞嚴經を講して道化を助く、延寶五年靜居寺に歸り、五峰和尚に依りて面授嗣法し、太源の十四世となる、和尚の命を受けて靜居寺の席を繼く、三月諸嶽山に瑞世し、勅を拜して黄衣を賜ふ、延寶六年より靜居寺の殿堂等を修復經營し、輪奐の美を極む、天和二年春加賀天德寺の月坡禪師江戸よりに師に書を寄す、九月常陸水戸に心越禪師を訪ひ、問答數次、禪師偈を與へらる、心越禪師法運未た開かす、道化澁滯す、師大に之を嘆し、天和三年美濃龍泰寺鰲山禪師に意を通し、自ら江戸に往き、諸名刹の間に斡旋す、此年半夏師初めて禪戒會を開く、貞享二年盤珪禪師を島田の僑居に訪ひ、後互に往復す、元祿元年支院香橋寺を法幢の地となし、法嗣泰州をして席を董せしむ、元祿二年春大藏經を請して經堂を建つ、九月三日靜居寺の席を退き近江彦根の大雲寺の虛席を董し、十月五日進山す、翌年大雲寺を退き、攝津の菜花に居る、京都大寧寺の心海來りて師を訪ふ、心海は師と同參の故友なり、元祿四年九月興正寺の高雲和尚を訪ふ、浪華の信士等相謀りて春海菴の廢趾に明月林藏鷺菴を營みて師の居に供す、元祿九

年七月阿波丈六寺の石峰和尙席を退き、師を請して其後を繼がしむ、師十一月十五日進山す、元祿十二年支院の無賴徒等師を官に誣告す、師一室に籠りて人事を介せず、扁して瞳眠樓といふ、元祿十四年父を喪ふ、寶永五年師宋本の宏智和尙の語錄を獲たれば讎考して剞劂に付す、蓋し原本は泉涌寺の寶庫に出づといふ、享保元年母八十五歲にて沒す、享保六年攝津北豐島郡木部村の下村玄仙なる者木部村の陽松菴の廢を起し、吉田村に移して新菴を造り、師の老居に供す、師名くるに退藏峰といひ、菴名は舊號を用ゆ、享保七年六祖の法寶壇經を註し、五冊となし、海水一滴と題す、請を受けて淡路を化す、蜂須賀無等軒佛工をして師の像を刻さしめ、退藏峯に藏す、師自ら肉暖の兩字を書して唔堂に扁す、享保九年五月事に因りて京都の官衙に出て糺問せらる、秋初めて公明を得て回る、享保十一年春江戸の諸刹宗徒に招かれ秋江戸に向ひて發し、天龍寺にて法を弘むる時病にかゝり遂に歸路靜居寺に憩ひ、翌年駿河靜岡の顯光院に說法し、後退藏峰に歸る、秋陽松菴を山腹に移す、十三年八月高松に赴き、十一月歸る、十四年正法眼藏辨註二十冊成る、玄瑞に退藏峰の院事を囑す、享保二十年十二月三日病を得、後屢りに門下に垂示し、十日の朝寂す、全身を退藏峰に瘞む、壽八十八、臘八十一、著作正法眼藏辨註二十卷、驢月彈琴七卷、碧岩錄牴犢鈔五卷、海水一滴五卷、法華經要解、報恩編各三卷、從容錄辯解、法語各一卷、(天桂和尙年譜、碑文)

デンボーイン 傳法院　ニチクワン日觀を見よ、

デンム 傳夢　ジョーベン成辨を見よ、

デンや 傳也　二三一六　〔淨土宗〕江戸廣德寺の開山なり、傳也は天蓮社冠譽と號す、雪念に從つて宗乘を究め、江戸淺草廣德寺を開く、明曆二年三月二十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

デンヨ 傳譽 (二二〇七)　〔淨土宗〕京師智恩寺の僧なり、傳譽は俗姓詳ならず、德山直譽師の法嗣なり、山城八幡志木正法寺に住す大に法門を弘通す、後柏原天皇勅して知恩寺に住せしめたまふ蓋し知恩寺の綸旨此に始まる、大永年三年九月二十二日天皇師を小御所に召して一七日の間大原問答書を講せしめたまふ、天文十六年再び師を召して一七日の間相具の法輪を講せしむ、優賞して恩賜甚だ厚し、師が示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

デンヨ 傳譽　二三一三　〔淨土宗〕安房遺水寺の開山なり、傳譽は安房平群郡の人、其俗姓詳かならず、法を靈巖に嗣ぎ、郡の穗田村に遺水寺を開く、承應二年六月二十六日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

デンヨ 傳譽　クワンテツ觀徹を見よ、

デンヨ 傳譽　ゴタク牛澤を見よ、

デンヨ 傳譽　コクドー國道を見よ、

デンヨ 傳譽　シューガン宗巖を見よ、

デンヨ 傳譽　ジューイ住意を見よ、

デンヨ 傳譽　ジュンリョー順良を見よ、

デンヨ 傳譽　サンホ三甫を見よ、

デンヨ 傳譽　センキョー專慶を見よ、

デンヨ 傳譽　ダイサン臺山を見よ、

デンヨ 傳譽 チヨユン智順を見よ、
デンヨ 傳譽 チベン知辨を見よ、
デンヨ 傳譽 リドー利導を見よ、
デンヨ 傳譽 リユーヤ龍也を見よ、
デンヨ 傳譽 リユーエン良縁を見よ、
デンヨー 傳葉 ゼンカ善迦を見よ、
デンエツ 田悅(……)〔曹洞宗〕安房長安寺の禪僧なり、田悅字は長巖、幼にして長安寺に投して出家し、亘天を禮して師とし、亘天の寂後神龍其席を踵き、師に命して典座とす、時に齡山峯壽第一座に居れり、師之に就きて硏究し、終に單傳の旨を得、辭し去りて名宿を歷參し、時に神龍既に退きて齡山主席にあり、師を主座とす、齡山の沒するに及び、乃ち住持となる、寂年、及び壽缺く、法嗣嫡宗田承あり、(日本洞上聯燈錄)
デンシヨー 田承(……)〔曹洞宗〕安房長安寺のの禪僧なり、田承字は嫡宗、俗姓生國詳ならず、長巖田悅に參して法を得、長巖の寂後其席を繼ぎて安房長安寺に主となり、其廢を興す、寂年並に壽缺く、法嗣巨山泉滴あり、(日本洞上聯燈錄)

トの部

トサイ 渡西 シギヨク志玉を見よ、
トナン 斗南 エーケツ永傑を見よ、
トナンローニン 圖南老人 ニチケン日賢を見よ、

トランニ 都藍尼(一三三四)(……) 大和吉野山の修行者なり、都藍尼は大和の人、佛法を精修し、兼ねて仙術を學ぶ、吉野山の麓に住す、當時相傳ふ金峰山は黃金の地にして金剛藏王菩薩加護し、婦人の登攀を許さず、と、都藍尼曰ふ、我女身なりと雖淨戒を持す、世常の婦人の比ならむ、と、乃ち金峰山に入る、雷電晦暝にして路を失ふ、尼龍を呪してこれに乘りて進む、然るに一泉源に到りて進む能はず、尼嗔りて嚴角を踏めば盡く崩裂したり、其持する所の杖を捨つれば自ら植し、後漸く長してて大樹となる、尼山中に長生の術を得て終る所を知らずと云ふ、(元亨釋書)〔考〕都藍尼は聖武天皇の時の人なるべし
ドダツ 度脫(一八六五)〔淨土宗〕某寺の學僧なり、度脫は氏族詳ならず、聖光に師事し、早く家業に熟す、元久の始衆徒縱に宗義を瀆し、相傳の正義を亂る、二年三月聖光其眞僞を決せんと欲し、一書を封して師をして京師に赴かしむ師吉水の禪室に詣て、法然上人に謁して師命を傳へ決を受け聖光に復命す、是れより一門の宗風九州に振ふ示寂の年月日缺く、(鎮流祖傳)
ドグワン 土丸 二三〇七……〔淨土宗〕越前圓成院の開山なり、土丸は大譽と號し、大和奈良の人なり、法を虎角に稟け、越前福井運正寺に主となる、後、越前坂井郡清永村に圓成院を剏し、正保四年七月十七日寂す、壽詳ならず、(淨土總系譜)
ドクワイシ 土槐子 シユーゲン宗眼を見よ、
トリ 止利(一二八九) 我國最初の佛工なり、止利一に鳥

に作る、鞍作氏なり、父は德濟法師と云ふ、(司馬達等の男多須那なり)推古天皇の十三年四月天皇皇太子太臣及び諸王諸徒と共に誓願を發し、始めて佛像の一丈六尺なる銅繡各一軀を造立したまふ、止利勅命を蒙りて其工事に當る、高麗の大興王これを聞いて隨喜し、黃金三百兩を貢進せり、止利專ら經營し、一期年にして像二軀、並に狹侍皆成る、其銅像に用ひたる銅二萬三千二百斤、金七百五十九兩なり、乃ち法興寺の金堂に安置せんとするに、堂戶に障へられて納るゝ能はず、諸工相議して堂戶を破らんとしたるに、止利工案をなし、事なく納ることを得、同年八月勅して大に齋會を設けて開眼供養なしたまふ、これより每年四月八日及び八月十五日に齋會を設けんことを定めたまへり、蓋し是れ後世の灌佛會及び盂蘭盆の起源なり、天皇止利の功勞を賞したまひ、大仁位を賜ひ、近江坂田郡水田二十町を給したまふ、止利一寺を興し、坂田尼寺と號し、(一に金剛寺と號す)其水田二十町を寄附す、翌十五年に再び勅命を蒙り、藥師佛金剛像を造立し、同年に新に成りたる斑鳩の法隆學問寺の金堂に安置せしめたまふ、同三十年正月に皇太子病に臥したまひ、妃及び諸王子諸臣等深く憂愁し、共に發願して釋迦牟尼佛の金銅像を造立したまふ、止利勅命を蒙りて其工に當る、三十一年三月に至りて釋迦牟尼の金銅像、長四尺五寸なるもの、幷に二狹侍工成る、止利其光背に銘文十四行百九十六字を刻し、其事由を記す、止利の沒年月日幷に壽傳はらず、後世相傳へて止利の工にかゝると云へる佛像多し、(日本書紀、法王帝說、古今目錄鈔、古京遺文)

トーアン　東菴　シユートン宗曔を見よ、

トーイン　東胤　……(一三二七)　〔淨土宗〕江戶願行寺の開山なり、東胤は眞蓮社譽と號し、武藏品川の人なり、虎角に師事して法を嗣ぎ、駒込に願行寺を創して開山となる、慶長十五年十二月二十六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

トーエー　東英　二四三五—二五一七　〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、東英字は陽關、常陸水戶鬬戶氏の子なり、十一歲同國長勝寺龍雲模に師事し、十六歲出遊し、阿波の慈光寺春叢珠を問ひ、器重せらる、二十餘年の間其下に參究し、遂に印可せらる、二十八歲妙心寺第一座に推され、尋て慈光寺の法席を繼ぐ、天保九年勅を拜して妙心寺に住す、同十一年虛堂錄を提唱す、雲衲四百餘人なり、同年攝津兵庫祥福寺の強請により其僧堂を監す、翌年台州愚に職を讓る、嘉永元年七十四歲再び妙心寺に住す、同三年阿波に歸隱し、安政四年八月七日慈光寺に寂す、壽八十三、臘七十三、(近世禪林僧寶傳)

トーエー　東英　カクタン覺潭を見よ、

トーエー　東瀛　二五三二……　〔眞宗〕山城伏見西方寺の住持なり、東瀛は闡彰院と號す、擬寮司となり、文政十年高倉學寮に草木成佛義を講し、嘉永二年十二月二十三日擬講となり、文久三年五月廿六日歸役し、弘化三年寮司となりて金牌論を講し、慶應元年正月二十九日嗣講に進みて願々鈔散善義玄義分を講す、明治四年十月三日寂に遇ひて死す、後講師を贈らる、(眞宗史料)

トーカイ　東海　ジユンリヤウ順了を見よ、

トーカイ　東海　ギエキ義易を見よ、

トーカイ　東海　ジクゲン竺源を見よ、

トーカイ 東海 シューチョー宗朝を見よ、

トーカイ 東海 シューヨー宗洋を見よ、

トーカイ 東海 ショーシュン昌俊を見よ、

トーカイ・東海 ソーキ聰暉を見よ、

トーカイ 東海 ホーテー寶鼎を見よ、

トーガク 東岳 エウン慧雲を見よ、

トーガン 東巖 エアン慧安を見よ、

トーガン 東富 ドンシュン曇春を見よ、

トーキ 東暉 二四九四 〔眞宗〕越後高柳速念寺の住持なり、東暉は越後の人、高倉學寮に學び、文政八年寮司となり、倶舎頌疏を講じ、四年瑜伽釋を講ず、六年五月二十一日擬講となり、天保五年十一月十九日寂す、壽缺く、(高倉學寮講者列傳稿本)

トーキ 東暉 リョーモン良聞を見よ、

トーキ 東輝 エーコー永杲を見よ、

トーキ 東輝 チューケー中啓を見よ、

トーキ 東皈 コーショー光松を見よ、

トークワボー 東花坊 シコー支考を見よ、

トークワクサンニン 東郭散人 エンシキ圓識を見よ、

トーケー 東溪 シューモク宗牧を見よ、

トーコー 東皐 コーチュー興儔を見よ、

トーコーイン 東光院 ニチシン日眞を見よ、

トーコク 東谷 シューコー宗杲を見よ、

トーサン 東山 タンショー湛照を見よ、

トーサン 東山 ドーキョー道慶を見よ、

トーサン 東山 ミョーエン妙演を見よ、

トーシュー 東洲 シリョー至遼を見よ、

トーシュー 東洲 シュードー周道を見よ、

トージュン 東純 二一五五 〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、東純字は全巖、出羽大江氏の子なり、初め羽黒山に登りて、祝髮し、眞言を修習す、十六歳山を下り、諸寺に周遊す、京師に遊學せんとし、鎌倉を過ぎて禪林の高風を見て欽慕し、圓覺寺に留まり、始めて禪に參し、三年を經て京師に到り、南禪寺天隱に參し、去りて器之爲播に永澤寺に於て謁す、器之龍文寺に歸るに及び、師も亦隨從して得悟し、其命により瑞雲寺に登り大菴須益に見ゆ、入室して衣法を附せらる、時に應仁二年正月十一日なり、五月大菴の龍文寺に移るに際し、師止りて院務を司とる、文明三年三月一日師命を受けて瑞雲寺に主となる、全九年詔によりて總持寺に住し、久しからずして長門大寧寺に歸へる、後檀越周防に瑞光寺を建て、師を迎ふ、師大菴を開山に奉し、自ら二代となる、明應四年十二月十日寂す、法嗣是翁永滿、桃岳瑞見、長宗永、明鑑の四人あり、(日本洞上聯燈錄)

トーショ 東曙 トーカイ等海を見よ、

トーショー 東沼 シューガン周巖を見よ、

トーショク 東寔 二三三九 二三二一 〔臨濟宗〕美濃大仙寺の中興なり、東寔字は愚堂、俗姓は伊藤氏、美濃伊自良の人なり、幼にして東光寺に入り、瑞雲禪師に侍し、十三歳薙髮し、十九歳にして遊方す、播磨の三友寺南景岳禪師の下にありて一

夜坐して三更に至り、豁然として省あり、淸見寺說心宣、典禪寺物外播に謁し、共に版首に居り、臨濟寺鐵山鈍、備前の大安寺天長長に歷謁す、後、聖澤寺の庸山庸に參して其印記を受け、分座說法す、稻葉氏の請に應し、出て丶美濃の正傳寺に住す、州の大仙寺は宗祖東陽和尙演法の地なりしが、年を經て廢頹す、師檀越と計り、地を北山に移し、再造して移居す、寬永五年勅を奉して妙心寺を主とること前後三回、後水尾上皇師を便殿に召して禪要を問ひ、五山の宿老皆同列して之を聞く、上皇大に喜ひ、官茶を賜ひ翌日使を遣はして僧伽梨を賜ふ、後將軍德川家光府中に召して法要を問ふ、石川忠綱龍翔寺を興し、出雲の刺史溝口某松平親英等相共に正燈寺を興し、師の遊化を待ちて招きて之に居らしむ、親英豐後の治内に養德寺を刱し師を開山とす、師亦伊勢の中山寺、美濃の高井寺を建て丶第一代となる、晚年山城の華山寺に退去し、病に罹り、門弟を誡むる曰、及ひ偈今日利益、老僧稍存佗日利益、附囑兒孫を書し、筆を投して寂す、時に寬文元年十月一日なり、壽八十三、臘七十、嗣法の弟子八人、本山妙心寺の第一座を分つ者六人あり、勅諡大圓寶鑑國師を賜ふ、(本朝高僧傳)

トーゼン 東漸　シユーシン宗震を見よ、

トーゼン 東漸　ケンイ健易を見よ、

トーデン 東傳　シケー士啓を見よ、

トーネン 東念(……)［臨濟宗］京都建仁寺の禪僧なり、東念字は悅嵓と云ひ、其鄕貫嗣承詳かならず、京都建仁寺に住し、盛んに法幢を樹つ、寂年壽缺く、(延寶傳燈錄)

トーバン 東播(二二四四)［曹洞宗］相模保國寺の開山なり、東播字は布州、俗姓は安田氏、信濃の人なり、十四歲にして得度し、十八歲天室禪睦に師事して印可を附せられ、永平寺に出世し、後、武藏龍穩寺に遷つる、巖槻洞雲寺、藤田松龍寺、相模保國寺等皆師を開山となす、某年壽八十一にして寂す、法嗣善菴良置あり、(日本洞上聯燈錄)

トーホ 東甫　ユーギク融菊を見よ、

トーホー 東峯　ツーセン通川を見よ、

トーミヨー 東明　エビヤク慧白を見よ、

トーモク 東木　チヨージユ長樹を見よ、

トーヨ 東譽　エシヨー惠昌を見よ、

トーリン 東林　ユーキユー友丘を見よ、

トーリユー 東流(二五一二……)［曹洞宗］武藏豪德寺の第二十二代なり、東流字は亘海、鄕貫師承詳ならず、天保の頃武藏世田ヶ谷豪德寺に入り一住廿一年、嘉永五年の頃寂す、壽缺く著作碧巖錄註あり、(豪德寺返信)

トーレー 東嶺　エンジ圓慈を見よ、

トーレー 東嶺　シユーヨー宗陽を見よ、

トーイ 等惟(二三一二)［臨濟宗］京都妙心寺の禪僧なり、等惟字は三芝、妙心寺明叔慶浚禪師に隨侍すること多年、遂に其法を嗣ぐ、然れども未だ出世するに及ばずして寂す、其年時缺く、(延寶傳燈錄)

トーカイ 等海(二〇二四)［臨濟宗］相模建長寺の禪僧なり、等海字は東曙、古先印元に師事して法を嗣ぎ、壽福寺に出世す、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

トーキ　等貴（……）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、等貴は宗山と號す、伏見邦高親王の子なり、出家して梅山に師事し其法を嗣ぐ、兼ねて丹靑を能くし、和歌に長ず、寂年缺く、（皇朝名畫拾彙）

トーキ　等煕　二一二三……〔淨土宗〕山城淸淨華院の第十代なり、等煕は俗姓藤原氏、萬里小路從一位内大臣嗣房の子なり、十一歳にして松林院定玄僧正に投して出家す、宗義弁に顯密の二教に通ず、紫雲山僧然に法を嗣ぎ、遂に黑谷の九代淸淨華院の十代に擢てらる、後圓融帝、後小松帝、稱光帝皆師を召し戒及宗要を受け給ふ、寛正三年八月十二日寂す、同日後花園帝號を佛立惠照國師と諡す、（鎭流祖傳、淨土總系譜）〔考〕等煕の俗姓等異説あり右の傳必すしも信ずべからず、

トークー　等空　二四三七……〔新義眞言宗〕山城護持院第二十一代なり、等空字は周音、紀伊の人、本周坊鑁盛の下に投じて、得度練行し、後、智積院に登り、一宗の學を究む、鑁盛の名古屋長久寺の請に應じて同寺に住するに際し、師隨從して敎を受く、鑁盛寂後智積院に皈り、學徒を敎授す、醍醐山に遊び實雅僧正より幸心院流の事相を受け、戒壇院洞泉律師に就て戒律を受く、寶曆十四年八月二十三日幕府の命を蒙り、江戶眞福寺に住し、明和三年七月智積院に進み權僧正、正僧正に歷任す、能化職にあること八年、安永二年三月因幡堂に退隱す、全六年六月朔日寂す、蓮臺寺に葬る、（眞福寺世代）

トークワン　等觀（二一六四）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、等觀號は秋月、俗姓は高城氏、長門の武族にして薩摩の太守に仕ふ薙髮して僧となり、畫法を雪舟に學びて相從ひて入唐し、秋月の名を得、これより自ら入唐秋月と稱す、畫格極めて師風に似たるを以て其畫に印なきものは謬りて雪舟の畫とするもの多し、殊に水墨の山水、達摩を畫くに秀づ、永正年中の人寂年壽缺く、（本朝畫史、扶桑畫人傳）

トージヨー　等定　一四六〇……〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、等定は金鐘寺の實忠に從ひて華嚴の敎旨を傳へ、詔により河内の西林寺に住し、其廢頽を修して舊觀に復す、桓武天皇尙ほ東宮にありて屢々師を召して法を聽きたまふ、後天皇位に即きたまひ延曆二年、勅して東大寺別當に任し、同九年九年九日律師となり、十二年二月二十日少僧都となり、十六年正月十四日大僧都に上り、同十九年七月某日寂す、壽缺く、其法を受くる者藥師寺勝長僧都、東大寺禪雲律師、東大寺西進律師等あり、（東大寺別當次第、本朝高僧傳）

トーゼン　等禪（二一六六）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、等禪は雨等と號す、俗姓は松浦氏肥前松浦郡の人なり雪舟の畫法を學びて能く其深趣を得、殊に宋元の畫風を研究して其奧旨を極む、寂年壽缺く、（本朝畫史、扶桑畫人傳、鑒定便覽）

トーゼン　等膳　二二五〇……〔曹洞宗〕遠江可睡齋の禪僧なり、等膳字は鳳山、伊勢國篠島の人なり、本國の淨眼寺に入りて出家す、遠江の可睡寺大曳に謁し後、辭して諸方に歷遊し、駿河尾張に至り既にして南に歸り篠島に跡を晦し妙見齋を築て棲む、德川家康道譽を聞いて歸崇し、延き見て法を問ひ、大に悅ふ、元龜三年命して可睡寺に住せしめ、駿河遠江三河の僧錄の事を總へしむ、一住二十年、大に宗風を弘

む、天正十八年五月廿一日寂す、壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

トーゾーサイ　等象齋　カイセキ介石を見よ、

トーチン　等珍（……）〔淨土宗〕山城淨華院の僧なり、等珍字は僧海、其鄕貫詳かならず、聖深に師事して法を嗣ぎ、淨華院及金戒光明寺に住す、寂年壽缺く、嗣法一人良士と云ふ、（淨土總系譜）

トート　等都（二二三〇……）〔曹洞宗〕三河龍谿寺の第二代なり、等都字は廬嶽、下野の人、如仲に依りて得度し、徧く諸老を訪ひ、茂林芝繁に參し、僧伽梨を附せられ、三河大澤山龍谿寺を開き、茂林を開山とし、自ら第二代となる、次で越後の龍澤寺に住すること三年にして龍谿寺に歸り、文明二年二月一日寂す、法嗣開花道見、春照慧成の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

トーニン　等仁（二〇四六―二一二一）〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、等仁字は義山、奈良の人、出家して諸方に歷參し、加賀大乘寺籌山了運に見え、其法を嗣ぎ、承天寺に住し、後大乘寺に主となる、寬正三年十月一日寂す、壽七十七、

トーバイ　等梅（二一六六）〔眞言宗〕紀伊高野山の修驗者なり、等梅は筑後の人、高野山の修驗者なり、書法を雪舟に學び、能く戴笠鐘馗の圖を畫く、其筆力周耕に似たり、（續本朝畫史、扶桑畫人傳、鑒定便覽）

トーホン　等本（二一六六）〔臨濟宗〕京師の禪僧なり、等本は其鄕貫詳かならず、畫を好み初め周文を學び、後雪舟を慕ふ、山水花鳥に於て最も秀作なり、其遺墨は扇面に多し、（本朝畫史、扶桑畫人傳、鑒定便覽）

トーボン　等梵（二二〇八八）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、等梵字は竺西と云ふ、古先印元禪師に參して印可を受け、淨妙寺に出世し、後了義寺を開く、正長年中に寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

トーヤク　等益（一九八七―二〇六五）〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の禪僧なり、等益字は友峰、筑前の人なり、初め雪澗存和尙を禮して童役を執り、稍長して薙髮進具す、雪澗寂する後、等持寺眞如寺の間に古先元禪師に參し、無德孝東福寺を司とる時、召されて內記を掌とり、職滿ちて夢窓石、虎關錬、乾峰曇、蒙山明、龍山見、放牛林、此山在、東陵嶼、石室玖、太虛充の諸尊宿に歷謁す、古先甲斐の慧林寺、相模の淨智寺、圓覺寺、建長寺等に歷住するに方り、師歷侍して左右を離れす、去りて叔復菴己を常陸法雲寺に訪ひ、命せられて後班に居る、巨福山に歸へりて前版に轉す、後諸山の請に應して下野の長樂寺に出世し、後淨智建長の二寺に歷遷す、晚年長壽寺に退去す、檀越野田氏普慶寺を𠛬して開山とす、應永十二年正月病にかゝり、二十二日衣を更へ偈を書して曰く、幻生亦不滅、非幻不生滅、方外立二乾坤一、壺中掛二日月一と泊然寂す、壽七十九、塔を澄心といふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

トーヨ　等譽　エゾン慧存を見よ、

トーヨ　等譽　グワッシューー月舟を見よ、

トーヨー　等楊（二〇八〇―二一六六）〔臨濟宗〕周防雲谷寺の禪僧なり、等楊號は雪舟と云ひ、別に備溪齋、米元山主人、楊智客、雲谷軒等の號あり、俗姓は小田氏、備中赤濱の人十二歲に

して州の寶福寺に入りて度を受け、天性畫を好み、經卷を事とせず、師僧之を戒むれども聽かず、一日師僧大に怒り師を堂柱に縛す、晩に及びて親ら堂上に到り縛を解かんとす、忽ち雪舟の膝下に鼠の驚て走るを見る、師僧驚きて之を逐へとも動かず、恠みて熟視すれば雪舟の自ら脚の拇指を以て滴る涙痕を點して鼠形を畫きたるものなり、是に於て師僧其妙に服し、復畫を作るを責めず、壯年に及び相國寺供德禪師の弟子となり、鎌倉に赴き建長寺玉隱永璵に從ふ、常に周文、如拙の風を慕傚し、寬正年中便船を求めて明に入り四明山に登り、天童山第一座となる、師明にある時好畫を求めて習はんと欲し、其畫を見るに一も意に適せず、即ち自ら曰ふ、大明國裏師とすべき人なし、唯名勝の地のみ我師なり、と、是より山水の景を寫して怠らず、遂に奇畫を爲す、明主其美を賞し、勅して禮部院の壁に畫かしむ、明人の請により本朝田子の浦の景を畫く、當時の鴻儒詹僖（字は

雪舟禪師

仲和鐵冠道人と號す）讃を作りて曰ふ、巨嶂稜層鎭二海涯一、扶桑堪レ作二上天梯一、岩寒六月常留レ雪、勢似二青蓮直過一レ氏、名刹雲連淸建古、虛堂塵遠老禪栖、乘レ風吾欲二東遊一去、特到二松原一竊二羽衣一と、師明に留まる五年にして歸朝し、周防山口雲谷寺に住す、後去りて石見大喜菴に居す、師の畫の妙處は天性に得て古人の蹤跡を踐まず、最も山水に長ず、釋尊出山の圖、觀音、達磨等の圖は筆格粗なりと雖も、其筆力豪俊なり、凡そ人物牛馬に於て筆を一點して成る、蓋し減筆の法は師より始まるなり、後大內義興畫を明より求め、之を師に示す、師見て曰ふ、是れ我れ往年明に在る時畫きしものなり、と、義興大に怒り己れを欺くとなして之を逐放す、後畫絹物に觸れて汚る、因て工に命じて洗除せしめしに雪舟の署名顯る、義興大に驚き始めて、其虛ならざるを知りて召還す、足利將軍の命を受けて蘆屋釜の下繪を畫く、此圖後世に遺りて世人賞翫す、永正三年二月十八日寂す、壽八十七、（本朝畫史、扶桑畫人傳、野史）

トーレン　等連（二〇八三）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、等連字は竺雲と云ふ、大岳周崇に參侍して法を嗣ぎ、萬壽寺天龍寺圓覺寺を歷て南禪寺に昇る、晩年印を解きて靈龜山性智院に退く、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

トーゲン　統玄（二〇一〇）〔曹洞宗〕加賀永安寺第二代なり、統玄字は玄路、明峯素哲の法を嗣きて諸老を歷問し、加賀に至り永安寺を開き、明峯を其一代となし、自ら第二代に居り、同寺に終る、寂年缺く、法嗣寶山宗珍あり、（日本洞上聯燈錄）

トーヨ 統譽　エンセン圓宣を見よ、

トーウンシ 凍雲子　シユーサ宗佐を見よ、

トーテキ 凍滴（一四四一）〔臨濟宗〕近江某寺の禪僧なり、凍滴號は豹隱と云ひ、一に笙洲と云ふ、近江の人なり天明の頃詩文を以て名あり、蘆東山幽蘭社十才子の一人と稱せらる、

トーテツ 到徹（……）〔眞宗〕肥後益城郡六嘉村佛誓寺の住持なり、到徹は肥後益城郡甲佐村皎月寺に生る、環中の門人にして學林初て學階を設くる際、擢てられて司教となる、開生環徹の二師は並に師の門人なり、著作淨土論講錄三卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

トーヒ 到彼　ガンリヨー岸了を見よ、

トーヤ 到也（一三二九）〔淨土宗〕甲斐九品寺の開山なり、到也は乘蓮社一興と號す、幡隨に師事して淨土教を學び、遂に其法を嗣ぐ、甲斐八代郡に九品寺善導寺を剏して開山となり、寛文九年十月寂す、（淨土總系譜）

トーヨ 登譽（……）〔淨土宗〕三河大樹寺の僧なり、登譽は其氏族詳ならず、三河國大樹寺に住す、性雄畧にして道操高し、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

トーヨ 登譽　ケンドー見道を見よ、

トーヨ 登譽　チドー智童を見よ、

トーヨ 登譽　テンシツ天室を見よ、

トーヨ 透譽　ザンリユー暫龍を見よ、

トーリユー 透龍（……）〔曹洞宗〕周防龍文寺の禪僧なり、透龍字は雲菴、周防の人、春明師透に從ひて祝髮し、禪定を學ぶこと六年、出てゝ諸方に遊行して歸へり、春明の法を嗣ぎ、春明の寂後席を補して周防龍文寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣隆室智丘、笑巖宗間の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

トーアン 桃菴　ゼントー禪洞を見よ、

トーイン 桃隱　ゲンサク玄朔を見よ、

トーウン 桃雲　シユーゲン宗源を見よ、

トーオク 桃屋　チユーホ仲圃を見よ、

トーガク 桃岳　ズイケン瑞見を見よ、

トークワセン 桃花仙　シコー支考を見よ、

トークワボー 桃花房　チドー智洞を見よ、

トーケー 桃溪　ジヨタイ汝岱を見よ、

トーケー 桃溪　トクゴ德悟を見よ、

トーゲン 桃源　ズイセン瑞仙を見よ、

トースイ 桃水　ウンケー雲溪を見よ、

トーヨ 當譽　ゾンモ存茂を見よ、

トーヨ 當譽　ゲンテツ源哲を見よ、

トーイン 島陰　ケーアン桂菴を見よ、

トーカン 萄間　シンリヨー辰亮を見よ、

トーシツ 棟室　コンリヨー建梁を見よ、

トーシユク 唐叔　シユーギヨー宗堯を見よ、

トートーミノベツトー 遠江別當（……）七條佛所の佛工なり、遠江別當は定覺の子なりといへとも、恐くは定覺の別名なるへし、大和奈良興福寺中金堂安置の二王像は師の作なり、（佛工系圖）

トーホ 董甫　シユーチユー宗仲を見よ、

トーヨ 燈輿　コーネン光然を見よ、

トーヨ 騰輿　ドンリユー曇龍を見よ、

トーリン 鄧林　シユートー宗棟を見よ、

ドーアイ 道愛 二〇三九……　〔曹洞宗〕奥羽高澤寺の開山なり、道愛字は道叟、羽後秋田の人、俗姓は平氏なり、比叡山に登りて剃髮し、具足戒を受け、天台止觀を習ふ、二十四歳の時所業を捨てゝ、偏く叢林に參す、時に峨山紹碩能登の總持寺に居れり、師之に謁し後辭して鷹維の觀音に詣て其傍に茅菴を結びて居る、陸奥伊勢權守柏山氏報恩山永德寺を刱し師を請す、時に黒石の正法寺席を虚くするを以て師請せられて住持となる、後津輕の合浦に到り、高澤寺を建て開山となる、康暦元年九月十二日寂す、壽缺く、嗣法月菴良圓あり、（日本洞上聯燈錄）

ドーア 道阿　エンセン圓宣を見よ、

ドーア 道阿　ジヨーグヮツ定月を見よ、

ドーイ 道意（……）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、道意は關白藤原良基の子なり、出家して園城寺良瑜に顯密二教を習ひ、其玄奥に達し、園城寺の長吏となり、三山の檢校を領し、常住院に住して大衆の表となる　寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ドーイ 道意 一九二五 二〇一五　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、道意は藤原實雅の子なり、辨悲上人を師として灌頂を受け、後宇多法皇に從ひて重受す、勝寶院に住して瑜伽法を扶け、元亨二年、東寺の長者に加任す、建武二年秋勅により宮中に於て守護經の法を修し、大僧正に任せらる、文和四年十一月十七日寂す、壽六十二、（東寺長者補任、常樂記、本朝高僧傳）

ドーイチ 道一 二四一七 二四八五　〔曹洞宗〕近江清涼寺の禪僧なり、道一字は漢三、別に摩尼と號す、俗姓は井上氏、但馬國湯村の人なり、甫めて九歳長谷寺洞月に就きて薙染し、長國寺千丈の法を得て豪德清涼皓臺の諸寺に歷任し、文化十三年の頃攝津桃山に隱れ、扁して知足菴といふ、文政八年十月三日寂す、壽六十九、臘六十一、

ドーイチ 道一 二三九八 二四二九　〔曹洞宗〕越後龍雲寺の開山なり、道一初め諱は龍華、號は雲秀といふ、越後蒲原郡の人なり、幼年の頃通山和尚に就きて得度し、十七歳にして郡の天樹寺にあり、始めて無得良悟禪師に見え、尋いで武藏東禪寺（今の三室寺）に隨ふ、禪師の命により丹州に赴き、斷崖橋禪師に依る、後美濃の覺照に參せんと欲し途中近江の祥壽山を過ぐ、偶ゝ無得禪師の太寧寺に出世せるを聞き、途を轉して西に向ひ、大寧寺に投して參究すること年久し。然れとも未だ大事を啓發せず、師大に憤發し辭して丹州に入り菴居して一心に工夫す一日一切の境界念に依りて起るの語を憶ひ疑情頻りに凝り山河大地十方虛空悉く本參の話頭となる、夕より坐して覺えず曉に至り、適ゝ溪水潺湲として耳に觸るゝや忽然として失笑す、偈あり曰く、一夜泉聲入眼底、回頭笑見舊時人、虛空拍ゝ手須彌跳、珍重威音劫外春、と、即日菴を捨てゝ再び大寧寺に至り無得に見えて所證を呈す、尋て出てゝ遊方す、大乘寺の智證、寶圓寺の大陽、案性寺の玉淵に謁し、皆器許せらる、既にして播磨の姫路山中に入りて長養す、瑞芳寺の奕性山中

に臨みて師をして首座たらしめんとすれとも辭して出す、孝顯寺曉堂の強請により分座說法す、初め泰淸寺に住す、藩主源宗矩延きて師を天女山に主たらしむ、高徒大謙金津縣に寶林寺を捌し師を延きて開山とす、師六十一歲にして天女山を退く、寶林寺市に近きを患ひ諸徒と共に之を議し、三國の地に移る、屢々越前の龍雲、金鳳、瑞祥、越後の東山常福の諸寺の請に應す、越後新津の桂原氏龍雲寺を捌し師を請して開山とす、居ること三年、越前寶林寺に歸りて老を養ひ、以後諸方の請に赴かす　明和六年十二月二十六日寂す、寶林寺に葬むる壽七十二なり、語錄一卷あり、師の室に入る者五十人あり、師平素文字に意を用ゐすと雖も偈贊大に見るへきものあり、明和三年正月詩あり、曆開明和闘二三春一、恭祝吾皇萬萬春、淑氣靄然滿二天地一、寒巖枯木又逢レ春と、一門の諸師唱和數十韻あり、後人編して壽春編と云ふ、（行狀、壽春篇）

ドーイツ　道逸　二一四〇—二二二五　〔曹洞宗〕能登石雲寺の禪僧なり、道逸字は傑山、業を季雲に受け天叟順孝に師事し永正元年八月二十八日信衣を受けて總持寺に出世し心源寺石雲寺等に歷住し永祿八年五月八日寂す壽八十六、法嗣自山臨龍の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

ドーイン　道印　（二三二四）　〔曹洞宗〕近江比良山某菴の僧なり、道印字は月坡、蔭涼寺鐵心に參して曹洞の禪を究む寬文四年比良山獅子谷に棲遲す山居三十律の作あり七年夏關山琵琶處に住し十絕句の作あり、示寂の年時缺く著作語錄及び參禪要路、菴居集あり琵琶湖を渡る詩に曰く、騎レ雨跨レ風片帆輕、琵琶十里信レ舟行、布帆掛後知二風力一、舳艫搖邊會二水情一、江上有レ山山遠近、波間無レ路路縱橫、普通年外乘蘆客、堪レ笑度生心不レ平、（續日本高僧傳）

ドーイン　道印　二二五三—二三三四　〔曹洞宗〕加賀等覺寺の開山なり、道印字は鐵心、伯耆國河邨郡の人なり、其俗姓は詳ならず、十二歲にして龍德寺松菴受念に依て出家す、初め關東に遊び、偏く禪席を叩く、曾て法門陵夷して宗風振はさるを嘆ず、遂に萬安に隨ひ武藏國舟田山に入りて參究すること久し、尋て天外に仙壽寺に參見し、機語相契ふ、遂に附囑を蒙る、信濃國大昌寺に住し、次に美濃國龍溪寺、加賀國天德寺に遷る、次に等覺桑山の二寺を創す、後隱元禪師長崎の東明寺に來ると聞き、往きて謁し、偈を呈す、幾もなくして隱元攝津國普門寺に遷る、師復た往て謁す、晩に和泉に隱棲し、後小林山蔭涼寺を開く、居士河邨氏淨財を捨て恆產と爲す、加賀國中納言前田利常、丹波國守源光重、大和國太守藤廣之等交々延請して常に篤く崇禮す、師平生衆と共に座禪し、老て益々壯なり、延寶八年正月二十八日寂す、壽八十八、臘七十六、（日本洞上聯燈錄）

ドーイン　道隱　一九一五—一九八五　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、道隱字は靈山、宋の杭州の人、仰山の雪巖禪師に師事し、狗子佛性の話を參究して契悟す、偈あり、妖嬈爲態逞二餘芳一、華品名中占二得王一、莫レ把二傾城一比二顏色一、從來邦國爲レ伊亡、雪巖禪師印可す、我元應の初東渡す、北條高時建長寺に請す、時に夢窓石禪師三浦の泊船菴に在り、往復酬唱せり、師詩あり傳ふ、題下僧血二書華嚴經一應上舍利上「百城烟水蟭螟眼、五十三人驢馬群、頷有二圓珠一皮有レ血、針鋒定末定二功勳一」題二血書法華

ドーイ　道イ

經ニ、轉男成佛夢中夢、衣裡明珠泥彈丸、血脈貫通親徹ノ句、紅蓮華綻紫毫端、題ニ血書金剛經ニ「三心飯」一一非ノ心、十指何須痛著針、山雨午收秋日薄、丹霞散ノ彩落ニ風林、後臣福山中に正受菴を結びて居す、正中二年二月二日其菴に寂す、壽七十一、遺偈あり、還源歌、還源歌、還歌、吹、脫ニ婆婆、哩哩囉と、勅諡佛慧禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ドーイン　道隱　タイニン諦忍を見よ、

ドーウン　道雲　ホーイ法位を見よ、

ドーヱ　道會(……)〔曹洞宗〕某寺の禪僧なり、道會字は海雲、大菴須益に師事して印可を受け、未だ出世に及はすして寂す、其年時傳はらす、(日本洞上聯燈錄)

ドーエー　道榮　一三二五……〔日蓮宗〕紀伊法紹寺開山なり、道榮は紀伊の人、俗名は忍穗彌五左衛門と云ふ、名草郡宇津村に閑居し、三寶に事ふ、明曆元年紀伊侯夫人の歸依により、養心山法紹寺を開く、寬文五年三月十五日寂す、謚して仁慈院日理と稱す、(本化別頭佛祖統紀)

ドーエー　道榮(一三八九)〔……〕大和奈良の僧なり、道榮は唐の人なり、經論に該通し、尤も梵唄を善くす、天平元年勅して道行を嘉し、緋色の袈裟幷に物を賜ふ、示寂の年時缺く、(續日本紀、元亨釋書、本朝高僧傳)

ドーエン　道圓(……)〔曹洞宗〕某寺の禪僧なり、道圓は長門大寧寺大菴須益の法を嗣ぎ、未た出世に及はすして寂す、示寂の年時を知らす、(日本洞上聯燈錄)

ドーエン　道圓(……)〔眞宗〕常陸枕石寺の開山なり、　道圓は俗名を左衛門尉頼秋といふ、近江日野の人、日野頼秀の裔なり、故ありて常陸大門村に居る、建保五年秋親鸞其家を過ぎり、宿を請ふも許さず、乃ち其門外に臥す、夢に異を感し、親鸞を家に延き弟子となる、宅を捨てゝ寺となし、後内田村に移し、今の地に移す、久慈郡上河合枕石寺是なり、大門村にも枕石寺あり、今鎮西淨土宗に屬す、枕石村及び道緣塚あり、(本願寺通紀)

ドーエン　道圓　エンショー圓晴を見よ、

ドーエン　道淵　一二〇四……〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、道淵は中納言源通時の子、禪助法師に從ひて宗義を學ひ、貞治二年四月東寺の長者に補し、至德元年十二月六日寂す、壽七十八、(東寺長者補任)

ドーオー　道雄　一五一一……〔眞言宗〕山城海印寺の開山なり、　道雄俗姓は佐伯宿禰、讃岐多度郡の人なり、一に圓珍の伯父なりと云ふ、初め法相寺の慈勝に投して剃髮し、唯識の訣を受く、東大寺正進律師の上足長歲に華嚴の宗旨を學び兼て因明を究め、遂に本朝華嚴宗の正脈を繼きて第七世の祖となる、或は云ふ勝長大德なる者に學ふと、後、空海に師事すること多年、天長の初め兩部灌頂の職位を受け、般若三藏所傳の顯密開合の旨を授けらる、後、山城乙訓郡木上(コカミ)山に海印寺を開く、承和十四年十二月二日律師となり、嘉祥三年七月十日勅して宿禰姓を賜ふ、十二月八日權少僧都に補せらる、權少僧都の位之より始まる、仁壽元年六月八日寂す、壽缺く、僧正を追贈せられ東山鳥部南阜に荼毘す、(本朝高僧傳、弘法大師弟子譜)

ドーガ　道我　一九一一……〔眞言宗〕京都東寺二の長者なり、

道我一に道雅に作る、大納言僧正といふ、今出川皇后の歸依を得、弘安六年八月十三日北山西園寺三身堂にて皇后剃度の師となる、康永二年十月十九日寂す、壽六十、（東寺王代記、東寺長者補任、傳燈廣錄）

ドーカイ　道海 二二八八／二三五五 〔黄檗宗〕上野廣濟寺の第二代なり、道海字は潮音、俗姓は楠田氏、寛永五年十一月十日を以て肥前小城郡に生る、五歳母を失ひ、祖母に養育せられ、九歳郡の慈雲寺秦雲に投じ字を學び、書を讀み、十三歳剃髮染衣す、明年醫王寺瑞巖に參し、正保二年春京に上り、廣く儒釋を學び、次に近江にて大慧書を聽講し、禪の宗旨を知る嘗て、瑞石寺に如雲禪師に見えて法を問ひ、後、諸方に參究す、慶安元年百法論四敎義等を聽き、四年瑞石寺に夏座す、承應三年肥前に皈り、七月長崎に往き、道者禪師に參す、冬東明寺に止まり、隱元禪師に謁す、寛文元年黄檗山に登り、再び隱元に見え次に木菴に參し、機語相合す、三年登壇して大戒を受く、翌年木菴黄檗山に住するや、擢でられて知客となる、明年七月木菴江戶に往き師これに從ふ池田秀峰黑田泰岳二居士特に師に請ひ、大慈菴を剏し、師之に住す爾來諸侯大夫道を問ひ、戒を受くる者多し、寛文八年春梵網經を講し、四衆雲集し菩薩戒を受くる者四千餘人、秋戒本宗要を說き登壇する者二千六百餘人、館林侯萬德山廣濟寺を建立し、師を請す、師乃ち木菴を開山とし、自ら第二代に居し、遂に木菴より拂子を附せらる、延寶三年禪餘舊事本紀等の圖書を閱し、深く神道に達し、兼て眞言宗を究む、六年解制す、元祿八年八月遺偈を弟子元福に大書せしめて曰く、六十八年、掣風掣顚、掉レ臂行處、蹈ニ倒大千一、と同月二十四日寂す、壽六十八、臘五十五、師生前開山となる二十餘ヶ寺、嗣法六十三、人受戒者十餘万人、著作指月夜話七卷、弁才天三部經畧疏、觀音感通傳各三卷、語錄二卷、不動經要解二卷、摧邪論、三道權輿錄、護國神論、聖德太子傳話、五憲法首書、霧海南針、大成經破文答釋篇、臘扇集、宗門滲漏集、坐禪論、聖胎長養集、南牧山居詩、信心銘要解、日本年事畧儀集、各一卷あり、（潮音禪師年譜、續日本高僧傳、近代名家著述目錄）

ドーカイ　道海 一九六九 〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、道海字は桑田、播磨の人、初め大小乘を習ひ、後大覺禪師の下に歸し、法嗣となる圓覺寺に佛光禪師の住するに際し典座となる、後東照禪興淨智の諸寺に歷住し、龜山菴に退休す、延慶二年正月八日寂す、勅諡智覺禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーカク　道覺 一八六四／一九一〇 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、道覺は後鳥羽院第六の皇子、母は尾張局法眼顯盛の女なり、出家して慈鎭慈賢眞性の三師に天台の宗義を學ひ、西山の證空上人に就いて淨土敎を受く。寶治元年天台座主に任ずるも常に念佛修行す、建長二年正月十一日寂す、壽四十七、（天台座主記、淨土總系譜）

〔考〕諸門跡譜には道覺は後鳥羽院第八の皇子俗名は朝仁建長二年正月十八日寂すとあれども取らず、

ドーカク　道覺 二二九〇／二三六七 〔黄檗宗〕山城天眞院の開山なり、道覺初の名は祖休、字は了翁と云ふ、羽後尾勝郡八幡村の人、俗姓鈴木氏、寛永七年三月十八日に生る、二歳母を

ドー（道）カ

ドー(道)カ

喪ひ、且つ家貧なり、乃ち同郡高屋敷村高橋氏に養はる、幾もなく養父母相尋て沒し、義姉二人亦沒す、七歲實家に復す、後、伯父某の家に寄る、伯父母亦歿す、是に於て郷人不祥の兒となし、顧る者なし、幾に眞言宗の僧某に憐を乞うて衣食し、十二歲同國岩井の曹洞宗龍泉寺の奴となり、竊に三寶に皈依し、十四歲平泉の金堂の頹敗し、經典の散佚するを憂ひ、自ら紺紙金泥の經典六卷を搜索して金堂に納む、十五歲郷の八幡祠に祈誓して三寶に皈依し、功德を積まんとす、仙臺瑞巖寺雲居希膺禪師に謁して法要を問ひ、秋田に至り某寺に投して苦行し、一夜に三千五百禮をなす、實父の老衰貧困を聞いて衣鉢を賣りて生計を助け、尋て江戸に出て日々市街を行乞して遠く米錢を送り、孝養の誠意を盡せり、承應元年隱元琦禪師來航の風說を聞き、出發して西上し、同三年長崎に至り、禪師の同地に着するを待ちて謁を請ふ、會不幸にして大病に罹り佐賀に退きて療養し、翌四年江戸を經て故郷に皈省し、再び出發して北陸道より攝津に入り、富田普門寺に至り、再び隱元琦禪師に謁し、追從して黃檗山に登り、參究を事とす、後、攝津有馬に湯浴して宿病を療養し、一夕大に感憤するところあり、自ら陰莖を切りて婬慾の根を斷ち、再び黃檗山勝尾山等に歷回して參究を事とし、大和の長谷、山城の清水、伊勢の山田等を回歷して佛神の冥助を祈禱し、寬文四年三十五歲寺院修繕經典探訪等の大願を成就せんとして行乞し、山城より東國に下り、奧羽に回歷し、具に辛苦を嘗め、寒暑に際し、陰莖の創痕の痛爛するを患ひ、偶〻靈夢に感して藥方を知り、自ら藥を製して治癒す、これより其藥を錦袋圓と云ひ、廣く賣りて大願を成就せんとす、世間の毀貶を意とせず、六年間に三千兩を蓄積す、乃ち三百兩を投して七千餘兩の書を購求す、輪王寺宮の贊助を請うて不忍池中に一島を築き、文庫を造營し、尋て東叡山に勸學寮を造營す、延寶六年下谷池の端に藥店を開き、勸學寮里坊と稱し、專ら錦袋圓を賣る、貞享元年に至り、勸學寮、並に文庫大に整備し、藏書大凡三万餘卷に上る、こゝに於て高德老儒を聘して日々講席を開く、學徒の來集する者三百餘人に上る、尋て輪王寺宮より勸學坊權大僧都法印に任せらる、師は台密禪の三道場に大藏經完納の願を發し、瑞聖寺、寬永寺、並に高野山に完納し、次に二十一道場に大藏經完納の願を發し、山城萬福寺、武藏瑞聖寺、美濃小松寺、伊勢開福寺、大和法德寺、遠江寶林寺、山城善福寺、(以上禪宗)武藏寬永寺、山城延曆寺、下野宗光寺、武藏金讚寺、山城興聖寺、上野長樂寺、常陸月山寺、(以上天台宗)紀伊光臺寺、同高野山、同泰雲院、同新別所、河内延命院、大和東淨寺、武藏靈雲寺(以上眞言宗)にいつれも鐵眼道光禪師開刻の大藏經を購求納附し、土藏を併せ寄附す、元祿八年高泉性潡禪師より法印を附せられ、其法嗣となる、寶永四年五月廿二日寂す、壽七十八、著作開堂錄一卷あり、(了翁禪師紀年錄、禪師自傳)

ドーカン 道感(二三〇八) 〔淨土宗〕信濃の僧なり、道感俗姓は詳ならず、信濃の人なり、出家して住所を一定せず、野宮の邊に居して古き駕輿を以て菴となし、或は紫竹の邊に住しては朽木の窟を以て室となす、常に金鼓を打て晝夜佛號を稱し、偏に俗事を絕つ、慶安年中十月十五日寂す、壽詳な

らず、（緇白往生傳）

ドーカン　道侃　二三三二 一七八　〔黄檗宗〕近江野洲某菴の禪僧なり、道侃字は直翁と云ふ、近江野洲の人、俗姓玉田氏なり、見たる時新皮襪を着けて泥中を蹴む、父其率暴を見て俗に處すべからずとなし、十一二歲の比、父京師にある弟に托し僧となさしむ、既にして一寺に遣はされ、住僧の肉を食ふを見て其弟子たるへからずとなす、次に一寺に遣はされ、住僧の酒を飲みて佚遊するを見て亦其弟子たるべからずとなし、遂に叔父の命により、直指菴獨照禪師の下に投して師事し、學行を勵む、後、禪師の法嗣竹岩禪師に師事す、獨照禪師の許可を受けたるも、眞率にして事を事とせず、終に法を嗣かず、獨照禪師の寂せる後、故里に歸りて草菴を營み、門を閉ち客を謝す、同門卓岩康席等訪問して絕えず、嘗て卓岩と約して曰ふ、我れ子と共に先師の嗣とならんとす、方今海內師事すへき者あるなし、子再び出つる勿れと、後、卓岩の禪師の嗣たるを聞いて大に罵り、書を與へて交を絕つ、竹岩の寂するに方りて、遺言し、且つ袈裟を附して曰ふ、吾れ固より、子の我嗣たるを屑せさるを知る、然れども吾法は即ち獨照の法なり、子若し嗣かずば其絕ゆるを奈何せんと、師拜して之を受く、既にして竹岩に二弟子あり、密に法を附すと聞いて大に怒りて曰ふ、我れ彼弟子と同しく嗣と稱する能はずと、乃ち竹岩の像前に袈裟を返す、師平生磬を鳴して念誦す、甲人呼びて鳴磬三昧と云ふ、善く伽陀を作る、念誦中に之を發す、一日法侶某訪問して伽陀を作らんことを請ひ、乃ち磬を鳴らして大悲咒を念誦す、中間時に一句を言、某傍に在り隨て書すに、毎四句に至りて皆章を成し、累々二十餘首に至ると云ふ、師性果を好む、庭園に蒲萄棚を架し、熟すれは棚下に就いて之を食ふ、又瓜を種て朝暮に之を食ふ、是に因りて痢を患ふ、曰ふ、吾れ起たす、吾何そ跡を斯世に遺す者ならんやと平生の書稿を取りて盡く火中に投し燒く、十月十四日の夜侍僧を喚んで曰ふ、吾れ明日將に西方の樂邦に適かんとす、我ために粥を炊で行を餞せよ、と、翌日早に粥を食ひ了りて曰ふ、吾れ今往かんと、室中に仰臥して寂す、壽五十七、實に享保三年十月十五日なり、（小宗援稿）

ドーキ　道機　二二八九 二三六〇　〔黄檗宗〕武藏弘福寺の開山なり、道機字は鐵牛、自ら號して自牧子と云ふ、石見の人、俗姓藤原氏なり、寛永五年二月十六日に生る、十一歲郡の龍峯寺提宗に事へ、十五歲出家得度して慧覺と號す、十九歲美作の龍雲寺に留る、會慈母の病を聞いて家に歸省し、看護に心力を盡し、その癒るに至りて出遊し、大坂に至りて湛月の講席に列し、尋て京都妙心寺に投し、後、再び湛月の下に學を修む、爾來江戶東禪寺、大坂法雲寺等に徧歷して教律弁に究む、明曆元年大坂より、西下し、長崎に至りて崇福寺に入りて隱元琦禪師に謁して提撕せらる、琦禪師東上して黄檗山開創の事業を經營するに際し、同門の諸禪師と共に大に力を盡せり、萬治二年江戶に下り　閣老稻葉正則の强請に任せ、湯島麟祥寺に住す、寛文六年四月木菴瑫禪師より法印を附せらる、後、延寶元年稻葉正則の强請により、相模小田原に紹泰寺を開き、武藏向島に弘福寺を開く、同三年木菴瑫の後を繼いて瑞聖寺第二代となり、同六年下總に巡化し、椿沼開墾の事業を經營

す、蓋し數年以前より椿沼開墾の議ありしも決せざりしが、師一たび其土地に到りて實視し、大に國利あるを知り、稻葉正則に謀り、土地の豪族を說きて經營し、元祿二年に至り、新田八万石を開墾功を畢ふ、其間十二年出てゝは開墾造營の事業に奔走し入りては瑞聖寺に宗要を擧揚すること一日の如し、元祿十三年八月二日寂す、壽七十二、勅謚大慈普應國師と云ふ、手創する所の寺院相模紹泰寺、武藏弘福寺、駿河瑞林寺、奥州大年寺、下總の補陀寺、等著作七會語錄十卷自牧摘稿十卷あり、（年譜）

鐵牛禪師

ドーギ　道義　一四九七—一五六二　〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、道義は俗姓生國詳かならず、弱年にして道雄平仁の二師に從ひ、華嚴の旨を受け、兼ねて眞言敎を學ぶ、十八歲にして受戒し、博く經論を閱し、傳燈大法師に任す、昌泰元年東大寺に主となる、明年十二月宇多上皇師に就て受戒し給ひ、延喜二年帝東大寺の中門を造り、千二百僧を以て供養し、師これが導師となる、寺務五年僧中大に和し賞して僧官を賜はる、此歲寂す壽六十六、臘四十八、（本朝高僧傳）

ドーキン　道欽（……）　〔臨濟宗〕相模圓覺寺の僧なり、　道欽字は承先と云ふ、默翁に參すること久時、遂に印可を附せられ、圓覺寺に住し、晩年寺務を厭ひ、桂昌菴に退休す、年七十四を以て菴中に寂す、遺偈に曰く、生地去來本無二一物、白月明朗、清風拂拂喝、と、嗣法淨妙寺正巖曹雅あり、（延寶傳燈錄）

ドーキン　道欣（一二六九）　百濟の歸化僧なり、　道欣推古天皇十七年四月道欣惠彌等十人並に俗人十五人と共に、肥後國葦北津に漂着す、同五月俗人は百濟に送り屆け、僧十人は其請ふに任せ歸化せしむ、道欣惠彌は其中の首なり、共に元興寺に住す、事蹟詳細を缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ドーキョー　道敎（……二五五四）　〔眞宗〕美濃池田郡本郷光慶寺の住持なり、　道敎號は包含、稻葉氏美濃の人なり、高倉學寮に學び弘化四年より學寮に唯識論述記、七十五法名目、俱舍論を講し、明治二年擬講となり、十五年より歎異鈔、本願鈔、散善義を講し、二十四年七月嗣講に進み、文類聚鈔を講し、二十七年一月五日寂す、（眞宗史料）

ドーキョー　道敎（一八七三）　〔淨土宗〕京都九品寺の學僧なり、　道敎は其鄕貫詳かならず、源空上人の弟子なる九品寺覺明房長西に師事して諸行本願の義を主張し、東國に遊化

したり、示寂の年月日缺く、師兼て天台宗に通じ、思圓に就て具足戒を受く、門下性仙等あり、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

〔考〕道教は建保頃の人なり

ドーキヨー　道教　二〇五一……〔淨土宗〕奥州新善光寺の開山なり、道教字は盛誓と云ふ、唱名に師事して淨土業を修め、終に其法を嗣ぐ、貞治年中奥州會津領津川に新善光寺を剏して其開山となる、明德二年三月十二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ドーキヨー　道教　ケンイ顯意を見よ、

ドーキヨー　道鏡　一四三二……〔法相宗〕大和葛木山の僧なり、道鏡は俗姓弓削連、天智天皇四世の孫なりと云ふ、河内の國弓削に生る、出家して義淵に師事し、葛木山に登りて苦行をなし、如意輪法を以て聞ゆ、天平寶字五年に天皇近江保良宮に行幸したまひ、御病患あり、道鏡を召し給ふ、道鏡宮中に候して宿燿法を修し靈驗あり、即ち少僧都に任せらる、此後常に禁掖に出入して寵愛を被る、寶字八年に惠美仲麿反を謀りて誅に伏し、同九月十二日に道鏡大臣禪師となり、封戶等大臣に准せられ、大臣禪師と號せらる、天平神護元年十一月一日に太政大臣禪師となる、同日綿一千屯を賜はり、百官をして禪師に拜賀せしめ給ふ、同二年十月廿三日に法王の位を授けられ、門下圓興に法臣、基眞に法參議の位を授けらる、是等の位官皆此に始る、特に法王宮を置きて乘輿衣服飮食等皆供御に准せらる、政教共に權柄を執り、僧尼の得度の度緣にも治部省の印を廢して道鏡の印を用ゆ、弟淨人といふ者布衣より昇りて從二位大納言となり、一族五位となる者男女十人なり、大宰の主神（カンツカサ）習宜阿曾麿道鏡に媚び、八幡の神敎を矯りて言ふ、道鏡をして皇位に即かしめば、天下太平ならむ、と、道鏡聞きて深く喜び、和氣淸麿を召し意中を告げて八幡に遣はし、神敎を請はしむ、淸麿八幡に至り神敎を傳へて曰ふ、我國家開闢以來君臣定る、未だ臣を以て君となしたることあらず、天日嗣は必ず皇緒を立てよ、無道の人宜しく早く掃除すべし、云々と、道鏡大に怒り、淸麿の官を解きて因幡員外介となし、尋きて詔あり大隅に配す、寶龜元年天皇崩御したまふ、道鏡梓宮を奉じて陵下に廬す、皇太子道鏡の罪を鳴らし、下野藥師寺別當に貶し、弟淨人等を土佐に配流す、寶龜二年僧尼度緣に道鏡の印を廢し、治部省の印を用ゆ、同三年四月下野に死す、庶人を以て葬れり、（續日本紀、七大寺年表、僧綱補任）

ドーキヨー　道曉　イチエン一圓を見よ、

ドーキヨー　道鏡　エタン慧端を見よ、

ドーキヨー　道慶（……）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、道慶は大臣源有房の子、七歲にして聖慶に從ひて三論を學び、稍長して稟具し、大小乘を究む、十九歲維摩會の竪義者となり、後東南院に住し、幾ならずして醍醐山の勝覺僧正に席を讓り、只衣鉢を持して高野山に入る、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ドーキヨー　道慶（一八九七）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、道慶號は東山と云ひ嘉禎三年長吏に任す、寂年及び壽缺く、（三井續燈記）

ドーギヨー　道行（一三二八）〔……〕近江の僧なり、

ドー（道）キ

道行は天智天皇七年十一月に草薙劍を盗み、新羅に逃れ向ふ、中途にして風雨に逢ひ迷ひて歸る。（日本書紀）

ドークー　道空……〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、道空字は谷翁、尾張の人、早年京に昇り東福寺に投す、後西下し應海山に白雲曉に謁し參究し、筑の崇福寺に南浦明に謁し、師資の禮を執り、其法を嗣ぐ、示寂の年時缺く、遺偈あり、機先活路、無レ來無レ去、欲レ知ニ住處一、泥牛哮吼、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドークー　道空（二〇三四／二一〇九）〔曹洞宗〕近江洞壽院第二代なり、道空字は眞巖、號を牧溪と云ふ、河内の人、幼にして出家し、專ら密教を習ふ、性榮華を厭ひ、近江管並の山村に退隱す、應永中如仲禪師此地に洞壽院を築き、師と溪を隔てゝ居れり、師一日如仲を訪うて宗門を叩き、是れより欽服奉侍す、後如仲其所證を印し、院を附して第二代とす、永享九年如仲師に拄杖一枝を贈る、蓋し其化風の盛んなるを悦びてなり、後院を川僧に附して養浩庵に退き、寶德元年八月十五日寂す、壽七十六、（日本洞上聯燈錄）

ドークー　道空　ニョゲン如幻を見よ、

ドークワイ　道快　ショークワイ聖快を見よ、

ドークワク　道廓（二四五八／二五三二）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、道廓字は晦巖、號は萬休、幼にして博多聖福寺仙崖の敎を受け、後東遊して鎌倉圓覺寺誠拙に隨侍し、淸隱、淡海、兩禪師に師事し、遂に淡海の法を嗣く、伊豫宇和島侯伊達春山に請せられ、其地に到り禮遇を受く、常に楞嚴經を誦し、楞嚴吐哉鈔を著さんとし、老後春山侯の供養を受けて法門の學揚を事とし、明治五年八月二十三日寂す、壽七十五吐哉鈔三卷成りて未た業を訖へず、俗弟子藤本鐵石あり、著作訓誨寶海一卷あり、

ドークワツ　道活（二三四八）〔臨濟宗〕肥前長崎某菴の禪僧なり、道活字は卓岩、俗姓宮崎氏肥前長崎の人なり、十五歳京都に上り西三博に醫術を習ふも、專ら佛敎に意を傾け、遂に辭して歸り深堀菩提禪寺に登りて得度す、時に二十餘歳なり、後京都に上り、嵯峨獨照禪師に師事す、再び長崎に歸り、防山に隱棲し、禪味を樂む、示寂の年壽缺く、（續日本高僧傳）

ドーグワツ　道月　ショーネン聖然を見よ、

〔考〕道活は元祿の頃の人なり

ドークワン　道觀（一三一三）入唐學問僧なり、春日粟田臣百濟の子なり、白雉四年の一月に遣唐使に隨ひて唐に航す、事蹟缺く、（日本書紀）

ドークワン　道觀　ショーエ證慧を見よ、

ドークワン　道貫（二四八二／二五五六）〔眞宗〕美濃國池田郡本郷光慶寺の第二十代なり、道貫字は得一、號は香雨と云ふ、稻葉氏なり、美濃の人、文政五年四月一日に生る、十七歳にして大坂に遊び、廣瀨旭莊の門に入り、尋て豐後に遊び廣瀨淡窓の咸宜園に入り、留學三年、後高倉學寮に入り寮司となり、內典を研習すること十餘年、明治十二年東京弘敎書院の聘により縮刷大藏經を校合し、十五年故鄕に歸り、翌十六年兄道敎に代り光慶寺第廿五代の住持となる、二十六年六月高倉學寮擬講となり、二十八年の冬老病あり、翌二十九年五月二十

三日大助教に補せらる、同二十五日寂す、壽七十五、宗主香雨院道貫の五字を書して遺族に與ふ、(傳讃)

ドーケー 道契 二四七六/二五三六 〔眞言宗〕美作圓通寺の僧なり、道契字は天靈、號は鐵尾、豐後安耶郡神邊村の人、黑瀨孫四郞の季子なり、幼にして出家の志あり、甫めて十歳、郷の頂見山覺本上人に從ひて經論を學び、持寶院道雅和上を拜して度を受く、十五歳傳法灌頂を受け、二十七歳三宮寺一雲和尚に謁して戒を受く、後、高井田知幢和尚に就て具足戒を受け、雷雨、性戒、守脫、密成の諸律師に歷侍して顯密の學を受け、智積院に入り、海應能化より密教を傳へ、醫王寺思古禪師に參し禪を探る、弘化三年六月美作香々美圓通寺の請に依り、同寺に住す、明治の初め廢佛論起るに方り、諸宗の學僧と共に東寺に會し、宗風舉揚を謀る、乃ち嵯峨教王常住院を再興し、諸宗の學徒數百人を收容教授す、大覺寺法親王師を大講師に任じ、紫衣緋紋袈裟を賜ふ、後三年美作に歸り、圓通寺內に拾翠山房を營み、文墨を樂む、翌年官教導職を置くに方り、師を導教師となす、其翌年諸宗合同して津山に中教院を設くるに際し、推されて其學頭となり、大講義に補せらる、明治八年八月疾を得、翌九年七月二十三日寂す、壽六十一、臘五十一、僧正を贈らる。著作續日本高僧傳十二卷、般若心經一滴談、宗祖影讃、保國篇、續保國編、闢邪大義護法談、詩文集、各一卷あり、(笠道契和尚傳、畠山照南氏返信)

ドーケン 道顯 (一三六八―……) 大和大安寺の學僧なり、道顯は高麗の人なり、大安寺に住す、天智天皇元年に鼠あり、馬尾を產す、道顯占ひて曰ふ、北國の人將に南國に附かむとす、蓋し高麗破れて日本に屬するかと、元明天皇の朝始めて柑子の木を植ゆ、唐より得來る所といふ、示寂の年時缺く、著作日本世記あり、傳はらず、(日本書紀、僧綱補任、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕僧綱補任に入唐學問僧とあり、歸化の後入唐したるものか、未だ詳ならず、

ドーケン 道顯 (二一三〇) 〔眞宗〕和泉堺眞宗寺の住持なり、道顯は足利氏、道祐五世の孫なり、文明二年本堂を再建して、蓮如上人を請し入佛供養導師となし、同八年境內に別に一字を構へて信證院と號し、蓮如上人に献す、上人常に寓居して手から教行信證、持名鈔幷に十字名號等を書して授與せられたり、師示寂年月詳ならず、(泉州志)

ドーケン 道顯 二三二三/二三八九 〔曹洞宗〕武藏瑞光寺の中興なり、道顯字は隱之といふ、加賀金澤藤岡氏の子なり、母富樫氏靈夢を感して孕むあり、寬文三年二月四日生る、七歳にして詩書の句讀を習ふ、八歳京都に入り、木下順菴に學ふ、十二歳周易を覆講す、聽者嘆服す、十五歳越中立山に登り、忽ち梵鐘の響を聞きて三寶の靈感を知り、出家の志あり、十九歳攝津禪定寺に到り、月舟胡に從ふ、月舟藥山非思量話を示す、貞享三年其命により總州正泉寺良高に依りて克充參究し、遂に許可を受く、翌年江戶吉祥寺に掛錫し、法席を張る、寬永寺僧正某を問ひて天台の教觀を修め、靈雲寺淨嚴律師を問ひて眞言の法要を傳ふ、次に獨湛獨照慧極潮音の諸禪師に歷見して請益す、後禪定寺月舟胡の下に歸る、月舟師に僧伽梨を附して法信となす、元祿三年播磨の磐珪、河內の玄光に歷

謁す、九年加賀大乘寺卍山白の下に留る、寶永元年下總東昌寺の請に應し法席を張る、享保三年徹照居士瑞光寺を再興し、師を請して開山とす、十年美濃妙應寺の請に應す、十四年七月一日同寺に寂す、壽六十七、臘四十九、著作語錄十卷、法嗣寂林心宗等六十餘人あり、遺偈に曰く、四大分明 離虛空、沒蹤跡、喝一喝、(續日本高僧傳)

ドーケン 道顯 二三一二／二三九六 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の住持なり、道顯號は密山、別に朽木子と稱す、俗姓は足立氏、近江の人なり、甫めて十一歲、越前永建寺海翁によりて薙染し、寬文十一年加賀に往き、月舟に大乘寺に謁す、後病を抱きて紀伊に遊び、城北の吉田村に棲遲す、時に黃檗の圓通も亦岡田村に庵居す、吉田を去ること二里許なり、師常に往復して共に商量す、河內經山の獨菴に謁し、元祿十二年二月明州の後を嗣きて大乘寺に住す、正德元年河內の摩尼峯に隱退す、卍山か鷹峰にありて病革るを聞き、往きて之を問ふ、卍山病を力めて師に後事を囑すといふ、元文元年十月十二日寂す、壽八十五、臘五十九、

ドーケン 道憲 (一五六八) 〔三論宗〕奈良元興寺の僧なり、道憲は元興寺の碩德にして延喜八年聖寶を禮して金剛乘法身佛灌頂心印を得て南方の宗匠となる、(續傳燈廣錄)

ドーケン 道憲 (……) 〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、道憲號は顯日、讃岐の人、戒壇院圓照に師事して具足戒を受け、後故鄉に歸り戒律を唱ふ、寂年缺く、(本朝高僧傳)

ドーケン 道見 (……) 〔曹洞宗〕三河泉龍院の禪僧なり、道見字は開巷、大澤寺廬嶽等都に參し、入室して其衣法を附せられ、分座說法す、後總持寺に出世し、退きて參河に歸へる、檀越泉龍院を擲し、師を請す、師廬嶽を奉して開山となし、自ら次位に居る、寂年並に壽缺く、法嗣字岡祖文あり、(日本洞上聯燈錄)

ドーゲン 道玄 (……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、道玄字は自性、定舜の法を嗣きて思允と同學なり、受具の後京都と奈良の間を往來して律章を究め、某年宿志を果して宋に入り、戒疏を齎らす、東歸して東山建仁寺の首座となる、寂年及び壽臘缺く、著作比丘鈔序解一卷あり、(本朝高僧傳)

ドーゲン 道玄 (……一九六四) 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、道玄は二條前攝政良實の子、最守法師に宗義を受け天台座主となること二度准三后となる、嘉元二年七月十九日寂す、壽缺く、(天台座主記、諸門跡譜)

ドーゲン 道玄 (一九八二) 〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、道玄は貞覺と號す、示觀國師に滿分戒を受け、賢首菩薩の敎を究め、東大寺に寓居して世を終ふ、著作華嚴五十三略頌、新舊會品鈔各一卷あり、世俗呼びて華嚴老僧、一に貞覺大亭といふ、(本朝高僧傳)

ドーゲン 道玄 ドーゲン道元に同し、

ドーゲン 道元 一八六〇／一九一三 曹洞宗の開祖なり、道元(一に道玄に作る)希玄と號し、佛法房と稱す、俗姓は源氏、内大臣久我通親の息にして母は攝政藤原基房の女なり、正治二年正月二日を以て生れ、三歲の時父を喪ひ、伸兄なる大納言通具に養はる、四歲にして李嶠雜詠を讀み、七歲にして毛詩

左傳を讀みて神童の稱あり、八歲母を喪ひ、悲哀の餘出家せんとするの意あり、これより益讀書に耽り、阿毘達磨俱舍論等を閱す、松殿禪閤藤原師家養うて嗣子となさむとするも、師の宿意益固くしてこれを固辭す、建曆二年十三歲にして大に決する所あり、一夜暗に乘じて木幡の山莊を遁れ出で、比叡山麓なる良觀法師の草庵を訪ひ、具に狀を告げて弟子となる、蓋し良觀法師は師家の弟にして師の母の兄なり、横川首楞嚴院の般若谷千光房に留學し、建保元年四月九日十四歲にして座主公圓僧正を仰いで手度を受け、同月十日大戒を受く、翌二年園城寺に投じ、公胤僧正の下に敎觀の要を問ひ、尋で榮西禪師新に禪宗を唱ふるを聞き、就て謁を請ふ、然れども榮西は京都鎌倉の間に往來して法席暖なる遑なく、幾何もなく鎌倉に寂せしを以て、其嗣明全禪師に師事し、共に東山に幽棲して個事を參叩す、時に幕府建仁寺の寺觀を新にしたれば、明全と共に同寺に住したり、久しからずして明全は榮西の往跡を追うて宋に航せんとし、貞應二年二月二十二日建仁寺を出で西下筑前博多に向ふ、師時に二十四歲廓然高照等と共に明全に隨ふ、三月伊勢津の芝原四良左衞門の商船に便乘して博多を發し、海路恙なく四月の初め明州に着す、五月阿育王山の典座船に來る、因て師相見して問答す、同月陸に上り、金禪師に隨侍して慶元府の太白山天童景德寺に登り、佛照德光の法嗣なる無際了派に謁す、同月新戒の列に置かれたるを非とし、上表して叢林の排座を正さんことを請ふも許されず、再次上表して切に其非を訴ふ、乃ち勅ありこれを正さる、我國の比丘支那の叢林に投じて戒次の列に置かるゝもの此に始まる、爾來天童景德寺に留まりて參叩す、我國留學僧隆禪に依りて龍門佛眼派下の嗣書を覽、惟一に依りて法眼派下の嗣書を覽、宗月に依りて雲門派下の嗣書を覽る、嘉定十七年正月廿一日無際了派の秘藏せる佛照德光より了派に傳へたる嗣書を覽て大に感喜す、翌寶慶元年天台山雁山寺に至る途次、平田の萬年寺を訪ひ、元鼐禪師に見へて嗣書を覽、同年徑山の興聖萬壽寺に登りて浙翁如琰に見え、台洲の小翠岩、阿育王山の廣利寺等を遍歷し、盤山思卓幷に大光等一時の大禪師間はざるなし、かくて再び天童無際了派の下に皈らんとし、途中其示寂を聞きて大に落膽し、明全禪師に會し事を謀らむとす、偶徑山の羅漢堂に於て一老僧老璡と云へる者に遭ひ、新住持長翁如淨の禪風を說くを聞きて欣喜措かす、同年五月一日徑に天童に登りて謁を請ふ、一見機緣相投し、宿契あるか如し、乃ち其下に掛搭し、朝參暮叩餘念なく、遂に佛佛祖祖面授の大事を豁悟し、身心脫落脫落身心の妙契に達す、同年九月十八日佛祖正傳の大戒を稟受し、二年を經て別れを告ぐ、如淨禪師慇懃に誨示し、且つ芙蓉道楷祖の袈裟、寶鏡三昧、五位顯訣、幷に自贊頂相を附與す、即ちこれを拜受して山を下り、同年便船に乘して東皈の途に上り、風浪の險を凌ぎて漸く肥後川尻の津に着し、五年留學の功を全うす、時に安貞元年なり、直に東上して京都に入り、建仁寺に行李を卸す、時に同寺は明全以後了心住持となりて稍叢林の風規を整へたりと雖も法嗣絕えて傳はらず、僅かに遺風の存留せるのみなり、即ち同寺に留りて普勸座禪儀一篇を選す、然れとも師同寺に於て新に門戶を張らんとはせず、寛喜二年の頃京師を出

ドー（道）ゲ

て、深草なる安養院といへる廢院に幽棲す、然るに德譽漸く四方に傳はり、道俗相尋で來皈す、正覺禪尼なるものあり深く師の教に服し、一禪寺を興さんとし、同地極樂寺の舊趾に就て經營し、天福元年土木功畢り、初め觀音利導院と號し後師宋の徑山の寺號興聖幷に曹谿の寺號寶林を併せ取りて興聖寶林禪寺と號す、嘉禎二年十月十五日同寺に於て開堂を行ふ、懷弉、詮慧、義尹等前後して其下に皈し、師資の禮を執れり、乃ち懷弉を擧けて首座となし、諸弟子を監せしむ、一住十餘年、門風大に興る典座教訓、學道用心集等を撰す、寛元元年七月同寺を出で二三の弟子を率ゐて飄然北行し、越前の山中に向ふ、松岡溪の奧吉峰の巓に登りて錫を駐む、これ師の北國に法化を敷ける始めなり、初め出雲守波多野義重京師に在りて師の教を蒙り、深く皈依崇信し、其領地なる越前の勝を說いて往化を請ふ、師は大宋の如淨古佛越に生る越の國號を聞くすら

道元禪師

思慕の至りなりとて、即刻其請を容れて出發したりと云ふ、かくて吉峰の嶺に幽棲し、深く其勝を愛す、義重傘松の西に地を相して一禪寺を建立し、吉祥山大佛寺と號して師を請す、乃ち寛元二年七月師自ら開堂を行ひ、尋で法堂僧堂等を造立し、一一古制によりて清規を行ふ、寛元四年六月十五日に至り、改めて永平寺と號す、寶治元年八月最明寺時賴の强請により鎌倉に到り、時賴以下諸人の爲めに法門を說き、且つ菩薩戒を授く、時賴抑留して一寺を興して請せんとしたるも、固辭して應せず、同二年三月永平寺に皈る、時賴越前六條堡二千石の地を寄進して衣食に供せんとて、師の弟子玄明に附し寄進狀を送る、玄明先づ大に喜びて師に呈す、師固辭して受けず、却て玄明の喜べるを聞きて其卑陋を惡み、下山を命して擯出し、玄明の坐禪牀を毀たしむ、爾來山中を出です、靜修を事とす、後嵯峨天皇勅して召し給ふも出です、紫衣を賜へば再三これを辭す然れとも許されず、遂に拜授し、一偈を作りて上謝し、畢生これを着用せさりきと云ふ、其偈に曰く、永平雖二谷淺一、勅命重重重、却被レ笑二猿鶴一、紫衣一老翁と、建長四年の夏微恙あり、諸弟子を召して遺教經を講ず、翌五年七月永平寺を孤雲懷弉に附し、八月波多野義重の請に應じ疾を輿して京都に上り、高辻西洞院俗弟覺念の宅に入りて療養す、同年八月二十八日に至り遂に其宅に寂す、壽五十四、懷弉等相謀り東山に荼毘して眞骨を永平寺側に葬る、遺偈に曰く、五十四年、照二第一天一、打二箇𨁝跳一、觸二破大千一、渾身無レ覓、活陷二黃泉一と、著作普觀坐禪儀一卷、學道用心集一卷、清規二卷、廣錄十卷、正法眼藏九十五卷あり、嘉永七年

二月二十四日勅謚佛性傳東國師の號を賜ひ、明治十二年十一月廿二日承陽大師の號を賜ふ、師の宋に航する時、隨從したる者に木下道正加藤景正といへる者あり、景正は後に春慶と號す、宋に於て陶器の製造法を傳へ來り、東皈の後尾張の瀨戸に其業を開き、子孫蕃殖し、所謂瀨戸焼今に盛なり、(傳光錄、建撕記、永平和尙傳記、同年譜、本朝高僧傳・洞上諸祖傳、日本洞上聯燈錄)

ドーゴ　道悟　二二九六 二三六九　〔黃檗宗〕攝津慈應寺の開山なり、道悟字は靈峯、美濃多藝郡の人なり、早年伊勢正法寺に投して度を受け、後出遊して諸禪師に參謁し、長崎に至り、明僧道者禪師に謁して法嗣となる、道者西歸の後、攝津中島に幽棲し、嚴冬一紙衣、極夏一施布、十五年一日の如し、時人紙衣の悟頭陀と呼ふ、四十四歲黃檗山に登り、木菴より戒を受く、埼島村に春日寺を開き、西の宮鳴尾に慈應寺を開く、黃檗山の悅山慈應の二大字を書し贈る、一住二十年なり、後中島に遊び、病に罹りて寂す、寶永六年四月廿四日なり、壽七十四、臘五十八、(續日本高僧傳)

ドーゴ　道悟　チユーシユン忠俊を見よ、

ドーゴ　道御　シユーコー修廣を見よ、

ドーコー　道光　一三五四　〔戒律宗〕入唐學問僧なり、道光は孝德天皇白雉四年五月道嚴、道通等と共に唐に航し、後白鳳七年東歸して律師となる、勅を拜して四分律鈔選錄文一卷を撰し上る、我國に南山派を傳ふる始めなり、持統天皇八年四月寂す、勅して賻物を賜ふ、(日本書紀、三國佛法傳通緣起、元亨釋書)

ドーコー　道光　一九五〇　〔淨土宗〕京師悟眞寺の開山なり、道光字は了慧、居所を望西樓と號し一に蓮華堂と號す、俗姓は宍戸、父名は常重と云ひ相模國鎌倉の人なり、十一歲にして比叡山に登り、尊惠に師事し、諸宗に通ず常に法華經を誦す、四十歲の頃記主禪師良忠に師事し、淨土宗の要義を受く、師京師の三條に悟眞寺を創す、世に三條流と云ふ、弘安七年春聖光上人の別傳一卷を記す、十年八月然空上人の別傳を記し、永仁四年夏大綱鈔上卷を著し、選擇集を注解す、五年二月同門の請に依て大經鈔七卷を製す、花園天皇の四十八條の勅問を拜して答釋を上る、世に尊問愚答記と云ふ、正應三年三月廿九日寂す、勅謚廣濟和尙と云ふ、前記の餘、新扶選擇報恩集一卷、往生十因私記二卷等あり、(鎭流祖傳、淨土總系譜、蓮門經籍錄)

ドーコー　道光　二二九〇 二三四二　〔黃檗宗〕攝津瑞龍寺の開山なり、道光字は鐵眼と云ふ、肥後益城の人、俗姓佐伯氏、寬永七年正月一日生る、父の名淨信と云ひ、深く佛敎に歸す、師七歲にして父の下に觀無量壽經を授けられ、能く暗誦す、十三歲にして同郡海雲法師の下に度を受く、十七歲豐前の永昌寺に至り起信論の講席に列り、慧解大衆を驚かす、慶安三年出遊して諸師の講席に列り、明曆元年明より隱元隆琦禪師の東渡を聞き、長崎に至りて謁を求め、尋て同禪師の攝津富田普門寺に入れるを追うて西上す、親しく敎を受け、遂に隆琦禪師の高弟木菴性瑫の弟子となる、既にして大藏經開刻の大志を發して經營す、寬文八年大坂月江寺に起信論を講して大衆に對し、其大志を告く、觀音寺妙宇道人と云ふ者あり、

即ち師の大志に感し、白金一千兩を寄附す、師大に喜ひ、宇治黄檗山に登り、隱元隆琦禪師に謁して事情を告く、禪師偈を作りて其擧を賛し、明より齎すところの大藏經の刻本を與へ、且つ山内の地所を割いて木版の貯藏所に當つ、師大に喜び、其地に寶藏院を開き、且つ京師に印房を置く、爾來木版工を募り、日日事に從ふ、尋て江戶に下り、淺草海雲寺に楞嚴經を講して大藏經開刻の緣を募る、道俗の資金を寄附する者甚た多し、寬文十年大坂に歸り、信徒の懇請により慈雲山瑞龍寺の中興開山となる、同寺は元藥師寺と號したりしが、其基を新にして中興したるなり、翌十一年瑞龍寺に楞嚴經を講し、同年再ひ江戶に下り、井伊氏夫人の懇請により青山に海藏菴を營み住す、後、正德三年に至り、改めて寺となし、海藏寺と號す、黄檗山東林寺開山大眉性善、東林院の地の高邃にして火災を避くるに便なるを以て寶藏院に附す、師大に喜ひ、

鐵眼禪師

大庫三棟を築いて木版を藏む、延寶二年家父の病を問はんか爲め肥後に歸る、家父沒して後居宅を寺となし、三寶寺と號す、國守細川氏師の道譽を聞き、城中に請して優禮し、且つ向後毎年金一千錠を寄附し、開刻を助く、同年秋薩摩に遊ひ、福昌寺に楞嚴經を講す、琉球國王子等數〻法要を問へり、豐前國守久留島氏の懇請により、同地安樂寺に經を講す、會〻徒ありて師の道譽を嫉みて害を加へんとす、久留島氏命じて惡徒を捕へ、且つ師を國境に送る、師特に弟子を遣はして惡徒の罪を宥さんとを請ふ、久留島氏益感服して惡徒を放てり、延寶四年黄檗山に回り、木菴性瑫の下に法印を拜す、四月先考の忌辰に際し、瑞龍寺に法華經を講し、秋江戶に下る、老中稻葉氏の懇請を受く、同六年に開刻功を畢へんとす、乃ち表を製して太上法皇に上進す、同年瑞龍寺に大雄殿、幷に選佛場を築く、尋て大藏經を大將軍に獻す、天和二年畿內荒歉し、衆民飢渴に苦む、師大に救濟を謀り、其恩澤を被る者凡そ一萬餘人なり、同年二月廿九日俄に疾發るも大衆のために經を講す、三月七日弟子に後事を托す、二十二日偈を書して曰ふ、七顚八倒、五十三年、妄談般若、罪犯彌天、優遊華藏海、踏破水中天、同日巳の時寂す、壽五十三、臘四十なり、師經論を講すると十餘會、寺を開くと八所、即瑞龍、寶藏、金禪、海藏、小松、三寶、寶泉、延命なり、法嗣寶洲等數人なり、

（行實、碑銘、續日本高僧傳、野史、近世畸人傳）

〔考〕鐵眼道光禪師は初め眞宗の學徒なり、眞宗の成規院西吟に就いて敎を受けたるも、西吟の異義を以て斥けらるゝ後、轉して黄檗宗に歸し、一生眞宗の宗風を攻擊す、其豐前に於

いて危難に臨むも、各く眞宗の徒の激怒に因るなり、本文に惡徒とあるは、即ち眞宗の某々等なりとす、

ドーコー 道光 ニチケン日謙を見よ、

ドーコー 道光 フジヤク普寂を見よ、

ドーコー 道晃 二四七四 二五三 〔眞宗〕肥後熊本坪井鳥町善正寺の住持なり、道晃は肥後葦北郡日南久町善立寺に生れ、慶恩の養子となり、遂に住職を繼く、明治二年安居觀經を學林に代講し、同七年の安居に文類聚鈔を代講し、十六年二月七日寂す、壽七十、法主諡を與へて超絶院といふ、著作二種深信講義、六字釋講義、正信偈講義あり、（學苑談叢）

ドーコー 道公（……）〔天台宗〕攝津天王寺の僧なり、道公法華誦持を業とす、熊野山に登り精修し、一夏畢りて寺に歸ろ、途中に神祠の前に宿し、靈告を蒙りて祠前に留り、三日間法華を誦持せり、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ドーコー 道香 二三三三）〔黄檗宗〕大和王龍寺の開山なり、道香字は梅谷、俗姓中村氏、肥前長崎の人なり、早年道心あり、永昌寺に投し、曹洞禪に參し、後、黄檗山木菴瑫に師事す、宇治福清寺に住して道譽あり、郡山侯本多氏の延請により、郡山に法光寺を開く、大旱に際し、村民の請により、華嚴經を誦して雨を祈りて大に驗あり、村民驚喜して王龍寺を興す、師其開山となる、寂年缺く、（續日本高僧傳）

〔考〕道香は延寶の頃の人なり、

ドーコー 道興 二〇九〇 二一八七 〔天台宗〕山城聖護院の門跡なり、道興は京師の人、關白近衛房嗣の第三子なり、長享二年に生れ、幼にして出家し、顯密の兩教に該通す、聖護院第二十四代となり、後、園城寺長吏三山撿挍となり、大僧正に昇り、准三后となる、寶德三年十月職を辭し、爾來風月を友とし、詩歌を樂めり、將軍義政同義尙と贈答したり、天文十二年東國に旅行し、文明十八年自ら見聞したるところを記し、回國雜記と云ふ、大永七年七月七日寂す、壽九十八、（諸門跡譜、佛教史料）

ドーコー 道皎 一九五三 二〇一一 〔臨濟宗〕京都大梅山長福寺の學僧なり、道皎號は月林、山城の人、中納言久我具房の子、其先は村上天皇十一世の胤、母は藤原氏の出なり、幼にして父を喪ひ、母に隨ひて越前に往き、平泉寺に入りて童役となる、十六歲薙染し、建長寺高峰日和尙に依り高峰の寂するに及ひ、京都の北巖倉に居り、大燈國師に謁して宗要を咨詢す、花園上皇其名を聞きて屢〻離宮に召し、心法を尋問したまふ、元亨の初年師二十九歲にして海を渡り、明年春元に入り金陵の保寧寺の古林和尙に參し、大仰寺の志心誠に謁す、命せられて藏典となり、職滿ちて保寧寺に歸へる、一日古林問うて曰く、斬りて三段となす時は如何と、衆競ひて答ふれとも契せす、師後に至りて答へて曰く、勞して功無きものなり、と、古林大に肯し、此より名朝野に馳す、文宗皇帝勅して佛慧知鑑大師の號を賜ひ、古林の命によりて後版に居る、天曆二年冬古林將に寂を取らんとするに方り、法衣を師に付す、明年春歸朝す、我か元德二年なり、城西の法華山に菴を結びて居り、妙峰菴と稱す、大燈國師師の歸朝を喜ひ、使を以て通問す、敎門の大德ありて師の道風を感し、梅津敎寺を改めて禪寺となし、師を迎へて開山となす、大梅山長福寺是なり、花園上皇

益崇信し、詔して宮に入れ、時に寺に幸して法を問ひたまふ、後塔院を寺北に建て清凉院と稱し、古林和尚の肖像を安す、觀應二年二月十三日病にかゝり、二十五日寂す、壽五十九、臘四十四、全身を清凉の塔に窆むる、（本朝高僧傳、續群二三四）

ドーザン　道山　二二八七……〔淨土宗〕信濃願行寺の僧なり、道山は崇蓮社炭譽と號す、甲斐歸命院炭往の弟子にして河越蓮馨寺の感譽に兩脉を傳へられ、奉譽に璽書を受く、信濃願行寺に住し、寛永四年寂す壽缺く、嗣法二人あり、廓道、傳隨これなり、（淨土總系譜）

ドーザン　道山　リョーコー良高を見よ、

ドーザン　道殘　ゲンリユー源立を見よ、

ドーザン　道殘　リョーチ良智を見よ、

ドージ　道慈　一四〇四……〔三論宗〕大和大安寺の學僧なり、道慈は大和添上の人、俗姓額田（ヌカタ）氏といふ、幼少にして佛門に歸し、智藏に師事して三論宗を受け、龍門寺義淵に法相宗を學ぶ、大寶元年遣唐使粟田道麿に附從して唐に航し、諸名僧を歷問して三論等を研究す、眞言の善無畏三藏にも遇ひて其宗を聞きたり、長安に於ては仁王般若經の宮講の講師に推選せられ、大に優遇を受けたりと云ふ、諸科の學藝にも意を用ひ、詩は殊に其長する所なり、遂に皇太子に上りたる作あり、養老元年に歸朝し、大安寺に住して盛に三論宗を講敷す、慧灌、智藏、道慈、幷に唐に渡りて三論宗を傳持したれば、是を併稱して三論宗の三傳と云ふ、道慈は法相、戒律、成實、華嚴、眞言の諸宗を兼學幷傳せり、天平元年に大安寺改造の事あるに際し、其贊したる西明寺の圖によりて設計をなし、工匠を指揮して土木の事を督したり、同十月に律師に任せらる、八年二月に勅して封戶及び扶翼童子六人を賜ふ、九年四月に上奏して例年大安寺に於て大般若經六百卷の轉讀をなし、鎭護國家の祈禱をなさんと云ふ、勅して之を許す、同年十月宮中に於て始めて金光明最勝王經の宮講を行ふ、道慈請せられて講師となる、聽衆一百、沙彌一百、朝廷の儀一に元日に同じ、同十六年十月に至り寂す、壽七十餘なり、道慈性峻嚴にして强鯁なり、唐より歸りて竹溪山寺に隱棲する頃、長屋王詩酒の宴會に招かむとしたるに、詩一篇を寄せて答ふ、其詩に僧既方外士、何煩入二宴宮一の句あり、平生當時の僧尼の弊風を慨し、愚志一卷を作り、僧尼の事を論ず、然るに其書今佚して傳はらず、（續日本紀、懷風藻、元亨釋書、本朝高僧傳）

ドーシン　道振（……）〔眞宗〕安藝本鄕寂靜寺の住持なり、道振字は嵩山といひ、豐水と稱す、芿園の上足なり、法義惑亂の際書を著述して邪を摧く、著作願成成文撮要、易行品敬持記、淨土論略解、（未完）安樂集大意、散善義唯信決、六軸標擧提綱、行卷文義畧決、化卷科節辨意、（未完）行一念繼述編、本典大意畧解、文類聚鈔鏡、（未完）二門偈略解、三帖和讃大綱、行信桑名記、蓬窓閑話、寄直對辨、淨土法門綱要、圖說昭穆作述決、佛性論講述、各一卷、往生要集備忘記、正信偈報恩記、愚禿鈔大光錄、御傳翼讃、各二卷、小經舒舌箋往生要集、唯稱決、本典大意略解餘論、各三卷、玄義分專想錄四卷、論註覈本決、選擇集顧命錄、各五卷、並に願文成就參挍考、（未完）安樂集唯淨決各若干卷あり、（淸流紀談、本

願寺派學事史）

ドーシン　道信（一三四九）〔……〕蝦夷の僧なり、道信越の蝦夷なり　持統天皇の三年に出家す、天皇勅して佛像一軀、灌頂幡、鐘、鉢各一口、五色綵各五尺、綿五屯、布一十端、鍬、一十枚、鞍一具を賜ふ、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ドージン　道深（一八六六―一九〇九）〔眞言宗〕京都仁和寺の法親王なり、道深は後高倉帝第三皇子、建永元年を以て生る、十一歳にして仁和寺に入り、北院の道助僧正によりて落髮受戒し、後奈良の東南院にて密敎を學び、性相を究む、承久二年一身阿闍梨に任し、翌年冬親王に敍す、安貞元年廣隆寺を主どる、寛喜元年禁殿に於て孔雀經法を修し、二品に敍し、二年春觀音院に於て道助に兩部の灌頂を禀け、三年仁和寺に住し、九月總法務六勝寺の檢校となる、建長元年七月二十八日寂す、壽四十四、（本朝高僧傳）

ドージン　道深（一二一四）〔……〕百濟の歸化僧なり、道深は欽明天皇の朝に來る、同十五年二月に曇慧等來りて道深等に代れり、されば其以前に來れるものなり、蓋し我國に僧の入れるもの道深等の一行を始めとす、事蹟缺く、（日本書紀）〔考〕元亨釋書、本朝高僧傳に、欽明天皇十五年に曇慧等と共に來りたりと云へるは正しからず、今は書紀に從ふ、

ドーシヤ　道者（二三一八）〔黃檗宗〕肥前長崎崇福寺三代なり、道者諱は超元明の人、慶安四年西來し崇福寺三代となる、國人の敎を請ふ者甚た多し、萬治元年國に歸る、

ドージヤク　道寂　一八〇七〔……〕〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、道寂出家して長谷寺に參籠し、靈告により名山を浮遊し、元興寺に居りて坐禪念佛す、後眉間寺に移つる、洪鐘を禱て東大長谷金峰の三寺に施し、久安三年十二月彌陀號を稱へて寂す、壽八十餘、（本朝高僧傳）

ドージヤク　道寂（一七四七）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、道寂は俗姓中原氏、京師の人なり、初め宇治關白賴通の家臣となる、官少外記に至り、急に出家の願を發し、比叡山に登り剃髮納戒す、五部の大乘經を書寫して楞嚴院に安置す、後、無動寺に住し、經を書寫し、一字三禮す、寛治の頃近江の蒲生山中に於て阿彌陀佛を念持して寂す、（本朝高僧傳）

ドーシユ　道種（三〇二八）〔戒律宗〕大和極樂院の律僧なり、道種字は光圓、其俗姓生國詳かならず、應安の初め奈良極樂院に住す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ドーシユー　道秀（一九九〇―二〇七七）〔臨濟宗〕伊豆臨濟寺の禪僧なり、道秀字は松嶺、俗姓は藤原氏、武藏川越の人、父の名は尊嚴、母は平氏の出なり、甫めて十二歳、伊豆走湯山の萬代法師に投して侍童となり、尋いて曹源寺の默翁淵の弟子となる、十四歳落髮し、建長寺笠仙仙和尙に參す、十六歳比叡山にて受戒し、天龍寺夢窓國師に參す、從侍すること一年、關東に歸へり、淨智寺實翁秀に依り、去りて常陸法雲寺の復菴已に參す、一冬を經て契せす、回へりて默翁を省す、備中慈光寺に寂室光に見え、同寺に掛搭して日に參究すること一年、猶ほ契せす、備前の高菴丘和尙に謁し、去りて因幡に至り寂室に侍す、後相模に往き、建長寺實翁に謁し、夏畢りて備後の鐵山に往き、茅菴を結びて幽棲し、牛欄菴といふ、藤原師

景備中に寺を建て、師を延きて居らしむ、貞德寺と號す、後、席を上足容極に讓り永源寺寂室に省す、留まること四日、法語及び印可を受く、備の佛原山に菴居す、上杉天樹居士招きて治内に居らしむ、師乃ち伊豆に往き、虎杖原(イタドリハラ)の幽勝なるを見て臨濟菴を結びて僧三十人と共に幽棲す、康曆元年圓應禪師の十三忌辰に逢ひ、大衆に招かれて永源寺に住す、師諸山の高德を招きて大會齋を設く、住持十年、道風大に振ふ、備の檀越景貞の請に赴きて新に佛殿を建て居る、明德初年天下の騷亂あらんことを慮り、臨濟菴に歸り、再び永源寺に往きて、再興を力む、將軍足利義持師の道風を聞き使及び畫工を遣はして袈裟十二襲并に香信等を齎して代り禮せしめ、且つ其肖像を描かしむ　翌年伊豆に歸へり應永二十四年二月十四日寂す、壽八十八、臘七十二、勅して圓明證智禪師と謚す、(本朝高僧傳、行狀)

ドーシユー　道宗　……〇二〇　〔淨土宗西山派〕山城龍護院の僧なり、道宗字は傳敎と云ふ、雙空道慧に師事して淨土宗西山派の學を究め、山城竹林寺に住し、其門業を張る、足利尊氏深く師の道學を慕ひ歸向最も深し、後深草帝護院に幸となり、延文五年八月二十九日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

ドーシユン　道俊　一八八九―一九六九　〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、道俊は二位中將基輔の子、二品親王忠遍隆澄開田准后の諸師に就きて學び、正應五年東寺長者に任し、永仁二年正僧正に昇り、同七月寺務に補す、延慶二年二月八日寂す、壽八十一、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

ドージユン　道順　……一九八一　〔眞言宗〕京師東寺の長者なり、道順は藤原秀房の子なり、醍醐寺に投じて憲淳僧正に灌頂密印を受け、報恩院に住し、三寶院に遷る、文保二年權僧正に任し、元應元年東寺二長者に加はり醍醐寺の座主を兼ね、大僧正に昇る、翌年寺務並に法務を領し、護持僧となる、元亨元年十二月二十八日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ドージユン　道順(……)　〔曹洞宗〕備後龍雲寺の開山なり、道順字は慈伯、備後の人、丹波圓通寺の竹馬光篤に師事して其法を嗣ぎ、鄕里に歸りて菴居す、菴後に寺となり、龍雲寺と號す、寂年世壽缺く、全寺に塔す、法嗣報扇知恩あり、(日本洞上聯燈錄)

ドージユン　道順　二四三七―二五〇六　〔天台宗〕江戸東叡山鹿苑菴の學僧なり、道順字は隆敎と云ふ、東叡山に鹿苑菴を營み、天台の敎學を講し、慧澄と名を齊うす、弘化三年正月二日寂す、壽七十、著作四敎義容拳十二卷、四敎義箋三卷等あり、

ドージユン　道淳　……一九八二　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、道淳は紀伊神宮の人、賴審に師事して灌頂を受け、密乘に精通して法驗あり、寶龜院に住して元亨二年檢校職となる、寂年、及壽缺く、(本朝高僧傳)

ドージユン　道潤　……一九六二　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、道潤は二條良實の子源惠法師に習學し、乾元元年天台座主に任す、寂年缺く、(天台座主記)

ドージヨ　道恕　二三三八―二三九三　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、道恕は久我廣道の子、通規の弟にして鷹司房輔の猶子となる、延寶四年八月二十八日蓮華院に入り、同六年得度す、貞享元年十二月二十九日法印大僧都に任し、安井門跡となり、同五

年二月二十九日權僧正に昇る、元祿四年十月八日東寺に於て受戒し、五年三月二十日大僧正に任ず、享保三年三月二十八日東寺長者となり、十八年十一月十五日寂す、壽六十六、後法界心院と號す、師生前書を好み、狩野永納に學ぶ、人物花鳥に秀作あり、（諸門跡譜、扶桑書人傳）

ドージヨ 道助 一八五五—一九〇九 〔眞言宗〕京都仁和寺總法務なり、道助は後鳥羽天皇の第二皇子なり、四歲にして親王に叙し、六歲にして仁和寺道法僧正の室に入り、十一歲剃度して密咒を誦習す、承元四年二品に叙し、建曆二年一身阿闍梨となる、尋て灌頂を受け、建保元年六勝寺の檢校に補す、此歲仁和寺の席を繼ぐ、七年正月總法務となり、寬喜二年辭して金峯山に退居し、建長元年正月十五日高野山に寂す、壽五十五、（本朝高僧傳）

ドージヨ 道助 **ジジユン**慈順を見よ、

ドーシヨー 道照（一九二〇）〔戒律宗〕大和白毫寺の律僧なり、道照字は入圓と云ふ、奈良の人なり、東大寺圓照に師事して戒律を承け、智舜に三論を、憲深聖守の二師に密敎を、密蓮阿闍梨に悉曇を受け、白毫寺に住す、文應中圓照の命により八幡の善法院に於て行事鈔を講じ、大に南北の學徒を驚かす、僅かに十八歲にして白毫寺に寂す、其年時缺く、（本朝高僧傳）

ドーシヨー 道照（……）〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、道照字は靈巖、淨智寺桑田海に師事し、後、建長寺に留る、上首となる、淨妙寺瑞龍菴に寂す、年時缺く、遊二東漸寺一賦、水逹二山腰一碧似レ藍。月離二雲嶠一落二波瀾一、數聲欸乃漁歌外、風捲二蘆花一洲渚寒、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーシヨー 道照 **チカイ**智海を見よ、

ドーシヨー 道昭 一二八九—一三六〇 法相宗の開祖なり、道昭（一に道照に作る）河内國丹比郡の人、俗姓船連（フナムラジ）なり、船史（フヒト）王辰爾の後にして父は惠釋（エサカ）と云ひ、皇極天皇の朝に仕へ、蘇我臣蝦夷の亂に國記を火中より取り出だして中大兄に上りたることを以て聞ゆ、道昭は舒明天皇元年に生れ、出家して戒行缺けず、殊に忍行を尙べり、嘗て弟子其性を究めむと欲し、竊に便器を穿ち漏れて被褥を汚せしも、師は放蕩の小子人の床を汚すとて微笑し復咎めず、白雉四年五月に遣唐大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒に從ひ、學問僧道嚴、道通、道光、惠施、覺勝、辨正、惠照、僧忍、知聰、定惠、安達、道觀、及び學生巨勢臣藥、氷連老人等百二十一人倶に一船に乘じ、大山下高田首根麿等百二十人の一船と共に出發す、師は唐に到着の後、慈恩寺に玄奘三藏を訪問して師資の禮を執り、窺基（慈恩大師なり）と親交を結びたりと云ふ、玄奘の命により相州隆化寺の慧滿禪師の下に至りて禪宗を傳ふ、かくて數年を經て、玄奘の所を辭するにあたり、經論若干卷、及び玄奘が西域より將來せる鐺子を贈らる、幾もなく東歸し、天智天皇元年三月に元興寺の東南隅に禪院を建立し、此に經論等を安置せり、師法相を傳ふ、之を同宗の第一傳と云ふ、後十餘年の間諸國を巡遊して路傍に井を鑿ち、渡口に船を設くる等、救濟の事業をなし、宇治の大橋の造營にも力を致したりと云ふ、文武天皇二年十一月十五日に藥師寺なる繡佛の開眼供養に推されて講師となり、同日大僧都に任ぜらる、大僧都の官

は此に始まるなり、同四年三月に元興寺の禪院に寂す、壽七十二なり、弟子等遺言によりて栗原に火葬す、我國の火葬此に始まる、（續日本紀、姓氏錄、日本靈異記、僧綱補任、七大寺年表、元亨釋書）

〔考〕法相宗傳來は道昭東歸の年にかゝるも、其年明記なし、日本靈異記考證に齊明天皇五年七月に發したる遣唐使か回航の船便に依りて東歸したるへしと云ふもの取るべし、然れとも其回航の年亦明記なし、今、日本書紀の註に依りて考ふるに、其遣唐使一行は同年十月三十日に洛陽に入り高宗に謁したりとあれは、回航して復命したるは翌六年なるべし、然れば道昭は齊明天皇六年に東歸したるものなるべし、

ドーショー　道昭　一九四〇／二〇一四　〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、道昭は太政大臣藤原教實の子、行昭大僧正の高弟子なり、法驗學術共に師德に比し、三度び三井の長吏に補し大僧正に任し、三山の檢校を司とる、文和三年十二月廿二日寂す、壽七十九、（本朝高僧傳、寺門傳記補錄）

ドーショー　道昌　一四五八／一五三五　〔眞言宗〕山城法輪寺の開山なり、道昌姓は秦氏、融通王の後裔にして、延曆十七年三月八日讃岐香河郡に生る、十四歲元興寺明澄に師事して出家し、三論を學ぶ、弘仁八年年分試により度を受く、九年東大寺にて受戒し、諸宗を研綜して秘奧を究む、天長五年神護寺に空海に侍し、灌頂壇に昇り、兩部の大法を受く、翌年五月葛井寺に往き精祈すること百日、一日虛空藏を圖書し、寺に安す、七年閏十二月名僧十人に詔して宮中に佛名經を懺禮せしむる時、師導師となる、承和三年檀林寺成るに方り、師供養導師となり、太秦廣隆寺の主務に補す、嘉祥元年七月實敏光定等同く宮中に參し、法華を講供し、と太上皇の冥福を祈る、三年隆城寺に移り住す、貞觀元年正月八日宣を受けて大極殿御齋會の講師となる、曾て大井河漲るに際し、師祈禱し驗あり、十年元照寺を主とり、此年嵯峨の葛井寺を修し、規模を改め福智山法輪寺と云ふ、十二月少僧都となり、十七年二月九日隆城寺の別室に寂す、壽七十八、臘五十八、承應三年春敕して僧正を追贈す、（弘法大師弟子譜、本朝高僧傳）

ドーショー　道生　一九二二／一九九一　〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、道生字は鐵菴、出羽の人、佛源禪師（正念）の下に參究し、後、諸方に遊歷すること三十年、大に叢林の間に聞ゆ、出羽の資福寺に出世し、筑前の聖福寺、京師の建仁寺、相模の壽福寺に歷住して到る處門學市をなす、元弘元年正月六日東山の瑞應菴に寂す、壽七十、遺偈あり「罵詈佛祖、今七十年、一舌挂地、兩脚踏天、塔を造り海性塔と云ふ、勅謚本源禪師と云ふ、語錄若干卷あり、元の育王山月江印、雪峰の樵隱逸、四明の東陵璵、幷に我國乾峯曇等の諸老の序跋あり（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーショー　道勝　一八七八／一九三三　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、道勝は藤原實氏の子なり、幼にして大僧正道助に從ひて落髮し、秘密灌頂を受く、天福二年觀音院の阿闍梨に補し、嘉禎二年冬權大僧都に任し、勝寶院に住し、正嘉元年秋僧正に轉ず、文應初年東寺長者となり、弘長二年冬大僧正に任じ、寺務法務を領し、護持僧となる、三年五月東寺の灌頂院に於て傳法密灌を修し、道耀等の四人に授く、文永三年夏長者法

務を辭し、勝寶院に退居し、五年春蒙古調伏の爲めに東寺に於て仁王經を修す、同十年七月十三日寂す、壽五十六、(本朝高僧傳)

ドーショー　道證　一四一六 一四七六　〔法相宗〕筑前觀世音寺の學僧なり、道證俗姓は百濟氏、阿波の人なり、早くより奈良に入りて性相を研究し、持戒嚴密なり、弘仁元年勅により大宰府の講師に任し、七年十一月寂す、壽六十一、(本朝高僧傳)

ドーショー　道青　[illegible]　〔曹洞宗〕丹波永澤寺の禪僧なり、道青字は俊鷹、定光寺清寧妙祐に參して書記となり、時に慈眼永澤二寺に逐隨し、入室を許され、信衣を附せらる、時に嘉吉元年四月二十二日なり、清寧寂するに及び、其席を嗣き、永澤寺に住し、後龍泉慈眼兩寺に歷住す、寂年缺く、法嗣大拙眞雄あり、(日本洞上聯燈錄)

ドーショー　道正　一九〇八　〔曹洞宗〕京都道正菴の禪僧なり、道正俗名は藤原隆英京極相國爲光十世の裔、父は顯盛、母は源仲家の女なり、長して淸水谷公定に養はれ、左近衞少將に昇り、三品に敍せらる、後致仕して薙髮し、諸名勝古刹を探り、道元に謁して法要を聞き貞應二年春明全道元等と共に明に到り、天童に登りて無際に謁し、尋て諸尊宿に見え、二年を經て天童に歸へり、長翁に謁して解決し、安貞元年歸朝し、京都洛西の舊菴に入りて深く世事と斷つ、寶治二年七月二十四日寂す、壽缺く、興聖寺後山に葬むる、(日本洞上聯燈錄)

ドージョー　道乘　一八七五 一九三六　〔眞言宗〕京都東寺長者なり、道乘は仁和親王の子なり、良慧僧正に師事して灌頂法を受け、嘉禎四年權大僧都に任す、建長三年大僧正に轉し、東寺一の長者を司とり法務を兼ぬ、夏六月護持僧となる、文永十年蒙古調伏の爲めに大佛頂法を修し、同年十二月十一日寂す、壽五十九、(本朝高僧傳)

ドージョー　道定　二三七三　〔曹洞宗〕尾張萬松寺の禪僧なり、道定字は惟慧、美濃關中村氏の子なり、九歲にして龍泰寺長靈に投して出家す、十四歲嘆て曰く、書を攻め辭を修す是れ世間相のみ、蓋そ出世間の法を求むるに若かんや、乃ち靜處に就て獨り自坐す、十八歲にして東遊し、諸老の門に周旋すること前後三年餘にして西に歸り、宇治の興聖寺に留る、後長崎に往き、東明寺に入り隱元禪師に見ゆ、時に道者元禪師崇福寺に住す、師參謁して訓誨を受く、明曆元年隱元攝津國の普門寺に遷る、師亦從ふ、後に等覺寺鐵心に見へ、次て武藏に往て獨木禪師の菴に寓すること九年、萬治五年黃檗山に上り、大戒を木菴に受く、遂に善應寺に隱る、寬文十二年長靈を藥王寺に省す、靈喜んで印信を附す、時に師三十九歲なり、明年金山の默玄寂師を招て版首に居らしむ、職滿て加賀に至り、大乘寺月舟の化儀を助く、延寶七年永平寺に出世す、幾なくして善應寺に還る、元祿元年大に毘尼場を開き廣く緇素を化し尾張侯命を降して監護す、五年の秋衆を捨て丶小野の僻洞に隱る、六年尾張侯萬松寺に聘す、師疾と稱して起たず、更に合笑久昌兩寺主に命して強請せしむ、師已むを得すして出つ、一住五年、德巖寺の舊隱に退歸す、十二年の冬善應寺主師を請して結制す、大衆集るもの殆ど三千人、十五年春大日堂を寺の北岡に造り、側に小菴を結んで華藏菴

と云ひ、燕息の所と爲す、明年三月丹波に赴く、正德三年四月廿五日寂す、壽詳ならす、（日本洞上聯燈錄）

ドージヨー　道場（一二四五）〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、　道場法師は尾張國阿育郡の人なり、俗姓詳かならす、傳へいふ敏達天皇の朝尾張國に一農夫あり、夏日田を灌漑す、時に天雷雨あり、農夫樹下に佇立して霽るゝを待つ、俄にして雷農夫の前に墜つ、狀小兒の如し、因て耒を擧けて將に撃たんとす、雷語を發して曰く、汝我を害するなかれ、我必す汝に報いん、と、農夫雷に問うて曰く、汝何を以て恩を報するかと、答へて曰ふ、我汝をして異兒を生ましめ、是を以て汝に報いんと、今望むところは楠を以て舟を造り、其中に水を滿たし竹葉を浮へ我に與へよ、と、農夫其言の如くす、雷舟を得て直に天に登る、居ること數月にして農夫の妻身み、斯に及ひて男子を生む、雷蛇兒頸を纏ふこと凡そ二週なり、父甚た之を異しむ、童子十有餘歲、膂力人に過き、能く方八尺の石を擧けて投すること數丈、其石を投くるに力を出して地を踏み、其足跡地に入ること三四寸なりといふ、元興寺の僧に師事す、時に鐘樓に鬼の住するあり、毎夜金を撞くものを殺す、師夜半堂に昇りて鐘を撞く、未た數下に及はすして鬼來りて形を見はす、師鬼頭を打つ、鬼師と力を爭ひて相接す、此鬼は引きて外に出てんとし、師は引きて內に入らんとす、此の如くして夜を徹し、曉に及ふ、鬼脫去せんと欲す、師急に鬼の髮を握る、髮剝落して皮肉附着せり、鬼即ち逃れ去る、明日地に血痕を見、跡を尋ねて之を求め、寺邊の栢樹上に至りて止む、之を驗するに寺家昔日惡奴を埋むるところなり、惡奴の鬼となりしを知る、鬼髮元興寺の寶藏に傳ふと稱す、師此後出家したり、（道場法師傳）

ドースイ　道遂　シヨーガク正覺を見よ、

ドースイ　道粹（二四二一）〔眞宗〕出羽酒田大信寺の住持なり、　道粹字は純叟、諡して木立院といふ、出羽酒田大信寺に住す、法霖桃溪二師に親炙す、僧撲西上以來師と相交はると二十年なり、寶曆七年講主命して學林に監護たらしめ、同八年四月僧撲と同く副講の命を蒙むり、其秋重ねて監護の任に當る、同九月命を奉して僧撲泰巖二師と共に眞宗法要を參校し、同年亦監護たり、翌年長門圓空の邪義を糺明し、十一年十月以來山城の攀龍に代りて四度監護の命を蒙むる、十二年の安居にまた僧撲と共に副講に命せられ、掛搭人費の作法、及ひ典座、食堂等の規則を作る、著作安樂集正錯錄、般舟贊科、正像末贊私考、十二光義遺芳錄、眞化佛土圖說、要門弘願章說、各一卷、修删釋典序、評歸命辨問辨、各若干卷あり、（淸流紀談、本願寺通紀、本願寺派學事史）

ドーセン　道泉（……）〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、　道泉字は秋磵、俗姓不詳、佛源禪師（正念）の記莂を受けて、後、樵谷僊に師事し、後、壽福寺に出世す、示寂の年時缺く、寫照自讃の作あり、松源正脈、佛眼的傳、秋磵無㆑底、波浚㆓青天㆒、全躰恁麼、參得如何、失㆓却半邊㆒、（本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

ドーセン　道詮　一五三六……〔三論宗〕大和法隆寺の學僧なり、　道詮は武藏の人、東大寺玄耀法師に空宗を承け、法隆寺に住すること四十年、三論の玄致を唱へて七大寺の衆俗を攝

す、弘仁中唐の遍明法師、釋摩訶衍論十卷を齎す、當時の諸師批評區々なり、延暦寺最澄圓珍はこれを僞論となす、師却て僞論となすを破す、嘉祥二年三月仁明帝師を召して受戒し、不殺戒を持す、後、大和富貴山に退居し、深く人事を避け八十歳に垂んとして貞觀十八年寂す、著作四相違記一卷、却章頌記一卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ドーセン 道璿 ……一四二〇 〔戒律宗〕大和大安寺の律僧なり、道璿は俗姓衞氏、唐の許州の人なり、出家して大福光寺の定賓律師に師事し、戒律を受け、嵩山の普寂禪師に就きて禪を傳ふ、且つ華嚴天台に兼ね通す、天平八年に我遣唐使に隨ひ菩提仙那等と共に來朝し、大安寺の西唐院に住し、衆僧の請により、梵網經、行事鈔を講演す、これより戒律漸く盛なり、天平勝寶三年四月勅して律師に任せらる、晩年比蘇寺に退居し、梵網經疏三卷を著はす、天平寶字四年閏四月八日寂す、壽五十九、門下行表あり禪を傳ふ、(續日本紀、三國佛法傳通緣起、元亨釋書、本朝高僧傳)

ドーゼン 道禪 一八二九-一九一六 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、道禪は其郷貫詳かならず、定惠仁曉禪覺眞圓の諸師に天台の宗義を學び、仁治二年別當に任じ、同十一月十七日拜堂す、康元元年八月八日寂す、壽八十八、(三井續燈記)

ドーゼン 道禪 一八五九-一八九五 〔眞言宗〕山城醍醐山三十二代の座主なり、道禪は鳴瀧法印といふ、尚書源通資の子なり、成賢僧正の法を嗣ぎ、寛喜元年八月醍醐山三十二代の座主となる、貞永元年五月座主職を辭し、嘉禎元年十一月十六日寂す、壽二十七、著作灌頂式遍口抄靈尊二卷あり、(續傳燈廣錄)

ドーゼン 道善 ……一九三六 〔眞言宗〕安房清澄山の僧なり、道善(一に道禪に作る)は俗姓詳ならず、安房清澄山の諸佛房に住し、眞言宗を奉し、且つ阿彌陀佛を念す、日蓮始め業を師に受く、後、日蓮の法華經を弘通するに至り、却て其敎を受く、建治二年三月十六日寂す、壽缺く、(報恩鈔、高祖年譜考異)

〔考〕一說に道善は眞言宗の人にあらずして天台宗の人なるへしと云へり、其實詳ならざるも、清澄山か古く眞言宗に屬したるは明なり、東寺長者弘眞の撰にかゝる同寺の鐘銘によれは、當時其末なりしを知るべし、日蓮の時も亦然るべし、今高祖年譜考異に從ふ、

ドーソー 道叟 ドーアイ道愛を見よ、

ドーゾー 道藏 (一三八一) 成實宗の開祖なり、道藏は百濟の人なり、白鳳の頃來朝し、該博靈通を以て聞え、盛に成實論を講說す、天武天皇白鳳十二年勅を拜して雨を祈りて靈驗あり、後持統天皇二年七月に、再び勅を拜して雨を祈り靈驗あり、勸賞せらる、養老五年六月元正天皇特に詔して絁五疋、綿十屯、布二十端を賜ふ、詔に曰ふ、百濟沙門道藏寔惟法門袖領、釋道棟梁、年逾二八十一、氣力衰耄、有二東帛之施一、豈稱二養老之情一哉、宜下所司四時施上レ物云々、數年を經て示寂す、時に壽九十、其著成實論疏十六卷あり、同論講究の指針と稱せられしも今傳はらす、(續日本紀、本朝高僧傳)

〔考〕元亨釋書本朝高僧傳に道寧を立て、道寧天武天皇白鳳十二年に雨を祈禱すとあり、然れども日本書紀によりて撿するに、道藏の誤なること明なり、當時道寧といふ僧絶え

てなし、

ドーソン　道荐　一九四九……〔曹洞宗〕美濃衆林寺の開山なり、　道荐は出家して高野山に登り秘軌灌頂法を習ひ、阿字觀を修す、義介禪師遊歷して高野山に至るに方り相見る、師信服して倶に越前へ至り、弧雲懷弉に謁し宗乘を傳へ其法を嗣ぐ、左右に執侍すること十餘年、後美濃の西願寺に住し、四衆を開化す、檀信衆林寺を創し師を延て開山とす、正應二年七月某寂す、壽詳ならず、（日本洞上聯燈錄）

ドーソン　道尊　二三八〇 二九三三〔眞言宗〕京都東寺長者なり、道尊は以仁親王の子、仁和寺僧正守覺の甥なり、幼にして守覺に從ひて落髮受業し、稍長じて兩部の秘法を稟け、諸密典を讀む、建久四年一身阿闍梨と爲り、尋で權僧都に任じ、蓮華光院を刱して第一祖となる、元久三年春東大寺に住し、承元元年秋正僧都に轉じ、東寺の長者に任じ、寺務法務を兼ね、護持僧となる、十二月仁和寺の寺務に補す、承久二年病に罹り、職を辭し、三年閏十月大僧正に任じ、重ねて諸職を領す、貞應元年牛車の宣を賜ふ、嘉祿二年再び東大寺に住し、安永二年職を辭し、八月五日寂す、壽五十四、（本朝高僧傳）

ドータン　道坦　二三五八……〔曹洞宗〕肥前藤津泰智寺十二代なり、　道坦字は萬仞、號は三休菴、肥前の人俗姓池田氏、元祿十一年に生る、加賀大乘寺大機行休の法を嗣ぐ、肥前鹿島の泰智寺及び關東の寶積寺に歷住す、宗學の研究に力を盡す、著書辨々註、三物秘辨、禪戒鈔、生死辨等あり、

ドーチ　道智（……）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　道智俗姓は藤原氏、道家の子なり、園城寺道覺僧正に師事して十乘觀法兩部の密灌等を受く、勅して園城寺の長吏に補し、大僧正に任ず、初め東山禪林寺三井の常喜院に住す、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ドーチ　道智（二二六四）〔眞宗〕肥前正覺寺の開山なり、　道智は肥前有田の人なり、久しく島原に質となり、後加藤清正に屬して朝鮮の役に從ふ、役後東皈して眞宗に歸し僧となり、長崎鍛冶屋町に住し法を說く、異宗徒大に之を怨み、屢〻危難を加ふ、小笠原一菴の奉行となるに及び、其助を得て益盛に法を說き、慶長九年幕府に請うて一寺を開き正覺寺と云ふ、これ長崎市中寺院再興の始なり、寛政十年四月幕府年始八朔禮席朱印地同格とし、翌年六月諸事朱印地に準せり、師寂年缺く、

ドーチン　道珍（一四七七）〔眞言宗〕下野瀧尾寺第二代なり、　道珍は下野の刺史橘利遠の族なり、天平寳字六年六月州の大山鄕藥師寺にて剃髮得度し、補陀洛寺勝道上人を拜して沙彌戒を受けて師事す、弘仁八年三月一日勝道寂するに及び、其席を補す、十一年空海が眞濟、幹海等を率ゐて伊豆桂谷寺を經、七月二十六日下野四本龍寺に宿するに方り、師法弟敎旻、尊鎭、仁朝等と共に空海を迎へ、龍生の瀧より中禪寺に至り、其絕頂に登り、湖を涉りて南岸に達し、更に北西に遊び、徧く勝區を探り、寺を立て像を造り流連一句を經たり、次で空海より般若理趣三昧を授けられ、加持如意珠の法、十八道金剛胎藏護摩鎭壇受明灌頂等の諸秘要を傳ふ、十二月四日空海は京に歸り狀を奏す、帝乃ち勅して瀧尾寺を御願寺

となす、空海を開山となし、師を第二代とす、寂年、及壽缺く、（弘法大師弟子譜）

ドーチン　道珍　二〇四七……〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、道珍字は珠巖、加賀大乘寺明峯素哲に參して其印可を受け、出てゝ洞谷寺、及大乘寺に住し、後、承天寺を開きて居る、嘉慶元年三月二十三日寂す、承天寺に塔を建つ、法嗣徹山旨廓溫老宗與あり、（日本洞上聯燈錄）

ドーチン　道珍　一九六八〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、道珍俗姓は藤原氏、太閤基忠の子なり、永仁六年三月靜珍を拜して灌頂壇に入る、一日諸尊經軌に就きて十二帖抄を著はす、其寂年缺く、（三井續燈記）

ドーチン　道琛　二三四一〔黄檗宗〕肥前長崎福濟寺の二代なり、道琛初の名は定琛、字は慈岳と云ふ、明の泉州、張氏なり、出家して木菴性瑫禪師に師事す、明曆元年瑫禪師に從うて東航し、長崎福濟寺に滯留す、寛文十年福濟寺二代となる、天和元年米穀登らず、加ふるに唐船の入港殊に少く、市街の貧民飢餓に斃るゝ者あり、師毎日衆僧を率ゐて諸方に行乞し、其米穀を以て粥を烹て貧民に施與す、一月以來三千餘人に至り、米穀給せず、官特に米穀五百俵を出して之を助けたり、師寂年詳ならず、

ドーチュー　道忠　二三一三—二四〇四〔臨濟宗〕京都龍華院の二代なり、道忠字は無着、號は葆雨、一に照冰堂と云ふ、但馬の人、承應二年七月廿五日を以て但馬養父郡竹野村に生る、父は小出大隅守の家臣熊田正利、母は大野氏、名は德と云ふ、師の生るゝ翌年、母故あり師幷に師の姉を携へて北村氏に改嫁す、一家和せず、師數ゝ繼父の怒罵に遭ひ、具に辛苦を嘗む、萬治二年師七歳母に携へられて出石の如來寺に入り、翌二年亦母に携へられて京都に上り、京極の光明寺に寓し、妙心寺龍華院に至り、伊曇首座に謁す、首座は丹後智恩寺の僧なり、寛文元年九歳にして龍華院主笠印禪師に師事し法名を祖忠と云ひ、後に道忠と云ふ、萬治七年十五歳侍者となり、翌年藏主となる、同十年十八歳始めて古文眞寶集解を作る、同年紀伊吹上寺に至り、逸堂禪師に謁し、碧岩錄の評唱に參す、十二年八月十九歳越前田谷の大安寺に至り、默印に參す、翌年龍華院に歸り、内外の諸家を問うて佛儒の學を修め、歌道曆術等に至る、後外學を廢し、專ら宗乘に意を用ゆ、爾來尾張白林寺、美濃梅林寺、慈溪寺を歷遊して諸禪師に參し、延寶五年廿五歳大秦等覺寺如周律師に就いて倶舍法相を學び、同年周防に至り、笠印の疾を問ひ、九月笠印の寂後遺命により、龍

道忠和尚

ドー（道）チ

華院の師跡を續き、大衆の請により、原人論等を講す、天和二年三十一歲、師叔印住の座元の勸により前堂となる、元祿十一年以來龍華院にあり大衆の請により佛祖通截、佛祖三經、法藏心經疏、大慧書等を講す、貞享元年以來東は甲斐より常陸の地方に至り、西は周防の地方に至り巡遊敎化す、寶永四年六月五十五歲妙心寺に住し、正德四年七月六十二歲三執事の請により八月晉山す、然るに天球院澤宗覺道、甘露寺家の雜掌河井監物と謀り、師の晉山を妨害す、師其煩累を厭うて退山せんとするも、靈雲派の推擧辭すべからず、翌年五月事漸く釋け、澤宗等擯斥せらる、享保五年六十八歲四派執事の請により妙心寺に住す、蓋し前例なきとなり、爾來周防、丹波、尾張等の諸地方に歷遊し、道俗を敎化す、延享元年十二月疾あり　同月廿三日寂す、壽九十二、著作禪林象器箋二十卷、正宗贊助桀二十卷、切脉（維摩經解）十卷、葆雨堂虛凝集十卷、副寺須知、勅修淸規左觽、栲栳珠（大慧書解）、虛堂錄犁耕、金鞭指街、龍潭寺三寶記、筑紫遊記各一卷等あり、（照冰堂年譜、野原稻藏氏返信）

ドーチユー　道忠　一九四二……〔淨土宗〕某寺の學僧なり。道忠字は乘圓、其氏姓詳ならず、俱舍天台を聽惠に受け、法相を蓮乘に受く後に記主禪師に師事す、眞阿長老と云人あり　諸行本願の義を主張す師難問して遂に其誤を正す、後師訓を奉て探要記一部十四卷を選述し、群疑論を註釋す、弘安四年正月十九日寂す、壽缺く、（鎭流祖傳）

ドーチユー　道忠（……）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、　道忠俗姓缺く、出家習學し、鑑眞を拜して具足戒を受く、戒を持する事極めて嚴正なり、鑑眞常に稱して持戒第一といふ、諸國に遊化し時人呼びて菩薩といふ、慈光寺を開きて第一代となる、比叡山の圓澄初め道忠に師事し、菩薩戒を受く　示寂の年時傳はらず、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ドーチユー　道中　エンクワン圓環を見よ、

ドーチヨー　道朝（一九三四）〔眞言宗〕山城醍醐山三十九代の座主なり、　道朝は七條僧正といふ、久我太政大臣通光の子なり、文永十年十二月詔して醍醐山の座主に補し、十一年二月官符を賜ひ、八月二十六日拜堂す、幾なくして職を辭す、官僧正に昇る、（續傳燈廣錄）

ドーチヨー　道超　シヨーカイ性海を見よ、

ドーツー　道通　一九九九……〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、　道通字は大川、俗姓不詳、佛源禪師（正念）に師事す、初め壽福寺に主となり、後圓覺寺に遷つる、曆應二年正月建長寺の請を受け、未だ登山に及ばず、俄然疾を示し、二月一日圓覺寺臥龍菴に寂す、遺偈あり、末後一句、始到二牢關一、不レ隨二凡聖一、潭北湘南、平生の作一首を傳ふ、題東漸寺作、山圍二平海一小坤維、白鳥銜レ潮映二落暉一、空蓋十霜飄泊恨、水天上下碧瑠璃　（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドートー　道登（一三一〇）　入唐學問僧なり、　道登は推古天皇の末年唐に渡り、舒明天皇の初歸朝す、大化元年十師の一に選ばる、同二年宇治の大橋架設の工事を監す、白雉元年二月穴戸國より白雉を獻す、道登奏して其祥瑞たるを說く、示寂の年時缺く、（日本書紀、日本靈異記、本朝高僧傳、古京遺文）

〔考〕續日本紀に宇治橋は道照の架設したるよしあれども、其實道登なり、宇治橋の碑に徵して明瞭なり、古京遺文、道の孝等に詳細の考證あり、

ドーニン 道仁（一九一二）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、道仁は土御門院の子、建長三年四月長吏に任す、寂年及び壽缺く、（三井續燈記）

ドーニン 道壬（一九七二）〔臨濟宗〕山城大德寺の禪僧なり、道壬字は虎溪、俗姓不詳、大燈國師（紹明）の法を嗣ぐ、後元に航し、諸禪宿を歷訪し器重せらる、大燈國師の訃音に接し、偈あり、盧空惡發咬牙齒、沙竭呑「聲寄」信來、愧我胸中藏「五逆」大唐國裏獨聽「雷、師元地に身を終らむとしたるも徹翁亨、妙超の法嗣人を遣はし招く、歸來大德寺に住す、示寂の年時を缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕正和の頃の人なり、

ドーニュー 道入　ニチチョー日長を見よ、

ドーネー 道寧（……）道藏の下を見よ、

〔考〕元亨釋書本朝高僧傳に道寧の傳あり、然れども道藏の事蹟を揭ぐるより見れば、道藏を誤り傳へたるものなるべし、實は當時道寧と云ふ人なし、

ドーネン 道然 一八七九 一九六一〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、道然字は葦航、俗姓不詳、信濃の人なり、大覺禪師に師事して心印を傳へ、桃溪無及約翁と併ひて門下の四傑と稱せらる、弘安四年に佛光禪師建長寺に住す、道然擢でられて第一座となる、後巨福寺に住し、正受菴に退休す、正安三年十二月六日寂す、壽八十三、遺偈あり、空華亂墜、八十三年、即今依舊、葦航道然、後勅諡大興禪師と云ふ、（元亨釋書、本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

ドーネン 道稔 二二八八 二三六一〔臨濟宗〕仙臺萬壽寺の開山なり、道稔字は月岬、號は龜毛子、俗姓は太田氏、寬永五年九月一日尾張名古屋に生る、幼にして父を失ひ、佛に歸す、瑞巖寺雲居禪師の美濃瑞龍寺より歸へるに逢ひ、相與に松島に往き、修道す時に二十五歲、江戶目黑の不動に祈りて靈應あり、再ひ松島に歸へる、雲居の寂するに及ひ、遺命により乾德山永安寺に住す、綱宗之を開き、擧けて妙心寺第一座とす、曾て黃檗山に登りて木菴に法を問ふ、延寶中仙臺に到り、延壽山安養寺の舊址に茅廬を結ひて之に住す、時に伊達綱村佛を信す、月岬を延きて法を聞き、城中に禪室を設けこれに居らしむ、後に城東に於て一寺を創し、月岬を乞ひて開山とす、開元山萬壽寺是なり、元祿十四年正月一日寂す、壽七十四、（仙臺史傳）

ドーハク 道白 二二九五 二三七四〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、道白字は卍山、備後の人、俗姓藤井氏なり、十歲にして龍興寺一線を禮して手度を受け、未た幾ならずして一線に從うて東國に下り、金峰に留ると二年、次に高秀寺文春禪師に參して省あり、一線の海藏寺集福寺に歷住するに隨侍す、江戶萬松寺育州禪師に招かれて版首となり、後王子山觀濤寺に住す、大乘寺月舟禪師の禪風を聞いて加賀に遊ひ、禪師に謁し、機語契合す、永平寺に出世し、後王子山に歸住し、大寺より請せらるゝも出てず、常に宗內の衰頽を憂ひ、再興の大志あり、延寶八年大乘寺の請あり、先師の舊跡なるを以て、

喜て出つ、九月進山して大衆を統ぶ、住十二年にして退き、攝津住吉の興福寺に閑棲す、後、禪定寺に遷り、次に山城鷹峰に遷り、源光菴を營む、元祿十二年梅峯禪師と相議して江戸に赴き、幕府に出て訴へ、法系嗣承の紊亂せる弊を改めんとす、滯留四年に及ぶ、東叡山公辨法親王に謁して具に志を陳す、法親王師の丹誠を嘉みし、大に力を盡す、十六年に至り、幕府其訴ふるところを聽許し、特に命を下して弊を改めんとす、師は大に喜ひて西歸し、自ら復古道人と號す、淸人蕭愛山師の居に復古禪林の額を贈る、靈元上皇師の道譽を聞きたまひ、宮中に召したまふ、師病と稱して出でず、勅して緇綿を賜ふ、師寺を開くもの八所なり、正德四年八月十九日源光菴に寂す、壽八十、遺偈に曰く、超師超佛、滿八十年、秋風捲レ地、孤月遊レ天、と廣錄四十八卷あり、

ドーハン　道胖　二二九一—二三七二　〔黃檗宗〕長崎聖福寺の開山なり、道胖字は鐵心、俗姓陳氏、龍邑石馬郡の人なり、早年出家の志あり、十四歲木菴瑫に師事し、後四方に遊ぶ、瑫禪師普門寺に留るにあたり、召されて其下に至り、その黃檗山に上るに至り、擢てられて侍者となる、後記室となる、母の喪に丁り、長崎に歸る、檀越等萬壽山聖福寺を興し、師を請して開山となす、瑫禪師江戸瑞聖寺に留まるにあたり、重ねて召されて其下に至り、法化を助く、晩年長崎に歸り、松月菴に隱棲し、正德二年寂す、壽八十、語錄詩文集あり、(續日本高僧傳)

ドーハン　道範　一八四四—一九一二　〔眞言宗〕高野山正智院の學僧なり、道範は和泉船尾縣の人、十四歲にして明任法眼に投して剃染童子となる、建仁二年寶光院雅澄寂し、師に囑して院を主とらしむ、時に二十三歲なり、後遍く畿內に遊び、華王院覺海、仁和寺覺法親王に就て瑜伽を學び、禪林寺靜遍僧都、金剛王院實賢僧正より諸眞秘を傳へ、舊院に歸休して專ら著述に任ず、後正智院に移る、仁治四年傳法院の事に座して讃岐に謫せらる、州守慰問し、侍するに弟子の禮を執り、嚴禁を加へず、因て南海の各區を巡遊して善通寺に寓し、講席を啓きて四衆を誘誨す、謫居七年、建長元年赦されて歸り、再び寶光院に住す、四年夏病に罹り、二十二日寂す、壽六十九、著作大日經疏遍明鈔二十卷、大疏除暗鈔七卷、相應經秘決、住心論勘文、各五卷、寶鑰問談鈔、藏中治金鈔、金發揮鈔各四卷、菩提心論鈔、釋論應教鈔、二敎論手鏡鈔、秘密念佛鈔、住心論他緣鈔、住心論覺心鈔、金剛頂開題勘註、灌頂次第眞言等事、初心頓學鈔、各三卷。理趣釋五鈔、聲字義鈔、秘鍵開寶鈔、冐地悉多鈔、行法肝要鈔、海心林葉鈔、御傳鈔、文義憶持鈔、解脫文義鈔、憶念鈔、紇哩字軌注鈔、各二卷、理趣釋五秘密軌鈔、理趣釋加開鈔、釋論曼荼羅、義釋裏書、印身義鈔、吽字義勘文註、秘鍵鈔、大日經開題鈔、秘密念佛印、禪心集、非相傳受鈔、御作總勘文、胎藏部口傳鈔、實相三摩耶圖、駄都鈔、各一卷、理趣釋聽海鈔、理趣經秘傳鈔、菩提心論明鏡勘文、秘鍵拾遺、秘鍵大事、遺告勘註鈔、三種菩提心義、伏膺鈔、心內鈔、十六分等勘文要鈔、東寺灌頂超越諸家事、灌頂雜集、傳法灌頂相違略記、眞言法華淺深事、五種三昧耶三種灌頂圖、悉曇鈔、光明眞言四重釋、紇哩字、吽字鈔、吽息觀、阿息觀、吽心鈔草、自心觀、三身五輪圖、末世

傳法事、東寺蘇悉地事、大原鈔、仁王經本尊事、三十七尊種子耶形事、胎藏十三大院　、五點阿字、瑜祇秘釋、草木成佛、仁王經、水天、淨瑠集、十八道口傳、請雨經、法華音義、延命、八字文殊、善別、不動、尊勝、金剛薩埵、五色、護身法、瑜祇一滴、大經、用意鈔、孔雀經、御修法間事、慈氏鈔、御素木加持、吉祥天、正觀音、降三世、軍荼利、千手鈔、金剛夜叉、各若干卷あり、(本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ドーヒ　道費 二三九七 二三八九 〔曹洞宗〕加賀實性院の第九代なり、　道費字は無隱、號は雑華堂といふ、郷貫詳ならず、出家して實性院第四代良悟禪師の法を嗣く、元祿十六年實性院第九代となり、正德二年長門大寧寺に轉し、享保十四年四月朔日寂す、壽九十三、著作心學典論二卷、無孔笛三卷、雜華集三卷、無隱語錄若干卷等あり、(實性院返信、近代名家著述目錄)

ドーフク　道福 (一三一三)　入唐學問僧なり、　道福は白雉四年五月大使大山下高田首根麻呂、副使小乙上掃守連小麻呂に隨ひ唐に航す、事蹟詳ならず、(日本書紀)

ドーベン　道辨 (……) 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、　道辨一に道遍に作る、俗姓平氏相模の人なり、幼にして熊谷の蓮生の風を聞いて淨土教に意を傾け、二十歲の頃相模にて安樂に逢ひ、後、京師に上り、源空上人に謁して師事す、尋て相模に歸り、上總周東の在阿等と共に宗義を弘通す、示寂の年月日缺く、(淨土傳燈錄)

ドーホー　道芳 二二二七 二〇六九 〔臨濟宗〕京都養源院の開山なり、　道芳字は曇仲、幼にして空谷應に侍し、業成りて無已聖劒關提の諸老に稱せらる、空谷相國寺に住するにあたり、其輪藏を司どり、尋で印可を受く、大周齋南禪寺に住し、師を其一座とす、已にして性海、椿庭、太清、春屋、義堂、絕海の諸師に謁し、將軍義滿に優遇せらる、諸方の巨刹師を請すれども門を閉ぢて出でず、養源院を構へて居し、應永十六年三月二十九日疾に罹り、偈を書して曰く、四十三年、不ㇾ坐不ㇾ禪、掀ニ翻大海一、抹ニ過靑天一と、筆を措いて寂す、壽四十三、長生に葬る、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ドーホー　道寶 一八七四 一九四一 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、道寶は藤原良輔の子、藤原道家の猶子なり、少より成寶僧正に從ひて灌頂を受け、寬典阿闍梨に重受す、嘉祿三年一身阿闍梨に任して安祥寺に住し、尋で勸修寺の長吏に補す、貞永元年夏法眼に任し、文曆元年三會の講師を勤む、嘉禎二年權大僧都に進み、昇りて法務となる、十年七月神泉苑に於て雨を禱り、僧正に轉し、秋東寺の長者に任じ、建治二年冬寺務を領す、明年春法務を兼ねて護持僧となり、詔を奉じて伊勢大神宮に於て蒙古調伏を禱る、弘安元年大僧正となり、六月大和大安寺に住す、七月僧職を辭せんとすれども許されず、四年春東大寺別當となり、八月四日寂す、壽六十八、(東大寺別當次第、本朝高僧傳)

ドーホー　道法 一八二六 一八七四 〔眞言宗〕京都仁和寺の法親王なり、　道法は後白河天皇第八皇子なり、仁安元年に生れ、九歲にして仁和寺に入り、皇兄守覺を師として密典を學び、十四歲にして得度す、壽永三年冬一身阿闍梨に任ず、十九歲觀音院に於て守覺を拜して灌頂壇に入る、元應二年春親王に敘

し、六勝寺の檢校を掌る、建久六年春東大寺大佛殿供養の導主となり、二品に昇る、元年仁和寺に主となり、建仁元年牛車に乘るを聽さる、三年總法務となり最勝院の檢校を補す、建保二年十一月寂す、壽四十九、師生前敕を奉して法を修すること四十二度、皆効あり、灌頂弟子九人あり、（本朝高僧傳）

ドーホン 道本（……）〔黄檗宗〕長崎崇福寺の僧なり、道本諱は寂傳號は蓮亭別に竹林と云ふ、淸人なり、享保の頃東航して長崎に入り、崇福寺に留り、靈源海脉の法を嗣く、詩名高し、著作蕭鳴草一卷あり、（蕭鳴草）

ドーホン 道本（……）〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、道本字は同原、大覺禪師の法嗣なり、信濃保福寺に住し、雲衲來附す、示寂の年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーホン 道本　エンカイ圓海を見よ、

ドーミョー 道明（一三三二）〔……〕大和弘福寺の僧なり、道明俗姓六人部氏なり、出家して弘福寺に住す、天武天皇の朝勅を拜し大和の長谷に精舍を創し、觀世音を安置す、（僧綱補任、長谷寺緣起文）

ドーミョー 道明（二三二八……）〔黄檗宗〕江戶瑞聖寺の第三代なり、道明字は慧極、長門の人なり、出家して木菴性瑫に師事し、三傑の一と稱せらる、瑞聖寺鐵牛道機に繼いで第三代となる、相模足柄の慈眼寺（福聚山無量壽院）中興となる、享保六年八月廿四日寂す、壽缺く、

ドーミョー 道明（二三九六）〔曹洞宗〕武藏野雲菴の禪僧なり、道明は武藏の人なり、早年父母を喪ひ、出家して隱之顯禪師の下に投し、機緣相契し、衣法を傳ふ。尋きて鄭門

妙喜等の諸禪師に見ゆ、天文中出遊して相模の海岸に一友人に邂逅し、共に宗風の廢頽を慨嘆す、晚年野雲菴を營みて閑棲す、示寂の年時缺く、著作野雲隨筆二卷、（續日本高僧傳）

ドーミョー 道明　ショーゲン照源を見よ、

ドーミョー 道明　ショーネン聖念を見よ、

ドーミョー 道命 二四三一 二四七二 〔眞宗〕安藝能美島德正寺の住持なり、道命は安藝國安藝郡警固屋村長迫の人なり、父は忠次といふ、廿一歲にして佐伯郡德正寺第九代顯道の養嗣となり、後住職を嗣く、芿園の門に入りて內外兩典に涉り、殊に宗乘に力を費し、造詣頗る深し、遂に芿園門下第一位に居る、石泉の助正釋問の出つるに及ひて助正箋を著して之を斥け、大に師說を闡揚せり、文化九年九月六日寂す、壽四十二、明治十六年九月本山司敎を贈る、著作大經慚愧篇、正信偈鸚鵡篇　行信義助正箋、各一卷、入出二門偈相忘編四卷あり、（學苑談叢）

ドーミョー 道命（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、道命俗姓は藤原氏、大納言道綱の長子なり、出家して慈惠僧正に師事し、專ら法華を誦持す、音聲微妙にして聞く者皆感嘆す、城西の法輪寺に住し、誦持を事とす、寺中の僧の夢に一宵冠瓔せる者堂內に群集し、自ら曰ふ金峰山の藏王、熊野、住吉、松尾の諸神なりと、皆道命の聲を聞きて隨喜したりと奇瑞甚だ多し、世に傳ふ道命法華の持者なれども品行修まらず、一宵和泉式部の所に戲れて後讀經す、夢に老翁來りて曰ふ、吾は五條西洞院邊に住す、平日の讀經には梵天帝釋等の諸神群りて聽聞たまへば吾のごときは近くべからず、今曉は

行水もしたまはで讀經したまへば、諸神來り給はず、因りて聽聞するなり、云々、（元亨釋書、本朝高僧傳、古事談）

ドーモン　道門　二二七四／二三一四　〔曹洞宗〕出雲桐岳寺の開山なり、道門字は龍岳、定光寺竹堂利賢に參し、弘治二年衣法を附せられ、命に依り席を嗣ぐ、出雲廣瀨城主戸田氏桐岳寺を創し師其開山となる、文祿三年三月十九日寂す、壽八十一、遺偈あり、曰く、東漂西泊、八十一年、末後行脚、脱落無邊、（日本洞上聯燈錄）

ドーモン　道文　一三四　〔……〕入唐學問僧なり、道文は天智天皇十年十一月に筑紫君、薩野馬韓島勝、娑々布師首磐と唐より歸り奏して曰ふ、唐國使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人を送る、總合二千人　船四十七隻に乘り比智島に泊す、人船數衆ければ國人驚駭して射戰せんも料られず、故に吾等先づ上陸し事を開すと、（日本書紀）

ドーユ　道瑜　二一二九　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、道瑜字は玄音、俗姓生國詳かならず、十輪院に住し、學譽高く、臈臘の順次を經ずして大衆一百三十人の上に擢でゝ學頭に昇る、學徒推重して能化と稱し、自ら所化と稱す、能化所化の稱此より始まる、寂年缺く、著作大疏尋求鈔八卷、五教章見聞十卷、大鈔緣起一卷、藥師護摩一帖あり、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

〔考〕道瑜は文明年中の人ならん、

ドーユー　道融　（一三八九）　〔戒律宗〕奈良の學僧なり、道融は俗姓波多氏なり、少にして儒學を修め、特に詩文に巧なり、母の喪にあたり山寺に寄住し、偶法華經を見て慨然として歎じて曰ふ、我久しく貧苦して未だ寶珠の衣裏に在るを見ず、周孔の糟粕何ぞ意を留むるに足らむと、遂に俗累を脱して出家し、精心修行して心を戒律に留む、時に道宣律師の六卷鈔あり、辭義隱密して絶えて披覽するものなし、道融閲讀一年ならずして畢り、一部洞達せざるはなし、世六卷鈔を披覽するもの、師より始まるなり、時の皇后學德を嘉し、絲帛三百匹を施し給ふ、師曰ふ、我菩提の爲に法施を修するのみ、これによりて報を望むは市井の事のみと、遂に遁れて出でず、示寂の年時缺く、其詩二首今に傳ふ、（懷風藻）

〔考〕道融は天平頃の人なり、

ドーユー　道融　一八八四／一九四一　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、道融は藤原公經の子なり、幼にして出家し、蓮華王院の道圓親王の室に投じて密教を學び、光臺院の道助法務に從ひて灌頂法を受け、十五歲法眼に敍し、延應元年權大僧都に任ず、寛元元年法印に進み、一身阿闍梨の宣を受け、正嘉元年法務を領し、十二月權僧正に任す、文永元年五月僧綱及法務を辭すれども允れず、十一月少僧正に任して東寺三の長者に加任す、三年十二月寺務法務を領し、護持僧となる、七年大僧正に昇進し、十年東大寺を領す、十一年冬蒙古來襲し、師佛眼の法を修す、弘安元年仁和寺に住し、四年七月十五日寂す、壽五十八、（本朝高僧傳）

ドーユー　道祐　（……）　〔眞言宗〕山城醍醐山六十二代の座主なり、道祐は蓮藏僧正といふ、俗姓は源氏、中院内大臣通重の子なり、道順大僧正の室に入りて出家し　具支傳法職位を同師に受け、詔して醍醐山六十二世座主となり、東寺

二長者に加へ僧正を賜ふ、命を受けて雨を祈り、功によりて八幡別當となる、示寂年月日詳ならず、（續傳燈廣錄）

ドーユー　道祐 一八六一—一九一六〔臨濟宗〕山城妙見堂の禪僧なり、道祐は筑前博多の人なり、嘉禎年中に宋に渡り、徑山の佛鑑禪師の下に參究す、一日鑑禪師問ひて曰ふ、「日本國裏有禪也無」と、道祐聲に應じて曰ふ、「大唐國裡禪無」と、鑑禪師深く肯ふ、寛元二年（淳祐五年）の夏辭し去るに臨み、鑑禪師の頂相を寫し、讃を需む、禪師乃ち筆を把り題して曰ふ、「從來震旦本無禪、少室單傳亦妄傳、却被道祐等閑覷破、便知老僧鼻孔不在口邊、漫把虛空強描邈、好兒終不使爺錢」、東歸の後洛北の妙見堂に隱逸し、世に接せず、康元元年二月五日東福寺中の延壽堂に寂す、壽五十六なり、遺偈あり、曰ふ、「五十六年無伎倆、不問諸祖與諸佛、今日今時告往來、日日日從東畔出」、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーユー　道祐 二〇二四〔眞宗〕和泉堺眞宗寺の開山なり、道祐は足利義氏の第四子、俗名祐氏と云ふ、幼にして母に從ひ、和泉堺に居る、出家して道祐と號す、初め天台を學び、後、本願寺覺如に謁して一向專修念佛者となる、足利尊氏將軍となるに及びて、同族の舊緣を以て寺地の租稅を除き、封田若干を寄附す、延元中覺如佛像幷に一宗の聖教を授與す、師寺に安置す、正平十九年に堺に於て古本論語を翻刻す、師か內外二典に意を用ゐたるを見るべし、其古本論語の翻刻本は後世正平版論語と云ひ珍重す、師示寂年月日詳ならす、（泉州志、正平版論語考）

〔考〕泉州志に道祐は足利義氏の第四子なりとあれとも、義氏は建長六年に薨し、正平十九年より一百十年前に當れり、道祐か其子なりと云ふを信しかたし、蓋し其俗緣あるものなるべし、所謂正平版論語は、支那の六朝時代の古本論語に依據したるものなり、其跋文に道祐堺浦居士重新命工鏤梓正平甲辰五月吉日謹誌とあり、然れは正平以前の刻を重ねて刻したるものなるべし、今は正平以前の刻全く傳はらされば、正平版を以て我國に於ける儒教書の最古の刻本となす、

ドーユー　道猷 一九三九—二〇一八〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、道猷は其俗姓鄉關を詳かにせす、弘安三年に生れ、正安二年得度受戒し、長乘乘師の二師に歷事す、平生作る所の私記頗る多し、延文三年十二月十五日寂す、壽八十、（三井續燈記）

ドーユー　道猷　ゲンラン源鸞を見よ、

ドーヨ　道譽（一九三七）〔戒律宗〕筑前觀音寺の學僧なり、道譽字は淵月といひ、幼より儒典を讀みしか、出家して泉涌寺の智鏡淨因に從ひ、四分律に學ふ、戒壇院に入り實相照に就きて具足戒を受け、比叡山に上りて教觀の要を問ふ、久しく鎮西に居り、觀音寺に止る、移りて安藝に往き、菴居して其終を知らす、（本朝高僧傳）

ドーヨ　道譽 一八三九—一九〇〇〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、道譽は大和國兼房の子、尊惠に從ひて落髮稟具し、正治三年二月會慶を拜して灌頂を受け、大阿闍梨位に昇る、仁治元年九月五日寂す、壽六十二、（三井續燈記）

ドーヨ　道譽　テーハ貞把を見よ、

ドーヨー　道耀 一九六三〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、

道耀は藤原實氏の子なり、道勝僧正に就て兩部の灌頂を受け、勝寶院に住す、建長二年權大僧都に任し、文永六年法務を司とり、權僧正に昇る、弘安二年正僧正となる、明年冬東寺の長者に任し、七年大僧正に進み、四月寺務法務を領し、護持僧に擧げらる、嘉元元年十二月寂す、壽缺く、實海良圓勝慧勝如の四上足あり、（本朝高僧傳）

ドーラクアンシユジン　道樂菴主人　キョーオー敬雄を見よ、

ドーリユー　道隆　一八七三 一九三八　〔臨濟宗〕相模鎌倉建長寺の開山なり、道隆字は蘭溪、俗姓冉氏、宋西蜀涪江の人なり、十三歳にして成都の大慈寺に投す、後、浙に抵り無準範、痴絶沖、北磵簡の諸禪師に謁して參究し、未だ得る所なし、陽山に抵り、無明性禪師の下に依り、一日東山の牛窓櫺を過ぐる話を聞きて、平日の疑問解決す、辭して明州の天童に登る、日本に禪宗未だ盛ならざるを聞きて遊化の志あり、淳祐六年（我寛元四年）に日本の商船至りて來遠亭に在り、師往て觀るに忽ち浮橋頭に人あり師を見て謂ひて曰ふ、師の緣東方に在り、時已に至れり、と、言訖りて見へず、師乃ち商船に搭じて出航し、弟子義翁紹仁等數人隨ふ、同年太宰府に着す、時に三十三歳なり、筑前の圓覺寺に寓す、寶治元年京師に上り、泉涌寺の來迎院に入る、院主智鏡は嘗て宋に渡りて舊交あり、尋て相模鎌倉に抵る、これ智鏡の指示によるなり、壽福寺大歇了心相見て喜ぶ、北條時頼常樂寺に請して法要を問ふ、建長四年の冬大伽藍を造營し、巨福山建長興國禪寺と號し、師を請して開山とす、師上堂の偈あり　紅稀綠暗春將暮、欲問春皈那一方、戲蝶尚貪殘蘂蜜、狂蜂猶戀故園香、新池蓮挺玉錢細、古岸柳飛金線長、莫謂蘭溪不分付、誰家好子肯承當、文永二年に至り、勅詔により京師の建仁寺に遷り住す、明菴榮西の忌辰に丁り、上堂の偈あり、蜀地雲高、扶桑水快、前身後身、一彩兩賽、昔年今日、死而不亡、今日斯晨、在而不在、諸人還知落處麼、香風吹委花、更雨新好者と後嵯峨上皇道譽を聞きて宮中に召したまふ、師偈を進む、夙緣深厚到扶桑、忝主精藍十五霜、大國八宗今鼎盛、建禪門慶仰賢王、文永五年に再び東下す、時頼禪興寺を開きて請す、尋て建長寺に歸住す、門下の一人事により幕府に讒す、師これがため甲斐に謫せらる、甲斐の僧俗相競ひて歸仰す、師曰ふ、我れ弘法のために日本に來る、讒によりかゝる僻地に弘法するもの龍天豈に意あるか、と、三年にして鎌倉に歸へり、壽福寺に投す、再び流言あり、甲斐に遷る、幾くもなく事判明し、時宗に迎へられて壽福寺に住し、弘安元年五月建長寺に歸住す、時宗益深く歸依し、別に一大伽藍を造營せむとし、相共に郊外に出で、土地を相す、師一所を指して此地梵刹を興すべしと、鍬を以て鋤くこと三下、時宗も亦隨ひて鋤くこと三下、艸蓋を挿みて回り、其秋七月の初微疾あり、廿四日に至り沐浴し、衣を更め、偈を書して曰ふ、用翳睛術、三十餘年、打翻筋斗、地轉天旋、衆を辭して寂す、壽六十六、法臘五十、門人荼毘し、靈骨を建長寺の一所に收め、其所を西來菴と云ふ、勅謚大覺禪師と云ふ、禪師の賜號此に始まる、嗣法二十四人、語錄三卷あり、宋朝僧錄司上天竺佛光照の序、徑山虛堂愚の跋を付す、道隆の遺物中に靈鏡あり、

面に觀世音を現す、圓覺寺成るに及びて觀音閣を建て安置す、佛光禪師賛を作り、一山寧、月江印、靈石芝、靈山隱、虎關錬、龍山見、伯英俊等の記あり、永く傳ふ、（元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドーリュー 道龍（二二九四／二三八〇）〔黄檗宗〕肥前龍津寺の開山なり、道龍字は化霖、筑後の人、中河原氏の子なり、十六歳にして郡の金剛寺三源智の下に度を受け、後、諸國に歷遊すること十餘年なり、一たび國に歸り、多福寺賢善と相交り、再び歷遊して黄檗山に登り、隱元琦、木菴瑫に謁し、寛文五年三源智の下に歸り、慈眼山に閑棲す、後、再び黄檗山に登り、木菴瑫に事へて典藏となり、高泉潡、獨湛瑩に謁して器重せらる、獨湛瑩の江戸海福寺に住するにあたり、師其下に綱維となり其法を嗣く、後慈眼山に歸住す、蓮池侯城西の地を寄附し、寶壽山龍津寺を開く、元祿四年七月龍津寺を宗鏡湖に讓り、寺側に甘露菴を營みて退隱す、享保五年十一月九日寂す、壽八十七、臘七十二、法嗣宗湖鏡、月海昭、大潮皓等あり、著作楮襖集あり、（續日本高僧傳、黄檗宗鑑錄）〔考〕續日本高僧傳には道龍は木菴の法嗣となせとも、今は宗鑑錄に從ひ獨湛の法嗣とす、

ドーリョー 道了（二〇七二）〔曹洞宗〕相模小田原の僧なり、道了は何許の人なるか詳ならす、常に了菴慧明に隨侍す、慧明の小田原に菴居するに方りて師雜務を執る、恠力ありて行作凡人に異る、寂年缺く、後人相傳へ道了化して小天狗となり、最乘寺を守護すと、因て明覺道了和尚の號を追贈し、小天狗の狐に跨れる像を作りて安置するに至れり、（善庵隨筆）

ドーワ 道和（二二七七）〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺の僧なり、道和字は良說といひ、大坂生玉の人なり、卅五代良古上人の弟子なり、攝津住吉法泉寺に住す、徧く名山大刹に遊ひて高德智識に參す、慶長十八年本山大念佛寺に住す、傳へいふ師元和三年六月住吉松太夫の亡靈を度すと、某年寂す、

ドーウン 洞雲（二三三三）〔淨土宗〕江戸珠寶寺の開山なり、洞雲は覺蓮社大譽と號し、紀伊小倉の人、信譽の室に投じ靈巖の法を嗣き、江戸市ヶ谷本村に珠寶寺を剏す、寛文十二年六月二十二日寂す、（淨土總系譜）

ドークー 洞空 ジセン慈泉を見よ、

ドーゲン 洞源（二一一六）〔曹洞宗〕越前龍澤寺の禪僧なり、洞源字は靈嶽、遠江の人なり、如仲天誾に依りて薙髮し、備中洞松寺に往き喜山性讃に敎を聞き、遂に總持寺に出世し、繼で洞松寺に住し、大澤山圓幢寺を開く、康正二年越前龍澤寺に住し、再び諸嶽山を主どり、紫袍を賜はる、寂年缺く、法嗣月泉印、雪巖通の二人を出す、（日本洞上聯燈錄）

ドーコ 洞庫（二二四六）〔淨土宗〕和泉遍照寺の開山なり、洞庫は想蓮社信譽と號す、伊勢の人なり、一心院稱念に就て剃髮し、法を禪芳に嗣ぐ、和泉堺に遍照寺を開きて住し、天正十四年二月十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ドーサツ 洞察（……）〔曹洞宗〕美濃林廣寺の開山なり、洞察字は梅庭、其俗姓生國を詳かにせず、初め越前の長安寺に在りて天眞和尚の敎を受け、後に美濃に林廣寺を開き、庭前に紅梅一株を植え、禪を問ふ者あれば、庭梅を指す、時人梅庭禪師と稱す、某年寂す（日本洞上聯燈錄）

ドーシヤク　洞奭　二〇九四 二一七八　〔曹洞宗〕尾張福嚴寺第二代なり、洞奭字は盛禪、遠江周知郡の人、長享六年二月を以て生る、文安二年靈岳偶ゝ其家に休憩し、師の骨相を見て父母に乞ひ携へて寺に歸り、剃髮せしむ、長して五山の間に歷參し、臨濟の宗旨を究む、後、靈夢に依り曹洞宗に入り、遠江に赴きて秋葉山に登り、山神を禮し、次に大洞寺に於て喝堂智に參し、五位の旨訣を究め、辭し去りて靈嶽に請益す、其寂後遺命に依り尾張開元寺月泉性印に謁し、遂に印可を蒙り、野口寶積寺に住す、知縣道永大竹山の西北に福嚴寺を開き、師を請す、即ち月泉を開山とし、自ら二代に居す、道永大竹下原二邑を割きて寺產に充つ、明應年間龍澤寺に主となり、一年にして福嚴寺に歸る、永正十五年二月八日寂す、壽八十五、臘六十八、（日本洞上聯燈錄）

ドージユ　洞壽　二二六八　〔曹洞宗〕越前孝顯院の開山なり、洞壽字は舜國、俗姓は日下氏、三河設樂郡の人なり、十一歲出家し、泉龍寺光國を禮して落髮受具す、十六歲東遊し、久しく興豐建隆に參し、尋て仁菴恕、及び其他關東の諸名宿に謁し、歸りて興豐の法を嗣ぎ、結城左近衛少將晴朝の請に依り、福嚴寺に住し、次に孝顯寺に遷り、晴朝と議して寺基を移し、殿堂を新にす、源中納言秀康越前福城に孝顯院を建て、師其開山となる、慶長七年八月詔に依り參內し、特に紫衣、及び心月圓光禪師の號を賜ふ、慶長十三年二月二十八日寂す、世壽缺く、法嗣國巖大佐あり、（日本洞上聯燈錄）

ドーシヨー　洞松　リヨーア亮阿を見よ、

ドースイ　洞水　二四八八　〔眞宗〕攝津大坂玉泉寺の住持なり、洞水號は功乘院、大坂の人、高倉學寮に學び、文化十三年因明大疏を講ず、文政三年擬講となり、四年臨濟錄を講じ、八年改邪鈔を講ず、文政十一年十一月朔日（一說十月朔日）寂す、世壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

ドースイ　洞水　ウンケー雲溪を見よ、

ドースイ　洞水　グワツタン月湛を見よ、

ドーゲン　同源　ドーホン道本を見よ、

ドーコー　同廣　ニチチユー日中を見よ、

ドーコー　桐岡　ケータク桂鐸を見よ、

ドーハクサンニン　桐柏散人　キヨーオー敬雄を見よ、

ドーギヨー　童堯　二三〇〇　〔淨土宗〕信濃攝取院の開山なり、童堯は東蓮社君譽と號す、幡隨に師事して其法を嗣ぐ、初め松本生安寺に住し、後、攝取院を開く、寛永十七年十月八日寂す、嗣法一人あり、巍然と云ふ、（淨土總系譜）

ドーチヨー　動潮　二三六九 二四五五　〔眞言宗〕山城智積院第二十二代なり、動潮字は通照、武藏忍の人、俗姓は岡野氏、幼にして鄉の長久寺光如に隨うて得度し、後智積院に登り、講席に列す、長時院滿意律師を訪うて俱舍唯識を學び、醍醐山實雅僧正より幸心院流の事相を傳へ、且洞泉律師より戒律を受く、仁和寺寛順僧正より廣澤流の事相を傳へ、有證僧正より傳法院流の事相を傳へ、且灌頂を受く、明和六年八月幕府の命を受け眞福寺第二十三代となる、安永二年智積院第二十二代能化となり、僧正に任ぜらる、初めて智積院にありて灌頂を行ひ、盛んに事相を唱ふ、後世智積院第一の事相家と稱せらる、安永八年養命坊に退隱し、密嚴諸秘釋等を校して版行す、寛

政七年十二月七日寂す、壽八十七、著作事相手鏡十五帖あり、(眞福寺世代)

ドードー　導道　サンキ三喜を見よ、

ドーリン　棠林　シユージユ宗壽を見よ、

トク　德　二〇七〇……〔臨濟宗〕常陸東福寺の開山なり、德字は有隣河内の人なり、初め諸方を遍歷し、授翁に參するに及び遂に契悟し、鄕里に歸りて逸居す、後常陸に遊化して鹿島郡に寓止す、士民其德に歸し、花木山東福寺を建て師を請して第一代となす、師乃ち法兄華藏曇と共に互に法幢を扶け、法化尤も盛んなり、應永十七年九月五日寂す、(延寶傳燈錄)

トクイチ　德一(一四九五)〔法相宗〕常陸筑波山の學僧なり、德一(一に德溢に作る)は惠美仲麻呂の子なり、興福寺の修圓僧都に隨ひて法相の學を受け、東大寺に住す、嘗て法華新疏を作りて、傳敎大師を難破す、偶々朝議に昇りて東國に謫せらる、乃ち常陸筑波山を開きて第一代となる、某年寂す、壽缺く、著作中邊義鏡箋二十卷、唯識論異補闕十二卷、法相了義燈十一卷、起信論寛狹章、遮異見章、法華要略、慧日羽足、各三卷、法相了義燈問答、中邊義鏡章、通破敎章各一卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

トクイチ　德一　ジユコー壽廣を見よ、

トクウンイン　德運院　ゼンシユー全宗を見よ、

トクエ　德慧　グエ弘會を見よ、

トクエン　德圓(一四八五)〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、德圓は下總猿島郡の人、俗姓刑部氏なり、父母子なく常に佛神に祈禱し、母瑞夢を感して孕むあり、十歲家を辭して道に入り、修練苦行す、時に重病を得て絕命す、父母悲泣して敢て葬らず、一晝夜の後蘇生す、爾來益三寶を崇重し、廿四歲具足戒を受く、廣圓禪師に師事す、禪師は勸操の入室にして、桓武天皇持戒の淨師八人を選びたまひたる內の一人なり、師禪師より灌頂を受け、禪師の寂後最澄、義眞、圓澄に歷事す、義眞より菩薩大戒を受け、圓澄の法嗣となる、後廣智禪師より灌頂を受く、天長二年梵釋寺十禪師の任を拜す、寂年月日詳ならず、附法に智證大師圓珍あり、(台密血脈譜)

トクオー　德翁　シユーセキ宗碩を見よ、

トクオー　德翁　シヨーテー正呈を見よ、

トクオー　德翁　リヨーコー良高を見よ、

トクガク　德嶽　シユーキン宗欽を見よ、

トクガン　德含　二四六九／二五三三〔天台宗〕武藏梅園院の僧なり、德含初の名は亮順と云ふ、字は閑禪、號は松靄、伊豆下田の人なり、出家して東叡山に登り、後、淺草梅園院に住す、道暇詩を嗜み、秀作あり、明治六年十一月七日寂す、壽六十五、著作詩集一卷あり、(湖山樓詩屛風、墓銘)

トクギ　德誼　二五二五……〔眞宗〕豐後大分郡府內荻原村長久寺の住持なり、德誼は豐後の人、萬延元年の講を初として、高倉學寮に憲法十七條四敎義集註法華玄義を講し、元治元年二月十三日(一に十二日)擬講となり、慶應元年三月一日溺死す、(眞宗史料)

トクク　德久　一九九三／二〇三六〔臨濟宗〕明の圓通寺の禪僧なり、德久字は約菴、俗姓不詳、和泉日根の人、早年紀伊の大慈寺に投じ、高山照禪師に事ふ、尋て南都の戒壇に登り、具足戒

を受けて大僧となり、元に航し、天寧寺楚石琦、靈巖寺了菴欲等に歷謁し、學德并に高く、律儀尤も嚴なり、三十餘年始終一日の如し、檀信某嘉興縣の圓通禪寺に請す、師上堂高山照の法乳に酬ゆ、永和二年九月廿四日、明洪武九年、同寺に寂す、壽六十四、臘五十一、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

トクケー　德瓊(　　)〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、德瓊字は林叟、俗姓千葉氏なり、大覺禪師の下に參究し、其法嗣となり、後宋に航し、諸老宿を歷訊す、歸來肥前小味寺に居す、尋て鎌倉に入り、禪興寺壽福寺に留り、桂光菴を構ふ、示寂の年時詳かならず、詩あり傳ふ、遊二東禪寺一「寺在二江濱一馴二白鷗一、石屏如レ畫入二幽眸一、釣船一曲漁歌曉、明月蘆花天地秋、」勅謚覺照禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

トクゲー　德猊(二四四一／二五一九)〔眞宗〕越後無爲信寺の住持なり、德猊字は香雲といひ、香海院と號す、俗姓は武田氏、越後蒲原郡水原村の人、無爲信寺順崇の子にして、講師香樹院德龍の弟なり、幼にして外典を習ひて才名あり、稍長じて京都に遊び、高倉學寮に入り、香月院講師の講筵に侍し、宗要を硏究す、此時普門律師梵暦を唱導し、諸宗風靡す、香樹院其說を傳へんと欲して未だ果さず、乃ち師をして就き學ばしむ、高倉學寮に梵暦を說く者師に始まるなり、文化十四年刈田郡中濱の勝願寺に住し、寺務の暇に開講し、門人甚だ多し、天保八年火災に罹り、伽藍悉く燒く、仍て再建の工を起し、八年を歷て成る、既にして寺務を厭ひ、寺後に菴を結びて居り、號して得月舍といふ、後長崎に遊び、遍く勝地を探り、安政六年十二月十九日寂す、壽七十九、明治三十年宗主特に擬講を追贈す、平生述ぶるところの宗餘乘の講錄及び暦學書、和歌稿、數十卷あり、共に寺に藏す、(碑文)

トクケン　德見(一九四四／二〇一八)〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、德見字を龍山と云ふ、下總香取郡の人、俗姓は平氏、十五歲にして相模壽福寺に投じ、寂菴昭に師事して法華を暗誦し、十七歲滿律戒を受く、瑞鹿山一山和尙に參して侍司に居り、二十二歲寂菴に心印を密付せられ、支那に渡り天童に登り、住持東巖に謁す、東巖の寂後竺西席を補し、師命せられて侍香となる、後、辭して吳門に往き、東洲古林に謁し、江西の諸名山に遊び、錫を東林寺に掛く、分寧に至るに及び、平山濟川相尋で雲巖寺に住し、師を留めて分座說法せしむ、後、州守の命により兜率寺に住し、一住十年、廢頽を興し、悅禪師の再來なりと稱せらる、辭して大龍翔集慶寺に寓し、笑隱訢の優遇を受く、後、衆請により再び兜率寺に歸住す、貞和五年東歸す、時に六十六歲なり、足利直義の請に應じ、京都建仁寺に住し、將軍尊氏の奏請により、南禪天龍二寺を主とる、朝廷師の聲譽を崇び、特に眞源大昭禪師の號を賜ふ、延文三年十一月十日病に罹り、門下を召して後事を囑し、十二日夜偈を書して曰く、西涌東沒、南往北來、末後一句、掘地深埋、と起て戶外に出で、月色の斜めなるを見て偈尾に十一月十三日と書し、筆を投じて寂す、壽七十五、臘五十七、門人東山の知足院に葬り、塔を樹て靈洞と云ふ、(本朝高僧傳、續群二三四)

トクケン　德儉(一九〇四／一九七九)〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、德儉字は約翁、相模鎌倉縣の路傍の棄子なり、縣の某

拾ひて乳養す、幼稚の時三寶を崇重し、僧を見ることに合掌禮拜す、父に從ひて巨福山に過ぐ、大覺禪師其骨貌を奇とし、乞ひて童役となし經書を授く、十六歲にして落髮し、東大寺に往きて登壇受戒す、大覺禪師京師の建仁寺に遷る、師其下にあり、禪師問ふ「雪覆千山爲甚孤峰不白」、と師曰ふ、毒龍行處草不生、と禪師其答を稱し、人に謂ひて曰ふ、德儉今十九歲なり、三十年を加ふれば天下に蔭を垂れむ、と、後、大覺禪師の巨福山に遷るや、師亦隨ふ、かくて參究功を積む、支那に遊ばむとして出航し、台州の九山に登り、育王山の寂窓照に謁し、尋て天童の石帆衍、淨慈の東叟頴、靈隱の虛舟度、徑山の藏叟珍、簡翁敬、覺菴眞に歷謁す、且つ一時の大宗匠たる晦機熈、一山萬、末宗本、寂菴相等皆道交を結ぶ、吳越に往來すること八年なり、宋の末運に際し、禪刹亦騷擾に妨げらる、乃ち辭して東歸し、大覺禪師の下に省す、永仁四年葦航道然巨福山に主たり、師其下に首座となる、山內に長勝寺を開きて住す、次に東照淨妙寺に遷る、德治元年詔あり京師の建仁寺に主たり、東西の雲衲其下に來附す、後宇多上皇詔して西郊の離宮に召し、禪要を咨問したまふ、延慶二年の秋東歸鎌倉に入り、同三年建長寺に主たり、正和四年の秋寺火災に罹る、師災後瓦礫の場に坐して應接恬然たり、同年十一月寺內の龍峯庵に屛居して出でず、文保元年南禪寺の一山寧寂す、後宇多上皇師を召したまふも固辭して出でず、乃ち勅を北條貞時に降して强請したまふ、上皇御史太夫源有房をして迎へしめたまふ、開堂の日上皇卿相を隨へて親臨したまふ、元應元年微疾を示す、翌年の春東下し、鎌倉の舊菴に入らむことを請ふも、上皇諭告して許したまはず、親臨して慰問したまふ、四月病重し、上皇特に勅して佛燈大光國師の號を賜ふ、師再三辭讓すれども許されず、遂に佛燈の二字を拜受す、五月十七日病益重し、更衣して大衆を集めて訣別す、十九日趺坐偈を書す、七十六年、不生不死、雲散長空、月行萬里、終に寂す、牧護菴に闍維し、靈骨を分ちて相模龍峰に塔を建つ、上皇宸筆佛燈國師無相塔を賜ひ、讃岐垂水莊を割きて牧護菴の香燈料となしたまふ、且つ御製の賛六十六字を下したまふ、後醍醐天皇嘉曆元年の夏勅して菴を改めて寺となし壽聖の額を賜ふ、德儉七會語錄あり、元の圓通寺竺田心、道場寺月江印序を作り、淨慈寺靈石芝跋す、上天竺寺沙門匡道大師塔銘を撰し、奉議大夫趙雍書し、中奉大夫王都中篆額す、（元亨釋書、本朝高僧傳、延寶傳燈錄）

トクゲン　德源　二〇八一―二一五六　〔曹洞宗〕越前佛陀寺の禪僧なり、德源字は江父、俗姓は平氏大和の人、幼にして慶田寺海門興德に投じて童子となり、十一歲得度し、新豐寺天叟龍興寺大見佛陀寺希曇に參し、皈りて海門に侍し、其法を嗣ぎ、總持寺に出世し、後、佛陀、補巖、安養、慶田の諸寺に歷遷す、晚年安能寺を創して開山となる、明應五年十一月十五日寂す、世壽七十六、法臘六十五、（日本洞上聯燈錄）

トクゴ　德悟　（一九三九）　〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、德悟字は桃溪、鎭西の人なり、初め眞言宗に歸し、後、禪宗に投す、大覺禪師の下に師事して法嗣となる、宋に渡り育王山頑極彌に謁す、弘安二年（唐祥興二年）東歸の途に上り、祖元元に同伴し來る、元禪師に隨ひて建長寺に住し、尋て請

を受けて筑前の聖福寺に住す、元禪師二偈を以て送る、其一に曰ふ、說盡山雲海月情、老懷終是缺ニ惺惺一、雖ニ然桃李分ニ蹊徑一、又喜淸陰滿ニ祖庭一、幾くもなく東歸し圓覺寺に住し、道化大に揚る、大仙菴を搆へ退休す、晩年武藏東漸寺に住す、寺は風景に富み、一時の名宿多く題詠を寄す、師詩あり、冥ニ心邱壑一絕ニ追攀一、曠希夷宇宙寛、重疊山遮ニ名利路一、渺茫海隔ニ是非關一、放蒼松翠竹烟籠淡、古岸平沙月照寒 即此逍遙無ニ外事一、白雲饒得伴ニ淸閑一、示寂の年時缺く、遺偈あり、芭蕉虛幻軀、片片總成レ眞、驀地歸レ根去、露ニ出法王身一、勅諡宏覺禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

トクサイ 德濟 (二〇五四) 〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、德濟號は鐵舟、下野の人なり、嘗て元に入り、普く諸師に謁し、東歸して天龍寺無極玄禪師に依り、終に其席を補して同寺に住す、後、京都の萬壽寺に移り、幾ならすして西山の龍光院に退休す、寂年、及び壽缺く、師嘗て元にある時順宗皇帝其道化を崇みて、特に圓通大師の號を贈る、著作閻浮集あり、(本朝高僧傳)

〔考〕 德濟は應永頃の人なり、

トクサイ 德濟 (一二四七) 我國最初の僧なり、德濟俗名は鞍部多須那と云ふ、司馬達等の子なり、用明天皇二年、天皇瘡を患ひたまひて甚だ重く、將に崩御したまはんとするに際し、多須那進み奏して曰ふ、臣、天皇の爲に出家し、道を修し奉り、丈六尺の佛像を造立寺を營みて安置し奉らむと、後、崇峻天皇三年に誓言を踐みて出家し、德濟法師と云ひ、南淵坂田寺を興し、一丈六尺の佛像、脇侍菩薩を安置し、天皇の冥福を祈願せり、我國にて男子の出家するは多須那を始めとす、示寂の年時缺く、(日本書紀)

トクサカ 德積 (一二八五) 高麗の歸化僧なり、德積は鞍部氏なり、推古天皇三十二年四月始めて僧都の官を拜す、事蹟の詳なるは知るべからず、(日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕 日本書紀に鞍部德積と氏名を併せ揭くるより見れば、出家ならざるが如しと雖、僧都の官に任せられたるより見れば、俗人にあらさるを知るへし、元亨釋書、本朝高僧傳、皆出家の中に列す、僧綱補任に高麗の人とあり、今姑く之に從ふ、

トクジユ 德樹 二一八六 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、德樹字は天蔭、東陽の室に入りて年を經、其席を續きて養源寺に住す、尾張の瑞泉寺に移り、詔を奉して京都妙心寺に昇る、寺の側に聖澤院を搆へて居り、大永六年四月十六日寂す、(本朝高僧傳)

トクシユン 德俊 二〇六三 〔臨濟宗〕山城南禪寺の禪僧なり、德俊字は伯英、靑岳遺老と號す、武藏の人なり、久しく了堂安禪師に參して、宗旨を究む、應永年中登大年と船を同くして元に入り、普く巨刹に遊ひて名匠に參見し、天童山に登りて了堂一に謁し、藏鑰となり、久しくして辭して國に歸へり、相模の圓覺寺に住し、建長寺に移つる、後詔を奉して京都南禪寺に登る、晩年大寧寺に退居し、應永十年八月十二日寂す、壽缺く、遺偈あり、曰く、生死涅槃、全不ニ相干一、須彌踍跳、虛空展レ顏、著作萬松藁あり、(本朝高僧傳)

トクシユン 德舜 二一六五 〔曹洞宗〕甲斐大澤寺の禪僧な

り、徳舜字は明江、甲斐山梨郡の人、俗姓は河村氏、廣巖院の雲岫に投し、服勤十餘年、雲岫の命により天澤寺鷹嶽宗俊に師事して其法を嗣き、後、天澤寺に主となる、晩年萬福定林の二寺を開き、永正二年十二月二十二日寂す、壽缺く、

トクショー 徳昌 二二五九……〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、徳昌字は桂林、號は蘚菴、五歳にして建仁寺に入り、伯耆安國寺の和甫忍に嗣く、延德元年建仁寺に入り、一住十年、近江山上の石頭菴に寂す、壽缺く、著作青松錄あり、

トクショー 徳紹 (一九七七)〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、徳紹字は無絃、大覺禪師の法嗣たり、一山寧に請せらる、淨智寺に住す、示寂の年時缺く、遺偈に曰ふ受二淨智辟命一、行二無生國裏一、一機瞥轉、淸風萬里、(本朝高僧傳)

トクショー 徳祥 ショーリン正麟を見よ、

トクジョー 徳成 (二四一〇)〔眞宗〕伊豫松山圓光寺の住持なり、徳成は字大吉房と云ふ、伊豫松山の人、圓光寺明逸の子なり、父に從ひ佛儒の學を受け、後、出遊して播磨の義端に交はり、尋いて大同房基辨に從ひ、倶舍法相等を究め、殊に倶舍には一家の見解あり、學者相傳へて伊豫徳傳と云ふ、晩年美濃の墨股に在り、其地に寂す、著作因明大疏考決二十二卷あり、

トクジョー 徳定 二四一一／二四七〇〔淨土宗〕京都清淨花院の僧なり、徳定字は佛慧といひ、紀伊日高郡の人なり、妙年出家し、郡の稱名寺俊廓に師事す、後增上寺に入り、解行並ひ進む、大巖寺に住し、學徒を教誘す、幾もなく京都清淨花院に住し、大に祖風を振ふ、文化六年十一月微恙あり、自ら起たさることを知り、後事を弟子に附し、專ら佛名を唱ふ、明年正月六日剃髪更衣し、其夜二更寂す、壽六十、師平生誦するところ阿彌陀經十万部、日々念佛六万遍なり、且つ手から佛號を書したること五十万幅なり、(續日本高僧傳)

トクセン 徳詮 (一九四二)〔臨濟宗〕相模禪興寺の禪僧なり、徳詮字は無及、俗姓不詳、大覺禪師の法嗣となる、初め巨福山に住し、第一座となる、後禪興寺に移り住す、弘安五年の春佛光無象の諸禪師と共に東漸寺に遊び、詩を作る、師の詩に曰ふ、峭壁嵯峨碧浪深、樓臺倒影蘸二波心一、目前盡是普門境、時聽海潮鼓二梵音一、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

トクセン 徳璇 一九一五／一九九四〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、徳璇字は玉山、俗姓不詳、信濃の人なり、大覺禪師道隆に師事して印可を受く、奥州の檀越某の請に應じ、出谷山に住し第一代となる、後建長寺に住して法化高し、晩年回春院を創して屛居す、建武元年十月十八日に寂す、壽八十、勅諡佛覺禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

トクソー 徳叟 シューキュー周仇を見よ、

トクソー 徳叟 シューサ周佐を見よ、

トクチュー 徳忠 (……)〔曹洞宗〕信濃溫泉寺の開山なり、徳忠字は節香、俗姓伴野氏、信濃の人、十三歳にして出家し、茂林寺南溪に參し、慶德寺の嫩桂に謁す、其寂するに及び仲孚正巽來りて席を補す、師侍して首座となり、後其席を繼ぎて信濃慶德寺に開法す、同國前山城主伴野貞祥洞源山貞祥寺を建て、師を開山となす、高井郡の檀越溫泉寺を建て、師を第一代となす、禪透、法泉、雲興、常源、自成の

諸寺皆師を開山とす、詔に依り闕に入り、法を說く、勅して圓明禪師の號を賜ふ、某年二月十五日禪透寺に寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

トクテー 德鼎（……）京師の畫僧なり、德鼎字は慧鹿、初周文に學び牧溪玉澗を追慕す、殊に人物に長せり、寂年、及壽缺く、（本朝畫史、扶桑畫人傳）

トクドー 德道 一三一六/…… 大和長谷寺の開山なり、德道は播磨揖寶郡の人、俗姓辛矢田部造と云ひ、初の名は米麿、後の名は子若、齊明天皇二年に生る、十一歲父に別れ、十九歲母に離る、二十歲長谷寺に到りて出家し、靈驗に感激し、一大木材を得て十一面觀世音を彫刻し、長谷寺に安置す、神龜四年功を竣へ行基大菩薩等を請して供養會を行ふ、示寂の年時缺く、（長谷寺緣起文、本朝高僧傳）

［考］長谷寺緣起文に德道の事蹟を細說せるも恠誕にして信じがたし、今は只其要を摘みて揭くるなり、

トクヒョー 德標 ジュンショー純淸を見よ、

トクホ 德輔 二三八二/二四七八 ［臨濟宗］京都南禪寺の禪僧なり、德輔字は惟宗、出家して千巖大禪師に業を受け、東福寺にありて藏鑰を司どる、職滿ちて出遊し、再び千巖に參し印記を附せられ、伊勢安養寺に出世し、京都普門寺に遷る、應永の末年東福寺に住し、嘉吉元年秋天龍寺に遷る、文安五年勅あり南禪寺に主たらしむ、幾何ならずして辭して東福寺に歸り、文正元年二月六日疾に罹り、偈を說て曰く、閻浮界九十七年、打二著南邊一、動二北邊一、拗二折柱杖一底時節、驀口吞却盡大千、と、泊然として寂す、嗣法南禪寺證夫衲、聖福寺天祐麟、中岳本、眞如寺慕林元、全牛潟、聖福寺大有觀、東福寺載之輿等あり、（本朝高僧傳）

トクホー 德峰 シューコ宗古を見よ、

トクホン 德本 二四一八/二四七八 ［淨土宗］武藏一行院第一代なり、德本俗姓は田伏氏、畠山重忠の後孫にして、紀伊日高郡志賀谷久志村の人なり、寶曆八年六月二十二日に生れ、甫めて四歲、隣家の兒の死するを見て、忽ち無常を觀し、師受なく念佛を唱ふ、九歲出家を請へども許されず、天明二年往生寺に至りて戒を受く、時に二十五歲なり、同四年の春再び出家を母に懇請し、六月往生寺の大圓に從ひて剃度す、翌年大瀧川の月正寺に寓し、三十日を期して日に一食晝夜念佛怠なし、後往生寺を出て、四方に流寓す、千手川の村民等菴を營みて師を請す、師乃ち茲に寓し、苦修七年を經、寛政三年十月萩原の草廬に移る、五年萩原を去り、攝津谷山に寓し、明年夏四月智恩院、西山、比叡山等の祖蹟

を拜し、九月熊野に詣て、到る處に化を布き、十月鹽津に歸へる、師幼より文字を習はず、剃度の後阿彌陀經の句讀を習ひしのみ、然るに自ら繪詞傳語燈錄等を讀み、宗要を了解し、大乘の敎理に到達す、七年七月古城山の絕頂に閑居し、專ら念佛を事とす、寬政十年夏五月自誓して梵網五十八戒を受く、後法隆寺叡辯律師より印可を蒙むる、八月攝津吳田吉田氏の請に應して住吉の草菴に住し、十二年九月紀伊の太守の招きにより鄕に歸りて有田山に菴居し、享和元年十月攝津勝尾寺大衆の延請により、松林菴に寓す、文化十四年增上寺典海大僧正の懇請に依り、東國を化導す、典海大に悅び、武藏に一行院を刱して住せしむ、文政元年夏病にかゝり、八月十日宗門の秘藉を弟子本佛に附し、諸弟子を戒め、十月六日正念にして寂す、世壽六十一、（德本上人行業記、續日本高僧傳）

トクマン　德滿（………）（………）　山城鞍馬寺の僧なり、德滿俗姓不詳、攝津水田縣の人、二十歲にして盲す、三歲を經て治せず、鞍馬寺に詣し祈るも驗なし、長谷寺に詣し、一七日祈りて靈告あり、轉して近江彥根山觀世音靈場に至り祈る、第三日の夜兩目忽ち開きて燈火を見る、時に承曆三年なり、此より德滿靈場に留りて精進修練す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

トクモ　德母　リヨーオー良雄を見よ、

トクモン　德門　フジヤク普寂を見よ、

トクヨ　德譽　コーネン光然を見よ、

トクヨ　德譽　ロコー魯公を見よ、

トクヨー　德陽　二二一四一　二二一一五　〔曹洞宗〕武藏青松寺中興なり、德陽字は泰翁、美作の人、俗姓は橘氏、諸兄の裔なり、十三歲父の鎌倉に守官たるに從ひ、東遊し武藏青松寺雲岡に投じて弟子となり、雲岡の寂後喜州普山節菴相踵きて靑松寺に主となる、師三師に奉侍し、節菴の衣法を附せられ、總持寺に出世し、次に青松寺鳳生寺に歷遷す、其靑松寺に住するに方り敗頹を興し、中興と稱せらる、越州大守太田眞淸、由井城主大石道俊、師の道化を慕ひ、田園を寄捨す、弘治元年十一月二十日寂す、壽七十五、法嗣在天宗鳳あり、（日本洞上聯燈錄）

トクリン　德霖　二五二六　〔眞宗〕近江坂田郡多和田村即往寺の住持なり、德霖は近江の人、安政二年より高倉學寮に倶舍論解深密敎を講し、文久元年十二月二十日擬講となり、慶應二年六月（一に七月）廿一日寂す、（眞宗史料）

トクリン　德林　シンコン心建を見よ、

トクリユー　德龍　二四三二　二五一八　〔眞宗〕越後蒲原郡水原村無爲信寺の住持なり、德龍字は召雲、自ら不爭室と號す、越後の人、父は順崇、母は佐藤氏、安永元年九月二十六日無爲信寺に生る、幼名を傳記麻呂と稱し、聰明衆に秀て、八歲にして能く詩を賦す、十二歲父に隨ひて江戶に遊び、既に長じて學內典に入り、慧解日に新なり、諸山の講場を經歷し、初め深密瑜伽攝論唯識宗を究め、後華嚴天台に涉り、無爲信寺に住すること數年、後、寺職を辭し、改めて香樹院と號す、文化年中高倉學寮に三類境、解澤密經、成唯識論を講し、文政三年擬講となり、同六年六月八日嗣講に進み、翌年選擇集を講し、以後累年、往生禮讚、淨土和讚、往生要集を講し、十四年夏

代講師となりて高僧和讃を講し、弘化四年四月三日講師に任じ、爾後淨土文類聚鈔、十住毗婆娑論、往生論註、正像末和讃、正信念佛偈を講し、安政五年正月廿三日京都に寂す、壽八十七、師德行を以て聞え東本願寺歷代講師の中、學は香月院を推し。德は香樹院を推すと云ふ、

德龍講師

トクレー 德令（二四六三―二五五二）〔眞宗〕筑後光善寺の住持なり、德令は石門と號す、俗姓は木屋氏、筑後八女郡木屋村の人なり、享和三年八月十日に生る、其先は喬花城主木屋彈正左衛門調行實なり、師文政五年豐後廣瀨淡窓の門に入りて、詩文を學び、天保三年柳川惠雲に內典を學ぶ、五年京都に入り、高倉學寮に入りて香樹院に師事す、弘化五年家塾を開き、修文館と號す、門人前後三千人に及ぶ、其京都に在る日、伏見親王の侍講となる、相國寺協議して師を大和尚となさんとす、師辭して曰く、紫衣は我が分にあらざるなり。と、明治八年八月廿九日二等學師となり、十年九月七日大講義に補す、廿五年七月二日寂す、壽九十一、師妻子なし、遺稿詩文集數十卷あり、

トクイチ 得一　ドークワン道貫を見よ、

トクオー 得翁　エー永を見よ、

トクガン 得巖（二〇八五）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、得巖字を惟肖と云ふ、備前の人なり、十六歲にして京都に上り、草堂禪師に從ひて剃髮受戒し、參究久しくして開悟す、將軍足利義持相國寺の西堂に請し大に優遇す、攝津の棲賢寺、京都の眞如寺萬壽寺天龍寺等に歷住し、南禪寺に昇住す、後南禪寺に雙桂院を構へて居り、某年寂す、壽缺く、著作莊子鬳齋口義鈔十卷、東海瓊華集若干卷あり、（本朝高僧傳）

〔考〕得巖は永祿の頃の人なり、

トクキョー 得慶　シンスイ針水を見よ、

トクゴ 得吾（二〇九九―二一八二）〔曹洞宗〕甲斐廣嚴寺の禪僧なり、得吾字は自山、甲斐巨麻郡下山氏の子なり、十五歲身延山に投じて得度し、比叡山に登りて具足戒を受け、徧く三藏を索る、後禪に參し、廣嚴寺雲岫に謁す、時に一華文英大龍菴に居る、師日々其敎を聞きて發悟す、一華廣嚴等に住するに際し、師を選びて第一座とす、一華永昌寺に遷るに及び、師命せられて廣嚴寺に主となる、大永二年五月十六日寂す、壽八十四、臘六十七、遺偈に曰く、不ㇾ住二生死一、不ㇾ留二涅槃一、即心獨露、大道一貫。と、法嗣俊屋椎彥あり、（本朝高僧傳）

トクジュー 得住（二五二九）〔眞宗〕能登羽咋郡鹿頭村常得寺の住持なり。得住は獅子窟と號し、賢殊院と稱す、能

登の人なり、天保六年以後高倉學寮に入論起信論五教章を講じ、十三年八月(一に九月)廿九日擬講となり、十五年華嚴略策を講し、嘉永七年二月二十五日嗣講に進む、安政二年より散善義定善義を講し、文久元年夏序分義を代講し、同十二月十八日講師となりて、翌年以來玄義分、觀念法門、往生禮讚、法事讚般舟讚文類聚鈔を講す、明治二年講師となる、寂年缺、(眞宗史料)

トクショー　得勝　一九八七　二〇四七　〔臨濟宗〕甲斐向嶽寺の開山なり、得勝字は抜隊と云ふ、俗姓は藤原氏、相模中村の人なり、四歳にして父を喪ひ、州の治福寺に往き、應衡禪師に隨ひて受業し、二十九歳落髮し、瓊侍者に謁し、艸菴を結びて禪座久うし、鷄聲を聞て省あり、鎌倉に往て肯山悟に謁し、常陸に到り復菴巳に見え、武藏上野に遊徧して諸名宿に參し、皆優賞を受く、返りて瓊侍者を訪ひ、其勸めにより雲樹寺孤峰國師の室に入り、信印を付せられ、抜隊の號を受く、これより諸國に歷遊し、相模彌勒寺、美濃桐山寺、駿阿鷹打寺、遠江天方寺等に寓居し、近江永源寺に寂室光和尙に參し、去りて伊豆鍋澤山に菴居し、二年を經て相模に移る、後甲斐に菴居すること三年、國中大に化す、秀菴主なるものあり、鹽山に向嶽寺を剏し、師を請して第一代とす、太守武田信成師の德望を慕ひ、力を盡して外護す、嘉慶元年二月二十日寂す、壽六十一、臘三十二、門下全身を奉して本山に葬る、著作語錄あり、天文十六年六月五日敕謚慧光大圓禪師の號を賜ふ、(本朝高僧傳、續群、二二七)

トクセン　得仙　二〇〇四　二〇七三　〔曹洞宗〕攝津護國寺第二代なり、得仙字は笑山、俗姓は平氏、近江淸瀧の人、十九歳にして家を出で、京都に至り、東山大辨訥了を拜して祝髮し、服勤三年、辭して遊方す、初め永源寺寂室光、定光寺平心齊に參し、次に下野吉祥寺大拙能に依る、後妙應寺大徹宗令に謁し、奉待すること六年、遂に衣法を受く、大徹總持寺に住するに及び記室となる、康曆二年應久菴主攝津に護國寺を創し、師を請す、師大徹を推して開山となし、自ら二世となる、將軍足利義滿護國寺を五山の一に列せんとすれども、師固辭す、應永初年關東に遊び、暫らく上野眞淨寺に留る、下野宇都宮の檀越桂林精舍を創し、此に居らしむ、同四年の春越中立川寺に住し、尋で總持寺に出世し、六年の春近江に長命寺を開き、十五年正月大徹立川寺に寂するに及び、遺命に依りて其席を嗣ぐ、將軍義滿京都に召して法を問ふ、赤松性松、播磨に佛可寺を建て師を請すれども辭して赴かず、後永光寺を司どり、居ること三年、美濃の鈔應寺に遷る、晩年檀越師に請ひて桂林寺に皈らしむ、二十年三月十九日寂す、壽七十、臘五十一、同寺の西南に塔し、祖心院と名く、遺偈あり、曰く、殺レ佛殺レ祖、寸陰不レ閑、及二一息斷一、直墮二無間一、過了也唊、須彌走入二藕絲一、法嗣惟忠守勤あり、(日本洞上聯燈錄)

トクゾー　得藏　二〇二五……　〔臨濟宗〕上野長樂寺の禪僧なり、得藏字は敎外、明極俊禪師に師事し、攝津の接賢寺に住し、上野の長樂寺に遷つる、後、諸方に歷遊し、常陸鹿島に根本寺を開き居す、貞治四年正月三日長樂寺賓光院に寂す、

トクテツ　得哲　(……)　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、得哲字は愚溪と云ふ、明極楚俊に參して法を嗣ぎ、豐

後岳林寺に法を開き、後、相模淨智寺建長寺に歷住す、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

トクホー 得芳（……）〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、得芳字は艸堂と云ふ、明極に參して法を嗣ぎ、攝津廣嚴院に住し後淨妙寺に移る、晩年職を辭して攝津に返り、棲賢寺に居す、將軍天龍寺に請すれとも師固辭して起たず、世人其高風に服す、寂年、及世壽缺く、（延寶傳燈錄）

トクホーイン 得法院　クワンア觀阿を見よ、

トクホーイン 得法院　クワンネー寛寧を見よ、

トクヨ 得譽　ゲンドー玄道を見よ、

トクヨー 得幺（……）〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、得幺字は子純、出家して久しく雷峯間に參し、法を嗣ぎ、相模鎌倉建長寺に主となる、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

トクオー 禿翁　エデン惠傳を見よ、

トクグワン 禿頑（……）〔淨土宗〕武藏靈山寺の僧なり、禿頑字は大超念蓮社專譽と稱す、下總の人なり、十五歲にして舟橋淨勝寺に投して出家す、學解の譽高し 武藏山島に靈山寺を建立し、法化盛なり、某年某月二十五日寂す、壽八十一、（鎭流祖傳）

トクショ 禿樵　ショートー紹等を見よ、

トクヨ 禿譽　ゲンセー源逝を見よ、

トクオー 特雄　センエー專英を見よ、

トクホー 特芳　ゼンケツ禪傑を見よ、

トクホー 特峰　ミョーキ妙奇を見よ、

トクシユー 督宗　ショートー紹董を見よ、

ドクアン 獨菴　ゲンコー玄光を見よ、

ドクオー 獨雄（二四三四）〔……〕越中眼目山立川寺の學僧なり、獨雄詩文に長す、眼目山に住し、眺望の詩あり、曰ふ、出門散步萬松間、嵓岳風寒殘雪斑、寺下晴川春水至、村邊荒逕暮烟閑、北看二信越雲中嶺一、西望二加能海上山一、駐杖晩來時極レ目、漁樵相伴幾人還、安永癸巳立川寺緣起を作る、文章拙ならず、（燕臺風雅）

ドクグ 獨吼　ショーシ性獅を見よ、

ドクグワク 獨鶴　チエー知影を見よ、

ドクシ 獨師　シバン師蠻を見よ、

ドクショー 獨照　ソキ祖輝を見よ、

ドクショー 獨照　ショーエン性圓を見よ、

ドクショー 獨淸　ウングワ雲臥を見よ、

ドクショーケン 獨淸軒　ゲンエ玄慧を見よ、

ドクタン 獨湛　ショーケー性瑩を見よ、

ドクホ 獨步　キョージユン慶順を見よ、

ドクホー 獨峰　ショーギ正巍を見よ、

ドクホー 獨峰　ゾンオー存雄を見よ、

ドクホー 獨芳　ショードン淸曇を見よ、

ドクホー 獨放　マシユー摩聚を見よ、

ドクホン 獨本　ショーゲン性源を見よ、

ドクモン 獨文　ホーヘー方炳を見よ、

ドクリン 獨麟（……）〔臨濟宗〕攝津弘德寺の僧なり、獨麟は少にして江戸に抵り、業を東禪寺萬菴に受く、晩年攝津に往き、芥川弘德寺に主となる、甚だ文才あり、富

春叟と親み善し、一日與に語る春叟吏に答へず、師恠みて之を問ひしに春叟の曰く、人朱肉を贈る故に、謝詩を作らんと欲すれども構思まだ就らず、故に然りと、師立どころに賦して曰く、神仙山上煉丸沙、一旋頒投洞裡家、霧蓋手開滄海日、雲篷眼醉赤城霞、龍波浴出珊瑚樹、鵑雨灑來躑躅花、縱在峨眉深處隱、覓教姓字發光華、と、寂年壽缺く、（近世叢語）

ドクリユー　獨立　ショーイ性易を見よ、

トツセツアン　咄屑菴　ジエン慈延を見よ、

トツ〳〵サイ　咄々齋　シユーシユク宗俶を見よ、

トンア　頓阿　一九六一—二〇四四　〔時宗〕京都四條金蓮寺の僧なり、頓阿は梶井別當源仝の子にして、俗名を二階堂貞宗と云ふ、初め泰尋と云ひ、良阿と稱す、二十四歲にして比叡山に登りて佛事を學び、高野山に登り感空と改む、後京都に皈り四條金蓮寺に入りて更に頓阿と改む、和歌を好み、藤原爲世に從ひ、其蘊奧に達す、爲世の沒するに及び、頓阿其已を知る者なきを嘆じて、和歌を作らず、光嚴天皇師の歌才を知り、貞治二年當時の歌風を改新せんと欲し、藤原良基に敕し、師と問答せしめて後世の龜鑑とし、名けて愚問賢註と云ふ、嘗て權大納言藤原爲明新拾遺集を選し、未だ果さずして薨したるを以て、師繼ぎて戀の部以下を成す、「月宿る澤田の面に伏す鴨の氷より立つ明方の空」は人口に噲炙し人呼んで澤田の頓阿と云ふ、元中元年三月十三日雙林寺に寂す、壽八十四、著作井蛙鈔、草菴集（家集）あり、（野史）

トンエ　頓慧　二四一〇—二四七六　〔眞宗〕豐前古城正行寺の住持なり、頓慧字は鳳嶺號は皆往院、豐前の人なり、高倉學寮に學ぶ、寛政七年嗣講となり、同八年阿彌陀經を講ず、十年四敎儀集註を講ず、後、玄義分、法事讚、往生禮讚、淨土和讚、入出二門偈を講ず、文化十三年九月七日寂す、壽六十七、文政四年六月講師を贈らる、（高倉學寮講者列傳稿本）

トンシユー　頓秀　二三二六—二三九九　〔淨土宗〕江戸增上寺四十一代なり、頓秀は傳蓮社通譽寂西阿と號す、俗姓は國村氏、上總望陀郡の人、母は船方氏の出なり、延寶六年四月二十三日十三歲にして生實大巖寺に入り、乘譽流頓上人に師事し、同八年流頓の洛北知恩寺に移るに方り、師隨從し、天和二年大巖寺に皈り、貞譽上人に二脉を受く、貞享三年秋京都に上り、流頓を拜省して一乘戒儀、幷に璽書を受け、上人號を賜はる、後增上寺に于蘭盆經疏、及び選擇集を講し、寶永二年一字班に進み、淨土論註、圓覺經疏を講ず、正德四年十一月司月職に移り、享保五年座元に補し、六年三月大念寺に主となる、十一年秋大光院に遷り、二十年正月二十二日增上寺に昇進し、大僧正に任ぜらる、元文三年七月三十日辭職を奏請したれども許されず、十一月十八日病に罹り辭して麻布に退隱し、專ら病を養ふ、同四年十月十日寂す、壽七十四、臘六十二、（三緣山志、淨土總系譜）

トンジヨー　頓成　二四五五—二五四七　〔眞宗〕能登羽喰長光寺の住持なり、頓成は能登羽喰郡赤崎の人なり、開悟院靈雕に師事して眞宗々學を講究し、機深心自力說を唱ふ、弘化四年東本願寺法主光勝特に德龍、澄玄、宣成等に命し、其義を正さしむ、頓成乃ち廻心狀を呈し、正義に復す、幾もなく再び前義を唱ふ、諸國の信徒附和する者多し、乃ち幕府東本願寺講師

靈睢、及び澄玄、覲月を召喚して宗意を尋問し、東本願寺に命し調訂せしむ、法主光勝再び德龍、靈睢、義讓、秀存等に命し、其義を正さしむるも頓成服せす、幕府遂に頓成を捕へて獄に下し、罪刑して四日市に流す、明治維新の大赦令により國に皈るを得、其後尚ほ前義を唱へ、東本願寺の罰するとと前後二回に及へり、明治二十年十一月十九日寂す、壽九十三、

トンジヨー 頓乘（……）〔眞宗〕長門萩三千坊の住持なり、頓乘一名は常精といふ、道振の門人なり、宗乘に精しく助教となる、寂年缺く、本山諡を與へて淨蓮房といひ、明治十八年司敎を贈る、著作或談辨失一卷あり、南溪の爐上閑談を駁したるものなり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

トンヨ 頓譽　チテツ智哲を見よ、

トンヨ 頓譽　リユーテツ龍鐵を見よ、

トンアン 豚菴　リユーハ龍派を見よ、

ドンエ 曇慧（一二一四）〔　〕百濟の皈化僧なり、曇慧は百濟の人なり、欽明天皇十五年二月に來貢し、道深等に代る、事蹟詳ならす、（日本書紀）

ドンエー 曇英　エオー慧應を見よ、

ドンエー 曇榮　シユーヨー宗曄を見よ、

ドンカク 曇覺　コーエー光映を見よ、

ドンキ 曇熙　ホーゴン法嚴を見よ、

ドンクー 曇空　エクワ慧果を見よ、

ドンゲ 曇華　エサイ慧齋を見よ、

ドンケー 曇冏　リヨークワ良果を見よ、

ドンゲン 曇現（……）〔臨濟宗〕京師東福寺の禪僧なり、曇現字は瑞巖、東福寺山叟雲の法を嗣ぐ、慧劍の法弟なり、持律淸嚴にして舍利首髮に現したりと云ふ、臨終の偈あり、大悲願力、示現生滅、松風水月、全機漏泄、示寂の年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドンコー 曇光（……）〔曹洞宗〕近江大光寺の禪僧なり、曇光字は日菴、薩摩の人なり、出家して大光寺天德に參して敎を受け、諸方に歷參して皆印可を蒙る、天德龍泉寺に遷るに及んで師に命じて記室に居らしめ、分座說法す、請に依り法を總持寺に開き、近江大光寺を主どり、越前宗正寺に移る、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ドンコー 曇香　ゲンカイ玄海を見よ、

ドンジヤク 曇寂（二三五三）〔新義眞言宗〕京都五智山の學僧なり、曇寂字は惠旭と云ふ、其鄕貫詳かならず、運敞僧正に學び、新古和融說の祖と云はる、寂年、壽缺く、著作大疏私記三十八卷、理趣經私記八卷、即身義私記、吽字義私記、資鑰纂解傍觀、起信論烈綱、各三卷、二敎論私記六卷、菩提心論私記四卷、秘鍵私記、秘鈔切抜紙私記、各二卷、傳法灌頂戒壇作法事記五卷、聲字義私記、八轉聲集記、玄秘鈔私記、金寶鈔私記、秘鈔私記、秘鈔除菴私記、各一卷あり、（新義眞言宗史）

ドンシユン 曇春 二〇六八……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、曇春字は東嵒、五峯項に師事して法を嗣ぎ、東福寺に主となる、應永十五年二月二十日寂す、東福寺內禪勝菴に塔す、（延寶傳燈錄）

ドンシヨー 曇生 二〇三六……〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧な

り、　曇生字は頑石、俗姓不詳、福巖寺哲巖禪の法を嗣ぐ、建仁寺に住す、晩年定慧院に退休す、永和二年七月廿七日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ドンシヨー　曇照　ジヨーギヨー淨業を見よ、

ドンセン　曇璿（……）〔曹洞宗〕周防龍文寺第二代なり、　曇璿字は在山、俗姓生國詳かならず、出家して竹居眞梁和尚に師事して印可を受け、周防龍文寺に住し、永澤寺に遷り、再び龍文寺に主となる、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ドンゾー　曇藏（二五一二）〔眞宗〕長門萩光明坊の住持なり、　曇藏は嘉永五年七月勸學職となり、九月に至り故ありて非職を命せらる、（學苑談叢）

ドンチユー　曇仲　ドーホー道芳を見よ、

ドンチヨー　曇徵（一二七〇）〔……〕高麗の歸化僧なり、曇徵は推古天皇十八年三月高麗王の命により法定と共に來朝す、曇徵五經に通じ、且つ繪畵工藝に精しく、紙墨彩色及び碾磑を造れり、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ドンテー　曇貞（一九九二 二〇八九）〔曹洞宗〕越前宗生寺の禪僧なり、　曇貞字は天德、近江の人、俗姓は橘氏、正慶元年に生れ、八歲の時比叡山に登り、天台を學ふこと數年にして之を捨て禪門に歸す、通幻寂靈によりて印可を受け、其法を嗣き、辭して鄉里に歸る、時に天台の祐元法印爺須郡醴泉寺に住し師の道風を慕ひ、寺を改めて禪宗となし、師を延きて主とす、將軍足利義滿師を迎へ禪要を問ひ、有司に命して諸堂を興し莊田を寄捨す、周防に至り大陽寺を築きて居り、幾もなくして大光寺に歸へる、明德二年五月通幻寂靈龍泉寺に寂したるを以て、師代りて住持となり、永享元年の秋丹波の永澤寺に移り、八月一日越前の宗生寺に歸休し、九月六日寂す、壽九十八、法嗣日庵曇光あり、（日本洞上聯燈錄）

ドンポー　曇芳　シユーオー周應を見よ、

ドンモ　曇茂　エンモン圓門を見よ、

ドンヨ　曇譽　ニンカイ忍海を見よ、

ドンリユー　曇龍（二三八一 二四三二）〔淨土宗〕江戶增上寺の學僧なり、　曇龍號は昇蓮社騰譽と云ふ、肥後熊本の人、幼にして同國阿彌陀寺に投し、後江戶に出て、增上寺圓海和尙に師事し、內外の學に通し、殊に詩に長ず、安永元年四月十七日寂す、壽五十二、臘三十六、增上寺の墓北に葬る、詩集刊行せらる、（三緣山志）

ドンリユー　曇龍（二五〇一……）〔眞宗〕筑前博多万行寺の住持なり、　曇龍は龍華と號す、安藝の人なり、宗學を慧雲、大瀛に受け、文政十一年勸學職となる、同年及び天保八年の安居に學林にて代講し、天保十二年八月十一日寂す、諡して大行院と稱す、著作願成就文向陽記、往生論便蒙、安樂集判敎辨、選擇集畧解、敎行信證綱要、同略辨、信文類十益辨、正信偈跡水錄、廣畧二書對辨、諸經和讃阜山錄、自然法爾辨、改悔文要解、眞宗佛性論、易行大道論、龍華門標、橫超專修文、對賓夜話、艸庵靜話、講間夜話、官斗編閑話、侍筆塞責、辨客拳編　助正訣　評眞宗唯信義、七釋唯信義　高祖論、皇大子論、筑前育子談、誓判或問、五願義、玄義分六字釋廣畧、

並に讃信行一念論評、各一卷、易行品壽燈錄、大無量壽經執御錄、玄義分偈頌釋、往生禮讃義、禮讃引釋義、選擇集玉軌錄、同侍講記、敎行信證三則、十益辨疑云、行一念義釋、正信偈見金錄、(未完)大經和讃用稱記、小經和讃甘露記、龍天二讃阜山錄、御傳鈔義箋、與御書睫戰錄　改悔文仰信記、五願義家道學箋、宗典義略、射師敎、金嶽請問、七釋雲梯、魂神不滅文類、病中漫筆、眞宗論信、金嶽室語、大谷聖人肉妻訣、文類聚鈔弊鋏記、汚泉談、各二卷、觀經芭蕉記、論註海錢錄、十五問許、正像末讃阜山錄、劫燒編、見聞異事、愚禿鈔戰競錄、各三卷、三祖一轍義、入出二門偈蚊飲錄、正信偈見金錄、各四卷、第十八願刁々記、金嶽文集、各五卷、往生要集海滴錄、選擇集山樹錄、敎行信證德徵記、(未完)各八卷、垂釣卯十五卷、胎中死子往生得不論、寶章機要、(未完)文類聚鈔三一問答角乳記、敎行信證大節、吉水大師三書科書、各若干卷あり、(學苑談叢書目)

ドンオク　呑屋　二二四七 二三二八　〔淨土宗〕尾張高岳院第三代なり、呑屋は本蓮社眼譽と號す、甲斐の人、其俗姓詳かならず、呑宿に就て剃髮し、光明寺傳察に師事して法を受く、初め尾張相應寺を剏して開山となり、次に高岳院に移る、正保三年京都金戒光明寺に主となり、晩年尾張市池の邊りに自然院を構へて退隱し、寛文八年四月二日寂す、壽八十二、(淨土總系譜)

ドンカイ　呑海　一九二五 一九八七　〔時宗〕相模藤澤淸淨光寺の開山なり、呑海は相模俣野村の人、文永二年に生る、始め京都七條金光寺に住せしが遊行上人第四代の法位を承くるに及び、遍く四海に遊化し、諸處に道場を創設す、正中二年遊行して相模に到り、今の總本山淸淨光寺俗稱遊行寺を建立す、嘉曆二年二月十八日寂す、壽六十三、遺書を四代上人法語といふ、(淸淨光寺記錄)

ドンキュー　呑岌(二二八三)　〔淨土宗〕尾張高岳院第二代なり、呑岌は號を底譽と云ひ、其俗姓生國詳かならず、呑龍に就て剃髮受業し、遂に宗乘の奧義に達す、後、席を繼ぎて名古屋高岳院に主となる、寂年、及世壽缺く、(淨土總系譜)

ドンシュク　呑宿　……二二八二　〔淨土宗〕尾張高岳院の開山なり、呑宿號は寂譽と云ひ、甲府の豪族なり、州の敎安寺に入りて剃髮し法を岩付の淸巖に嗣ぐ、尾張名古屋に高岳院を開きて住し、元和八年正月二十三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ドンタツ　呑達(……)　〔淨土宗〕奧州淨國寺の開山なり、呑達字は良然と云ふ、俗姓玉野氏奧州の人なり、良懿に法を嗣ぎ、州の平久保に淨國寺を開き、盛んに所承の學を弘む、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

ドンシュー　呑舟　チョーコン長鯤を見よ、

ドンチョー　呑潮　……二三四一……　〔淨土宗〕尾張西岸寺の開山なり、呑潮は縁蓮社三譽西岸と號す、俗姓は三上氏、甲斐の人なり、呑宿に就て剃染受業し、名古屋に西岸寺を剏す、天和元年四月十七日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ドンホ　呑補　二一六九 二二四八　〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、呑補字は天嶺、一に氷霞と號す、初め徧く師席に遊び、快叟良慶の信衣を受け、永平寺に出世す、永祿十二年上野龍門寺

に遷る、天正二年下野皆川に傑岑寺を開き、仝三年の秋大中寺に遷る、仝十六年十月十六日寂す、壽八十、法嗣白菴秀闘あり、（日本洞上聯燈錄）

ドンモ　呑茂　二二六六 二三四一　〔淨土宗〕尾張大泉寺の開山なり、呑茂は心蓮社念譽と號し、其俗姓生國詳かならず、呑宿の室に入りて薙髮し、增上寺隨波に師事して法を嗣ぐ、初め尾張高岳院に住し、洲の大泉退休二寺を開く、次に相應寺に主となり、後、建中寺に遷る、天和元年九月四日寂す、壽七十六、（淨土總系譜）

ドンエキ　呑益　二三五四　〔淨土宗〕江戸松音寺の開山なり、呑益は信蓮社深譽と號す、江戸の人、大龍に投じて剃髮し、法を頓譽知哲に嗣ぐ、初め大森寺に住して、第二代となり、後松音寺を剏す、元祿七年三月四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ドンリユウ　呑龍　二二八三　〔淨土宗〕下野大光院の開山なり、呑龍號は源蓮社然譽大阿と云ふ、別に故信と云ふ、武藏岩付の人、（一說に近江の人）、俗姓井上氏、初め州の林西寺岌辨に師事し、後、鎌倉江戸に歷遊し、源譽存應の法を嗣ぎ、林西寺大善寺に住し、後に新田大光寺を開く、家康の寵遇を受く、後陽成帝紫衣を賜ひ、永職となす、元和九年八月九日寂す、壽八十餘、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

ドンリヨー　呑了　二三〇七　〔淨土宗〕武藏淸岸寺の開山なり、呑了は專蓮社覺譽と號し、石見津和野の人なり、法を隨波に嗣ぎ武藏佐々木淸岸寺の開山となる、正保四年十二月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ドンオー　鈍翁　リヨーグ了愚を見よ、

ドンシヨー　鈍性　エンセツ圓說を見よ、

ドンフ　鈍夫　ゼンクワイ仝快を見よ、

ドンケー　嫩桂　ソコー祖香を見よ、

ドンケー　嫩桂　ユーエー祐榮を見よ、

ドンニヨ　嫩如　ゼンホー仝芳を見よ、

トリブツシ　鳥佛師　クラツクリノトリ鞍作鳥を見よ、

ナの部

ナイア　内阿　（一九七九）〔時宗〕相模當麻無量光寺の住持なり、内阿は眞敎に師事し、時宗大本山相模當麻無量光寺に住し、舊當麻派を開く、

ナイケイン　泥華院　エンモン圓門を見よ、

ナンエー　南英　ケンシユー鎌宗を見よ、

ナンエー　南英　ゼンモ禪茂を見よ、

ナンエー　南榮　レーサン禮三を見よ、

ナンエン　南園　リジユン理準を見よ、

ナンカイ　南海　シヨーシユ聖珠を見よ、

ナンカイ　南海　ホーシユー寶洲を見よ、

ナンガン　南岸　二三四〇　〔淨土宗〕丹後淸運寺の開山なり、南岸は松蓮社貞譽と號す、俗姓は荒川氏、筑紫の人なり、法を了學に嗣ぎ、丹後宮津に淸運寺を開く、延寶八年正月六日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ナンギン　南岑　シユーキク宗菊を見よ、

ナンゲ　南化　シユーコー宗興を見よ、

ナンゲ　南化　ゲンコー玄興を見よ、

ナンケー　南溪　二五二四……〔眞宗〕豐後玖珠郡戸畑村萬福寺の住持なり、　南溪は淮水と號す、別に覺音坊と云ふ、筑前粕屋郡宇美信行寺に生る、甫めて十歳にして軍書小説に渉獵し、又能くこれを記誦す、師の一生は破邪顯正を以て自任す、平田篤胤の佛教を排撃するに方りて神佛水波辨を著はして反駁し、其後攝津の儒者中井積善か草茅危言を作り書中眞宗を排撃するに方りて師角毛偶言を作りて反駁し、西洋の宗教の流傳するに方り闢邪辨等數書を作る、安政三年十二月勸學職に任し、同五年文久四年の二回安居の代講を命せられ、元治元年六月寂す、謚を圓成院といふ、其嗣洞徹助教に昇る、師に先ちて寂す、師の著作五惡段講義、三願眞假高僧眼、宗教一隻眼、行信贅語、一鞭千里、護法濟衆編、易簀臥話、闢邪辨、奉命垂誠、各一卷、爐上閑談、淮水遺訣、二十九難一笑記、杞憂小言、闢邪小言、釋教正謬噱斥、各二卷、破邪顯正記、角毛偶語、各五卷、本典講錄二十卷、神佛水波辨若干卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ナンケー　南溪　シヨーソー正曹を見よ、

ナンゲン　南源　シヨーハ性派を見よ、

ナンコー　南江　シユーゲン宗沅を見よ、

ナンコク　南谷　シヨージユー照什を見よ、

ナンゴク　南極　ジユシヨー壽星を見よ、

ナンサン　南山　シヨーミン昭岷を見よ、

ナンジユ　南壽　シンシユー愼終を見よ、

ナンシユー　南州　コーカイ宏海を見よ、

ナンシヨー　南證　カクカイ覺海を見よ、

ナンシヨー　南證　チユーエン忠緣を見よ、

ナンソ　南楚　タイコー大江を見よ、

ナンテン　南天　ソシヨー祖生を見よ、

ナンテキ　南的　二三一八……〔淨土宗〕周防海藏寺の開山なり、　南的は一蓮社順譽と號す、法を源底に嗣ぎ、周防都濃郡富海の海藏寺を開く、萬治元年六月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ナンドー　南堂　リヨーカイ良偕を見よ、

ナンヘーサンニン　南屛山人　シヨーミン昭岷を見よ、

ナンポ　南浦　ゲンシヨー玄昌を見よ、

ナンポ　南浦　シヨーミヨー紹明を見よ、

ナンホー　南峰　ミヨージヨー妙讓を見よ、

ナンム　南無　チキヨー智慶を見よ、

ナンムイン　南無院　ニチミヨー日妙を見よ、

ナンムサンボー　南無三寶　キヨーオー敬雄を見よ、

ナンメー　南溟　シヨーケ紹化を見よ、

ナンヨ　南礜　セツネン雪念を見よ、

ナンヨー　南要　二〇一〇　二〇七七〔時宗〕相模藤澤山の僧なり、　南要は美濃の人、俗姓は山田氏なり、尊明の弟子となり、時宗を弘通し、同宗第十六祖となる、應永二十四年四月相模藤澤に寂す、壽六十八、著作四國綱心記あり、（清淨光寺記錄）

ナンリン　南麟　二三九八……〔眞宗〕紀伊磯脇安樂寺の住持なり、　南麟一名は高森、桂華と號す、別號を謙溪といふ、安

樂寺に住持し、後辭し去りて和泉佐野の敎蓮寺に寓す、久しく日溪に事へ、論註記九卷を著し、元文三年三月廿六日和泉貝塚客舍に寂す、安永某年宗主諡して理合院といふ、著作大經講錄十卷、論註啓講義九卷、選擇集稽聽還珠記、小見往生俚詮、艸論學職、各一卷あり、（本願寺通紀、本願寺派學事史）

ナンリン　南鱗　シユートン宗頓を見よ、

ナンリユー　南龍……二三三〇　〔淨土宗〕江戸梅窓院の開山なり、南龍は載蓮社頂譽、一に冠中と號す、俗姓は津田氏、下野の人、貴屋に師事して法を嗣ぎ、江戸青山に梅窓院を開く、寛文十年四月六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ナンレー　南嶺　キヨーシユン慶舜を見よ、

ナンシギ　難思議　グワツセン月筌を見よ、

ニの部

ニジアン　爾時菴　タイゼン泰禪を見よ、

ニネン　爾然（一九三一）〔臨濟宗〕三河實相寺の禪僧なり、爾然字は無外、山城の人なり、辨圓（聖一國師）に師事し、其法嗣となる、後、宋に渡りて諸禪宿を歷訪す、文永八年總州刺史源滿氏三河に實相寺を開き、辨圓を請し第一代となす、圓席に據ること僅に一日にして師に讓る、示寂の年時缺く、勅諡應通禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ニチアン　日菴　イチトー一東を見よ、

ニチアン　日菴　ドンコー曇光を見よ、

ニチイ　日意……二一七九　〔日蓮宗〕甲斐身延山第十二代なり、日意字は法鏡と云ひ、圓敎院と號す、初め天台宗比叡山の僧にして勢州桑名村妙蓮寺に居り、後ち甲斐身延山に至り、第十一代日朝と法戰三晝夜にして遂に其說に服し、名を改めて日意と云ひ、比叡山の籍を削る、爾來日朝に師事す、後ち日朝主席を與へ、自ら覺林房に遷る、乃ち主座に在ること二十年、西谷に病を養ふ、今の圓敎坊なり、永正十六年已卯の春三月三日寂す、世壽詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチイ　日意　二一八一／二一三三　〔日蓮宗〕下總平賀本土寺の第八代なり、日意字は秀鏡、俗姓は足立氏、下總國八幡庄市川の人なり、幼にして佛敎に皈し、平賀本土寺第六代日福に師事し、喜多院に遊學して、天台の講を聽く、後、平賀に歸り、宗意を受く、身延山の日朝より觀心本尊鈔の口決を受く、文安五年二十八歲にして平賀本土寺の主となる、檀越曾谷直滿、狩野但馬入道行蓮、信濃入道朗意力を盡し伽藍を造營す、長祿二年原能登守胤繼小西の阿彌陀堂を毀ちて法華堂を造營し、師を請て開山となす、妙高山正法寺と號す、後に小西談林と云ふ、市東の光德寺、中野の本原寺、白井庄彌富の長福寺、小山の法宣寺等は皆師の手創なり、古河將軍成氏師の德望を聞き、家臣小笠原右馬助を使はして禮聘し法化を請ふ、師平賀本土寺に主たること十八年なり、應仁二年偶微恙を感じ、小西の日瑞を招きて席を讓る、文明五年四月九日寂す、壽五十三、著作八敎攝記、狂少破圓記、各二卷、本尊鈔相傳見聞一卷あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチイ　日迨　二三〇〇／二三六一　〔日蓮宗〕安房誕生寺第二十一代なり、日迨字は遵慮、號は寂如院、京都の人、立本寺日芳、

身延山日脱に師事し、飯高談林に學び、松崎談林の化主となる、京都立本寺に住す、後武藏八王子に隱れ、再び出て誕生寺を司る、元祿十四年七月五日寂す、壽六十二、(本化別頭佛祖統紀)

ニチイ　日怡尼 二二八五 二三二四 〔日蓮宗〕京師瑞龍寺第二代なり、日怡號は瑞圓院、九條關白幸家の女なり、寛永十八年七月二十四日剃髮受戒し、瑞龍寺に居ること二十四年、寛文四年二月三日寂す、壽四十、(本化別頭佛祖統紀)

ニチイ　日位 一九七八…… 〔日蓮宗〕駿河本覺寺の開山なり、日位は治部卿と呼ぶ、幼にして日蓮の弟子となる、晩年駿河國有度郡池田の鄉に隱棲し、一心精進して題目を唱ふ、同郡村松鄉に瀧水山海上寺あり、天台の道場なり、寺主師の道化に歸し、切に師を請ふ、師已を得ずして出て同寺に住し、後法弟淡路阿闍梨日賢を招て席を讓り池田に歸る、文保二年四月二十三日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチイン　日允 二二七九 二三五二 〔日蓮宗〕京師妙覺寺第二十四代なり、日允字は玄通、號は本通院、父は本阿彌光悅なり、師身延山日遠に師事し、中村談林の講主となり、本法寺法華經寺を經て京都妙覺寺に住す、父光悅の筆法を受けて書を能くす、晩年鷹峰に隱る、元祿五年十一月十六日寂す、壽七十四、(本化別頭佛祖統紀)

ニチイン　日胤 (一七二五) 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、日胤は律靜房と號し、千葉常胤の第七子なり、園城寺に住し、治承中源賴朝の密旨を受けて家門再興を禱り、一千日を期して石淸水に詣で、大般若經を默誦して神助を求む、會々以仁王兵を起して園城寺に入る、師これを聞き、弟子日慧をして代りて祈らしめ、自ら王に從ひて奈良に赴く、光明山に至り、王流矢に中る、師追兵と奮戰して死す、賴朝大に悼み伊賀山田鄉を園城寺に附して師の冥福を祈らしむ、(大日本史)

ニチイン　日胤 一九六六…… 〔日蓮宗〕下野妙光寺の開山なり、日胤は下野古河邑主某の子なり、幼にして日蓮に投じて出家す、晩年に至り一寺を創して居る、官俸地を割て與ふ、寺中に日蓮自筆の大曼荼羅を藏す、德治元年四月六日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチイン　日胤 (二三七六) 〔日蓮宗〕京師妙顯寺の僧なり、日胤字は周泉號は速現院と云ふ、享保の頃學名あり、著作、指要鑽仰一卷あり、(日蓮宗史料)

ニチイン　日印 一九二四 一九八八 〔日蓮宗〕本成寺派の開祖なり、日印俗姓詳かならず、(或は朝倉氏なりとも云ふ)、文永元年越後國三島郡寺泊に生る、八年十月日蓮佐渡に謫せらるに方り、寺泊に於て謁を請ひ、摩訶一丸の名を授けらる、後ち同郡石瀨村天台宗青龍寺の智觀法橋の弟子となる、永仁二年三十一歲にして相模鎌倉に遊び、日蓮の高弟日朗の摩訶止觀を講ずるを聞き、舊宗を捨て丶其門に入り、名を摩訶一阿闍梨日印と改む、五年越後蒲原郡大藻の莊薄曾根村に精舍を營み、靑蓮寺と號す、德治元年四十三歲の時、同郡東島村に妙蓮寺を建つ、延慶二年四十六歲の時越中國天台宗の學匠淨信法印舊宗を捨て丶皈依す、正和三年五十一歲師日朗を靑蓮寺の初祖に仰ぎ、且山門の號を請ふ、元應二年五十七歲大光山本國

寺を鎌倉松葉谷に創立す、嘉曆二年六十四歳、本成寺を以て本門三大秘法の根本道場と定む、後舊師智覩の日蓮の法義を難問するに答へ遂に改宗せしむ、晩年本成本國の兩寺を嫡弟日靜に附し、兩寺統一の貫主とす、(其後所以ありて本成寺に於ては日靜を除歴す)嘉曆三年十二月二十日鎌倉に於て寂す、壽六十五なり、(一傳に越後金津妙蓮寺にて寂すと云ふ)著作、本迹躰一鈔、鎌倉殿中問答記(日靜筆記)各一卷あり、(本化別頭佛祖統紀、佛教各宗綱要)

ニチイン　日院　一九九二/二〇三三　〔日蓮宗〕甲斐身延山第六代なり、日院は寶敎阿闍梨と呼び、甲州巨摩郡梅平村の人なり、其姓は詳かならず、幼にして日進の門に入り、剃髪染衣し、比叡山に上り、南都に遊ぶ、諸宗に偏參すること三十餘年にして身延山に皈る、日臺に隨侍し日蓮の宗致を受け、遂に日臺の跡を嗣ぎ、第六代となる、應安六年六月二十五日寂す、壽六十二なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチウン　日運(……)〔日蓮宗〕美濃常在寺第四代なり、日運俗姓齋藤氏、出家して京都妙覺寺日善に師事し、後ち出でゝ美濃岐阜常在寺に住す、寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチウン　日運　二〇八五……　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第四代なり、日運は刑部卿阿闍梨と稱す、碑文谷法華寺の僧なり、法義の紊亂を憂ひ、曾て矯正の志あり、後、日什に信歸し徒弟となる、日什の寂後日仁に事へ、後日仁の席を繼きて妙滿寺を領し法化盛んなり、應永三十二年寂す、壽缺く、著作日運記若干卷あり、(日蓮宗史料)

ニチウン　日運　二三〇二……　〔日蓮宗〕寶乘寺第十九代なり、日運號は本藏院、妙珍山寶乘寺に住し、四方山本藏寺を開き、讀經三千部、寛永十九年一月十九日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチウン　日運　二三四六……　〔日蓮宗〕京師本國寺第十八代なり、日運字は尊周、乘體院と號す、俗姓は源氏、六條家宰相有純卿の九男なり、俗世を厭ひ、日桓の室に投じ、出家して關東に遊び、飯高談林に於て修學し學行兩つながら進み、終に菊亭家の猶子となり、日桓の後を嗣で本國寺に主となり、僧正に昇る、後ち葉山に退隱す、依つて葉山僧正と呼ぶ、貞享三年丙寅十一月二十五日江戸にて化す、師門下に日逞日解あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチエ　日慧(二〇八四)〔日蓮宗〕上總中山安世院開山なり、日慧は中山法華經寺日祐に師事し、同門日經と共に道譽あり、後ち中山に安世院を築きて住す、應永三十一年三月十三日寂す、壽缺く、

ニチエ　日慧　二二八四……　〔日蓮宗〕相模本覺寺第十一代なり、日慧字は慈眼、號は遠了院、身延山第十七代日新に師事し、飯高談林に學ぶ、京都妙傳寺、鎌倉本覺寺に歴住し、寛永元年十二月五日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチエ　日慧　二三〇三/二三九〇　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第二十一代なり、日慧字は智俊、智定院と號す、和泉堺の人なり、本光寺善龍院主に依りて得度受戒し、十三歳にして鷹峰談林に入り、十九歳の時中村談林に走り、後肥後蓮政寺主となり、六條の請に依り、文句を講じ、紀州感應寺主となり、中村の化

キ位に充つ、終に龍華院妙顯寺の主席を嗣ぎ、退いて鳴瀧三寶寺に隱れ、後鷹峰體眞庵に遷る、享保十五年九月十五日、壽八十八にて寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエ　日惠　二二四〇 二三〇二　〔日蓮宗〕肥前本蓮寺の開山なり、日惠號は本瑞院、幼にして肥後本妙寺日眞に師事し、二十六歲にして本經寺に住し、寺務十四年にして退き、長崎に入る、當時長崎耶蘇敎盛んなりしかば、師は之を敎化せんとして屢〻難に逢へり、幕府其志を稱し寺地を與ふ、後に聖林山本蓮寺と謂ふ、寺務十四年寬永十九年十月二十日寂す、壽六十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日叡　一九九四 二〇五七　〔日蓮宗〕相模妙法寺の開山なり、　日叡字は楞嚴房、大塔宮護良親王の王子なりと云ふ、親王鎌倉に薨し給ひたる後、母に依り難を逃れて鎌倉に至り、親王の墓を拜し、後ち本國寺日靜の許に出家す、日靜の京都に還れる後、鎌倉に妙法寺を開き、父親王の名を掩ひ、讀經唱題を事とす、應永四年十一月九日寂す、壽六十四、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日叡　一九七八 二〇六〇　〔日蓮宗〕甲斐身延山第七代なり、　日叡は上行院と號し、十三歲にして日進の室に投ず、然るに不幸にして早く離れ、日善に奉仕す、日善も亦た幾何ならずして寂す、因て笈を負ひ東西に歷參し、比企ヶ谷日輪の門に留る、應安六年の夏身延山に主となる、時に五十六歲なり、永德元年の秋比企ヶ谷の主席を兼ぬ、應永七年五月七日寂す、壽八十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日榮　……二〇六一　〔日蓮宗〕相模大明寺の開山なり、　日榮字は大明房と云ふ、相模三浦の人、父は平三郎と云ふ、日郎に歸依し法華平三郎と稱せらる、後ち本國寺日靜に歸依し、益〻法華經を信じ、遂に宅を寺となし、大明寺と云ふ、日榮は父の命を受けて出家し、同寺に住し、道力堅固なり、應永八年十一月二十六日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日榮　一九六八……　〔日蓮宗〕甲斐本國寺の開山なり、　日榮一に日淨と云ひ、字は最蓮と云ひ、京師の人なり、初め天台宗の學僧なりしが、事に坐して佐渡に流さる、文永九年の春日蓮に見え、弟子の禮を執り、改めて日榮と云ふ、十一年の春日蓮鎌倉に歸る、翌年師身延山に至り奉侍す、晚年に至り茅屋を山麓に結んで其地を下山と云ひ、延慶元年四月十八日（一傳二日）寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日榮　（二三七六）　〔日蓮宗〕山城本瑞寺の學僧なり、　日榮字は忍辱鎧と云ふ、享保の頃西陣の本瑞寺に住し、學名あり、著作、修驗故事便覽五卷、法律阿梨樹章二卷あり、

ニチエー　日英　（二一四八）　〔日蓮宗〕越中氷見寶德寺の開山なり、　日英元は眞言宗の僧にして、圓了房法印照英と云ふ、過〻榮昌院日能に逢ひ法論の後ち遂に日蓮宗となり、寺を改めて寶德寺と呼ぶ、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー　日英　……二三〇七　〔日蓮宗〕京都立本寺第十六代なり、　日英は本學院と號す、京師立本寺第十六代の主となり、師道德高く、晚に鳴瀧三寶寺内に菴を結びて居す、深草の日政日燈等に推重せらる、正保四年正月二十五日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエー 日英 二二七五 二三三六 〔日蓮宗〕京都妙滿寺の僧なり、日英字は受詮、號は精進院と云ふ、俗姓北村氏、上總山邊郡東金の人なり、日信法印に依りて出家す、法印歿後日乘律師に就いて業を受け、承應年中宮谷檀林に入りて止觀を講す、萬治年中本國寺講主となり、大に寺門を興す、僧學貞等不受不施の說を唱ふ、師其非を論し、彼等を伏す、寬文三年慶印に繼きて妙滿寺に住す、同九年關西の諸大寺の僧不受不施の說を唱へて、師を誘ふも、師應せす、同年の冬僧の讒誣により日向國に謫せらる、師謫所に在りて法華弘通を事とす、延寶四年八月四日謫所に寂す、壽六十二、臘五十三、後三年日嚴僧都等上表して師の罪を赦されんことを請うて聽許せられ、遺骨を鳳皇山に葬る、（日英上人略傳、野口義禪氏返信）

ニチエー 日英（二四九三）〔日蓮宗〕備後妙顯寺の學僧なり、日英は英園院と號し、其鄕貫詳かならず、天保の頃備後妙顯寺に住して學譽あり、寂年缺く、著作、安國論新註、四宗要文纂集、祖書肝要集、御書續集、各三卷、摧邪辨正錄二卷あり、（日蓮宗史料）

ニチエー 日永 二二〇五 二三八三 〔日蓮宗〕紀伊報恩寺第二代なり、日永號は大通院と云ふ、日順の弟子なり、小西談林に學び、藻原寺に出世す、後、紀伊報恩寺に轉す、享保八年十一月十二日寂す、壽七十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン 日衍 二二一九 二二七一 〔日蓮宗〕京師妙顯寺第十二代なり、日衍は字を春皐と云ひ、備前の人なり、諸方に參歷して越前の妙泰寺に於て法華玄義を講ず、後ち京都妙顯寺に主となりて奈良に赴き唯識等を究む、慶長十六年十月十六日寂す、壽五十二なり、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ニチエン 日衍（……）〔日蓮宗〕佐渡根本寺第十三代なり、日衍號は旃林院、京都妙覺寺の徒となり、後佐渡塚原根本寺第十二代日是の招きに依り、同寺の第十三代の主となり、大に寺基を起す、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン 日圓 二一四九 …… 〔日蓮宗〕京師本國寺第十代なり、日圓は成就院と號す、學業成るの後ち日野家の猶子となり、大僧都に任じて本國寺の住持となる、初め天台宗の徒なり、敎傳來りて宗義を詰り、師と議論すること數日にして其非を悟り、衣を更め名を改めて師事し、後ち粟田口に居る、乃ち正法寺の開山是れなり、師一住二十四年にして延德元年七月廿九日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン 日圓（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、日圓俗姓不詳志氣淸粹にして菩提心を發し、一心三觀の敎義に明なり、僧官を嫌ひ、岩窟に棲居す、金峰山に登り、岩窟を求めて禪坐し、鹽穀を斷つ、後美作の眞島山に移る、師支那の淸涼山に到らむとし、商船に乘りて出航し、宋に着し、勝地靈跡を巡遊し、天台山國淸寺に留り、終に同寺に寂す、年時缺く、（本朝高僧傳）

ニチエン 日圓 二二二七 二二六五 〔日蓮宗〕下總日本寺の開山なり、日圓字は慧雲、後字を以て院號と爲す、下總國香取郡飯高村の人なり、俗姓は椎名氏、妙見社地妙福精舍に入りて度を受く、時に日生飯塚談林に在りて大衆に接す、師往て師事す、日生徒を率ひ飯高に移る、師亦隨侍す、日生職を辭

して京師に歸り、師の才を愛して後職蓮成日尊に托す、師益困學し竟に首座となる、慶長三年化主日尊池上本門寺に住す、法雲日道後を繼いて化主となる、日道幾ならず身延山に昇住し、後の化主決せず、大衆京師の一如日重を延んとする者あり、師を推さんとする者あり、大衆亊分して議決せず、師これを厭ひ、間行して逃れ去る、竊に中村淨妙寺に寓す、大衆之を聞きて追從して至る、師面折すれとも去らず、遂に如何ともする能はず淨妙寺に講を開く、飯高檀林日重を迎ふるも日遠代りて至る、爾來飯高、中村兩檀林相分る、家康封を寄せ別に正東山日本講寺と呼ふ、日遠師の道儀を崇敬して相交る、八年日遠身延山に進む、大衆をして師を請せしむ、師再三固辭するも日遠强て促す、師已むことを得ずして終に飯高談林第四代の化主と爲る、十年六月四日寂す、壽三十九歲、著作顯性錄私記、金錍論私記、各一卷あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチエン　日延　二二三一　〔日蓮宗〕甲斐身延山第十代なり、日延は觀行院と號し、武藏の人なり、日億に隨つて業を受け、日億の寂後舊家に皈り、老母に仕ふ、後ち身延山の請に應じて化主となり、一住十三年、寬正二年四月二十六日寂す、其壽詳ならず、俗弟に是正あり、天台の徒となり、仙波談林の化主位に昇りしが身延山に來り兄日延と問答累日にして大悟す、乃ち鎌倉三島兩本覺寺の開山日出是れなり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン　日延　二二□□　〔日蓮宗〕京師妙臺寺の中興なり、日延號は大聖院と云ふ、京都妙覺寺第六代の主となり、後紀伊多田に入り、妙臺寺を再興す、文安元年九月八日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン　日筵　二二六九／二三四一　〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十九代なり、日筵は字を春山と云ひ、隆源院と號す、初め正東談林に遊び、後ち其化主となり、次に京師妙顯寺に住す、後ち遂に身延山の主となり、一住六年、天和元年正月二十七日羽州秋田府にて寂す、壽七十三なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン　日演　二二五五／二三一八　〔日蓮宗〕下總中山法華經寺の學僧なり、日演は顯壽院と號す、堺妙國寺に住し、中山法華經寺に轉す、萬治元年閏十二月十七日寂す、壽六十四なり、著作敎證二道義、家々義、各一卷、入重玄門義若干卷あり、

ニチエン　日演　二二七二／二三三八　〔日蓮宗〕紀伊養珠寺第三代なり、日演字は良住、通玄院と號す、京師の人、勸修寺家の族なり、早く世相を厭ひ、頂妙寺第六代覺性院日瑞に投して出家得度し、六條談林に於て業を受く、後、中正院日護に從て本化の奧旨を受く、一時堺の常住寺に唯識論を講ず、請に依て若狹國長源寺の主となる、慶安二年紀伊侯德川賴宣師を招て妹背山に住せしむ、承應三年養珠寺の堂舍佛閣新造畢る、是に於て妹背山養珠寺合して一と爲す、師を請て主たらしむ、師一住十餘年、寺傍に菴を築き閑居す、是も亦寺となり、後に演光寺と號す、延寶元年五月六日寂す、壽六十七、初め明曆三年權律師位に任す、平生の著作止觀輔行畧記、高祖遺書解あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチエン　日演　ニチショー日性を見よ、

ニチエン　日淵　二二六九　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第廿六代な

り、　日淵は久遠院と號す、道譽內外に聞ゆ、織田信長の京に在るや曾て師を請して法華を聽講す、安土に淨土宗と法論の時、藏經點撿の任に當れり、後、寂光寺を創立して十六本山に列せしめ、大に宗風を闡揚せり、慶長十四年寂す、壽缺く、著作略述大藏經百卷、法華玄義私通記、文句惣釋記、止觀指的鈔若干卷あり、（日蓮宗史料）

ニチオー　日應（二一九八）〔日蓮宗〕尾張大光寺第二代なり、　日應俗姓生國未詳、身延山第十三代日傳に師事し、上野奈和の本妙寺第二代となり、同寺の尾張清須に遷さるゝに方り、妙瑞山大光寺と改め、同じく同寺に住す、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチオー　日應（二三〇九 二三九三）〔日蓮宗〕佐渡妙照寺第二十六代なり、　日應字は空心、號は淨感院、京都の人なり、本滿寺日逞に師事し、後小室談林、飯高談林、水戸談林等に遊學す、水戸談林化主日省の弟子となり、其命により相模栗原村法泉寺に主たり、五十三歳にして佐渡一谷妙照寺に轉し、寺務二十年、中興の祖と稱せらる、享保十八年七月十八日寂す、壽八十五、（本化別頭佛祖統紀）

ニチオー　日應（……）〔日蓮宗〕京師妙滿寺の僧なり、　日應は妙滿寺日繼に師事し折伏を以て名あり、著作與破記一卷あり、（日蓮宗史料）

ニチオー　日應（……）〔日蓮宗〕某寺の僧なり、　日應字は空水、始め飯高談林に學び、後塵世を厭ひ、奥羽會津に隱れ、詩文を弄ふ、示寂の年時缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチオー　日雄（……）〔日蓮宗〕山城法華寺の僧なり、　日雄字は善住始め原田の法華寺に住し、後鳴瀧三寶寺に隱る、示寂の年時缺く、（艸山集、本化別頭佛祖統紀）

ニチオー　日雄（二二四二 二三一五）〔日蓮宗〕攝津法華寺の僧なり、日雄字は實成、若狹小濱の人、俗姓内藤氏なり、天正十年四月八日に生る、幼にして出家し、後瀨山日賢に師事し、字を善住と云ふ、後、身延山に登り、法華經の行者となり、靈異を感す、寛永の頃西遊して攝津紀伊に巡化す、寛永十二年攝津豐島郡原田妙見山に法華寺を創す、同二十年同寺を弟子日遙に讓り、寺側に退隱し、讀誦を事とす、正保三年九月山城鳴瀧三寶寺に入りて草菴を營み、承應二年若狹に歸り、即圓坊を築く、明暦元年四月十九日寂す、壽七十四、（草山集）

ニチオー　日雄（二二五九 二三三四）〔眞言宗〕山城愛染寺の學僧なり、　日雄字は天阿、俗姓は堀氏、近江坂田郡の人なり、幼にして郡の神照寺に投じて薙髮し、空雄僧都に隨つて兩部の灌頂を受け、去りて醍醐山に登り、大僧正寛濟に師事して再び密印灌頂を受け、諸尊の秘軌を傳へらる、寛永中山城稻荷山愛染寺に住す、智積院の宥貞僧正に謁して根嶺の幽旨を探る、寛文中神照寺に遷り、灌頂壇を開き、大に道俗を度し、後稻荷山の麓に退隱す、師性修鍊を好み、歡喜天の密軌を行こと凡そ二百六十五度、許可、及傳法灌頂を受くる者一百二十八人なり、延寶二年二月十五日寂す、壽七十六、臘五十六、（續日本高僧傳）

ニチオー　日奥（二二二五 二二九〇）〔日蓮宗〕不受不施派の開祖なり、　日奥別に安國院と號す、永祿八年六月京都に生る、十歳にして妙覺寺の日典に師事し、十八歳に至り剃髮受戒す、

文祿元年師の跡を嗣ぐ、四年九月豐臣秀吉大佛妙法院に於て千僧供養を營み、各宗より各一百名の僧を請招す、日蓮宗の諸師皆之れに應するに、師獨り不受不施の義を唱へて應せず、同月十五日妙覺寺を退き、丹波國小泉に隱退す、慶長四年德川家康大坂城に召して千僧會に出席せんことを勸むれども應ぜず、五年六月遂に對馬に謫せらる、謫所に在る十三年、大に困苦するも初志を變せす、慶長十七年赦に逢うて歸京し、寬永七年三月十日妙覺寺に寂す、六十六歲なり、著書宗義法制論三卷、守護正義論、斷惡正善抄、禁斷謗施論、各一卷、萬代龜鏡錄(一代著作の全集)等あり、(日蓮宗史料)

ニチオク　日億　二〇八二……〔日蓮宗〕甲斐身延山第八代なり、　日億は行學院と號し、甲斐波木井の鄉の人なり、兄弟三人あり、早く父母を失ひ、共に日叡に師事す、長は即ち日億なり、次は比企第六代の主日行と云ひ、末を成就院日學と云ふ、應永二十九年十一月八日寂す、世壽詳かならず、初め赤澤村八幡宮の側に一寺を構ふ、後に長德山妙福寺と號せり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチオン　日遠　二二三二／二三〇二〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十二代なり、　日遠字は堯順、號は心性院、別に一道と云ふ、俗姓石井氏、京都の人なり、父を了玄と云ふ、師二兄あり、了程了具と云ふ、皆學才ありて和歌に長す、師幼にして父を喪ひ、六歲母に從ひ、本國寺に至り、日重を仰いで得度し、專ら天台教を學ひ、十六歲自ら法華經を講す、尋て文句止觀を講す、南都に遊びて倶舍唯識戒律等を究め、京都に歸りて東山に大藏經を讀み、鈔錄三十卷を作る、廿八歲下總飯高談林より請せられて出發し、文句玄義等を講す、三十三歲身延山に主となり、山内に立正會を開き、大に學事を獎勵す、會常樂院日經、淨土宗の僧に難を搆へらる、師駿河に至り家康に謁し、法論を決せんとするも許されず、乃ち去りて身延山を辭し、大野に隱棲し、本遠寺を開く、是に於て本遠寺に於て大衆のために三大部を講す、元和元年家康の命により再び身延山の主となり、一年にして退き、大野に隱る、寬永七年池上本門寺日樹不受不施の異義を唱ふるにあたり、師は日乾等と共に鎭定に力を盡す、後幕府其功を賞し、池上本門寺を師に附す、僅に一年にして鎌倉經ヶ谷に隱棲す、寬永十九年正月經ヶ谷に於て病に罹り、二月池上に至り、三月五日寂す、壽七十一、臘六十六、著作三大部隨聞記三十八卷、法華經大意三卷、法華經音義一卷、敎主備考二卷、不二門義一卷、文心解要文、顯性錄要文各一卷、四敎儀鈔三卷、十如是私記一卷、自鑑慚恥集九卷、聚雪鈔二卷、無礙道論一卷、安國論鈔二卷、童蒙發心鈔五卷、廻向通不一卷、嘉會宗義集一卷、千代見草二卷、色心不二門義、法華三昧抄、八重看經抄、自誓受戒作法、破奥記、一念三千等御書卷一卷、四敎集解私記、法華隨音句、法音句各二卷、見聞隨心鈔、法華譯和尋跡鈔各三卷、和訓法華經八卷、法華文段經等あり、(草山集、本化別頭佛祖統記、近代名家著述目錄、日宗著述目錄)

ニチカ　日可　二二四四／二三二一〔日蓮宗〕山城深草瑞光寺の學僧なり、　日可字は宜翁、自ら號して竹菴と云ふ、俗姓は岡田氏、讃岐丸龜の人なり、父の名は吉勝、母は井上氏なり、師の幼なる時故なくして父師の母を出す、母流落し攝津に至り、

病に寢す、師往て看護す、遂に母の起つへからさるを知り、母を奉して其故里高松に至る、母の沒するや、悲慟して葬る、時に師十八歳なり、爾來後母に事へて亦孝なり、父後母を追ふ、師愈樂ます、遂に父に逐はれて家を出て、京師に至る、承應元年二十九歳にして自ら髮を削り、西山の義萃に投す、義萃の東誠に遊へる後、興正寺掛堂に投し圓覺經の講說を聞き、般若心經の奧旨を受く、明年の冬人を介して京師に於て日政に謁し、遂に禪を捨てゝ日蓮宗に歸す、師嘗て王陽明の學を好み、傳習錄等を愛讀し、事理合一の旨を以て日政に扣く、日政笑うて曰ふ、儒は善道の一端なり、子我學に熟せは自得すへし、と、數年の後日政に從ひて攝津高槻に滯留し、一夕遽に曰ふ、我れ始めて儒佛の同異を得たり、今より後專ら宗乘を究めん、と、明曆元年三十二歳日政に從ひて深草に住す、初め師京師に在りし時、師の舊妻其母に携へられて讃岐より來り、院門の外に臨み、人をして言はしめて曰ふ、讃岐の人宜翁を尋ね來る　願くは一たび相見えん、と、師未た其誰なるかを知らす、自ら出てゝ視れは我舊妻なり、師毫も異める色なく、恭しく曰ふ、遠く來ることを辱うす、其勞を慰むへきなれとも、此處女人の門に入るを許さず、請ふ此より辭せんと、便ち入る、舊妻且つ耻ち、且つ怨みて返る、師世緣を絕つと雖、父の事を忘れす、常に其命に違ひたるを悲しみ、時々跪いて孝經を讀む、一時父事に因りて京師に止る、師問候するも、父見ることを許さす、師日々其門前に至り、躑躅して去る能はす、父國に歸りて沒して後、親戚師の家に歸らんことを勸む、然れとも已に出家すれは歸るへからす、且つ父の沒後に至りて歸るは父を欺くものなりとなす、其妹の家を齊ふを聞きて大に喜び、國に歸りて父の墓を拜す、寬文元年四月微疾に罹り、攝津高槻に滯留す、五月京師に入りて醫療を受く、病床の作あり曰ふ、夜々窓前不レ點レ燈、長抛二書卷一愛二無能一、十年倦レ學總忘了。高臥林間一病僧、六月朔京師より深草に歸り、玉鮮院に寓す、五日の朝諸友を會して訣を告け、法衣を整へて壽量品を誦し、六日日出の時奄然として寂す、壽三十八、臘十なり、門人竹菴遺稿（詩歌幷に雜記）三卷を編し、刊行せり、雜記は師か言を錄するものなり、二三を玆に揭けん、「夫道者無レ形、而從二其所一レ見以立レ言、佛者見レ之謂二之佛一、儒者見レ之謂二之儒一、道者見レ之謂二之道一、百家異道亦然、但有二淺深遠近之異一耳、識者不レ可レ不レ辨焉」、「儒者有也、道者空也、釋者中也、大哉中也、空有亦有二其中一矣」、「敎律禪三者各名二其門一、我謂不レ然夫我法也、戒定慧而已矣、若其缺レ一則非二我學一也、何禪、何敎、何律之有哉」、「大丈夫當二立レ志而一生成一レ佛矣、一生成レ佛實難矣、而無二此志一則於レ成レ人亦難矣」、「有レ志勤レ之則八萬細行、三千威儀、亦非レ煩也、無レ志墮レ之則着レ衣洗レ鉢亦煩也」、「夫一念之心一刻清淨則一刻之佛也、一時清淨則一時之佛也、一日清淨則一日之佛也、一歲清淨則一歲之佛也、適是以至二一生一一世億載何僧祇皆然可レ不レ勉哉」、（宜翁行實、竹菴遺稿、本化別頭佛祖統紀）

ニチカ　日荷　二二〇三　〔日蓮宗〕武藏金澤上行寺の第二代なり、日荷字は妙法、相模鎌倉の人、俗名荒井平次郎光善と云ふ、世々鎌倉に住す、師佛敎に歸し、武藏金澤六浦に草菴を營み、禪誦を事とし、自ら妙法禪門と稱す、建長六年

日蓮上人下總中山より鎌倉に歸る、途次草菴に一宿したりと傳ふ、師深く上人の高風を景仰し、後上人の弟子日祐（中山第三代）の鎌倉に遊ふにあたり、其弟子となり、自ら日荷と云ふ、眞言の一寺を改めて日祐を開山となし、自ら第二代となる、後に六浦山上行寺と號す、師努力衆に過ぎ、數々人を驚かせり、六浦に在りて同地眞言宗稱名寺の僧と戲に稱名寺樓門に安置せる金剛密迹の二大像を賭して碁を圍み、師勝ちたれは自ら二大像各長七尺六寸餘なるを背負ひて身延山に登り、山本坊に留り、別に金剛密迹の二小像幷に大黒天像を彫刻し、幾もなく六浦に歸る、文和元年武藏久良岐杉田に一寺を開き、日祐を請して開山となし、自ら第二代となる、後に午頭山妙法寺と號す、師六浦より中山に至る往復一日、毫も疲勞を覺えさりきと云ふ、文和二年六月十三日寂す、壽詳ならす、（日荷堂緣起、江戸名所圖繪）

ニチカイ　日海　二八三……　〔日蓮宗〕京師寂光寺の僧なり、日海字は算沙號は本因坊と云ふ、京都の人なり、寂光寺に住し碁將棊の名手を以て大名あり、織田信長豐臣秀吉德川家康等に召され、其技を以て推重せらる、家康の時權大法印となり、俸祿を與へらる、後將棊は宗桂に讓り、碁は一家の傳とす、元和九年五月寂す、（大日本史料）

ニチカイ　日海尼　二三一〇……　〔日蓮宗〕相模淨心寺の尼なり、日海號は淨心院と云ひ、相模小田原の城主北條氏綱の女なり、大永四年武藏江戸城主太田大和守資高に嫁す、一子新六郎康資を生む、資高の死後剃髮して尼となり、平河山法恩寺の傍に庵居す、讀誦唱題を事とす、天文十九年九月十四日疾みて寂す、子康資肖像を作りて之を庵に置く、其妻、寺となし日祐僧正に請ひて大覺山淨心寺の號を得たり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチカク　日覺（……）　〔日蓮宗〕美濃常在寺の第六代なり、日覺は山城齋藤道三の子なり、出家して岐阜常在寺日運に師事し、兄日饒と共に同寺に在り、終に第六代の主となる、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチカク　日覺　二一四六―二二二〇　〔日蓮宗〕京師本禪寺の僧なり、日覺は智秀と號し、尾張の國の人、文明十八年同國の妙本寺に祝髮す、十八歲にして本成寺第九代の貫首となる、著す所の書論大小十四部あり、天文四年天台宗と宗論の爲め、山門の衆徒京師日蓮宗の諸本山を燒毀し本禪寺も亦此厄に罹る、因て京師に上りて之を再興す、後奈良天皇紫宸殿に高座を設けて一七日法華經を講ぜしめ、大僧正に補し、紫衣及び七寶の珠數等を賜ひ、勅して菩提心院と號す、十四年本禪寺を日導に讓り、越中井田郷に退き、十九年十一月寂す、壽六十五なり、

ニチカク　日覺尼　二三九一……　〔日蓮宗〕淨妙菴の主なり、日覺字は離障 京師の人山田某の娘なり、幼にして父を喪ひ、壯にして世の無常を覺る、明靜院日堯に就きて得度す、深草日燈に就きて具足戒を受け、誦持餘閑なし、母も亦祝髮して榮珠と號し、共に梵業を修す、守心、離染、智光、智正の四弟相續きて來り師事す、享保十二年春淨妙庵主妙佐の後を繼きて庵に主たり、離染主座となる、偶々隣村火を失し、庵亦類燒す、日覺離染力を盡して其再建を計り、佛殿香廚を興す、享保十六年九月十八日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチガク　日學　二二一九…… 〔日蓮宗〕甲斐身延山第九代なり、日學は成就院と號し、日億及び日行の弟なり、後、八代日億の後ちを受けて甲斐身延山に主となり、一住二十八年、長祿三年十二月七日寂す、其壽詳かならず、初め帝都に觀光敎化を敷く、時に門人日讃なる者ありて學養寺を造り、日學を推して開山となす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチカン　日閑　二二七〇 二三五〇 〔日蓮宗〕駿河蓮永寺第十四代なり、日閑字は沾爾一源院と號す、心性院日遠の門人なり、飯高談林に遊學して終に玄義の講主となる、承應元年壬辰貞松寺に瑞世す、一住三十九年、元祿三年二月十七日寂す、壽八十一、（本化別頭佛祖統紀）

ニツカン　日閑　二一六四 二二六一 〔日蓮宗〕甲斐身延山積善坊第十代なり、日閑は仙壽院と號す、常に讀誦唱題を怠らず、又日蓮嚴修の別頭祈禱法を傳へ、七面山に詣て嚴修を事とし、七面の眞相を拜し大に靈異を感ず、東谷に菴を結び積善坊と呼ぶ、平生の行業麻衣木服粗茶淡飯嚫物受けず、强て之を贈れば乃ち孤貧を賑恤す、慶長六年七月二十四日寂す、壽九十八、（本化別頭佛祖統紀）

ニチカン　日鑑　四八六 二五四六 〔日蓮宗〕甲斐身延山七十四代なり、日鑑字は誠研、號は淸兮、後に白厚院と云ふ、土佐の人吉川省の子、六歲鄕の妙國寺に入りて度を受け、十四歲出遊し、六條飯高の諸檀林に學び、加賀立像寺日輝の盛聞を慕うて其下に敎を受く、後、江戸に至り、堀ノ內妙法寺に留り、寺主某の故あり獄に下さるゝにあたり、師連坐して幽囚二百餘日に至る、赦に遭うて後下總妙廣寺に住し、飯高中村の二檀林に宗乘を講す、明治五年敎部省に召され、日蓮宗の宗務を整理す、九年大敎正に任せられ、身延山久遠寺第七十四代となる、是れより先久遠寺火災に罹り、殿堂皆烏有に皈す、師拮据經營し諸國を巡行して淨財を募り、數年にして舊觀を復す、明治十九年一月十三日寂す、壽六十一、（壽碣銘、近世高僧年表）

ニチカン　日鑑　二四六六 二五一九 〔日蓮宗〕京都寂光寺二十二代なり、日鑑字は通義、號は永昌院、別に遊方と稱し、如猿と稱す、越前丹生郡眞栗村の人、俗姓西野氏、父は金三郎、母は美惠子と云ふ、十歲杤川善隆寺皓說日常に就いて出家す、文政元年十二月日常廣島本照寺に赴くにあたり、師を山內村本行寺堅通日毅に附す、翌二年春宮谷檀林に入り、宗乘を講究す、三年夏華香房に入り、五年六月始めて法席を開く、六年四月十八歲にして久々津本照寺に住す、偶吟あり曰ふ、飢食二山花一渇飲レ泉、山房無レ暦不レ知レ年、情孤性癖耽二閑話一、更對二白雲一獨樂レ天、八年十一月玄部頭に擢てらる、十一年春千葉本圓寺に遷る、十二年夏善宜惠善と共に潜龍窟に學ぶ、天保二年冬品川本榮寺に轉し、四年秋和泉妙滿寺に轉し、六年冬本山の命により越中富山正顯寺に住す、十年四月氷見に於て宗論をなして大に功あり、十二年秋眞宗の僧靈城と權實の異目を對論し、翌十三年夏能登羽咋本能寺に於て再び對論し、示正篇三卷を作る、弘化元年春越中妙經寺に住し、四年春本山の特選を以て加賀本長寺に轉住し、大に宗風を擧揚す、嘉永六年十月大坂蓮成寺に遷住し、安政四年夏備前本行寺に轉住し、六年九月空中山寂光寺の貫首に進む、明治二年十二月八日寂す、壽六十四、臘五十五、師天性剛毅潔白、事に臨み

て撓まず、居を移すこと十餘回、命を奉して錫を轉すること三回、到る處專ら折伏を旨とし、口を開けは權實本迹の法義を離れす、法席一萬餘座、四十餘年間終始違はす、化益天下に遍し、著作、示正篇三卷、正中辨、開祖略傳記、心遂醒悟論、各二卷、本門顯要鈔、内典孝經章、妙宗廻向文略註、三時感應辨、本迹正義鈔、本迹以呂波歌、斷疑生信錄、各一卷、妙宗處中辨、金剛錍解辨、日什傳辨妄、文底秘沈決、十二因緣抄、若干卷あり、(日鑑上人略傳、野口義禪氏報、日宗著述目錄)

ニチカン　日鑑　ジユヤク壽益を見よ、

ニチカン　日感（二三〇四）〔日蓮宗〕肥前本蓮寺第二代なり、　日感號は一性院、長崎本蓮寺開山日惠の弟子なり、師の志を繼いで耶蘇敎を破却す、正保中幕府其効を稱し、寺地を增し、且つ銀一千兩を與ふ、寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチカン　日感（二三二八）〔日蓮宗〕加賀實乘寺第二十二代なり、　日感號は本光院、加賀河北郡車村實乘寺に住す、寛文八年國主の命を受けて雨を祈りて驗あり、寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチカン　日幹　二四二九　〔日蓮宗〕武藏宗延寺の學僧なり、　日幹字は要敎と云ふ、武藏下谷宗延寺に住す、明和六年三月廿六日寂す、著作續種論十卷、小山茗話七卷、衞正論一卷あり、(日蓮宗史料)

ニチガン　日顏（二二九五）〔日蓮宗〕山城法華寺の開山なり、　日顏は見性院と號す生國俗姓詳ならず、山城北野に閑居し、道譽高し、松崎談林に入り、日英の下に天台の三大部を研究し、南都北嶺に遊び益研究を積み、頂妙寺日忠、本國寺日乾等と交れり、鷹峰談林より迎へらるゝも出てす、遂に北野の草庵に寂す、門人日進草庵を更めて法華寺となし、師を開山とす、(本化別頭佛祖統紀)

ニチキ　日輝　二三七三　〔日蓮宗〕京師本國寺第二十一代なり、　日輝字は尊明と云ひ、俗姓は藤原氏、大炊御門前右大臣經光の二男にして小字を志解麻呂と呼び、少にして水戸談林に掛搭し、後ち僧正に任じ、本國寺に主となる、正德三年十一月十八日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチキ　日輝　二四六〇 二五一九　〔日蓮宗〕加賀立像寺の學僧なり、日輝字は堯山、號は優陀那、加賀金澤の藩士、野口和平の第四子なり、寛政十二年三月廿六日に生る、幼名駒三と云ひ、九歳出家して郡の慈雲寺日行に隨事し、覺善と云ふ、後改めて堯山日輝と云ふ、一家日蓮宗の信者にして、母携へて日行に附したるなり、幾くもなく日行寂し、妙立寺日雄に師事し、内外の學問を修習す、日雄の師立藏寺日靜道譽あり、日輝屢次訪問して敎を受く、遂に日靜日雄に志を告げて出遊す、京師に上り深草本妙寺日臨を問ひて敎を受け、學問大に進む、乃ち國に歸りて立像寺の後園に小菴を構へ、讀誦勤行を事とし、漸く盛譽あり、前田侯召見して學資若干を寄附す、天保四年立像寺日靜寂し、其法席を繼ぎ、寺に充洽園を興して、大衆を敎養す、門下常に百人に餘る、前田侯の夫人榮操院深く歸向し、毎歲米三十俵を寄附して學資を助く、弘化四年常陸水戸談林に聘せられ其廢頽せるを中興せり、此に於て一宗の學風勃然として盛なり、師國に歸住し、著作講說に從ふ、

一念三千論妙宗本尊辨等相尋て成る、嘉永の末外國船來り、諸國物議沸く、師門下を誡め、益宗門の弘通を謀れり、幾くもなく疾に罹るも著作講説を廢せず、褥床に法華經の講義を録す、卷末より筆を起し、涌出品に至りて疾革まり、遂に寂す、安政六年二月廿三日なり、壽六十、臘五十二、門下相謀り身延山久遠寺、池上本門寺、金澤立像寺に碑を立つ、門下に新井日薩、三村日修、小林日昇等あり、著作三千論六卷、初心回向義註釋等七卷、妙法蓮華經宗義抄十二卷、日月燈、綱要正義各三卷、當要法數錄、撰時抄略要各二卷、首題要義、同略辨　弘經要義、佛法亢略、破無明論、本迹歸宗論、加持病患祈禱肝文抄、禮誦儀、三秘指要抄、五種法師法則、同略法則、同略々讃、同回向文差定等、佛界一覽抄、本尊抄略要各一卷、事觀略議、四句格言辨、唱題運想儀、久遠偈要觀、雙照二觀精要編　雙照談事理修相編　本尊廣辨、同略辨、同略々辨、宗義錄、同二編、事理二觀略抄、台荊異目、事觀眞實義、事觀略伽陀、文底秘沈決讀、正誑談、佛身普相編、台延二觀義、同宗要錄、祈禱肝文註釋、學佛具眼抄、具佛知見抄、心海寶藏抄、護法知時論、攝折進退論、事觀最實義、法華折伏略抄　乘幹決、玄要略、六即論、庚戌雜答、蓮華釋、日天子宗要記　艸山要路註釋、法界次第註釋、四敎儀決疑、大部四敎儀科文、玄籤微錄、同分牒、四敎各相辨、六度集經講錄、水法界、藥師佛回向義釋、三千空門、妙語拾遺、讃經要文、玄序並回向文、葬儀要句集、放生要文、曼荼羅供養讃、觀心讃差定剃髮式、法界次第略頌、漢土台宗系圖、漢土歷代略頌、本化別頭統紀略抄　首題功德抄、歷緣　觀抄、離愛法話、音訓假名道、祖書玉の海、物勸文抄略要、當體義抄略要、法華題目抄略要、唱法華題目抄略要、明因果抄略要、十法界抄略要、同疑釋、遠沾妙道抄開目抄講錄、敎機時國抄略要、錄外要卷各若干卷あり、（日輝上人傳、日蓮宗史料）

ニチキ　日暉　二四一七／二五三七　〔日蓮宗〕伊豆玉澤妙法華寺の學僧なり、日暉號は白蓮華と云ふ、本姓物部氏、父は森本氏、母は石塚氏、下總國葛飾郡松本村の人、文政十年四月を以て生る、家貧にして師の午後母に別れ、祖父に哀憐せらる、人の語に因り、玉澤の妙法華寺に托せらる、五歲にして出家し、日桓上人に師事す、十歲始めて法兄日智に從うて內外の書を學び、三年の後退いて獨學し敎觀に意を傾く、三十一歲東京に住し、學譽高し、明治元年四十二歲にして玉澤の妙法華寺に住し、大に一宗の門風を張る、明治七年十二月安心立行篇合法久住篇を著す、明治十年九月十一日寂す、壽五十一なり、（日蓮宗史料）

ニチギ　日宜　二三〇五／二三七四　〔日蓮宗〕山城本國寺第二十三代なり、日宜字は素雲、忍稱院と號す、中村談林の化主なり、久しく貞松山に住し、大衆の請を受けて本國寺の主席を補す、正德四年三月十六日寂す、壽七十、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギ　日義　……二〇五七　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第二代なり、日義は伊豫阿闍梨と稱す、日妙に代りて玄妙寺を領し、後日什の遺命により移りて妙滿寺の二代となる、諸堂の規摸を完備し、總本山の資格を定む、應永四年寂す、壽缺く、

ニチギ　日義尼　……一九五八　〔日蓮宗〕甲斐妙立寺の開山なり、日義字は妙圓、波々井六郎實長の養女なり、駿河村岡

民部大輔某に嫁す、民部大輔は承久の亂に戰死し、家亡ふ、師少にして鎌倉執權經時の寵を得、北條相模守時國を生む、文永十一年日蓮比企ヶ谷に還り開堂するに際し、往きて投し、剃度を求め妙圓日義と云ふ、至誠至信讀經唱題甚だ勵む、時國幾によりて常陸水戶に竄せらる、時國の舊臣相謀り義兵を擧げ、伊具柴田勝田の三郡を得時國の舘を築く、師此地に一寺を造り、日蓮の德、實長の恩に報ひんとす、是奥州伊具郡妙圓山妙立寺なり、道俗の歸依頗る多し、家臣悉く宗門に歸し、傍に久圓寺、圓日寺、久正寺、正覺寺を造り宗風を興す、師故波木井實長（法名日圓）を崇めて開山とす、永仁六年四月十二日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

〔考〕一說に妙圓は神次郎村に生れ、甲斐波木井氏に嫁し、實長死後舊地に來り、寺を造ること八ヶ所に及ぶと云ふ、永仁六年三月十三日寂す、委くは高祖年譜攷異に見ゆ、

ニチギン　日銀　二二九四……〔日蓮宗〕山城寶塔寺の中興なり、　日銀字は亥旨、號は圓頓院、幼にして出家し、龍華日堯に師事し、十四歲飯高談林に入る、後日堯の命を受けて山城深草に至り、寶塔寺中興の業を全うし、寬永十一年九月二十日寂す、壽缺く、（草山集、本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日經（……）〔日蓮宗〕下總中山淨光院の開山なり、　日經は中山法華經寺日祐に師事し、其敎化を助く、晚年中山に淨光院を築き住す、寂年缺く、

ニチキヨー　日經　二二八〇……〔日蓮宗〕京師妙滿寺第二十七代なり、　日經は常樂院と號す、妙滿寺に住し、權大僧都に叙せらる、諸國を經行して折伏を事とし、向ふ所敵する者なし、慶長十三年江戶城にて淨土宗と法論を開く、德川幕府淨土宗の學僧の言に依り、日蓮宗諸本山に令して經文に據り、念佛無間の本據を出さしむ、師奮ひて之に答ふ、幕府大に怒り、師弟を捕へて劓刑に處す、弟子一人之に死す、師獨り、經織に符合するを悅ひ、刑場に於て本尊を寫す、血痕斑々たり世に日經の血曼陀羅と稱す、寺を開創すること五十餘所、元和六年寂す、壽缺く、著作本迹問答用心記、謗法顯示筆端抄、法華顯要抄、淨土宗論記錄、釋尊所證法躰抄　本迹問答記錄、淨土宗難詰廿三ヶ條、寸刀、各一卷、山崎問答等あり、

ニチキヨー　日經　二〇七一……〔日蓮宗〕京師本國寺第六代なり、　日經は一意院と號し、日傳の門人なり、十五歲にして師の跡を嗣ぎ、本國寺に主となり、大僧都に任ず、世に見貫首と呼ふ、在職三年應永十八年正月十二日壽十八にして寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日敎（……）〔日蓮宗〕相模本蓮寺の開山なり、　日敎俗姓生國詳ならず、日蓮在京の間其信徒に淨本妙蓮夫婦あり、師弟の禮を執る、日敎は其裔なり、日敎本の舊宅に寺を造り、本蓮寺と呼ふ、示寂の年時、及び壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日敎　二二一六／二二三八〔日蓮宗〕京都妙顯寺第九代なり、　日敎は西園寺藤原氏の子にして弘治二年を以て生る、妙顯寺日廣の寂後王席を缺くこと數年なり、師尙ほ少なれども推されて住持となる、天正六年七月二十四日寂す、壽僅に二十三なり、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日敎　二〇七九／二一五二〔日蓮宗　越中妙傳寺の開山な

り、　日教は大覺院と號す、俗姓生國詳ならす、越中國新川郡太田庄に法流山妙傳寺を開く、後六條大僧都日助呼て北地の弘道處となす、權僧正日禎佐渡參拜の時富山に寄寓して師の意により法流山妙傳寺を開く、其後師加賀金澤に法流山妙傳寺を開き北國に宗風を興す、明應二年四月十八日寂す、壽七十五、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日慶（二二九五）〔日蓮宗〕下總法界寺の開山なり、　日慶號は常誦院、生地姓氏共に詳ならす、下總公崎に菴を結び、經卷一萬部を讀誦して靈驗あり、後、菴を萬部山法界寺と稱し、日慶開山となる、日乾師に常誦院の號を與ふ、寂年詳ならす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日慶尼（一九七四）〔日蓮宗〕武藏日慶寺の開山なり、　日慶俗姓生國を詳にせす、日向を崇拜し、法を受けて深く日蓮を崇め其像を彫刻せんとし日向に請ふ、日向之を許す、師手つから刀を執りて彫刻す、後、武藏の豐島郡に居り、谷中に一寺を創し、其像を安置し日慶寺と呼ぶ、示寂の年時及び壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日境（二二六二―二三一九）〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十七代なり、　日境は字を叡長と云ひ、通心院と號す、正東談林の化主なり、慶安元年請を受けて身延山に主となり、一住十二年、萬善堂を改造す、此時平賀日述、小湊日運、碑文谷日晴、奧津日遵、谷中日誠等黨を結び、邪義を唱ふ、承應元年師幕府に訴ふ糺明未だ終らず、萬治二年十月廿八日江戸に於て寂す、壽五十八なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日鏡（二一六七―二二一九）〔日蓮宗〕甲斐身延山第十四代なり、　日鏡は善學院と號す、幼にして日意の門に入り、日意の寂後日傳に奉侍し、本化の奧義を究め、終に甲斐身延山に主となる、弘治の頃武田の家臣原美濃守信知、小幡山城守信貞と交り篤し、兩氏相議して信濃海津の城下にある日蓮の檀越久龍氏法名蓮乘が宅を寺となし、師を請うて開山となす、名けて久龍山蓮乘寺と云ふ、甲斐篠原村に八幡山法久寺を立つ、家康開運の符を請ひ後ち關八州及び甲信の主となり身延山に詣でゝ謝したりと云ふ、師晩年西谷に退隱し、永祿二年四月廿五日寂す、壽五十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニツキヨー　日曉（一九二四……）〔日蓮宗〕安房鏡忍寺の開山なり、　日曉字は鏡忍、幼にして日蓮に師事す、文永元年十一月十一日日蓮安房の小松原に於て、平景信が厄に遭ふ、師之れを禦がんと欲して難に死す、工藤吉隆も亦同じく死す、吉隆の子日隆其地に寺を開き師を追尊して開山となす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日曉（二一二六……）〔日蓮宗〕京師本國寺第九代なり、　日曉は妙勝院と號す、初め備後房と呼べり、出家の後ち學行已に熟して華山家の猶子となり、僧正に任じ、本國寺に住すること二十餘年、文正元年閏二月六日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチキヨー　日曉（二三四八）〔日蓮宗〕山城鷹峯の學僧なり、　日曉は字圓海號一音院といふ、元祿の頃山城鷹峯に住して學名あり、著作法華安心錄、同羽翼邪正問答（一名八代問答）各一卷あり、（日蓮宗史料）

ニチギヨー　日堯（二一六六……）〔日蓮宗〕京師本國寺第十一代

なり、日堯は大聖院と號し、俗姓は牧氏なり、出家し學業成るの後ち華山家の猶子となり、日圓の囑を受けて本國寺の主位を補し、永正三年五月二十七日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日堯　二二〇三／二二六四　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第十代なり、日堯は字を淳譽と云ひ尾張の人、少にして出家し、下總飯高談林に入り、多年學を修め、後、諸國に歷遊して專ら行化を布く、後ち妙顯寺に主となり、京都に化を布く、天正十一年關白秀吉新居を築くに依り、伽藍を遷し建築す、北岩倉寶林山金龍寺、鷄冠井村の勝中山興隆寺を造り、晩年に至り華光寺を修して隱退の所となし、慶長九年閏八月七日壽六十二にして此地に寂す、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日堯　二〇五六　〔日蓮宗〕下總中山本行院の開山なり、日堯は中山法華經寺第六代日暹の俗弟なり、日暹に師事して道行高し、晩年中山に本行院を築き住す、應永三年九月九日寂す、壽缺く、

ニチギヨー　日堯　二二七〇／二三五二　〔日蓮宗〕京師頂妙寺第十一代なり、日堯生國俗姓詳ならす、正東談林に學ふこと二十餘年、京都頂妙寺第十一代の主となり、尋て中山法華經寺第三十代の主となり、後、總州篠原に隱れ、元祿五年十一月三日寂す、壽八十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日堯　二三四九　〔日蓮宗〕山城淨妙菴の僧なり、日堯字は空雅、明靜院と號す、俗姓は永井氏、夙に飯高談林に入りて學ひ、鷹峰談林の化主となる、後、山城田中村に淨妙菴を結ひて隱棲す、元祿二年七月十七日寂す、深草靈光院に葬る、著作淨心錄、觀心本尊鈔、科文各一卷あり、（本化別頭佛祖統記）

ニチギヨー　日堯　二二九四／二三七四　〔日蓮宗〕甲斐本敎寺第七代なり、日堯字は孝辨、一妙院と號す、紀伊の人俗姓は大草氏、父の名は久家と云ふ、師幼にして感應寺證圓日眞に依る、日眞後に要玄日寛に附す、稍長して飯高談林に遊び、小西談林に遷り、化主となり玄義を講ずること四年なり、後退きて、大野山本遠寺に住す、元祿四年悲田派の邪義興るに方て書を作りて駁す、紀伊光貞の室の請により武藏の千駄谷に居ること數年、後大野に還る、正德四年十月廿五日寂す　壽八十一、著作、通敎々主二十卷、文句解十卷、同讃記三卷、白牛通徹錄、同通方錄、止觀覆述記、安國論見心抄、本尊見心抄、各一卷、華嚴敎々主、方便品題釋、已酬未酬、爾前釋文旨、交互感應、禮岳和解、聞頓者解若干卷あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日行　一九二九／一九九〇　〔日蓮宗〕佐渡本光寺の開山なり、日行妙音阿闍梨と呼び、松林院と號す、少にして日朗、日像に歷事し日朗の寂後、京師に遊び、後日蓮苦行の地を慕ひ、佐渡に遊化す、其地に日朗坂と云ふあり、即ち日朗の舊跡なり、師一寺を開く後に日朗山本光寺と號す、元德二年二月五日寂す、壽六十二なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日行　二〇九四　〔日蓮宗〕武藏本門寺の第六代なり、日行は甲斐波木井鄉の人なり、兄弟三人皆共に甲斐身延山日叡に師事す、日叡寂する後、兄日億身延山の主席を嗣ぎ、本門妙本の兩山を兼ねたりしが、兩山大衆の請ひにより、日行を推して主となす、寺務三十餘年、永享六年六月五

ニチ（日）ギ

日寂す、壽詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨー　日行　二二四八　二三二四　〔日蓮宗〕武藏善立寺第二代なり、日行字は心證　十如院と號す、父は橋本大和守某にして小田原北條家の臣なり、師父母の命により、出家して身延山日賢に師事し、十三歳にして飯高談林に入り、學成りて江戸下谷大光山善立寺に住す、學德並に高し、門下に神智院日儀、智寂院日省等あり、寬文四年九月九日寂す、壽七十七、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨク　日玉　一九二四　〔日蓮宗〕安房日澄寺の開山なり、日玉は妙隆院と號す、俗姓は工藤氏、俗名は左近亟吉隆、父は小四郎行光と云ふ、建長中左近亟吉隆鎌倉に於て日蓮に謁し、弟子の禮を執る、弘長元年日蓮伊豆の伊東に配流せらるゝに方り吉隆門信懈らず、二年日蓮別頭四恩書を製して吉隆に謝す、文永元年日蓮安房の小松原に於て平景信に要撃せられ弟子鏡忍難に死す、吉隆大津に在りて之を聞き、即ち馳せて力戰し遂に戰敗して死す、日蓮謚號を與へ僧の禮を以て葬り、妙隆院日玉上人と呼ふ、日蓮の法孫日澄吉隆の菩提所の眞言宗なるを改め日玉を開山となし、自ら第二代に居る、（本化別頭佛祖統紀）

ニチギヨクニ　日玉尼　二二八二　二三四六　〔日蓮宗〕山城養壽菴の開山なり、日玉字は妙月、殊芳院と號す、俗姓赤松氏、攝津大坂の人なり、十五歳にして惠藤家に嫁し、五男三女を生む、三十六歳にして夫に訣れ、長男出家す、槇尾の善俊と呼ふ、次男亦出家して日燈と稱す、日玉亦深く佛門に歸し、深草日政に就きて落飾し、戒を受く、寬文七年深草養壽菴を改めて尼寺となして住す、修懺唱題日課缺かす、遂に尼衆の叢林となる、日燈養壽菴淸規一策を製す、天和三年師病に罹る、日燈宗門緊要一篇を作りて母に呈す、貞享三年十月二十五日寂す、壽六十五、霞ヶ谷に荼毘す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチクニ　日久尼　二三一〇　二三八一　〔日蓮宗〕山城養壽庵第二代なり、日久字は妙本、號を法壽院と云ふ、日燈の妹にして茨木氏某に嫁し、二女を生む、夙に讀誦書寫を務む、延寶七年長女十三歳にして祖母日玉に侍し度を乞ひて止ます、遂に日燈に依りて度を受け、孝本妙行と云ふ、日久其後れたるを悲み、夫に乞ひて許され、深草養壽院に至り、亦同しく日燈に乞ひて度を受く、時に三十一歳なり、精進勇猛殆と凡人にあらす、次女亦出家し孝道妙理と云ふ、日久尼母の寂後養壽菴に住す、二女不幸にして先す、日久尼は享保六年八月六日壽七十二にして寂す、一字三禮血書の法華經ありと云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチグ　日具　二一八三　二二六一　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第六代なり、日具は寒松軒と號す、俗姓詳ならず、安藝嚴島の人なり、幼より出家し、日明に師事し、明應六年卜部兼倶宗家鎭護の番神に就て問難一篇を設け、當寺並に妙蓮本國兩寺に寄す、時に師備中に退隱し、日芳主職に居ると雖、遠く師の答釋を請ふ、師一覽して答釋を作る、兼倶大に感喜す、七年僧正となる、文龜元年二月十二日寂す、壽七十九、著作、本迹一致鈔、番神問答鈔、本迹御書、各一卷、潤亭函底鈔三卷あり、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ニチクー　日空　二二八五　二三五三　〔日蓮宗〕京都妙顯寺第十七代な

り、日空は字を貞順と云ひ、觀樹院と號す、京師の人なり、幼にして出家し、龍華院日延に師事して中村談林の玄義講主となり、請に應じて鷄冠井、松崎、六條の三談林の化主となり、妙覺寺に居り、後中村談林の化主となる、龍華院の請を受け昇住し幾何ならずして退隱し、元祿六年正月二十六日寂す、壽六十九、(本化別頭佛祖統紀)

ニチクワン　日完　二二五一／二三二八　〔日蓮宗〕山城勝光寺開山なり、日完字は學要、號は即是院、伯耆の人、感應寺日長の門人、身延山日新の法孫なり、諸國に巡化し、常陸水戸の本行寺、安藝廣島の妙顯寺若狹小濱の妙光寺に歷住し、說法五千餘座、晚年京都に學要山勝光寺を開く、寛文八年十一月二十四日寂す、壽七十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチクワン　日桓　二四九〇　〔日蓮宗〕京師本國寺第十七代なり、日桓は字を尊忠と云ひ、鷲峰院と號す、俗姓は藤原氏、今出川家右大臣晴季の二男なり、出家して日禛に師事し、研學多年、本化の奧義を究め、終に日禛の囑を受けて主位を繼ぎ、大僧正に任じ、居ること四十九年にして小倉山に退き、天保元年十一月四日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチクワン　日寛　二二七七／二三四八　〔日蓮宗〕甲斐本遠寺第六代なり、日寛字は堯恩、要玄院と號す、幼にして王澤の日通に就て出家し、飯高談林に學び、後小西談林に遷り、遂に化主となる、將軍家光師の高風を聞き束金の殿を賜ふ、師改めて建築し大に寺門を與す、後平河山法恩寺大野山本遠寺に歷住す、元祿元年九月三十日寂す、壽七十二、著作淨名大華一卷あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチクワン　日觀　一六八一　〔法相宗〕大和傳法院の學僧なり、日觀は傳法院に住し、盛んに法相を弘め、長和元年維摩會の講師となり、治安元年三月二十八日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ニチクワンイン　日觀院　ソーエー僧顯を見よ、

ニチケ　日家　一九一八／一九七五　〔日蓮宗〕安房小湊誕生寺第二代なり、日家は寂日房と呼ぶ、上總夷隅郡奧津村の人なり、俗姓は佐久間氏、父は兵庫の亮重吉なり、其長子十郎左衞門重貞と云ふ、父の祿を襲て奧津村に居す、三寶に歸依し草堂を築いて釋迦牟尼佛を安置して香花を供すると年あり、文永元年日蓮安房小湊に歸りて老母を勤省し、父の墳墓を掃ふに方り重貞謁を求め遂に深く崇敬し草堂に請して法を受く、重貞子あり長壽麻呂と名く、即ち命して手度を受けしむ、日蓮名を與へて日保と云ふ、重貞の弟竹壽麻呂之を羨て亦手度を受く即ち師なり、相俱に此草堂に居る、一日叔姪相語り安房の小湊に一寺を創し、高光山日蓮誕生寺と呼ぶ、師日蓮を推して開山と爲し、自ら二代となる、弘安二年日蓮大曼茶羅を圖して與ふ、師重て藥王殿を構へ、妙日、妙蓮、藥王麻呂の肖像を安置す、且つ石を建て蓮花潭、誕生井、天道松　莊嚴道場を表す、後別に一宇を創し日蓮雙親の墳墓を修營す、正和四年七月十日寂す、壽五十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケー　日啓　二二九二／二三四九　〔日蓮宗〕京師妙傳寺の僧なり、日啓字は輪匠、號は寂耀院、牛國俗姓詳ならず、寂遠院日通に師事し、飯高談林に入る、日通の命を受け山科談林の化主となる、後大衆の強請により京都妙傳寺の主となり、僅に三

年にして西岡眞如寺に隱る、元祿二年六月十七日寂す、壽五十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケー　日啓　……二三〇八　(日蓮宗)武藏品川本光寺第十八代なり、日啓は宮谷檀林より出づ、寛永十九年二月將軍德川家光の面前にて念佛者意傳と論戰す、慶安元年七月四日本光寺に寂す、壽缺く、(本宗宗義綱要)

ニチケー　日啓　二三一七 二三八八　(日蓮宗)京都妙顯寺第二十三代なり、日啓字は辨通智覺院と號す、和泉堺の人にして妙國寺第九代日秀の弟子なり、幼にして關東中村談林に遊び、玄義を講じ、六條の化主となる、後ち頂妙寺正中山に遷次し、中村の講主となり、終に妙顯寺に主となる、享保十三年四月晦日寂す、壽七十二、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケー　日桂　二二五三 二三三三　(日蓮宗)武藏瑞輪寺第六代なり、日桂字は久應、號は圓妙院、相模高座郡の人、出家遊學功成つて甲斐小室妙法寺第十九代の主となる、後ち身延山智見院日暹の命を受け江戶に入り、瑞輪寺第五代日遜の後ちを嗣ぐ、慶安二年幕府瑞輪寺を谷中に遷すに方り、師亦た經營するところあり、明曆二年同寺を退隱し、武藏一宮村に隱れ、讀經を事とす、寛文十二年十二月十七日讀經一万部功を終り、石を立て丶部數を其下に埋み、供養を行ふ、其地後に圓妙山万部寺と云ふ、延寶元年七月二十三日寂す、壽八十一、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケー　日溪　ホーリン法霖を見よ、

ニチゲー　日霓　(……)　(日蓮宗)紀伊感應寺の學僧なり、日霓は勇猛院と號す、紀伊德川氏の皈依を受け、學德を以て聞ゆ、文政七年寂す、著作祖書編輯考、金玉集、賢王護國編、龍華年譜同備考等あり、

ニチケン　日賢　一九〇三 一九九八　(日蓮宗)駿河海上寺の第二代なり、日賢は淡路阿闍梨と呼ぶ、駿河國安東村の人なり、幼より日蓮の門に遊び、日蓮の滅後長く其塔を守る、永仁の中ろ武藏の雜司谷日源碑文谷に遷らんと欲して師を招く、師再三辭するも日源許さず、乃ち已むを得ずして出づ、正和年中駿河の村松に遷る、村松大殿の後に本佛堂を建つ、曆應元年三月十七日寂す、壽九十六、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケン　日賢　(……)　(日蓮宗)妙勝寺第二十代なり、日賢自ら號して一睡と云ふ、又圖南老人と云ふ、智雲院日收の弟子なり、詩文に達す 寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケン　日賢　二二一九 二二五八　(日蓮宗)甲斐身延山第十八代なり、日賢は字を純性と云ひ、妙雲院と號す、其鄉貫姓氏詳かならず、(或は伯耆の人なりとも云ふ)、幼にして俗世を脫し、東海に逍遙し、身延山第十七代日新に投じて困學數年、文祿元年壬辰の秋日進疾に臥し、遺言して主座となさしむ、在山八年なり、慶長四年閏三月十三日寂す、壽四十一なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチケン　日賢　二三九五 二四七六　(日蓮宗)山城頂妙寺二十九代なり、日賢字は智朗、號は玄收院と云ふ、武藏江戶の人なり、出家して京都本國寺日達に師事し、寶曆四年中村談林百六十五世能化となり、講餘著作を事とす、明和九年二月京都頂妙寺二十九代となり、天明二年八月廿七日中山法華經寺八十代となり、同五年八月廿七日退隱し、同八年八月廿七日再び八

十三代となり、寛政三年十一月廿七日退隱し、同五年光揚義を作り、淨土宗增上寺四十六代定月の獅子絃を駁す、後退隱して赤城の清隆寺に閑居し、專ら宗義を研究す、享和三年二の江妙勝寺光明房跡に遷り、著作を事とす、文化十三年正月元日寂す、壽八十二、著作宗旨要解十卷、同撮要一卷、宗教要解十二卷、西窓隨筆二卷、餘年集十卷、同追加一卷、日達上人傳一卷、光揚義四卷、仝後篇七卷等あり、(宗教要解後序)

ニチケン　日謙　二四〇六―二四八九　〔日蓮宗〕出雲報恩寺の僧なり、日謙字は道光、號は聽松菴と云ふ、攝津大坂の人、日野氏の子、幼にして出家し、京師本國寺日領僧正の室に入りて宗乘を修め、鷹峯談林に遊びて天台の章疏を學ぶ、深草日政上人の風を景慕し、深草瑞光寺に留ること年あり、偶出雲平田報恩寺主なく、擅越の強請を受け、其寺に住持となる、幾もなく法嗣を得て法務を讓り、寺側に小菴を營みて閑居す、小菴の隣に一古松あり、因て自ら聽松菴と號し、道暇詩を嗜み秀作あり、後山陽道より大阪京師に浪遊し、一時の名家を訪うて交を結ぶ、賴春水、菅茶山等尤親善なり、文政十二年五月八日寂す、壽八十四、著作聽松菴集二卷あり、(碑文、詩山堂詩話)

ニチケン　日乾　二二二〇―二二九五　〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十一代なり、日乾字は孝順、號は寂照院、俗姓塚本氏、父某は越前の人、若狹小濱に淪落し、其地に師を生む、師幼にして出家し、同國長源寺日欽に師事す、父沒後母に從うて京師に上り、本國寺日重に學ぶ　時に十二歲なり、爾來六年間天台三大部を講究し、遂に三井の園城寺に遊びて倶舍を學び　南都の諸大寺に歷遊して法相戒律等を修め、本國寺に歸りて六條談林に講席を開き、本滿寺に主となる、慶長七年身延山より日重を請するも重出てす、日乾代りて身延山に上り主となる、同年十月宗門綱格一卷を著し、後陽成天皇に上る、女御中和門院等の旨を受け、數〻宗門を說き　紫衣を賜はる、翌八年本國寺に退き、十四年に至り再び身延山に上り主となり、大に山規を整ふ、十九年寺務を辭して西谷に隱棲す、元和三年西上して攝津能勢に覺樹菴を築きて隱捿し、同六年紀伊侯夫人養珠院駿河松野寺を紀伊有度郡沓谷に遷して蓮永寺と號し、特に師を請す、乃ち同寺中興となる、寬永二年寺務を日遠に讓り、再び能勢に入る、寬永五年池上本門寺日樹不受不施の異義を唱ふるに方り、法弟日遠と共に其鎭壓に力を盡す、同七年其功により幕府の命を受け、京都妙覺寺に主となり、寺務七年にして能勢の舊菴に歸る、寬永十二年十月廿七日京都本滿寺に寂す、壽七十六、著作宗旨雜記、書捨艸各二卷、宗門綱格、宗門大意、一筆艸各一卷、西谷名目條箇二卷等あり、(草山集、本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチゲン　日玄　二三……―二三六四　〔日蓮宗〕武藏池上本門寺第二十二代なり、日玄は字を義卓と云ひ、妙悟院と號す、出家して壽量院日祐に師事し、飯高談林に於て修學三十年、終に玄義講主となり、文句化主となる、後眞間山弘法寺に居れり、延寶元年の冬長興長榮兩山に主となり、居ること三十二年寶永元年疾に臥し七月三日遂に寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日玄　二二四七―二二九九　〔日蓮宗〕紀伊本久寺の開山なり、日玄始め日賢と云ふ、號は本覺院、阿波の人なり、出

家して諸國に遊行し、慶長の頃紀伊に遊び、道俗の歸依を受け、本久寺を開き、日夜法華經を讀誦し、一萬一千八百部に至る、寛永十六年三月四日寂す、壽五十三なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日源　一九七五……〔日蓮宗〕駿河實相寺の開山なり、　日源字は智海、初め播磨法印と呼び、駿河國富士郡なる天台宗の古刹岩本山實相寺の學頭を勤む、日蓮同寺に遊ぶ時摩訶止觀の講を聽く、弘安元年遂に天台宗を捨て身延山に到り日蓮を仰いで師資の禮を執る、後岩本山實相寺に歸り法華經を修行す、遂に岩本山の檀越等相議して師を推し開山と爲す、冷泉中將隆茂卿師の道風を聞き、其領地なる駿河須津に一寺を開きて强請す、後に東光寺と號す、後師武藏雜司ヶ谷の法明寺、碑文谷の法華寺、駿河傳法村の正法寺を開く、正和四年九月十三日寂す、壽詳ならず、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日源　一九〇九 二〇四六〔日蓮宗〕能登妙法輪寺の開山なり、　日源初め哲源律師と云ひ、眞言宗の僧なり、永仁中能登羽咋の法輪寺に住す、　遇〻日像の同地方に遊行するに際し、教を受けて弟子となり、日像の命に依り寺を妙法輪寺と改め、且つ哲源を改めて日源と云ひ、專ら法華を修す、至德三年三月八日寂す、壽百三十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日源　二二六九……〔日蓮宗〕筑後福王寺の中興なり、　日源は越前今立郡五鹿の人、出家して諸國に歷遊し、文祿の頃筑後下妻郡溝口村に至り、矢部川岸の土地肥沃にして水石清麗なるを愛賞し、其村の古寺福王寺に留り、幾もなく忽然去り、再び弟子數人を携へ來り、始めて紙を製造し、其法を村民に傳ふ、村民大に喜び、相共に業を得、柳河侯立花氏師の功勞を嘉し、福王寺に田地、幷に製造用の家屋器具等を給與す、因て益製造の業を興す、世に溝口紙と稱し、諸國に出賣することゝなる、慶長十四年十月十四日其寺に寂す、壽缺く、師寂後其地に紙の製造大に盛なり、慶長中筑後侯田中氏の封土となり、元和中久留米侯有馬氏の封土となるも、舊例により器具等を給與し、其業を奬勵す、元和中肥後侯加藤氏寛文中筑前侯黑田氏いつれも師の弟子を聘して其法を傳へ、元祿中肥前の人納富某亦其法を傳へ業を開けり、後世師を九州製紙の開祖と稱す、(碑文)

ニチゲン　日元　一九三七……〔日蓮宗〕甲斐身延山竹の房開山なり、　日元、久本房と呼び、甲斐今諏訪の人なり、其先は安部宗任より出つ、嘗て稅を貢して鎌倉に赴き、松葉谷に於て日蓮に見え、舊業を棄てゝ弟子の禮を執る、文永十一年日蓮身延山に遷るを以て共に家を移し奉仕す、建治三年十一月朔日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日現　二一五六 二二二一〔日蓮宗〕武藏池上本門寺第十一代なり、　日現は佛壽院と號す、幼にして池上に於て出家し、出遊の志を懷き、武藏仙波の天台宗の僧佛藏院實海法印に謁し、天台宗の學を受け、後京師に遊び、遍ねく碩學を叩き、最も宗意に通じ、遂に名宮中に達し、天皇召し見て權大僧都法印を賜はる、後、池上大坊本行寺に主たりしが、十代の日陽疾に罹りたるを以て、命に依り本門妙本の二寺を主どり、居ること二十一年、永祿四年七月二十一日寂す、壽六十六、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゲン　日眼　……二三一七　〔日蓮宗〕武藏淨心寺の開山なり、日眼字は通遠、號は即如院、幼より世相を厭ひ、出家して小西談林に遊學す、師將軍家綱の乳母三澤女の皈依を受く、明曆元年三澤女病に寢し呪藥驗なし、師を招き遺言して曰く、妾至願あり果さず、師一寺を營みて妾に代りて至願を果されんことを請ふと三澤女逝く、後師深川に一廬を築きて時の到るを待つ、三年將軍家綱命を下して三澤女か躅を弔す、師三澤女の遺言を告げ、遂に幕府の許を得て一寺を開く、偶〻不幸にして病を得、門人覺性を召して遺言し其業を繼紹せしむ、同三年十二月二十一日寂す、世壽詳ならず、覺性幕府に請ひ翌萬治元年戊戌官覺性に命して地錄を賜ふ、三澤女法號淨心院妙秀の冥福を修し、法苑山淨心寺と呼ひ、師を崇て開山と爲す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゲンニ　日顯尼　二三〇八 二三八七　〔日蓮宗〕山城淨妙庵主なり、日顯尼字は妙佐、父は永井某、京都の人なり、夙に良人に訣る、一男あり、出家せしめんとし、鷹峰談林の化主明靜院日堯に告く、蓋し日堯は師の兄なり、日堯之を日燈に介し、手度を受けしめ本如院日明と云ふ、師大に喜ひ、自ら日燈の所に至りて比丘尼となる、時に年三十六なり、明靜院日堯山城田中に隱れ、尋て寂するに及ひ、師日明と共に田中淨妙庵に住す、日明寂せる後田中に獨居すること三十餘年、淸素嚴密、修懺讀誦　唱題攝心を以て其終を完うす、享保十二年正月五日に寂す、壽八十なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゲンニ　日玄尼（……）　〔日蓮宗〕山城慧光寺の開山なり、日玄は智照院と號し、父は三宅內藏助信勝、母は妙香尼なり、父の死後師出家す、信勝の第地に一寺を開き父の靈を祭る、後に智照山慧光寺と云ふ、門下に立本寺日審、日芳、北岩倉本妙寺日貞等出つ、示寂の年時及ひ壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゴ　日護　……二一九二　〔日蓮宗〕京師妙覺寺第十二代なり、日護俗姓生國未詳、京都妙覺寺日善に師事し、終に同寺第十二代となる、天文元年寂す、世壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゴ　日護　二二四〇 二三〇九　〔日蓮宗〕紀伊養珠寺第二代なり、日護字は順性、號は中止院、丹波國與佐郡の人、俗姓は市村氏なり、十五歲にして得度す、京師本滿寺に遊び、一如日重の講授を受く、後山門、寺門、南都の學席を經、次に心性日遠に謁し、師資の禮を執る、飯高談林に入りて宗乘を研究すること二十年、一朝奮然として救濟の志願を起し、諸州を蹈遍して敎化を事とす、播磨明石山城嵯峨の小倉山等に隱れ、意の適する處に隨て草菴を構へ、專ら讀經唱題を勤む、後水尾天皇師の道儀を聽きたまひ、親しく召して道愛を加へ給ふ、勅して朝向閣の佛像數軀を刻せしめ、權大僧都に任じたまふ、仁和寺法親王山城鳴瀧に三寶寺を開き師を請す、正保四年紀伊侯德川賴宣禮請す、師已むを得すして和歌山に至り大に優待せらる、後賴宣江戶に下るに方り、師往て其母養珠夫人の供養を受け且つ其請により妙見菩薩の像を刻す、晚年山城賀茂の佛谷に幽棲し、慶安二年四月十五日寂す、壽七十、後賴宣養珠寺を開き、心性日遠を追崇して開山と爲し師を第二代となす、塔を鳴瀧三寶寺に築く、師彫刻に巧にして佛菩薩の

像を刻したるもの一萬餘躰に及ひたりと云ふ、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゴ　日悟　二二六九／二三四六　〔日蓮宗〕奧州仙臺法運寺第二代なり、日悟字は堯意、號は了寂院、俗姓青木氏仙臺の人、幼にして出家し、身延山日深に師事し、後心性院日遠の弟子となる、仙臺侯伊達宗政の子忠宗の皈依を受け、仙臺に法運寺を開く、日遠を開山とし、自ら二代となる、貞享三年正月四日寂す、壽七十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチコー　日廣　二一六五／二二一二　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第八代なり、日廣は遠江の人なり、天文中比叡山の衆徒法華宗の號を憤ほり、屢々出訟す、日廣乃ち門人實成を遣はして衆徒の前に於て宗號綸旨を讀ましむ、衆徒口を閉ぢて退きたりと云ふ、是れ宗號論の第二度なり、天文廿一年八月二十五日寂す、壽四十八、(龍華歴代師承傳、本化別頭佛祖統紀)

ニチコー　日廣　二三三一……　〔日蓮宗〕紀伊木正寺の開山なり、日廣理性院と號す、其生地俗姓共に詳ならす、靈夢に感し紀伊牟婁田邊庄湊村に堂を移して木正寺と稱す、衆推して開山となす　寛文十一年十月八日寂す、壽詳ならず、(本化別頭佛祖統紀)

ニチコー　日好　二三一五／二三九四　〔日蓮宗〕伊豆玉澤妙法華寺第二七代なり、日好字は唯妙、禪智院と號す、其生地姓氏詳ならす、幼年にして出家し、京師の妙覺寺日允に師事し、中村談林に遊學し水戸三昧堂玄義の講主となる、後京師の六條林化主となり、遂に玉澤妙法華寺第二十七代となり大に宗を張る、元政の遺風を追慕して戒律を嚴持す、道餘詩文に長す、中村談林の化主となり不幸にして火災に遭ひ、講堂僧室燒失す、師退て江戸青山の本通庵に潜む、庵は本師日允の遺趾なり、唱題の間大藏經を閲し翰墨を樂む、享保十九年七月廿一日寂す、壽八十、著作錄内扶老十五卷、仝拾遺八卷、風水稿四卷、錄外微考、臨終用心記各二卷、世尊降生入滅記、寂菴文錄、于喁集各一卷等あり、(本化別頭佛祖統紀、日蓮宗史料)

ニチコー　日好（……）〔日蓮宗〕但馬立正寺の學僧なり、日好は心信院と號す、但馬豐岡の立正寺に住す、示寂年月日詳ならす、著作本迹中正錄あり、(日蓮宗史料)

ニツコー　日高　一九一七／一九七四　〔日蓮宗〕下總中山法華經寺の第三代なり、日高は帥阿闍梨と呼ぶ、俗姓は源氏、太田金吾乘明が長子なり、日蓮に投して出家す、父乘明上總國の北方に住して一草堂を造り、誦經唱題して終る、後に法顯寺と云ふ、永仁七年春日常の囑を受けて下總正中山法華經寺第三代となる、晩年太田の妙本寺、金原の妙大寺、山崎の妙福寺、常陸隱井の妙德寺を創す、正和三年四月二十六日寂す、壽五十八、著作置文あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチコー　日珖　二一九二／二二五八　〔日蓮宗〕和泉堺妙國寺の開山なり、日珖は佛心院と號す、俗姓は伊達氏、天文元年を以て和泉堺に生る、稍長して頂源寺日沾に師事し、十七歲にして三井の勸學院宥尊に就いて倶舍唯識を學ふ、南都に戒律を受け、南禪寺に禪宗を探り、比叡山に登りて尊契に就いて天台敎を受く、尊契師の博識を歎し、大衆の爲めに講席を開かしむ、大衆紫袈裟を贈り其勞を謝す、日蓮宗の徒紫袈裟を著す

る者師より始る、弘治元年師二十四歳頂妙寺の請に應す、神道を卜部兼右に學び、密附を受け神道同一鹹味書を著す、父常吉の爲めに宗門眞秘要路を著す、三年權僧正に補せらる、永祿元年河內國高屋城主三好義賢入道實休師を請して戒を受け、安居の地を割く、五年五月實休家臣松永禪正久秀に弑せらる、師城中の男女を率ゐて堺に置き亂を避けしむ、十一年父常吉廣普山妙國寺を興す、師當家論義書を著す、天正元年五月織田信長師を相國寺に召し、道遇を加ふ、七年五月二十五日信長近江の安土にて宗論を促す、文祿二年中山日典邪計を構ふ、師の訴により家康命を下して日典を長門に竄す、後幕府の命を承け中山輪次の式を定め、本法頂妙國の三寺輪次に中山に住するとゝす、慶長三年八月二十七日寂す、壽六十七、著作神道同一鹹味鈔六卷、文句無師（日珖日諦日詮合著）廿卷、安土問答記錄一卷、宗門眞秘要略、當家論義鈔、微案書各若干卷あり（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチコー　日興〔一九〇六―一九九二〕〔日蓮宗〕興門派の開祖なり、日興字は白蓮と云ひ、伯耆阿闍梨と呼ぶ、俗姓は橘氏、美濃の刺史善根の裔、大井庄司某の子なり、母は駿河の由比氏、川合入道の女なり、寛元四年五月八日を以て甲斐巨摩郡鰍(カジカ)河澤に生る、幼にして駿河實相寺主播磨二位律師嚴譽に投じて經卷を學ぶ、時に年甫めて八歳なり、建長五年に得度す、康元元年十一歳嚴譽の命により三井寺に笈を負ひ、大に學譽あり、正元元年十四歳母の喪に逢ひて郷里に歸り、嚴譽を省す、時に宗祖日蓮大藏經を閱せんと欲して實相寺に來る、寺主嚴譽惡んで面せず、時の學頭智海衆と議して日蓮に摩訶止觀を講せんことを請ふ、師其講するを聽て大に感じ、待者吉祥麿と道契を結ぶ、智海竊かに師に語て曰く、日蓮は一代の明師なり、我將に弟子の禮を執んと欲す、然れとも今衣を更へんには憚るところあり、子は妙年なり、奈んぞ往て奉侍せざる、我も亦時を待ちて子が跡を逐んと、茲に於て師改宗の念愈ゝ切なり、既にして日蓮歸途に就く、師竊に寺を出て途次日蓮に見へ隨ひて鎌倉に赴く、文應元年日蓮侍者吉祥麿に手度を加へ日朗と名け、大國と字す、師も亦同時手度を加へられ日興と名け、白蓮と字す、爾來親しく師事し、立正安國論の艸案は多く其手に成ると云ふ、文永八年九月日蓮龍口の厄に罹りて佐渡に流され、日朗は獄に投せられ、松葉谷を毀たるゝに方り衆皆離散す、時に師及日向等四人交々佐渡に省し、日昭と共に濱に蟄居して時の至るを待つ、同十一年日蓮赦されて佐渡より歸り、師日朗と共に隨侍して長與山に入り、身延山に隱る、弘安五年日蓮疾に罹り、池上にあり、師暫くも側を離れず、晝夜看護を力む、其示寂後池上に荼毘し、身延山に塔す、祖塔を守ることは弟子六人輪次の約あり、六人各子院を造り、師も常在院を構ふ、翌六年正月喪終りて諸徒退散し、師は駿河富士郡上野に茅菴を結びて居る、弘安八年日向身延山に留る、檀越波木井實長日向に告て曰く、高祖の龕塔輪次に守ること、法の爲め山の爲めに宜しからず、諸山は主人あるを以て益盛んなり、然るに身延山は然らず、主徒共に旅泊の想をなすを以て益衰へんとす、高祖棲神の靈窟他日若し荒涼せば悔ゆとも及ばじ、尊者能く之を謀れ、と、日向乃ち日昭日朗に告く、二師も亦檀越の意を如何ともする能

はず、時に師獨り肯せずして曰く、輪次人無くんば議するも亦可なり、我等六人遺命を承けて未だ一紀に滿たず、今にして乖戻するに忍びず、法運の通塞は俗人の識る所にあらず、と、憤然として去りて河合に舍す、翌年安房北野郡保田郷に往きて小菴を構へ、唱題讀經を事とす、後に中谷山妙本寺といふ、永仁五年富士郡上野の邑主新に寺を創し再三師を請す、師遂に辭すること能はずして駿河に皈る、寺は一大石の上にあるを以て大石寺と名く、後北山に遷りて寺を剏し、本門寺と呼ぶ、相模串橋の長立寺、甲斐一瀨本宗寺、駿河大宮大泉寺、柚野光德寺等は皆師の手創にして、共に身延山に屬したり、正慶元年疾に罹り、二月七日諸徒を召して後事を囑し、辰の刻に至り寂す、壽八十八なり、著作法華畧疏八卷、御筆記六卷、開目鈔要文、日興記各二卷、實相寺大衆訴狀、點蓄相傳、産湯口傳、富士正義鈔、富士秘傳鈔、五人所破鈔各一卷、本因妙鈔、百六箇相承各若干卷あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

〔考〕 日興は後に本迹二門勝劣派の祖といはる、然れども其富士に住する初め、未だ宗義の異論なく、稍後に至り身延山の諸師と執るところを異にしたるものゝ如し、

ニチコー 日孝 二三〇二 二三六八 〔日蓮宗〕安房小湊誕生寺第二十二代なり、 日孝字は慈忍、大中院と號す、京師の人なり、姓は伊關氏、祖母常に法華經を持す、師九歲にして九識院日琢に投して出家す、十二歲深草の元政に師事し、偶〻嵯峨に侍して何有亭に遊ぶ、萬治二年の秋元政身延山に詣す、元和上皇之を聞き其紀行を求む、元政乃ち師をして淨書せしめ上皇に上る、これより師書名あり、元政の寂後上總飯高に遊び、身延山西谷談林の化主となる、瑞輪寺に主となり、飯高談林の化主となる、後誕生寺に主となる、寶永五年十月十八日寂す、壽六十七、著作水雲集二卷、自敍傳年譜一卷、宗旨漢語、別頭四十千二章(一名通別一覽志)、釋氏蒙求等あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチコー 日亨 二三〇六 二三八一 〔日蓮宗〕甲斐身延山第三十三代なり、 日亨字は顓海、遠沾院と號す、京師の人なり、八歲にして本法寺寶塔禪師に依り、後十一歲寂遠院日通に師事し得度して顓海と號す、飯高談林に遊學す、萬治三年六月山科談林の請に應じ、貞享四年五月妙傳寺に移徙し、元祿二年五月立本寺に出世す、飯高談林の請に應す、滿願寺を手創して大に敎化を敷く、寶永元年日省の囑を受けて身延山に登る、寺務十年、是時勅あり紫衣を賜ひ身延山を勅願寺となしたまふ、京師の滿願寺を同しく勅願寺となしたまふ、師正德三年門人日裕に囑して退休す、享保六年十二月二十六日寂す、壽七十六、著作巨水遠沾記二卷、法華經開結共校正十二卷あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチコー 日向 一九一三 一九七四 〔日蓮宗〕甲斐身延山第二代なり、 日向は佐渡阿闍梨と呼ぶ、京都の人、俗姓は小林氏、父の名は民部實信と云ふ、元久元年父實信日蓮の父重忠と伊勢平氏に與して叛し、上總埴生郡藻原郷に放たる、師は建長五年二月十六日に父の配所に生る、幼より僧儀を慕ひ、嬉戲毎に巾を結て袈裟となし、貝を貫いて念珠となし、合掌して三寶の名を唱ふ、父之を厭ひ、早く髮を修し、烏帽を加へ、

呼んで藤三郎實長と云ふ、時に僅かに五歳なり、弘長二年十歳の時病に罹り、醫巫力を竭ども効あらず、師父母に告て曰く、我病醫巫の治すべきにあらず、若し神佛の助を祈らば或は免るゝを得んと、父母乃ち安房の千光山に虚空藏菩薩を祈り、誓て曰ふ、這兒若し助からば捨てゝ佛子となさん、と、果して驗あるを得たり、時に比叡山高乘院主某實信仕官の日道交あるを以て鎌倉に至るの途次駕を枉げて來訪し、師の秀發なるを見て懇請して比叡山に歸り、手度を加へて民部卿と呼ぶ、文永元年宗祖日蓮母を省して郷に歸る、實信其父の友なるを以て往て日蓮に見へ、師資の契を結び、告げて曰く、吾に小兒あり泣て出家を需むるを以て遂に比叡山に投ず、今より衣を更めしめて師の弟子の數に加へん、と、翌年使を遣して師を召し歸し 携へて日蓮の下に投ず、時に師十三歳なり、これより日蓮の膝下にありて學餘宗祖の母に事ふる實の母の如し、四年十二月日蓮母の喪を修し、終りて鎌倉に歸り、師も亦隨侍す、八年九月日蓮龍口の厄に罹り、佐渡に流さるるに方り、師日興と共に日昭を輔佐して蹤を晦し、艱難を嘗め、日興、日頂、日持の三師と共に更々佐渡に侍す、十年正月日蓮書を裁して道善房の壽を賀すに方り、師命を奉じて安房に到り、歸途父母を省し、數日停留して佐渡に還る、十一年日蓮赦されて鎌倉に歸り、長興山に入り、身延山に隱る、師朝夕待して其法話宗義に關れば記して秘珍す、後日向記と云ふ、建治二年春安房淸澄山道善房寂し、師日蓮の命を受けて往て佛事を修す、駿河富士郡に瀧泉寺ありて眞言宗の大刹なり、寺の學徒身延山に至りて眞言亡國の理を問ひ、日蓮の說に服して弟子の禮を執り、寺を改めて日蓮を請す、師命に依り往て法規を一新す、居ること年あり、法弟日慧に附して退く、弘安五年日蓮武藏池上に於て寂を示し、身延山に塔す、これを守ることは六人輪次の定めとす、藻原兼綱雄刹を構へて師を請し、開山始祖となす、後に常在山妙光寺と號す、弘安八年師身延山に直す、檀越波木井實長師に告げて曰く、守塔輪次の直は宗祖の遺命なれども、法の爲め山の爲めに宜しからず、師これを謀れと、師これを日朗等に謀りて檀越の意に任す、實長乃ち師を身延山第二代の主と仰ぐ、爾來身延山輪次の事無し、これより先き師武藏妙顯寺、相模妙勝寺等を剏して開山となる、師進山してより寺務二十六年、正和三年微恙を感じ、上總坂本村法華谷に退き、三位日進をして席を補せしめ、九月三日安祥にして寂す、壽六十二、著作天目日向問答記錄二卷、高祖一期行狀日記、御講聞書(一名日向記)各一卷あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチコー　日講　二二八六 二三五八　〔日蓮宗〕不受不施講門派の開祖なり、日講號は安國院と云ふ、京師の人なり、十歳にして度を受け、京師妙覺寺に留り、專ら宗義を講究し、後、關の諸談林を歷遊して益蘊奧を盡し、下總野呂妙興寺に住し、日奧上人の主唱したる不受不施を以て宗義の眞意を得たるものとなし、同上人の遺風を景慕し、大に之を主唱す、平賀の日述、日院等悲田派恩田派と稱し、同く不受不施を主唱したれば、師相共に固執し、身延山の日境等に抗す、日境 日豐等寛永七年の前例によりて幕府に訴ふ、寛文五年幕府は寺領の土地田園等を以て、幕府の供養にかゝるものとなし、師等

ニチ(日)コ

に告く、これ師等を苦めんとするものなり、師即ち守正護國章一篇を撰して幕府に上り、不受不施の意を明にし、寺領の十地田園等は國主の仁恩に出で、所謂供養にあらざるとを辨ず、然れども幕府其言を用ゐず、身延山の日尊等の請を容れて師等を審問し、遂に師を罪し、日向佐土原に配流す、師其地に蟄居すること三十餘年、毫も初志を變せず、元祿十一年三月佐土原に寂す、壽七十三なり、著作錄内啓蒙四十卷、同條箇六卷、發心即到記、寤語問答、守正護國章、各一卷あり、

ニチゴー　日合　一九五三　〔日蓮宗〕下總妙興寺の開山なり、日合は筑前阿闍梨と呼ぶ、幼にして日蓮の室に入る、曾谷道崇と云ふ者下總國千葉郡野呂村に一宇を構へ妙興寺と號し、師を請して開山となす、永仁元年十月十一日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゴー　日豪　二一九八 二二八六　〔日蓮宗〕遠江妙恩寺第十一代なり、日豪號は常在院、甲斐の人、馬場景政（後ちに信房と云ふ）の子なり、世々武田家に仕ふ、信玄沒後景政末子を僧となす、日豪是れなり、師初め遠江妙恩寺主日宣に師事す、武田氏沒落し、父難に死せる後、同寺に在つて益道行を勵み、遂に十一代の主となる、德川家康の濱松城に入るに方つて召されて知遇を受けたりと云ふ、寛永三年七月八日寂す、壽八十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチコン　日近　二二七四 二三五七　〔日蓮宗〕甲斐本遠寺第四代なり、日近字は舜說、常寂院と號す、越前の人にして寂照院日乾の外姪なり、心性院日遠に就きて剃髪す、飯高談林にありて敎化に盡すこと殆んど廿年、貞松寺主席を空くするに方り、請を受けて住す、後甲斐の大野山本遠寺に主となり、大僧都に補せらる、晩年駿河有度郡村松里に觀富山龍華寺を造營す、元祿十年閏二月八日寂す、壽八十四、平素讀誦算なく、經を寫し、佛を刻せり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチコン　日近　二二九八 二三八三　〔日蓮宗〕山城本法寺第二十三代なり、日近字は幸長、遠成院と號す、別に空堂と云ふ、本法寺十七代證莊院日休の門人なり、幼にして俗を脫し、中村談林に遊學す、鷹峯の化主となり、本法寺に出世し中山に輪住す、晩に梶折安穩寺に隱る、大衆の强請に依り再び本法寺二十五代の主となる、幾もなく梶折に還り文章を樂み、毎に深草日政の家風を慕ふ、一時水戶光國禮を厚くして法駕を屈せんと欲す、師疾と稱して出でず、享保八年正月二十五日寂す、壽八十六、著作敎餘于喁集八卷あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチコン　日金（……）　〔日蓮宗〕岩代妙法寺第三代なり、日金は出羽阿闍梨と稱す、日什六老僧中隨一の人なり、日什の業を助け、其寂後東北弘通を以て自任し、數寺を建立し、後日仁に代りて若松妙法寺を領す、其終る處を知らず、著作日金記あり、（本宗宗義綱要）

ニチゴン　日嚴　二〇七四　〔日蓮宗〕京師本國寺第七代なり、日嚴は本高院と號し、日經の兄なり、日經の寂後主席を空するを以て官の命に依り主席を嗣ぎ、法印に叙す、居ること四年、應永二十一年四月五日寂す、世壽詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゴン　日言　二三六五　〔日蓮宗〕伊豆玉澤妙法華寺二十六代なり、日言字は長江、號は取要院、別に虛舟齋、白岩

老人と云ふ、俗姓は古澤氏、京都の人、了哲の子なり、世々連歌師を業とす、師七歳にして四書を誦し、十歳にして法華經を讀む、十一歳にして出家し、尋て野呂談林に學ぶ、當時の化主日講慧雄は師の叔父なり、日講録啓蒙三十六卷を作りて大名あり、然れども師は其異解あるを嫌ひ、去りて中村談林に入り、玄義の講主となり、尋て沼津妙海寺を經て玉澤の妙法華寺に出世し、遂に中村談林の化主となる、後伊豆の白岩に隱る、寶永二年六月二十五日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチサイ 日齋 オーキ應其を見よ、

ニチサツ 日薩 二四九〇—二五四八 〔日蓮宗〕甲斐身延山七十三代なり、日薩字は文嘉、號は容月と云ふ、後文明院と云ふ、上野桐生の人、新井宗右衛門の六男なり、九歳にして秩父郡御堂村淨蓮寺日軌の弟子なり、十九歳加賀金澤に遊び、優陀那日輝に師事し、二十七歳江戸に至り、藤森弘菴の塾に入り、儒學を學び、後駒込蓮久寺に住し、道譽甚く高し、明治五年教部省に召され、一宗の教務を執る、後身延山に進み、大教正に任ぜらる、爾來日蓮宗教院を設置し、大に宗徒の教育に力を盡し、且つ諸宗の高僧と謀り、福田會育兒院を興して孤兒を救濟教育す、晩年池上本門寺に住す、明治廿一年八月廿九日寂す、壽五十九、著作法華宗日鑑一卷あり、

ニチサン 日山 一九九八—二〇四一 〔日蓮宗〕武藏池上本門寺の第四代なり、日山は下總平賀郡の人にして俗姓詳かならず、幼にして日輪の門に入り宗義に達し、延文四年日輪寂するを以て其跡を嗣ぎて主となり、永德元年九月七日寂す、壽四十四なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチサン 日山 リョーキョク良旭を見よ、

ニチサン 日產 二二一八—二二七二 〔日蓮宗〕紀伊蓮心寺の開山なり、日產號は良應院、俗姓是利氏、紀伊の人なり、出家して伊豆玉澤妙法華寺に住す、慶長十四年紀伊に蓮心寺を開く、慶長十七年九月九日寂す、壽四十五、(本化別頭佛祖統紀)

ニチジ 日慈 二三二四—二三九五 〔日蓮宗〕山城妙顯寺第二十四代なり、日慈字は慧天、近要院と號す、越後國の人なり、俗姓は高山氏、幼にして妙顯寺第廿二代日妙の室に投じ、中村談林に學ぶ、學行成りて六條談林の化主となり、後尾張國妙勝寺に遷る、京師の妙覺寺に出世す、再び中村談林の化主となり、妙顯寺第廿四代の席を補す、享保二十年十月二十二日寂す、壽七十二、(本化別頭佛祖統紀)

ニチジニ 日慈尼 二三五九—二三七六 〔日蓮宗〕京師瑞龍寺第五代なり、日慈號は瑞應院、鷹司兼凞の女なり、正德四年二月十六日剃度受戒し、京師瑞龍寺に入り、在住三年享保元年四月六日寂す、壽十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチジ 日治 二二六五 〔日蓮宗〕加賀立像寺の開山なり、日治蓮藏院と號す、何許の人なるを詳にせず、日像に師事して學德共に高く、加賀侯前田利家の歸依を受く、文祿中小松城下に玉樹山立像寺を開き、越中高岡に妙法山立像寺を開く、天正中加賀金澤に妙布山立像寺を開き、後國主の命により泉野に地を移す、蓋し往古日像北越驛次の遺跡なるに由る、慶長十年八月二十一日寂す、世壽詳ならず、(本化別頭佛祖統紀)

ニチジ 日持 一九一〇 〔日蓮宗〕駿河蓮永寺の開山なり、

日持は蓮華阿闍梨と呼ぶ、駿河庵原郡松野村の人、其俗姓を詳かにせず、生れて奇相あり、諸子百家の學に通じ、兼ねて和歌文章を善くす、偶佛書を讀で出家の志禁じ難く、比叡山に登りて剃髮し、天台の敎觀を學び、法華經、大日經、理同事勝の決に至て疑滯あり、深く慈覺智證二師を疑ふ、一時猛省して謂く、摩訶止觀に行道の障を示すに三あり、自を疑ひ、師を疑ひ、法を疑ふ是なり、苟も一も此疑あらば其罪遁るべからず、今我甚だしく二大師を疑ひ、冥より冥に入る、此魔障を如何せん、若かじ學を廢し行を企て、佛祖の冥護を祈らんにはと、遂に國に歸る、一日岩本實相寺に遊び、智海僧都に謁し、其勸めによりて松葉谷に赴きて日蓮に謁し、遂に其弟子となり、日持と名け、蓮華阿闍梨と呼ぶ、時に文永七年師廿一歲なり、これより日蓮の傍を離れず、師書に巧みにして日蓮の手簡多くは師の手に成ると云ふ、一時別頭行門の大意を記して自記に備ふ、後持妙法華問答と云ふ、弘安五年日蓮の示寂するに方り、六人輪次に身延山に直す、師、子院を構へ本應院と呼ぶ、松野の邑主嘗て日蓮に從ひて俗弟子となる、玆に於て翌弘安六年一梵刹を構へ師を請して開山となす、後貞松山蓮永寺と號す、師常に言ふ、本朝の弘化には日昭日朗の諸老あるを以て足れり、我は異域に往て妙法を闡揚せん、假令海中颶風大魚の難に遭とも是れ我至願なりと、永仁二年九月十三日松野にて宗祖十三回諱大法會を修し、十月身延山に詣でゝ祖塔を拜し、翌三年正月一日四十六歲法を日敎に付し、漂然として寺門を出づ、門人等多く之に隨はんと欲す、師諭して曰く、我異國を救濟して身命を佛祖に奉ず、設ひ江魚の腹中に葬らるゝも辭するところに非ず、これ儞等の堪る所にあらずと、衣を振て去る、門人涕泣して別る、遂に異域に赴き終るところを知らず、此故に師の法孫今に至る迄正月朔日を忌日となして齋會を修す、門下に日敎、日圓、日達、日信等ありて皆一時に聞ゆ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジツ　日實　一九七八／二〇三八　〔日蓮宗〕京都妙覺寺第四代なり、日實字は通覺、俗姓は桃井氏、紀伊の人なり、元德元年十二歲にして光明禪寺に投して出家す、貞治四年四十八歲竊に光明寺を出で妙顯寺第三代朗源僧都の室に入り、衣を更へて欽持す、僧都見て器許す、師一時僧都の命を受けて西國に弘通す、備前國津島に眞言宗福輪寺あり、寺僧寺を捨て師に歸す、乃ち改めて妙善寺と云ふ、居ること年あり、永和四年僧都寂を示す、師妙顯寺に歸り、僧都の喪を修し、次に進山を行ふ、初め小野氏妙覺と云ふ者あり、其別業に寺を造りて師を請ふ、師往て化導し、妙覺寺と號す、日像を崇て開山となし、大覺大僧正を二祖となし、朗源僧都を三祖となし、自ら第四祖となる、永和四年夏六月七日寂す、壽六十一、明珠院日成に法を附す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジツ　日實　一九七四……　〔日蓮宗〕駿河妙海寺の開山なり、日實は但馬阿闍梨と呼ぶ、其俗姓詳ならず、師日昭と交深し、高祖日蓮の滅後日昭を助けて鎌倉に留る、日昭那瀨の妙法寺を退き、師に命じて主たらしむ、師固辭して出でず、日昭濱の法華寺を退き、師に命じて主たらしむ、師再び固辭して受けず、駿河富士郡沼津村に一茅菴を結び、讀經唱題を事とす、晩年檀越の請により一菴を造り海會寺と云ふ、後に

妙海寺と號す、正和三年十月二十三日寂す、壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジツ　日實　二二八五 二三五八　〔日蓮宗〕京師眞如寺の僧なり、日實字は覺性、後字を以て院號とす、攝津難波の人、世々醫を業とす、天性多病にして俗事を厭ひ、專ら佛敎を修す、遂に出家して寂遠院日通に師事し、飯高池上身延に歷遊し、後日通の命により京都眞如寺に主たり、元祿三年法華經書寫を志し、一花一香一字三禮三年にして功を畢る、元祿十一年正月十四日寂す、壽七十四、出家の後も醫業を廢せず、修法投藥兩ながら靈驗を以て聞えたり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジツ　日實　二二一八……　〔日蓮宗〕山城立本寺第五代なり、　日實字は玄式、妙顯寺第四代日霽の門人なり、初め元亨元年後醍醐帝特に勅を降し、御溝の傍今小路の地を割きて日像に賜ふ、日像大道場を開き龍華院妙顯寺と云ふ、二十一年を經て曆應四年大覺の時光嚴帝勅を降し地を易へ、五十三年を經て明德四年將軍義滿再び地を易へて改め造り妙本寺と號す、日霽命を受けて修營す、師曆應の故地なる櫛司に一道場を開かんとし幕府に請ひ遂に龍華院を開く、後に立本寺と號す、應永十二年冬日霽寂す、師日霽を第四代となし、自ら第五代に居る、長祿二年四月二十二日寂す、壽六十餘、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン　日眞　二二〇四 二二八八　〔日蓮宗〕本隆寺派の開祖なり、日眞字は慧光と云ひ、父は中山中納言親通、母は山名伊豆守義時の女なり、文安元年三月二十九日を以て但馬に生る、十二歲にして剃髮して園城寺に入り、十八歲の時比叡山に登る、二十三歲にして京師妙本寺に入り、六代日具に謁し、大に宗義を研究す、爾後北越に化を布き、其途次若狹の小濱を經て一寺を創し、慧光山本境寺と云ふ、これを弘宗立義の始めとす、越前に赴きて化を施し、後攝津に一宇を開き久成寺と稱す、後ち又た丹波但馬に赴き、湯島に曼茶羅湯を開き、長享二年秋京師に皈り、一宇を六角西洞院に構へ、本隆寺と號す、永正の初め職を日鎭に讓り、享祿元年三月二十九日寂す、壽八十五なり、著作、三大部及び天親の法華論の科文註釋あり、

ニツシン　日眞　二二二五 二二八六　〔日蓮宗〕肥後本妙寺の開山なり、　日眞字は慧性、東光院と號す、身延山日乾の門人なり、京師妙傳寺の請に應して第十二代の主となる、天正十三年加藤淸正本妙寺を攝津の難波に築き、師を請て開山となす、十六年淸正肥後半國二十五萬を食む、其封内佛坂に勝地を得て本妙寺を遷し、法性山と呼び、後星山と改む、文祿元年淸正朝鮮國を征す、師道契の餘り往て護念す、淸正凱旋して事を近衞公に告ぐ、公遂に後陽成帝に奏す、乃ち勅して紫衣を賜ふ、是に於て本國寺大僧正日桓、本妙寺を以て九州一派の首山となす、初め肥前大村邑主因幡守某師に就て法を聽き、宗を改て受戒す、封内に寺を造り、師を請て開山と爲す、今の大村本經寺是なり、其他肥前島原の護國寺、豐後鶴崎の法心寺、肥後府中の妙永寺、本學寺、川尻の法宣寺、水俣の法華寺等皆師の手創なり、後京地に閑居す、寛永三年四月二十二日寂す、壽六十二、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン　日眞　ニチジン日進を見よ、

ニチシン　日審　二二七九 二三二六　〔日蓮宗〕京師六條談林の學僧な

り、　日審字は文嘉、號は靈鷲院と云ふ、京師江村久茂と云ふ者の子なり、慶長四年六月二日に生る、八歳にして惠光寺日玄に師事し、十七歳出遊して松崎談林に入り、尋て六條談林に學ふ、日玄の意を受けて壯年に及て敎導に盡さんとし、若狹長源寺に住す、時に卅一歳なり、同寺に於て一百日演說するに日々聽衆群集す、師の演說するにあたり、巧に譬喩を用ゐ、能く聽衆をして首肯せしむ、遂に一身を敎導に委し、六十餘州回歷せさるなし、四十三歳の頃に至り法座七千餘座に至る、族兄日養六條談林の化主となり、後師を招し其席を繼かしむ、師化主の職に在ると五年に及ふ、正保四年立本寺に住す、寺側に老父を安して孝養す、近衞家の邸に於て後水尾上皇の御前に妙法を說き、叡感を蒙る、萬治二年正月廿一日師六十歳にして退隱し、讀經唱題を事とし、寛文六年三月病あり十五日に寂す、壽六十八、著作口演鈔、法華座敷談義（一名圓頓學道法語）あり、（草山集、三國高僧畧傳、日宗著述目錄）

ニチシン　日信　二三二三／二三八四　〔日蓮宗〕紀伊報恩寺第三代なり、　日信號は一正院と云ふ、日順の弟子なり、小西談林の化主となり、紀伊感應寺藻原寺を經て報恩寺に入る、享保九年二月廿三日寂す、壽六十二、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン　日森（二一八一）　〔日蓮宗〕越前妙顯寺第七代なり、　日森號は三智院敦賀妙顯寺第六代賢舜に師事し、其後ちを嗣ぐ、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

〔考〕日森は大永の頃の人なり、

ニチシン　日禛　二三八二　〔日蓮宗〕安房誕生寺第二十九代なり、　日禛字は永順、一善院と號し、上總大楠村に生る、壯年にして玉澤院日雄に投して出家し、飯高談林に入りて玄義の講主となる、奥津妙覺寺に住し、小松原鏡忍寺に移る、飯高談林の化主となり、遂に安房小湊誕生寺に出世す、晩年市川龍潜院に隱れ、享保七年壬寅六月十三日寂す、壽七十五、一生讀誦經卷其數を算せす、說法二千五百座なりと云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン　日親　二〇六七／二一四八　〔日蓮宗〕京都本法寺の開山なり、　日親は久遠成院と號す、上總武射郡埴谷村の人、幼名は寅菊麿といふ、十四歳にて中山法華經寺の日暹に就きて得度す、十九歳西海松尾山總導師職に補す、喫食高眠に安せす、終に中山に歸り、尸陀林中蚊蚋に咬まれて百日間自我偈を誦すること夜々一百遍、次に一日に一爪を拔き、十日に十爪を盡して熱湯に浸し痛苦を忍ふ、應永三十四年京都戾橋の路傍に傘を立てゝ權敎を折伏す、檀越梶折一乘寺を建てゝ師を待つ、師自ら立正治國論を作りて將軍に諫言す、將軍義敎大に怒り師を捕へて獄に繫く、炙火鞭笞熱湯冷水交々攻むれとも堅志拔くへからす、串を以て陰莖を刺し、鍬を燒きて脇に著く、師は法樂となす、義敎益々怒りて鐵を以て舌を拔き、活火に鍋を燒きて頭に冠す、師確乎として動せす、時人呼ひて鍋かぶり上人といふ、嘉吉元年三月義敎責めて曰く、我法華の持者を責むる、何そ現罰なからんや、師答へて曰く、三年を過きず、義敎笑ひて曰く、現報寛なる哉と、師曰く、然らは吾れ百日に縮めんと、六月二十四日果して義敎赤松滿祐に弑せらる、獄中に菅原氏あり、松田妙本なる者ありて師と

檀越の約を結ふ、本阿彌家是なり、後官地を降し、狩野修理入道叡昌開て財を投し、叡昌山本法寺と號す、長亨二年九月十七日寂す、壽八十二、鳥部山に塔を作り、全身を葬る、是れ本壽寺なり、師か開創の寺多し、著作折伏正義鈔、埴谷鈔、傳燈鈔、一生修行鈔、本尊鈔相承、本法寺緣起、御祈禱經鈔、立正治國論各一卷あり、（日親上人傳、本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチシン 日心 一九一六 二〇〇三 〔日蓮宗〕甲斐長遠寺の開山なり、日心は久成院と號し、元眞言宗の僧にして大心房阿闍梨と呼び、小室日傳の俗弟なり、寺は加賀美信濃守遠光か祈願處なりしが、家兄日傳宗を改め衣を更ゆるを聞いて兄の許に行く、兄倶に身延山に至り、日蓮に見えて說を聞かしむ、乃ち日蓮に依り更衣受戒し、寺に皈り檀徒に告ぐ、檀徒亦其寺を奉ず、後巨摩郡中條村慧光山長遠寺と號す、康永二年九月二十一日寂す、壽八十八なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン 日心 ニチシン日進を見よ、

ニチシン 日新 二一九五 二二五二 〔日蓮宗〕甲斐身延山第十七代なり、日新字は純慧、號は慈雲院と云ふ、甲斐巨摩郡今諏訪村の人なり、幼にして日傳に仕へ、日傳の寂後日鏡に依りて得度し徧く諸名宿を參叩し、具に辛酸を嘗む、京師妙法華寺に住し、藻原妙光寺に出世す、天正中日整の囑を受けて身延山に昇る、寺務十五年、文祿元年八月十一日寂す、壽五十八なり、初め德川家康身延山に參詣し累日道話に耽り、莊田一千石を寄附せんとす、師の曰く當山は高祖棲神の靈地なるを以て白毫相光淨界に盈ち、自然に餘裕ありて飢寒あることなし、閣下他日嘉運を得て都城を築かば其時坐具の地を賜へ、と、後家康江戸を開くに及び、師を召して外護の任に當り、飯高中村小西諸談林の俸地を割き、江戸に停住の地を割き與ふ、因て師瑞輪寺を開く、門下に順藏院日巡、妙雲院日賢、法雲院日道、日巡、中正院日友、慈眼院日慧等あり、皆一時に傑出す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシン 日新 シューヤク宗益を見よ、

ニツシン 日進 一九一九 一九九四 〔日蓮宗〕駿河正法寺の開山なり、日進は三位阿闍梨と呼ぶ、初め日心に作る、一に日眞に作る 俗姓は源氏、安倍貞任が末なり、幼にして日蓮に投して出家す、文永八年九月十二日日蓮龍の口の厄に遭ふ、師時に十三歲、日朗と共に走て日蓮を問ひ、奮て一身を顧みず、日蓮厄を免れ、日朗及師檀越四人同じく入牢す、十一年日蓮免せられて佐渡より歸り身延山に入る、後師の父日元身延山に一菴を結ひ、幾ならずして寂す、師正蹤を營み、竹の房と號し此に居る、師の弟亦出家し日善と云ふ、正安の初師偶檀越の請に依りて駿河國富士郡柚野村に就き、竹養山正法寺を築き遷り住す、正和二年日向師を招き身延山に主たらしむ、師時に五十五歲、寺務二十二年、建武元年の冬法弟日善に附し、十二月八日寂す、壽七十六、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジン 日尋 二一八八 〔日蓮宗〕奥州法華寺中興なり、日尋は京都の人、初め本滿寺に投じ、後ち東遊して、奥州に入り、日持の舊跡なる松前の妙光山法華寺を中興し、享祿元年五月十八日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジン 日深 二二三一 二二八四 〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十五代

なり、日深は妙寂院と號し、日乾の門人なり、幼にして出家し、六條談林に於て困學研習々年に及び、終に日遠の囑を受け、京師の本滿寺に居り、元和九年の秋日要寂するを以て身延山に主となる、寛永四年丁卯十二月二十八日寂す、壽五十四、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジン　日陣　一九九九　二〇七九　〔日蓮宗〕越前本成寺第二代なり、日陣は童名を門一丸と云ひ、佐々木高綱の末裔なり、曆應二年越後國瀨波郡加治莊荒川郷今の蒲原郡黑川に生る、貞和二年八歲にして本成寺に登り、學頭日龍に師事す、出家の後ち名々圓光房日陣と改め、笈を負て諸國の學匠を訪ふ、應安二年三十一歲にして日靜に隨つて法を附せられ、本成寺の讓を受け、宗祖弘通の本旨を繼承し、本山の規則を定む、應永四年五十九歲にして京師に到り、本國寺に於て法華經を講ず、應永十三年四月本禪寺を創立す、二十六年八十一歲にして本成寺を日存に附し、本禪寺を日登に附し、同年五月二十一日本成寺に於て寂す、（日蓮宗史料）

ニチジヤク　日寂　一九四六　〔日蓮宗〕武藏長昌寺の開山なり、日寂素と天台宗の僧にして、寂海法印と呼び、淺草金龍寺山の別當なりしが、弘安二年夏微行して身延山に至り、日蓮に見えて戒を受け、日寂の名を賜はる、弘安九年十一月朔日寂す、弟子本覺房日增、河內房日可一寺を造る、後に長昌寺と號す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユ　日守　二三五三　〔日蓮宗〕武藏淨心寺第三代なり、日守字は洞澄、號は一相院、出家して深草の日政と交深し、元祿六年八月二十日寂す、世壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユ　日壽　二〇九〇　二一二二　〔日蓮宗〕武藏池上本門寺第七代なり、日壽は相模の人にして、幼名を龜壽麿と云ふ、父は長尾氏、母は狩野修理入道叡昌の女、後ち落飾して理哲と呼ぶ者なり、生れて幾ならずして日行に投じて得度す、永享六年の夏日行寂するを以て其後ちを繼ぐ、寶德元年十九歲にして美濃に遊び、三光房尊源法印に謁し、居ること三年、偶々病に罹り、醫に就き學養寺に寄宿す、享德元年四月四日遂に學養寺に於て寂す、壽廿三なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユ　日樹　（二〇二八）　〔日蓮宗〕下總眞間弘法寺第三代なり、日樹は相模皮川の人、俗姓森氏、父の名は七郎旨秀、世々太田氏の家臣なり、師十五歲にして中山法華經寺に於て出家し、後ち下總眞間山弘法寺に住す、應安年中中山の日祐京都に上り、立正安國論を上るに方り、師亦た隨從し、身延山日禪と共に宗門の興隆を圖る、同時京都に於て關東三傑の名を得、屢々京都に於て法論に名を擧げたり、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユ　日樹　二三二八　〔日蓮宗〕江戶長遠寺の開山なり、日樹號は長遠院と云ふ、俗姓生國詳ならす、初め池上本門寺、比企谷妙本寺第六代の主となる、寛永五年安國院日奧の不受不施の義に唱和し、東叡にこれを主張す、同年將軍秀忠の夫人淺井氏葬禮の布施を受けすして身延山衆のこれを受けたるを非とし、痛く排擊す、中山法華經寺前住日賢、小西談林日領、正東談林日充、平賀の日弘、碑文谷の日進等四方に呼應したれは、一時勢力あり、身延山主日暹大にこれを

憂ひ、日乾、日遠、日遵等に謀り、異論邪義を以て幕府に訴ふ、幕府命を下し、寛文七年　月廿一日兩方の對論を開く、一方は身延山前住日乾、日遠、前住日暹、藻原の日東、玉澤の日遵等、受不施を主張し、他の一方は日樹、日賢、日弘、日領、日進、日充等不受不施を主張す、對論の後幕府は日樹等を罪す、即ち寛文七年四月日樹を信濃伊奈郡に御預けとなし、一黨の僧を追放す、日樹罪に服し、同八年五月十九日寂す、壽缺く、著作留意要三卷あり、(日蓮宗史料)

ニチジュ　日受　二二八七……　〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第二代なり、　日受は慧性院と號し、身延山第十七代日新の門人なり、天正十九年徳川家康日新を召して江戸城下に停住の地を賜ふ、翌文祿元年日新寂す、師其囑を受けて江戸に慈雲山瑞輪寺を建てゝ自ら第二代に居る、慶長元年瑞輪寺火災に罹る、師法姪妙傳寺の日盛を召して職を授け再興を命し、寛永四年正月二十七日寂す、世壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチジュ　日受（　　）〔日蓮宗〕京師妙滿寺の第九十二代なり、　日受は合掌阿闍梨と號す、宮谷檀林に學び妙滿寺に昇り、專ら宗學に力を盡し、一派の宗學を大成せり、示寂年月日詳ならず、著作如實事觀錄三卷、自鏡篇、同補闕、各二卷、什師諷誦文法釋、十法界抄自鏡篇、當躰義鈔自鏡篇、佛界緣起鈔、我此土安穩義、答書疑難抄辨辨釋一卷あり、

ニチジュニ　日壽尼　二二〇七 二三五一　〔日蓮宗〕京師瑞龍寺第四代なり、　日壽尼は瑞法院鷹司左大臣教平の女なり、寛文十二年九月十三日剃度受戒し、京師瑞輪寺に入り、在住二十年、元祿四年四月二十九日寂す、壽四十五、(本化別頭佛祖統紀)

ニチシウ　日秀　一九一五 一九九四　〔日蓮宗〕相模實相寺の開山なり、　日秀は丹波阿闍梨と呼び、姓は源氏、高橋入道時忠の子なり、俗の字は高橋出羽世と云ひ、上州墨田郡に居り、一時の名士なり、故に墨田を以て呼ぶ、父時忠日蓮に皈依し、弘安二年其次男を出家せしむ、即ち日秀なり、後ち日向飛綱が請に應じて藻原山妙光寺に法を開く、正應元年日向波木井氏の請を受けて身延山に遷り、師を招いて妙光寺に主たらしむ、此に居ること四十餘年、藻原初め常樂山妙光寺と號せしが、師上京の時後醍醐天皇親しく召し見て常在院の號を賜はりしを以て、改めて常在山と呼ぶ、晩年舊館を乞いて父時忠の冥福を祈る、後に妙福寺と云ふ、又相模宮田に實相寺を開く、建武元年正月十日寂す、壽七十（本化別頭佛祖統紀）

ニチシュー　日秀　二〇四三 二一一〇　〔日蓮宗〕京師本滿寺の開山なり、　日秀字は觀隨、玉洞妙院と號す、近衞關白從一位在僕射道嗣公の男、母は瀨尾氏、永德三年を以て生る、八歲にして本國寺日傳の室に投して得度す、父道嗣其別莊を割て一淨室を構し　師を召して法華を講せしむ、名聲世に顯る、帝詔して僧都となしたまひ、京師に一宇を興し廣布山本滿寺と號す、寶德二年五月八日寂す、壽六十八、(本化別頭佛祖統紀)

ニチシュー　日秀　二一五五 二二三七　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、　日秀字は玄紹といふ、早年出家して講席に列り、顯密二教に精通し、盛譽を馳す、弘治二年智積院の席を繼きて化主となり、六大法身の講席を開く、自後智積妙音の二院新命開法の日必す六大法身の講席を開くは師に始まるなり、

同三年醍醐寺に登りて大僧正源雅に謁し、報恩院の事相を受く、天正五年十一月十二日寂す、壽八十二、（結網集、續日本高僧傳）

ニチシユー　日秀　二二二六／二二八一　〔日蓮宗〕山城墨染寺の開山なり、　日秀字は純志、甲斐國巨摩郡の人なり、身延山第十八代妙雲日賢の門人なり、和歌を嗜む、時に豐臣秀吉の姉武藏守一路の室瑞龍夫人日賢に歸依し道契尤も厚く、贈答絶えず、師毎に其介を務めて京師に往く、時に京師に幽齋紹巴有り、和歌を以て聞ゆ、師幸に交を結び、滯留の間墨染櫻の舊跡を訪ひ、相偕に語り歎ず、秀吉之を聞き、師を召して貞觀寺の緣由等を諮り、且つ墨染の地を割て一精舍を造りて師に賜ふ、師因て墨染寺と號す、秀吉時々師を延き見、奏して大僧都に補す、秀吉沒後師本國に還り雙親の塚を吊す　元和七年七月十七日寂す、壽五十六、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユーニ　日秀尼　二一九四／二二八五　〔日蓮宗〕京都瑞龍寺の開山なり、　日秀字は妙慧、號は瑞龍院、豐臣秀吉の姉にして三好武藏守一路に嫁し、關白秀次岐阜宰相秀勝を生む、二子死するに逢ひ、深く世の無常を嘆き、身延山十八代日賢に歸依し、其檀越となり、財を捨て、身延山の佛殿、方丈、大光山の立像堂、客殿、庫厨を再建擴張して舊制に三倍す、一路死するに及び、寂照院日乾に請ひて比丘尼となり、讀經唱題を事とす、家康之を憐みて特に俸地を與ふ、寬永二年四月二十四日寂す、壽九十二、其蹟は幕命により尼寺と爲り、瑞龍寺と呼ぶ、日秀在世の時東山善正寺を造り、秀次の冥福を禱りしと云ふ、瑞龍寺は世々貴族の女子主となる、故に世に村雲御所と呼ぶ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユー　日宗　一九五一……　〔日蓮宗〕甲斐遠光寺の開山なり、　日宗字は宗明と云ふ、甲斐の人、俗姓は武田氏、俗名を三郎光行と呼ぶ、父遠光深く佛を信じ、榮西禪師に歸依せしかば、沒後師父の冥福を祈る爲めに一寺を創し、榮西の徒を請してこれに住せしむ、文永十一年日蓮身延山に隱れしが、其檀越波木井實長師と親戚なるの關係を以て屢日蓮に見へ、遂に其德に服して出家受戒し、自ら創したる寺も供す、日蓮之れが爲めに經字塔を造りて與へ、山を寶塔山と呼ばしむ、後に遠光寺と號す、正應四年四月五日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユー　日宗　二二七六／二三三〇　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第十九代なり、　日宗字は叡相と云ひ、境妙院と號す　身延山遠心院日境の門人なり、中村談林に於て學成り、鷹峯の化主となり、復た中村の化主となり、終に龍華院妙顯寺の請に依り主とな

る、後ち鎌倉高松寺に退き、元祿十三年正月二十日寂す、壽八十五、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユー　日修　二四八三—二五五一　〔日蓮宗〕甲斐身延山第七十五代なり、日修字は圓政、號は心妙院、備後福山の人、中村源助の子なり、文政六年三月四日生る、幼名萬吉と云ふ、七歳備中花尻村普門院日現に就きて得度し、尋て京師妙顯寺日谷の下に師事す、東訊西問師を求め、優陀那日輝に就きて學業大に進む、日輝水戸に味堂に在りて教養を事とす、日修日昇等其下に留る、日輝水戸を去りて加賀金澤に歸り、尋て再び出で、池上に來る、日修は日昇と共に常に隨侍す、日輝示寂の後國に歸る、明治五年大坂に出で講席を張る、後本國寺に住し、尋て身延山久遠寺に住し、第七十五代となり、大教正に補せらる、明治廿四年五月十七日同寺に寂す、壽六十九、

ニチシユー　日收　二一八七—二二五八　〔日蓮宗〕京師常光寺第二代なり、日收字は秋澗、號は智勇院、別に一鷗と云ひ、睡心病叟と云ひ、古川子と云ふ、能登の人なり、京都松ヶ崎談林下野飯高談林に學び、心性院日遠の教を受く、次で安國院日奥に迎られ、妙覺寺に內外の書を講ず、元和六年肥後に下り、國主加藤清正に遇せられ、備者那波道圓と交り、詩文の贈答をなす、慶安三年十月十日寂す、壽七十二、（本化別頭佛祖統紀、日蓮宗史料）

ニチジユー　日住　二二九七—二三六九　〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第八代なり、日住字は圓住、號は養眞院、甲斐の人なり、圓妙院日桂に從ひて出家し、飯高談林に學ぶ、後西谷談林の請に應じて文句を講ず、延寶二年武藏瑞輪寺に住す、寺務十四年、再び飯高談林の請に依り經を講ず、端輪寺は立本院日運、大中院日孝の二代を經て、元祿四年再び入りて寺務を見る、同五年退隱し、寶永六年三月三十日寂す、壽七十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユー　日住　二一四六……　〔日蓮宗〕京師妙覺寺第十代なり、日住號は眞如院、京都妙覺寺日延に師事し、日延の命を受け本覺寺第二代妙覺寺第十代となる、後ち兩寺を合して一寺となし、益々法門を弘む、晩年紀伊和歌山に遊び、眞言宗の廢寺を再興し、和歌山正住寺と云ふ、文明十八年九月十八日寂す、世壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユー　日從　二三一〇—二三六八　〔日蓮宗〕山城本國寺第二十二代なり、日從字は通心、信解院と號す、加賀國の人なり、瀧谷日遼の門人、身延日奠の法孫なり、中村談林に入り後水戸談林に至り、玄義を講じ、六條談林の化主となる、紀伊國の蓮心寺に住し、京師の妙覺寺に進む、後中村談林の請に應ず、本國寺第二十二代の席に倚り、大僧都法印に任じ、寶永五年十二月十七日寂す、壽五十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユー　日充（……）　〔日蓮宗〕尾張某菴の學僧なり、日充は下總國の人なり、幼より出家し、東西に奔走して天台教觀を研究し、本化別頭の宗致を通曉して下總岩邊に講席を開く、學徒輻輳す、師名利を嫌ひ、終に學徒を捨て、尾張に適きて隱棲す、一弊寺に唱題讀經を事とし、後能登國に至り瀧谷に隱る、暮年に故國に歸る、入寂の時、異花棺中に飛ぶ、乃ち花降上人と云ふ、其年月日詳ならず、（扶桑隱逸傳、本化別頭佛祖統紀）

ニチジユー　日什　一九七四／二〇五二　〔日蓮宗〕妙滿寺派の開祖なり、日什父は鎌倉の人、石堂太郎覺知、母は會津城主、葦名四郎盛宗の女清玉姬、正和三年四月二十八日岩代會津若松に生れ、幼名を權太夫國重と稱す、少にして經史百家の學に通じ、十九歳京都比叡山に登り、慈遍僧正に就きて薙髮し、名を玄妙と改め、天台を學び、止觀を究む、其間近畿の巨刹を訪ひ、諸宗の蘊奥に通ず、三十八歳能化職に推選せられ、一山三千の學徒を領す、建德二年辭して鄕里に歸へる、師の外戚なる國守若狹守蘆名眞盛、强ひて師を菩提寺羽黑山東光寺の職に就かしむ、道譽盛なれども心猶安からざるものあり、一日日蓮上人著述の開目抄如說修行抄の二書を感得し、一閱の下直に既往の疑義を了解し、天台の非を悟り、慈覺智證の謬旨を知る、是に於てか斷然天台宗を捨てゝ日蓮宗に歸し、自ら日什と號す、大衆狂となし、密に之を害せんとす、上足日仁其謀を師に密告す、乃ち天授六年師六十七歳の時日仁、日金、日妙、日穩、日全、日義の六老僧と共に逃走して下總市川鄕眞間弘法寺に至り、日宗に謁して未だ契せず、正中山法華寺に入り、日祐に見えて日蓮の書を披閱し、感奮興起し、一天四海皆歸妙法を實地に見んと欲し、弘和元年六月京都に到り、二條關白良基に依りて上奏し、立正安國論、及び意見書を献じ、諸宗の謬妄を論ず、尋きて二位僧都に敘せられ、京師弘通の勅命を蒙むる、然れども未だ上奏の意を達することを得ず、歸途身延山に登りて法義を談ず、翌年諸宗の謗法を鎌倉管領足利義滿に訟へ、京都に至り天裁を伺へども果すこと能はず、京師に留りて妙法を弘通す、弘和三年夏再び天裁を請ふ、良基大に師に歸依し受法唱題す、元中元年室町將軍に謗法禁遏の旨を訴ふ、吏言を左右に托して容れず、翌年遠江見附驛に一宇を剏し玄妙寺と號す、時に日宗と邂逅す、初め師眞間中山にあるや、既に諸門流は法理化儀を誤り、受授の正統絕滅せるを看破す、是に於て大に其邪謬を攻め、僻謬を衝く、日宗答ふること能はず、之より諸門流の誤謬を捨て、直授日蓮塔中別付の正義を弘通す、是を一派開創の紀元とす、乃ち師の開宗後六年にして、日蓮滅後百四年に方り、元中二年師年七十二歳の時なり、翌年吉美妙立寺を建て元中五年京に入り、六年妙滿寺を開き、一派の本山とす、同八年三月死を決して將軍義滿に面訴す、義滿陽に之を容るゝと雖、遂に之を用ひず、同七月席を門弟に附し、京師を發し途次妙法を弘通し、若松に歸へりて妙法寺を創立し、父母の冥福を修し、元中九年（北朝明德三年）二月二十八日寂す、壽七十九、著作治國策、

日什上人

前諷誦文、後諷誦文、置文等あり、(本宗綱要)

〔考〕本化別頭佛祖統紀に日什の傳あり、彼此參照するに相異するところあり、今は顯本法華宗に傳ふる所に從ふ、

ニチジュー　日重　二二〇九 二二八三　〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十代なり、日重は一如院と號す、京都の人某の子なり、某若狹に遊び、師を其地に生む、師六歲にして父に從ひて京都に歸り、本國寺に投じて出家す、尋いて笈を負ひて和泉堺に遊び、日珖日諦日詮に就て天台三大部を究め、後、南都に學ぶ、既にして歸りて本國寺に住し、寺務の暇、日々に天台教を講ず、講席日に盛んなり、茲に於て本國寺大衆相議し、特に本國寺內に求法院を設けて師を請ず、師一たび門を構へて四來の學徒群をなし、續講七年にして三大部を畢ふ、乃ち舊寺に還り、小庵を結びて隱る、慶長七年身延山の請するも師固辭して起たず、高弟日乾を遣はす、日乾日遠相繼ぎ皆身延山に住す、其功勞を師に歸し、身延山二十代に配す、師閑居すと雖も常に道俗座に滿つ、師循々として祖書等を談ず、平素浮華を事とせず、紙衣布衲、老に至るも改めず、元和九年閏八月六日寂す、壽七十五、一生說法五百四十餘座、讀經一千五百七十部、著作見聞愚案記廿四卷、崑玉集十卷、同撮要集、空過致悔集、法華神書、(一名三十番神抄)各一卷、和語鈔十卷、立正安國論聞書一卷あり、(草山集、本化別頭佛祖統紀、三國高僧畧傳)

日重上人

ニチシク　日祝　二二二七 二二七五　〔日蓮宗〕甲斐身延山第廿三代なり、日祝は慧眼院と號し、二十二代日遠の門人なり、幼にして日重、日乾、日遠の三師に親炙し、後ち西谷談林の化主となる、慶長十三年日遠主席を辭して大野に隱る、因て命を受けて座主となる、翌年病に罹り、退て醫藥に就く、乃ち日乾再び主位となり、寺務七年にして退く、時に家康これを聞き日遠を主たらしむ、是れを乾遠兩師二度の進山と云ふ、日祝の病遂に治せず、元和元年五月七日寂す、壽四十九、(本化別頭佛祖統紀)

ニツシク　日祝　二〇八八 二一七三　〔日蓮宗〕京師頂妙寺の開山なり、日祝は妙國院と號す、俗姓は千葉氏なり、應永三十四年下總千葉郡に生る、小字は千鶴麻呂、九歲にして中山法華經寺第六代日薩の室に入り得度す、文明五年師四十七歲京師に妙法を弘通す、時に細川氏治部少輔勝益道契尤も厚く、一精舍を築きて師を請す、師乃ち頂妙寺と號す、高益の子高國々々の子氏綱同しく師に歸依す、是を以て寺門大に賑ふ、後和泉堺に隱退す、後寺と爲し永松山頂源寺と云ふ。永正十年四月十二日寂す、壽八十六、(本化別頭佛祖統紀)

ニツシユツ　日出 ……二二一九 〔日蓮宗〕伊豆本覺寺の僧なり、日出字は是生、一乘院と號す、身延山日延の俗弟なり、初め天台宗にして仙波談林に能化職を勤む、後、日延に投して日蓮宗に歸す、伊豆三島に往て折伏敎化し、數々危難を冒す、一門の徒一室を構へて師を請す、師常在山本覺寺と號し此に居ること十六年、永享八年鎌倉に往き、日蓮の舊趾夷堂に留る、諸宗の徒より攻擊せられ六月二日三昧橋に於て縛せらる、副元帥持氏使を馳せて延見し、宗義を問ひ歸信し夷堂に田園若干畝を寄す、師改めて妙嚴山本覺寺と號す、長祿三年四月九日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシユン　日春（一九四二）〔日蓮宗〕甲斐長光寺第三代なり、日春字を空存と云ふ、俗姓は鮎澤氏、甲斐山梨郡の人なり、初め天台宗の僧となり、法印に昇り、立正寺日乘に見えて其說を叩き、終に身延山に至り、日蓮に投じ弟子となり、日春と云ふ、後長光寺に日法を請じて開山となし、日乘を以て第二代とし、自ら第三代となる、某年五月八日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニツシユン　日春 二二八二—二三六二 〔日蓮宗〕山城妙顯寺第十五代なり、日春字は是然、後秀感と改む、號は中道院、俗姓は清水氏、元和八年二月十六日を以て加賀金澤に生る、八歲にして本學山蓮覺寺主日諦に投して出家す、十六歲にして下總中村檀林に入る、時に春山上座小西談林に至り玄義を講ず、師上座に隨侍す、後鷄冠井談林の講主となる時に三十八歲、尋て松崎談林の講主に進む、寬文五年四十四歲妙顯寺に上り四海唱導師の重任を受く、時に中村談林主席を空す、大衆師の德風を仰ぎて强請す、師重職の暇宗義を授く、講了て京師に歸り、伽藍を修補し、大に壯觀を加ふ、寺務十七年、法弟日空に讓り退隱す、元祿十五年正月廿五日寂す、壽八十一、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日順 二〇九〇—二一七一 〔日蓮宗〕攝津本澄寺の開山なり、日順は其生國姓氏を詳にせず、權大僧都に任せられ、京都本滿寺の子院に寓す、靈驗により攝津島上郡上牧村に精廬を創す、將軍足利義植土地を割きて供す、後に本澄寺と號す、永正八年九月十九日寂す、壽八十二なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日順 二二九七—二三六〇 〔日蓮宗〕紀伊報恩寺の開山なり、日順字は堯辰、俗姓は石野氏、紀伊に生る、幼にして甲斐大野日性の室に投して得度す、十三歲にして小西談林に入る、寬文六年德川光貞其母の爲に白雲山報恩寺を紀伊吹上に建つるに及ひ、師を招きて主とならしむ、次て權大僧都に補せられ、遂に開山となり、紀伊一宗の首位に居る、寺務を執ること十九年、相坂村應供寺に結庵して隱る、居ること十七年、元祿十三年九月十日寂す、壽六十四なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日遵 二一四七…… 〔日蓮宗〕京都妙滿寺の第十代なり、日遵號は寂光院と云ふ、文明年間專ら弘通に力を盡し、諸國に寺院を開剏すること數十、當時の巨刹を開宗せしむること夥し、長享元年十月廿日寂す、壽缺く、

ニチジユン　日遵（二三一四）〔日蓮宗〕安房小湊延生寺第十九代なり、日遵は長遠院と號す、鄉貫詳ならす、安房の

誕生寺京師の頂妙寺に歷住し、承應三年十月三日寂す、著作諫迷論十卷あり、

ニチジユン　日遵　二一八一……〔日蓮宗〕京師本國寺第十三代なり、日遵は法性院と號し、小字は吉壽麿と云ひ、俗姓は源氏、太田道灌齋持資の季子なり、幼にして日了の門に入りて出家し、華山家の猶子となり、本國寺の主となる、文明十八年七月二十六日持資逝去し、法號を香月院春苑靜勝居士と云ふ、舍兄資康寺を造り、其靈を祭る、乃ち平河山法恩寺なり、在職十四年、大永元年辛巳正月二日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日純　二一四二—二二二〇〔日蓮宗〕武藏本門寺第九代なり、日純は惠眼院と號し、日調に隨つて學び、遂に其囑を受けて池上本門寺に主となり、居ること四十年、天文十九年三月二十一日寂す、壽六十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日純　二二八二……〔日蓮宗〕京都妙滿寺第三十代なり、日純は日經日淵と同時の人にして宗學に秀て、宗學の衰頽を嘆き、四方を遊化して上總宮谷に一大學林を興す、徒弟雲集す、元和八年寂す、壽缺く、

ニチジユン　日淳（　—　）〔日蓮宗〕加賀經王寺の開山なり、日淳は加賀の人、父は越前淺倉家臣上木氏、師の妹は高岡大納言利長小松中納言利光の母にして、深く師に皈依し、金澤に經王寺を剏す、師迎へられて開山となる、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジユン　日潤　二三七七……〔日蓮宗〕武藏本門寺第二十三代なり、日潤は字を慈雲、後ち字を以て院號と爲す、江戸の人なり、妙悟院日玄に師事し、飯高談林に於て學ぶこと二十餘年、終に敎藏院の席を繼ぎ、玄義の講主となり、南谷に來り玄義を講す、後ち兩山の主となる、寶永七年庚寅の冬池上の厨庫火を失し、不幸にして佛殿祖堂等皆な燒亡す、是時高祖日蓮自筆の長榮山本門寺の牓字も燒失す、師再興を經營し客殿方丈厨庫等を造れども、佛殿祖堂未だ成らすして寂す、實に享保二年正月二十七日なり、壽數詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨ　日初（二四六四）〔　・　〕攝津池田某菴の僧なり、日初は何許の人とも知らす、攝津の池田に小庵を營み住し、食あれは打坐讀書し、食盡くれば托鉢行乞す、常に破袈裟一領を肩にして安然たり、傍ら國學を好み、日本春秋若干卷を著はす、（近世畸人傳）

〔考〕日初は文化頃の人なるべし、

ニチジヨ　日助　二二二三……〔日蓮宗〕京師本國寺第十四代なり、日助は蓮光院と號し、華山家太政大臣藤原政長の猶子なり、大僧都に任じて住持となる、天文五年比叡山の衆徒及び檀越兵を起し山に逼り、火を放ちて灰燼となす、日助大に力を振ひ、造營に勤め、諸伽藍を一擧に成就す、住持三十三年、天文二十二年七月十四日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨ　日叙　二一八三—二二三七〔日蓮宗〕甲斐身延山第十五代なり、日叙は寶藏院と號し、幼にして日傳の門に入り、後ち日鏡の囑を承けて主となる、是時天下大に亂るれども一山殊に靜かなり、寺務十九年、日整に讓り、西谷定林房に退き、天正五年五月二十二日壽五十五にして寂す、初め甲陽侯信玄身

延の地勢を見て居城を移さんと欲し、禮を備へて日叙に告ぐれども聽かず、信玄大に怒り、元龜三年四月十一日兵を以て山を圍みたるも、疾を發して退き一山全きを得たり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日昇（二三四九）〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、　日昇は其郷貫詳かならず、宗恕禪師に師事して法を嗣ぎ、尾張瑞龍寺に住し、後正法山妙心寺に出世す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

ニチシヨー　日昇 二四九二―二五五一〔日蓮宗〕武藏本門寺第六十三代なり、　日昇字は泰山、號は樗菴と云ひ、後に妙乘院と稱す、越後の人小林氏なり、優陀那日輝に師事し、後、妙光院日京に師事し、其敎を受く、佛儒の學に達し、詩書畫琴笛等の末技に至るまで通せさるなし、數々身延山主に推さるゝも出てす、道暇文墨を樂めり、明治廿四年十月廿九日寂す、壽六十、著作迹門宗義鈔一卷、樗菴燕語、禪餘書談各二卷あり、

ニチシヨー　日性 二二九一―二三五八〔日蓮宗〕京師大虛庵の僧なり、　日性字は春繼、知足庵日龍に師事し、法兄由信と共に學を勵みて學譽高し、元祿十一年十一月十五日寂す、壽六十八、諡して法林院日演法師と稱す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日性 ……二二七四〔日蓮宗〕京都要法寺の學僧なり、　日性は世雄房承惠と云ひ、後に圓智院と號す、要法寺に住して學譽あり、慶長十九年二月廿六日寂す、著作御書註（圓註と云ふ）十八卷、柹葉要文六卷、御書要文、同難字抄、同和語拾遺記、各二卷、元祖蓮公薩埵畧傳一卷あり、

ニチシヨー　日性 ……二三〇九〔日蓮宗〕甲斐大野山本遠寺第三代の主なり、　日姓字は堯印眞應院と號す、紀伊家臣三浦長野守爲春の子なり、心性院日遠の門人となり、次て小西談林に遊ひ、甲斐大野山に住し大に門風を張る、在職八年、慶安二年五月五日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日證 ……一九七七〔日蓮宗〕駿河常林寺第二代なり、　日證別に寂仙房と號し、兵部阿闍梨と呼ぶ、眞間山日頂の弟なり中山日常の意により、日蓮の門人となる、駿河富士郡重須村は父橘樹伊豫守定時が舊跡なるを以て此地に居る、母妙常も亦た來る、妹乙御前も來り、落飾して妙國尼と呼ぶ、母妙常は正安三年二月二十九日寂す、翌乾元元年兄日頂父母の墓を弔ひ、居ること年餘、延慶元年二月三日妙國尼寂す、同三年三月十四日日證も亦寂す、日頂益々去ること能はず、居ること十六年、文保元年三月八日に至り寂す、後ち寺を造り常林寺と呼び、日頂を開山となし、日證を以て第二代となす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日昌 二二九七―二三五三〔日蓮宗〕京師本滿寺第二十四代なり、　日昌字は喜俊、示性院と號す、俗姓は久田氏、京都の人なり、十二歳にして出家し、十五歳にして山科談林に入り、廿五歳にして小西談林に轉す、座元日俊に兄事し、學業を力む小西談林の化主日寬の下に宗乘を究め、後本滿寺に住し、尋て小西談林化主となる、本滿寺火災に罹り、師再興の功を完くす、元祿六年五月六日寂す、壽五十七、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日唱 一八四六―一九三三〔日蓮宗〕下總唱行寺の開山なり、　日唱は首題房と呼び、初め富木氏の家臣なり、淨土宗

に投じ出家して鐘阿彌と號す、文應元年日蓮中山に於て百日說法するを聽きて大に悟り、日蓮より首題房日唱の名を與へらる、文永十年五月朔日寂す、壽八十八なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチシヨー　日詔　二二二九/二二七七　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十四代なり、　日詔は字を無問と云ひ、其生地を詳かにせず、池上本門寺十三代日尊に師事し、後ち通生院日裕小西談林を開き、師を招く、師因て文句を講ず、慶長八年日尊寂し、師嗣で主となる、十三年秀忠寶塔一基を營造す、後大峰法性寺を中興す、主座たること十五年、元和三年四月十九日寂す、壽四十九、著作四教儀集解要文八卷、顯正錄要文、四教儀要文各五卷、文心解要文、觀心記、智者一代訓導記各二卷、草木成佛記一卷あり、(日蓮宗史料)

ニチシヨー　日昭　一八九六/一九八三　〔日蓮宗〕伊豆妙法華經寺の開山なり、　日昭字は大成辨、嘉禎二年下總葛飾郡平賀村に生る、俗姓畠山氏父の名は祐昭といふ、師は其仲子なり、建長元年十四歲郡の山寺に投して薙髮し、名を成辯といふ、後遊方して比叡山に登り、尊海法印に師事す、建長五年春十八歲にて登壇受戒す、慈覺智證の書を讀み、法華經大日經理同事勝の說に至りて疑問多し、時に日蓮關東にありと聞き、親しく見えんと欲し、先つ鄕里に歸りて父母を省し、次いて日蓮を松葉谷に訪ひて敎を受け、名を改めて日昭といふ、蓋し父祐昭の一字をとれるなり、智辯に長したるを以て大成辯と號す、正嘉二年日蓮父の喪に遭ひて安房に歸る、爾來師松葉谷の草堂を監し、日蓮が佐渡謫流の間は常に草堂にありて留守す、文應元年草堂諸宗暴徒の爲に燒かる、師刻苦して再建す、文永八年九月日蓮龍口の難あり、官命して松葉谷の草堂を毀ち、日朗日心を獄に降し、一門の徒皆逐はる、師一飯一宿をも得る能はず、辛苦して跡を晦まし、濱に菴居して竊かに時の至るを待つ、十一年日蓮鎌倉に歸り、草堂に入る、師出で迎へて共に相見る、日蓮甲斐に赴く時、師に命じて長興山の主たらしむ、師日朗に讓らんことを請ひ、自ら濱に潛みて身延山に侍せず、深く諸宗に慮るところあり、十一月池上右衞門太夫宗仲長榮山を築きて日蓮に供し、亦別院を構へて師を待つ、師法弟大進を遣はして監せしむ、弘安五年日蓮池上に病む時、師往きて看護す、日蓮師に後事を託し、手書の註法華經開結十卷、法華三部要文三卷、本理大綱集一卷を付す、十月十六日日蓮寂す、師日朗と共に棺を舁きて荼毘し、諸徒を引率して身延山に塔す、六人の弟子各子院を造る、師の構ゆるところ常不輕院といふ(俗に南の坊といふ)弘安六年正月二十三日喪事終る、師身延山淸規を作り、十月長榮山に會して日蓮の遺文百四十餘篇を輯し、師自ら手書し錄内の書といふなり、事畢りて濱に潛居す、正安二年師舊師尊海を訪ふ、尊海時に年九十一、病みて京都にあり、師見えて本地久遠の說をなし、本化別頭の戒を授く、傍に智祐といふものあり、師の法話を聞き、頓悟して口決を受く、尊海見て大に喜び、直に智祐を師に附す、師乃ち日祐と名け、本門圓頓戒相承血脈譜を製して授く、師看護のことを日祐に囑して鎌倉に歸る、是より先き越後信濃兩國の太守風間信昭師の弟子となり、德治元年那瀨に一寺を營みて師を請す、師乃ち法王山妙

ニチ(日)シ

法寺と號して開堂供養す、文保元年門弟日成を召して院を附し、再び濱に菴居す、信徒淨財を棄て丶一宇を構へ、師の居に充つ、師大に喜び、開堂の式を擧げて、弘延山妙法華寺といふ、旣にして寺務を日祐に附し、傍に小菴を營みて安居すること七年、元亨三年病を得、信昭を召して北陸弘法の事を託し、日祐を召して沒後の事を告げ、三月二十六日寂す、壽八十八、山上に葬る、後正慶建武の交妙法華經寺兵燹に罹る、伊豆の檀越雲金村に東金山妙本寺を造る、少時して濱を雲金に合して遷す、文祿年中第十三代日苞田方郡賀殿村に妙法華寺を再建し、元和中第十六代日亮官命を受けて今の玉澤に開き、名を經王山と改むといふ、著作本門圓頓戒相承血脈譜あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニツシヨー　日紹　二二〇二／二二八二　〔日蓮宗〕京師妙顯寺第十一代なり、　日紹字は是陽、俗姓は平氏、備前金川の人なり、初の名は日韶、後日紹と改む、下總飯塚に遊學す、中年備前に歸り蓮昌寺に住す、後日堯の讓を受けて妙顯寺に上る、天正の初大僧都となる、師の平生曉より法華經一部を讀誦し、次に題目を唱へ、次に祖書を閲して午に至て止む、日々課業とす、元和八年六月二十五日寂す、壽八十一、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ニツシヨー　日省　二二九七／二三八一　〔日蓮宗〕甲斐身延山第三十二代なり、　日省字は老辨、智寂院と號す、久津美氏、江戸の人なり、幼にして善立寺主十如日行に投ず、十三歲にして飯高談林に入る、困學二十餘年、終に玄義講主となる、山科の請に應じて妙傳寺に住し、後飯高談林の化主となる、天和二年師四十七歲鎌倉扇谷に幽棲す、元祿二年水戸光圀特に禮請して講話を開く、師居ること三年、去て會津に往き、太守正之の禮請を受く、十一年身延山の請あり、十二月十三日進山す、十四年賜紫の詔を拜す、在住七年、東谷に退隱す、攝心十八年、享保六年正月十三日寂す、壽八十五、著作本化別頭高祖傳二卷あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニツシヨー　日生　二二一三／二二五五　〔日蓮宗〕飯高談林の開山なり、　日生字は慧教、教藏院と號す、俗姓は鳥井氏、播磨の人なり、十一歲にして京師の立本寺善住院日經に師事す、後備前岡山に遊び、蓮昌寺に寓す、寺の檀越某師に歸依し外護を約す、後に京師の松崎僧都谷に茅菴を結び、天台の三大部を熟讀し、本國寺權僧正日禎に謁し其指示に依り比叡山に上る、日禎の徒文市上總飯塚の僧要行等相共に日々講席に陪す、要行學成りて國に歸り講席を開き、飯塚檀林と呼ぶ、師之を聞き大に喜び、往きて扶佐す、要行大に喜で師に謂て曰く、吾日來多病なり、死後子之を謀れと、尋いで寂す、其時飯塚異端黨を結び師等を迫害す、師內山地を易ふるも吏尙ほ可かず、師將に去らんとす、時に飯塚の城主平山氏師を妙福寺に請す遂に同寺に留り談林となる、後世日蓮宗講經の初祖となす、後京師に歸り松崎談林を開く、備前の蓮昌寺師を請て止まず、終に其請に應ず、晩年立本寺第九代の主となる、文祿四年七月二十四日寂す、壽四十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチシヨー　日精　二二四四　〔日蓮宗〕相模宗延寺の開山なり、　日精號は三光院と云ひ、其生國を詳かにせず、相模小田原城下に報新氏宗延と云ふ者あり、一精廬を造り、衣食の

資を合せて師に供す、師其誠實に感じて、讀經唱題甚だ勉む、宗延死するに及び、師官に告て精廬を香花の地となし、報新山宗延寺と呼び、身延山に屬す、天正十二年十一月六日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチショー　日匠　二二八七 二三四九　〔日蓮宗〕京師本法寺第二十代なり、日匠字は溫故、本地院と號す、俗姓詳ならず、攝津伊丹の人なり、同國尼崎長遠寺にて落飾し、日迅に師事し、六條談林に遊ぶ、化主一性院日威其才を愛し、器許して關東に送る、日匠飯高に上りて壽量院日祐に教を受け、後化主となる、本法寺に住し、中山に轉住し、東山の大藏に入り、後梶折の安穩寺に退隱し、元祿二年六月二十一日寂す、壽六十三、生前艸山和尚と交り、著書多く日親上人德行記一卷、病導師二卷、壽量祐公玄義解、平假名畫入德行記、各一卷等あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチショー　日祥　二二六六 二三二一　〔日蓮宗〕山城鷄冠井談林の開山なり、日祥字は梅山、通明院と號す、京師西陣の人なり、其姓氏詳ならず、得度して鷹峰談林に入る、研究年を積み、南都に遊び唯識を學び、兼て戒律に通じ、後鷹峰談林の化主となる、承應三年鷄冠井北眞經寺荒廢を嘆し、談林を開いて教授す、德風四邊に達す、後紀伊感應寺に退隱す、寛文十一年八月十日寂す、壽六十六、(本化別頭佛祖統紀)

ニチショー　日邵　二二〇五 ……　〔日蓮宗〕京師本圀寺第九代なり、日邵字は壽政、號は智門院と云ふ、俗姓詳ならず、始め圓龍坊と云ふ、京師の人なり、天文十四年に生る、出家して學德並に高く、天正年中光了山本圀寺の九代となる、慶長七年十一月二十日播磨姫路の池田輝政の夫人督姫(德川家康の側室の生む所)の逝去に方り、師其地に下り葬儀を行ふ、翌慶長八年三月朔日督姫(緣了院妙幻尊靈)の一百忌に丁り、輝政難波より船を發し、大衆の供養米を京師に送る、偶〻攝津北山の麓なる中筋村の村民、領主の收納を催促するに苦み、伊勢に赴き收納の米穀を借らんとする途次、船中に滿積せる米穀を見、船人に就いて其本圀寺に送るものなるを聞き、村民等相議し、轉して京師に至り、本圀寺に詣して師に謁し、困窮の實況を告け、切に救助を請ふ、師は異宗の徒を救助するは我宗風に背けることを告け、且つ村民の請により日蓮上人の宗風を說く、村民等村に皈り、相議して宗門を改め、日蓮宗となり、起請文を師に呈す、師乃ち米四十石を與ふ、村民大に喜び、師の教化に皈仰す、後中筋村に一寺を興し、松榮山妙幻寺と號し、妙幻尊靈の冥福を修す、師請により開山となる、爾來例月二十日に村民相會して妙幻尊靈の冥福を修すると慣例となる、師示寂年月日詳ならず、(大日本史料)

ニチショー　日章　二二三〇 二三二五　〔日蓮宗〕京都本能寺の學僧なり、日章は後に如竹と云ふ、薩摩の人、父は屋久島の舵工(一說に農)なり、幼にして出家し、稍長して京都に上り、本能寺に投し、日蓮宗の宗義を學ふ、後國に皈りて文之玄昌の名を聞きて其下に師事し、儒學を學ふこと八年に及ふ、遂に俗に還り、專ら儒學に耽り、尤四書に精し、如竹の名を以て大に聞ゆ、慶長の頃攝津有馬の溫泉に遊び、偶然藤堂高虎侯に遇ひて信重せられ、其招聘により伊勢に往きて顧問となり、數〻忠言を進む、寛永七年侯薨して後。薩摩に皈りて島津氏

ニチ(日)シ

に信重せらる、俸祿を擧けて親族、幷に近所の貧民に配與し、翌八年琉球に入り、儒學を以て四人を敎化す、幾もなく薩摩に皈り、東上して大阪に入り、其地に門戸を張り、明暦元年薩摩に皈り寂す、同元年五月十五日にして壽八十六なり、（漢學起源、近世叢語、日本敎育史料）

ニチシヨー　日證尼　二二四五／二三二〇　〔日蓮宗〕山城燈光寺の尼なり、　日證字は妙弘、法誓院と號す、大和添上郡の人なり、父は播磨守淸原朝臣胤榮、母は近衛關白左大臣前久公の女なり、日證後陽成天皇に事へ、三皇子を生む、長は法嚴院前大僧正義尊、次は寂住院前大僧正常尊、末は遍照寺照光院主道晃とす、帝崩御の後立本寺日審に歸して尼となる、後水尾天皇特に三位を賜ふ、之より三位尼公と呼ふ、萬治三年六月二十七日寂す、壽七十六、尼生前の住所の跡は後三皇子の力によりて寺となり、帝親ら染筆して法圓山證光寺と名く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日上　（二〇〇六）　〔日蓮宗〕甲斐身延山竹の房第四代なり、　日上は甲州身延山竹の房の開基日元の第三子なり、兄日善身延の方丈に入るの後、これを主どる、寂年月詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日成　二二一九　〔日蓮宗〕佐渡根本寺第三代なり、　日成大泉房と號す、京都妙覺寺第十二代日護の許に出家し、後ち佐渡に到り日蓮の舊跡を巡拜し、塚原に一寺を開き、根本寺と云ふ、實に天文二十一年なり、日蓮を開祖となし日朗を第二代となし、自ら第三代となる、永祿二年二月朔日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日成　一九九七　〔日蓮宗〕越後妙法寺第二代なり、　日成は出羽阿闍梨と呼び、其姓氏を詳かにせず、一に風間信濃守信昭の一族なりとも云ふ、初め日昭一寺に倚らず、一門弟を育せざりしが、正安二年無動寺の尊海に會うて初めて日祐を得、德治元年邦瀨の妙法寺を築くに及んで日成を得度す、文保元年丁巳日昭相模海濱に歸り、これが寺主たらしむ、元亨三年風間信昭妙法寺を其任國越後三島郡村田鄕に移す、共に隨つて赴き、大に宗風を振ふ、居ること十五年、延元二年微疾を感し、四月十六日寂す、壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日成　ゲンウン玄雲を見よ、

ニチジヨー　日乘　二三〇五　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第三十二代なり、　日乘字は乾龍、號は養德院と云ふ、上總東金鄕の人なり、妙滿寺に住し宮谷學林の講主たり、甞て東叡山寛永寺にて大藏經を周閱し、尋で學頭に任ぜらる、時の鴻儒林羅山と往來し、常に論議を上下せり、正保二年四月廿三日寂す、壽缺く、師生前に羅山の送りし南天樹の机今猶存す、著作玄義考拾記十卷、文句攬剛九卷、止觀述聞五卷、西谷條例三卷、四敎儀集解歷承一卷、全誌議集九卷、文句述解、指要抄隨覽、信行要道義、流通捜源記、受不受記各一卷等あり、

ニチジヨー　日乘　一九三一／二〇四〇　〔日蓮宗〕能登妙成寺第二代なり、　日乘は初め大宮房と號す、能登石動山天平寺の上首にして眞言山伏なり、永仁二年甲午日像帝都に上らんとして身延山に詣で、佐渡の地を歷るに、船中に一行者を見る、即ち大宮房なり、行々宗義を論ず、師日を經て己れが宗義の非なるを

知り、日蓮宗に皈し、日乘と云ふ、共に能登羽咋郡瀧谷に到りて日像と別れ、後ち此地に金榮山妙成寺を造る、日像をして開山となし、自ら第二代となる、日像の寂後三十九年康暦二年六月二十七日寂す、壽百十なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日乘　一九七〇……〔日蓮宗〕甲斐立正寺第二代なり、日乘は眞妙院と號し、俗姓鮎澤氏、元眞言宗の僧にして式部阿闍梨と呼び、甲斐山梨郡等力鄕北原村金剛山胎藏寺に主たり、嘗て日蓮此地に遊び、立正安國論を講じ此時衆と共に竊に傍聽す、建治二年和泉阿闍梨日法も亦此地に弘化す、日乘迎へて立正安國論の奥義を聽き、共に身延山に詣てゝ受戒し、尙ほ寺院を奉じ、日法を請うて開山となし、自ら二代となる、寺の名を改めて安國山立正寺と呼ぶ、延慶三年庚戌十二月十九日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日靜　二三一〇　二三六五〔日蓮宗〕山城瑞光寺第三代なり、日靜字は慈觀、京師の人なり、父名は道仙、母名は妙怡、二兒を産す、父道仙早く逝き、母妙怡二兒を携へ、深草の妙種尼に仕へて謹事す、妙種尼愛憐して二兒を膝下に養育す、弟小字は虎と云ふ、七歳にして僧風を慕ふ、妙種尼見て手度を加へ虎哉と云ふ即ち師なり、萬治元年九歳にして慈觀日靜と改む、兄も亦弟の道義を見て出家し、名を素圓禮と云ふ、寬文八年日政滅に臨み法嗣日燈に師を托す、爾來日燈に師事し戒律を嚴持す、天和三年の冬母妙怡養壽庵に寂す、師喪を修す、貞享三年日燈稱心院に退藏し師を推す、翌年師日燈に随て本門別授戒を受く、住山五十年なり、寶永二年十月二十六日寂す、壽五十六、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日靜　一九五八　二〇二九〔日蓮宗〕京師本國寺第四代なり、日靜は妙龍院と號す、駿河加島の人なり、俗姓は藤原氏、父は上杉氏、修理亮賴重、母は足利家の女なり、師小字は豐龍麻呂と云ふ、幼より世相を厭ひ、同州池田村日位に投して出家す、文保二年日位寂す、時に師二十一歳なり、鎌倉に遊び、摩訶一印に随侍し、師資の契を結ふ、元應二年の春日朗の喪に遭ひ、日印喪を修し了りて翌年越後に皈る、師の外姪足利尊氏外護の力を盡す、師寺を本國寺と號す、時に日印疾にかゝるを聞き馳せて省す、日印遺訓を與へて寂す、師一たび鎌倉に皈り、貞和元年師尊氏と謀り、京師六條の傍に地を相し本國寺を移す、四年伊東感應の随身佛、伊豆佐渡の赦牒高祖手書安國論讓狀等を迎へて大法會を營む、日蓮を勸請して開山となし、日朗を二代となし、日印を三代となし、自ら第四代となる、天皇勅して三位僧都を授く、京師に敎化盛なり、寺務二十六年、尊氏父子屢〻駕を巡し法を聞く、應安二年六月二十七日寂す、壽七十二、塔を東山に築き、大光と云ふ、著作此經難持十三個口決あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日靜　一九六一……〔日蓮宗〕佐渡妙照寺の第一代なり、日靜字は學乘、一位阿闍梨と呼ぶ、佐渡國雜田郡石田鄕一谷村の人なり、邑吏近藤小次郎淸久の族にして眞言宗の徒なり、本間六郎重連世々この地を領す、文永九年本間氏日蓮塚原の困厄を見て法華堂を開き、近藤氏をして此所に遷らしむ、此時師も亦衣を改めて随侍す、日蓮此に居ること三年にして歸る、師其跡を護り、終に伽藍と爲す、建治元年中興入道信重使を身延山に遣はして寺山號を問ふ、日蓮妙法華山妙

照寺と與ふ、師喜びて日蓮を崇んで開山となし、自ら第二代となる、後松榮山實相寺を開いて日蓮の跡を保存す、正安三年六月二十二日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日淨　二二三四　二三〇〇　〔日蓮宗〕京師本瑞寺の開山なり、日淨號は覺性院、初め本鏡坊と云ふ、京師の人、俗姓を磯野氏と云ふ、盧山寺に入り天台を學びしが、法華六難九易の説を讀むに方り、疑心を懷き、決する能はず、妙華寺主慈雲院日新に質し、始めて日蓮宗の意を得、遂に家を捨てゝ日新に師事す、日新覺性院日淨の名を授く、次で日新の命により近江彦根蓮華寺の主となり、伊豆三島本覺寺第十六代の主となる、慶長三年本覺寺を退き、破笠短杖縁に任せて遍行す、晩に父母の墓を慕ひて歸り、寛永十七年九月九日辭世の和歌一首を詠して寂す、壽六十七、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日淨　二二九六　二三五四　〔日蓮宗〕山城瑞光寺の僧なり、日淨字は離諳、初め宗春と呼ぶ、播磨の人なり、晩年出家して諸國を徧行し、足跡至らざるなく、道俗を勸化して題目十三万部を唱へしむ、天和元年日蓮四百年遠忌に丁り、再び四方を巡錫し、普く妙法を弘通す、唱題四百万部に滿ち、武藏池上、信濃飯田、同上田、越中富山、越前府中、山城深草の六所に塔を建つ、晩年讀誦四千五百部、題目要品を誦すること一万一千五百部に及へりと云ふ、貞享四年師五十二歳にして日燈を拜して深草に入り、苦行最も極む、元祿七年十月十五日寂す、壽五十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日淨　ニチエー日榮を見よ、

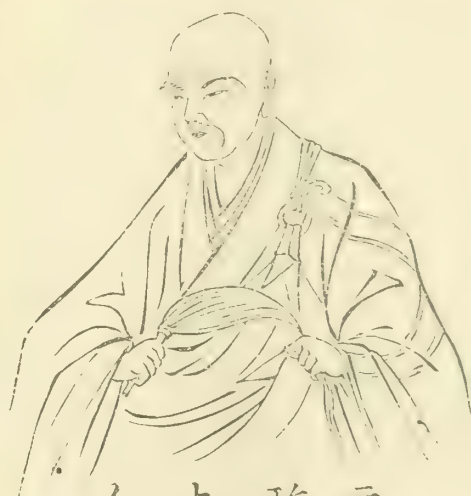
ニチジヨー　日常　一八七六　一九五九　〔日蓮宗〕下總法華經寺第二代なり、日常字は常忍、號は常修院といふ、俗名は源五郎胤繼と稱し、因幡富城村を領す、後、下總葛飾郡八幡庄若宮村に遷る、建長六年夏五郎鎌倉に往かんとし、路を海に取る、偶日蓮の下總より鎌倉に往くに遭ひ、之を船中に招きて法を聞き、大に歸服す、建長七年中山に法華堂を建つ、日蓮屢々法華堂に來りて衆の爲に法筵を開く、文永十一年日蓮法を長興山に開くに方り、五郎若宮の邸宅を棄てゝ寺となす、依て中山を本妙寺と號し、若宮を法華經寺と號す、（後合して一寺となし、本妙法華經寺と號す）建治二年四月八日五郎母を喪ひ、悲哀に堪へず、日蓮に請ひて出家し、常忍日常と稱す、江戸の淺草山金龍寺主寂海法印師に就きて法を論し、終に歸信して日蓮の門下となり、橋場の長昌寺を開く、弘安五年日蓮寂するに及び、中山に歸り、始めて袈裟を着して沙門と稱す、正安元年疾を得、三月四日法弟日高に後事を囑し、二十日寂す、壽八十四、塔を若宮に建つ、著作觀心本尊鈔見聞、置文各一卷あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチジヨー　日條　二三一〇　〔日蓮宗〕加賀妙成寺第十五代なり、日條號は正覺院、加賀の人、同國妙正寺眞成寺常福寺大乘寺等を開立す、慶安三年九月二十三日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチセー　日盛　二二三四　二二七九　〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第三代なり、日盛號は了現院、京都妙傳寺主日慧の門人となり、後ち妙傳寺に主となる、慶長元年江戸大火あり、瑞輪寺燒亡す、師法叔日受の囑を受け、進山して主となり、幕府の命により神田に地を遷し、造營に勤め、遂に舊に復す、居ること九年、

ニチ（日）セ

職を法姪日登に附して退隱し、後再び請によりて主となり、元和五年三月二十七日寂す、壽五十六、（本化別頭佛祖統紀）

ニチセー　日政　二二八三―二三二八　〔日蓮宗〕山城深草瑞光寺の開山なり、日政字は元政、（一に幻生に作る）、號は妙子、別に泰堂、空子、幻子、不可思議と云ふ、京都の人、元和九年二月廿三日京都一條に生る、（一に彦根の人）、俗姓藤原氏、（一に菅原氏と云ふ）、母は石井氏、初め石井八郎元政（一に吉兵衛と云ひ、一に平之亟と云ふ）、九歳建仁寺大統院に投じ、九巖和尚に謁す、後近江彦根に至り、寛永十二年十三歳城主井伊直孝に仕へ、故ありて母の氏を稱す、天性山水を愛し、數々京師に入り、泉涌寺雲龍院如周の法華經を講ずるを聽き、慶安二年二十六歳父母に告げて致仕し、妙顯寺日豐の室に投じて度を受け、後中正院日護、立本寺日審、本法寺日德に交り、一宗の秘奧を究め、明曆元年三十三歳山城の深草に草菴を營み、竹

元政上人

葉庵と號し、父母を迎へ孝養す、萬治元年父元好法名道種の喪を修し、翌二年母妙種七十九歳なるを奉じ身延山に詣し、歸途江戸に入り、母を井伊氏の邸に托し、師は日本橋に旅寓す、井伊直澄は師の姉の子なるを以て、井伊氏數々師を其邸に請するも、師固辭して赴かず、母を奉じて京師に歸り、深草の草菴に入り、佛殿等を開きて深草山瑞光寺と號す、師開山となり、法華經修行の道場となし、門下宜翁を上座となし、相共に修行を事とし、道暇詩歌を樂めり、明の陳元贇に交はり、詩の贈答をなし、元々唱和集あり、平生往來する者、熊澤蕃山、北村季吟等一々數ふべからず、寛文七年十二月母妙種の喪を修し、同年攝津高槻に至り、留住一月餘なり、八年正月病あり、自ら再治せざるを知り、深草に歸り、日燈に後事を附し、二月十八日寂す、壽四十六、遺骸を稱心菴の側に葬り、竹雨三竿を種て墓表に代ふ、辭世の歌あり、「鷲の山常にすむてふ峰の月かりにあらはれかりにかくれて」師校訂著作するところ多し、校訂、訓點天台三大部輔正記、大智度論、涅槃經會疏、法苑珠林、釋門章服義、袁中郎全集、寶物集等あり、著作、草山集三十卷、谷口山詩集（草山集鈔錄）、如來秘藏錄、各六卷、小止觀鈔、龍華傳鈔、本朝法華傳、扶桑隱逸傳、各三卷、元々唱和集二卷、衣裏寶珠鈔、釋氏二十四孝、釋門孝傳、龍華歷代師承傳、身延山七面記、身延山紀行、溫泉遊草、稱心病課、草山要路、草山和歌集、食醫要編、以空上人方丈記首書、聖凡唱和、都土産、霞谷法語、江左垂示、唱題得意、題目和歌鈔、各一卷あり、（元政行狀、近世畸人傳、本化別頭佛祖統紀、近世叢語、近世名家著述目錄）

ニチセイ 日整 二二六三 二二三八 〔日蓮宗〕甲斐身延山第十六代なり、日整字は琳光と云ひ、後ち字を以て院號となす、下總の人なり、當時、天下麻の如く亂れ、郡雄割據して互に雌雄を爭ひ、寧日なし、日整之れを見て竊かに家を出で、身延山に走り、日傳の門に入りて、受戒し、日鏡日叙の二師に隨從す、後ち日叙の席を繼ぎ、主座すること七年、天正六年八月二十日寂す、壽七十六なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチセイ 日惺 二二一〇 二二五八 〔日蓮宗〕武藏池上本門寺第十二代なり、日惺は佛乘院と號し、天文十九年を以て備前福岡に生る、出家して後ち遍く名僧を叩き殊に本化の宗義に通ず、時に本門寺主日現寂して主なきこと二十一年、本行寺主本行院主更互に役を執る、二人師を迎へて主となす、時に師三十二歳なり、德川家康兩山に地を與ふ、箱根軍旅の時命あり攘災の符を上る、是れより以前は本門寺主常に比企ヶ谷に在りて池上を司どりしが、家康江戸城を築くに及んで池上に居らしむ、且つ府内に五ヶ所の停住の地を與へらる、因て其地に寺を造る、興榮山朗惺寺、鎭護山善國寺、朗昌山蓮久寺、眞立山正覺寺、實相山蓮長寺是れなり、慶長三年七月六日寂す、壽四十九なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニツセイ 日霽 二〇二一 二〇六五 〔日蓮宗〕京都妙顯寺第四代なり、日霽字は通源、俗姓は源氏、貞和五年を以て相模國鎌倉に生る、十二歳にして京師に來り、大覺の室に投じ、翌年剃髮す、大覺去て後朗源に依る、明德四年將軍義滿地を割て寺に附す、師寺院を修營し號を改めて妙本寺と云ふ、應永十二年十一月四日寂す、壽五十七、臘四十五、著作顯底鈔あり、(龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀)

ニチセイ 日栖 二二四三 〔日蓮宗〕京師本國寺第十五代なり、日栖は中道院と號し、華山家の猶子となり、大僧都に任じ本國寺の主職を嗣ぎ、寺務四年にして天正十一年四月五日寂す、壽缺く、著作本迹問答鈔三卷、指要鈔秘決二卷あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチセン 日詮 二〇八〇 二一六〇 〔日蓮宗〕加賀寶乘寺第九代なり、日詮號は壽量院、加賀河北郡車村妙珍山寶乘寺に住し、讀經一万部に及ぶ、明應九年三月四日寂す、壽八十一、(本化別頭佛祖統紀)

ニチセン 日詮 二二三九 〔日蓮宗〕和泉堺の僧なり、日詮は山光院と號す、其俗姓詳ならず、壯年にして南都及び比叡山に遊び、唯識教觀の旨を究む、後和泉堺に在り、常光日諦、佛心日珖と共に三光勝會を結ぶ、初め三井に在り大衆の懇望に依り四教儀詳解を作る、自他以て珍とす、天正七年七月二十五日寂す、世壽詳ならず、著作四教義詳解あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチセン 日詮 二三〇五 二三八三 〔日蓮宗〕京師本國寺第二十五代なり、日詮字は慧仲、圓妙院と號す、鄉貫詳ならず、中村談林に遊學して松崎談林の化主となり、平賀本土寺に進み、後ち本國寺の請を受け座主となり、享保八年五月十一日寂す、壽七十九、(本化別頭佛祖統紀)

ニチセン 日暹 一九八七 〔日蓮宗〕越中蓮乘寺の開山なり、日暹初め眞言宗の僧にして能登石動山に住す、遇ゝ越後に遊び、日印の教を受けて日蓮宗に歸す、乃ち越中射水郡

稍積村に草庵を營み、讀經唱題を事とす、後ち越中氷見に庵を遷し、直至山蓮乘寺と號す、嘉曆二年三月朔日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニツセン 日暹 二二四六/二三〇八 〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十六代なり、日暹字は隆恕、智見院と號す、日遠の門人なり、日乾の選により鷹峯談林の化主となる、後京師本滿寺に移り、身延山の請を受く、一住二十二年、不受不施の異義を鎮定す、慶安元年五月二十九日寂す、壽六十三、師平生著述多し今存するもの西谷名目標條四卷、拾要抄三卷あり、

ニチセン 日選 二三一二…… 〔日蓮宗〕肥後本妙寺第四代なり、日選字は文夙、號は本住院、寂照院に師事し、肥後蓮政寺を經て本妙寺に住し、承應元年九月十日寂す、壽缺く、著作別頭本尊鈔解等あり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゼン 日全 二〇七六…… 〔日蓮宗〕京都玄妙寺の僧なり、日全は藏人阿闍梨と稱す、日義に代りて玄妙寺を領し、應永二十三年寂す、壽缺く、

ニチゼン 日全 二二八四…… 〔日蓮宗〕越中妙國寺の開山なり、日全號は信命院、備前の人、出家して北國に遊び、高岡の妙國寺、金澤の妙國寺 富山の妙國寺を開き、苦修練行を積み、寛永元年正月一日神通川の上にて二十一日の間斷食讀經を終り水に入りて寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゼン 日善 一九三一/二〇〇六 〔日蓮宗〕甲斐身延山第四代なり、日善は大貳阿闍梨と呼び、第三代日進の弟なり、七歳の時父日元に訣れ、弘安元年日蓮に依り剃度す、同五年十二にして高祖の寂するに遭ふ、正安中兄日進駿河竹養山正法寺を開くを以て其跡を嗣ぎ、身延山竹の房に主たり、建武元年冬日進寂するを以て竹の房を舍弟日上に囑し、身延の方丈に入る、時に大檀徒の波木井氏の子春乙麻呂出家を乞ふて剃髮す、名を授けて日臺と云ふ、貞和二年十二月二十二日寂す、壽七十六、駿河廬原郡小島村宗榮山善立寺は日善の開基なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゼン 日善 二二六五/二三四三 〔日蓮宗〕山城鷹峯の僧なり、日善字は天素、號は興遠院と云ふ、俗姓木村氏、加賀の人なり、十四歲龍華院日饒に師事し、後東遊して飯高談林に學ぶこと三十年、心性院日遠の知遇を受けて松崎談林の講主となる、後山城鷹峰に隱れ、讀經唱題を事とす、天和三年九月六日寂す、壽七十九、隱中讀誦經卷三万五千有餘部なりと云ふ、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゼン 日善 一九二三/一九九二 〔日蓮宗〕常陸大法寺の開山なり、日善は大法阿闍梨と呼ふ、俗姓は平氏、北條義澄が嫡孫濱名次郎光成の男なり、幼より世塵を厭ひ、日朗に投して出家し、大法房日善といふ、未た幾ならず常陸に安中山大法寺を築き、居ること年有り、後比企谷に歸る、正和四年碑文谷の日源師を招て第二代の主となす、師時に五十三歲、元應二年の春日朗の喪に遭ひ、比企ヶ谷の傍に實成寺を構へ、心喪すること三年、元亨二年夏京都に赴き、日像を龍華院に訪ひ、五畿の間舊跡を巡る、檀越新に寶國寺を築て敬待す、師已むを得ずして停住年を逾ゆ、後碑文谷に還り、元弘二年九月二十二日寂す、壽七十、(本化別頭佛祖統紀)

ニチゼン 日禪 一九二六/一九九五 〔日蓮宗〕若狹妙興寺第二代な

り、　日禪字は素頓、其姓氏未詳、若狹の人なり、初め禪宗に皈し、後ち日像の敎を受けて其弟子となり、日像の命に依りて若狹小濱に妙興寺を開く、建武二年十月二十四日寂す、壽七十なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゼン　日禪　二二九九 二三七七　〔日蓮宗〕紀伊養珠寺第六代なり、　日禪字は宣海、號は稱智院、別に行首と呼ふ　俗姓下村氏、紀伊の人なり、正保四年中正談林日護に師事し、後、山科談林玄義の講師となる、延寶七年紀伊侯光貞の招により養珠寺に入る、寶永七年退隱し　同國那賀郡粉河村覺王山妙宣寺を海士郡に移し再興す、享保二年十二月二十九日寂す、壽七十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゼン　日禪（……）　〔眞言宗〕紀伊高野山傳法院の座主なり、　日禪字は淨嚴と云ふ、密學に通し、北室の良禪に從ひて小野傳法灌頂を受け、其蘊を盡くす、衆に推されて傳法院座主となる、附法一人聖心あり、（續傳燈廣錄）

ニチゼン　日禪　二二六三 二三三〇　〔日蓮宗〕京師寶塔院の僧なり、日禪は京都本法寺內寶塔院に住し、道行高く、且聲明を善くす、大原に遊び聲明の秘傳を受け、一流を開く、寬文十年六月二十七日寂す、壽六十八、（本化別頭佛祖統紀）

ニチソー　日聰　二〇九三……　〔日蓮宗〕京師本國寺第八代なり、　日聰は大周院と號す、日嚴の囑を受けて華山家の猶子となり、本國寺に主となる、在職二十年、永享五年正月二十九日寂す、初め方丈に入り大僧都に任せられし時、足利義量十七歲征夷大將軍となる、其命を受け立像百座祈禱を修む、

ニチソー　日窓（……）　〔日蓮宗〕京師法華寺第十四代なり、　日窓字は成翁、後に字を以て院號となす、奧州松前の人、其地法華寺に出家し、京都本滿寺に業を受け、後ち法華寺の主となる、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチソー　日相　二二九五 二三七八　〔日蓮宗〕尾張法蓮寺第十三代なり、　日相字は是心、久成院と號す、尾張國葉栗郡の人、俗姓は進藤氏、幼にして法蓮寺日近の弟子となり、敎圓と呼ぶ時に九歲なり、正保四年師十三歲にして日近の喪に遭ふ、心院日通法蓮寺の主となる、日通師を山科談林に學ばしむ、此時名を是心日明と改む、明曆二年美濃國岐阜の長照寺に住す、道暇に儒士宗悅に交り、歌道を華山家に受く、萬治三年日通の躅を繼き、法蓮寺に移る、此時日相と改む、專ら修營に從事し、客殿、庫厨等觀を改む、元祿二年五十五歲退隱し、法弟堯然日迨に讓る、享保三年十月十七日寂す、壽八十四、師著述多く、正字妙經八軸（世に日相本と呼ぶ）、己心北斗、與記各二卷、和語式五卷、勸愚鈔二卷、法華音義補闕五卷、當家宗旨名目二卷、隱中和歌二卷等あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチソーニ　日相尼　二二八五 二三六五　〔日蓮宗〕武藏日慶寺の尼なり、　日相字は妙是、圓心院と號す、加賀金澤の人、俗姓は久津見氏、重子と呼ぶ、五歲にして父を喪ふ、家世々禪宗なり、重子深く法華を崇み、京都の日審北地に弘通する時、母に請ひて其敎を受く、時に七歲なり、姉は長子（後に音羽）、母は仲子と云ひ、一家擧て日蓮宗に歸す、寬永十七年の春母子三人將軍家光に仕ふるに方り、重子十六歲にして加賀中納言利常の養子となり、八條智忠親王に嫁す、餘暇讀經唱題を事とす、母老ゆるに及び、致仕して歸へり、後身延山日境に

依りて得度し、妙是日相と呼ぶ、母の死後將軍家綱母の半祿を分ちて日相に與ふ、茲に於て地を中村に相し、小廬を築き竹露庵と稱し、傍に母の爲に妙應堂を營造し、持誦修懺をつとめ、書寫怠らず、谷中日慶尼寺の舊地に移さんと欲し、之を身延山現住日省に計る、日省は日相の俗姪なり、官に告ぐ、綱吉聞きて之を許す、遂に竹露庵を改めて日慶寺と云ふ、寶永二年十月三日寂す、壽八十一、生前學を好み和歌を好くし、殊に楷書に秀でたり、嘗て紺紙金泥にて自ら法華經を書し一字一蓮一花一香字字三禮して全函成就すと云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチソーニ　日相尼　ニチシュ日守を見よ、

ニチゾー　日藏　一六四五　［法相宗］大和龍門寺の僧なり、日藏は京都の人、三善清行の弟なり、十二歲金峰山椿山寺に入りて下髮し、精修すること六年、母の病に遇ひて山を出で、歸省し、東寺に屬し、良鄕法師に隨ひて密教を學ぶ、金峰山に往來すること二十六年、靈感により初の名道賢を改めて今の名とし、專ら大日如來を尊崇す、寬和元年寂す、壽一百餘、（元亨釋書、本朝高僧傳）

ニチゾー　日像　一九二九 二〇〇二　［日蓮宗］京都妙顯寺の開山なり、日像は字を肥後坊と呼び、下總葛飾郡平賀の人、其先は新羅三郎の第三子四郎盛義より出づ、始め盛義平賀村を領す、因てこれを氏となす、盛義五世の孫忠晴千葉氏の女を娶り、文永六年八月十日師を生み、萬壽麻呂と名く、盛義夫妻は日蓮上人の信徒にして師を生みたる翌年第宅を捨てゝ上人に施し、長谷山本土寺を建立し、自ら其傍に居す、建治元年二月師七歲にして日朗の室に投じ、十一月携へられて身延山に登り、日蓮に謁し、經一麻呂と云ふ、同二年師の弟龜王丸（後に出家して日輪といふ）も登山し、師と共に日蓮上人に師事す、建治三年父卒す、弘安元年師の母亡父の追福の爲に鎌倉に一寺を建立すといふ、弘安五年九月日蓮上人池上に赴く時師隨侍し、十月十一日上人師に京都弘法の命を囑し、十三日其地に入寂す、師乃ち鎌倉比企谷に往きて日朗に從ふ、弘安六年平賀に歸りて母を省し、本土寺に寓す、弘安七年本土寺に於て四月八日日朗を拜して手度を受け、名を日像といひ、肥後坊と號す、弘安八年鎌倉に歸り、後屢〻下總相模の間を往復して母及び日朗に奉事す、正應三年四月二日法華經全部を書寫す、正應五年諸說の異同を比較して秘藏集三卷を著す、自ら謂へらく京師に入りて妙法を弘通せんとせば、衆僧反目して大難を構へん、若し夫れ機鋒の鋭なるものあらずは、豈に之に抗するを得ん、と、十月廿六日より一百日を期し、晝は比企ヶ谷の一室に籠りて法華經を寫し、寒酷しと雖も火を用ひず、夜は由井の海水に入りて壽量品を唱ふること一百回、朝日を見るに及びて歸る、寒風顏を破り、堅氷膚を裂くも、忍辱の力確乎として拔くべからず、翌永仁元年二月七日素願を滿てゝ靈驗を感じたりといふ、此時に朝日の光中に感見したる南無妙法蓮華經の七字は師が以後自ら模して書風をなしたりといふ、茲に於て京師の地に遊化せんと欲し、先づ池上に到りて日朗に見えて其意を述べ、塔中並座の本尊幷に宗祖手刻の像及び舍利を附せらる、中旬平賀に歸りて母を省して別を告げ、安房に赴きて誕生寺清澄寺を巡錫して日

蓮の靈跡を拜し、小松原を過りて鎌倉に來り、龍口に詣て伊豆に到りて日蓮謫居の故跡を觀、次て身延山に登りて祖塔を拜すること一七日、越後寺泊に到りて石川吉廣の家に寓す、此より佐渡に渡りて日蓮の靈蹟を禮し、日滿等と相語る、能登に赴かんとして纜を解く、船中に苦行者あり、師の四個格言を唱ふるを聞きて論難す、師循々として之を折す、既にして颶風大に起り、道俗震慴す、師安祥として舷に立ち、妙法を誦すれば須臾にして波浪平く、衆感服し、苦行者歸信す、曰く、吾は泰澄の法孫にて石動山の學存房といふ者なり、師か巡化を乞ふと、船七尾に着し、共に福善寺村某の家に到る、家の主人師の敎に歸信す、依て本尊を附す、石動山に登りて妙法を演說す、衆徒譟擾し師を害せんとするに至る、加賀太郎北左衛門兄弟師を救ひて難に死す、師遁れて西塲塲村に赴き、石に踞して妙法を說く、信毀相半す、後、鄕人加賀兄弟の爲に本土寺を創して其志を紹くとい

日像上人

ふ、師難を避けて瀧谷に往く、學存之に從ふ、甲斐に入り白山廟下の一勝地に至り、携ふるところの杖を岩間に倒立し學存に謂ふ、吾誓ふところあり此杖根を生せば就きて一寺を營め、と、而して相別る、幾ならずして其杖芽を生ず、即ち槐樹なり、學存歡喜して資財を募り、芝原某資を棄てゝ寺を建つ、金榮山妙成寺と號す、師今濱村に往きて某の家に宿す、家主は眞言の信者なりしが、師の說を聞きて歸信し、尋いて麥生法輪寺の哲源亦師に歸信す、依て名を日源と改め、寺には本尊を改めて妙字を與へ妙法輪寺と號す、加賀に往き河原市村の妙珍、藥師村の乘蓮、直江谷村主井家莊太郎などいへる者皆師の敎に歸信す、井家氏寺を建てゝ師を待つ、師寺を妙珍に與へて寶乘寺と號す、倉谷に往きて崖を上り一々巨石を求めて、題目を書す、大野村に至りて尙玄阿闍梨を化し、順次成村を過きて越前に入り、安保村、埴生村、今宿村、大道村等を經、行道を布き人を化し、寺を建て、小野より河野に出で、舟路敦賀に入る、眞言宗の僧學圓と對論して之を伏し、其寺を改めて妙顯寺といふ、其他日禪日善等皆師に伏す、永仁二年四月日禪と共に丹波知伊村を歷て十三日京都に達す、此に於て日禪を歸らしむ、京師の道俗師の日蓮の徒なるを知りて一宿をも許すものなし、石淸水に詣するに方り神官靈夢に感じて師を延きて寓せしむ、賈人某神託を受けて師の敎に歸して檀越となる、師比叡山、三井寺等宗祖の舊蹟を巡禮す、眞廣法印と云ふ者東寺の法華堂に住す、師と相見て機緣相合す、二十八日宮城の東門に於て朝日を拜し、四個格言を唱へ、妙法を說く、夕に至るまで停まず、五月十三日十字街頭に立

ち大衆に說きて曰く、念佛は無間なり、禪は天魔なり、眞言は國を亡ぼし、律は國賊なり、諸宗道を得る者なく、地獄に墮つるの根源なり、唯妙法ありて汝等成佛するなり、南無妙法蓮華經、と、人以て狂愚となし、石を投じて去る、師益々高聲に說きて止まず、廿一日に至りて東西を論ぜず、貴賤を選ばず、專ら法を說き、化を勸む、京師の物情漸く騷然とし、毀貶誹謗の聲日を追ひて高し、偶〻京師の北將軍邑の人々歸信する者あり、遂に草堂を結びて師を待つ、師甫め十如是を講じ十如是堂と號す、松崎勸喜寺實眼僧都師が三條の石上に踞して妙法を說くを聞き、後屢〻來りて論難し、亦深草法身莊嚴寺實典を伴ひ來りて論難すれども師皆擊破す、八月十三日越前の檀越に書を送り、九月十三日宗祖日蓮の十三回忌法筵を張る、永仁二年實眼實典等弟子となる、室町の小野某五條の中興某等亦歸信す、一日松崎に到り、歸路下賀茂を過るに優婆夷あり、其家に請す、即ち至り見れば親族相會せり、乃ち妙法を說く、井上氏の親族子院を興し講筵に待す、後に大妙寺と號す、濱土の日昭手書の本尊を贈りて師か敎化の盛を賀す、永仁四年春奈良に往き、日蓮歷遊の諸寺を巡拜し、歸路宇治の金持久弘の家を過り、久弘夫妻を化す、久弘草菴を結びて師を延く、師請に應じて止住すること日あり、之を微妙房に附し、後直行寺と改む、德治元年松崎の實眼寂す、師實眼の門徒の請に應じ七月十四日より十六日迄大に妙法を說く、擧村皈依して妙題を唱へて他經を棄て。寺を改めて妙泉寺といふ、德治二年比叡山及び諸寺の僧徒師を惡みて官に訴ふ、五月廿日朝廷大納言宣房に命じて京師の地を驅擯せしむ、師上表して其非を向ひ、京を出て丶西國に遊ぶ、向日神祠の傍に止りて日夜敎化を力む、鷄冠井邑に到るに三郎四郎といふ者あり草木成佛の理を疑ふ、師之を論明す、四郎歸伏して淹留を請ひ、里人來りて道を問ふ者少からず、眞言寺の實賢、深草の良桂等來りて對論し、皆師の說に伏す、延慶元年母妙朗尼師を見んと欲し人をして師に告げしむ、師も亦相思の情禁せざるものありと雖も、身逐追にあるを以て自ら小影を刻して贈る、八月廿八日官師を許して妙法を弘通せしむ、小野氏妙覺寺を興して中興氏妙蓮寺を興し、皆師に施す、延慶三年諸寺亦朝廷に訴ふ、三月八日朝廷再び中納言定資に命じて師を驅擯せしめ、眞廣等にも及ぶ、二十三日師表を上りて法華の妙理を縷述す、十三日母の喪を聞くも赴くこと能はず、鷄冠井眞經寺に留まる、日範關東より來りて相會す、既にして日範丹波に往きて法幢を建つ、四月十五日中納言定資、檀越朝臣明澄、章文、章敦等三十三人及び庶民數百人を京師の地を逐ひ、六月十九日堂舍を舊邸主に賜ふ、應長元年皇太子不豫あり、人流言して法華持者を逐ふの故なりとす、朝廷議して三月七日師京師に入るを許す、師一日嘆して曰く、吾法の爲に日朗師を見ざること二十一年、欽慕に堪へずと、遂に錫を飛ばして鎌倉扇谷に赴き日朗に謁す、共に妙法を說いて化導盛なり、一寺を創して藥王寺といふ、平賀に歸り室を以て精舍となし、妙泉院と號す、亡母の像を刻して法筵を設く、日傳日輪等に會して還る、此行路を橫川に取り、先づ淨光院の廟塔を拜し、堅田より木濱に到る、船中に彥左といふ者ありて師を請す、乃ち今濱に到り妙法を說く、歸信する者

ニチ（日）ゾ

彫し、師本尊を授け且つ石工をして南無妙法蓮華經の七字を方塔に彫刻せしむ、石工師に歸信して岩倉の家に請す、後守山の本像寺、岩倉の妙感寺、今濱の法華堂等を興す、駿河の奥津に宿る時主人教を受け、地を棄てゝ寺となし、高光山石塔寺と號す、亦府中の某も寺を建て妙像寺と號す、師の同胞日如尼遠江端場金原左近の家に客居せり、因てこれを省問す、左近師に說を請ひ地を棄てゝ寺となし、妙恩寺と號す、正和元年十二月二日日朗、師に書を寄せて日蓮手書の本尊幷に法語二帖を贈り來る、正和二年嵯峨大覺寺の妙實、及び其法弟智覺、正覺、祐存等歸信す、同年法華宗旨問答鈔を著す、正和三年三原に本妙寺を開く、是れ檀越本妙居士の寄附による、文保二年正月十三日日蓮の祈禱鈔を註して諸弟子に授く、十月二十三日日朗宗祖所傳の本迹勝劣の口決を書して師に贈る、十二月十八日師曼荼羅口決を相承す、元應元年大曼荼羅を書して妙實に與へ、本迹勝劣の口決を註して高弟等に附す、元應二年正月二十一日日朗比企ヶ谷に寂す、元亨元年正月鎌倉に往きて日朗の忌筵に列し、幾もなく西歸す、此夏大に旱し天下饑に苦しむ、師は末法の致すところとなし、盛に諸宗を誹謗す、諸宗師を朝廷に訴ふ、十月二十五日朝廷宣房に命して師を京師の地より逐はんとす、時に宮中に怪異多し、是に於てか勅して日野大納言をして師を召したまふ十二月御溝側に安居院を賜ひて師の德を賞す、元亨二年師の法弟日禪鎌倉より來りて錫を留め、檀越某實國寺を創して日禪を待つ、元亨三年春師法華講式を作り、每月十三日大衆をして音樂を奏し伽陀を誦して宗祖の恩德を謝せしむ、爾來定例となる、正中元年十一月手づから大黑天の像を刻す、元弘元年天下に變異多し、師上表して二王並立の前徵となし、速に妙法を弘通して其災を避けんことを請ふ、北條高時隱岐に天皇を配するに方り師護良親王の令旨を拜して祈禱すといふ、建武元年勅して妙顯寺を勅願寺としたまふ、足利尊氏軍を起すに及び、師其請を受けて祈禱し、數々光明天皇の勅を拜して祈禱し賞賜を蒙る、曆應四年七月十四日淸規六章を定め、法嗣を選びて六上首を定む、康永元年は日蓮示寂の甲子に丁れり、依て師東行して身延山に登り、祖塔を拜す、又鎌倉比企ヶ谷を歷て武藏池上を過ぎ、故鄕平賀に歸りて父母の墓を拜す、秋京師に歸る、十一月八日　期の事を擧げて大覺に囑し、諸弟を誡め、十二日大曼荼羅を掛け香を焚き經を誦して夜を徹し、十三日未明に寂す、壽七十四、臘五十九、深草山下に闍維す、延文三年勅して菩薩號を賜ふ、著作三秘藏集三卷、本尊相承、法華宗旨問答鈔、宗旨弘通鈔、法華講式各一卷、澗亭函底鈔、源流山谷鈔（一部共に一に日具の著とも云ふ）、祈禱經鈔、各若干卷あり、（龍華年譜、本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチソン　日尊　二二六三　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十三代なり、日尊は字を文甫と云ひ、蓮成院と號す、出家して六條本國寺の日禛に師事し、命に依り比叡山に登り、天台の學を修む、後ち本門寺主席を缺きしを以て請はれて主となり、居ること六年、慶長八年三月十六日寂す、世壽詳かならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゾン　日存　二〇八四　〔日蓮宗〕京都妙蓮寺の僧なり、日存字は精進房、越中の人なり、俗姓は源氏、桃井左馬頭尙儀

の弟なり、弟好學房日純と共に妙顯寺日壽の下に修學す、應永十二年日壽の喪に逢ふ、これより兄弟廬を別にして本迹勝劣の判を詳かにせんことを力め、遂に豁然として通會することを得たり、玆に於て二人力を合せ、行業年を積み、楊柳山妙蓮寺を剏し、日像を開山となし、大覺、朗源、日壽を歷代となし、師自ら五代に居り、日純六代となる、應永二十八年三月二十六日寂す、壽缺く、日純後に日道と改め、應永卅一年四月二十日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチゾン 日存 二三三〇 〔日蓮宗〕紀伊養珠寺第四代なり、

日存號は觀妙院と云ふ、俗姓生國未詳、智道院日明の弟子、心性院日遠の法孫なり、飯高談林に學び、六條談林の化主となる、京都本滿寺に出世す、寬文六年紀伊候に招れて同國養珠寺第四代となる、今十一年十一月七日寂す、著作指要鈔科解三卷、金山鈔十六卷等あり（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチタイ 日諦 二四四一 〔日蓮宗〕常陸三昧堂の學僧なり、

日諦字は健立、號は圓行院と云ふ、常陸多賀郡赤濱村の人、長久保氏なり、出家して京都に上り、宗學を究め、後、中村檀林の義の講主となり、次に三昧堂化主となる、天明元年六月五日寂す、著作本化別頭高祖年譜一卷、同考異二卷あり、（日蓮宗史料）

ニチタイ 日諦 （二三七六） 〔日蓮宗〕京師妙顯寺の僧なり、

日諦は觀具院と號す、山城鳴瀧に住し、學問を事とし、後妙顯寺に住す、享保年中華嚴の鳳潭天台の靈空等と共に名あり、寂年詳ならず、著作規矩準繩錄、惑燈塵壺各一卷あり、

ニチタイ 日諦 二三?? 〔日蓮宗〕和泉堺の學僧なり、

日諦は常光院と號す、壯年南都及び比叡山に遊び、唯識教觀の旨を究む、尾張國犬山城主齋藤道三師の德風を聞きて敬待す、道三沒落の後京師に隱る、日珖日詮共に師の德風を喜び三人道交を結び和泉堺に會を開き文句を輪講す、人呼で三光の勝會となす、其聽衆には舜孝秀智等あり、初め天台の尊契念佛無間の說を問ふ、師曰く善導の千中無一、法然の捨閉閣抛は、唯除五逆誹謗正法の金言に違するに非らざらんや、尊契重て宗意を問ふ、師日蓮慈悲廣大等の文を擧げて答ふ、天正十三年八月廿一日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチタイ 日泰 二三二四 二三九一 〔日蓮宗〕武藏報恩寺の第四代なり、

日泰勇健院と號す、甲斐小室山主日超の門弟にして小西談林の化主となり、武藏の平河山に住す、享保十六年二月二十二日寂す、壽六十八、（本化別頭佛祖統紀）

ニチタイ 日泰 二〇九二 二一六六 〔日蓮宗〕京師妙滿寺第十六代なり、

日泰は心了院と號す、京都白河の人、幼より三寶に歸し、稍長じて妙滿寺日遵に師事し、專ら折伏を事とす、兩總の地に巡化し、酒井定隆の歸向を受け、一夕の化導を以て上總七里の間の人民をして其宗に歸せしむ、世に七里法華の祖と稱す、文明の頃下總濱野村に本行寺を開き、延德元年京師妙滿寺に住し明應の頃再び住し權大僧都となる永正三年正月十九日寂す、壽七十五、

ニチタイ 日體 二二八三 二三三五 〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第七代なり、

日體字は寂遠、號は通應院、夙に圓妙院日桂の下に出家し、飯高談林に學ぶ、明曆二年瑞輪寺第七代となる、平賀日遠等不受不施の義を唱ふるに方り、身延山日境、日奠等と

其破却に力を盡し、前後十五年にして功を全うす、延寶三年三月二十一日寂す、壽五十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチダイ　日題　二二九三／二三七四　〔日蓮宗〕越中大法寺の學僧なり、　日題は蓮華院と號す、學德を以て聞ゆ、正德四年六月廿四日寂す、壽八十二、著作中正論二十卷、全或問五卷、全添署六卷、開邪陳善記、斷邪顯正論各五卷、法華初心要學籥二卷、法華女人成佛抄一卷あり、

ニチダイ　日臺　一九八一／二〇二六　〔日蓮宗〕甲斐身延山第五代なり、　日臺は字を鏡圓と云ひ、宮内卿と呼ぶ、俗姓は源氏、身延山大檀徒波木井六郎實長の曾孫、信濃刺史長氏の子なり、元亨元年を以て甲斐波木井村に生れ、幼にして佛を信じ、童形を以て日進に事ふ、日進寂するの後ち、日喜に事ふ、延元二年日善年老て六十七なり、時に日臺年十七、學業も稍々進みたるを以て、手度を受け後身延山の席を讓らる、貞治五年三月七日寂す、壽四十六なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチタツ　日達　……／二三七六　〔日蓮宗〕京都寂光寺第九代なり、　日達は享保年間の人なり、初め山城小栗栖學林に入りて學び、進みて講主となり、衆徒を領す、諷誦抄二卷及び台當本勝篇五卷等の著作あり、寂年及び壽缺く、

ニチタツ　日達　二三三四／二四〇七　〔日蓮宗〕京師本國寺第二十六代なり、　日達字運智、一の字智鳩、號は了義院、岩代福島の人なり、妙顯寺第十八代日耀に學を受け、鷹峯六條中村の三談林の化主に歷遷し大僧都法印となり、學譽大に高く、當時の學僧華嚴の鳳潭、天台の靈空等と名を齊うす、日達顯揚正理論を作りて眞宗の性均の台淨念佛復宗決を破折し書中鳳潭の説に及ぶ、鳳潭乃ち金剛槌を作りて大に日蓮宗を駁す、こゝに於てか享保二十一年日達は決膜明眼論を作りて鳳潭に當り、議論一世を動せり、延享四年二月廿六日寂す、壽七十四、臘五十八、著作經律論拔萃十五卷、內外雜記、學海餘滴各十卷、懲諭繫珠錄七卷、神佛冥應論、鷹峯群談、本迹雪謗、各五卷、決膜明眼論四卷、顯揚正理論、山陰雜錄各二卷、對類廿四孝、報應影響錄、獅子吼章、安國論講義、開目鈔講義、現安後善鈔、弟子訓各一卷、再難條目鈔、受不受決疑鈔、御讓狀註釋、信佛功驗孝子傳、鎌倉殿中問答註、象志、信力堅固鈔、四河人海鈔、立像釋迦佛緣記、各一卷等あり、（日蓮宗史料）

ニチダツ　日脫　二二八六／二三五八　〔日蓮宗〕甲斐身延山第三十一代なり、　日脫字は空雅、一圓院と號し、遊明子と呼ぶ、越中の人なり、俗姓は逸見氏、本是院日理に投じて出家す、上總飯高談林に遊學し、貧學二十年務て倦まず、遂に山科談林の講主と爲る、立本寺に出世す、後飯高談林の化主となる、是時記事一圓記有り、延寶七年身延山に昇る、元祿六年賜紫の詔を拜す、十一年一年九月二十二日寂す、壽七十三、駿河國富士郡香久山妙法寺、武藏國久良岐郡榮玉山常清寺、甲斐國小原島一圓寺、飯野了圓寺等皆、師を崇て開山と爲す、著作一圓記あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチン　日珍　（……）〔日蓮宗〕越中本叡寺開山なり、　日珍字は正啓阿闍梨と呼ぶ、元は天台の僧なり、後ち日蓮宗に歸し、本蓮寺日宗本國寺日傳に事へて宗乘を究め、越中に佛眼山本叡寺を開く、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチユー　日忠　二三〇二／二三七二　〔日蓮宗〕紀伊本廣寺の開山な

ニチ（日）チ

り、　日忠字は幸風、號は正孝院、京都立本寺日審に師事し、後、紀伊熊野新宮の法輪山法華寺に住す、延寶六年同寺を改めて慧雲山本廣寺と云ふ、名草郡直川村千手寺に役行者の舊蹟を興し、本惠寺と改む、正徳二年十一月十二日寂す、壽七十一なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチユー　日忠　……二三二〇　〔日蓮宗〕常陸水戸久昌寺の開山なり、　日忠字は通心、禪那院と號す、甲斐國巨摩郡三子澤の人なり、俗姓は佐野氏、幼にして身延山十七代日新に投じて出家し、飯高に就學す、不幸にして早く新師を喪ひ、日遠に敎育せらる、行業年を追て進む、紀伊候の養珠夫人衣資を給す、終に玄義の講主となる、小西談林に文句を講ず、京師の頂妙寺を嗣ぎ、下總の法華經寺に出世す、寛永元年飯高の請に應じ、再び講主となる、六年眞間山の主席を補す、時に中村談林化主寂静日賢學徳世を蓋ふ、師交を結ぶ、飯高談林後の化主を訊るに師日賢を推す、然るに日賢不受不施の異義を執る、七年幕府命じて池上の日樹と倶に流刑に處す、師日賢と深交あるを以て亦嫌疑を被る、師世煩を厭うて幽捿す、十九年の春日遠疾ありと聞き、鎌倉に至り訪問し、數日看護し後瓢然として去る、萬治三年十月十六日寂す、世壽詳ならず水戸光國母靖定夫人の爲に久昌寺を造り、師を仰で開山と爲す、著作帶埧記、西谷名目解等あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチユー　日忠　（二三六三）　〔日蓮宗〕豐前博多勝立寺の開山なり、　日忠は唯心院と云ふ、初め京師妙覺寺に住して學譽あり、後西國に下り宗風を宣揚す、慶長八年四月廿五日豐前博多妙典寺に於いて耶蘇敎のイルマンと對論し、二宗の優劣を爭ふ、師對論に勝ちて大に名を揚ぐ、福岡城主黒田長政其功を賞し、福岡橋口町に土地を與へ、一寺を興し、勝立寺と號す、師示寂年日詳ならず、（石城志）

ニチチユー　日中　二二九〇／二三六一　〔日蓮宗〕和泉堺妙法寺の僧なり、　日中字は省巳、一に正住院同廣と呼ふ、生國俗姓詳ならず、幼より詩文に長す、深草の日政と交り、常に詩文の贈答をなせり、後身延山に入りて幽棲し、持律嚴密なり、元祿の頃和泉堺妙法寺に住し、元祿十四年正月十九日同寺に寂す、壽七十二、著作高僧贊詞あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチヨー　日朝　二〇八二／二一六〇　〔日蓮宗〕甲斐身延山第十一代なり、　日朝字は鏡澄、加賀阿闍梨と呼び行學院と號す、應永二十九年を以て伊豆那賀郡宇佐美郷に生る、幼にして夙姿凡ならず、三島の日出と云ふ者師を見て父母に乞ふ、父母愛して出家せしむるに忍びず、師傍にありて之を聞き、泣て出家を求め遂に日出の門に投ず、時に八歳なり、既にして手度を受くるの後、比叡山に學び南都に遊び、性相の諸學を講究して皈る、身延山の日延之を聞きて召し見る、爾來師日延に隨侍して敎を受け、益々宗奥に達し神童の稱あり、永享八年日出師を招て待遇し、遂に推して三島本覺寺に主たらしむ、師時に僅かに十五歳なり、長祿三年日出寂を示し、師遺命により鎌倉本覺寺を兼領し、化儀大に振ふ、寛正元年日延退隱し、師招かれて身延山十一代の主となる、これより寺基の狹隘にして衆を容るゝに足らさるを憂へ力を盡して增建し、又身延山の世路嶮にして老者の參詣すること能はざるを以て、日蓮の舍利を分て鎌倉本覺寺に塔を築き東身延山と稱し、遠近の

道俗をして本化の良緣を結ばしむ、寺務四十年　明應八年職を辭して山下に菴居し(今の覺林房)、翌九年六月廿五日寂す、壽七十九、師の生處の寺となり妙秀山朝善寺と呼ぶ、手創の寺甲斐八代郡法來寺等十有餘ヶ寺あり、著作御書見聞五大部鈔十七卷、法華草案鈔十二卷、一代五時記九卷、十不二門見聞、四宗要文各三卷、弘經用心記五卷、元祖化導記、當家口傳記各二卷、天台眞言敎觀解　倶舍唯識評註等あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチチヨー　日朝　一九四二…　〔日蓮宗〕下野妙光寺の開山なり、日朝は常在院と呼び、俗姓は藤原氏、俗名を藻原遠江守兼綱と云ふ、世々上野藻原郡に館す、初め久しく日蓮に皈依し、後に出家得度し、常在院日朝と云ふ、日蓮の寂後藻原妙光寺を築き、日向を請うて開山とし、復下野に至り多古の妙光寺、志摩の妙興寺を造り、自ら居りて老を養ふ、弘安六年五月二十三日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチチヨー　日澄　二一七〇…　〔日蓮宗〕伊豆本立寺の開山なり、日澄字は啓運。圓妙院と號し一如房と呼ぶ、鎌倉妙法寺に住し、尋て啓運寺を創す、伊豆江川氏の請を受けて仁良山本立寺を開く、學德共に高く世の浮華を厭ひ、名刹の請あれども辭して赴かず、終生逸居して終る、永正七年二月九日寂す。壽缺く、師平生著述多く、今存するもの法華啓運鈔五十五卷、助顯唱導文集七卷、法華神道秘決四卷、註書讃、日出台隱記、本迹決疑鈔、嘉會宗義鈔各二卷、法界一念鈔一卷、本迹決要鈔等數十卷なり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニツチヨー　日澄　一八九九一九八六　〔日蓮宗〕相模本達寺の開山なり、日澄は大乘阿闍梨と呼ぶ、相模小田原の人、俗姓は平氏、濱名豐後守時成の子なり、三歲にして父母を喪ひ祖母妙珍に撫育せらる、妙珍の逝ける後、師郡の山寺に投じ度を受く、後比叡山に登り、天台の章疏を學び、春鎌倉松葉谷に來りて日昭に謁し、弟子となる、時に二十二歲なり、翌年日蓮赦を得て歸る、師隨從す、文永二年工藤氏吉隆の父行光日蓮を請す、天津の眞言寺主宗義を詰る、日蓮師に命じて之を敎導せしむ、寺主遂に其化に服し寺を改め天津山日澄寺を興す、十一年比企の傍に眞言宗正覺院あり、亦其宗を改め、後に大巧寺と云ふ、日蓮身延山に入る後日朗比企ヶ谷に住す、師常に欽奉す、池上宗仲地を割て供す、後に大坊本行寺と號す、元應二年日朗の喪に遭ひて悲哀苦痛す、翌元亨元年父母の舊地に就て寺を造り冥福を薦す、後に妙珍山蓮昌寺と號す、尾張國に遊化して熱田に一寺を開き、妙光山本遠寺と號す、嘉曆元年八月朔日寂す、壽八十八(本化別頭佛祖統紀)

ニツチヨー　日長　二二七一…　〔日蓮宗〕伯耆感應寺の開山なり、日長は圓覺院と號す、甲斐巨摩郡の人なり、幼にして慈雲院日新の門に遊びて得度す、學業熟して日新の囑を受けて京師の妙華寺の主となる、後請に應じて甲斐小室德榮山十七代の主となる、次に駿河感應寺十一代の主となる、檀越横田内膳村政師を遇すること殊に厚し、村政は中村氏式部大輔一氏の家老なり、一氏の子忠一伯耆に封せらる、村政來子府の傍に勝地を相して一精廬を築き、師を招く、師往て佛殿僧房を開き、駿河の感應寺の如し、日向を崇て開山となし、日朝を推して第二代となし、自ら第三代に居る、慶長八年十

一月十四日村故城中に死す、師厚く之を葬る、翌年出雲に遊化し、啓運山慈雲寺を築き、本師日祈を推して開山となす、十六年五月十三日寂す、壽九十餘(本化別頭佛祖統紀)

ニチチヨー　日長(一二九二四)〔日蓮宗〕紀伊妙臺寺開山なり、　日長俗名は貞昭、父は伊賀國壬生野城主貞繼伊勢平氏に與して志を得ず、紀伊多田に逃れ、法華經を讀誦す、後文永中貞昭鎌倉に入り、日朗に從つて出家し、父の遺跡を寺となし妙臺寺と云ふ、寂年詳く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチチヨー　日長(……)〔日蓮宗〕山城道入寺の開山なり、　日長字は道入、俗姓は服部、攝津の人なり、出家して榮利を厭ひ、二十二歲靈夢に感じ、日像の苦行に倣ひ、百日間海中に苦行を試む、四條河原にて石を拾ひて法華經を手寫す、雲母坂不動堂にて斷食して晝夜苦行を積む、某年寂す、壽六十二、後人苦行の地に寺を作り道入寺と云ふ、(本化別頭佛祖統紀)

ニチチヨー　日長(二二……八五)〔日蓮宗〕和泉顯本寺内高三坊第二代なり、　日長字は隆達、號は已成院と云ふ、後に別號自菴と云ひ月樂軒と云ふ、俗姓高氏、其先は筑前博多の人なり、貞治の頃高三郎兵衞道玄博多より和泉堺に移住して藥種交易の商業を營み、十餘代其業を傳へ、天正の頃に至り良左衞門隆喜といふもの長子某に家を讓り、菩提所なる顯本寺内に一菴を營みて退隱し、自家の姓により高三坊と稱す、これを高三坊第一代となす、　日長は隆喜の季子にして、父に從ひて高三坊に移り、後ち出家し專ら三寶に事ふ、隆喜死して後其菴を本寺の支院となし第二代となる、豐臣秀吉大坂城に在る時、堺津に命を下し、一藝に長じたるものを召したるに、その命に應じて出でたるもの日長、利休、新左衞門の三人なり、蓋し日長は書畫に長じたれば、其技を以て出でたるなり、秀吉其能を賞し朱印六石を與ふ、然るに日長自ら受けず、是を顯本寺に納めたり、平生好て小唄を能くしたれば、小唄隆達とて戲曲家の間に其名を喧傳せらるゝに至る、寛永二年十二月二日寂す、世壽缺けて傳らず、(顯本寺記錄)

〔考〕　堺鑑、聲曲類纂、類聚名物考、嬉遊笑覽等に元は日蓮宗の僧にて顯本寺の寺内に住したりしが、故ありて俗人となり、高三氏の家に往て藥種を商ひ、後ち小歌の一節を歌ひ出すよしあるは、事實を誤り傳へたるものゝごとし、

ニチチヨー　日頂(一九一二一九七七)〔日蓮宗〕下總眞間弘法寺の開山なり、　日頂は伊豫阿闍梨と呼ぶ、俗姓は橘氏、伊豫守定時の長子なり、師弟妹二人あり、寂仙房日澄、乙御前と云ふ、父定時駿河に戰死の後、母に隨て鎌倉に往く、時に下總若宮の邑主富木五郎胤繼妻を喪ひ、師の母を納れて內事を司らしむ、隣邑に眞間山あり、天台宗の談林にして、時の化主を了性と云ふ、師幼より學を好み、世榮を求めず、僧儀を慕ふ、了性これを見て乞ひ納れて弟子となす、既にして祝髮し、伊豫房と呼ぶ、文應元年日蓮松葉谷を去りて師の繼父五郎の宅に休す、五郎即ち中山に法華堂を造て敬待し、師をして日蓮の下に附かしむ、時に師十六歲、命を受けて眞間山を監す文永五年日蓮松葉谷に歸り、師も亦隨待す、八年日蓮佐渡に流さるゝや、師日向日持等と交々省定す、同十一年日蓮佐渡より歸り長興山に入り、師もまた眞間山に遷りて進山の式を擧

く、時に廿三歳なり、弘安二年五郎眞間山の本尊釋迦佛を造立し、師命を受けて之が點眼を修す、五年日蓮寂を示し身延山に塔を建て六弟子輪次守塔に決し、師本國院を構へて居る、翌年春喪事終りて眞間山に歸る、乾元元年三月八日法を日揚に付して弘通行脚し、駿河富士郡重須(オモス)村に到り、父戰死の跡を吊し、塚を守ること前後十六年、文保元年三月八日寂す、壽六十六、時に日興大石寺にありて遺骸を山麓に葬り、常林寺を剏し、師を開山となす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチチヨー　日調　二一六一……　〔日蓮宗〕武藏本門寺の第八代なり、日調は上總の伊保藏向臺の人なり、父は狩野氏にして法名を朗舜と云ひ、母は下野足利郡の人、法名を幸善と呼ぶ、幼にして兩山常住院主日隆に依りて出家し、二十五歳の夏第七代日壽の囑を受けて本門寺に主となる、此時山家氏庄內氏等檀徒となる、亦た俗兄行蓮弟子の禮を取る、日調一時他にあるとき火災の爲めに山內皆な燒亡す、行蓮力を盡し舊に復す、師主席にあること五十年、文龜元年十月八日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニツチヨー　日潮　二三三一／二四〇五　〔日蓮宗〕甲斐身延山第卅六代なり、日潮字は海音、六牙院と號す、一に瑞松堂松岩と號す、八歳にして惠明日燈に投じ出家す、十九歳にして師命によりて遠く關東に遊び、飯高談林に入り、卅五歳にして首座位に上る、明年山城松崎談林の請に應じ、大衆の爲に法華文句を講ず、翌年奥州仙臺侯の禮請により、仙臺孝勝寺に住持す、享保五年飯高談林の請に應じ出講すること一年、元文元年幕府の命に依りて身延山に昇り、在山九年、寬保三年京師に赴き、天顏を拜し、御扇を賜はる、身延山祖塔柱朽ち、殿傾く、師力を奮つて一新す、延享元年十一月職を解きて退藏し、延享二年九月二十日寂す、壽七十五、法臘六十八、著作本化宗鰈感得記一卷、大菩薩記一卷、本化別頭佛祖統紀二十八卷、蒙古對治曼荼羅記一卷あり（六牙院日潮年譜、三國高祖畧傳）

ニチチヨー　日迢　シンチヨー眞超を見よ、

ニチツー　日通　二二七四／二三三九　〔日蓮宗〕甲斐身延山第三十代なり、日通字は玄海、寂遠院と號す、俗姓は松[illegible]氏、妙傳寺日勇上人に師事し、鷹峯談林に學ぶ、次に山科談林に至て玄義の講主となり、妙傳寺に瑞世す、鷹峯談林の請を受け文句を講ず、飯高談林主席を缺く、師入りて化主となる、摩訶止觀解指要鈔解は是時の著述なり、長興長榮兩山の主となり、身延山丈室に移る、在山八年、延寶七年二月十一日武藏の瑞輪寺に於て寂す、壽六十六、初め京師西岡眞如寺、後相模金井法傳寺を開く、著作法華文句志述記十二卷、指要鈔解、摩訶止觀解等あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチツー　日通尼　二三一三／二三三二　〔日蓮宗〕京師瑞龍寺第三代なり、日通號は瑞照院、二條故攝政康道の女なり、寬文七年二月九日剃度受戒し、居ること六年寬文十二年七月十七日寂す、壽二十、（本化別頭佛祖統紀）

ニチテー　日貞　二〇二九……　〔日蓮宗〕下總中山法宣院の開山なり、日貞は日高の室に投じて弟子となり、學行成りて後ち日祐の囑を受けて松尾山西海總導師職となる、晩年中山に法宣院を築いて住す、應安二年九月十三日寂す、壽缺く、

ニチテー　日貞　（……）　〔日蓮宗〕山城本妙寺の開山な

り、日貞字は學珠、號は智靜院、京都の人、幼にして慧光寺日玄に依つて出家し、飯高談林に學ぶ日脩日香等と學名高し、後ち山城北岩倉に隱れ、岩倉本妙寺を開く、寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニツテー 日貞 二三七二……〔日蓮宗〕下總弘法寺第十九代なり、日貞字は存肖、善甚院と號す、別に練阿と呼ぶ、伊豆國初島の人なり、幼にして本門寺日玄に師事し、飯高談林に學ぶこと二十年、學名當時に顯る、敎藏院の席を繼ぐ、南谷に往て玄義を講じ、眞間山に瑞世し、飯高談林の請を受く、偶ゝ疾を感じ退て眞間山に歸る、後眞間山を退き隱棲す、正德二年十一月五日寂す、師平生著作多し玄義得宜鈔、文句得宜鈔各十卷、妙境內解二卷、指要鈔解・吞等學者傳て珍となす、師文章を好み飯高病中の記あり、(本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄)

ニチテー 日貞尼 二〇三八……〔日蓮宗〕下總禮林寺第二代なり、日貞字は妙林と云ひ、曾谷日禮俗の時の子なり、總州佐倉城主千葉大隅守胤貞に嫁す、胤貞建武の亂に戰死するに及び平賀日傳に就きて出家し、日貞と呼ぶ、父日禮を慕ひて曾谷に菴を結び胤貞の後を吊ふ、胤貞の嗣子俸錢を與へ、第を更めて寺とし、日禮を開山とし、妙林二代となる、禮林寺是れなり、永和四年七月二十日化す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチテー 日廷 二二七七 二三五〇〔日蓮宗〕京師本國寺第十九代なり、日廷字は甚哲、一心院と號す、少にして中村談林に入り、硏學多年、後小室鷹峰中村三談林の化主に歷任し、德行高く、律師法橋位に任じ、終に本國寺の主位に充つ、居ること十年、元祿三年八月二十日壽七十四にして寂す、初め水戶光國禮を以て招聘せしと雖も老を告けて起ざりしと云ふ、(本化別頭佛祖統紀)

ニチテー 日廷 二三七三 二二四四〔日蓮宗〕京師妙覺寺第二十五代なり、日廷字は尊賀、後字を以て院號となす、伏見宮邦房親王の子なり、出家して京都本滿寺智見院日暹に師事し、飯高談林に學び、西谷談林に轉學し、京都妙覺寺に出世す、後水尾天皇の寵遇を受く、晚年鷹峰に隱る、貞享元年九月九日寂す、壽七十二、(本化別頭佛祖統紀)

ニツテン 日奠 二二六一 二三二七〔日蓮宗〕甲斐身延山第廿八代なり、日奠字は義道、妙心院と號す、正東談林の化主なり、能登瀧谷妙成寺に瑞世し、萬治三年四月二十八日日境の遺命を受けて身延山に住す、其職に在ること八年、寬文七年七月二十三日寂す、壽六十七、前住日境の時、平賀日逑等の法亂ありて糺明未た終らず、師再び日境の志を繼き其糺明に力を盡す、師道暇に丈六堂三光殿を造營し、山上に家康の祉を祠る、加賀の泉野千部山常樂寺、卯辰弘法山三寶寺、妙法山蓮華寺、能登柳田淨心寺、越中新川法光山妙輪寺は皆師の手創なり、著作西谷名目解あり、(本化別頭佛祖續紀)

ニチテン 日典 二二五二……〔日蓮宗〕京師妙覺寺第十八代なり、日典俗姓生國未詳、京都妙覺寺に主となり、內外の學を講す、殊に外學に通し、詩文を善くす、後、佐渡に渡り、塚原根本寺に入り、日成の後ちを再興し、第八代の主となる、文祿元年七月二十五日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチデン 日傳 二〇〇一……〔日蓮宗〕下總本土寺の第二代な

ニチ(日)テ

り、日傳は大圓阿闍梨と呼ふ、越後の人なり、俗姓は藤原氏、幼にして柏崎の天台寺に出家す、文永十一年法華玄義講師と爲る、時に二十八歳、日朗日蓮の謫居を訪ひ柏崎に次するに方り、滯留の間寺に過る、師遂に日朗に侍して往て日蓮に謁し、日傳の名を授けらる、建治三年曾谷の日禮北谷山日朗に請て開山となさんとす日朗固辭出てす、師に命して赴かむ、日蓮本土寺の號を與ふ、日朗大曼荼羅を圖して高祖的受の九條袈裟を授け水晶の念珠を併て以て寺鎭と爲す、師別に日朗の塔院を造り、妙泉院と云ふ、日朗の滅後日輪師を見ること殊に篤く、年師より少き二十五歳、幼より師に學ふもの多し、師一には後進の爲め、一には日輪の爲め、天台の章疏、高祖の遺書手書大成して比企の藏中に措く、一夏は平賀に安居し一夏は比企に安居す、人呼て半年阿闍梨と爲す、平生著述多し、今存するもの別頭三五の記二卷、二策十二因緣の圖解一卷なり、師一時岩部村に宿す、衆群を爲して化を蒙る、其地に寺を創し安興寺と號す、歸て妙泉院に退藏す、曆應四年三月六日に寂す、壽九十五、(本化別頭佛祖統紀)

ニチデン　日傳 二〇〇二―二〇六九 〔日蓮宗〕京師本國寺第五代なり、日傳は字を大圓と云ひ、建立院と號す、相模鎌倉の人なり、幼にして日靜に奉仕して受戒す、應安二年日靜遷化せるを以て、嗣で主職となり化儀大に振ふ、在職四十一年、應永十六年四月朔日職を日經に讓りて寂す、壽六十八なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチデン　日傳 ―一九六二 〔日蓮宗〕甲斐妙法寺の開山なり、日傳は肥前阿闍梨と呼ふ、其の俗姓詳ならず、初め眞言宗の僧なり、多年日蓮の敎化を受け、遂に之に歸す、身延山に茅舍を結ひ、自ら醍醐と呼ぶ、後其地に名けて醍醐谷と云ふ、志摩坊其舊趾なり、乾元元年二月十二日寂す、壽詳ならず、(本化別頭佛祖統紀)

ニチデン　日傳 二一三二―二一九八 〔日蓮宗〕甲斐身延山第十三代なり、日傳は寶聚院と號す、幼にして日朝の室に投じ、日朝の寂後日意に就て學び、遂に日意の後ちを嗣ぐ、時に甲斐の主武田信虎寺を造りて敬待し、終に身延山の檀越となる、今の甲府信立寺是れなり、是の時身延山始めて官寺となれり、初め相州小田原の臣宇野定治光淨山玉傳寺を造り日傳を請ふて開山となす、尾張名護屋の城下妙瑞山大光寺も請うて開山となせり、天文十七年十二月十日寂す、壽六十七なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニツトー　日透 二三一三―二三七七 〔日蓮宗〕甲斐西谷談林の學僧なり、日透字は惠照、後堯辨と改む、觀如院と號す、京師の人なり、父の名は休節、寛文元年九歳にして寂光寺日孝に投して出家す、同十年小栗栖談林に入り敎義を研習す、延寶七年遂に關東に赴き、小西談林に入りて、法華文句を研究すること四年、天和元年秋故ありて京師に歸り、明年再ひ出て小西談林に至る、苦學三年、遂に中座となり、貞享二年飯高談林に入りて、上座に昇り、終に講授に至る、貞享中舅氏日孝偶江戸に到り早く舊寺に歸るを促す、元祿十二年冬玄義講主となる、翌年功成り退く、幾なくして伊豆國蓮山に住す、兼て西谷談林の化主となる、後會津德翁侯の召に應し若松淨光寺の主たり、寺務の暇指要鈔講草五卷、祖書順憶二卷を撰し、

正德四年春退藏廬を結びて閑居す、享保二年春壽量顯本義、本尊義各一卷を撰し、三月事觀義二卷を撰す、同年三月廿六日寂す、壽八十五、臘五十六（三國高僧畧傳、日宗著述目錄）

ニチトー　日東　二三〇八　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十七代なり、日東は字を常然と云ふ、小西談林、飯高談林の化主となり、藻原妙光寺に居る、初め書法に拙にして之を學ぶこと三年大に筆意に達す、寛永八年心性院日遠に招かれて長榮長興兩山の主となり、居ること十八年、慶安元年十一月二十二日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチトー　日東　ショーシュン韶春を見よ、

ニチトー　日東　ソキョク祖旭を見よ、

ニチトー　日登　二二二五　二二八五　〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第四代なり、日登は了雲院と號し、甲斐の小室第十七代の主圓覺院日登の門人にして日新の法孫なり、慶長九年日盛の囑を受けて瑞輪寺に主たり、寺務二十二年、餘暇妙雲寺を造りて退き、寛永二年九月十日寂す、壽六十一、（本化別頭佛祖統紀）

ニチトー　日璒　二二二九　二三一〇　〔日蓮宗〕上總妙覺寺の第二十二代なり、日璒生國俗姓不詳、初め上總妙泉寺に住し、後同國奧津の妙覺寺に轉住し、堂塔を修繕し、同寺中興の祖となる、慶安三年六月廿二日寂す、壽八十二、（本化別頭佛祖統紀）

ニチトー　日燈　二三〇二　二三七七　〔日蓮宗〕山城深草瑞光寺第二代なり、日燈字は慧明、波羅密と號す、俗姓は惠藤氏、初め戒律宗慈任に依りて出家し、名を智岸と云ふ、寛文五年三月一日二十四歳にして深草に至り、日政を拜し師資の禮を執る、六年日政を仰いで具足戒を受く七年、日政母の喪に遭ひ、師の母妙月を招き養壽庵に主となす、八年日政病重く師を召して後事を附し、大曼荼羅を圖して之を證す、日政寂し大衆退散す、惟り慈觀師に侍すること日政に侍するが如し、遂に齊堂、松壽軒、向陽庵、聽雨庵、知足庵、芥子臺等を破毀し僅に稱心庵に幽捿し、薪を拾ひ、水を汲み、迹を晦し、眞を守る、同十年母妙月を伴て身延山に詣て、日蓮の塔を拜す、十一年十月三七日法華三昧を修す、禪誦の暇草山集考を編す、延寶二年先師日政回忌に法會を嚴修し、八年先師日政十三回忌に丁り同侶志を合し、普賢道場を構へ、六時懺を修す、天和三年寂耀院日啓和尚に就て日蓮の祈禱經を受く、其年草山清規一卷を作る、貞享二年母妙月の爲に宗門緊要一策を作る、三年慈觀に法席を讓り、四年慈觀等及び養壽尼衆等に戒を授く、元祿三年一切經藏を造營し自ら土を荷ひ石を曳き先師の遺德に酬ゆ、五年先師の二十五回忌に法會を嚴修す、九年本覺英五十年に丁り傳を撰し之を祭る、四年稱心庵に退隱正德三年七十二歳霞岡の上に五輪塔を立て一生の著作を埋む、享保二年先師日政五十回忌の法會を嚴修す、同年九月十一日遺偈を書し曰ふ本有生死、無レ去無レ來、泰然坐了、妙法蓮臺と、翌十二日寂す、壽七十六、著作艸山集註十卷、宗門緊要、懺法修否論、持戒論、艸山要路會註、艸山清規、秘法鈔註等各一卷あり、（本化別頭佛祖統紀、日本著述目錄）

ニチトー　日等　二三一一　二三九二　〔日蓮宗〕武藏本門寺第二十四代なり、日等は字を靜慧と云ひ、妙玄院と號す、妙悟院日玄に依りて薙髮得度し、十五歳にして飯高に入る、研習三十年、元祿八年四十五歳にして玄義の講主となり、駿河村松海上寺

ニチ（日）ト

に遷り、居ること十年にして飯高談林の化主となる、正德元年六十歳にして水戸侯に召されて三昧堂の講主となり次に安房の誕生寺を嗣ぎ、終に雨山の主となる、時に火災の後なるを以て專ら造營に勤む、將軍の命に依り深德夫人の廟を建つ、在職十二年、享保十八年十二月二日寂す、壽八十二、（本化別頭佛祖統紀）

ニチドー　日道　二二二二／二二六一　〔日蓮宗〕甲斐身延山第十九代なり、　日道は法雲院と號す、甲斐身延山第十七代日新の門人にして、教藏院日生に隨つて學を受け、其命に依り下總飯高談林に至り、蓮成院日尊の化を輔く、慶長二年日尊飯高に移るを以て其跡を嗣ぎ、飯高の化主となる、四年身延山主となり、居ること三年、六年の冬閏十二月十二日寂す、壽五十なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチドー　日導　二三八四／二四四九　〔日蓮宗〕下總正東談林の學僧なり、　日導一妙院と號す、肥後熊本の人なり、父井上某篤く法華經を信ず、十歳の時本妙寺の東光院に投じて出家す、名を榮雅と呼ぶ、十八歳の頃京都に上り、鷹峯に入りて苦學す、會江戸谷中の妙福寺日禪來り其貧にして學を好むを愛し、相携へて歸り、名を智溪と改む、日禪高田本松寺に移るに方り、師隨待す遂に中村談林に入り講席に列り、日々天台教を聽き其學成り談林を去るに及び、妙興寺に住し、江戸牛込惠光寺に移り、寺務の餘暇祖書を探究す、天明三年退隱して專ら撰述を事とす、四年秋正東談林の請に任て文句を講ず、五年春祖書綱要廿三卷成る、幾はくもなくして熊本本妙寺の請に應し居ること數年、寛政元年七月十二日寂す、壽六十六、著作祖書綱要二十三卷、即身成佛義一卷あり、（三國高僧畧傳）

ニチトク　日得　二二七九　〔日蓮宗〕江戸善立寺の開山なり、　日得字を壽仙と云ふ、後ち字を以て院號となす、初め三河岡崎善立寺第七代の主なり、德川家康岡崎城に在る日、師を召して恩遇最も渥し、江戸城を築くに及んで師召されて江戸に遷り、下谷に地をトして寺を建て、大光山善立寺と號す、元和五年四月某日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチトク　日得　一九三九　〔日蓮宗〕佐渡妙宣寺の開山なり、　日得は阿佛房と呼び、姓は藤原氏、俗名を遠藤左衞門尉爲盛と云ひ、其先は遠藤武者盛遠文覺の曾孫なり、爲盛順德天皇に仕へて從四位上に叙せらる、師和漢の學に通じ、歌道に達す、承久三年天皇佐渡に遷幸したまふに從ふ、時に三十二歳なり、仁治三年天皇崩したまふ、爲盛素と淨土を宗とし、念佛怠りなく、自ら阿佛房と號す、帝の崩じたまふに及んで妻と共に落飾して陵下に廬すること三十年、文永八年の冬日蓮佐渡に遷され、塚原に潛む、阿佛房これを訪ひ、說を聞き、妻と共に舊宗を棄てゝ弟子となる、十一年日蓮鎌倉に還り、甲斐に隱る、阿佛房遠路を厭はず、再三身延山に登り、說を聞く、弘安元年の秋九十歳にして登山す、日蓮大に感じ名を日得と與ふ、翌年三月二十一日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチトク　日德　二三二九　〔日蓮宗〕京都本法寺第十九代なり、　日德字は學林、興林院と號す、俗姓は中川氏、出家して松崎興遠院日善の門人となり、中村談林に遊び、後ち鷹峯談林の化主となり、京都本法寺に主職となる、後ち退隱して寛文九年正月十六日寂す、壽缺く、著作信施論一卷あり、（本化別

頭佛祖統紀）

ニチトク　日德 一九八五…　〔日蓮宗〕武藏妙顯寺第二代なり、　日德は俗姓を墨田と云ひ、名を五郎時光と云ふ、上州墨田次郎時忠が嫡孫、中老秀上の姪なり、日蓮の門に入り出家す、嘗て己が領地武藏足立郡新倉村に日蓮難產を救ふの舊趾ありたるを以て、其地に寺を立て、日向を開山となし、自ら二代の位に居る、後に妙顯寺と號す、正中二年十二月十二日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチナン　日南　ホーカイ法海を見よ、

ニチニン　日忍 一九七一…　〔日蓮宗〕相模長福寺の開山なり、　日忍は下野阿闍梨と呼ぶ、俗姓は源氏、正峰山日辨の俗弟なり、父は熱原甚四郎國重と云ふ、日蓮に投して出家す、其寂後相模相橋に廬す、幾ならずして寺となし、長福寺と號す、晩に日辨の招に應じ正峰山第二代の席を繼ぐ、應長元年四月十日寂す、壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニン　日忍 二三六〇…　〔日蓮宗〕山城瑞光寺の僧なり、日忍字は無諍、其俗姓を詳にせず、京都の人なり、夙に出家し、本覺寺日英の高足正善院日通に師事し、飯高談林に入りて學ぶ、鎌倉に赴き勝光院日耀に見へ、大に悟る所あり、直に京都に歸へり、小松谷に隱棲して讀經唱題すること數年の後深草に至り、日燈に就きて戒を受け、苦行甚し、元祿十三年九月八日寂す、壽缺く（本化別頭佛祖統紀）

ニチニン　日忍 二三四八 二三八五　〔日蓮宗〕山城瑞光寺の僧なり、日忍字は智朗、初め老貞と呼び、元山と號す、俗姓伴氏、上總久留利村の人なり、十三歲にして身延山日省に就きて得度し、飯高談林に入りて學び、轉讀一部日課として怠らず、深草の慈航に就きて戒を受く、檀越の請により飯高談林に歸へり、止觀の席に進む、後退きて江戸に隱棲す、再び深草に至り持戒嚴密なり、享保十年八月朔日示寂す、壽三十八、骸を霞谷に葬むる、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニン　日忍 二三一〇 二三八四　〔日蓮宗〕京都立本寺第二十四代なり、　日忍字は如節、慈廣院と號す、京都の人なり、立本寺日芳瑞光寺日政に師事し飯高談林に學び、山科談林、飯高談林の化主に歷任す、後立本寺に住す、寶永元年寺火災に罹る、師再興して効あり、享保九年六月十二日寂す、壽七十五、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニン　日仁 二〇七六…　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第三代なり、　日仁は宰相阿闍梨と稱す、岩代若松妙法寺の二代となる、後妙滿寺の三代に昇る、日什の滅後門弟信徒の沮喪せんことを恐れ專ら奬護の策を講ず、後權宗禁遏の諫言を入れ、應永五年六月五日法弟日實と共に將軍義滿を途に要す、義滿之を脅かし、遂に亂打毆擊身肉糜爛せしめ、且沸湯を灌きて退かしめんとすれども止まず、遂に慰して皈らしむ、應永二十三年寂す、壽缺く、（日蓮宗史料）

ニチニユー　日入 二三四二…　〔日蓮宗〕山城深草平樂菴の開山なり、　日入字は元信と云ふ、鄉貫詳ならず、山城深草に平樂菴を開き、道暇詩文を樂む、元政元贇幷に師三人唱和す世に三元唱と云ふ、天和二年六月十日寂す、（日蓮宗史料）

ニチニヨ　日如 二三八八 二三五九　〔日蓮宗〕下總正峰山第二十七代なり、　日如字は是心、本寂院と號す、別に即空と呼ぶ、俗姓

は片岡氏、京師の人なり、妙覺寺日允の室に投じて出家し、中村談林に入り後伊豆の雲金に瑞世し、下野國沼田妙光寺に遷り、下總正峰山の請に應ず、本師日允遺命して武藏青山本通菴を囑す、水戸光圀師を請するも老を以て起たず、平素風雅を好み詩を作り歌を詠ず、師の滅後法弟童妙日好編して本光遺集と云ふ、元祿十二年十一月十二日寂す、壽七十二、著作本光遺集あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチニヨ　日如尼（……）〔日蓮宗〕遠江妙恩寺第二代なり、日如字は妙恩、下總平賀邑の人、俗姓は平氏、日像の姉なり、晩年日朗によりて比丘尼となり、身延山に登り、日蓮の塚を拜し、日像を京都に訪ふ、歸路遠江金原法橋の宅に宿る、時に日像鎌倉日朗を省する途次歩を枉けて妙恩を問ふ其地寺となり、瑞和山妙恩寺と號し、日像を開山とし、日如第二代となる、示寂の年時缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニヨー　日饒 二〇八八……〔日蓮宗〕下總本土寺第六代なり、日饒字は慧海、俗姓は明石氏、初め天台宗の僧なり、比企ヶ谷日山の敎を受けて日蓮宗に入る、後下總平賀本土寺に住す、正長元年五月六日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニヨー　日饒 二二三三 二三〇四〔日蓮宗〕京師妙顯寺第十三代なり、日饒字は英月と云ひ、京都の人、姓は尾形氏なり、幼にして出家し、十六歳にして法輪寺に入り、常に講席に侍して研學多年、遂に南總小西黌舍に於て諸部を講ず、武藏の法恩寺に於て妙玄を講ず、元和の初め四十三歳にして妙顯寺に主となり、正保元年九月廿二日壽七十二にして寂す（本化別頭佛祖統紀）

ニチニヨー　日饒 二二二二……（日蓮宗）京都妙覺寺第十七代なり、日饒觀照院と號す、尾張犬山城主齋藤山城守利直入道道三の子、長井義龍の弟なり、道三自ら菩提の爲めに二子を美濃常在寺日運の許に送り僧となす。師は其一人なり、常在寺の主となり、妙覺寺に出世す、犬山城沒落後同寺に於て法門を修し、永祿四年に至りて寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチニヨー　日遠 二二四八 二三一一（日蓮宗）紀伊淨心寺第二代なり、日遠字は忠桂、號は感通院と云ふ、心性院日遠の弟子となり、元和中紀伊に養珠山淨心寺を開き、日遠を開山とし、自ら第二代に居る、慶安四年十一月二日寂す、壽六十四、（本化別頭佛祖統紀）

ニチ子ン　日念 二二九四 二三六七〔日蓮宗〕江戸淨心寺第三代なり、日念字は孝存、號は覺成院、山城鳥羽の人、俗姓山本氏、幼年頂妙寺に入りて出家し、立本寺日審に師事す、後、關東に遊び、中村談林に入り、學成りて江戸深川淨心寺に主たり、寺務卅九年、說法二万餘座、法益を受くる者數を知らず、寶永四年七月七日寂す、壽七十四、（本化別頭佛祖統紀）

ニチ子ン　日念（……）〔日蓮宗〕京都法華寺の開山なり、日念號は善立院、京都東寺門前に法華寺を築き讀經を事とす、寂年缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチ子ン　日念 一九九四……〔日蓮宗〕安房妙福寺第二代なり、日念は松本房と呼び、元は天台宗の僧なり、下總眞間山日頂に投じて敎を受け後日蓮に見えて別頭の秘奧を拜す、初め日蓮安房國南無谷の泉澤權頭が許に宿する時、權頭及其子三人皈依して宗を改め、弘安二年寺を造る、日蓮これを聞い

て日念に命じて監せしむ、乃ち往て之れを守り、讀經唱題の暇に造營し成就山妙福寺と號し、日蓮を祟んで開山となし、自ら第二代となる、後ち弘化に從事して下總河西蓮昌寺、結城妙國寺、越後高田妙國寺等を創して皆眞間山に屬す、建武元年八月二十七日寂す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチノー　日能　二〇七一—二一四八　〔日蓮宗〕越中大法寺の開山なり、日能は榮昌院と號す、京都本國寺第九代日曉僧正の門人なり、師北地に弘化して機緣大に熟す、越中礪波郡高岡に地を相して一梵宇を築き海秀山大法寺と號す、長享二年十月二十五日寂す、壽七十八、㊥

ニチハン　日範　一九八…　〔日蓮宗〕丹波常照寺の開山なり、日範は大善阿闍梨と呼び、眞言宗の僧なりしか、日朗に謁して說を聽き、宗を改む、後丹波福智郡に遊ぶ、其地に信士あり、元甲斐小室の人にして曾て日蓮の化を受けて、信徒となり、流居して此に來り住す、人呼んで小室と云ふ、日範尋ねて一見す信士大に喜んで居る所の荒加山を供す、村民も亦力を合せて寺を建立す、後に福智山常照寺と號す、其歸路伊豆船田村を過ぐるに、村民寺を建立して敬待す、後に本敬寺と號す、相模維末村を過ぎ、其地に寺を建立して長妙山圓教寺と號す、元應二年正月日朗の寂するに逢ひ、悲泣して喪に服し、三月十五日寂す、壽詳かならず、(本化別頭佛祖統紀)

ニチビヤク　日白　ザンム殘夢を見よ

ニチフ　日阜　二四九六—二五五三　〔日蓮宗〕甲斐身延山第七十六代なり、日阜字は秀泰、號は春應院、越中新川郡堀川村中田氏の子なり、九歲富山大法寺日淸に就きて得度し、十四歲下總國中村檀林に學び、尋て加賀立像寺日輝の道風を慕ひ、其門に學ぶこと八年に亘る、二十八歲再び中村檀林に遊び、二十五歲相模三浦本住寺に住し、後、大光寺妙藏寺に歷住す、尋て岡山中敎院、大阪中敎院、東京大檀林の敎授に歷任す、明治廿五年六月五十七歲、身延山主に登る、先代日修上人の遺業を繼ぎて大學院を設立し、一宗の敎育に力を竭す、二十六年八月疾あり、同月廿六日寂す、壽五十八、臘五十、身延山晋山偈、千歲棲神地、紫雲護蛻樓、天人降聳耳、龍鬼臥祇頭、學仰重遠乾、功推薩鑑修、吾來繼衣鉢、何以贊宏猷、

ニチフク　日福　二〇三九—二一二〇　〔日蓮宗〕武藏承敎寺の開山なり、日福字は寂順、圓琳房と號す、俗姓は天野氏、平賀日饒に依て出家す、學成るの後日饒の囑を承て平賀本土寺第六代となり、職にあること二十三年、武藏江戸に隱所を築き、幾ならず疾に罹り、寶德二年十二月二十日寂す、壽七十二、時に法壽房日圓と云ふ者師の隱所を寺となし、師を祟んで開山となす、即ち二本榎承敎寺なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチフツ　日佛尼　一九五九…　〔日蓮宗〕甲斐身延山の比丘尼なり、日佛字は妙了、甲斐巨麻郡中野村に生る、同郡相股村史氏に嫁す、日佛は中道院日了の母なり、史氏死して後日蓮に依りて尼となり、唱題を事とし、日蓮の垢衣を滌き、平生の淨業と爲す、相股より身延まで六里餘の間日々往復す、日蓮之を憐み身延山に地を割きて休息の所を與ふ、正安元年八月二十二日寂す、壽缺く(本化別頭佛祖統紀)

ニチベン　日辨　一九七一…　〔日蓮宗〕下總妙興寺の開山なり、日辨は越後阿闍梨と呼ふ、駿河國富士郡の人、俗姓は源

氏、熱原甚四郎國重の長子なり、富士山の麓に眞言宗瀧泉寺有り、一會百餘人、學頭五人あり、師は其の一なり、日蓮の敎化を聞き、身延山に至りて弟子の禮を執る、日蓮名を與へて日辨と呼ぶ、弘安四年駿河賀島に一寺を開き、蓮壽山常諦寺と號す、後上總に鷲山寺を開き、下總國に妙興寺を開き、晩年甲斐に定榮山蓮照寺を開き、相模に關本山弘行寺を開く、應長元年の夏病を感じ、少納言日源を召て鷲山寺を授け、法弟下野阿闍梨日忍を招て妙興寺を囑し、閏六月二十六日寂す世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニッポー　日保　一九一八―二〇〇〇　〔日蓮宗〕上總妙覺寺の開山なり、　日保は鄕公と呼ぶ、俗姓は佐久間氏、父は十郎左衞門重貞と云ふ、正嘉二年七月朔日を以て上總國夷隅郡興津鄕に生る、小字は長壽麻呂、小湊日家の俗姪なり、文永元年日蓮重貞が請に應じて興津の釋迦堂に入り、十日の間法を說く堂を扁して廣榮山妙覺寺と云ふ、重貞一男子あり、日蓮に投す即ち師なり、日家及び師同日剃髮す、後重貞誕生寺を建立す是に於て日保は妙覺寺第二代誕生寺の第三代となる、日家は誕生寺第二代妙覺寺第三代となる、倶に日蓮を推し開山となす、曆應三年四月十二日寂す、壽八十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチボー　日法　一九一二―二〇〇一　〔日蓮宗〕甲斐立正寺開山なり、日法は和泉阿闍梨と呼び、父の名は芝田右近と云ふ、初め日蓮山梨郡等力鄕北原村に遊び、眞言の精舍金剛山胎藏寺に在りて地藏堂の傍にある一石に倚り、立正安國論を講ずるを聞き重ねて往て化す、時の寺主師を延て相見え、始めて舊業の非なるを知り、共に身延山に至り、日蓮に師事す、日蓮寺主に名を日乘と與ふ寺の檀徒相議して日乘と共に師を請し、安國山立正寺と號す、此地後に日蓮休息村と呼ぶ、時に駿河岡宮天台宗の僧峯存と云ふ者日蓮の敎化に皈して、弟子となり、且つ日法を請し、一寺を開き、後に光長寺と號す、曆應四年正月五日九十歲にして寂す、師彫刻に巧にして名後世に高し（本化別頭佛祖統紀）

ニッポー　日芳　二一三二―二一九四　〔日蓮宗〕京都妙顯寺第七代なり、　日芳は攝政鷹司某の子なり、妙年にして親を辭して道を日具に問ふ、大僧正に任ず、天文三年十月一日寂す、壽六十三、（本化別頭佛祖統紀）

ニチポー　日芳　二二八〇―二三三〇　〔日蓮宗〕京都立本寺第二十一代なり、　日芳號は養壽院、俗姓川副氏、京都の人、出家して慧光院日耀に師事し、六條談林に學ぶ、万治中六條談林の化主となり、京都立本寺に主となる、寛文十年七月十五日寂す、壽五十一、師一生說法三千餘座、唱題八千万部、授戒二万五千人なりと云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチポー　日方　二二六八―二三四一　〔日蓮宗〕紀伊本久寺の第二代なり、　日方俗姓生國詳ならず、紀伊の本久寺開山日玄に師事し、同寺の二代となり讀經を事とす、天和元年九月廿日寂す壽七十四（本化別頭佛祖統紀）

ニチポー　日豐　二二六〇―二三三九　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十九代なり、　日豐字は唯遠、僧那院（一に鷲峯院）と號す、俗姓は大河原氏、能登七尾の人なり、慶長五年八月十一日に生る、十一歲にして加賀蓮昌寺に投して度を受け尋いて京師妙顯寺日饒に就いて天台の章疏を學ぶ、十六歲にして上總法輪寺に遊

ひ禪那院日忠の講席に列す、弱年なるを以て末席に居すと雖も、大に啓發あり、一時池上の日耀と匹敵す、數年の後自ら玄義を講す、三十二歳にして中村談林に至り玄義を講す、三十五歳にして身延山西谷談林の請を受けて重て玄義文句を講す、三十九歳再び中村談林に赴て文句を講ず、四十一歳遂に妙顯寺第十四代となる、明曆の初め武藏池上本門寺第十九代となる、初め承應中權大僧都となる、寛文九年六月十五日寂す、壽七十、（顯本化別佛祖統紀）

ニチポー 日鳳 [illegible]—[illegible]七七 〔日蓮宗〕能登妙成寺第十三代なり、日鳳は[illegible]山院、越中富山の人、初め禪宗の徒なり能登瀧谷妙成寺第十二代普賢院日慈に就て日蓮宗を受く、後ち松崎談林に入りて天台の教を學び、日慈に嗣て妙成寺第十三代となる、元和三年七月二十日寂す、壽缺く、師京都松崎談林に在る時能登瀧谷の僧の寂せることを遙知す、屢々斯かる靈異を以つて人を驚かす、時人呼んで六根淨大德と云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチポー 日峰 イゲー伊鯨を見よ。

ニチポー 日峰 シユーシユン宗俊を見よ。

ニチポー 日峰 ホーチヨー法朝を見よ。

ニチポー 日峰 モンチヨー文朝を見よ。

ニチポン 日梵 二二六三—二三三六 〔日蓮宗〕京師華光寺の僧なり、日梵字は見妙、俗姓橘氏、二十五歳出家して山科談林の秀典に師事し、後京都華光寺に住し、後光明天皇の敕命を蒙り律師の位を拜す、延寶四年六月三十日寂す、壽七十四、遺言して全身を淀川に投ぜしむ、（本化別頭佛祖統紀）

ニチマン 日滿 一九一五—二〇〇三 〔日蓮宗〕佐渡妙宣寺第二代なり、日滿は豐後阿闍梨と呼ぶ、阿佛房日得遠藤左衛門尉爲盛の子なり、建長七年佐渡に生る、俗名は九郎盛[illegible]と云ふ、文永八年日蓮佐渡に流さる、師時に十七歳、[illegible]父阿佛房入道日遠[illegible]に欽仰するを見て九郎も常仕て給仕の役を勤む、弘安二年阿佛房日得上人右[illegible]、谷村に於て[illegible]す、九郎[illegible]に携へす、遺骸を奉持し、谷村[illegible]して身延山に至る、[illegible]にて日蓮に啓して父の塚前に薙髮す、日蓮呼て豐後房日滿となす、日ならずして、歸り宅を捨て寺となし、父日得を[illegible]し開山となし自ら第二代に居る、後に佐渡[illegible]郡阿佛村遺[illegible]田妙宣寺と號す、日蓮大曼荼羅を[illegible]して歸る、康永二年八月十五日寂す、壽八十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチミヨー 日妙 二〇五二— 〔日蓮宗〕京都[illegible]妙寺第二代なり、日妙は大藏阿闍梨と稱す、十六歳にして日什に代りて、玄妙寺の貫主となる、幾もなく夭折す、其年時、及び壽缺く、（日蓮宗史料）

ニチミヨー 日妙 二二九八—二三七〇 〔日蓮宗〕京都妙顯寺第二十二代なり、日妙字は泰運、南[illegible]院と號す、洛陽の人、本滿寺にて得度し、十六歳にて中村談林に遊び、終に玄義を講じ、深草寶塔寺の主となり、松崎談林の化主に充つ、頂妙寺に遷り終に妙顯寺の主となる、後ち[illegible]院に退休し、寶永七年十月十六日寂す、壽七十三なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチミヨー 日妙 二一六[illegible]— 〔日蓮宗〕尾張法蓮寺の開山なり、日妙は法淨院と號す、甲斐國[illegible]切村の人なり、俗姓は[illegible]田氏、十八歳、身延山日朝を拜して出家得度す、後諸國に歷

遊し明應元年の春路尾張を經て薬栗村に宿す、村民相見て師の德に懷く、師喜んで滯留敎化し、一寺を開く、日朝之を聞き妙玉山法蓮寺の號を與ふ、文龜二年七月十三日寂す、世壽詳ならす、

ニチミヨー　日明（二三六四）〔日蓮宗〕武藏淨心寺第四代なり、日明字は觀靜院、生國俗姓詳ならす、江戸深川淨心寺日念に師事し、其後を繼く、寺務三十四年、說法一万餘坐、示寂の年時缺く、（本化別頭佛祖統記）
〔考〕日明は寶永頃の人なり

ニチミヨー　日明（二三二四／二三五〇）〔日蓮宗〕山城瑞光寺の僧なり、日明字は本如、俗姓詳ならす、京都の人なり、八歲にして父を喪ひ、母の信心に感化せられ、廿一歲の時日燈に就きて出家す、明靜院日堯は其伯父にして山城田中に居れり、日明親炙すること年あり、毎に深草と田中の間を往復するに途中歌舞地を避く、元祿三年春西岡眞如寺に至り敎觀を學ふ、講主日明の智行兼備せるを賞す、秋七月講畢りて歸り、病を得て途中に死す、壽二十七、霞ヶ岡に葬むる、母亦尼となりて妙佐と云へり（本化別頭佛祖統記）

ニチミヨー　日明（一九七二）〔日蓮宗〕駿河蓮永寺第八代なり、日明初め日勇と稱す、字は智道、圓照院と號す、京都の人なり、夙に出家し、心性院日遠に侍す、飯高談林に學ぶこと二十餘年、玄義の講主となり、京都本滿寺に出世し、再び飯高談林の化主となる、晩年貞松山蓮永寺・大野山本遠寺に主となり、正和二年五月二十七日寂す、世壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチミヨー　日明（……）〔日蓮宗〕佐渡妙照寺第二代なり、日明字は學優、本間三郎左衞門貞重の子にして、山城入道の一族なり、入道に從つて佐渡に赴き、感する所あり佐渡一の谷妙照寺に投し日靜に從ひて出家し、道行を事とす、示寂年月日缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ニチミヨー　日明（二四〇三／二四七四）〔日蓮宗〕尾張妙法寺の學僧なり、日明字は智英、尾張海東郡の人なり、出家して同國妙勝寺日登に師事し、學成りて同國妙法寺に住し、後、京都六條談林求法院能化となり、發願して宗祖日蓮の遺書を採收編纂せんとし、諸國に巡遊して眞蹟を索め、校讎を事とす、寬政十年名護屋の西なる本鄕と云ふ地に草菴を營み、農民伊藤七兵衞と云ふ者の供養を受て充ら校讎訂正を事として倦ます、文化十一年十月まで十七年の間に編纂するところ三千八百紙五十卷となし、新撰祖書と名く、十一年三月草菴に寂す、壽七十二、（高祖遺文錄序）

ニチミヨー　日命（二二二七／二二八九）〔日蓮宗〕甲斐常住寺の開山なり、日命字は不借、後字を以て院號となす、俗姓鹽野氏、甲斐山梨郡鶴瀨庄の人なり、夙に出家の志あるも父許さす、幾もなく父沒し、母と共に出家し、母は妙立日修と稱し、師は鰍ヶ澤春光院日現に師事す、小地を得て七面明神を勸請し、母と共に讀誦唱題を事とす、中山法華經寺日充其道行を賞し、鶴瀨山常住寺の寺號を與ふ、讀經一萬部功を畢り、靈夢に感し、更に一萬部を積む、且題目七字を書寫するに一花一香一字三禮、每字自我偈一遍を誦し、一萬幅に及ふ、後身延山奧院の殿司となり、其間三年にして讀誦三千五百部に及ふ、享

保十四年九月二十八日寂す、壽六十三、師詩歌を善くす、身延山八景詩あり、(本化別頭佛祖統記)

ニチミヨー　日妙尼（……一九六一）〔日蓮宗〕駿河常林寺の尼なり、日妙字は妙常、駿河富士郡重須邑主橋木伊豫守定時の妻なり、(一説に駿河熱原神四郎の女なりと云ふ)二男一女を生む、定時戰死したる後二兒を携へて再ひ下總若宮邑主富木五郎胤繼に嫁す、時に長男は八歳にして眞間法印了性の室に投して出家し、日頂と名け、後眞間山主となり、亡父の名を慕ひて伊豫坊と云ふ、二男は亦長して日蓮に奉し、剃髮して寂仙房日澄と呼ふ、日澄亦日頂の舊地を得て父の墳塚を修し、草庵を結ひ母日妙を迎へ孝養す、末女乙御前亦母を逐ひて至り、比丘尼となり妙圓と名く、茲に於て三人讀經唱題甚た勤む、日妙正安二年二月二十九日寂す、骸を先夫定時の傍に葬むる、日翌乾元元年の春日頂父母の墓を修せんとして至るに方り、日澄妙圓の強ゐて留むるにより、其意に從ひて年を超ゆ、延慶元年二月三日妙圓寂す、三年三月十四日日澄亦寂す、茲に於て日頂去るに忍ひす、遂に庵主となる、此地後寺となり墓石相連りて存す、初め小林寺と云ひ、後常林寺と改む、日頂を開山とし、日澄を第二代とす、(本化別頭佛祖統紀)

〔考〕一説に曰く日妙先夫によりて一男を擧け、後夫富木氏によりて一男一女を設く、文永中富木氏故ありて日妙を出たす、乃ち富士に徃きて終り、三子亦同所に終ると、是非を知らす

ニチモー　日孟（……）〔日蓮宗〕山城秀典寺開山なり、日孟字は秀典、山城山科に幽居し、法華三昧を修す、若狹の妙旨道人に就きて書法を學ひ法華經を寫す、門人其經を刻し、秀典本と云ふ、且其幽居の草庵を秀典寺と號す、(艸山集、本化別頭佛祖統紀)

ニチモク　日穆（一九七四）〔日蓮宗〕相模本興寺の僧なり、日穆は大輔阿闍梨と稱し、相模飯田本興寺を領す、日什に先ちて寂す、其年時及ひ壽を佚く、著作日穆記あり、

ニチモク　日目（一九二〇—一九九三）〔日蓮宗〕駿河富士大石寺の第二代なり、日目は蓮藏房と號す、伊豆國波多郷の人なり、曾て日興の推擧に因て日蓮に謁することを得、日蓮の滅後日興は波木井氏と隙あり、同門皆交を絶つ、師獨り舊恩を憶て日興を追ふ、日興は駿河國大石寺を開き、師を推して第二代の主となす、師奥州に遊化し、登米(トヨマ)郡新井田本源寺、森村上行寺、栗原郡宮野妙圓寺柳妙教寺を開く、駿河安久山村、同州蒲原驛、甲斐國谷村に各一寺を開き、皆大法山東漸寺と號す、正慶元年日興寂す、翌年美濃國垂井の驛舍

日目上人

に於て寂す、壽七十四、（本化別頭佛祖統紀）

ニチモン　日門　二二三九……　〔日蓮宗〕京都頂妙寺の學僧なり、日門字は普傳房と云ふ、織田信長の時安土問答を以て名あり、天正七年五月廿七日寂す、（日蓮宗史料）

ニチモン　日門　一九五六……　〔日蓮宗〕常陸妙光寺の開山なり、日門は一乘阿闍梨と呼ぶ、其俗姓詳ならず、常陸國築地に妙光寺を開く、後陸奥に遊び、宮城郡光明山大仙寺を開く、永仁四年七月二十日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　一九五〇……二〇二九　〔日蓮宗〕下總法華經寺第四代なり、日祐は淨行院と號す、俗姓は平氏、下總國相馬郡佐倉の城主千葉大隅守胤貞の子なり、幼にして中山日高の室に投して出家す、正和元年四月日高の遺命を受けて中山法華經寺に主たり、千葉氏大に外護の力を盡す、一時州の香取郡に巡化す、郡は皆眞言宗なり、露座法を說くこと百日に及ぶ、安久山圓靜寺主其敎に皈服して寺を供し弟子の禮を執る、後安房に遊ぶ、眞言宗多聞寺主宗を改めて寺を供す、鎌倉六浦に往く妙法禪門師を請いて眞言寺を改めて上行寺を造る、後武藏國久良岐郡杉田村に至り牛頭山妙法寺を造る、後肥前に至る千葉氏地を割て助く、松尾山護國光勝寺を創す、說法敎化大に利益あり、天皇之を聞き勅願寺としたまふ、師中山に還る、應安二年五月十五日寂す、壽八十、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　二二七〇……二三二四　〔日蓮宗〕下總弘法寺の第十六代なり、日祐字は玄普、號は壽量院、姓氏未詳、攝津浪華の人、幼にして出家し、郡の雲雷寺に投じ、後ち眞性院日遠に師事し、飯高談林に學ぶこと二十餘年、當時の化主圓是院日耀の知遇を受く。慶安元年飯高談林化主となる、承應三年下野眞間山弘法寺に住し、寛文四年五月三日寂す、壽五十五、著作玄義禘記五卷、止觀妙經要義二卷、圓頓者私記一卷、片簡錄等あり（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニチユー　日祐　二〇二三……　〔日蓮宗〕相模妙法華寺第二代なり。日祐字は智祐、大貮阿闍梨と呼ぶ、比叡山無動寺第五代尊海の門人なり、正安二年日昭尊海を京都に訪へる時、師の命を受け、衣を更へて日昭に師事す、文保元年日昭那瀨の妙法寺を退き相模の海濱に遷る。妙法華寺を立て日祐をして主たらしむ、正慶建武の間鎌倉大に亂れ、濱の寺も燒亡し、僅かに日蓮の手書及肉牙日昭の手書を頭に懸け池上に遁く、此時伊豆雲金村に勝地を得て東金山妙本寺を建立し、居ること二十餘年、戰亂未た治らずして濱の重寶を遷すに及ばす、貞治元年正月十四日寂す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　二三〇〇……二三七四　〔日蓮宗〕山城眞如寺開山なり、日祐は字は玄慧、寂玄院と號す、攝津難波の人なり、少して寂遠院日通の門に投し、山科談林に學ぶ、後東山談林講主に請せらるゝも固辭して起たず、深草の日燈の風を慕ひ、霞谷に隱棲すること年あり、日燈道友を得て大に喜ぶ、晩に眞如寺に主となり。門下に教を請ふ者甚だ多し、正德四年六月十九日唱題正念辭世の偈を書して寂す、壽七十五、著作、起信論科解、指要鈔私記、諦觀集註、自照法界次第私記等なり（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　（一九四二）〔日蓮宗〕祖日蓮の弟子なり、

日祐は大輔公と呼ぶ、日蓮茶毘葬の列に大輔公日祐を擧ぐ、守塔勤番帖十八人の列に花押手書あり、然れども嗣法の裔なく布化の寺なし、事蹟詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　二二六六……　〔日蓮宗〕下總小西檀林の開山なり、　日祐字は慧澄、通王院と號す、日生に師事し、飯塚飯高に隨侍す、一家の敎觀具に蘊奧を究む、天正中平賀日悟小西檀林を構へて師に謀る、師往て敎化す、學徒大に集る、家康之を聞き飯高中村小西同時に封を頒ち、護法の印を賜ふ、慶長七年京師の立本寺疏を裁して敦待す、師飯高興鬪日蔚を招き以て講職を繼がしむ、進山規を調へ、居ること五年、十一年十月六日寂す、世壽詳ならず、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日祐　ニチヨ日譽を見よ

ニチユー　日勇　二二六四……二三一〇　〔日蓮宗〕山城山科談林の開山なり、　日勇字は天慧、號は法性院、俗姓平氏、西洞院參議時直の子、幼名梅松麿と呼ぶ、甲州身延山日要の弟子となり、竹の房に留まる、京都妙傳寺の請を受けて同寺の主となる、後水尾天皇に東福門院に召されて法門を奏上し、後ち宇治郡山科に談林を開き、光了山護國寺と云ふ、慶安三年十二月二十三日寂す、壽四十七、門下に寂遠院日通あり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチユー　日勇　二四二〇……　〔日蓮宗〕京都妙滿寺第百九代なり、　日勇字は存道、號は本壽院と云ふ、尾張名古屋の人なり、幼にして常德寺第十二代日貫周達に從ひ得度す、日貫は學德共に高く、門下四十人あり、殊に宮谷檀林の南谿に尾州寮を興し、門下の弟子をして寄宿就學せしむ、師其中に參して頭角を出す、始めは常德寺塔中忠善院に住し、後東行し宮谷檀林に入り、天台三大部を講究す、當時日受立圓宗乘を以て聞ゆ、師親しく敎を受く、後江戸下谷蓮華寺第十一代となり、次に上總松岸山本松寺第十七代となる、寶曆三年十一月檀林玄義講師に進み、七年五月第七十七代講經主に昇る、この年大衆相謀りて日乘乾龍の文句攬刪を上木す、師訂正の任に當る、八年八月松の鄕に法席を張る、十日の間に一百座におよぶ、信徒雲集し、聽者嘆服せざるなし、同年十月本山妙滿寺第百九代の貫主となる、九年十一月任滿ちて東飯の途次、尾張名古屋に過ぎて父母の墓を拜し、常德寺に宿泊す、詩あり曰ふ、學錦功成向故鄕、峯松年積薜蘿長、龍門欲躍龍鯛勁、虎谷將超虎尾强、驚風亂颭三江水、墜葉斜侵一片霜、弊衲發輝親里宿、恩謝何克廟下香、十年十二月廿二日松岸山本松寺に寂す、壽詳ならず、著作二敎合壁論五卷、易學原正三卷、儒佛心性論衡二卷、蒲鞭折疑論、塔山記行、各一卷あり、二敎合壁論は主として新井白石の鬼神論を辨駁せるものなり、（日勇上人略傳、野口義禪氏報）

ニチユー　日友　二二七九……　〔日蓮宗〕武藏池上本門寺第十五代なり、　日友は中正院と號す、上總武射郡湯坂村の人、俗姓は佐藤氏なり、飯高談林に遊び、講會の傍ら法華玄義を談ず、時に圓韓なる者あり、竊かに是れを記して後ちに至り梓に上す、今の法華玄義招釋是れなり、後ち日遠に親炙して弟子の禮を執り、行學愈進み、元和三年の夏南山に主となり、五年六月十四日寂す、著作文句辨私記、顯性錄和記各一卷あり（本化別頭佛祖統紀、日宗管迹目錄）

ニチヨ　日興　二二一六……二二〇〇　〔新義眞言宗〕山城智積院第三代な

り、日譽一に日祐といひ、字を正純と云ふ、武藏の豪族小野寺氏の子なり、幼にして有間の西光院日雄僧都の室に入り、剃髪して業を習ふ、三十歳に及びて根來山に登り、日秀、頼玄二老の丈室に侍す、天正十三年根來山兵燹にかゝり、師高野山に遁る、有間の西光寺に迎へられて同寺に住す、幾もなく長谷寺に遊び、專譽僧正に隨ひて其蘊底を得たり、去りて智積院の玄宥僧正に謁し、慶長十一年秋請を受けて近江總持寺を補す、初め智積院の祐宜僧正と隙あり、然れども僧正は師を以て次補とせんと欲せるなり、會津の城主蒲生飛驒守秀行、師を延請して圓藏寺に住せしめんと欲し家康に聞す、家康師を措きて智積院の嗣なきを慮り、祐宜僧正と相和せしめ、十七年十一月祐宜の寂するに及び、師代りて席に居る、翌十八年東靜岡に行きて恩を謝し、幕命を受けて城中に元壽、秀算、俊賀、賴聲等と法を論ず、家康寺門の法制及び封戸硃印を降す、十九年春重ねて駿府に到り、更に命を承けて江戸に赴き秀忠に謁す、大阪の役に家康二條城に營す、師屢々入りて南北の諸學僧と法を論す、元和三年八月家康の執奏により僧正に任す、寛永八年冬席を退きて城北大報恩寺に退隱し、寛永十七年十一月二十日寂す、壽八十五、泉涌寺に葬る、(結網集)

日譽僧正

ニチヨ　日譽　ゲンテー源底を見よ、

ニチヨ　日譽　ゴオー牛雄を見よ、

ニチヨ　日譽　リョーカン了感を見よ、

ニチヨー　日耀　二三一五　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十八代なり、日耀は字を住心と云ひ、圓是院と號す、上總武射郡垣谷村の人にして鈴木和泉守某が裔なり、初め中正院日友の弟子となり、後ち亦た心性院日院の門に入り、飯高談林第十二代の化主となり、慶安元年飯高大講堂を再建す、此時本門寺主席を缺くを以て、入りて主席を補し、明暦元年十月十二日寂す、世壽詳かならず、著作玄義解十卷、文句示童記八卷、四教儀說私記、部教得意、通佛義三惑同異事、華嚴教主私記、觀心自鏡章、各一卷、施權同異事、等妙私談事等あり(本化別頭佛祖統紀、山陰雜錄)

ニチヨー　日耀　二二九六―二三五七　〔日蓮宗〕京都妙顯寺第十八代なり、日耀は字を勝光と云ひ、後ち字を以て號となす、本通院日允の門人にして身延山日暹の法孫なり、中村談林に於て學業成り、鷹峯談林の化主となりて本法寺に遷り、次で正中山に遷り、中村談林の化主となる、水戸黄門光圀の禮聘によりて三昧堂に於て四來の道俗に接し、後妙顯寺第十八代となる、去て鷹峯體眞庵に隱れ、元祿十年十一月二十日寂す、壽六十二、(本化別頭佛祖統紀)

ニチヨー　日陽　二二四六 二三〇三　〔日蓮宗〕紀伊感應寺の開山なり、日陽は正覺院と號す、圓覺日長の高弟にして、駿河國感應寺第十三代なり、紀伊侯夫人養珠院落飾の時師之が戒師たり、子賴宣紀伊國に封ぜらる、元和五年賴宣及夫人始て紀伊に入る、師も亦命有りて隨ふ、夫人自ら地を相して感應寺を建立し師を請して開山となす、茲に於て駿河伯耆紀伊三國に常住山感應寺あり、師寬永二十年十一月九日寂す、壽五十八、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日陽　二二五八……　〔日蓮宗〕尾張法華寺第五代なり、日陽は本覺院と號す、尾張淸須法華寺第五代の主なり、延德中平氏織田常勝の建つる所なるを以て織田一家之が外護たり、就中織田信長厚く歸依し、手ら軍旗を出して師に宗門の首題を大書せしむ、信長美濃の岐阜城に移り、師を招き停住の地を割く、後岐阜法華寺と號す、天正中信長日蓮宗を怨むことあり、安土城に於て遂に宗論を興し、威勢を以て宗徒を辱かしむ、重て身延山幷に本國寺を毀んと謀る、師之を聞き、馳せ至りて切諫す後權大僧都に補せらる、六條日禎僧正身延山日新使を送りて之を謝す、慶長三年四月六日寂す、世壽詳ならず、後愛知郡名護屋城下に寺を遷し、啓運山法華寺と號す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日陽　二二二四 二三〇〇　〔日蓮宗〕紀伊宣經寺第二代なり、日陽字は鷲山、鷲仙院と號す、圓雄院日格の弟子なり、紀伊新町に妙儀山宣經寺を建立し、先師日格を請して開山となし、自ら第二代に居る、寬永十七年八月十三日寂す、壽七十七なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日陽　二一五六 二二一〇　〔日蓮宗〕武藏本門寺第十代なり、日陽は中道院と號し、天文十八年師日純任を解くを以て次で主となり、翌年二月十五日寂す、壽五十五なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日養　二一七六 二二五六　〔日蓮宗〕越中法光寺の開山なり、日養は了覺院と號す、天正十一年越中國礪波郡高岡に一精舍を搆し本照山法光寺と號す法化盛んなり、晩年閑居し、自行轉讀一萬餘部、慶長元年九月十五日寂す、壽八十一（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日養　二三三一……　〔日蓮宗〕加賀寶乘寺第二十代なり、日養は覺隆院と號す、加賀河北郡東村寶乘寺に住し、倉谷山宗榮寺を開く、寬文十一年四月十六日寂す、壽缺く（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日養　二二八五 二三三三　〔日蓮宗〕武藏本門寺第二十一代なり、日養字は高月と云ひ、一爽院と號す、俗姓は榮山氏、少にして日通に隨つて出家し、飯高談林に硏學二十餘年、玄義の講主となり、大野本遠寺第五代を繼ぎ、後玉澤に居り、終に飯高談林の化主となる、寬文十二年本門寺に主となり、翌延寶元年二月八日寂す、壽四十九、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日遙　（二三〇〇）　〔日蓮宗〕紀伊宣經寺第三代なり、日遙見龍院と號し、日陽を師とす、日陽に繼ぎ、紀伊新町宣經寺の三代となる、修驗を以て著はれ、且易學に精通せるを以て時人多く之を稱す、（本化別頭佛祖統紀）

ニチヨー　日遙　二二四一 二三一九　〔日蓮宗〕肥後本妙寺の第三代なり、日遙字は學淵、本行院と號す、朝鮮國慶尙道河東の人、

余吉禧字天甲の子なり、明朝の神宗皇帝萬曆九年に生る、我が文祿二年加藤清正朝鮮より歸る時傳溪洞普賢庵に於て一小兒を見る、其姓名を問ふに默して對へず、筆を執り書して曰く、獨上寒山石徑斜、白雲生處有人家、時に甫て十歲、清正之を奇として携へて本邦に歸る、乃ち師なり、初め清正寂照院日乾に投して出家せしむ、日乾時に六條談林に主たり、遂に下總の飯高談林に遂り學問を修めしむ、居る事十餘年に及ぶ、清正大に喜び、招て本妙寺に主たらしむ、慶長十六年清正の喪を修し、萬治二年二月廿六日寂す、壽七十九、(本化別頭佛祖統紀)

ニチヨー　日要　二二二七—二二六四　〔日蓮宗〕甲斐身延山第二十四代なり、日要は顯是院と號し、日遠の門人にして正東談林の講主となり、京師の妙傳寺に住す、後ち甲斐小室妙法寺に遷る、元和元年日遠家康の命を受けて再び身延山に主となり、期月にして退き日要をして主たらしむ、居ること九年、慶長九年七月五日寂す、壽四十八なり、初め身延山に五重の塔高さ二十丈なるを造る、加越能の大守利常の母壽福夫人(日榮)師に歸依し黃金若干を投じて資を助く、(本化別頭佛祖統紀)

ニチリ　日利　二二七三—二三三二　〔日蓮宗〕下總龍光寺の僧なり、日利字は智泉、俗姓は千葉氏なり、初め淨土宗なりしが、後日蓮宗に歸し、慶安四年七月蓮心寺日產に就きて戒を受く、後龍光寺に居る、寬文十二年三月寂す、壽六十なり、(本化別頭佛祖統紀)

ニチリ　日利　二三〇一—二三六〇　〔日蓮宗〕京都妙顯寺第廿代なり、日利は字を春利と云ひ、隆眞院と號す、和泉堺の人、身延山日遠の門人なり、中村談林に於て[illegible]學[illegible]、學成りて六條談林の化主となり、紀伊滿心寺に住し、中村談林化主となる、後ち谷中延命院に遷れ、終に妙顯寺に主と[illegible]、元祿十二年八月朔日寂す、壽六十、(本化別頭佛祖統紀)

ニチリ　日理　二三二五—[illegible]　〔日蓮宗〕加賀本是寺の開山なり、日理號は本是院、中村談林、鷹峯談林に學を講す、後ち加賀に入り、清生山本是寺を開く、明曆元年十二月朔日寂す、門下に身延山日脫を出す、(本化別頭佛祖統紀)

ニチリ　日理　ドウエー道榮を見よ、

ニチリン　日臨　二四四七—二四八二　〔日蓮宗〕常陸三昧堂の學僧なり、日臨字は本妙、江戸青山の人なり、幼にして父を喪ひ、母に事へて孝順なり、夙に出塵の志あり、下谷宗延寺日實に從て得度す、師深く深草日政の風を慕ひ、遂に其遺蹤を尋ね、深草に至りて居す、後、甲斐國波木井に移り、一小庵を結び世緣を絕つ、誦經唱題懈ることなし、道俗仰ぎ慕ふ、偶水戶談林三昧堂の請あり、其地に赴く、幾なくして寂す、時に文政五年九月十七日なり、壽三十六、著作佛海微瀾、敎觀聲林、妙經述讚、朝暮[illegible]心記、本尊抄文和略解、忍艸雜記、題目和談抄、三大秘法辨等あり、(三國高僧略傳、日宗著述目錄)

ニチリン　日輪　一九三二—二〇一九　〔日蓮宗〕武藏本門寺第三代なり、日輪は大經阿闍梨と呼ふ、文永九年下總國葛飾郡風早庄平賀鄕に生る、小字は龜王麿、父姓は平、平賀を以て氏となす、名は忠晴、母は千葉氏なり、忠晴日朗に歸依し俗弟子となる、二子あり長を萬壽麿と云ひ、次を龜王麿と云ふ、萬壽麿日蓮に投して出家す、龜王麿も兄の道儀を見て欽仰し、遂に日

朗の室に投して出家し、日輪と名け、治部卿と呼ぶ、正應四年九月日朗師に命して本門妙本兩寺に主たらしむ、師時に二十一歲なり、爾來常に日朗に隨侍す、文保二年日朗七十四歲池上南の窪に一小菴を構へて退休す、元應二年に至りて寂す、師棺を荷ひ松葉谷に荼毘す、延文四年四月四日法嗣日山を兩寺に主たらしめ、同日寂す、壽八十八、師初め下野國宇津宮鄉妙勝寺、相模國大儀妙輪寺等を開く、(本化別頭佛祖統紀)

日輪上人

ニチリユー 日隆 二〇四四／二一二四 〔日蓮宗〕八品派の開祖なり、日隆字は深圓、精進院と號し、桂林房と呼ぶ、越中の人、桃井左馬頭尙儀の子なり、師の叔父に日存日純あり、共に妙顯寺日霽の門人なり、師二師を羨んで出家の念を起し、遂に日霽に仕へ、桂林房と呼ぶ、二十二歲の時、日霽寂を示し、日存日純共に本迹勝劣を唱へ、妙蓮寺を開く、師二師に隨ふ、後二師月明僧正に歸す、師獨り勝劣を唱へ本能寺を構へて住す、後攝津尼崎に本興寺を剏して弘通接度す、甲斐立正駿河光長兩寺の主本果院日朝、京師に上りて師に謁し、共に勝劣の見を立て唱和する者多し、寛正五年二月二十五日寂す、壽八十一、

ニチリユー 日隆 二三九二／二三七〇 〔日蓮宗〕伊勢間妙寺の開山なり、日隆號は通心院、駿河奥津に生れ、日選の門に入り、苦行を積みて證悟を得、桑名城守松平定重病むに方り、師に祈禱を請ひ、後定重の父卒するに及びて定重、光德山間妙寺を興し師を請して開山とす、定重の奏請により權律師に任す、晩年江戸に歸り谷中に菴を居す、寶永七年二月二十四日寂す、壽七十九、

ニチリユー 日隆 二三五六 〔日蓮宗〕京都本國寺第二十代なり、日隆字は春山、少にして正東談林に入り、學成りて求法談林の化主となり、妙覺寺に進み、中村談林の請に應ず、水戸黃門光國の請により三昧堂の化主となる、後ち今出川右大臣公規の猶子となり、本國寺に住し、大僧正に任ず、光國懇請して久昌寺に主となす、元祿十一年三月五日寂す、壽五十九、(本化別頭佛祖統紀)

ニチリユー 日隆 一九二五／一九九四 〔日蓮宗〕安房鏡忍寺第三代なり、日隆字は長榮、刑部阿闍梨と呼ぶ、工藤左近丞吉隆の子、初め父吉隆日蓮と約あるを以て、投じて弟子となる、後ち父日玉難に死せる地に一寺を造り、日曉を推して開山となし、日玉を第二代とし、自ら第三代となる、名けて妙隆寺と云ふ、後に鏡忍寺と云ふ、建武元年十一月朔日寂す、壽七十、

ニチリユー 日隆尼 〔日蓮宗〕高松寺第二代なり、日隆號は妙光院、一色直房の妻なり、直房卒後尼とな

りて高松寺に入る、寛文十二年四月二日寂す、壽三十三、

ニチリュー　日龍　二二五四―二三二九〔日蓮宗〕京都頂妙寺第八代なり、日龍號は精進院、生國俗姓詳ならす、京都頂妙寺に住し、尋て中山法華經寺に住す、寛永十三年寺職を辭し、山城鷹峯に知足庵を營みて隱棲し、紺紙金泥一字三禮の法華經を寫し九年にして功を畢へ、寛文九年九月廿三日寂す、壽七十六、（本化別頭佛祖統紀）

ニチリョー　日了　……―二一七〇〔日蓮宗〕京都本國寺第十三代なり、日了は勸行院と號す、華山家の猶子となり、主位を嗣ぎ、僧正に任ず、時に鎌倉上杉家の臣に太田左衛門太夫持資なる者あり、日了の德風を聞いて道契尤厚し、松永彈正久秀三光堂を造る、在職十年、永正七年八月二十八日寂す、

ニチリョー　日了　二三〇八―二三七四〔日蓮宗〕本覺寺第十七代なり、日了字は長圓、號は慧明院、駿河府中の人なり、江戸善立寺寂明院日長に就て出家す、後、甲斐に入り大野山日近に師事し、飯高談林に迎へられて玄義の講主となる、池田本覺寺に住す、正德四年六月九日寂す、壽六十七、

ニチリョー　日了　一九三八―一九九二〔日蓮宗〕甲斐妙了寺開山なり、日了は中道院と號し、甲斐巨摩郡相股村の人なり、文永十一年日蓮鎌倉を去り、甲斐に入り、相股村に少休す、日了の父東氏庄左衛門午齋を供す、弘安元年父死したるを以て母師を懷にして身延山に至り、日蓮に托す、母も尼となり妙了日佛と云ふ、弘安五年日蓮寂するに逢ひ、母の生地中野村に歸る、後相股村の舊宅を寺となし、正慶寺と號す、正慶元年八月七日寂す、壽五十五なり、後弟子日勢地を一の瀨村に更へ妙了寺と號し、且つ中野村に靈與山妙行寺、妙久山法久寺を造り、日了を推して開山となす、（本化別頭佛祖統紀）

ニチリョー　日了　……―二三二九〔日蓮宗〕山城慈雲寺の尼なり、日了字は妙法、號は信解、生國俗姓未詳、諸國を徧行して居を定めす、萬治二年五月十七日紀伊にて終る、讀誦經卷三千二百部、身延山に參拜すること七度と云ふ、京都中道寺村慈雲寺の中に新に佛殿を作れり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチリョー　日良　二二五〇―二三二〇〔日蓮宗〕山城燈明寺の中興なり、日良字は圓通、號は寶龍院、俗姓生國詳ならす、出家して讀經を事とし、法華經三千部に滿つ、後諸國に行脚し、宗門の靈地往問せさるなし、山城燈明寺の荒敗を興し、中興祖となる、晩年山城下加茂大妙寺に隱る、立本寺日審其德行を賞し、寶龍院の號を與ふ、萬治三年七月十九日寂す、壽七十一、（本化別頭佛祖統紀）

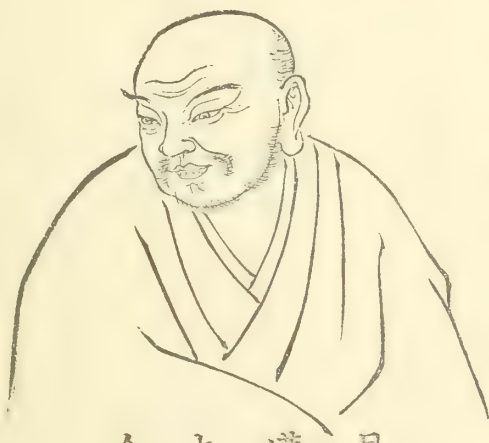
ニチリョー　日量　二三二一―二三七一〔日蓮宗〕甲斐妙了寺第十六代なり、日量字は泰壽、後字を院號となす、俗姓は市川氏、甲斐巨摩郡荊澤村の人なり、七歲にして出家し、十六歲にして飯高談林に學ふ、苦學難行に堪へ、身延山院日脫の弟子となり、松崎談林の化主となる、甲斐の妙了寺に出世し、幾もなくして塚原に隱る、西谷談林師を請へとも辭して往かす、日亨の書に接して遂に止むを得ず往きて化主となる、正德元年九月二十日寂す、壽五十一なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチリョー　日遼　二二四九―二三〇九〔日蓮宗〕武藏瑞輪寺第五代なり、日遼字は貞山、號は慈眼院、了顯院日盛の門人なり、江戸瑞輪寺日登の後を受けて同寺の第五代となる、寛永七

年池上本門寺日樹の法亂に際し、身延山智見院日暹と共に力を盡す、晩年深川慈眼寺を造りて退隱す、慶安二年三月二十九日寂す、壽六十一、（本化別頭佛祖統紀）

ニチレー　日禮　一九五一　（日蓮宗）下總法蓮寺の開山なり、日禮字を法蓮と云ふ、俗姓は平氏、俗名は教信、世々越州に住たり、總州の曾谷に籠す、文應元年富木五郎法華堂を造り、日蓮を敬待す、日蓮說法すること百日、是時教信等・舊宗を棄て教化に皈す、後、教信身延山に至り、日蓮に師事し名を日禮、字を法蓮と云ふ、曾谷に皈り小庵を構へて居る、後ち一寺となし、法蓮寺と號す、延應四年五月五日寂す、壽八十餘なり、（本化別頭佛祖統紀）

ニチレン　日蓮　一八八二　一九四二　日蓮宗の開祖なり、日蓮初の名は蓮長といふ、貞應元年二月十六日安房小湊浦の漁家に生れ、幼名を善日麿といふ、俗姓貫名氏なり、遠く藤原氏に出て、中頃井伊氏を稱す、祖父は貫名五郎重實と云ひ遠江に住せしが、平氏の亂に安房に配流せられて漁父となる、其子次郎重忠に五子あり、師は其第四男なりといふ、家貧にして衣食給せす、天福元年十二歲にして同國清澄山に投して諸佛房道善（一に道禪）に師事す、延應元年十八歲（一說に嘉禎元年十六歲）にして道善に就きて出家得度す、師自ら生死の無常を知りて其解釋を以て一身の大事となし、日夜刻苦して經論を涉獵し、早く法華經を以て宗となすに至れり、仁治三年廿一歲にして戒體即身成佛義一卷を撰す、師山中に在りて靜に經論を閱讀し心思を鍛錬し、旣に得るところあるに至ると雖も、尙ほ安んずる能はず、常に比叡山高野山に遊はんとし仁治の初先つ鎌倉に出つ、三年廿一歲にして鎌倉に於て比叡山の學僧尊海に逢ひて志を告け、遂に相隨ひて西上し、比叡山に登り一房に寓して經論章疏を閱し、尊海、靜明、經海、心賀、政海、心聰は師と同友なり、幾くもなくして比叡山を下り、園城寺を問ひ、尋いて泉涌寺に問ひ宋僧道隆に謁したりと云ふ、寶治三年大和に遊ひて諸大寺を歷問し、紀伊に到りて高野山に登り、攝津に出て河内を經、同年に再ひ京に入り比叡山に歸り建長五年に伊勢を經て安房に着したり、同年四月（一說に三月）二十八日東天に向ひて朝日を拜し始めて南無妙法蓮華經の七字の題目を高唱し後道善の持佛堂に入り道俗を集めて專ら法華經を贊揚し、眞言、禪、淨土等の諸宗を罵詈す、傳に此時地頭東條景信席に列し、師の言を聽きて大に怒り、刀を拔きて斬らんとしたるを、道善淨顯義淨等の擁護により僅に身を以て逃るゝことを得たりといふは事實にあらさるべきも後師が淨土宗を誹謗して景信の怒を買ひしは事實なりとす、東條氏は世々長狹郡東條に住せる土豪にして景信は師が諸宗を罵詈し就中其奉信する淨土宗を誹謗するを以て大に怒る、師は其難を逃れ、同年五月去りて舟路鎌倉に往き松葉ヶ谷に一小屋を構えて居を占め、日々法華經を讀誦し、時に出てゝ街頭に立ち南無妙法蓮華經の題目を高唱し、通行の人々に對して之を勸む、見る者狂漢と爲したりといふ、然るに四條某進士某等師に就きて法を問ひ、遂に意を傾けて歸向す、同年十一月に比叡山の僧成辨といふ者鄕里上總に歸らんとする途次師の事を聞き、松葉ヶ谷に來りて訪問し師の弟子となる、是れ後に六老僧の第一位に置かるゝ日昭なり、師はこれより

日昭と共に日々法華經を講せり、翌年十月上總の平賀某の男來りて弟子となる、是れ後に六老僧の第二位に置かるゝ日朗なり、師己に二人の弟子を得たるも來附するもの未だ多からす、尋て去りて上總に至り遊化す、既にして鎌倉に歸り二弟子と共に松葉ヶ谷の草菴に籠居せり、時に幕府は深く禪宗に力を添へ、執權北條時賴は專ら宋僧道隆に歸向し、新に大刹を建築して建長寺と號す、淨土宗も亦良忠の入りてより大に興隆の勢あり、然れとも師の說ける法華の功德は未た多く信仰せられす、松葉ヶ谷の草菴は舊に依りて蕭索たり、師は常に意中平ならず、法華經を誦讀する餘暇に、書數部を製作して僅に其憤懣を洩せり、幾もなくして鎌倉の地を出て駿河に遊化し、偶〻岩本の實相寺に大藏經あるを聞き、請うて閱讀し、仁王經、藥師經、金光明經、大集經等の文を抄出す、再ひ鎌倉に還りて松葉ヶ谷の草菴に住す、文應元年に至りて實相寺にて抄出したる數條の經文により立正安國論

日蓮上人

一卷を製作す、立正安國論は師が殆と一生の心血を注きたるものにして、其製作に就いて第一に意を注かさるへからさるは當時に於ける天變地異なり、蓋し寬喜、貞永、正元、曆仁の頃より五穀屢〻登らすして、小民饑饉に迫り、建長五年六月即ち師か鎌倉に入りたる翌月に大に地震ひ、康元元年一月、六月に大雨激雷ありて、諸川の洪水人馬を流す、八月に三たひ大風猛雨ありて橫死頗る多く、十一月十二月に激雷あり、翌正嘉元年四月に日蝕あり、五月に日蝕あり、且つ大に地震ふ、八月再ひ大に震ひ人馬の死傷算なし、九月重ねて震ひ、十月より十一月に至り、大震激雷交々起る、此間幕府は諸寺諸社に令して頻りに祈禱せしむと雖も其驗なし、師は正元元年に守護國家論を製し、同二年二月に災難對治鈔を製作し、文應元年に立正安國論を製作す、蓋し前二書を修正して其體裁を改めたるものなり、師か一生三百餘篇の書、皆草案を用ひす、時に臨み、用に應して筆を托したるものなれとも、唯此論は製作して幕府に上らむとしたるものなれは、頗る體裁、文章等に意を用ひたるものゝ如し、師は此論に於て極力法然上人の淨土宗を誹謗したり、即ち此論を宿谷左衞門光則に依りて幕府に上れり、幕府は却て師が妖言を以て民衆を誑惑するものとなし、弘長元年五月十二日伊豆に配流す、伊豆伊東に留りて川奈彌三郎等の供養を受け專ら法華經を修行したり、弘長三年十一月十一日赦免を蒙り鎌倉に着し、再ひ松葉ヶ谷の舊草菴に居りて弟子等と法華經弘通の事を圖る、持妙法華問答鈔等を製作し師に對する世間の惑を解かんとしたるなり、然れとも淨土禪の隆盛なるにも拘らす、師の說くところは未た多く鎌倉

の人士の信仰を引くこと能はさりしかは、師の意中益々平ならさるものあり、文永元年安房の小湊に歸り、先親の墓を掃へり、此時父は既に死し、母は老いて病めり、十有餘年故郷の地を踏ますして此に七十有餘の老母に侍し孝養を盡せり、且清澄寺の道善にも遭ひたりといふ、此時の著なる當世念佛者無間地獄事といふ一書を見れは安房に於ても淨土念佛を誹謗したるか如し、日夜に法華經を讀誦し老母の病の平癒せんことを祈禱し、且つ諸人の請に應じて法華經を讀誦して祈禱せり、然るに此十一月十一日に安房東條の原に於て念佛信者に要擊せられ、弟子一人殺され、二人傷を蒙り、師は幸うして遁るゝを得たりといふ、文永五年に元の忽必烈か高麗を介して書を我國に贈れるに方り師は鎌倉にありて此事を聞て大に感奮するところあり、即ち宿谷光則に一書を裁して呈し、十一月十一日に北條時宗、平頼綱、北條彌源太等に書を呈して蒙古の侵害を防かんか爲には、淨土禪等の宗旨を禁して法華經を興隆すへきことを勸說す、其言頗る暴慢なり、同日建長寺等に書を送り自ら立正安國論の符合を誇り、道隆等に對して罵詈至らさるなし、然れとも幕府並に諸寺の大德は毫も師の書を省みざりしかば、師は益々憤懣し、此より數年間師は獅子奮迅の勇を以て幕府を攻擊し、諸宗を誹謗せり、文永八年の頃幕府が右諸大德に命して雨を禱らしめたることありしかは、師は亦書を送りてこれを罵詈したるか如し、當時淨土宗の僧行敏といふ者あり、同年七月師に一書を致して念佛無間等の說を難詰せり、然れとも師は敎義に關して答へす、たゝ簡短なる一書を送れり、其後師は行敏の幕府に訴へたるにあたりて、々難問を會通したりと云ふ、而して師は是等の難問に逢ひて益々奮せり、行敏は淨土宗の僧念阿の門下なる乘蓮といふ者の弟子なりと云へとも、その事蹟一も傳らす、同年九月十日に自ら幕府に出て平頼綱に謁して立正安國論の意を開陳して、幕府の譴責を受け、十二日平左衛門尉數百人の兵を率ゐて師を拘引し、相模龍ノ口に於て斬に處せんとしたるも故ありて改めて佐渡に配流す、即ち十月十二日に相模を出て、廿一日越後の寺泊に至り、此地より佐渡に送られたり、佐渡に渡り塚原といふ地に留り、後一の澤といふ地に至り、日夕小堂の裡に起臥して法華經を讀誦せり、偶々阿佛房といふ者あり、師に心服して大に周旋せり、阿佛房とは前に配流せられたる遠藤爲盛の事なりといふ、當時佐渡は親鸞の越後に配流せられしより淨土の念佛大に盛勢を致せり、師之を見て其念佛を誹謗せり而して阿佛房夫妻が困苦の中に師を扶持したるは猶ほ伊豆配流中の彌三郎の如くなりしなり、此間に數々書を製作して遠く鎌倉等の信徒に送れり、即ち文永九年二月に開目抄二卷稿を脫し、十年四月に觀心本尊鈔一卷稿を脫し、一は四條頼基に、他の一は富木某に送付せり、此二書は何れも師か一生の著作として特筆すへきものなり、殊に觀心本尊鈔は師か始めて一家の說を宣揚したるものなり、されば師の敎化に佐渡以前佐渡以後と二分せらる、文永十一年二月十四日に赦免せられ、三月八日に赦免狀到着したれは、同十三日に同地を發し、十五日に越後の柏崎に着し、陸路十二日を經て二十六日に鎌倉に入れり、弟子等に迎へられて鎌倉に入れり、四月八日に平頼綱に謁し、重ねて法華經を說きて幕府の採用せんことを求めたるも、

ニチ（日）レ

鎌倉に於ける佛敎の狀況は前に異なるところなきを以て採用せらるへくもあらす。これまで三たひ法華經を用ひられんことを說けとも皆採られす、玆に於て四月八日賴綱に謁して曰く、日本を救はんか爲に我は三度も上申するなり。若し蒙古の難をさけて救を我に求めんとならば、淨土禪等の僧の頭を刎ねて由井ヶ濱に懸けよ、と、其遂に用ゐられさるを知り、決然として鎌倉を出て、酒匂を經て駿河に入り、竹の下より富士山の東麓を踰えて甲斐に入り、波木井の地頭なる南部六郎實長といふ者に迎へられて身延山に留まり、山中に一小庵を結ひて法華經弘通の基をなす、四方の弟子門徒相傳へて訪ひ來りたれは、日々法華經を說き時に附近の地に出てゝ敎化を施せり、此年間に師は當躰義鈔、立正觀鈔、顯立正意鈔等を製作し專ら敎義を說けりと雖、師の氣力は老て益々壯なり、然れども辛苦艱難は猶ほ前に倍し、三四の信徒の扶持によりて漸く朝夕の給用を支へたるなり、信徒の衣食を贈る緣につれて法を說けり、されは身延山の附近は皆法華經の功德に感化し、駿相總房等曾て經歷したる土地の信徒は交々來りて訪問し、佐渡より數々阿佛房來りて訪問せり、弟子日昭、日朗、日興、日頂、日向、日持等は時に出てゝ附近の地にその敎を傳ふれは、來りて門に入り師に師事するもの日に加はる、日像、日善、日傳、日範、日印、日諦、日澄、朗慶等は皆此年間に歸順せるものなりといふ、かくの如くして身延山に於て始めて法華弘通の初志を貫くを得たり、身延山隱遁九年の後　弘安五年の秋偶々疾を獲るにあたりて思ふ所ありとて山中を出て、弟子門徒に扶けられて武藏の池上に到り、宗仲の家に着す、後、病益篤く、一日高弟なる日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の六人を枕頭に召して後事を托し、法華經を讀誦しなから寂を示せり、實に弘安五年十月十三日、壽六十一なり、弟子遺言によりて遺骨を身延山に葬る、著作甚た多し、立正安國論、觀心本尊鈔、敎機時國鈔、開目鈔、選時鈔、（以上五部書）即身成佛義、女人往生鈔、一代大意、一念三千、十如是、守護國家論、念佛追罸五篇、十法界鈔、爾前二乘菩薩不作佛、災難退治鈔、十法界明因果鈔、唱法華題目鈔、一代五時圖、後五百歲合文、題謗法鈔、持法華問答鈔、法華眞言勝劣、當世念佛者事、木繪二像開眼、藥王品得意鈔、法華題目鈔、安國論後記、眞言天台勝劣、十章鈔、僧行敎訴狀答釋、秀句十勝、眞言見聞、祈禱鈔、如說修行鈔、顯佛未來記、當躰義鈔、法華行者値難鈔、法華取要鈔、爾前得道有無、立正觀鈔、顯立正意鈔、法蓮鈔、身延山記、觀心本尊得意鈔、聖人知三世、報恩鈔、本尊問答鈔、本門戒躰鈔　三世諸佛總勘文敎相廢立、諫曉八幡鈔、（以上錄內）根本戒法門、色心二法鈔、師子頰王、堯舜禹王、諸願成就鈔、十王讚歎鈔、八大地獄鈔、禪宗問答鈔、諸宗問答鈔、念佛地獄鈔、一生成佛、釋尊三德、垂迹法門、十二因緣鈔、三八敎、衰臺室、六凡四聖、一念章法門、總在一念、今此三界合文、日本眞言宗事、善神擁護鈔、行者佛天守護鈔　結要附屬鈔、題目彌陀名號勝劣、聖愚問答鈔、師恩報酬鈔、壽量品得意鈔、早勝問答鈔、法華淨土問答鈔、得授職人功德法門、八宗違目、法華宗佛法血脈、小乘大乘分別、授職灌頂鈔、瑞相鈔、神國王鈔、大白牛車鈔、（以上錄外）三種敎相（以上御書續集）等幷に書翰若干通あり（元

ニチ（日）レ

祖化導記、註畫讃、本化別頭高祖傳、本化別頭高祖年譜、同考異、蓮公薩埵傳、高祖累歳錄、日蓮上人眞實傳、本化別頭佛祖統紀、高祖遺文錄）

【考】日蓮の事蹟に關して一大疑問となれるものは、所謂龍ノ口法難なり、日朝の元祖化導記、日澄の註畫讃、幷に此事を記載す、殊に註畫讃には龍ノ口頭座御難と云ふ一標目を揭け、文永八年九月十二日幕府の命により頼綱等名越の小菴に亂入して師を捕縛し、同日龍ノ口に於て斬刑に處することゝなり、越智直重時に刀を下さんとしたれば、刀段々に折れ、警固の武士等大に驚愕し、師の靈德に感したることを詳說せり、然れとも歷史上より研究觀察すれは、此詳說するところは容易に信用すべからさるものなり、幕府方面の史料より見るも、日蓮宗に傳ふる史料より見るも、未た此詳說するところの歷史上の事實として證明せらるへきものあらす、日蓮の遺書と云はるゝものに數々此始末を言へとも、其實遺書と云はるゝものは、眞僞混淆せるを以て、後人の附加攙入にかゝるものなるべし、註畫讃の如きは、日蓮の靈德を讃揚せんとしたるものなれは、決して歷史上に重用すへきものにあらす、其刀の段々に折れたりと云ふか如きは、全く法華經普門品の經文により緣飾附會したるものなり、然れとも所謂龍ノ口法難は日蓮宗に傳へて一宗の大事となすものなれは、輕卒に抹殺すへきものにあらさるなり、故に本傳に姑く傳說のまゝを存す、

ニチレン 日蓮 ジユーニヨ重如を見よ、

ニチロー 日朗 一九〇三 一九八〇 【日蓮宗】下總本土寺の開山なり、日朗は字を大國といひ、號を筑後房といふ、寛元二年四月八日下總猿島郡能天村に生る、幼名を吉祥麻呂といふ、父は印東治郎左衛門尉有國とて平家千葉の族なり、有國建長六年鎌倉にて日蓮に見え深く歸信す、乃ち師を携へて日昭に投す、日蓮師に日朗の名を與ふ、日蓮か父の喪にあひて鄕に歸る時、及ひ駿河岩本實相寺に到りて大藏經を閱する時、師從ひ往きて傍を離れす、文應元年十六歲にて薙髮得度す、弘長元年日蓮伊豆に謫せらるゝや師官禁によりて他に往くこと能はす、三年間由井濱に居りて讀誦を事とし、日昭に就きて天台の三大部を學ふ、天台宗の僧某來りて師の下に弟子の禮を執る、是れ即ち日澄なり、弘長三年日蓮赦に逢ひて母を安房に省する時、師及ひ日澄從ひ往く、小松原の難ありて日蓮傷を蒙り屛居して醫療す、而して師は日澄と共に看病の事をなす、龍ノ口の變ある時師右臂を折らる、これより一生右手治せすといふ、日蓮佐渡に流され、師は檀越四人と共に宿屋光則の手に捕はれて獄に下さる、後請ひて佐渡に日蓮を省することと八回、常に米を負ひて到るといふ、十一年二月官師を赦す時に三十歲なり、十四日官命あり日蓮を赦す、師即ち牒を受けて發し三月八日佐渡に到る、共に手を携へて歸る、三月十三日佐渡を發し幾もなく鎌倉に着す、大學三郎第地を捨てゝ長興山妙本寺を建て、日蓮之を開堂す、既にして日蓮身延山に往くに及ひ師をして寺を主とらしむ、九月身延山に到りて日蓮を省してまた鎌倉に歸る、冬池上右衛門大夫宗仲宅を捨てゝ寺となし、日蓮に奉す、日蓮乃ち長榮山本門寺と號し師をして兼ね治めしむ、建治元年二月平忠時の子萬壽麻呂を携へて身延山に登り、翌年また其弟龜王麻呂を伴ひて登山す、

建治三年曾谷の敎信剃度して日禮と稱し、下總鼻和の地藏堂を改めて寺となし師を請す、師日傳をして代り往かしめ、日蓮に請ひて寺號を得、本土寺といふ、乃ち師を開山とし日傳を第二代となす、弘安五年十月十三日日蓮長榮山にて滅を取るとき、師長榮長興兩山の監督を遺囑せられ、伊東の感應佛像一軀、立正安國論一卷、伊豆佐渡兩島の赦狀二紙を讓らる、其示寂にあたり、日昭と共に喪事及び後事を監す、六神各子院を身延山に構ふるや、師正法院を修して喪に居る、正應四年九月大曼荼羅を繪きて日輪に附して兩山に主たらしめ、文保二年七十四歲池上南窪に菴居す、元應二年疾に罹り、死後松葉ヶ谷に茶毘せんことを遺命し、正月二十一日寂す、壽七十八、即ち松葉ヶ谷に茶毘して猿畠山に塔す、日像日輪日善日傳日範日印日澄日行朗慶等九人を世に日朗門下の九老僧と稱す、後光嚴天皇勅して菩薩號を賜ふ、著作本迹見聞鈔、本迹違目各一卷あり、（本化別頭佛祖統紀、日宗著述目錄）

ニンエ　仁慧　一八三五 一九〇七　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、仁慧は安藝の刺史隆親の子なり、灌頂法を仁隆僧都に禀け、密宗の秘軌に精し、延應元年秋權大僧都に任じ、仁治二年東寺の長者に補し、寬喜元年權僧正に進む、二年六月敕を奉じて雨を祈り、忽ち法驗あり、寶治元年七月十六日寂す、壽七十三、（本朝高僧傳）

ニンガ　仁賀（……）〔天台宗〕大和多武峯の學僧なり、仁賀は大和の人なり、興福寺に居す、性名達を欲せず、人僧綱に昇るを勸むれば、或は狂病ありと云ひ、或は寡婦に通すと云ひて辭し、遂に多武峯に登り、增賀に師事して山中に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ニンカイ　仁海　一六一五 一七〇六　〔眞言宗〕山城曼荼羅寺の開山なり、仁海は和泉の人、宮道氏の子なりと云ふも詳かならず、七歲にして高野山に登り、雅眞法師に師事し、後、石山の元杲大僧都に從つて傳法灌頂を受け、衆流を修め、小野に曼荼羅寺を剏し密敎を唱ふ、寬仁二年六月畿內旱し、師敕により神泉苑に請雨經法を薰修して靈驗あり、權律師に任せらる、これより萬壽長元の間數〻敕を奉して雨を祈る皆靈驗あり、治安三年冬權少僧都に任せられ、東寺の一長者に補せられ、長元二年東大寺別當に補せられ、長曆二年僧正に轉ず、時人師を雨僧正と呼ぶ、長久四年正月より五月に至る百五十日の間諸國雨降らず、草木枯死し、河井涸盡す、勅して七大寺の衆僧に命し祈願間斷なく、宮中に大壇を建設して千僧讀經を修行せらるゝも功驗なし、是に於て天皇特に勅して師を召したまふも、老病の故を以て辭す、再三再四の強請により遂に遁れかたく、六月八日より宮中に法を修す、第六日に至り大雨沛然として降る朝野驚喜して師の高德を仰く、同四年（一に六年）輦車を聽し、封七十戶を賜はる、永承元年五月十六日曼荼羅寺に寂す、壽九十二、（或は九十四とも云ふ、）密灌傳法の弟子成尊、成典、性信等二十三人、共に世に傑出す、（本朝高僧傳、密宗血脈鈔）

ニンカク　仁覺　一七〇五 一七六二　〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、仁覺俗姓は源氏、右大臣師房の三子、母は寬仁入道大相國の女なり、出家の後慶範明快性範經運の諸師に師事して顯密二敎を學び、寬治七年天台座主に任ず、康和四年三月八日、壽

五十八にて寂す、（天台座主記）

ニンカン　仁韓（一四二三）〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、仁韓俗姓詳ならず、唐に生れ、出家して鑑眞に師事し、眞和尙に隨ひて來朝し、招提寺に住す、示寂の年壽缺く、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ニンキヨー　仁鏡（……）〔眞言宗〕山城愛宕山の僧なり、仁鏡は奈良の人九歲にして東大寺に投し、剃髮就學し、稍長して登壇受戒し、經論に通す、晚年山城愛太子山に安居し、法華經を持誦し、某年寂す、壽百二十（本朝高僧傳）

ニンキヨー　仁恭（一九二六 一九九四）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、仁恭號は石梁、元台州の人、一山國師の外甥なり、石溪月禪師を禮して祝髮受具し、後一山國師の下に歸して心印を傳ふ、正安元年國師に隨從して渡來す、信濃の慈雲寺に住す、檀越慈壽寺を創して延請す、尋て筑前の聖福寺、京都の建仁寺に歷住す、後再び東下し、鎌倉壽福寺に住す、建武元年十二月十八日寂す、壽六十九、遺偈あり大宋咸淳丙寅生、日東建武甲戌滅、滅不滅分生不生、長空萬里一圓月、興雲菴に塔を建て遺骨を收む、勅諡慈照慧燈禪師と云ふ、嗣法竺芳祐、大閑等あり

ニンキヨー　仁慶（二四七八）〔新義眞言宗〕常陸樂法寺第二十三代なり、仁慶字は惠隆、俗姓は栗山氏、武藏多摩郡井草村の人なり、幼にして州の豐島郡目黑新長谷寺卓榮の室に入りて剃髮受戒す、幾ならずして卓榮寂したるを以て深川南都勸進所惠運に隨從す、安永年中豐山に掛錫して專ら顯密二敎を學び、遂に其玄奧に達す、後月輪院に住し、屢〻講筵を開きて學徒を誘掖す、文化八年貫主の命により、常陸眞壁郡雨引山樂法寺に主となる、文政年中小池房に退隱し、十二月十六日寂す、壽五十八、著作論義私記九卷、因明大疏記四卷、分別六合釋、駁法華妙玄首卷抜鈔、妙玄端辭釋論、三大法等、百法明法論懸談、全談柄、義林章玄談、大乘成業論遺財錄、並科圖、天台被接記、全四敎斷位、三十頌畧釋、有宗正宗提要、六釋八轉、倶舍論玄談、立圖解、立權衡、入阿毘達磨論談柄、成道日義、轉法論日義、起信論敎理鈔、還源錄、各一卷あり（新義眞言宗史料）

ニンキヨー　仁慶（……）〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、仁慶は越前の人、比叡山の西塔に止まりて顯密二敎を學び、後京都に住し、專ら法華を誦す、晚年兩界の曼陀羅を圖し、阿彌陀の像を雕り、專ら西方淨土を願ふ、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ニンクー　仁空　ジッデン實傳を見よ、

ニンクワク　仁廓（二四五九 二四九五）〔眞宗〕肥前長專寺の住持なり、仁廓は肥前佐賀中島氏の子なり、幼にして願正寺に剃度し、長專寺の嗣法となる、漢籍を松尾舞山に學ひ、後筑前秋月に遊ひ、吉田紀四郎に隨ひて經史文章を修め、文政二年學林に掛搭し、乘誓院の門人となり、宗乘を硏磨し、苦學多年、業成りて國に歸へり、後進の子弟を集めて開講殆んと虛日なし、遂に得業に擢てらる、僧亮、岱觀、崇仁、雷震、洞觀、大五等の諸師皆師の薰陶を受く、天保六年上京し、幾もなく病に罹り、遂に五月廿一日六條の僑居に寂す、壽三十七、（學苑談叢）

ニンクワン　仁寛（一七六一）〔眞言宗〕山城醍醐山東院の僧なり、仁寛は左大臣俊房の子、勝覺の弟なり、康和三年二月十三日無量光院にて傳法職位を受け、崇德天皇の護持僧となる、天皇後白河天皇と復祚を爭ふとき、師公事に座し、伊豆に配せらる、名を蓮念と改め、遂に配所に寂す、付法四人あり、觀蓮、寂乘、觀照、見蓮なり、（續傳燈廣錄）

ニンゲン　仁源 一七一八 一七六九 〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、仁源俗姓は藤原氏、京極大殿師實の長子、母は伯耆守定成の子なり、出家して仁覺明快經暹の三師に天台教を學び、長治二年天台座主に任ず、天仁二年三月九日寂す、壽五十二、（天台座主記）

ニンコー　仁浩 一九五四 二〇一九 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、仁浩字は無涯、出羽の人、鐵菴生の法を嗣ぐ、元に航し諸禪師に歷參す、東歸の後淨土（肥前）、東勝（相模）、建仁（京師）、に歷住し、延文四年正月五日永源菴に寂す、壽六十六、寶明塔を建て骨を收む、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ニンコー　仁斅 一七七二 一八四六 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、仁斅初め如無僧都を師とし、後宗圓和尙に師事して法相を究め、兼て台密に涉る、延長五年維摩會に講主となり。承平元年律師に任す、四年大會探題の宣を蒙り、天慶元年敕により法務を司どる、三年權少僧都に任し、文治元年大僧都に昇り、明年六月二十二日寂す、壽七十五、師常に城西に居す、故に時人嵯峨の僧都と稱す、其法を受くるもの一乘院定照大僧都あり、（本朝高僧傳）

ニンコー　仁皎 一五三三 一六一九 〔眞言宗〕山城醍醐山成覺寺の開山なり、仁皎は讃岐の人、俗姓は秦氏、觀賢和尙に就いて三論を學ふ、成覺寺を剏して開山となり、後延性に傳法灌頂を受けて深砂大將の法驗を得、深砂座主と名く、律師に任し、天德三年十一月二十三日寂す、壽八十七、（續傳燈廣錄）

ニンコー　仁康（一五四九）〔天台宗〕京都祇陀林寺の開山なり、仁康は源融の第三子、夙に比叡山に登りて慈慧の門に學ふ、効め融六條河原に新に別業を築き、美を極め、奇を盡し、日に百人の壯夫をして難波の海より海水を汲ましめ、鹽竈の烟を揚けて奧州松島の風景を摸せり、融死して子源湛宇多天皇に獻す、天皇融の遺靈を怖れて幸せす、後精舍を建て師に敕して主管せしむ、師佛工康尙に命して一丈六尺の釋迦牟尼像を造らしめ、名德を集めて一七日中五講會を修す、師洪水を恐れて寺を四條の廣幡院に移す、祇陀林の額は源信僧都の命する所なり、師某年同寺に寂す、爾後亂を經て寺荒廢せしを延慶年中淨阿敕を受けて住持し、金蓮寺と改む、（本朝高僧傳）

ニンゴー　仁豪 一七八一…… 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、仁豪は内大臣能長の子、右大臣賴宗の孫なり、出家の後明快良眞安慶の三師に就て天台教を討習し、天台座主に任ず、保安二年十月四日寂す、壽缺く、（三國名匠略記、天台座主記）

ニンサイ　仁濟（一八一三）〔眞言宗〕紀伊高野山新別所の律師なり、仁濟字は地藏、京都の人、美濃守忠隆の子なり、寬信法務を禮して傳法を受け許可を付せらる、先に念範の印可を得、此に於て二師の傳を承けて密學に精通す、付法二

人成實玄證あり（後傳燈廣錄）

ニンサイ 仁濟　シユージヨ宗恕を見よ、

ニンジイン 仁慈院　ドーエー道榮を見よ、

ニンジツ 仁實 一七五一 一七九一 〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、仁實は大納言公實の二子なり、仁覺仁源慶朝仁豪相覺宗觀の諸師に隨つて天台敎を研究し、保安四年三十三歲にして天台座主に任ず、天承元年六月八日寂す、壽四十一、（天台座主記）

ニンシユー 仁秀 一四六八…… 〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、仁秀俗姓物部氏、伊豫の人なり、出家して慈訓に師事し、法相に精し、大同三年三月寂す、門下願安あり、（本朝高僧傳）

ニンシユー 仁岫　シユージユ宗壽を見よ、

ニンジヨ 仁助 一九二三…… 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、仁助は土御門院の子、圓淨を拜して灌頂壇に入り、後大阿闍梨位に居る、仁治三年勅して二品親王を賜ふ、弘長二年八月十一日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

ニンシヨー 仁性（一八二九）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、仁性字は左衞門律師、童名は祇德、中御門中納言家成の子なり、實任に從ひて薙髮し、覺性親王に傳法灌頂を受け、仁和寺の學講となる、寂年、及び壽缺く、（傳燈廣錄）

ニンセン 仁泉 二一一八…… 〔曹洞宗〕備中法泉寺の開山なり、仁泉字は古潤、信濃の人、幼にして天摸和尙に投じて受戒し、徧く諸智識に歷參して太容に師事し、後ち總持寺に出世し、次に佛陀、補巖、玉雲の諸寺に歷住す、伊勢の太守平盛定師の德を慕ひ、備中長谷鄕に法泉寺を造立し、請じて始祖となし、山林田莊を寄附す、長祿二年二月寂す、偈あり、披毛戴角、滿八十年、末後一句、阿鼻現前、嗣法弟子に契隆、梵機、融庭等あり、全身を奉じて法泉寺に塔す、（日本洞上聯燈錄）

ニンソー 仁叟　ジヨーキ淨淝を見よ、

ニンゾー 仁增（一七九四）七條佛所佛工なり、仁增は、康助の弟子なり、一說賴助の弟子ともいふ、長承三年東寺の二王を作るとき師勢增と共に其佛師たり、

ニンテー 仁禎（……）〔臨濟宗〕京都大德寺第六代なり、仁禎字は祥山（一に蔣山）と云ひ、其鄕貫詳かならず、徹翁義亨に參すること多年、遂に其法を嗣ぐ、京都大德寺に住し、盛んに法幢を樹つ、寂年缺く、（延寶傳燈錄、紫巖譜畧）

ニンチヨー 仁澄（一九七六）〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、仁澄は嵯峨入道將軍久明の子、正和五年天台座主に任す、寂年、及び壽缺く、（天台座主記）

ニンネン 仁然（一九〇五）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、仁然は久しく淨菩提院賢定に師事して灌頂法を受く、尙祚に法を承け、心南院に住す、學徒を誘掖し、心南院流と號す、（本朝高僧傳）

ニンホ 仁甫　シユゼン殊善を見よ、

ニンホー 仁峰　ゲンゼン元善を見よ、

ニンヨ 仁與（二〇一一）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、仁與字は香山、夢窓國師に侍して印可を受け、去りて美濃に往き、草菴を結びて跡を晦ます、永和四年同門の衆招きて臨川寺に主たしめ、次で天龍寺に住し、南禪寺に昇る、後禪

度寺を捌して居り、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ニンヨー 仁耀 一三八二 一四五六 〔華嚴宗〕大和東大寺の僧なり、仁耀俗姓は石寸氏、大和葛木上郡の人、幼にして東大寺に入りて剃髮得度し、嚴に戒律を守る、夏夜蚊帳を設けずして安坐し、蚊の膚を噬ふに任かす、延暦十五年二月某日寂す、壽七十五、（本朝高僧傳）

ニンリユー 仁隆 一八〇四 一八六五 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、仁隆は郷貫師承詳ならず、正治二年正月法印に叙し、同七月東寺の長者に任す、元久二年正月十日寂す 壽六十二、（東寺長者補任）

ニンア 忍阿 二四四七 二五一八 〔眞宗〕伊勢河藝郡柳村金光寺の住持なり、忍阿は悅淨院と號す、高田派の講師となり、本山専修寺に居る、安政五年九月二十九日寂す、壽七十二、

ニンカイ 忍海 二四二一 〔淨土宗〕武藏寶松院の九代なり、忍海は寶蓮社曇譽と號す、書畫和歌篆刻を以て名あり、寶暦十一年六月十七日寂す、（泉谷瓦礫集）

ニンカイ 忍鎧（二四四九）〔　〕京師某菴の僧なり、忍鎧字は惠甫、號は空華子と云ふ京師の人なり、能く香を嗅ぎ分くるを以て名あり、一日童子の雪にて造りたる兎を持ち來れるを見て、此は某の邊の雪にて造りたるへしと云へは、人々皆驚き、師は香を嗅ぎ分るのみならず、雪までも鑑定するかと訝る、師微笑して雪に魚臭あり、某は魚賈なれは必す其邊に積れるものを採り來りたるものなるを知ると云ひたりと、某の宮秘藏の紅塵と云へる名香失せて百方捜索す、師島原の邊を行きて其香を聞き、某の宮に報したりといふ、此類の事多しと云ふ、師書を善くし、且和歌を善くす、某年八十餘にして寂す、（續近世畸人傳）

〔考〕忍鎧は寛政頃の人なるべし

ニンキ 忍基（一四一九）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、忍基俗姓缺く、一に唐國の歸化僧なりといふ、初め道璿に師事し、後鑑眞を仰ぎて具足戒を受く、依附すること十餘年なり、思託よりも教を受け、天平寶字三年に東大寺に於て法勵の四分戒本疏を講敷す、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ニンクー 忍空（一九〇四）〔戒律宗〕京都戒光寺の律僧なり、忍空字は空智、駿河の人なり、行脚して圓珠思順と邂逅し、相伴ひて京都に入り戒法を定舜に、律章を淨因に受け、白毫寺に往し、後戒光寺に遷り、大和の室生山竹林寺勝鬘院に主となる、寂年、及壽缺く、門下に本無あり、（本朝高僧傳）

ニンコー 忍向 二四七三 二五一八 〔法相宗〕京都清水寺成就院の僧なり、忍向字は月照といふ、父は玉井宗江鼎齋といふ攝津大阪の人、世々醫を業とし、茶道を好む、師は其嫡子なり、幼名を宗久 又は久丸といふ、京都清水寺成就院藏海に從ひて薙髮し、中將房と號し、忍鎧と名く、一に忍介と書す、後月照と字し、忍向と改名す、天保六年二十三歲にして師席を繼く、松間亭、無隱菴、菩提樹園などの別號あり、其人となり、憂國の志に篤く、常に青蓮院宮（後に久邇宮朝彥親王と稱す）及び近衞家に出入して皇運の挽回を謀る、安政五年八月老中間部下總守京都に上り、所司代酒井若狹守等と協議して、京都に於ける勤王家を探索し、梅田源次郞、鵜飼幸吉等を捕縛して關東に護送す、其禍延きて師に

及はんとす、當時人皆幕府の威を怕れて師の志を憐むものなし、唯た近衛忠煕、及ひ老女村岡二人深く師を助くと雖、亦難を免るゝ能はず、近衛忠煕乃ち師に勸告して鹿兒島の西郷吉之助隆盛に依りて逃れしむ、隆盛之を諒して有村俊齋(後に海江田信義と稱す)と謀り、安政五年九月十日の夜師近衛家を潜出して粟田青蓮院宮へ参上し、暫時にして御幸町三條上る竹原好兵衛方に止宿す、翌十一日未明に發途して奈良に遁逃せんとす、隆盛は駕の傍に添ひ、師の僕重助其後に從ふ、竹田街道を經て伏見乘場に到着す、隆盛師に勸めて謂ふ、奈良は京都の近傍にて潜伏に便ならす、薩摩へ下らるへし、と、師之を諾す、因て俊齋船を艤して發し、日暮の頃大阪八軒屋に着す、隆盛は俊齋に意を含めて京に歸る、師は俊齋と共に同志なる吉井孝助(後に吉井友實)の大坂勤番にて詰合ひ居りしを招いて潜伏の事を謀る、幸助之を大目橋櫂屋町薩州上仲仕幸助に議し、幸助の宅に潜伏することゝなりたり、因りて俊齋は京に上り、師の大阪に滯留中は吉井孝助に萬事を謀ることゝなしたり、師俊齋に託して書を從臣近藤正愼に贈る、書中陽りて、四國へ落つるよしを認めて薩摩に往くことを書せす、只俊齋をして口つから近衛公及近藤重助に傳へしむ、同年十月三日重助は京都西町奉行所に囚はれ、師の在る所を詰問せらるゝも、實を告けす、吏許さす、因て師の書を出して四國に遁れしよしを陳すれとも猶ほ許されす、自ら死を期して食を絶つと十餘日、毫も師の事を云はすして獄裡に舌を噛みて死す、是より先き隆盛も亦幕府の嫌疑を受け危難身に迫るを以て京に止ること能はす、陽に歸國の姿を見せ、大阪迄下り、故郷へ潜行すへしとて京地を出發す、其時同伴する者伊地知正治、北條右門、(後村山松根といふ)有村俊齋の三人なり、正治は伏見に潜む、三人大阪に着す、翌日京都薩摩邸の留守居伊集院太郎右衛門より急に一書を隆盛に送る、同月廿三日夜土佐堀薩摩邸の下より船に乘り出發せんとするに幕府の吏其出帆を妨けんとす、隆盛俊齋百方苦心し俊齋船夫を叱し強いて纜を解かしむ、師は船中每朝手を洗ひ口を漱ぎ、京に向ひて祈念す、赤間ヶ關に至り、三首の歌を詠して俊齋に送る、曰く「追風に矢を射るとく行舟のはやくも事をはたしてしかな、「難波江やあしのさはりはしけくとも猶世のために身をつくしてん、「いかはかりうきめみるとも行末にこゝろつくしのかひもあらなんと、海路八日にして十月朔日下の關に着す、隆盛は先に出發して薩摩に歸る、師同日竹崎なる同志白石正一郎より迎ひ來る故に其家に一泊し、翌二日小舟を借りて豐前小倉へ渡り、同月五日筑前博多工藤左門の宅に着す、同夜有村俊齋急きて薩摩へ歸る、師は滯在中箱崎八幡宮へ詣て、又太宰府を拜して懇に祈誓す、同所松屋某方に止宿して天拜山に登る、後福岡吳服町高橋屋勘六方隱居に止宿す、京都町奉行より追捕の使下れるを聞き翌廿六日未明に人の勸めにより薩摩へ遁んとするも意の如くならす、先つ筑前國上座郡福岡を距る十里餘大庭村なる竹内五百都の許に往き、一兩日潜伏すべしと一決し、同月二十七日師は竹内五百都に着し、靜溪院鑁水と變名し、同志平野次郎を弟子として雲外と稱し、僕重助を藤次郎と改め修驗者に扮し筑後河を下り水天宮に詣し久留米領若津に着す、柳川領小保津に至り、醍醐三寶院より

日高存龍院への使僧の通券を贋造し薩摩の關門を通行せんとす、十一月朔出船し、肥前島原へ渡り、二日間風を待ち天草福浦へ着す、水股を經て薩摩米津番所に至り、關內を通行し野間の原番所に至るに、通行を許さす、故に阿久根港に着し、船番所に通券を出し事なく通行し、同月八日城下に至り、柳の辻子俵屋助次郎方へ着す、西鄉隆盛を訪ひ、共に國事を慷慨す、師は存龍院に一宿す、師書を俊齋に送る、同月十六日師は日向に赴くと稱し隆盛次郎并に重助四人同船し海に浮ひ月に棹し出つ、或は詠し或は吟す、師の歌に「舟人の心つくしに波かせの危き中を漕きそ出ぬる「答ふへき限は知らし不知火のつくしにつくす人の情にといふ師は隆盛と共に船頭に出て相語る暫時にして海に陷りし音ありければ皆驚き漸くに引上くるに隆盛は師を堅く抱き居たり、隆盛は蘇生したれども師はかへらす、實に安政五年十一月十七日の曉なり、壽四十六、舟子曰ふ師は右手にて西を拜し左手にて隆盛の手を握り居りしと、翌日大久保市藏(後に利通)有村俊齋變を聞て海岸に到り見れば師船中に斃れ、僕重助傍に悲泣せり、隆盛の袖中に師か辭世の和歌あり曰く「曇りなき心の月の薩摩潟沖の波間に頓て入りぬる「大君の爲にはなにかをしからむ薩摩の迫門に身は沈むとも」と、幕吏檢視して城下松原南林寺に葬る、重助は京師の獄に繫かれ　同六年正月五日の夜師の實弟信海同獄に幽せられ　相面して師の死を語る、後五月重助は赦に遇ひ出てゝ、清水寺門前に住居す、明治二十三年十二月十七日勅して師に正四位を贈らる、(月照上人履歴書)

ニンコー　忍光　ユークワン融觀を見よ、

ニンシツ　忍室　モンショー文勝を見よ、

ニンシュー　忍州　二四七三—二五三一　〔眞宗〕伊勢河藝郡柳村金光寺の住寺なり、　忍州は忍阿の嗣なり、至妙院と號す、眞宗高田派の講師となる、明治四年九月廿九日寂す、壽五十九、

ニンショー　忍性　(……)　〔淨土宗〕京師の學僧なり、忍性は初め比叡山に登りて、天台宗を學び、兼て俱舍に精し、中ころ下野に居り、後照空上人の門に入りて、淨土教を受け、道化盛なり、門下皆其德風を欽慕す、寂年及壽缺く、(鎮流祖傳)

ニンショー　忍性　(二二五二)　〔臨濟宗〕土佐長岡汲江寺の學僧なり、　忍性は鄉貫詳ならす、南村梅軒より儒學を受け、四書を講す、如淵天室と並に儒學を以て聞ゆ長曾我部元親に招かれ、岡豐城內に每月六回儒學の講席を開き、大に優遇せらる、寂年并に壽缺く、(南學傳、日本敎育史料、吉良物語)

〔考〕忍性は文祿頃の人なり、

ニンショー　忍性　一八七七—一九六三　〔戒律宗〕相模極樂寺の律僧なり、　忍性字は良觀と云ひ、父は伴貞行、母は榎氏の出、建保五年を以て大和磯城島に生る、十一歲にして信貴山に登り、十六歲の時母沒せしを以て額安寺に入りて剃髮し、翌年登壇受戒す、二十四歲睿尊を拜して十重戒を納る、仁治元年沙彌戒を受け、尋て具足戒を受く、又大悲菩薩に師事して益々戒律を究む、後常施院を建てゝ、諸病僧を養ひ、悲田院を修して、乞丐を救ふ、寛元元年丈六尺の文殊像を造りて般若寺に置き、母の菩提の爲めに十八處に於て乞丐に食を給すると一万八千人に及ふ、晝夜八關齋戒を授く、寶治元年鎮西に往き

て三大律部を求めて西大寺に納め、重ねて元に渡り、大部の律鈔を求めんとし、睿尊の止むるところとなりて果さず、建長四年巡化して常陸に入り、清涼院に止まりて盛んに律席を開く、弘長元年鎌倉に到り、北條時頼の請により光泉寺の開山となる、武藏刺史平長時極樂寺を修營す、師其開山となりて大に律規を興し、密灌を授く、建治元年極樂寺火災に罹り、師奇夢によりて勸化し再興に力を盡す、幾何ならずして舊觀に復す、弘安四年蒙古來寇す、師時宗の命により、稻村山に於て仁王會を開きて調伏を禱り、其賞として永福寺の主務に補し、極樂寺御願場となる、正應元年西大寺に至りて睿尊に謁し、重ねて灌頂を受け、阿闍梨に任じ、四年始めて戒壇を結び、別受の法を行ふ、壇に登る者六十人なり、永仁元年詔を奉して八幡宮に於て蒙古軍を咒し、秋東大寺の幹事に補し、六年四天王寺を司とり、悲田敬田の二院を建つ、嘉元元年七月十二日寂す、壽八十七、臘六十三、大和の般若、攝津の多田、相模の大悲、多寶、永福、明王、常陸の普濟、淨光、濟渡寺等は皆師の生前住せし寺院なり、三大律鈔を講すると七回、菩薩戒の宗要教誡律儀を講すると各三十回、所度の弟子二千七百四十餘人、寺院を結界する七十九所、伽藍を修營すると八十三、佛塔を建立すると二十區、大藏經を納むる十四所、諸州に橋を架する百八十九、道路を修する七十一所、義井を鑿る三十三、殺生を禁止する六十三所、浴室療病の宅、乞丐の屋、各五所に置き、專ら慈善に心を盡し、日に往て看病し、二十年間五万七千二百五十人を養ふ、厩を構へ病馬を集め、時々佛名を唱へ、小簡に咒を書して其頸に繫しむる等惠愛禽獸に及ぶ、時の人呼んで醫王如來と稱す、嘉曆三年夏後醍醐天皇其德を追崇して菩薩の號を賜ふ、(行狀略、本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

ニンジヨー 忍成 二四八二 二五四二 〔眞宗〕伊勢貝家上品寺の住持なり、 忍成字は鄰然といひ、闡教院と號す、心海の長子なり、文政五年十二月二十四日に生る、法梁に從ひて學ふ、法梁の寂後忍阿に就きて專ら宗乘を究む、高田派の上品寺に住し、明治十二年講師に任し、同年權少教正に補す、明治十五年六月八日寂す、壽六十一、

ニンシヨーイン 忍稱院 ニチギ日宜を見よ、

ニンジヨーボー 忍成房 クワンチユー環中を見よ、

ニンチヨー 忍澂 二三〇九 二三七一 〔淨土宗〕山城法然院の開山なり、 忍澂字は信阿、自ら癸翁と號す、俗姓二見氏、正保二年正月八日江戸に生る、明曆元年十一歲にして增上寺直傳を禮して薙髮し、宗門の章疏大義に通す、時に十三歲なり、萬治二年直傳寂す、師哀憐追慕禁する能はす、其肖像を圖し奉侍すること生前に異ならす、時に萬無玄淨國寺に住して大に法門を布く、師往きて之に謁し、教を受く、後林閣に從ひて經論を研究す、七年十月笈を負ひて遊方し、相模江の島の辨才天石窟に入り一七日間精進す、窟を出てゝ近江竹生島に到り、一百日間精修練行して靈夢を感し、期滿ちて山城八幡正法寺に寓す、尋きて長野采女に見えて神道の要を究む、和泉の阿彌陀寺の含榮に請せられて其席を補し、往生要集を講す、延寶四年和泉淨福寺に寓し、自誓して八齋戒を受け、八誓願を發し、自ら誓ひて菩薩戒を受け、快圓律師其證明となる、一日萬無玄

に待する次、宗弊を歎息し、獅子谷の祖跡を修し、般舟道場を中興せんと議し、乃ち土木の役に就き、延寶九年五月に至りて落成す、即ち善氣山法然院と號す、開堂して選擇集を講し法筵を張る、茲に於て台密禪律の大刹慈觀、戒山、香雲、隆長、慧中、寶光等の諸寺其敎義に歸す、元祿六年師四十九歲大和西光寺玄阿を擢てゝ席を補せしめ、影隱菴に退老し、益々道業を勵む、一條照子夫人關白近衞基熈等師の道化に歸し、數々邸に延きて法要を聞く、元祿十六年幕府法然院を官寺となし、莊園山林等を賜ひ、永く寺產となす、自ら江戶に到りて恩賜を謝す、將軍綱吉召して親しく法要を聞く、辭して獅子谷に歸へり、陰隲錄自知錄等を刊行す、寶永三年二月學者十餘人を選ひ、建仁寺の高麗藏本を借り、北藏の經本を對校し、七年四月成就す、師別に大藏對校錄一百卷を作らんとし、正德元年十一月十日病に罹り寂す、壽六十七、臘五十六、著作三心私記裒益三卷、光明大師別傳纂註、一枚起請諺論、敕修御傳緣起、同目錄、同遺事、淨業課誦、已曉未曉評註、安心決定集、興學篇、別時念佛三昧法諺註、勝瑞記各一卷あり、(忍徵和尚行業記、續日本高僧傳)

ニンヨ　忍譽　オンチョー音徵を見よ、

ニンヨ　忍譽　ギョーコ行故を見よ、

ニンヨ　忍譽　ジッドー實道を見よ、

ニンヨ　忍譽　シンバイ信倍を見よ、

ニンヨ　忍譽　ズイテキ隨的を見よ、

ニンヨ　忍譽　テーアン貞安を見よ、

ニンア　任阿　タツリョー達亮を見よ、

ニンウンシ　任運子　シューリュー宗龍を見よ、

ニンカク　任覺　一七六九／一八四〇　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、任覺は藤原行宗の子、京都の人なり、仁和寺信證僧正に從ひて、兩部灌頂を承け密學に通す、保元元年熊野の塔の供養導師となり、權律師に任す、平治元年勅して東寺の長者となる應保元年權大僧都に轉す、長寬元年國家鎭護を禱り、賞として法印に叙し、二年春天變を禱る、承安四年六月神泉苑に雨を乞ふ、皆驗あり、治承四年二月十一日寂す、壽七十二、(本朝高僧傳)

ニンシキ　任識　ライイ賴意を見よ、

ニンジョ　任助　二二八四／二二四四　〔眞言宗〕京都仁和寺第二十代なり、　仁助は貞敦親王の第四子、後奈良帝の猶子、母は太政大臣實香の女なり、天文某年十一月宣して親王となし、諱を熈明と賜ふ、明八年十二月廿五日出家し、十五歲宗門の行業を稟け、十一年四月十二日眞光毘盧殿に登り、大僧正尊海に傳法灌頂を受け、二十三年十二月廿四日特進に叙す、元龜三年正月一品に轉し、天正十二年十二月十九日寂す、壽六十一、嚴島御室と云ふ、付法の弟子に晉海あり、(傳燈廣錄)

ニンショー　任證　一七七三／一八四九　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　任證は鄕貫師承詳かならず、文治二年東寺の長者に任じ、同五年六月十一日長者職并に大僧都を辭し、文治五年六月二十三日寂す、壽七十七、(東寺長者補任)

ニンセー　任誓　キョーハ曉把を見よ、

ニンヨ　人譽　二二七八　〔淨土宗〕下總淨土寺の開山なり、人譽は奧州岩代の人、其俗姓詳かならず　存把に師事して淨

十敎を學び、下總大戸川村に淨土寺を剏して開山となる、文和四年八月六日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

ニヤクエー 若英 チョーネン超然を見よ、

ニヤクエー 若瀛 ゲンチ玄智を見よ、

ニヤクコ 若虛 ミョーオー明應を見よ、

ニヤクシ 若芝 (二二一七) 京師の畵僧なり、若芝字は溪溪、號は紫陽と云ふ、後奈良院の時の畵僧なり、筆力柔和にして設色粗紅華をなす、寂年壽缺く、(續本朝畵史、鑒定便覽)

ニヤクセツ 若拙 シューロー宗郎を見よ、

ニヤクトツ 若訥 一八七七―一九五三 [臨濟宗]相模長建寺の禪僧なり、若訥字は宏辯、俗姓不詳、肥前の人、初め天台を修め、後、禪宗に皈し、圓通寺を開く、蘭溪道隆西來し太宰府に留るにあたり、若訥謁を通じ、一見機契す、即ち弟子の列に連る、道隆を圓通寺に請し、自ら偏室に居る、道隆の鎌倉に入り、建長寺を開けるより師隨侍同寺に留る、後道隆の命により筑前の蘆屋寺に遷り住す、道隆の疾を示せるにあたり、建長寺に歸り湯藥に侍し其命終の時拂子柱杖を授與せらる、圓通寺に歸へりて法化を揚ぐ、永仁元年十二月廿七日沐浴了り淨衣して寂す、壽七十七、遺偈あり假成ニ幻質、七十七年、一蹈蹈碎、萬里靑天、諸弟子塔を建て傳心塔と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ニヤクリン 若霖 ニョタイ汝岱を見よ、

ニユーア 入阿 ……一九四五 [淨土宗]京師の學僧なり、入阿一に敬蓮社入西と云ふ、長門の人なり、初め源空上人の弟子幸西に隨ひて一念義を喜び、後、辨長上人に師事して一門の宗義を傳へ著作するところ多し、三心全菩提心の義を立てたりと云ふ、弘安八年十月二日寂す、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

ニユーエン 入圓 ……) [天台宗]近江比叡山の僧なり、入圓東塔南谷に住し、日夜念佛して義學を事とせず、臨終に沐浴して益精修す、其日笙歌伎樂上に滿ち、座主明快親しく聞き、每に人に逢ひて語りたりと云ふ、(本朝高僧傳)

ニユーエン 入圓 ドージョ道恕を見よ、

ニユーゲン 入玄 二二八一―二三三四 [淨土宗]大和奈良隨曲菴の僧なり、入玄字は良乘といふ、越後新潟の人なり、出家して念佛三昧にあり、醍醐山三輪山金剛山下の與樂寺等に寓す、寛文六年奈良に到り、高圓山下に隨曲菴を營みて住す、日課念佛三万聲懈ることなし、延寶二年六月病を獲て七月十二日寂す、壽五十四、(續日本高僧傳)

ニユーサイ 入西 ……一九一二 [眞宗]常陸の僧なり、入西は常陸の人初め比叡山に登り、天台の敎を學ふ、晩年本國に皈り、山林に居り道を修す、後親鸞に歸依して弟子となる、仁治三年九月親鸞上人の像を畵き、建長四年寂す、(一說に入西は唯圓と同人なりと)(本願寺通紀)

ニユーサイ 入西 ニユーア入阿を見よ、

ニユーシン 入信 ……一九〇九 [眞宗]常陸那珂郡壽命寺の開山なり、入信俗姓は源氏、佐竹義長の子なり、深く世を厭ひ、穴澤の小邑に隱居す、親鸞に謁し、淨土敎を受けて薙染す、貞應元年二月大島村に一寺を創し、壽命寺と號す、建長某年三月廿五日寂す、(本願寺通紀)

ニユーエン 柔遠 二四〇二―二四五八 [眞宗]越中新川郡高柳明樂寺

の住持なり、柔遠字は子踰といひ、柳溪と號す、雪山の高弟にして師說の闕けたるを補ひ、空華の學遠近に振ふもの師ことに力あり、寛政十年二月一日寂す、壽五十七、諡して快樂院といふ、其後は越中の諸師別に弟子を取らず、後進の學生を率ゐて其墓に謁せしめ滅後の入門を許可すといふ、著作十二禮讃錄、寶章訓函各一卷、易行品螢明錄、淨土論隨感錄、各二卷、往生論註錄、玄義分講錄、本典頂戴錄、文類聚鈔肩寛錄、高僧和讃攝釋、各四卷、般舟讃甄解、選擇集錐指錄、各五卷、往生要集講錄十卷、六要鈔指玄錄十一卷あり（淸流紀談、本願寺派學事史）

ニヨイ　如意　ケンソン賢尊を見よ、

ニヨイアン　如意菴　ギョーグワン行願を見よ、

ニヨイコンゴー　如意金剛　ミョーシン明信を見よ、

ニヨイコンゴー　如意金剛　ユーショー宥性を見よ、

ニヨイニ　如意尼　四三三 一四九五　〔眞言宗〕攝津神咒寺の開山なり、　如意尼は丹州與佐郷の人なり、十歳の時京都に入り如意輪觀音の靈場を訪ひ、頂法寺（六角堂）の傍らに寓す、弘仁十三年太子に仕へ、十四年四月太子即位し給ふにあたりて妃となる、其年天皇と共に空海に從ひ、如意輪の法を受け、天長五年二月十八日夜二侍女を携へて宮中を出で、攝津に往き、如意輪摩尼峯に寺を建て、十一月空海に請うて山に入り、一七日如意輪の法を修す、六年正月空海に受明灌頂を受け、五日吉野に至り、二旬を經て皈る、七年二月十八日空海阿闍梨位灌頂を尼に授く、八年十月十八日大殿を落慶し、神咒寺と號す、承和二年正月淳和天皇山に幸し、尼に法要を問ひ給ふ、同年二十日寂す、壽六十三、朝廷使を遣はして厚く葬る（弘法大師弟子譜）

ニヨイチ　如一　二二七六 二三三一　〔黃檗宗〕豐前福聚寺の開山なり、　如一字は即非、俗姓は林氏、明福淸縣の人なり、父の諱は英、十三歳の時父を喪ふ、學年にして密雲和尚を黃檗山に禮して宗意を學ひ、後、十八歳にして龍山寺の西然灝を拜して薙髮す、二十歳にして進具す、崇禎十年隱元禪師黃檗山に主たるに及ひ具足戒を受得す、遊方して長慶石雨禪師に入路の要を聞く、朝宗萬如永覺亘信の諸大宗匠に見え、後菴を搆へて幽居し、黃檗山に入りて再ひ隱元に參して書記となる、淸順治四年母の病を聞きて玉融城に歸へり、平治を禱る、同年冬黃檗山に歸へり堂司となる、苦行精修すること三年に及ひ、同七年十二月三十日山中會々火を失す、師火中にありて頭面手足傷損すれとも知らす、僧智圓等急に呼ひて助け起す、師機に方りて豁然大悟す、爾來

即非禪師

隱元の淨室に侍し、翌年正月印可を蒙る、時に三十六歲なり、同年夏雪峰崇聖禪寺に錫を移し、九年一月母八十一にて終る、師喪を修して後、再び雪峰崇聖禪寺に歸へる、十一年隱元禪師日本より請せらるゝに方り、明年元禪師より召さる、途次諸高僧を歷詢して各々機語あり、殊に虞山に登り費隱禪師に謁して敎を承け、八月費隱に辭し、獅子吼の三大字を付與せらる、十四年二月曇瑞等を從へて出發東航し、十日ならすして長崎に着す、時に日本明曆三年なり、乃ち長崎崇福寺に住す、萬治元年冬同寺に安居す、當時木菴性瑫福濟寺にあり師と並ひ稱せられて二甘露門と云ふ、寬文三年山城宇治黃檗山に登り、隱元禪師に邂逅し、同山竹林寺に入る、同年冬木菴と共に隱元禪師の法化を助く、翌年九月黃檗山を辭し、淸の雪峰崇聖禪寺に歸へらんとし、途次豐前小倉侯に迎へられ、同地に留まり、福聚禪寺を創し開山となる、五年四月祝國開堂の盛典を擧け、法化四方に徧し、八年法雲洞を擧けて席を讓り、自ら長崎崇福寺に退隱し、十年秋微疾あり、翌十一年二月病再發し、五月六日遺囑並に規則六條を書し、懇に弟子を誡め、且つ弟子等の請により偈を書して曰く、生如是、死如是、坐二斷生死關一、觸二破沒巴鼻一と、筆を擲きて茶を啜り、泊然として寂す、寬文十一年正月二十日なり、壽五十六、臘三十九、弟子骨身を三所に分ち塔を建つ、即ち廣壽寺、聖壽寺、黃檗山の瑞光院なり、法嗣拍巖節、千呆佺等五人、著作全錄廿五卷、並に佛祖道影贊あり、(即非和尙年譜、續日本高僧傳)

ニヨエン 如圓 一九五二……〔淨土宗西山派〕山城眞宗院の學僧なり、如圓字は信空と云ふ(一に眞空に作る)、京兆尹信實の猶子なり、深草眞宗院隆信に師事して宗義を受け、隆信の遺命により眞宗龍護の二院に住し、道化盛んなり、正應五年三月三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜、淨土傳燈錄)

ニヨエン 如淵 二二四〇……〔臨濟宗〕京師東福寺の學僧なり、如淵は眞西堂(一に信西堂に作る)と號す、俗姓吉良氏、土佐の人なり、吉良宣義の姪なり、幼にして出家して京師に上り、東福寺に學び(一說に妙心寺)、後土佐に南村梅軒の儒學を唱ふるを聞き、國に皈りて其講席に列し、儒學を講究し、忍性天室等とゝもに一時に聞ゆ、長曾我部元親に招かれ岡豐城内に儒學の講席を開き、大に厚遇せらる、天正八年十月異父弟吉良親實讒に死するに及ひ、同月連坐して、殺さる、辭世の偈あり、五蘊聚散處、人間作二古今一、不生還何滅、洞然常法心、著作吉良物語あり、(南學傳、吉良物語、吉良神靈記)

ニヨエン 如緣 アイチ阿一を見よ、

ニヨエン 如猿 ニチカシ日鑑を見よ、

ニヨカイ 如海 (……)〔時宗〕越前稱念寺の僧なり、如海は越前の稱念寺に住し、時宗要義集二卷を著はす、寂年及ひ壽缺く、

ニヨカク 如覺 一六五四……〔天台宗〕大和多武峯の學僧なり、如覺は九條右大臣藤原師輔の八男、母は延喜帝の皇女、前齋宮雅子內親王なり、初め從五位右少將藤原高光と云ふ、巧に和歌を詠し、多く選集に入る、天德四年師輔薨す、翌年の冬一夕月に對し歌を詠して感を述べ、世の無常を感し、出家の志あり、應和元年十二月五日比叡山横川に詣し、増賀上人

を禮して度を受く、二年八月多武峯に登り、常行三昧を修し、增賀上人に就いて昭金の密法を受け、且つ摩訶止觀等を聞く、後、草庵を結びて極樂房と云ふ、正曆五年三月十日沐浴淨衣端坐合掌西方に向ひ、阿彌陀佛を念し、偈を書して曰く、比來修行念佛業、常願西方極樂界、臨終夕初見三聖、賢愚莫疑淨土教、と、筆を投じて寂す、（多武峯略記、扶桑隱逸傳）

ニヨキシ　如寄子　シユーデン宗傳を見よ、

ニヨクー　如空　一九八一……〔淨土宗〕相模鎌倉光明寺の僧なり、　如空姓は大江氏、京師の人なり、父は大江齊光の孫家光なり、童名は法喜丸と呼ぶ、始め南禪寺に入りて儒典を學ぶ、父を亡するに及んで大に世の無常を感じ、道意の下に投して出家す、尋て慈心に謁して諸宗を研究す、記主禪師に師事して一宗の玄微を盡す、後醍醐天皇師を召して諸部を勅問し給ふ、奏對甚だ明なり、天皇即ち佛元眞應智慧如一國師の號、幷に紫衣を賜ふ、師和歌に巧なり、其作續千載集、新千載集に出づ、元亨元年三月六日寂す、謚して如一と云ふ、（鎮流祖傳、淨土總系譜）

ニヨクー　如空　エーシン英心を見よ、

ニヨクワク　如蠖　リヨーオー良雄を見よ、

ニヨゲン　如幻（二三五三）〔新義眞言宗〕山城五智山の學僧なり、　如幻字は道空、其鄕貫詳かならず、出家して運敞僧正の門に學び、曇寂と新古和融の義を爭ふ、寂年缺く、著作敎主義、百法拔書鈔指瑕、俱舍論講輯、義林章序解、三論玄義大例、各一卷あり、（新義眞言宗史）

ニヨゲン　如幻（二〇八七）〔華嚴宗〕播磨性海寺の學僧なり、　如幻は興福寺にありて唯識を學び、因明を傳ふ、良覺に從つて華嚴を稟け、觀念を修す、僧都に任し、後播磨に往き、性海寺を開きて華嚴經を講す、某年壽六十二にて寂す、（本朝高僧傳）

ニヨゲン　如幻　シユーゴ宗悟を見よ、

ニヨゲン　如元（二〇五一）〔曹洞宗〕聖興寺の禪僧なり、如元字は太山、筑紫の人なり、幼にして僧となり、諸禪師に歷參し、尋て峨山紹碩に依る、法兄通幻大原山に聖興寺を開くに方り、師其席を嗣て住持となる、後總持寺に出世し、幾ならずして辭して聖興寺に皈り某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ニヨコン　如金　一九九二／二〇六二〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、　如金字は玉岡、越前の人、別源圓旨の室に投して薙髮し、執侍多年にして初めて弘祥寺に出世し、尋て筑前の聖福寺に主となる、將軍源公其玄下に歸し、聘して建仁寺に主たらしむ、幾ならずして天龍寺に遷り、終に南禪寺に主となる、應永九年八月廿六日寂す、壽七十一、偈あり、七十一年、討甚麼椀、古渡月明、靑天雲散、東山に塔し、新豐塔と名く、

〔考〕如金曹洞下の法系を繼くも臨濟下の僧の如く臨濟の寺に住す、これ當時一禪宗にして分つところあらざりしに由るなり

ニヨコン　如欣（二〇八七）〔曹洞宗〕越前洞源寺の禪僧なり、　如欣字は怡雲越前の人、幼にして圓通山醫王堂に入りて甘露泉の偈を讀み、出俗の志を起し、十八歲普濟善救和尚に付て落髮し、寶圓寺直傳祖禪師に師事して印可を受け、總

持寺に出世す、後、檀徒の請に應じて洞源寺に主となり、某年寂す、壽缺く、法嗣巨海印、放牛索、箇中遠、雪叟庭の四人あり、(日本洞上聯燈錄)

ニヨサン 如珊 二二五一…… 〔曹洞宗〕三河全久寺の禪僧なり、如珊字は九峰、一に湖海と號す、眞翁宗龍に參し、入室印可を蒙り、永平寺に出世し、全久泉龍龍谿の諸寺に歷遷す、丹波の大守菅沼氏上野に禪寺を建て全久寺と名け、師をして之れに居らむ、一住數年、參河の全久寺に退休し、天正十九年十二月二十五日寂す、壽缺く、遺偈に曰く、達磨不レ來ニ東土一、二祖不レ往ニ西天一、一條古路無ニ荊棘一、遊戲自在入ニ九泉一、法嗣香山淳領あり、(日本洞上聯燈錄)

ニヨジツ 如實 シユーホン秀本を見よ、

ニヨジツ 如實 リヨーカイ亮海を見よ、

ニヨジツアン 如實菴 ギリユー義龍を見よ、

ニヨシン 如信 一八九九 一九六〇 〔眞宗〕山城本願寺第二代なり、如信は善鸞法師の子、親鸞上人の孫なり、延應元年に生れ、法脈を祖師に承け、文永九年親鸞の季女覺信尼と共に一寺を大谷墳墓の傍に設く、此年朝廷より本願寺の勅號を賜ふ、後從弟宗慧を留守職となし東國に遊化し、陸奧白川郡大網に願入寺を建て、後其職を宗昭に讓り、願入寺に退隱す、正安元年十二月弟子乘善の請に應し、常陸金澤に行化し、同二年正月四日同地にて寂す、壽六十二、(門跡傳、本願寺通紀、本山寺誌、大谷畧譜)

ニヨシン 如心 チユージヨ中恕を見よ、

ニヨシン 如眞 リヨーカイ良海を見よ、

ニヨジヤク 如寂 (一八四四) 〔眞言宗〕河内法界寺の學僧なり、如寂は法界寺に住す、眞言を宗とし、傍ら淨土宗を修む、元曆年中院を捨てゝ高野山に登り、九十日間修鍊す、師某僧の見聞を筆して高野往生傳を纂述す、寂年、及び壽缺く、(本朝高僧傳)

ニヨジヤク 如寂 エンジヨー圓靜を見よ、

ニヨシユン 如春 (一九七二) 〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、如春字は少林、夙に出家し偏く諸老に歷事す、後東明に師事して侍司となる、正和の初め同志と共に支那に渡り、恕仲愠愚菴及等の諸老を訪ふ、姑蘇天寧寺に楚石琦を拜す、示後愚菴に依ること亦久し、東歸後建仁建長圓覺に歷住す、示寂の年時及壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

〔考〕我國の曹洞宗と云ふは道元禪師を開祖とするものなれは、如春の如き曹洞の法脉を受くる者も、元禪師に關係なきを以て臨濟下の寺に住せり、

ニヨシユー 如周 二二五四 二三〇七 〔戒律宗〕京都泉涌寺の律僧なり、如周字は正尊、俗姓は伴氏、山城八幡の人、幼にして泉涌寺の長國院に投し、賢弘に依りて侍童となる、十三歲削髮染衣し、十九歲玉英珍を拜して具足戒を納る、比叡山正覺院に登りて法華經を聽き、尋いで興福寺の喜多院に空慶僧正に從ひて唯識を學ふ、其他瑜伽因明傳習せさることなし、寛永七年醍醐寺無量壽院に往き、堯圓僧正に從ひて松橋流を傳承し、慧日山の丹岳忠に參して禪宗の玄旨を問ふ、師雲龍院の廢を見、奏請して興復し、白金若干を內賜せらる、京都の所司代板倉氏、高槻の城主永井氏共に外護となる、十八年

法華經を講し、三寶の名字を刻み印して諸人に與ふ、師に三歸戒を受くる者一萬餘人に及ふ、太上法皇寵遇最も渥く、十九年秋詔して院に就きて如法經を修し、先帝の冥福を資けしむ、勅を拜して禁中に梵網經を講し、爾後每月宮に入りて法華楞嚴遺敎の諸經を講す、二十年通受の法にて自誓して菩薩戒を重受す、眞空阿之を證明す、正保元年上皇及ひ東福門院師を延きて受戒し、公卿太夫同時に受戒する者多し、四年二月初病を示し、上皇特に敕して大納言經廣をして泉涌寺の主となす、十八日遂に西向合掌端坐して寂を唱ふ、壽五十四、臘三十六、全身を寺の後山に窆む、（本朝高僧傳）

ニヨシヨー　如性（一九一九）〔法相宗〕大和菩提山の學僧なり、如性字は禪空、奈良の人なり、興福寺に寓して法相を講習し、後、菩提山に住し、經照上人と席を同じうして宗敎を磨き、智舜に從つて三論を學び、尋で法華義疏を聽く、體日なる者あり高野より來りて菩提山の座主となる、師屢これと論難し、體日をして金峯山に去らしむ、正元元年圓照に謁し、戒壇院に於て戒を受け律を聽く、其後を詳かにせす、（本朝高僧傳）

ニヨシヨー　如淸（……）〔曹洞宗〕能登實相寺の開山なり、如淸字は一庵、薩摩の人なり、龍護寺眞化玄淳に師事し、其法を嗣き、總持寺に出世す、能登の神保氏同國實相寺を立て師を請す、師依て開山となる、後再び總持寺に皈り、敕賜紫衣を拜す、寂年缺く、法嗣竺雲梵仙、和菴淸順、松梵藏主の三人あり、（日本洞上聯燈錄）

ニヨジヨー　如定（二二五七／二三一七）〔黃檗宗〕肥前長崎興福寺二代なり、如定字は默子と云ふ、明人なり、寛永九年西來し長崎興福寺二代となる、道暇書を能くす、寛永十一年工を督して酒屋町磨屋町の間に石造の眼鏡橋を架す、これ長崎に於ける石橋の始なり、隱元の西來するにおよび、戶町村大浦に退隱す、明曆三年十一月卅日寂す、壽六十一（黃檗宗史料）

ニヨジヨーローニン　如常老人　シヨーセン性潛を見よ、

ニヨスイ　如水　シユーエン宗淵を見よ、

ニヨゼアン　如是菴　サイジユン西順を見よ、

ニヨセツ　如雪（二〇五四）〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、如雪は（一に如拙に作る）、明の人、應永中九州に來り、後、京都に上りて畫を明兆に學び、終に妙手となる、最も山水人物花鳥に長し、其畫く所南宋の馬遠、夏珪、牧溪、玉澗、及び元の顏輝に似たり、我國古來畫を善くする者未だ宋元の風を學びたる者なし、これを學びて大に其法を得たるは師を以て始めとす、京都相國寺中亂芳軒に住す、寂年、及壽缺く、（本朝畫史、扶桑畫人傳、扶桑畫工譜）

ニヨセツ　如雪　モンガン文巖を見よ、

ニヨセツ　如拙　ニヨセツ如雪に同し、

ニヨセツ　如節　ニチニン日忍を見よ、

ニヨセツ　如說　エケン慧劍を見よ、

ニヨゾー　如藏尼（一五九八）〔……〕奧州慧日寺の尼なり、如藏尼は平將門第三の女なり、父誅に伏するに及び、奧州に走り、慧日寺の傍らに菴居し、常に地藏號を持す、故に時の人地藏尼と稱す、寂年缺く、壽八十餘、（元亨釋書）

ニヨタク　如澤　二四六二—二五四三　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の第三十九代なり、　如澤字は霖龍、俗姓山野氏、後に響谷氏を稱す、周防秋穗の人なり、出家して黃檗宗に皈し、素明聰の法を嗣き、長門豐浦の萬松寺に住す、明治十六年八月十六日黃檗山に上り、第三十九代の山主となり、同年十二月廿九日寂す、壽八十二なり、（黃檗歷代表）

ニヨチク　如竹　ニチショー日章を見よ、

ニヨチユー　如仲　テンギン天誾を見よ、

ニヨドー　如導　一九四四—二〇一七　〔戒律宗〕京都永園寺の律僧なり、　如導字は見蓮、號は無人と云ふ、俗姓は藤原氏、伯耆刺史の子なり、智恩院に投して出家し、自ら謂へらく、此穢土世界を去りて樂國に適かん、と、乃ち大井川に到り、石を抱て水に投ず、里民これを救ひ、父の宅に送る、去りて關西の安樂寺に寓し、勤修三年の後、筑後に遊び、安養寺に於て沙彌戒を受け、淨土教を學び、居ること七年、泉涌寺に至り知元和尚を拜して滿分戒を受け、法光明院に往きて良知律師に從ひ、錫を留むること八年、律儀を研究し、兼て圓頓大戒を傳へ、肥田院の明玄の壇に入りて灌頂受學し、小野流の蘊奧に達す、建武初年信濃善光寺に說法し、畢りて京都に還り、永園寺に住す、四方の檀越交々師を請ひて住持たらしむ、上林苑觀音寺、朝日山莊嚴院等皆然り、師常に夢窓國師に參し、禪を問ひて省あり、後伊勢迎攝院を開き、戒を弘め、法を授く、延文二年五月二十日北野觀音寺に於て寂す　壽七十四、法臘四十八、師住持たること十餘ヶ寺　創建再興十五ヶ寺、尼寺を置く數十寺あり、（本朝高僧傳）

ニヨニチ　如日　二四七二—……　〔眞言宗〕攝津遲月菴の僧なり、　如日字は照空、號は空阿　後に遲月菴と云ふ、備中小田郡笠岡の人、父は丸山安左衞門守喜と云ふ、京師光天律師に就いて度を受く、空々阿闍梨大幻智暉に就いて法門を受け、博覽多識にして傍ら短句俳歌を嗜む、初め攝津大坂に留住し、生駒山下に菴を營み遲月菴空阿と云ふ、後諸國を歷遊し、西は備後長門等に至り、東は伊賀幷に奧州の諸地に留住す、仙臺の鹽竈　岩城の平瀉、常陸の水戶に菴を營みて住し短句俳歌を以て大に聞ゆ、文化九年九月十五日江戶住吉町大坂屋長四郎の家に寂す、壽六十三、辭世の句に曰ふ、身もなくとおもへはさむしちる櫻、著作隨筆若干卷あり、（此君堂文集、江戶名家墓所一覽）

ニヨニン　如忍　ソーホ聰保を見よ、

ニヨニヨシ　如々子　ジョーレキ淨櫪を見よ、

ニヨニヨドーニン　如々道人　ショーゲン邵元を見よ、

ニヨフー　如風　ショーシユン韶舜を見よ、

ニヨホー　如寶　一四七四—……　〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、　如寶俗姓詳ならず、唐に生れ出家して鑑眞に師事し夙に俊慧を以て知らる、眞和尚の東航に隨ひ戒壇院の開立並に唐招提寺の開立に力を致す、具足戒を受けて後下野に下り、藥師寺に住し戒行氷雪の如し、聲望遠く敷きて緇素欽向す　後、西上し招提寺に住し戒律の明師と稱せらる、寺內に大殿を建して丈六の盧舍那佛を安置す、桓武天皇如寶の高德を崇敬したまひ戒を受けたまふ、延曆二十三年如寶奏して戒律講敷の

制を請ふ、即ち勅許あり、同寺に戒律講敷するを永式となす、嵯峨天皇弘仁四年に封五十戶を賜ひて僧糧を給し給ふ、師上表して恩を謝す、同五年五月寂す、壽九十餘なり、（元亨釋書、本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ニヨホー　如寶　二四五一／二五一〇　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺第三十二代なり、　如寶字は楚州といふ、俗姓福地氏、武藏江戶の人なり、出家して黃檗宗に皈し、普明光の法を嗣き、大雄菴に住す、弘化三年五月廿八日黃檗山に進み、一住五年、嘉永三年九月十七日寂す、壽六十、

ニヨホー　如法　二四五一／二五一〇　〔淨土宗〕鎌倉光明寺の僧なり、如法字は蓮空、俗姓は藤原氏、奈良の人なり、父は春日大神の巫覡天資釋典を志望す、長して東大寺に入りて出家す、智藏法師に投して諸宗を硏究す、後相模の光明寺に至り、傳法會を開き、進て知恩寺を管す、時の天皇師を召して戒を受け、號を蓮空大道人と賜ふ、師示寂の年月日、幷に壽缺く、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

ニヨホー　如法　キジユー皈住を見よ、

ニヨム　如無　一五二七／一五八八　〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、如無俗姓は藤原氏、中納言山蔭の子なり、元興寺明詮僧正に投じて剃髮し、法相の奧義に達し、延喜十六年少僧都に任す、承平元年大僧都に昇り、延長六年法務を司どる、天慶元年八月十日寂す、壽七十二、（本朝高僧傳）

ニヨモク　如嘿　（二三二四）　〔臨濟宗〕奧州會津稽古堂の學僧なり、如嘿は無爲菴と號す、肥前の人、俗姓服部氏なり、出家して臨濟宗に皈し、佛儒の二典を兼ね學ひ、殊に儒典に精し、萬治の初、奧州若松に來り、學徒を敎育す、寛文の初、藩士等相謀り、若松桂林寺町に學問所を興し、稽古堂と云ひ師を請す、同四年に至り、稽古堂の名聲盛にして老臣田中三郞兵衞正玄を首とし、士庶の別なく師に就いて學ぶ者數十人に至れり、藩主殊に儒臣橫田三友をして此堂の記、及ひ講筵の式を作らしめ、其地稅を免し、營繕料を給し、且つ師に扶持米を給す、會津藩下に學問所の興りたるはこれを以て始めとす、師の寂年月日詳ならす、詩歌數首傳はる、亦以て其學風の一端を見るべし、大學、「大學聖門第一書、勉諸誠意幾微初、經又孔子傳ニ曾子一、句々章々實不レ虛、」論語、「魯論夫子平生語、句々渾然意味深、可レ貴聖言含ニ萬理一、轉令ニ讀者一發ニ仁心一、」中庸、「中庸本是子思言、道學傳來示ニ本原一、理密辭高難ニ看破一、無レ色無レ臭不レ堪レ論、」孟子、「孟子七篇利義分、誰言好レ辯見ニ諸君一、四端性善浩然氣、莫妄用私情解文、」三敎一皈、「三敎消異卽相同、是レ已非レ他爭易窮、寂滅無爲兼大極、都來不レ出ニ一心中一、」眞性、「人々自性無ニ憎愛一、一念纔生萬念隨、要レ識本來眞面目、枝々紅白未レ開時、」眞妄不二、「迷眞々作レ妄、悟妄々皆眞、眞妄元無レ二、春來紅綠新、」君、「心ひろくあはれみ深く威重きを君ときみたりと世に仰くなり、」臣、「きみたゝし友をたすける己の身は立も立たぬもよしや世の中、」父、「人となり鳥獸にたくふ子はそたつる親のこゝろにそよる、」子、「生て世にすむとはしれと又母にうときは人の數ならぬ身そ、」夫、「人しらぬ閨の枕の私言もきく鬼神のあるとしるべし、」婦、「岸たかく生れ出ても我せこにしたかひてよき靑柳の絲、」兄弟、「跡先とつらなる枝の年たけてかれ／＼となる

中そかなしき、」朋友、「手を覆ひ手を翻すまに雲となり雨となる世の交そうき、」孝行、「世に有もいくほとならぬ父母にうとく事へて後に悔むな、」「なき跡の供佛施僧のつとめより世にあるほとの孝行そなき、」「うちつけはよろついみしくする人も不孝ときけはにくさけになる、」愼獨、「いかはかりはつかしからん獨しるこゝろのまゝの色に出なは、」愼言、「ことのははたゝすくなかれ十のもの七のこして三ついふそよき、」怒り多き人を見て、「はる〳〵と何尋ぬらん大江山こゝろの外の鬼もなきよに、」（會津藩敎育一斑）

ニヨリン　如輪　チヨーク－澄空を見よ、

ニヨリユー　如隆　二四五三 二五 八　〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺の三十三代なり、如隆字は頁忠、號は松壽、近江愛知の人、俗姓渡邊氏なり、十一歲出家して西照寺獨介に從ひ、華頂來鳳妙峰春叢早洲應拙の諸禪師に徧參し、後、石泉の法を嗣く、弘化二年因幡の了春顯巧二寺の請に應して結制し、受戒者八百人に及ぶ、嘉永四年九月六日黃檗山の法席を繼き、第三十三代の山主となり、將軍に謁して金帛を給せらる、安政四年退隱し、攝津富田慶瑞寺の請に應して同寺に留ると七年なり、慶應元年九月因幡顯功寺に閑棲し、明治元年十月十日寂す、壽七十六、師黃檗山に登りて一山の宗風大に振ひ、木菴高泉以後始めて其盛興を呈したりと云ふ、因て崇て同山の再興と云ふ、（行實）

ニヨレン　如蓮　キヨーベン敎辨を見よ、

ニヨタイ　汝岱　二三三五 二三九六　〔眞宗〕近江正崇寺の學僧なり、汝岱字は若霖、號は桃溪と稱す、武藏金澤の人、幼にして俊秀にして學問內外を綜へ、且つ詩に巧なり、京都に上りて光隆寺知空に依りて薙染學習し、次に諸宗の碩德に參して其蘊奧を極む、天台の靈空大に器重し、誘ひて天台敎に歸し、東叡山に登さんと欲すれとも、師聽かす、松丘に在りて淨名經の註を讀む、幾もなく異解を以て叢林を擯斥せらる、乃ち畿內を遊方して放浪自適す、知空に召され其像に讃して大に賞せられ、宗門の後事を付せらる、法主命して典講に補し、參唱に拜す、正崇寺に住し學黌を掌ること十九年なり、晚年正信偈の文軌を著す、享保二十年九月十七日寂す、壽六十一、龍谷に葬むる、法主諡して離塵院といふ、著作三經科校本四卷、正信偈文軌五卷、正信偈科一卷、淨土和讃科一卷、桃溪遺稿一卷（龍谷講主傳、本願寺通紀、淸流紀談、本願寺派學事史）

ニヨーナン　汝南　エテツ慧徹を見よ、

ニヨリン　汝霖　リヨーサ良佐を見よ、

ネの部

ネーエー　寧永　ホーシユ法守を見よ、

ネンア　念阿　一八一七 一九一一　〔淨土宗〕山城往生院の僧なり、念阿號は念佛、初め比叡山に天台宗を學び、後、源空上人に師事して淨土敎を受け、嵯峨淸凉寺の西隣に一字を營み、號して往生院といひ、念佛誦經を事とす、建長三年十一月三日往生院に寂す、壽九十五、（淨土傳燈錄）

ネンア　念阿　ゼンカク善覺を見よ、

ネンカイ　念海　二四七二　〔淨土宗〕武藏江戶增上寺第九十

四代なり、念海は超蓮社倫譽在阿と號し、惠學といふ、信濃の人なり、幼にして伊勢に遊び、桑名の正源寺聖譽可梁の下に事ふ、出家して後江戸に遊び、深川靈巖寺に投して宗學を修む、寶曆十一年增上寺祐月寮に入り、明和四年十一月祐月上人に事ふ、安永三年十月上人に從ひ、弘經寺に至る、始め念成といひ、後改めて念海といひ、增上寺に皈りて講席を開き、天明三年十月學頭となり、十一月大善寺に住し、寛政元年四月常福寺に轉し、同六年三月光明寺に轉し、十一年四月增上寺に昇り、大僧正に任せらる、文化五年退隱し、九年九月十五日に寂す、著作因果小子訓、蓮門士女訓、放生報應章、大師報恩嘆德疏等あり、（三緣山志）

ネンコー 念光 二三〇六 〔淨土宗〕山城光念寺の僧なり、念光號は法譽、相模の人なり、五歳彈誓上人の下に投す、後諸國の山川を周歷して苦修錬行を事とす、彈誓上人洛東獅子谷洛北長谷村に住す、念光隨侍し、一心に念佛稱名懈たらす、田中村守皎寺紫竹村光念寺を營構し、自作の阿彌陀佛を安置す、正保二年正月五日寂す、（續日本高僧傳）

ネンシン 念信（一九一七）〔眞宗〕三河妙源寺の開山なり、念信俗名は正次太郎、薩摩守と稱す、俗姓は安藤氏、三河桑子の人、平地庄の領主となる、親鸞に請ひて弟子となり、後、碧海郡桑子に寺を建つ、後高田派となり妙源寺と號す、（本願寺通紀）

ネンショー 念照（……）〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、念照俗姓は小野氏、道風の孫なり、出家して寂昭に就て天台教を學び、常に淸淨戒を持す、（三外往生傳）

ネンショー 念稱 ユーアン遊安を見よ、

ネンハン 念範（一八二三）〔眞言宗〕山城安祥寺の已講なり、念範字は大進といひ、安祥寺宗意の上足なり、性相天台の教を學び、宗意の密灌を受け、續きて嚴覺を禮して其流を得たり、後、勸修寺の門を敲きて寛信の印を佩び、傳法詑りて安祥勸修兩寺の間にありて密教を弘通す、付法の弟子觀祐、興然、寛海、源基、智海、仁濟の六人あり、（後傳燈廣錄）

ネンブツ 念佛 ネンア念阿を見よ、

ネンム 念無 ……二三二三 〔淨土宗〕江戸道住寺の開山なり、念無は法譽と號す、近江の人、其俗姓詳ならず、靈巖に師事して宗乘の奥義を究め、江戸高輪繩塚に濟海寺を創し、後、伊皿子に道住寺を開く、寛文三年八月十一日同寺に於て寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ネンヨ 念譽 イチデン一傳を見よ、

ネンヨ 念譽 クワクシュン廓春を見よ、

ネンヨ 念譽 クワクム廓無を見よ、

ネンヨ 念譽 ゲンクワク玄廓を見よ。

ネンヨ 念譽 テーザン貞殘を見よ、

ネンヨ 念譽 デンクワク傳廓を見よ、

ネンヨ 念譽 テンシュー典宗を見よ、

ネンヨ 念譽 ドンモ呑茂を見よ、

ネンヨ 念譽 モンガ文賀を見よ、

ネンア 然阿 リョーチュー良忠を見よ、

ネンクー 然空 一九九七……〔淨土宗〕山城淨華院第四代なり、然空字は禮阿、俗姓は阿部氏、十二歳にして比叡山に

登り、永存に師事す、後、記主禪師良忠の講席に參し、遂に淨土敎の宗義を面受す、後一義を立て常に西谷に居る、故に西谷流と云ふ、尋て一條の淨花院に住す、故に一に一條流と云ふ、無量壽經を讀誦講演す、永仁五年六月十一日寂す、壽詳ならず、著作大經聞書寫傳す、門下大に盛なり、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

ネンシツ 然室 ヨクワク與廓を見よ、

ネンヨ 然譽(二二五三) 〔淨土宗〕安房三善寺の開山なり、 然譽は法蓮社と號し、安房岡本 人なり、法を虎角に嗣ぎ、州ノ瀧川村に三善寺を捌す、寂年、及び壽缺く、(淨土總系譜)

ネンヨ 然譽(……二二六八) 〔淨土宗〕因幡大善寺の開山なり、 然譽は其鄉貫詳かならず、感譽に師事して法を嗣ぎ、因幡智頭郡用ヶ瀨村に大善寺を捌して住し、慶長十三年八月四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ネンヨ 然譽 ギンタツ吟達を見よ、

ネンヨ 然譽 グワンシユー願秀を見よ、

ネンヨ 然譽 ゲンカ源可を見よ、

ネンヨ 然譽 ゼンホー禪芳を見よ、

ネンヨ 然譽 ドンリユー吞龍を見よ、

ネンキヨー 拈橋 チヨーイン棖因を見よ、

ネンゲシツ 拈華室 ソトー楚棟を見よ、

ネンシヨー 拈笑 シユーエー宗英を見よ、

ノの部

ノーアン 能菴 ミヨーカン明鑑を見よ、

ノーイン 能因(……) 京師の歌僧なり、 能因は遠江守忠望の子なり兄肥後守元愷に養はれ、永愷と云ふ、文章生となり肥後進士と號す、性和歌を嗜み、藤原長能に歌道を問ひ、遂にこれに師事す、和歌の師資これより始まる、剃髮して能因と云ひ、攝津古曾部に居る、故に世に古曾部入道と稱す、「都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」の詠歌は人口に膾炙す、著作玄玄集、八十島記、歌枕あり、(大日本史)

ノーエツ 能悅(……二三〇三) 〔淨土宗〕武藏大泉寺の開山なり、 能悅は一蓮社念譽專稱と號す、江戸小石川の人、其俗姓詳かならず、幼にして光圓寺に入りて薙髮し、廓山に師事して其法を嗣ぐ、後、豐島郡關口に大泉寺を創して開山となり、寛永二十年十月十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ノーエン 能圓(……) 〔……〕筑前極樂寺の僧なり、 能圓は大宰府觀音寺傍の極樂寺に住し、專ら勸化を業とし、念佛を宗とす、嘗て千日を期して法華經を講す、四衆席に滿ち、門庭市をなす、卷軸已に終りて合掌觀念志高聲に阿彌陀佛號を唱して寂す、(本朝高僧傳)

ノーオー 能翁 ゲンエ玄慧を見よ、

ノーグワン 能願(……) 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、 能願は大和の人、少にして眞言宗に皈し、高野山に

住すること六十餘年、理趣經を誦し、要文を親誦す、九十歳に至りて寂す、其年時缺く、（本朝高僧傳、高野往生傳）

ノーコー 能光（二五九七）〔曹洞宗〕唐の碧雞坊の僧なり、能光字は瓦屋、俗姓不詳なり、唐に渡り洞山良价禪師に參して法印を受け、唐の天福の初（我延喜の初）に遊化して蜀地に到る、永泰軍節度使祿虔扆と云ふ者歸向して其碧雞坊の宅を捨てゝ禪院となし、師を請す、後梁の長興の末（我承平の末）其地に寂す、壽一百六十三、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ノーコー 能光（一八〇二）紀伊の佛工なり、能光は紀伊の人、彫刻の妙を以て聞ゆ、永治元年の夏、金剛峯寺の中門二天、即ち持國多門の像長八尺五寸なるを彫刻す、木馬を造り自ら其木馬に乘りて京師に入り、象牙を以て笛を造り、鳥羽上皇に獻し、大に優賞を蒙りたりと云ふ、沒年月日幷に壽詳ならず、紀伊入鄉村に能光塚ありと云ふ（高野春秋）

ノーサン 能山 シュゲー聚藝を見よ、

ノーシン 能信（二二二三）〔淨土宗〕京都極樂寺第二代なり、能信は方譽と號す、其俗姓生國詳かならず、稱念に師事して法を嗣ぎ、初め京都桂の極樂寺に住す、後、下山田村に玄忠寺を剏して退隱し、永祿六年十一月二十九日寂す、世壽缺く、法嗣一人あり、秀譽生西と云ふ、（淨土總系譜）

ノーシン 能眞（一六八四―一七五六）〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、能眞は河內の人、出家して平常念佛讀經を以て勤めとし、久しく道明寺に住し、後、高野山に移る、永長元年寂す、壽七十三、（拾遺往生傳）

ノーシンイン 能信院 ユジョー由常を見よ、

ノージョ 能助（一九三八―一九八四）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、能助は德大寺入道太政大臣公孝の子、高雄御室を師として業を受け、東寺一の長者となり、正應五年法印に敘し、永仁二年權僧都となり、六年權大僧都に任し、嘉元三年權僧正に轉し、延慶二年正に進み正和三年寺務法務となり、護持僧に選はれて大僧正に昇る、正中元年五月二日寂す、壽四十七、（東寺長者補任）

ノーショー 能勝（二〇一一―二〇八三）〔曹洞宗〕越後耕雲寺第二代なり、能勝字は傑堂、河內の人、俗姓は橘氏、楠正成の後裔なり、初め軍に從つて勇名ありしが、俄かに感悟するところあり、高瀨大雄寺に入り、古劍納禪師に就て剃髮す、受具の後永澤寺に抵り、通幻寂靈に參して契悟あり、後龍澤寺梅山和尚の道譽を聞き往て參し、服勤多年、遂に宗旨の玄奧に達す、應永元年越後杜澤に往き、靈樹山耕雲寺を剏し、梅山を請して開山となし、自ら第二代に居す、梅山の寂後衆龍澤寺に請すれども、師固辭して應せず、一住三十年、法化盛んなり、應永三十年八月七日寂す、壽七十三、本山に塔す、法嗣顯窓字、南英宗、虛廓清の三人あり、（本朝高僧傳）

ノーショー 能正（二一七二）〔曹洞宗〕能登東昌寺の禪僧なり、能正字は疊翁、久しく能山聚藝に參し心印を受け、總持寺に出世し、東昌寺に遷る、寂年並に壽缺く、法嗣助翁玄輔あり、（日本洞上聯燈錄）

ノーゼン 能禪（一八九一）〔眞言宗〕京都東寺大悲心院の大僧都なり、能禪は持法印といふ御史中丞爲親の子なり、元

遍に法を受け、東寺定額となり、大悲心院に住す、寛喜二年十月十五日東寺を開き、灌頂を授く、嗣法の弟子亮禪覺仁行範等あり、(傳燈廣錄)

ノーニン 能仁(一八〇五)〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、 能仁は大和の人、高野山に居りて阿彌陀經佛頂咒を誦持す、久安年中寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ノーニン 能忍(一八四九)〔臨濟宗〕攝津三寶寺の開山なり、 能仁字は大日、姓平氏惡七兵衞景清の叔父なり、出家して經論を究め、深く禪に歸し、工夫を事とす、攝津水田縣に三寶寺を開きて盛に禪風を揚ぐ、道俗其下に雲集す、然るに其師承なきを誚る者あり、文治五年に弟子練中勝辨の二人を宋に遣はし、育王山拙菴光に書幣を送り、且つ所悟を呈す、拙菴光は大慧派宗杲の法嗣なり、所悟を證明し、法衣幷に賛達磨像を付す、賛に曰ふ、直指人心、見性成佛、太花劈開、滄溟頓竭、雖然接ニ得神光一、爭奈當門齒缺、」練中勝辨畫工に命じて描菴の像を作らしめ、賛を求む、禪師即ち賛す、曰ふ、「這僧無面目、撥ニ轉天關一、掀ニ翻地軸一、忍師脫躰見得親、外道天魔俱寘伏、と二人歸朝以來、能忍の聲譽益高し、號して日本達磨宗と云ふ、鎭西の聖光上人亦會下に來りて宗鏡錄要文を質せり、一夜景淸訪來す、師大に喜び、弟子を使して酒を買ふ、景淸事を官府に密告するものとなし、遂に刺殺す、其年時缺く、後に深法禪師と云ふ、門下覺晏あり、衣鉢を傳ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ノーネン 能念(……)〔淨土宗〕山城長樂寺の學僧なり、 能念は其俗姓生國詳かならず、長樂寺隆寛の孫弟なる慶隆に師事して淨土敎を究め、門下の觀念了念等を率ゐて盛んに弘通したり、寂年、及壽缺く、(淨土傳燈錄)

〔考〕淨土總系譜には智慶の弟子極樂の下に能念を擧ぐ、

ノーハン 能範(二〇六六)〔曹洞宗〕尾張常樂寺第一代なり、 能範字は仙巖、伊勢の人、俗姓は平民なり、稍長じて龍澤山大初に投じて落髮受戒し、後慈眼寺快翁、太平寺無極、龍興寺希明に謁し、次に佛陀寺に至り、大初に見え留まりて師事し、應永十三年越前松隱寺に出世し、龍澤山惣持寺に歷住す、尾張の牧某師の道化に皈し、常樂寺を築き、聘して第一代とす示寂年時缺く、(日本洞上聯燈錄)

ハの部

ハフジューケン 把不住軒　ケョー希膺を見よ、

ハラチ 婆羅遲　ボダイセンナ菩提僊那を見よ、

ハラミツ 波羅密　ニチトー日燈を見よ、

ハリユーシ 破笠子　シユージク宗竺を見よ、

ハリヨー 巴陵　センミヨー宣明を見よ、

ハイウンイン 拜雲院　ギヨーシユー堯秀を見よ、

バイアン 梅菴　シユーク集九を見よ、

バイオー 梅翁 二二七八……〔淨土宗〕加賀極樂寺の開山なり、 梅翁は殘譽天月と號す、道譽に師事して宗乘を究め、加賀金澤極樂寺の開山となる、元和四年二月朔日寂す、世壽詳かならず、(淨土總系譜)

バイオク 梅屋 シユーコー宗香を見よ、

バイオク 梅屋 シユーコー宗亘を見よ、

バイガン 梅岸 ギトー義東ヲ見よ、

バイギン 梅岑 シユーモク宗默を見よ、

バイクワエン 梅花園 ジツドー實道を見よ、

バイクワセンレー 梅花仙嶺 タンクー湛空を見よ、

バイクワドーニン 梅花道人 シユーク集九を見よ、

バイケー 梅溪 ユークン融薫を見よ、

バイコク 梅國 ジツクワン實貫を見よ、

バイコク 梅谷 ドーコー道香を見よ、

バイコク 梅谷 ホーゴン方巖を見よ、

バイザン 梅山 (……) 〔 〕尾張常滿寺の住たり、梅山は其郷貫詳かならず、旭翁の門人にして尾張犬山常滿寺に住す、後美濃古市場天壽菴に退居す、師畫を嗜み、墨竹を畫くに妙を得たり、寂年壽缺く、(鑑定便覽)

バイサン 梅山 ジユンエ純惠を見よ、

バイサン 梅山 ニチシヨー日祥を見よ、

バイサン 梅山 モンホン聞本を見よ、

バイセン 梅仙 二三〇九 二三七五 〔曹洞宗〕武藏青松寺第十七代なり、梅仙字は竺巖と云ひ、近江の人、俗姓は源氏なり、幼にして妙巖寺に投じ、陽谷と云ふ、後ち湖雲獅巖に事へて弟子となり改めて梅仙と云ふ、後ち丹崖に師事すること數年、時に實家大に貧なるを以て書畫を以て母を養ふこと七年餘、後永平寺に出世し總州の重俊寺に住し、次に近江の金勝寺に遷る、元祿十二年の秋命を受けて青松寺を領す、寶永四年大中寺をキどり、居ること五年にして退き、正徳五年二月廿三日寂す、壽六十七、(萬年山志)

バイセン 梅仙 タンクー湛空を見よ、

バイソー 梅莊 ケンジヨー顯常を見よ、

バイソー 梅叟 リンコー麟香を見よ、

バイソー 梅叢 ヨフン與芬を見よ、

バイチ 梅痴 シンケー秦冏を見よ、

バイテー 梅庭 ドーサツ洞察を見よ、

バイテン 梅天 ムミヨー無明を見よ、

バイフ 梅腑 一四〇六 一四五一 〔曹洞宗〕江戸青松寺の第十四代なり、梅腑字は獅巖、俗姓大平氏 讃岐多當郡の人なり 七歲郡の龍德院古鑑に依りて祝髮受具し、其命に依り武藏に往き、龍穩寺大了に謁して記室となる、時に不中秀的青松寺にあり、師親參して三年を越えて得悟し、寛文九年永平寺に出世し、次に湖雲寺に遷つる、延寶五年祠部院の命に因り青松寺に主となる、同九年三月二十日寂す、壽四十五、遺偈あり、四十五年、落ニ賺世緣一、翻身回去、春宵一天、と 法嗣如實秀本あり、(日本洞上聯燈錄、萬年山志)

バイホー 梅峯 ジクシン竺信を見よ、

バイサオー 賣茶翁 ゲンシヨー元昭を見よ、

バイサオー 賣茶翁 ホーゴン方巖を見よ、

バイアン 唄菴 ギボン義梵を見よ、

バイシ 培芝 シヨーエツ正悅を見よ、

バイセン 楳仙 二四八五 二五六一 〔曹洞宗〕能登總持寺獨住第二代なり、楳仙は信濃下高井郡夜間瀨村字宇木 水某の子、

畔上氏、幼名鉄藏と云ふ、故あり母の姓を冒す、文政八年七月十五日生る、天保二年十歳にして同國同郡佐野村興隆寺活宗英徹に禪師に就いて度を受く　同十年十五歳出遊して下野結城孝顯寺月山に師事し、十二年十七歳轉して相模愛甲郡萩野松石寺國隱に參す、十四年十九歳國に歸り活宗の法を嗣く、尋て信濃長國寺一圭、江戸吉祥寺愚禪に參し、駒込栴檀林に留學す、後覺巖月譚に參す、安政五年三十四歳興隆寺の師跡を繼く、六年三十五歳飯山英岩寺に金剛經畧疏宏智頌古を提唱す、爾來諸寺の請に應して法華經、西谷名目、梵網經古迹記、大清規を提唱す、慶應三年四十三歳信濃松代大林寺に轉住し、諸所の請に應し、註維摩經斷壁、碧岩集、起信論等を提唱す、明治五年四十八歳長國寺に轉住し、權訓導に補せらる、同七年五十歳相模足柄の最乘寺に轉住し、同八年權少敎正に累進す、明治十二年二月六日五十六歳總持寺に昇る、五月二十七日大敎正に補せられ、六月四日勅號法・普蓋禪師を賜はる　後信濃金松寺眞光寺等の開山となり、十三年以來三十三年まで十たび管長の任に就く、三十四年三月十五日總持寺貫主を辭し、東京小石川茗荷谷林泉寺に退隱し、十一月微恙あり　同月二十七日寂す、壽七十七　遺言により最乘寺に葬る、著作十種疑問落草談一卷あり、(年譜)

バイチン　賣年　リョーグー亮隅を見よ、

バイリン　貝林　ウシャク有籍を見よ、

ハクイン　白隱　エクワク慧鶴、見よ、

ハクジュ　柏樹　ゲンショ・玄昌を見よ、

ハクテー　柏庭　シューショー宗松を見よ、

ハクテー　柏庭　ショーソ清祖を見よ、

ハクエー　伯英　トクシュン德俊を見よ、

ハクキ　伯奇　(二〇一一)　〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、　伯奇字は勝菴、天龍寺夢窻國師に參して藏主となり、後第一座に昇る、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ハクシ　伯師　ギリョー義稜を見よ、

ハクチ　泊知　二三九五……〔眞宗〕大和高田專立寺の住持なり、　泊知は玄甫の弟たり、高田本山別院を留守し、知空に就きて道を學ふ、享保中地大に震ひ佛殿崩壞す、師復興を以て任となし、幾ならすして成る、享保二十年正月一日寂す、(本願寺通紀)

ハクニョ　泊如　ウンショー運敞を見よ、

ハクツー　博通　(一三六一)　奈良の歌僧なり、　博通は大寶中和歌を以て聞ゆ、萬葉集に其歌を收む、(萬葉集作者履歷)

ハクニン　博仁　リョーユー了祐を見よ、

バツシュー　筏舟　ボンカイ煩海を見よ、

バツタイ　拔隊　トクショー得勝を見よ、

ハンイ　範伊　二〇〇五 二〇六六　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、　範伊は十七歳にして出家受戒し、覺與に從ひて宗義を學ひ、傳法灌頂壇に入る、秘敎の玄埋に徹し、東台兩密の事相に通ず、後傳法大阿闍梨となる、應永十三年閏六月廿日寂す、壽六十二、(三井續燈記)

ハンエ　範惠　二四四八 二五一〇　〔新義眞言宗〕山城智積院第三十六代なり、　範惠字は快順、俗姓は畑氏、山城相樂郡加茂村の人なり、十一歳海住山寺範冷和尚に投じて落髮し、十八歳智

積院に掛錫し、研究三十餘年、天保五年越前福井大守の請に應して住海寺に移り、翌年秋命により眞福寺に進み、住持たること十一年、弘化三年幕命により智積院能化となり、同四年權僧正に任ず、嘉永三年春疾に罹り、自ら起ざるを知り、門下を集めて後事を囑し、四月一日寂す、壽六十三、（新義眞言宗史料）

ハンカク　範覺　セゴー世豪を見よ、

ハンク　範久（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、範久俗姓不詳、楞嚴院に住して淨土敎に意を傾け、西方淨土を願求し、西方に向て吐唾便利をなさず、山に登る時身を斜にして行く、常に曰ふ、樹の倒るゝは必ず傾く方あり、我の願何ぞ遂げざると、後、果して正念往生す、（本朝高僧傳）

ハンケン　範賢（一八九一）〔眞言宗〕近江石山寺の座主なり、範賢字は淨光といひ、中納言僧都と稱す、尙書郞藤原成範の子、成賢の胞弟なり、灌頂職位を兄と共に受けて石山寺に住し、實繼の印を受く、（續傳燈廣錄）

ハンケン　範憲（一九三八）〔法和宗〕大和興福寺の學僧なり、範憲は修行院貞弘の上足にして弘安元年維摩會の講師となり、大和の興福寺に住す、後三藏院を開き化儀甚だ盛んなり、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ハンシユン　範俊（一七一九 一七九三）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、範俊は興福寺の大威儀師仁靜の子なり、初め傳法院松朝に從ひ、後、小野成尊僧都に依りて兩部の大法を稟け、專ら密敎を修習す、永保二年敕を奉じて雨を禱り、義範の爲めに礙けられ那智山に隱る、後ち白河帝詔して都に歸らしめ、

小野曼荼羅寺を主とらしむ、白河帝讓位の後鳥羽宮に遷り、師護持僧となり、常に離宮に陪して愛染王及び尊勝の法を修し、權大僧都に任ず、康和二年興福寺の寺務に補し、長治三年東寺の長者となり、兼ねて寺務を領す、天永元年權僧正に任し、長承二年四月二十四日寂す、壽七十五、世に鳥羽僧正と呼ぶ、（本朝高僧傳、東寺長者補任）

ハンジヨ　範助（一八二九）七條佛所佛工なり、範助は康助の弟子なり、嘉應元年四月八日增賀上人の像を作る、

ハンオー　繁應（二二一五 二二八二）〔曹洞宗〕加賀寶圓寺の禪僧なり、繁應字は量山、俗姓は平氏、下野の人なり、幼にして大中寺至心を禮して薙髮し、越の太白寺に往きて廣山恕陽に投て印可を受け、永平寺に出世す、慶長十年加賀寶圓寺に移つる、元和八年三月十五日寂す、壽六十八、法嗣泰山尖堯あり久昌寺宗龍寺の二寺は師の開創にかゝるなり、（日本洞上聯燈錄）

ハンヨツ　繁越（二〇九五 二一七〇）〔曹洞宗〕駿河梅林院の開山なり、繁越字は界巖、出羽の人、俗姓は林氏なり、幼にして廣く經史を讀み、十三歲羽黑山にて得度し、密に禪門を慕ひ、崇芝性岱の道望を聞きて參し、二十餘年を經て了悟し、總持寺に出世し石雲寺に移り、退きて駿河の谷川に梅林院を營みて之に居り、永正七年四月二十七日寂す、壽七十六、（日本洞上燈聯錄）

ハンコー　繁興　ソンエー存榮を見よ、

ハンシユン　繁俊（二二六八……）〔曹洞宗〕石見永明寺の禪僧なり、繁俊字は秀峯、石見津和野城主吉見成賴の子なり、

幼にして出家し、備中洞松寺に入り、茂林芝繁を禮して剃髮し、長して印記を受け石見永明寺に住す、晩年大定院を築きて幽棲す、永正五年十月三日寂す、（日本洞上聯燈錄）

ハンシヨー 繁紹 二一〇九 二一六四 〔曹洞宗〕伊豆修善寺の禪僧なり、繁紹字は隆溪、上總北條の人、一休禪師に從ひて薙髮し、石雲寺の崇芝性岱に參し、服勤十八年を經て印可を蒙り、總持寺に出世し、後遠江日向谷に華嚴院を剏す、伊豆の太守に請はれ修善寺に住す、明應八年石雲寺に轉し、期年にして修善寺に歸へる、永正元年八月七日寂す、壽五十六、

ハンテツ 繁哲 二〇九八 二一七二 〔曹洞宗〕駿河林叟院の開山なり、繁哲字は賢仲、俗姓平氏、備中の人なり、十二歲洞松寺茂林を禮して祝髮す、茂林の寂するに及ひ、崇芝性岱に從ひ、信衣を付せらる、後、總持寺に出世し、駿河林叟院を開く、晩年龍居寺を開く、永正九年六月二十四日寂す、壽七十五、法嗣大樹宗光あり、（日本洞上聯燈錄）

ハンリン 繁林 ズイシユン瑞春を見よ、

ハンイン 半隱 シユーリユー宗劉を見よ、

ハンデーシ 半泥子 シヨーソー紹琮を見よ、

バンア 鑁阿 （……） 〔眞言宗〕下野鑁阿寺の開山なり、鑁阿は俗姓生國詳ならす、文治の頃高野山に登りて修行し、大塔の造立に力を盡し諸國を巡行勸化す、建久六年三月奈良に入り、東大寺の戒壇に登り、同七年下野足利に至り、鑁阿寺を開き、足利氏の供養を受く、正治元年三月八日寂す、壽四十六、（高野春秋、鑁阿寺小史）

〔考〕鑁阿寺小史に鑁阿は足利義兼なりとあれとも信し難し、

バンカイ 鑁海 二二一五 …… 〔戒律宗〕京都善能寺の律僧なり、鑁海は山城の人なり、八歲にして善能寺に投して月海靜律師を拜して剃髮し、戒律を學ぶ、後奈良天皇宮中に召して戒法を受け、詔して泉涌寺に主たらしむ、後 善能寺に移り、弘治元年四月十二日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

バンケー 鑁啓 二〇四〇 二一二五 〔眞言宗〕山城智積院第二十三代なり、鑁啓字は寶嚴、磐城の人、宥存阿闍梨に就て得度す、後智積院の講席に列し、湛慧律師より俱舍唯識を學ぶ、智積院第十八代快候に師事して中性院流の秘法を傳ふ、洞泉律師宥證僧正淨公僧正を歴問して幸心院傳法院流等の秘奧を傳ふ、安永二年七月幕府の命により眞福寺第二十四代となり、安永九年四月智積院に進みて能化となり、僧正に任ぜらる、天明七年退隱し、寛政六年十二月三日寂す、壽七十七、著作六大法身論義記一卷あり、（眞福寺世代、新義眞言宗史）

バンシヨー 鑁淨 二四〇四 …… 〔眞言宗〕山城智積院第十六代なり、鑁淨字は眞快、薩摩の人なりと云ふも詳かならす、元文四年智積院第十六代能化となり、權僧正に任せらる、其職にあること十六年、延享元年四月二十二日寂す、壽缺く、（密嚴血脈譜、新義眞言宗史）

バンカイ 幡海 バンガイ幡涯に同し、

バンガイ 幡涯 （二二八三 ……） 〔淨土宗〕武藏熊谷寺の僧なり、幡涯は（一に萬涯、幡海に作る）品蓮社九譽と號す、幡隨意に投して受業し、其法を嗣ぎて武藏熊谷寺に住す、

バンコー 幡光 センカイ詮海を見よ、

バンズイイ 幡隨意 ビヤクドー白道を見よ、

バンケー 盤珪　エータク永琢を見よ、

バンコ 挽古　コゼン耕禪を見よ、

バンアン 蕃菴　リユートー龍統を見よ、

ヒの部

ビケサイ 備溪齋　トーヨー等揚を見よ、

ヒゼン 肥前　コーキヨー康慶を見よ、

ヒツヽアン 瑟々菴　シコー支考を見よ、

ヒンカク 敏覺（一八三五）〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、敏覺は三論を覺樹に受け、兼ねて密敎に通す、安元の初め東南院より東大寺に移りて大に講席を啓く、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

ヒンラクサイ 貧樂西　シヨーケー祥啓を見よ、

ヒヤクエー 百叡 二四四七 二五三一 〔眞宗〕加賀江沼郡勅使村願成寺の住持なり、　百叡一名は廣智といふ、少にして學を好み、越後僧朗の門に入りて宗乘を研磨し、處々の講肆に遊びて内外の學を習ふ、就中天台は惠澄律師に受け、性相は恢麟和尙に學び、共に秘奧に達せり、歸鄕の後、後進を敎育し、講筵を開くこと四十餘年、遂に勸學職に擢でらる、明治の初め官敎導職を置くに方り、大講義に補せられ、尋きて權少敎正に上る、四年三月十二日寂す、壽八十五　著作大經觀經四帖疏、唯識論三類境、俱舍論法華玄義、四敎集注の講義筆記あり、世に寫傳せり、(學苑談叢)

ヒヤクセツ 百拙　ゲンヨー元養を見よ、

ヒヤクチ 百痴　ゲンセツ元拙を見よ、

ヒヤクチドーニン 百癡道人　セツガン拙巖を見よ、

ヒヤクフチドーシ 百不智童子　オンコー飮光を見よ、

ビヤクアン 白菴　シユークワン秀關を見よ、

ビヤクイン 白隱　エクワク慧鶴を見よ、

ビヤクウン 白雲　エギヨー慧曉を見よ、

ビヤクウン 白雲　エスー慧崇を見よ、

ビヤクウンドー 白雲堂　ムソー無相を見よ、

ビヤクオー 白鷗　クワンゼン觀禪を見よ、

ビヤクオー 白翁　シユーウン宗雲を見よ、

ビヤクガイ 白崖　ホーシヨー寶生を見よ、

ビヤクガンローニン 白岩老八　ニチゴン日言を見よ、

ビヤクゲン 白玄 二三〇八 二三六〇 〔淨土宗〕江戶增上寺第三十三代なり、　白玄は信蓮社詮譽良阿清風と號す、江戶の人、其姓氏詳かならず、一說に父は宮城平右衞門正業と云ふ　寬永四年を以て生れ、幼にして路白上人に就て剃髮し、修學功を積みて河越蓮馨寺に住し、弘經寺光明寺に歷遷し、元祿十一年閏九月二十九日增上寺に出世す、翌十三年七月二日寂す、壽七十三、天光院に葬る、(三緣山志)

ビヤクゲン 白玄　リヨークン良薰を見よ、

ビヤクシン 白心　コミヨー虛明を見よ、

ビヤクジユン 白純　シンケー秦冏を見よ、

ビヤクジヨー 白壤　ジヨークー淨空を見よ、

ビヤクズイ 白隨 二三一六 二三九〇 〔淨土宗〕江戶增上寺第三十八

代なり、　白隨は幡蓮社演譽智頼海阿と號す、伊勢の人出家して三縁山に屬し、內外の典籍を學び、一文事月行事の職を經て學頭となり、靈山寺に住し、次に大光院に移る、後、光明寺に主となり、享保二年二月二十一日增上寺三十八代の貫主に補し、大僧正に任す、時に六十歲なり、四月有章公一周忌法會の導師を勤む、同七年四月十條の制を出し、寺院所化の說法者の卑劣勸化を誡む、十年十二月職を辭すれども許されず、十一年再辭を乞ひ、二月十六日麻布に退隱し、十五年六月二十一日(或は八月二十日)寂す、壽七十五、臘六十二、塔を累代の傍らに建つ、(三縁山志)

ビヤクセツロ　白雪廬　エカイ慧海を見よ、

ビヤクチシ　白痴子　ジユンカク純覺を見よ、

ビヤクチヨオー　白箸翁　(一五一九)　京師の隱者なり、白箸翁何地の產なるか詳ならず、貞觀の頃京師に白箸を賣るを業とす、平生冠履全からず、數日食はざるも晏如として飢色なし、人あり年を問へば每に七十なりと答ふ、時に市樓の下卜者あり年八十許、人に語りて曰ふ、吾れ兒童の時已に此翁を見る、衣服容貌今と異るなし恐くは百餘歲ならむと、一日市門の側に終ふ、市人戶を移して東河の畔に埋む、後、二十餘年南山の石室中に翁の法華經を誦持するを見たりといふものあり、後、終る所を知らず、(白箸翁傳、本朝高僧傳)

ビヤクドー　白道　(二二一四―二二一八)　〔淨土宗〕武藏幡隨院の開山なり、　白道字は幡隨意、號は同蓮社智譽と云ふ、相摸國藤澤の人、(一說紀伊名草の人)父は玉林と云ふ、幼にして若山萬性寺に投して出家す、曾て京師に於て百萬遍の岌興和尙に謁す、岌興其志を愛して業を授く、天正六年二月六日下總國關宿に於て眞言宗ノ圓相阿闍梨と法論す、後上野國館林に於て善導寺を興し、武藏に飯て新知恩寺を創す、後に幡隨院と云ふ、慶長十年鎭西に至り長崎大音寺に住し、日向に白道寺を開く、歸路故國紀伊に至り、萬松寺を剏す、元和元年(一說九年)正月五日寂す、壽七十、(幡隨意上人傳、檀林志)

ビヤクドー　白堂　ダイエン大圓を見よ、

ビヤクホー　白峰　ゲンテキ玄滴を見よ、

ビヤクユー　白祐　(二二九七……)　〔淨土宗〕肥前正法寺の開山なり、　白祐は見蓮社而譽と號す、幡隨意に就て剃髮受業し、其法を嗣ぐ、後肥前後杵郡に正法寺を剏して開山となり、寬永十四年十月五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ビヤクユーシ　白幽子　(二三六九)〔……〕山城白河山の隱者なり、白幽子は何許の人なるか詳ならず、幼にして石川丈山に事へ、病に因て辭して養生の術を求め二十歲の頃一異人に遇うて丹を練る方を受け、一所に住せず、七十歲の頃に至り、暫く丈山の詩仙堂に住し、後白河の山中に一菴を構へ住す、寶永の頃白隱慧鶴禪師に就いて養生の術を受く、眞宗の桃溪若霖白幽子を訪うて詩を贈る、寶永六年七月二十五日寂す、謹志箴一篇あり、曰ふ夫長ニ於雲谿靑松下一、無レ有ニ遊觀廣覽之知一、願有ニ至愚孤陋之累一、晏然哀ニ吾生之須臾一、平日好讀レ書、不レ求ニ甚解一、竊ニ聖賢之道一不レ慕ニ榮利一、安レ貧不レ厭ニ風日一、一褐一瓢屢空不レ憂　今日而俟ニ天命一而已、と、(白隱禪師年譜、續近世畸人傳)

〔考〕白幽子の事蹟稍明瞭を缺けり、白隱禪師の夜船閑話に、白幽眞人は丈山の師にして三百歳の壽を保てりといへり、これ事實としがたし、されは近世畸人傳に其人の實在を疑へるも一理あり、續近世畸人傳に桃溪若霖の冝遊草等を引いて始めて其人の實在を信し、事蹟を掲けたり、然るに白隱禪師年譜によれは寶永七年に禪師白幽子を訪へるに、續近世畸人傳に掲くる墓銘によれば、其前年に沒せり、禪師年譜の誤れるものか未た詳ならず、

ビヤクヨ 白譽　シユードー秀道を見よ、

ビヤクヨ 白譽　シヨーオー稱往を見よ、

ビヤクヨ 白譽　チヨーデン長傳を見よ、

ビヤクヨ 白譽　リユーテツ龍鐵を見よ、

ビヤクヨ 白譽　リヨーモン了聞を見よ、

ビヤクリユー 白龍 二三二九 二四二〇 〔曹洞宗〕山城妙玄寺の開山なり、白龍字は三州 武藏忍の人なり、（一説熊谷の人）俗姓村上氏出家して卍山道白の法を嗣き、大山太室菴を開き住し、後洛東心性寺妙玄寺を開く、寶曆十年四月八日寂す、壽九十二（鷹峯宗譜、語錄）

ビヤクレン 白蓮（一八九三）〔淨土宗〕某寺の僧なり、白蓮は始め天台を證眞法印に學び、後辨長に投し宗風を究む、天福元年三月十八日入宋使橋尙書の船に同乘して宋に至り、名區を遍遊し、後、睿禪師に詣ず、一日善導の彌陀義を見て歡喜し、之を書寫して本朝に渡らむとするも睿禪師許さず、師止むを得ずして其至要を憶持して東歸の後盛に法門を弘通す、寂年詳かならず、壽七十、（鎭流祖傳）

ビヤクレン 白蓮　シヨーキン性均を見よ、

ビヤクレン 白蓮　ニチコー日興を見よ、

ビヤクレンゲ 白蓮華　ニチキ日暉を見よ、

ビヤクロー 白樓　ジシユー慈周を見よ、

ヒヨーエー 平榮（一四三〇）奈良の歌僧なり、平榮は天平寶龜間の人にして和歌を以て知らる、其詠歌は載せて萬葉集にあり、（萬葉集作者履歷）

ヒヨーオン 平恩（一五二六）〔・・・〕大和西大寺の僧なり、平恩俗姓不詳、法相倶舍に通ず、維摩會講師となる、貞觀八年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ヒヨーグワン 平願（一六六七）〔天台宗〕播磨書寫山の僧なり、平願は播磨の人、性空上人に師事し常に法華を誦す、一日暴風あり菴倒れ、平願其下に壓せられ、誠心に法華を誦すれば神來りて引き出し慰めたりと云ふ、後衣盂を鬻きて法華を書し、佛像を圖し、河上に無遮會を開き、誓ひて曰ふ此善業を以て極樂に往生することを待むか、仰き願くは我に奇瑞を示せ、と、明日河邊に白蓮華千餘朶を生じ、異香を發したりと云ふ、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ヒヨーゲン 平原 一五二一 一六〇九 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、平原は伊勢の人、業を金勝寺願安に受け、延長元年維摩會の講主となり、承平元年興福寺に住し、大僧都に任ず、新院を創し第一祖となり、天曆三年五月三日寂す、壽八十九、門下安秀あり、（本朝高僧傳）

ヒヨーサン 平山　ゼンキン善均を見よ、

ヒヨーシツ 平室　アン安を見よ、

ヒヨーシン 平心 ショサイ處齊を見よ、

ヒヨーセン 平川 レーシユン禮浚を見よ、

ヒヨーチ 平智 (一五二七) 〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、 平智藥師寺に住し、傳燈大法師位に昇る、後、律師の任を拜す、維摩會講師となり、貞觀九年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ヒヨーチン 平珍 (……) 〔三論宗〕大和法興寺の僧なり、 平珍俗姓不詳、少壯より淨業を事とし、晩年一寺を建立し、常に寺中に住し、別に小堂を開き、極樂淨土の相を彫刻して禮拜す、命終に際し、弟子等をして念佛三昧を修せしむ、相語りて曰ふ、音樂近く聞こゆ空中に如來の迎ふるならむ、と、便ち新淨衣を著して、入滅す、(往生極樂記、本朝高僧傳)

ヒヨーデン 平田 ジキン慈均を見よ、

ヒヨートー 平燈 (一六〇〇) 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、 平燈は智淵尊意の二師に從ひて台密を研究し、諸國に出遊す、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

ヒヨートーボー 平等房 エーゴン永嚴を見よ、

ヒヨーニン 平仁 (一八一三) 〔法相宗〕奈良東大寺の僧なり、 平仁俗姓不詳、法相に精し、仁和三年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ヒヨーニン 平仁 ヒヨーニン平忍を見よ、

ヒヨーニン 平忍 (……一五九八) 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、平忍(一に平仁に作る)、比叡山の座主尊意に從ひて台密を學び、東塔の法華三昧堂に居る、常に法華經を持誦して他を省みず、天慶五年年八十餘にして寂す、(本朝高僧傳)

ヒヨーニヨ 平如 (……) 〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、 平如は仁和寺の仁元供奉に從ひて顯密の法を學ぶ、詳傳なし、(本朝高僧傳)

ヒヨービ 平備 (……) 〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、 平備は敎乘に通し元興寺を主とり、性相に通じ、學徒を誘掖す、著作因明論疏記九卷、唯識論羽足四卷、般若理趣分私鈔三卷、三身義五卷、成業疏一卷、梵網經上卷義疏、梵網經上卷料簡各二卷、梵網經下卷私鈔二卷、最勝王經羽足一卷、最勝調度四卷、法苑松章記一卷、法苑記七卷あり、寂年、及び壽缺く、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ヒヨーミヨー 平明 (一七一三 一七八九) 〔天台宗〕上總國分寺の僧なり、 平明は京都の人なり、出家して梵學を事として餘暇毘首の風を聞きて好みて佛像を作る、勅によりて上總國分寺の講師となり、大治四年九月二十八日寂す、壽七十七、(本朝高僧傳)

ヒヨーヨー 平耀 (一六一七) 〔眞言宗〕山城醍醐山の律師なり、 平耀は常に法華を誦し、阿彌陀を念ず、天德元年十二月五日元杲の傳法を得、同日印信を受く、付法の資惟靜智算の二人あり、(續傳燈廣錄)

ヒヨーイン 豹隱 トーテキ凍滴を見よ、

ヒヨーケー 標瓊 (一四三二) 〔……〕大和の僧なり、標瓊俗姓不詳神護慶雲元年に中律師となり、寶龜二年に其官を罷む、示寂の年時缺く、(七大寺年表)

フの部

フギヨー　普行　二四五二／二五一四　〔眞宗〕大坂淨光寺の住持なり、普行一名は眞了といひ、越中の人なり、少壯の時寂用院の門に入りて宗學を硏習し、文化五年叢林に掛搭し、自他宗の典籍を涉獵し、天保八年大坂砂場淨光寺に住持し、弘化元年二月勸學職に昇り、幾くもなく病に罹りて寂す、壽五十三、謚を但信房といふ、明治九年但信院の號を賜らる、著作、三帖和讃錄、文類聚鈔私記　二門偈私記、正信偈私記、敎行信證私記、選擇集私記、玄義分私記、序分義私記、定善義私記、散善義私記、六字釋私記、安樂集私記、淨土論私記、淨土論講記、願成就文私記、御一代聞書錄、寺族敎諭、法相イロハ目錄、增補諸乘法數名目、增補略述法相義講記、觀心覺夢鈔記、唯識述記所引典據書目、唯識述記私記、唯識述記入紙、起信論義記記、同私記、同私抄、同補缺、同谷響、華嚴法界記愚艸、華嚴大疏鈔抄出、五敎章纂釋略、五敎章愚艸、義林章所引本文典據各若干卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

フコーイン　普光院　ゲンシユーニ玄秀尼を見よ、

フゴン　普嚴　一四三五／二四九五　〔眞宗〕安藝西林寺の住持なり、普嚴字は圓護といひ、森谷、一に洞雲と號し、書室を方舟齋と稱す、安藝國安藝郡警固屋村俗家の子なり、十六歲の時に法專寺に於て剃髮し、翌年眞實院の門に入り、爾後數年左右に侍して宗學を硏究す、後院の媒介を以て坂村西林寺に住す、三業惑亂の際院に從ひて東下し、給事誠を竭し院の病を得るに及ひて日夜湯藥の勞に服して懈らす、其寂せらるゝや遺骨を護して安藝に歸へる、文政九年司敎に擢てられ、翌年安居して往生論註を副講し、天保三年勸學職に上り、四年安居本講人出二門偈を講す、六年十月廿四日病を發して遽かに寂す、壽六十一、（學苑叢談）

フゴン　普嚴　シンジユン眞淳を見よ、

フサイ　普濟　ゼンク善救を見よ、

フザイ　普在　一九五八／二〇三六　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、普在字は在菴、俗姓源氏、阿波倉本の人なり、師十歲那の香谷寶覺律師に事ふ、服勤年ありて契悟す、相模に下り壽福寺秋澗泉に謁す、明極俊、淸拙澄、竺仙仙の諸禪師に器重せらる　豐の圓通寺に請せられ開法す、豪族宇佐公光なるもの光隆寺を創して師を請す、尋て備の善昌寺紀伊の興國寺に歷住し、禪客雲集す、將軍足利義詮禪興寺に請し、安房の太守源賴季弟子の禮を執り菩薩戒を受け、與源寺を創して請す、未た幾くもなくして京師妙光寺、備の寶興寺を經て、建仁寺天龍寺に轉し、遂に南禪寺に昇り住す、細川賴之府命により寺南の地に師の爲に覺勝塔、幷に大定菴を立つ、晩年東下建長寺に住す、老病あり龜谷勝國寺に退休す、永和二年閏七月四日寂す、壽七十九、臘六十六、勅謚佛慧廣慈禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

フサン　普山　ホーサン彭山を見よ、

フジヤク　普寂　二三六七／二四四一　〔淨土宗〕武藏長泉院の開山なり、　普寂字は德門、自ら道光と號す、伊勢桑名の增田眞宗源流寺秀寬（字古雲）の第一子なり、寶永四年八月十五日に生る、幼名左南と云ひ夙に聰明の譽あり、享保五年十四歲にして桑名光明寺某に就きて俱舍頌疏を學ひ、同十年十九歲同地天祥寺禎山禪師に就て起信論義記　五敎章、圓覺經略疏、

因明纂解等を聽受し、尋いて出遊の志あり、父に請ひて京都に上り、一時の名匠たる十玄、天旭、湛慧、鳳潭を歷問して性相の經論を學ひ、和泉の眞敎に就きて密部を受け、大に得る所あり、河内法然寺[illegible]雄の招により同寺に到り、相共に學問を勵けみ、後再ひ和泉に遊ひて專稱寺慧然に謁して信重せられ、慧然に代りて倶舍論を講す、偶疾に罹りて其下を辭して東歸す、而して師の學問は此に一期をなし疾に因りて急に出離の要法を求め、晝夜煩悶し、積年の學問を一塵に附し去らんとするに至れり、眞宗の宗風によりて意を充しかたければ、脫出せんことを期したるも、其寺院に生れて事情の許しかたきものあり、荏苒數年を經、享保十六年廿六歲にして再ひ出遊し、攝津の四天王寺に詣し、聖德太子像に祈禱して出離の要法を求め、同十八年鄕里に還へり、益意安からさるものあり、遂に父母に强請して永く膝下を辭し、路資用唯銅錢三百を携帶し、一笠一鉢にして諸國經行の途に上る、これ實に同年四月廿八日なり、其夜上野村に宿し、徹夜一書を作りて父母に送り、具に出家の志願を述へ、決然として眞宗の法衣を脫す、自詠あり「身にかけし法の衣はおなしきも身はゝあはねは脫き捨てそする」、翌日早發して河內に向ひ、交野郡津田の正應寺に弟僧智圓を訪ひ、亦其志を告け、且つ伊勢に歸へり、代りて父母に奉事せんことを命す、自ら同寺に留り、一室に籠居して念佛誦經を事とす、伊勢光蓮寺なる弟僧乾雅は師のために隱棲の地を求め、某居士と謀りて尾張八事山に迎ふ、師は同年八月正應寺を出てゝ八事山に登り、同山の前住持高隣上人に謁して菩薩戒、盡形齋戒を受け、山中の一菴に隱棲して晝夜の別なく念佛誦經を事とし、其苦修練行は見聞するもの皆驚服する所たり、同國中一色の西方寺關通上人師の苦修練行を聞きて隨喜し、弟子を遣はして供養す、享保二十年二十九歲別時念佛を修し、偶疾に罹り、關通上人の下に到りて療養す、後八事山に還り、舊により苦修練行を事とし、一旦靈驗あり、廓然として躰脫する所あり、而してこれより關通上人の勸奬によりて大に戒律に意を傾くることとなれり、後年師か淨土宗内に戒律を唱導して一時を風靡するものゝこゝに淵源するなり、八事山は師か念佛誦經の爲に隱れたる所なり、師は再ひ同山を出てんとは期せさりしならむが、關通上人再三策勵して曰ふ、これ士女翕嫗も能くする所なり、師の材力大法を興隆し、大衆を普濟するに餘あれは、益進みて洪器を空くするなかれ、と、師これより同山の住持諦忍律師に請ひて輪藏の大藏經を閱讀す、先つ輪藏中に安置する延命普賢像を祈禱して有緣の經論を探り華嚴經を得て大に喜ひて曰ふ、今より一止一作華嚴の敎海に游泳し、一解一行普く法界に廻向せんと、關通上人の策勵により、戒律の興隆を期し、上人の書を得て江戸の敬首律師を問はんとしたるか、律師書を送りて曰ふ、關東律儀疎濶にして初學者を誘ふによろしからす、京師深草に玄門律師あり、先つ問ふへしと、こゝに於て關通上人の周旋により、（三河苅谷の崇福寺義燈律師（湛慧律師の資）に面し、律師に隨伴して深草に到る、玄門字は通西、淨土宗西山派の高德なり、强請して其下に歸し、改めて慧謙字は德門と云ふ、幾もなく關通上人の招によりて東歸し、義燈律師に師事し、菩薩戒を重受す、翌元文元年安樂院

フ(普)ジ

靈空律師玄門律師の高風を慕ひて西上し、有門菴正寛律師に因りて靈空律師に謁し、一門の敎を受く、後、華嚴寺鳳潭を問ひ、攝津に下り鳳潭の門下碧洲を問ひ、三日間留宿し、河內に到り正應寺に留宿し、後東歸す、同年江戸に下り增上寺順眞寮に俗弟乾雅を訪問し、寺僧の請により赤坂に寓し、倶舍頌疏を講す、義燈律師江戸に下り、幡隨院に留り、敬首律師を請ひて天台戒疏の講席を開く、師疾を力めて其席に列し聽受す、(元文元年尾張西方寺律院となり改めて圓成寺と號し、開山に敬首律師を仰き、住持に義燈律師を推す、乃ち翌二年義燈律師東下し、敬首律師に律院の規約を受け、且つ天台頌疏の講席を開く、)同年義燈律師に隨伴して西上圓成寺に留り、翌三年義燈師を拜して息慈法を受け、重ねて京師に上り、照臨菴に留り、尋きて近江守山淨土寺に住す、翌四年和泉に遊ひ、住吉地藏院快存律師の講席に列して四分行事鈔を聽受し、後淨土寺に歸住し、諸緣を斷ち

普寂和上

て念佛誦經を事としたるか、忽ち三大疑問ありて解釋すること能はす、大に苦悶す、三大疑問とは其一は建立器界の事、其二は大小兩乘の事、其三は因果應報の理なり、師は夙に佛敎の大體に體脫したるが、猶此三大疑問腦中に蘊蓄して飲みて入らず、吐きて出てさるか如く苦悶す、師自ら謂ふ、此疑問は人に質して消すへきにあらす、書に探りて決すへきにあらす、自心に了悟するにあらすは安んそよく解釋するを得んと、爾後亢々參究の念あり、禪林に投せんとし、同地大光寺某に謀り、加賀大乘寺慈麟元趾の風を聞き、元文五年二月飄然として出發し加賀に向ふ、曹洞宗の大德元趾禪師師を迎へて慰諭懇到す、即ち其下に大事を參究し、禪師を抑き土菩薩戒を重受す、天德院僧孝禪師の風を聞きて謁見し、允許を得て其室に投す、幾もなく病の爲め其下を辭し、守山淨て寺に歸住し、寺務を弟子育信智薫二人に一任し、自ら寺內可吟菴に隱棲し、四壁を閉して參禪し、時々通宵眠らす、感發するところあれは經論に證し、筆を取りて片紙に記錄す、師後に作るところの香海一滴は大低此時感發の心相を記錄したるものに係る、而して三大疑問は遺除せすして、自然に遺除し、心身安靜なり、幾もなく可吟菴を出て、弟子育信を率ゐて大和紀伊を經行し、吉野山高野山の靈蹟を歷訪し、重ねて京都に上り、深草玄門律師の勸めにより其草菴に留住す、一年餘にして守山に皈へり、再ひ大和に到り、東大寺放光院、招提寺の菩提庵に留まり、道聲高く、師の道聲を聞き、四方の道俗相競ひて其下に敎を乞ふ、伊勢の道源(字德柄)は其一人なり、道源は初め湛慧律師の下にあり、後師の下に敎を乞ひ

たるか、延享三年律師の意を受け、師に具足戒進受のことを勸誘す、師乃ち律師に謁して其推擧を謝し、進受の準備をなす、然るに十二月一日律師病ありて癒えず、翌年二月十日に寂したれは、進受由なく、終に同年六月十日に律師の肖像の前に自誓受傳し、法隆寺法澤琛覺二律師證明し、之を成辨す、蓋し湛慧律師の遺言によるなり、是より京都長時院に留り寺務を統理す、五年四月同院に法澤律師を請し、行事鈔を講す、寛延二年八月長時院を辭し、嵯峨瑞應院、東福寺内南明院に留まるに、陸續歸向する者あり、良徵尼光嚴臺雲等最も聞ゆ、翌年相國寺雲興軒に轉し、大原の妙立和尚、古知谷の澄禪和上の靈跡を探くる、寶曆元年長時院の檀主の强請によりて同院に住し、法席盛なり、歸向するもの玄光慧秀等甚た多し、翌年四月奥州無能寺不能律師の請により、太秦桂宮院に行事鈔を講す、聽者數百人なり、同年十二月禪林寺學侶大心大成等の請により倶舍論を講す、翌年常樂寺に再ひ倶舍論を講す、六月八日父の訃を得て哀傷常に過き、講席を休止す、尋きて長時院側に母を延招して奉事す、寶曆十一年長講堂に唯識述記を講し、翌十二年三たひ倶舍論を講す、同年江戸目黑長泉院工事成り幹事千如遙に書を寄せて師を招請す、師再三病弱を以て辭するも懇請して止ます、十三年四月十五日遂に京都を發し、木曾より善光寺を經て同月末江戸に入り、五月長泉院に住す、蓋し目黑の長泉院剏立は初め增上寺成譽大玄上人の意に出て、上人は門下堯雲を督して經營し盤龍寺不能律師を迎へんとしたるが、當時幕府は新に寺院を剏立することを禁したれは、其志願を果たすに由なく、大玄寂能相繼きて寂す、大玄の門下千如其志を繼き川越蓮馨寺敎意に計り、相共に力を盡し、終に落成す、乃ち遙に師の風を聞きて延請するに至りしなり、師東下して同院に住するにあたり、道俗雲集して敎を乞ふ、同年秋增上寺に於て五敎章、翌明和元年倶舍論、二年探玄記を、相續きて講す、每に聽者數百人あり、翌三年西上し、長時院に留まり、法苑義林章を講し、翌四年東歸し、講席盛なり、門下的玄、澤巖、明遍、大心、鷲山、等常に侍して敎を稟く、師香海一滴を圖し、鷲山に寄附す、尋きて弟子大心具壽を長時院の住持とし、明和七年夏西上し、成等菴に五敎章を講し、八年禪林寺にて法華玄義並に止觀を講す、同年香海一滴を門下僧尾古岑、大成、仙靈、旭應、賢州、大賢に寄附し、秋東皈し講席の盛なること前に倍す、安永七年靈夢により、自ら道光と號す、爾後常に長泉院に住し、日々諸經說法を事とし、天明元年八月華嚴經を講し、性起品に至りて止む、是れ講經の終なり、老病ありて坐臥自由ならす、唯淨土曼荼羅に對し、念佛唱名をことゝし、諸弟子を召し遺訓を與へ、同年十月十四日安然寂す、壽七十五、臘三十六、著作華嚴五敎章衍秘鈔五卷、唯識述記纂解十四卷、倶舍論要解十二卷、法苑義林章纂解七卷、攝大乘論略疏附分科五卷、唯識論略疏六卷、法華三大部復眞鈔、附分科三十卷、大乘義章科圖五卷、四敎儀集註詮要、首楞嚴經略疏、各四卷、起信論義記要決、梵網經台疏辨要、勝鬘經顯宗鈔、各三卷、心經略疏探要鈔、法苑義林章分科、願生淨土義、圓覺經義疏、三藏知津、顯揚正法復古集、各二卷、華嚴經探玄記、發揮鈔、天文辨惑、梵網經摘要、梵網辨要略釋、三聚戒辨要

フ(普)ジ

遺教論略疏、倶舍論要解分科瑜珈圖鈔、無差別論示珠鈔、楞伽知律、三藏法數、六物辨要、行事撮要、毘尼法要、四分律行事鈔分科、淨宗兼學律儀辨、通別二受律儀辨、見道辨、華嚴玄々章、同篇測、香海一滴、各一卷あり、（普寂和上行狀記）

フシユー　普宗　二三六九／二四二九　〔曹洞宗〕越後雲洞菴の禪僧なり、普宗字は高廓と云ふ、奥州小幡郷鈴木某の子、寶永六年三月十七日に生る、出家して大に曹洞の宗風を擧揚す、明和六年十月十九日寂す、壽六十一、著作語錄あり

フシヨー　普照　（一四一八）〔法相宗〕奈良興福寺の學僧なり、普照俗姓詳ならず、出家して興福大安二寺の間に周旋して義解の名を擅にし、常に戒律の缺けたるを慨す、天平の初勅を拜して榮睿と共に唐に航し、福先寺の定賓律師に就きて戒律を受け同寺に留る、玄宗二僧の堅志を賞し、時々絹二十匹を施し、四時に時服月俸を給し、供奉の班に預る、普照榮睿辭して曰ふ、求法のために來れり寵榮に意なしと、便ち去りて萍遊し道璿に謁して共に揚州に下り鑑眞に謁し來意を告げ東化を請し、河東に至り船を理し粮を辨して相共に出發す、海上屢困厄に罹り榮睿は途中に寂す、普照は鑑眞等の一行に隨ひて歸朝す、乃ち勅を拜して東大寺に居り維摩堂に於て法勵の戒疏を講敷す、時に志中、靈福、賢璟等、占察經瑜伽論の自誓受戒を以て問詰蜂起す、普照一々辨析し羯磨の要を說く、是に於て志中等皆其下に從ふ、天平寶字二年六月普照奏して曰ふ城外の路傍に果樹を列栽せば行人蔭に就て凉を納れ、飢る時は實を食せん、是れ聖化を助くるを得む云々、其利濟の深き以て知るべし、示寂の年時缺く（元亨釋書、本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

フジヨー　普定　（二三一五）〔黃檗宗〕肥前長崎崇福寺の僧なり、普定は明人なり、寛永十六年に西來し、崇福寺に留り、明暦元年國に皈る、（黃檗宗史料）

フテン　普天　二四四七／二五一一　〔眞宗〕近江大津唯泉寺の住持なり、普天一名は澄玄、號を香雲院といふ、幼より諸方に笈を負ひ、諸山の碩學を訪ひて得るところ多し、殊に性相の法門を究む、遂に香月院講師の門に入り、學德日に進む、大津唯泉寺の住職となるに及び、夙に佛堂の頽廢を歎き、再興の業を起し、經營成就して頗る輪奐の美を極む、次に經藏を設けて佛籍を蒐集し、後新に洪鐘堂太鼓樓及び門宇を築き、更に當寺永世相續維持の法を設く、常に高倉學寮にありて屢々講述の筵を開き、擢てられて擬講となる時に三十八歲、後四十九歲にして嗣講となる、偶々靈崎頓成と宗義を爭ひ、幕府に訴へ師の答辨流るゝか如く、正邪判して事止む、師寺に歸へり、嘉永四年八月六日寂す、壽六十五、明治二十年法主嚴如師を追賞して講師を贈る、（碑文）

フテン　普天　二五一三　〔眞宗〕攝津武庫郡西新田村源光寺の住持なり、普天は天保十五年正月勸學職となり、嘉永五年安居學林に代講し、同年七月員外となり、六年七月十三日寂す本山謚して皆遵院といふ、（學苑談叢）

フテン　普天　チヨーゲン澄玄を見よ、

フデン　普傳　（……）〔眞宗〕越前國福井仙福寺の住持なり、普傳は越前の人、眞宗高田派なる福井の仙福寺に住し、數次本山安居を勸む、寂年月日缺く、

フデンボー 普傳房　ニチモン日門を見よ、

フニン 普潤 二四八九 二五六一 〔天台宗〕山城安樂律院の學僧なり、普潤は筑後浮羽郡増生田村の人、母は岩佐氏、文政十二年十月二日に生る、十二歲潜に家を遁れ出て高良山蓮臺院に投し、即超に師事し、即眞と云ふ、後三年恩亮僧正に就いて度を受け、十七歲其院の塔頭一音院の住持となり、後比叡山に登り、西塔大仙院光觀に就いて一宗の學を受く、改めて堯濡と云ふ、嘉永五年正月安樂律院性憲に從ひ、其院貧成に就いて四十八戒を受け、嘉永六年性憲に就いて十重戒を受け、其年四月東下し淨名院慧澄に師事して、顯密二敎を學ひ、天台三大部の講席に列ると三回に及へり、安政三年正月慧澄に就いて形同沙彌となり、慧澄の詩句一雨普潤三草春を愛誦し、自ら普潤と改む、安政四年魚山梵唄秘曲を受け、慶應元年二月輪王寺宮公現親王の師範となり、明治二年七月七日安樂律院忍達に從うて十重戒、幷に瑜珈梵綱重輕兩戒を誓受し、其日具足戒を受く、六年一月備前圓山佛心寺に住す、八年三月坂本村泰門菴に住し、十二月廿四日本山安樂律院に轉し、十三年十二月中學林黌長となる、十九年聖護院町有門院に住し、僧正に昇る、廿年二月三部都法大阿闍梨位となり、紀伊粉河十禪院に住す、廿三年四月日光山興雲院に轉住し、廿五年大學林講師となり、坂本世尊寺に住す、卅三年十月疾に罹り、翌卅四年一月四日寂す、壽七十三、臘三十一、(事歴)

フネー 普寧 ……一九三六 (臨濟宗)相模建長寺第二代なり、普寧字は兀菴、俗姓不詳、宋西蜀の人、幼にして出家し、諸老宿に歴訊し、蔣山に到りて癡絶冲の上堂に値ひて覆船僧到雪峰話を擧するを聞き、忽爾省あり、尋て育王山に登り、無準範に依り徹悟し、後端平の初範禪師に隨ひて徑山に遷り住す、禪師曰ふ、道を得るは易し、道を守るは難し、默默之を守るべし、久くして自然に感驗あり、と、師退きて兀兀日を度る、準禪師兀菴の二字を大書して贈る、因て號となす、尋て靈隱天童に遷り、第一座に推さる、象山の靈巖寺席を虛するに際し、道俗懇請す、乃ち入寺開堂す、然るに北虜侵入し、寺院亦禍を受く、景定元年（我朝文應元年）に東遊を決す、蓋し我國に留れる道友の屢書を贈りて招聘せるに由る、同年博多津に達し聖福寺に寓し尋て入京す、東福寺の辨圓は師と舊交あり、同寺に留り厚侍せらる、北條時賴特に迎へ、巨福山に請す、住持蘭溪道隆舊交あり、相見て甚だ歡ぶ、時賴は嘗て夢中に拜したる高僧の相貌に似たりとて、大に重信歸仰す、建長寺に留まりて禪規整備し雲納群集す、弘長三年の冬西歸の意あり、道俗交抑留すれども肯せず、衆を辭して曰ふ、無心遊此方、有心復宋國、有心無心中、通天路頭活、柱杖を擧げて曰ふ、柱杖頭邊挑日月、下座決然として去る、時宗家臣を差し、護送して西府に到る、既にして明州に達し、婺の双林寺に住し、後江浙に漫遊し、溫州の江心寺に住し、至元十三年(我朝建治二年)十一月廿四日龍翔寺に寂す、勅謚宗覺禪師と云ふ、嗣法弟子大夢あり、四會語錄若干卷あり、待讀尤焴跋す、(元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

フホー 普峰　キョージュン京順を見よ、

フミョー 普明 ……二四六五 〔眞宗〕豐前長福寺の僧なり、普明字は寶月、號は香光室と云ひ、明月樓と云ふ、府中永福寺に

生る、後日田長福寺通元に養はれて、同寺に居し、通元に就て佛儒の學を受け、後、黄檗宗の大潮に就て詩文を學ぶ、東本願寺高倉學寮に於て易行品等を講して學與高し、晩年國に歸り、著作を事とす、文化二年十月寂す、壽缺く、著作釋教文選二十卷、論註考決五卷、香光室詩文集三卷あり、（豐綸詩史、宜園百家詩、大學寮講者鏡）

フミヨー　普明　ゲンサン元三を見よ、

フミヨー　普明　チジョー知常を見よ、

フミヨーイン　普妙院　タンクー湛空を見よ、

フモン　普門　一八七二—一九五一　〔臨濟宗〕京都南禪寺の開山なり、普門字は無關、俗姓源氏、信濃保科の人、母某氏夢に富士山に登り、日輪の海より出つるを見、取りて呑み、覺めて四方を見れば、白光室を照す、即ち娠むあり、僅に五月にして聲胎外に聞ゆ、十二月にして口に雙齒あり、目に重瞳あり、耳長くして重輪を帶ぶ、七歲母に携へられて越後に赴き、伯父正圓寺寂圓法師に附せらる、十三歲祝髮し、長じて信濃に歸へり、鹽田に宿す、適熱病に罹る、家主忌みて郊野に置く、黑白二犬來りて頭脚を擁す、群狼競ひ來るも二犬防ぎ吠ゆ、家主見て異人となし迎へて看養す、病治して後諸國に行脚し、十九歲上野長樂寺に到り、釋圓榮朝に謁し、菩薩大戒を受け、顯密二敎を習ふ、聖一國師の京に法化を揚くるを聞き、往きて謁し、其輪下に留ること五年なり、越の華報寺に到り、本智法師を問ふ、法師普門の學德に服し、欣然席を讓り、敎を出で、禪となる、留ること五年、蔚然叢林となる、忽ち歎じて曰ふ丈夫大方に翱翔すべし豈蝸殼に粘着すべけむや、と、遂に決然去りて宋に航す、會稽に到りて荊叟珏に謁し、尋て淨慈寺に投して、斷橋倫に謁す、倫一見器許し、參究功ありて徹證す、弘長元年（宋景定二年）倫禪師將に寂せむとし、袈裟白贊の頂相を師に付して信印となす、兩浙に巡歷すること十二年にして東歸し、聖一國師に侍す、後壽福寺藏叟譽の下に在り、越に歸りて安樂寺に住し、尋て正國寺に遷る、北越諸地大に其風に靡く、弘安三年國師の不安を聞きて京に上る、國師示寂の後衆議師を推す、師去りて攝津光雲寺に居す、同四年の秋東山照東福寺を退く、藤原相實經師を請す、一山皆推服す、正應の間龜山上皇の龍山離宮に御し、屢妖怪あり妃嬪等魅感せらる、上皇大に惡む、群臣相議し、南北の諸高僧を請し、祈禱するも驗なし、西大寺睿尊律師淨僧二十員を率ゐ來り、晝夜誦呪すること三ヶ月に至るも、尚ほ驗なし、乃ち勅あり普門を召す、師宮中に禪坐し、妖怪頓に熄む、上皇大に悦ひたまひ禪宗に意を傾けた

大明國師

まふ、遂に宮を禪刹となし、太平興國南禪寺と云ふ、家經實兼等の碩臣皆師を拜して弟子の禮を執る、正應四年の冬東福寺丈室に病臥す、上皇幸臨慰問したまふ、十二月十二日上皇並に碩臣名卿等丈室に充つ、師禪坐半日に同じ、請により遺偈を書し、晏然として寂す、壽八十、臘六十二、遺偈に曰ふ、來無所往、去無方所、畢竟如何、喝、不離當處、翌年上皇御製の賛を賜ふ、叢林老作人天眼、電卷星馳追也難、三尺竹篦三尺鐵、未曾動著逼人寒、嘉元の間勅諡佛心禪師と賜ひ、元亨三年大明國師と加賜す、(元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

フモン 普門 (二三四八) 〔眞宗〕伊勢國津彰見寺の住持なり、普門は伊勢人、の源頼政の末孫慧澄の子なり、夙に學を嗜み眞宗高田派なる伊勢安濃郡津の彰見寺に住し、著作を事とす、元祿中寂す、壽五十七なり、著作敎行信證發覆鈔二百五十卷等數部あり、

フモン 普門 (二三四四) 〔眞宗〕豐前妙正寺の僧なり、普門字は不文、俗姓小栗栖氏豐前戸須に生る、世々東本願寺に屬す、貞享の頃長崎に至り、大藏經を購求せんとし、遍く支那人の舘を訪ふも之を得ず、乃ち平戸侯松平氏に就いて其藏にかゝる高麗本を請うて閱覽し、日々閱覽に隨うて筆寫し、數年の間一日も怠らず、筆寫數千册に上る侯其志行を感し、遂に其高麗本全部を師に贈れり、師大に喜ひ、妙正寺に藏したり、寂年享壽缺く、(豐繪詩史)

フモン 普門 (二三九五) 〔……〕加賀金澤栽松山の僧なり、普門號は蘆隱と云ふ、金澤栽松山に住し、詩文に堪能なり、黃檗の高泉性潡の加賀に客留するにあたり、相交り詩文を贈答す、師の詩飛動奇逸採るへき者多し、退院詩に曰ふ、天性癡頑道力微、竿頭弄險住山衣、償還十五年來債、空鉢清風帶得皈、と、後江戸に出遊し、荻生徂徠と方外の交を結び、詩文の名あり、壬申試筆に曰ふ、於吾何有春王力、日出談論日入休、山委叢規無柏酒、茶鐺更酌雪花浮、と、縱橫の才力を見るへし、示寂の年月日詳ならす、(燕臺風雅)

フモン 普門 エンツー圓通を見よ、

フカキ 不可棄 シュンショー俊芿を見よ、

フカシギ 不可思議 ニチセー日政を見よ、

フカトク 不可得 カクリョー覺了を見よ、

フカトク 不可得 ユーショー宥性を見よ、

フカトクソー 不可得叟 シューコツ宗忽を見よ、

フキシ 不器子 ジカイ慈戒を見よ、

フキシ 不器子 ミョーホー明寶を見よ、

フキユー 不及 (二四四五 二五〇六) 〔眞宗〕肥前佐賀某寺第八代なり、不及字は探情、號は棽華といふ、初め仰遣に學ひ、沒後安藝の道命に依る、道命師を同藩の豐水和上に託す、乃ち師事すること數年、學成りて歸へる、豐水の寂後四方來學するもの多し、師諄々として講演し、學徒を薫陶す、講述暇あれは筆硯を樂み、文政十一年得業に擢てられ、天保七年召されて驟事となる、叢林に至り既に事を畢えて歸へる、弘化元年再び召さるれとも老を以て辭す、同三年七月十七日寂す、壽六十二、著作慶嘆錄等二十餘部九十餘卷あり、(碑文)

フグン 不群 チョーネン超然を見よ、

フケン 不見　ミョーケン明見を見よ、

フゲンシ 不還子　リョーケン靈見を見よ、

フザン 不殘　二二七七〔淨土宗〕武藏勝願寺の僧なり、不殘は總蓮社圓譽法革と號す、俗姓は上田氏、武藏の人なり、淸巖に投じて受業し、終に宗乘の奧義に達す、一乘院宮及德川家康深く師に皈依す、鴻巢勝願寺を再興して淸巖に讓り、自ら第二代に居す、後下總行德德願寺、武藏忍勝龍寺、幸手神宮寺、小室願成寺、山城宇治郡西道寺、信濃木曾法然寺等を剏して開山となり、元和三年九月三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

フシキ 不識尼（……）〔曹洞宗〕美濃不識菴主なり、不識尼は其俗姓生國詳かならず、初め智翁永宗禪師を美作西來寺に拜して尼となり、後大寧寺に來りて菴を山下に構へて住し、遂に印可を受く、某年寂す、（日本洞上聯燈錄）

フシヤ 不捨　コーセツ光攝を見よ、

フシヤク 不惜　ニチミョー日命を見よ、

フシヤクイン 不惜院　ニチミョ日命を見よ、

フセン 不遷　二一八五 二五二七〔曹洞宗〕尾道濟法寺の禪僧なり、不遷字は物外と云ふ、伊豫松山の人なり、幼にして傳福寺圓瑞和尙に從ひ、寬政三年七歲にして得度し、十三歲の頃より龍泰寺に入り、內外の學を力め、且つ劍術を學ふ、寬政十二年正月十六歲にして大阪に出遊し、市街に賃居し、晝は行乞し、夜は書を讀み、禪を修す、文化四年十二月十九歲にして諸國漫遊の途に上り、東海道を經行し、駿河府中に居りて草菴を營みて棲居す、偶龍泉寺に江湖會あれは、師出て參す、會中宇治興聖寺磨瓶和尙の知遇を受け、和尙に從うて興聖寺に至り、三年の間修行し、一日金剛經を讀み、無相無我の說を見て翻然省悟す、文化十一年二月二十六歲にして江戶に下り、駒込吉祥寺の學寮に安居し、禪道劍術を以て知らる、同十四年九月二十九歲にして西上し、安藝廣島に皈り、尋て尾道濟法寺に住し、禪道劍術を以て大に知られ、一時の名士相競うて敎を請へり、播磨姬路侯特に法話を請ひ、每年濟法寺へ二百石を寄附し、祈願所となせり、文久元年三月濟法寺を出て、備中松山に至り、門人某の家に逗留す、同年六月出雲松江に至り、宗仙寺の隱寮に逗留し、十一月杵築に至り、一藩の儒者劍客に交を結ふ、尋て尾道に歸り、文久三年三月京師に上り、加賀、薩摩、土佐、尾張　越前等の諸藩主に面して國事に關し謀るところあり、慶應三年大阪に下り、十一月急に海路尾道に皈らんとして出發し船中にて寂す、壽七十三なり、師腕力大に強く、諸國漫遊中數々衆を驚したり、その交はるところは內外の名士にして、常に勤王の大義を唱へたり、京師に入りては大に長州征伐の非を說き、自ら長州征伐の高札を破壞し、一文を添へて泉涌寺內に投したりと云ふ、

フセン 不遷　ホージョ法序を見よ、

フゼン 不禪　二二七六 二三四一〔曹洞宗〕山城眞成寺の開山なり、不禪字は悅巖、信濃松本の人、俗姓詳ならす、出家受具の後道者元に謁し、宗旨の玄奧を究め、道者の支那に歸へるに及ひ、勝尾の般若峰に跡を晦ます、蔭涼寺の鐵心道印自ら訪ひて之を招き、衣法を付し、席を踵かしめんとせしか、師應せ

すして茅舍を鳩嶺の別峰に遷して獨笑菴と號し、後、地を山城山崎に相し慈眼山眞成寺を刱し、天和元年十二月七日寂す、壽六十六、遺偈あり、曰く、世尊下レ山、我卻上レ山、一生相背過、墮二無間一咦、浮生穿鑿不二相干一（日本洞上聯燈錄）

フゾー 不藏　カジキ可直を見よ、

フソーシツ 不爭室　トクリュー德龍を見よ、

フタイ 不退　エンセツ圓說を見よ、

フタイイン 不退院　ショーゲン昭玄を見よ、

フタク 不琢　ゲンケー玄珪を見よ、

フチユー 不中　シユーテキ秀的を見よ、

フテツ 不鐵　ケーモン桂文を見よ、

フトン 不豚　ホーテー寶鼎を見よ、

フニドーニン 不二道人　ホーシユー方秀を見よ、

フニヨ 不如　レンサツ連察を見よ

フニヨシ 不如子　シユーリユー宗立を見よ、

フハク 不白　コーエキ交易を見よ、

フマイ 不昧　オーシ奧志を見よ、

フマイシ 不昧子　シユーシユク宗宿を見よ、

フモン 不文　フモン普門を見よ、

フリユーサンニン 不留山人　カンウ甘雨を見よ、

フヨー 芙蓉　ゲンシ原資を見よ、

フヨーケン 芙蓉軒　ゲンシ原資を見よ、

フヨーホー 芙蓉峯　エカイ慧海を見よ、

フオー 浮翁　ゼンサ全槎を見よ

フギヨク 浮玉　一九六四 二〇四三〔臨濟宗〕丹後安國寺の禪僧なり、　浮玉字は寶山、晩に几山と號す、俗姓藤原氏、越中の人なり、十歲郡の興聖寺竺山源を禮して得度す、十六歲京師に上り、南禪寺約翁儉に事ふ、儉示寂の後、通翁圓、夢窓石に歷事し、西禪寺嵩山の化風を慕ひ、其下に投して參究大に力め、其法を嗣ぐ、嵩山南禪寺に住し、尋て丹後の幸泉寺、秋月寺に退隱し、再び建仁寺圓覺寺に歷住す、師は其出處進退共に追隨す、曆應二年足利幕府諸國に安國寺を置く、丹後秋月寺其數に列る、改めて安國寺と號す、師は嵩山の後を受けて大に寺基を擴張す、應安元年伯耆の禪永寺に住し、三年にして安國寺の興菴に歸へる、檀越某西林寺を刱立し、師を請して開山とす、尋ぎて幸泉寺に遷りて建興修繕す、康曆年中將軍義滿鎌倉淨智寺、京師眞如寺に請するも固辭して出でず、永德三年三月小疾あり、廿四日門弟子に遺誡を與ふ、京師性海見問候するに笑語常の如し、翌二十五日寂す、壽八十、臘六十六、遺偈あり、不レ管二輪回一悟了底唸、無レ去無レ來、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

フコー 扶公　一六八八……〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、扶公俗姓は藤原氏、左衞門督重扶の子なり、興福寺眞喜に師事して法相を研究し、寬弘四年維摩會の講師となり、興福寺に住す、少僧都に任し、治安元年大僧都に昇り、萬壽元年法印に敍せらる、此年の秋興福寺寶塔落慶供養の導師となり、長元元年七月十日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

フシユー 布州　トーバン東播を見よ、

フチ 弗知　グワッセン月筌を見よ、

ブドーボー 葡萄坊　ミヨーシキ妙式を見よ、

フーグワイ 風外 エクン慧薰を見よ、

フーグワイ 風外 ホンコー本高を見よ、

フークワン 風觀 リヨーセン良仙を見よ、

フクアン 復菴 シユーキ宗己を見よ、

フクヨー 服膺（二九一六）〔眞宗〕越後蒲原郡女池村皆應寺住持なり、服膺は越後の人、高倉學寮に學び、弘化四年より因明大疏、八宗綱要、成唯識論を講し、嘉永七年四月二日擬講となり、安政三年春夏の間改邪鈔因明大疏を講し、後、嗣講に進む、寂年缺く、（眞宗史料）

フクリヨー 福亮（一三一八）〔三論宗〕大和元興寺の僧なり、福亮一に福領に作る、元吳國の產なるも、歸化して熊凝氏となる、慧灌に就きて三論の敎義を修習し、兼ねて法相に通じ、後唐に渡りて三論の奧旨を究む、元興寺に住して三論を講敷し、僧正に任せらる、大化元年に選ばれて十師の列に加はり、齊明天皇四年に中臣鎌子に屈請せられて、山科の陶原なる鎌子の家に於て、維摩經を講演す、示寂の年時缺けて傳はらず、門下に神泰あり、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕元亨釋書、本朝高僧傳に福亮唐に渡り、嘉祥寺吉藏に學びたりとあるも、年代相違せり、故に取らず、

フクリヨー 福領 フクリヨー福亮に同し、

フシミノオキナ 伏見翁（一三九六）大和伏見岡の隱者なり、伏見翁何國の人なるか詳ならず、一說に天竺より來れりと、伏見に居るより伏見翁といふ、大和の菅原寺畔の伏見岡に臥して三年起きず言はず、時々首を擧けて東方を見る、天平八年に行基菩提仙那を菅原寺に迎へて齋し、二人箸を執て拍板となして舞ふ、翁亦寺に入り起舞して曰く、時哉、時哉、緣熟する、と、三人相舞ひて恰も故舊のごとくなりきと、（元亨釋書、本朝高僧傳）

ブツエ 佛慧 トクジヨー德定を見よ、

ブツカイ 佛海 ジシユー慈舟を見よ、

ブツギヨーボー 佛行房 キヨーキ敬己を見よ、

ブツキヨーボー 佛行房 リヨーオー良雄を見よ、

ブツゲー 佛猊（二四二三 二四五二）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、佛猊字は靈皞、號は空濤と云ふ、俗姓は木田氏、京都の人、寶曆十二年四月八日に生る、幼にして唐土山に登りて祝髮し、顯道に學を受く、天明四年大乘要義を授けられ研究し、遂に之が頭辭を作りて梓に壽す、出てゝ洛南に寓し、大同房に從ひて唯識俱舍等を學び、性相の旨に達す、後聖護院法親王の侍讀となり、華王院と稱す、遂に廣橋前亞相伊光の義子となり、大僧正に任せらる、五年顯道請に應じて出雲に赴くに方り、所藏の群籍を悉く師に付す、六年夏洛北長谷寺に掛錫する三旬、專ら禪那を修し、偈を作りて曰く、夜來禪石上、明月照三衣、と、又云ふ晨炊有時缺、心中禪味濃、と、寛政二年圓戒七箋の凡例を著し、三年圓頓戒學則一篇を撰す、大日經疏鈔を校正して重刊し、明年更問抄を刻す、四年請により尾張尊壽院に赴き、觀經妙宗鈔を講ず、時に詩を作りて曰く、乘機流彩西方、千歲遺芳憲章、依正凝眸漸炳現、根塵絕迹自隻己、瓊林鳥奏無生曲、寶閣人遊何有鄉、堪愧探若幽趣、羊漫猨猊床、と、此秋病に罹り、

十二月二十七日寂す、壽三十一、師平素著す所の詩文若干あり、敬長編して空書遺芳と名く、(顯道和上行業記)

ブツコーボー 佛光房 (一七九〇) 七條佛所佛工なり、佛光房は康助の弟子なり、大治五年三月二十五日日野新堂佛を安置したる時、賞として布五反を賜ふ、(中右記)

ブツゴン 佛嚴 (一八九五) 京都の醫僧なり、 佛嚴は其鄕貫詳かならず、醫を善くす、治承元年藤原兼實風疾を患ひ、師を迎て治法を問ひ、其言に從ひて効あり、これより大に優遇せらる、寂年壽缺く、(皇國名醫傳)

ブツシンイン 佛心院 シンキョー信曉を見よ、

ブツシンイン 佛心院 ニチコー日珖を見よ、

ブツジユ 佛樹 ミョーゼン明全を見よ、

ブツジユイン 佛壽院 ニチゲン日現を見よ、

ブツシヨー 佛星 イカイ爲戒を見よ、

ブツジヨーイン 佛乘院 ニチシヨー日惺を見よ、

ブツジヨーボー 佛乘坊 エリン慧琳を見よ、

ブツソー 佛僧 (一九二二) 〔曹洞宗〕越前某菴の禪僧なり、 佛僧は近江國の人、未だ族を詳にせず、師幼より世塵を厭の志あり、弘長の初孤雲和尙の法席に至り、遂に孤雲に師事して出家す、名を佛僧と改め、左右に侍せしむ、出世に意なし、孤雲滅後吉祥山の絕頂に入りて菴居す、數々名刹を以て之を致せども遂に起たず、

ブツチヨーボー 佛頂房 ギョーゴン行嚴を見よ、

ブツチヨーボー 佛頂房 ライシユン賴舜を見よ、

ブツツー 佛通 二四八五 〔曹洞宗〕攝津光明寺の開山なり、 佛通は俗姓生國詳ならす 出家して東門慧西禪師に師事し、飽參の後、山城乙訓郡物集女村永昌寺に住す、文政の頃攝津有馬に巡化し、灘村の某の寄附により山中に一寺を開き、光明寺と號し、自ら幽棲する所を碧岩窟と稱し、日々參徒を接得す、其禪風極めて峻嚴なるを以て時人虎佛通と呼び、叢林に喧傳す、文政八年二月十日病あり、同十六日病革る、弟子遺偈を請ふも我に遺偈なしとて一句も與へす、同日寂す、壽缺く、

ブツテツ 佛哲 (一三九六) 〔……〕大和大安寺の僧なり、 佛哲(一に佛徹に作る)、林邑國(今の安南の南部)の人なり、南天竺に入りて菩提仙那に從ひて佛敎を受け、密咒に通ず、海に入りて如意珠を求め、衆生の貧苦を賑濟せんとし、南海に浮び密咒を以て龍王を召し、咒縛して珠を求む、然るに龍王縛を解きて逃れ、遂に如意珠を獲ず、茫然として歸る、唐の開元中菩提仙那に誘はれて支那に來り、尋ぎて同行して來朝す、實に我天平八年なり、仙那と共に大安寺に住し、崇敬を受く、示寂の年時詳ならず、師音樂を傳ふ、即ち菩薩、抜頭、迦陵羅等は其傳ふる所なり、著作には悉曇章一卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、和名類聚鈔)

〔考〕元亨釋書等に佛哲の傳を揭ぐるに險怪にして信用しがたきものあり、今は唯其要を摘むのみ、

ブツテツ 佛徹 ブツテツ佛哲に同し、

ブツポーボー 佛法房 ドーゲン道元を見よ、

ブツレン 佛蓮 (……) 〔眞言宗〕越後國上寺の僧なり、 佛蓮其俗姓生國詳かならず、初め近江の安祥寺に止ま

りて修法し、後、越後古志郡國上山に居り、法華を持誦す、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

ブンリユー　分龍　二三〇〇……〔淨土宗〕佐渡法界寺の中興なり、分龍は越中の人法を不殘に嗣ぎ、佐渡相川法界寺の中興となる、寬永十七年四月二十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

への部

ベーゲンサンシユジン　米元山主人　トーヨー等楊を見よ、

ヘキザン　碧山　二三一三……〔淨土宗〕江戸正覺寺の開山なり、碧山は超蓮社勝譽と號す、俗姓は今井氏武藏忍の人なり、正覺寺に入りて剃髪し廓山に師事して法を稟く、江戸牛込高田に正覺寺を剏して開山となり、承應二年十一月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ヘキサン　碧山　ズイセン瑞仙を見よ、

ヘキタン　碧潭　シユーコー周皎を見よ、

ヘキサン　壁山　ホーカク法珏を見よ、

ヘツポツシ　ノヘ子　シユーリユー宗龍を見よ、

ベツゲン　別源　エンシ圓旨を見よ、

ベツゲン　別源　シユーヘー宗甎を見よ、

ベツシユー　別宗　ソエン祖緣を見よ、

ベツデン　別傳　シユーブン宗分を見よ、

ベツデン　別傳　ミヨーイン妙胤を見よ、

ベツホー　別峰　ダイシユ大殊を見よ、

ヘンカク　遍覺　一五五九／一六一四　〔眞言宗〕山城勸修寺第二別當なり、遍覺は八條大將保忠の養子、冬嗣四世參議正三位有實の子なり、昌泰二年に生る、濟高和尙の上足なり、峰禪の燈を續ぎ、勸修寺少別當に補し、天慶七年六月二十一日別當に任し、又東寺凡僧別當となり、天曆八年寂す、壽五十六、(續傳燈廣錄)

ヘンク　遍救　(一六四三)　〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、遍救は京都の人、俗姓は藤原氏仲平の子なり、夙に佛門を慕ひ、覺運に師事して敎觀を討究す、天元五年朝廷山門の秀才を選び、師甲科に擧げらる、初め比叡山靜慮院に住し、後北山曼珠院に遷り、盛に天台敎を唱ふ、後大僧都に歷任し、某年寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

ヘンコー　遍斅　(一六三五)　〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、遍斅は顯密の學を座主延昌に受け、常に比叡山にありて靈應あり、敕して權僧都に任し、天延三年藤原兼道の病を加持して平癒す、因りて兼道執奏して師を少僧都に任せらる、(本朝高僧傳)

ヘンシヨー　遍昭　一四七七／一五五〇　〔天台宗〕山城元慶寺の座主なり、遍昭俗姓は藤原氏、俗名は宗貞と云ふ、仁明帝に仕へて近衛將を經て藏人頭となる、嘉祥三年帝崩ず、師哀慕に堪へず、遂に比叡山に登り、圓仁和尙に投して落髪出家し、圓頓戒を受け、天台宗を學ひ、圓仁の命により安慧に就て三部の大法を受け、圓珍和尙に從つて灌頂密旨を受く、貞觀十一年法眼に叙し、元慶元年權僧正に任す、正僧正に進み、仁和元年封一百戸を賜はり、元慶寺の座主となる寬平十二年正月

十九日華山寺に寂す、壽七十四、(本朝高僧傳)

ヘンミョー　遍明　シンジャク眞寂を見よ、

ヘンリュー　遍龍　(……)　京師の畫僧なり、遍龍は其郷貫師承詳かならず、十輪院に住す、畫を善くし、殊に佛像を圖すに妙を得たり、寂年壽缺く、(鑑定便覽、續本朝畫史)

ヘンアン　片菴　シユーイン宗印を見よ、

ヘンオー　頰翁　エソー惠聡を見よ、

ヘンコー　泛梗　シユーリョー宗良を見よ、

ヘンジユン　偏詢　チシユー智周を見よ、

ヘンゾーイン　偏增院　コーユー光融を見よ、

ベンア　辨阿　ベンチョー辨長を見よ、

ベンエ　辨惠　(……)〔眞言宗〕京都栂尾山の僧なり、辨惠は號を良明上人と賜ひ、中納言經平の子なり、思操隱逸世味を甘せす、傳法職位を龍華園に受く、道耀に推されて栂尾山第一世となる、寂年缺く、(傳燈廣錄)

ベンエン　辨圓　(一八六二—一九四〇)〔臨濟宗〕京都東福寺の開山なり、　辨圓字は圓爾、俗姓は平氏、駿河安部郡藁科の人、土御門天皇建仁二年十月十五日に生る、建永元年五歲にして久能山の堯辨の室に投し、俱舍の頌を誦す、七歲俱舍の圓暉の頌疏を習ひ、九歲俱舍論の普光の疏を讀み、十二歲法華玄義を學ふ、順德天皇建保四年止觀の講席に列り、五年法華文句摩訶止觀を閱讀す、承久元年十八歲にて智證大師の遺跡を慕ひ、近江園城寺に入りて薙髮す、十月二十日東大寺の戒壇にて受戒す、翌年京都に入りて孔老の敎を修む、後堀河天皇貞應二年園城寺に皈り、下野長樂寺に往き榮朝に從ふ、蓋し榮朝は啻に三部の密法を持するのみならず、亦禪戒を受けて敎外別傳の道を知れるか故に、師之に就きて生死の大事を得んとせるなり、元仁元年久能山に歸る、山に見西阿闍梨といふ者あり、密宗秘印を持し附屬すへき弟子なきを嘆き居りしが、師を見て大に喜ひ、即ち之を全付す、嘉祿二年相模鎌倉に遊ひ、壽福寺の藏經院に寓す、住持行勇は長樂寺榮朝の道友たり、師を見て厚待す、時に了心といふ者あり、首楞嚴經に精通す、客位に講席を開く、師參し聞き、其第四卷に至りて師詰難を致す、了心解答に困し、憤りて已ます、師自ら謂ふに、今日日本の學者は了心を以て指南となす、膚淺なること此の如し、我夫れ誰に依らん、當に宋朝に往て宗匠を訪ふべし、と、是に於て始めて渡宋の志を抱く、此年鶴岡八幡宮に八講會を開く、師も亦其數に預る、講主賴憲僧正は能辯を以て世に鳴り、三井の大鏡と稱せらる、師徵詰すること數次、賴憲屈して語なし、寬喜二年壽福寺にありて藏經を披閱して訖り、冬長樂寺に歸りて榮朝に事ふ、四條天皇天福元年師三十二歲、一日榮朝に曰く、我れ和尙の訓導を受けて親しく顯密の二宗を聞く、得るところなしとせす、此故に已に傳燈大阿闍梨位に登れり、然れとも敎外の宗旨は未た其旨を領せす、願はくは宋に往き智識を訪尋せん和尙乞ふ是を許せ、と、榮朝これを許す、師乃ち謝して寺を出て、故鄉に歸りて母を省し、一錫飄然として博多に到り、圓親寺に憩ふ、是より先き有智山の義學禪宗を厭惡し、師を謗りて害を致さんとす、綱首謝太郞國明これを知りて日夜衞護し、師をして櫛田の私第に居らしむ、文曆元年高麗國王貢船に附して法語を求む、

師顯密の法門を條列して酬ゆ、嘉禎元年四月平戸を出船して宋の明州に到る、即ち理宗の端平二年なり、州の景福律院に寓して月公の開遮の説を聽き、後、天童山に登りて癡絶冲に見え、漸く都に着く、天竺の栢庭月師の性具の宗を究むることを知りて、自撰の楞嚴楞伽圓覺金剛四經の疏鈔及ひ天台宗相承の圖を授く、時に挑笑翁は淨慈寺を領し、薫石田は靈隱寺を領す師二寺の間に來往す、退耕寧は北山に客を典とる、師に謂うて曰く、而今徑山廢頽せりと雖、無準範荒趾に坐して大法輪を轉す、天下指して甘露門とせり、子何そ往かさると、師乃ち徑山に登る、無準に器許せられ旬日ならすして巾瓶に侍す、朝參暮請大に努む、時に即菴覺、東山日、西巖惠、斷橋倫、別山智、環溪一、簡翁敬、靈叟源、方菴圻、兀菴寧、希叟曇等門にあり、師是等に交りて切磋す、翌二年藤原道家京都に東福寺を建てんと欲し、其工を起す、暦仁元年師無準範（佛鑑）の頂相を書きて佛鑑の

聖一國師

贊を求む、佛鑑乃ち之を書す、延應元年八月師德如侍者に就きて佛鑑の行狀を得、仁治元年飛來峰の簡翁敬を訪ひて法語を求め、其親書せる韻關一部を與へらる、二年正月二十三日師德如の記せし佛鑑の行狀を佛鑑に示し、其奥證を得たり、三月一日佛鑑師に自書の宗派圖、密菴の法衣、及ひ竹杖を付して法信となす、又敕賜萬年崇福禪寺の八大字を書して與へられ曰く、汝初住の寺に此額を掲けよと、四月二十日佛鑑を辭す、佛鑑楊岐の法衣、并に大明錄を出して以て之を付す、同門の諸友偈を作りて師を送るもの二十餘人なり、五月瀬船明州の定海縣を出づ、風波の爲に漂流し、六月晦日高麗耽沒羅阿私山の下に著き、留まること四日、七月博多に達す、諸綱首來迎院に舘せしめ、或は請して普説せしむ、太宰府に湛慧といふ者あり、曾て宋に入り佛鑑の法を受け、師に謂ひて曰く、我れ横嶽山に一伽藍を剏すへし、師若し風帆恙なく鄕に歸らは、此寺に來りて住せよと、是故に師を請して方丈に居らしめ、自ら偏室に居る、師崇福寺の額を掲け、開堂說法す、肥州の水上に榮尊といふものあり、嘗て師と共に長樂寺にあり、後、宋に入る、然れとも三年にして早く歸れり、歸來水上の敎院を領す、師の既に至ると聞き、改めて禪寺となし、師を請して開山となし、自ら板首に居る、三年秋謝國明博多の東偏に承天寺を剏し、師を延きて第一代となす、佛鑑親しく寺額、及ひ其他堂額諸牌を書す、師徑山に災ありと聞き、謝國明に勸めて千板を勸化して贈る、佛鑑書を以て之を謝す、太宰府有智山の寺は關西の大講場なり、師の禪化を嫉み、官に聞して承天寺を毀たんとす、朝廷許さす、却て承天崇福二

寺を官寺となす、後嵯峨天皇寛元元年二月將軍藤原良實（道家の第二子）湛慧の言により師を京に召し法を問ひ、歸仰甚た深し、即ち僧正に任せんとするも師固辭す、其禪敎に兼通するを以て、日本國の總講師に補せしむるも、師亦固辭す、此に於て將軍親ら聖一和尙の四字を書して唐の代宗の法欽に國一の號を賜ひしに擬し、東福寺の第一代となす、延曆寺の座主慈源其他紳縉貴夫人等來りて法要を問ふ、將軍師をして東寶寺に宿せしめ、宗行の私宅に居らしむ、寛元二年秋下野長樂寺に赴かんとす、將軍備中刺史行範をして師を護衛せしむ、八月長樂寺に至りて榮朝を拜し、歎語すること七日、駿河を過ぎりて母を省し、九月京に歸りて月輪の別墅に寓す、三年天皇に宗鏡錄を奉呈す、藤原道家東福寺未た成らさるを以て、先つ普門寺を建て、師をして居らしむ、岡屋の藤原兼經師に命して宗鏡錄を講せしむ、圓憲、回心、守眞、理圓等皆座に列す、後深草天皇寶治元年長樂寺の榮朝寂す、二年筑前の承天寺火災に罹る、師彼地に往く、謝國明師の至るを喜ひて一日の中殿堂十八宇を刱す。建長元年三月十八日佛鑑禪師徑山の退耕室に寂す、此年平時賴巨福山建長寺を建て蘭溪隆を第一代となす、師蘭溪と相友たり、師覺心といふ者を勸めて宋に入らしむ、七月承天寺を慶す、法相の良遍眞心要訣三卷を作るや、師序を作る、三論宗の回心師に二諦の義を問ふ、二年五月母を喪ふ、三年戒壇院の圓照に禪戒を授く、五年三林長老師の肖像を寫し、師之に賛す、此年眼疾のため右眼明を失す、六年冬鎌倉に赴き壽福寺に寓す、時賴の請により禪戒を授け、衆に說法す、七年歸京す、三月宋の徑山に藤原實經の親書せる法華等四經三十二卷を寄捨す、時に西巖惠大童山に住す、即ち日本國丞相藤原公捨經之記を作りて石に刻すといふ、是れ師の周旋に係るなり、六月二日東福寺を慶す、正嘉元年三月龜山離宮にて上皇に大乘經を授け奉る、上皇特に黄金の扇を賜はる、時賴の請により鎌倉に下り、大明錄を講し、將軍宗尊親王の命を受けて京都建仁寺を領す、敕を蒙りて東大寺の幹事となるも辭して就かす、時賴師をして壽福寺に居りて叢林の禮を講せしむ、翌二年建仁寺に據る、師の住持以來佛殿僧堂を興す、龜山天皇文應元年泉涌寺の慧曉師の法話を聞く、宋の兀菴來朝す、師其到るを喜ひて優遇す、兀菴建長寺に住す、弘長元年鎌倉に往き、兀菴の建長寺に住するを祝す、此歲師淸見寺を慶す、二年備中に赴き朝原塔を慶す、三年時賴沒す、文永元年正月鎌倉に往き、兀菴に請ひて時賴の爲に上堂普說す、二年法成寺の大殿を造る、又天王寺の幹事となる、四年敕を蒙りて尊勝寺の幹事となり、廻廊中門及ひ二重の樓門を造る、五年諫議菅原爲長と莊嚴藏院にて法を論す、六年東大寺の事に幹し、周防の歲入を捨つ、八年西磵子曇侍者宋より來る、師之を優遇す、足利滿氏師を請して參河實相寺の第一代となす、師寺に入り其日直に鎌倉に赴く、因て智藏に命して第二代となす、十年正月一日東福寺の法堂を落慶し、冬龜山法皇に大戒を授け奉る、弘安二年子元元宋より來朝す、師僧を遣はして迎えしむ、三年二月疾に罹る、是より先き秋高城の藏山空三聖寺の東山照等師の頂相を書きて賛を求む、今亦辨雅首座、正堂然、奇山顯等師の像を書き、皆賛を求む、六月一日師東福寺の規範十條を製す、二日常樂

ベン　辨　エ

菴に移り上皇醫を賜ひ、貴紳病を訪ふ者多し、六日師自ら三敎典籍の目錄を製志て普門寺の書庫に置く、以後道業毫も怠らず、諸弟に法を說き、灌頂を授くること平日の如し、十月十七日に安然として寂す、壽七十九、常樂菴に葬むる、遺偈に曰く、利生方便、七十九年、欲レ知二端的一、佛祖不レ傳、と、花園天皇聖一國師の謚を賜ふ、法嗣湛照、無關普門、白雲慧曉、山叟慧雲、藏山順空、無外爾然、無爲昭元、月船琛海、癡兀大慧、眞翁智侃、奇山圓然、天柱宗昊、南山士雲、潛溪處謙、雙峰宗源、東洲至道、王溪慧瑃、無住道曉、妙翁弘玄等著はる、(東福開山聖一國師年譜、本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

ベンガ　辨雅　一七九五／一八六一　〔天台宗〕近江延曆寺の座主なり、辨雅俗姓は源氏、權大納言顯雅の子なり、重愉實寬覺算の三師に就て天台敎を學び、建久八年天台座主に任ず、建仁元年二月十七日寂す、壽六十七、(天台座主記)

ベンキ　辨基（一四三〇）　奈良の歌僧なり、辨基は天平寶龜年中の人にして和歌を以て鳴る、其詠歌は萬葉集にあり、(萬葉集作者履歷)

ベンキヨー　辨曉　一七九七／一八六〇　〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、辨曉は藤原氏父は法橋隆助、華嚴宗を景雅に受け、尊勝院に住して學侶の貫首たり、後白河上皇屢々宮中に召して衆と共に論說せしむ、初め法印に敍し、權大僧都に轉す、建久十年敕して東大寺を管せしむ、常に大經を述へ、淨土の法を修す、建仁二年七月十一日寂、壽六十四弟子道性、尊玄、敎見あり、(東大寺別當次第、尊卑分脉、諸嗣宗脉紀)

ベンギヨク　辨玉　二一七八／二五四〇　〔淨土宗〕武藏三寶寺の僧なり、辨玉は善蓮社淨譽と云ひ、慶阿と云ふ、別に號を瑲々室と云ふ、江戶淺草の人、大熊卯八の二男なり、幼名銕之助と云ふ、十歲にして下谷淸德寺に投し、住持大潮を仰いで度を受け、法名を滿潮と云ふ、天性和歌を嗜み、三十一文字を弄ぶ、淺草の元鳥越に橘守部あり、和歌を以て名あり、師其門に入りて、和歌幷に書を學ぶ、後下總飯沼弘經寺の秦冏に從ひ、內外の學を受く、秦冏は梅痴道人と號し、詩文を以て聞え、大沼枕山等往來せり、師因て枕山に交ろ、幾もなく江戶に歸り、增上寺に入りて宗乘を修め、神奈川三寶寺の住持となり、道暇和歌に耽る、守部の沒後岡部東平、及ひ神奈川の普門寺瓊音を問うて短歌を學ひ、長歌短歌に通す、然れとも守部は長歌に達したるを以て、師も亦長歌を以て聞ゆることゝなれり明治七年敎部省より召され國學を講す、幾もなく神奈川に歸り幽棲し、益和歌に造

辨玉上人

詣あり、蒸滊車、停車場、人力車、瓦斯燈、寫眞鏡等の新題を取りて長歌を作り、巧妙人の意表に出づ、近藤芳樹、伊達千廣等相交はり、皆其才に服したりと云ふ、明治十二年由良牟呂集を刊行す、自作の長歌集にして芳樹序を書し、鵜飼徹定跋を書せり、翌十三年四月二十五日三寶寺に寂す、壽六十三、師琴曲にも通し、時々琴を弄したりと云ふ、著作由良牟呂集世間に行はる、(大熊辨眞氏返信、國學院雜誌、國文學)

ベンケー 辨慶(一八四九)〔天台宗〕出雲鰐淵山の僧なり、辨慶は武藏坊と號す、初の名は鬼若丸、熊野別當湛増の子なり、幼にして比叡山に登り、西塔に學ぶ、後鰐淵山に到り、顯密二教を學ぶ、然れども性學を好まず、常に武を修む、源義經に從ひ君臣の約をなす、頼朝義經兄弟隙ありて義經の奧州に下るに方り、辨慶相從ひ安宅關に於て、義經の危難を救ひたりと云ふ、(源平盛衰記)

ベンシユー 辨秀 二四三二〔淨土宗〕江戸增上寺第四十七代なり、辨秀は心蓮社歡譽喜受天阿と號す、遠江濱松の人なり、正德元年濱松玄忠寺に入り、快傳の弟子となり、三年正月十九日三緣山に登る、時に十七歲なり、翌年三月光明寺に往き、寬保三年十一月七日歸山して專ら內外の經典を學ぶ、後命ありて結城弘經寺に住し、飯沼弘經寺傳通院等に歷住し、明和三年春增上寺に貫主となり、大僧正に任ず、安永元年七月二十九日寂す、(三緣山志、淨土總系譜)

ベンシユー 辨宗(………)〔戒律宗〕大和大安寺の僧なり、辨宗戒律を宗とし、學業博達なり、常住の大修多羅供錢三十貫を私用す、維那僧等徵すること急なり、辨宗泊瀨寺に詣し、觀世音に頂禮して錢を賜はらむことを祈求す、時に船親王寺に詣しこれを見て辨宗に錢を施與し、償納せしむ、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ベンシヨー 辨正(一三六二)〔……〕入唐學問僧なり、辨正俗姓秦氏なり、性滑稽にして善く談論す、出家の後敎義に通ず、大寶年中唐に渡り名士と交遊す、玄宗尙ほ龍潛の日にして辨正が圍碁に精しきを以て、屢賞過せらる、詳細の事蹟並に示寂の年時缺く、詩二首傳ふ、二子あり朝慶朝元といふ、慶は唐にありて死し、元は歸朝して朝仕し、天平年中再び唐に渡り玄宗に謁す、玄宗其父の故を以て優待す、後歸朝して卒す、(懷風藻)

ベンシヨー 辨正 一三九六〔……〕入唐學問僧なり、辨正一に辨靜に作り又辨淨に作る、俗姓春日氏出家して白雉四年五月に遣唐使に附隨して唐に航す、後歸朝し三論宗を弘む、養老元年七月廿一日に少僧都となり、天平元年十月七日大僧都となる、尋きて同二年十月十四日に僧正に昇り、同八年寂す、(日本書紀、續日本紀、七大寺年表)

〔考〕日本書紀白雉四年の條に辨正渡唐の事見え、七大寺年表天平八年の條に示寂のこと見ゆ、其間實に八十三年なり、渡唐の時尙幼稚なりしとするも、稍長きに過ぐ、然れ共斷じて別人にはあらずと信ず、

ベンシヨー 辨照 一三七一〔……〕大和の僧なり、辨照一に辨昭に作る、大寶二年正月十五日少僧都となる、和銅四年の頃寂す、(續日本紀、七大寺年表)

ベンシヨー 辨昭　ベンシヨー辨照を見よ、

ベンジヨー　辨靜　ベンショー辨正を見よ、

ベンジヨー　辨淨　ベンショー辨正を見よ、

ベンチヨー　辨長　一八二二 一八九八　〔淨土宗〕筑後善導寺の開山なり、辨長字は聖光、號は辨阿と云ふ、筑前遠賀郡香月(カツギ)の人、俗姓は藤原氏なり、應保二年五月六日に生る、仁安三年七歳にして菩提寺妙法法師の下に投し三寶に事ふ、(一説に嘉應二年九歳)安元元年三月十五日十四歳にして觀世音寺に於て得度受戒し、治承の頃唯心常寂の二師に業を受く、壽永二年比叡山に登り、東塔南谷の觀叡に師事し、尋で寶地房證眞に師事して天台宗の敎義を學ぶ、建久元年比叡山を下りて故鄕に歸り、同二年油山に講席を張る、四年肉弟なる三明阿闍梨の寂せるに遭ひ、世相の常無きを悟り、專ら解脫の道に心を潜む、適々明星寺の高塔の廢毀せるを修營せんとて、近國を經行して淨財を募り、三年を經て高塔落成す、蓋し明星寺は常寂の住したる寺なり、同八年再び東上し、同年五月吉水の草菴を訪うて源空上人に謁す、上人時に六十歳にして師時に三十六歳なり、上人試みに三重の念佛に就いて問へば、師詳かに對へて、一に摩訶止觀に明すところの念佛、二に往生要集に勸むるところの念佛、三に善導和尙の立つるところの念佛を解釋す、これより專ら上人に師事し、日課念佛六萬顆、阿彌陀佛六部を修し、六時に往生禮讚を修す、九年上人より選擇集を授かり、(一説に正治元年と云ふ)同年八月上人の命により伊豫に下りて化導す、十年二月京師に歸り、上人に奉侍す、當時攝津の三寶寺に大日能忍禪師あり、日本達磨宗を唱ふ、師は禪師を訪うて宗鏡錄の三章等を質す、元久元年八月源空上人より淨土宗の正統を傳へて西歸し、同年筑後の高良山厨寺に淨土宗を弘通す、其地に於て一千日を期し、今佛三昧を修す、(一説に安貞二年と云ふ)建曆六年博多に往きて道場を開き、唐の善導大師の影像を奉安す、建保五年順德天皇特に敕して善導寺の額を賜ひたりと云ふ、安貞二年肥後の往生院に於て四十八日の別時念佛會を開く、因て末代念佛授手印一篇を作る、寛喜二年七月二十八日阿彌陀經一部を書寫す、一字三禮燒香散華し、一々の字に阿彌陀佛像を圖し三鋪となし、命終の期の助標となす、嘉禎二年良忠のために證疏行義分、論註、安樂要集、選擇圓頓戒、儀、布薩等を講傳し、正統の印を授く、三年十月疾に罹る、曆仁元年正月二日頸下に腫を生じ、八日に菩薩戒を門弟に授け、十五日來迎の讃を修し、靈異を感ず、閏二月二十六日肥後竹崎禪尼に圓頓戒を授け、二十八日願見佛身、來迎引接、決定往生、出離生死の一偈を誦し、二十九日禮讚竟り、一字三禮の阿彌

聖光上人

陀經を誦持し、頭北面西して念佛すること一時許り、光明遍照の一句を誦して寂す、世壽七十七、法臘六十四、著作淨土宗要六卷、名目問答三卷、徹選擇集二卷、三心要集一卷、識知淨土論等あり、仁孝天皇文政十年十一月廿二日勅諡大紹正宗國師を賜ふ、弟子良忠並に慶蓮社招蓮社敬蓮社滿願等あり、一門を鎭西義と云ふ、蓮社と稱するは、惠遠法師の白蓮社の遺風を慕ふものなり、(聖光上人傳、淨土宗三祖傳、本朝高僧傳、淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄)

〔考〕鎭西略要傳には辨長上人文治五年八月宋に航し終南山悟眞寺了然禪師に謁して善導流の宗義を傳へ、三年にして東皈したりとあり、然れども事實にあらざるべし、略要傳の奥書に于時正應五壬辰年二月二十九日鎭西辨師口決、比丘聖護誌とあり、且つ此傳記鎭西本山善導寺文庫より出づるよし附記せるも、共に未だ信じ難し、上人の事蹟は聖光上人傳あり此書は弘安七年十二月望西樓了惠の記述する所、これ鎭西略要傳記述の年時なりと云へる正應五年よりも八年前にかゝるなり、上人傳に一言も入宋の事なし、本朝高僧傳鎭流祖傳等亦然り、蓋し皆上人傳に依りたるものゝ如し、今傳尾に附して參考とす、

ベンツー 辨通(一三七二)〔……〕大和の僧なり、辨通寶二年正月十五大日に律師となり、和銅五年九月少僧都となる、示寂の年時缺く、(續日本紀、七大寺年表)

ベンツー 辨通　ニチケー日啓を見よ、

ベンヨ 辨譽　リヘキ離碧を見よ、

ベンリユー 辨龍　二三八八　〔淨土宗〕江戸天德寺の僧なり、辨龍は淨蓮社澄譽愚童と號す、其鄕貫詳かならず、知辨に師事して法を禀け、岩付の淨國寺に主となり、後、江戸天德寺に遷る、享保十三年八月十七日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ベンヨ 便譽　リユーゼン隆善を見よ、

ホの部

ホタク 補澤　二二八九／二三五七　〔曹洞宗〕武藏宗圓寺の禪僧なり、補澤字は舞山、俗姓は安藤氏、武藏舘鄕の人、十六歳牛頭山の北巖寅嘯によりて出家し、出游して起雲寺萬安に謁し、次に常陸の天童山に登りて菴居す、後歸へりて北巖を省し、服勤數年、終に玄奥に達す、北巖の主席を退くに方り、師補して其廢頽を興す、一住三十餘年、元祿十年三月十五日寂す、壽六十九、臘五十四、遺偈あり、曰く、六十九年、顚倒倒顚、翻身歸去、春月一天、と(日本洞上聯燈錄)

ホドー 補道　二三〇六　〔曹洞宗〕武藏春松寺の禪僧なり、補道字は十洲、俗姓は源氏、近江の人にして江戸深川海福寺獨本の庶兄なり、幼にして母弟と共に武藏青松寺春道を禮して母子三人同時に出家し、起雲寺萬安に謁し、青松寺に歸りて春道を省すれとも心可を蒙むること能はず、春道龍穩寺に移るに及び、命により後主心靈牛道に謁し記室となる、永平寺に出世し、次に青龍寺青松寺に歷遷す、後母の未た存するか故に洞春菴を築きて奉養し、正保三年三月十一日寂す、壽缺く、臨終の遺偈あり、須彌翻倒入藕絲、盡大地人尋不著、法嗣高巖薰道あり、(日本洞上聯燈錄)

ホゴー　保廣（……）〔曹洞宗〕常樂寺の禪僧なり、保廣字は雪溪、仙巖能範の法嗣なり、寂年壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ホザン　保山（二一五四）〔淨土宗〕美濃善教寺の開山なり、保山は諦蓮社聽譽と號し、其鄕貫詳かならず、聽保に就て出家受業し、美濃多藝郡志津村に善教寺を剏す、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

ホシユク　甫叔（二一八九—二二四六）〔淨土宗西山派〕山城融雲寺の開山なり、甫叔は山城醍醐の人、禪林寺顯眞の門人なり、醍醐に融雲寺を創す、一時總持寺に住し、永祿七年禪林寺に移る、永祿十年九月香衣の綸旨並に香染の袈裟を賜はる、元龜三年九月廿二日當流學席の綸旨を賜ふ、天正十四年六月二日寂す、壽五十八、

ホセツ　甫雪　トーゼン等禪を見よ、

ホアン　蒲菴　シユーチン宗陳を見よ、

ホアン　蒲菴　シユーモク宗睦を見よ、

ホゲン　蒲原　カクシヨー赫照を見よ、

ホキヨー　輔教（……二四〇三）〔曹洞宗〕越後香積寺の禪僧なり、輔教は祖山と字し、俗姓は關口氏、越後國刈羽郡山室村の人なり、業を鄕の飯涌山香積寺の寰海に受け、法を西來德翁に繼き、香積寺に住す、寛保三年四月十二日寂す、壽八十餘、

ボダイシンイン　菩提心院　クワンシヨー貫昭を見よ、

ボダイセンナ　菩提僊那（一三六四—一四二〇）〔……〕印度の歸化僧なり、菩提仙那譯して覺軍、南天竺の婆羅門種、姓は婆羅遲と云ふ、夙に支那に來り、天平五年の遣唐大使從四位多治比眞人廣成並に學問僧理鏡等に要請せられて、林邑國の佛哲等と共に東航す、天平八年五月十八日に太宰府に到着す、八月八日攝津に入る、天皇勅して行基等を遣し難波に迎へしめ、供養甚だ厚し、菩提僊那行基を見て相喜び、和歌を贈答したりといふ、これより大安寺に住し、密呪を誦持し且つ華嚴經を讀む、同年十月勅して時服を賜ふ、十九年長谷寺の供養に臨みて導師となる、天平勝寶二年僧正に任せらる、（一に天平勝寶三年に作る）、同四年三月行基等の推擧により東大寺大佛の開眼供養會に臨み導師となる、同六年鑒眞の京に入るに際し出でゝ迎ふ、天平寶字四年二月廿五日阿彌陀佛を念じながら寂す、壽五十七（菩提僧正碑文、續日本紀、七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕菩提僧正碑文一篇あり、然るに諸書を參照するに、まゝ事實の信用しがたきものあれども、ほゞこれに依り取捨を加ふ、

ボシユー　慕秀（……二二九八）〔淨土宗〕佐渡廣源寺の開山なり、慕秀は專譽と號す、幡隨に從ひて剃髮受業し、學成りて佐渡相川に廣源寺を開く、寛永十五年三月五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ボナン　慕南　シユーズイ宗瑞を見よ、

ホーイ　法位（……二〇一七）〔淨土宗西山派〕山城龍護院の僧なり、法位字は道雲、雙救道宗に師事し、淨土宗西山派の學を究め、深草龍護院に住し、盛んに所承の敎を弘む、延文二年三月晦日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ホーイ 法位 二四二六／二四四二〔眞宗〕播磨本德寺の僧なり、法位童名は義千代、寂如宗主の曾孫にして、本德寺法靜の第一子、母は美喜姫なり、明和五年七月錦華殿主文如の法嗣となる、天明元年九月十七日攝政尙實公の猶子となり、阿茶君と稱す、明年七月腫病に罹り、錦華殿に寂す、壽十七、大義院と號す、（本願寺通紀）

ホーイチ 法一（……）〔臨濟宗〕伊豆淨因寺の開山なり、法一字は無二、駿河の人なり、佛心に參して法を嗣ぎ、元に渡りて徧く名山奇勝を歷觀して歸る、然れとも出世に意なく、跡を晦まし、山中に隱る、義堂禪師勸めて駿河承元寺に住せしむ、伊豆の檀越水戸に淨因寺を創し、懇請して第一代となす、寂年缺く、法嗣に明湖法永禪師ありて淨智寺より、建長寺に出世す、（延寶傳燈錄）

ホーイン 法員（一三五三）〔……〕持統天皇の朝の僧なり、法員持統天皇七年近江國益須郡に醴泉湧出するに方り、勅を拜し同年十二月善往眞義等と共に同地に至り、これを飲み檢す、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

ホーウン 法雲（二五二九）〔眞宗〕京都富小路唯明寺の住持なり、法雲は天保九年より高倉學寮に七十五法、神代卷法、華功德品、觀音玄義記、般若心經を講して明治二年に至る、此年擬講となる、寂年詳ならす、（眞宗史料）

ホーウン 法運 二三三九……〔淨土宗〕江戸大圓寺の開山なり、法運は承蓮社相譽と號す、俗姓は市川氏、遠江の人なり、傳典に就て剃髮受業し、其法を嗣ぎて後江戸小石川小日向に大圓寺を剏して開山となる、延寶七年二月十二日寂す、世壽詳かならず、（淨土總系譜）

ホーウンイン 法雲院 ニチドー日道を見よ、

ホーエー 法榮（一四一六）〔戒律宗〕奈良戒壇院の律僧なり、法榮は姓產不詳、聖武天皇の朝學德を以て聞ゆ、同上皇の不豫に際し、御牀に侍して看護尤も力む、上皇の崩御したまふ後は、山陵に廬して讀經修薦を事とす、孝謙天皇其意を嘉し、法榮が本貫の一郡の租役を免し給ひ、且つ上皇供御の米塩の類を鑑眞並に法榮に賜ひ供養したまふ、天平勝寶八年四月の勅に曰ふ、禪師法榮立性潔、持戒第一、甚能看病、由レ此請ニ於邊地一、令レ侍ニ醫藥一、太上天皇得レ驗多レ數、信重過レ人、不レ用ニ他醫一、爾其閱水難レ留、鸞輿晏駕、禪師即誓、永絕ニ人間一、侍ニ於山陵一、轉ニ讀大乘一、奉レ資ニ冥路一、朕依レ所レ請、鬼ニ報德一厭レ俗飯レ眞、財物何富、出家慕レ道、冠蓋何榮、莫レ若下名流ニ萬代一以爲中後生准則上、宜復 禪師所レ生一郡一遠年勿レ役、示寂の年時缺く、（續日本紀、本朝高僧傳、皇國名醫傳）

ホーエー 法穎 二〇四一……〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、法穎字は中山、相模の人なり、曾て南遊して明に遊び、歸へりて太平準和尙の印可を受け、康曆年中相模の壽福寺、及び建長寺に住す、至德二年天龍寺を主とる、將軍命して南禪寺を董せしむ、師住持一年にして辭して巨福山長生菴に歸へり、明德元年十一月七日寂を示す、（本朝高僧傳）

ホーエン 法緣 一五七一／一六四〇〔三論宗〕大和東大寺の學僧なり、法緣俗姓は的氏、京都の人なり、出家して觀理僧正に三論を稟け、受戒後七寺の門を敲き益々玄旨に達す、天祿二年東大寺々務となり、一住七年、權律師に任し。醍醐寺第一代座

主となる、天元三年十月寂す、壽七十、(本朝高僧傳)

〔考〕續傳燈廣錄には天元五年七月九日寂す、壽七十六とあり是非を知らす、

ホーエン　法延　二〇二三……〔臨濟宗〕若狹高成寺の開山なり、法延字は大年、伊豫の人、俗姓は藤原氏なり、幼にして出家し、具足戒を受くるに及び、遊歷して偏く諸名宿に見え、淨妙寺竺仙和尙に參して印可を付せられ、版首に擧けられ、後京都に入る、將軍足利尊氏師の道譽を慕ひ、皈依尤も厚し、伊豫刺史大高重成若狹の治內に高成寺を剏し、師を請して開山とす、貞治二年十月二日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、續群二三五)

易行院法海講師

ホーエン　法圓（………）〔眞言宗〕山城小栗栖の別當なり、法圓は大元別當第十五代となる、仁海僧正を禮して小野灌頂を受け、一方の匠となる、(續傳燈廣錄)

ホーオン　法音　チコー智輿を見よ、

ホーカイ　法海　二四二八／二四九四〔眞宗〕肥後八代光德寺の住持なり、法海字は月藏、號は日南、後槗州と云ふ、易行院と稱す、肥後の人、高倉學寮に學び、文化元年寮司となり、倶舍論を講ず、二年正月二十一日擬講となり、十句義論を講ず、三年唯識述記を講じ、後易行品、倶舍論、末燈鈔、尊號眞像銘文を講ず、十一年十一月二十一日嗣講となり、十三年御傳鈔を講じ、後往生論註、往生要集、讃阿彌陀佛偈、阿彌陀經を講ず、文政十一年十月四日講師に進み、十二年夏觀無量義經を講じ、後無量壽經、文類聚鈔、安樂集、玄義分を講ず、天保五年八月七日寂す、壽六十七、(高倉學寮講者列傳稿本)

ホーカイ　法海　(一四三〇)〔法相宗〕和泉槇尾寺の僧なり、法海は攝津豐島郡の人なり、行基の室に投して出家受戒し、法相を學ふ、東大寺長谷寺に遊歷し、衆に隨ひて法を聽くを樂となす、寶龜の初年和泉の卷尾寺に住して九旬安居す、寂年、及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

ホーカイボー　法界坊　エーゲン穎玄を見よ、

ホーカク　法珏（………）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、法玆字は璧山、夢窓國師に參して法を嗣ぎ、天龍寺にありて記室となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ホーカク　法革　フザン不殘を見よ、

ホーガン　法岸　二四〇四／二四七五〔淨土宗〕長門西圓寺の學僧なり、法岸字は姓如、俗姓は藤田氏、周防吉敷郡下津村の人な

り、十歳にして郡の妙樂寺隨仙の侍童となり、幾ならずして宮市西念寺の蓮昇に侍し、其年四年蓮昇により剃髮染衣す、寶曆十一年江戶に上り、增上寺に投す、徹應廓純二師に就きて宗義を學び、翌年冬定月大僧正に五重の秘訣を受け、十三年三月遂に講席を辭し、跡を晦まし、信濃善光寺に修練し、相模阿彌陀寺に勤念す、徧く名山靈刹に遊び、翌年春畿內播磨南海諸州の聖跡を訪ふ、尋で鄉に皈り、妙慶寺雲說に就きて請益す、十月再び江戶に遊び、小山の龍原寺に止まり、明和二年正月增上寺惠照院にて菩薩戒を受け、九月下總大巖寺隆善に宗戒兩脉を授けられ、十二月獅子吼庵に於て關通に謁し、宗要を研究す、翌年七月關通京師に遊化し轉輪寺に寂するに及び、師もまた隨從す、安永二年再び鄉に皈り、八年三月檀請により、大日比の西圓寺に住す、天明三年三月阿彌經を西市慶雲寺に於て講ず、寬文四年席を上足常稱に附し丸山の草菴に閑居す、享和八年庵を旁里に遷し、文化十二年十二月五日寂す、壽七十二、臘六十三、著作口稱三昧感得記、專習要文集、唯稱演說集、本願念佛正義辨、專修念佛要語、臨終要語等各若干卷あり、剃髮の弟子百六人、誓受唱名者二十一万餘人なり、(法岸和尚行狀記、續日本高僧傳)

ホーキク　法菊　二〇一八　〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、　法菊字は芳庭、太平準の法を嗣ぐ、天龍寺正覺國師に事て、益參究す、近江の佐々木高氏父子深く歸依す、應安元年淨妙寺に住す、嘉曆元年太平準、僧を元に遣はし大藏經を求め、金華山に藏す、延文二年火災に罹り、灰燼に皈し、舍利塗出す、師藏記舍利記を撰す、(記は延寶傳燈錄にあり)記の末に偈を系く、金口五千餘卷說、每談二一字一如來、不レ知那個泥洹也、八斛摩尼照二冷灰一、同三年三月二日俄に中氣を得て正源菴黃金閣に寂す、壽缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ホーキン　法忻　二〇二八　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、　法忻字は大喜、俗姓源氏、三河の人、今川基氏の子なり、太平準に師事して法を嗣ぐ、淨智圓覺建長の諸寺に歷住す、晚年圓覺寺に萬富山續燈菴を建て退休す、應安元年九月二十日寂す、遺偈あり、諸佛降跡處、續燈大光明、巖上開二一室一、一坐五百生、勅諡佛滿禪師と云ふ、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ホーキンニ　法均尼　一三八九／一四五八　〔……〕大和奈良の尼なり　法均尼俗名和氣廣蟲、備前藤野郡の人、初め從五位下葛木戶主に嫁して貞順なり、孝謙天皇に愛信せられ、正六位下に叙せらる、天皇落飾したまふに際し、廣蟲も亦佛門に投し法均と名け、進守大夫尼位を授けらる、藤原仲麿の亂に天皇を諫めて其黨類の罪を減し配流に處す、其後五穀登らず、衆民飢餓に苦む、法均四方に人を遣はし、幼兒を收養するもの八十三兒に及ぶ、神護景雲二年從四位の封戶を賜ふ、同三年弟淸麿の道鏡の意に忤ひて大隅に配流せらるゝとき、法均還俗して備後に配流せらる、後光仁天皇召し還し、從四位下に叙せられ、典藏となり、出納を掌る、尋て正四位上に叙せられ、典待となり、延曆十七年正月十九日寂す、壽七十、後天長二年に正三位を追贈せらる、(續日本紀、日本後紀)

ホーギン 法闇(……)〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、法闇字は中山と云ふ、建仁寺栖雲軒に住す、事歴詳ならず、(日本名僧傳)

ホーキヨー 法鏡(一三五三)〔……〕持統天皇の朝の僧なり、法鏡同天皇七年正月に勅して水田二町を賜ふ、事蹟缺く、(日本書紀)

ホーキヨー 法鏡 ニチイ日意を見よ、

ホークー 法空(……)〔 〕奈良法隆寺の僧なり、法空俗姓不詳、下野の人、性相に通じ、常に法華を誦むこと一晝夜に六部なり、後下野に歸りて石洞中に禪坐す、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ホークワ 法顆(一四二三)〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、法顆俗姓詳ならず、唐に生る、出家して鑑眞に師事し、眞和尙に從ひて來朝し、招提寺に在りて戒律を講敷す、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

ホーゲン 法眼(……)〔黃檗宗〕攝津法福寺の開山なり、法眼は京都の人、俗姓詳ならず、黃檗山に登り、獨湛和尙に就て剃髮受業す、大坂東南に法福寺を開き、其開山となる、寂年壽缺く、(近世叢語)

ホーコー 法興(二九三一)〔淨土宗西山派〕山城光明寺の開山なり、法興字は淨音、京都の人藤原雅清の子なり、西山派の開祖證空上人に師事して一門の宗義を受け、後仁和寺西谷に光明寺を開き、道化盛んなり、其門を西谷流と云ふ、文永八年五月二十二日寂す、著作論註删細鈔十二卷、序分義愚要鈔三卷あり、門下觀智、乘信、覺證、道戒等あり、(淨土總系譜、淨土傳燈錄)

ホーコー 法興 ユイシユ惟首を見よ、

ホーコー 法高 センヨー闡揚を見よ、

ホーコー 法光 サンキユー三休を見よ、

ホーコーイン 法光院 カクシヨー赫照を見よ、

ホーコク 法國 ジヨークー淨空を見よ、

ホーコンゴーイン 法金剛院 シヨードー承道を見よ、

ホーサイ 法載(一四二四)〔戒律宗〕大和招提寺の律僧なり、法載俗姓詳ならず、唐に生れ鑑眞に師事す、揚州の靈曜寺に住して戒律を講敷す、天平勝寶五年に東航し、天平寶字の末招提寺に住して戒律を講敷す、示寂の年時缺く、弟子眞環あり、(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

ホーシン 法心(……)〔臨濟宗〕奧州圓福寺の禪僧なり、法心字は性才、壯年に至りて出家す、文字を解せず、單に個事を明にせむとし、宋に禪宗の盛なるを聞きて商船に附して航し、臨安府に抵り、徑山に登り、佛鑑禪師に謁し、開示を求む、鑑禪師圓相の中に一の丁字を書して示す、法心席下に留りて日夜參究し、寢食を忘れ、骨臀爛るゝに至る、志氣益堅く、九年にして遂に悟處を得、鑑禪師印證す、後本國に歸り、松島に圓福寺を開き、佛鑑の禪を唱ふ、命終の七日前其期を弟子に告げ、病なく禪床に踞す、弟子遺偈を乞ふ、心文字を解せず、乃ち口を銜きて唱へて曰ふ、來時明明、去時明明、是個何物、將に眼を閉ぢむとす、弟子進みて猶後句を缺くと云へば法心喝一喝して寂す、壽不詳、世に傳ふ法心俗名は平四郎、嘗て眞壁郡主に仕ふ、郡守事あり履を以て蹴

る、師憤然世を厭ひ、海を踰えて大法を求め、徑山の無準に師事す後國に歸れば郡守大に喜び、圓福寺を開き請す、師偈を說きて衆に示して曰ふ、遠上ニ徑山一分ニ風月一、歸來開ニ圓福道場一、透ニ得法心一無ニ一物一、元是眞壁平四郎、と此れ事實なるか未だ詳かならず、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ホーシン　法進　一三六九／一四三八　〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧となり、法進俗姓王氏、王導の後なり、唐の明州の人、鑑眞の下に戒律並に天台の敎義を學び、兼ねて儒書に通ず、揚州の白峯寺に居り、戒律を以て四衆を引導し、後鑑眞に隨ひて辛苦艱難し、我國に來る、鑑眞の東大寺に戒壇を開くにあたり、大に助力す、天平勝寶八年五月律師に任ぜらる、聖武上皇の崩御に際し、薦福の導師となる、神護景雲元年に少僧都となり、寶龜五年二月大僧都となる、鑑眞招提寺に還る後、師戒壇院を監す、能く和語に通じ、梵網戒本疏、羯磨疏、行事鈔、比丘尼鈔、毘尼義鈔、慧光略疏、法勵中鈔、智者廣疏等を講ず、且つ衆請により天台の三大部を講ずること前後四度に及ぶ、後大和に佛國寺を建立す、寶龜九年九月二十九日寂す、壽七十、著書ありしも傳らず、門下聖一慧山等あり、聖一佛國寺の二代となる、(七大寺年表、律苑僧寶傳、元亨釋書、本朝高僧傳)

〔考〕本朝高僧傳に天平勝寶八年律師となり、同九年大僧都となるとあり、今は七大寺年表に依る、

ホーシユ　法守　一九六八／二〇五一　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、法守俗諱は寬永、後伏見院の第三皇子、延慶元年九月十四日に生れ、禪河院といふ、元亨元年三月出家して寬性禪助の二師に從ひて眞言宗を學び、正中三年に灌頂す、嘉曆二年寺務に補し、十二月直に二品に敍す、建武三年法勝寺圓勝寺の寺務職に任し、同四年綱所を賜ひ、同日六勝寺檢挍に補す、永和五年一品に敍し、明德二年九月十九日寂す、壽八十四、(仁和寺御傳)

ホージユ　法壽　(一六五八)　〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、法壽は延曆寺座主暹賀僧正の弟子となり西塔院に住し、法華經一部を日課とす、夢に所持の法華經西方に飛び去る、師これを憂ふれば、傍に紫衣の一老僧あり、曰ふ、歎惜するなかれ、經を極樂に送るなり、汝數月の後彼淨土に生すべし、と、これより法壽阿彌陀佛像を圖し三時回向して遂に往生す、(本朝高僧傳)

ホージユイン　法壽院　ニチキユーニ日久尼を見よ、

ホーシユー　法秀　(‥‥)　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、法秀は近江志賀郡の人、餘慶に師事して天台敎を學ぶ、能く法華を讀誦し、一日の部數殆んど二十部に及ぶ、比叡山の南麓に菴居して妙法を修し、後愛太子山に移る、寂年壽缺く、(法華驗記)

ホーシユー　法洲　二四二五／二四九九　〔淨土宗〕長門大日比西圓寺の僧なり、法洲字は託阿、眞蓮社承譽と號し、自ら還源老人と呼ぶ、俗姓は中井氏、父の名は源右衞門景直と呼び、世々國主に仕ふ、母は多賀氏の出なり、明和二年四月十四日を以て長門大津郡河原に生る、甫めて三歲母に隨ひ、神上寺に詣で灌頂を受く、安永七年十四歲再び神上寺に登りて灌頂を受く、天明五年母を喪ひ、追福修善の爲めに法華經、及大般若理趣

分を一字一石に書寫し、母の塔下に藏む、同七年二十三歳の時、闍隨尼の勸めにより西圓寺に赴き、光譽法岸上人に謁して法を聞き出家の念切なり、翌八年父の許を得て西圓寺に投じ、法岸に就て剃髮す、寛政元年二十五歳京師輪轉寺に留錫して解行を勵み、翌二年の春江戸に赴き、下谷安樂寺唯稱を訪ひて法話數月の後、法岸の上足三緣山辨信和尙の室に移る、同三年二十七歳幡隨院潤譽露閑を拜して五重の秘訣を傳持し、翌年宗戒兩脈及び布薩を禀承す、同五年辨信寮に再寓し、倶舍、唯識、天台、華嚴等を研究し、大に聲譽あり、時に潮洞和尙師の學識を感し、弟子となして法財を委託せんとし、屢々懇請す、師本師に對する義を思ひてこれを斥け、急に事に託して京都に上り、西九條西福寺に留まり、佛定、義柳、典壽、慈雲の諸師に歷從し、益宗學を研究す、同七年卅一歳國に歸りて法岸を省し、尋で中井に至りて父に見ゆ、これより京師江戸浪華の間に往來して有緣の衆生を化度せんとの念を起し、九月七日先づ浪華に着し、嵯峨稱念寺助念上人を訪ひ、西光寺義門律師。敎晨上人等と時々別行を勵修す、寛政八年初春課程簿を作り、毎日課號の成否を記載するに便なるために、紙半葉を罫畫して卅日となし、毎日の下に圈を施し、課號を成するものは其圈を減し、卅日にて計算し、十二ヶ月を重ねて一年の總數を記し、淨業錄と名く、同八年西光寺に於て慈雲律師を拜し、圓戒、及び五戒等を求受し、八月河內成雲寺の請に應じ、大坂小松谷妙蓮菴に寓し、空譽上人の懇請により、同山の主となる、明年三月妙蓮菴例月の淨業會を開き、其規則を定む、同十年十月東行の志あるを以て妙蓮菴を退き、十一月江戸に到り新谷敎信寮に留まる、十一年二月江戸を發し、伊勢神宮を拜し、廿二日大坂に着し、茶臼山の菴室に移り、九月高野山に登り、根來山に宿して歸り、中町の菴室に寓す、同十二年但馬豐岡來迎寺主法譽上人示寂し、師衆請によりて同寺に晉山し、山規を一新す、亨和三年大坂生玉大乘寺に遷り、文化二年十二月同寺を退く、同七年招かれて江戸に上りて、青山自得菴に止まる、翌年宗祖六百年忌を修し、終りて房總の間を巡化す、同年夏父の病を聞きて國に歸り、喪を終りて大阪に上る、同年西圓寺寂譽示寂し、師其遺命により、翌九年西圓寺に住す、一住七年、文政元年主職を靈幢に讓り、萩松本村に菴居し、後大日比の斜古溪に移る、防長の間を遊化し、諸寺の懇請により法を説く、玆に於て四方皆師の高德に風靡し、徧ねく防長の間專修念佛の聲を以て充たさる、然るに突然命ありて文政八年遂に羽島に流さる、師時に六十一歳なり、翌九年赦されて歸り、これより一切他の請を辭し、唯自行を策勵す、然れども遠近師の德を慕ひて道俗日々菴に滿つ、天保九年疾に罹り、病苦を忍びて法を説き、翌十年七月十三日懇ろに門弟を誡め、安祥にして寂す、壽七十五、臘五十二、著作托事辨十九卷、歸命本願鈔講説七卷、阿彌陀經講説、迎接曼荼羅講説、各五卷、辨斷劈邪示正論、正邪強會辨 大原問答講説、各四卷、選擇集講説、御傳廿一之卷講説、各三卷、大經厭欣段講説、大胡消息講説、一枚起請講説、往生要集十樂講説、海德本願合勸錄、法岸和尙行業記、小消息講説、淨土要略鈔講説、各二卷、發願文講説、二河白道講説、御傳七席講説 御傳三席講説、三法語大

意、御傳翼賛決擇私評、和語燈觀經大意釋講說、弘覺大師徽號講說、正宗國師徽號講說、向譽上人起請文講說、四要篇講說、正邪不可會辨、兩會辨或問、蓮門回向十條辨、爲貪婬酒求生辨、各一卷等あり、(法洲和尙行狀記)

ホージユー　法住　二三八三／二四六〇　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十二代なり、法住字は智幢、大和石上郡櫟木中村の人なり、十六歲にして內山の快範上人に隨ひて剃髮し、次に法隆寺に學び、豐山に登りて無等に師事し、後諸國に歷遊し、智積院淨空に就て大に得る所あり、奈良一乘院法親王より岡寺を賜り、此に居り、後根來山大傳法院に住し山務を視ること十三年、大に其興隆に力を盡す、時に根來山の前住常明和尙に土巨流の事相を傳へられ、始めて新古異議の疑を晴らし、法柄管絃相承義等を著す、寬政三年擢られて能化職に上り、法柄を執ること六年、豐山の義學最も盛んなり、同八年興喜寺に退老し、仝十二年五月十日寂す、壽七十八、著作管絃相承義二卷、大日經玉振鈔十卷、仝弄引二卷、仝秘訣一卷、攝八囀義論五卷、補八囀義一卷、略八囀義、分別六合釋、六合釋文句、各一卷、十句義記二卷、仝敎起因緣考、仝極微積集章、論場旗皷、各一卷、金七十論私記、秘密念佛法話廣二卷、仝略一卷等あり、(法住僧正傳)

ホージユー　法住　(二五三二)　〔眞宗〕東京小石川傳久寺の住持なり、法住字は開華院と號す、寮司となりて弘化二年高倉學寮に淨土源流章を講し、嘉永二年六月二日擬講となり、尾張名古屋住吉町守綱寺に住し、參河寺部守綱寺を兼ぬ、嘉永五年より高倉學寮に十不二門指要鈔、觀經妙宗鈔を講し、文久元年十二月二十日嗣講に進み、慶應元年より選擇集、淨土和讃を講し、明治四年五月十二日講師に任し、正信念佛偈を講す、寂年缺く、(眞宗史料)

ホーシユン　法俊　二〇〇〇／二〇七六　〔曹洞宗〕丹波圓通寺の開山なり、法俊字は英仲、京師の人、將軍足利尊氏の季子なり、母は某氏三井寺の觀音に祈りて金鉢を授ると夢みて娠むあり、曆應三年五月二十一日に生る、七歲にして母を喪ひ、十一歲にして遂に天龍寺夢窓國師に依て童子と爲り、夢窓の遷化に値て丹波の永澤寺に投し、天眞和尙を禮して師となす、十六歲にして出家し、天眞の再び慈眼寺に住するに及んで、侍司となり、常に曹洞の玄要を受く、後辭し去て丹波氷上郡に至て、永谷山に隱棲す、鹿苑院義滿師の德風を慕ひ、永德二年隱棲の地に就て圓通寺を建立し、開山となし、莊田一千餘石を寄附し寺產に充つ、後圓融帝師の道譽を聞きて欣慕あ、特に宸翰の額、及び英仲禪師の號を賜ふ、至德の初勅召あり、宗要を問ひたまひ、奏對旨に稱ふ、勅して國師と爲し、紫伽梨を賜ふ、晚年永澤寺を董す、尋て慈眼寺の命に應ず、未た幾ならずして圓通寺に退老す、應永二十三年二月二十六日寂す、壽七十七、臘六十二、(日本洞上聯燈錄、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ホージユン　法順　(二〇一二)　〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、法順字は適菴と云ふ鄉貫未詳、夢窓國師に天龍寺に參して其法を嗣ぐ、記室より第一座となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ホージヨ　法序　二〇四三……　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧な

り、法序字は不遷、相模の人、姓は平氏、二階堂氏の族なり、夢窓國師の室に入りて印可を蒙むり、近江の德雲寺に主となり、京都天龍寺に登る、後南禪寺を主とるに及び、將軍義滿親しく法莚に臨みて金襴の僧伽梨、香合等を賜ふ、永德三年十二月十四日偈を書して寂す、著作菩薩蠻（語錄なり）あり、勅賜して佛照慈明禪師と諡す、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホージヨ　法助　一八八七〜一九四四　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、法助俗姓は藤原氏、攝政關白道家の第五子、母は太政大臣藤原公經の女なり、安貞元年三月五日に生れ、十二歳にして仁和寺道深僧正の室に入りて落髮得度し、此歲冬東大寺の戒壇に登りて滿分戒を受く、延應元年一身阿闍梨に敕任し、准三后となる、僧家此職あるは師を以て始めとなす、寛元元年十二月觀音院に於て道深の灌頂を受く、建長元年秋仁和寺を領し、正嘉二年辭して開田に退居す、文永元年八月北院に孔雀經を修して國祚を祝し、弘安七年十一月二十一日寂す、壽五十八、（本朝高僧傳）

ホーシヨー　法性　一九〇五……　〔眞言宗〕紀伊寶性院の學僧なり、　法性は高野山正智院明任に師事して宗教を究め、法性院を開きて盛んに弘通す、仁治年中傳法院大災に罹る、保延以後傳法院金剛峯寺和合せざりしを以て師誣告に逢ひ、師及衆徒二十餘人遠島に謫せらる、寛元三年十月二十一日遂に謫所に寂す、壽缺く（本朝高僧傳）

ホーシヨー　法性　クーア空阿を見よ、

ホーシヨーイン　法性院　ニチジユン日遵を見よ、

ホーシヨーイン　法性院　ニチユー日勇を見よ、

ホージヨー　法定　二四三三〜二五〇〇　〔眞宗〕伊勢磯山專照寺の住持なり、　法定字は海懷、號は明靜院、長谷の快道に倶舍因明等を學ぶ、雅龍唯然に天台を學び、淨土の經歷に華嚴を受く、講師に任せらる、天保十一年六月晦日寂す、壽六十八、

ホージヨー　法定　（一二七〇）〔……〕高麗の歸化僧なり、法定は推古天皇十八年三月高麗王の命により、曇徵と共に來朝す、事蹟缺く、（日本書紀）

ホージヨー　法成　（一四一三）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、　法成唐に生れ、出家して鑑眞に師事し、戒律を傳え、兼て天台を修む、寶州の開元寺を開きて大に法輪を轉ず、眞和尙の東渡を聞きて馳せ至り同航す、來朝以降の事蹟缺く、

ホースイ　法水　（……）〔……〕肥前某山の僧なり、法水は鄕貫詳ならず、肥前の賢順居士より箏曲を傳へ、（居士は筑後善導寺の僧より傳ふ）筑後練早慶岩寺の玄恕と共に箏曲に通ず、後居士の意を受けて京師に入り、尋いで武藏に入り、俗に皈して柏屋と云ひ絃索を商ふ、其下に八橋撿校出て、箏曲大に行はる、法水寂年缺く（箏曲大意鈔奥書）

ホーセー　法勢　一五一八……　〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、　法勢は延曆寺義眞の徒なり、後詔により傳法大法師となり、貞觀十年正月八日最勝會講師となる、寂年缺く、

ホーセン　法宣　二五二七……　〔眞宗〕攝津大阪天滿善覺寺の住持なり、　法宣は廣說院と號す、嘉永二年より高倉學寮に唯識三類境、倶舍論（此筆記十五卷寫傳す）四敎儀集註を講し、七年七月十四日擬講となり、慶應元年五月二十九日嗣講に進み、三年三月（一に四月）三日示寂す、（眞宗史料）

ホーゾー　法藏　一五六四—一六二八　〔法相宗〕大和東大寺の學僧なり、法藏俗姓は藤原氏、山城の人なり、出家して寬救に唯識を受け、延僦に三論を學び、定助に密灌を傳へらる、天德四年維摩會の講師となる、康保二年東大寺を主どり、住持四年西室に退居す、安和元年少僧都に任し、二年正月三日寂す、壽六十五、臘四十二、著作般若經玄文十卷、般若理趣分私記三卷あり、（本朝高僧傳）

ホーゾー　法藏（一三四二）〔……〕百濟の歸化僧なり、法藏天武天皇十四年敕を拜して優婆塞益田直金鍾と共に美濃に至り、白朮を煎ず、因りて絁綿布を賜ふ、同十一月金鍾と共に白朮煎を獻ず、後陰陽博士となる、持統天皇六年道基と共に各銀二十兩を賜ふ、示寂の年時缺く、（日本書紀）

ホーソン　法尊　二〇五六—二〇七八　〔眞言宗〕京都仁和寺の淮三后なり、法尊は征夷大將軍鹿園院義滿の子なり、應永十六年十一月七日得度す、時に十四歲なり、十九年四月十六日宣して淮三后となり、苦修鍊行し、廿年四月廿二日永助親王に傳法灌頂を受け、二十五年二月十五日寂す、壽二十三、（傳燈廣錄）

ホーソン　法瓚　二三四二—二四一七　〔曹洞宗〕信濃正安寺の禪僧なり、法瓚字は圭立大梅山人と號す、信濃水內の人、大日方氏、深志源氏小笠原氏の裔なり、幼にして正安寺の敲山に度を受け、後諸國に偏歷して諸禪師を歷問し、深く增林空禪師に服す、空禪師の指示により、獨睡菴主に師事し、遂に其法を嗣く、一時上總銚子に隱棲し、後信濃寶壽寺に出て、大に宗風を擧揚す、爾度惣持寺に出て、後輩を教導す、寶曆七年九月廿八日寂す、壽七十六、臘六十、弟子五十餘人、著作大梅語錄二卷あり、（墓銘、寶壽大和尙年譜）

ホータク　法澤　エオン慧恩を見よ、

ホーチヨー　法朝（二〇六〇）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、法朝字は日峰と云ふ、大喜法忻に參して法を嗣ぎ、應永年中建長寺より天龍寺に遷る、晚年印を解きて巨福山南華院に逸老し、某年四月三日寂す、（延寶傳燈錄）

ホードー　法道（一三一一）〔天台宗〕播磨法華山の修行者なり、法道は傳へ云ふ、天竺の人にして、紫雲に乘り支那朝鮮を經て日本に來り、播磨國法華山に菴を結びて住し、常に法華經を讀誦し密觀を修す、千手觀音の銅像、佛舍利、寶鉢を持して餘の長物なし、時々山下に出でゝ供養を受く、國人稱して空鉢仙といふ、船師藤井官租の東米を載せて過ぐ、法道供を乞ふ、藤井曰ふ、御厨の精粳なり、私情に任ぜず、と、藤井師の持鉢便ち飛び去り、東米鉢に隨ひて雁陣の連る如し、藤井驚奔し、師の菴に至りて悔謝す、師笑ひて諾す、東米前の如く飛び歸へる、其一東米南河畔に落つ、爾後其河畔豐饒にして富豪多く、俗に號して米はち村と云ふ、藤井入りて事を奏す。孝德天皇大に感嘆し給ひ、大化五年玉躰不豫に方り左大臣阿倍倉內を遣して法道を召し加護せしめ給ふ、師即ち宮中に候し祈禱す、己にして玉躰平復す、師留ること七日間、法を說き無遮會を行ふ、法華山に歸りて後天皇勅して山中に佛堂を興し、其持する所の觀音の銅像等を安置す、白雉元年九月に工事落成し、天皇行幸して供養會を行ひたまふ、二年三月師の諭化により、宮中に大藏經會を行ひたまふ、二月齋會

を行ふ、後師衆に告げて曰ふ我は本若閣崛山の仙人なり、暫く此に來りて誘導をなすのみと 一偈を遺して飛びて空中に入り去れり、師の建立にかゝる寺諸國に多し、丹の成道寺其一なり云云、（元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕日本書紀法道の名なし元亨釋書等に揭くる所恠誕にして信すべからす、寧ろ一笑に附すへきものあり、然れとも別に正確なるものなきを以て、姑く其傳ふる所を擧ぐるなり、

ホードー　法道　二四六四 二五二三　〔淨土宗〕長門法船菴の中興なり、法道字は圓如、德蓮社元譽信阿と號し、一に蓮菴と云ふ、俗姓は村尾氏、母は長嶺氏なり、文化元年八月廿五日を以て長門阿武郡萩に生る、九歲父に携へられて西圓寺に詣す、寺主光譽法岸上人師の容貌俊英なるを見、强て父に請ひて出家せしむ、爾來法洲上人の提撕を請けて内外二典を學び、學業日に進む、文化十四年三月十四歲にして師命を受け、父及び弟子辨雄等と共に萩を發し、途次靈跡を參拜し、五月江戸に着し、三緣山塔下立譽辨信上人の室に入る、同年秋辨信幕府の命に依りて三河信光明寺に遷り、師も亦隨從す、然るに翌文政元年不幸にして病に罹り上人の座下を辭して鄉里に皈り、專ら療養に力を盡す、翌二年十六歲病快復したるを以て歡信上人に伴はれて江戸に到り。龍源寺主信定に從ふ、三年十七歲の時、增上寺舜從大僧正を拜して五重相承し、尋で其命により惠照院圓通律師に就て天台戒疏及び戒部を硏究し、翌年大僧正より宗戒兩脉を禀承し、化他利生の許可を蒙る、同五年祖母病氣の命に接して江戸を發し、信光明寺に立譽に謁し、三月國に着して看護す、同七年西圓寺主靈幢退隱し、師師命によりて遂に主席を繼ぐ、時に二十一歲なり、これより寺門の改築を計り、辛苦經營して漸く一新す、天保六年卅二歲法洲上人の命を受けて十勝論を校合し、且布薩相傳の爲めに上京し、專念寺に寓し、三月華頂山貫主聽譽大僧正を拜し、布薩傳戒を受け、畢りて黑谷貫主祐譽上人に禀議し、共に報恩院に入りて十勝論校訂に從ふ、未だ功終らずして的門に後事を託して歸國し、承譽を省す、同十年夏法洲疾に罹り、將に寂せんとするに方り、師に遺囑して曰く、我が沒後設令他よりの請あるも、他の寺院へ轉職せず、唯如法に修行して出離生死の本懷を遂すべしと、其寂後八月十一日の夜まで先師の慈恩を報せん爲め不臥無言別行を修す、これより先き天保八年師法船菴再修の志を發し、承譽上人に詢りて功を創めしが十一年十二月諸般の功全く成就せり、翌十二年正月元日より門弟等の請に應し、當麻曼陀羅を講じ、これを永世の定則となす、同年羽島の信者等承譽上人三回忌追善の爲めに名號石を建て師請はれて其開眼に赴き、皈路田部七見上畑粟野先大津等に巡錫して歸院す、弘化三年七月華頂山貫主觀道上書を裁して召せども辭し赴かず、嘉永二年三月萩龍昌院立傳の請に赴き、一七日中父子相迎を講じ、日々の聽衆三千人日課の授與千九百五十八人なり、これより諸寺の請によりて化益愈々盛なり、文久二年萩無藏院に講莚を開きて疾に罹り、療養力を盡せども全快に至らず、然れども師疾を勉めて請に應じて諸寺に講莚を開く、文久三年六月廿一日弟子三人を召し、遺囑して大順に席を繼かしめ、義應を後見とし、公邊をして寺中の雜務を指揮せしめ、廿三日遂に寂す、壽六十、臘

五十三、(法道和尚行狀記)

ホーニ 法爾　イテン意天を見よ、

ホーニイン 法爾院　インクー印空を見よ、

ホーニン 法仁 一九二五 一〇一二 〔眞言宗〕京都六勝寺の檢校なり、法仁は後醍醐院の第十皇子、正中二年に生る、曆應元年出家し、觀應元年法守に從ひて灌頂し、二年二品に叙し、六勝寺の檢校に補す、文和元年十月二十五日寂す、壽二十八(仁和寺御傳)

ホーニン 法忍 (一三四七) 〔……〕天武天皇の朝の僧なり、法忍朱鳥元年六月に義照と共に養老の爲め各封三十戶を賜はる、事蹟詳ならず、(日本書紀)

ホーニン 法忍　ジョーギョー淨業を見よ、

ホーニヨ 法如　コーセン光闡を見よ、

ホーニヨー 法饒　ヱカイ慧海を見よ、

ホーネン 法然　ゲンクー源空を見よ、

ホーホー 法方 (……) 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、法方字は中圓と云ふ、大喜に參して法を嗣ぎ、建長寺に主となり、法化盛んなり、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ホーホン 法本 (一八七二) 〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、法本字は行空、美作の人なり、源空上人の下に淨土敎を受け、後同門成覺に與し、一念義を唱へ、遂に擯出せられたりと云ふ、示寂の年月日缺く、(淨土總系譜)

ホーマンイン 法曼院　ソージツ和實を見よ、

ホーミヨー 法明 (一九一二) 〔曹洞宗〕羽前玉泉寺の開山なり、法明字は了然、一號は弘章と云ふ、高麗國の人なり、幼にして、出家し、長して宋に遊び、徑山の無準範に參す、嘗て東方に佛地ありと聞き東渡の志あり、遂に淳祐七年商船に乘して來り、京師幷に關東に周遊す、後東羽に至り、羽黑の神社に詣し、歸途善見村に至り山川の奇絕を見て草廬を結び棲住す、道俗禪林を營造し師を請す、後に玉泉寺と云ふ、建長三年三月十八日一夕一老人有りて道元禪師の化風を告く、師即ち往て禮謁し大に悅ぶ、刺史大泉の藤原氏之を聞て力を盡して諸宇を造營す、師此處に來てより一坐三十餘年、足門を出でず、遂に寂す、示寂の年月日缺く、(日本洞上聯燈錄)

ホーミヨー 法明　オンカク恩覺を見よ、

ホーミヨー 法明尼 (一三一六) 〔……〕山城山科寺の尼なり、法明尼は百濟の人にして皈化せり、齊明天皇二年內大臣鎌子病に寢し、天皇軫憂したまふにあたり、奏して曰ふ、維摩詰經は疾を問ふによりて法を說く、今試に內大臣のために讀誦せむ、と、天皇詔して讀誦せしめ給ふ、尼即ち山階陶原なる鎌子の家に至りて讀誦す、未だ卷を終らずして病即治す、天皇並に諸臣大に悅ぶ、是れ後世の維摩會の濫觴なり、示寂の年時缺く、(多武峯緣起、元亨釋書、本朝高僧傳)

ホーニヨ 法如尼 (一四二三) 〔……〕大和當麻寺の尼なり、法如尼は右大臣藤原豐成の女、中將姬と呼ぶ、天平寶字六年六月穢惡の境界を脫し、極樂世界に生ぜんと願求して當麻寺に參詣し、念佛を稱へて行住坐臥惰らず、遂に剃髮して同寺に住す、一時觀無量壽經曼陀羅を織らんとするの願を發す、一人の禪尼一人の織女と共に來り、禪尼は蓮を以

て絲となし、寺の巽方に井を堀り、蓮絲を以て五色と成す、織女は絲を取りて堂の乾方に寄りて阿彌陀淨土の變相一舖を織る、此淨土變相圖天平寶字六年六月二十三日に至りて成れり、後稱贊淨土經一千卷を寫して縷繡せる百袋に盛れりと云ふ、寂年缺く、（當麻曼陀羅跋文、尊卑分脈）

ホーミヨーボー 法明房　リヨーソン良尊を見よ、

ホーモク 法穆 一九四か 二〇二一 〔臨濟宗〕備中呑海寺の開山なり、法穆字は靈岳、俗姓藤原氏、備中隼島の人なり、七歳父を喪ひ、出家の志あり、某寺に投ず、十三歳閑谷雲禪に師事す、十七歳上京して廣仁寺に留り、尋て鎌倉に下り、淨智建長の諸寺に留まり、太平準、一山寧、清拙澄、明極俊に歴事して精究す、後萬壽普門の諸寺に留まり、乾峰に依る、當時京師の地騷擾し、盜賊衢に滿つ、僧侶難を避けて離散す、師獨り普門寺に留る、一日盜賊闖入白刄を以て脅す、師毫も懼る色なし、盜賊什具等を掠奪し去る、師乃ち土地神を呵して曰ふ、我佛法のために軀命を惜まず、爾の責尸素にあり、と、木偶を取りて壁間に貶向す、三日の後盜賊來り什具等を返附す、時人相傳へて土地神の靈異なりとす、東福寺に岡山鞏あり、師其下に留り、門下衆僧の首となる、尋て備中願成寺に遷る、文和の末菩提院に留り、朝峯の印記を受く、肥州救鹿山に登りて菴居す、日々樵夫が一椀の芋羮を供養せられ、山を下らざること八年なり、禪坐動かざること、五日に至ることあり、里人相傳へて神となす、備中の信藏寺に遷り住し、尋て箕島に呑海寺を開く、延文三年備中常道寺より請せるも出でず、藤原亟相東福寺の席を以て請するも同じく出でず、脚疾あるを以て辭す、康安元年十二月十三日示寂す、壽七十三、臘五十六、遺偈あり、向上向下、背後面前、末後一句、先聖頂邊、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホーヨ 法譽（二二四三）〔淨土宗〕京師西光寺の僧なり、法譽其氏族を知らず、出家して豐臣秀吉の愛妾松丸殿の歸敬を受く、始め京師西光寺に住し、大に法化を敷く、後に東光寺に住す、示寂の年月日缺く、（鎭流祖傳）

ホーヨ 法譽 二一七一 〔淨土宗〕京都知恩寺第二十一代なり、法譽は善蓮社と號す、日野の豐光の息にして法を善譽良敏に嗣ぐ、知恩寺に住し、第二十一代となり、永正八年十月二十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ホーヨ 法譽　カクゲン覺玄を見よ、

ホーヨ 法譽　チソー智聰を見よ、

ホーヨ 法譽　チヨーヤ潮也を見よ、

ホーヨ 法譽　ネンコー念光を見よ、

ホーヨ 法譽　ネンム念無を見よ、

ホーヨ 法譽　チコク智穀を見よ、

ホーラン 法蘭　エンモン圓門を見よ、

ホーリン 法霖 二三五三 二五〇一 〔眞宗〕近江正崇寺の學僧なり、法霖元の名は慧琳、號は日溪、別號は松花子、俗姓は雜賀氏、紀伊關戸の人、幼にして鄕學に入り、奇才を以て稱せらる、十七歳鷺林別場に薙髮し、十九歳選擇集を講す、高野山の僧法華經疏を講するに方り、師大衆に加はりて聽く、後、本山の命を受けて南麟と共に伊勢廣瀨に到り、鷺林別場に住すること三年、邪義を破り、大に名を知らる、京都に入るに及ひて

諸學匠に參詢して宗要を研究し、二十七歳學黌に入り、桃溪を禮して師事し、副講に擧けらる、正崇寺の席を董す、京都松尾に僧鳳潭なるものあり華嚴を宗とし天台を兼ね、念佛明導劄を作りて淨土敎を貶す、師折衝編を作り之を破る、尋んで鳳潭雷斧を作り、師笑螂臂を著して相論難し、大に宗風を揚く、寛保元年十月十八日寂す、壽四十九、師身長七尺二寸古貌軒昂たりきと云ふ、龍谷桃溪の墓側に葬む る、法主謚して演暢院といふ、紀伊の南麟は其門弟なり、著作無量壽經標宗記、淨土論遊刃記、選擇集科、高僧和讃望㴱記、正像末讃科、學則、鳥語、獨語、淨土眞宗傳佛心印記、辨賀讃遺事、大利无上辨、當流本尊辨、十二光義、法華念佛同時辨、古數奇屋法語、鷺森御堂再建記、日溪詠錄、各一卷、觀經述要、阿彌陀經聖淨決、淨土折衝編、各二卷、無量壽經要解、正信偈捕影記、二門偈窺班錄、眞宗秘要、日溪自問書、各三卷、文角聚鈔蹄涔記四卷、笑螂臂五卷、選擇集諳記七卷、淨土和讃望㴱記九卷、含華未出記、方便法身義、小兒往生記、各若干卷あり、（龍谷講主傳、本願寺通記、清流紀談、本願寺派學事史）

日溪法霖師

ホーリン　法霖　二四二三／二四八九　〔眞宗〕伊勢須川村本樂寺の住持なり、法霖は伊勢の人なり、眞宗高田派の講師に任す、文政十二年六月十九日寂す、壽六十八、大相院と號す、

ホーリン　法霖　セーハン誓般を見よ、

ホーリンイン　法霖院　ニチショー日性を見よ、

ホーリヨー　法梁　二四四八／二五一四　〔眞宗〕伊勢三日市攝取院の住持なり、法梁は遊泉院と號す、伊勢の人、眞宗高田派の講師となり、權少僧都に任す、安政元年八月十七日寂す、壽六十七、

ホーレン　法蓮（……）　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、法蓮は奥州の人、元興寺に住して最勝王經を業とす、勝光と共に道交篤し、寂年、及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

ホーレン　法蓮（一三八一）　大和の醫僧なり、法蓮は醫術に通ず、文武天皇三年七月醫術を賞して豐前國の野四十町を賜ふ、元正天皇養老五年六月に詔あり其道行を賞せらる、其詔に曰ふ、沙門法蓮心住ニ禪枝一、行居ニ法梁一、尤精ニ醫術一、濟ニ治民苦一、善哉若人何不ニ褒賞一、其僧三等以上親賜ニ宇佐君姓一、と示寂の年時缺く、（續日本紀）

ホーレン　法蓮　シンクー信空を見よ、

ホーレン　法蓮　ニチレー日禮を見よ、

ホーエー　方裔　一九九四／二〇七四　〔臨濟宗〕下野淨因寺の開山なり、方裔字は偉仙、下野の人、結城政光七世の孫國田光氏の

子なり、建武元年八月十五日生る、二歳にして父戰爭に死す、師六歳の時、父の死山を開き、出家の志あり、郡の鑁阿寺明範阿闍梨の下に童役をなす、十六歳落髮し、比叡山の戒壇に登る、歸來範阿闍梨の下に兩部の秘奥を究め、華嚴、法華、倶舍、戒律等を兼修す、十九歳にして忽ち謂ふ、三學富むと雖心地明めずむば、何を以てか生死を出離せむ、乃ち圓覺寺大喜忻に事ふ、五年にして契悟せず、常陸法雲寺復菴己に見へて參究功あり、法を嗣ぐ、下野の補陀山(日光山)に登り、中禪寺に留る、三年にして老母を省す、鑁阿寺住持榮濟の請により、同寺に法華經を講ず、是れ國內講經の始なりと云ふ、下野前守小山義政の請により、四十三章經を講ず、尋て常陸の筑波、下野の樺崎、洛山に寓し、三たび三藏經を閱す、永和三年行道山に登り、淨因寺を捌立す、大衆の請により、華嚴、法華、楞嚴、圓覺等の諸經を講ず、また白蓮社を設けて淨業を修す、應永十五年伊豆國清寺延請するも出でず、淨因寺に幽棲す、應永二十一年正月廿五日寂す、壽八十一、坐夏六十五(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ホーガイ 方涯 ゲンケ=元圭を見よ、

ホーコ 方壺(……)〔……〕武藏江戶の奇僧なり、方壺は鄉貫詳ならず、一說に江戶の人と云ふ、少時父の讎を復して僧となり、詩酒に放浪し、醉へは瓢を叩いて高吟し、倦めは路上に困臥し、群犬圍繞して吠れは師亦和して吟す、林鶴梁相交り其性行を記す、(鶴梁文鈔)

ホーゴン 方嚴 一四一二 二四八八 〔臨濟宗〕三河無量壽寺の中興なり、方嚴字は祖永と云ひ、一に曇瀞と云ふ、賣茶翁と號す、自在菴梅谷とも號す俗姓笠原氏筑前福岡の人なり、二十歳出家し京都妙心寺に投じ、尋いて鎌倉圓覺寺に投じ、禪を參究し、深く賣茶翁元昭の風を慕ひ、茶具を負ひて行脚し、隨處に茶を煎して客に供す、晚年三河八橋の在來寺に留り、尋て無量壽寺の廢頹を興す、紀伊大納言師の風雅を愛し、通仙翁の三字を書し贈る、文政十一年大納言に招かれ、江戶に遊び、病みて其藩邸に寂す、壽七十七、遺偈、山中春靜梵王家、木版聲終解結跏、七十年間總若夢、今朝落盡昨朝花、と(方嚴禪師傳)

ホーシュー 方秀 二〇二三 二〇八四 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、方秀字は岐陽、不二道人と號す、讃岐の人、俗姓は佐伯氏、母は源氏、康安元年十二月二十五日に生る、時に國中大に亂れ、父淸泰北越に走り、母師を携へて京師に入り、外祖父に依る、祖父儒を業とし、師に詩書を授くるに、師善く暗誦す、應安五年祖父卒するに及ひ、東福寺石窗泉禪師に從ひて侍童となり、翌年十二歳にして安國寺靈源淵和尙を拜して剃髮得度し、親炙八年、後、辭して相模壽福寺に掛搭して、諸禪寺に謁す、一年にして京都に皈へり、南禪寺に投し、南北の講席に遊ひて大小の經論を探究し、卅歳にして東福寺に歸へり、藏鑰となる、尋て後版より前堂に移つる、應永九年明の天倫彝禪師一菴如講主來朝す、師之に見えんと欲すれとも、官禁の爲めに果さす、屢々書を往來して其博才を賞せらる、將軍足利義持常に請して法要を問ひ、崇敬至りて渥し、初め讃岐の道福寺に主となり、次に京都の普門寺に住し、東福寺に移つる、入寺の日將軍より金襴の袈裟を贈らる、五十

入歲天龍寺の請に應し、俄に病に罹り、栗棘菴に退居し、後、南禪寺に登る、幾ならすして東福寺內に不二菴を築き、應永三十一年二月三日寂す、壽六十二、著作琴川錄、不二遺稿あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、自贊)

ホージユー 方充　ショーダ紹佗を見よ、

ホーシユーサイ 方舟齋　フゴン普巖を見よ、

ホーヘー 方炳 二三一六 二三八五 〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺十一代なり、方炳字は鐵文、淸の人、劉氏なり、出家して東瀾澤に師事し、元祿六年七月西來し、享保四年十一月黃檗山に進み、一住五年なり、享保十年十月十八日寂す、壽七十、(黃檗譜略)

ホーヨ 方譽　ノーシン能信を見よ、

ホーアン 寶菴　ショーサン祥參を見よ、

ホーウン 寶雲 二九〇七 〔眞宗〕筑前臼井長源寺の住持なり、寶雲は烏水と號す、筑前臼井の人なり、大乘の門人にして天保十四年五月司敎と爲り、同十五年七月員外勸學となり、弘化四年七月六日寂す、師南溪と同鄕たり、少壯の時南溪と同しく他山の講席に列し、講半にして南溪に謂ひて曰く、予去らんと欲す、今後講すへき義旨略ほ察知すへし、予復た聞くに懶しと、遂に去る、南溪獨り留まり講を終へ、後、細に師の言を思ふに、符節を合するか如し、是に於て南溪大に嘆服し自ら及ふへからすとなしたりと云ふ、著作易行品私記、本典好密、諸經和讃略記、開出三身章記、眞要鈔錄、閑論、十句義論記、八轉聲軌式、因明秘書、因明要義鈔、論藏、論所緣々論略釋、大乘掌珍論記、入阿毘達磨論記、宗輪論記、各一卷、觀經玄義分錄、本典折衷、正信偈錄、倶舍鈔、因明義斷錄、因明纂要錄、二十唯識記、各二卷、因明新疏四卷、倶舍精髓記五卷、梅洞由筆六卷、成唯識論講記、倶舍論講記、因明大疏講記、義林章講記、了義燈講記、解深密經講記、七十五法名目講記、唯識三十頌講記等若干卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

ホーウン 寶雲　エウン慧雲を見よ、

ホーキ 寶器　カイリヨー海量を見よ、

ホーキヨー 寶慶　ジヤクエン寂圓を見よ、

ホーグワツ 寶月 (……) 〔眞宗〕紀伊名草郡中島村西覺寺の住持なり、寶月は豐後竹田領明安寺住持某の三男なり、其仲兄救民と共に妙齡にして出遊し、始終筆耕等を以て僅に其資を辨せり、漢籍を帆足萬里、及ひ毛利格に受け、佛乘は戒定法雲に學ふ、智山豐山の諸德に從ひて倶舍唯識因明を研究し、比叡山に登りて梵網戒律等を習へり、寂後司敎を追贈せらる、(學苑談叢)

ホーグワツ 寶月　ウンドー雲堂を見よ、

ホーグワツ 寶月　フミヨー普明を見よ、

ホーケー 寶景　トーカイ東海を見よ、

ホーゴン 寶嚴 (二四四一) 〔眞宗〕讃岐西法寺の住持なり、寶嚴は讃岐の人、天明年間西本願寺下の功存の皈命辨を駁し、復興記を作る、然るに故あり寶嚴の名を署せす、三州善永と稱す、功存の徒竊に其版を購ひて燒棄す、師再び本願決を作りて功存に贈り、其徒の復興記の版を購ひて燒棄したる故を問へり、これより互に論駁せり、功存の徒再び本願

决の版を賭はんとして果さゝりきと云ふ、師後美濃の某寺に遷り、東本願寺下の宗風を擧揚す、寂年月日幷壽詳ならす、(清派紀談)

ホーゴン　寶嚴　コーリユー興隆を見よ、

ホーゴン　寶嚴　バンケー鑁啓を見よ、

ホーサン　寶山　エーシユー永秀を見よ、

ホーサン　寶山　ザンム殘夢を見よ、

ホーサン　寶山　スーチン崇珍を見よ、

ホーサン　寶山　タンカイ湛海を見よ、

ホーサン　寶山　フギヨク浮玉を見よ、

ホーシン　寶心　一七五二 一八三四　〔眞言宗〕山城醍醐山理性院の二代なり、寶心字は淨運、上野阿闍梨と稱す、賢覺の灌頂法を得、理性院の二代となる、後高野山に遁れ、承安四年九月一日寂す、壽八十三、(續傳燈廣錄)

ホーシユー　寶洲　一九八一 二〇四三　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、寶洲は號を南海と云ふ、上野世良田の人、俗姓は源氏、山名の族なり、七歳にして郡の長樂寺に投じ、桃源勤に從ひて剃髮受業し、長するに及び相模圓覺寺に掛錫し、竺仙仙不聞聞の二師に參し、十八歳中巖月と關西に往き、元に入らんとし、公府許さゝる爲めに果さず、貞和の初同志數輩と遂に海に泛ぶ、洋中に於て破船し、師一の大櫃に附て高麗に漂着し、國に歸りて圓覺寺に藏鑰を掌り、法雲寺の復菴天龍寺夢窻に參請す、山名時氏師の德望を慕ひ、伯耆に少室山少材寺報恩山光孝寺を剏し、美作に大義山理濟寺を建て、師を請して開山となす、貞治二年上野長樂寺に出世し、應安元年靈雲菴を構へて退居し、京都萬壽寺に住し、三年東福寺に遷り、晩年美作理濟寺に歸り、永德三年十一月二十九日寂す、壽六十三、塔を樹て增輝と云ふ、(本朝高僧傳、續群一二三七)

ホーシユー　寶洲　エーハン英範を見よ、

ホーシユー　寶洲　エンチヨー圓澄を見よ、

ホーシユーイン　寶聚院　ニチデン日傳を見よ、

ホーシユクシ　寶叔子　シユーゲン宗眼を見よ、

ホーシヨー　寶生　二〇〇三 二〇七四　〔臨濟宗〕上野泉龍寺の禪僧なり、寶生字は白崖、俗姓は橘氏、河内の人なり、稍長して金剛峰寺に登りて諸老に謁し、下髮して直に山を下り、關東に赴く、鎌倉に到り、淸隱寺の至一上人を拜して、具足戒を受け、去りて安房の虛空藏菩薩を禮し、得法の因緣を祈求す、後衣を更へて近江永源寺の寂室和尚に參し、久しくして契せす、辭して河内に歸へり、道吉野を過ぎ、風の竹を動かす聲を聞きて怳然省あり、即ち歸へりて寂室に告げ、服勤すること四年、寂室の寂するに及ひて越後の月堂心に參し、幾ならすして月堂寂す、會々大拙能和尚元より歸へり、上野の吉祥寺にありて盛に千巖の禪を弘む、往て謁し、機語契せす、工夫參禪戸を出てさるもの三年、大拙圓覺寺に移つるに際し、中路に逆へて之を叩くも、語尚契せす、尋いて日光山に入り、一日粥を煮るに鍋忽然割る、其音を聞きて豁然大悟す、時に三十一歳なり、遂に大拙の印可を蒙り、其論誡を奉じて十三年間深く韜晦し、開法せさらんことを期し、拔隊勝、特峰奇、月菴光、通幻靈、無著融、武藏の西堂達、土佐の林藏主等の五十五人の者宿に謁し、後筑の正傳精舍に寓す、去りて高麗

寺より若狹に遊化し、武藏に抵り、秩父某の請を受けて興禪寺に住す、同地の日奏氏圓福寺に迎へ上野那波の大江氏泉龍寺を剏して師を開山となす、應永二十一年九月七日寂す、壽七十二、臘五十三、勅して普覺圓光禪師と謚す、（本朝高僧傳、龍門夜話、續二三九）

ホージョー　寶乘　エンシキ圓識を見よ、

ホーショーボー　寶生房　キョージン教尋を見よ、

ホーゾーイン　寶藏院　ニチヂョ日叙を見よ、

ホーチン　寶珍　シューチン宗珍を見よ、

ホーテー　寶鼎（二三八六―二四六二）〔曹洞宗〕常陸祇園寺の禪僧なり、寶鼎は東海と號し、不豚と字す、其鄕貫詳かならず、水戸祇園寺に住し、畫法を櫻井小與に學び、花鳥人物に巧みなり、戯れに河豚魚を寫す、世に東海の河豚と稱して大に行はる、享和二年十月三日寂す、壽七十七、（逸人畫史、近世高僧年表）

ホーボダイイン　寶菩提院　ゴーチン豪鎭を見よ、

ホーヨ　寶譽　クテン舊典を見よ、

ホーヨ　寶譽　ヂンカイ尋海を見よ、

ホーヨ　寶譽　リンザン林殘を見よ、

ホーエー　豐榮（一五三一）〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、豐榮法相宗に歸し、維摩會講師を經て傳燈大法師位に任す、貞觀十二年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ホーガク　豐嶽（……―二二七五）〔淨土宗〕但馬西林寺の開山なり、豐嶽は尊蓮社旭譽、存阿と號し、相模三浦の人、其俗姓詳かならず、虎角に師事して淨土教を學び、遂に其法を嗣ぐ、但馬竹原野に西林寺を剏して法化を布き、元和元年十一月十九日寂す、壽寂く、（淨土總系譜）

ホーゴクホーシ　豐國法師（一二四七）〔……〕百濟の歸化僧なり、豐國法師用明天皇の朝豐後國に隱る、故に豐國法師といふ、其名缺けて傳はらず、天皇の二年四月に召されて宮中に候す、後廐戸皇子攝津駒ヶ嶽に中山寺を開き法師を請したりといふ、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）

〔考〕日本書紀には穴穗部皇子が法師を引きて宮中に入れることを載するも、法師の事蹟一も見えず、本朝高僧傳は中山寺記によりて一二の事蹟を揭ぐ、今姑くこれに從ふ、

ホージュ　豐壽（二〇九五―二一六一）〔曹洞宗〕下總最乘寺の開山なり、豐壽字は龜阜、近江の人、俗姓は源氏なり、幼にして新豐寺雪叟を禮して得度し、游方して慈眼寺の希明に依り、研究すること多年、又新豐寺に歸へる、時に天叟祖寅席にありて化門甚だ盛なり、師入室して印記を受け、文明十四年請を受けて總持寺に住す、下總の太守藤原顯泰越中を領し、師を請して瑞泉寺に住せしむ、後、檀越最乘寺を剏して師を開山とす、文龜元年正月五日寂す、壽六十七、臘五十六、法嗣獨歩慶順あり、（日本洞上聯燈錄）

ホーシュン　豐春（……）〔新義眞言宗〕大和長谷寺の學僧なり、豐春鄕貫詳ならす、豐山に學び、異義を骨張して大衆に逐はれ、大念佛寺に潜み、論草を草したりと云ふ、寂年幷に壽缺く、著作大日經專心鈔九卷あり、（新義眞言宗史料）

ホーシュン　豐春　ケンジュン謙順を見よ、

ホースイ　豐水　ドーシン道振を見よ、

ホーネン　豐然（一五六一）〔眞言宗〕美濃谷汲寺の開山なり、豐然は大乘經を習ひて深く圓通の理を信す、遊方して延曆中美濃谷汲に到り、寺を建て十一面觀世音像を安す、延喜中朝廷寺額を賜ひて華嚴といふ、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ホーヨ　豐譽　リヨーオー靈應を見よ、

ホーリユー　豐隆（二一六六……）〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、豐隆字は幾年、加賀大乘寺、紹嶽堅隆の法嗣にして、其席を踵き、永正三年八月二日寂す、壽缺く、法嗣提室智闇あり、（日本洞上聯燈錄）

ホーエン　峯筵（一五〇四　一五八三）〔天台宗〕山城鞍馬寺の僧なり、峯筵は東寺の十禪師の一なり、延長元年六月二十日寂す、壽八十、（本朝高僧傳）

ホーオー　峰翁　ソイチ祖一を見よ、

ホーシク　峯宿（一五八六）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の學僧なり、峰宿は其俗姓生國及師承を詳かにせず、延長四年東寺の長者濟高僧正金剛峰寺の座主を兼ね、朝に奏して曰く、紀伊京都遠隔にして山中の事を辨し難し、故に偉器を撰んで執事職を置んと、師衆議により其職に任ず、これ高野山執事の初めなり、寂年、及壽缺く、（本朝高僧傳）

ホーゼン　峯禪（一五六九）〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、峰禪初め眞然に從ひて剃染受教し、聖寶に就きて灌頂法を禀け、大和大安寺に住して秘密教を布く、時に金剛峰寺無空の退隱後日に荒蕪す、師衆選に應して座主職に補し、常に興建の志あり、祈親上人亦到り共に力を合せて遂に舊觀を復す、寂年、及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ホーアン　芳菴　ソゴン祖嚴を見よ、

ホーエー　芳英　ホージユ芳樹を見よ、

ホーギン　芳誾（二四二七　二四九七）〔眞宗〕伊勢河藝郡池田養元寺の住持なり、芳誾は大敬院と號す、長谷寺の慈光房隆山法印に倶舍唯識を學ふ、講師に任す、天保八年十一月七日寂す、壽七十一、

ホーキヨー　芳鄕　コーリン光隣を見よ、

ホーサン　芳山　ゼンイ善意を見よ、

ホージユ　芳樹（……）〔眞宗〕紀伊川邊村正念寺の住持なり、芳樹字は芳英といひ、諡を圓覺房といふ、紀伊有田郡箕島村の人なり、村の淨應寺に於て剃髮し、後、名艸郡川邊村正念寺に住持す、倶舍唯識は根來山の智幢に學ひ、天台は高野山の僧某に學ひ、華嚴は淨土の經歷に學ひ、宗乘は桃花房に受けて入僧中の隨一となると雖も、安藝の問難あるに及ひて、竊に其允當に服せり、東廳の示諭に接するや即時に正義を受得し、回心狀を呈し、爾來毫も餘臭を帶ひさりしと云ふ、晩年攝津二茶屋の喜福寺に閑棲し、同寺に寂す、普天、覺巖、淨眞等皆師の門より出つ、著作阿彌陀經丁丑記二卷、遊心法界記錄、安塵還源觀錄各三卷、華嚴探玄記錄二十四卷、孔目章錄若干卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ホーシユー　芳洲　シゼン至善を見よ、

ホーシユクイン　芳淑院　リゼン履善を見よ、

ホーシユン　春芳　センカイ専戒を見よ、

ホーシヨー　芳勝　二五〇〇／二五五六　〔新義眞言宗〕山城智積院第四十五代なり、芳勝字は純賢、越後國三島郡深澤村の人、俗姓は船岡氏、高頭澤太郎の三男なり、天保十一年正月二十日を以て生れ、十三歳にして州の小千谷慈眼寺芳須和尚の下に投じて剃髮し、十八歳灌頂を五智院英澄上人より受け、尋で京師に上り、智積院に掛錫して隆榮、弘現、義範等の諸師に顯密教相を學ぶ、隆榮、芳須、宥性の三師に小野廣澤諸流の蘊奥を究む、明治初年化主の命を蒙り、講筵を開きて學徒を教授す、會〻一山瓦解して大衆皆離散したれども、師獨り依然として留る、後奈良に往きて登壇受具し、十二年大講義に補し、十六年田川弘誓寺に灌頂壇を開く、二十年兩山の化主に推され、大學林講師となり、僧正に任せらる、慈眼寺、弘誓寺、五智山等を經て二十九年智積院能化となり、權大僧正に任し、兼ねて大學林主管となる、同年九月進山の式を行ひ、尋で東上し、主管交替の式に至りて疾を發し、眞福寺に寂す、時に明治二十九年十一月五日なり、壽五十七、臘四十五、遺命により骨を分ちて本山及五智山に塔す、宗長者大僧正を贈る、著作十卷章私記十卷あり、（新義眞言宗史料）

ホータク　芳澤　ソオン祖恩を見よ、

ホーテー　芳庭　ホーキク法菊を見よ、

ホートン　芳暾　二二三五／二二一八　〔曹洞宗〕能登菩提寺の開山なり、芳暾字は朝山、肥前島原の人、俗姓は西郷氏なり、十九歳溫泉山に投して薙髮し、專ら天台を學ふ、尋て禪門に入り、諸宗席に遊ひ、豐前大寧寺に往き、足翁永滿に參し、其法を嗣き、享祿四年保福寺に出世し、遂に總持寺に升る、天文十四年深堀の郡主金谷の菩提寺を更めて禪刹とし、師を第一代とす、晩年蚊燒山に逸老す、永祿元年四月一日寂す、壽八十四、法嗣領山英頓あり、（日本洞上聯燈錄）

ホーニン　芳仁　リユーキ隆基を見よ、

ホーヨ　芳譽　エニン慧仁を見よ、

ホーヨ　芳譽　センサツ泉察を見よ、

ホーアン　鳳菴　エーリン英麟を見よ、

ホークワン　鳳冠　（二五二七）　〔眞宗〕越後蒲原郡西崎蓮德寺の住持なり、鳳冠は五明院と號す、寬政七年越後の小吉村圓明寺に生れ、文化十四年蓮德寺に入る、嘉永元年六月老母病床にあり、諸子看護す、一日疾革る諸子遺言を問ふ、老母曰ふ我れ娑婆に出てゝ恨なし、唯男兒四人ありて三講者の一人たる者なし、是を遺憾とすと、諸子涕泣して答ふるなし、師時に五十四歳なり、慰諭して曰ふ、意を勞したまふなかれ、小僧今より期して必す三講者の一人となるべし、と、爾來專ら學問を勉勵し、安政四年初めて高倉學寮に成唯識論を講し、爾來義林章、因明大疏等を講す、慶應三年正月（一傳二年三月二十二日）擬講となり、句あり「おくれても咲く時は咲く梅の花」、同三年十月一日寂す、壽七十三、

ホーケン　鳳健　二五一四……　〔新義眞言宗〕大和長谷寺の學僧なり、鳳健字は光隆、鄉貫詳ならす、豐山に登り、學名高く、著作を事とす、安政元年八月十九日寂す、壽缺く、著作略攝八轉義講義、西谷名目補翼、因明照量記、各三卷、西谷名目玄談、同有体無体辨、倶舍圖記、四明十義書不忘記、唯識三類境科文、因明大疏席助解、同瑞源記發揮私記、十句義

府骨、各一卷あり、

ホーサン　鳳山 二四四一／二四九四 〔融通念佛宗〕大和吉野極樂寺第十五代なり、　鳳山字は靈脊、號は常說といふ、河内花田鄉船堂の人なり、俗姓は山本氏、父を幸輔といふ、寬政八年十二月十六日を以て生る、甫めて十三歲通關に從て得度し、宗學を研究す、文化十一年二月通關の跡を董す、文政年中大源山講主となり、眞光院と稱す、師辯舌に長し世人、稱して富樓那といふ、天保五年二月廿日寂す、壽五十四、臘四十二、著作融通春鶯辨六卷あり、

ホーサン　鳳山　トーゼン等膳を見よ、

ホーシユ　鳳樹　ダイケン大賢を見よ、

ホーセキ　鳳積 二一九八 〔曹洞宗〕遠江安興寺の開山なり、　鳳積字は雪窓、奧州の人、清和帝の後裔なり、幼年にして松島瑞巖寺に投じて落髮し、後、具足戒を受け、乾坤寺の逆翁、大洞寺の以翼等の諸老に遍參し、遂に洞壽寺然室與廓に參して侍司となり、次に分座說法す、永正十年命を受けて近江洞壽寺に主となる、遠江の龍穴寺を再興して、更めて永江寺と號す、安興寺を剏して開山となる、再び洞壽寺に歸へり、大永六年の旱魃に際して雨を禱り効驗あり、天文六年職を辭して永江寺に退き、同七年八月十三日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ホーセン　鳳千 二五〇〇 〔眞宗〕飛驒高山不遠寺の住持なり、　鳳千は寮司となりて、文政十二年より、高倉學寮に法華玄義摩訶止觀を講し、天保三年七月十日擬講となり、同五年以後十不二門指要鈔入出二門偈を講し、十一年四月廿二日寂す、（眞宗史料）

ホーレー　鳳嶺　トンヱ頓慧を見よ、

ホーキ　奉基 （一五四四）〔法相宗〕奈良元興寺の僧なり、奉基俗姓不詳、諸部に通達す維摩會講師となり、元慶八年に最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ホージツ　奉實 一三九七／一四八〇 〔法相宗〕大和大安寺の學僧なり、　奉實俗姓は荒田氏、尾張の人なり、大安寺に居りて性相を學び又瑜伽を學ふ、弘仁十一年寂す、壽八十四、（本朝高僧傳）

ホーチヨー　奉張　カイリヨー海量を見よ、

ホーヨ　奉譽　シヨーデン聖傳を見よ、

ホーオン　報恩 一四五五 〔……〕大和子島寺開山なり、報恩は備前津高の人なり、十五歲にして家を離れ、三十歲にして吉野山に入り、大悲呪を持すること四五年、數々靈感あり、天平勝寶四年孝謙天皇不豫の際詔により病を禱り、即ち癒ゆ、師時に小沙彌たり、勅により出家し、天皇より今の名を賜ふ、後山に歸へり益々持念を勤む、桓武天皇長岡の宮に微恙の時師亦宮中に召されて根本呪を修す、後、吉野山に歸へる、天平寶字四年三月大和の子島に寺を剏し子島寺と稱して居る、延暦十四年六月寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ホーセン　報扇　チオン智恩を見よ、

ホーヨ　報譽　リユーサン龍山を見よ、

ホーザイ　放濟 （……）百濟の歸化僧なり、　放濟西來の年時缺く、百濟兵難に罹る、勅を拜して備後三谷郡主某往きて救ふに際し、誓願して曰ふ、若し軍功を得ば寺像を造

立せむと、旣にして凱旋し、盛に寺像を造立す、師其請により、倶に力を竭す、京師に上り造立の用に供せむか爲に、金丹等を求め歸る、途中難波津に出づ、偶大龜を賣る者ありたれば、三尾を購ひ放つ、舟備前の骨島を過ぐ、夜中舟子等相謀り金丹を奪はむとして師を海に投す、俄に三龜あり、師を負ひて岸に登る、其後人あり金丹を賣りて郡主某の家に至る、師家にあり熟視すれば前の舟子なり、舟子師を見て惶恐首伏す、これより師海岸に住して敎化を事とす、八十餘にして寂す、(日本靈異記、本朝高僧傳)

ホーギユー 放牛 コーリン光林を見よ、

ホーギヨク 抱王 エリン慧淋を見よ、

ホーシツ 抱質 ソーモク僧樸を見よ、

ホーセツ 抱拙 カクゲン覺眼を見よ、

ホーシユク 邦淑 クワイカン快侃を見よ、

ホーシユク 邦叔 シユーテー宗楨を見よ、

ホーアン 呆菴 テンシヨー天章を見よ、

ホーウ 葆雨 ドーチユー道忠を見よ、

ホーガン 包含 ドーキヨー道敎を見よ、

ホーゲン 逢源 シユーゲン宗源を見よ、

ホージユ 彭壽 二一八六 〔曹洞宗〕相模最上寺の禪僧なり、彭壽字は普山、武藏川越城主某の子なり、俗姓は藤原氏なり、甫めて十三歲天菴玄彭に依りて下髮し、服勤多年、其法を嗣ぎ、總持寺に出世し、次に喜州の席を踵きて靑松寺に遷る、永正十年最乘寺に移り、再び靑松寺に歸へる、上杉朝興心歸し、田莊を寄附す、大永六年六月一日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ホーメー 鵬溟 リゼン履善を見よ、

ボーイン 房印 ボーギヨー房曉を見よ、

ボーエン 房圓 (一九一七) 〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、房圓俗姓は藤原氏、后宮大夫成經の子なり、仁和寺の覺敎僧正に師事して傳法灌頂を禀け、眞乘院に住す、師最も密學に精通し、寬喜元年權少僧都に任ず、建長元年朝召を奉して軍荼利の法を修し、即日法驗ありて阿闍梨二人を住房に置くを許さる、五年夏五月東寺の長者を司とり、權僧正に進む、正嘉元年春東寺を領し、法務を兼ぬ、九月僧正となる、寂年並に壽缺く、(本朝高僧傳)

ボーカイ 房海 (一九五〇) 〔眞言宗〕紀伊高野山智惠門院の僧なり、房海字は覲烈といひ、中將學士と稱す、左近衞權中將源有房の子、母は中房氏忠順の女なり、十九歲にして松橋に入りて傳法職位を受け、平生高野山にありて苦修す、後智惠門院と號し、正嫡にあらざれども尙房の法を受く、睿尊信西雅房と共に松橋の四王と稱せらる、(續傳燈廣錄)

ボーカイ 房海 一九七六 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、房海は俗姓藤原氏灘波三品宗敎の子、房源圓審二師に就きて三學に通し、文永八年登壇す、正和五年八月三日寂す、(三井續燈記)

ボーギヨー 房曉 一九〇一 一九六九 〔天台宗〕近江園城寺の探題なり、房曉初の名は房印といひ、房喜敬宗幸尊の諸師に就きて台密を究め、兼ねて儒家に通ず、永仁四年三月入壇し、三井探題を經て、四宗證議者となる、延慶二年十月二日寂す、

壽六十九(三井續燈記)

ボーゲン 房源 一八六八/一九四六 〔天台宗〕山城長福寺の別當なり、房源は出家して圓順現舜二師に學び宗義に長す、建長六年六月の會に立義者となり、題者を勤む、後大學頭となり、遂に長福寺、及び若王子の別當に補す、弘安九年九月五日寂す、壽七十九(三井續燈記)

ボーゲン 房玄 二〇一一 〔眞言宗〕山城醍醐山清淨光院の大僧都なり、房玄は其俗姓を詳かにせず、夙に醍醐山の法を學び、德治二年四月二十日職位傳法を内大臣親玄僧正に受け、又覺洞僧正の門を叩き、遍智院僧正の燈を續く、清淨光院に住し、觀應二年十月十五日寂す、付法一人親惠といふ(續傳燈廣錄)

ボーコー 房光 一七七五/一八三九 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、房光は紀伊和佐縣の人なり、北室の兼賢に從ひ、瑜伽法を受け、北室の席を續きて密教を說く、承安三年高野山の檢校に補し、治承三年八月二十三日寂す、壽六十五 法弟明善覺善の二人あり(本朝高僧傳)

ボーシン 房深 一九八八/二〇六〇 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、房深は顯密戒三道に通し、康曆至德の間宸筆八講あり、共に初座に侍す、題者證義者大阿闍梨大學頭に歷遷し、勅により房號を捨て丶院號に改む、應永七年七月廿七日寂す、壽七十三、(三井續燈記)

ボージユン 房淳 一九九五/二〇六〇 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、房淳俗姓は源氏なり、出家して顯密の要義を學び、入壇灌頂の後、四宗證義三井題者別當大學頭の諸職に歷任し、應永八年二月廿一日寂す、壽六十六、(三井續燈記)

ボーショー 房聖 一九八三/二〇五六 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、房聖は但馬の人、元亨二年五月廿三日に生る、十七歲にして剃髮し、房仙、泉尊、慈誨、泉惠、朝幸の五師に歷事し、十九歲登壇す、廿一歲初めて法勝寺八講の聽衆に加はり、廿八歲入壇灌頂す、永和元年五十四歲にして僧正に任し、大阿闍梨となる、屢々御講の證義者となり、本寺の別當並に題者に補す、應永三年十一月十四日寂す、壽七十四、(三井續燈記)

ボーセン 房仙 一九四九/二〇二四 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、房仙初の名は房宣、但馬の人、正應元年二月二十六日に生る、正安二年出家受具して光喜、賢文、淨雅、幸尊、房曉、鐵菴の諸師に業を受け、正和二年十二月已講となり、五年正月權律師に任す、十一月入壇し、貞和四年四月權僧正に轉し、文和三年及び延文三年に共に大に昇る、平生著書多し、貞治三年閏正月二十四日寂す、壽七十六、(三井續燈記)

ボーセン 房宣 ボーセン房仙に同し

ボーチコー 房忠 (一五四三)〔法相宗〕奈良興福寺の僧なり、房忠俗姓不詳、法相宗に精し、維摩會の講師となり、元慶七年に最勝會講師となる、同年十月七日に勅して諸宗の學德廿九員を召し、仁壽殿に於て宗乘を論義せしめらる、東寺眞然 源仁、東大寺玄津 祥勢、藥師寺義叡等皆與る、師亦其一員なり、權律師に任せらる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ボーノー 房能 二〇二四/二一一〇 〔天台宗〕近江園城寺の學僧な

り、房能初の名は光能、俗姓は源氏、亞相親光の孫なり、出家して勸學院の衆に列し、定助房譽朝圓の諸師に學を受け、四宗證義者三井題者となる、應永三十一年園城寺別當に補せられ僧正に昇り、寶德二年二月二十日寂す、壽七十七、（三井續燈記）

ボーヨ　房譽　二〇〇二　二〇八〇　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、房譽は台密兩宗を兼學し、四宗證義者三井探題別當大學頭に歷任し、應永廿七年十二月十五日寂す、壽七十九、（三井續燈記）

ボーズボツカイ　坊主墨海　センカイ詮海を見よ、

ボータイシ　帽袋子　シューゲン宗玩を見よ、

ホクガン　北巖　インシュー寅嘯を見よ、

ホクコー　北高　ゼンシユク全祝を見よ、

ホクテン　北天　モクヨー默耀を見よ、

ホクメーシ　北溟子　チョーコン長鯤を見よ、

ボクアン　墨菴　ダイニン大任を見よ、

ボクイン　墨隱　二四四六……　江戸の書僧なり、墨隱は右山と號す、俗姓は駒澤氏なり、書を周文に學び、佛書に秀づ、天明六年八月二十日寂す、壽缺く、今戸養禪寺に葬る、（扶桑書人傳、江戸名家墓所一覽、鑒定便覽）

ボクイン　墨隱　ショートー紹等を見よ、

ボクサイ　墨齋　ショートー紹等を見よ、

ボクデン　墨田　ニチトク日德を見よ、

ボクアン　朴菴　シューギョー宗堯を見よ、

ボクガイ　朴艾　シジュン思淳を見よ、

ボクチユー　朴中　ボンジュン梵淳を見よ、

ボクドー　朴堂　シュージュン宗淳を見よ、

ボクギユーシ　牧牛子　シューショー宗璋を見よ、

ホンア　本阿　ユーサツ祐薩を見よ、

ホンインボー　本因坊　ニチカイ日海を見よ、

ホンエ　本慧（……）〔淨土宗西山派〕鎭西某寺の僧なり、本慧は東井上人と號し、其俗姓生國詳かならず、出家して善慧證空の高弟淨音法興に師事して西山派の學を修め、鎭西に居住して弘化に勤め、本願鈔を作る、寂年、及壽缺く、（淨土總系譜）

ホンエン　本圓　カクオン覺遠を見よ、

ホンカク　本覺　二四三九　二四九八　〔淨土宗〕備後奈良津の僧なり、有覺號は還譽、俗姓は中原氏、備後加茂村の人なり、家農を業とすれとも、師夙に道心あり、阿彌陀佛に歸す、攝津勝尾寺に到り、德本上人に謁し、信解徹底す、上人本覺の名を命す、既にして鄕里に歸住し、耕耘稼穡の間念佛の聲を斷たす、遂に郡の專故寺に投して落髮し、法躰となる、奈良津村に菴居し、頭陀に露命を繋く、長門の法洲和尙に謁し、五重相傳を受く、天保九年四月福山に留り、當麻曼荼羅を講す、閏四月八日正念に命終す、壽六十、（續日本高僧傳）

ホンカクイン　本覺院　ニチヨー日陽を見よ、

ホンカクイン　本覺院　ニチエー日英を見よ、

ホンカクイン　本覺院　ニチゲン日玄を見よ、

ホンギイン　本義院　ニチユー日勇を見よ、

ホンギヨーイン　本行院　ニチヨー日遙を見よ、

ホンキヨーボー 本鏡房　ニチジヨー日淨を見よ、

ホンクー 本空 二〇四三…… 〔臨濟宗〕伊豫興福寺の開山なり、本空字は寂、俗姓不詳、孤峰明の法を嗣ぐ、伊豫の太守大野正公居士興福寺を創立して請す、永德三年七月十日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホンガン 本願　ジツハン實範を見よ、

ホンゲン 本元 一九四二 一九九二 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、本元字は元翁、佛國禪師を抑ぎて得度受具す、夢窓石と同參なり、正和二年美濃の古溪に遊び、其勝景を愛し、菴を營みて居す、夢窓南禪寺後董の詔を拜するや、本元を率ゐて京都に入る、師其俗を厭ひて比叡山に登り、醍醐山に隱る、雲衲追隨して敎を請ふ、嘉曆三年相模の萬壽寺に請せられ、元德の初後醍醐天皇の勅を拜して南禪寺に主となり、法化京師に盛なり、後正滴菴を創して屛居し、尋て古溪の舊菴に歸り、正慶元年七月四日寂す、壽五十一、遺偈あり、去不去、留不留、月西沈、水東流、瞎驢不會普化直裰、一鐸聲盡碧天悠悠　勅謚佛德禪師と云ふ、語錄一卷あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホンコ 本故　レキサン歷山を見よ、

ホンコー 本高 二四三九 二五〇七 〔曹洞宗〕三河香積院の禪僧なり、本高字は風外、伊勢の人、俗姓平氏なり、幼にして世俗に混せす、時々村寺に入りて書畫を愛玩して終日を消す、天明七年九歲にして州の廣泰寺に投し度を受く、後諸禪師を歷訊して參究し、遂に興聖寺玄樓奧龍に師事し、參究功あり、其堂奧に徹す、其後跡を晦まして長養年あり、文政元年の秋浪華の圓通院の請に應して大に寺門を興し、次に三河香積寺に轉し、專ら宗風を張り一大叢林をなす、玄龍の鐵笛倒吹一百則に著語して行ふ、後浪華烏鵲樓に老を養ふ、弘化四年六月二十二日寂す、壽六十九、（鐵笛倒吹附錄）

ホンコー 本興 二一九四…… 〔曹洞宗〕尾張雲興寺の禪僧なり、本興字は永山、正眼寺魁叟永梅の法を嗣き、尾張本興寺に住す、天文三年四月三日寂す、法嗣祥巖秀鱗あり、（日本洞上聯燈錄）

ホンコー 本光　クワツドー瞎道を見よ、

ホンコーイン 本光院　ニチカン日感を見よ、

ホンコーイン 本高院　ニチゴン日嚴を見よ、

ホンシン 本心　チヨーカイ澄海を見よ、

ホンジヤク 本寂　ムトー無等を見よ、

ホンジヤクイン 本寂院　ニチニヨ日如を見よ、

ホンジユー 本住　ゲンヱー元榮を見よ、

ホンジユーイン 本住院　ニチセン日選を見よ、

ホンジユン 本純 二三六二 二四二八 〔天台宗〕近江比叡山安樂院の學僧なり、本純字は守篤と云ふ、駿河府中の人なり、出家して比叡山に登り、安樂院靈空光謙に師事して解行双絕と稱せらる、明和六年四月十七日寂す、壽六十八、著作起信論裂網疏籤錄六卷、維摩詰經疏籤錄十三卷、金錍論本爾鈔等一百餘部あり、

ホンシヨー 本性（一九九一） 〔法相宗〕大和般若寺の僧なり、本性は鄕貫師承詳ならず、勇力を以て聞へ、後醍醐天皇の笠置山に幸するや、六波羅の兵來り、攻むること急にして城將に陷らんとす、適〻師官軍中にあり、大石を敵中に

投じ、敵の中りて死する者多く、其爲に賊退きて近よらざりきと云ふ、寂年、壽缺く、（本朝武功正傳）

ホンシヨー　本性　ゼンエ禪慧を見よ、

ホンシヨー　本照　シヨーユ性瑜を見よ、

ホンシヨー　本昌　ギテー義貞を見よ、

ホンジヨー　本淨　二〇一二……　〔臨濟宗〕甲斐棲雲寺の開山なり、　本淨字は業海、俗姓不詳、文保二年同志數人相携へて元に航し、中峰本に謁し、東皈の後諸方に歷遊す、貞和四年甲斐に菴居す、後改めて棲雲寺と號す、師十境を拾ひて詩を作る、（詩十首延寶燈錄に揭載す）蓋し其景元の天目山棲雲寺に似たるよりかく號したるなり、文和元年七月廿七日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホンズイイン　本瑞院　ニチエ日憙を見よ、

ホンゼイン　本是院　ニチリ日理を見よ、

ホンゾーイン　本藏院　ニチウン日運を見よ、

ホンヂイン　本地院　ニチシヨー日匠を見よ、

ホンツーイン　本通院　ニチイン日允を見よ、

ホンニヨ　本如　コーセツ光攝を見よ、

ホンニヨ　本如　タンエー湛睿を見よ、

ホンニヨ　本如　ニチミヨー日明を見よ、

ホンミヨー　本妙　ニチリン日臨を見よ、

ホンム　本無　一九八九……　〔戒律宗〕大和竹林寺の律僧なり、本無字は了心、室生山の空智律師に師事して法を嗣ぎ、戒壇院に主となり、竹林寺に遷る、元德元年十月三日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ホンヨ　本譽　二三四一……　〔淨土宗〕出羽潮蓮寺の中興なり、本譽は其鄉貫詳かならず、呑龍に師事して淨土敎を學び、出羽庄內今泉の潮蓮寺に住して中興となる、天和元年正月二十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ホンヨ　本譽　クモン舊門を見よ、

ホンヨ　本譽　ゲンコ玄故を見よ、

ホンヨ　本譽　シユンテー春貞を見よ、

ホンヨ　本譽　ジユンリヨー筍靈を見よ、

ホンヨ　本譽　ズイオー隨應を見よ、

ホンヨ　本譽　ソゲン祖玄を見よ、

ホンヨ　本譽　ダイガン大巖を見よ、

ホンヨ　本譽　ダンズイ檀隨を見よ、

ホンヨ　本譽　リカク利覺を見よ、

ホンヨ　本譽　リヨードー了道を見よ、

ホンヨ　本譽　ロハク露白を見よ、

ホンリユー　本立　（……）　〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、　本立字は千峰と云ふ、無及詮の法を嗣ぐ、元に渡りて諸老宿を遍訊し、東歸の後淨妙寺に住す、示寂の年時缺く、題東漸寺作、千載桃翁舊典刑、焚修繼續德惟馨、門庭臨ㇾ岸接ニ蛟室ニ、殿閣倚ㇾ空對ニ石屛ニ、氣壓前灘烟浪濶、風回別海水雲腥、奇蹤恰類ニ焦山景ニ、只欠ニ沙頭瘞鶴銘ニ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ホンリユーイン　本立院　ドースイ道粹を見よ、

ホンレン　本蓮　一八四六／一九一七　〔日蓮宗〕尾張本蓮寺の開山なり、本蓮俗名は大橋貞經、築後守平家貞の後ちなり、源平の亂に鎌

倉に捕はる、後出家して尾張愛知に本蓮寺を開く、正嘉元年六月十一日寂す、壽七十二、(本化別頭佛祖統紀)

ホンエ　品慧 一四〇四 一四七八 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、品慧俗姓は大原氏、京都の人なり、甫めて十四歳、興福寺に入り衆と共に經を讀み、深く宗義に達す、二十歳試業に及第して登壇受戒し、道名近畿に振ふ、六十八歳の時推されて維摩會の講師となる、弘仁九年某日寂す、壽七十五、(本朝高僧傳)

ホントー　品騰 二〇八四 二一五二 〔曹洞宗〕備後圓通寺の禪僧なり、品騰字は傳翁、備後の人、兒島氏なり、十八歳の時丹波圓通寺に牧翁性欽に謁して師事し、遂に印可を受け、辭して郷里に歸る、檀越等法悅寺を築きて之に居らしむ、後圓通寺に主となる、將軍義尙莊田を寄附す、明應元年正月六日寂す、壽六十九、臘五十四、偈あり末後一句、豈干舌頭、春風浩々、鶯動閣浮、(日本洞上聯燈錄)

ホンヨ　品譽　チョーエツ長悅を見よ、

ボンエキ　梵奕 (……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、梵奕字は大觀と云ふ、默菴に侍して法を嗣ぎ、初め妙心寺に住し、後南禪寺に主となり、法化盛んなり、寂年欠く、(延寶傳燈錄)

ボンカ　梵嘏 (二一二三) 〔臨濟宗〕京都萬壽寺の禪僧なり、梵嘏字は天祐、法を天龍寺の雪心安に嗣ぎ、夢窗國師第四代の孫なり、寛正四年春幕命により、京都萬壽寺に出世す、寂年、及ひ壽缺く、著作萬壽語錄一卷、萬壽寺記一卷あり、(本朝高僧傳)

ボンカク　梵覺 (二〇〇八) 〔曹洞宗〕越前心月寺の禪僧なり、梵覺字は海團、長門の人、俗姓藤原氏、十二歳にして京都南禪寺に詣て笠雲を禮して師とし、受具の後諸老に偏參し　慈眼寺桃菴洞禪師に謁し、參究三年、衣法を附せられ、分座說法す、幾もなくして總持寺に出世し、心月慈眼の諸寺に遷り、再ひ總持寺を主とる、敕賜紫衣を拜す、晩年泰藏院に退去し、其年寂す、法嗣夫巖智樵あり、(日本洞上聯燈錄)

ボンキ　梵鍇 (……) 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、梵鍇字は少薰、其郷貫詳かならず、玉崖琇に師事して法を嗣ぎ、京都相國寺に主となる、寂年、及壽缺く、(延寶傳燈錄)

ボンキ　梵機 (二〇八二) 〔曹洞宗〕備中法泉寺の禪僧なり、梵機字は關叟、出家して業を大容梵清禪師に受け、古澗仁泉の法を嗣ぎ、仁泉和尙の寂後備中法泉寺の席を繼ぎ、次に總持寺に出世し、佛陀寺に遷る、晩年奇泉菴に皈休し、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ボンギョーイン　梵行院　ケンジュ研壽をを見よ、

ボンサク　梵策 (二二二一) 〔曹洞宗〕越前心月寺の禪僧なり、梵策字は大英、心月寺大雄亮麐の法を嗣ぎ、總持寺に出世し、越前心月慈眼寺等に歷住す、寂年並に壽缺く、法嗣大室總芳あり、(日本洞上聯燈錄)

ボンシュ　梵守 二〇六七 二一四二 〔曹洞宗〕越後華報寺の開山なり、梵守字は太安、大和高市の人、俗姓は平和田氏なり、幼にして出家し耕雲寺に入りて德嶽宗欽に參し、衣法を付せられ、總持寺に出世し、次に德嶽の席を繼きて越後雲耕寺に遷

る、後法嗣審巖に席を禪り、華報寺を刱し此に居り、老を養ふ、文明十四年七月五日寂す、壽七十六、臘六十三、法嗣審巖正察あり、(日本洞上聯燈錄)

ボンシユン　梵舜　二三一三……　〔曹洞宗〕播磨全久寺の開山なり、　梵舜字は天外、俗姓伊藤氏、相模鎌倉の人なり、出家して業を建長寺に受け、諸老に徧參して播磨全久寺特雄專英に見えて其法を嗣き、永平寺に出世し、尾張天澤乾坤兩寺に歷住す、丹波の刺史松平康長請して信濃全久寺に住せしむ、其子光重播磨明石を鎭し、其地に全久寺を建て、師をして住持せしむ、參河龍谿寺、美濃圓成寺、尾張宗心寺、近江養源寺、冷泉寺、丹波の普濟寺等は皆師を第一代とす、承應二年八月二日寂す、壽缺く、法嗣鐵心道印あり、(日本洞上聯燈錄)

ボンジユン　梵淳　(……)　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、　梵淳字は朴中と云ふ、出家して適菴法順首座に參して法を嗣ぎ、圓覺寺を主どる、後海念菴に退休す、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ボンシヨ　梵初　(二〇六一)　〔臨濟宗〕京師相國寺の禪僧なり、　梵初字は心月と云ふ、相國寺の仲芳仲正禪師に師事し、書を善くするを以て聞ゆ、寂年月日缺く、(補菴京華集)

ボンシヨー　梵清　二〇八二 二一五五　〔曹洞宗〕上野吉祥寺の開山なり、　梵清字は天宙、雪窻禪師に法を嗣ぐ、寶德三年廣澤寺に主となり慈眼寺に遷る、晩年上野桐生に、吉祥寺を創す、明應四年二月七日寂す、壽七十四、(日本洞上聯燈錄)

ボンシヨー　梵清　二〇八一……　〔曹洞宗〕丹波玉雲寺の開山なり、　梵淸字は大谷、薩摩の人、幼にして石屋禪師に投して薙髮し、了道眞覺の法を嗣き、加賀の佛陀寺に住す、丹後の檀越玉雲寺を建て、師請せられて開山となり、應永廿九年諸嶽山に移る、寂年缺く、法嗣希曇宗璵、古澗仁泉の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

ボンセン　梵仙　(……)　〔曹洞宗〕能登實相寺の禪僧なり、　梵仙字は笙雲、能登の人、大養禪師に業を受け一菴如淸の法を嗣く、一菴の寂後能登の實相寺の席を繼き、再び總持寺に出世し、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ボンセン　梵僊　一九五二 二〇〇八　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　梵僊字は竺仙、自ら來來禪子と號す、元の明州象山縣の人、俗姓は徐氏、父の名は應、字は景陽、母は歐陽氏、師は其末子なり、六歲にして學に就き、十歲呉興資福寺の別流源に投して侍童となり、十八歲杭の靈山に登りて瑞雲隱に依る、既に度牒を得て、其師虎巖伏禪師の塔を拜して落髮受具し、諸刹を叩く、初め晦機熙、雲外岫、景元端、東嶼海、止巖岦、中峰本の諸老宿に謁し、皆賞讃せらる、古林和尙の擧唱を聞きて心地大に門け、座下に進拜して問答往來し遂に參堂を許さる、一日湯泉に遊ひ、大慧廣錄を閱して豁然大悟して古林と相契し、東浙に歸へり、荊楚に遊ふ、天曆二年夏徑山に登り、明極和尙日本に赴くに會ひ、相從ひて東航し、我が元德元年六月太宰府に着す、太守應士迎へて太變寺舍に館せしむ、翌年二月鎌倉に入る、北條高時明極を請して建長寺に住せしめ、第一座とす、正慶元年高時の命に依り、淨妙寺に移る、足利尊氏及ひ直義の崇敬を受け、其第に赴きて法要を說く、建武元年

幕府の命を受けて淨智寺に住し、金三萬、地三千畝を給す、明年天柱峰の故跡を施して壽塔となし、其地楞嚴山に類するを以て楞嚴院を剏す、藤原高景の子泰三浦の無量寺に延きて師を開山とす、曆應元年淨智寺に退き、東堂に居る、四年春旨を奉して南禪寺に住し、朝廷其寺階を昇せて天下第一刹となす、康永三年亦楞嚴院を開きて退居す、貞和二年眞如寺に赴き、翌年建長寺に住す、貞和四年七月十六日寂す、壽九十七、臘三十九、全身を最勝塔に藏む、著作語錄あり、（本朝高僧傳、續群）

ボンセン　梵千　二三四五……　〔臨濟宗〕鎌倉圓覺寺の僧なり、梵千字は大顛、江戸の人なり、其角に俳諧を學び俳諧を以て名あり、貞享二年正月二日寂す、（江戸名家墓所一見）

ボンソー　梵相　二〇〇六 二〇七〇　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり、梵相字は間鑑、甲斐の人なり、春屋に參して法を嗣ぎ、相國寺に住す、應永十七年二月二十日病に臥し、偈を書て曰く、內秘菩薩慈、通身鐵牛機、要レ知二眞皈處一、一鐸碧天涯、と、泊然として寂す、壽六十五、西山の法苑に塔す、（延寶傳燈錄）

ボンテー　梵貞（……）　〔淨土宗〕攝津天性寺の僧なり、梵貞は出俗姓生國詳かならず、信譽に師事して法を嗣ぎ、大和當麻往生院に住し、後攝津大坂天性寺に移る、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

ボンテー　梵貞　二二二八……　〔曹洞宗〕安房延命寺の開山なり、梵貞字は吉州、幼にして出家し、能山助翁等の諸老に見え、次に靈泉壽曾に參して法を嗣き、瑞雲寺に主となり、長興寺に遷る、次に梅靑寺に住す、房總兩州の大守里見義堯師に敎を受け、弟子の禮を取り、安房に長谷山延命寺を建て請して開山とし、田園を寄す、晩年明光寺に退隱し、永祿元年六月二十日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ボンパ　梵巴（……）　〔曹洞宗〕美作靑蓮寺の禪僧なり、梵巴字は江中、備中の人、山名氏の子なり、幼にして永祥實賓の室に入りて出家し、辭して美作に到り、靑蓮寺綱菴和尙に參し印記を受け、諸嶽山に出世し、復た靑蓮寺に主となる、晩年に到り瑞景寺に住す 筑州の太守赤松滿祐歸依し、厚く莊田を施し、永く供養に充つ、寂年壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ボンホー　梵芳（二〇五四）　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、梵芳字は玉畹、普明國師の法を嗣ぎ、隱逸して志を守り、同侶開法を勸むれとも辭して就かず、將軍足利義持其風を聞て皈依特に渥く、強て南禪寺に住せしむ、晩年投老菴を構へて辭して休す、後近江に往き草菴を結び年を經て寂す、壽及年時缺く、師生前書を善くし、好みて蘭を書きたりと云ふ、（本朝高僧傳）

ボンム　梵無　二三一四……　〔淨土宗〕加賀弘願院の開山なり、梵無は願譽と號し、尾張犬山の人なり 法を了學に嗣ぎ、加賀金澤に弘願院を建つ、承應元年六月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ボンヨ　梵譽　クワンレー觀靈を見よ、

ボンヨ　梵譽　テーソン貞存を見よ、

ボンカイ　煩海　二四五〇 二五二六　〔曹洞宗〕越後觀音寺の禪僧な

り、頌海字は筏舟、越前福井の人、八歳出家し、萬慶寺曇英に投し信濃に遊び、全林寺玄綱に參し、後越後觀音寺に宗風を張る、慶應二年正月二十八日寂す、壽七十七、

マの部

マヂユ 磨壽(……)〔曹洞宗〕安房長安寺の禪僧なり、磨壽字は鰤山、安房の人、幼にして亘天に依りて祝髮し、去りて諸老に徧參し、再び長安寺に歸り、亘天を省す、亘天の寂するに及び、大雲初龍主席を補す、師其記室となり、後席を繼きて主となる、寂年、及世壽缺く、法嗣長巖因悅あり、(日本洞上聯燈錄)

マシユー 磨聚(二一八四)〔曹洞宗〕上野龍源寺の禪僧なり、磨聚字は獨放、培芝正悅の法を嗣ぎ、上野龍源寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣笑顏正忻あり、(日本洞上聯燈錄)

〔考〕磨聚は大永の頃の人なり、

マヨ 磨譽　シユンヨー俊光を見よ、

マヨ 磨譽　リヨーズイ了隨を見よ、

マセン 磨甎 二四九八……〔曹洞宗〕山城興聖寺の禪僧なり、磨甎は越後西蒲原郡國上村渡部の修驗者智玄の長子にして母は地藏町の商粕川三左衞門の女なり、幼にして出家し、大事了後興聖寺に住し、曹洞の禪風を舉揚す、其門下に、回天、京璨、物外等出づ、天保九年四月六日寂す、

マニ 摩尼　ドーイチ道一を見よ、

マツシユー 末宗　ズイカツ瑞曷を見よ、

マンアン 萬菴　ゲンシ原資を見よ、

マンキユー 萬休 二二三六……〔淨土宗〕近江花階寺の開山なり、萬休は專蓮社稱譽西念と號す、俗姓は源氏、相模鎌倉の人なり、虎角に師事して法を嗣ぎ、近江大津花階寺を剏す、天正四年六月六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

マンキコー 萬休　エーサイ永歲を見よ、

マンキユー 萬休　ドークワク道廓を見よ、

マンキユーソー 萬休叟　ケーモン契聞を見よ、

マンキヨー 万慶(……)　三十一代佛工なり、万慶は俗名を定覺といひ法橋に叙す、

マンクー 萬空 二三三三……〔淨土宗〕江戶增上寺の僧なり、萬空は氏族を知らず、增上寺天神谷に住して宗學を究め、後京師に歷遊し、內外兩典に通す、延寶元年六月觀經を講し訖て寂す、(鎭流祖傳)

マンコー 萬江　シユーテー宗程を見よ、

マンゴク 萬極　リヨージユ良壽を見よ、

マンジン 萬仞　シユーシヨー宗松を見よ、

マンジン 萬仞　ドータン道坦を見よ、

マンシユー 万宗(二〇八五)〔臨濟宗〕甲斐惠林寺の禪僧なり、万宗字は旅泊と云ふ、相國寺に在りて室町幕府の皈依を受け、天山勝定二將軍に尊重せらる、天山將軍金襴僧伽梨を贈り、勝定將軍(義持)水精念珠を贈る、甲斐惠林寺に住する時富士山に登る、寂年月日缺く、(日本名僧傳)

マンセツ 萬說 二三〇七……〔淨土宗〕京都公安院の開山な

り、萬說は善蓮社賢譽凝心と號す、山城深草の人、其俗姓詳かならず、法を傳燈に嗣ぎ、京都岡崎に公安院を築きて開山となる、正保四年十月二十一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

マンテキ 萬的 二三一六 〔淨土宗〕下野大乘寺の開山なり、萬的は松蓮社頼譽と號し、出羽庄内の人なり、業譽還無上人に師事して淨土敎を修め、下野に赴き、鹽谷郡上平大乘寺の開山となる、明暦二年三月四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

マン子ー 萬寧 ゲンイ玄彙を見よ、

マンム 萬無 二二四五 二三一九 〔淨土宗〕京都知恩院の僧なり、萬無字は玄譽といひ、心阿と稱す、俗姓は瀧岡氏、伊勢津の人、平判官康頼の末孫なり、早年天然寺眞譽に就きて落髮し、後增上寺還無の下に投し、諸講席に列す、萬治二年淨國寺に住し、次に弘經大光明の諸寺に歷住す、後華頂山に登る、洛東獅子谷に地を相し、一寺を開かむとし、延寶九年官許あり、善氣山法然寺を剏立す、土木未だ功畢らずして疾に罹り、六月十九日より七晝夜別時念佛を修し、廿三日弟子忍澄に曰く、我遠からず死なん、それ安臥して逝かむか、坐脫せむかと、忍澄答へて曰く、淨業の徒安養に生るゝを要とす、坐脫立亡奇となさず、和尙寧ろ法を双林に取れと、廿五日中夜頭北面西佛號を唱へて怡然寂す、壽七十五、臘五十五、華頂山に葬むる、(續日本高僧傳、鎭流祖傳)

マンヨ 萬譽 レンイ連意を見よ、

マンリ 萬里 シユーク集九を見よ、

マンリソー 萬里叟 シヨーケー清啓を見よ、

マンリヨー 萬量 二三三六 〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、萬量は典蓮社貴譽天爾と號す、正譽上人の堂に入りて剃髮受業し、後岳譽上人に師事す、寛文元年三月上人師に璽書を授く、是より幡隨院弘經寺等を經て相模鎌倉光明寺に主となり、延寶四年九月二十五日寂す、壽缺く(淨土總系譜)

マンリヨー 萬靈 二二四九 二三四〇 〔淨土宗 京都知恩寺三十九代なり、萬靈は照蓮社光譽と稱す、近江大津の人なり、十歲にして同國淨念寺に入りて出家す、十五歲にして靈岩の會下に參し、壯年に及びて傳法會に入り、成學の後岩築の眼嶺に主たり、山城知恩寺三十九代となる、寺務三十八年、延寶八年正月二十三日寂す、壽九十二、(鎭流祖傳)

マンクー 滿空 二三七八 二四五六 〔淨土宗〕武藏增上寺第五十一代なり、滿空は中蓮社現譽身阿と號し、在心と云ふ、播磨印南郡志方町の人なり、父は蔭山六郞左衞門昌隆 母は內海氏の女なり、享保四年七月十一日に生る、十二歲にして佛門に志し、同國阿彌陀の宿地藏院に入り出家す、享保十九年五月武藏增上寺に入り、三島谷の靈妙寮に留り、內外二典を究め、同廿年五重相承を拜し、元文三年宗脉を受く、寛保二年二月勅して上人の號を賜ふ、學寮に講演を開き、大に法門を弘通す、寶暦十三年月行事となり、明和四年十二月廿四日命を奉じて勝願寺に住す、天明三年九月廿五日增上寺に遷り、大僧正に任せらる、後請て職を辭し、增上寺神明谷の一所に地をトして閑棲す、本國の大守酒井雅樂守師を敬崇して常に座下法義を聽受せり、寛政八年七月某日寂す、壽七十九、臘六十五、著作現勝錄六十卷あり、(三緣山志)

マンサイ　滿濟 二〇三八 二〇九五 〔眞言宗〕山城醍醐山七十四代の座主なり、滿濟は法身院の准后といふ、今小路の男にして大將軍義滿の養子なり、永和四年に生る、賢俊大僧正の室に入りて得度し、應永二年同師より庭儀灌頂を受け、詔して醍醐山七十四代の座主となる、地藏院の道快、醍醐の極圓に密印を授けらる、東寺百三十四代の長者法務に任し、大僧正准三后となる、後法務を辭す、東寺百四十一代百六十一代の長者に任す、師寺務を執ること三十九年、法身院に退き、永享七年六月十三日寂す、壽五十八、世に將軍門跡と稱す、（續傳燈廣錄）

マンシユー　滿秋 ……二三二八 〔淨土宗〕近江榮節寺の開山なり、滿秋は神譽と號す、近江野洲郡の人、幼にして知恩院滿譽僧正の室に入りて剃髮し、幡隨に師事して法を嗣ぐ、近江蒲生郡八幡に榮節寺を開き、津田村に常福寺を刱し、寛文八年正月二十七日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

マンセー　滿誓（一三八一）〔……〕大和奈良の僧なり、滿誓俗名從四位上笠朝臣麻呂と云ふ、元正天皇の七年二月勅を蒙りて筑紫に下り觀世音寺造營の工事を監す、和歌を巧にして、詠ずる所皆佛教に關せり、示寂の年時缺く、（續日本紀、萬葉集）

マンニン　滿仁　ショーニン性仁を見よ、

マンメー　滿米（……）〔眞言宗〕大和金剛山寺の僧なり、滿米其師承を詳にせず、大和金剛山寺（俗に矢田寺と云ふ）に居る、諫議小野篁師を崇めて弟子の禮を取る、滿米本の名は滿慶、琰米を得て後今の名に改む、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

マンヨ　滿譽　ソンショー尊照を見よ、

マンレー　滿靈（……）〔淨土宗〕武藏廓信寺の開山なり、滿靈は光譽と號す、俗姓は深井氏武藏岩付の人なり、不殘に師事して法を嗣ぎ、州の足立郡針谷村に廓信寺を刱して開山となる、寂年、並に壽缺く、（淨土總系譜）

マンアン　卍菴　シガン士顏を見よ、

マンゲン　卍元　シバン師蠻を見よ、

マンザン　卍山　ドービヤク道白を見よ、

マンアン　蹣菴　シユージョー宗成を見よ、

マンセキ　曼碩（……）〔眞宗〕日向直純寺の住持なり、曼碩は泰巖の門人にして宗門惑亂の時審問決を著して法主に呈し、諄々として諫む、寂年詳ならず、著作審問決の外に佛名經躰章一卷あり、（淸流紀談、本願寺派學事史）

ミの部

ミコー　彌浩（……）〔臨濟宗〕京都眞如寺の禪僧なり、彌浩字は無際と云ふ、秀巖に參して印可を受け、眞如寺に出世す、寂年缺く、（延寶傳燈錄）

ミチユー　彌忠（二〇一一）〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、彌忠字は大進、其鄕貫詳かならず、久しく梅尾にありて大藏經を閱す、初め淨智寺清拙に參し、後天龍寺夢窓に依り、書記より藏鑰となる、印可を付せられて後辭し去りて丹波の山中に隱る、臨終に兩手を以て胸を披き、衆に示して曰く、

汝等我五十年煩惱を入る無明袋を觀よ、今日破れ了れり、と、遂に寂す、其年齒缺く、（延寶傳燈錄）

ミテン 彌天 エーシャク永釋を見よ、

ミツウン 密雲 二五四四 〔曹洞宗〕越前永平寺の禪僧なり、密雲字は環谿、號は雪主、越後西頸城郡の人、俗姓は細谷氏、後久我建通の義子となり、其姓を冒す、十二歲出家し、清凉寺堅光に師事す、後出遊して山城興聖寺に到り、回天に師事し、遂に其法を嗣き、興聖寺に住し、後武藏豪德寺に住す、明治四年永平寺臥雲の寂後其後を嗣きて同寺に住す、幾もなく大敎正に補せられ、一宗の管長となり、宗務に盡力す、勅して絕學天眞禪師の號を賜ふ、明治十七年寂す、

ミツゴン 密嚴 一七六〇—一八四四 〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、密嚴は其諱を記せず、房號を以て呼ぶなり、夙に灌頂傳法を受け阿闍梨位に任ず、衆に交はらず、草庵に退き、觀心專修老て倦まず、文曆元年九月九日寂す、壽八十五、（本朝高僧傳、高野往生傳）

ミツゴン 密嚴 （……） 〔戒律宗〕下野藥師寺の律僧なり、密嚴は良遍僧都の上足なり、性相の學に通し、尤も律部に詳しく、下野の藥師寺を主とる、師同寺の頹廢を興し、寺宇莊觀を呈す、依りて師を其中興とするなり、（本朝高僧傳）

ミツサン 密山 ショーゴン正嚴を見よ、

ミツサン 密山 ドーケン道顯を見よ、

ミツジヨー 密乘 エーケン英憲を見よ、

ミツジヨー 密乘 リジユン理準を見よ、

ミツジヨー 密成 ソービン僧敏を見よ、

ミツゾー 密藏 チヨーガ澄雅を見よ、

ミンア 民阿 リヨーオー靈應を見よ、

ミンヨ 愍譽 シユンオー春應を見よ、

ミヨーアン 明菴 エーサイ榮西を見よ、

ミヨーイチ 明一 一三八八—一四五八 〔……〕奈良東大寺の學僧なり、明一俗姓和仁氏なり東大寺に住して學譽高し、晚年梵嫂を置く、時人皆惜む、延曆十七年寂す、壽七十一、著作最勝王經註十卷、法華經畧記四卷、法華記二卷ありしも傳はらず、（元亨釋書、本朝高僧傳）

ミヨーイツ 明逸 （二四四九） 〔眞宗〕伊豫松山圓光寺の僧なり、明逸字は曇寧、號は明月（メイ）と云ふ、八月望日に生れたるに由る、周防八代島の人なり、幼にして伊豫松山に至り、圓光寺の法嗣となり、佛儒の學を究む、人となり仟誕詼諧にして、一世を愚弄す、二十歲にして京師に遊ひ、後和泉堺に僑居し、次に江戶に下り、服部南郭、宇野明霞等に交はる、後國に歸り、始めて松山藩に徂徠の學風を傳ふ、早く寺務を謝して隱棲し、詩文書畫を樂めり、詩文は常に改竄を加へす、書畫亦筆を縱にし、深く意を用ゐす、一日一商の屏風を裝して書を乞ふ、師即ち一大魚を圖し、翼と脚とを加へ、其上に題して曰ふ、謂二之魚一耶、乃有レ脚、謂二之獸一耶、乃有レ翼、謂二之鳥一耶、乃有二鱗與一レ鬐矣、余亦不レ知三其爲二何物一、而天地之大、萬物之多也、如レ此者亦不レ可レ謂レ無焉、と、書は尤草躰に巧にして奇逸縱幻を極む、詩文書畫を乞ふ者常に門に滿つ、一藩相傳へて謂ふ明月の書、藏澤の墨竹は、松山藩の寶なり

と、一夕寺厨火を失し、近隣の諸人馳せ來りて救ふ、師徐に柱の燃ゆるものより火を移して蠟燭に點し、これを手して出つ、皆其安恬に感したりといふ、又近隣に一空屋あり、妖怪ありとなし、一人の住する者なし、師聞いて笑うて曰ふ、ばけもの亦妙なりと、乃ち賃居し、號して化物園といふ、某年寂す、壽七十一、門下に宇佐美淡齋、杉山熊臺等あり、皆儒學を以て聞へ、男德成佛學を以て聞へたり、著作扶桑樹傳は勅覽を賜はり、且つ清人傳唱したりといふ、(明月上人傳、欽慕錄)

〔考〕明逸は寛政頃の人なり、

ミヨーイン 明因 二三三六—二四〇七 〔眞宗〕近江本福寺第十三代なり、明因は角上と號す、俳句を以て聞ゆ、延享四年五月寂す、壽七十二、(俳諧畸人傳)

ミヨーイン 明印 コータン高湛を見よ、

ミヨーウン 明雲 —一八四三 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、明雲號は慈雲房、京都の人、源顯通の子なり、初め比叡山の辨覺法印に就きて顯密の法を受け、座主最雲法親王の資となる、仁安元年勅して僧正に任し、尋きて延暦寺の座主に補す、比叡山の法師日吉の神輿を舁きて朝に強訴する時、師後白河上皇の怒に觸れ、伊豆に流され、治承元年京を出つ、衆之を粟津に追ひて奪ひ歸へる、六月赦を賜ひ、三年再び座主に任す、尋きて天王寺の寺務を領す、天台の山徒にして此任に缺くるもの十一代なり、今師に至りて舊に復す、壽永二年源義仲上皇を法住寺に攻むる時、圓慧法親王師と共に流矢に中りて寂す、時に十一月十九日なり、壽缺く、(天台座主記、本朝高僧傳)

ミヨーエ 明懷 一六四八—一七三二 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、明懷は一に明快に作る、俗姓は藤原氏、山城刺史宣孝の子なり、奈良の林懷に師事して法相を受け、東寺成尊に秘密灌頂を稟く、康平三年興福寺の寺務を領し、小僧都に任す、後三年にして西唐院に退居し、延文四年八月二日寂す、壽八十五、(本朝高僧傳)

ミヨーエ 明慧 コーベン高辨を見よ、

ミヨーオー 明應 一九八八—二〇六七 〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、明應字は空谷、號は若虛、俗姓は平氏、嘉暦三年近江淺井郡に生る、九歲の時郡の廣濟寺志徹に投じて侍童となり、後、夢窓國師に就き、命により上足無極玄に業を受くること久し、辭して建仁寺高山照に依り、又臨川寺に皈りて無極に服勤す、十七歲具足戒を受け、國師に侍す、無極天龍寺に住するに及び、命して侍者となし、退くに及び東陵禪師來りて其席を繼ぎ、師を擧げて知賓を司とらしむ、師建仁寺放牛林に依りて典藏となる、後碧潭皎默菴諭中巖月の三老に從ひて三藏の教、五家の禪、九流百氏の書に至るまで渉獵せさるなし、明蒙山南禪寺を主とる時師記室となり、春屋葩靑溪徹と共に分座說法す、永和元年冬美濃の天福寺に法を開き、四年大守土岐氏の請によりて、天寧寺に住す、崇光天皇敕を下して大光明寺を主らしむ、天皇勅召して法を問ひ、寵遇尤厚し、至德三年春屋葩相國寺を退くや、將軍義滿の懇請により、其席を補す、師住後三年にして殿堂を修復し、規模を一新す、嘉慶の初め、鹿苑院に退休し、明德元年義滿金縷の袈裟を捧げて再住を請ふ、天皇深く師の高風を嘉し、勅召して法を問ひ、

たまひ、師の奏對叡旨に契ひ、翌日使を遣して特に佛日常光國師ハ號を賜ふ、三年八月義滿相國寺を修營し、落成供養す、五山十刹及ハ諸山の住持皆法會に集まり、義滿師をして慶讃せしめ、泉布三千緡黄金白鎰文馬十疋及び種々の珍物を施す、師悉くこれを常住寺に皈す、義滿益崇敬を加へ丹州の莊田若干を常德寺の壽塔に寄す、應永初年相國寺類燒す、師また同寺に住し兩年を經て諸堂を一新し、鹿苑院に皈る、時人師及び絕海津禪師を稱して二甘露門と云ふ、五年幕府の命により北山の等持寺に遷り、住すること三年、退きて雲居寺の塔を守る、先師箋註の勞を思ひ衆と共に宗鏡錄を講す、十一年冬天龍寺に主となり翌春また鹿苑院に休す、十四年十二月疾に罹り、將軍父子及び諸官員疾を訪ふもの夥しく、十六日夜沐浴淨髮衣を更へ、諸弟子の請によりて偈を書して曰く、倒騎ニ木馬一蹈破ニ虛空一、要レ覓ニ蹤跡一結レ網繫レ風、と、刻移りて寂す、壽八十、臘六十三、全身を慈濟院佛慈禪師の卒塔婆の西に葬る、法嗣二十八人著作語錄あり、(本朝高僧傳)

ミヨーカク　明覺　(一七八二)　〔天台宗〕加賀溫泉寺の學僧なり、明覺は俗姓生國詳かならず、天台宗の覺嚴西詣最嚴に就いて敎を受く、加賀の山中に隱棲し、專ら悉曇學を研究し、發明するところ多し、往々にして窺基義淨の說を排難せり、著作悉曇要決八卷、悉曇形音義二卷、註大佛頂、悉曇大底、反音鈔各一卷、略嘆、金剛界諸尊位、金剛界句義鈔各若干卷あり、門下に七覺上人念昭あり、(台密血脉譜、悉曇系圖、山密往來、諸宗章疏錄、梵學津梁)

〔考〕　金剛峰寺無名沙門常塔安永三年二月に開刻せる悉曇要訣の序文に依れば、古より明覺の事蹟明瞭ならざるものなるを知るべし、序文に曰はく、明覺尊者盡ニ心於此一、利名深厭、隱ニ悉曇室一、僧史難レ逸、事跡可レ察、嗟夫隱去來、隱去來、志レ道人者、皆如レ是乎、云云、と、寺門傳記等に明覺の學僧たること見ゆるも、事蹟を錄せず、台密血脈譜、悉曇系譜に依つて學問の系統を知るべし、台密血脈譜に依れば左の如し、

良源─慶　有─覺超─利救─經暹─覺嚴─明覺─念昭
└(中略)─皇慶─院尊─成緣─西詣─明覺─視圓
　　　　　　└長宴─嚴範─最嚴─明覺─敎禪
　　　　　　　　　　　　　　　　　　├緣忍
　　　　　　　　　　　　　　　　　　├覺算
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└家寛

常陸新治郡東城村經塚より發堀の經筒の一箇の銘に、保安三年大歲壬寅八月十八日如法經書寫供養願主僧明覺云云、他の一箇の銘に、天治元年甲辰歲、十一月十二日乙酉奉安置銅壺一口行者延曆寺沙門經暹云云と、經筒二箇一所より出でたる關係より見て、明覺が天台の明覺なること明なり、

ミヨーカン　明鑑　(二二〇九―二二八三)　〔曹洞宗〕武藏天王院の開山なり、明鑑字は能菴、上總海上郡の人、俗姓は白井氏なり、筑波山中禪寺に登りて薙髮し、出でゝ普く師席に遊び、天甯山にいたりて信仲に謁し、廣嚴寺に到り一華文英に參じ、進究十年法を得、辭し去りて武藏久喜莊に到り菴居す、菴は後天王院と稱す、大永三年四月十六日寂す、壽七十九、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーカン　明鑑　(……)　〔曹洞宗〕某寺の禪僧なり、明鑑初め全嚴東純に參じて印記を受け、未だ出世に及ばすし

て寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーガン 明巖 キヨーシヨー鏡照を見よ、

ミヨーガン 明巖 シセン志宣を見よ、

ミヨーガン 明巖 シヨーイン正因を見よ、

ミヨーク 明救 (一六〇六—一六八〇) 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、明救は光孝天皇の孫有明親王の子なり、早く比叡山に登り座主延昌僧正に從ひて顯密法を學ぶ、出でゝ淨土寺に住す、三條帝眼耳を病に方り、長和二年冬命により仁壽殿に修法す、功により僧正に任せられ、五年九月延暦寺の座主を命せらる、一住五年法儀大に整ふ、寛仁四年七月五日寂す、壽七十五、世に淨土寺の座主と稱す、(本朝高僧傳)

ミヨークー 明空 (一八八五—一九五七) 〔眞宗〕常陸光明寺の開山なり、明空は俗名を三浦胤村といふ、駿河守義村の第八子なり、寶治元年二月家族滅亡したるにより、出家して京師に上り、親鸞の弟子となる、某年常陸國眞壁郡下妻小嶋に光明寺を剏す、永仁五年二月十三日寂す、壽七十三、(本願寺通紀)

ミヨークー 明空 リヨーシヨー了性を見よ、

ミヨークワイ 明快 (一六四七—一七三〇) 〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、明快は藤原俊家の子、利仁將軍の裔孫なり、少にして比叡山に登り、明豪覺運遍睿の三師に從ひて顯密を研習し、後池上の皇慶に法を嗣く、天喜二年延暦寺座主に任し、兼ねて法成寺悲心院の撿挍を領す、康平三年表を上りて諸職を辭すれとも免されず、延久二年重ねて上表し洛北に皈棲す、延久二年二月十八日寂す、壽八十四、(本朝高僧傳)

ミヨークワイ 明快 ミヨーエ明懷に同じ、

ミヨークワン 明觀 (一六一三—一六八一) 〔眞言宗〕山城醍醐山第十三代の座主なり、明觀は京都の人、二世佐忠の子、醍醐天皇の曾孫なり、天暦八年に生る、座主觀理に從ひて出家し、永觀二年四月五日元杲を禮して灌頂を受け、密印を蒙むる、慶助に就きて再ひ灌頂を受け、長德四年十二月十七日醍醐山十二代の座主に補し、无量光院と云ふ、寛仁二年十二月席を覺源に讓り、治安元年十月八日寂す、壽六十九、(一說に師は醍醐天皇の子なりとすれとも非なり、)(續傳燈廣錄)

ミヨークワン 明觀 チキヨー智鏡を見よ、

ミヨーケー 明溪 コーモン光聞を見よ、

ミヨーケン 明見 (二〇〇七—二〇七〇) 〔曹洞宗〕出雲總持寺の禪僧なり、明見字は不見、出雲の人、俗姓は源氏なり、七歲にして三光國師によりて受戒し、高野山に登り、關東相模に往き、圓覺寺大拙能を禮し、尋きて永澤寺通幻寂靈に謁して法衣を受く、時に至德二年十二月十八日なり、應永元年鄉里に皈へる、龜瀧の檀越瑞洞山總光寺を建て、師迎へられて開山となる、同二年越前龍泉寺に遷り、三年興禪寺を主とる、應永十三年總持寺に主となり、仝十七年丹波永澤寺に移る、仝年六月三日寂す、壽六十四、臘四十三、嗣法者庭見、芳唄菴、義梵了、巖元妙の三人あり、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーケン 明憲 (一六八二) 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、明憲は林懷の法弟にして、長保四年維摩會の講師となり、少僧都に任し、治安年中寂す、壽八十一、(本朝高僧傳)

ミヨーケン 明賢 (一九〇〇) 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の撿

挍なり、明賢は覺基の上足にして其秘記を受け、常に北院に住し、學徒の爲に中院の法流を授く 仁治元年高野の撿挍に任す、寂年及ひ壽缺く、(本朝高僧傳)

ミヨーゲン 明源(……)〔淨土宗〕下總了覺寺の開山なり、明源字は唯性、性眞上人に師事して其法を嗣ぎ、下總幽戸了覺寺を剏して其開山となる、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

ミヨーゲン 明元 一八三八 一八九九 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、明元は其鄕貫詳かならず、出家して長舜に師事し義學の名を得たり、延應元年正月十八日寂す、壽六十三、(三井續燈紀)

ミヨーコー 明光 一八二四 一八八七 〔眞宗〕備後光照寺の開山なり、明光俗姓は藤田氏、信濃守季平の裔なり、父は賴光母は源氏朝の長女なり、幼にして比叡山に登り、慈鎭に從ひて敎規を學ぶ、後山國を弘化す、賴朝師と叔姪の親あるを以て寺を相模鎌倉に創し最寶寺と名け、師をして處せしむ、師之に住して化度すること年あり、後親鸞眞宗を稱ふと聞き、遠く越後に赴き敎を受け隨侍すること數年、寺に歸り化を布く、親鸞の命を奉して寺を眞弟明故に付し西國を行化し、備後山南光照寺及ひ常石寶田院を開く、布化十餘年の後京師に歸り、安貞元年四月十六日寂す、壽六十四、遺骨を光照寺に納む、(本願寺通紀)

ミヨーコー 明光 一九四六 二〇一三 〔眞宗〕山城佛光寺の第六代なり、明光一名は了圓といひ 佛光寺に住す、文和二年五月十六日寂す、壽六十八、(或はいふ明光は最寶寺の門光と同人なりとされど年代相違せり)(本願寺通紀)

ミヨーコー 明江 トクシユン德舜を見よ、

ミヨーゴク 明極 ソシユン楚俊を見よ、

ミヨーゴン 明言 二二五七 …… 〔曹洞宗〕日向江東寺の開山なり、明言字は宣安、肥後高來郡有馬の城主晴純の子にして俗姓は藤原氏なり、幼にして敎院に投して祝髮し、普く講席に遊ひ後捨てゝ禪に歸し、關東に往き有山鐵に參 、留りて五位の旨訣を極め服勤五年雲松に謁す、次に龍江源知長生等の老宿に歷參し、皆印可を蒙る、密傳機尊に參して侍司となり、久しくして得悟す、總持寺に出世し、退きて肥後に皈へり、飽田郡にある常樂寺の廢趾に就き菴を結ひて靜住す、有馬義純師の道化を慕ひ、日向に江東寺を剏し師を延きて開山とす、永祿中亂を避けて肥前深堀に寓す、肥後の檀越等相議して西岳山禪定寺を剏し師を迎へて此を居らしむ、金福寺金生寺廣勝寺等は皆師を開山とす、天正八年賢巖をして禪定寺に補せしめ廣勝寺に老を養ふ、慶長二年七月二日寂す、臨終の頌あり言宣無盡攸、既九十餘秋、在ニ權化門上一、示ニ感音路頭一(日本洞上聯燈錄)

ミヨーサン 明算 一六八一 一七六六 〔眞言宗〕紀伊高野山の檢挍なり、明算俗姓は佐藤氏 紀伊田中莊の人 治承元年三月に生る、長元四年定譽 祈親上人)に鞠育せらる、同五年定譽を仰きて出家得度す、長曆三年三月東室に觀座して弘法大師を感見す、長久元年中院に移住し、平康七年小野に往き成尊僧都を仰きて秘奥を傳ふ、延久四年十二月傳法灌頂を受けて高野山に歸へり、同五年奧の院の菴室を營みて住す、承保二年

三月高野山の秘記を感得す、同年生地田中莊に歸へり一寺を開き龍藏院と扁す、寬治三年八月維範の後を承けて檢挍となり、嘉承元年七月持明坊眞譽に灌頂を授く、同年十一月十一日中院に寂す、壽八十六、臘七十五、入壇の資三十五人あり、就中眞禪 琳賀、兼賢、行惠、眞譽を其上足と稱す、(高野春秋、傳燈廣錄)

ミヨーサン 明山　シユンサツ春察を見よ、

ミヨーシ 明之　エーショー永誠を見よ、

ミヨーシツ 明室　カクショー覺證を見よ、

ミヨーシツ 明室　ギケン義見を見よ、

ミヨーシツ 明室　ゲンホ玄浦を見よ、

ミヨーシツ 明室　ショードン昌暾を見よ、

ミヨージツ 明實　……一七五三　〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、　明實は俗姓藤原氏長門刺史共方の族弟なり、十五歲比叡山に登り、十七歲の時剃髮受戒し顯密二敎を學ぶ、書を善くし毎日文珠菩薩像九躰を圖して禮拜供養す、根本中堂に詣づること二千八百日、自ら香花を以て藥師佛に供養す、寬治七年七月十三日文珠菩薩の像に對し端坐示寂す、壽缺く、(本朝高僧傳、續本朝書史)

ミヨーシン 明信　一七九二―一八五四　〔眞言宗〕紀伊高野山の座主なり、　明信は如意金剛と稱す、山城鞍馬の人なり、其俗姓詳かならず、幼にして出家し、初め山城東山國城寺に居りて寬朝僧正に事ふ、法を受けて後高野山に入り、房光に就きて中院の法脉を嗣き、光房の寂するに及ひ、北室の主となる、建久元年檢挍となり、五年七月二十四日寂す、壽六十三、(續傳燈廣錄)

ミヨーシン 明信　ギノー義能を見よ、

ミヨーシン 明昣　……一六一四　〔三論宗〕大和東大寺の別當なり、　明昣は和泉の人、俗姓は珍氏なり、幼年にして出家し、承平六年十一月二十九日東大寺別當に任し、幾ならずして辭し、天慶四年七月十五日重任の宣旨を蒙る、天曆三年僧都に任ぜられ、同八年十二月十二日寂す、壽缺く、(東大寺別當次第)

ミヨーシン 明眞　二三八〇―二四三七　〔眞宗〕伊勢國安濃郡津光澤寺の住持なり、明眞は得昇院と號す、伊勢の人、眞宗高田派なる安濃郡津古川の光澤寺に住し、寳暦九年本山の安居本講を勤む、安永六年十二月十二日寂す、壽五十八、

ミヨーシン 明心　リヨーショー良照を見よ、

ミヨージヤク 明寂　(一七七〇)　〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、　明寂は隱岐守大江實成の子なり、出家して虛空藏菩薩を敬信し、求聞持法を修して悉地を得たり、天永の初年高野山に上り、眞禪阿闍梨に從ひて兩部の大法を受く、天治某年寂す、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ミヨーシユー 明秀　……二一四七　〔淨土宗西山派〕紀伊惣持寺の開山なり、　明秀字は光雲、俗姓は赤松氏播磨の人なり、圓光大師に師事して淨土宗西山派の學を修め、紀伊梶取惣持寺の開山となり、大に門業を張る、大經抄、秘決集抄、安養報身報土義各一卷、淨土名目二卷、選擇私鈔三卷、愚要抄二卷等を著す、長享元年六月十日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜、淨土宗經論章疏錄)

ミヨーシユー 明秀（一六九八）〔天台宗〕山城黒谷の學僧なり、明秀は其郷貫詳かならず、出家して遲賀僧正に師事して台敎を學び、兼て眞言宗の學に精通す、法華を讀誦して他事なく、四十歳に及び黒谷に籠居す、寂年月日及壽缺く、（法華驗記）

ミヨーシユー 明宗 二〇九七……〔曹洞宗〕相模大慈寺の開山なり、明宗字は大綱、甲斐ノ人なり、鹽山拔隊勝によりて得度し、最乘寺了菴に參し、應永十四年入室して法衣を付せられ、擢んでられて版首となる、後總持寺に出世し、寛正三年最乘寺に住す、尋て永澤寺に移り再び總持寺を領す、居ること周歳、辭して相模に歸り、大雄山中に大慈寺を創して逸老し、永亨九年正月十四日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ミヨーシユク 明叔 キヨーシユン慶浚を見よ、

ミヨーシユク 明叔 シユーテツ宗哲を見よ、

ミヨージユン 明順（一七七三）三條一流の佛工なり、明順は二代圓勢の子なり、永久年頃の人なり、

ミヨージユン 明遵 二一六七……〔曹洞宗〕上總洞泉寺の開山なり、明遵字は陳叟、山城の人、七歳にして出家し、十九歳諸國に行脚し、越中龍泉慈眼の二寺を歴訪し、密山正巖に眞如寺に參し、其法を嗣ぎて眞如寺に住し、洞泉寺を開く、永正四年四月四日寂す、法嗣照應慧照あり、（日本洞上聯燈錄）

ミヨーシヨー 明詔 二二六八……〔戒律宗〕京都來迎院の律僧なり、明詔字は舜甫、出家して戒律を修め、泉涌寺に主となる、久しうして來迎院に退く、織田信長數々來りて師に法を問ひ依深し、慶長十三年正月一日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ミヨーシヨー 明請（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、明請俗姓は藤原氏、京師の人なり、初め眞言に歸し兼ねて阿彌陀佛を念持す、晩年病に罹り弟子靜眞を召し語りて曰ふ、地獄の火遠く病眼に現す、佛にあらずば誰かこれを救ふものぞと、專ら阿彌陀佛を念持して寂す、（往生極樂記、本朝高僧傳）

ミヨージヨー 明照尼（一九八五）〔曹洞宗〕加賀寶應寺の開山なり、明照尼は越前の人、妙齡にして洞谷瑩寺山に依りて、得度受戒し祇陀寺大智に謁して法を問ふ、居る半年再び瑩山に參し、後明峯素哲に見え親しく印可を受け、圓通菴に住す、晩年加賀に寶應寺を營みて住し、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ミヨージヨーイン 明靜院 ニチギヨー日堯を見よ、

ミヨージヨーイン 明靜院 ホージヨー法定を見よ、

ミヨーセン 明千 二〇二〇……〔臨濟宗〕京師萬壽寺の禪僧なり、明千字は古鏡、俗姓詳かならず、清拙禪師に師事す、後元に航し、雪峰の樵隱逸に依る、留ること二十年にして東歸し、京師眞如寺に住す 尋ぎて信濃開善寺 京師萬壽寺に歴住し法化盛なり、延元年萬壽寺に在り、始めて百丈法規を印刻して頒布す、同三年九月八日萬壽寺五山の位に列せられ師上堂す、同五年五月廿二日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ミヨーセン 明選 一七三六／一八二九〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧な

り、　明濯は號を妙蓮房といひ、紀伊の人なり、高野山にありて傳法灌頂を受け、理趣經の永讀を以て日課となす、勉めて興建に志し堂塔を修補すること多し、嘉應元年六月十五日寂す、壽九十四、(本朝高僧傳、高野往生傳)

ミヨーセン　明詮　一四四九／一五二八　〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、　明詮は奈良の人、彦人皇子の裔なり、祖父彌正尹櫻井王天平十一年に姓を賜ひて大原氏となる、父石本早く亡し母橘氏に鞠養せらる、十五歳の時母も亦亡す、師心を佛乘に歸し親恩を報ひんと欲し、元興寺の施嚴法師に從ひて薙髮納戒し、法華經最勝王經を習ひて大義に通す、施嚴師の大器を見て同寺の中繼に附す、師法相を究めて名京畿に擧る、嘉祥二年維摩會の講主となり、元興寺に住して空宗を敷演す、三年正月大極殿の講師となる、二月天皇高座を淸涼殿に設け、四宗の碩徳を請して金光明經を講せしむ、三論は實敏、華嚴は正義、天台は圓修其選に當り、法相宗は師之に任す、師議論鋭精人をして驚かしむ、天皇命して僧綱に補せんとす、時に僧綱所惡比丘多し、共に妬心を抱きて師を陷れんとし、强者六十人を率ゐ各兵仗を持ちて寺に入り、大聲して師を脅かせとも師自若たり、帝遂に師を律師に任す、勅使寺に入る、惡比丘等相顧みて色を失ひ狼狽して逃れ去る、師玄弉三藏の風を慕ひ院を玉華と稱す、(玄弉は洛陽の玉華院に住す)、貞觀六年朝廷新に僧綱の位階を定め、師を以て始めて大僧都に任す、十年五月十六日病を得て晋石山に寂す、壽八十、臘五十、著作四相違記二卷あり、(元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄)

ミヨーセン　明洗　(二四四九)　〔天台宗〕陸奥峯壽寺の學僧なり、　明洗號は姫岳と云ふ、寛政年中京都聖護院に學び、内外の學に通じ、傍ら詩文書畫俳句を善くす、殊に俳句は谷口蕪村の門人なり、著作、入木寓談十卷、天台敎義二十卷、白龍齋書論一卷、俳諧集二卷、詩文稿五卷、歌集二卷等あり、

ミヨーゼン　明全　(二二五六)　〔曹洞宗〕下野長安寺の開山なり、　明全字は體菴、丹波の人なり、洞光寺良石寺に投して出家し、月窓明潭の道化を聞き、往きて之に參し、記室を掌とる、後其席を繼きて長祿寺に主となる、詔を受けて總持寺に出世す、下野那須郡の千本氏長安寺を剏し師請せられて其開山となる、寂年及ひ世壽缺く、法嗣玖峰玄あり、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーゼン　明全　一八四四／一八八五　〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、　明全字は佛樹、伊勢の人なり、早年得度し、比叡山に登り、明融阿闍梨に師事して顯密二敎を學修す、後榮西禪師の室に投して禪宗を傳ふ、禪師示寂の後は、獨り京都建仁寺に住す、貞應二年二月道元等を率ゐて同寺を出て、西下博多に到り、宋に航す、天童山に登りて榮西禪師の祠堂を禮し、禪師の忌日に値ひ緡劵一千緡を捐て大齋會を行ふ、嘉錄元年(宋理宗寶慶元年)五月五日天童山了然寮に寂す、壽四十二なり、(建撕記訂補、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ミヨーゼン　明善　一七二一／一八五四　〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、　明善は山城鞍馬の人、仁和寺に密乘を習ひ、高野山に入り、房光に從ひて灌頂法を受く、房光の寂後命により北室に住す、建久元年春高野の檢挍職に補し、五年七月十四日寂す、壽六十三、法弟守善あり、(本朝高僧傳)

ミヨーゼン　明禪　一八二七／一九一二　〔天台宗〕山城毘沙門堂の學僧なり、　明禪俗姓は藤原氏、參議成賴の子なり、幼年比叡山に登り顯眞智海の二師に從ひて檀那院流を學び、法曼院仙雲に秘密灌頂を受け小野流を傳ふ、毘沙門堂を開きて第一代となる、性隱逸を好み僧官に進まず、晩年源空の選擇集を見て淨業を專修す、仁治三年五月三日極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂の句を唱へ禪坐して寂す、壽七十六、（本朝高僧傳）

ミヨーソー　明叟　サイテツ齊哲を見よ、

ミヨーソー　明叟　シユーフ宗普を見よ、

ミヨーソー　明窓　シユーカン宗鑑を見よ、

ミヨーゾー　明增（……）〔眞宗〕肥後長洲淸臺寺の住持なり、　明增は肥後の人、僧鎔師門下に遊びて西派學匠の名を得たり、旁ら國學に通し、親鸞の和讃を講ずるに殊に手亘波を精說す、天性洒落にして絕て俗事に拘らず、寂年缺く、著作法要撮要說一卷、實章要問答二卷、淨土和讃講錄四卷、二諦論衡、眞宗念佛辨海、訪道家訓、和讃天爾遠波辨、各若干卷あり、（淸流紀談、本願寺派學事史）

ミヨーソン　明尊　一六三一／一七二三　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、　明尊は小野奉時の孫にして道風の子なり、夙に園城寺に入りて餘慶に業を受け、慶祚に就て益々顯密の奧旨を究む、圓滿院に住し法務を兼ね僧正に任ず、長曆二年秋延曆寺座主に補す、慈覺の徒狀を捧げてこれを阻み、三年春山徒大に祇陀林寺に會す、藤原賴道使を遣して諭せとも肯せず、賴道の館に聚り呼號して門を扣く、賴道大に怒り能登刺史平直方をして兵を率ひて擊退せしむ、これより兩門角立し園城寺の僧叡山戒壇に登る能はず、師上書して三井寺に戒壇を建てんことを奏す、長久二年五月宣して園城寺戒壇の立不立を諸宗に問ひしに、三論法相華嚴眞言律宗等皆贊せしも天台固執して應せず、四年正月師に封七十戶を賜ふ、寬德二年園城寺長吏となる、永承三年八月十一日天台座主に敕任し、十一日上表して辭す、明年七月疾に罹り、步行する能はず、天皇勅して牛車を賜ふに師また辭して受けず、天喜二年八月長谷寺落慶供養の導師となる、五年十一月帝志賀寺を營みたまひ、師乃ち住持となり封戶を拜す、康平三年齡巳に九旬に登りしを以て藤原賴道釋迦像を圖し妙經九十部を書し、白河の別業に於て敎門諸寺を集め大に慶讃の法筵を開く、四年秋東北寺落慶供養の導師となり、六年六月十六日志賀寺に寂す、壽九十三、（本朝高僧傳）

ミヨータツ　明達　二五三七／一六一五　〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり、　明達字は直仁、蓮華院と號す、俗姓は土師攝津住吉の人、十二歲藥師寺勝雲に依りて下髮受戒す、十五歲天王寺尋仙に就て天台の止觀を受け、比叡山に登りて座主尊意に隨ひて顯密の奧旨を得、天慶三年正月二十四日勅を蒙り美濃南宮寺に四天王の法を修して平將門を降し、擢てられて內供奉十禪師となる、冬十一月亦命により住吉の神宮に到り、毘沙門の法を修し藤原純友を降す、天曆九年九月二十二日寂す、壽七十九、（一說八十五）、著作理界私記二卷、智界私記二卷あり、（本朝高僧傳）

ミヨータツイン　明達院　ゼンイ善意を見よ、

ミヨータン　明潭　……／二一五六　〔曹洞宗〕陸奧觀音寺の開山な

り、明潭字は月窓、伊勢國の人、其俗姓詳ならす、大綱和尚に投して業を受け法を春屋和尚に嗣ぐ、出て丶諸嶽山に住し青原大雄寺に移る、長祿元年遠江國守二階堂氏陸奥國の須賀川に於て臨澤山觀音寺を建營し師を請して開山とす、寺に龍虎の二石あり數々靈異を顯はす、明應五年六月十九日寂す、世壽詳ならず、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーチ 明智　ショーヨ盛譽を見よ、

ミヨーチユー 明中 (二〇五〇)〔曹洞宗〕伊豆山の禪僧なり、明中字は大陽、伊豆の人俗姓は藤原氏なり、幼にして國淸寺に投じて出家し、方廣寺無文に師事し、次に相模最乘寺了菴の室に入る、學行成りて伊豆山に隱れ、專ら華嚴を閱し、更らに出世の意なし、後ち其終る所を知らず、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーチヨー 明昶 (二〇〇九―二〇二三)〔臨濟宗〕但馬宗鏡寺の開山なり、明昶號は金山(一に金峰と云ふ)、俗姓藤原氏安藝の人なり、長じて京師に入り東福寺大道以に師事し、後元に航し諸禪師を歷訊す、播磨の圓應、淡路の安國、駿河の淸見の諸寺に住し、後但馬に宗鏡寺を開きて開山となり東福寺に昇る、應永二十年十一月十三日寂す、壽六十五、偈あり曰ふ、法界即五蘊、五蘊即法界、法無レ可レ說、五蘊無レ可レ名、死也無レ死、生也無レ生、呵呵呵、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ミヨーチヨー 明兆　キチサン吉山を見よ、

ミヨーテツ 明哲 (一五二〇)〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり、明哲俗姓不詳、藥師寺に住して華嚴經を說く、貞觀二年正月八日最勝會の講師となり、十四日講齋畢りて大極殿に論議を開く、明哲論議明斷にして大衆感嘆す、天皇敕して時服を賜ふ、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

ミヨードー 明道 (二四七八)〔眞言宗〕山城海印寺の學僧なり、明道は宣然房と號す、文政の頃山城海印寺に住し顯密の學に通す、著作三論玄義玄談一卷あり、

ミヨードー 明道　シユーセン宗詮を見よ、

ミヨードー 明導　ショーゲン照源を見よ、

ミヨードー 明堂　ショーチ正智を見よ、

ミヨーニン 明任 (一八〇八―一八八九)〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、明任は紀伊神宮の人なり、定兼に從ひて傳法灌頂を受け、京都の瑜伽師に見えて小野廣澤の諸灌頂を稟具す、定兼の寂後正智院に住し、嘉祿二年高野山の檢校に補し法眼に敘す、寬喜元年十一月十日病なくして寂す、壽八十二、法弟法性道範等十餘人あり、(本朝高僧傳)

ミヨーニン 明忍 (二二三六―二二七〇)〔戒律宗〕山城槇尾山の律僧なり、明忍字は俊正、京都の人、俗姓は中原氏なり、幼にして高尾山晉海僧正に投じて內外典を學び、十一歲にして父の業を繼きて少內記に任す、師韻書を諳んし楷書を善くし宮中の聯句詩筵に侍する每に大人を驚かし神童と稱せらる、幾ならずして少外記に昇り右少史を兼ぬ、然れ共出家の志禁し難く二十一歲にして晉海を拜して剃髮し、瑜伽法を稟け慧雲と共に西大寺に往き開遮持犯の說を究め、寺僧友尊三人と共に高山寺に至り、通受の法によりて自誓受戒し、行事鈔を講ずると幾んど一年、後晉海槇尾山平等心王院の故址に廬を結びて師に居らしむ、後支那に入らんとして對馬島に至り國禁の爲め

に果さず、夷崎に移りて持鉢自活し、慶長十五年六月七日寂す、壽二十五、（本朝高僧傳、律苑僧寶傳）

ミヨーハン 明範（一一八九）〔眞言宗〕紀伊高野山正智院の學議なり、明範は和泉の人、明任法眼の上足にして法性道範と同門なり、明任の法脈を受け、性、範二師逝流の後正智院の論場に補任す、（續傳燈廣錄）

ミヨーフ 明普 ……一六六六〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、明普は鄕貫詳かならず、延曆寺楞嚴院に住し數十年間怠りなく、西方業を修す、寬弘三年四月七日寂す、壽缺く、（三外往生傳）

ミヨーフク 明福 一四三八 五〇八〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、明福俗姓は津守氏、山城の人なり、幼より賢憬に事へて經論を讀み延曆十年得度す、剃髮稟具よ 壯年に至るまで遊學して倦ます、三藏を貫通して唯識を練磨す、興福寺を董し法輪を轉す、天長四年秋九月大內宮中に諸德を召して開會講法せしむる時師亦之に與る、承和年中大僧都に任し、嘉祥元年八月某日興福寺に寂す、壽七十一、法弟延賓あり、延賓寬平七年勅を奉して維摩會の講主となり學譽高し、（本朝高僧傳）

ミヨーヘン 明遍 一八〇二 一八八四〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、明遍は京都の人藤原通憲の季子なり、幼より奈良の東南院に入り、敏覺明海の二師に從ひて三論を承け兼て密敎を學ふ、三十一歲遊方して大和光明山に入り交を絕ちて安居す、朝命累りに召せとも恩を謝して往かす、承安年中源空盛んに化を弘む、師始めて山を出て念佛の義を受け、即ち高野に登りて念佛修行し、其山を下らさると三十年なり、元仁元年六月十六日高野山蓮華三昧院に於いて寂す、壽八十三、師常に當時の僧徒か朝市に往來し、世間の榮華に意を絕たさるを慨嘆したり、（元亨釋書、本朝高僧傳、高野春秋、）

ミヨーホー 明贇 二四六二 二五三四〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺の僧なり、明贇一に慈海と稱し、蓮成院と號す、無所得道人、不器子等は其別號なり、肥後熊本の人なり、初め天台宗にて得度し豪潮律師に從ひて天台の敎觀を究め、龜井氏に就きて漢籍及ひ詩文を學ふ、師書を善くし墨客となりて諸國に遊歷す、天保十年河內下小坂淨雲寺に留錫し遂に本宗に歸す、幾もなく大源山に上り學徒を指南す、弘化四年特命を以て香衣を司さる、蓮成院と號す、夏講を勤むること廿四年、明治二年大源山講主となり眞光院と號す、明治五年宗難に際し官に上表すること數回大に盡すところあり、明治七年十一月四日寂す 壽七十三、著作融通大念佛宗綱要一卷、白痴庵雜錄七卷あり、（大源山記錄）

ミヨーホー 明贇 ショーシン證信を見よ、

ミヨーホー 明峰 ソテツ素哲を見よ、

ミヨーユー 明祐 一五七八 一六二一〔戒律宗〕大和東大寺の律僧なり、明祐は加賀の人なり、東大寺觀宿に從ひて華嚴を學ひ、律學密學を兼ぬ、東大寺の戒壇院に住して道譽頗る高く、常に學徒を敎導し、高弟法秀等とともに戒律を持すること極めて嚴正なり、命終に及びて淨土敎に意を傾け專ら阿彌陀佛を念ず、天德五年二月十六日病惱あり飲食例にあらず、弟子等粥を勸むれば退けて曰ふ、齋時已に過ぐ命終近し何ぞ破るべ

けむ、重ねて命して曰ふ、二月は寺例の佛事なり我之を過ぎむと、弟子等十七日に阿彌陀佛を誦ず、其翌十八日に寂す、壽八十四（往生極樂記、本朝高僧傳）

ミヨーヨ　明譽　二三一三 二三七七　〔淨土宗〕京師法恩寺の住僧なり、　明譽字は古礀、號は虛舟、初め江戶增上寺の學侶となり、大和郡山西巖寺に住し、後京師法恩寺に住す、晩年西岩倉に閑居し、道暇書を嗜み、加納永納に從うて筆法を學び、後、雪舟の風を慕ひ、人物山水を畵き、殊に大黑の像を畵く、享保二年五月廿三日寂す、壽六十五、著作當麻曼陀羅撮要二卷、淨土十六祖傳、隆寬律師傳各一卷あり、（本書に揭くる辨長良忠の像は師の圖により縮寫したるものなり）、

ミヨーヨ　明譽　ゼンカイ善海を見よ、

ミヨーヨ　明譽　モンシユク文宿を見よ、

ミヨーヨ　明譽　ユーアン遊安を見よ、

ミヨーヨ　明譽　リヨーチ了知を見よ、

ミヨーヨー　明陽（一八三一）　七條佛所佛工なり、　明陽は範助の弟子なり、承安元年晦日大日如來像一軀を作る、同三年燒失したれは今は傳はらず、（多武峰畧記）

ミヨーリン　明麟（一九九四）　〔臨濟宗〕山城南禪寺の禪僧なり、　明麟字を聖徒といひ、俗姓生國を詳にせす、孤峰遠禪師に師事して、印可を稟く、南朝廷其道譽を聞き、常に宮中に召して法要を問ひ、崇信甚た篤し、慶光菴に居りしが詔を奉して南禪寺を主とり、法化最も盛なり、晩年禪棲菴を構へて退隱し、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕　麟明は建武の頃の人なり

ミヨーリン　明林　シユーテツ宗哲を見よ、

ミヨーリユー　明隆（一八九九）　〔眞宗〕山城金寶寺の住持なり、　明隆は俗名を水元瀨基信といふ、忠信の子なり、元仁二年正月十九日出家して道珍と名け、少納言慈忠と稱す、金寶寺に住して第五十七代となる、官僧都に至る、延應元年三月親鸞の弟子となり、眞宗を學び名を明隆と改む、四月十五日親鸞十字佛名を書して與ふ、親鸞九月下旬より十一月下旬に至るまで金寶寺に寓し、藏經を閱す、師一室を營み安聖閣と稱し、十二月下旬親鸞を請して居らしむ、親鸞寄寓すること凡そ五年、寬元五年正月下旬に至りて去る、弘長元年正月廿三日より廿五日まで親鸞金寶寺に布敎す、二年正月下旬より四月九日迄、又六月三日より九月廿二日迄、又十月九日より廿九日迄、安聖閣に來り寓したりといふ、（本願寺通紀）

ミヨーリヨー　明了（一九三七）　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、　明了は小河の上綱に師事して密灌悉曇を受け、奈良に圓照を拜して具足戒を受け、偏く小野廣澤延曆園城諸寺に遊びて諸學を研究す、其寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

ミヨーリヨー　明了　エンカイ圓海を見よ、

ミヨーレン　明蓮（……）　〔・　〕大和法隆寺の僧なり、　明蓮法華經を誦持し能く七卷に通ず、第八卷に至りて記する能はず、乃ち稻荷神祠に冥報を祈求すると百日なるも驗なし、長谷寺金峰山寺に至りて祈求すると各一夏なるも尙ほ驗なし、尋て熊野山に登りて祈求す、夢告あり曰ふ、我れ此事に就きて垂感する能はず住吉明神に祈求せよ云云、明蓮攝津に至りて住吉祠に祈求すると百日、夢告あり曰ふ、伯耆の大

山神に祈求せよ、明蓮大山に登りて前の如く祈求す、一夏の後夢告あり、曰ふ昔美作の人米を牛に駄して此山に登り、祠に詣で牛を僧房に繫ぐ、房中の比丘法華經を誦ず、牛これを聞きて慈喜心を生ず、第七卷に至りて其人牛を牽きて去る、汝前生は此牛なり、云云、これより精勵して終に法華經一部を通じ誦するを得たりと云ふ、（本朝高僧傳）

ミヨーレンボー 明蓮房　ミヨーセン明暹を見よ、

ミヨーイ 妙意 一九三四／二〇〇五 〔臨濟宗〕越後五智山の禪僧なり、　妙意字は慈雲と云ふ、俗姓は平氏 信濃の人なり、文永十一年に生れ、十二歲にして越後五智山に登りて落髮す、嘉曆二年後醍醐天皇師を宮中に召して法を問ひ特に淸泉禪師の號及紫衣七條を賜ふ、明年復た敕ありて護國摩頂巨山仁王國泰萬年禪寺の敕額を賜ひ敕願場となる、北陸鎭護第一禪刹特進出世の道場たり、貞和元年六月三日寂す、壽七十二、後光明帝諡して惠日聖光國師の號を賜ふ、（諸宗祖師畧傳）

ミヨーイチ 妙一 二二九一／二三六一 〔臨濟宗〕山城紫野大德寺の第二百四十八代なり、　妙一字は乾舟、號は海萍 京都の人、大隱の法を嗣く、元祿四年四月廿八日出世し、同年八月十八日開堂し、飛禪妙高山大隆寺に住す、後金龍院に住し、元祿十四年三月廿五日寂す、壽七十一、（紫巖譜略）

ミヨーイン 妙胤 （二〇〇四） 〔臨濟宗〕京都建仁寺卅一代なり、　妙胤字は曇傳、元の人なり、徑山の虛谷陵の法を嗣ぐ、康永の末來朝す、將軍足利尊氏建仁寺に請す、後鎌倉の淨智寺に遷り、大圓菴を構へて退休す、示寂の年時缺く、弟子玉崗珍あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

【考】　古林拾遺、黃龍十世錄等に依れば、妙胤元人にあらず元に渡りて虛谷希陵の法を嗣ぎたるなり、本傳誤れり、

ミヨーウンイン 妙雲院　ニチリユー日隆を見よ、

ミヨーエ 妙慧　ニチシコーニ日秀尼を見よ、

ミヨーエー 妙英 二〇〇五／二〇六六 〔臨濟宗〕京都天龍寺の禪僧なり、　妙英字は靈嵒、筑前太宰府の人なり 七歲にして母を沒し、深く世相を厭ひ出家を求むれとも父許さず、十九歲にして初めて志を遂げ、偏く智識に參し、後美濃の山寺に住まりて禪坐す、常に夢窓國師の道風を慕ふ、會其門人に逢ひ、遂に其法を嗣ぐ、然れども更に出世を望まず、性慈仁にして凍餓の者を見ては衣を與へ、食を施す、應永十四年四月十六日寂す、壽六十二、（延寶傳燈錄）

ミヨーエン 妙演 （二〇一二） 〔臨濟宗〕京都天龍寺の藏主なり、　妙演字は東山、天龍寺夢窓國師に參して法を嗣ぎ、藏鑰を掌とる、寂年欠く、（延寶傳燈錄）

ミヨーエン 妙圓　ニチギニ日義尼を見よ、

ミヨーオー 妙應 二〇一一…… 〔臨濟宗〕下野興禪寺の開山なり、　妙應字は眞空、俗姓不詳、佛國禪師に師事し常に典座となれり、毎日齋畢りて食滓を澄濾して溫煮し自の一分を留め餘を丐者に給與す、或人佛國に讒して曰ふ、典座別に香飯を炊くと、佛國實視して其讒なるを知り衆に對し妙應の行業を稱す、雲巖寺の檀越土岐氏死に臨み遺言して曰ふ、應典座を請して秉炬せしめよ、師便ち葬所に往きて檑木と杓子とを拈出し曰ふ、檑木は直く杓子は曲れりと、炬を投して直に歸る、此より應典座の名叢林に喧し、後下野に神護山興禪寺を開き

第一代となる、觀應二年十月二十五日寂す、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ミヨーオン 妙音 (一八〇二) 〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、 妙音初め横川寺の香豪法師に從ひて台教を學び專ら法華を持す、康治の初藤原賴長の請により其病を禱り、爲に法華經を講す、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

ミヨーオン 妙音 ニチギョー日行を見よ、

ミヨーオン 妙恩 ニチニョニ日如尼を見よ、

ミヨーカ 妙可 (……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、 妙可字は悅堂と云ふ、鄕關詳ならず、香山仁與に參して印可を付せられ建仁寺に住す、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ミヨーカイ 妙誡 (一九九四) 〔臨濟宗〕阿波妙幢寺の開山なり、 妙誡字は默翁、俗姓は源氏肥前の人なり、八歲にして京都に登り正覺國師の室に投し、十二歲にして薙髮受具す、服勤多年衣法を傳へられ阿波の寶陀寺を主とる、後京都臨川寺に移つるに及び光嚴上皇宮中に召して法を問ひ給ふ、晩年華藏院に退去し、某年寂す、壽七十四、臘六十一、備中の華藏院、阿波の妙幢寺は師の開刱する所なり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕 妙誡は建武頃の人なり

ミヨーキ 妙奇 一九五九 二〇三八 〔臨濟宗〕丹波慧日寺の開山なり、 妙奇字は特峰、俗姓不詳、雲巖寺高峰日の法を嗣ぐ、元に航し諸禪宿に參叩す、東皈の後丹波橫山に隱棲す、細川賴之慧日寺を刱して師を請す、僧錄司普明國師(妙葩)臨川寺に招くも出でず、永和四年三月八日慧日寺に寂す、壽八十、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ミヨーキ 妙喜 シユーセキ宗績を見よ、

ミヨーキヨー 妙慶 二〇八二 二一五三 〔曹洞宗〕越後顯聖寺の開山なり、 妙慶字は快菴、薩摩の人なり、十五歲にして出家行脚し殆んど二十餘員の老宿に參す、終に京都に至り宗熙藏主に謁し自ら悟れりとなし、美濃祥雲山に往き南谷に菴居すること半年、華叟正蕚に謁し服勤數年遂に印可を付せらる、越後の檀越顯聖寺を建て師徃て之れを主とる、下野郡主小山成長大中寺を刱し師を請して開山となす、明應二年十二月二十六日寂す、壽七十二、法嗣培芝正悅あり、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーギヨー 妙堯尼 ……二二四三 〔日蓮宗〕山城本蓮寺の中興なり、 妙堯尼は其俗姓を詳にせす、京都の人なり、天文法亂に本蓮寺燒失す、妙堯深く之を悲み別に地を相して一精舍を造營す、以後本蓮寺と云はすして妙堯寺と呼ひ、今に至るまで神力山妙堯寺と稱す、天正十一年十一月十三日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統記)

ミヨーグ 妙弘 ニチショーニ日證尼を見よ、

ミヨークー 妙空 (一九六八) 高麗國の禪僧なり、 妙空字は空室、俗姓不詳、我國に渡來して佛國禪師(顯日)の下に禪を參究し、遂に其法を嗣ぎて西歸し高麗水精寺に居る、示寂の年時缺く 法嗣慶芳あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕 延寶傳燈錄、本朝高僧傳(慶芳傳)に妙空の年時を缺くも延慶の頃の人ならむ

ミヨークー 妙空 (一六七七) 〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、 妙空は其俗姓生國詳ならず、出家の後淨土を求めて世

縁に染ます、或る時源信僧都に謀り丈六佛を作らんとし、功未だ畢らざるに寂す、其年時及壽缺く。（三外往生傳）

ミヨークー　妙空尼　二三〇八　二三八〇〔日蓮宗〕山城深草養壽庵の尼なり、妙空字は教智、茨木氏某の女にして攝津の人なり、平野某に嫁し一女を生む、夙に出家を願ふと雖良人許さす空しく時の至るを待てり、正住院同廣覺性院日實は良人と友として善し、妙空二僧の感化を受け、道行愈進む、夫婦の禮を避けて專ら讀誦唱題を務むるが故に遂に良人の疎する所となる、即ち時を得て覺性院日實に依り落飾す、時に二十五歳なり、日實の命に從ひ深草養壽庵に入り日燈に就きて本門の大戒比丘尼となる、日玉尼に侍して淨行を修す、妙空和歌に長す、一女亦母の跡を追ひて至り出家して智岳妙高と呼ふ、妙高先んして死す、妙空養壽庵に居ること四十餘年、享保五年正月十五日寂す、壽七十三、一字三禮開結共十卷血書したりと云ふ、（本化別頭佛祖統記）

ミヨークワイ　妙快（二〇〇六）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、妙快字は古劍、夢窓疎石に師事して其法を得、印可を受けて支那に入り、恕中慍楚石琦穆菴康等に謁して悉く器許を蒙むり、歸朝して龜山に寓居す、光明上皇伏見大光明寺に召して法を問ひ、官茶及ひ御製の詩を賜ふ、旨を奉して東光寺建仁寺建長寺等の諸刹に歷住し、晩年西山の壽光菴に退居し、某年寂す、壽缺く、著作語錄、了幻集等あり（本朝高僧傳）

〔考〕　妙快は正平の頃の人なり

ミヨーグワツ　妙月　一九三三　ニチギヨクニ日玉尼を見よ、

ミヨークワン　妙環　二〇一四　〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、妙環字は樞翁、高峯日の法嗣なり、後建長寺に遷り、雲外菴を構へて退休す、文和三年二月十八日菴に寂す、壽八十三、遺偈あり、蹈ニ破虚空一、踢ニ翻大地一、別有ニ末後句一、今年八十二、門下に雲峯霖、大岳積、大綱整、天初廓の四上足あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ミヨークワン　妙觀（一四三七）〔……〕攝津勝尾寺の僧なり、妙觀は何處の人なるを知らす、光仁天皇の寶龜八年攝津勝尾寺の觀音像を作る、（元亨釋書）

ミヨークワン　妙觀尼（一三九七）奈良の歌人なり、妙觀尼は養老七年從五位上を授けられ、神龜元年姓河上忌寸を賜ふ、天平九年正五位に進み、和歌を以て聞ゆ、其作萬葉集に載す、（萬葉集作者履歷）

ミヨーケン　妙謙　二〇二九……〔臨濟宗〕伊豆國清寺の開山なり、妙謙字は無礙、俗姓不詳、武藏の人、佛國禪師の法を嗣ぐ、後元に航し、雪村梅天岸廣等と共に江浙の禪林を遍歷す、中峯本に謁して參究す、妙謙東皈の時崇報寺の行中仁送別の詩あり、回首搏桑若個邊、春風萬里上ニ皈船一、神龍餽レ供雲迷レ海、仙女吹レ花月在レ天、密意西來端有レ得、新詩東去豈無レ傳、若逢ニ石室一煩ニ通問一、歳晩南湖學レ種レ蓮、相模壽福寺に住す、晩年如意菴を構へて老躰を養ふ、上杉憲顯伊豆の奈古谷に國淸寺を創して師を聘す、應安二年七月十三日寂す、勅諡佛眞禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ミヨーゲンイン　妙玄院　ニチトー日等を見よ、

ミヨーゴ　妙悟　二〇五一……〔曹洞宗〕越中淸源寺の開山なり、妙悟字は省山、加賀の人、大徹宗令の法を嗣く、大徹

の立川寺に住するに際し師其分座となる、檀越海慧寺を捌し師請せられて開山となる、後總持寺に出世し、晩年に越中富山に淸源寺を建て居り、明德二年八月一日寂す、遺偈に曰ふ、生也恁麼、死也恁麼、火院躍跳、煙翻二氷河一、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーゴイン 妙悟院　ニチヂン日玄を見よ、

ミヨーコー 妙康 二〇六六 二一四五 〔曹洞宗〕武藏龍穩寺の第三代なり、　妙康字は泰叟、對馬國の人、俗姓は平氏なり、家を辭して里院に於て出家す、受戒の後徧く高僧を歷訪し、東國の禪席甚だ盛なりと聞き、海を渡りて東に來り大雄寺大綱に參す、居ること一年、尾張楞巖寺に至りて月江に謁し、命せられて內記を主とる、月江永澤大泉寺に遷るに及ひ師其下に隨侍すること十年、深く其旨を得たり、出でゝ總持寺に出世し次で大泉寺に補し永澤最乘二寺に遷る、武藏龍穩寺は大將軍義敎艸創の寺にして無極を始祖と爲し月江二代たり、文明四年備中の太守太田資淸世子持資と倶に謀て大に伽藍を興し師を聘請す、師住持して第三代と爲り、文明十七年十一月十四日寂す、壽八十、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーコーニ 妙香尼 (……) 〔日蓮宗〕某庵の尼なり、　妙香は野本式部輝久の臣、三宅內藏助信勝の妻なり、信勝主に徇して忠死するに及ひ、出家して先夫の靈を弔ふ、一子あり捨てゝ僧となす、智照院日玄是なり、妙香示寂の年時、及ひ壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ミヨーゴク 妙極　カクゲン覺彥を見よ、

ミヨーコクイン 妙國院　ニチシユク日祝を見よ、

ミヨーサ 妙佐　ニチケンニ日顯尼を見よ、

ミヨーザイ 妙在 二〇三七 …… 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　妙在字は此山、俗姓不詳、信濃の人なり、佛國禪師の下に參究功を積み印記を受く、後元に航し諸刹を歷問す、東歸の後天龍寺に留り、尋て建仁南禪圓覺の諸寺に歷住す、晚年圓覺寺中の定正菴に居す、永和二年病に罹り明年正月十二日寂す、定正菴及京師の十如是菴に遺骨を收む、遺偈あり賣弄一山過、彌ゝ罪犯多、今朝機轉レ位、無レ佛亦無レ魔、師詩名ありて著作若木集二卷あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、日本名僧傳、五山高僧小傳)

ミヨーシ 妙旨 (……) 〔日蓮宗〕某庵の僧なり、　妙旨其生國俗姓を詳にせす、始め飯高談林に學ひしが信施を受くることを恐れ、僧形を變し自ら道人と稱し、若狹小濱に幽居し淸貧を樂み揮毫を以て母を養ふ、頗る能書の聞あり、示寂の年時缺く、(扶桑隱逸傳、本化別頭佛祖統紀)

ミヨーシ 妙子　ニチセー日政を見よ、

ミヨーシキ 妙式 二三一三 二三八三 〔眞宗〕近江堅田本福寺十二代なり、　妙式は葡萄坊千那と號す、近江の人、律師に任せらる、徘句を以て聞ゆ、世に蕉門の迦葉と呼ぶ、享保八年四月十日寂す、壽七十一、著作有邪無邪關あり、師の徘句「水ばなにまことを見する十夜かな」蠅打ちて後にはながめられにけり等人口に膾炙す、(俳諧名譽談)

ミヨージツ 妙實 一九五七 二〇二四 〔日蓮宗〕京都妙顯寺第二代なり、　妙實は大覺と號す、小字は月光麻呂、攝政近衞藤公經忠の子なり、初め嵯峨の大覺寺に入り眞言宗を受く、一日京師に

入るの次日像の法筵に遭ふ、欣然として難遭の想を生し聽聞七日、其徒智覺、正覺、祐存、等日々相從ふ、隨喜信服して忽ち眞言を棄つ時に師十七歳なり、日像に師事し宗意を究む、正和の頃より元應に至て毎歳春秋日朗に省覲すると凡十一回、一年天下大に旱す師詔を奉して請雨の法を修して効あり、天皇大に悅び其欲する所を言はしむ、師因て高祖及び日朗日像の菩薩號を請ふ、乃ち高祖日蓮に大菩薩二師に菩薩を贈らる、尋て師を擢てゝ大僧正と爲す、特に大覺の二大字を書して之を賜ふ、是れより大覺大僧正と呼ふ、延文三年七月詔して曰く宜しく四海の唱導と爲り一乘の弘通を致さるべし云云、初め文和四年の秋將軍尊氏三莊を割て之に附す、又義詮僧伽梨幷に水精の念珠等を寄す、貞治三年四月三日寂す、壽六十八、（龍華歷代師承傳、本化別頭佛祖統紀）

ミヨーシンイン　妙心院　ニチテン日奠を見よ、

ミヨージヤクイン　明寂院　ニチジン日深を見よ、

ミヨーシユ　妙珠（二〇一こ）〔臨濟宗〕京都天龍寺の藏主なり、妙珠は夢窓國師の法嗣にして天龍寺にありて經藏を掌とる、寂年及世壽缺く、（延寶傳燈錄）

ミヨージユ　妙壽　ニチセンニ日仙尼を見よ、

ミヨーシユー　妙周（……）〔臨濟宗〕京都大德寺の禪僧なり、妙周字は岐岳と云ふ、大象宗嘉に參して印可を付せらる、性剛毅にして衆の爲めに畏敬せらる、初め筑前崇福寺に住し、後、大德寺に遷る、寂年及世壽缺く、臨終に偈を說いて曰く、呑ニ卻乾坤一、成ニ鐵崑崙一、夜來依レ舊レ唯我獨尊（延寶傳燈錄）

ミヨージユン　妙準（一九七六）〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、妙準字は太平、俗姓不詳、早年にして雲巖寺高峰日、建長寺約翁儉に隨ふ、後雲巖寺に高峯日の後を繼ぎ、尋て相模淨智寺に遷り住す、示寂の年時缺く、遺偈あり、末後一句、向下文長、處處無ニ蹤跡一、地獄與ニ天堂一、勅諡佛應禪師と云ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ミヨージユン　妙順尼（二三一三―二三八三）〔日蓮宗〕山城壽養庵第三代なり、妙順字は孝淑と云ひ、法壽庵日久の妹なり、幼にして父を喪ひ、母に侍せしか、母出家して日玉と云ひ、養壽庵に住するに際し、膝下を離るゝを欲せず庵に至り母に見ゆ、遂に日政日燈兩師の許可を得、日燈は剃度の式を設けて之を落飾せしめ、日政は孝淑妙順の名を授く、時に十四歳なり、性學を好み妙經を了得し傍ら外典を習ふ、且詩歌を能くす、妙順三十歳ならすして外典を讀ます、詩歌共に棄て一心一向に道行を務む、法壽寂後幾ならすして享保八年二月七日寂す、壽七十一、晚年終を期して讀誦妙行一千部成就すと云ふ、（本化別頭佛祖統紀）

ミヨーシヨー　妙性　シンチン眞儆を見よ、

ミヨージヨー　妙讓（二〇一こ）〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、妙讓字は南峯と云ふ、眞空妙應禪師に參して印可を付せらる、初め天龍寺の前堂に居りて分座說法し、後相模壽福寺に住す、寂年缺く、嗣法五人建長寺心聞開、松岳貞、淨智寺西源竺、淨妙寺吉山貞、圓覺寺九蓙これなり、（延寶傳燈錄）

ミヨージヨー　妙常　ニチミヨーニ日妙尼を見よ、

ミヨーショーイン　妙勝院　ニチキヨー日曉を見よ、

ミヨージヨーイン　妙乘院　ニチショー日昇を見よ、

ミヨージヨーニ　妙定尼　二〇八八……〔日蓮宗〕山城法華院の尼なり、　妙定尼は一條關白經嗣の女なり、經嗣薨するに及ひて世の無常に感し、出家して日蓮宗に入る、眞廣法印の舊迹なる東寺門前の法華堂の廢地に精舍を設け、持誦唱題を務む、居ること十年、正長元年七月一日寂す、壽缺く平素和歌を善くし、其詠歌は人口に膾炙せり、精舍は後寺となり法華院といふ、(本化別頭佛祖統紀)

ミヨーズイ　妙瑞（……）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、　妙瑞傳詳ならす、高野山にありて佛祖正傳集を著し、別義を破し、根來山の敵隆と論爭せり、寂年幷に壽缺く、

ミヨーゼ　妙是　ニチソーニ日相尼を見よ、

ミヨーセキ　妙積（二〇二八……）〔臨濟宗〕相模圓覺寺の禪僧なり、　妙積字は大岳、俗姓不詳、樞翁環の法を嗣ぐ、後元に航し楚石琦等諸宗匠に歴謁參究す、東皈の後鎌倉幕府に請せられ、淨妙寺圓覺寺に歴住す、示寂の年時缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕　妙積は貞治應安の交の人なり

ミヨーセン　妙船尼（……）〔眞宗〕某菴の尼なり、　妙船尼は江戶の人、俳諧者不角の妹なり、松村氏に嫁して貞操あり、後出家し念佛の餘暇俳諧を嗜む、寂年詳ならす、(續近世畸人傳)

ミヨーソン　妙尊（……）〔眞言宗〕近江石山寺の僧なり、　妙尊法華經を誦持し偶丹波に赴く、途中病に罹り馬に賃して京に入り祇園寺の側に憩ふ、寺中の一夫馬を見て大に怒りて曰ふ、是れ我畜ふ所の馬なり汝何ぞ盜み去ると、意に任せて鞭撻し引きて屋柱に繫く、師橫逆に遭ふも夙債なりと觀し專心に誦持す、其夜寺中の數輩の夢に一夫あり普賢菩薩を縛するを見る、明旦師の屋梁に繫がるゝを見てこれを解く、其日かの夫は人のために射殺せらる、聞くもの皆聖僧を辱しめたる報なりと云ひたりとぞ、(本朝高僧傳)

ミヨータイ　妙諦（二三七六）〔臨濟宗〕和泉佛在菴の禪僧なり、　妙諦字は聖僕、號は南外史と云ふ、享保元年佛在菴に在りて禪籍志一卷を編す、

ミヨータク　妙澤　一九六六 二〇四八　〔臨濟宗〕下野國淸寺の僧なり、　妙澤は古劍と字す、下野足利國淸寺第九代の住持にして夢窓國師の高弟なり、幼より書を好み每に不動の像を書き其技妙に入り、世に妙澤不動と稱し最も珍重せらる、又鐘馗を能くし牧溪因多羅の風に似たり、嘉慶二年九月寂す、壽八十三、(扶桑畫人傳、鑒定便覽)

ミヨータツ　妙達　一六〇七　〔天台宗〕出羽龍華寺の僧なり、　妙達龍華寺に住して專ら法華經を誦持す、天曆九年に手に經卷を捧けて俄然寂す、暫時にして蘇生し、達冥官に引かれて閻魔王の前に出て、娑婆の四衆の罪業に耽けることを誡められたり云々とて益淨行を勵みたり、(本朝高僧傳)

ミヨーチ　妙智　二二四七……〔曹洞宗〕薩摩善勝寺の開山なり、　妙智字は愚丘、薩摩の人俗姓は藤原氏島津の一族なり、稍長して竹居正猷禪師に依て出家し、徧く諸方を參歷して福昌寺に皈り、仲翁守邦禪師に見えて法衣竹篦を付せられ分座

説法す、後大守島津氏の請に依り法を福昌寺に開き、妙圓舍粒諸寺に歴遷す、晩年檀越等同國に善勝寺を創建し、師迎へられて第一代となる、長享元年十月二十四日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーチン　妙珍　二〇〇四……〔日蓮宗〕加賀寶乘寺の開山なり、妙珍は日像の弟子なり、日像北遊の途次加賀直江谷に於て宗門を弘め來皈するもの多し、妙珍も亦其一人なり、直江谷邑主井家庄太郎に迎へられて妙珍山寶乘寺を開く、是れ加賀に於ける日蓮宗最初の寺なり、師康永三年八月一日寂す、壽缺く、(本化別頭佛祖統紀)

ミヨーチユー　妙沖尼(……)〔……〕某菴の尼なり、妙沖尼俗姓は橘氏逸勢の女なり、逸勢罪を得て貶せらるゝに及び悲泣徒步して從ふ、監護の使者叱して去らしむ、乃ち晝は止まり夜は行き遂に相離れざるを得たり、逸勢死するに及び屍を收めて葬り、其側に廬居して去らず、落髮して尼となり妙沖と名け誓念苦行懈らず、十年の後逸勢の罪を免さるゝに及び、屍を負ひ還りて改葬す、寂年壽缺く、(大日本史)

ミヨーチヨー　妙超　一九四一―一九九六〔臨濟宗〕京師大德寺の開山なり、妙超字は宗峯、俗姓紀氏播磨揖西郡の人なり、父母書寫山の觀首に祈り靈夢を感じて生む、早年穎敏の性質屢人を驚かす、十一歳書寫山圓敎寺に投じ戒信律師に親附す、天台の敎觀を修め、後禪を慕ひ萬壽寺に到り佛國禪師に謁し參究す、一僧の百丈の語を讀むを聞き省あり、嘉元三年大應國師(紹明)詔を拜し筑紫より上り京師韜光菴に住す、師即ち問訊し國師の萬壽寺に入るに隨ひ參究益力む、德治二年國師東下相模鎌倉の建長寺に遷り住するに亦隨ふ、一日案上に鑰鎖の放在するに因りて忽然大悟す、即ち國師の印可證明を受く、偈二首を呈す、一回透㆓過雲關㆒了、南北東西活路通、夕處朝遊沒㆓賓主㆒、脚頭脚尾起㆓淸風㆒、透過雲關無㆓舊路㆒、靑天白日是家山、機輪通變難㆓人到㆒、金色頭陀拱㆑手還、國師其後に書して曰ふ、儞既明投暗合、吾不知儞、吾宗到儞大立只是二十年長養使人知此證明矣、爲妙超禪人書、巨福山南浦紹明、延慶元年國師寂す、喪畢りて京師に上り雲居寺に住す、嘉曆元年紫野に小院を構へて幽棲す、道俗問訊するもの踵を接す、玄慧法印内外の學に通ず、元亨の宮論の後師に歸し敎外の旨を究め私宅を捨てゝ方丈となす、後に雲門菴と云ふ、俗緣の赤松圓心深く師の德に歸依し巨資を投して堂宅を建立す、即ち龍寶山大德寺なり、超請により開堂を行ふ、これより法化益盛なり、花園上皇勅詔して宮中に法要を問答したまひ深く其德に歸依したまひ特に勅して興禪大燈國師の號を賜ふ、且つ大德寺を官寺となし朝廷第一の祈禱に充てたまふ、後醍醐天皇立ちたまひて恩寵益渥し、屢勅召あり宮中に法要を問答したまふ、師嘗て法語一編を上る天皇嘉賞あり御製の偈を給へり、二十年來辛苦人、迎㆑春不㆑換舊風烟、著禮喫飯恁麼去、大地那曾有㆓一塵㆒、後又淸涼殿に法要を說く、勅して高照正燈國師の號を加賜したまひ且つ兼金縑帛等を賜ふ、尋て大德寺に莊田を賜ふ、美濃の長林、播摩の小宅三職方、幷に浦上、下總の遠山方御厨、信濃の伴野、紀伊の高家等若干畝なり、建武の初め特に陞して南禪寺と同格としたまふ、大宰府都督大友賴尙崇福

寺に請す、師は先師開法の地なれば欣然應じて西下し住持期年にして歸る　再び大德寺に住　德望一世を覆ふ、延元元年の冬首座徹翁義亨を召して懇に後事を付し、十二月廿一夜に至り諸弟子に遺誡を與へ、翌二十二日午時胡牀に端坐示寂せむとす、而も足疾あり結跏趺坐する能はず、兩手を以て左足を右股の上に加ふ　左膝傷折して血流れ衣を染む、乃ち偈を書して曰ふ、截斷佛祖、吹毛常磨、機輪轉處、虛空咬牙、筆を擲ちて寂す、壽五十六、臘三十四、諸弟子靈光塔を起して靈骨を收む、嗣法十五人、語錄若干卷、夜話記一卷あり、貞享三年勅謚大慈雲匡眞國師と賜ふ、(行狀、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

〔考〕槐安國語に妙超が五條橋下に乞食の群に投じ席を被りて臥したれば朝旨あり、其嗜むところの甜瓜を與へて召し出ださる云々との一條の話あり、甚だ奇矯なれども事實ならむか、

ミヨーテキ　妙適　二三九八……〔眞言宗〕山城槇尾山の僧なり、　妙適字は無染房、攝津大阪の人、出家して槇尾山に住し學德の聞え高し、元文三年寂す、壽缺く、門下に法相宗の大同坊基辨を出だす、(續傳燈廣錄)

ミヨーテツ　妙喆　(一九七六)　〔臨濟宗〕相模鎌倉淨妙寺の禪僧なり、　妙喆字は大同、奥州の人、下野雲巖寺に到り佛國禪師(顯日)に謁す　藤原氏京師に北禪寺(曆應の初安國寺と改む)を興して請す乃ち開山祖となる、京師の眞如寺鎌倉の淨妙寺に歷遷し、後建長寺中正印菴に退休す、臨終の偈あり、末後一句、透過牢關、金鎚影動、寶劍光寒、其年時缺く

(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ミヨーハ　妙葩　二〇七一／一四八　〔臨濟宗〕山城相國寺第二代なり、　妙葩字は春屋、自ら不經子と號す、甲斐の人、父は平氏母は源氏の出にして夢窓國師の姪なり、初めて三歲夢窓國師に投し夢窓口つから心經を授くるに師之を誦す、七歲美濃古溪寺にて法華を習ひ七日にして軸を畢ふ、十二歲甲斐に歸り惠林寺道滿に依る、嘉曆元年十七歲にして默翁誠と共に京都に登りて夢窓を南禪寺に拜し下髮受具す、此秋夢窓龍山を退き元翁元席を補するに方り師之に侍して宗意を研究す、明年相模瑞鹿山に往き夢窓に侍し竺仙に淨智寺に參す、建武元年淸拙南禪寺に住し師を迎へて悅衆となし、竺仙の淨智寺を退くに及び擧けて其席を補せしむ、貞和元年天龍寺落慶して諸山を請して法會を修し、師其記綱となる、後衣法を付せられ法兄無極玄天龍寺に主となり、師を擧けて第二座とす、延文二年將軍足利尊氏請して等持寺に住せしむ、明年春天龍寺火災に罹り師幹事となりて期年にして其功を畢ふ、弘安元年臨川寺累燒す、同門の老宿亦師を請して再興の工を幹せしむ、貞治初年後光嚴天皇屢々師を召して法要を問ひ、衣鉢を賜ひ優遇甚だ篤く智覺普明國師の號を賜ふ、武藏の刺史細川賴之阿波の光勝院を剏して師を此に居らしむ、三年伏見の大光明寺に移り、皇太后の爲に昇座說法し上皇の臨御を仰く、同十一月命ありて天龍寺に移つる、六年高麗國の使臣金龍等二十五人來朝して西山に館し、師の道望を慕ひて皆衣鉢を受け弟子の禮を執る、應安二年南禪寺新に三門を建つ、其境地延曆寺の故封を侵す比叡山の僧徒幕府に訴へて南禪寺を毀たん

とす、師管領細川頼之に訴へ之を防止す、僧徒志を果たさす、乃ち日吉の神輿を奉して內庭に入らんとす、南禪寺の一衆因りて大に奮戰す、師退きて丹後の雲門菴に隱居し、康曆元年旨を受けて南禪寺に住す、後圓融帝屢々師を招きて宮中に法を聽き特に內道場にて戒を受け衣を傳ふ、翌年正月智覺普明國師の號を賜ふ、將軍義滿勅を奉して師を僧錄司となす、後義滿奇夢を感して城西に覺雄山寶幢寺を建て師を第一代となす、永德二年二月又天龍寺に主となり後金剛院に退居す、至德元年萬年山相國寺に請せられ夢窓を追請して開山となし自ら第二代となる、又京都の景德寺備後の天寧寺伊豫の安國寺出羽の崇禪寺等の開山となり、嘉慶元年病に罹り移りて鹿王院に居り、翌二年八月十二日衆を集めて永訣し、偈を書して曰く幻生七十有餘年、了ニ却先師未了因ヲ、一國黃金收拾去、古帆高掛合同船、と、晏然寂す、壽七十八、臘六十四、受度の弟子八千五百餘人、著作語錄あり、(本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

ミヨーホー 妙峰　ゲンジツ玄實を見よ、

ミヨーホー 妙法　ニチカ日荷を見よ、

ミヨーホー 妙法　ニチリヨーニ日了尼を見よ、

ミヨーホーニ 妙法尼　二二〇六 二二六七　〔日蓮宗〕某菴の尼なり、妙法は了秀院と號し、久我中納言晴通の女にして野本式部輝久に嫁す、輝久死するに及び出家して日蓮宗に歸す、時に十九歲なり、讀誦唱題して一心に專修す、慶長十二年八月十七日寂す、壽六十二、(本化別頭佛祖統紀)

ミヨーホン 妙本　ニチクニ日久尼を見よ、

ミヨーモン 妙文　一九三九 二〇一八　〔日蓮宗〕越前妙泰寺第二代なり、　妙文は能登瀧ヶ谷妙成寺日乘の俗弟なり、初めは越中羽丹生八幡宮の社僧となり、眞密二宗を兼ね權僧都となる、兄日乘改宗の事を聞き就いて其敎を受け、又日像に見えて改宗受戒し、日像に從つて越前脇本に到り、一勝地を得て妙泰寺を刱し、日像を開山となし、自ら第二代となる、後ち同郡今宿村に光明山妙勸寺を創し弘化盛なり、廣野に閑居し、延文三年三月三日寂す、壽八十、(本化別頭佛祖統紀)

ミヨーヤ 妙彌　(……)〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、　妙彌字は堅中、出家して九峰虔の法を嗣ぎ、初め東勝寺に住し後淨智寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ミヨーユー 妙融　一九九三 二〇五三　〔曹洞宗〕豐後泉福寺の開山なり、　妙融字を無著といふ、俗姓は藤原氏、大隅の人なり、十九歲日向の大慈寺に往き剛中柔禪師を禮して薙髮受戒す、鷲峰の三光國師に參して法を問ひ、鄉里に皈へりて靈山の與聖寺に掛錫し九旬にして省あり、薩摩の副田に菴を構へて居る、同參の僧あり能登總持寺に到り第一座無外昭に師の道風を語る、無外の皐德寺を開くに及び師招かれて其下に究む、後無外の總持寺に歸へるに方り、師命によりて皐德寺に主となり法衣を付せらる、後諸州に遊化し貞治五年日向の太平山を刱し、應安の初め伊勢の二見に庵居し、豐後に往き教院を改めて禪寺となし盛に宗乘を唱ふ、康永元年大守田原氏泉福寺を建て師を其開山となし五百僧を置く、永德三年鄉里に歸り天山の南に茅を結びて菴居し、秋松浦の醫王寺に移つる、信濃守藤原秀高の夫人了本肥州佐嘉郡に玉林寺を建てゝ師を開山となす、師亦筑州の大聖寺豐州の永照寺等を開き、明德三年泉福

寺に歸へる、四年七月の初め病に罹り、八月十二日偈を書して寂す、壽六十一、臘四十二、寺の西北隅に葬むり塔を普門と云ふ、(本朝高僧傳)

ミヨーユー　妙祐　(二一〇五)　〔曹洞宗〕伯耆定光寺の禪僧なり、　妙祐字は淸寧、薩摩の人、出家して機堂長應禪師に師事すること七年、機堂示寂の後其法席を繼ぎ、伯耆定光寺に主となる、文安二年慈眼寺に主となり、次で永澤寺に遷り、總持寺に出世す、寂年缺く、(日本洞上聯燈錄)

ミヨーヨ　妙譽　ジョーグワッ定月を見よ、

ミヨーリン　妙霖　(……)　〔臨濟宗〕相模淨智寺の禪僧なり、　妙霖字は雷峰と云ふ、樞翁に參して法を嗣ぎ、相模淨智寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

ミヨーリン　妙林　ニチテーニ日貞尼を見よ、

ミヨーリユー　妙龍　二三六五　二四四六　〔眞言宗〕尾張興正寺第五代なり、　妙龍字は諦忍、雲蓮社空花と號す、父は仙石忠績、母は磯谷氏の出なり、寶永二年六月二十二日を以て美濃國賀茂郡山上邑に生る、正德元年五月三日甫めて七歲、州の神照寺檜道に投じて僧業を受け、三年六月五日九歲にして薙髮得度し魯典を習ひ竺墳を讀む、享保元年三月同國三光寺戒龍律師灌頂壇を開くに際し師召されて侍者となる、時に十二歲なり、十四歲の時長安寺岱梁和尙の戒本宗要梵網古跡記を講するを聞き、翌年十八契印金剛界胎藏界不動護摩法等を修行す、同六年檜道尾張八事山に到り山主點阿和尙に請うて師をして其弟子たらしむ、八年八月十九歲にして點阿の命により現前分物考を校訂す、同十三年正月十一日具足戒を受け、五月常照より小野流諸尊法、六月淨土鎭西白旗流璽書を受く、時に二十四歲なり、明年八月檜道の命により遍照院に於て普門品を十六年九月秘藏寶鑰纂解を講ず、十九年五月七日中納言宗春の命により尾張八事山興正寺第五代となる、時に三十歲なり、これより大に宗門を張り一住五十二年、天明六年六月十日寂す、壽八十二、臘五十九、遺偈あり曰く、四大飛自性、自性飛四大、何物是本性、阿鑁覽吽欠、と、著作會佛無上醍醐篇、彌陀和讃集註各三卷、空華隨筆、善導大師行狀記、西方淨土十樂手鏡、念佛不思議神力傳各二卷、梵網經要解弁惑問十一卷、律苑行事問辨十卷、空華談叢七卷、大光普照集三卷、彌陀和讃、開山和尙行業記、蓮花標名錄、鐵壁法話、天狗名義考、念佛醍醐秘要藏、合掌叉手本義編、三聚淨戒記、弘法大師念佛法話直解、閑窓雜錄、坐具顯正錄、盆供施餓鬼問辨、日本最初念佛法諺註、一枚起請文諸說辨斷、伊呂波問辨、神國神宗論、金作摧駁、放生手引草、本方六字丸、衆律弘通記、坐右寶鑑、顯戒章、日課念佛圖說、指迷篇、無住國師道跡考、迦葉傳衣非金襴辨、苦海之海船、梵網經秘略釋、馬朗婦觀音記、率塔婆用意鈔各一卷等あり、(諦忍和尙略年譜、近代名家著述目錄)

ミヨーリユー　妙立　ジサン慈山を見よ、

ミヨーリユーイン　妙隆院　ニチギヨク日玉を見よ、

ミヨーリユーイン　妙龍院　ニチジヨー日靜を見よ、

ミヨーリヨー　妙了　ニチブツニ日佛尼を見よ、

ミヨーア　名阿　コウン孤雲を見よ、

ミヨーゼン　命禪　一六二三　一七〇〇　〔眞言宗〕大和圓成寺の開山な

り、　命禪俗姓は小野氏、春時の胤裔なり、妙年にして祝髮し、大和大安寺に投じて法相宗を學び後、寛空僧正に師事して瑜伽の密法を受け兼て台教に密なり、三輪の五大輪寺に住す、萬壽三年諸刹に遊び大和忍辱山に至り、圓成寺を剏して此に住し、長久元年寂す、壽七十八、（本朝高僧傳）

ミヨークワ　猛火　二三七六／二四四八　〔眞宗〕伊勢松坂眞臺寺の住持なり、　猛火字は明了、號は赤須眞人と云ふ、伊勢飯高郡松坂の人なり、小字は勝と云ふ、父母九子を亡ひ、嗣を不動尊に祈禱し、母靈夢に感して孕む、享保元年丙申六月一日生る、異相あり、十一歳にして父を喪ひ、母に事へて孝なり、十九歳五畿より近江紀伊に歷遊して名山大川の勝景を探り、二十一歳眞宗高田派の本山に至り、東海巍堂の二師に謁す、後京師に上り、詩文殊に進む、神助あるか如し、當時海內荻生徂徠服部南郭の詩風を喜ふ、師盛唐の詩風を喜ふ、且つ書篆刻を善くす、金蓮寺に莊子を講し、古人未解の新義を發す、三十三歳熊野に遊ふ三十四歳伊勢に皈り、眞臺寺の東北に閑居し、一女を生む、女十一歳にして死し、妻次て死す、師これより才氣益進み、詩文手に應して成る、天明八年五月廿九日寂す、壽七十三、著作赤須眞人詩集若干卷あり、門人衆妙、法幢、無極三人の同輯にかゝるなり、左に集中の詩一首を錄せん、

赤須眞人

「離筵酒酣我卒然作ニ信甲歌一歌レ之、莫下君聞ニ此天岨之難一而生中長途悲上、勢之地盡白浪如レ雲湧、信之山嶮青薛如レ索垂、上有三立壁竦レ身棧道接ニ上天一、下有三疾流轉レ石殷雷走ニ深淵一、九頭龍吟風雨時起、淺間嶽燒烟火雲連、湖水凝波將レ解日、春花徒發犀河邊、舊府月明猿啼レ樹、空壘風悲鬼嘯レ雨、正南欲レ倒芙蓉峯、勢如ニ天柱海隅起一、一瞬絕頂陰晴變、忽然洞口風公怒、盛夏氷雪千尋谷、乾坤昔分界ニ草木一、仙家白鶴千年古、將軍獵場遠ニ林麓一、復不レ聞甲國澄湖湛不レ流、道人金錫初東遊、一驅山鬼裂巖岫、陳迹今見觀濤樓　山川之勝於戲美哉、美矣此山川之勝進ニ君才一、郡內市中交易富、葡萄垂レ蔓梨花開、六月暮陰絺綌寒、危橋宛轉遠ニ波瀾一、歸路平原青草裡、芙蓉雪色掌上看、駿參開國龍起地、風土于レ今抱ニ壯志一、憶伊往昔味方原、八陣奇正誰能記、年年江天雁長飛、山村寒蟲人ニ牀幃一、白露明月無限夜、思婦涙盡倚ニ閭闔一、閭闔一夢驚桐葉下、此時勢江鱸已肥　縱令畏日流ニ金石一、預分ニ秋風一何不レ歸」（赤須眞人自傳、赤須眞人詩集）

ムの部

ムイ　無爲　二二九四／二三七六　〔淨土宗〕山城知恩寺の僧なり、無

爲字は圓冏、京師の人なり、十三歳にして父を喪ひ數月を經て母の意に從て佛門に入る、後遂に江戸靈岸寺に至り珂山上人に師事す、寛文七年夢中に阿彌陀佛と觀見す、元祿元年幕府の命により知恩寺に住す、寶永三年九月十五日寂す、壽七十三、臘六十一、知恩寺に葬る、師は道行殊に高く初發心より命終まで晝夜横臥せず、三經を讀誦すること二万三千九百五部、阿彌陀經を讀誦すること十五万八千十五部、佛名の日課三万聲、四十一歳より尚三万聲を加へたりと云ふ、（鎭流祖傳）

ムイ 無爲　ガクシン學信を見よ、

ムイ 無爲　ショーゲン昭元を見よ、

ムイシツ 無爲室　シユーガイ衆鎧を見よ、

ムイドーニン 無爲道人　ジクワン慈觀を見よ、

ムイシツ 無異室　ギモク宜牧を見よ、

ムイン 無隱　エンハン圓範を見よ、

ムイン 無隱　ゲンクワイ元晦を見よ、

ムイン 無隱　シユーキ宗喜を見よ、

ムイン 無隱　ドーヒ道費を見よ、

ムイン 無隱　シユーイン宗因を見よ、

ムウン 無雲　ギテン義天を見よ、

ムガ 無我　ショーゴ省吾を見よ、

ムガ 無我　リユークワン隆寛を見よ、

ムガイ 無涯　二五四三……〔眞宗〕伊勢三重郡大井手村淨蓮寺の住持なり、無涯勸學は肥後の人、初め寛寧に就きて宗乘を學ひ、後美濃に遊ひ、了達院の門に入り、研鑽數年、學成るに及ひて伊勢國三重郡大井手村淨蓮寺に住持となる、明治の初め一專と同く勸學職に任せられ、十一年安居安樂集を學林に代講し、十六年某月病を以て寂す、享壽詳ならず、（學苑談叢）

ムガイ 無涯　ショーカイ性海を見よ、

ムガイ 無涯　チコー智洪を見よ、

ムガイ 無涯　ニンコー仁浩を見よ、

ムガク 無學　シゲン孜元を見よ、

ムガク 無學　シユーエン宗衍を見よ、

ムガク 無學　シユーフン宗棼を見よ、

ムガク 無學　ソゲン祖元を見よ、

ムガク 無學　モンエキ文奕を見よ、

ムキユー 無休　ダイゲン大玄を見よ、

ムキユー 無休　トクセン德詮を見よ、

ムクー 無空　一五七八……〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の學僧なり、無空出家して眞然の室に入りて密印を傳へ、壽長の寂後嗣て座主に補す、時に弘法大師筆寫の三十帖の小策秘して山中にあり傳へて師に至る、本と東寺寶藏のものなり、是に於て長者觀賢僧正責めてこれを還さしめんとすれとも師背んせず、將に朝に訴へんとす、延喜十六年八月師小策を抱きて伊賀に遁れ、十八年六月二十六日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ムクー 無空　一五八一……〔三論宗〕大和東大寺の僧なり、無空俗姓は橘氏、東大寺に居りて密教を學び、又念佛を修す、延喜二十一年六月寂す、壽缺く、（元亨釋書、本朝法華驗記、

日本往生極樂記）

ムグワツ　無月　セーハン誓般を見よ、

ムクワン　無關　フモン普門を見よ、

ムゲ　無外　二三一七……〔淨土宗〕岩代稱名寺の開山なり、無外は嘆蓮社讃譽と號し、下總大戸川の人なり、還無に就て淨土敎を學び、其法を嗣ぎて、後稱名寺を開く、明曆三年十月十三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ムゲ　無外　エンショー圓照を見よ、

ムゲ　無外　エンホー圓方を見よ、

ムゲ　無外　ケーゴン珪言を見よ、

ムゲ　無外　ショーコー承廣を見よ、

ムゲ　無外　ニネン爾然を見よ、

ムゲシ　無外子　エンツー圓通を見よ、

ムゲ　無礙　クワンツー關通を見よ、

ムゲ　無礙　ミョーケン妙謙を見よ、

ムゲコーイン　無礙光院　コーカイ光海を見よ、

ムゲン　無絃　二三〇〇……〔淨土宗〕下野新田大光院の僧なり、無絃號は往譽、伊勢の人なり、幼より了聞に師事して出家す、韻律詩文等を善くす、德化甚た至る、寛永十七年七月六日新田大光院に於て寂す、（鎭流祖傳）

ムゲン　無絃　トクショー德紹を見よ、

ムコー　無功　ダイコー大功を見よ、

ムゴク　無極　二三三一……〔淨土宗〕山城法成寺の開山なり、無極は廣蓮社大譽と號し、相模鎌倉の人、俗姓詳かならず、鎌倉光明寺に於て修學し、法を傳察に嗣ぐ、山城久世郡羽拍子村法成寺開山となり、寛文十一年二月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ムゴク　無極　エテツ慧徹を見よ、

ムゴク　無極　シゲン志玄を見よ、

ムゴン　無言　ショーキン昌謹を見よ、

ムサイ　無才　チオー智翁を見よ、

ムサイ　無際　ミコー彌浩を見よ、

ムザツ　無雜　ユージュン融純を見よ、

ムジシ　無似子　センガイ旃崖を見よ、

ムジン　無盡（二一二九）〔曹洞宗〕加賀妙雲寺の開山なり、無盡字は藏海、絕巖運奇の門に投じ法を嗣ぐ、加賀の檀越に請せられ龍興山妙雲寺の開山となる、示寂の年時缺く（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕無盡は天文前後の人ならむ、

ムジュー　無住　イチエン一圓を見よ、

ムジュー　無住　シケン思賢を見よ、

ムジュー　無住　リューサン龍山を見よ、

ムジューケン　無住軒　シューモン宗文を見よ、

ムショトクドーニン　無所得道人　ジカイ慈戒を見よ、

ムショトクドーニン　無所得道人　ミョーホー明寶を見よ、

ムショー　無象　ジョーショー靜照を見よ、

ムショー　無聖　ゼンカイ禪海を見よ、

ムセンボー　無染房　ミョーテキ妙適を見よ、

ムソー 無相 二四八五 〔新義眞言宗〕江戸根生院第三十一代なり、無相字は無動、白雲堂と號す、上野群馬郡の人なり、文政元年十二月十三日幕府の命を蒙り浦和玉藏院より江戸根生院に晉む、同八年十一月四日寂す、總持寺に葬る、壽缺く、著作因明科繼、因明圖注、三十三過本作法纂解、正語六合釋纂註、連歌六句選、仝三十六句選、仝百句選、四季二百題各一卷、百談茶談前後篇貳卷あり、（新義眞言宗史料）

ムソー 無相 カクタン覺潭を見よ、

ムソー 無相 モンオー文雄を見よ、

ムソー 無相 リョーシン良眞を見よ、

ムソー 無諍 ニチニン日忍を見よ、

ムタン 無端 ソクワン祖環を見よ、

ムチヤク 無著 （二四八八）〔曹洞宗〕尾張萬松寺の禪僧なり、無著字は黄泉といひ、別に雖小菴と號す、俗姓は江崎氏、尾張愛知郡山崎村の人なり、幼にして村の黄龍雄道に依て得度し、寛政十一年攝津に遊ひ、法華寺亮天に參して狗子無佛性の話を提撕し、また武藏に徃き靜簡院白淳に謁す、文化元年再ひ攝津に徃き五毛山祉にありて藏經を閲す、師覺道の法を嗣きて邑の白毫寺に住し、文政十一年夏幕命を蒙りて長崎皓臺寺を主とる、著作正法眼藏涉典錄、續貂反爾錄、永平小清規翼、心經忘筌等若干卷あり、

ムチヤク 無着 ドーチユー道忠を見よ、

ムチヤク 無着 ミョーユー妙融を見よ、

ムチヤク 無着 リョーエン良縁を見よ、

ムチヤクアン 無着菴 ジシユー慈周を見よ、

ムチユー 無中 イチキョー一鞏を見よ、

ムテキ 無敵 コーケン高健を見よ、

ムデン 無傳 ショートー正燈を見よ、

ムトー 無等 二四二四 〔新義眞言宗〕武藏寶仙寺第三十五代なり、無等字は本寂、俗姓は佐藤氏、武藏大里郡廣瀬村の人なり、元祿十二年州の瀬山村正福寺鏡秀法印の室に入り、仝年九月二十一日弘光寺智薩日叙に從つて薙髮す、寶永元年九月二十日覺意法印に灌頂を受け、豐山に留錫すること六年なり、延寶元年正月十七日化主信恕の命により寶仙寺に主となる、同三年十月灌頂及び結縁灌頂を修し受者五千人に及ぶ、師又法住能化の師にして尤も事相家として名あり、明和元年三月十三日寂す、壽缺く、著作大疏探頤錄十八卷、護摩口快二卷、金剛界傳授私記、眞言行者四度別行隨筆、胎藏界傳授私記各一卷あり、（新義眞言宗史料）

ムトー 無等 イリン以倫を見よ、

ムトー 無等 エスイ慧崇を見よ、

ムトー 無等 リョーオー良雄を見よ、

ムドー 無道 ジユテツ壽徹を見よ、

ムドー 無動 ムソー無相を見よ、

ムドー 無導 リョージツ良實を見よ、

ムトク 無德 シコー至孝を見よ、

ムトク 無得 リョーゴ良悟を見よ、

ムナン 無難 二二六三 二三三六 〔臨濟宗〕武藏澁谷東北寺の開山なり、無難字は至道と云ふ、美濃關ヶ原驛長三輪某（一説相川氏）の子なり、幼時草書に巧なり、郷人呼びて假名書童子

と云ふ、十五歲父に隨ひて京坂の間に遊び、世上の變遷を觀察して早く已に出家の志あり、父業を繼ぐものなきを以て其志を果さず、遂に父業を繼ぎて驛務を掌る、大仙愚堂國師の往來せらるゝ次、屢家に請して法門を問ふ、國師本來無一物の句を示す、無難晝夜參究し寢食を忘るゝに至る、國師大に其行業を賞し刧外と云ふ號を付し且つ偈を與へ益奬勵す、無難俗累を脫して偶事の參究を事とせむとて常に其便を求む、偶國師江戸に赴く途次その家を過るに適く家に在らず、家人國師に謂ひて曰ふ、家主比來酒に耽り上下日に疎し、動もすれば離散せむと欲す、和尙大慈大悲痛く方便を加へよ、と、國師諾し便ち樽酒を設けて待つ、深夜に至り果して大に酒を被りて歸り醉狂熛發し怒罵を極む、國師徐に出てゝ迎ふ、無難見て驚き服し上席に請し禮拜す、國師曰ふ、老僧事に因りて遠く行かむとす、即ち樽酒を設けて永訣の情を盡さむとす、と、大杯を擧げ無難に與ふ、師頂受す、國師叱して曰ふ、吾聞く汝大酒動もすれば人情を失すと、老僧今夜汝に大酒を許さむ、汝若し大丈夫の志氣あらば末後の醉を盡せ、向後再び手にするなかれと、無難稽首して曰ふ、是れ弟子の願ふ所老和尙此語を忘るゝなかれ、と、國師大笑し終夜淸話し曉に至り國師出發す、師出てゝ相送ること數里に及ぶ、國師屢諭せども歸らず、曰ふ、我已に繼嗣あり家事を慮る所あらずと、行裝を備へず、衣資を貯へず、戀々隨行して遂に江戸正燈新寺に到り、即日髻を截ち國師の前に蹲きて曰ふ、我れ久しく便を求め今幸にして俗累を脫するを得たり、得度を許したまへと、國師笑ひて請を容れ始めて無難と名く、爾來國師の下に師事して朝參暮請す、一日至道無難の話を透得す國師仍て至道庵主の號並に拂子を授く、是れ實に慶安二年師四十七歲の時なり、後國師は東陽禪師以來傳持の夾山百則公案の正本を授く、其過量の機あるを見ればなり、武藏麻布東北庵（後に東北寺と號す）に住し至道菴主と稱す、出羽米澤太守上杉氏美濃加納太守安藤氏等皆崇信して弟子の禮を執る、寬文の末參學の諸士相謀り澁谷に禪河山東北寺を建立し、師を請して開山となす、師事務を厭ひ正受端首座を擧げて當らしむ、端亦信濃に遁れ去る、時に愚堂國師の末後弟子慧水首座府内三田に隱る、師擧げて同寺第一代となす、（慧水洞天と號す後全體道の法嗣となる）別に一院を興し至道菴と號し幽棲す、延寶二年小石川に遷り、同四年八月十九日病なくして寂す、壽七十四、諸弟子東北寺に葬る、法嗣正受道鏡端禪師あり、次に四庵主あり、即ち祥山丹瑞菴主（至道二代）、光應一外庵主（谷中幻住庵に住す）、蝁融圓徹庵主（極樂水庵に住す）、明通淸鑑庵主（至道庵側に一小菴を結びて住す）なり、（續日本高僧傳、近世禪林寶僧傳）

ムニ 無二一 ホーイチ法一を見よ、

ムニン 無人 ニヨドー如導を見よ、

ムノー 無能 二三四三 二三七九 〔淨土宗〕奧州北半田の僧なり、無能字は守一、一に學運、俗姓矢吹氏、奧州石川郡次釜村の人なり、早年出家大安寺良覺に師事し、淨土の章疏を講究す、十八歲にして出遊し、江戸增上寺に投す、寶永二年山崎貝通上人に就きて宗戒兩脉を受け、同五年十二月常坐不臥唱號三萬遍を要誓す、明年五月川俣に草菴を結ひ、幽棲して專ら佛

號を唱ふ、正德三年正月以後日課十萬遍を唱ふ、口雜話を絕し、身雜事を營ます、喫茶喫飯の間も唱號の聲を斷たず、同年四月小島梅松寺に寓し、自ら生支を斷つ、幾もなく創瘥ゆ、十二月三寶諸天に誓ひて制誡七十二條を錄し、自ら誡む、享保三年北牛田の禪室に幽棲して微恙あり、秋より冬に至り危篤なり、十二月二十五日諸弟子に後事を托し、懇勤永訣す、廿七日同法良覺に謂ひて曰く、我不思議の因緣を以て數万人を敎化す、這回淨土に歸る、出世の本懷之に過ぎず、廿九日剃髮漱口し、念佛益々勵み、四年正月二日頭北面西阿彌陀の像に對して眠るが如く寂す、壽三十七、臘二十、師一生唱へし佛號三億六千九百三十餘萬遍、日課を受くる者十六万九千一百七十餘人、淨業の靈驗勝けて算ふへからす、(近代奥羽念佛驗記廿三卷に詳載す)師枯淡質朴にして衣食尤も愼む、常に紙衣を著け、嘗て紙衣十德ありといへり、一に求め易くして憂なし、二に盜賊の怖なし、三に名利の念を離る、四に寒を防ぎ風を遮ぎる、五に洗濯の煩なし、六に蚤虱住せず、七に執着の念を離る、八に起居自ら靜なり、九に他の羨望を絕す、十に行法を勵む媒となる、云々と、(續日本高僧傳、無能上人行業記)

ムヒ 無比　タンキョー單況を見よ、

ムミョー 無明 一二六七—一三三六 〔臨濟宗〕山城白河寺の開山なり、無明字は梅天、俗姓は源氏、須田爲實の後裔にして豐後の人なり、杵築侯に仕ふ、愚堂和尙養德寺に說法するときこれに謁して參禪し、明曆元年十二月二十八日年巳に半白にして伊勢中山に愚堂を拜して出家し、尋で熊野辭山に隱れ硏究一年愚堂の印記を受く、萬治三年京都烏木氏及宗入居士師に皈依し、靑龍山白河寺を建て師を開山に延く、後伊勢に往き內山玄壽慈眼寺を再興してこれに住す、延寶四年五月二日寂す、壽七十、臘二十、慈眼寺東北隅に葬る、著作長養用心記、十魔記、梅天禪師法語等あり、(續日本高僧傳)

ムム 無夢　イチショー一淸を見よ、

ムモン 無文　ゲンセン元選を見よ、

ムモン 無聞　ショーオン聖音を見よ、

ムモン 無問　ニチショー日詔を見よ、

ムヨー 無用　ジャクミョー寂明を見よ、

ムヨードーニン 無用道人　シューチョ周樗を見よ、

ムガン 夢巖　ソオー祖應を見よ、

ムスー 夢嵩　リョーシン良眞を見よ、

ムソー 夢窻　ソセキ疎石を見よ、

ムチユー 夢中　リョーネン良然を見よ、

ムデン 夢傳 ……一三三二 〔淨土宗〕對馬夢傳菴の開山なり、夢傳は鏡蓮社圓譽と號す、俗姓は山本氏、筑前博多の人なり、法を隨波に嗣ぎ、對馬府中に夢傳菴を剏してこれに住し、寬文二年十一月十三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ムナン 夢南　グシュン愚春を見よ、

ムハンシ 夢伴子　ショークワ紹杲を見よ、

ムユー 夢遊　タイゼン泰禪を見よ、

メの部

メタイ 馬蹄（二三八〇）〔曹洞宗〕常陸祇園寺の禪僧なり、馬蹄はいまだ其鄕貫を詳にせず、心越に水戸の祇園に參して首座たり、人ありて其年を問へは總て七十といふ、享保五年三月白隱師と相見ることあり、寂年缺く、

メードー 盟堂 ケーシユ繼壬を見よ、

メツシユー 滅宗 シユーコー宗興を見よ、

メツドイン 滅度院 リヨーヨー靈曜を見よ、

メンサン 面山 ズイホー瑞方を見よ、

メンヨ 面譽 ビヤクユー白祐を見よ、

モの部

モゲン 茂彥 ゼンソー善叢を見よ、

モサン 茂產（……）〔淨土宗〕下總弘經寺の僧なり、茂產號は性蓮社全譽、自ら自紅と號す、正譽上人に師事して淨土教を學び、遂に其法を嗣ぎ東漸寺に住し弘經寺に移る、後伊勢山田理光院に退隱し、某年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

モテン 茂典（……）〔淨土宗〕下野法林寺の開山なり、茂典は其鄕貫詳かならず、出家して法を良信に嗣ぎ、後、下野古河に法林寺を開く、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

モハク 茂伯 レーサイ令才を見よ、

モリン 茂林 シユーハン宗繁を見よ、

モリン 茂林 シハン芝繁を見よ、

モアン 模菴 シユーハン宗範を見よ、

モゲ 模外 ユイシユン惟俊を見よ、

モドー 模堂 エーハン永範を見よ、

モーコー 蒙光 タツリヨー達亮を見よ、

モーサン 蒙山 ゲンコー玄光を見よ、

モーサン 蒙山 チミヨー智明を見よ、

モクアン 默菴 シユーユ周諭を見よ、

モクイン 默隱 イツサン佚山を見よ、

モクエ 默慧（二五三五）〔眞宗〕加賀江沼郡山中村燈明寺の住持なり、默慧は瑞應院と號す、俗姓は富樫氏なり、寮司となりて天保十四年より高倉學寮にて勝鬘經、三類境、法苑義林章、唯識述記、唯識樞要を講し、安政二年擬講となり、萬延元年より唯識樞要佛心印記を講し、慶應元年五月二十九日嗣講に進み、同三年より安樂集高僧和讃を講し、二等學師に昇る、明治八年夏入出二門偈を講す、寂年缺く、（眞宗史料）

モクオー 默翁 シユーエン宗淵を見よ、

モクオー 默翁 ミヨーカイ妙誡を見よ、

モクガン 默巖 イケー爲契を見よ、

モクゲン 默玄 ゲンジヤク元寂を見よ、

モクザン 默山 ゲンゴー元轟を見よ、

モクシ 默子 ソエン素淵を見よ、

モクシ 默子 ニヨジヨー如定を見よ、

モクシツ 默室 エンチ焉智を見よ、

モクフ　默譜　ソニン二祖忍尼を見よ、

モクヨー　默耀（……）〔眞宗〕越後願勝寺の住持なり、默耀は北天の姪にして少歲家學を受けて造詣頗る深し、本山始めて學階を置くに方り、師適々京都に在り、乃ち得業に擧げらる、後寺に歸へり一室に晏臥し猥に人と面せず、終身妻を納れす淨業怠ることとなし、每年必す越中に赴き圓滿寺義敎の墓を展すること一に北天の例に依る、年八十餘病なくして寂す、又越後願生寺に興麟といへる得業あり、宗乘を僧朗慧麟に學ふ、性狷介苟も合するを好ます、四十歲にして梵行齋食菴を結ひ世と斷ち自ら念佛菴主と號す、誦經稱佛二十餘年一日の如し、人以て及ふへからすとなす、（學苑談叢）

モクガン　穆岩　シユーモク宗穆を見よ、

モクサン　穆算（一六七一）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、穆算は其鄕貫俗姓詳かならず、三井の餘慶に師事し勝算の法弟となりて顯に博く密に精にして名一代に蓋ふ、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳、三外往生傳）

モクセン　穆千　一八四一 一九二七　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、穆千は法眼玄延の子、延長元年八月十二日別當に任し、弘長三年九月十三日寂す、壽八十三、（三井續燈記）

モクニヨ　穆如　リヨーオー良雄を見よ、

モクオー　牧翁　シヨーキン性欽を見よ、

モクケー　牧溪　ドークー道空を見よ、

モクチユー　牧中　シヨージユ正授を見よ、

モクアン　木菴　ゲンリヨー玄稜を見よ、

モクアン　木菴　シヨートー性瑫を見よ、

モクドー　嘿堂　センソン宣存を見よ、

モツゲ　物外　カジユー可什を見よ、

モツゲ　物外　フセン不遷を見よ、

モツゲン　物外子　シヨーゲン邵元を見よ、

モツセン　物先　カイキヨク海旭を見よ、

モツセン　物先　シヨーオー性應を見よ、

モツリン　物倫　シヨートー紹等を見よ、

モンイ　文彙　二四八七 二五四〇　〔臨濟宗〕紀伊大泰寺の禪僧なり、文彙字は泰龍、俗姓は中島氏尾張の人なり、十七歲出家し鄕の慈雲寺松隱に投し、後雪潭に師事し其法を嗣き、紀伊の大泰寺に住す、明治十三年十二月二十六日寂す、壽五十四、

モンエ　文惠（一六八四）　畫僧なり、文惠は飯室阿闍梨と稱す、俗姓は藤原氏、伊尹の孫義懷の子なり、畫を善くし万壽元年新たに御堂を造り、十二大願の意或は觀音品偈の意を書く、共に其技絕妙なり、寂年及壽缺く、（續本朝畫史）

モンエー　文英　二〇八五 二一六九　〔曹洞宗〕甲斐永昌院の開山なり、文英字は一華、甲斐國山梨郡源氏の子なり、十三歲にして甲斐國鹽山俊翁禪師に投して出家し、雲岫に參す、雲岫師の法器なるを知りて庫務に充てしむ、師履踐澹泊古德の風あり、是れに由りて名朝野に聞ゆ、柏原帝詔して紫衣幷に神嶽通龍禪師の號を賜ふ、永正六年六月六日寂す、壽八十五、臘七十一、（日本洞上聯燈錄）

モンエキ　文奕　二四七九 二五五八　〔臨濟宗〕京師妙心寺の禪僧なり、文奕字は無學と云ひ、別に樹王軒と云ふ、美濃國武儀郡神洞村山田久兵衛の男、文政二年八月一日に生る、故あり

長瀬村武井某に養はる、八歳得度し清泰寺梅山に師事し、探源に學ぶ、十六歳迫間大雲寺に掛錫し邁翁和尚に見て參究す、十九歳大坂に遊方し行々鉢を托し備前に入り國清寺月珊和尚に見ゆ、轉して出雲玉昌寺に到り谿隱和尚に依り痛棒を喫す、天保十年國命あり他國人の留住を禁ず、師即ち去り長門大照院に掛錫す、十二年江戸に到り佐藤一齋等に就きて儒典を學ぶ、弘化四年受業師の喪により國に歸り、尋て再び出遊し備前曹源寺、筑後梅林寺に回歷す、梅林寺羅山和尚の教示に服す、慶應二年國命により梅林寺に住持となる、明治七年妙心寺に昇る、東京大教院に出て禪宗大教校の校長となる、八年退耕園の後を受けて禪宗九派管長となる、九年權大教正に補せらる、同年十二月九派管長並に妙心寺住持を辭し牛込濟松寺に退休す、十一年七月再び妙心寺派管長に上り、大教正に進む、十六年管長を辭し十八年重ねて管長に推さる、十九年尾張犬山瑞泉寺に退休す、廿八年十一月管長匡道示寂す、師また推されて再び管長に任ず、卅一年秋微恙あり、十二月三十一日妙心寺方丈に寂す、壽八十、

モンエン　文淵　シユーシユ宗殊を見よ、

モンオー　文雄　二三六〇／二四二三　〔淨土宗〕京都了蓮寺第十七代なり、文雄字は僧谿、號は無相、一に尙絅堂と云ふ、俗姓は中西氏丹波桑田郡濃背村の人なり、幼にして郡の玉泉寺にて剃髮し京都了蓮寺誓譽に謁し左右に侍す、學年にして江戸傳通院に留學し内外の典籍を涉獵す、時の碩儒太宰純と交り厚し、純支那音を善くし和讀の文義を害するを憂へ、師を誘うてこれを學ばしむ、師稍韻鏡の淵源を究め、京都に皈りて後磨光韻鏡を著し、又經史莊嶽音、和字大觀抄を著す、嘗て曆數の術を究め發明するところあり、寶曆初年桂林寺に退き、十三年五月阿波讃岐に往き山水を遊觀して京都に皈り九月二十二日寂す、壽六十四、臘四十九、著作磨光韻鏡二卷、同後編五卷、同餘論三卷、韻鏡律正一卷、韻鏡至要錄一卷、翻切伐柯編一卷、三音正僞二卷、九弄辨一卷、經史莊嶽音一卷、字彙莊嶽音四卷、和字大觀二卷、專誰甄陶篇一卷、古今韻括一卷、廣韻字府一卷、非出定後語一卷、蓮門經籍錄二卷、搜玄鈔綱要二卷、蓮門學則、舍利功德鈔、金剛寶戒眞僞辨、淨土源流章索隱各一卷、續日本高僧傳、諸家人物志、近代名家著述目錄、（蓮門經籍錄）

モンオー　文翁　リヨーオー了應を見よ、

モンカ　文嘉　ニチサツ日薩を見よ、

モンカ　文嘉　ニチシン日審を見よ、

モンガ　文雅　二四四一／二四九五　〔臨濟宗〕常陸常光寺の禪僧なり、文雅字は象鮑、別稱欖谷、俗姓森田氏、伊豆の人なり、早年出家して樹林寺石室禪師に業を受け、後出遊して慈照禪師に事へ、趙州無字の公案を參究し寢食を廢す、文化十二東歸して大哀の法嗣となり樹林寺に住し、妙心寺第一座に轉ず、文政五年慈照三河小松原に赴く、師再び參見して餘蘊を盡す、天保四年樹林寺を退き伊豆の國淸寺に留る、勅を拜し玉鳳院塔主職となり尋て常陸常光寺　攝津祥福僧堂に遷り大衆を接得す、後出雲慈園寺に強請せらるゝも固辭して赴かず、天保六年七月十八日遺訓を示し二十三日寂す、法臘五十五、壽六十二、天保十一年九月廿九日勅謚神鑑獨照禪師を賜ふ、

(近世禪林僧寶傳)

モンガ 文賀 二二七六 〔淨土宗〕江戸本誓寺の開山なり、文賀は貞蓮社念譽頑碩と號す、幼にして相模小田原本誓寺貞譽の室に入りて剃髮し觀智國師に師事して法を嗣ぎ本誓寺に住す、後江戸深川に本誓寺を開きて居住し、元和二年二月十日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

モンカイ 文海 (二一八九) 〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧なり、文海字は龍洲、下野大中寺主菴伊白に參して其法を嗣き席を補す、寂年並に壽缺く、法嗣海菴尖智あり、(日本洞上聯燈錄)

〔考〕 文海は天文頃の人なり

モンカク 文覺 (一八四五) 〔眞言宗〕山城高雄山中興なり、文覺俗姓は遠藤氏近衞校尉持遠か子、初の名は盛遠といふ、性勇悍にして宮廷の衞兵曹となる、十八歲誤りて袈裟御前の首を斬りて道心頓に萠し出家遊歷す、能く苦行に耐へ後京都に歸へり高雄山の廢頽を見、心に再興を誓ひ普く諸檀に勸む、一日後白河上皇の離宮に入りて幹事を奏せんとす、適々宮宴ありて群臣歌舞し奏聞するの遑なし、師階下に近きて疏を捧けて呼號す、其聲粗暴にして絃歌紊る、師を引き出して疏を裂き衣を破る、師匕首を手に取り衞士を斬る、上皇大に怒り獄に付し治承三年伊豆に竄せらる、時に源賴朝先に謫せられて州にあり、師に就きて出家せんと乞ふ、師其日ら棄つる所以なるを說きて之を許さす、既にして治承の末關東兵起る師密に近臣に憑りて後白河法皇の院宣を得て回へり、賴朝に勸めて兵を詗へしめ、文治の初め遂に元帥となる、玆に於て賴朝師を遇すること殊に厚く道福盛なり、神護寺を復し東寺を修す、師嘗て那智山にありて大誓を發し七日瀑下に立といふ、寂年及び壽缺く、(本朝高僧傳)

モンガン 文巖 二二六一 二三三一 〔臨濟宗〕山城法雲院第一代なり、文巖字は如雪、俗姓は三好氏、阿波板西郡の人、母は赤澤氏の出なり、甫めて六歲常に佛菩薩の像を彫するを以て戲となし、十歲父を喪ひ郡の莊嚴院宥全に就きて薙髮し密乘を習ふ、尋きて灌頂を讃岐虛空藏院に受け、又經說を高野に學ふ後、重ねて灌頂を善集院に稟け密敎の蘊奧を究む、去りて賢俊律師に毘尼を學ひ、槇尾山にて重ねて受具し、全理律師によりて南山靈芝の律義を究め、臘滿ちて宇治田原に嵓松精舍を搠し虛空藏開持の法を修す、師嘗て支那に遊ひ終南祖師の遺跡を拜し且つ禪律諸師を參叩せんと欲し、遂に性宗と共に西海道に赴きしか國禁により志を果さすして歸へる、禪要を慕ひ大梅寺一絲に參して悟る所あり、尋きて大和に菴居し偶々岩松寺に寓し一禪人と問答して應すること能はす、大に耻ちて爾來晝夜を分たす研究し、一時雪中に坐して三更に到りて疑團氷釋し玆に大悟徹底す、實に四十一歲なり、因りて一絲に永源寺に見えて所解を呈す、田村了徹及ひ貞淸居士其德を敬慕し指雲瑞泉二寺を搠し之に住せしむ、其翌年春一絲示寂し師遺命を受けて永源寺に主となる、近衞應山公及ひ諸宰官貴族等道譽を慕ひ屢々法要を聞く、後水尾天皇大納言資慶に勅して師に就きて豫め末後の佛事を乞ふ、師乃ち法語を書して上奏す、寬文元年資慶祖父の冥福の爲め洛西に法雲院を營み、師請せられしか辭して先師一絲を崇めて第一代となし自ら二

代に居る、明年圓應祖師の爲に三百年忌の法筵を設け衆僧をして五部の大乘經を書せしめ並に無遮の大會を設く、皇太后之を聞きて黄金若干を賜ひて香積に充つ、寛文十一年四月十八日寂す、壽七十一、臘六十二、遺偈あり幻生幻滅、本無ニ去來一、虚空破裂、大地骨堆、（續日本高僧傳）

モンギン　文岑（……）〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、文岑字は象先、俗姓不詳、桃溪悟に師承し、壽福寺に住す、晩年大澤菴に屏居す、示寂の年時缺く、題東漸寺作、徑通ニ幽處一海天寛、潮落ニ沙汀一鷗鷺閑、憶得高秋清夜景、寒濤搗レ月浸ニ欄干一、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

モンキョー　文慶（一六七一）〔天台宗〕山城大雲寺の僧なり、文慶は參議藤原佐理の子なり、園城寺餘慶に從つて顯密の祕奧を得、後勸修勝算の二師に師事す、敕により洛北大雲寺に主となり、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

モンキョー　文慶（……）〔淨土宗〕駿河華陽院第二代なり、文慶は眞蓮社短譽と號す、其鄕貫詳かならず、智短に師事して法を嗣ぎ華陽院第二代となる、寂年及壽缺く、

モンクワン　文觀（二〇一七）〔眞言宗〕京都醍醐寺の座主あり、文觀は一名弘眞初め天台宗徒にして播磨法華山に住し、後、賀西北條寺に遷り、算數卜筮に通ず、奈良に遊びて四律五論を學び、遂に小野に至り、大僧正道順に從うて灌頂を拜し、眞慶仁寛の流を受け立川流を主唱す、後醍醐天皇の皈依により、醍醐寺第六十四代座主兼天王寺別當となり、官僧正に昇る、後醍醐天皇北條氏を滅せんと謀るに方り、師及び圓觀等北條氏を咒詛し、事泄れ捕へられて硫黄島に流さる、正慶二年亂平くに及び圓觀等と本寺に還住す、後東寺百十五代長者となる、高野山衆の强訴により諸職を解き甲斐に流さる配所に於いて觀音經秘鍵等を作る、足利尊氏の兵京師を犯すに及び、師脇屋義助等と兵を率ひて山崎に拒ぎ敗れて退く、正平十二年寂す、壽缺く、世人皆小野の文觀と稱す、生前佛像を書くに妙を得、曾て畫きし慈恩大師の像は世に聞ゆ、（續傳燈廣錄、大日本史、南方紀傳、扶桑畫人傳、寶鏡鈔）

モンケー　文珪（二〇三〇）〔臨濟宗〕京都轉法輪藏寺中興なり、文珪字は延用、大林に侍して法忍を得、貞治三年城北寶福寺に住す、時に寺は荒廢し正殿なく獨藏室を存す、應安三年後光嚴天皇額を轉法輪藏寺と賜ひ、地若干畝を賜ひて寺基を廣む、師衣資を出して日に工役を督す、搢紳士庶歸依多く舊時の壯觀に復するを得たり、師命を奉して大藏經を購ひて寺に安置す、後使節となりて明に入り、翰林學士宋景濂に請ひて寺の記を作らしむ、其後の事を知らず、（本朝高僧傳）

モンケン　文賢（二二二四）〔曹洞宗〕伊豫安樂寺の禪僧なり、文賢字は泰菴、伊豫安樂寺の喜山宗忻の室に投して法を嗣ぎ、天文十八年安樂寺に住す、永祿三年總持寺に出世し、寺に歸り、永祿七年五月十八日寂す、世壽缺く、

モンゴー　文豪（一七二六）〔……〕京都釋迦院の僧なり、文豪は京都四條坊門の釋迦院に住し、治暦二年五月五日東山鳥部野に於て柴を積み、身を燒て寂す、（本朝高僧傳）

モンコーニ　文亭尼（二四〇六／二四三〇）〔天台宗〕山城圓照寺の尼なり、文亭尼は櫻町天皇の養女、實は有栖川職仁親王の女

なり、延享三年に至れ嵩宮と云ふ、寛延二年四月八日天皇の養女となり、十月十八日圓照寺附弟となり、寶曆六年得度し、明和七年七月四日寂す、壽二十五、南都山村に葬り、觀喜心院と號す、(皇運紹運錄)

モンサイ　文濟　二二一七／二二〇七　〔曹洞宗〕武藏寶光寺の開山なり、文濟字は以船、武藏豐島郡の人、俗姓は岡部氏なり、十八歳中野の法泉寺に投して受具し密教を習ふ、後捨てゝ下野大平寺に往きて培芝に參し、次に廣嚴寺俊屋柱彥に參して宗旨を學ひ、分座說法を命せらる、天文八年俊屋寂せしか故に師其席を補す、武藏平井の某氏寶光寺を創し師請せられて其開山となり、後辭して廣嚴寺に歸る、天文十六年九月十日寂す、壽九十一、法嗣筒學光眞あり、(日本洞上聯燈錄)

モンシ　文之　ゲンショー玄昌を見よ、

モンシ　文旨　ニチギン日銀を見よ、

モンシキ　文識　ユーバン宥鑁を見よ、

モンシツ　文室　エサイ慧才を見よ、

モンシツ　文室　シューシューー宗周を見よ、

モンシユ　文守　二二六七／二三〇五　〔臨濟宗〕山城靈源院の開山なり、文守字は一絲、工部尙書源具堯の三子、母は藤原氏なり、十四歳萬年山の雪岑崟禪師に侍し、後深く宗門を慕ひ、一夜潜に寺を出て泉南寺澤菴禪師に參す、十九歳にして槇尾山賢俊を拜して剃髮受戒し安居すると九旬、毘尼を講習し再び澤菴に參す、澤菴謫せらるに際し師省侍する一年、洛西岡の里に菴居す、後明に入りて明師の證を得んと欲し國禁の爲めに志を果さず、妙心寺雲居膺、雪窓崔、愚堂寔等に師事す、上皇賀茂に靈源院を建て師に命して住持せしめらる、寛永二十年近江永源寺を主とり、正保二年春に罹り三月十九日寂す、壽三十九、臘二十、著作緇門寶藏註垂誡、幷に佛祖百首頌童行談、苑狐廷五葉等の集あり、延寶六年春敕諡定慧明光佛頂國師の號を賜ふ、(本朝高僧傳)

モンジユ　文珠　二四三五／二五〇三　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、文珠字は大徹、美濃乙坂の人なり、俗姓佐藤氏、九歳越前福井東光寺泰崇康に就きて得度す、十六歳遠江海藏寺に至りて東嶺慈に謁し其下に書記となる、尋て伊豆龍澤寺に掛塔し、常に遠豆の間を往來す、誓ひて曰ふ吾れ個事を明にする能はずは頭を舉げて芙蓉峰を望見せず、と、精參苦攻を積む、十九歳尾張妙興寺に留る、忽ち一鴉の飛びて室に入る聲を聞きて豁然大悟し、東嶺慈印可す、時に二十八歳なり、後愛宕前大納言通直の猶子となり、定濃恩の法を嗣きて丹波法常寺に住す、四十二歳勅あり紫衣を賜ふ、四十五歳近江大圓寺に法席を開く、雲衲群集す、五十五歳法席を憲革道に讓りて再び京都に入り、南禪寺に僧堂の幹事となる、僧堂の名を改めて薝蔔林と云ひ百發俱に學ふ、天保十一年玉藏院に遷居し十二年再び薝蔔林に入る、十二月廿五日遽然疾に罹り一年にして較輕快なり、自ら號して七十七翁不二身と云ふ、已にして再び重く十三年三月廿八日寂す、壽七十七、臘六十八なり、法常玉藏兩寺に塔を立つ、(近世禪林僧寶傳)

モンシユー　文宗　二二九〇　〔淨土宗〕武藏勝林寺の中興なり、文宗は勝道祇超界と號す、吞龍に師事して法を嗣ぎ武藏新方備後村勝林寺に住し、其廢頹を興して中興となる、寛永七

年七月寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

モンシユー 文秀 二四〇〇 二四八七 〔黃檗宗〕山城萬福寺廿五代なり、 文秀字は華頂、近江石部の人藤谷氏なり、十五歲比叡山に登り方玉律師に師事し敎律を學び、後禪を究めんとし律師に告けて山を下る、寶曆八年近江正明寺中嶽禪師に謁し、次に伊豫に遊び湛堂禪師に謁して參究す、三年の後白隱禪師の室に投し、徧參究す、禪師示寂の後石部に皈住す、天明五年正明寺に住持となり十五年間其職にあり、寬政十二年正月幕府の命により黃檗山萬福寺廿五代となる、文化六年四月退隱し正明寺に寒巖堂を營みて幽棲す、同年九月北越國泰寺の請に應し臨濟錄を提唱す、文政十年正月十五日寂す、壽八十八、臘七十五、語錄あり行はる、(續日本高僧傳)

モンシユー 文秀 エーヨ榮譽を見よ

モンシユク 文宿 二三〇六 〔淨土宗〕江戶心光寺の開山なり、 文宿は光蓮社明譽と號し、下野宇都宮の人なり、出家して宗呑に淨土敎を學び其法を嗣きて後越後高田の善導寺に住し、江戶無量院に移り第二代の主となる、寬永五年小石川に心光寺を剏して開山となり、正保二年四月二十四日寂す、世壽缺く、法嗣本譽春貞あり、(淨土總系譜)

モンシユク 文夙 ニチセン日選を見よ、

モンシヨー 文昌 二一八九 〔曹洞宗〕駿河長興寺の第二代なり、 文昌字は久峰、回夫慶文に依りて得度し心要を悟りて法を嗣ぐ、後天桂山長興寺に住し伽藍を興造す、長興寺は元回天の開創せしものにして師尋きて其二代となりたるなり、享祿二年二月二十五日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

モンシヨー 文淸 二二九九 二三八六 〔曹洞宗〕美濃全昌寺の禪僧なり、 文淸字は常傳、俗姓佐藤氏、近江彥根の人なり、十歲白峰玄滴を禮して薙髮し、法席に游ひ皈りて白峰の法を得て永平寺に出世す、大垣の城主戶田氏定請して全昌寺に主たらしむ、尋きて榮春寺に遷り、晚年退老閑居し、享保十一年三月二日寂す、壽八十八、臘七十八、光源寺瑞泉寺等は師の開創する處なり、臨終の偈に曰く、老翁八十又八歲、端的身心俱脫空、蕩豁太虛無￢罣礙￢、塵塵都莫￢不￢圓通￢と、(日本洞上聯燈錄)

モンシヨー 文勝 (　　) 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、 文勝字は忍室、俗姓は作部氏薩摩の人なり、諸老に徧參し後同國福昌寺天祐宗津に參して印可を受け、總寺持に出世し、福昌寺に遷る、國守奏して紫衣及佛照大圓禪師の號を賜ふ、寂年並に壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

モンシヨー 文性 リヨーテン亮典を見よ、

モンセツ 文刹 (二二九四) 〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、 文刹字は大淵、生國俗姓詳ならず、下總總寧寺勝國良尊に參して旨を得、四五の寺に歷遷して後多寶寺を主とる、寬永十一年幕命を承けて總寧寺に住す、寂年及び壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

モンセン 文筌 ソンシユン尊俊を見よ、

モンセン 文詮 二四二一 二四八八 〔眞宗〕江戶築地唯心寺の僧なり、 文詮字は暉眞と云ふ、抱一、屠龍、鶯村、雨華菴、輕擧道人、庭柏子等の號あり、酒井備前守忠仰の第二子、雅樂頭忠以宗雅の弟なり、母は里姬、松平和泉寺乘祐の女なり、師

は寶曆十一年七月朔日を以て江戸小川町の邸に生れ、幼名を前次と呼び、後に榮八忠因と改む、十一歳より鈴木清兵衛に就き、起倒流の柔術を學び、山本嘉兵衛に就き無邊流の鎗術を習ひ、中根新兵衛に就き弓術を學ぶ、安永二年兄忠以に從ひて、藩地姫路に赴き、尋いて京師に上る、同九年廿歳江戸神田橋大手上屋敷に移り、爾來文藝游藝に耽る、寛政九年卅七歳多病なりと稱し、西本願寺の徒弟たらんと欲し、幕府の執政に請ひ、十月十八日築地本願寺に於て得度し、等覺院と號し、權大僧都に任ず、俳句あり遯るへき山ありの實の天窓かな、と、文如上人光暉の準連枝を以て遇せらる、同年十一月三日京師に上り、十二月三日江戸に皈り、(一說に京師滯在三年とあり)寺務を捨てゝ簑輪に閑居し、後、淺草觀音の境内辨天池の傍に幽棲す、師多技多能にして太田南畝(蜀山人)に交はり、尻燒猿人なる狂歌名を呼びて詠みし狂歌多し、江戸座の宗匠馬場存義に俳諧を學び、初め徘名を濤花といひ、後に杜陵と云ひ、最後に屠龍と云ふ、其弟子哲阿彌の風調を喜び、時々名句あり、兄宗雅に繪畫を受け、漸く上達するに至りて楠本紫石に就きて明畫を學ひ、後、狩野永德高信に就て筆法を受け、京師に上れる時、土佐光貞の弟子となり、狩野の畫風を捨てゝ土佐の筆意を慕ひ、又丸山風を學ぶ、稍昇達するに及んで尾形光琳の風を喜び、一變して終に其風を畫くに至れり、當時谷文晁在りて世に鳴る、師交を結びて筆法を問ひたりと云ふ、董堂敬義に書を學び後に其角の風を慕ひ、其筆意を得たり、書畫、骨董、刀劍の鑑定を好み　古筆了意等と交はる、文化　年四十九歳下根岸鶯塚に居を移し、菴を雨華菴と名け、晝間は門弟を指揮して專ら丹青に勵み、薄暮に至れば必ず吉原の遊廓に入る、日々然り、屢々樓に書筵を開く、故に遊女にして師の書畫及び徘句を學ぶ者多し、殊に玉屋の遊女誰袖(小鸞女史と號し落髮して妙華尼と云ふ)大に聞えたり、文化十二年六月二日尾形光琳百年忌に丁り、光琳百圖を刊行し、且つ其墓を改修す、乾山に就いて陶工を學び、時々陶器を手製したりと云ふ、文政十一年病に罹り、豪商伏見屋(森川佳續)を招きて後事を托し、十一月二十九日寂す、壽六十八、築地本願寺本坊にて葬儀を營み、塔頭善林寺に葬る、著作屠龍之技(徘諧句集)靑簾春の曙、江戸鶯、(戲作)等あり、(文藝叢書、扶桑畫人傳、香亭雅談)

モンチユー　文仲　(………)　〔曹洞宗〕下總孝顯寺の禪僧なり、　文仲字は的翁と云ひ、春翁圭陽の法を嗣ぎ龍源寺に住し孝顯寺に遷る、晩年武藏に至り東竹院を築き工終りて寂す、其年時缺く、法嗣興豐建隆あり、(日本洞上聯燈錄)

モンチユー　文忠　二二〇八……　〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、　文忠字は恕岳、薩摩の人にして世々儒を業とす、出家して諸老に徧參し、歸りて福昌寺大祐宗津の室に入り印可を蒙る、諸寺に歷住して後福昌寺に主となる、天文十六年十一月寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

モンチヨー　文超　二二九二　〔淨土宗〕總州大巖寺の僧なり、　文超は要道軒典譽　鎭松と號す　俗姓生國詳かならず、潮龍に從て剃髮し　を靈巖に嗣ぐ、寛永二年生實の大巖寺に住し、同九年八月四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

モンチヨー　文朝　(二二六四)　〔曹洞宗〕攝津靈松寺の開山

なり、文朝字は日峰、攝津の人、幼にして覺隱に事へて出家し、受具の後英巖希雄に參して研究多年、其印可を受けて永平寺に出世す、明應中攝津に到り靈松寺を刱す、文龜元年闕雲寺を主とり、永正元年辭して靈松寺に皈へる、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

モンテー　文禎　二二二四―二二八七〔曹洞宗〕讃岐寶光寺の禪僧なり、文禎字は大嶽、京都の人なり、幼より阿波桂谷寺の茂菴樹繁に師事して出世の法を學び、十五歲薙髮し具足戒を受け、諸老に徧參すること久しくして歸へり遂に其法を嗣ぐ、茂菴の香積寺に遷るに及びて師其席を補す、繼きて永平寺に出世し、讃岐の寶光寺に遷る、茂菴の寂後遺命により香積寺に主となる、大永二年闕雲寺に移り、一年にして香積寺に退去す、師香積寺に住すること前後三十年、大永七年二月二十五日寂す、壽六十四、（日本洞上聯燈錄）

モンニヨ　文如　コーキ光暉を見よ、

モンホ　文甫　ニチソン日尊を見よ、

モンミヨーイン　文妙院　ニチサツ日薩を見よ、

モンミヨーシヨーニン　文明上人　インゲン印玄を見よ、

モンヤク　文益　ズイケー瑞奎を見よ、

モンリユー　文龍　二二七七……〔曹洞宗〕上野長昌寺の第一代なり、文龍字は大雲、俗姓は藤原氏、武藏足立郡の人なり、幼にして郡の國昌寺心巖宗智に仕へ、十五歲剃髮受具す、東西に遊方すること二十年、光德寺に住きて首座となる、後皈りて心巖を省し、所傳の法衣を付せられ永平寺に出世す、尋て心巖の席を補して國昌寺に主となる、三たび敕を蒙りて入庭し紫衣及び佛日金蓮禪師の號を賜はる、師書を善くし詔に依り大字及歌書を寫す、熊谷守光居士守光院を再興し、師其始祖となり、山を護[illegible]と名く、後辭して國昌寺に皈り心巖寂するに及び席を補して當泉寺に住す、居ること數年又國昌寺に皈る、道譽高く上野清巖寺長昌寺武藏安龍寺皆師を第一代とす、晚年妙昌寺を搬して退老す、元和三年正月十八日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

モンアン　聞菴　ドーケン道見を見よ、

モンエ　聞惠　二四七一―二五五三〔眞宗〕豐後專念寺の僧なり、聞惠號は五岳、別號古竹と云ふ、豐後日田の人平野氏なり、幼より詩文を好む、廣瀨淡窓の咸宜園に入り別才を以て稱せらる、三十餘年にして始めて書に力を用ひ、田能村竹田の風を慕ひ後に一家をなす、詩書畵共に通達し、時人五岳の三絶と稱す、明治二十六年三月三日寂す、壽八十三、

モンエツ　聞悅　（二二八五）〔淨土宗〕江戶傳通院の僧なり、聞悅は登蓮社叡譽、直心と號し、其俗姓生國詳かならず、廓山に師事して法を受け、館林善導寺に住し、後江戶小石川傳通院に移る、寂年及世壽缺く、（淨土總系譜）

モンケー　聞溪　リヨーソー良聰を見よ、

モンゴー　聞號　シヨージユ正受を見よ、

モンシヨー　聞秀　二二四二……〔淨土宗〕武藏報土院の中興なり、聞秀は心蓮社三譽と號す、其俗姓生國詳かならず、法を清巖に嗣ぎ武藏埼玉郡[illegible]戶村報土院に住して其廢頽を興す、天正十年十月十五日寂す、壽欠く、（淨土總系譜）

モンショー　聞證　二二九五―二三四八　〔淨土宗〕武藏淨國寺の學僧なり、聞證字は貞光、俗姓林氏京都の人、夙に出家の志あり慶安元年三月十五歲にして父を失ひ、幾ならずして家兄亦沒す、玆に於て籠居一百日念佛を事とし、亡父亡兄の冥福を祈る、遂に十七歲にして淨土宗呈觀に就て得度す、空山東暉に歷侍し、後江戶增上寺に投じ修學五年に及ぶ、三界義略解を著し、尋て奈良に遊び盛源法師に就て法相宗を學ぶ、萬治三年大澤の圓通寺に至り住僧鐵關を訪うて道交を結ぶ、蓋し圓通寺は淨土宗俗中上人敎を講ずるの地なり、師同寺に止まり專ら講筵を事とし大原問答百法問答等を講し、大原問答辨釋、百法問答私解を作る、延寶三年九月武藏淨國寺玄察の懇請により同寺に到り、唯識論を講じ略述法相解を作る、淨國寺に止まること八年法化盜なり、尋て京都に登り雷峯天外等の諸禪師に參し、伊勢に至り明星山に登り、天台宗の學僧瑱敬を訪ふて道交を結ぶ、再び京都に上り淨敎寺等禪寺に唯識論を識ず、貞享四年花開院に寓し法化益盛なり、元祿元年五月疾に罹り、自ら癒へざるを知り、門人を召して懇ろに訓戒し、仝月二十七日趺座して阿彌陀佛の像に對し、燒香合掌佛號を唱へて寂す、壽五十四、臘三十八、師平常法華經を讀誦する一千部、淨土の三部經を讀誦すること各一万部なり、著作唯識論略解十卷、淨土便蒙五卷、三論玄義誘蒙四卷、百法問答私考四卷、略述法相解三卷、圓覺經略解三卷、四敎儀略解三卷、三界畧解二卷、大原問答私考三卷、曼陀羅變相便覽二卷、釋摩迦術論便槩二卷、科註略論、科註往生論、科註大原問答、啓蒙雜記、俱舍綱要、外宗義、五經簡註、六即誘蒙、無門關時習、大經異譯對映、發微事考、名聚略辨、六物略解、盂蘭盆略解、小乘拔萃、羯磨略解、唯識論玄譚、二十頌略解、各一卷あり、（聞證和上行業記、鎭流祖傳、續日本高僧傳、蓮門經藉錄、近代名家著述目錄）

モンタイ　聞諦（……―……）〔淨土宗〕江戶法源寺の僧なり、聞諦は衍蓮社閑譽と號す、觀智國師に宗乘を學び江戶橋場の法願寺に住し、後駿府寶臺院に遷る、寂年並に世壽詳かならず、（淨土總系譜）

モンホン　聞本　二〇七七―……　〔曹洞宗〕加賀金剛寺の開山なり、聞本字は梅山、美濃の人、幼にして同國の律寺の某律師に投して薙髮し、律師の寂後衣を更へて禪門に入り、行脚して佛陀寺大源宗眞に參し遂に印可を享く、越前坂北郡簾尾邑の信士正壽龍澤寺を剏建し師を第一代となす、辭して加賀に到り金剛寺を開く、後敕請により總持寺に出世し、幾ならずして辭し、龍澤寺に歸へりて閑居す、將軍足利義滿師の道譽を慕ひ刺史に命して京都に來らしむ、師固辭して可かず、應永二十四年九月七日寂す、壽缺く、法嗣傑堂能勝、如仲天誾、大初繼覺の三人あり、一門の敎風大に繁榮す、（日本洞上聯燈錄）

モンヤク　聞益　ジコーニュー識入を見よ、

モンヨ　聞禪　ゼンエー善榮を見よ、

モンヨー　聞陽　タンカイ湛海を見よ、

モンアン　門菴　シュークワン宗關を見よ、

モンズイ　門隨　二二八…―……　〔淨土宗〕山城瑞雲院の開山なり、門隨は相蓮社常譽[illegible]、[illegible]、虎角に師事し、後盛林に法

を嗣ぐ、洛西千本瑞雲院開山となり、元和九年閏八月二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

モンテキ 門的　リョーグ良求を見よ。

モンテツ 門哲　…三三七〔淨土宗〕土佐還到院の開山なり、門哲は隆誉社壇譽と號し、土佐の人、其俗姓詳かならず、聞悦の室に入りて剃髪受業し、州の井口村に還到院後改めて西蓮寺を刱す、延寶五年四月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

モンヨ 門譽　カクケー覺瑩を見よ、

ヤの部

ヤウンシ 野雲子　ショータ紹佗を見よ、

ヤシ 野子　シコー支考を見よ、

ヤスイ 野水　コーゼン晃全を見よ、

ヤクオー 益翁　シユーケン宗謙を見よ、

ヤクシ 益之　ショーケン正謙を見よ、

ヤクシン 益信　一四八七―一五六六〔眞言宗〕京都圓城寺の開山なり、益信は備後の人、俗姓は紀氏、一に品治氏、武內宿禰の後裔行教和尙の族弟なり、幼にして奈良大安寺に入りて剃髮受戒し、初め法相を元興寺明詮僧都に學び、後ち宗叡源仁に密灌を受く、仁和二年傳法阿闍梨に任し、寛平二年東寺の長者となり、六年法務を司とる、宇多天皇深く佛乘を慕ひて仁和寺を建て、昌泰二年同寺に行幸し師を召して三飯ー戒を受け給ふ、三年僧正に任ず、延喜元年天皇東寺に行幸し師に就て傳法灌頂を受け給ひ法皇と稱したまふ、尙侍藤原淑子疾に罹り師を請して持念し、癒後圓城寺を建て、師をして住持せしむ、六年三月寂す、壽八十　著作金剛頂蓮華部心念誦次第法八卷、金剛頂蓮華部心持念次第四卷、金剛界次第一卷、胎藏持念次第四卷あり、花園天皇延慶元年二月勅諡本覺大師の號を賜ふ、十月比叡山の徒憤訴し大師の號を停止せんとを逼る、因て一たび停止せらる、翌二年七月九日東寺の奏請により本覺大師の號を復せらる、三年再び比叡山の徒の憤訴により再び停止せられたり、（諸門跡譜、秘密血脉鈔、傳燈廣錄、元亨釋書、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

益信僧正

ヤクシユ 益守（一九九一）〔眞言宗〕京都東寺の僧なり、益守は仁和寺の禪守僧正を拜して兩部の灌頂を受け、成就院に住す、元弘元年東寺の長者に任ず、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

ヤクヘン 益遍　二一一二―二二五七〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、

益遍は東久世相國通博の子、寛正四年出家し、宗典守遍信嚴の諸師に學習し、五年法眼に叙す、文明元年權大僧都に任し、同四年法印に叙す、同十六年權僧正に任す、明應六年九月六日盜賊に殺さる、壽四十六、（仁和寺諸院家記）

ヤクチ　藥知（一七三〇）〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、　藥知は幼より池上の皇慶に師事して穎譽あり、八歲の時比叡山の内論義に方り講師となる、後三條帝未だ皇太子たりし時、座主勝範に命して學内外に兼通するものを出さしむ、師選に當り帝より止觀併に密乘を問はれ奏對審明なり、次に經史子集に至る、師始めに俗諦を釋し、次に眞乘を說き、雄辯水の流るゝが如く衆を驚かしむ、帝の即位に及び大に擢登せんとせられしに、不幸短命にて寂す、帝愛惜諡を賜て其才德を旌す、（本朝高僧傳）

ヤクニン　藥仁（一五三四）〔法相宗〕奈良藥師寺の僧なり、　藥仁俗姓不詳、諸經論に兼通す、維摩會講師を經て貞觀十六年に最勝會講師となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

ヤクレン　藥蓮（……）〔……〕信濃如法寺の僧なり、　藥蓮は信濃國高井郡中津村如法寺に住し、一生の間阿彌陀經を讀誦し、兼て佛號を唱ふ、出家以前に一男一女あり相從ふ、藥蓮二子に語りて曰ふ、明日曉に極樂に詣づべければ、衣裳を洗濯し身躰を沐浴せむと、夜に入りて衣裳をとゝのへ獨り佛堂に坐し、明日午の刻まで堂戸を開くべからずと命ず、曉に二子微細の音樂を堂中に聞き、午の刻に開けば藥蓮の身躰並に持經等あらざりきと云ふ、（往生極樂記、本朝高僧傳）

ヤクアン　約菴　トクク德久を見よ、

ヤクオー　約翁　トクケン德儉を見よ、

ユの部

ユシン　由信（二三三三……）〔日蓮宗〕山城大虛庵の僧なり、由信は知足庵日龍の弟子なり、日龍の沒後山城鷹峯常照寺に留まり、同地大虛庵に隱れ詩歌を弄ぶ、延寶元年四月二十五日寂す、壽缺く、（本化別頭佛祖統紀）

ユシヨー　由性（一五〇一—一五七四）〔天台宗〕山城雲林院の學僧なり、　由性は華山僧正遍昭の朝廷に仕へし時の子なり、幼にして比叡山に登り顯密二教を學び、寛平八年洛北雲林院に住す、昌泰年中藥師寺を領し少僧都に任ず、延喜十四年二月二十日寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

ユジヨー　由常（二三三一—二三四九）〔眞宗〕山城興正寺の第八代なり、　由常字は寂珉、童名は爲丸といふ、良尊の四子にして母は良如宗主の第七女なり、師貞享三年二月十二日得度し、四月七日直に法眼に叙す、四年三月五日大僧都に任す、四月廿一日松平讃岐守賴重の第四女を娶る、某年權僧正に任じ、元祿二年正月四日寂す、壽十八、能信院と號す、寺務僅に三年なり、嗣子なし、（本願寺通紀）

ユーエツ　融悅（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、　融悅字は陽菴、陽室融慶の法を嗣き、肥前圓通寺に住す、寂年及世壽缺く、法嗣養叔融供あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーカン 融鑑（……）〔曹洞宗〕肥前正藏寺の開山なり、融鑑字は月春、圓通寺に於て梅溪融薫に參して其法を享け、席を嗣きて圓通寺に主となる、郡人某正藏寺を開き師其一代となる、寂年及び壽缺く、法嗣古心融鏡あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーキ 融喜（二〇〇〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、融喜字は琳識、俗姓生國詳かならず、十輪院に住し、總持院政憲に繼きて學頭となる、寂年缺く、（結網集）
〔考〕融喜は南北朝時代の人なり

ユーキク 融菊（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融菊字は東甫、肥前の人なり、出家して諸方に徧參し、久學融貞に參して其法を得、席を繼きて肥前圓通寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣一庭融頓あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーキヨー 融慶（……）〔曹洞宗〕肥前大梅寺の開山なり、融慶字は陽室、肥前佐賀の人、古心融鏡に參して旨を得、席を繼きて圓通寺に主となる、檀請により大梅寺を剏して開山となる、寂年及び壽缺く、法嗣陽巷融悅あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーキヨー 融鏡（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融鏡字は古心、肥前の人なり、月春融鑑に侍すること久しく入室して印可を受け、命せられて分座說法す、後席を繼きて肥前圓通寺に住し、辭して福壽院に退居し、某年寂す、壽缺く、法嗣陽室融慶あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーグ 融供（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融供字は養叔、肥前の人、俗姓は林氏なり、教院に投して出家受具し、諸方を遍參し、古心融鏡に依りて得悟し、分座說法す、後、其席を繼きて圓通寺に住す、寂年及び壽缺く、法嗣安老融察あり、（日本洞上聯燈錄）

ユークン 融薫（……）〔曹洞宗〕肥前龍雲寺の開山なり、融薫字は梅溪、肥前の人、幼にして圓通寺に入り玉室融椿を拜して薙髮得度す、後去りて諸老を徧參し、再び圓通寺に皈り玉室に服勤十年、其寂するに及び遺命に依り席を嗣く、檀越某龍雲寺を建て師請せられて開山となる、寂年並に壽缺く、法嗣月春融鑑あり、（日本洞上聯燈錄）

ユークン 融薫（二〇五三）〔曹洞宗〕日向大平寺の禪僧なり、融薫字は[illegible]陽、京都の人なり、幼にして出家し徧く諸老宿に參し、後日向の大平寺に到り無著和尚に師事す、和尚の泉福寺に移るに及び師に命じて分座せしむ、後ち皇德寺に出世し大平寺に還る、晩年[illegible]壽寺に退去して病を養ひ、某年六月六日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）
〔考〕融薫は明德の頃の人なり

ユークワン 融觀（二三一四―二三八一）〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺第四十六代なり、融觀は忍光と號す、慶安二年正月八日に生る、父は攝津住吉郡平野村の豪族徳田氏にして後薙髮して祐德と稱す、母は小林氏の女なり、師十七歳にして母を喪ひ、翌年妻を娶り一子を擧く、父は剃髮して別に茅室に居り、念佛を專修せしかは、師躬ら家事を治む、廿四歳の時父遂に沒す、初め十三歳にして母の安穩を禱らんか爲に、西國三十三ヶ所を巡拜し、廿一歳再ひ西國三十三所の補陀道場に詣し、並に諸國の名山大刹を巡歷し、父の無上菩提に資せんと擬す、而し

て今二十四歳にして、慈父の喪にありて悲嘆痛哭に堪へす、自ら人生の危脆なるを觀し、漸く出家の志を決す、廿六歳の時父の三年忌を修し、同日金銀財寶を親戚故舊七十餘人に頒ち與へ、出家の志を披露して廬を別莊の地に設け、優婆塞となりて一向一念に佛道を修む、三十歳の頃住吉の地藏院快圓和尚に就きて菩薩優婆塞戒を受け、尋て密雲律師に從ひて梵網戒經を習得し、疊彥阿闍梨に法華經を承け、又比叡山の妙立和尚に天台一家の典籍を學ひ、鐵眼禪師に謁して正法眼藏を開く、旣にして伊豫宇和島に往き賢巖禪師に從ひて首楞嚴經を研究す、賢巖萬峯不住居士の號を授く、翌年支那の高僧黃蘗高泉禪師に參禪し九旬練行す、禪師不退場の三大字を書して師に與ふ、天和元年五月十五日本山第四十五代良觀上人に投して剃髮得度し、翌年また快圓和上に參して菩薩大戒を具足し、兼ねて興正菩薩瑜伽自誓三聚の宗要

融觀上人

を咨決す、師良觀の門に入りてより相輔けて大に宗門の復興を謀る、蓋し當時法明上人融通念佛宗を中興してより玆に四十代に垂とし、宗規壞亂し百弊從ひて生し、本末の門流其名僅に存すれとも其實全く廢し、宗門の衰ふること未た此時より甚しきはあらす、且つ古袈裟に廬山衣天台衣と稱ふるものあり、服製較殊なるより門末の僧徒相互に僻執して異諍止む時なかりしかは、師首として此濫弊を矯正せんと欲し、天和二年始めて江戶に赴き、事を將軍綱吉に白す、乃ち裁可を得て遂に僧徒の異諍を和融す、後、諸國を遊化し弘く念佛を勸む、一夕諸神の靈告により貞享元年本山に皈り良觀と商議し、玆に策を定め、意を決し、再び江戶に到り、具に宗門復興の願意を記し、寺社奉行酒井河內守、戶田能登守米津出羽守等によりて大將軍に申請す、然れども事重大なるを以て審議決し難く荏苒として歲を超えたり、同三年良觀の疾篤しと聞き急き官暇を請ひて皈山し晝夜病床に侍して看護す、良觀自ら起たさるを知り復興の事を師に囑し、遺髮を授けて寂す、玆に於て門末の六大寺の宿老鬮を如來の前に抽き、以て本山の席を繼ぐの舊令を取り競ひて法席を鬪くと雖、師には宿願未だ成らざるを以て敢て意となさゞりき、再び江戶に入り事を幕府に請へども、宿願未だ達せず、且諸の魔事起りて屢師を煩はす、而も毫も撓まず再三江戶に往復して宿志を達せんとし、元祿元年七月十八日遂に大將軍綱吉の裁可を得たり、其命に謂く「方今融通の一宗弊風極まれり宜しく之を正すべし、先づ山門頭に酒肉五辛を禁するの表石を立て、及本末の寺法を明かにし、僧衆の淸規を嚴かにし、其他細大の弊習を蕩盡し

ユー(融)ク

て大に宗門の面目を改むべし、其當代住持の職に至りては且らく先例に從ひ六大寺の住持をして鬮を以て之に當らしめ、次代より以後必す法器を擇ひて次代に附囑し、師資相續して本山に住持して末寺を統御せしめよ」とありければ師年來の志願滿足せりとて大に喜び、國に皈り假に天王寺の茶臼山觀音寺に寓居し、時々本山を看護す、元祿二年春幕命を奉じて六大寺の宿老を本山に召し、末寺の老年僧侶をして之れが證明とならしめ、本尊の前に鬮を抽き以て本山主の席を定む、當時師六大寺の第一なる八尾良明寺の席を領せしかば亦其抽籤の一人なりしに師其選に當りければ衆議定りたり、三月二十日列伍を整へ茶臼山を發し本山に進む、其盛大なること古今に絕せり、是に於て僧衆の服制を正し、寺門に禁碑を建て三時六齋勤行の制規を定め、末寺檀越接待の格式を設け、專ら宗祖の風紀を復し、殿堂の輪奐を修む、元祿三年請に應して天得の尊像を護持し、畿內千戶の末寺を巡教す、之より先き諸國の末寺に住するもの、多くは俗家似同の行儀にして眞の住持たる者極めて稀なり、此故に寺門荒廢して修繕することなく、教法地を拂ひて衰頹せり、師巡敎して到るところ之を矯正し、悉く住持職となして寺院の面目を一新す、七年五月靈元天皇勅して紫衣を賜ひ其德を表はし給ふ、六月二十六日參內して之を謝す、九年九月十六日に太上天皇新に敕旨を賜ひ本山を以て永く一宗の檀林となし、諸國末寺の學侶を管領し、其學成り臘高き者一人を擇びて參內して綸旨を受け乃ち香衣を着し位階を進ましめたまふ、師檀林清規を製して末代の龜鑑となし、學頭院を建て、寮舍を造立し、廣く學徒を集めて講筵を開き、人器を擇びて朝廷に奏聞す、後十五年京都北野天神の傍らに圓滿寺を建て盛んに貴賤を勸めて名帳に入らしむ、同年十一月十日太上天皇名帳宸翰の序を賜ふ、十三年春江戶に赴きて衆を化す、十六年五十五歲にして融通圓門章を著す、寶永二年融通念佛信解章二卷を著す、同四年四月般舟堂落成を告げしを以て大に慶讃し、嘗て自ら造りし上品の阿彌陀佛像八尺の尊軀を安置す、六年四月八日奈良東大寺大佛殿の落慶供養の佛事に參會し、同年將軍綱吉薨去せしかば江戶に赴き、東叡山根本中堂に詣で將軍の冥福を祈る、享保元年春江戶に疾を得、二月十二日寂す、壽六十八、臘三十六、第三日に至り千住に茶毘す、(融通念佛宗三祖畧傳、再興尊者編年畧)

ユーケイ 融硅(二〇五六)〔曹洞宗〕豐前護聖寺の開山なり、融珪字は韓山、信濃諏訪の人なり、幼年慈雲寺に入り薙髮し、受具の後行足參方す、初め補巖寺了榮に謁し次に泉福寺の無著に見え、止まりて講事す、後ち無著玉林寺に遷り師を迎へて分座す、後ちに總持寺に出世す、豐前の信官護聖寺を建て聘して第一祖となす、繼て泉福寺を主どり、期年にして護聖寺に退隱し、某年十月十三日寂す、世壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ユーゲン 融源(一八二九)〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、融源號は五智房、俗姓は平氏、肥前の人にして覺鑁上人の親族なり、(一說に上人の季父なりといふ)、高野山に落髮受戒し、覺鑁上人に師事して秘密法を受け、智德並に高く、一山の大衆に歸仰せらる、示寂の年時缺く、師山中に菴

居して修行を事とし、道俗の機嫌を顧みることなければ往々疑謗するものあり、嘗て灌頂壇を開くに際し三昧耶戒の日俄に大雨あり、皆曰ふ融源阿闍梨の此會に與るためにかゝる不祥ありと、然るに融源等屐を着けすして壇に登るに大雨自ら避けて法衣濕はす、大衆駭服し先に疑謗したる者亦大に慚ちたりといふ、嘉應元年後白河上皇高野山に幸ありし時、師を召し見んとす、師風疾ありとて出てす、再三使至るも堅く臥して出てす、上皇乃ち其菴に幸したまへは、師木片を燒きて腰背を炙り、前驅御幸を告くるも回顧せす、上皇背後より合掌して歸へりたまひたりと云ふ、（結網集、砂石集）

ユーコー 融光 クワンゴー觀豪を見よ、

ユーサツ 融察（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融察字は案考、養叔融供の法を受け其席を繼ぎて肥前圓通寺に住す、寂年並に世壽缺く、法嗣久學融貞あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーサン 融參 二〇九一…… 〔曹洞宗〕日向福聚寺の開山なり、融參字は實庵、日向の人なり、十三歲にして無著禪師に依て出家受戒し、徧く江湖に參歷す、洞巖和尚に謁するに及んで心印を發明す、應永中鄉に皈り龜石山に跡を晦ませしが、四方の道俗雲集し壇供を設け漸く法席を成す、名けて福聚寺と云ふ、永享三年十一月十日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーシン 融眞（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融眞字は大芳、月山融照の法を嗣ぎ、肥前圓通寺に住す、寂年壽缺く、法嗣玉室融椿あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーシユー 融秀（二〇〇〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、融秀字は良順、俗姓生國詳かならす、妙樂院に住し學頭に昇る、寂年缺く、（結網集）

〔考〕融秀は南北朝時代の人なり

ユーシユン 融舜 二一八三…… 〔淨土宗西山派〕山城禪林寺第卅三代なり、融舜字は一仲、廿八代召運の法孫なり、尾張一ノ宮常念寺の二代に居り、又備後尾道寶土寺二代に居る、後禪林寺に住す、大永三年十一月十八日寂す、壽缺く、著作觀經厭欣鈔三卷あり、

ユージユン 融純 二〇八四…… 〔曹洞宗〕筑前明光寺の開山なり、融純字は無雜、越後の人なり、十四歲にして出家し、二十歲にして行脚し泉福寺に於て無著に參す、後ち總持寺に出世し、無著の嗣となるも辭して肥前の慈廣寺に退去す、應永中筑前の檀越某博多の津に明光寺を建て師を迎へて開山となす、後ち泉福寺の主となり期年にして辭して明光寺に皈り、應永三十一年十一月二十七日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーシヨー 融松 二〇四五 二一一三 〔曹洞宗〕奧州正法寺の禪僧なり、融松字は任山、奧州江刺郡巖谷堂の人、小森氏の子なり、九歲にして正法寺月泉禪師に依て沙彌となり、十三歲にして薙髮得度す、勤學多年印可を受け奧州正法寺に出世す、寶德中續燈寺に遷り、享德二年五月十四日寂す、壽六十九、臘五十五、偈あり龍門無宿客、龜鶴本來佛、（日本洞上聯燈錄）

ユーシヨー 融照（……）〔曹洞宗〕肥後圓通寺の禪僧なり、融照字は月山、的林融中の法嗣にして其席を繼ぎ、

肥後圓通寺に主となる、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーチン　融椿（……）〔曹洞宗〕肥前地福寺の開山なり、融椿字は玉室、幼より遊方し日山に見えて堂に登り、後大芳融眞に謁し服勤二十年、大芳の沒後其席を繼ぎ圓通寺に住す、檀越某地福寺を築き師を請す、寂年壽缺く、法嗣梅溪融薰あり、（日本洞上聯燈錄）

ユーチウ　融中（……）〔曹洞宗〕肥後圓通寺第二代なり、融中字は的林、肥後の人、幼にして無著禪師に依りて祝髮し、次に玉翁に謁し其提唱を聞いて發悟し、其席を嗣で肥州圓通寺第二代となる、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーテー　融貞（……）〔曹洞宗〕肥前圓通寺の禪僧なり、融貞字は久學、案考融察に參して法を得、其寂後席を繼きて肥前圓通寺に住す、寂年及世壽缺く、法嗣東甫融菊あり（日本洞上聯燈錄）

ユーテキ　融適　二〇七三……〔曹洞宗〕筑前瑞石寺第二代なり、融適字は天眞、肥後の人なり、無著和尚に師事して無情說法の話を聞て疑情脫す、無著即ち衣を與ふ、師服勤四年辭して筑前の鞍手郡金生村に一寺を捌し一奇石を拾ひ、寺を名けて瑞石寺と云ふ、無著を以て開山祖となし、自ら第二代となる、後ち同國醫王寺に移り、應永二十年八月二十日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーテン　融天　二三九三……〔融通念佛宗〕攝津貞松院の住持なり、融天字は龍海、鄕貫詳ならず、元祿十二年九月大源山に上り入衆す、山主大通上人一見して師の才學を稱し、大和山邊郡荒蒔城福寺の住持を命ず、後本山に上り、享保六年第四十七代融海忍通上人寂後官命により本山執權職を受け、同十年勸修寺前大納言豐智麻呂入山して第四十八代（通存信海）となるにあたり、法務後見となる、前後要職に當ること三十二年一日の如し、寶永二年本山に於て西谷名目を講演す、五年二月貞松院住持となり、享保十五年六月退隱し、大坂鹽町に萬休菴を結びて閑居す、同十七年大和萩原宗祐寺の請に應じて同寺に住し、同十八年弟子惠海の請により芝村廣讃寺に老病を養ふ、同年七月二十五日寂す、壽缺く、弟子惠海あり、（龍海上人傳）

ユードー　融道　二四五五……〔新義眞言宗〕佐渡蓮華峰寺の學僧なり、融道字は勸善、鄕貫詳ならす、蓮華峯より京都六波羅密寺に轉し學譽高し、寬政七年八月廿八日寂す、壽缺く、門下に海應能化を出す、著作瑜伽條目二卷あり、（新義眞言宗史料）

ユートン　融頓　二二四七　二三一九〔曹洞宗〕長崎皓臺寺の開山なり、融頓字は一庭、肥前佐嘉の人なり、俗姓は上原氏、十三歲にして圓通寺東甫和尚に投して出家す、十八歲にして遊方し關東に至りて武藏國青松寺に入り一峯和尚に謁し、次に龍穩寺の撫洲、孝顯寺天柱に參見す、凡そ十餘年一時の名宿叩請せざることなく、皆印可を蒙る、既にして西歸して東甫を圓通寺に省す、遂に入室して信衣並に相承の圖を付せらる、元和九年玉林寺に分座す、後に總持寺に出世し圓通寺に移る、寬永四年玉林寺に轉す、是の時に方り寺基荒廢甚だし、衆輪番住持を改め師に重興を請ふ、居ること十三年、寺基を振興す、後長崎の洪泰寺に居す、寺は本龜翁鶴の開創する所な

り、其地狹隘にして衆を容るゝに足らさるを以て寺基を移して再興し、改めて皓臺寺と云ふ、當時天草に邪敎を唱ふる者あり佛寺を滅すに至る、幕府軍を發して之を誅す、馬塲利重幕府の旨を奉して諸宗の高僧に命して之れを化導せしむるに方り師も亦與る、寬永十九年春江戶に上り將軍に謁す、賜賚優渥なり、秋九月勅召を拜し奏對旨に稱ふ、上大に悅び嘉號を寺に加へ普照皓臺と云ひ紫衣徽號を賜ふ、即ち了外廣覺禪師と曰ふ、既にして辭して西に歸る、天草の郡司鈴木重成幕府の命を奉して師を請て郡に赴かしめ、待つに師の禮を以てす、師止むを得すして應ず、雲山に命して皓臺寺の席を補せしむ、重成一宇を創し萬松山國照寺と曰ふ、師を以て開山始祖と爲す、慶安元年進院す、雪山既に寂して皓臺寺席を虛し請を受けて兼攝す、承應三年國照寺を以て丹山に付し、長崎の也足菴に退去す、萬治二年七月十日寂す。壽七十三、臘六十一、(日本洞上聯燈錄)

ユーリン　融林(二〇三〇)〔曹洞宗〕肥後圓通寺開山なり、融林字は玉翁、薩摩の人なり、出家の後ち金鐘寺了堂に參し、應安三年鎭西に出づ、時に無著三輪山に寓せしを以て往て說を聞き、日向に至り普藏寺を創して此れに住す、肥前の郡將圓通寺を建て請じて開山となす、某年六月五日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

ユーギ　宥儀(二二〇六—二二七八)〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三代なり、宥儀字は玄音、俗姓は佐竹氏、常陸水戶の人なり、寶鏡院に投して剃髮受具し、關西に遊びて講莚に列す、天正三年根來山に至り、日秀賴玄等の老宿に皈して密乘を習ふ、仝十四年春專譽に從ひて醍醐山に上り。大僧正堯雅に謁して秘藏を授けられ、又京都平等寺にて性盛に從ひて兩部の大法及び儀軌等の奧秘を受く、同十九年十月十一日三寶院正嫡憲深の一流を付せらる、師先きに法隆寺に遊び倶舍唯識を聽き梵網戒本を學ぶ、專譽僧正豐山に住するに方り其命に依りて喜多坊に住す、慶長三年春佐竹常陸介義重師を水戶に迎へ社務の席を補せしむ、講席を開き盛んに化を布く、同十四年秋性盛寂し空鏡密かに僞りて其讓りを受けたりと稱し小池房に住す、西藏院秀盛空鏡の僭僞を惡みて秀算元壽等と退散す、遂に兩黨となりて各官に訴ふ、空鏡其僞りを隱す能はず恥を負ひて伊勢山田に退く、家康師に命じて豐山の席を補せしむ、時に同十五年六月なり、同十七年十月四日駿河岡崎城に上り封戶及び一派の軌矩の印を授けらる、同月二十七日師智積院祐宣等と議し、學徒業二十年を經るときは能化の印章を帶ひて寺院に主たるべきこと等數條の制度を定め諸國に公布す、元和元年再び岡崎城に到り城中に論莚を開く、後退きて長谷寺に皈る、幕命に依り秀算主席を補し同二年の春師主席を讓りて月輪院に隱る、元和四年七月十七日寂す、壽七十三、(豐山傳通記)

ユークワイ　宥快(二〇〇五—二〇七六)〔眞言宗〕紀伊高野山寶性院の學僧なり、宥快字は性嚴、京師の人、藤原實光の子なり、應安出家して高野山に登り寶性院信弘に師事し入壇灌頂す、應安七年寶性院に住し敎相學を唱ふ、天授元年寶鏡鈔を著はして立川流の邪義及び天王寺眞慶の邪義を駁擊し、翌二年安祥寺興雅阿闍梨の高風を仰きて其寺に入り、慧運流の事相を傳へ

後安祥寺を兼務す、至德の頃勅召により宮中に秘法を修して靈驗あり、後圓融上皇御製を賜ふ、曰く「祈るへき道はしはしも迷ふなよかへる深山の花の白雪」、師即ち答歌を奉りて曰ふ「迷はしな花の白雪ふみわけて道ある御代をいのる心は」、と、後左學頭の職に上り大に敎相學を唱ふ、高野山の敎相學は師に至りて大成せらる、後世これを應永の大成と云ふ、師悉曇學を唱へ著作おほし、晩年善集院に退隱し、應永廿三年七月十七日寂す、壽七十二、著作大疏鈔三十一卷、經疏鈔由來二卷、宗義決擇集二十二卷、釋論決擇集二十卷、釋論鈔四十五卷、菩提心論鈔、即心義鈔、研心鈔、吽字義鈔、命息鈔各十卷、聲字義鈔三卷、二敎論鈔二十卷、寶論鈔四十卷、秘鍵鈔七卷、悉曇字記鈔六卷、悉曇考覈鈔四卷、悉曇決擇鈔五卷、寶鏡鈔一卷、灌頂私記三卷、灌頂授與記二卷、灌頂應永記一卷、實語鈔二卷、安祥寺由來一卷、安流大卷一卷、西院傳授記一卷、快遍問答鈔三卷あり、（本朝高僧傳、高野春秋、後傳燈廣錄、諸宗章疏錄）

ユークワン 宥歡 二五二六…… 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第五十代なり、宥歡字は周室、大和笠村の人、其師承詳かならず、彌勒寺より護持院に晋み、文久二年遂に豐山能化となる、職に在ると四年、慶應二年四月二十一日長谷寺方丈に寂す、（新義眞言宗史）

ユーケン 宥乾 リョートン良頓を見よ、

ユーケンボー 宥賢房 ライキョー賴慶を見よ、

ユーシン 宥信（二二一四）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、宥信は常陸の人なり、少にして高野山寶性院に上り宥快に師事して密壇に入る、後花園天皇の勅により僧都に任す、灌頂以後諸師の門に遊ひて顯密を學ひ宥快の印契を得て如意輪寺に住す、享德三年高野の檢挍職を司とり、其終を知らす、同門に快全なる者あり、宥快の秘印を禀けて釋迦文院に住し、瑜伽法を唱へ且つ章疏を作る、（本朝高僧傳）

ユーショー 宥性 二四八一 二五五五 〔新義眞言宗〕山城智積院第四十三代なり、宥性字は智友、不可得と號し、又如意金剛と云ふ、俗姓は小川氏、後僧侶の姓を稱するに及び金剛氏と云ふ、文政四年二月十五日を以て安房長狹郡平塚村に生る、小川孫左衞門の二男なり、天保三年三月十二日智積院賴如僧正に從ひて得度し、四年二月加行し、同八年一月入壇灌頂を受く、嘉永二年三月降榮僧正によりて再び入壇灌頂を受く、同三年三月同師より幸心方一流を相承し、尋て本願方一流、兩部神道灌頂、小野廣澤の兩流を相承す、大會を經て天保五年春より正信に師事して大乘起信論を研究し、唯識論述記、大乘義林章、倶舍論、智度論、釋摩訶衍論、瑜伽論、華嚴五敎章、天台四敎儀幷に宗部の敎相、儒佛合異等を兼習す、後安房淸澄寺に主となり、敎部省の設あるに方り權少敎正に任ぜられ、六年三寶院の住職となる、八年四月醍醐寺座主に補せられ權中敎正に進む、明治十四年故ありて其職を辭す、然れとも久しからずして大講義に任ず、二十三年五月二十日智積院能化職となり、二十五年二月四日大僧正に任ず、在職五年辭して東京淺草吉祥院に退き、二十八年一月十二日遂に寂す、壽七十五、（新義眞言宗史料）

ユーテー 宥貞 二二五二 二三二四 〔新義新言宗〕山城智積院第六代

なり、　宥貞字は仙丁、上野勢田郡の人なり、父は奈良原氏、母は阿久津氏といふ、文祿元年に生る、初め前橋の龍藏寺に投して天台の敎を學ひしが、自ら密乘に入らんことを願ひ、大胡の玉藏院祐慶上人に依る、十五歲髮を下して息慈戒を受け、尋きて十八契印、兩部の大法、護摩の秘軌を習ひ、漸く諸尊の密印を學ふ、祐慶上人の寂するに及ひ關東の諸寺を巡遊す、既にして石上寺の圓靜上人に就きて曼荼羅に入り、兩部の灌頂に沐し、阿闍梨位を受く、元和八年京師に上り智積院の日譽僧正に謁して研究し、金剛峰寺に上りて西室實翁の講を聞くこと二年、法務大僧正堯圓に醍醐山に見えて二年を送り、松橋の玄幽を探る、去りて圓城寺に遊ひ法泉院の亳忠に法華を習ひ、勸學院の實雄に倶舍を學ぶ、たま／＼元壽僧正日譽僧正に代りて智積院を領するに會ふ、太上法皇元壽僧正に勅して內殿に講席を開き、一時の學匠たるもの十人を擇ひて問難となす、師之に與る、後、尊性法親王元壽を大覺寺に延きて三問一講を行ふ時、師第三問者となる、駿河守牧野成久師を請して其采地越後長岡の玉藏院に住せしむ、此に於て初て法幢を建て雲衆に接す、又始めて灌頂壇を建つ、幾もなくして歸りて智積院に入る、元壽僧正に師事すると四年、寛永十九年將軍家光の命によりて武藏中野の寶仙寺を領し講席を張る、時に五十一歲なり、正保三年元壽僧正を省して益々奧底を探ること兩年、復た寶仙寺に歸り灌頂壇を開く、此年幕命を受けて江戶愛宕の圓福寺を董す、慶安三年曼荼羅を圓福寺の道場に立つ、明曆二年命を蒙りて智積院に赴き隆長僧正の後を嗣き、兼ねて中性、寶護の二院を管す、勅して僧正に任す、萬治元年春江戶に往く、時に紀伊大納言江戶にあり、一日師を赤坂の邸に屈請し法を聞く、寬文元年七十歲にして京都大報恩寺に退き、四年五月六日寂す、壽七十三、臘五十九、全身を智積院の坊山に闍維す、（結網集）

ユーハン　宥範　一九三〇 二〇一二　〔眞言宗〕讃岐善通寺の學僧なり、　宥範は讃岐櫛梨の人、少にして鄉里の新善光寺に入りて剃髮受戒し、淨土の敎を學ふ、後州の無量壽院に覺道僧正に師事すること八年、胎金の兩部小野流の密派皆其玄奧を究む、西三谷に至りて倶舍論を聽き、永仁二年高野山に登る、然れとも故ありて留寓すること能はす、下野に抵りて鷄足寺の學頭賴尊に謁して三寶院の法疏を受け、同國分寺妙祥に見えて大日經疏を聽かんと請ひしか、妙祥奧州如法寺の道性法印に求めしむ、然れとも道性其請を拒む、復下野に歸へる、行路の饑饉を見て妙祥始めて講筵を開き、一年にして全く畢ふ、正安元年妙祥武藏の廣田寺に講筵を開き、翌年春伊豆密嚴院の請に應して走湯山に開く、師皆席に列して之を聞く、妙祥に從ふこと前後九年、毘盧の密印ほゞ手に入る、師妙祥に就きて聞く所を錄し妙印鈔三十卷を編す、嘉元三年平帥妙祥の請に應して鎌倉に往く時、師舊師匠覺道を省す、覺道自ら常福院に移り師をして無量壽院に住せしむ、延慶二年近江安祥寺に往き寺主光譽に謁し、往來すること十八年、盡く秘奧を得たり、嘉曆の末再ひ妙印鈔を增訂して八十卷を成す幾もなく末東北院に移り、元弘年中誕生院を創す、曆應三年院燒く乃ち善道院に移り十餘年の間力めて殿堂を興復し、文和元年七月一日寂す、壽八十三、應安四年春僧正を贈られ、弟子宥

源其行狀を草す、（本朝高僧傳）

ユーバン 宥鑁 二二八四 二三六二 〔眞言宗〕山城智積院第九代なり、宥鑁字は文識、甲斐八代郡一の宮の人、俗姓は降屋氏代々一の宮大明神の祠司たり、氏は寛永元年を以て生る、十三歳にして出家の志あるも父許さず、遂に自ら髮を斷て同國末木村慈眼寺に投じ、宥眞の許に沙彌戒を受け、諸書を諳誦し、苦學年を積み具足戒を受く、後京都に入り智積院に投じ第六代宥貞僧正に師事し、講學二十年に及ぶ、學成りて國に歸り慈眼寺に住す、寛文十年秋再び智積院に往き、第七代運敞僧正の許に教を受くること六年なり、後、奈良東大寺に遊び倶舍唯識を講究す、延寶元年十月安房寶珠院より請せられ同院第二十二代となる、後山城醍醐山に登り法務大僧正宥雅に就て小野流の事相を傳ふ、天和三年武藏眞福寺に遷り、同院第六代となり、盛んに講筵を開き、數々將軍の優賞を拜す、元祿六年幕命に依り智積院第九代能化となり僧正に任せらる、能化職にあること五年、傳法大會を再興す、仝十五年七月十九日大報恩寺の隱室に寂す、壽七十九、臘五十九、（宥鑁僧正行實）

ユーホー 宥豐 二四一九 二四八三 〔新義眞言宗〕京都清和院の學僧なり、宥豐字は大識、安房和宗村の人、出家して智積院に學び學譽高し、文政六年六月十四日寂す、壽六十五、權僧正を贈らる、著作論議私記十卷、起信論大識記三卷、十卷章私記十卷あり、（新義眞言宗史料）

ユーホー 宥峯 シユージヨ宗恕を見よ、

ユーア 酉阿 ケーカン冏鑑を見よ、

ユーオー 酉翁 シユーケー宗圭を見よ、

ユーケー 酉冏 二一六七 〔淨土宗〕下野弘經寺第三代なり、酉冏は傳蓮社曜譽、大愚と號す、肥前の人其俗姓詳かならず、了曉に師事して法を嗣ぎ、飯沼弘經寺に住し第三代の主となる、後鄕里に皈り淨圓聖光大乘尙福の諸寺を刱す、相模小田原に本誓寺を開き、永正四年正月十五日寂す、壽缺く、法嗣宗悅あり、（淨土總系譜）

ユーゴー 酉仰 二〇七八 二一一九 〔淨土宗〕武藏增上寺の第二代なり、酉仰號は明蓮社聰譽、俗姓千葉氏にして下總國千葉の人、千葉滿胤の二男なり、（一說相模の人）應永廿五年七月に生る、一族酉譽上人聖聰の高德を慕ひ師、其下に出家し學業を勵む、永亨の初武藏橋場の古刹法元寺の荒廢を歎し、寺境に在る齋藤實盛の墓を修理し念佛供養す、後同寺を再興して法源寺と改め號し皈命山無量壽院と稱し、常に淨土の曼陀羅を安置す、永亨十一年八月廿二歲にして增上寺第二代となり、長祿三年五月十五日寂す、壽四十二、著作傳籍末抄深義集あり、（鎭流祖傳、三緣山志）

ユーシヨー 酉性 二〇八九 〔淨土宗〕武藏勝願寺第五代なり、酉性字は良意、其鄕貫詳かならず、良順に師事して法を嗣ぎ勝願寺に主となる、永亨元年九月十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ユーソン 酉尊 二三四五 〔淨土宗〕山城光明寺の僧なり、酉尊は心蓮社叶譽と號す、加賀の人なり、路白に師事して法を嗣ぎ、江戶淺草幡隨院に住し、後京都金戒光明寺に移る、貞享二年八月二十九日寂す、壽七十、著作三經略解、曼陀羅

鈔各若干卷あり、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

ユーチン　西念（二二五八……）〔淨土宗〕土佐稱名寺の開山なり、西念は名蓮社稱譽と號し、其鄕貫詳かならす、感譽に師事して法を嗣ぎ、土佐國土佐郡に稱名寺を剏して開山となり、後郡の宇佐村に極樂寺を開きて退隱し、慶長三年七月二十二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ユーヨ　酉譽　ショーソー聖聰を見よ、

ユーカイ　祐海　グモー愚蒙を見よ、

ユーエー　祐榮（……）〔曹洞宗〕越前小林寺の開山なり、祐榮字は嫩桂、近江國の人なり、其俗姓詳ならず、初め芳菴和尚に參して法を嗣ぐ、後海を渡りて元に遊び、徧く諸名德を訪て歸朝し、越前中津原に至りて隱處すること年あり、檀信梵刹を建て請て開山と爲す、初め南遊の日少林熊耳の靈跡を禮す、今此地相似たり、故に熊耳山少林寺と號す、後、永平寺に出世す、晩年近江國野口の海藏寺に住す、某年十一月十七日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーカク　祐覺（一九九五）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、祐覺は俗姓生國詳かならず、比叡山に在りて大衆に交はる、後醍醐天皇の船上山に幸したまふに方り、師比叡山に在りて僧兵を率ゐて王事に盡す、新田義貞の軍に從うて足利尊氏及び直義を討つ、師は童十人、僧兵三十人を率ゐ、童は皆冑上に花を載せ、衆に先じて進擊す、衆これを見て大に奮ふ、鎭守府將軍顯家兵を率ゐて近江に至る、師は勅を奉して船七百隻を發して之を迎へ、共に京師に尊氏を討ち、大に功あり、後醍醐天皇の再び比叡山に幸したまふに方り、師一山の大衆を獎勵し、數々錢穀を出して軍用を助けしむ、後王事に盡し、數々功を樹つ、然るに後醍醐天皇の軍敗るゝに方り、京師に於て尊氏に斬殺せられたり、（大日本史、前賢故實）

ユーギ　祐宜（二一九六―二二七二）〔新義眞言宗〕山城智積院第二代なり、祐宜字は長善、俗姓は深澤氏、下野西方村の人なり、父は宇都宮の族にして武略に富み、晩年入道して道播と稱し鎔達と號す、初め西方村を領せり、故に師同村に生れしなり、甫めて十六歲、邑の正安寺に入りて落髮し、後根來山に上り智積院の日秀、小池房の賴玄、甲斐景巖（字は圓性）等の諸老宿に親炙して秘密敎旨を習ひ、又醍醐寺法務大僧正堯雅に就きて諸尊の秘軌を習ひ、重書秘訣を受く、或は奈良に遊びて唯識、三論、華嚴の宗義を學び、或は近江に往きて倶舍、天台の敎を受く、かくの如きもの二十五年の後、天正十二年故鄕里に歸る、幾もなくして請侍を受け桑島の金剛定寺に住し、大に講筵を開く、一住四年、退

祐宜僧正

きて他家山に隱れ菴を結びて兀座す、學徒相集りて群をなす、十六年十月岩代の藥王寺實宥僧正に聘せられて同寺に住す、太守平貞隆金品を寄せて厨庫に充つ、慶長七年貞隆故ありて出羽山里に謫せらる、師怏々として衣を拂ひて桑島に歸り、宇都宮の正福寺に逸老す、翌年皆川の持明院に移り住す慶長九年京都に入り智積院に掛錫す、玄宥に擢てられて脇能化となり、十二月旨ありて僧正に任す、明年正月龍顏を拜す、十年冬玄宥寂す、遺命して越州瀧谷寺の惠傳和尚をして位に補せしむ、然れとも衆多く師を慕ひて之を拒む、兩黨和分れて共に家康に訴ふ、家康衆議を容れ師をして補席せしむ、乃ち慶長十一年五月進院す、慶長十七年十一月十一日寂す、壽七十七、臘六十二、遺骨を泉涌寺に葬る、（結網集）

ユーゲン　祐源（……）〔眞言宗〕山城醍醐山深砂堂院の己講なり、祐源字は精進、淡路己講といふ、淡路守藤原輔明の子、師隆家の六代にして金剛王源蓮元の弟なり、定海の法を嗣き深砂堂に住す寂年缺く、（續傳燈廣錄）

ユーサツ　祐察　二二六四 二三二三〔淨土宗〕武藏大秀寺の開山なり、祐察號は直蓮社心譽、本阿と云ふ、氏族を詳にせず、十三歲にして聞說上人に師事し、學譽高く大衆其名を呼ばず經藏と稱す、壯年にして南都京都に歷遊し、唯識因明及俱舍等の學を究む、又華嚴法華に通す、武藏鳥越に大秀寺を開く、寬文三年三月十九日寂す、壽六十、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

ユーシン　祐信（一九四七）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、祐信は紀伊河南の人なり、弘安七年撿校に補し權律師となる、十年某月某日遍明院に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ユーシン　祐心（二三八四）〔……〕攝津源光寺の僧なり、祐心連歌を以て聞ゆ、寬永の頃浪速の人淀屋言當師に就いて古今傳を受けて名あり、（續茶人花押藪）

ユーシユー　祐宗　二一六九……〔淨土宗〕相模光明寺の九代なり、祐宗は長蓮社觀譽と號す、其俗姓詳かならず、法を聖譽慶順に嗣ぎて天照山の第九代となる、學德共に高く、嘗て頌義見聞十卷を著す、明應四年九月後土御門帝師を召して彌陀經を講せしむ、且つ十夜の法要を宮中に修せしむ、師の請願に依て爾來十夜の法要は淨土宗の通規となる、永正六年十一月八日寂す、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

〔考〕寺記に依れば祐宗は祐崇の誤なり、

ユーシユン　祐俊（二三一三）〔眞宗〕京都西光寺の住持なり、祐俊は父を祐從といふ、准如上人の時祐從堂衆となり、慶長四年以來內大臣豐臣秀頼公太閤の靈を追薦し、毎月十八日洛東豐國櫻馬場に諸宗の僧を請して佛事を修し、准如上人其會に列して伽陀句讀し祐從を率ゐて之を唱へしむ、十六年三月本山宗祖三百五十年忌を修し祐從亦句讀を唱へ法談となる、師時に十五歲、法會前三月十七日命を承けて定衆となる、十八年十一月二十日法會の列に入り、元和六年十一月內陣位に進む、寬永十六年十一月十四日學黌を慶讃し、常樂寺准慧及び堂衆六人ともに齋會に列し、正保元年十二月隱退す、承應二年西吟月感宗義を諍ふ師其事に關す、寂する時を知らず、師記錄の才ありて務めて舊事を叙す、洛東豐國八宗法事記、准宗主送終記、承應鬩牆記各一卷、外に大佛法會記、慶長祖忌記錄あり、慶長以來舊事後世に傳はるは師の功多きに

居るなり、(本願寺通紀、本願寺派學事史)

ユーシヨー 祐正 二四七九—二五三八 〔眞宗〕近江木ノ本明樂寺の住持なり、祐正は字は大憲と云ひ、後に顯晢院と號す、近江木ノ本の人なり、東本願寺末なる明樂寺の住持となり、法談唱導に長し、盛譽天下に敷く、師諸國に週遊し、法談唱導を事とし、皈依する者多し、明治十一年八月十一日寂す、壽六十なり、

ユーソン 祐尊 一八〇七—一八八二 〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、祐尊は仁證法印に從ひて灌頂法を稟け密敎を究め、仁和寺西方院に住し權大僧都に任す、建保元年秋東寺長者職を司とり、秋神泉苑に雨を禱る、貞應元年五月二十七日寂す、壽七十六、(本朝高僧傳)

ユーテン 祐天 二二九七—二三七八 〔淨土宗〕武藏增上寺第三十六代なり、祐天は明蓮社顯譽と號し、愚蒙と字す、陸奧國岩城郡新倉村の人、父は新妻重政と云ふ、寬永十四年四月八日に生る、正保二年三月十二歲にして增上寺内地德院休波に從うて江戶に入る、休波は師の伯父なり、後檀通上人に就いて得度し、專ら學業を勵む、常に隱遁の意ありて寺に住持とならす、貞享三年五十歲にして諸國經行の途に上り淨土敎を弘通す、數年にして江戶に皈り、牛島に幽棲するに道譽大に揚る、桂昌院特に請して法要を問ふ、元祿十二年幕命により生實大巖寺に住す、一躍して檀林に入るは異例なり、翌十三年弘經寺に轉し紫衣を許さる、寶永元年傳通院に住し上下の信仰益〻深し、將軍綱吉常に城中に請して法要を問ふ、家宣亦深く皈依し其風を仰く、正德元年十一月廿七日增上寺第三十六代の貫主となる、十二月六日幕府に出て大僧正に任せらる、同二年家宣疾あり特に師を請す、因つて城中に黑本尊を安し供養膽禮し且つ十念を授く、然るに十月十四日薨去し、遺命により師導師となりて葬る、其後屢々城中に法要を說き侍臣侍女等を敎導す、同四年六月增上寺貫主の職を辭し麻布の隱室に閑居す、享保二年二月西應寺に移り六月龍土に閑居す、三年七月十五日安祥にして寂す、壽八十二、臘七十、師常に手書の南無阿彌陀佛を諸人に與ふ、(三緣山志、續日本高僧傳)

ユーヘン 祐遍 ……—一九二三 〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、祐遍は紀伊紺野の人、引接院良任に師事して中院流を汲み、莊嚴院に住して瑜伽の學を弘む、學人其法を傳へて智莊嚴院流と號す、弘長二年夏高野山の檢挍に任ず、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

ユーホ 祐補 ……—二二三六 〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、祐補字は雲窻、能登酒井の人、洞谷寺にて下髮し、受具の後諸老に徧參し、承天寺に到り、虎溪正淳に參し、入室して衣法を付せられ、出世して屢々名刹に遷る、晩年加賀の大乘寺を主とり、天正四年四月十四日寂す、壽缺く、法嗣海天玄聚あり、(日本洞上聯燈錄)

ユーホー 祐寶 (……—……) 〔眞言宗〕肥前護國寺第百八代なり、祐寶初め肥前佐賀に在り、後醍醐山に登る、武藏騎西寶生寺長意と一宗の法脈を調査し、傳燈廣錄五卷、續傳燈廣錄十三卷、後續燈廣錄四卷を作る、(傳燈廣錄)

ユーエン 猷圓 一八二一—一八九二 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、猷圓は右京大夫隆信の子、其師承詳かならず、嘉祿三年七月二十一日別當に任し、同十一月十六日拜堂す、貞永元

年二月二十五日寂す、壽七十二、（三井續燈記）

ユーケン　猷憲 一四八七 一五五四 〔天台宗〕近江延暦寺の學僧なり、猷憲は下野鹽屋郡の人なり、少にして京師に上り、智證德圓の二師に從ひて灌頂を受け天台教を學ぶ、貞觀の初年勅により南北の諸宿大極殿に於て最勝王經を講し、師問者となる、常に持念堂に居し、寛平五年三月延暦寺の座主に任ず、翌年八月二十二日寂す、壽六十八、臘四十八。（本朝高僧傳）

ユーソン　猷尊 一八三八 一九一二 〔天台宗〕近江園城寺の別當なり、猷尊は兵部仲資の子なり、出家して慶範公胤の二師に台宗を學び、寛元二年七月園城寺別當に任じ、後權僧正に任ぜらる、建長四年七月十八日寂す、壽七十五、（三井續燈記）

ユーシヤク　佑籍（二二六五） 〔曹洞宗〕能登龍護寺の開山なり、佑籍字は貝林、播磨の人、幼にして出家し、業を明峰宗哲に受く、宗哲の滅後祥園寺無端祖環に師事すること數年、次に實峰良考に參して其法を嗣き總持寺に出世す、晩年能登の龍護寺を剏す、寂年及ひ世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーシヨー　侑松（……） 〔曹洞宗〕信濃靈雲寺の禪僧なり、侑松字は雪巖、能登の人なり、龍護寺眞化玄淳に師事し、其法を嗣きて總持寺に出世し、後信濃靈松寺に遷る、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

ユーア　友阿　ゲンサツ玄察を見よ

ユーキユー　友丘（……）〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、友丘字は東林、俗姓不詳、一山禪師に師事して其法を嗣ぐ、後元に航し育王の月江天寧の楚石等に依る、東歸の後建長寺圓覺寺に住し、雲光菴に寂す、年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ユーサン　友山　シサイ思偲を見よ

ユーシン　友心 二二六二 二三三二 〔淨土宗〕大和三輪某菴の僧なり、友心字は全行、大和山邊郡輻智堂村の人なり、三輪宴光律師に師事し念佛を業とす、郡の丹波市誓願寺の本尊は慧心僧都刻するところにして世人引導佛と稱して歸仰す、師深く此本尊を崇禮し靈異を感す、寛文十二年十二月三日正念念佛して寂す、壽七十一、（續日本高僧傳）

ユーバイ　友梅 一九五〇 二〇〇六 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、友梅字は雪村、別號は幻空、越後白鳥縣の人、俗姓は源氏、母は須田氏の出なり、幼にして建長寺一山國師を禮し左右に侍して苦學し、稍長して登壇受具し、京都の建仁寺に掛錫し、參禪の暇世書を讀み殊に莊子に通す、十八歳の時支那に渉り元叟端虛谷陵東嶼海晦機熙の諸老に謁し、後湖の道場に登りて叔平隆に依る、命せられて經藏を主とる、初め元の世宗日本を略せんと欲し、水軍利あらす仁宗相繼きて先志を償はんとす。而して師日本人なるを以て捕へられて霅川の獄に入り刑官刄を加ふるに及び怡然として懼れす、佛光禪師の偈を誦して曰く乾坤無レ地卓二孤筇一、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、雷光影裏斬二春風一、と、刑官感伏して朝に聞す、是によりて免るゝを得道名一時に高し、師獄中に在りて佛光禪師の韻を次して五首を成す、其一に曰く、百城煙水一枝筇、觸目無非是幻空、童子曾參二無厭足一、鑊湯爐炭起二清風一、と、既にして朝議師を西蜀に竄す、師志少しも屈せす、函關を出てゝ秦隴を渡る、因て詩を賦して志を見はす、其一に曰く函谷關

西放逐僧、生涯善以拙爲能、千鈞弩發雛邊雀、鸞落搏風化海鵬、其二に曰く函谷關西放逐僧、黄皮瘠裹骨崚嶒、有時宴坐幽巖石、只欠空生作友朋と、西川に至るに及び大學鴻儒道を問ふ者多し、十年の後恩を蒙むりて召し還され、長安に留まること三年、忽ち老母を思ひて歸朝せんと欲し、將に舟を艤せんとす、會々大宗即位し、詔ありて帝都の翠微寺を董し開堂説法す、帝特に寶覺眞空禪師の號を賜ふ、幾もなくして印を釋き、諸名刹を巡遊し、天暦元年夏商舶に附して歸へる、時に四十歳なり、母を鎌倉に省して共に居り、元徳二年建長寺玉雲菴に寓す、會々信濃諏訪の慈雲寺席を虚くす、郡主金剌一了居士師を延きて之に居らしむ、元弘元年秋神爲頼徳雲寺を創し師を開山祖となす、明年右金吾校尉小串範秀懇請して京都西禪寺に住せしむ、建武元年夏豐の萬壽寺を董し、一住二年印を釋きて京に上り、城北の栂尾に嘉遯す、赤松圓心金華山法雲寺を播磨に建て師を招きて開山祖となす、足利尊氏京都の萬壽寺に招致す、居ると一年、清水の清住院に退居す、貞和元年春朝命ありて建仁寺に住す、二年十二月二日寂す、壽五十七、著作語錄、並に峨嵋集四卷あり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳、續群書類從)

ユーホー 友峰　トーヤク等益を見よ、

ユーアン 遊安 二三五五……〔淨土宗〕武藏靈山寺の僧なり、遊安字は廓榮、光蓮社明譽と稱し、念稱と號す、姓は新田氏上野國邑樂郡小島の人なり、十五歳春岳に師事して業を受く、後南都京師に過遊して諸宗を學び、宇津宮氏に就て儒を學び、遂に智哲上人の法を嗣ぐ、貞享三年幕府の命に依て靈山寺に進み、元祿元年寺地を本庄に移し、五年殿堂悉く落成し、六年秋淨福寺に擢らる、八年正月十日增上寺に如き年始を賀して館舍に歸り寂す、壽五十餘、著作往生要集指麾鈔五十八卷、安樂集鈔五卷あり、(三縁山志、鎭流祖傳)

ユーシキ 遊識　シューコー宗興を見よ、

ユーシンサイ 遊心齋　チセン智暹を見よ、

ユーセンイン 遊泉院　ホーリョー法梁を見よ、

ユーホー 遊方　ニチカン日鑑を見よ、

ユーミョーシ 遊明子　ニチダツ日脱を見よ、

ユーケン 勇健 一九九一―二〇四三 〔臨濟宗〕信濃安養寺の禪僧なり、勇健字は大欽、俗姓は藤原氏、信濃伊那の人、元徳元年六月某日生る、甫めて五歳邑の澄心寺に入り、別山長の侍童となり、別山に携へられて紀伊の大慈寺に徃き、高山照に就き十五歳剃髮稟具す、京都に上りて建仁寺に掛搭す、康永元年東海源同寺に住するに及び師之に從ひて參究す、二年高山紀伊の楞嚴寺に寂し、遺命により師其法衣を受く、貞和年間雪村梅別傳胤相繼きて席を補す、師或は侍者となり或は記室となり、日々慧解を增す、偶々華嚴經を閲して忽然省あり、澄心寺に寓居し寺主大拙愚と共に參究す、師また遠山に登り月菴光と爭ひて峰翁和尚に參問す、文和四年翁の信任を受け拂子を與へらる、後關東の諸寺に遊び歸へりて建仁寺に寓す、龍山見中巖月に謁して九句酬唱す、衆選ひて師を高職に居らしめんとす、師聞きて竊に逃れ、伊豫に徃きて大蟲岑に見え宗義を談して居ること三年、貞治元年大雄寺に三光國師を拜し、其證明及び曹洞派の五位の妙訣を受く、同年夏國師

寂す海藏寺海雲和尚等師を招きて紀伊の大慈寺に居らしむ、移りて鷲峰山に住す、公卿士庶集り來るもの多し、また信濃に遁れ安養寺を嵯峨の地に遷して第一代となる、永德三年九月四日寂す、壽五十三、勅して正眼智鑑禪師といふ、（本朝高僧傳、續群二三七）

ユーケン　勇健　ニチタイ日泰を見よ、

ユーミョーイン　勇猛院　ニチゲー日麑を見よ、

ユーミョークワン　勇猛觀　リョーモン良聞を見よ、

ユーカイ　幽海　タンヤク湛益を見よ、

ユーセン　幽仙　一四九五—一五五九　〔天台宗〕近江比叡山の別當なり、幽仙は慈覺大師の門に學ひ、顯密に通し律師となる、昌泰二年十二月先定の例に依り延曆寺別當となり、同月十四日拜堂登山をなし、其夜坂本月林寺に宿し急に寂す、壽六十五、（天台座主記、僧綱補任、扶桑略記）

ユーレン　幽蓮　エリョー慧亮を見よ、

ユーエン　誘苑　（二五〇八）〔眞宗〕近江眞行寺の住持なり、誘苑は近江北中小路眞行寺の住侶なり、宗學を慶恩に承け助敎に昇階せり、晚年發揮の說少からす、平生宗典の解義を案する每に必す衾を被りて臥し、其說を得さるときは終日と雖も起きさりきといふ、（學苑談叢）

ユーケー　有慶　二三六九—二四三五　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第二十八代なり、有慶字は眞良、大和宇智郡牧野の人、俗姓は櫻井氏母は辻氏の出なり、甫めて十三歲豐山良興院龍岳の室に入り、翌年剃髮し、龍岳に隨つて河內通法寺筑波山金剛院に住し、後豐山に留錫し菅明慈眼兩院を歷て寶曆八年十一月十八日近江北野寺に轉ず、明和三年十二月二十四日幕府の命により江戶根生院十八代となり同寺の廢頹を興す、同九年十月二十七日護持院に主となり權僧正に任ず、安永二年六月二十九日遂に豐山能化職に補し、翌年僧正に昇る、同四年九月八日豐山丈室に寂す、壽六十七、奧院に葬る、（新義眞言宗史料）

ユイア　唯阿　二四一一—二四八三　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第三十九代なり、唯阿字は傳燈、武藏の人なり、州の木曾根普門院一阿に侍し、後豐山に登る、學業成りて武藏針ヶ谷弘光寺に主となる、文化七年六月根生院に移り、九年三月十二日擢られて豐山能化職に補す、法柄を執ること七年職を辭して閑居し、文政六年十二月十二日寂す、壽七十三、（新義眞言宗史料）

ユイア　唯阿　ショーキン性均を見よ、

ユイイチ　唯一　（二三一七）〔黃檗宗〕山城宇治黃檗山の禪僧なり、唯一は明人なり、明末に方り一方の將軍となり、滿州兵を防き戰ひ、人を殺すと一千餘人に至る、戰利あらすして明朝の傾ける後出家して隱元禪師の弟子となり唯一と號す、我國承應三年禪師に從ひ一門の大眉、獨言、獨知、獨湛、獨吼、獨立、良演、恒修、無上等と共に西來し、山城宇治黃檗山に留り殺罪を贖はんとして自ら血を刺して經を書す、常に鼻を刺し鼻頭石榴の如くなりたりと、血書の八十華華嚴經ありと傳ふ、寂年月日詳ならす、詩あり傳ふ、不ㇾ會ㇾ詩兮不ㇾ會ㇾ禪但將ニ一念ニ學ニ前賢一、古已有人今豈異、男兒奮志好加ㇾ鞭」

ユイエン　唯圓　（一九四八）〔眞宗〕祖親鸞の弟子なり、唯圓は常陸茨城郡沖和田の人、俗に鳥喰唯圓と稱す、蓋し其

生地を鳥喰といふなり、親鸞上人の弟子にして正應年頃の人なり、（本願寺通紀）

ユイオン　唯遠　ニチホー豐を見よ、

ユイクー　唯空（……）〔眞言宗〕大和菩提山の學僧なり、　唯空字は經照、初め興福寺に在りて法相を學ぶ、興正菩薩を拜して沙彌戒を受け、圓照に師稟して比丘戒を納れ、京都の善法金山に旋り東福寺に掛搭して禪那を修す、菩提山に上りて唯觀に灌頂を受けて大阿闍梨となる、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

ユイクワン　唯觀（二三〇一―二三三二）〔淨土宗〕大和今井谷の僧なり、　唯觀字は稱意といひ、能登珠洲郡藏見村の人なり、十五歲出家し二十歲京都に遊ぶ、是より先家兄惠海世を遁れ近江祥嘉寺に幽棲す、師先つ兄を訪問して淨土の宗要を聞き歸仰す、後壬生寺唯稱上人に師事し其法化を蒙むること二年なり、尋きて伊勢に遊び泉谷寺に留り同志五六輩社を結ひて念佛す、幾もなく諸國を周遊し、晚年大和今井谷に居り日課念佛六萬聲す、寛文八年四月醍醐山に結夏し、日夜阿彌陀佛像に對し一心に佛號を唱へ靈瑞あり、寛文十二年八月微恙あり、廿五日氣力漸く衰へ遂に寂す、壽三十二、（續日本高僧傳）

ユイシン　唯心（一九二四）〔眞言宗〕山城八幡の僧なり、唯心は山城八幡の人、小野廣澤二流の秘密灌頂を受け其蘊奥に達す、兜率の業を修し常に道場に坐して苦修怠りなし、文永の初年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ユイシン　唯心（一九三七）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、　唯心號は勸聖、京都の人、初め良遍に從ひて法相を學び、後圓照に師事して戒律を傳ふ、然れども常に法相の學を廢せず、唯識述記を講ず、後鎭西に遊化し終るところを知らず、（本朝高僧傳）

ユイシンアン　唯心菴　ジッドー實道を見よ、

ユイショー　唯稱　チクー知空を見よ、

ユイショー　唯稱　ミョーゲン明源を見よ、

ユイショー　唯稱　リンチョー輪超を見よ、

ユイジョー　唯乘（……一七九三）〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、　唯乘は比叡山の學徒にして法華經を誦し專修すること六年、長承二年十一月某日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ユイゼン　唯善（一九一三―一九七七）〔眞宗〕下總常敬寺の開山なり、　唯善一名弘雅、俗姓は源氏、小野宮禪念の子にして覺慧の同母弟なり、建長五年に生る、少將輔時の猶子となり、長して大納言雅忠の猶子となる、鳴瀧相應院守助の室に入り、又御室に參し廣澤流の法を承け、密教を研究し、修驗道を兼行す、大納言阿闍梨と稱す、後眞宗に歸し河和田唯圓に從ひて業を受く、覺慧に招かれて大谷に居る、然るに大谷の地狹きを以て師門徒と謀り南隣の地を買ひ寺基を廣め舍を建てゝ此に居る、宗昭と棟を分ち交を結ふ、衆其居に就きて宗昭を北殿と稱し師を南殿と稱す、嘉元元年關東に事あり、專修念佛を廢せんとす、師祖訓に反するを恐れて急に東下し、金數百貫を募りて鎌倉幕府に致し、官符を得て事を安す、師大谷に居ること幾ならすして信如宗主世を去る、師自ら祖廟を領するの志あり、諸門弟可かす正安以來爭訟再三に及ふ、然れとも覺信尼の遺命明白にして志を遂くる能はす、延慶二年七

月師遂に隨順す、即ち祖像の首を奉して東行し鎌倉の常葉に安置す、將軍守邦親王恩遇し下總關宿に寺を剏し朝に奏して額を賜ひ、中戸山西光院といふ、將軍寺領若干を附す、文保元年二月二日寂す、壽六十五、後西光院六代善鸞乃祖に代りて過を謝し像首を本山に奉す、時の宗主蓮如上人其志を納れ、且つ常敬寺の號を與ふ、（本願寺通紀）

ユイミョー　唯妙　ニチコー日好を見よ、

ユイミョー　唯明　リユーユ隆瑜を見よ、

ユイリヨー　唯了　ゲンサン源讃を見よ、

ユイアン　惟琰　二四一四／二四七二　〔臨濟宗〕美濃梅龍寺の禪僧なり、惟琰は隱山と號す、俗姓は杉本氏、越前國大野郡伊野原村の人なり、杉本氏累世白山神祠の祝人たり、其先は泰澄大師より出づといふ、甫めて九歳美濃興德寺禪規に從ひて薙染し、明和六年十六歳出て丶越前瑞邑寺に往き萬國に從ふ、安永元年十九歳陸前三春高乾院の月船を訪ひて參究し稍得る所あり、同八年十六歳の春、月船の下を辭し、儕輩と共に出遊し關西の諸大老に偏參し、後、去りて美濃に至り興德寺老山に見へ、其命によりて梅泉寺に住す、寛政四年三十九歳江戸に赴き永田寺第二代峩山に謁して縕奥を盡す、同六年四十一歳の春二月また永田に到りて、峩山に見え、五月また梅泉寺に歸へる、この秋峩山聘に應して美濃淸泰寺に入り、梅龍寺に移りて講筵を開くこと二十餘日に及ぶ、師前後其左右に在り、峩山駿河蓮光寺に入るに方り師亦これに從ふ、後梅泉寺に歸へりて大衆に接し、寛政十二年四十七歳請に應して梅龍寺に住し、碧巖集を講す、幾もなくして梅龍寺を明峰に讓り、草菴を東浦山堅相寺に結ひて優遊自適す、應接の煩を厭ひ、悉く緇徒を散遣し、僅に五人を從へて播磨鹿谷山に入る、居ること三年道俗皆德に歸す、文化三年九月美濃に歸りて金寶山中の瑞徵菴に卓錫し、更に名を更めて天澤菴といふ、文化十四年十一月二十九日寂す、壽六十四、臘五十六、朝廷特に詔して正燈國照禪師の諡號を賜ふ、

ユイエ　惟慧　ドージヨー道定を見よ、

ユイエー　惟永　クワンショー寛性を見よ、

ユイサン　惟三　シユーシユク宗叔を見よ、

ユイシユ　惟首　一四八六／一五五三　〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、惟首號を法輿と云ふ、俗姓は御船氏、近江蒲生郡の人なり、智證大師遍昭僧正に從つて灌頂を受け、德圓和尚法勢講師に就て天台教を學ぶ、貞觀元年詔を奉して大極殿寂勝王經會の講師となり、寛平四年五月延暦寺の座主に任す、明年二月二十八日寂す、壽六十八、臘五十、虛空藏の座主と號す、（天台座主記、元亨釋書、本朝高僧傳）

ユイシユー　惟宗　トクホ德輔を見よ、

ユイシユン　惟俊　二二〇一……　〔曹洞宗〕三河龍海院の開山なり、惟俊字は樸外、初め泉龍寺宗岡祖文の許にありしが、長興寺を過ぎて汝南契禪に參し、其印記を受け、記室となる、總持寺に出世し、長興寺に遷る、又龍溪寺を主どる、岡崎城主源淸康滿珠山龍海院を建て師を開山となす、晚年辭して退居し、天文十年十一月三十日寂す、長興寺龍海院に塔す、（日本洞上聯燈錄）

ユイショー　惟肖　トクガン得巖を見よ、

ユイセン　惟僊（一九一五）〔臨濟宗〕信濃安樂寺の開山なり、惟僊字は樵谷、俗姓不詳、建長の末宋に渡る、南浦明、約翁儉、無象照と同じく虛堂愚、偃溪聞、介石明、簡翁敬の諸老に參す、後天童の別山智和尙の輪下に心印を傳ふ、辭を告ぐるに及び、育王山の觀物初偈を贈りて曰ふ、一二應聲中密意通、分明飯布裏春風、休論親切不親切、巨船同程至海東、歸國の後信濃に隱逸し、安樂寺を開く、示寂の年時缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

ユイチユー　惟忠　シユゴン守勤を見よ、

ユイチユー　惟忠　ツージヨ通恕を見よ、

ユイツー　惟通　ケージユ桂儒を見よ、

ユイ子ン　惟念（二四八七……）〔眞宗〕伊勢輪宗寺の住持なり、惟念は花廼舍と號す、伊勢桑名の人なり、文政十年八月十日を以て生る、稍長して畫を嗜み、土佐光孚、浮田一蕙等に從うて筆法を受け、漸く畫名あり、後、東京に僑居し、谷修習を事とす、明治十六年第二回內國博覽會に畫を出して妙技三等賞を得、第一共進會に畫を出して銅牌を得、宮內省より買上げらる、是より畫名大に揚る、師示寂年月日缺く、

ユイヨ　惟譽　ゲンカイ玄海を見よ、

ヨの部

ヨカク　與廓（二一〇〇 二一七六）〔曹洞宗〕近江洞壽寺の禪僧なり、與廓字は然室、俗姓は藤原氏奧州の人なり、無外珪言の法を嗣ぎ、文龜二年命を承けて洞壽寺に住し、永正十年[illegible]雲寺に遷り、後龍穴菴に退居し、又龍洞院を開きて老を養ふ、仝十三年三月十七日寂す、壽七十七、臘三十八、法嗣雪窓鳳積あり、（日本洞上聯燈錄）

ヨフン　與芬（二一三九 二二〇八）〔曹洞宗〕近江洞壽寺の禪僧なり、與芬字は梅叢、俗姓は源氏、遠江飯田の人なり、幼にして鄉里の敎寺に祝髮し、十九歲衣を更へて禪に入り、洞壽寺無外珪言に謁して印可を受け、遠江に皈り飯田の山中に菴居す、大永七年佛陀寺に主となり、幾ならずして近江慧燈菴に退居し、指月龍華の二菴を立つ、洞壽寺雪叟の寂後遺命に依り其席を補す、天文十七年正月二十三日寂す、壽七十、臘四十五、（日本洞上聯燈錄）

ヨケー　餘慶（一五七九 一六五一）〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、餘慶は筑州早良の人、明仙に天台を、行譽に密灌を受け、苦修練行す、天元二年園城寺の長吏に補し、四年法性寺の座主に任し、永祚元年秋延曆寺の座主に補し、十二月權僧正となり、大に密敎を興す、智證大師流の密敎は師より盛なり、正曆二年閏二月十八日寂す、壽七十三、寬弘四年二月二十五日敕して智辨と諡す、（本朝高僧傳）

ヨーアン　陽菴　ユーエツ融悅を見よ、

ヨーシン　陽岑　シユーキン宗昕を見よ、

ヨークワン　陽關　トーエー東英を見よ、

ヨーコク　陽谷　ケンシユン賢春を見よ、

ヨーシツ　陽室　ユーキヨー融慶を見よ、

ヨーシユー　陽洲（二三六四）〔淨土宗〕尾張寶周寺の開山なり、陽洲は譽蓮社正譽と號す、尾張の人なり、州の岩倉誓

願寺講學の室に入りて剃髮し、後幡隨に師事して其法を嗣ぎ、初め誓願寺に住し美濃淨音寺に遷る、後名古屋に寶周寺を剏して開山となり、寶永某年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ヨーシユン 陽春　シンシヨー信盛を見よ、

ヨーシヨー 陽生 一五六四／一六五〇 〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、陽生俗姓は伊豆氏、伊豆北條の人なり、少にして比叡山の延昌僧正を師とし顯密を傳受す、性多病なるを患へ暫く靜養して精修を弛寛し法華を誦す、後竹林寺に居りて精修す、貞元二年權僧都に任せられ、天元二年正に轉す、永祚元年延曆寺座主に補し、正曆元年十月二十八日寂す、壽八十七、或は七十ともいふ、（本朝高僧傳）

ヨーシヨー 陽勝 一五二九／…… 〔天台宗〕近江比叡山の行者なり、陽勝俗姓紀氏、能登の人、母日を呑むと夢みて娠むありて生む、元慶三年十一歲にして比叡山に登り、空日に師事して止觀を學ぶ、兼ねて眞言に通ず、山中に籠居して法華經を誦持して苦修練行をなし臈席に印せす、後大和に遊び金峰山に登り、尋きて牟田寺に留り穀食を絕つ、延喜元年に至り全く世間を厭離し出てす、父病あり死に瀕し陽勝を思ふ、師即ち飛行して鄕里に至り父に見ゆ、後再び金峯山に隱る、終る所を知らず、（本朝高僧傳）

ヨーホー 陽峯　シユーシヨー宗韶を見よ、

ヨーゲンイン 要玄院　ニチクワン日寬を見よ、

ヨーシン 要津　エタン慧潭を見よ、

ヨーバン 要播（……）〔曹洞宗〕安房長安寺の禪僧なり、要播字は亘天、俗姓は平氏上總の人、敎院に投して童子となり後祝髮受具す、會々禪者の勸めにより衣を更へて績翁宗傳に見え第二義に居る、久くして了悟し、績翁の龍江寺に遷るに及び、命せられて席を補し、安房長安寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣大雲神龍あり、（日本洞上聯燈錄）

ヨーヨ 要譽　インサイ寅載を見よ、

ヨーシン 楊愼（……）長崎の畫僧なり、楊愼一名は遵眞と云ふ、支那明朝の人なり、巧に人物を畫き其技妙に入る、隱元國師に從ひて來朝す、寂年壽缺く、（續本朝畫史）

ヨーチカク 楊智客　トーヨー等楊を見よ、

ヨーフ 楊富 二二四〇／二二〇五 〔曹洞宗〕肥前天祐寺の開山なり、楊富字は春岡、保福寺威化宗倪の法を嗣ぎ、肥前諫早鄕天祐寺を建て其開山となる、天文十四年九月八日寂す、壽六十六、遺偈あり曰く、算計甲子、六十六年、末後一句、落葉飄天、と、法嗣大央淳甫あり、（日本洞上聯燈錄）

ヨーリユー 楊柳　テツシユー哲秀を見よ、

ヨーシンイン 養眞院　ニチジユー日住を見よ、

ヨージユイン 養壽院　ニチホー日芳を見よ、

ヨーシユク 養叔　ユーク融供を見よ、

ヨーシユン 養春　リヨーヲユン良順を見よ、

ヨージヨーボー 養性房　ジヨーソー定聰を見よ、

ヨーソー 養爽　シユーイ宗頤を見よ、

ヨーセツ 養拙　シユーモク宗牧を見よ、

ヨーホ 瑤甫　エケー惠瓊を見よ、

ヨーリン 瑤林　シユーク宗玖を見よ、

ヨーカク 曜覺　シンエ信慧を見よ、

ヨーヨ 曜譽 ユーケー酉冏を見よ、

ヨーシユン 鷹春 シユーキヨー秀慶を見よ、

ヨージヨー 鷹城 ソーエー僧叡を見よ、

ヨーキヨク 杳旭 二四九九…… 〔眞宗〕越中魚津照顯寺の住持なり、杳旭は僧鎔の門人なり、當時三業惑亂始めて鎭定して能化職廢せらるゝを以て、本山師を擢てゝ學頭代勸學となし、學林の成規を改正せしむ、安居の代講師となること前後三回、初は觀經次は愚禿抄上卷後は愚禿鈔下卷を講し、又御前講を命せられて觀經玄義分を講す、師學自他に涉り他部は華嚴天台に達し法華三大部を通講すること三回に及へり、宗乘は殊に愚禿鈔選擇集に詳かなり、中年に當りて射水礪波兩郡三業の餘黨猶ほ盛なりしが、師全力を之か破斥に用ひ遂に悉く回悟せしめ、晩年口稱正因を計するの徒漸く蔓延するを以て、亦頗る其對治に勤めたり、天保十年寂す、本山謚を下して寂用院といふ、著作二卷顯彰鈔十卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ヨーグワツ 容月 ニチサツ日薩を見よ、

ヨーケン 用兼 二一七三 〔曹洞宗〕安藝洞雲寺の開山なり、用兼字は金岡、俗姓は戶田氏讃岐の人、十一歲敎院に投して剃髮し、後衣を更へて徧く禪門を叩き、龍文寺大菴に參し親炙多年其寂後尙宗仲心に依りて心要を發明し遂に永平寺に出世し爲宗の法嗣となる、次に龍文寺に遷り一年にして辭し、去りて行脚し安藝嚴島の社に詣づ、神官興藤掃部頭宗親應龍山洞雲寺を開き師を開山となす、又多多良義興周防に長福兼龍の二院を剏し細川道空居士阿波の桂林慈雲の二寺を建て師皆招かれて開山となる、慈雲寺は後丈六寺と改む、晩年洞雲寺に皈り、永正十年十一月五日嗣子章山に院事を囑し出でゝ行脚し其終るところを知らず、法嗣章山覞雯、月殿昌桂の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

ヨーサン 庸山 ケーヨー景庸を見よ、

ヨーラクアン 瓔珞菴 キヨーシユ敬首を見よ、

ヨクシユー 沃洲 二五四四…… 〔眞宗〕肥後近見淨專寺の住持なり、沃洲は槐齋と號す、肥後の人なり、宗學を閩生に受け頗る精微を極め兼ねて外典に通す、明治五年七月司敎となり爾來學林の事務を執ること數年なり、十六年六月宣猶老人と同しく勸學職に擢てらる、十七年二月觀經和讃を侍講し六月病を以て京師僑居に寂す、宗主謚を賜ひて願行院といふ、師諷詠を嗜み書法亦觀るへし、嘗て團扇を詠して曰く、擧之則月動之風朗月清風一握中、休ゝ嘆恩情秋夜絕、禦冬爐火亦煩ゝ公、と、著作二河譬講箋、八番問答講説、安心決定鈔丙子記、各一卷、寶章綱要二卷あり、（學苑談叢、本願寺派學事史）

ラの部

ラケー 羅溪 ジホン慈本を見よ、

ラサン 羅山 ゲンマ元磨を見よ、

ラグワツシ 蘿月子 シユーズイ宗瑞を見よ、

ライイ 賴意 二二七三 二三二五 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第九代なり、賴意字は任識、俗姓は市川氏、慶長十九年の春を以て土佐須崎邑に生れ、六歲大善寺賴助に依り、十二歲剃髮して

經論を習ひ瑜珈行を修す、寛永八年同國五臺山に登りて南部の灌頂を受け、遊方して關東に至り、糟壁島等巡行し、諸寺の法席に列し尊慶僧正に見えて歡喜院に寓す、後尊慶豐山に主となるに及び、師も亦登山し深く其化を受く、時に賴助寂し師に席を讓りしを以て大善寺に住持す、後門弟に寺を附して復豐山に登り、研究十餘年にして學名を得たり、法隆寺に至り觀音院に随つて倶舍法華を聽き、又奈良に赴きて英性に華嚴を學び、盛源に唯識を學び、皈りて五敎章を講ず、後亦大僧正寛濟に見え、兩部大法經疏儀軌等を傳へられ、深く小野流の淵源を究む、寛文六年夏快壽寂するを以て、幕命に依り師席を補して第九代となり、僧正に任せらる、是れより先き豐山堂宇狹隘なるを以て、十五間四方の講堂を建てんと欲し、幕府に乞ひて許され、且黄金千兩を賜はり、提唱の暇專ら營構に勤め、寛文十年の秋に至りて漸く落成す、延寶三年七月二十二日寂す、壽六十三、法臘五十一、(豐山傳通記)

ライエ 賴惠 一八二八—一八九五 〔三論宗〕大和東大寺の別當なり、賴惠は慈恩院と號す、出家して寛賓に三論の敎義を學び、大安寺別當尊勝寺修理別當等を經て、天福二年十月十二日東大寺別當に任ず、嘉禎元年閏六月二十八日寂す、壽六十八、(東大寺別當次第)

ライエン 賴圓(……—……)〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、賴圓俗姓は藤原氏、中納言賴資の子、山城の人なり、興福寺良兼僧都に師事して出世の法を學び、稍長するに及び、得度受戒し、十三歳の時最勝會の講師となり衆を驚かす、興福寺に住し、東光院に移る、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

ライキョー 賴慶 二二三三—二二七〇 〔眞言宗〕紀伊高野山蓮花三昧院の學僧なり、賴慶字は宥賢房、鄕貫詳ならず、出家して伊豆走湯山般若院に在り、内外の學に通す、後高野山に登り蓮華三昧院に住し、慶長六年十一月阿波に至り、日蓮宗を論破して大に名を揚く、初め阿波の日蓮宗徒貞安と云ふ者、盛に諸宗無得道の説を骨張して眞言宗等を排す、師乃ち其地方の眞言宗徒に招かれて往き眞言宗の勢を張る、其筆記あり安慶同答と云ふ、同十三年四月學侶行人の爭に方り、師は學侶方なるを以て、行人方に惡まれ奇禍に罹る、同七月徳川家康の召により、快正賴慶共に駿河に出て審問を受け、快正罪に處せられ、師は却て家康に皈仰せらる、同十一月十五日、江戸城に於て淨土宗傳通院廓山と、日蓮宗常樂院日經と宗論を開くに方り、師幕府の命を受けて判者證義となる、廿一日其功勞により、小袖一重白銀百枚、及び傳馬五疋を給せらる、これより師の名益大に揚る、慶長十四年三月三日駿河幷に江戸城に出づ、八月駿河城に於て眞言宗の義を説き、且つ一宗の衰微を訴ふ、依て同月幕府命して關東眞言古義法談所九箇條永格朱印を給し、九月高野山に永格七箇條を下し、且つ賴慶に判物を給す、十二月師勸學の命を蒙る、十五年二月師使僧となり、東寺、醍醐山、高雄山、御室、嵯峨、石山、内山、上乘院、桃尾山、釜口寺、菩提山、金剛山、河州天野山、同觀心寺等に勸學の書札を達す、是に於て師の勢威兩門主を凌く、同年一山の大衆中師の專横を惡み、撿挍政遍駿河に出て之を訴ふ、遂に五月四日走湯山に蟄居し、十月十三日寂す、壽四十九、著作遮表深義鈔二卷、護身法鈔一卷 阿字恩

言鈔二卷、光明眞言鈔一卷、起信立義釣物鈔一卷等十餘部あり、（高野春秋、元祿書籍目錄）

ライクワン　賴觀（……）〔眞言宗〕山城東寺三十二代の長者なり、賴觀は德大寺僧都と稱す、堀河右大臣藤原賴宗の子、賢尋僧都の高弟なり、性信親王に傳法灌頂を受け、法身心印を嗣ぐ、遂に東寺第三十二代の長者法務となる、其寂年缺く、（傳燈廣錄）

ライケン　賴兼　一八四六 一九二一　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、賴兼俗姓は源氏、具平親王五代の孫、公胤法師に就きて薙髮し、定兼、常久、眞俊、長舜の四師の門に遊ひて宗義を學ひ、四宗の證義者一寺の別當となり、又覺朝を拜して登壇し、大阿闍梨となる、弘長元年七月十七日、（別當次第には十八日）寂す、壽七十六、（三井續燈記、東大寺別當次第）

ライケン　賴賢　一八五六 一九三三　〔眞言宗〕紀伊高野山寶相院の開山なり、賴賢字は尊圓、藏人阿闍梨と稱す、京都の人、幼にして醍醐山に登り、成賢僧正に仕へて出家す、宗門の行業訖りて傳法職位の灌頂を同師に受け、妙德房を山中に開きて祖となる、終に金剛頂宗の鐵塔相承法身の心印を付屬せられて、小野派の三十四祖となる、後高野山に退き、金剛三昧の安養院に隱れ、小田原の寶相院に移りて開山となる、龜山天皇勅して法橋上人の位を賜ふ、時に鎌倉の請に應して關東に居る、大將軍賴經當の下常樂院等一兩院を建て、師を開山に仰きて法幢を建つ、文永十年十二月七日寂す、壽七十八、（續傳燈廣錄、本朝高僧傳）

ライゲン　賴玄（……）〔戒律宗〕常陸清涼寺の律僧なり、賴玄字は道順、諸師と共に興正菩薩の律苑に遊ひて戒範を習得し、密軌を傳受す、後常陸の三村にありて清涼律寺を刱建し、大に律幢を建て、四衆來集す、寂年缺く、（本朝高僧傳）

ライゲン　賴玄　二二六六 二三四四　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、賴玄一名は快傳　字は定識、能登の人なり、根來山に登りて妙音院玄譽法印に師事し、瑜伽三密の蘊奥を受く、次に東大寺興福寺に遊ひて性相の學を究め、尤も因明に精し、永祿十年玄譽の付囑を受けて妙音院の席を董す、六大法身の講席を張る、時に六十二歲なり、日秀と同しく學徒を敎授す、學徒鈔錄纂集して智小口訣と號す、智積院小池房（妙音院の別號）二家の口訣の義なり、天正十二年八月十七日寂す、壽七十九、（結網集　續日本高僧傳）

ライゲン　賴源　……　一八四三　京都の畫僧なり、賴源は筑前法師と號す、佛畫に秀作あり、壽永二年二月二十四日寂す、壽缺く、（僧綱補任、續本朝畫史）

ライゴー　賴豪　一六六二 一七四四　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、賴豪は伊賀の人、同國の刺史藤原有家の子なり、幼にして園城寺に入り、諸碩德に謁して顯密を習ふ、白河帝の勅により儲嗣を祈り、承保元年冬皇太子生る、これより帝の優遇渥し、應德元年五月四日寂す、壽八十三、（本朝高僧傳）

ライゴー　賴豪（一九九〇）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、賴豪字は行心、俗姓生國詳かならす、中性院賴瑜蓬華院實尊に師事して學譽あり、元德二年實尊寂す、後を繼きて蓬華院に住し學頭に昇る、寂年缺く、著作大疏開雲鈔十

六卷、東草集五卷あり、（結網集、諸宗章疏錄）

ライゴン　頼嚴　一七〇—一七五九　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、頼嚴は藤原實仲の子、覺源法師の上足なり、寛治四年維摩會の講師となり、尋きて法華最勝の講師となる、康和元年寂す、壽五十、（本朝高僧傳）

ライサイ　頼西　一七三八—一八二一　〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、頼西は智明房と號す、二十五歳剃髮出家して高野山に登り、師を擇ひて密灌を受け、經論を研習す、靜處に菴を結ひて益々精進苦修す、山衆稱して伊勢上人といふ、師齡八十四歳既に八千座の護摩を修し、仁平元年十一月五日寂す、（本朝高僧傳）

ライシン　頼信　一七四三……　〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、頼信は甲斐の大守藤原頼經の子、興福寺に眞範僧正に従ひて下髮受戒し　思を法相の敎に潜め、因明に精通し、一乘院に住す、幾もなくして興福寺を董し、大安、法華、山階、長谷の四寺を權管し法務を兼ぬ、永保三年六月二十一日寂す、弟子三人あり、永緣、頼尊、覺信是なり、頼尊は攝政家に出て僧正に任し、一乘院に住す、（本朝高僧傳）

ライシン　頼信　ショーショー性盛を見よ、

ライシン　頼眞（……）〔眞言宗〕山城安祥寺の太元別當なり、頼眞は大納言阿闍梨と稱す、實嚴の傳法印可を得て安祥寺に住し、詔して太元別當となる、付法の弟子に成嚴あり、（後傳燈廣錄）

ライシン　頼眞（……）〔天台宗〕近江金勝寺の僧なり、頼眞は近江の人、甫めて九歳にして近江金勝寺に至り、法華經を聞きて能く記憶し、兼ねて義解す、然るに辨說に拙にして口常に哨嚼す、人多く之を笑嘲す、頼眞深く恥とし比叡山に登り、中堂に參籠し七晝夜を期し祈願して曰ふ、我何の惡報ありて牛の如く哨嚼するか、願くは大醫王明に前因を示せと、第六夜に至りて夢に人聲あり告けて曰ふ、汝が前生は近江の緣神郡にありて牛たり、郡人法華經並に供物を馱して某寺に至りたることあり、其功德により人類に轉生したるものなり云云、頼眞これより益精心に持誦を事とす、七十歳までに六萬部を誦したりと、（本朝高僧傳）

ライシン　頼審（一九七二）〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、頼審は定範の秘密灌頂を受け、胎母院に住し、盛んに法義を播き、撿挍職となる、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

〔考〕　頼審は正和の頃の人なり

ライシン　頼申（……）〔眞言宗〕美濃實相院の學僧なり、頼申字は宗佐、越前瀧谷寺の住僧なり、十八歳美濃實相院の宗印に従ひて瑜伽の法を受く、時に宗珍といふ者あり、日向の日胤に従ひ習學すること六年、其玄微を盡す、後美濃に回りて松山寺に住し開講す、師之に就きて顯密の法を承け、實相寺を繼きて密を說き諭導す、寂年缺く、觀心發源頌を著す、（本朝高僧傳）

ライシン　頼心　ソンキョー尊慶を見よ、

ライシン　頼深（……）〔眞言宗〕某寺の僧なり、頼深は性信親王の燈を續く、聲譽高かりしと雖詳傳なし、付法の弟子に天台宗の尋禪を出たす、（傳燈廣錄）

ライジン　頼尋（……）〔眞言宗〕京都釋王寺第一代な

り、頼尊山城の人、其俗姓詳かならす、或は攝津守源滿仲の子なりと、仁和寺性信親王に随つて傳法灌頂を稟く、後釋王寺を刱して第一代となる、性僧綱を嫌ひ、終身阿闍梨位に居りて寂す、其年時及壽缺く、（本朝高僧傳）

ライシユン　頼舜（……）〔眞言宗〕京都東寺の僧なり、頼舜號は[illegible]房と云ひ、[illegible]寶院を刱す、初め深覺に就きて兩部の灌頂を受け、密驗に長す、寂年及ひ壽缺く、（本朝高僧傳）

ライジヨ　頼助（……一九九六）〔眞言宗〕京都東寺の僧なり、頼助俗姓は平氏、武藏守經時の子なり、仁和寺の法助僧正に從ひて灌頂法を受け、御室に居して法印に叙す、弘安八年仁和寺の法務に補し、九年權僧正に任ず、此日法務を辭し、明年九月東寺の長者となり、五年長者職を辭し大僧正に昇る、永仁元年東大寺の寺務を領し、四年某月二十八日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ライジヨ　頼助（一七六三）七條佛所三代佛工なり、頼助は學助の子なり、康和五年七月二十五日、興福寺供養の時に法橋たりしも、後法眼の任叙は見えす、故に法眼頼助と云ふも法橋の誤ならん、寂年缺く、一說に應德二年三月九日寂すとあれとも、應德は康和永久に先つること十數年にして、未た生存中なり、其造佛傳はらす、（外記日記中右記）

ライシヨー　頼照（……）〔眞言宗〕山城醍醐山の僧なり、頼照は中理趣房と稱す、顯密に通し、寂聞の傳法を以て一方の宗匠となる、付法賢覺、禪慧、定明、淨快、勝賢、勝成の六人あり、（續傳燈廣錄）

ライゼン　頼全　ショーゼン盛全を見よ、

ライゾー　頼増（……一七三二）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、頼増は其郷關及ひ俗姓を知らす、延久二年後三條天皇仁和寺の南に圓宗寺を建て、法華最勝の二會を置き、京都奈良の僧をして法義を講せしむ、四年十月師其講師となる、寂年及壽傳はらす、（本朝高僧傳）

ライソン　頼尊（一七四五）〔眞言宗〕京都池上淨光院の律師なり、頼尊は京都の人、能登守藤原實房の子、平救の入室弟子なり、薙髪の後顯密内外の典籍を受け、遂に性信親王の傳法を受け、示誨を蒙むる、付法の弟子永尊、平源、賢尊の三人あり、（傳燈廣錄）

ライニヨ　頼如（二四六一―二五二二）〔新義眞言宗〕山城智積院第三十八代なり、頼如字は大幢、俗姓は野部氏、安房長狹郡廣場村の人なり、剃髪受具して智積院に學ぶ、業成りて安房寶珠院に住し、嘉永六年幕命を受けて圓福寺に晉み、安政三年秋智積院三十八代の能化となる、師在職七年、文久二年春職を辭して退隱し、同年八月二十四日寂す、壽六十二、臘五十二、（新義眞言宗史料）

ライヘン　頼遍（二三二六）〔眞言宗〕近江石山寺寶性院の僧なり、頼遍は冷泉中納言爲尙の子、本と石山寺寶性院に住す、承應二年得度し、寛文三年權律師に任じ、同六年法眼に叙す、（仁和寺諸院家記）

ライホー　頼寶（……）〔眞言宗〕山城東寺寶嚴院の學僧なり、頼寶は其郷貫師承詳ならず、東寺寶嚴院に住して學譽あり、寂年及壽缺く、著作眞言本母集三十四卷、釋論勘

註二十四卷、秘藏記秘聞鈔三卷、體大東聞記、悉曇綱要鈔、身心本元鈔、微細安執義各一卷あり、（諸宗章疏目錄）

ライユ　頼瑜　一八八六—一九六四　〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の中興祖なり、頼瑜字は俊音といひ、紀伊那賀郡の人、源姓土生川（へふかは）氏にして、父の名は源四郎大夫と稱し、郡の豪家なり、嘉祿二年郡の山崎に生る、幼にして世典を習ひ、強識衆に驚かる、後靈夢に感し玄心阿闍梨といふに師事して得度納戒し、兩部瑜伽の大法を受け、尋きて高野山に登り、大傳法院に慧解の譽を馳す、道悟阿闍梨といふに師事して教藏の微旨を究め、建長の初奈良に遊び、東大寺に三論華嚴を學び、興福寺に瑜伽唯識を習ふ、兼ねて眞言院に眞言を探る、戒壇院に摩訶衍論を講す、康元元年仁和寺に至りて廣澤流の眞言事相を傳へ、正嘉元年高野山にありて十住心論愚草即身成佛義顯得鈔を草し、弘長二年山城醍醐寺に在りて般若心經秘鍵開藏鈔を草し、又高野山に歸へりて釋論開解鈔を草し、文應元年木幡觀音院に至りて眞空（字は廻心、號は中觀）に就きて秘密の口訣を受く、同年秘宗教相鈔を談し、干栗駄鈔解を草す、弘長元年正月觀音院道場に於て、眞空より廣澤流の灌頂を受け、同六月醍醐寺に至り、報恩院憲深に謁し、十八契印口訣を受け、野道鈔を草し、七月大疏指心鈔を草す、九月金剛界大法を受け、十月胎藏界大法を受く、二年護摩鈔、薄草子口訣等を草す、同年木幡の南院に寓して大乘義章首卷、八識義鈔を草し、靈夢により吉祥天を刻す、文永三年大傳法院學頭職に昇り、傳法大會を行ふ　四年醍醐の中性院に寓す、六年大傳法院に歸り、大會の談義を勤む、即身義愚草、十住心論愚草相尋きて成る、九年大傳法院を再建して僧坊に住し、中性院と號す、菩提心論愚草を草す、十一年五月奈良眞言院に寓居し、建治元年醍醐中性院に在りて大疏愚草を修正し、三年秘鍵愚草を草す、弘安元年覺洞院實勝法印高野山に登る、乃ち就きて妙鈔等を受け、二年四月十七日高野中性院に於て、實勝法印に就きて傳法灌頂を受け、第二重印可を蒙むる、九月醍醐中性院に於て毘那耶伽天供、愛染明王供を受け、三年傳法大會に聲字義、開秘鈔、吽字義愚草を作る、同年七月二十八日、高野中性院に於て實勝法印に第三重許可を受け、靈夢に感して文殊の像を畫く、同年十住心論衆毛鈔等を草す、七年三月瑜祇經拾古鈔を編す、正應元年大傳法院密嚴院を根來山に遷し建つ、大衆皆隨ふ、同年根來の假堂に傳法大會を行ふ、永仁三年寶鑰勘註を草す、四年四月寶鑰愚草を草す、五年根來山中性院に宴坐し、秘鈔問答を作る、正安元年豎義分短冊を綴る、十二月十六日根來神宮寺に於て豎義を行ひ永

頼瑜贈僧正

式となす、三年理趣經文句愚草を作る、嘉元元年釋論愚草を草す、（第八冊以下は後人の作なり）、同年十一月風疾あり、翌二年正月一日無量壽印を結びて寂す、壽七十九なり、天文の初め僧正を追贈せらる、著作序分義短冊、釋論秘決、釋論禪門決鈔、即身義別記、法華開題愚草、理趣經文句愚草、仁王經開題愚草、最勝王經開題愚草、大日經開題愚草、梵網經解題愚草、陀羅尼義愚草、金剛經解題愚草、眞言二字義愚草、諸宗教理同異釋各一卷、菩提心論初心鈔、祕鍵開藏鈔、祕鍵初心鈔、祕鍵愚草、聲字義開祕鈔、聲字義愚草、吽字義探宗記、顯密問答鈔各二卷、即身義顯得鈔、吽字義愚草、金剛頂經開題愚草、守護經釋愚草、新仁王經愚草、寶鑰勘註各三卷、菩提心論愚草、二教論愚草、即身義愚草各四卷、二教論指光鈔、寶鑰愚草各五卷、釋論短冊六卷、十住心論衆毛鈔十五卷、大疏指心鈔、釋論開解鈔各十六卷、大疏愚草十八卷、釋論愚草二十二卷、十住心論勘文二十四卷、釋論鈔出二十五卷、眞俗雜記問答鈔三十卷、十住心論愚草三十八卷、（以上教相部）、野金鈔、野胎鈔、護摩口決、石山道場觀記、妙鈔記、阿彌陀大心鈔、法華大意、入我我入觀、玄文鈔口決（玄は一に瑜に作る）、五重結護鈔、十八會指歸鈔各一卷、十八道口決、玄少口決（玄少は一に玄秘鈔に作り、又一に玄を瑜に作る）各二卷、野金發惠鈔、野胎入理鈔、灌頂私記、阿字秘釋、瑜祇拾古鈔、遺告釋疑鈔各三卷、秘鈔問答鈔、薄草口決各二十卷、字輪觀一紙、灌頂壇樣圖三紙、阿彌陀護摩次弟、光明眞言護摩、普賢延命護摩、大勝金剛護摩、六字護摩娛羅識法、妓尾惹耶法、專去輪護摩、北斗護摩、愛染王護摩、藥師供次第、聖天供次第、童子經供養作法、却溫經供養作法、摩怛利神法、諸尊法畧次第、泥塔供作法、朝暮護身作法、瑜祇經釋、眞言三部經釋各若干卷、（以上事相部）、灌頂私記、理宗口決各二卷、理寶口決四卷、（以上理性院部）、金界口決、胎界口決、護摩口決、各若干卷、澤見口決、野月口決各一卷、（以上廣澤部）、宗要畧鈔、古跡料簡、持犯要記畧鈔各一卷、義章八識義愚草三卷、五教章料簡六帖、唯識論料簡、頌疏料簡鈔各十四卷、（以上他宗部）、釋論序鈔一卷、神決鈔印可口決、諸尊通用表白集各一帖、香藥六帖、大日經疏衍義若干卷、（以上餘錄增加）、都て百七部、無慮四百五十餘卷に及ぶ、（結網集、本朝高僧傳、諸宗章疏錄）

ライヨ　賴譽　一九四〇……〔眞言宗〕京都東寺の僧なり、賴譽は中納言藤原賴貪の子なり、眞慧僧正に從ひて兩部の灌頂を受け、建長七年法印に敘し、弘安元年東寺の長者に任ず、二年權僧正に任せられ、同三年十二月七日寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ライヨ　賴譽（二一二九）〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の學僧なり、賴譽、字は定嚴 俗姓生國詳かならず、妙喜院を開きて住す、院側に小池あり、因て小池法印と號す、學頭に昇りて盛譽あり、寂年缺く、著作行法要集、論議私記等あり、（結網集）

〔考〕　賴譽は文明の頃の人ならむ

ライヨ　賴輿　シューコー周公を見よ、

ライエン　來緣　ジョーシュン定舜を見よ、

ライオー　來應　二二九五……〔淨土宗〕相模淨源寺の開山な

り、來聴は相蓮社昌譽と號す、智譽上人の法嗣にして、相模一色村淨源寺の開山なり、寛永十二年十月四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ライヨ　來譽　二二六一……〔淨土宗〕京都永養寺の開山なり、來譽は極阿と號し、大和の人、京都勝円寺岌昌に投じて剃髮し、法を道譽に嗣ぐ、京師京極に永養寺を開きてこれに住し、慶長六年二月五日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

ライアン　雷菴　ショーリュー性隆を見よ、

ライウ　雷雨　二五三九……〔淨土宗〕京都一心院の學僧なり、雷雨は觀蓮社稱譽眞相と號す、山城駒郷阿彌陀寺に住し、後、京都一心院の第五十四代となり、戒律を嚴持す、明治十二年四月七日寂す、著作天台戒疏講述三卷、十不二門講述一卷あり、

ライオン　雷音　〔二三五二〕〔黄檗宗〕肥前長崎興福寺第四代なり、雷音初の名は子巖、明の人なり、元祿五年西來し、寶永四年興福寺四代の住持となる、寂年詳ならす、（長崎年表）

ライシン　雷震　カイオン海音を見よ、

ライホー　雷峰　ミョーリン妙林を見よ、

ラクサイ　樂西　〔一八三一〕〔天台宗〕攝津妙法寺開山なり、樂西は出雲の人なり、弱冠を過ぎて自ら祝髮して天台宗に歸し、觀心を事とす、受戒の後遊方し、承安年中攝津和田縣に到り山中に菴居し、四民歸崇して菴を改めて寺となす、平清盛師の名を聞きて、之を聽し篤く供養す、某年寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

ラクシ　樂只　ジンコー甚孝を見よ、

ラクヨ　樂譽　ソーリン聰林を見よ、

ランザン　鸞山　二四五一……〔淨土宗〕淺草誓願寺二十六代なり、鸞山は白蓮社紫譽と云ふ、智恩院鸞宿に師事し、二宗の學を受け、安永九年八月靈山寺に住し、寛政元年三月誓願寺に轉す、初め書を櫻井雪關に學び、後明人の遺擧を法として別に一家をなす、寛政三年五月廿四日寂す、華頂山の支院に師が書きし、寒山拾得の圖ありと云ふ、（三緣山志、鑒定便覽）

ランシク　鸞宿　二四一〇……〔淨土宗〕山城知恩院の學僧なり、鸞宿號は靈譽伊勢山田の人なり、出家して淨土宗に歸し、增上寺靈玄に師事し、後知恩院に住す、寛延三年十月十五日寂す、壽缺く、著作有鬼論二卷、淨土傳燈總系譜二卷、八宗綱要鈔、選擇集決疑鈔講義、並に玄談八卷、選擇集講義並に玄談五卷、回瀾鈔一卷等あり、（三緣山志、續日本高僧傳）

ランケー　蘭溪　ドーリュー道隆を見よ、

ランケー　蘭溪　ニヤクシ若之を見よ、

ランザン　蘭山　ショーリュー正隆を見よ、

ランシツ　蘭室　コクイ國伊を見よ、

ランシユー　蘭洲　リョーホー良芳を見よ、

ランジヨ　蘭恕　ジューガ從賀を見よ、

ランハ　蘭坡　ケーイ景葩を見よ、

ランハ　蘭坡　シューイ宗葩を見よ、

ランリヨー　蘭陵　オツシユー越宗を見よ、

ランアン　懶安　モンミョー文明を見よ、

ランウン　懶雲　ゲンショー玄昌を見よ、

ランウン　懶雲　シューシュー周宗を見よ、

ランオー　懶翁　キサン耆山を見よ、

ランセン　懶禪　シュンユー舜融を見よ、

ランケー　藍溪　シューエー宗瑛を見よ、

ランセン　藍泉　ジョークワン淨觀を見よ、

ランデン　藍田　ソエー素瑛を見よ、

ランリユー　嬾龍（二一四七）〔曹洞宗〕遠江西來寺の禪僧なり、嬾龍字は三巖、近江國源氏の子なり、首め鳳山に遠江の可睡寺に從ひ、次に拮橋の室に參す拮橋圓覺經悟修の頓漸を舉して之に示す、從て契ふことあり、遠江國の西來寺に出世し移て廣嚴寺を領す、德川家康道化を欽ひ、莊田を捨て歸依甚だ厚し、名京師に聞ゆ、天正十五年宮に召して宗要を問ふ、奏對旨に稱ふ、特に紫衣及び佛照大光禪師の號を賜ふ、文祿四年五月廿七日寂す、壽七十九、（日本洞上聯燈錄）

りの部

リウ　理有（……）〔臨濟宗〕山城大智寺の開山なり、理有字は大有、奥州の人、金氏の子なり、幼にして自ら我か前身は良辯なりといふ、父母之を異とし僧となす、近江青蓮寺に投して業を受け、後鎌倉に入り壽福寺の慧日に師事す、但馬大明寺月菴に心印を稟むり、同國の圓通寺大明寺に歷住す、後山城の和束に百丈山大智寺を開きて第一代となる、寂年及び壽缺く、勅諡大觀禪師といふ、（本朝高僧傳）

リカク　理覺（……）〔淨土宗〕總州龍福寺開山なり、理覺は其鄕貫詳かならず唱名に師事して法を嗣き、總州猿島龍福寺を開き其一代となる、寂年壽缺く、門下の高弟に良笈あり、（淨土宗系譜）

リカク　理覺　シンレン心蓮を見よ、

リカク　理覺　ジンキョー尋慶を見よ、

リガンイン　理含院　ナンリン南麟を見よ、

リキョーニ　理慶尼（二二七一……）〔眞言宗〕甲斐大善寺の尼なり、理慶は武田氏の族勝沼信朝の女にして雨宮某に嫁す、信朝叛して信玄の爲めに殺され、雨宮累の及はんことを恐れて尼を離緣す、師乃ち柏尾大善寺に入りて慶紹阿闍梨に投じて薙髮し尼となる、慶長十六年八月寂す、壽缺く、尼生前武田氏興亡の記を作り、理慶記と名く、（名女傳）

リクワン　理寛（二四二七……）〔眞宗〕近江即得寺の住持なり、理寛は近江の人、東本願寺の擬講となる、明和四年八月十五日寂す、壽缺く、（高倉學寮講者列傳稿本）

リグワン　理願尼（……）歌僧なり、理願尼は其鄕貫詳かならず、和歌を善くするを以て其名を知らる、詠歌は載せて萬葉集にあり、寂年壽缺く、（萬葉集作者履歷）

リケン　理賢（一七七九 一八九二）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の檢挍なり、理賢は大和の人なり、元曆元年高野の檢挍を司とる、源賴朝師の道望を聞きて召す、師病と稱して往かす、弟子慧智をして代り往きて謝せしむ、慧智幕府に到り、愛染明王の像を得て歸へり寺に安す、尋きて賴朝莊田を寄附す、蓮華院は其の趣なり、建久元年十月十一日寂す、壽七十四、（本朝高僧傳）

リコー 理光（……）〔天台宗〕近江無動寺の僧なり、理光は比叡山無動寺に住し、阿闍梨位に任ず、素より西方を願ひて諸の善業を捨て、臨終の時身心亂れず、七七忌中香氣薫發し、其房に入るもの皆香を帶びて歸る、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

リシン 理眞 一九四九 〔淨土宗〕某寺の僧なり、理眞氏姓詳ならず、然空に面受して淨土の門に遊ぶ、正應二年五月二十八日寂す、壽缺く、（鎭流祖傳）

リシユー 理秀尼 二三八三／二四一四 〔天台宗〕山城眞如寺の尼なり、理秀中御門天皇の皇女、母は民部卿の典侍なり、享保十年十一月五日に生れ、嘉久宮と稱す、同十六年八月四日寺に入る、時に七歳なり、十八年九月十三日得度し、明和元年十一月二十日寂す、壽四十二、眞如寺に葬り、淨照明院宮と號す、（皇胤紹運錄）

リジユン 理準 二四五六／二五八一 〔眞宗〕武藏正德寺の僧なり、理準字は密乘、號は南園と云ひ、後に常護院と稱す、美濃國安八郡小野村眞宗大谷派專勝寺に生れ、後武藏荏原郡品川正德寺に住し、詩を以て聞ゆ、明治十四年十一月十日寂す、壽八十六、著作南園集一卷あり、（中山理賢氏返信）

リジユン 理順 リヨーコー良興を見よ、

リシヨー 理性 ケンカク賢覺を見よ、

リシヨーイン 理性院 ニチコー日廣を見よ、

リチユー 理中 リヨーカン良鑑を見よ、

リデン 理傳 ……／二三四〇 〔淨土宗〕大和念佛寺の開山なり、理傳は閑蓮社鎭譽と號し、大和高市郡戸毛村の人なり、珂山に師事して法を嗣ぎ、郡の市尾に念佛寺を開く、延寶八年閏八月二十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リネン 理然（……）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、理然字は如空、奈良の人、興福寺圓緣僧都の上足なり、法相因明に通し、圓照に滿分戒を受け、大小の戒を習ふ、又越前永平寺に道元禪師に謁して曹洞の宗旨に粗通し、京都に歸へり空願上人に眞後を受け、丹後に寺を建て大に令名を播く、（本朝高僧傳）

リハク 理柏（……）〔曹洞宗〕越後長福寺の開山なり、理柏字は高巖、寶圓寺桂林祖香に發悟し、總持寺に住し、寶圓寺に還る、越後の信官長福寺を創し、師を開山とす、寂年並に壽缺く、法嗣桂質嶠芳の一人あり、（日本洞上聯燈錄）

リホン 理本 リヨーエー良榮を見よ、

リミヨー 理明 コーネン興然を見よ、

リヤク 理益 ……／二三九三 〔淨土宗〕三河松應寺の第六代なり、理益は聰蓮社存譽と號す、其郷貫詳かならす、觀智國師に師事して法を嗣ぎ、三河松應寺に住し第六代の主となる、寛永十年六月二十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リカク 利覺 ……／二二七一 〔淨土宗〕江戸一行院の開山なり、利覺は源蓮社本譽一故と號す 俗姓は豐島氏、武藏の人なり、雲譽に師事して法を嗣ぎ、江戸赤坂淨土寺の中興となる、後鮫橋に一行院を開きてこれに移り、慶長十六年三月 日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

リキヨー 利慶 一七五七 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、

利慶字は宜陽房、播磨の人なり、少より圓城寺に住し顯密に兼ね通す、平生西方淨土を願ひ、命終の際衆僧を集めて、相共に佛號を唱へ安然として寂す、承德元年八月十二日なり、壽七十餘（本朝高僧傳）

リケン　利賢（二一九四）〔曹洞宗〕伯耆定光寺の禪僧なり、利賢字は竹堂、文室慧才に參究すること七年、天文三年四月十三日入室して衣法を受け、伯耆定光寺に主となる、寂年及び壽詳ならず、法嗣龍岳道門一人あり、（日本洞上聯燈錄）

リシユー　利舟　リヨーハク良白を見よ、

リチヨー　利朝（一六六四）〔眞言宗〕大和壺坂小嶋寺の僧都なり、利朝は奈良の學匠なり、眞興の法を受け、小嶋寺に住す、付法の弟子春秀、太念の二人あり、（續傳燈廣錄）

リテキ　利的　二二九〇……〔淨土宗〕江戸心行寺の開山なり、利的は頓蓮社圓譽と號す、俗姓は小島氏伊勢津の人なり、幡隨意に師事して其法を嗣ぎ、江戸下谷池の端に心行寺を剏す、寛永七年二月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リテン　利天（二三〇一）〔淨土宗〕安房大圓寺の開山なり、利天は興蓮社光譽と號し、安房長田村の人なり、幼にして大巖院雄譽の室に入りて剃髮し、法を靈巖に嗣ぐ、後州の安房郡に大圓寺を剏して住し、某年寂す、其年時並に壽缺く、（淨土總系譜）

リテン　利天　二三二一―二三九五〔淨土宗〕江戸增上寺第四十代なり、利天は航蓮社衍譽慈容順故と號す、常陸下舘の人、父は藏持次郎右衛門、母は岡見氏の出なり、幼にして專稱寺に投じ、善譽の高弟寂譽實道に就て剃髮受業し、實道の結城弘經寺より光明寺に遷るに及び、師亦隨從して內外の典籍を學ぶ、後增上寺に持寮し三席の階次、三講の法務を經　享保五年五月二十二日幕府の命を受けて東漸寺に主となり、次に常福寺に移り、光明寺に出世し紫衣を賜はる、同十七年八月二十三日幕府の命あり、二十八日三緣山に貫主となり、大僧正に任ず、師已に貫主となりてより專ら宗門の格規を訂し、荒廢の寺院を興す、享保二十年二月八日辭して隆崇院に退き、同九日寂す、壽七十五、（三緣山志、淨土總系譜）

リドー　利道　二二八六……〔淨土宗〕日向專念寺の開山なり、利道は然蓮社廓譽と號す、俗姓は中田氏日向延岡の人なり、隨流に師事して淨土教を學び、鄕里に皈りて專念寺を開く、寛永三年五月十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リドー　利導　二二八六〔淨土宗〕江戸專心寺の開山なり、利導は法蓮社傳譽一夢と號す、法を靈巖に嗣ぎ、江戸白金に專心寺を剏して開山となる、寛永三年九月十五日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

リビヤク　利白　リヨーホン良本を見よ、

リモー　利蒙（……）〔曹洞宗〕肥州法泉寺の禪僧なり、利蒙字は古泉、俗姓生國詳かならず、出家して後ち肥州法泉寺了運禪師に謁して教を受け、學成りて後其後ちを嗣ぐ、寂年及壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リモン　利聞（二〇五四）〔臨濟宗〕京都安國寺の禪僧なり、利聞字は鐘谷、出家して東福寺の固山鞏禪師に師事して其法を嗣ぎ、攝津の善住寺を剏し、後、京都安國普門の諸寺

に歴住して道譽高し、寂年缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

〔考〕利開は應永頃の人か、

リゼン　履善　二四一四 一四七九　〔眞宗〕石見淨泉寺の住持なり、履善字は信修、號は鵬溟といひ、又兼信齋と稱す、實成の弟にして道如上人十世の孫、寶曆四年十月十五日伊賀明覺寺に生れて十歲祝髮す、明和二年仰誓命を奉して淨泉寺に住するに方り、師之に從ひて來り、檀徒の請により嗣となる、同四年十四歲にして出て、深諦院に學ひ、七年夏論語釋義を作り、九年大學集解及ひ緒言を作りて之を講す、安永六年二十四歲にして筱揚篇を著して安藝慧仲の邪義を駁し、冬易行品解を作りて之を講す、天明二年實成退老す、師乃ち代り立つ、寬政四年備後靈昌の難あり、師辨斥を作りて之を答ふ、同十年四十五歲の夏師多病の故を以て院務を嗣法善成に讓りて退老す、法主號を芳淑房と賜ふ、寬政の末宗門內に邪義行はる、師瓶正論、彈歸佛篇等を撰して邪義黨尊顯を駁す、文化元年法主の命により上京して親近護衞す、居ること四年、其間得度誦文考、唱導梗概、釋無想離念難等の撰あり、皆法主の命により撰する所なり、賞して金帛を賜ふ、法主親寫の竹書を賜ふ師詩を獻して之を謝す、文化四年十一月病を以て免れて歸國し、六年夏また命を奉して東上し、大學林に禮讃を講し、九年無成館成りて之に移住す、十年六十歲の四月下旬獻壽の筵を開き、十三年命により東上し、學林に小經を講す、文政二年六月二十日本院に末燈鈔を講し、二十四日病に罹り七月八日朝無成館に寂す、時に壽六十六なり、九月法主法諱を親書して賜ひ、翌年八月諡を下して芳淑院と稱す、著作正信偈義、二硨深信義、正信末燈序記及科說、兩一念文、略鈔釋要附錄、正像末知讃略說、銘文義概　文意義記、消息集義概、日溪學則註、註六合釋、六合釋義論、百法論注疏、教行綱宗考、大經五惡段錄　回向義　證文義概、六三分別、註六合頌、三類境義、得座授受文考及和解　戒殺鈔說敬老篇、淨泉寺由緒記考、一念義論、筱揚篇、變怪辨、己酉法細、宗要切磋、彈歸佛編、讀爐邊放言、教導義、君川問答、宗規九辯、攘災議、宗要義箋、君川法議、糾繆錄、摧破略釋、教導記、上書釋難、駁元正錄、鵬溟八論、法語釋難、難螺溪評、大利無上功德章、鵬溟雜集、高城家儀、護宗文編、甲申集、數法騎托南、演暢偈語、無名錄、京兆章蘭、讀導要文、六箇條細、心要輔翼、肉妻辯惑　攘訴錄、大學義、小倉百詩、助字則、花士詩纂、之渡正字、讀修刪阿彌陀經、及非刪阿彌陀經、五十連音說、滑稽錄各一卷、眞宗龜鑑發膊、教名坊錄發膊、一宗行儀鈔發膊、合卷、機教辯、歸命本末合卷各一卷、三一問答箋、二門偈名義、行信兩願成就文講義、易行品解、論註義欄、和讃字音考、往生文類論義、末燈鈔義概、安心決定鈔釋、教導上書、辯斥漫答、南瓶頌珠、斥攘追書論　獅原解嘲　實道糾問、行本錄　昨夢廬文集、續法王消息集、遊觀記、法事讃總懺悔道勿、鵬溟圖彙、孟子文談、論語補義、大學辯、大谷名物斧藻、伊呂波鏡各二卷、小經宗要、略鈔釋要、淨土和讃講義、往生禮讃補注、陸隲文苍演、安心甄正篇　光德護宗編　中興十六集、干城論、鵬溟筆乘、鵬溟文則　道賀各三卷　淨土論逆　四十八願釋義　高僧和讃講義、成實論考、鵬溟二筆、明教秘說各四卷、眞宗義五卷、法華典據、鵬溟文集、三河傳各十卷、廣書箋、鵬溟學記、各十二卷、眞

俗紀談、廣懺文導笏、鵬溟十遊、一世紀聞譯、古典異話、鵬溟讃銘、孟子䕫庫、古俗流語、百人一首講笏、唐詩補註、中古語例、重累助語譯彙各若干卷あり、（學苑談叢、淸流紀談）

リチユー　履中　ゲンレー元禮を見よ、

リシヨー　離障　ニチカクニ日覺尼を見よ、

リチヤク　離着　ニチジヨー日淨を見よ、

リヘキ　離碧　二三〇六　（淨土宗）京都法雲寺の中興なり、離碧は然蓮社碧誉拱阿と號す、駿河長沼の人、其俗姓詳かならず、出家して諸門に遊學し、諸師に宗決を咨ひ、靈巖に師事して玄奥を研究し、遂に其法を嗣ぐ、初め駿河寶相寺に住し、州に欣福寺を開く、次に遠江橫須賀還要寺に遷り、後京都一心院に主となる、京都岡崎法雲寺に移り、同寺の廢頽を修營して中興の祖となる、正保三年八月二十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リユ　李由　リヨーグー亮隅を見よ、

リキシヨー　力精　二四七七／二五三九　（眞宗）近江聞信寺の住持なり、力精勅學は常陸那珂郡湊光泉寺に生る、少にして文學に志し、勤勉の名あり、時に水戸藩主烈公藩下の僧侶を淘汰せんとし、師の力學を聞きて之を賞す、烈公遂に大に淘汰して諸寺を破滅し、學識ある僧侶の如きは强ゐて俗に皈せしむるの擧あり、師其累を受けんことを恐れ、去りて京都に至る、蓋し天保十年の前後なり、時に龍華和尚學林に名高し、栖城針水の諸宿師を紹介して龍華の門に入らしむ、幾もなくして龍華寂す乃ち栖城に從ひ若狹に留學すること數年、已にして叢林に入り、遂に近江梁瀨村聞信寺に住す、後京都淨敎寺に移り、終に攝津武庫郡西新田源光寺に住持す、某年得業に及第し、累進して司敎に任す、其間屢々叢林に出づ、慶應年間排佛の論頻に起る、師常に護法を以て任とす、明治十二年二月法主殊に命まて勸學職に補す、時に師病あり、其翌日寂す、壽六十三、師の弟に大順といふあり、後一昭と改む、學兄師に及はすと雖も、性頗る倜たり、武藏忍成正寺に住す、兄に後れて寂す、（學苑談叢）

リクニヨ　六如　ジシユー慈周を見よ、

リツジユ　律受　シンジヨー信乘を見よ、

リツジヨーボー　律靜房　ニチイン日胤を見よ、

リツジユ　棘樹　コーエー光映を見よ、

リンエ　林懷　（一六七六）（法相宗）大和興福寺の學僧なり、林懷は伊勢の人なり、幼なるとき友と遊戲し、木葉の凋落するを見て忽ち無常を觀し、父母に告けて出家を乞ひ、奈良興福寺に往き、喜多院眞空に投して落髮具受し、唯識を習究す、又松室の仲算に就て益玄旨に達す、長德四年維摩會の講師となり、長和五年敕により興福寺に住す、晩年喜多院に退き某年寂す、壽缺く、門下に經救、明懷、敎懷の三人あり皆一時に傑出す、

リンエー　林英　シユーホ宗甫を見よ、

リンオー　林應　二三九〇　（淨土宗）江戸長建寺の開山なり、林應は通蓮社周譽と號し、其鄉貫詳かならず、普光觀智國師に師事して法を嗣ぎ、江戸牛込長建寺開山となる、延寶八年八月五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンオク　林屋　二三〇九　（淨土宗）三河緣心寺の開山な

り、林岸は源蓮社英譽と號し、總州の人なり、觀智國師に師事して宗乘を究め、三河西尾緣心寺を開く、慶安二年正月三十日寂す、壽一百餘、（淨土總系譜）

リンカク　林覺　……二二九三　〔淨土宗〕岩代光源寺の開山なり、林覺は其鄕貫詳かならず、靈巖に師事して法を嗣ぎ、岩代に光源寺を建て自ら開山となる、寛永十年四月二十九日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

リンカク　林覺（一七六〇）〔眞言宗〕山城醍醐山遍通院の律師なり、林覺は京都の人、肥後守藤原重房の子、栗田關白の裔なり、定賢座主の灌頂を受け、心印を蒙りて太元別當となり律師に任し、遍智院に住す、（續傳燈廣錄）

〔考〕林覺は康和頃の人なり

リンゴー　林豪　一六九三一七九九　〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、林豪は青蓮房と號す、俗姓は平氏、薩摩守從五位下生成の子、大學頭大江擧周の養子となる、幼にして比叡山に登り、座主明快に就て剃髮受業し、良田良信の二師に眞言教を學ぶ、承暦四年權律師に任じ、寛治三年權少僧都となる、康和元年七月一日寂す、壽六十七、（本朝世紀）

リンサク　林作　……二二八九　〔淨土宗〕下總仲臺院の中興なり、林作は久蓮社正譽と號す、俗姓は高木氏下總小金の人なり、觀智國師の室に投じて剃髮受業し、國師に法を嗣きて後、州の小松川仲臺院に住し其廢頽を興し、中興と稱せらる、又松樹院を剏して開山となり、後燒香庵を構へて退隱し、寛永六年三月七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンザン　林殘　二三二三　〔淨土宗〕江戸大秀寺の開山なり、林殘は三蓮社寶譽還愚と號す、山城の人、俗姓は飯田氏なり、幼にして筑後善導寺第二十七代法林德阿に就て剃髮受戒し、知童に師事して法を受く、武藏新鳥越に大秀寺を創して開山となり、寛文三年三月十九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンジヨー　林常　クワイドー快道を見よ、

リンソー　林叟　トクケー德瓊を見よ、

リンチヨー　林長　……二二九三　〔淨土宗〕信濃法藏寺の開山なり、林長は存蓮社廣譽と號し、下總の人なり、感譽に就て剃髮受業し信濃川中島戸部に法藏寺を剏す、寛永十年十一月四日寂す、壽缺く、嗣法一人あり、隨應と云ふ、（淨土總系譜）

リンテー　林貞　……二二七四　〔淨土宗〕江戸壽松院の開山なり、林貞は光蓮社善譽と號し、相模三浦の人なり、道譽に師事して法を稟け、江戸淺草に壽松院を開く、慶長十九年六月五日寂す、世壽缺く、（淨土總系譜）

リンテツ　林哲　……二二九八　〔淨土宗〕江戸長傳寺の開山なり、林哲は行蓮社心譽と號す、其鄕貫詳かならず、朗月に投じて剃髮し、隨流に師事して法を嗣ぐ、江戸麻布に長傳寺を剏して居り、寛永十五年八月二十三日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンポー　林芳（二〇三九）〔臨濟宗〕鎌倉建長寺の禪僧なり、林芳字は草堂俗姓不詳、龍山見の法を嗣ぐ、應安七年足利基氏壽福寺に請す、再三にして漸く出づ、康暦元年辭し圓覺寺中龍興菴に退休す、後建長寺に昇り、龍淵菴に寂す、年時並に壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

リンヨ　林譽　エンテキ圓的を見よ、

リンガ　琳雅　一八一〇……〔眞言宗〕紀伊某寺の僧なり、琳賀は紀伊那賀郡の人、初め法相を學び、因明に精通す、後に業を捨て明算に密教を稟く、修學の餘營構に勤め、久安六年八月十四日寂す、壽缺く、（元亨釋書）

リンカイ　琳海（一一九三五）〔戒律宗〕京都東北院の律僧なり、琳海字は信覺、攝津の人なり、郡の勝尾寺に住せしが、後戒壇院に於て圓照に師事して律學を研究す、文永四年八幡宮司圓照を大乘院に招く、圓照辭して師を以て代りてこれに住せしむ、建治元年棄てゝ攝津海人崎（今の尼崎）に往き、大覺寺を開き、又京都東北院に住して、盛んに律幢を樹つ、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

リンケン　琳賢　一七三四　一八一〇〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、琳賢俗姓は平氏、紀伊那賀郡の人、東大寺に止りて順海に華嚴宗を學び、高野山に登りて慶俊に眞言教を受け、良禪に從ひて兩部の灌頂を稟け、專ら密乘學し、事行兩ながら全し、時人呼びて小聖と曰ふ、師堂塔を建て經典を繕寫す、久安六年八月中旬俄に病に罹りて寂す、壽七十七、師畫を能くし、東大寺誌を編す、（本朝高僧傳）

リンコー　琳光　ニチセー日整を見よ、

リンコーイン　琳光院　ニチセー日整を見よ、

リンサン　琳珊　リユーテン龍天を見よ、

リンシキ　琳識　ユーキ融喜を見よ、

リンシン　琳眞　キヨーシン鏡眞を見よ、

リンタツ　琳達　二二九四　二三七六〔曹洞宗〕武藏勝光院開山なり、琳達字は天永、伊豆の人、十一歲出家し、隨翁舜悅に參して法を得、分座說法す　初め永平寺に出世し、武藏牧田に退去して勝國寺を剏す、天正十年世田ヶ谷主吉良賴康勝光院を剏し、師請せられて其開山となる、同十七年心源寺に遷り、晩年觀栖寺に退き、元和二年八月十一日寂す、壽八十二、（日本洞上聯燈錄）

リンシヨー　輪匠　ニチケー日啓を見よ、

リンチ　輪智　二二五四……〔淨土宗〕常陸常福寺第十代なり、輪智は空蓮社釋譽と號す、其俗姓生國詳かならず、日譽了感に師事して淨土教を學び、遂に其席を繼ぎて常福寺に主となる、文祿三年十一月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンチヨー　輪超　二三四八……〔淨土宗〕上總壽光院の僧なり、輪超號は念蓮社一譽と云ふ、俗姓高橋氏、上總葛西一色村の人なり、出家して增上寺貴屋の法を嗣く、葛西小松川壽光院に住す、元祿元年四月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リンチヨー　輪超　二三三八……〔淨土宗〕三河大樹寺の僧なり、輪超號は緣蓮社三譽と云ひ、別に唯林といふ、伊勢山田の人なり、出家して無絃に事へ增上寺に投し、內外の學を究め、且つ詩賦を善くす、江戶崎大念寺に住し、後三河ノ大樹寺に轉住す　延寶六年十月廿七日寂す、著作淨土論注字選六卷、同助見六卷、布薩返破論四卷等あり、（鎭流祖傳、淨土總系譜）

リンヨ　輪譽　シユーカク宗廓を見よ、

リンヱン　倫圓　一七七六　一八六四〔天台宗〕近江園城寺の別當な

り、倫円は其郷貫師承詳かならず、正治二年三月別當に任じ、同十月拜堂、元久元年二月十一日寂す、壽八十七、（三井續燈記）

リンゲー　倫藝（……）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、倫藝は隆濟に從ひて業を受け、學譽高し、一時遠嶋に流され、還俗して諸所を來往す、或は曰ふ名武峰に住し、改めて良快と名くと、寂年缺く、（三井續燈記）

リンヨ　倫譽　ネンカイ念海を見よ、

リンエキ　麟易　二一七四〔曹洞宗〕越前慈眼寺の禪僧なり、麟易字は桃溪、桃源寺興國玄晨に參し入室了悟其席を補し、晩年越前慈眼寺に遷り、後辭して東郷永昌寺に退居す、永正十一年八月二十六日寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リンオー　麟翁　エーショー永祥を見よ、

リンコー　麟香　二二四三〔曹洞宗〕武藏金澤寺の開山なり、麟香字は春叟、日峯伊鯨の法を得、其席を嗣ぎて武藏龍穩寺に住す、泉井の檜越金澤寺を創し、師を第一代となる、天正十一年五月二十九日寂す、壽缺く、法嗣大鐘良賀あり、（日本洞上聯燈錄）

リンザン　麟山　ニチヨー日陽を見よ、

リンソー　麟曹　二二二七／二二八三〔曹洞宗〕武藏青松寺第九代なり、麟曹字は一峯、近江の人、俗姓は藤原氏なり、第六代久室に依り沙彌となり、十四歳得度す、慶長四年總持寺に出世し、久室の遷化に至つて遺命を受け席を繼ぎ、叢林未だ備らざりしを悉く新にす、將軍秀忠師に命じて城中に於て宗要を提綱せしむ、是に於て名聲益著れ、道を問ひ、寺を創して迎ふる者甚だ多し、元和六年春道を召して席を讓り、巖槻の雲居山大龍寺に退去す、寺は伯州の大守青山忠俊の建つる所にして、師を以て鼻祖となす、九年十一月八日浴を索め衣を更め偈を書して寂す、壽五十七なり、（日本洞上聯燈錄）

リンタツ　麟達　二二一五／二二七六〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、麟達字は三了、俗姓は平氏、前田の族、薩摩の人なり、久しく南嶺慶春に從ひ印可を受け、元和元年大守島津氏の請に依り玉龍山に開法す、仝二年二月八日寂す、壽六十二、法嗣人川長益あり、（日本洞上聯燈錄）

リンヒ　臨羆　二二二五〔曹洞宗〕武藏乾晨寺の禪僧なり、臨羆字は日山、武藏多摩郡の人なり、傑山道逸に從ひて其法を嗣ぎ、永平寺に出世し、心源寺に移つる、後武藏に乾晨寺を剏し第一世となる、永祿八年七月八日寂す、壽缺く、法嗣玉田存麟あり、（日本洞上聯燈錄）

リンヨ　鄰譽　テードン貞鈍を見よ、

リユーア　隆阿　二一四一……〔淨土宗〕近江淨巖院第二代なり、隆河號は堯譽、近江野洲郡小濱の人、降堯に投して出家受業し、遂に其席を繼ぎて淨巖院二代となる、後京都知恩院第十九代となり、文明十三年九月七日寂す、壽缺く、嗣法の弟子一人あり、宗眞と云ふ、（淨土總系譜）

リユーエ　隆慧　シヨーシン證眞を見よ、

リユーエー　隆榮　二四六九／二五二七〔新義眞言宗〕山城智積院第三十九代なり、隆榮字は龍謙、俗姓は石井氏、安房長狹郡打墨村の人なり、文化六年を以て生れ、甫めて十三歳、本瑞比丘の室に投じて剃髪し、禪宅能化の附弟となりて智積院に登

り、後學業成りて第一座に擢でらる、嘉永五年更勅を奉じて洛北講智院に住す、安政三年四月幕命により江戸眞福寺に移り、文久二年再び幕命を蒙り智積院能化に晉む、翌年二月僧正に任し、元治元年正僧正に昇る、慶應三年七月十七日寂す、壽五十九、師性尚甚も性相學に通ず、著作大小乘戒袖珍一卷あり、（新義眞言宗史料）

リユーエン　隆圓（一八三〇—一八八五）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、　隆圓俗姓は藤原氏、亞相隆季の子なり、道顯に師事して天台を學び、公胤を拜して密灌を受く、建久中中朝請に應し宮中に於て宗義を說き、以來凡そ二十箇度に及ぶ、建保四年六月本寺の題者となり、嘉祿元年十二月五日寂す、壽五十六、（三井續燈記）

リユーオー　隆雄（二四四六……）〔新義眞言宗〕江戸眞福寺の學僧なり、　隆雄字は覺山、下總の人なり、智積院に學び眞福寺に住す、後伏木大政院に退休し、天明六年十月廿六日寂す、壽缺く、著作傳流口訣一卷あり、（新義眞言宗史料）

リユーガ　隆賀（一八〇九）〔……〕奈良東小田原の僧なり、　隆賀字は嚴親、醍醐山定海の密灌を受け、小田原に住し法匠となる、寂年缺く、（續傳燈廣錄）

リユーガ　隆雅（二〇一七……）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、　隆雅は俗姓及び師承を詳かにせず曆應　年東寺の長者となり　延文二年八月廿八日寂す、　壽缺く、（東寺長者補任）

リユーカイ　隆海（一四七五—一五四六）〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり　隆海俗姓は清海氏、攝津の人なり、州の講師藥圓に見え作はれて三論の碩德願曉に投し、承和二年戒壇に登り滿分戒を受く、中繼法師に法相を學び、眞如阿闍梨に密灌を受け、貞觀六年大極殿の最勝講に第六座の問者となる、十年勅により大和の講師となり、元慶の末權律師に任し、元興寺に住す、仁和二年七月十二日寂す、壽七十二、著作二諦義、方言義各一卷、四諦義、二智義、二空比量義、因明九句義各三卷あり、（本朝高僧傳）

リユーカイ　隆海（一七八一……）〔新義眞言宗〕紀伊傳法院の第七代座主なり、　隆海字は大夫法印、大宮太夫家隆の子、便ち後三條天皇の裔なり、久安一年四月一日圓明寺に登りて兼海に傳法灌頂を受く、時に二十七歲、毘盧心印を繼きて傳法院第七代となる、付法弟子隆位、印海、靜雅、俊照、靜聖、成覺、隆盛、覺尋の八人あり、（傳燈廣錄、結網集）

リユーカク　隆覺（……）〔眞言宗〕山城仁和寺の僧正なり、　隆覺は轉經院僧正といふ、寛意の法を嗣き當時の法匠と稱せらる、後又和泉法橋覺海の傳を受く、示寂の年時を缺く、（傳燈廣錄）

リユーカク　隆覺（一八一六）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、　隆覺は源顯房の子なり、幼より南都大乘院の隆禪大僧都に隨ひ、落髮受戒し長して家學を善くす、嘉承元年維摩會の講主となり、保延四年興福寺を董す、僧階頻りに進みて僧正に任し、住持久しくして密嚴院に退居す、保元元年勅により最勝講會の證義者となり　尋きて牛車の宣を賜ふ、年七十餘にして所住に寂す、（本朝高僧傳）

リユーキ　隆基（二四八九—二五五七）〔新義眞言宗〕山城智積院第四十

四代なり、隆基字は芳仁、生玉隱士と號す、岩城菊多郡後田村の人なり、幼にして邑の宥德院胎中上人に隨つて剃髮し、後武藏へ師河原佐伯隆珊和上に師事して其姓を冐す、智積院に學び、武藏大井村東福寺に住し、後平間寺に晋み、最も財德に富む、翌明治二十四年選まれて智積院能化となり、職にあること六年、辭して平間寺生玉菴に退隱し、三十年十月三日寂す、壽六十九、（新義眞言宗史料）

リユーキ　隆琦　二二五四／二三三五　黄檗宗の開祖なり、隆琦字は隱元　明の福清の人、萬曆二十年十一月四日を以て生る、俗姓林氏八閩の望族たり、世々詩書を以て名あり、父の名は德龍、母は龔氏、子三人あり、師は其季子なり、甫めて六歲父楚に客となりて皈らず、九歲學に就きたるも家道淡素を以て廢す、師靜夜に松陰に臥して天文星月を觀て感ずるあり、因て佛教を學ぶの念を生ず、二十一歲の時父を尋ねて豫章を經て金陵に到り、尋で南海の普陀山に登り、觀音を禮して佛境の殊勝を見、遂に發心し、潮音洞主に投じて茶頭執事となり、泰昌九年二十九歲の時、黄檗山に到り鑑源和尙に師事す、之より諸山を歷訊請益して玄機を究む、金粟に往て密雲和尙に參し、再び黄檗山に回る、時に費隱禪師其席を董す、師その室に入り精修すること年あり、崇禎七年四十三歲にして印可を承けて臨濟の正傳を得たり、後三年を經て崇禎十年黄檗山の請に應して其山に住す、一住七年一山の宗風大に重興せらるゝ者多し、是より諸處に應化して正法の興隆を以て已か任となす、金粟に費隱禪師を省勤して、崇福寺福嚴寺を主り、又龍泉寺の請に應す、その間法化を慕ふもの虛日なしと云ふ、順治三年再び黄檗山に住し法門を宣揚する九年、門學甚だ盛んなり、順治六年五月に檀謙日本長崎福濟寺の請に應して東渡し、同八年門下也嬾圭り崇福寺の請に應し、東渡の途中海上風浪の難に遭うて溺死し、その志を果さず、師偈を作りて悼む、其後師の日本に應する一段の因緣此に基く、九年日本興福寺住持逸然僧古石を遣して書帛を齎し、東渡開化を請ふこと再三、未だ決せず、同十年十一月第四の請書に接してその誠懇に感し、乃ち上堂して之れを許す、東渡衆に辭するの法語に曰く、老僧非事無能、濫主黄檗二十有七載、有負檀信者多、玆乃即日啓行、聊叙言別、以慰衆念、所以三請而來、一辭便去、遵上古之風規、爲今時之法則、未有長行而不行、行既行也、且道途中得力一句麽、生道撥盡洪波千萬頃、拈花正脈向東開と、順治十一年三月黄檗山の席を慧門に讓り、五月十日大眉獨湛南源獨吼等の諸

隱元禪師

弟子を卒ゐて出發し、海上事なく長崎に到着す、時に我國承應三年七月五日なり、寺主逸然檀越と共に請うて興福寺に進む、法語五則あり、載せて本錄に收む、兩鎭主も來り臨む、明年崇福寺に入る、曹洞の鐵心、獨本、臨濟の獨照相尋で門下に馳せて向上一著の玄旨を叩き、其他鐵牛、潮音、鐵眼、了翁の諸僧來りて參謁す、師の道譽玆に於て大に四方に宣傳せらる、尋で明年妙心寺賜紫龍溪の請に應して、九月六日攝津の普門寺に進む、京都所司代板倉周防守造り謁す、謙恭敬重にして相見の晩きを恨む、次て師を請ふて祝國開堂す、碩德高士風を聞いて至り謁する者常に門前市を爲せり、かくして普門寺に在ること四年、會々支那黃檗山衆書を寄せて西皈を促す、龍溪再三再四懇に留止するを以て之を許す、後徑山の費隱和尚若一禪人を遣はして書を齎す、長崎の道俗その言の切なるを以て秘し、師の留錫を決するに及びて始めて之を出したりと云ふ、萬治元年東上し江戶に到りて麟祥院に寓す、士民參謁する者容るゝに地なし、十一月朔日將軍に見え、衣金を賜はる、當時老中酒井雅樂頭、稻葉正則等請うて法要を問ふ、尋で深川海福寺を過ぐ、寺主獨本師を仰きて開山となす、皈途諸方に應化して普門寺に皈る、萬治三年將軍家綱の上旨を承けて、山城大和田に地を選び、越えて明年大和田を開き、黃檗山萬福寺と云ふ、寛文三年祝國開堂す、內外の學侶袂を連ねて集り、法門の盛事此に備はる、同二十五日後水尾院法皇龍溪に委して禪要を召す、師乃ち書を奉じて奏答す、上大に悅び之より屢禪要を下問せらる。師山に住する四年松隱堂に退き、高足木菴を舉げてその席を補す、木菴その遺志を繼ぎ、檗門の洪基を確立せり、師退休の暇諸山の請に應し敢て老隱を以て居らず、木菴を輔けて殿堂伽藍の經營に餘念なし、延寶元年二月微疾あり、三十日上皇使を遣して慰問し給ふ、師偈を述へて進謝す、又病餘遺訓を作りて弟子を誡む、四月二日病革る、上皇殊に大光普照國師の號を賜ふ、その翌三日早刻吾が行期逼れりと、午刻に至り起坐偈を述へて曰く、西來楖栗起ニ雄風一、幻ニ出檗山一不レ宰レ功、今日身心俱放下、頓超ニ法界ニ一眞空と書し畢り泊然として寂す、實に延寶元年四月三日なり、山を舉けて慟哭せさるはなし、身を留むる三日、龕を擁する三年、延寶三年大祥の期に當りて入塔す、世壽八十二、法臘五十四、法門を主張する三十年、東渡開化より二十年、法皇追思して止まず、敕諡佛慈廣鑑禪師、徑山首出禪師、覺性圓明禪師を賜ふ、著作黃檗語錄二卷、龍泉語錄一卷、黃檗山誌八卷、弘戒法儀二卷、（以上支那撰述）、扶桑會錄二卷、普照國師廣錄三十卷、黃檗和上扶桑語錄十八卷、示衆語錄二十卷、黃檗和尙太和集二卷、同續集二卷、崇福寺錄、佛祖圖贊、佛舍利記、隱元法語、普門艸錄各一卷、松隱集一卷、同二集、同三集、同續集各二卷、雲濤集一卷、同二集、同三集、各二卷、擬寒山詩一卷、黃檗清規一卷等あり、（國師年譜、本朝高僧傳）

リユーキヨー　隆慶（一八八七）〔淨土宗〕山城長樂寺の學僧なり、隆慶字は敬願、初め智慶と共に天台宗に在り、後亦共に長樂寺隆寬を訪うて淨土門に歸し、智慶に服し其敎を受くることゝなる、寂年缺く、門下に長空、能念等あり、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

リユーキヨー　**隆慶**　二三〇七 二三七七　〔新義眞言宗〕大和長谷寺第十七代なり、隆慶字は專順、俗姓は田原口氏、慶安二年四月二十四日大和添下郡に生る、九歳寶光院實源に投して童子となり、十三歲祝髮受戒し、十四歲興福寺に往き、長補法印に師事して法相を修學し、且儒士嶋田立德に詩書易春秋等を習ひ、十六歲山に歸へり、四度の別行を修す、十七歲更に護摩を行すること百日、三時以て灌頂の方便とす、寛文九年春實源に從ひて戒場に登り、具支灌頂を受け、後祕密の經軌を授受す、二十二歲興福寺に游ひて唯識を聽き、二十三歲知足院淸慶に從ひて因明、唯識を學び、又招提寺朝意に就きて祕密藏を受く、延寶元年夏隆光寺諭賢に從ひて豐山に登り、賴意僧正に謁し冬初めて論席に列なる、天和元年仁和寺に入り、亮汰に師事すること多年、高祖の論章及ひ理趣經の奧義を傳へられ、貞享五年醍醐寺に到り有雅大僧正に見え、兩部の大法、經疏、灌頂部及ひ諸尊の契印を授けられ、殊に憲深一流を究む、元祿四年十月卓玄の命により西藏院に住す、同九年三月尾張中納言綱誠の嚴請に因り、同國東岳山長久寺に遷る、同十六年四月幕命を蒙り、江戶彌勒寺に移り、寶永四年四月大護院に昇り、其廢頹を修理す、同五年三月命を蒙むりて豐山の席に補せられ 四月進院す、敕して權僧正に任せらる、正德二年七月幕府の執奏により僧正となる、享保二年將軍吉宗の命によりて筑波山護持院の住職となり、猶護國寺を兼ぬ、同四年二月院務を謝し、護國寺の別院に居を移す、仝年八月六日滅を唱ふ、壽七十一、臘五十九、遺骸を同寺別業に葬り、五輪の石塔を建つ、著作豐山傳通記四卷、理趣經授決三卷あり、（豐山傳通記追加、新義眞言宗史）

リユーキヨー　**隆敎**　ドージユン道順を見よ、

リユーギヨー　**隆堯**　二〇三〇 二一〇九　〔淨土宗〕近江淨嚴院の學僧なり。隆堯は近江栗太郡の人、應安三年正月二十五日に生る、九歲にして比叡山に登り、内外顯密を修むれども未だ出離の要道を得ざるを憂ひ、三十六歲にして山を下り、栗太の金勝谷に幽棲し、向阿の秘書を閱して感するところあり、これより定玄僧正に師事して淨土敎を學び、其玄旨に達し、近江蒲生郡安土村に金勝山淨嚴院を剏して幽棲し、寶德元年十二月十二日阿彌陀寺に寂す、壽八十、嗣法の弟子一人。堯譽隆阿と云ふ、著作淨土念佛安心大要鈔二卷、念佛奇特集二卷あり、（淨土總系譜、緇白往生傳、鎭流祖傳）

リユーキヨー　**隆曉**　一七九五 一八六六　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、隆曉は鄕貫詳かならず、寬曉に師事して密敎を學び、正治元年大僧都に任し、東寺の長者となる、同二年職を辭し建永元年二月一日寂す、壽七十二、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

リユークワイ　**隆快**　（……）　〔眞言宗〕山城安祥寺の阿闍梨なり、隆快は成雄の法流を嗣ぎ安祥寺に住す、諸方の化主慕ひ來りて燈脈を受く、他に詳傳なし、付法仟遍光意の二人あり、（後傳燈廣錄）

リユークワン　**隆寬**　（一七八七）　〔眞言宗〕山城仁和寺の僧都なり、隆寬は大治二年二月十八日三寶院の道場にて傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

リユークワン　**隆寬**　二〇三七 二〇八九　〔眞言宗〕山城醍醐山水本第

十一代なり、隆寬は釋迦僧正といふ、松殿中將忠隆の子、顯保の猶子なり、隆源の室に入りて出家し、同師に傳法職位を受け、釋迦院の主席を董す、詔して東寺二の長者に加へ、朝廷及び將軍家の修法をなすこと年あり、永享元年三月十三日寂す、壽五十三、付法隆濟あり、（續傳燈廣錄）

リユークワン 隆寬 一八〇八/一八八七 〔淨土宗〕山城長樂寺の開山なり、隆寬字は皆空、別號無我と云ふ、京都の人、少納言藤原資隆の三男なり、出家して比叡山に登り、範源慈圓に師事し、天台の學解を以て聞ゆ、後長樂寺に住し、長樂寺律師と稱す、淨土宗開祖源空上人を問ひ、其敎を受けて弟子となる、爾來專ら淨土敎に意を傾け、日々阿彌陀經四十八部、佛號三万聲を常課となす、益上人に親附し、元文元年三月十四日選擇集の附屬を受く、承久三年某親王の問により淨土要義三卷を作る、安貞元年比叡山の定照彈選擇を作り淨土敎を誹毀す、師一見して大に笑ひ顯選擇集を作りて定照に與ふ、是に於て定照大に憤慨し師を朝廷に讒奏す、因て同七月五日奧州に遠流せられ、源空上人の門人も亦多く放逐の禍に罹る、師乃ち長樂寺來迎房に一七日の念佛會を修して後護送せらる、然るに護送の吏森入道西阿深く師に皈依せるを以て、相模鎌倉に至りて私に執權北條氏に謀り、八月一日師を已れの領地なる相模飯山に留め、師の門人實成をして代りて奧州に入らしむ、同年十一月飯山にありて風疾に罹り、羇中吟一篇を作り、門人に示す、十二月十三日念佛二百聲にして寂す、壽八十、門下日敬、智慶、正智、唯願、實成等あり、一門を長樂寺流と云ひ、一に多念義とも云ふ、著作顯選擇集一卷、捨子問答、大師傳等傳ふ、（淨土傳燈錄、淨土總系譜）

リユーケー 隆慶 ハンショー繁紹を見よ、

リユーゲンイン 隆源院 ニチエン日延を見よ、

リユーゲン 隆源 一九〇二/二〇八六 〔眞言宗〕山城東寺百三十六代の長者なり、隆源は水本大僧正と稱す、四條尙書隆家の子隆蔭の猶子なり、經深法印の室に入りて出家し、國師に傳法職位を受け、幸心院十代の席を補す、應永三十三年三月二十九日寂す、壽八十五、（續傳燈廣錄）

リユーコー 隆光 一五五一…… 法相宗 大和藥師寺の僧なり、隆光法相宗に精し權律師となる、元慶五年に最勝會の講師となる、寬平三年正月五日寂す、（本朝高僧傳）

リユーコー 隆光 二三一九/二三八四 〔新義眞言宗〕江戶護持院の開山なり、隆光字は榮春、俗姓は川邊氏、慶安二年二月八日を以て大和添下郡二條村に生る、六歲にして書を能くす、十歲招提寺朝意に從ひて童子となり、十二歲剃髮受具し名を隆長字を俊宜と云ふ、漸く秘藏の章疏及詩書を習ふ、萬治三年八月一日朝意に從ひて豐山に登り、亮汰の室に投ず、亮汰乃ち四度別行軌を授く、寬文二年五月郡山に往き講席に學び、二年を經て仝四年秋快壽僧正に謁し、冬論筵に列し、初めて問役となる、師常に亮汰に從ひ密藏の奧旨を究む、一時の秀才卓玄、蓮意、英岳等の講席に列ま、馬鳴龍樹の諸論を受け、智者法藏の諸敎を學び、顯密二敎の理に通す、寬文六年春京都に遊び、立庭氏に就きて詩書春秋老莊等を學ぶ、仝七年春高野山に登り宥專に見え兩部の灌頂を受け、四聲の輕重を學ぶ、八年三月興福寺盛源に唯識を聞き、又華嚴三論の宗

匠に徧見す、仝九年隆慶寺法隆寺に往きて倶舍論を聞く、是より數々講筵を開けり、天和二年春醍醐寺に登り大僧正有賀に謁し、秘密の儀軌及重鈔秘訣を傳へらる、貞享元年卓玄の命に依り慈心院に住す、三年秋將軍綱吉の命に依り筑波山知足院に主となり、常に江戶に住して城中を鎭護す、仝十二月權僧正に勅任せらる、元祿元年師寺境を江戶に近く移さんと請ひ、許されて神田橋の外に地を相し、大久保佐渡守忠高をして之を監せしめ、十年落成し、護持院と稱す、仝四年春三月武藏鷲宮の寺及大乘院を再興す、仝夏六月僧正に轉任す、釋迦院大僧正有賀を請して重位の許可を傳へ、傳法院灌頂を再授す、仝七年三月高野山の尊海に從ひて中性院流及瑜祇灌頂を傳へられ、仝八年九月大僧正に昇任す、仝十年請ひて五智堂を建つ、仝十三年正月請ひて河內壺井通法寺を再興す、寶永二年命ありて護持院を修興す、仝四年二月請許せられて根來山の再興を天下に募る、六月退院を請ひて隱棲の地及衣鉢の料を給ひ、院を號して成滿院（江戶橋町にあり）と云ふ、仝六年八月大和超昇寺に隱れ、享保九年六月七日寂す、壽七十六、著作聖無動經慈怒鈔二卷、理趣經解嘲二卷、筑波山緣記二卷あり、師生前最も將軍綱吉の寵を蒙りたり、（豐山傳通記、新義眞言宗史）

リユーサイ　隆濟　二〇六九／二一三〇　〔眞言宗〕山城東寺百八十代の長者なり、隆濟は水本法務僧正といふ、中御門松木尚書宗量の子、尚書宗隆の猶子なり、隆寬僧正の室に入りて得度し、具支灌頂を受けて幸心院十二代の席に補す、後請せられて伊豆箱根伊豆山密嚴院の別當となり、後東寺百八十代長者法務に補す、文明二年九月五日寂す、壽六十二、（續傳燈廣錄）

リユーサイ　隆濟　リンゲー倫藝を見よ、

リユーサン　隆山　……二四六一　〔新義眞言宗〕近江惣持寺の學僧なり、隆山字は慈光と云ふ、鄕貫學歷詳ならす、惣持寺に住して彥根侯伊井氏と土地の境を爭ひ、家老をして切腹せしめたるを以て幕府より罪せらる、仁和寺の法親王其學を愛し幕府に請うて師の罪を宥し、御室の勝功德院に居らしむ、師因りて勝功德院に居し著作を事とす、享和元年十二月二十七日寂す、壽缺く、著作大疏補闕鈔六卷、令問答六卷、宗輪論研集記三卷、四重秘釋、密敎修行、念修作法註各一卷等あり、（新義眞言宗史料）

リユーシツ　隆室　チキユー智丘を見よ、

リユーシン　隆信　一八七三／一九四四　〔淨土宗西山派〕山城深草眞宗院の開山なり、隆信一に立信に作る、字は圓空俗姓生國詳かならす、一說には多田源氏にして大和十市郡の人、藏人行綱の孫建保元年に生るといふ、甫めて十五歲善惠に事へて專修念佛の法を學ふこと二十餘年一日の如く、凡そ一宗の義門通達せさるなし、後山城の深草に眞宗院を創め大に念佛を弘演す、故に深草流といふ、後深草天皇師を召して淨土の法門を問ひ、勅して大殿廊門經藏を建立し、別に般若堂を構へて念佛三昧の道場となし賜ふに資糧を以てす、皇太后師に往生の事を問ひ給ふ、久我內大臣源具實往來して法を問ひ、齋糧を寄進す、中年同門の請に應し往生遣迎の二院に歷住し、尋て京師誓願寺に住し、大に宗義を弘む、晚年舊院に歸り精修怠らす、弘安七年四月十八日寂す、壽七十二、臘五十八、

著作觀經疏十卷あり、門下如圓、道敎、胡戒、信一、法英等あり、天台宗妙觀院僧正顯師亦其室に入れり、（淨土總系譜、東國高僧傳、緇白往生傳、淨土傳燈錄）

リユーシン　隆眞（……―……）〔眞言宗〕京都仁和寺の已講なり、隆眞字は靜定、其鄕貫を詳かにせず寛意の法を受けて已講となる、付法林豐隆勝の二人あり、（傳燈廣錄）

リユーシンイン　隆眞院　ニチリ日利を見よ、

リユーシユン　隆舜（一九四〇―二〇一三）〔眞言宗〕山城東寺の長者法務なり、隆舜は按察律師と稱し、水本僧正と號す、四條二品隆政の子なり、隆勝僧正の室に入りて剃度し、宗門の大業を畢へて職位傳法を受け、尋いで第二印可を付せらる、貞和四年詔して東寺百二十代の長者に任じ、觀應元年寺務僧正に補す、文和二年正月十四日寂す、壽七十四、（續傳燈廣錄、東寺長者補任）

リユージユン　隆順　リヨーバン良鑁を見よ、

リユージヨ　隆助（一八七二―一九三八）〔眞言宗〕京都仁和寺の學僧なり、隆助は藤原隆衡の子にして、仁和寺道助親王灌頂の上足なり、敎寺に徧遊して宗籍を審問し、皈りて仁和寺の大敎院に住す、寛喜寛文の間法眼法印に轉任し、建長六年權僧正に任し、東寺の長者に補す、文永七年五月日蝕を祈り僧正となり、奏して阿闍梨六人を高野山に置く、建長二年僧綱を辭し、弘安元年七月九日寂す、壽六十七、（本朝高僧傳）

リユージヨ　隆恕　ニチセン日暹を見よ、

リユーシヨー　隆勝（一九二四―一九七四）〔眞言宗〕山城醍醐山幸心院第七代なり、隆勝は釋迦僧正と稱し、水本宰相といふ、水本の唱玆に始まる、四條尙書隆行の子なり、弘眞の室に入りて得度し、永仁五年二月一日甘露王院にて同師より具支灌頂を受く、醍醐山幸心院の七代となり、正和三年十一月廿六日寂す、壽五十一、（續傳燈廣錄）

リユーシヨー　隆成（一七八七―……）〔眞言宗〕山城仁和寺の僧なり、隆成は隆寛と共に大治二年二月十八日、三寶院道場にて傳法灌頂を受く、（續傳燈廣錄）

リユーシヨー　隆盛（二四六一―二五三二）〔新義眞言宗〕江戶護持院三十九代なり、隆盛は大和添上郡月瀨の人、俗姓尙氏、十六歲度を受け州の畑の春日不動院に入る、慶應二年幕府の命により小池坊に住し權僧正となる、明治元年擧げられて豐山能化職に補し、仝五年五月敎部省の設置せらるゝや大敎正に任せらる、其年十一月八日寂す、壽七十二、（新義眞言宗史料）

リユーセン　隆暹（一七〇七―一七七六）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、隆暹は總持房と號す、夙に顯密兼備の譽あり、晩に所業を捨て專ら淨刹を願ふ、毎日念佛すること十二萬遍、終焉の地を擇びて阿彌陀嶺に移り、永久四年正月二十六日寂す、壽七十、（本朝高僧傳）

リユーゼン　隆禪（一六六二―一七二四）〔法相宗〕大和大乘院の開山なり、隆禪は藤原政兼の子、興福寺の緣圓僧都に從ひて唯識因明の二論を傳習し、又諸師に謁して益々玄致を究む、延久五年維摩會の講師となり、大僧都に叙し、興福寺務を補し、兼ねて長谷大安兩寺を領す、又大乘院を開きて第一代となり、盛に法相を唱ふ、康和七年七月十日寂す、壽六十三、（本朝高僧傳）

リユーゼン 隆善 二三六七／二四五一 〔淨土宗〕江戸增上寺第五十代なり、隆善は方蓮社便譽一實乘阿と號す、俗姓は傳田氏信濃水内郡柳澤の庄澤村の人なり、享保五年五月二十八日十四歳にして州の茂菅村賴朝山性法院靜松寺に入り、實譽嶽龍上人に就て剃髮し、七年九月武藏鴻巢勝願寺に掛錫し、到譽順教上人に參し、九年十一月騰譽知秀上人より五重相承す、同十二年同山敎順上人に宗戒二脈を稟け、十六年三緣山天神谷義俊寮に留住す、寛保二年正月綸旨を賜はり上人と稱す、延享二年正月京都三條瑞泉寺に於て、御室湛慧律師の探玄記を講するを聽き、十一月下旬江戸に皈る、三年二月十五日發足京都誓願寺辻常樂寺にて、再び湛慧律師の探玄記を聽講し、同年秋聞福寺にて倶舍論を聽講し、秘書百六十卷を謄寫す、延享四年五月法宗源を講し、寛延二年七月八日一文字席となる、時に四十二歳なり、同三年春天神谷より三島谷役者智奠轉寮の跡に移る、寶暦九年十二月二十八日學頭に補し、十一年三月法門法主を勤む、明和六年十一月新田大光院に住し、九年九月命ありて鎌倉光明寺に遷り第七十二代となる、安永七年正月十五日增上寺に出世し大僧正に任ず、天明三年九月八日職を辭し、十三日麻布一本松に退隱し、寛政三年三月二十四日谷作業室に寂す、壽八十五、(三緣山志)

リユーゾー 隆增 (三〇八六) 眞言宗〕山城醍醐山戒光坊の法印なり、隆增字は戒光といふ、美濃十八條の人、俗姓は木寺氏なり、傳法灌頂を法務隆源大僧正に受け、最上乘心印を得たり、(續傳燈廣錄)

リユーソン 隆尊 一三六二／一四二〇 〔法相宗〕大和元興寺の學僧なり、隆尊は俗姓詳ならず、出家して義淵に師事し、七上足の一に數へらる、常に元興寺に住し、東大寺大佛供養會の講師となる、嘗て律師の命を受け奏して曰ふ、性來頑愚にして今律師の任あり、徒に聖授を辱しむるあらんとす、且つ國家戒師なきことを尙し、我異域に入りて律範を質さむと欲すれども、才力足らずして國辱を遺さむことを恐る、方今興福寺榮睿法師は夙に戒儀嚴峻の人なり、天性隱逸にして美濃に蟄居す、此法師を起し唐に渡りて明師を請はしめむと、天皇其言を納れ給ひ、榮睿を召し、大安寺普照と共に唐に航し、戒律の明師を求めしむ、道璿鑑眞等は即ち此二僧の請し來りたる所なり、隆尊天平寶字四年四月十八日寂す、壽五十九、(續日本紀、元亨釋書、本朝高僧傳)

リユーダツ 隆達 ニチチヨー日長を見よ、

リユーチヨー 隆澄 一八四一／一九二六 〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、隆澄は藤原長信の子、仁和寺道深親王に就て兩部の灌頂を受け、嘉禎の初め權僧都に任す、建長七年權僧正に登り、正嘉二年夏僧綱を辭し、弘長元年冬旨ありて又僧正に還任し、東寺三の長者に加す、文永三年寺務法務を領し、護持僧となる、冬十一月長者法務の印を解て同月十七日寂す、壽八十六、(本朝高僧傳)

リユーチヨー 隆長 二二四六／二三一六 〔新義眞言宗〕山城智積院第五代なり、隆長字は圓精、俗姓は柳氏、越後八彥村の人なり、天正十四年十一月廿三日に生る、甫めて九歳州の安養院憲英和尚に投して侍童となり、志學の年に及ひて金剛頂、瑜伽、大悲、胎藏、及び五部灌頂、諸尊の秘軌を受く、是に於

て出遊の志あり、先つ出羽長井の文珠樓に上り修供すること一七日夜、以て所業の緒に就かんことを祈る、二十五歲に及び、衣を挾み錫を飛はして關東を徧歷し講席に巡遊す、時に武藏の明星院祐長和尚の名關東に震ふ、師其門に趨き論席に登ろ、舉けられて上足となる、既にして智積院日譽僧正に招かれて左右に侍し、寬永五寺水戶光明院の虛席を補す、時に武藏明星院の祐長寂し、其遺命ありて止むことを得す兩寺を兼領すること三年、退きて京都に赴き智積院の元壽僧正に就きて請益す、偶々元壽僧正太上天皇の勅を蒙り、心法有色の幽致を講せんとて一時の義龍十人を選ひて難問となす、師之に與りて特に寵賞を蒙る、十年八月大覺寺の尊性法親王元壽僧正を屈請し、三問一講の席を開きて文祿上皇の十七周忌に追薦したまふ、僧正師を擢てゝ講師となす、是年江戶彌勒寺宥鑁和尚寂し寺を師に囑す、師仍て之に住し三年の後退きて京師に歸り、僧正に從ひて蘊奥を咨決す、十六年春僧正の灌頂を受けて中性院流の淵源を盡す、十八年夏また傳法院の軌則により漫荼羅を建て其祕蘊を傳へらる、慶安元年春僧正寂し、幕命を受けて智積院を主とる、四年勅して僧正に任す、明曆二年秋九月疾を示し、城北大報恩寺に移り、十月十日寂す、壽七十一、臘五十七、智積院坊山に葬る、(結網集)

リユーニン 隆任 サイクワン最寬を見よ、

リユーニヨ 隆如 (一五三三) 〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、 隆如法相に精し、維摩會講師となり、貞觀十五年最勝會講師となる、示寂の年時缺く、(本朝高僧傳)

リユーヘン 隆遍 一八五 一八六五 〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、 隆遍は辨法印と號す、權右中辨光房の子なり、出家して覺成堯眞二師に眞言を學び、元久二年二月二日東寺の長者に任ず、元久二年十二月十七日寂す、壽六十一、(東寺長者補任、仁和寺諸院家記)

〔考〕 仁和寺諸院家記に壽六十三とあり、

リユーベン 隆辨 一八六六 一九四三 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、 隆辨俗姓は藤原氏、大納言隆房の子なり、十三歲にして出家し覺朝、明辨、澄慶、猷鬪、圓意の諸師に天台敎を學び、寬元元年法印に敘す、同三年若宮の別當となり、文永五年大阿闍梨位に登る、弘安六年八月十五日寂す、壽七十八、(三井續燈記)

リユーホン 隆本 リヨートク良德を見よ、

リユーミヨー 隆明 一六八〇 一七六四 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、 隆明は藤原道隆の孫、隆家の子なり、園城寺心譽明尊に從つて顯密の法を學び、十一歲より衣帶を解かずして修練苦行す、寬治元年護持僧となる、同五年皇后の疾を祈りて僧正となる、六年七月白河上皇金剛山に幸して百僧を集め、法華經百部、金泥五部大乘經を供養せしめ、師其導師となる、康和四年大僧正を授けらる、承德二年園城寺の長吏に任じ、長治元年九月十五日寂す、壽八十五、或は云ふ四年八十八歲にして寂すと、(本朝高僧傳)

リユーユ 隆瑜 二四三三 二五一〇 〔新義眞言宗〕山城智積院第卅三代なり、 隆瑜字は難明、俗姓は佐野氏、安房國安房郡波佐間村の人なり、剃髮受具の後智積院に掛錫し、學成りて安房寶珠院に住して學徒を誘掖し、天保二年圓福寺に出世し、五年

智積院に住し、第二十三代となる、在職四年、同八年瑞應院に退き、嘉永三年四月三日寂す、壽七十八、（新義眞言宗史料）

リユーヨ　隆譽　コーケー光冏を見よ、

リユーオク　龍屋　二三一七　〔淨土宗〕駿河善境寺の開山なり、　龍屋は眞蓮社正譽と號す、世俗姓生國詳かならず、呑龍に投して剃髮受業し、駿河新宿善境寺の開山となる、明暦二年八月九日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーオン　龍温　二四六〇 二五四五　〔眞宗〕京都御幸町圓光寺の住持なり、　龍温字は雲解、後香山院と號す、寛政十二年四月岩代會津に生る、俗姓は樋口氏、父は義敎、母は兒島氏といふ、師幼少にして書を好み筆硯を弄す、十二歳論孟等を讀み、十四歳儒塾に入る、十九歳父の命を奉して香樹院の門に入り勉勵年あり、二十四歳初めて他山の講肆に遊ひ、倶舍、唯識、華嚴、天台、及ひ眞言を究め、又大小乘律藏を究め、皆其蘊奥を盡くす、又因明、悉曇、八轉、六釋及ひ國書に至るまて涉獵せさるなし、三十九歳京都圓光寺に住し、嘉永二年六月二日五十歳にして擬講となる、香樹院安居講說の命を受けて果さすして寂す、師命を受け翌年倶舍世間品を講ず、是より先き寮司となり、天保十四年以降十王經、成唯識論を講せしか、擬講となりて後、淨土眞要抄、般舟讃を講し、安政五年嗣講に代りて阿彌陀經、執持鈔を講し、文久元年十二月二十日嗣講となり、元治元年觀經を講し、同二年正月二十一日講師に任し、以後大經往生要集、往生禮讃を講し、明治五年素絹出仕を許可せられ、後選擇集を講し、七年一等講師となりて以後、愚禿鈔、正信念佛偈、易行品、淨土論、六類聚鈔を講し、十三年少敎正に補せられ、觀經往生論註、阿彌陀經を講して十七年に至り、翌十八年七月十二日寂す、壽八十六、著作闢邪護法策二卷あり、（碑文、眞宗史料）

リユーオンイン　龍音院　エカイ慧海を見よ、

リユーカイ　龍海　ユーテン融天を見よ、

リユーガク　龍嶽　シユーリユー宗劉を見よ、

リユーガク　龍岳　ドーモン道門を見よ、

リユーガン　龍岩　シユートー宗棟を見よ、

リユーキヨー　龍慶　二二一九　〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、　龍慶字は喜冠、俗姓は樺山氏、薩摩の人なり、福昌寺天祐宗津に依り其法を嗣ぎ、妙谷寺に住す、國守聘して福昌寺に住せしむ、永祿二年華舜軒に退居す、寂年缺く、法嗣代賢守中あり、（日本洞上聯燈錄）

リユーキヨー　龍杏　シヨーケー祥啓を見よ、

リユークー　龍空　ズイサン瑞山を見よ、

リユークワン　龍關　二五五二　〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、　龍關俗姓は齋藤氏、心華院大拙に師事し其法を嗣く、建仁寺に昇り管長となる、明治二十五年五月八日寂す、壽缺く、

リユーゲ　龍牙　ロネン魯念を見よ、

リユーゲ　龍華　ドンリユー曇龍を見よ、

リユーゲイン　龍華院　ウンケー雲溪を見よ、

リユーケー　龍溪　シヨーセン性潜を見よ、

リユーケン　龍謙　リユーエー隆榮を見よ、

リユーゴ 龍護　カクオー覺應を見よ、

リユーゴサンニン 龍護山人　カクオー覺應を見よ、

リユーコー 龍江　シユーシヨー宗翔を見よ、

リユーコーイン 龍興院　タクガン卓巖を見よ、

リユーサン 龍山　二三〇七　(淨土宗)伊豫崇源寺の僧なり、龍山一に無住と云ふ、號は報譽、因幡の人なり、出家して天台學に通し、安藝嚴島に遊び、經藏に入りて要旨を拔書し、六十餘卷と爲す、金玉拾拚集と名く、伊豫崇源寺に住し、盛に法門を弘通す、正保四年八月十日寂す、壽缺く、(鎭流祖傳)

リユーサン 龍山　カクオー覺應を見よ、

リユーサン 龍山　トクケン德見を見よ、

リユーシツ 龍室　シユーシヨー宗章を見よ、

リユーシツ 龍室　リヨージユー亘從を見よ、

リユーシン 龍深　(二一五八)　(臨濟宗)京都建仁寺の禪僧なり、龍深字は九淵、號は葵齋と云ふ、東山建仁寺に住す、壯年にして支那に遊ばんとし、其發するに臨み補陀洛山の觀音を信仰し、日々其像を書く、積みて一千七百餘軀に至る、東飯の後之を法姪正宗龍統に示す、龍統乃ち記を作りてこれを稱す、(本朝書史)

リユーシユー 龍湫　ゲンサク玄朔を見よ、

リユーシユー 龍湫　シユータク周澤を見よ、

リユーシユー 龍洲　モンカイ文海を見よ、

リユーシヨー 龍惺　二〇四四　二一二　(臨濟宗)京都南禪寺の禪僧なり、龍惺字は瑞巖、別の字は仲建、自ら蟬菴と稱す、和泉石津の人、俗姓は源氏、父は因幡の刺史南樵と號す、母は佐佐木氏の族鞍智氏、師至德元年を以て生る、七歲父に從ひて京都に入り、周く靈跡に詣て出家の志を發す、明德二年和泉大に亂れ家人と共に亂を避けて深山に入り、一の古寺に投して僅かに免るゝを得、十一歲にして東山の一菴麟和尙に投じて沙彌となり、十七歲得度受戒す、一菴天龍寺南禪寺に遷るに及び、師隨從して左右を離れず、遂に印可を受く、時に二十四歲なり、一菴寂する後、屢々高職に登り、嘗て東山にありて分座說法し、又護國寺の祖塔を守る、加賀の福昌寺、駿河の淸見寺、筑紫の聖福寺等より請れたりと雖、師固辭して往かず、文安三年足利將軍請じて建仁寺に住せしむ、寶德二年將軍朝廷に奏して師をして南禪寺に住せしむ、師住持すること半歲にして、辭して靈源菴に退休す、會和泉大雄寺開山三光國師百年の遠忌に當り、衆に請はれて昇座說法し、得るところの寄捨金を以て悉く修塔に充つ、長祿四年秋微疾ありて更に藥餌を用ゐず、時の僧錄司瑞溪鳳禪師自ら藥劑を持して師に薦む、師これを喜べとも尙飮まずして寂す、實に寬正元年閏九月五日なり、壽七十七、臘六十、臨終の偈あり曰く、通ニ貫三際一、彌ニ綸十方一、一機瞥轉、石火電光、著作二會語錄幷に外集あり、(本朝高僧傳、延寶傳燈錄)

リユーシヨー 龍松　ソケー素溪を見よ、

リユーシヨーイン 龍照院　ジユンカイ準海を見よ、

リユージヨー 龍乘　(二〇五四)　(曹洞宗)越中立川寺の禪僧なり、龍乘字は月桂、奧州の人、大徹宗令の法を嗣ぎ、初め總持寺に住し、立川寺に遷る、又名立寺を立てゝ開山となる、寂

年譜に詳かく、(日本洞上聯燈錄)
〔考〕龍乘は應永の頃の人なり

リユースー 龍崇 (二一五八) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、龍崇字は常菴 自ら角虎道人と號す、俗姓生國詳かならず、建仁寺の正宗統和尚の侍童となり、群籍を讀む、稍長して剃髮受戒し、正宗の心印を稟承す、初め薩摩の大願寺に開法し、京師の眞如建仁の諸寺に歷遷す、寂年及ひ壽缺く、著作語錄二卷、角虎集、寅闇藁若干卷あり、(本朝高僧傳)
〔考〕龍崇は明應の頃の人なり

リユースイ 龍水 シユーテー宗貞を見よ、

リユースイ 龍水 シユーフン宗賁を見よ、

リユーセン 龍泉 レースイ冷卒を見よ、

リユーソー 龍象 ギヨーセン行暹を見よ、

リユータク 龍澤 (二一二九) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、龍澤字は天隱、播磨揖保郡路傍の棄子なり、慈恩寺の僧之を收めて鞠養す、甫めて十歲京都東山に上り、寶洲衆和尚を拜して侍童となり薙髮受具す、和尚に侍すると二十年、博く群書を涉獵し、後天柱和尚の嗣となる、天柱和尚は聞溪聰の嗣なり、師初め京都眞如寺に出世し、文明年間十たび建仁寺に住す、晚年大昌院に退居し、某年寂す、壽缺く、著作翠竹眞如集、默雲稿等若干卷あり、(本朝高僧傳)

リユーテキ 龍的 二三〇八…… 〔淨土宗〕尾張大應寺の開山なり、龍的は莊蓮社巖譽と號し、尾張の人なり、祖的に法を嗣ぎて、州の岩崎大應寺を刱す、慶安元年六月十九日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

リユーテツ 龍鐵 二二九七…… 〔淨土宗〕伊勢大蓮寺の開山なり、龍鐵は大蓮社頓譽と號す、石見の人、其俗姓詳かならず、安藝の以八上人に投じて剃髮受業し、法を壽巖に嗣ぐ、伊勢山田に大蓮寺を創して開山となり、寬永十四年九月朔日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リユーテツ 龍鐵 二三二三…… 〔淨土宗〕江戶廣大院の開山なり、龍鐵は道蓮社自譽と號す、俗姓は源氏常陸水戶の人なり、阿譽隨巖に就て剃髮受業し、寬永十五年四月十五日上人より璽書を授かる、武藏江戶淺草に廣大院を刱して開山となり、寬文三年十一月二十一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リユーテン 龍天 二三三七…… 〔淨土宗〕三河松應寺の僧なり、龍天は五蓮社九譽降雨と號し、其鄉貫詳かならず、呑龍の室に入りて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、初め結城弘經寺に住し、後三河松應寺に移る、延寶五年十一月六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リユーテン 龍天 二三三七 二四二六 〔新義眞言宗〕山城智積院第十七代なり、龍天字は琳瑞 俗姓は明芽氏、常陸眞壁郡下妻の人なり、母は高梨氏なり、師延寶五年九月廿一日に生る、小字は千能といふ、甫めて十五歲泰鳳山隆譽法印の室に入り薙髮し、二十一歲智積院に隸す、元祿十二年隆譽法印の灌頂を受け大阿闍梨となる、享保二年請に應して常陸圓福寺の壇を開き、又た本山に歸へる、十三年春智興僧正の命に因り、勸學院に開法し、十八年春醍醐山に登り相學を眞圓僧正に受く、餘暇松橋元雅大僧正と論議す、九月歸山し、元文元年六十歲本山に留學してより四十年なり、後鄉里に歸へり圓福

寺に住す、四年唯識論を講し、翌年法華經を講す、寬保元年門徒の爲に灌頂を授け、秋九月再ひ京都に入り本山に寓す、時に武藏の大護院虛席あり、鑁淨僧正師をして住かしめんとすれとも師固辭して聞かす、延享元年春また勸學院に開法し、四月鑁淨僧正病あり、自其起たさるを知り、師に後事を屬し、是月遂に寂す、五月江戸に赴き、本山住職の欽命を蒙むり、六月歸り八月權僧正に任ず、九月二十一日清涼殿に朝し、二年春又江戸に赴き、二荒山に登り東照宮廟に詣て、四月歸へる、三年六月一日僧正に任せられ、寶曆三年七十八歲にして本山の職を辭し、瑞應精舍に退隱す、本山に住すること茲に至るまて凡そ十年なり、九年四月八日眞乘院宥證僧正に從ひ傳印印可を授けらる、翌九日より僧正一家の秘訣を傳授すること、凡そ百三十有五日、師常に衆に列して其蘊奧を叩く、寶曆十二年三月廿八日更に職位灌頂を受け、獨昭金剛杵を授けらる、明和元年亦七種の法器を授けられ、以て印璽となす、時に年八十六歲、同年九月廿六日報恩寺に灌頂道場を開く、師始め九歲にして書を沼青山德首法師に習ひ、後隆興を拜して傳奏院耶となり、遂に東常大教利の化主となる、當時唯識論を奈良圓成院に聞き、五教章、起信論、俱舍論を鳳潭に學ひ、法華を靈本義瑞二師に習ふといふ、明和三年春寂す、壽九十、（眞言宗史料）

リユーテン 龍天　ゼンジョー善讓を見よ、

リユーテン 龍大　ユーテン融大を見よ、

リユートー 龍統　二一五八……「臨濟宗」京都南禪寺の禪僧なり、龍統字は正宗、號は蕭菴、山城の人、俗姓は平氏、下野太守東益の子、幼にして建仁寺瑞巖惺に投じ、受戒するに及び、叔父江西、慕哲二師に師事して玄旨に達し、建仁寺に出世し後南禪寺に昇る、常に東山靈泉院に居す、明應七年正月二十三日寂す、著作語錄集あり、（本朝高僧傳）

リユートー 龍統　ゲントー元棟を見よ、

リユートン 龍頓（……）〔淨土宗〕山城知恩院の僧なり、龍頓字は乘譽、姓は筠氏、越前の人なり、九歲にして淨光院に至り僧となる、十五歲にして傳通院に修學す、下總國成田に至り不動尊に祈る事七日、滿夜明王の夢告を受くと云ふ、後番頭位に抽てられ、大岩寺に住し、後長德山に住す、示寂年月日缺く、壽七十、（鎭流祖傳）

リユートン 龍頓　リョージョー良聲を見よ、

リユーハ 龍派　二二〇六……「臨濟宗」京都南禪寺の禪僧なり、龍派字を江西と云ひ、別に豩菴と號す、京都の人、俗姓は平氏、總州の太守東師氏の子なり、幼にして建仁寺天祥麟に師事して其法を嗣ぎ、建仁寺に出世し、後南禪寺に遷る、文安三年八月五日寂す、壽缺く、著作江湖集鈔、天馬玉津沫續翠藁若干卷あり、（本朝高僧傳）

リユーハク 龍伯　コーズイ廣瑞を見よ、

リユーバン 龍播　ショーウン松雲を見よ、

リユーホク 龍北　クワンチユー環中を見よ、

リユーモン 龍門　ショークン韶薰を見よ、

リユーヤ 龍也　二三三六……〔淨土宗〕伊豫榮養寺の開山なり、龍也は心蓮社傳譽と號し、伊豫伊豫郡の人なり、幼にして州の長建寺に入りて剃髮し、知哲に師事して宗乘を究

め、遂に其法を嗣ぐ、寛永十四年郷里に皈り、榮養寺を剏して居住し、寛文六年七月十二日寂す、世壽詳かならず、(淨土總系譜)

リユーヨ 龍譽　リヨーギン靈吟を見よ、

リユーエ 立慧　ニチユー日祐を見よ、

リユーエー 立英　ウンドー雲堂を見よ、

リユーコー 立綱(二四七七)〔眞宗〕近江學勝寺の學僧なり、立綱は大寂菴と稱し、海量の門人なり、著作伊勢物語、昨非抄、國學正辨、三哲小傳、しのふ草、さら〳〵日記、萍跡紀聞、玉插頭、和漢嘆得錄等あり、

リユーシン 立信　リユーシン隆信を見よ、

リユーシユク 立叔　ズイコン瑞建を見よ、

リユーゼン 立禪　タクチユー卓中を見よ、

リユードー 立道 二四一五 四四九六 〔淨土宗〕山城正定院の僧なり、立道字は慧玄、心蓮社得譽尙阿と稱す、聖光寺良瑞の下に得度し、後增上寺に留學し、豐譽僧正より一宗の秘奧を傳へ、尋て長泉寺普寂に師事し、學業を勵む、後天明三年嵯峨正定院に住して盛譽あり、夙に聞證湛慧の風を慕ひ、華嚴起信に精し、眞言の慈雲に謁して秘法を傳ふ、晩年兩眼明を失し敎化を事とす、天保七年正月八日正定院に寂す、壽八十二、臘六十八、述作二十餘部あり、師選擇集に精く、まゝ先賢未發の見解あり、一世の大匠と稱せらる、(淨土宗史料)

リユーヨ 立譽　エガン慧岩を見よ、

リユーヨ 立譽　テーゴク貞極を見よ、

リユーヨ 立譽　ギヨーカイ行誡を見よ、

リユーケー 栁溪　ケーグ契愚を見よ、

リユーケー 栁溪　ニユーオン柔遠を見よ、

リユードーニン 瘤道人　キヨーオー敬雄を見よ、

リヨハク 旅伯　マンシユー萬宗を見よ、

リヨーア 良阿 二二九八 〔淨土宗〕江戶善長寺の開山なり、良阿は圓蓮社信譽と號し、相模小田原の人、其俗姓詳かならず、觀智國師に師事して宗乘を究め、州の中原大松寺江戶三田の大松寺を開き、後小田原大蓮寺に主となり、京都一條淨華院に遷る、辭して後再び江戶に下り、增上寺下屋敷に善長寺を剏して開山となり、寛永十五年十一月七日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーア 良阿　トンア頓阿を見よ、

リヨーア 良阿　ビヤクゲン白玄を見よ、

リヨーアン 良安 二二六四 〔淨土宗〕山城淨華院第三十四代なり、良安字は信譽と云ふ、其鄕貫詳かならず、初め良休に師事し、後休岸の法を嗣ぎ、石見極樂寺に住し、淨華院に主となる、慶長九年三月九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーアン 良安 二二九二 〔淨土宗〕下野法王寺の開山なり、良安は殘蓮社と號す、法を良信に嗣ぎ、下野那須郡黑羽に法王寺を開く、寛永九年十月二十四日寂す、(淨土總系譜)

リヨーイ 良意 一六九四 一七六三 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり良意は唐房僧正と云ふ越前守正四位下藤原良經の子、て出家し、園城寺唐房に居る、寛治六年大僧都になり、康和二年梵釋寺別當となる、四年權僧正となり、法成寺別當となる、五年十一月十五日寂す、壽七十、(本朝世記、尊卑分脉、本朝高僧傳)

リヨーイ　良意 ガンセキ岸石を見よ、

リヨーイ　良意 ユーシヨー酉性を見よ、

リヨーイ　良懿（……二二〇四）〔淨土宗〕磐城專稱寺第七代なり、良懿は學蓮社和南と號す、良大に師事して法を嗣ぎ、專稱寺に主となる、天文十三年七月十三日寂す、壽缺く、嗣法の弟子に良然存達あり、（淨土總系譜）

リヨーイン　良因（……）京師の畫僧なり、良因は其甫父は周苦と號す、周文の風を學び、畫上に書して曰く、是千幅の内と、其畫皆觀音の像あり、（本朝畫史、扶桑畫人傳）

リヨーイン　良印（一九七九—二〇六〇）〔曹洞宗〕能登正法寺の禪僧なり、良印字は月泉、俗姓は藤原氏、能登の人、幼にして教院に投し祝髮し、顯密の諸教を究む、後衣を更へ禪に入る、諸方に遊び總持寺峨山紹碩に謁して開悟す、康安元年の夏峨山の命に依り、正法寺に住す、總持寺より招けども辭して往かず、應永七年二月二十三日寂す、壽八十二、法嗣無等良雄、笑顏慧忻、通海良義、巨泉長智、古山良空、梅榮元香、大應玄徹、虎溪良乳の八人あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーイン　良胤（一八七一—一九五一）〔眞言宗〕京都觀勝寺の學僧なり、良胤字は大圓と云ふ源賴政の末なり、建曆二年十二月某日丹州三重村に生る、十歲國府大谷寺の閑觀に投して侍童となり、十六歲薙髮す、嘉禎二年良師を求めて上京し、清水寺に詣てゝ冥助を請ふ、成景と云ふ者之を見て故を問ひ、師の意を知りて、師の爲に良師を選び、實賢僧正に依らしむ、即ち白河の峰殿にて實賢に謁し、三寶金剛兩流を受く、文永五年修景師を延きて京都觀勝寺を主とらしむ、正應二年龜山上皇師に就きて落髮して秘密灌頂を受く、師皇恩を受くることを嫌ひて、或は石山の巖窟に匿れ、或は高野山に遁れ、翌年五月二十六日觀勝寺に寂す、壽八十一、臘六十六、著作壒囊鈔十卷あり、（本朝高僧傳）

リヨーエ　良惠（一八五二—一九二八）〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、良慧は藤原雅實の子、仁和寺道法親王に隨つて兩部の大法を受け、上乘院に住し、元久二年權少僧都に任し、承元二年冬一身阿闍梨となり、寬喜元年權僧正に昇る、天福元年護持僧となり、延應元年廣隆東大の寺務を領し、秋東寺の長者を司とる、仁治元年大僧正に進み、秋寺務法務の宣を受く、三年職を辭し、寬元元年再任し、明年諸職を辭す、建長元年詔により三たび職に復す、文永五年十一月二十四日寂す、壽七十七、（本朝高僧傳）

リヨーエ　良惠（一四二五）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、良惠は其鄉貫詳ならず、出家の後良辨に師事して華嚴宗を學び、天平神護元年東大寺別當に任す、寂年及壽缺く、（東大寺別當次第）

リヨーエ　良惠（二二五九—二三三四）〔融通念佛宗〕攝津平野大念佛寺の第四十三代なり、良惠字は舜空、攝津東成郡北花田の人なり、出家して大念佛寺第四十二代良實崇嚴上人に師事して法脈を續く、萬治三年本山大念佛寺に進み、殿堂の再建を經營す、蓋し元和元年大坂夏の役に大念佛寺殿堂兵火に罹り燒失す、當時の住持第三十六代良說道和上人末吉孫左衞門等に謀り、再建を企て未だ成らずして寂す、師遺志を繼きて經營す、寬文元年二月大念佛寺大原南坊と本末の爭論あり、師江

戸奉行所に至り本理を辨明す、奉行所の覺書に曰ふ、城州大原由南坊と攝州平野大念佛寺と本末に付て異論裁判の寫、一、融通念佛は南の坊開山良忍上人相初め候段紛れ無く候然りと雖中絶の處法明上人再興して大念佛寺に住して本寺爲り萬事可守先規事、一、大念佛寺宗門修行天台宗と各別たるの條不可爲末寺雖然良忍相傳之流に候間大念佛寺住持變り候節は南坊へ使僧を遣し其上南坊より使僧を遣し互に可相通事、右趣注今已後可守之依之双方へ此證文可出置事、寛文三年八月六日板倉阿波守井上河内守云々とあり、同年三月梁椽二十間の大殿堂を建立す、六年十月十五日不斷念佛を開く、七年十月十五日錬供養修行を始む、九年三月一日職を退き、十六年花田村に舜空寺を建立し隱捿す、延寶二年七月四日寂す、壽七十六歲なり、

リヨーエ 良惠 一八〇八 〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺の第二代なり、良惠字は嚴賢、俗姓は橘氏名は輔元といふ、堀川天皇嘉承二年を以て山城醍醐に生る、長承元年良忍の法を繼いてより久安四年に至る十七年間大念佛寺に住し、同四月三日寂す、著作融通念佛和讃あり、四萬三千徧の行者と云ふ、師晩年居を攝津神峰山に搆へ、佛號の數をとるに赤小豆(アヅキ)を以てし其殘餘を菴の傍に散布す其跡今に赤色の土となり、小豆坂と稱すと傳ふ、(大念佛寺舊記、攝津名所圖繪)

リヨーエ 良懷 二一〇五 〔淨土宗〕下野近龍寺の開山なり、良懷は本蓮社泼念と號す、出家して良榮に淨土敎を學び遂に其法を嗣ぐ、後下野都賀郡近龍寺開山となる、文安二年十月七日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエイ 良永 一九九〇 二〇四六 〔臨濟宗〕京師建仁寺の禪僧なり、良永字は相山、俗姓藤原氏なり、西禪寺無着緣の法を嗣ぎ、建仁寺に住す、晩年祥雲菴に退休す、至德三年十二月二日寂す 壽五十七、一說に八月五日寂す、壽六十八、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳

リヨーエイ 良永 二二四五 二三〇七 〔眞言宗〕紀伊金剛峰寺の僧なり、良永字は賢俊、俗姓は宗氏對島刺史の子なり、高野山に登り妙齡にして僧となる、中性院に居りて密乘を習學し毘尼を志す、偶々對馬に歸りしに明忍律師其邑に寓居せり、師之に謁し其示誨により山城槇尾山に登り、慧雲に師事して戒律を學ぶ、慶長十五年慧雲に從ひて沙彌戒を受け、翌年三月自誓進具す、翌年三月高野山に歸へり諸緣を絕ちて屛息す、山口修理太夫某師に歸依すること深く精舍を建てんことを請ふ、師乃ち山中に地を相し東大寺の重源が幽棲せし所に靈嶽山圓通寺(俗に新別所と稱す)を刱し、四衆に說戒し且つ餓者病者を救恤す、師河內の睿福寺堂塔の廢壞せるを見て檀越に勸めて修繕す、正保四年病にかゝりて寂す、壽六十三、臘三十六、遺骸を圓通寺に瘞むる、師の戒法を嗣く者眞政等若干人あり、これより高野山新別所に師の後を繼いて戒律を修する者、常に絕えさるとゝなりたり(本朝高僧傳、高野春秋)

リヨーエイ 良榮 二一〇八 二一五八 〔曹洞宗〕下野元性院の開山なり、良榮字は大有、近江の人、俗姓は源氏なり、十二歲にして永源寺に投して出家し、普く名宿に歷參して崇芝性岱の法を嗣ぐ、下野の佐野に到り元性院を創し總持寺に出世す、明應二年石雲寺に住す、同七年三月十日寂す、壽五十一、(日

本洞上聯燈錄)

リヨーエイ　良榮　二〇一二/二〇八三　(淨土宗)下野圓通寺の開山なり、　良榮號は高蓮社理本、奥州磐前郡小阿里の人、俗姓は石川氏なり、十一歳にして出家し聖觀に師事して法を嗣ぎ、始め鎌倉に留る、應永九年下野國芳賀郡に於て圓通寺を創す、其門流を大澤流と云ふ、著作大經鈔見聞、論註記見聞等あり、應永三十年六月二日寂す、壽七十二歲、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

リヨーエン　良緣　(……)　(臨濟宗)山城西禪寺の禪僧なり、　良緣號は無着、一山禪師の下に參究し、後元に渡り古林茂一山萬清拙澄等に謁す、元に留ること二十餘年なり、清拙澄東渡の後巨福山第一座となる、後檀越藤原氏に請はれ西禪寺に住す、示寂の年時缺く、著作新羅箭あり、自家の詩集なり、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

リヨーエン　良緣　二三三二/……　(淨土宗)江戸來迎寺の開山なり、　良緣は宗蓮社傳譽と號す、法を呑龍に嗣ぎ、江戸牛込に來迎寺を剏して開山となる、萬治三年四月二十一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエン　良緣　二二四九/……　(淨土宗)奥州圓樹寺の開山なり、　良緣は親蓮社含益と號す、奥州鹿角の人、專稱寺九代良輿に師事して法を嗣ぎ、同國磐前郡圓樹寺を開く、天正十七年三月二十六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエン　良圓　二三一四/……　(淨土宗)奥州飯命院の開山なり、　良圓は萬蓮社可頓と號す、俗姓は宮田氏奥州宮城郡の人なり、出家して良秀に事へ遂に其法を嗣ぐ、後郡の梨付村に飯命院を剏して開山となり、承應三年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエン　良圓　二二九九/……　(淨土宗)出羽一心院の開山なり、　良圓は滿蓮社一廓と號す、出家して良信に法を嗣ぎ、出羽大舘に一心院を開き所承の教を弘む、寛永十六年二月二十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエン　良圓　(一九七四)　(天台宗)近江園城寺の別當なり、　良圓は延慶二年十二月三井寺の別當となり、正和三年拜堂す、其死沒の年時缺く、(三井續燈記)

リヨーエン　良圓　二〇〇五/二〇八五　(曹洞宗)下總永德寺の開山なり、　良圓字は明菴、出羽の人、北條政信が子道叟禪師の姪なり、貞和四年四月八日を以て生る、十三歲にして父に携へられて陸奥の永德寺に至り道叟に謁して出家す、後諸方を歷遊し總持寺峨山に謁し侍者となる、留ること五年にして皈り道叟に省覲す、道叟師の來るを喜び代て住持せしむ、師竊に遁れて玉造郡に至り花淵山の下に菴居す、後羽後の莊内に至る一山あり洞瀧と云ひ瀑布迸出す、師其勝地を喜び茅を結で居す、上野の介佐藤實信其子正信來りて弟子の禮を執り其宅を寺と爲す、號して總光寺と曰ふ時に至德元年なり、師此に住すること二十年、應永十年二月弟子湖月に席を付し、行化して下總臼井の莊に往く、郡主某師の道望を崇て治所に就て寺を建て迎請す、師辭することを得ずして之に應じ報恩山永德寺と名く、二十四年の春事を謝して出羽に皈り龍山に菴居して終焉の計を爲す、應永三十二年七月二十七日寂す、壽八十一、(日本洞上聯燈錄)

リヨーエン　良圓　ケンショー顯證を見よ、

リヨーエン　良衍　一九八五……　〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、　良衍は實衍後覺靜泉の三師に學業を受け、頗る天台の義理に通す、嘉元年中園城寺平等院八講の第三日講師となる、正中二年九月廿七日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

リヨーオー　良雄　二二九五 二三五三　〔天台宗〕近江比叡山青龍寺の僧なり、　良雄俗姓は富賀見氏、大和十市郡の人なり、母長谷の觀世音に嗣を禱り、異夢を感じて師を生む、三歲にして父母を喪ひ、祖父母に養育せらる、十九歲比叡山黑谷に登り青龍寺實傳に師事し度を受く、實傳寂後遺命により青龍寺に住し、鞍馬の麓なる然譽を問うて淨土敎を受け、爾來專ら淨土敎に意を傾け、日課念佛三萬聲一日も怠るなし、元祿六年九月十日西向端坐して寂す、壽五十九、弟子良道あり

リヨーオー　良雄　二四三八 二四九九　〔眞宗〕越前南條郡金粕村憶念寺の住持なり、　良雄字は德母、別號は金洲と稱す、幼にして同國の深勵に就き、又京師に從ひ往くこと多年、旁顯密諸敎を獵涉す、靑山侯嘗て其爲人を愛し徵して其學を勵ます、文化四年の春其寺火災に罹り一山燒失す、同十年學成て寺に歸へり力を再興に竭し、日ならずして成り輪與舊に倍す、爾後笈を負ひて來る者門前に市をなす、師大に宗風を演へ痛く邪解を排す、佛祖の眞敎を述へ以て道俗を化す、又梵文を善くす、本山學徒にして梵文を學ふもの多く其門に出つ、文政十一年九月二十三日大谷大法主師を延きて擬講となす、尋きて事を謝して退老し佛行房と稱す、天保十年淨土見聞集を講し、七月十三日夜急に病に罹り廿日寂す、壽六十二、寺の東隅に葬むり本山嗣講を贈る、師一生に講するところ八囀聲、倶舍論、因明大疏、唯信鈔文意、成唯識論、心經幽贊、淨土見聞集等なり、（碑銘、眞宗史料）

リヨーオー　良雄　二四〇四 二四七三　〔眞言宗〕薩摩興金寺の僧なり、　良雄字は浩然、號は如蠖と云ひ、別に穆如の號あり、俗姓は橋口氏、薩摩川內隈城の人なり、九歲にして興金寺に投じて祝髮受戒す、筆翰を好み董其昌を慕ふ、嘗てその金剛經の眞蹟を得之を學びて得る所あり、興金寺は京都智積院の法籍に係るを以て稍長じて京都に上り、居ること數年諸名僧と往來し暇あれば臨摸倦ます、其昌より米元章に遡り益々得る所あり、文化三年下野出流山に住し居ること六年、去りて四方に流寓し道を修むるの餘筆翰を以て娛みとす、薩摩侯師を重んずること甚だしく、室を作りて幽棲の處とせんとすれども辭して受けず、文化十二年上野に遊び病みて寂す、壽七十、（續近世叢語）

リヨーオー　良雄（二〇六〇）〔曹洞宗〕出羽正應寺の開山なり、　良雄字は無等、出羽の人俗姓藤原氏なり、幼年出家して月泉良印を師とす、戶庭に徧歷して又月泉の許に皈り其法を嗣ぐ、初め補陀寺に住し正法寺に遷る、後退きて出羽に正應寺を開く、寂年欠く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーオー　良雄（二二五二）〔淨土宗〕羽前常念寺の開山なり、　良雄は寂蓮社舜翁と號す、岩城の人なり、良潜に師事して其法を嗣ぎ、羽前山形に常念寺を開く、永祿中其所在を失ひ終るところを知らず、（淨土總系譜）

リヨーオー　良雄（……）〔曹洞宗〕下野大中寺の禪僧

なり、良雄字は韓嶺、初め諸老に徧參し朴堂宗淳に依りて入室し、後席を繼ぎて下野大中寺に住す、寂年並に壽缺く、法嗣建室宗寅あり、(日本洞上傳燈錄)

リヨーオー 良應 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第十一代なり、良應は讃蓮社文翁と號す、其郷貫詳かならず、良迦に師事して淨土敎を學び、其席を繼ぎて圓通寺に主となる寂年壽欠く、(淨土總系譜)

リヨーオーイン 良應院 ニチサン日產を見よ

リヨーオン 良穩 二二九〇 〔淨土宗〕出羽本覺寺の開山なり、良穩は安蓮社淵龍と號す、武藏の人、良興に師事して法を嗣ぎ、出羽村山郡に本覺寺を創して開山となる、天正十八年三月二十五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーカ 良可 (……) 〔淨土宗〕奧州淨應寺の開山なり、良可は貞蓮社圓秀と號す、奧州津輕の人なり、良大に師事して淨土敎を學び州の豐間に淨應寺を開く、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーカ 良迦 (……) 〔淨土宗〕下野國圓通寺第十代なり、良迦は海蓮社性海と號す、其郷貫詳かならず、良岳に師事して淨土敎を學び、其席を繼ぎて圓通寺に住し盛んに所承の學を弘め、且其廢頽を與し中興と稱せらる、寂年壽缺く、門下に良智良應良興良玉の四人あり、(淨土總系譜)

リヨーガ 良雅 (……) 〔眞言宗〕山城山科松本大敎院の律師なり、良雅は少輔の阿闍梨と稱す、範俊の入室上足なり、大敎院及び大乘院に住す、寂年及び壽缺く、付法の弟子定海、明寂の二人あり、(後傳燈廣錄)

リヨーガ 良賀 二二七四 〔曹洞宗〕武藏永源寺の開山なり、良賀字は大鐘、久しく梅叟香に參して心印を享け、天正十一年衆請により慧源寺に主となり、同十五年龍穩寺に遷る、文祿元年島田氏の請を受けて坂戶に永源寺を剏し、次に最乘寺に移り、再び龍穩寺を領す、慶長十九年正月二十八日寂す、法嗣朝谷是暾あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨーカイ 良海 一八五七 一八七八 〔眞言宗〕山城醍醐山第二十六代の座主なり、良海は太政阿闍梨と稱す、九條太政大臣實公の子、久我太政大臣雅實の猶子なり、元海僧都の法燈を嗣ぎ元久二年七月二十七日詔して醍醐山二十六代となり、即日官符を降し十二月十五日拜堂す、建永元年病を得て職を退き、建保六年八月二十九日寂す、壽二十二、(續傳燈廣錄)

リヨーカイ 良海 (……) 〔淨土宗〕某寺の僧なり、良海字は如眞、伊勢の人なり、泉涌寺眞一上人に從て具足戒を受く、後然師に從て宗義を繼く、道化盛なり、示寂の年月日缺く、(鎭流祖傳)

リヨーカイ 良海 センオー詮雄を見よ

リヨーカイ 良偕 (……) 〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり、良偕字は南堂と云ふ、大同初に參して法を嗣ぎ、建仁寺に主となる、寂年缺く、(延寶傳燈錄)

リヨーカク 良覺 二[illegible]三一 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、良覺は良禪和尙に從ひて業を受け、應安五年六月立義者となり、學譽一時に擧かり學徒多く其下に集まる、爲めに山衆の嫉を買ひて殺さる、時に應永四年七月廿五日なり、壽缺く、(三井續燈記)

リヨーカク　良覺（一九一四）〔眞言宗〕紀伊高野山の學僧なり、良覺は紀伊在田縣の人、日輪寺親性に師事して秘密灌頂を受け、經律を練貫して博辯の譽あり、華王院に住す、建長の初年高野山の檢挍を司とり、法眼に任ず、六年檢挍職を辭し、其終るところを知らず、（本朝高僧傳）

リヨーカク　良覺（……二三〇六）〔淨土宗〕山城淨華院第三十八代なり、良覺は大蓮社皓譽、宗吟、雙阿等の號あり、良隨に師事して淨土敎を學び、其席を繼ぎて淨華院に住す、後西京專福寺の開山となり、又中京生蓮寺中興となる、正保三年二月二十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーガク　良岳（……）〔淨土宗〕下野圓通寺第九代なり、良岳は興蓮社順利と號す、良冏に師事して淨土敎を學び、席を繼ぎて圓通寺に主となる、寂年壽缺く、嗣法の弟子に良迦あり、（淨土總系譜）

リヨーカン　良鑑（……二一〇五）〔淨土宗〕磐城專稱寺第三代なり、良鑑は照蓮社理中と號す、出家して良頓に法を嗣ぎ、席を繼ぎて專稱寺第三代となる、文安二年二月晦日寂す、門下に良察あり、（淨土總系譜）

リヨーガン　良巖　ジツワン慈觀を見よ

リヨーギ　良義（二二六〇）〔曹洞宗〕上野長覺寺の開山なり、良義字は通海、出羽の人、日泉良印に依り得度し諸方に遊ぶ、數年にして再び月泉を省し、服勤七年、月泉の寂後關東に遊ぶ、上野の檀越高尾邑に長覺寺を建て、師をして之に居らしむ、武藏の長興寺、常陸天德寺等皆師を請して開山となす、寂年缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーキン　良均（二一一八／二二〇一）〔曹洞宗〕武藏金剛寺の開山なり、良均（一に良鈞）字は節菴、俗姓は岡部氏武藏足立郡の人、十八歲同國龍穩寺泰叟を禮して薙髮し、天菴によりて具足戒を受け禪定を學ぶ、七年の後出でゝ諸老宿に謁し龍穩寺に歸へり雲岡に參し記室となる、又諸方に徧參して青松寺に喜州玄欣に參して法を嗣ぎ總持寺に出世し青松寺龍穩寺等に歷住す、巖槻の城主太田三樂の家臣田中某邸宅を捨てゝ寺とし師を延きて之に居らしむ、名けて金剛寺と云ふ、天文十年十一月二十三日寂す、壽八十四、法嗣泰翁德陽、天室禪睦の二人あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーギン　良吟（……）〔淨土宗〕下野安樂寺の開山なり、良吟は其鄉貫詳かならず、出家して良信に法を嗣ぎ、下野小山に安樂寺を開く、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーギン　良誾（……）〔曹洞宗〕越中立川寺の禪僧なり、良誾字は誾堂、能登の人、大徹宗令によりて薙髮し其法を嗣く、總持寺に出世し越中立川寺に移り、五年の後法川寺に老を養ふ、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーキヨー　良慶（一七六七／一八五一）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、良慶は其鄉貫詳かならず、良明に師事して台敎を學びて一流を興す、後敕を蒙り法華品々各論義之鈔を製す、文治五年十一月眞圓を拜して灌頂壇に登り、正治二年本寺大學頭となり、敕して法眼に敍せらる、建久二年二月二十九日寂す壽八十五、（三井續燈記）

リヨーキヨー　良慶（……）（天台宗）近江園城寺の僧なり、良慶俗姓は藤原氏、太政大臣敎實の子道昭大僧正の

族弟なり、圓城寺の長吏となり大僧正に任じ、三山の檢校を通し台密を以て衆に崇さる、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

リヨーキヨー　良慶　（……）　曹洞宗、下野大中寺の禪僧なり、良慶字は快旻、海花実智に師事して法を得、席を嗣ぎて下野大中寺に住す、寂年及び壽缺く、法嗣天嶺呑補あり(日本洞上聯燈錄)

リヨーキヨー　良慶　（二一一三）　淨土宗、常陸常福寺第四代なり、良慶は賢蓮社暜譽と號す、其鄕貫詳かならず、明譽了知上人に師事して法を嗣ぎ、常陸那珂郡常福寺の席を受けて第四代となる、寂年壽缺く、法嗣二人あり了月、聖欽、辨譽これなり、(淨土總系譜)

〔考〕良慶は享徳の頃の人なり

リヨーキヨー　良慶　（二四九〇）　〔眞言宗〕武藏江戸大護院の僧なり、良慶一名は泰俊と云ひ、號は雲巣、別號餐霞と云ふ、江戸淺草御藏前の大護院に住し、書畫を以て聞ゆ、其事蹟詳ならず、(諸家人名錄)

〔考〕良慶は天保頃の人なり、

リヨーキヨー　良經　（……八）　〔淨土宗〕出羽壽光寺の開山なり、良經は觀蓮社貞吟と號す、出羽深澤の人、良性に師事して法を嗣ぎ州の金谷に壽光寺を剏す、萬治元年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーキヨー　良教　（二二八四）　淨土宗、奥州大善寺の開山なり、良教は頓蓮社と號す、良與に師事して淨土教を學び津輕に大善寺を開く、寬永元年四月寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーキヨー　良恭　（二三八〇／二四五九）　〔新義眞言宗〕安房寶珠院の學僧なり、良恭字は孝完、安房長狹郡吉保村高梨氏の子なり、幼にして出家し圓鏡寺に留り、三十歲智積院に登り果春阿闍梨に灌頂を受け、後東皈して大聖院に住し、安永八年六十歲にして再び智積院に登りて學業を力む、五年の後化主の求めにより釋摩訶衍論の講席を開き博識雄辯人を驚かせり、乃ち化主鑁啓より黃色の法衣を着用することを許さる、動潮僧正より事相を傳承し、寬政二年越前の瀧谷寺に移住し僅に五月にして退き、安房に皈り寶珠院に住す、寬政十一年一月幕府に出て、將軍家齊に謁し、其命に依て愛宕圓福寺に晋む同月十六日同寺に寂す、世壽八十、其著作學侶教育釋論講錄若干卷、住心品疏試講廿五卷、五教章拾義抄十三卷、十卷章講錄十卷、起信論義記筌蹄三卷、理趣經密談三卷、百法問答抄收解二卷等あり、(新義眞言宗史料)

リヨーキヨー　良曉　（二三二二）　〔淨土宗〕磐城大龍寺の開山なり、良曉は照蓮社拾傳と號す、俗姓は高橋氏、奥州磐前郡の人なり、出家して眞秀に淨土教を學び遂に其法を嗣ぐ、後州の瀧尻に天龍寺を開きてこれに住し、盛んに所承の學を弘む、永應元年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーキヨー　良曉　（一九一五／一九八八）　淨土宗、鎌倉光明寺第二代なり、良曉字は寂慧、俗姓は藤原氏、石見の人なり、(一說相模白旗の人)、父は圓尊禪師と云ひ、從三位皇太后宮太夫資賴の孫にして良忠上人の家弟なり、建長七年に生る(一說建長四年)、文永九年十八歲にして比叡山に登り、東塔の仙曉に業を受け、十九歲得度受戒し諸師を歷訪して顯密の教義を講

究す、後淨土教を弘はんとして遠く相模鎌倉に下り、光明寺良忠上人を問ひ師資の禮を執る、上人器許して一家の蘊奧を傳へたれば親附の弟子となりて謹事す、後相模白旗に幽棲して念佛修行したれば其師の門流を白旗流と云ふ、正和元年二月傳通記見聞選擇鈔十五卷を作る。同二年下總の某氏に請ぜられて往化し稱名寺を開き、講話の餘口傳鈔を作る、三年を經て白旗に回り、決疑見聞論註鈔等を作る、元亨二年十月述聞鈔を作る、嘉曆三年二月微疾あり三月朔日一偈を書して曰く、顯露窮レ事、七十四夢、清天無雲、法界洞朗、と、脫然として寂す、壽七十四、法臘五十七なり、弟子定慧、慧光等皆一方に教化盛んなり、（淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄）

良曉上人

リヨーギヨー　良堯（二〇八三）〔淨土宗〕下野圓通寺第二代なり、良堯は舜蓮社聖欽と號す、幼にして出家し、良榮に師事して淨土教を學び、遂に其席を繼ぎて圓通寺に主となる、寂年缺く、（淨土總系譜）

リヨーギヨク　良旭（……　）〔曹洞宗〕出羽向川寺の開山なり、良旭字は日山、信濃の人、幼にして業を大方に受け、遊方して越中眼日山に至り大徹宗令に依り分座となる、出羽新城府主向川寺を開き師を請ず、師大徹を開山となし自ら二代に居る、後總持寺に遷り道譽高し、越前洞昌寺、奥州實相寺等皆師を第一代となす、某年洞昌寺に寂す、世壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーギヨク　良玉（……　）〔淨土宗〕山城淨華院の僧なり、良玉字は僧禿、と云ふ郷貫詳かならず、僧海等珍に師事して淨土業を修し、其法を嗣ぎて後淨華院及金戒光明寺に住す、寂年及壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーギヨク　良玉（　　）〔淨土宗〕下野圓通寺第十三代なり、良玉は閑蓮社祖關と號す、良迦に師事して法を嗣ぎ、法兄良興の後を受けて圓通寺に主となる、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーク　良求　二三二六……〔淨土宗〕奥州春照寺の開山なり、良求は專蓮社門的と號す、俗姓は小林氏奥州宮城郡の人なり、法を良秀に嗣ぎ郡に春照寺を開く、寛文六年八月寂す、（淨土總系譜）

リヨーグ　良弘（……　）〔眞言宗〕山城勸修寺の學講なり、良弘は中納言法印といふ、良勝の傳法を得て小野の良匠となる、付法二人良智眞慶と稱す、（後傳燈廣錄）

リヨーグ　良弘　二二三一……〔淨土宗〕奥州増福寺の開山なり、良弘は顯蓮社天蘂と號す、出家して乘慶良觀に法を嗣

ぎ、奥州袰前郡白十村に増福寺を創して開山となる、文明三年三月十六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨークー 良空 二三二九／二三九三 〔眞宗〕伊勢三重郡川原田村常超院の住持なり、良空は五天と號し、別に慧日院と號す、伊勢の人なり、夙に開祖親鸞上人の傳の詳かならざるを憂ひ高田の寶庫に入り、眞佛顯智等の古記錄を捜索し、高田正統傳三巻を編す、享保十八年寂す、壽六十五、著作正統傳三巻あり、（眞宗史料）

リヨークー 良空 ……／一九五七 〔淨土宗〕山城尊勝寺の開山なり、良空字は慈心、俗姓詳ならず、記主禪師に從て專ら宗要を究む、常に小幡に居して法門を弘通す、一宇を創し尊勝寺と號す、世に之を小幡派と云ふ、山城三派の一なり、正應元年了恵を勸諭して曰く、先師の鈔記するところ皆整備す、但し闕くる所は大經鈔のみ、親しく稟承の者は披閲に闇からず、末學に至て定て文義に迷ふべし、公先聞を記して末學を資せよ了慧謙辭したるも強て請て遂に成る、時に永仁五年二月なり、同年秋七月八日示寂す、（鎭西正傳、淨土總系譜）

リヨークー 良空 二〇二三／二〇七五 〔曹洞宗〕出羽龍門寺の開山なり、良空字は在山、出羽莊内の人、十九歲にして教院に投して薙髮し、天台の止觀を學べとも疑ひ釋けず、遂に禪門に入り正法寺の月泉良印に師事して典座となり、應永元年磐井郡瀧原村に遊び其地に威光山龍門寺を剏す、月泉良印の寂後正法寺の席に補し、一住三年龍門寺に歸隱す、應永二十二年三月一日寂す、壽五十三、臘三十四、（日本洞上聯燈錄）

リヨークー 良空 ジョ：ショー淨勝を見よ、

リヨークン 良薫 （二二七〇） 〔淨土宗〕奥州成德寺第十五代なり、良薫は其郷貫詳かならず、良憲に師事して法を嗣ぎ、成德寺に主となる、寂年壽缺く、門下の高弟に良林あり、（淨土總系譜）

リヨークン 良薫 二二六六…… 〔淨土宗〕常陸常林寺の開山なり、良薫は重蓮社白玄と號す、良信に師事して淨土教を學び遂に其法を嗣ぐ、後常陸新治郡柿岡に常林寺を剏して開山となる、慶長十一年寂す、世壽詳かならず、（淨土總系譜）

リヨークン 良訓 （……） 〔曹洞宗〕下野瑞光寺の禪僧なり、良訓字は雪光、益之正謙の法を嗣ぎ下野瑞光寺に主となる、寂年及び壽缺く、法嗣只山宗友あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨークワイ 良快 一八四五／一九〇二 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、良快は後法性寺禪定兼實の子、母は修理大夫頼輔の女なり、出家して尊忠慈圓覺什快雅の諸師に台教を學び、寛喜元年天台座主に任ず、仁治三年十一月十七日寂す、壽五十八、（天台座主記）

リヨークワイ 良快 リンゲー倫藝を見よ、

リヨーカク 良矐 二二八…… 〔淨土宗〕陸前悟眞寺の開山なり、良矐は鑑蓮社と號す、奥州楢葉の人、俗姓は猪狩氏なり、出家して法を良鄕に嗣ぎ、仙臺に悟眞寺、成覺寺を創めて盛んに所承の教を弘む、文和七年九月二十日寂す、壽缺く嗣法二人良然良勝これなり、（淨土總系譜）

リヨークワン 良寬 二四一八／二四九一 〔曹洞宗〕越後國上山の奇僧なり、良寬字は大愚、小字は榮藏、俗姓山本氏、越後出雲

崎の土豪左門常は秦雄の長子なり、左門一に伊織と稱し落髮して以南と號し頗る學殖あり、嘗て京師に至り皇室の振はさるを慨し、天眞錄を著はし終に悲憤し水に入りて死す、師幼にして穎異なり、十八歲家を弟由之に附し自ら尼瀨の光照寺玄乘に投し度を受く、幾もなく出遊し備中玉島圓通寺國仙禪師の室に入り其法を嗣ぐ、二十餘年にして國に皈り國上山に小菴を營み、五合菴と云ひ禪行を事とす、道暇詩歌に遊し殊に書を善くす、龜田鵬齋北遊し師に面晤して草書の妙を傳へたりと云ふ、晚年島崎村の入木村某の別莊に迎へらて供養を受け、奇行甚多し、天保二年正月六日寂す、壽七十四、隆泉寺に葬る、詩歌集一卷あり、一詩を錄せん曰ふ、乞食到二郭市一路逢舊識翁、問レ我師胡爲住二彼白雲峯一、我問師胡爲老二紅塵中一、欲レ答兩不レ道、夢破五更鐘、(碑文、良寬上人傳)

リヨークワン 良冠 ……二〇八八 〔淨土宗〕奥州寶鏡寺の開山なり、良冠は寶蓮社と號す、其鄉貫詳ならず、良觀に師事して其法を嗣ぎ、楢葉大谷村に寶鏡寺を創して開山となる、正長元年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨークワン 良觀 ニンショー忍性を見よ、

リヨーケー 良冏 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第八代なり、良冏は聖蓮社乘感と號す、其鄉貫詳かならず、圓通寺七代良卜に師事して淨土敎を修め、終に其席を繼ぎて圓通寺に主となる、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーケー 良冏 ……二二三七 〔淨土宗〕甲斐阿彌陀寺の開山なり、良冏は辨蓮社長譽と號す、辨譽に師事して法を嗣ぎ甲府に阿彌陀寺を開く、天正五年三月五日寂す、壽缺く、

リヨーケー 良桂 (一九七一) 〔日蓮宗〕山城寶塔寺第二代なり、良桂は初め眞言宗の僧なり、深草極樂寺に主たりしが日像の敎を受けて日蓮宗に改む、時に延慶三年なり、日像の寂後極樂寺を改めて寶塔寺鷄林院と呼び、日像を仰で開山となし、自ら第二代となる、寂年缺く、(本化別頭佛祖統紀)

リヨーケー 良繼 (一九〇一) 〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、良繼は其俗姓生國詳かならず、出家して高順に師事し唯識の旨を受け良印に法を嗣ぐ、仁治二年維摩會の講師となる、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

リヨーケー 良景 ……二一六二 〔曹洞宗〕周防龍華寺の禪僧なり、良景字は西湖、出家して英巖希雄に師事して印記を受け、文明三年英巖の席を踵きて周防龍華寺に住す、明應二年席を法嗣孝山に附し闘雲寺を主とること三年、文龜二年三月二十五日寂す、塔を紗喜寺に建つ、法嗣孝山祚養、九江慈淵の二人あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨーケン 良賢 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第十四代なり、良賢は念蓮社存當と號す、良興に師事して淨土宗を修め、良玉の後ちを繼ぎて圓通寺に主となる、寂年壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーケン 良賢 ……二二二七 〔淨土宗〕伊勢悟眞寺の開山なり、良賢は其鄉貫詳かならず、良順に師事して淨土敎を學び伊勢白子悟眞寺を開く、應仁元年七月十六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーケン 良賢 ジモー慈猛を見よ、

リヨーケン 良憲 ……二二七〇 〔淨土宗〕下野圓通寺第四代な

り、良德は一蓮社了圓一可と號す、俗姓は猪狩氏奧州楢葉の人なり、出家して良德に淨土教を學び終に其法を嗣ぎ、席を繼ぎて圓通寺第四代となる、後奧州信夫郡福島に到岸寺を剏して開山となり盛んに所承の學を弘む、慶長十五年二月二十日寂す、壽缺く、門下の高弟に良廣、良薫、良鑁、の三人ありて共に皆一時の碩德なり、（淨土總系譜）

リヨーゲン　良源　一六八五—一七三七　〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、良源號は石山、其傳詳かならず、出家して密教を學び、承保元年東寺長者の宣下を蒙る、後僧都に任し、承曆元年八月二十四日寂す、壽五十三、（東寺長者補任）

リヨーゲン　良源　二〇一三—二〇八七　〔曹洞宗〕丹波洞光寺の禪僧なり、良源字は澄照、俗姓は藤原氏、越前波多野の豪族なり、文和三年正月十八日を以て生れ、六歲にして丹波寶鏡山洞光寺天鷹和尙に投じて出家す具し、刻苦參究久しうして印可を受け、諸嶽山に住し尋いで洞光寺を領す、應永二十四年九月二十日寂す、壽七十五、（日本洞上聯燈錄）

リヨーゲン　良源　一五七三—一六四五　〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、良源は俗姓木津氏にして近江淺井郡の人、母は物部氏の出なり、延喜十二年九月三日に生る、後母に從ひて同國滋賀郡に居住す、遊行の途次梵釋寺に來り、覺阿闍梨の勸めにより十二歲の時比叡山に登り　寶幢院日燈の房に往き理仙和尙に師事す、經論を讀誦して倦まず、延長六年十七歲にて出家剃度す、未た受戒に及はすして理仙長逝す、依て同年四月尊意和尙に從ひて登壇受戒す、承平七年興福寺維摩會講師基增に從ひてその寺に行く、師選にあたりて奈良の義昭と法を論し大に能辯の名を博す、太政大臣九條公師の人となりを聞きて大に敬慕し深く結緣す、天曆三年太政大臣薨す師其喪に侍す、九條右大臣遺囑を受けて亦師に就く、師山に歸らんとすれとも右大臣之を許さす、左大臣の諭告により終に師をして歸山せしむるに至れり、師乃ち楞嚴院にありて三百日護摩を修す、天曆四年勅を受けて東宮に侍し皇太子を鎭護す、天慶五年四十歲にて天慶寺別當覺慧和尙の解文により阿闍梨に補す、天慶八年九條右大臣楞嚴院に昇り法華三昧堂を以て師に寄す、堂は慈覺大師の入滅後住僧僅に一二輩のみなりしを師此に住するに及ひて四衆群集するに至れり、應和三年宮中にて法藏和尙と共に法華經の教理を論辯す、康保元年勅旨に依りて公家の爲に功德を修す、結願の日内供奉十禪師に補す、康保二年權律師に任し、同三年延曆寺座主に補す、時に五十五歲なり、師一山の興隆に力を盡くし堂塔を造營するもの頗る夥し、總持院の阿闍梨十三人を增し

慈慧大僧正

リヨー（良）ゲ

て十六人となし、又廣學竪義を始めて屢々無遮大會を設く、又文珠堂の燒跡に新堂を興す、座主補任の後久しからすして律師に轉す、安和元年に少僧都に進む、天祿二年四月十五日楞嚴院に於て始めて毎月二度の布薩を修す、同年五月十一日敕命を蒙り法務となる、天延元年十一月衆に戒を授くること二日なり、衆に白く、明日一日聞受戒を停止すへしと、衆之を怪む、翌日戒壇の天井墜落す、乃ち工に命して修繕せしめ二日の後再び戒を授く、衆皆其神通に驚くといふ、同十二年少僧都に轉し翌天延三年大僧都に昇る、貞元二年十二月廿一日僧正に補す、天元四年八月內裡火を失し天皇後院に移る、時に天皇不豫なり、師命を承けて法を修す、結願の日菩提子念珠、綾法服一對、沙金百兩、度者二人を賜ふ、同年廿六日再び帝不豫なり、師之を癒して功あり卅日大僧正に任し、比叡山に慧心院を建て御願所となす、永觀二年西塔法幢院を構營す、此冬師風痺を疾み山を下りて東阪弘法寺に居りて加養す、同三年正月三日口に念誦を絕たすして寂す、壽七十四、寬和三年二月十六日勅して慈慧と謚し給ふ、世に元三大師と云ふ、著作胎金念誦行記六卷、百五十尊口決十卷、九品往生義別義名通私記、被接義私記、三觀義私記、佛土義記、七聖義、五味義、常住金剛私記、金剛界念誦賦各一卷等あり、（群書類從六九、本朝高僧傳、元亨釋書、諸宗章疏錄）

リヨーコ　良故（二二四三）〔淨土宗〕奧州淨照寺の開山なり、良故は一蓮社興順と號す、奧州磐前の人、良興に師事して淨土宗を學び、後、州の日理郡に淨照寺を創して盛んに所承の敎を弘む、寂年壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーゴ　良悟（二三二一—二四〇二）〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、良悟字は無得、俗姓は山口氏岩代會津の人なり、甫めて十四歲大寧寺の忠恕に投じて薙染し、出てゝ黃檗山に上り木菴に見え、隱元を松隱室に拜す、延寶元年潮音禪師大慈館林二寺に禪風を揭ぐ、師良高と共に往きて之を從ひ參究怠なし、又宇治田原の月舟を訪ひて偈を呈し、貞享三年加賀實性寺明州の招に應して其席を繼く、晚年長門大寧寺の法泉菴に住し、深く門戶を掩ふ、寬保二年五月二十三日寂す、壽九十二、臘七十九、弟子には海淋、獨橋、無聞、無隱等六十二人あり著作語錄二卷、及び洞上佛祖源流贊世に傳ふ、

リヨーコー　良興（……　）〔淨土宗〕下野圓通寺の第十二代なり、良興は大蓮社炎雪と號す、其俗姓生國詳かならず、良迦に師事して淨土業を修めて其法を嗣ぎ、法兄良應の後を繼ぎて下野芳賀郡圓通寺第十二代となり、盛んに所承の學を弘む、寂年壽缺く、嗣法の高弟に良賢良燈の二人あり、（淨土總系譜）

リヨーコー　良興（二二四三……）〔淨土宗〕磐城專稱寺第九代なり、良興は源蓮社理順と號す、良大に師事して法を嗣ぎ、法兄良潛の席を繼ぎ專稱寺に主となる、天正十一年八月二十九日寂す、壽缺く、嗣法四人良緣、良穩、良故、良敎これなり、（淨土總系譜）

リヨーコー　良興（一四二二）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、良興は其俗姓生國詳かならず、出家の後良辨に師事して華嚴を學び、天平寶字五年東大寺別當に任ず、寂年及壽缺く、（東大寺別當次第）

リヨーコー　良高　二三〇九—二三六九　〔曹洞宗〕備中西來寺の中興なり、良高字は道山、號は德翁、武藏江戸の人、俗姓は藤原氏宇都宮の族、母は大曾根氏の出なり、十二歲吉祥寺離北重に投して童子となり、十五歲薙髮す、游方して遠江の初山に到り獨湛に見みえ、明年黄檗山木菴に依りて大戒を受け、去りて興禪寺月舟に參し、又薩涼寺鐵心に就き後鄕里に皈へり、館林に至り潮音に參し、入室して印可を蒙むる、時に二十五歲なり、尋て瑞聖寺に往き再び木菴に見ゆ、翌年秋月舟の加北に化を布くと聞き禮謁し服勤すると三年、館林に入りて再び潮音に見ゆ、延寶八年桑山南針禪師特に師をその寺に招きて分座說法せしむ、天和二年正泉寺に住す、翌年月舟を禪定寺に省し、衣法並に永平戒本を付せられ總持寺に升り、又正泉寺に歸る、時に備中定林寺虛席あり、出羽の刺史水谷氏師を聘して之に補せしむ、久しからずして加賀本多政長迎へて大乘寺を主とらしむ、元祿九年退きて備中明崎に居り、同年秋新見府に西來寺の古趾を得て之を重興す、府主關道空居士の歸依最も深し、玉島の圓通寺、矢野の龍洞寺、永壽寺、武藏德昭寺、甚兩慈雲寺等は皆師を開山に延く、寶永二年秋圓通寺に歸へり、明年秋美濃大慈寺に化を助く、同五年冬播磨久學寺にて病み、翌年春圓通寺に歸へり、二月七日寂す、壽六十一、臘四十六、西來寺に塔す、遺偈に曰く、大地山河、一堆塵埃、今日消盡、分明沒蹤、咄、著作續洞上諸祖錄、語錄等あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーコー　良果　二二七一　〔淨土宗〕磐城專稱寺第十一代なり、良果は貞蓮社專閑と號す、良拾に師事して法を嗣ぎ後席を繼ぎて專稱寺に主となる、慶長十七年六月一日寂す、壽缺く、法嗣一人あり良性と云ふ、（淨土總系譜）

リヨーコー　良光　……二二七八　〔淨土宗〕山城淨華院第三十六代なり、良光字は乍越、出家して良安に淨土敎を學び、嗣法の後淨華院に主となる、元和四年七月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーコー　良光　モンショー聞證を見よ、

リヨーコー　良廣　……二二五四　〔淨土宗〕奧州德林寺開山なり、良廣は乘蓮社と號す、下總の人、良憲に師事して淨土敎を學び、遂に其法を嗣ぐ、後奧州前原に德林寺を創して所承の敎を弘む、文祿三年二月四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーゴン　良欣　……二二三三　〔淨土宗〕陸前大念寺の開山なり、良欣は心蓮社察眼と號す、良拾に師事して淨土敎を學び遂に其法を嗣ぐ、後仙臺佐沼大念寺の開山となる、天正元年五月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーゴン　良欣　……二三二三　〔淨土宗〕陸前生因寺の開山なり、良欣は賦蓮社と號す、奧州八塚の人、良勝に師事して法を嗣ぎ、仙臺に生因寺を開く、寬文三年八月二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーゴン　良巖　二四〇二—二四七四　〔天台宗〕山城正敎院の僧なり、良巖字は靈玉、上野群馬の人、長野信濃守業政の裔なり、首め奈良に遊び法相を大同房に學び能く玄旨を稟け、寬政五年顯道和尚に投じて衣鉢を受け、顯密を精研す、六年唐土山に留錫して宗學研究の餘暇唯識百法論等を講じ、此冬上野下

リヨー（良）コ

野等に遊化す、嘗て金光明最勝王經を讀むこと數百卷、乃ち其會を結ぶ、又不動尊八千枚燒供を修する五遍、大般若經を謄する二百餘卷に至り、享和元年顯道の志を繼き菩薩戒經會疏を校して梓に壽す、二年武藏心光院に寓して四敎儀集註を講し、此歲冬園城寺に掛錫す、文化元年冬實相門主の禮請により正敎院に主となり、觀音玄疏記、十不二門指要鈔、即身義等を講す、二年法雨律師を請して戒師となし圓頓大戒を受く、三年園城寺に法華畧疏を講じ、五年洛西に四敎義集註を講ず、文化十一年七月疾に罹り二十九日寂す、壽七十三、師生前講懺の暇詩を好み又能く和歌を吟す、稿あり風烟遺塵と云ふ、著作菩薩戒經會分陰錄、四敎儀集註分陰錄、觀音玄疏講錄補、各三卷、法相義分陰錄二卷、止觀大意分陰錄、不動和讃、同淺略抄、觀音和讃、同海滴抄各一卷等あり、（顯道和上行業記）

リヨーサ 良佐（二〇四〇）〔臨濟宗〕京都寶幢寺第二代なり、良佐一に周佐に作る、字は汝霖、俗姓藤原氏遠江高園の人なり、少にして出家し、徧く講席に遊び宗說該通し、兼て詩文に通し聲譽あり、應安元年絕海津と共に明に入り、蘇州承天寺の記室となり、尋で五山の諸老と共に鍾山に入りて大藏經を點挍す、學者文人に逢ひて詩文を磨き翰林學士宋景濂師の文章を賞して其終りに跋す、太祖師及び絕海を召して熊野三山のことを問ひ恩賜甚だ渥し、洪武九年強海と共に皈朝す、將軍義滿使を和泉堺に遣し、師を迎へ要して法を普明國師に繼かしむ、康曆二年赤松義則の請に應し播磨の法雲寺に開堂す、此年義滿覺雄山寶幢寺を建て普明をして開山とす仍ち師命せられて席を補し、後幾何もなくして寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

リヨーサイ 良哉（……）〔臨濟宗〕三河華嶽寺の禪僧なり、良哉は尾張の人、出家して日向大光寺古月材禪師に參し、後駿河に下り白隱鶴に謁す、鶴禪師一見して曰ふ、文珠來れりと、數年の間其下に留り玄奧を究め許可せらる、後三河華嶽寺に住して宗風を擧揚し、尋て日向に往き再び古月材を問ひ唱和の詩あり、近江大圓院の請に應じ大慧禪師の書を提唱す、開題の偈あり、曰ふ活提錦囊獅子兒、虛空背上無二八騎一、大湖三萬頃秋水、一碧渺漫月滿時、後圓山宗德寺に寂す、詩偈數首傳ふ、維長維短松千樹、或曲或斜竹一叢、不レ許人來成二境會一、鳴レ鐘僧立夕陽中（華嶽寺）、鐵錫不レ曾誤二再來一、參陽人事字良哉、骨清堂上捲簾坐、雨後青山雲霧開、（再謁古月材禪師）（近世禪林僧寶傳）

リヨーサク 良作（二四七九／二五五二）〔曹洞宗〕山城心性寺の禪僧なり、良作字は坦山、號は覺仙、別號鶴巢と云ふ、磐城平藩士新井勇輔の長男なり、文政二年十月十八日を以て生れ、十五歲江戶に出遊し、昌平校に入り、兼ねて醫術を修む、二十歲にして榮禪和尚に遇ひ始めて佛敎に意を傾け出家す、風外禪師に謁し印可を受け、京璨禪師の法を嗣く、後京師に遊び小森某に遇ひ、西洋の科學を聞き、其實驗を主とするを見て大に感するところあり、他日佛敎を難する者は科學なるへしとなし窃に意を用ゆ、尾張八事山に登り正光眞人を問うて仙訣を受け乃ち江戶に皈り書を著はして一家の見を主張す、佛仙社を結び學徒の爲めに講演す、安政二年永平寺に瑞世し、翌三年山城心性寺に住す、幾もなく寺務を辭し退休す、明治

五年官教導職を置くに方り、師累進して少教正に至る、十二年帝國大學始めて印度哲學科を置き師擢てられて講師となる、十八年學士會院會員に選はる、二十五年曹洞宗管長缺くるにあたり、内務省の命により宗務を攝理し、且つ曹洞宗大學林總監となる、同年七月中風し、廿七日俄に筆を走らせて四方に告を發し、老漢即刻命終云々を記し、報告し了り泰然白髭を撚て寂す、壽七十四、師大悟徹底にして小事に拘泥せす、數々奇言奇行人を驚かせり、甞て六十初度に詩を作て曰ふ、明治己卯冬、臘月廿五日、甲子一周前、坦山此世出、と、人あり問うて曰ふ、此れ何躰なるか、師曰ふ、帳簿躰なり、著作首楞嚴講義六卷、無明論、心性論、惑病同源論、腦脊異躰論、心性實驗錄、老漢新參各一卷あり（曾文、香亭雅談）

坦山禪師

リヨーサツ　良察　……―二一二八　〔淨土宗〕磐城專稱寺第四代なり、良察は頓蓮社想譽と號す、專稱寺良[illegible]に師事して淨土宗を學び、遂に其席を繼ぐ、應仁二年四月二十六日寂す、壽缺く、門下に良處あり、（淨土總系譜）

リヨーサン　良讃　二〇三九―二〇九五　〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、良讃俗姓は藤原氏、家升の子なり、十五歲剃髮し具し良瑜道意の二師に就き、十六歲直に法眼和尙に叙し、公武修法の功により大小僧都及び大僧正に任せらる、正長元年六月勅して阿闍梨二人を積善院に賜ひ、永享五年本寺の別當となる、永享七年六月廿九日寂す、壽五十七、（三井續燈記）

リヨーサン　良算（……）〔眞言宗〕大和蘚嶽寺の僧なり、良算は關東の人、南北に遊學し常に法華を誦す、後金峰山に登り、蘚嶽寺に居りて專ら法華を持す、寂年及び壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーサン　良讃　……―二三〇五　〔淨土宗〕岩代一乘寺の開山なり、良讃は覺蓮社格傳と號す、常陸笠間の人、出家して良信に淨土教を學び、遂に其法を嗣ぐ、後會津に一乘感應二寺を建てゝ開山となり、盛んに所承の教を弘む、正保二年十一月二十日寂す、（淨土總系譜）

リヨーサン　良山　ギョークワン行觀を見よ、

リヨージ　良慈（……）〔眞宗〕近江錦織寺第十五代なり、良慈は廣橋前内大臣兼忠の季子にして、京極家仁親王の猶子たり、（本願寺通紀）

リヨーシツ　良室　エーコン榮欣を見よ、

リヨージツ　良實　……―二三一七　〔淨土宗〕磐城專稱寺第十三代なり、良實は眞蓮社爲達、又は眞導と號す、良性に法を嗣ぎ專稱寺に主となり、又州の信夫郡に滿願寺を剏して開山となる、明暦三年七月二十七日寂す、嗣法の弟子に良本あり、

（浄土總系譜）

リヨーシン　良心　一九八三……　〔浄土宗〕下總正定寺の開山なり、良心字は持阿、武藏埼玉郡[illegible]田の人、小太郎刑部行重の子なり、幼にして良忠上人の弟子性眞に師事し、弘安六年尊觀に謁して宗義を受け、同九年京師に上り始めて良忠上人に謁す、尋て上人に隨從して東下し、鎌倉秩父に歴遊す、遂に性眞より手印脈譜を受く、時に廿七歳なり、高聲寺第二代となる、正和二年下總葛飾古河大野正定寺を開く、後ち藤田流の本山となる、尋て小幡田村に無量壽寺を開き土塔を築造して傳ふるところの秘決を藏す、因て世に良忠の門流を土塔流といふ、尋て同國木村將修寺上總中野の神光寺を開く、元亨三年六月五日寂す、著作傳通記授決鈔（藤田鈔）等あり、（浄土總系譜）

リヨーシン　良心　二二七四……　（浄土宗）奥州天德寺の中興なり、良心は光蓮社閑空と號す、奥州行方郡の人、俗姓は安部氏なり、出家して良性に事へ遂に其法を嗣ぐ。後弘前天德寺の廢頽を興して其中興となり、慶長十九年七月寂す、世壽缺く、（浄土總系譜）

リヨーシン　良信（二二三三）　信濃の醫僧なり、良心は信濃の人、俗姓は秦氏、父久秋左近將監となる、師詞藻を善くし又醫に通ず　文祿五年畠山義統の命を受けて朝鮮に往き、和氣丹波二宗皆て用ふる瘰疬八穴の灸法及神應經を傳て皈朝す、寂年壽缺く、（皇國名醫傳）

リヨーシン　良信　二〇八五……　〔浄土宗〕越前西福寺の第二代なり、良信は越前の人、出家して良如に法を受く、顯密に通ず、道化盛なり、應永三十二年正月二十五日寂す、壽詳ならず、（鎭流祖傳、浄土總系譜）

リヨーシン　良信　二二九九……　〔浄土宗〕下野圓通寺第十五代なり、良信は深蓮社住關と號す、俗姓は玉造氏常陸田木屋の人なり。出家して良定に浄土教を學び、遂に其法を嗣ぎ江戸幡隨院の學頭となり、後下野那須郡烏山に善念寺を剏して開山となる、又圓通寺に住じ盛んに所承の教を弘む、寛永十六年五月十二日寂す、壽缺く、（浄土總系譜）

リヨーシン　良信　二三二九……　〔浄土宗〕陸前遍照寺の開山なり、良信は深蓮社靈殘と號す、俗姓は加藤氏岩代の人なり出家して良性に浄土教を學び、其法を嗣ぎて後仙臺に遍照寺を開く、寛文九年某月寂す、壽缺く、（浄土總系譜）

リヨーシン　良信　二〇八五……　（浄土宗）越前法福寺の開山なり、良信は越前の人、其俗姓詳かならず、出家して良如に師事し、其席を繼ぎて敦賀西福寺に住す、後州に法福寺寶治院を剏して開山となり、應永三十二年正月二十五日寂す、（浄土總系譜）

リヨーシン　良信　二〇九八～二一二八　〔曹洞宗〕薩摩龍雲寺の開山なり、良信字は心巖、日向の人、俗姓惟宗氏清和帝の裔なり幼にして良山和尚に依り薙髪受具し、仲翁守邦禪師に師事し研究三年、遂に衣法を付せらる、長祿二年薩摩福昌寺に主となり、遷りて龍泉寺に住す、寛正三年島津氏新に龍雲寺を築き師迎へられて開山となる、應仁二年七月廿一日寂す、壽七十一、（日本洞上聯燈錄）

リヨーシン　良眞　二〇八五～二一六五　〔天台宗〕近江延曆寺の僧な

り、良眞號は圓戒と云ふ、源雅輔の子光孝天皇の後裔なり、比叡山に登り座主慶命に學び後僧正明快に嗣ぐ、永保元年秋勅を奉して延曆寺の座主に任ず、承曆元年白河帝の詔により儲嗣を祈り明年太子誕生す、帝大に喜びて僧正に任ぜらる、寛治五年大僧正に進む、六年冬寺内騷擾せるを以て京師に退居す、七年八月山徒數千師の住坊を燒燬す、永長二年五月十三日寂す、壽七十一、（本朝高僧傳）

リヨーシン　良眞　一九九九……　（臨濟宗）山城東山の禪僧なり、良眞號は無爲、俗姓生國共に不詳、一山國師に師事して禪を傳へ、國師の滅後華頂山中に菴居す、諸方の名刹請へども應ぜず、平生法華經を讀誦し六萬部を終ふ、道行高く衆庶の歸依を受く、後法樂寺に遷居す、淸拙和尙偈を送りて曰ふ、七十年頭心已安、隨方去住似雲閑、又携華頂千重翠、藏向深深淸水山、晩年華頂山中に歸り志操始終一の如し、曆應二年二月十日寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

リヨーシン　良眞（一九四一）（臨濟宗）山城靈鷲寺の禪僧なり、良眞號は夢嵩、時人稱して靈巖と云ふ、奧州の人、初め教門に學び後禪門に投じ一翁豪に師事す、後佛光禪師に師事し、尋て京師東福寺に登り大明國師普門に依り典座職となる、國師の禪席に侍して屢問難を致す、其徒これを嫌む、良眞去りて靈巖寺に屏居す、大相國西園寺實衡師の枯淡を愛し問訊して法要を談ず、因て靈鷲山に小廬を結び居らしむるに問學の徒常に座に溢る、一日病なく沐浴新衣し諸徒を召し曰ふ、我今日行かむ汝等努力せよ、と、偈を書し寂す、其年時缺く、法嗣同淨良忠あり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

一考　良眞は弘安の頃の人なり

リヨーシン　良眞　ケンチョー兼澄を見よ、

リヨーシン　良良　サイグツツ西月を見よ、

リヨーシン　良進　キョーザン鏡殘を見よ、

リヨーシン　良深　一七四七／一八二五　（淨土宗）山城禪林寺の第十三代なり、良深字は珍海と云ふ、藤原基光の子なりと云ふ、出家して醍醐の禪那院に入り三論眞言を學び、後淨土宗に皈し禪林寺十三代となり、淨土教を弘通す、師佛畫を善くし、其製作は皆神品と稱せられ珍海の名大に聞ゆ、永萬元年十月十五日寂す、壽七十九、著作決定往生集二卷、菩提心集一卷、淨土私記二卷あり（禪林寺歷代記、名畫拾彙、鑑定便覽、蓮門經籍錄）

リヨーシン　良深　一六七九／一七三七　（眞言宗）山城東寺二十九代の長者法務なり、良深は京都の人、花山帝第二子中務親王照登の子なり、禪林寺深覺大僧正の室に入りて剃髮し、庫院僧都深觀の法を受けて高足となる、恒に石山寺に在りて其閒寂を喜ぶ、禪觀熟して聲譽高く乃ち權少僧都に任して東寺二十九代の長者法務となる、康平二年覺源座主を禮して醍醐山流の灌頂を受け其脈を傳ふ、承曆元年八月二十四日寂す、壽五十九、（續傳燈廣錄）

リヨーシユ　良守　二三三九　（淨土宗）奧州九品寺の開山なり、良守は善蓮社觀茂と號す、奧州岩前郡の人なり、初め禪宗に入りて出家せしが、後淨土宗に入りて良潛に師事し遂に其法を嗣ぐ、又專稱寺圓通寺傳通院の間に勤學し、州の磐前郡に九品寺を開き盛んに所承の學を弘む、天正七年正月十二

日寂す、壽缺く、門下に良相あり、(淨土總系譜)

リヨージユ 良壽 二二七六 〔淨土宗〕岩代善性寺の開山なり、良壽は淨蓮社可眞と號す、俗姓は岡邊氏奧州の人、出家して良潛に法を嗣ぎ、二本松に善性寺を開く、元和二年正月寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨージユ 良壽 (……) 〔曹洞宗〕下總總寧寺の禪僧なり、良壽字は萬極、巨海良達に師事して旨を得、結城の安穩寺に住し下野成高大應州寺に歷住す、次に幕命に依り下總總寧寺に住し最乘寺を兼持す、寂年並に世壽缺く、法嗣鐵山林說あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨージユ 良授 二二二四 〔淨土宗〕岩代稱名寺の開山なり、良授は法蓮社と號す、奧州岩代の人なり、良信に師事して法を嗣ぎ州の築川に稱名寺を開く、永祿七年二月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーシユー 良秀 二二六〇 〔淨土宗〕磐城專稱寺第十四代なり、良秀は靜蓮社慧玄と號す、出家して良性に淨土教を學び、法兄良貫の後を嗣ぎて專稱寺に主となる、慶長五年五月五日寂す、壽缺く、嗣法の弟子三人あり良曉良求良圓と云ふ、(淨土總系譜)

リヨーシユー 良秀 (……) 〔淨土宗〕山城淨華院第十一代なり、良秀字は僧尊、其鄉貫詳かならず、出家して等熙僧正に法を嗣ぎ、淨華院に主となり後金戒光明寺に遷り盛んに所承の教を弘む、寂年及壽缺く、嗣法の弟子良尊聖深の二人あり、(淨土總系譜)

リヨーシユー 良秀 (……) 京師の畫僧なり、 良秀は其鄉貫詳かならず、嘗て居宅火災に罹り、火焰昇るを見て不動尊の火炎を畫くを知る、故に師の畫きし不動後世に至るまで珍重せらる、(本朝畫史)

リヨーシユー 良拾 二〇六五 〔曹洞宗〕備中永祥寺の開山なり、 良拾字は實峯、能登の人俗姓不詳、總持寺の峩山紹碩に參し容易に悟る能はず、諸方に遊歷し再び總持寺に歸り隨侍十餘年其杖拂を受け養壽寺に住す、能登の大守某定光寺を創し師を其開山となす、道譽高く勅に依り總持寺に主となる、備中の檀越師を請して永祥寺を開かしむ、應永十二年六月十二日寂す、世壽缺く、法嗣綱菴性宗、悅堂常喜、中門見方、一天玄清、貝林侑籍、大等一祐、明窓妙光の七人あり、著作語錄あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨーシユー 良拾 二二六一 淨土宗 磐城專稱寺第十代なり、良拾は曉蓮社受得、又は即到と號す、出家して良潛に事へ遂に其法を嗣ぐ、專稱寺に主となり、慶長六年一月二十六日寂す、壽缺く、嗣法の高弟三人あり良欣良盛良杲これなり、(淨土總系譜)

リヨージユー 良從 二〇九七－二一七三 〔曹洞宗〕薩摩福昌寺の禪僧なり、 良從字は龍室、薩摩伊集院の人、俗姓は源氏村上義國の後裔なり、甫めて九歲同國福昌寺心巖に投して童子となり十六歲祝髮す、翌年心巖越前龍泉寺に移るに方り師亦侍從す、後諸方に徧參し聞雲寺に到りて英巖に見ゆ、應仁二年心巖寂せしかば師鄉里に歸へり、後泰雲守琮に謁し三歲を經て石屋の法衣を付せらる、明應三年泰雲能登總持寺に住す、師其化を助く、文龜元年高津侯師を請して福昌寺に主たらしむ、住

持すること四十年道化大に振ひ勅賜紫衣及び大通德光禪師の號を拜す、時に永正六年二月なり、同十年十二月五日寂す、壽七十七、臘五十六、法嗣天衍宗津あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨージユー 良住 ニチケン日賢を見よ、

リヨーシユク 良叔 シヨーキヨー聖慶を見よ、

リヨーシユン 良俊 一八二三—一八七九 〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、良俊は文章博士業實の子、出家して良慶に就て天台の宗義を學び、建久五年眞圓に隨つて灌頂壇に登る、後圓也に侍し台密由宗の義を聞き、敕により少僧都に任ぜらる、又た堂立義並初問を勤め、建保五年六月題者となる、承久元年二月十四日寂す、壽五十七、(三井續燈記)

リヨージユン 良順 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第六代なり、良順は旭蓮社養春と號す、法を良鑁に嗣ぎ、其席を繼ぎて下野芳賀郡大澤村圓通寺に主となる、寂年壽缺く、著作一夏百條論あり、(淨土總系譜)

リヨージユン 良順 ……二〇六九 〔淨土宗〕相模光明寺第四代なり、良順は圓蓮社聖滿と號す、出家して良譽定慧上人に就て法を嗣ぎ、鎌倉光明寺に住し、後勝願寺に移り第四代となる、應永十六年五月二十六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨージユン 良順 ユーシユー融秀を見よ、

リヨーシヨ 良處 二一五〇…… 〔淨土宗〕磐城專稱寺第五代なり、良處は映蓮社諦阿と號す、專稱寺第五代良察に師事して淨土教を修め、其席を繼ぎて專稱寺に主となる、延德二年二月二日寂す、壽缺く、門下の高足に良大あり、(淨土總系譜)

リヨージヨ 良助 (一九五九) 〔天台宗〕近江延暦寺の座主なり、良助は龜山法皇の皇子、尊助法師を師として宗義を學び、正安元年天台座主に任ず、寂年缺く、(天台座主記)

リヨーシヨー 良勝 (……) 〔淨土宗〕陸前悟眞寺の開山なり、良勝は其鄉貫詳かならず、良讚に師事して淨土教を修め仙臺悟眞寺の開山となる、寂年缺く、嗣法の弟子に良欣あり、(淨土總系譜)

リヨーシヨー 良勝 二〇七二…… 〔淨土宗〕下野慈眼寺の開山なり、良勝は寂蓮社性音と號す、奧州山崎の人なり、良榮に師事して淨土教を學び、下野木幡村に慈眼寺を剏して開山となる、應永十九年三月一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーシヨー 良勝 (……) 〔眞言宗〕山城勸修寺蓮光坊の阿闍梨なり、良勝字は蓮光といひ、櫻町ノ三位、重士ノ律師と稱す、藤原左府從一位道良の子なり、幼にして金峰山の天先達となり、嚴覺の病床に侍し其心印を付せらる、之を寶時の印信といふ、其寂年を知らず、付法の弟子良弘、行心、寶勝義圓、舜嚴、滿意、寶任の八人あり、(後傳燈廣錄)

リヨーシヨー 良聖 (二二九九) 〔淨土宗〕京都法林寺第三代なり、良聖は閑蓮社貞龍、又は中觀と號す、良仙に師事して淨土教を學び、其席を繼ぎて法林寺に住す、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーシヨー 良清 (二三一四) 〔淨土宗〕奧州大念寺の開山なり、良清は淨蓮社受覺と號す、岩代の人、出家して良厭良靜二師に事へて法を嗣ぎ、南部に大念寺を開く、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

リヨー(良)シ

リヨーシヨー　良照（一九三七）　戒律宗　大和戒壇院の律僧なり、良照字は明心、奈良の人、圓照に師事して具足戒を承け、三密の法を受け、勝鬘院に入りて圓珠思順の密璽を傳へ、竹林寺に留まりて日阿の壇に入る、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーシヨー　良照　ギシヨー義照を見よ、

リヨーシヨー　良韶　一九七二 二〇二一　〔曹洞宗〕陸奥正法寺の開山なり、良韶字は無底、能登國酒井保の人なり、幼より世相を厭ひ二十二歳にして遂に洞谷寺明峯の室に投じて出家す、後辭して陸奥の江刺に至り、黑石村の幽邃を愛し、小菴を結び住す、後改めて一寺を創し正法寺と名く、文和四年洞谷寺に移り久しからずして辭して歸る、康安元年六月十四日寂す、壽四十九、臘二十八、（日本洞上聯燈錄）

リヨーシヨー　良性　二三二四……〔淨土宗〕磐城專稱寺第十二代あり、良性は法蓮社曇商と號す、出家して良杲に法を嗣ぎ後專稱寺に住す、承應三年九月十二日寂す、壽缺く、法嗣に良實あり、（淨土總系譜）

リヨージヨー　良定　二二〇四 二二九九　〔淨土宗〕山城法林寺の開山なり、良定辨蓮社袋中と號す、岩城菊多郡の人、俗姓は佐藤氏以八上人の俗弟なり、母奇夢を感じて孕み夫沒して他家に嫁し後師を生む、二歳にして又母を喪ひ、繼父に育せらる、五歳にして千字文を習ひ、明年詩書易禮等を讀む、然れども父母を追想するの餘り、出家の志禁じ難く遂に能滿寺に投じて祝髮受戒し、寶泉寺に到り三學を練磨し、補陀洛山に登り一七日救世大士を念じて靈驗あり、會津の圓性法師に謁して台密の蘊奥を究め、福島の月空により楞嚴圓覺の玄微を究む、天正十一年淨土血脈論を著す、師又當麻曼陀羅に精通し自記十三卷を著す、天性强記にして傳通記等の三五部を諳誦す、嘗て遠遊の志あり明に渡らんとし長崎に抵り、有司の拒むところとなりて果さず、尋で琉球に渡り大に法化を布く、刺史馬貴明深く師の道化に歸し、桂林寺を創して開山祖となす、慶長十六年歸國し洛東法林寺を刱す、寬永十六年正月二十一日山城欣閑西方寺に寓し端座念佛印を結びて寂す、壽九十六、師生前寺を築營すること二十ヶ所に至る、著作聖龜讃二十五卷、琉球神道記五卷、五岳一槐集二卷、泥洹五道舍利記、隨聞記、選擇傳各一卷曼荼羅記若干卷等あり、（續日本高僧傳、鎭流祖傳、淨土總系譜）

リヨージヨー　良乘　二二九二……〔淨土宗〕岩代本覺寺の中興なり、良乘は一蓮社含隨と號す、俗姓は小倉氏下野の人なり、良信に師事して淨土教を學び、元和四年會津若松の本覺寺に住し、其廢頽を興して中興と稱せらる、寬永九年十月十五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨージヨー　良乘　ニユーゲン入玄を見よ、

リヨージヨー　良靜　二三二四……〔淨土宗〕下野專稱寺第十五代なり、良靜は寂蓮社龍頓、迦殘と號す、俗姓は服部氏奥州白川の人なり、出家して良性に事へ後良實に師事して法を嗣ぐ、專稱寺に住して十五代となり、後州の三坂に淨心寺を開き所承の學を弘む、承應三年五月三日寂す、嗣法二人あり圓的良淸これなり、（淨土總系譜）

リヨーシヨーイン　良正院　ズイヨー隨庸を見よ、

リヨーズイ　良隨　……二二八五　〔淨土宗〕山城淨華院第三十七代なり、良隨字は純應、號は音譽と云ふ、石見礒竹村の人なり、出家して良安に淨土敎を學び遂に法を嗣ぐ、淨華院に主となり、寛永二年七月十九日寂す、壽缺く、嗣法良覺あり（淨土總系譜）

リヨーズイ　良隨　……二二八五　〔淨土宗〕奥州欣淨寺の開山なり、良隨は樂蓮社と號す、出家して良定良拾の二師に法を嗣ぎ奥州磐前郡に欣淨寺を開く、寛永二年十一月十五日寂す壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーセー　良誓　……二二三三　〔淨土宗〕奥州安養寺の開山なり、良誓は願蓮社恢徹と號す、奥州磐前郡の人、良潛に師事して淨土敎を學び、郡の勝間に安養寺を開く、天正元年七月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーセー　良盛　二二六六　〔淨土宗〕仙臺大願寺の開山なり、良盛は賓蓮社格外と號す、幼にして出家し良拾に就て淨土敎を學び遂に其法を嗣ぐ、後仙臺北山に大願寺を開き、慶長十一年九月八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーセツ　良說　ドーワ道和を見よ、

リヨーセン　良仙（二二九九）〔淨土宗〕下野圓通寺第十六代なり、良仙は讃蓮社圓雄、風觀と號す、袋中良定に事へて淨土宗を修め、法兄良信の後を繼ぎて下野芳賀郡圓通寺に主となり、京都法林寺に住し第二代となり盛んに法化を布く寂年壽缺く、嗣法の弟子に良聖あり、（淨土總系譜）
〔考〕良仙は寛永の頃の人なり

リヨーセン　良潛　……二二二八　〔淨土宗〕磐城專稱寺第八代なり、良潛は昌蓮社受徹と號す、良大に師事して法を嗣ぎ法兄良谿の後を受けて專稱寺第八代となる、永祿十一年十一月二十六日寂す、壽缺く、門下の弟子に良守、良鄕、良誓、良雄、良壽、良補、良拾、良念の八人あり、（淨土總系譜）

リヨーゼン　良善（二〇八三）〔淨土宗〕常陸照光寺の開山なり、良善は其俗姓生國詳かならず、良榮に師事して其法を嗣ぎ常陸新治郡玉里に照光寺を開く、寂年壽缺く、嗣法の弟子に良珠、聖本、受音、正受、慈俊、良納、良慶、祐慶の八人あり、（淨土總系譜）
〔考〕良善は應永の頃の人なり

リヨーゼン　良禪　一七〇八／一七九九 オムロヒジリ　〔眞言宗〕紀伊高野山の檢校なり、良禪字は解脫房、世に北室聖と稱す、俗姓は坂上氏、紀伊那賀郡上崎の人なり、永承三年に生る、十一歲にして高野山に投じ任尊に師事す、十四歲剃髮し北堂の行明に遇ひて隨求佛頂等の多羅尼を受け、且つ兩部の大法を稟け、堅く門を閉して世事を厭ふ、後明算に從ひて重ねて兩界の灌頂を受け、五部の秘印を究む、承德三年高野の檢校に補す、天治の初鳥羽上皇高野に幸する時、師香衣を賜ひ法眼に叙す、又一院を建て常念密修す、眞言堂を造りて諸尊の像を安じ寛助僧正を延請して唱導師となす、其他慈氏堂多寶塔を建てゝ法華の法を修し、定海大僧正を請して供養導師となす、相次きて鐘樓經藏疊々として軒を連ね寺規此に至りて盛なり、長承三年十二月檢校を辭し引接院に住す、保延三年再び檢校に任じ、保延三年再び撿校に任じ、同五年二月二十一日寂す、壽九十二、

臘七十九、門人遺骸を葬むり塔婆を建て其地を谷上といふ、（本朝高僧傳、高野春秋、傳燈廣錄）

リヨーゼン　良禪　二〇五八……〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、　良禪は郷貫師承詳ならず、元應三年六月廿五日初めて報恩講立義者となり、又學頭の第一座に居る、即ち大學頭なり、應永五年九月二十九日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

リヨーソー　良相　二二八七……〔淨土宗〕奥州照岸寺の開山なり、　良相は信蓮社露傳と號す、俗姓は淺井氏奥州菊田郡の人なり、出家して良守に事へ遂に其法を嗣ぐ、後、州の磐前郡に照岸寺を創し、盛んに所承の學を弘む、寛永四年三月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーソー　良聰　二〇三二……〔臨濟宗〕山城建仁寺の禪僧なり、　良聰字は闘溪、俗姓不詳、信濃の人なり、鎌倉の諸刹を遍歷す、圓覺寺に東明日を禮し洞上の家風を問ひ、後建長寺に一山寧を禮し師事す、遂に信衣を付せらる、正和年中國師南禪寺に住し、師及び石梁を擧げて兩堂首座となす、京師西禪寺播磨法雲寺を經て建仁寺に住す、應安五年七月五日建仁寺大昌庵に寂す、塔を普明と云ふ、勅謚佛海慈濟禪師と賜ふ、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

リヨーソン　良尊　（二八九八）〔天台宗〕近江園城寺の長吏なり、　良尊は俗姓生國師承詳かならず、安貞三年正月長吏に補せられ、寛喜二年二月十二日大僧正に任ず、曆仁元年三山の檢校となる、寂年及壽缺く、（三井續燈記）

リヨーソン　良尊　一九三九 二〇〇九〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺中興なり、　良尊は法明房と稱す、右大臣清原夏野の裔にして父は清原右京亮守道、後宇多天皇の朝に仕へ、母は河内平岡の神司主計頭の女、桔梗の前といふ、故あり致仕し河內深江に閑居し、數郡の長と仰がる、常に子なきを嘆じ、信貴山に參籠して毘沙門天に懇禱し、其靈驗によりて師を生む、弘安二年十月十日なり、師幼名を信貴千代と稱し、成長して權少將清原朝臣道張と云ふ、十餘歲にして父母を喪ひ、老臣澤田源五兼定に補育せらる、稍長じて妻を迎へて一子を擧ぐ、永仁正安の頃天下疫病流行し、妻子共に病沒したり玆に於て人世の無常を厭ひ、出離の志あり、弟刑部丞正次に家を讓り、且つ懇に家臣兼定に囑托し、廿五歲の秋、密に家を出づ、其時の詠あり、「世の中の憂きは御法のしるべかな火宅の宿を今や出でけん」遂に高野山に登り、千手院谷眞福院の俊賢法師を師として度を受け、法明房良尊と名く、兩部の灌頂を受け、密宗の奧義を究め、是より天台の宗義を學ばんと欲し、高野山を辭して比叡山に登り、天台の敎

法明上人

観を究め遂に顯密兩宗に渉り諸家の敎行を窺ふ、然るに煩惱具足の凡夫出離生死の要路は西方淨土を願ふの一行に若くものなきを知り、是より念佛三昧に意を決す、一時郷里に歸へれば家主家臣等皆師の修行の勇邁なるを稱讃し、邸の側に一小菴を造營し、師の四衆の化導に任ず、家臣澤田兼定師の德風に感化せられ下髮して西願といひ、薪水の勞に服す、遠近相傳へ貴賤老若相率ゐて師の門に歸し、倶に淨土往生の勝緣を結ぶ、(後世草菴の跡に一寺を建て法明寺と號す) 蓋し昔良忍融通念佛宗を開きてより、六世良鎭上人に至りて不幸にも法を嗣ぐ附弟なかりしかば、石淸水八幡大士深く之を歎き、良鎭上人の所に化現して融通の法脉安心の密印等を傳持し、且つ開山傳來の靈寶を悉く男山の社殿に納めしめ、法器の出づるを待ちて之を傳承せしめむとし一百四十年を經たり、茲に元亨元年十一月十五日夜石淸水八幡大士示現して融通念佛を授けて其を弘布せんことを靈告すこれ師の行德神意に契ひたるに由ると云ふ、翌朝開祖傳來の諸寶物を受傳し、弟子と共に之を護持して攝津杭全(今の原野)に到り開祖良忍の舊跡に錫を留む、遠近の信徒雲集して遂に寺殿を起こす、元亨三年敎信坊靈夢に現して念佛の要を師に説きしかば、大に歡喜して其遺跡なる播磨加古に往きて懇ろに佛事を修す、四方の淨徒來り歸するもの多く、同年七月八日歸航和泉堺浦七堂か濱に着し、普く諸人を敎化す、後醍醐天皇深く師を崇信し、皇后及び百僚と共に日課念佛を受け、名帳に入會せり、元の世祖皇帝も亦師の德風を聞きて大に歸仰し、至元五年夏燕州邵夫人自ら紺紙銀泥を以て書寫せる華嚴經に願意を跋書して遠く師に寄贈すといふ、七十歳に及びて附弟興善房に法務を讓りて退閑し、念佛三昧に入り、貞和五年六月十三日寂す、壽七十一、(融通念佛宗三祖畧傳)

〔考〕 八幡宮靈告の事極めて險恠にして信ずべからずと雖姑く一宗の傳を存して删らず

リヨーソン 良尊　エンチヨー圓超を見よ、

リヨータイ 良諦 ……二二九四 〔淨土宗〕下野妙安寺の開山なり、　良諦は甚蓮社隨道と號す、下野鄕內小山村の人なり、出家して良定に淨土敎を學び遂に其法を嗣ぐ、後州の芳賀郡茂木庄藤繩に妙安寺を剏して開山となり、盛んに所承の敎を弘む、寛永十一年四月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーダイ 良大 ……二一七四 〔淨土宗〕奧州專稱寺第六代なり、　良大字は仰觀、號は信蓮社といふ、俗姓生國不詳、奧州專稱寺第五代良處上人に師事して大澤流即ち良榮上人の法系を傳へ、後第六代となる、良大上人の時專稱寺は勅願所となり、奧州本山の號を賜はる、永正十一年六月朔日寂す、(淨土總系譜)

リヨータツ 良達 ……二三一五 〔淨土宗〕奧州滿藏寺の開山なり、　良達は滿蓮社覺殘と號す、奧州小川の人なり、良定に師事して淨土敎を學び、州の小島に滿藏寺を開く、明暦元年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨータツ 良達(……　……) 〔曹洞宗〕下總寧寺の禪僧なり、　良達字は巨海と云ひ、養室壽孝の法を嗣ぎ、常陸玄勝寺に住し、下總寧寺に移る、寂年及び壽缺く、法嗣萬極良壽あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨーチ　良智　ゲンリユー源立を見よ、

リヨーチ　良置（……）〔曹洞宗〕武藏大中院の開山なり、　良置字は善菴、武藏比企の人、出家して諸名宿に徧參し、布州東播の法を得て武藏龍穏寺に主となる、晩年秩父に大中院を剏し其寺に終る、世壽缺く、法嗣格翁桂逸あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーチン　良珍（……）〔曹洞宗〕奥州萬年寺の開山なり、　良珍字は巨泉、奥州の人、其鄕貫詳かならず、正法寺月泉良印に依りて剃髮し、印可を付せられて志田郡長井保に往きて菴居す、菴後寺となり萬年寺と稱す、又正法寺に遷り、幾ならずして萬年寺に歸り、某年寂す、其年時缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーチン　良珍　二一五八……〔曹洞宗〕加賀宗德寺第一代なり、　良珍字は玉叟、相模の人なり、幼にして出家し、諸方を參歷して耆老を訪ひ、永澤寺に至り普濟に謁し、止まりてこれに師事すること二年にして信印を付せらる、總持寺に出世し、永澤寺に移る、永享四年龍泉寺に主となる、加賀の信徒龍谷寺を築いてこれに居らしむ、後に宗德寺と改む、明應七年八月寂す、壽缺く嗣法龍傳金、玄仲義、正海孝の三人あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーチン　良椿　二一四八……〔曹洞宗〕筑前靑蓮寺の禪僧なり、　良椿字は花庭、備中の人、俗姓藤原氏なり、幼年出家して永祥寺大澤音に師事し、後北遊して大平寺春屋慈眼寺快翁に歷侍す、美作に到り靑蓮寺禪素に謁し、遂に其法を嗣き總持寺に出世す、筑前守赤松滿祐師の道譽を慕ひ請して靑蓮寺に主たらしむ、長享二年正月二日寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーチン　良鎭（一八四三）〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺の僧なり、　良鎭は山城嵯峨の人、治承三年より壽永元年に至る四年間本山大念佛寺の寺務を秉る、後大原を出てゝ嵯峨野に移り、三寶寺を創して念佛勸進の根據となす、融通念佛緣起二卷を著はし、日本六十餘州に頒布す、所謂本緣起にして奥附に治承第三暦仲冬上旬之候記之とあるもの是なり、師の在世中鳥羽天皇勅願所平野大念佛寺火災に罹るとぞ、寂年並に壽詳ならず、

リヨーチン　良鎭（二〇七四）〔融通念佛宗〕攝津大念佛寺の僧なり、　良鎭は六世良鎭と同名異人にして六世良鎭に後るゝこと二百餘年、明德應永の際に當り盛に融通念佛畫卷を頒布して念佛を弘通す、其畫卷は京都禪林寺（明德年間の書）清凉寺（應永廿一年の書）に藏すといふ、

リヨーチユー　良忠（一九四二）〔臨濟宗〕山城慈德寺の開山なり、　良忠字は直翁、靈鷲寺良眞の法嗣となる、後慈德寺を剏して開山となる、示寂の年時缺く、（本朝高僧傳）

リヨーロチユー　良忠（……）〔華嚴宗〕大和東大寺の學僧なり、良忠は尊藤院承性の神足にして、東大寺に住し華嚴法相に精通す、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーチユー　良忠　一八五九　一九四七〔淨土宗〕鎌倉光明寺の開山なり、　良忠字は然阿、俗姓は藤原氏石見三隅の人、太政大臣師實六世の孫比叡山圓實の長子なり、蓋し圓實宏才あり、朝許を得て後房伴氏を置き良忠を生みたりと云ふ、師正治元

年七月二十七日を以て生れ、幼にして園城寺に入り北山龍淵坊に留まる、承元三年十一歳にして三智法師の往生要集を講ずるを聞き淨土教に意を傾け、建暦元年二月十三歳にして出雲に下り鰐淵寺信暹に業を受け俊才を以て知らる、一時に能く八十行を誦したりと云ふ、建保二年十六歳にして得度し、常に法華經を誦し屢〻靈異を感ず、同四年十八歳にして法照法師の聖竹林寺記を見、悲喜交〻至り專ら淨土教を信仰し日課念佛一萬顆を修す圓信法師に就て天台宗の教義を究め密藏源朝の二師に就て眞言宗の教義を傳へ良遍僧都に就いて法相宗の教義を受け、大に得るところあり、貞永の初め多陀寺に寓して專心に念佛修行す、嘉禎二年九月聖光上人の道化を聞いて謁を求め師資の禮を執る、當時上人筑後上妻庄の天福寺に留れり、師は同寺に於て謁を求めたるなり、爾來其下に教を受け善導寺に留まりしが擢でられて首座となり、三年八月朔日正統の付囑を受く（一說に七月六日

良忠上人

と云ふ）これより諸國に經行し河內生馬に於て奈良勝願院良遍の來附あるあり、同地に勝願寺を開く、相模鎌倉に入り住吉谷に居す、仁治元年二月副元帥北條經時師を仰いで宗脉幷に圓頓戒を受く、三月經時の本願により佐介谷に蓮華寺を開く、經時武藏箕田鄉を供養田として寄附す、寬元元年五月靈驗を感じ蓮華寺を改め號して光明寺と云ふ、四年四月一日經時念佛して卒す、法名安樂と云ひ光明寺中に碑を建つ、寶治二年三月後嵯峨上皇の敕召により京師に上り、三部の經典を講じ且つ圓頓戒を授け奉る、上皇乃ち優賞して香衣幷に上人號を賜ふ、朝野歸向するもの雲霞の如く、淨意禪尼殊に信仰深し、師其請により選擇集を講し其後道俗の請により善導大師の四帖の疏を講ず、建長六年決疑鈔五卷を作り、正嘉元年三月下總光明寺に於て傳道記十五卷を作り、翌二年三月同國西福寺に於て其功を畢ふ、文永の頃京師東山赤築地に於て四十八日を期し蓮寂法師と勢觀法師の念佛義を校量し、皆鎮正流に違せざるを知る、建治元年十一月鎌倉悟眞寺に於て重ねて傳道記を訂す、三年九月後深草上皇の敕召を拜し金剛戒を授け奉る、上皇特に紫衣を賜ふ、弘安九年光明寺に回る、師日常日課念佛六萬顆阿彌陀經六部を修し、六時に往生禮讚を修し、如何なる日も怠るなし、且つ毎月法事講を行し別時念佛を勸む、弘安十年六月十六日痢を病み七月四日以後靈異あり、六日端座して念佛五百聲にして寂す、壽八十九、臘七十四なり、永仁元年七月敕謚記主禪師の號を賜ふ、一生彫刻佛像四十八軀、建立寺院四十八所、著作十餘部あり、觀經疏記十五卷、選擇集決鈔五卷、註往生論私記五卷、安樂集私記二

卷、淨土宗要集五卷、授手印疑問鈔二卷、領解鈔一卷、觀念法門私記、法事讃私記、般舟讃私記、往生禮讃私記等なり、門下甚だ盛んなるが、良曉、性心、尊觀、慈心、了慧、禮阿尤も聞ゆ、良曉は光明寺二代となりて師跡を繼げり、其門流を白旗流と云ひ、性心の門流を藤田流と云ひ、尊觀の門流を名越流一に大澤流と云ひ、慈心の門流を小幡流と云ひ、了慧の門流を三條流と云ひ、禮阿の門流を一條流と云ふ、是等の諸門流東西に繁興して一時淨土宗の隆盛を致せり、(淨土總系譜、鎭流祖傳、淨土傳燈錄)

リョーチユー 良忠 ニョリユー如隆を見よ、

リョーチヨー 良澄 二三三一 二三〇二 〔淨土宗〕京都壬生寺の學僧なり、 良澄字は西岸、京都の人なり、幼にして出家し日遠に從ひて日蓮宗の敎を研究し、後宗を天台に更めて比叡山に登り玉泉の正流を汲む、三塔の學頭師を推選して伊勢西來寺に住せしむ、一日善導大師四帖の疏傳通記を閲し、初めて彌陀本願の深旨及び光明吉水の鈔釋を知り、之より茅屋を壬生寺の竹林中に結ひ、閑居して日々佛名三万遍を唱ふ、年六十九に及び誓ひて講經を廢して典籍を開かず、一心一向に念佛を勵む、寛永十九年四月河内極樂寺に寓し、八月壬生寺の草庵に歸へりて病に罹り、九月十九日寂す、壽七十二、(續日本高僧傳)

リョーチヨー 良肇 二〇九三…… 〔淨土宗〕下總飯沼弘經寺の開山なり、 良肇は聰蓮社嘆譽と云ふ、下總猿島富田の人(一說に武藏の人)なり、出家して聖聰上人に投じ、後了實上人に師事して一宗の眞決を受く、飯沼に居して法化盛なり、應永廿一年弘經寺を開き一住廿五年、又永德三年相模小田原に傳肇寺を開く、永享十年五月十二日寂す、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

リョーテツ 良哲 二〇七四…… 〔淨土宗〕下野延壽寺の開山なり、 良哲は純蓮社善通と號す、俗姓は長沼氏下野の人なり良榮に師事して淨土敎を修め、下野上小倉に延壽寺を創めて開山となる、應永二十一年二月二十八日寂す、壽缺く、門下に了祐、敎俊、理珍、本道の四人あり、皆一方に法化を敷けり、(淨土總系譜)

リョーデン 良殿 一九二四 一九九六 〔新義眞言宗〕紀伊大傳法院の僧なり、 良殿字は定俊、俗姓生國詳かならず、十五歲賴瑜の室に投じ十五年一日の如し、三十歲三摩耶戒壇に登り兩部曼茶羅に入る、嘉元二年賴瑜の後を繼きて學頭となり、正和三年權律師に補せらる、元弘三年少僧都に登る、延元元年九月五日疾なくして寂す、壽七十三、法臘五十九、(結網集、本朝高僧傳)

リョートー 良燈 二三二一…… 〔淨土宗〕常陸雲充寺の開山なり、 良燈は賢蓮社祖殘と號す、良興に師事して法を嗣ぎ、常陸河內郡下妻田に雲充寺を開きて所承の學を弘む、寛文元年九月二十二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リョードー 良堂 スーオン崇溫を見よ、

リョートク 良德 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第三代なり、 良德は法蓮社隆本と號す、出家の後良榮に師事して法を嗣ぎ、圓通寺第三代となる、寂年壽缺く、嗣法の高弟に良憲、良調等あり、(淨土總系譜)

リヨートン　良頓　〇九二　〔淨土宗〕磐城專稱寺第二代なり、良頓は相蓮社宥乾、又は慈專と號す、良榮に師事して法を嗣ぎ專稱寺第二代となる、永亨四年十月十九日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーニチ　良日　二〇四三　〔淨土宗西山派〕大和來迎寺の開山なり、良日字は靜見、俗姓生國詳かならず、敎觀本空に師事して淨土宗西山派の學を究め、山城深草眞宗院誓願寺に主となり、又大和に來迎寺を開き盛んに所承の宗を弘む、永德三年十二月六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーニン　良忍　一七三二 一七九二　融通念佛宗の開祖なり、良忍は延久四年正月元旦、尾張知多郡富田村に生れ、幼名を音德丸といふ、父は藤原道武と云ひ知多一郡を領し、母は熱田社頭大宮司の女なり、甫めて十二歲(一に七歲)比叡山延暦寺檀那院良賀大僧都の室に入る、大僧都師の聰敏を愛し朝に奏して出家せしめむことを請ふ、即ち度牒を賜ひて良賀大僧都の弟子となし、光乘坊良忍と名けらる、東塔阿彌陀坊に住し、叡運所傳天台一家の境觀を習ひ、十五歲師命により園城寺の大德禪仁律師に從ひて梵網輕重の戒法を受得し、二十一歲仁和寺の永意僧都の室に入りて兩部の灌頂を受けて化制二敎の理趣に達し、顯密兩宗の蘊奧を窮む、茲に於て比叡山の講主となる、二十三歲職を辭して大原山に隱棲す、詠あり曰く「遁れても得こそゆるさね世のうさを厭ひ來て棲む大原のおく」「たれ人かよもたつね來ん鳥だにも聲せでふかき谷に入る身は」と、同山に來迎院淨蓮華院の二坊を創建し丈餘の尊像を安置す、融通の阿彌陀是なり、是より諸禪三昧に身命を委ね、華嚴法華に心思を潛め、常に阿彌陀經を讀誦す、師嘗て多武峯賴朝阿闍梨に從ひて慈覺大師所傳の聲明梵唄梵讃を傳授し、各其秘曲に達し、名聲極めて高し、殊に懺法の曲に長し南都諸大寺の大衆相競ひてその秘曲を傳習す、これより師は聲明の中興と稱せらる、永久五年五月十五日四十六歲にして安養淨土阿彌陀佛來現して融通念佛の奧義を授けらる、融通念佛とは此法門を信受するもの念佛の功德自他融通し、一遍の稱名一々三千大千世界を周遍して平等大利益を成滿す、其功德廣大不可思議なり、是れ即ち融通念佛の義趣なり、師茲に於て普く融通念佛宗を弘通し、道俗相競うて來歸す、天治元年六月九日勅を拜して、禁裏に入りて融通念佛會を營み、鳥羽上皇皇后待賢門院と共に會に入り、公卿百官より下庶人に至るまで競ひて參會する者數ふべからず、上皇感激して多年龍顏を照し給ひし尺二寸の鏡を以て扣鐘を鑄て師に賜はる、且つ上皇親ら融通念佛勸進帳を製し、宸翰を

良忍上人

添へて賜ひ、四海に弘布勸進して名を記入せしむ、師乃ち諸方を巡化し攝津に融通念佛弘通の地を定め、衆人を化導す、長承元年二月朔日大原の來迎院に寂す、壽六十一、朝廷賚を下し厚く同山に荼毘す、其後後桃園天皇安永二年十月六日勅して聖應大師と諡したまふ、(聖應大師傳、融通念佛宗三祖略傳)

リヨーニン　良仁　シンア眞阿を見よ。

リヨーニウ　良乳　二〇八二……〔曹洞宗〕奧州大祥寺第二代なり、　良乳字は虎溪、俗姓は人首氏、奧州江刺郡の人、文和二年四月八日に生れ、七歳にして父母を失ひ出家して正法寺月泉良印に依りて祝髮し、大に器量せらる、已にして具足戒を受け服勤十年發悟し、終に入室して記莂を受く、永和年間鄉國峠邑村に龍雲山大祥寺を創め月泉を開山とし、師自ら敎化を助く、康應元年席を繼ぎて二代となる、應永二十九年十一月十三日寂す、偈あり曰く拈弄傀儡、滿七十年、末後一句、佛祖不搏、(日本洞上聯燈錄)

リヨーニヨ　良如　(二〇四三)　〔淨土宗〕越前西福寺の開山なり、　良如字は智水、越前國府中の人なり、平泉寺に出家す、比叡山に登り天台を學ぶ、後靑華院に至り法を敬法和尚に嗣ぐ、是より頭陀を事とし越前敦賀に遊化す、應安元年八月其地に西福寺を創立す、後光嚴天皇額を大原山西福寺と賜ひ、後小松帝勅願所と爲し給ふ、師大津海老江の稱名寺を初開として江越若の三州に一百餘の寺を創立す、晩年に至りて靑野實國寺に隱居す、示寂の年月日缺く、壽六十九、著作融通賛一卷あり、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

リヨーニヨ　良如　コーエン光圓を見よ、

リヨーネン　良然　二二八二……〔淨土宗〕岩代阿彌陀寺の開山なり、　良然は忠蓮社夢中と號す、下野眞壁郡の人なり、良信に師事して法を嗣ぐ、後會津に阿彌陀寺を剏して開山となる、元和八年四月十日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーネン　良然　二二二七……〔淨土宗〕奧州來迎寺の開山なり、　良然は當蓮社敎隨と號す、上總の人なり、良大に師事して其法を嗣ぐ、奧州神谷宿來迎寺を創して盛んに淨土敎を弘む、永祿十年三月十日寂す、(淨土總系譜)

リヨーネン　良然　(二二九九)　〔淨土宗〕下野淨念寺の開山なり、　良然字は廓道と云ふ、其鄉貫詳かならず、良信に師事して法を嗣ぎ、宇都宮に淨念寺を開く、寂年缺く、(淨土總系譜)

リヨーネン　良然　二三〇〇……〔淨土宗〕陸前慈恩寺の開山なり、　良然は嚴蓮社と號す、奧州玉造郡の人、良覆に師事して淨土敎を學び、法を嗣ぎて後仙臺に慈恩寺を開き、盛んに所承の敎を弘む、寛永十七年七月五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーネン　良然　エクワン慧觀を見よ、

リヨーネン　良然　ドンタツ呑達を見よ、

リヨーネン　良念　二二六八……〔淨土宗〕奧州圓城寺の開山なり、　良念は信蓮社岌辨と號す、奧州磐前郡の人なり、良潛に師事して淨土敎を學び、州の宮城郡に圓城寺を創して開山となる、慶長十三年寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーハン　良範　(……)　〔天台宗〕近江比叡山の僧な

り、良範は比叡山の楞嚴院に住し淨行を以て顯はる、淨土に遊ばむことを誓ふも人皆信せず、不幸短命十八歳にして寂す源信僧都爲に諷經す、夢に良範雙親に告げて曰ふ、我極樂にありて其名を仁慧菩薩といふ、是れ上品上生なり、友人其巾笥を見るに衆佛衆經あり、初めて其勝因を修することを知れりといふ、（本朝高僧傳）

リヨーハン　良範（一九六八）〔眞言宗〕京都淸水坂愛染堂の學僧なり、良範は了聞と號し、後興實と改む、奧州の人なり、性海寺の良敏に事へて顯密を學び、周防の僧都に聲明を習ひ、實相上人に戒律を稟く、永仁年中京都淸水坂に愛染堂を建て衆生を利益し、延慶の初年寂す、（本朝高僧傳）

リヨーハン　良範（……）〔眞言宗〕山城安祥寺の律師なり、良範は民部卿律師といふ、戸部尙書親範の子なり、安祥寺賴眞の室に入りて出家受具し、勝賢の法を嗣ぎ、良瑜と同學たり、（續傳燈廣錄）

リヨーバン　良鑁（……）〔淨土宗〕下野圓通寺第五代なり、良鑁は光蓮社隆順と號す、其鄕貫詳かならず、良憲に師事して淨土敎を修め、終に其席を繼ぎて圓通寺第五代となる、寂年壽缺く、門下に良順あり、（淨土總系譜）

リヨービン　良敏（……一三九九）〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、良敏俗姓不詳、義淵に師事して法相宗を傳へ、元興寺に住す、神龜元年少僧都に任せられ（一說大平元年、）天平九年大僧都に任せらる、同十一年寂す、（續日本紀、本朝高僧傳、七大寺年表）

リヨービン　良敏（一九二三）〔眞言宗〕尾張性海寺の學僧なり、良敏字は寂忍、尾張熱田大宮司の子なり、同國の淨心美濃の照寂に隨ひて天台宗を學ぶ、後觀勝寺の大圓に從ひて眞言敎を受け、東大寺に往き圓照の室を敲きて戒を受け律を學ぶ、弘長の末年八幡の善法寺に居り、戒壇院の凝然を招きて四分戒本定賓略疏を講せしむ、又圓照に從ひて京都の鷲峰山に在りて表無表章大日經を聽く、圓照亦師をして天台の疏籍、眞言の秘典を講せしむ、鄕里の大塚縣に性海寺及び池鈴山を開き宗義を演ふ、尾張に密敎を唱ふるもの師を始めとす後京都の吉水に菴を結びて幽栖し、某年寂す、門下に禪心、光遍、觀海、定祐、證圓、良範等あり、（本朝高僧傳）

リヨービヤク　良白（……二三〇五）〔淨土宗〕奧州無量寺の開山なり、良白は雲蓮社利舟と號す、俗姓は早坂氏奧州宮城郡の人なり、法を良性に繼ぎ州の小倉に無量寺を開く、正保二年二月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーヘン　良遍（八八一〇―一八九二）〔眞言宗〕京都東寺の長者なり、良遍俗姓は藤原氏、越中の刺史顯成の子なり、出家して金胎の秘法を勝遍律師に受け、後公賢僧都に從つて密灌を受く、建久八年の冬東寺に灌頂の宣を蒙り、翌年十二月初めて觀音院の小灌頂に補す、建保元年夏法印に叙し、六年冬東寺の長者に加任せらる、承元元年春勅を奉じて神泉苑に於て雨を祈りて効あり優賞を蒙る、二年十月長者職を辭し、貞永元年八月二十一日寂す、壽八十三、（本朝高僧傳）

リヨーヘン　良遍（一八五五―一九一二）〔法相宗〕大和興福寺の學僧なり、良遍字は信願、號を蓮阿と云ふ、俗姓は藤原氏、京都の人なり、幼にして興福寺勝願院に投して落髮し、同寺光明院

覺遍に隨いて法相の奥旨を究む、寛喜二年維摩大會の講師となり、盛んに中宗の學道を唱へ、遂に時の上皇に敬せられ法印權大僧都に敕任せらる、師春日明神に詣てゝ其地の幽靜なるを愛し草菴を結びて論講廬と云ひ、自ら地藏を刻みて安置す、嘉禎年中大悲尊者松院に戒律を唱ふるを聞き、往て謁し戒を受く、正法の弊を歎じ戒律の興隆を旨とし律文の不明なるあれば之れを正法國師の高足來緣舜律師に咨ふ、時に大悲尊者通受比丘性戒倶成の義を立て、學侶信疑半ばして是非の聲喧すし、師乃ち通受比丘文理鈔等古今の證文を著して不明の徒に教ふ、茲に於て大悲の法化大に振ひ、白毫寺に法を開き盛んに開遮の法を唱ふ、此時に方り戒壇院の實相照法相宗を慕ひ受業の師を春日明神に祈り、偶師に見えて弟子の禮を執る、師依つて中宗の玄旨を傳ふ、後聖一國師東福寺に於て宗鏡錄を講ぜるを以て、師眞空律師と共に往きて之れを聞き、講終りて師自ら撰せし眞心要決に書簡を添へて呈し返書を得たり、仁治二年四十八歳にして生馬山大聖竹林寺に至り、清淨戒律の道場となし、且念佛往生決心記を著す、次で東大寺知足院の廢を興して戒律の道場とし、名けて新別所と云ひ解脫上人より得たる地藏尊像を安置して永世の鎭護とす、建長三年冬病に罹り、院を上足覺澄に附し大聖寺に退き、翌四年八月二十八日寂す、世壽五十八、嗣法の高弟知足院覺澄、下野藥師寺中興密嚴、東大寺尊勝院宗性、興福寺中院賢恩、鎌倉光明寺良忠等あり、著作應理大乘傳通要錄二卷、眞心要決前抄卷數未詳、仝後抄二卷、法相大意抄一卷、法相二卷抄二卷、唯識觀、唯識三十頌略記、唯識三性觀、唯識三類境、瑜伽論大科各一卷、因明大疏抄八卷、仝四相違記二卷、仝局通對記一卷、眞法要文集一卷、表無表章鈔六卷（或は三卷とも云ふ）、意業無表鈔、自行思惟、三種菩提心、別受行否抄、通別二受抄、通受比丘文理抄、三聚淨戒懺悔軌則抄、通受軌則有難通會抄各一卷、菩薩略要六卷、宗鏡錄要義三卷、念佛往生決心記、善導大意、群疑論科、學徒教誡、白毫寺緣起、春日安居記、知足院緣記、仝遺誡止防用心一卷等凡て百餘卷あり、（蓮阿菩薩傳、本朝高僧傳）

リヨーベン　良辨　一三四九―一四三三　〔華嚴宗〕大和東大寺開山なり、　良辨の俗姓生國詳ならす、俗姓百濟氏とも淺部氏とも漆部氏とも云ふ、生國相模とも、近江志賀ともいふ、師二歳の時其母出てゝ桑を采り兒を樹蔭に置く、忽ち大鷲あり捉へて去り、大和春日の祠前に放つ、偶義淵僧正神祠に詣て拾ひ歸りて養育す、五歳甫めて學に就き、稍長して法相の義を受け、專ら義淵に給事す、後東山に退隱し、一小院を構へ、行者となりて佛道を修行す、時人東山の金熟仙人といひ、金鐘行者といふ、（金鐘一に金鷲につくる）、天平五年、聖武天皇山城添上郡に於て羂索院を建てゝ不空羂索觀音の像を安置す、既にして天皇師の名を聞き、勅召して羂索院を賜ひ、費用を給して造營し、已に工事成り改めて金鐘寺と號す、師か念持の執金剛神の像を安置す、時に師已に四十五歳なり、師天皇に奏し大伽藍を建立せんとす、これ天皇か毘盧沙那佛の大像鑄造を發起し給ふ初因緣なり、初め近江紫香樂に於て企て未た成らさりしかは、遂に其事業を金鐘寺に移つすに至りしものなり、天平十六年十二月の夜金鐘寺及び朱雀路に燈一万坏を燃

く、其後十八年十月天皇及び太上天皇（元正）皇后共に金鐘寺に幸して燈を燃き、盧舍那佛を供養し佛の前後の燈一万五千七百餘坏に及ふ、夜一更に至りて數千の僧侶をして脂燭を擎けて贊嘆供養せしめ、佛を繞ること三匝に及ふ、三更に至りて宮に還り給ふといふ、師審祥を請し金鐘寺に於いて華嚴經の講筵を開く、師が華嚴闡頓の說は審祥より得、後世師を以て日本華嚴宗の二祖とす、東大寺の將に成らんとするや、我か國未た產金の地なかりしが故に師自ら藏王權現に祈り、近江に至りて觀音の冥助を禱る、師時に比良神の靈を蒙りて此地に寺塔を築けり、（今の石山寺の觀音は此地なりと云ふ）天平勝寶三年天皇自ら東大寺に幸して師を少僧都に任し給ふ、翌年四月大佛の大供養會あり、五月一日勅を以て東大寺別當に補せられ、寺務を司ること凡そ九年、（一說に十二年）天平勝寶六年十月十三日法務を兼ね、同八年五月二十五日聖武天皇御病の勞を嘉みし給ひ、轉して大

良辨僧正

僧都となし當戸の課役を免せられ其父母兩戸に及ふ、天平寶字四年（一說天平勝寶七年）僧正に任せらる、時に八十歲、寶龜四年十一月十六日寂す、壽八十五、天皇使を遣はして弔せしむ、其墓は大和宇陀郡赤尾山林に在り師か剏立するところの寺院大和の東大寺、近江の石山寺、金鐘寺、菩提寺、相模の大山寺（一に大安寺に作る）等あり門下實忠、良興、安寬、永興、忠惠、標瓊、鏡忍等あり、之を門下の八上足といふ、（東大寺別當次第、僧綱補任、三國佛法傳通緣起、七大寺年表、續日本紀、元亨釋書、本朝高僧傳、扶桑略記等）

リヨーベン　良辨　……　ソンクワン尊觀を見よ、

リヨーホ　良補 二二七五 〔淨土宗〕奧州專光寺の開山なり、　良補は文蓮社淨譽、又は善保と號す、奧州岩城の人なり、良潛に師事して淨土敎を學び遂に其法を嗣ぐ、後州の白河郡田村に專光寺を開き、元和元年九月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーホー　良芳 一九六五 [illegible]四 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、　良芳は字を蘭洲と云ふ、若狹の人、俗姓は橘氏諸兄大臣の胤なり、幼にして敎寺に落髮し、十五歲畿内に觀光し一山國師の道望を聞き、遂に衣を更へて南禪寺大雲菴に抵る、國師寂する後無相眞に參し、久うして辭して講肆に遊び諸家の秘奧を探り、比叡山横川に菴居す、三年を經て愛宕山に登り菴を結びて禪坐す、建武元年夢窻國師再び南禪寺に住するに方り　師招かれ内史に侍す、攝津溝杭の檀越菩法洲性二寺を剏し、師を請して居らむ　曆應元年清拙和尚南禪寺に遷り師藏鑰を司とる、貞和元年雪村梅和尚東山を董し師往てこれに

請益す、時に四十一歲なり、雪村の寂するに及び退て大龍寺の塔を守る、龍山和尚建仁寺に主となるに方り、師招かれて第二座となり分座說法す、文和元年出でゝ甲斐淨居寺に住し幾もなく京都に歸る、天境致、別源旨、聞溪聰、中山闇の諸老相繼で建仁寺に主たるに方り師常に版首に居す、播磨太守赤松則祐久しく雪村に參して師と交厚く、大義金剛二寺を建て師か演法の場となす、康安元年楠正儀細川淸氏南軍を率ひて京都に入り、將軍足利義詮後光嚴帝を奉じて近江武佐寺に走り、嗣子義滿僅に四歲、左右抱持して夜師の室に至る、師これを衣中に匿し、輿に乘し馳て播磨白旗城に入る、明年義詮京都に歸り、特に攝津濱田莊を割て衆供に充つ、之より寵遇渥し、貞治二年相模萬壽寺を主どり、四年京都萬壽寺に遷る、永和四年建仁寺に住し、康曆二年敕を奉じて南禪寺に主となる、住持三年にして東山淸住院に佚老し、至德元年十二月六日疾に罹り、偈を書して曰く、須彌倒卓、虛空消亡、日面月面、常時寂光、と、筆を投して寂す、壽八十、門人全身を奉して本山に塔す、著作諸會語錄若干卷あり、敕諡弘宗定智禪師の號を賜ふ、(本朝高僧傳、續群二三七)

リヨーホン 良本 二二五八…… 〔淨土宗〕仙臺長龍寺の開山なり、 良本は順蓮社利白と號す、俗姓は片桐氏、良實に師事して法を嗣ぎ、仙臺長龍寺を開く、慶長三年九月寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーホン 良本 二二四七…… 〔淨土宗〕奧州安樂寺の開山なり、 良本は誓蓮社と號す、奧州小野鄉の人、聖觀に師事して淨土敎を學び、楢葉安樂寺を開きて所承の學を弘む、長享元年六月四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーミン 良閩 (……) 〔曹洞宗〕出羽龍雲寺の開山なり、 良閩字は越叟、出羽の人、十三歲羽黑山にて落髮し密部を學ぶ、大徹宗令越山に說法するを聞き、服を更めて之に師事し其印可を受く、總持寺に出世し、立川寺に遷る、晚年辭して鄉に歸り龍雲寺を築き老を養ふ、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

リヨーミヨー 良明 (……) 〔天台宗〕近江比叡山の學僧なり、 良明は鄉貫詳かならず、幼にして桂園院範守に業を受け、最も天台敎に精しく時の名ある者皆師より出づと云ふ、某年五月三日寂す、壽缺く、(三井續燈記)

リヨーボク 良睦 (一九七七) 〔臨濟宗〕相模建長寺の禪僧なり、 良睦字は仲和、俗姓不詳、一山禪師の法を嗣ぐ、友丘の法弟なり、不幸短命なり、示寂の年時缺く、遺偈あり淸風吹ニ碧海ー明月照ニ青空ー一唱還鄉曲、調高興不レ窮、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

リヨーモク 良卜 (……) 〔淨土宗〕下野圓通寺第七代なり、 良卜は尊蓮社旭殘と號す、良順に法を嗣ぎ、終に其席を繼きて下野芳賀郡圓通寺に主となる、寂年缺く、嗣法の弟子に良冏あり、(淨土總系譜)

リヨーモン 良聞 三二八三 二三四二 〔淨土宗〕京師法林寺四代なり、 良聞字は東暉、號は定蓮社、勇猛觀と云ふ、京師の人なり、双親篤信にして慈善を好む、師幼にして袋中上人の禪室に入り熟學の後山城法林寺の主務となる、勤業嚴密にして數々倶舍唯識等の講席を開く、天和二年二月十八日佛號を唱

して寂す、壽六十歲、（鎭流祖傳）

リヨーユ　良瑜（二〇二八）〔天台宗〕近江園城寺の僧なり、良瑜俗姓は藤原氏關白兼基の子なり、園城寺に投じて得度し、良慶道瑜の二師に從ひて顯密二敎を究め、三井の長吏を管し法務を兼領す、常住院に住して大僧正に任じ、尋で三山の檢挍を司どる、應安元年宮中に密壇を修して牛車に乘るを聽さる、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーユ　良瑜（二〇九七）〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、良瑜初の名は靜助、俗姓は藤原氏攝政忠敎の子なり、密灌を實相寺の仁師に受けてより之を人に授け、廿二人天下に聞こゆ、且つ修驗法に長す、應永四年八月廿一日寂す、壽缺く、（三井續燈記）

リヨーユー　良祐（一八一九 一八九一）〔臨濟宗〕筑前香正寺の學僧なり、良祐號は安覺、一名は色定と云ふ、建仁寺榮西禪師の俗弟なり、甫めて七歲佛門に歸し、良印學頭に就て習業し、二十歲に充たずして諸經に精通す、文治三年廿九歲にして法華四功德の文を讀み、初めて大藏書寫の大願を發し、華嚴經より初む、其尾に書して曰ふ、昔釋尊以三七ロロ之今弟子以九十日筆之說之與書難異開悟得脫是同、と、筑の吉澤觀音、香椎、箱崎、豐の彥山、淡路の武島等に遊歷し、宋に渡りて居ること十餘年、大藏を暗記して東皈す、筑前田島香正寺に住す、承元初年漸く一筆にて經論六百三十八部二千七百四十五卷二百五十八帙書寫の功を終ふ、大願を發してより四十二年の間、廡下船底も業を廢せず、毎卷尾に其地を記し一切經一筆書行人良祐とあり、大宮司宗像氏師と交り深く、財を捨て堂を建てゝ神祠の傍に置く、師自ら像を彫み大藏を守護す、寬喜三年寂す、壽七十三、（本朝高僧傳、小雲棲稿）

リヨーユー　良祐　ジユーショー十聲を見よ、

リヨーユー　良勇（一五二五 一五八三）〔天台宗〕近江延曆寺座主なり、良勇は美濃の人、俗姓は忌部氏なり、出家して智證靜觀遍照の三師に天台敎を學び、延喜二十一年天台座主に任ず、延長元年三月六日寂す、壽六十九、（天台座主記）

リヨーユー　良融　ジユンキヨー順敎を見よ、

リヨーヨ　良譽（二〇〇六）〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、良譽は大納言實藤の子、育助法師に學ひ貞和二年東寺の長者に任し權僧正となる、其示寂の年時缺く、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

リヨーヨ　良譽（二二五一 二三一八）〔新義眞言宗〕大和長谷寺第六代なり、良譽字は堯遍、俗姓は奈良生氏、母は岸氏、下野都賀郡の人、天正十八年に生る、九歲高島の寶藏院に入りて應譽和尙に從ひ、十一歲落髮し、十四歲四度の瑜伽行を修め、後小山の持寶寺に到り入壇し灌頂を修し、廣く遊方して講席に列なる、京都に往きて元壽僧正に師事すること十六年にして秘奧を授けらる、元和九年五月醍醐寺に到り、大僧正堯圓に見えて兩部の許可及ひ諸尊の印契を蒙る、寬永九年後水尾上皇元壽を宮中に召して論莚を開かしむ、師之が講師の選にあつかる、同五月大覺寺尊性法親王に謁して廣澤一流を受け同十年春高島の寶藏院に皈へり講席を主とる、同十三年武藏の愛阜寺俊賀和尙の後補となり、將軍家光の命によりて圓福寺に遷る、一住十二年正保四年秋席を俊宥に付して再ひ元壽

僧正の室に入る、後六波羅密寺に住す、承應元年六月十八日尊慶僧正師を訪ひて豐山の主職を讓らんと約し、祕訣一軸を傳ふ、同十三年十二月十九日尊慶寂し、同二年春江戶に赴き命を受け始めて主席を補し長谷寺に住す、住五年、萬治元年九月一日寂す、壽六十八、臘五十七、（豐山傳通記）

リヨーヨ　良譽　ジョーエ定慧を見よ、

リヨーヨー　良耀　二〇〇〇……　〔眞言宗〕山城東寺の長者なり、　良耀は內大臣僧正と號し、權中納言具俊の子なり、定助法師に從ひて宗旨を學ひ、元弘二年東寺の長者となる、同十二月權僧正に任す、曆應三年重ねて長者となる、其寂年缺く、（東寺長者補任、仁和寺諸院家記）

リヨーリン　良林　二二七五……　〔淨土宗〕陸奧光林寺の開山なり、　良林は光蓮社運淸と號す、奧州平久保の人なり、良薰に師事して法を嗣ぎ、洲の中山に光林寺を創して盛んに所承の學を弘む、元和元年五月寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーア　了阿　二四三三―二五〇四　〔天台宗〕江戶淺草金地院の僧なり、　了阿初の名は高風、字は春山、號は台麓、別に一枝堂といふ、俗姓村田氏、通稱小兵衞といひ、江戶淺草黑船町に住して烟管を賣るを業としたりしが、浪華の契沖阿闍梨の風を慕ひて、其歌文を愛誦し、後下谷坂本に隱棲し、國書佛書を幷せ讀み、博覽強記人に過ぐ、一切經を通讀すると三回に及へり、三十餘歲にして髮を剃して了阿と云ひ、淺草寺境內の金地院に入り學問を事とす、和歌を淸原雄風に學び、書を東江源鱗に學び、共に奧蘊に達せり、惠照律院の普門律師圓通、駒込西敎寺潮音等に交り、佛書を聞く、終生女犯なく戒律を嚴持したりと云ふ、天保十四年十二月十四日寂す、壽七十二、顯德院一鶴了阿と云ふ、著作俚言集覽、考證千典、一枝堂全書、一枝堂抄錄等數百卷あり、
（考）了阿は天台宗の度を受けたるにあらされとも、天台宗の寺に留住したれは且く其宗の僧に列す、

リヨーア　了阿　ルトン流頓を見よ、

リヨーアン　了庵　ヱミョー慧明を見よ、

リヨーアン　了庵　ケーゴ桂悟を見よ、

リヨーイ　了意（二三四二）〔眞宗〕山城本性寺の住持なり、　了意字は昭儀坊と云ひ、天和の頃京師にありて著作を事とす、著作三部經鼓吹七十八卷、往生十因直談十五卷、大原問答句解十卷、新語園十卷、勸信義談鈔六卷、三國因緣談三卷、釋迦一代記八卷等あり、

リヨーイ　了意（……）　京師の佛工なり、　了意は了無の猶子にして俗名を右京といふ、

リヨーイン　了胤　二四一〇―二四七二　〔眞宗〕武藏江戶眞龍寺第八代なり、　了胤號は蘭室と云ふ、江戶淺草の人、眞龍寺に住し學を嗜む、安永九年十一月本山の命により府內末寺組頭役となる、天明九年五月十三日權律師に任せらる、設樂純如の門に入り心越禪師より傳はれる七絃琴の指法を學ひ妙手となる、龜田鵬齋等に交はり文墨を樂めり、晩年眼を疾みて明を失し七絃琴の指法を門人に口授したりと云ふ、文化九年九月十三日寂す、壽六十三、（琴人傳史料、寺記、香亭雅談）

リヨーウン　了運　二〇一〇―二〇九二　〔曹洞宗〕加賀大乘寺の禪僧なり、　了運字は籌山、加賀の人、出家具戒の後南禪寺省德に

參し、辭して加賀大乘寺桂巖禪師に師事すること一年、玄奧を究む、桂巖の寂後其席を嗣ぐ、永享四年八月二十八日寂す、壽八十三、(日本洞上聯燈錄)

リヨーウン 了運(……) 〔曹洞宗〕肥後法泉寺の禪僧なり、了運字は泰庵、幼にして出家具戒し經論に通す、後能翁玄慧の室に入り印可を受く、無說宣大慈寺に道を唱へ師を迎へて第一座となす、後出で丶吉祥寺に住し、次に肥後法泉寺に移り、某年寂す、壽缺く、法嗣古泉利蒙あり、(日本洞上聯燈錄)

リヨーウン 了運(二一八五) 〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、了運は中院前中納言通世の子、永正十三年尊海の室に入りて得度し、十四年法眼に叙す、十七年權少僧都に任し、大永三年權大僧都に任し、五年法印に叙す、寂年及ひ壽缺く(仁和寺諸院家記)

リヨーウン 了雲(……) 京師の佛工なり、了雲は三位といひ、初の名を數馬と稱す、了雲は其法名なり、彫刻せる佛像多し

リヨーウンイン 了雲院 ニチトー日登を見よ、

リヨーエ 了惠 カイニン戒忍を見よ、

リヨーヱ 了惠 ドーコー道光を見よ、

リヨーエツ 了悅(……) 〔淨土宗〕某寺の僧なり、了悅字は喜譽、武藏國船町の人なり、俗姓詳ならす、師俗の時夫妻堅く契約する所ありしが妻死後漸く約に背く、後大に之を悔悟して處々の靈地を經遊し、衆僧を供養し念佛精進すること最勤む、後病を得て攝津有馬に浴治す、遂に此地に寂す、某年十一月二日なり、壽詳ならず、(緇白往生傳)

リヨーエン 了圓(……) 〔淨土宗〕筑前葦屋の僧なり、了圓俗姓生國詳かならず、長樂寺隆寬に師事して淨土宗長樂寺流の學を究め、筑前葦屋松原に住し大に所承の敎を弘め、岡上人と號す、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーエン 了圓(……) 〔淨土宗西山派〕備前小野路の僧なり、了圓字は賴達、鵜木光明寺觀堂覺慈に師事して淨土宗西山派の學を修め、備後小野路に住して盛んに法化を布く、後宗を改めて戒律宗に皈し律師となる、寂年及壽缺く、

リヨーエン 了圓 ミヨーコー明光を見よ、

リヨーエン 了圓 リヨーケン良憲を見よ、

リヨーエン 了圓 リヨーハン良範を見よ、

リヨーオー 了睢(二四一六—二四八六) 〔眞宗〕加賀金澤林幽寺の住持なり、了睢號は香流庵、加賀の人、高倉學寮に學び、文化十三年十一月十七日擬講となり、文政元年夏學寮に義林章を講し、秋尊號銘文を講ず、後無差別論疏末覺鈔を講す、文政九年正月五日寂す、壽七十一、(高倉學寮講者列傳稿本)

リヨーオー 了翁 ドーカク道覺を見よ、

リヨーオン 了音(……) 〔淨土宗西山派〕山城本願寺の學頭なり、了音は淨音法興に師事して淨土宗西山派の學を受け、稱念寺本願寺の學頭となり、山城八幡に住す、又京都六角に住し觀經疏鈔八卷を作る、世に八幡の鈔、又は六角鈔、或は本願寺の鈔と云ふはこれなり、寂年並に壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーカイ 了海（二三一三）〔眞宗〕京都東坊の住持なり、了海は肥後の人、延壽寺月感の弟なり、承應二年月感は西本願寺能化西吟の安心を駁して自性一心の邪義となし、訴狀を出して彈劾し、一山の騷擾となる、了海亦月感に同意し遂に東本願寺下に轉す、尋て月感も東本願寺下に轉す、了海東本願寺內不明門通七條上る東坊に住し、高倉學寮の開立に力を盡し、後世より學寮の開基と稱せらる、寂年並に壽缺く、著作文類直解、明眼論大疏等あり、（高倉學寮講者列傳稿本、月感年譜）

リヨーカイ 了海 一八六〇／一九五三 〔眞宗〕山城佛光寺の第四代なり、了海一名は願明、幼名を松君といふ、鳥羽天皇の裔なり、父は左大臣實信、母は大井氏民部少輔の女なり、七歲實相寺範賢に從ひて薙髮し、後比叡山に登り靜榮に師事す、一旦家に歸へり、後奇瑞に感し麻布山善福寺に至り之に住して密敎を弘む、親鸞東化の途次之に宿し、師之に謁して淨敎を受け弟子となる、弘安元年京に赴き興正寺を主とり、後之を誓海に附して麻布に還る、永仁元年十一月六日寂す、壽九十四（一に元應二年正月廿八日寂す壽八十二、）著すところ和讃七首あり（本願寺通紀）

リヨーカイ 了海（………）〔眞宗〕三河勝曼寺の住持なり、了海俗名は庄治太郎、俗姓は安藤氏、父は敎房（上宮寺蓮行）なり、出家して勝曼寺を主とり、天台宗を學ふ、蓮行慶圓と共に親鸞に矢作柳堂に謁して弟子となり眞宗に歸す、示寂の年月詳ならす、三河額田郡針崎勝曼寺は其遺跡なり、（本願寺通紀）

リヨーカイ 了海（一九七一）〔眞言宗〕山城醍醐山松橋の九代なり、了海は公紹大僧正の室に入りて薙髮し、應長元年五月三日職位傳法を受け松橋の席を董す、師他院の法を嗣くか故に譜に載せす、（續傳燈廣錄）

リヨーガク 了學 二二〇九／二二九四 〔淨土宗〕武藏增上寺の第十七代なり、了學號は照譽、俗姓高木氏下總國小金城主高木修理亮の三男なり、天文十八年春武江糀村に生れ、三上安西の猶子となる、永祿二年十三歲（一說十一歲）にて東漸寺に入り聞譽上人（一說善樹上人）に投じて剃髮し、後生實大巖寺源譽觀智國師存應大和尙に從うて法を受く、稟性聰慧淨土敎に通し、且つ諸宗並に神道を究め和歌に涉る、卅七歲（一說卅一歲）にて佛法山の學頭に補せらる、天正十七年四十一歲の時聞譽上人の讓りを承けて佛法山に住持し、又上總國大瀧に至り良信寺を開き住する事三年、先是飯沼弘經寺兵火に遭ひ寺主存把寺を遁れて結城に弘經寺を開きしかば飯沼廢絕す、了學乃ち之を中興して住持す、後諸處に寺を建つ、家康駿府に在りて圓頓戒の再傳を山城黑谷の主琴譽上人に問ふに方り了學薦擧せらる、又了學を拜して圓頓布薩二戒を受く、將軍秀忠亦師を營中に召して戒を受く、師下總國大鹿村に至り弘經寺を再興し衆一百と論難す、幾もなく寺を弟子了聞に附し飯沼に歸る、寬永四年七十九歲にして飯沼を辭し佐倉に往き淸光寺に閑居し、城主の請に依りて松林寺を開く、又伊勢桑名城主侍從忠政の請に依りて西岸寺を桑名本邑に開く、寬永八年冬秀忠病あり師を請すること切なりしかば、營に登りて宗義の要を說き十念を授く、仝九年正月七日增上寺の第十七代となる、仝月廿

四日秀忠薨去、廿六日遺骸を移し師導師たり、命ありて安國殿を南山に移し法寳藏を建て、又同山下三嶋谷を増上寺境內とす、尋て營中の道場に入りて戒を授く、仝年冬退院の地を四谷竹町にトし了學寺と名け、北谷の新境に雲晴院を開く、仝十一年春病あり、二月十三日將軍親しく病を問ひ其願ふ所を問ふ、師答ふるに弘經寺常紫衣の事を以てし終に寂す、壽八十六遺弟塔を增上寺歷代の側に立つ、(三緣山志、鎭流祖傳)

リヨーカクイン　了覺院　ニチヨー日養を見よ、

リヨーカン　了感　二二七七　〔淨土宗〕信濃法然寺第二代なり、了感は其鄉貫詳かならず、不殘に投じて剃染嗣法し、信濃木曾谷法然寺に住して第二代となる、元和三年九月三日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーカン　了感　二二四三　〔淨土宗〕常陸常福寺第九代なり、了感は尖蓮社日譽と號す、空譽玉泉上人の室に入りて淨土教を學び、遂に其席を繼ぎて常福寺に住じ第九代の主となる、後常陸那珂郡に西方寺を創して開山となり、天正十一年二月二十一日寂す、壽缺く、法嗣一人あり輪智釋譽と云ふ(淨土總系譜)

リヨーガン　了巖　二四一三　ゲンミヨー元明を見よ、

リヨーキ　了軌　二四八七　〔眞宗〕武藏光明寺の僧なり、了軌字は公範、號は雲室と云ふ、初の名は鴻漸、字は元儀と云ふ、寶曆三年三月五日信濃飯山なる眞宗光蓮寺に生る、寺は本武田信豐の子正善の開創するところにして、師は正善より第十一代なり、十七歲にして江戶に出で、諸葛蠡に畫を學び後清人伊孚九の畫法を慕ひ特に山水人物に於て傑作あり、文學は初め儒家宇佐美惠助に就き、後林家に學ぶ、又詩文に長じ嘗て詩社を結びて小不朽吟社と云ひ詩聲一時に振ふ、文政十年五月九日寂す、壽七十五、遺命により住持せし江戶西久保光明寺に葬る、著作老君解旨、莊叟得意、西峰放言、室中之燭、山水徵、雲室詩鈔各若干卷あり、(扶桑畫人傳、續諸家人物誌、雲華隨筆)

リヨーギ　了義　(一九九四)　〔臨濟宗〕近江興禪寺の禪僧なり、了義字は海岸、俗姓海部氏、阿波の人なり、早年敎寺に入り後禪に歸す、大燈國師(妙超)の下に參究功あり、後攝津妙觀寺を開く、建武年中諸國亂る、師寺を捨てゝ京師に入り國師の下に留る、尋て近江興禪寺に遷り住す、一日國師の命を帶びて南朝に使す、關吏詰問すれば師實を告ぐ、吏曰ふ子已に有德の僧なり、若し夢窓國師に歸せば罪を宥るさむと、師笑ひて曰ふ、出家たるもの豈死を畏れて師承を易へむや、頭を要せば斬り取れ、と、安坐して頭を伸ぶ、吏遂に刀を加ふ其年時並に壽缺く、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

リヨーギ　了義　ニチタツ日達を見よ、

リヨーギン　了吟　二四六一　〔淨土宗〕攝津大福寺の僧なり、了吟字は風航と云ふ、大坂大福寺に住し、國學に通し、學譽高し、享和二年三月廿八日寂す、著作風航記事五十卷、鎭西上人繪詞傳十八卷、新撰往生傳八卷、四十八願題詠鈔五卷あり、

リヨーキヨー　了慶　(二四〇四)　京師の佛工なり、了慶は俗名內藏丞といふ、延享元年不空羂索觀世音を白檀木にて作る、

リヨーギヨー　了曉　二一四三　〔淨土宗〕下野弘經寺第二代なり、了曉は聖蓮社慶譽と號す、大和の人、西譽上人に師事して法を嗣ぎ、飯沼弘經寺に主となる、又三河寶飯郡に大恩寺を創して開山となり、文明十五年五月二十七日寂す、壽缺く、著作數卷あれとも今傳はらず、(淨土總系譜)

リヨーグ　了愚　二〇一二……　〔臨濟宗〕山城東福寺の禪僧なり、了愚字は鈍翁、俗姓不詳、月船海に師事し長樂寺に住す、次に京師の普門寺に遷り、後に東福寺に遷り住す、虎關が元亨釋書を修するに方り、了愚を訪ひて曰く、聞く先師月船和尙示寂の際異香室に滿つることこれありや、果して然らば當に僧史に載せて後世に傳ふべし、其實如何と、師色を作して曰ふ、和尙先師を誘するなくば好し先師末後半點の屎臭氣もなし、更に何ぞ異香室に滿つと言はむと、師の性情は此一事を以て知るを得むか、文和元年四月四日に遺偈一首を留めて寂す、提二空却印一、去來在レ天、萬年一念、一念萬年、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

リヨーグー　了空　(一〇八六)　〔曹洞宗〕長門了空菴主なり、了空は其俗姓生國詳かならず、初め智翁永宗禪師を美作の西來寺に拜して得度し、尋て菩薩戒を受け、從つて大寧寺に來り遂に印記を受け、菴を山南に構へて之れに居し、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

リヨーグワツ　了月　(……)　〔淨土宗〕常陸常福寺の僧なり、了月は上蓮社芸譽と號す、盛譽泉慶上人の法嗣にして常陸寺に住す、寂年壽缺く、著作授手印邪正義、幷に破淸濁各一卷あり、(淨土總系譜)

リヨーグワツ　了月　二三四五 二四一八　〔淨土宗〕武藏江戶淺草行安寺の僧なり、了月字は普照と云ひ、神蓮社靈譽と號す、京都の人なり、三緣山增上寺大僧正貞譽了也の弟子となり、內外兩典を學ぶ、天性畫を好み顏輝牧溪の筆意を仰慕し、自稱して顏溪と云ひ妙神に入る、了也に陪して城に登り、其畫は將軍の優賞を蒙る、殊に墨梅を以て聞えたり、法兄了說の後を繼きて淺草行安寺に住し、寶曆八年十月十七日寂す、壽七十四、(名家略傳)

リヨークワン　了觀　(……)　〔淨土宗西山派〕京師三福寺の學僧なり、了觀字は漸空、俗姓生國詳かならず、東山證入の弟子觀日に師事し淨土の宗義を受け、京師に三福寺を建立して宗義を弘演し、門下大に盛なり、示寂の年月日缺く、(淨土傳燈錄、淨土總系譜)

リヨーグワン　了願　(二四〇三)　〔眞宗〕伊勢光蓮寺の住持なり、了願字は節山、號は維嵩と稱し、晚年藏六菴と呼ぶ、伊勢津の光蓮寺九代了台の子なり、桃溪日溪二講主に師事して博く內典に涉り唱導を善くす、享保二十年安藝の古貫と偕に叢林の知事となる、寬保三年淨土和讃を附講す、臨終に偈あり一夢場中客、六旬辭二閻浮一、更次乘二願船一、流二入大心海一、と法主號を下して祥雲房といふ、(學苑談叢)

リヨーゲン　了源　一九五二 一九一一　〔眞宗〕相模善福寺の開山なり、了源名は信之、沖津三郞と稱す、童名は祐若、曾我氏なり、父は十郞祐成、母は虎女、建久四年祐成父の讐を復する時師は猶ほ母の胎內にあり、祐成の死後生る、建保元年廿一歲の時和田の合戰に功あり、源實朝相模平塚の地を賜ふ、

後世を厭ひ祝髮す、國府津に親鸞に謁し、淨土敎を受け大磯山下に善福寺を建つ、建長二年三月十二日寂す、壽六十、(本願寺通紀)

リヨーゲン　了源　(……)　〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、了源字は笠堂、山城の人なり、幼にして洞谷寺明峰素哲に投じて出家し、明峯の大乘寺に遷るに及び、總持寺峨山に依り印記を蒙り、總持寺に出世し同寺に寂す、年時缺く、(日本洞上聯燈錄)

リヨーゲン　了源　クーショー空性を見よ、

リヨーゲンイン　了現院　ニチショー日盛を見よ、

リヨーコ　了故　二二八七　〔淨土宗〕山城西光寺の開山なり、了故は一蓮社宗譽と號し、相模三浦の人、法を感譽に嗣ぎ山城伏見西光寺の開山となる、寛永四年十月十七日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーコー　了光　(……)　〔曹洞宗〕能登洞谷寺の禪僧なり、了光字は寂室初め瑩山に大乘寺に參し久して所證なし、辭して無涯洪に謁して機語相契ふ、左右に執侍する者已に年あり、師遂に其席を繼て開堂し無涯の嗣と爲る、幾もなくして洞谷寺に遷る、化儀盛んなり、某年七月二日寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

リヨーコー　了康　(……)　〔曹洞宗〕能登總持寺の禪僧なり、了康字は安仲、肥後の人、業を玉碉に受け月叟明潭の法を繼き、出世歷遷して總持寺に主となる、某年寂す、壽缺く、(日本洞上聯燈錄)

リヨーザン　了山　二三四六　〔淨土宗〕信濃芳泉寺の僧なり、了山は稱蓮社香譽、直至と號す、俗姓は土屋氏信濃佐久郡小諸の人なり、慧頓に師事して淨土敎を學び、後鴻巢の檀榮に法を嗣ぐ、信濃芳泉寺に住し、貞享三年十二月七日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーザン　了山　二三五九　〔淨土宗〕武藏大巖寺の僧なり、了山は信蓮社晃譽、故照と號す、安藝廣島の人、以八上人の孫弟なり、初め江戸崎大念寺に掛錫して巖宿に嗣ぎ、後傳通院增上寺の輪下に入り、大巖寺大光寺の二寺に主となり、元祿十二年正月二十五日寂す。壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーシン　了心　二三〇二　〔淨土宗〕豐後淨安寺の開山なり、了心は行蓮社松譽と號し、三河の人なり、傳察に師事して法を嗣ぎ、豐後大分郡に淨安寺を剏して開山となる、寛永十九年八月八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーシン　了心　(一九〇二)　〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、了心號は大歇、退耕行勇に師事し、宋に渡りて禪林を遍歷す、歸りて壽福寺に住し、尋て建仁寺に移る、楞嚴經に精しく註十卷を撰す、建仁寺に在りて衣服禮典等を制し、叢林の風了心によりて大に備はる、示寂の年時缺く、著作心書(卽ち楞嚴經の註)十卷あり、(本朝高僧傳)

〔考〕了心は仁治の頃の人なり、

リヨーシン　了心　ホンム本無を見よ、

リヨージツ　了實　二〇四六　〔淨土宗〕常陸常福寺の開山なり、了實字は成阿、盛蓮社と云ふ、其俗姓生國詳かならず、大田法然寺蓮勝上人の室に投じて淨土宗の敎義を傳へ、元德二年六月宗脉を授けらる、後空慧上人に就て圓頓戒並に布薩

なごく、延文三年佐竹義篤の皈依により常陸那珂郡瓜連に常福寺を建立して念佛の道場となす、貞和四年聖冏を度し後法席を讓る、至德三年十一月三日常福寺に寂す、壽八十餘、（鎭流祖傳、淨土總系譜、淨土傳燈錄）

リヨージヤク　了寂　エンショー圓證を見よ、

リヨージヤクイン　了寂院　ニチゴ日語を見よ、

リヨーシユー　了秀　二三七〇……〔淨土宗〕京都淨華院の僧なり、了秀は憲蓮社章譽と號す、俗姓生國詳かならず、知哲の室に入りて宗乘を研究し、岩付淨國寺に住す、後京都淨華院に移る、寶永七年正月十五日寂す、世壽缺く、著作法事讀私記檢要七卷あり、（淨土總系譜）

リヨーシユー　了秀（二二四七、一）〔淨土宗〕常陸常福寺第六代なり、了秀は玉蓮社感譽と號し、超譽聖欽上人の高弟なり後常陸那珂郡常福寺の席を嗣きて第六代となり、某年寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

了實上人

〔考〕了秀は長亭の頃の人なり、

リヨーシユーイン　了秀院　ミヨーホーニ妙法尼を見よ、

リヨージユン　了淳　二四五六 二五一八〔眞宗〕三河源德寺の住持なり、了淳字は義讓、號は本法院と云ふ、尾張の人なり、高倉學寮に學び、數々講席を開く擬講嗣講を經て講師となり、異義の鎭定に力を盡す、安政五年二月四日寂す、壽六十三、

リヨーシヨー　了祥　二四四八 一五〇二〔眞宗〕三河萬德寺の住持なり、了祥號は龜水、妙音院と稱す、三河の人、香月院深勵に就いて、宗乘を學ひ教行信證を專攻して發明する所多し、天保十三年四月八日寂す壽五十五、

リヨーシヨー　了性　二二五二 二三〇九〔戒律宗〕大和極樂寺の律僧なり、了性字は明空、俗姓は蓮池氏京都の人なり、幼にして雙紗寺日勸に投して剃髮し、十九歲律を慕ひて、大原野に往き空因律師に謁す、暫くして槇尾山に登り慧雲海に依りて沙彌戒を受け、翌年具足戒を進得す、五年の後始めて大和の上宮皇院に住し顯密の教を講す、藤原光廣蓮華念佛會を開き共に之を行ふ、太上天皇召せとも應せす、絹若干匹を賜ふ、師乃ち之を東大寺に送る、晩年極樂寺の傍に菴居し、常に唱號三萬遍、慶安三年十月二十五日寂す、壽五十八、臘三十九、門人極樂寺に塔を建つ、（本朝高僧傳、緇白往生傳）

リヨーズイ　了隨　二三一五……〔淨土宗〕大和超龍寺の開山なり、了隨は鎭蓮社隱譽と號し、大和平群田原の人なり、周頓に就て剃髮し虎角に師事して法を嗣ぐ、大和郡山超龍寺の開山となり、明曆元年三月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーゼン　了全（二三三二）京師の佛工なり、了全は康知の子なり、初め左京と稱し三位といひしか、後入道して今の名に改む、内侍所の獅子狛犬を作る、

〔考〕了全は寛文の頃の人なり、

リヨータイ　了諦　エユー慧友を見よ、

リヨータツ　了達（二三二九）〔淨土宗〕伯耆光明寺の開山なり、了達は幡蓮社隨譽と號し、其郷貫詳かならず、幡隨に就て剃髮受業し遂に其法を嗣ぐ、初め播磨三木の光明寺に住し、次に伯耆倉吉に光明寺を開く、晩年三木の淨念寺に移り此所に於て寂す、時に寛文九年九月八日なり、（淨土總系譜）

リヨータツイン　了達院　ギョーショー行照を見よ、

リヨーチ　了知（二一一二）〔淨土宗〕常陸常福寺第三代なり、了知は滿蓮社明譽、實賢と號す、其郷貫詳かならず、了譽聖冏上人に就て淨土教を學び、其法を嗣ぎて後席を繼ぎて常福寺に主となる、永享四年不輕山高仙寺を剏して開山となり、享德元年二月二十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーチ　了智（一八四五）〔眞宗〕信濃正行寺の僧なり、了智は俗名佐々木高綱、頼朝に事へて武勇を表はす、文治二年越前を領す、後塵榮を厭ひ高野山に入りて密乘を修學す、而して親鸞越後に道を稱ふと聞き、遙々國府津に往き敎を受けて弟子となる、今の信濃筑摩郡栗邑の正行寺は其遺跡なり（本願寺通紀）

リヨーチヨー　了澄　ギョーチョー堯超を見よ、

リヨーテキ　了的（二二二七―二二九〇）〔淨土宗〕江戸增上寺第第十四代なり、了的號は桑譽、俗姓近藤氏、甲斐の人、永祿十年十歳にして府中瑞泉寺に入り、大譽順的上人を拜し薙染す、天機明敏にして諸經に通ず、順的其凡ならざるを愛し上野上蓑の存置和尚に附送す、十七歳にて登壇受戒す、後觀智國師に從ひて常に城中の講莚に列り家康秀忠等に寵せらる、慶長五年家康關原に戰ふや、觀智國師の命を受け美濃勝山の陣へ慰問の使僧たり、仝八年小田原大蓮寺に住し學徒一百を集む、又江戸に歸り國師の座下に弼務す、洛東黑谷金戒光明寺の荒廢を興し其第卅七代たり、元和二年大阪の陣を訪ふ、仝三年八月晦日姬君（淺野長政の室）を黑谷に葬り師を以て大導師となす、又師の意に依て安藝に正清院を建つ、寛永二年十一月廿六日命に依り增上寺の第十四代となる、以後常に登城法問あり、仝三年九月十五日大夫人薨ず、乃ち師を大導師となし十八日增上寺に葬る、追福として萬部の大法莚あり、是れ淨土宗萬部の始なり、仝七年七月十七日將軍茶會を茲に開く、仝年九月十五日寂す、壽六十四、在住七年なり、（鎭流祖傳、三緣山志）

リヨードー　了道（二二八一）〔淨土宗〕攝津養谷寺の開山なり、了道は然蓮社本譽存牟と號す、三河の人、其俗姓詳かならず存把の室に入りて剃髮受業し、初め總州佐倉清光寺に住す、慶長二年攝津品美村に養谷寺を剏し、居ること多年にして大坂一心寺に住し、元和七年十一月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨードー　了道　シンカク眞覺を見よ、

リヨードー　了堂　ソアン素安を見よ、

リヨートツ　了訥（二〇五四）〔曹洞宗〕伊賀安養院の開山

なり、了訥字は大辨、俗姓年國詳かならず、初め佛陀寺了堂に依り薙髪し、徧く諸老の門に遊び遂に奇叟異珍和尙の後ちを承けて佛陀寺に主となり、繼で和泉の補巖寺に據る、伊賀の刺史某安養院を創建して迎へて開山となす、某年寂す、壽缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーナン　了男（……）　京師の佛工なり、了男は俗名を內藏之丞といふ、其作る所靈元法皇御用彌陀觀音勢至等あり、

リヨーニン　了忍　二一二二／二一六五　〔曹洞宗〕相模長泉寺の開山なり、　了忍字は大寧、俗姓は藤原氏伊豆田方郡北條村の人なり、享德元年八月十五日を以て生れ、幼名を金剛童と云ふ、十一歲藏春院寶山永秀に依りて落髪し諸方を偏參し寶山を最乘寺に省し印可を蒙る、文明十八年郡ま某眞珠院を創し師を請す、師寶山を開山とし自ら二代に居る、相模大森氏長泉寺を刱し師其開山となる、永正二年十月九日寂す、壽五十四、（日本洞上聯燈錄）

リヨーネン　了然（一九一七）　〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり、　了然號は月峯、俗姓不詳、平安城の人、初め朝仕して大學博士となる、後儒を出で佛に入り大覺禪師に就きて心印を傳ふ、正嘉元年淨妙寺に住し雲衲四來す、示寂の年時缺く遺偈あり、七十一年、夜夢紛然、一日覺來有ニ何事ー、水住ニ澄潭ー月在ニ天、後ニ語を携へて宋に入るものあり、南屛の石帆衍乳寶の希叟曇著語して稱美せり、（延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

リヨーネン　了然　エーチョー永超を見よ、

リヨーネン　了然　ゲンソー元聰を見よ、

リヨーネン　了然　ホーミョー法明を見よ、

リヨーハ　了般　二二四四／二三九八　〔淨土宗〕山城某菴の僧なり、了把字は慶登、姓は淺井氏近江國淺井郡の人なり、幼にして出家す、若年の頃より求道の志盛にして壯年に及んで益々厚く、嘗て四國に歷遊すること三度に及べり、其後和泉奈良京師に至りて小菴を結び住すること十余年なり、至る所師か道化を蒙る者多し、寬永十五年六月二十一日寂す、壽五十五、（緇白往生傳）

リヨーハン　了般　……／二四〇七　〔淨土宗〕江戶增上寺四十二代なり、　了般は高蓮社鎭譽大然と號す、備後の人なり、尾の道正受院に入り剃髪して了長と名く、後江戶に下り增上寺に隷して貞譽了也に師事し、勤仕數年遂に資嗣となる、初め命により大念寺に住し大光院光明寺を經て天文三年十一月一日三緣山に貫主となり大僧正に任す、延享二年七月職を辭して鹿布に遷り、四年十月八日寂す、（三緣山志、淨土總系譜）

リヨーヘン　了遍（一九六五）　〔眞言宗〕京都仁和寺の僧なり、　了遍は藤原實有の子なり、幼にして行遍僧正に師事して灌頂を受け又法助僧正に就て請益重受す、常に仁和寺の菩提院に居して苦修練行瑜伽法に精通す、建長元年權僧正に任す、尋で東寺の長者に任し、弘安八年寺務法務を司とり、九年大僧正となる、翌年東大寺の寺務を補し、嘉元の末年寂す壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーミョーニ　了明尼　一九五四／二〇三六　〔眞宗〕山城佛光寺の第八代なり、　了明は佛光寺九代源鸞の母なり、永和二年正

三日寂す、壽八十三、稱して了明尼公といふ、(本願寺通紀)

リヨーム 了無 (二三二一) 京師の佛工なり、了無は了全の子にして法橋に任す、

リヨーモン 了聞 二一六五……〔淨土宗〕江戸增上寺の第五代なり、了聞號は光蓮社天譽、俗姓飯田氏にして信濃國伊奈郡高遠の人なり、始め禪を學び諸國を巡りて師を求む、隆譽上人珠阿光岡の說く所に感じ、從うて學び遂に其奧妙を究む、明應元年八月增上寺の第五代となる、後諸方に遊化して寺を建つ、武藏足立郡花又村の實性寺は其一なり、後職を高弟僧譽に讓りて永正二年の春岩槻に至り淨安寺を開く、同年七月八日寂す、(三緣山志)

リヨーモン 了聞 二三〇〇……〔淨土宗〕江戸幡隨院第三代なり、了聞は道蓮社白譽と號す、增上寺了學の俗姪なり、了學を師として出家し、多年隨待して淨土敎を修め、了學の寂後阿譽上人に就て法を嗣ぐ、江戸淺草幡隨院に主となり、寛永十七年四月八日寂す、壽缺く、嗣法の弟子に無踣あり(淨土總系譜)

リヨーヤ 了也 二二八九 二三六八 〔淨土宗〕江戸增上寺第三十二代なり、了也は念蓮社貞譽 自然と號す 俗姓は大八木氏下總の人なり、小金東漸寺に入り寺中淨嘉院に得度し、白譽了聞上人に師事す、後了學位産譽屆の三上人に隨侍し宗戒の二脈を傳ふ、安房の清澄山に登り求聞持法を修す、平治元年上人號を賜ふ、寛文十二年右巖上人より布薩を受け大巖寺に住し、次に弘經寺傳通院を經て元祿五年二月二十四日三緣山主となる、將軍家綱の皈依を受け數城中に法を說く、七年閏五月十二日將軍三緣山に遊び即日大僧正に任せらる、將軍夫人また深く皈依し三緣山に詣で和歌を與へらる、法然上人出生の靈地美作國誕生寺の中頃浮田氏破却の後、慶長以後再建せられしも未だ封祿を給せられず、師これを將軍夫人に請ひ食邑五十石を給せらるゝことゝなる、同九年十月六日將軍に謁し法然上人の敕諡號の上達を請ふ、仍て敕あり圓光大師の號を賜はる、十二年九月二十八日老病を以て隱退を請ふ、將軍殊に綿纍等を賜ふ、寶永元年八月湯島大根畑に隱室を構へ別に二百戸を給せらる、同五年八十の高齡に達し黃檗山悅峯詩を贈りて賀す、其歲疾あり四月三日寂す、壽八十、臘六十八、將軍銀二千兩を賜ふ、山內心光院に葬る、(三緣山志)

リヨーユー 了祐 二四七〇 二五四九 〔眞宗〕美濃北方長慶寺の住持なり、了祐一名は博仁、越中國新川郡泉村正覺寺住職行輪の二男なり、文化七年二月生る、文政十一年笈を負ひて京師に遊び田中大藏に就きて漢籍を習ふ、天保元年十月美濃に適き行照師の門に入りて專ら宗乘を修し、傍ら華嚴天台法相等の學を講すること十二年、弘化元年美濃國大野郡北方村長慶寺に住す、翌年寺中に寮を開き後進を敎育す、僧來笈を負ひて來るもの日を逐ひて增加し、名聲大に近國に揚る 遂に勸學職に登り、明治十五年二月敎導職權少敎正に補せらる、廿二年三月廿三日寂す、壽八十 諡を達照院といふ、著作二河譬略解一卷あり、(學苑談叢、本願寺派學事史)

リヨーヨ 了譽 ショーケイ聖冏を見よ、

リヨーワ 了稐 エンクワン圓環を見よ、

リヨーア 亮阿 二四六〇 二四二 〔天台宗〕尾張長榮寺の僧なり、

亮阿字は實戒、號は洞松と云ふ、俗姓は有澤氏、越中礪波郡佐野の人、寛政十二年正月元旦旭日の昇ると共に生る、幼にして常に出家せんことを父母に求め終に其許を得、文化十四年十一月二十四日比叡山に登り西塔金光院亮照律師を拜して薙髪し、苦學精修同輩に超ゆ、爾來出離の念切にして志を捨身の修行に潛め、法華金光明仁王菩薩戒經等を血書す、三十歳に至る迄常住不臥毎夜釋迦堂の椽側に坐し觀修すること三年後智積院の學寮に入り、倶舍性相の學を修む、金峯山に登り專ら禪觀法に心を凝らし、又紀伊天の川に往き其勝地を愛して掛錫すること數日、每日岩上に露坐して工夫を凝らす、後金剛山に登り斷食定坐すること六十餘日靈異を感ず、尾張に往き長榮寺豪潮に謁して師資の禮を執る、天保六年十月終に豪潮の跡を繼で長榮寺に主となる、尾張侯大に師の德に皈依し常に城中に請じて加持せしめ又密法を修せしむ、明治七年三月大講義に補し、十二月權中敎正となる、十年大坂西天王寺に遷り、十二月權大敎正に進む、明治十五年三月疾に罹り、臨終の前日諸弟子を集めて十念を授け、十五日衆と共に彌陀の名號を唱へ、日沒に至りて寂す、壽八十三、臘六十六、同月十八日大坂天王寺に荼毘す、師持律堅固にして密典は三密の行業悉地成就を得、護摩供を修する六萬座、胎金諸會を修する一萬座、四箇の大法を修する十餘度、密灌圓戒を受くるもの三万餘人、融通念佛を受くる者六萬人、三部の大法を受くるもの百餘人あり、柳原護國堂、諸輪村長榮寺の二剎を造り、又丈六の阿彌陀立像五大尊十二天を造る、明治十九年十二月二十二日大僧正を贈らる、(天台宗史料)

リヨーエ 亮慧 (……) 〔眞言宗〕大和內山の阿闍梨なり、 亮慧は字を眞東といふ、其傳詳かならず、付法慈信、圓海、敎慧、覺心、朗澄の五人あり、(續傳燈廣錄)

リヨーエ 亮慧 二一五〇―二二二六 〔眞言宗〕山城東寺寶菩提院權僧正なり、 亮慧は俗姓木下氏、比叡山王權現社務の子なり、壯にして顯密の典籍を學び、若年にして小野廣澤の法源を探り名聲あり、俊雄に就きて醍醐山相承の密印を受け瀉瓶の記を與へらる、大和內山に住し亨祿二年三月三日寶菩提院にて衆に法を付す、永祿九年十一月十八日寂す、壽七十七、付法の資一人亮淳と稱す、(續傳燈廣錄)

リヨーエイ 亮叡 ……―二二四七 〔淨土宗〕山城淨花院の僧なり、 亮叡は其氏族を詳にせず、敦賀西福寺に行き箇才上人に投して出家す、學諸宗に通ず、又融通の妙法を修す、後法を大拙上人に嗣て淨花院を司る、天正十五年十二月十四日寂す、壽詳かならず、(鎭流祖傳、淨土總系譜)

リヨーカイ 亮海 二三五八―二四一五 〔新義眞言宗〕京都智積院の學僧なり、 亮海字は如實、上野の人なり、出家して智積院に學び、故ありて寬保元年智山を去り、東大寺根來山等に居り紀伊荒川法林寺に住す、寶曆五年十月十四日寂す、壽五十八著作十住心論冠注、大疏講錄、十卷章亮海錄、五敎章亮海錄、各十卷、四明十義書愚案記三卷、減緣滅行闕異翼正記二卷、準提觀音靈驗記、大日經敎主古今異說集各一卷あり、(新義眞言宗史)

リヨーカイ 亮海 二四一三―二四八八 〔新義眞言宗〕山城智積院第三十一代なり、亮海字は學周、下總太田の人、下野國流山于牛

院道海和尙の弟子となりて一宗の學を受け、文化七年八月幕府の命を蒙り眞福寺第二十九代となり、寶藏等を修繕して功あり、文政六年十二月幕命により智積院に昇り第三十一代能化となり、權僧正に任ぜらる、其職にあること六年、文政十一年三月十四日寂す、壽七十六、(眞福寺世代)

リヨーキヨー 亮恭 二四〇五/二四八九 〔新義眞言宗〕大和長谷寺第四十代なり、亮恭字は文恭、下野安蘇郡飯田村の人なり、州の都賀郡原寄村玉塔院亮喜の室に入りて剃度し、豐山に留學し、業成りて武藏金剛院に住し、彌勒寺に移る、文政二年選ばれて豐山能化となり、職にあること七年、與喜寺に退き、文政十二年六月二十四日寂す、壽八十五、(新義眞言宗史)

リヨークー 亮空 二四九一…… 〔眞宗〕越中高岡光誓寺の住持なり、亮空は越中の人、高倉學寮に學び、文政元年寮司となり、俱舍論を講ず、三年擬講となり、九年勝鬘經を講じ、天保二年二月十四日寂す、壽缺く、(高倉學寮講者列傳稿本)

リヨーグー 亮隅 二三四一/二三八五 〔眞宗〕近江平田先明寺十四代なり、 亮隅字は買年、號は李由といひ、別に四梅廬、月澤道人と云ふ、近江の人、徘句を以て名あり、許六等に交はり秀作あり、寛永六年六月廿二日寂す、壽四十五、著作顏塞箱、實宇多法師等あり、「乞食のことといふて寢る夜の雪」「水鳥の寢暖まるか靜なりなど、人口に膾炙す、(俳諧名譽談)

リヨークワイ 亮快 (二三七八) 〔新義眞言宗〕京師淸和院の學僧なり、 亮快字は存心、鄕貫詳ならず、享保の頃京師淸和院に住し僧正となり學譽高し、寂年幷に壽缺く、著作顯密威儀便覽二卷あり、

リヨークワク 亮廓 フシユー普宗を見よ

リヨーケン 亮賢 二二七一/二三四七 〔新義眞言宗〕武藏護國寺開山なり、 亮賢俗姓は須藤氏、上野甘樂郡小野村の人なり、幼にして邑の得成寺慶深に從ひて落髮染衣し、十六歲瑜伽行を修す、受具の年豐山に登り尊慶僧正に見えて講習年を積み、深く敎理に通す、後八幡の大聖寺を主とり、一住三年又得成寺に歸へる、師常に觀音に歸依し卜筮を善くす、將軍綱吉の實母桂昌院の命によりて祈禱占相し、正保三年正月四日綱吉誕生す、後又命せられて護摩修行し、延寶八年綱吉將軍となり、之より深く桂昌院の歸依を受く、天和元年春請うて江戶音羽に寺を建て觀音を安置す、卽ち御室に屬し悉地院(今の神齡山大聖護國寺)と號す、師之か開山となり封戶三百石の朱印を附す、同三年四月命により仁和寺に游歷し、大僧正孝源に謁して傳法院流の許可を受け、再び豐山に往き、幾ならすして神齡山に歸へる、貞享二年病に罹り職を高足賢廣に讓りて退休し、同四年六月七日寂す、壽七十七、(豐山傳通記)

リヨージユン 亮淳 二一九七/二二六二 〔眞言宗〕京都仁和寺眞光院の權僧正なり、 亮淳は下總葛飾の人(今武藏となる)、天神島城主一色兵部大夫源國朝の子、甫めて十歲密林に入り、十三歲出家し、十四歲十八契印を受け、十五行金剛界十六修胎藏並に護摩を了し、永祿四年醍醐山に上り亮惠僧正の室に入りて傳法灌頂を受く、時に二十五歲なり、仁和寺一品任助に謁して傳法職位を蒙り聽許せらる、四十一歲傳法密壇を關東に建て、五十六歲廣澤流の秘奧を究め、慶長七年七月病に臥し、命終に際して眞光院主に補し、十月四日寂す、壽六十六、

(續傳燈廣錄)

リヨージユン 亮允、トクガン德含を見よ、

リヨーセキ 亮碩 二四一九/二四五一 〔天台宗〕近江園城寺の學僧なり、亮碩字は碧道 京都の人、寶曆十年を以て生る、幼にして園城寺に入り亮恭僧都に從つて剃髮し、後大仙院を領す安永六年瑜伽の密供を受け、十八歲の時妙玄疏止觀の三部を貫關する二回業を卒ふ、天明二年擢られて講師となり、四年辭して退隱す、後比叡山雙巖院に寓して教觀を練磨し兼て瑜伽を學ぶ、天明中出雲鰐山に赴き、顯道和尙の道譽を慕ひこれより師事して其化を助く、寬政元年法華略疏を興國寺に講じ聽者一千人に垂んとす、三年京師に上り南禪寺の請に應じ法華入疏を講じ、後、山城の寶法寺に寓して疾に罹り、四年正月三日寂す、壽三十三、著作三式染指鈔八卷、一乘戒開雲章七卷、一乘戒濫吹撲、五教成佛義各六卷、一乘戒義略問答鈔、久修業論、一乘戒九衆論、別教戒論各三卷、三式汲海鈔、回小向大捨不捨論、一乘比丘戒論、顯密雜編各二卷、梵網五支十戒論、一乘沙彌戒論、大乘九衆戒義、梵網宗戒體義、梵網待絕二妙論、回小向大正義決、久修業分齊義、別教戒義、一乘戒々略鈔、一乘戒金篦鈔、一乘戒要論、二諦常住論、法華佛性錦鎧論、一生入妙覺論、遮那經心目科各一卷あり、(顯道和上行業記)

リヨーゼン 亮禪 一九一八/二〇〇一 〔眞言宗〕京都東寺二の長者なり、亮禪は弘安二年十一月十一日東寺大悲心院に入りて能禪に傳法灌頂を受け 寶菩提院を創して開山となる 曆應四年七月二十六日寂す、壽八十四、寶蓮華寺亮尊と共に白寶鈔一百卷を撰す、付法の弟子賴我等あり、(傳燈廣錄)

リヨータ 亮汰 二二八二/二三四〇 〔眞言宗〕大和長谷寺第十一代なり、亮汰字は俊彥、後改めて淨泉と云ふ、俗姓は鷹氏薩摩田布施高橋の人なり、九歲邑の牟井寺盛印の弟子となる、十八歲にして京都に赴き、三井寺にて倶舍を聽き、諸方に歷遊して遂に鷲尾の興法寺に住す、後亮典和尙の碩德を慕ひ、伊勢に到り法樂舍に寓して亮典の法華を講ずるを聞き、又玄義等を閱し去つて興法寺に皈る、一日和泉安倍に詣でゝ上乘院僧正亮雄に遭遇して法を付せられ、慶安元年日遲の勸めに依り豐山に入りて尊慶の室に投じ、後去つて興法寺に住す、承應元年の冬良興長谷寺に主たるに及び師を能囑となす、明曆三年信海主席を繼ぎ師に命して喜多坊に住せしむ、時に座階第二十七なり、之れより講席を開き遮那玄王法華楞伽釋論等を講ず、萬治二年の春鄕里薩摩に皈りしに、刺史其德を欽び國に止まらしめんとすれども業未だ成らざるを以て辭して豐山に皈る、寬文九年覺有の讓りを受けて近江の總持寺に住し同十一年席を賴重に讓り洛西の般若寺に隱る、後大僧正孝源の請に依り仁和寺花嚴院に寄宿す、總法務性承法親王屢々師を招きて秘密藏を講ぜしめ恩遇殊に渥し、延寶八年五月將軍綱吉の命に依り豐山に主となり僧正に任せらる、同年九月に至り講筵を開き、延寶八年十一月十日寂す、壽五十九、著作理趣經純秘鈔三卷、科理趣經一卷、住心品科注三卷、科注住心論三卷、口の疏科注六卷、起信論講義四卷、起信論序科注一卷、釋論序科注一卷、仁王經序注一卷、心經科略鈔一卷、藥師經纂解四卷、千手經報乳記四卷、觀音經選注三卷、父母恩

重經鈔二卷、科注父母恩重經鈔一卷、延命地藏經鈔二卷、念珠經科注一卷、木槵子經科注一卷、數珠經科注壹卷、數珠功德經鈔一卷、錫杖鈔一卷、九條錫杖鈔一卷、光明眞言照闇鈔三卷、供養法疏略三卷、菩提心論敎相記二卷、仝三摩地段秘記一卷、阿字義鈔一卷、阿字寓言鈔一卷、阿字義私記一卷、尊勝陀羅尼科注三卷、寶篋印陀羅尼經鈔三卷、十一面陀羅經鈔一卷、金剛界禮懺文鈔二卷、胎藏界禮懺文鈔一卷、金胎禮懺科注三卷、舍利禮文鈔一卷、却溫神咒經鈔一卷、不思議疏鈔三卷、菩提心義記科注三卷、求聞持儀軌記一卷、科瑜伽護摩儀軌鈔四卷、科五供養備注一卷等總て八十六卷あり、（豐山傳通記、新義眞言宗史）

リヨータ　亮太　二四〇七 二四九六　〔眞宗〕伊勢四日市光源寺の住持なり、亮太は淨輪院と號す、寬政三年講師となり、職にあること四十年、天保七年三月九日光源寺にて寂す、壽九十、著作敎行信證私解、外數部あり、

リヨーテー　亮貞　二三〇八 二三七九　〔新義眞言宗〕大和長谷寺十五代なり、亮貞字は白春、溫如と號す、俗姓は松岡氏、慶安元年八月を以て伊勢度會郡宇治鄉に生る、十一歲にして叔父菩提山光算の室に投じ、其命に依り圓光寺光心に業を受く、十四歲微雲院兼意に依り得度受戒す、寬文二年大和金剛山に登り、蓮雅に從つて四度の瑜伽行を修す、仝四年春眞常寺亮元の室に投じて螢雪の功を積み、仝五年十八契印兩部の大法及び諸壇の軌を受け名を亮眞と與へられ、仝九年二月豐山に赴き僧正賴意にゆえ名を改めて亮貞字は白春と云ふ、師山にありて講筵に出て、隆光と並び稱せられて豐山の兩大學の名あり「遊方して大覺寺法親王に見えて重んぜられ、元祿四年八月尾張大納言光友の嚴請に依り長久寺に主となる、仝八年將軍綱吉の命に依り江戶彌勒寺に移る、仝十六年四月幕命に依り豐山を司とる、六月敕して權僧正に任せらる、寶永元年四月更に僧正となる、將軍綱吉自ら觀音妙智力の五字を書して與ふ、仝年八月門外の經堂を修造す、翌年春閻魔堂を再建す、三年の春三重の塔を修營す、仝四年二月幕府の奏請に依り大僧正に任せられ護國寺に遷住を命ぜらる、五年閏正月退隱を乞ひて許され、三月二日江戶を發して京都乙訓寺に至りて寓す、享保四年九月十七日寂す、壽七十二、著作理趣經存公記四卷、自證說法私記一卷、敎德總標第三重新艸一卷、釋論序解一卷、還辨折曉諭篇一卷あり、（豐山傳通記、新義眞言宗史）

リヨーテツ　亮徹　二三五三 二四〇二　〔淨土宗〕武藏淨國寺の僧なり、亮徹字は雲洞、號は曉山と云ふ、下野宇都宮の人高木某の子なり、出家して同鄉慈光寺雲頂和尙に師事し、後結城の弘經寺新田の大光院に錫を掛け、尋て江戶に入り傳通院增上寺に錫を掛けて宗乘を修め、且つ太宰純服部元喬に就いて古文辭を學び詩文に長す、寬保二年疾に罹り增上寺の僧舍に療養し同年二月二十五日寂す、壽五十、臘三十七、太宰純墓碑銘を作り悼惜したり、（春臺文集、三緣山志）

リヨーテン　亮典　二二六七 二三二二　〔眞言宗〕伊勢眞常院の學僧なり、亮典字は文恒、俗姓倉田氏、伊勢宇治郡の人たり、慶長十二年に生れ、元和四年十二歲にして郡の建國寺に投して得度し憲式空鏡の二師に學ふ、久留山の空鐵其法器なるを知り

養うて弟子となす、十七歳高野山に登り頗る盛譽あり、後ち智積院の日譽元壽の二僧正に就いて根來山の學風を研究す、常に貧困にして傭書して學資を支へたり、久留山に皈り大日經疏の講席を開き、尋て諸國に歷遊して法化盛なり、皈後宮崎に隱棲して出てす、岩井田神路山下の地を相して眞常院を建立して學問修行の道場となす、後ち密乘院宥雄和尚に就いて土巨流の事相を傳へ、心蓮院宥嵒和尚に就いて廣澤流の事相を受け共に蘊奧を極む、承應元年八月十三日密乘院に寂す、世壽四十六、法臘廿六、仁和寺法親王特に上人號を賜ふ、著作住心品疏科文六卷、秘鍵文林一卷、起信論專釋鈔五卷、說法明眼論鈔三卷、大疏五十卷、父母恩重經鈔二卷等なり、

リヨーニン 亮潤 二三二八 二四一〇 〔天台宗〕江戶東叡山寶園院の學僧なり、 亮潤字は豪雲、一の字は大雲、又眞諦、號は一雨堂といふ、鄉貫詳ならす、出家して東叡山に居り、內外の學に通し朝野の皈仰を受く、寬延三年八月二日寂す、壽八十三、（墓表）

リヨーハン 亮範 二三五五 二三二四 〔新義眞言宗〕山城智積院第十五代なり、 亮範字は岳泉、越前新保浦の人、俗姓竹內氏、豪族にして世々佛敎に皈依す、師寬文十年八月二日を以て生る、幼にして出家の志あり十一歲同國瀧谷寺慶範に投じて得度受具す、十六歲慶範の命を受けて京都に上り、智積院第八代、信盛僧正の許に學ぶ、比叡山奈良に歷遊し法華華嚴俱舍唯識等を學び、元祿七年江戶に至り靈雲寺淨嚴律師を訪うて戒律を受け、出羽守柳澤吉保の皈依を受け智寶寺の開山となる、依て又幕府の重んずるところとなり、數々淨嚴律師と共に幕府に出で殿中に法を說く、文祿十五年仁和寺一品法親王寬隆の請により、同寺に到り性靈集を講ず、尋で醍醐に至り大僧正寬順前大僧正有雅を仰ぎて一流の秘密を受く、盤滿寺に住し六波羅密寺信福寺を經、享保十三年九月幕府の命により智積院第十五代能化となり權僧正に任せらる、爾來盛んに講筵を開き、門下英俊多し、能化職に在ること十二年、寬文四年九月二十七日寂す、壽七十、（亮範和尚行狀）

リヨーベン 亮辯 エニン慧任を見よ、

リヨーマ 亮磨（……） 〔曹洞宗〕越前心月寺の禪僧なり、 亮磨字は大雄、越前の人、天巖智樵に參して其法を受け、主席を繼きて越前心月寺に主となる、寂年及壽缺く、法嗣大英梵作あり、（日本洞上聯燈錄）

リヨーウン 靈雲（一三〇五） 入唐學問僧なり、 靈雲は推古天皇の末年唐に渡り、舒明天皇四年八月僧旻と共に歸朝す、大化元年孝德天皇十師を選びたまふに際し、師亦其選に與る、示寂の年時缺く、（日本書紀、元亨釋書、本朝高僧傳）〔考〕 本朝高僧傳に、僧旻靈雲共に嘉祥寺の吉藏に謁したりとあれども詳ならず、

リヨーエン 靈圓 二三四六 …… 〔淨土宗〕相模光明寺の僧なり、 靈圓は本蓮社公譽繼風と號す、安房の人、其俗姓詳かならず、靈巖に師事して法を嗣ぎ、江戶靈巖寺に住し後鎌倉光明寺に遷る、貞享三年十二月二日寂す、（淨土總系譜）

リヨーオー 靈應（二四三三） 〔淨土宗〕武藏增上寺第四十九代なり、 靈應は安蓮社豐譽、民阿と號す、蒙光觸と云ふ、近江國愛智郡君ケ畑村の人、幼にして同所金龍寺に入りて

出家す、尋で江戸傳通院に至り照譽如空に師事し、享保七年十一月五重相承を拜し、十年十一月宗脈を受け、寛保元年增上寺貸譽上人より戒を傳ふ、後淨國寺常福寺に歷住し、安永二年三月增上寺第四十九代の貫主となる。（三縁山志）

リヨーガク　靈嶽　ドーゲン洞源を見よ、

リヨーガク　靈岳　ホーモク法穆を見よ、

リヨーカン　靈鑑（三三七四）〔淨土宗〕武藏東漸寺の僧なり、靈鑑は信蓮社親譽、見阿と號す、其俗姓生國詳かならず、玄察によりて淨土教を學び東漸寺に主となる、正德四年十月二十七日寂す、世壽缺く。（淨土總系譜）

リヨーガン　靈巖（……）〔淨土宗〕美濃茱萸の僧なり、靈巖は美濃の人、出家して淨土門に歸し知恩院に留まる、三十歲國に歸り山中に幽棲し禪誦を事とし、四十六年山を下らす、日に新譯華嚴經を閲し兩日にして終る、終れはまた始む、連環して間斷あるなし、黃檗山の僧雪丘師を山中に訪ひ來り隨侍すること一年餘に至る、某年壽七十三にて寂す（續日本高僧傳）

リヨーガン　靈岩　ドーショー道照を見よ、

リヨーガン　靈嵒　ショーフー松風を見よ、

リヨーガン　靈嵓　ミヨーエー妙英を見よ、

リヨーギ　靈義（一四三八）〔華嚴宗〕大和東大寺の別當なり、靈義は其俗姓生國詳かならず、出家して良興に就て華嚴の教を受け、寶龜九年東大寺別當に任ず、寂年及壽缺く、（東大寺別當次第）

リヨーギン　靈吟（二二八〇）〔淨土宗〕江戸昌清寺の開山なり、靈吟は天蓮社龍譽と號し、奧州岩代の人、幼にして州の來迎寺に入りて剃髮し、法を普光觀智國師に嗣ぐ、江戸本鄉昌清寺を創してこれが開山となる、寂年及壽缺く。（淨土總系譜）

リヨーギヨク　靈玉　リヨーゴン良嚴を見よ、

リヨグワツ　靈月（二二八九）〔淨土宗〕岩代西岳寺の開山なり、靈月は安蓮社穩譽と號す、俗姓は上田氏三河の人なり法を靈巖に嗣ぎ岩代西岳寺を開く、寛永六年六月朔日寂す、世壽缺く。（淨土總系譜）

リヨーケン　靈見（二〇五六）〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり、靈見字は性海、號は不還子と云ふ、俗姓は橘氏信濃横山の人なり、七歲にして能く書を讀み、十一歲建長寺に得度す、十九歲にして建仁寺清拙和尚に參して知賓となり、久しうして後奈良に華嚴を探り、比叡山に台教を聞き其大義に通ず、南禪寺虎關禪師に依り知客寮にありて請問し、一日圓覺經を看て本有を豁悟す、康平二年元に入り江の南北を歷徧して一時の高德に請益し、天寧寺空海念に見えて一夏藏典を掌る、月江印、即休了、竺源遠に見えて優賞を蒙り、至正十一年東皈す、之より先き虎關禪師遷化し其遺命ありたるを以て龍泉寺に主となり遺物の袈裟一頂を付せらる、後檀越長壽禪居與勝寺等を建て皆師を請す、貞治二年將軍足利義詮に招かれて三聖寺に住し、應安元年命により東福寺に遷る、相尋で天龍南禪寺に昇り、永德三年義滿の强請により常光在寺に主となり、住すること二年退耕菴に退く、應永三年三月疾に罹り將軍義滿菴に入りて疾を問ふ、二十一日門下を集め懇ろに遺誡し、

偈を書して曰く天上人間休ㇾ覓ㇾ我、大千沙界絕二行踪一、不ㇾ須撈二攏水裏月一、誰敢縛二住空中風一、と筆を投して寂す、壽缺く、著作石屏集若干卷あり、(本朝高僧傳、續群二三九)

リヨーゲン　靈玄　二二七四 二三五三　〔淨土宗〕武藏增上寺第三十代なり、靈玄は信蓮社(一に往蓮社)生譽と稱し、一到と號す俗姓は田澤氏、安部貞任の後裔出羽國莊內小泉澤城主越前守孫左衞門の子なり、父は大坂に遷り醫を業とし、豐臣秀吉に仕へ後德川秀忠に仕ふ、師元和五年を以て生る、僅かに九歲にして出家の意あり、遂に增上寺臺山に師事し留學十五年內外百家の學に通ず、延寶二年四月十三日瀧山大善寺に住し、同八年正月弘經　に轉ず、天和二年八月(一說延寶九年)增上寺に昇り第三十代大僧正となる、同四年五月幕府二百戶を給與す、師本院支院の法規を改正し大に宗風を張る、後大松寺に退隱し、貞享　年正月十五日伊勢國山田晴雪院に遷る、元祿六年疾に罹り、自ら偈を書して曰く業綱高繫、七十餘年、眼光落地、心月輝ㇾ天、と、又曰く七十餘年呼二小玉一、空拳遮莫勞多情、西方寂靜無爲境、一念即生十万程、と、十一年五月九日念佛して寂す、壽八十、臘七十一、著作彌陀經和字序、淨業酬記、眞宗七祖傳、糅鈔序註各若干卷、扶桑鐘銘集一卷、將軍年譜、甲陽軍記、東鑑脫漏、並に醫卜詩歌等の書數十卷あり(三緣山志、緇白往生傳、續日本高僧傳)

リヨーゲン　靈彥　二〇六四 二一四九　〔臨濟宗〕京都東山聽松院の開山なり、靈彥字は希世、號は村菴と云ふ　京都の人、幼にして善住菴の斯文宣を師とし、細川滿元の養子となる、甫めて八歲將軍義持に携へられて後小松上皇に朝し、敕により詩を賦し上皇に優賞を蒙る、十七歲落髮して惟肖江西に師事し聽松院を捌してこれに住し、更に諸方の請に應せず、嘗て富士山に題して曰く富士峯高宇宙間、崔嵬豈獨壓二東關一、唯應二白日青天好一、「雪裏看ㇾ山不ㇾ識ㇾ山、と、又天橋立に題して曰く碧海中央六里松、天橋勝境是仙蹤、夜深人待二龍燈出一、月落文殊堂裏鐘、と、延德元年寂す、壽八十六、遺稿あり、敕諡慧鑑明照禪師と賜ふ、(延寶傳燈錄)

リヨーゲン　靈源　カイミヤク海脉を見よ、

リヨーコー　靈光　シユーテツ周徹を見よ、

リヨーコー　靈哮　ブツゲー佛猊を見よ、

リヨーゴク　靈極　……二三〇五　〔淨土宗〕山城常樂寺の開山なり、靈極は深蓮社貞譽と號し、京都の人なり、靈巖に依りて剃髮受業し遂に其法を嗣ぐ、初め山城極樂寺に住し、後久世郡に常樂寺を創して開山となる、正保二年正月二十二日寂す、世壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーサン　靈山　コーソン功存を見よ、

リヨーサン　靈山　ドーイン道隱を見よ、

リヨーザン　靈殘　リヨーシン良信を見よ、

リヨーシユーイン　靈鷲院　ニチシン日審を見よ、

リヨージユン　靈順　(二三二六)　〔淨土宗　駿河華陽院の僧なり、靈順は了蓮社歷譽と號し其鄉貫詳かならず、歷山に師事して法を嗣ぎ駿府華陽院に住す、寂年及壽缺く、(淨土總系譜)

リヨージユン　靈順　イチドー一道を見よ、

リヨーズイ　靈瑞　二四七九 二五四八　〔淨土宗〕京都知恩院の僧な

り、　靈瑞號は鳳譽と云ふ、俗姓日野氏信濃更科郡布施の人、文政元年八月十日に生る、七年郡の蓮光寺仁說の下に投し、後江戸に出遊し增上寺學寮主慈專に學ひ、天保十二年學寮主となり、次に學頭に進む、文政三年下總生實大巖寺に住し、後上野新田大光寺に轉住し權大敎正に補せらる、明治十九年增上寺に進み、廿　年知恩院に昇る、同年五月十六日伊勢に巡化中寂す、壽七十、

リヨーセン　靈泉　ジユンソー壽曹を見よ、

リヨータツ　靈達　リヨージツ良實を見よ、

リヨータン　靈潭　二四五八―二五三四　〔眞宗〕河波勝浦郡小松島村光善寺の住持なり、　靈潭は豐後海部郡臼杵安養寺塔頭西方寺蘭溪の長男なり、文政八年二月阿波光善寺の住持となる、安藝の雲幢紀伊の芳英大和の誾號等の諸學匠に從ひて宗餘乘を習ひ、閑々道人に就きて悉曇を習ひ、神道の傳授を受け皆大に成る所あり、又黃檗山の藏經を購ひ閱讀殆んと業を畢ふ、明治六年六月司敎に進み、九月勸學職に任せられ、七年十月十四日寂す、壽七十七、著作詩文稿若干卷あり、（學苑談叢）

リヨータン　靈潭　ロリユー魯龍を見よ、

リヨーチ　靈致　一九五一―二〇四一　〔臨濟宗〕京師南禪寺の禪僧なり、　靈致字は天境、俗姓不詳、甲斐の人なり、早年出家して清拙澄に師事し其法を嗣ぐ、康永三年十二月肥前の淨土寺に住す、貞和二年豐前の萬壽寺に遷つる、文和三年京師の萬壽寺に住す、延文五年建仁寺に遷り、貞治五年南禪寺に昇る、應安元年播磨の法雲寺に住す、六年天龍寺に遷り住す、永和二年再び建仁寺に住し、法化益盛なり、退休後龍山善住菴にあり、永德元年病あり自ら入壙の語を作る（延寶傳燈錄、本朝高僧傳共に載す）、同年十一月十八日寂す、壽九十一、語錄幷に外集あり無規矩と云ふ、敕諡寶鑑圓明禪師と云ふ、（延寶傳燈錄）

リヨーチユー　靈仲　ゼンエー禪英を見よ、

リヨーツー　靈通　二二七七……　〔淨土宗〕伊勢海藏寺の開山なり、　靈通は忍蓮社堪譽と號す、智譽上人に法を嗣ぎ伊勢度會郡海藏寺の開山となる、元和三年五月五日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーデン　靈傳　二四〇六―二五〇三　〔眞宗〕若狹遠敷郡小濱妙玄寺八代なり、　靈傳字は義門と云ふ、天明六年七月七日に生る、父は妙玄寺五代傳瑞、母は同國名田莊光久寺惠元の女縫子といふ、其先は三河東條の人、三浦市郎左衞門眞興といふ、傳瑞三子あり、長子知傳早死し、次子實傳（字慈勸）寺務を繼き、壯年にして死す、師幼にして穎敏なり、九歲父に携へられて空印禪寺に倍遊し、和歌を詠して座客を驚かす、禪寺の住僧大硯を與へて學業を奬勵す、父の沒後、叔父慶海に從ひて內外の學を受く、季子なるを以て出てゝ丹波田邊願藏寺の寺務を管す、然れとも天性學業を好み幾もなく寺務を某に委して退隱す、文化四年仲兄實傳沒したれは、親戚檀越等妙玄寺の寺務を繼かんとを請ふ、師煩を厭ひてこれを辭す、然るに老母切に勸むるを以て、遂に入りて八代の住持となる、後京師に出遊し、高倉學寮擬講威光院靈曜（尾張名古屋養念寺）に師事して內典を學ふ、師殊に國學を嗜み、本居宣長、同春庭の著作を愛し、覆誦玩讀して大に發明あり、文化七年江戸

に入り、太田金齋に遇ひて音韻の學を問ひ、藤井高尙、本居春庭に就いて語格等を學ひ、一宗の學者が宗祖親鸞上人の和文聖教を解釋するに、語格等に意を用ゐさる爲め、往々解釋誤謬に陷るを慨歎して益研究を事とし、奈万之奈三卷を著はす、講師雲華院大含序文を作り、顧七百年來言ニ人所ㇾ未ㇾ言、而千歲之後發ニ人不ㇾ可ㇾ發の語あり、且つ普門律師に就いて梵曆を學び、須彌儀を模造す、國守若狹守忠進に召され、梵曆を講說す、忠進其先祖にして妙玄寺開基なる明賢院妙玄尼の系譜異說ありて明かならさるを憂ひ、師に命して調査せしむ、師自ら忠進か先祖の封地たりし三河武藏等を歷遊し、諸家の系譜諸寺の碑碣等を參撿考證し、一部淨書して上る、忠進大に喜び、優賞を與ふ、師歌あり曰ふ「御ことはの露かゝらんとおもひしや霜に折れふす草の我身に」と、忠進返歌を與へて曰ふ「露霜の夕いかにとおもふかなはるまつ草の色を見るにも」と、天保十四年高尙翁の遺囑により、其著作古今集新釋を修治せんか爲め、備中宮內に至る、三月旅中病に罹り、七月京師に皈りて療養し、八月病を興して若狹に皈り、同月十五日寂す、壽五十八、師平素病弱にして服藥衞生を怠らす、禮佛誦經を缺さす、相交る所作信友、石田頴、田中貞風、平重民等なり、著作、山口栞、玉の緒繰分、奈万之奈、各三卷、活語指南二卷、活語雜話初篇、同二篇、同三篇、同餘論、於乎輕重義、友鏡、友鏡底廼影、類聚雅俗言、月草、日本魂、和語說畧圖、指出廼磯、磯乃洲崎　磯淸水　蹤間之日記、袖禱廼日記、各一卷あり、此他三部經和語說、唯心鈔講說、改邪鈔遠測、御文講說若干卷あり、(東條敎成氏返信、高倉學寮講者鏡、言語學雜誌、幷に遺書參照)

リヨードー　靈幢　タイオー體應を見よ、

リヨートク　靈督　ホーサン鳳山を見よ、

リヨートン　靈頓　二三三六　〔淨土宗〕下總淸岸寺の開山なり、靈頓は信譽と號す、俗姓は松田氏武藏岩村の人なり、殘嶺に師事して後法を不殘に嗣ぐ、下總寶殊花村に淸岸寺を剏して開山となり、寬文六年八月二十六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

リヨーハ　靈波　一九五〇 二〇三七　〔華嚴宗〕大和戒壇院の學僧なり、靈波號は性通、俗姓は足利氏、相模鎌倉の人なり、稱名寺の湛睿に隨ひて剃髮染衣し、奈良に入り盛譽に沙彌戒を、俊才に菩薩戒を受け、七寺に遊ひ諸經論を硏く、毘尼を主張し、華嚴を宗とす、大和戒壇院相模の稱名寺に歷遷し、永和三年八月十五日稱名寺に寂す、壽八十八、著作律興要傳十卷五敎儀解集三十卷、五敎章鈔八卷、五敎章性通記鈔、五敎斷惑分齊鈔各二卷、起信論私鈔十二卷、戒壇系圖通詳記五卷等あり(本朝高僧傳、律苑僧寶傳)

リヨーホー　靈峰　エケン慧劍を見よ、

リヨーホー　靈峰　ドーゴ道悟を見よ、

リヨーミヨー　靈妙　二四一七　〔淨土宗〕下總弘經寺の學僧なり、靈妙は聖蓮社神譽と號し、沖阿と云ひ、悟心と云ふ鄕貫詳ならす、增上寺に學ひ弘經寺に住す、寶曆七年七月十一日寂す、壽缺く、著作桂華漫筆三卷、法門或問二卷あり、

リヨーモン　靈文　二〇一一　〔臨濟宗〕京都天龍寺の藏主なり、靈文字は虎溪と云ふ、夢窓國師に天龍寺に參し鑰藏

となる、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

リヨーモン　靈門　……二三〇二　〔淨土宗〕江戸源空寺の開山なり、靈門は覺蓮社聞譽、道阿と號す、俗姓は佐竹氏奧州米澤の人なり、初め諸師の門に遊び後深く幡隨の道化に皈す、居を江戸神田に卜し草衣木食念佛を堅持す、後江戸淺草源空寺の開山となり、寬永十九年五月十八日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーヤク　靈益　……二三四七　〔淨土宗〕大和清涼院の開山なり、靈益は念蓮社專譽と號し、其鄕貫詳かならず、靈巖に師事して法を嗣ぎ大和添下郡清涼院の開山となる、後京都一心院に移り、貞享四年正月十七日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

リヨーヨ　靈譽　エンキヨー圓鏡を見よ、

リヨーヨ　靈譽　ギヨクネン玉念を見よ、

リヨーヨ　靈譽　ランシユク鸞宿を見よ、

リヨーヨー　靈曜（一四一四）〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、靈曜俗姓不詳、唐に生れ鑑眞に師事して戒律を傳へ、兼ねて天台を學ぶ、天平勝寶六年眞和尙に隨ひて來朝す、示寂の年時缺く、（律苑僧寶傳）

リヨーヨー　靈曜　二四八二……　〔眞宗〕尾張名古屋養念寺の住持なり、靈曜一名は鐘山、號は威廣院、一に威光院と云ふ尾張の人、高倉學寮に入り深勵に學ぶ、文化二年五月二十一日擬講となり、法華入疏を講ず、五年俱舍論、因明纂解を講ず、文政五年十一月七日寂す、壽缺く、嘉永七年十月四日嗣講を贈られ、安政四年八月講師を贈らる、（高倉學寮講者列傳稿本）

リヨーヨー　靈曜　二〇四三―二一〇六　〔曹洞宗〕遠江圓通院第二代なり、靈曜字は大輝、尾州高柳の人、俗姓は平氏なり、幼にして出家し、初め講肆を經て大意を領し、十九歲の時自ら別傳の旨を慕うて如仲禪師に師事し、後大洞寺に住し次に佛陀寺總持寺に遷り、遠江大通院に退隱す、永享九年僧慶本遠江佐野郡原田莊に一山を相し師を請じて創開せしむ、俗に日高山一に霧山と稱す、區畫營構漸く寶坊と成り名けて高台山圓通院と云ひ、如仲を請じて開山となし自ら第二代となる、文安三年四月十四日寂す、壽六十四、臘五十七　偈あり曰く六十四年、空華陽焰、末後一句、地轉天旋、（日本洞上聯燈錄）

リヨーヨー　靈用（二〇八三）〔曹洞宗〕薩摩妙圓寺の禪僧なり、靈用字は大田、其俗姓生國を詳かにせず、薩摩妙圓寺石屋眞梁に投じて出家受具し、諸方に歷參し後眞梁の命を受けて席を繼ぐ、示寂年時缺く、（日本洞上聯燈錄）

リヨーウン　凌雲（……）〔黃檗宗〕江戸海藏寺の開山なり、凌雲は信濃の人、武田左馬頭の女の腹にして左馬頭の外孫なり、同國小諸海音院に投じて剃髮し曹洞の宗旨を學び後黃檗宗に皈す　江戸に出てゝ所々の菴室を新に寺となさんことを願ひ、幾多の困難を經て遂に官許を得、江戸八ヶ菴と號せしものを悉く寺號となす、市ヶ谷町の藥王寺、深川の萬祥寺等これなり、師晚年深川海福寺に住したりと云ふ、寂年壽缺く（江戸砂子）

リヨーエー　量榮　二〇九九―二一五二　〔臨濟宗〕京都某寺の僧なり、量榮字は春谷、其先は王孫なり、慈相院足利義政の寵遇を受く、義政畫工に命して師の面容を圖せしむ、明應元年五月廿

五日疾に罹り寂す、壽五十四、其子追慕し足成畫工に命じ像を作らしめ天隱和尚の賛を乞ふ、和尚賛を作り像に題せり、（天隱語錄）

リヨーゲ　量外　ショージユ聖壽を見よ、

リヨーサン　量山　ハンオー繁應を見よ、

リヨーニヨカイ　凉如海　チエー智瑛を見よ、

リヨーフー　凉風　カテン珂天を見よ、

リヨーカ　綾河　ギクワン義完を見よ、

リヨーカイ　寥海　二二七一　〔戒律宗〕山城槇尾山の律僧なり、寥海字は慧雲、和泉の人、本日蓮の徒なり、最も止觀に精しく徒中稱して觀門慧雲と云ふ、一日大和の古蹟を巡覽して明忍律師に見え、共に西大寺に入りて戒律を習受す、慶長七年明忍と高山寺に登り自誓受具す、七年奈良の律寺安養龍德戒藏寺等にありて行事鈔を講ず、明忍西海道に赴き將に支那に渡らんとするとき、師囑を受けて槇尾山に住す、同十六年高雄山に寂す、壽缺く、（本朝高僧傳）

リヨーゴンボー　楞嚴房　ニチエー日叡を見よ、

リヨーサン　領山　エートン英頓を見よ、

リヨードー　苓道　リヨーセキ亮碩を見よ、

ルの部

ルアン　流安　二三三九　〔淨土宗〕出雲月照寺の開山なり、流安は生蓮社長譽と號す、俗姓は岡村氏越前大野の人なり、隨流に就て剃髮受業し、出雲松江に月照寺を剏す、延寶七年五月二十日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ルデン　流傳　二三三七　〔淨土宗〕出雲西方寺の開山なり、流傳は登蓮社高譽と號す、石見大森の人其俗姓詳かならず、法を呑龍に嗣ぎ出雲意宇郡宍道の西方寺開山となる、後同地正定寺に主となり其廢頽を興す、寬文七年七月二十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ルトン　流頓　二三四八　〔淨土宗〕京都知恩寺の僧なり、流頓は直蓮社乘譽、了阿と號す、越前府中の人、其俗姓詳かならず、隨流の室に入りて剃髮受業し、又頓譽智哲に事へて宗乘の奧義を究む、寬文三年生實大巖寺に住して第十代となり、延寶八年京都知恩寺に移る、元祿元年九月十六日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ルネン　流念　二二九〇　〔淨土宗〕攝津安養寺の開山なり、流念は鎭蓮社專譽と號す、其鄉貫詳かならず、法を虎角に嗣ぎ攝津島下郡安威庄大念寺の中興となり、後耳原安養寺を開く、寬永七年正月二十四日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ルヨ　流譽　コガン古巖を見よ、

ルコーチヨーロー　留興長老　ジモー慈猛を見よ、

レの部

レーイ　令扆　一五一六 一六〇二　〔法相宗〕奈良大安寺の僧なり、令扆は京都左街の人、俗姓は高階氏、法相の學侶なり、延喜二十一年維摩會の講師となり、尋いて大安寺別當に補す、延

長六年閏六月廿八日權律師に任し、承平元年十月廿七日律師に轉し五年十月十二日少僧都に任す、六年十一月廿六日石山の淳祐を禮して胎藏界の灌頂を受く、天慶元年正僧都に進み、五年八月二十一日寂す、壽八十七なり、（續傳燈廣錄、本朝高僧傳）

レークン　令薰　二一〇四……〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、令薰字は琴江と云ひ、久しく和翁春に參して遂に其法を嗣ぎ、廣嚴永福の二寺に歷住し、京都に皈りて普門寺及東福寺に道を唱へ、晚年同聚院に退休す、文安元年八月十一日疾に罹り、衆を集めて偈を說ひて曰く、文安元年、八月十一、琴江老衲、大事了畢、と終に同院に於て寂す、壽缺く、（延寶傳燈錄）

レーゲン　令玄　二四三五 二九〇九〔眞宗〕越中國上新川郡東水橋町照蓮寺第十七代の住持なり、令玄は宗乘を快樂院に受け、餘乘は殊に天台に邃し、寺中に學寮を置き講莚を開くこと三十年一日の如し、門下無慮四百餘人に及ぶ、天保十四年四月勸學職となり、弘化三年の安居學林代講を命せられ、觀念法門を講し奥書院に於て論註八番問答を講す、所謂御前講なり、廣如法主特に消息一通を與ふ、嘉永二年八月二十一日寂す、壽七十五、謚を慧燈院といふ、（學苑談叢）

レーサイ　令才（……）〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、令才字は茂伯、號は扣角子と云ふ、久しく白英東に參して記莂を受け東福寺に主となる、寂年及壽缺く、（延寶傳燈錄）

レーザン　令山（二〇五九）〔臨濟宗〕武藏國濟寺の禪僧なり、令山字は峻翁、武藏秩父の人なり、幼より出家の志あり、了機道人といふ者に師事し薪水の勞を執る、十六歲出家して比叡山に登り具足戒を受く、一たび國に歸へりて大陽山洞翁禪師に參し、下野長樂寺に留まる、參究八年に及べとも未た契せす、盡く書籍を燒き捨て諸方に歷游す、赤城山乾坤長禪師、須須萱山拔隊勝禪師を訪へとも猶悟入せす、上野寶林寺に到り大拙能禪師に謁し、其指示に從ひ再ひ拔隊勝禪師の下に歸へり、遂に其心、印を受く、越前龍溪寺月堂心、丹波慧日寺特峰奇、永澤寺通玄靈等に歷謁し皆賞讃を受く、後鄉里に歸へり成木山に草菴を結ひ道化盛なり、次に金峰山に入りて菴居すること十四年、拔隊勝の鹽山を掇する時招かれて知藏寮となる、勝禪師の寂後武藏香積菴に住す、康應元年甲斐向嶽寺に轉住し、勝禪師の後を嗣き大衆八千人に接す、武田信成尊崇して菩薩戒を受く、翌年武藏に歸へり橫山廣園院を開く、長井道廣尊信歸仰す、同年秋上杉憲房の請に依り武藏膵羅に常興山國濟寺を創して開山となる、會下の大衆一萬餘人に上るといふ、又猪俣氏の請により光嚴寺を開き、諸檀越の請により武藏の東皎瑞巖長契下野の西方報恩の諸寺を開きて皆開山となる、應永三年後龜山法皇の勅招を蒙るも老病を以て出てす、六年の夏大に旱す、國民の請により祈雨の偈を作り、大に驗あり、幾もなくして寂す、壽缺く、勅して法光圓融禪師と謚す、（本朝高僧傳）

レーホー　令法　二四八七……〔新義眞言宗〕大和長谷寺の第四十一代なり、令法字は爲幢、佐渡國戀ケ浦の人なり、州の國分寺に入りて剃度し、十三歲にして初めて豊山に登り、留

錫多年、學成りて大和國寺に住し、後江戸護持院に移る、文政九年豐山能化職に舉げられ、翌十年九月十七日寂す、壽缺く、(新義眞言宗史)

レーイン　嶺胤　二二七九　〔曹洞宗〕長門大寧寺の禪僧なり、嶺胤字は貫雲、俗姓は田氏肥後の人なり、忠山を禮して得度し往きて華光寺能山に參す、次に大寧寺闕翁に謁し朝夕咨請終に玄旨を領す、辭して下野興源寺の照巖に參し執務三年、後闕翁大寧寺を退きて妙悟寺に住すと聞き、往きて之を省し、其命により安叟珠養に師事し遂に附囑を蒙むる、慶長三年總持寺に出世し大寧寺に遷る、同八年永澤寺に移り、明年辭して又大寧寺に歸へる、仝十二年大蘊軒に退去し、元和五年七月二十五日寂す、壽缺く、鐵村玄燕あり、(日本洞上聯燈錄)

レーオー　嶺翁　二二九九　〔淨土宗〕筑後眞福寺の開山なり、嶺翁は滿蓮社圓譽と號し、筑後の人なり、幼にして郡の本誓寺に入りて剃髮し法を廓山に嗣ぐ、鄕里に眞福寺を剏して開山となり、寛永十六年四月十八日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

レーシツ　嶺室　ゼンシユー禪鷲を見よ、

レーナン　嶺南　シユージョ秀恕を見よ、

レーナン　嶺南　スーロク崇六を見よ、

レーア　禮阿　ネンクー然空を見よ、

レーコー　禮光(ライ)　(一三八九)　〔三論宗〕大和元興寺の僧なり、禮光俗姓詳ならず、天平の頃元興寺に在りて道譽高く、智光と相交る、暮年淨土教に歸向し專ら阿彌陀佛の相好及び淨土の莊嚴を觀想し、自ら誓ひて言語を絕す、故を問ふものあるも總べて答ふることなし、居ること數年にして寂す、(往生極樂記、元亨釋書)

レーサン　禮三　(一二五六)　〔曹洞宗〕豐州安樂寺の禪僧なり、禮三字は南榮、出家して屢々名宿を叩き、伊豫大室永廓に參し、奉侍久くして衣法並に眞贊を付せられ、大室の大通寺に遷るに及び、師席を踵きて安樂寺に主となる、慶長中豐州玖珠城主久留島康親の請により寺基を其領内に移す、晚年法嗣紹岸をして席を襲はしめ、某年寂す、壽缺く、法嗣紹岸呂隆あり、(日本洞上聯燈錄)

レーシユン　禮浚　二二八　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり、禮浚字は平川、出家して久しく振岩玉の法孫なる大翁冉に參して遂に其法を嗣ぐ、京都東福寺に住し、長祿二年六月六日寂す、壽缺く、妙足菴に塔す、(延寶傳燈錄)

レーウン　冷雲　クワ果を見よ、

レーサイ　冷淬　二〇二五　〔臨濟宗〕京都萬壽寺の禪僧なり、冷淬號は龍泉、後醍醐天皇の皇子なりと云ふ、其母夢に靈異を感じ覺めて孕むあり、天皇母を源氏某に賜ふ、尾張海東郡に生る、早年京師に上り濟北菴の虎關の室に投す、建武元年濟北菴に在りて上首となる、勅召により宮中に法要を說く、貞和二年師瑞松寺にあり、後村上天皇御製の詩を賜はり海東の牡丹を求めたまふ、師御製の韻を次して上る夢破春閑塵事空、芳心一點遠相通、同根知是在二天地一、花開南山與二海東一、虎關錬寂後師海藏院に居す、觀應元年東福寺第一座に擢てらる、後楞伽圓通承天萬壽の諸寺に歷住す、貞治四年十二月十一日海

藏院に寂す、著作松山集三卷、海藏紀年錄一卷あり、虎關錬元亨釋書を撰し、上表して大藏函に入れむことを請ふも朝議許可せず、延文五年師先志を繼ぎて上表して之を請ふ、遂に許可あり、師聞道寺に留る時、一夕盗あり鉢を盗み去る、師偈を作る、應供遍身三十年、幾乾幾濕日朝レ天、夜來忽有ニ人拏去一、感得諸家鉢盂傳、(延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

レーサン 齡山 エン延を見よ、

レーサン 齡山 マジュ麿壽を見よ、

レーガン 玲巖 ゲンハ玄波を見よ、

レーショー 聆照 (一二四八―……) 百濟の歸化僧なり、聆照崇峻天皇元年三月に其國使に隨ひ令威、惠衆、惠宿、道嚴、令開等と共に來る、同行に寺工太良未、太文賈古子、鑪盤工將德白昧淳、瓦工麻奈文奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝彌、畫工白加あり、聆照等の事蹟缺く、(日本書紀)

レキオー 歴央 二三一四 〔淨土宗〕山城淨安寺の開山なり、歴央は百道社大譽、西風と號す、下野の人其俗姓詳かならず、初め名越流の徒なりしが、後生實の大巖寺に入りて法を雲巖に受け、洛東粟田口に淨安寺を創して開山となる、承應三年二月三日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

レキザン 歴山 二三二六 〔淨土宗〕駿河華陽院の僧なり、歴山は道蓮社的譽、本故と號す、了的に師事して宗乘の奥義を究め、其席を繼ぎて駿河華陽院に住す、寛文六年十一月十五日寂す、世壽詳かならず、法嗣歴譽靈頓あり、(淨土總系譜)

レキテン 歴天 二三二六七 〔淨土宗〕江戸增上寺第二十六代なり、歴天は頓蓮社森譽、善阿と號す、其郷貫詳かならず、或は云ふ豐後寺眞野賴包の庶子なりと、幼にして出家し修學功を積みて關東に遊歷し、後三緣山に登り法問講釋階級を進み、大巖寺に住し大光院に遷る、寛文九年七月命を奉して三緣山に貫主となる、延寶元年十一月三日辭して麻布に退隱し、翌四日寂す、壽六十七、(三緣山志)

レキヨ 歴譽 リョージュン靈順を見よ、

レキオー 礫翁 二三三九 〔淨土宗〕肥前無量寺の開山なり、礫翁は莊蓮社嚴譽と號す、俗姓は千葉氏肥前の人なり、礫道に就て剃髮受業し、州の大村無量寺の開山となる、寛文九年十一月五日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

レキドー 礫道 二二九三 〔淨土宗〕肥前長安寺の開山なり、礫道は濟蓮社九譽と號し、筑前の人、法を虎角に嗣ぎ、初め州の博多西方寺に住し、次に肥前慶巖寺に遷る、後肥前大村長安寺を剏して開山となり、寛永十年二月十五日寂す、世壽詳かならず、法嗣に礫翁あり、(淨土總系譜)

レキカイ 曆海 二二六〇五 〔眞言宗〕大和東大寺の僧なり、曆海は聖寶の弟子なれども其法を嗣かず、寛救の密灌を受け道興高し、嘗て勅を奉して石山に請雨經の法を修す、詳傳なし、(續傳燈廣錄)

レン 濂 (一一九二―) 〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり、濂字は溪闇、天陰德樹に參して法を嗣ぎ、享祿四年秋尾張瑞泉寺に住す、寂年及壽缺く、(延寶傳燈錄)

レンア 蓮阿 センオー詮雄を見よ、

レンア 蓮阿 リョーヘン良遍を見よ、

レンイ　蓮意 一七九二 〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、蓮意は大和の人、少にして高野山に登り碩德に謁す、四面堂を建て阿彌陀觀世音不動尊の像其丈各丈六なるを安置す、長承元年九月十日寂す、壽缺く、(本朝高僧傳・高野往生傳)

レンイ　蓮位 一九三八 〔眞宗〕常陸三月寺の住持なり、蓮位俗名は宗重兵庫頭と號す、俗姓は源氏、多田滿仲の裔三位賴政の孫なり、父は宗仲といふ、承久元年家族賴茂の謀反に連座して死罪に處せられんとす、親鸞適〻刑場を過ぎ乞ひて弟子となす、常陸眞壁郡下間小島三月寺に居る、弘安元年七月廿三日寂す、(本願寺通紀)

レンイン　蓮胤 (一八七一) 〔天台宗〕山城大原山の僧なり、蓮胤俗名は鴨長明と云ひ、世々鴨社の氏人祖は季繼、父は長繼皆禰宜なり、長明は管絃に通し和歌を善くす、應保中從五位下に叙し後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となる、一時和歌に名あるものに敕して肥大枯細艷雅三體の和歌を獻ぜしめて其才を試む、衆皆之を難し唯長明及攝政良經、慈圓等六人敕を奉せしのみ、後父祖に繼ぎて社司に補せられんことを奏請して許されず、これより怏々として樂まず、遂に薙髮して僧となり、名を蓮胤と改め大原山に入る、時に五十歲なり建曆中鎌倉に往き將軍實朝に謁し、幾ならずして京都に皈り、室を作る、其結構新創に係り方一丈高さ七尺餘柱楹屋廂皆鉤鎖を用ひて開闔に便ならしむ、意に適せざれは移し他に往く、遂に日野外山外に入りて居る、有する所は佛像及書數軸箏琵琶等他に蓄ふる所なく、山に登り水に臨み採擷して自ら給す、後上皇復召して和歌所に入れんとせしに、師和歌を上りて辭す、寂年壽缺く、遺跡に石牀あり、世に方丈石と號す、著作榮玉集、無名針、發心集、文字鏁、四季物語、方丈記等あり(大日本史)

レンイン　蓮茵 ジッドー實道を見よ、

レンウン　蓮雲 (二二二九)〔天台宗〕加賀の學僧なり、蓮雲は號を光聚房と云ふ、明覺の弟子なる念照に就て悉曇學を受く、寂年詳ならす、門下に惠淵あり、

〔考〕蓮雲は室町幕府の末葉の人なり、今假に文明の初に係く、

レンキョー　蓮敎 (二一五二) 〔眞宗〕山城興正寺の第一代なり、蓮敎初の名は經豪と呼ひ、佛光寺經譽の兄なり、文明十三年佛光寺を出て〻本願寺派に歸す、蓮如宗主己の名の頭字を與へて蓮敎と名け、蓮覺の長女を以て之に配す、明應元年五月二日寂す、壽四十二、(本願寺通紀)

レンギョー　蓮行 (一九一七) 〔眞宗〕三河上宮寺の住持なり、蓮行俗名は敎房、姓は藤安氏、出家して上宮寺に住して天台を學ふ、矢作柳堂に親鸞に謁し弟子となり眞宗に歸す、後蓮願をして席を繼かしむ、八世の孫如光寛正年中本山に功ありしとぞ、今の碧海郡佐々木上宮寺是なり、(本願寺通紀)

レンクー　蓮空 ニョホー如法を見よ、

レングワツ　蓮月尼 二四五三 二五三五 〔淨土宗〕山城神光院の尼なり、蓮月尼は父を太田垣傳右衞門光古と云ひ 京都知恩院の廣間侍なり 小名は誠と呼び近江彥根の人、近藤某の子を夫となし男女子四人を產むも皆早世す、夫も亦續て沒し、悲嘆の餘り尼となり蓮月と號す、時に二十歲前後なり、四十歲

の頃父光古も亦沒したれば手づから陶器を製し、これに自詠の歌を描きて鬻ぐ時人珍襲する者多し、京都の陶工これを摸造して利を得る者亦少からず、また國々より上京する者の詠歌を乞ふの煩なるを厭ひ家居を定めず、後西加茂神光院の茶所に住せり、故に人呼んで屋越の蓮月といへり、其詠歌「宿貸さむ人の心を情にて朧月夜の花の下臥」は善く人口に膾炙す、明治八年二月八日西加茂に寂す、壽八十三、或る人生前詠せし歌を刊して海女刈藻と云ふ、（好古集說、名人忌辰錄）

〔考〕寂年並に壽に異說あり、今は名人忌辰錄を採る、

レンゲアザリ　蓮華阿闍梨　ニチジ日持を見よ、

レンゲイン　蓮華院　ニチダイ日題を見よ、

レンゲイン　蓮華院　ミョータツ明逹を見よ、

レンゲドーシ　蓮華童子　ギトー義統を見よ、

レンゲン　蓮眼（一九三七）〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、蓮眼字は禪智、越前の人なり、高野山に上りて瑜伽軌を習ひ大和に至りて圓照に謁して戒壇院に於て戒律を受け、鷲尾山に密藏を開く、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

レンコ　蓮居　ショーケン性憲を見よ、

レンゴ　蓮悟　ケンエン兼緣を見よ、

レンコーイン　蓮光院　ニチヂョ日助を見よ、

レンジヤク　蓮寂（……）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり、蓮寂は鄕貫詳ならず、興福寺に於て法相を學び、比良山に居りて常に法華を持す、寂年及壽缺く（本朝法華驗記）

レンシユー　蓮舟（二五九三）〔眞言宗〕大和藥師寺の學僧なり、蓮舟俗姓は良淵氏、慧宿に師事して密敎を受け、寶聖に就て灌頂を受け、奈良藥師寺に住し後京都貞觀寺の座主となる、承平三年春東寺三の長者に加任し、僧都に任ず、寂年及壽缺く、（本朝高僧傳）

レンシユー　蓮秀　キョーショー慶照を見よ、

レンジユン　蓮淳　ケンシヤ兼舍を見よ、

レンジユン　蓮順　ライゲン賴玄を見よ、

レンシヨー　蓮生　一九一九……〔淨土宗西山派〕山城西山の學僧なり、蓮生字は實信、俗名は宇都宮彌三郎賴綱と云ひ、粟田關白道兼の末葉大進成綱の子なり、初め武門にありて驍勇の名高かりしが、熊谷入道の勸めにより吉永の禪室に詣で、後善慧證空に師事して淨土宗西山派の學を修し西山良峰に庵居す、積學鈔若干卷を作り、正元々年十一月十二日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

レンシヨー　蓮生　一八六七……〔淨土宗〕祖源空上人の弟子なり、蓮生は武藏熊谷の人、俗名熊谷次郞直實と云ふ、安居院聖覺法印に就いて出離の要道を問ひ、法印の指示によりて黑谷の源空上人に謁し淨土敎を受け弟子となる、文久元年五月十三日鳥羽某寺の上品來迎の阿彌陀佛像を禮して上品の往生を願ひ、靈驗を感す、後京師より武藏に歸るに西方に背かんことを恐れ日々倒に騎します、承元元年八月疾あり、九月一日念佛して寂す、（淨土傳燈錄）

レンシヨー　蓮照（……）〔天台宗〕近江延暦寺の僧なり、蓮照は備前の人、久しく比叡山に居りて他學を修めず、常に法華を持す性極めて仁慈、冬は衣を脫して凍人に與へ、凶年には食を餓者に讓る、又汚池に入りて膚肉を蛭に食

しめ、或は山に入りて蚊虻に噉しめ、體大に腫脹して甚だ苦惱を受く、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)

レンショー　蓮勝　二〇一八　〔淨土宗〕常陸法然寺の開山なり、蓮勝字は永慶、常陸の人なり、出家して良曉上人に師事し淨土宗の教義を傳へ、元應二年四月重ねて宗脉を授けらる、東國に法化盛なり、大田に法然寺を開き專修念佛の道場となす、文和四年聖冏を教授し淨土宗の教義を示し、延文二年に聖冏に勸めて定慧上人の下に就かしむ、同年法然寺に寂す、(淨土總系譜、鎮流祖傳、淨土傳燈錄)

蓮勝上人

レンジョー　蓮淨　(一九三七)　〔戒律宗〕大和戒壇院の律僧なり、蓮淨字は實淨、大和の人、圓照に從ひ戒律を傳へ戒壇院竹林寺に住す、後京都に入りて淨土教を諦す、寂年缺く、(本朝高僧傳)

レンジョーイン　蓮成院　ギョーケン賢堯を見よ、

レンジョーイン　蓮成院　シューレー秀嶺を見よ、

レンジョーイン　蓮成院　ニチソン日尊を見よ、

レンジョーイン　蓮成院　ミョーホー明寶を見よ、

レンズイ　蓮隨　二二八一　〔淨土宗〕駿河淨光院の僧なり、蓮隨は與蓮社空譽と號す、俗姓は野崎氏伊勢山田の人なり、智譽上人の室に入りて剃髮受業し、遂に其法を嗣ぐ、初め駿河籠鼻の淨光院に住し、後菩提山稱往院に遷る、晩年梅香尼の請により蓮華溪梅香寺を開き、元和七年二月十四日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

レンゾー　蓮藏　(……)　〔眞言宗〕紀伊金剛峯寺の僧なり、蓮藏は加賀の人、出家して密宗に入り、高野山に登りて三時の行法千日護摩を修して往生の助となす、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳　高野往生傳)

レンゾー　蓮藏　(……)　〔三論宗〕大和大安寺の僧なり、蓮藏は大安寺にありて法華を持す、法嚴なる者同寺にありて華嚴を誦す、二人後出雲に遷り相去ること遠からずして菴居し、共に二經を持すこと二十年なり、寂年及壽缺く、(本朝高僧傳)
〔考〕蓮藏は室町幕府の頃の人か、

レンゾーカイ　蓮藏海　オーリュー奥龍を見よ、

レンゾーカクシュジン　蓮藏閣主人　ゲワッセン月箋を見よ、

レンゾーボー　蓮藏房　ニチモク日目を見よ、

レンソン　蓮尊　(……)　〔法相宗〕大和元興寺の僧なり、蓮尊美作の人、出家して東上し、元興寺に住し法華經

を持す、二十七品分明に誦す、勸發品に至りて記する能はず、倍々精勤して數万遍に至るも遂に記する能はず、大に愧ぢて普賢菩薩像に禮し、九十日の間精祈して曰ふ、忘失句偈還令通利、と、大士我を欺かむと、夢中天童あり告げて曰ふ、大士我をして汝が宿因を識らしむ、汝前生野狗たり、母狗に就きて持經法師の床下にあり乳のむ、持經法師法華經を誦持するに序品より嚴王品まで雛狗聞くを得、勸發品に至りて母狗立ち去り、雛狗隨ひ行く、聞法力によりて今人身を得たるもかゝる宿因により其聞を洩らしたる勸發品を記する能はざるなり、益心志を堅固にすれば全誦するを得む、果して全誦したりとぞ、(本朝高僧傳)

レンタイ　蓮待（一六七一—一七五八）〔眞言宗〕紀伊高野山の僧なり、蓮待は土佐の人、容山阿闍梨に從ひて密敎を傳習し、灌頂を受けて以後洛北に卜居す、世に崑藏(イヘクラ)の上人と呼ふ、又金峰山に入りて鹽穀を斷ち、後高野山に移り、又鄕里に歸へり、金剛定寺に住し、眞言の外淨業を修す、承德二年夏五月俄に鄕を出て山に歸へり寂す、壽八十六、(本朝高僧傳、高野往生傳)

レンタイ　蓮躰（二三六二）〔眞言宗〕武藏江戶靈雲寺の學僧なり、蓮躰は俗姓生國詳ならす、靈雲寺開山淨嚴に師事し、學德高く殊に悉曇に通す、平生兜率上生を勸說す、著作大課誦三卷、秘密安心往生集二卷あり、

レンチヨー　蓮長（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、蓮長法華讀誦を事とす、長坐不臥沐浴にあらずは帶を解かず、金峰、熊野、志賀、長谷等の勝地遊覽せざるなし、命終の日手に白蓮華一莖を握り香氣室に滿つ、人皆異とす、其年時缺く、(本朝高僧傳)

レンチヨー　蓮長　ニチレン日蓮を見よ、

レンテキ　蓮的（……二三四五）〔淨土宗〕江戶靈岸寺第五代なり、蓮的は武藏熊谷の人、名蓮社義譽と云ふ、後に遇光と云ふ、蓮意に從て出家し江戶靈岩寺第五代となる、一日母の病を告ぐるものあり、師急ぎ歸省せんとすれども身貧にして旅費なし、行路作業して下野に到り、一村落に入りて宿を求むれとも得ず、曠野に出でゝ一草堂に宿し端坐讀經す、會賊等堂に入りて掠財を分たんとし、師を見て驚き逃れ去る、師其捨て置きたる金錢を集めて資とし、皈りて母を省せりと云ふ、貞享二年八月廿七日寂す、壽缺く、(野史、淨土總系譜)

レンニ　蓮二　シコー支考を見よ、

レンニユー　蓮入（一六六四）〔眞言宗〕大和石光寺開山なり、蓮入は初め伯耆の大山寺に居り、寬弘の間大和の長谷寺に詣りて靈告を得、西南九里の地に彌勒三尊の像を得、寺を建て今來寺といふ(俗に石光寺)、某年所住に寂す、壽缺く、(本朝高僧傳)

レンニヨ　蓮如　ケンジユ兼壽を見よ、

レンホー　蓮昉（二三二四—二三七九）〔黃檗宗〕山城宇治萬福寺第十代なり、蓮昉字は旭如、淸の人王氏なり、出家して諸禪師を歷訊し、正德元年十月西來し悅法童の法を嗣く、享保元年十一月黃檗山に住し、一住三年にして退隱し、享保四年三月廿六日寂す、壽五十六、(黃檗譜畧)

レンボー　蓮坊（……）〔天台宗〕近江比叡山の僧なり、蓮坊俗姓不詳、延曆寺座主慈念に隨ひて兩部の大法を

受け、日日法華經を誦持し五智觀を凝らす、一夏江文山に禪坐す、大笠を懸けて蓋となし、平石を拂ひて牀となし、晝夜臥せず、餓ゆれば蔬を烹て喫するも鹽味を絶つ、法華經の誦聲を休めず、一冬比叡山釋迦堂に在り、氷を敲き閼伽水を汲みて法華經を誦ず、老僧來り摩頂して曰ふ、妙法功盈つ往生疑なしと、命終に時經を把りながら寂す、（本朝高僧傳）

レンイ　蓮意　二三〇九……〔淨土宗〕三河大樹寺の僧なり、蓮意は隨蓮社萬譽と號す、其郷貫詳かならず、幡涯に就て剃髪受業し遂に其法を嗣ぐ、後瀧山大善寺三河大樹寺に主となり盛んに法化を布き、慶安二年五月二十五日寂す、世壽缺く、嗣法蓮雨あり、（淨土總系譜）

レンサツ　蓮察　二三三二—二四一五〔淨土宗〕江戸增上寺第四十三代なり、蓮察は入蓮社走譽不如一阿と號す、江戸の人、父は上坂增右衛門と云ひ井伊掃部頭の臣なり、寛文十二年七月を以て霞岡の本邸に生れ、元祿九年五月十七日赤坂龍泉寺に入り清譽文察の弟子となる、後三緣山に登りて修學す、然れとも性清貧にして學席に止まり難く、一字班の半ばにして退山せんとす、貫主演譽白隨これを聞き其才を惜み幹事を司どらしむ、享保十一年命を奉じて善導寺に住す、住寺十一年にして弘經寺に移り紫衣を賜はる、元文三年秋傳通院に移り、延享二年八月三緣山增上寺に貫主となり、大僧正に任ず、時に增上寺三大藏の内第三藏闕本ありしを讃岐法然寺より寫取り員數目錄を修補す、寛延二年七月職を辭せんとせしも許されず、二年二月十四日辭して一本松に退く、後門譽貫主を辭せしかば一本松を讓り、山内眞乘院に移る、四年安立院境内に隱室を構へ、寶曆五年四月二十五日寂す、壽八十四、遺偈あり曰く修短繋筆、八十四年、長夜大夢、制不在已、（三緣山志、淨土總系譜）

レンサン　蓮山　コーエキ交易を見よ、

レンヨ　蓮譽　ウンセツ雲說を見よ、

レンア　練阿　ニチテー日貞を見よ、

レンサイシ　戀西子　キョーコー敬光を見よ、

レンシユク　鍊叔　シューテツ宗鐵を見よ、

ロ の 部

ロコー　魯公　二二九一……〔淨土宗〕京都知恩寺の僧なり、魯公は天蓮社德譽と號す、智譽上人の法を嗣ぎ遠江横須賀の選要寺に住し、後京都知恩寺に遷る、寛永八年五月十一日寂す、壽缺く、嗣法一人あり玄恕と云ふ、（淨土總系譜）

ロコー　魯光　ゼンキョー善慶を見よ、

ロコー　魯耕　ソドー祖洞を見よ、

ロサン　魯山　タクシュー琢宗を見よ、

ロシン　魯信　ソンジユ存樹を見よ、

ロトー　魯洞　二二三九—二三二五〔淨土宗〕和泉大經寺の僧なり、魯洞字は玄恕、一に聖譽と稱す、俗姓は源氏遠江國横須賀の人なり、父は山中左衛門義繼、十歳にして郡の泉涌寺德譽に投して出家す、天正十五年舘林善導寺に至り隨波に師事して修學す、德譽の命に依て泉涌寺に住す、一夏法幢を豎起して三百餘人の大衆を領す、後紀伊大納言の請により大智寺に住す、

後和泉大經寺に轉住す、寛文五年十二月十六日寂す、壽八十七、(鎭流祖傳、續日本高僧傳)

ロドン　魯鈍　オーキ王機を見よ、

ロチン　魯念　二三〇九……〔淨土宗〕大坂西福寺の開山なり、魯念は光蓮社心譽、又は能牙と號す、俗姓は東條氏、相模鎌倉の人なり、智譽上人に隨つて受業し、其法を嗣ぎて後大坂天滿に西福寺を剏す、慶安二年六月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ロリユー　魯龍　二四〇六―二四六六　〔曹洞宗〕山城興正寺の禪僧なり、魯龍字は靈潭、俗姓は桑原氏、但馬千原の人なり、十歲龍滿寺問厚の下に投す、十六歲楞嚴經の講義を聞きて省するところあり、以來周遊し諸明匠を歷訪し、三十歲にして歸へる、問厚の示寂に値ひ、仍て玄楞和尙に隨ふ、後北遊し越後に寓居し大藏經を閱讀す、天明二年松月石了の室に入り記莂を受く、翌年石了寂す、尋きて南遊し相模勝源寺に住すること四年、法化盛なり、寛政元年九月伊井侯の武藏豪德寺の請に應ず、享和二年但馬に隱退す、八月永井氏の興聖寺に請するに應す、文化三年正月疾あり、七月三日寂す、壽六十一、臘五十二、語錄ありて行はる、(續日本高僧傳)

ロリヨー　魯寮　ゲンコー元皓を見よ、

ロクワク　路廓　二三〇一……〔淨土宗〕江戶龍原寺の開山なり、路廓は法蓮社圓譽と號す、俗姓は內海氏江戶駒込の人なり、淸巖に師事して法を嗣ぎ、豐後臼杵龍原寺龍昌寺及ひ江戶高輪龍原寺等を開く、寛永十八年三月五日寂す、(淨土總系譜)

ロケー　路繼　エンイ圓意を見よ、

ロネン　路念　二三〇二……〔淨土宗〕出羽金淨寺の開山なり、路念は行蓮社運譽と號す、越後柏崎の人、幡隨の室に入りて剃髮受業遂に其法を嗣ぐ、出羽庄內に往き鶴岡に金淨寺を開き道化盛んなり、寛永十九年十二月十一日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ロギン　露吟　二三二七……〔淨土宗〕江戶大願寺の開山なり、露吟は天蓮社曉譽助心と號す、俗姓は佐藤氏、筑前博多の人なり、幼にして郡の極樂寺に入りて剃髮し、後觀智國師に師事して宗決を嗣ぐ、初め信濃松本大願寺に住し、後江戶牛込に大願大養兩寺を開く、寛文七年正月二日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ロギユー　露牛　二二八二……〔淨土宗〕伊勢天然寺の開山なり、露牛は聖蓮社岌譽と號し、武藏岩付の人、法を感譽に嗣ぐ、伊勢安濃郡地島の天然寺に開山となり、元和八年十一月寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ロスイ　露水　カクゲン覺玄を見よ、

ロチユー　露柱　シユーコー宗光を見よ、

ロテン　露天　二三三七……〔淨土宗〕日向松月院の開山なり、露天は諦蓮社誠譽と號す、俗姓は久保田氏日向佐土原の人なり、貴屋の法嗣にして運亮の法弟なり、州の那珂に松月院を築きて開山となり、延寶五年十一月六日寂す、壽缺く、(淨土總系譜)

ロデン　露傳　リヨーソー良和を見よ、

ロハク　露白　二二四八―二三二四　〔淨土宗〕江戶增上寺第廿四代なり

露白は哲道祖本譽と號す、相模國小田原の人俗姓は蔭山氏なり、八歳にして伊豆國に至り菜王善知に投して出家す、後下總國小金東漸寺に入り圓應和尚に師事して淨土教を受く、十八歳にして辭して上野國ヶ重山の吞龍上人に就て修學す、後東漸寺の主となり專ら淨業を修し、寺務の間を得て法門の弘通に勤む、後大光院光明寺廿四代の貫主となる、一宗の統錄司たり、寛文二年九月十七日辭職し、麻布一本松の地をトして菴居す、師の高德に感し來集するもの甚盛なり、寛文四年九月廿八日寂す、壽七十七、臘六十七、（鎭流祖傳 三緣山志）

ロミンシ 露眠子 シューオー宗璵を見よ、

ロイン 蘆隱 フモン普門を見よ、

ロセーシ 蘆栖子 シューセツ宗雪を見よ、

ロウン 蘆雲 ケンエー憲榮を見よ、

ロガク 蘆嶽 トヽト等都を見よ、

ロドー 鑪堂 カンエン寒淵を見よ、

ローキヨー 朗慶 一九八四…… 〔日蓮宗〕下總法蓮寺の開山なり、朗慶は越中阿闍梨と呼ぶ、父姓は源氏荏原左衞門佐義宗と云ふ、義宗日蓮に歸依して奮て躬を顧みす、弟子の禮を執り其季子を棄て日朗に投す、乃ち師なり、義宗の沒後師地を中延にトして一精舍を構し神像を奉す、今の八幡山妙法蓮寺是なり、師正中元年二月二十八日寂す、壽詳ならす、（本化別頭佛祖統紀）

ローグワツ 朗月 二三九〇…… 〔淨土宗〕江戸大養寺の開山なり、朗月は然蓮社嚴譽と號す、俗姓は樋口氏伊勢桑名の人なり、江戸天德寺嶽譽行阿に就て剃髮受業し、後隨流に師事して法を嗣ぐ、西久保に大養寺を創して法化を布く、寛永七年四月二十一日寂す、壽缺く、（淨土總系譜）

ローゲン 朗源 一九八六 二〇三八 〔日蓮宗〕京師妙顯寺第三代なり、朗源俗姓は千葉氏、小字は德壽麻呂と呼ぶ、十三歳にして出家す、龍華に入り苦修鍊業すること五年、後日覺に從て化道を輔く、貞治四年乙巳權小僧都に任ず、永和四年正月十八日寂す、壽五十三、（本化別頭佛祖統記）

ローゼン 朗善 （一五五〇） 〔天台宗〕近江延曆寺の僧なり、朗善久しく比叡山にありて顯密の法を究め、傳燈大法師位に任す、傳教大師嘗て精廬を建て、比叡山の南に在り、師香華を主とり□□搆する所多し、寛平二年十二月奏して定額寺に列し、永く國家を護せんと請ひて許さる、寂年缺く、（本朝高僧傳）

ロータン 朗湛 二四一一 〔融通念佛宗〕攝津觀音寺の住持なり、朗湛は俗姓詳ならす出家して大通上人の弟子通照に就いて學を受け、寶曆の頃攝津天王寺茶臼山觀音寺に住し宗風を舉揚す、寂年詳ならす、著作兩祖師繪史傳三卷、融通圓門章講案（未完）等あり、

ローチヨー 朗澄 コーショー光勝を見よ、

ローネン 朗然 ジョーエン乘圓を見よ、

ローヨ 朗譽 一八五四 一九三七 〔臨濟宗〕相模壽福寺の禪僧なり、朗譽字は藏叟と云ふ、榮朝に師事して心印を傳へ、朝禪師滅後長樂寺に住す、正元年中鎌倉の壽福寺に住す禪教並に聞ゆ、晚年再び長樂寺に住す、示寂の前日山林を巡行して卒歳の地を相し、其翌日大衆を集めて法談し觀音像に向ひて寂す、建

治二年六月四日なり、壽八十四、遺偈あり淸夜月靜、松風爲琴、自非我客、誰是知音、(砂石集、元亨釋書、延寶傳燈錄、本朝高僧傳)

ローウンアン 浪雲菴　ショーユー性融を見よ、

ロークワ 浪化 二三三二 二三六三 〔眞宗〕越中井波瑞泉寺の僧なり、浪化は越中の人、東本願寺一如上人の後孫なり、芭蕉に就いて徘諧を學び殊に親重せられ、芭蕉沒する時師二十三歳なるも已に造詣深く遺言六條を後人に傳へ正風の指針となす、元祿十六年十月十六日寂す、壽三十二、白扇集あり「釣そめて蚊やの匂ひて二三日、時鳥雨のかしらを鳴て來る等人口に膾炙す、(徘家奇人談、徘家沒年表、徘諧名譽談)

ローセン 老仙　ゲンタン元聃を見よ、

ローソー 老僧　コージョ康助を見よ、

ローテー 老貞　ニチニン日忍を見よ、

ローナン 老南　シンコー神興を見よ、

ローバイ 老梅　ギョーネー行寧を見よ、

ローベン 老辨　ニチショー日省を見よ、

ローケンイン 勞謙院　ゼンジョー善譲を見よ、

ローショーカク 弄松閣　ジグワン只丸を見よ、

ローホー 狼峰　ケンシン見眞を見よ、

ロンサン 崙山 (二三三三) 〔淨土宗〕常陸淨國寺の僧なり、崙山は常陸板久淨國寺に住し信施共に高し、師常に煕羊僧の名利に奔るを嘆し、小鉦を胸間に掛けて市廛山野に念佛し行脚を事とす、伊勢太神宮に詣し、尋きて大湊に寓し晝夜村落を巡遊し法化を施す、土俗皆仰崇信し金胎寺を剏建して開山に請す、後常陸に歸り淨國寺に寂す、年時缺く、(續日本高僧傳)

〔考〕崙山は延寶の頃の人なるべし、

ワの部

ワアン 和菴　ショージュン清順を見よ、

ワオー 和翁　シチュー芝中を見よ、

ワナン 和南　リョーイ良懿を見よ、

ワイトーニン 矮道人　タイゼン泰禪を見よ、

日本
佛家人名辭書
終

正誤

△九〇五頁上二三行ドンケ曇華△九〇九頁上一行ナンケ南化△一〇一六頁上四行バイギン梅岑△一〇六七頁上十四行ホクテン北天の各行削除す

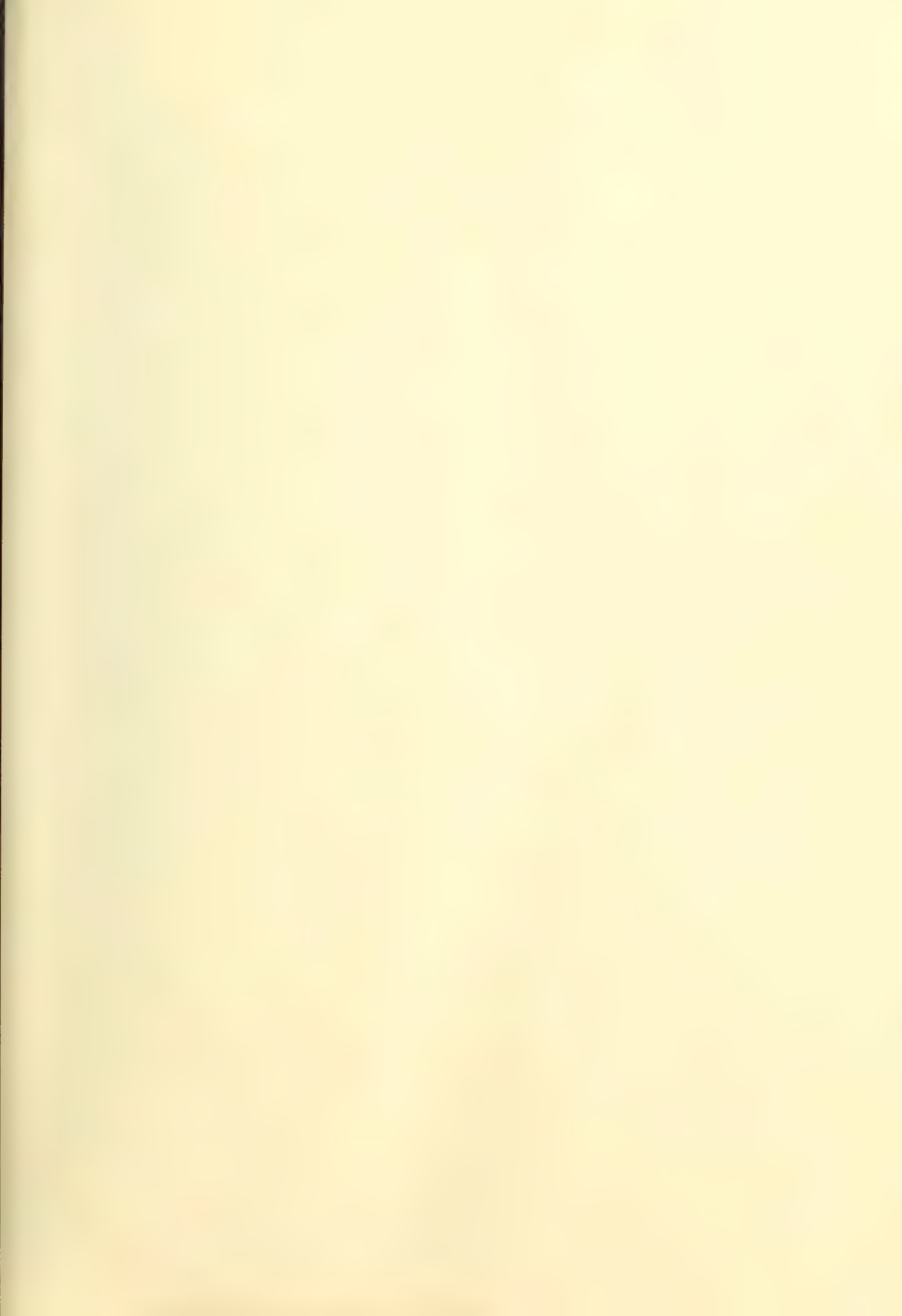
跋文

余國史を繙き佛家の事蹟に至ることに、未た曾て史傳の缺乏を歎せすんはあらさりき。古來高僧傳の類なきにあらされとも、其記するところ佛家諸宗に及はす。近古の大宗門たる眞宗日蓮宗の高僧大德か、全く闕如に附せられたるか如きは、最も遺憾に堪へさる所なり。是を以て夙に佛教界の學者に謀り、徧く諸宗の高僧大德の行實を編纂して世出世に益せんと欲せり。然れとも一千三百餘年の間、十三宗三十餘派の中に輩出せる高僧大德も亦多し、是等の行實を網羅して一大著を成さんことは、固より容易の事業にあらず、而して未た其人を得さるを以て、空しく數年を經過せり。適、鷲尾順敬氏が獨力を以て日本佛家人名辭書の編纂に從事せらるゝを聞き、驚喜措く能はす、乃ち氏を谷中の寓居に訪ひ、一見果して其人なるを信し、告くるに余の宿望を以てし、遂に自ら編纂の資を出して、氏

の計畫を贊けんことを約す、實に明治三十二年二月なりき。爾來氏は萬事を抛ちて專ら編纂に從ひ、余は力を盡くして便宜を給したり。其間に種々の困難に遭遇し、事、意の如くならす、屢、蹉跌せんとしたり。然れとも氏か堅忍なる志は能く其困難を排し、遂に今日の完成を見るに至れり。氏は余に對して曰く、此書の成るを得たるは一に君の贊助に由ると。是れ固より過獎の言なれとも、余か氏を信して疑はさりしことも、亦今日の完成を見るに至りたるの一因ならん。氏は此著を以て自己事業の一片となし、毫も人に誇るの意なしと雖も、氏の苦心經營を知る者は余に若くなかるべし。今や印刷成るを告く、余實に喜ひに堪へず。乃ち其來由を敍して、此書を繙くの諸彥に告くること爾り。

東京神田駿河臺袋町寓居に於て

明治三十六年六月　　今立裕識

増補

日本佛家人名辭書增補

鷲尾順敬撰

アの部

アマタグアン 天田愚庵　テツゲン鐵眼を見よ、

アマタテツゲン 天田鐵眼　テツゲン鐵眼を見よ、

イの部

イウシユン 宥俊　シヤウベン政遍を見よ、

イウシヨ 有諸（二〇九三）〔臨濟宗〕京都南禪寺第百六十代なり。有諸、字は大用、鄉貫詳ならず。幼にして太淸宗渭に參じ、後、その印可を受く。播磨寶林寺に住し、尋いで京都建仁寺に轉じ、南禪寺に上る。次いで退いて雲門庵に住り應永二十年正月南禪寺記を作り、永享四年雪村行道記一篇を作る。寂年及び壽缺く。著作、前揭の外に法華撮註八卷、獅子吼集等あり。（蔭凉軒日記、南禪住持籍、五山文學小史）

イウセツ 有節　ズイホウ瑞保を見よ、

イウデン 宥傳（二〇五七……）〔眞言宗〕安房金剛山寶珠院第一世なり。宥傳、氏族詳ならず、安房平郡東國府の人なり。應永四年に生る。應永十一年夏、その父母莊田數百頃、寢室茅舍若干字を施して寺坊を建立して寶乘院と號し、宥海を請じて開基となし、宥傳をその弟子となす。是に於いて宥海に就いて學ぶ。父母卒して後、醍醐山に登り、戒光院隆增に見えて三摩耶戒場に入り、具支灌頂を受く。後鄉に歸りて院を寶珠院と改め、第一世となる。寶德元年秋再び醍醐山に登り、諸尊の秘軌口訣を習ひ、小野流の淵源を究めて歸る。天性畫繪を好み、兩部曼茶羅二鋪を圖畫し、又、宥海、道隆、妙光の眞影を畫く。文明二年四月九日寂す。壽七十四。（寶珠院列祖傳）

イウメン 有緜（二四八〇—二五二五）〔修驗道〕豐前英彥山の山伏なり。有緜は政所坊と云ひ、政所有緜と稱す。英彥山甘露明王院執當職なり。長南梁原田種信等に就いて和漢の學を受く。文久三年八月朝廷攘夷の議の決せらるゝよしを聞いて大に喜び、座主大僧正教有に奉し、一山尊王攘夷を唱ふ。有緜主として護王寶印の裏面に、攘夷者主上之勅諚也、尙尊王愛國之有志者、宜挺身當國難、以應勅諚と記して神壇に納め、起請文を製して有緜以下十五人連署し、固く相誓ふ。乃ち長門藩に通し事を擧けんとす。然るに小倉藩の聞く所となり、忽ち同十一月同藩兵に襲擊せられ、一山潰盡し、座主大僧正教有以下皆捕はれて小倉に護送せらる。有緜は義俊坊順道等十人と共

に入百屋町の獄舍に投せられ、數々糺彈栲問せらるゝも、尊王攘夷の主意を論張し、藩吏を罵詈す。慶應元年七月長門藩兵小倉藩を攻擊し二十七日大激戰をなし、小倉藩を破る。小倉藩自ら本城を保つべからさるを知るに及び、獄舍の山伏等を慘殺す。有縣は同志正應坊淨典等と共に從容として首を延へて刄を受く。壽四十六なり。（維新史料、日子山義僧傳）

イウヨ　遊譽　カイジヤウ誠誠を見よ。

イクタトクノウ　生田得能　トクノウ得能を見よ。

イシウ　葦洲　トウエン等緣を見よ。

イチチン　一鎭　一九三七 二〇一五　〔時宗〕藤澤淸淨光寺第三代なり。一鎭、元と學阿と號す。他阿眞敎の弟子なり。初め七條金光寺の三代となり、嘉曆二年四月越後國曾禰津長福寺にあり、曆應元年淸淨光寺に住し、獨住十八年、敷地を轉じて八十一坪の堂宇を再建す。文和四年十二月二十二日同院に寂す。壽七十九。戒臘十九。（淸淨光寺記錄、遊行歷代譜、遊行歷代圖）

イツケイ　一慶　二〇四六 二一二二　〔臨濟宗〕京都南禪寺第百七十二代なり。一慶字は雲章。別に流芳と號す。玉渚は書齋の扁名なり。京都の人、九條經嗣の子なり。至德三年五月十二日に生る。六歲にして山崎成恩寺に入り、通玄に就いて句讀を受け、尋いて京都東福寺に在り。應永九年明の使僧天倫道彝、一菴一如の來朝するや、覺曇を介して通謁せり。後城北聖壽寺岐陽方秀に就いて內外の學を修む。又、奈良に往き、華嚴法相等の學を硏究せりと云ふ。岐陽の東福寺に移るに及び、輪藏を管して、岐陽と碧巖集を評論し、その推獎を受く。曾て奇山然の語を見て領悟する所あり、永享三年普門院に開堂して、奇山に嗣香を焚く。永享七年後小松上皇の詔を受けて宮中に元亨釋書を講ず。嘉吉元年東福寺第百三十二代の席を董し、寶德元年冬南禪寺に陞住す。居ること九旬にして東福寺に歸り、寶渚菴に閑居す。寬正三年正月二十三日寂す。壽七十七。弘宗禪師の諡號を賜はる。著作。淸規綱要、五燈一覽圖、理氣性情圖、一性五性例儒圖あり。〔再錄〕

イツゲン　一源　エトウ會統を見よ、

イツトウ　一凍　セウテキ紹滴を見よ、

イハ　岩　二四八九 二五五七　岩代熱鹽の佛敎信者なり。岩子姓は瓜生氏、岩代耶麻郡熱鹽村の人。父は同郡喜多方の渡邊利左衞門、母名はりえ、瓜生氏より嫁す。岩子文政十二年二月十五日に生る。家世〻油商なり。天保八年九歲父を喪ひ、且つ一家火災に罹り、資產を燒盡す。幾もなく母りえは姑の意に任せ岩子及び幼弟半治を携へて熱鹽村の生家に復す。これより岩子及び幼弟半治、母の生家にあり。天保十三年十四歲母に携へられて若松なる親族山內春瓏に寄る。山內氏は世〻醫業をなす、春瓏會津侯に仕へ、醫業の傍ら儒佛の書を讀み、殊に佛敎を信仰す。岩子山內氏にありて敎育せられ、弟半治は親族鈴木某の養子とせらる。弘化二年十七歲、佐瀨茂助と云ふ者の妻となり、若松に一家を構へ、反物商を營み、五年にして長女つねを擧げ、更に二年にして長男祐一を擧け、翌年二女とよを擧げ、安政三年三女を擧く、同年茂助重病に罹り、久しく癒えす。且つ幕府の末期に際し、若松城下自ら騷擾を極め、商業大に衰ふ。岩子夫茂助の重病を看護し、具に辛酸を嘗む

文久二年夫茂助沒し、翌年母を喪ふ。慶應三年若松城下の激戰あり。岩子喜多方に在り、城下の地に至り兵士の勞を慰し大に斡旋奔走す。後岩子は一藩の子女の離散せるを歷問し、舊の藩學日新館を再興し、彼等を教育する方法を立てんとし、諸人に謀り百方心力を盡せり。再三再四民政局に哀願し、遂に學校の開設を許可せらる。乃ち村岡庄吾等と謀り、一校舍を建築し、彼等を教育することゝなる。器具購入教授の招聘等苦心至らざるなし。且つ各宗の僧侶に謀り、小田村の萬福寺に於いて戰死者の大施餓鬼會を修行す。遺族の男女老幼相携へて四來し、大に感喜したりと云ふ。明治三年三月七日民政局より召され賞與せらる。尋いて小學校令發布せられたるを以て、幼學校を閉鎖することゝなる。五年十月岩子始めて東京に上り、救養會所を視察し、若松に分所を開設して亂餘の窮民孤兒等を救濟せんとし、縣令澤簡德に謀りて計畫したるも、中途にして澤簡德轉任し、事業一頓挫し、岩崎の長福寺を借りて寓居す。寺に住僧なく荒敗に委せられたるが、岩子寓居し數月を過ぐ。當時同地方に墮胎の惡風あり。岩子具に視察し、自ら誓うて此惡俗を矯正せんとし、種々の方法を以て心力を盡せり。且つ常に村落の子女を集めて教育し、大に實功を奏す。同地方の諸人相傳へて感歸するに至れり。明治十三年、縣令山吉盛典より、十五年に三島通庸より、十八年に赤司欽一より、十九年に折田平内より、いつれも賞與せらる。二十年に福島に轉し、長樂寺側の小屋に住す。これより同地方の窮民孤兒等を救濟せんとし、數々東京に上り、曾て知遇を受けたる警視總監三島通庸を往問して相謀り、二十二年十二月福島救育所を開設す。二十四年二月九日福島縣選出代議士山口千代作等に依り、婦女慈善記章の制に關し、衆議院に請願し、國家風教の維持は、婦女の慈善事業に由ることを縷說せり。二十四年三月東京養育院の幼童世話掛長となり、六月自ら發明したる飴糖製の菓子を皇后陛下に傳献し、嘉納の光榮を蒙り、尋いて御所に召され御物を下賜せらる、八月二十七日權典侍柳原愛子權掌侍稅所敦子に謁し、縮緬等を贈らる。同年十二月その主唱により喜多方に產婆研究所開設せられ、二十六年又その主唱により福島に育兒院開設せられ尋いて濟生病院開設せらる。宮中の女官等皆贊助し、金品を贈る。尋いて福島に於いて出獄人保護のことに心力を盡す。二十七年戰役に方り甘藷水飴を製し、陸軍衞戍病院赤十字社病院に寄附し、傷病兵の救護の一助とす。同年宮内大臣土方久光夫人龜子等相謀り瓜生會を組織し、岩子の事業を贊助す。二十九年五月十一日賞勳局より藍綬褒章を賜はる。我國の女子にして此褒章を受けたる者岩子を以て始めとす。三十年四月十九日福島に於いて病沒す。壽六十九、親族等長樂寺に於て葬儀を行ひ、耶麻郡熱鹽村示現寺に瘞む。後三十二年六月東京に於いて同志相謀り瓜生會開會式を舉行し、遺業の發展をなす。後四恩會と合し四恩瓜生會と云ふ。三十三年三月同志相謀り岩子の銅像を鑄造することゝなり、遂に淺草公園に建設せらる。(瓜生岩子)

イホ　五百　一九〇五 二五六七　[眞宗]肥前高德寺の女なり。五百子、姓は奧村氏、肥前唐津の人なり。父名は了寬、二條左大臣藤原治孝の三男なる實齊の子にして唐津高德寺第十二世な

り、母名は淺子、小笠原藩士上田圓大夫の長女なり。一男二女あり五百子はその次女なり。弘化二年五月三日に生る。五六歲より三味線を習ひ、十三歲より裁縫割烹の事を習ふ。鎖港攘夷の論沸騰し、長州征伐の事起るに及び、父兄の命により屢々山口、太宰府、福岡、博多等に使す。二十二歲同宗福成寺大友法忍に嫁し、二十五歲の時法忍寂す。明治五年二十八歲唐津の阪田彦五郎に再嫁して共に國事に盡くし、家計貧困を極む。次いで平戸に移り、八年彦五郎の鄉里水戸に歸り、再び唐津に歸り魚屋町に古着商店を開き、且つ茶を販賣し、家計稍々富む。十九年十月福岡に移轉して商業を繼續せり。二十年九月國家に對する意見相合はざるより、彦五郎と相別れ、一男（勢一）二女（敬子、光子）の三子を率ゐて別宅に居住し、商業を營む。二十一年唐津海軍用地の拂下に就いて運動し、松浦橋架設に就いて盡力せり。二十三年國會開設せらるゝに際し、衆議員選擧問題に奔走し、二十五年議會解散總選擧の時も亦大に運動せり。二十七年鐵道布設、唐津灣開港の議起るや、その株主となりて運動する所あり、遂に二十九年二月開港外交貿易港に指定せらる。三十六年六月感ずる所あり兄圓心と共に京都に上り本願寺事務所に韓國布敎等の件三

奥村五百子

條を上申し、七月圓心布敎師に任ぜられて出發し、韓國光州に根據地を置く。三十年十月圓心の布敎困難の狀況を聞き、京城を經て光州に向ひ、途中圓心と邂逅して、同月東歸せり。三十一年四月再び渡韓して實業學校設立の計畫準備をなし、七月東歸す。九月又、渡韓し、同月校舍の上棟式を行ふ。然れども幾もなく韓民の妨害に遭ひ、且つ疾に罹り、その經營を後任者に委し、十月唐津に歸る。二十二年七月東京に上り本願寺新法主より慰勞の宴を下さる、又、東宮妃殿下に拜謁す。八月唐津に歸り疾を養ふ。九月妃殿下より慰問を賜はり十月再び上京す。同月南淸視察の爲め渡航のことに決し、十二月唐津に歸り、三十三年一月出發し、門司港より上海に着し、福州に入り廈門に渡りて上海に回る。又、蘇州、杭州より南京に入る。偶々匪徒の蜂起して甚だ猖獗なるに會し、滯留五日にして上海に回る。歸途朝鮮に寄航し、京城を經て六月光州に着し、滯在一ヶ月、木浦より釜山に航し、軍艦宮古に便乘を許されて東歸す。同月佐世保に着し、唐津に歸る。七月上京して公爵近衞篤麿に面し、且つ本願寺に報告せり。同月、京城視察を名として北淸軍慰問の途に上り、十月仁川にて本願寺慰問使の一行に加はる。北京に到りて皇帝に拜謁し、十一月仁川より一行と別れ、仁川にて軍人遺族救護の必要に就きて演說をなし、釜山を經て歸る。三十四年一月上京して小松宮、閑院宮等に拜謁し、軍人遺族救護のことを言上し、近衞公爵小笠原子爵等に會見して大に謀り、二月愛國婦人會創立の議成り、三月公爵夫人岩倉久子を會長に推し、四月始めて地方遊說の途に上る。六月陸軍少佐佐藤正、會務

に任じ、七月内務大臣内海忠勝より各府縣知事の東京に在るを機として之を華族會館に招待して擴張の事を懇談す。十月趣意書を發表して、第一回評議員會を偕行社に開き、同月偕行社にて遊說報告會を開く。三十五年三月雜誌愛國婦人を發刊し、同月偕行社にて第一回大會を開く。三十六年一月基本金三十餘萬圓に上り、三月閑院宮載仁親王妃智惠子殿下を總裁に戴き、同年末には會員四萬餘人に上り、後、七十萬人に達す。三十七年二月日露の戰端開かれ、三十八年六月慰問追弔を兼ねて滿韓を巡回し、十月歸京、十一月偕行社に報告會を開く。同年牛ヶ淵公園帝育會全部の建物を購入して、本部となす。三十九年十二月退隱して唐津に宿痾を養ひ、四十年一月京都大學病院に入り、二月七日歿す。壽六十三。(奥村五百子詳傳、奥村五百子言行錄)

インカウ 胤康 (一五二七) [臨濟宗]日向慈眼寺の僧なり。胤康、一名淨康、又彭康、晚に胤康と改む、姓は北條氏、武藏四ッ谷の人と云ふ、出家して日向臼杵郡岨岐村慈眼寺に住し、禪機と兵機とを幷せ備へ、且つ經綸の才あり、膽略ありて事に處するに明決なり。文久二年春、力を王事に致さんとして西國を周旋し、將に京都に上らんとせしとき廣瀨友之允より諸藩の形勢を聞き、翻然身を國に致さんとし、同志を募る。その事激烈に渉り、延岡藩の嫌疑を受けて捕縛せられ、慶應元年遂に京都町奉行に護送せられ、三年四月牢中に病寂す。壽缺く。著作、縮武新書あり。(維新史料)

インゲン 印玄 (一九三八―二〇〇六) [眞言宗]山城仁和寺尊壽院の僧なり。印玄、字は少輔、文妙上人と號し、又、金剛佛子と稱す。鄉貫詳ならず。一說に仁和寺承禪の息と云ふ。仁和寺承禪の弟子にして、禪助の第十五の付法、性融の重受の弟子なり。法印に敍せらる。善く佛像を書き、延慶二年七月金剛童子の像同三年六月馬鳴菩薩像を書く。隱遁して北長尾の法住菴に住す。貞和二年八月五日寂す。壽六十九。著作、傳法灌頂作法傳受記一卷あり。(尊壽傳記、仁和寺諸院家記、諸宗章疏錄、本朝畫史、大日本料、古書備考)[再錄]

イヨウハ 鷹灞 (二二〇四) [臨濟宗]京都建仁寺第二百七十九世なり。鷹灞、字は驢雪、鄉貫詳ならず、幼にして建仁寺洞春菴に入り東林如春に就いて剃染受具し、遂にその法を嗣ぐ。越前寶應菴に住し、領主日下景紀の崇敬を受くること厚し。後、退いて建仁寺洞春菴に移り、繼天壽戩等と交遊す天文五年建仁寺第二百七十九世に住し、十年八月再び住し、十一年三び住す。天文十三年正月洞春菴に在り寂年及び壽缺く。著作、驢雪詩集一卷あり。

ウの部

ウサン 有三 (二一七二―二二四三) [時宗]越前西方寺の僧なり。有三、元と其阿と號す。不外の弟子なり。永祿六年九月越前岩本成願寺に入る　和歌を善くし又佛書を善くす。天正十一年四月五日敦賀西方寺に寂す。壽七十二。(遊行歷代譜、古書備考)

ウヘダセウベン 上田照遍　セウベン照遍を見よ。

ウンシウ 雲岫　エイシュン永俊を見よ。

ウンシヤウ 雲章　イッケイ一慶を見よ。

ウンセウ　雲照　二四八七 二五六九（眞言宗）山城仁和寺第三十三世なり。雲照、俗姓は渡部氏、出雲神門郡東園村の人なり。文政十年三月二十日に生る。天保七年二月十歳にして慈雲飲光に師事し、同年九月剃髮染衣す。十三年五月松江千手院にて四度加行を修し、弘化元年八月高野山に登り、實賢に就いて傳法灌頂壇儀印契を受く。二年二月阿遮羅明王の秘法を始めて三千個座を滿ず。二十一歳出雲に於て實賢より理趣釋經の講傳を受くること兩度、同國潮郷普賢院の後董となる。翌年再び高野山に登り、金剛峯寺樂徒となり、良基に華嚴を學び、實賢に密敎を受け、高堅に天台を習ひ、曇觀に雲傳神道を承け、眞別所隆鎭に秘藏記を受け、兼ねて通受羯磨に依りて菩薩戒及び沙彌の十戒を稟け、並びに有部律の講說を聽く。二十三歳、智光に侍して備前に到り、智光に敎相を學び、復、高野山に回り、隆鎭より重ねて秘藏記を受け、次いで同山德嚴院に籠りて求聞持法を修す。同年八月播磨明石願成院にて靈雄に大日經を學ひ、十一月攝津に往き、高堅に天台學を稟く。嘉永三年二月、更に高野山に回りて、智光に大日經を學び、その夏阿波撫養港に到り、隆遷に大日經住心品の講說を聽き、秋、攝津に到りて天台を修め、冬、高野山奥院に籠りて求聞持法を修す。四年春眞別所隆鎭に安流の印可並びに大日經奥疏を傳受し、同年出雲岩屋寺に求聞持堂を建立し、且つ即身成佛義を講ず。六年京都に往き、淸和院隆賢に唯識を學ぶ。安政元年比叡山に登りて大寶に天台敎及び梵網經を學び、二年春河内高井田長榮寺端堂より十善戒、八齋戒、沙彌十戒を受く、五年高野山奥院にて求聞持法及び八千枚護摩供を修すること兩度、萬延元年八月具足戒を受け、尋いで京都に往き、三宮寺覺明に律部を學ぶ文久元年出雲普賢院に八千枚護摩供を修し、二年但馬比曾寺に安居して、秘藏寶鑰を講じ、且つ授戒會を行ふ。三年眞別所榮嚴に就いて小野諸流の源底を傳へ、並びに密宗所學の有部律を研究し、後、益々事敎二相の奥義を究む。慶應二年大和柴水山吉祥院毘沙門堂にて、三密瑜伽の護摩供を修すること三十個座、傍ら門人の爲に宗部を講ず。明治維新の際廢佛毀釋の風潮に會して、東西に奔走し、新古合同一宗畫一の宗務に盡し、又、宮中後七日御修法の再興に努め、且つ久邇宮朝彥親王を奉じて、東西京に十善會を興し、明治十七年一宗畫一の制度破るゝと同時に東京に移り、十善會を再興し、夫人正法會を設立して機關雜誌を發刊す。又觀樹居士三浦梧樓の外護を得て目白臺に僧園を開き、僧侶を敎養す。三十年頃より神儒佛三道一貫の德敎主義を唱道して地方を巡化す、仁和寺に住したるも幾もなく東京に回る、日露戰爭の終るや、滿韓の地を巡錫す。四十年山陰山陽を經て九州を巡化し、翌年更に東北及び北海道より樺太に巡錫す。明治四十二年四月十三日寂

釋雲照師

す。壽八十三、法臘四十八、著作、末法開蒙記、密宗安心義章各二卷、大日本國教論、緇門正儀、七衆戒義諺詮、四威儀小作法、金剛般若經講解、佛教大意、予が信仰、いろは義解國民教育之方針、佛教通論、佛數大原理、十善業道經講義、教育の本義、佛數通論各一卷あり。（釋雲照大和上略傳）

ウンセウ　雲照　センリヤウ潜亮を見よ。

エの部

エイイン　永因（二一八一）〔臨濟宗〕京都建仁寺如是院の僧なり。永因字は三益、郷貫詳ならず。夙に建仁寺如是院に入りて雪嶺永瑾に師事し、後建仁寺第一座に補せらる。尋いで如是院に住し、大に詩名あり。冬和、月舟、常菴、等と交游す。永正の末、如是院にありて寂す。壽缺く。著作、三益艶簡、三益詩稿なり。

エイイヨ　永璵（二〇二五）〔臨濟宗〕京都南禪寺第二十三代なり。永璵、字は東陵、元、四明の人なり。明州天童山雲外雲岫に隨ひて曹洞の宗旨を嗣ぎ、明州天寧寺に出世す。曾て東遊の志あり、我觀應二年博多に着し、聖福寺に入り、七月京都に上り天龍寺夢窓疎石を問うて西芳寺に住す。偶々無極志玄天龍寺を退くに方り、繼いで同寺第三代の席を補す後詔を奉じて南禪寺に遷る。更に鎌倉に下り建長圓覺に歴住す、貞治四年五月六日寂す。壽缺く。南禪寺西雲菴に塔す。勅して妙應光國慧海慈濟禪師の號を謚す。（禪林僧傳、南禪寺住持籍、延寶傳燈錄、本朝高僧傳）

エイオン　永恩（二一七一／二二三四）〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百八十七代なり。永恩、字は春澤、別に泰安、枯木、萍郷、天津の號あり。俗姓は武田氏、若狹の人なり。父は若狹領主武田元光と云ふ。永正八年に生る。幼にして建仁寺如是院九峯以成に就いて得度し、遂に以成の法を嗣ぎて如是院に住す。天文二十一年三月六日建仁寺に住し、元龜二年四月廿四日南禪寺住持の帖を賜はる。平生策彥周良と道交を厚くす。天正二年八月十六日如是院に寂す。壽六十四。著作、春澤錄、枯木集あり。〔再錄〕

エイシユン　永俊（二二五三）〔臨濟宗〕京都相國寺善應院の開山なり。永俊字は雲岫、初め尾張慈雲寺に住し、次で相國寺に再住す。文祿二年七月廿二日寂。壽缺く。（萬山編年精要）

エイシヨウ　榮承　ジユンダウ順道を見よ。

エイチヨウ　英澄　リヤウキ良基を見よ。

エイホ　英甫　エイユウ永雄を見よ。

エイユウ　永雄（二二六〇）〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百八十九代なり。永雄、字は英甫、別に武牢、又は小溪といふ。俗姓は武田氏、若狹の人、武田信重の子なり。幼にして出家し、建仁寺文溪永忠に從ひて句讀を受け、遊方の後、永忠に嗣法す。初め建仁寺如是院に住し、天正十四年十一月建仁寺を董し、爾來慶長五年に至るまで十八住を重ぬ。文祿三年九月南禪寺に陞住す。鹿苑院西笑承兌と道交厚し、又、狂歌を善くし後世傳唱す。「祖父祖母ひうばひ祖父　と〳〵く死なずに居ては何ぞくはせん」「貧乏の神も出雲へゆくならば十月ごとに我は福人」「虱ほど世をへつらはぬものはなしむさき

人にはことに近づく」など、その風調を見るべし。寂年及び壽缺く。著作、語錄一卷。鴉臭集あり。（建仁寺住持籍、鴉臭集、倒痾集、古今夷曲集、後選夷曲集、五山文學小史）

エキシ　益之　シフシン集箴を見よ。

エツガン　悅岩　トウショ東悆を見よ。

エツサン　悅山　ダウソウ道宗を見よ。

エフセウ　曄嘯　二四九五—二五六二　〔黄檗宗〕山城萬福寺第四十一代なり。曄嘯、字は虎山、後、虎林と改む。別に巽枘と號す。姓は吉井氏、肥前小城郡多久の人なり。天保六年三月五日に生る。十餘歳納町圓成寺修驗者に養はれ、次いで福聚寺雅山に就いて得度す。安政五年雅山寂して春江その席を補す。六年宇治黄檗山に登りて瑞雲悟芳に參じ萬延元年三月三壇戒を受く。文久元年豐前小倉福聚寺萬丈悟光に參じ、會々長州征伐の變あり、去りて豐後宇佐永福寺文常に參じ、遂にその印可を受く。明治六年二月教導職試補に任ぜらる。是より先き黄檗山朱印地を廢せらるゝに際し、同山役員となりその維持に力を致し、八年五月京都府廳より塔頭瑞光院の住職を命ぜらる。九年十二月京都府廳より黄檗宗寺院寶物什器取締を命ぜられ、十年七月内務省より中講義に補せらる。十一年黄檗山幹事兼化主助教講究係となり、黄檗宗總黌を建て、又佛供講を起す。十二年四月權大講義に補せられ十四年四月大講義に補せらる。十五年黄檗山授戒會を修し、次いで役員の職を辭す。十九年十二月權少教正に補し、二十一年四月瑞光院を辭す、同年六月肥前諫早性空寺に住して、本堂を再建す。二十四年六月黄檗宗務總裁に任ぜられ、同年九月特に開堂位を許さる。二十六年二月宗務總裁の職を辭し同年六月長崎崇福寺を兼務し、以來二年にして大修繕の工事を完成す。二十七年二月中教正に補す。三十一年四月崇福寺の兼務を辭し、三十三年六月黄檗宗管長に任ぜられて大教正に補し、三十三年六月性空寺住職を免ぜられて萬福寺住職となる。同年十月黄檗山に登り、以來學校を興し、伽藍保存講を組織す。三十五年十月十五日寂す。壽六十八。遺偈に曰はく「四大非吾身、三界非我處、拾得一文錢、悠々入酒肆、喝」（虎林禪師略傳）

吉井虎林師

オの部

オクムライホコ　奥村五百子　イホ五百を見よ。

オダトクノウ　織田得能　トクノウ得能を見よ。

オホヌマクワンデン　大沼寬田　クワンデン寬田を見よ。

カの部

カイオウ　海雄　二五二六　〔眞言宗〕紀伊高野山寶生院の門主なり。海雄、俗姓は島田氏、阿波名西郡高原村の人なり。幼より同國板野郡堀江村八葉山神宮寺東林院に入りて敎雄の弟子となる。文政三年二月金剛峰寺座主たりし龍遍より傳法灌頂を受け、東林院二十世の住持となり。在留十八年、後、寶性院門主となり、孝明天皇の詔を奉じて夷賊降伏の祈禱をなすこと數度、京都清水寺成就院月照、正智院良基、及び增福院常賢と交りて王事に盡くし、安政五年二月月照及び良基等と共に正智院に密談を凝しゝことあり。六年十二月遂に幕府の爲めに良基常賢の二人と共に隱居せしめらる。七年蓮金院に退隱し、慶應二年六月九日寂す。壽缺く。著作、詩集あり。

カイゲン　海眼　ジヤウクハウ淨光を見よ、

カイジヤウ　戒靜　ニチキ日鎧を見よ、

カイジヤウ　誡誠　二三九四 二四六〇　〔淨土宗〕但馬瑞泰寺の僧なり、誡誠、字は豪吉と云ひ、謙蓮社遊譽儒阿と號す。別に佛定と號す。俗姓山田氏、丹後熊野郡圓頓村の人なり。享保十九年九月生る。寬延二年十六歲但馬城崎郡豐岡來迎寺に入り、戒譽智典を拜して得度す。寶曆五年二十一歲江戶に出遊し、增上寺南溪の貞現（後に知恩院に住す）に從ふ。十年十一月妙譽定月を拜して宗脉戒脉を受け、尋いで惠照院戒師を拜して菩薩戒を重授す。十一年但馬に歸省して母の喪を修し、後再び江戶に出遊し、圓宜（後に增上寺に住す）に從て性相の學を究む。且つ大實、德門、宜達及び曹洞宗の面山等を問ひて學問修行す。明和四年豐岡の瑞泰寺に住す。安永七年四十五歲寺職を辭して京都に上り、知恩院貞現の意を受けて智惠光院に住す。八年貞現を拜して一宗の奧義を傳承す。寬政十二年十一月病あり、二十一日弟子を召し示して曰はく、朝な夕なこゝろにかけし紫の雲の迎は今となりたり、と。二十三日寂す。壽六十七。二十六日智惠光院の墓地に葬る。著作古鏡說、同餘說、隱者弘法論、驚鐘錄、曉痴談、覺睡草、日課念佛投宿編、遺訓、日課勸導記等あり。弟子大粲、隆圓の二人行業記及び法語詩歌を編成刊行す。（佛定和尙行業記）

カウゲン　孝源（二三四八）〔眞言宗〕紀伊高野山遍明院の僧なり。孝源、鄕貫詳ならず。寬隆法親王の導師なり。天和元祿の頃の人、畫を能くし、三千佛像を畫く。年壽共に缺く。（古畫備考）

カウシ　翔之　ヱホウ惠鳳を見よ、

カウシユン　江春　ズイテウ瑞超を見よ、

カウチヤウ　香頂　二四九一 二五六九　〔眞宗〕豐後妙正寺の僧なり。香頂、幼字は實丸、長じて大識と稱す。八洲又は蓮舶の號あり。父は了堅といひ、母は峯子といふ。天保二年八月四日豐後大分郡戶次妙正寺に生る。八歲にして句讀を帆足杏雨に受け、十歲京都本願寺に得度す。十一歲臼杵藩黌に學び、十二歲後藤巳士に學ぶ。十四歲帆足萬里の門に學び、十五歲廣瀨濬窓の塾に入る。在學六年業大に進み、石井瀧二、石井雪二と共に宜園の三才子と稱せらる。二十歲卒業し、二十二歲京都に上りて智積院龍謙に俱舍論を學び、これより法和天台の學を研究し、又、禪を修す。二十六歲高倉侍從永胤の女郁子を娶る、以來數年の間、豐前鷲海東菴に蘭學を學び、又、華嚴

眞言宗の學を修め、宗乘を大阪南德寺龍源に受く。慶應二年十住心論を京都の高倉學寮に講じ、明治元年三月擬講となる。二年七月本山總會所の說敎を命ぜられ、八月京都府令眞宗を一向宗と改稱せしむ。時に府廳に赴きてその非を辨じ、又、神佛判然の令に對しても亦その不可を論ぜり。三年三月蝦夷開拓の命あるや、越後に開拓資金を募集し、四年排佛の勢盛んなるに際し、泰然として寺に住りて往生要集を講了す。五年三月敎部省を置き、三條の敎則を設けらるや、その下問に應じ三條敎則釋義以下數書を製し、同年大隈重信に說きて眞宗宗名の恢復を計り、遂にその公布を得。この時に方り、耶蘇敎各地に會堂を興して漸く蔓衍せんとす。香頂慨然として護法の策を講じ、印度支那日本の三國同盟を結ぶに在りとし、先づ支那に遊びてその緖を開かんとす。偶々敎部省九州の神官僧侶の學力を試驗せんとし、香頂を招く。依つて六年三月長崎に往きて大音寺に試驗し、又中敎院の幹事長となり、兼ねて淸語を學ぶ。閏六月支那行の印鑑を乞ひ、長崎を發して、上海に着し、天津を經て北京に入る。北京の諸大寺を訪ひて龍泉寺に到り、本然源具に面し、淸慈庵に寓して、淸語を習ふ。十二月書を帝師雍和宮洞濶爾胡圖克圖に呈して、興敎の策を問ふ。七年一月語學略ぼ了るを以て支那布敎の端を開かんとして吾國各宗の大意を撰し、且つ護法策十三條を錄して本然に示す。五月北京を發して五臺山に登り、靑黃二派の統領たる江曲阜に面し、喇嘛の禮遇を受くること厚し。五臺山に登る詩數首あり、一首に曰はく、淸晨騎馬上東臺、昨夜有雲猶未開、老虎數聲山竅震、日從日本紫邊來、と。六月五臺山を下りて北京に歸り、七月北京を辭して天津に到りて病發り、八月長崎に歸る。八年六月本山編集局監督となり、九年五月外務卿寺島宗則を訪ひて支那開敎の事を決し、七月再び長崎を發して上海に着し、假別院を開きて、八月開敎式を擧ぐ。九月天台山に遊び、十一月病發る。十年一月歸國して病を養ふ。十六年五月病稍癒えたるを以て京都に上り、本山上等敎校敎授となり、十八年二月淺草別院在勤となり、十九年十一月東京石川島監獄敎誨師となり、爾來各地の監獄に敎誨を施す。二十二年宮內省文學御用掛となり、明年之を辭し、同年關八州敎學策進委員長となりて、以來各地を巡敎す。三十二年十一月舊里に歸隱し、三十八年三月十二日寂す。壽七十五。辭世の頌に曰はく願海無際、信山不動、佛心所徹、特憑恩寵、此心宏大、三千不重、此道公明、十萬不壅、久在纏縛、群惑坌湧、今日超證、萬福大總、と。著作。八洲日歷百六十四卷、蓮舶法語六十四卷、敎行信證講錄二十五冊、蓮舶詩歷十卷、選擇集講錄五冊、喇嘛敎沿革三冊、北京紀遊三卷、眞宗敎旨、眞宗資治、北京護法論各一卷、步船抄講錄、將來方針、萬雷霹靂、晚年私言、三經宗體、御文第一通講義、眞言宗大意、十七憲法講義、大學佛敎解各一冊。此他、念佛圓通、陽陰資辨、日本刀並に往生要集、安樂集、及び眞言部、三論、起信、法相等の講錄百餘卷あり。（小栗栖香頂略傳）

カウホ 香甫　ケイシフ慶集を見よ、

ガウヱン 豪圓　……二一七一　〔天台宗〕伯耆大山寺の僧なり。豪圓、初名を圓知といふ。俗姓は中津氏、伯耆西伯郡宇田川村大字福岡の人なりと云ふ。幼にして同郡大山村大山寺に入

りて僧となり、後、近江比叡山に入り、東塔西谷地福院に住し、元祿四年備前金山寺に移る。領主宇喜多直家の歸依を受けて金山寺再營の議を決し、天正二年正月に起工し、三年十一月に至りて成る。時に領内社寺の總管となり、五千九百石を給せられ、領内の社寺を復興せしめらる。是より先比叡山は織田信長の攻掠に逢ひて全山灰燼に歸せしを以つて、又、命を受けて再建の事に預る。次いで叡山習禪院に住して金山寺を兼攝せり。天正十年羽柴秀吉中國を經營するに方り、秀吉に謁して軍役の免除と禁制の下賜とを請へり。又、浮田直家の備作を治するに方り、國中寺社の所領を沒收せしかば、秀吉に請ひてこれを復せんとし、十六年八月秀吉より寄進狀を受く。文祿三年(一說永祿四年)勅を受けて大仙寺を兼領す。四年十二月秀吉より三千石を金山寺に寄進せられ。國中の寺社に配當せしめらる。慶長五年關ケ原役後、宇喜多家滅亡するに及び、金山寺の所領も沒收せられしかば、更に德川家康に請ひ、三千石を寄せらる。六年五月大山寺衆徒と共に同寺寺領の朱印を請ひ、八年金山寺を法弟圓忠に讓る。十年十一月權僧正に任せられ、十五年四月大山寺領朱印三千石を賜はる。十六年六月五日寂す。(金山寺記、圓慶覺書、大山年中行事、中津氏家傳)

カクセン 覺千 (二四一六—二四六六) (天台宗)武藏東叡山修禪院第二十三世なり。覺千、姓は土屋氏、江戶下谷の人なり。明和八年十二月眞如院覺印に從ひて薙髮し、淺草寺別當代善王院覺邦の弟子となる。安永二年十月覺邦東叡山松林院を主るに隨ひて移る。天明二年九月比叡山玉泉院を主り、三年三月山門に登り妙音院に寓す。蓋し玉泉罹災の故なり。四年法華會の竪者となる。寛政五年玉泉院を造り、七年三月執行代となりて大僧都に任ず。九年五月病に依りて執行代を辭し、十一年三月東叡山修禪院に轉住す。是歲法華會の講師となり、十二年五月使价の職を司り、七月貫主に代りて日光山に登る。享和元年九月開山堂灌頂助教授となる。文化三年五月二十六日寂す。壽五十一。津梁院の西に葬る。著作、金剛集二十卷あり。(東台子院譜略)

カクドウ 覺同 (二三一八—二四〇〇) (天台宗)武藏東叡山寒松院の第七世なり。覺同、鄕貫詳ならず。寶永七年二月等覺院より遷りて寒松院を去り、尋いて大僧都に任ず。享保元年十一月院を辭して京都に上り、廬を嵯峨二尊院の傍に結びて圓悟院と號す。享保十二年山家灌頂を比叡山麓生源寺に修す。蓋しこの灌頂山門その傳を失すること久しく、唯、播磨書寫山の徒之を傳ふるのみ、覺同夙に興廢の志あり、之を受けて再び行ふに至れるなり。その外中堂の佛名會、西塔の勸學會、横川の如法經會、山王の舍利會皆再興の任に當ると云ふ。又、密教を奉ずること厚し。又、法華五千部を誦して大明大王の爲めに祠を薦め、塔を山城山科毘沙門堂の側に建つ。元文五年十一月五日嵯峨の草庵に寂す。壽八十三。遺言に依り山科大明大王塔下に葬る。(東台子院譜略)

カクニヨ 覺如 リヤウキ良基を見よ、

カクワ 覺和 (二四九五—) (眞言宗)高野山成就院の開基なり。覺和は日圓房と號す。鄕貫詳ならず。惠深の上足にして野山八傑の一なり。特に音聲に善し。正和二年後宇多法皇、

野山に幸せられしとき、覺和、弘法大師の影前にて諷經を爲し、辭音淸亮、聞く者感嘆す。又、畫を能くし、嘗て辨財天の尊影を寫す。その筆細妙なりと云ふ。年壽共に缺く。（本朝高僧傳、高野山通念集、古畫備考）

カクワウヰン　覺王院　ギクワン義觀を見よ。

カジヤウ　呵成　二五二四─二五六九〔淨土宗〕京都八幡正法寺の僧なり。呵成、姓は吉岡氏、京都の人なり。淨土宗學林を卒業し、次いで同學林助教授となる。京都八幡正法寺住職となり。明治二十四年雜誌佛教新運動を發刊し、後之を佛教公論と改題し、三十二年同志相謀り、宗粹雜誌を經營す。又別に布教會を設立して、傳道師を養成す。淨土宗第六定期宗會議長に推され、三十七年四月、第五教區教務所長となり、始終關西の方面に在りて盡瘁せり。三十八年十月十日正法寺に寂す。壽四十二。同月管長より權僧正を贈らる。

カツミネダイテツ　勝峯大徹　ダウリン道林を見よ

カナサナククハウククワン　金鎻廣貫　クハウクワン廣貫を見よ。

カンイウ　鑑有（……）〔臨濟宗〕京都某寺の禪僧なり。鑑有、字は機先と云ふ。明に入りて詩名高し。瀟陽八景の詩句に曰はく、豈料長爲南竄客、朝々相對獨爲翁、と。讁せられて漠南に謫居す。沐氏其詩を錄す。胡粹中機先を挽する詩句に曰はく、日出扶桑極東處、雲歸滇海最西頭、と。滇に寂す。（異國使僧小傳、明詩綜、列朝詩集、）

カンシツ　閑室　ゲンキツ元佶を見よ、

カンチヤウラウ　韓長老　セイカン淸韓を見よ、

キの部

キウエン　九淵　リヨウチン龍琛を見よ、

キウクワ　九禾　ケイシユウ景秀を見よ、

キウテイ　九鼎　キヂユウ器重を見よ。

ギエン　義演　二二一八─二二八六〔眞言宗〕山城醍醐寺第七十九世座主なり。義演は二條晴良の息子にして、母は伏見殿二品親王の女なり。將軍義昭の猶子となる。永祿元年八月十日二條押小路亭に生る。七年莊嚴院義堯の附弟となる。同年二月義堯寂し、十二年六月理性院堯助に就いて入室し、醍醐寺光臺院に移る。元龜二年四月十四歲、報恩院雅嚴に就いて得度し、同日大僧都に任ぜらる。天正二年十一月金剛界次第を深應に傳受し、胎藏界次第を雅嚴に稟承す。同年十二月薄次第を受く。三年醍醐寺を出でゝ金剛輪院を再興す。四年八月大傳法院座主に補し、次いで醍醐寺座主に任ず、七年十二月大僧正に任ず。十二年十一月雅嚴の許可を受く。十三年七月准三宮の宣下を蒙る。十四年十二月金剛輪院にて傳法灌頂を行ひ、十五年二重次第を傳受す。十六年三月仙洞にて佛眼大法を修す。十七年十二月秘林傳受を了り。十九年二月雅嚴より附法狀を受く。十九年四月山城新大佛殿地鎭法を修し、二十年六月東寺講堂にて仁王經大法を修し、豐臣秀吉高麗進發の祈禱を爲す。同年十一月金剛輪院の兩殿を建立す。文祿三年七月東寺長者に補し、法務並に護持宣下あり。七月東寺塔供養導師を勤む。九月大佛妙法院門跡にて千僧齋會の導師となる。慶

長元年七月大地震あり大佛破壊して開眼供養を行ふ能はざるに至れり。二年二月傳法灌頂を行ひ、三月金剛峯寺大塔供養導師を勤む。七月善光寺如來を大佛殿に遷座す。十一月秀吉入寺。三年五月山上寺家新屋敷に新櫻馬場を經て、その左右に乘西院、普賢院、阿彌陀院、金蓮院、西往院を建つ。八月大佛開眼供養を修し、九月豐國明神社頭の地鎮を行ひ、十月金剛輪院の新造悉く成る。同月日野、勸修寺、北野、東笠取の四卿より千六百餘石を寄附せらる。五年三月金堂の上棟式を舉げ、七月竪義を再興す。九年三月大坂城にて大般若轉讀を修し、十年正月櫻木百本を移植す。十一年九月嵯峨法輪寺堂供養導師となり、同月東寺の金堂を供養す。十三年十二月五大堂の地鎮を行ふ。元和二年二月清涼殿にて普賢延命法を勤仕し、將軍家康の病を祈る。八年十二月後七日御修法再興せられて之を勤む。寛永三年閏四月二十一日寂す。壽六十九。著作、五八代記一卷、醍醐新要錄若干卷、等極めて多し。（五八代記、東寺長者雜事記、義演准后日記、東寺長者補任、續史愚抄、華頂要略）

ギカイ　義海　二四九六　二五七一　〔眞言宗〕大和長谷寺第六十一代なり。義海姓は高城氏、越前今立郡横江村岡田仁兵衛の長男なり。天保七年四月八日に生る。安政元年十八歲下總松戸町寶光院嘉海に就いて染衣し、四年三月大和長谷寺に入衆して密學を修む。文久二年十一月同國東葛飾郡根本村吉祥寺に住し、元治元年六月寶光院の席を董す。二年十一月小金町大勝院に轉じ、明治七年教導事務係となり、九年七月同國野田町西光院に遷り、十一年中教院講究課に累遷す。二十二年二月東京小石川大塚坂下藥王院に移り。同年大僧都に累進す。三十一年九月音羽護國寺に轉住し、三十三年九月豐山派宗務長となり。十月管長事務取扱となる。同年十一月大和寶生寺を兼務し、三十七年八月豐山中學林長となり、三十九年一月大學林主管となる。四十一年六月深川龜住町法乘院を兼攝し、四十四年三月大司教大僧正に累遷し、豐山派管長に選ばれず、長谷寺化主に就職す。同年五月十一日寂す。壽七十六。

キクイン　菊隱　ヱサウ惠叢を見よ。

キクワン　義觀　二四八三　二五二九　〔天台宗〕武藏寛永寺凌雲院の僧なり。義觀初め堯運と云ふ、覺王院と號す。幼名劇藏、姓は金子氏、武藏國新座郡根岸村の人。文政六年十月晦日生る。少にして穎敏、長ずるに及び果斷に富み、居常嚴格にして自尊の風あり。天保三年二月東叡山に入り、大慈院堯覺に就いて得度し、堯運と號す。同十二年眞如院義嚴の弟子となり、今の名に改む。弘化三年十二月比叡山千光院の住となりて未だ赴かず、嘉永元年義嚴凌雲院に轉ずるに及び、その席を繼ぐ。同六年比叡山に登り法華會の竪者となり、累進して大僧都に至る。慶應三年三月、輪王寺宮慈性法親王に擧げられて執當職に任じ、院家に補し、特に覺王院の號を賜はる。四年正月徳川氏の罪を朝廷に得るや、密に西城に招かれ、衆議に參與すること數回、徳川氏陳謝を輪王寺宮公現法親王（後能久親王）に請ふ。親王初め聽かず、後慶喜の東叡山大慈院に閉居するに及び、屢〻義觀を召し陳謝の義を親王に懇請せんことを囑す。義觀依つて親王に懇請する所あり。同年二月親王に扈從して江戸を發して駿府に至り、大總督有栖川宮熾仁親王に謁し、

法親王を輔けて大に辯論し、且つ正親町、西四辻及び西郷吉之助、林玖十郎等の參謀と會談台議したれど、訴願遂に水泡に歸し、到底戰鬪の已むべからざるを覺り、憤然袖を拂ひて起つに至る。既にして法親王の命を奉じて先發江戶に歸り、慶喜に面して陳謝の顚末を告ぐ。是より先き西城引渡に際し、德川氏の寶器典籍等移されて山內の中堂にあり、旗下の士等之を擁護すと稱して亦山內に屯集し、號して彰義隊と云ふ。大總督府、德川氏に命じて之が解散を促したれど、隊士等之を聽かず。時に全山の威權皆義觀の手裏に在り、山岡鐵太郎上使として屢々義觀と論判したるが、義觀は頑として其說に從はず。同年四月慶喜公の東叡山を退き、水戶に赴くや、義觀は輪王寺宮の令旨を奉じ、諸藩主に檄文を發して、官軍に對し宣戰を諭告す。蓋し當時官軍と稱するもの眞に天皇の叡慮にあらず。薩長等の諸藩は幼冲の天皇を擁し、德川氏を滅して己れ之に代り、政權を握らんとするにあるを以て、國家を患ふる者君側の奸を除かざるを得ずとなす。義觀の如き此に見る所あり、乃ち隱然奥羽諸藩の重役等と相結んで謀略を通じたりと云ふ。五月十五日上野の戰鬪一日を經ずして敗れしも、若し夜間にまで繼續せられんには、事未だ容易に知るべからざるに至りしならんと云ふ。故に義觀の此決心たる必ずしも無謀にあらざりしを知るに足らん。時に中堂、法親王の宮殿及び眞如院兵燹に罹り、義觀は、法親王の所在を失し、單身逃れて會津に至る。法親王は五月二十五日品川灣より、榎本釜次郎（後ち武揚と改む）の率ゐる軍艦長鯨丸に投じて常陸平潟に上陸し、磐城平より會津を經て仙臺に至り。仙岳院に入る。義觀は六月六日遇然その潛行の途に會し、以後その一行に加はりて仙岳院に居る。六月七日會津にありて作る所と云ふ詩二首あり、曰はく、倦棄千乘入雲山、居連諦觀水潺湲、何知宿債餘償在、一闋人間行路難（其一）履仁輕命即仁人、重法遺身是法臣、今日風波世途險、就如六歲苦修辛（其二）と、當時白石城に立てられたる奥羽列藩の軍事局あり、之を公議府と云ふ。義觀、隱然相往來し、與つて力ありしが如く、更に法親王を奉じて函館に走らんとしたれど、榎本釜次郎の忠告に依りて果さず。九月二十日法親王の思召を以つて謹愼を命ぜられ、仙岳院の末寺に閉居す。是より先き同月十二日法親王は陳謝狀を白河總督四條隆謌に提出し、西上の途に就かせらる。此日義觀亦捕へられ、鎖乘東京に送致せられ西丸下糺問所の獄に投ぜられ、有司の詰責を受くるもの數回義觀泰然自若答へて曰はく、法親王をして此に至らしめたるは野衲一人の罪にして、宮は勿論其他の與り知らざる所なり、抑も初め薩長二藩の所爲を誤認したる結果、遂に大義名分を失したる姿となれども、毫も朝廷に對し異志あるとなしと。復云ふ所なし。官亦問はず。糺問所の獄中に在ると數月遂に病を發し、本鄕壹岐坂松平美作邸に移され、療養中、明治二年二月二十六日寂す。壽四十七、千住小塚原刑場の側に埋めらる三年二月二十八日東叡山慈眼堂の東側に改葬し、諡して寂靜心院と云ふ。明治十九年十二月天台座主覺寶特に權僧正を贈る。義觀は天台の教義に詳しきのみならず、又天下の形勢を揣摩し、辨論風發、議論卓拔、殆ど一世を睥睨し、當時に傑出せる僧なり。その獄中に病死と云ふも、或は毒害せられた

るものと云ふ。（覺王院義觀傳、彰義隊戰史）

キケイ　季瓊　シンズイ眞蘂を見よ、

ギケウ　義敬　二四七七 二五三三　〔天台宗〕越前大野平泉寺玄成院の住僧なり。義敬號は如如、姓は藤原氏、下野の人なり。父は佐野眞虎、文化十四年に生る。天保六年日光山に上り、九年始めて慈觀に戒を受け、同十二年東叡山邦範に就いて經律を研究す。居ること十三年、法印權大僧都に叙す。嘉永七年八月白山別當職となり、九月玄成院の住持となる。慶應三年職を辭して京に上り權僧正となり、紫衣を賜はる。十一月歸村して菩提林中に一菴を建て、無漏と號す。翌年三月福井松尾寺にて一夏經を講じ、明治二年越知山大谷寺に隱れ、四年妙永寺に病を養ひ、五年玄成院に歸り、六年一月二十三日寂す壽五十七。（蒿庵文集、如如僧正塔、越前人物志）

キコウ　季弘　ダイシユク大淑を見よ。

ギザン　義山　二四八四 二五七〇　〔眞宗〕備後勝願寺の住僧なり。義山、幼名は護法、別に龜水と號す。姓は足利氏、備後の人母は光圓寺了雲の長女、父は安藝大草村雍貞家の男了隨なり文政七年十二月三十日光圓寺に生る。三歲父寂し、後、播磨網干曇影、惠海、諦願に學び、嘉永二年光圓寺を出で、勝願寺に入る。六年二月養父甚教寂し、五月勝願寺に住す。元治元年春橋本德三郎に就いて、以心流の長刀鎗劍を練習す六年五月試補に補す。九月小田縣より中教院長を命ぜられ、尋いで西山教校の宗乘教師となり、十二年博練教校副監兼教授となり、十三年七月之を辭す。十四年大教校教授となり九月學庠教授となる。二十一年三月博練教校總監となり、二十四年九月法嗣學事係專勤となり、十月勸學職に累進す。二十八年十一月佛教大學校教授となり、三十一年五月同綜理となる、十二月之を辭す。三十三年佛教大學林教員となる。四十三年六月十六日寂す。壽八十七。著作、三帖和讃問答記三卷、三帖和讃俗問、眞宗辨義、私憂辨評論補各一卷、讀笑評破塵問對、三種深信對問、敎行信證摘解、眞宗安心三十題啓蒙、眞宗百題啓蒙各一册あり。（足利義山師略歷）

ギシユンバウ　義俊坊　ジユンダウ順道を見よ。

キセン　機先　カンイウ鑑有を見よ、

キセン　龜泉　シフシヨウ集證を見よ、

キタジヤクジユン　喜多寂順　ジヤクジユン寂順を見よ

キタバタケダウリユウ　北畠道龍　ダウリユウ道龍を見よ、

キヂウ　器重（二二〇六）〔臨濟宗〕京都建仁寺大中院の禪僧なり。器重、字は九鼎、別に錦菜を號す。鄉貫詳ならず。位、西堂に終り、諸山に出世せず。建仁寺大中院に住す。曾て攝津廣嚴寺に住したりしも、幾もなく又、建仁寺に歸り、常に江西龍派、九淵龍琛、慕哲龍攀と交はること深し。寂年及び壽缺く。著作、蘋齋集あり、今、傳はらず。

ギデン　宜田　二五六七 ……　〔臨濟宗〕京都南禪寺第三百三十代なり。宜田、字は舜應、石窓軒と號す。姓は松山氏、初め遠江濱名郡富塚村法林寺に住し、與山方廣寺專門道場の師家となる。明治二十三年三月南禪寺派管長に任ぜられ、二十九年三月辭任す。四十年二月十七日寂す。壽八十餘。

キハク　規伯　ゲンハウ玄方を見よ。

キンエイ 瑾英（二四八一―二五五七） 曹洞宗能登總持寺獨住第三世なり。瑾英、穆山と號し、別に可翁、無爲菴、有安老人の號あり。幼名萬吉と云ふ。俗姓は笹木氏、その先は陸中遠野郷の佐々木氏に出づ。父を長次郎と云ひ、母をなをと云ふ。後西有氏を冒す。陸奧三戸郡濱通湊村の人、文政四年十月二十三日に生る。初め外戚西村氏に養はれしも、その家に一子の生るゝに及び遂に出でて歸らず。天保四年六月九歳にして類家村長龍寺全龍に就いて得度し、翌五年全龍に隨ひて法光寺に遷り、十九歳全龍の退院するに及び、仙臺に赴き、松音寺悅音の下に掛錫し居ること三年、二十一歳江戸に到り駒込吉祥寺學寮に入る。時に學資の給すべきなく、牛込宗參寺曹隆庇護を受け、天保十三年二十二歳立身の盛事を行ふ。翌年八月曹隆の法嗣たる淺草本然寺泰禪の室に入りて嗣法し、牛込鳳林寺に住す。二十五歳加賀大乘寺の結制に會し、又、佛關、宗植、篋舟、雲齡等に參ず。其の秋江戸に歸り、吉祥寺愚禪に參ずること五年、二十九歳愚禪を請じて自坊に法輪を轉ぜしめ、三十歳鄕里に歸り、慈母の激勵に遇ひて、再び相摸海藏寺月潭の會下に投ず。一日楞嚴經の提唱を聞き、大に省悟する所あり、月潭之を許す。後、道元の六百回忌に際し永平寺に到り、奕堂に會し、遂に隨ひて上野龍海院に詣り居ること二夏、更に駿河如來寺に安居す。三十八歳相摸英潮院に住し、在院五年四十二歳牛込宗參寺に轉住す。越えて三月月潭病あり、代つて甲斐福昌寺に助化し、戒師となる。當時維新の事あり、乃ち護法用心集、山陰閑話等を著して世論を破す。明治四年桐生鳳仙寺に轉ず。五年三月總持寺奕堂の召に應じて上京し、坦山、琢宗の二師と共に教部省に出仕し、中講義に補せられ、尋いで大講義となり、總持寺東京出張所監院兼本山貫首代を命ぜらる。十月大教院能試驗者に任ぜられ、六年一月選ばれて大教院議員となり、法服廢止俗衣着用の議に參じて大に之を排斥す。天龍寺滴水、相國寺獨園の二師共に之に贊し、遂に院議を翻すを得たり。三月第八教區の本派寺院說教法調査巡廻を命ぜられ、並に神佛各派管長より宗務取糺の依囑を受く。四月權少教正に補せられ、兩本山代理を命ぜらる。九月北海道巡教の命を受け、翌年少教正となり、八年陸奧法光寺に轉じ、尋いで北海道に入る、時の北海道開拓使判官松本十郎深くその道風を慕ひ、一萬餘坪の地を給して一宇を建立す。今の中央寺是なり。六月中教正に補せられ、十一月本山大會議々員となり、副會頭に選ばれ、會頭永平寺環溪を補佐して大に宗綱を釐正す。翌年七月青森行在所に天皇に拜謁し、十年四月本校教師を囑託せられ、幾もなく遠江可睡齋に轉住し、十一年十月再び掛川行在所に天機を奉伺し、十二年靜岡縣第二號教導取締に任ぜらる。十四年一月風紀の衰頹を憂ひて敲唱會を大阪に組織し、

西有穆山師

又萬松學校を可睡齋境内に創立す。此年再び本山會議々員となり、會頭に選ばれしも固辭して受けず。十六年二月權大教正となり、十九年二月永平寺西堂となり、黄緋直綴の着用を許さる。二十五年日置默仙を後繼として可睡齋を退き、島田町傳心寺に隱棲す。此年特に内務大臣より曹洞宗事務取扱を命ぜらる。二十九年法正眼藏私記、正法眼藏講義を公刊す。三十三年横濱の檀信徒一字を建立し名けて西有寺と云ふ。請ぜられて開山となる。三十四年春總持寺獨住三世の席を董し、六月十九日直心淨國禪師の徽號を賜はる。三十五年曹洞宗管長に任ぜられ、三十六年滿期管長を辭し、三十七年再び管長に任ぜらる、此年六月大日本宗教家大會の座長となる。十二月管長を辭し、三十八年二月總持寺を退院し西有寺に移る。四十三年十二月四日寂す。壽九十。遺語に曰はく「老僧九十、言端語端、無末後句、月冷風寒」と。著作、洞上安心訣、禪戒鈔講話、學道用心集提耳錄、西有禪話、洞上五位說講話、辨道話講義、等あり。（西有穆山老師傳）

キンシユク　琴叔　ケイシユ景趣を見よ、

キンシユク　昕叔　ケンタク顯晫を見よ、

キヤウカク　經覺　二〇九四 二一九六　〔法相宗〕大和興福寺別當なり。經覺は關白九條經教の子なり。應永二年に生る。同十四年十二月得度し、同二十二年少僧都に任ぜられ、同三十三年春日社興福寺別當となり、翌年二月長谷寺別當、橘寺別當、藥師寺別當となり、永享三年大僧正となる。この年萬歲、高田以下の四莊官異議を主張して、段錢を輸せざりしに、平田莊の莊官を諭して、之を輸せしめたり。同年八月再び興福寺別當に任じ、七年十二月再び別當を罷め十年八月將軍足利義教の旨に忤ひて大乘院門主を罷め、立野寶壽寺に隱居せり。嘉吉三年九月筒井光宣その弟尊覺、實憲、順永及び箸尾入道宗信等古市胤仙と奈良に戰ひ、彌勒院、光林院、大興院、鵲地藏堂を攻陷し、近所の在家今御門、寺林以下に放火せり。經覺幕府に訴り、光宣を罪し、その河上關務を褫ひ、直ちにこれを大乘院に屬せしめたり。翌文安元年二月經覺、越智某を遣りて筒井光宣及び順永等を擊たしめしが、戰利あらざりしかば、經覺懼れて山城の嵯峨に奔る。尋いて光宣の弟僧實憲等興善院を攻め、古市胤仙と戰ひて敗死せしかば、經覺復奈良に歸り、城を鬼薗山に築きてこゝに移る。寛正二年二月經覺三たび興福寺の別當となり、十月一乘院大僧正教玄と隙を生ぜしかば、光宣中間に立ちてこれを調和せり。同四年六月經覺三たび別當を罷め、權別當兼雅興福寺の別當に補せらる。文正元年十二月興福寺別當兼雅、前關白一條兼良に就き、經覺を奏して三宮に准ぜられんことを請ひしも、その例なきを以て聽許せられず。文明元年三月經覺四たび興福寺別當となり、明應五年八月寂す。壽百三なり。著作、大乘院寺社雜事記若干卷あり。（大乘院寺社雜事記、興福寺別當次第、大和人物志）

キヤウゲン　慶彥　ケイゲン慶彥を見よ、

ギヤウコウ　行弘　センクウ專空を見よ、

クの部

グアン 愚菴 テツゲン鐵眼を見よ、

グゴク 愚極 レイサイ禮才を見よ、

クハウウン 宏雲 一九九七 〔臨濟宗〕遠江平田寺の開山なり。宏雲、字は龍峯と云ふ、俗姓は藤原氏、相摸の人上杉掃部頭頼重の子にして、足利尊氏は其外姪なり、幼にして出家受戒し、長じて諸方の名師に參ず。建治元年宋に入りて留まること五年、元大元十六年祖元子元、北條時宗の請を受けて到るに際し、從ひて歸朝す。即ち我が弘安二年なり。尋いて祖元の法嗣圓覺寺長壽院雲屋慧輪に就いて參學し、その印可を受く。弘安六年春鎌倉を辭して、遠江相良莊通菩提山に到り、支那の徑山に似たりとなし、禪苑を營みて平田寺と云ふ。七年春、上杉公相良莊に邸宅を構へ、屢〻宏雲の室に入りて禪要を問ふ。永仁元年上杉公、私田八十町及び山林河海等を寄附して常住の供に充て、後、諸伽藍を營みて悉く落成せしむ。二年四月京都に上り奏請して免税の綸旨を賜はり、四年五月宮に入りて謝恩し、並に勅問に奏對す。その答語中、山吸長江の句あり是より吸江山と號せり。嘉暦二年冬、京都に入りて後醍醐天皇に謁し、皇祚祈禱の綸旨を賜はり、元弘二年冬、京都に入りて天皇に謁す。正應二年足利尊氏と相見し崇敬を受くること敦し。是より平田寺の興隆日に益〻起り、宏雲の聲價亦愈〻顯る。建武四年六月三日寂す。壽缺く。尊氏奏して莊田若干畝を賜はり、その追福に具へしめらる。（名剎由緒書）

クワウクワン 廣貫 二四七八 二五六六 〔天台宗〕伊勢洞津西來寺の僧なり。廣貫、字は眞童、松峯と號す。姓は金鑽（カナサナ）氏、武藏國多摩郡鄕地村岩崎某の二男なり。文政元年に生る。東叡山勸學寮作頭廣海に從ひて剃染す。天保十四年十老に進み、論義講師となる。安政六年上總行光寺住職となり、慶應元年檀林武藏兒玉郡二ノ宮村金鑽山大光普照寺に轉じ、學頭職に任ず。明治維新東叡山の變、勸學寮の將に廢滅に歸せんとするを痛惜し、乃ち職を辭して自ら關東各寺を巡諭し、極力復舊の策を講ず。五年五月權訓導に、七月權中講義に補せらる。次で六年復舊の實成り、改めて東部學寮と稱す。その講師兼幹事たり。八年權大講義に累進し、大教院講究課に勤務し。九年更に大講義に轉ず。十二年に至り眞盛派管長の推薦により伊勢洞津西來寺に錫を駐む。十四年十二月權少教正に轉じ、十九年宗制寺法制定僧階九級を置くに及び、權僧正に補せられ、二十一年僧正に進む。同派本山西教寺住職の缺くるに方り、明治二十五年眞盛派管長事務取扱となり、九月門末公選により、同派管長となる。數閱月にして病を得、二十七年八月辭して西來寺内に留錫靜養す。三十四年病を力めて比叡山大學に三大部を披講す。明治三十九年八月十九日西來寺に於て左の一語を留めて寂す。壽八十九。夫西方十萬億土極樂世界三千之假名悉皆成佛。

クハウシ 光子 ゲンヨウ元瑤を見よ、

クハウシウ 廣洲 ソウタク宗澤を見よ、

クハウエウ 晃耀 二四八四 二五七〇 〔眞宗〕三河安休寺の住持なり。晃耀、因明院と號す。姓は雲英氏、天保二年七月五日三河幡豆郡一色村眞宗大谷派安休寺に生る。十一年より慶應三年迄高倉大學寮安居に聽講し、餘暇を以て美濃川内當々、大坂

廣瀨旭莊に漢籍を學び、又、大坂善覺寺法宣、京都智積院義觀、天龍寺環中、乙訓寺海傳等に參學して、法相、禪、華嚴の學を修む。天保十三年十月父歿して安休寺に住す。安政五年高倉學寮安居に日月行品を講じ、慶應三年擬講となり。明治四年三河大谷派取締を命ぜらる。十五年廣島捴詰院長邸に因明を講じ、十六年京都肯晞院に、十七年東京帝國大學講義室、及び早稻田專門學校に、十八年豐川妙嚴寺及び司法省講堂、東京華族會館に因明を講ず。十九年嗣講となる。二十四年大學寮本科敎授となり、二十六年第二十代講師となる。四十三年二月十四日寂す。壽八十。著作、因明大疏方隅錄十三卷因明大疏冠註六卷、愚禿鈔講錄三卷、因明活眼、因明三十三過方隅錄、本作法講義各二卷、正理門論科圖、因明二十頌、因明大意、因明初步、因明三十三過本作法科本、東洋心理初步因明正理門論科本、東洋新々因明發揮、東洋新々因明一班、同引文各一卷あり。（碑文、事蹟、高倉學寮記錄）

クハウセン　光宣……二〇五九　〔法相宗〕大和成身院の僧なり。光宣は筒井順永の兄なり。順永筒井の統を受くるに及びて筒井順弘と河上關務を爭ひ、幕府の處分に服せず。文安元年經覺、越智等をして討たしめしにより、光宣等迎へ戰つてこれを破り、幕府の兵來り責めしも又克つ能はず。長祿三年幕府その罪を釋し、將軍義政親しく光宣を引見せり。其以來常に順永を援け、兩畠山の相抗するに及びては速に義就の黨と戰ひ、文正元年八月幕府より義就征伐の命を受けしかば九月入洛して義政等と軍略を議し、十二月奈良に歸りしが、翌應仁元年正月又京都に出でたり。五月二十六日光宣、細川武田の軍と共に一色義直、山名持豐の壘を攻め、激戰累日所在悉く兵燹に罹る。文明元年七月二十六日大和に還る。時に年七十五。細川、赤松の軍之を送りて醍醐に至り、大和衆五百人許之を迎へたりと云ふ。（大乘院寺社雜事記、大和人物志）

クハウタク　光澤……二二六五　〔臨濟宗〕京都東福寺第二百二十八代なり。光澤、字は天倫、京都の人なり。幼にして東福寺寶勝院蘭圃光秀の室に投じて出家し、受具の後、光秀の法嗣となる。後、東福寺に住す。又大友氏の請を受けて豐後萬年山勝光寺に兼任し、明國との脩好の書契を主る。慶長十三年三月南禪寺の勅帖を賜はりたれども住せず。十四年七月二十二日寂す。壽缺く。寶勝院に塔す。（孝亮宿禰日次記、時慶卿記、五岳前住籍、南禪住持籍、大日本史料）

クボタニチキ　久保田日龜　ニチキ日龜を見よ、

クワンシヤウ　寛昌（一八七五）〔天台宗〕播磨書寫山第三十二代の長吏なり。寛昌淨雲坊と號す。姓は平氏、筑紫の人敎盛の末子なり。葉上僧正榮西渡宋の時十六七歳にして出家受戒す。宋に在る八年にして歸朝の後、書寫山禪院房に住し、眞言の法に達す。又、書を能くす。寂年及び壽缺く、弟子に淨密房、賢定房實印あり。著作、本願講式、和讃等あり。（書寫山長吏記）

クワンソン　觀尊　二三七六　二四三六　〔天台宗〕近江園城寺法泉院の學僧なり。觀尊は京都の人。高辻前大納言家長の猶子。延享二年三月二十日前大僧正忍玉より灌頂を受く。千乘院に住し、後に法泉院に轉住す。安永五年八月十六日寂す。壽六十一。著作、題要隨考七十卷、四度初行私記、敎時問答條箇、三部

秘經條簡、法界次第箋要、門理樞要、觀經疏妙宗鈔私解、教證二道辨、新選問要集、淨土三藏考、各一卷あり現行す。(園城寺記錄)

グワンチ 願知 二〇九八 二一八七 〔眞宗〕京都德正寺の開基なり。願知姓は井上、俗名遠仲と云ふ。越前國荒井の人、文明三年二月叡山の衆徒四百餘人、京都大谷の祖廟を襲ひ、堂宇を燒く。時に蓮如、宗祖の像を守り三井寺に遁る。山徒勢に乘じ墳墓をも破壞せんとす。願知之を聽きて防ぎ戰ふ。依つて恙なきを得たり。遂に留まりて本廟を守護し、剃髮して僧となる。文明八年正月蓮如その功を賞し法名及び感狀を與へ、その子孫をして祖廟を守らしむ。願知依つて一宇を建立す。是れ德正寺の開基なり。大永七年正月二十八日寂す。壽八十九。(德正寺小誌、大谷本廟沿革志、本願寺沿革志、山城名跡志、越前人物志)

ケの部

ケイギン 啓誾 (二一六四) 〔臨濟宗〕京都建仁寺大龍菴の禪僧なり。啓誾、字は春和、別に東湖と號す。鄕貫師承共に詳ならず。明應永正の頃建仁寺大龍菴に住し、月舟壽桂、常菴龍崇、東福寺湖月信鏡等と交游す。最も騈麗文に巧みなり。寂年及び壽缺く。著作、春和絕句集一卷あり。(幻雲集、寅闇序跋集)

ケイゲン 慶彥 二二八一 二三五八 〔臨濟宗〕京都鹿苑寺の禪僧なり。慶彥、字は文雅、鄕貫詳ならず。相國寺鳳林承章の法嗣なり。延寶四年春相國寺住持となるや、後水尾法皇院宣を降し、金を賜ひて綿谷の舊廬を再興せしめらる、且つ毎月先朝兩國忌修齋の料を賜はる。慶彥亦時々召を蒙りて詩筵に陪す。後、北山鹿苑寺に住してその頹廢を復興し、後水尾法皇亦金を賜ひてその工を助けしめ給ひ、方丈その餘の堂宇を一新するを得たり。元祿十一年十二月二十九日寂す。壽七十八。(萬山編年精要)

ケイシウ 景秀 二一五六 二二四〇 〔臨濟宗〕京都南禪寺第二百六十三代なり。景秀、字は鐵叟、別に九禾と號す。近江山上の人なり。永源寺靈仲禪英に就いて剃髮染衣し、遂にその法を嗣ぐ。次いで建仁寺定惠院に住し、天文二十一年五月建仁寺第二百八十八世に住し、爾來天正六年に至るまで前後十八住を重ぬ。元龜二年四月南禪寺に陞住し、翌年又再住す。この間南禪寺内に一宇を創して楞迦院と名け、自ら開山第一世となる。天正七年五月安土宗論の際命を受けて判者となる。天正八年十一月十八日寂す。壽八十五。遺稿傳はらず。

ケイシフ 慶集 二一九〇 二二七五 〔臨濟宗〕京都眞如寺の禪僧なり。慶集、字は香甫、鄕貫詳ならず、子建壽寅の法嗣なり。眞如寺に住して、通玄軒に居る。又、相國寺北禪院の遺趾に一宇を構へて慈雲菴と號す。大佛鼻塚供養大施食の首唱者たりと云ふ。元和元年九月四日寂す。壽八十六。(萬山編年精要)

ケイシユ 景趣 (二一四二) 〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり。景趣、字は琴叔、松蔭と號す。近江の人なり。幼にして出家し、長じて天龍寺用剛乾治に嗣法す。後、南禪寺正因菴に住し、寺内に松蔭軒を創し。禪餘詩文を弄して當時の諸老

と應酬す、文明十四年平生所作の詩百餘篇を携へて村菴靈彥の評を需む。靈彥評語を加へて之を選す。この外蘭坡景茝、横川景三、祖溪德濬の三師もこれが序を作る。明應七年南禪寺に住し、後ち同寺を董すること三回、病を獲て松蔭軒に寂す寂年に及び壽缺く。著作、松蔭集あり。

ケイジヨ　景徐　シウリン周麟を見よ。

ケイセイ　慶政　一九二八［天台宗］山城松尾法華山寺の開山なり。慶政は證月房と號す。證月一に澄月、勝月、照月、照日に作る。鄕貫詳ならず、能舜に師事して經論を學び、又延朗に從ひて三井の法流を汲み、三密の敎へを受く。後、宋に入り、南宋嘉定十年即ち我が建保五年泉州にて南蠻人をして明慧上人高辨に送遣せん爲め一書を書せしむ。この書は波斯文にして現に傳へらる、幾もなく歸朝し、山城松尾の西峯に草菴を構へて住す。是れ峯堂と稱するものにして即ち法華山寺これなり。高辨と交はること最も厚かりしと云ふ。次いで淨土の敎に歸し、建保七年一月には同菴にて本朝往生傳及び拾遺往生傳を、承久二年秋には後拾遺往生傳及び三外往生記を、貞應元年六月には新修往生傳を各〻書寫す。安貞元年三月多寶塔を供養し、高辨を導師となし、百僧供養をなす。寬喜二年四月より尊圓と共に御夢殿加造の勸進をなす。天福二年眞如尼と共に上宮王院に太子の御影を安置供養し、文曆二年四月上宮王院の正堂の石壇を修し、七月三經院の法相宗祖師曼陀羅及び太子の御影を安置し、嘉禎二年四月上宮王院御舍利堂前法華經轉讀を始めその導師となる。三年四月萬燈會並に五百七十坏供養の勸進をなし、五百坏供養並に五十種捧物をなす。同年十一月上宮王院禮堂並に廻廊等を葺し、十二月法隆寺塔下の石壇を造り、同年法隆寺塔下北方の涅槃像及び脇士の修理を加ふ。弘長三年式乾門院利子內親王の十三年忌を法華山に修して、唐本の一切經供養をなす。文永五年十月六日寂す。壽八十許。著作。渡唐日記一卷、閑居友二卷ありと云ふ。（三井續燈記、蔭凉軒日錄、壒囊鈔、法隆寺別當次第、風雅集、百錬抄、沙石集、年山紀聞、續古今集、歷代皇紀、新千載和歌集、本朝書籍目錄、史學雜誌所載慶政上人の事蹟）

ケイチウ　敬冲　ブンドウ文幢を見よ、

ケイテツ　桂喆（二一六三）［臨濟宗］京都萬壽寺の禪僧なり。桂喆、字は慕眞、鄕貫詳ならず。雙桂の法孫なり。明に遊び畫を能くす。大黑及び八景圖等あり。文龜三年五月その畫を稱好に贈る。寂年及び壽缺く。（竹居淸事、本朝畫史、古畫備考）

ケイテツ　景徹　ゲンソ玄蘇を見よ、

ケイテン　繼天　ジユセン壽殲を見よ、

ケイリン　桂林　トクシヤウ德昌を見よ、

ケウクワンバウ　敎觀坊　ジヤウレン成蓮を見よ、

ケウシン　敎信　一五二六［法相宗］大和興福寺の學僧なり。敎信、鄕貫詳ならず。奈良興福寺にあつて唯識因明の學を究む。後、淨土の敎に歸し、播磨賀古郡賀古驛に住して念佛を修す。人呼んで阿彌陀丸と曰ふ。居ること三十年、貞觀八年八月十五日寂す。壽缺く。（往生拾因）

ゲウニン　堯忍　二四七六　二五四三［天台宗］東叡山龍王院の學僧なり。堯忍は別に淸淨林院又は海龍院王と號す。姓は津田氏、江戶本鄕森川町の人、幕府旗下の士田口某の二男なるも、明

治の後法祖行學の俗姓を嗣ぎ津田氏を稱せり。文化十四年九月に生る。文政十一年十二歳にして東叡山に入り、堯運の弟子となり、薙染戒を受け、道順律師に就き顯密二教の大意を學ぶ。長ずるに及び比叡山に登り横川の戒定院住持となり、益〻進んで佛典を研究し、居ること數年、東塔の遺教院に轉住す。弘化二年七月輪王寺宮公紹法親王の命を奉じ東叡山普門院の住持となり。後、福聚院に住し、更に寒松院に轉じて、東照宮の別當職を勤む。當時花山院家厚の猶子となり、大僧都に補す。輪王寺宮慈性法親王の時、屈徒院家に補し、清淨林院の號を賜はる。安政五年十一月滿宮公現法親王の輪王寺宮の法嗣となるに及び、佛典の教授職を勤む。後幾もなく執當に補し、明靜院に轉じ、更に海龍王院の別號を授與せらる。慶長元年日光山に供奉し、東照宮二百五十回忌勅會導師の補翼となる。その執當職に居るや、能く愼重補佐の任を盡くし、輪王寺宮慈性法親王より特に紫衣を許さる。四年五月東叡山事變の時親王に隨ひ、三河島に至る。會〻親王に隨ひ來るもの多きを以て諭して之を去らしめ、自己亦退き、遂に宮の行途を失し、後ち宮の仙臺にあるを聞き、跡を慕ひて至り、隨從に參加す。同年十一月公現法親王の陳謝書を總督宮に奉ずるや、先づ堯忍、義觀の執當職を免じ退いて謹愼せしむ、而して親王上京の途に就かせらるゝの日、義觀と共に捕に就き、鎖乘東京に送られ、糺問所の獄に投ぜらる。然れども堯忍天質溫順にして佛に仕ふるの外、世風に惑動せず。義觀が佐幕論を主張し遂に宮を誘ふの深意あるを知らず、義觀亦之を知らしめざりしなり。故に幾もなく無罪を以て放免せられ、唯謹愼を命ぜられたり。明治二年軍務官より謹愼を免ぜられ、越後國中頸城郡五智國分寺に退居し、老を養ひて復出でず。常に誦經念佛を事とし、明治十六年九月十四日寂す。壽六十九。寺中に葬り、諡して遊戲淨院と云ふ。（龍王院堯忍傳、彰義隊戰史）

ゲウヱ　堯慧　二一八七 二二六九　〔眞宗〕伊勢高田專修寺門跡第十二代なり。堯慧、足利義晴の子、母は近衞尚通の女、實は飛鳥井藤原雅綱の三男なり。天文四年應眞の養子となりて入寺し六年得度す。同年五月專修寺住持職となる。十一年二月權大僧都に任ぜらる。永祿三年二月權僧正に任ぜらる。天正元年十月織田信長禁制の狀を寄す。二年十一月正親町天皇より門跡號を勅許せられ、八年六月僧正に任ぜらる。十年五月大僧正に轉ず。同年堂宇を改造し、十六年九月に至りて成る。十二年五月德川家康亦制狀を寄す。同年六月豐臣秀吉亦制狀を寄す。十三年住持職をその子堯眞に讓り、慶長十四年正月二十一日寂す。在職四十八年、壽八十三。（時慶卿記、御當家令條、常磐井家譜、大日本史料）〔再錄〕

ゲツケイ　月溪　チユウサン中珊を見よ、

ゲツセン　月泉　シヤウジユン詳洵を見よ、

ゲツタン　月湛　二三〇六 二四六三　〔曹洞宗〕越中光嚴院の禪僧なり。月湛、字は洞水、姓は黑川氏、黑川那雄の叔父たり。初め追分高源寺、次は飛彈片掛大淵寺、次は高山雲龍寺に住し天明元年春、光嚴院に晉む。寬政三年光嚴院を退き、翌年正月江戸駒込吉祥寺に到り、當時清國に絶えたる曹山錄、洞山錄、劫外錄、拈古錄、寂知錄の五書を淸の天童及び長盧の二刹

に贈り、我國に缺けたる大乘經要並偈頌、曹洞廣錄、明安別錄、洞山十不歸、浮山五位格、對寒山詩、洞宗剩語、四家頌古注の入種を得むとし、寺社職松平輝和、執政松平定信に上書してその許を請ふ。寛政五年夏免許を得、且つ兩刹音信の品も官命によりて成れり。然れども當時天童、長盧の二刹の存亡未だ知るべからざりしかば、之を調査する爲めに二年を經たり。時に松平信明執政となり、異國贈答の禁制最も嚴なり。故に事遂に成らず。この間滯留九年關東の諸刹に於いて僧二千二百餘人を度し、寛政十二年秋容しく歸り、富山光林庵（後吉祥院と號す）に閑居し、山城宇治興聖寺に道元の千五年の大齋に招かれ、享和三年六月二十日寂す。壽七十八。（黒川記錄、越中史料）〔再錄〕

ゲツタン　月潭　ダウチヨウ　道澄を見よ、

ゲンカン　玄韓　二二〇三　二二六六　〔臨濟宗〕駿河寶泰寺の僧なり。玄韓、號は泰岳、生國氏族詳ならず。幼にして駿河有渡郡傳馬町金剛山寶泰寺に入り、雪峯會に投じて得度し、遂にその印可を受けて同寺に住す。慶長中詔して紫服を賜ふ。後寺の西南隅に安立院を建てゝ蟄居す。慶長十一年七月十六日寂す。壽六十四。臘五十。（正法山誌、駿國雜志、大日本史料）

ゲンキツ　元佶　二二〇八　二二七二　〔臨濟宗〕山城圓光寺の開山なり。元佶、字は閑室、別に三要と號す。俗姓は野邊田氏、實は千葉胤連の落胤なりと云ふ。肥前國小城郡晴氣村の人。天文十七年に生る。永祿中同郡圓通寺塔中養源院に薙髮し、染衣受具の後、諸方を遊歷し、法を金庭菊に嗣ぐ、大覺派たり。後、中峰の法を耳峰東堂に傳ふ。壯歲に及び儒書を好み、關東に到り、足利學校に學ぶ。天正十九年十月豐臣秀吉、足利學校の書籍を收め、元佶を從へて歸る。尋いで五山十刹を歷董す。かくて德川家康の寵遇を受け、足利學校第九世の席を董し、領地一百石を賜はり、學校を中興す。慶長四年五月家康より活字を賜はり、三略、六韜を印行し、五年二月貞觀政要を印行す。同年三月南禪寺住持の帖を賜はる。同年九月關原の役、陣中に從ひて、日取吉凶等を勘進す。此年肥前に歸る。國主鍋島勝茂、三岳寺を建て、開山となし寺領百二十石を附す。六年九月家康伏見に圓光寺を建て、亦開山となす。七年足利學校を退く。八年七月寺領二百石を賜はり、上方の學校を管し、金地院崇傳と共に寺社の事を掌る。十年四月周易を印行し、十一年七月武經七書を印行す。十二年五月朝鮮來聘使に應接し、同月秀忠の命により朝鮮來聘使に授くる復書を作る。十三年正月豐光寺承兌の寂後、代はりて外國渡航朱印の事を掌る。十四年家康、又駿府に圓光寺を建てゝ開山となす。十七年五月二十日駿府圓光寺に寂す壽六十五、遺偈に曰はく、萬事人間傀儡子、棚頭日々使狂吾、言非言是々何物、端的看來脫有無、と。（駿府記、鹿苑

閑室和尚

日錄、本光國師日記、南禪住持籍、圓光寺文書、下毛埜州學校由來記、圓光寺歷代譜、鍋島勝茂譜考補、三岳寺文書、大日本史料）〔再錄〕

ケンギン　建誾　一九八〇　二〇七八　〔臨濟宗〕遠江方廣寺第二世なり。建誾、號は脫翁、姓は鈴木氏、三河國八名郡大野村の人なり。元應二年正月十八日に生る。嘉曆三年九歲にして同鄕の禪林寺に就いて落髮受具す。長じて諸方の名德に參じ、後、無文元選の室に投じて參究し、無文下四神足第一の法嗣と稱せらる。遂に無文の命に順ひて方廣寺第二世に住す。常に數百衆を領して無文の宗風を舉揚す。明德三年二月退いて山の東阜に一宇を構へて東隱院といひ、移り住す。幾もなく、三河八名郡大野領主鈴木氏の請を受け、天德山淵龍寺を開き、住すること十五年、再び奧山の東隱院に歸る。應永二十五年十月二十三日遺偈を書して曰はく「平生受用。破鏡無痕。末後一句。不言不言」と。筆を擲ちて寂す。壽九十九。臘九十一。塔を東隱院に建つ。門人、別傳居暎、眞海居實、悅宗玄怡の三人あり。建誾の開山たる禪寺、十二院、八十餘寺、皆その法孫にして東隱派下或は悅翁派下と稱せらる。（名刹由緖書）

ゲンケイ　源慶　二〇三五　〔臨濟宗〕相模淨妙寺の禪僧なり。源慶字は大祥、三河の人なり。双峰源の法を嗣いで淨妙寺に出世し、永和元年四月二十六日遠江の安源寺に寂す。偈に曰はく、頻伽緋裡、滿盛虛空、一踢一倒、八達七通。（空華集）

ゲンコ　原古　シケイ志稽を見よ。

ケンシユン　賢俊　一九五九　二〇一七　〔眞言宗〕京都東寺第百十八代の長者なり。賢俊、菩提寺大僧正といふ。日野俊光の子なり。寶池院僧正賢助に就いて出家し、賢助より傳法具支灌頂を受く。後醍醐天皇、文觀を東寺の座主法務に補し給へるを患ひ、隆舜に憑りて足利尊氏に見えて之を謀る。遂に高野山の奏に依りて文觀を逐ひ、次いで長者法務に任ぜらる。已來尊氏の歸依を受くること彌々篤し。建武三年尊氏攝津湊川に敗れて筑前に赴きし時、賢俊、長者を辭し、直義の討取せし所の護良親王の錦旗を持し、追ひて赤間關に到りて尊氏に逢ふ。尊氏大に悅びて軍議を談ず。時に肥後の菊池、豐後の大友等官軍として尊氏を討たんとす。賢俊乃ち錦旗を借りて豐後に到り、大友入道具簡に說きて尊氏の麾下に屬せしむ。是に於いて尊氏筑前多々良貫首宗像の館に入る。尋いで尊氏の命を帶びて京都に還り、童藥師麻呂より院宣を受取り、持して九州に歸る。尊氏安藝宮島に詣して武運を祈り、院宣を神前に捧げて大に歡喜す。大友二萬の軍兵を率ゐて來り會し、九州咸く隨從す。以來尊氏の軍に在りて護持の任を勤む。尊氏大將軍となるに及び、賢俊即ち醍醐

賢俊僧正

山第六十五代の座主に補せられ、繼いで後醍醐天皇の詔を受けて重ねて第百二十代の長者法務を董す。尊氏食邑六萬石を醍醐山に寄附し、諸伽藍悉く再建せらる。尋いで幕府命を下して、三寶院の殿閣を作新せしめ、重塀宛も城廓の如く、慶讃訖りて尊氏の一族皆寺に詣で竟日雅樂饗應せり。四年正月宮中後七日の法を勤修して、曆應四年に至る。康永元年三月上醍醐七重大塔火災に罹る。同年四月詔を奉じて、東寺大講堂にて仁王大法を修し、天下靜謐寶祚盛久を禱り、五月に及びて滿散す。貞和に至りて天下また大に亂る。賢俊亦長者を辭して尊氏の軍中に參與し、且つ賴意文觀の二僧を招きて護持せしむ。五年師直兄弟の尊氏を圍むや、卿相官女の資財雜具等を新三寶院に集む。文和四年天下漸く靜謐し、後光嚴天皇及び尊氏は近江より入京し、賢俊も亦三寶院に還れり。延文二年醍醐寺座主職を光濟に讓りて菩提寺に退き、又、勅を受けて東寺第百二十二代の長者法務に補す。大將軍義詮新三寶院に臨み、饗應前よりも盛んなり。同年七月十六日寂す。壽五十九。日記數卷あり貞和文和の記事にかゝる。傳法の弟子に光濟、實濟あり。（園太曆、五八代記、諸門跡傳、續傳燈廣錄）〔再錄〕

ゲンソ　玄蘇　二一九七／二二七一　〔臨濟宗〕對馬以酊庵の開山なり。玄蘇、字は景轍、俗姓は河津氏、筑前國宗像郡西鄕の人飯盛山城主隆業の第二男なり。天文六年を以て生る。同郡隆尙菴湖心鼎の法を嗣ぐ。永祿七年湖心寂後隆尙菴に住す。天正五年博多聖福寺に遷り、八年府主柳川義調の請を受けて對馬に到り、同年朝鮮に使す。同十七年再び調信と共に朝鮮王城に到り、信使を伴ひて還る。文祿元年征韓の役、秀吉、肥前名護屋城に在り、五山の碩匠、南禪玄圃靈三、相國西笑承兌東福惟杏永哲、及び玄蘇を以つて朝鮮修文職となし、尋いで檄を諸州に傳へて朝鮮を伐つ。此年玄蘇、宗義智の命により調信と共に朝鮮に入り李德馨と大同江中に會して和議を謀る。同四年國命を奉じて明に使す。明の萬曆二十三年なり。神宗その勞を慰し、特に本光禪師の號、並びに蜀錦の伽梨を賜ふ。明年明楊沈二使劄付を齎す。慶長二年菴を府城の東に創し、瞎驢山以酊菴と名く。蓋し山號は扇原官狹谷の名に據り、菴名はその生年丁酉に取ると云ふ。同九年八月朝鮮、松雲惟政及び僉知孫文彧を差し和を講ぜしむ。時に大將軍家康適京都に在り、玄蘇、調信と共に義智の命を受け、修好使を率ゐて京都に入り家康を伏見城に拜す。事了りて二使を紫野大德寺に舍せしむ。十年三月南禪寺住持の勅帖を賜りしも住せず。十二年朝鮮正使呂祐吉、副司正慶暹、從事丁好寬の三人を差して聘を奉ず。玄蘇又義智の命を受け、三人を引いて江戶に到り家康に謁す。十四年三月義智の命を受け、玄蘇正官となり、柳川景直副官となりて朝鮮に到り和講の賀を申ぶ。十六年十月二十二日寂す。壽七十五。辭世の偈に曰はく、七十五年、本光洞然、今日吹滅、這瞎驢邊、喝、と。瞎驢山に葬る。遺稿、仙巢稿三卷あり。（仙巢稿、瞎驢山住持籍、聖福寺文書、南禪寺住持籍、以酊開山由來書、筑前國續風土記、津島紀事、對州編年略、大日本史料）〔再錄〕

ケンタク　顯晫　二二四〇／二三一八　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり。顯晫、字は昕叔、姓は藤原氏、日野輝資の子なり。有節瑞保の法嗣にして、二十六歲にして相國寺に秉拂す、三十二歲

相國寺を董し、元和の間、幕命を承けて鹿苑院に住し、僧錄司を總ぶ。幾ならずして疾を以つて辭す。將軍家光請じて、對島以酊菴に住せしむ。是時に方りて後水尾法皇の召を拜して法要を奏對し、皇情大に悅び、落飾して師資の儀を表し給ふ。乃ち法塔を相國寺に建て宸筆經一卷及び佛舍利を納め給ふ。顯晫塔慶讃の佛事を勤め、特に皇后より金襴袈裟を賜はる。萬治元年正月二十日寂す。壽七十九。後西院天皇佛性本源國師の諡號を賜ふ。(鹿苑日錄、南禪住持籍、萬山編年精要)

ケンチ 謙致　モクライ默雷を見よ、

ゲンチウ 元沖 (二二六五……) 〔臨濟宗〕京都南禪寺第二百六十八世なり。元沖、梅印と號す。姓は三淵氏、山城國の人、出家して法を梅谷保に嗣ぐ。古林派たり。慶長二年九月二十八日南禪寺住持の帖を賜はり、同年十一月十九日入寺す。同十年七月二十四日、悟心院に寂す。壽缺く。(慶長日件錄、寬政重修諸家譜、大日本史料)

ゲンテイ 元棣 (二一〇九)〔臨濟宗〕京都建仁寺定惠院の第九世なり。元棣、字は心華、美濃の人なり。十三歲にして建仁寺定惠院に入り、頑石曇生に師事して句讀を受け、剃染受具の後、四方に參請し、又、還りて曇生に嗣法す。建仁寺第一座に補せらる。康曆二年六月義堂周信日用清規の講を受け、九月請ぜられて後堂首座に充てらる。次いで美濃興雲寺に住すること二年、永德三年秋、山陽聖壽寺に住し、更に備中松山寺を董す。三十八歲、曇生寂して定惠院の席を繼ぎ、文墨を以つて、諸寺の長老と交り、就中義堂周信、惟忠通恕、太白眞玄等と交ること厚し。至德二年三月義堂に江湖疏稿の改訂を請ひ、寶德元年十月義堂を常在光寺に訪ひ、以來屢々之を訪へり。寂年及び壽缺く。著作、心華臆斷、業鏡臺あり。(空華日工集、東山歷代、建仁寺住持位次簿)

ゲンハウ 玄方 (二二四八 二三二一) 〔臨濟宗〕對馬以酊菴第二世なり。玄方、字は規伯、玅外と號す。姓缺く。筑前宗像郡の人なり。出家して對馬以酊菴玄蘇の弟子となる。慶長九年玄蘇に隨ひて朝鮮媾和使松雲と共に京都に上り、十四年玄蘇の朝鮮に使するや、以酊菴の寺務を監理す。十六年玄蘇の寂後、京都に入りて諸方の知識に參じ、元和三年には東福寺に住し五年六月南禪寺に寓し、尋いで秉拂す。同年十二月以酊菴に歸る。七年十月初めて朝鮮に使し、寬文二年十一月書を朝鮮の禮曹に致して、四書官板大全、易學啓蒙、翰墨全書、事林廣記、文選、通鑑、貞觀政要、歐蘇手簡、離騷、楚辭、杜甫李白の詩集、朝鮮諸名家詩文集等を得て永く以酊菴の文庫に備ふ。六年閏二月朝鮮の內亂に依り幕命を帶びて再び朝鮮に使し、四月釜山より漢陽城に入りて參內せり。蓋し日本の使者の京城に入ることを得ざるもの數十年、是に於いてその舊例を破れり。六月歸朝、十年以酊菴の方丈、庫裡を再造し、重垣回廊を一新す。十一年朝鮮に送るに僞書を以つてしたりと云ふ罪に坐して江戶に捕へられ、翌十二年三月南部に配流せらる。慶安三年對馬の任菴留首座の請に依りて玄蘇の遺稿たる仙巢稿三冊及び湖心碩鼎の三脚稿を幷せ開板せしむ。配所に在ること二十四年、萬治元年赦免の狀を得て南部を出て、江戶を經て京都に到り、金地院僧錄司竺隱崇五の薦により、南禪寺塔頭語心院の住持となり、尋いで建長寺の公帖を

得たりと傳ふ。幾もなく去つて攝津大坂に遊び、寛文元年十月二十三日大坂城畔の寓居に寂す。壽七十四。著作。心經抄無門關抄等あり。（仙巢稿、朝鮮物語、瞎驢山編年考略）

ゲンハウ　元芳（二一一二）〔臨濟宗〕京都建仁寺洞春菴の禪僧なり。元芳、字は正楞、鄕貫並に師承詳ならず。永享享德の頃建仁寺の洞春菴に住して文名あり、東福寺以篤信中、建仁寺九鼎器重、瑞巖龍惺等と道交厚し。最も四六文に巧みなり寂年及び壽缺く。著作、越雪集あり。

ゲンフク　玄伏　二三九八 二四五二〔眞宗〕越前黑川敬覺寺の住持なり。玄伏、一名は諦淨と云ふ、平乘寺功存に佛典を學ぶ。大學林にて講釋すると一回、寛政四年十一月十五日寂す。壽五十五、本山より眞因房の諡號を授かる。著作、往生要集玄談、彈妄釋疑編、彈妄釋疑第二篇、歸命行信辨各一卷あり（越前人物志）

ゲンポ　玄圃　レイサン靈三を見よ、

ゲンヤク　玄谿　ニチエン日演を見よ、

ゲンヨウニ　元璐尼　二二九四 二三八七〔臨濟宗〕山城林丘寺の開山なり。元璐一に玄瑤に作る。始めの名は光子、朱宮、後、林丘寺宮と稱し、後、普明院宮と號す。後水尾天皇の皇女なり寛永十一年七月一日を以て生る。寛文三年十一月龍溪に就きて菩薩戒を受け、延寶三年人民の凍餒を愍れみて之を賑す。同八年九月後水尾法皇崩御し給ひしに依り、天龍寺天外を戒師として落飾し給ふ。時に四十七歲なり。天和二年、山城修學寺村に觀音堂を建て、聖明山林丘寺と號す。畫を好み佛菩薩及び人物の圖像を畫く。享保十二年十月五日寂す。壽九十四。一乘寺村葉山に葬る。（皇胤紹運錄、大宗正統禪師語錄、高泉禪師語錄、古畫備考）

ゲンリヨウ　彥龍　シウコウ周興を見よ、

ケンレイ　顯靈　二二九七 二三六五〔臨濟宗〕京都相國寺第百二十一代なり。顯靈、字は太虛、鄕貫詳ならず。玉英慶瑞の法嗣にして相國寺に住し、又、南禪寺に位す。次いで對馬以酊菴に住し、天和二年朝鮮の使臣に接伴す。寶永二年五月二十日寂す。壽六十九。（相國寺住持籍、萬山編年精要）

コの部

コウケイ　弘稽（二一七一）〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百四十三代なり。弘稽、字は古桂、揖松軒と號す。鄕貫詳ならず。初め建仁寺淸住院に投じて元華良曇に就いて內外の典籍を學び、後、諸方に參詳し、歸りて良曇の法を嗣ぐ。尋いで淸住院に住し、文龜元年八月建仁寺に住し、爾來永正八年に至るまで二十二住を重ぬ。寂年及び壽缺く。著作、桂子禪味二卷鷄助集あり。（蔭凉軒日記）

コウチユウ　洪疇　ハンシ範之を見よ、

コケイ　古桂　コウケイ弘稽を見よ、

コゲツ　湖月　ズイケイ瑞桂を見よ、

コゲツ　湖月　シンキヤウ信鏡を見よ、

コサン　虎山　エフセウ曄嘯を見よ、

コシン　湖心　セキテイ碩鼎を見よ、

コシユク　鼓叔　シユセン守仙を見よ、

コバヤシニチトウ　小林日董　ニチトウ日董を見よ、

ゴンシキ　儼識　二四七八 二五六五　〔淨土宗西山派〕大和奈良五劫院の住持なり。儼識姓山本氏、尾張の人。幼にして出家し、大里の常蓮寺碩儼に師事す。後山城紀伊郡吉祥院村明吉寺に入りて住し、大に學業を勵む。天保十一年光明寺第五十六世闡空の枉の千光寺に隱棲するに及び、日々唯識論等の講義を聽く。尋いで經歷和尚雷雨律師に就いて華嚴法華の敎義を研究し、殊に華嚴の敎義を研究す。奈良の五劫院に移り住するに及び、東大寺及び高野山の學徒の請に依りて華嚴の章疏を講じ、尋いで臨濟宗淨土宗眞宗等の學徒の請に依り諸所に之を講ず。明治三十八年五月三日寂す。壽八十八。遺言により山城の三木山に葬むる。著述、探玄錄、五敎章訓蒙記、各八卷、大乘起信論冠註三卷、原人論錄、因明三十三過本作法錄、各一卷等あり。

ゴンヨウバウ　嚴瑤坊　リヤウシン亮親を見よ、

ゴリン　虎林　エフセウ曄嘯を見よ、

サの部

サイトウモンシヤウ　齋藤聞精　モンシヤウ聞精を見よ。

サイニン　西忍　二〇四四 二一四六　大和の住僧なり。西忍、幼名は「ムスル」、俗名は天次、姓は楠葉氏、父は天竺の人にして「ヒジリ」（聖人）唐人と號し、後龜山天皇應安七年十二月來朝し、將軍義滿に仕へて京都の三條坊門烏丸に居り、妻楠葉氏を娶る。西忍は元中元年を以て生る。剃髮して今名を號す。將軍義持の意に背き、一色家に預けられしも、父の歿するに及びて免さる。義持の時大和に入り、奈良より高市郡曲川に至り平群郡立野に住し、その所有の田地は曲川と立野とにあり。後、奈良の押上に移り、又立野に歸り、更に古市の北口に移る。永享以來幕府の役僧に從ひて再び明國に航し、貿易の利害を辨明したる等、當時に在りては、達識罕に見る所とす。文明十八年二月十四日古市に寂す。壽百三。一に九十三に作る。（大乘院社寺雜事記、大和人物志）

サイニン　濟忍　エンリン圓琳を見よ、

サイモンケイチウ　濟門敬冲　ブンドウ文幢を見よ、

サウエイ　壯裔　二四六八 二九五〇　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり。壯裔、字は圓桂、武藏秩父の人。鉢形仙福寺にて落髮受具し、諸方に歷參の後、江戶海禪寺に住す。偶阿房の大守蜂須賀公の歸崇を受け、寺田を寄せられ、寺宇亦壯嚴を極む。同寺の中興と稱せらる。後勅を受けて妙心寺に住し、且つ紫衣を賜はる。安政六年故里に小菴を構へて獅子窟と曰ひ、退居す。明治二十三年夏寂す。壽八十三。（海禪圓桂和尙廣略、斗室集）

サキヤジクン　櫻木谷慈薰　ジクン慈薰を見よ、

サクゲン　策彥　シウリヤウ周良を見よ、

サタケオリエ　佐竹織江　リヤウシン亮親を見よ、

サハムラリンオウ　澤村臨應　ゼンキ禪機を見よ、

サンエウ　三要　ゲンキツ元佶を見よ、

サンエキ　三益　エイイン永因を見よ、

シの部

シウカウ　周亨（二〇七三……）〔臨濟宗〕京都南禪寺第六十三代なり。周亨。字は大椿、筑紫の人なり。少年天龍寺に入り常州に就いて四書五經を學び、豆一斗を人に請ひて堂隅に掛け日に一握を煎りて之を食す。後、又、鄕里に還り、錢十五貫を請ひて歸り、遂に易學を究む。又、義堂周信に參ぜり。應永中南禪寺に陞住し、幾もなく寺内に雲臥菴を創して靖退し、竊に朱子の學風を鼓吹す。應永二十年五月十日寂す。壽缺く。弟子に笠華梵夢あり。（南禪寺住持籍、臥雲日件錄）〔再錄〕

シウコウ　周興（……）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。周興、字は彥龍、別に半陶と號す。山城深草の土器師の子なりとも石井河内守の弟なりとも云ふ。早歲にして相國寺法住院に投じて剃染受具し、默堂久に就いて參禪す。後、法住院に住す。資性英達、夙に文章を以つて聞へ、又、聯句に巧みなり。建仁寺壽桂と名を齊しくす。藤原惺窩、横川景三等亦之を重んず。位、藏主に終り、三十四歲にして寂す。寂年缺く。著作、半陶稿六冊あり、永正五年景徐周麟序を冠し、明曆二年五月版行せらる。（蔭涼軒日記、相國寺住持籍、半陶稿）〔再錄〕

シウシン　周伸（二〇三三……）〔臨濟宗〕京都南禪寺第六十六代なり。周伸、字は無求、甲斐の人なり。幼にして夢窻疎石の室に投じ、内外の學を受く。今出河に環中菴を開きて住し、次いで資壽院に遷る。偶〻門人の將軍の命に忤ふ者あり。大和に徙され、吉野に信福寺を興して居る。又、嵐山の東北に大慈菴を建て、平生隨身の觀音像一軀を安置す。時に行旅必ず錢筒を持して乞兒に給し、若し檀施を得ればその十分の三四を獄中に施し、途に棄兒に逢へば從者に命じて抱き歸らしめ、人を募りて乳養せしめ、日に二百錢を給せり。後、相國寺第四十二世に住し、次いで南禪寺に陞り、又、天龍寺第五十三世に遷る。到る處宗風大に振ふ。應永二十年十二月十八日環中菴に寂す。壽缺く。塔は大和直指菴と嵯峨大慈菴とに在り。嗣法の弟子に大梁梓あり。（前相國無求伸禪師行實）

シウセウ　周沼（二一〇〇）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。周沼、字は芳源、鄕貫詳ならず。相國寺萬宗中淵の法嗣にして相國寺に住せり。永享十二年四月將軍義教八坂法觀寺塔を再興し供養する時、命を受けて高僧八員の列に加はる。寂年及び壽缺く。（萬山編年精要）

シウテツ　周瓞（二〇六六―二一三二）〔臨濟宗〕京都等持寺の禪僧なり。周瓞、號は綿谷、齋名を松鷗といふ。鄕貫詳ならず。應永十三年に生る。二十一年九歲にして京都相國寺に入り、大梁梓に就いて出家す。二十五年大梁、命を受けて若狹高成寺に遷るに從ひ、開堂了りて又、大梁に從ひて相國寺壽德院に歸る。三十一年十九歲にして大僧となる。永享元年大梁等持寺首座寮より西小寶幢寺に遷るや、又、その左右に侍す。二年十二月大梁寂するに及び、三年壽德院に歸る。六年相國寺東藏を主る。八年八月瑞溪周鳳景德寺に出世するに隨侍し、九年秋等持寺に遷るに及びて亦侍衣となる。以來周鳳に隨ひて相國寺鹿苑院等に侍衣となる。嘉吉元年相國寺壽量軒に住し、享德元年壽德院を主る。時に文名緇林を壓せり。長祿二年四月相國寺前板寮に遷りて秉拂し、將軍義政その法會に臨む。

是れ將軍の秉拂に臨む始めなり。尋いで辭して壽量軒に歸る。寛正五年秋等持寺に住し、翌年退いて壽德院に住す。文正元年贈高麗書を製し、同年冬官命を以て壽德院を慶雲院と改めらる。應仁元年秋山名、細川の亂あり、周鳳と共に北岩藏の小菴に寓す。翌年高野有隣菴に遷り、居ること二年、又、北岩藏に還り、居ること四年、この間高麗報書を製す。文明四年二月二十二日寂す。壽六十七。（臥雲日件錄、綿谷瓞禪師行狀、善隣國寶記）

シウフク　周馥（二一二九）〔臨濟宗〕京都妙智院の禪僧なり。周馥、旃室と號す。鄉貫師承共に詳ならず。洛西嵯峨妙智院に住し、常に讀書を樂しむ。東坡の詩及び史記を講じ、華航廣と名を齊しくす。寂年及び壽缺く。蓋し永享文明頃の人ならんと云ふ。著作、翰林殘稿あり。

ジウン　慈雲　ヱハク悪舶を見よ。

シウリン　周鱗　二一〇〇／二一七八〔臨濟宗〕京都相國寺第九十二代なり。周鱗、字は景徐、別に半隱と號し、又、宜竹軒、對松軒、江雲軒と稱す。俗姓は佐々木氏、生國缺く。永享十二年に生る。幼にして京都相國寺に投じ用堂中材の法を嗣ぐ。長享元年七月等持寺に住し、明應四年三月相國寺に住し、五年二月鹿苑寺に移る。文龜三年三月幕命を受けて朝鮮に遣す書を草す。永正五年再び相國寺に住し、十五年三月相國寺慈照院に寂す。壽七十九。著作、翰林葫蘆集十七卷あり。〔再錄〕

シウリヨウ　周良　二一六一／二二三九〔臨濟宗〕京都天龍寺妙智院の禪僧なり。周良、字は策彥、別に怡齋といひ、後、謙齋と改む俗姓井上氏、京都の人、管領細川氏の家老井上宗信の第三子なり。文龜元年四月二日に生る。永正六年十二月九歲にして洛北鹿苑寺に入り、心翁周安の室に投ず。幼より雅華流麗一たび目を過ぐれば遺忘することなし。七年二月三體詩を寫して學習し、毎日十首を課して遂に全く暗誦せり。八年夏偶〻鹿苑寺の火災に罹るや、三體詩一冊を取りて懷にし、その夜等安に從ひて天龍寺に到り、尋いで周安、丹波の性智院に退休するに從ひ、自ら内外百家の書を寫して學習す。十一年三月鹿苑寺にて高峯顯日の二百年忌を修するや、將軍義植入山して香を燒く。周良時に給侍となる。十五年幕命に依りて天龍寺に薙染す。十六年詢南英、備中井山寶福寺に住するに方りて、諸山の疏を作る。建仁寺の諸老之を稱美せざるものなし。大永元年十一月法叔、梅莊、嵯峨臨川寺に住するに際し、又、同門の疏を作る。三年周安天龍寺妙智院に寂す。爾來閑居刻苦勵精す。天文六年周防大守大内義興、筑前博多新篁寺碩鼎をして遣明の使節たらしめ、周良を副使となす。八年四月五島を解纜して、翌年三月北京に入りて參内せり。時に明の嘉靖十九年なり。同年七月使命を了へて馬關に歸着す。天文十六年遣明正使となりて同年五月再び五島を發し、同十八年四月北京に參内す。即ち明の嘉靖二十八年なり。明の世宗特に唱和の詩を賜ひ、且つ上林苑に宴を賜ふ。翌年六月使命を全うして歸朝するや大内義興優遇至らざるなく、京都に還るに及び後奈良天皇特に召して宴を賜ひ、菊花を頒ち銀塊を賜ひて褒賞せらる。是より先き織田信長城中に請じて異域の人物、風土、山川、政治の要を尋ね、又、親ら天龍寺妙智院に訪ひてその德に服し、肥田若干を施す。又、曾て安土城の

記文を屬するや、周良之を辭し、代ふるに南化を以てせり。文成るに及び、信長周良に贈るに百金を以てし、南化には五十金を與へしのみ。當時甲斐武田信玄も亦周良を崇敬し、慧林寺、長興寺、等を以て之を請ず。周良依て甲斐に居ること數年、後、更に一寺を創建して開山第一世に請じたれども赴かず。天龍寺妙智院に靜居す。天正七年六月一日妙智院に寂す。壽七十九。前後住せし所、洛北等持院、丹波常照寺、嵯峨西芳寺、華藏院、妙智院、景德寺、臨川寺、甲斐長興寺、慧林寺、周防福生寺、鎌倉圓覺寺等の十餘刹なり。著作、南游集、謙齋雜稿、謙齋詩集、初渡集、再渡集あり。〔再錄〕

ジエイ　慈英　二四八四 二五三六　〔臨濟宗〕京都建仁寺第三百五十七代なり。慈英、初めの名は肇海、天章と號す。京都の人なり。文政七年に生る。幼にして京極淨國寺に剃度し、次いで江戸增上寺の學寮に入りて淨土教を習ひ、鵜飼徹定と同窓たり。又、漢學を摩島松南、仁科白谷の二氏に學ぶ。後、同友梅辻春樵を介して京都建仁寺雲洞院全室慈保に投じて衣を改む。天保十二年慈保、五山碩學科に任ぜられ、朝鮮書契御用を拜命するに及び、隨侍して對島以酊菴に輪番す。同年八月朝鮮の譯官參知事、清翁書記官等來朝し、屢々應接酬唱す。十四年建仁寺に歸りて堆雲軒に住す。尋いで建仁寺に秉拂說法す。初め北山眞如寺に住し、次いで五山西堂位に昇り、後、建仁寺に住す。明治維新の際は勤王の大義を首唱し、大原重德と時事に參預し、勤王の士と往來せり。明治九年鳴瀧妙光寺に寂す。壽五十三。著作、竹堂集數卷。辛丑隣盟一卷。杞憂菴五十八詩、梔花百絕あり。

ジクウ　自空　一九八九 二〇七二　〔時宗〕藤澤清淨光寺第六代なり。自空、元と師阿と號す。渡般の弟子なり。永德元年二月備後尾道常稱寺に於て賦算五十三、遊行七年、嘉慶元年清淨光寺に住し、獨住三十六年、時に寺宇回祿の災に罹り、一百坪の堂宇を再建す應永十九年三月十一日寂す。壽八十四。戒臘二十九。（遊行歷代譜、遊行歷代圖）

シクハウ　志晃　二三二二 二三九〇　〔天台宗〕近江園城寺慶恩院第四世なり。志晃生緣を詳にせす。園城寺の慶恩院に住し、常に好んで古書舊記を搜索す。長吏の命を受けて寺門傳記補錄を撰し、園城寺の歷史事實を編成す。享保十五年六月四日寂す。壽六十九。著作、寺門傳記補錄二十卷あり。

ジクン　慈薰　二四九四 二五六七　〔天台宗〕武藏喜多院の住僧なり。慈薰、幼名は千代丸、字は圓乘房、裸堂と號し、別に荷山子、金翅道人、仙州、星野山人と號す。姓は櫻木谷氏、江戸下谷の人眞宗高田派南松寺の僧、淳實の第二子なり。その先は松平讚岐守の家臣千葉氏に出づ。母は正木氏、天保五年二月十日に生る。幼にして穎悟強記、資性頗る硬直、九歲にして東叡山壽昌院慈善に就いて得度し、次いで

櫻木谷慈薰師

山内勸學講院講師廣照に學ぶ。弘化二年三月考俊に隨ひて四度の秘法を修し、翌年講院を辭して一山の僧次に加へらる。法叔慈明に就いて法議を習ひ、嘉永元年十五歳にして山内淨名律院慧澄の門に入り、數年の間教觀の大旨に通ず。進んで内外の群籍を涉獵す。嘉永六年慈善寂するに及び、比叡山に登りて諸學匠に見え、尋いで信濃戸隱に到り慈谿に謁して實修練行すること三年、安政四年五月辭して江戸に歸り、再び慧澄の門に入り小乘三藏の義を學ぶ。文久三年比叡山無量院を董し、次いで大寶に唯識を學ぶ。又、曾て大沼枕山に學べり。その學儕輩の推す所となり、居常之を凌ぐ傾あり。母書を寄せて、之を警めたり。是に於いて大に感悟し、其書を裝幀し壁間に掲げて箴とせり。明治維新、神佛分離排佛毀釋の事あるや、慨然神佛一致の旨を論じて挽回する所あらんとし幾許もなく山を下りて近江東南寺に移る。明治六年講究所議事となり、七年編輯專任となつて、少講義に補せらる。八年台門初歩及び布教論を著し、九年講究課詰となりて權大講義に進み、講究課となる。十三年座主の命に依りて大藏經縮刷の校合員となりて東上し、同年九月その母卒す。十八年權大僧都に補せられて、地方講師を命ぜられ、二十年三月大僧都に進む。四月東叡山大衆の請に應じて寛永寺に講筵を開き天台四教儀集註、十不二門指要鈔、護法論を講貫し、十月陸中毛越寺に轉じ、次いで權僧正に補せらる。二十三年座主の命に依り、滋賀院殿閣にて指要鈔、妙宗鈔、護法論を講貫して歸東し、次いで僧正に進み、大學林支校長となりて赴任す。二十五年三月校舍移轉改築の議起り、辭して根津に僑居して大道學館に講授す。十一月再び大學林支校長となる。二十八年望擬講に補せられ、二十九年權大僧正に補せらる。同年淨土宗學本校教授及び同高等學院講師の囑托に應じ、十一月仙波喜多院に轉住し、大學校長の職を辭す。三十三年大僧正に補せらる。偶々田中弘之東亞佛教會を組織せんとするや、釋雲照、渡邊南隱の二師と共に發起となり、東京市街を托鉢して淨財を集むること數年、之を同會の資に充つ。三十三年六月比叡山慈本の著一實神道記出版委員長となりて、之を刻し之を天覽に供せり。三十四年七月座主より國師の德號を贈らる。是より先き喜多院の興復を畫し境内一萬餘坪の下戻を得各堂宇の大營繕を完成せり。四十年二月二十七日寂す。壽七十四。臘六十六。著作、台門初歩、布教論、古文孝經國字疏護法論國字疏、裸堂國師遺稿一冊あり。(裸堂國師傳、裸堂國師遺稿)

シケイ 志稽 二〇六〇 二一三五 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。志稽、字は原古と云ふ三條叟と號す。俗姓は細川氏、生國詳ならず。應永七年に生る。相國寺簡翁志敬に就いて得度しその法を嗣ぐ。曾て奈良元興寺に遊びて法相を傳へ、晩に東密を學べり。等持寺相國寺に歷住し、丹波德溪軒に住す。後、軒を相國寺内に移し、幾もなく阿波桂林寺に移り、文明七年三月十五日同寺に寂す。壽七十四。著作、大施餓鬼集類分解一卷、心經秘鍵鈔、若干卷あり。

シケン 子建 二一四一 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。子建、字は字說、鄉貫詳ならず。畫を能くし、牧溪を慕ふと云ふ。文明十三年二月廿五日寂す。壽缺く。(京華集、本朝畫史、相

書備考）

シケン　子建　ジユイン壽寅を見よ、

ジセツ　字說　シケン子建を見よ、

シダウ　志道　ジユンゲイ順藝を見よ、

ジツイウ　實祐　（一九九二）〔　〕大和藥師院の住僧なり。實祐生國氏族共に詳ならず。今の藥師院氏の祖なり。法眼に叙せらる。元弘元年八月二十五日聖尊が後醍醐天皇を東南院に迎へ奉りし時、寛寶と共に使節として木津石地藏の邊に到り、寛寶は前驅となり、實祐は手勢二百人を以て後陣となり、前後を護衞しつゝ、東南院に迎へ奉り、二十六日天皇夜に紛れて山城鷲峰山に入らせ給ふ時、又、聖尊と共に手勢を率ゐて守護し奉り。笠置行幸の後、天皇より旗印に菊花の御紋を賞賜せらる。寂年及壽缺く。（大和人物志）

シブカハエイシヨウ　澁川榮承　ジユンダウ順道を見よ。

シフゲウ　集堯　二一四三／二二三四　〔臨濟宗〕京都相國寺第九十一代なり。集堯、字は仁集、別に睡足又は雲間野衲と號す。鄉貫詳ならず。幼にして相國寺瑞春菴に投じて、龜泉集證に學び長じて京畿の諸老に參ず。歸りて集證の法嗣となる。曾て播磨金華山法雲寺赤松山寶林寺等に住す。天文十三年十二月相國寺に董し、雲泉軒を創して樂隱の地となす。十六年二月南禪寺に陞る。永祿二年鹿苑院に住して、僧事を錄すること十四年、天正二年七月雲泉軒に退休し、常に鼓叔、策彥と交る。天正二年七月二十八日寂す。壽九十一。塔を雲泉と云ふ。著作、縷氷集四冊、（相國寺住持籍、萬山編年精要）

シフシン　集箴　二一四七……　〔臨濟宗〕京都天龍寺第百四十六代なり。集箴、字は翁之、別に懶菴と號す。俗姓は織田氏、生國詳ならず。幼にして相國寺季瓊眞蘂の門に入り、長じて雲頂院に住す。曾て天龍寺を董す。季瓊に繼いで蔭涼の職にあること數年、寛正六年十月將軍義政東山の惠雲院（今の銀閣寺）を以て山莊の地と定むるに與りて力あり。長享元年十一月十六日寂す。壽缺く。（蔭涼軒日記、天龍寺住持籍、扶桑五山記）

シフシヨウ　集證　二一五三……　〔臨濟宗〕京都天龍寺第百五十一代なり。集證、字は龜泉、別に松泉主人又は松岳と號す。俗姓は後藤氏赤松の家人なり。早歲にして相國寺に入り、季瓊眞蘂に參請し、後、その法を嗣ぐ。相國寺雲頂院に住す。後、相國寺中に瑞春菴を創して學徒を敎ふ。益之集箴に繼いで蔭涼軒の職にあること多年、曾て天龍寺を董し、幾もなく瑞春菴に歸る。明應二年九月二十七日寂す。壽缺く。著作、龜泉日錄、（蔭涼軒日記の一部）松泉集あり。（蔭涼軒日記、萬山編年精要、鹿苑僧錄歷代記）

シマダバンコン　嶋田蕃根　バンコン蕃根を見よ。

シマヂモクライ　嶋地默雷　モクライ默雷を見よ。

シンカイ　眞海　一八六六／一九三七　〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり。眞海、鄉貫詳ならず。蓮華院賢深の弟子なり。入宋して宋に住ること數年、畫を研究す。三寶院の山水屛風、並に十二天屛風はその筆なりと云ふ。建治三年九月六日寂す。壽七十二。（密宗血脈抄、古書備考）

シンキヤウ　信鏡　二一九四……　〔臨濟宗〕京都東福寺第百九十

六代なり。信鏡、字は湖月、別に籛花と號し、又、楠溪、或は豐阜の號あり。郷貫詳ならず、幼にして出家し、京都東福寺商森信佐に就て參請し、その印可を受く。後、塔頭大慈院に住し、永正十四年幕命を以て東福寺を董し、幾もなく大慈院に靖退す。居常文事を樂しみ、古文眞寶を講授す。天文三年十二月十六日寂す。壽缺く。著作、湖鏡集あり。（五山文學小史）〔再錄〕

シンゲ　心華　ゲンテイ元棣を見よ、

シンケイ　眞敬　二三〇九—二三六六　〔法相宗〕大和興福寺一乘院の門主なり。眞敬、初めの名は信敬と云ふ。字は正覺、一乘院宮と號す。俗名は常賢、登美宮と稱す。後水尾天皇第二十六の皇子なり。母は贈左大臣基音の女、幼にして出家し、法相の學を究む。又黄檗の隱元及び高泉に就いて禪要を問ひ、延寶三年夏高泉より拂子一枝偈一首を付せらる。親王は學德兼備はり、殊に書畫を善くし、畫は狩野常信に學び給へりと云ふ。寶永三年七月六日寂す。壽五十八。三菩提院と號す。（高泉禪師語錄、門跡傳、大和人物志、古壽備考）

シンケウ　眞教　二四六四—二五四二　〔融通念佛宗〕京都大念佛寺第五十四代なり。眞教、字は慈嶺、三河碧海郡棚尾村の人なり。大樹寺良聞に從つて得度す。諸山に經歷し内外の學に達す。特に教相に精しく、明治初年東京大教院に就職す。六年一月大念佛寺の主となる。是より先き同五年九月華嚴宗以下五宗は廢宗となり、他に附屬せしめらる。本宗もその一となりて淨土宗に屬せられしが、七年再び獨立せり。十三年十一月二十三日寂す。壽七十七。（融通念佛宗略史）

シンザン　深山　セイコ正虎を見よ。

シンズイ　眞蘂　二〇六一—二一二九　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。眞蘂字は季瓊、雲澤と號す別に松泉と號す。俗姓は上月氏、生國詳ならず。幼にして京都相國寺雲頂院に入りて、叔英宗播に師事しその法を嗣ぐ。嘉吉元年六月義教、赤松氏の亭に赴き滿祐の爲めに殺さる。眞蘂夜半その邸に趣り、亡骸を鹿苑寺に送り、又、等持院に就いて荼毘の儀を行へりと云ふ。寛正三年七月將軍義政、鹿苑院の龍岡、等持院の笠華、壽德院の瑞溪に命じて高倉御所を建てしむるや亭子の名晴月、淨玉等の額名を獻ず。五年職を法弟益之集箴に讓りて雲頂院に歸り、方丈を紫藤と名け、室を安樂窩と曰ひ、書院を鷺雪と曰ひ、亭を無双と稱し、又、別に一堂を構へて觀音像を安じて水月道場と曰ひ、更にこれを畫いて禪廬圖といふ。後、天龍、相國の兩刹に住し、歸りて又、雲頂院に老ゆ。文明元年八月十一日寂す。壽六十九。著作、季瓊日錄あり。（蔭凉軒日記、梅花無盡藏、相國寺住持籍、扶桑五山記）

シンリン　尋尊　二〇九〇—二一六八　〔法相宗〕大和興福寺大乘院の門主なり。尋尊は一條兼良の子。永享二年八月に生る。同十二年に得度し、享德二年少僧都となり、三年大僧都に進み、四年僧正に任ず。康正二年二月春日社興福寺別當、長谷寺別當、橘寺別當、藥師寺別當に補せられ、三年六月大僧正に任ぜらる。長祿三年五月修理目代任料のことに就きて一乘院教玄と確執し、越智家榮その中間に立ちて斡旋せしかば、幕府諭して之を和解し、家榮修理目代任料の殘分を大乘院に納めて事なきを得たり。この頃畠山政長一族義就と不和なり。大

和にては筒井、箸尾は政長に黨し、越智、古市等は義就に黨し、互に相鬩ぎしが、家榮箸尾その采地佐味を占領せしかば六月幕府大乘院をして家榮に諭してこれを還付せしめたり。寛正二年一月幕府大乘院、一乘院等に命じて、大和の民を發して畠山政長を助けて義就の黨を討たしめたり。同年筒井順永の部下小林某、福智堂領九條庄を冒占せしかば、十一月權大納言日野勝光尋尊をしてこれを還付せしめたり。寛正六年九月廿二日征夷大將軍足利義政春日社に詣し、一乘院及び大乘院に詣づ。尋尊小袖五重、甲冑一領、劍一振、鴾毛馬一頭盃、香合、高檀紙十帖を獻じたり。應仁元年十二月興福寺法務に任ぜらる。文明二年三月、日尊といふもの、故小倉皇子の裔某を奉じて兵を擧ぐ。畠山政長義就の爭亂に加へ、延きて天下の大亂となり、四月後花園法皇、院宣を聖護院准后道興に下して、熊野本宮、新宮、及那智山の僧徒の故小倉皇子の裔某に應ぜざるを賞し、且つ軍功を勵まし給ふ。六月七大寺に勅して干戈不定を祈らしめ、又命を東大寺、妙樂寺等に傳へて南朝の遺黨を討せしめ給ひしに由り、奈良附近の兵士の南北に往復する者多かりしかば、七月尋尊古市家則等に命じて兵士の奈良に入る者を防がしめたり、文明三年八月尋尊釜口の長岳寺が寛正六年將軍義政の奈良に來りし時に課せし錢を納れざるを以て、十市遠清に命じて督責せしめたり。遠清兵を發してその房舍を毀ちしかば、僧徒懼れて錢を納れて罪を謝せり。文明三年十二月幕府尋尊及教玄等に命じて越智家榮をうたしめたり。家榮は西軍の義就に應じて、軍兵を宇智郡に入れたり。この地は同年九月大乘院の本寺領の如く知行すべきよし一決せる地なり。文明五年八月成身院順宣、興善院尊舜筒井順永と計り、妙樂寺をして興福寺領萩原莊代官職を管せしめたり。學徒服せず、四日その巨魁を追ふ。尋尊、教玄等調和を計りしも諧はず、尋で又十人を逐ふ。文明七年四月二十日尋尊書を大内政弘に遣り、春日社古河莊を還付せんことを請ひしかば、八月政弘之を還へす。永正五年五月寂す。壽七十九。應仁の亂、父一條禪閤兼良の記錄を大乘院に保管してその兵燹を免れしめ、又自ら見聞せる所を記して遺したるものあり。著作大乘院日記目錄、諸寺別當座主次第等あり。(大乘院寺社雜事記、大和人物志)

シンドウ　眞童　クワウクワン廣貫を見よ、

ジヤウウンバウ　淨雲房　クハンシヤウ寛昌を見よ、

ジヤウカウ　淨康　インカウ胤康を見よ、

シヤウカク　正覺　シンケイ眞敬を見よ、

シヤウギヨク　清玉　二二〇三―二二四五　(淨土宗)山城阿彌陀寺の僧なり。清玉は得蓮社生譽と號す。何許の人たるを知らず。天文十一年八月十日織田信秀の男信廣、(信長の庶兄)鳴海に陣し、偶々路上に一姙婦の劇だ疾苦せるを見、大に憫み、醫者に命じて藥を服せしめたるも、効なく遂に死す。更に醫者に命じ、腹を剖いて胎兒を出さしめ、其家に送りて鞠育せしむ。天文十六年兒六歳、初めて其事を聞いて悲痛し、出家して母の冥福を祈願せんとす。信廣その志を憐み、出家せしむ。是れ即ち清玉なり。初め建仁寺に入り、後芝藥師の阿彌陀寺に入り、成覺に師事し、遂に阿彌陀寺に住し、織田信長に寵遇

せらる。萬里小路惟房に謁し、信長の禁城修理等のことに關し、周旋したりと云ふ。尋いで阿彌陀寺を勅願所とせられ、信長大に堂舍の造營をなせり。天正十年六月二日の本能寺の變あり。清玉急難に赴き寺後の竹藪中にて、信長の遺臣より遺骸を乞ひ得て火葬し、法衣の袖に遺骨を裹みて逃れ去り。後明智光秀を問ひ、信長及び當時の死人を葬り、冥福を修せんとする意を告げ、信忠以下の屍を收めて葬る。豐臣秀吉阿彌陀寺に寺領三百石を寄附し、香華の資となさんとす、清玉固辭して受けず。秀吉悅ばず、數〻人を遣し說かしむるも竟に命に從はざりきと云ふ。天正十三年九月十五日寂す。壽四十四なり。（阿彌陀寺由緒、阿彌陀寺過去帳、清玉上人傳記）

ジヤウクハウ　淨光 二四四五……〔黃檗宗〕肥前長崎紫雲院の禪僧なり。淨光、字は海眼、鶴亭と號す。聖福寺岳宗の法嗣にして畫を熊斐に學ぶ。灑落にして潤澤あり、自ら一家をなす。後紫雲院に住す。天明五年十二月江戶に寂す。壽缺く。（長崎畫人傳、古畫備考）

シヤウジユン　詳洵 ……二一四二……〔臨濟宗〕京都南禪寺第百九十八代なり。詳洵、字は月泉、鄕貫詳ならず。幼にして出家し、江月和に就いて進具嗣法す。三聖寺に住し、享德四年八月嵯峨天龍寺に移り、次に東福寺に轉ず。寬正五年十二月南禪寺に陞住し、後又、東福寺に歸る。文明十四年三月二十六日寂す。著作、月泉錄一卷。（蔭涼軒日記、扶桑五山記、）

シヤウツウニ　聖通尼 一九六九 二〇四八〔臨濟宗〕山城通玄寺の開山なり、聖通尼字は智泉と云ふ。四辻宮尊雅王の女、初め嫁して山城八幡善法寺了淸法印の夫人となり、中歲出家し、夢窓疎石を問ひ、疎石の命により松巖寺開山晦谷雲に參し、其法を嗣ぐ、後瑞雲山通玄寺を開く、大將軍義滿特に奏して尼山五山に列す。聖通禪餘工に命じ、每日佛像一軀を彫造せしめ、終身怠らず。廿四日地藏菩薩號一萬遍を誦す。至德二年寺內の曇華花に病を養ふ。嘉慶二年一月廿五日寂す。壽八十。（通玄寺誌）

ジヤウテン　淨典 二四八六 二五二九〔修驗道〕豐前英彥山の山伏なり。正應坊といひ、鷹羽氏なり。英彥山甘露明王院執當職をなる。同職政所坊有縣等と共に尊王攘夷の議を主唱し、文久三年一山盟約連署す。同年十一月小倉藩の英彥山を襲擊するに方り、同志と共に逮捕せられ、小倉八百屋町の獄舍に繫がれ、數〻糾問せらるも屈從せず。極口藩吏を罵詈す。慶應元年七月獄舍に於いて、同志政所坊（政所有縣四十六歲）、義俊坊（澁川榮承四十歲）本覺坊（宇都宮堯民四十七歲）、成圓坊（宇都宮有允三十七歲）等と共に殺さる。壽四十四なり。（維新史料、日子山義僧傳）

ジヤウニン　成忍（一八八四）〔眞言宗〕山城高山寺の僧なり。成忍、一に成恩に作る。惠日坊と號す。宅間法眼の實子なり。明惠上人の弟子となる。筆格能く宅間に似、專ら佛像に工みにして兼ねて雜畫を能くす。貞應三年四月唐本十六羅漢、幷びに阿難尊者を畫く。寂年及び壽缺く。（本朝畫史、明惠上人行狀、山城名勝志、古畫備考）

シヤウベン　政遍 二一九四 二二七四〔眞言宗〕高野山第二百十八世寺務檢校なり。政遍、字は宥俊、寶性院と號す。越中の人。前檢校增福院良運に就いて兩部灌頂に入り、小野廣澤諸流の淵源を究め、又、顯密孔老の學に通ず。豐臣秀吉及び秀忠等

の崇信を受け、又德川家康の寵遇を蒙る。慶長十一年五月寺務檢校に補せられ、在職四年家康より數々褒賞を賜はる。同十四年十一月職を辭す。同十七年五月駿府に召されて論義の證義となり、六月紀三井寺觀音堂落慶供養導師を勤む。同月東寺の寺務を監し、山科安祥寺を兼務し、その再興に任ず。同十九年二月又召されて論義に預る。同年四月二日安祥寺に寂す。壽八十一。(本光國師日記、駿府記、紀伊續風土記)

シヤウヨ　生與　シヤウギヨク清玉を見よ、

ジヤウレン　成蓮　二四九一 二五二四　(修驗道)豐前英彥山の山伏なり。成蓮は教觀坊と云ひ、藤山衞門と稱す。英彥山に住す。長南梁(梅外と號す)原田種信に就いて漢籍國典を學び、慨世憂國の志を抱けり。豪氣活潑、軀幹強壯にして日に健歩すると三十里、常に諸方に使命の勞をなす。文久三年一山長門藩に通じ、尊王攘夷の議を決するに方り、座主大僧正教有の意を受け、淨現坊(鬼谷嗔)と共に赤間關に至りて事情を偵察し、長門藩の志士と往來し、一山舉りて攘夷の先鋒とならんとする意を告ぐ。此時侍從中山忠光赤間關に下向せり。乃ち面謁してその意を告げ、且つ忠光を促して久留米に微行し、同藩の志士木村三郎柴山運平等の幽囚を解かんとす。尋いで教有の書を齎らし、良什坊(高根正也)祐玉坊(柏木民部)と共に三人長門藩に使し、奇兵隊の營に至りて隊長瀧彌太郎に面接し、且つ恰も攘夷の軍勢を犒はんが爲め下向せる監察使左少將正親町公董に面謁し、親しく天意のある所を拜承す。八月十八日京都變動の飛報に接し、衞門等三人夜中に馳せ還り、教有に復命す。是に於いて一山沸騰し、朝廷攘夷の議の斷行せられず、遂に變動を見るに至りたるは、全く幕府の專橫に出づるものとなし、大に奮慨し、日夜今後の方法を評議す。衞門等益々鬪く尊王攘夷の議を執る。再び教有の書を齎らし、良什坊祐玉坊と共に三人長門藩に使す。九月九日三田尻に着し、藩士佐久間佐兵衞に面接し、次いで同地の招賢閣に至り、三條實美等七卿に面謁し、京都變動の始末を聞き。更に藩士眞木和泉等と往來し、相互に時事を痛論す。遂に座主教有の京都に上り天氣を伺ふべきと、大に時宜を得たるを知り、衞門等三人九月二十四日三條實美の書を携へて英彥山に還りて具に復命す。遂に座主教有出發の期漸く迫り。忽ち小倉藩の聞く所となり、藩士二木求馬將となり、大砲二門銃隊五百人を率ゐ夜中山門より襲擊し、座主の家に侵入し、一山の大衆を逮捕す。執當政所坊(政所有緜)、正應坊(鷹羽淨典)奉行義俊坊(澁川榮承)及び良什坊(高根正也)等同夜逮捕せられ、後成圓坊(宇都宮有允)は熊本に逃れ、橋本坊(橋本有幸)は田代に逃れ、本覺坊(宇都宮堯珉)は日田に逃れ、各々その地に於いて逮捕せらる。此時衞門は恰も如藏坊(安達昇)、中坊(阿部豪一)淨現坊(鬼谷嗔)、嚴瑤坊(佐竹織江)、祐玉坊(柏木民部)、水口坊(水谷左門)と共に長門にあり、偶然にして危難を免かれたり。衞門等英彥山の急報を聞いて大に激昂し小倉藩の暴狀を罵詈す。長門藩の忠勇隊に編入せられ、專ら初志を貫徹せんとす。十一月長門藩の諸士の議に依り、衞門は嚴瑤坊(佐竹織江)と二人三田尻を出發して京都に向ひ、竊に京都の狀況を偵察し、且つ三條實美等の用品を收め携へ來らんとす。既にして京都に入り、諸卿の門を訪ひて音

信を通じ、用品を整理し、長櫃二棹に入れ、英彦山座主用物と書せる標札を附し、伏見に出で、將に大阪に下らんとす。然るに小倉藩の兵伏見にありて警衞し、一見大に怪み一行を糾問逮捕し、長櫃を沒收す。衞門は織江と共に京都六角の獄舍に投ぜらる。同囚に但馬生野銀山の敗士平野次郎等あり、相共に悲壯慷慨の談話をなす。元治元年七月二十日獄舍の吏數卒を指揮し、長槍を以て檻外より亂衝せしめたれば、同囚三十餘人、或は壁に攀じ、或は天井に飛び、長槍を避く。衞門等二人は從容として胸間を披き、長槍の鋭尖に刺され、兩眼を瞋らして死す。衞門三十四歲なり。（維新史料、日子山義僧傳）

シヤウオウバウ　正應坊　ジヤウテン淨典を見よ、

シヤクウンセウ　釋雲照　ウンセウ雲照を見よ、

ジヤクジユン　寂順　二四九八　二九六五　〔天台宗〕近江延曆寺第二百三十六世座主なり。寂順、幼名は富三郎、別に戀西子と號す姓は村田氏、中頃喜多氏を稱す舊松江藩士村田正道の第三男にして、淸水谷公正の猶子なる。天保九年七月二十六日に生る。九歲にして圓流寺孝順に投じ、

村田叔順師

幾くならず孝順寂せしかばその法嗣心海に事ふ。十歲出雲鰐淵寺に得度し、顯密の二教を稟く。安政五年二十歲鰐淵寺本覺坊の住職となり、元治二年松本坊に轉住す。文久元年藩主松平定安より香衣一領を賞與せらる。慶應二年征長の役、定安に召され、天守閣にて九字護身法を傳授し、且つ甲冑武器等を加持す。同年七月定安に侍して石見口の陣營に在り、晝夜五大明王護摩供を修す。同月軍凱旋して、寺祿二百石を加增せられ、金襴袈裟一領を受く。明治元年三月神佛判然の令下り、比叡山廢亡の危機に迫るや、實弟泰良と共に五月鰐淵寺を發して京都梶井宮邸比叡山出張所に着し、紹婦に面して神佛一體を論ぜる建言書の進達を請ひ、即日太政官に呈せらる。同年鰐淵寺の守護摩多羅神の神佛如何の議起るや、之を佛教に屬すべしと辨じ、二年再び起つて社寺奉行より東京神祇官に召喚せられしが、偶〻疾あり。泰良をして代らしめ、辯論勝利を得たり。五年三月教部省開設せられ、神佛教導職を置かる。召されて東京に上り、教導職十二級試補に補せられ、尋いで神佛合併大教院庶務課を勤む。同年僧侶の俗籍姓氏を定むべき達あり、依つて姓喜多を稱す。六年二月權小講義に補せられ、同年五月權大講義に補せらる。六月尾張、播磨、美作、因幡、出雲、備前、備中、四國、九州に派出して教導職を試驗し、且つ巡教す。七年一月再び播磨を巡教し、三月大講義に補せられ、六月比叡山蓮華王院住職に補せられ鰐淵寺松本坊を兼務す。同月以來滋賀縣下神佛合併中教院講究課勤務となり、八月東上、九月梶井三千院住職を命ぜられ、十月より京都府下神佛合併中教院講究課を勤務す。八年二月

神佛合併大教院分離論起り、京都府下神道各宗教導職總代として東上し、滯京中、天台宗執事を兼ぬ。三月權少教正に補せらる。同年十二月宮門跡の廢絶を憂慮して歎願する所あり九年六月宮內省より特に舊門跡寺院に永續の年祿を下賜せらる。同年七月京都妙法院住職を命ぜられて、第四十二世の門跡となり、十月少教正に補せらる。十二月童蒙必用作文初步の版權を得、十年二月同書を天皇、皇太后、皇后へ獻上す。同年四月原籍に復歸して姓村田を稱す。九月京都府より泉涌寺改革事務取扱を囑托せられ、同月比叡山延曆寺維持に付き二三條、岩倉兩大臣に建言書を呈出す。十一年二月京都府療病院資金獻納の賞として金盃を下賜せられ、十月叡道の懇請に依り、大隈重信勅を奉じて比叡山に登る。次いでその命に依りて同山の保存必用堂宇の取調書を差出す。十二月延曆寺總代として東上し、淺草傳法院に滯在して翌年十月に至る。この間滋賀院號復歸寺祿御下賜及び延曆寺法華會廣學竪義再興を歎願す。十二年四月大隈重信も亦建言し、前門跡の例に準じて御下賜金を請へり。時に明治四年以來信濃善光寺別當大勸進と、淨土宗大本願との間に、大葛藤を生じて解けず。依つてこの年六月內務省より善光寺大勸進事務取扱兼務を命ぜられて赴任し、兩者調停の主旨を懇諭して、七月歸京復命せり。又、明治二年八月菊桐御紋章の嚴制ありて以來諸寺院の不便少からざりしが、この年十月由緒ある寺院の佛殿莊嚴に關する在來のものに限りて之を使用せんことを歎願し。八月之を許さる。九月延曆寺法華會の復興を許され、同月歸山恰も同會五年目の時期に會せしを以て、維新已後始めて公然たる大會を執行し、勅使として滋賀縣令籠手田安定臨饗せり。十三年二月延曆寺代理として東上し、五月滋賀院保舊年米二百五十石を下賜せらる。同月歸山す。六月天台宗大會議を東京傳法院に開かれて議長に選ばれ、宗制の改正を議す。同月天皇京都行幸の際、その懇願に依りて妙法院へ臨御あらせらるべき內命を蒙り、同月議會閉場の後、直に歸院して大修繕を加ふ。七月天皇行幸せられ、寶物六點を獻上せり。十一月中教正に補せらる。十四年二月善光寺大勸進住職を命ぜられ八月赴任して、淨土宗大本願と協議の上、和協一致の條約書を地方官及び內務省に進達して、十月歸西す。同月籠手田安定等久邇宮を會長として崇叡會を設立し、皇族を始め寄附勸進の爲め、延曆寺座主代理として東上せしめらる。十五年二月教導職試補を廢して度牒の舊制に復せんことを建議し、二月新宮城御建築の安鎭法を行はんことと、及び各本山へ公債證書御下賜のことを建議す。十月泉涌寺炎上し、同月同寺再興の歎願書を各親王に呈す。十二月宮內省より延曆寺へ千圓を下賜せらる。十六年一月比叡山の維新の際に於ける勤王の事實を拔書して右大臣岩倉具視に呈出し、同月佐伯旭雅と共に泉涌開山俊芿に大師號宣下を奏請し、泉涌寺執事玄猷と共に東上す。後、月輪大師の諡號を賜はる。同月內務省より延曆寺に貳千圓を下賜せらる。五月岩倉具視、京都桂宮に疾を養ふや、比叡山維持法に就きて請ふ所あり。七月妙法院門室保續の爲め、南叡會を設立し、後、櫻井能監を會長とし、親王を總裁に戴けり。十七年七月旭雅と共に故契沖の功勞を彰表して贈位幷に祭資料御下賜のことを請ふ。八月太政官より教導

職を廢して、敎宗派の取締を神佛各管長に委任せらる。時に寂順、權大僧正に補せられ、次いで大僧正に進む。十一月各門主の連署を得て、東叡山日光山兩輪王寺宮へ年金の御下賜を歎願し、十八年四月妙法院外六ヶ寺門跡號の復舊を許さる十月天台座主大杉覺寶の代理として東京宗務廳請の委任を受け、淺草傳法院に滯在して二十六年に及べり。二十年三月各宗協同普通學校設立の事を各宗管長に謀り、曹洞宗瀧谷琢宗日蓮宗新井日薩の贊成を得て、麻布笄町に普通學校を新設し、二十一年十一月開校式を擧ぐ。以來三間間にして數百名の卒業生を出しゝが、琢宗、日薩二師の寂するに及び、廢校となれり。二十年十二月善光寺大本願より再び出訴し、同月赴山して調和せしむれども成らず。二十一年三月諍論の仲裁を長野縣知事木梨精一郎に請ひ、城山館に會して調和談をなす。四月延曆寺に一宗の會議を開くや、座主に代りて議事を總理し、宗務廳及び大學林を比叡山に置かんことを議定す。乃ち學校の敷地を定めて工事に着手せしめ、七月宗務廳を復歸し、九月東京傳法院を宗務支廳とし、支廳長に任ぜらる。十二月、翌二十二年一月より門跡妙法院以下三十箇寺院住職の拜賀を許さる。是れ寂順の二十年春以來宮內內務の兩省に建言上請せしものなり。二十二年一月參內拜賀す。七月淨土宗大本願との諍論敗訴の審判に對して、控訴の議を辯護士に委任す。十月延曆寺根本中堂修繕に付き五百圓を下賜せらる。十二月歸西して各宗協同會議を主張し、二十三年六月之を築地本願寺に開會し、その議長となる。爾來十餘年間年々開會せらる。九月善光寺大本願に對する控訴は大勸進の勝訴となる。二十四年五月魯國皇太子大津にて遭難あるに際し。六月宮內大臣に建言して陳謝大使に加へられんことを請ふ。六月宮內省より西塔轉法輪堂及び横川中堂へ五百圓を下賜せらる。六月善光寺兩宗寺務分掌心得に對する伺書を內務大臣に呈出し、二十六年三月各宗派に對する改革意見六條を內務大臣に建議し、五月善光寺兩宗仲裁の協議成りしを以て、仲裁判依賴書を品川彌二郎に提出し、七月三十一日彌次郎は仲裁判決正本を作り、大本願大勸進永久の調和を成立し、その記念として古畫阿彌陀如來の像一軸を善光寺に奉納せり。是に於いて二十餘年來の葛藤は全く解け、その尊影を揭げて大法會を修し、爾來年々この日を記念日として記念法會を修するに至れり。九月青蓮院門跡殿宇燒失の報を得て院主に代りて宮內省に出頭して陳謝し、久邇宮に再建の歎願をなせり。十一月佛敎代表者を貴族院議員に選擧すべき旨を總理大臣に建議し、二十七年七月日清宣戰の大詔の下るや、清韓調和皇威振張の祈願として藥師護摩開闢を執行し、數萬の軍人守札を寄贈せり。九月天台眞言兩宗協議して廣島大本營に天機を奉伺して歸り、十一月京都洪濟會にて各宗派集會して軍隊布敎を決議して之を大本營に出願し、十二月葬祭布敎使派遣の儀を請ひ同月又、捕虜撫恤に付き請願し、遂に許可を得て、從軍僧及び軍隊慰問使を選定し、二十八年一月南禪寺にて各宗會議決定して之を請ふ。二月廣島陸軍墓地に各宗協同追悼會を執行し、二月吳鎭守府にても同樣に執行し、三月廣島大本營に天機を奉伺し、五月平和克復の大詔を發せらるゝ、又、登營して奉祝文を獻ぜり。十月圓頓戒壇院にて一乘菩薩比丘戒を受

く、二十九年六月天台座主に補せられ、七月延暦寺に晋山式を行ひ、同月宗務廳にて一宗の會議を開く。八月善光寺大勸進正住兼任を解き、同月皇朝天台史略の開板及び般舟三昧院再興のとを決し、十二月その工事に着手す。同月參內して皇朝天台史略を奉獻す。三十年一月般舟三昧院へ御尊牌遷遷の許可を得て、泉涌寺より御遷座をなしその式を行ひ、二月英照皇太后の靈柩を奉迎して、大喪に列し、中陰の祭典を修す四月天皇京都に御着輦あり、先づ大津に奉迎して、天機を奉伺し、宮內大臣へ般舟三昧院再建の歎願書を呈せり。九月五千圓を下賜せらる。三十三年五月暹羅皇帝より釋尊の遺骨を賜はるべしとの報あり、妙法院の新殿を以て佛骨奉安の假堂と定められ、六月帝國佛教會の名を日本大菩提會と改稱し、その理事長に推され、同月その趣意書を發布して創立式を行ひ、七月佛骨を奉迎せり。九月覺王殿建築の規模縮少の意見書を各宗管長に提出したれども行はれず。三十四年二月理事長を廢して會長を置き、又推選せらる。三十五年七月覺王殿建設地に關する衷情書を各宗管長に發し、八月各宗派會を開きて之を議したれども遂に決せず。十一月大菩提會會監會開設せられ、敷地を名古屋に決定せらる。寂順は京都敷地說を固持主張したれども容れられず。同月會長の職を辭す。三十六年一月暹羅國皇太子を七條に奉迎し、翌日妙法院に迎接す三十七年二月妙法院に五箇宮門主集會を催し、日露開戰の詔勅將に煥發せんとするを傳聞し密に相議し、十月衷曲肅啓册子を各宗派管長に提出して大菩提會會長在職中の責任を明にし、且つ各宗派會議を開催して、負債償還に關連せる善後策を議定せられんことを促せり。時に前田誠節釋等願は獄に下り、寂順亦債主の起訴に遭はんとせり。三十七年十月天台宗座主職を辭し、三十八年十月　日寂す。壽六十八。著作。童蒙必用作文初歩なり。（隨緣迹）

ジユイン　壽寅　二二四六 二二四一　〔臨濟宗〕京都眞如寺の禪僧なり。壽寅、字は子建、自ら是菴と號す。鄉貫詳ならず。默堂壽昭の法嗣にして、畫を能くす、眞如寺に住せり。天正九年正月四日寂す。壽九十六。（萬山編年精要）

シユウエン　宗淵　二四四五 二五一九　〔天台宗〕伊勢津西來寺の學僧なり。宗淵は竹圃房眞阿と號す。俗姓菅原氏。京都北野天滿宮の社僧光乘坊某の子なり。近江坂本の西教寺に入りて得度し、尋いで大原の普賢院に住す。文政八年九月四十歲にして伊勢の津の西來寺に入り、三十三代の住持となる。三十餘年の間同寺に在り、學問教化を事とす。法華經の校訂研究に力を用ゐ、著はすところ多し。安政六年八月二十八日寂す。壽七十四。著作。寶印集三冊。法華經考異二冊。梵漢法華品題一帖等あり。寶印の跋に曰はく、經曰我此法印、爲欲利益、孝阿縷板、拾伍施銀、參伯故請、勿爲奇翫、須同經籍、于時天保辛丑宗淵敬白、と。諸國古寺所藏の卍字印種子印一百十餘の印影を收め、來由を略說附記せるものなり。

シユウザン　宗山　トウキ等貴を見よ。

ジユケン　壽顯　二一六九　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり。壽顯、字は文總、鄉貫詳ならず。綿谷周瓞の法嗣なり。南禪寺に入り、鹿苑院に住し、再び左街大僧錄に任ず永正四年五月將軍義滿の一百年忌を鹿苑に營むや、壽顯その拈香を

なす。永正六年十二月二十六日寂す。壽缺く。（翰林胡盧集、鹿苑僧錄歷代記、萬山編年精要）

シユセン 守仙 二一五〇 二二一五 〔臨濟宗〕京都東福寺第二百七代なり。守仙、字は鼓叔、別に瓢庵と號す。姓缺く、信濃の人延德二年に生る。早歲にして京都東福寺白悅守懌に侍し、長じて諸方に參詳し、遂に守懌の法嗣となる。後、東福寺不二庵に住し、又、眞如寺に移る。天文七年五月東福寺を董し、住すること十年、天文十六年五月七日南禪寺の帖を賜はる。後東福寺の山內に善慧軒を創して第一世となり、薛いて能登崇壽寺近江惠雲寺等に移り、居ること數年にして又、善慧軒に歸る。弘治元年十月十二日寂す。壽六十六。著作、鐵酸餡集、猶如昨夢集あり。

ジユセン 壽戠 （二一九七） 〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百八十四代なり。壽戠、字は繼天、牧雲と號し、軒を皆春と云ふ鄉貫詳ならず。初め建仁寺一華院に投じ月舟壽桂に就いて剃髮稟具し、諸方に從游の後壽桂の法嗣となりて一華院に住す。天文六年十一月建仁寺を董す。聯句及び駢驪に巧みなり壽桂の抄せし錦繡段を編次し、駿河林際寺雪齋太原の問に對して宗門の要を論じて、雪繼問答を著す。寂年及び壽缺く。著作、前記の外柳西落葉、續錦繡段あり。〔再錄〕

ジユンエイ 順永 二〇八三 二一三六 〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。順永、又良舜と云ふ。箸尾光宣の弟なれど、嘉吉元年幕府に請ひて筒井家を承けたり。嘉吉二年兄光宣と共に順弘と河上關務代官職を爭ひて相鬪ひ之に勝つ。然れども幕府の處分に服せず。嘉吉三年九月經覺、幕府と謀りて光宣等を罪し、

河上關務を褫ひ、翌文安元年越智氏をして來り擊たしめしを順永、光宣と共に迎へ擊つて之に勝つ。幕府亦松田貞情等を遣して順永等を攻めしめしが勝たずして去れり。長祿三年幕府順永等の罪を釋してその采地を復す。翌寬正元年順永の冐占せる寺田の貢租を大乘院に納れしめらる。蓋し興福寺も亦順永の歸順を容れたるなり。初め順永遠智氏と不和なり。永享四年幕府の軍に從つて越智氏を討ち、後ち、兩畠山氏對立するに及びて、政長に黨し、應仁の亂亦東軍に屬し、屢〻義就の黨なる越智家榮等と戰ひたり。文明八年寂す。壽五十四。（大和人物志）

ジユンケイ 順慶 二二〇九 二二四四 〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。順慶初の名は藤勝、陽舜坊と稱す。姓は筒井氏、順昭の子なり。母は山田順貞の妹なり。天文十八年三月三日筒井城に生る。二歲にして父を喪ひ、五歲にして家を繼ぎ、永祿三年三月剃髮して陽舜坊順慶法師と稱す。長じて學を好み、唯識論に通じ、兼ねて神書儒學に達し、又和歌を善くす。弘治三年正親町天皇踐祚し給ふ。順慶人を遣して奉賀す。永祿三年御卽位あり、又人を遣して賀し奉り物を獻ず。この頃松永久秀は既に大和河內の堺なる信貴山に居城を構へ、更に奈良の南方多聞山に築き、東西相應じて勢威大に張る。筒井氏屢〻これと戰ふ。永祿八年順慶敗戰して筒井城を去り、布施城に入る。九年六月筒井城を復し、九月進んで奈良に入りて久秀の兵と戰ふ。十二年曩に久秀に陷れられたる十市城を復せんとして克たず。元龜以後又頻に久秀の黨と戰ひ、互に勝敗ありと雖も、未だ久秀に拮抗する能はず。蓋し永祿十一年織田

信長の西上以來、久秀は質を信長に入れてその後援あればなり。元龜二年、久秀信長に叛くに及びて順慶は信長に降り、又頻りに久秀の黨を伐ちしが、天正元年久秀再び信長に降るに及びて大和暫く小康を得たり。二年順慶信長の命によりて明智光秀の子を養ふ。四年大和守護原田直政の大阪に戰死するや、順慶代つて大和を管せり。當時、國内には尙ほ信長に心服せざる者ありしが、順慶間に居て、專ら調停に努力せり。五年久秀又叛するや、順慶は光秀等と共に河内片岡城を攻めてこれを拔き、來つて織田信忠の兵に會し久秀が居城信貴山に逼る。順慶地理に熟せるを以てこれが先鋒たり。十月十日信貴城陷落して松永氏こゝに至りて亡ぶ。天正八年十一月、瀧川一益、明智光秀、大和の檢地を終りて京都に歸るや、信長郡山城を順慶に附して大和一國を管せしめたり。既にして明智光秀信長を弑し、使を筒井に致し、啗はすに利を以てし、己の援をなさしめんとす。順慶諸將を會して向背を諮ふ、諸將皆曰ふ、三州(大和、河内、紀伊)を併有せんとの一擧にあり、速に明智を援けて大功を樹つべしと。老臣松倉獨りこれを否とす。順慶松倉の言を容れて、乃ち陽に來意を領して形勢を窺ふ。この時豐臣秀吉中國より歸りて光秀を伐たんとす。順慶使をその陣に遣りて秀吉に通ず。秀吉舊によりて順慶に大和一國を領せしむ。天正十二年八月十一日寂す。年三十六。(大和人物志)

ジユンゲイ 順藝 二四三五 二五〇七 〔眞宗〕越前丹生淨勝寺の住持なり。順藝は、字を志道と云ひ、丹山と號す。父は順慧と云ふ。性學を好み、博識にして最も佛學に精し。夙に一切經對校の大志を起し、京都に往いて建仁寺所藏の高麗版の大藏經に就いて校合すること三回、文政九年より天保七年に至り十一年を閱せり。この間明藏の闕けたるものを麗藏に就いて謄寫するもの凡そ五百餘卷、その苦辛想ふべし。殊に文雅の心深く、當時の大家賴山陽其他數名と交りその書齋を不如歸山房と稱し、山陽その記文を撰す。時に文政十二年八月なり。又覺如の遺墨消息を模寫し、之を石摺として有志に頒布す。蓋し覺如時代眞宗未だ盛んならず。禿筆の書多し、順藝當時の苦境を想到せしめんとして之を印施す。弘化四年寂す。壽七十三、著作、二願希決、金剛般若心經讀、言南無者講述、二門箸言、御傳歎啓、二種信心略說、眞宗行儀辯、美能里乃友等あり。(越前人物志)

ジユンケン 順賢 二二四四 …… 〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。順賢は筒井順尊の子なるべしと云ふ。永正二年越智氏等と和し、共に畠山の事に關知せざらんとせしが、赤澤朝經來り征するに及び、敗走して東山内に遁れ、永正中屢々恢復を圖りしも成らず。寂年及壽缺く。(大和人物志)

シユンゲン 俊源 (……) 〔天台宗〕播磨書寫山第三十四代の長吏なり。俊源、眞覺房と號す。播磨賀古郡の人、鷲尾經春の末裔なりと云ふ。初め西方院に住し、後、二階坊を建つ。書寫山の五重塔、講堂、食堂を再建し、餝西、余部の庄を寄せらる。書寫山の繁榮は大半俊源以來と云ふ。寂年及び壽缺く。(書寫山長吏記)

ジユンコウ 順興 二一九九 …… 〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。順興は筒井順尊の子なりと云ふ。初め畠山稙長に屬して、

畠山義英の屬將古市公胤、越智家全等と戰ひしが、永正十七年講和し、翌大永元年家全の女を娶る。當時筒井氏は成身院布施、箸尾、越智、吐田、萬財、檜原、十市、片岡、倶尸羅高田の諸氏と共に國刺衆と稱せられ、相並びて國務に參與せり。大永六年後柏原天皇崩ず。順興上京して悼み奉り、後奈良天皇踐祚の時順興又入京して賀し奉り物を獻ず。天文四年七月寂す。壽缺く。子女多し。長女は小田切春次、二女は飯田賴直、三女は家老森好之に嫁し、二男順國は慈明寺氏、三男順弘は福住氏を繼ぎ、末女は十市遠忠の妻となり、更に伯母の子を養ひて明山（秋山）直國の室たらしむ。これより筒井家の家門益〻盛にして、他日全國を統一せんとする勢隱然としてこゝに成れり。（大和人物志）

シユンサウ　春莊（二一六八）〔臨濟宗〕京都建仁寺の禪僧なり。春莊は字、諱を一椿と云ひ上字を脫せり。別に蒙菴と號す。鄕貫、師承詳ならず。幼にして建仁寺大龍菴に投じて剃髮し、長じて諸方に參詳し、夙に才名あり。生涯一疏をも製せず。時人言ふ「東山に二の遺憾あり、春莊に疏なく、常菴に陞座なし」と。永正五年春、赤松氏の請に應じて播磨寶林寺に住し、兼ねて法雲寺を領す。後、歸りて建仁寺大龍菴に住し、位、西堂に終ふ。寂年缺く。壽五十五。著作、蒙菴百首あり。明應八年九月天隱龍澤批點を加へて跋を書す。（五山文學小史）

ジユンシヤウ　順淸　ジユンテイ順貞を見よ、

シユンジヨウバウ　俊乘房　チユウゲン重源を見よ、

ジユンセイ　順盛（二一七七）〔法相宗〕大和成身院の僧なり。順盛は筒井順尊の弟なり。順尊若くして歿し、その子順賢なほ幼なりしかば、順盛專ら筒井黨を率ゐて、越智家榮等と戰ひ、後ち越智と和して、共に赤澤朝經と戰ひ、敗走し、永正十三年更に越智、古市の軍と戰ひて又敗走せり。十四年幕府に請ひて越智古市を伐たんとし、幕命未だ至るに及ばずして、兵を率ゐて大和に入りしかば、將軍義植その專恣を怒りて順盛を逐はしめたり。寂年及壽缺く。（大和人物志）

ジユンセウ　順昭（二二一〇）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。順昭は榮舜坊と稱す。筒井順興の長男にして母は山田城主民部順貞の妹なり。資性勇武にして善く衆を懷け、領地日に大にして本領麾下合せて二十萬石を領するに至れりと云ふ。天文五年二月、後奈良天皇の御即位あり、順昭上京拜賀して物を獻ず。十年八月大風あり、禁裡の御門御廊を始め多く轉倒す。順昭數百人を率ゐて馳せ上りて守護に任じ、又物を獻ず、十一年三月劍馬を幕府に獻じて襲封を謝す。この時に當り、三好の執權に松永久秀あり、大和の豪族を征服して全國を併呑せんとする志あり、先づ筒井を亡さんとす。順昭之を聞きて士卒を練り、糧食を備へ、天文十三年正月奈良北小路の城主飯田直基と和を講じ、遂にその妹を直基の子賴直に嫁し、以て久秀の聲威を殺ぎたり。天文十八年俄に比叡山に隱れ、家督をして幼兒藤勝（後ち順慶と改む）を輔けて後事を處せしめ、翌十九年寂す。壽缺く。順昭子女多し。長女は慈明寺順國、二女は福住順弘、四女は箸尾高春、五女は片岡春利、六女は山田順淸の室となれり。又姪を養ひて小和泉秀元に妻はす。（大和人物志）

ジユンソウ 潤叟　ブンセン文瑄を見よ、

ジユンダウ 順道 二四八六/二五二五 〔修驗道〕豐前英彥山の山伏なり。順道義俊坊といひ、澁川氏、榮承と稱す。英彥山甘露明王院の奉行職をなす。天性沈毅英邁、能く事を斷じ、一山の衆望を負へり。文久三年八月朝廷攘夷の議の決せらるゝよしを聞いて大に喜び、一山の大衆と共に天下の形勢を論じ、座主大僧正教有を助け、尊王攘夷を唱ふ。然るに後攘夷の議の一變するを聞き教有京都に上り、天氣を伺はんとするに方り、良什坊（高根正也）等と相從ひ、將に出發せんとし、十一月十一日の夜小倉藩吏に捕はれ、遂に小倉八百屋町の獄舍に繫がれ大に糾問せらる。藩吏を罵詈して曰はく、我等勅命を奉じて國難に斃るゝを知る。幕府に阿諛して國を賣り、膝を屈して生を謀るを知らず。願くは速に我等の首を刎ねよ。然らずば復問ふ勿れ、と。亂打せられて肉爛れ膚靡し、鮮血淋漓たるに至れり。獄舍の中に在り白衣の袖に血書したる詩あり。曰はく、忠臣必出孝子門、忠孝以報天地恩、朝聞道夕死不悔、況以忠孝傳子孫、欲向中原唱勤王、顚沛誤陷樊籠裏、有父有母有妻兒、父母妻兒在舊里、日歸曰歸猶未歸、其雨其風朝日輝、其耶命耶時耶勢、任他三十九年非、と。慶應元年七月藩吏の爲め同志數人と共に獄舍に於いて慘殺せらる。壽四十なり。（維新史料、日子山義僧傳）

シユンタク 春澤　エイオン永恩を見よ。

ジユンテイ 順貞 二二三三…… 大和の佛教信者なり。順貞一に順清と云ふ字は道安、姓は山田氏、民部と稱す。筒井氏の一族にして。山邊郡山田城主なり。薙髮して道安と號す。性畫を好み、初め周文雪舟の畫風を慕ひ、後宋畫の風を慕ひて、その意を得たり。又彫刻その他の技藝にも優る。奈良興福寺西堂中に、鳧鐘をうつ小僧の像ありしを賊の爲に盜み去られたるに、道安重ねてこれを刻せりと云ふ。永祿十年十月十日大佛殿松永久秀の兵火にかゝり、大佛の首落ちしが、道安術を良工に教へてこれをつがしめ、永祿十二年八月願主となりて大佛の螺髮を鑄たりと云ふ。天正元年十月二十一日寂す。壽缺く。（南都大佛供養記、畫工略傳、大和人物志）

シユンオウ 舜應　ギデン宜田を見よ、

シユンワ 春和　ケイギン啓誾を見よ、

シヨウク 證救 一九二〇…… 〔臨濟宗〕京都建仁寺第八世なり。證救、字は濟翁、別號功德房。鄉貫詳ならず。天菴源祐（榮西の嗣）の法を嗣ぐ。八坂の法觀寺に住して中興祖となり、仁治元年改めて禪寺となす。後、建仁寺に住す。文應元年八月十七日寂す。壽缺く。（法觀雜記、東山歷代、建仁寺住持位次簿）

シヨウカク 證覺 （……）〔……〕阿波海部與願寺の住僧なり。證覺、鄉貫詳ならず。少うして京都に遊び、池大雅に從ひて畫及び書を學ぶ。遲鈍なれども七十歲に至るまで苦學して厭はず、故に頗る筆法を存すと云ふ。（畫乘要略、古畫備考）

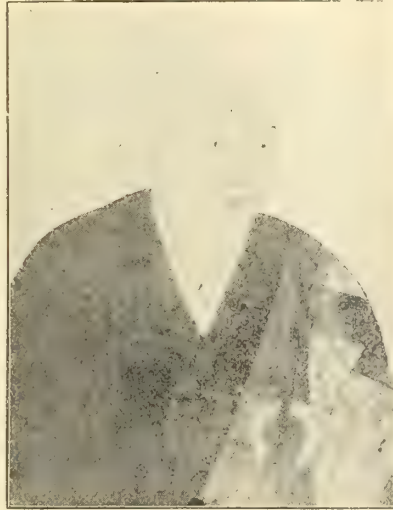
シヨウグワツバウ 證月房　ケイセイ慶政を見よ、

シヨウシユン 承峻 二五〇一/二五六九 〔臨濟宗〕京都相國寺第百五十一代なり。承峻、字は東嶽、姓は中原氏京都の人なり。十二歲にして相國寺荻野獨園の弟子となり。十八歲名古屋黑田漢學塾に入る。二十三歲九州の九峰に參じ、次いで備前の義

山に學ぶ。後、再び獨園に參ず。明治二十八年相國寺派の管長となりて同寺に住し、幷に大光明寺住職を兼ねて常に同寺に起臥す。明治四十二年十月十七日寂す。壽六十九。

シヨウダ　承兌　シヨウタイ承兌を見よ、

シヨウタイ　承兌　（二二〇八／二二六七）〔臨濟宗〕京都相國寺第九十二代なり。承兌、西笑と稱す。鄕貫詳ならず。永祿二年十二歲にして仁如集堯に就きて學び、翌年元旦初めて試筆の詩を賦して、集堯より褒奬せらる。後、夢窓派中華舜の法嗣となり德川家康より鹿苑院僧錄獨住の命を受く。天正中豐臣秀吉の命を受けて京都大佛の供養導師となり、天正十二年二月京都相國寺に住す。十七年四月南禪寺の帖を賜はりたれども住せず。同年六月紫衣の台帖を賜はる。文祿三年八月秀吉伏見に大光明寺を建立するや、又、之を賜はる。慶長元年九月秀吉に召されて肥前名護屋に赴きて明使の國書を讀み、二年二月、伏見學問所の記を草し、同年八月明國の復書を草す。九月又、命を受けて京都大佛前にて、征韓役戰死者追弔の大施餓鬼を執行す。同年十月家康より宋板の太平御覽を賜はり、秀吉より虛堂の墨蹟及び茶具を賜はる。

西笑和尚

家康の朝鮮と和を講ずるに當りては、屢々其議に參與し、又其命を受けて外國航通の朱印を司れり。五年二月家康の命に依りて貞觀政要の跋を作り、同年四月關ヶ原役の起らんとするに當りては、嘗て直江兼續と親交あるを以て家康の旨を承けて、之に書を贈れり。又、數々宮中に召されて御府の群書を拜覽せり。九年細川忠興の爲に鐘銘を書す。十年三月家康の命に依りて東鑑の跋を作り、四月周易の跋を作る。十月秀頼相國寺の法堂を建てゝ成り慶讃上堂す。十二年十二月二十七日寂す。壽六十。日記日用集三冊あり。（義演准后日記、慶長日件錄、梵舜日記、鹿苑日錄、當代記、武德編年集成、南禪寺住持籍、諸五山十刹住持籍、承兌和尚事蹟、大日本史料）

シヨウダウ　承道　リンズイ琳瑞を見よ、

ジヨウミヤウ　乘明　（一九九三）〔眞言宗〕播磨書寫山第五十八代の長吏なり。乘明、增上坊と號す。鄕貫詳らず。密學に達して靈驗あり。元弘三年五月後醍醐天皇行幸の時、天皇に謁し、律師に補せらる。寂年及び壽缺く。（書寫山長吏記）

ジリウ　慈隆　（二四七五／二五三二）〔天台宗〕下野淨土院の住僧なり。慈隆、字は洛山、靜存菴と號す。俗姓は鍋掛川氏、下野日光の人なり。父、名は東作、後、鶴翁と稱す。その先は陸奧の人なりしが、後、下野に移り醫を業とせり。慈隆は文化十二年を以て生る。文政八年十一歲にして日光山新宮の別當安養院慈禪に就きて薙髮し、後、東叡山に錫を駐めて、淨名院惠澄及び隆敎等諸僧に隨ひて天台宗の敎旨を學び、傍ら佐藤一齋に就きて儒學を修む。天保二年淨輪房と改稱し、嶄然頭角を露す。十三年日光山淨土院眞辨の法嗣となりて、俊乘房と改稱

し、弘化元年妙道院慈觀より三部都法秘密灌頂を承く。四年三月淨土院住持となる。嘉永三年比叡山の法華會に登り、歸途横川安樂院に到り、住僧隆澄を訪ひ、相共に日光に歸り盛に講筵を開く。尙ほ儒生金内備造佐々木愚山の徒を招き、儒學を士民の子弟に敎へしむ。四年本宮の上入職となり、自ら千金を投じて社地一萬餘坪の荒蕪を開拓し、石楠數十株を移植して社地の舊觀を一變せり。五年大法印大僧都に進む。六年府庫金出納の事を掌る。夙に尊攘の志あり、時僧の多く忌む所となる。嘉永六年米人浦賀に入るや、幕吏山僧と議して多く和を唱ふ。慈隆戰を主張して抗議屈せず。遂に日光を逐はる。依つて本所某寺に隱れ、尋いで中村藩執政池田圖書の薦めに依り藩の顧問となる。爾來尊攘の大義を以つて一藩を訓陶し士風を振作す。文久二年門人西貫之助氏家健之進等同志と橫濱の外人を襲擊せんとするや、慈隆密に斬夷の旨趣書を與へ、事發れしが、慈隆のその他意なきを說くに及び嫌疑竟に解く。文久年間江戶に遊び外人日に猖獗、幕府萎靡不振の狀を視て感ずる所あり、深く洋書を究め併せて天下を漫遊して廣く豪傑の士を募らんとし、藩主に辭して將に途に上らんとせしが、藩主の懇請に依りて遂に止む。時に和歌を詠じて曰はく「やすらひし年も久しき竹の被闈のあなたの空ぞ悲しき」明治元年春伏見の擧起り、尋いで九條公仙臺に到り會津を討つや、藩亦部署に從ふ。時に慈隆飄然緇衣を被り竹輿に乘じて兵馬の間に奔走し、終始勤王の大義を以て藩の方針を定む。旣にして奥羽平定するや、その名望益々揚る。以來益々藩政を改良し、學校を擴張し、又、武事を奬勵す。一日子弟に示す詩に曰はく「彈丸雨注雨陣間、笑決死生眞是男、此膽附君最易々、讀書萬卷須知慚」と。明治二年福島縣兇徒の起るや藩兵を借して之を平定し、三年藩兵解隊の令下るや諭すに忠孝大義を以つてし、四年大少參事と議して士族授產の事を計畫す。五年春飄然東京に遊び、大に爲す所あらんとし、二宮尊德に見えてその策を天下に普及せしめんとし、伊知地正治に說きて、將に西鄕隆盛を訪はんとせしが、偶々病に罹りて終に赴かず。五年十二月二十四日寂す。年五十四。(維新史料)

ジレイ　慈嶺　シンケウ眞敎を見よ。

シヱツ　子越　二〇三三〔臨濟宗〕長門安國寺の開山なり。子越號は南嶺、京都の人、藤原氏、幼にして懷敬和尙に從ひて業を受け、後佛燈國師に參謁し、建仁寺建長寺等に住り明に航せんとして西下し、長門の太守に迎へられ、同地に留り、遂に書を明の江西信菴主天目本禪師に寄す。二師各々僧伽黎を附して信を表せり。太守物部氏、一寺を建立して鳳凰山東隆寺と號し、師を開山となす。且つ寺北に壽藏の塔を建て續燈菴と云ふ。後攝津の福嚴寺に住し、幾もなく東隆寺に還る諸方の大刹より請ぜらるゝも赴かず。建仁寺當中山偈を寄せて曰はく、三十餘年方得信、審知五十五春秋、開千光室遲君久、須急來扶老比丘、と。觀應二年勅あり東隆寺を諸山に列し安國禪寺の一となす。後延文四年八月筑前の聖福寺に住す。幾もなく退隱し、貞治二年九月十一日弟子を聚め遺誡し、偈を書して曰はく、七十九年、心月孤圓、來時無日、一句了然と。筆を擲ちて寂す。壽若干。塔を常照と云ふ。弟子元初聖

福寺に塔を建て續燈と云ふ。三會語錄あり。後法孫元久明に入り、與東升の篆額、雲崖妙術の撰文を乞ひ、東隆寺に日本長州鳳皇山安國禪寺南嶺和尚道行碑を立つ、(妙術選文の末に大明景泰五年歲在甲戌夏四月朔旦とあり。)(道行碑、扶桑五山記)

スの部

ズイケイ　瑞桂　二二一八……　[臨濟宗]京都眞如寺の禪僧なり。瑞桂、字は湖月、郷貫詳ならず。惟明瑞智の法嗣なり。眞如寺に住して西山靈松院を兼領す。永祿元年七月二十日寂す。壽缺く。(萬山編年精要)

ズイセン　瑞仙　二〇九〇 二一四九　[臨濟宗]京都相國寺第八十代なり。瑞仙、字は桃源、別に蕉了、蕉雨、春雨、亦庵、卍庵、竹庵、梅岑、春雨庵と號す。姓氏詳ならず。近江愛知郡市村の人なり。永享二年六月十七日に生る。二歲にして母を喪ひ岩桂慈昌尼に養育せられ。遂に村の慈雲院に入り、齊岳に事す。十餘歲の頃京都相國寺明遠俊哲の法を嗣ぎ、康正長祿の際、南禪寺牧中より史記抄及び易抄の講義を聽き、又、竺雲等蓮、瑞溪周鳳等に親炙すること久し。應仁元年八月橫川景三等と共に亂を避けて近江に入り、堅田の安樂寺月翁周鏡の處に留まり、尋いで鄉寺慈雲院に入り、又、小倉實澄の保護の下に山上永源寺の龍門菴に寓せり。文明六年より九年まで山上にて書を講じ、書を抄し、十三四年の頃京都に歸り、十四年には景德寺に住し、十五年正月には等持寺に住せり。十七八年頃勝鬘寺に住し、十八年七月相國寺の內命を受け、八月公帖を領し、次いで入寺す。延德元年九月自院に歸り、同年十月二十八日大德院に寂す。壽六十。臘五十七。著作、百衲襖二十五卷。史記抄十九冊。蕉雨稿三冊、坡詩抄。易學啓蒙抄。百丈清規要綱、同雲桃抄等。(百衲襖、東遊集、京華集、翰林胡盧集、梅花無盡藏、史學雜誌所載桃源瑞仙の事蹟)再錄)

ズイチ　瑞智　(二〇七〇)[臨濟宗]京都相國寺の禪僧なり。瑞智、字は惟明、俗姓は近衞氏、生國詳ならず。相國寺鄂隱惠巖の法嗣なり。等持、相國、南禪を歷董し、文明十五年鹿苑院に入りて僧事を錄すること久し。長享三年年八十にしその職を退き、延德四年再び相國寺に住し、明應の初め勝定院を兼領す。某年四月十三日寂す。寂年及び壽缺く。(萬山編年精要)

ズイテウ　瑞超　二一七四 二二四四　[臨濟宗]京都相國寺第百七代なり。瑞超、字は江春、郷貫詳ならず。湖月瑞桂の法嗣なり。元龜二年相國寺に住し、又、鹿苑院に入りて僧事を錄す。天正の初め勝定院を兼領す。天正十二年十二月九日寂す。壽七十一。(鹿苑僧錄代記、萬山編年精要)

ズイホウ　瑞保　二二〇八 二二九三　[臨濟宗]京都南禪寺の禪僧なり。瑞保、字は有節、郷貫詳ならず。祐谷瑞延の法嗣なり。天正十九年南禪寺の帖を賜はる。慶長十三年、鹿苑院に入り、僧錄となる。山門を再造して慶讃す。後陽成天皇に召されて、五山の諸老と詩の聯句を作り、又、御製を評して、白銀若干を賜はる。寬永十年十一月七日寂す。壽八十六。(鹿苑僧錄歷代記、萬山編年精要)

スゲクハウシウ　菅廣洲　ソウタク宗澤を見よ。

セの部

ゼイウ 是勇 ニチトウ日董を見よ、

セイカン 清韓 二一八一 [臨濟宗]京都東福寺第二百二十七代なり。清韓、文英と號す。世に韓長老と呼ぶ。伊勢の人なり。法を圓爾辯圓の遠孫慈雲菩に嗣ぐ。夙に文名あり、征韓の役、加藤清正に從ひて文筆を掌り、清正歸朝の後も熊本にありて詩文を教授せりと云ふ。清正の卒するや輓詞五章を草し、且つ哀悼の序文を作る。慶長五年京都東福寺に住し、九年南禪寺に陞る。屢々宮中に進講せり。十八年八月東坡集を進講するや公卿門跡及び五山の碩學皆その講筵に列す。十九年片桐且元の依囑によりて京都大佛の鐘銘を撰す。その文中に國家安康の句あり、且つその文の形式奈良大佛のものと異るを以つて家康大に之を難ぜり。遂に豐臣氏滅亡の端緒となれり。後、京畿の間に潛匿したれども元和元年十月遂に捕へらる。二年三月駿府に護送せられ、町奉行彥坂光政の下に蟄居せしめらる。四年林羅山と中秋の韵を和唱し、先きに鐘銘を詈りし羅山は此の時口を極めて稱讃せり。後、許されて京都に歸り、六年二月近衛殿に講義し、九月宮中に進講せり。七年三月二十五日京都に寂す。壽缺。○(時慶卿記、泰重卿記、南禪住持籍、五岳前住籍、東福寺文書、本光國師日記、本妙寺文書)

セイケイ 清啓 (一一二九) [臨濟宗]京都建仁寺第百九十一代なり。清啓、字は天與、別に海樵老人と號し、又、自ら鵝湖或は萬里叟と稱す。又、寮を淨居と名け、院を杏花深處といふ。鄉貫詳ならず。幼にして京都建仁寺禪居菴に投じ、伯元清禪に事し、幾もなく剃染す。稍々長じて刻苦參請し清禪の法を嗣ぐ。後、信濃法金寺に住し、禪居菴に移る。寛正四年幕命を奉じて明に使し、書籍銅錢を齎して歸る。應仁二年冬、幕命を受けて妙增、紹本、春洋、壽敬、通擇、永扶、並に桂菴玄樹等以下百餘人を率ゐて明に使し、大に外交の伎倆を示したりと云ふ。文明初年公命を以つて建仁寺を董し、幾もなく又、禪居菴に靖退し、一時の老宿と文墨の間に遊戲す。長祿中禪居菴に寂す。壽缺く。著作、萬里集、再渡集、入明記各一冊あり。(五山文學小史)[再錄]

セイコ 正虎 (一九八二) [臨濟宗]山城太秦海生寺の開山なり。正虎字は深山、鄉貫詳ならず。常に破車に乘じて、その欲する所に行く。里人呼びて破車と云ふ。又、能く七百歲前の事を語る。此に因りて亦七百歲と呼べり。支那鳥窠道林の風を慕ひ、一夏、筑前筥崎の松樹の上に坐禪し、夏了りて東福寺直翁智侃に謁し、遂に剃髮して僧となる。菴を山階の山中に結び。毎に宗侃の塔院に往來し、自ら時菓を持して其の大像に供せり。寂年及び壽缺く。(太秦海生寺開山和尚行狀)

セイゴ 正悟 二二二一 二二七三 [臨濟宗]京都南禪寺第二百七十世なり。正悟、字は梅心、鄉貫詳ならず。法を華溪稷に嗣ぐ。佛光派たり。慶長十二年八月書籍謄寫の勞によりて物を賜はり、十五年四月南禪寺住持の帖を賜はり、十六年二月に入寺す。同年五月院御所聯句御會に參列し、十七年四月院御所より祖圓の像の贊を賜はる。十八年七月十三日南禪寺歸雲院に寂す。壽

五十三、著作、翰林五鳳集五十九卷あり。（本光國師日記、鹿苑日錄、南禪住持籍、大日本史料）

セイサン 清三（二一七七）〔臨濟宗〕相摸建長寺の禪僧なり。清三、笑雲と號す。時人三東堂と稱せり。伊勢の人なり。幼にして同國阿彌陀寺（或は無量壽院と云ふ）に入り、湖月信鏡に就いて學び、次いで剃染受具す。後、東西を跋渉し參學の功を積み、又、東福寺一韓智翃に業を受けて某子院に住す。後、鎌倉建長寺を董す。常に讀書を好み、手に卷を釋かず。寂年及び壽缺く。著作、四河入海一百卷。古文眞寶抄十卷あり。（五山文學小史）〔再錄〕

セイセウ 西笑　ショウタイ承兌を見よ、

セイリヨウ 正楞　ゲンハウ元芳を見よ、

セウカン 照漢（二四四四）〔黃檗宗〕山城萬福寺第二十一代なり。照漢、字は大成、淸閑道人又は劫外叟と號す。淸の人なり。大鵬正鯤の法を嗣ぐ。攝津淸壽院に住し、安永四年四月黃檗山繼席の命を受け、閏十二月に進山す。五年三月江戶に往いて將軍家治に謁す。住山九年、塔頭漢松院を開基す。天明四年二月十日寂す。壽缺く。照漢は正鯤の法を傳へて畫を能くし、寶曆十一年正月黑竹の畫等あり。（黃檗遞代譜略、古畫備考）

セウテキ 紹滴（二一九三―二二六六）〔臨濟宗〕京都大德寺第百二十六世なり。紹滴、始めの名は宗滴、後紹滴と改む。字は一凍自ら野糂子と號す。俗姓は源氏、和泉堺の人なり。父宗顯の歿して後、同村の金剛山龍門寺に投じ、寺主雪岫祥に育てられ宗滴と名く。次いで剃髮受具し、堺南宗寺普通に參ずること年あり。雲岫祥示寂の後、南宗寺に掛錫し、笑嶺宗訢に親炙すること、又年あり。一日忽然省發する所あり、遂に宗訢の印可を受て、紹滴と改め一凍と號す。時に天正十年八月なり翌年春宗訢京都聚光寺に移るや、紹滴その肖像を寫して賛を題せしむ。即ち天正十一年三月なり。同年十月德禪寺に住す十一月宗訢の寂するに及び、和泉の陽春寺を主り、未だ幾ならずして南宗寺に移る。文祿三年五月勅を承けて大禪寺に住し、翌年開堂す。大德寺に住ること纔に一月、退いて陽春寺に歸り、又、南宗寺に居る。一鄕の道俗歸向するもの多し。一宇を南宗寺の北隅に構へて厚德軒と號す。慶長三年八月二十六日特に明堂古鏡禪師の號を賜はる。十年秋より疾に罹り十一年四月二十三日陽春寺の西軒に寂す。壽七十四。臘五十八。嗣法の弟子に澤菴宗彭あり。（澤庵紀年錄、龍寶山大德禪寺世譜、龍寶山志、名僧行錄、大日本史料）〔再錄〕

セウハ 紹巴（二一八四―二二六二）〔法相宗〕大和興福寺の僧なり。紹巴は臨江齋と號す。本姓は松本、後里村氏を冒す。奈良の人、幼にして興福寺明王院に入りて喝食となる。偶々連歌師周桂奈良に來りしかば、從ひて上京し、後又里村昌休に學びて連歌の奧秘を極め、宗祇以後隨一の名人と稱せられたり。天正中明智の變に、陽光院宮適々二條の邸に在り、紹巴輿を上る。依つて法印に叙せらるゝ恩命ありしを、紹巴辭したるに由り、遂に法橋に叙せらる。亦豐臣秀吉の寵を受け、宅地を賜はる。文祿年間秀次の事に坐して三井寺に謫居せらるゝに及び宅地は悉くその師昌休の子昌叱に賜はる。三年の後赦されて京都に歸り、慶長七年四月十二日寂す。壽七十九なり。（大和人物

志）

セウハク　宵栢　二一〇三 二一八七　〔……〕攝津池田夢菴の歌僧なり。宵栢號は夢菴と云ふ。牡丹花と稱す。京都の人、久我氏大納言通方の子なり。嘉吉三年生る。弱年にして出家し、宗祇に從ひて和歌を學び、萬葉集より新續古今集に至る代々の歌集、及び伊勢源氏等の物語を熟讀し、且兼菴和尙に就いて唐の詩を學び、五山の禪僧の間に交を訂す。攝津池田に一菴を營み、扁して夢菴と云ひ、滿庭に花を植ゑ。殊に牡丹花を愛す。常に山酒一壺、海沈一爐、卉花一叢を併せて三愛となす。且つ吟じ、且つ醉ひ、殆ど歲月を忘却す。後柏原天皇一夕夢に後土御天皇の御所にありて連歌し、發句を宵栢に命す宵栢先づ和歌一首を諷して曰は、、此和歌の意を用ゐて發句を奏すべし、と。後柏原天皇既に寤めて大に奇異なりとし給ひ內大臣三條實隆をして宵栢を召さしめ給ふ。是に於いて宵栢攝津池田より至りて拜謁し、發句を奉進し、御製之を續け給ひ、百句卒に成る。即ち天杯を賜はり嘉賞し給へり。攝津亂あり、和泉堺に移り居す　外出には牛に騎し、牛角を塗りて金色となす。途上觀る者皆異とす。大永二年十一月二十日門弟等相謀り八十歲の雅筵を催す、紹滴その眞を寫し、五山の諸禪僧贊を製す。大永七年四月寂す。壽八十五なり。著作、伊勢物語註あり。後土御門天皇に奉進す。勅して秘府に藏せしめ給へり。（夢菴居士壽贊、扶桑隱逸傳）

セウヘン　照遍　二四八八 二五六七　〔眞言宗〕河內延命寺第十三世なり。照遍、字は龍眠、無庵と號す。姓は上田氏、父は仁木嘉吉といふ。維新の際故ありて姓を上田と改む。阿波名東郡北新居村の人なり、文政十一年八月十日に生る。十四歲同國板野郡德命村千光寺に入り戒仁惠等に就きて剃染し、遂に傳法灌頂を受く。十八歲顯密經論の大義に通ぜり。二十歲高野山に登りて眞言を學び、後、京都に出て丶諸宗の學匠を歷訪し大小の性相を研く。特に大坂生玉山、高野及び近江園城寺大寶寺脫等に就きて華嚴天台二宗の蘊奧を極む。安政三年、二十九歲春河內延命寺に至り、寶肝に依りて自誓得戒し、同年夏安居中與疏及び諸儀軌を傳受し、事相諸流を瀉瓶す。元治元年三十七歲延命寺を管す。明治初年廢佛毀釋の論興るや四方に遊化してその鎭撫に力め、稍〻鎭定するに及び諸寺に應請して講筵を開き數百處の多きに達す。明治十一年十月高野山大學林敎師となり、十三年三月東寺定額僧の選に當り、同年十二月大阪府學頭に任じ、十四年四月宗內戒和尙となり山城仁和嵯峨兩山大學林の講師となる。十九年奈良東大寺の請に依りて、戒壇院長老和尙職となり、每年春秋、戒壇院に於いて道俗に授戒す。又、攝津妙法寺、大阪圓珠庵、河內叡福寺を兼攝して寺門を興隆す。三十三年九月大僧正に進む。三十六年六月祖風宣揚會會長となりて、宗運の發展を企圖し四十年二月より五月に至り、事相講傳所及び高等中學の請に應じて東寺に大日經奧疏幷に秘密諸儀軌を講傳せり。此間又、弘法大師全集編輯に盡す所あり。同年九月二十四日寂す。壽八十。臈七十。著作、七十餘部あり。

セウホ　少輔　インゲン印玄を見よ。

セウボク　紹璞　二四六二 二五三三　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり。紹璞、字は雪潭、紀伊の人なり。同國牟婁郡大泰寺に投

じて受具す。十八歳にして妙心寺に登り、尋いで美濃の棠林に參ず。棠林に隨ひて加納の瑞兆に遷り、その印可を受く。棠林示寂の後、大泰寺に住し、次に妙心寺の請に應じ、又、正眼寺に移る。その他飛驒の宗猷、禪昌、播磨の常光、尾張の永泉、甲斐の惠林、法泉の諸寺を歷董す。遂に特に眞如妙覺禪師の號を賜はる。かくて衆を接すること三十年、後、眞福寺を建てゝ移る。明治六年九月十九日寂す。壽七十二。（濃州正眼雪潭和尚要傳、斗室集）〔再錄〕

セキコク　石谷　二四九八―二五九七　〔天台宗〕近江園城寺光淨院の僧なり。久成、通稱は民部、石谷と號す。姓は町田氏、薩摩日置郡石谷の人。幼にして聰慧、二十六歲、大目附となり、慶應元年藩命を奉じて海外を視察し、英國に赴く、時に森有禮、吉田清成等之に從ふ。既にして還るや、大政既に朝に歸せり明治元年正月參與の職を拜し、外國の事務を掌る。尋いで長崎裁判所判事に任じ、九州鎭撫使參謀を兼ぬ。累遷して、外國官判事、外務、內務、大學文部大丞、內務農商務大書記官となり、內務省の博物局を置くに及びて局長となる。蓋し博物館は、その提議創設する所にして、嘗て明治六年山下門內の武家長屋にて天下の珍什古書畫を集めて毎月一六の日と日曜日とに公開入場を許したるを以てその濫觴とするなり。後元老院議官に任じ、從四位勳三等に敍す。適〻智證大師の一千年忌に當り、辭免して近江三井寺に投じて得度し、即ち謀りて勅會を舉行し、光淨院の住持となりて僧正に任ず。又、滋賀崇福寺を再興し、その他佛事に盡力すること頗る多しと云ふ。病を獲て東京上野明王院に在りて療養し、居ること一年餘、明治三十年九月十五日同院に寂す。壽六十。滋賀法明院に葬る。四十三年九月東京博物館域內にその碑を建てんことを計り、四十四年八月建碑設計に着せらる。碑文は重野安繹の撰する所なり。（町田石谷君碑）

セキテイ　碩鼎　二一四一……　〔臨濟宗〕京都南禪寺の禪僧なり。碩鼎、字は頤賢、湖心別に、又は三脚と號す。鄕貫詳ならず。文明十三年に生る。一華由に就いて剃髮受具し、次いで嗣法す。後、筑前博多新篁寺に住し、永正十六年十二月聖福寺に移る。天文八年大內義隆の命を受けて天龍寺策彥以下數百人を率ゐて明に使す。時に明の嘉靖十八年なり。翌十九年北京に到りて世宗に謁し、青色法衣、金襴袈裟を賜はり、且つ辭するに及びその像を畫かしめて餞せらる。二十年歸朝す。即ち吾が天文十年なり。後、明儒梅屋送るに詩を以つてし、北京の諸老各〻詩を作りて之を贈る。天文十四年七月九日南禪寺の帖を賜はる。永祿の末年疾に罹りて博多新篁寺に寂す。壽缺く。著作、三脚稿一冊あり。（南禪住持籍、五山文學小史）

ゼジユン　是純　ニチトウ日董を見よ、

ゼジクン　雪譚　セウボク紹璞を見よ、

センア　遷阿　カイジヤウ誡誠を見よ、

ゼンカイ　禪海　二四三五……　〔臨濟宗〕豐前羅漢寺の禪僧なり。禪海、姓は福原氏、幼名を市九郎と云ふ。越後高田の人。父を勘太夫と云ひ、その藩士なり。父の勘氣を受け、江戸に到りて淺草の中川四郎兵衞に仕ふ。後ちその主人を暗殺し、諸國を流浪す。享保十九年豐前に詣り、耶馬溪に遊び、鎖渡の險道を過ぎ、誓つて之を開鑿せんと欲し、遂に出家して專

心開鑿に從事す。偶〻江戸中川四郎兵衞の一子實之助禪海を尋ね來り、父の讎を復せんとしたれど、禪海の精神に感じ遂に之を果さずして歸る。かくて開鑿に從事すること三十年その工を竣ふ。後ち權大僧都に補し、安永三年八月二十四日寂す。壽缺く。(碑文)

ゼンキ 禪機 二四八六／二五六九 〔臨濟宗〕近江永源寺第百六十一代なり。禪機、字は臨應、無礙室と號す。姓は澤村氏、尾張松下の人なり。二十五歳の時近江石馬寺の僕となり居ること三年、二十八歳にして出家す。尋いで兵庫祥福寺に往きて匡道に參ずること十一年、後、京都大秦村法雲院を董す。次いで東福寺海州楚棟に通參すること三年、楚棟の兵庫祥福寺に移るに及び、復參ずること三年、遂にその印可を受く。明治十七年近江永源寺に住して同派の管長となり、二十年春僧堂を開單す。二十五年病を以て職を辭し、八重練高松寺に退居し幾許もなく南山城正法寺に移る。又、石馬寺の席を缺くに及び同寺に往來すること數年、後、京都西山法雲院に閑居すること十餘年、明治四十二年七月十四日同院に寂す。壽八十四。

ゼング 全愚 二四九四／二五六四 〔臨濟宗〕東京小石川龍雲寺の禪僧なり。全愚、字は南隱、姓は渡邊氏、美濃の人なり。天保五年に生る。初め儒學を修め、周易の講釋を聞いて疑義あり、自ら決せず。後、遂に出家し、瑞龍寺萬寧に就いて學ぶこと五年、次いで備前に遊び、又、久留米の維山に從ひて參禪すること八年。遂にその印可を受く。讃岐丸龜城主京極家より招かれて同家の菩提所玄要寺に住し、居ること五年、偶〻維新の變に際し、同寺を辭して美濃に歸隱し、法衣を脫し俗人の間に在り。後東京谷中全生菴に入り住す。明治十五年山岡鐵太郎の薨去に際し、全生菴を去り東京小石川龍雲寺に隱遁し、後門弟子の勸めに依りて道場を開く。これを白山道場と云ひ、道俗の來參するもの多し。書を能くして貫名海屋の風を學ぶ。三十七年十一月二十四日寂す壽七十一。

渡邊南隱師

センクウ 專空 一八七一／二〇〇三 〔眞宗〕下野專修寺第四世なり。專空、俗名は行弘、大内冠者と稱す。姓は平氏、平國香の後胤にして、下野芳賀郡眞岡城主大内國行の三男なりと云ふ。建曆元年五月五日に生る。安貞二年五月高田專修寺に於いて親鸞の弟子となり、親鸞附法の三傑と言ひ傳へらる。親鸞京都に歸りて後、陸奥に下りて敎化して、立川の邪義を摧く。陸奥の布敎は專空の力に依るとぞ。曆仁元年十一日京都に歸りて親鸞に面す。時に顯智も亦同道たり。親鸞大に悅び兩人を召してその手を取り、眞佛は我體なり、顯智專空は左右の手なりと言へりと傳ふ。正元元年四月西洞院御坊にて親鸞口訣相承の密附を受く。時に顯智は既に顯附の師たり。口訣相承に就きて顯附密附の二師を立つるは是れより始まると云

ふ。文應元年四月下野高田にて顯智より顯附の相承を受く。弘長元年二月京都に上りて親鸞に面し、二年八月陸奥に勸化す。弘安二年病に臥し、一夕神人より靈芝を受けて之を食し病頓に癒えたりと云ふ。正應二年三月顯智の讓りを受けて高田專修寺に住し、三年京都に上りて東山の祖廟を巡見し、永仁二年又、上京して廟地を檢し、四年四月大谷祖廟の狹きを以て、南隣青蓮院門侶良海の園地を買ひて之を廣む。時に地域東西面各〻十丈、南面十二丈五尺、北面十丈七尺あり。正安四年二月覺如より御廟預りの證文を納る。應長元年上京して岡崎御坊に寓し、正中二年正月又、上京して善法院に居り存覺の爲めに親鸞一生の行狀を談ず。嘉曆元年下總葛飾郡に往きて教勸す。康永二年十二月十八日寂す。壽百三十三。著作、聖法輪藏五冊、口傳鈔二冊、道士勝負記一冊あり。（叢林集正統傳後集、大谷本願寺通紀、專修寺文書、妙源寺文書、大日本史料）〔再錄〕

（考）專修寺文書に據るに、專空は延慶二年十八歳にして、康永二年に至りては五十二歳を得るに過ぎざることゝなる。本願寺通紀にも專空の長壽に就きて疑ひを挾めり。考ふべし。

センシヤウ　宣正 二五一九―二五六三 〔眞宗〕越後三島光西寺の僧なり。宣正、姓は藤井と云ふ。越後三島郡本板與村光西寺に生る。八歳にして得度し、眞宗本願寺派の僧となる。十八歳長岡中學校に入る。後、東京に上り島地默雷の家に客となり、專ら佛典を研鑽すること三年、明治十四年京都に往き、本願寺留學生となる。偶〻母の病を聞きて歸省し、再び東京に上りて慶應義塾に入る。十七年夏大學豫備門に轉じ、第一高等

中學校を經て帝國大學文科の哲學科に入り、二十四年七月卒業す。本願寺派にて帝國大學を出でしは宣正を始めとなす。同月京都本願寺文學寮教授となる。二十五年六月井上瑞枝と婚し、東京白蓮社會堂にて佛教の禮法に依りて式を擧ぐ。佛式結婚の權輿とす。八月文學寮教頭となり、爾來六年本願寺教育の改善に力む。三十年文學寮教授解職となりて東京に來り、十一月埼玉縣第一尋常中學校長となり、三十一年八月同校教諭を兼任し、三十二年四月埼玉高等女學校教授を兼ね、九月赤十字社支部商議員となり、三十三年二月體育會埼玉縣支會常務委員となる。三十三年九月本願寺宗主より政教の關係調査の爲め、英國龍動滯在の命あり。依りて十一月中學校長休職の命を領して、佛教大學教授の任を帶び、十二月橫濱を解纜す。爾來龍動ボットレー等に轉住し、神學校、ケンシントン博物館に入りて、教會制度、印度美術等の調査に從ひ、又、東洋美術品鑑査整理の囑託に應じて之に從事し、居ること三年、三十五年本願寺宗主光瑞の印度聖蹟探撿の擧に參與して印度に航し、殆ど印度全島を周遊し、後、再び錫崙に航して古趾を撿し、古倫母を發して英國に回航する途次病發り佛國馬耳塞港に上陸して寂す。時に明治三十六年六月六日なり。壽四十五。宗主より融法院の諡號及び准司教の學階を贈らる。著作。佛教小史二卷（明治二十七年發行）日本地理一卷（明治三十年十月發行）現存日本大藏經冠字目錄（明治三十一年二月發行）眞美大觀解說（明治三十二年五月發行）愛楳全集一冊（明治三十九年十二月發行）あり。

センシユン　詮舜 二二〇〇―二二六〇 〔天台宗〕近江觀音寺第八世な

り。詮舜、姓は藤原氏、近江滋賀郡の人なり。その先は武藏兒玉郡なりしが、正慶建武の閒亂を避けて移居す。詮舜十四歲比叡山西塔院正敎坊詮運に從ひて祝髮し、次いで具足戒を受け、顯密の學を修む。元龜年閒叡山兵燹に罹るや、逃れて近江栗田郡觀音寺に寓し、賢珍に介せられて豐臣秀吉に謁して其眷顧を受く。時に全宗、藥樹院に住して亦秀吉の眷顧を受く。依つて共に叡山を再興せんとし、全宗は東塔を興し、詮舜は西塔を復せんとす。豪盛等亦來りて之を議す。旣にして秀吉の奏請に依りて募緣を允許せらる。依つて豪盛をして募疏を撰せしめ諸國に勸募す。天正十三年十二月西塔院の本堂を建てんとして舊佛を得、假に小堂を營みて之を安置す。繼いで諸堂坊舍漸次に經營せらる。賢珍の寂後遺囑を受けて觀音寺に住してその第八世となり、舊に依りて湖府民戶並に賦稅等の事を掌る。文祿元年秀吉、朝鮮を征し、肥前に至るに從ひて軍事に參預し、二年賢珍と共に私財を捨てゝ日吉二宮の神殿及び祭祀の器具を造る。三年伏見城を築くに當り、又經營の事に預る。四年園城寺僧徒謀叛して追放せられ、その所領大津上田を寄せらる。乃ち全宗と共に西塔の本堂を營建す。之を轉法輪堂と稱す。その餘の堂宇及び經像等次第に舊觀に復せり。慶長元年秀吉に請ひて近江上坂本村及び葛川村の北を給せらる。時に全山三塔復興し、經論古書漸く集り、僧徒も亦稍歸す。五年二月十九日寂す。壽六十一。（舜公碑銘、天台霞標）

ゼンテウ　善超　二四四五／二五一五　〔眞宗〕越前國今立證誠寺第二十世なり。善超、東溟と號す。京都今出川大納言從一位實種の子なり。天明五年正月朔日に生る。二十二歲の時當寺の法統を繼ぎ、荒廢せし山務を整理し、本堂を再建す。文化八年十月上人號を勅許せられ、小御所に參內して天皇に謁す。幼より歌を好み、賀茂季鷹を師とす。又天下の志士と交り尊王の說を唱ふ。安政二年七月十三日寂す。壽七十一。著作、東溟集あり。（越前人物志）

ゼントウ　禪透　チヤウアン長安を見よ。

センイヤウ　仙陽　ニチタイ日泰を見よ。

センリヤウ　暹亮　二三四六／二四一一　〔天台宗〕越前善法院の住僧なり。暹亮、字は雲照、姓は三神、越前大野郡石徹白村の人、貞享三年二月八日に生る。元祿十年近江大津古市西坊法印胤將の家に寓す。胤將愛して子となし虎丸と名く。翌年長等山に登り、三藏坊法印亮央の附弟となる。二月亮央寂す。十二年十一月薙髮し、多寶昭院暹雄を戒師となし、その室に入り胎金兩部の大法護摩蘇悉地の秘法及び諸尊の儀軌次第等を受く。十六年三月權律師に任じ、法橋に敍す。尋いで大僧都に任じ、法印に敍す。賀山瑞師に諮詢し、又圓滿院覺尊親王の命に依て四敎儀を講ず。享保二年宥盛に就いて悉曇を傳受す此年七月暹雄寂す。七年九月靈鷲院舜定を拜して、傳法阿闍梨となり、唐院にて灌頂壇に入り悉曇の傳授を受く。十年賀山瑞師の法明律院を建立するに際し、亮泯貞舜の二師と共に斡旋する所あり、遂に之を落慶す。十一年學頭代に補す。翌年正月一山の總代となり、將軍吉宗に謁す。十五年學頭代を辭す。翌年圓宗院に轉ず。九月唐院灌頂法會の奉行となる二十年善法院に轉住し、法光院を兼ぬ。元文二年十一月學頭

の員數に入る。六月法華會の第一の問者となりしも病を以て辭す。三年六月法華會の竪者となる。十二月權僧正に任じ參內して天皇に謁す。翌年探題に補す。六月法華會の初探題となる。八月護摩法を圓滿院門跡祐常に授け、五年金剛界の大法及び諸尊の儀軌次第を授く。十月智證大師八百五十年忌を修す。寛保元年別當に補す。延享二年三月詔を受け唐院に灌頂壇を開き傳法阿闍梨位を法印永尊及び定剛に授く。翌年十月詔を受け再び唐院に灌頂壇を開き、四年授決集を祐常に授く。寛延二年七月大僧正に轉ず。三年櫻町天皇崩御し給ひ、勅して般舟三昧院に御追福法會を執行すること七七日間、その唱導師となる。四年四月十一日寂す。壽六十六。聖無動院と號す。（聖無動院大僧正略譜）

ソの部

ソウジ　宗二 二一五八―二二四一　大和の佛教信者なり。宗二、名は逸、法號を桂室宗二居士といふ。姓は林氏、宋入林淨因第五代の孫にして、父を持平道太禪門と云ふ。淨因吾國に歸化し奈良に住して饅頭屋を業とし、子孫奈良に住して家業を繼げり。宗二は明應七年に生る。和學を牡丹花肖柏に學び、源氏物語、古今集の傳授を受く。古今集奈良傳授と云ふもの丶起りとなす。又、漢學にも通じ、當時の禪僧と交り、博學にして多才なり。多くの抄本を作る。即ち杜詩抄二十四冊（元龜二年正月）杜詩續十冊（內一冊缺、元龜三年五月―天正七年十月）柳文抄七冊（永祿八年十月）東坡詩抄三十冊（永祿八年三月）山谷詩抄二十二冊（永祿九年―同十年）山谷幻雲抄二十一冊、尚書抄十二冊、春秋左傳抄十冊、史記史家抄八冊、江湖風月集抄一冊これなり。これ等の內には先人の抄本を寫したるものもありて、皆宗二の抄出にはあらざれども、その大部分は自ら抄錄せしものなりと云ふ。又、節用集を增補して雕刻せり。世に饅頭屋本と稱するものこれなり。天正九年卒す、壽八十四。著作、源氏物語林逸抄五十四卷、節用集一卷あり（林家系譜、群書一覽、禪宗所載林宗二）

ソウタク　宗澤 二五〇〇―二五六七　〔臨濟宗〕京都大德寺第四百八十四代なり。宗澤、字は廣洲、姓は菅氏、但馬養父郡森村の人なり。天保十一年一月に生る。長じて鄉里祐德寺の住職となり、後、備前宗禪寺に轉ず。儀山善來に參ずること久しく、明治十年十二月その印可を得たり。九年三月大德寺塔中芳春院住職となり、二十五年七月大德寺派管長に選ばれ、二十八年之を辭す。三十一年十二月再び同派管長に任ず。四十年八月十五日大學病院に寂す。壽六十八。

ゾウリユウ　增隆 二四八三―二五五三　〔眞言宗〕紀伊高野山の檢校なり。增隆、始の名は隆定と云ひ、又、大心と名く。字は智瑞不背と號す。姓は三宅氏、大阪島之內三津寺筋油町三丁目醫師慈仙の第三男なり。文政六年に生る。十一年阿波美馬郡穴吹村亨保寺隆賢に就いて祝髮し、弘化元年春高野山に入衆す。四年備前兒島郡木見村住心院にて初めて心經秘鍵を開講す。嘉永二年高野山月輪院に住し、三年攝津高井田長榮寺智幢に就いて受戒し、律部及び悉曇を受く。五年高野山に歸り西南院隆快より御流及び三輪流の神道を受く。六年冬年頭代を勤

め、安政二年春江戸在番を勤め、三年夏總陽院に轉住す。四年隆快より三寶院中流及び雲傳の神道を受く。五年蓮金院海雄に從ひて中院御流神道を傳ふ。六年春京都野々口隆正に就いて國書を研究し、秋、攝津萩原廣道の皇學を習ふ。萬延元年夏歸山す、元治元年越後の請に赴き結緣灌頂を行ひ、受者二千八百餘名に達す。二年十一月歸山す。三年三月學侶總代として孝明天皇御納物拜領の爲め京都に到り、九月歸山す。明治元年正月京都大阪の間に亂起るや、一山總代として京都に到り、二月江戸在番に當りて發す。時に廢佛の議盛んなり。各宗協議して同盟を結び、舉げられて盟主となる。三年夏歸山す。五月再び越中の請に赴く。時に教部省新設せられ、大講義に補せらる。十月神佛合併大教院の新設に際し、舉げられて議事長となり、十一月議事兼神務掛となる。六年一月十一級出仕となり、說教派出人講究掛に任ぜらる。二月本院講究試驗專務掛となり、三月權少教正に進む。九月武藏埼玉高麗、秩父の三郡に出張し、十一月千葉縣下合併中教院開設に際し、神佛總代として出張し、四月神川縣中教院に出張す。共にその紛議を鎭定せん爲めなり。七月大教院會計課長に當選し、十月第三第四兩大教區を巡回して、各宗の僧侶を檢査す。八年三月少教正に補す。六月大教院教師兼講究學務係に選ばれ、九月講究課長となる。九年九月權中教正に補せらる。十一年一月座主代理として加賀、能登、越中、越後を巡教し、十二年二月無量壽院の住職に任じ、尋いで歸山して、一山寺法改革係長となる。三月大教師に補し、次いて定額位に昇る。十三年五月中教正に補せらる。十四年三月大塔再建の起工式を舉げ、十七年五月和歌山明道協會大導師となり、次いで高野山大學林事教の講傳を擔任す。二十一年四月阿波太龍寺を兼任して、寺法を確立し、その廢を興す。二十二年正月德島縣宗內學頭に補し、二十三年四月自行十善會講師の請を受け同年太龍寺を釋縕律嚴に讓り八月歸山し、二十四年正月寺務檢校法印大和尚の職位に就き、同月轉衣の式を擧ぐ、三月權大僧正に補せらる。二十六年四月三十日牛瀧山大威德寺に寂す。壽七十一臘六十六。（權大僧正高岡增隆傳）

ソエン　祖緣　二三七四……〔臨濟宗〕京都相國寺第百二十六代なり。祖緣、字は別宗、相國寺に住す。寶永八年朝鮮の使者に接伴し唱和するもの若干篇、槎客通簡集と曰ひ、之を梓行す。正德四年五月一日寂す。（萬山編年精要）〔再錄〕

ソケイ　祖溪　トクシユン德濬を見よ、

ソジユン　祖淳　二二二七……〔臨濟宗〕京都建仁寺第百五十三代なり。祖淳、字は朴堂、蜷川親禾の子なり。虛堂祖白の法嗣、永亨九年八月建仁寺に入り住す。細字を能くし、爪甲上に般若心經一卷を書すと云ふ。又善く不動尊像を畫く。應仁元年五月廿四日寂す。（一說長祿三年四月廿四日寂す壽八十七）（建仁寺住持位次簿、天陰語錄、臥雲日件錄、古畫備考）

ソセン　蘇泉　（二一五二）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。蘇泉、一に蘇堂に作る。諱は一泉、鄉貫詳ならず。黑竹に善し。延德四年五月十三日寂す。壽缺く。（翰林葫蘆集、翰林五鳳集、古畫備考）

タの部

タイガク 泰岳 ゲンカン玄韓を見よ、

タイキヨ 太虛 ケンレイ顯靈を見よ、

タイケイ 大圭 ブンキ文器を見よ、

タイジヤウ 諦淨 ゲンフク玄伏を見よ、

タイジヤウ 大成 セウカン照漢を見よ、

ダイシユク 大椒 二〇八二 二一四七 〔臨濟宗〕京都東福寺第百七十七代なり。大淑、字は季弘、別に蕉菴、又は竹谷と號す。姓缺く。備州の人なり。幼にして京都建仁寺竹菴大緣に就いて進具し嗣法し、文明十二年東福寺に住す。禪餘文墨を弄して詩名當時に顯る。文明十九年八月七日寂す。壽六十六。著作、蕉菴遺稿。蕉軒日錄あり。（蔭涼軒日記、五山文學小史）〔再錄〕

ダイセン 大戩 カウチヤウ香頂を見よ、

ダイダウチヤウアン 大道長安 チヤウアン長安を見よ

タイチン 大椿 シウカウ周亨を見よ、

ダイテツ 大徹 ダウリン道林を見よ、

ダイヨウ 大用 イウシヨ有諸を見よ、

ダイヱン 大圓 二四九九 二五九八 〔眞宗〕 越後嶋田明通寺の僧なり。大圓、姓は姫宮、初め比叡山に登り金臺院光謐に就いて天台の教觀密教の秘印を傳へ、又圓空に一心金剛大戒を承け並に悉曇を學び、實光院より梵唄の奥義を受く。後、東叡山等覺院に住す。明治維新彰義隊の變起るに際し、越後に歸る明治四年杵野木林勝念寺に住し、私塾を設けて緇素を教養す十一年本山大教校の簡寮となり、傍ら教授を兼ぬ。後、久しからずして歸り、更に高田興仁教校總監兼教授となる。二十四年東京積德教校教授となり、又、曹洞宗大學林に講師となる。二十六年京都大學林教授に轉じ、爾來教鞭を執ると六年、三十一年七月五日寂す。壽六十。私に謚し滿月院と曰ふ。著作、大日經住心品講義一卷。（明治三十一年六月上梓）滿月院法語（明治三十二年七月發行）あり。

ダウアン 道安 ジユンテイ順貞を見よ、

ダウエイ 道永 ツウシヤウ通昌を見よ、

ダウクハウ 道光 二三六七 〔黃檗宗〕肥前長崎興福寺の僧なり。道光蘭溪、又は若芝と號し、又、烟霞比丘、風狂子の別稱あり。俗姓は河邨氏、書を逸然に學び、專ら佛像を書き、傍ら鎔冶を善くし、香爐花瓶及び刀劍の裝飾を作る。人多く之を稱翫す。この技は之を明人より傳ふと云ふ。寶永四年十月寂す。壽缺く。（長崎書人傳、古書備考）

タウゲン 桃源 ズイセン瑞仙を見よ。

ダウソウ 道宗 二三六九 〔黃檗宗〕山城萬福寺第七代なり。道宗、字は悅山、明の人なり。寛文十二年九月木庵性瑫の法を嗣ぎ、延寶三年八月性瑫攝津舍利寺に進山し、尋いでその席を繼がしめらる。寶永二年二月宇治黃檗山繼席の命を承け、三月進山す。三年四月江戸に到り將軍綱吉に謁して繼席の恩を謝し、四年二月退席の公許を蒙り、五月塔頭慈福院に退隱す。六年七月二十九日寂す。壽缺く。著作、悅山禪師語錄四卷、黃檗七代慈福悅山和尚末後事實、南岳悅山和尚佛

事法語各一冊あり。(黄檗木菴禪師年譜、黄檗遞代譜略)

ダウチヨウ　道澄　(二二〇四／二二六八)〔天台宗〕山城照高院の開山なり。道澄、照高院と號し、浄滿寺宮と號す。姓は近衞氏、關白稙家の第三男なり。准三宮に叙せらる。三井長吏にして三山檢校たり　永祿六年二月宮中にて百座仁王經を修行し、天正五年十年清涼殿にて仁王經百座修行あり。十四年大佛殿を管領す。山城愛宕郡に照高院を開きて退居す。慶長十三年六月二十八日寂す。壽六十五。(孝亮宿禰日次記、梵舜日記、扶桑拾葉集、華頂要略、近衞家譜、玄朔道三配劑錄、山州名迹志、大日本史料)

ダウチヨウ　道澄　(二三九四)〔黄檗宗〕山城嵯峨直指菴の禪僧なり。道澄、字は月潭といふ。獨照性圓の法を嗣ぎ、嵯峨に直指菴を營みて幽棲し、詩文を善くす。天台宗の亮潤等と交り贈答をなす。示寂の年月日を詳にせず。著作、法語一卷、心華剩錄五卷、巖居稿十卷等あり。

ダウリン　道林　(二四八八／二五七一)〔臨濟宗〕京都南禪寺三百卄七代なり。道林字は大徹、滴水軒と號す。俗姓森田氏、後、勝峰氏と稱す志摩國志摩郡御座村の人。文政十一年十一月十八日に生る。八歲にして伊勢朝熊山金剛證寺の聯溪に就きて剃髮し、弘化二年錫を美濃國福田大勝寺に掛け、耕隱に參じ後、甲斐西板垣村東光寺の清隱に參ず。嘉永元年金剛證寺に歸りて五祖錄會に會して長門の諦州に謁し、再び東光寺に投ず。安政三年四月朝熊山塔頭普明院に住し、後、寺務を徒弟に讓り、京都東福明の海州に參ず。後、鈴鹿峠を過る際大雨に遇ひ、大悟徹底す。遂に伊勢の自坊に歸り、又、江戸淺草藏前朝熊嶽出張所の寺務をも兼ぬ。明治元年金剛證寺の住持となり。會々廢佛毀釋に際し、荻野獨園等と謀りて寺を伏見宮家の御祈願所となして災を免れたり。明治十四年妙心寺寛州の法を嗣ぎ、十九年十二月南禪寺に晋山し管長の職に就く。二十三年三月任滿ちて金剛證寺に歸り、二十四年武藏南多摩郡八王子村廣園寺に住す。堂宇を修理し、その維持法を立て、又、八王子に是道會を東京に興禪護國會を設く。三十三年廣園寺を辭し。駒込動坂町百番地に無礙庵を結びて居り。祖錄を提唱し、道俗の入室を許すこと十餘年、四十四年二月二十六日寂す。壽八十四。

ダウリユウ　道龍　(二四八〇／二五六七)〔眞宗〕紀伊和歌山法福寺の僧なり。道龍は紀伊和歌山の人。法福寺に生る。北畠氏なり。知空の子。十一歲の時より儒佛の書を讀み。稍長じて銃馬劍槍を善くし各免許を得たり。後天下を歷遊し具に艱難を嘗む。僧籍を本願寺派に置き得業に擧られ　隆賢に就いて因明性相を學び。又天台を修め十餘年の後助教に進む。教法改正の建言をなし容れられざるより辭して國に歸る。十津川騷動の際には藩主の命を受け僧侶隊を率ゐ防戰し。又長州の亂にも偉功を立てたり。次で藩の少參事となり、傍ら藩兵の訓練に力を致し、明治維新の際仕途を抛つて獨逸語を修め。次て東京に出て有樂町に私塾を開き諸生を教ふ。西南の役陸奥事件に關し獄に下り、尋で赦さる。明治十一年本山宗義紛亂の際再び教法改革を唱へ漸く宗主に重用せらる。是に於て各國の宗教を攻究せんとし十四年世界漫遊の途に就けり。時に歲六十先印度に至りて釋尊の遺跡を拜し「日本開闢以來余始めて釋

ダ　道

尊の墓前に詣ず。北畠道龍」と刻せる石碑を建て、夫れより歐米二州を巡遊せるが。澳太利の碩學スタイン氏に面晤し氏が日本は古來獨特の精神的文明を有するに關らず。徒に歐米の物質主義に趨るは遺憾なりと言へるに感激す。十七年一月東歸し、東京小石川に北畠法話所を設け、大に坊主改良論を主唱したるが、却つて僧侶界の反抗を受く。佛教大學の設立を計畫したるも資金を得る能はずして中止し。且つ本願寺と絶緣して二十一二年の頃大阪に下り下寺町大蓮寺。福島萩の寺等に流寓し。後には僧籍を脫し網島に卜居し四十年十一月十五日同所に逝く壽八十八。軀幹長大にして極めて强健なり意氣軒昂尤も氣概に富む。生前陸奥宗光、津田仙、海江田信義、柳原前光、東久世通禧等と親交あり常に往來せり。著作、法話筆受六冊。因明入正理論方便。天竺行路次所見各三冊。告政治家及宗教家。三問我日本人。法界獨斷。法界獨斷演說集。國體の秩序。眞宗眞要。三問我日本人民。雷斧叩耳。教育事理筆乘各一冊。因明新指。世界宗教興廢。文字名義等若干卷あり。

タカオカゾウリユウ　高岡增隆　ゾウリユウ增隆を見よ

タカギギカイ　高木義海　ギカイ義海を見よ。

タクシ　託資　二二五一—二三一八　〔時宗〕相模藤澤清淨光寺十六代なり。託資、元と其阿と號す。普光の弟子なり。初め沼津西光寺に住す。正保二年二月藤澤清淨光寺に入り、次いで同寺に住し、獨住十一年、萬治元年十二月三日同寺に寂す壽六十八。（遊行歷代譜）

チの部

チクウン　竺雲　トウレン等蓮を見よ。

チゲン　智玄　二〇一〇……　〔臨濟宗〕遠江榛原郡平田平田寺の第二世なり。智玄、號は容叟、小字を月輪童子と呼び、又、文殊童子と稱せらる。近江の人なり。七歲にして遠江相良莊平田寺に投じ、龍峰宏雲に就いて落髮し、次いで受具す。永仁元年三月父病あり、命を受けて宏雲に從ひ、京都に上りて平田寺免稅の事を奏請し、遂に勅許の綸旨を賜はる。建武元年元に入りて諸名匠に歷參して略々その落處を知る。曆應二治商船に乘じて歸朝す。時に宏雲既に寂す。一山の衆遺命を奉じ、平田寺の席を繼がしめんとす。三年平田寺に住す。觀應元年九月十四日寂す。壽缺く。（名刹由緒書）

チセンニ　智泉尼　シヤウツウニ聖通尼を見よ、

チズイ　智瑞　ゾウリユウ增隆を見よ。

チマン　智滿　二四九六—二五七〇　〔眞言宗〕京都隨心院門跡なり。智滿、姓は和田氏、攝津大阪の人なり。幼にして父の主月心、兄覺樹と共に河内高井田智幢に就きて得度し、四分律及び事相の菩提流を本流として汎く諸流に通ず。明治十六七年頃より雲照の後を承けて久邇宮朝彥親王の護持僧となりて篤き歸依を受く。十九年三月教師試補より少僧正に超補し、二十年十一月京都支所下學頭に任ず。二十三年六月權中教正に補し、二十五年二月隨心院門跡に入りて權大僧正に補す。三十二年九月武藏大宮村大字西加茂神光院住職を辭し、三十三年八月大

僧正に補す。三十四年五月隨心院門跡を辭す。顯密敎相の外、外典に通し、殊に古梵字に造詣深く、書は貫名海屋を學び、後、大師の風を習ふ。畫は月心が森徹山より受けし家風を傳ふ。明治四十三年二月二十一日神光院に寂す。壽七十五。

チンカイ　珍海　一八二三……　〔三論宗〕大和東大寺禪那院の學僧なり。珍海、理法房と號し、又、越前已講と稱す。姓は藤原氏、繪師從五位上藤原基光の子なり。世に文殊の化現と稱せらる。三論を東大寺東南院覺樹に受け、密學を醍醐寺三寶院定海、勸修寺寬信、及び行海に稟く。常に常喜院及び傳法院覺鑁と交ること深し。長承二年醍醐法華八講の堂莊嚴を司り、保延五年二月覺樹の寂後は、醍醐に入りたるが如く、永治二年七月には既に擬講となれり。康治二年正月眞言院にて太元法の講師となり、同年三大會の御齋會の擬講となるり、久安中已講となりたるが如く、同四年三月には既に已講となり、寬信の囑に依りて法華堂根本曼茶羅を修補す。仁平二年秋、清瀧宮季御讀經の經頭となる。時に醍醐の定額僧たり。同年十一月無量壽院にて大日經義疏三十講開始せられ、その講師を勤む。同月二十二日寂す。壽詳ならず。或は六十と云ひ、六十二と云ひ、六十五と云ふ。珍海は學、顯密の二敎に通ぜりと雖も、最も因明、勝鬘、華嚴に秀でたるが如く、又、晩に淨土敎をも究めたり。畫はその家風を受けて巧みなり。醍醐三寶院所藏の五髻文殊圖及び高野學侶金剛三昧院所藏の五髻文殊圖の二者は、その正筆として最も有名なれども、これ鎌倉時代のものにして、珍海の製作にあらざること明瞭なりと云ふ。而して今その筆致を見るべきものは、玄證古寫粉本の帝釋天圖（承安二年十二月）高山寺傳古寫本の吉祥天圖（建承二年二月）及び仁王經儀軌息災曼茶羅（天承元年二月）なりと云ふ。著作、因明四種相違私記三卷、俱舍論明眼論鈔六卷（大治四年）菩提心集一卷（大治三年八月）三論名敎二卷、三論玄義文義要十卷、（天承元年—保延二年七月）決定往生集一卷（保延五年三月）淨土義私記二卷あり。（尊卑分脈、夾註菩提心集、本朝世紀、長西錄、內典塵露章、本朝畫史、仁王經儀軌醍醐新要錄、秘抄見聞、密嚴上人行狀記、大傳法院本願上人傳、密宗血脈鈔、醍醐寺雜事記、醍醐寺文書、漢語燈錄、元亨釋書、本朝高僧傳、大和人物志、國華所載珍海已講）

チヤウアン　長安　二五〇三　二五六八　救世敎會の開祖なり。長安、初めの名は禪透、別に忍哉童子、無爭堂主人、雪隣齋、妙力門主人、救世仁者と號す。俗姓は本田氏、後、大道と改む。越後新發田の人、本田文八の次男なり。天保十四年四月一日に生る。六歲にして父歿し、同國長岡曹洞宗長樂寺泉明に事し、同年七月得度して禪透と名く。嘉永四年三月九歲の時若狹三方郡海源寺法兄大道大樹に就きて受學す。安政元年三月大樹、越後北蒲原郡水原町大雲寺に轉住するに從ひ、同年大樹の弟子となる。四年三月江戶駒込吉祥寺栴檀寮に入りて修學し、六年美作津山大道山長安寺に往き大樹を補佐せんとし、途中同國大庭郡河原村極樂寺禪龍の初會に立職の式を行ひ、萬延元年二月大樹に就いて傳法の式を擧げ、次いで永平寺に登りて瑞世請疏す。同年七月越前永平寺に掛錫し、次いで諸國を遍歷し、翌年秋再び駒込栴檀寮に入り、居ること一年、大樹の病報を得て津山に歸りて看護し、傍ら刻苦勉學す

元治元年二月藩主よりその至孝篤學を賞せられて金子並に賞狀を受く。明治元年夏、美作清凉寺上樹に參じて大に省あり同年九月同國北條郡奧山中村圓通寺住職となり、五年肉食妻帶の令下れどもその志を動さず。六年六月大樹寂せしに依り、長安寺住職となり、名を長安と改め、姓大道を稱す。同年三月教導職十一級試補に任じ、十一月北條縣内禪曹洞派教導職に管事となる。八年八月長安寺住職を辭して越後長岡に歸り、十月長樂寺に住す。爾來每月八回の說教を開き、越後釋迦と稱せらる。翌年二月新潟縣曹洞宗教導職取締となり、同年六月權中講義に補し、十二月取締職を辭す。十年六月救世會を設立す。十三年七月長岡大火救助金を送りて知事より木杯を授與せられ、十四年三月新潟縣下積雪罹災救助金を出して賞狀を送らる。此の間大道校規約を設けて子弟を教養せり。十六年一月長興寺を法弟禪瑞に讓り、同年權大講義に補せらる。同年十二月長岡市總光院町の救世院落成して移り、貧兒を收容す。その數凡そ十八人に達せり。十八年六月越後中頸城郡蜘ヶ池村瑞天寺に法筵を張らんとするや、眞宗の僧百人、壯丁約五百名の群衆の强迫に

大道長安師

遭ひ、曹洞眞宗の教義の異同に關して大に說をなす。同年東京に出て諸名士と會し、その思想の是非を叩き、十九年一月新佛救世教開立の五箇條を決定し、二月救世會規約を印刷して發布し、三月救世教眞實義を公にし、更に救世教教規を發表せり。同年六月信濃長野町にて救世教の開立を宣言す。同月曹洞宗宗務局に僧籍脫却願を出し、八月同局より宗門擯斥の通知書を受く。是に於いて曹洞宗及び一部の道俗の迫害を蒙る。十月救世方便義を發表す。以來三年の間、教會の設置せられたるものは、長岡救世會（越後古志郡長岡町）加茂救世會（同南蒲原郡加茂町）宮川救世會（同刈羽郡宮川町）善根救世會（同善根村）柏崎救世會（同柏崎村）高田救世會（同中頸城郡高田町）糸魚川救世會（同西頸城郡糸魚川町）長野救世會（信濃長野町）若松救世會（岩代會津郡若松町）函館救世會（北海道函館）の十ヶ所なり。長岡は長安自ら之を監し、柏崎は丸山樹山、長野は荻原誠必各々之に居る。二十年長野監獄に二十一年松本監獄、富山監獄に二十二年上田監獄、若松監獄に各教誨して賞狀を授與せらる。二十二年二月雜誌救世之光を發行す。同年九月長岡を發して東京に宣教し、留ること三箇年三十三年三月再び上京し、四月麴町元園町に救世會事務所を設け、堀野賢龍をしてその事務を擔當せしめ、同月退京、歸途信濃越後各地を巡教し、六月歸院す。同年八月岩代若松、三宮、塚原を巡教す。九月東京の事務所火災に罹る。十月東京及び名古屋を經て紀伊に到りて歸る。二十四年六月開宗滿五年の祝賀會を長岡に開く。二十五年三月東京本鄉根津西須賀町に移居し、同年救世教會館成る。その餘暇、福嶋、新潟、

長野を巡遊す。二十六年春秋二期に岩代、信濃、越後を巡遊して、更に紀伊に赴き、以來年例となし、伊勢、伊賀を增す同年本郷春木座にて觀劇傳道を行ひ、次いで東京各區に救世婦人會、横濱、千住、所澤に教會の設立を見るに至れり。二十八年二月麴町三番町に本部會館を建て、翌年四月開館式を擧ぐ。同年更に三河を經て京都に巡教す。三十年腦病に罹りて長岡に歸養し、三十一年六月小千谷船岡山に淨聖殿を新築して迎聖式を行ひ、十月長岡總光院町の會館を廢して中千手町に新築開館す。同年先きに三陸海嘯の義捐金を送りたるに依りて木杯を賜り、又、二十七八年戰後に獻金したるを以て東京府知事より賞狀を受く。三十二年始めて北海道を巡化して根室、小樽、札幌、室蘭、函館に及び、以來その布教を怠らず。三十三年九月より毎朝觀音經の講義を始め、三十四、三十五の兩年には東京及び横濱なる婦人傳教團の宣教を開始す。三十六年六月東京本部會館にて還暦の祝賀會を催され、尙ほ東京に開宗報恩祭の法會を設けて毎年之を行ふを例とせり。四十一年六月十五日東京に寂す。壽六十六。著作、禪餘閑詠集、長安精舍集、圓通精舍集、鈍鐵集、忍哉樓集、救世會、忍哉十講錄、救世教眞實義、救世方便義、七難勿生疑、巡教錄若干卷あり。(大道長安仁者傳)

チユウエン　中淵　一九九五／二〇七〇　〔臨濟宗〕京都相國寺第八代なり。中淵、字は嵩宗、自ら旅泊老衲と號す。鄉貫詳ならず。春屋妙葩の法嗣なり。常に淸規を講ず。應永五年八月京都相國寺に住し、この日將軍義持より金襴の袈裟を賜はり。遂にその席を董すること三回、應永中將軍義澄の牌所廣惠院(後、法住院と改む)を建つ。應永十年正月六日寂す。壽七十六。遺偈に曰はく「臨行一著示吾徒、千眼觀音見得無、穢土淨邪留不住、古今誰是赤須胡」と。塔に西山大通院東山廣惠院の二所に在り。(相國寺前住籍、萬山編年精要)

ヂユウゲン　重源　一七八一／一八六六　〔眞言宗〕山城醍醐寺の僧なり。重源、俊乘房と號す。俗名は重定、姓は紀氏、京都の人なり。十三歲にして上の醍醐寺に投じて出家し、十七歲四國を修行し、十九歲、大峰山に修行す。後、源空に依りて淨土教に歸し、大原問答の時門弟三十餘人を率ゐてその席に列す自ら南無阿彌陀佛と號せり。これ阿彌陀號の始めなり。仁安二年宋に入り、五月四明にて榮西に遇ひ、天台山及び阿育王山等に登りて、三年九月榮西と共に歸朝す。時に淨土五祖の畫像を將來せりと云ふ。治承四年十二月奈良東大寺兵火に罹りて燒失せり。その大勸進職始め源空に下りしが、源空之を辭し、重源を擧けて之に任ぜしめたり。文治元年八月先づ大佛を鑄造して開眼供養を行ひ、二年三月周防國を東大寺造營所に充てられて、その國務を管す。四年四月大勸進職に任ぜられ、伊勢大神宮に參詣して大般若を供養し、以來屢々參詣せりと云ふ。同年周防に下向し、三年周防佐波郡に阿彌陀寺を建つ。建久二年源空を東大寺に請じて觀經の曼陀羅及び淨土五祖像を供養せしめ、自ら三部經を講せりと云ふ。三年九月播磨別所を造る。六年三月東大寺落慶供養の法會を行ふ、時に後鳥羽天皇行幸し給ひ、大將軍源賴朝上洛參詣し。同月大和尙位を賜はると云ふ。同年十一月上醍醐寺に經藏一字を建て、宋本一切經藏を施入し、同月東大寺別所を造る。七年十

一月請に依りて備中野田保を同國散在の燈油田に代へ、不輸地とせらる。八年八月東大寺、鎭守八幡宮の神體を造り、正治元年八月東大寺三月堂を修造す。二年八月請に依りて播磨淨土堂を御祈願所とせらる。建仁元年九月攝津渡邊淨土堂を建てゝ迎講を行ひ、二年伊賀に新大佛寺を創立す。その他高野山新別所醍醐寺舊住道場に不斷念佛を興隆せりと云ふ。尙ほ重源の入宋三箇度と稱し、東大寺大勸進の職に就くや、一輪車に乘じて諸國を勸進し、その營造の工を起さんとするや番匠の器用を試驗し、時に支度第一俊乘房と稱せられきと云ふ。後、所領を定範に讓り、建永元年六月四日寂す。壽八十六。遺像及び遺物を東大寺に置く(明月記、三長記、阿彌陀寺文書、興福寺略年代記、法然上人行狀畫圖、元亨釋書、淨土寺開祖傳、僧官補任、紀氏系圖、玉葉、南無阿彌陀佛作善集、源平盛衰記、古今著聞集、大神宮參詣記、東大寺造立供養記、古事談、善光寺緣起、沙石集、愚管抄、俊乘上人所用天然木脇息銘、蒹葭堂雜錄、重源讓狀、大日本史料)〔再錄〕

(考) 重源の示寂の日次諸書一定せず。或は六月六日と云ひ或は五日と云ひ、或は二日と云ふ。今、明月記に從ひて四日とす。

チユウサン 中珊 二〇三七 二〇九四 〔臨濟宗〕京都相國寺第三十五代なり。中珊、字は月溪、自ら道隱と號す。鄕貫詳ならず。幼にして南禪寺下生院不遷法序に就いて出家受具しその法を嗣ぐ、正長二年六月二十七日相國寺に入り住し、永享六年正月二十八日寂す、壽五十八。著作、道隱集あり。今傳らず。(相國寺前住籍、五山文學小史)

チヨウケン 澄憲 ……一八六三…… 〔天台宗〕京都安居院の僧なり。澄憲、姓は藤原氏、少納言通憲即ち信西入道の子なり。母は近江守高階重仲の女、初め其家學たる儒學を修め、後、出家して延曆寺の衆に入り、天台の宗義を研究し、夙に辨才を以て知らる。承安四年五月最勝講の論義に列し、辯論縱橫一人の能く之に及ぶものなし。乃ち權大僧都に任ぜらる。明雲の伊豆に配流せらるゝや送りて國分寺に到り、明雲より一心三觀の相承血脈を受く。後、大僧都に轉じ法印に敍す。幾もなく一條北小路大宮通安居院に退居して、專ら道俗の教化に力を致せり。後德大寺左大臣實定の息公守亡母の鏡面に梵字を書し之を供養せんとするに際し、請を受けてその導師となりて說經し、又、九條關白兼實の寫經供養にも請ぜられて導師となりて說經せり。奈良の某九郎の大乘經を寫し春日明神の前に供養せんとして澄憲を請ぜんとし、興福寺の衆徒の憤りを招きしが、春日明神の靈告あるに及び、遂に請ぜらるゝに至れり。時に道俗その說經を聽きて大に感動し、數日間奈良に留まり、多くの施物を受く、歸途奈良坂にて數人の賊に遇ひしが、賊亦その說經を聞きて改悔し、後、遂に出家するに至れりと云ふ。晩年妻を納れ、眞雲、海惠、聖覺、覺位。宗雲、理覺、惠聖、惠敏、覺眞及び一女子の十子を擧ぐ。皆眞言天台の名僧たり。第三子聖覺その業を繼げり。建仁三年八月六日寂す。壽缺く。著作、法滅の記、外數部あり。(業資王記、尊卑分脈、平家物語、古今著聞集、源平盛衰記、僧綱補任、倭歌作者部類、法然上人行狀繪圖、大日本史料、長西錄、淨土總系譜)

ツの部

ツウクハウ　通晃　二五一六／二五六六　〔臨濟宗〕京都東福寺第二百九十二代なり。通晃、字は東晃、姓は宮裡、近江高島郡の人。大溝藩士谷當住の次男なり。元治元年大溝圓光寺石延に就いて得度し、後、丹波國北桑田郡山國村常照寺魯山に師事す。明治九年十月美濃正眼寺霧隱に就きて參禪し、十五年より二十二年まで嵯峨天龍寺由利滴水に參じ、三十一年滴水の印可を受く。後、丹波常照寺住職となり、又、天龍寺副住職及び同寺專門道場師家より更に東福寺師家に轉ず。三十六年東福寺副住職となり、三十九年二月同寺住職となりて、同派管長に任ず。同年九月二十一日寂す。壽五十一。

ツウシヤウ　通昌　二四九六／二五七一　〔黄檗宗〕山城宇治萬福寺第三十八代なり。通昌、字は道永、叱石と號す。姓は林氏、伊勢の人なり。出家して實聞眞聽の弟子となり、次いで山城宇治萬福寺に掛搭して良忠に參じ、良忠攝津富田慶瑞寺に退隱するに及び、豐前小倉福聚寺に到りて、萬丈悟光に參じ、居ること九年、遂にその印可を受く。維新の際大教院に在りて、奔走する所あり、後、黄檗宗の管長となりて萬福寺に住し、明治九年二月同宗を臨濟宗の一派より脫して獨立せしむ。退山の後伊勢四日市天聖院に住して、一身を布教に委ね、又嘗て清國に遊びて清帝に通ぜらる。明治四十四年二月六日天聖院に寂す。壽七十六。

テの部

デウカイ　肇海　ジエイ慈英を見よ。

テツゲン　鉄眼　二五一四／二五六四　〔臨濟宗〕山城林丘寺の僧なり。鐵眼は愚菴と號す。俗名天田五郎と云ふ。始め久五郎といふ。磐城平藩士甘田平太夫の二子なり。明治元年兄善藏出陣し、新田山等の戰に加はる。久五郎十五歳、父母に請うて出陣し谷川瀨村の一營所に至りて推擧を求め、忽ち元服して鎌田河の關門詰となり。次に新川町の關門詰となる。七月十二日砲戰あり。新川町の關門破る。久五郎敵の彈丸を潜りて本丸に入る。此夜平城沒落す。久五郎關伽井嶽に登りて猛火を望見し、更に河内村に出て、喜代橋に至り、同藩の諸士に會し、兄善藏を見て相喜ぶと限りなし。久五郎一たび仙臺に逃れ、後平に歸り、兄善藏を見て父母及び妹のとを聞ふも得る所なく、兄弟更に百方搜索したるも種々の流言を聞くに止まる。善藏は賣卜者となり、行々旅費を得東北諸國を遍歷して搜索せんとし、遂にその途に上る。久五

天田鐵眼師

郎は兄善藏の命により、平に留りて學問修行し、既にして甘田久五郎を天田五郎と改む。明治四年東京に出遊し、故ありニコライ氏の開設せる駿河臺の神學校に入る。然れど希臘敎を信仰することなく、數〻同校の人々と激論し、遂に同校を出で、麴町の小池詳敬に寄り、大に學問勉勵し、落合直亮に就いて國學を修め、山岡鐵太郎に就いて禪要を問ふ。明治六年落合氏に從ひて仙臺に至り、志波彥神社權禰宜となる。幾もなく東京に歸り、小池氏に從ひて東海道を經、西海道に至る。これ種々の便宜を求めて全國を徧歷し、父母を搜索せんとするなり。四月陸軍大尉横田弃に從ひて臺灣に向ひ、生蕃諸社に入りて軍事に與る。六月東京に歸る。韓國と國交破れんとするを聞き、同志を募り韓國に渡航し、大に爲す所あらんとす。然るに國交舊に復したれば、渡航のことを中止し、筑前博多より薩摩に入り、桐野利秋に寄り、吉田の宇殿谷に居る。明治八年東京に上り、一たび鄉里に歸りて兄善藏に面會し、再び出てゝ北海道に向ひ、行て父母を搜索す。函館に於いて肺病に罹り、東京に上りて淺草梅園院に寓し、山岡鐵太郎の扶助によりて療養す。幾もなく越前より加賀越中越後等を遍歷す。十一年京都に至り、山陰道に入り、更に大阪に至る。會〻山岡鐵太郎の書に接し、靜岡に至りて面會し、鐵太郎より俠客山本長五郎（次良長）に托せらる。五郎これより長五郎の家に寄る。十二年東京に上りて鄉里に歸り、幾もなく東京に上り、諸新聞に廣告し、父母及び妹を搜索す。寫眞師となりて淺草の江崎禮二を問うて諸國を徧歷せんとす。既にして寫眞機を携へて伊豆に至り、熱海伊東等を經回し、更に東海道東山道の諸國を徧歷し、十五年山本長五郎の下にありて富士野の開墾場を監督し、遂に長五郎の養子となり、山本五郎と云ふ。此間に數多の博徒に交る、幾もなく本姓に復し、東京に上る。肺病再發し、諸友の扶助に依りて療養す。後大坂の內外新報社の幹事に聘せられ、同地に下る。その出發に際し、山岡鐵太郎は滴水禪師を問ふべきことを勸告す。既にして大阪にあり、時々天龍寺に至り、滴水禪師を問ひて禪に參じ、二十年四月八日遂に林丘寺に入りて禪師の度を受け、鐵眼と云ふ。時に三十四歲。詩あり、曰はく、楚山呉水去悠々、二十年來事歷遊、踏斷身前身後路、白雲深處臥林丘。と。歌あり、曰はく、黑染の麻の衣の朝な〳〵手向る花の露に濡れつゝ。これより朝參暮請し、專ら工夫參禪し、數〻寢食を忘る。二十五年淸水產寧坂に小菴を營み、愚菴と云ふ。書を學び、詩歌を善くす。愚菴十二勝の作あり。江湖の文人墨客之を唱和す。二十六年六月西國三十三所の靈場を巡禮せんとし、勸進帳を製し、一人三錢三厘の喜捨を求め、一百日にして隨喜する男女一千五百五十人に及ふ。九月二十日出發し十二月二十一日小菴に皈る。三十三年八月桃山に移り居す。三十七年一月一日の夜俄に發熱し、十三日遺偈を書す。曰はく、氷魂向水散、鐵骨入苔穿、月下人尋否、梅花白處烟、と。十四日遺書を作り、十七日寂す。壽五十一なり。著作、愚菴詩稿、愚菴詠草、巡禮日記、東海遊俠傳、各一卷あり。（愚菴遺稿）

テツソウ　鐵叟　ケイシウ景秀を見よ、

テンイウ　天祐　セウカウ紹杲を見よ、

テンシヤウ 天章　ジエイ慈英を見よ、

テンタク 天澤　トウオン等恩を見よ。

テンヨ 天與　セイケイ清啓を見よ。

テンリン 天倫　クハウタク光澤を見よ、

トの部

トウエン 等緣 ……二一九七…… 〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。等緣、字は華洲、俗姓は細川氏、生國詳ならず　天澤等恩の法嗣なり。崇禪寺に遊初寮を構へて居る。明應元年等恩の副使として明に使し、歸りて蔭涼の職を領す。後、相國寺に住す。明應六年六月十八日等恩に先ちて寂す。壽缺く。（萬山編年精要、異國使僧小傳）

トウオン 等恩（二一五二）〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。等恩、字は天澤、俗姓は細川氏、生國詳ならず。月溪中珊の法嗣にして夢窓疎石四世の法孫なり。初め相國寺に住し明應元年命を奉じて明に使し、後、天龍、南禪に住し、又、鹿苑院に居りて僧事を錄す。寂年及び壽缺く。（萬山編年精要）

トウガク 東嶽　ショウシユン承峻を見よ、

トウクハウ 藤光 二二七一 二三二二 〔時宗〕藤澤清淨光寺の第十七代なり。藤光は燈外の弟子なり。初め日輪寺に住す。承應二年閏月藤澤清淨光寺に入る遊行七年、次いで同寺に住す。寛文元年四月本堂、客殿、庫裡等殘らず炎上せり。獨住四年、同二年十月十五日同寺に寂す。壽九十二。（遊行歷代譜）

トウコ 東湖　ケイギン啓誾を見よ、

トウシヨ 東悆 ……二一八九 〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百六十六世なり。東悆、字は悅岩、別に西湖と號す。鄉貫詳ならず幼にして京都建仁寺兩足院に入りて、西菴敬亮に參じ、遂にその印可を受く。次いで諸方に歷參し、歸りて兩足院に住す永正十八年三月建仁寺を董したれども、入院せずして兩足院に棲遲す。享祿二年十二月十一日寂す。壽缺く。著作、悅岩集あり。（建仁寺住持位次簿、五山文學小史）

トウスイ 洞水　ゲツタン月湛を見よ、

トウヨク 東昱　ツウクハウ通晃を見よ、

トウリヨウ 東陵　エイイヨ永璵を見よ、

トウレン 等蓮 二〇五〇 二一三〇 〔臨濟宗〕京都南禪寺第百五十五代なり。等蓮、字は竺雲、別に自彊又は小朶子と號す。鄉貫詳ならず。明德元年に生る。幼にして出家し、京都天龍寺太岳周崇に就いて訓陶を受け、その法嗣となる。後、萬壽寺に住し、永享七年八月相國寺に移り、寶德二年八月將軍足利義政夢窓の塔を拜して受衣の儀あるや、等蓮その式事を掌る。三年勅を受けて南禪寺に陞る。後、退いて嵯峨に妙智院を開きて靖退の地となし、常に史記、漢書等を講ず。故に當時蓮漢書と稱せらる。又、聯句に巧みなり。文明二年正月七日寂す壽八十二。著作、繫雲集、瓶梅あり。共に傳らず。（妙智院過去帖、五山文學小史）〔再錄〕

トクシヤウ 德昌（二一四九）〔臨濟宗〕京都建仁寺第二百三十一代なり。德昌、字は槇林、別に蕣闇、靑松、松窩、武陵、蕣闇、晦夫等の號あり。鄉貫詳ならず。五歲にして京都建仁

寺に入り、稍々長じて内外の典籍を學習し、英俊を以て稱せらる。後、伯耆安國寺科甫忍に就いて法を嗣ぐ。近江山上石頭菴に住し、尋いで建仁寺西來院に移る。延德元年建仁寺を董し、後住すること十二回、常に天隱龍澤祖溪德濬と交ること深く、又、老儒清原宣忠とも交遊すと云ふ。常に西來院にありて書史に耽り、傍ら童蒙の爲めに講授す。著作、史學提要抄、古文眞寶注、三體詩註、桂林錄、蕣闇疏稿各一冊あり。（建仁寺住持位次簿、東山歷代、五山文學小史）〔再錄〕

トクシユン　德濬（　―　）〔臨濟宗〕京都眞如寺の僧なり。德濬、字は祖溪、別に水拙又は鶴峰と號す。俗姓は一ノ宮氏、阿波の人なり。早歲にして出家し、京都建仁寺光澤菴に寓して參禪す。初め阿波補陀寺に住し、尋いで駿河清見寺に移り、又、京都眞如寺に住す。博識強記にして大般若經を諳ずと云ふ。後、病に罹り東山瑞光菴に寂す。遺偈に曰はく於無生滅、說生滅、紅爐雪飛、氷河焔發、と。寂年及び壽缺く。著作、水拙手簡、水拙集あり。（五山文學小史）

トクニン　德潤　二三三五―二四一〇　〔天台宗〕武藏東叡山凌雲院第八世なり。德潤、字は定玉、蘆谷堂と號す。俗姓は芝崎氏、播磨飾東郡姫路の人なり。父は宗直、母は西城戶氏、貞享四年十一月播磨增位山憲海に就いて剃髮し、元祿八年正月比叡山に登り、德王院亮潤に從ひ、又、禪定院靈嚴に學ぶ。十年十月法華會の竪者となり、十一年九月本性院眞場の弟子となり、十月本性院を主る。正德元年十一月靑蓮院主の命を受けて侍講となり、二年二月從ひて江戶に赴き、四年正月鈍色衣を賜はる。五月五大灌頂の時その事を掌り、錦袈裟を賜はる。五年三月又、從ひて日光山及び江戶に赴き、享保元年記室職となる。四年八月大僧都に任ぜられ、五年八月擢でられて執行代となる。九年六月執行代を辭し、又、擢でられて望擬講となる。十三年六月擬講となる。十五年四月遷りて覺林坊を主り、六月冷泉前亞相爲經の猶子となる。十六年崇保親王の命に依りて兼ねて山城山科龍華院を主りて山科に居り、隨宜樂親王の師傅となる。又、兼ねて近江愛知郡百濟寺を領す。十七年四月別請竪義となり、十八年十月探題となる。二十年二月權僧正に任じ三月參內拜謁す。元文二年二月隨宜樂親王に從ひて東叡山に赴き、七月山科に遷り、尋いで比叡山麓覺林坊の別院に遷る。三年三月僧正に轉じて參內拜謁す。四年正月轉じて東叡山圓珠院を主り、八月凌雲院に遷り、兼ねて越後古志郡安禪寺を領す。五年十月紅葉山別當職を兼ぬ。寬保元年四月大僧正に任じ、延享二年三月紅葉山法華八講會に預る。寬延三年六月二十一日寂す。壽七十六。凌雲院に葬る。隨宜樂親王より滿成院の諡號を賜はる。（東台子院譜略）

トクノウ　得能　二五二〇―二五七一　〔眞宗〕東京淺草宗恩寺の住持なり。得能、幼名は貞、雲溪と號す。姓は生田氏、後、織田氏を襲ぐ。越前阪井郡波寄村の人。萬延元年十月三日同村觀音寺に生る。明治四年十二歲にして福井別院の學舍に入り、十年師範學校に入る。十二年七月師範學校を卒業し、九月同校及び福井中學校の助敎諭に任じ、傍ら富田厚積滋賀有作の兩氏に就きて漢學を修む。十五年中學校長と論合はざるより、辭して京都に上り、高倉學寮に入り、十六年原田雅壽に就き

て唯識俱舍を學ぶ。十八年河内葛城山高貴寺に到りて四分律及び大乘律を學び、旁ら慈雲の記錄を披見す。同年六月越中に往きて、雅壽に就いて學び、尋いで東京に向ひ、途次伊勢を過ぎ、舊友淸水某の勸めに依り、楷梯學舍に入り、二十年一月東京に入り、島地默雷の知遇を得て、その宅に寓し、默雷と共に三國佛敎略史の稿を艸す。二十一年暹羅國全權大使ビヤバスカラオングスの歸國に從ひて暹羅に遊び、同年三月盤谷府に着し、南方佛敎の事情を視察す。二十三年六月バヌランシー親王の來遊に從ひて歸り、貝葉經典六十餘帙、佛像數軀、靈塔數基を齎したり　二十四年淺草宗恩寺の住職となり、哲學館の講師に聘せらる。二十六年石川舜台等の宗敎法案運動に反對し、竟に宗籍を除かる。又、高等學校に聘せられて國文及び佛敎を講じ。三十三年支那に遊ぶこと半年にして歸り、次いで岡倉覺三と印度に遊ぶ、後、專ら佛敎大辭典の編纂に從事す。四十年夏腦脊髓炎に罹り、終に癒えず、四十四年八月十八日靑山腦病院に寂す。壽五十二。著作、和漢高僧傳、大乘起論義記講義、八宗綱要講義、佛敎大意講義、七十五法名目講義、蓮如上人略傳御訓、法華經講義、佛語解釋、佛敎金言集、天台四敎儀講義、大乘起信論和解、天台四敎義和解、暹羅佛敎事情、三國佛敎略史、（島地默雷と合著）の十餘部あり。（織田得能師經歷）

ナの部

ナンイン　南隱　ゼング全愚を見よ、

ナンポウ　南峯　メウジヤウ妙讓を見よ、

ナンレイ　南嶺　シエツ子越を見よ、

ニの部

ニチエン　日演　（二二五五―二三一八）〔日蓮宗〕和泉妙國寺の學僧なり。日演、字は玄益といふ。顯壽院と號す。俗姓洲浪氏、備前の人。東遊して小西談林に入り、內外の學を修め、後武藏報恩寺に住し、尋いで山城善正寺に住して講席を張り、學徒四來す。後妙國寺第六世日建の讓を受けて妙國寺第七世となり、中山法華經寺の寺務を兼ぬ。晚年攝津高津に退隱し、和歌を樂む、萬治元年十二月十七日武藏岩淵に寂す。壽六十四報恩寺に葬る。著作懸橋あり。法華二十八品の題詠和歌なり（佛心歷代師承傳）

ニチカク　日覺（一七七六）〔天台宗〕近江延曆寺の學僧なり。日覺は比叡山に在りて顯密の學を修め、且つ曆數宿曜の術を辨ず。嘉保二年一月夢中に術を案じ、永久四年に至り、十二時漏刻の器を創始す。藤原敦光銘を製して曰はく。去嘉保二年孟陬之月、夢中案術、覺後施巧、天盤則縱橫三尺、表三才也、地盤則方各四尺、辨四序也、南中央有一孔穴堅二寸法二儀、橫四寸方四點也、其器圓也、象圓蓋之遞轉、其基方也、類方輿之不搖、禽獸居中、隨十二時而形現、童子立上、向方角位而指點、一動行一刻、八動成八刻、各有動轉、必有音韻、不登臺以賭天文、不出戶以知時刻、唯此靈器深以秘藏云々。これに依りて其器の形狀等を知るべし。生緣及び示寂

年月日を詳にせず。（朝野群載）

ニチキ　日龜　二五〇一 二五七一　〔日蓮宗〕久遠寺第七十九代なり。日龜、字は戒靜、妙地院と稱し、別に靈龜と號す。姓は久保田氏、駿河清水町の人、久保田甚右衞門の第四男なり。天保十二年十月四日生る。嘉永三年十歳にして町の妙慶寺に入りて觀慈院日啓に師事し、同年九月得度す。五年身延山西谷善覺院學庠に學び、翌年日啓寂し、安政三年三月下總飯高檀林に轉學し、更に東京駒込蓮久寺にて日薩の講筵に侍す。次いで三保妙福寺に住し、母の孝養を盡す。慶應二年二十七歳にして再び池上南谷檀林に入りて日薩に侍し、造詣頗る深し。傍ら漢學を小笠原東陽に稟け、且つ詩文を習ふ。明治元年日薩の教授を助けて池上妙教院に在り、以來數年に及ぶ。四年三月上總大多喜藩主僧侶の無學を憤りて悉く還俗せしめ、且つ寺院を廢滅せんとす。有志者依つて石神に宗學校を開き、日龜その請に應じて教鞭を執り、時弊を矯正す。藩主その德に服し、毎年米十俵を供せり。五年五月教部省設けらるゝや、日薩、日鑑の命を受けて神保日淳等と宗門改善の方針を協定し、又、宗門教育に對する建白書を管長に呈す。同月權訓導に補せらる。六年三月東京谷中佛心寺に住し、七年二月管長の命を受けて第七教區を巡教し、爾來巡教國内に普ねし。八月神佛合併大教院の創立せらるゝに際し選ばれて講究及び編輯員に列す。九月京都本滿寺に昇住し、村雲門跡日榮尼公並に一條家松壽院殿に進講す。八年七月京都府中學院教師に任ぜられ、翌年二月愛知縣中教院教師を兼ぬ。十年五月内務省より大講義に補せられ、十二年一月愛知縣中教院教師專任となる。二月下總弘法寺に轉ず。十三年三月法華經寺第百十四代の席を主り、母を迎へて奉養せしが幾もなく母歿せり。以來諸堂の修理、三門の新築に從事すると十九年、大にその廢を興す。同年十一月太政官より權少教正に補せらる。十四年三月第十一教區中教院教師に轉じ、十八年五月管長より權僧正に補せらる。二十一年八月日薩の寂するに臨み、長興、長榮二山の付屬を受けしが、二十三年三月住職罷免、學位剝奪の厄に遭ひ、比企谷に隱棲す。二十五年一月その職を復せらる。二十八年二月評議員に擧げられ、三十九年九月第二教區甲部小檀林長となり、三十一年宗會甲部議員に選ばる。三十二年四月第一教區中檀林長に任ぜられ、尋いで教頭及び第一教區小檀林長を兼ぬ。同年長興長榮兩山の席を董す。三十四年四月長榮山回祿に罹り、爾來再建の募緣を勸めて其工事を起す。同年學區の會議を開き、檀林合併の規模を以て第一學區中檀林の校舍の新築の提議をなす。三十六年十一月日蓮宗管長に當選し、同月大僧正に累進し、又、日露戰役、報國義會の會長となる三十七年日蓮宗大學を開創し、二年にして管長の職を辭し、本門寺の再建に專任す。四十三年四月九州巡教の途に上り、名古屋に至りて疾起りて鎌倉に歸養し、四十四年四月十三日寂す。壽七十一。臘六十五。（日龜大僧正略歷）

ニチケン　日健　ニチトウ日董を見よ、

ニチシヤウ　日清　〔日蓮宗〕相摸足柄妙福寺第二十八代なり。日清字は蓮眞、心量院と云ふ。初め俗名を山内甚五兵衞一直と云ふ。備前の人なり。京都に上り、熊澤了介に從ひ

て儒學を修め、妙心寺白巖に參じて禪學を修し、後江戸に下る。少より劍術を好みて八流を究め、益々奧妙に入りて開悟し、自ら無敵流と云ふ。板倉内膳正に聘せられて師範となり老後出家して蓮眞と號す。小田原稻葉侯太夫田邊氏業を受け遂に妙福寺に請ず。乃ち入りて二十八代の住持となり、堂塔を修營し、同寺中興開山となる。寛文十三年同寺に寂す。壽六十二。（碑文）

ニチタイ　日泰　二三三〇―……（日蓮宗）和泉妙國寺の學僧なり。日泰、字は仙陽、駿河の人。俗姓を詳にせず。駿河感應寺日陽に師事し、飯高談林に入りて內外の學を修め、後師跡を繼ぐ。感應寺後に紀伊に移轉し、師その地に至り住す。池上本門寺日樹不受不施を主張す、身延山の日暹、師を迎へて說を聞く。師紀伊より武藏に至りて說明要を得たり。寛永十年堺の妙國寺に住し、鐘樓等を造營し、翌年中山に輪住し、尋いで頂源寺に退隱し、講席を張し、學徒四來す。寛文十年七月一日頂源寺に寂す。壽七十六。著作、塔婆書あり。一宗の間に行はれたり。（佛心歷代師承傳）

ニチトウ　日董　二五〇八―二五六五（日蓮宗）京都妙顯寺の住持なり。日董初名日健、字は是純、初字是勇、別に時中院と號す。幼字は次八、姓は小林氏、越後三島郡出雲崎の人なり。嘉永元年正月十七日に生る。三歲にして小倉百人一首を暗誦し、七歲、同町圓正寺に入りて學ぶ。安政五年十一歲、同郡村田妙法寺日曼に投じ、十月剃染受戒す。萬延元年三月下總香取郡飯高檀林に入りて、新說法式を學げ、慶應元年五月妙法寺子院安全坊に住職す。明治二年四月再び飯高檀林に入りて研學す。六年七月新井日薩に隨ひて東京芝二本榎町日蓮宗教院に入り、七年七月教導職試補となり、九月甲斐行野村行善寺に住職す。八年權少講義となり、九年十一月東京四谷千駄ヶ谷仙壽院に住職し、十一年四月少講義となり、十二年四月中講義となり、五月新潟中教院教師となり。十三年五月蒲原郡三條町實盛寺に轉住す。十四年二月權大講義となる。三月同郡東島妙蓮寺を主り、十一月本堂改築を落す。十六年五月大講義となる。十八年三月大檀林準教師となり。十九年三月權僧正となり。二十年十二月妙顯寺住職に選ばれ、二十一年五月晉山式を學げ、十一月諸問總會を東京に開きて、その議長となり。二十三年一月大檀林林長となる。四月本山諸堂の修繕をなして、開山日像の五百五十回忌を行ふ。六月東上會事務取扱となり、二十四年十二月管長に任ぜらる。二十五年一月大僧正となり、二十六年六月日像華洛弘通記念祭を修し、二十七年十二月再び管長に任ぜられ二十八年八月臨時宗會を開きて宗規を改正し、三十年四月宗會法を編成す。三十一年五月その職を退き、三十七年大學林林長となり。三十八年七月三十一日寂す。壽五十八。著作、

小林日董師

法華題目鈔和註二冊、法華經要品改正訓點一冊等あり。(日董履歴死後遺告書、日董上人傳)

ニチヨ 日與 二五一四 二五六九 〔日蓮宗〕駿河海長寺第五十九世なり。日與、字は文靜、松竹と號す。姓は守本氏、江戸の人なり。安政元年二月二十七日に生る。幼にして牛込善國寺に投じ、文久元年十一月新井日薩に從ひて得度受戒し、尋いで池上南谷檀林に新説法式を擧ぐ。明治六年十二月大教院下等學科を卒業して、訓導に補せらる。次いで同人社に入り、中村正直に英文を學ぶ。十四年十二月その業を卒ふ。十六年一月大教院教師に任ぜられ、翌年十一月池上大檀支林準教師に轉ず二十一年宗門内訌の起るや、自ら進んでその衝に當り、畫策する所少からず。二十七年戰役の起るや、報國義會の囑に依り、朝鮮に渡りて軍隊に布教し、二十九年九月第三學區中檀林林長となる。三十二年十二月駿河安倍郡不二見村海長寺に住し、三十五年不二見教育會を興して副會長となり、三十七八年の戰役に從軍す。四十年一月不二見青年聯合會を興して名譽會員に推さる。日與才氣縱横詩を能くし、又、書に巧みなり。晩年專ら教觀の鑽仰に潜心す。四十二年病革るや特に權大僧正に補せられ、五月二十六日寂す。壽五十六。

ニチヱンバウ 日圓房 カクワ覺和を見よ、

ニンカイ 仁海 (二四二一) 〔曹洞宗〕河内法藏寺の二代なり。仁海、字は鎔州、俗性は長曾我部氏、四國の人。同寺好山の法嗣なり。寶暦十一年二月好山寂して後、同寺の再營を繼ぎ、佛殿、法堂、寮舍、方丈等悉く再建す。禪餘畫を好み沈氏者流を慕ひて虎を圖して精妙を得たりと云ふ。年壽共に缺く。(河内名所圖會、古畫備考)

ニンジヨ 仁恕 シュゲウ集堯を見よ、

ニヨダイニ 如大尼 ムヂャク無著尼を見よ、

ニヨダウ 如道 一九一三 二〇〇〇 〔眞宗〕越前足羽專照寺開山なり。如導、童名を珠千代麿と稱し、京都の人。平判官康頼の曾孫、康敏の子なりと云ふ。母は賀茂氏。建長五年四月八日に生る。文應元年春親鸞の室に入りて剃髮式を受く。以來禪房に在ること三年、弘長二年十一月親鸞寂するに及び、諸處を遊歷すること十九年、弘安五年三河蓮照寺の圓善を師として眞宗の法を傳承す。同八年越前に遊化す。領主波多野治郎左衞門尉通貞深く歸依し、正應三年八月足羽郡大町に專照寺を建立す。乃ち圓善より受けたる大師自刻の眞影及び遺骨を安置す。正應四年善鸞の息女玉垂を迎ふ。正和二年長泉寺別當孤山、愚闇記を作り聖淨二門の疑難二十ヶ條を設く。元應元年愚闇記返札を作りて之に答ふ。暦應三年八月十一日寂す。壽八十八、門人に如覺、道性、道願、祖海等の數人あり。その後を三門徒派と稱す。

ヌの部

ネの部

ノの部

ハの部

バイイン 梅印　ゲンチウ元冲を見よ、

バイシン 梅心　セイゴ正悟を見よ、

ハウカウ 彭康　インカウ胤康を見よ、

ハウゲン 芳源　シウセウ周沼を見よ、

ハツトリバンカイ 服部鑁海　バンカイ鑁海を見よ。

ハフゲン 法彥（二五一九 二五五三）〔眞宗〕越前足羽佛照寺の僧なり。法彥は足羽郡南江村佛光寺派佛照寺住職法讓の男なり。初め本山學寮に入り、宗乘を研究し、次いで攝津富田行信教授に學ぶ、二十歲東京に出遊し、明治二十一年生田得能と共に暹羅に到り、盤谷に留まること數月、別れて錫蘭に至り、哥倫坡に止まり、スマンガラ僧正に從ひ、梵語巴利語の經典を學び學大に進む。二十三年土耳其に達し、更に歐洲に漫遊し、英國劍橋、牛津の諸府に至る。又佛蘭西に入り、巴里ギメー博物館に親鸞の報恩講を修す。二十四年五月軍艦に便乘して品川沖に着し、南條文雄と謀り巴里原文譯出出版を企て、その業緒に就く。二十六年七月九日寂す。壽三十五。遺書十餘部ありと云ふ。

ハフニ 法爾（二二二三 二三〇〇）〔時宗〕京都金光寺第二十一代なり。法爾、元と持阿と號す。俗性は佐伯氏、相模小田原の人有三の弟子。初め京都七條金光寺に住す。寬永四年二月相模藤澤淸淨光寺に於いて賦算六十五、遊行十四年、同十七年十月廿九日甲斐一蓮寺に寂す。壽七十八、戒臘九。（遊行歷代譜）

ハンカイ 範海（二五二八）〔天台宗〕武藏寬永寺淩雲院の僧なり。龍王院純海の弟子にして、幕末有名の僧なり。嘗て上野は天海に始まり範海に終ると迄云はる。上野に於ける彰義隊戰敗の後、義觀、光映、堯忍を始め一山の僧徒は凡べて彰義隊に一味し、輪王寺宮を煽動したるものと看做され、僧侶は一人も歸山するを赦されざりしが、當時範海は大僧正に任じ淩雲院の主僧となり、明治元年十月嘗て同窓にして當時官軍にありし野見鍉次郎と共に一書を大總督府に差出し、奧羽に到りて、輪王寺宮門主を迎へんことを請ひしが、大總督宮は野見鍉次郎を差添として之を許されたり。示寂の年月日は詳にせず。（彰義隊戰史）

バンカイ 鑁海（二五〇六 二五六九）〔眞言宗〕伊豫仙龍寺の學僧なり。鑁海、姓は服部氏、大和の人。弘化三年五月一日に生る。安政三年十二月同國平群郡生駒山寶山寺法慶に就いて得度し、慶應二年八月高野山に入り、寶譽、密榮の兩師に學び、更に近江三井寺に往き、中川大寶に天台學及び韻學を受け、次いで京都知恩院にて吉水雷雨に學ぶ。その他高野山性源院周傳に中院流事相を受け、生駒山乘空に勸修寺西大寺の兩流を稟く。明治三年二月紀伊那賀郡野上村西方寺に住し、七年十月教導職試補となり、翌年十一月中講義となる。十八年　月山城愛宕郡今熊野村觀音寺に轉じ、二十年二月伊豫宇摩郡新立村仙龍寺に移る。この間攝津中山寺を兼務すること數年なり四年權大僧正に累進す。鑁海は特に布教に於いて功ありしものにして、明治九年以來東西に巡敎する傍ら布教練習所講師として貢獻する所多し。四十二年六月十三日寂す。壽五十四

同宗より大僧正を贈らる。著作、空拳夜話、教導辨要、教示章講義錄若干卷あり。

ハンケン　範憲　一九〇七―一九九九〔法相宗〕大和興福寺別當なり。範憲、鄉貫詳ならず。花山院宗雅の猶子にして尊憲の弟子なり。弘安元年興福寺維摩會の講師に任じ、正安元年六月權僧正を以て興福寺別當に任じて、三藏院を開き、治すること一年、乾元元年十一月再び任ぜられて、又、治すること一年、翌年五月僧正に任ぜらる。德治二年正月三び任ぜられて、治すること四箇月、同年四月大僧正に轉ず。正和二年七月四び任ぜられ、三年正月之を辭す。嘉曆二年十一月五び任ぜられ三年三月に辭す。曆應二年十二月十七日寂す。壽九十三。（大乘院記錄拔書、興福寺別當次第、興福寺々務次第、興福寺三綱補任、本朝高僧傳、大日本史料）〔再錄〕

バンコン　蕃根　二四八七―二五六七　東京の佛教學者なり。蕃根、初めの名は圓眞と云ふ。別に如縄道人、曉華懺士、懺翁道人、天心書屋、月竹道人、天心居士、蘭莪室、一漚居士、身修懺士、獨朗庵、四痴齋等の別號あり。姓は島田氏、周防德山の人なり。その先は南朝の遺臣島田良義に出づ。良義、安藝に移りて毛利氏に仕へ、その裔良盛に至りて修驗道を學び、以來世〻その道を奉ぜり。蕃根は良盛第九世の孫なり。文政十年十二月二十八日に生る。幼より學を好み、長じて博覽强記又、父祖の家業を繼ぎ、修驗道の學術を究めて德山教學院に住す。後、伊豫の晦巖に就いて臨濟宗の禪に參得す。明治維新の際修驗道を去りて藩校興讓館の教授となる。時に藩主元蕃の偏字を授かりて名を蕃根と改む。尋いて德山藩大參事に任ず。明治四年尾越蕃輔と謀りて、德山藩を山口藩に併せんことを請ひて許さる。之を天下廢藩の始めとなす。同五年三月東京に上りて教部省に出仕し、大錄に任ぜらる。十年教部省の廢せらるゝに當りて官を去り、十二年內務省社寺局に奉職し、爾來內閣記錄局、修史局等に歷仕す。十三年增上寺行誡と謀りて、弘教書院を芝山內に設けて縮刷大藏經を刊行す。次いで福田會育兒院の創立に關して、その基礎を確立せり。蓋し同會は明治維新已後佛教慈善事業の始めなり。官を辭して以來常に古書畫を愛して價格を顧みずして購入し、又、之を刊行したり。聖德太子の三經疏、梵網經の如き是れなり。常に儉素にして綿服を纏ひ曾て絹布を着けたることなし。三十九年六月舊友門生等相謀りて八十賀會を芝靑松寺に開く。四十年九月二日卒す。壽九十一。（島田蕃根先生誄辭、『嶋田蕃根翁』）

ハンシ　範之　二五二二―二五六九〔曹洞宗〕越後東頸城保倉顯聖寺の禪僧なり。範之、初めの名は善來と云ふ。字は洪疇、保寧山人と號す。幼名は範治、久留米藩士佐波四兵衞の第三男なり。母は島田氏、文久三年十一月廿三日に生る。明治六年福岡縣三井郡草野町醫師武田家に養はる。然れども醫を好まず、吉富復軒、江崎巽庵等に就いて學ぶ。十四年京都に遊ぶ。十五年東京に遊び神原精二の共慣義塾に學び。一夜天象を仰いで疑を起し、飛驒の山中に入り、又上野赤城山下に從る。後ち、越後の關山村寶海寺に至り初めて佛書を讀み、遂に東頸城郡保倉村顯聖寺根松玄道に就いて出家す。以來勉學修行す。後ち長岡曹洞宗專門學校に入り、次いで天台宗の三好野千春に

就いて教義を學ぶ。二十一年冬師玄道の常恒會に於いて立職し、翌年八月玄道寂し、石田道牛其席を繼ぐに及び山を下りて東京に出で、柴四朗等と交はる。後ち各地を放浪し、遂に久留米に至る。二十五年秋朝鮮に渡らんとして博多を發し、對馬を經、金鰲島に上陸し、初めて李豐榮と會し意氣相投じ、以來朝鮮開發を以て自ら任ず。二十六年春博多に歸り、結城虎五郎の計畫に贊同し、漁船八艘漁夫三十餘人を率ゐて再び金鰲島に渡り、又李豐榮と交を深くす。偶金玉均の書を介し、李豐榮と共に事を擧げんとしたるも果さず。二十七年清國の事變起るに及び、戰地に奔馳し病を獲て歸り、大坂に隱るゝこと月餘、二十八年春東學黨の起るに及び、廣島に至り樺山資紀を問うて謀る所ありしも行はれず。九月柴四朗と共に京城に入りて李豐榮を訪ふ。閔妃殂するに及び俄に退韓の令を受け、廣島監獄に獲送せられしも、二十九年一月免ぜらる。三十年越後顯聖寺に歸り、中頸城郡桑取村東林寺の住職となり、同年永平寺に就いて瑞世轉衣し、三十三年道牛の寂するに及び、顯聖寺住職となり、同宗革新の氣勢を揭げ、又雜誌大帝國に筆を執る。三十四年顯聖寺の方丈を改築す。三十五年末派總代議員となる。三十七年嘗て上地せしめられたる顯聖寺境内の一部を還す。三十九年同じく國有不要存置林二十餘町を特買し、又石川素童を請じて日清戰役の追弔法會を修す。此年内田良平統監府員となりて渡韓するに及び、又招がれて十二月京城に入る。四十年夏顯聖寺に歸り、秋再び渡韓す。四十一年春歸山して顯聖寺認可僧堂の開單式を擧ぐ。夏、韓國十三道佛寺總顧問となり、李晦光等をして圓宗宗務院を京城に設立せしむ。十月東京に歸り、十一月顯聖寺を祥雲晚成に讓り、四十二年三月渡韓し、一進會顧問となりて日韓併合に力を盡す。十月東京に歸り十一月渡韓す。四十三年十月歸りて顯聖寺に入る。四十四年六月二十三日東京下谷中根岸養生院に寂す。壽四十七、著作、南山松譜、隆熙改元歌、洸瀣經、圓宗六諦論、同附錄、鰲海釣玄正續等あり。

ハヤシダウエイ 林道永　ツウシヤウ通昌を見よ、

ヒの部

ヒメミヤダイヱン 姫宮大圓　ダイヱン大圓を見よ、

フの部

フヂヤマヱモン 藤山衞門　ジヤウレン成連を見よ、

フヂヰセンシヤウ 藤井宣正　センシヤウ宣正を見よ、

ブツマ 佛磨 二四七七 二五二二 曹洞宗」武藏北豐島南千住圓通寺第二十三世の住持なり。佛磨、姓は武田氏なり、信濃國の人、幼にして父を失ひ、母氏に賴り、育せらる。七歲人を傷けて死に致し遂に僧となりて佛磨と稱す。後ち本寺に住す。慶應四年五月十五日西軍彰義隊を東叡山に討つや、隊兵終に敗れ、一山皆燬く。後數日を經るも、死屍累々として鮮血流るゝのみ、然れども西軍の威を憚り之を能く收斂する者なし。佛磨慨然として之を哀れみ、三河屋幸三郎と計り之を火葬に附せんこと

を請ひて許可せられ、同時に上野凌雲院にも死骸取方付の命あり。時に佛磨貧甕洗ふが如し、江川隼太なるもの金壹兩二分を貸與し盡力少からざりきと云ふ。佛磨乃ち出羽國黑山の修驗者弘善に依賴し、因州藩の重役に交渉せしめ、又金三兩を以つて人夫十二名を傭はしむ。佛磨之を使役して死骸二百六十六を收め、之を山王臺（現今彰義隊戰死墓地）に溜め長さ三十間位の大穴の邊りにその幾分を燒き、他の幾分は穴中に埋葬せり。その燒きたる遺骨は自坊に收めて墓石を建つ。後ち常に山王臺埋葬地に至り、鐘を叩き讀經供養したり。明治二年春上野護國院の主僧清水谷慶順、寒松院の主僧多田孝泉と謀り、一小碑を建設す。後ち佛磨その墓碑を携へ歸り自坊の境内に建てしが、三河屋幸三郎更に圓通寺より之を取戻し劍客榊原鍵吉に持ち行き、書家關雪江、劍鍛冶栗原建次等と協議の上、再び上野山王臺に建設したり。圓通寺には以來詣づるもの甚だ多く、香火常に盛んなりと云ふ。明治二十五年一月二十四日寂す。壽六十六、翌年一月墓碑をその寺に立つ。（二十三世佛磨大和尚之墓碑文、彰義隊戰史）

ブンエイ　文英　セイカン清韓を見よ、

ブンガ　文雅　ケイゲン慶彥を見よ、

ブンキ　文器　二四六九 二五一八　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり。文器、字は大圭、姓は落合氏、東京の人なり。幼にして潤叟文瑄に就て受具し、二十歲遊方して阿波の玉潤に學ぶこと殆ど六年、又、美濃の天澤菴にて刻苦參禪す。次て潤叟の法を嗣ぎ、濟松寺の席を董す。後、勅を受けて妙心寺に住し、紫衣を賜はる。安政五年秋寂す。壽五十。（濟松大圭和尚備傳、斗室集）

ブンジヤウ　文靜　ニチヨ日與を見よ、

ブンセン　文瑄　二四三七 二五〇二　〔臨濟宗〕京都妙心寺の禪僧なり。文瑄、字は潤叟、姓は原田氏、京都の人なり。幼にして出家し、東京濟松寺謙堂に就いて受具す。次て伊豆の東嶺に參じ、又、陸奥の南山古梁に事ふ。二十歲遊方して諸老宿に參じ、周防の性堂に侍すること前後十八年、遂にその法を嗣ぎ、濟松寺に住す。天保三年春勅を受けて妙心寺に住し、且つ紫衣を賜はる。五年濟松寺に還る。住山前後三十四年、石水軒を造りて居る。文久二年正月二日寂す。壽八十六。普照禪師の號を賜はる。（濟松潤叟和尚要傳、斗室集）

ブンソウ　文總　ジユケン壽顯を見よ、

ブンタウ　文幢　二四八四 二五六五　〔臨濟宗〕京都東福寺第二百九十一代なり。文幢、字は敬冲、別に斗室と號す。俗姓は河田氏後、自ら濟門と改む。岐阜縣山縣郡高富天王の人なり。その先は名古屋藩士なりしが、祖父の時美濃に移れり。父は善衛、母は篠田氏、兄弟四人あり、その第三子なり。文政七年十一月十六日に生る。三歲の時父歿し

濟門敬冲師

母に養はる。天保五年秋十一歲天澤寺棠林を介して、東京牛込濟松寺淵叟の弟子となり、十五歲得度す。天保十四年秋二十歲、美濃天澤寺に掛搭して、雪潭に參じ、弘化二年秋廿南美山中に接心す。雪潭の伊深正眼寺に移るに從ひ、遂にその印可を受く。初め牛込濟松寺に住し、次いで淺草海禪寺に移る。嘉永元年九月母の訃に接し、即ち歸りて墳を掃ふ。明治維新の後、美濃瑞龍寺に住して四來の衲子を接し、明治十五年京都東福寺火災の後、匡道の後を繼いで之を董し、同派の管長たること二十四年、方丈を建て、宗制を定む。三十八年八月東京に遊びて海禪寺に寓し、九月濟松寺に先師の搭を拜し、同月四日海禪寺に寂す。壽八十二。著作、斗室集十七卷、斗室續集十卷、斗室外集六卷あり。（白業記、斗室自序）

への部

ベツシユウ　別宗　ソエン祖緣を見よ、

ホの部

ボクザン　穆山　キンエイ瑾英を見よ、

ボクダウ　朴堂　ソジユン祖淳を見よ、

ボンケイ　梵桂　二〇六三／二一九〇〔臨濟宗〕京都南禪寺第二百五代なり。梵桂、字は惟馨、東廬と號し、泰雲軒と稱す。鄉貫詳ならず。應永十年に生る。初め相國寺大智院元容周頌に侍し剃染受具の後諸方に參拜し、歸りて周頌に嗣法す。光源院（舊號廣德軒）に住し、翌年退いて光源院に居る。六年南禪寺に陞住し、應仁元年七月再び相國寺に住す。同年山名細川の軍京都に戰ひ十月山名の軍勢相國寺を攻め、庫裡、七堂、並に東方の諸院一時に焦土となる。文明五年洛北慶苑寺に住し、十年十一月三たび相國寺に至り、新法堂にて上堂す。以來伽藍再造の工を進む。長享元年杖を制して將軍義政に獻じ且つ副ふるに一詩を以てす。延德二年十一月五日寂す。壽八十七。著作、東廬吟稿あり。今傳らず。（五山文學小史）

ホンシヤウバウ　本性房（一九九三）〔‥‥〕大和般若寺の僧なり。生國氏族共に詳ならず。元弘三年九月三日六波羅の兵笠置を攻め、守備危かりし時、適〻本性房般若寺より卷數を持ちて使し、元來大力の僧なりければ巨巖大石を轉ばして二三十うち續けゝれば、寄手忽ち頽れて引き退きたりと云ふ。（大和人物志）

マの部

マツヤマシユンオウ　松山舜應　ギデン宜田を見よ、

マンシ　滿之　二五二三／二五六三〔眞宗〕三河西方寺の住持なり。滿之姓は淸澤初め德永滿之助と稱し、尾張名古屋の人なり。父は名古屋藩士德永永則と稱し、滿之は其嫡男なり。文久三年六月二十六日を以て生る。初め名古屋醫學校に學び、明治十一年得度して大谷派本願寺の僧となり、育英敎校に入る。十四年十一月選ばれて東京留學生となり、大學豫備門に入る。二

十年七月文科大學哲學科を卒へ、同年九月大學院に入りて、宗教哲學を修め、傍ら第一高等學校及び哲學館に教鞭を執る。二十一年九月京都府尋常中學校長に任じ、傍ら高倉大學寮に哲學を講ず。この年三河國大濱西方寺に入りて清澤の姓を冐す。二十六年の幕師患に罹りて須磨に療養し、二十九年九月本山の施政日に非なるを慨し、稻葉昌丸、今川覺神、月見覺了、淸川圓誠、井上豐忠の諸氏と謀りて一派の革新を企て、十月雜誌教界時言を發行して、その意見を發表し、夏に至りて局を結ぶ。三十一年春大濱西方寺に退く。三十二年春東京に出てゝ大谷派新法主の侍讀となり、三十六年春浩々洞を本鄕森川町に開き、翌年一月、多田鼎、佐々木月樵、曉烏敏等と共に雜誌精神界を發刊して他力信仰を鼓吹し、三十四年十月眞宗大學の東京に移轉するやその學監となる。三十五年十一月職を辭して大濱に歸養し、三十六年六月六日寂す。壽四十一。著作、精神講話、佛教講話、修養時感、懺悔錄、宗教哲學骸骨各一卷あり。（淸澤先生小傳、信仰坐談、淸澤先生略傳、淸澤先生の信念）

清澤滿之師

マンシユウ 萬宗　チユウエン中淵を見よ、

ミの部

ミホウ 彌峯　エンキ圓基を見よ、

ムの部

ムキウ 無求　シウシン周伸を見よ、

ムヂヤクニ 無着尼（一九四六）〔臨濟宗〕京都景愛寺開山なり。無着尼、字は如大、別に無外と云ふ。俗名は賢子（一說千代野）、秋田城介兼陸奥守藤原泰盛の息女にして、金澤越後守平顯時の妻なり。一女を生む。（女は後に足利貞氏に嫁す）無着尼は夫顯時逝去の後、粉華を去り嗜好を絕ち、佛像を崇尊し經典を書寫してその冥福を追薦し、特に建長寺に於いて子元祖元を請じて、釋迦像及び楞嚴咒を慶讃し、遂に祖元に就いて薙染し、祖元に參じて、その法を嗣ぐ。弘安九年祖元の寂するに臨み、正脉菴を營構して祖元の塔所となし、又、上杉氏二階氏等の助成により洛北松木嶋に景愛寺を建立す。皆祖元の遺命に遵ふなり。無著尼こゝに住して緇衆を董し、法道鼎盛なり。幕府奏請して尼寺五山の第一位に列す。又資壽院を建つ。寂年及び壽缺く、無着尼は我國に於ける女子の參禪嗣法の始めなり。（佛光禪師語錄、無着尼傳、萬山編年精要）

ムラタジヤクジユン 村田寂順　ジヤクジユン寂順を見よ、

メの部

メウアン 妙安 二一四〇 二二二七 〔臨濟宗〕京都相國寺第九十代なり。妙安、字は惟高、懶安と號す。近江の人なり。文明十二年に生る。初め京都妙心寺に入り、後、相國寺光源院瀑岩等紳に就いて受具す。次いで諸方に參じ、歸りて等紳の法を嗣ぐ。幾もなく光源院に住し、天文九年九月相國寺に出世し、同年南禪寺に陞住す。天文十四年鹿苑院に移りて僧錄を領し十九年五月足利義晴薨じて東山慈照寺に葬るや、之が秉炬をなす。又、東山慈照寺を兼領す。鹿苑に在ること七年、出雲伯耆兩國の太守の知遇を得て伯耆金龍山護國寺、多寶山海藏寺に住し、伯耆に留滯すること三十年、尙ほ慈照寺を兼領せり。永祿十年十二月三日寂す。壽八十八。著作、葉巢稿、詩淵一滴あり。今、詩淵一滴のみを傳ふと云ふ。（萬山編年精要、五山文學小史）

メウジヤウ 妙讓 一九五六 二〇二〇 〔臨濟宗〕下野龍興寺の開山なり。妙讓、字は南峯、姓氏缺く、常陸築波の人なり。八歲にして鎌倉淨智寺に入り、高峯顯日に就いて薙髮染衣す。顯日に隨ひて下野雲岩寺に移る。十六歲眞空の雲岩寺に住する及び侍者となる。後、諸方に遍參し、還りて淨智寺に典壙の職に任じ、次いで又錫を圓覺寺に掛け、一山一寧に參じて、記室の職に任ぜらる。幾もなく出でゝ東海道菊田高倉幻住菴に居る。正中元年書を下野興禪寺眞空に贈りて所悟を呈す。眞空の回章を得て使者と共に到りて參叩す。嘉曆二年九月脫然了悟する所あり、次いで京都に上り勝榮寺雲峯に就いて經錄を習學し、後、天龍寺に於いて後堂及び前堂に轉ず。後、又、九州に到り、法眼寺を建てゝ住し、建武四年下野に歸りて興禪寺を領す。住すること四年、次いで宇津宮大通寺、下野府中法藏寺、同佛性寺に遷り、又、宇都宮眞名子鄉內五大尊山麓に龍淵菴を結びて居る。時に稻葉聖仁入道、龍興寺を建て開山となし、塔を正受と曰ふ。氏綱、檀越となり、道價益ゝ播揚す。遂に將軍尊氏綸旨及び請帖を以て安國萬壽の兩寺に請じ、朝夕參扣せり。貞和三年西方寺に入りて夢窗疎石に見えて商量す。妙讓曰はく、昔日眞空和尙一喝の用處を覰破す、と。仍ち偈を呈として曰はく、德山棒下骨董袋、却和尙家珍百雜碎、此中高價無數量、不管玄沙未徹在、と。疎石妙讓曰はく幸に眞空傳底の衣有りと、贈るに法衣を以てす。遂に受けず。花山院京都に星福寺を建てゝ開山に請じたれども辭して下野龍興寺に歸る。後、尊氏より相模壽福寺の請帖を受けて入院開堂す。中山に南屛軒を設け、後ち金鷄菴と改む。終に下野龍興寺に歸る。花山院綸旨を以て召せども赴かず。又、龍興寺を以て勅願所とせらる。尊氏亦祈願寺となす。延文五年十二月二十三日寂す。壽六十五。佛巖禪師の諡號を賜はる（下野龍興寺開山佛巖禪師行狀）〔再錄〕

メンコク 綿谷　シウテツ周瞮を見よ、

モの部

モウコ　蒙古　カイジャウ誡誠を見よ、

モクタン　木端　二二六三／二三二三　〔時宗〕藤澤清淨光寺の第十八代なり。木端は藤光の弟子なり。初め日輪寺に住す。萬治三年四月藤澤清淨光寺に於し賦算二十八、遊行四年、次いで同寺に住し在二十年の堂宇を再建す。寛文三年三月晦日同寺に寂す。壽六十一。（遊行歷代譜）

モクライ　默雷　二四九八／二五七一　〔眞宗〕周防妙誓寺の住持なり。默雷、始め謙致と稱す。別に繇溪、縮堂、雨田、無聲、晩暢、北峰、六々道人の號あり。姓は清水氏、後、島地と改む。山口縣佐波郡和田村専照寺清水圓隨の第四男なり。天保九年二月十五日に生る。始め佛儒二學を同郡錦園塾及び萩城學校に學び、後、宗學餘乘を肥後及び安藝に修む。元治元年藩令して火葬を禁ずるや、送葬論一篇をものしてその非を辯じ、慶應二年春大洲鐵然等と議して、改正局を設けて、長防二州の眞宗一派の風儀改正の事に從ひ、萩城に學校を開きて、これを監督し、同年同郡島地村妙誓寺に住す。依りて後、島地を姓とす。明治元年同志白鳥唯唱、三國巧成、安邊行藏等を伴ひて京都に上り、赤城連城と協同して本山改正の事を建議してその功を奏す。尋いで本山の命を受けて、攝河兩州及び越前播磨等に到りて、末寺の改正を唱誘し二年秋郷里に歸りて長防二州の改正を行はしむ。三年春鐵然と共に京都に上りて本山の參政となり、同年八月又、共に東京に上り太政官に建議して、寺院寮を民部省中に創設せしむ。蓋し幕府時代の寺社奉行は維新の際に廢止せられ、當時神道の方は神祇官の設けあれども、佛教には別に施設なきに由れるなり。翌四年夏更に教部省開設の事を建議して採用せらる。偶々木戸孝允の內囑に依り、日新堂を神田今川小路に開き、新聞雜誌と題せる毎月三回發兌の新紙を發刊す。是れを本邦新聞の始めとす。同年十月岩倉實視大使となり、木戸孝允等副使となりて歐米に航遊せんとするに當り、默雷、新法主明如の同航を木戸に謀り、事成らんとして偶々前法主廣如の遷化に際して法主の洋行は中止せられ、翌五年一月その代理として梅上澤融を航遣せらる。時に默雷その補佐として隨行し、赤松連城及び光田、堀川の三氏は留學生として同航して獨英諸國に分留せられ、默雷は澤融と共に佛英獨蘭の諸國を巡視し、更に分れて瑞、以、希、土、埃及、耶路撒冷等を巡歷し、終に孟買より印度內地に入り、アルラハバッドに到りて佛跡を禮し、六年七月に歸朝す。是れを本邦僧侶の游歐入竺の嚆矢とす。然るに前年五月教部省設置以來、神佛混淆の弊甚しかりければ、默雷慨然として神佛分離の說を立て、宗教

島地默雷師

獨立の急務を首唱す。兩本願寺の法主及び佛光寺派、木邊派皆之れに同意したれども、その他の各宗及び佛光寺派三門徒派等は之れに從はず。依りて遂に眞宗四派のみ合同して、大教院の分離を請願したれども事容易に行はれず。六年冬より八年夏に至るまで前後三年にして遂に之れを貫徹し、獨り眞宗の分離のみならず、各宗すべて獨立の布教を許さるゝに至れり。これを神佛獨立の創始とす。同年夏島尾得菴と協議して白蓮社を開き、毎日曜日に中六番町なる法主の別莊を借りて宗教の講話會を開けり。又、前年より大內青巒と協議して報四叢談と題する雜誌を毎月發行し、傍ら和敬會の演說に出席す。九年一月本山の執行となり、眞宗合同して宗規綱領編制の事に從ふ。十年西南の役に當りて、木戶孝允の京都に薨ずるや、その葬儀を本願寺に依賴せらる。蓋し維新以後貴顯の佛葬此に始る。是れ默雷の公と交り厚きに由れりと云ふ。同年夏熊本鹿兒島に出張して戰後の鎭撫と救恤とに奔走し、偶〻西鄕隆盛が日向可愛の嶽の圍みを破りて城山に歸るに遇ひ、縣令岩村氏等と共に深夜舟に乘じて僅に一命を免れて京都に歸る。同年十一月再び鹿兒島に赴く。その後本山執行を辭し、十二月再び東上して白蓮社等の教學の事に奔走し、十四年大患に罹りたれども幸に癒え、十六年白蓮社堂、及び自宅を中六番町に建築し、十七年法主の命に依りて宗制寺法の起草員となりてこれを草按し、後、生田得能と共に三國佛教略史三冊を編述し、二十一年女子文藝學舍を開きて女子教育の事に從ひ、二十三年佛教各宗協會の囑託に依りて編輯委員長に選ばれ、佛教各宗綱要を編纂す。二十四年本山安居に文類聚鈔を大學林に副講し、二十六七年の間本山執行長の任務に從ひ辭職の際、學階勸學に進む。爾後東上して佛教各宗綱要五冊を編成す。三十四年本山安居に本講師として般舟讚を大學林に滿講し、本山より一等巡教師使待眞顧問に加ふるに耆宿の待遇を以てせらる。三十八年奧羽布教總監として盛岡に移り、東京なる白蓮社及び女子文藝學舍等は皆本山へ獻納す。嘗て教導職中教正に補せられて天顏を拜せしこと數回、又、日本赤十字社創立の最初より社員となり、遂に特別社員となりて有功章を佩用し、又斯文學會設立の際文學に選ばれて莊子を講じ、或は三宅雄二郞の諸氏と共に政教社を開きて雜誌日本人を發刊し、又三河國西重寺の請に依りて同寺を兼任す。明治四十一年一月故舊同人等の發起に依りて古稀の賀筵を築地本願寺に開かる。四十四年二月三日青山病院に寂す。壽七十四。(島地默雷上人略傳、雨田古稀壽言集)

モシン　慕眞　ケイテツ桂哲を見よ、

モンシヤウ　聞精　(二五〇〇―二五六三)〔眞宗〕加賀江沼郡勅使村廣成寺の學僧なり。聞精、姓は齋藤氏、加賀江沼郡山代村田中伊織の第四子なり。父は旅宿を營み、後、京都に出でゝ公卿の侍株を購ひ、帶刀の身となる。天保十一年九月二十八日生る二十歲頃より諸方を遊歷し、遂に永平寺の禪堂に入る。此時願成寺白嶺の知る所となり、眞宗の宗乘を學ぶ。明治六年石川縣より小學校訓導を申付らる。後、學庠に入り、園城寺の大寶に法華玄義及び起信論を學び、楞嚴院秀應に唯識述記を楠玉諦に五教章、四道源觀等を受く　十年本山石川縣小學校教授を申し付けられ、同年十月學庠教員に補し、十二年十

一月得業となり、十三年學庠下等專學部全部を卒ふ。同年十一月助教となり、十六年五月學庠副講に補し、十七年九月輔教となり、十九年二月學庠一等教授となる。同年九月宗內學教科書編輯係となる。二十二年九月司教となり、二十四年九月大學林教員に任じ、二十五年三月大學高等教員となり、二十六年安居他部副講講者を命ぜられ、二十唯識述記を講ず。二十九年九月勸學職に上り、同月病によりて休職す。三十二年安居本講觀經を講ず。學林休職の後、監督局監事及び內事局顧問となり、三十六年六月二日病んで寂す。壽六十五。宗主より戒忍院の號を贈らる。著作、有宗七十五法記聽記一卷（明治十七年頃講）校正增補略述法相義評解五卷（明治十九年刊）佛教或問一卷（明治二十二年十一月刊）二十唯識論述記講義一卷（明治二十六年夏安居副講）觀無量壽經講義一卷（明治三十二年夏安居講）有宗七十五法名目講義二卷あり。（安居講義錄、佛籍誌稿本、禿氏祐祥氏返信）

モリモトブンジヤウ　守本文靜　ニチヨ日輿を見よ、

ヤの部

ヤクシウ　益洲　ニンカイ仁海を見よ、

ヤマモトゴンシキ　山本儼識　ゴンシキ儼識を見よ、

ユの部

ユイカウ　惟高　メウアン妙安を見よ、

ユイケイ　惟馨　ボンケイ梵桂を見よ、

ユイミヤウ　惟明　ズイチ瑞智を見よ、

ヨの部

ヨシオカカジヤウ　吉岡呵成　カジヤウ呵成を見よ、

ヨシヰコリン　吉井虎林　エフセウ曄嘯を見よ、

ラの部

ラクサン　洛山　ジリユウ慈隆を見よ、

リの部

リハフバウ　理法房　チンカイ珍海を見よ、

リンイツ　林逸　ソウジ宗二を見よ、

リンオウ　臨應　ゼンキ禪機を見よ、

リンズイ　琳瑞　二四九〇 二五二七　〔淨土宗〕江戸小石川處靜院の住持なり。琳瑞、字は祥道、姓は細谷氏、羽前村山郡谷地の人なり。陸奥伊達郡桑折無能寺琳堂の徒弟となり、後、江戸小石川處靜院の住持となる。尤も氣慨あり、夙に開明の說を唱へ山岡鐵舟、高橋泥舟、那珂通高、淸河八郎、飯島武四郎（秋槎）等の名士と交際して屢〻世論を動かす。慶應三年十月高橋泥舟の宅より歸るや、途中安藤家の家士廣井求馬及び松岡平九郎の爲めに暗殺せらる。時に三十八歲。（彰義隊戰史）

リンソウジ　林宗二　ソウジ宗二を見よ。

リヤウキ　良基　二四六三―二五三七　〔眞言宗〕紀伊高野山金剛峯寺第三百七十六代の檢校なり。良基、初め覺如英澄と稱す。姓は藤原氏、父を又右衞門と云ひ、母は瀨良氏、備後の人なり。享和三年に生る。十歲にして同國助元村信光寺に入り、居ること一年にして生家に歸り、後、又、蘆原村法光寺に入る。次いで備中江良村西方院に移り、空道、覺明の二師に事し。鷲峰山法壽に從ひて薙髮す。十六七歲の頃讃岐高松に游學し十八歲にして王泉寺容悲に灌頂を受く。文政五年八月二十歲の時高野山に登りて寶龜院光盛の弟子となり、九月入衆し、數年の後學業大に進めり。文政十三年春光盛の譴斥を蒙りしが、後、又山に歸る。天保六年十月龍華院に移り、十一年寶龜院に晋み、嘉永六年十一月正智院に轉じ、安政三年碩學に進む。夙に勤王の志に厚く、清水寺月照及び弟信海と交はる。安政四年十二月三十日より平日勤行の外、大般若經二卷を讀誦し、不動愛染咒一千反を唱へて尊攘の祈禱に代へたり。五年二月十九日信海、近衞忠凞よりの御祈禱の御願文を持し、密使として高野山に來り、その夜、良基は信海とともに寶性院海雄を訪ひて密談を凝らす。同年五月二十七日信海更に御内勅の使者として登山せり、是れ當時英米魯等の使者頻りに我國に來りて通商を求めしにより、尊攘の祈禱をせしものなり。然るに同年六月十九日幕府は米國と假條約を締結し、二十七日之を朝に奏せしより、朝廷震怒し、志士憤慨す。九月幕府大に尊攘の志士を捕へて獄に投ず。時に月照は西海に赴きてこの年十一月十六日薩摩潟に死し、信海は獄に繫がれて江戶に送られ、翌六年三月十八日遂に獄中に死せり。七年正月四日幕府より寶性院海雄、增福院常賢と共に隱居を申付られ、良基は心南院に退けり。文久二年幕府の赦免を蒙り、翌三十年正月四日その狀高野山に着す。同年秋江戶に召されて碩學過人となり、歸山の途次京都に入りて近衞忠凞に面謁して赦免取成の禮を伸べ、歸りて正智院に住し、同年一﨟職に昇り、翌年左學頭に進む。明治二年五月從來の門主、碩學、集議席の名を改めて執政、副執政、參政とせられ、良基は執政に進み寶性院門主となり、山科安祥寺を兼務す。五年四月敎部省より召されて出京し、眞言宗管長代理として法務に盡力し、尋ぎて紀三井村護國寺住職となり、八年六月又、出京して大敎院の院務を管し、十月本宗管長となりて大敎正に進み、期滿ちて歸山し、寺務檢校法印の職に就く。十年十一月十六日寂す。壽七十五。和歌を好み、初め香川景恒に學び、後近衞家に入門せり、著作、密宗安心鈔一冊視聽雜記、閑窓雜記、あづまぢの記、兩部神道概要、敬神愛國論、日並の記等あり。

リヤウケン　亮憲　二二九九―二二七七　〔天台宗〕常陸黑子千妙寺第十五世なり。亮憲は初め肥前有馬金藏寺の作侶なり。十八歲東上して比叡山に登り、東塔西谷覺林坊に住す。後諸國を遍歷し、諸典を通覽す。園城寺長吏准三后道澄の請を受け、同寺日光院に住す。慶長六年十一月二十九日唐院に於いて道澄より灌頂を受け、園城寺三院の首座に推さる。元和三年十一月八日寂す壽七十九。著作、兩界曼荼羅私鈔十卷、金剛界曼荼羅現圖鈔胎藏界曼荼羅現圖鈔、曼荼羅尊位鈔、群玉類要集、驪龍頷下集、各一卷及び諸經の科註等あり。（一山別當代々記）

リヤウシン　亮親　二四七六—二五二四　〔修驗道〕豐前英彦山の山伏なり。亮親は醍醐坊と云ひ、佐竹織江と稱す。英彦山に住す。夙に尊王攘夷の議を唱へ、同山の執當職奉行職の諸僧と共に國事に奔走す。文久三年一山の大衆尊王攘夷の爲めに義擧をなさんとし、盟約連署の一人なり。教觀坊成連等と共に長門藩の忠勇隊に入り、京都に上りて偵察し、同十一月伏見に於いて小倉藩の兵に捕はれ、京都六角の獄舍に繫がれ。翌元治元年七月二十日獄舍に於いて慘殺せらる。壽四十九なり。（教觀坊成連の傳を參考すべし。）（維新史料、日子山義僧傳）

リヤウシユン　良舜　ジユンエイ順永を見よ、

リヤウハン　亮範　二五一一　〔淨土宗西山派〕山城粟生光明寺第九十六世なり。亮範字は闡空、尾張の人なり。同國祐福寺に住す。天保二年十二月光明寺に昇住し、四年學寮の講堂等を建築し、大に一山の學風を興す。總持寺恬澄と共に鵜ノ木行觀の私記を研究し、一流の教義を振興す。天保十一年八月桂の千光寺に隱棲し、益學問に力を盡す。嘉永五年七月二十九日寂す。著作論註管窺鈔、選擇管窺鈔、各五卷。玄義管窺鈔四卷。二十唯識管窺鈔、戒疏管窺鈔、圓頓戒集要鈔、各二卷。曼陀羅傳授祕要鈔、曼陀羅口授抄引、各一卷等あり。

リユウゲン　龍眼　セウベン照遍を見よ、

リヨウチン　龍琛　二一五八　〔臨濟宗〕京都南禪寺第二百一代なり。龍琛、字は九淵、別に葵齋と號す。鄕貫詳ならず。幼にして京都建仁寺兩足院に投じ、一菴一麟に就いて剃度し嗣法の後、建仁寺雲源院に住す。寶德三年冬（明景泰二年）允澎芳貞等に從ひて明に入り、吳越江淮の間に遊び、遂に北京に達し、都下の名官、英衲に交り、大興隆寺贊菴に謁して、正宗龍統の學を稱し、贊菴をして詩一篇を寄せしむ。景泰五年春辭して南京に到り、潤、常、湖、蘇四州を遍遊し、餘杭に到りて留まること十月、復、四明に歸り、衞時用と遊び、亦龍統に贈る詩を賦せしむ、同年六月寧波府を發して歸朝す。即ち吾が享德三年なり。幾もなく建仁寺に住し、長祿三年七月龍統の禿尾長柄帚の序を撰し、寛正七年の頃南禪寺に陞り後又、雲源院に靖退す。明應七年某月二十三日寂す。壽缺く著作、葵齋集あり。今、傳らず。（五山文學小史）

リヨウホウ　龍峯　クハウウン宏雲を見よ、

ルの部

レの部

レウケン　了顯　（二一三四）　〔眞宗〕越前足羽本向寺第五代の住持なり。了顯は足羽郡市波村本向寺了眞の子にして、同地に生る。吉崎本願寺蓮如に師事するに及び自ら吉崎に移る。文明六年三月吉崎の諸堂悉く回祿す。時に蓮如教行信證を閱覽し、六卷の內三卷を机上に取殘したれば、了顯猛火の中に入之を持出さんせしに、既に猛火に包まれたれば、自ら腹を屠りて數卷を腸中に納めて燒死す。今尙ほその血痕の浸染したるものを、本光坊腹籠の聖教と稱すといふ。その墓は吉崎本堂の舊蹟に在り、東西兩本山より特に建てし所のものなり。（本光坊緣起、越前人物志）

レイサイ　禮才　二一一二……〔臨濟宗〕京都東福寺曹源院の禪僧なり。禮才、字は愚極、山城の人、大中禮省の法嗣なり性、書畫を能くし、詩賦に巧みなり。專ら牧溪に學び、又、明兆を慕ふ。寶德元年十月渡唐天神の自畫贊を書畫す。寶德四年六月六日寂す。壽九十許。（本朝畫史、古畫備考）

レイサン　靈三　二一一九五／二二六八　〔臨濟宗〕京都南禪寺二百六十六世なり。靈三、字は玄圃、俗姓は荒川氏、治部少輔澄宣の子なり。大鑑派春芳光の法嗣となる。天正十四年五月京都南禪寺に入寺し、塔頭聽松院に住し、後、豐臣秀吉より院領百石を賜はる。足利義輝及び松井康之の歸崇を受け、康之の菩提所たる丹波の宗雲寺（後、春光寺と改む）を兼ぬ。文錄元年承兌と共に秀吉の命を受けて肥前名護屋に赴き、二年明使來朝の時之に應接せり。同年八月勅板錦繡段の跋を草す。慶長初、塔頭天授庵の再興を計り、弟子雲岳即ち細川幽齋をして之を主らしむ。七年雲岳之を建つ。十一年豐臣秀頼、後陽成天皇の勅を以て南禪寺の法堂を建立し、七月その慶讃供養を行ふ。天皇、特に雲華堂の宸翰の額を賜はる。十三年十月二十六日寂す。壽七十四。聽松院に塔す。（南禪住持籍、天授庵過去帳南禪舊記、聽松院由緒書、南禪寺志稿、大日本史料）

レンパク　蓮舶　カウチヤウ香頂を見よ、

ロ　の　部

ロセツ　驢雪　イヨウハ鷹瀛を見よ、

ワ　の　部

ワダチマン　和田智滿　チマン智滿を見よ、

ワタナベナンイン　渡邊南隱　ゼング全愚を見よ、

ヰ　の　部

ヱ　の　部

ヱケウ　惠教　二一三八／二二〇七　〔天台宗〕山城二尊院の中興なり。惠教は生緣を詳にせず。山城二尊院に住して念佛修行す。戰國の際、寺領悉く押領せられ、堂舍荒敗し、僧衆皆退散したるも、惠教獨り留住し、念佛修行を事とす。後西三條實隆大に歸依し、堂舍の再建をなす。これより一院復興す。後柏原天皇の勅請を拜して宮中に於いて戒を授け奉る。天文十六年三月廿四日寂す。壽八十。勅號廣明和尚と云ふ。（諸寺歷代）

ヱソウ　惠叢　二二九二／二三六五　〔臨濟宗〕京都相國寺の禪僧なり。惠叢、字は菊隱、鄕貫詳ならず。幼にして相國寺慈照院に入りて昕叔顯晫に參じ、又、崇禪寺に寓して千甫座元の讓りを得たり。長じて長得院に到り、千英惠仭の法を嗣ぐ。後、相國寺に住し、崇禪寺を再興し、長得院を重建す。寶永二年五月十七日寂す。壽七十四。（萬山編年精要）

ヱトウ　會統　一九八九／二〇五九　〔臨濟宗〕京都祇樹菴の開山なり。會統、字は一源、姓は菊池氏、肥後の人なり。建武四年九歲

にして筑前油山平田均に投じ、十六歳にして薙髪す。貞和四年平田京都に上り、雲居庵に居り、何もなく東福寺に住す。會統皆之に隨へり。後、大陽冲に侍して賓客を接す。平田の南禪寺に遷るに際し、往いて衣鉢を掌り、遷りて燒香の職に當る。平田の常在光院に退老するに及び、辭して肥後に歸り、次いで近江飯高山に到り、叔室元光に參ずること六年、疾を得て山を下り、貞治五年京都に寓す。應安の初め、祇樹菴を天王祠側に建てゝ住し、明德の初め攝津光雲寺を再興し、甲刹の列に陞す。上杉房方、赤松義則歸依して檀越となる。應永五年小山に白石庵を建てゝ住し、六年四月二十五日寂す。壽七十一。臘五十。應永二十六年岐陽方秀その行狀を撰す。（河東祇樹一源統禪師行狀）

エナン　惠南　二三一七　二三八四　〔眞宗〕越前鯖江法林寺の住持なり。惠南一に圓智坊と稱し、淨榮の子なり。本山法主秀誠、秀海、秀如三代に歷仕し、特に木蘭色九條袈裟同色衣白地金紋輪袈裟を許され世々之を襲ふことゝなれり。本山曾て豐臣氏に寺領朱印を引上られたるに依り、德川幕府にその復舊を請願す。幕府許さず。時に惠南江戸に滯留すること三年旅費盡きて乞丐の姿となり、東叡山の境內に隱る。輪王寺宮の知る所となり、幕府に紹介の勞を賜はり、享保三年七月許可を得て歸國す。秀如賞品並にその添狀を贈る。享保九年十一月六日寂す。壽六十八。（越前人物志）

エハク　惠舶　二三八七　二四三九　〔眞宗〕越前善行寺の住持なり。惠舶一名は慈雲、越前國丹生郡清水谷道場に生る。京都宏山寺僧樸の門人にして佛典に精しく篤學の稱あり。安永八年十二月十一日寂す。壽九十三、著作、信行辨一卷あり。（越前人物志）

エホウ　惠鳳　二〇二九　〔臨濟宗〕京都東福寺の禪僧なり。惠鳳、字は翱之、美濃の人なり。貞治の初めに生る。幼にして京都東福寺岐陽方秀に投じて佛事を發明す。後、明に遊びて留まること數年、歸りて東福寺の岩棲院に居る。嘉吉元年九月將軍足利義勝、貧民を救ふに方り、德政論一篇を作りて天下に布く。寬正六年西游稿を著す。寂年及び壽缺く。傳へて百十餘歳に至ると云ふ。著作、前記の外、竹居清事あり、文化の初めその末裔惠鳳再遊稿と共に分類編次して惠鳳藏主遺稿と名く。（五山文學小史）

エンキ　圓基　二三九〇　二四七七　〔黃檗宗〕長崎福濟寺の僧なり。圓基、字は顯岩、東鳳と號す。大鵬正鯤の法嗣にして福濟寺の監院たり。墨竹を大鵬に學び、能くその法に熟す。文化十四年六月寂す。壽八十八。（長崎畫人傳、古畫備考）

エンゲイ　圓藝　二〇〇〇……　〔眞宗〕常陸水戸願入寺の開山なり、圓藝は淨如房といひ、一に奧の房と云ふ。大綱大德と稱せらる。本願寺第二世如信の子なり。奧州白河の竹貫鄉大網に願入寺を開く。（同寺後に常陸水戸岩船に移轉す。）後越前今立に山元山護念寺證誠寺を再興し、同寺第三世となる。歷應三年八月十四日（一說に應長元年九月五日）願入寺に寂す。壽缺く（一說に七十六）子信藝（字は空如）あり。願入寺にありて法を嗣ぐ。（歸願寺文書、願入寺系圖、大谷本願寺通紀、大日本史料、越前人物志、）

エンシン　圓眞　バンコン蕃根を見よ、

ヱンシユン 圓俊 (二一六〇) 〔法相宗〕大和藥師寺の僧なり。圓俊は淸水谷中納言公定の遠孫なり。父祖世々醫を業とす。父を定怡と云ふ。幼にして佛門に入り、奈良般若寺慈心和尙に就きて剃髮し、西大寺に具足戒を受け、深く佛敎を修む。而も能く家業に通ず。後土御門天皇御不豫の時、勅を受けて診候し、湯藥大に驗あり、觴を賜はる。又、後柏原天皇の御病を治療して奇効ありて寶劍を賜はる。弟子圓盛、壽像を製し、贊を東山の月舟に請ふ、時に圓俊年七十五なりと云ふ。寂年及壽缺く。(大和人物志)

ヱンジヨウバウ 圓乘房 ジクン慈薰を見よ、

ヱンチ 圓智 カウヱン家圓を見よ、

ヱンチバウ 圓智坊 ヱナン惠南を見よ、

ヱンミツ 圓密 二三九八 二四八一 〔黃檗宗〕肥前福濟寺の禪僧なり。圓密、字は祖關、大鵬正鯤の弟子にして彌峯圓碁の法弟なり。圓碁の後を繼ぎて福濟寺の監院たり。墨竹を正鯤に學び、その法を傳ふ。文政四年五月寂す。壽八十四。(長崎畫人傳、古畫備考)

ヱンリン 圓琳 二四四七 二五一三 〔眞宗〕越前國坂井郡宿浦圓藏寺の僧なり。圓琳、字は濟忍、天明七年七月八日を以つて本寺に生る。人となり敦厚易直、幼にして香月院深勵に從ひ大小乘の佛典を學ぶ、文化九年始て自他宗部若干種を講ず。弘化四年擬講となり、嘉永四年淨土見聞集を高倉學寮に講ず。聽者頗る多し。同五年秋病に罹り、嘉永六年四月十三日寂す。壽六十七。私謚開香院と云ふ。(大谷擬講琳師碑銘)

ヲの部

ヲグルスカウチヤウ 小栗栖香頂 カウチヤウ香頂を見よ、

日本佛家人名辭書增補 終

ヱ 圓
ヲ 小

明治三十六年六月二十八日印刷
明治三十六年六月三十日發行
明治四十四年十二月廿五日增訂再版發行
大正六年十一月十五日第三版發行

日本佛家人名辭書
定價金拾圓

著作者　鷲尾順敬

東京市神田區駿河臺袋町一番地
發行者　平本正次

東京市京橋區新富町三丁目二番地
印刷者　小泉重助

東京市神田區駿河臺袋町一番地
發行所　光融館
振替口座東京二三一三番
電話本局二九九九番

（光融館製本部浦島）

（東京市京橋區新富町三丁目二番地・日新印刷株式會社印刷）